世界をめぐる、銀白の翼

武闘鬼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界をめぐる、銀白の翼

【Ｎコード】
Ｎ１０４３Ｌ

【作者名】
武闘鬼人

【あらすじ】
第一章

主人公を殺し、世界を食らおうとして、さまざまな世界を回る「奴」それを追う一人の青年、蒔風舜

さまざまな世界で、蒔風は勝ち続けなければならない
世界を救うために・・・・

でも、そのたびの行き先は・・・きっと光に満ちている。

さあ！楽しく熱くかっこよく！！いってみよー！！

第二章

と！！そうして世界をめぐって救った蒔風。

しかし、そうは問屋がおろさない。

一つになった新たな世界で新たな事件が！！

第二章、はーじまーるよー！！

第三章

そして世界は安定した。

しかし！！事件と言うものはなくならない！！

世界が交錯し、物語が新たに生まれる。

救えるものを、根こそぎ救え！！

検索用：ＡＩＲ　ＣＬＡＮＮＡＤ　リトルバスターズ！　仮面ライ

ダー　クウガ　アギト　龍騎　５５５（ファイズ）　ブレイド　響鬼　カブト　電王　キバ　ディケイド　Ｗ（ダブル）　涼宮ハルヒの憂鬱　らきすた　うたわれるもの　タユタマ　バカテス　魔法少女リリカルなのはＡ's　なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　とある魔術の禁書目録　ファイナルファンタジー７　ひぐらしのなく頃に　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　真・恋姫†無双　１１ｅｙｅｓ　真剣で私に恋しなさい！！　Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～序章～

どうも、オレの名前は蒔風舜（まいかぜしゅん）っていうんだが、どうもやばいことになっているみたいなんだ。
だってよ、空っていうかなんか空間にひびが入ったみたいになってて さ、街はボロボロ。
んでもってなんか黒い影っぽい男がオレを見据えて突っ立てるんだぜ？どーなってんだ！？

よぉし落ち着こうか。
とりあえず最初からあったことを整理しよう・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

「うっふえ、の～どいてぇ」
と、ぼやいているのがオレ、蒔風　舜。
○○大学の二年生、今１９歳だ。
高校生のころ、いろいろ武道をやっていて、段位とかは特にないけどそれでなんとなく興味を持った空手とか柔道、剣道とかも一通りこなした
組み合わせてなんか独自にいろいろ型作ったり、それで軽く喧嘩みたいなんやったことあるし・・・・

びみょうにつよいんじゃね？とか中二なことをいまだに考えている、変人奇人の極みの人間です！！

今は友人数名とカラオケで最高にフィーバーして出てきてみんなと

そのまま横浜あたりをブラブラしている。
喉が痛むのはそのため
でも俺もよくやるよな～～
後半二時間は俺一人で歌ってたぜ？

「おまえ一気に三曲連続で入れて手加減なしで歌っててなんでさらにあんなにトバせんだ？」

「オレのテンションに限界はねぇのさ！」

「馬鹿かてめえ」

「あっ！」

「どうした」

「またテンションあがってきた。テンションギャハハな状態だい！」

「うっせえ馬鹿！誰かこいつ止めろ！」

「どうやってだよ」

「息の根でも脈でも何でもいい、止めるんだ！」

「あっはっはっは！」

「やっほ～～う、蒔風にＴＵ☆ＤＵ☆ＫＥ！」

「巻き込むな！巻き込まれんな！」

どうだ？俺は、俺たちはいろいろはっちゃけたメンバーなのさ
話し相手は最高に気の合う仲間達。高校からの親友。
どれが俺の発言かは、まぁ察してくれ。テンション高いの全部だ。
そんな風に街をみんなで歩いてた

そしてその時にやってきた。

まぁ、世界の終わりってのはあっけないっていろんな漫画とかアニメとかゲームでお決まりの言葉だから言いたかないけどさ、言わせてもらおう。

世界の終わりはあっけなくやってきたんだ

急に隣にとまってた車がポーンと跳ねて落ちた。
川の水が何人かを飲み込んでいった。
看板が落ちて悲鳴が上がった。

街中でティッシュ渡されるくらいあっけなく・・・なんの前兆すらもなく、やってきた。

そしてあいつがあらわれたんだ。

そいつはゴシャゴシャの街を歩いてきた。
街の状態など一切気にしないで、普通に歩いてきたんだ。

まず気になったのはその黒い人影。顔が見えねえなって思ったら本

当にただ黒くて、多分近づいてもわかんねえと思う。
全然顔がわかんねえ。

でもノッペラってわけじゃねぇンだ。
なんだろうな、顔にずっと影がかかって微妙に誰だかわかんないシーンとかってあるだろ？あんな感じ。

んで、現在に戻るんだが・・・・・

オレの１０メートルくらい前で止まってこう言ってきた

「貴様がこの世界の最主要人物か？」

最重要人物？？なんだそれ？

「まぁ、わからないか、なっと！」

ブゥワッ！、とそいつの蹴りがとんでもない勢いで突っ込んできた

オレはみんなを突き飛ばしながらながら横っ跳びしてそれを避けて・・・

そして見ちまったんだ。オレの代わりに横っ面から蹴られた自販機（おそらく蹴りながら無理にオレを追って変なほうにずれたのだろう）が

真ん中あたりがひしゃげて、三つも貫かれていた

・・・・・・・・・・おいおいおいおいおいおいおいおい！！！！！！

まてまてまてまてちょっとまて！

こいつはやべえよ！なんなんだよ！ターミネーターだってそんな無茶はしねぇよ！

「走れぇ！逃げｎ「まあまてよ」ッ！」

奴の声が聞こえたと思ったら、オレたち全員が地に伏していた。

抵抗などする時間もなかった

気付いたら倒されていた

どこを殴られたかも、あまりにも鮮やか過ぎて感じられなかった

皆命に別状はないようだが、今すぐ逃げられるようでもない。

これは・・・まずい

あいつは今もまた目の前から１０メートルくらい先に立っている。

余裕のつもりか、くそったれ

「この世界、”Ｎｏ　Ｎａｍｅ”の力に合わせて、フルパワーなんぞ皆無なんだぞ？もぅちっとと楽しませろよ」

この世界？のーねーむ？フルパワーじゃない？

そんなことを考えているオレの視界に、ぶっ倒れている仲間が入ってきた。

みんなオレと同じ感じだ。すぐには動き出せない。

みんな、やられてる

ボコボコにされた。誰に?あいつにだ。オレの仲間を?やりやがった?

おれたちはなんもしてねえのに。これからまたバカ騒ぎしようって心躍らせてたのに?
奴の声が聞こえる・・・

「死ね、名前は・・・ほう、蒔風か。蒔風よ、オレの力の増幅のために、世界を崩壊させるために、死んでくれ」

・・・・・・あぁん?
んだよそれ

「んだそれよぉ!?」

「?」

「てめえは自分の目的のために」
グッグッ
膝を立てる

「おれ達をの存在を、おれ達の意志を、ぶっ潰すってのか!?」
ギチッ
拳が強く握られる

「ああ、だがオレの中で生きるぞ?そして新しい世界で生まれ変わるんだ」

ーふざけるなー

「ふぬ？」

てめえがなんのつもりでここに来たかは知らねえし、何の目的でこんなことをしたのかも知らねえ。
何言ってんだかもよくわからねえがわかることが一つある。
おまえは仲間を傷つけて、関係ない奴を巻き込んで、しかも他者の命と意志などお構いなしに殺すってことだ。てめえかおれの敵ってことだ！

「おぉー、よく立つなぁ。お兄さん感心だ」

畜生が・・・・

「ま、蒔風…」
ふと、足元のダチの一人が俺に声を掛けてきた

「逃げ、ろ。あれは・・・普通じゃない・・・」

逃げろって？
ああ、おまえらが見知らぬどーでもいい一般人ならそうしてたよだけどな、幸か不幸か、おまえらは俺の親友なんだ
それを見捨てて逃げちゃあよ、俺はその時点で俺じゃない
俺が蒔風舜であるために、ここは命をかけさせてもらう

「友人が逃げろと言っているのに、逃げぬとは。さすがは最主要人物と言ったところか」

「ちげえよバァカ。オレが逃げねえのはよ、ここで逃げたら、顔向

けできなくなっちまうだろうがよ」

「そいつらの親にか？それはむｄ「ふふっははははっ！」？？？」

「ちげえ、ちげえ。全然ちげえ。お前わかってねえなあ・・・」

ザっ
一歩近寄る

ズリッ
すると影の男は一歩後退し、蒔風から距離をとった。

いったい何が彼の足をさがらせたのか。
恐怖ではない。この男より力は強い。
気おされてでもない。一般人の出すようなものよりも強い迫力があるが、そんなになるほどでもない

では・・・なぜ？

その疑問を振り払うかのように影の男は問いただす

「一体・・・何に対して顔向けできないというんだ？」

「そりゃぁ、おまえ・・・・・・・・」

そこから先を蒔風は言わなかった
しかし、言わずともその思いは、誇りは、確かに目の前の敵に伝わった

―明日の、自分の面にだよ！―

To be continued

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～序章～（後書き）

どうも武闘鬼人です
この作品は中二なオレが頭の中に溜めにためまくった中二な話を形にしたものです
楽しんでいただければ幸いかと
では主人公性説明なんかを（結構重要かも？）
名前：蒔風　舜
読み：まいかぜ　しゅん
好きなこと：アニメやゲーム、楽しいこと、特撮
嫌いなこと：誰かの意志が理不尽に潰されること
性格：基本的には気さくで愉快な人。でも時にすごい悟ったような大人になるし、時にはすごく熱くなる。つまりは一定してない。故に話し方も気分で変わるし一人称も一定しない
エセ哲学者を自称し、高二の頃になんとなしに「死と生」について考えていたらそのまま死を理解してしまい、死に対する恐怖が無くなってしまった
でも痛いのは嫌だし、死ぬ気もない。
「なんだこれ」

おや居たのかい

「いたよ！ってかなんだよ死を理解したって。はずかし」

まあそう言うな。お前のことなんだからさ
それに名前はあの「時風　瞬」からきてるんだぜ？
十分だろ

「それはマジか！よっしゃ、ならはずかしくねぇ」

よかったぁ
ま、君が彼ほどかはまだまだわかんないけどね

「次の話は「奴」との戦い、そして覚醒だ」

無視された・・・・
ではまた次回

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～覚醒～（前書き）

このｔｈｅ　ｄａｙｓの世界はあと二、三話は続きます

the days 崩壊 ～覚醒～

さてと、とりあえずは立ち上がれた。大見栄も張った。
でもあいつのほうが絶対強い。まず勝てない。
とりあえずはあいつをここから引き離していかないと・・・・

そんなことを考えてどうしようか悩んでいると、

「はっはっはっは！いいな！今のお前、最高にカッコよかったよ！」

と、あいつが楽しそうに笑っていた。
そして次の瞬間つまらなそうな顔をして、

「だから主要人物はよぉ・・・」

とまたわけのわからないことを言う。

だが
あいつが言ってることを考えるより、ここを離れるほうが先だという結論を導き出したオレは、奴に向かって突っ込んでいった。
男は怪訝な顔をしながらおれの顔面に一撃必殺であろう拳を繰り出してくる。

ブアッ、ズシャァッ！

オレはその拳をかわして、奴の背後にまわり、そのまま一発だけ裏拳をかまして距離をとった。
たしかあいつの狙いはおれだと言っていた。
つまりこうやってちょっかい出してちまちま逃げてりゃあいつは俺

のほうに来る。
そうやって仲間たちから離れた場所まで行ってあとは時間稼ぎだ。
そうすりゃ警察やら軍隊やら出てくるだろうから、それまでの辛抱。

「ほら、こいよ！怖気づいたか？楽しい鬼ごっこしゃれこもうぜ！」

さらに挑発。しかしやつは攻撃しては来なかった。

「時間稼ぎで治安機構が来るまで待つ、か。まあ及第点だな。悪くはない。だけどこの現象がこの地区一帯だけだと思ってるんじゃないのか？」

「？」

「空に入っているひび。あれは今この世界で空を見上げればどこでも見れるし、崩壊はいたるところで起きているんだぞ？来るわけないだろうよ、警察や軍隊なぞ。ほかのところの被害でてんてこ舞いだ。この騒ぎが起こってからすでに十分たっているのに誰も救助に来ない時点でおかしいと思うべきだったな、それに・・・」

ゴグァッ、バガァ！

気づいたらオレの体がビルの壁にまで吹き飛ばされた。
さらにはガラガラと瓦礫がのしかかってくる。
そして身体が完全に埋まり、隙間から奴が見えた。
オレがぶつかったところだけが崩れたようなので、そこまで大量の瓦礫ではないから死ぬほどではないが、それでも意識が朦朧としてくる。

「言っただろう?そもそもオレはフルパワーが出せてなかったんだ。
この力を手に入れてまだ日が浅くてな。
いままではまぁ、慣らしだったんだよ。さぁてっとこうしてオレは
また新たな世界を食らうのであった。チャンチャン。って、聞こえ
てるか～?」

聞こえてるよ畜生。
くそ・・・このままおわるのか?

どんどんあいつの声が遠くになっていく

力が、欲しい
敵がどんな力を持って、どんな攻撃をしてこようとも、守りきれる
ような、
そんな、力が・・・・・
あぁ・・・意識が・・・だんだん・・・飛んで・・・・・

いかない?

いやまてこの空間はなんだ?白い・・・・
真っ白というか、光に包まれているというか、なんか不思議な・・・

「どうも」

「!」

声のほうを見るとそこには一人の女性が立っていた。
服はこうごうと輝いた白いドレスで、髪は金髪でウェーブがかかっている
これじゃまるで・・・

「あぁ、警戒しないでください。私はあなたの敵ではないですよ」

「敵じゃない？じゃあなんなんだ？神か？そもそもここどこだ。死後の世界ってやつか？オレを転生させるとかそんな話を持ちかけてきたりスンのか？」

「ちがいますよ（汗）　とりあえず私は神ではないですね。それに近くはあるけど。
それからあなたは死にかけている状態だけど、まだ死んでいない。
その直前であなたにこうしてコンタクトをとっているだけです」

ふーんと思いながら、オレは手を挙げる

「はい、先生」

「どうぞ」

「（ノリいいな）それであなたがコンタクトした理由は何ですか？」

「いろいろスルーしていきなり本題ですか」

「だってつまりは『そこらへんは後で説明するからとりあえず本題』ってことだろ？」

「まぁそうなんですけどね。私の話というのはスバリ、あなたにあいつを止めてもらいたいのですよ。」

「いや、そりゃぁ・・・」

「嫌なのですか？」

「嫌じゃないですけど、おれじゃあいつには勝てませんよ。どうせ見てたんでしょ？」

「ええ」

「だったら話は簡ｔ「しかし勝つ方法があります」？」

「あなたはこの世界にいながら、死とはどういうものかを知っている人間ですね？」

「？ん、まあ知っているけど、どうせくだらない妄想の域だろ？」

「いいえ、あなたは一つの真理に辿りついています」

「・・・はぁ？」

「齢十六歳で死を理解したことによって、人としてどころか生物としてその理から外れた者。あまりこのような言い方は好ましくないのですが、ようは異端者となった者。だからこそ、この鍵をあなたは受け取る事ができるはずです」

そう言って自称神（仮）が手を出すとそこには一つのカギがあった

「この鍵はあなたの力の扉を開く鍵。細かい説明はやはり後でしますが、これでもしかしたら、あいつを倒すことができるかもしれません」

「!!それは、非常に魅力的だが、大抵こういうものには代償があるものでしょう?」

「ええ、あなたがこの鍵を手にするならば、あなたは世界の理からの外れる、真の異端者になります」

「・・・・・」

「それでもいいならッ!?」

オレは話が終わる前にその鍵をつかんだ
瞬間、鍵は光を放ち、消えていく
そしてオレの体の芯のほうから、カチリ、となにかが開いた音がした
そして、オレは・・・・

「まったく、少しは悩まないのですか?」

「悩んだってしょうがねえよ、あいつは『世界を食らう』って言ってたんだ。
多分あのままじゃよくわかんねえがみんな死ぬ。
だったらよ、目の前にある可能性を、掴むしかないだろうが。
人としてだろうが生物としてだろうが世界の理だろうが、何からでもはじきやがれ!
でも、オレのこの最高にクソだけどもすばらしい世界は、守らせてもらうぜ」

「そうですか、覚悟の上でなのですね。ならばもうかける言葉はありません。」

「おう、あとで詳細な説明頼むな」

「もちろんですよ、では」

「ああ」

そして視界が戻っていく

さ・・・地獄へ戻ろうか

ーーー

ガラガラと瓦礫を崩してもう立ち上がれないであろうダメージを受けたであろう蒔風がその体を起こしていき、立ち上がる
否、もはやその体に傷は見当たらなかった。服はボロボロのままだったが、身体のほうは回復していた。
そして先ほどとは明らかに違う一点に男の視線が集中する。

足がまた一歩後退した
しかし先ほどのように、もはや理由がわからぬわけではなかった
むしろ理由ははっきりした。蒔風の背中一点の違いによって、男の疑問は解消された。
しかし男の顔は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「まさかこんなことになるとは・・・・
この世界ではこのようなことはご法度だろう！」

その視線の先には、
蒔風が立っており、
その背中には、

白と銀の混ざった輝きを放つ銀白（ぎんぱく）の翼がはえていた

「な・・・それは・・・まさか！」

「さあてと」

「こんな世界に貴様のような！」

「はじめるか・・・」

「翼人が！存在したというのか！おのれ管理者め！やってくれるな！」

「明日の俺に顔向けするために、よ」

銀白の翼人がニッ、と笑う

今ここに

長い長い

銀白の翼人の伝説が、始まった

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～覚醒～（後書き）

さて、やっと覚醒ですね

蒔風「やったぜおれぇぇぇぇぇ！」（以下「」内はこいつ）

おめでとう！さあこっからが楽しく、そしておれにとっては辛いことになるぜ！

「でもきちんと書けよ？駄文でもなんでもしっかり書けよ？」

書きます書きます書きますともさ

さて、次回のまたその次回あたりでこのｔｈｅ　ｄａｙｓの世界の話は終わり、いよいよ異世界にいきますよ！

「まだあと二、三話も先の話をしてどうするよ」

おっとしまったぜ

あ、なおこれからこの話は、かなり複雑な設定になっていくことかと思われます
この私の拙い国語力では表現しきれずに理解不能なところも出てくるかと思われます
しかもこの主人公の持つ信念というか主義はいろいろと上げ足取りみたいになっています
それらの中でもし疑問点があったら質問してください
なるべくすべてに回答いたします

「まったく、わかりにくい事になるならかえりゃいいのに」

そうするとお前の人間像がめちゃくちゃになってしまうのだよ

「あー、じゃあがんばってくれＹＯ」

もちろんろん

「次回はこの世界での一応の決着、そして自称神（仮）の説明が入る」

長くてめんどくさいけど、この世界観の説明ってことになるのですみませんがご一読ください

「あとこいつの勢いが乗ればそのまま旅立ちます」

なおこの次回予告は次回の内容と合うかどうかは分かりません

「おい！」

それ逃げろッ！

でわでわ、また次回に～

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～ほとんど説明だなこりゃ～（前書き）

結構大変だ…

文章に起こすのがこんなに大変とは・・・・

マジたくさん書いてる人尊敬します

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～ほとんど説明だなこりゃ～

「大きな力を得ると思ってはいましたが、まさか”銀白の翼人”とは」

先ほどの白い空間で、影の男いわく「管理者」の女性が蒔風を見て唖然としていた。

「やはり、これはこうなるべき物語だということですか？」

――

「くそ、もう少しだったってのに、管理者めぇ」

「管理者？あの女性のことか？」

「はん！お前なにも知らずに力を得たのか？」

「ああ、何も知らねえよ。あの人のことも、お前のことも、この翼のことも。だけどこの力でおまえを倒せるのなら・・・・問題ねえよ。それに、あとでいろいろ教えてもらう事になってるしな」

「確かに、その力なら俺さんを倒せるかもしれないな。だが、初めて手にした力をぶっつけ本番で使って、うまく勝てんのかぁ？」

「お前わかってないなぁ、いいか？こういう状況はな？大体パワーアップしたら苦もなく勝てるようになってんだよ」

「だが、敵はさらに強かったーっていくこともあるぞ？」

「じゃあ、試してみっか？」

「いーいだろう、こい、貴様を殺し、世界を食らい、オレは理想を手に入れる！」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「「うおおお

ゴガッ！ズズズズズズズズ・・・・

蒔風の作りだしたバスケットボールより一回り小さい火球が打ち出される。
それを男は紙一重でかわすが、その瞬間火球が変化した

火球は一気に大きく膨れ上がり、男を飲み込んでいく。
その内部では炎がすさまじい勢いで渦巻いており、さらにいくつもの爆発音が聞こえる。
そして大きくなりきった火球は大爆発を起こした。

ッドァァァァァ！！！！！

「～～～～～～～～っ！」

爆発によって男はそのまま大地にたたきつけられ、言葉にならない叫びを上げる
その姿は土煙で見えないが、そこにいることはなぜだかはっきりとわかる

「どうした？まだまだ気が済まないんだ。とっととかかってこい！」

蒔風が地面に降り、男の落下地点に向かって叫ぶ。
が、男の返答は思いもよらないところからやってきた。

「この一撃だけで俺をノックアウトしたつもりか？」

蒔風の足元から声がした瞬間、

ドゴッ！！！！

男が地面から飛び出し、蒔風の顔面に重い一撃を叩きこむ！！

「ブッ！」

蒔風が仰け反り、半歩後ろに下がる
その姿に男も血を流しながら嗤った

「調子に乗るからだ！直撃ならまずかったが、がんばってそれだけは避けてやったぜこんちきしょう！」

「っつあ！てんめ、痛そうな声出しで悶絶してたじゃねえか！」

「何のことかな？」

「しらばっくれた！？何て野郎だ」

ギュアアアアアア

蒔風が手のひらを上に向け、蕎麦屋が担ぐような形に腕を曲げる
するとその上に大量の水が集まってきて、巨大な水の塊が出来上がる

「おらあ！圧水掌！」

ザッッップァァァァァァァン！

頭上からその大量の水が叩きつけられて男は潰され、呑まれ、倒れる。

「てめえが力を得たのがどれくらいかはわかんねえが、まだ扱いきれないんだろ？
オレはこの力の使い方がよくわかるぜ？頭の中に流れ込んでくるんだ。俺とお前の力の総量はイーブンってとこか？だから扱える分、今なら俺のほうが強い！」

本当に今はだけどな、と付け加える蒔風に男が応える

「グッ、はぁ、はぁ、はぁ。そうか、貴様は鍵によってその力を・・・確かに、強い、わけだ。だがそんなことよりいいのか？・・・はやく、オレを倒さなければ・・・世界が崩壊するぞ？」

確かに、そこらじゅうがビキビキといっているのが何となくとだが感じ取れる。
このまま長引かせるのはまずいようだ

「まだまだボコし足りないんだが、この世界のことを考えると、終わらせる必要があるようだな」

「確かにそうだろうな・・・だがっ！」

「！」

「オレはこのままトンずらすんぜ！時間さえたてばこの世界はいずれ終わる！そうすりゃオレの勝ちだ。オレはこの世界を壊して食えればそれでいいんだからな！」

「待てこら！」

「はっはっは！アデュー！」

そして男が前を向いてその場から離脱しろうとしたその時、男の体がガクンと身体が揺れた

？？？？なんだ？どうした？

いや、わかっている。この原因はわかっている。
オレがこんなことになる理由はたったひとつしかない。

だが認めたくない。

二個目の世界でこんなことになるなんて、いきなり出鼻がくじかれるなんて！
駄目だ振り返るな、振り返ったら現実になる！

しかし男は振り返った。本人も分かっていたのだろう。見ようと見まいとその脅威が迫っていることは間違ってないことを！

「ウオォォォォォォオオオオオオオオ！」

「あああああああああああああああああああああああ！」

蒔風が男の後襟をつかんで引き寄せる！

「こ・れ・で・お・わ・り・だ！」

「ちっくしょうがあああああああああああああ！」

堅く強く握られたその拳が男を砕かんと振り下ろされる！

その拳はいかなる星をも打ち砕く！

「打（うち）・滅（ほろ）・星（ぼし）！！」

ゴッシャァ！！！

拳が男の顔面にめり込み、とんでもない音を出して地面に飛んでいき、あろうことかバウンドしてまた蒔風の眼前に戻ってきた。それを蹴っ飛ばして距離をとった蒔風は確信した。

これでおわったな。

「ぐっふあ。げはっ、っづ。」

影の男がユラ～っと消えていく。

「くっそ、てめえ覚えてろよ?別の世界を食らって、また戻ってきてやる。それとも、追っかけてくるかい?ふっふっふっふっふっふっふ。ははははははははは・・・・・・」

シュァァァァァ

男が完全に消滅し、あたりが静寂に包まれた

蒔風が地面に降りると、瞬間、周辺が再びあの白い空間に変わっていく

ーーー

信して、それを形にしているのです。

そしてこれらの世界・・・物語には必ず主人公、我々管理する者からは「最主要人物」と呼ばれ、またそれを取り巻く人物などを「主要人物」と言います。

「ん?確かあいつ俺のこと・・・・」

はい、あなたもまたこの世界の最主要人物、主人公なんですよ?
ほかの世界ではあなたを取り巻く環境が何らかの形で作品となっているんです

「なんか、恥ずかしいな」

まあまあ。
そしてそれらの世界は主人公と中心に構成されて行きます。
いわば主人公は世界の中心なのですよ
こう思ったことはありませんか?
『なんで主人公はこんなにも色々とあるのだろう』と
しかしそれは逆です。『そのようなことがいろいろある人間が主人公となる』のです
つまりなろうと思えば誰でもなれるのですよ、主人公には

それで彼のことになります。
彼は自分の世界でそれなりに普通に暮らしていました
しかし彼はある時、これらの世界の構造に気付いたのです
そして彼が調べた結果彼は・・・・

脇役でした

「脇、役？」

ええ。そうですね、さしづめ「学生G」とか「通行人Z」とかそんなものですかね

「GとかZって」

それほどまでに彼は脇役だったんですよ。
そして思いました
なんで俺は主人公じゃないんだ？と

「待ってくれ。あいつはそんなに駄目な奴だったのか？」

いいえ？彼は決して悪い人間ではなかったんですよ。
どこにでもいるようなごくごく普通の人間でした
しかし彼は知ってしまったのです

そして、自分のほうが優れているんじゃないか？
ほかの世界で自分は適当にあつかわれているのはなんでだ？
もしかしたら俺だけでなく俺の友人たちもないがしろに扱われてるんじゃないか？

だれも・・・俺のことは知らないんじゃないか？

「それは・・・奴の勘違いだし、どうにかできるんだろう？主人公と友人にでもなればいいじゃないか」

そうであることは彼も知っていたでしょうがもう止まりませんでし

た。

結果、彼はその世界の最主要人物を殺し、世界を壊してしまいました

「あれ?主人公が死んだら世界が崩壊するのか?主人公が死ぬような話はたくさんあるけど、その後も物語・・・世界は続いてるぜ?」

いいえ、ただ最主要人物が死ぬだけでは世界崩壊のトリガーにはなりません

重要なのは世界はそのように成り立っていることを理解したうえで殺害することです

故に、彼の世界は崩壊し、そして彼はその世界を、自らの内に取り込んだのです。

彼のすべてを含めた、世界を。

彼は世界を取り込み、壊れました。今はただあらゆる世界をとりこんで、それを再構築して、新たな世界を作り出そうとしています。

世界一つのエネルギーは莫大です。それこそ翼人一人に匹敵するほどの、ね

「そうそう、でさ。この力とあの鍵はなんだったん?あいつも翼人とか言ってたけど」

さて、世界は大まかに分けると五つに分類されます

すなわち

『何の変哲もない日々がただ淡々と過ぎていく世界』

『人が何らかの特殊な力を得ている世界』
『科学技術が異常に発達している世界』
『基本的には普通の世界だが、強い人の想いが奇跡を起こす世界』
『秩序を失った黒い世界』

これらは順に

”ｎｏ　Ｎａｍｅ”　”フォルス”　”ライクル”　”輝志（きし）”　”ＬＯＮＤ”

と呼ばれてます

「統一性ないな」

そもそもがバラバラの世界の区分ですからね
せかいはこれらの属性をいろいろと組み合わせているのです

そうですね、いくつか例をあげてみましょう
『涼宮ハルヒの憂鬱』という世界があります

「あ、知ってる知ってる」

でしょうね。
この世界は上っ面は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”ですが、それに”フォルス”、”ライクル”が入り込んでいます。
あとはほんの少しの”ＬＯＮＤ”ですかね

「あの世界はそれなりにしっかりしてるぞ？それでも”ＬＯＮＤ”があるのか？それに宇宙人とかの存在はどうなんだ？」

宇宙人や異世界人は日本人とアメリカ人の違いのスケールアップにすぎません。
この境界を越える方法によって分類されます。
あと、大体の事件が起こったりするようなものは”ＬＯＮＤ”に分類されます

もうひとつの例を
『ひぐらしのなく頃に』という世界では、”輝志”と”ＬＯＮＤ”がすべてを占めていますね

「なるほど」

あなたがいた世界は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”です。そこにおいてあなたのように力を得るとはどのようなことかわかりますか？

「そういう世界なんじゃないの？もともと”ライクル”が入ってたとか」

いいえあなたの世界は純粋な”ｎｏ　Ｎａｍｅ”です。それはあり得ません。

人は本来力を持っているのです。ただ生まれ落ちた世界によってそれは変わってきます。

”ｎｏ　Ｎａｍｅ”にいる人はみな扉が閉じている状態なのです。
そこで渡したあの鍵を使ってあなたの扉を開けたのですよ。
力をすんなり使えたでしょう？それはもともと持っていた力だったからですよ。

「ああ、だから代償は世界の理から外れるだったのか」

はい

「でもほかの世界の奴に頼むこともできたんじゃないか？なんで世界の理を外させてまで俺に？」

それは、彼の正体が・・・・・

ーーー

翼人になる人間は限られており、誰でもなれるようなものではありません。
また、生まれも関係ありません。
翼人の翼は物理的なものではありません。だから、翼が生えていてたあなたの服の背にも、穴は空いてません。
まあそれで攻撃することもできますけどね。

翼人はいくつかの世界に一人という低確率で現れます。しかもその持ちうる力の大きさから、一生のうちにその力に目覚める者は、ほんの一握りです。

そして翼人となるものにひとつだけ共通点があります。
それは

「それは？」

良くも悪くも、人に意思を尊重するものです。ただ一方的に叩くにしても、相手の意志を知った上で、理解したうえで否定してきます。故に翼人は素晴らしい善人とも呼ばれますし、とんでもない悪人ともいわれることもあります

「つまりはすべての理解者ってことかい」

ええ、理解なしには否定も共感もできませんから。

そして翼人の翼はそれぞれ色が違い、またつかさどる人の想いも異なります

あなたの色は確か銀白でしたね？

「ああ、この色は何の想いなんだ？」

それはあなたにしかわかりません
色と想いの組み合わせも、一致しないのです。

「んじゃ、ちょっと待ってくれ・・・・ハァっ！」

バサァ

なにもここでやらなくても・・・・

「いーじゃんいーじゃん。んーっと、俺の翼は・・・希望、人の願い、言っちまえば欲望だそうだ」

！？やはり・・・あなたは規格外ですね

「これで説明はおわりですかな？」

ええ・・・「んしょっと」

「そういえばなんでさっきまで響くように話していたんだ？」

「それっぽいでしょう？」

「なるほど・・・（つくづくノリがいいな）」

「ではあいつが向かった世界に行ってきてもらいましょうか」

「まってくれ、そこまでやるのか？！」

「何を言っているのです。そうしなければあなたの世界は本当に崩壊してしまいますよ？」

「・・・・なんでさ」

「一度「奴」のような脅威にさらされた世界というのは、その後にワクチンのような防壁を張るのです。

「奴」ならば破れるでしょうが、それには莫大なエネルギーがかかります。

世界によっては新たな物語によって再度入れることもありますがね。

そこであなたは世界を守ろうとしていくのですから、その世界にはすんなり入れます。その状態で戦えば・・・」

「俺が勝つから、無駄になる。だからあいつは一度失敗した世界には入り込まないって？」

「その通り。ですが彼がほかの世界を食らい強く・・・つまりはバージョンアップしたらその防壁は効きません。彼は素通りしてしまいます。しかもあなたを遥かに凌ぐ力を持って」

「それじゃ、オレは、」

「ほかの世界まで「奴」を追い、勝ち続けなければなりません。ただ一度の敗北も許されません。まければあなたの世界だけではなく、ほかの多くの世界の崩壊につながります」

「・・・・いいぜ。」

「え？」

「なんだ?その意外そうな顔。いいぜってのよ。やってやるさ。「奴」が「あいつ」だってんなら俺に勝てない道理はねえ。世界を救ってやるさ。」

「いいのですか?どれほどの旅になるかもわからないのですよ?」

「おれさ、昔からヒーローが好きでさ、それでも救いきれないキャラとかが居るのとか見ると悔しくてさ。もしヒーローになったら絶対こうしようってきめてるんだよな」

「どのようなことを?」

「いいか?よーく聞いとけよ?「救えるものは根こそぎ救う!」ってな♪」

「・・・あなたの覚悟。確かに聴きとどけました。ではこれが世界へのゲートです」

すると白い光に包まれたゲートが現れ、「Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ｔｈｅ　ｄａｙｓ」という声が聞こえた

「おおすげえな」

「それと・・・ああ、来たようですね」

「なにが?」

「あなたの武器です。どんな武器だかはわかりませんがきっとそれ

なりのものが来ますよ」

「あそこまで強くなってさらに武器かよ」

「あなたは勝ち続けなければならないのですよ?強すぎて悪いことはありません」

「む、たしかに」

そんな風に話していると、刀が四本落ちてきた。日本刀である。柄のところにそれぞれ「風」「林」「火」「山」と書いてあった

「四本も?こりゃすげえ・・・・」

「これは、まさか・・・!おそらく、まだ来ますよ!」

「へ?」ひゅんひゅんひゅひゅん　とととっ

間抜けな声を出した蒔風の目の前をさらに四本の刀が落ちてきた。あと数?前に出ていたら彼の旅はここで終っていただろう。

「あっぶね!」

今度のはトンファーの形をしていて、本来相手を殴るための横の棒の箇所には、刃が付いていた。
日本刀をトンファーと合体させたような形をしていた。殴りさまに相手を切れそうである。
とっての先についている球にそれぞれ「天」「地」「陰」「陽」と

書いてある

さらに四本、最後に三本、落ちてきてそこで終ったようだ

さらに落ちてきた四本は、直径三十センチぐらいの円を四分の一にしたようなものでそれぞれに青龍、白虎、朱雀、玄武の意匠が彫りこまれていた。

最後の三本は、幅が二十センチほどの、ありきたりな西洋剣の形をしている。
しかしそれぞれに獅子、天馬、麒麟の意匠が彫りこまれている。

「十五本!?なんでこんなに・・・」

「・・十五天帝。まさかこの刀の持ち主がこんな形で、しかも何もなけれな”ｎｏ　Ｎａｍｅ”で・・・」

「??十五天帝?」

「ええ、この剣は十五本一刀の合体剣です。その一つ一つもすごい性能を持っているのですが…」

「・・・・そのとおりです」

「「!!??」」

いきなり男が現れていて、二人は驚いた

「・・・いきなり失礼いたします。・・・あなたが我らが主ですか?」

「我らが主？何の主？」

「ああ・・いきなりでわからないのですね。・・・わが名は青龍。主よ・・あえて光栄だ」

「えっと」

「・・・私はそこに刺さっていた青龍の絵のついた剣の変化体です」

「ふえ？」

「・・・ほかにも、白虎、朱雀、玄武がおります。大きな獣の姿の獣神体・・・このような人型の人神体・・・待機状態の剣神体の三つの体系がございます」

黙々と語る青龍に圧巻されてしまう蒔風は

「お、おう」

としか言えない。なんかさっそくヘタレてきている

「・・・我ら四刀、龍虎雀武（りゅうこざくぶ）・・・よろしくお願いいたします」

「説明下手だな、青龍よ」

と、そこにまた男が一人

「・・・獅子か」

「またでた!?」

「また出たとは失礼な。私は獅子。そこにあった西洋剣の体をした三本の剣のうちの一つだ。まあ、青龍たちと形が違うだけで同じだ、そうだな・・・召喚獣だと思ってくれていい」

「ああ、なるほど」

「ほらな?青龍。このように簡潔に言うのだよ。だがまあ三形態の説明はめんどくさかったからな。その手間は省けた」

「・・・気にするな」

「ふっ、寡黙で謙虚な奴よ」

「えっとさ・・・」

「では挨拶も済んだので我らはこれで」

「・・・必要となった時、呼びたいと思った時。お呼びください」

「ああ・・・わかった」

「「では」」

といって二人はそれぞれの形に戻ってしまった

「では武器も手に入れましたね。おそらく相手も今頃は十五天帝と対となる剣を得ているでしょう」

「これでまたイーブンってわけか」

「やめますか？」

「じょーだん（笑）じゃ、行ってくるぜ」

「ちなみに向こうの世界に行ったら、あなたの世界で得た作品世界の知識は消させていただきます。おもに登場人物とか、話の流れとかですね」

「えー？知ってたほうが有利じゃない？」

「向こうの世界の人間も生きています！プライバシーの侵害、ダメ、絶対」

「納得。そりゃ確かにいけねえ」

「でも必要な情報は送ります」

「どうやって？」

「頭に」

「頭に？」

「ええ」

「わかりやすいなそれは」

「ああ、それと、向こうでの移動手段としての足はどうしますか？」

「バイクを一台と車一台ありゃいい」

「バイクはともかく車の免許は？」

「そんなもんいるのか？」

「まあいいでしょう。運転の仕方は頭に直接送り込みます」

「あんがと」

そして彼は旅だった

まずは最初の世界へ・・・・・・・・・・・・・・・

ーーー

学校名は・・・・

「私立光坂高校、か」

そして頭に情報が流れ込んでくる

「ＣＬＡＮＮＤＤの世界か」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～ほとんど説明だなこりゃ～（後書き）

さて、やっと来ましたよ、ほかの世界！

蒔風「本当にな」

でも次にはお前の能力の設定を出すつもりなんだ

「話にはいかないのかよ」

管理者さん「あのすみません、わたしの出番はもう？」

ええ、ありませんよ？
この話が完結するころに・・・・

管「ざっけんなよ！名前もまだ決まってないでしょうに！」

蒔「たしかになあ。地の文でも自称神（仮）とか管理者とかな」

管「あげくただの女性の時もありました・・・しくしく」

んで、どうしたいの？

管「私を出せ！人間になって蒔風についていく！」

蒔「ヴェ！？」

そこ、オンドゥルしないで
いや、そりゃ話の流れ的に無理っていうかしたくない

何よりオリキャラは「奴」とこいつで十分じゃ！

蒔「そういえば結局「奴」って誰なんだ？いやまあオレはもう知ってるけどさ」

管「おらぁ！作者そんなんでいいのかぁ！？」

あー、それは中盤で明かしますから待っててよ

管「てめえおら、私をだせぃぃ！管理者なのに！」

管理者はなおのことこっち側にいてもらわないと・・・

ん？ひらめいた！（ピコーン）

このあとがきのオレの話相手にあなたを採用します！

蒔「あれ？オレは？」

来たい時に来れば？

蒔「つめてえ」

管「やった、やったよ！アリスはやりました！私はなんとか出番を手に入れたー！」

蒔「あ、名前アリスって言うんだ」

なおここでのアリスさんは本編には関係ありませんよ～

蒔「さて次ｋ「さて次回わ！」とられたよぅ」

管「ついに旅立った蒔風、さてこの世界でどのようにたちまわるのでしょうか」

ではまた次回

この街の、願いの叶う場所へ・・・

設定ーーーーーまずは武器編

【武器編】

一天剣一　十五天帝

十五本の刀剣で一セットの合体剣
さらに細かく4、4、4、3本での組合わせがある
どれとも組み合わせの互換性があるので思いのままに組み立てられるが、組み合わせた結果が使えるものであるとは限らないので、使われない組み合わせもある
どこにつけられるかは決まっており変更不可
組み立てるときにはカチャカチャと組みたてるのではなく（クラウドの合体剣みたいではなく）、一つに合体する（融合といったほうが近いかもしれない）。
また常に帯刀されているわけではなく、蒔風の意思に反応して、現れる。（キーブレードみたいに）

［風林火山］
日本刀の形そのまんまである。四本
蒔風の両方の腰に二本ずつかけられている
柄の部分にそれぞれ一文字ずつ字が入っておりそれがそのまま名前になっている

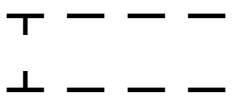
柄と柄のお尻の部分を組み合わせ可能で、二本にしてバトンのように振り回して攻撃できる。
敵を切り裂くことに向いており、斬撃を飛ばすことも可能である

なお、「林」には防壁を張る力が、「山」には治癒の力が宿っている

［天地陰陽］
トンファーを模した刀。四本
取っ手の先についている玉にそれぞれ一文字ずつ字が入っておりや
はりそれがそのまま名前になっている
蒔風の両腕の前腕の内側と外側に一本ずつ、取り付けられている。
取っ手は折りたためられて邪魔にはならない

取っ手の先と先を組み合わせて相手に向けて使う
こんな形

二本が



←　合体して



こうなる

相手を突き刺すことに向いており、突きの斬撃?を飛ばせる

［龍虎雀武］

「りゅうこざくぶ」と読む

それぞれ直径三十?程の円を四分割したような湾曲剣。四本蒔風の両方の脇下に取っ手が前に二本、後ろに二本、それぞれ向いて収納されている

一本一本に青龍、白虎、朱雀、玄武の意匠が彫りこまれている

なおこの形はあくまで待機状態であり開放するとそれぞれ異なった形となる

青龍→剣『青龍刀』
白虎→釵（さい）『白虎釵』
朱雀→槍『朱雀槍』
玄武→盾『玄武盾（げんぶじゅん）』

の四つである

解放状態での組み合わせも可能だが、あくまでこの四つの間だけになる

待機状態で組み合わせると円盤になり、投げつけて攻撃することも可能

その形態の多さからもっとも多様性に富む

また呼びかけに応じ、名前の通りの神獣が出てくる。

［獅子天麟］
「ししてんりん」と読む
幅二十センチの西洋剣。このセットのみ三本である
蒔風の背に一本は真っ直ぐ、二本はクロスした状態で鞘に入って居る
それぞれに獅子、天馬、麒麟の意匠が彫りこまれている

組み合わせるとバスターソードの形になる
叩き伏せるという攻撃に向いている
巨大なものを破壊するときには重宝する

龍虎雀武と同じように呼びかけに応じ、名前の通りの神獣が出てくる。

蒔風「こりゃまた凄いな」

おっと待ってくれあくまでこれは【武器編】だぜ？

蒔「まだあんのか！？」

ほら、おまえはやってた　管「獄炎弾とかさ！」ウェイ！？

蒔「おお管理人さん」

管理人？「ちがう！アリスって呼んで！」

こういう場面で出てこないとないからね

アリス「そうなんですよ、ちなみにこの武器強すぎじゃね？とか思ってるそこのあなた！そんなことはありませんよ」

蒔「そこのあなたって・・・・いるのか？読んでるやつ」

それを言うなよ！読んでほしいよ！こんな駄文だけどさ！

蒔「確かに主人公としては読んでもらいたいな。そういえば「奴」もなんか手に入れてるみたいなこと言ってたけど？」

ア「そうですよ。さまざまな世界に多くの武器がありますが、その中でも特に強力な剣はそれに対となるものが存在するんですよ。まあ大抵は概念的なものであったりするんですけどね。十五天帝にはきちんと存在します」

つまり「奴」も十五天帝と同じような力を持つ武器、おそらく剣を手に入れてるだろうな

蒔「う～わ、面倒くせえ」

そういわないでさ。で、どうする？

このまま能力編いっちゃう？

ア「こんがらがるから次にしなさい、わけなさい」

蒔「絶対そのほうが出番増えるしね」

そういうこんたんか

っていうか後書き欄でもないのにそれっぽくなっているぞ?

ア「いーじゃん、いーじゃん・・・・いーじゃん!」

蒔「すげーじゃん、って言いたかったけど内容に合わなかったみたいですなぁ」

次は能力編だよ!

蒔「おいらの強さはどこまで伸びる?」

設定ーーーーー能力編だよ！（前書き）

本当にめんどくさくてごめんなさい

設定ーーーーー能力編だよ！

【能力編】

《属性》

［獄炎（ごくえん）］
炎と爆発の力。
灼熱の力で相手を焼き払う。
力をためる動作は胸の前で両手をボールをなでるように回す

［圧水（あっすい）］
水と勢いの力
大量の水で相手を押し流したり叩き潰したり押し流したりする。
敵を無力化させるときに便利。
力をためる動作は手のひらを上に向け、顔の横に持ってくる

［雷旺（らいおう）］
電気と爆ぜ散る力。
雷の力で相手を地形ごと巻き込んで吹き飛ばす。
力は他のものと同じだが、方向性を決めるだけで、あとは勝手にその先のものを吹き飛ばしてしまうので使い勝手が悪い。
威力を弱めればコントロールも多少出来るがたいした威力は出ない
力をためる動作は両手の指を組み合わせてそれを引き離して、手と手の間に溜めていく

［土惺（どせい）］

土とうねりの力
その圧倒的な重量で相手を押しつぶす
圧水と違い相手を「倒す」ではなく「斃す」になってしまうため。
やはり使いにくい
力をためる動作は両腕を後ろ斜めに突きだして、引き抜いてくるようにあげていく

［絶光（ぜっこう）］

光と射抜く力
瞬間的な貫通力に優れているが、強いのは正面だけで、横からには弱い。
しかしそれを無視出来うる貫通力と、スピードを持つ
力をためる動作は右手の指を指を伸ばしてそのまま引いて力を込める

［混暗（こんあん）］

闇とひきつける力
発動させた面に重力を発生させる
しかしもっぱら使われることはなく、他の属性同士を組み合わせるときのつなぎとして使われることが多い。（例：獄炎と土惺を組み合わせるときに、まず混暗を作り、そこにこの二つをぶち込んで混ぜる）これはひきつけるという重力の力による特性である
力をためる動作は下に手のひらを向けてかざす

［嵐風（らんぷう）］

風と舞い上がる力
しかし、蒔風はこの力を気持ち程度しかもっていない。つまり、攻

撃にこれだけでは攻撃に使えない。
せいぜいがその場にそれっぽい雰囲気と作り出す程度である。
しかし、十五天帝によって斬撃と飛ばす際に、作り出すための真空と、方向のコントロールには欠かせない力である。
使うことはないので力をためる動作はない

《系統》

［弾（だん）］
溜めこんだ属性を凝縮し、相手に投げつける
一気に膨れ上がるので、獄炎での威力が一番高い
打ち出す動作は思いっきり投げつけるようにする

［掌（しょう）］
大量に集めた属性を相手の頭上から落として打ちのめす。
打ちのめした後に押しやっていくために、圧水との相性が一番良い
打ち出す動作は手にひらを上に向け、相手を押しつぶすように思いっきり振り下ろす

［砲（ほう）］
手に集めた属性を前方に打ち出す（かめはめ波みたいに）
前方に居るものをなぎ払うことから、雷旺での使用が最も強い。
打ち出す動作は指を爪のように曲げ、そのまま相手に手のひらを突きだす。
しかし雷旺の場合はコントロールが難しいため、両手でその手を作り、手のひらどうしを向けて、そして相手につきだす。
普通に打ち出すと前に向かって拡散していってしまい威力が落ちる

ためである。他の属性は普通に打っても大丈夫

［竜（りゅう）］
巨大な竜の形（バオウ・ザケルガの様な）に固めた属性を相手にぶつける
なおこれで作られた竜には超高度な追尾能力が付加されており。敵を追い続ける。
他の属性でも威力は高いが、飲み込み、押しつぶすことと、相手を選択して攻撃できることから、土惺で形作られることが一番効果的で有効である。
打ち出す動作は相手を認識して、両手を標的に向かってバッ、とクロスさせる

［尖（せん）］
腕の細さ程度の砲撃を相手に打ち出す
衝突面が小さく、スピードもトップクラスなので、絶光での威力が絶大である
打ち出す動作は指を真っ直ぐそろえて、相手にまっすぐ突くように伸ばす

［陣（じん）］
名前の通り周囲に属性の場を作り出す。
あくまで足場だけなので、混暗ぐらいでしかたいした威力は発揮されない。
さらに足場がないと発動は不可能
発動の動作は両手をパッと広げる

上にあげた《属性》と《系統》を組み合わせて攻撃していく
その際の技名は《属性名》＋《系統名》
例：雷旺砲、土惺竜などなど

また使用する動作の手順も同様に組み合わせたものである

慣れていくにつれて、動作はしなくても済むようになるが、しっかりやったほうが威力は高い

蒔風「・・・・・・・・・」

アリス「・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・

蒔「多すぎじゃ！こんがらがるわこんなもん！」

ア「いいじゃないですかあなたは！出れるんだし！」

蒔「でれりゃいいならここでがまんしろよ！」

ア「黙れ勝ち組め！」

てめえらうるせえぞッコラァ！

蒔、ア「ごめんなさい」

よし許す。

蒔「いやでもさ、これはいくらなんでも多すぎないか？」

ア「たしかに、いくら勝ち続けるためとはいえ、これは・・・・」

なにをおっしゃいますか！力があるからといってそれをバカスカ使うとでも？一番そのシチュエーションに合ったものを使いますよ！

ア「ちなみに基準は？」

どれを使ったら熱く決められるかなってこと

蒔「熱いのはいいよな！」

だよな！いいよな！かっこいいしな！

蒔「かっこいいのは正義！」

ジャスティース！

蒔「Ｆｕ－Ｆｕ－！」

いえーーー！

ア「二人が盛り上がりすぎて暴走したのでここからは私が。こんなにめんどくさい設定をここまで読んでくださってありがとうございます。これらの力を使って、蒔風は世界を救っていきます」

多分でも他の世界でまた力をつけたりしそうだよね～

蒔「これ以上増えんのか！？」

ア「帰ってくるの速いな！」

まあねん。いや、まあ仮の話だけどさ。

蒔「かっこいいのにしてね？」

あったり前さ！

蒔「いよっ、さすが作者！」

いやっふぅ！さすがオレぇ！

ア「また逝きましたか、次回から本格的な「ＣＬＡＮＮＡＤの世界」での活動ですお楽しみください」

ちなみに一つの世界にいつ時間は世界によって長かったり短かったりします。

もしもあなたのお気に入りの作品が短かったり、いらないのが下手に長かったりしたら・・・申し訳ございません。

では、ここでおしまいにしましょう

ではまた本編で

ＣＬＡＮＮＡＤ　～遡逅～（前書き）

８話（有紀寧編の最後）のあとの話になります。

アニメも原作もやったけど、うろ覚えになってしまっている・・・・

間違いがあったら教えてください（泣）

CLANNAD ～遡逅～

この世界に降り立った蒔風は、とりあえず書類に書いてあった光坂高校に向かい職員室に向かった。

どうやらこの転校は急に決まったものらしく、なんと一昨日来た話なのだそうだ。

そのくせクラスはA組とかではなく、なんとも中途半端なD組だった。

しかもプロフィールにはろくに書かれていない。

おそらく世界が蒔風をこの世界に置くための「役割」なのだろう。

蒔風舜、19歳。今更になって高校生。見た目はまだそれで通るのがわずかな救いか。

教師に連れられて三年D組に向かい、HRで簡単な自己紹介を済ます蒔風。

後ろの席の方で金髪童顔の生徒がが「なんだよ男かよ。急な転校性は普通女子だろ」とブチブチ文句を垂れてグダっていた。

（俺ももその意見には賛成するし、それは夢だ。が・・・オレは自ら夢を壊してしまったようだ・・・・）

内心がっくりとしている蒔風が気を取り直して考える。

（それよりも・・・・この教室に標的とされる最主要人物がいるのだろうか？）

そんな事を考えていると、教師が席を教えてくれたので、その席に向かい、おとなしく座る。

「えーっと、クラス委員は・・・藤林だったな。急な転校だからいろいろ教えてやれ。蒔風君も、わからないことがあったら彼女に聞くんだ。」

蒔風を席に送り出しながら教師が言う。
そして、進路相談とか三者面談とかの説明をして、ＨＲが終わった。

ＨＲと授業の合間の時間。
その間に女子生徒が蒔風の席に近づいてきた

「あ、あのぅ・・・」

消えそうな声で話しかけてきた彼女にあいさつしようとする蒔風だが、いかんせん名前がわからない。

「あー、えっと・・・」

「あっ、わ、私クラス委員の藤林　涼って言います。」

「あ、どーもどーも。転校したての蒔風舜って言います。よろしくど～も～」

「は、はい。よろしくお願いいたします」

「いやいやこちらこそっ！（ビシィ！）」

「ひえっ!?こっ、こちらこそ！」

といったところで、一人の男子がやってくる。

「おい藤林。いつまでやるつもりだ？それと、こいつはおとなしめな奴だから、あまり大きなリアクションはとらないでくれ」

「（むう、確かにそんな感じだな。すまないことをしてしまった。）そうでしたか・・・（しょぼん）えっと、名前は？」

「ああ、気にすんな。ただのこいつのアドバイザーだ。」

「彼は岡崎朋也君って言います。」

「どうも、岡崎さん」

「よせよ、同年代だろ？岡崎でいーよ」

名前を勝手に言われたことにたいした反応もせずに、岡崎という男は手をひらひらと振りながら自分の席に戻っていってしまった。どうやら無意味なやり取りをしていた蒔風達を止めに来ただけだったらしい。

「藤林さん。わからないことがあったらよろしくお願いします。」

「はっ、はい！まかして下さい！」

こんなやり取りで締めくくり、授業が始まり、昼休みになり、午後の授業が始まり終わり、放課後になった。

「さぁって。どうしようかな」

帰りのＨＲが終わり、蒔風は自分の席で鞄の中をごそごそとあさってみた。
ちなみにこの鞄は蒔風がこの世界に来た時にすでに持っていて、勉強道具なども一通り入っていた。
用意周到な世界である。

そうして漁っていると、教科書などに押しやられて底の方に一枚の紙があった。

「入部届け？」

それは部活動に入るための申し込み用紙だった。
書き込むべきところにはもうすでに書き込みが済まされており、部活名の欄には「演劇部」と書かれていた。

・・・・この部に向かえ、ということなのだろうか。
善は急げと演劇部の活動場所を探し出そうとした蒔風だが、早くも障害にぶち当たった

部室の場所が、わかりません！！・・・・

教室で聞こうにももう誰もいなかったから聞きようがない。
どうしようかと思いながら校内を徘徊してると、小さな影を視界にとらえた。

第一生徒発見！

向こうも蒔風に気づいたらしく、こっちに向かってきていきなり指をさしてきて、叫んだ。

「変人がいます！学校をうろうろしている変な人です！」

いきなりだった。

その少女は本当に高校生か？という背丈に、星型の木の彫り物を持っている。

変な人。確かに校内うろうろしてれば変な人だ。というか蒔風は基本的に変な人だ。

しかしこう言うということは、蒔風はさっきから見られていたということである。

これはまずい。これでは「奴」にいつ寝首をかかれるかもわからない。

「どうしたんですか！・・はは～んこの風子に恐れをなして声も出ませんか！」

その声に当初の目的を思い出し、蒔風は質問をしようと口を開いた。

「おぉ！そうだそうだ、風子っていうのかい？えっと「なぜ風子の名前を知っているのですか！？まさかエスパー？未知との遭遇ですか！？」・・・・・」

未知との遭遇はエイリアンですよお嬢さん

「さっきから自分の名前連呼してればそりゃあ・・・」

「しまった！風子としたことがこれは不覚・・・ッ」

蒔風が呆れながら、ふと彼女が手に持つ彫り物を見て、思いついた。

（あーどうしよう、この子めんどくさいぞ。そう言えばなんでこんな星型のを・・・いや、待て。この彫り物、まあ星だろうが、おちょくってみるか・・・）

「ひとでの彫り物かい？」

「！！！！！！変なこと言ってごめんなさい！あなたは素晴らしい人です！」

そんな反応されては蒔風も困惑するだけだ。
彼も大概に変人なのだが・・・・

「（えぇーーーー？もうわかんないよこの子。冗談で言ったのに）えっとだな！風子さん！」

「！！はい！何でしょう！」

急に礼儀正しくなった風子に対し
おお・・・なんでこんなに急に従順になるんだこの子は？？
と思いながらも部室の場所を聞く蒔風。

「演劇部ってどこで活動してるか知ってるか？」

「知っています！風子についてきてください！」

そう言って風子は歩き出した。これで迷わずに済む。
そしてほどなくして演劇部の前に到着した。

「では！風子はこれで！」

「ん？ああ、ありが・・・と？」

振り返るともうそこには風子はいなかった。
いったいなんだったのだろうか？
と、思いつつも、本来の目的を果たすべく、蒔風は演劇部部室に入って行った。

「えっと、ここって演劇部であってますか？」

中に入っていく
中には見知った顔が三人いた。岡崎と藤林と金髪童顔である。

「蒔風君じゃないですか。どうしたんですか？」

「いや、来てみただけなんだけどね」

と、面識のある藤林が話しかけてきた。
すると同じような顔をした、しかし気は強そうな女子が近づいてきた。

「あんた誰？・・・ああ、今日急に転向してきたっていう奴？入部希望者？」

「まあ、そんなところですかね？で・・・・」

「ああ、あたしは藤林杏。こっちの椋とは双子であたしが姉ね。・・

・おーい！部長ー！入部希望者だぞう！挨拶しなさいよー！」

と奥のほうに声を飛ばして誰かを呼びだした。
すると部長と呼ばれた気の弱そうな女子がうつむいて何かをつぶやいていた
岡崎もそばにいる。

??なんて言ってるんだ?あんぱん?

「え・・・えっと、演劇部の部長をやっている古河渚です。入部、ありがとうございまふっ！」

と言いながら手を出してきた。握手か。

しかし大丈夫なのか?噛んでしまうような演劇部って

と思いながら伸ばされた手に握手する

すると情報が頭の中に流れ込んできた

彼女は・・・最主要人物に最も近しい主要人物か・・・さしづめ主人公の彼女ってところか?
主人公が女なら親友ってとこだが多分・・・

「ああ、こいつあがり症でな。さっき自己紹介したよな。岡崎だ。」

とそこで岡崎が話しかけてきた。なるほど、噛んでしまったのはあ

がり症か・・・・本当に大丈夫か？

「ああ、どうも。それで「あー！てめえは美少女転校生をの夢を粉々に打ち砕いてくれた奴！」は？」

「うるさいぞ春原」

「岡崎はいいよな！渚ちゃんみたいな可愛い彼女が居るんだから！」

「す、春原さん・・・可愛いなんてそんな・・・」

やはり岡崎と古河はつき合っているようだ。となると岡崎が最主要人物か？

思考は春原の叫び声に寸断される

「そこに美少女転校生が来てくれればこの部に引き込んで、あわよくばいい関係になっちゃったりできたかもしれないのに！こいつはその夢を打ち砕いたんだぞ！」

ああ、そういうこと・・・こいつモテねえな。

「じゃあこいつといい関係になればいいじゃないか」

「ちょっと待て岡崎！なぜオレを指さす！？」

教室で一度だけしか会ってないのに、いきなりこんな風に巻き込んでくるなんて、こいつできるっ！

「なんでですかぁぁぁぁ？僕そんな趣味ないですよッ！それなら凶暴で恐ろしくてもこっちのほうを・・・」

ヒュン、ゴッ

「いがあああああああああああああ！」

なんだ！？辞書が飛んできて金髪童顔・・・春原とかいう奴に飛んでったぞ？

「あんたらいい加減にしなさいよね！新入部員の紹介ができないじゃないの！」

こっちの・・・杏が投げたのか？恐ろしい威力だ。

「・・・なんでやねん」

「なんでそこになんでやねん！ことみ！あんたの突っ込みは遅すぎる！ってちがうちがう、そんな場合じゃない・・・」

「えっとみなさん、落ち着いてください。この人の紹介を聞きたいですし・・・・」

「僕は落ち着いてなんかられｎ「ゴシッ」・・・・・・・・」

「静かになったわね。じゃあ私と涼と朋也はもう知ってるでしょうから他の人から自己紹介していきましょう。ほら、あんた」

本当に恐ろしいな・・・あいつすっ飛んでったぞ。静かにはなったが。あとあんたって・・・

「えっと、今日三年D組に転校してきた蒔風舜です。よろしくお願いします」

「あっ、よろしくお願いします。古河渚です。クラスは三年B組です。演劇部の部長をやらせていただいてます。来てくれてありがとうございます」

「こんにちは。初めまして。三年A組の一ノ瀬ことみです。趣味は読書です。もし良かったらお友達になってくれると嬉しいです。」

「はい、一ノ瀬さん。願いします。」

するとフルフルと首を振り、

「呼ぶ時はことみちゃん」

と言ってきた

「ああ、ではよろしくです。こ、ことみちゃん」

いかん、名前で呼ぶのはなんか慣れないな

「まあ、これぐらいかしらね」

「なあ、あいつは？」

「あいつは春原よ」

「それだけ？」　「それだけよ」

「へ、へえ・・・」

「ねえあんた。どうしてこんな時期に部活動に入ろうなんて思ったのよ」

「え？」

「だってあんたも三年でしょ？あたしらもそうだけど、受験やら就職やらあるでしょう？なんで？」

ああ、まあそうだろうな、こんな時期に今更部活だもんなぁ・・・

さて、どうしようか・・・・

「それは・・・失った青春を取り戻すためさ！」

その瞬間。

空気が凍った。盛大に外した。これは・・・まずい

まずいぞこの場をどうにかする能力は十五天帝にもないぞッ！

「まあいいわよ。ちょっと気にしただけだし。」

「あ、うん・・・（なかったことにされてしまった）・・・・それで、今日はどんなことをしてたの？」

「えっとですね、今日はというか今日もと言いますか…」

「私たち、学園祭でもう劇をやっちゃって。それにもう卒業だし・・・・」

「というわけよ。入るのはいいけど、やることないわよ？多分」

「まあそれでもいいですよ」

「ふーん」

そう、ここに最主要人物であろう岡崎が居るなら、この部に身を置くことは必要なのだ。
やることはむしろそっちなのだし。

それからみんなと会話して、春原が目覚め、パシられて、戻ってきて、落とされて、またみんなと話して、あっという間に下校時刻になってしまった。
それと、みんなと話しているうちに岡崎とも握手をした。やはり彼が主人公だったようだ。
そして、

「じゃあもう帰りましょうか」

と古河が言うとみんなは、

「そうだな、これ以上遅くなると、おっさんも心配するしな」

「あたしらも帰るかぁ。行くわよ涼」

「あ、待ってお姉ちゃん」

「みんな、さよなら。あしたまた、あいましょう」

全員帰る支度をして各々帰路についていく。

「俺も帰りますっかねっと。春原は？」

「いいのよ」

「いいのか」

そしてみんなと別れてオレは寮に向かっていった。

どうやら俺の寝場所はそこにあるらしい。

こうして一日目が終わる・・・と思っていた

が、感じたのだ「この世界」に異なるものが侵入してきたことを。

「来た・・・か」

おそらく奴のほうが先にこの世界に向かっていたのだろうが、多少ずれたのだろう。
この世界では運が良かったってことらしい。もしかしたらこれは「奴」が先に入り込んでるってこともあるだろうしな。

そしてオレは意思を固める

それは戦いは幕のあがる合図だった。

決して両者に意思の疎通があったわけではないが

それはぶつかり合う火花でではなく、満天の星空の下で、「奴」と蒔風の二人だけがただ、漠然と感じ取っていた

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＣＬＡＮＮＡＤ　～邂逅～（後書き）

さて、ＣＬＡＮＮＡＤの世界にきましたよ！

アリス「ねえねえ、生徒会長とか、寮母さんとか、パン屋さんとかは出さないの？」

出したいんだけどねえ
パン屋さんは出せても生徒会長さんとか寮母さんは出しにくいかも、
次の話では「奴」と戦う予定だし

ア「はやくない？」

だって「奴」は世界を食らうことが目的なんだぜ？
やってきて、次の日に襲いかかるのは普通だろ？
なんせよっぽどじゃないと奇跡の起こらない”輝志”なんだからこの世界は

ア「この世界はその分類なのね」

そう

ＣＬＡＮＮＡＤ

分類は”輝志”９９％に”ＬＯＮＤ”が１％だな

ア「”ＬＯＮＤ”が入るの？」

渚の正体不明の病気とか朋也の暗い家庭環境とかな
本当にすこしだけどね

ア「なるほど、”ＬＯＮＤ”はそういうのもなのね」

そうだよ
純粋な”輝志”はないんじゃね？

ア「たしかに・・・・」

しかしなかなか執筆時間ってとれないものだね。
三日に一度くらいで更新する人は凄いな

ア「あなたは一話一話を少しずつ書かずに一気に書くからでしょう
一日に少しずつ書けばいいのでは？」

ダメなんだよなぁ。勢いが出た時に一気にやらないとノらないんだよ。

ア「ご愁傷さま。そういえば蒔風は？」

今寝てるよ、寮で

ア「世界に言ってる間はこっちに来れないんですか最初はいたのに」

ほら、あそこはまだあいつ自身の世界だったし

ア「ご都合主義ですね。その設定も今考えたでしょう」

いいじゃんつじつまが合えばなんとかなつ・・・・と思う

ア「新米が何を言っているのか・・・」

すみません

では次回また会いましょう

この町と、住人に幸あれ

ＣＬＡＮＮＡＤ　～日常と幻想、そして開戦～（前書き）

さて、二日目です

ＣＬＡＮＮＡＤ　～日常と幻想、そして開戦～

この世界での一日目が終わり、「奴」がやって来てから夜が明け、二日目が始まった

あいつは必ず岡崎を狙って来るはずだ。

そう考えた蒔風がとろうとした行動は岡崎の家に張り込むことだった

しかし・・・・・・

「やべえ、わかんねぇ」

はい、今オレ蒔風　舜はまた迷子になっております

畜生、岡崎の家くらい情報くれよ、世界さんよ

仕方がないので学校前の坂の麓で待つことにした

そうしていると、だんだんと登校する生徒が増えてきて、待ち続けて十五分ほどしたところで、岡崎と古河が一緒に登校する姿が見えた。

周りの生徒には全く怪しまれなかった。

ダンボールかぶってたからな

そこでオレは隠れていた茂みから出て、五メートルほど前を歩きな

がら、岡崎たちを意識の範囲内に入れた。
そうして歩いていたら、どうやらあちらが気づいたようで、古河が挨拶してきた。
「蒔風さん、おはようございます」
「おぉ、おはようございます古河さん」
「渚でいいですよ。皆さんそう呼んでますし」
「あー、な、渚さん？」
「はい」
ダメだ。やっぱり名前で呼ぶのは慣れない。
「よう」
「おお、岡崎。最近どうだ？」
「特にないぞ。っていうか昨日あったばかりで最近もなにもないだろ」
「ん、まぁな。でもほら、社交辞令社交辞令♪」
なるほど、特に異常はなかったようだ。隠しているわけでもなさそうだしな。
「お、そういえばお前パン好きか？」

「ん?特に嫌いなわけじゃないけど」

じゃあこれやる、と岡崎が二、三個パンをよこしてくれた
昼飯は買うつもりだったし、資金はたくさんあるから金に困っているわけでもないが、こういうのは素直にうれしいな

「ありがとうな」

「あ、朋也くん、そのパ「気にするなよ知り合いのパン屋にタダでもらったんだ」・・・もう」

「ん、じゃああありがたくいただくぜ」

「ああ」

そんなこんなでクラスの違う渚と別れて、俺達二人は教室に入っていく。

そしてHRが始まり、午前の授業が終わり、昼休みに入る前に春原が登校してきて、岡崎と話し始めた

「岡崎っ!なんで僕を置いていくんだよ!」

「お前誰だ」

「あのその知らないフリやめてくれませんかねぇっ!?すごく傷つくんですけどっ!」

「悪かったよ。だからそんなに顔を近づけるな」

「ふっ、やっぱりお前でも、僕の友達のポジションを失うのはおしいよな！うんうん」

あいつやっぱりモテねぇだろ。あと馬鹿だ

「今から昼飯だろ？」

「あ、僕なにもないや。ま、渚ちゃんのお弁当をもらうし、いっか」

「杏にボコボコにされるぞ」

するとギギギと春原の首が傾き、ホント？、と岡崎に問いかけていた。

ちなみに岡崎の目もかなりマジだった

「んー、あ！」

と春原はなにか思い付いたようでオレの方に歩いてきた

「なぁ、お前、僕よりあとに演劇部に入ったってことは僕の後輩だよな」

「まぁ、そうなるのかな」

「よし！今から僕が言うことに逆らうなよ！」

「やだ」

「逆らうなって言っただろぉー！」

「なあ岡崎。こいつどうすればいい？」

「杏を呼んでこい」

「よし！」

「よし！じゃねーよ！なんだなんだぁ？お前僕が怖いのかぁ？女子の力を借りるようなチキン野郎かぁ？」

春原がチンピラのようにケンカを売ってきた！

「あぁ？てめぇもっぺん言ってみよぉかぁあ゛？」

蒔風はメンチを切って春原に凄みをきかせた！

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

春原は戦意を削がれた！春原はへたれた！春原の敗北！

「まったく、何してんのよ」

「杏」

「ほら、昼ご飯食べに行くわよ。あんたも」

「ああ、行こう」

どうやら俺のこともかろうじて演劇部の仲間として受け入れられたようだ。

あまりからまないけどな。しかたないけど。

そうして俺たちは杏に連れられ演劇部部室まで行き昼飯を食べた。

なお、昼飯には岡崎からもらった「メカニックパン」なるパンを食べた。

パンとは思えないほど硬くて、食べるのに難儀したが、まあ俺だし、何とか食いきることができた。後ほど計測したら鉄分がとんでもない量入っていた。

そういうものなのか？鉄分って

さすがにひとつでギブアップして、残りの二つのうちの一つは春原にあげた。

食えないと騒ぎ出したところで杏がもうひとつを投げつけた。

春原の口にクリーンヒットし、そのまま食道に流れ込んで詰まったようで、水を飲んでもふやけず、このままでは春原が死んでしまうので思いっきり腹を殴って一命をとりとめさせた

そうして午後の授業も終わり放課後である。

今日は皆それぞれに用事があったようなので、部活はないそうだ。

ちょうどいい、このまま岡崎の家を調べて今日から張りこもう。

俺の世界みたいになるのはまっぴら御免だからな

そうして岡崎は渚と一緒に下校しだした。

その後をついていくオレ

すると二人はパン屋さんの中に入って行った。
ここが岡崎の知り合いのパン屋ってところか？

と思い店名を見てみたら「古河パン」と書いてあった

ということはここは渚の家か

ちょうどいい。ここもチェックしておこう。
ついでにあのパンの創作者の顔を見ておこう。

そう思い店の中に入ると

エプロンを制服の上からかけた姿の岡崎と渚が店番をしていた。

「お前らが店やってるのかよー！！？？」

「あ、蒔風さん。どうしたんですか？」

「い、いや、今日食べたメカニックパンっていうのが愉快過ぎてな、。どんなパン屋か見に来たんだ。」

「でもなんでうちのパン屋にピンポイントに？」

「春原に聞いた」

あとをこっそり付けてきたなんて言えない。言えるわけない！

だから適当なスケープゴートを用意した。春原・・・・便利な子！！

「あいつか・・・で？感想は？おまえ普通に食ってたけど・・・」

「ああ、おれは何とか大丈夫だったが、春原のあの反応を見てわかるとおり、あれは常人じゃとてもじゃないが食えない。硬すぎる。人を殺せるな。まあ味は悪くなかったがな。あんなパンどうやって作ったんだ？」

といったところで後ろでヒック、という声が聞こえた。
振り返ってみると渚に少し年齢を重ねたような女性が、目をウルウルさせて立っていた。

「わ、私の・・・・」

「私の？」

「私のパンは、人を殺せるような必殺仕事人みたいなパンだったんですね～～～！！！」

「！！？？？」

「さっ、早苗！どうしたんだ！？また誰かに泣かされ・・うお！待て早苗！おれは大好きだぞぉ～～～～！！」

「！！？？！！？！？！？」

「お、おかあさ～ん！おとうさ～ん！」

「お母さん！？お父さん！？若いなおい！」

「ああ、驚いたか。あれが渚の両親だ。アホ親子だ。見ていて面白いぞ。とくにおっさんがな」

「はあ・・・そういえば、もう遅いが、岡崎、お前は帰らなくていいのか？」

「大丈夫ですよ。朋也君はうちに住んでますから」

「ふぇ？ここに？」

「ばっ、渚！」

「どうしたんですか？朋也君」

「んなことといきなり言われたら戸惑うだろ！」

「ああ、なるほどね。親公認の中ってことか」

「えっ、それは」

「お前、理解速いのな」

「そりゃまあ、理解しなきゃいけないのでね」

「？？どういうことだ？」

「気にすんなよ。んじゃ、オレはかえるな」

「気をつけてな～」「お気をつけて」

「おう」

そして俺は帰路につくふりをして、前にある公園の茂みの中に身を潜め、ジッとした。

これからここで見張るか・・・・

そうして三十分後、渚の両親が帰ってきて、パン屋も閉まった。

さらに見張りを続けていると、家から二人、誰かが出てきた。

岡崎と渚か？なんか話してるけどよく聞こえないな・・・

Ｓｉｄｅ　岡崎

今日も渚は演劇の練習をするらしい。

なんでも、せっかく新入部員が入ったんだから、また何かやりたいんだそうだ。

「でもあいつ、なんかおかしな奴だよな」

「蒔風さんのことですか？」

「ああ、なんだろうな。昨日来たばかりなのに、不思議となじんだっていうか。でもなんかそれでもみんなから外れてるよな」

「ふふっ」

「なんだよ」

「やっぱり朋也君はやさしいですね。昨日来た転校生を気にかけてあげるなんて」

「寝る」

「あー！待ってくださいよ～！」

「・・・嘘だよ。でもな」

「はい、不思議な人です。まるで・・・・」

「まるで？」

「外から来た人・・・・みたい？」

「そりゃ、転校生なんだから外から来たんだろ？」

「う～～～ん？？」

そういってうなる渚。仕草がいちいち可愛らしいな。
アホ毛もミョンミョン揺れている。

ブルっ

今日は寒いな、ソロソロ家に戻るか。
練習はしてないけど、このままじゃ体調を崩す

「渚。今日はやめて家に入ろう。風邪ひいちまう」

「あ、じゃあ一回だけ」

「はいはい、一回だけなー」

そう言って渚は電灯の下に立つ

そしてあのセリフを言うのだ。俺があいつの練習を、最初に見たときのあのセリフを。

それは、始まりのセリフだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

渚が街灯の下に立ち、偶然か、こちらのほうを向き、言葉を紡いだ

「もし、よろしければ…」

それは・・・・

「あなたを…」

とても幻想的な空間を作り出し

「あなたを、お連れしましょうか」

そしてきっとこの言葉からこの物語は始まったのだろうと連想された

「この町の・・・・願いが叶う場所に」

その瞬間

「奴」が渚の首をはねようと闇の空から落ちてきた

「っ！」

ギャリン！

その凶刃を俺はとっさに天地陰陽のうちの一本を引き抜き、手刀で受けるように弾き飛ばした。

「！！！渚ぁ！」

「は、ふぇ、と、朋也く・・・」

「動くな！！！」

ギイイン！ギャンチンキンギャリリリリ、ギャァン！

最後の一太刀で、風林火山の「林」を抜き放ち、奴との距離をとる。

そのすきに渚を抱え、岡崎のほうに連れていく

「渚！大丈夫か、渚！おい蒔風どういうことだ！なんでお前がここにいる！あいつはなんで渚を！・・・くそっ、警察を、その前におっさんを・・・・」

「それはできないようだ」

「なんでだよ！すぐそこだぞ！」

「この公園を包むように結界が張られている。出れない」

「結界？何言ってるんだしっかり説明を・・」

ブォン

その瞬間、蒔風が渚と岡崎を包むように簡単な結界を張った。

これで流れ弾に当たる事はなくなるだろう

「お、おい！」

「青龍、説明してやってくれ」

「・・・御意に」

結界の中に青龍を潜り込ませ、岡崎と渚を任した蒔風は、「奴」ほうに向かっていく。

「待てよ！おまえ、一体なんなんだよ！」

岡崎は蒔風に問いかける、せめてそれぐらいは答えろ、と

渚はまだ何が起きたのかよく理解できていない。
無理もないだろう。いきなり視界の外の頭上から襲いかかられたのだ。何が何だかわからない。
しかし自分がとんでもない脅威にさらされた事は判るらしく、いまだに体が震えている。

そんな二人に、蒔風は立ち止まってこういった

安心しろよ、大丈夫だと言わんばかりに、自信満々にこういうのだ

「気にすんなよ。ただの・・・・」

――ただの世界最強だ――

銀白の翼人、始動

to be continued

ついに戦闘に入りましたねえ

アリス「生徒会長は？寮母さんは？」

出なかったねえ

ア「そんなんでいいのかよ」

だってこの時期だったら智代は生徒会の仕事で演劇部には顔出さないだろうし、美佐枝さんは蒔風があんまり寮にいないし。

ア「・・・ファンに殺されるぞ」

オレだって・・・出したかったよ・・・・

ア「でも古河夫妻は出てたわね」

なんとかね。

話の構成上、岡崎と渚が一番の柱だから、その周辺ぐらいしか描写できないからな。

蒔風は言ってしまえば「奴」の狙う最主要人物か、それに近しい主要人物を守れればそれでいい

だからその周辺以外には干渉しないんだよ。

ただでさえ異端者で異世界人、しかも世界の分類も違うんだからさ

ア「なるほどねえ」

でもこんな説明で納得してもらえるとは思っていません。だから

ア「だから？」

とにかくごめんなさい、と・・・・・ね

これは完全に自分の文才のなさが招いた結果ですので、みなさんどうか温かい目で見てください

ア「私からもお願いします」

さて次回は

ア「ついに始まる「奴」との戦い。奴の使う武器とは？そして世界の意志が呼応するとき、強き力がもたらされる」

と、なっております

ではまた次回

透き通る、夢を見ていた

ＣＬＡＮＮＡＤ　～戦闘終了、その後とそして～（前書き）

皆さんどうやって執筆時間をとっているんでしょうね

CLANNAD　～戦闘終了、その後とそして～

「奴」と俺が公園の真ん中で対峙する・・・・

オレは風林火山の「風」と「林」を抜き組み合わせ一本にし、同じように「火」と「山」を組み合わせて構える。

「やっぱりおまえが手にしたのは「十五天帝」だったか」

「そういうおまはんの武器はなんてんだい」

「オレのは「魔導八天」だ。よろしく、ねっ」

「さいですかい。・・・なんでお前この世界に来てすぐに行動しなかったんだ？」

「ふん、世界によって構築が違うのだ。それを解析し、いかように食らうかを算出せねばならなかったんだよ」

「あっさり教えてくれんのな」

「その程度、出し惜しみしてどうする。
・・・・それにしてもまあなんとも、また、邪魔してくれたなぁ、おい」

「当たり前だ。この世界を、貴様の好きにはさせない。それ以前に、あいつらは俺の友人だ」

「ふん。出会って二日しか経ってないというのに、友人か。よくそれで命を懸けられるもんだ」

「あいつらのためでもあるし、オレの世界のためにもだからなあ！」

バッ

と俺が一気に間合いを詰める。

風林火山を振り回しながら、「奴」に迫る。

「奴」は腰の高さ辺りに魔導八天のうちの三本をプロペラのように回して剣撃をうける。

走り、飛び、転がり、跳ね、交差し、打ち合う。

「ラア！」「フン！」「オリヤァ！」「ツッ」「ハァ！」「ラッセ！」「オウッ！」「ダァ！」

お互いの気合がぶつかり合う剣撃が公園の中だけで響いている・・・・

Ｓｉｄｅ　岡崎

「・・・・・・・・・というわけでして」

俺と渚は青龍とかいう男から事の顛末を聞いた

他の世界からきた蒔風は、あの黒い奴から他の世界の崩壊を防ぐためにやってきたそうだ。
そして俺たちがそのトリガーらしく（なんでも俺たちは世界の中心らしい。信じられないが）それで俺たちを守るためにこの公園で張ってたそうだ。

「だったら最初から話せばよかったんじゃ「信じますか？」・・・いや」

「わ、私も、この光景を見ていなければ、信じられませんし・・・・」

渚も落ち着きを取り戻してきたみたいだな。
この結界の外では蒔風が戦っている。俺も何か・・・・

「・・・いけません。ここにいてください」

「なっ」

「・・・大体考えることはわかります。主を・・・助けに行きたいのでしょう？しかしあの場は・・・あなたたちの居るべき日常（いばしょ）ではありません。ここが安全・・・です」

「で、でも・・・」

「・・・その気持ちだけで十分でしょう。大丈夫です主は・・・・世界最強ですから」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

互いに攻め、互いに受けて、二人は空に舞い上がる！

それでも二人は止まらない。打つ切る削る！

ギギギギギギギギッギイギギッギッギギギンンン、ガッギィ！

と最後に思いっきり打ちつけ合い、刃が交差し、組み合って、そのままの体勢で二人が落ちてきて、

ドッッッン！！！

思いっきり大地に足を踏みしめる。
数秒ほどその体勢で固まるが、「奴」の蹴りが蒔風の腹部にめり込みその体を吹き飛ばす。

「ゲボァッツァ！」

蒔風は後ろに飛び、どん、と岡崎たちの居る結界にぶつかり寄りかかり、片手を結界に伸ばし、それで体を支える。

「はあ、そういえばお前さん、結局オレを追ってきたのね？」

「ゲッホ、・・・ほっといたらいろんな世界も・・・・オレの世界も壊されちまうからな」

「安心しろ。その後にみんなが主人公になれる世界を作る。そうすれば誰もないがしろになんかされない、素晴らしい世界になるんだ。どうだ？誰もが幸せになれるんだぞ？いい世界だろう」

「・・・それは・・・・・だめだろうよ」

「あん？」

「何もせずに幸福を得るってか？馬鹿馬鹿しい、へどが出る！そんなものはいらねえ。「幸せな地獄」なんてな、必要ねえよ」

「生まれた時から主人公として生きてきてこれた運命を持つ奴に、言われたくねえなぁ」

「生まれた時から主人公だ？馬鹿かてめえ、生まれた瞬間からを描いた物語なんざねえだろうがよ。あらかたの物心ついた頃からだろうよ。主人公だからあれこれいろいろあるんじゃない。あれこれいろいろある奴が主人公になるんだ！運命なんて簡単な言葉で主人公（おれたち）の未来を決めるんじゃねえよ！」

「所詮そんなものは貴様だから言える戯言だ！」

「ちがう！幸せってのはな、他人を蹴落としてでも、手に入れられるかどうかってぐらい大切なもんだ！現に他人を蹴落とせば手に入るなんてものじゃないしな！」

「誰もがステージに立てるわけではないだろう！だから俺は誰もがステージに立てる舞台を用意するんだよ！そのために、そこをどけぇ！殺してやるぞ！最主要人物（しゅじんこう）！」

「・・・・このバカ野郎が・・・・・」

蒔風が怒気をはらんだ声でぼそりと唸る。

「いいか？こいつらはな、舞台に立つことすらもままならなかったんだぞ！部活は廃部状態、相談できる友達はいねえ、経験も知識も何もねえ！でもそんな状況でも、こいつらは舞台に立ちたいっていう強い願いで動いた！そしてステージに立ったんだ！お前の言う世界は素晴らしいのかもな、でもそれは、こいつらのような奴の努力を踏みにじる行為だ！おれはそれを許さない。オレは！銀白の翼人！おれの翼のつかさどる人の想いは希望・・・人の願いだ！」

蒔風は自分でもなんでこんなことを言っているのかもわからない。情報が来たわけでもない。ただ、そんな気がしたのだ。

こいつらは、必死だったと。

彼らがその願いをかなえるために、走り回っていたことを・・・・

もしかしたら彼はもともと知っていたのかもしれない。

しかし、それは誰にもわからない・・・・・・・

グッと右手の拳を胸の前で握り、そして打ち払うように一気にその手を振り下ろす！

「開翼（かいよく）！！！！」

バサッ

その瞬間

蒔風の背に、銀白の翼が現れた

「銀白の・・・・翼人・・・・っ！」

「・・・・オレはお前を許さない。こいつらのためにも、絶対に、だ！」

ダンッ　ギィン！

風林火山を構えなおし、蒔風が「奴」に迫る。

「奴」の体勢が崩れたところで蒔風が舞う。
その舞は華麗なる剣撃

「いくぞ！鎌鼬切演武（かまいたちきりえんぶ）！！！」

ザアッ！

無数の斬撃が蒔風の廻す風林火山から放たれ、「奴」を追いこんでいく

そしてその斬撃は一定の形をなす

「鎌鼬切演武、四季早々（しきそうそう）、春」

ザザザザザザザザザザザザザザ

「花吹雪！」

ザザザザザザザザザザ、ズアッ！

「奴」の周りをぐるぐると、斬撃が取り囲むように、回りながら、迫っていく。

奴を取り囲む斬撃の円が、徐々に狭まり、奴を切り刻む。

「ぬ、あああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！

ズゥアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

その斬撃も終わり、「奴」の姿が見えてきた。
満身創痍ではあるが、奴はいまだに立っている。

そこで蒔風は岡崎たちを覆っていた結界を消した。

Ｓｉｄｅ　岡崎

蒔風・・・・

なんであいつが俺たちのことを知っているのか、あのステージのことを知っていたのかは分からない。

でも、あいつはわかってくれている。そんな気がした

そして美しい舞いが始まった。

「綺麗・・・・」

渚もこの光景に目を奪われているようだ

一つ一つが大変な威力だろうに、思ったのは凄さより美しいということだけだった。

そうしてると結界が消えて、蒔風がやってきた

「よし・・・とどめを刺そうぜ！」

「は？」

俺たちに戦う力はないんだが？

そういうと蒔風は、笑顔でこういった。

「大丈夫だ。お前らも、一緒に、この町（せかい）を守ろうぜ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いくぜ！ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ！！」

そう言って蒔風は岡崎の肩をポン、とたたいた

その瞬間、どこからか声が聞こえてきた。

【ＣＬＡＮＮＡＤ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

そうすると、地面から光がポツポツと雪が降るようにそして大量に浮かんできた

「さあ、この町の、願いをかなえよう」

その光は「奴」を覆い尽くし、その動きを止めた。

「な、んだこれは！」

「これはＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫだ。世界だってお前に抵抗するんだよ」

「ぶっ、っふ、あ」

「よし、行くぞ岡崎！お前の想いを強く念じろ！」

「あ、ああ！」

【ＣＬＡＮＮＡＤ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

また声がすると、巨大な光でできた剣が蒔風の手に握られていた。
そしてそれは岡崎の手にも。

「これが俺たちの力だ。行くぞ岡崎！」

「よし！おおおおおおおおおおおおお！」

「あああああああああああああああああっ！」

この町にいるすべての人の、今この場の状況はわからなくても、この町を思う気持ちが、力となる！町もまた、守るために、力を発揮する！その想いを、町は・・・この町の幸せのために！

蒔風と岡崎が、一気に駆け、「奴」をその想いでたたっ切る！

「ぬ、ぐあああああああああああああああああああ！！！！！！！」

ザシュシュッ！、ドガァァァァァァァ！

二人の斬撃が「奴」を切り裂く。
そして三等分にされた「奴」が爆散する。

ァァァァァァァァ・・・・シュウウウウウウウ

「またしても・・・また、負けただと？この俺が！畜・・・生！」

「お前の魔導八天はどうやらパワー重視らしいな。オレのは多様性がめちゃくちゃあるから工夫しないと勝てないぜ」

「余裕そうにしておけ、次は勝つ・・・・・」

「やわせねえよ。オレは世界最強だからな。勝ち続けてやるさ」

ウウウウウウウウウウウウ・・・・・・

そうして「奴」は、最初からそこにいなかったかのように、消えた。

その瞬間、「奴」の張っていた結界が消滅し、普通の夜が戻ってきた

公園の時計を見ると、五分も経っていなかった。

「五分も経ってない・・・・」

「あの中では若干時間の流れがずれるようだな」

「・・・で、終わったのか？」

「ああ、この世界での役目は終わった」

「あ、あの、よくわからなかったんですけど、ありがとうございました！」

「気にすんな。俺の世界のためでもあるんだからな」

「行っちまうのか？」

「すぐにってわけでもないんだがな。あと一時間ほどで、かな。こ

の世界にいたのはたったの二日・・・もう三日目になっているけど、それくらいだしな」

「あの、じゃあ何かお礼を」

「ストップ。お礼が欲しくてやったわけじゃない」

「で、でも・・・」

「ふう、岡崎、渚」

「ん？」「は、はい」

「お前たちにはこれから大変なことが多く起こるかもしれない。しかし忘れるな、さっきの力を。この町はあれだけの力を持って、お前たちを見守ってくれている。そして、この町の人々も、な」

「はい！わかりました！」

「でもなんでそんなこと・・・」

「ではな、二人とも。この世界はもう大丈夫だろう」

「あ、ああ、じゃあな」

「おう、渚。もう部活にはいけないけど、ごめんな」

「大丈夫です。これからもがんばります！」

「ははっ。ん、じゃ」

「なあ！」

「ん？」

「ありがとな！本当に、ありがとう！！」

その言葉を受け、蒔風はにっと笑い、歩いていく

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＣＬＡＮＮＡＤ］

目の前に、光のゲートが開きそれをくぐる。

さぁって。次の世界は～なんだろな～

－－－

その話はすぐに噂になり、放課後にはほとんどの生徒が知っていることになった。
だが、その転校生がだれか、という明確な情報は誰も知らなかった。

「噂の転校生って、あいつのことよね？」

演劇部部室で杏が言う。
ことみは噂のことを知らなかったし、春原はさっき来て知ったばかりで、驚いていた。

「蒔風君、転校しちゃったの？」

「あいつへんな奴だったよな。来たときからいなくなるまで。あいつの部屋寮にあったらしいんだけど、荷物が何もなかったそうだぜ？」

「そ、それは怖いですね・・・」

ことみ、春原、椋が蒔風のことを話している。

「ねえ朋也、あんた何気によく話してたじゃない。何か知らないの？」

杏が岡崎に聞いてきた。
しかし岡崎は、知らねーよ、という。

きっと言ったところで信じてもらえないだろう。

そうして数日が過ぎるとそんな噂は日常に押し流され、忘れられていった。

しかし、二人だけは覚えている。

岡崎はあの剣を握った感触を。
渚は目の前で羽ばたいた翼の美しさを。

彼の強さを忘れない・・・

彼は今、どの世界で戦っているのだろう・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

蒔風がゲートをくぐり、次の世界に降り立つ。

降り立つ先は、新たなる時代の始まり。

みんなの笑顔を守るために戦った、２０００の技をもつ男の世界である。

to be continued

ＣＬＡＮＮＡＤ　～戦闘終了、その後とそして～（後書き）

蒔風「いやあ、おわったおわった」

おつー、そしてバタン

蒔「どうしたんだ？」

戦闘描写がむずかしいー

蒔「あー、ほら。だれてないで、技の説明でもしろよ」

わかっ「私がやるよ！」・・・・やって

アリス「あんたが来ると目立たなくなるからね！こういうところで派手に行くわ！」

蒔「いろいろとすげえよ、あんた」

ア「どうも♪さて、といきますよー。

説明しよう！鎌鼬切演武とは、蒔風が風林火山によって作り出した斬撃を飛ばし、攻撃する技である！ただ飛ばすのもあれば、「四季早々」のように決まった型をとるものもあるし、「短撃」で一発で攻撃することもある。

ってもんだい！」

蒔「見事だな。あんたほんとに誰だよ」

ア「私が主人公の作り主だー！！！」

蒔「違うだろうよ！」

ア「うっさい！そう思わせてくれ！うはははははははー！」

ダメですね、もう

では次回のことを蒔風に

蒔「おれ！？」

ア「あたしの仕事だ！」

蒔「戻ってきた！」

ア「えーコホン。次の世界で蒔風が出会う男とは？そして「奴」の攻撃は！？」

蒔「それだけかい！」

ア「だって本編でなんの世界か言ってないのにここで言うのは、ねぇ？」

まぁ、わかる人にはわかるでしょう。お楽しみに！

ではまた次回

からっぽの星、時代をゼロから始めよう

クウガ　～接触～（前書き）

大変なことを忘れていた・・・

詳しくは後書きで

クウガ　～接触～

皆さん、こん、にち、はー！蒔風舜でーす！

今ぼくは警視庁の中にいます。今目の前にいるこわいかおの刑事さんに招待してもらいました！

やったね（＾ｏ＾）ｖ

今は小さい窓のある暗い部屋にいます。両手に金属のリングをはめています。ファッションだね！

さっきまで目の前の刑事さんとお話してました！

単刀直入に言おう。
現在取り調べられ中だコンチキショー！（泣）

不幸だ。なんでこーなるの・・・？

ーーー

この世界に着いたとき、まずしたことは身の回りを確認ダァッ！！
服装はスーツになっていて、なんと警察手帳を持っていたんダァッ
！！
所属は「未確認生命体合同捜査本部」だそうダァッ！！

未確認生命体・・・グロンギという名称の彼らは、「ゲゲル」と
称した殺人ゲームを長期間にわたって行い、大量殺戮を繰り返した。
そのために、警視庁に未確認生命体合同捜査本部が設置され、未確
認生命体と戦っていた・・・らしい。

その時点で「クウガの世界」だと言うことはわかった。
クウガが何だかはわからないがね。

そうして警視庁に来たオレは受付の人に「未確認生命体合同捜査本
部ってどこですか」って聞いたんだ。
そしたら怪訝そうな顔されて、お待ちくださいと言われて待つこと
１５分。こわいかおの刑事さんに連れられてここにいる。

身の回りの物は没収された。
虚偽の疑いで逮捕だそうだ。

たしかに虚偽なんだからなにも言い返せない。

だからと言っていきなりこれか？
世界め・・・・・謀りおったか！？

ガチャ

思い悩んでいると取調室の扉が開き、一人の男性が入ってきた。

「おお、悪いな一条。あいつが帰ってくるってのにな」

「大丈夫ですよ杉田さん。五代が帰ってくるまで、まだ時間があります」

一条、と言う名を聞いて、この人が主要人物であることがわかる。
便利だなおい。

一条　薫
未確認生命体合同捜査本部にて、幾度となく未確認生命体と戦ってきた刑事。
現在は長崎県警に所属・・・か

情報が流れて来るトリガーはまちまちのようだ。
もっとサクッと来てくれるかな？

いちいち驚くんだけど・・・・・・・

「で、この人が？」

「ああ。受付に「未確認生命体合同捜査本部はどこですか」って聞いたらしい」

「そうか・・・・だが、未確認生物による事件は終わった。だからもう捜査本部はない。ただの勘違いだろう？それだけで逮捕か？」

「いや、逮捕の理由は違う。こいつが警察手帳を持っていて、所属が捜査本部になっていたってところだ」

「それは・・・だがしかし、さっき彼の所持品を見てきたが、すべてしっかりとした本物だった・・・所属をのぞいてな」

「ああ。だからとりあえず虚偽ってところで連れて来たんだ。なにかあると思ってな」

「あの・・・・オレが対策室にかつていたっていう可能性は・・・」

「「ない」」

「即答ですか・・・（泣）」

「って言うのも、オレも一条も、捜査本部にいたからだ。そしてお前のことは知らない。なのに所属が捜査本部。怪しむのは当然だろ

？」

「君が何を考えているかは知らない。だが決して悪い気は考えてないんだろう？」

「どうしてそう思うんだ？」

「この人の目が、なんとなく五代に似てるんですよ。見た目じゃなく、雰囲気が」

「あいつに？そうかぁ？」

「で、だ。正直に話してもらえないかな。未確認生物なんてものを相手にしてきたから、少しくらい突拍子もない話でも、理解できると思うけど」

・・・ふぅ、どうやら話さなければ解放してもらえないかな。

そうしてオレは話しはじめた。

異世界から来たこと、敵がいること、この世界の人間が狙われること。

一通り話終わってから、杉田さんが口を開いた。

「どんな話かと思えば、かなりぶっ飛んだ話だな。新しい未確認と戦いに来ましたって方が説得力あるぜ？」

「だが、それが本当なら・・・誰が狙われる?」

「おいおい一条!信じんのかぁ?」

「あ、そうだあともう一つ」

「なんですか?」

「クウガって、なんのことか教えてもらえますか?」

「「!!」」

「?」

「その名を、どこで?」

「この世界に着いた時に、クウガの世界って情報が」

「・・・なあ一条」

「ええ・・・狙われるのはその「クウガ」なのか?」

「おそらくは。「クウガ」とは?人の名前ですか?」

「いや、だが・・・」

「我々とともに戦った男の別の呼び名だよ。・・・会いに行くか?」

「!!一条!」

「大丈夫だ。お前も、そこまで本気ではないだろう。こんな逮捕。だから調書も取らず、話を聞こうとしたんだろ？」

「・・・・・・・・・まあ、な」

「確かあいつはあと二時間後にはポレポレにいるはずだ。行こうか。えっと・・・」

「蒔風です。蒔風舜」

「蒔風さん。ではいきましょう」

「はい。ありがとうございます。杉田さん、お騒がせして申し訳ございませんでした。それと、本気で逮捕してくれなくて、ありがとうございます」

ペコリ、と一礼してから私、蒔風舜は一条さんに連れられて、「クウガ」なる人物が来るという喫茶店、ポレポレに向かった

――――――

山道を一台のバイクが走っている。
乗っている人間は二十代前半くらいの男性。
ヘルメットの下の顔には、ウキウキとした笑顔があった

（一条さんにおやっさん、それにみのりに桜子さんは元気にしてるかな）

彼の名は五代雄介
ここだけの話、彼がかつて多くの怪人たちと戦ってきた、仮面ライダークウガである。

彼は今、冒険の旅から帰ってきたところだ。
ちなみにおやっさんとは彼の居候する喫茶店、ポレポレのオーナーで、みのりとは彼の妹である。

さらに桜子とは本名、沢渡桜子。彼が変身するクウガに関しての古代文字の解読をして、彼の戦いをフォローした人物だ。

そんな久しぶりの友人との再開に、彼は胸を膨らませていた。

「この分なら予定通りに・・・・・ん？」

道の真ん中に人がいる。

こんなにもよい天気で、視界ははっきりしてるのに、良く顔が見え

ない。
おかしいと思いながらも、基本お気楽な彼は特に気にせずそのまま通り過ぎようとした。

そして

男を抜こうとしたとき、男の手にいつのまにか大きな剣が握られていて

その剣が五代の愛車、ビートチェイサーごと真っ二つにしようと襲い掛かってきた！

轟っ！！

「！？！っ！うわぁ！」

寸でのところでかわした五代だったが、敢え無く転倒し、身体が道に投げ出された。
とっさに受け身をとって軽い擦り傷だけで済んだのはさすがはクウ

ガといったところだろうか。

片膝をつき、軽く構えながら五代が叫んだ。

「なんだお前!?」

その声には若干の怒気が含まれている。

それはそうだ。

剣が本物でなくても大惨事だったろうし、本物なら自分は死んでいた。

しかし多くのグロンギと戦ってきた感性が、剣は本物であり、目の前の人物が自分の命を狙っているのは明らかである、と告げていた。

だから何をするんだ、ではなく相手の正体を知ろうとした。

目の前のジンブツは、得体が知れなさすぎる。

「オレのことはいい。貴様、仮面ライダークウガだろ?それだけで十分さ」

そう言って男が近づいて来る。

五代は驚愕した。

「仮面ライダー」が何だかは知らないが、「クウガ」は間違いなく自分のことだ。

自分がクウガであることは、特に隠してはいなかったので、一条を始めとした警察関係者や友人の何名かは知っている。

しかし彼らがそのことを他人に簡単に言うとは思えない。

「お前、未確認の生き残りか！？」

だからこの問いに行き着いた。
そもそも自分をクウガと最初言ったのは未確認、グロンギたちだったからだ。

だが男は即座に否定した。

「未確認？あぁ、グロンギのことか。違う違う。オレはただお前を殺し世界を喰らうだけだ」

その言葉に五代は再び驚愕する。

未確認＝グロンギであることを知っている？

確かに、未確認に関して調べていた桜子は古代文字から奴らを「グ

ロンギ」と命名した。

だが世間一般、マスコミでは「未確認」としか呼称されていないし、警察内でも「未確認〇号」という名称だった。

それを一発で未確認＝グロンギだと呼んだこいつはいったい何者なんだ？

さらには世界がどうのこうのと言っている。

何を言っているんだ？

五代は次第に混乱してきた。

しかしそれ以上に命の危険が迫っている。

戦おうにも自分の腹部にあるアークルはまだ０号、最強のグロンギ、ダグバとの戦いの破損から回復していない。戦うつもりもなかったから特に気にしてなかったが、このままでは自衛もできない。

ビートチェイサーには警棒がついているが、あの剣に対抗できないだろうし、取りに行くにも距離が離れ過ぎている。

「ま、クウガといっても今はただの人間だな。終わらせようか」

まずい！

そう五代が身を強張らせる。

しかし、

そのとき不思議な事が起こった！

五代の腰にアークルが完全回復した状態で現れたのだ！

「なに？」

「くっ。（バッ）変身！」

とにかく戦うにしても逃げるにしても、変身するしかない！

そう思った五代は迷わず変身した。

そして彼は光に包まれ、立ち上がる。

なぜアークルが再び復活したかはわからないが、また戦わなければならないのか。

彼はマスクの下で一瞬悲しげな顔をして、まっすぐ相手を見据える。悲しげな顔はマスクには表れず、凛々しい姿の古代(リント)の戦士がただ構える。

彼の名は、仮面ライダークウガ。

皆の笑顔のために、悲しむ顔をつくらぬために、戦ってきた、戦士！

「っち！厄介な！」

ブワッ！！！

奴が接近の速度を速め、一気に近づいてきた。

奴の振るう剣がクウガの腹部を貫こうと突っ込んで来る！

それをギリギリのところで避けるクウガだが、掠めたらしく、うっすらとその装甲に傷がついている。

奴はさらに攻撃を続けてくる。

「くっ、おわっ、はぁっ！」

クウガは避け続けていくが、奴の猛攻に、ただえさえかわせるかどうかの攻撃が、さらにかわすのが困難になっていく。

しかし相手も決定打が決まらないのに業をを煮やしたのか、大きく剣を振り上げ、叩き落としてきた。

だがクウガもそれを避けられないわけではない。

むしろその瞬間が来るかどうかが勝負だった。

バガァっ！

と荒くコンクリートでならされた道路を砕いた剣は、地面にめり込んだ。

引き抜くのに一秒程かかる。

そしてその一秒がクウガの狙いであった。

クウガは奴が振り上げだ瞬間からビートチェイサーの方に駆け出して行く。

今は逃げるしかない

その考えからクウガは一切の反撃をしなかったし、ひたすら回避に専念していた。

そしてチャンスがきたらビートチェイサーを最高速度まで走らせ、一気に逃げるつもりだったのだ。

そうしてクウガは自らの考えのとおりに、ビートチェイサーに乗り込み、一気に最高速度まで上げ、その場から逃走した。

逃げるが勝ち
三十六計逃げるにしかずである。

――

「奴」は遠くなっていくその姿を見ている

こいつが本気で追えば追いつけるだろう。
しかし乗っているのは人間体ではなく変身したクウガだ。
ビートチェイサーのスピードを惜しみなくフルで出しているにちがいない。

五代のバイク、ビートチェイサー２０００の最高速度は時速４２０？である。

生身では耐えられなくとも、クウガに変身した今ならおそらくそのスピードで走っているだろう。

それでも追いつけるには追いつけるが、追いつく途中で都内に入り、警察が出て来て、最悪蒔風を相手しなければならない。

つまり奴のこの計画は

「ちっ、失敗か・・・」

というわけである。

しかし、奴は残念そうでもなく

「んじゃ、第二計画に移行しますかね」

と呟き、その場から消えた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

クウガ　～接触～（後書き）

しまった！！忘れてたよ！ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの説明をしていなかった！！

アリス「そんな大事なこと忘れるなよ！っていうかＡＮＧＥＬ　ＢＥＡＴＳ！！？？」

よくわかったな、飴をやろう

ア「わーい、じゃなくてＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの説明をしなさい」

はいよ

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫとは、各世界で蒔風が一回だけ発動できない大技である。

世界の意志とつながり、その力を引き出して使う。

世界の象徴ともいえるような技や武器が出て来て、それで攻撃するのだ！

また「奴」がある世界の「なにか」をとりこんでいたら、それを破壊することもできる。

しかしどの世界のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫも大ぶりなものが多く、最後の一撃にしか使えない。

当然、世界ごとに能力、形態、効果、すべてが異なる。

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～は、各世界での力を引き出す。またキメ技のための前準備でもある。

そして－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～にて、最大の攻撃をぶつける

大きく三つの形にその効果は表れ、

？最主要人物や主要人物に力を与える、その世界の人物主体の場合（この場合の使用者の負担は一切かからない）

？蒔風に最主要人物、又は主要人物の力を付加し共に攻撃する、蒔風に力をつける場合。

？最主要人物と蒔風の力を合わせ、新しい一つの武器（力）を作る、どちらの力も使う場合

がある。

ア「ようは世界ごとに一回だけ出せるすげー技ってことでしょう？」

そのとおりですねはい。めんどくさくてごめんなさい。

ちなみに【ＣＬＡＮＮＡＤの世界】でのＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＷＥＰＯＮ～で町の意志の光のなんか綿みたいのを出してあいつの行動を止めて、

ア「描写適当ですね」

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＡＣＫ～で光の大きな剣でぶった切るのですよ

このパターンは？ですかね。

ア「ですかねってまた適当な」

この小説もノリで描き始めたものだからねえ。

こんな中二な話が俺の頭にあるんだぜって友達に言ったら、「書けばいいじゃん」って言われて書いたからね。

ア「さらりと誕生秘話を・・・」

そんな大層なものじゃないって

ア「というかなんでこんなに大事なこと忘れたんです？」

鎌鼬切演武の説明書いたら終わった～ってなって説明した気でいた

ア「このド素人が！」

すんません！！！

では、次回予告をどうぞ～～！！

ア「いきなりの「奴」の襲撃から何とか逃げ延びた五代。そして蒔風との出会い。さらに「奴」の第二の計画とは？」

お楽しみに！

ではまた次回

だから見ていてください。俺の、変身！

クウガ　～脈動～（前書き）

思った通りに書くのって大変だ・・・

クウガ　～脈動～

「奴」の五代襲撃から一時間後

五代雄介なる人物を待つ間、オレは一条さんから五代さんについての話を聞いていた。

聞けば聞くほどあってみたくなってくる人物だ。

どうやら妹さんがいるらしいが、働いている保育園で待ってるらしい。

喫茶店ポレポレのオーナーからコーヒーを飲みながら彼の到着を待つ。

このコーヒーも旨いが、五代さんのコーヒーはもっと旨いらしい。

そうしていると、程なくして喫茶店の扉が開き、一条さんが迎える。

どうやら五代さんが到着したらしい。

「おお、五代！予定より速いな・・・・ってどうした！？服がボロボロだぞ！」

「一条さん、オレ、今さっき襲われました！」

「なにっ！？」

「世界とか訳のわかんないことといってきて・・・「それは本当か！？」・・あ、あなたは？」

「ああ、紹介しよう。彼は蒔風舜といってな・・・・・」

そうして一条さんがオレの事を五代さんに説明してくれた。
その際、オーナーがいるので外の駐車場まで三人は出てきた。

やはりこの五代雄介と言う人が最主要人物のようだ。

「は、はあ。世界を、ですか？ちょっと信じにくいです。でも・・・・」

「でも？」

「オレを襲ってきた奴も同じようなことをいってました」

「間違いないな。「奴」だ」

「それに一条さんも信じているみたいですし、信じます」

「そんな簡単に!?」

「信じられるなら、信じた方がいいでしょう?」

やべぇ、かっけぇ
つか、器の大きな人だ。

「ありがとう」

「いえ、どうも。あ、一条さん、そういえばベルトがまた復活したんですよ」

「ベルトが復活?」

「五代がクウガに変わる際に必要な物だ。破損して、使えなかったんじゃ?」

「オレにもなにが起こったのか・・・わかりません。そうだ蒔風さん、なにかわかりますか?」

「うーん、おそらくは「世界」がやったことだと思う」

「世界が？」

「ああ、「奴」の力は強大だからなぁ。それに対抗するために失われた力を復活させたんだと」

「それでクウガの力が・・・・」

「ああ。あと、「奴」は何か言ってなかったか？」

「世界を喰らうって言ったくらいで他には・・・・」

「手がかりはなしか・・・・」

プーッ、プーッ、プーッ

そう話しているとビートチェイサーに警察無線が入る。

「奴」に襲撃されたことから、何か起こったら、と五代が回線を開いておいたのだ。

《警視庁から各局へ通達。科学警察研究所が何者かに襲撃された。犯人は武装している可能性がある。繰り返す、犯人に武装の可能性あり！！十分に注意されたし！》

「科警研が！？」

「科学警察研究所ってなんだ？なにがある？」

「クウガの事とか、未確認の事を研究して、サポートしてくれていたところでです！」

「・・・「奴」、か？もしかしたらクウガの情報を得るために！？一条さん、研究所ってどこですか！？」

「一条さん、オレも行きます！蒔風さんは着いてきて下さい。なにか乗り物は？」

「あ、そういえばバイクを貰ってたんだ・・よっと」

蒔風がふっ、と腕を振るうと、クルクルと回りながらそこに一台のバイクが現れ、ドッ、と着地した。

「す、すっげー」

「ま、ますます信じるしかないようだな」

「行きましょう。「奴」は待ってはくれない。」

「あ、はい！」

――――――

そしてちょうど駐車場に出るところで、二台のバイクと一台の車がきた。

「やはり来たか・・・・」

それに乗っていたのは蒔風と先程山道で逃した男と車にランプがのっていたので、おそらくは刑事であろう男だった。

「やあやあ諸君！遅かったな。オレっちの目的はもう果たされてしまったぞ？」

と、自慢げに「奴」が手にした物を三人に見せつける。

それはケースに入った何かで、それを見た瞬間、五代の顔色がサァッ、と変わった。

「あ、あれは！」

「どうした五代？」

「あれはダグバの、零号のベルト！」

「なんだと！？なぜこんなところに！」

「知らなかったのか？最後の戦いのあとに、密かに回収され、ここに保存されていたのだよ。甚大な被害を出したとはいえ、古代の知的生命体の一部だし、人類の進化のきっかけがあるかもしれんしな。研究者なら放ってはおかないだろうな」

「「・・・・・・」」

「なるほどねえ」

驚きでまともに動けない二人に変わり蒔風が口火を切る。

「で、お前はそれでどうするつもりだ？まさか人類の進化ってやつを促すのか？」

「それも面白そうなんだが、これの使い道はもっと別にある」

「それが何だかは知らんが・・・やらせると思うか！！」

ゴッ！！！！

蒔風が「奴」に突っ込んでいく。
その手は「風林火山」の一本「風」にあてられ、攻撃範囲に入るや否や、「奴」を居合切りで切り伏せる！！！

・・・・はずだった。

しかし「奴」はそれの柄を足で踏みつけ、そのままジャンプし蒔風の側頭部に蹴りをぶちかます！！！

ゴガッ！！！、と強烈な音がして、蒔風が研究所のほうへ吹き飛んでいき、壁に当たり、中に突っ込み、いくつにもバウンドしていく。

「ぐっ、あぐぁぁあ・・・・っ！」

そうしてまだ半分空中に浮いている状態の蒔風の背後に「奴」が廻りこみ蒔風を掴み上方へと投げつける。

グッ、ベキベキベキ、バガッ！！！

天井がいともたやすく砕け、蒔風の体が五メートルほどの高さに放り出される。

かすむ視界に蒔風が太陽をとらえた時に、そこに奴のシルエットが浮かび、そこから落ちてきた「奴」は蒔風を踏みつけそのまま地面に着地する。

いや、着地なんてもんじゃない。あれは墜落と言っていいレベルのものだ。

ボッグァ！！！！

「ぐぶぇッ、っがっは！！！」

蒔風を踏みつける「奴」はここで初めて剣を抜く。

［魔導八天］

その刀身は美しく、素晴らしく、一点のゆがみも傷もなく、整った形をしていた。
しかし行うその所業は、間違いなく歪んだものだった。

「ちょうどいい。ここで死ぬか？」

「奴」がその剣を振り上げ、蒔風の首を撥ねようとしたところで

バンバンバァン！！

その刀剣が激しくぶれた。

「なに！？」

「奴」が視線を向けた先には、クウガのフォームの一つ、風の戦士、ペガサスフォームに変身して、ペガサスボウガンを構えた五代がいた。

フォームによって周囲のものを己の武器に変えるクウガは、おそらく一条から拳銃を借りたのだろう。

そしてペガサスフォームの能力、超感覚をもって、「奴」の振り下ろす魔導八天を撃ちその軌道をそらしたのだ。

その瞬間を逃す蒔風ではない。

「はぁ、っ！白虎！！」

そう叫んだ瞬間、蒔風の右脇の前部に龍虎雀武のうちの一本、「白虎」が現れ、一瞬で大きな獣の姿へと変わり、「奴」を弾き飛ばした。

「ぬう！！」

「大丈夫ですか！蒔風さん！！！」

クウガが蒔風のもとによる。

その姿はすでに基本的なマイティフォームに戻っていた。
超感覚という便利な力を使うペガサスフォームは、そのエネルギーの消費が激しいので、約五十秒間しかその姿を維持できないのだ。
五十秒たつと強制的に変身は解除され、二時間は変身不能になってしまう。

「あ・・・ああ、げふっ・・・なんとか、な」

白虎を元の剣の姿に戻し、鞘に納めて、クウガに寄りかかる。
白虎たちの姿はこの世界であまり堂々とさらすものではない。

「ち、ますますもって面倒な。・・・まあいいさ。当初の目的は果たした。ここで戦うのもイレギュラーだしな。これさえ手に入れば今はいい。あとはこいつをふさわしい場所でゆっくりと・・・・な」

「行かせるか・・・ッ！」

「蒔風さん！！動かないで！！」

「そうだぞ蒔風。動かないほうがいい。今ここでやりあってもそん

なお前じゃ勝てないし、俺もおまえを倒して終わりだ。それ以上はできないだろうよ。やはりいったん引くことになる。そんな面倒なことはしたくないんだよ」

「てめえ、一体何を・・・・」

「ま、そこにいるクウガが最高の力を発揮すれば話は別だろうが・・・そうなられる前にここは退散するとしようかね。じゃあねーーー！」

そういって、フシュッ、と「奴」はどこかへと消えた。

あとにはボロボロになった蒔風と、変身を解除して立ちつくす五代、そしてその戦いの一部始終を見ていた一条だけが残された。

空には不気味なほど明るく太陽が輝き、サンサンとこの惨状を照らしていた。

to be continued

クウガ　～脈動～（後書き）

アリス「あいつ強いじゃん！！！」

そりゃ強いよ！！

ア「前の世界でぼこぼこにやられてたのに・・・反撃したの一回くらいじゃなかった？」

まあ、最初だし、シンプルに行こうかなってね

ア「本音は？」

戦闘描写が大変で書ききれなかった。

ア「ヘタレですね。これだからあなたの書く戦いはいつも一方的なんですよ。」

面目ない

では今回はこの辺で

ア「さて、「奴」のたくらんでいることは？？蒔風の体は大丈夫なのか？」

あ、多分大丈夫

ア「ここでいっちゃうんですか！！？？？」

まあねー

ではまた次回。

だってオレ、クウガだもん！！

クウガ　～期間～（前書き）

前書きいらないですか？？？

アリス「ここで聞くな！！！」

「奴」の攻撃にボロボロになったオレは、五代さんの掛かり付けの医者がいるという、関東医大病院に、二人に連れられて向かった。

「椿！椿いるか！？」

一条が声を荒げてその人を呼ぶ

すると一人の男性が出てきた。

椿　秀一

関東医大病院の司法解剖専門の医師である。

一条の気の許せる友人でその関係から五代がクウガであることを知る人物であり、彼の戦いをサポートした。

「ん？一条か、どうした・・・五代！帰ったか！おいおいそいつはどうしたんだ！」

「説明はあとだ。椿、彼を診てやってくれ。あと念のため五代も」

「また面倒事かよ・・もういいけどさ」

そういって蒔風と五代は診察室に入っていった

そして診察と治療が終わったのだが・・・・

「五代。どーなっている。なぜまたベルトが復活しているんだ。それに一条！こいつ、あー、蒔風だっけか？もうだいたいの怪我は治っているぞ。担ぎ込まれたときはあからさまに折れていた骨もつながりはじめている。五代以上の回復力だ。何者なんだ？」

「それは・・・・だな。言っていいのかどうか・・・」

「・・・・わかった。いーよ。今は聞かないでおく」

「椿？」「椿さん？」

「なんかまた巻き込まれてんだろ？科警研が襲撃されたって聞いたしな。関係してんだろ？」

「あ・・・ああ」

「だったら早く終わらせてこい。そしてそのあとに聞かせてもらう。こんなことがあった、って笑い話でな」

「椿、すまん」

「そう思うなら早くケリつけてこい」

「ああ」

「はい！」

そうして椿が会議室から出ていく。

蒔風がまだ目覚めないので、二人だけで話が進む

「あいつ、ダグバのベルトをどうするつもりだ・・・・・」

「なあ、五代。第三号の事を覚えているか？」

「あの蝙蝠みたいなでしたっけ？」

「ああ、確かあいつは零号のベルトのかけらを取り込んで自らを強化していた」

「まさか・・・・・あいつも！」

「それが本当なら、おそらくその通りだろうな・・・・」

「「蒔風　（さん）！」」

「ここは・・・病院か。一条さん、五代さん。ありがとうございま

す」

「身体は大丈夫なのか？」

「普通の人間より頑丈にできてるんで・・・平気だです。まだ全快ではないんだけど・・・な」

「でも、本当にダグバのベルトを丸々一つ取り込むなんて、できるんですか？」

「「奴」は既に一つの世界をその身体に取り込んでいる。時間はかかるだろうが、不可能ではないだろうな」

「たしかに、「奴」は相応しいところでゆっくり・・・とか言っていたからな・・・だがその場所は・・・」

「い、一条さん、もしかしたら」

「あそこ・・・だろうな」

「あそこ、とは？」

「すべての未確認・・・グロンギが封印されていた、長野県山中の古代遺跡」

「もしくはその周辺の森だろう」

「確かに、相応しい場所だな・・・」

「一条さん！すぐに・・・」

「ダメだ」

「どうしてだ蒔風！「奴」は今長野にいる。今が攻めるチャンスだ！」

「勝てないぞ、「奴」には。普通の状態のオレと「奴」が同じほどの力を持っていて、それで今オレは戦うには無理がある。さらにあいつは今も力を増していっている。五代一人じゃ勝てない。そんな相手に警察が向かっても、叩き潰される」

「じゃぁ、どうすれば・・・・」

「オレが回復してから五代さんと一緒に「奴」を叩く。骨がくっつくまで、あと四日ってところか」

「その間にベルトの取り込みが終わったら・・・」

「そうならないのを祈るしかない。本当なら五代さんを連れて行きたくはないんだけど、オレ一人じゃ勝てないからにゃー。ま、それでも勝たなきゃならんのやけどのぅ」

「蒔風さん・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――――

長野県山中古代遺跡内

「ぐっぬぅ、さすがに強大な力だ。しかし・・・・たいしたことないな取り込めきれる！この程度でダグバの力ならもうけもんだな。オレはやればできる子！がんばるぞー！」

ギュアアアアアアアアアアアアアア・・・・

クウガ　～期間～（後書き）

アリス「この後書きは、御覧の通りアホの提供でお送りしております」

いきなりひどいなおい！

ア「最近一本一本短くない？話数どんどん増えてくよ？」

流すなし！

ア「長砂氏？一体誰のことを言っているのですか？」

んな人間はオレだって知らねえよ！

何これ。作者いびって楽しいか！？楽しいのか！？楽しいんですか！！？？

ア「三段活用オツーｗｗｗ」

・・・どうやら貴様にはお灸をすえてやらねばなるまい

ア「（ビクッ）な、何をするつもりですか？」

リマジの響鬼の世界に送り込んでコードネームを【驚鬼（おどろき）】または【楽鬼（らっきー）】にしてやる

ア「（ピカァァァァ）争いはいけません・・・みな、仲良くしましょう」

だが断る。貴様の声を消す！！！

ア「・・・・・！？・・・・・・！・・・！・・・・・・（グズン）」

どうした？

ア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！？（ＯＴＬ＜オンドゥルラギッタンディスカー　と言っているようだ）」

声を失ったお前など、俺の敵ではない。

ア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（１５００秒　と呟きながらバットをもって近づいてくる）」

ふっ。オレは作者だそんなのは・・・・あれ・・・・音が・・・きこ・・・・・え・・・・

ア「ふっ、貴方が私だと思っていたのは・・・・残像だ」

ＺＡ☆Ｎ☆ＺＯ☆Ｕ？？？

（野太い声で一人二役しながら）知っているのか作者！！！？？？

（もどって）「残像だ」・・・・男子が一生に一度は言いたい言葉ランキング五位以内に常にある言葉だ！

ア「ふふふ。その夢を私がかなえてしまいました・・・・」

畜生・・・俺たちの・・・・夢が・・・・

ア「っていうか全く関係ないよね、この後書き」

面白い後書きを目指しています

めざせ時雨〇恵一さん

ア「騒がしいだけでしょ、これ」

そしてタグには「後書きが本編」！とある！

ア「タグなんかないでしょうが！！２５２５動画じゃあるまいし」

でも、いいよね・・・たのしいの

ア「まあ、楽しいのはいいですけど」

だから・・・もう・・・ゴールしても・・・・

ア「ダメです。ダァメ！」

ひでえ

ア「貴方が言いますか」

おかあさ～ん！！この人ひど～い。マジ困るんですけど～～～

ア「お母さん今ここにいないだろうが！！！しかもそんな言葉で話

すのか！！？？」

そんなわけないでしょ

ア「ああよかっｔ」

おうごらぁ！！母さんよぉぉぉぉ！！！！洗い物手伝ってやろうかごらぁ！！！

ア「ヒドッ・・・・くない！！ひどくないよ！！？言葉づかいはひどいけど」

それが私クオリティ

さてこんなことはさておいて

ア「さておくことにグダグダと・・・」

・・・・次回は！！！！！？

ア「そして訪れる四日後。この世界での決着」

ではまた次回だゴラア！！！

ア「ひっぱるな！！」

頂上疾走俺が超えてやる――超変身、仮面ライダークウガ

クウガ　～出発～

ブォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ・・・・・・・・・

「蒔風さんはこれが終わったらすぐに旅に出るんですか？」

「あー、大体１２時間はいても大丈夫だけど」

「オレ、次は寒い地方に行こうと思ってるんです。前は南の島に行きましたから」

「良さそうですね、それ」

「はい、色んな人の笑顔が見れて、楽しいです」

キキィ、ブォンブォンブォンンン・・・・

「じゃあ、やっぱオレもこのまま出発になるのかな」

ザッザッザッ

「そうですか・・・次はどんな世界に？」

ザッザッザッ

「それはわかんないんだよなぁ」

ザッザッザッガサッ

「でもそれは楽しみでもありますよね！」

「そうなんだよな！楽しみなんだよなー、そこが！・・・でも、その前に」

ザッザッ

「ええ」

ザッザッザッザッ、ザシッ

「後顧の憂いは断っておこうか」

オオオオオオオオオオオオオオ・・・・・・・

「じゃあ・・・初めようか！」

「はい！」

「きたな・・・・終わらせてやる」

ーーー

「構わないさ」

「じゃあ、行ってきます」

「・・・・五代！」

「？？」

「どんな姿になっても、自分を見失うなよ・・・」

「大丈夫です。オレは・・・・倒すためじゃなく、みんなの笑顔のために、戦いに行きますから」

「なら、大丈夫だな・・・行ってこい！」

「はい！」

そして二台のバイクが出発した

ーーー

五代は基本的なマイティフォームに

蒔風は十五天帝、龍虎雀武のうちの青龍刀と玄武盾を

「奴」は魔導八天のうちの一本、「獣人（じゅうじん）」を手にする

オオオオオオオオオオオオオオ・・・・・・・・・・・・・

数秒の空白の後、三人が同時に動き出す！

バッ、ギィ！ゴァッ！

「奴」がクウガの首を狙うのを蒔風が防ぎ、空いた「奴」の腹にクウガの蹴りがめり込む！

「奴」は後退するが、蒔風がそれを許さない。

先日のお返しとばかりに「奴」の背後に回り、玄武盾で思いっきり上空に殴り飛ばす

そこには既にクウガがマイティキックを準備してジャンプしていた

「オォリャアァ！」

「グムッ！」

ドガア！

クウガの蹴りが見事に命中し、「奴」の身体が地面にたたき付けられた！

「どうです、五代さん」

「しっかり命中しました。でも・・・効いているかはわかりません」

「それじゃ・・・・」

「ひゃっほおおおおおおう！！！」

「「！？！？」」

「ららららららららららら、らいッ！！」

ガガガ、ゴッ、バシバシッ、ゴガッ、バキッ！！

「ぬ、うあ、ぐあっ、このっ、ぶ、がぶぁっ！！」

「うわっ、ぐっ、あああ！ゲッッぐ、おおお！」

「奴」が蒔風とクウガを一気に責め立ててくる。

そして剣を構え、二人を一気に吹き飛ばしにかかる！！！

「おらぁ！！ホームラーン！！！」

しかし二人もそう簡単にはやられない。

蒔風が跳び、クウガがしゃがむことでそれぞれかわし、クウガはパンチを、蒔風はキックをぶちかます！！

それを「奴」は足と手を使い器用にかわし、いなしていく。

ザッザァァァ

「奴」が二人から距離をとって叫ぶ

「ふむ、なるほど。さすがに蒔風がいるんじゃ二人相手は厳しいな。

・・・だ、が、な。ふおぉあっ！」

バッン、バッン、バッンバンバンバンバンバンバンンンンンンンンンンン・・・・・・

「奴」がうずくまり、力を込めるそうして起き上がると、肩から角をだし、頭からも四本の角を・・・ダグバのような姿と化した。

「「っ！」」

「どうした？こいよっ！」

といい「奴」が蒔風に手を向ける。

すると、蒔風の身体が一瞬で炎に包まれ、その身を焦がす！！

「ぐっ！？ごあぁぁぁ

ガギィ！

蒔風が青龍刀を振るい、「奴」は武器を構えず、素手でそれを受け止める。

「！？」

「今のオレにはこんな事もできんだ。あともうひとつ。この肩のトゲはな、常に高エネルギーのプラズマを放出していてな、さっきの炎もそれによるものなんだが・・・・」

「なっ、しまっ」

「蒔風さん！離れて！」

「近づくだけで切り裂かれるそうだ」

ドパッ！

そう「奴」が言い終えると、蒔風の全身が切り刻まれ、いたるところから血が噴き出した。

「ぎ、ギァァァァァァッ」

「蒔風さん！オオオオオオオオオオオ！」

「がっ、来るな！五代！」

「無駄、だぁ！」

ボグァッ！！！！！

「ゲッブァァァァ！」

ドガガガガガガガガガガガガガ！！！！

「奴」が蒔風を救おうと走るクウガを一瞬でなぎ払う。

「いいぞお！！最高だ！！おれはこの世界を喰える！！！」

「それは・・・・させない」

「なに??」

「絶対に、させない!!!」

「ふ、五代雄介。貴様、みんなの笑顔を守りたいんだよな。だったらオレに任せろ。オレが世界を再構築すれば、本当に誰も悲しまなくて済むんだぞ??」

「それは違う!!!」

「なにがちがうと???」

「みんなが笑顔になるのはいいことだ。それは本当だ。お前が目指すものは素晴らしいのかもしれない」

「ならば・・「でも!!!」・・・」

「でも！そのために今この世界にある笑顔を消していい理由にはならない！！！」

「そのとおりだ・・・」

「！！大丈夫ですか！蒔風さん！！」

「ああ・・なあ！聞いたかよ！！これが五代さんの覚悟だ！！彼が守るのはこの先の笑顔のためだ。お前も先の笑顔を求めるんだろうが、この人はさらに「今」の笑顔も守り通せる男だ！！先だけしか見ず今を見捨てる貴様に、俺たちは倒せない！！！なあ、五代さん！！」

「・・・・！！（コクン）」

「そんなものは今が幸せな奴の戯言だ！！！」

「戯言かどうか、見せてやるさ！！！開翼！！！」

バッサア！！！

「さあ、ゆこう！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＵＵＧＡ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

「五代さん！！」

「はい！！見ていてください！！オレの、変身！！」

グオオオオオオオオオオオオオ

「はぁぁァァァァァァァ！！！！究極変身！！！！」

黒煙がクウガを包んでいく

そしてそれが晴れた時、彼は、究極の姿に変わる。

しかしその姿は

この世界では発現されぬ姿！！！！

「これは・・・・・ビリビリ！！？？」

ここに、この世界ではあり得ぬ、仮面ライダークウガ　ライジングアルティメットフォームが立つ！！！

「馬鹿な！！！それはこの世界のでは・・・・・」

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫをなめんじゃねえよ・・・いくぜ、五代さん！！」

「はい！！」

二人が「奴」に掴みかかっていく

その力は、ダグバの力を取り込んだ「奴」をも凌駕する！！！

「なっ、がぁ・・・はなっせ！！」

「では」

「要望通りに！！！」

「「おらあああああ！！！」」

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

蒔風が放り投げ、クウガが宙へ飛ぶ！！！

空中で切りもみ回転して落ちてくる「奴」にパワー１００ｔのパンチが撃ちこまれる！！！

「ぬぐ。（ガッ）ぐあああああああああああ」

バッガアアアアアアアアア！！！

ドンッッッッ！！！！！！バツっ、バチバチ・・・

「が、ガードしてこの威力・・・・く、このままじゃ・・・・・」

「とどめだ五代！！！」

「おお、蒔風！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＵＵＧＡ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

「っ、はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぬうん、おおおおおおおおおおおおおお！！！」

クウガが中腰になって両手を広げ、蒔風が片足を地面に円を描くように回してから構え、力をためていく。

クウガのその強靭な右足に莫大なエネルギーが集まっていき、蒔風のほうにも同じエネルギーが集まっていく。

ボッボッボボボボボボボボボ！！

二人の周囲をそれぞれ炎が円形に地面に現れ、さらに稲妻がほとばしる！！！

「ぐ、な・・・ぜ」

「どうやらオレに力を付加するパターンのようだな。クウガのこの力をコピーしてオレのほうにペーストしてるだけだ。こっちの威力も本物だぜ！！！」

バババッ！！

二人が跳躍し、「奴」に向かって蹴りを放つ！！

「俺たち二人分の！！！」

「技を食らええ！！」

「くそおおお

「「たぁりゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

ゴッ、バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・・・・・・・・・・・

すさまじい爆発が起き、それを背にクウガと蒔風は大地に着地する。

その爆発の中では、「奴」の体から排出されたダグバのベルトが、もはや粉々に砕け、灰になり、消えていった。

クウガはマイティフォームに戻り、蒔風は翼を消した

「終わっ・・・・た??」

「ぐ、まだ・・・・だ」

「「!!!!」」

「終われる、かぁ!!」

すでにユラユラと消え始めている「奴」が、魔導八天が組み合わせの一つ、「鬼人（きじん）」と手に、蒔風にすさまじい勢いで駆け出してくる

「天馬！！！」

蒔風はそう叫び、自身の背中の左上から右下にかけてある天馬を抜き、それに応じる。

そして

二人の姿が

刹那の瞬間すれ違い

ギャリィィィィィ・・・・・・ン

五メートルの間をあけて止まる

蒔風は両手を突き出し膝を曲げて低い位置に

「奴」は両手を蒔風と同じように突き出し、こちらは体重を前にか

け、立っている

大体こういうシーンでは、どちらが勝ったのかわからないものだ。

だが、五代には、どちらが勝ったかは一目瞭然であった。

蒔風の手には先ほど握られていた「天馬」がない

しかし、「奴」の手にはしっかりと「鬼人」が握られている

そして

蒔風の「天馬」が、「奴」の胸に突き刺さっていた

「ぐ、あ・あ・あ・あ・あ!!!」

ボッッッ!!シュウウウウウウ

そうして、「奴」が一瞬ではじけ飛んで、きえた・・・・・・・・・・・・・・・

ーーー

そして蒔風がゲートをくぐって、次の世界に向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さてっと、俺も行きますか・・・・・ん??」

五代が出発しようとすると、視界の隅に、何か黒い影が写りこんだ

「なんだ??」

と、そこで彼の本能が、逃がすな!!!と叫んできた。

「っ!変身!!」

そして再び変身し、黒い影を追う。

黒い影は小さく、丸い形をしていて、直径十五センチほどのものだ

それは自分が完全に発見され、なおかつ逃げ切れないことを悟ったのか、急に大きくなり、反撃してきた。

「うわっ・・・あれ??思ったより強くない・・・」

どうやらその影はたいした戦闘力をもっていないようだった

「でも何があるかわからないから・・・超変身!!」

クウガは近くの木の棒を拾い、構え、その姿をいかなる攻撃にもひるまない、最高防御力を持つタイタンフォームに超変身した。

ギギィ、ギィ!

影は攻撃を仕掛けてくるが、タイタンフォームには効かない。

その後あっけなく切りつけられて、消滅した。

「何だったんだあれは・・・・「奴」が残したもの??でもあんなに弱かったし・・・・」

その後、悩みながらも、五代は旅に出た。

そして、この出来事はこんなこともあった程度に収まってしまった・・・

ーーー

クウガ　～出発～（後書き）

デ・レ・レ・レン！！ガシュッ、ピユーン

アリス「ディケイドの終わり方？」

よくわかったな、飴をやろう

ア「レモン味がいい」

ほら

ア「ありがとう！！（コロコロ）ほれにひてもは」

きちんと話しなさい

ア「んーーーー、（ゴクン！）それにしてもさ」

飴を飲み込んだ・・・・？？

大丈夫か？？

ア「平気平気。後でまた出して舐めるから」

人間ポンプか！！

ア「それよりなんか思わせぶりでしたね」

クウガの最後？

ア「ええ。あれ何なんです？？？」

終盤まで明かしません

ア「終盤まで見てくれるかどうか・・・」

オレは信じる！！今までのアクセス数を！！！

ア「私も応援します！！」

ありがとう！！

蒔風「やっとこっち来れた」

もう終るぞ？？？

蒔「まてよ！！なあ、オレのあの四日間とか描写してくれよ！！！」

それはいつか

蒔「この野郎めんどくさがりやがって・・・・」

ア「まったく、うるさい主人公ですね」

蒔「ここ来んのやめようかな・・・・」

では今回の世界を

【仮面ライダークウガ】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”　”ライクル”

最主要人物：五代雄介

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：クウガをライジングアルティメットフォームに

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：蒔風に同様の力を付加しダブルキック

です

ア「”ライクル”？？」

ああ、別に未来的なものじゃなくても、超古代の技術だろ？？あれ

ア「なるへそ」

さてと、よろしく

ア「はいはい。次の世界にきた蒔風。そこで彼は災いと言われ？？」

ではまた次回

蒔「主人公なのに主人公なのに主人公なのに主人公なのに・・・・・・」

ただの人間には興味ありません！！！

涼宮ハルヒの憂鬱　～エンター　イン　グループ～（前書き）

今回の世界は消失後です。

「ふう・・・・・」

クウガの世界を出て、俺がたどり着いたのはどうやら学校の教室・・・・いや、部室のようだった。

・・・・・・・・・

たった一つの問題を除いて、オレのこの世界での行動はいきなり順調だった。

最主要人物がだれだかいきなりわかったし、主要人物たちの情報もきた。

ちなみに服装はこの高校のものであろう制服を着ていた。

たしかにいいさ、手間が省ける。

だけどさ、これはないんじゃないですか??

到着地点にそのご本人たちがいるなんてさぁ！！！

「お、おまっ、どこっ、は？なんっ？？」

「ほう・・・・」

「きゃあ！！ど、どなたですかぁ～～～！！？？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

オレの目の前にいる四人はそれぞれ反応が違った

一人は見事にテンパっていて

一人はなんか感心してて

一人はバタバタと慌てだし

一人は分析するような眼でこちらを見ていた

「ふむ・・・もしかして、あなた異世界人・・・とか言いませんよね??」

「はぁっ!!??」

おとなしそうな男がいきなり核心を突いてきやがった!!!

「おい!!古泉!!こいつ本当に??」

「涼宮さんが掲げていた奇天烈項目のうちの、宇宙人、未来人、超能力者はもうすでにいるのですよ?この登場は遅すぎるくらいです。それとも、満を持して、ということなのでしょうか?」

「・・・・おい、おまえ。本当に異世界人か??」

「待ってくれ!!!なんでお前らそんなに理解が早いんだ!!??」

「なんてことはありませんよ。あなたがこの世界に来た理由は、おそらく涼宮ハルヒという人物が原因でしょう??」

「いや?違うけど」

「そうですか・・・いや、あなたが知らないだけかもしれませんし・・・あ、それと、あなたに敵意はないんですよね？」

「ないけど・・・」

「ああ、それはよかった。いきなり戦闘に入るのはいささか厄介なのでね。異次元からの侵略者じゃなくてよかったです」

「そんなこと言ってる場合か古泉。・・・で、お前さんは本当に異世界人なのか？」

「ああ。この世界の外から来たってことになるからねえ」

「長門、本当か？？またなんかお前の親玉がやらかしたんじゃないのか？」

「違う。彼の言っていることは事実。彼の存在座標は、この世界とは異なっている。」

「つまり？？」

「一般的に、彼は異世界人と呼ばれるカテゴリーの人間。また、肉体の構造は我々と変わらず、体内の状態からみて、彼に敵意は存在しないと思われる。」

「そうか・・」

「しかし・・・断定はできない」

「なぜだ？」

「彼はこの世界の人間ではない。故に、どのような力をもっているか、わからない」

「十分だよ。長門」

「（コクン）」

そうして長門と呼ばれた少女は、ふたたび読書に戻るかと思いきや、天井のほうを向いて止まってしまった。

「えっと・・・でー・・・・さ」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。僕は古泉。古泉一樹といいます。このＳＯＳ団の副団長をやっています。よろしく」

「あ、オレは蒔風舜。って、ＳＯＳ団って何だ？」

「その説明はのちほど、そしてあちらの方が」

「あ、あのぅ。朝比奈みくるといいますぅ・・・・」

「あ、どうも」

「お、お茶をどうぞ・・・」

「ありがとうございます」

「そして彼女が・・・」

「・・・・長門有希。」

どうやら天井観賞から帰ってきたようだ。

「・・・情報統合思念体から報告があった。」

「お前の親玉から?」

情報統合・・・・なんだそりゃ??

「先ほど、彼とは違う存在がこの世界に侵入してきた」

「なんだと!?」

「そして今は行方をくらまし、どこかに潜伏している・・・」

「どこだ!!どこであいつを見失った!!」

「それは・・・」

長門が口を開こうとした瞬間に

「あんたたち!!あたしがいない間に何騒いでんのよ!!!」

バァン!!と扉を豪快に開き、一人の女子生徒が入ってきた。

そして部屋の状態を見渡し、オレを疑うような顔で見て

「だれよあんた」

なんて聞いてきた。

「あー、ここの生徒だけど・・・」

「そんなのは見ればわかるわよ!!学年は?クラスは??なんでここに来たの?答えなさい!!」

「まくしたてないでくれ!!えっと・・・」

「ん?でもあんたの顔見たことないわね・・・本当にうちの生徒??」

なんでこの世界の奴らはこう鋭いんだよ!!!

「あー、ハルヒ。彼は明日からの転校生でな、その前に学校を見に来てここにたどり着いたそうだ」

まだ自己紹介していない男が、オレの事をいろいろと説明している。

「ふぅん。で、なんでここに来たの?」

「ここの人達がなんとも面白そうって聞いたもんでな」

「入団希望者ってこと?あんた、不思議な力を持ってるの?」

「ああ、そｒ「涼宮さん、今日は彼も来たばかりですし、時間も遅いです。」なんだ?」

「彼をこれ以上引き止めるのはかわいそうです。ですから、また明日彼には来てもらうということにしましょう」

「まあ、そうね・・・古泉くんの言い分も尤もね・・わかったわ!明日、なんか見せてもらうからね!」

そういって「団長」と書かれた席に涼宮が座る。

「あれ?あんた名前は?自己紹介とか済んだ?」

「蒔風だ。蒔風舜」

「オレの紹介だけまだだったな。オレは「そいつはキョンよ」おい!」

「なによ。あんただけ自己紹介してないって言うからあたしが言ったんじゃい」

「くっ。改めてオレは・・・」

「よろしく、キョン」

「定着しちまったじゃねぇか！？」

そうして、まだ少し残るらしいＳＯＳ団のメンバーを残して、オレは部室を出る。

その際、古泉から一枚のメモ用紙を渡された。

そこには、８時に市営公園に来てくれるように書いてあった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「おーい、来たぞー」

「ああ、こっちです」

そして時間通りに公園にオレは到着した。

そこには涼宮を除いたＳＯＳ団のメンバーがいた

「待たせたか？」

「いいえ、時間ちょうどです」

「なんであの場で止められたのかの説明とかをお願いしたいんや。頼むで」

「関西の方だったんですか？」

「うんにゃ、気分さね」

「適当だな！」

「では、説明しましょう」

そうして古泉が説明を始める。

途中途中で情報も頭に流れ込んできたから、内容はしっかりと伝わってきた。

どうやら彼等は人生を面白可笑しく過ごそうとする涼宮ハルヒに集められた人間だそうだ。

涼宮の目的は宇宙人とか超能力者、未来人に類する不思議で遊ぶ事らしい。

そして涼宮ハルヒは面白そうな人間を集めた。

しかし偶然か、必然か、集められた人間はみな本当に普通ではなか

った。

どうやら彼らによると、これは偶然ではなく、涼宮ハルヒの力によるものらしく、それは涼宮が意識的にしろ無意識的にしろ、願いを現実化するというとんでもないものだった。

しかも涼宮本人はこの能力を知らず知らず行使しており、不思議なことがそうはない、と思ってるらしい。

だから、彼女には様々な不思議現象をひた隠しにしなければならない。自覚した彼女がなにをしだすかわからないからだそうだ。

オレが涼宮に説明するのを止めたのはこのためか。

面倒だな。元凶に知られないように問題を片付けるのは。

そして彼等は様々な事件を解決してきたらしい。

「と、こんな感じですね。僕の機関の思惑などを省いて説明したつもりですが、大丈夫ですか？」

「ああ、大体わかった（世界の情報もあったしな）」

「朝比奈さん、長門さん。今の説明に付け足すことは？」

「ないです」

「問題ない」

「んじゃ、今度はそっちだ。説明しろよ？」

「とーぜん。そのつもりだ」

そして今度はオレが説明を始めた。

――――――

「オレ!!??」

「待ってください。彼は普通の一般人ですよ?」

「うん、そうだよ。彼は普通の人間だ」

「え?」

「最主要人物だからと言っても特殊な人間であるわけではない。普通の人間が主人公の話もあるだろ?」

「なるほど」

「あ、あのぅ・・・つまりキョン君の命が狙われるって事ですよね」

「そうだよ!ここにいるのまずくないか!?」

「たぶん大丈夫。いま「奴」は世界の構造を割り出しているだろうから、来ないと思う」

「世界の構造?」

「世界によっていろいろ違ったりするだろ?それを割り出さないと、世界を壊しても取り込むことが非常に困難になって、ほとんどが消えてしまうんだ。だから今「奴」は世界の構造を割り出している」

「それはどれくらいかかりますか?」

「長門さん。「奴」が来たのは何時頃ですか？」

「今日の１７時４８分」

「となると大体明日の１８時くらいかな」

「では明日の放課後に一気に攻めてくると？」

「いや、少なくとも涼宮の近くにいる時は大丈夫だ」

「なんでだ？」

「涼宮の前でお前を殺す。それはあからさまに非日常だ。「奴」か特別な力を使おうと使わまいとそれは涼宮の精神に大きなショックを与える」

「なるほど。それで世界の構築が変わってはせっかく今算出しているのが無駄になる、ということですか」

「もしくは、新しい世界を作られるかもな。つまり「奴」も俺たちも、涼宮にばれないように事を済ませなければならない」

「では、今は安全なのですね？」

「うーん。確かに「奴」は動けないし、今殺しても世界は食えない。けど・・・」

ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァンン！！

「ボコボコにして捕まえておくことはできるからなぁ」

ザアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・・・・・・・・

「ひぇっ！？」

「なんだなんだぁ！？」

「「奴」だなおそらく、この世界に残された何らかの記憶を利用してきている。ほら、あれ・・・・・・」

Ｓｉｄｅ　キョン

いきなり変わった風景。

どうやら長門が作り出す異空間と同じようなものらしい

「キョ、キョンくぅ～ん・・・」

朝比奈さんがオレの腕にしがみついてきている

カマドウマの時もあったなぁ、こんなの！！

なんでこんな状況でしかこんな風にならないんだ!!

「ほら、あれ」

蒔風がなんか指さして言ってきた。

あん?なにがあれだって??

蒔風が指をさしたほうを見た

そこにはグネグネした黒い塊が次々と分裂して15個ぐらいに分かれた。

「あれ、何だかわかる人挙手ーーー」

わかんねえよ!!!

「おかしいな、お前らのだれか、確率としてはキョンが今までに遭遇した脅威のはずだが」

俺が受けた脅威?そんなもん、ハルヒと出会ったこと以外に何がある。

あいつにかかわったせいで俺はトンデモ現象にかかわり始めたんだ。
今となっては納得してるけどな。

まずあいつに話しかけて、ＳＯＳ団を立ち上げ、部室を占拠し、朝比奈さんが拉致られてきて、古泉が転校してきて。

ここから一気にきたんだよな。長門にトンデモ話を聞かされ、朝比奈さんが驚きの正体を明かし、そして朝倉に・・・・・朝倉??

「おいおいおいおい・・・まさか、冗談だろ?」

分裂したグネグネがどんどん人型に近づいてくる。

わかっちまった。いまこそ自分の判断能力の高さに嫌気がさしたことはないね!!

なんであんなピカソの絵よりグネグネのでわかっちまったんだよ!!

「心当たりがあんのか?」

「あれは・・・・」

「対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース」

長門、初対面の人間にいきなりそれは・・・

「なるほど、じゃあお前の同類？」

わかんのか！！？？

「さっき説明受けたからそりゃわかる」

おれはいまだによくわからんのだが

「情報統合思念体が、この惑星の人類とコンタクトするためにかつて創造した端末。しかしあの個体はすでに消去されている」

「その記憶をもとに大量生産したってところかな。多分性能は能力こそ欠けてても、パワーなんかのステータスは底上げされてるぞ。で、あいつなんてんだ？対有機なんたらなんて長い名前以外にもあるだろうよ」

「・・・あいつは前にオレの命を狙ってきたやつだ。ハルヒがどう動くかとか見るためにな」

「あー、急進派ってやつか？」

「そう。そして彼女の個体名は・・・」

「「朝倉涼子（だ！）」」

SIDE　out

グママママママママママママママママママ

「うわー。どんどん形がしっかりしてきてるよー」

目の前の影がついに立ちあがるところまで出来てきて蒔風が面白そうに呟く。

「なあお前らってどれくらい戦える？」

「僕の力は使えるようですね。しかし普段の十分の一程度ですが」

「大丈夫なのか？」

「あの程度なら。それにこの程度で十分だということなんでしょうし」

「長門さんは？」

「問題ない」

「うん、よし。朝比奈さんなんかはなにか？」

「わたしは武器は持ってないです危ないですし・・・」

確かにこの人に武器は危ない。背中から打たれそうだ。

蒔風がそう思ったとか思わなかったとか。

「おれは一般人だからな！！」

「わーってるよ。でも、お前が狙いなんだからな。あいつらは」

「ど、どうするんだ？？」

「戦争を！！一心不乱の大戦争を！！」

「おい！」

「さぁー、テンションあがってまいりましたぁ！！」

グオン

「な、長門？」

「そこなら安全」

長門が戦えないキョンと朝比奈さんをバリアで包む

「おお、これなら大丈夫そうだな！・・・さっって！！いいか（女子らしいけど）この野郎ども。俺がいる限り、こいつに手出しはさせん！！！はあああ・・・力を借りるぜ！！」

バッ、ヴォン！！

そう言って蒔風が腰に手を当てるとベルトが現れた。

そして構えをとり・・・

「変身！！」

カチッ、ヴァンヴァンヴァンヴァヴァヴァ

そう、蒔風が前の世界で五代と別れるとき、五代は「蒔風の旅の安全」を願ってくれた。

そして蒔風の翼は人の「願い」を司る。

その五代の願いを蒔風が力として受け取ったのだ。

蒔風は他の世界の力をいくらでも借りられる（今まで出会ってきたものの中で、なおかつ蒔風に味方するものからだけだが）

その力は一つの力につきトータル十五分間の使用制限があるが、使用者が蒔風になっているので、それなりに強くなっている。

「な、なるほど・・・・」

「ほら、くるぜ！！いや、行くぜ！！！こっからスーパーヒーロータイムだ！！！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

涼宮ハルヒの憂鬱　～エンター　イン　グループ～（後書き）

アリス「アリスと！」

作者の！！

「「ドキドキ！クッキングー！！！」」

ア「さて始まりました「アリスと作者のドキドキクッキング」お送りするのは私アリスと」

作者の二人でございます

ア「では早速、始めましょう。まず豆を用意します」

え！？何の豆！！？？

ア「そして植えてから水をかけます」

そっからなのか！！！？？

ア「ここの土は良さそうなので、いいものができそうです」

オイ！ムシシツツェナイディナンツォクァイユェ！

ア「そしてサイバイマンが誕生しました」

何してんだよ！！

ア「基本襲いかかってくるので気を付けてください」

ドキドキすんのそこか！！

ア「ハッ、ダァっ！！（ドーン）へ、きたねえ花火だぜ」

それ違うし！！

ア「さて、後書きを始めましょうか」

そ、そうですね・・・

ア「今回はハルヒの世界ですか」

そーですね

ア「また強くなりましたね、蒔風」

そーですね

ア「しっかり答えてくださいね」

はい。

えーっと、蒔風が借りた力を使うときは自分自身の力は使えません。

翼はもちろんのこと、獄炎などの能力、十五天帝なんかも使えません。

その能力だけしか使えなくなります。

だから借りた力を二つ同時に、ということも無理です

ア「無理に使うと??」

使えません。無理に使おうとすることもできません。

もしできるとしたら本当に蒔風の体は、それぞれの「願い」がぶつかりあって崩壊します。

ア「願いが蒔風のためのものであっても?」

はい

ア「でも基本蒔風強いから・・・・」

まあ、ほとんど問題ないんですけどね

ア「それと前回の予告と違いましたよね。災いなんて言葉でできてないですよ?」

書いてるうちに、あれ?災いって言葉入れにくくない?となり・・・・

ア「まったく・・・・」

すみません・・・

ア「あ、あと・・・・」

またですか。なんですか？

ア「蒔風の性格とかはあったけど、基本的な身長とかの紹介ってなかったよね」

・・・・・・・・・・・・・・・さあ！！蒔風の紹介ターイム！！

ア「あ！！この野郎、忘れてやがったな！！」

蒔風舜

身長：１７５？

体重：７５？

顔：いたって普通の青年。それなりに整っているが、そこまでではない。本当に普通。高校生くらいならなりきれるぐらい。

眼鏡をかけていたが、手術で視力が回復していて掛ける必要なし。しかし一度眼鏡をとってみた時、友人からあまりパッとしないと言われ、伊達眼鏡をかけている。

身につけているもの

←

財布：布製の財布。中学生の時からの愛用品。ズボンの右のポケットに入っている。家のかぎが付いていたが、今は代わりに自身の覚醒の時に使った鍵のをストラップのようにつけている

音楽プレーヤー：言わずと知れたｉＰｏｄ。左腰にあるベルトにつけられたポーチに入っている。今まで蒔風がやったゲームやアニメなど曲が入っている。しかし蒔風はどれが何の曲かわからない。１２０ＧＢのクラシック

携帯電話：水色の携帯電話。ズボンの左のポケットに入っている。今まで訪れた世界での友人との写真がおさめられている。

ちなみに携帯もｉＰｏｄも充電は切れない。

ア「なんかフツー」

いいんだよ。ふつうで

ア「ってかこんなの話数が二桁に言ったところでやる事じゃないですよね」

本当に申し訳ございません

ア「眼鏡とか絶対読んでる人考えてないよ」

すみません！！

ア「じゃあ、いきますよ？」

お願いします（原稿を渡す）

ア「朝倉コピーと戦う蒔風たち。退けるがその後の「奴」の行動は！？・・・・日和(ひよ)ったな」

あい、すみません

ではまた次回

世界を大いに盛り上げる、ジョン・スミスをよろしく！！

涼宮ハルヒの憂鬱　～ワンダー　ヒューマン～（前書き）

ハルヒが全然出せない・・・どうしよう

涼宮ハルヒの憂鬱　～ワンダー　ヒューマン～

「オリャァ！」

ドカッ

パァンン

朝倉コピーとの戦いが始まって二分。

やっと三体目を倒したオレは古泉と長門さんに叫んだ

「やられるとこいつら弾け飛ぶぞ！しかもグジグジしてまた復活しやがる！」

「はぁ！それはっ！わかってますっ、が！」

古泉が赤い球体を飛ばしながら、所々で息を吐きながらかえしてくる。

長門さんは無言で向かって来る奴らから薙ぎ払ってる。

「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」「それ無理。」

『『『死んでよキョンくぅ～ん・・・・・』』』

「怖えええええええええええええ！！！！！！！！！っを！危ないからそれ貸しなさい！ひいいいいいいいいえええええええ！！！！怖い怖い！！・・・・・っと、超変身！」

バシッと朝倉コピーの持っているナイフを奪い、タイタンフォームに超変身する。

ナイフは瞬時にタイタンソードになって敵をなぎ払う

これでまあ大丈夫だが、きりがねぇ。他がもたない！

「どうすれば、はぁっ！いいですか！？」

「これらは再生の際、他の個体に頼っている。すべてを一度に殲滅するのが突破口」

一度に殲滅だぁ？

「古泉！できそうか？」

「僕、ふっ！にはできません！」

「長門さんは？」

「妨害があるために実行不可」

「蒔風さん。ふんっ！できませんか？」

「できるけどどうせならクウガで倒したい！」

「そんな理由ですか！？」

そうして、ないかな～と考えると・・・あ

「あ、あったよ。殲滅技」

「本当ですか！もっふ！！」

「長門さん。３キロ四方を吹き飛ばしても、この空間は大丈夫ですか？あと堪えられるバリアは張れますか？」

「バリアは可能。あと、この空間は物理的な方法での破壊は不可能」

「ならいけるな。長門さん！頼みます！」

「（コクン）」

ブォン

長門さんと古泉がキョンと朝比奈さんがいるバリアに入るのを確認したオレは、攻撃準備にはいる

「いくぜ！ハアァァァ・・・ライジング！」

フォームをマイティに戻し、更にライジングマイティに強化した

「オォリャァァァァ！！！」

ドッ、グアァァァァァァァァァァァァァァァァァ・・・・・・・・・

ライジングマイティキックが二、三人で固まっている朝倉コピーに命中し、その爆発で3キロ四方が巻き込まれた。

朝倉コピーは復活する間もなく焼き払われ。一人残らず消滅した。

と、それと同時に異空間も消えていた。

ーーー

「な、何号室だ??」

「あん?５０５号室」

「そこ、朝倉が住んでた部屋だぞ。ちなみに、長門が同じマンションに住んでる」

「・・・・・・・・・キョン!うち泊まれよ!安全だぜ!!?」

「馬鹿野郎!余計に気が滅入ったわ!!」

「なんか事件後のアパートに住んでる気分でいやじゃんかよ。それに一人はさびしい!!!」

「男に言われてもなんも思わんわ!!」

「しかし、確かにそれが合理的なのは確かです。今日はいいとして、明日からどうするのですか??」

「う・・・・」

「「奴」は寝ている間にお前をズシュッ!!とやってそれで終わりだぜ?」

「だけどハルヒにばれたら・・・」

「それは僕のほうで手をまわしておきます。緊急事態ですからね。機関も動くでしょう」

「世界云々の話を信じてくれる人たちかいのう？」

「そう言わなくても、涼宮さん関連で動いている組織は同じように彼のことも気にかけています。新参の名も知れぬ組織が早とちりして暴走したことにします」

「あっ。わたしそのままのこと報告しちゃいましたぁ。大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ですよ、朝比奈さん。貴方の上司は・・・・多分知ってますから」

「ふえっ？キョンくん、わたしの上司を知ってるんですか？」

「ん！？いやあ。朝比奈さんの上司ならそうかなって思ったくらいですよ。ははは」

「・・・？ちょっと待ってください。朝比奈さん、未来とは今まで通り通信できるのですか？」

「えっ？はい、できますけど・・・なにかいけなかったですかぁ？？」

「いえ、そういうわけではなく。もし「奴」に世界を破壊されているとすれば、当然、未来もなし崩し的になくなります。しかし朝比奈さんは未来と交信できる。つまり「奴」はこの世界を壊せなかった、ということになりませんか？いえ、もっと言ってしまえば、僕たちがどのように動いたかを教えてもらえば・・・・」

「そりゃ無理だ古泉。オレと「奴」はこの世界において完全にイレ

ギュラーなんだ。この「物語」に本来存在しないキャラクターなんだよ。だから俺たちは涼宮ハルヒに関係がないんだ。現れるべくして現れるなら、関係してないとおかしいだろ？つまり、この世界の未来も、俺たちのことを知らない。「未来」もひっくるめて、「この世界」だからな」

「そうですか・・・・」

「おいおい。だから勝手に納得するなよ！！肝心の俺が置いてけぼりじゃないか！」

「説明しだしたらきりがないし、お前はこの世界の構造を知りたいわけじゃないだろ？」

「そこまでは・・・」

「だからお前が知ってりゃいいのは、自分の命が狙われているってことだけで十分だ。本来、こんなもん背負わせるものじゃないんだけどな」

「・・・・・・」

「で、どうしますか？とりあえず今日は解散しますか？もう２３時です。汗も流したいですし、僕としてはお開きにしたいのですが」

「そうすっかな。キョン、明日までに決めとけよ？？」

「ああ・・・・ん？なんだ長門」

「これを」

「なんだこれ」

長門がキョンに防犯ブザーのようなものを渡している。

「貴方の命が危険にさらされたときに作動する。・・・・貴方にはこれを」

「ん？」

そして蒔風に同じようなものを渡した。

「あちらのほうが作動したら、貴方は瞬時に彼の居る場所に転送される」

「おおー！！ありがとう！！」

「ありがとな、長門」

「（コクン）」

「んじゃ、おやすみなさーい」

「では僕も」

「・・・・・・・・・（スタスタ）」

「じゃあ、キョンくん。気を付けてくださいね？また明日」

「あ、はい。また明日・・・・」

キョンは思う・・・・

畜生、「また明日」ってのがこんなに重いなんてよ・・・・・

と

――――――

「そこで！！おれは襲いかかるチンピラどもをバッタバッタとなぎ倒していったわけよ！！」

そこで俺は涼宮に自分の売り込みをしていた。何としてもこのＳＯＳ団には入らにゃならん。じゃないと監視が大変だし。まあ「奴」が手を出してくるとは思わないけどな。

「へえー、あんた凄いのね。で、それであなたはこのＳＯＳ団にどうやって貢献するの？」

「ボディーガードさ！！このＳＯＳ団は聞くところによれば世の中の不思議を探してるそうじゃないか。だけどそういうのはＸ－ファイルしかり未知との遭遇しかり、何かと狙われてしまうもんだ。そこで襲いかかるエージェントから俺がみんなを守るのさ！！」

「うーん・・・じゃあ！あんたは団員じゃなくて警護官ってことでいいかしら？」

「ああ、構わないさ」

よかった、どうやら近づけたようだ。

「なあハルヒ。なんで団員じゃないんだ？」

「団員はあたしとあんた、有希にみくるちゃんに古泉君だけでいいのよ！それがあたしたちＳＯＳ団よ！」

ふーん、この五人ってのがいいらしいね。楽しそうじゃないか。

「して団長、今日の予定は？」

「そうそう！あたしね、思ったのよ！今までいろいろやったわ！夏休みには夜空を見て宇宙人を探した。映画では未来人を主人公にしたし、超能力者も出した。でも、今まであたしたちが手を出していないジャンルがあったのよ！！！」

「一応聞くが、なんだ？それは？」

「異世界人よ！！！」

とまった。おもに俺が。ビシッときたね。

おーおーキョンが面白い顔してこっち見てる。

いやでも、こういう話は聞いてたからいいんだけどね？いきなりこうこられると、さあ。

「お、お前は異世界人と何をしたいんだ？」

「遊ぶのよ！！異世界旅行に行ってもいいわね！！」

「お、おい待てよハルヒなんでいきなり異世界人なんだ？ホムンクルスとかでもいいじゃないか」

「バカねキョン。あたしが四月に行ったこと忘れたんじゃないの？」

キョンが、お前も今日思い出しただろうに、という顔をしている。

「あたしはね、「宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら」って言ったのよ！！でも来ないから自分で探したしいろいろやった」

「それでいいじゃねえか」

「向上心のない人間はすぐに堕落するわよ！！でね、異世界人だけ触れてないなーって思ったのよ」

「・・・・で、結局おれたちは何をやらされるんだ？」

「それはもちろん、異世界への行き方を探すのよ！」

そうして俺たちは街に出た。

なんでもこのようなものは結構起こるらしく、適当にぶらついて時間をつぶすだけの時間になるらしい。

無意味に時間を過ごし、集合し、それで今日は解散した。

それから３０分後、俺たちは昨日のように公園に集合した。

「それで、うちに来んのかい？」

「ああ。そっちには長門もいるしな。家には新入部員の歓迎会でそのまま泊まるって言ってある」

「ほ、本当に大丈夫なんですか？その人が攻めてきても」

「大丈夫だ。俺がいるからな。それに「奴」はおそらく今晩来る」

「たしかに、準備が済み次第、すぐに実行するのは基本ですからね。それにしても不思議だ」

「ん？」

「いえ、あなたに会ったのはつい昨日のことです。まだ２４時間も経ってないのに、我々はあなたに程度は軽くても、ある種の信頼を寄せている。これは不思議なことです」

「・・・もしかしたら、の話だけどな」

「なんでしょう？」

「この世界で「仮面ライダークウガ」は一つの作品として知られている。同じように、お前たちの話も、どこかの世界で作品になっている。その作品を、オレは読んだことがあるのかもしれない」

「それは・・・」

「もちろん、記憶はない。おれはお前らのことは知らなかった。あの作品の誰々だ、なんてこともわからない。だけど、無意識のうちに気に入られるようにふるまっているのかもしてないな」

「まてよ。でもさ」

「なんだ?キョン」

「結局そんな風にできるってことはお前はもともといろんな人に対していい人ってことだろ?本当にそんな人間じゃなかったら、そんな風にはふるまえないだろうしよ。たぶん、そんなことがなくても、おまえは打ち解けてただろうし、今そんなこと言ってもしょうがないだろ」

「そ・・・・っか。・・・いやぁ!ありがとうな!キョン!!お前いいやつだわ!!」

「いてっ、叩くなよ!!」

「本当に、不思議ですね・・・さて部屋に行きましょうか」

「え？」

「僕も泊まりますよ。そのほうがいいでしょうし、何よりも上からそう仰せつかってるもので」

「あのぅ、あたしも長門さんの部屋にお邪魔するつもりだったんですけどぉ・・・」

「みんなで泊まりか・・・なんか涼宮がかわいそうだなあ」

「いいのかよ？」

「しかたねぇだろ。それに、最主要じゃなくても主要人物がこんだけいるんだ。これなら「奴」もこっち狙いで来るだろうよ」

「囮、ですか」

「そういうのは好きじゃないんだけどな。仕方ないだろ」

「まあ、そうですね。涼宮さんが狙われる可能性は？」

「ないだろうなぁ。あいつ、オレのこと目の敵にしてるから、オレのほう狙ってくるだろうし」

「そうですか。「奴」のことに詳しいのですね」

「まあね。まだ三個目の世界だけど、あいつのことは大体わかっちゃうんだよなぁ」

「まあ、こんなところで話してもしょうがない。いったん俺の部屋に集まって、みんなで飯だ！！」

「ちなみに何を？」

「もちろん」

ガサッ

蒔風がその手にビニール袋を持って言った。

「鍋だ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

涼宮ハルヒの憂鬱　～ワンダー　ヒューマン～（後書き）

アリス「オンリーワン止まりの野郎ども！！私がナンバーワンだ！！」

ＳＭＡＰの名曲をそんな風にネタにするな！！！

ア「だってあの曲事あるごとに流れるからもう聞きあきたんですもの」

う・・・たしかに・・・

ア「ねーねー、二人だけじゃつまんないよー。蒔風はいいからなんか他の世界の人連れてきましょーよー」

ほらほら、飴あげるから

ア「んー、（ゴクン）もーいっこー」

そんな舐め方する子にはもう飴はあげません！！！

ア「んおっ、コロコロ」

人間ポンプをするな！！！今更とりつくったって遅いわ！！！

ア「ごめんなさい」

じゃあよろしく

ア「ＳＯＳ団お泊まりか～い（ハルヒ除く）。ハルヒがいなくても大変なことになるかも！？」

ではまた次回

禁則事項です

鍋が始まった。

え？描写が簡単すぎ？

いいじゃないか！

「まずみんなに確認を取りたい」

「なんだ？」

「普通にすべきか闇にすべきか」

「普通にやれ！」

「そこが問題だ」

「そこっていうのがお前の頭なら正解だよ」

「多数決だ！」

「聞けよ！」

「普通がいい人ー」

五人の手があがる

「お前も普通でいいんじゃねえか！」

「ほら、もし闇の方がいいって人がいたら・・・」

「基本的におらん！」

「その方が面白そうなんだが」

「鍋の本来の目的をしっかりと果たせよ！」

「キムチでいいか？」

「はい、かまいません」

「え？キムチって？あの？」

「・・・・・（コクン）」

「あっさり決めやがった。普通だ。本当に普通だ。なんだったんだよ・・・」

じゃあ始めますか

ＳＩＤＥ　キョン

そうして鍋が始まった

「お、うまい」

ハルヒの鍋ほどではないが、結構うまい

長門がどんどん食っていってる。

あの身体にどういう構造になってんだ？

「宇宙になってるのかもしれませんね」

フードファイターかよ

「ふぅー、ふぅー。あむあむ・・辛いけどおいしいです」

朝比奈さん、貴女のその仕草でお腹いっぱいです！

「（パクパクパクパクパクパクパク）」

「おおー、よく食べるな」

蒔風が長門の食いっぷりに感心している。

長門の食い方はなんかこう機械的なんだよな。

でも、心なしかいつもより口に含んでる時間が長くなっている気がする。

ダパダパダパダパダパダパダパ

そんな音がして蒔風の方を見たら、キムチ鍋のもとを自分のお椀に注いでやがった。

そんなにかけて大丈夫か！？

「辛いのが大好きなのさ！」

辛党なんだな

「甘いのも辛いのも好きだけど、どちらかをいえば間違いなく辛いのが好きだ」

そんだけかけてりゃ疑いようもないわ

「ほら、おまえも（ダパダパダパダパ）」

「何するんですか！！！？？？」

「いやあ、な~んかあんまり食ってないような気がしてさ」

蒔風が古泉のお椀にも大量に注いでいく。

古泉め。普段いじられてないからな。焦ってるぞ。

「くっ、貴方はどうです？辛いの好きでしょう？」

「別に好きでもないわ！！！」

古泉、笑顔が怖い。

あとオレを巻き込むな！！

「僕だけじゃひどいと思いませんか？ＳＯＳ団の仲間じゃないですか」

「仲間だと思うなら一人で背負ってくれ」

「（ダパダパダパダパ）」

「てめえ！！何やってんだ！！古泉！！この野郎「グッジョブ！」じゃねえよ！！」

「囮ごくろう」

「いえいえ。っていうかすべてあなたのせいなんですけどね」

「図りおったなあああ！！！！」

おのれ、蒔風の罠か！！

「古泉～」

「はい？むぐっ！」

「うまいか？？」

「ヒャラララララララ！！！！（ビクンビクン）」

「おい、大丈夫かよ！？古泉？？古泉ーーーー！！！」

まあそんなこんなで時間は過ぎていった

朝比奈さんは涙目になってたなぁ。可愛かったけど。

そしてオレも食べはじめた。

もちろん、普通の辛さのをな

あんなんじゃとても食えん

普通のをしっかりいただきましたよ

腹が減っては戦は出来ぬとは、昔の人はよく言ったもんだ

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

――

「あと少しですね」

「ふぅ食ったなぁ」

「お腹いっぱいです」

「もう入らん」

「・・・・・・・」

古泉、みくる、蒔風、キョンが、まだ少し残っている鍋をみてギブアップ宣言

長門がまだ食べられそうだが、押し付けるのは気が引けるので、誰もなにも言わない。

ちなみに古泉は蒔風に食わされた事を覚えてなかった・・・・・

「もう１９時ですね。「奴」は本当に来るんですか？」

「来る、間違いなく」

「なぁ、来ない方がいいだろ？少なくとも俺はごめんこうむるね」

「まぁ、とりあえず片付けますか」

「そうだねー。片しますかー」

「・・・・・・・・」

長門が窓の外をジッと見つめる。

「長門・・・・・どうした」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・来た」

「！！ふんっ！！！」

ガッシャァ！

長門の言葉を聞くやいなや、蒔風が掴んでいた鍋を思いっきり外に向かって投げつけた

投げつけられた鍋はＵＦＯのように回転しながら飛び、窓ガラスを粉々に砕く。

そして外にいるであろう標的に向かって猛烈な速度で突っ込んで・・・

その空間に消えた。ぶつかる音も、落ちる音も聞こえない。

代わりに

「おいおい、食べ物を粗末にすんなよ」

夜の闇の中から声が聞こえた。

「奴」が光の範囲に入ってくる。

その手にはいつの間に食ったのか、綺麗になっている鍋が握られていた。

その鍋を蒔風にむかって投げる。

「うまかったよ。ありがとうな」

「はん！お粗末さまっての」

「蒔風・・・・こいつが？」

「お、こんばんは主人公。殺しに来たぞ」

「どうやらそのようですね」

「長門さん、頼む」

「了解」

ブォン！

「おっと、仲間外れはだめだよ」

「な！？」

「私たちもですか！？」

「まったく、意地が悪いぜ。戦えるやつだけ結界内に閉じ込めるなんて」

そう、蒔風が長門さんに頼んでいたのは、自身と「奴」だけを隔離する事だった。

しかし失敗した。

「奴」はキョンだけでなくみくるをも引きずりこんだのだ。

「・・・・・こうなったら仕方ねぇ。古泉、長門さん。そこの二人をたのむ」

「わかりました。御武運を」

「あんがとね」

「ふ、やはりお前とはどうしても戦わなければならんか」

「涼宮を狙えばよかったじゃん」

「それはー、つまらん！貴様を叩き潰したいんだよぉ、オレはなあぁ」

「物好きな野郎だ」

「さあ、蒔風は今回もオレに勝てんのかなぁ？あっはははははははは！！」

「テンション高ぇなあ。すううううううう・・・・・じゃあ、オレも上げてくっかなぁ！よっしゃぁアアア

涼宮ハルヒの憂鬱　～パーティ　アンド　デストロイ～（後書き）

やっとなのはとフェイトのねんどろいどゲットしたぜ！！！

アリス「どこ行ってもなかったもんねー」

秋葉原まで言ってやっと手に入れました。

やっぱアキバはいいな

ア「雨が降ったりやんだりで面倒くさい天気だったけどね」

しかもジットリと湿気が高いから無駄に暑いし

なんか今年の夏はスッキリとした暑さじゃなさそうでいやだな。

ア「ですねー。・・・こんな普通の雑談してていいの？」

いいんじゃない？

こんなのもありさ。深夜にならないとテンションあがらないし

ア「そういうもんですか？」

テンション自体はあげられるけど、不完全燃焼になって、気持ち悪くなる

ア「やめたほうがいいですね。そうなったあなたは手に余りますし」

次の楽しみは予約したダブルのヘッドホンかな

ア「仮面ライダーの？」

そうそう。パソコンのヘッドホンがもう結構寿命でさ。

ア「それは楽しみですね」

そろそろよろしくね

ア「はい。次回で「奴」と戦い、旅立つ蒔風。ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは？次の世界は？一体なんだ？」

ではまた次回

ＹＵＫＩ．Ｎ＞また図書館に

涼宮ハルヒの憂鬱　～蒔風舜の激闘～

「打滅星！」

「ィヤッハー！強いパーンチ！」

ゴガァッ！！！！！！

お互いのパンチがぶつかり合い、その威力を相殺し合う

二人は離れ、蒔風は風林火山を、「奴」は魔導八天を構える

「踊れ踊れ～！鎌鼬切演舞、四季早々、春・花吹雪！」

「そおりゃぁ！真っ二つよ！」

ズバン！

「奴」を取り囲むように回るいくつもの斬撃が一降りのもとに掻き消される。

しかし蒔風は止まらない。

「春が終われば夏が来るぅ！四季早々、夏・津波！」

ババババババババババッ！

再び作られた斬撃が、今度は高く積み上げられ、一気に「奴」を押し潰す！

が、しかし

「こんな力技はなぁ！オレが弱ってからやれやこらァァァァァ！！」

轟ッ

バァアアアアン

その津波が弾け飛び、周囲を切り刻んでいく

「さぁて、夏が終わってどーなるん！？何来るん！？」

「おぁぁぁ

その「秋風」を「奴」は魔導八天の内の三本を使い搦め捕り、蒔風の方にかえしていく！

「なんとぉーーー！？くっそ、もう一丁！」

自分に向かってくる「秋風」に、蒔風は「秋風」を再び放ちそれを打ち消した。

「ほらほら最後に冬だぞ？早くしてよ」

「いいぜぇ・・・動くんじゃねぇぞ！冬・霜柱ぁ！」

シャアアアアアアアアアアアアア！

斬撃が地面スレスレを飛んでいく。

そして「奴」の足元に着いた瞬間、一気に上昇する！

「ぬ、ぉっ！？」

「どうしたよ！？お待ちかねのもんだぜ！？」

「だっが、しかぁし！！！」

バッパァン！

「な、突き破ってきただと！？」

「ふっふぅ！もう大体お前のことはわかってきてんだよ！」

ガッキィ、グググッ

蒔風の風林火山と「奴」の魔導八天がぶつかる。

お互いに動けない。

ならば動けるものを出しにかかる！！！

「はぁっ！いけぇ！白虎！青龍！」

「ならば！ケルベロス！迦桜羅（カルラ）！」

ドドドドンン！！！

その状況からお互いに召喚獣を繰り出す

蒔風は青龍と白虎を

「奴」は三首の巨大犬、ケルベロスと、火を纏う巨大な怪鳥、迦桜羅を繰り出した

それに蒔風は驚愕する

「なっ、ケルベロスはともかく、迦桜羅だと！？」

「そうだ！かつてインドにいたという伝説の巨鳥！別名ガルーダ！こいつは、かつてな・・・・」

「！！！！！すざぁぁぁぁぁく！」

「その伝説で龍や蛇を喰らった！そいつの天敵だ！！」

ギャオオオオオオオオオオオオオオオ！！

キャオオオオオオオオオオオオオオン！

バッサ！ドッ、ブワァッ！

蒔風が青龍を喰われる前に朱雀を新たに呼び出し、寸でのところで青龍を守り、戻した。

それに「奴」は悔しそうに言う

「ちっ。・・・・・だかまあいい。いいのか？オレの召喚獣は少ない分強力だぜ！？」

グルラァァァ

ガァァァァァァァァァァァァ！

確かに、ケルベロスに白虎が押されている。

迦桜羅と朱雀も同様だ。

こうなれば・・・・

数でカバーするしかないのは必須！

「獅子、天馬ぁ、麒麟ン！あと玄武と青龍もだ！青龍は迦桜羅には向かうな！他をフォローしろ！」

「ではさらに、サラマンダー！」

ヴァン

フシュルルルルルルルルルルル

そこに「奴」は更に火竜・サラマンダーを召喚(だ)してきた。

ケルベロスには白虎、玄武、麒麟

迦桜羅には朱雀、天馬

サラマンダーには青龍、獅子がぶつかる。

「怪獣大戦争じゃぁ！」

無限に広がる隔離空間に縦横無尽に巨獣たちが暴れ回る！

「ボサッとすんなよ」

ギャァン！

蒔風が天地陰陽を構えて「奴」に向かう

「ふっふぅ、蒔風ぇ・・・いいぜ、こっちもやるかぁ！」

「「おおおお

ーーー

「ひぇぇえぇぇぇぇぇ・・・・蒔風さん、大丈夫なんですかぁ～？」

「彼はまだ平気なようです・・・・どうやら力は互角のようですね。一撃でもいいのと貰ったら、そこで勝負が決まります」

「そ、そうなったら・・・・」

「彼は殺され、世界が消える。無論、我々も一緒にね」

古泉、他人事みたいに言うなよ。

お前にはまだ言ってないが、朝倉に刺された時だけでめちゃくちゃ痛かったんだぞ。

あんな思いもうごめんだよ

だけどあいつは今、そんな状況の真っただ中にいるんだよな・・・・・

「蒔風・・・・」

くそっ、ここでこうして待ってるしかないのかよ・・・・・

SIDE　out

「おおぉぉぉ！！！大鵬（たいほう）！！！」

蒔風が組み合わせた天地陰陽で突きを飛ばし、さらにそれの後続、後続とつながり、巨大なひとつの円錐型となり、「奴」に向かって突っ込んでいく。

「ぐあああああああああああああ！！！」

「決まったぁ！！！」

「まだ、だよっ！！！」

「何！？ぐお！！！」

もうもうと上がる土煙の中から「奴」が思いっきり飛び出してきて、蒔風にケンカキックを入れる。

「ぐっ」

「素晴らしい技なんだけどさぁ、勢いばっかじゃ駄目だぜ？」

一撃はまだ大したことはなかった。

だがここまでも戦闘で次々とあしらわれ、そのすきにチマチマと攻撃を入れられていた蒔風は、結構限界に近いところにいた。

「おいおい、蒔風。どうしたんだよ。お前世界最強だろ？？」

「奴」があざけるように蒔風に言う

「く、そ、ミスった、なあ・・・・やっぱテンションに身を任せるには・・・・・はっ、いきなりすぎたわ」

ボロボロの体でめり込む地面に体を預けて蒔風がぼやいた。

ぐ・・・・身体が・・・・・動かない・・・・・・

「はん。いい感じに乗せられるからだ。まったく・・・・・」

「なん、だ?・・・・心配、でも・・・・・してくれてんの・・・・・か??」

「まっさかぁ!!!ただよ、お前も、あそこの中に隠れてるやつらも、なーんか勘違いしてるって思うと面白くってよ」

「なに・・・・が・・・・・?」

ギャオォオォォォォォォォォォォォォ!!!!

キュルルル

ドンっ、バァァァァァ・・・・ゴゴンン・・・・

青龍たちが戦っている音をＢＧＭに「奴」が語りだす

「そっちの奴らもよく聞いとけよ！！？いいか？お前ら揃いも揃って涼宮ハルヒがすべての現況みたいなこと考えてんだろ？」

「ああ・・・・古泉から聞いた話じゃ、っーーーーーーー！！！そんな・・・ところだ」

「無利するなよ蒔風。もうお前の負けだよ・・・・ひひひひひひ。ふぅ、その話から間違ってんだよ・・・・・」

ＳＩＤＥ　キョン

「間違ってんだよ・・・・・」

「奴」と蒔風が会話している。

数メートル離れているところだから、よく聞こえないはずだが、どうやら長門が音を拾ってくれてるらしい。

「涼宮ハルヒに特別な力があって、彼女の思い通りに現実が歪む。それはおおむね正しい。それが彼女が発信源なのか、それとも見つけていくだけの存在なのかは分からない。だがな、そこにいる最主要人物はな、そんな状況を求めてたって知ってるか？？」

「本当ですか？」

オレの隣で古泉が確認してくる

「いつのことだよ？今じゃ納得してるが、望んでなった立場じゃねえぞ」

「まあこれはオレの推測なんだがな、自信はある。そいつはな、嘗てはヒーローだとか謎の組織だとか、そういう面白い世界にあこがて、行きたがった。しかし気付いた、自分がそんなところに放り出されても何の能力もない自分は太刀打ちできない」

「それは、っっっはぁはぁはぁ――――――――よくわかるぜ。おれも・・・そうだったからなぁ」

「回復してきたな・・・・・おらあ!!!」

「ぐぶっ!!ぐぅぅぅぅぅぅぅぅぁぁあ!!!」

「で、そいつは考えたんだよ。転校生みたいに急に出会ったやつが実はそういうやつで、自分はフォロー役にまわればいいと。自分はその戦いを脇からのぞいてればいいと、な」

『!!!』

「どうだ?今そいつがいるのはそういう立ち位置だろう??オレの考えでは、そっちのほうが元凶なんだがなぁ・・・」

「あなた・・・まさか・・・」

「待ってくれ!!!おれはそんな人間じゃない!!!なんの力もない一般人だ!!!!」

「涼宮ハルヒだってそう思っている。いや?もしかしたら、お前と涼宮ハルヒの両方の力が作用し合っているのかもな。まあつまりはお前自身がどう思おうと、お前がそういうやつだということは変わらないんだよ!!!!!けっ、そういった最主要とか主要人物の勝手な都合で物語が進む、世界がかき混ぜられる!!!気に食わねえ。世界に居んのはてめえだけじゃねえってのによ!!!!」

どうやらこっちの声も聞こえてきたようだ。

だがそんなことよりも・・・・・・・・・・

おれは・・・オレは本当にそんな奴だったのか???

朝比奈さんは未来からやってきたのも、長門が作られたのも、古泉に変な力が宿ったのもオレのせいなのか??

オレは・・・・今までのオレは・・・・

バンッ!!!

「間違えんなよ・・・・・・」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「奴」がキョンに向かってその推論をぶちまけ、激昂している。

そのすきに蒔風はバリアのほうにズリズリと這いながら近づき、そのバリアを叩く。

中にいるキョンがビクッ！と蒔風のほうを見る。

「間違えんなよ・・・・・」

「お、お前・・・ボロボロじゃないか！！！大丈夫か？長門！！治してやれないのか！？」

「可能だが推奨はできない」

「なんでだよ！！」

「「奴」がいる。防壁を解いたら、終わり」

「大丈夫だよ・・・ありがとな・・・さぁて、てめえ、いい加減なこと言ってんじゃねえぞ!!」

「ン?結構筋が通っていただろう?」

「ああ、筋は通ってる。確かにそれが正しいのかもしれない。オレにそれを否定する要素はねえよ。だけどな、それが確定であるという確固たる証拠もねえだろうが!!!」

「ま、蒔風・・・・」

「こいつが何をしたかとかは関係ねえ。でもな、いままでがあったからこうやってこいつらはここにいるんだ!!!」

「・・・・・」

「誰がどうじゃねえんだよ。ハルヒがいて、キョンがいて、長門さ

んに朝比奈さんに古泉がいて！！！それがこいつらＳＯＳ団なんだよ！！！それもわからないお前にいい言葉を教えてやるよ・・・・」

「【自分がどんな存在かは、自分で決めることができる】らしいぜ？」

「蒔風・・・・！！」

「こいつはこいつだ！！今いろいろやってんのは涼宮だろうし、解決してんのはこいつらだ！！わかることはそれだけだし・・・・それだけでいい！！」

「確かに・・・・」

「古泉？」

「たとえあなたが元凶だとしても、僕の力は涼宮さんが与えてくれたものですからね。今のあなたは一般人。それで十分でしたね」

「私の仕事はあなたの安全を確保することと、涼宮ハルヒの観察。最初からそれだけ」

「長門・・・・」

「キョンくんは協力者ですけど、時間の流れに関与できません。だからこそ、いろいろお願いされるんだと思います」

「朝比奈さん・・・・」

「ふん！！美しい友情だなぁ！！！主人公よ！！殺したくなってくるわ！！」

「させるかよ！！おいてめえら、ちんたらやってんじゃねえぞ！！！」

「・・・御意！」「おっけ～！！」「了解です！！」「了解じゃ！！」「了承！」「おっし！」「いくかぁ！」

蒔風の叫びに、龍虎雀武・獅子天麟が応える！！

ケルベロスが玄武に向かい、その牙を突きたてる

しかし玄武の防御力は亀だけにあって最高峰である。

その三つの顎門（あぎと）が噛みつこうとも、その装甲は砕けない！！

そこに白虎がその爪をもって横腹を裂き、麒麟が思いっきり踏み砕く！！

ケルベロスは腹を裂かれて背骨を折られ、実体化できなくなって消える。

一方、迦桜羅との戦いは空中戦である

迦桜羅と朱雀がその体を炎に包み、幾度も幾度もぶつかり合う。

そこに天馬の蹄が襲う。

迦桜羅は今までもこの攻撃をかわしてきていた。なのでまた同じようにかわそうとする。

しかし今度は違った。パターンを見切った朱雀の嘴が、迦桜羅の翼を貫いた！！！

キュロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！

そして天馬の蹄によって地面にたたき落とされ、そこに急降下してくる全身を炎と化した朱雀の突攻が叩きこまれる！！！

バッガァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！

爆炎とともに吹き飛んだ迦桜羅も、消えていった

そしてサラマンダー戦である。

サラマンダーがその口から炎を吐き出し、青龍を焼かんとする。

しかし、青龍はそのすでに煤けた身体を鞭のようにしならせ、その炎を中心に回転して突っ込む！！

そしてその口に噛みつき塞ぎ、身体を巻き付け、上空にあげていく。

そこでサラマンダーを開放し、その体を全力で叩きつける！！！

バッチィ！！ヒョオオオオオオオオ・・・・・ズッズン・・・

そしてそこに獅子の爪と牙が襲いかかり、サラマンダーの首をとらえた！！

ガァルルルルルルル！！！

フシュシュシュシュシュユゥウウウウウウウウウウ・・・・・・・・・・

そうしてサラマンダーも、炎を弱弱しく吐き、消えた。

最後に、「奴」と蒔風である。

召喚獣たちを戻し、バリアの中からキョンを引っ張って言った。

「行くぜ、キョン。おまえに、一回だけ非一般人ってのをやらせてやるよ」

「はぁ？」

「おおおお！！開翼！！そしてぇ！！」

【Ｓｕｚｕｍｉｙａ　Ｈａｒｕｈｉ　ｎｏ　Ｙｕｕｕｔｕ】－ＷＯ

ＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

蒔風がＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫを発動させる

すると、キョンの眼の色が変わった。

なにやら右が青で左が緑だ。

「なんだなんだぁ！！！？？」

「あーキョン、なんか撃ってみて？」

「はい？お前まさかこれ・・・」

「はい、キョンビーム！！」

「うをぉ！！」

キョンが慌てて奴のほうを向く。

すると「奴」に向かってレーザーが放たれた。

「なぁっ！？くおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ピュン・・・ドォオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！

いきなりのことで「奴」も反応できずに、直撃を食らう。

あたり一面が火の海になった。

「レーザーだけじゃ爆発はしないんだがな。さすがはＷＯＲＬＤＬＩＮＫ」

「おいおい！！納得してないでなんだよこれ！！」

「こっち向くなよ！！ほら次だ！！」

「またかよ！！」

炎の中で動けない「奴」に再びキョンが向く。

「奴」はとっさにガードをとった。

しかしきたのはレーザーではなかった。

シュパン！！ズパパパパン！！！

「む？ぬあああああああ

その体が今度はズタズタのバラバラにされる。
今放たれたのはカッターのようだ。
「これなんだよ!!」
「気にすんなよ!!世界最強の特殊能力だと思え!!」
「何が何だか・・・」
「とにかく!!あいつを倒せる力ってことだ!!終わらせるぜ!!」
【Ｓｕｚｕｍｉｙａ　Ｈａｒｕｈｉ　ｎｏ　Ｙｕｕｕｔｕ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～
そしてそんな声がして、あたりが少し暗くなり、空が灰色に染まった

キョンの眼は元に戻っている

「この空間は・・・・・」

「来るぜ・・・・・・・」

ずずずずずずずずずずずず・・・・・・

地面を押しのけ、青く光る巨人・神人が現れる!!

「神人!?そんなものまで出てくるんですか?」

「それがＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫだ」

「ほらキョン。どうすんだ、あいつを!ぶちのめしてやろうぜ!!」

「おおおお！！！なんだかよくわからんが、いっけえええええええええええええええええええ！！！！」

オオオオ

「ぶ・・・がああああああ・・・・・・・・・」

ぶしゅうううううううううう・・・・・・・・・・・・・

叩き潰された「奴」は、細切れのまま消えていった。

空間にひびが入り、最初の隔離空間に戻ってきた。

さらに長門がその空間を解除し、元の部屋に戻ってくる。

「これで終わりですか？」

「ああ、間違いなくな」

「そういえば怪我は？？」

「大丈夫だっての」

「今治す」

「んお？長門さん、ありがとう」

「いい」

「蒔風・・・」

「なんだよキョン」

「なんか・・・ありがとな」

「いいっての。俺がやりたいだけだからに」

「でも・・・・・・・・ありがとな」

「あなたは、行くんですか？」

「んー、やっぱねー。この世界にそんなにいなかったしね」

「そうですか」

「大丈夫だよ！！この部屋とかのことは多分世界が修正効かせてくれるからさ」

「いえ、お礼をしたいなと思いまして」

「ははは、その「想い」で大丈夫だ。しっかり力になってくれるさ」

「？？」

「こっちの話さ」

「これから家帰んのもなんかなぁ」

「あ、明日までは大丈夫だと思うから、この部屋は」

「そうなのか？」

「たぶんねー。世界もそこまで意地悪じゃないだろうし」

「じゃあ、予定通りオレは泊まるか」

「僕は・・・すみません。機関のほうに報告を入れなければならないので」

「私もおうちに帰って報告しなきゃ・・・・」

「私は部屋に戻る」

「すみません、どうやらあなた一人になってしまうようです」

「大丈夫だ。この歳で寂しいってこともないしな。それに・・・・」

「それに？」

「オレは普通の一般人だ。こんな面白集団と寝るイベントは性に合わん」

「ふっ、そうでしたね。では、僕はこれで」

「おやすみなさい」

「・・・・・・・・・・また、明日」

そして各々帰っていく。

「じゃ、俺も行くかな」

「ああ、行って来い」

「送り出されるって・・・いいな」

「そうかもな」

「仲間を大事にな！！」

「言われなくれもそーするわ！！」

「ははははは」

「Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――Ｓｕｚｕｍｉｙａ　Ｈａｒｕｈｉｎｏ　Ｙｕｕｕｔｕ」

そして蒔風はゲートをくぐった

部屋にはキョンが一人残る。

蒔風が割った窓はすでに長門が修復してくれていた。

そして風呂に入り、歯を磨き、寝間着に着換えて、布団に入った。

布団の中でキョンは考える

いろいろあったな・・・・

でもそんなことがあっても、人間ってのは眠くなるし腹も減るもんなんだから、現金なもんだ・・・・・

オレは普通を謳歌する人間だ。

いくら周りに変な奴が来ても、オレはこっちの人間さ。

その立場だからできることとか、楽しめることってあるだろ？

だからこの立場でできることをやるのさ。

ま、今やるべきこととしては、明日ハルヒにどう説明するかを考えましょうかね・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

to be continued

涼宮ハルヒの憂鬱　～蒔風舜の激闘～（後書き）

アリス「ハルヒが出てなかったことに関するいいわけは？」

すみません、ありません

ア「確かに設定上出しにくいのはわかりますけど、結局ハルヒが出てたのは前半の二話だけじゃないですか。そこをどうにかするのが作者の力の見せ所でしょう」

ほんとすみません

ア「あと、キョンが実は元凶とかの話は？？」

勝手に考えました。でも思ってみればそうじゃね？

ア「確かにそうだけど、原作で否定されたらどうするのです？」

だから言ってたじゃん。推測だって

ア「うまく逃げ道を作りましたね。そういえば蒔風は？？？」

あ、描写忘れてた

蒔風「いたのになあ。ねえ、俺っていたらやりにくい？」

普段いないからやりにくいです

ア「本編キャラは帰れー！！！」

お前らひどいな！！！

ア「てめえ本編だけに出てろよ。こっちは私の場所なんだよ！」

蒔「へっ、そんな幻想はぶち殺「獄炎弾！！」オレの技ーーーーー！！！！」

おい・・・・いいのか？

ア「大丈夫って書いといて。そうすれば大丈夫になる」

蒔風はブッ飛ばされましたがギャグ的な要因で大丈夫でしたっと

蒔「いやあ、焦った焦った」

ア「そこで本当に大丈夫になるんですね・・・・」

それが作者の力

【涼宮ハルヒの憂鬱】

主な構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”１５％、”ライクル”４０％、”フォルス”４０％、”ＬＯＮＤ”５％

最主要人物：キョン（本名不明）

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：キョンにみくるビーム付加

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：神人召喚

ア「％まで入れたんですね」

こっちのほうがわかるかなと思って

蒔「事件性あるのって、全部”ＬＯＮＤ”だからなぁ」

ア「そういえばあの【自分がどんな～】のセリフってさ」

ああはい

［ゴジラ　ファイナルウォーズ］のものですよ

ア「やっぱりですか」

まあ蒔風はこう言うセリフをはっきりと覚えてるわけじゃなくて。
なんとなく出てくるだけだからね。

んじゃあ、まあ、こんくらいかな。

あとよろしく

蒔「なんか最近おとなしいねえ」

ア「燃え尽きたんでしょ。次回、蒔風はオタクと出会う」

蒔「簡単すぎだろ！！！」

ではまた次回

貧乳はステータスだ！！希少価値だ！！

らき☆すた　～そんなある日～（前書き）

アリス「始まるザマスよ」

蒔風「いくでガンス♪」

「奴」「・・・・・・ふんがー」

いいのか！？この配役！！！

らき☆すた　～そんなある日～

ここは陵桜学園高等部（りょうおうがくえんこうとうぶ）

わかるように言えば泉こなたたちが通っている高校である。

天気は晴れ。五月なので、いい感じの日和である。

今は昼休み。3年B組のクラスでこなた、つかさ、かがみ、みゆきの4人が昼食をとっている。

「・・・・・でさ～、くさくってさー」

「分かるわかる～」

「そういえばこなた、このクラスに転校生が来たみたいじゃない？この時期に面白いわよね？」

「あーうん。きたよ。今はいないみたいだけどね」

「ふ～ん・・・あ、あんたこの時期の転校生だからって変なこと言ってないでしょね」

「お姉ちゃん、変なことって？」

「いや、こいつのことだから、変な時期の転校生に『謎の転校生！？超能力者！？』とかネタを言ったんじゃないかと思ってね・・・・」

「まっさかー。あたしはそんなに誰かれ言わないよー」

「どーだか。そこんとこあんたは不安なのよ」

「ふふふ。あ、でも・・・」

「どうしたのよみゆき」

「いえ・・・その・・・」

「あぁ。みゆきさんが言いたいのはあれのことだよね？」

「こなちゃん、あれってなんだっけ？」

「自己紹介のときのだよ」

「なによそれ。やっぱあんた何かやったんでしょ？」

「えっと・・・やったといいますか、やってしまったといいますか・・・」

「はぁ？みゆきまでわけわかわんこと言って・・・・いいから教えなさいよ」

「『こなちゃん、教えて？』って言わなきゃ教えな～い」

「うぐっ、ゲホゲホッ」

「おぉ、かがみん、食べ物をそのタイミングで詰まらすとは・・・・やるね！！」

「（ゴクン）うれしくないわ！！で、その自己紹介がどうしたのよ」

「『ただの人間には興味ありません！！』って言ったんだよ？？」

「やっぱ言ったんかい！！」

「転校生が」

「転校生がかよ！！」

「うん・・・こなちゃんが『興味のあることって何ですか？』って聞いたらね？」

「そうそう。さすがにびっくりしたよー」

「そいつどんな奴よ」

「いや、相手は男子だし、やっぱりなかなか話の輪に入れなくってさー」

「あんたとなら意気投合できそうじゃない。そもそも気にしないでしょ？」

「いやいやかがみん。あたしはこう見えてもなかなかに繊細なのだよ」

「ぶっとくたくましく生きてるように見えるのはあたしだけか？」

「それにすぐに男の子たちに囲まれちゃってたから。いくらこなちゃんでも入りにくいっぽかったよ？」

「なんかつかさ、バカにしてない？」

「えっ！？してないよ～」

「つかささんはきっと、誰とでも仲良くなれる泉さんでも難しいとおっしゃりたかったのですね」

「そうだよこなちゃん！！」

（（さすがだ。心得ているよ。みゆきさん！！））

「あの、なにか？」

「いや、みゆきの大きさに改めて感心したところよ・・・・」

「たしかに、みゆきさんはいろいろ大きいですからなぁ～～♪」

「親父な発言はやめい！！」

そこからまた話題が変わっていき、昼休みが終わると、かがみは自分の教室に戻っていき、授業が始まった。

そうして授業が終わり放課後になり、珍しく4人でこなたの買い物に付き合っていた。

アニメ○ト、ゲ○マーズなどのアニメショップによって次々と目的のものを購入していくこなた。

かがみもライトノベルを数冊買い、つかさとみゆきは店内を面白そうに眺めていた。

そうして買い物も終わり、カラオケによって行こうか、帰ろうかと話しているところである。

「あ、ゆーちゃん?うーん、まだわかんないんだよねー。遊んで帰るかもしれないし・・・うん、うん・・・わかったよー。じゃーねー」

「ゆたかちゃん?」

「そ、あっちは今ひよりんの家で集まってるんだってさ」

「みなみちゃんとパティちゃんも?」

「そうそう、だからうちらもカラオケに言って親睦を深めよーう!!」

「じゃあいく?はやくしないと時間無くなるわよ?」

「なんだぁかがみん、乗り気じゃ~ん」

「うっさい!!」

「まったくかがみんは・・・なんだろうあの人・・・」

「なによ?またくだらないことじゃないでしょうね」

「ちがうよ、あの人・・・なんか・・・」

「ん?なによ。まさかあんたひとめぼれとか~?」

かがみがからかうように言いながらこなたの言うほうを見る。

そこには確かに人がいた。街の道の真ん中に立っている。

この道は全部歩道でなので車の邪魔などになっているわけではない。人もたくさんいる。

しかし、気づいたらただの「そこらへんの人」には見えなくなっていた。

そいつ黒い人影をしていた。顔がはっきりと見えず、まるでずっと影がかかっているようだった。

それが近づいてきて、言った。

「貴女が泉こなたさんですね？」

「あんたなによ・・・・なんの用よ」

かがみが庇うようにして前に立って言う。

「ああ、その庇うような態度。どうやらあっていたようだ。間違っていたらことですからね。では・・・・・」

そうして男が振りかぶり、

「この世界の最主要人物ってことか」

ブァッ!!ゴウっ!!!!

そういって「奴」がその拳を力の限り振り下ろしてきた・・・・・・

・

ーーー

止めている。

「へっ、気にすんな。ただの世界最強だよ」

そう、その男は答えた。

「蒔風・・・舜・・だっけ？」

「おお！覚えてくれていましたか！っとぉ！！」

ばしっ！

二人が距離をとり離れて、「奴」が結界を展開させて４人と蒔風を閉じ込める。

「この結界・・・好きだねえ・・・・」

「いらんものを巻き込みたくなかったからな・・・それにしても貴

様・・・・どこにいた!?」

「バカ野郎が、お前が現れれば、蒔風さんはどこにでも!!」

「えっと、蒔風・・・・くん?」

「ん?えっと、泉さんだっけ?あと、高良さんと、柊さん。あと・・・」

「あ、あ、あ、あたしも、ひ、柊よ。柊　かがみ。そのこの姉よ。そんなことよりあんた何よこれ!!説明しなさいよ!」

「んあー、あとでな。今は無理だな」

「なんd「か、かがみ・・・」なによ!!」

「いまは・・・任せたほうが・・・」

「~~~~~っ!わかったわよ!待つわよ!!」

「サンキューさん」

そして蒔風は「奴」に向き合った。

「はぁーあ、ちくしょう。せっかくすぐに行動できたってのによー。邪魔すんなよな」

「そうそう、おまえ早かったな・・・・なんでだ」

「この世界はただの純粋な”ｎｏ　Ｎａｍｅ”。解析など一瞬で済むわ」

「お前の世界も”ｎｏ　Ｎａｍｅ”だったんだっけか？」

「・・・そんなことはどうでもいい」

「さいですか。だけどこの世界は、いやこの世界も喰わせないぜ？」

「やるか？」

「やらいでか」

あっけなくやってきた世界の終わり

しかし今回はこいつがいる。

「もうあんなことにはならせないぜ！！」

誓いを胸に、翼人・蒔風、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”に立つ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

らき☆すた　～そんなある日～（後書き）

アリス「どうも、アリスです」

作者です

ア「短いし展開早いですね」

この世界は最初からこのように短くいくつもりでしたから

ア「なんでまた？」

それは次の話しで蒔風と「奴」とも会話に出てきますから・・・

ア「でも純粋な”ｎｏ　Ｎａｍｅ”でしょ？蒔風のもとの世界と同じじゃないですか」

そう、蒔風の世界と全く同じと言ってもおかしくないんですよね。

主人公が違うだけで。

ア「ほーう」

あとタイトルにも思い入れがありますね

ア「ん？「そんなある日」？なるほどね」

蒔風の世界のときのタイトルと同じなんですよね

ア「たしかにおもろいな」

そう思ってくれるといいなぁ

ア「おもろいと言えば最近面白い後書きしないね」

なかなか難しいもんでして。面白い文章って言うのは。

ア「当然ですけどね」

そう、面白い事を書くのは難しい。それは当然のこと。だから面白い作品は凄いと私は思うのですよ。

ア「なんか真面目ーー」

ちなみに作者の好きなお菓子はたけ○この里のスティックのやつです。おっきくなって竹になっちゃった、っての。

ア「どうでもいい情報！！！」

お願いね

ア「いきなりの「奴」の襲撃。”ｎｏ　Ｎａｍｅ”。蒔風は超えられるのか？」

ではまた次回

バルサミコ酢～♪

「よお・・・・」

「おお・・・・蒔風よ。せっかくあっさりと終わらせそうだったのによ」

「なんで隔離した？オレの世界のときみたいに、街ごと吹き飛ばせばよかったじゃないか」

「なに、ここの辺にいたのはほとんどが脇役（モブ）だ。オレはそういう奴らには優しいんだぜ？」

「オレの世界では全部ぶっ壊してくれたくせにか？」

「ああ、あのときね。だってお前なんだもの。腹立つだろ？」

「他の人を脇役（モブ）扱いしてる時点でよ、お前はそいつらを見下してるんだぜ？わかってんのか？」

「はん！おれはな、あいつらのことを気にはかけてやる。不必要な手も出さん。だけどな、同時に哀れだと思ってんだよ。自分がステージに立ててないことすら認識できてないあいつらをな」

「だから全員をステージにってか？」

「そうだよ。俺ってやっさしーー、だろ？」

「そのために流される涙を貴様は知ってんのか？」

「最主要人物の涙など知らん。そんな奴らのそんなものなんて気にかける必要あるかよ」

「て、めえ」

「蒔風・・・・くん?言ったい何の話を?」

こなたがおずおずと話しかけてくる。
やはり気になってしまうのだろう。
後ろのほうでみゆきとつかさが怯えており、かがみが信じられないような眼で蒔風を見ていた。

「おう、あの野郎はな、お前らを殺してこの世界を喰うって奴だ。だから俺が助けに来た」

「ちょっと待ちなさいよ!!なんであたしたちなのよ!それにあんたは・・・」

そこに「奴」が割り込んでくる。

「はっはっは!お嬢さん方!!教えてあげようか!!てめえらはこの世界の中心人物なんだよ!!だからてめえらを殺せばこの世界は壊れる。そのためにオレはここに来たんだよ!!」

「な、世界とか、わけわかんないこと言ってんじゃないわよ!!せかいのちゅうしん??そんなの、知らないわよ!!」

「ではこの状況をどう説明する?それに、貴様の目の前のその蒔風も、別世界の人間だぞ?それをお前は知っているはずだ」

「かがみ!!どういうこと!?」

「蒔風さんを知ってたんですか?」

こなたとみゆきの問いに、かがみが答える。

「あたしは・・・確かに知ってる。でも会ったことはないわ。それにあんたは読まないから知らないでしょうけど・・・・」

「?」

「蒔風舜っていうのはライトノベルの主人公の名前なのよ」

「え？」

「そんな・・・・」

「かがみ・・・ただの同じ名前じゃ・・・」

「そうだと思ってたわよ・・・でも、挿絵の絵と、全く一緒なのよ、こいつ・・・・」

「はっはっはっはっはっはっはっは！！！蒔風、ついにお前が作品になっている世界に来たなあ！！」

「どうなのよ・・・あなたは本当にあの蒔風舜なの？」

「たしかに・・・オレはお前の言う作品に出てくる蒔風舜だろうな」

「そんな！！」

「オレはその世界から来た男だ」

「だがぁ、そこの四人組も、蒔風の世界では作品になって多くの人間に読まれてるんだぜぇ？」

「あたしたちが！？」

「そうだ。そして蒔風はおそらくその作品を読んだことがあるだろうなぁ。こいつはな、お前らのことを知ってんだよ。お前がこいつのことを知ってるようにな」

「でも・・・あの作品は・・・こんなんじゃ」

「ああ、俺が壊したからな。で？そういったうえでお前らはこいつを信頼できんのか？この覗き見とも言えるようなこのくそ野郎をよぉ！！」

「ほんとう・・・なの？本当に・・・・」

「はっきり聞いちまえよ！！本当に知ってんのかってよ！！あーんなことからこーんなことまで、こいつは知ってたはずだぜ！！」

「そんな・・・・」

「蒔風くん・・・・」

「あんた・・・っ」

「えっと・・・・」

蒔風が言葉に出さず悪態をつく

畜生・・・あのやろう、彼女たちにオレを信じさせないことによってＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの発動をさせないつもりだな。

「奴」が今回蒔風にいきなり襲いかからないのはこういったことである。

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは最主要人物を通して世界に通じ、その力を借りるものだ。
そのためにはその世界の最主要人物と蒔風が、それなりに知り合い、少しは信じられるような、友人にならねばならない。
「奴」がいきなりしかけてきたのも、その時間をとらせないためであった。
そして今度はこなたたちの心を揺さぶり、信じさせないことによってその発動をさせない作戦なのである。

「・・・そうだな、一つ言わせてもらえば、オレはこの旅に出る際にそのような作品に関する記憶はなくなっている。本当にお前らのことは知らない」

「そんなの・・・信じられないよ・・・・」

「ふっ・・・ありがとな・・・」

「えっ！？」

「泉さん、あなたは一瞬でも信じようとしてくれた。こんなあやしさ大爆発のやつをよ。まあ、それだけで今んとこは十分さ。・・・・・・十分、戦える」

「戦うって・・・・・」

「オレはこの世界を、自分の世界に重ねていた」

「えっ！？」

「オレの世界は守り切れなかったんだよ。お前らみたいに、力がなかったから」

「へへっ・・・だから蒔風。お前はこの世界を意地でも守るってんだよな。わざわざそいつらをバリアで守らず、己で守りきって終わらせるのも、お前の世界のリベンジだろ？」

「・・・・・・・・・・」

「お前さんの世界も、この世界も純粋な、完全なる”ｎｏ　Ｎａｍｅ”だ。そしてこの状況も、考えてみるとあの時と同じだなぁ」

「ああ、そうだ。あっけない終わりの襲来。力無き世界。この世界はオレの世界と同じだ」

「だからこそ守りたい・・・・か？ふん、自己満足だな。貴様はあの時自分の世界を救いきれなかった。あの世界はまだボロボロだ。二度と修復できんかもなぁ・・・・」

「だから・・・・だからこそ！オレはこの世界を守る！いっさいの傷もつけさせねぇ。この状況を乗り越えなきゃならねぇんだ！」

「そのためにそいつらを巻き込むのか？最低だな・・・」

「なんとでも言えよ・・・オレはこいつらを守る。たとえ頼まれなくても、信じてくれなくても、オレはこの場を乗り越える！！そう

しなきゃ俺は、世界最強なんていい切りにくいからなぁ！！」

「信頼もなく、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫもできないお前なんざ、他愛もないわぁ！！」

「いく・・・かぁ！！！」

そうして蒔風が「奴」にむかう。

そのとき

「大丈夫だよ」

「・・・はい？」

「奴」に向かっていこうとする蒔風に、こなたが声をかけた。

「蒔風くんは危ない私たちを助けようとしてくれた。味方ってこと

でしょ？」

「・・まあ、そうだけど」

「じゃあ大丈夫。わたしはあなたを信頼するよ。っていうかあたしじゃーどーにもなんないからお任せします！！」

「そんなんで？？」

「こなたがそういうなら・・・いいわよ」

「え？」

「こいつが言うからだからね！！私はまだあんたを全面的に信じたわけじゃないんだからね！！」

「おー、かがみんはツンデレだねぇ～♪」

「うっさいわよ！！」

「わたしも、お姉ちゃんが信じるなら」

「わたしも」

「高良さん、柊さん・・・・」

「こんがらがるから名字だけはやめてくんない？」

「ああ・・・かがみさん・・・・ありがとうございます」

「あたしも、こなたでいいよ」

「私もかまいません」

「あ、あたしも」

「みんな・・・まだ出会って全く時間の経ってないおれを・・・・・本当に、ありがとう・・・・・っ」

「・・・・あーもー湿っぽいわね!!!倒すなら倒す!!守るなら守る!!あんた特別な力もってんでしょ!!??さっさと終わらせなさいよ!」

「おー、かがみんぜっこーちょーだーー!!!!」

「なぐるわよ!!」

「なにを和気あいあいとしてんだお前ら・・・・・」

「なに？あっというまに仲直りってか？ふざけんなよ。そんな都合のいいことがホイホイ起こってたまっかよ・・・主人公だけがこんなに簡単に問題を解決して！！ほかの奴らは何年も悩むようなことを！！！やっぱいけすかねえ。てめえたち最高にムカつくぜ！！」

「だから言ってんだろうがよ！！そういうことができるやつが主人公になるってよ！！主人公だからできるってわけじゃねえ！！」

「そんなこと・・・知るかぁァァァァァァ！！！！！！」

「奴」が迫る。しかし恐怖感は微塵もなかった。

「では早速、いくぜ、こなた。この世界を・・・守るぞ」

「いやぁ～、こんな状況に出会えるんなんて貴重ですなぁ～」

「動じてないのかい！？すげえな！！」

「だって大丈夫なんでしょー？？」

「ぁ・・・っぷ。あはははははは！！そうだ！！！だいじょうぶだ、オレに任せろ！！大安心だぞ！！」

「でしょー？？あはははははは！！」

「ぎいいい

勢いがなくなり、バランスを崩した「奴」に、蒔風の拳がめり込む。
そう、普通の拳が。

「ぶっ・・・・あぁん？なんだ？そのパンチは・・・効かねえぞ！！！」

ブンッ！！ゴス！！

今度は「奴」の拳が蒔風の腹に命中する

「？？？？」

「ガフッ」

その攻撃に、蒔風がよろめく。
よろめいた、だけだった。

「おい・・・何をした」

「はっ、っは！！わかんねえか？今この空間はな、まさに普通（ノーネーム）になってんだよ」

「なに！？」

「今の俺も、お前も、元の世界にいたような、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”の住人と同じ程度の力しかない！！」

「なんだと！！」

「おら行くぞぉ！！」

バキッ！！ゴスッッ！！！ゴッ！！！！

蒔風の攻撃が次々と「奴」命中する。
しかし「奴」にはたいして効いてないようだ。
その攻撃を無視して、蒔風に蹴りを放つ。
だが蒔風はその蹴りをしっかりと受け、反撃する。
それでも「奴」には大したダメージにはならない。

「元が違うようだなぁ、蒔風。そんなんじゃお前、ボコボコにしたくなっちゃうだろうよ！！」

「奴」の猛攻が始まった。
突き、蹴り、掴み、投げ。
さまざまな攻撃に、蒔風は全力で受けていく！！！
次々と受け流し、かわし、反撃に転じる！！
しかしその攻撃はいずれも「奴」を倒すには至らない。

「どうしたどうした！！よけてばっかで効かない攻撃してんじゃねえぞ！！」

ゴッ！バキッ！！ガッ！！

「奴」の攻撃も徐々にあたってきている。
それでも蒔風は倒れない！！！
この世界を守る、その想いをこの胸に宿す限り！！！

「蒔風くん！！！」

こなたたちの声援が飛ぶ。

がんばって、負けないでと。

「大丈夫だっての！！！」

「どの口が言うかぁ！！！」

ゴッ！！バシィイ！！！

「奴」の蹴りを受け、後退する蒔風。

そして言う。

「大丈夫だ！！勝ち続けてやる、お前らがそう願うがぎり！！！」

そしてそれは誓いであった。

「守ってやる！！俺がそうしたいと思うかぎり！！！！」

そして最後にささやかな願いを・・・・

「ただし！！何よりも熱く！！楽しく！！カッコよくだ！！」

「蒔風くん！！危ない！！！！」

「死ねえええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！」

「へ、ジ・エンド、だ」

【ｒａｋｉ☆ｓｕｔａ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

ゴォッ！！！バギャッ！！

「ウゴアッ？！！？？」

その音と悲鳴は

蒔風でなく「奴」のものだった。

突然「奴」の体が何かに殴られたようによろめいたのだ。

「いま、戻した」

「な、にぃ！？」

「今までてめえの受けたダメージをな、俺たちが本来の力で殴りあったものとしてダメージを与える！！」

「それは・・・・！！！！！」

「今まで殴った分、俺の本気で殴ったことになるってことだ」

「ご、ブァ！！ゲヒッ、ガボァッ！！アッ、グア！！ヌオ、ヌオオオオオオオオオオオオアアア

だがその分はもうすでに清算し終えていた。
大丈夫だ、まだ全然余裕だ。

蒔風の受けたダメージは相当ものもだったが、「奴」はその２０、いや５０倍は受けていた。

「調子に乗って真っ向からくらってるからこうなるんだよ」

「ギャウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

もはや「奴」は原形をとどめておらず、その体はよくわからないものに変形させられている。

「さて・・・派手にいくぜ！！！！！おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

蒔風が右の手の指を伸ばし、「奴」に向け、それを引いて引いて左手を添えるように前に出して身体を反す。
その右手に光が集まり、敵を撃ち抜く閃光となる！！！

「光り、輝け！！！！絶光（ぜっこう）！！！！！！！！！！！」

光がさらに強くなる。射止める敵を祓うがごとく！！！！！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！絶光尖（ぜっこうせん）！！！！！！！！！！！」

蒔風が左手を引き右手を一気に前につきだした。
そしてその手に集まった光は刹那の瞬間に蒔風と「奴」の距離を無とし、その体を撃ち抜いた!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!バシュン!!!!!

そして、「奴」の体に穴があき、「奴」はその変形しきった身体のために、一言も発することもできずに、消えていった。

――――――

らでしょが！！」

「私も大体わかったんだけど・・・」

「つかさも！！？？」

「わたしもわかりましたよ？」

「みゆきまで！？」

「かがみももうわかってるんでしょ？そんなはっきりとわかんなくても大丈夫でしょ？」

「たしかに・・・そうだけど」

「はっきり知りたい気持ちはわかる。だけどそこまでして知る必要はないよ。別に世界をどうとかってんじゃないでしょ？」

「なによ、わかったわよ！！あーもう、歌う！！あたし歌うわ！！」

「おーかがみんいいぞーー」

「「わーーーーー！！！！！」」

そうしてカラオケボックスで一、二時間を過ごした蒔風は、こなたたちに切り出した。

「じゃあ、そろそろ行くかな」

「もう行くの？？」

「あんまりいないほうがいいのさ。それに、次の世界で待ってるやつがいるかも知んないし」

「そっか、がんばんなさいよ？」

「がんばるがんばる！！絶対負けないさ。オレは乗り越えられたんだから！！」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ｒａｋｉ☆ｓｕｔａ］

「おっと、んじゃあな」

「じゃねー！」「また来なさいよ！」「ありがとー」「ありがとうございました」

そうして蒔風はゲートをくぐった。

誇りを胸に、これからも大丈夫だと笑いながら

――

ゲートをくぐったその先で、蒔風は身の回りを確認した。

どうやら東京のどこかのようだ。

そして懐に身分をあらわすようなカードが入っていた。
そこには「猛士（たけし）　関東支部　蒔風舜」と書いてあった。
そこで情報が流れ込んでくる

「猛士・・・・鬼？・・・・・・あぁ・・・・・」

「仮面ライダー、響鬼か」

to be continued

らき☆すた　～崩壊、させない～（後書き）

【らき☆すた】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”　１００％

最主要人物：泉こなた

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：全能力封印

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：与えられた攻撃を本来の威力に戻す

もう寝むう・・・・

アリス「なんで・・・・こんな時間まで？」

もうだめだ・・・・

よろしくぅ・・・

ア「じかいは番外編・・・・・次の世界を楽しみなひとごめんなさい・・・・」

ではまた次回

蒔風「空白のページを埋めよう」

番外編　～辛い、喧嘩、歌唱～

【仮面ライダークウガ】～辛党～

「奴」との戦いまでの四日間。
蒔風はポレポレに居候していた。

「また来てくださいねー！」

今蒔風はポレポレで手伝いをしていて、五代は料理をしていた。

蒔風の怪我は戦闘は無理でも、このような普通の生活には問題ない程度に回復していた。

「蒔風さん、ちょっと」

五代が蒔風を手を振って呼ぶ。

ちょうどお客もいなくなったところにだったので、蒔風は厨房に入る。

「なんですか？」

「これ、味見してもらえますか？」

「んお？これは、カレー？」

「そう、名付けて、雄介スペシャル！」

「旨そうっすね」

「もちろん！ただいつもおやっさんとななちゃんばっかりに味見してもらってるから、違う人にもと思って」

「なるほど・・ま、辛いもん好きのオレとしては嬉しいな」

「さぁ！食べてみてください！」

五代が自信満々にカレーを差し出してきた。

「んじゃ、いただきます！」

スッ、パクリ

モッキュモッキュモッキュ

「どうですか？」

「ンマァ～イ！」

「やった！」

「しかし辛党のオレとしてはまだまだ辛さが足りない」

「そうですか・・・でもこれはみんなにも食べてみてもらいたいから・・・・」

「ああ、すみません。大丈夫ですよ。このままでも抜群に旨いですから！」

「うーん、そうだ。蒔風さん特製スパイスを作りましょう！」

「オレさん特製スペシャルスパイシーパウダーをですか！？」

「そうです！そうすれば自分の好きなように辛さを堪能できますし！」

「よし！早速作りましょう！」

「あ、レシピを書き留めておかなきゃ！」

そうして5時間後、二人は蒔風特製スペシャルスパイシーパウダーを完成させた。

試食し続けた蒔風は

「お〝お〝お〝お〝お〝お〝・・・・・・・」

さすが胃袋をぶっ壊して悶絶して、寝込んだ。

ちなみにこのパウダー、数日後にある超能力者の記憶を吹き飛ばす程のものだと判明するのはあとの話である。

【涼宮ハルヒの憂鬱】～チンピラ（が）地獄～

ハルヒの提案した異次元探索で見事に男女に別れたキョンたちは、川沿いを何となくぶらついていた。

「なあ、異次元の歪みなんてそう開くもんなのか？」

「いやいやいや。開かないから」

「だよなあ」

「さて、これからどうしますか？涼宮さんの指定した時間までまだありますし」

「ゲーセンでも行くか？」

「構いませんが、涼宮さんに見つかりませんか？」

「ほら、そういうときの・・・」

「ああ・・・なるほど」

「さて、お前ら今何思ったか言ってみようか」

「逃げろッ！（ダッ！）」

「こら待てぇ！」

ダダダダダダダダダダダダ・・・・・・

蒔風を追いかけ始めたキョン、それを古泉が離れて見ている

「キョン！古泉はいいのか！？」

「まずはお前だ！」

「ひえーーーー！！！」

「おめえらうっせえぞこらぁ！！！」

「え？」「はい？」「おや」

三人くらいのチンピラが肩を大きく振りながらやってきた。

「あんないかにもな奴らいんのかよ」

「おそらく、涼宮さんかと。あなたがいろいろ狙われるとか言うからですよ」

「オレのせいかよ！」

蒔風と古泉が小声で話していると、チンピラ達が言ってくる。

「なにごちゃごちゃ言ってんだよ。てめぇらうるさいんだよ。ギャーギャー騒いでんじゃねえよ！！」

「ああ、それはすみませんでした。おい、戻ろうぜ」

「まてやぁ。迷惑料で有り金全部よこせやコラァ。ひっひっひっひ」

「あと、殴らせろ。イライラすんだよ・・・」

「へっ、楽しそうに笑いやがって・・・いいよなぁ、お前ら」

「どうすんだよこの状況！」

「なぁに、任せておけ・・・すみませんねえ。こんな往来でもなんです。そこにある公園の倉庫裏でお支払いしましょう」

「分かってんじゃねえかよ・・・」

「早くこのイライラを何とかしろ・・・」

「ヘラヘラと・・・笑ってんなぁ？おい」

蒔風とチンピラ三人が見えないように倉庫裏に行く。、

＜ここからは音声のみでお楽しみください＞

「さあて、まずいっぱつ、ブガッ！」

「あんだてめ、ゲフッ！！」

「ざっけ、ぎゃあああああああああ！！！！」

「おおおおお！！タンマタンマ！！来んなって！！ひいいいいいいいいいい！！」

「わかった！！もうイライラなんてねえ！！十分だ！！たすけ、てええええええええええ！！！」

「すみません！！すみません！！さっきまでの自分で十分良かったです！！だからこれ以上は、ｎｏｏｏ

三分後、蒔風は倉庫裏から出てきた。

後でキョンと古泉が倉庫裏を見たが、そこにはもう誰もおらず、何かがあった形跡すら残ってなかったらしい。

次の日、川を流れる三人のチンピラが、朝のニュースに流れ、ハルヒの好奇心をくすぐったとか。

【らき☆すた】～カラオケのとき～

「奴」との戦闘が終わり、カラオケボックスに入った蒔風たち。

「なに歌うー？」

「蒔風さんは何を歌いますか？」

「じゃあ、これ」

［仮面ライダークウガ］

「特撮！？」

「おおー、五代さん映ってる映ってる」

♪～～～～～

「得点は・・・・８２点か」

「高っ！！」

「あたしも負けられないね・・・これダァ！！」

［Ｇｏｄ　Ｋｎｏｗｓ．．．］

「なんかせこい気がする！！」

♪～～～～～～

「やたー！８７点！！」

「すげえな！！」

「これはツッこんでもいいのか？」

「すごいね、こなちゃん。じゃあ・・・・これ！！」

［バレンタインディ・キス］

「前も歌ってたよね」

「前はこなちゃんのほうがすごかったから・・・」

「「バレンダインディ・キィッス！！！！！」」

「二人揃ってだまっとれ！！」

♪～～～～～～～～

「６７点か～。悔しいです！」

「つかさ、そのネタはやめなさい。顔芸になるわよ・・・」

「「悔しいです！！！」」

「沈めるわよ！！」

「かがみさんはなに歌うん？」

「あたしはこれよ」

［えみりんのテーマ］

「「ネタだ！！！！？？？？」」

「なにがよ！！！！」

♪～～～～～～

「７８点ね」

「まだまだよのう、かがみん」

「はい、次みゆきね」

「かがみさんのスルーだぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

「えっと・・・」

「俺もスルーかぁーーーー！！！さみしい！！俺さみしい！！」

「耐えるんだよまいまい！！それがあたしたちボケの宿命さぁー！

！」

［三十路岬］

「渋ーーーーーーーい！！！」

「しかもうまい！！」

「みゆきさんこういうのうまいんだよねぇ」

♪～～～～～～～～

「ふぅ・・・どうでしたか？」

「９３点・・・・おれは、まだまだだったんだな」

「大丈夫だよまいまい！！最高に熱かったぜぇ・・・」

「ありがとうこなこな」

「なによさっきからあんたらの呼び方」

「「友達ですから！！！」」

「わたしは・・・つかつか？」

「じゃあ私は、みゆみゆですか？」

「え！？その呼び方に乗り気なの！？」

「な～んだい？かがみ～ん。呼ばれたいのか～い？」

「ぐっ～～～～～～～～」

「まてよ？「かがかが」って言いにくいぞ？」

「じゃあ、「がみがみ」？」

「それは・・・間違ってないような気がするけど（スパァン！！！）間違ってるから変えよう」

「じゃあかがみは「かがみ様」で」

「おお！！かがみ様！！！」

「かがみ様～～！！」

「うっさい、やめ！！」

そうして時間があっという間に過ぎていったとさ。

to be continued????

番外編　～辛い、喧嘩、歌唱～（後書き）

今回は短編ですよ！！！

アリス「描写されなかったあいだを書いたんですね？」

そうそう

物語に関係はないけど、あったら面白いかなってところをね

蒔風「総じて楽しい時間だったぜ」

これからもいくつかこういう風にやってくかも知れません

蒔風「やらない世界もあるのか？」

それはあります

でも極力入れていきます

ア「がんばれ！！」

蒔「がんばれ！！」

がんばんべーーー！！！！

じゃぁヨロ

ア「さあ、次は本編に戻るよ！響鬼の世界、出会う翼人！」

いろいろ説明はするけど、わかんなかったらｗｉｋｉを見るんだ！！

蒔「投げんなヤ！！」

鍛えてますから！（シュッ）

響鬼　～迫る脅威～

今蒔風は甘味処「たちばな」という店に来ている。

そこである人物が来るのを待っていた。

そして30分後、御手洗団子を食べながら待っていると、目当ての人物がやって来た。

「どうも、おやっさん、いる？」

「ああ、響鬼（ひびき）さん！父上なら下の資料室に」

「ん、サンキュー」

「あの、すみません」

蒔風がそこで声をかける。
響鬼さんと呼ばれていた男が振り返る。

「ん？なんでしょ？」

「えっと、響鬼さん、ですか？鬼の」

「おや！鬼を知ってるの！？最近正体ばれすぎてんじゃない？」

「響鬼さん！またばれるようなことを！？」

「ああいや、オレは響鬼さんに会うのは初めてですし、正直「鬼」が何なのかも知りませんよ？」

「は？じゃあなんで・・・」

「あー、うん。どこか別の場所がいいんですが・・・」

「じゃあ中入っちゃってよ」

「響鬼さん！？そんなわけわかんない人を・・・」

「まあまあ、まずは聞いてみないと。話はそっから。でしょ？」

「それは・・・そうですけど・・」

「んじゃ、来てくれ。ああ、青年、名前は？」

「蒔風舜」

「ん、オレは響鬼ってんだよろしく。（シュッ）」

そして響鬼に連れられ店の奥に進み、階段を降り、資料室と呼ばれる部屋に入る。

そこには眼鏡をかけた５０歳くらいの男性が、もう二人の男性と調べ物をしていた。

「ども、こんにちは」

「「響鬼さん！」」

「お、響鬼。ん？その人は？」

「まさか響鬼さんまた弟子っすか～？」

「はっはっはっ！いや違うんだよ轟鬼（とどろき）。なんか変な風にオレのこと知ってるらしくてさ、話をしに来たんだよ」

「響鬼さんを知っている？」

「うん。らしいんだよね」

「あの、ここって・・・」

「ん？ああ、「たちばな」の地下、と言うより猛士（たけし）の関東支部って言った方が正解かな？」

「猛士関東支部？たしか・・・・」

「？？」

「これなんですけど・・・・」

蒔風が懐から紙を取り出す

「なになに？「猛士　関東支部　蒔風舜」？」

「おやっさん、それは？」

「どうやら、彼はここの所属、みたいだねぇ」

「そんなはずはないっすよ！自分、ここに長く通ってますけど、この人に会ったことないです！」

「僕もですね」

「威吹鬼（いぶき）もか。おやっさん、どうなっているんですか？」

「それは彼に聞かないとねぇ」

「はい、説明します。そのためにここに来ましたからね」

「頼むよ」

「ラジャです。とりあえず、この世界に・・・・」

――――――

「響鬼は、どう思う？」

「うーん、たしかに突拍子もない話だけど、彼が嘘ついているとは思えないんですよね」

「そっか・・・蒔風君、なにか、証明出来るようなことって、ないかな？」

「そうですね・・・最近変なことって起きてないですか？終わったはずのことが始まったとか、昔のなにかか復活したとか」

「！それはたしかにあるねぇ。他には？」

「ふう、じゃあ・・・・・十五天帝！」

パァン！

蒔風がその名を言うと、十五天帝が現れた。

「これは・・・」

「すっげーっす！」

「たしかに我々の知らない力だね」

「そうなると思います。まあ、世界云々の話は信じてくれなくても大丈夫ですよ。とりあえず大変な危機が迫っているってことは、知

っていてください」

「いや、信じるよ」

「事務局長？」

「なにより、彼の目は、嘘をついていない」

「ありがとうございます」

「さて、今度はこちらが説明する番だね」

「お願いします」

――――――

その魔化魍を人知れず退治するのが「鬼」と呼ばれる人たちである。

「鬼」には己の体を鍛えに鍛えあげて、その肉体を変化させることによってなることができる。

ちなみに響鬼、威吹鬼、轟鬼などの名はいわゆるコードネームであり、本名ではない。

普通鬼になるには弟子になってから数年間修業してなる。

響鬼も弟子をもってるらしいが、今は猛士の総本山の吉野に行っているらしい。

姫と童子はともかく、魔化魍は鬼の放つ「音撃」でしか倒すことができない。

音撃とは、鬼たちの放つ清めの音による攻撃である。

音撃には太鼓、管、弦の三種類があり、ここにいる響鬼、威吹鬼、轟鬼がそれぞれ該当する。

鬼たちは全国の猛士のメンバーから情報を得て、魔化魍を退治し続けているのだ。

そしてつい半年前、「オロチ」と呼ばれる現象が起き、魔化魍の異常大量発生が確認された。

その異常に対し、響鬼、威吹鬼、轟鬼の三人が、見事その現象を抑えたのだった。

しかし、最近また魔化魍の出現が多くなってきており、他の鬼の人達も疲弊しきっており、なにが起こってるのかを三人は調べていたのだ。

「なるほど・・・・」

「でも正直なにがなんだかわかんないんすよね・・・・」

「おそらくは、「奴」です」

「蒔風くんが追ってきているっていう？」

「ええ、どうやらその魔化魍ってのを大量発生させて、響鬼さんを疲弊させたところでやるつもりなんでしょう」

「なんかオレそんな、世界の中心っていうのがわかんないんだけどね。オレが殺されたら世界が壊れるって言っても自覚ないんだよね」

「でも、「奴」に殺されなきゃ世界は壊れないんすよね？だったらオレが響鬼さんを守るっす！！」

「ここに何百匹もの魔化魍が襲いかかってきても？」

「う！！そ、それは・・・」

「まあ、それでもいいです。とにかく狙われてるのは響鬼さんっていうのがわかっていただければ」

「んー、なんかなぁ」

「で、とりあえず「オロチ」を止めましょう」

「そうだね。そのためには・・・・・・」

「響鬼さん！！威吹鬼さん！！轟鬼さん！！」

「どうした？日菜佳（ひなか）」

突然さっき店で響鬼を迎えたおやっさんの娘、立花日菜佳が血相を変えて飛び込んできた。

彼女も猛士の一員であり、響鬼たちに魔化魍の情報を与えたり、対抗策を講じる、重要なメンバーの一人である。

「い、いま連絡があったんですけど、弾鬼（だんき）さんと勝鬼（しょうき）さんと裁鬼（さばき）さんが魔化魍に倒されて重傷だって！！！！！」

「なに！？」

――――――――――――――――――――――――――――――

～三日前～

とある山奥の遺跡

そこに「奴」は立っていた。

「奴」は蒔風の来る前にこの世界に入っていたのだ。

ここにある遺跡は「オロチ」の現象を止めるために、大地に直接清めの音を流し込むための巨大な太鼓である。

半年前、ここで響鬼がこれを使用し、大地を清め「オロチ」を止めた。

「すばらしい、ここからなら直接この世界にオレの波長を流しこめる・・・・・ハァ！！！」

ドーンドーンドーン！！！

「奴」が行動を始める。

その世界を食らうために

to be continued

響鬼　～迫る脅威～（後書き）

今回は平成のアマゾンと呼ばれた、響鬼の世界！！

アリス「そんなことはどうでもいい。貴様は豚か？それが問題です」

おかしいだろうよ！！

ア「うるさいですよバカ」

バカだとぉ！！？

ア「ああもう、あなたを「バカ」という日本語で表現すること自体「バカ」という言葉に失礼ですよ」

ひどくない！？

ア「しかし「バカ」としか言いようがないのですからしかたなく言ってるのです」

じゃあ言うなよ！！俺がお前に何をしたよ！？

ア「本編出せよ！！」

無理だよ！！だからこの場を設けてるんじゃないか！！

ア「足りない！！アリス欲求不満で死んじゃう！！！」

おとなしくしてなさい！！飴あげるから（ガブッ）アッーーーーー！！噛むな噛むな！！

ア「ほーんーぺーんー！！」

うっさい！！ほら、重要な次回予告を！！

ア「うーーーー。次回・・・・・本編に、私、参上！！！」

作品も内容も違う！！！

あーもー、ではまた次回！！

少年よ、旅立つのなら　晴れた日に、胸を張って

響鬼　～待ち受ける闇～

響鬼たちと蒔風は病院に来ていた。

倒された鬼たちの内、勝鬼と弾鬼は意識がなく、集中治療室にいて話どころか面会も出来ない。

しかし裁鬼は身体は動かせないものの、まだ意識はあり、話をすることが出来た。

「裁鬼、一体なにがあった？お前ら三人が纏めてやられちまうなんて」

「響鬼さん・・・・違かったんです。あの魔化魍は・・・普通じゃなかった・・・」

「どういうこと？」

「最初は・・・順調だったんです・・・でも、途中から、馬鹿に強い・・・いや、あれは強いなんてものじゃない・・・・・俺達が、鬼だと思ってしまうほど、凶悪だった・・・・」

「そんな・・・・裁鬼さん！しっかりしてくださいよ！相手は魔化魍でしょ！？音撃で倒せなかったんですか！？」

「ああ、そいつはなんとか三人で倒したんだ・・・・・三人がかりで、何とか・・・・でも、その後に・・・・・・あんなのがいるなんて思いもよらなかったんだ・・・・・」

「なにが・・・出たんですか？」

蒔風が聞いた。

裁鬼は蒔風の存在には疑問を持たず、答えた。

いや、もしかすると、そんな余裕はなかったのだろう。

「三首の・・・・巨大な犬が・・・あれは、ありえない・・・・・・あんな魔化魍・・・みたことが・・・・・」

そこまで言うと裁鬼は気を失って眠り込んでしまった。

「裁鬼さん！」

「大丈夫だ。おそらく話し終えて、気が抜けてしまったのだろう」

「でも、裁鬼さんたちが見た魔化魍って、なんなんすか！？」

「首が沢山あるのはいくつか知ってますが、巨大な犬となると・・・・」

「ケルベロスだ」

蒔風がその正体を言う

「は？ケルベロス？」

もちろんその名前は何度か聞いたことがあった。しかしそれは魔化魍ではなく完全にフィクションのものであったはず。

蒔風がさらに説明をする。

「そう。まあ、「奴」の使役獣だ。ディスクアニマルみたいなものです」

ディスクアニマルとは、鬼たちが使う調査、探索、戦闘等に使える他目的武器だ。

元は円盤型で待機しているが、起動させると鷹、狼、猿、蛇、蛙などを模した形に変形して動き出し、鬼の意志に従って活動する。

それを知った威吹鬼が驚愕の声を上げる

「つまり「奴」は化け物を飼ってるってことですか！？」

「魔化魍だけでも三人を凌駕するほど強いのに、さらにそんな化け物までいるなんて・・・・勝ち目ないっすよ～！」

「いや、大丈夫です」

「どうして？」

「オレも同様の召喚・・・・使役獣を所持しています。オレのと「奴」のとは全部出し合っても互角。それならまっすぐぶつかり合った方がいいだろうから、そこはホイホイと使ってこないだろうかと」

「うーん、でもさ、そんだけ強いなら、なんで三人を倒すだけにしたんだろ。こう言っちゃ何だけど、殺そうと思えば殺せたはずでしょ？」

「おそらく、誘ってます」

「誘う？」

「三人がやられた場所。そこは確か・・・」

「半年前、俺達が儀式を行った場所に近い。というか三人はそこの遺跡を調べに行ってたんだ」

「そこに・・・「奴」がいる」

「！？本当にっすか！？」

「はい、ここまで鬼に甚大な被害が出れば、あとは自然と儀式を行える鬼は絞られてくる。そして響鬼さんは太鼓の鬼で一番の手だれです。そこで「奴」は響鬼さんを殺すつもりなんでしょう」

「じゃあ、響鬼さんは「たちばな」にいてください！」

「轟鬼・・・」

「そんな「奴」のところにわざわざ行く必要ないっすよ！自分達がなんとかします！」

「普通の「オロチ」ならそれで大丈夫かもしれません。しかし今回は違います」

「なにがですか？」

「「奴」がいる。まあその間はオレが守ればいいんですが・・・・
今回の「オロチ」はその遺跡から「奴」が自分自身の波長を流し込んだことによって起こったものでしょうし・・・・」

「そんな！」

「清めの音を叩き込めるならその逆のものも出来るはずです。まぁ言うほど簡単なことじゃないが、「奴」ならやってのけるだろうでしょうし」

「・・・・・・」

轟鬼は絶句している。

清めの音を叩き込むだけならば、弦の音撃戦士の轟鬼でも簡単なことである。

しかし大地に叩き込むとなると、太鼓を極めた響鬼程の者であっても大変なことである。

それをこの世界に来たばかりの者が、しかも清めの音ではないものを送る。

そんなことをやっている「奴」に対して具体的な脅威を感じたのだ。

響鬼も威吹鬼も、轟鬼程ではないが、驚いていた。

「オレには清めの音を叩き込むような太鼓の技は持ってない。かといって響鬼さんは「奴」に対抗できない。なら答えは簡単だ」

「まさか！響鬼さんと蒔風さんの二人でやるつもりですか！？」

「自分たちも行くっすよ！！」

「・・・・わかりました。では周辺に湧いてくる魔化魍の駆除をお願いします。オレは「奴」を」

「んで、オレが太鼓だな？」

「はい。響鬼さんをオレが守ります。轟鬼さんと威吹鬼さんには護衛をつけるので、その者と一緒に動いてください」

「よっし！！そうときまれば、明日行くか！！」

「明日ですか！？」

「善は急げって言うでしょ？はやくどうにかしないと、弾鬼たちは倒れちゃってんだからさ」

「それもそうですね」

「よぉ～っし！！がんがりますよぉ～！！！」

「今回は勝手に置いていかないでくださいね？響鬼さん」

「わかったよ。よし、みんな。がんばろう！！」

『おおーーー！！！』

ーーー

to be continued

響鬼　～待ち受ける闇～（後書き）

アリス「そこにさっそうと現れる私！！！！」

なんだ！？

ア「余裕ぶっこいてる「奴」をボコボコにして、私は次の世界に！！！」

蒔風どうすんだよ！？

ア「次回作に期待でいいでしょう？」

ダメだよ！！

ア「本編！出せ！」

もうお前のキャラがわからない！！

ア「そういえば感想を制限なしにしたんだっけ？」

なにこの唐突な自然な話題

ア「やだこわい、何言ってるのこの人」

オレはお前が怖いよ

そうですね、感想を受け付けるようにしました

ア「へこむことになるかもしれないのに・・・」

言わないで下さいよ・・・・

じゃあどうぞ

ア「世界を清める音撃炸裂！！！」

ではまた次回

僕たちには、ヒーローがいる

次の日、蒔風は響鬼、威吹鬼、轟鬼と共に例の遺跡に向かった。

「四人とも、気をつけてくださいね」

「たちばな」の玄関先で日菜佳、おやっさんが送り出してくれた。

日菜佳が火打ち石をカッカッ、と打ち鳴らし、武運を祈ってくれた。

「んじゃ、行ってきます！（シュッ）」

「日菜佳さん、オレ、頑張るっす！」

「では、行ってきます」

「ありがとうございます、日菜佳さん」

それぞれが挨拶を交わし、響鬼と威吹鬼はバイクに、蒔風は轟鬼の車に乗せてもらって、出発した。

景色が都会のそれから徐々に大自然のものとかわり、四人は山の中腹の荒れ地に着いた。

「ここですか？」

「そう。あそこに円形の台みたいのがあるでしょ？あそこから音撃を直接大地に打ち込むんだ」

「それにしても、ここまでなにもなかったのですが・・・・」

「なんか、怖いっすね」

「油断しないと、やられてしまいますよ。そうだ、今のうちに・・・よっ」

蒔風が声をかけると、玄武、朱雀、白虎が人の姿をして現れた。

三人とも蒔風と変わらないくらいの歳に見える。

玄武は亀だからだろうか、老齢な雰囲気が出ていた。

その腰に玄武盾を引っ掛けて持っていた

朱雀は柔らかな青年で朱雀槍を、白虎は常に楽しそうな少年のような青年で、脇に白虎釵を掛けていた。

「蒔風さん、彼等は？一体どこから・・・・」

「ああ、俺も「奴」みたいに使役している、召喚獣がいてね。彼らはその人の姿です」

「人の姿っていうのは？」

「もちろん、大きな獣の姿にもなります」

「本当に違う世界の人ですね・・・・」

そう彼らのことを説明していると、玄武、朱雀、白虎が蒔風に確認をとってきた。

「我等が護衛を？」

「まぁ、確かにそれが最善策でしょう」

「僕たちにまかせりゃだいじょーぶい！ね？玄武のじっちゃん」

「白虎よ、じっちゃんと言うな。私はまだそんな外見は歳くっとらんし、実際の年齢もお前らと変わらんぞ」

「なあ、三人とも、任せていいのか？」

「舜はちょっと待って。玄武はじっちゃんなの！いーじゃん、あだ名あだ名♪」

「納得いかん」

「まぁ、いいじゃないですか。白虎だって慕ってくれてるわけですし」

「ううむ・・・」

「おい、お前らちょっといいか？」

「うむ？」「はい」「はーい」

「これから大事な分担を言おうと思うんだが・・・・・・白虎？」

「え！？あ、あの、その～・・・・」

「よくもまぁこっち差し置いて・・・・（くわっ！！）」

「ひぃ！しゅ、舜？人間の顔の構造上なっちゃいけない顔になってるよ！？」

「白・虎？」

「ごめんなさい！許してぇ！」

「はぁ・・・気をつけろよ？」

「りょーかい！」

「では、轟鬼さんに玄武、威吹鬼さんに朱雀がついてくれ。白虎はオレと一緒に響鬼さんに」

「玄武さん、よろしくっす！！」

「この身の限り守ろうぞ」

「では朱雀さん、行きましょうか」

「ええ、準備は万端です」

「では、行きましょう響鬼さん」

「おう、頼んだぜ」

「まっかせてください！！僕と舜が二人係なんだよ？だいじょーぶですって！！」

「ははははは・・・・はぁ」

ピィン、キィィィィィィィィ・・・・・・

カシュン、ピュィィィィィィィィ・・・・・・

ガシュ、ギャァァァァァァァァン・・・・・・・

響鬼、威吹鬼、轟鬼がそれぞれの変身音叉（へんしんおんさ）、変身鬼笛（へんしんおにぶえ）、変身鬼弦（へんしんきげん）を鳴らす。

それを額の所に持っていくと、響鬼が炎に包まれ、威吹鬼は風に覆われ、轟鬼は雷に囲まれた。

そしてそれらを払うように腕をふるうと、それらはかき消え、鬼に変わった響鬼たちがいた。

「おおー。それが？」

「そう、それが鬼って奴だ」

三人の変身も終わり、三組に分かれて荒れ地を進んだ。

荒れ地といってもまだ植物は多くあるので、それに隠れる形で進んでいく

響鬼組は真っ直ぐに遺跡に、轟鬼組は右、威吹鬼組は左に少しずつ開きながら足を動かす。

そして、遺跡にもう少しで到着するところで・・・・・

「何にも来ないねー」

白虎がぼやいて蒔風にあきれた視線を向けられた。

しかし本当に何も来ないで、遺跡に到着してしまった。

「こないねぇ」

「ま、まぁ、来ないなら来ないでいいんですけど・・・・」

「もう始めちゃったら？」

「そうだな、始めっかぁ！」

そして響鬼が太鼓をたたき始める。

その遺跡を響鬼が叩くたびに、大地が清められていき、「オロチ」の現象が引いていく・・・・

「おいてめえらなにやってんだぁーーーーーーー！！！！」

『！！？？！？！？！』

「蒔風、あいつが？」

「はい、「奴」です・・・・おい、何やってんだって？てめえが始

めたことの後始末に来てやったんだよ！」

「あんたが蒔風さんの言ってたやつっすか！？もう遅いっすよ！！これで「オロチ」はおしまいっす！！」

右のほうから轟鬼が「奴」に向かって叫ぶ。

「はあ？いいんだよ、別にそんなん。オレとしては響鬼がここに来てくれれば僥倖なんだよ。だけどよお・・・・」

「だけどなんだよ？今の今まで何やってたんだ？」

「てめえら、こんな朝早くから来てんじゃねーよ！！！思っくそ寝てたわ！！！そこ！！いい加減太鼓たたくのやめ！！」

「・・・・・・・・・・はあ？？？」

「おい、蒔風。あいつ・・・・」

「アホですね」

「だよな」

「うっさいわ！！おれはな、てめえらみたいになんでも思いどうりにできるような人間（しゅじんこう）じゃねえんだよ！！」

「ま、とりあえずこれで「オロチ」はおわりだな・・・・ハァッ！！！」

ドドドドン！！！！！

・・・・・・・・・・・・・ばぁぁぁ

「魔化魍の・・・・大軍!?」

「これで「オロチ」は終わりじゃないんすか!?」

「バカ野郎どもめ、そう簡単にやらせると思ってたのか?その遺跡にたたきこんだのはオレの波長だ!!清めの音で消しきれず、それでも送りつけられれば、耐えきれず噴き出るのは当たり前だろ!!」

「てめえ、最初からこれ狙いで!!!」

「遅れてきたのもこのためか!!」

「・・・・・・・・・・・そうだ!!」

「寝坊はマジだこいつ!!!!」

「ええい、そんなことはどうでもいい。結果オーライだ!!・・ケルベロス!!!」

ガァァアルルルルルルル!!!!

「奴」の後ろから漆黒の体躯をうならせて、ケルベロスが飛び出してきて、響鬼を狙う。

「白虎ぉ！！！！」

「おっ・・・・・・けいッ！！！！」

がああああああああああああああああ！！！！！

白虎が瞬時に獣神体となり、ケルベロスを喰いとめる。

玄武と朱雀も向かおうとするが、ノツゴ、オトロシ、イッタンモメンなどの巨大な魔化魍らが襲いかかり、手を離せない。

「ケルベロスだけか？」

「それだけで十分だ。貴様こそ、他のは出さないのか？」

「・・・・・・白虎・・・・・・ケルベロス、倒せとは言わない。喰いとめられるよな！！」

「あったり前だ！！」

「よし！！！あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＨＩＢＩＫＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

蒔風がＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫを発動させる。

すると蒔風の手にも、太鼓の音撃を打ちだすための撥（ばち）、音撃棒（おんげきぼう）が現れた。

「響鬼さん！！オレが「奴」の波長を追いだします！！響鬼さんは

引き続き清めの音を！！」

「よし！！はぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！」

「ちいっ！！させるか！！！」

「獅子！天馬！麒麟！！」

「奴」が蒔風たちを止めようと迫るが、獅子天麟の三人に食いとめられる。

「奴」も残る迦桜羅とサラマンダーを出してくるが、それに天馬、麒麟が獣神体となり応戦、獅子に加えて青龍を人神体で出して「奴」に向かわせる。

「響鬼さん！！いまあいつらが「奴」をくいとめてます！！でもいつまでも持つようなものではありません！！」

「手っ取り早く終わらせようか！！威吹鬼たちも心配だしなッ！！」

ドンドンドンドンドンドドン、ドンドドドドン！！ドンドンドドドド！！！

蒔風と響鬼が音を叩き込む。

すると徐々に地面からわき出てくる魔化魍の数が減少し、ついには出てこなくなった。

「やった！！」

「後はここにいるやつらを倒せば終わりっす！！！」

「シメるぞ！！蒔風！！」

「おお、響鬼さん！！」

「「はぁぁぁぁあああああああああーーーーーーーーーーー」」

蒔風と響鬼が両手をあげ、最後の一撃を叩き込む！！

「「はぁっ！！！！！」」

ドッドドン！！！！！

その最後の一撃で「オロチ」は完全に祓われ、さらに遺跡の中の「奴」の波長も消えた。

「ガッ、グゥウ！！おぉア！！！」

「奴」の身体から火花が散った。

どうやら遺跡の中の「奴」の波長をたどって、音撃が流れ込んできたようだ。

「ちぃぃ・・・ごふ・・・・てめえ、邪魔くせえやぁ！！！」

「ぐあ！！」「ぐお！！」

「奴」が青龍と獅子を投げ飛ばし、ケルベロス、迦桜羅、サラマンダーを戻し、その場に残った白虎、天馬、麒麟に向け、「奴」自信をあらわすような、真っ黒な波動砲を打ち出し、なぎ倒した。

二人と三体は、食い止めることができていたとはいえ、かなり疲弊しきっており、その一撃で刀の姿に戻り、蒔風のもとに帰ってきた。

「ふぅふぅふぅ・・・・・はぁぁあああぁあああ・・・・・・ははははははは!!!集え魑魅魍魎の化け物どもよ!!お前らオレの波長でここまで強くなったんだから、オレの力にもなってもらうぜぇ!!!」

ギィッギギギギギギギギ!!

ゴギャーーーーー!!ブルルルルルルルル!!!!

コカッ、ココココッココココココココ!!!!

ピギャーピギャーピギャー!!!!

魔化魍どもが「奴」の周辺に集まり、その身を寄せていく。

「あいつら、なにするつもりっすか！！？？」

「くっ！！」

ドンドンドン！！

威吹鬼がラッパの形をした銃、音撃管（おんげきかん）を構え、鬼石を魔化魍に打ち込む。

そしてベルトにつけられている、音撃管の先端部分を取り付け、音撃を放つ。

「音撃射（おんげきしゃ）・疾風一閃（しっぷういっせん）！！！」

ププァーーーーーー・・・・・・プァ！！

バァァァァン！！！

魔化魍に打ち込まれた鬼石が、音撃管から発せられる音に共鳴し音撃を体内から響かせ、その体を落ち葉や土塊となって粉みじんに散らした。

しかしまだ多くの魔化魍が「奴」の周りに集まっている

「威吹鬼さん、やってもきりがないです！！」

「しかし！！」

「あれをまとめるのは「奴」です。一つになって固まったところを狙ったほうが、一気に殲滅できます！！！」

「それは、たしかに・・・」

「でも、それだと・・・・」

「大丈夫です。ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの最後を、まだ見せていない！！」

ギャァルルルッラララララララアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

「どうやら、終わったようだな」

そこにはもはや魔化魍なんて生易しいものはいなかった。

怪獣、そう、怪獣がいた。

身の丈が三十メートルほどの、大きな魔化魍の三倍近い大きさに、多くの魔化魍を取り込んで、巨大な姿となっていた。

「ばあああああああああああああああああ！！！！！」

「奴」の咆哮とともに、その胸元にある無数の口から、白虎たちをなぎ払った波動砲が打ち出される。

周囲が一瞬で吹き飛ばされ、蒔風たちは大地を転がっていく

しかしその眼には絶望など映っていない。

あるのは、勝ち気。ただそれのみ！！！

「終わらせましょう、響鬼さん！！！」

「てめえら、この巨体に、音撃が響かせきれるわけねえだろうが！！」

「侮るなよ？」

「ふん！！ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの威力をもってしても・・・・」

「ちげーよ。この人をだよ」

キューーーーーーイ！！

そう一声何かが鳴いたのが聞こえると、一羽の鳥のようなものが剣を持って飛んできた。

鳥はディスクアニマルの内の一つ、茜鷹（あかねたか）

剣は響鬼の強化武器、音撃増幅剣（おんげきぞうふくけん）・装甲声刃（アームドセイバー）である。

それを響鬼が受け取り、構え、刀に告げる。

「響鬼、装甲！！」

その掛け声とともに響鬼の体が紅となり、多数のディスクアニマルが響鬼の体に飛びつき、その体に装甲されていく。

その体を鍛え上げるかのように炎がその体を包み込んで、晴れた時、そこには響鬼の最強形態、装甲響鬼（アームドヒビキ）か立っていた。

「僕たちが「奴」を引きつけます！！」

「威吹鬼さん、行くっすよ！！」

威吹鬼と轟鬼が「奴」の巨大な身体にぶつかっていく。

両側から挟みこんで攻撃しているが、いかんせん攻撃が効いていない。

しかし、「奴」の行動の邪魔はできているようである。

「響鬼さん！！」

「おう！はぁ！！」

オン！オォォォォォォォン！！！

響鬼がそのベルトに取り付けられている直径十センチ程度の円盤、音撃鼓（おんげきこ）・爆裂火炎鼓（ばくれつかえんづつみ）を投げつけ、「奴」にセットする。

すると小さな音撃鼓がたちまち大きくなり、「奴」の巨体を隠してしまうほどに巨大化して、「奴」の動きを封じ込める。

「がっ！なにぃ？・・・振りほどけない！！！」

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫで強化されてんだよ。外せるわけねえだろう！！」

蒔風が腕を振るい、叫ぶ！！

「開翼！！！！！」

バッサア！！！

しかし響鬼たちはその姿には驚かない。

そこにあるのは頼もしさだけだった。

「よぉっし、四人で同時音撃だ！！」

「はい！」「よし！！」「わかりました！！」

ドンドンドンドンドン！！！

威吹鬼が鬼石を打ち込み、

ザシュッ、ズドッ！！

轟鬼がギターの形をした武器、音撃弦（おんげきげん）・烈雷（れつらい）を突き刺して

蒔風と響鬼が太鼓の前に立ち準備が整った

「いくぜ！！」

「おお！！！」

「「音撃打（おんげきだ）・豪火連舞（ごうかれんぶ）の型！！！！」」

「音撃射・疾風一閃！！！」

「音撃斬・雷電激震（らいでんげきしん）！！」

そうして流し込まれる音撃。

時刻はまだ十時にもなっていない。

その音楽を聴く人もいない。

しかし、その音は鳴りやまない。

敵を倒して、この音を、明日に向かって響かせる！！

「ゴッゴッゴッゴッゴオオオ

その体が音撃によって崩されていき、所々がすでにえぐれている。

「どどめだ！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＨＩＢＩＫＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

響鬼と蒔風が下がり、距離をとる。

すると蒔風の手から音撃棒が消えた。

「鬼神覚声（きしんかくせい）！！！！」

響鬼が装甲声刃（アームドセイバー）に自らの声を告げる。

音撃刃（おんげきじん）・鬼神覚声は、己の声をダイレクトに音撃に変換し、それを刃として切り裂く技である。

蒔風が風林火山の一本、「火」を構える。

すると響鬼と蒔風の刀身が炎に包まれ、目の前に「鬼」の一文字が現れる!!

「「はあああああああああああああああああああああっ!!!!!!!!」」

ゴゴゥッ!!!

二人が剣を振り下ろし、光輝く斬撃が飛ぶ!!

そして「奴」と、その体を作っている魔化魍を切り裂き、その切り口から音撃を流し込む！！！

「ぐぅあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

バン！！！！バン！！！！ババァアアアアアアア・・・・・・・・・・ン

魔化魍とともに「奴」が消し飛び、この世界から消えた。

「やった！！！」

「一件落着ですかね」

「みんな、お疲れ！！」

「ありがとうございました」

響鬼、威吹鬼、轟鬼は顔だけ変身を解いている。

「蒔風はもう行っちまうのかい？」

「うーん、まだ居たいんですけどね。どうも「奴」は待ってくれませんから」

「そうっすか・・・・」

「さっきの儀式で音撃をあれだけ送り込みましたから、おそらく三か月は魔化魍の出現はめっきり減るはずです」

「裁鬼たちもそれくらいには復帰してるだろうから、間に合うな」

「少ない人数でのローテーションにならなくて済むってことですか？」

「ですね」

「おおーーーー！！」

「ありがとな、蒔風。次の世界も、がんがれよ」

「大丈夫ですって。鍛えてますから！！なんて」

「ははははははは！！それなら大丈夫だな！！」

「応援してますよ！！」

「その想いで、お礼は十分です。しっかりと俺の「力」になります」

「んじゃ」

「では」

「Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＨＩＢＩＫＩ」

そして蒔風もこの世界からいなくなった。

「さって、帰りますか！」

「あ、オレ、おやっさんに連絡してくるッス」

「轟鬼は元気だなぁ」

「響鬼さんもまだ現役でしょう？」

「いやいや、蒔風の不思議な力があったから立ててるだけで、あんな音撃出したら三日は動けないよ」

「響鬼さーん！！電話ですー！！」

「ん？誰からだ？」

「京介君がー！！何で自分を呼ばなかったのかってー」

「ああ、なんか悪いことしたな」

「しっかり説明してあげてくださいね？」

「オレがー？勘弁してよもう」

響鬼たちが帰路につく。

響鬼はとりあえず、友人の旅の無事を祈りながら、今回のことを自らの弟子にどう説明するかを考えていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

とある世界

大自然に囲まれて、いくつもの国家が存在する土地。

そのうちの一つの大国に、ゲートが開く。

その国の名は・・・・・・トゥスクル

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

響鬼　～めぐる翼～（後書き）

アリス「蒔風くんなや！！」

蒔風「おいちょｔ「だまって！！！」は「返事はいらないから！！」
・・・・・」

ア「さあ、後書きを始めましょう！！」

あいつはいいのかよ

ア「誰のことですか？」

・・・女ってこわい

ア「それは違います。女ではなく、「私」が強いのです」

蒔「もういいか？」

ア「あーー！！ダメダメしゃべっちゃ！！」

いいじゃないもう

ア「いいの！こいつシカト！！」

・・・・・シカトされる悲しみを知らないで貴様そんなことをのうのうと・・・・・

ア「ひいいいいい！！！文章故にお伝えできないのがよかったと思

えるような怒気と哀愁を漂わせた表情を！！」

蒔「おまえはやっちまったな」

ア「ええ、触れてはならないものに触れてしまったようです」

蒔「謝っとけよ」

ア「はい・・ごめんなさい。ただ、出番をとられるかと思って・・・・」

そっか・・・いや、いいんだよ！！（グシグシ）気にしてないよ！！

【仮面ライダー響鬼】

構成：”フォルス”４０％、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”２５％、”ライクル”１５％、”ＬＯＮＤ”２０％

最主要人物：響鬼（本名、日高仁志（ひだかひとし））

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＷＥＰＯＮ～：蒔風に音撃棒の装備

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：鬼神覚声を蒔風にも付加

ですね

ア「じゃあ、次回予告いきますよ」

よろしくー

ア「ゲートをくぐるとそこはとある村の薬師の家の前だった」

ではまた次回

子どもの頃の夢は　色褪せない落書きで

うたわれるもの　～姉妹との出会い～

夜

蒔風はある村に着いた

「なんだここ。服装もシンプルだな」

蒔風がこの世界での服装は、民族衣装のようなものだった。

「オレはどこに行けばいいのかなー？」

そう蒔風がぼやくと、空にキラリとなにが光った。
蒔風はそれに気付かない。
そして落ちてきたそれが・・・・・タライが蒔風の脳天に直撃した。

ゴガン！

「ナッ、パァ！？おおお？・・・・・（バタン、キュー）」

その一撃で蒔風は意識を失った。

ーーー

「うちの前に倒れてたんです。びっくりしましたよ。朝外に出たら人が倒れていたんですから。多分、あれが頭にぶつかったんだと思います。でもどこから・・・・」

エルルゥが指差した先に蒔風の意識を奪ったタライが置いてあった。

底の方に「Ｐｒｅｓｅｎｔ　ｆｏｒ　Ｙｏｕ」と書いてあった。

世界がこの状況を作るためのお膳立てをしてくれたってことかよ・・・ありがたいがなんかムカつくなあの字

「そういえばマイカゼさんってここじゃ見かけない感じの人ですよね？尻尾もないし・・・」

「尻尾？」

「ええ、尻尾」

どうやらこの世界の人間には動物のような耳、尻尾などが付いているらしい。

「そういえばさっきの子は？驚かせてしまったようだけど」

「あの子は私の妹でアルルゥといいます。人見知りが激しくて。アルルゥーー！！お客さんに挨拶しなさーい！！」

「別にいいですよ」

「でも・・・あ、アルルゥ」

そう話しているとアルルゥがこっちに近づいてきた。

おっかなびっくりだが、興味は持ってくれているらしい。

「はは、こんにちは、アルルゥ。俺は蒔風ってんだ。よろしく」

「・・・・ん、アルルゥ、です」

「はい、どうも、アルルゥ。んで、エルルゥさん。なんでまたわざわざオレを拾ってくれたんで？」

「私、薬師なんです。だから倒れてる人を見ると助けなきゃって・・・」

「なるほど・・・・んっ」

その時、蒔風に情報が流れ込んできた。

どうやらこのエルルゥ、アルルゥ姉妹は、最主要人物に一番近しい主要人物のようだ。

最主要人物の名はハクオロ。しかし名前だけでそれ以外の情報は入ってこなかった。

「えっと・・・いきなりですみませんが、エルルゥさん」

オレは姿勢を正してエルルゥに訊く。

「ハクオロ、という人物に心当たりはありませんか？」

「ッ！！？？」

「おとーさん？」

「そ、その人は・・・・」

「知ってるんですか？」

「え、ええ。知ってます。しかし、今はいません・・・」

「なぜですか？その人って何をしてる人なんですか？」

「ハクオロさんは・・・・この国の・・・トゥスクルの皇（オウルオ）でした。」

「おぅるぉ？王様ってことか。しかし”だった”とは？」

「その後、いろいろあって、ハクオロさんはいなくなってしまったんです」

「なるほど・・・しかし、その皇（オウルオ）と親しいあなたがなぜ小さな村の薬師を？」

「私はハクオロさんの近くにいたかった。家族でしたから。だから、私は待ってるんです。この、私の居る場所で、ハクオロさんを」

「そう・・・ですか・・・」

「だいじょーぶ。おとーさん。帰ってくる」

「え？」

「と、言うと？」

「森が、言ってる・・・・」

「森が？」

「この子は『森の母（ヤーナマウナ）』で、動物の意志とかを聞きとることができるんです。アルルゥ、どういうこと？」

「わかんない。きゃっほーう」

そう言ってアルルゥがオレの手を引いてきた。

外に連れ出されると、昨日は闇夜で見えなかったが、今見ると、壮大で、美しい、大自然がそこにあった。

アルルゥがオレの裾を引いて何かを差し出してくる。

「これ、ハチミツ」

どうやらアルルゥの好物のようだ。

「ん、ありがとう」

ハチの巣ごと食べるのには驚いたが、どうやらこれが普通らしい。

普通に食べるより甘かった。

そうしてアルルゥと一緒に遊んでいると、一頭のウマがやってきた。

ウマといっても「馬」ではなく、ウォプタルと呼ばれる二足歩行のトガゲのような動物だ。

よかった、こういう情報が瞬時に流れ込んでくるといちいち驚かなくて済む。

どうやらそのウマに乗っているのは大柄な男のようだ。
いかにも武人、といったような男で、エルルゥに用があるらしい。

「姐さん!!いますかい!?姐さん!!!」

「な、なんですか?クロウさん。そんなに慌てて!!」

「姐さん!!!聞いてくれ、そ、総大将が、総大将が復活できるってよ!!」

「え?ハ、ハクオロさんが・・・・?」

「そうだ!今みんな皇都にいる!!姐さんたちが最後だ!」

「それは・・本当なんですか!?」

「ああ、一昨日来たへんな男が、この國の失われし皇(オウルオ)を害なく復活させようって来たんだ!!そいつ、俺たちの知らないような術を使うから、絶対だってよ!!」

「そんな・・・ハクオロさん・・・」

「どーしたの?」

「おお!!小さな姐さん!!聞いてくれよ!!実は・・・・・あんた誰だ?」

「失礼、オレは蒔風というものなんだが、その変な奴っての風貌を教えてくれ」

「あん？ああ、また姐さんに助けられた人か？すまねえが、後にしてくれな・・・・」

「そいつが実はお前らをだましているとしたら？オレの知ってるそういう奴だとしたら？どうする？」

「あんた・・・いったい・・・」

「俺もハクオロという人に会ってみたい。しかしその怪しげな人物も気になるんだ。教えてくれ」

「クロウさん、教えてあげてください」

「姐さん？」

「この人、何だか、普通じゃない気がするんです。でも、信頼もできる。そんな感じが、するんです」

「それは・・・」

「マイカゼ、悪い人じゃない」

「小さな姐さんまで・・・分かりやした、お教えしやしょう。そいつは・・・」

「全身が影で覆われたようなやつでしたよ」

to be continued

うたわれるもの　～姉妹との出会い～（後書き）

三年Ｖ組！！純情先生！！！

えっとですねぇ、ここが、テストに出ますよ～

以上で、終わります・・・・・

アリス「やっとおわったー！！」

あ、そうそうもうひとつだけ。

わたし、この授業中ずっとあなたが怪しいと思ってましたよ。

では。（ガラガラ、ピシャン）

ア「純情ってはぐれ刑事かよ！！！」

新感覚！！ファ○タ！ドドリア出た！！

ア「ドドリアはダメだろぉーーーー！！！！」

じゃあ、ザーボン？

ア「なんで？なーんーで鳥山ワールド行くの？」

ブッ〇オフで全巻読んだからね

ア「よくもまあ・・・・」

んじゃ、この辺で

ア「次回、「奴」は一体何をたくらむ！？」

ではまた次回

オボロ防壁！！

うたわれるもの　～暗躍する者～

今オレ、蒔風舜はエルルゥさんの乗ったウマを追いかけている。

しかし結構な速度だぞ。

まあ、それだけにハクオロという人の人望の大きさがわかるんだが。

「・・・・・・（じ～）」

アルルゥがこっちを見ている。

ちなみにオレは勝手にこの行動している。

完全な部外者のオレはまだ世界の説明もしてないし、連れてってくれ、とも言えなかったし、こうやってついてくしかない。

やだなぁ

ストーカーみたい

・・・・やだ、ゾクゾクしてきた

ともかく、森の母とはすごいもので、こっそりつけてるオレの方を何度かじ～っ、と見ている。

多分アルルゥが乗っている大きな白い毛の虎、ムックルが感づいて教えてるのだろう。

さっきアルルゥに教えてもらったときに知ったのだが、ムックルは森の主（ムティカパ）と呼ばれる者で、小さな頃にアルルゥに拾われたらしい。だからあんなに懐いてんだなぁ。

そんな説明口調で考え事をしながら走ってると、大きな都が見えてきた。

ここがこのトゥスクルの皇都らしい。

エルルゥさんたちがいかにも宮殿、みたいな建物に入って行った。

オレも早く侵入しなきゃな

「奴」が何するかわかったもんじゃない

「ふぅっ、土惺」

ボコッ

土埃の力を使い、地面に穴を開け、潜っていく。

城壁を越え、大きな木の根っこが見えたので、そこで地上にあがる

「ふぅ～い、よっこいしょういちっと。あ、よっこいしょういちって言っちゃった」

・・・・・・バカなことやってないで行こう。

衛兵の監視をかい潜り、宮殿の中に入っていく。

「一番でかい部屋に行けば、いいのかな～」

そうつぶやいて、オレは宮殿の中心を目指した。

実はオレ、派手な戦闘好きで得意だけど、一番の得意はこういう隠密行動なんだよねー♪

おっと、ここかな?

エルルゥさんの声が聞こえる。
オレがいるのは天井の梁の上。
なにやら話し合ってるらしい。

――――――

最初にエルルゥが口を開く

「ハクオロさんが蘇るって本当ですか？」

「まだ、わかりません。しかし、可能性は大きいです」

それにベナウィが答える

「聖上にまたあえるのですね！？」

「でもそんな簡単に信じていいんですの？怪しい方と聞いてますが」

トウカとカルラがさらに聞く

「うーん、確かに怪しい人だったけど・・・・」

「私たちの知らない術を使うこともたしか。彼が言うには、違う世界の力だそうですが・・・」

それには法術に秀でたカミュ、ウルトリィが答える

「だけど・・・ハクオロさんが封印を望んだ理由が・・・それを無視して・・・」

「そうですわね。主様の意志を考えると、このままの方が・・・」

「確かに、聖上は自分がこの世に下手な力で干渉しないように、己の半身と共に眠りつづけることを選択しました。そうなると・・・・」

エルルゥ、カルラ、ベナウィが難色を示していると、そこに声がした

「大丈夫ですよ」

「あ、あなたは・・・」

「ベナウィさん、あの人が?」

「ええ、聖上を復活させると言っていた人物です・・・・なにが大丈夫なのですか?」

「ふふふ、あなた方の主、ハクオロ皇の事情はわかっています。空蝉、でしたかな?その邪悪なる半身を消滅させ、ハクオロ皇を復活させる。そうすれば問題ないでしょう?」

「なぜ、あなたがそんなことを・・・」

「言ったでしょう。違う世界の力だと。それと・・・・・・ははははは！賊がいます！私の邪魔をする、ハクオロ皇の復活を妨げる者が！そこにいます！」

「奴」が天井に潜む蒔風を正確に指差す

「ドリィ、グラァ！」

「はい！若様！」

オボロが弓兵である二人に命令し、矢が放たれる。

ーーー

「おぅわっ！」

蒔風が驚きながらも着地すると、周りには二刀を構えるオボロ、弓を引くドリィ、グラァ、方術を構えるウルトリィ、カミュ、腰の刀に手を添えるトウカがいて、囲まれてしまった。

ちなみにクロウはベナウィの前に守るように立ち、エルルゥ、アルルゥはトウカの後ろに回っていた。

「マイカゼさん！？」

「あん？さっきのあんちゃんじゃねーか。こんなところでなにやってる？」

「いや、そいつが・・・・」

「皆さん！やつは私の敵です！様々な世界を巡る私をいつも邪魔してるのです！」

「いやまぁそうだけどさ、一旦話を・・・」

「問答無用！！せぇりゃぁ！！」

オボロが業を煮やして切りかかってくる。

蒔風は天地陰陽の内二本を抜き、上下から迫る刃を受け止め、身体を回転させ離れる。

そこにドリィ、グラァの弓が放たれるが・・・・

「（ダンッ！）畳返し！！」

バコッ！！

いきなり蒔風を隠す程度の大きさに、床が跳ね上がって壁になり、その弓を防ぐ。

「なにっ！？」

「なんだその術は！？」

「術じゃなくて技です。柔術の畳返しを床だとか地面でやってるだけですよ。まあオレは足でやってますが」

蒔風はそう説明するが、柔術なんて言われてもこの世界には存在していないので、彼らはちんぷんかんぷんである。

「ハッ！！」

「っ！！（ギィン！！）」

さらにトウカが攻めてくる。

その流れるような攻撃を、それに合わせるかのようにかわしていく蒔風。

「くっそ!!なあ、どう思う?白虎」

蒔風が己の剣に話しかける。
白虎はその剣の状態で応答する。

一音声の言葉じゃダメならもうやることは一つでしょー

「だよなー・・・・・いいぜ!!こっちだ!!」

「ま、待て!!」

蒔風が一気にジャンプし向かってくるオボロホ飛び越える。
空中で回転しながらドリィ、グラァの弓をはじき、外にでる。

外は広い演習場になっており、そこで軍隊の訓練などをしているのだが、今はいない。

「とうっ、と。へへ(クイクイ)」

「あの野郎舐めやがって!!(ダダダ)」

「若様!!待ってください!!」

「私たちも行きましょう!!」

「うん、お姉さま！」

「某たちも行くぞ！！カルラ！！」

「いいですわよ、トウカ。骨のありそうな方じゃないの」

そう言って他の者も全員が演習場にでる。

「奴」の姿はもうそこにはなかった。

「観念しろよ・・・おまえ、兄者の復活を拒むたぁどういうことだ！！」

「だーかーら！！話を聞けっての！！まったく・・・やっぱしゃーなしだな」

「なにをするつもりだ！」

「お前らと戦って、オレが勝ったら話聞いてもらうからな！！」

「てめえが？俺たちに？寝言は寝て言えや！！」

「さあて、レッツ肉体言語タ～イム♪・・・力を借りるぜ！！」

そういうと、蒔風の腰に音叉が現れる。
蒔風はそれを構え、指ではじく。

ピィン、キィィィィィィィィィィ・・・・・・・・

そして額に持っていくと、蒔風が紫の炎に包まれる！！

「なに！！？？」

「そんな・・・・マイカゼさん・・・」

「自殺した？」

しかしその炎の中で、蒔風が気合を込める！

「うーー・・・・・・・・・はぁ！！」

バァッ、ドンドン！！

そこに、炎をかき分け、鬼に変わった蒔風がいた！！！

「仮面ライダー、響鬼」

音撃棒をクルクルと回し、両手に構え、蒔風は猛る。

「さ、始めましょーか、尋常に！！！！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

うたわれるもの　～暗躍する者～（後書き）

アリス「作者さん、作者さん。質問です」

はいなんでしょうか

ア「携帯でこの小説を読むと括弧が多すきてめんどくさい気がします」

ああーー、確かにそうかもしれません。

私としてはパソコンで読んでいただければ幸いかと

ルビ振りなんかでも楽しんでるんで

ア「なんか裏設定ってないの？」

いきなり素に戻るなぁ・・・・

ありますよ？

ア「おせーておせーて」

えっとですね

蒔風は各世界に三日か二日、長い場合は今ん所は五日くらいしかいません

ア「今のとこは、ですか？」

はい

世界が入り組んでくるとその世界にいる時間も長くなりますから

長くいることになる世界も出てきます

ア「たとえば？なんの世界？」

残念ながらそれは言えませんが。

まあ一つの世界に、いくつもの世界を内包した世界なんかだと、長くなりそうです

ア「なるほど」

そして世界と世界を繋ぐゲートを蒔風がくぐって、次の世界に行きます。

それはまるで一瞬のように描いていますが、実はその間に、蒔風には二週間ほどの時間がたっています。

しかし現実では一瞬。故にあのような描写になるのですよ。

ア「すげえ今更な、壮大な裏設定！！じゃあ蒔風はもう・・・」

ええ、最初の自分の世界から【ＣＬＡＮＮＡＤ】には時間はたってないので、そこからだと・・・・

五回なので、二ヶ月半ですね、経ってます。

ちなみに蒔風の肉体自身は成長せず、十九歳のままです。

ア「その狭間の空間で蒔風は何をしてるの？」

今までの世界の情報をまとめたり、修練を積んだり、元の世界のことを思ってます。

ア「うわ・・・それって・・・」

ああ、あと、悪と正義だとか、生と死、人間の根源などについて考えています。

ア「壊れちゃわないの？」

蒔風はすべてを本気で理解しようとしています。

故に至高の理性と最高の狂気を、あわせもつ必要があるのです。

ア「へ、へーーー」

ってかしってんでしょ？

ア「まあねー。でもこうやって聞くと・・・」

そうだよね

ア「今更やる話じゃないよね」

う・・・

ア「また書き忘れてて、あ！これ書き忘れてた急いで書かなきゃ！！ってなったんでしょ？」

あぅあぅあぅ・・・・

ア「ダメ野郎ですね」

この小説を読んでくれているみなさん。

こんな計画性皆無の作者で申し訳ございません。

今この場をもって謝罪いたします。

これからもこのような至らぬ点もあるかもしれませんが、どうか温かい目で見てください。

ではお願いします

ア「響鬼に変身し、戦う蒔風。「奴」の目的は？」

ではまた次回

ハクオロ殿！後を、後を頼みまするぞ！！

うたわれるもの　～戦闘・守護の決意～

「なんだ、その姿は！？」

「気にすんなよ。誰からくるんで？皆で来んのかな？」

「貴様などオレ一人で十分だ！」

「オボロさん！」

「エルルゥは下がってろ！」

バッ！

蒔風にオボロが迫る

オボロは軽業師のような身軽な動きで蒔風を翻弄する

ギィ！ギャリリリリ！

蒔風は音撃棒でそれをすべて受けきる。

「なに！？オレの攻撃がみきられて！？」

「鍛えてますから！フンッ！」

ドカカッ！

「ぐぅう！」

音撃棒がオボロの腹部に減り込む。

その一撃でオボロは吹き飛んだ。

その身軽さとスピードのために鎧をつけないオボロはモロに食らい、悶絶する。

「ぐっ、あ・・・・」

「くっ、次は某が！」

「トウカさん・・・・・だっけ？いいぜ、こいよ！」

「はぁっ！」

トウカが一気に迫り、居合切りを蒔風に放つ

「あっぶ！」

蒔風が後退しながらそれをかわす。

「はぁぁぁぁぁぁぁ（ボッボッ）・・・・・はぁあ！」

そして音撃棒の先端に気を込め、それを炎とし、トウカに投げつける

トウカはそれに驚くが、凄まじい剣速でその炎を霧散させた

霧散した炎の向こう側から蒔風が音撃鼓を投げつけ、トウカにセットする

オン、オォォォォォォン

「ぐ、なに？これしきぃ！」

「音撃打・爆裂強打の型ぁ！」

トウカが音撃鼓に捕われながら蒔風に切り掛かる

が、実力を発揮しきれない状態では敵わず、蒔風はその斬撃を弾き、力の限り太鼓に撥をぶちあてる！

ドダゴン！

「うぐあっ！」

ドサッ、ドォン！

トウカの体が飛び、音撃によって爆発が起こる

「トウカさーん！！！」

「大丈夫ですよ。威力は抑えてますし、爆発も演出程度です。気絶してるだけですよ」

離れた所でカルラはクロウに話し掛ける

「クロウ、あなた行きます？」

「出来れば御一緒願いてぇな」

「よろしくてよ。さて、行きますわよ！」

「応！」

カルラが大きく跳び、蒔風の手前の大地に向かい大剣を叩き付ける！

カルラの大剣は剣と言うよりも金棒に近く、斬るよりも叩き潰して引きちぎる物である。

ドッガァ！

地面が否、大地が砕け、粉塵が舞う。

その中からクロウが日本刀を肥大させたような大剣を蒔風にぶちあてる！

蒔風はそれをガードするが、あまりの威力に地面を転がり、飛ばされる

「ちっ、時間もあるし、そろそろ・・・・」

カァァァァァァ・・・・

蒔風の体が戻っていく。

「あら、諦めましたの？」

「いえいえ。むしろこれからで・・・・獅子天麟！」

蒔風がその背に三本の剣をだし、抜いて合わし、一本の大剣、バスターソードの形をした獅子天麟をその手に持つ

「！？一体どこからだした！？」

「だーかーら、気にすんなっての。では、大剣祭だ。はぁぁぁぁぁぁ！」

蒔風がクロウに突っ込んでいく

クロウは蒔風の攻撃を予測して、防御する。

はたしてその動きは正しかった。

蒔風が剣で攻撃したならば、だが。

蒔風は獅子天麟を突きの体制で構えていたが、それをクロウに行き着く前に地面に向け、突き立てる。

そして棒高跳びのように獅子天麟を飛び越え、全身のバネを使い渾身の飛び蹴りをかました。

そこに切り掛かるカルラの剣を、後ろ回し蹴りで弾く。

カルラの手が痺れ、大剣を落とすことはないが、動かせなくはなっていた。

「とどめに！！力を借りる！！」

その手に赤い玉が現れ、蒔風がそれをカルラに投げつける。

とっさにカルラは大剣を手放し、その攻撃を避けるが、さらに第二射が襲いかかり、爆発した。

「くあああああああああああああああ！！！」

「くっ、カルラ！！」

「らぁ！！さらにだ！！」

ギァン、ギィィィィィィィィ・・・・バッ、バァァァン！！

「仮面ライダー、轟鬼。えいやぁ！！！」

ドムッ

クロウの腹部に音撃弦を突き立て

「音撃斬・雷電激震！！」

蒔風が音撃弦を鳴らす。

その音撃はクロウの鎧に響いて、それを弾き飛ばす！！！

ドパン！！！

「うがっ！～～～～ぐ！」

そこで蒔風は変身を解く。

「さ、お次は誰だい！？」

ベナウィの方を向いて蒔風が言う。

しかしベナウィは首を振り、

「これ以上あなたと戦ってもこちらに勝ち目はありません。それに、私はあなたの話も聞くつもりでしたし」

「ん？そうですか。いやぁ、ありがとうございます！！」

「いえいえこちらこっそ～♪」

「あん？ぬっがぁ！！！！がぁぁぁぁあああああああ！！！」

そこに「奴」が現れ、蒔風の背を斜めに切り裂く。

血があふれ、地面を染めていく。

「マイカゼさん！！！」

「あなたは・・・・ッ！！！なんてことを！！」

「言ったろ？そいつはオレの敵なんだよ。殺さなきゃーなんねぇのよ。おわかり？そんなことより早くハクオロ皇を起こしに行きましょうや」

「断ります。まずこの人に治療。それから話を聞いてからです」

「っち！！まあいい。この騒動中に封印の場所は調べたし、お前らに用はない。とっとと復活させてサクッと殺すか」

そういって「奴」は虚空に消えていった。

ーーー

「だいじょーぶ？」

「おーう、アルルゥ。大丈夫だぞー。お兄さん強いからねん！！ってて」

「だから動かないでください」

「あっ、はい」

「痛くないの？」

「痛いけど、がんばります！！蒔風強い子！がんばる子！！」

「動くな！！！！」

「「（ビック！！）ごめんなさい・・・・」」

そうして蒔風の治療が一通り終わり、謁見の間に連れてこられた。

「おい、お前大丈夫なのか！？」

「ええ、おかげさまで」

オボロが話しかけてくる

「しかしすみません。話を聞いてもらうためとはいえ、結構ボコボ

コにしてしまい・・・」

「ああ、それな・・・」

「それはもういいんですのよ・・・ああ、わたくし、カルラといいますの」

「どうも、蒔風です。もういいとは？」

「あなたの実力は高かった。それは私たち全員を殺せるかもしれないほどに」

「あー、それは」

「だが、あなたは某たちが怪我をしないように戦ってくれた。こちらに非があったというのに・・・」

トウカが引き継ぎ、先を話す

「しかし某もまだまだ未熟だ・・・あのようなものを少しでも信じてしまうとは！！」

「ああ、その・・・気にせんでください」

そうして、ぎこちないが何とか和解した蒔風に、ベナウィが切りだす。

「で、話をしてくれるのですね？」

「はいな。聞いてもらいますよ」

そうして蒔風は話し始めた。

いろいろと疑わしい話であったが、先ほどの戦いでの力を見た彼らは、意外とすんなりと信じてくれた。

「ハクオロさんを・・・・殺す？」

「そう。そうすれば「奴」はめでたく世界を食らい、さらなる力を手にすることができる」

「なるほど・・・今聖上は永久の眠りについている。つまり、何人も手を出すことができない。だから・・・・」

「兄者を復活させてから、殺すって言うのか！？」

「そうだろうな。しかし、そもそもなぜハクオロさんは封印されたんだ？」

「そうですね・・・少し長くなりますが・・・・」

そして今度はベナウィが説明を始めた。

ハクオロはエルルゥに助けられた人物である。

彼は記憶喪失で、そのままエルルゥの家で暮らした。

しかしその國の皇（オウルオ）があまりにひどく、ついに長老が殺されてしまい、村人が謀反を起こした。

そのときの指導者がハクオロで、今の國のなりたちである。

トゥスクルという國の名は、殺された長老の名で、エルルゥ、アルルゥの祖母だったそうだ。

そうして國を立ち上げたハクオロだが、さまざまな戦いに巻き込まれて行く。

その途中で、ディーという若者が現れた。

それはハクオロの半身である存在が、ディーに憑依したものであった。

実はハクオロは大いなる存在、「うたわれるもの」、この世界の神

話でウィツァルネミテアと呼ばれる神のごとき存在だった。

ディーは戦乱こそが人間を進化させるものであると戦いを煽り、ハクオロはそれに真っ向から反対した。

そして封印の地、オンカミヤムカイの最深部においてディーを倒し、同化し、自らがこの世に相容れぬものとして、自ら封印されることを望んだ。

そうして彼は封印され、いまでも眠り続けている。

「・・・なるほどな・・・・ならばなおさら復活を止めなければ」

「はい。やはり聖上は封印されたままのほうが・・・」

「ベナウィ!!貴様兄者がこの世界にいてはならないというのか!!」

「違います。私も、聖上には帰ってきてほしいと思います。しかし、聖上が自らの封印を願ったことを考えれば、あなたもわからないわけではないでしょう!」

「そうか・・・そうだよな。いや、すまん、兄者がいらないと言われたものかと・・・」

「いいんですよ・・・それで、「奴」というのはどのようにして聖上を復活させるのでしょう」

「無理やりだろうな」

「無理やり？」

「待ってください。ハクオロ様が封印されているのは我が国、オンカミヤムカイの最深部。そう簡単に破られるものではないですし、それに無理やりなんてしたらハクオロ様が！！」

オンカミヤムカイの第一皇女でもあるウルトリィが信じられないと声を上げる

「いいえ、「奴」はやります。そもそも、「奴」はハクオロさんがその手で殺せればいいのですから、身の安全など気にはしません」

「そんな・・・・」

「しかし、オレが・・・・させません」

「マイカゼさん？」

「オレはそのハクオロさんって人はよく知らない。だけど、その人がその意志を貫いたのなら、オレはその意志を守る」

「・・・・・・」

「案内してください。その封印の地まで」

「じゃあ、私も・・・」

「エルルゥさんは残ってください」

「いいえ、彼女は必要です。行きつくまでに堅固な扉があり、エルルゥさんでしか開けられません」

「それに俺たちも行くしな」

「は?ちょっと待ってくれ。「奴」は危険だ。そんな危ない所にみんなで行っては・・・」

「行きます」

「しかし・・・」

「行きますよ」

「あーーー」

「我々の意志は崩れません。我々はあの方の封印を見届けたもの。我々は行かなくてはなりません」

「・・・・まったく、主要人物ってのはみんな頑固なんだから・・・」

「??で、どうするんですか?」

「わかった、全員で行きましょう。でも！決して一人にはならないでくださいね！！」

「分かりました」

「では準備の出来次第ここを発ちます。急いだ方がいいですよ」

そうして全員が支度を始める

「ふう、さて、守るもんが増えちまったな。ははは、いやーまいったまいった♪」

そして数分後、蒔風たちは砦を出た

to be continued

うたわれるもの　～戦闘・守護の決意～（後書き）

お金がないです

アリス「今月のお金はねんどろいどに消えましたからね」

今週末に超電王見に行きたいのに・・・

ア「お金が入るまで待ちなさい」

残念だなぁ

ア「ゼロノスどうだったんですか？」

面白かったよー

ただ映画館の案内でニヤリとしてしまった

ア「なんで？」

いや、タイトルが長すぎて、しっかり言えてなかったｗｗｗ

ア「タイトル長いですもんね。なんでしたっけ」

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダーＴｈｅ　ＭＯＶＩＥ

超電王トリロジー～ゼロのスタートウィンクル～
です

ア「なっが」

そしてチケット切ってもらって誰にも聞こえないようにそれをスラスラ言ってやるオレ

ア「うっわ～～～」

さてさて、第二弾では言えんのかな～～～

ア「性格悪！！」

ライダーはかっこいいですね

じゃあ、ヨロです

ア「「奴」の思惑通りにハクオロは復活してしまい・・・？？？」

ではまた次回

うたわれるもの　～白き皇～

「ふぅ～、はぁあ。なかなかに重い・・・・これじゃあいつら来ちゃうじゃん」

オンカミヤムカイ最深部

ハクオロが封印された地に、「奴」はいた。

すでに蒔風を切り捨ててから二日

そろそろ来る頃だろう。

早くこいつズッコ抜いてぶっ殺さなにゃならん

「知ってはいたが、封印堅いし、こいつ重いし、このままやっちまおうか？」

すでにハクオロが力を解放させた、うたわれるもの・ウィツァルネミテアの巨大な体駆の半分は地面の魔法陣から出てきていた。

「でもこのままやっちまうと、上手くやれるかわかんないしなぁ。めんどいがやるしかないようだな！」

「待ぁてぇ！」

「お？」

ヒィン！ギャギン！

龍虎雀武を組み合わせた円盤が「奴」の目前に飛来し、その進行を阻む。

「来ちまったか。いや、速いほうかな？」

「貴様、許さんぞ！」

「蒔風！なんだ？そいつらまで連れて来たのか！」

「当然です」

「兄者を封印したのがオレ達なら、それを守るのもオレ達だ！」

「だそうですよ」

「は、さいですか。まあこの際だ。もういい、このままこいつをぶっ殺す！」

「ヤバッ！」

蒔風が駆ける。

しかし「奴」の方が近く、魔導八天の凶刃がハクオロに迫る。

ズブァッシャァ！

「奴」が全力を持って両断する。

その勢いでついにウィツァルネミテアの全身が出て来てしまい、完全に二つに別れてしまった。

しかしそこから血が流れることはなく、両断されたそれぞれが形を変え、二人の人間となった。

一人は顔に仮面をつけ、一人は背に翼が付いている。

「ハクオロさん！！」

「ディー！？」

「どっちが！！」

「仮面のある方が聖上です！」

「了、解ッ！青龍、掻っ攫え！」

「御意！」

蒔風の右前脇から青龍が飛びだし、ハクオロの身体を回収する。

「奴」はハクオロの方に青龍が向かったのを見ると、そちらではなく、もう半身の方に向かった。

「ハクオロさん、ハクオロさん！！」

「おとーさん、起きる！」

「エルルゥさん、下がって下さい」

「マイカゼさん、なにを？」

「着付け薬だ。雷旺！」

バツンッ！

蒔風がハクオロに電流を流す。

ハクオロの身体が一瞬ビクンと跳ね、やがて唸り声をあげ、目を覚ます。

「む、むぅ・・・ここは・・・」

「ハクオロさん！」

「え？エルル！？ブァッ！」

エルルゥとアルルゥがハクオロに飛びつき、喜びをあらわにする。
やはりなんだかんだでも、再会はうれしいらしい。

ちなみにオボロもつかみ掛かろうとしたが、ハクオロの跳ね上がった足に蹴られ、悶絶している。

あそこはいてぇな

「感動の再会の途中で悪いんだが・・・ハクオロさん、ですか？オレは・・・・」

「うん？ああ、蒔風舜だろう？眠ってる間に見ていたよ。いろいろと迷惑をかけたようだ」

「さすがうたわれるもの。話が早くていい。今から「奴」を潰します。危険ですので、離れていてください」

「いや、私も戦う」

「おぉう？」

「今・・・「奴」が私の半身を取り込んでいるようだ。徐々に繋がりが断ち切られていくのが解る。あれは私の半身だ。私がやらねばならない。それに・・・」

「それに？」

「あいつは私の封印を解いた。その落し前は、つけさせてもらう」

「あー、わかりましたよ。まーた護るもん増えたな。にしし」

「自らの勝率を下げるとは愚かだな蒔風」

「奴」の声が響く。

その姿は先程のウィツァルネミテアのものが黒くなったものに変わり、身長は２０メートル程になっていた。

「そもそもそいつに仲間はいらん。そいつは神といってもいい力を持っているのだぞ？その力で様々な人々を自らの意志で自由にいじくり回し、成長させていく。そいつは誰とも関わっちゃならないんだよ！周りの人間はお前の気分次第で・・・・・なぁ？ははははは！てめぇみたいな存在がいなけりゃ、戦いは起こらなかった！違うか！」

「違うなぁ！」

「なに？」

「戦いはどうあっても終わらないさ。０にはできない。だが、彼はそれでも戦いを止めようと戦った！０にできなくても、限りなく０に近づけるために！・・・なあ、ハクオロさん」

「なんだ？」

「もう一度、あの人たちとともに生きてみてください。あの人たちは・・・あなたと暮らしていけないほど、弱くはない」

「・・・・・・」

「・・・信じてあげろよ！！！あんたにどんだけついてきたやつらなんだよ！！！あいつらを、正しく導いてやれよ！！ウィツァルネミテアの半身ではない、たった一人のトゥスクル皇、ハクオロとして！！！」

「・・・うむ！！！」

「なぁ～に開き直ってんだよ！！！」

「奴」が蒔風たちに迫る。

その巨大な拳で大地ごと吹き飛ばしにかかる。

「あああああああ！！！！！十五天帝！！！！！」

「マイカゼさん！！？？」

蒔風の叫びにすべての剣が呼応する。

獅子天麟をベースに、まず龍虎雀武が一本ずつ刃の方に背びれのように取り付けられていく。

そして取っ手のところにはトンファー型の天地陰陽が鞘に収まった状態で取りつき、四角い輪を作り、より両手で持ちやすく。

最後に風林火山が、「風」「林」「火」「山」の順にそれぞれの背の方に刃が付き、柄がなくなり、獅子天麟の先端につく。

これこそ禍々しき正義と伝説で語られる、十五天帝の姿である。

その刀剣で「奴」の拳を弾き飛ばし、さらに襲いかかる拳を今度は弾けず、受け止める。

ブシュゥ!!!バダバダバダ・・・・

「いぎっ!!!ぐおおおおおおおおおおおおおおあああああ!!!!」

「マイカゼさん!!!!」

「背中から血が!!!!」

「なぜ避けなかった!!!」

「ばーか。避けられなかったんだよ。思いのほか深く切れていたみたいだねぇ。ひっひっひっひっひ!!!!」

「奴」が蒔風にとどめを刺そうとその口に炎をためていく。

「ふぉふぁりだ（終わりだ）」

「最後ぐらい、しっかり言えやぁ！！！土惺弾！！！」

ボガガガガガガガガガガガ！！！！！！！

地面からバレーボールほどの大きさの土の弾丸が、「奴」に向かって連射される。

「奴」その攻撃にのけぞり、蒔風から多少離れる。

しかししっかりとした動作をしておらず、しかも手負いの状態での土惺弾は、その程度の威力しかなく・・・・・

蒔風は傷が開いた痛みと出血で、その場から動けない。

「足掻くなよ！！！」

再び炎が蓄えられていく。

蒔風に防ぐ術はない。蒔風には。

「蒔風！！！！！」

ハクオロが蒔風の状態を見てすでに駆け出している。

「奴」は炎の充填よりハクオロの方が早いと感じるや否や、即座に天井を崩してきた。

ドガ！！！ガラガラガラガラ・・・・・

「奴」が天井を崩し、蒔風たちをみんなまとめて瓦礫の下敷きにする。

「はっはぁ！！下敷き完了！！これで・・・・・ガウッ！？」

その瓦礫の中から腕が伸び、「奴」を殴り飛ばした。

さらに銀白に輝く翼が、瓦礫を吹き飛ばす。

そこには、ウィツァルネミテアとしての姿であるハクオロと、皆をその翼で覆い守った蒔風がたつ。

「蒔風・・・大丈夫か？」

ハクオロが大きな体で蒔風に聞く。

すでにハクオロの力によって、蒔風の傷は癒えていた。

「すまない。助かった。こんな力もあるんだな。俺には得意な方じゃないから、マジ助かる」

「気にするな。行くぞ！！蒔風！！！オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

ダンダンダンダン！！！！

その巨体が大地を踏みしめ、猛然と「奴」に迫る。

ハクオロは「奴」に掴みかかり、その動きを止める。

「貴様は我が半身を取り込んだ。それが仇になったな。貴様の中の半身を抑え込むことで貴様を止める！！！」

「てめえにできんなら俺にだってできらぁ・・・・ッ！！な、が、なに・・・なぜ・・・・・」

「奴」の動きが止まる。しかし、ハクオロの動きは止まらない。

その強大な腕の爪で、牙で、その標的を拳の餌食に！！！

「ばっかだなぁ。混ざりもんのお前さんに、ハクオロさんを止められるわけないっしょ？」

【ＵＴＡＷＡＲＥＲＵＭＯＮＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

その声と同時に、エルルゥの髪についている白いリングが輝き、巨大化した。

そしてそれは「奴」の体を抑え込む！！！

その姿が歪なものであると、阻止するように！！！

さらにオボロたちの武器までもが巨大化し、ハクオロに扱える大きさになる。

「みんなの力だ。お前だけじゃなく、みんなで勝つんだ！！！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ハクオロが武器を、力をその手に握り、「奴」に皆の力を指し示す！！！！

ザシュシュ！！！！！
オボロの二刀が腹を裂き

ドムッ！！！
よろめいた「奴」をベナウィの槍が貫き大地に縫いとめ

ズバン！！！ザシュッ！！！
トウカとクロウの刀が四肢を切断し

ズッ！！バガアアアアアア！！！
ウルトリィとカミュからの力であろう方術がその体を焼いて

ゴシャッ！！ゴゴン！！

カルラの大剣で頭部を叩きつぶす！！！

そして「奴」を束縛していたエルルゥのリングが爆発し、その体を吹き飛ばす！！！！

煙が晴れ、「奴」の姿が見える。

腕も足も頭もなく、ただの黒い塊になっている「奴」が、どうやっているのか声を発する。

「なかまに・・・頼るのは・・・・・弱者の証拠よ・・・昔からよく・・・・・・言われるだろ？」

「「それは違う！！！」」

蒔風とハクオロが叫ぶ。

「私は決して一人ではここまで来れなかった。皆を先導し、時には私が導かれ、そうしてきたから私がいる！！そうして歩んできたことは、決して弱いことじゃない！！！」

「いいか?弱いから仲間になる。確かにそれはあるだろう。否定はしねえ。だがな、仲間ができるってことは同時に守るもんが増えるってことだ!!!仲間を守れるのは強い奴だ!!だから仲間が多い奴ほど、強いんだよ!!!仲間を作った瞬間に、そいつらを守る想いが、人を強くするんだ!!!!」

「「仲間が弱さの証拠なんて言ってる貴様に、この強さは得られない!!!!!」」

【ＵＴＡＷＡＲＥＲＵＭＯＮＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

オボロたちの武器が元に戻り、今度は蒔風の十五天帝が巨大化した。

「む、これは・・・」

「使え!!!これが俺たちの、仲間を守り、また守られる・・・その誓いの力だ!!!!!」

「いくぞ!!!!」

「仲間が強さ？ふふふふ、いつか泣くぞ、蒔風。貴様はいずれ・・・仲間を失いかけた時に・・・泣き、叫び、自らの信念が・・・揺らぐだろう・・・・」

「あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

十五天帝の刀身が輝き、「奴」を消しさる光を放つ！！！！！

ザゴン！！！！ギュアッ、ドッガァァァァ！！！！！

その世界をも両断できるような斬撃に、「奴」は、消えた

ーーー

「つまり・・・」

「つまり私も、君らのように寿命で普通に死ぬことになる。永遠の時は終わった」

「そ、それじゃ、ハクオロッ、さんはッ、うっうっ、グズッ」

「よかったですね」

「ああ、君のおかげだ、蒔風。お礼をしたいところなんだが・・・もう行くのだろう？」

「はい」

「マイカゼー」

「ん？なんだい？アルルゥ」

「これ」

「これは・・・ふふ、ハチミツか。ありがとう」

「♪～～～。」

「あら、アルルゥにしてはすんなり別れられるのね」

「マイカゼーには、また会えると思う」

「？どういうこと？」

「わかんない」

「でも、なんかそんな気はするな」

「ははは、では、またの再開を願っときますか」

「じゃあ、気をつけて」

「ん。でわでわ」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ＵＴＡＷＡＲＥＲＵＭＯＮＯ］

――――――

「わかった、今行くよ。ましろ」

そうして一組の、永遠を生きるであろう若い男女が走り出していった

to be continued

うたわれるもの　～白き皇～（後書き）

アリス「今回どうしたんですか？更新遅れたじゃないですか」

蒔風「そうそう、どうしたん？」

学校が・・・早くて・・睡眠時間に・・・・・

ア「あーなるほど」

蒔「確かに友人にも早いって言われてたもんな。お前の更新」

なんかこう、毎日アクセス数みてると、この人たちが読んでる！！
はやく書かなきゃ！！ってなって・・・・

ア「そうして書くべき設定を忘れるんですね？分かります」

蒔「本末転倒じゃん。それならもっとしっかり書いて更新すれば？」

もうほとんど日課になっちゃって・・・

ア「今更変えられないと」

蒔「そういえば、最後にどう読むのか分からない漢字出てきたけど？」

漢字？

ア「太転依って何て読むんですか？」

ああ、教えないです

分かる人はわかるので

分からない人は興味があれば調べるでしょうし

そしてどんな世界か下調べができれば楽しめるじゃないですか

ア「丸投げ？」

蒔「丸投げだな」

うっさい

蒔「でもこんだけいろいろ行くと、この世界わかんないっていう読者もいるんじゃない？」

大丈夫なように一応説明は入れているんですが・・・・

本当に興味がなければ、お勧めはできませんが、飛ばしてもいいような気がします

蒔「おい！！」

でもきっとこんな文章を読んでくれる人はやさしいはず！！

分からなければｗｉ○．ｉとかで補完していただけるとありがたい！！

ア「うわさいってー」

蒔「そうやって丸投げすっから・・・・」

すみません

ではお願いします

ア「次の世界で蒔風が出会うのは退魔の霊能を持つ者!!」

ではまた次回

あなたとひとつになるために　生まれてきました

タユタマ　～走る、止める、戦う～

「ふはははははははははははははははッ！走れ風の如く！」

蒔風が全力疾走で街を駆け抜ける！

速い速い速い！

何故走ってるか。
それは・・・・

「おまえいつまで着いてくんだよ～！」

なにか得体の知れない動物に追っかけられていたからである

――

「さて、どーんなせっかいかなん？」

オッス！オレ蒔風！

今山にいます

どうも神社の裏手らしい
さて、ここから先はとんとん拍子だ

神社に出る
←
なんかあったらしい
←
誰か二人が駆け出した
←
ゲート先の神社にいたなら主要人物？
←
追いかける
←
なにかを止めてる？
←
なにかがオレに気付く
←
追っかけてきた

こういう訳でオレはいま走ってます

「走んのは嫌いじゃないから構わないけどん！飽きた！蒔風は飽きたわ！」

止まろうと後ろに迫るなにかを見た

流れてきた情報によるとあれは太転依（たゆたい）という、まあ妖怪みたいなやつらしい

今オレを追っかけてるのは猿みたいな太転依だ。
しかし色が黄色を基調になったカラフルなもんだ。

手に持っているバナナはさっきの二人がなんか言っていたが、どうやら盗んだものらしい。

あの二人は太転依の問題解決のコンビなのか？

《・・・・せ～ん》

「ん？」

《・・みませ～ん。すみませーん！聞こえますか？》

「なんだなんだ！？」

《いまテレパシーで貴方に話し掛けています》

「ああ、なるほどね。さっきの人ね」

《はい》

「唐突な自己紹介ターイム！オレ、蒔風舜。Ａｒｅ　Ｙｏｕ　ｎａｍｅ？」

《み、泉戸裕理（みとゆうり）です》

「おお、それで泉戸青年。あいつ盗っ人なん？」

《え？は、はい》

「捕まえんの？」

《そうですが・・・あなたはこのまま走って来て下さい！決して手を出さないで下さい！》

「うーん。そう言われると手を出したくなるのが人の性」

《待って下さい！危険です！》

「大丈夫だ。手加減・・・・」

《あれはそんなことしません！》

「いや、オレがする方」

《は？》

「早く来てね♪」

《待っ（プツン）》

ズシャ、ザザッ！

蒔風が止まり、太転依が突っ込んで来る。

「猿相手なら彼が一番かな？」

パァン！

蒔風の手の中で光が弾け、そこに鉄扇が握られる

「ハクオロさん、力借りますよっ。せいっ！」

パカァン！

蒔風がその鉄扇を開き、太転依の頭を面で叩く。

キキュ！？

太転依がちょっとした悲鳴を上げる。

「これは帰してもらいましょ」

鉄扇を纏め、手の甲に当てる
太転依はバナナを落とし、蒔風が拾う

キィ！キ？キーキーキー！

どうやらバナナを奪われたことに怒っているらしい。

「こらこら、もの盗っちゃだめでしょー？」

蒔風が優しく諌める。
しかし太転依は暴れ続ける

このままではいずれ周りに被害がでるだろう

「・・・・・やめろ。傷つきたくはないだろ？」

ズアァッ

蒔風が、顕現させずに龍虎雀武、獅子天麟の気配を放つ。

そのすさまじい気当たりに、太転依は暴れるのをやめ、萎縮しておとなしくなった。

「よーしよしよし。おとなしくなったね」

蒔風が優しく猿を撫でる。

「あなた・・・・今何をしたのですか??」

「んん?」

振り返ると、そこには蒔風が見かけた二人がいた。

「オレ?あー、睨みつけただけだよ」

「本当に・・・ですか?」

「その声は・・・泉戸裕理?」

「あ、はい。泉戸裕理です」

「ほう・・・ほうほうほうほう」

「な、なんですか?」

情報が来た。

彼が泉戸裕理。この世界の最主要人物だ。

「あなたが最主要人物ですか！！」

「はい？」

「あ、とりあえずこの子よろしくお願いします」

「は、はい。ましろ、よろしく」

「はい、ありがとうございます。それであなたは・・・・」

「ん？オレさん？まあ、正義の味方ってところかな。ある奴を追ってきてるんだが、ちょっとお話いいですか？」

「え？はい・・・・・」

ーーー

「いいよ」

「ん。で、裕理の身が危ないから、オレが守りまっせ、ということ」

「さすが！裕理さんはやっぱりすごい人なんですね！」

「ははは、実感ないなぁ」

今、泉戸裕理の家でもある神社に来ています。

そこで俺は事の顛末を話して、まあ何とか納得をしていただきました。

裕理の隣にいる女性は泉戸ましろ、という名前だそうだ。

なんでも、裕理とその友人たちが、多くの太転依を封じていた遺跡を壊してしまい、あふれてきてしまったそうだ。

そして、壊れた遺跡から、それらの太転依を封じていた、綺久羅美（きくらみか）守毘売（みのひめ）という太転依が現れ、何とかしてほしいと言い残したらしい。

そしてその綺久羅美守毘売の生まれ変わりとして誕生したのがましろさんだそうだ。

いまは裕理や、他の太転依とともに、人間と太転依の共存に向けて頑張ってるそうだ。

「と、なると・・・応龍（おうりゅう）たちにも知らせたほうがいいですね」

「応龍？たち？」

「ましろの他にも、三強という大きな力をもつ太転依がいて、知り合いなんですよ」

「今から呼んでみましょうか・・・・」

ーーー

この五人である

「三強って聞いたんだけど、五人いるぜ？」

「ああ、三強名のは・・・」

「俺、応龍と」

「鵺であるわしと」

「ゆみなさんの頭の上に乗っている鳳凰です」

「あ、でも鳳凰さんは鳳と凰っていう二羽で一組なんです。で、ここに今いるのは鳳さんです」

「で、後のお三方は？」

「ゆみなは、お兄ちゃんの義妹です」

小鳥遊さんは一時期、泉戸家に預けられてたらしく、裕理の妹同然だそうだ。

「なるほど、身内ね」

「で、あたしはユウの幼馴染で、こいつの監視役」

河合さんは昔から裕理と知り合いだそうで、応龍とコンビ？みたい

なものらしい

「わたしは、鵺の保護者だ」

如月さんは鵺を預かっている、裕理の友人だそうだ。

「なるほどねー。なんだ、うまく共存できてんじゃないですか。ここにいるのは各種の太転依の長なんでしょ？」

「でも、なかなかむずかしくて・・・」

「オレは綺久羅美の考えに完全に賛同したわけじゃねえからな」

「もう、ヨリトモ！！」

「ヨリトモ？？」

「応龍のあだ名だよ」

「はーん。で、さっき説明したとおり、身の回りにおかしなことが起きたら、自分でなんとかせずに、オレに連絡してくださいな」

「はん！てめえが俺たちより強いかどうかもわかんねえのに、そうですかと頼れるかよ」

「それに八衢（やちまた）はそう簡単に死ぬようなからだではないぞ？」

「八衢？なんだ？そりゃ」

「僕の持つ「退魔の霊能」の正体ですよ。僕には生まれつき、太転依などの力を撃ち消してしまう能力があるんです」

「まろまろと付き合いだしてから、すごく強くなったんだよね？」

「そうそう。で、ましろを消してしまいそうになったり・・・」

「大丈夫なのかよ」

「今は平気です。僕自身の体をそういった神通力を扱える身体に変換して、コントロールできるようになりましたから」

「それじゃあ、つまり・・・」

「今僕は太転依と人間との中間の存在ですね。ましろもそんな感じですし」

「まて。太転依は永遠といってもいい時間を生きるものだ。お前は不老不死なのか？」

蒔風が厳しい表情を浮かべる。
その視線に一瞬ひるむが、裕理は億さず話す

「いいえ。確かに不老ではありますが、怪我などをすれば死ぬこともあります。不死ではないです」

「そっか・・・はぁ～あ。よかったよかった」

「よかった？」

「そ、よかった。死ぬことのないなんて言われてたら、おれ、どうしてたかわかりませんでしたよー。ははは！！」

「でも、もう裕理さんに勝てるような存在は、いないといってもいいくらいに強いんですよ？」

「そんなにか・・・・」

「で、だ。俺としちゃあ、てめえの力がどんくらいか計っておきたいんだよ」

「ほう・・・オレの力を測る・・・か。大きくでたな」

「ああん？」

「それじゃまるでオレが弱いみたいじゃない」

「・・・お前、どんくらい強いつもりだ？」

「世界最強」

「・・・いいぜぇ。三強が一、この応龍が相手してやるよ。綺久羅美ぃ！結界張っとけ！！」

「もう！応龍！待ちなさい！！」

「いいですよ、ましろさん」

「蒔風さん・・・」

「舜でいいっすよ。そっちは名前を呼ばせてくれてんのに、なんかねえ」

「舜さん、応龍は・・・・とても強いですよ」

「へーきへーき。伊達に世界を救ってないから」

「早くこいやぁ！！」

全員で神社の境内にでる。

ましろが結界を張り、神社を隔離する。

さらにその内部に、裕理が蒔風と応龍以外の皆を結界で包む。

準備は整った

「本気で来いよ！！！」

「こっちのセリフ、だ」

いまここに、蒔風ＶＳ応龍の戦いが始まる

to be continued

タユタマ　～走る、止める、戦う～（後書き）

大変だ！！うたわれるものの世界説明を忘れたよ！！

【うたわれるもの】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”５０％
　　”フォルス”３０％
　　”ＬＯＮＤ”２０％

最主要人物：ハクオロ

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：全員の武器を巨大化させ、切りつける

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＡＣＫ～：十五天帝を巨大化させとどめ

アリス「前回あれだけ忘れないように言ってたのに・・・・」

本当にすみません

あと十五天帝の組み合わせがわかりにくいと言われました

ア「複雑ですからね」

でも、そこを想像できるのが小説の楽しいところ！

ア「キタ丸投げ」

・・・・・・

ちなみにこのタユタマの世界は、ましろルート基盤ですが、いちおう他のルートも踏まえている、ということでお願いします

ア「ＣＬＡＮＮＡＤのアニメにみたいな？」

そうそう

ア「タユタマのアニメって言えばいいじゃないですか」

アニメ版見てない・・・・

原作はＦＤまでやったのに・・・・

ア「ファンに殺されるぞ」

新月の夜は気をつけます

それから、後書きの最後に入れる言葉が出てこない

ア「本当に殺されますよ？」

誰か教えてー！！

まあ、ではどうぞ

ア「勃発！蒔風対応龍！！やるのは蒔風かそれとも？」

ではまた次回

私はいつでも、どんな時でも、裕理さんの味方ですから

（とっくに）一万アクセス突破記念　～「奴」の部屋～

「奴」
「よう・・・・こんにちはだぜ」

盛り上げてくださいよ

「奴」
「断りたいな・・・・というかなんだこの部屋は」

いやぁ、アクセス数を見てみたら、一万を六千も超えてたことに気づいてね

唐突に出してみました

「奴」
「もうそんななのか・・・・で、なんで俺なんだ？あのクソ野郎とか管理者を出せばいいじゃないか」

こっちのほうがおもしろそうだった

「奴」
「きさま・・・早く続きを書けよ・・・・・」

じゃあ書いてよ

「奴」

「はぁぁぁ・・・・いい加減にしなさいよ!!!」

お〝おう!?

「奴」

「オレの名前も出さないし、どういうわけ!?」

我慢しろ。

「奴」

「早く俺様の活躍を書けやぁ!!!そいで主人公ぶちのめしてやっからよぉ!!!!」

勝てないくせに

「奴」

「おま・・・確かにそうかもしれねえけどよ、そこはちっとは応援しろや!!」

うん、それ無理

「奴」

「・・・・・・・・・もういい・・・俺の知り合いよんでやる・・・・」

いたの?

「奴」

「いるわ!!(プルルルル)あ、オレオレ。え?名前?今出せないんだよ。はぁ!?仕方ねえだろ!!だまれやこの我様(オレ)野郎!!!

おい、まてよ!!!切るな切るな!!!（ピッ）・・・・」

プフー。知り合い？

「奴」

「だ・ま・れ・や。次行くぞ（プルルルル）おー、久しぶりだなー。うん、おれおれ。大体わかんべ？ん？ゼロ殺す？ああ、手伝ってやるかろこっち来いよ。うん、場所な・・・・頼むぜー（ピッ）」

今度はよべた？

「奴」

「今こっちに（ヒュルゥゥゥゥゥゥゥゥゥ、ドォン!!）来たみたいだ」

誰呼んだんだよ!!!

？？

「来てやったぞぉ!!」

「奴」

「おお、ベリアル。来たか」

なに呼んじゃってんの!!？？

「奴」

「紹介しよう、こいつはウルトラマンベリアル。異世界の友人さ。こないだゼロとかいう生意気な野郎にやられたらしい」

ベリアル
「いらんことを言うな。で、俺様、来たはいいが何すればいいんだ」

「奴」
「ふはははは、俺様の出ているこの小説がアクセス数が一万を超えてたらしくてな。そこで記念に俺様の部屋が開設されたのだ。お前はそのゲストＮＯ．１だ」

ベリアル
「一万だと?その程度で俺様を呼ぶな!!」

その程度って言わないで!!!

それにこの小説読んでる人で彼のこと知ってる人が・・・・

ベリアル
「いないとでも?俺様、あのウルトラ兄弟をバッタバッタとなぎ倒して言ったんだぜ?知らんという奴はブッ飛ばすぞぉ!!」

うわぁ、何て野郎だぁ!!!

「奴」
「そういや、俺さんはウルトラ関連の世界には行くのか?」

さぁねえ

平成ライダーで手一杯かもねえ

ベリアル
「ウルトラまとめろや」

と言いましても・・・

「奴」
「俺ら二人を敵に回すつもりか？」

俺は作者だぞ！！！貴様らが勝てるはずなどないだろ！！！

ベリアル
「俺様はこの作品のキャラじゃないぞ」

ここにいたらもう関係ないね

作者パンチ！！！

「奴」
「ぶふ！！」

作者光線！！！

ベリアル
「ぬあああああ！！！」

悪は滅びた・・・

ってわけでみなさん、なんだかんだでこの小説も多くの人に読んで

いただいているようでわたしもうれしいです。

これからも応援お願いします！！！

でわでわ～～～～

「奴」

「どうせ書くならもっとしっかり長く書けよ」

うっさい！！！

作者兵器投入！！！撃てぇ！！

「奴」

「なんじゃそりゃぁーーー！！！！！？？？？」

了

（とっくに）一万アクセス突破記念　～「奴」の部屋～（後書き）

ベリアルさま呼びたかっただけかも・・・・

なんかすみませんでした

タユタマ　～寝床が！？～

「「おらぁ！」」

ドッガ！

すでにお互いが戦い始めて5分
見た感じでは互角の勝負である
しかし・・・・・

「はぁ、はぁ、はぁ」

「ンッン～～♪」

応龍の息は切れており、蒔風は鼻歌を歌うだけの余裕がある

始まって二、三分はまだこうではなかった。

互いが互いの攻撃を打ち消しあい、見事な攻防をしていたのだ

しかし蒔風は徐々に攻撃に込める力を上げていっていた。
応龍が気づかないように少しずつ。
しかもニヤニヤしながら。

まさに鬼畜である

応龍がそれに気付いたのは、更に一分後であった

「ぎぃっ！てめぇ、なんのつもりだ！」

「せっかく闘うなら派手に、かっこよくやろうぜ。いつまでその姿のつもりだ？」

「・・・・へっ。いいぜ、後悔すら感じない、絶望を味わいなぁ！」

ドン！ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ・・・・

応龍が飛び上がり、雷が唸り、輝きの中から巨大な龍が現れた

「それが真の姿か！さすがにでっかいねぇ！」

「応龍！やりすぎです！」

「黙れ！綺久羅美！このまま嘗められてたまるかよ！オレは最強の太転依、応龍だぞ！！」

「大丈夫だ。嘗めてなどいない。すごいと思うぞ。それだけの強さを安易に破壊なんかに使わない時点で、お前は十分に強さ手に入れている。だけどな」

「なんだ？言ってみろや！！」

「・・・だけど残念。オレの方がもっとすごい！（ビシィ！）」

「ぬかせや餓鬼がぁ！」

轟っ

応龍がその体で蒔風を押しつぶさんと突っ込んでくる。

「やっぱ、空飛んでて鱗があって、妖怪ならこの人でしょ」

シパン！

蒔風の手の中に笛が現れる
それを吹き、振るい、その身体を風が巻く！

「ぬぐ！？」

突進してきた応龍は、その風に阻まれてしまう

「変身中の攻撃は無効なんだぜ？・・・はぁ！」

スパァ！

そして手刀で風を断ち切り、姿を変えた蒔風が現れる！

「仮面ライダー威吹鬼」

「なんだそれは！？」

「気にすんなよ。はっ！（ドンドンドン！）」

「がっ！？・・・あん？なんだぁ！そんな豆鉄砲でオレに勝てるとでも・・・思ってんのかぁ！」

ババババババババ！

その口から雷が吐き出される！

蒔風は地面を転がりながらも、その電撃をかわしていく。

「うわぁ！くっそ、ぬわ！はっ！（ドンドン！）」

かわしながらも応龍にむかって打ちこんでいく

「効かねぇってんだよ！」

「いっ！？あびびビビビビビビビビ！」

「命中！どぉだぁ！もう終わりか！」

その電撃から解放され、立ち上がって蒔風が息を吐く

「なんちゅう電力だよまったく・・・だがこっちだって、無駄にパカパカ撃ってたわけじゃぁない！」

「あぁ？」

「（カチリ）音撃射・疾風一閃！」

ププー、パーパラパララリー、パラッパッパッパーーーーー、プァ！！

「な、ぐがぁぁぁ

「ちょっと待て。なんでここぞで叫ぶ名前がそっちなんだよ！」

「ツッコム余裕があるのかい。流石だな」

蒔風は感心しているが、実際応龍の体力は限界である。
立ち上がるのにも２０秒程かかった。

「もう終わりです。お腹減ったしご飯食べよーぜ」

「ここで折れたら、三強が泣くだろうが・・・」

「だけど～～～」

「（カッ）ぃ今だ！」

「んあ？うをあ！」

ババババババババババババッ！

応龍が蒔風の懐に入り込み、掴みかかった腕から確実に意識を奪える程の電流を流し込む。

しかし・・・

「優しいな、あんた」

「な！？」

「ここで本気の、殺せる程の攻撃でなく、オレの意識を奪う程度の電流にしてくれている。だけどな・・・」

「チイッ！」

「オレにゃ雷旺あるし、そもそも殺すくらいの電流じゃないと気絶しないぜ？」

ドッ

手刀を的確に応龍の後頭部にあて、意識を奪う。

倒れるその体を、蒔風が支える。

向こうから、ましろやアメリ、裕理らが駆け寄ってくる。

こうして、蒔風ＶＳ応龍の戦いは幕を閉じた

――――――

そこにはテント一式と、ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ！と書かれた看板が立っていた。

「ウソダドンドコドーン！！！」

「ま、蒔風？・・・」

「なんと言っているのですか？」

「あ、ああすまない。取り乱した。いや、なんか叫ばずには・・・ま、大丈夫でしょう！」

「空元気だよな？」

「・・・はい」

「蒔風さえよければ、家でねる？」

「そうですね！裕理さんを護るなら近い方が言いでしょうし！」

「（ズーン）ありがとうございます・・・・・」

そうして三人は家に戻り、裕理の父親に適当に説明し、蒔風は泊まらせてもらった。

タユタマ　～寝床が！？～（後書き）

ウロウロウロウロ

アリス「どうしたんですか？」

忘れてる設定とかないかな？

ア「知りません」

そんなぁ・・・・

みなさん！！わかんないことあったらドンドン聞いてくださいね！？

ア「この小説にそこまでする価値があるのか・・・」

なんであなたはそうやって自分の小説を卑下するんですか！？

もうちょっとくらいよいしょしてください！！

ア「だって私いないし」

それは仕方ないでしょ・・・

ア「ええ・・・もうそろそろ諦めてます
　終盤にあるという出番に期待しますよ」

そうしてください

ア「次回、「奴」が来ます」

簡単だな～

ア「あなたが言わせるんでしょ」

俺はちゃんと

「泉戸家で目覚めた蒔風。この世界でついに「奴」が動き出すその手段とは？放て！ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ！！」

ッてやってるじゃん

ア「毎回同じですよね？大体」

・・・・・・・

ではまた次回

ア「逃げんなぁーーー！！」

繋いだ手が離れずに祈る気持ちは　いつか誰かに伝わって

次の日、ましろたちが学校に行っている間、蒔風は掃除、洗濯と家事をこなしていた。

「泊めてもらってなんもしないのは嫌だからな」

そうやって午前の時間は瞬く間に過ぎていった。

裕理の父、裕導（ゆうどう）はなにやら集会やらで今日は家にはいないらしい。

ちなみに裕理たちが出かけたあとに、なにか気付いていたのか、裕導に詰め寄られてすべてを話してしまっている。

しかも「そうかい」の一言で信じてくれているのだから、ただ者ではない。

蒔風が神社の境内を掃いていると、応龍がやってきた。

「お前、いちいちそんなところまでやんのか？」

「んん～？」

蒔風はいま、境内に敷かれている石の隙間の小石をとっていた。

「暇なんだもん」

「だからってやるかよ」

「お前もアメリさんちの池ん中に住んでんだろ？そんくらいの掃除はするだろうよ」

「あんなもん仮住まいだ。いつか出てってやる」

「それでも今は住んでんだから、それくらいしなさい」

「うっせぇよ。そんな話しにきたんじゃねぇしよ」

「？」

「なぁ、お前の言う「奴」ってのは、お前と同じくらい強いのか？」

「オレが最強だ。あんな奴たいしたことない・・・と言いたいが、「奴」とオレの力の総量は同じだし、正直各世界での協力がなけり

ゃ勝ち続けらんないと思う」

「じゃあ「奴」ってのがこの世界のなにかを利用することは・・・」

「まぁあるな。今までもあったし」

「じゃあよ、この世界で利用されんのは・・・」

「太転依たちか？いやしかし裕理には退魔の霊能があるからいみないだろ？」

「あいつの心配なんかしちゃいねぇよ。オレは太転依が利用されないかが気になんだよ」

「さいですか」

「なんだ、その目は・・・ん？」

「どうした？」

「いや、なにか・・・」

「些細なことでも構わん。どうした？」

「太転依の・・・気とでもいうのか、なんか力が乱れてやがる」

「・・・確か太転依は命のエネルギーがそのまま形になった生命体だったな」

「そんなもんだが・・・」

「行くぞ応龍」

「あ？」

「「奴」だ！動いてやがる。手伝え！出来んなら結界頼めるか！」

「オレはそういうチマチマしたの苦手なんだよ。あのチビなら得意だ」

「チビ？」

「鵺だよ」

「じゃあ呼び出してくれ！急ぐぞ！」

蒔風も力の乱れを感じ取り、その方向に走り出す。

応龍も、鵺とましろにテレパシーで連絡しながら蒔風を追う。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「集まれ～集まれ～オレの～もとに～。ちょいちょいちょいちょいちょい、いよぅ！」

「奴」が訳のわからない踊りを踊っている。

正直気持ち悪い

「さてと、そろそろ十分かな？」

「奴」の周りには一面に弱った太転依が多く倒れていた。

「エネルギーもたくさんもらえたし、こんだけやったらあいつも気付くだろうし・・・ん？」

ブァァァァァ

空の色が変わり、「奴」の周辺一帯を結界が覆う

そこに蒔風と応龍が駆けてくる。

どうやらこの結界は、別のところから鵺が発動させたらしい。

「貴様、なにをしている?この太転依たちはなんだ!」

「応龍!蒔風さん!」

「あ、ましろさんに鵺・・・なんで裕理が来ている!危ないでしょ!」

そこに裕理がましろと鵺を連れてやってきた

「僕の事だ!!ましろや応龍、蒔風に任せて自分だけ安全圏にいるなんて、出来るか!」

それを見て、「奴」がぼやく

「愚かな主人公だな」

「なに？心掛けは立派だと思うが？」

「そもそも心配いらないんじゃないか？そいつは死なないんだろ？じゃあいいじゃねぇか。たくさんボコボコニさせてくれよ。」

「んなことさせるわけねぇだろうよ」

「それにだ・・・・そいつは皆死んでいく中で、どんどん先に行っちまう。そいつは共に生きる友人を捨てたような奴なんだよ！そういうくそ野郎がおれは嫌いだ。そうやってポイポイと自分の都合で周りを捨てるような最主要人物が嫌いなんだよ！！！」

「そんなもん、ただのお前の僻(ひが)みだろうが」

「うっせぇ！！！」

ゴバッ！

「奴」の鉄拳が唸る

そこで応龍が間に入るが、いとも簡単に吹き飛ばされてしまう

「応龍！」

応龍は木の根もとにぐったりと座り込んでしまった。

「ふぅぅ、やはり純粋な命のエネルギーたる太転依。素晴らしいな。あの三強の一角をいとも簡単に沈められるとは」

「あの子たちになにをしたんですか！」

「いやあ、エネルギーをギリギリまで吸わせていただきました。全部吸うと消滅しちまうから、調節に厳しかったぜ」

「全部吸わないのはなんでだ？いや、やってくれという訳じゃないけどさ」

「太転依の存在はこの世界の重要なピースだ。それが一斉に消えたら、世界構築の比率が変わっちまうだろ？」

「でも、こいつら死にかけてる・・・お前はこの苦しみがわからないか？」

「どうせこいつ殺せばオレの一部になるからな。前払いってとこだよ」

「お前・・・その利子、高く付くぜ・・・」

「はん！！・・・らあ！」

「奴」が波動砲を撃つ。

それを蒔風が拳で弾き、絶光を撃つ

「奴」も魔導八天でガードして、そのうちの一本を裕理に向かって投げつける。

空気を切り裂いて飛んでいくそれを、蒔風が獅子を投げつけ弾いた。

それを「奴」が空中で拾い、返す手で波動砲を放つ。

蒔風が獄炎砲でそれを打ち消すが途端、波動砲が分散し、裕理に向かっていく。

「裕理！！！」

「裕理さん！！！」

「くっ！はぁぁ！！！」

咄嗟に裕理がガードするが、護りの結界は砕け、命中してしまう。

「裕理さん！」
「八衢！！！！」

「う、あ・・・はあはあ・・大丈夫。これくらいならまだ治癒できるよ」

分散したことと、結界で一瞬止めたからか、致命傷には至らなかったようだ
しかし、裕理の中に疑問が残る

「でも・・・あいつ、太転依の力を利用しているのに、僕の能力じゃ消せないのか？」

それに「奴」が答える

「当たり前だ。オレのエネルギーと混ざり合ってんだ。まあ多少は打ち消されちまうが、完全には消させねぇ。前の世界じゃ混ざってミスったが、今回はそうはいかない、よっ！」

ビュン！

「奴」が再び魔導八天を投げつける。

しかし今度は

その場にいる裕理、ましろ、鵺、応龍の四人同時にだ

「防げるか！？なぁ！」

「クソ！開翼！」

蒔風が銀白の翼を拡げ、動き出す。

応龍、鵺に迫る剣、計四本を走り抜けざまに畳返しで防ぎ、ましろに迫るのを蹴り飛ばす。

しかし「奴」のパワーが乗ったそれは、蹴りの反動で蒔風を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた蒔風が大木にぶつかり、その木を薙ぎ倒す。

裕理に剣が迫るまで、あと０．７６秒

蒔風はその翼を羽ばたかせ、飛び出していく。

その速度は、銀の輝きを引き、一筋の流星と化した！

ヒュヒュゥァ、ドッ！ザザシュ！

蒔風は間に合った

裕理に迫る二本の剣を

自らの身体に突き刺さらせることで阻止する形となったが

これらの動作は一瞬の出来事であった

ほかのものにしてみれば、急に蒔風が裕理の前にいて、いきなり剣が二本も突き刺さっていたのだから、驚きが隠せない。

「蒔風ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「はっは！終わらないぜ！フン！」

「奴」が蒔風に向かい、拳をグッ、と握る

すると蒔風に弾かれた他の魔導八天が宙に浮き、蒔風に向かって飛び出した！！

「う、な、ぁ・・・え〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！」

ガギギギギン！！

それらすべてを蒔風は天馬と麒麟で叩き落とす。

そして自らに刺さった二本を抜き、天馬、麒麟を構えるが、すぐにその場に倒れてしまう。

「蒔風、さん？」

「蒔風・・・蒔風ええええええええええええええ！」

「やった?やったのか?・・・はは、やった、やったぞ!オレは、オレは勝ったんだ!殺した!オレの勝ちだぁぁぁぁぁぁ!!」

「てんめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

応龍が「奴」に向かい走り出す

しかし、それはいとも簡単に弾かれてしまう

「がっぁ・・・」

「応龍!ッ!貴様ぁぁぁ!!」

「熱くなるなよ泉戸裕理。人の死なんて、お前が悠久の時を生きるなら、いくらでも目にするだろうよ。貴様は友人が先に死んでいくのを眺めて生きていくつもりなんだろ?こんなひとつの死でグダグダゆーなや」

「違う!僕は・・・」

「違わねぇゃ。お前は友と生き、そして死んでいくのを拒んだんだ!そんな野郎がいちいち悲しむな!」

「そ、それは・・・僕はッ・・・・」

「泉戸、裕理の・・・・生きる覚悟を、そんな・・・クズみたいなもんと・・・・・一緒に、すんな・・・・・」

「蒔風！」

「こいつはな・・・・たしかに、多くの人達と出会い、通り過ぎていって・・・・しまうだろう。他の人を、置き去りにして・・・・・・しまうだろう」

「だが、こいつはそいつら、を・・・・忘れない。これまでの時間を、今この・・・・瞬間を、これから先の・・・・・・新たなる出会いと別れを！こいつは、忘れない・・・絶対に！こいつは愛する者のために、すべてを背負う覚悟を・・・・・・したんだ！」

「自らの世界に見切りをつけて、自分で断ち切った貴様に、こいつを嗤う資格はない！！！」

「なん・・だと?」

蒔風が立ちあがり、祈りのように謳う

――――――願いを――――――

「??」

――皆の願いを。我、銀白の翼人。司りしは人の願い。その想いを我が糧に。その想いこそがすべての源!!!――

「これは・・・」

「輝ける希望を!!!」

バサァ!!!

その背に再び翼が舞い、蒔風を光が包み込む!!!!

「皆の願いを!!!」

ギュアアアアアア！！！！！

・・・・・・ツッパアアア！！！！！

光がはじけ、蒔風の周りに粒子となってドーム状に覆う

そこに立つ蒔風は、すでにその身に傷はなく、完全に回復した姿があった

「バカな・・・あれだけの傷・・・・どうやって・・・・」

「皆の願いが・・・オレに力をくれる」

「な・・・・」

「忘れたのか？俺は銀白の翼人。願いを司る翼。お前を倒してほしいと願う裕理たち、そしてそこの太転依たちの大きな願いが、この力の源だ」

「お・・・ま」

「まあ、使い方は基本的には全回復ってくらいにしかまだ使えないが・・・・」

「死ねえ！！！（バウッ！！！）」

「（バチぃ！！）見せてやるよ。この俺の、本当に全快の時にしかできない大技を・・・・」

「奴」が波動砲を撃つが、取り巻く粒子がそれをはじくと同時に、粒子も弾けて消えてしまった

「龍虎雀武、獅子天麟！！！！」

ドスッ！！フィィィィィィ・・・・

それぞれを組み合わせ、獅子天麟を大地につきたて、その上に天使の輪のように龍虎雀武を浮かす。

「出でよ、神代の二柱・・・・応龍！！鳳凰！！」

「応龍に・・・鳳凰だと！？」

「ああ、お前らとはまた別もんだぞ？お前らの名前は、伝説にあったものからとられたんだろうが、こいつらはその大元の、伝説の応龍、鳳凰そのものだからな」

ＧＩＧＡａａａ

ＦＵＲｕｕｕ

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが発動し、ましろの髪がすべて白く変わり、巨大な槌が現れた。

そこに「奴」に奪われた太転依たちの力が流れ込む。

「す、凄い力です！！！」

「こんなエネルギーを操ってたのかよ・・・・」

「まだまだのはずだろ？」

そして次にましろ、応龍、鵺、上空を飛ぶ鳳凰、そしてここにはいないゆみな、アメリ、美冬までもの力が流れ込んでくる。

「どうだ？これが皆の力だ。人間も太転依もねぇ、この世界を守る意思は、変わらない！！！」

【ＴＡＹＵＴＡＭＡ－Ｋｉｓｓ　ｏｎ　ｍｙ　Ｄｅｉｔｙ－】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

「いっけぇ！！！裕理！！お前の覚悟を、その願いを！！！」

「この・・想い！！！皆の力に、皆と一緒に！！！」

「叩きこんでやれ！！！」

「くらえええええええええええ！！！！！！」

ドムッ！！！ゴアッ、バァァァ・・・・ッッッ！！！！ドゴァァァァァ！！！！！！！！

消える体で「奴」が言う

「ぎ、あ・・・・絶対なんてことは・・・絶対にないぞ・・・・蒔風・・・そいつはいずれ・・・・いろんなことを忘れるぞ・・・・・」

「ああ、そうだな。絶対なんてない。だがそれでも「絶対」と言っている奴はな、なにがあってもやってやるという覚悟を言ってんだよ」

「“絶対”なんてない。ただ、“絶対”という名の覚悟があるだけさ」

「・・・貴様の“絶対”が・・・・どこまで続くか・・・楽しみだな・・・」

「オレが勝つさ。いつまでもな」

シュウウウ

「どうした、応龍」

「今度こそは決着をつける・・・だからまた来い。次はオレが勝つ」

「・・・ップ、あはははははははは！！！！」

「なんだよ。お前らも！！全員で笑ってんじゃねえ！！」

「ひっひっひっひっひ！！あーっはっはっは、うひひひひひ！！！」

「笑いすぎだ！！てめえ、今すぐ決着付けようか！！」

「ああ、すま、プグッ！！グッフ、ククククククククク！！！」

「おい・・・大丈夫か？」

「いや、自分が笑ってくことに対して。「なんで俺のこんなに笑ってんだｗｗｗｗｗ」ってなってツボった」

「だめだな・・・なんか」

「いや、そうだな。また会えるかもだもんな！！じゃ、行ってくるわ。ゆみなさんたちによろしく」

「はい。ありがとうございました」

「蒔風、本当にありがとう」

「ああ、んじゃな」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ＴＡＹＵＴＡＭＡ］

――――――

タユタマ　～願いの翼～（後書き）

タユタマ編、終了です！！

蒔風「いや、大変だったよ」

アリス「大怪我してましたからね」

【タユタマ－Ｋｉｓｓ　ｏｎ　ｍｙ　Ｄｅｉｔｙ－】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”１５％
　　”フォルス”８０％
　　”ＬＯＮＤ”５％

最主要人物：泉戸裕理

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：ましろの大槌に皆の力を集める

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：それを最大の威力で相手にぶちかます

さて、みなさんに最初に言っておきます。

次は龍騎の世界です。

ア「言っちゃうんですか？」

蒔風「説明しなきゃなんないことがあるからな」

はい

龍騎本編（ＴＶシリーズ）で戦いが終わりましたね。

そのあとが少しオリジナル入ってます

私の考えでは

最後の願いで、願われたことは、「ライダーバトルがなかったことに」としております

ア「だから最後に皆が生きていたけど、神埼兄妹は出ていなかった、と」

蒔風「神埼って誰？というのは次回でなるべく紹介していくからな！」

それと今回の新技を

蒔風はその世界の皆の願いのエネルギーをその翼で受け取り、己のエネルギーにできます。

これは翼人ならだれでもできることです

ア「まあ、翼人の数自体かなり少ないんですよね？

なかには、勇気や、絆といったものをエネルギーにする者もいるとか」

蒔「そして、応龍、鳳凰だな？」

あの召喚は特別でして、蒔風の体力気力共に全快でないと使えません

ア「つまり十五天帝なんか出した後だと？」

使えません

蒔「パンチ一発でも？」

使えないです

だから使いどころが難しいんですよ。

毎回毎回あんな願いを集めていられませんしね

ちなみに青龍たちの大まかな大きさは三～四メートルくらいですが、この二匹はゆうに十二メートル程あります。

ア「でかいですねえ」

蒔「そろそろ予告でしょ？」

ア「では・・・嘗て戦い、勝利した男に出会う蒔風。しかし肝心の最主要人物がそのことを見な忘れていて！？」

ではまた次回

戦わなければ　生き残れない

龍騎　～記憶のない戦いの記録～

オレが世界に降り立ってから、すでに二日が経過していた。

最主要人物の名は城戸真司
その名を調べてわかったが、どうやらＯＲＥジャーナルという出版社に勤めるジャーナリストのようだ。

更にわかったことは、かつてミラーワールドといる鏡の中の世界で１３人もの仮面ライダーが最後まで勝ち抜けば願いが叶うと、己の願いをかけてバトルロワイヤルを繰り広げた。
そして彼は仮面ライダー龍騎として戦った。

しかしそれを本人に尋ねたら

「かめんらいだー？ミラーワールド？なんですかそれ？あ、うちに投稿する方ですか！」

という反応だった。

彼が生きているならば、彼が優勝者じゃないのか？
なぜ忘れているのか

そういうわけで彼を尾行している

・・・・・・・・・・・・・

おっと喫茶店に入ったようだ

喫茶店の名は花鶏（あとり）。
小さいが雰囲気のいい店だ。

そこで城戸さんはコーヒーを頼むが、紅茶しかないと言われ、紅茶を頼む。

紅茶は苦手だがなにも頼まないのは不信に思われるのでオレも一応頼む。

城戸さんが紅茶を飲み終わり、喫茶店を出る。
オレも勘定を済ませ、店を出ようとする。

が、入れ代わりで入って来た男に肩を捕まれ、留められてしまう。

「おい貴様。何故城戸をつける」

「・・・・ほぉ」

どうやらオレが城戸さんをつけていたのに気付いていたらしい。

この場ではなんなので、場所を公園に移す。

「で、なんでオレがあの人をつけてると？」

「一昨日と昨日、城戸を花鶏で見た時に、お前塀の外から中を窺ってただろ」

どうやらこの男、秋山蓮（あきやまれん）は花鶏に住み込みで、と言うより、居候しているついでに店を手伝っているらしい。

そりゃ気づかれるな。

にしても厳つい眼してんな

「あー、じゃあ城戸真司さんの知り合い？」

「ああ。ま、あっちは知らないが・・・」

「？まあいいや。なあ、仮面ライダー、もしくはミラーワールドという単語を知っている、かぁ！？」

その質問にたいして、蓮がいきなり蒔風につかみ掛かってきた。

「お前、どこでその言葉を知った」

「放して放して！！！・・・ふう、知っているんですね？そのことを。では、城戸真司が仮面ライダー龍騎であることは？」

「！（カチャ）」

蓮が手の平に収まるくらいの黒い名刺入れのような物を取り出して構える。

「ん？ああ、それがライダーデッキか。あんたもライダー・・・・ふむ、ナイトか・・」

「貴様・・・どこでそれを知った!!!何者だ!!」

「説明します。しますから落ち着いてください」

ーーー

「・・・・・・」

蓮が訝(いぶか)しげな表情をしながらも説明した

１３人のライダーバトル
多くの人間がその戦いで命を落とした。

ある者は愛するものを救うため。
ある者は邪魔者を消し、利益を得るため。
ある者は戦いを楽しむため。
ある者は自らの命を救うため。
ある者は戦いをやめさせるため。
ある者はゲーム感覚で。
ある者は英雄になるため。
ある者は復讐のため。
ある者は楽な生活のため。
ある者は満たされるため。
ある者は妹を救う男の指示で。
ある者は自らを確かな存在にするため。
ある者は人を守り、戦いを止めるため。

熾烈な戦い、苛酷な潰し合い。

様々な想いと力が入り乱れ、秋山蓮・仮面ライダーナイトはライダ

ーバトルに勝利した。

そして願った

「ライダーバトルがなかったことに」

・・・と

どうやら蓮の願いは昏睡状態の恋人を復活させることだったらしいが、その原因がライダーデッキなどを作り出した科学者の実験だったそうだ。

故に彼らはすべてを忘れて蘇った

いまは共に戦ったもの、潰しあった者のことを忘れ、生活している

蓮だけは勝利者だったので、記憶もライダーデッキも持っている、というわけだ。

「そうか・・・・ん?」

「・・・・!」

蒔風と蓮が何かに気付いた。
癇(かん)だかい音が頭に響き、なんらかの脅威が迫っていることを知らせる。

「この音は・・・・」

「ミラーワールドのモンスターが近くにいる証拠だ。しかし・・・ああ、ライダーデッキを触ったからか」

ライダーでない者も、ライダーデッキに触れることで、ミラーワールドのことを知覚できるようになるのだ

「らしいな。ってか、じゃあモンスターが！」

「（コクッ！）」

蓮が厳しい表情で頷く。

「方向は・・・こっちか！」

その方向は・・・・

「城戸が向かった方向だ・・・・（バッ）」

蓮と蒔風が走り出した

その気配の先に、戦いがあると知って。

to be continued

龍騎　～記憶のない戦いの記録～（後書き）

前回も言った通り、このようになっています

アリス「ご都合主義ですね」

こうでも解釈しないと・・・・

ア「まあ私としては文句はありません」

最近小説活動が楽しくなってきた

ア「やっとですか！？」

早く世界を回り切りたいなー

ア「当分先でしょう。めぐる世界は３０以上はあるんですから」

それにめちゃめちゃ長くいる世界もあるしねー

ア「そうなりますかね」

まだまだ旅は続きます

ア「次回、蒔風は城戸真司のもとに駆け付ける。そして・・・」

ではまた次回

人を守るためにライダーになったんだから、ライダーを守ったっていい！！

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

城戸さんのものと思われる悲鳴が聞こえる。

ショーウインドーのガラス
そこの前で異変は起こっていた。

そこに駆け付けると、いま正に蜘蛛の化け物・ディスパイダーが城戸さんをガラスの中に引きずり込もうとしており、たどり着いた瞬間に城戸さんがガラスの中に消えてしまった。

ミラーワールドは鏡でなくても姿が映り込むなら構わないらしい

「今のが！？」

「ミラーモンスターだ（バッ！）」

キィィィン、カシィン

蓮がガラスにライダーデッキを向け、ベルトが腰に現れる。
そして構えをとり

「変身！」

カシュッ、キィィィ・・パリィ！

デッキをベルトに挿入し、仮面ライダーナイトに変身する。

「お前は？」

「多分行ける」

蒔風がミラーワールドに向かう意思を持ちながらガラスを触ると、
指が入りこんだ

「（ライダーでなくても行けるとは・・・異世界の者というのは
本当かもな）」

「どうした？」

「いや、行くぞ！」

バシュ、バシュン

鏡の中に二人が突撃する

その姿を見たものはいなかった。

――――――

そう思い目をつむるとそんな機械音が聞こえてきた。
目を開けると、目の前に今度は蝙蝠の化け物が現れた。
「なんなんだ！なんなんだよ！？」
しかしそいつはオレを庇うように飛び回る。
「城戸！大丈夫か！？」
後ろから二人の人影が走ってきた。
一人はこないだ来た人だ
だけどもう一人は変な格好していてわからない
「蒔風、城戸を連れ出してくれ」
「おぅよ。城戸さん、こっちに」
なにがなんだかわからないうちに、さっき襲われた場所にまた鏡を通って戻って来る。
「大丈夫ですか？」

「はぁ、はぁ。なああんた。あれはなんなんだよ・・・教え・・・っつう！」

「いませつめ・・・どうしましたか！？」

なんだ・・・頭が・・・・・痛い？

違う・・・・オレはこの光景を知っている？

「が、ぁ・・・・・」

「城戸さん？城戸さん！」

うるさい

少し黙っててくれ・・・・

デッキ・・・ライダー・・・戦い・・止める・・・龍騎・・・・・蓮・・・

手の平に何かが現れる

「それは・・・ライダーデッキ！？」

隣の・・・蒔風が驚きの声をあげている

ああ、わかったよ・・・
そういうことか・・・・・・・・
ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

城戸さんが立ち上がる
デッキをガラスに向け、構え

「変身！」

ベルトに挿入し変身した

仮面ライダー龍騎
人を守ると願ったライダーが！！

そして龍騎はガラスに向かう

戦いの場に
友のもとへ

――――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　蓮

「ぐ・・・ハァ、ハァ・・つ、強い・・・」

このモンスターはこんなに強かったか？

力も動きも違いすぎる！

ギシュウウウウウ！

蜘蛛らしく八本の脚で次々と襲い掛かって来る

「クソッ！」

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

デッキからカードを取り出し、剣型の召喚機、ダークバイザーに挿入する

そうすると、蝙蝠型の契約モンスター、ダークウィングがもう一本

の剣、ウィングランサーを手渡してくる

それをも使い、二刀で受けていくが、間に合わない！

このままではやられる！

―Ｔｒｉｃｋ　Ｖｅｎｔ―

トリックベントで分身を三人作り出し、そいつらに任せ猛攻から抜け出す。

しかし分身はいとも簡単に掻き消され、再びモンスターが迫る

これしかないな・・・

フォン

デッキからカードを取り出し、ダークバイザーに挿入する

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

「ふっ、はぁっ！！」

一気に飛び上がり、剣を真下に、脚に添えるように構えモンスター

に向ける。
そして契約モンスター、ダークウィングがマントと化して背中に付く。
そして身体をドリルのように覆い、敵を貫かんとする。

飛翔斬
いままでもこの技で多くのモンスターを、敵を貫き撃破してきた。

しかし

ギシャァァァァァ！
プシァァァァァァァァァ！

ディスパイダーが糸を吐くいてくる

その程度の糸、飛翔斬の回転の前には無力だ。
当たったところで散らして終わりだ。

しかしこのモンスターはやはり、普通のものとは違った。

真正面ならばナイトに効果などなかっただろう。
しかし糸は、真正面を逸れ、側面に当たる

糸を弾き飛ばせずに、自分から糸を巻き取ってしまい、大地に墜ちる。

「な・・・グァァ！・・・・ッガ！こいつ、本当にただのモンスターか！？」

普通のモンスターならばこんな戦法をとることなどない。

しかし、そんなことは些細な問題であった

いま正に蓮は死を覚悟した

しかしその瞬間

－Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ－

ドゴァァァァ！

炎の塊がナイトに迫るディスパイダーを弾きとばす。

蓮は首を回し、炎の来た方向を見た。

そこには、赤き龍がたたずんでいた。

そしてそれとともに幾度となく見てきた、あのライダーが歩いてくる。

秋山連が、唯一友と呼べる男が！！！

「り、龍騎？・・・・・城戸ぉ！！」

コクリ

龍騎は言葉を発さずに頷くと、カードを取り出し、左腕の召喚機・ドラグバイザーに入れ、スライドさせる。

－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－

龍騎が構え、腰を落とす。
ドラグレッダーが龍騎を囲むようにまた、力を溜める。

「ふっ、おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

そして高くジャンプし、ドラグレッダーもそれに合わせ、回りながら上昇する

頂点に達し、龍騎が蹴りの体勢をとり、ドラグレッダーはその龍騎に炎を吐きつける！

龍騎が烈火に包まれ、眼前の敵に迫る！！

モンスターが糸を吐きかけるが、すべて炎に焼き尽くされる
更に八本の脚で防ごうとするが蒔風が放った紅い光球が飛んできて、
その脚を粉砕する

そしてファイナルベント・ドラゴンライダーキックが炸裂し、ディ
スパイダーを爆発と共に消し去った

――――――――――――――――――――――――――――――――

戦いが終わり、ミラーワールドから出てきた三人。

「城戸・・・お前・・・」

「蓮。オレ、全部思い出したよ」

「何故だ・・・何故記憶が戻った？」

「世界が必要だと判断したんだろう」

「世界が？」

「「奴」という存在に立ち向かうために、失われた力と記憶を戻したんだろ」

「うん、そうみたいなんだ。蒔風のことは記憶が戻った時に知った・・・にしても蓮」

「なんだ」

「あんな風にライダーバトルを終わらせるなんて、オレは思い付かなかった。ありがとうな。おかげでオレも・・・」

「ふん、オレは恵理が一番喜ぶ結末にしただけだ。お前らのことは、ついでだ」

「フフッ、そうかよ」

「で、早速だが・・・」

「あ、待ってくれ蒔風。どうやらもう一人記憶と力が戻った人がいるみたいなんだ」

「なんとまぁ。誰ですかい？」

「城戸・・・まさか・・・」

「あぁ。多分蓮が思い出してる人と一緒だと思う」

「その人は？」

「北岡秀一。弁護士だ」

――――――

to be continued

龍騎　～蘇る記憶～（後書き）

さて、ここで龍騎系のライダーの説明をしましょう

彼らはカードを使って戦うライダーです。

カードをそれぞれのライダーの持つバイザーにベントインして読み込ませ、その能力を発動させます。

アリス「アドベントとか、ソードベントとかありましたね」

アドベントは契約モンスターを召喚するカードで、ソードベントはまんまソードを装備するカードです

ア「ちなみに契約モンスターとは・・・各ライダーは何らかのモンスターと契約して力を得ており、そのモンスターはまちまちです」

龍騎ならドラグレッダー、ナイトならダークウィングですね

ア「あと、トリックベントはナイトだけのカードで、分身を作り出します」

ストライクベントは手甲状の武器を装備するもので、龍騎の場合は火炎を相手にぶつけます。

ア「このくらいですか？」

そうですね

ア「こっからハッチャケていきますよ！！！」

ウェーーーイ！！！

ア「次回！！！最初の荒れくれライダーが動き出す！！！！」

いきなり切られたヤッホイ！！！

で～はま～たじ～かい～～

戦え！！それがライダーとなった者の宿命だ！！

龍騎　～復活の狂戦士～

「北岡法律事務所」

有罪を無罪にする男と言われる弁護士、北岡秀一の自宅兼事務所である

大きな窓ガラスを背に、デスクに座るスーツ姿の一見すると気さくで社交的な男、北岡秀一が口を開いた。

「で、また戦うっての？」

事務所を訪れた蒔風、城戸、蓮の三人に、北岡は渋い顔をして言った

「まったく、思い出さなくてもいい面を思い出しちゃってうんざりしてるのに、しかも世界の崩壊？勘弁してよ。ね、ゴローちゃん」

北岡が傍らに立つ、秘書である由良吾郎に話し掛ける。

彼もどうやら関係者として、記憶が戻っているらしい

北岡秀一

かつて仮面ライダーゾルダとして、不治の病に侵された自分のために永遠の命を望み戦った男である。
ライダーバトルがなかったことになり、その病も残るかと思われたが、どうやらそれすらも無くなってるらしい

「ま、あいつも刑務所にいないみたいだし、そんなもんでしょ」とは北岡の談

そして由良吾郎
北岡秀一の秘書兼ボディーガードを勤める。
かつて北岡に裁判で救われたことから、先生と呼び慕い、ライダーバトルでは北岡の私生活のサポートをした

「ま、たしかにお前には、結果的とは言え病気の件で借りがあるわけだし・・・それに世界が壊れちゃ人生楽しめないしね」

「それはなによりだ」

「ところで・・・そっちが蒔風舜かい？ヒョロッちいねぇ、ホントに戦えんのかい？」

確かに蒔風は少しばかし細身である。
しかも着痩せするタイプで、初対面ではそこまで強くは見えない。

「大丈夫だ。奴の実力は本物だ」

珍しいことに蓮が他人を高めに評価する
ならば大丈夫だろうと北岡も納得した。

「で？城戸が狙われるんだって？なんでまたこんなやつが・・・・」

「なんだよ・・悪いかよ」

「いや、ある意味適任かもな」

「ま、確かに。厄介ごとを背負い込むって意味ならこれ以上の適任はいないな」

「チェッ、やっぱこんなんかよ・・・お前らやっぱ嫌いだ～！」

久しぶりに話すので話題は尽きない。

が、そこにあの耳鳴りに近い音が響く。

そして部屋に立てかけてあったガラスから、モンスターのものと思われる溶解液が吐き出された

それは北岡の座っていた椅子に向かい、北岡はとっさにかわした。

溶解液は誰もいない椅子とデスクを瞬時に溶かし、元がなんだったのはもうわからなくなってしまった。

「先生！大丈夫ですか！？」

「ああ、ゴローちゃん、大丈夫大丈夫」

「城戸、北岡！」

「いちいち言わなくてもわかってるよ」

「よし・・・行くぞ！」

ババババッ

『変身！！』

三人が変身し龍騎、ナイト、ゾルダのライダーが揃う。

「ふっ」

「はっ」

「っしゃあ！」

三人がミラーワールドに飛び込み、蒔風もあとに続く。

――

モンスターの気配を追い、ミラーワールド内の廃工場にたどり着いた
そこには人影がユラ～っと立っていて、こちらを見据えていた。
その顔は仮面で覆われ、表情は確認できないが、その視線には確実に殺気が含まれていた。
そしてその姿が明らかになると三人は驚愕した
「「「！！！！！」」」
「？どうしたんだ？あれは・・・ライダーか？」
そう、ライダーだ。
紫を基本としたカラーで、契約モンスターの形状であるコブラを模したライダーがそこにいた
何人ものライダーを葬った男が、そこにいた。

「王蛇・・・だと?」

「貴様、まさか・・・」

「浅倉ぁ!!」

「はぁぁぁあ・・・北岡ぁ、てめぇとの決着をつけてやる・・・」

浅倉威(あさくらたけし)

かつて仮面ライダー王蛇として戦った男。

しかし願いなどなく、ただ戦いを楽しむために戦った、戦闘狂。

その凶暴性は留まることを知らず、放火、殺人、強盗と、その犯罪歴を挙げればきりがない。

家族すらも自ら放った炎で殺している。

しかもその理由が「イライラしていたから」といい、蓮や北岡に「人間じゃない」いわしめた男。

その罪は北岡すらも無罪に出来なかった。

浅倉はそのことで北岡に逆恨みをしており、それ以来ライダーということもあり、執念深く襲ってきた。

「なぜだ・・・何故浅倉にライダーの力と記憶が戻っている!?」

「はっ、わけのわからん奴がイラつきを消す方法があるとかなんとか言ってな・・・だがそんなことはどうでもいい！北岡と・・・あと戦いをなくしやがった秋山とか言う貴様をぶっ殺す・・・戦え・・・戦え！！」

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

王蛇が杖状の召喚機、ベノバイザーにカードをベントインし、コブラ型の契約モンスター・ベノスネーカーの尾を模した黄金の突撃剣・ベノサーベルを振り回し走ってくる

「おらぁ！！！」

「クソっ！！」

「チッ！！」

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

－Ｓｈｏｏｔ　Ｖｅｎｔ－

ナイトがソードベントで剣を、ゾルダがシュートベントでキャノンを取り出し、応戦する。

「くっ！！連！！北岡！！」

「城戸さん！！俺たちも・・・・・」

「お前らはこっちだ・・・・・」

カツン、カツン、カツン・・・・

黒い影が現れた。

そのシルエットは龍騎と全くと言っていいほど同じものだった。

しかし、そのボディは黒く、龍騎とはまったく違っていた。

「お前は・・・龍騎！！？？」

「いや、違う・・・・その姿・・・・・リュウガか！！！」

「リュウガ？」

「そうだ！！先のライダーバトルで、貴様らと遭遇することのなかったライダー。それをこの俺が世界の記憶を読み出し、このデッキを復活させた！！！」

―Ａｄｖｅｎｔ―

「奴」が、リュウガがアドベントで黒龍・ドラブラッガーを召喚する。

―Ａｄｖｅｎｔ―

龍騎も同じようにドラグレッダーを呼ぶ。

龍と龍とがぶつかり合い、グルグルと回りながら応戦する。

―Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ―

―Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ―

「こっちも行くぞぁ！！」

「はぁ！！」

「ちぃ、獄炎砲！！！」

龍騎とリュウガのストライクベントにより、業火が繰り出され、蒔風の獄炎砲が龍騎を後押しする。

しかし・・・・

「このオレが！！基本スペックは龍騎を上回ったリュウガに変身し！！放ったこの技！！！その程度で崩されッかァァァ！！！」

「「うぁぁぁぁぁぁッ！！！」」

二人の炎が徐々に押し戻され、ついにリュウガのストライクベントをくらってしまう。

ナイトとゾルダも、ただえさえ浅倉の驚異的な戦闘能力と身体能力で性能が上がっており、さらに「奴」によって底上げされている王蛇に非常に苦戦していた。

「はぁ、はぁ・・・・」

「ふぅ、ふぅ・・・・・・・ッ！！」

―Ｆｉｎｅｌ　Ｖｅｎｔ―

ソルダがファイナルベントを発動させる。

エンドオブワールド

契約モンスター・マグナギガの全身から放たれるミサイルやレーザーによって敵を一掃するものだ。

その爆発は、まさに世界の終わりといわれる程で、一面を一気に爆発で巻き込むのである。

それを王蛇に放った。

ゾルダもナイトもこれで終ったと確信した。

確かに終わっていたかもしれない

王蛇の性能が「奴」によって上げられてなければ

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

王蛇がファイナルベントを発動

空中からベノスネーカーの毒液の勢いを乗せて放つ必殺の連続蹴り・ベノクラッシュを放つ
バタ足のように脚を振るい、その連蹴りで多くのライダーの命を奪った。

そして王蛇は・・・浅倉は信じられないことをした

マグナギガの放つミサイルを、その蹴りですべてはじき返したのだ!!!!

「なっ!?ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」
「うぐぁぁあああぁぁあああああ!!!!!」

二人の体が宙を舞い、数十メートルまで吹き飛ばされる

マグナギガの放つミサイルは総数は三十近い。
それをすべて蹴り返すほどの性能もパワーも、たとえ王蛇でも持ってなかった。

恐るべきは「奴」による強化か
本来覆されくことのないものを、覆してしまったのだから

「蓮！！！北岡！！！」

「今助けに・・・なに、動けな・・・」

二人が王蛇によって吹き飛ばされるのを見て、助けに行こうとするが、その場から動けない。

足元を見るとリュウガの炎が固まり、蒔風と龍騎の足を固めていた。

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

「まずい！！！」

「くそっ！！外れろぉぉぉぉぉ！！！」

リュウガの身体がが宙に浮き、飛び蹴りの体勢をとる。

そして後ろからドラブラッガーが炎を吐き出し、急突進してくる！！！

「おおおお！！！」

バギン！！！

蒔風が力任せにその拘束を解く。

そして「火」で龍騎の拘束も砕く。

だが間に合わない、リュウガはすでにその眼前に迫っており・・・

ゴォ！！ドッがぁぁアぁぁ！！！！！

蒔風と龍騎が吹き飛ばされ、爆炎に覆われる。

「やったか？・・・・・」

煙が晴れると、そこには四人の姿はなかった。

「逃げられたか・・・・・」

「おい・・・あいつら逃げたぞ・・・このイライラをどうしてくれる！！！戦ってないと・・・ドンドンイライラしてくんだよ！！！」

「次で終わるさ。あいつらも無傷じゃない。むしろかなりの怪我をしただろう。次で・・・・終わらせる」

「すぐに追って・・・そして、祭りを始めようぜ！！いま、お前と始めてもいいんだぞ・・・」

「待てよ。オレが世界を再構築できれば、ずっと戦いの続く世界にもできる」

「わすれるな・・・・」

「ふふふ、さて。奴らはどこに逃げたのか・・・・ひっひっひっひ、くくく、かかかかかかかか！！！！！」

二人のライダーも、廃工場から消える。

狙った獲物を追い続ける・・・・・

ーーー

「とりあえず俺は「奴」とぶつからないとなりません」

「王蛇は・・・・」

「俺と北岡、城戸でやる。いけるか？」

「オレに指図しないでちょうだい。でも、浅倉とは決着付けたかったし、いいよ」

「でも、どうやって勝つんだよ！」

「俺はまだ切札を使ってない。勝機はまだある」

「じゃあ、オレが「奴」を相手してるあいだに三人が王蛇を・・・」

「ああ」

「ふ。まぁ、俺一人でもいいくらいだ」

「なに言ってんのよ。オレが決着付けるんだから」

「とりあえず怪我を治さないと」

「ここは浅倉も知らないから、しばらくは大丈夫だ」

「当然「奴」も知らないはずだから、ここで傷をいやしてから・・・だな」

「あ、ゴローちゃんに来るように言わなきゃ」

北岡の事務所は浅倉に知られている。

北岡は吾朗を呼び出すために、携帯を取り出した。

城戸は蓮に包帯を巻き、蓮と蒔風は対策を講じる。

しかしいずれここも「奴」にばれる

刹那の休息

どこまで回復できるのか・・・・・

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

龍騎　～復活の狂戦士～（後書き）

ふう、最近暑かったり寒かったりで大変ですね

アリス「そうですね。でも最近は暑くなってきて夏って気がしますね」

夏といえば祭りだ！！コミケー！！

ー祭りの場所は・・・ここかぁ？ー

ア「今何か聞こえましたよ！？」

気のせいさ

ア「なんかここ怖くなってきてる・・・いつの間にか壁に得体の知れないものかかってますし」

ああ、あれ？あれはある筋肉自慢からもらったバーベルで叩きつぶした壁だよ？

ア「形がぐしゃぐしゃで逆にインテリアかと思いましたよ！！」

逆に、ってことは普通にひどいってことだよね

ア「・・・・はい」

あそこは後で直すからいいの

ではどうぞ

ア「ついに見つかる蒔風たち、そして戦い。今回のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは？」

ではまた次回

そこに正義などない。あったのは、ただ純粋な願いである

龍騎　～願いのカード～

あれから四日

蒔風たちは今も花鶏に隠れている。

もちろん食材などの買い出しには行くが、最新の注意を払っている。

この店のオーナーはちょうど四日前、蒔風たちが敗北したあたりでアマゾンに旅行に出たそうだ

今のところ、「奴」や浅倉の姿を確認はしてないし、されてもいない。

「ふう、大体の怪我は治ったな」

「しかしどうする。いつまでもここに隠れてることはできないぞ」

「こっちから打って出るか？」

「あっちがどこにいるのかわからないのに？」

・・・

「鏡から離れろ！！」

ダンッ！ゴロゴロゴロ、バシュッ！

蒔風たちが咄嗟に鏡から距離をとると、ベノスネーカーとドラブラッガーが飛び出してきて、直ぐに戻って行った。

「見つかったか・・・」

「行くぞ！」

「「「変身！！」」」

三人が変身し、蒔風が構え、ミラーワールドに向かった。

――――――

「来たかい。ならやろうか・・・・」

「さあぁ！祭を始めようか！」

「手筈通りに。オレが「奴」を」

「オレたちは浅倉をやる」

「では・・・行くぞ！雷旺掌！！」

頭上に大量の雷旺が集まり、それがリュウガと王蛇に向かって落ちる。

一瞬、二人の動きが止まる程度の攻撃だが、その間にそれぞれの相手に向かっていくことができた。

「三人掛かりか・・・・いいぜ、楽しめそうだ！だが・・・」

「城戸！」

「気に食わんがこうしないとライダーの力も記憶も無くなっちまうからな・・・貴様は邪魔だぁ！！」

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

ガッ、ゴガッ！
ガシッ、ブンッ！

「う、ぐあ！うわぁ！？」

王蛇が龍騎に切り掛かり、その身体を掴み、蒔風の方に投げつける。

「城戸さん！」

「これでちょうどいいな。ふはぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

リュウガの装甲や仮面の隙間から黒い影が湧き出てきて、すっぽりとおおい、ベルトとバイザーを装着した「奴」と姿を変えた。

「やはりこの方が出力はあがるな」

「くっ、やっぱこうなんのか・・・城戸さん、二人でやりましょう」

「でも浅倉は！」

「二人が負けると？」

「・・・・殺しても死なないかもしれない」

「ですよねーー」

こうして戦いが始まった

ＳＩＤＥ　王蛇ＶＳナイト&ａｍｐ;ゾルダ

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

－Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ－

－Ｓｈｏｏｔ　Ｖｅｎｔ－

ナイトと王蛇が剣を構え、ゾルダが細長いキャノンを構える。

しかし、やはり王蛇のパワーは凄まじかった。
ゾルダがキャノンを撃ち、その直後にナイトが飛び掛かる。

それに対し王蛇はゾルダのキャノンをナイトに打ち返し、ナイトを打ち落とす。

更に撃ってくるゾルダにアドベントでサイ型のモンスター、メタルギラスを召喚し、ゾルダを吹き飛ばす。

「ぐあっ!!ば、バカな・・・それは他のライダーの・・・ガイのモンスターのはずだ!!!」

「そんなこと知らねえよ・・・・とにかく戦えぇ!!」

王蛇が自らのモンスター以外のメタルギラスを操れるのは、以前のバトルで仮面ライダーガイを倒したわけだからなのだが、もちろん今はガイに変身していた者は生きている。

しかしこの王蛇のデッキは「奴」が記憶がら作り出したもの。
ゆえに、浅倉が王蛇の力として覚えているそのままが出て来るのだ。

「ぐ・・・・う、ああ・・・・」

「秋山!!大丈夫か!?」

「・・・ああ・・・・・いくぞ・・・」

フォン、パァン!!

ナイトが一枚のカードを取り出し、ダークバイザーが砕けるように弾けると、ダークバイザーツバイへと形を変えた。

そしてそこにカードをベントインする。

－ＳＵＲＶＩＶＥ－

そしてナイトが風に包まれ、その姿を現すと、ナイトはナイトサバイブへと強化変身した。

－Ｎａｓｔｙ　Ｖｅｎｔ－

ナイトがナスティーベントを発動し、ダークウイングが姿を変えたダークレイダーが飛来し、高周波をまき散らしメタルギラスを退かせる。

「大丈夫か？」

「それ、こっちが聞いたんだけど、ねっ！！」

ドウン、ドウン！！！

王蛇に向かってキャノンを発射する。

王蛇はそんなことは気にしないとお構いなしに、ガードをベントインする。

－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－

王蛇の腕にメタルゲラスの頭部を模したメタルホーンを変えにつき出したまま、メタルギラスの肩に足をのせ相手に向かって突き出すように立つ。

そしてメタルギラスが猛スピードで突進し、相手を貫く、ヘビープレッシャーがナイトに迫る。

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

ナイトもファイナルベントを発動させる。
ダークレイダーがバイクに変形し、そのまま、風をまとって相手に突っ込む。

両者が正面からぶつかりあった。

爆発が起き、反対側にナイトがダークレイダーに乗り駆け抜ける。
王蛇の姿はない。

しかし

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

「なにっ！！？？」

どちらもファイナルベントだった。
しかし、本来ならばサバイブで強化変身したナイトの方が上回っていたはずなのだ。

そう、本来ならば。

今の王蛇は、サバイブの強化変身すらも凌駕する!!!

エイ型のモンスター、エビルダイバーを召喚していたのか、それに乗り、ふたたび突貫してくる!!!

そして王蛇のハイドベノンがナイトに炸裂する!!

タッチの差でゾルダがとっさにナイトに向かって砲撃し、ナイトの体がズレる。

「ぬあああああああああ！！！！！」

ナイトの身体が砲撃の衝撃でずれ、王蛇の直撃は免れたが、それでも十分な威力を誇り、サバイブが解け、通常のナイトに戻ってしまう。

「は、もっと楽しもぉか・・・・・」

王蛇が一枚のカードを掲げる。

「な、そのカードは・・・・」

「隙だらけなんだよ・・・おかげで最高に楽しくなりそうだ！！！」

ナイトのサバイブが解けたのは、ファイナルベントを立て続けに食らってしまっただけではない。

王蛇はハイドベノンの瞬間に、ナイトのダークバイザーツバイを破壊し、サバイブ－疾風－のカードをかっぱらっていた。

そして最悪の事態になってしまった。

－ＳＵＲＶＩＶＥ－

王蛇がカードを使う。

その身を風が覆い、サバイブに強化変身する。

その肩周りからは牙が生え、胸元は大きく前に膨れ上がり、左腕がコブラの首の形の手甲とほぼ一体化したバイザーとなっていた。

「はぁぁぁぁぁ・・・最高だ・・・・・」

「最悪だよ」

「くっ、しまった・・・・・」

ナイトとゾルダが戦慄する。

王蛇が二人にグリン、と首をまわし獲物を見据える

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ーーー

「奴」がカードをベントインし、ストライクベントを発動させる

「あああああああ！！！！！圧水砲！！！！！！」

ぶしゅぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！

それに蒔風が圧水砲を放ち、相殺させる

炎と水がぶつかり、芳烈な勢いでその場を水蒸気の白で覆い尽くす。

そしてその霧の中から、龍騎が切りかかる。

しかし「奴」は魔導八天で弾き、一回転してからの後ろ回し蹴りを側頭部にぶち当てる。

そこに蒔風が風林火山で霧を吹き飛ばしながら突っ込んできた。

「一気に視界が良くなったね！！！」

「ぬかせや、切り刻むぞ！！！風林火山！！！！」

ギギィン！！！

「奴」をはじき、離れたところで

「鎌鼬切演武、単！！撃！！！・・・剛（ごう）！！！！！」

ゴッ、バキャキャキャ！！！！

蒔風が、一切の切れ味を捨てた打撃のみの単撃切演武、「剛」を放つ。

その攻撃に「奴」は吹き飛ばされ、大地を滑っていく。

「ぐっ・・・っはぁ!!!い～い、一撃。だが、今の俺には効かないよん!!!!!」

「終わりなんて言ってないぜ?・・・・鎌鼬切演武、四季早々、春・花吹雪」

ブズァ!!!!!

「奴」を斬撃が覆い切り刻んでいく。

「さらに・・・・土惺竜!!!!!」

ゴバッ!!!!!

竜の形をとった大地が、花吹雪の終わったばかりの「奴」に向かい突っ込んでいく!!!!

「はっはぁ！！！」

―Ａｄｖｅｎｔ―

ドラブラッガーが現れ、土惺竜を阻止する。

「土惺竜を阻止するとか本来ならあり得ないだろ・・・・」

「それが俺様クオリティーさ」

「じゃあ、その品質・・・確かめようか！！！」

蒔風が「奴」に向かう

さらに龍騎が蒔風の後ろから駆け寄る。

ブンッ！！！！

蒔風と「奴」の拳がクロスし、お互いに反対の手で受け止める。

そして同時に離し、凄まじい早さでの攻防が始まった。

蒔風が突き、受け、突き、蹴り、殴り、掴み、投げ返され、体をひねり、着地し、関節を決めようとし、外され、蹴られ、身を返し、体制を即座に取り直し、殴り殴り殴る！！！！！

「おおおお！！！！三滅星（みつほろぼし）！！！！」

ダゴンダゴンダゴン！！！！！

蒔風の渾身のパンチ、打滅星を三連続で放つ。

それに「奴」はよろめき、蒔風が背後にまわり「奴」をがんじがらめにする。

―Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ―

そこに龍騎がストライクベントを発動させる。

「お前ごと焼ける気か？」

「オレにはお前っていう盾があるからな」

「オレに効くかよ」

「なら、試してもらおうか！！！！！はあぁぁぁぁ！！！！！！」

装備したドラゴクローから業火が吐き出され、「奴」に直撃する。

そして最後に火球を打ち出し、爆発を起こす。

ドッゴァァァァァァ・・・・・・・・

炎の中にいる蒔風に龍騎が訪ねる

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・蒔風!!!大丈夫か!!!」

「うっく・・・大丈夫さね・・・・それより、「奴」はどこに・・・・最後の火球まで確実に食らってるはず・・・・」

龍騎が蒔風に駆け寄る。

最後の火球の衝撃で、「奴」を離してしまったらしい。

蒔風自身も、強がっているが、実際には結構ボロボロだったりする。
実は蒔風は先日のリュウガの攻撃の傷がまだ完全に癒えていなかった。

龍騎をかばい、かなりのダメージを負ったのだから、当然と言えば当然だった。

キョロキョロと見回しながら「奴」を探す蒔風と龍騎。

「どこにいる！！！出で来い！！！」

「ふぅふぅ・・・おいどこだぁ！！！」

そして蒔風の背後から声が聞こえ、その背中にコツンと何かがあてられる

「こ～こ♪」

―Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ―

「ぁ・・・・・・」

ドゴオァァァァァァ！！！！！！

蒔風の背中から超至近距離でストライクベントが放たれる。

蒔風の体が漆黒の炎に包まれ、肉の焼けるにおいがしてきた。

「燃～えろよ燃えろ～～よ～～～～蒔風この野郎～～～～♪」

そんなことをさも愉快そうに歌いだした「奴」に、龍騎が本気で激昂した。

「きっっっさっまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

「さあ、お前死のうか」

「奴」が龍騎に迫る。

龍騎がソードベントで剣を出し、勇猛にもかかっていくが、一発で首をつかまれ大地に叩き伏せられる。

ドォ！！！！

同時に、壁を突き抜け、ナイトとゾルダが吹き飛ばされてくる。

王蛇サバイブがもう飽きたといわんばかりに二人を一瞥し、「奴」

のもとへ歩く。

「奴」が龍騎に言う

「戦いを止めるためと戦ったようだが・・・残念だなぁ。そうやっていつもいつも最主要人物の願いばかりピックアップされて他の奴の願いなんか間違ってることにされる。酷いよな。他の奴らの願いだって間違ってるわけじゃないのにさ。だからお前ら嫌いなんだよ。如何にも正しいみたいにしてよぉ！！！！！！」

「奴」が龍騎に最後の一撃をかまそうとした時

「バカ言ってンじゃねえぞぁ！！！！！！！」

燃え盛る炎を消し飛ばし、龍騎に馬乗り状態の「奴」に蒔風がドロップキックをぶちかました。

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

隙をみてゾルダが王蛇と「奴」にファイナルベントを放つ。

しかし、二人にはもはや効かず、爆発の後に何事もなかったように二人が立っていた。

「ってぇな。なんだよおめー。邪魔すんなよなー。いーかげん死ねよー」

「奴」が蒔風に蹴られた部位をさすりながら言う

「ガブッ、うぐ、バハァッ！（ボダボダボダ）てめえ、城戸さんがどんだけ悩んだのか知らねえだろ・・・人の願いなんざなぁ、全部叶うわけ・・・・・ねえだろうが！！・・・・・それでも人を守るという・・・・・その、願いのために・・・・・戦いを止めることは、間違って・・・・・ない！！！」

全身焼けていて血をダボダボとはき出し、言葉を発する度にゼヒューゼヒューといやな呼吸音がのどからしてきていたが、フラフラになりながらも蒔風は叫び続けた

「自分の願いをかなえるために、誰かの願いを犠牲にする・・・・・そうしないと叶わない願い・・・・確かにそうだった・・・このライダーバトルは、ゲヒッ！！ヒューヒュー・・・・・・確かにそうだ！！！！そんな他人を蹴落として手に入れる・・・・・幸福

は・・間違っている!!!!」

「だがそいつらは自らの願いのために他人を・・・・」

「ああそうだ。でもな・・・・願いってな、そうしてでも叶えたいものなんだよ・・・・そうでもしないと叶わないんだよ!!!だから人は日々戦っているんだ・・・決してかなわない願いに向かって走ってんだよ!!!」

「では貴様は・・・・ライダーバトルを肯定するのか?」

「違う!!確かに願いをかなえようとすることは・・・・戦いだ。しかし、本来ならそこから這い上がっ・・・・・ッゴ、がぁ・・・・・這いあがってもう一度足掻くチャンスがなければならない!!!ライダーバトルは命を奪い、そのチャンスすらをも殺す!!!故に間違っている!!!だから城戸さんは止めようとしたんだ!!!!!」

「願いは必ずしもかなわないもの・・・・か。いいのか?貴様がそんなこと言って」

「俺は願いを司る、銀白の翼・・・・オレに力を与えてくれるのはなぁ、夢に向かって走り続ける、その力だ!!!!輝きだ!!!!!!たとえ叶わなくても、願い続けてくれる、その思いだ!!!!」

ばっっさぁ！！！！

「人は夢を追い続ける。願いを胸に宿し続ける！！！！それは、知っているからだ！！！たとえかなわなくても、その夢を抱いて、そこに向かっていくことは、なによりも素晴らしく、輝いているってことをな！！！！」

「そしてだからこそ・・・・お前を許さない・・・・・・城戸さん、見せてやりましょう・・・・俺たちの、願いを！！！！」

「ああ！！！」

－ＳＵＲＶＩＶＥ－

龍騎がサバイブ－烈火－のカードを使い、龍騎サバイブに強化変身する

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＲＹＵＫＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＷＥＰＯＮ～

蒔風の手に計六枚のカードが現れた。

そしてこの場にいる五人のライダーのデッキからも、計七枚出でくる。

「なに！？」

「オレのカードが！！！」

「なにをする！！？？」

「きさま・・・・」

それらのカード十三枚が一枚のカードに変わり、龍騎の手に収まる

「・・・・・よし！！！！」

――ＡＤＶＥＮＴ――

龍騎の新たなバイザー、ドラグバイザーツバイにカードをベントインする。

すると十三人のライダーの、すべてのモンスターが召喚された！！！！

「な・・・・ばかな！！！！」

「む・・・・・な、なに！？」

その瞬間、王蛇と、分かりにくいが「奴」の装着するリュウガのバイザーとデッキの色が落ち、ブランク体になってしまっている。

「モンスターを奪われたんだ。そりゃそうなる」

「しかし俺たちは大丈夫だぞ？」

「それは・・・・俺たちは仲間だからだ！！！」

さらに龍騎の手にカードが一枚
それをベントインする

――ＵＮＩＴ　ＶＥＮＴ――

ユナイトベントの効果により、すべてのモンスターが一つとなった。

マグナギガを中心に置き、ドラグレッダーとドラブラッガーの二体
が双頭の頭となり

その背にはエビルダイバー、ダークウイング、白鳥型のブランウイ
ング、不死鳥型のゴルドフェニックスが張り付き翼となって

両腕にはカニ型のボルキャンサーと白虎型のデストワイルダーが

両脚にはレイヨウ型のギガゼール、カメレオン型のバイオクリーザが

尾にはベノスネーカーがおり、その先端にはメタルギラスの角が付いていた。

キギュァシャァァァァァァァ！！！！！！

「こいつは・・・・・」

「ば、化け物・・・・・・・・」

「面白い・・・・かかってこい・・・・・」

「最高の祭りだぁぁァァァ！！！！ハハハハハハハハ！！！！」

各々、その姿に驚く。

そして

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＲＹＵＫＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

龍騎の手に再びカードが

そのカードにはすべてのライダーの紋章が描かれていた。

－－－ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ－－－

「おおおお

空中で反転し、蹴りの体勢となり、龍騎が二人にジェノサイドライダーキックをぶちかます！！！！！

「おおおお

爆発が起こり、半径三十メートルが吹き飛んだ。

その中で「奴」は消滅し、王蛇とリュウガのベルトは砕け、消えてしまった。

――――――

「まあ、それでいいかな」

「蒔風は行くのか？」

「行ってきますかね。あ、ミラーワールドは完全に閉じられたわけではありません。微妙なほころびがまだあります」

「だがそれも徐々に閉じていっているんだろ？」

「なら俺達でなんとかしようぜ！！」

「相変わらず・・・うるさい奴だ・・・・」

「なんだよ、やっと人を守るためだけに戦えるんだから、いーじゃねーかよ！」

「ほら、蒔風も、行くならさっさと行け。そして厄介事を追っかけるんだろ？」

「そうですそうです。では、これで」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＲＹＵＫＩ］

蒔風がゲートをくぐり、次の世界へと向かうことになった

そして三人も、その場を去った。

最後には一人の男がぶっ倒れていた・・・・・

ーーー

to be continued

龍騎　～願いのカード～（後書き）

アリス「あれ？作者がいませんね」

蒔風「あー、そこのベッドで寝てるってさ」

ア「まあいいですけどね」

蒔「次回は短編」

ア「今までの響鬼～龍騎の世界であったちょっとした話をご紹介」

ア・蒔「ではまた次回」

さあ、空白のペ（ｒｙ

番外編　～夢、虹、宴、ＩＦ～

【仮面ライダー響鬼】～出会う夢～

病院を出て、次の日に「奴」のいると思われる遺跡に行くと決まり、どうせなら今のうちに街を見たいと思った蒔風は、街をぶらついている。

響鬼たちは明日の準備をしているが、蒔風は基本手ぶらなので、抜け出してきた。

商店街を歩いて、本屋があったので、立ち寄った。

見たことのあるような気がする本や漫画があったが、蒔風はライトノベルのコーナーに向かった。

「オレの作品はないのか～。ちょっと読んでみたかったな」

そういって順番に見ていって、次の通路に入る。

そこは参考書などが並ぶエリアで、なかなか人がいなかった。

そこで蒔風は面白いものを見た。

高校生ぐらいだろうか？

今の時間ならまだ制服のはずだが、彼らは私服だった。おそらくサボっているのだろう。

そしてカゴの中の漫画を自分の鞄の中に詰め込んでいる。

万引きである。

「あーあ、見ちった」

「「！！」」

二人が蒔風に気づき、脱兎の如く走り出す。

レジの店員が鞄から零れた漫画をみて、待ちなさい！と叫ぶが止まるわけがない。

そのあとを蒔風が追いかける。

「わぁりぃごはいねーがー！アハハハハハ！」

しかも面白いおもちゃを見つけたような楽しそうな笑顔である

本気で追えば一瞬なのだが、二人と付かず離れずの距離を保って走りつづける。

「っち！なめてんじゃねぇぞコラァ！」

急に二人が反転し、蒔風に向かう。

しかも一人はナイフを持っている

「追っかけっこおわりかい？」

「「オラァ！」」

しかし蒔風はどこ吹く風で、その態度がさらに二人をイラつかせる。

一人が蒔風にナイフを突き出すが、靴の裏で食い止め、その手を捻り地面に押さえ込む。
その際に身体を反し、もう一人に後回し蹴りを顎にクリーンヒットさせ、昏倒させる。

「やっぱ「オレ、スゲェ」とか思ってる馬鹿野郎を叩きのめすの・・・楽し～♪」

二人を本屋に突き出し、警察に預け、蒔風が再び街をぶらつくと、一人の男子高校生がこちらを見ていた。

「ん？どうしましたか？」

「あ、いえ。さっきの捕物がすごかったなって・・・」

「すごかった、か・・・耳が痛いよ。オレはさっきの捕物を楽しんでいたんだ。まあ、正義感ってのもあったけど、一番の理由はそんなもんだからね」

「でも、なんとかできる力を持っていることは凄いです。理由がなんでも、僕には素晴らしいと思いました」

「君のような純粋な高校生が、いるもんなんだな・・・やっぱ世界は捨てたもんじゃないな」

「え？」

「いや、ありがとうな。こんなやつが素晴らしいなんて言ってくれてな。君、名前は?オレは蒔風舜ってんだ」

「僕は安達明日夢です。よろしく蒔風さん」

蒔風は彼が最主要人物に近い・・・いやもう一人の主人公だとは知らない。

「そうか、医者になりたいのか」

「はい、前は違う道もあったんですけど」

「ま、それが君の夢なら、願い続け、頑張るんだ。そうすれば叶うさ」

「なんか・・・ありがとうございます。初対面なのにこんな話聞いてもらって」

「なぁに、願いなんてんなら、オレの領分。難しいものからくだらないことまでなんでも相談にのるぜ」

そして30分後、二人は別れた。

「さて、帰りますかね」

あんな奴がいるんだ
世界はやらせないぜ？

明日は決戦だ

【うたわれるもの】～道中にて～

「カミュちー、こっちー」

「もー、ムックル速いよー。あとマイカゼさんも速すぎ！」

「遅れちまうぞー！」

現在、ハクオロの眠るオムカミヤムカイに向かっている道中で、一旦休憩を取っている場所の近くの森の中で、アルルゥ、カミュ、蒔風の三人が入っている。

なんでもハチミツの匂いがしたとアルルゥが言うので、採りに来たのだ。

「あった」

「えっ、どこどこ？」

「ありゃぁ、結構高いな～」

三人が見上げると木の上に蜂の巣があった

あんなとこのハチミツの匂いがわかるって・・・・・

「じゃ、採ってくるね♪」

カミュが飛び上がり、蜂の巣の前まで行く。

そこでうまくやってハチミツをゲットし、降りてくる。

猛スピードで

「逃げてぇ～（。□。；）」

ブゥウウウウウウウウウン

その後を黒い塊が追いかけてきた。

「ひぇえええええええええ！！」

「ムックル、走って！」

「ごめんなさーーーい！」

そうして走って行くと、湖が見えた。

「みんな、飛び込め！」

「ムックルは水苦手なんだよ！？」

「じゃ、ムックルは頑張って逃げてくれ！飛び込んでも構わないけどね！！」

「ムックル、行く！」

「ヴォ！？」

「アルちゃん、鬼・・・・・」

「さすがエルルゥさんの妹・・・・・」

ザッパァン！

三人と一匹が飛び込み、蜂がその上を二、三回旋回し、去っていく。
ちなみにハチミツは湖の側の茂みに置いたので無事だった。

「うぅびしょ濡れ・・・」

「ムックル、大丈夫？」

「ヴォフ・・・・」

「みんないいか？ちょっとこっちに・・・・ふっ、圧水！」

パシャン

蒔風が圧水で服やムックルの毛に染み込んだ水分を吸い上げ、湖に戻す。

「すっご～い！」

「乾いた・・・」

「ま、こんなふうにもできるよ」

パァァァ

蒔風が水を上手く散布するするとそこに虹が現れる。

「「おお～」」

「うん、いいかないいかな」

「ん、これ」

「お？ハチミツか・・・うん、採れたては美味いな！」

「そろそろ戻る？」

「そうだね。そろそろ時間だ。行こうか、アルルゥ」

「ん、きゃっほーう」

蒔風たちがエルルゥたちの元に戻る。

まだまだ先は長いなぁ

【タユタマ－Ｋｉｓｓ　ｏｎ　ｍｙ　Ｄｅｉｔｙ－】～宴会～

蒔風と応龍のバトルのあった夜の晩御飯を食べているときのこと

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

蒔風は誰に盛られたのか、酒を飲んでしまったようだ

凄く笑っている。

こいつアホだ

「だ、大丈夫か？」

酒を盛った応龍が心配になるくらいに大笑いする蒔風

「蒔風さん！落ち着いて下さい～～」

「ちきしょう！「奴」はオレが倒す！絶対に～～～世界はやらせん！ウィッ！それについて～～～皆に言いたい！」

な、なんだ？と全員が注目する

「感じるんだ・・・・・感じるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「なにをだよ！！」

「マンゴーの囁きに耳を傾けるんだ・・・・そうすれば世界の真理・・・・・月の裏側の納豆王国がが見えてくる・・・・・はっ！月のカエルは元気ですかーーー！！！！？？？」

グルグルグルグル・・・・・バタン！

『えぇ～！？』

蒔風がグルグルと回り倒れる。
完全に潰れている。

このあと、蒔風は目覚め、酔い覚ましも兼ねてましろと裕理について行ったのだが、その先の衝撃で一気に覚めたとか。

また翌日、信じてしまったのか、マンゴーを抱えて眠る美冬を鵺が発見し、何日かからかわれたとかなんとか

【仮面ライダー龍騎】～北岡シュミレーター～

「そういえば令子（れいこ）さんは僕の事覚えてないんだよね」

「奴」から隠れて二日後、北岡がそんなことを言い出した。

因みに北岡が言っている令子さんとは、真司の勤める出版社「ＯＲＥジャーナル」の記者、桃井令子のことである。

「令子さん？ああ、多分知っていても世間一般の評判ぐらいにしか知らないでしょ」

「なんだ？どうした？」

「それはいけない。せっかくあれだけの時間を共に過ごし「共には過ごしてないだろ」愛を語り合い「お前だけがな」並々ならぬ関係を築いたというのに！！「仕事だけの関係な」さっきからうるさいよ城戸！秋山！！」

「なるほどね・・・そりゃ悲しいな。知っているのに知られないなんて」

「でしょ？やっぱりわかってくれるか！！」

「でもやめとけよ？今は危険だ」

「う～～～む・・・・なら城戸！！！」

「な、なんだよ」

「お前、令子さん役な」

「はぁ！？」

「この戦いが終わったら、俺は令子さんに挨拶に行く。しかし、その時に怪しまれちゃ意味ないでしょう？だからここは今の令子さんを知る城戸、お前の力を借りたい」

「なに？じゃあ俺はお前の行動に対して令子さんがとるであろうはんのを示せばいいのか？」

「そうだ」

「やだよ！！」

「馬鹿馬鹿しい」

「ならば今行くぞ」

「蒔風、あいつどうにかしてくれ」

「城戸さん、やるんだ」

「蒔風！！？？」

「なんか面白そうだ」

「ま、確かにここにずっといては気が滅入るからな」

「蓮まで・・・他人事だからって気楽だよな！！！」

「多数決で決まったんだ。協力してもらうぞ」

「はぁ・・・分かったよ」

ＴＡＫＥ１

「どうも」

「ドナタデスカ」

「おや、美しい。オレの名前は北岡秀一、そこの男の知り合いです。こうして出会ったのも何かの縁。どうですか、一緒に食事でも」

「コレカラシュザイナンデス。シツレイシマス」

「・・・・・カーーーーット！！！！」

「どうした」

「もっと感情こめてくれよ！！！棒読みにもほどがある！！！」

「分かったよ。顔近づけんな」

TAKE2

「城戸はいますか？」

「どなたですか？」

「おや、美しい。オレの名前は北岡秀一。こうして（以下略）」

「これから取材なんです。失礼します」

「ではお送りしますよ！！！」

「結構です」

「お茶でーす」（蒔風乱入）

「（！？）おや、ありがとう。だけどもう行くから」

「うちの社のお茶が飲めないんですか！？」

「（令子さんは自分の会社を愛している！？なんてプロ意識なんだ令子さん！！！）いえ！！いただきましょう」

「城戸はいるか」（蓮乱入）

「蓮！！どうした！？」（真司による一人二役）

「いや・・・北岡、お前もいたのか」

「なんだよお前ら！！！出てくんなよ！！！」

「いきなりやってきてなんですかあなたは！！！」（真司が女声を作って）

「貴様ら、もういい！！！帰る！！！」

「送ると言ったのは嘘なんですか！！？？」

「（くっ、確かに令子さんならいいそうだ！！）いえ、令子さんも一緒に行きましょう」

「俺も取材だから一緒に・・・・」

「城戸役はいらないんだよ！！！令子さんだけでいい！！！」

「彼は私のアシスタントよ！！」

「最悪だな、北岡」

「秋山はしれっとすんな！！！」

「お茶入りまーす」

「蒔風はもうお茶いいから！！！」

「うちのお茶が「しつこい！！！」なんですかあなた！！」

「もう一杯どうですか？お茶」

「いらねーよ！！！」

「三つ奴に出してくれ」

「おっけー」

「秋山お前ぇ！！」

「取材行かないんですか！？」

「もう役はいい！！お前ら、ちょっと面貸せや！！！」

「もどりました・・・先生、何やってるんですか？」

そこに買い出しに行っていた吾朗が戻ってくる。

目の前の光景は凄かった

北岡が秋山に飛びかかろうとして、それを蒔風が止める

真司が囃し立てて、蓮は我関せずと紅茶を飲んでいる。

北岡の服は乱れ、脱げかけている

「うんざりだ！！このバカ！！！友達ゼロ人！！！」

ピクッ

二人の動きが止まる

真司と蓮が黙ってデッキを取り出している。

「なんだ・・・やるか!?」

「やってやらぁ!!!」

「売られたケンカは買ってやる」

そのまま変身してミラーワールドに行く。

蒔風は残った。

「大丈夫なんですか?」

「大丈夫でしょ。別につぶしあったからって願いが叶うわけがじゃないし。気分転換且つ憂さ晴らしですよ」

「はぁ・・・・」

二人が料理の準備を始める

鏡の中から声が聞こえた

「よし、おまえら覚悟を≪≪－ＳＵＲＶＩＶＥ－≫≫までまでまでそれはヒキョ≪≪－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－≫≫ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

その後、真司と蓮はスッキリした顔をして、ストレスがうまく発散できたようだ。

北岡は落ち込んでいたが、吾朗の料理とフォローで次の日にはさっぱりしていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？？？？

番外編　～夢、虹、宴、ＩＦ～（後書き）

アリス「今回は番外編ですね」

蒔風「いや、恥ずかしいやらなんやらのエピソードが・・・」

ア「響鬼では明日夢くんに会ってましたね」

本編で出てない、ってか時系列的に出れないからね

ここで出ました

蒔「森の中でのひと時。あれは気持ちよかった。水が冷たくてさ」

ア「蒔風、子供に人気ありますもんね」

保育園とかに行くと大変だろ

蒔「みんなひっついてくる。あいつら底なしすぎる」

ア「タユタマの世界で、あんた酒飲んだんですか？」

蒔「正確には飲まされたんだ」

一九歳だけど、もうそんなの関係ない存在だしねぇ

ア「にしてもわけわからなかったですね」

蒔「俺もだ・・・後で聞いてわかったんだ、あれ」

そして龍騎

ア「北岡さんってあんなキャラでしたっけ？」

蒔「みんなでいじくりまわしたらああなった」

かわいそうだったなぁ

ア「北岡ファンごめんなさい」

さて、次回は本編に戻ります！！！

『お楽しみに～～～』

「総員ペンを執れ！」――テストで召喚戦争！？

バカとテストと召喚獣　～出会いと名乗りと調査依頼～

「転校生の蒔風舜だ」

ここは教室
二年のＦクラスだ
学校名は文月学園
オレはこの学校に転校した生徒として今ここにいる。

「お前の席はあそこだ」

担任の先生に促され座る
ちなみに席と言っていたが、あるのはちゃぶ台だった

「・・・・なにこれ。イジメ？」

「あとでクラス代表から説明してもらえ。ＨＲ始めるぞ」

HRが始まった。
終わった

もっと説明しろ？

だって本当にこんなもんなんだもん！

一人の男子生徒が歩いてくる。どうやらクラス代表らしい。

「よう。オレがFクラス代表坂本雄二だ。災難だな。よりによってこんなクラスに入るなんて」

「転校だから仕方ないさ。オレ、蒔風舜。でさ、早速聞きたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「試召戦争ってなんだ？」

「ああ、それな」

雄二が（下の名で良いと言われた）試召戦争の説明をしてくれた。

ここ文月学園では、革新的な学力低下対策として「試験召喚システム」を初めて採用した学校である。

科学とオカルトと偶然によって完成した「試験召喚システム」
なぜ試験なのかというと、召喚獣の強さが、テストの点数によって変わるからである。

この学園のテストの点数に上限はない。
制限時間内ならば、難問でも答えていくらでも点を上げられるのだ。

そして試験召喚戦争、略して試召戦争とは、クラス対抗で召喚獣を用いた戦いをし、勝てばクラスの教室を交換できるのだ。

なおクラスの備品はランクで分かれており、成績優秀者上位５０名の在籍するＡクラスには黒板でなく大型スクリーン、さらには各生徒に個人用の冷蔵庫、エアコン、ノパソにリクライニングシートにシステムデスクと至れり尽くせりなのだ。

蒔風の在籍するＦクラスは最低ランクで、座布団（綿がほとんど入ってない）に卓袱台（ガタガタしてる）である。

「なるほどね。それなら勉強して召喚獣強くして戦っていい設備の教室に行きたがるわな」

「そういうことだ」

「雄二ー。どうしたの？」

「おう、明久。お前は人の話を聞かないんだってことをな」

「え？なんでいきなり貶されたの？僕！！」

「ＨＲで鉄人が言っていただろ。俺はクラス代表として転校生に説明しなきゃならなかったんだ」

「え！？転校生！？」

「オレオレ。ってか本当に訊いてなかったんだな・・・」

「それだから授業も聴けず、学園最下位の成績になるんだろうが」

「バカな！！！僕が最下位なんて！！！」

「いい国作ろう？」

「そんなのは政治家の仕事さ！！！」

「以上がこの吉井明久という人間の説明だ」

「よくわかった」

「え!?なに?なにかやっちゃった!?」

「明久、何を騒いでおるのじゃ」

「・・・明久・・・どうした」

「授業始まるわよアキ。ん?転校生じゃない」

「明久君、早速友達になったんですか?」

ゾロゾロと人が集まってくる。

この吉井明久という男、バカでも自然と人が集まるんだな。

「おお、なんじゃ転校生の蒔風か。ワシは木下秀吉じゃ。秀吉と呼んでくれ」

「・・・土屋康太」

「ウチは島田美波よ」

「姫路瑞樹です。よろしくお願いします」

「えっと、島田さん、土屋、姫路さん、秀吉・・・・くん？」

「バカな！？秀吉の性別を見破った！！？？」

「違うよ蒔風くん！！！」

「どうした、吉井。あ、あと俺はなんとでも呼んでいいぞ？」

「秀吉は第三の性別「秀吉」なんだ！！！男とか女とかは超越してるんだ！！！」

「おぬしはなにを言ってるのじゃ明久！！？？」

「確かに、木下君はずるいです！！！」

「そうよ！！ウチより胸があるじゃない！！！」

「待つのじゃ島田！！それは誤解じゃ！！ワシはれっきとした男じゃ！！なんならここで証明を・・・」

「だ、ダメだよ秀吉！！みんなが見てるよ！？」

「それがなんじゃ！！ワシは男じゃ！！そんなもの気にしないのじゃ！！！」

「いや違う。ムッツリーニが失血死してしまう！！」

「（グッ！！パシャパシャパシャ！！！）ダバダバダバダバ・・・・・・ガクッ」

「ムッツリーニーーーーー！！！！！！」

「ムッツリーニ？」

「ああ、こいつは「寡黙なる性職者」だ。ムッツリーニと呼ばれている」

「本名なんだっけ？」

「つち・・・や・・・・・こ・・・・う・・・・・た・・・・・・・」

土屋康太改めムッツリーニが輸血パックで血を補充している。

「そうだな・・・明久、蒔風に召喚獣がどんなものか見せてやってくれないか」

「え？なんで僕が？」

「お前ほど召喚獣の扱いに長けたバカはいないからさ」

「雄二、いま何かほめ言葉でない単語が聞こえたよ？」

「ああ、「いい」意味でな」

「いい意味で、って付ければいいってもんじゃないよ!!悪意がそこにあるよ!!」

「悪意なんてお前に抱くわけないだろ」

「そ、そうだよね?僕たちは友達だもんね!!」

「抱いているのは殺意だ」

「常になのかっ!僕はつねに狙われてるのか!?」

「いいから召喚しろ。許可はオレが出す。《機動(アウェイクン)》」

雄二のつけている白金の腕輪が光り、フィールドが小さく展開される。

「あれ?召喚許可は教師じゃなきゃ出せないんじゃ?」

「この腕輪は特別でな。教師でなくても許可を出してフィールドを展開できる」

「はぁ・・・じゃあいくよ?《試験召喚(サモン)》!!」

吉井の足本に幾何学的な魔法陣が現れ、試験召喚獣が現れる。
学ランに木刀を持った姿で、大きさは８０センチ程度か。

「これが試験召喚獣だ。これからお前も戦力になるかもしれないから。よく知っておいてくれ」

「おう。で、触れんの？」

「まあな。っても明久のは特別でな。「観察処分者」だから触れるんだ。普通の召喚獣は物に触れない」

「観察処分者？」

「ふふん、観察処分者っていうのはね、この学園でただ一人。最も「バカに」優れた僕だけの、雄二！！なんで僕の評判を落としたいの！？」

「お前の不幸がオレの幸せだからな」

「でさでさ、この召喚獣って実際どれくらいつおいの？」

「つおいって・・・まあ、こんなりだがかなりの力をもっているな。明久の点数でもサッカーゴールくらいは簡単に持ち上げるぞ」

「わかたよー。で、こいつを倒せばいいんだよな？」

「まあな、でも生身の人間じゃ・・・・」

「せりゃ！千脚（せんきゃく）！！」

ドガガガガガ！！！

「旋脚(せんきゃく)！！！」

バシンバシンバシン！！

蒔風が蹴りでの突きを繰り出し、さらに回転しながらの蹴りを当てていく

「い、痛いッ！イタッ、イタァァァァア！！」

「ちょ、ストップストップ！！」

「およ？大丈夫か？」

「観察処分者の召喚獣へのダメージや疲労は何割かフィードバックするんだが・・・説明が省けたな」

「吉井、大丈夫？すまないなぁ」

「ううん、親切心が心にしみる」

「やったのは本人なんじゃがのう・・・・」

そうして授業が始まり、時間が過ぎていく・・・・・・

ーーー

「・・・まぁいいさ。あんたのクラスに一人転校生が来ただろう？」

「蒔風のことか？」

「そうそうそんなガキだったね。で、これがそいつの転校手続きなんだが・・・」

「なんだ？別に普通だが」

「そこに書類手続きだとか、全国模試とかの成績が書いてあるだろう？」

「ああ。そこそこだな」

「問題は点数じゃないんだよ。この学園は試験召喚システムの実験場でもあるんだ。そうホイホイと転校生が来るわけがない」

「だが現に蒔風が転校してるじゃないか」

「だからおかしいと思って調べたんだよ。そしたらどうだい、全国模試の名簿に、蒔風舜なんで名前はなかったよ」

「・・・どういうことだ？この書類は偽物ってことなのか？」

「いや、その書類は間違いなく本物さ。だからこそおかしいんだ」

「なるほど。存在するものとデータが合わない。しかも両方とも本物ってことか」

「だから調べてくれないかい？あんたはなかなかできるからね。なんなら、何人か協力者を求めてもいいよ」

「別にしてやる義理なんざ無いが・・・まぁ、一つ貸しだからな」

「構わないよ。さ、用はすんだよ。さっさといきな」

「うるさいババァ長だ」

「聞こえてるよ！！」

to be continued

バカとテストと召喚獣　～出会いと名乗りと調査依頼～（後書き）

しまった・・・・また忘れてたよ・・・・

【仮面ライダー龍騎】

構成：”ライクル”８０％
”フォルス”５％
”ＬＯＮＤ”１５％

最主要人物：城戸真司

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：全契約モンスター召喚＆amp;合体のカード

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：ジェノサイドライダーキックを発動

ア「あーあ、やってしまいましたね」

またやってしまった・・・・

ア「ま、気を取り直して、今回はバカテスの世界！！！今回の世界の時系列は？」

そうすねぇ・・・・どこら辺だろ？

あらかたの登場人物が出てきて・・・確実に一巻以降だからねー

名言は致しません！！！

ア「ああ、とにかくバカテスの世界ですよ、と？」

そうそう

あ、後最後の一文は言葉とかじゃなくて一生懸命考えたオリジナルのバカテストです

ア「がんばりましたね。ま、そんなもんでしょう」

あれ？今回は文句言わんの？

ア「？ええ」

さみしい（ショボーン）

ア「はぁ・・・次回「雄二、蒔風を問いただす」」

ではまた次回

【スポーツに関する学生アンケート】
野球と聞いて想像することはなんですか？

木下秀吉の答え
イチロー、巨人、ＷＢＣ

教師のコメント
日本人ならまず知っている野球の代名詞ですね

姫路瑞樹の答え
青春、部活、甲子園

教師のコメント
まさに学園生活の一ページです。
姫路さんもそんな青春を送れるといいですね

島田美波の答え
デッドボール

教師のコメント
どうしてあなたの回答はこう物騒なんですか？

その他の全F組男子の答え
『『『野球拳』』』

教師のコメント
上記三人以外の全員の答えがこれのなのに対し、先生どうしたらいいかわかりません
しかし、嫌いではないです。

西村教諭のコメント
後で先生も一緒に指導室に来てください

次の日

蒔風が登校すると、雄二がやってきた。

「よ」

「おう、オハヨー雄二！」

「なぁ、いくつか聞いていいか？」

「なんだよい？」

「お前、前の学校ってどこだ？」

「おぉっとォ、キツイの聞いてくんね」

「どこなんだ？」

「答える前に、聞かせてくれ。なぜそんな質問を？」

「お前が答えてくれると言うなら言おう」

「別に構わにゃいよ。そこまでして隠すことじゃにーからにぇー」

「なら言おう。学園長が転校書類でお前を怪しんでいてな。聞いて来るように頼まれた」

「なるほどのぅ。わかりましたい！では、学園長室に行こうかね」

「今からか？」

「学園長の用事だろ？大丈夫でしょ」

そうして蒔風たちは学園長室に向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「で、素直に話すってのかい？」

「そそ。で、誰彼構わずに話して良いようなもんでもないから、この部屋にしました」

「で、なんで僕が呼ばれたの？」

この部屋には藤堂カヲル、蒔風、雄二の他に、明久、美波、瑞希、秀吉、ムッツリーニの五人までいる

「蒔風が連れて来てくれって言ったんだ。他の奴は別について来てもいいと言ったら来たんだろ？」

「さて、役者は揃いましたな。ではお聞かせしましょう。蒔風舜の、一世一代の頑張り物語を」

そうして蒔風が説明を始め、終わると、雄二が口を開く。

「病院いけ」

「そうなるよねぇ」

「流石に信じられるわけなかろう」

「・・・明久が実は頭いいとか言った方がまだ信じられる」

「信じられないか・・・・・」

「そうだよ！僕みたいななんでもない普通「より遥か下」の人間がって雄二！いらないこと言うなよ！」

「たしかに吉井は普通・・・な人間だ」

「その空白を埋めて！何も言われないのも響く！」

「だけど最主要人物の条件にはそんなもの関係ない」

「他の世界だとかそんなもの信じられるわけなんざないさね。あんた、書類の偽装で下手すりゃ国家権力のお世話になってもらうよ？」

「そりゃあ・・・お？」

「なんだい」

「災い転じて福と成すってか？」

「なにがだい」

「来たぞ」

ブァァァァァァァァ！

部屋の雰囲気が一瞬で変わる。
一面が色落ちしたようになった。

「なんだこれ！？」

「「奴」が来たな。んじゃこれから証明しようか！」

ドッドン！
ガルァァァァァァァァァァ！

そして学園長室の壁を破壊し、巨大な三頭犬が現れた

「な！？」

「キャァァァァァァァァァ！！」

「何じゃあれは！！」

「蒔風！あれはなんなのさ！？」

「「奴」の使役する召喚獣、ケルベロスだ！」

「召喚獣!?」

「この世界のモノとは違う!なにかってーとゲームとかの方に近い!!・・・・皆伏せろ!!」

ブァァ!!

ケルベロスが大木ほどもある腕を真横に振るう。
蒔風は皆を伏せさせ、ケルベロスに飛び掛かる。

「せぇりゃあ!!脚砲(きゃくほう)!!」

ズッドンッ!!

蒔風の強烈な後ろ蹴りが胸元に命中し、校庭に落ちるケルベロス
どうやら結界の範囲は学校をすっぽりと包んでいるようだ。

「そこで見てな、オレっちの活躍!!」

蒔風が校庭に飛び降りる。

他の全員が崩れた壁から校庭の様子を伺う。

「さて、召喚獣ってなら、こいつだ！」

パァ！

手の平にカードデッキが現れる

蒔風は後ろの窓ガラスに振り向かないで腕だけを出し、デッキを向ける。

蒔風の腰にベルトが現れ、右手を左上に突き出し、叫ぶ！

「変身！」

カシュッ！キュィィィン、パァァン！

「あ、あれは」

「仮面ライダー！？」

蒔風が龍騎に変身すると、明久たちが驚く。

「この世界でなんかの作品になってんのか・・・・ま、やるっか！」

ガルァァァァァァァァ！！

―Ａｄｖｅｎｔ―

「頼んまっせ」

ギャァァァァァァアン！！！！

蒔風がドラグレッダーを呼び寄せる。

ケルベロスにドラグレッダーが絡みつきその動きを封じる。

「さ・ら・に・だ《―Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ―》こいつは熱いぜ？おりゃぁ！！！」

ドラグレッダーが離れた瞬間にケルベロスを炎が襲い、爆発が起きる。

「これで最後ですのことよ！！！」

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

「とう！！！」

蒔風がドラゴンライダーキックを発動させる。

しかし、爆煙の中からケルベロスが飛び出してきて、ドラグレッダーと蒔風を弾き飛ばす。

ゴゴン！！！

蒔風とドラグレッダーが叩きつけられ、ドラグレッダーは光の粒子となって消えてしまった。

「ぐっぉ・・・あぁ！！！消えたぁ！！そう簡単にゃあ、いかんかね？なあおい！お前の主人はどこにいんだい？」

しかしケルベロスはそんなことは知らんとばかりに蒔風をにらむ。

「はん・・・・（パァ！）だったらこいつさね（パァン！）」

変身を解き、今度は巨大な槌を取り出す。

「四本の足で駆けるものには、こいつがいいんだったっけ？」

ガルルルルルルァアアアアアアアアア！！！

突進してきた。

それをジャンプしてかわす蒔風。そして槌を叩きつける。

バガン！！！！！

ゴフッ!?ガララルル・・・・・・・・

ケルベロスがふらつく。

槌を消し、蒔風がケルベロスの方に指を組み、向ける。
そしてその手を離していくと、バチバチと雷旺が溜まっていく。

「あんた一人にやるよーなもんじゃないんだけどもね!!!!喰らっとけや!!!!」

ズッ、ババババババババババ!!!!

大地を幅二十メートルは削ぎ落とし、百五十メートル先まで抉った
その砲撃は、ケルベロスを文字通り粉砕し、跡形もなく吹き飛ばし
た。

「はぁぁ。こーなるから最高能力での締めはなかなかめんどくさい
んだよなー・・・・っと」

蒔風が明久たちのところに戻る。

「大丈夫かい？」

「あ、ああ・・・・・」

「信じてくれたかい？」

「お、おう・・・・・」

「そりゃあよかった」

「それよりこの損害どうすんだ？」

「大丈夫だと思うよ？ケルベロス倒したし、結界が解ければ・・・・」

蒔風が話していると、空間に色が戻ってきた。
抉れた大地も、壊れた壁も、すべて何事もなかったかのように元に戻った。

「ほらね？」

「は、はは・・・・」

「ま、待ってよ！！じゃあ僕が狙われるのは本当なの！？」

「あ・・・」

「そうですっ！このままでは明久君が危ないです！！」

「吉井なら大丈夫だ」

「そ、そうか！蒔風が守ってくれるもんね！」

「いつも狙われてるようなもんだろ？」

「失礼な！僕はそんなに・・・・・・」

「アキ？なんでウチの方を見るのかな？」

「なんでもないよ」

「ま、吉井はオレが守るから大丈夫だよ」

「それにしてもそんなことが本当にあるとは・・・・」

「本来ならあり得ない。オレはこの世界に存在しえないものなんだ。だからなるべく早めに片をつけたいなとか思っているのでござる」

「そうか・・・・」

ガラガラガラ!!!

「たっ、大変だ坂本!!!」

ひと段落ついたかと思ったら、学園長室の扉を開け、Fクラスの須川という男子生徒が飛び込んできた。

「どうした須川。何かというとこっちの方が大変だったんだが」

「なにを言ってるんだ?それより聞いてくれよ!!」

「まあ落ちつけ。話はそれからだ」

慌てる須川をなだめ、改めて聞き直す。

「それで？なにがあった？」

「ああ、取り乱してすまない。実は・・・」

「Ｂクラスが試召戦争を仕掛けてきやがった！！！！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

バカとテストと召喚獣　～答えと不信と戦争開始？～（後書き）

アリス「すみませんが今回は作者が逃亡したために後書きは私一人です」

と、言うわけで「」は省きました。

さて、こう毎回毎回書いてるとそろそろ後書きのネタが切れたとが、何書けばいいかわからないとかうなった挙句にですからね。

そうですねー

そうそう、今日私マンガ版の禁書目録（インデックス）と超電磁砲（レールガン）読みましたよ！！

マンガ版だと姫神さん出てないんですよねー。かわいそうですね

レールガンはアニメまでみたいですねー。

今度見てみますよ。

では次回のことでも言いましょうか

始まった試召戦争。その裏に暗躍するのはやはり・・・・

とのことです。

でわでわ～、また次回に～

【歴史】

（　）の中に入る言葉を答えなさい

１５８８年に豊臣秀吉がたした法令は（　）狩りである

姫路瑞樹の答え

刀狩り

教師のコメント

正解です。有名すぎて姫路さんには簡単だっだでしょうか

土屋康太の答え

秀吉狩り

教師のコメント

クラスメイトのことを考えて心は痛まないのですか？

吉井明久の答え
オヤジ狩り

教師のコメント
ごめんなさいトラウマをいじらないでください

西村教諭のコメント
あとで先生はカウンセリング室に来てください

Bクラスが攻めてくる

この情報はすでに学園中に広まり、皆驚きを隠せないでいた。

本来試召戦争は下位クラスが上位のクラスに教室環境改善のために仕掛けるものだ。

つまりBクラスがFクラスに戦争を仕掛けても、正直メリットはない。

しかももし負ければ設備交換。

どう考えてもおかしなものである

「じゃあなんでBクラスは攻めてきたのさ？」

明久が雄二に聞く

今は昼休み。

屋上にFクラスの主要メンバーと蒔風が集まって話し合っている。

「Bクラスの代表はあの根本だ。俺達への復讐とかそんなとこだと思うのだが・・・・」

「しかしそれは根本一人の感情じゃろう？あやつにBクラスの皆が

乗ってくるかのう？」

「根本って誰さん？」

「Ｂクラスの代表なんだが・・・・」

Ｂクラス代表・根本恭二
卑怯な手を使う奴として有名で、Ｂクラスのメンバーからの人望も低い。
かつて試召戦争でＦクラスに負け支持率は更に下がり、敗軍の将として辱め（女装させられたまま下校。更には写真集まで作られた）を受け、Ｆクラスにはそれなりに恨みがある男だ

「まぁ、秀吉の言う通り、そこがわからん。あの根本に、しかも個人的な理由の試召戦争にＢクラスの奴らが乗るわけがない」

「Ｂクラスの奴らも脅迫させられてるんじゃない？」

「奴ならやりかねないが・・・それだけの手段があるとも思えない。とにかく、情報を待つしかないな」

現在、ムッツリーニがＢクラスに斥候に向かっている。
皆その情報待ちなのだ。

「・・・・報告」

「ムッツリーニ！Ｂクラスはどうだったの？」

「みなの目がおかしかった」

「おかしいとは？」

「催眠術の類いの可能性がある」

「催眠術！？」

「なんでそれがわかるのか疑問だが・・・・」

「ちょ、それシャレにならないじゃない！警察沙汰よ！？」

「確かなのか？」

「正気でないのは確か」

「・・・どういうことだ・・・根本は最低最悪の人間だが、催眠術なんてことが出来るような奴じゃないはずだ」

「先生に報告するべきです！」

「待ってくれ」

「蒔風？」

「試召戦争は明日開戦だよな？」

「相手方はそう言ってきたな」

「ちょっと時間をくれないか？」

「まさか・・・「奴」ってのが？」

「わからない・・・だから調べる」

「調べるのが間に合わなかったらどうする？」

「もし「奴」なら今騒ぐと策を放り捨てて攻撃してくるかもせれないからな・・・下手にやめないでそのまま開戦してくれ。明久には護衛をつかせる。念のために、他のみんなにも・・・これを」

「これをって・・・剣じゃないか！こんな危ないもの・・・・」

蒔風が「青龍」を取り出し明久に渡そうとする。

「あ、確かに。だったら・・・小獣召喚」

ポン、とかわいい小さな音がなると、子犬程度の大きさの、しかもデフォルメされたチビ青龍が顕れた。

「「かわいい～」」

美波と瑞希がチビ青龍を抱え上げる。

「青龍、モテるじゃないか」

「・・・困ります・・・・・」

「喋った!?」

「ああ、こいつはオレの召喚獣・・・お前らのとは違うがな。の、青龍だ。明久の護衛に付ける」

「わしらの護衛はどんなやつなのじゃ？」

「興味あるかい？」

「他にもいるんですか!?」

「早く見せて!」

「はいはい・・・小獣召喚」

更に蒔風が他の召喚獣を小獣で出す。

「じゃあ、お願いね」

『了解』

結果として雄二に玄武、秀吉に白虎、美波に天馬、瑞樹に朱雀、ムッツリーニに麒麟があてがわれる。

「こいつらは基本的には目につかないようにいるから、見えなくても心配するな」

「そうなんだ・・・・」

「ちょっと残念です・・・・」

「・・・人の目のないところなら呼び出せば来るけどな」

「主!?」

「だってあんな顔されたら・・・・ねぇ?」

「いーじゃん、女の子みんなかわいーしさ!この子もかわいーし」

「白虎君。彼は男子だぞ?」

「ええ!?」

「驚かないでくれんかのぅ・・・それにしても蒔風はワシが男とわ

かっていたようじゃが・・・」

「大体わかるわ!!確かに女っぽくてそんじょそこらの女子よか可愛いけど・・・・」

「それはそれで傷つくのじゃが・・・・」

「秀吉は男だとわかったさ。てかそんなんもわからなきゃ「奴」の気配なんかわからん」

「蒔風!!!いや、舜!!これからは舜と呼ばせてくれんか!?」

「いいけど・・・・」

「あ、じゃあ僕のことも明久でいいよ」

「それは構わんが・・・名前で呼んではずかいいと思うのはおかしいかな?」

「まあ、最初はそうかも知れないけど・・・」

「もう慣れたしの。これがデフォじゃ」

「オレもちっとずつ慣れっか・・・ま、おれはこれから早退する。先生にはうまく言っといてくれ」

「分かった」

「では・・・・さらば!!」

ダンッ、ブワッ

蒔風がフェンスを飛び越え、飛び降りる

皆が驚いて下を見ると、そこにもう蒔風はいなかった。

――――――

「ッ！？うわあああああ！！！」

「逃がすかよ。お前がいたんじゃ邪魔なんだよ。もうちっとおとなしくしてくれ」

二人を追う人物が背後から現れ、話しかけてきた

「あそこまでやるんて・・・・お前は・・・・・・ッ」

「世界のためだよ」

「なにがだ！！この・・・・・・」

「まあいい、そいつからこの世界の情報も大体得た。用済みだ、まとめて死ね」

「なン・・・・・・」

キュボッ！！！！ゴガゴゴン！！！！！

黒き波動砲が撃ち出され、二人を飲み込む。

しかしそれは夜の闇に溶け、誰の目にも映らず、知られることはなかった・・・・・

――――――

バカとテストと召喚獣　～会議と護衛と黒い影～（後書き）

作者が帰ってきません

何やってるんでしょうね、まったく・・・・

ま、こうして勝手に後書きできるからいいですけど。

はやく帰ってこないかな～～～お姉さん暇だ～～～

次回、試召戦争開始・・・・って前回もこんなこと言ってたな

次回予告はあくまで予想といってもこれはひどいですね

短いですし

ではまた次回～～～

【世界史】

デカルトの残した有名な命題「コギト　エルゴ　スム」の日本語訳を、括弧の中に言葉入れて完成させよ

（　）思う、ゆえに（　）あり

姫路瑞樹の答え
我思う、ゆえに我あり

教師のコメント
正解です。
いかなるものを疑ったとしても、この自分自身の存在は疑いようのない事実だということですね。

吉井明久の答え
小汚いと思う、ゆえにスムーズに掃除する必要あり

教師のコメント
あなたは何を言ってるのですか

西村教諭のコメント
先生は早く机の上を整理してください

Bクラスとの試召戦争が始まり、Fクラスで明久たちが集まっていた

「蒔風はどうしたの？」

明久が不安そうに聞く。

しかしそれに答えられるものはない。

「わからん。だが連絡が無い場合は試召戦争を始めておけと言っていたからな」

「しかしわしらだけで大丈夫かのう」

「蒔風の召喚獣がついているから大丈夫だろう」

「今は人がいなくなるなんて、ないですよね・・・・」

「だからいまムッツリーニに情報収集と一緒に麒麟から話を聞いてもらっているんだ」

「・・・・戻った」

「どうだったの？ムッツリーニ」

「麒麟が言うには昨日から連絡がつかないらしい。あと、Ｂクラスだけど、さっき動き出すようなことを言っていたから・・・・」

「そうか・・・・第一中隊は廊下で展開しろ！Ｂクラスを食い止めるんだ！」

雄二の号令に皆が動き出す

「蒔風・・・なにかあったのかな・・・・・」

「とりあえず今は試召戦争だこれで負けたらみかん箱だぞ」

皆で蒔風を心配しながら、出て行ったＦクラスメンバーを見送り、一旦腰を落ち着かせる

そして明久が席に座ると瞬間

廊下が吹き飛んだ

「・・・・・は？」

「なにが起きた！？」

「ほっ、報、告・・・・廊下に展開していた部隊が全・・・・滅・・・・・」

「なん・・・・だと・・・・・！？」

雄二たちが廊下を覗く

多くの人が倒れている中をＢクラスの人間を率いて根本が歩いてくる。

倒れている人の中には巻き添えを喰らったＢクラスのメンバーもいただけで無く教師すらも含まれていた

しかし、根本はギラギラした笑みを浮かべ歩いてくる。

後ろのＢクラスメンバーは仲間も倒れているというのに見向きもせずフラフラと根本のあとをついて行く。

「なんだよ・・・これ・・・」

「試召戦争で本人が傷つくことなどありえんはずじゃ！」

「しかもＢクラスの仲間まで・・・・・」

「ヒドイです・・・」

「根本・・・・貴様ァ！なにをした！」

「ふふふ・・・・いけ」

『・・・・・《試験召喚（サモン）》』

ズアズアズア！！

地面の幾何学模様の魔法陣から試験召喚獣が出てくきて、生き残ったＦクラスメンバーと明久たちにジリジリと迫る。

「教師もいないのになぜ召喚できるのじゃ！？」

「雄二！あいつら普通じゃない！」

「くっ、誰か学園長を呼んでこい！！他は行くぞ！《試験召喚（サモ）・・・・・」

そこまで叫んで雄二が止まった。

いや、雄二だけではない。

明久たちやFクラスメンバーまでもがそれを見て固まった。

別になにかおぞましいものを見たわけではない。

別になにか恐ろしいものを見たわけでもない。

彼らが見たのはたった一つの仕草であった。

そう、召喚獣の一体が、足元にある壁が欠けて出来た小石に当たり、それを退かして来たのだ。

本来、召喚獣はもの凄い力を持っている。

学園最下クラスの明久の召喚獣でもサッカーゴールを軽々と、ヒョイッと持ち上げ移動させられるぐらいに。

しかしそれでも大丈夫なのは試験召喚獣は物体には触れられないからである。

床はなんらかのコーティングで突き抜けないようになっているが。

それが小石を退かした。
つまり召喚獣だけでなく、人にも触れられるということ。
しかもパワーはBクラスの点数。
足元に転がる生徒と教師

それを理解した瞬間、驚きで固まった彼らの表情ををすぐに恐怖のものへと変えた。

『うわぁぁぁ

ていた。

「逃げないのか・・・・・まぁ、楽にはなるな」

「根本！どういうつもりだ！」

「どういうもなにも・・・」

「このクソジャリども！なんの騒ぎだい、これは！！！」

そこに藤堂カヲルがやってきた。

誰も学園長室に呼びに行かなかったはずだが、これだけの騒ぎになれば流石に気づいたようだ。

明久たちの方に寄り、問い詰めようとするが雄二が先に口を開いた。

「ババァ！！そいつら普通じゃない！」

「普通じゃないだって？」

「そいつらの召喚獣、物に触れられるぞ」

「なんだって？」

「しかも教師のおらぬ状況で召喚しおったのじゃ！」

「な・・・・」

「話は終わったかい？」

ババババッ！！

一旦動きの止まっていた召喚獣が再び動きだし、明久たちに襲い掛かる。

「食い止めろ！《試験召喚（サモン）》！！！」

ドドガァ！

学園長を教室の方に押しやり、明久たちが立ち向かう

そして明久たちの召喚獣がＢクラスの召喚獣とぶつかる。

さらに青龍たちも姿を現し、小獣状態で迎え撃つ。

「青龍！？」

「ぬあああああ！！！・・・この姿では・・・全力が出せぬ！！」

「でもでも、舜との連絡がないんじゃどーしよーもないじゃんよー！」

「このまま凌ぐしかないでしょう。幸い、相手の召喚獣は我々ほど強くないようでしょうし」

青龍、白虎、朱雀が叫ぶ

「どうしても蒔風と連絡は取れないのか！？」

「無理だぞ、雄二殿！！なぜだか知らぬが主との交信が切れてこちらから呼び出せないのだ！！」

「ってかそれは何度も言ったろうが！！！」

雄二の問いかけに玄武と天馬が答える。

そして、美波と秀吉の悲鳴が聞こえた

「きゃああ！！！」「うわあああ！！」

「美波！！秀吉！！」

どうやらこの空間での召喚獣に反映される点数の教科は自由に決められるようだ。

扱いに慣れている明久、最近かなりの成績を修めている雄二、もともと学年トップクラスの瑞樹は全教科で挑み、保健体育の点数で特殊能力持ちのムッツリーニはそのまま保健体育で挑んでいる。

しかし美波と秀吉はBクラスの召喚獣に押され、召喚獣を倒されてしまった。
点数はまだ残っているが、残り一ケタと、もはや死に体である。

天馬と白虎が駆け寄る

「大丈夫か!?」「ごめん!!守り切れなかったよ・・・」

「ウチらはいいから、アキの方を!!」

「ワシらの方は問題ないのじゃが・・・明久が狙われるとまずいぞ!!」

はたして二人の言うことは確かであった。

雄二、ムッツリーニ、瑞樹には敵が六人ずつ付いているというのに、明久には十五人も付いていた。
先ほど美波と秀吉を攻撃した召喚獣も、用は済んだといわんばかりに明久の攻撃に加わっていた。

玄武、麒麟、朱雀はそれぞれ雄二、ムッツリーニ、瑞樹についており、小獣のせいかそれでも苦戦していた。

それなのに明久には二倍以上も敵がいるのだ。

「確かにそうだけどよ！！！」

「このまま二人をほっとけないよ！！」

「ウチらは教室に逃げるから」

「明久のフォローを頼みたいのじゃよ」

「それは・・・あっ、おい！！」

「待って～～！！」

そう言って二人は教室に戻っていった。

その体は召喚獣をやられたときにおこった衝撃に巻き込まれて、フラフラだった。

「・・・天馬」

「なんだ、虎ガキ」

「あいつ・・・許せない」

「虎ガキ。それは許さん」

「天馬！！」

「あいつは・・・オレが一番許せねぇんだよ。だから俺がやる。お前は明久のとこいけ」

「ボクがやるんだ！！！」

「いーや俺だね」

「この駄馬！！」

「なんだとこの漂白野郎！！」

「がーーー！！！じゃあ早い者勝ちだ！！！」

「待てコラァ！！！」

白虎と天馬が飛びだした。
白虎がリードするが天馬が追い抜き、根元に到達する。

白虎はそれに気づくとすぐさま明久の方にコースを変更した。
そこまでふざけてはいられない

「助けにきたよ！！さって・・・おまえら、覚悟しとけよぉぉぉぉ！！！！」

「む・・・白虎がキレているな・・・」

「美波と秀吉は！？」

「大丈夫だよ！！教室に戻った！！」

「そうか・・・ってうわぁ！！！」

「明久！！」

戦いは止まらない
そして止まらないことにいらついている人物がいた。

「お前らもういい。ちんたらするなら、消えろ」

根本である。

その手をスイッ、と横に振ると電池がキレたようにＢクラスの生徒達が倒れた。

「なんだ！？」

「どうしたんだ・・・」

「なんでみんな倒れちゃったんですか!?」

「・・・・催眠が、解けた?」

「ほう、よくわかった、なっ!!!」

轟ッ!!!

根本が駆ける。

その進行を小獣たちが食い止めようと立ちふさがるが、根本の体に当たっただけで弾かれてしまった。

明久たちの三メートル手前まで駆けてきたところで、根元の姿が消える。

そしてキョロキョロト見渡す明久の目の前にフッ、と現れ殴り飛ばす。

「ゲフッ!!!ガ・・・ァ・・・」

「きゃあああああ!!!!明久君!!!!!!」

「明久ァァァア!!!!」

「明久！！！！！」

「死ね」

ドムッ

根本が廊下に転がる明久を踏みぬき、砕けた廊下が粉塵を上げる。

「そん・・・な・・・・・」

「あ、明久・・・・・」

「ぁ・・・・・・・・」

瑞樹が口を半開きにして目を見開いて、それでも目の前の光景が見えてないかのように焦点はあっていなかった。

雄二は膝をつき、拳を廊下に叩きつける。

ムッツリーニは頭を抱えブンブンと振る。

粉塵が晴れる
三人は思い切り目をそらした。そこにあるのが現実だと認めたくないと叫ぶかのように

しかしそこにあるのは紛れもない現実である。
そして

「一体何に目をそらしてるんだい？」

その声もまた、現実であった。
その声は悪夢（けんじつ）を吹き飛ばした。
その声は希望（げんじつ）を運んできた。
その声は確かにあった。

現実だって救いがあると、それを確かにするかのように！！！！

「さんざんド突いてくれたなおい」

「キッ、サマ・・・・」

『蒔風ぇぇぇぇぇ！！！！！』

明久を踏みぬこうとしたその脚は、蒔風によって防がれていた。

明久にはその背に、輝く何かが映った気がした。

「お、らっと！！！」

ブァっ、スタン

根本が空中で一回転して距離をとった。

蒔風が背負っていた何かをムッツリーニに渡した。

それは、否その人物はぐったりしており、気を失っていた。

ところどころ怪我もしている。

「ほい、こいつ」

「こいつは・・・・」

「根本！！！」

「じゃああっちの根本君は！！？？」

「貴様まだ動けたのか蒔風ェェェェェェェェェェ！！！！！！！」

「動ける、さ！！！獄炎砲！！」

ズパン！！

さっきまでいた方の根本に蒔風が簡単に撃つ。

煙が晴れると、そこには「根本」という皮がベリベリと剥がれ、その姿を現した「奴」がいた。

「あいつは！？」

「あれがオレの追っている「奴」さ」

「確かに貴様は行動不能にしたはずだ！！！」

「ああ！？あんなもん、半日休めばなんとでもならぁ！！！」

「ッ強がりを！！」

「どういうことなの！？」

「簡単なことだ。「奴」は根本を攫ってなり変った。Ｂクラスを使い試召戦争という戦いの場を作り明久を狙いやすくした。それだけのことだ」

「なんで連絡を！！・・・・」

「根本を救出して逃げる間にかなり喰らっちまってな。結構まずかったんだぜ？」

「死ィネェ！！！！！」

「奴」が魔導八天を構えて突っ込んでくる。

蒔風はそれを剣でではなく、「奴」の手元を掴むことで防ぐ。

ドン！！！

「ぬあああああああああああああ！！！！！」

そしてそのまま「奴」の肩を掴み、廊下の端まで押しやり、さらに壁を突き破って落下し、隣接する体育館まで突っ込んだ。

ゴゴン!!ゴゴン!!ゴガガガガガ!!!!!

そうして十分に距離をとったところで、戦いが再び始まる。

ＳＩＤＥ　明久

なんとか・・・生きてるよ?

蒔風が・・・・・助けてくれた・・・・

「明久君!!!」

なんだろう、姫路さんがこっちぬ向かって走ってくる。

教室の方からは秀吉と美波まで・・・・

大丈夫ですか?とか怪我はない?とかみんな聞いてくる。

「大丈夫だよ・・・それにしても、美波まで走ってきてくれるなんてね」

「ウチは・・・ウチはアキが死んだら誰を殴ればいいのかわかんなくなっちゃうでしょ!?だ、だからよ!!!」

こんな時まで僕の命を狙うのかこの人は

「それは・・・勘弁だなぁ」

「む?どうした明久。気の抜けた顔しおって」

「仕方ないだろう。あんなことに真っ向から巻き込まれたんだ。こんな風にもなる」

「あんなことって・・・」

「なんだ?忘れたのか?」

失敬な。僕だってそれぐらい覚えてる。

たしか、Bクラスが攻めてきて、戦って、いきなり殴られて、殺されそうになって・・・それで・・・・

「!!!蒔風は!?」

「あいつは今・・・戦っている」

そんな・・・だったらこんなところで寝てられない!!

「ダメですよ!!明久君!!」

姫路さんが止める。

「あんなところに言ったら死んでしまいます!!蒔風さんは勝てるって言ってました!!だからここで待ちましょう?」

「そうよ!!アキが行ったって何の役にも立たないんだから!!!」

ひどいなぁ、二人とも。確かにそうなんだけどさ・・・

でも・・・いかなくちゃ

「なぜだ?明久」

「雄二・・・」

「お前が行くというなら、そのわけを話せ。納得できなきゃいかせねェ」

「はっは・・・簡単だよ・・・理由は・・・」

「理由は?」

そうだよそんな理由なんて決まってる。

「僕は今までも、鉄人から脱走したり、雄二をおとりに使ったり、卑怯なこととか沢山してきた」

でも、それでも!!!

「友達が僕のために戦ってくれているのに、ここでのんびりなんかしてられるか!!!」

そうだよ。みんなそうだ。

なぜか姫路さんも雄二も、秀吉も美波もムッツリーニも、いつもは僕をメタメタにして、偶に逆に僕がして。
でも本当に僕や、他のみんなが貶されたりすると本気で立ちあがってくれるじゃないか！！

「だから僕は行くよ。蒔風は僕の友達だ。友達のために僕は行くんだ。勝ち負けなんか関係ない！！！」

そうだ、勝ち負けなんかどうでもいい。
僕は見たんだ。余裕そうにしていたけど、僕をかばった時、蒔風の顔が激痛に歪んでいたんだ。
それなのに蒔風は「奴」と一緒に行ってしまった。

「蒔風はあのまま勝てるかもわからないのに僕らのために命を懸けて戦ってるんだ！！」

「・・・・」

「だから雄二、そこをどいてくれるかい？行かなくちゃならないんだよ」

「・・・明久」

「なに？雄二」

「その言葉が言えてなきゃ、オレがお前を殺していたよ」

「え？」

「行くのはお前だけじゃねぇよ。俺もつれてけ」

「わしも行くぞ」

「・・・オレも」

「アキ・・・」「明久君・・・」

「二人は残って・・・・・」

「わたしも行きますっ!!」「ウチも行くッ!!」

「え?え?」

「そうですよね・・・友達の、ためですもんね!!」

「アキだけにかっこいいことさせられないっての」

「覚悟はいいか?明久」

「雄二・・・ああ、行こう」

廊下の騒ぎを聞き付けて、他の生徒や教師が来た。
試召戦争用に作られた校舎だから、騒ぎが浸透するまで時間がかかった見たいだ。
僕たちは蒔風の向かった方に進む

邪魔はさせないよ

友達が、待ってるんだ。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ゴキン！！！

「ぐおおおおあああああああああ！！！！」

蒔風が転がる。

頭からは血がダラダラと流れ、背中は真っ赤に染まっている。
右頬は腫れあがった跡がある。口が切れ、血が出たため腫れは引いたのだろう。
息は荒く、右足は折れているようだ。

「自信満々に言ってくれたようだけど、なんだぁ？このざまは！！」

「うっせんだよ！！この豚野郎が！！！いいかぁ、このくらいのハンデがちょうどいいと思ってたんだよ・・・・」

「主人公の吐くセリフではないな」

「フゥフゥフゥフゥ・・・・」

「言葉もないのか？」

「ガッ・・・・ッア・・・・」

ゴガン！！！

「奴」の蹴りが蒔風を吹き飛ばす。

壁に叩きつけられ、体育館が揺れる。

蒔風の体はズルズルと壁に寄り添って崩れた。

「終わりだなぁ」

「ッ！！！おおおおおおおお！！！！！」

「なにっ？」

「土惺竜！！！！」

蒔風が構え、土惺竜を放つ。

竜の顎が「奴」をとらえ、体育館の床・・・というよりも、大地に叩きつけていく。
その体が次々とアーチを描いていき、幾度も幾度も叩きつける。
そして一面にその土の体をまき散らしながら、それでいて床を砕き、さらに多くの土を取り込み大きくなる。

「あああああああああああああ！！！！！！！」

ボッドッゴン！！！！！

最後に天井を突き破り、飛びでて行き、そこから奴ごと落ちてきて捻りつぶした。

その土塊の山の中から、「奴」がフラフラと出てきた。

「ふっふ・・・はぁーーーー、ははははは！！なかなかに・・・威力が落ちてるぞ？蒔風ぇ・・・」

そう言って「奴」が笑う。

しかしその笑いは、勢いよく開け放たれたドアの音によって遮られた。

「蒔風！！！」

「おまえら・・・・ノコノコ殺されに来たかぁ！！？？」

「・・・あき・・・ひさ・・・・・」

「大丈夫！？」

「大丈夫・・・なわけあるかと言いたいが実は大丈夫だぁ！！！・・・ガッ・・・つ～～～～～っぁ・・・・・」

「無茶するな！！！」

「なんで来たよお前ら？オレに殺されるってのがわかんねぇのか？バカなの？ねえ、死ぬの？」

「確かに僕はバカさ！！でも、何が間違ってて、何をやらなきゃいけないかぐらいはわかる！！！！！」

「明久・・・」

「僕は友達を助けに来たんだ！！それはバカでも、絶対に忘れちゃいけないことだ！」

「ッ！！！！！まずい！！！！！」

「よくいってくれた、明久！！」

【Ｂａｋａ　ｔｏ　Ｔｅｓｕｔｏ　ｔｏ　Ｓｈｏｕｋａｎｎｊｕ】
－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

「《試験召喚（サモン）》！！！！！」

明久が召喚獣を出す
その瞬間、明久の召喚獣の頭上に表示される数字が、最初から３０６５となっていた

「明久・・・お前その点数は！？」

「え？なんで！？」

「それはな、お前のテストの点数じゃねえ」

蒔風が立ちあがりながら言う

「その数値は友がお前を想い、またお前が友を想うその力だ！！！」

そう言いながらも数値がどんどん上がっていく。

そして次第にあまりのカウントのスピードに数字が読み取れなくなり、グルグルと回り出す。

そして一つの形となっていき、最後には∞となる！！！！

「ふ、ざ、け、ん、なぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

「それはよぉ、お前さん・・・・」

『こっちの台詞だ！！！！！』

【Ｂａｋａ ｔｏ Ｔｅｓｕｔｏ ｔｏ Ｓｈｏｕｋａｎｎｊｕ】

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

明久の召喚獣がそのまま大きくなり、人間大にまでなった
さらに武器である木刀が、蒔風の十五天帝に変わる。

「「いけぇ！！！」」

「「「明久！！！！」」」

『ぶちかませっ！！！！』

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

ドズッバン！！！！！

ガガガガゴゴッゴァァァァ・・・・・・・

その刀身は「奴」を体育館ごとぶった切る。

そして「奴」は二等分にされたまま地面にめりこみ、そして霧のように消えていってしまった。

――

「いたいいたいって！！！！」

「こんな怪我してんだから、しっかり治療しなさい！！！」

「でも、右足、繋がりかけてますよね？」

「まあね。でもここからがまた長いんだよね」

「まったく・・・終わったと思ったらすぐに行くなんて言うんじゃから・・・・」

「・・・せめて治療くらいさせろ」

「はいはい。分かりましたよー。ところでさ、今更だけど崩れた廊下とか壁とか体育館って大丈夫なのか？」

「ま、そこら辺はババァも事情を知ってるだろうし、俺たちの証言で今回根本は無実だとわかってるんだし、正直に言わないにしても、

それなりの言い訳をしてとりつくろってくれるさ」

「幸い、この学園は試験校だからね。そういった資金はあると思うよ？」

「じゃから心配することはないと思うぞ？根本も大したことなかったみたいじゃし・・・ほれ、包帯巻き終わったぞ」

「こっちも終わったわよ」

「美波ちゃん、凄いですね。私怖くて見ることもできませんでした」

「まあ、アキにいろいろやってるからね。そういうのは見慣れてるって言うか」

「嬉しいんだか悲しいんだかわからなくなるなぁ、それ」

「ん、よし。みんな、ありがとうな」

「よしてよ。友達でしょ？」

「は、確かにそうだ。ふふ、じゃ、俺は行くわ」

「こっちは、まあ任せておけ」

「ごめんな。本当なら俺から話しておくべきなんだが・・・」

「いいんじゃよ。気にせず行くのじゃ」

「あいつがほかのところで暴れるんでしょ？」

「早く行って、助けてあげてください」

「ああ、行ってくる」

「・・・・・・・・・（ボソボソ）」

「あ？他の世界のエロ本は・・・・持ってこれないし送れないなぁ」

「（ブンブンッ）・・・そんなこと言ってない」

「さすがだよ、ムッツリーニ・・・・」

「ではな」

「Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｂａｋａ　ｔｏ　Ｔｅｓｕｔｏ　ｔｏ　Ｓｈｏｕｋａｎｎｊｕ」

「行っちゃったね」

「そうだな」

「吉井ィ！！坂本ぉ！！！貴様らが今回の主犯だということはわかってんだぁ！！！おとなしく出てこいどこにいる！！！」

「ゲッ！？鉄人！？」

「むっ、そこかぁ！！！！」

「うわぁ！！鉄人が来た！！ってかなんで！？」

「鉄人！！ババ・・・学園長から話聞いてねぇのかよ！！！」

「聞いてはいないがこんなバカのことするのはお前らしかおらん！！！」

「逃げるぞ明久！！！」

「分かった雄二！！こんな冤罪で捕まってたまるか！！」

「逃がすかァァァ！！！」

そうして再び始まる日常

彼らは再び走り出した。

「いい加減にあきらめろ！！」

「諦めてたまるかよ!!こっちは何もしてないんだ!!」

「そうです先生!!むしろ僕らは世界を救ったんです!!」

まぁ・・・物理的にも、青春的にも・・・・な

ーーー

to be continued

バカとテストと召喚獣　～バカと想いとそのつながり～（後書き）

【バカとテストと召喚獣】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”５０％
　　”ライクル”３０％
　　”フォルス”２０％

最主要人物：吉井明久

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：想いを召喚獣のパワーに

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：十五天帝装備・それに見合った大きさに変化

今回これだけですごめんなさい　Ｂｙアリス

アギト　～闇からの忠告～

レストランＡＧＩＴΩ

今日はＯＰＥＮではなく、貸し切りの札が出ていた。

そしてこの場には三人の男が集まっていた

則ち、津上翔一、葦原涼、氷川誠である

かつて人類の行き過ぎた進化を恐れた存在、闇の力の放つアンノウンと戦ってきた、仮面ライダーアギト、ギルス、Ｇ３－Ｘである

「で、本当に始めるのか」

「はい！もちろんです。これからもアギトの力に目覚める人はたくさん出てくると思うんです。だから実際に悩んで苦しんだオレや葦原さん、そしてオレたちと長く接してきた氷川さんとでアギトの会を開いてそういった人を導いていこうかと、前々から思ってたんですよ」

「それは素晴らしいことです。しかし、どうやってアギトに目覚めた人を見つけだすんです？」

この場合の「アギト」とは仮面ライダーアギトのことではない。人類の進化の可能性、すなわち超能力に目覚めた者のこと、もしくは目覚める現象のことである。

しかしその力はあまりに大きく、かつて人間を想像し愛してもいる存在「闇の力」はそんな人間たちを危険とみなし排除していたのだ。その闇の力も今は退き、アンノウンの出現はなかったのだが・・・・

「とりあえず二、三人は目星がついていますから・・・・」

「しかし・・・最近またアンノウンの目撃情報が多々見られるようになったようですね・・・」

「そうなんですよ～～。こっちも仕事中に来られて何度困ったことか」

「僕もまたG3ユニットに戻りましたし・・・」

「しかし俺や津上が到着する頃には全滅させられていたな・・・誰だ?」

「新しいアギト・・・・か?」

そこまで話したところで、客席の角が輝き、声が聞こえた

《人よ、アギトよ。聞きなさい》

そこには黒いセーターを着た、中性的な顔をしたもの大人しそうな男がいた。

「！！！！！お前は！！」

「闇の・・・・力」

「ばかな！津上さんが倒したはずでは・・・」

そう、この男こそアンノウンを送り、アギトとなる可能性を持つ人間を危険として排除してきた男である。

いや、男という表現は間違いか。この存在は半ば神のような存在なのだ。

《私はもはやアギトを襲わぬ。あるヒトとの賭けをしていてな・・・》

「なんだと？」

「そんな奴がなんの用だ！」

《アギトはヒトと共に生きて行けるのか、ヒトはアギトを受け入れられるのか。それを確かめるために、あなたたちには生きてもらわねばならない》

「だからなんだと！・・・」

《この世界に邪悪なるものが入り込みました。わたしの遣わした者も敗れ、世界の終わりが近づいています》

「それでアンノウンが・・・」

「むしろお前がやってるんじゃないのか！アギトを持つ人を襲ってるんじゃないのか！？」

「そう簡単に信じられるとでも思ってるのか？・・・・」

《そのものが現れた最新の場所を教えます。私はアギトの・・・・人間の可能性に賭けてみることにしたのです》

「おい待て！」

《頼みましたよ・・・・》

そう言って男は消えてしまった。

まるで最初からいなかったかのように

「・・・どうする」

「あいつの罠かもしれません。行かないほうがいいと思います」

「オレも同意見だ。どう考えても怪しすぎる」

「でも、だったらこんな回りくどいことしますかね」

「確かに・・・アンノウンの大群で攻めればいいものを・・・なぜ？」

「津上、お前どうしたいんだ？」

「・・・とりあえず確かめます。本当ならその悪い奴を倒さなきゃならないし、罠だとしても放っておいたら大変なことになる」

「では、行きますか？」

「仕方ない。こうなると津上は止まらん」

「じゃあ、行きましょう！！」

津上と葦原はバイクに、氷川は車に乗って闇の力が示した場所に向かう。

ーーー

探り出すのは「奴」がどっちに行ったかだ。

ＳＩＤＥ　ライダー’ｓ

ブォン、キキィ！

蒔風から離れた所にバイク二台と車一台がやってきた。

降りてきた三人の男が蒔風を見つけ、驚く

「本当に・・・いた？」

「待ってください。一般人かもしれません」

「なんだ？手元が光ってるぞ」

「あれは？」

「わかりません。でも、アギトの力は感じられないです」

「ならば本当に・・・」

「異世界の力？」

「ということがあいつが・・・・」

「行きましょう！」

バババッ！！

葦原と氷川が茂みから飛び出し、蒔風に掴みかかった

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「よし、あっちか」

蒔風が「奴」の向かった方向を探知し、そちらに向かおうとすると、
茂みから飛び出した二人の男につかみ掛かられた。

「うひゃぁ？なにが起きだ」

突然の出来事に無駄に訛った

そんな蒔風の口調を無視して、馬乗りになっている葦原が聞いた

「貴様！違う世界から来た人間か？」

「はい？え？なんで知ってんの？（。□。；）」

「っ！やはりか！」

ガバッと蒔風を立たせ、殴る葦原

「痛っ！なんだよ！」

「貴様の思い通りにはさせん！（バッ）変身！！」

ヴァン！

葦原がギルスに変身し、蒔風に襲い掛かる。

「アガァァァァァァァ！！」

「なんなん?なんなんだ?なんなんなんなん?」

「オォア!」

バギッ、ドゴッ!

「ブッ、ガッハ!ぃきなりなにすんだ!」

「ここに世界を崩壊させる邪悪なる者がいると聞いて来てみたら、貴様がいた!」

「しかもどうやらアギトの力ではないようです。身柄を拘束させてもらいます!!」

ギルスと、拳銃を構える氷川が言う
それに対し蒔風は小さく悪態をつく

「決定的ってか。確かに「奴」がさっきまでいたみたいだけど・・・・」

「なにをブツブツ言っている!」

ギルスが一気にその跳躍をもって蒔風に掴みかかった!!

ガッ、ガッ、ガシッゴロゴロゴロゴロ

蒔風とギルスが組み合い、転がる
蒔風はその勢いでギルスを投げ、

「緑のライダーかい。なら！！」

パァ！！

蒔風の手首に変身鬼弦が現れ、それを用いて轟鬼に変身する。

「よっし・・・張り切っていくっスよーーー！！！」

「くっそ！！！」

ギルスの爪と音撃弦・雷電が火花を散らす。

「芦川さん！！！（バッバ！）はぁぁぁぁぁ・・・・変身！！！」

そこに津上が駆け付け、アギトに変身する。

「やっべ！！フンッ！！（ドッ！！）」

「グガッ！！」

雷電をギルスの腹に突きたて、音撃を送り込む。

「音撃斬・雷電激震！！」

ギターの音が鳴り響き、突きたてた場所から火花が散り、ギルスが倒れる。

「葦原さん！！！」

「ん？おおう！？」

アギトが掴みかかり、投げとばす。
蒔風は変身を解いて着地した。

「なんだよあんたら！！世界を壊すのはオレ、ぬっはぁ！？」

「やっぱりあなたが！！絶対にさせない」

蒔風の話す途中で、実にいいタイミングでアギトのパンチが襲いかかり、変な風に理解されてしまう。

「あー、もー！！！いいぜ、いっぺんブッ倒す！！それから話を聞いてもらうぞ！！（バッ、ヴォン！）変身！！」

蒔風が今度はクウガに変身した

そしてイライラした声で言う

「人間の進化だか可能性だか知らねーが、所詮カテゴリーはまだホモサピエンス止まりだろーが。蒔風は、その上を行くぞ。人間の定義を外れてっからよぉ！！！！」

クウガの姿に拳銃を構えた氷川が、四号？・・・などと言っていたが二人には届かないようだ。

カチッ、フォォォォン・・・ヴァン！！

アギトの右腕が赤くなりフレイムフォームに変わり、そのベルト・オルタリングからフレイムセイバーを取り出す

「ふっ、超変身！！！」

一方クウガはタイタンフォームに超変身して、近くの棒きれを拾いタイタンソードに変える。

「「はぁあああ！！」」

ギィン！！

二人の剣がぶつかり合う。

しかしタイタンの防御力と、攻撃の重さに敵わず、弾かれてしまう。

さらに蹴りを織り交ぜながらクウガが攻める。

本来このような動きはできないはずだが、このタイタンは蒔風が変身しているものだ。

通常のクウガとは比べるべくもない。

アギトはそれを超越感覚でかわしていくが、素早い動きに向いたフォームではないため次第に追い詰められていく。

「「そこだ！！」」

アギトの背が木に当たる。

追い詰めたクウガと、追い詰められたアギトが同時に叫んだ。

クウガがタイタンソードを突き出すと同時に、アギトはストームフォームに変わり、オルタリングからストームハルバードを取り出し、そのままクウガに突きだす。

タイタンソードが剣なのに対し、ストームハルバードは両先端に刃のついた槍である。
長さの違いは目前であり、クウガが突っ込んだ衝撃をカウンター気味に食らう。

「ゲフッ!!っち!ならこっちは・・・・」

クウガの姿が青く変わり、ドラゴンフォームになる。と同時にタイタンソードはドラゴンロッドと変わった。

「アギトと同じような変わる力・・・いや、似ているがやっぱり違う!」

「こっちはクウガだからねえ。そりゃ違うってのよっ、とぉ!!!」

ガガガガガガ!!!!

クウガドラゴンフォームがロッドをダイナミックにブン回し、クルクルと回転していき、時には止まり、コンパクトに振りまわして攻撃を仕掛けていく。

しかしアギトはひるまない、クウガの回転に合わせて、うまくかわしていく。
さすがはスピードと俊敏性に優れたストームフォームだ、と言っておこう。

そしてここぞで大振りになった時、グランド・ストーム・フレイムの三つの力を一つにした、トリニティフォームに変わり、フレイムセイバーとストームハルバードで切り殴り飛ばす。

ドラゴンフォームはスピードや跳躍力に特化するために、攻撃・防御力を捨てたフォームだ。その代わりにドラゴンロッドを装備しているのだが。
ゆえにその衝撃に耐えられるわけもなく、軽々と吹き飛ばされる。

「ドゥッガッハ！！！へっへっへ・・・フゥ」

「ハァハァ・・・グゥゥ・・・」

クウガはたった二撃打しか喰らってないが、相手はアンノウンや闇の力と戦った男。やはりダメージはそれなりにあった。
アギトもさんざん攻撃を食らい、結構ぼろぼろである。今までの反撃も、破れかぶれに出したものだった。

「さぁて、終わらせますかい！？」

「フッ、ハァァァァ・・・・・（カチッ）」

ヴァン！！！ヴォン！！！

クウガが黒の金の姿、アメイジングマイティフォームに

アギトが燃え盛る業火の戦士、バーニングフォームに

それぞれ変わり、一点に力をためていく。

その一撃に両者が勝負をかけた

「「ハアアアアアアアアアアア！！！！！！」」

クウガの足に、アギトの拳に、エネルギーがたまっていく。

「！！！！オォォォアアア！！！！！！」
「！！！！ハァァァァァ！！！！！！」

ドッ・・・・・バグァァァァァ！！！！！！！！

二人同時に動きだし、クウガのアメイジングマイティキックとアギトのバーニングライダーパンチがぶつかり合い、大爆発を起こす。

「津上さん！！！！！」
「津上！！！！」

変身の解けた葦原と、氷川が叫ぶ。

爆炎が晴れた先に、膝をついて肩で息をする変身の解けた蒔風と、地面に倒れている津上がいた。

「オレさんの勝ちだ！！」

「まだ僕が！！！！」
「グッ、オレもまだ戦えるぞ！！！！」

「よってぇ！！！！！」

蒔風が二人を威嚇するように大声を出し言葉をさえぎる。

「話を聞いてもらいますよ？そ・も・そ・も！！オレは世界を守りに来たんだ！！！お門違いもいいとこだ！！！」

「「・・・・・は？」」

その言葉に、二人は固まってしまった

ーーー

と、ぼやく「奴」がいるのは瓦礫だらけの崩れたビル群の一角である。

「そろそろいい加減にしてくれないと・・・・ん？はぁ・・・またかよ」

うんざりしたように「奴」がその方向を見ると、複数のアンノウンのシルエットが見えた。

「いいぜ・・・かかってこいよ。オレをそんな簡単に倒せると思うなやぁ！！！！」

爆発が起きる。

黒い波動にのまれ、アンノウン達が消え去った。

そして「奴」の姿も。

これから何をしだすのかは、「奴」自信以外誰も知らない。

to be continued

アギト　～闇からの忠告～（後書き）

きゃーーーーーーーーーーー！！！

ｉＰｏｄがこ・わ・れ・たーーーーーーーーーー！！！！！

アリス「数日間いないと思ったらそんなことが・・・なんでですか？」

編集していた
←
取り出そうとｉＴｕｎｅｓの取り出しボタンを押す
←
勢い余ってダブルクリック
←
何とｉＴｕｎｅｓとの同期が始まる
←
ｉＴｕｎｅｓはからっぽなので焦る
←
キャンセルできない
←
焦って回線を引き抜く
←
見てみるとデータはあるのに全部その他扱いになっていた

ア「データはあるのにオーディオやビデオと認識されないんですか？」

そうなんだよーーーー

今までも五、六回落としてるから、中身もガタガタなのかもね。

ア「買ったのいつでしたっけ？」

去年の六月

ア「ちょうど一年じゃないですか！！しかも壊すの速！！」

うるさいうるさい！！

しかもめんどくさがってバックアップなんてとってないし
データ取ったＣＤはいくつか売っちゃったし・・・・

ア「手元にない者は買いなおさなきゃならないんですね？」

ですですね

ア「ま、ドンマイです。次回は、説明する蒔風、そして仲直りかーらーの！？」

ムチャブリシナイデーーー

ではまた次回

前回最後の忘れたので二個
しかも二個目長い・・・・

目覚めろ、その魂

私は、人間の側からアギトを滅ぼすための使者としてあなたを復活させた。
・・・だが、その必要はなかったようです。
人間はいずれ、アギトを滅ぼします・・・

いや、あなたは人間を作りながら、人間のことを何も知らない。
人は、アギトを受け入れるだろう。人間の無限の可能性として・・・

・・・では、見守ってみましょう。あなたのことばが正しいかどうか・・・・
人間とは何なのか。もう一度、この目で・・・

ああ。きっと俺が・・・勝つさ！

林の中での衝突から津上が目覚めるのを待ち、落ち着いて話せる場所に移ろうということになり、四人はレストランＡＧＩＴΩに戻っていた。

「って訳なんですよ」

蒔風が説明を終える。

「ではあなたはその「奴」を追って来て、ちょうど我々と鉢合わせしてしまったと・・・・」

「・・・・すまん」

気まずそうな氷川と謝る葦原に、蒔風はヘラヘラと笑い

「ま、紛らわしかったのはこっちもだし、お互い様ですよ。いやー、それにしてもやっぱり強いですね！」

「お前の方が断然強いだろう」

「確かにそうですけど・・・・」

「否定も謙遜もしないんですね・・・」

「葦原さんも津上さんも、まだあれよりも先の力があったでしょう？」

「・・・わかるのか」

「わからいでか」

「みなさん、できましたよ～！」

厨房から津上が料理を運んでくる

「レモンのスパゲティです」

「レモンのスパゲッティー！？」

「違いますよスパゲッティです」

「いや、オレはスパゲティーだったと記憶するが・・・」

「まぁ、なんでもいいじゃないですか！とにかく、食べてくださいよ」

「レモンの・・・か」

「ああ、津上さんの料理は奇抜なものがほとんどですけれど、とてもおいしいですよ」

「へぇ・・・（パクリ）ん！うまい！酸味がいい感じに聞いていて、それでいて爽やかな感じ！」

「でしょでしょ！？いやぁ、よかったよかった」

「にしても津上さんは気にしないん？」

「なにをですか？」

「いや、オレ散々殴ったからさ」

「いえいえ、むしろこっちの勘違いだったんですから！ほらほら、どんどん食べてくださいね！」

四人はその後も雑談をしながら食事をする

「それにしても津上気づいているか？」

一段落したところで芦原が口を開いた。

「ん（ゴクン）はい、アンノウンですよね」

「ああ、さっきから出ては消えの繰り返しだ」

「「奴」を追っているな。間違いなく」

「というか津上さんも葦原さんもなんで言わないんですか！？」

「今回アンノウンの目的は人間じゃないからな」

「逆にアンノウンの気配を追えば自然と「奴」には辿り着けます。その前に腹ごしらえしないとでしょう？」

「しかし、「奴」は津上を殺すことで世界を取り込むんだろ？なぜここにこない」

「「奴」はバカみたいに強烈強大な力をもっているが、それはオレと同じか、それより少しだけ上程度だ。しかもこの世界では津上さんたちがいる。だから確実に勝つために利用できる何かを探しているのだろうな」

「だけどアンノウンたち闇の力は「奴」の事を知っています。利用できるものがあるのでしょうか・・・」

「大丈夫ですよ！オレたち三人に更に蒔風さん。それに今はＧ５ユニットっていうのもあるんでしょ？それだけあれば問題無いですって！」

「Ｇ５？」

「Ｇ５ユニットはＧ３ユニット解散後に出来た部所です。再び現れるかもしれない新たなる敵や未確認に対抗するために日々訓練をしていますよ」

「でも氷川さんはＧ３－Ｘですよね？」

「僕はもうあれに慣れてしまって・・・こないだＧ５を装着して動いてみましたけど、全然で・・・」

「でもそのあとＧ３－ＸでＧ５と模擬戦したら圧勝だったじゃないですか！」

「最新式に勝ったんだ。大したものだ」

「なるほど・・・で、なんで５なんですか？」

「え？」

「なんでＧ４ではなくなったんですか？」

「あれは・・・存在してはならないものだからです・・・」

氷川が説明を始める

第４世代型対未確認生命体強化外骨格及び強化外筋システム・ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ－４

通称・Ｇ４システム

かつてＧ３の開発者が更なる強化を目指し設計した機体

しかし、その使用には人を人と思わぬような副作用があった

まず装着者は最初は大丈夫でも、最終的には必ず死ぬ。
搭載されたＡＩが最も有効な行動を選択し装着者を動かすため、その負荷に耐えられないのだ。
しかも装着者が死んでもスーツがその体を動かし戦いつづける。

つまりはスーツを動かすのに人体というパーツが必要、ということである。

また、超能力者を利用したＥＳＰシステムと連動させることで、相手の行動の予知をすることが可能である。

そしてその超能力者もいずれは死ぬという、装着者と超能力者を消耗品として扱うシステムだったために、封印された。

前回、自衛隊の一部隊が暴走してＧ４システムを設計図を盗み、作り出しアギト達に牙をむいたのだ。

「その時は何とか事を治めましたけどね・・・」

「あのシステムは厄介だったなぁ～～～」

「と、なるとそれを利用してくるかもな」

「え？」

「「奴」にとってそんな負担などないに等しい。真の意味でＧ４システムを使いこなしてくるだろうな」

「ではまた・・・・超能力者が利用される！？」

「いいや、あくまで「奴」はその場に残る記憶から作り出すだけだから、それはない。それでも性能は生かされるから恐ろしいけどな」

「となると・・・あの研究所に！？」

「行きましょうか？」

「・・・調べに行きましょう。「奴」がいるなら叩きつぶす。いなくてもその場にしみ込んだ記憶を利用できないようにする」

そうして彼らはかつての地獄へと向かっていった

to be continued

アギト　～最悪のシステム～（後書き）

アリスです

ごめんなさい

また作者が逃げました

次回は、研究所に巣食う者

ではまた次回

お前はアギトではない。何故これほどの力を・・・何者なんだお前は！

ただの・・・・・人間だ！！

アギト　～地上での溺死～

山に囲まれた林

更にその中のすすきの生える平原に研究所はあった。

「ここ・・・・か」

「では行きますか」

四人が到着し、早速中に入る。

津上、葦原、蒔風はそのまま進む。

「待ってくださいよーー」

氷川は万が一のためにＧ３－Ｘを装着して行く。

「やっぱりＧ５の連中も連れて来た方が調べるのは速いんじゃない

か？」

「危険過ぎる。本来ならオレ一人で行きたかったんだがな」

というわけで、Ｇ３トレーラーと、二、三人のオペレーターを残し、四人は進む。

ゲートには黄色いテープが貼ってあり、鍵もかかっていたが

「ちょいや」

蒔風が「風」で簡単に鍵を壊しゲートを開ける。

中はかつて氷川たちがＧ４と戦ったときのままだった。

壊れた壁、割れたガラス、ひっくり返った車両。

そして最深部のコンピュータ制御室まで来てしまった。

部屋の中は踏み荒らされ、遮断目的のガラスが砕けて散らばっていた。

「この部屋は？」

「この部屋のあのシステムに超能力者の人を繋いで、Ｇ４に予知の結果を送ってたんです」

「その予知をもとに最善の行動をＡＩが弾き出す・・・か」

「まぁ、「奴」はいないみたいですよね？」

「いないな・・・本気で気配消されるとわかんなくなるけど、そこまでやると「奴」が動いた瞬間にわかるからな。実質「奴」は動けん」

「じゃあ、この場の記憶ってのを封じて、Ｇ４を使えなくしましょう」

「だな」

蒔風が床に手を当て、記憶を使えないようにプロテクトをかけていく。

蒔風が途中、ん？と何か違和感に引っ掛かったが、滞りなく作業が終わる。

「呆気ないですね」

「なら早く帰るぞ。ここにいると嫌なことを思い出す」

「？なにかあったんですか？」

「ここの戦いでオレは一回腕を切り落とされたんだ。いい気はしないだろ」

「げ、そりゃ痛いですね」

「まぁ、ギルスの力でなんとか再生出来たが、もう二度とやりたくないな」

「Ｇ４強烈だな」

「いや、オレはＧ４とは戦ってないぞ」

「へ？」

「Ｇ４とは津上さんも戦いましたが、本格的に戦ったのは僕だけです」

「じゃあ・・・なんで？」

「オレと葦原さんは乱入してきたアンノウンと戦ってたんです」

「アリみたいな奴らだったな」

「待ってくれ!!だったらここには・・・・」

「ごめーとー。つまりはそゆこと」

ズブァァァァァァァァ

声がした瞬間、床から湧き出るようにアリ型のアンノウン、アントロードが出現して来る。

「「!?変身!!!!!!」」

津上と葦原がアギトとギルスに変身する。

蒔風が壁を蹴り貫き、少しでも広い場所にでる。

それぞれが交戦しながら声を飛ばす

「やられた！！！！」

「これは・・・・このアンノウンは倒したはず！！」

「「奴」がこの地の記憶から作り出したレプリカだ！！！性能はオリジナルと同等かそれ以上だ！！」

「記憶を使うのは封じたんじゃないのか！！！」

「Ｇ４に関してはな！！何かおかしいと思ったんだよ。処理するときにもＧ４以外の記憶があったしな！！」

「なんでそれほっといたんですか！！」

「オレが手を出せたのは事前にＧ４のこと知ってたからだ！！知らないことには手を出せん！！「奴」は間違いなく天才だよ。こうやって記憶を読み取って使いこなすことに関しては超一流だ！！」

「お褒めの言葉ありがとうございま～～す」

『!?!?!!?』

そこに声が響く

壁を崩し続け、たまにはすでに崩れた壁を通過し、四人はトレーラーの止まる駐車場まで出てきていた。

そこは半分外になっている構造で、四人をアントロードが囲み、身動きが取れなくなってしまったところだ。

「奴」が姿を現す。宙に浮き、足を組んで座っている姿勢でだ。

「オレさんがG4使うと思ったっしょ?違う違う。この大軍こそが欲しかったのよ!!」

アントロードは蟻の、しかも軍隊アリのアンノウンだ。

雑兵の歩兵クラスが数百、行動隊長クラスの赤い個体が数十、そしてそれらを取り仕切るかのように輪の外に女王アリのクィーンアントロードがいた。

その動きはまさに一つの獲物に群がる蟻そのものであり、ただでさえ厄介な上に数で攻めてくるからたちが悪い。

アンノウン最大の特徴としては人間には絶対実行不可能な方法を用いる殺人、通称・不可能犯罪である。

そしてアントロードの殺人方法とは・・・・

「やれ」

「奴」が短く命令すると、アントロード達が一斉に口から何かを吐き出す。

「伏せろ!!!」

ビシャシャ!!!

蒔風たちの頭上で液体がお互いにぶつかり、弾ける。

「なんだこれ・・・・」

「数で潰せ。時間をあまりかけるなアリども」

シャァァァァ！！！！

アントロード達が一斉に襲いかかって来る。

四人は再び分散し、戦う。

Ｇ３－Ｘはガトリングを辺り一面に撃ち続ける。
その弾幕からは一体も逃れることはできない。
だが後続の者が次々と襲いかかり、徐々に後退していく。

一方ギルスはエクシード、アギトはバーニングとなって応戦する。

それなりの数を撃破していくが、やはり多勢に無勢
いつ終わるともわからないマラソンをしているようなものだ。

蒔風は三人が追い詰められるところに入り、押し戻していく。

隙を見て奴に向かおうともするが、アギトに加勢し凌いだら次はＧ３－Ｘ、次はギルス、またＧ３－Ｘに行き、アギトにと、きりがない。

しかしその均衡も破れる。

クィーンアントロードが蒔風の背から三又の槍「黄泉の鐙（あぶみ）」で蒔風を貫いたのだ。

「蒔風！！！！」

蒔風はちょうどギルスの援護に入っていた。

混戦のため、小回りのきく「天」と「地」を使っていたが、それが仇となり防げなかったのだ
さらに誰よりも動きまわっていた蒔風の体力にも限界があった。

「ゴフッ？ゲッバアア！！！」

「そこだ！！蒔風を狙えぇ！！！」

アギトやギルスが蒔風によろうとするが、ロードたちに防がれる。

そしてアントロード達が一斉に集まり最初に放った液体を飛ばした。

それはすべて蒔風の顔面に命中し、ある現象を起こす。

「ブッップ!!ガ?ゴ、ゴボボボボボオオオボ!!!!」

「蒔風!!」

蒔風の口元から気泡のようなものが漏れ出る。

・・・・・・・

蒔風は今、溺れているのだ。

「チクショウ!!蒔風!!!」

「蒔風さん!!!!!」

さらにそこにロードたちが飛びかかる。

あっという間に蒔風がつぶされる。そしてモゴモゴと動いていたロードたちが止まる。

まるで・・・動くことでとらえた者の抵抗を抑える必要がなくなったかのように

「蒔風ェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！！」

空は曇り、一切の光を通さない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

アギト　～地上での溺死～（後書き）

アリス「作者帰ってきましたーーー！！！」

さてさて、今回は蒔風ピンチですよ。

ア「Ｇ４ってかなりつよいですよね？」

はい

ア「なぜ「奴」は使わなかったんですか？」

あの場合一体の最強よりそれなりに強い個体を大量に出した方が強いしね。

それは龍騎の世界での失敗と、バカテスの世界での結果を見てだろうね。

ア「まあ、バカテスの世界では数で押してなかなかいいとこまで行きましたからね」

というわけですよ

最近書くの大変になってきた

ア「がんばってくださいよ？最後の方にあるという私の出番までは！！！」

最後まで書きますよ！！

さ、行ってみよーー！！

ア「溺れる蒔風、どうやって脱出するんだーーー？？」

ではまた次回

Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　Ｇｏ，Ｃｏｕｎｔ　ＺＥＲＯ！！仮面ライダーアギト！！！

「ははははははははははは！地上で溺れるなんて面白いな、蒔風！」

アントロードの山

そこに向かい叫ぶ「奴」は愉快に笑う。

しかしその目には勝った、という確信はない。

ピシュン・・・・・

ズルズルズル、ドチャチャ！

アントロードの山の中から何か細い糸のようなものが噴き出し、アントロードを切り崩す。

「ゴホゴホッ、エホッ！ハァッハァッハァッ！」

そこから蒔風が出てくる。

何かを担ぐように右腕を曲げ、手の上には圧水の力で集められた水球が浮いていた

「肺の中の水を抜き取ったか」

「フゥフゥフゥ・・・・ッ！ガブッ！」

「蒔風さん！」

「・・・づがみざん・・・・」

「まずい・・・一旦退却を！」

「してほしくないなぁ。メンドイだろ？」

「っく！」

「オレが時間を稼ぐ」

「葦原さん、ダメですよ！」

「しかしこの大群をどうすれば！」

「な〝ぁ・・・ウォーターカッターっでじっでるか？」

「は？」

三人が蒔風を庇うように立ち、目の前にはアントロードの大群。
退けばすぐに圧殺されてしまうほどの脅威

そんな中で一番死にかけの蒔風がボソボソと言った。

蒔風を見ると、水球は左手に移され、そこから糸が伸びている。
実際には超極細の水なのだが、パッと見ただけではわからない。

そして伸びた先は蒔風の右手人差し指の先端。
蒔風は指をアントロードに真っすぐ、左手で弓を射るような体制をとる。

「伏せろ！」

ビィィィィィィィ！！

三人が伏せる瞬間に指先から水が放出され、アントロードを切り刻んでいく。

ウォーターカッター
水の接地面を極端に小さくし、高出力で吹き掛けることで対称を切断する技術

それを蒔風は己の身一つでやってのけた。

しかし水には限りがある

５０体ほど倒した所で水は尽き、指先は裂け、赤い血がポタポタと垂れていた。

「どうした？その程度か！」

「奴」が波動砲を撃ち、四人を蹴散らす。

爆風の中で蒔風の意識は途絶えた。

――

目が覚める。

蒔風たちは五メートル程の高さで柱に一人ずつ縛り付けられ、身動きの取れない状態にある。

「お目覚めかい？寝坊だぞ、蒔風ぇ！」

「奴」が宙で笑う

足元を見ると、アントロードがウジャウジャとうごめいていた。

「蒔風さん！」

「大丈夫か！？」

横を見ると、変身の解けた津上と葦原がやはり縛られていた。

氷川はスーツが上手く剥げなかったのか、Ｇ３－Ｘのまま縛り付けられている。

「大丈夫なもんかよ」

「奴」が蒔風に近寄り、上半身の衣服を剥ぎ取る。

「！！！！！」

そこには、先程クィーンアントロードに貫かれた跡と、大小様々な傷跡、さらに開きかけた傷、血で滲んだ包帯が見えた。

「やっぱりな。貴様回復しきってないだろ？オラ！」

「イギッ！ガッブァ！」

「奴」が蒔風の鳩尾に拳をめり込ませ、蒔風が苦悶の叫びと表情を浮かべる

「ふん、おかしいとは思っていたんだ。いくらか時間が経ってるとはいえ、あれだけの損傷を回復しきっているとは思えないってな」

「どういうことだ！」

氷川が「奴」に叫ぶ。

「奴」はそれに答えた。

「簡単なことだ。蒔風に限界が近いってことさ。幾つもの世界で戦い、負傷してきた。ま、途中で回復を何度かしてはいるがな。それでもやはり限界が来てしまう」

「そんな・・・そこまで？」

「さっきのウォーターカッターだってそうだ。こいつはいざとなれば、自らの力を変換して水が無いところでも生成して使うことができる。だがそうしなかった。さらには指先まで裂けるしまつ」

「今にして見れば、ここ最近のワールドリンクも貴様自身は何もせず、最主要人物に任せたものばかりだったな」

「奴」の推測。

それは外れてはいない。

確かに蒔風の体はボロボロだ。

しかし・・・・

「ガブッ・・・で？」

蒔風が口を開く。

「あん？」

「だからどうした」

「ほほぅ」

「オレがどんだけ死にかけようが、それがてめぇの勝因になるわけじゃねぇだろうが・・・・」

「死にぞこないがよくいう」

パチン

「奴」が指を弾くと、蒔風の縄が切れる

蒔風の体が重力にまかせて落ちていく。

「食え。跡形も残すなよ」

「奴」が命じ、アントロードが蒔風の落下地点に殺到する。

そして蒔風が落ちると、

着地点周辺のアントロードが押し潰されるように地に伏せた。

「な、に？」

「おおおおおおおおおおおァァァァァァァ！！混闇陣！！」

地面が漆黒に染まり、力を発揮する。
発揮するのは混闇。
闇の力。引き付ける力。抗えぬ重力の力！

ギ、ギュガァァァァァァ！！
ドンドンドン！ドォォォン！！

蒔風の着地点周辺のアンノウンが潰され、光の輪が頭上に現れ爆発する。

さらに混闇陣は天井まで引きずり降ろし、周りの柱までを捩曲げる。
それにより津上、葦原、Ｇ３－Ｘは束縛から脱する。

「変身！」

「変身！蒔風さん！」

二人が再びエクシードギルス、アギトバーニングフォームに変身し、
蒔風に駆け寄るが

「三人とも！後ろに下がれぇ！！ヌゥァァァァァ！！圧水掌！！
！」

蒔風の構える手に水が生成され集まる。

頭上に集まった莫大なる量の水は、蒔風の振り下ろす動作によって、
残りのアンノウンたちを押し流し、壁に激突させる。
それでもなお水は襲い掛かり、影に押しやられたアンノウンと、後
から流れてくるアンノウンとぶつかり合い、一気に爆発する。

そして最後の一体を「風」で斬撃を放ち倒す。

「まだそれだけの事ができるか蒔風！！」

サァァァァ・・・・・

そこに日の光がさす。

「やっとか・・・問題だ。オレがなぜ・・・一旦混闇陣を、発動さ

せたと・・・・思う？」

「な・・・まさか・・・雲すらをも捉えたというのか！！」

その光を受け、アギトの装甲が殻のように剥がれていく。

アギト・シャイニングフォーム
その輝きは、可能性。人類の無限の未来の輝き！

そして蒔風が開翼し、さらなる切札を！！

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＡＧＩＴＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＷＥＰＯＮ～

蒔風の背の翼が粒子となって散る。

その粒子はアギトの背に宿り、ふたたび翼として顕現する！！！

「（まずい・・・あれは闇の力すら恐れた人類の可能性・・・・それにあいつの翼が付いたら！！！）ッッッチィ！！！！！」

「かましてやれ・・・・・」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＡＧＩＴＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

「ハァァァァァァァァ・・・・・・・・・」

アギトの足元に紋章が輝く。

そのエネルギーを右足に込め、その翼をもって上空へと飛びあがる！！！

「ハッ！！オオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

そしてキックの体勢をとると、「奴」までの直線上に、五つの紋章が浮かび上がる。

一つ目はアギトの、二つ目はギルス、三つ目はＧ３－Ｘ、四つ目はもはや存在しないライダー・アナザーアギトのもの、そして最後にシャイニングアギトの紋章であった。

バッサァ！！！！ゴォウ！！！！！

「ハァアアアアアアアアア！！！！！！」

「寝ぼけんなアリども！！！！！せめて盾にはなりやがれ！！！！！」

ズグアアアアア！！！

再び作り出されるアントロード・レプリカ。

しかし止まらない。
止まるわけがなかった。

その身に宿すのは人の未来。
背にあるものはその希望なのだから・・・・

「ぬっがあああああああああああああ！！！！！！！！」

ドドオオオオ・・・・・

爆発が起き、「奴」が無様に転がる。

シュウシュウと身体が消えかけている。

頭を振り、手を当てながら、それでも立ち上がろうと顔をあげるが

「愉快だな。愉快ついでに死んでおけ」

パァン

蒔風が「奴」の目の前に立ち、至近距離から撃った。

Ｇ３－Ｘの装備品である銃、ＧＭ－０１　スコーピオンで一発だけ。

その一発の銃弾で「奴」ははじけ飛んで、消えた。

「は、だから言ったろ・・・・・お前の勝因にはならない・・・・・・って・・・な・・・・」

それだけ言って蒔風が倒れる。

「蒔風さん!!」

「蒔風!!」

「大丈夫ですか!」

三人が駆けより、蒔風を揺する。

しかし蒔風は目覚めない。

三人の声がだんだんと遠くなり、蒔風の意識は闇に沈んだ。

ーーー

「彼女は超能力者で、僕も何度かお世話になってるんです」

「オレも命を救われた」

「生き返らせるのはもう無理ですけど・・・怪我の治療くらいなら何とか」

蒔風が自分の身体を見て、手を見て、グーパーグーパーして身体を確かめる。

「すっげぇ・・・ありがとうございます！！！」

「しかし・・・今回はありがとうございました」

「ほとんど蒔風に戦っても立ってばかりだったな」

「俺たち・・・蒔風さんの足手まといにしかならなかったですよね・・・真魚ちゃんがいなかったら死なせてしまっていたかもしれませんし・・・・」

「いいや・・・俺一人でもやられていた・・・最後のあの一撃。あれはオレでは出せない。だから津上さんたちがいて本当に助かりました」

「まぁ、あれから二日も寝てれば身体もそれなりに治りますよね」

「二日！？」

「ええ・・・どうしました？」

「大変だぁ・・・・オレすぐに行かないと！！！」

「待ってください！！確かに傷は治ってますけど、まだ安静に・・・」

「「奴」は次の世界に行ってしまってるんです！！やばいやばい・・・次の世界が多重世界だといいんだが・・・・」

「多重世界？」

「一つの世界の中にいくつもの世界が内包されている世界です。ほら、異世界に飛んだ～～なんてものがそんな感じです」

「へぇ～～」

「でもそんな世界そうそうないですからね。では、ありがとうございました！！！」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＡＧＩＴＯ］

「あ、まって・・・」

「すまん！！一分一秒が惜しい！！」

「蒔風さん！！！ありがとうございました！！！！」

いいってことよ～～、と蒔風が言いながら手を振ってゲートをくぐって行ってしまう。

「騒がしい奴だったな」

「でも、凄かったです」

「ねぇねぇ、あの人が目覚めたら教えてくれるって言ってたけど、何があったの？」

「あーうん、それはね・・・・」

そうして再び日常が始まる

アギトと人間の生きるこの世界の・・・・日常が

――――――

しかし今夜はいつもと違う。

街の一部が結界に包まれ、その中で戦いが繰り広げられている。

「ハァハァハァ」

「もういいよ!!君は僕を置いて逃げて!!!」

一匹のフェレットが言葉を発する。
それを抱えて逃げる小さな人影。

「そんなことできな「僕は足手まといだ!!君だけなら逃げられるだろう!?」・・・・」

ドォン!!!

後から追ってきているモノは、異形のモノだ。
灰色のもやみたいのから、触手の生えた化け物だ。

「そうだな・・・足手まといは捨てるか・・・・」

「ッ!!そう・・・だよ・・・それがいいんだ・・・・」

「だから・・・・オラ!!（ブンッ!!）」

「え?うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・」

小さな人影がフェレットを投げる。

その小さな姿が飛んでいって見えなくなる。

飛んで行った彼はその先で一人の少女と出会うのだが、それはまだ誰も知らない

「さてと、足手まといもいなくなったし・・・・」

背後に迫る化け物に小さな人影が言った

「ブチノメさせてもらいましょか。覚悟しろよ?オレの全力全開は、ちっとばかしキキきすぎるぞ!!!」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

アギト　～死にかけのＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ～（後書き）

終わりましたな。アギトの世界！！

アリス「今回蒔風かなりまずかったんじゃ？」

ですねー

というか、蒔風に与えられた「勝ち続けなければならない」という条件がまず異常なんですよね

ア「そんな人はまずいませんもんね」

それをしなきゃいけない蒔風は相当つらいですよね・・・・

ア「あれ？そういえば世界が一つ終わったのに彼来てませんよ？」

ああ・・・それね・・・

ア「・・・・まさかあなた・・・・・」

めんどくなりました

ア「このダメ作者！！でも私は許します」

なんで？

ア「出番増えるし」

このダメ管理人

【仮面ライダーアギト】

構成：”フォルス”７０％
　”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：津上翔一

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：アギトに銀白の翼を付与

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：それからのシャイニングライダーキックスペシャル

さて、次の世界は長くなります。

よって後書きの最後の言葉がネタ切れになる可能性大です。

ア「名言っていっぱいありそうじゃないの？次のって」

だって次の世界はストーリー丸々使いますもん。

ア「おや、今までのは話が終わった後に介入していたのに？」

そういう場合もありますよ

ではどうぞ

ア「次回、ついにキタ！！魔法少女！！！！」

ではまた次回

風は空に星は天に　そして不屈の心は　この胸に！！！

なのは　～突然の襲来なの？～

どうもこんにちは、高町なのはです。

ついこないだまでは普通の小学三年生だった私ですが、最近魔法少女になってしまいました。

違う世界からやってきたユーノくんと一緒に、危険な古代の遺品、ロストロギア・ジュエルシードを回収するお手伝いをしています。

そんな魔法少女のお仕事に慣れてきたある日のことなのですが・・・

・

ーーー

森の中って言っても、実は友達のすずかちゃんの家の裏なんですよね
すずかちゃんのおうちにアリサちゃんと遊びに来ていたんだけど、
途中でジュエルシードの反応があって抜けだしてきちゃいました。
うーーー、さっきまでいろいろとお話してたのに～～～。
こないだのテストのこととか、転校生のこととか・・・・

でもしょうがないよね・・・

それで、駆け付けた先でユーノくんが張ってくれた結界の中で見つけたのは・・・・・

みゃーーーん

「う・・・・・」

「お・・・・・」

ズシンズシン・・・・

「あ、あれは・・・・・」

おっきな子ネコちゃんでした。

大きさが十五メートルぐらいの大きな子ネコちゃんでした。

「た・・たぶん・・あの猫の大きくなりたいっていう想いが正しくかなえられたんじゃないかなと・・・・・」

「そ・・・そっか・・・」

大きくなるって違うと思うけど・・・・

さすがいろんな願いを叶えるけど、その方法に問題のあるジュエルシード・・・・

「でも、このままじゃ危険だから、早く封印しないと」

「そうだね・・あのサイズじゃ、すずかちゃんも困っちゃうだろうし・・・・」

あの猫ちゃん、よく見たらすずかちゃんの飼っている猫のうちの一匹だ。

「襲ってくる様子もないし、ササっと終わらせちゃおう・・・レイジングハート、お・・・・」

ギュオオオオオオオオ
ドパン！！

みゃぁぁん！！！

レイジングハートを起動しようとしたら、何かが飛んできて子ネコを攻撃してきた。

誰！？

そう思って飛んできた方を見ると、そこには・・・

「バルディッシュ、フォトンランサー、連撃」

《Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ，Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ》

ドドドドド！！！

みゃーーん

そこには電柱の上に立つ、黒いバリアジャケットに身を包んだ女の子がいた。
金色の髪の毛ろツインテールでまとめている。
その手にはデバイスが握られている

「な！？魔法の光！？そんな・・・」

そうだそうだ、ぼーっとなんかしてられないよ！！

「レイジングハート、お願い！！」

《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．．ｓｅｔ　ｕｐ.》

レイジングハートが輝いて、バリアジャケットに身を包む。
よし！！！

《Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ》

空を飛んで、子ネコに近づく。

するとあの子からの魔法攻撃が飛んできた

《Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ，Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

防御魔法を張って、それを防ぐけど、庇いきれない！！

子ネコの足元に打ち込まれて、子ネコが倒れてしまった。

それに合わせて地上に降りる。

近くの木にあの子が降りてきた。

遠くてよくわからなかったけど、私と同じくらいの女の子？

「同系の魔導師・・・ロストロギアの探索者か」

あの子・・・怖い・・・
なんて・・・さみしそうな・・・・

「バルディッシュ・・・」

《Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ，Ｓｅｔｕｐ》

「バル・・・ディッシュ？・・・」

それがあの子のデバイスの名前みたい

そのバルディッシュが鎌みたいな形に変わった。

そして足元をすくうように切りかかってくる！！！

《Ｅｖａｓｉｏｎ．Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ》

レイジングハートのおかげで空中に飛んで回避できた。

危なかった～～～

それにしても・・・速い・・・

私よりも・・・ずっと強い！！！

《Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ》

さらに攻撃が来た。

斬撃を飛ばすようにくるくると回りながら魔法攻撃が飛んでくる！！

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

とっさに防御してさらに上に上がるけど、追ってくる！！避けられない！！

ガキィ！！！

だからレイジングハートで受け止めたけど・・・やっぱり速い！！！

「なんで・・・なんで急にこんな・・・・」

「答えても、多分・・・意味がない」

そんな・・・そんなことないよ！！！

「くっ！！」

ガァン！！！

距離をとって、あの子のデバイスが最初の形に戻る。

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ》

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ．Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ》

お互いにデバイスを向けあって止まる・・・

あの子・・・やっぱり私と同じくらいの女の子だ・・・・でも・・・・

みゃーーん・・・・・

え?子ネコちゃん?

なのはがそっちに気を取られていると、少女のデバイスに魔力が集まり

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんね」

《ｆｉｒｅ》

ドン！！！！
ドカァァァァ！！！！
爆発が起き、なのはを巻き込む。
「なのは！！！」
ユーノが叫ぶ。
撃った方の彼女はこれで終ったと思った。
だが・・・・・・
「呼ばれなくても！！飛びでて現れじゃじゃじゃじゃーーーん！！！」

「え？」

「は？」

「・・・・？」

三者三様に驚いている。

なぜならさっきまでいなかった人物がそこにいたのだから。

その人物の身長はなのはより少し高いくらいか。

砲撃からなのはを守ったようである。

「あーーーーーっ！！！きみは！！！！」

ユーノがその姿をはっきりととらえ、また驚きの声を上げる

「きみは前に助けてくれた子！！！」

「おーーーう、フェレット君。あのときの怪我は大丈夫かい！！それと・・・」

彼が振り返り、なのはの方を向く。

そこでなのははこの少年がだれだかわかった。

「転校生の・・・・蒔風くん！！？？」

「そのとーーーーーり！！！！！！」

パンパン、と手を叩いてから再び少女の方に振り返る蒔風。

「なのは！！彼を知ってるの！？」

「えっと・・・うちに来た転校生なんだけど・・・・ユーノくんも知ってるの？」

「なのはに最初にあったあの夜に助けてもらったんだ。でも・・・」

「おお、あんときな、ブン投げて悪かったなぁ。あの後あいつらぶちのめそうとしたらピンク・・・いや、桜色だな。魔法光が見えてよ。そしたらあいつらそっち行っちまうんだもの」

「じゃ、じゃああのときユーノくんが言ってた助けてくれた人って・・・」

「俺さんだよ」

「私と同じ年なのに・・・」

「ん？ああ、この姿ね・・・それは・・・」

「それよりも！！・・・なんで君がこんなところに！？きみは・・・何者なんだ！？」

「へへっ、そんなことはこの場において些細な問題だ。そんなことより・・・おい君！！！黒いが影みたいなやつ知らないか！？」

「・・・知らない。あなたも・・・ジュエルシードを狙って？」

「そっか、知らんか」

「あれは危険なものなんだ！！それがわかって・・・」

「やめとけよ」

「な！！」

「ありゃ梃子（てこ）でも動かないぜ？」

「それは・・・・」

「一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、自覚の有る無しにかかわらず周囲の生物が抱いた願望を叶えるロストロギア、ジュエルシードか・・・」

「渡さない・・それは・・・私に必要だから・・・」

「はん・・・こっちはクラスメイト襲撃されたんだ!!そのまま黙ってはいそうですかなんて行くと思ってんのかい!?」

「だったら・・・ちからづくで!!!」

ブォン!!!バキぃ!!

最初の音は少女がバルディッシュを振るう音

そして二個目は、蒔風がそれを蹴り、軽くはじいた音だ。

「!!!!」

「手加減なしだよ。ハァァァア・・・・変身!!!」

ヴァン!!!

「仮面ライダァァァァ！！！アァギトォウ！！！ってか、変身すれば元の大きさになんのかい！！」

「なにあれ！？」

「まほう！？」

「違うんだよなぁ・・ま、説明は後でするよ」

「大きくなった・・・変身魔法？」

「うーーーんやっぱちっと違うんだよな。ハッ」

アギトがトリニティフォームになり、少女に切りかかる

それをバルディッシュで受けとめるが、止めきれず、地面にまで降りてきてしまう。

「そっからのライダーーー！！！キィーーーーク！！！」

「！！！！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

バチぃ！！！！

「ぬっ、おぉ！？」

「くっ」

少女の展開したバリアで、ライダーキックが弾かれ、両者共にバランスを崩す。

少女が体勢を戻すと、すでに蒔風は変身を解いて接近していた

「ッ！？はや・・・・」

「力を借りる！！！」

蒔風が一瞬だけ薄く光って、少女の肩をガシッとつかむ、そして借りた力を発動させる！！！！

「貧乳はステータスだ！！！！希少価値だ！！！！」

・・・

なのはが予想外の状況におろおろしていると、少女がジュエルシードを封印してしまった

「ま・・まて！！！」

「まって・・・あなたのなm」

ビュン！！！

なのはが言い終わらないうちに、少女は去って行ってしまった。

二人とも、それを見ていることしかできなかった・・・・・・

「ユーノくんあの子は・・・・」

「たぶん、僕がいた世界と同じ世界の住人だ」

「そう・・・なの・・・」

「それよりも、彼は何者なんだ？」

「あの子より強かったよね・・・」

「蒔風・・だっけ？」

「うん、蒔風舜君。そっかぁ、ユーノくんを助けたのって蒔風くんだったんだ」

「そういえば彼、出会ったときに変なことをいってたな・・・」

「なにを？」

「主要人物とか、なんでちっこいんだとか・・・・」

「そういえば姿が変わった時にも「元の大きさ」とか・・・・」

「でもこのままじゃ・・・・」

「とりあえず・・・運ぼうか」

「すずかちゃんになんて言おう・・・・」

そうしてユーノの魔法で近くまで運び、庭に差し掛かるところで降ろし、みんなを呼ぶ。

侵入者だと騒がれ、すずかやアリサからも怪しまれたが、なのはの弁解で何とかことなきを得た。

理由はわからないが林の中で倒れていたから連れてきたと言い訳した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「はっ!!目覚めの時!!」

ガバ!!

蒔風が目を覚ますと、何だか豪華な部屋のベットの上にいた。

「目が覚めた!!!そしてここはどこですかい?」

蒔風がベットから出ようと立ち上がると

「動くなッ!!!」

「!?撃たないで!!!」

指を銃の形にして構えたアリサ・バニングスが扉を開けて立っていた。

「アリサちゃん、どうしたの?」

「あ・・目が覚めたんだ!!」

あとからなのは、月村すずか、そしてフェレット・・・ユーノが入ってきた

「あーーーそっか、オレ倒れて・・・」

「あんた!!転校生の蒔風でしょ!?なんであんなとこいたのよ!!」

アリサがすごい剣幕で詰め寄ってくる。

それもそのはずである
アリサやすずかはかなり凄い大金持ちの家の子だ。
ゆえに、誘拐などに狙われることが多かった。

そんなすずかの家にいたという蒔風は、怪しまれて当然である

そんなアリサに蒔風は

「冒険したかったから」

なんて答えた

「・・・・はぁ！？」

「冒険したかったからだ！！！世界はでっかい宝島！！！そうさ今こそアドベンチャーーー！！！！」

「バカかあんた！！！！」

「アホといって！！」

「ダメだこいつ！！！」

「まあまあ・・・・」

「二人とも落ち着いて・・・」

「とにかくだ、俺ってこの町に来てまだ間も無いからさ、いろいろ歩いて回ってたのよ」

「それでウチの敷地に？」

「セキュリティーがあったはずよ！！」

「ん？金網が破れていてそっから入ったんだよ」

「そうなんだぁ」

「そうなのだ」

「すずか！！信じるの！？」

「うーーん。どうだろ。なのはちゃんは？」

「えっ？わたしは・・・大丈夫だと思うよ？」

「そんな・・なのはまでぇ」

「じゃあどうやったら信じてもらえますかねぇ」

「・・・・そうね・・・じゃあ・・・」

ドン！！

「これで決めるわ！！」

「おい、その嘘発見器はどこから出した」

「気にしたら負けよ」

「そ・・そうか」

「えーーっと・・・よし、準備完了！！ぜんぶＮＯで答えてね」

「ど～～んとこ～～い！！」

「いくわよ～～。あなたは侵入者である」

「ノー」

ピーーー

「アウトォ！！」

「まてまて！！オレが侵入してしまったのはわかってんだろ！？問題はオレが誘拐とか考えてるかどうかだろう！？」

「そ・・・そうだったわね・・・じゃあ、あなたは犯罪目的でこの家に来た」

「無論、ノーだ」

・・・・・・・・・

「本当のようね・・・・・」

「ふう」

「よかった～～」

「いやホントにね。『誤解が解けてよかったよ』」

「！！！」

『これ、念話ってんだろ?便利だねぇ』

『なんで・・・やっぱり魔法関係の!?』

『それはおいおい説明しますよ』

「でも、もうこんな時間だし・・・・」

「そうだね、もう帰る時間ね」

「あ、じゃあオレも帰ります」

そうして、なのはとその兄の恭也、アリサ、蒔風は月村家のリムジンで送ってもらった。

「ここでいいですよ」

アリサを下した後、高町家へと向かっている途中で、蒔風が声をかけた。

「え。でもここって・・・」

「公園だぞ」

なのはと恭也が驚く。

確かにそこは公園で、周りに家は見当たらない。

「大丈夫ですって。では・・・・」

そう言って蒔風は降りて行ってしまった。

「・・・怪しいな」

「お兄ちゃん？」

「なのは、あの子確か転校生なんだよな？」

「そうだけど・・・」

「あの歳であの動き・・・普段の行動に出るほどに染みついている・・・いったい・・・」

「どうしたの？」

恭也がブツブツと何かを言ってるが、なのはには聞き取れない

「なのは。追うぞ」

「え！？」

「あの少年に興味がわいた」

「お、お兄ちゃん？あ、待ってよ～～。すみません、待っててもらえますか？」

なのはは運転手に頼んでから、恭也を追う

恭也はすぐに見つかった。

公園の茂みの向こうに蒔風がいるようで、気に隠れて様子を見ている。

なんか唖然としているようだが・・・・

なのはもそっと近寄って覗きこんだ。

そこには・・・・

「♪あるっ晴れった日ーのことーーまほーいじょーのゆーかいがーー・・・・・」

蒔風がいた

しかもそれだけではない

テントが張ってあった。

テントのちょっと離れたところに、グッナイ！！（笑）とかかれた看板が割られて捨てられてる。

蒔風が桶とタオルといくつかの衣服をもっている。

これから銭湯に出かけるみたいだ

蒔風が桶から石鹸を落とす。

拾って顔を上げた時に、なのはと目があった。

同時に、恭也にも気付く

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・ナズェミデルンディス！！！」
「「！！？？」」
「ハッ！！すまない、取り乱した・・・」
「えっと・・・蒔風くん？」
「何でしょうか高町さん」
「なのはでいいよ。・・・このテントは？」
「オレん家だけど」
「えーーーーー！？」
「君はそんなところで暮らしてるのか！？」
「あ、高町さんのお兄さん」
「恭也でいいよ」
「ええ、まあ・・・こんなりじゃホテルは無理ですし・・・・」
「・・・・親は？」

「空に・・・・行きました」

「そ、それは・・・・・」

「今どこの辺飛んでんだろ。飛行機落ちなきゃいいけどなーー」

「旅行!?」

「いいえ、パイロットです」

「二人揃って!?」

「いえ、母はフライトアテンダントです」

「死んだみたいに言うな!!」

「はぁ・・すみません」

「・・・で、こんなところに?」

「家はどうしたの?」

「人生これ、サバイバルだ!!って言われました」

「凄い環境だね・・・」

「・・・君、うちに来てみないか?」

「え?」

「こんな状況を見て黙ってはいられないよ」

「マジすか！！助かります！！あなたは神か！？」

「それほどでもないよ・・・・」

「ま、待ってよお兄ちゃん！！」

「ん？どうしたなのは」

なのはは狼狽している

そりゃそうだ、昨日までクラスメイトだったのが急に同居人になってしまうのだから。
しかも一般人ではないらしい

それになのはだって女の子なのだ。
男子が急に来ても困ってしまう。

「？？？よくわからんが・・・蒔風くん、では来てくれ」

「はいな、ではちゃちゃっと片付けますかね」

そうして蒔風と恭也はテント一式を片付け、先ほど待たせたリムジンに乗せ、三人で高町家に向かった。

家について恭也が事情を説明する

そこでなのははこんなことを考えていた

「（大丈夫、大丈夫。お父さんもお母さんもそう簡単にオーケーするわけが・・・・）」

「うん、いいよ」

「嘘ぉ！？」

「なんだ、なのは。彼に公園生活をしろというのかい？」

「う・・・・」

そう言われては言い返せない。

蒔風は家にある道場で寝泊まりすることになった。

「さて、条件通りにしてもらうよ？」

「え？条件？」

「なんだなのは、聞いてなかったのか。蒔風くんと恭也で一手手合

わせ願うといっただろう」

「彼の動き一つ一つを見ればわかるよ。彼は強い。そこで家での居候の代わりに、一戦やってもらおうというわけさ」

「ま、いいですけどね」

二人が木刀を構える

戦いが始まる・・・・・終わった

「早ぁ!!」

「つ・・・強い・・・」

勝負は一瞬だった

恭也が攻め込み、上段から振り下ろす。

蒔風は上に木刀を放り投げ、その木刀を白刃取りする。

そして動きの止まった恭也の脳天に、先ほど放った木刀が命中したのだ

それだけだった

「オレの呼吸に合わせて飛び込んで、白刃取りだと?・・・・しか

も完璧に・・・」

白刃取りというものは言うほど簡単なことではない。

なにせ相手の動きに反応して手を出すのでは遅いのだ。

相手の重心、腕や足の筋肉の動き、視線の先。

その他諸々を観察し、はじめて実行することができるのだ。

「蒔風くんの勝ち！！！」

そうして、恭也と蒔風は別々に風呂に入り、寝床についた。

『ユーノくん・・・』

『うん、彼に話を聞くなら、今だね』

なのはがユーノを抱え、そっと部屋から抜け出し向かう先は蒔風のいる道場。

「来たかい」

「お話・・・聞かせてもらえるよね？」

「おっけーおっけー。なにから話すかね」

そうして蒔風が話し始めた

to be continued

なのは　～突然の襲来なの？～（後書き）

なのはの世界イエーーーーーー！！！！

アリス「おお、ついにですか！！」

へっへっへ

これでアクセス数もうなぎのぼりＹＯ！！

なのはブランドは凄いからなぁ！！！！

ア「わぁ、外道！！でも多くの人が見てくれるならいいですね」

純粋になのはは好きだしねーー！！！！！

ア「オレの嫁とか言うんですか？」

そういう意味じゃなくて作品がですよ

ア「なるほど」

さあ！！カモンアクセス数！！感想！！お気に入り登録ーーー！！！！

ア「なんてやらしい作者！！しかもそういう「やってください」的な発言はＮＧでしょう！？」

はっ、しまった！！！

できたらでいいですからねーー！！！

調子乗ってすみませんでしたぁ！！

ア「そういえばこの話は無印？それとも劇場版？」

似てわかるように無印です。

実は劇場版で進めたかったのですが・・・

ア「ですが？」

細かいセリフなどがうろ覚えでして・・・

ア「ああ、ＤＶＤ早く欲しいですよね」

そうそう、そっちの倉庫（バンク）にも無くてさ

ア「へぇ・・・ってか今の発言意味わかりません」

ま、すっるーしてよ

そういうわけで無印です

でも、演出とかＳＬＢとかの迫力は劇場版のままで想像してください

ア「劇場版を無印で補完してるようなものですね」

そんな感じでお願いします

ア「次回、説明入りまーーす。そしていい湯だな」

ではまた次回

リリカル　マジカル！！

蒔風があらかたの説明を終えた。

ユーノが口を開く

「じゃあ、君がいたのはどこの管理外世界なんだ？」

「違う違う。そういうのも引っくるめて違う世界からきたんだ」

「どういうことなの？」

「いいか？つまりだな」

蒔風が紙を取り出して二つの丸を書く。

「こっちの右の方がオレがいた世界。で、こっちの左の方がなのはっちの世界」

「うんうん」

「オレはこの間を飛び越えて来たわけだけど・・・」

蒔風がなのはの世界の方の円の中にさらに幾つかの丸を書き足していく

「こんな感じなんだよ。幾つもの世界が内包されている世界。それがこの世界。で、オレはそれよりも高い次元で世界を越えてきたんだ」

「そんなことが・・・・」

「僕たちが行き来する世界よりも高次元の・・・・」

「私と同い年なのにすごーい」

「いやいや、オレは年上だぞ」

「・・・・え？」

「オレはもっと年上なんだよ。ただ「奴」が狙ってくる以上、オレはなのはと接触しなければならない。でも、大きな男の人が小学三年生に近づいていくのは無理がありすぎる」

「そ・・・そんなこと」

「いきなり知らない人に「君は狙われてるんだ。お兄さんが助けてあげよう」って言ったらどうするよ」

「ディバインバスター」

「だろ？」

「なのは！？」

「ち、違うよユーノ君。例えばだよ、例えば」

「だからこんななりだがオレは同級生じゃなくてお兄さんなんだよ」

「えー?でもそんな感じしないし・・・」

「おい・・・まさか・・・」

「同級生だと思ってるよ?私は」

「あ・・・ま、いっか」

「それで、なのはが狙われてるって?世界を喰らうって」

「そうなんだよ。「奴」はなのはを狙ってくるだろうね」

「じゃあ今も危ないんじゃ!?」

「いやぁ、かなり先まで大丈夫だと思うよ?」

「なんで?」

「いったろ?この世界は多重世界だ。で、世界を解析するのにも当然時間がかかる」

「だから当分は大丈夫?」

「そゆことだよ。だから今は当面の問題に集中しよっか」

「ジュエルシードの回収・・・」

「それからあの子・・・・名前・・・聞けなかったな・・・・」

「ジュエルシードを追ってりゃまた会えるさ」

「そう、だね」

蒔風との話が終わり、なのはは自室に戻りベッドに入る。

眠気はすぐにやってきた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「温泉街・・・・・ですか？」

「そうそう。行くからね」

次の日の朝。朝食をとっている時のこと

高町家の家長、高町士朗さんに今度の連休に、温泉街に家族旅行に行く旨を伝えられた。

高町家の経営する喫茶「翠屋」は年中無休なのだが、連休の時には店員さんに任せて家族旅行に行くのが定番らしい。

「そうですか。では留守は任せてください！！」

ま、「奴」も動かないだろうしね。

この家の安全は私が守ろう！！

「なに言ってるんだい？君も来るんだよ？」

は？

「・・・今何と？」

「だから、舜君も来るんだってば」

「まてなのは。なんだそれは。舜君ってのやめてくれ。くすぐったくなる」

なのはは朝起きた時からオレのことを「舜君」と呼ぶ。

まあ小学生なら普通かも知れんが・・・・

「えーー？だってお友達でしょう？」

ぐっ！！

や、やっぱりなんか主要人物たちは名前で呼び合うのが普通みたいになってる。

慣れようとも思うが・・・いまいちうまくいかない

「それよりも、君は今はこの家に住んでいる。仮にも今は家族なんだから」

「行くんですか?というか、行ってもいいんですか?」

「なにを遠慮するんだい?」

「いやまあ、行ってもいいと言われれば行きますけど・・・」

「じゃあ決まりだ。」

「あ・・はい。分かりました・・・・」

決まってしまった

そして学校に向かう。

私立聖祥大附属小学校3年生

それがこの世界でのオレの肩書だ。

しかし小学校の授業なんかまともに受ける気もしないのだが・・・・

今は高町家に居候の身。

ここで俺が授業フケたりしたら確実に士朗さんに連絡が行く。

そんな迷惑はかけられない。

だから俺は授業中はずっと別のこと考えたり、ノートに落書き、借りた力の残り時間の算出などをして時間をつぶした。

世界の構築を解くのも楽しそうでやってみたが、すぐに飽きてしまった。

そうして昼休みである。

「えーーーーー!!??こいつもくんの!?」

と叫ぶのはオレの右隣のアリサ・バニングス。

ちなみに正面に月村さん、左にはなのはだ。
机を二つ並べて四人で昼飯を食っている。
最初は屋上に行こうかとも思ったのだが、なのはに引きずられてきてしまった。
ちくしょう、弁当人質にするのは卑怯だ。
こいつオレが実はもっとお兄さんだって完全に忘れてんな？
そして食べながら話していると連休の話になった
どうやら月村さんとそのメイドさん、それとアリサ・バニングスも旅行に来るらしい。
「な・ん・で！！こいつもくんのよ！！」
「お父さんが連れていくって」
「はぁ？ちょっとなのは。いつ決まったのよ」
「今日の朝だよ？」
「今日の朝って・・・まさかあんた！！」
「舜君はウチに住んで「バッ、なのは」るの」
「止められなかった・・・・」

「そんな！！あんた！！なんでくんのよ！！ってかいんのよ！！」

「俺だった遠慮したさ。だけど士朗さんが「今は家族だからね」って言ってくれたんだから、いやだというのは失礼になる」

「～～～～ッ！！蒔風舜！！あんた旅行先で変なことして台無しにしたらただじゃおかないからね！！」

「心配するなアリサ・バニングス。そういうのを盛り上げるのは得意中の得意だ」

「蒔風くん、そういうの好きなんだ～」

「任せてくださいよ月村さん。楽しく行きましょう！！いえ～～い！！」

「すずかでいいよ？うん、いえ～～い！！」

「ほら、なのはも、いえ～～い！！」

「い、いえ～～い！？」

「あーーーもーーーー！！！！」

そうして当日

向かう先は海鳴温泉。
そこで二泊三日の温泉旅行だ。
大体いつもの定番らしい

『わーーーーー！！！』

温泉街につくと女性陣が声をあげる。
やはり女性にとって温泉というのは素晴らしいものなのだろう。

「早速行こうよ！！」

「まずあれに入りたい！」

「うんうん！！」

女性陣は早速入るらしい。
さて、オレも入ってこようかねぇ。

するとなのはがユーノを連れて行こうとする。

「なのさんや。動物は入れてもいいのか？」

「ん？大丈夫みたいだよ？」

なるほど。ペット同伴オーケーというわけか。

じゃあオレも入っｔ・・・ピキューーーン！！！

『ユーノ！！』

『え！？な、なに舜？』

オレはユーノに念話で話しかける

これは・・・まずいかもしれない！！

『おまえ、温泉って何か知ってるのか！？』

『え？よく聞かされてないけど・・・』

『いいか・・・温泉というのはな、巨大浴場なんだ。このままではお前、女湯に連れ込まれるぞ』

『え!?で、でも僕は男なんだよ!?』

『バカ野郎!!なのはにとってお前はただの人の言葉を話す動物さんぐらいの認識だ!!ってかお前人なんだ?』

『ああ・・僕は人間だよ。今はなのはをサポートするためにこの姿だけどね』

『・・・この野郎・・・』

『は?』

「てめえ女湯覗く気かぁーーー!!!!」

「キュッ!?」

「舜くん!?」

しまった念話が切れてしまったか。

ええい、だが今はそんなことどうでもいい

「なのは!!ユーノを渡すんだ!!」

「え?でもユーノくんは今から一緒に・・・・」

「だめです。貸しなさい。そいつは男なんだぞ!」

「でもフェレットだし・・・・」

この子・・・そ、そうか!!しまった。なのはは天然さんだった!

！！

「ユーノ！！お前それでいいのか！？」

「キュ？」

「女湯に連れ込まれ、目の前に恥ずかしい光景が広がるんだぞ！？」

「ちょっと！！フェレット相手に何熱くなってんのよ！！」

黙っててくれアリサ・バニングス

これは戦いなんだ

オレの紳士魂をかけた戦いなんだよ！！

「こっちへ来い、ユーノ」

「だめ！ユーノくんは一緒にお風呂入るの！！」

チィ！！なのはやアリサ・バニングスの裸体になど興味はないが（正直妹みたいなもんだからな）なのはの姉、高町美由希さんやすずかの姉、忍さんの裸体を貴様一人に見させてたまるかぁ！！！

「ちょっと・・・凄いことになってるわよ・・・・」

「血の涙流し始めたし・・・・」

「わ、わかったよ。ユーノくんは舜君に預けるよ・・・・」

「よっし！！ばっちり洗ってやっからなぁ！！ユゥ～～～～ノォ～

～～～～くぅ～～～～ん」

『ひぃ！？』

そうしてユーノを連れて男湯に向かう。
やはり男同士はいいよなぁ！！

・・・・コッチってわけじゃねぇからな

「ふぅーーーー」

『はぁーーーー』

カポーーーン

「よく考えなよ。あっち行ってみろ。お前いたたまれなくなるぞ」

『うん・・・冷静に考えたらそうだよね・・・ありがとう』

「いいさ」

『いい湯だねぇ』

「あ”ぁ～～～癒される・・・・・」

カポポーーーーーン

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

え？オチ？女湯シーン？

ねぇよそんなの

to be continued

なのは　～男の戦いなの？～（後書き）

アリス「長年いろいろ言われてきたユーノ覗きのシーンがなくなるとは・・・・」

同い年の蒔風がいる以上は女湯に行く必要がないからね

ア「本音は？」

覗くなバカ野郎

ア「正直ですね」

実は蒔風に覗かせることも考えました

ア「な！？」

でも本人の希望で却下しました。

それに蒔風はロリコンではありません

ア「そうですか」

さてさて、次は？

ア「夜、魔法少女の戦いが始まる」

ではまた次回

全力全開！！

なのは　～ちょっと言い過ぎなの～

夜

なのはとユーノは布団から抜け出した。
ジュエルシードの発動を感知したのだ。

「行こう！ユーノ君！」

「うん！」

なのはは私服に着替え宿を飛び出す

「いい月夜だ。そんな夜に散歩とは、優雅だねぇ、なのは」

「！！・・・なんだ、舜君か」

なのはが声のした方に振り向くと、屋根の上で足を組んで蒔風が座っていた。

そこから飛び降りてなのはに聞く

「ジュエルシードか？」

「うん・・・もしかしたら、あの子も」

「二人とも、急ごう。もう動き出してる！」

そして目的地まで駆ける

ーーー

「あ？」

「あぁっ！」

そこにはすでにバリアジャケットを展開したあの時の魔法少女と、赤みがかった髪の女性がいた

「子供はいい子でって・・・言わなかったっけか？」

女性の方が小馬鹿にしたようにいってくる

「ムカ。なのは、この人しってる？」

「温泉であった人だよ・・・でもまさか・・・・」

「ジュエルシードをどうするつもりだ！それは、危険なモノなんだ！」

ユーノが叫ぶ。

ジュエルシードの発掘者として、その危険性を知りえる彼だからこそ出せる叫びだった

「さぁねぇ。答える理由が見当たらないよ」

のらりくらりと言葉を紡ぐ女性。
しかしその目は笑っていない。
「それにさぁ。あたし親切に言ったよねぇ。いい子でないと、ガブッといくよって！」
「なに言ってんだか」
「はぁ？」
「人をいきなり襲撃する子の方がよっぽど悪い子だよ」
「あんた・・・何者だい？管理局の人間・・・じゃないね。魔力も感じられないし・・・雑魚は引っ込んでな」
「雑魚は・・・か。聞いてないのか？お前のご主人様を圧倒したのはオレだぜ？」
「！？本当かい？」
女性が少女に振り向き問う
「うん・・・」
その答えを聞いて、女性の表情が険しくなった
「あんた・・・ゆるさないよ」

「問題ないぜ。そいつぁ予想通りだもんね！！」

「ッ！！！！！」

ガッ、ベキベキベキ！
オォォォォォォン！

女性の姿が大型犬よりも一回り大きな四足の獣と変わる。
その体毛は髪と同じ燃えるような赤毛だった

「やっぱりな・・・人ではないとは思ったが」

「あいつ、あの子の使い魔だ！」

「使い魔？」

「使い魔・・・動物と魔法契約を結び、主人は魔力を与える代わりに、使い魔はその存在のすべてを賭けて主人を守る・・・か」

「あんたホントに何者だい？・・・先に帰ってて・・すぐに追いつくから」

使い魔が少女に促す。
しかし

「逃がすと思うか？」

「あんたも言ったろ？すべてを賭けて主人を守るってね！」

ゴウッ！

使い魔が飛び掛かる。

しかしユーノが防御魔法でそれを防いだ。

「なのは！あの子をお願い！」

「させるとでも、思ってんのかい！！」

「それをさせるのが今やることならな・・・なのは！こっちは大丈夫だ！！なに、かわいいわんちゃんじゃねぇか」

「いくよ、舜！」

「いや、オレは行かんよ」

「は？」

カァァァァ！

「まずい・・・移動魔法！？」

「ちょ、舜！」

「大丈夫だぁ。戦力はつけるからさぁ」

パシュ！

光と共にその場から、使い魔、ユーノが消える。

そして二人の魔法少女と少年が残された。

「空間転移魔法・・・良い使い魔だね」

「ユーノ君は使い魔じゃないよ。私の大切な友達！」

「それより、使い魔の方はいいのか？」

「アルフは・・・負けないから」

「アルフってのか。使い魔ちゃんの名前」

「・・・で、どうするの？」

「話し合いで・・・なんとか出来るってこと・・・ない？」

「私はジュエルシードを集めなきゃいけない。あなたも同じ目的なら・・・」

「つまらん御託はいい。話し合えるのか？話し合えないのか？」

「・・・戦うしか・・・ない」

「そういうことを決め付けないために！話し合いって、必要なんだと思う！」

「話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃ・・・きっと伝わらない」

「言葉にしなきゃ伝わらない思いもあるが？それに、しもしないで勝手に諦めてんじゃねぇぞ、ガキ」

「ガ、ガキ！？」

「どうせわかってもらえないと誰が決めた。お前自身じゃねぇか。そりゃ伝わんねぇよ。お前に伝える気がないんだから」

「それは！」

「ヤダは堕落者のセリフ、無理は無能のセリフだ。やろうとすれば出来るくせにこれを言う奴はそういう奴さ」

「ッ！！」

「本当に嫌なら仕方ないし、無理ならしょうがないけど、違うだろ？」

「なにも・・・知らないくせに！！」

「知らないさ。だから話せと言っている」

「舜君・・・ちょっと言い過ぎ・・・」

「そうか？」

「ハァッ！」

蒔風がなのはに振り向くと、そのすきに少女がなのはの背後に回り、奇襲してくる

なのはは空に飛ぶことでそれを逃れる。

「オレを狙うと思ったんだがなぁ」

「私の目的は、ジュエルシードだから」

少女が感情を殺した声で言う

そしてなのはに向き

「・・・・・賭けて」

「え？」

少女がなのはに語りかける。

「賭けて。お互いのジュエルシードを、一つずつ」

ーーー

ドガァ！！

その時、空が魔法光に照らされる。
黄色い砲撃と桜色の砲撃がぶつかり合うが、桜色の砲撃がそれを押しやった。

「なのはさんもやりますなぁ」

「なのは・・・強い！」

「でも、甘いよ」

砲撃の跡には少女の姿は無い。
なのはがその姿を探すと・・・いた。
少女が上空・・・否、天空から急降下で飛んでくる！

《ｓｃｙｔｈｅ　ｓｌａｓｈ》

少女のデバイスが鎌の形体になる。
あまりのスピードに反応仕切れず、バルディッシュの魔力で作られた刃がなのはの首筋に当てられる。
その刃は電撃を帯びており、バチバチとはぜていた。

「うっ・・・く・・・」

音声と共にレイジングハートがジュエルシードを少女に差し出す

《ｐｕｔ　ｏｕｔ》

「レイジングハート!?なにを・・・・」

「きっと、主人思いのいい子なんだ」

そして少女はジュエルシードを手中におさめると、蒔風に向かい構える。

「なんだよ。オレにはそいつを奪い返すつもりはないよ」

「・・・・・フッ!!」

ズァッ!!!

少女が襲いかかり、蒔風がひらりとかわす。

「なんだ。感情的になってきたじゃないの。いいぜ。そういう反応

は大好きだ」

「あなた・・・嫌い！！」

「（ガガーン！！！）ショックだ・・・お兄さん大打撃だよ・・・・」

「ハァッ！！！」

ザシッ！！

「でもさ、おまえいい顔してんぜ？さっきまでの人形みたいな顔とは大違いだ」

「！？」

「人も想いってのは素晴らしいもんだね」

「舜君！！私も・・・」

なのはが駆けよろうとするが、蒔風がそれを止める。

「なのちんは脱落しちったっしょ？ま、見ててくださいですにゃー」

「くっ！！」

少女が大空に飛び、魔法陣を展開させる。
そして砲撃の準備に入った

「ねぇ！！！あなたの名前は！？」

「？？」

そこでなのはが口を開く

今でなければ・・・聞けないと思ったから。

「フェイト。フェイト・テスタロッサ」

「いい名前じゃないのよ。運命（フェイト）、ね」

「私のなm・・・」

「・・・ッ！！バルディッシュ！！」

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ》

「ハァァァァァァ！！！！」

魔法陣から雷が漏れ出す

なのはの言葉の続きは、聞こえなかった

「電撃？すごいエネルギーだな。本当に見た目通りの歳かよ」

「当り前さ！！フェイトはあんたみたいなやつには負けない！！」

アルフが蒔風に啖呵を切る。
それを聞いて蒔風は笑った。

「おーけ。いいぜ、そっちがそうなら、こっちもだ。雷・旺・・・・」

バツッ！！バンバンバン！！！

蒔風の組んだ指の離した間から電気が爆ぜる。

「オレがこんな、ちみっこい身体で制御できるかわからんからな。
片手でだ」

そうしていつもの雷旺砲の構えでなく、片手だけつきだす、普通の
砲撃の構えになる。

「サンダァーーーー！！！」

「こんなとこで遊んでないで・・・・」

「スマッシャァーーーー！！！！！！」

「お使いすんだらさっさとおうちに帰りなさい」

蒔風の目前までフェイトの砲撃が迫る。
しかし、それはかき消されてしまう

「拡散式！！雷・旺・砲！！！！！」

ズッ！！ドブァ！！！

蒔風の腕から放たれた雷旺砲は、扇状に広がり砲撃も、フェイトも呑み込んでいく。

「フェイトォ！！」

「怪我はしてないはずさ。連れて帰ってやりなさい」

「ッ！！この借りは・・・必ず返すよ！！！」

「楽しみにしてる」

ガザっ！！！

アルフが茂みの中に飛びこみ、姿を消す。
主人が倒れるその場所に駆けるために。

「舜！！なんであのままジュエルシードを取りかえさなかっ「いいの、ユーノくん」なのは？」

「あれは・・・あの子の・・・フェイトちゃんものだよ」

「そう、フェイトは卑怯な手を使ったわけではない。真っ向から挑んで、それを手にした。それを奪うことはオレにはできん」

「それでも・・・・・」

「分かってんだろ?ユーノ。でも、お前はその立場上、言わざるを得ないんだよな」

「うう・・・・」

「ま、人を踏みつぶすようなことをしない限りは、オレはその人の願いを尊重すんのさ・・・・（ボソッ）翼人としても、な」

「え?」

「ユーノくん、ごめんね・・・・・」

「い、いや!なのはは悪くないよ。それに、舜のいうこともっともだし・・・・」

「帰ろっか」

「そうだな、明日もあるんだ。旅行を楽しまないとな」

「そうだね。帰ろう」

三人は宿に戻る。

部屋の前で分かれ、それぞれの部屋に入る。

（よく聞き取れなかったけど・・・翼人？・・・まさか・・・・ね）

ユーノは布団の中で、さっきの蒔風の言葉を思い出していた。

しかしもう夜は遅く、夢とともにそれは忘れていってしまった。

to be continued

なのは　～ちょっと言い過ぎなの～（後書き）

ア「正直蒔風かきまわしただけですよね」

まぁ、本来なら彼なしでも回る物語だから

ア「蒔風・・・いらない子？」

コラァ！！！

ア「それに小3まで小さくなって・・・なにがしたいの？」

言わないでよ！！！

ア「グダグダと書きやがって・・・」

あなたキャラ変わってませんか！？

ア「更新だって遅れてたし」

ｉＰｏｄ壊れたから買いなおして編集してたんだ

更新待ちの皆さま、すみませんでした。

ア「誰も期待してないさ」

あんたもう帰れよ！！

ア「出番を奪う気か？」

あなたが僕にはわかりません！！

ア「はーーい。次回は、市街戦だよ～～」

えーーー？わからないよーーーーこの人ーーー

ではまた次回

伝えたい思いがあるんだ

なのは　～それは怒りの叫びなの～

旅行から帰ってから、数日後

学校でのこと

「いい加減にしなさいよ！」

教室にアリサの声が響く

「さっきからボーッとして、上の空で！あたしたちといるのがそんなに退屈なの！？」

「あ・・・・」

それはなのはにかけられた言葉だった。

実際、なのははフェイトの事を考えており、実生活に身が入ってなく、アリサやすずかとの会話も聞き流してしまっていた。

「そんなにボーッとしたかったら、いくらでも一人でしてなさい！」

「アリサちゃん！」

教室を飛び出すアリサとそれを追うすずか。

なのははごめんね、と呟くが、その声は届かない

ーーー

「んあ？どうした？」

そこに蒔風が通り掛かる。
あれだけの声で話せば気になるものだ

「あんた！」

「ひぇ？」

「あんた、なのはがなに悩んでんのか　知ってんの！？」

「あー」

「いや、あんたが来てからなのはがボーッとする時間は長くなってきた・・・あんたなの？あんたのせいなの！？」

アリサが蒔風の肩を掴み揺さぶる。

その瞳は涙が潤み、今にも零れてしまいそうだ。

（たしかに・・・なのはが悩んでるのはフェイトの事だな。オレが来たのが同時期だから、怪しまれんのは当然・・・か）

「なんとかいいなさいよ！」

「・・・オレが知ってんのはなのはが悩んでること。それと、それは簡単なことじゃないって事だ」

「・・・あんた・・・・知ってんのね」

「なんとなくな。それでいいなら、話す？」

「聞かせてもらおうじゃないの」

三人が屋上に上がる

「なのはの悩み・・・か。話す前に一つだけ約束しろ。こっちが答えられないと言ったらそれ以上の追求はしないくれないか。なのはに聞くのもなしだ」

「・・・・・わかったわ」

「んふ・・・そうだな。なのはの悩みはな、ひょんなことから知り合った女の子の事なんだが・・・なんて言うかな・・・」

「いいならいいなさいよ」

「アリサちゃん怖いわよ？（裏声）」

「（ガシッ）話しなさい」

「はい。・・・その女の子、もしかしたらな、話し合えばわかり合えるかもしれないんだが、なかなか心を開いてくれないんだと」

「なによそれ」

「なのは曰く、とても綺麗で、冷たい目をした女の子」

「・・・・」

「その子を・・・なんとかしてあげたいんだそうだ。でも、どうすればいいのか、わからないんだろーな」

「そんなこと・・・相談してくれれば・・・」

「出会い方が普通じゃなかったんだよ。人には言いにくい状況でな・・・」

「それは・・・」

「悪いが、それに関しては答えられない」

「・・・わかった」

「だから、なのはを責めないでやってくれ。あいつ、今全力で考えてるんだ。あいつ一人でやらせてやってくれ」

「ほっとけって・・・言うの？」

「いや、アドバイスとかはしてやってくれ・・・にしても・・・」

「な、なによ・・・」

「お前、なのはのこと大好きなんだな」

「な・・・なななな!?うっさい、バカ!」

顔を真っ赤にして、屋上を飛び出すアリサ

「面白いやっちゃなー」

「舜くん、ありがとう」

「知りたい、があいつの願いだったからな・・・戻るか」

「うん!」

ーーー

「蒔風舜からだいたい聞いたわ。だからよくわかんないけど、あたしはこれ以上聞かない。だけど、言わせてもらうわ！」

「え？」

「そもそも、あたしが遠慮するなんて、らしくなかったわ！！」

「ア・・アリサちゃ・・・」

「友達になっちゃいなさい！」

「え？」

「あたしが言いたいのは、それだけ！！だからもう、ウジウジすんな！！！」

「アリサちゃん・・・・」

「解決、かな？では・・・・」

蒔風がなのはに近づいていき、頭をポカンと叩いた

「うにっ！な、なに？」

「友達に心配かけさせんなバカ。お前隠し事出来ないんだから、できるだけ頼れ」

「でも・・・」

「無理、か？あの子にも言ったが、それは無能の言葉だぞ？」

「！！」

「あの子に話してって言ったお前が話すことやめてどーすんのよ」

「舜・・・くん」

「オレが言いたいのはこれだけさ」

そういって蒔風は自分の席に座る。

すぐにチャイムがなって、授業が始まった。

そして放課後、なのはがアリサとすずかに話があると教室に残った

蒔風は残らず、先に帰った

（三人でじっくり話し合いなさい）

そしてなのはも帰宅する

その顔はスッキリとしていた。

「吹っ切れたな。話したん？」

「魔法の事とか、フェイトちゃんのことは上手く隠して、ね。でもそれよりもみんなでごめんなさい大会だったなぁ」

「お前、幸せもんだよ」

「うん！」

そうして二人と一匹はジュエルシード探索に街に出る。

しかし、簡単に見つかるものでもなく、あっという間に暗くなってしまう。

「タイムリミットかなぁ・・」

「大丈夫だよ。僕がもう少し残ってさがすから」

「待てユーノ。お前は街の危険を知らないのか？」

「え？」

「こんな街中をフェレットがチョロチョロしてたら簡単に捕まるぞ。最悪保健所行き。そうじゃなくても、野良猫、ネズミがお前に襲い掛かるぞ」

「大丈夫だよ。ユーノ君はただのフェレットじゃないし」

「でもそれらの処理しながらは探せないだろ」

「うー」

「あー」

「だから今日は・・・」

その時

空気が変わった

魔力が街を包み込む

「これは！」

「なんだ？」

「なに？これ！」

「この辺りにあるジュエルシードを強制発動させる気だ！」

「こんな街中で！？人もいるのに！」

「無茶苦茶するなぁ・・・対策は？」

「広域結界を！・・・くっ、間に合え！！」

ユーノが結界を展開し、関係者のみをその中に取り込む。

「レイジングハート、お願い！」

結界の発動と共に、レイジングハートを起動させ、バリアジャケットに変わるなのは

「よっし・・・いくかぁ！」

「うん！」

「よし！」

そして街中の、光が空に伸びる場所に向かう。

「ジュエルシードが発動してるぞ！」

「なのは！あの子より先に封印して！」

「了解！」

なのはの封印魔法がジュエルシードに伸びる

そしてそれが着弾すると同時に、黄色い魔力光を放つ封印魔法も着弾した

「！！！リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアルＸＩＸ！」

二人が離れた距離で、同時に叫ぶ

「「封、印！！」」

二人の砲撃がまた同時命中し、ジュエルシードはおとなしくなった

おとなしく光るジュエルシードを眺めながら、その離れた先の向こうにいるフェイトを思いながら、なのはは考える。

（アリサちゃんにも、すずかちゃんにも、思ったこと言えなくて、喧嘩になっちゃって・・・そういえば、二人と友達になったのも、喧嘩してからだったな・・・）

「なのは！早く確保を！」

ユーノがなのはに叫ぶが

「させるかい！」

アルフがなのはに飛び掛かる。

ユーノが防御魔法で防ぎ、アルフを弾く。

「白虎・・・自由にやれ。でも、あんま怪我させんなよ？」

「オッケー」

蒔風がユーノとアルフが向かった先に、白虎を投げる

ユーノの防御魔法が解けると、そこにはフェイトが近くの宙に立っていた。

（目的が同じならぶつかり合うのは仕方ないかもしれない・・・だ

けど、知りたいんだ！）

「こないだは、自己紹介できななかったね。私、なのは！高町なのは！私立聖小大付属小学校三年生！」

「同じく！蒔風舜だ。世界最強さ！（キラッ）」

《ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ》

しかし、関係ないとフェイトがなのはに刃を向ける。

「またやるのか・・・」

「舜君・・・私にやらせて」

「なのは？」

「知りたいんだ。私自身が。どうしてあの子があんな寂しい目をしてるのか」

「なら、存分にやれ」

「ありがとう」

そうしてなのはとフェイトの、三度目の戦いが始まる。

――――――――――――――――――――――――――――――

「なんだいあんたは！！」

アルフが目の前の男に忌々しそうに叫ぶ。
その問いに男は陽気に答えた。

「ボク？ボクチンは白虎さ。フェレット君を助けるのっさ！！！」

ドウッ！！

白虎がどこからか釵を取り出し、アルフに切りかかる。

それをかろうじて牙と爪で弾くアルフ。

（このままじゃ押し負けるね・・・・）

そう考えた瞬間に、アルフは打って出た。

白虎の攻撃をすんでのところでかわし、その肩口に噛みつく。

『言ったろう？ガブッといくってさ！！』

噛みついて口がふさがってるために念話で交信する。が・・・

パシィン！！！

アルフの体が巻きつかれる

「な・・・バインド！？」

「ボクを忘れちゃ困るよ！！」

ユーノの束縛魔法がアルフの動きを止める

「ふふん♪」

白虎が楽しそうに鼻歌を歌う

「な・・・」

「いいね。もっと楽しく行こうよ！！ハッ！」

その瞬間に、白虎の体が聖獣体へと変わる。

一瞬で体長が五メートル近くまで大きくなり、アルフを吹き飛ばす。

「あああああああああ！！！！」

「え!?なんだ!?これ!!」

「でか・・・すぎんでしょうよ!!」

「そーいわれてもー」

「白虎!!!」

「あ、舜ーーー」

「戻れ。あとはオレが」

「はいな」

蒔風がやってきて白虎を戻す。

「舜!!なのはは!?」

「フェイトと戦ってる。助けにはいけないな。なのはが決めたことだ」

「そう・・・」

「だから俺たちはさ。外野を黙らせとこうか!!!」

「ああ!!」

「力を借りんぜ?」

パァン！！

蒔風の手に巨大な槌が握られる。

「はぁぁぁぁぁぁ！！！」

そして力を開放させる。

髪が白く変わる。

「なんだいそれは！？」

「他の世界の力さ」

ドウン！！

蒔風が大地をたたく

あまりの振動にアルフは立てず、空中に逃げる。

「とったぁ！！！」

そこに蒔風が炎をまとい、槌を振り上げ、迫る！！

「モグラたたきの気分を味わいなぁ！！！」

ドブン！！

槌はアルフの頭上に迫っていた。

しかし、アルフの主はあのフェイトである。

そう簡単にはやられず、すんでのところでかわした。

しかしその風圧で、コンクリートの大地に叩きつけられる。

そこに二人も降り立ち、構える。

場所はなのはたちの戦う空のすぐ近くだ

いくつもの閃光と、いくつもの飛翔音、そしていくつもの言葉が交わされる

二人の声が聞こえてくる

「・・・たしは！！・・・・のために・・・」

どうやらなのはは自分のジュエルシードをあるめる理由を話しているらしい。

自分の周りの人を守るために
そのために自分はジュエルシードを集めて、ユーノに返すんだ、と。

「これが！！私の理由！！！」

「・・・・私は・・・・・・」

それを聞き、フェイトの口が開く

しかし・・・

「フェイト！！言わなくていい！！」

「!?」

「なに!?」

アルフが叫ぶ。もう、諦めたような声で。わかってくれる人なんか、いないと。まるで、フェイトではなく、世界に叫ぶように。

「優しくしてくれている人たちに囲まれて、ぬくぬくと暮らしてきたやつらなんかに、話すことなんかない!!!」

その発言に

「ッざっけんじゃねぇぞ貴様ぁ!!!!!」

蒔風が吠える。

それはアルフの叫びよりも、獣に近かった。

「そうやってフェイトを遠ざける気か?そうやってフェイトを孤独に突き落とす気か!?てめぇ、主人を守る使い魔だとか言いながら

よ、一番大事なもん守れてねぇじゃねぇか！！！」

「うるさいよ！！！あんたみたいにへらへらしてる奴に、帰る場所がつらいところのフェイトの気持ちがわかるわけない」

「アルフ！！！」

「帰るところだと・・・・貴様・・・・イイヤガッタナ・・・・」

ズォッ！！！！

空気がどす黒く変わる。

瞬間、蒔風はアルフの首筋を抑え、地面に押しつけていた。

「帰る場所だと！？そこがつらいだと！？だったらてめえがなんとかしてやれよ。使い魔だろうが！！！まだ何とかしようがあるじゃねぇか！！主人の笑顔も安穏とした居場所も守れネェクセに、調子乗ったこと言ってんじゃねぇぞ！！！！！」

「ガ・・・ぁ？」

「オレの帰る場所はな・・・オレの世界はな！！！もう崩壊しかけて帰ることもできねぇんだよ！！！それでぬくぬくとだと？貴様らの方が、よっぽどぬくぬくしてんだよ！！！」

「家に・・・帰るたびに・・・フェイトが、どうなってるか、知らないから!!だからそんなこと言えんだ!!」

そこで蒔風はアルフを離し、のどが張り裂けんばかりに叫ぶ

「だったら言えよ!!お前はフェイトが大好きなんだろう!?命をかけて守りたいんだろ!?お前はきっといろいろやったんだろうな。でもだめだった。そこで諦めて、グダグダしてきたのはお前の責任だろうが!!!!」

「!!!!」

「フェイトのことを想うなら、時には主の命にも逆らえよ!!!あらゆる手段を使えよ!!!それが、命懸けってやつだろうがよ!!!」

そこで、ジュエルシードに異変が起きる。

いきなり力が噴出し、軽い暴走状態に入ったのだ。

二人同時の封印が、逆に堪えたらしい。

フェイトはとっさにジュエルシードに向かって飛ぶ。

それを追うなのは。

そして二人のデバイスはぶつかり合い、ジュエルシードを挟んでガギッ、と組み合う。

そして光の爆発が起きた。

爆発といっても、衝撃のみで、なのはにもフェイト両者とも、吹き飛ばされたが怪我はない。

しかしこれでジュエルシードは完全な暴走状態に入った。

「！！！フェイトォ！！！！」

アルフの叫びで、フェイトに注目がいく。

フェイトはジュエルシードに近づいて行っていた。

どうやら、力づくで抑え込んで封印するようだ。

バルディッシュはデバイスモードに戻されており、その手にはない

「バカ野郎！！！」

蒔風が駆けだす。

すでにフェイトはジュエルシードをその手で包みこんでいる。

「止まれ・・・止まれ！！」

しかし、手の部分のバリアジャケットはすでに裂け、手が裂けるのは時間の問題だ。

「くっ・・・・」

「そのままでいろ」

「！！！あなた！！！」

「オレがそいつに働き掛けて抑える。暴れないようにそのまま抑えろ」

「・・・・・（コクン）」

フェイトは頷いた。

こうするしか、今はない

「歪みはあれど、願いをかなえるジュエルシード・・・だったら・・・我が翼に共鳴せよ」

蒔風がボソボソと呟く。
フェイトにはよく聞き取れなかった。

「我、銀白の翼・・・・オレの力に同調しろ!!ジュエルシード!!!!」

ゴォォォォォォ!!!!!!

光が一層強くなる。

しかしさっきのような衝撃はなく、むしろ温かいものだった。

その光の中で、ジュエルシードを抑え込みながら二人が話す

「なぁ、お前のその背中の傷さ」

「!!」

今までフェイトのマントで、背中は隠れていた。
しかし、ジュエルシードの衝撃で、マントははじけ飛んでしまっていた。

「家に帰るとつらい・・・か。その傷は戦闘のではないな。鞭の・・・しかも一方的な傷・・・・・」

「関係、ないよ・・・」

「・・・そうだな・・・お前はオレのこと嫌いだもんな。これ以上は聞かんよ」

「うん・・・・・」

「だけど・・・はいそうですかと切り捨てるほどオレはくだらない人間でもない」

「え？」

シュバン！！

蒔風が「山」でフェイトを切る。

しかし、そこに傷はできず、逆に背中の傷は消えてしまった。

「癒しの剣さ。オレの持つ、ただ一つの優しい剣だ」

「なん・・・で」

「ん？」

「なんで・・・助けるの？」

「うーーん。実を言うと、助ける必要はなかったかもしれないんだ」

「え？」

「オレはこの世界のイレギュラーだ。放っておいてもこの世界は順調に回る。つまり高みの見物しててもいいんだ。「奴」が来たら、戦えばいい。でも介入する。ま、あまり大きなことはしないけどね。なるべく元の形を崩さないようにな。だからお前からも無理にジュエルシードを取り上げもしない」

「（「奴」？よくわからない・・・そういえばこの人、結局どこの何者なんだろう・・・）だったら、本当に助けなくてもいいんじゃないの？」

「でもさ、目の前で嫌なことが起きたらオレは助けるって決めてんのさ。世界がどうとかよりも、な」

「・・・・・」

「だから助けた。簡単に言っちまえば、助けたいから助けたんだ、だな」

「そんな理由で？」

「人の行動原理は、驚くほど簡単なんだぜ？さ、終わるぞ」

「え？う、うん」

「願いの宝石、ジュエルシード、銀白の翼が命じる・・・・封印」

その瞬間、フェイトには

蒔風の背に翼があるように見えた

オォォォォォォォォ・・・・・・・・・

光が収まり、フェイトの手にはジュエルシードが

「ほら、持って帰んな」

「・・・いい・・・の？」

「言ったろ。無理に取りゃせんって。それとも、いらないのか？」

「・・・ありがとう。いくよ、アルフ」

「フェイト！！・・・待ってよフェイト～～・・・・・」

フェイトが去り、アルフが追う。

その場には、やりきった一人の少年と、やりきれない一人の少女と

が残され

その姿を、一匹のフェレットが見ていた。

to be continued

なのは　～それは怒りの叫びなの～（後書き）

アリス「今回蒔風キレたーーーー！！！」

長い世界だからできることさ！！！

今まで短かったからね。

ここまで突っ込んだこと書けなかったのさ

ア「なるほど～～～他に長くなる予定の世界は？」

大体わかるっしょ？

ア「いいなさい」

ダメだ！！！

ア「このへぼ」

冷たい！！！視線が冷たい！！オレ何か間違ったこと言いましたか！？

ア「いいえ？ただ私の機嫌を損ないましたが」

それで俺は世界中を敵に回したような視線を向けられてるんですけど

ア「私は管理者ですからね」

世界と同義だっての？

ア「まっさかーー。そこまで傲慢じゃないよん♪」

だよねーー！！

ア「私は管理するだけ。神でも世界そのものでもありませんよ」

え？なんか真面目？

ア「いつも真面目ですよ」

おーーーっとぉ

作者今驚いてますよーーー

ま、次回の方よろしく

ア「次回、管理局、介入」

ではまた次回

やばいネタ切れたーーーー！？

なのは　～悩んで決めて、戦うの～

戦いの夜が明けて

高町家道場内、現蒔風の寝床

朝早く起きたなのはは、昨日のことをもう一度よく考えようと心を落ち着かせるために、ここに来ていた。

しかし・・・・

「なんて恰好で寝てるの・・・・」

道場の隅は蒔風の寝床になっている。

どうしてか蒔風は壁に背をつけ、床に肩をつけた、半分逆立ちみたいな恰好で寝ている。

そしてなぜか傍らには「愉快だ」と書かれたメモがあった。

それを見ないように正座をして、考える

（昨日の衝突で、レイジングハートは傷ついちゃったし・・・・フェイトちゃんとしっかりとお話しできなかったな・・・・）

「あれ？なのは？」

「お姉ちゃん・・・・」

そこになのはの姉、美由希がきた。

毎朝稽古のために、走りこみの後道場に来て練習してるのだ。

「お父さんとお兄ちゃんは？」

「ちょっと遠くまで走りこむってさ」

「そう・・・ねぇ、あれ・・・」

なのはが蒔風の方に向いて聞く

「ん？ああ、あれね。もう気になんなくなっちゃったよ」

「あ、あはは・・・・ねぇ、お姉ちゃんの稽古、見ててもいい？」

「いいよ。あんまりおもしろいものじゃないと思うけど」

そして美由紀が稽古を始める。
それを眺めながめていると、ユーノから念話が入る。
『なのは?どうしたの?こんな朝早くから』
『ちょっと、眼がさめちゃったから・・・・それでね、私、考えたんだけど・・』
『ん?』
『やっぱり、私フェイトちゃんのこと気になるの』
『気になる?』
『凄く強くて、冷たい感じもするのに、綺麗で優しい目をしてて。でも、すごく悲しそうなの・・・』
『んで、どうしたいんだ?』
『舜君?』
なのはは　蒔風の方に目を向ける
今は普通に布団にくるまっている
『起きてたの?』
『まね。な、一番重要なアドバイス。アリサ・バニングスからもらったろ?』

『でもあの子・・・聞いてくれるかどうか・・・・』

「・・・・おはようございます。美由希さん」

「ん？おはよう！舜君」

蒔風が起き上がり、今起きたように立ち上がる。

「オレも・・・ちょっとだけいいですか？」

「え？いいけど・・・・」

蒔風が道場の、美由希から少し離れたところで立つ。

そして動き始めた。

美由希との組み手でなく、ひとりで動くようだ

その動きは派手ではなく、むしろ軽やかなもの。

日の光にあてられて、まるでスポットライトにあてられてるようだ。

しかし、一瞬で動きが軽やかなものから重い一撃一撃の動きに変わる。

その眼前には本当に敵がいるかのようで、その一撃はあらゆるものを粉砕する意思が感じられた。

そして再び軽やかに

今まで攻撃した相手をいたわるかのような動きだ。

そして最後に一礼して、蒔風は止まった。

なのはも美由希も、その動きについ目がいってしまっていた。

「すっご～～い！！さすが兄さんに勝っただけあるねぇ」

「いや・・・寝起きでまだちょっと本調子じゃないんですけどね・・・『どうだった？』」

『え？』

『本気の動きってのがさ、どういうもんか。今のはまだ本気とは言えないけど、それでも、オレがどう思って動いたか、何となくわかったかい？』

『えっと・・・最初にやさしく・・・諭（さと）して、それから思いっきり戦って・・・・・』

『で、最後に大丈夫か？と問いかける。わかるもんでしょ？それと同じさ』

『同じ？』

『本気で動けば・・・本気で相手とぶつかれば、その想いは、相手に響く』

『そう・・かな？』

『そうさ。現にフェイトはなのはに本気でぶつかってきて、それでなのははフェイトがどんな想いなのか、断片的にわかってるんだろ？』

『・・・なんとなくね』

『だから、お前も悩まずに、ぶつかるんだ。いや、悩んでもいい。でも、ぶつかるときだけは、お前の伝えたいことを本気でだ。その時は、悩んじゃいけない』

『・・・・うん！！！』

――――――

その後方から無数の魔法弾が飛来し、樹獣に向かう。
しかし、バリアを展開され、当たらない

その魔法弾の来た方向には、フェイトとアルフがいた

「生意気にバリアなんか張ってるよ」

「今までのより、強い」

樹獣が敵の数か増えたことを確認すると、その根を地面から引っこ抜き、鞭のようにしならせなのはに向けて叩きつけてくる

《Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ》

なのははそれを上空に飛ぶことで逃れ、蒔風は動かなかった。

「レイジングハート!!もっと・・・・もっと高く!!!」

離れた所からは

「アークセイバー・・・・いくよ、バルディッシュ」

《Ａｒｃ　ｓａｂｅｒ》

バルディッシュの魔力刃が回転しながら飛び、根を裂き、本体に当たる。
しかし、バリアに阻まれダメージが通らない。

急に蒔風を押しつぶし、大地に伏せていた根が吹き飛ぶ。

「まったく・・・だから何なんだっつのよ」

蒔風はその体にちょうどいい大きさに縮んだ風林火山を構え、ぼやいた

上空で根の追撃のなくなったなのはがレイジングハートを樹獣に向ける。

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ》

「撃ち抜いて！！！ディバイン！！」

《Ｂｕｓｔｅｒ！！》

なのはのディバインバスターが樹獣の上斜めから命中するが、やはりバリアに阻まれる。

「貫け、轟雷！！」

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｓｍａｓｈｅｒ》

ドゥッ！！！

さらにフェイトのサンダースマッシャーが真正面からあたる。

これもバリアに阻まれる。が

「さて、お兄さんもやりますか」

この少年がいる。

「派手に行くぜ？吹き飛べ！！獄・・・・炎・・・・・」

ズギュゥアァアァアァ・・・・・！！！！

蒔風がとんでもないエネルギーを集める。

そしてそれが一気に凝縮され

「だぁぁぁぁん！！！！！！」

蒔風が投げつけ、樹獣に命中する

当然それもバリアに阻まれるが、しかし

「ＢＯＮ、だ！！！」

ギュオッ！！ズゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・・・

一気に膨れ上がった火球が、樹獣を飲み込む。

そして爆発が起きた。

蒔風がとっさに「林」でバリアを張り、爆風からなのはたちを守る。

爆発の後には、衝撃と爆風が抑えられたために、どこまで続くかもわからないような大穴があいていた。
普通ならおそらく、公園から少し離れたところまでがクレーターになっていただろう。

そして、そこには宙に浮く活動の止まったジュエルシードが

《Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ，　ｓｅｔ　ｕｐ》
《Ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ，　ｓｅｔ　ｕｐ》

二人のデバイスが同時に姿を変える

「ジュエルシード、シリアルＶＩＩ！！」

「封印！！」

そして、ジュエルシードを中心に、光が広がり、二人とも一瞬目をそらす。
が、すぐにデバイスを構える。

二人はちょうど、ジュエルシードを挟んで立つ。

「ジュエルシードにはあまり大きな衝撃を与えない方がいいみたい」

「そうだね・・・こないだみたいになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも、かわいそうだもんね」

「だけど・・・譲れないから」

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ》

フェイトがバルディッシュを基本形態に戻し、構える。

「私はフェイトちゃんと話したいだけなんだけど・・・」

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｍｏｄｅ》

なのはも、レイジングハートを基本形態に戻す

なのはの眼には、迷いはない

そこには、たった一つの想いがあった。

「私が勝ったら、お話、聞いてくれる？」

なのはの問いに、フェイトは答えない。
答えは、言葉ではなく、行動で

二人が同時に飛びだし、ぶつかり合う!!

衝突した場が光り、それが晴れると・・・・

「ストップだ!!!」

新たに現れた少年が、そのデバイスでバルディッシュを抑え、もう一方の手でレイジングハートを掴んでいた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!!・・・時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ!!詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「くっ」

「時空管理局・・・」

「なんだそりゃ？」

地上ではアルフ、ユーノ、蒔風が各々声を上げる

クロノと名乗る少年が、二人とともに地上に降りてくる。

「なあなあ、時空管理局って何なん？」

そこに蒔風が近づいて訪ねる

「知らないのか？まぁ、それは後だ。まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら、」

クロノが言葉を言い終わらないうちに、砲撃が飛んでくる。

「フェイト！！撤退するよ！！！離れて！！」

フェイトが離れ、砲撃が飛ぶ。
その砲撃を離れてかわす三人。
フェイトは爆煙の中、ジュエルシードに手を伸ばすが・・・・
ドシュシュシュシュ！！！
クロノの放った光弾で撃ち落とされる。
アルフが落ちていくフェイトをその背に拾い、地上に降りる。
そこにさらにクロノが追撃をかけようとする。
「ダメぇ！！！」
「やめろ！！少年！！」
なのはがその間に立ち、蒔風がクロノを掴み背負い投げの要領で地面に投げつける。
クロノは一回転して着地し、そのすきにアルフはフェイトを連れて逃走した。
「君！！公務執行ぼ「今何で撃った」は？」
「今何で撃ったと聞いている」

「なんでって・・・あのままではジュエルシードが奪われていた。だからそれを」

「止めるために、か。しかしバインドという拘束魔法があるだろう。なぜそうしなかった」

「煙で相手が見えなかったんだ。仕方ないだろう！！」

「そうか・・・しかしそのせいで一人の少女が傷ついたな」

「・・・・・」

「オレが言いたいのはそれだけだ」

「・・・・・・くっ」

クロノがジュエルシードを回収する

と、モニターが現れ、そこに一人の女性が映っていた。

『お疲れ様、クロノ』

「すみません。片方、逃がしてしまいました」

「ま、大丈夫よ」

「あの、一つ聞いていいですか？」

『なにかしら？』

蒔風が艦長と呼ばれた女性に問いかける

「時空管理局って・・・なに？」

『うーーん、それを含めてちょっとお話聞きたいから・・・クロノ、その子たちをアースラに案内してくれるかしら』

「了解です。すぐに戻ります」

そうして、なのは、蒔風、ユーノは、アースラへと連れて行かれた。

ここから物語は加速する

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのは　～悩んで決めて、戦うの～（後書き）

アリス「今回、蒔風後半空気でしたね」

いうな・・・・

ア「やったことは樹、焼いてからクロノ投げて質問しただけ・・・・」

言うなッ！！！

わかってますよ！！それくらいさぁ！！！

でも・・・・どうすればよかったんだよ！！

ア「わたしを出せばいいのでは？」

却下

ア「即答！？」

当たり前だ！！

え？なに？

その長いこと言わなかったっから今言えばぽろっといくかと思ったのにって顔！！！

ア「何のためにおとなしくしてたと？」

こいつ策士だーーーー！！！

ア「次回、今度は時空管理局に説明だ！！」

ではまた次回

想いつかなーーーーーい！！！！

なのは　～またまた説明なの？～

時空航行船、アースラ内

蒔風、なのは、ユーノはクロノに連れられ、ここに来ていた。

『ユーノ君、ここって一体・・・』

『時空管理局の次元航行船の中だね。簡単に言うと、いくつもの次元世界を自由に行き来するための船だよ』

『あんまり簡単じゃないかも・・・』

『つまり、違う世界に行くための乗り物ってことか』

『そうだね』

『そうなんだ・・・』

「ああ、バリアジャケットとデバイスは元に戻しても大丈夫だよ。あと君も元の姿に戻ったら？」

「あっ、そうですよね・・・って、元の姿？」

なのはがバリアジャケットを解除しながら疑問を口にする

「そうだね・・・んっ」

ユーノが光と共に元の姿に戻る。

なのはと同じくらいの歳の、少年に姿を変えた。

「ユーノっち!そいつが人の・・・ああ、違うか。そっちが元か」

「そうだね。舜に会ったときはもうフェレットだったからね」

「え?え?・・・えぇ～～～～～～（。□。；）」

「どうした、なのは。豆がハトポッポしたような顔をして」

「それを言うなら鳩が豆鉄砲食らったじゃ?」

「おお!それそれ!」

蒔風とユーノがさも当然そうに会話をする。

しかし、なのははガタガタと震え、ユーノを指さして慌てはじめた

「じゃなくて!ユ、ユ、ユ、ユーノ君って・・・嘘、そんな・・・

えぇー！？」

「あ、なのはは知らなかったんだっけ」

「え？なのはに最初に会ったのはこの姿じゃ・・・・・」

「最初からフェレットだったよー！」

「だから温泉でいったろ。こいつは男だって」

「そういう意味だったの！？」

「うーん・・・あ！そ、そうだったね！この姿は初めてだったね・・・」

「そうだよね！」

「そしてなのはちゃんはそんなユーノを部屋に入れたまま堂々と着替え、あまつさえ女湯に連れ込もうとしたんだよな（｀∀´）」

「っ！！（カァ～～～～～～）」

バシバシン！！バジル！！

次の瞬間、ユーノは叩かれ、蒔風は叩かれた上にバジルを突っ込まれた。

「な、ん、で～～～」

「お前は自業自得だ。なんでオレまで・・・しかも何故バジル？」

「早くしてくれないか？」

そんなこんなでクロノが先を促すので、三人は先に進む。

扉が開いた先には

「なにこれ？」

「和風？」

「わふ～（＞ω＜）／／」

「どうしたの？舜君」

「いや・・・・」

そう、和風だった

盆栽が並び、ししおどしがあり、茶道のセットが置かれている。

そしてそこには一人の女性が座っていた。

「お疲れ様。三人共、どうぞどうぞ。私はリンディ・ハラオウン。この船の艦長です」

カコーーーン

そして三人が座り、話を始める。

ーーー

る。

「あの・・・ロストロギアってなんですか？」

なのはが質問をし、

「あぁ。異質世界の遺産・・・って言っても、わからないわよね」

「ん？・・ああ、大体わかったよ」

「え？」

蒔風がいきなり言うので、リンディもクロノも驚く。

蒔風が話し出した

「つまりはいろんな世界の、昔のよくわかんないモノのことを、ロストロギアと言うらしいな」

「そ、そうね」

「で、安全なものなのか危険なものなのかもわからないから、こうして回収すべきもの・・・でもあるんですよね？」

「そうだが・・・君は知らなかったんじゃないのか？」

「ん？ああ、ま、そこは気にしないで・・・すみません話の腰を折ってしまって」

「いいえ・・・で、あなたたちの集めているジュエルシードは次元干渉型のロストロギアよ」

「いくつも集めて起動させれば、次元断層が起き、大変なエネルギーが起きる」

「ああ、なのはとフェイトのデバイスがぶつかったときのあれか」

「そうだ。たった一つの発動でも、あの威力・・・複数起動させたら、どうなるか・・・」

「でも・・・それを抑え込んだ者がいるの」

クロノとリンディが蒔風の方を見据える

「・・・え?オレ?」

自分を指さしながら蒔風が素っ頓狂な声をあげた

「そうだ。君はあの黒衣の魔導師・・・フェイト・・・とかいったか。あの少女とともにおこなったといっても、それを抑え込んだ」

「さらには強引にならまだしも、我々の知らない方法で、しかも同調して」

「??強引なほうが大変なんじゃないんですか?」

なのはが当然のことを聞く。

大きな力を無理やりねじ伏せるのは確かに大変そうだ。

それにクロノが応える

「止まれ、って願えば、多少だがそれが叶う。だから多少強引にやる方がまだ易しい・・・と思うんだが・・・」

「あなたは何者なの?魔力もないのにあの戦闘力・・・」

リンディの発言のあとに、クロノがモニターを出し映像を映す。

そこには先ほどの獄炎弾を撃つ蒔風に、数日前のフェイトとともにジュエルシードを抑え込む姿があった。

「教えてくれないか?」

「いいよん♪」

「こっちもそれなりの・・・はい?」

クロノが断られることを前提に会話を進めようとするが、蒔風がそれを粉砕した。

「いいっての。隠す必要はないでしょ。そうだねぇ・・・・」

そして今度は蒔風が説明を始める。

「奴」のこと、世界を回ってること、自分のまわる世界の次元などを

「僕たちの世界よりも高次元を!?」

「そそ」

「信じ・・・・られるか・・・」

「あなたたちはどうなの?信じているの?」

「僕は・・・この話を聞いた時には正直信じていませんでした。なのはが狙われるなんて、突拍子もないし。最主要人物なんて言われてもわかりませんでした。でも」

「でも?」

「今は信じています。舜の言うことのすべてがわかったわけではありませんが、それでも、彼は信じられる人間だと、僕は思います」

「私も、信じてます。私が狙われるって言っても、実感ないけど・・・」

「そう・・・」

「確か時空管理局って、世界間を取り締まる警察みたいなもんなんですよね?」

「そうだが」

「だったら、エリアサーチの機材とかあります？」

「あるが・・・どうするんだ？」

「いえちょっと。借りられるなら、「奴」を探してみようかなって・・・」

「無理だ。第一、こちらの文字がわからないだろう」

「あ、その心配は大丈夫です。おれ、言葉には強いから」

「どういうことかしら？」

「違う世界をめぐると、当然言語の違う世界もあります。でも、その世界でも活動を迅速に行うために、ある能力があるんです」

「ある能力？」

「全言語同時翻訳です。どんな言葉や文字を見聞きしても、俺の意志ですべて日本語に聞こえるし見えます。その逆のまたしかりです。オレがどんな言語で話そうとも、相手はその人が意識している言語で聞こえます。だから、文字の心配はないんですよ」

「そ、そうなのか・・・しかし、無理だ。いまはジュエルシードの探索に使っている。他のことにはとても・・・」

「ああ、ああ、いいよ。無理言ってんのはこっちだから」

「そう・・・それで、ジュエルシードのことですが、このことは私たち、時空管理局が受け持つことになります」

「だから、君たちは元の世界で、元の世界に戻るといい」

「え！？」

「このことを忘れて、元通りの生活に戻るといい」

クロノが優しく言う。

その通りなのだ。

この事件は時空世界に大きく影響を及ぼしかねない事件だ。

民間人であるなのはたちを巻きこめないし、どうこうさせるべき事件でもない。

「でも・・・・」

「なのは・・・」

「ふぅ、正論だな」

「舜君？」

「正論すぎる。確かに、素人が口出しできる事件ではないようだ」

「では・・・」

「しかし、今までオレたちは、いや、なのはは、ジュエルシードの回収をここまでやってきたんだ。それに、」

「それに？」

「俺たちは素人じゃない。オレはもちろん、なのはも立派な魔道師だ」

「舜君・・・」

「そうね・・・すぐに、といっても気持ちの整理ができないでしょうし、今晩じっくり、三人で話し合いなさい」

そして話し終えた三人はクロノに連れられ、元の公園に送られた。

そこから、三人で帰宅した。

ーーー

夜

ユーノと蒔風がレイジングハートを使いアースラに交渉していた。
曰く、なのはの魔力や蒔風の力は管理局にとっても利益なる。
だから、この件に協力させてほしいと。

『なるほど・・・中々考えてますね』

「それに、「奴」が現れた際に、管理局の人がいると、助かるしな」

横から蒔風が話す。

「「奴」は結構派手に暴れる。戦いの後の処理なんかを手伝ってもらえると、助かるしな」

『あなた・・・勝てるの？聞いた話じゃその人、かなり強いらしいんじゃないの？』

「今まで勝ってきた。これからも。オレは世界最強だからな」

『・・・思ったんだけど、君は本当にに九歳か？』

クロノが蒔風に聞く

「ん？実はオレさんは、十九歳なのよん（キラッ）！！」

『・・・冗談はさておいて』

「そんなぁ～～」

クロノが蒔風を一蹴し、リンディが話題を元に戻す

『そうね、そういうことなら協力してもらいましょう』

『母さ・・・艦長！！』

『戦力は多い方がいいし・・・ね。クロノ執務官』

『はい・・・』

『条件は二つよ。三人とも、身柄は一時時空管理局の預かりとすること』

「ん。それと？」

『それから指示を必ず守ること。よくって？』

「・・・・・」

「わかりました」

蒔風が頷き、ユーノが答える。

こうして、なのはたちの協力が決定した。

その晩、なのはは蒔風とともに母の桃子さんに、魔法のことなどは伏せて、できる限り説明した。

「お母さん・・・」

「そうね・・・なのはがまだ悩んでるなら、危ないって止めるけど・・・でも、もう決めちゃってるんでしょ？」

「うん・・・・」

「ちゃんと、最後までやり通すって、決めたんなら、しっかりやりなさいね？」

「うん！！ありがとう、お母さん！！」

「舜君も、行くの？」

「はい」

「だったら、なのはのこと、よろしくね。舜くん、見た目より大人びて見えるから」

「必ず、守ります。でも、多少の無茶までは、やらせてあげたいんです」

「それはもう!!やらせてあげてね?あの子がこんなにものめり込むこと、なかったから」

「はい!!」

その晩、蒔風となのはは、アースラに向かった。

なすべきことを、なすために。

to be continued

なのは　～またまた説明なの？～（後書き）

はい、今回も蒔風空気気味でしたね

アリス「そうですね～～。そうそう、一つ質問を」

なんでしょう

ア「蒔風のする「説明」って、どの範囲まで説明してるのですか？」

ああ、それですか

一、「奴」が世界を食らうために、最主要人物を狙ってること

二、自分が「奴」を追って、いくつもの世界をめぐっていること

程度ですね

ア「ということは蒔風の知る「奴」の正体や、蒔風の世界がどうなってるのかは説明してないんですね？」

してないですね

彼にとって、嫌な記憶ですから

だから、「説明をした」といった描写があったら、このことだと思ってくれて結構です。

ア「「奴」って誰なんだろうね～～」

あんた知ってんだろ

ア「ですけどね～。凄く話したいです」

だめ

ア「わかってますよ・・・・」

どうした？

ア「・・・「奴」の正体は鷹野「ばかーーーーー！！！！！」」

って、いまなんて言おうとした？

ア「鷹野三四」

ひぐらしのなく頃に！？

ってか、嘘つくなよ！！

大声出してまで妨害しちまったじゃねえか！！

ア「でもあり得そうじゃないですか？」

まぁ・・・できなくないな

でも女性じゃん

ア「ほら、そこは世界を取り込んで曖昧になったとかで」

あ、なるほど・・・違うけどね

ア「ま、違いますからね」

そんなこと言ったらいくらでも言えるじゃん。

セフィロスなんてモロだし

ア「救われなかったリィンフォース！！」

理樹を死なせてしまった恭介！！

ア「暴走した違う次元の長門！！」

恋姫無双の左慈！！

ア「世界の破壊者ディケイド！！」

とまあ、それこそいくらでも

ＩＦの世界から引っ張り出せば無限大に

ア「キリないですね」

ないね

ア「ちなみに今言ってた作品、行くんですよね？」

ハッ！！

ア「あーあ、ばらしちゃった～～」

みんな！！今のことは忘れてくれぇ！！！

ア「ネタばれを嫌がる読者もいるだろうに・・・・」

あああああああああああ！！！！！

ア「次回、海上大決戦！！！」

あああああああああああああああ！！！！！

ア「ではまた次回～～～～」

あああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！

ア「まだ言ってんのかい！！！！！」

それから数日間、ジュエルシード回収の効率は上がって、順調に数を伸ばしている。

いま、鳥に宿ったジュエルシードを回収したところだ

「うーん、二人とも中々優秀ね」

「なのはの才能はハンパないですからね」

「将来、うちに欲しいくらいだわ」

「わかります」

「で、君はいかないのか？」

リンディと蒔風が話しているところに、クロノが割って入る。

「オレが行っちゃうと簡単に解決しちゃうからなぁ・・・」

「よっぽど自信があるんだな」

「そりゃもう。ここはなのはの成長の為、サポートに回りますよ」

そして、クロノと一緒に、オペレーターであり、執務官補佐でもある通信士のエイミィの元に向かう

「この子・・・フェイト・テスタロッサ、だっけ？」

「そう、かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

「大魔導師？そいつの血縁ってことか？」

「そう、大分昔の事だけど、ミッドチルダの中央都市で、魔法実験中に事故を起こして、追放されてしまった、大魔導師・・・でも・・・」

「でも？」

「この名前が本名とは限らないし・・・」

エイミィが検索をかける

しかしモニターには表示されない

「あー、見つからないよー」

「上手く逃れているな」

「その上、ジュエルシードを二つ取られている。あの使い魔の仕業か」

「アルフ優秀だなぁ」

――

食堂

現在は蒔風と、回収から戻ったなのは、ユーノの三人しかいない

「そっか・・・別のルートで・・・」

「うん。アルフが優秀でね。なかなか探知に引っ掛からない」

「でも、あっちは焦ってるはずだよ」

「そう・・・だね」

「・・・なのは、寂しくない？」

「え？大丈夫だよ、ユーノ君。一人なのは、慣れてるし・・・ユー

ノ君と舜君もいるし・・・」

「なのは・・・・」

「アホぅ」

ポカン

「あにゃ！なにするの～！？」

「一人に慣れるとか言うな。寂しいなら寂しいと言え。それを受け止められないくらいほど、オレもユーノも弱くない」

「そうだよ、なのは」

「お前らには帰れる場所があるんだ。寂しがる必要はないだろ？」

「舜君・・・」

「舜・・・」

『オレの帰る場所はな・・・オレの世界はな！！！もう崩壊しかけて帰ることもできねぇんだよ！！！』

なのはとユーノは先日の蒔風の叫びを思いだしていた

ガシッ、と蒔風がなのはとユーノの肩に腕を回し元気づける。

「ああ、あんま気にスンナよ？じゃ、オレはそろそろ行きますわな」

そうして蒔風が立ち上がり、去っていく。

「舜君・・・・・・ユーノ君！」

「どうしたの？なのは」

「頑張ろうね！そして、一緒に帰ろう！」

「なのは・・・・そうだね。あの子、フェイトも一緒に」

「うん・・・うん！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

「検索をかける？でも・・・」

「大丈夫ですよ」

オペレータールームで席に着いているのはエイミィではなく蒔風である。

フェイトを探し出すと言って変わってもらったのだが

「相手は高性能な魔法を使って逃げてるんだよ？」

「だったらこっちは・・・世界一パソコンと相性の良いインターフェースの力を借りるか」

カァァァ・・・・

蒔風が一瞬光り、モニターに向かう。

そしてその指が動き出した。

あまりのスピードに、指が片手で十本あるようだ

「ひぇ～～～！」

「足跡を見つけた」

「はや！」

「今追っている。もう少し・・・・これは・・・まさか！！！いや、でも！！！」

そこで、赤いランプが光り、アラームが鳴る

「やはりなのか？」

「!そ、そんな!!あの子たち、なにしてんの!?」

――――――――――――――――――――――――――――――

海鳴市海上の上空

アースラのメインモニターにはそこにいるフェイトとアルフを映し出していた。

海中のジュエルシードを見つけるために、強制発動させているようだ

リンディとクロノがモニター越しに見ている中、ジュエルシードが発動する

「始まったか!?」

「フェイトちゃん!!!!!あの!私急いで現場に・・・・」

蒔風、なのは、ユーノが駆け付ける。

しかし、クロノは

「行く必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

「え！？」

「ほう」

なのはと蒔風がモニターに目をやる。

「海の中のジュエルシードを六つも強制発動させて、体力を結構削った上に、封印までしようとしているんだ。どうしあっても彼女の限界を超えているよ。自滅しなくても、弱ったところを捕縛すればいい」

クロノの説明通り、もうすでにフェイトは疲れ果てているようだ。動きが鈍り、荒れ狂う竜巻をかわし切れていない

「私たちは、常に最善の選択をしなければならないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが・・・現実よ」

「でも・・・・」

リンディの言葉に、なのはがうなだれる。

「フェイトちゃんが！！」

「まさに正論だな。ここで無理に手を出す必要もないな。正しい選択だ」

なのはの叫びを蒔風が打ち消す

「舜君！？」

「舜、わかってくれるのか？」

「オレだっていくつもの世界を守ってきたんだ。それくらいわかるさ。それは正しい判断だよ」

「舜！！！」

そんな舜の発言にユーノが叫ぶ。

「だってさ、あんなところに行ってみろ。並の奴じゃ怪我してどうしようもなくなるぞ？かえって邪魔になるよ。いやぁ、いい作戦ですね。向いてますね、軍師とかに」

「ありがとう」

「でも・・・でも！！！」

さらに蒔風が口を開く

「そうなんだよねぇ。そこで、でも！だ！！！！！」

「？？」

クロノが疑問の表情を浮かべる

「軍師に向いていても、人を守るには向いてないな。それに並の奴なら無理だけどな。なのはは並じゃないぜ？」

「舜君？」

「行きたいんだろ？行ってやれ」

「舜！！何を言っている！！！」

「だめよ！！あなた、さっき自分で言ってたじゃない！！！」

「ああ、確かに正しい判断だ。しかし！！！決して最善などではない！！！！ユーノ、なのは、行け！！！」

「あ、ありがとう！！舜君！！！」

そうして、なのはとユーノが出ていく。

向かうは結界内のフェイトのもとだ

「何をしている！！！！！」

「何をしてるだと！？こっちの台詞だ弱者どもめ！！！！こんな手段を最善なんて言って、バカじゃねぇのか！？こんなもの、最善なわけないだろ！！！！」

「なんだと！？」

「お前は、自分の力不足のために、あの現象を利用しようとしてんだろ？はん！！！本当に強いなら、現象抑えてフェイト無事に捕まえるくらいのことしろよ！！！！」

「君は・・・君も、世界を守ってきたんだろう！？なぜわからない！？」

「わかってるから腹立ってんだ！！！・・・本当なら俺はここにいなくてもいいんだ。「奴」出てきたら戦えばいいんだからな、。それでもオレは、物語を知らぬ間に崩すかもしれないのにここにいる。なぜだと思う？」

「くっ、わけのわからな・・・・」

「答えは簡単！！オレが強いからさ！！どんなことになっても、どんな状況でも、負けず、屈さず、救い出す！！！そんな強さを求めてオレは手に入れた！！！もっと力があれば、もっといい方法があった、なんてことがないように！！」

「そんなの・・・強引だ！！」

「強引だろうが構わない！！これはオレの正義なんだよ！！ずっと

そうだったんだ！！！ずっとそうしてきたんだ！！！そうやって救ってきたんだ！！！力がないためにできなかった最善の方法を逃さないために！！！確かにこれはお前らにとっては最善かもな。お前らの力じゃ、これが限界かもしれないな。でも違うだろ！？まだまだ力もってんだろ！？俺やなのはやユーノだっているじゃねぇか！！！なんでそこで諦めんだよ！？それに、解決解決って、お前らそんなに解決するだけが大事なのかよ！？てめえらは解決するために行動してんのか？規則に書かれたことを守るために悲劇を食い止めんのか！？違うだろ！！！正義があって、そのために行動するんだろうが！！！！！てめえらの正義は、分厚い本にあんのか、その胸にあんのか、どっちなんだ！！！本にあんなら持ってこい。今すぐここで燃やしてやるよ。だけどな！！！！」

ドン！！！

蒔風が自分の胸を叩き宣言した

「ここにある正義ってのはな、どんだけ燃えても消えないものだ！！！！絶対になくならないものなんだ！！！その信念を間違えちゃいけないんだ！！！さあ、答えてもらおうか。お前らの正義はどこにあんのかを！！！お前らは何を守りたいのかを！！！！」

そしてモニターを指さし叫ぶ

「お前らが止めたかった悲劇ってのはよ、あそこにあるものじゃな

いのか？それを止めるために、みんなここにいるんだろう！？」

みな、蒔風の言葉を聞く。

そうだ。任務優先であの子を見捨てようとした。
自分たちはの正義はそこにあるのか？と

「正義を語るんなら、味方も敵も、どっちも救って見せてみろよ！！！潰すより生かす方が難しいんだ。だったらそっちをやってみせろよ！！お前ら、大きな力があるじゃないか！！！それなのにできないのは弱者の証だ。攻撃されたからって、反撃するという安易な方法をとってあの子を傷つけた奴を切札なんて言ってるお前らと、あの子もジュエルシードもどっちも救うために駆けて行ったなのはとじゃ、なのはの方がよっぽど強いし正しい！！！！！」

「しかし、我々には失敗は許されないんです。失敗すれば、他の世界が消えてしまいます。現実は甘くないんです！！」

「だからなのはやオレや、ユーノがいる！！そういったものをフルに使いもしないで、できないとか言ってんじゃない！！！！」

蒔風はリンディに対しても叫ぶ。
その胸の己の正義を語るために。

「それでもここで俺を取り押さえてなのはを連れ戻そうというなら、いいだろう。それがお前らの正義なんだと解釈しよう。なに、正義

なんて人それぞれだ。それは構わない。だがな、ただで通れると思うなよ?ここに立つは銀白の翼人!!!くんなら五百は死ぬ覚悟で来い!!!!!」

「な・・・」

「翼人だと!?」

「すべてを、どんな状況からも救いだすために、世界最強になったんだ!!!オレの信念、救えるものは根こそぎ救う!!!!オレは救ってやるぜ。時空管理局は、何が救いたいんだ?人か!!!世界か!!!両方か!!!」

それだけを言って、蒔風が踵を返し、出ていく

「・・・どこへ行くんだ?」

クロノがそれを呼び止める。

蒔風は振り返らずに答えた

「救いに。オレは弱くないからな。難しいことでも、やってのけるさ」

「・・・・・僕にも・・・できるだろうか」

「クロノ？」

リンディがクロノの変化に気づく。

蒔風がクロノに聞きなおす

「なにが？」

「君のように、すべてを救うことが・・・・」

「さぁね。でも、諦めたら０％だ。でも、諦めなければ、可能性はいくらでもある。それに、お前には仲間がいるじゃないか」

「・・・・」

「エイミィさんも、リンディさんも。なのはにユーノ、もちろん、オレも。これだけじゃ、足りないかい？」

「・・・いや・・・・十分だ。僕も行こう。気になることもあるし」

「クロノ！！！」

「すみません、艦長。でも・・・僕の正義はこの胸にあるみたいです」

「クロノ・・・」

「行こうか」

蒔風とクロノはともに海上へ

他のメンバーはすでにモニターに向かい、補助をしていた。

この悲劇を、だれも傷つけずに、終わらせるために

――――――

「さて、後はフェイトをどうにか連れて行って。話を聞くだけだな」

「ああ！！」

近づいていくと、なのはとフェイトが話している声が聞こえた

「友達に、なりたいんだ」

「ぁ・・・・・・」

どうやら伝えたいことは伝えたようだ。

蒔風が近くに寄る。

「おお、言えたか？なのは」

「舜君・・・それに、クロノ君・・・ごめんなさい！！！勝手な行動して！！！」

「僕も・・・だからね」

その瞬間、アースラのアラームが鳴る。

それはなのはたちにも届いた。

『次元干渉、来ます！！！あと六秒！！！』

「！！！」

「なに！？」

「え？」

「母さんッ！？」

そして、海上に紫の雷が落ちる。

それはフェイトに直撃し、悲鳴を上げさせる。

「あああああああああああああ！！！！！！！！あ・・・・・・・・・」

しかしそれは途中で止まる。

蒔風が雷を弾き飛ばし、止めたからだ。

しかし、いまだに空は唸っており、第二派を予感させた

「フェイトが言うなら・・・・母さん、だっけか？なるほど、てめえが、すべての現況・・・・・」

蒔風が怒りに燃える

ゴロゴロゴロ・・・・

「貴様の雷、撃ち落とす！！！」

バッツン！！！！バガガガガガガガガ！！！！！！！！

蒔風がその手に雷旺を溜める。
すべてを吹き飛ばす、最高出力の技を！！！！！

「雷旺砲！！！！！！」

ズッガ！！！！！
ビシャァ！！！！！

ドッ！！！！バガンバガンバガン！！！！！！

二つのの雷がぶつかり合い、まき散らされていく。
あまりのエネルギーに、他の者は少しも動けなかった。
動けば、いつ雷に貫かれてしまうかわからない。

「なかなかじゃねぇか、だが！！！！ああああああああああああああ！！！！！！」

バッサァ！！！！

蒔風の背に翼が現れる

「オレをなめんな！！伊達で世界最強名乗ってんじゃ、ないんだよ！！大魔導師だか何だか知らねぇが、お前の勝因にはなりゃしねぇ！！！！」

ズッガン！！！ドドォォオ・・・・・・・・

蒔風の雷旺砲が紫電を撃ち消す。

「フェイトちゃん！！！」

なのはが叫ぶ。

見るとフェイトが落ちていっていた。
あの最初の一撃に耐えられなかったようだ。

落ちるフェイトをアルフが拾う。
さらにジュエルシードも取ろうとするが

「これは、渡さない！！！」

クロノが間に入り、止める
しかしアルフがクロノを投げ飛ばし、ジュエルシードを確保する。

しかしその数は三つ。
クロノが先に三つ、取っていたのだ。

怒りで暴れるアルフ。
爆発を起こし水しぶきを上げ、その隙に逃げてしまった

――――――――――――――――――――――――――――――――

アースラに帰った四人は、リンディに呼び出されていた。

「まったく・・・あなたたちときたら・・・それにクロノまで・・・・」

「すみません、艦長。責任は、僕がとります。だから三人は・・・」

「・・・規則を守ることは、個人だけでなく集団を守ることにも

つながります。周りの人を、危険にさらしたかもしれないんですよ？」

「ぅ・・・・・」

「しかし、今回は結果的に得るものがありましたし・・・それに、見失っていたモノも見つけられました・・・・」

「艦長・・・・」

「だから、今回のことは不問とします。しかし、二度目はありませんよ？」

「二度目があったら吹き飛ばしてやる」

ドゴン！！！！

蒔風が三人から同時にド突かれる。

「舜君！！言い過ぎだよ！！」

「まったく・・・君を見直したと思ったのに・・・」

「舜は少し過激すぎるよ」

「ふふふ。蒔風くんはね、凄く素晴らしいけど、ロクな人間じゃないんだよ」

「偉そうに言うな！！」

「まぁ・・・その辺にしてくれますか？」

「すみません」

「あい。改めて、すみませんでした。あんなに騒いで」

蒔風だってわかってるのだ。

リンディは最初から不問にするつもりだった。

しかし、艦長という立場上、ポンと許すわけにはいかない。

だからこんな厳しいことを言ってるのだ、と

「いいんですよ、もう。それより、聞きたいことが」

「なんですか？」

「翼人・・・なんですか？」

「・・・・はい」

蒔風の表情が少しだけ堅くなる

「あれが、翼ですか・・・・・」

リンディが先ほど雷旺砲を撃った蒔風をモニターに映す。

「ん？あれ？そういえば、翼人を知ってるんで？」

蒔風の質問にユーノが答える

「翼人は、伝説の時代よりも前の時代・・・・アルハザードの歴史でも一番古い部分に書かれたものだ。でも・・・まさか舜が・・・・」

「そこには、ただ一言。［翼人、救世主にして破滅の者］と書かれています」

「その翼人が、君だというならば、君はレアスキルどころかロストロギアだ」

「オレがぁ？」

「あなたは翼人について知ってるのですか？」

「多少は」

「では・・・なぜ？」

「・・・話さないと、ダメですか？」

「話したくないなら、構いません。ちなみに、この部屋での話は、私たち五人しか聞いてません」

「まいったな・・・そう言われると、嫌なのに話したくなるな・・・・」

蒔風が本当に悲しく、嫌そうな表情をする。

「・・・わかった。話すよ。あれはオレが世界とかそんなの知らな

かった時だ・・・オレの世界に「奴」が来てな。オレを殺そうとしてきた。その時のオレには力がなくて、死にかけの状態にまでボコボコにされた」

「・・・・・・」

「だけど、そこで世界の管理者と名乗る女性から自らの力の扉をあける鍵を渡され、覚醒した。それがこの力だ」

バサァ

蒔風が開翼する。
今は光ってはいないが

「それ以来オレは「奴」を追って、戦っている。翼人の翼は人の想いをそれぞれ司っているらしい」

「ひとの・・・想い？そもそも、翼人にはその・・・管理者がすれば誰でもなれるのか？」

「いや、オレがたまたまそうだっただけさ。なるもんじゃないさ。翼人なんて。そういう奴は少なからず世界からズレているからな」

「それで、舜君の翼には、どんな想いが？」

「人の願いだ」

「願い？」

「よく言えば希望。悪く言えば欲望だな。それを力にすることがで

きる」

「舜は銀白のって言ってたけど、他にはあるの？」

「オレは知らないけどな。人ごとに違うらしい。っても、翼人の存在自体超希少だからな。いくつかの世界にやっと一人、くらいらしい」

「へぇ～～～～」

「そして改めてあなたに問いたいの」

「何を、ですか？」

「あなたは、私たちの、味方でいいのよね？」

「当然です」

「でもまさか伝説の話の中でも伝説といわれる翼人をお目にかかれるなんて・・・翼、触ってもいいかい！？」

「ど、どうしたんだ？ユーノ・・って、あひゃうぅ！！！」

ユーノが蒔風の翼に触る。
すると蒔風が変な声をあげてのけぞってしまった

「あはは！！あひゃうぅ、だって！！！」

クロノは笑い、ユーノはさらに観察する。

「これは！！！興味深い・・・羽を貰ってもいいかい！？」

「やめろ！！！」

ユーノはあのジュエルシードを発掘したのだ。
このような伝説の代物を見て、黙っていられるわけがない

蒔風が翼をしまうが、ユーノは引き下がらない

そんなことを１０分くらいして、次の話に移る。

「さて、問題はこれからよ。クロノ」

「はい。エイミィ、モニターに出してくれ」

『はーーい』

そこでエイミィが通信で会話に加わる

そして映し出されたモニターには、ひとりの女性が映っていた

to be continued

なのは　～正義があるのはどこになの？～（後書き）

アリス「今回、長っ！！！」

どうしてもきりのいいところが見つからなかった・・・・

ア「そういえばこの小説ではフェイトの虐待シーン描かれないですよね」

まあ、あくまで蒔風中心なんで

ア「本音は？」

あんなひどいシーン書けない！！！

背中の傷でいっぱいいっぱいだったのに！！！

ア「あーーーなるほど。あとそれと」

はいはい

ア「前回の小説を読んだ友人から、「なぜバジル？」とのことですが」

ああ、あれですか

バシンバシン！！って打とうとしたら、片方がバジンになっててね

もうバジルでいいや、とああなりました

ア「何そのどうしようもない理由!?また何かのネタかと思いましたよ!!」

そんなものではない

ではよろしく

ア「はぁ・・・次回、アルフの脱走あります」

ではまた次回

封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！

（気付いたら）五万アクセス突破記念　～「奴」のボウリング場～

いえーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！

「奴」
「ほおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「「五万ヒットォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」」

やったぜぇ！！！！

「奴」
「これもひとえにオレが世界を襲い続けているからだな」

それ違うと思う

と、言うわけで今回は！！！！！

「奴」
「俺様のボウリング場だ！！！！！ゲストは誰だ！？」

いないよ

「奴」
「なんだと！？」

ばかだなぁ

オレたちに自分の作品の大切な主人公を預けてくれる人なんかいるわけないだろ？

「奴」

「いや・・・こういうの完全に番外編だから蒔風と管理人じゃなきゃいいんだが・・・」

そうなん？

「奴」

「おい！！もっといろんな人に感想送ってコミュニケーションを広げろよ！！！」

・・・怖いんです

「奴」

「はぁ？」

今まで散々読んでた作品の作者様に、今更感想とか送るのが怖くて仕方ないんです！！！

こいつ今更感想かよ、みたいになったらどうしよう！？

「奴」

「いや・・・みなさんそんな人じゃないと思うぞ？」

そう思うさ！！でも俺ってそういうのダメだから・・・

自分からじゃ何もできないんだ・・・・

「奴」
「無能が」

うるさい！！！

「奴」
「仕方ない。二人でいくぞ。まず俺から投げるぞ」

どーーーーぞーーーーー！！！！！

「奴」
「ぬぁ！！！」

ーガーターー

「奴」
「はぁ！！」

ーガーターー

「奴」
「バカな！？」

ははは！！へたくそ！！

オレのを見てみろ！！！

ーガーターー

―ガーター―

・・・・・・・・・

「奴」
「見てみたが？」

うあああああああああ！！！！！

「奴」
「では仕切りなおして、ほい」

―ストライク！！―

「奴」
「よし！！！」

なんの！！ほりゃ！！

―ストライク！！―

《そうして順調にゲームを進める二人。しかし・・・》

肩が・・・腕がぁァァァ！！！！！

「奴」
「ゴリュゴリュいっとる・・・これはやばいィ・・・・」

《無理して強引にブン投げてきたために、一ゲームで二人とも沈んだ》

「奴」
「やっぱり・・・ゲストいないと・・・」

無理さ・・・

それに、オレが読んでない小説からきたらどうする？

「奴」
「それは相手もわかってくれるだろう・・・」

失礼じゃないか！！！

「奴」
「お前に合わなきゃしかたないだろう」

そうですね・・・・

みなさま、この「世界をめぐる、銀白の翼人」もアクセス数が五万を超えました。

システム復旧したらいきなり五万越えを確認。
驚きました。

なのはを原作に入れたらアクセス数の伸び率が半端なかったです。
やっぱりなのははすごい。

しかし、この小説がここまで続いてきて、ここまでアクセス数が伸びたのも、ひとえに皆様のおかげです。

現在はリリカルなのはの世界。
まだまだ世界は回って行くので、どうかよろしくお願いします！！！

あと、蒔風を使いたい方がいらっしゃったら、気軽に声掛けてください。

あんな男でよければ、いくらでもお貸しします。
アリスでも、「奴」でもいいですよ。

では、全然やってなかったけれど、「奴」のボウリング場、おわりま～～す。

自分からは感想とかいけないダメダメな人なので、感想、お待ちしてます！！！

モニターに映し出されたひとりの女性

彼女についてクロノとエイミィの説明が入る

「名前、プレシア・テスタロッサ。私たちと同じ、ミッドチルダ出身の魔導師にして、研究者」

「専門は次元航行エネルギーの開発。かつての実験の失敗で、ミッドチルダの一部を吹き飛ばし、その身を追われた人物ですね」

「過去の登録データと、さっきの攻撃の魔力が一致したから、まず間違いなさそうです」

「そして・・・フェイトちゃんのお母さん・・・」

「確かに、フェイトは母さん、と言っていたな。だが、とてもじゃないが良い顔はしてなかったな。むしろ怯えた感じだった」

「うん・・・」

「エイミィ。彼女について、もっと情報を集めて」

「了解です！」

リンディがエイミィに指示を出す。

が、しかし

「・・・・ダメです。家族構成やこれまでの足取りのデータは綺麗サッパリなくなっています。本局に申請したので、一両日中にはデータがそろうかと」

「そう・・・ありがとう」

「フェイトの背中には傷があった」

「え？」

蒔風の発言に皆が注目する

「しかも魔法戦やジュエルシードの封印の際の怪我じゃない」

「それはどういう・・・」

「そういえば、アルフさん、言ってました。フェイトちゃん、家に帰る度に辛いってみたいなこと・・・・」

「更に言うと、傷の元は、鞭によるものだと思うんだ」

「ま・・・まさか！！」

「まさかだと・・・いいけどな」

「・・・とにかく、今はあの二人とも、あれだけの魔力を使ってすぐには動けないはず。アースラのシールドも補強しないといけないし、なのはさんたちは一旦、帰宅した方がいいでしょう」

そう、あのときのプレシアの雷による攻撃は、アースラにもあったのだ。

「でも・・・」

「なのは、休むことも必要だよ」

「それに、アリサ・バニングスやすずかに連絡入れないと、心配させちまうぞ」

「うん・・・・」

ユーノと蒔風が説得する。

今焦ってもしょうがない

そうして、なのはたちは一旦帰宅した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「フェイト・・・フェイト!!」

世界の狭間にある、プレシアの根城「時の庭園」

そこにアルフの叫びが響く。

駆け寄る先には傷つけられたフェイトが倒れている。

つい先ほどまで、フェイトはプレシアに鞭打たれていた。

あれだけの好機に、なにをボケッとしていたのかと

アルフには信じられなかった。

あれだけ頑張ったのに

あれだけ歯を食いしばってたのに

フェイトがそれでも頑張るの理由は！！

睨みつける先にはあの女の部屋がある

『フェイトのことを想うなら、時には主の命（めい）にも逆らえよ！！！あらゆる手段を使えよ！！！それが、命懸けってやつだろうがよ！！！』

あのときの・・・蒔風だっけ？
あの少年の言葉を思い出した。

そうだね・・・・

あのときは聞き流したけど、その通りだね・・・・

フェイト、ごめんよ
でも！もうダメだよ！我慢出来ない！

ドォン！！

考えたのは最初の一瞬だけ
あとはこの私の使命のままに！！

吹き飛ばした扉を潜り部屋に入ると、あの女がいた

「あああああ！！」

私はあいつに飛び掛かった。
障壁を張られたけど、関係ないね！
今のあたしは、いつもと違う！！

バキィ！

障壁を破り、胸倉を掴む

ぶん殴りたい衝動を、言葉に変えて叫んだ

「あんた！あの子の母親だろう！？あの子が何のために戦ってるのか、知ってんだろ！？あんなに一生懸命な子に、なんであんな事を！！」

フェイトがあんなにまで頑張ってるのはあんたの為なんだよ！
なんであんたはそんなあの子にあんな仕打ちするんだよ！

「自分の為に頑張ってくれている娘に、どうしてあんな事できんだよ！！」

しかし、プレシアはなにも言わない。
しかし目は語っていた

――クダラナイ――

その瞬間、プレシアの魔法が腹を撃ち抜いた。

「ぐっ、あああ!!」

部屋の隅まで吹き飛ばされる
口の中に血の味が広がる

「全く・・・あの子は使い魔の作り方が下手ね。感情剥き出しじゃないの。それに、あなたわかってるの？私はあの子の母親よ？」

「関係、ないね」

「なに？」

「あたしの主人はあんたじゃない、フェイトさ！フェイトの為なら、あたしは何でもする。そのためならフェイトの母親でも、あんたは私の敵だ！！」

「・・・はぁ、ダメね。（ボソッ）やっぱり、人形が作った使い魔なんて、不完全極まりないわね」

「え？」

「あなた、もういらないわ・・・消えなさい！！」

まずい・・・消される！

ドッゴン！！
バラバラバラバラ・・・・

プレシアの攻撃で部屋の一部が吹き飛び、穴が開く。
そこにはアルフの姿はなかった
プレシアはアルフを消し去るつもりで攻撃したので、得に疑問には思わなかった

プレシアはフェイトにアルフは逃げ出したと伝えた。
フェイトは信じてはいなかったが母の言うことに口答えは出来なかった

しかしアルフはとっさに防御して逃げていた。
それでもダメージは深刻だ。

（どこでもいい・・・転移しなきゃ・・・ごめんねフェイト。必ず助けるから・・・・）

そしてアルフは転移した

その先でひとりの少女に拾われるまでに、そう時間はかからなかった

――――――

「あんたも、来たければ来てもいいのよ？」

アリサが蒔風にも声をかける。

「マジで？でじま、マジでじま！？」

「古いわよ！！」

「行かせていただきます！！お嬢様！！」

「お？いいわね！！もっと崇めなさい！！」

「ははーーー」

「あっはっはっはっは！！！」

蒔風がいつのまにか大きな葉っぱのうちわを取り出し、アリサを扇（あお）いでいる。

「アリサちゃん、ノリノリすぎ・・・・」

「あ、そうそう。あと、大きな犬拾ったのよ」

「どんな犬なの？」

「えっとね、オレンジ色で、額に宝石見たいのが付いてた」

『舜君』

『間違いないな・・・・』

『『アルフ（さん）だ』』

ーーー

『なのは、彼女からは僕が話を聞いておくよ』

『オレも。何があったのか聞きたいんだ』

『うん、お願い』

なのはが二人と家に入る。

蒔風はもうちょっと様子を見てみたいと残った

そして蒔風は普通に、二人は念話で話す

『どうして君がここにいるんだ?』

「フェイトはどうした。何かあったんかい?」

『・・・この会話、管理局の連中も聴いてるんだろ?』

『・・・ああ、管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。正直に話してくれるなら、悪いようにはしない』

クロノがアルフに通信で話しかける。

その言葉は純粋な想いから来ていた。

『・・・わかったよ。話すよ。代わりに、フェイトを、フェイトを助けてやってくれ・・・』

「「「当たり前だ」」」

三人の声が揃う。

そしてアルフが話しだす。

フェイトがジュエルシードを集める理由。
それは彼女の母親、プレシア・テスタロッサの指示だった。

プレシアは何らかの目的のためにジュエルシードを集めている。

フェイトは、母親のためと一生懸命に頑張った。

しかし、プレシアはそんなフェイトを見ようともしない。
さらには集まりが悪いと、鎖で吊るし、鞭を打ち、フェイトに仕置きをしていた。

しかし、アルフから見ればお仕置きとは言うばかりの、ただの虐待。
自らの憂さ晴らしにやってるようであった。

そんなフェイトにアルフは何度もこんなことはやめよう、と訴えていた。
しかしフェイトは、母さんのためだから、母さんを困らせちゃ駄目

だから、と今まで頑張ってきた

アルフは、そんなフェイトを救うために、ついにプレシアに牙を剥くが、返り打ちにあい、ここまで逃げてきたのだそうだ

「なんでそんな無茶したんだ」

『あんたの言葉さ』

「オレの？」

『あんた言ったろ？主人のために命懸けでってさ。だからあたしはフェイトのために、やっと立ち上がったんだ・・・でも・・・・』

その声が、悔しさにわなわなとふるえていく

『でも・・なにもできなかった・・・フェイトを守るんだって言っても、結局負けて、フェイトを置き去りにして・・・・今、フェイトは一人ぼっちなんだよ・・・なんで・・・なんであたしは弱いんだ・・・使い魔なのに・・・あの子を・・・守れない・・・』

「守れるさ」

『え？』

「弱いなら、頼れ。管理局は立場上、難しいかもしれないが、オレやなのははフェイトを助けるつもりでいるんだからな。頼れる仲間は、おまえの強ささ」

『舜、見くびらないでくれ。管理局だって、フェイトを救うために全力を尽くす』

『僕もだ。僕の力は弱いかもしれない・・・でも、この思いは誰にも負けないつもりだ』

「はは。どうだ?あっという間に味方ができたぜ?」

『あ・・・う・・・うっ・・・・』

「世界ってのはさ、確かにクソったれなことがたくさんあるさ。でも、絶望するほど救いがない世界なんて、ないんだ」

『あああ・・・・』

「大丈夫だ、安心しろ。救いは確かにここにある」

『うっ、うっ・・・ありがとう・・・フェイトを・・・頼む!!・・・』

『なのは、聞いていたかい?』

『うん』

通信で話を聞いていたなのはが会話に入る

『管理局はこれより、プレシア・テスタロッサの逮捕及びフェイト・テスタロッサの保護に全力を注ぐ』

『私たちは?』

『僕たちはプレシアを追うから、もしそれまでにフェイトが現れたら、君に一任する』

「お、クロちゃん太っ腹」

『それが一番いいと、僕も思う。なのはにしか、できないと思う』

『彼女と一番長く戦い、話し、出会ってきた君なら、彼女を救える。任せたよ』

『はい!!!!』

そして翌日の、夜が明けるころ

なのはたちは家を出た。

昨晩にもう家族に話してはあるので、問題はない

なのはは駆ける。
フェイトに、答えを聞くために。

途中でアルフも合流した
己の主を救い出すために。

ユーノはそれを見届ける。
これからのことが、確かにあったと証明するために

蒔風はなのはを見守るつもりでいる。
何者にも、これから起こることの邪魔をさせないために

そして、海に面した公園につく。

そこで心を澄まして待っていると、やって来た

フェイトがそこに現れる
大切な母親（ひと）の笑顔が戻ると信じて

そして二人は言葉を交わす。

お互いのジュエルシードをすべて賭け

最初で最後の本気の勝負

そして、想いを伝えるために

二人の魔法少女の、最後の戦いが始まる。

しかし、ここまで来ても、まだ

この物語はプロローグにもなっていない

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのは　～戦う理由がそこにあるの～（後書き）

さあ、ついにここまでかこつけましたよ！！

アリス「ここから一気に最後まで行くんですよね？」

そうかな？

ア「あれ？なにかあるんですか？プロローグがどうとか」

さぁね～～～

ア「うわ、ムカつきますね」

それはお楽しみに！！！

今回はこの辺で

ア「次回、決着、そして・・・・」

ではまた次回

この手にあるのは、撃ち抜く魔法。涙も痛みも、運命も

なのは　～全力全開！！そして謎の影なの～

フェイトとなのはが飛び上がる。

二人の戦いが始まった

言葉はもはやなく

輝く魔法と二人だけが飛び交う戦場

砲撃においてなのはが勝り

接近戦においてフェイトが勝る

離れて撃ち

近づき攻める

互いが互いに仕掛け、かわし、防ぎ、飛ぶ

戦いの舞台から離れた公園

そこに蒔風たちはずっといた。

「なのはは勝てるだろうか・・・・」

ユーノが不安そうな声を出す。

「どちらとも言えないな。なのはは確かに強くなったし、魔力量も大きい。フェイトの方は経験値が高いからな」

「フェイトは、スピードで動き回って相手の懐に入り込み、攻撃する近接戦闘を得意としているんだ」

「なのはは離れたところからの砲撃と、その精度がすごいから、当たればひとたまりもない」

蒔風が中立的な意見を

アルフがフェイトの、ユーノがなのはの持ち味を述べる

「つまりは・・・自分の領分で攻撃しきった方が勝つ、か」

「でも・・・フェイトは・・・・・」

「ん？」

アルフがさらに先を言う

「それ以外が苦手なわけじゃないんだよ」

その瞬間、フェイトのバインドがなのはを捕らえる。

「！！捕まった！」

「まずい・・・フェイト、本気だよ！！」

『なのは！いまサポートを・・・』

ユーノが叫んだ。

しかし

「だめぇ！！」

なのはが叫ぶ

「一対一の、最初で最後の、全力全開の勝負だから!!だからここは、一人でやらせて!!」

『でも・・・フェイトのそれは本当に・・・』

「ゴチャゴチャ言うな!!なのはは、一対一での本気の勝負と言って、フェイトもそれに応じたんだ!ここで手を出すことは、オレが許さない!!お前らも、あいつらの顔に泥塗りたくないだろ?」

アルフがなのはの身を心配し、忠告しようとするがそれを蒔風が押し留める。

「でも・・・・」

それでもなお心配なのか、アルフが声を出す。

そこで蒔風がなのはに問う

『なのは、行けるよな!?』

それに答えるなのはの声は、絶対に退かない覚悟が込められていた

『当然!!まだまだ諦めないよ!!!』

動けないなのはの目の前で、魔法の力が溜まっていく。

（絶対に・・・負けない！！！！）

《Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ》

「フォトンランサー、ファランクスシフト。撃ち砕け・・・・ファイア！！！」

そしてフェイトのフォトンランサーが命中していく。

何十、いやその数は百に届くであろう数の砲撃がなのはを襲い、爆発になのはが呑まれる

フェイトの顔に、苦しげな表情が現れる

「なのは！！！」

ユーノが思わず叫んだ

しかし、その声にはだれも答えない

更なる追撃の為に、フェイトが魔力を溜める

そして、爆煙が晴れたその先に、なのはがいた

まだ電撃が身体に残り、少し痺れるが問題はない。

なのははその砲撃に耐えきっていた。

レイジングハートの補助と、なのはの成長が、それを可能なものとしていた。

「バインドって、攻撃のあとなくなっちゃうんだ・・・」

なのはが多少の痺れが身体から抜けたことを確認すると、レイジングハートをフェイトに向け、叫ぶ

「じゃあ、今度はこっちの、」

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

「番だよ！！」

なのはの砲撃がフェイトに放たれる

迎え撃たんと溜めた魔力を放つフェイト

しかしてそれは塵へと変わり、衰えを知らず少女に向かう

フェイトは防壁を張りそれをしのぐ

しかし直撃のディバインバスターは優しくはない

たが瞬間、フェイトは堪えてみせると誓った。
あの子も、自分の攻撃に堪えたのだ。
自分が堪えれないなんてことが！！！

「あって・・・たまるかァァァァァ！！！」

衝撃に晒されるマントはボロボロとちぎれ、突き出す腕の手袋は次々と避けていく

が、フェイトは堪えきった。

息は荒く、腕は下がり、顔を落とす。

そんなフェイトの上空、レイジングハート先端に、桜色の魔力が溜まる。

その光に、フェイトが再び顔を上げる。

（そ・・・そんな!!あれだけの砲撃をして、まだあんな魔力・・・・まさか!!!!）

「集束・・・魔法!!!!」

その事実にフェイトは驚愕する。

出会った時は、魔力の大きな素人だったのに、なんでこんなに強くなれたのかと

「考えてみりゃ簡単なことだったんだよな」

離れたところの、公園に立つ蒔風が、誰にでもなく語る

同時に、なのはの言葉が紡がれる

二人の言葉が、申し合わせていたかのように、交互に発せられる

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！！」

「なのはとフェイトの間には、大きな大きな壁があった」

フェイトが逃れようとすると、なのはのバインドがフェイトを捕らえる

「私とレイジングハートで考えた、知恵と戦略」

「その壁はあまりに高く、どこまで飛んでも、どこまで眺めても、上の見えない、とてもじゃないけど乗り越えられない壁」

空気中に霧散した微細な魔力をかき集め、自らの魔力とし、ありったけを注ぎ込む!!

「これが私の全力全開!!」

「でも、知ってるやつは知ってるんだ。その壁は・・・・」

「スターライト!!!・・・・・」

「乗り越える必要なんかなかったってな。その壁が、どれだけ薄っぺらいものだったのかを知っているんだ！」

「ブレイカーーーーーッッッ！！！」

「だからそんな壁、ぶち壊してやれ。思いっきりあたったあとに、分かり合えることだってあるんだからな」

フェイトを砲撃が襲う。
バインドで防御することも出来ず、直撃した。

星の輝きを冠したその砲撃は、フェイトを呑みこみ、下の海に一瞬だけ穴を空け、その着弾点の海水を吹き飛ばした。

砲撃が止み、フェイトが海に落ちるが、なのはがそれを引き上げる。

フェイトを抱えながら飛ぶなのはも、もう体力はそんなになく、フェイトが目を覚ますと、自分で飛べるかを聞き、その手を離す。

二人が二言三言、言葉を交わす

そしてフェイトが負けを認め、なのはにジュエルシードを八つすべて差し出すために、バルディッシュからそれを取り出した。

その瞬間

あのとき襲ったの紫電が飛来した

「圧水掌！！」

ドババン！

ババァァァ・・・・・

公園から蒔風がそこに圧水掌を叩き込む。

水が紫電ではじけ飛び、一瞬の雨を降らす

「まったく・・・癇癪持ちは嫌われるぜ？プレシアよ」

『舜君！！』

『早く戻れ！なのは！』

蒔風がなのはに戻るように促す

なのはとフェイトが蒔風たちの方に向かう

その間も雷は来たが、蒔風が圧水で傘を作り、それを防いだ

なのはたちが地上に下り、蒔風がなお迫る雷を払い続ける。

「ユーノ！早く転移を！」

「ああ！なのははジュエルシードを確保して！」

ジュエルシードは、フェイトは自分で持っていたが、なのはのものはユーノとアルフの周辺に浮いて置かれていた

今はそれらすべてがここにある

「うん！レイジングハートお願、きゃあ！！」

「どうした！！！！」

なのはが悲鳴を上げ、蒔風がそちらを向く

すでに雷はおさまっている

「ユ、ユーノ君。あれ・・・・」

「ッッッ！しまった・・・ジュエルシードを取られた！！」

ユーノとアルフが転移魔法の準備の為に目を離した瞬間、なにかがジュエルシードを七つ、奪っていったのだ。

「てめぇは！」

蒔風がその存在が何であるかを確認し叫ぶ。

その瞬間、更に一旦攻撃の止んだ雷が飛来し、ジュエルシードを九つ奪っていった。

「ジュエルシードが！！！」

「そんな！！」

なのはとユーノが愕然とする。

すべてのジュエルシード２１個のうち、九つはおそらくプレシア奪われ、得体のしれない奴に七つもとられたのだ。

なのははとりあえず、手元に残る五つのジュエルシードを回収する

「ユーノ、アルフ。二人を連れてアースラに戻れ」

蒔風がユーノとアルフに促す

「舜は？どうするつもりなんだ！！それにあの黒いのからジュエルシードを取り返さないと！！」

「それはオレがやる」

ユーノの言うこともっともだ。

しかし蒔風が一人でやると言い張った

「舜君は・・・あれを知ってるの？」

なのはの質問に、蒔風の口元がにやりとしたものに変わる

「知らないわけないだろう。あれは・・・「奴」の欠片だ！！！」

「「奴」って・・・舜君の追ってる!?」

「ああ、本人が来てないところから、解析は済んでないが手出しはしようといったところか」

「だったら私たちも・・・」

「だめだ。お前らは体力も魔力もカラだろ。危険だからここはオレに任せて帰れ」

「でも!!!」

舜君が心配だ、とここに残ると言い張るなのはだが

「～～～～ッ。ユーノ!!準備できたか!!!」

「あ、ああ。でも・・・」

「だったら行け」

ドカッと蒔風が魔法陣の中に四人を放り込む。

「舜君!!!」

「大丈夫さ。ジュエルシードを取り戻して必ず帰る」

なのはにそう声をかけ、蒔風が「欠片」に向かう。

後ろから転移魔法の発動した音が聞こえた

「行ったか・・・・さぁて、本体は今どこにいんだ？」

「＄＃６８？＝９＆＜」

「言語能力は与えられなかったか。まあいい。オレにとってはやっと、」

「＆＃％理８１ｇ殺！！」

「欠片」が騒ぐ。
それは言葉にせずとも、明確な殺意と悪意を含んでいた。

「プロローグが見えてきたってとこかな！！！！」

蒔風が「欠片」に向かう。

二人の戦ったその証を、取り戻すために

一方、アースラ艦内ではジュエルシードを奪った雷を追い、ついにプレシアの根城を突き止めていた。
物質転移は跡が残りやすく、容易に見つけることができた。

多くの武装魔導師が乗り込む。

ここから、物語は加速する

しかし、一人の少女の物語はまだ始まってもおらず。

一人の少年の戦いはやっとプロローグの前に辿り着いたばかり。

to be continued

なのは　～全力全開！！そして謎の影なの～（後書き）

アリス「どうするんですか？七つも取られて」

いや、欠片だから大丈夫でしょ、多分

それにしてもやっぱりなのはは熱い！！！

ア「燃え上がりますよね！！」

作者としてはあの作品

アニメとか魔法少女の皮をかぶった特撮ヒーローものだと思っています

ア「おかしいですもん、あの熱さ」

劇場版とかもうサイッコーでしたね

ＢＧＭとか今聞いても鳥肌立つもの

ア「ソクゾクするネェ」

するねーー！！！！

ア「次回、蒔風の戦い。そしてフェイトの秘密！？」

回次たまはで

↑↑↑↑↑↑

ア「めんどいことすな！！！」

君との出会いで胸に輝く勇気は
思いがけないほどに大きく解き放たれた
運命に負けないように一生懸命動き出そう
計算違いの展開が未来を切り開いて行く

なのは　～闇との戦い　そして残酷な真実なの～

「オオオ！！」

ガッ、バギィ！！

蒔風が獅子、麒麟を握り「欠片」に迫る。
それを腕で受け止める「欠片」

「くっそ！！」

蒔風が悪態をつき、「欠片」から離れ、身を翻して獄炎砲を撃つ。
爆発が起きるが、手応えはない。
「欠片」がまだ健在であることがわかる。

「鎌鼬切演舞、単撃！！」

蒔風が「風」と「林」に刀を持ち替え、身体を捻り脚の筋肉に力を込める

「螺旋！！」

捻った身体を一気に戻し、その勢いで回転しながら「欠片」にむかって弾丸のように飛び出す。

「風」「林」の斬撃が「欠片」を刻み、蒔風が「欠片」を飛び越していくと、衝撃波で「欠片」が海にまで吹き飛んだ。

「逃がすか！！」

蒔風が海に飛び込む。

海中で「欠片」を見つけた。

蒔風が圧水を使い一気に接近する

（近づいて、海上に放り投げて、十五天帝てぶった切って終いだ！！）

「欠片」は蒔風が迫るにも関わらず、微動だにしない。

そして蒔風が「欠片」を掴み、海上に向けて投げつけようとする。

が

（な・・・こいつ！！）

蒔風がつかみ掛かった瞬間、「欠片」と蒔風の周囲を囲むように渦が発生した。

当然、自然現象ではない。

「欠片」が蒔風を蹴りだし、渦に放り込んだ

（ぐっ・・あ！？チクショウ、一瞬で上下も左右もわかんなくなったぞ！！）

「欠片」は一人海上に上がり、蒔風を渦ごと海中から引きずり出した。

しかし、蒔風には海中から引き上げられた事すら感知できない。

「欠片」の脚に七つのジュエルシードがすべて集まり、光りを放つ

普通であれば、あまりの強さに目を閉じ、それでも脳がフラッシュしたようになるであろう輝きがその脚に宿る。

しかしその輝きも、今の蒔風には分からない

そして蒔風が回ってきたところに、カウンターの要領で「欠片」が全エネルギーを込めた廻し蹴りを蒔風の背に叩き込む。

蒔風の身体がまるで前と後ろが入れ代わったかのように、背中側でくの字に曲がり、音速を越えるスピードで公園に突き刺さった。

モウモウと土煙が上がって、ガラガラとなにかが崩れた。

地面は抉れ、木は根っこから吹き飛び、蒔風の姿は見えない

「欠片」がその場を去ろうと踵を返す。

そのとき

「開翼！！！」

ドッバァ！！

土煙を吹き飛ばし、一対の銀白の翼が展開される。

そして蒔風が立ち上がり、「欠片」に向かって両手を向ける。
「欠片」は再び蒔風に向かって飛び出した

「混闇陣！！」

メギャ！！と音がして、「欠片」が途中で吸い寄せられるように大地に倒れ、目に見えない重力に押し潰されている。

「混闇竜・・・」

更に漆黒の竜を繰り出す蒔風。
さらに動作は止まらない。

「焼き尽くせ、獄炎。押し潰せ、土惺！！混闇の元に混ざり合え！」

混闇竜に獄炎と土せいを投げ込み一つにする。
すると、土惺と獄炎が混ざり合い、マグマのように煮えたぎる竜へと姿を変えた。

「獄惺竜！！焼き押し潰せ！！」

蒔風が混闇陣を解き、「欠片」を蹴り上げる。

そこに獄惺竜の顎（あぎと）が襲い掛かった。

かみ砕かれた部分から身体がひしゃげ、さらに炎が吹き出し、爆発する。

「欠片」のすべてが竜に飲み込まれ、そのまま海に落ちていく。

海水がドンドン蒸発し、水蒸気が立ち上る。

そして爆発が起きた。

獄炎と土惺のエネルギーを持つ竜が爆発し、そこを中心に半径５０メートルは陸地になった。

すぐにその場には海水が流れ込み、再び海に変わり、もうどこが中心だったかはわからない。

しかし、中心であった場所から七つの宝石が海中から浮かび上がってきた

蒔風はそれを回収し、アースラに連絡をとり、帰還した。

――――――

「オイオイどうしたんだ?プレシアは捕まえたの?」

蒔風がジュエルシードをジャラジャラとお手玉しながら管制室に入ってくる。

なのはたちは蒔風が帰還したにもかかわらず、そちらの方を見ず、モニターのある光景に絶句していた

まさに今ちょうどプレシアの研究室が暴かれたところである

モニターにはプレシアに迫る管理局員と、奥の研究室に踏み込んだ先の映像が流れていた。

そこには大きなカプセルが真ん中に置かれており、その中にいたのは・・・・

「あん?なあなあ、あのカプセルの中にいるのってさ・・・フェイトじゃねえの?」

プレシアが管理局員に殺意と狂気のまなざしを向け、叫んだ

「私のアリシアに・・・近寄らないでちょうだい！・・・・・」

モニターでは、カプセルの傍らにいるプレシアと、それを捕縛するために迫る管理局員が映っているが、プレシアの攻撃に次々と倒れ、全滅した。

リンディの指示で全員が強制的にアースラに戻される

「アリ・・・シア？」

フェイトが目の前の光景が理解できないとつぶやく。

皆の疑問を解くように、アリシアが語り始める

『もう駄目ね・・・たった九個のジュエルシードではアルハザードには到達できない・・・・終わりにするわ。娘を失ってからの陰鬱とした日々も、代わりの人形を娘呼ばわりするのも』

「っ！？」

「！？・・・人形・・・だと？」

「どういう・・・」

『聞いていて?あなたのことよ、フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ・・・何の役にも立たない、ちっとも使えない・・・私のお人形!!』

「~~~~ッ!!!!どういうことだ!!!!あの少女は誰なんだ!!!!」

蒔風が叫ぶ。
それにエイミィが説明する

「・・・昔の実験の時に、プレシアは自分の実の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしているの」

「な・・・に?だったらあの少女は!?フェイトは!?」

「プレシアの研究は、人工的な魂の精製・・・人造生命の生成と、死者蘇生の秘術・・・「フェイト」って名前は、その時のプロジェクトの名前なの・・・・」

エイミィが資料から調べ上げたことを話した

プレシアが続きを語る

『よく調べたわね・・・・そうよ、その通り。だけど、ちっともう

まくいかなかった。作りものはしょせん作りもの。アリシアのＤＮＡを元にクローンを作り、アリシアの記憶をそのまま与えたのに全然違う』

プレシアの言葉一つ一つがフェイトの心を砕いていく

自分はあの子の代わりだった。
でもそれにもなれなかった、紛い物。
自分自身が保てなくなる・・・・・

「やめて・・・・」

なのはがプレシアに向かい、届かない声を発する

『アリシアはもっと優しく笑った。わがままも言うけれど、私にやさしくしてくれた。私の言うことはよく聞いてくれた』

「やめてよ・・・」

なのはがさっきよりも大きな声を出すが、まだ届かない

蒔風の表情が若干険しくなった

『でも・・・あなたは違う。同じ記憶、同じ体を与えても、所詮あなたは偽物。だからもういらないわ・・・・だから、もうどこにでも行くといいわ』

「やめてぇ！！！！！」

なのはの叫びがプレシアに届く

しかしプレシアは止まらない

「実はね・・・私、あなたと出会ってからずっと・・・」

――アナタノコトダイキライダッタノヨ――

「っ！！！！」

そこでプレシアは狂ったように笑い、通信を断絶する。

同時、フェイトは自身の存在を見失った。
今までの記憶、今までの自分
それらはすべて「フェイト・テスタロッサ」ではなかった。
そんな人間はいなかった。いたのはただの「お人形」

「フェイト・テスタロッサ」という人間を見ているものなど・・・
いなかったと・・・・

フェイトの手からバルディッシュが落ちる。
中心の宝石が砕ける。主の心を表すかのように。
そしてフェイト自身も、その場で崩れ落ち、倒れた。

「フェイトちゃん！！！」

「フェイト・・・」

なのはとユーノがフェイトに声をかける

「プレシア・・・・テスタロッサァァァァ！！！！！！」

蒔風がすでに届かない声をあげる。

それに応えるかのように、モニターに巨大な魔力反応が多数現れた

「な・・・なんだ！！この魔力反応は！？」

「推定ランクA！！個体数六十、八十・・・まだ増えています！！！」

アースラのモニターに再びプレシアの庭園内部の映像が映る

局員の残した別のカメラで内部が映し出されたのだ
庭園内に、鎧の騎士を模したような化け物が、モニターに表示されただけ出現していた

「プレシア・テスタロッサ・・・一体、何を!?」

「プレシアはアルハザードに行くと言っていたな」

「舜さん?」

蒔風がリンディに声をかける

「遥か太古に滅んだ理想郷、アルハザード。なるほど、確かにそこなら死者を蘇生させる術があったと思われても不思議じゃないよな」

「では・・・あったのですか!?そのようなものが!!」

「ないさ。いや、オレはアルハザードのことなんかこれっぽっちも知らないですよ?でも、死者を蘇らせる方法なんか、ない」

「そう・・・ですよね」

「クローンによるアリシアの復活に失敗し、さらにはアルハザードにはいけない・・・ってか、アルハザードって滅んだんですよね?」

「一部の学者の間では、滅んではおらず、どこかの時空に存在して

いるといわれているわ・・・でも・・・」

「一部の学者か・・・そんなものにまで縋るほど・・・か」

「歪んだ愛ね・・・」

「だが、強い・・・今プレシアは自暴自棄状態にある。もうなりふり構わないだろうな。おそらくは・・・」

「おそらく・・・どうなるというの？」

「無理矢理でもアルハザードに行こうとするだろうな。可能性が低いとは言え、ゼロじゃないんだからね。今の彼女ならやりかねない」

その通りであった。

プレシアはアリシアの入ったカプセルを土台から抜き、祭壇の中央に行く。

『私たちは旅立つのよ！！！永遠の都、アルハザードに！！！』

ジュエルシードが九つすべて発動し、次元震が起きる。

アースラが回避行動をとる

「くそっ！！そんな、アルハザードがあったとしたって、失われた過去は取り戻せないんだ！！！」

クロノが飛び出し、彼女を止めようと庭園に向かう

『あはははははははっは、うふはははははは。うひ、ひゃはははははははは！！！！！！！！』

モニターではプレシアが狂ったように笑い続ける

フェイトの眼に光はなく、ボーっと、虚空を見つめていた

それと抱えるなのはが、キッとプレシアをにらみつける。

ある者にとっては

ここからがクライマックスで、

物語の始まりで、

プロローグの始まりである

to be continued

なのは　～闇との戦い　そして残酷な真実なの～（後書き）

アリス「フェイトさん、気を確かに！！！てめえ作者こらなんて展開にしやがんだ！！」

ええ！？いや、ここは弄っちゃいけないだろうよ！！！

ア「でも～～～～」

はいはい

確かにひどくはありますけどね、仕方ないでしょうよ！！！

ア「そうですけどね～～～」

大丈夫

なのはや蒔風が何とかしますからね！！！

ア「今ほど主人公に期待したことはありませんよ」

ではお願い

ア「次回、己の存在証明」

ではまた次回

あの日出会った奇跡は
誰にも想像できない物語のプロローグに繋がっていく

アルフがフェイトを抱え、蒔風が後につき医務室に運ぶ。
なのはとユーノも途中までついて来ていたが、クロノと合流し、プレシアの庭園に乗り込んでいった。

医務室のベッドにフェイトを寝かせ、アルフが心配そうに眺め、蒔風は壁に寄り掛かって腕を組んでいる。

「・・・なぁ、なんであんたはあっちに行かなかったんだい？」
「こっちの方が心配だからな。にしても衝撃の事実だったねぇ」
「うん・・・」

医務室のモニターに、庭園に乗り込んでいったなのはたち三人が映し出される。

クロノが道を開き、なのはとユーノが先に進む。
クロノは大量の騎士たちを相手どり、なのはたちはプレシアのもとに向かっていく。

「あの騎士たちはなんだ？」

「あれは・・・多分、機械に庭園の動力炉にあるロストロギアのエネルギーを送り込んで作ったものだよ」

「なるほど、人が入ってるわけじゃないのか」

「うん・・」

「あと、所々にある穴はなんだ？」

「あの穴に黒い空間があるだろ？あれは虚数空間って言ってね、一切の魔法が無効化されてしまうんだよ」

「落ちたら一貫の終わり、か」

「・・・あたし、あの子たちが心配だから、ちょっと手伝ってくるね」

「そうか」

「フェイト・・・これが終わったら、ゆっくりでいい。元の、あたしの知ってるフェイトに戻ってね・・・・じゃあ、行ってくるよ」

アルフが部屋を出る

部屋には蒔風と、虚ろな目をして天井を見つめ続けるフェイトが残された。

「フェイト、わからなくてもいい。聞いてくれ」

蒔風がフェイトにに話し始める

「今お前は、自分を見てくれていた母親に裏切られた。お前を見ていた者はいない、と思っているだろうな」

「でも、アルフはどうだ。あいつは、お前が・・・フェイト・テスタロッサがいたからああして生きているんだ。あいつの主は、間違いなく、お前なんだ」

「それに、モニターの向こうで戦ってるなのは。お前の名前を何度も叫んだあの少女。お前と友達になりたいっていったんだぜ？他でもない、フェイト・テスタロッサとだ」

「オレたちが知っているのは、アリシア・テスタロッサの代わりの少女じゃない。ましてやプレシアの人形でもない！フェイト・テスタロッサと言う、一人の人間だ！」

「確かに、生まれた理由は、アリシアのクローンだったかもしれない。プレシアの慰み物だったかもしれない。でも、生きる理由は、そこじゃない！！」

「アリシアのクローンだとか、そういったものも当然、お前を形作る要因の一つだ。でも、そうある前に、お前はフェイト・テスタロッサだ！アリシアとかプレシアとか、そんなことは後回しだ。まず、お前自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてくれ」

「そして忘れるな。誰よりも「フェイト・テスタロッサ」を見てきた少女が今、他の誰でもないお前の為に戦っていることをな」

蒔風が出口に向かいながら最後に言った。

「お前の物語はここからかもしれないけど、オレの「この世界の」物語はまだ始まってないんだ。プロローグでもたつかせないでくれよ？」

そして蒔風も医務室を出ていく。

部屋にはフェイトが残された。

ＳＩＤＥ　フェイト

あの男の子が出ていった

頭の中を思考がグルグルとまわる

母さん・・・・

あんなこと言われても、私はまだ母さんに笑って欲しいと思ってる。

まだ母さんに縋り付いてる。

チカチカと映っているモニターに目をやると、アルフと、白い服の女の子が戦っていた。

アルフ・・・何度も私を止めようとしてくれた、アルフ

アルフは、いつだって私の為に動いてくれた。

それに、あの白い服の女の子・・・

なんども戦って、なんども私の名前を呼んでくれて・・・

初めて私と対等に向き合ってくれた

初めて私に本気の本音をぶつけてくれた

なんどもなんども、私に”初めて”をぶつけてくれた、あの子

胸の中に、熱いなにかを感じた気がした。

身体を起こす

生きる意味なんて、母さんに認めてもらうためだった。
それ以外にないと思っていた。

でも・・・あの子は・・・・私に・・・

逃げればいいってわけじゃない。
捨てればいいってわけじゃ、もっとない・・・

部屋の片隅に置かれた、ボロボロになったバルディッシュ

私の・・・私たちのすべては、まだ始まってもない。

バルディッシュをデバイスモードに展開する
ボロボロでヒビだらけで、今にも砕け散ってしまいそうだけど、確かにまだここにある

「私・・・まだ始まってもいなかったのかな、バルディッシュ」

《ｇｅｔ　ｓｅｔ》

「っ・・そうだよね、バルディッシュもずっと私のそばにいてくれたんだもんね。このまま終わりになんか、したくないもんね」

《ｙｅｓ　ｓｉｒ》

そうだ・・・私はフェイト・テスタロッサ！

アリシアが元で生まれて、母さんの人形だったとしても！！

「私は、私であるために！私の、フェイト・テスタロッサの物語は、
ここから始まるんだ！！バルディッシュ！！！」

《ｙｅｓ，ｓｉｒ！！！ｒｅｃｏｖｅｒｙ！！！！！》

バリアジャケットに身を包み、バルディッシュが輝き、ボロボロだった機体が直り、万全なものとなる
これで準備は整った。

「さあ、これからを始めるために、これまでを、終わらせよう！！」

転移魔法陣を展開し、跳ぶ。

向かうはあの子の戦う場所、そして、母さんのもとに

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

医務室の中からフェイトの気配が消える

「行ったか・・・」

蒔風が中をのぞき、嬉しそうな表情でつぶやいた

「ははは！！これだから！！人ってのは素晴らしい！！」

天井を仰ぎ、大笑いして、この世の最高の幸せと手にしたような顔をする

「どんな逆境にあっても！！決して失われることなく、輝き続ける心！！ああ、やっぱり生きてるっていいな。人との出会いはなんと素晴らしい！！人の意志の力はなんて逞しいんだ！！！」

その言葉にはいっさいのからかいはなく、純粋に人に対する想いから来ていた

「まったく、こんなん見せられたら、もっと人が大好きになっちまうだろ！！」

自分自身が翼人であることは関係なしに、蒔風の想いは大きくなる。
これが蒔風舜なのだ。
特定の誰かが好きなんじゃない。人間が好きなんだ、と

「さて・・・オレも行きますか。あんなやつがいるんだから、まだまだ世界は十分輝てるんだからな」

蒔風も飛び出す。

なのはたちのいる決戦の地へ

――――――

「バルディッシュ！！」

《ｇｅｔ　ｓｅｔ！！》

「こっちもだよ！レイジングハート！！」

《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！！》

ギィィィィィ！！！！！

大型の両肩に乗るキャノンにエネルギーがたまる

だが、知るであろう

そんなものは、この二人の前には無意味であることが！！！

「サンダーーーー！！！スマッシャーーーー！！！！」

「ディバイーーーーン！！！バスターーーーーー！！！！」」

ドウッ、ゴアッ！！！

バリアに二人の砲撃が阻まれる

それでも！！！

「「せーーー、のっっっっ！！！！！」」

グオァッ！！！ドドゴン！！！

二人の攻撃に、バリアをいとも簡単に破られ、爆散する。

庭園が揺れ、ガラガラと崩れていく。

プレシアの居る場所も、例外ではない

なのはやフェイト達のいる位置よりかも遥か奥

足場が崩れ、虚数空間の領域が広がる

プレシアは最深部の部屋におり、細く突き出した足場の先に、アリシアの入ったカプセルとともにいた。

「もう来たのね・・・でももう間に合わないわよ・・・あと、も

う少し・・・もう少しで・・・」

ドォン！！！ドドドン！！！ドッ！！バガァッ！！！

プレシアの言葉をさえぎるように、そこに蒔風が乗り込んできた

「よう。プレシア、それにそっちがアリシアか」

「・・・何の用かしら。今とても忙しいの。それに、ここの前にはまだ見張りがいたはずよ」

「あのデグどもか？あんなもんじゃ止められないよ、オレは。止めたきゃ、あと五百倍は持ってこい」

「そう・・・」

「なんだ？拍子抜けだな。アルハザードには行けそうなのかい？」

「・・・無理よ。これっぽっちじゃ届かない」

「あらまぁ」

「でも・・私にはあのままアリシアの死を受け入れられなかった」

「・・・・」

「あのまま何もしなきゃ、私はアリシアの死を認めなければならな

くなる。そんなことはできなかった!!!私はアリシアをそんな簡単に「殺す」ことはできなかった!!!」

「・・・死は誰にでも訪れるものだ。アルハザードであっても、それは覆らない」

「あなた、アルハザードを知ってるの?知らないでしょう。だからこれから行くのよ!!何としても!!!」

「できないとわかっていても、それに向かって突き進む。その意志は嫌いじゃない。嫌いじゃないが・・・!!!!」

「なに?文句でもあるの?」

「誰かの意志を踏みにじってまで叶えられる願いなんざ、このオレがゆるさねぇ!!!」

「そんなの知ったことではないわ!!そもそも、なんでアリシアなの!?なんでこの子がこんな目にあわなければならなかったの!?世界はこんなにも理不尽なのよ!?だから私は取り戻すのよ!このどこまでも理不尽で、救いのない世界から、私たちの失われた過去を!!!」

バシュウウウウ・・・ドゴン!!!

「世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばっかりだよ!!　ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ!!

そのとき、クロノが額から血を流し一人突入してきた
そしてなおも、プレシアの問いに叫び続けた

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ！だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！」

そこでクロノの体が若干揺れる

「クロノ！！！大丈夫か！？」

蒔風がクロノに向かって叫ぶ

「舜！！もう来ていたのか・・・さすがに、早いね・・」

現在、プレシアは崖っぷちに

蒔風はそこから三、四メートルほど離れたところに

クロノは蒔風よりも三メートル後ろにいる

さらには天上の穴からフェイトとアルフが飛び降りてきた

「フェイト！！！なのはとユーノは！？」

「二人とも、動力炉を破壊しに行ったよ！！」

ドドン・・・・・

さらに庭園が揺れる

足場がビキビキといっているのに蒔風が気付く。

プレシアが苦しそうにせき込む。

「母さん！！」

「動くな！！」

フェイトがプレシアに駆けよろうとするのを、蒔風が止める

「今足場が非常に不安定だ・・・何の拍子で崩れるかわからない！

！！」

蒔風の忠告に、皆動けなくなる

「何をしに来たの・・・言ったでしょう。あなたはもういらないのよ」

プレシアがフェイトに話しかける

「あなたに言いたいことがあってきました」

それにフェイトが答える

「私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかもしれません」

フェイトの告白は続く

「だけど、私は・・・フェイト・テスタロッサは・・・あなたに育ててもらった、あなたの、娘です！！」

「ふ・・・ふふふ。あははははは！！！言ったでしょう！！私はもうあなたはいらないの！！なに？今更あなたを娘と呼べと！？」

「・・・あなたが、それを望むなら。私は、世界中の誰からも、あ

なたを守り続けます」

「・・・・・」

「それは、あなたが、私の、母さんだから!!」

「っ!!!」

フェイトの言葉には芯があった
たとえどんな存在でもいい。自分の意志で決めたことだから。
たとえどんなに愛されなくてもいい。それでも私はあなたの娘だから。
あなたは私の母さんだから!!!
そこには、かつての人形はいなかった。
この世でたった一人の、フェイト・テスタロッサが、そこにいた

しかし、それでも

「くだらないわ・・・言ったでしょう?あなたはもういらない。私にはね、ふ・・・ふふふ」

ドゴン！！！

プレシアが残った少ない力で、足場に魔力を流す。

たったそれだけの魔力で、プレシアの足場は崩れた

「母さん！！！」「プレシア！！！」

フェイトとクロノか叫ぶ。

しかし、その先には踏み込めない。

容易に動けば、自分も落ちてしまう

「ダメだ！！！開翼！！！」

しかしこの少年は動いた

その背に翼を展開させ、プレシアの落ちて行った穴に飛びこむ

「い・・今、背中に翼が・・・」

「ああ・・・彼は・・蒔風舜は、あの伝説の翼人なんだ」

「！！！」

「彼なら虚数空間でも飛ぶ術をもっているのだろう。急げ！！ここから逃げないと！！」

「ま・・待って・・・母さんが・・母さんが！！！！！」

「フェイトォ！！！」

アルフがフェイトを引きとめる

そして、その空間から離脱した

一方、虚数空間内

「プレシアアアアアアアアア！！！！！」

蒔風が落ちていくプレシアを追う

しかし、プレシアは手を伸ばそうとせず、一向に届かない

しかし、その顔には驚きの表情があった

「あなた・・・まさか・・・翼人！？」

「そうだ。普段じゃ飛べないからな。こうしないとならないんだよ」

「では!!やはりアルハザードは!!」

「知らないよ」

「え?」

「オレはアルハザードなんか知らない。あそこの伝説に書かれたものとは別人だよ」

「そん・・・な」

「今からでも戻れる!!掴め!!」

「・・・だめよ。この子を一人にさせられないわ・・・」

「だったら一緒に引き上げてやるから!!フェイトだって待ってんだぞ!!」

「なおさらダメよ。私にはあの子はいらないもの」

「まだそんなことを!!!」

「あそこの庭園・・・あそこにアリシアのデータや研究の資料がたくさんあるわ」

「??」

この間も距離は縮まらず、なおも落ち続ける

「あそこには私とアリシアの、思い出の詰まった場所がたくさんあるの。それを胸に・・・私は逝くわ」

「フェイトはどうするんだよ!!あんたの」

「私にはいらないのよ!!!」

「っ!!」

プレシアが蒔風の言葉を遮る

「言ったでしょう?私に必要なのは、アリシアか、お人形よ」

「・・・・」

「あの子はもう、人だもの。「フェイト・テスタロッサ」になってしまったもの」

「おまえ・・・」

「あの子は一人の人間としてここにきてたわ。紛れもない、フェイト・テスタロッサとして。だから、私は・・・・」

そこでプレシアは、

悲しそうに、それでも、穏やかに笑った。

「この笑顔・・・「お人形」には見せられないわ・・・でも・・・・・」

「プレシア！！！！！」

そしてプレシアが雷を振るう。

追うことに全力であった蒔風は、これを受けられず、後ろに跳ね飛ばされた

蒔風が目をあけると、そこには虚無の空間がただただ広がっていた。

「プレシア・・・・テスタロッサァァァァァアアアアアア！！！！！！」

もう見つからない、追いつけない
蒔風はそれを理解してしまった

だから全力で戻った

庭園の、プレシアの、その記憶を永遠にするために

『全員退避しろ！！！！ここを跡形もなく吹き飛ばす！！！！』

「舜！？」

「舜君！？」

蒔風は虚数空間から飛び出すと、庭園内にいる全員に念話を飛ばした

誰にも蒔風の姿は見えず、その背の翼もみられることはない

『オレは、本気だ！！一切の資料を持ち帰ることはこのオレが許さない！！！』

（プレシア・・・お前の記憶は・・・誰にもいじらせはしない！！！
それがお前を救いきれなかった、オレの・・・償いだ！！！）

『くっ、全員退避！！急いで！！！何も持たないで、全速力！！！』

リンディからの指示が下る

「おおおお

（この翼に宿るのはたった一人の願い。
だが、オレは！！！その願いのために、こいつを！！！）

十五天帝と、蒔風の腕にエネルギーが・・・一人の母の願いが集まる！！！！

「あああああああああああ！！！！！」

蒔風が涙を流し、「時の庭園」に突っ込んだ

「《すべての者に救いと破滅を》！！！！！」

ガオオオオオ！！！！！！ドッ！！！！！

ギュゴガゴゴガゴゴゴゴゴガガガガゴゴゴン！！！

to be continued

なのは　～戦いの終わりと始まりとプロローグなの～（後書き）

アリス「戦いの終わりですね」

何とかここまでこぎつけたよ・・・

ア「もうそろそろなのはは終わりですかね」

あと二話くらいかな？

ア「にしても、蒔風が人間好きだったとは」

蒔風には確かに確固たる愛情があります

しかしそれは１００％の人類愛なんですよね～～～

ア「そういえば、蒔風とくっつく人って、いないんですか？」

う～～～ん、いません

ア「悩んで断言ですか」

今のところはね

本当に終盤になったら、出てくるかも

ア「さいですか」

じゃ、よろ

ア「次回、終わってその後。そして・・・」

ではまた次回

ありふれた言葉でもいい　真っ直ぐに伝えたいよ
君の元へと羽撃いていく
「行こう・・・」もう迷わない

「て・・・「庭園」崩壊・・・消滅、しました」

「次元震、停止しました。断層発生は、ありません・・・」

「そう・・・了解（あれだけの力・・・なんとも恐ろしいわね。［翼人、救世主にして破滅の者］とはよく言ったものね）」

管制室で報告を受けるリンディ。

改めて蒔風の力の恐ろしさを体感したところであった・・・

――――――

「フェイトちゃんは？」

「護送室だ。彼女たちはこの事件の重要参考人だからね。残念だけど・・・」

「ま、仕方ないだろ。クロノが見ることになんだろ？なら安心だよ」

「でも・・・いっつ」

「なのは！ジッとしてよもう」

なのはが身を乗り出し、痛みに顔をゆがめる

包帯を巻いていたユーノが注意した

「今回の事件は一歩間違えれば次元断層すらも引き起こしかねなかったんだ」

「関係者の処遇には気をつけないとだからねーー」

「そうだ。でも大丈夫だ。彼女には酷い目には合わせないよ絶対にだ」

「クロノ・・・お前丸くなった？」

「君の影響だよ」

クロノがフッ、と笑いながら蒔風に言った

「オレが？バカ言っちゃなんねえよ。そうなったのはあくまでお前の意志だ」

「・・・そうだね・・・というか、君が庭園を跡形もなく吹き飛ばしたから面倒なことに・・・」

「そうじゃなくても、あそこは崩れていたさ」

「一切の資料も持ち出せなかったし・・・」

「それは許さん」

「・・・プレシアか？」

「ああ・・・」

蒔風が天井を仰ぐ

とても、悲しく、そして残念そうな顔で

――――――

そこの通路に、なのはたちと別れた蒔風が入ってきた

「あんた・・・」

「よう、フェイト。ちょっとお話ししよう」

「え・・・うん・・・」

そうして蒔風は話し始める

最初に出会って、いきなり戦ったこと

ジュエルシードの暴走を抑え込んだこと

そして・・・プレシアの最後

「母さんが？」

「ああ。フェイトを・・・もう、一人の人間だって、言っていたよ。
そして・・・」

蒔風がモニターに一枚の画像を出す

「これは・・・・」

「プレシアの最後の・・・笑顔だ」

「・・・・」

「言っていたよ。この笑顔は人形には見せられない笑顔だって。でも、最後にプレシアが想っていたのは・・・きっと・・・」

「母さん・・・・」

「オレはプレシアを助けられなかった」

「そんなこと・・・ないよ」

「いいや・・・これはオレが背負わなきゃならない、弱さなんだ」

「・・・・」

「だからフェイト。お前は進んでくれ。決して立ち止まらないでくれ。お前の世界は、始まったばかりなんだからな」

「うん・・・うん!!」

「じゃ、オレはもう行くよ。ほんとはここ入っちゃいけないらしいからな」

「え?」

「いやぁ、どうしてもこれだけは見せたかったからな。話しておきたかったからな。「奴」もそろそろ来るだろうから、なのはのそば

にいないとだし」

「「奴」？」

「ああ、話してなかったな。そうだな・・・・」

蒔風が五分ほどで説明した。
自身が翼人であることも含めて

「そんなことが・・・」

「というか、あんた本当に伝説の翼人だったんだね・・・」

「気にするなよ。ん？をう！そろそろ本気で見つかりそうだから、オレは逃げるよ。じゃあね」

「うん・・・じゃあ」

そうして蒔風は壁に向かって、手をかざす
物質情報の結合を解除、と呟くと、壁に穴があき、出ていくと、再びそこを閉めた

「フェイト・・・」

「大丈夫だよ。アルフ・・・ありがとう」

フェイトの胸には、哀しみがあった。
でも、それよりも大きな、出会いがあった。
フェイト・テスタロッサはもう、大丈夫だった

――――――

「ま、ただでは済まないよなぁ」

「うん・・・数百年以上の幽閉が、普通なんだが・・・・・・」

「そ、そんな!!!」

「ははん、クロノ。「なんだが」、でしょ？」

「ああ。前にも言ったが、絶対にそんなことはさせない。僕の正義が、許さない。何が何でも、上の人に理解させて見せる」

「クロノ君・・・」

「心配しないでくれ。彼女が自らの意志で加担していなかったことははっきりしている。それを、絶対に上の人間に伝えて見せる」

「頼んだぞ。クロノ」

「任せてくれ。そういったことは、得意なんだ」

「信頼してるぜ」

「なにも知らず、ただ母親のために一生懸命だった子に罪を問うほど、時空管理局は冷徹じゃないから」

「でも、見捨てようとしたよな～～あんとき」

「バッ、あのときのことはもう言わないでくれ!!!」

「ははーーーん。まーだ後悔してんのかーい？あのときすぐに助けにいけなかったのがっさ」

「う・・・うるさい！！」

「あははは！！！」

「笑うな！！！」

「うっ、ぷはははははは！！くっくっく・・・ぷぁっはっはっは！！！」

「舜んんんんん！！！！！」

「照れるな照れるっぷ！！！はははははは！！！」

ーーー

さらに数日後

なのはの携帯に、時空管理局から連絡が入った
電波は世界を超えるのである

どうやら、フェイトは、これから身柄を本局に移され、裁判になるらしい。
しかし、ほぼ確実に、無罪になるそうだ

しかし、それには相当時間がかかることもあるために、始まったらしばらく会えなくなる。

その前に、今からフェイトに会えるのだそうだ
なのはに、会いたいと言っているそうだ

そうして約束の橋の上に来たなのはたち

クロノとアルフも来ていた

「時間もないから、二人で話すといい。僕たちは、あっちにいるから」

「ありがとう、クロノ君」

「じゃ、行きますか」

「あ・・・」

「ん？なんだい？」

「あなたとも、話したいことが・・・・」

「・・・光栄だな」

周りが一瞬静かになる

そうして、蒔風、なのは、フェイトが話し始めた

「話したいこと、いっぱいあるのに・・・何話したらいいか、わかんないや」

「そうだね・・・私もうまく言葉にできない・・・」

「いろいろあったからねぇ・・てか、オレいなくてよくない？」

蒔風が蚊帳の外であることを危惧し始める

「でも、嬉しかった。私と、真っ正面から向き合ってくれて」

「呼び止めたのあなたですよねー？なんでー？」
フェイトに話しかけるが、無視される

「うん・・・私ね、フェイトちゃんと、お友達になれたらって、想ってるの！」

「あれー？なのはさん、あなたもシカトですかー？」
なのはにもスルーされ、いたたまれなくなってきた

「でも・・これから、出かけちゃうんだよね」

「うん・・・少し長い旅になる」

「・・・・・」
蒔風が橋の反対側でいじけ始めた

「また、会えるんだよね！？」

「ぁ・・・うん。まだ少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから」

「フェイトちゃん・・・」

「あなたたちのおかげだよ」

「・・・え？オレ？やっと話題振られた？」

話題にやっと入れそうになり、蒔風が二人による

「うん・・・貴女が私と対等に向き合ってくれたから、貴方が私と対等の立場で酷い言葉でも私のために叫んでくれたから、私はここにいられる」

「フェイト自身が見つけた現実だよ、それは。オレたちはきっかけでしかない」

「それでも・・・私の目を覚まさせてくれたのは、あなたたち二人だった・・・」

「フェイト・・・」「フェイトちゃん・・・」

「今日来てもらったのは、あのときの返事をするため」

「え？」

「君が言ってくれた、「友達になりたい」って」

「うん、うん！！」

「私にできるなら、私でいいなら・・・って。だけど・・私・・・」

「どうしたらいいかわからないのかい？」

「うん・・・だから教えてほしいんだ・・・どうしたら友達になれるのか・・・」

「簡単、だよ・・・・・・」

なのはが言う

それは、誰にでもできることだと

「え？」

「名前を呼んで。初めはそれだけでいいの。君とか、あなたとかじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、ちゃんと相手の名前を呼ぶの」

「ぁ・・・」

だから、何度もなのはは名前を呼んでいた。

フェイトと友達になるために

あとは、もう片方が、手を伸ばすだけ

「私、高町なのは。なのはだよ！！」

そして

「なのは・・・」

手が、届いた

「うん、そう！！」

「な、の、は」

一文字ずつを、かみしめるように言う

決して間違わないように

「うん！！」

「オレは、蒔風舜な」

「舜・・・」

「いきなし下か」

「あ・・・」

「いや、大丈夫だよ。ありがとう、フェイト」

「うん・・なのは、舜！！」

「うん！！」「ああ！！」

「ありがとう、なのは、舜」

フェイトがなのはと蒔風の手をとる

三人が笑う

そして

その瞬間、水中から、何者かが飛び出してきた

「温かいねぇ～～～～～。美しい友情だねぇ～～～～」

「「！！！？？？」」

「おいおい、空気読めよ。普通ここで出くくるかよ。てめぇ！！！」

「奴」が、来た

なんだかとてもイライラしているようだ

「よかったな、そこな少女よ。そいつが最主要人物でよ」

「舜君！！あいつは！？」

「「奴」だよ。全く、長い長いプロローグだったぜ・・・・」

「え？」

「そうだなぁ！！こっからが、オレたちの！！！」

「この世界での！！物語だからなぁ！！！」

「舜！！！」

「なんだいあいつ！？」

アルフとその肩に乗ったユーノ、それとクロノが三人に駆け寄る

「アルフ、ユーノ。結界を頼む」

「え？」

「開翼・・・」

バッサ！！！ブォア・・・

結界が張られたことを確認すると、蒔風が飛びあがり、「奴」と同じ高さまで上がる

「あーーーくっそ。計算し続けてあったま痛いわ」

「休んでくりゃよかったじゃないか」

「は！！あんな、最主要人物が相手だったからまともになれたような幸運野郎見てたら、腹立ってきたんだよ」

「なんだそりゃ。前々から思ってたけどよ、てめえのそれはもうただの僻(ひが)みじゃねぇか！！」

「黙れ！！主人公だからという理由だけで成功してきた者にはわからない！！必ず努力が実るような、うまくいくようなやつにはなぁ！！！！」

「どう言ってもしょうがないみたいだな」

「わかってただろ？」

「まあ・・・な」

「舜君！！私も！！！」

「僕も！！」

「私も・・・！！！！」

なのは、クロノ、フェイトが蒔風の横にまで飛んでくる

「お前ら・・・フェイトはいいのか？クロノ」

「僕が与えた。この状況で、規則とか言ってられないからね」

「ふっ、そうかい！！」

それぞれの手にはデバイスが握られている

フェイトの手にも、バルディッシュが握られていた

「は！！ぶっ殺すぞ！！！主人公どもが！！！！」

「させないよ・・・絶対に！！」

「友達になったのに、終わりになんて、させない！！！」

「わたしはまだ、始まったばかりなんだ！！！」

「いきなりやってきて「ぶっ殺す」とは何て言い草だ・・・・時間がないんだ、早く終わらせよう」

「終わるのは・・・どっちかなぁ？」

なのはたちが叫び、蒔風が意志を固める

そうして、「奴」も構える

川の水がうねりをあげ、空には雷鳴がとどろく

「終わらせねえよ・・・今！オレのこの世界での話は、始まったんだからな！！！」

そうして一つの話が終わり、ひとりの少年の「この世界」での物語が始まる

長過ぎたプロローグは、ここから本編に入る

to be continued

なのは　～終わってからの始まりなの～（後書き）

アリス「ついに「奴」の登場ですね。いやーー空気読めてないですね」

そうですねーーー

でも「奴」にとってして見ればやっと計算が終わったところなんです

早く終わらせたいのでしょうね

ア「さて、ここでプロローグだとかそこらへん聞きたいのですが？」

ああ

なのはにとっては、この話は丸々本編でした

フェイトにとっては、自身の存在を見つけ出したところから、始まりでした

では蒔風にとっては？

蒔風の物語は、各世界での「奴」との戦いです

それまでの物語は、正直すべてがそれまでの時間つぶしなんですよねぇ

ア「あの話を時間つぶしだとか言ったら、ファンに殺されちゃいますよ？」

時間つぶしとはいっても、蒔風は本気で取り組んでますから

てか、「奴」が動き出すまで、あれだけのことほっとくわけにはいかないでしょう

ア「まあ、そうですね」

だから、ここからが本編なんです。蒔風にとっては

ア「なるほどねーーー」

じゃ、この辺で

ア「次回、「奴」との戦い。なのはの世界ももう終わりですね」

ではまた次回

魔法少女、はじめました

ア「今更キャッチコピー！？」

なのは　～戦いと、次なる旅立ちなの～

「奴」との戦いが始まり、まだそう時間は経ってない。

しかし、蒔風の声には焦りが感じられる

「ちぃぃ、青龍！！」

ガァァァァ！！

グバッ、ズギャン！！

ドッパァ！！

青龍が川にたたき付けられる。

青龍だけではない

他の神獣たちも大地に伏せ、倒れている。

さらには蒔風たちもほとんど満身創痍状態である。

皆、息が上がり、肩が上下している。

（なぜ・・・だ。なぜここまでに強い！？）

そこでなのはがレイジングハートを「奴」に向ける

「舜君どいて！！ディバイーーーン！！！」

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

「なのは、止せ！！」

「バスターーーー！！！」

蒔風の制止も間に合わず、なのはの砲撃が「奴」に向かって伸びる。

しかし、「奴」はディバインバスターを掴んでくるりと回転し、なのはに向かって投げ返した。

レイジングハートがとっさに防壁を張るが、弾かれてしまう。

なのはが川に落ちる。

「っ！きゃぁぁぁぁ！！」

「なのは！！あああああ！！！」

「くっ、フェイト！」

フェイトが飛び出し、それをクロノが追う。

「奴」がフェイトに向かい、拳を振るう。
それに合わせるようにクロノが「奴」にバインドをかける。
しかし

パシィ、バキッ！！

発動と同時に打ち壊され、その拳が止まることはない

「っ！？バルディッシュ！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ガィン！！
ババババ！！ドォン！

フェイトの防壁に「奴」の拳が当たり、電撃が爆ぜるが、いとも簡単に打ち壊され、爆発する

爆風に押され煙の中から飛び出してきたフェイトをクロノが押さえるが止まらず、近くに倒れていた獅子がそれをかろうじてキャッチした。

「主！！」

「ああ、わかってる！！龍虎雀武！獅子天麟！！」

彼らを刀剣に戻し、龍虎雀武を円盤状に、獅子天麟をバスターソードに組み立てる

ビィィィィィン！！

蒔風が「奴」に龍虎雀武を投げると、龍虎雀武が無数に分身し、「奴」に襲い掛かった。さらに蒔風が獅子天麟を握りしめ、「奴」に飛び掛かる。

『「奴」の力の元を探る！！援護を！！！』

『『『了解！！』』』

「奴」が無数の龍虎雀武を四肢を使い叩き落としていくしかし、一つ以外はあくまでも分身叩いては空を切るばかりで、消えていく。

そして動きつづける「奴」にフェイトがサンダースマッシャーを撃つ。

ついに「奴」が魔導八天を抜き、フェイトの攻撃にも対処し始める。

「はっはっはっはっはっはっ！！あーひゃっ！いひひひひひひひ！！！」

「奴」が高らかに笑いながらすべての攻撃を消していく。
そしてついに龍虎雀武の本体が落とされ、分身が消える。

そこに蒔風が「奴」の首を狙い獅子天麟をたたき付ける！！

「らッ、せ！！」

バッキ！！ゴゴゥ！！

しかし切り付けた部分からとてつもない光が溢れ出し、蒔風を吹き飛ばした。

（この光・・・まさか！！）

「ディバインバスター！！！」

吹き飛ばされた蒔風を「奴」が追撃しようとするのをなのはが防ぐ

蒔風が「奴」から距離をとり、睨みつけた

「お前・・・やりやがったな！！？」

「ははん。さすがにさっきので気付いたか。その通りだ」

そう言って「奴」は風呂敷を広げるように両腕を左右に開いた。

そこには九つの、輝く宝石があった

「あれは！！まさか！」

『ジュエルシード！？』

蒔風を除く皆が同時に声を上げ、驚愕する

「そんな・・・ジュエルシードはすべて時空管理局が回収したはずだ！！」

「あれはおそらく・・・プレシアと共に落ちていった九つだ!!」

蒔風が忌々しそうに叫んだ

それにみな再び驚く

「な!?」

「そんな・・・」

「母さんを・・・どうしたの!?」

フェイトが「奴」に叫んだ

グリン、と「奴」の首がフェイトの方を向き、口を開いた

「ああ?母さん?おお、あの女のことか。知らんよ、んなこと。これさえ手に入ればよかったからな」

「てめぇ・・・そのまま見捨ててきやがったのか!!!」

「見捨てるとは人聞きの悪い。あいつは死ぬ事を望んでいたんだから、いいじゃねぇか。それがあいつの望みだったんだろ?じゃあその思いを尊重してやらなきゃだろうが。うん?」

「それは・・・母さん・・・」

「「それは違う！！」」

「死ぬことで報われる罪なんかないんだ！！それはただの逃げだ！！」

クロノの言葉に蒔風が続く

「そうだな。死ぬことを望むだ？そんなのはオレは許さない。いいか？死ぬことよりもな、生きてることの方が遥かに辛く、悲しく、苦しいんだ！！だったらよ、罪を購うんなら、生きて購えってんだ！！だからオレは死なせないし殺さない。生かすことが最大の罪滅ぼしだからな！！死なせるなんて、そこまで俺は優しくない！！！」

「それを誰もが出来るとか思うな！！そんなもの・・・できるやつの台詞だ！できない弱者に、貴様はそれを強いるのか！？」

「うん」

「なぁ！？」

「やってやるさ！生きることは苦しいが、楽しいんだ！オレは世界最強だからな！それくらいやってのけるさ！！」

「たった一人を救えずなにが世界最強か。プレシアを死なせてしまったのはお前だろ？蒔風！」

「舜はそんなんじゃ・・・」

フェイトはそれを否定しようとするが

「そうだ」

蒔風が一発でそれを肯定してしまった

「舜？」

「その通りだ。プレシアを救えなかったのはオレの力不足だ。オレの弱さだ。オレの罪だ！だけどな・・・」

「どうした世界最強。吠えてみせろよ！」

「オレが申し訳なく思うのはお前にじゃない」

「・・・はん！開き直りかよ。そんな開き直りも、おまえが主人公だから、いい感じに聞こえるんだろうけどな・・・まあいい、あの女を庇っても意味ないしな。正直ウジウジしてて嫌いだったしな。落ちながらずーっと娘の死体にしがみついてんだぜ？非効率的だよな。死者が蘇るわけないのによ。見ててイライラしたよ」

「お、ま、え、はぁぁぁぁぁ！！！！」

蒔風が更に翼を力強く羽ばたかせ、「奴」に向かって飛び掛かる。

しかし、多少のやり取りですぐにたたき落とされた。
さらにその地点に「奴」の波動砲が四方から撃ち出され、魔導八天が串刺しにしていく

「舜！」「舜君！」

煙が晴れ、蒔風が姿を現す
貫通はしていないが背中には魔導八天のうちの二本が突き刺さり、右腕は関節のない場所で二、三回曲がっていた。

そんな蒔風がヨロヨロとした足取りで立ち、拳を握りしめ、地面にむかって叫んだ

「ああそうさ！プレシアの行動はバカなことだったさ！死者を蘇らせようだなんて、そんなこと出来るわけねぇだろ！！そのためにいくつもの世界を犠牲にしようとするなんざ、大馬鹿者のやることだよ！！」

蒔風が「奴」にまだ無事な左手で指差して叫んだ

「だけど、あの人の想いは本物だった。なによりも強い愛があった

！娘を想う母がいた！！我が子を理不尽な死から引っ張り出そうとした！！！その想いは本物だ！！！！！したことはいくらでもけなすといい。だか、その想いまでは否定なんかさせない。絶対だ！！！！！！」

「舜・・・」
「舜君・・・」

「あああああ！」

蒔風の翼がさらに強く、雄々しく開かれる

その翼に、みんなと自身の強き願いが！！！！

【Ｍａｈｏｕ　Ｓｙｏｕｊｏ　ｌｙｒｉｃａｌ　Ｎａｎｏｈａ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

レイジングハートがなのはの手を離れ、蒔風の元に向かう。

そして、その場の魔力を集め始める。

蒔風の翼の色と同じ、銀白の魔法光が

「集束魔法・・・スターライトブレイカーか！！！」

「それだけじゃねぇ」

ぎぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！

蒔風の翼が輝き始める

「人の願いを！！！未来の希望を！！！！この背に宿し、力とならん！！！！！」

蒔風が皆の願いを集める

その願いはたった一つ

あいつを、倒す！！！！！

「オレは翼人、銀白の翼！！！！この翼、司りし人の想いは、願い！！！！！」

その願いをのせ、魔力がたまる。

この世界で、この後にも続く物語を、切り開くために！！！！

「あああああああ！！！！」

【Ｍａｈｏｕ Ｓｙｏｕｊｏ ｌｙｒｉｃａｌ Ｎａｎｏｈａ】－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－ ～ＦＩＮＡＬ ＡＴＴＡＣＫ～

「全力全開・・・否！！限界突破だぁ！！！！」

蒔風がレイジングハートを「奴」に向け標準を合わせようとするが、しかしレイジングハートを握る蒔風の左腕が振るえる。

支えるために腹筋に力を込めると、アバラがビキビキと音を立てる

（ぐっあ・・・やっぱ左手だけじゃ無理か！？）

蒔風の右腕は使えず、左手も無事ではない

その時、蒔風の両側から、なのはとフェイトの手が伸び、レイジングハートを掴んだ。

「三人一緒に！！」

「それなら、行ける！！」

「なのは・・・フェイト・・・」

はぁ、と蒔風がため息を吐く

「反動で吹っ飛ばされても知らねえぞ！？」

「望む！！」「ところだよ！！」

二人が笑顔で蒔風に返す

「よっし・・・行くぞ！！！」

「「「せーーーーーのっっ！！！！」」」

ガゴォウ！！！！ドオオオオオオ！！！！！

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが「奴」に向かう

「ちっ！！ジュエルシードよ！！我が身を守る盾とならん！！！」

「奴」がジュエルシードを九つすべて目の前に展開し、そのエネルギーでバリアを張る。

たしかに、それだけのエネルギーなら、完全には無理でも、９０％近くの威力を殺せただろう。

しかし、ジュエルシードは「奴」の”願い”とは正反対の現象を起こした。

確かに防壁は展開された
砲撃が当たる
すると、その砲撃にジュエルシードのエネルギーすべてが吸収、結合され、「奴」に向かって襲いかかった！！！
「バカな！！！なぜ、だっブギ！！！バッガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」
「奴」が吹き飛ばされ、ジュエルシードが砕け散る
空には銀白の線が一直線に伸びていった
「いま・・・ジュエルシードが・・・」
「うん・・・私たちに、力を貸してくれた・・・」
「普通に考えればさ、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの影響だって言えるんだよね。それ」

「そうなの？」

「だが、オレはそうは思わない」

「じゃあ・・・なんで？」

「あの人が・・・未来に生きろって、言ってくれたんじゃないかな？」

「あの人、って・・・」

「まさか・・・母さん・・・」

「本当のことはわからない。ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの現象だと言ってしまえば、そうすることもできる」

「でも・・・私は、プレシアさんが力を貸してくれたと思うな」

「うん・・・ありがとう・・・母さん」

「じゃあ、オレぶっ倒れるから」

「え？」「は？」

「はい、どーーん（バタン！！！）」

「舜？舜！！酷い怪我！！」

「ユ、ユーノくーーん！！クロノくーーーん！！！」

「アルフーー！！早くこっちーーー！！！！」

そうして次の日、蒔風はアースラの医務室で目を覚ました

右腕にはギプスが巻かれており、全身いたるところに包帯が巻かれている

「舜君！！起きたの！？」

蒔風が目覚めたことに気付いたなのはが飛びつくように話しかけてくる

よく見るとユーノとリンディもいた

「なのは、オレには目を開けたまま寝るなんて芸当できないんだが」

「舜君！！よかったーーー！！！！本当によかった！！！！」

あきれる蒔風をよそに大興奮のなのは

そこにリンディが話しかけてくる

「とんでもない戦いだったみたいね？」

「まぁ、あれが普通なんで。ここが多重世界だから、あんだけの前期間があったんですよ」

「あんな戦いをいろんな世界で何回もしてるの？」

「そうだよ。でも、仲間もできるし、楽しいからいいのさ」

「でも・・・一人なんだよね？」

「そうだな。これはオレの一人旅だ」

「じゃあ、わた「却下だ」え？」

なのはの言葉を、蒔風が遮る

「おおかた、「私も付いていくよ！！」とか言うつもりだったんだろ？」

「うん・・・」

「ダメだよ。この世界をどうするつもりだ。それに、フェイトだって今裁判に向かってんでしょ？」

「そうだね。今はクロノと一緒に、ミッドチルダに向かってる」

「だろ？ちゃんとお前がいないと、ダメだろうが」

「そんな～～～」

「そんな～～～、じゃない。諦めろ」

「む～～～」

そんななのはの頭をポンポン、となでる蒔風

なのはは恥ずかしがってその手を払いながら、思い出したように言った

「あ、そうだ！！舜君の荷物から、面白そうな食べ物を見つけたんだ！！！」

世界が用意した蒔風キャンプセットには、多くの缶詰や、レトルト食品がある。

中には別世界からの贈り物や、食べ物じゃなくても珍しいものがあったりするのだ

なのはが見つけたのはそのうちのひとつだろう

「なんだ？」

「これこれ！！！」

それは真空パックになっていて、監修者の名前はわからないようにつぶされていた

「なになに？シャ○先生監修料理教室特製スープ？レトルトか？」

「そう！！「ゴルゴンスープ」だってさ！！！」

「世界も面白そうな料理用意してくれたなぁ・・・どれ、獄炎！！」

蒔風が獄炎を使って一瞬でスープを温める。

（こりゃすんごく遠い別の世界から送られてきたものだな・・・他世界の珍品ってやつか？）

「ちなみにそれ、見つけた時はかちんこちんに凍ってたよ？」

「素材の味をそのままに、って感じだな。いたたきま～～す！！（ゴクッ）」

「どう？どう？」

「なのは・・・・」

「な・・・なに？」

蒔風の首がギギギ、となのはの方に曲がった。

なにも言わなかったが、真っ赤な目をしたその眼光はこう物語っていた。

ーーー謀りおったな。この悪魔め・・・・ーーー

ドガシャ！！！

「きゃあ！！舜君？舜君！！」

「なのは！！お皿に・・・穴があいてる・・・」

「そんな！！！」

「と、とにかく治癒魔法を！！！救急班、いそいで！！！」

なのは、ユーノ、リンディがワタワタし始め、慌ただしく時間が過ぎて行った

そんなこんなで蒔風が再び倒れ、何とか回復したのは十二時間後だった。

あんなもの飲んだのに、なぜかリフレッシュしており、傷は完治ほどではなくてもあらかた回復していた。

そうしてそのまま蒔風は旅立った

高町家やすずかやアリサには、親が急に海外の方に来い、と呼んだからと説明してもらうことにした。

そうして、長い長い、この世界での役割は終わった

ーーー

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』と

to be continued

なのは　～戦いと、次なる旅立ちなの～（後書き）

やっと終わりました「なのはの世界」！！！

アリス「今回変なものでてきましたね。スープとか」

はい！！あれは現在「魔法少女リリカルなのは～真の紋章と竜の騎士～」を執筆されている、剣　流星様からいただきました、ゴルゴンスープです！！

ア「でも、あれ作った人、時系列的に・・・」

だから名前わからないようにしました

ア「たしかに・・・」

【魔法少女リリカルなのは】

構成：”ライクル”３５％
　　”フォルス”３５％
　　”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：高町なのは

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：レイジングハートによる翼人エネルギーと魔力の混合

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：集束

し、最大出力による砲撃

そういえば一つまた言い忘れていた設定が

ア「またですか」

蒔風は開翼しないと自由に飛べません

ア「なにぃ！？」

いや、ある程度の推進力？だとかはありますよ？

ＦＦ７ＡＣの時のクラウドたちみたいな

ア「ああ、あれですか。あれ、確実に飛んでるように見えるけど・・・」

飛行能力はないんですよね

そういうもんですはい

じゃ、そろそろ

ア「次回、出会う主人公」

ではまた次回

その幻想をぶち殺す！！！

とある魔術の禁書目録　～とある病室の珍客騒動～

学園都市　第七学区の病院の病室

上条当麻はここのベッドにいた
インデックスと呼ばれる少女が椅子に座り、頭をベッドに乗せ、寝ている

先程までは先の事件で世話になった少女と、天使の姿をしたとある女教皇（プリエステス）もいたのだが、今はいない。

「あー。さっきのはなんだったんだ・・・神裂もどうしちまったのか・・・これ以上なんか起こったらさすがにあのワードをぼやくぞ・・・」

しかしそんな願いもむなしく、上条当麻は“これ以上”に遭遇してしまう

声がして、光のゲートが開くと、そこから一人の男が出てきたのだ

ここは科学的に超能力を開発する街、「学園都市」
故にとんでもない現象は数え切れないほど起こっているが、いきなり現れたら驚くのは当然で・・・

「なんだぁ!?」

「ふえ?どうしたの!?とうま!!魔術師!?」

上条が大声を出し、インデックスが目覚める。
彼の口癖、「不幸だーー!!」という言葉も出なかった

出てきた男は

「やった!元の大きさ!やっぱりこっちがしっくりくるな!」

とか言っていて、上条たちが目に入ってない。

「とうま、あの人だれ?」

「オレだってしらねぇよ。魔術関係じゃないのか?」

「あんな光の門なんか知らないんだよ。少なくとも、１０万３０００冊の中にはないよ。科学(そっち)方面じゃないの?」

「いや、瞬間移動（テレポート）とも違うしなぁ。よくわからないから、はっきりとは断言できないけど。小萌先生にでも聞くか？」

上条とインデックスが小声で話し合っていると、男が二人に気付いたようで、じっと見つめてきていた。

「・・・見ました？」

「・・・大体は・・・」

「不幸だーーーー！」

「それオレの台詞！！」

「待つんだよとうま！それどころじゃないと思うんだけど！？」

ギャーギャー三人で騒いでいると、病室の扉がバン！と開かれた。

「えぇい！せっかくキチンと着替えてお礼を言い直そうとしていたのに、なんですかこの騒ぎは！！」

「にゃー。そのまま逃げるように帰るつもりだったのに、騒ぎを聞き付けるとなんの躊躇もなく突撃できるねーちんは流石だにゃー」

扉を開いてやって来たのは一組の男女だ

といっても恰好には一貫性がないが

日本刀を下げた女の方は神裂火織（かんざきかおり）
にゃーにゃー言ってる男は土御門元春（つちみかどもとはる）という人物だ

ちなみに先ほどのセリフのあと、土御門は神裂に殴り飛ばされていた

神裂が中の現状を見るに

一、まずいろいろと借りのある恩人たる少年がいて
二、『あの子』が少年を庇おうとギャーギャー騒ぎ
三、その前には見知らぬ男がワタワタとして立っていた

なにが元凶かは一目瞭然だ

「そこから離れなさい！！」

神裂が男に愛刀「七天七刀」で切り掛かる

「ぬあ！？」

ギィン！！

「なに！？」

男がどこから取り出したのか、トンファー型の剣を握り、それを受け止めていた。

「お願いします！話を！話を聞いてーー！！」

その男・・・蒔風舜が涙目で懇願してきた

ーーー

都市
ここでは超能力が科学的に解明され、生徒たちは能力開発を受けている超能力者だ。
といってもすべての生徒が超能力に目覚めているわけではない。
その強さはレベル0、1、2、3、4、5の六段階に別れている
順に無能力者、低能力者、異能力者、強能力者、大能力者、超能力者とされる
なかでも超能力者（レベル5）は学園都市には7人しかいないそうだ

さらにそれに対をなす魔術師
彼らは自らの宗教にのっとった術式を使うものだ
彼らは自ら魔力を練り上げ、それを法則に従い組み上げ魔術を使用する

魔術と科学、オカルトとサイエンスは敵対している
しかし、魔術サイドにもいろいろあるらしく、イギリス清教の必要（ネセ）悪（サリウス）の教会は、学園都市側についている

現在は科学サイドのトップ、学園都市と魔術サイドのトップ、ローマ正教が戦争を起こしているらしい。
昨日も第二十二学区で、ローマ正教の「神の右席」に所属する魔術師、「後方のアックア」が攻めてきて、これを退けたばかりだ

「しかし、世界云々はともかく、カミやんが狙われるって話は信じておくにゃー」

土御門が蒔風に自分の心境を語る

「世界とか崩壊とかそういうのは大体はわかったけど、いまひとつ納得いかんのよ。でも、とにかく「奴」って野郎がカミやんの命を狙ってるなら、防ぐだけだにゃー」

「私は上の方に連絡してきます」

神裂が病室を出ていく
携帯を使用するためだろう

「ま、もともとカミやんは狙われてるから、防衛線張るのは難しくはないんだにゃー」

「もともと狙われてる？」

「そうそう。カミやん、いろんなことに首つっこみまくっちって、ローマ正教の邪魔物になっちまってるんですにゃー」

「全く。とうまはとにかくなにかしてないと死んじゃう病気にでもかかってるんじゃないかと思うんだよ？」

「ちげぇよ！オレはいつもいつも巻き込まれてんだ！オレからなんて・・・インデックスさん？なんですかその目つき！？わたくし間違ったこと言いましたかね！？」

上条の右手、正確には右手首から先
そこには幻想殺し（イマジンブレイカー）と呼ばれる能力がある

それは世界の意志だろうが神の奇跡だろうが、それが異能の力ならば、問答無用で消し去る力だ。

上条は今までこの力ひとつで様々な敵に立ち向かってきた。

「まあ、とにかく上条の命が狙われてるんだけど・・・」

「？どうしたんだよ。何かあんのか？」

「いや、その後方のアックアってのが気になってな。そいつ、昨日戦ったんだよな？」

「そうだけど」

「めちゃくちゃ強いんだよな？何だっけ？神の・・・ローマ正教四天王だろ？つまり」

「そうだにゃー」

「いいのかよそんな説明で！！」

「じゃあ・・・はぁ～～あ、利用されるよなぁ、そりゃあ、よお！！！！」

蒔風が上条の右手を掴み、病院の窓に向かって突き出させた

するとそこに突如として飛来した黒い巨大な棍棒を触れただけで撃

ち消してしまった

「おお～～。これが幻想殺しか！！」

蒔風が感心しているが、当の上条としては心臓バクバクである

「なにすんだ！！ってか、あれはなんだ！？」

「「奴」だよ。正確には、「奴」の能力で作られたアックア・レプリカだ。とりあえずボコしておこうってわけらしいな」

病院の外

同じくらいの高さのビルの屋上に、黒い影が立っていた。

「あれは・・・アックアの・・・影！？」

「あんな魔術知らないよ！？」

「知らなくて当然だよ」

ゴキゴキと蒔風が拳を鳴らしながら病室の窓の縁に足をかける

「おい・・どこ行くつもりだ」

上条が蒔風に聞いた

「あれを止める。なに大丈夫だよ。お前はここにいろ。インデックス、上条を見張っててくれ」

「あ、うん・・・とうま!!なに立ち上がろうとしてるの!?」

インデックスが上条の方を見ると、昨日の傷も癒えてないのに、ベットから立ち上がろうとしていた

「ほっとけるわけねぇだろ!!あれもなんか知らないけど、異能の力でできてんなら、この右手で触れば一発じゃねぇか!!」

「じゃあ、オレはお前の右手掴んで飛びまわればいいのかい?」

「え゛?」

「だって、そうしないとついてこれないぜ?まあ、任せてくれよ。ほれ」

蒔風がバン、とテレビをたたくと、そこに蒔風が映りこんだ

「これでも見てなさい。オレの活躍をな!!!」

バッ!!

蒔風が飛び出す

そうして、「奴」によって再現されたアックア・レプリカに向かう

ーーー

学園都市

近未来的な表面だけでない、何かが渦巻く都市で、モニター先の蒔
風は戦いを始めた

to be continued

とある魔術の禁書目録　～とある病室の珍客騒動～（後書き）

アリス「とある魔術の禁書目録の世界に来ましたね」

はい

時期としては、作中でも言っている通り、後方のアックア戦の次の日ですね

ア「そういえばインデックスの前で土御門が普通に魔術師として話してますが・・・」

気にするな！！！

ア「わかりました」

よし、ほら、飴だよ

ア「わーい。久しぶり！！（コロコロ）」

どうだい？おいしいだろ？

ア「ウマい！！そういえばどうするんです？」

なにが？

ア「学校の試験ですよ。あなた大学生でしょう？」

・・・ソウデスネ

ア「なんかヤバげな感じですね・・・」

そうなんですよね。試験があるんですよ

いや、これが困ったもので

ア「なにがです？」

作者の執筆の八割は電車の中で携帯によって書かれてます。

ア「そんなところで・・・」

電車の中が一番集中できる

高校生時代には４０分で英単語をスペルを書けるレベルまでを５０個覚えたからな

ア「それはなかなか・・・」

だからもっぱらの試験勉強時間は電車の中。しかし・・・

ア「そうなると執筆がなかなかできなくなるから遅れてしまうかも？」

そうなんですよ！！

今までは平日の夜に一回と、最低でも土日のどちらかには必ず更新してきたのに、これでは遅れてしまう！！！

ア「なのはの時もいったん送れませんでした？」

あのときはｉＰｏｄが壊れて参考にできるものがなかったからなぁ・・・

でも今回はマジでヤヴァイから、どうしても執筆時間がとれず、更新が遅れるかもしれない。

ア「まぁ、勉強が学生の本分ですからね・・・」

だから、試験のかたまっている再来週あたりから、更新が遅れがちになるかもしれません。

ア「にしても、二週間も先のことをなんで今言うんですか？」

多分言い忘れるから

ア「納得。次回、学園都市でのバトルバトル！！！」

ではまた次回

おなかいっぱいご飯食べさせてくれたら、うれしいな

とある魔術の禁書目録　～とある「欠片」の聖人模倣～（前書き）

タイトルの「聖人模倣」は「アックア・レプリカ」と読んでください（笑）

「おおおおりゃぁ！！！！」

蒔風が病室から飛び出し、アックア・レプリカに飛びかかる
その漆黒の体躯をうならせて、巨大な棍棒（メイス）を蒔風に振るう

「はえ？おおおおぁ！？獅子天麟！！！」

バッ、ガギョ！！！

蒔風が自身を仕留めようと振り下ろされたメイスを獅子天麟で受けるが、弾き飛ばされ別のビルの屋上に着地する
そこに更に叩きつけられるメイス

追撃が止まらない

ビルからビルに飛び移り、体勢を立て直す蒔風
次第に交互に飛び交いながら打ちあっていく

（何て野郎だよアックアってのは!!一番重量のある獅子天麟がビリビリ言ってんぞ!?）

それもそのはず

「後方のアックア」はこの世界では「聖人」と呼ばれる人間である聖人とは、「神の子」と身体的特徴が似通った人間のことで、ゆえに莫大な力をもった者のことである。
さらにアックアは「神の子」だけではなく「聖母」とも身体的特徴が似ている

つまりは、「神の右席」で「聖人」で「聖母」なのが後方のアックアという人物なのだ。

レプリカとはいえ、その力に落ち度はない
「奴」の力はそんなに荒くはない

ガバァン!!ドギャ!!ゴガゴン!!!

ビルとビルとを跳ねまわりながら打ち合い、飛んでもない音を立てて移動していく二つの影

地上の人間が何事かと上を見上げる頃にはそこにあった二つの影はない

猛スピードで動いていく二人

蒔風がビルに着地と同時にまた跳躍する。

何度目になるかわからないアックア・レプリカとの衝突。

しかし、到底ぶつからないであろう位置から、アックア・レプリカはメイスを振るってきた。
すると、これから打ち合う体制に移行しようとしていた蒔風に、暴風が襲いかかった。
暴風といっても、それだけでは言いきれまい

突風、暴風、轟風、烈風
それらあらゆる風がまじりあい、風であるにもかかわらず、何かが激突したように蒔風を物理的に叩いたのだ

その衝撃を蒔風は顔面で受けてしまった否、顔面でしか受けられなかった

空中でのけ反り、体勢を崩す

そこにアックア・レプリカが二撃目を、今度は直撃コースで振るってきた。

「だあああああ！！！！っそい！！！！」

それを蒔風は仰け反ったまま一回転して獅子天麟で真っ向から受け止めてしまった。

再三の激突に両手は痺れており、さらには無理な体勢から受けてしまっては、蒔風の両手は獅子天麟を握っていることができなくなった

街のどこかに獅子天麟が落ちていく

落としてはしまったが、取りに行くこともできない。
手元に再び戻すには、いったん落ち着いてからじゃないと無理なのだ。

しかしそのおかげで、直撃は免れ、ふたたび無事に屋上に着地することができた。

蒔風は飛びあがらず、その場でアックア・レプリカに向け力を放つ

「燃え上がれぇ！！！獄炎砲、獄炎尖、獄炎掌、獄炎砲、獄炎竜、獄炎掌ぉぉぉおおおおおおお！！！！！！！」

ドウン！ドシュドバ、ゴゴウ、バガァ！！ゴォォオオオオ！！！！

蒔風がアックア・レプリカに向かって獄炎コンボをぶっ放す
しかし相手の元は後方のアックア。それだけでは潰されない。
空中でメイスを振るう反動を使って、上下左右に移動しかわしていき、時にはメイスで砕いた
だが蒔風の本命かここからだ

「獄！！！炎！！！！弾！！！！！」

ゴォ！！！

蒔風の胸前にエネルギーがたまり、それを標的に力のかぎり投げつける！！！

ビュォア・・・ドッ、ズガガガアアアアア・・・・・・・・

獄炎弾が爆発を起こす。
蒔風の能力で最高峰の一つを放ったのだ。無事であるわけがない
そんなはずはないのだ

「なのになんで・・・まだ生きてんだてめぇはよぉ!?」

グバッ!!と獄炎の膨張した巨大火球から、アックア・レプリカが飛び出てくる。

そして気付くと、いつの間にか蒔風の背後にまわっており、襟を掴んで大地に向かって投げつけた

ヒュガッ、ドドン!!!!!

蒔風が頭をフルフルと左右に振って立ち上がる

（くっそ・・・高速移動なんてオレにはできねぇぞ!?ッ!?）

ドゴン!!

アックア・レプリカが蒔風の立つ位置に踏み砕こうと飛び降りてきた

どうやらここは開発途中か、それともこれから開発する区域らしい。
周りに建物は一応あるが、誰かがいる気配はない
しかし、ちょっとでも離れれば市街地だ

「まだまだ気は抜けない・・・か・・・龍虎雀武!!解放形態!!」

蒔風が龍虎雀武を開放して組み立てる

とはいっても、朱雀槍の先端が青龍刀になっていて、柄の部分に白虎と玄武の文字化彫られただけのものだが。

「朱雀青龍刀!!四獣を宿したこの武器相手に、力技じゃあ・・・勝てないぞっ!」

ダッ!!

蒔風が駆ける

アックア・レプリカの足元から上段にかけて朱雀青龍刀を振り上げる。

それを当然のようにかわし、アックア・レプリカはメイスを横なぎに振るう

バァァアアアアアン！！！！
ズシャアアア！！！

銅鑼を鳴らしたような音が響き、蒔風が地面を滑る

「よっし！！これでいけるか？！！！」

蒔風の握る武器の形が変わっていた

先端が青龍刀であったのが、円盤状でふちが刃になっているものとなっていた。

「朱雀玄武盤。ちと音大きいし、後ろに飛ばされちまうけど、まあ何とか・・・・」

ゴゴゥ！！！
ブシッ！！

「なるかな？」

蒔風が獲物を振るうと、アックア・レプリカの脇腹辺りが裂けていた。

「変幻自在の武器、攻防。とくとご覧になるがいい！！！」

ゴダゥ！！！

メイスを横薙ぎに振るう音と、アックア・レプリカの足の裏から響く踏み込みの音が同時に聞こえた。

蒔風はそれを柄の部分で一瞬だけ受け、その地点を軸にくるりとメイスを乗り越える。

「朱雀白虎棍！！」

そして今度は槍の両端に白虎釵を取りつけた形として、アックア・レプリカの手首に突きさす

アックア・レプリカはそんなものは関係ないと腕を振るおうとする

が、しかし、その腕は動かない

アックア・レプリカに突きささっている方の白虎叙は蒔風の持つ槍の先端からはずれていた

そしてそれがまるで空中に固定されたかのように動かないのだ

「説明してもわかんないかもしれないけどな。この両端についてる白虎叙は、この状態からなら取り外すことで空中に固定できるんだよ。ま、引き抜かれちゃ終わりだが、その一瞬で十分だ！！」

ドスっ！！

もう一方の先端をアックア・レプリカに突きさす蒔風。

突き刺した白虎叙をそのまま残し、取り外す

朱雀青龍刀に変え、アックア・レプリカの腕を切り落とし、メイスを落とさせる

青龍刀を白虎叙のように突き刺し、離し、今度は朱雀玄武盤にする。

それを脳天からざっくりと切りつけてめり込ませ、蒔風が号令をかける

「よぉ～～し。暴れろてめぇら！！」

ドッ、グバァ！！！！

その突き刺した所から、体内に向かって四神が飛び出した。

体内から引き裂かれ、アックア・レプリカが無残に散る

「欠片も残さん！！！」

風林火山をブォンブォン回転させ、細かく散った欠片をも消し炭にして消滅させる。

「これで終わりだな。上条～～～。見てるん？今戻るよ～～ん」

蒔風がその場を立ち去ろうとする

しかし

蒔風のジーンズの裾が突如として現れた鉄矢によって地面に縫いつけられ、歩みが止まる

さらにそこに二人の少女が突如として現れた

小柄なツインテールの方が右腕の腕章を掴み、こう叫んだ

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！！放火能力（パイロキネシス）の乱用と、市街地での戦闘容疑で拘束します！！！」

そういった少女、白井黒子（しらいくろこ）は蒔風の前に立つ。

戦いはまだ終わらないようだ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

とある魔術の禁書目録　～とある「欠片」の聖人模倣～（後書き）

アリス「今回また新しい武器出ましたね？」

ええ

解放状態での龍虎雀武の組み合わせですね

まあ、朱雀槍の先端が変わっていくだけですけど

各組み合わせはこのように

青龍→先端が青龍刀になる。薙刀？青龍偃月刀？みたいな

玄武→先端が円盤のふちに刃がついた物になる、防御に優れる

白虎→両端に白虎釵がつく。振っている途中でも切り離し、空中に固定することのできるトリッキーなもの

ですね

ア「まためんどくさい」

すんません

ア「最後に白井さんが出てましたね」

そっすねーーー

まああんだけ暴れればそりゃ来るでしょう

ア「忘れたことはないですか？」

ないと・・・思う

ア「不安ですがまあいいでしょう。次回、ＶＳ常盤台コンビ！！」

この世界戦ってばっかかも・・・

ではまた次回

いい加減に始めようぜ、魔術師！！！

とある魔術の禁書目録　～とある二人の誤答考察～（前書き）

「誤答考察」は「お門違い」とお読みください（笑）

「風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部　白井黒子ですの。あなたの身柄を拘束しますわ！！」

風紀委員（ジャッジメント）
志願学生による学園都市の治安機構の一つだ
あれだけ暴れれば確かにそういったものに引っ掛かるだろう

（この鉄矢・・・どっから来た？・・・ま、とにかく）

蒔風が屈伸して、ジャンプする
ジーンズの裾がビリビリと裂けたが特に気にせずビルの屋上に向かって跳んだ。

「ま、めんどいし、このまま」

蒔風が逃走しようとする
しかしその前に声が聞こえた

「このまま、どうするおつもりですの？」

「な！？」

着地しようとした地点
そこにはすでに黒子と名乗った少女が立っていた。

（こいつも高速移動か！？気配なかったぞ！？）

蒔風が思考に身を固めると瞬間、黒子の姿が蒔風の目の前の宙に突如として現れた。

「なぁ！？ブェ！」

黒子が蒔風の顔面にドロップキックをかます

ビルのフェンスにぶつかるが、老化していたのか蒔風は寄り掛かる事もできず、再び下に落ちる。

着地し、鼻の辺りをさすりながら蒔風が周囲を警戒する

（なるほどね・・・瞬間移動（テレポーター）者か！！）

そこで黒子も下にテレポートしてきた

「さあ、観念してもらいますわよ。大人しく御縄につきなさい！」

（テレポーターってことは力のほとんどは視力に頼っているはず・・・だったら・・・）

「・・・どうやら、大人しくしているつもりはないようですわね。でしたら！！」

黒子がスカートで隠れてる、太ももに巻き付けられたベルトにある新たな鉄矢に手を伸ばす

しかし、蒔風が一瞬早く動いた。

「乱立！畳返し！！」

蒔風が地面を両手で叩き弾く。

ドガガガガガガ！！！

すると蒔風と黒子、あとこの光景を見ているだけのもう一人の少女がいる広範囲に、バラバラに地面が起き上がる

突如として地面の板が何枚も起き上がり、視界を遮られた黒子は、

別の事に気を取られていた。

（たしか報告であった映像では彼の能力はパイロキネシスでは！？どういうことですの！？）

そんなことを考えているうちに、乱立畳返しのうちの一枚が黒子に飛んできた。

蒔風が蹴り飛ばしたのだが、向こう側の見えない黒子はそんなことには気付けない。

むしろ「物を飛ばす」という能力も持っているのでは、と勘繰ってしまう。

（いいえ・・・多重能力者（デュアルスキル）なんてありえませんわ！！そんなの、あの方一人いらっしゃれば十分ですの！きっとなにかあるはずですの・・・なにか・・・！！）

そこにさらに蒔風が畳返しを蹴り飛ばしてきた。

それを飛んできた物の後ろに回り込んで回避する黒子。

そして襟元を捕まれた。

蒔風は蹴り飛ばした畳返しの裏についていくかたちでジャンプしていたのだ。

完全に意表を突かれた黒子は混乱にとっさのテレポートもできず、地面に叩きつけられそうになる

しかし

そこに電撃の槍が飛来し、蒔風を襲った。
蒔風が吹き飛ばされ、土煙が上がる

黒子は叩きつけられはしなかったが、投げ出されはし、苦しそうに咳込みながら喉を押さえた。

「そろそろあたしも手を出させてもらうわよ。いいわね？」

「お、お姉様・・・」

「後輩の尻拭いくらいはしてやるわよ」

「お姉様・・・」

「だからあんたは大人しく・・・い〝っ！？」

もう一人の少女、御坂美琴が黒子の方を見ると、目を異常にキラキラと輝かせていた。

「あぁ！お姉様！！黒子の、この黒子の敵討ちの為にお姉様が立ち上がって！！！黒子はもう昇天してしまいそうですわ！！」

そんなこといって黒子は身を悶えている
しかし、体力が尽きたのか本当に昇天してしまったのかはわからないが、黒子はパタリと気絶してしまった

御坂はそんな黒子を放っておき、蒔風が吹き飛んだ方を睨む

煙の向こうから蒔風がひょっこり出てきた。

「なるほど。学園都市超能力者・レベル５の第三位、超電磁砲（レールガン）の御坂美琴か。どうしてなかなか・・・・電撃使い（エアクトロマスター）の頂点と言うだけあるな」

「私のこと知ってんのね・・・ま、そりゃそうか・・・あんた！私の後輩が世話になったわね！今度は私の相手をしてもらうわよ！！」

「はん・・・超電磁砲だかレベル５だかなんだか知らねぇが、それはお前の勝因にはなりえない！」

ババン！

御坂が蒔風に電撃を投げつける。

それを蒔風は「風」で巻き上げ、地面に向けて奮った。
方向を変えられた電撃は地面を少しえぐった

「へぇ・・・この程度は効かないか・・・でも、あんたの力、少しわかったかも」

「ほっほっ！オレさんの能力がわかった？じゃあ、答えてみてくれ。正確かどうか採点してやろう」

「あんたの能力はずばり・・・原子操作！」

「炎は火の原子を空気中の酸素を操って、畳返しも原子を構築し直して作り出しただけってか？」

「でも、そんな能力、あたしの電撃で「ぷ、あっはっはっはっはっは！！！！」・・・なにが可笑しいのよ」

「いや、可笑しいてっの。ははは。オレの力は、そんなもんじゃないよ。圧水砲！！！」

ドッパァ！！！

蒔風が水の砲撃を美琴に撃ち出す蒔風

「！？チッ！！」

バツッ!!ボッシュァ!!!

それを即座に吹き飛ばす美琴。

「どぉーだい?これでもまだ、原子だとか言ってられんのかい!?」

さらに雷旺弾を撃つ。

これは美琴に吸収されてしまう

「ま、そうなるわな。でもこうして見ると、見たくなるよな。電気対決!!!」

蒔風が美琴に向かって右腕を伸ばす。

「力を借りる!!(パァン!)バルディッシュ!!セットアップ!!」

《ｙｅｓ，ｓｉｒ．ｓｅｔ　ｕｐ》

蒔風の服が黒く染まり、腰に赤いベルトがつく

「あーー、よかった。色が変わるだけか。ま、さすがに男のオレがあの恰好はいけないもんな」

「な、な、な、な・・・・」

「どうした、やらないのかい？」

「なんじゃそりゃーーーーー！！！」

ドバァ！！！

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ》

ドウッ、ババババババババ！！！

バァ！！！

互いの攻撃がぶつかり合い、弾けて消える

「っと、さすがに電気量じゃあっちのほうか上か・・・」

「なんなのよあんた！！」

「気にすんなよ。ただの・・・そう、ただの世界最強だ」

「世界・・・最強？」

「そそ。んじゃ、そろそろ帰りたいんで、一気に終わらせますわね」

バシィ！！

美琴の両手両足をバインドが固定する。

《Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ》

「ファランクス・シフトォ！！！！」

ドドドドドドドド！！！！！

いくつもの砲撃が美琴を襲う。

が、しかし

この程度で沈む第三位ではない

ピィン・・・ドジュァ！！！！！

一筋の光線が蒔風のわきを通り過ぎて行った。

「はい？」

「あんたがどうやって手首足首縛り付けたかは知らないけどね・・・
こちとら指先一本でも動けば十分なのよ！！！」

煙の中から美琴が腕を突き出してきている。
その指先にはコインが一枚

ドシュ！！！ゴゴオッ！！！

今度は外さない、と的確に蒔風を狙ってくる。

蒔風がそれをバルディッシュで弾くが

ベキイッ！！！

「ンなにぃーーー！？」

バルディッシュがあろうことかひん曲がって折れてしまった。

「バカですかあんた?あたしのこれ真っ向から受けたらそうなるわよ。あいつ以外だけど・・・・」

「くそ・・・まだ一分しか使ってないのに退場かよ・・・使えなくなったわけじゃないけどさ・・・・」

「さ～～あ、観念しなさい。あんたもこれ以上怪我したくないでしょう?」

「・・・怪我・・・怪我、ねぇ?」

バチバチバチ

「!?」

「どうやら精密操作と総電気量はそっちの方が上見たいだが・・・」

ババババババババ!!!!!

「チッ!!!後悔しても知らないからね!!!!」

「オレの方が攻撃力は高い。持久戦に持ち込むべきだったな」

ピィン・・・・

美琴がコインを指で弾く
コインが宙を舞い、美琴は腕を蒔風に向け、標準を合わせる
そしてコインが腕の前まで落ちてきたらレールガンを放つ・・・・・

それよりも早く、蒔風の雷旺砲が襲いかからなければ、だが

ドゴゴゴンゴンゴンゴン！！！！！！！

大地を抉り、ただそこには「破壊」の跡があった

「どうだい？オレの雷旺砲。ま、これでもまだ本気ではないんだけど」

チーーーン、と

コインが静かに落ち、地面に当たった

美琴は立ち尽くしている

雷旺砲は美琴を直撃せず、脇を通過しただけだった

「これで充分だろ?オレは帰る。お友達も、ちょっと揺さぶっただけだから、怪我してないし、あと二、三分で目ぇ覚ますよ。じゃね」

「待ちな・・・さいよ」

「ん?」

「ふざけないでよ!!学園都市第三位の私を相手にして去っていくなら!!!!」

バチバチバチバチ!!!!

「いっ!?ヤベッ!!」

「あたしをしっかり倒してから行きなさい!!!!!」

ドシュっ!!!!!

美琴がレールガンを放つ

音速の三倍で放たれたゲームセンターのコインは一筋の光となって
蒔風に迫る

しかし

それは蒔風には当たらず途中で軌道を変えて空に伸びていった。

「・・・・な・・・・んで」

美琴が蒔風をにらみつける

蒔風は「火」を美琴の腕に向け、真っ直ぐに伸ばしていた

レールガンが飛来した瞬間

蒔風は飛んできたコイン・・・弾丸に向け「火」を構えた

そしてその切っ先にそっ、と当て、軌道をそらしたのだ

一瞬で飛来する弾丸に即座に反応し、寸分の狂いもなく切っ先にあて軌道をそらす

説明されずとも、美琴はわかっていた。
わかっていたが信じられなかった。
信じたくなかった

「あいつ」に効かないのはわけわかんない力が作用してるのはわかる
それは「わけわかんないモノ」だからまだ納得がいく（気がする）
自分より高位の能力者に効かないのはその特性や性能故にだ

しかしこの男は
自らの技量のみでレールガンを攻略した

もし蒔風が何らかの力で無理やりはじいたり、かき消していたらこうは思わなかっただろう。

だがそうではなく、たった一本の日本刀と、たった一本の腕だけでなんの能力も使わずに攻略されたのだ

勝てない、と美琴に思わせるには十分だった。

そして蒔風は今度こそビルに飛びあがり、姿を消す

美琴は目を覚ました後輩の怪我でも見ようとしたが、かすり傷一つ負ってなかった。
若干電撃で手足がしびれるくらいだ

（あいつ・・・何者なのよ・・・）

それを彼女が知るのはまだ先のことである

――――――

一発の銃弾が飛んできた

蒔風はそれを難なく弾くが、このまま帰るわけにもいかない。

蒔風は鉄骨を組まれた建設中の工事現場に降り立った

「ンだァ？仕事で渋々来てみりゃあよ、こンな弱っちそうな奴が侵入者だァ？」

そこに足を踏み入れる一人の少年
その髪は白く、服は黒を基調としていた

「ッたく。なーンで、オレがいちいちよォ。こンな配役なーンでーすかーー？？」

「お前は？」

「はン！！お前オレを知らねェの？いいねェ。面白おかしくなってきたかもなァ！？」

学園都市最強のレベル5、一方通行（アクセラレータ）がそこに立っていた

ーーー

to be continued

とある魔術の禁書目録　～とある二人の誤答考察～（後書き）

アリス「次から次へとなんなんですか！？」

言ったしょ？

この世界じゃ戦ってばかりなのさ！！！

ア「うそでしょ？」

はい

でもこう考えるのが普通なんですよね

アックア・レプリカと戦う

←

風紀委員＋超電磁砲登場

←

上層部からの依頼で一方通行登場

ってさ

ア「まぁ、ソウデスネ」

なんだその声は

ア「気にしないで」

あ、後それと一つ

一方通行（アクセラレータ）、っていちいち打つとパソコンの人はともかく、携帯で呼んでる人は見にくいと思うのよね

ア「パソならルビになりますけど、携帯じゃぜんぶ括弧ですからね」

だからこれからはルビも括弧も抜きで「一方通行」て統一します

ア「まあ、その方がいいでしょうね」

じゃあそろそろ

ア「次回、ＶＳ最強のレベル５．蒔風の戦法は！？」

ではまた次回

たとえ俺達がどれだけのクズでも、どンな理由を並べても、それでもこのガキが殺されて良い事なンかならねェだろォがよ！！

学園都市最強と世界最強の翼人が睨み合う。

「なンだァ、てめェ。やられたッてのになンも言わねェの？あれですか、お前はマゾですかァ？よォ！！」

ゴガン！

一方通行が近くの鉄骨を適当に殴る。

すると殴った方向ではないにも関わらず、蒔風に向かって鉄骨が飛んできた。

学園都市最強のレベル５、一方通行の能力は彼の名と同じく「一方通行」

それはありとあらゆる力のベクトルを変更することだ。

故に殴った方向とは違う方に鉄骨が飛んだのだ。

しかし蒔風にはそこまでの情報は流れては来なかった。

（学園都市最強の能力者「一方通行（アクセラレータ）」、本名が来ないってことは普通にそう呼ばれてたからか。どうせなら能力まで教えろよ！！）

蒔風が飛来する鉄骨を獄炎で吹き飛ばし、土惺砲を一方通行に撃つ。
太い土の柱が一方通行に迫るが、それは一方通行に触れる直前で吹き飛んだ。
（なンだこいつ？複数の能力使ッてンのか？・・・ま、関係ねェか。オレの能力の前じゃ無意味だからな）
蒔風は土惺砲を弾かれた反動でのけ反るが、即座に今度は圧水弾を小さくいくつも投げつけた。
が、それも一方通行の力で反射される。
投げつけられた圧水弾はまっすぐ蒔風の方に帰ってくる。
「反射！？くっ！！」
ババババン！
蒔風がかわし、圧水弾がさっきまで立っていた位置の地面を軽く吹き飛ばした。

「反射かァ。少し違うんだよなァ」

「??」

「確かにデフォは「反射」に設定してるけどよォ、そンなものは能力の一部でしかねェンだわ」

「どういうことだ?」

「知りたきャもッと面白おかしく愉快に踊れェ!!」

ドバッ!!!

地面が吹き飛び蒔風に向かって飛んでくる

衝撃に身を固めるが、蒔風は回収していた獅子天麟を構え、突進する

(反射してんのは事実なんだから、反射しきれないくらいの力で押し切れば!!!)

ゴギャ!!!

蒔風が一方通行に突っ込む

しかし、数秒押し合っただけで弾き飛ばされてしまった

「なンだ？押し切ろォとしたのか？全然駄目だな。まァ、ちッとだけでも持ちこたえたのはよかッたかもなァ」

そして一方通行は面白そうに叫んだ

「もしかしてお前、「相手の反射の許容量以上の攻撃で～～」とか思ってンじゃねェだろォなァ！！！」

「っち！！」

「オレの能力はなァ、そんな漫画（オママゴト）やゲームとは違ェンだよ！！！」

そして初めて一方通行が本格的に動き出した

「オレの能力は「ベクトル変換」！！！てめェがどンな攻撃しようと、オレには届かないンだよ！！」

ゴウッ！！ゴウッ！！ゴウッ！！ゴウッ！！

一方通行が両手を振り回して蒔風を追い詰めていく

触れただけであらゆるベクトルの向きを変えるその腕は、今や凶器だ

もし当たれば瞬時に血流や神経内の電気信号を滅茶無茶にされ、殺されてしまうだろう

（ベクトル変換？デフォが反射？・・・そりゃいいや、まさに学園都市最強だな。だがいいのかい？そんなに自慢げに語っちまってよ）

迫る一方通行の眼前に畳返しをし、視界をふさぐ

一方通行の前にそんなものは無意味だが、その間に蒔風との距離は離れた。

「それだけじゃあ、お前の勝因にはならないぜ？」

スッ、と蒔風が屈み、地面に手を当てる。

「ああ？愉快なこと言ッてくれンじゃねェか！！！」

一方通行が蒔風に向かって駆けだす

そして

その足元

本当にまっすぐ足の裏の地面から炎が噴き出した

「ンがァ！？」

当然

一方通行に炎などは効かない
一切の熱をカットすればいいのだから

しかし、彼の足の裏は焼けていた

「なン・・・だとォ！？」

「考えてみりゃ簡単なこった。デフォが反射ならなんでお前さんは歩く度に浮かないんだ？」

そう

もし一方通行が全身に反射を効かせているならば、歩く度にその衝撃で浮きあがるはずだ。

足の裏だけ別方向にして浮かないようにしていると言う仮説もあったが、蒔風はこれを却下した
なぜなら、そんな歩き方をすれば変なところの足の筋肉が発達しているはずだし、目の前の人物がそんなことといちいちするような人間にも見えなかったからだ

ならば話は簡単

足の裏の一点のみ、一方通行は能力を切っているだけのこと
といっても、本当に片足ずつに一点のみだ。
蒔風はその一点を一方通行の歩き方一つ一つで見極めていた。

一方通行は足の裏の痛みに動けずにいた

「で、これだ。獄炎弾！！！」

ゴッ！！ズア！！

蒔風が灼熱の球を投げつける
一方通行に当たる寸前で、獄炎弾が膨れ上がり一方通行を飲み込んだ

（なンだァ？この程度じゃァオレは・・・まさか・・・クソッタレ！！そういうことか！！！）

一方通行は獄炎の中でも平気だった。
一切の攻撃は彼を傷つけることはできない
しかし、確実に彼は焦っていた

「どうだい？はたしてその中に・・・呼吸するだけの酸素は残されているかな？」

獄炎弾の持久時間は実を言うと混闇陣に次いで長い
その中に閉じ込め、酸素を燃焼し、呼吸を奪う

これが蒔風の最後の手段だった

中では一方通行がそこから抜け出そうとしていた

足の裏はやけどで歩けないので、重力を「反射」して宙に浮いて移動する
しかし、「反射」しているということは獄炎弾の中にはぽっかりと穴があいている

それが動けば蒔風にも感知される
蒔風はその空洞が真ん中に来るように獄炎弾を細かく動かしていた

ついには呼吸ができなくなり、脳に酸素がいかなくなる

一方通行は演算を組むことができなくなっていっていた

（クソ・・ッタレ・・・・なン・・・だ・・・こいつ・・・・）

蒔風が獄炎弾を消す

そこには倒れた第一位がいた

「確かにお前は強かった。普通に出会って戦うなら、オレだってここまでやりゃしなかったさ。素直に逃げるか、降参してた」

蒔風は荒い息を整えようと深呼吸してから、言葉を続ける

「でも、オレは世界を守ってきてんだ。はいそうですかと簡単に負けるわけにはいかないんだよ。オレは世界最強。意地でも勝たせてもらったぞ」

そうして蒔風が今度こそ
上条の病室に帰っていった

・・・・・・ホントだよ!!!

誰にも絡まれなかったよ!!

――――――

ーーーーーーーーーー

「ただいま～～」

「おう・・ってお前どうしたんだよ！映像切れてから丸々十分は経ってるぞ！？」

「あーー、風紀委員（ジャッジメント）とかが存外しぶとくてな」

「そういえばビリビリとも戦ってたな・・・」

「ん？彼女知ってんのかい？」

「まあな・・・」

「で、オレがこの世界とは違う力の持ち主ってのはわかったかい？」

「まあな。一人につき能力は一つだからな。それはわかった。インデックスは？」

「うん・・・いかなる魔術にも該当しない・・・しゅんの力はこの世界のものではないと思うよ？」

「ありがとさん・・・あれ？土御門は？」

「ああ。なんか仕事が入ったとか言って出ていっちまった」

「ふ～～ん」

「そういえばお前怪我大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。たいしたことない。ただ滅っっっっ茶苦茶に疲れたな・・・おまさんは今日はこのまま病室？」

「当たり前なんだよ！！とうまはボロボロなのに私を置いて飛び出して行ってあろうことかあの後方のアックアにケンカ売りに行ったんだよ！？絶対安静なんだから！！！」

「・・だそうです」

「じゃあ・・・どうしようか・・・インデックスさんはどうするんで？」

「え？」

「このままここにいても飯は出ないだろうし・・学生寮に住んでるんだっけ？同居人がインデックスだけじゃ帰ってもやっぱりなにも喰えないぞ？」

「・・・・とうま？」

「いやに頭の中であなたがこれから何を言うのかわたくし容易に想像できるのですが、とりあえず言ってみなさい」

「・・・家にご飯は？」

「・・・ない」

「と～～～ま～～～～～～！！！！！」

「うひゃあインデックスさん!?オレは絶対安静なのではーーー!?」

インデックスが大きな口を開け、上条に迫る

それを唖然と眺める蒔風だが、思いついたように言った

「あーーー。じゃあオレが飯用意しようか?」

「!!!

しゅんだよ！！！」

「うわｗｗｗひでえ。いつもこうなん？」

「いや。お前がいてくれなきゃオレが噛みつかれてた」

「あーー。それはなんというか・・・ふこ「言うな」ごめん」

「ほら！！とうまは絶対安静なんだから、私たちはご飯のために帰るんだよ！！」

ダダダダダダダ・・・・

インデックスが部屋を飛び出す

「いま本音出てたぞ」

「気にしないでやってくれ・・・じゃ、これ寮の鍵」

「ああ・・・というかよくいきなり知り合った人間を部屋に入れられるな」

「うーーーん。大丈夫なんだろ？」

「まあな」

「ならいいじゃん・・・ッて感じだな」

「そんなもんか。上条さんパネェっすね」

「はは・・ほら、行かねえと、あの極悪シスターがオレに噛みつく前に行ってくれ」

「ああ。これは置いていく」

そう言って蒔風は獅子天麟の三本を壁に立てかけていく

「ありがとな」

「お互い様だ。じゃな」

そうして蒔風は外で待つインデックスを追って、上条の寮の部屋まで行った

そしてそこで料理をふるまい、インデックスがベッドで眠りにつくと、蒔風も適当なところで眠りについた

――

アレイスター・クロウリーは考える

あの男は我々の手に余る

が、幻想殺しに迫る脅威を追い払ってくれるならこちらとしても僥倖

ならばこれ以上手は出さず、静観するのが一番か

依然『プラン』に変動なし

侵入者「蒔風舜」の行動に一切の介入を禁ずる

to be continued

とある魔術の禁書目録　～とある最強の戦闘記録～（後書き）

やーーっと戦いが終わりました

アリス「これはらは日常パートですね！？」

・・・・・

ア「おい答えろ」

・・・・どうしよっか？

ア「まさかまた・・・」

次回！！どうなるのかな！？

ア「私の台詞うううう！！！！」

ではまた次回

祈りは届く。人はそれで救われる。私みたいな修道女は、そうやって教えを広めたんだから！

とある魔術の禁書目録　～とある翼人の世界接続～（前書き）

「世界接続」まんまですね（笑）

次の日

蒔風とインデックスが上条の病室に向かうと上条はいなかった
どうやらどこかに散歩にいったようだ。

なので病院内の庭園に足を運び、そこで上条を発見する

「上条ーーー。調子はどうだ？」

「おう。まあ、歩き回るには支障ないってよ」

「とうまはベッドで寝てないとダメなんだよ！！」

蒔風とインデックスが上条に近づいていく。
あと六メートルくらいといった所か。

そこで黒い影が通り過ぎたと思ったら、上条が消えていた。

「はい？」

蒔風が空を見上げると、見覚えのある鳥の姿があった

「迦桜羅！！チクショウが・・・よくもまあオレの目の前で！ってか、急展開すぎだ！！」

「しゅん！？あれは何！？」

「あれは「迦桜羅」ってな、「奴」の使役獣だ！！」

「とうまが！殺されちゃう！！」

「させねぇよ！！追うぞ！」

ブアッ！ドスン！

ヴァヴァヴァヴァ・・・・・

蒔風がバイトを出現させ、インデックスにヘルメットを投げる。

「急ぐぞ・・・あの野郎、誘ってやがんな・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――――

どこかの廃工場

迦桜羅は上条をそこにほっぽって消えてしまった

「何なんだ、何なんですか、何が何なんだコンチクショー！！」

「どうも、幻想殺し」

「はい？」

そこに「奴」が現れた。

上条当麻を殺すために

「てめぇが蒔風の言っていた・・・」

「そうだよん。ま、観念して下さい」

「お前、何のためにこんなことしてんだ？」

「ん？世界を取り込んで～、それから新しい世界を作るんだ～。脇役とか、主人公とか、そんなの全く存在しない世界をね」

「そのために消えていく世界があってもか？」

「どーせ再構築した世界で蘇らせてやるさ。ほら、みんな主役ならみんな楽しい。試練が欲しいなら与えられる。立ち向かう悲劇が欲しいならくれてやる。それらを打ち破る力だって、な」

「その為に「今」を潰すのか？」

「そそ。だから殺されろ。大丈夫さ。お前も元に戻してやるからさ。不幸ってのも何とかなるかもよ？そのままでいいなら、そのままにもできるし」

「だから・・・死ねって言うのか？他の奴のために？ははは、残念ながらこの上条さんは、誰かのためにホイホイ命を投げ出すようなお人好しじゃないんでね。断らせてもらうぜ？」

それ以外にも

上条当麻が断る理由はあった

死にたくない、この世界がいいんだ、など多くあったが、一番大きな理由はたった一つ

上条当麻はもう死なない。

あの少女の顔が悲しみに染まるなら、自分は絶対に死んでやれない

上条当麻はもうすでに一度「死んで」いる。

あの少女を助けた時に、彼は一度「死んだ」のだ

もう死んでやることはできない

これ以上、あの子を偽ることなんか・・・できるはずもない

「都合のいいように試練を与え、都合のいいように力を与え、都合のいいように乗り越えさせるだと？ふっざけんじゃねぇ！！今まで俺たちが乗り越えてきた苦労を無駄にさせんじゃねぇよ！！！みんながこの理不尽な世界のながで、必死になって抗って、それで乗り越えてきた今なんだ！！！その時の必死をそんなことで無駄にさせてたまるかよ！！俺たちの歩いてきた道を、無意味なもんにするんじゃねぇ！！！もしてめぇが世界をどうにかして新しく都合のいい感じに作り直すってんなら・・・そのためにオレの知り合いを泣かせるってんなら！！！」

上条当麻は右手を握り、世界最強と対をなす男に向かって、なんら臆することなく宣言した。

「いいぜ・・・お前のその腐った幻想をぶち壊す！！！」

上条と「奴」が睨み合う。

その眼には確かな敵意

まず「奴」が動いた。

「奴」が波動砲を撃つ。

それを上条が右手で払う。

波動砲は撃ち消され、黒い霧がブワッ、と広がり、すぐに消えた

「異世界のものとはいえ、やはり効くのか幻想殺し（イマジンブレイカー）！！」

ドウッドウッ

立て続けに何発も撃ってくるのを、撃ち消しきれないと判断し、走り回ってそれをかわす上条。

（あいつの使ってるのだって蒔風と同じ異能の力なら、この右手で消せるはずだ！！！）

しかし、消せるだけでは倒せない。

いや、ここで勝とうとは上条は思っていない。

ただ、蒔風が来るまでに一発でも殴ってやりたかった

「奴」は波動では埒が明かないと判断したのか、その手に魔導八天を出そうとする。

が、そこに上条が突っ込んだ

そして「奴」の手元に向けてその右手を伸ばす

すると、途中まで出現しかかっていた魔導八天が消える

上条は迦桜羅に連れ去られたときに、それに触れていた

しかし迦桜羅は消えなかった

つまり、迦桜羅を召喚する力は消せるが、迦桜羅自体は消せないということだ

だから、上条は「奴」が何かを出すときにその手に触れると決めていた

「ぬ！？」

「お、らぁ！！！」

ブァ！！！

上条の拳がうなる

しかし、「奴」は腕の部分に手刀を当て、弾く。

そして上条の腹部に蹴りをいれ、その体をやすやすと吹き飛ばした。

「げがあああああああああああ！！！！」

「オレの強さは能力だけじゃない。普通に戦っても強いんだよ。お前じゃオレに勝てないぜ？」

「お、おお、おおおおおおおおおおお！！！！」

「ダメだよ上条さん・・・そんなことされたら・・・そんなに必死になっちゃ・・・」

上条が「奴」に駆ける

そんな姿を見て、「奴」がうれしそうな顔をする

「叩きたくなっちゃうだろぉ？」

ゴッドン！！！！

「奴」が大地を踏みつけ、揺らす

あまりの振動に、上条の体が浮き上がった

「うわあああああああ！？」

「上条さん、いらっさーい！！」

「奴」が上条に手を伸ばす。
その手に向かって、上条は空中から蹴りを繰り出すが、簡単に掴まれ、また放り投げられる

そして何度も、何度も、向かっては投げ返される

「ぐっ、ごあああああああああああ！！！！！」

もう何度目だろうか
アックア戦でもうすでにボロボロだった上条の体は、ここ二日で回復した分がこの戦闘で吹き飛んでしまった。

それでも上条当麻は立ち上がる

（何か引っかかるんだ・・・「奴」はオレの攻撃を全部真っ向から掴み投げてくる・・・なんだ？なにが・・・引っかかってる？）

「そちらから来ないならこちらから行くぞ！！！攻めてこないならてめえは死ね！！！」

「奴」が右腕を振りかぶり、上条に向かって突っ込んでくる

（右腕・・・右？・・・そうか・・やっぱり効き目はあるってことかよ！！）

「奴」が止めとばかりにダンッ、と大地を踏み締め、上条の顔面を粉砕しようとその拳が唸る。

が、上条当麻は知っている。
止めで繰り出す技を放ったときの人間の隙は、絶対にあると！！

上条の体がぐらりと倒れ

「どんなことがあったって、どんなに良い結果があったって」

「奴」の右ストレートを懐に入り込みかわす。
ブワァ！と耳の脇を拳が過ぎる。

「そのために誰かが泣いちゃ、意味ねぇだろ！！！」

ゴッキィ！！

上条が「奴」をカウンターで殴り飛ばす

「奴」が後ろに後退し、顔を手で抑える。

「きっさま・・・貴様ァ！」

「奴」の顔の、上条が殴った箇所の影が消える。

目の下からあご辺りの頬、それと口と鼻の半分があらわになる。

「そういや、お前は自分の世界をエネルギーにして取り込んでんだったな。世界ってのは消せなくても、お前との接続は消せるみたいだな！！」

だから「奴」は上条の右手には触れようとしなかった。
もしかしたら自分が取り込んだ世界が消えてしまうかもしれないからだ。

実際には殴られた箇所の力が失せるだけで、力が消滅するわけではない。
幻想殺し（イマジンブレイカー）は能力を打ち消しても、能力を一生涯使えなくさせるものではない。

「ぶっ殺す！ヒーロー面しやがるクソ野郎が！遊びは終わりだ。右手ぶった切ってグチャグチャにしてやる！！」

「奴」が怒りに狂い獣のように叫ぶ。

対する上条は満身創痍
もう走るだけの体力もない

だと言うのに、彼の顔は勝ち誇っていた

「ああそうだな。世界の捕食者。お前の願い(げんそう)は終わりだよ」

ドゴァン！！！！

上条の後ろの壁が吹き飛び、そこから影が飛び出してくる

アギトに変身し、バイクをサーフボードのように変形させたマシントルネイダースライダーモードに立ち、蒔風がインデックスと共に突っ込んできた。

「とうまーーーーー！！」

「インデックス！！」

インデックスが上条に向かって飛び降りる。

蒔風はマシントルネイダーから「奴」に向かって飛び、変身をといてから新たにカードデッキを出す。

「変身！！」

パァン！！フォン

《Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ》

ナイトに変身した蒔風が「奴」にファイナルベント「飛翔斬」を当てるが、「奴」は魔導八天でそれを弾き飛ばした。

魔導八天に弾かれた蒔風が空中で体を伸ばして縦に回転しながら、上条の方を向く。

「上条！いくぞ！！」

「おう！！」

【ｔｏａｒｕ　ｍａｊｕｔｕ　ｎｏ　ＩＮＤＥＸ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

ゴゴゥ！！

着地と同時に、蒔風の背にいつもの銀白の翼とは違う、別の翼が何本も生える。
翼といってもそれは白く輝く無数の鞭のようなものだ
それはまるで刃のように鋭い翼で、ビュンビュンと吹き荒れている。

それらが一斉に「奴」に向かって伸びていく。

一本一本に異常なほどの力を持つそれは「奴」の魔導八天すべてをもってしても捌き切れるものではない！！

「ぐっが、グギィアアアアアアア！！！」

「奴」の叫びがこだまする。
インデックスはその力を目の当たりにして、唖然としていた。

「この力の源の女の子から、願いが届いたぜ」

「え？」

「『頑張って！私もいるから！！』だってさ！！」

「ひょ、ひょうか！？」「風斬ィ！？」

それは友達の願い

なにがあっても助けたいと願う力！！！

「さあさあ、友達を想う、その願い！！我が真なる翼にすべてをのせて！！！」

【ｔｏａｒｕ　ｍａｊｕｔｕ　ｎｏ　ＩＮＤＥＸ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

無数の翼が消え、蒔風の銀白の翼が開翼される

インデックスがうっすらと光り出し、全身から無数の文章が浮かび出ては消えていく

「わっわっ！？な、なに！？」

「とうっ！！！」

インデックスがうろたえ、蒔風が宙に浮く。

五メートルほど浮いたところで、インデックスの背後から無数の本が飛び出した。

それが蒔風の周囲にページを開いた状態で展開される。

その冊数は実に「１０万３０００冊」

つまり

「これ・・・全部魔導書の原典!?」

「な!?あれ?でもオレ見ても大丈夫だぞ?」

「当然さぁ!!これはお前たちと、友達の願いたる、ＷＯＲＬＤＬＩＮＫなんだからな!!!」

それらの本が一斉に輝く。

その輝きは強く、温かなものだった

「待って!!そんなもの放ったら学園都市ごと吹き飛んじゃう!!」

インデックスがその威力を知るが故に、警告する

蒔風はそれに自信満々に答えた

「だったら、願え!!これらをもってお前らが、何を吹き飛ばしたいのかを!!!」

その言葉に、上条とインデックスが「奴」を睨みつける。

「なら大丈夫だ。お前たちの世界は、お前らの願いは！！！このオレが守る！！！」

ゴオオオオオオオオオオアアアアアアアアア！！！！！！！！

キィン・・・・・・

ドォオオオオオウウウウウウウウウウ！！！！！！！！！！

ゴアッ！！！ドドドッドンバンガゴキキガランドゴガガン！！！！！！

ありとあらゆる破壊の音が鳴り響き、そしてそれはすべて「奴」にのみ降り注いだ。

「奴」の叫びは誰にも届くことはなく、そのまま、消滅した。

ーーー

「さってと・・・オレは行きますよ。の前に・・よっと」

蒔風が上条を「山」で斬る。

すると斬られた個所から、完治とはいかないまでも、病院からさらわれたときの状態にまでは回復した

「右手に当たらないようにって意識してやると、結構難しいもんだね」

「おお～～。サンキューな。蒔風」

「しゅん、ありがとうね！」

「気にするない。オレのやるべきこ「ああ～～～～！！あんた！！」っとぉ？」

そこまで話して叫び声がする

そちらの方を見ると、白井黒子と御坂美琴が駆け寄ってきていた

「うは。厄介なのが来た・・・オレは逃げる！！説明よろしく！！」

「ああ！？あんな状態のビリビリをオレに投げるな～～～！！ふ、不幸だーーー！！！」

「とうま、短髪が来たよ？」

「あなた!!今度こそとっちめて・・・」

「あんた!?なんなのよ!!説明しなさ・・・」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ｔｏａｒｕ　ｍａｊｕｔｕ　ｎｏ　ＩＮＤＥＸ］

「じゃね～～～」

ヴォン

「なんですの?私の能力とは違う・・・一体なんなんですの!?」

「え?え?なにそれ?一体何がなんなのよ～～～～!?あんた!!」

「はい!?なんでしょうか御坂さん!?」

「あいつ!!何者なの?知ってんでしょ!?だったら早く話し・・・」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ｔｏａｒｕ　ｋａｇａｋｕ　ｎｏ　ＲＡＩＬＧＡＮ］

「はい?」「え?」「うそ・・・」「なんですの?」

「うあ～～さって、次・・・・は・・・・」

蒔風がやってきた。

ゲートをくぐって、新たな主人公を主軸に、ふたたび学園都市に

「こんなのありですかぁ～～～～～～！！？？」

to be continued

とある魔術の禁書目録　～とある翼人の世界接続～（後書き）

アリス「上条さん、凄いです・・・あの「奴」をほとんど一人で・・・」

まぁ、実際に与えたダメージは微々たるものですが、あの一撃は「奴」にとって大きな精神的ダメージになりましたからね

でも、上条さんパネェっす

【とある魔術の禁書目録】

構成：”ライクル”３５％
　　”フォルス”３５％
　　”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：上条当麻

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：「天使」の羽を蒔風に付加

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：インデックス内の魔導書による一斉掃射

さてさて、次はレールガン！！！

ア「ホントにこんなんありなんですか？」

はい

主人公が変われば物語も変わる
構成もちっとは変わりますしね

一つの世界に最主要人物は一人じゃないんですよ

ア「あれ？じゃあ、なんで「奴」は御坂美琴を狙わなかったんですか？」

それは「奴」があくまで「上条当麻」を主軸としてこの世界に入ったからです
あくまであの物語の最主要人物は「上条当麻」だから、彼を狙わなきゃ意味がないんですよね

ア「へぇ～～～～」

ではお願い

ア「次回、蒔風連行！？」

ではまた次回

あの方こそが、学園都市二三〇万人の頂点。七人の超能力者（レベル５）の第三位――

「・・・とまあ、そういうことなんですわ」

蒔風が御坂美琴と白井黒子に説明を終える

「それで？だったらまたこの殿方を狙ってくるということなんですの？」

黒子が上条の方に目をやって言う。

「いいや、違うよ。今度はこの御坂美琴嬢を狙ってくる」

「なんでだ？「奴」が狙うのはその・・・最主要人物ってやつだろ？オレじゃなかったのか？」

上条の当然の疑問に蒔風が答える

「いや、一つの世界に最主要人物が一人とは限らないんだ。御坂美琴もまた、最主要人物ってことだ。たぶん・・・彼女には彼女なりのエピソードがあったりしたんだろうよ」

「は・・・はぁ・・・」

蒔風の説明にあきれたように会釈する一同

よくわかったようなわからないような、そんな顔をしていた

「ま、そんな難しいことはいい。重要なのはこのビリビリちゃんが狙われ（バゴン！！）御坂が狙われるってことだ」

途中、蒔風が御坂にド突かれたが、滞りなく説明が終わった。

「よし・・・じゃあオレも！！！」

「「あんた（とうま）はもう動いちゃダメ！！！」」

やる気のともった目で立ちあがろうとする上条を、御坂とインデックスの二人が押しとどめる

「ってぇなおい！！」

「バカやろ。当たり前だ・・・天馬！！」

そんな上条を見てあきれる蒔風。
そして一本の剣を突き立てて叫んだ

ズアッ、ズン！

蒔風が天馬を召喚し、その背に上条とインデックスを投げ乗せる。

「病院に連れてけ。で、一応お前はそのまま待機な」

「りょーかい。おい、しっかりつかまってろよな！！」

「え？おい、蒔風ぇぇぇぇ・・・・・」

天馬が飛び去り三人が残される

「な、何だったんですの？いまのは」

「あれ？オレの召喚獣ってやつかな」

「召喚獣！？まんまゲームみたいな話じゃない！！」

「だから、別の世界のだって・・・」

「・・・信じるしかなさそうね」

「そうですわね・・・」

「さって、これからどうすっかね」

「ま、まぁ、やることは決まってますわ（ガシャン）」

「あれあれっ？」

黒子が蒔風に手錠をはめている。

その顔はにんまりとしていた

「先の容疑で連行ですわよ？あと、負けた腹いせも受けてもらいますわ」

「なんっ！？」

「まぁねーー私も負けたから、参加してもいい？黒子」

「大歓迎ですわお姉さま。では、支部に戻りましょうかしら」

「え？え？」

「では行きますわよ？」

黒子が一度に運べる重量は１３０．７キログラムだ

だから一旦御坂を送り、それから蒔風を送った。

黒子が戻ってきたとき、蒔風が手錠を破壊していたのでテレポートで直接はめようとし、その度に蒔風が腕を逸らすのでなかなかできず、一悶着あったようだが、まあ、問題はないだろう。

ちなみに結局手錠をはめなおすことはできなかった

――――――――――――――――――――――――――――――

「で？白井さんはそんな突拍子もない話を信じたんですか？」

と語るは白井黒子の友達にして風紀委員（ジャッジメント）でコンビを組んでる初春飾利（ういはるかざり）である。

ここは風紀委員第１７７支部

そこのパソコンの前に座っていると、まず御坂が送られ、その後た

っぷり十分後に黒子がボロボロになって見知らぬ男性と一緒に来て、とんでもない話をし始めたのだからそれは当然だ。

「えーー？でも、面白そうじゃん！ねえねえ、本当にいろんな能力使えんの？」

と若干興奮気味なのは初春の親友、佐天涙子（さてんるいこ）だ。

ちなみに、彼女と御坂は風紀委員ではない。

何となくここに入り浸り、何となく事件にかかわっていくのだ。

「えっと・・・いいのか？やっても」

「「だめ（ですわ）！！！」」

「えーーーー？」

「で、その「奴」って言うのはいつ頃くるんですの？」

「あと３０分くらいしたら来るんじゃない？」

「早！？」

「いや、だって構成は同じだし・・・（ボソッ）魔術ないだけで主人公変えるだけだし・・・やっぱそんくらいだな」

「そんな・・・対策の立てようが・・・」

黒子の顔が青くなるが、蒔風はどこ吹く風だ

「えーーっと、じゃあ、大暴れしても問題ない地区って、どこだ？」

「大暴れしても問題ない？」

「ああ、そこでやる。ここにいつまでもいたら、「奴」はここに攻撃を仕掛けてくるからな」

「こんな街中でですの！？」

「こんな街中でも、ですのよ！！」

「「・・・・・・」」

「「オラァ！！！」」

ビリドン！！

「で？初春さん、そういったところって、ある？」

「え？あの、二人は・・・」

「いいのよ。バカ騒ぎされるならあの方がましよ」

「えーーっとですね・・・・」

初春が該当地域を検索している間、蒔風と黒子は床でクロ焦げになって転がり、佐天はそれとつついて遊んでいた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「で、検索結果が・・・・ここか？」

「そうよ」

蒔風たちが来ていたのは・・・・さっきもいた廃工場だった

「無駄足だったな」

「仕方ないわよ」

「まったく・・・ここにお姉さまがいるのは危険なのでしょう？」

「だな。だから「奴」がきたらすぐに逃げろ。そこんとこは白井に任せる」

「了解ですわ。お姉様も、今回ばかりは大人しく下がってもらいますわよ？」

「あーーー・・・うん」

（本当にわかってんのか？）

そして、蒔風の言った時間が来る。

「・・・・静かですわね」

「？ああ、ところがそうはいかないようだ（パァン！！）」

蒔風の手に、レイジングハートが現れ、それを地面に向ける。

「ディバインバスター！！！」

ドドゴウ！！

地面が吹き飛び、そこからケルベロスの姿があらわになる

「まーた急展開だな。焦んなよなぁ、まったく」

蒔風がその両手に風林火山を構える。

「よっしゃぁ！！いく・・・ぜ？」

ドシュン！！！

ガラアアアアアアアア！！！！！

ズズン・・・・・シパァン!!!

蒔風が勇んでいこうとすると、ケルベロスを美琴のレールガンが撃ち抜いた。

腹部に穴が空き、ケルベロスは消え去っていってしまった。

「お・・・い・・・」

「お姉様?」

「あれ?あれって敵でしょ?いいんでしょ?」

「そういうことじゃない!!早くここ離れろっての!!白井!!」

「わかってますわ。さ、お姉様行きましょう!!」

「やーよ。だってあたしでも何とかなりそうじゃない」

「バカ野郎!!あいつの眷属倒したくらいで・・・」

「その余裕・・・コッチとしては大いにありがたい」

「「!?」」

「ほら来たぁ！！」

ドオッゴオオ！！！！

いきなり隣接する無人の廃ビルが飛んできた
「奴」がビル一つを抱えあげ、投げ飛ばしたのだ

蒔風がそれを蹴り飛ばして粉々にする

「白井ぃ！！！」

「え・・・は、はいですの！？」

ドゴンドゴンドゴン！！！

蒔風が白井に御坂を連れていくように促すが、次々とビルが投げ込まれて来るために黒子はテレポートに集中できない。
飛んでくるビルそのものと、それらの瓦礫。さらには大地を揺るがす衝撃をかわしながら御坂に触れて移動など出来たものではない。
しょうがないので蒔風は御坂と黒子を両脇に抱えて走り出す。

「ちょっと、降ろしなさいよ！！」

「だーー、うっせい！！黙ってろ舌噛むぞ！！！」

ドダン！！！！

蒔風が跳躍し、まだ無事なビルの壁面に片足をめり込ませて立つ。
そこにもすぐにビルが飛んでくる

そうやってかわしていく蒔風だが、ビルがそんなにあるわけもなく、
すぐに追い詰められていく

「御坂！！頼む！！」

「わかってるわよ！！！！」

バッ！！バッツン！！！！

途中、御坂も電撃で攻撃するが、蒔風はともかく黒子がこんなにも
近くにいると、全力の攻撃の影響が出るかもしれないため、思いっ
きりやれないでいた
それにここまで動きまわると、レールガンも撃てない

「どしたどしたぁ！！！その程度か第三位！！所詮はただのガキン
チョかぁ！？」

「なんですってぇ！？」

「ばか！乗るな！！」

「あの・・・うぷ、ちょっと・・・おぅう・・・」

「白井さん！？やめてください！？クソっ、埒ぁ明かねえ！！白虎！！青龍！！時間稼ぎだ！！３０秒間！！」

「「了解！！！」」

ドドン！！

青龍と白虎が飛び出し、ビルを次々と砕いていく。

その間に蒔風は黒子と御坂を離れた所に置く。

「ここにいろ。ほら白井。酔い止めだよ」

「うっぷ・・・・」

「黒子、大丈夫？・・・あたしも行くわよ！！あんなけた外れな奴あんた一人でやれるわけ・・・・」

「それをやらなきゃいけないんだよ」

蒔風が普段とは違う声を出す

その声に御坂が縮み上がる。

「ずっと・・・ずっとそれをやってきたんだ。大丈夫っさ！！」

「そんなの・・・だからって、見過ごせるはずないじゃない！！」

「お前が狙われてるんだ。お前は来るな」

「じゃああんたは？あんただって死ぬかもしてないのよ！？」

「構わん」

「かまっ！？」

「オレに今更、「死」を恐怖しろと？この力を得る前より「死」を理解したオレに？おほほほ、なぜ理解できたものを恐怖するひつにょーがあーるのかしらん？」

「あんた・・・本当に人間なの？」

「いや？オレは人間どころか生物として破綻しているっさ！！「死」に抗ってこその生物！！ま、だからこそこうやって世界を越えていけるんだが」

「・・・ひとりで・・・戦うの？」

「そうだよん♪じゃぁね、ここで観戦してな、痛っっ！？」

御坂が蒔風に電撃をぶつける

不意打ちに蒔風が痛がるが、そんなことは御坂は知らない。

「あんたの旅・・・ねぇ。わかったわ。確かにあんたの旅は一人かもしれないわね」

「ああ」

「でも！今この世界では私を仲間にしなさい！！そうやってきたんでしょう！？だったら私にもやらせろコノヤローー！！！」

「はいぃ！？」

「あのバカが戦えたのに、私が引っ込むわけにはいかないっての！！」

「・・・はぁ・・・この世界はどうしてこう主人公みたいなのがいっぱいいるんだろうねェ・・・いや、確かに主人公だけどさ」

「？？」

「わーーったよ！！じゃあ・・・行くか！！」

「ええ！！黒子！！」

「わかりましたわよ・・・お姉様、ご武運を・・・」

「大丈夫だ、なんとかするさ・・・お前らの勝因は」

黒子がテレポートで二人を「奴」のいる上空に飛ばす

「ここにいるんだからな！！！」

ゴウッ！！

空中に現れた二人を白虎と青龍が拾う

「主・・・実に８０秒は経ってますよ・・・」

「時間過ぎてるじゃん！！何やってたのさ！！」

「えっ！？こいつらしゃべんの！？」

「「失礼な！！！」」

「あーー怒んな怒んなっての。もう終わらせるよ」

【ｔｏａｒｕ　ｋａｇａｋｕ　ｎｏ　ＲＡＩＬＧＡＮ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

蒔風の雷旺と、御坂の電流が一つとなる。

そしてそのすべてが美坂に集まっていく

「なに！？この電気量！！！」

「大丈夫だ！！今なら制御できる！！！」

ズッッドン！！！

さらに周囲の鉄がすべて集まり、一枚のコインの形から、鉄球になっていく

直径二メートルにもなるその鉄球が御坂の目の前に浮く

「さぁ～～て！！ぶっ放すぜ！！！」

【ｔｏａｒｕ　ｋａｇａｋｕ　ｎｏ　ＲＡＩＬＧＡＮ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

「！！！これだけのエネルギー・・・（ニッ）行、く、わ、よ！！！！」

「やったれぇ！！！！」

「おおおおおおおおおおらあああああああああ！！！！！！」

美坂が鉄球を殴り飛ばす

その瞬間、美坂美琴の代名詞『超電磁砲（レールガン）』が放たれる！！！

ドッギュァ！！！！

「オレ一撃も食らってないのに！？」

ボッ！！！ズジュッガァ！！！！！

そして

なんともあっけなく「奴」は消し飛んでしまった

学園都市第三位は、自信満々に胸を張る

「えっへん」

ーーー

「もう行くの！？」

「バカ野郎！！この世界にオレの安息はない！！戦って、戦って、それが終わったら戦って！？バカじゃねェのかこの世界は！？」

「バッ！？あんた、人の世界をなんだと」

「あーあー！！聞こえない聞こえないーーー！！あ、お帰り天馬。じゃあオレは行く！！」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ｔｏａｒｕ　ｋａｇａｋｕ　ｎｏ　ＲＡＩＬＧＡＮ］

上条のところから飛んできた天馬を収め、蒔風が駆ける

「待ちなッさい！！」

「やなこった！！！」

御坂が追うが、蒔風はゲートをくぐって行ってしまった

「はぁ・・・ま、いっか・・・あ！！そういや問い詰めるの忘れちゃった・・・」

御坂美琴は黒子の元に向かう

その胸にあのバカ（上条）に対する疑念を抱きながら

又、離れた場所の、第七学区の病院では上条が天馬からもう蒔風が去ることを聞いて思った。

（「奴」の顔・・・な～んかどっかで見たことあるよなぁ・・・聞こうと思ってたんだけど・・・）

そうしてこの世界での「日常」が過ぎていく

今日もどこかで「魔術」と「科学」が交差する・・・・・

――――――

そして、次の世界で・・・・

to be continued

とある科学の超電磁砲　～とある物語の単発戦闘～（後書き）

アリス「短くない！？」

ごめんなさい

でもこうするしかなかった！！！

ア「まあ、わかりはしますけど・・・」

超電磁砲ファンの皆さま、誠に申し訳ございません！！！

勘弁してください！！

【とある科学の超電磁砲】

構成：”ライクル”３５％

”フォルス”３５％

”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：御坂美琴

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：御坂と蒔風の電気エネルギーを一つに凝縮

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：用意された鉄球にて、最大級のレールガン発射

マジテストつらい・・・

なんで俺こんなに執筆してんだ?
テストやんなきゃいけないのに・・・・・

ア「言ってたじゃないですか。ちょっとだけ休んでしっかり勉強をしましょうよ」

でもさ

こう、更新してない日でも見てる人がいるとさ

「この人たちは更新してないのに覗いてくれてるんだ!!がんばって早く次を!!」

ってなるんですよね・・・・

ア「バカじゃねえの?」

なんだと!?

ア「どうせあれですよ。検索して順番に見てみて、ついつい行きすぎて開いちゃった、とかでしょ?」

そんな・・・・(ズーーーン)

ア「ま、そんなことはないと思いますけど」

(パァァァ)

ア「言葉で言いなさい」

次回の方を～～～

ア「次回、次の世界で出会う男は、元ソルジャーで、そして・・・」

ではまだ次回

興味ないね

FF7 ～自称・元ソルジャー～

「ここは・・・どこだ」

蒔風が立っているのは荒野の丘の上

いくつかの黄色い花がそこに咲いていた。

花のところには、何かが突き立てられていた跡がある。

遠くには町が見える

蒔風が花の方に近づくとコツン、と何かが爪先に当たる

「ん？これは・・・」

落ちていたそれは一つの小包だった。

箱側面に何か書いてある

「『ストライフ・デリバリーサービス』？宅配業者が落としてったのか？」

蒔風はとりあえずその荷物を抱え、先に見える町に向かって歩き出した。

――――――――――――――――――――――――――――――

ピン、ポーン

崩壊したミッドガル周辺にできた新たな街、エッジ

そこにある飲食店兼、宅配業の事務所である「セブンスヘブン」の

ドアのチャイムが鳴らされる

「はーーい」

そのチャイムに、ひとりの女性が出る

この店の運営をしている彼女の名は、ティファ・ロックハート

ティファが扉をあけると、そこには蒔風が先ほど拾った荷物を持って立っていた

「どなたでしょうか？」

「えっと・・この荷物拾ったんだけど・・・んあ？」

「？どうしました？」

「ああ、なんでも（なるほどね・・・ここに最主要さんがいるのか）」

蒔風の頭に情報が流れてくるが、まだ詳しいことはわからない。

ティファに荷物を渡すと

「クラウドーー!!お届け物だよーーーー!!!あ、そこに座ってくださいね」

と誰かを呼びに階段を上って行ってしまった。

どうやら宅配業の事務所は二階になっているようだ。

手頃な席に蒔風が座ると、ティファが一人の男性とともに降りてきた。

「ほら、この人が」

「ああ・・・すまないな。しかし、これをどこで拾ったんだ?」

男がその手に握る携帯電話を差し出してくる

どうやら水に浸かってしまったもののようで、もう使えない。

「ん?いや、荒野の丘の上の黄色い花の咲いてるとこにあったよ?」

「・・・そうか・・・」

「・・・なあ、ちょっと・・・名前聞かせてもらっていいかい?」

「なんでだ」

「いや、何となくさ」

「・・・クラウド・ストライフだ」

「おぉ～～う。オッケオッケ。わかったぜ」

「なにがだ？」

「オレの名前は・・・（えっと、この世界だと名字逆だから・・・）シュン・マイカゼだな」

「興味ないな」

「ところがどっこい、そうはいかないんだ」

「知らないな」

クラウドがフイッと首を逸らして、二階に行ってしまおうとするティファが、お礼言わないとだめでしょ！、と追いかけていく

その背中に蒔風が言った

「お前の命が狙われている、と言ったら？」

クラウドの足が止まる

「・・・どういうことだ」

「クラウドが？なんで！？」

「さてと、では、ザ・説明タイム、だな」

ーーー

その結晶であるマテリアにを使用することで、魔法を使えるのだ

「・・・確かに、マテリアはない。どうやら本当のようだな」

「でも・・・世界を壊して新しい世界を作るって・・・まるで・・・」

「まるで・・・どうしたんだ?」

「・・・セフィロス」

「だれだ?」

「かつての・・・英雄だ」

この星を破滅に導かんとする者、セフィロス

かつてセフィロスは神羅カンパニーという一大企業で、最強であったソルジャーだ

神羅カンパニーとは、ミッドガルにあった、この星全体に影響をもっていた大企業だ

ライフストリームを魔晄エネルギーに変えて発展していったため、生活は豊かになったが、星の力を使っているために反乱分子も多かったのだ。

今はもう神羅カンパニーは潰れ、少数のメンバーによる復興がなさ

れているだけだ

そしてその神羅が治安維持のために所有していた私兵部隊の中でもエリートたちが「ソルジャー」である。

セフィロスはその中でも「英雄」と言われた男だ

しかし、彼は自身の出生を知り、世界を憎むようになる。

彼はある実験によって生み出されたのだ。

ジェノバと呼ばれる古代に宇宙から飛来した生命体の遺伝子を埋め込まれて誕生したセフィロス

ある任務の途中でそれを知った彼は、ジェノバを自らの「母」と呼び、それをかつて葬り去った人類に憎悪を抱き星を滅ぼそうとしたまた、前に現れた時には、この星を自分のものとし、かつてジェノバが宇宙をさまよったように、新たなる地を求める、と言っていたそうだ

それらはクラウドたちが阻止したのだが・・・・

「たしかに・・・「奴」の考えと似ているな」

「まさか「奴」って・・・」

「違う」

蒔風がティファの推測をさえぎる

「「奴」はセフィロスじゃない」

あまりにもバッサリと断言する蒔風にクラウドが疑問の声を投げかける

「お前は・・・「奴」が何者なのか知ってるのか？」

「・・・「奴」は様々な物を利用してくる。何をしてくるかわからないからな」

蒔風が強引に話題を変える。

だからクラウドはそれ以上言及することをやめた

彼自身にも、あまり突っ込んで聞かれたくないことはある

「「奴」が利用する物は？」

「「記憶」だ。その地に刻まれた記憶から現象としてそいつを引っ張り出してくる。さっきの話だと、多分セフィロスを・・・」

「無理だ。セフィロスの記憶はどこにもない」

クラウドが否定する

「セフィロスは消滅するとき、ライフストリームとなることを拒ん

だ。あらゆる場所を探しても、セフィロスの記憶はないんだ」

『私は・・・思い出にはならないさ』

そう言って彼は消えた。

―ライフストリーム（思い出）になることを拒んだのだ

だから、セフィロスという「記憶」はどこにもない

「ライフストリーム・・・確かにそこになきゃ、無理かもな・・・」

ガラガラン！ドシャアッ！！

クラウドと蒔風が話していると、扉から一人の男が倒れ込んできた。

「なんだ！？どうした？」

「近づくな！」

クラウドが男に近寄るが蒔風がそれを止める。

男の体はユラユラとした影に侵食されていて、首まで漆黒に包まれている

「た・・・助け・・・」

男が呻き、唯一自由の効く首を回し、クラウドの方を見、叫んだ

「助けて!兄さん!!」

「な!?ガタージュ!?おまえどうし・・・」

「う、ぐ、ああ!!!あああぁぁぁぁぁ・・・・・」

ガタージュと呼ばれた男が後ろから何かにいきなり引っ張られたように扉から飛び出していった

その腕をつかもうとするクラウドだが、虚しく空を切る

蒔風とクラウドが外に出て、その先を目で追う。

「おい、あいつ誰だ!」

「ガタージュは・・・セフィロスの思念体だ」

「なに!?」

カダージュ

セフィロスの思念体である、少年のような外見と口調の男だ

かつてセフィロスを復活させようとし、クラウドを狙った
そして戦いのさなか、その体を利用され、セフィロス復活の礎となった

しかし、復活したセフィロスはクラウドに倒され、カダージュはセフィロスの呪縛から解かれ、ライフストリームの中に還って行ったのだが・・・

「そのはずなんだ、が・・・まさか!!」

「あの野郎、セフィロスを呼び出せないから、ライフストリームからガタージュ引っ張り出してセフィロスを復活させようと!!ってか、兄さんって言ってたけど?」

「・・・行くぞ。方角はわかった」

「おい、ちょっと待ってくれ!!ったく、わーったよ。聞かねえから待てって!!」

クラウドがバイクに跨がり走り出す。
蒔風もバイクを出してそのあとを追う。

向かう先は崩壊したミッドガル

再び彼(か)の地が戦場となる

to be continued

ＦＦ７　～自称・元ソルジャー～（後書き）

アリス「ＦＦ７の世界ですね」

は・・・はい・・・

ア「どうしたんですか？」

じ・・実は・・・

ＦＦ７の記憶がうろ覚えなんです

ア「えぇ！？」

いや、ゲームやったの六年前に友達から借りてだもん！！

しかもストーリーとか頭の中に全然ないし・・・

がんばって当時の記憶を様々な情報で補完してやりました！！

ア「よくやりましたね。この世界」

どうしても入れたかった

いやでも、ＦＦ７ＡＣはしっかり見た！！

ア「他は？」

・・・ディシディア

ア「だけですか！？」

ああ！あと、キング〇ムハーツも！！

ア「なぜ伏字？」

どこまでがアウトかわかんないし

ですから、もし何か違うんじゃね？とか思ったら教えてください！！
適時修正します

ア「お願いします。で、この世界での時期は？」

ＡＣの後ですね

ア「そういえばマリンは？」

バレットのとこにいます
なんか石油あてたらしいですし、彼

ア「ふーーん。他のキャラは出さないんですか？」

どうやって出すよ？

ア「聞くなよ！！」

難しいのでカットカット！！
ここは完全に作者の力不足です

これくらいかなぁ？

ア「そうですね。では」

お願い

ア「次回、レッツゴー、崩壊のミッドガル！！タダでは行けないぜ！？」

ではまた次回

思い出の中で・・・ジッとしといてくれ

・・・私は、思い出にはならないさ

FF7 ～on The Highway～

ハイウェイを二台のバイクが駆ける。

数本の道路が並び、走っていく度に何車線かが別れたり、他から一つになったり、高くなったり低くなったりしている

ミッドガルに向かってフルスピードでクラウドと蒔風が走っていく。

走っていくうちに、右の方に下から道路がこちらに合わせた高さに上がってくる。

徐々に上がってきて、駆ける漆黒の巨大な体躯が並走し、飛びだしてきた！！

ダンッ！ドスァ！！

駆けてきたのはケルベロス。

それがこちらの車線に飛び乗り、二人に襲い掛かってくる！！

ガッ！ギャリン！ギャギャギャギャギャ！ブォン！！

バイクをスピンさせてかわし、先に進む二人。

だがケルベロスは二台の後ろに張り付き、追ってきている。

「あいつはなんだ！？」

「「奴」の召喚獣だ！！気にするな。このまま突っ切る！！」

その後ろから蒔風を引き裂こうとケルベロスの腕が襲いかかる。
すぐ後ろを爪が襲い、蒔風がバイクごと浮き上がり、そこにさらに襲いくるケルベロスの腕。
蒔風はバイクごとそれにそのまま着地し、ケルベロスの上空にさらにジャンプする。

そしてバイクを飛び降りて消し、「風」「林」をケルベロスの背中に突き刺した！！

・・・・が、そのような攻撃はケルベロスにとってたいしたことのないものだ。

そのままケルベロスがクラウドに襲いかかろうとし、それに揺られて蒔風は必死に二本の刀をハンドルのように握リ締める。

「うおおおおおおおおおッ！？ゆっ、揺れっ！！！」

「シュン！！」

クラウドが背に背負っていたファースト剣を抜き、１８０度方向転

換し、ケルベロスに向き合いながら走行する。
そして襲いくるケルベロスの爪をバイクを残してジャンプでかわし、しがみつく蒔風をそのまま回収して、後ろに落ちる。
ピッタリのタイミングでフェンリルがケルベロスの足の間を抜けてやってきて、そこにクラウドは跨り、蒔風は後部座席に立った。

さらにケルベロスが後ろ足で踏みつけにくる。

「十五天帝!!（ダンッ）」

蒔風が十五天帝を出し、そのうちの獅子天麟を構えながら飛ぶ。

バッギャッ!!

蒔風がケルベロスの足を弾いてから足の脇にバイクを出してそれに着地し、並走する

クラウドが反対側を走り、二人が剣を構えて同時に突っ切った!!!

「フンッ!! ハアッ!!」
「お、りゃぁ!!」

二人の剣がケルベロスの後足と前足の腱を切り裂いた

ドキャッ!!!ドゴン!!ガリガリガリガリ!!!!

ケルベロスは頭から転がり転倒する。
派手に転がりながら二人を追い抜き、先に行ってしまい、そこで止まった。

それでもケルベロスは終わらない。

その足でどうやっているのか、ふたたび立ち上がり、その三つの口には炎が溢れ始めている。

「っ！クラウド！！」
「わかってる！！」

ゴバァ！！

三つの口から火球が放たれ、それが途中で一つにまとまり、巨大な火球が迫りくるッ！！！！

「「ッッッ！！！ハアァ！！！」」

蒔風とクラウドがバイクから飛び、空中で野球のバッターのように剣を振りかぶりながら左右対称に一回転し

「「オオオオッ！！！」」

そして、ケルベロスの火球を真っ二つに斬り裂き、置き去りにした。
二人の後方で裂かれた火球が爆発し、その衝撃を利用して飛距離を得、猛然とケルベロスに斬りかかった!!!

ズジャッ!!!ゴガシャ!!!

そのまま蒔風が真ん中の頭蓋を貫き、クラウドが縦一直線に背骨を割る。

消えていくケルベロスの元を見、二人がジャンプする。
そこに二人のバイクがそのまま走ってきて、それに飛び乗り先に向かった。

行く先のミッドガル上空には怪しげな黒雲が集まっていた。

――――――

「気にするない！！オレさんがやってんですよ?安心しなさいってのよ」

「そうか・・・・」

「まったくぅ。いくらオレさんでも～、記憶からモノホン引っ張り出して来るのは大変だったんだよ～～?まぁ、ライフストリームって具現化された形としてあったからできたんだけどね」

「そのために体力を使うとはな」

「うるせい。お前を復活させるためじゃい。オレの体力回復の間、あいつらの相手頼むぞ?」

「ふ・・・新たなる世界・・・そこを目指すのならば・・・な」

（こいつ絶対オレ利用する気だよなぁ。まぁ、オレもそのつもりではいるしな）

（こいつが食らう「世界」をやら・・・私が貰おう。そして私が新たなる世界を・・・）

「奴」と、八割がた復活したセフィロス

ミッドガルの中心で、二人の思惑が、不気味にうごめいていた・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

FF7 ～on The Highway～（後書き）

アリス「短いですね～～～」

いやいやいや

ちょっと待ってくださいよ

ア「なにか？」

思ったんだ。

「なのは」が長すぎて麻痺してたけど、この小説こんなもんでしたよ！？

ア「あーー、たしかに。「なのは」は一話一話が長かったから・・・」

ですよねーー！！

だからこれは短くない！！はずだ！！

ア「さて次回は、激突セフィロス！！」

ではまた次回

絶望を贈ろうか

ＦＦ７　～片翼の天使～

セフィロスが山になった瓦礫の上から二人を見下ろす

「来たか、クラウド」

「セフィロス！！」

「あいつ・・・・」

クラウドの表情が険しくなり、蒔風はなにかが疼いた

クラウドがフェンリルからすべての剣を取り出しファースト剣に組み付ける

蒔風も、剣にジリジリと手が伸びる

「あの男の体力が戻るまでの相手をしてやろう・・・死にたくなければ・・・二人で来い」

タンッ、とセフィロスが跳ね、蒔風とクラウドの間に飛び降りてきた

「ッ！ハァッ！」

ギンッ！バシッ！

ダンッ！ギュオ！

蒔風が風林火山でセフィロスに斬り掛かる
その連続の斬撃を受け、横一線に長刀「正宗」を薙ぐ
後ろ向きに跳躍し、そのまま上空に逃げる蒔風
セフィロスがそれを追い、さらにクラウドが後を追う

蒔風が着地したのはビルの突き出した屋上だ
その背後から即座にセフィロスが飛び出し、振り下ろしながら着地する

蒔風が転がってかわし、斬撃を飛ばす。
それをセフィロスが掻き消し、そのまま回転して後から来たクラウドに斬り付ける。

着地しようとしたクラウドは咄嗟にそれをガードする
セフィロスがクラウドの眼前にまで跳んで、数回打ち合う
セフィロスの猛攻にクラウドは強制的に防御を強いられる。

「クラウド！」

セフィロスの背後から獅子天麟が回転しながら飛んできた。

クラウドは合体剣を正宗に打ち付け、そこを軸にセフィロスの頭上を乗り越え、獅子天麟を握る。そして両側から挟み込む形で斬り掛

かる。

セフィロスはそれをクラウドの腹を蹴り、後退してかわす。

クラウドが着地し、蒔風が駆け寄る

そこに切り裂かれたビルが落ちてくる。

二人はそれらに向かって高く跳躍し、直撃コースの物は切り裂きながら、ガラガラと落ちてくる巨大なビルだった塊の滝を上に抜け、着地する。

そこより二十メートルほど高い、ビルの壁面にセフィロスが重力を無視したように立っていた。

「クラウド・・・お前はまた、人形なのだな」

「なんだと!?」

「そこの男が言うままに戦う・・・やはりお前には導き手が必要なようだな」

「断る!!ここに来たのは、オレの意志だ!」

「そうかな?私はお前以上にお前を知っているぞ?」

「黙れ!!あんたは必要ない!オレにも、世界にも!!」

クラウドがセフィロスに向かい、壁を駆け上がる

セフィロスはクラウドに背を向け、自分の立っている位置より上の部分を切り刻む
さっもそうしたのであろう。
巨大な瓦礫が降ってくる

右へ左へと避けながらクラウドがセフィロスに迫る。

斬りかかると同時、上層部のなくなったビルの中から蒔風が飛び出してくる。

上下からの挟み撃ち

クラウドが剣を突き出して滑るように突っ込む
それをかわすと、今度は蒔風が上から斬撃を飛ばしそれに身を隠しセフィロスを斬ろうと獅子天麟を薙いだ
しかし、セフィロスの姿が一瞬消え、蒔風の背後にまわり、蒔風の後頭部を柄で殴り落とす。

落ちていく蒔風の後を、正宗を突き刺すように下に向ける

「シュン！！！くっ！！」

ドウッ！！

クラウドがセフィロスの真上から剣を突き出して後を追うように勢

いをつけて追う

ドゴン！！バッガッ！！！ドシュ！！

蒔風が巨大なパイプの上に落ち、後を追ってきたセフィロスの刀が
腹部に突き刺さる。

「ぐあぁぁああ！！っあ！づぅっ！！」

蒔風の体が標本のように止められる
深く突き刺さっているのか、蒔風が抜こうとも抜けなくなっていた
そしてさらに追ってきたクラウドの剣を身体を逸らすだけで避け、
その首に手を伸ばし、掴んだ

「がっは・・・・」

クラウドの足がじたばたともがき、浮く
その手から合体剣を落とし、セフィロスの腕を掴むが全く動じない

「クラウド・・・「奴」から聞いたぞ？お前にも翼があるようだな」

「が・・・なん・・・の・・ことだ」

セフィロスがクラウドに話し続ける

「他の世界において、お前の背には片翼の翼があるようだな。今のお前にないということはないだろう?私は・・・完全になるのだよ。クラウド」

グォオオ、バッサ!!

セフィロスの背から、右だけの漆黒の翼が現れる
その姿に蒔風の眼が見開かれ、驚愕の表情に変わる。

「ぐ・・な・・・翼人!?」

「そういうらしいな。だが不完全だ。だからくれないかクラウド。お前の、翼を」

「!?ぐ、お、がああぁぁぁぁぁぁあああああ!!!!!」

クラウドが苦痛の声をあげる。
体内に無理やり力を流し込まれ、それが暴れまわっている

「よ・・せ!!・・・グッ!!ゲボッ!!!」

蒔風がもがき、血を吐く

クラウドの腕からは徐々に力が抜けていき、ついには全身がダランとして意識を失う

と、その背中から左半分の漆黒の翼が現れる
そしてそれの羽が弾け、翼が消える
散った羽がセフィロスの元に集まり、ついにそれは完成した

「・・・感謝するぞクラウド。そして・・・もういいぞ」

そこに立っていたのは漆黒の翼人
ついに一対の翼を持ち、より強くなったかつての英雄がそこにいた

蒔風の腹から正宗を引き抜き、クラウドの四肢を撥ねようとする
しかし、その動きが途中で止まる

「ほう」

振り返ると蒔風が立ちあがっていて、正宗を掴み、その動きを止めていた

「止しておけ。お前にはもう無理だ」

セフィロスが蒔風に言う。
しかし彼は退かない

「わかってんのか・・・「奴」がクラウドを殺したら、世界ごとお前も消えるんだぞ!!!」

「ふ・・・そんなもの・・・世界などに・・・混ざりはしないさ」

「!?ぐあっ!!」

ギュィィン!!!

セフィロスの攻撃を蒔風が「風」「火」で弾く。
さらに二、三合撃ちあい、蒔風が弾き飛ばされる

元は立体駐車場だったのか、その中に弾丸のようなスピードで突っ込んでいく蒔風
壁に激突し、その衝撃に頭を振る。

そして自分が飛んできた穴に視線をやると、そこからセフィロスが飛び込んで蒔風に斬りかかる

「開翼!!」

バン!!

蒔風も開翼し、それに応じる

しかし、その細い刀身からは想像もできないほどの重さに、片膝をつき、苦しそうに俯く。

「それがお前の翼か・・・しかし、「奴」は持ってはいないのだな」

「は！何のことだか・・・」

蒔風がなんとか上を見上げながら答える

その額には冷や汗と脂汗の混ざった物が張り付いている

「フー、フー、フー・・・おおおおあ！！！」

ドギャン！！！ゴゴン！！

蒔風が瞬発力をフルに使い、その場から弾けるように離れた

その後を影や天井をジャンプしながらセフィロスが追う

蒔風も同様に移動しながら応戦するが、その速さに苦戦する

「消えろ」

ズッ、ゴン！！！

蒔風とセフィロスの剣がぶつかり合い、鍔競り合うが、セフィロス

がその状態から衝撃のみを叩き付け、蒔風の体を吹き飛ばした

外にまで飛び出し、倒壊したビルの屋上部分（そこにも他のビルが

倒れこんでいる）に落ちる蒔風

「こんなものか・・・銀白の翼人」

セフィロスが蒔風の突き破った穴から蒔風の落ちたところを見る

「どうだい？調子は」

さらに

そこに「奴」までもが現れる

穴の外の宙に浮いて、セフィロスの方を見る

「クラウドはどこだ？あいつ殺さんと」

「あっちはいいのか？」

セフィロスが蒔風の方に目をやる

「蒔風・・・か。やっぱ殺したいよなぁ。オレとしてはよ！！！」

ドウッ！！

「奴」が波動砲を撃ち、蒔風のいた所が吹き飛ぶ。

「・・・じゃ、クラウドはどこだ」

「死体は確認しないのか」

「やだよそんなの。死んでなくてももう動けんだろ」

セフィロスと「奴」の姿が動いた

クラウドにとどめを刺すために

to be continued

ＦＦ７　～片翼の天使～（後書き）

アリス「蒔風・・・死んだ？ならば私の！！」

出番ではないですよ

ア「ちぇ。そうそう、出てきましたね。蒔風以外の翼人！！」

これは予想してた人もいたのでは？と思います

ア「翼をもつクラウドって言うのは？」

はい

キング○ムハーツです。キ○グダ○ハーツ。

ア「でも、あの作品とセフィロスの翼って、形違くないですか？」

そうなんですよね～～

でもここはセフィロスの方で統一！

クラウドの翼も、普通な感じの翼で

それにしても、戦闘描写を派手にってどうやるんだろ

ア「ああ。派手ですものね。スクエニのって」

だからみなさん

妄そゲフンゲフン、想像するときは思いっきり派手に！！

お願いします

ＦＦ７ＡＣとかの戦闘シーンの素早くて派手なのが好き

ア「あれは凄いですからね」

じゃ、この辺で

ア「次回、新たなる翼人。明かされる秘密」

ではまた次回

大切じゃないものなんか、ない！！！

FF7　～勇気の翼・漆黒の翼人～

「シュン・・・おい、シュン!!大丈夫か!!」

「が・・・う。クラウド・・・か」

ビルの隙間。

周りからは見えない影の部分で、蒔風が意識を取り戻す

そのそばにはクラウドがいた

「奴」の波動砲から蒔風を助け出し、抱えてここまで来たようだ

「ここは・・・？」

「あの場所からそんなに離れてはいない。まだ動くな」

クラウドがマテリアを使い、蒔風の体を癒す

「クラウドは・・・大丈夫なのか？」

「今はな。あのときのあれは一瞬の苦しみのようだ」

あのとき、とは翼を奪われた時のことだろう

「セフィロスってのは・・・バケモンかよ・・・何の手引もなしに、開翼まで持って行くなんてよ・・・」

「蒔風、翼人とはなんだ」

その問いに対し、蒔風が翼人の説明をする

「つまりだ、お前も翼人になれる可能性が、まだある」

「セフィロスから翼を・・・奪い返すのか・・・」

「やってやろうぜ・・・オレたちは・・・流されて戦ってるんじゃない。自分の意志で、戦ってるんだ」

「ああ！」

ドッゴァ！！！

「見つけたぞ。行くぜ！！」

「奴」が影を作っていた瓦礫を吹き飛ばし、やってきた

「このやろ・・ッ！！ぐ・・・」

「シュン！！掴まれ！！」

クラウドが蒔風に肩を貸し、その場から逃げる

しかし、そんな足で逃げられるはずもない

全方位からいたぶるような攻撃が続く

クラウドと蒔風が必死になって弾き続ける攻撃も、はたから見ると気まぐれにポツポツと攻撃しているものだ

周りで爆発が起きる中、二人は必死に歩くが、そこにセフィロスのメテオが落ち、二人を吹き飛ばす

蒔風が瓦礫に背中を預けてぐったりと座り込み、クラウドは地に伏せ、起き上がろうとするが力が入らない

一メートルくらいの高さまでセフィロスが降りてくる

「奴」はいない

「無様だな。それでも同一存在なのか？」

「オレは・・・あんたとは、違う・・・オレは・・・あんたじゃない！！」

「お前のことではない、クラウド。知らなかったのか？滑稽だな」

「なんの・・・ことだ」

「やめてくれ・・・セフィロス・・・言うな!!」

蒔風が叫び、ブルブルと震えながら立ちあがろうとするが、すぐにその場に崩れ落ちた

「お前はそれでも「蒔風舜」なのか?」

「黙れぇ・・・・」

「なんもことだ!!セフィロス!!あんたはなにを知っている!?」

「なに、簡単なことだ」

「止せ!!!」

「そこに転がる男と、「奴」は同一人物だということだ」

「な・・・・・んだと?」

「セフィロス！！」

蒔風が異常な速度で飛びだし、セフィロスの胸ぐらをつかみ、捻り上げる

「それを・・・言うんじゃねェ！！」

「フン」

ドゴッ

セフィロスが軽く鼻を鳴らし、蒔風の鳩尾に拳を叩き込む

蒔風の体がズルズルと落ち、倒れる

「弱いな。これで「主人公」？・・・笑わせる。「脇役」であった「奴」の方が強いとはな」

セフィロスが言葉を続ける

「さまざまな世界。その中には私や、お前もいるだろう。しかしその役割は違う。もしかしたら、我々はつまらない一市民である世界もあるだろう。「奴」とこの男も同じだ。「脇役の蒔風舜」と「主人公の蒔風舜」。世界は違えど、全くの同一人物。どうだクラウド。同じ存在で戦い続けるのは醜いだろう？」

「だから・・・どうだと言うんだ」

「私と共に来い、クラウド。お前が私にすべてを委ねれば、新たな

る世界へのみ「断る！！！」」

クラウドがセフィロスの台詞をさえぎる

「この世界には、守るべき友が、仲間が、思いがある！！この世界を守った人の想いが、この胸にある！！！」

「・・・残念だ」

ゴォオ！！

セフィロスがクラウドに迫る
そしてクラウドは斬られ、無残に転がるだろう

しかしそうはならなかった

「いーーい願いだ。そんだけのもんがあるなら、まだまだ希望は尽きちゃいねェ！！」

蒔風が

「正宗」の峰の部分を器用につかみ、食い止めていた

そして「山」でクラウドの傷と疲労を癒した

「クラウド。「奴」の方はまかせる」

「しかし・・「奴」はおま「るっせぇ！行け！！こいつは・・・！！」・・・わかった。任せた！」

クラウドが「奴」に向かう

「いいのか？自分を殺させて」

「あれはオレじゃない。「奴」だ！！あいつは世界を取り込んだ瞬間から、「蒔風舜」ではなくなった！！」

「自分潰しの蒔風舜・・・面白い」

「人の知られたくないことべらべらと言いやがって、覚悟できてんだろうなぁ！？」

ドゴウ！！

蒔風が裏拳を振るい、セフィロスがバックステップで避ける。

「武器も構えず、私に勝つのか？」

セフィロスが勝負は見えていると、蒔風に言う

それに対して蒔風が、胸を張って、右手を握りしめ、答えた

「武器なら・・・ここにある」

その手で胸をドン、と叩き、こう言ったのだ

「オレの武器はたったの一つだ。この胸にある正義、それをなす願い！！十五天帝だとか能力何てものはただの手段にすぎない！！」

右手を振り払い、指をチョイチョイ、と曲げる。

蒔風の目に炎がともる。

「さあ来いよ、英雄。このオレの胸に宿る正義が、願いが！！オレの勝因だ！！」

ゴッゴォア！！！！

――――――――――――――――――――――――――――――――

「セフィロスめ・・・いらんこと言いやがって」

「お前の相手は俺だ」

「奴」の背後にクラウドが立つ

「おいおい・・・オレは間違いなく「マイカゼシュン」なんだぜ？それを殺すのかい？」

「あいつは、お前じゃない。いや、お前は・・・「マイカゼシュン」ではない！」

「は！・・・そういや、セフィロスとお前も同じような存在なんだったな。そいつを乗り越えた奴の理解は早いねェ。ま、オレもあいつと同じだなんて虫唾が走るがな」

「オレとセフィロスは・・・違うさ」

「なに？」

「もう・・・迷わない。オレは・・・・」

ダンッ！！ゴォウ！！！

ガギィ！！！！！

「オレは、ひとりじゃない！！！」

クラウドと「奴」が打ち合う

「奴」もクラウドもその剣の合体を解き、お互いに猛攻を仕掛ける

しかし一本、また一本とクラウドの剣が弾き飛ばされる

そしてついにクラウドは最後のファースト剣になってしまう

「そんなんでいいのか！？元ソルジャーさんよ！！」

「自称、だ！！」

「奴」が魔導八天を一つにし、飛びかかってきたクラウドを弾く。
クラウドの体が飛び、瓦礫に埋もる。

「奴」が静かに構え、クラウドの方へ走って行く

すると、クラウドの居る場所の土煙と瓦礫が吹き飛んだ

「フッ、ハアァ！！」

クラウドが頭上でファースト剣を一回転させ、両手で持ち、腰を落とす。
全身から蒼い炎のようなオーラが吹き出、剣までを覆う。

ドウッ！！

「奴」の走ってくるタイミングに合わせ、クラウドが突進する！！

「奴」がクラウドの剣を弾く。
クラウドが「奴」の頭上を回り、背後に立つ

「奴」の後ろ蹴りがクラウドの腹に命中し、その体が舞う

「いくぞ！！クラウド・ストライフ！！討ち取る！！」

「奴」が宙のクラウドに向かって飛ぶ
クラウドまであと五メートル

そこで、クラウドの眼がカッ！と見開かれる。

「（ブォン！）集え！！」

クラウドの叫びと同時、散っていったクラウドの剣、計五本が
クラウドに集まっていく
その途中にいる「奴」を切り刻みながら

「ぐおおお！？」

「ハアッ！！！」

ドゴン！！！

「奴」に向け、ファイガを放つ。
一瞬、「奴」の視界が曇り、そしてその一瞬で十分だった

上からセフィロスが落ちてくる

ーーー

「フッ！！」

蒔風がジャンプからのスライディングでセフィロスの足を狙う
それを高く飛びかわすセフィロス
蒔風はそれがわかっていたかのように即座に後を追う

「自分で自分を潰し続ける気持ちとはどういうものだ？」

蒔風が一回転からの踵落としとするが、セフィロスが腕でガードする

「その気持ちを教えてくれないか？」

「お前にはわからないさ！！」

「フ・・フンッ！！」

セフィロスが蒔風の足首を掴み、頭上で振り回してから地面に投げつける
地面をクレーターのように窪ませ、蒔風が着地する

そこにセフィロスが蒔風を真っ二つにするように振り下ろしながら舞い降りる

蒔風が横からの手刀でそれを逸らす
その後もセフィロスの斬撃がくるが、刃に当たらぬようそれ以外の個所を打ち続けるという、一瞬も気の抜けない攻防をする

蒔風もただ受けているわけではない。
突き、蹴り、足を祓う、後退するを繰り返していく

ガンギン！ヒュパッ！ガガッ！ヒュン！ブオォ！！ゴォ！！！ギャン、バキャ！！

蒔風がセフィロスの攻撃を後ろ回し蹴りで弾き着地し、一回転して構える
構えは大きく体を開け、両腕を開き、セフィロスに向かう
しかしその眼には先ほどと違い、余裕が見える
が、決してそこに油断はない

「誰かに知ってもらうと少しだけでもスッキリするって、本当だったんだな・・・・ッハアッ！！」

蒔風が飛びかかり、右の拳を強く握り、振りかぶる
それを見て呆けているセフィロスではない

「正宗」を一回だけ振るう
すると、無数の斬撃が蒔風を襲った。
しかし蒔風は止まらない

その腕から、足から、腹から、顔から、鮮血が吹き出るがそれでも止まらない

セフィロスが蒔風の眉間に向け、「正宗」を突き出す

しかし彼はいくつもの世界で、規格外の者たちと、そして「奴」と戦い、勝ってきた男。
これだけでは死ぬことなどできない！！！

ガッ！！ギャリギャリギャリ！！

蒔風が顔を少しだけそらし、メガネのフレームで受け、それに沿って近づいていく
フレームが折れ、落ちる

セフィロスの顔面に蒔風の鉄拳が突き刺さり、地面にセフィロスが叩きつけられる
地面でバウンドしたセフィロスの腹に膝蹴りをかまし、その長い髪を掴む

「長いんだよ。ちっとは散髪しろ！！！」

ブゥンブゥン！！ゴウゥ！！！

上空にセフィロスを投げ放ち、そこに向かって蒔風も飛ぶ
そしてセフィロスより少し上まで行き、振り落としの回し蹴りを叩き込んで落とす！！

下の方ではクラウドがちょうど「奴」に向かってファイガを放ち、爆発したところだ

「クラウド！！やれぇ！！！（ブンッ！！）」

蒔風がクラウドに十五天帝を投げる
それはセフィロスを追い抜き、クラウドの手に

その二振りを手に、クラウドとセフィロスか交差する！！

ヒュッ、ジャカン！！！

そしてセフィロスの背の翼が切り離され、羽となって散り、クラウドとセフィロスを包むように停滞する

「行くぞ！！」

【ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　ＶＩＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＷＥＰＯＮ～

それらの羽が、クラウドの背に集まる

そして一対の翼が現れる

「行くぞクラウド！！使い方は、わかるな？」

「ああ・・・問題ない！！」

飛んできたクラウドが、蒔風の足の裏に合体剣の側面を当て、地上に向けて射出する

地上の「奴」をセフィロスは衝撃にまだ頭を振っている

そこにとんでもない勢いで落ちてくる蒔風

そして二人を掴み、落ちてきた勢いをそのままに回転力とし、ふたたび上空に投げ放つ！！

【ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　ＶＩＩ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

クラウドが合体剣と十五天帝を振り、飛んでくる二人に向けて振る
そこですべての合体が解かれ、二人の周りにばらまかれる。
そしてクラウドの体が蒼く覆われ、燃え上がるように力を放出する

ヒュ、パシ、斬ッ！！ゴ、ォウ！斬！！ヒュゴ、斬！！斬斬斬斬！
！！！

「おおおおおおおおお！！！！！」

クラウドが次々と周りの剣を掴み、繰り返し繰り返し、何度も二人
を切り刻む！！

超究武神覇斬　ｖｅｒ．ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

その締めくくりに、十五天帝と合体剣を掴み、二人を切り刻まんと
上空から突っ込んでいく！！

「舐めるなぁ！！！」

クラウドが向かってくると、「奴」が身体を起こす
しかしクラウドはさらなる力を解放する!!

「オレは・・・漆黒の翼人!!この翼の司る願いは・・・」

「消えろォ!!翼人!!!滅び去れぇ!!!」

「奴」がクラウドに赤銅に燃える豪火球を放つ
それは巨大だった。ざっと半径五メートルはあるだろうか
それにクラウドが突入する

そして爆発した
「奴」の口元がニヤリと歪み、次の瞬間、それは丸く開かれた

「な!?」

爆炎と爆風の中から蒼いオーラに身体を包み、赤い光の粒子に囲まれてクラウドがさっきと変らぬ姿で現れた

「あらゆる運命に立ち向かい、それを打ち破る、勇気だ!!!」

ズッ、パアァ!!!

「奴」に十五天帝が、セフィロスに合体剣が突き刺さり、それを手放しクラウドが先に着地する

そして突き刺さった二本はそこから弾け、綺麗な円形にばらけた。

そしてクラウドと蒔風を中心に、ストトトッ、と落ち、突き刺さる

クラウドと蒔風がセフィロスと「奴」を見上げる

「ぐ・・クラウド・・・お前は・・いずれ・・・」

「・・・そうはならないさ」

クラウドがセフィロスにそう言うと、セフィロスは黒い霧を噴出し消え、あとにはカダージュが残される。

―ありがとう、兄さん―

そういって、カダージュも消える

ライフストリームの輝きとなって

「こ・・・の・・・よかったな、蒔風。せいぜい仲間ごっこを楽しんどけ」

「オレは「脇役」だとかを悪く言うとつもりはない。だが、てめえ

だけには言わせてもらうぞ。いい気になるなよ蒔風(わきやく)。てめえは一生かかってもオレ(しゅじんこう)にはなれない」

「必ずなってみせる！！オレはお前(オレ)を超える！！！！」

「やってみろ。楽しみにしてるさ」

ボッシュ！！

そして「奴」も消え去っていった

いつの間にか空から暗雲は消え去り、日の光が射してきていた

――――――

「すまないな。だが、助かる」

「気にすんな。翼人の仲間が増えるのはうれしい」

「これも・・・オレの力か」

「戦士タイプの翼人だからな」

「戦士？」

「ああ・・・オレが勝手に分けてるだけだよ。「戦士」は攻撃、「賢者」は防御、「聖人」は治癒を、それぞれとくいとした者のことにしているんだ。分類ってすると楽だろ？」

「そ・・・そうか」

「この世界はもう大丈夫だな」

「任せてくれ。もう、大丈夫だから」

「ではな・・・漆黒の翼人。また会えたら」

蒔風が手を出す

その手を握り返すクラウド

「ああ。お前も、自分に負けるなよ」

「今まで勝ってきたんだ。これからも、な」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　ＶＩＩ］

蒔風が去る

次の世界に旅立った

――――――

ＦＦ７　～勇気の翼・漆黒の翼人～（後書き）

アリス「ついに判明「奴」の正体！！」

「奴」

本名：マイカゼシュン

武器：魔導八天

魔導八天は十五天帝と対となるもの
三本の「獄」「怪」「焔」の召喚の剣と五本の「鬼人」「魔人」「獣人」「廃人」「天人」の剣で構成される
「奴」の呼び掛けに応じ現れるだけなので鞘はない
すべてが西洋剣の形であり、組み立てると見惚れるような大きな美しい西洋剣になる

彼は出身世界の構成を見抜き、その世界の主人公を殺し、取り込んだその瞬間に「マイカゼシュン」から外れ、「奴」となった
しかし、本質的にはマイカゼシュンのままである（多少のゆがみがあるが）

使役獣はケルベロス、迦桜羅、サラマンダー

剣や能力、召喚獣の数は蒔風より少ないが、パワーにおいて上回り、幾度も窮地に追いやる

ちなみに元の世界では、蒔風となんら変わらない性格だったが、世界に触れ、壊れた

ア「これが「奴」。蒔風の敵」

だから蒔風は「奴」の敵として選ばれたのです
「奴」が最初に来た世界が「蒔風の世界」だったのも、偶然ではなかったのかもしれません

【ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　ＶＩＩ】

構成：”フォルス”６０％
　”ＬＯＮＤ”４０％

最主要人物：クラウド・ストライフ

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＷＥＰＯＮ～：散った翼人の力をクラウドに

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：合体剣と十五天帝による超究武神覇斬　ｖｅｒ．ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

ア「そういえば、ダージュオブケルベロスは出すんですか？」

すみません
やったことないので出しようがないのです

ア「本当にそれしかやってなかったんですね・・・」

《漆黒の翼人》

所有者：クラウド・ストライフ

翼色：漆黒

想い：勇気

タイプ：戦士

今回書くこと多いなー

ア「結構明かされましたからね」

この世界でこうやってバラスのはこの小説を考えた時から決まっていました

しかし蒔風の回る世界はまだまだあります
これからも「奴」は立ちはだかるでしょうね

ア「「奴」の表記はどうするんですか？」

今まで通りに、「奴」で

このことを知っているのはクラウドだけで、これからの世界で説明する時も言いません

ア「先の後書きで言ったことだけですか」

だけになります
これくらいかな?

わからないことは感想でいくらでも聞いてくださいじゃあ

ア「次回は久々に番外編!!!」

正直忘れてました

ア「長かったなのははカットする予定のようです」

本当にすみません
それ以外もカットするかも・・・

ではまた次回

蒔風「ん?後書き?出れなくたっていいんだもん!!」

（タイミング良く）十万アクセス＆一万二千ユニーク突破記念　～「奴」の座談会～

祝☆１０万アクセス突破記念ンンンンンンンンンン！！！！！

あとユニークも1万2千超えましたぁ！！！

「奴」
「なんかタイミング良すぎじゃね？オレの正体バレタばっかで」

神はいた
そういうことで（笑）

「奴」
「それにしてもあまり重く書かなかったような気が・・・オレの正体もクラウドの翼人化にかき消された感が・・・」

やっぱりお前を「蒔風」としてより、「もう一つの蒔風の可能性」として見てもらいたかったからな
あくまで「別人」、だが「同じ」ということにしたかった

「奴」
「だから呼称も「奴」のままか」

そうだね

忘れがちだけどこれもまた蒔風なんだ～～、ッて感じでお願いします

「奴」
「全開はボウリング場だったのに、また普通に戻ったな」

前回で気づきました
作者にはああやって書くのは無理だ

《「奴」の考案話》

実際最初にはこの話もただ作者が「いろんな世界回りたいな～」
という妄想を考えたところから始まりました。

「奴」
「最初はただ「この世界に作者がいたらこうしてやるのに」って考
えだったんだよな？」

そう。高校生の時にそんなこと考えてましたね～

でも、作者はクロスオーバーが大ッ好きなのです

仮面ライダーが集結する「ディケイド」が好きだ
歴代ＦＦ主人公で戦う「ディシディア」が好きだ
様々なディ○ニーの世界に行く「キング○ムハーツ」が好きだ
アーネンエルベで「ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ」キャラが揃う時には興奮
が止まらない
スーパーマンとバットマンが並び立つだけで全身の毛だ逆立つようだ
そんなキャラクターたちが交差していくのを見ていると心臓が止ま
りそうになる！！

だから！！いろいろな世界を巡る話にシフトし、その過程で生まれ
たのが「奴」です

世界をめぐるには理由が必要です
そのために「奴」を考えました

「奴」の目的として、「世界を食らう」ことに設定し、そこからはトントン拍子に

「奴」
「でもその時はオレの正体なんか決まってなかったんだろ？」

ですです

候補はたくさんありました
が、最終的にはこうなりましたね

当初はなんかありきたりすぎてやめようかとも思いました

ですが、「奴」が「蒔風」だと考えていくと物語が進む進む

「奴」
「それでこの物語の最後まで考えついちゃったんだよな」

ええ
もうこの頭の中に最終回までの大まかなストーリーはあります

最終回の話なんかもう繊細に駆けますよ

「奴」
「でもまだ途中の話が」

なんですよね～
蒔風が巡る世界はあと２５個近くあります

「奴」
「そんなにか！？オレの正体バラすの早かったんじゃ？」

もう後悔しても遅い

しかも途中途中の世界では思いっきり長くいる世界もありますし

ってかあれ？お前の考察から離れてない？
お前の誕生の話の予定なのに

「奴」
「そうだったな」

でももうよくね？

「奴」
「おい！！」

《これからの世界》

さて、上記のように蒔風のめぐる世界はまだまだありますが・・・

「奴」
「が？」

正直、出そうかどうか迷ってる世界があります

「こんなマイナーな世界わからないんじゃないか？」って

「奴」
「堂々と仮面ライダーのせかい出してよく言えるな」

あれは私の趣味

それでで、です
最初には

空を飛ぶ、三つの方法
真剣で私に恋しなさい
緋弾のアリア
これはゾンビですか？
狂乱家族日記
１１ｅｙｅｓ

も考えてました

「奴」
「でも、知らない人がいるかもってことで？」

はい・・・

後これ以上世界を増やすのも嫌でしたし

「奴」
「なぜ？」

だって最終回が遠のく

「奴」
「まあ、今までもペースでやったら・・・かなり先だからな」

だからもし、これらの世界での蒔風の活躍が読みたい！！という方がいらっしゃいましたら

「奴」
「たら？」

感想でリクエストしてください

一作品に5人以上集まったら書きます

「奴」
「わーお、あわよくば感想人員増やそうとしてるよこいつ」

黙れうるさい

《FF7の修正点》

ここで大きな訂正の報告をします

「奴」
「どこだ？」

「FF7の世界」の最初の話

蒔風が降り立った丘なんですけど

「奴」
「バスターソードの刺さってた？」

はい
しかしわたくし、書きながらコンプリート版の方を見たんですよ

「奴」
「通常の方しか見てなかったのか」

はい

それでコンプリートを見直したら、大変なことに

あのザックスのバスターソード、教会に移されてるじゃないですか
！！！！！

「奴」
「わ～～お。やっちまったなぁ！！」

だから大急ぎで修正しました

「奴」
「だから最後に教会にバスターソードがあったんだな」

はい
いやぁ焦った焦った

だって最後のシーンで丘に剣がなくて、教会にあるんだもの
あったのは綺麗な花

「奴」
「でも大きく話は変えられないから」

まあ、そこはうまく変えました
気になった方は読み見直してみてはどうでしょうか
と言っても、本当に最初の部分だけですが

《感謝感激涙号泣》

さてさて、このストーリー「世界をめぐる、銀白の翼」もここまで来てしまいました

「奴」
「途中なのはが入って番外編忘れたりしたけどな」

そこ、うるさい
大丈夫!!次に書くから!!

「奴」
「番外編だとオレ出れないからな～～」

やろうとすればできるよ?

「奴」
「マジでか!?」

うん
でもそれよりも

皆さまのアクセス一つ一つが十万アクセス
そしてユニーク一万二千越えとなりました

正直ここまで多くの方に読んでいただけるとは思ってもみませんでした

「奴」
「最初の方なんか読みなおすと酷いもんだ」

いまだに心配です
最初の二、三話読んで「イマイチだな」って切られたらどうしようとか

でも、この作品につきあっていただいた
いつもチェックして読んでくれている多くの読者の皆さま
そしてお気に入り登録してくれたユーザー様

誠にありがとうございます

「奴」
「お、もう自分の作品を駄文って言わないのな」

いや、今でもまだまだだって思ってるよ？
こんなものより優れた作品はたくさんある

でも、この作品を読んでくれてる人がいるのに

「この作品は駄文です」
なんていうのは失礼だ。

だから、駄文なんて言いません

「奴」
「心の中ではそうじゃないんだな」

そうでっす！！

いつかみなさんの作品も読んでみたいです

作者は自分の作品をお気に入り登録してくれている方を捜索しております

必ず見つけ出してやるからな！！！

「奴」
「お前感謝ってどういうものか知ってるか？」

やだ・・
恥ずかしいわ

「奴」
「お前の方が恥ずかしいわ」

ではこの辺で

次は十五万アクセスかなぁ・・・・

ユニーク一万五千の方が早いかな?

終劇

番外編　～さまざまな夜の過ごし方～

【バカとテストと召喚獣】～戦争前夜～

蒔風が召喚獣を預けた夜のお話

《坂本雄二の場合》

「なあ、玄武とやら」

「なんだ？雄二殿。なにか用でもあるのかね？」

雄二がベッドに寝そべって姿の見えない玄武に話しかけると、宙に小獣状態の玄武が現れた

「いや・・・明日試召戦争だろ？」

「うむ、確かにそうだの」

「戦ってる間に点数削られたら補充のテスト受けんだけどよ」

「らしいの」

「答え教えてくんね？」

「ダメ」

「チッ、ケチ臭い」

「ほぅ・・・それは我にケンカを売っとるのかツンツンクソガキ」

「そう聞こえたかドンガメ爺」

「ジジィというな！我は人型なら主らと変わらんのだぞ！！」

「でもそんなんじゃなぁ。人型になってみてくれよ」

「今は無理であるの。普通の召喚なら大丈夫だが、この状態では」

「やっぱ爺じゃん？」

「後悔させてやるわ！！！」

玄武が雄二に飛び掛かる

雄二が叩き落とそうと手刀で迎え撃つが、甲羅に当たり、夜の坂本家に雄二の悲鳴が響いた

《木下秀吉の場合》

「のう、白虎・・・じゃったかの？」

「なんだい？秀吉ー。あははは！この漫画面白い」

秀吉が回転式の椅子に座り、床でゴロゴロしながら肉球で器用に漫画のページをめくる小獣状態の白虎に話しかける

「おぬし・・・勝手に出てきてよいのか？」

「うん？いやまぁ、用は秀吉を護れればいいわけだし、ここで誰かに見られるわけでもないから、いいんじゃない？」

「舜に怒られんのかの？」

「多分ばれたらなんか言われるだろうけど、舜はそんなことで怒んないよ」

「そうなのか？」

「うん。形式的に言うだけさ。舜だって多分漫画があれば読んでるよ」

「秀吉～、いる？（ガチャ）」

その時、秀吉の双子の姉、優子がノックも無しに入ってきた

白虎は咄嗟にぬいぐるみのように四肢を伸ばしコロン、と転がった

「姉上・・・せめてノックはしてもらえんか？」

秀吉は内心ビクゥ！としていたが、伊達に演劇バカではない。
一切表情にはでてなかった。

「いいじゃないよ・・・ん？なによこのぬいぐるみ。結構かわいいわね。どうしたのよ」

「それは男子から貰ったのじゃ」

秀吉は間違ったことは言ってない。
しかし、悲しいかな。
言葉は時に歪んで伝わるものだ。

「あんたぁ・・・また男子からこんなプレゼント貰ったのね!?」

「お、落ち着くのじゃ姉上!決してそのようなものでは」

「黙りなさい!女の私より男のあんたが貰ってるなんてぇ!!（ギリギリギリギリ）これは没収!」

（秀吉ぃ!た、助けてぇ・・・・）

白虎の目がそう訴えていたが秀吉は

（軽はずみで姿を現すからじゃ）

といった視線を投げた

白虎の目はウルウルし、身体がプルプルしているが、優子は気づかない。
そのまま連れ出され、深夜になって優子が寝た後に涙目になり精神ボロボロで白虎が帰ってきたのは言うまでもない

《島田美波の場合》

「なんだ?オメー明久のこと好きなのか?」

「な!?なに言ってんのよ!!（ゴウッ!）」

「え?な、ハンッ（ボキャッ!）ギャアァァァァ!」

天馬に美波の鉄拳が突き刺さる
天馬は身悶えて転がる

「ごぉぉぉぉ・・・・これが恋する乙女の強さ、か・・・・・」

「もう!!ばばば、バカなこと言うからよ!!」

「だが、このままだと瑞樹に取られんじゃねェの?」

「!!たしかに・・・瑞樹は頭もいいし、胸も大きいし・・・」

「お前が勝ってんのは腕力だけだな」

「うっさいわよ!!」

「だが大丈夫さ。世の中にはお前みたいな壁が好きな奴だってぎゃあああああ!!!!!!」

これは特に言うことはない
ただの天馬の自滅である

《姫路瑞樹の場合》

「なるほど・・・明久君はそこまでに鈍感なのですか」

「そうなんです！！美波ちゃんもわたしもいろいろアプローチしてるのに！！」

瑞樹が朱雀に愚痴っていた
内容は明久の鈍感ぶりにだ

「しかし、はっきりと「好きだ」と言えば彼だって」

「ダメなんですよ・・・明久君はそれくらいじゃ」

「だったらもうこれは押し倒すしかないですね」

「お、おしっ！？」

「貴女のその胸は何のためについてるのですか？さあ！！レッツエンジョイ！！ですよ！」

「朱雀さん・・・もっと大人しめな人（？）かと思ってたのに・・・」

「いえいえ、これはこれで正論ですよ？事実彼が言葉で気づかないなら行動で示すしかないじゃないですか」

「そうでしょうか・・・」

「そのとおりです。そうですね・・・押し倒すはなくとも、彼にお弁当を持っていっては？」

「それは前にやったのですが・・・もういいといわれてしまいまし

た・・・」

「ほう・・・して瑞樹さん。料理の腕は？」

「あ、はい！！この間も新しい調理道具を買いに」

「熱心ですね」

「ドラッグストアとホームセンターに」

「姫路さん、あなたは料理をしない方がいい」

「な、なんでですかぁ！？」

朱雀の賢明な判断によって、この世界の主人公は救われた

《ムッツリーニの場合》

「なぜオレだけ本名じゃないんだ」

「なにを言っているんだ？」

「いや・・・なんでもない」

「それよりも話の続きだ。お前なんだこのエロ本、エロ画像の数は」

「それは・・・」

「巨乳巨乳巨乳！！お前は申し訳ないと思ったことはないのか？世

の中の貧乳の冒涜だぞ！！買うならどちらもバランスよく買え！！」

「オレは自分の好みに合わせて・・・」

「ふむ、確かにな。これらはそうあるべきかもしれん。だが、貴様は一度でも貧乳のこういったものを見たことがあるのか！？」

「あるが・・・そこまでは・・・」

「それがおかしい。いや、なにもわたしは貧乳が好きだと言ってるんじゃない。ただよく見もせずにただ「巨乳巨乳」言ってる貴様に腹が立ったのだ！」

「それは貧乳が好きなんじゃ・・・」

「違う。いいか？たとえばある男がおにぎりの「ねぎとろ」を食べた時、これが最高にうまいコンビニおにぎりだ、と周りに言うかもしれん」

「いいんじゃ？」

「いや。他のおにぎりも喰わずにそんなこと言えるのか？他の見捨てられたおにぎりはどうするのだ！！」かわいそうではないか！！

（ああ。こいつバカだ）

ムッツリーニのひそかな感想なぞ知らずに、麒麟がまくしたてる

「だから貴様も、様々なものを知るべきなのだ。我が主は凄いぞ。すべてを理解するために狂気と理性を・・・・」

そうして夜が更けていく

胸のことが話題になっているのに、全く興奮できなかったムッツリーニであった

《吉井明久の場合》

「・・・・・・」

「・・・・・ねえ」

「？・・・なんでしょう明久殿？」

「なんで黙ってるの？」

「・・・護衛が我が任務・・・ああ、決して明久殿と話すのが嫌いだとかそういうのではないので」

「そう」

「はい・・・」

青龍と明久の間になんとも言えない空気が漂う

「・・・時に明久殿」

「なんだい？」

「この家の冷蔵庫にはまともな食品がなかったように見えましたが？」

「ああ・・少し前までは姉さんがいたんだけどね。また海外に行っちゃったから、食生活が前に戻ったのさ」

「・・・お話に聞いたあの塩と水だけという？」

「うん」

「・・・ここにお金があるので好きなものでも買ってきてください」

「え？」

「そんな状態では明日の戦争には勝ち残れません。さ、コンビニならまだ空いてます。何かしっかりとした食べものを買ってくるのです」

「大丈夫なの？このお金」

「・・・主はああ見えて必要なお金は持ってます。この程度では何ともありませんよ」

「そう・・・青龍はなんかいる？」

「私・・・ですか。では、プリンを」

「へぁ？」

「ああ、もしなければシュークリームやエクレアでもいいですよ」

「そ、そう・・・（甘いもの好きなんだ）」

ーーーー少しして－－－－

「買ってきたよー」

「おお。ではプリンを」

「え？」

「いただきま・・・なんですかこれは」

「プリンだけど・・・」

「プッチンのできないプリンなど買ってきてあなたは何を考えているのですか」

「え？」

「何か小皿を。あと、爪楊枝もお願いしたいところですね」

「それならキッチンの棚に」

「（ヒュン！）あった・・・これでプッチンーーー！！！」

（おかしな奴だなぁ）

こうして夜が更けていく

明日戦争なのによくのほほんとしてるなこいつら

【とある魔術の禁書目録】～これよく食うな～

上条の部屋から寮の部屋に向かい、そこでインデックスに料理をふるまう蒔風

「ごっはん！ごっはん～～～！！」

「ご飯と言っても他の世界の得体のしれないものだぞ？いいのか？」

「大丈夫なんだよ！！このいいにおい、たまんないよ！！」

「では・・・どうぞ！！！」

そこにはインデックスの見たことのないフルコースが並んでいた

「おお～～～～！！！！」

「さ、ご賞味あれ」

「いっただっきま～～～す！！！」

蒔風の頬をツツッ、と汗が垂れる

「（バクバクバクバク、ゴクン）うん！！とうまはこんなにたくさん作ってくれないんだよ。全部食べてもいいの！？」

どうやらインデックスという少女の判断は「質より量」のようだ

「構わん構わん」

「ようし。もう容赦しないんだよ！！！」

そしてインデックスが食べる食べる食べる
あっという間に半分ほどを食べあげて

「こっちはとうまにとっとかないとね」

そう言って半分を残しておくインデックス

「いいのか？」

「うん。とうまだって今病院で頑張って治してるんだしね」

「にしてはなんかいろいろ噛みつこうとしたりしてたが・・・心配とかして大変だろ？」

「心配？う～～ん。とうまの怪我は心配だけど、とうま自身に関し

ては心配してないよ」

「??」

「だってとうまは絶対に帰ってきてくれるもん。あいさの時も、短髪のときも、今回も。怪我をして、ボロボロになっても、とうまは絶対帰ってきてくれるんだよ」

「そっか・・それはいいことだ」

「うん!!・・・あれ?なんだか・・・・!!!!」

「どうした?」

インデックスの首がギギギと回る

「・・・・・・・・（パクパクパク）」

口が金魚みたいにパクパクしてる

そして倒れた

「・・・やっぱ大丈夫だったわけじゃないんだなこれ」

そう言って今回の料理の入っていた容器を見る蒔風

＜シャ○先生監修料理教室フルコースセット＞

そう書いてあった

「嫌な予感はしてたんだ・・・でもすごいな。ここまで大丈夫だっ

たとは・・・・」

蒔風が残ったフルコースを見てつぶやいた

残り半分は綺麗にラップして冷蔵庫にしまった

インデックスは昨晩何があったのか忘れていた。
でもなぜか笑顔の神裂と、気恥ずかしそうな顔をしたステイルという魔術師が夢に出てきたらしい

後日
上条がそれを食べようと冷蔵庫の中に右手をのばすと、バキン！と言って料理が消えたそうだ

人外の者でも使ってたのか・・・・
実に恐ろしい料理であった

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？？

番外編　～さまざまな夜の過ごし方～（後書き）

いやはや久しぶりに短編書いた

アリス「ほとんど「バカテス」でしたけどね」

なのははもともと長いし、アギトとＦＦ７はすぐに戦いに行ってしまったから短編の隙間ないし・・・

ア「ま、仕方ないですかね」

そう思っていただけるとこれ幸いです

さて、今回インデックスさんに食べてもらったあのフルコースまたまた剣　流星さんから頂いた物です

ア「まだ他の人からもらったものが一つあるでしょうに」

なかなか出せるところが見つからないんだよう！！

ア「がんばって作れ」

はい

ア「次回、本編」

出会いまするは元・カケラの魔女と、その地の守り神

ア「そして陽気な仲間達～～！！」

ではまた次回

嘘だッッッ！！

ひぐらしのなく頃に　～事話し編～

蒔風が降り立ったのはどこかの神社の裏の展望台みたいな場所だ。
眼下には村が広がっている

「雛見沢村。人口２０００人の小さな村、か」

蒔風が展望台を離れ、神社の方に向かい、正面の長い階段を下りていく。

階段を下りて行っていると、子供達の集団が走ってきていた
とても元気だ
下は小学生低学年、上は中学生ぐらいかの少年少女たち
とはいっても男子は一人
他はみんな女の子だ

この暑い中、長い階段を一気に駆け上がっていく

子供達とすれ違い、蒔風がなにかを感じた
そして振り返る

他のみんなは一番上まで駆け上がっていた

しかし、薄紫色の髪をした女の子がこちらを見下ろしていた。

それより少し上の方で、同い年かの濃い紫色の髪の少女が心配そう

に少女を見ていた

しばらくお互いに視線を向け合っていると、上から声が聞こえた

「羽入ーーー！どったの？・・・誰？この人。雛見沢の人じゃないね」

碧色の髪をポニーテールにしている年長者らしい少女が階段を降りてきた。

この雛見沢、人との関わりがものすごく濃いのだ

だから外から来た人は一発で分かる

「あぅ。魅音、ボクは少しこの人に用事があるのですよ。梨花、来て下さい」

「え？なによ羽入？そんなに引っ張らないでよ」

「あなたも、いいですね？」

「・・・ありがたい限りだ」

そうして、羽入、梨花と呼ばれた少女と一緒に蒔風が神社裏の倉庫周辺に向かった

ーーー

「お前も、神がヒトの世界になにか用か？」

「え？え？ど、どういうことなのよ羽入！他の世界って？なんであんたの正体が」

「で、この子が最主要人物か」

「どういうことなのですか？」

「流石に知らないか。実は」

「あんたたち！私を無視するなー！！」

梨花が両手を振り上げ叫んだ。
黙り込む二人

「・・・でだ、この梨花ちゃんの命がかくかくしかじか」

「それは本当なのですか！？」

「聞けぇ！！」

何事もなかったかのように再び話しはじめた二人に梨花が本気でキレたため、まず羽入が蒔風にこの世界のことを話し、それから蒔風が説明することにした。

――

この少女、古手梨花は普通の少女ではない
これまで『様々な雛見沢』、つまりはパラレルワールドで幾度も幾度も殺されてきた少女で、殺されるたびに時間を巻き戻り、その死に抗ってきた。
昭和５８年６月に殺される運命に抗い続けて時間を幾度も巻き戻り百年の時を過ごしたのだ。
それをついに今回打ち破り、運命の６月を越え、今にいたっている

そして時間を巻き戻し続けたこの地の神、「オヤシロさま」こと古手羽入。
今は人としての人生を楽しんでいる。

その説明を聞いてから蒔風が口を開く

「ふ～む。多重世界ではないようだな」

「多重世界ってなんなのですか？」

いつもの調子に戻って話した梨花が蒔風に聞く

「一つの世界がいくつもの世界を内包してるのを「多重世界」ってんだが、ここは違うみたいなんだよ」

「あぅ？ボク達は確かに多くの世界を・・・」

「それは可能性の世界だろ？そうだなぁ・・・多重世界ってのは、一つの世界の中にＡとＢって別の世界がある場合だ」

「みー」「あぅあぅ」

「君達の場合、AとA'の・・・ようは別の可能性の世界との行き来に近い。だからここは多重世界ではないんだよ」

「なるほどなのです」

「あぅ。それで、舜がこの世界に来た理由はなんなのですか？」

それに蒔風が答える

「っとま、こんなとこかな」

「梨花の命を・・・なんでまたそんなことに」

「「奴」に聞いてくれ。あと、あれはいいのか？」

「あれ？とはなんなのですか？」

そう言ってまいかぜがあごをクイッと後ろの方に向けるするとそちらからこそこそと声が聞こえた

（ばれちゃった？）

（もう！！圭ちゃんのバカ！）

（オレじゃねえ！沙都子押すな！！）

（見えないんですのよ！！）

（わっわっ、お、押さないで～～）

ドダッ！！！

先ほどの少女＋少年が物陰から転がってきた
こういうとき男子が一番下につぶされるのはもはやデフォなのだろうか

「いたた・・・あんた！！梨花ちゃんが殺されるってどういうこと！？」

「また「東京」とかいう連中ですの！？」

「東京」とはかつて梨花の命を狙った組織の名だ。
この組織は戦後日本政治界重鎮たちの作った組織だ
しかしその重鎮たちが邪魔になった若い世代が、重鎮たちを追いやろうとし、彼らの着手している計画を潰すことを考えた
その計画とはここ雛見沢における「雛見沢症候群」と呼ばれる病気の解明だ

この症候群は雛見沢から離れると果てしない低確率で発症するもので、異常な疑心暗鬼や被害妄想、さらには幻覚を見るなどの症状を起こす
近年では全くと言っていいほど収まっているようだが、過度なストレスを受けることで高いレベルでの発症をしてしまうのだ

古手梨花は「女王感染者」と言われる存在で、彼女が死ぬと全村民

が一斉発症し、この世の地獄絵図となるらしい
そんなことが起きれば重鎮たちは責任を取って消える、という計画で梨花を殺そうとしたのだ

「あーーー！！！までまでまで！！さっきの話聞いてたんか？」

「は、はい・・・あの、私たちやっぱり梨花ちゃんたちが心配で、途中から聞いてしまって」

「どっから？」

「えっと、あなたが説明を始めたあたりからです」

「さいで。ま、そういうことだ。聞いてたんなら話が早い。オレ、蒔風舜な」

「オレは前原圭一と言います。それで・・」

「敬語禁止。普通に話してくれ。むずかゆくなる」

「えっと・・・じゃあ、私は竜宮レナです！！これくらいならいいですよね？」

「ま、そんくらい砕けてくれりゃあ」

「私は園崎魅音（そのざきみおん）。この部活の部長だよ」

「わたくしは北条沙都子ですわ。それで、本当に梨花が？」

「マジマジ。ちょっと厄介な奴がねーー」

そう手をヒラヒラと振りながらなんでもないように言う蒔風

（なんだ？このメンバー、すげぇぞ？最主要人物候補が沢山いやがる？あれ？魅音だけ違う？）

そんなことを考えていてもしょうがないと
蒔風が口を開く

「で？みんなは何をしようとしてたんだい？」

「裏山でサバイバル鬼ごっこですわ！！」

「サバイバル鬼ごっこ？」

「沙都子ちゃんの仕掛けたトラップがこの裏山にたっくさんあるんです」

「そこで鬼ごっこをするんだ。トラップにかかったり、鬼に捕まったりしたら鬼の仲間になって追いかけるんだ」

「なるほど・・・ようは「全滅鬼」ってやつか」

「え？私たちは「ゾンビ鬼」って言ってますけど」

「そんなことより！舜さん、その「奴」ってのはいつ来るんだい？」

魅音が一切ふざけのない、本気の視線で蒔風を見る

「さすがのリーダーだな・・・その目つきお兄さん怖いわ!!」

蒔風がふざけたように言う

それにちょっとした驚きを感じながら、魅音が先を言おうとする

「いいから・・・」

「ごめんごめん。ま、それに関しては大丈夫だ。まだ「奴」は動かないさ。そんなことより!!!」

蒔風がうきうきしたような眼をして叫んだ

「遊ぶんだろ?オレも入れてくれ!!そういうの大好きなんだ!!」

『・・・はぁ?』

その場の全員が一斉に声をあげた

これまでの流れから想像もできないような明るい口調で言い出したのだから

その視線にさらされ、蒔風が焦る

「な、なんだよう。その眼は・・・いいだろぉ!オレはいつまでも少年ハートなんだ!!遊ぶの大好きでもいいじゃないか!!」

「いや・・なんか今までのふいんきと違って」

「おっといけねぇな圭一。「ふいんき」じゃねぇ「ふんいき」だ」

「そうなの？」

「そうだよ。これ、テストにでるからね！！（ズビシ！）」

蒔風が意味のわからないテンションになってきた

夏か。夏のせいなのか

「どうする？魅音」

「う～～ん。我が部に入るには雛見沢在住じゃないといけないんだけどなぁ～～」

「え～～～？そんなこと言わないでよ～～～～」

蒔風が子供のように駄々をこねるときの声を出す

「あんたホントに大人か！？」

「童心を忘れないだけさ！！！」

「・・・ほら魅音。勉強しないで遊んでるとこういう大人になるんだ。受験がんばれよ？」

「説得力あるね・・・」

圭一が蒔風の方を見ながら魅音に言った

なぜか蒔風は誇らしげだ

結局蒔風はこの部活に参加させてもらえることになった

そして場所は移り裏山

ここでサバイバル鬼ごっこが始まる

『ジャンケン、ポン！！！！』

最初にジャンケンをして鬼を決める

負けたのは・・・

「沙都子か・・・こりゃ恐ろしくなったね」

「そんなに凄いのか？トラップ」

「ま、まあね」

「を～～ほっほっほっほ！！ま、鬼になっても皆さんを捕まえられれば私の一人勝ち！！ヨッユ～～ですわぁ！！！」

「確かにすごそうだ（汗）・・・・」

「じゃあ百を「待て沙都子」なんですの圭一さん」

「今度もまた問題にしよう。いいか？」

「むっ、もう騙されませんのよ!!」

「よし!!じゃあ!!「山田さんちにリンゴを23個持っていき、山田さんはお返しに22個の梨をお返ししました」ええ!?舜さん!?」

圭一が問題を出そうとしたら蒔風が横からいきなり問題を言い出した
地面に数字を書きながら沙都子が耳を傾ける

「いいの?魅ぃちゃん」

「ここは彼が我が部に対抗しうるかどうかを見てみようじゃないか」

レナと魅音が楽しそうに話す
魅音の口はニッシッシ、と笑っていた

「そこで二人三脚をしていた息子の幸助君が梨を4個食べてしまいました」

「ふむふむ・・・」

「さて、この問題で私は「に」と何回言ったでしょう?」

「なっ!?」

「そら逃げろ!!!」

蒔風が走り、大笑いしながら他のメンバーも走り出す

「えっと・・・一回、二回・・・問題が思い出せませんわぁ~~~

！！！！」

後ろの方で沙都子の叫びが聞こえる

「あっひゃっひゃっひゃ！！！あんたサイコーだね！！！」

「同感！！沙都子の悔しそうな顔がたまんね～～！！！」

「はぅ～～！！！泣き顔の沙都子ちゃんかぁいいよ～～。でも部活中だから、罰ゲームでお持ち帰りぃ！！」

そんな中梨花と羽入は走りながらもポカンと眺めていた

「凄いわ・・・すぐにみんなの輪に打ち解けた・・・」

「あぅあぅあぅ。それだけいい人、ということなのかもしれませんのです。あぅ！！」

こうして始まった部活

勝者は誰だ！？

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ひぐらしのなく頃に　～事話し編～（後書き）

アリス「「ひぐらし」の世界です！！」

いや～～
そういえばああいう鬼ごっこて地方ごとに違うよね
作者の方は蒔風と同じですけど

ア「にしてもいきなり部活ですか」

それがひぐらしの醍醐味

ア「ほかの最主要人物候補とは？」

圭一は鬼隠し、綿流し、祟殺しで
レナは罪滅しで
沙都子は原作じゃないけど厄醒しで

主人公でしたから

正直圭一か梨花か、どちらを主人公にするか悩んだんですけど

ア「結局梨花ちゃんに？」

そう
それしかないと思ったね

ア「さいですか。次回、壮絶、鬼ごっこ」

ではまた次回

なら、その運命とやらを俺がブチ壊してやろうじゃねぇか

ひぐらしのなく頃に　～鬼倒し編～

蒔風は現在裏山のなかをプラプラ歩いている

さっきまで一緒にいたメンバーとは、沙都子がついに正解を叫びながら追っかけてきたのでバラけた。

「さってと、どこにいようかな」

蒔風がベストプレイスを探す

こういう場合、若干開けた場所で待つのが蒔風のパターンだ

そうすれば鬼が来たのも察知でき、開けてるから逃げやすい。

いい感じの切り株が蒔風の目の前に現れる

周りも開けているし、調度いいと蒔風はそこに腰を下ろそうと歩を進める

そこでなにがスイッチだったのか、ぶっとい丸太が縄に吊されてブランコのように蒔風に向かってきた

「フンッ！（ゴッ！）」

蒔風が拳でそれを殴り止める

更に蒔風が調度丸太を止めた瞬間にそれを吊っていた木が倒れてきた。

「は？おぅっ！？」

拳を打ち出した直後で体勢が危うかったが、それを廻し蹴りで粉砕する。

そして蹴りきった足が地に着く前に、下から竹槍が突き出してきた。

それらは幸運にも蒔風を突くことはなかったが、あと少しズレていたら、蒔風に尻の穴がもう一つできていただろう

「・・・トラップって、もっと子供じみたもんかと・・・実戦レベルだぞ。これ」

「見ぃつけましたわ！！覚悟してくださいまし！！」

茂みから沙都子が飛び出し、蒔風を捕まえようとしてくる

それをヒラリとかわし、蒔風が再び逃げる

「魅音さん！行きましたわよ！！」

「あいよ、沙都子！！」

その行き先に魅音が現れる。

どうやら木の上にいたらしい。

迫る魅音の手を、うまく手首を払うことで弾き、右に曲がる

「舜さん！」

「お？レナ！」

その先にレナがいた
そちらに駆けながら蒔風が叫んだ

「お前は大丈夫か！？」

「うん！」

レナが笑顔で答える

だったら合流しようと蒔風がそちらに行こうとして
ゾワッ！！！！とした寒気がした

蒔風がとっさに身を翻してレナを避ける

「・・・レナさん？嘘言わないで正直に言ってみよう。鬼かい？」

「・・・あっはははははは！！！！！」

「畜生、やっぱりか！！（ダッ）」

蒔風が逃げる
途中に様々なトラップがあったがそれを次々と避ける
その様子を簡単に紹介しよう

落ちるタライ↓アッパー
足元をすくう縄↓引っ掛かったがそのまま引きちぎる

転がる岩→わずかな隙間を縫ってかわし、最後の一個に玉乗りする
落とし穴→乗ってた岩を落として回避
飛んでくる竹槍→木の棒で棒術を駆使して弾く
転んでみー泣いてる梨花ちゃん→鬼だったので手に触れないよ
うに包帯巻き付けて魅音にパス

こんなそんなで何気に余裕の蒔風
ちなみに魅音は実は鬼ではなかったらしく、梨花をキャッチしてア
ウトになった

「みんな！！あと二人だ。絶対にぶっ潰すよ！！」

「「「「おーーーーー！！！（です）（なのです）（ですわよ）」」
」」

「ん？二人？おわっ！！」

蒔風が魅音の言葉に不思議がってると裾を掴まれて茂みに引っ張り
込まれた

そこには縮こまって隠れている圭一がいた。

「圭一も生き残ってたのか」

「舜さんやりますね。沙都子のトラップは特殊部隊だって撃退した
代物なのに」

「そんなんじゃ駄目さ。オレを潰したきゃ殺る気で来ないと」

いや、結構あのトラップも死亡率高いと思う

「そういえば時間制限は？」

「えっと・・・大体夕暮れになってからです」

「まだあるな・・・よし、鬼の殲滅にかかるか」

「え？」

「手伝ってくれ。さすがにここの地形とかはまだわからないからね」

「は、はい」

蒔風が動き出す

その口はギチギチと笑っていた

ーーー

ないでくださいましー！」

そう言って沙都子と魅音は振り返った
しかしそこには

「あれ？羽入は？」

羽入がいなかった
レナと梨花も、さっきまではいたのに、という顔をする

そしてガサッとした音がして、そちらの方の茂みを見る。
魅音が茂みをどかしてみると・・・

「こっ、これは！！！」

そこには簀巻きにされた羽入がいた。
顔には紙が貼られており、「うぐぅ」と書かれていた

なにがなんだかわからない一向。
とりあえず体勢を立て直そうとそこから移動しようとするが

「うキャぅ！！な、なんですのー！？」

沙都子が落とし穴にはまり、首から下がすっぽりと埋まってしまった。
まるで生首が転がってるみたいだ。

「どうしたの沙都子！？」

「ト、トラップがいじられてますの！このトラップは一定の場所さ

え踏まなければ作動しないのに・・・やられましたわ・・・」

「沙都子ちゃ・・」

「レナ、ダメ!!助けようとしたらそこを狙われるよ!!」

「で、でも・・・」

「蒔風舜、か・・・伊達に戦ってきてないってわけね・・・くぅ～
～楽しませてくれるじゃん!!」

「助けてくれませんの!?この穴、梨花用に作ったせいかちょっと
胸が苦し」

「（ドカビシ!!!ボン!!!）み、みぃ!!!沙都子が!!!」

「沙都子!?そんな・・・私たちが目を離した一瞬の隙で!?」

「沙都子ちゃんの特性花火を使ってるのがまたヤラシイやり方だね・
・・」

そこには爆破され、アフロになった沙都子がいた。
梨花の表情が「計画通り」な顔になったのは気のせいだろう

「くっ、みんな!背中合わせになって!!!全方位を警戒!!!」

魅音が号令を出す
しかし背中を合わせるのは二人だけ

ガサリ、と上の方から葉が落ちてきた。

そちらを見ると、足を縄で結ばれ、逆さまに吊るされた梨花が

「「ぎゃあぁぁあーーーーーー！！！！」」

その長髪が地面に向かってだらりと下がり、目が半開きになっているのだ。
これはかなりのホラーだ
ちなみにスカートはめくれないように止められていた
腹に紙が貼られていて「人を呪わばなんとやら」と書かれている。

「まずい・・・まずいよ・・・これはまずい！！」

「魅ぃちゃん、どうするの？」

「絶対に気を抜かないで！！！そうしたら最後だよ！！！レナ！！武器の使用を許可するよ。舜さんに常識は通じない！！」

「まさかこっちが狩られる側になるなんて・・・」

そういってレナがどこからか鉈を取り出し構える（この鉈は刃が潰されているので大丈夫です☆）

そしてグルグルと回りながら警戒し続ける二人

五分くらいしただろうか
そこにある男のアクションが入る

「前原圭一！！参上！！！」

圭一である。
そしてその手にはあるものが握られている

「レナ！！見るんだ。これを！！」

圭一がそのあるものを出す
それは、木を星型に掘っただけのものだった

「あはは。圭一君、それだけじゃレナを誘惑できないよ？」

「じゃあ、これでは？」

くるりとそれの反対側を見せる
そこには「これはヒトデなんだよ」と彫られていた

「かぁいい～～～！？おもちかぇり～～～～～！！！！」

「相変わらずれなのかぁいいポイントがわかんねぇ～～～～！！！！」

そう言って逃げていった圭一をレナが追いかける

すぐに茂みで見えなくなったが、おそらくやられただろう

「これは・・・ん？」

そこに紙飛行機が飛んでくる

そこには何は書いてあった

が、それを確認するよりも早く、魅音の意識はなくなった

――――――――――――――――――――――――――――――

「「オレたちの勝ち！！！」」

蒔風と圭一がガッツポーズをする
その前には縄で縛られた女子メンバーたち

「悔しいのです」
「わたくし、止めは他の誰かに・・・」
「沙都子、考えたら負けなのですよ」
「ヒトデさんかぁいいよ～～」
「一生の不覚！！体験入部者に負けるなんて！！！」

と、各々恨み言（？）を言っている

「さてさて、罰ゲームは確か、エンジェルモートでウェイトレスさんだったなぁ！！」

「エンジェルモート？なんだそこ？」

「明日行ってみればわかる！！」

「だったら楽しみにしよう」

そして日が落ちる
みんなの縄をほどき、各々帰宅する

蒔風は例によって情報の通りに森を進んだらテントがあった

「ひさしぶりだな・・・ここ」

ちなみにこの山は沙都子のトラップのない山だから安心できる

とりあえずレトルトに手を伸ばし、カレーを用意する蒔風
途中、トイレに席を立った

そして戻ってきて、さあ食べようか、と思ったらそこにはレトルトがなくなっていた

「・・・なぜだ・・・・ＯＴＬ（ガックシ）」

そのカレーを盗んだ女性は後にこう語っている

「ええ。最初は私の知らないカレーの匂いがしたので行ってみたのです。そしたらそこに「超激辛マグマカレー」と書いてあるではないですか。次の瞬間、私は気づいたらそれを持って自宅にいました。ええ、今では少し後悔しています。まさか自分の服が燃え上がるとは思いませんでした。しかし、カレーの新たなる神秘に気付き、や

はりカレーは素晴らしいと・・・・・（この後四時間にわたってカレーの素晴らしさを語った）

蒔風はもう一つあったので用意し直し、それを食べた

尋常でないほど辛く、服が煤けたが、まあ問題はなかった

to be continued

ひぐらしのなく頃に　～鬼倒し編～（後書き）

今日はもう眠いよ～～

アリス「ほらほら、とりあえず言うべきことは言いましょう」

はい

今回の「超激辛マグマカレー」はいつも感想をいただいているリュウガさんからのいただきものです

ア「ありがとうございました」

じゃ・・・私寝ます。
明日試験だコノヤローー

ア「おやすみなさい。次回、罰ゲーム」

ではまだ次回、Ｚｚｚ

・・・・東京へ帰れ

次の日、蒔風はバイクで圭一の家の前に向かった。
エンジェルモートの場所を知らないので、一緒に行くことにしたのだ。
ちなみに他のメンバーは着替えだとかの準備があるらしいので先に行っているらしい

「あなたが蒔風さんですか。うちの愚息をよろしくお願いします」

圭一の父親が挨拶をしてきたので蒔風も挨拶を交わす。
ちょうど圭一が出てきたので、ヘルメットを渡し雛見沢よりも発展した隣町、興宮に向かう。
長い山道を１０分程下って行く。

「そこの店ですよ」

圭一のナビでエンジェルモートに到着した。
蒔風はバイクを消し、階段を上がって店に入る

エンジェルモートはようはファミレスだ
ただ・・・・

「なんだ・・・この店員さんの衣装は」

「すごいでしょう。これが興宮名物、エンジェルモートです！！」

（まるでメイド喫茶・・・あれ？ここって昭和５８年だよな？）

蒔風がもっと考えようとしたが、蒔風の本能がストップをかけた

「ま、悪くないし、いいか」

「舜さーん、こっちこっち」

圭一が席をとる

蒔風もその向かいに座る

「で、ここで罰ゲームってことは・・・ってか、お店でそんなことやっていいの？」

「この店、魅音のおじさんがやってるんですよ」

園崎家は雛見沢や興宮を含む鹿骨市の全域に影響を持っているいわゆる名士だ。

市会議員と県会議員にも園崎性の人がいるし、街の八百屋から弁護士まで、園崎家の人々がいる

ここもそんな店の一つだ

魅音は実を言うと園崎家次期当主だ。

だからというわけではないが、まあそれなのに融通がきくのだ

「で、あれを？」

あれ、とはさっきから言っている衣装のことだ。

その衣装はほとんどコスプレだ足はほとんど出ていて、胸の上半分は出ていて・・・描写に苦労するコスチュームだしかし言えることは一つ

エロい

「いやぁ・・・いいなぁ・・・眼福眼福」

「萌えって素晴らしいですよね!?」

「萌え?」

「あれ?知りません?萌えって言うのは」

「いや、知っている。知っているが・・・あれが萌え?」

「え、ええ・・・」

「ふぅ～、いいか前原圭一。貴様は萌えとエロをごちゃまぜにしているようだな。矯正してやる!そこになおれ!!」

「は、はい!!」

「確かに、エロと萌えを最近ごちゃまぜ逃げるしているものが多い。しかし諸君、忘れてはいないか。萌えとは、かわいい、愛おしいの延長線上のものであると!確かにエロに萌えを掛け合わせれば更に興奮するだろう。それゆえにきさまらの目は曇ったようだな。性的興奮と萌えは違うんだよバカヤロー!!それがわかるか前原圭一!!」

「オレは・・・萌えを見失っていたのか？・・・」

「そうだ！あのコスチュームは確かにいい。だか、萌えではない！例えればあれだ、「可愛い」と「綺麗」が別物なのと同じだ！！」

「お・・・おお！オレの目は・・・今完全に覚めた！！」

「なにやってんだか・・・エンジェルモートにようこそ！」

そこに彼女たちがやって来た。

それは素晴らしかった。
魅音、梨花がブルマ姿、沙都子、羽入がメイド服、レナが巫女服だった

「あぅあぅ！あれはボクの巫女服なのです！」

「ふむ、素晴らしい。イベントとかでコスプレに出れば優勝できるぜ、これは」

「イベント？」

「有あ・・・いや、今は晴海だな。そこのイベントでだよ。まあ、優勝とかはないけど、大人気にはなる」

「でもそんなとこまで行かなくても良くなくては？そういう場所はたくさんありますもの。ここで十分ですわ」

「こ・・・こんなとこだと?・・・お前・・・」

「まずい・・・沙都子逃げろ!!!」

「え?」

圭一の警告虚しく、蒔風の演説が始まった

注意:ここから先、蒔風君の暴走が入ります
彼のイメージを壊したくない方は飛ばすことをお勧めします

「馬鹿野郎おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!現日本文化の最前線、萌えの聖地になにいってんだあぁぁぁぁぁぁぁぁァァァァァァァ!!!!!!!!
お前が言っていることはあれだ、エルサレムにお祈りしに行くキリスト教信者に対して「祈るなら教会でいいじゃん」と言っていることと同じことだぞ!貴様には萌えがなんたるかを教えてやらねばならんな。特にネコミミだ。そしてメイド!スク水!制服!ブゥゥゥゥゥルマァァァァァァァ!うをぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!これで萌えないやつは男じゃない!そいつは自分を偽って生きているムッツリだ!まず、自分に誠心誠意仕えてくれるメイドさん!あの主従関係は特別なものだ!金を払って雇うのならそいつにメイドさんに仕えてもらう必要などない!メイドさんが自分に仕えてくれる、その代わりにご主人様である私たちはメイドさんを守ってあげるという契約ができるのだ!それをただの仕える人としか見ていないやつは真のご主人様になどなれはしない!!おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!次にネコミミだ。ネコミミはオプション、つまりパーツとして存在していた。だが今ではそれだけで主流となり、萌えの王道

と言っても過言ではないところまできている。これに他の萌えコスチュームを着けたらどーなりますか!?足し算?かけ算?乗法?それ以上だぁァぁァぁァぁぁぁぁぁァァァァ!!!!!!!!ただえさえヤバイ萌えレベルなのにここまできたら、ＭＡＸを超えますよ!?あぁネコミミよ、永遠なれ!それにスク水!あの身体にフィットするのがたまらない!あれはボインな女子が着けてもだめなんだ。まだ発育途中の女の子が一番フィットしていいんだよ!なぜ無くなりつつあるのだ!?スク水ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!最後にブルマだ。あのはち切れんばかりの太股!もはやブルマと他の萌えアイテムと一緒に仕様うすることが多いが・・・シンプルなものに究極が見え隠れする事がある!それがブルマなのだ!なのに今やブルマは絶滅!うぅぅぅぅぅぅぅッ!ブルマを返せ!ブルマ!カーーーームバーーーーーーーーーーァック!!!!!!!!!!!!!!!!!ふ、ふはは、ふはははははは、ふはははははははははははははッ!!!!!萌えは考えるのではない、全身で感じるのだ。萌えはある程度の常識を守り、それでいて理性で推し量るものじゃないんだ。萌えと理性はまさにトイレ用洗剤。混ぜるな、危険!それを混ぜると萌えは鎮圧され意味を失い、消滅してしまいます。もし萌えを感じられなくなったらどうなりますか?それはつまり我々のロマンの絶滅ッ!!その時、月は砕け悲しみの雨を地上に降らし、地球をアステロイドベルドが覆う!!それこそが預言書に記された最後の審判の日ッ!!全世界を偉大なる萌えのヴェールが覆いし時、真の萌王が復活する!!ふはははお静かに、諸君は世界最強の目の前にいるのだ!!跪けッ!命乞いをしろッ!小僧から石を取り戻せッ!!!同情するなら金をくれ!イタイ目で見るな軟弱者!!もうイヤだ?止めてくれ?ここまでくるので目が疲れた?お前なんかもう知るかってか?!やってみろ!だがしかし覚えておけよ、忘れるな!私は戻って来るぞああ来るさ!世界がどうなろうとも、そこに萌が存在する限り、我が存在と精神は不滅だあぁぁぁ!ふおおおおおおおおおお!!!!!」

「なに店でバカ騒ぎしてんですかこのスカポンタンが！！！！！」

バギョ！！！バチチチチチチ！！！！！

蒔風の体がグラリと傾き、座席に倒れる

そこ後ろには魅音と同じ顔をした少女がいた

その手にはふちの凹んだ金属トレーと、ごついスタンガンがあった

彼女は園崎詩音。エンジェルモートでバイトをしている魅音の双子の妹だ。

「お姉、なんなんですか？この人」

「あー、その人ね。じつはね・・・」

魅音が詩音に蒔風の事情を話す。

すると詩音があきれた感じのため息を吐いた

「そんなことホントに信じてんですか？」

そこに羽入が真剣に言った

「本当なのです。彼は確かに別の世界の人間なのですよ」

「じゃあ・・・梨花ちゃまが狙われるって・・・やばくないですか？」

「でも、彼がいれば大丈夫なのですよ。あぅ」

「本当にですか?この人そんなに強くなさそうですよ」

「詩音、わかってないね。なぜ彼がこの罰ゲームで勝者の位置にいるのかが」

「・・・まさか・・・勝ったんですか!?お姉たちに!?」

圭一が昨日の部活の事を詩音に語った

詩音は驚いていたが、みんなが本当のことを言ってるかどうかはわかるらしい

「そうですか・・・」

「む・・・はっ!!おれはしょうきにもどった!!!!」

「もう起きたんですか!?」

「詩音!!あんたスタンガンどんだけ強くしてたの!?」

そうしてみんなでくっちゃべって時間が過ぎる
お昼ごろになって詩音が用事があるからと抜けたが、皆は夕暮れになるまでそこで遊んだ

帰りは蒔風が誰にも見られないように車を出し、それにみんなを乗せて帰る

魅音、レナ、圭一を降ろし、梨花、沙都子、羽入を送る
梨花と聡子と羽入は一緒に暮らしてる
両親ともに既に他界してるらしく、がんばって生活してるんだそうだ
そしてみんなを送りきって、車を消して帰る蒔風

テントに戻る途中、止まっているスクーターを見つけた

「どうしたんだ?詩音」

そこで止まってるのは詩音だった
どうやらパンクしたらしく、どうにもならないそうだ

「いやぁ・・ま、いいですよ。このまま今日はお姉の家に泊まっていきますよ」

詩音と魅音は別々に暮らしており、詩音は興宮に住んでいる
ここから歩いて帰るのは危険だ

「でも、お前の用事って雛見沢にあったんだな。なんのようだったの?」

「・・・あんた、他の世界から来たんですよね？」

「そだよ」

「だったら、この世界では無理なことでも、できますか！？」

「・・・何かによる。言ってみ？」

そうして詩音は話し始めた

雛見沢症候群
その病気の末期症状にかかってしまった少年、北条悟史
詩音の想い人で、沙都子の兄だ。

雛見沢症候群の原因はウイルスのような寄生虫らしい。
それは感染した人間が死ぬと身体から消え、故に長らく解明されてきていなかったものだ。
現在ではこの村の診療所の地下の研究所で、密かに解明が進められているが、いまだ進展はない
そこで彼は目覚めるのを待っているのだ
そんな彼を、詩音は毎日のようにみまっていた
今日もその帰りだそうだ

「あんたがこの世界の人間じゃないなら、ほかの世界の方法で、何とかできませんか？」

「・・・一つだけ聞こう。なぜ？」

「もう・・・沙都子を一人にしたくないんです。悟史君を、起こし

てあげたいんです!!」

それを聞いてニッ、と蒔風が笑う

「残念だな。お前の願いうんぬんより、オレがそいつを助けたくなっちまった」

「え？」

「ダメだな・・人の願いを奪うなんざ。でもまあ、結果オーライか」

「それじゃ・・・」

「連れてけよ。どこにいるんだい。愛しの悟史君は」

詩音が来た道を戻り、蒔風を案内する
もうあたりはすっかり暗い
街灯もないので本当に真っ暗だ

それでも詩音には離れた道で、すいすいと進んでいく

そしてこの村の診療所「入江診療所」についた

詩音がカードを通し、地下までの扉を開く
そしてその突きあたりに、一つの病室があり、そこに一人の少年が眠っていた

彼こそが北条悟史
雛見沢症候群の末期者だ

「入っても大丈夫か?警報とかは?」

「大丈夫ですよ。私のカードはここのトップの人からもらったものですから、警報は鳴りませんよ」

「では・・・ふむ・・・このベルト、取っても大丈夫なのか?」

詩音曰く、それはだめだそうだ
彼は末期症状者。
彼の眼に映るものはすべて敵に見えるらしく、異常な凶暴性をもって襲いかかるそうだ

それを詩音が悔しそうに言った

「だったら・・・何とかするか手始めに・・・と」

蒔風が力を借りる。
その右手が一瞬だけ光る

「さて、この幻想は殺せるのか?」

蒔風が悟史に触れる
しかし何も起こらない

「やはり・・・病気相手じゃ無理か・・・じゃ、次」

蒔風が次の力を借りる

そして爪を少しだけ悟史に食いこませる

そこからナノデバイスを送り、雛見沢症候群を消そうとするが・・・

「ナノより小さい？クソっ。だったら・・・そういえば、雛見沢症候群って、死んだ奴からは一切見つからないんだよな？」

「そうですけど・・・」

「だったら簡単じゃん」

蒔風が悟史の、ちょうど心臓の真上に手を乗せる
そして一気に衝撃を送りこんだ

周りの計器がピーーーと静かに、一斉に鳴った
その光景に詩音は取り乱した
なぜなら、心拍計が０を示しているのだ
つまりは悟史の死を意味していた

「な、なにをしてるんですか！！悟史君っ！？」

「静かにしてろ！！大丈夫だ。大丈夫」

そう言って蒔風が力を借りる

全身に電気がほとばしる

「オレの雷旺じゃこんな精密作業はできねえけど」

その手を再び悟史の胸にあてる

「さあ、最強の電撃使い（エアクトロマスター）の力の見せ所だ」

そう言って電流を流し、ふたたびその心臓を動かしていく
悟史の心臓が動き出す

そして一つを除き、すべての計器がさっきと同じ数値を示していた
その一つとは

雛見沢症候群の進行度を表す数字。
それが問題なしの1にまで下がってるのだ

「あ・・・さ、としく・・・・」

「まあ、まだまだ目は覚めないだろう。でも、一週間以内には」

「あ、ありがとうございます!!!本当に・・・本当に・・・・」

蒔風の手を握り、詩音が泣きながら頭を下げてくる。
それを見て蒔風が頭をかきながら言った

「言ったろ。オレが助けたいと思っただけだ。それに、早くずらからないと、さっきの計器の音、絶対知られたろ」

「はい!!悟史君、また明日ね!!!」

それに答えるものはいない
しかし、彼が目覚めるまで彼女はずっと待っていたのだ

あと一週間

なんてことはない

そうして診療所から出て、詩音を園崎家前まで送る

詩音が泊まってくよう言ったが、蒔風は遠慮した

現当主のお魎（りょう）がどんな人間か、頭に情報が流れたからだ

それはそれは恐ろしいばあさんだった

蒔風がテントに戻り、トイレをすましてからご飯を用意して、食べた

星が昨日より、綺麗に、美しく見えた

――

――

――

この世界に使えるものはねぇな

しゃーないか

今回は自力でいくかね

あの野郎にはワーリ（ワールドリンク）があるのにオレにはないとか卑怯だろうよ

ま、明日にでも潰しに行くかね

to be continued

ひぐらしのなく頃に　～目覚し編～（後書き）

アリス「なんですかあの途中の大演説」

ひぐらしらしさを・・・あれ？

ア「途中になんか入江のメイドインヘブン入ってますし」

きにするな

アリス「そういえば結局試験あるとか言っておきながら更新してるじゃないですか」

もうどうにも止まらない

ア「バカですか」

アホと言って

あとここで言いたいことが一つ

ア「なんですか？」

先日友人に

「お前の小説で○○のネタあったけど、あれの世界も行くの？」

と聞かれましたよ

ア「それで？」

答えは「そうとは限りません」です

作者はネタでしか知らないのに平気で使う人です
だから
「あれはあの作品のネタだ！だったらあれでるな」
とか思ったらいけません

ア「この詐欺師」

ごめんなさい
この辺でよろしく

ア「次回、「奴」きまっす！！」

ではまた次回

あなたは今どこで何をしていますか

ひぐらしのなく頃に　～「奴」殺し編～

「今日は前回の雪辱を晴らすよ！」

「今日は大貧民で勝負ですわ！」

ここは雛見沢の学校
雛見沢分校だ

今日の部活はここでの大貧民だそうだ

「いいねぇ。オレ大好きだよ！」

「簡単に勝てると思わないことさね」

「新人が勝てるほど甘くはないですのよ！」

魅音と沙都子が蒔風にかなりの余裕を見せる

「なぁ、あの自信はどこから来るんだ？」

蒔風が誰ともなしに聞くと、後ろから声がした

「ああ。あれはですね、カードの裏面でなんのカードかわかるからですよ」

「げぇっ、詩音！！」

魅音がその姿を捉らえて叫んだ
蒔風の背後に立っていたのは詩音だ。

「マジかよ!?オレ絶対不利じゃねぇか!」

「大丈夫です。私が教えましょう」

詩音が蒔風にアドバイザーを買って出るが、魅音が反論する

「詩音!これは神聖なる部活なんだよ。ってか、あんた来るなー!診療所はいいのー!?」

「もう大丈夫なんですー。それでこの方には恩があるので、助力させてもらいます」

「詩ぃ・・・それってどういうことなのですか?」

梨花が詩音に尋ねるがはぐらかすばかりだ

「それに、新人さんにここまで本気になるなんて、大人気ないですよお姉」

「あの、いや、オレの方が年上なんだけど・・・」

そんなことを話していると、ガラガラと教室の扉が開いた

沙都子によるタライ落しのトラップが発動した
しかし入ってきた人物に当たることはなかった

なぜなら、そいつは開けた瞬間にハイの回転蹴りをしていたからだ。
タライが飛ぶ

それは凄まじい回転をしながら梨花に向かっていった。
だか梨花には当たらない

蒔風がそれを手刀で真っ二つに裂き、後ろにそのまま飛んでいったからだ。
後ろの壁に二つになったタライが突き刺さる。

「な!?」
「誰だ!」
「梨花、大丈夫ですか?」
「こいつ!!」

一同が一斉に現れた男、「奴」に向かって敵意を向ける。

「んっん~。面白いメンバーだな。さ、まずはぁッ!!!」

ドガッシャ!!

「奴」が突っ込む
それに蒔風が立ちはだかり、「奴」の突進で一緒に窓ガラスを砕き、外に飛び出す。

蒔風が仰向けになり、「奴」が馬乗りになって蒔風の首に向け手を伸ばし、それを蒔風が食い止めている

「あれが「奴」って奴かい！？」

「魅音さん、わかりにくいですわよ、それ」

「舜さん！！！」

みんなが窓から身を乗り出して校庭の状況を窺う

「このやろ・・・男に馬乗りになられても・・・キモチワルイんだよ！！！！」

ドウ！！

蒔風が「奴」の腹を蹴りだし、身体の上からどける

「（バッ！）変身ッ！！」

蒔風がエクシードギルスに変身し、その背から出た触手で「奴」を絡め捕り、校舎裏の林に向かって投げる
その後を追うように蒔風もジャンプし、校舎を飛び越えていく

「オオオアァ！！！」

蒔風が「奴」に踵落としを仕掛ける
しかし、「奴」がそれを魔導八天で受け、柄の部分で蒔風の顔面を殴った
蒔風は変身が解け、地面を転がる

「楽しくゲームなんぞしてからに・・・ちっとは警戒してろよ」

「警戒してたからタライ弾けたんだろォが、バァカ」

ズズズ、と蒔風の足元の地面が盛り上がる
そしてそこから弾丸を射出した

ボボボボボボボ！！！！！

連続射出されるそれをすずしい顔をして弾いていく「奴」
そうしながら蒔風に近づいていく

「どうしたよお前。その程度ぉア！？」

「奴」の体がガクンと下がった
「奴」の足が地面に埋まっているのだ

「これだけ打ち出してる土をどっから出してると思ってんだ」

「奴」が足を突っ込んだのは射出した分無くなって、空洞になったところだ

「レッツセイ！！！！」

蒔風が掛け声とともに空中で横回転していき、縦に回し蹴りを「奴」に放つ。
「奴」が首を逸らし、肩に当たる

「ぐっ・・・おおおあ！！！！」

「奴」が足を引っこ抜き、ハイキック、そして反対の足でそのまま

後ろ回し蹴りをする
それが蒔風の側頭部に命中し、蒔風が吹っ飛ぶ
蒔風が頭を押さえ、立ちあがりながら聞いた
「お前記憶とか使ってこないのかよ」
「奴」が右肩を押さえながらそれに答える
「いや、だってここの記憶にある奴らなんてただの自衛隊員だぜ？
そんなの使うなら真っ向から行くわ」
「さいでか。だったら覚悟できてんのかぁ？！！」
「上等だぁ！！！」
ブォン！！ゴォオ！！！
ガッギャ！！！！！
蒔風の「風」「林」の二刀と、「奴」の「廃人」がつば競り合う。
「フン！！」「ヌア！！」
それを二人同時に弾き出そうとしたため、三本とも吹っ飛んでいってしまう
「「オォラァ！！！」」

即座に二人の拳が交差し、お互いの顔面に突き刺さった

「いってぇ!!」「おごご・・・」

二人がまた同時に後退し、距離をとる

「あーーーー!!!またメガネ割れたじゃねえか!!!せっかくフレーム直したのに!!!」

まあ、伊達眼鏡だったので問題はないが

蒔風が眼鏡を捨てる

そこに部活メンバーが駆けよってきた

「舜さん!!」

「舜!!大丈夫なのですか!?」

「バカ野郎!!なんで来た!!!」

蒔風が一向に叫んだ

それと同時に「奴」が動くのを察知し、カバーに回る

ギギン!!

今度は蒔風の「天」「地」と、「奴」の「獄」が打ち合った

そしてもう一度大きく振りかぶり、激しく火花を散らしながらぶつかり合う。

「通常ならば人の死は一回のみ。それを自分の都合で何度もやり直したぁ、都合のいい主人公様だよなぁ！？」

バキン！！

蒔風の「天」「地」が飛び、地面と木に突き刺さる

そして脳天をカチ割ろうと「奴」が剣を振るうが、それをなんとか白刃取りする蒔風。

「こいつらはそれに見合う悲劇を・・・なによりも死を経験してきたんだ！！」

「何度も死んで慣れちまってダメならハイ次なんて簡単に世界を諦めるようなやつぁ、ロクな奴じゃねえんだ！！」

「ッ！！」

「奴」の腕にさらに力がこもり、グググと蒔風に刃が迫る

「そいつは死に過ぎて、死ぬことがそこまで重くなっちゃいないんだよ！！」

ズシャッ！！！

「奴」が剣を引き裂く

蒔風は真上からの力に対抗してたため、急に引かれて体勢を崩した。

そこを切り裂かれ、胸から血しぶきが飛ぶ

「舜！！！大丈夫！？」

「ゲボッ・・・ウがァ！！！」

蒔風が畳返しで地面をはね上げ、「奴」を退かせる

圭一とレナが身体を支える

魅音と詩音が前に出て蒔風を庇うように立ち、叫んだ

「あんたがなんのこと言ってんだかわからないけどね、ここに死ぬことに慣れた奴なんかいないよ！！」

「同感です。生きることの素晴らしさを知ってるんです！！私たちは！！！」

「そうだ・・・だから俺たちはここにいるんだ！！」

「梨花ちゃんの命が狙われたときだってそう。生きたいから立ち上がったんだよ！！」

そんな前向きな、希望に満ちた声に「奴」は感心しながらも唾を吐く

「・・・ふん・・・なにも知らされていないから言えることなんだけどな。あいつらが数多の別の可能性でお前らを見捨てたか・・・知らないから」

「奴」の言葉は彼らには聞こえない

しかし、梨花や羽入の耳には届いていた

「まったく・・・ウルっせぇんだよゴタゴタと」

「舜？」

羽入と梨花が心配そうに蒔風の顔をのぞく

蒔風が魅音、詩音を退け、前に出る

「そんなこと「この世界」で言ったってしょうがねえだろうよ！！こいつらがなんで百年も死を経験し、乗り越えられてきたか考えろよ！！！百回じゃない、百年だぞ！？祖に慣れたならこんなに抗いはしない。いいか？死に恐怖し、生きたいという願望があったからこそ、彼女はここまで踏ん張ってきたんだ！！！」

「舜・・・」

「それを世界を壊して新しく作るだぁ？バカ野郎が。この子のただ純粋な、生物として最も強い欲望たる「生」を百年間！！！積み上げ続けてやっと手に入れた幸福なんだぞ！！それを、こんなつまらない「死」でさっさと片付けんじゃねえよ！！！」

「そのたった一人のために、他の者が泣いたのだぞ？それはいいのか！答えろ、翼人！！！」

「翼人？」

「そいつの願いはこの子の命の上に立っていた。そんな願いが叶うくらいなら、打ち砕いてやった方がいいに決まってんだろ！！！」

そして蒔風が一歩踏み出し、その体が輝き始める

「誰か死や涙の上に立つ願いなんか認めない。あるとすれば、それ

は歓喜の涙だ！！！開翼！！！！」

ドン！！！！

蒔風の背に銀白の翼が展開される！！！

「願いをこの背に！！！」

ゴォオオオオ！！！！

人から、空気から、大地から噴き出した金の粒子が蒔風の周りをドーム状に包んでいく

「願い・・・させると思うかぁ！」

「奴」が飛び出す。

そこでどこからともなく声が聞こえた

【ｈｉｇｕｒａｓｈｉ　ｎｏ　ｎａｋｕ　ｋｏｒｏｎｉ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

瞬間、「奴」の体が止まる。否、「奴」だけでない。

木々の葉っぱ、宙を飛ぶ虫、空気の流れさえも止まった

動いているのは蒔風と部活メンバーのみだ

「これは・・・・」

「時間が止まった!?」

「いくぞ・・・」

当然「奴」には届いていない。
しかし、蒔風がはっきりと宣告した

・・・・ヒュンヒュンヒュンヒュン!!バシィ!!!

それと同時に一本の剣が蒔風の手に飛んできた
形は太刀から右上と左下から枝分かれしたようになっている剣だ
その剣の名は、「鬼狩柳桜（おにがりのりゅうおう）」

ここ雛見沢に伝わる伝説の宝刀!!!

「ヌ、おおお!!!」

蒔風が「奴」を上空に「奴」を投げ放つ
もちろんそれでも「奴」は止まったままだ
時が止まってるため、最上部まで上がって、そこで止まる

「見ろよ、あいつアホみたいだなーーー」

「あはははは!!」

レナが笑った
もう心配することがないとわかっているかのように
そしてそれにつられて皆が笑う

蒔風も大笑いして、キッ、と「奴」を睨んだ

「仕留める！！！！」

【ｈｉｇｕｒａｓｈｉ　ｎｏ　ｎａｋｕ　ｋｏｒｏｎｉ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

ドォウ！！！

蒔風が今までにないほどの「願い」の輝きに包まれる！！！！

「ふはははははは！！！百年分の「生きたい」衝動！！！これはいい！！いいぞぉ！！！」

頭上で二回鬼狩柳桜を回し、両手で持ち、力を込める

「はぁあああああああああああ！！！！！！」

そしてすべての力をその剣に！！！

すべての力を突撃に！！！

蒔風の翼が大きく撓(しな)り、砲弾のように飛び出した！！！

そして止まっていた時間が動き出した

「奴」には何が起きたかなぞわからない

急に放り出されたようなものだ
どっちが上かもわかるまい

ヴォン、ガゴン！！！！

そして蒔風が「奴」を切る。
「奴」の切られた部分から金の粒子が噴き出してくる

「いひひひひひ！！！！願い、ネガイ、ＮＥＧＡＩ！！！！こんな純粋な願いは初めてだ！！！消えちまいなこのやろう！！！！」

「う、うわあああああああああああ！？」

「毎回毎回ボコボコにされてから、必死の逆転ばっかしてんだ！！！今回くらいは楽に勝たせろや！！！！」

ギュォア！！！ドゴオオアアアア！！！！！！

「奴」が爆散四散し、消え去る。
そして蒔風が降りると、みんなが出迎えてくれた

ーーー

「羽入、知ってるのですか？」

蒔風が次の世界に行く見送りで、羽入が言った

「翼人とは、ボク達の一族の救い主なのですよ」

「えっ！？」

「梨花には前に話しましたが、ボク達も元はと言えばこの世界の住人ではありませんでした。この世界に辿り着くまで、ある翼人に助けてもらったことがあるのですよ」

「でもそりゃ俺のとは別の翼人だぜ？」

「それはわかってるのです。彼はもっとかっこいい顔でしたのですよ」

「・・・・オレは？」

「メガネかけてフツーですね。無いとパッとしませんです」

「・・・・・・・・・・・」

今の蒔風はメガネを掛けていない

二回も連続で壊れたので、もう嫌になったのだ

しかし・・・・

「だ、大丈夫だよ！！」

「そ、そうですわ！！今まで掛けてたからそう感じるだけですの！！！」

「否だもう！！やっぱり掛ける！！」

蒔風がどこからともなく眼鏡を取り出し掛けた

「で、もう行くんですか？」

圭一が聞いてくる

「ああ、次が楽しみでしょうがねえよ」

「がんばってくださいね」

「応援してるよ！！」

詩音と魅音が声をかけてくれる

「じゃね、がんばれよ。お前らも」

『おう！！！』

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ｈｉｇｕｒａｓｈｉ　ｎｏ　ｎａｋｕ　ｋｏｒｏｎｉ］

蒔風の足が止まり、一言だけ言った

「そうそう、ノストラダムスな。あれ外れるから安心しろ」

「ええ！？」

「んじゃねーーー」

そうして蒔風は次の世界へ

――――――

ひぐらしのなく頃に　～「奴」殺し編～（後書き）

先に言っといちゃいます
次の世界は「仮面ライダーＳＰＲＩＴＳ」です

アリス「今回は言うんですか？しかもまたマイナーな・・・」

いや、平成仮面ライダーだすなら昭和も出したい
でも、昭和の各作品回ってたらキリないでしょ

ア「まあ、それはそうですね」

ただえさえ平成もあるのに・・・
だからひとまとめにしちゃおう！！ということです

ア「これわからない人はどうすれば？」

・・・・ｗｉｋｉ？

ア「うおぉぉぉおおおおい！！！！」

気になったら読んでみるとか・・・
すみません
なるべく説明入れますんで

【ひぐらしのなく頃に】

構成：”輝志”５０％
”ＬＯＮＤ”５０％

最主要人物：古手梨花

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＷＥＰＯＮ～：時を止め、鬼狩柳桜を装備

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：梨花の廻った世界の「生きたい」という願望までも得る

今回のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫで集めた「願い」は今めで梨花が百年繰り返してきた分の願いですから

ア「ハンパないですね」

ええ

あと、次回は一話でさっさと終わらすつもりです

ア「仮面ライダー好きなのに？」

原作の方がまだ途中なんですよ
だからついたらいきなり戦闘

ア「そんなんで大丈夫なんですか？」

なんとかします、はい

ア「次回、昭和仮面ライダーズ！！！！（１０号まで）」

ではまた次回

時代が望む時、仮面ライダーは必ず蘇る

仮面ライダーSPIRITS　～昭和って便利だよね～（前書き）

変身するライダーと本名を書いていきます

一号・本郷猛士
二号・一文字隼人
V3・風見志郎
X・神敬介
アマゾン・山本ダイスケ
ストロンガー・城茂
スカイライダー・筑波洋
スーパー1・沖一也
ZX・村雨良

です

アマゾンは本名あるんですが「アマゾン」としか呼ばれません

あとスーパー1の「1」は「ワン」とお読みください

仮面ライダーSPIRITS　～昭和って便利だよね～

ただ広がる黒い空間
黒いと言っても暗いわけではなく、視界ははっきりしていた

そこに仮面ライダーZX（ゼクロス）・村雨良はいる

「この空間はなんだ？バダンの仕業か？」

BADAN（バダン）
これまで仮面ライダー一号、二号が相手をしてきた「ショッカー」から始まる組織を裏で操っていた大組織
その組織とは「ショッカー」「ゲルショッカー」「デストロン」「GOD秘密機関」「ゲドン」「ガランダー帝国」「ブラックサタン」「デルザー軍団」「ネオショッカー」「ドグマ」「ジンドグマ」である
今それらの組織はバダンによって復活させられ、日本各地に展開されている

そして世界征服の名のもとに、世界中の空軍を潰し、日本を占拠せんとしている

一号から始まる、二号、V3、ライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー、スカイライダー、スーパー1の仮面ライダーたちもまた、各地に散って戦っている。
ZXは各地に向かい、それぞれのライダーと協力して戦っていたのだ

しかしその途中で、急にこのような空間に取り込まれたのだ。

「バダンには確か魔法陣のようなものを用いた空間移動があったが・・・これも？」

《良！！聞こえるか！？》

《本郷さん！！》

ＺＸに本郷からの通信が入る

《お前もここにいたか》

《お前も・・・ってことは他のライダーも？》

《合流しよう。一人では危険だ》

良は変身を解き、交信を頼りに他の九人と合流する。

「本郷さん」

「良。大丈夫か」

「ああ。でもこの空間はなんなんだ？」

「さっきホッパーを打ち上げたが何もわからない」

村雨の言葉に志郎が答えた

ホッパーとは「V3ホッパー」という彼のツールのことだ
打ち上げることで上空に停滞し、そこからの映像を送るのだ

「それで何もわからないとすると・・・」

「ああ、だから俺たちは待ってるんだ」

「待っている？」

一文字の言葉に良が訊いた
それに結城が答える

「バダンにしろなんにしろ、こういったことをするならば意味があるはずだ」

「だからここで待ってりゃ敵さんのほうからノコノコ来るってわけだ」

結城の言葉を茂が継ぐ

「待ってくれ。「バダンにしろなんにしろ」？こんなことするのはバダンしかいないんじゃ？」

「そうなんだが・・・」

「ガウ・・・ここ、バダンの空間と違う」

アマゾンが何か釈然としないように言った

「アマゾンのこう、野性じみた・・・というか野性の勘はバカにできない。彼には何か感じるところがあるんだろう」

敬介が説明を入れる

良は合点がいったようだ。

かといって何が進展したわけでもない

「とにかくは待つしかないってこと・・・か」

「いやいやいや。そんなに待たなくてもいいぜ?仮面ライダー諸君」

『!?』

どこから声がした

「みんな、あっちだ!!!」

洋が気付き、皆を促す

その指がさす方向

そこには「奴」がポツンと立っていた

「貴様、バダンか！！！」

志郎が叫ぶ
それに対してどーでもいいように「奴」が答えた

「バダン？ああ、あんな雑兵と一緒にしないでくれよ。こっちが狙ってんのは「世界」なんだから」

「奴」の言うことは彼らには理解できない
それでも「奴」の言葉は続く

「いや、実はそこのＺＸだけでもよかったんだけどさ、かつての最主要人物がここまでいると不安だし・・・だから全員殺ることにしますた」

「な！？」

「まあ、さ。だからこう・・・・死んどけ」

ズズズズズズズズ・・・・・

「奴」の体が地面にトプン、と沈み消える

そして地響きとともに大地が揺れ、１０人の真ん中が盛り上がっていく

そこから巨大な「奴」が盛り上がっていく
皆がバラバラになりそこから離れる

「奴」の全身があらわになる
身長は４０メートルほど
姿かたちは全く変わらないが、あまりにもでかすぎる

「コイツッ！！・・・！？」

一文字が悪態をつき、その表情がきつくなる

「良！！！！！」

叫んだときにはもう遅かった

良が転がった先で体勢を整えようとしているところに、「奴」の巨大な拳が迫る
変身も間に合わない

その拳は確実に彼を粉砕してしまう！！！！

皆が良の名を叫ぶ。
しかしその拳は止まらない。ここにいる誰にも、止めることはできない！！！

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＳＰＩＲＩＴＳ］

バチィ！！！！！

そんな状況において、その拳は弾かれた
世界最強の男の襲来を告げるその門によって！！

「蒔風ぇ！！！！！」

「おいおい・・・いきなり展開クライマックスかよ」

「お前は？・・・・・」

「オレは蒔風舜。説明している暇はないみたいだな・・・今回はこれで」

蒔風が良の額に指をあてる
すると、良の頭に情報が流れ込み、すべてを理解した

「これは・・・あんたは！！！！」

「他の人には交信でその情報を伝えてください」

「あ、ああ！！」

「では・・・行きますか？」

「良！！！今の話は・・・本当なのか！？」

他の皆が駆けよってくる
蒔風に対しては半信半疑だ

「信じてくれるとありがたいです。でも」

「でも、なんだ」

本郷が蒔風に聞く
蒔風が意地の悪そうな笑いをして、こう言った

「このままじゃ全滅ですよ？それに、もしかしたらあなた達のうちの一人でもやられたらそれで世界は・・・・」

「・・・そうだったな」

「本郷さん？」

「信じよう、君を。力を貸してもらえるか？」

「ハナっからそのつもりです。俺としても、あなた達の力を借りなければキツイでしょうしね」

「みんなは？」

本郷がほかのメンバーに聞く

「本郷がいいというんだ。オレはいいぜ」

「いいだろう」

「オレもだ」

そういって次々とみなが賛同してくれる

「じゃあ・・・行くぞ！！！みんな！！！」

「「「「「「「「「「おう！！！」」」」」」」」」」

「変身だ！！！！」

バウッ！！！

グラララララ・・・・

「「ライダー、変身！！！」」「変、身、Ｖ３ァ！！！」「大、変、身！！！」

「アァァァマァァァァゾォォォォォォォン！！！」「変、身、ストロンガー！！！」

「スカァイ！！！変身！！！」「ハァァァ、変身！！！」「変ンンン、身！！！！」

ギュオオオオオオ！！！！！

カアアアアアアアアア！！！！！

ババッ、ザッ！！！！

『仮面・・・ライダー！！！！！』

ドドドドン！！！！！！

栄光の１０人ライダーが並び立つ。
その光景に一体誰が「負ける」などという感情を抱こうか

しかし「奴」は強大。それだけで勝てる相手ではない
だが、こちらにはこの男がいる！！！

「開・・・翼！！！！！」

バッ、ドン！！！

「さあ、行こう！！！」

『応！！！！！』

「また簡単に負けるわけにはいかねぇんだよ！！！」

ドゴウ！！

「奴」の体が動く
その脚がとんでもない勢いで地面を旋回する

「ぐおおおおおお！！！！！」

「あの巨体でッ！！」

「なんてぇ速さだ！！！！」

「セイリングジャンプ！！！」

「トオ！！！」

皆が回避する中、空中移動の可能なスカイライダーとゼクロスが飛ぶ

「衝撃集中爆弾！！！」

ドゴゴウ！！！！

「奴」の顔面に向け、ゼクロスの衝撃集中爆弾が炸裂する

煙の中から奴の顔がチラリと見える

「スカァイ！！！キィック！！！！」

その眼に向け、スカイライダーがキックと放つ

「～～～～ッハァ、フゥ～～～～～～ッ！！！！」

それに向けて「奴」が思いっきり息を吹きかける

その風に煽られ、スカイライダーがバランスを崩す

「奴」の手が捕らえようと伸びる、が。

「大切断！！！！！」

ズバァ！！！！！

アマゾンのその手のカッターによる大切断で「奴」の腕が落ちる

「ウぬ！！」

「奴」の腕は落ちると消えた。

そして驚くべきことにビュルルル！！！と「奴」の腕が超速再生し元に戻ってしまった

「ガウ！？」

「この・・・野性児が！！！」

「奴」が魔導八天を取り出す

その剣も主に合わせて巨大になっている

「フン！！！」

ゴゴウ！！！！

その強靭がアマゾンに襲いかかる

「「アマゾン！！！！」」

スーパー1とストロンガーが同時に叫び、「奴」に攻撃する

「エレクトロファイヤー！！」

「チェーンジ！！エレキハンド！！！」

ストロンガーはその手から放たれた電撃を地面から
スーパー1は直接に「奴」に向けて電撃を放つ

その電撃に「奴」の動きが本当に少し鈍る。
しかし「奴」はその程度で止まることはない。

「「ライダァーーー！！！！ダブルキィック！！！！」」

ドドドガガァ！！！！

その剣の横っ面を一号、二号のダブルライダーのキックが命中する
それによって「奴」の剣がずれ、アマゾンが回避に成功する

「大、回、転、スカイキィック！！！！」

そこにスカイライダーの回転キックが「奴」の額に当たる
「奴」が少しよろける

さらに

「ゼクロスキック！！！！」

ゼクロスのキックが立て続けに炸裂し、「奴」の巨体が後ろに仰け反る

「ぐ・・・この！！！！虫けらが・・・・！！！！」

「ロープアーーーム！！！！」

ライダーマンのロープが「奴」の足が巻き付く
体勢を整えようとしたところにそれである

「奴」が大地にむかって倒れていく

そこに背中からバッ、とＶ３が現れる

「Ｖ３ィーーーー！！！！！」

ダン、ガン！！！！

「反転キィック！！！！！！」

ドガッ、ガァァ！！！！

一度、二度と両の足で立て続けに蹴り、最後に一撃を当てる「Ｖ３反転キック」によって倒れかけた奴の体が真っ直ぐに起き上がる

その首元が掴まれる
そこにいるのは、Ｘライダー！！！

「真空・・・地獄車ぁ！！！！」

「グッ、おおおおおお！？！？！？」

ズゴオオオオオ！！！！！

Xライダーが「奴」の巨体ごと回転し、何度も何度も大地に叩きつけていく
叩きつけてはまた上昇し、叩きつけて上昇の繰り返し
その形はまさに「地獄車」！！！

ドゴンドゴンドゴンドゴン！！！・・・・

その回転、威力に「奴」の脳味噌が揺さぶられる

ドダァッン！！！

Xが「奴」はら離れ、「奴」の体が叩きつけられて跳ね上がる
そこにスカイライダーとスーパー1、ストロンガーがキックを放つ！！！

「スカイドリルキック！！！」
「スーパーライダー閃光キック！！！！」
「チャージアップ！！！！超電スクリューキック！！！」

ド、ド、ドン！！！！

立て続けの猛攻

それでも「奴」は着地し、上半身がだらりと下がる

「・・・・めるな」

ドン！！！

「舐めるな貴様ら！！！」

「奴」の体が起き上がり、全身から波動を放つ
それにより全ライダーが吹き飛ばされ、地面を転がる

「ぐっ・・・あれだけ食らってもまだこれだけの力が・・・・」

「蒔風！！！切札の準備、できてるよな！？」

「ああ！！！」

蒔風がその答えに発動させる！！！

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＳＰＩＲＩＴＳ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

「全員、パワーをゼクロスに！！！」

「そうか・・・バラバラなら無理でも！！！」

「一つにすれば！！！」

ギュオオオオオオ！！！！！

9人ライダーのベルトが回る
そのエネルギーが、ゼクロスに！！！！！

「おおおおおお！！！！！」

「奴」がそこを踏みつけようとする

「さ、せ、る、かぁ！！！！！超・絶！！！！畳返しィ！！！！！！」

ダバン！！！！ズッ、ドゴゴゴゴォ！！！！！

その畳返しはいつもの物とは違った
なによりその大きさが桁違いだ

「奴」と同じぐらいの大きさの畳返しが、起き上がってくる
しかしさすがにそれだけの重量は持ちあがらないのか、途中で減速する

「ハッ！！見かけだお・・・」

「まだまだまだまだぁ！！！！！」

蒔風が畳返しの背に向かって跳び、中腹辺りで滞空する

「おらおらおらおらおらおら！！！！！」

ドッドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！！！！

ドドドドドッドドドドドドドドオドドドオ！！！！！！！

そこでものすごい回転速度と威力をもって、連続して蹴りつける！！！！！

勢いをなくしていた畳返しが再び持ち上がる！！！！！

「おおおお！？ってか、この程度余裕で砕けるわ！！！！！」

「奴」の拳が目の前の壁を砕こうとする
しかしそれが当たる前に、蒔風が蹴り砕いた
それはもはや爆発したといってもいいだろう

恐ろしいほどの量の岩石が「奴」を打ちつける

「俺様の楽々勝利タイムが簡単に終わってたまっかい！！オレがどんだけお前にボコられたと思ってんだ！！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

そして下方で果てしないほどの熱量を携え、ゼクロスが立ちあがる

「終わったぞ・・・・決着をつける！！！！」

「行ったれェ！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＳＰＩＲＩＴＳ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

「おおおおおお！！！！！」

蒔風が気合を込めて能力を施行する

「奴」に埋め込まれた岩石が土惺の力で「奴」ごと浮き上がっていく

「行けえ！！！ゼクロス！！！！」

「おお！！！！」

蒔風が「奴」の巨体を高速回転させる

ゼクロスが力を右足に集め、回転キックを「奴」の回転の中心に減り込ませる！！！

そのキックは・・・・「孔（あな）」を「穿つ」！！！！

「ゼクロス！！！！穿孔キック！！！！！！」

ドギュアアアアアア！！！！！！

ズムッ、ボッ、ギャアアアアアア！！！！！！

「奴」の腹を貫き、その回転で内臓を引き裂いたゼクロスが「奴」の背から飛びでる

「・・・機械仕掛けの化け物どもめ・・・」

「奴」は散り際に呟く
それに蒔風が反論する

「たしかに彼らは機械の体だ。だが、誰よりも「人間」やってんぜ？」

「蒔風・・・・・」

「くぁあああはははっはははははは！！！！」

「奴」が消える。

同時に、この空間もうっすらと消えていく
仮面ライダーたちも、元いた場所に戻されるようだ。

「お別れのようだな」

「たしか・・・次の世界だったか？」

「もう行くのか？できれば我々と共に・・・・」

「すみません・・・オレにはオレの、戦いがあるんです」

「・・・そうか。達者でな」

「ええ。希望があれば、いかなる窮地でも活路は見い出せます」

「そうだな。ではみな、行こう！！！」

『ああ！！！』

シュン！！！！！

彼らが消える

元いた地区に戻ったのだ

「オレも行くかな。いや、今回はいきなりでキツかったなァ・・・・」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＳＰＩＲＩＴＳ］

－－－

to be continued

仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ　～昭和って便利だよね～（後書き）

アリス「本当に一話完結ですか」

いや、このマンガ熱いよ？
マジ熱い

かっこよすぎるよ仮面ライダー！！！

ア「ではなぜ？」

前回も言ったけど、原作がまだ途中で・・・
どこのタイミングで蒔風を放り込めが言いかわからなかった
だからどの時期に蒔風がやってきたかは明言しません
とにかく「蒔風が来て「奴」を倒した」ということで

ア「それにマイナーですしね」

そうなんですよね・・・・
でも昭和ライダーも出したかったし・・・・

【仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ】

構成：”ライクル”６０％
　”ＬＯＮＤ”４０％

最主要人物：村雨良（仮面ライダーＺＸ）

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＷＥＰＯＮ～：全ライダーのパワーをゼクロスに

ーＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫー　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：蒔風と共同作業による超ゼクロス穿孔キック

と言っても、他のライダーを殺しても世界崩壊にはつながりますけどね
ゼクロスなら一発、ということです

ア「なるほど。それにしてもみなさん蒔風に対して納得するの速くないですか？」

それが昭和の意気込みさ！！！
タイトルにも書いてあるだろ？

ア「「めぐ銀」史上最悪のタイトルですね」

・・・いわないで

ア「次回、夏の海、ゴール」

ではまた次回

にははっ

Ａｉｒ　～生きる、ゴール、スタート～

ある物語の終末

少女と母が向きあい、言葉をかわす

「もう一度だけ、がんばろうって決めた、この夏休み。
往人さんと出会ったあの日からはじまった夏休み。
いろんなことがあったけど、つらかったり、苦しかったりしたけど
私、がんばってよかった！
私のゴールは幸せと一緒だったから、ひとりきりじゃなかったから、
だから、だからね、もうゴールするね・・・」

「あかん、観鈴。きたらあかん、ゴールしたらあかん！
はじまったばっかりやんか、昨日やっとスタートきれたんやないか
！
取り戻していくんや、１０年前にはじまってたはずの幸せな暮らし
これから観鈴と取り戻していくんや！
うちらの幸せは始ったばっかりやんか！」

海辺で母と子が抱き合う

母の名は神尾晴子
少女の名は神尾観鈴
いま彼女の命は古の呪いに蝕まれて、消えようとしていた。

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ａｉｒ］

その海辺のある町のとある一軒家の屋根の上

そこにゲートが開く

と、同時に蒔風が飛び出し、海辺に向かって跳躍した
隣を見遣ると時空が歪んで「奴」も現れた

「蒔風ぇ！わかってんな！？」

「奴」の叫びを蒔風は瞬時に理解した。

「くそっ、仕方ねぇ！」

ガシッ！！

蒔風の腕を「奴」が掴み、海辺の二人に向け投げ放った。

蒔風が二人に急接近する。
蒔風が力を借り受け、右手が淡く光る
「その悲劇(げんそう)！いまここでぶち壊す！！」

ダンッ！

蒔風が着地する。
晴子は突如として現れた蒔風から観鈴を守ろうと身体を振る。
しかし蒔風はそれに構ってる暇はないのだ

「彼女を死なせたくないならどいてくれ！」

蒔風が半ば強引に晴子を退かし、右手を背中に当てる。

バギン！！と砕けた音が鳴り響く

消えようとしていた彼女の命が留まる。
蝕んでいた呪いが身体から消えた。

「っは！・・・・お母さん？」

「み、観鈴？観鈴！！大丈夫なんか？なああんた！！観鈴はもう大丈夫なんか！？」

「大丈夫に決まってます。そうじゃなきゃ、オレが困る」

答えたのは蒔風ではない。
三人がいる海辺の町側の堤防の方に「奴」来た。
浜辺に降り立ち、こちらに歩いてくる

「最主要人物に消えられて、そいつにまで死なれたら困るし」

「あ・・・あんたも助けてくれたんか？」

それに答えたのは「奴」ではなく蒔風だ

「確かに助けてはくれた・・・だが決して味方じゃない」

「どういうことや？」

「「奴」はな、自分の手で殺すために神尾観鈴を助ける手伝いをしただけだ！」

「う・・・嘘やろ？」

「そこで見ててください」

蒔風が「林山」を突き立てる。
神尾親子を「山」がバリアが包み、「林」が観鈴の体力を回復させていく。

「玄武、頼んだぞ」

「どこまでですかな？」

「説明から護衛まで」
「了解じゃ」

蒔風が「奴」に向き合う

「ああ胸クソ悪ぃ。お前と共同なんざ吐き気がするよ」
「そうか？蒔風。オレは少し面白かったぜ？ひひひひひひひひひひ」
「ふっ、ふふふ。ひゃはははははははははははは」
「うはははははははははははははははは！！」
「くかかかかかかかかかかかかか！！！」

ダッ、ゴガッ！！

蒔風と「奴」が衝突する

「奴」の拳を残った「風」「火」で受ける。
しかし「奴」の拳は裂けない。
蒔風が蹴り上げる足を「奴」が踏み付け押し止める。

「ぐぎぎぎ・・・」
「このクソったれ・・・」

ギシギシと音が響いてくる。
それは二人の噛み締める歯ぎしりの音か
それともせめぎ合っている箇所の音か

「「ダァッ！！」」

ドッ、フン！！
ブワァアアア・・・・

「奴」と蒔風が同時に力を無動で相手にたたき付けた
その衝撃は周りに散り、浜辺が窪み、周囲に砂を撒き散らした。

バリア内

晴子が蒔風と「奴」の戦闘を見て驚きの表情をする

「な、なんやこれ。ほんまにあんたの言った通りなん？」

「そうだの。さっき儂が説明したとおりだの」

「あの・・・」

「！！観鈴！身体、大丈夫か？」

「うん・・・あの人は、どうして」

「戦う理由ですか？」

「ううん。実はさっきから聞いてたんだ。でも、それなら私がこの

まま・・・・」

「確かに観鈴嬢があのまま召されておれば「奴」は手だし出来なくなりますな」

「あんた！」

晴子がその言葉に少し憤る
それを観鈴が止める

「大丈夫だよ。でも、助けてくれたもん。あの人は・・・蒔風さんはなんで？」

「・・・主は様々な世界をめぐっておる。その中で世界を救い続けてきたのう。しかし、主にも救いきれないものがなかったわけではないのじゃね」

玄武が一旦言葉をとぎらせ、また話す。

「自らの世界がその一つだった。その瞬間から主は決めたのじゃ」

「なにを？」

玄武は戦う主に視線を向ける。
いくら傷ついても倒れず、決して見捨てぬその意志と、世界を背負うその背を見、誇りを持ってこう言うのだ。

「救えるモノは根こそぎ救う。だた一つの信念、彼自身の願い」

「信念・・・・」

「主はいろいろな事を考えておる。しかし、その根幹はたった一つのそれなのじゃ」

ガッ、ゴオオオ!!!!

蒔風の背に銀白の翼が現れる

そして叫ぶのだ

「物語?世界?そんなんかんけぇねえ、関係ないんだ!!!!
ただそこで理不尽に消えていく命があるんだ。

救う理由はただそれだけでいい
戦う理由もそれだけでいい
それ以上もそれ以下も必要ない

誰かが助かって誰かが笑うなら
なんだって相手にしてやる
世界も、運命も、自分自身でも!!!!

なんであろうと相手になるぞ

オレは世界最強、銀白の翼、願いの翼人!!!!
見ておけ・・・これが俺(せかい)の正義だ」

to be continued

Ａｉｒ　～生きる、ゴール、スタート～（後書き）

アリス「Ａｉｒの世界ですね」

ｋｅｙ作品から二つ目です

ア「そういえば今日テスト終わったんですよね？」

そうだね～～

ア「結局休みませんでしたね、更新」

オレ偉い！？

ア「それでテストの結果がいいなら」

・・・・・・・・

ア「卒業できませんよ？大学生さん」

・・・・単位はまだ足りてるもん！！！

ア「さいで」

本当だよ！！！

ア「次回、純白、翼、開翼」

ではまた次回

が、がお・・・

Ａｉｒ　～没死、必死、決死～

「鎌鼬切演武、四季早々・花吹雪」

蒔風の剣技が「奴」に襲いかかる。

「くっ、お」

「終わらせるぜ」

蒔風がさらに夏、秋と続けようとする

「フンッ！爆落（ばくらく）！！！！」

ドッ、ズガ！！！

「奴」が魔導八天を地面に叩きつけ、爆発したかのように砂塵が舞う

「おぉ！？ッブ！！砂口入ったぁってうお！？」

切演武が掻き消され、さらに地面が陥没してそこに向かって蒔風がズルズルと引きこまれる。

まるで蟻地獄だ

足首まで沈んだところで、蒔風が空中に飛びそこから脱する

しかし

「蒔風さんいらっしゃ～～い♪」

「な、ん！！！」

ガゴッ！！！

蒔風を待ちうけていたのは「奴」の振るう魔導八天だった。
タイミングばっちりで蒔風の頭部をとらえたそれは防がれはしたが、
その衝撃は殺されることなく叩きつけられる。
上昇してた蒔風の体がそのままの軌道で戻され、蟻地獄のど真ん中
にのめり込む

「主！！！」

「地獄に堕ちろや」

「奴」が着地し、観鈴達の居るバリアに向かって歩いてくる

「おのれ貴様ぁ！！！」

玄武が飛び出し、「奴」に向かう
その手に玄武盾を出現させ、砂浜とは思えないスピードを出す

ドゴン！！！

「奴」のケンカキックと玄武盾が真っ向からぶつかり合う
玄武も「奴」も一歩も引かず、凄まじい衝撃をまき散らしその場で止まった。

「儂の防御力は十五天帝随一の物！！！そう簡単には破れまいて！！」

玄武が「奴」に余裕気に言った。
蒔風がいつもやるように、自信満々に

だが

「そうだな。だがそれは蒔風の事。お前ひとりじゃ・・・なぁ？」

ピ・・・キ・・・

「！？バ、そんなバカなことが・・・・・！！！！」

ピキキキギギギ！！！

「引っ込めよ。本来前菜程度の奴が、今更戦場に出てくるな」

バガア！！！！

玄武盾が砕け、「奴」の蹴りが玄武の腹部をとらえる

鳩尾に命中したそれは玄武の意識を彼方へ飛ばし、海にまで身体を吹き飛ばした

「単体じゃ思ったほど堅くねえな、あの亀。さぁ～～てと、オレに生かされた命、オレのために消えてもらおうか」

「奴」の手が観鈴に伸びる。
晴子が「奴」の手を払おうとするが、簡単に投げ出されてしまう

「いや・・・いやぁ・・・・助けて・・・」

「今だけだ。新たな世界で、お前も、お前の愛しい人も、蘇る」

「奴」の言葉には本気の想いがこもっていた
殺意でもなく、悪意でもなく、純粋に世界を造り変えたい
そして皆が笑えるような新しい世界に

その想いだけ
それしかなかった

それしかないから他の犠牲など気にも留めない
新たな世界しか見ない

その過程で流される涙、悲しい想い、怨嗟の叫び
そのすべてなど、どうでもいい
ましてや主要人物のなど

「奴」の手が観鈴の目に触れようとするまで、あと三ミリ

ドッブア！！！！

「スーパーライダァーー、月面キィック！！！！！」

ドゴオ！！！！

その背後で蟻地獄の中心部が噴水のように噴き上がり、そこから銀色のライダーが飛び出した
仮面ライダースーパー1に変身した蒔風が、そのまま「奴」に向かってキックを仕掛ける

「奴」が振り返り、その腕がキックを受け止め、後ろに流す。
蒔風はそのまま観鈴の元に着地し、彼女を抱えて晴子の元に届ける。

「お母さん！！！」

「う・・・観鈴？」

「大丈夫ですか！？」

蒔風が晴子に呼び掛ける

「あんた・・・蒔風って言ったっけ？あんたなん？」

外見がスーパー1なので、晴子が恐る恐る聞く

それに蒔風が答えた

「そうです。玄武は？」

蒔風の声がしたので安心し、晴子は言った

「「奴」に吹き飛ばされて・・・海に」

蒔風が海のほうに視線を向ける

「・・・大丈夫でしょう、あいつなら」

そう言いながら変身を解く

「引き続きここにいてください、絶対に」

蒔風が「奴」に向かう

「んん？なんで出てこれた？・・・ああ、そういや、スーパー1は・・・」

「そういうこと、だ！！！」

蒔風が「奴」に向かって駆けだす

蒔風があの蟻地獄を抜け出せたのはひとえにスーパー1の能力のおかげだ

仮面ライダースーパー1は本来宇宙開発用のサイボーグだったのだ
ゆえに、無重力までは無理だとしても、重力操作はお手の物だ。
それによって重力を軽減させ、蟻地獄を一気に抜け出せたのだ

バッキ！！

「一気にあんだけのライダーと出会っといてよかったぜ！！」

「能力だけかよ。たいした事ねえな」

バゴゴン！！！

ズッシャァ！！！

蒔風が地面スレスレに右で回し蹴り、「奴」の左足を払いにかかる
それを「奴」が足をあげてかわし、踏みつけようとする

それをさせる蒔風ではない。
両手を地面につき、逆立ちするような勢いで左足で蹴りあげる

そのまま逆立ちしたまま足を広げ、カポエイラのように蹴り攻める

ガガッ、ガッガッガッ、ゴガガガガガ！！！

蒔風の額に汗がたまっていく。
それに対して「奴」は涼しげな顔だ。

くる攻撃を受け止めるだけで、弾きもしない。
まるで攻撃の来たところにうまく腕や足を当てはめていくゲームをしてるようだ

「どうした蒔風、きつそうだな?そんなに汗かいちまってよ」

「ハッハッハッ・・・できの悪い砂風呂に使っちまったからな!!!」

「だったら体冷やせやぁ!!」

ガシッ!!

蒔風の脛を脇に挟み込み、「奴」がブン回し始める
そして蒔風を海のほうに投げ放った

ドッパン!!!

そんなに浅い入射角でもないにも拘らず、蒔風の体が水面ではねた。

「水」とは恐ろしいものだということを知ってるだろうか?

あれほど滑らかで、スラスラと流る水は、実はとても硬くなることがある
いや、実際に水か硬く固まるわけではない
しかしその硬度は銃弾をも砕く時がある。

ハンドガンならば銃弾は容易に水の中に入ってくる
しかしなん十ミリもの機関銃で水面を撃った場合、銃弾そのものの力によって、砕け散るのだ

水が、ではなく、銃弾がだ
突入してくる物の力によって水はそれ相応の牙をむいてくる

石を浅く投げてはねさせる「水切り」も同じだ

あれは「低い」角度で投げ、「回転」させるという二つの力があってこそ水の上を撥ねるものだ

しかし今回蒔風の体は「高い」角度でほぼ「無回転」で投げつけられてそれで跳ね上がったのだ。

その威力が想像できるだろうか
それによって蒔風の体に残されたダメージが想像できるだろうか

「ぁ主！！！」

ドッバア！！！

海中から玄武が獣神体で海上に飛び出す

その口から水流が放たれる

クァ！！！

「玄武！！！！」

蒔風の眼が見開かれ、くるりと空中で回転して体勢を立て直す
それだけでもボキゴキとアバラが悲鳴を上げる

そこに玄武の放った水流が届く
蒔風がそれの先端に足の裏を合わせ、勢いに乗って飛び出していく
！！

途中で水流はなくなり、玄武も剣の状態に戻ってしまう
それでも蒔風の勢いは止まらず、「奴」に向かって突っ込んでいく。

「おおおおおおおお！！！！！」

蒔風が腕を「奴」に向かって伸ばし、殴りかかろうと鬼神のような表情をして迫る

そんな蒔風を「奴」は呆れたように見、体（たい）を返す
スッ、と「奴」が蒔風をかわし、通り過ぎていく蒔風の後頭部に回転蹴りを上から下に真っ直ぐ叩き落とす

「ご・・・げ・・・」

「沈みなさい。そしてそのまま死ぬのです」

「お・・・断りですのことよ！！！」

蒔風が叩きつけられながら身を回転させ、「奴」に蹴りかまそうとする

だが「奴」はそんなこと気にも留めず、反対の足でちょうどむき出しになった蒔風の腹を突き破る勢いで踏みつけた

「バッボガ・・・ぎいいい

Ａｉｒ　～没死、必死、決死～（後書き）

アリス「蒔風終わり？」

ではないですけど・・・

やばいっすね

ア「で、なんか途中に字数稼ぎにしか見えない説明入りましたよね？」

・・・・・

キニスルナ

ア「あの解説本当にあってんですか？」

・・・多分

ア「たぶんて！！！」

だから違うんじゃね？と思ったら指摘をどうぞ！！！

ア「間違い探しか！！！」

でも強力な機関銃とかで水撃つと弾丸が砕け散って水の中大丈夫なのはホント

角度にもよるけど

ア「なんかうさんくさ」

うっさい!!なんかテレビでやってたんだよ!!
「世界〇見え」みたいなのでさ!!

ア「さいで。あと、次回予告と違いませんﾝ?」

・・・・・・

ア「純白も翼も開翼も出てませんよね?」

・・・・・・

ア「むしろ蒔風ゴールですよね?」

・・・もういいよ
お願い

ア「拗ねないでください。予定通りいかなかったなら行かなかったで言いなさい

次回、今度こそ!!純白、翼、開翼」

ではまた次回

観鈴ちん、ぴんち

Ａｉｒ　～覚醒、純白の翼～

蒔風が静かに目を閉じてから十秒がたった。
「奴」にしては時間をかけ過ぎる
蒔風がもう一度、瞼を開けた
「いてっ、この・・・なんなんだよぅ。もーーーー！！」
「奴」の頭部に黒い何かがまとわりついているのだ。
否、「何か」ではない。
カラスだ
その光景に蒔風は驚く
一羽のカラスが「奴」の頭を突いていたのだ。
「奴」の行動を邪魔するように
敵うはずもないと知りながらも、戦っていた
「くっ、こいつ・・・邪魔だうっとおしい！！！！」
バキッ
クァーーー！！

そのカラスが叩き落とされる
怪我はないようで、もう一度立ち上がるが、それでもぐったりしていた

「ふん・・・観鈴嬢の飼っていたカラスか・・・・」

そう。カラスの名は「そら」
そのカラスは観鈴が少し前から飼っていたカラスだ
飼っていたといっても勝手に拾ってきただけだが。

「不幸の象徴のカラスまで来るとは・・・お前も終わったな」

その光景を見て蒔風の体に何かが燈る

その何かが蒔風のもう動かせないだろう顎を、舌を、喉を動かした

「・・・・・い」

蒔風の口から言葉が漏れる
「奴」にそれは聞きとれていない

だからさらに言葉を紡ぐ

「お・・じゃ・い」

「・・・あん?」

言葉が「奴」の耳に届いた
しかしまだわからないようだ
だからまだ言葉を紡ぐ！！
「終わりじゃない・・・まだ、終わってない・・始まってすらも、いないんだ！！！！」

【Ａｉｒ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

「彼女たちの物語は・・・始まるはずだった。でも、終わろうとしていた。それが始められるんだ。邪魔はさせない・・・・」
蒔風の体はいまだに浜辺に転がっている
それでも、蒔風にはやるべきことがあった
こんな状況になっても、世界は蒔風に戦うことを求めたのだ

ゴオオオオオ！！！！

そらの身体が白く輝く。
そしてその光は人の形をとっていく
光は観鈴の元に飛び、そして徐々に光を失っていった

そこに立つ男は・・・・

「え？・・・・往人（ゆきと）・・・さん？」

「ああ・・・観鈴！！！」

そこに立つのは国崎往人。
神尾家に数日間居候していた青年だ。

彼の持つ法術という力。
ただ人形を操るだけの力。

しかし彼はその力を限界以上に使い、観鈴の死を数日間だけ伸ばした。
たった数日

その数日で神尾親子は救われたのだ。
親子の姿を取り戻せたのだ

しかし、彼はあその身にあまり力を行使したために消滅してしまった。
だが、彼は「そら」に姿を変え、観鈴を見守っていたのだ。

その想いが、今ここに、彼の復活という奇跡であらわされた

「往人さん・・・往人さん！！！」

「観鈴・・・よくがんばったな・・・」

「もういなくならないでぇ・・・」

「泣くな泣くな（ペシッ）」

「が、がお・・・」

「それやめろって（笑）」

離れたところのその軌跡を目の当たりにし、「奴」の顔がギシリと歪んだ。

「最主要人物の復活・・・ターゲットが戻ってきたぁ！！！」

地面に倒れる蒔風を放って「奴」が国崎に突っ込む

しかし、蒔風の発動のほうが早い

「いけ・・・純白の」

【Ａｉｒ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

国崎、美鈴、晴子に迫る「奴」

だが、それが届くことはなかった

「往人さん・・・私ね、翼・・・見つけたよ！！！」

バッサァ！！！

観鈴の背中に翼が現れる
その色は純白。汚れなき白。

「綺麗じゃないか。見てたぜ。呪い、なくなったんだっけ？」

「うん。蒔風さんのおかげ」

「そうか。じゃあ、お返ししないとな」

「うん！！観鈴ちん、いっくよーー！！」

ドバァ！！！

観鈴の背の翼が荒れ狂う
翼の先端から衝撃波が飛び、辺り一面をなぎ払っていく

「奴」の体も消し飛ぶ

「なぐっ！！！ごおおお！？これはあああああ！！！！！」

それでもなお突き進もうとする「奴」

そんな「奴」に、観鈴は優しげに言った

「私の翼はね、純白。共鳴するのは、人を想う・・・愛情だよ！」

ドバァァァア！！！！！

あと一歩で国崎まで届くはずだった手が消し飛び、「奴」自信も後方に飛ばされる

そして空の彼方にまで飛び去り、散りになって消えた

「・・・・蒔風さんは！？」

「そうだ・・・蒔風！！！」

観鈴と国崎が蒔風に駆け寄る

「大丈夫か！？」

「大丈夫に、見えるなら・・・眼科、行け・・・・」

「酷い怪我・・・・そ、そうだ！！」

「どうした、観鈴」

「今ならできること、わかるんだ」

「え？」

「んっ！！！（ポアアア・・・・）」

蒔風を優しい光が包む

「これは・・・翼人としての力か・・・まいったな。まさか聖人タイプとは」

「聖人？」

治癒されながら蒔風が答える
どんどん怪我が治っていっている

「ああ。治癒が得意な奴のことさ。聖人タイプはただえさえ少ないし、いたとしても力はそこまで強くない。まして翼人のだなんて今までいたかどうか・・・・」

「えっと・・・？」

「つまりお前は凄いってことだ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとう、だけでいいよ。そんなに賢まさんな」

「えっと・・・うん！」

「よし・・・・」

蒔風がパンパンと服をはたきながら立ちあがる

「オレはもう行くよ」

「だがまだ治癒が終わってないだろ？」

「最強暇なし。次の世界が何だかわからない以上、のんびりできないんだ。ごめんな」

「ううん。次の世界も、がんばってね」

「観鈴とオレの事、ありがとな。本当に、ありがとう」

「それはもういいよ。しっかり生きて、それからしっかり死ぬんだぞ？この世界で、きちんとな」

蒔風がおどけた声で言う

それに苦笑しながら国崎が答えた

「ああ。おまえも、死にに急ぐなよ？」

「・・・そうだな」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ａｉｒ］

蒔風がゲートをくぐる

次の世界へと向かった

――――――――――――――――――――――――――――――――

九つの世界を回り終わった世界の破壊者

しかし彼らはまだ知らない
旅はまだ終わってないということを

そこに乱入者が来ることを

彼らのいる家の看板にこう書いてあった

「光寫眞舘（しゃしんかん）」と

to be continued

Ａｉｒ　～覚醒、純白の翼～（後書き）

出ました三人目の翼人！！！

アリス「というかこれありきたりすぎませんか？」

大丈夫です

オリジナル設定付加してどこかの世界の主人公にも覚醒させる予定です

【Ａｉｒ】

構成：”輝志”７５％
”ＬＯＮＤ”２５％

最主要人物：国崎往人

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：国崎の復活

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：観鈴の翼人覚醒

《純白の翼人》

所有者：神尾美鈴

翼色：純白

想い：愛情
タイプ：聖人

ア「そうそう、あの聖人とか戦士とかってわかりにくいですよ」
では簡単にまとめましょう
各タイプの力の強い順に並べます
戦士：攻撃＞防御＞治癒
賢者：防御＞攻撃＞治癒
聖人：治癒＞防御＞攻撃

となります
一概にこうとは言い切れませんが

ア「観鈴さんは「奴」を圧倒しましたしね」
ワーリがはたらいてたからね
ではこの辺で

ア「次回、新たな世界、世界の破壊者」

ではまた次回

通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！！

ディケイド　～新たな世界～

仮面ライダーディケイド・門矢士（かどやつかさ）は、薄暗い宇宙のような空間に立っていた。

いくつもの地球が浮かび、漂っている

「ここは・・・・」

「ディケイド、緊急の要件です」

そこに白い服を着た青年が現れた。
士が旅に出る際、世界の危機を促してきた男だ。

「またお前か。オレの旅は9つの世界を回って終わったんじゃないのか？」

「それよりもディケイド。この世界にまた別の破滅がやってきました」

「なに？」

「異世界からの侵入者が世界を喰らい、力にしようと、この世界に来たのです」

「なんだと？」

「しかし、「奴」を追っている人物もこの世界に来ています。彼と共に、「奴」を打ち破り、世界を救ってください」

「ちょっと待て！なんでオレが！そいつのこともちゃんと教えろ！！」

「頼みましたよ」

そう言い残して青年は消えてしまった

同時に空間も輝きに消え、門矢士は写真館の前に戻ってきた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「で？やってきたのがお前ってことか？」

「そうだそうですそのとおりです。オレが来た理由、わかってんだな？」

「ああ、大体わかった」

ここは光写真館

その家の中で蒔風と士が机に座って話し合ってる

「ちょっと士君!!誰ですかこの人」

「そうだぞ士。自分だけ納得しないで俺たちにも説明しろ!」

「だから、オレは蒔風舜だ。「奴」を追ってきたんだ。わかんない？」

「わかりません!!!」

蒔風がコーヒーを飲みながらその場にいる全員を見渡して言った。

仮面ライダーディケイドと世界を渡る旅のメンバーだ

ピンクのトイカメラを首から掛けた青年が門矢士

蒔風に問い詰めている女性がこの写真館のオーナーの孫娘、光夏見。

同じく士に問い詰めている青年が小野寺ユウスケ。

奥の流しでコーヒーを作っている老人がこの写真館のオーナー、光栄次郎だ。

「しょーがないな。お前らのために特別に説明してやるよ。このオレが」

士が偉そうに話しだした。
他の二人は士のそんな態度にはもう慣れているのか、黙って聞く。

門矢士は世界を救うためにいくつものライダーの世界を回っている。
今までもクウガ～キバの世界を回り、救ってきた。
そして前回の世界で九つの世界を回り終わったのだ。

「え!?お前らの旅終わったの!?」

「はい。九つのライダーの世界はしっかり回ってきました」

「そこで世界を救ってきたもんな?士」

「ま、軽いもんだ」

蒔風がその事実を知り、驚くが思いなおし

「でもお前の近くにはいないとなぁ」

「「奴」ってのが来るからか?」

「そうそう。それ本当なのかよ。世界はせっかく救われたのにさ」

士とユウスケが蒔風に問う

「その通り。だからまあ・・・お世話になりまっす!!!」

「ちょっと!!士君にユウスケまでいるのに、これ以上置いとけませんよ!!」

夏海が反論する
それはそうだ。これだけ人がいれば大変である。

なにより士はこの家に写真の現像代や食事代などの借金を溜めこんでいるのだ。

「どれくらいいるんだ?」

「結構な時間だな。この世界は多重世界だから」

「多重世界?ってなんですか?」

「なるほど。大体わかった」

「士。本当にわかってるのか?」

「当たり前だ」

とりあえず蒔風が他の二人に多重世界のことを説明する。

「理由はわかりました。でももうこの家は結構きついんですよ?」

そこですすすっ、と蒔風が夏海によって何か封筒を渡す
結構な厚みだ。

「これで足りるかい？」

「なんですか？・・・・！！！！ようこそ！蒔風さん！！」

いきなり蒔風と歓迎した夏海に士とユウスケが驚いた

「なんでだナツミカン！！！」

「夏海ちゃん、どうしたの？」

「なんでもありません。さ、町に行きましょう」

そういって夏海が皆をひきつれて外に出る

ちなみに夏海が封筒の中に見たのは、沢山の福沢諭吉だったとか。

今この世界は最初の「夏海の世界」に帰ってきているそうだ。

彼女にとっては久しぶりの故郷だ。

旅の最初に、この世界は崩壊しかけてしまったそうなのだが

「わぁーーー。すっかり元通りです！！」

「よかったな、夏海ちゃん！！」

「はい！！」

かつて崩壊した街並み
それは綺麗に元通りとなり、前と同じ、平和な世界が広がっていた

意気揚々と街を回る一向。
途中、士が皆の写真を撮り、終始みんな笑顔だった

そしていったん家に帰ろうとすると、どこからかバイオリンの音色が聞こえてきた。

音のほうを向くと、ひとりの男性が道の真ん中でバイオリンを演奏していた
演奏し終わり、士達のほうに歩いてきた

「百年に一人の天才、紅音也(くれないおとや)様の演奏だ。三千万円の価値がある！！」

そんなことを言って夏海や士と握手を交わす、紅音也なる人物。

「礼を言おう。お前たちのおかげで世界は救われた」

「お前・・・・何者だ？」

いきなりのその言葉に、士が不審そうなまなざしを向けて聞く。

だがそれに対しあくまでも友好的に答える音也。

「紅音也。えら～い人だ。近い将来このオレの名前が全国の教科書に載るだろう」

「そんなに偉いんだったら教えてほしいな。オレは一体何を手に入れたんだ？」

音也の労いの言葉に士が聞く。

どの世界の住人でもない自分がこの旅で得たものはなんだったのかと九つの世界を巡って、一体自分は何をしてきたのか

音也がそれに答えた

「それは・・・おまえの、生きるべき、世界」

音也の言葉に何か違和感を感じる士

「どうしたんだ？」

「ああいや・・なんでもない・・・」

蒔風の言葉になあなあに返事をする士

そこに栄次郎が夏海を呼びに来た

どうやら彼女に電話がかかってきたようだ

皆が写真館に戻っていく。

振り返るとそこに音也の姿はなかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

どうやら電話の相手は夏海の同級生らしい。
久々に自分の世界に帰ってこれた夏海は、有頂天になっている。
これからみんなで集まるのだそうだ。

「TGクラブ？」

「そうです。「退学」で「TG」です」

「つまり退学クラブ？なんじゃそりゃ」

夏海が出かける準備をしながら教えてくれた。

なんでも高校時代、世の中が詰まんなくなり、いっそ退学でもしてやるか！？と作ったものらしい。
とてもくだらなそうに見える集まりだが、それでも彼女にとっては大切な友達だ。

そうやって過ごしてきた青春なのだ。

そんなことを話していると、先ほど士の撮った写真を栄次郎が現像し、持ってきた。

「おぉー、綺麗に取れてるじゃん!!」

ユウスケが驚く。そう、その写真はきれいに撮れていたのだ。

と、言うのも、士の写真はいつもピンボケで、まともに映ったためしがないのだ。
それも士がその世界の住人じゃないからしかったのだが・・・・

「うまいもんだなー。オレは写真だとかのそういった芸術方面が苦手だからな」

「そうなのか?」

「絵なんかひどいぞ。棒人間がせいぜいだよ」

蒔風たちが話してるうちに夏海の支度が終わったらしい。

とくに用事もない暇な三人なので、途中まで士達も付いていくことにした。

「士君達も会ってみます?みんなに。すっごいお宝もあるんですよ」

道中夏海が提案するが、士は呆れた顔をして取り合わない

「青臭い連中は好きじゃない」

「やめろよ。夏海ちゃんの友達なんだから」

士の言葉をユウスケが戒めるが、夏海はもう慣れたと言って受け流す。

「友達・・・か」

「どうしたんだ?舜」

「舜?」

「いいだろ?舜で。で、どうしたんだ?」

ユウスケが蒔風の顔を覗き込み、心配してくる

「なんでもないさ。この世界が修復されて、よかったな」

「はい!!では、行ってきます!!」

夏海が別れる。

三人はそこから夏海を送りだした

「嬉しそうだな、ナツミカン」

士が優しそうな声で言ったのを、蒔風が聞いた

「へぇ、そんな声出せるんだ～～～」

「バッ、そんなんじゃねえ！！」

「士？照れてんのか？」

「ちげぇ！！！」

「「へぇ～～～～～」」

「～～～～～！！！オレは行く！！！！ついてくんな！！！！」

士がむっすりとしてずんずん歩いていってしまう

残されたのはユウスケと蒔風だ

「どうする？」

「このまま士っちを追うのも悪くないな～～～」

蒔風がいたずらっ子の目をして言うが、ユウスケがそれを止める

「やめた方がいいぞ？士は怒ると・・・怖い」

「そんなのだいじょ「怖いんだ」・・・そんなに？」

コクリ、と無言で頷くユウスケ

その簡単な動作がすべてを物語ってた

「そっか・・・じゃあぶらつくか？」

「そうだな」

そうして二人は士や夏海とは別の方向に歩いていった。

ーーー

と、そこで公園の中からある庭園の中が覗けた。
聞き覚えのある声がして、その中を凝視すると・・・・

「士!!!」

「え?何やってんだお前!!」

そこにはゆったりとくつろいでいる士がいた
周りにはメイドが控え、執事みたいな男もいる。
何か見合い写真のようなものをもっているが

「士、どうしたんだこれ?」

「まさか・・・だまし取ったのか!?」

「人聞きの悪いことを言うな!!・・・ま、オレの強運ゆえに、だな」

よくよく話を聞いてみると、入ったレストランで一万人目の客になったそうで、その贈り物で企業の社長やら全財産の譲渡やら大変なことになっているらしい。

「じゃあこの写真は?」

「士坊っちゃまの結婚相手でございます」

執事のような男が答える。
というか、本当に執事だったのかこの人は。

「そうだ、お前らも付き合え」

「は？」

「なにに？」

「これに」

ーーー

首をクキリと鳴らし、メガネをかけた男が言った。

「こんなところにまだ人間がいたとはな」

ギュゥン、カシィン

その姿が変わる。

オルタナティブという疑似ライダーに変身した男が、二人に瞬時に接近して、その首を締めあげていった。

そして崩れ落ちる二人。

この男の名は、田中。

今夏海と合っている「ＴＧクラブ」の顧問をしていた男。

この世界にある秘密。

それは彼女の想いをとは真反対のものだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～新たな世界～（後書き）

アリス「世界の破壊者ディケイド！！」

やってきましたよこの世界

ア「この世界は長くなるんですよね？」

そうなります

どんどん書いて更新してくぞーーー！！！

ア「おーーー！！」

と、言いたいところなんですが

ア「おー？」

最近何だかなかなか書く気が起きなくなってきてるかも

ア「スランプってやつですか？」

そうかもしんない

どうしよう！！初投稿から続いてきた更新の勢いがここに来て止まるかも！？

ア「てかよくここまで続けましたね」

ペースの速さなら自信があります

その分内容はトントン拍子さ！！

ア「威張らないでください」

すみません

あと、今回戦闘＆ａｍｐ；変身無くってごめんなさい

ア「まぁ、今回は説明パートでしたからね」

次回からはどんどん行きますよー！！

ア「次回、この世界は本当に夏海の世界なのか？どっちなんだい！！」

ではまた次回

こいつが人の笑顔を守るなら、オレはこいつの笑顔を守る！！

「っは！！ここは！？」

気づいたら蒔風とユウスケはどこかの料亭の和室まで連れてこられていた

目の前には三人の着物美人がいる。

「さぁ、お坊っちゃま。好きな女性を、お選びください」

いつの間にかいた執事のその言葉に、同じくいたのか、士が三人を見る

「女性を選ぶというのは失礼というもの。ゆえに、全員だ」

「士、そんなふしだらな」

「節操無しーーー。背中からブスリだぞーーー」

ユウスケと蒔風の咎めるような言葉に、興を削ぐ奴だな、と言って立ち上がり。

「だったら、お前らが選べ。あとは好きにしろ」

と蒔風とユウスケを前に押し出し、自分はとっとと部屋を出ていってしまった。

「おいまて好きにしろって!!」

「おい士!!・・・・・どうする」

「どうするって言っても・・・」

「これは士の未来に関係することだぞ?」

「えっと・・・じゃあとにかく・・・・・」

「「ご趣味は?」」

そう二人同時に聞く。

なんともテンプレな行き出しに、ホホホとほくそ笑む着物美人たち。

瞬間、三人の顔がトンボのように変わり、部屋に羽音が響き始めた。

「「!?!?!?!?」」

ブーーーン

「おぉうわ！？」
「嘘だろおい！！！」

蒔風とユウスケが部屋を飛び出す
怪人という存在には慣れていても、こうもいきなり来られてはビビるわけで。

廊下をどたどたと走り逃げる二人。
その後ろからは羽音が鳴り続け、逃がしてはくれなそうな感じだ。

「ユウスケ！！お前右、オレ左！！」
「オッケィ！！」

外に飛び脱し、蒔風とユウスケが途中の道で左右に分かれる。

よし、これでうまく分断できたはず・・・・

と、思いきや

「なんで!?なんで全部こっち来んだ!?」

そしてなぜか三体中三体が蒔風のほうに向かってきた。

「なん（ブーン）なんだこ（ブーン）の世界（ブーーーーン）ダアアアア!!!鬱陶しい!!!まともに喋らせろ!!!!!!」

ゴガッ!!!ドォン!!!!!

蒔風が振り返りざまに追ってくる三体の内の一体を殴り飛ばして爆破させる。

地面に叩きつけられて爆発した仲間を見て、他の二体が警戒を強める。

「貴様はライダーでも怪人でもないな」

「貴様はこの世界にいることは許されない!!」

「なんだと?」

「「それがこの世界のルールだ!!」」

バッ、ヴォン

羽音が鋭く鳴り、蒔風に迫る。
二体の怪人、ミラーワールドのレイドラグーンの攻撃を避けながら、蒔風はなおも聞く。

「この世界はなんなんだよ!!」

「貴様に言う必要があると?」

「は!そりゃ正論!!」

バキッ!!

蒔風が後ろ蹴りで二体を押しやり、変身の構えをとる。

「だったら、ライダーならいいんだよな!?力を借りる!!」

パァン!!

蒔風の腰に変身ベルト・トルネードが現れ、かつての世界の、初めて空を制した仮面ライダーへと変身する。

「(バッ、バ!)スカァイ!変、身!!」

ビュオオオ・・・バァン!!

「スカイ、ライダー!!」

「なんだと!?」

「変身!?貴様・・・ライダーか?」

「見ての通りだが?フゥッ!スカイドリル!!!」

蒔風が二体に近づき、捻りを利かせたパンチ、「スカイドリル」を放つ。

が、二体は空中に飛んでその攻撃から逃げて行く。

トンボのような外見の通り、やはり空中を飛べるようだ。

「ム・・・セイリングジャンプ!!」

蒔風がそれを追って空を飛ぶ。

驚いたのはその二体だ。

「空を・・・飛べるだと!?」

「可笑しいかい?そんなライダーもいるんだよ!!」

蒔風が二体に向かって飛ぶ。

一体が逃れたが、もう一体は逃げられず・・・

「スカァイ、キィック!!!」

ドカッ、ドォン！！！！

一体が吹き飛び、もう一体がその光景に愕然とする。

「さぁて、次はお前だ」

蒔風がもう一体のほうに飛びかかろうとする。
そこで相手が待ったをかけてきた。

「ま、待て！！貴様がライダーならば戦う理由はない！！」

「なに？どういうことだ！！！」

「それは・・・」

ピュン、ビシッ

ドォン！！！

「な、に？」

話そうとした怪人を一筋の光線が撃ち抜いた。

蒔風が光線の来た方向を見ると、そこには「Ω」をモチーフとした仮面ライダー、オーガが変身ツールであるオーガフォンをガンタイプにしてこちらに標準を合わせていた。

「なんだあいつは!?」

オーガはファイズの世界のライダーだ。まだめぐっていない世界のライダーでは、当然蒔風は知るはずもない。

とにかく現状打破だ!!と蒔風がオーガに向かって飛んでいき、その距離を詰めにかかる。

チュンチュンチュィン!!!

向かっていく蒔風にオーガフォンの銃撃が襲いかかる。
蒔風は腕で顔をガードするが、一発がベルトの腰に被弾し、セイリングジャンプのための「重力軽減装置」破損してその効果が切れる。

蒔風が落ち、その場に土煙が上がる。
が、その中から変身が解け、それでもまだ無事な蒔風が出てきた。

「ったく・・・あのライダーなんなんだよ・・・・ん?あれは・・・」

戦闘音が聞こえ、そちらの方を見ると、ディケイドに変身した士と、ダークキバが戦っていた。

「ん・・・ダークキバか・・・そしてあれが・・・ディケイド」

蒔風の頭に情報が来て、とりあえず名前だけでも判明する。
ダークキバ、キバの世界のライダーだ。

そうやってみているとダークキバとディケイドの戦いが終盤に入る。

ここぞというタイミング。
そこでディケイドがバックルにカードを差し込み、起動させた！！

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－Ｄｅ　Ｄｅ　Ｄｅ　Ｄｅｃａｄｅ！］

「ハァッ！！！」

ディケイドが跳び、キックの構えをとる。
ダークキバとディケイドの間に黄色いホログラムカードが現れ、それをディケイドが通過していく。

一枚通るごとにエネルギーが足に集まり、敵を粉砕する「ディメンションキック」が、ダークキバにむかって突っ込んでいく！！

はずだった

しかし、そうはならず、ディケイドが通過するはずのカードが黒ずんでボロボロと崩れていく。
そのせいかキックの勢いが殺され、勢いを失ったディケイドが体勢を崩してその体が地面に落ちる。

同時にその衝撃で、今まで回ってきた世界のライダーたちのカードが周りに散った。

そこ光景を見てもう用はすんだのか、ダークキバがその場を去る。

「士!!大丈夫か!!」

蒔風が士に駆け寄り、身体を抱える。
士の変身はすでに解けており、地面のカードを見て愕然としていた。

「な・・・に・・・」

それはそうだろう。
そのカードに描かれていたはずのライダーの絵が消え、ただの真っ黒なカードになっているのだ。

「これは・・・カードが・・・死んだ!?」

「どういうことだ・・・・」

失われたカードはすべて他のライダーに関するものばかりだ。
ディケイド自身の能力のカードは失われていない。

ディケイドはカードを使って戦うライダーだ。
それら他のライダーのカードを使うことで、そのライダーに変身でき、能力も使用できる。

最初は使えなかったが、九つの世界を回ってきて、すべて使えるようになったはずなのだが、それが消えた。
それはつまり

「ディケイドの・・・旅の否定？」

「なんなんだこれは！！！」

士が乱暴に絵柄のなくなったカードを回収し、立ちあがる。

「どうするんだ？」

蒔風が士に聞く。
振り返らずに士が答えた。

「この世界について調べる」

そして首だけを蒔風に向け、最後に言った。

「この世界は・・・何かおかしい」

ーーー

その頃、林の中

夏海は同級生たちと高校時代の秘密基地に来ていた。
そこに特に仲のよかった「千夏」という少女か来たようなので、彼女を探しているのだ。

「千夏～～。どこですか～～～？」

音を頼りに千夏を探す夏海。
しかしここに来ているのは千夏ではなかった。

茂みの中から、その人物が夏海を覗く。

その顔は、友人を探す少女のものと同じものだった。

「光夏海」が、そこにいた。

一体この世界は・・・どこなのだろうか。

to be continued

ディケイド　～この世界の謎～（後書き）

ここでディケイドの能力解説コーナー！！

ディケイドはカードを使って戦うライダーです

ア「そのカードは基本的にカメンライド、アタックライド、フォームライドに分かれます」

カメンライドは各主人公ライダーに変身
アタックライドは能力や攻撃、防御を発動させる
フォームライドはまんまフォームチェンジするカードです

ア「さらにこれらの頭に「ファイナル」がつくと効果が一気に上がります」

ファイナルアタックライドは必殺技の発動
ファイナルフォームライドは各主人公ライダーを変形させる効果

が、あります

ア「ファイナルカメンライドはないんですよね？」

あるけど、劇中未使用だからな
一応説明すると、各ライダーの最強フォームに変身です

こんなところか？

ア「次回、コンプリートフォームって最初は変だったけど動いたら

かっこよかったよね？」

予告になってない！？

ア「ではまた次回」

信じる者のために戦える、それが王だ！王の資格だ！

「士、調べるってどうすんだよ」

「手始めに、あいつだ」

士が指差した方に、紅音也が立っていた

「あいつが？」

「ああ、さっきのライダーだ。おい！結局、この世界は救われてなかったのか？」

士の言葉に足を止め、音也が振り返り答えた。

「ははははは！！1この世界は救われる必要などない！！」

「どういうことだ？おい！！」

「なるほど・・・そういうことか。わかったぞ士」

蒔風が前に出て言い放った

「つまり、この形でこの世界は正常、ということだな？これがこの世界のあるべき形。そうだな？」

「な・・じゃあここはやはり、ナツミカンの世界じゃない！？」

「となると・・・夏海さんが危ない！？」

蒔風と士が駆けだそうとする
その背中に音也が叫んだ

「お前は！！この世界にふさわしい！お前はいずれこの世界の宝を受け継ぐことになるだろう」

その言葉に士が足を止め、反論する

「気に入らないな。人の人生勝手に決めんな！！行くぞ、蒔風」

「おう」

その場に音也を置いて、二人が駆けだした
その姿を見て、音也が笑う

歓喜と狂気が程よく混ざった声が響いた

――――――

「海東・・・」

この青年は海東大樹
仮面ライダーディエンドに変身し、士たちと同じように世界を回っている

彼の各世界での目的はその世界のお宝を手に入れること
今までの世界でも様々なものをいただいてきている

まさに「怪盗」海東大樹だ

「あんたがディエンドか？」

「・・・君がこの世界にやってきた翼人って奴かい？」

「翼人？なんだそれは」

「あとで説明してやる。知ってんのか？光栄だね」

蒔風がわざとらしく大きな態度をとって接する

「きみも、たいしたお宝をもってるみたいだけど、それはあとででもいい」

「盗れるかな？」

「それが僕の目的だからね」

蒔風と海東がお互いに挑戦的な目でお互いの目を見る。
その顔は楽しんでいるようにうっすらと笑っている。

「そんなことは今はいい。海東、この世界はなんだ？」

「なんだ士、知らなかったのかい？ここはネガの世界さ」

「ネガの・・・世界？」

海東が言葉を進める

「そう、写真にポジとネガがあるように、世界にも裏と表の世界があるんだ。ここはその世界さ」

「つまりは一種のパラレルワールドってことか？」

「そうだね。さすがに理解が早い」

「そりゃもう♪」

「ええい、話を逸らすなお前ら！！」

勝手に二人でバチバチ言わしてるのに業を煮やし士が叫んだ

「とにかく、ここはナツミカンの世界じゃないことは確かなんだな？」

「そう。この世界ではライダー・・・といってもダークライダーが怪人たちを統率しているんだ」

「オレが狙われたのはそういうことか」

「そういうことさ」

「そういえば蒔風、ユウスケはどうした？」

士が蒔風にユウスケの事を聞く

「ああ、あの見合い相手がバケモンになってな。それで逃げる途中に分かれたんだが・・・・
あいつはライダーだから大丈夫だろ。ダークライダーじゃなくても、ライダーならギリギリセーフみたいらしいし」

「それもそうだな」

三人は薄情にもユウスケを思考の外に押しやった。
大丈夫だと信頼してると言ってもいいのだが・・・・

――――――

彼らこそさっきまで士と戦闘を繰り広げたライダーたちだったのだが、彼女はそんなことは露とも知らない。

「千夏さん、もうすぐ来るそうですよ」

「本当ですか！？楽しみだなぁ～」

「久しぶりだもんな」

「そうだ！あのときみんなで埋めた宝物、見に行ってみません？」

あのとき、とは「ＴＧクラブ」が解散した時のことだ
つまりは未来に向けたタイムカプセルだ

「あ・・・あそこは・・・」

「え？」

「コンクリ敷き詰められて、マンションの駐車場になってんだ」

「でも大丈夫です。千夏さんがどこかに「宝」を隠していますから」

「じゃあ、早く千夏に合わないとですね！」

「ええ・・・本当に。どこに隠したんでしょうね・・・・「宝物」」

千夏から連絡があるまで、夏海は久々の町を歩いてみることにした。

（町もみ～んな元通り。これで千夏が揃えば～～♪）

「夏海さん！！」
「おい、ナツミカン！！」

そこに蒔風と士が夏海を見つけて駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？二人とも。ユウスケは？」

夏海がユウスケのことを案じるが、二人にその気はない。
全くない。

「夏海、この世界は危険だ。ここはお前の世界じゃない」
「さっき怪人にも襲われた。写真館に戻るんだ」

士と蒔風がやいのやいのと夏海に言うが、本人は不服そうな顔をする。

無理もない。
久々に帰ってきた世界に、久々の友人たち。
それらを否定されて、いい気分ではいられないだろう。

「やめてください！ここは私の世界です。絶対にそうです！！」

「夏海！！」「夏海さん！！」

夏海が駆けだしていってしまい、士と蒔風はその場に立ち尽くしてしまう

（酷いです・・・せっかく帰ってこれたのに・・・蒔風さんはあったばかりなのに馴れ馴れしいですし、士君も）

ドスッ！！

しっかり前を向いてなかったので、夏海が誰かにぶつかってしまった。

「す、すみません！！」

夏海が謝るが、ぶつかった女性は不機嫌な顔をして睨んできた

「なに？あんた。人間のくせに」

ブーーーン

「！！！！！そんな・・・そんな！！！」

目の前で女性の顔がトンボのように変わり、怪人になってしまう

その光景から逃げ出すように夏海は元の秘密基地まで戻ってきていた。

「そ・・・そうです。みんな！みんなは！？千夏！！」

夏海が仲間を探しだす
彼らだけが、この世界が彼女の世界であるという証明だからだ。

みんなの記憶は確かに本物だ。
だからここは私の世界だ、と

ガサガサガサ！！！

背後で何かがうごめく音がした
それが千夏だと思い、夏海は音のほうに向かい覗いた。

だが、そこにいたのは

「え？・・・・そんな・・・・」

「落ち着いて聞いて。ここはあなたの世界じゃないわ」

そこにいたのは自分と同じ顔をした「光夏海」だった

ーーー

「・・・ということなの。ここはネガの世界。あなたの世界じゃない」

この世界の夏海（以後、ネガ夏海）が説明を終えた。
夏海はそれを聞いて愕然としていた。

「で、でも、みんなの思い出は同じでした！！」

「思い出はある。でも、それだけ。彼らは知ってるだけなの」

「嘘・・・・嘘です！」

「彼らはダークライダーなの。殺したみんなの姿をとってるだけの偽物よ」

「そんな・・・じゃあ千夏は？千夏はどうしたんですか！！」

「千夏は・・・死んだわ。奴らから、宝を盗んで」

「嘘です！！そんなことありえません！！」

「じゃあ私の存在はどうなの？ここは危険なの。早く逃げなさい！！！」

「夏海！！そいつから離れろ！！」

そこに同級生三人が走ってきた

ネガ夏海が止めるが、夏海がそちらに駆けて行ってしまう

「みんな！！」

「夏海・・・（ニヤリ）フン！！」

グイッ、と佐藤の顔が醜悪なそれに代わり、夏海の腕を捻りあげた。

「佐藤君！？なんで・・・」

「お前は餌だったんだよ。こいつをおびき寄せるための、な」

青柳がネガ夏海を指さしてバカにしたように言った
さらに言葉と続ける

「さあ、我々から盗んだ宝を返してもらおうか」

「・・・・・・・・」

ネガ夏海が悔しそうに俯く。
人質を取られては、案内するしかなかった

――

やってきたのは土管が大量に、あちらこちらに積まれている土石場。

ここの電信柱の下の砂利の中に、「宝」は埋められていた。

ネガ夏海がそれを差し出す
するとどこからともなく現れた音也がそれを奪うように取り上げた。

「んーーー。これで我々の宝が戻ってきたぞ・・・そしてこれを受け継ぐのは・・・出て来い!!士!!」

その声に応じて士管の陰から士が出てきた。
その顔は厳しく険しい

「士君・・・」

「これはお前のものだ、士。お前は最高のライダーとしてこの世界に生きるがいい。お前は、影の世界の住人だ」

「なるほど・・・いろいろと楽しかったけどな・・・」

士がその先を言う前に、周囲を紙飛行機が飛んできた。
皆の視線がそちらに奪われる
その隙を突き、海東が音也の手から「宝」をかすめ取っていった!

「へぇ〜。これはたいしたお宝だ」

「宝」を見まわし、感心の声をあげる海東。
周囲から向けられる敵意の眼差しなど、気にも留めてない

「貴様・・・・（ガブリ）変身！」

音也がダークキバに変身し、海東に迫る
それに合わせて海東も変身する

ガシュウ、ガチィ

カードをディエンドライバーに装填し、

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－］

その銃口を上に向けて

「変身！！」

引き金を引く

［ＤＩＥＮＤ！！］

幾重にも影が海東を覆い、仮面ライダーディエンドに変身した。

さらに夏海をとらえていた三人も、彼女を放りだし、変身する

「（ウィン）変身」

「（０００、ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ）変身」

「（バッ）変身」

ガシュゥウウ・・・・

そこにダークカブト、オーガ、リュウガのダークライダーが現れる

「手加減なしだ」

「「「オオオオオオオオ!!!!」」」

音也の言葉を合図に、三人が一斉にディエンドに駆け出す。

その様子を士が流した目で見る

交戦するディエンドだが、さすがに三人相手に対応しきれるはずもない

徐々に押されていく

「海東君。手助けはどうかにゃ～～～？」

「「「「!？」」」」

そこに声が響く

一瞬にして四人の間を駆け抜け、ダークライダーの三人の装甲から火花が散る

そしてそこに立つのは・・・・

「こりゃすげえな。確かに宝だ。でももっと神秘的なものかと思ってたからにゃー」

「君は・・・蒔風!!」

「相手になろうか?み~~んなまとめてでもいいぞ?」

「なめるな!!」

蒔風に三人が向かう
その背中にディエンドが弾丸を放った

「僕を・・・無視するな!!!」

ドンドンドンドン!!!!

ディエンドがさらに弾丸を放ちながら戦闘に飛びこむ。

「士!!」

蒔風が戦闘の合間に「宝」を投げる
ディエンドがそれを妨害しようと「宝」に向かって撃つ

軌道が逸れ、「宝」は夏海のほうへと転がっていった
それを拾った夏海を庇うように士が近づく

「この世界で生きろ士。お前の旅は終わったんだ」

思わず夏海のほうへ向かった士に、こちらの世界にくるよう音也が誘う。

お前は表の世界じゃなく、裏の世界にいるべきだと。

「どうだ?このネガの世界なら何でも好きなものを与えよう!!あらゆる快楽を、幸福を!!」

その素晴らしい誘い
きっと多くの人間ならそちらを選んでしまうかもしれない
だが、ここにいる男は、そんなものに縋るほど弱くはない

「違うな」

断固とした決意で士が言った

「人は誰でも、自分の居るべき世界を探している。
そこは偽りのない、陽のあたる場所
そこに行くために人は旅を続ける。そして旅を恐れない!!

そうだよな・・・ナツミカン」

「士君・・・」

士は言ったのだ

自分の世界は自分で見つける
こんな上っ面な世界じゃない、本当の自分の世界を見つけ出すと

「その旅を穢したり、利用したりする権利は誰にもない!!」

「士・・・・」

戦いながら蒔風もその言葉を聞いていた

彼らの旅は世界を探す旅。

しかし、蒔風の世界はすでに崩壊寸前。
帰ることなどできない

だが・・・・

蒔風が士に近寄り、問いかけた

「見つけられるかな・・・オレの、帰る場所」

「見つかるさ。そのために世界を回ってるんだ!!」

「ありがとう・・・少し・・・救われた」

士と蒔風が互いに見つめ合う
そこに一つの絆が生まれた

自覚しなくても、彼らは仲間となる

「貴様は・・・何者だ?」

ダークキバの問いに士が答える

今までも言ってきたその言葉。
自分の世界を見つけるまで、何度でも言い続ける！！！

「やはりオレは・・・通りすがりの仮面ライダーだ！！」

「と、ただの世界最強さ」

「覚えておけ！！変身！！！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！！］

「ってか、蒔風！！オレの台詞に割り込むな！！」

「いーじゃんいーじゃん。ほら、カードが」

ファアアン・・・・

失われていたカードが蘇り、新たなカードが現れた。

「準備はいいな？」

「ああ、いくぞ！！」

ディエンドの相手を呼び寄せた怪人に任せ、三人のダークライダーが二人に迫る。

「おらおら！！こっちだこっち！！カブトムシにドラゴン野郎が！！」

蒔風の挑発にダークカブトが乗るが、リュウガはオーガとともにディケイドに向かう。

「ちっ。うおっ。力を！！」

蒔風が槌を取り出し、ダークカブトに振るう

「（こいつの残りもあと五分くらいってとこか・・・）
よっし、使い切るか！！来いよ駄ブト！！！いや？堕ブトか？」

「貴っ様ぁ！！！」

蒔風とダークカブトが交戦する中、ディケイドは二人に押されていた。

右から左から、休むことなく剣が向かってくる
ディケイドもそれを受けはするが、ダークライダーの地力は凄まじく、受けることもできなくなっていく。

そして二人同時に剣を振るって来たのを直撃してしまい、ディケイドが吹っ飛んだ
いくつもの土管を粉々にし、ディケイドが地面に伏せる

「士君！！」

夏海がディケイドを案じ、叫ぶ。

彼にゆっくりと迫るリュウガとオーガ。

「どうすれは・・・・！！士君！！これ！」

そこで夏海が自分の手にあるものに気付き、それを士に投げた

ディケイドがそれをキャッチする。

そして先ほど現れて新たなカードを挿入し、そこに映ったマークをなぞっていく

［ＫＵＧＡ　ＡＧＩＴＯ　ＲＹＵＫＩ　ＦＡＩＺ　ＢＬＡＤＥ
ＨＩＢＩＫＩ　ＫＡＢＵＴＯ　ＤＥＮ－Ｏ　ＫＩＶＡ］

そして最後にディケイドのマークをタッチし、それが・・・「ケータッチ」が起動した

［Ｆｉｎａｌ　Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！！］

その姿がディケイドコンプリートフォームへと変わる

胸には各ライダーのカードが収められており
額部分にはそれらよりも上位であることを示すかのように、ディケイドのカードが嵌まっていた

バォオウ！！！

全身からエネルギーが噴き出し、その力強さをあらわしていた

「・・・・！！！！」

二人のライダーがその姿に驚くが、ディケイドはそんなことは気にしない

ライドブッカーソードモードの刃を撫で、二人に迫る

二人は猛然とディケイドに斬りかかるが、出力が違い過ぎる

一薙ぎ二薙ぎされただけで、四肢からは力が抜けていく

ディケイドがオーガの腹部に剣を突き刺し、ケータッチを操作する

［ＲＹＵＫＩ－Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－ＳＵＲＶＩＶＥ］

すると、ディケイドの隣に龍騎サバイブが突如として現れた

ディケイドがオーガから剣を引き抜き、腰に移動させたバックルにカードを装填させる

－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－

リュウガがディケイドに最終技を繰り出そうとし、宙に浮いていく

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵＫＩ！！］

ディケイドと龍騎サバイブが全く同じ動作をとる

空中で×の字を書くように剣を振るうと、その形に炎の斬撃が作られる

「おおおおおおおおおお！！！！！」

リュウガがドラグブラッカーの炎を受け、キックで迫ってくる

ディケイドは龍騎サバイブとともに斬撃を飛ばし、迫りくるリュウガを粉砕する！！

「ぐ、ぐあああああああああ！！！！！！」

リュウガをドラグブラッカーもろとも爆散させると、龍騎サバイブは消えてしまう

さらにオーガがオーガストランザーにエネルギーをチャージし、巨大化したフォトンブラッドの刃を構える。

［ＦＡＩＺ－Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－ＢＬＡＳＴＥＲ］

それに対し今度はファイズブラスターフォームを召喚し、ファイナルアタックライドを発動させる

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＦＡ　ＦＡ　ＦＡ　ＦＡＩＺ！！］

ディケイドの剣の先と、ファイズの持つファイズブラスターからフォトンブラッドの光線が放たれる
その光線はオーガの刃、オーガストラッシュを粉々に撃ち砕き、さらにオーガをも撃ち抜き、その体を爆発させる。

さらに蒔風と交戦中のダークカブトのほうを向き、ケータッチを押す

［ＫＡＢＵＴＯ－Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－ＨＹＰＥＲ］

カブトハイパーフォームを呼び出し、

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＫＡ　ＫＡ　ＫＡ　ＫＡＢＵＴＯ！！］

ハイパーキックを二人で放つ

それに気づいたダークカブトが蒔風から離れ、ベルトのボタンを押す

《１、２、３、ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ》

「うをおおおあああああああ！！！！」

空中でキックがぶつかり合うが、敵うはずもなく、ダークカブトがキックの渦に飲み込まれ爆発し、消えた。

「っち・・・・」

変身を解いた音也が忌々しそうに士ら一行を睨み、その場を立ち去る

こうして、士達の戦いは終わった

ーーー

その未来に、絶望ばかりがあると知りながらも、一筋の希望を信じて、歩きだした。

――――――――――――――――――――――――――――――――

一行が光写真館に戻ってきた。

そこに栄次郎が士の写真を持ってきて皆驚いた
正常に取れていた士の写真がネガのように色が反転してしまったのだ。

「う～～わ。こりゃひでえ」

「やっぱりこうなったか」

「それにしても、世界はまだあったんだな」

「それは当然だ。オレだってライダー以外の世界を回っているからな」

「ま、オレはライダー限定みたいだけどな」

「でも、その世界に限界はない」

「ああ・・・世界は九つだけじゃない。
オレの回る世界は、まだまだあるってことだ。

オレたちの旅は・・・まだ終わってはいない」

士の言葉に、皆閉口する。

「・・・ま、オレとしては退屈せずにすみそうだ」

「退屈って・・・そうだ、お前ら酷いぞ。オレを置き去りに戦うなんて！！」

「だってユウスケ空気だし」

「諦めろユウスケ。それがお前の宿命だ」

蒔風と士の慰めにならない慰めにユウスケが膝を抱えて拗ねてしまう

「ユウスケ、気を落とさないでくださいよ」

そう言って夏海が立ちあがり、柱の鎖に手を掛ける

すると背景ロールが降りてきて、新たな世界へと誘った。

その絵に真ん中にはディエンドのマークとＷＡＮＴＥＤの文字が

「さあ、新しく蒔風も来たことだし、新たな旅の始まりだ」

次の世界・・・そこは・・・

「海東・・・・」

ディエンドの世界

to be continued

ディケイド　～新たな旅、コンプリート～（後書き）

アリス「長すぎ！！あと蒔風が空気すぎる！！！」

ごめんなさい
長いのは次回からの課題に
蒔風の空気もどうにかします

ア「どうやってですか？」

まずは各世界の話にもっと蒔風を突っ込ませます
今回の話は新たな始まりですから、どうしても蒔風を入れにくかったんですよ

ア「では次回からは？」

それなりにオリジナル展開だと思います

オリキャラは出ませんが

ア「がんばってください」

がんばる！！！

ア「次回、ディエンドの世界」

ではまた次回

この手で誰かの手を握ることもできる
その時はオレたちは、弱くても、愚かでも
一人じゃない！！

ディケイド　～親切な世界とその裏～

「海東の世界～海東の世界～～どんなのかな～～～？」

「楽しいのか？」

「いつだって世界に降り立った時は楽しいもんさ」

そうだろ？と聞きながら蒔風がユウスケに振り返る。

いまユウスケ、蒔風、夏海の三人はこの世界の様子を見て回っていた士はこの世界に着いたときに振られた役割が「サラリーマン」だったため、その会社に出勤していった。

「それにしてもこんな田舎に会社なんかあんのか？」

「さぁ？」

そう、ここは田舎だ。
見渡すばかりの田んぼが広がっている
あっち見ても田んぼ、こっち見ても田んぼ。
今通りすがったのだって、きっと田んぼに違いない

「そんなことないだろ」

「やっぱり？でも・・・田んぼしかねぇ」

「だなぁ・・・こんな穏やかな世界で海東さんは何やったんだろ」

「それをこれから調べに行くんじゃないですか。ほら、いきますよ！」

そういって夏海が二人を引き連れていく

その道々には看板が多く掛けられておりそのすべてに

「指名手配犯　海東大樹」「極悪ライダー、ディエンド・海東」

などと言った指名手配書がこれでもかと貼り付けられていた

「まぁ・・・泥棒だからなぁ・・・」

「いきますよ！蒔風さん！！」

「へ～い」

そして三人がたどり着いたのは警察署だ。

海東がなにかやったのなら、それを聞くならここが一番適しているだろう

「にしても大概におかしな世界だな。ここも」

「そうか？けっこーいい世界だと思うぞ？」

と蒔風とユウスケが言うのも訳がある

ここまで歩いてくるまでの事だ
いちいち説明すると長いので簡単に言おう
皆親切すぎるのだ

ユウスケの腹が鳴ると、通りすがりの少年が自分の弁当をくれたり
三人が警察署までの道を聞くと、そこまでおぶって行ってくれたり
今もただ話を聞きに来ただけだというのに、まるで国賓が来たかの
ようなおもてなしだ

「で、みなさん。一体どのような御用件で？」

警察官が屈託のない笑顔で聞いてきた

ちなみに警察署と言っても申し訳ない程度の交番があるだけだ
三人はそこの外にある天幕の下にいる
周りでは何人かのお年寄りがお茶をすすっていた。
夏海達が海東大樹について聞くと、警察官も、周りにいた住人も一
斉に驚き、海東大樹の名をささやき始めたのだ。

「海東！？」「海東大樹だって！？」「あいつのことなのか！？」

「こ、こりゃあ大変だ・・・ちょっと、お待ちください！！」

そう言って警官が自転車に乗ってどこかに走り去っていってしまった
どうやらお偉いさんに報告に行ったようだ

ーーー

そして次の日

田園風景の只中にドン！と建っている高層ビル
そこのプールに士たちは案内されていた

「なんで話を聞くのにプールなんだ！！」

「落ち付け士。落ち着くんだ」

「待て蒔風。お前は本当に冷静なのか？」

「オレか？いたって冷静だ。冷静すぎるほどにな（キラン）」

「だったらなんで海パン一丁なのか説明してくれないか」

「そこにプールがあるからさ！！！（バッ、ドボン！！）」

「あっ！！蒔風さん！！」

蒔風がプールに飛び込み、ザバザバと泳いでいく
それと同時に、プールから一人の男が上がってきた

「申し訳ございません、このような格好で」

そして男が着替えてから、士達を改めて案内した

屋敷の中のような内装のホールでテーブルを囲んで士達が話をする
夏海、ユウスケ、士、いまだに水着の蒔風、そして先ほどの男だ
「では、あなた達は海東大樹とともに様々な世界を旅しているということですか」
「別に・・・仲良くってわけじゃないけどな」
「オレはこないだ参加したよー」
「舜。服は着ないのか？」
「海東はいろんな世界でお宝を手に入れ回ってるらしいけどな」
「所詮ただのコソ泥だ。オレたちの周りをウロチョロしてる、な」
「舜？なんで服着ないんだ？」
「コソ泥ですか・・・あいつらしい」
「それで、海東さんは一体この世界でなにをしたんですか？」
「あれ？なんでみんなおかしく思わないの？服着てないんだよ？」
「あいつは、この社会を壊そうとしたんです。いわば、反逆です」
「なるほど。大体わかった」

「あいつ？そう言えばさっきからなんか親しげっすね？」

「おかしいな？オレは間違ったこと言ってないよね？」

「あ、申し遅れました。私はエリア管理委員会次官、海東純一です」

「海東？」

「ということは・・・・」

「はい。大樹は、私の弟です」

「な、なんだってーーー！？」

「舜。ちょっとこっち来い・・・・（テメェいい加減服着ろって言ってんだろうが！！！）」

「（ユウスケさん！？やめてくださいよぅ！！そんな重り縛り付けられたらいくらオレでも・・・ギャーーーーー！！！！）」

ドボン！！！

「ゴボガボボボボボボボ・・・・・・」

ーーーー

そこからは士も単独行動するようだ。

「お前らは写真館に戻ってろ・・・蒔風はどうした？」

「し～らね」

「私も知りません」

三人が蒔風の所在を考えるが、彼なら一人でも大丈夫だろう、という結論に達し放置した。

その蒔風はと言うと・・・・

（こ～こな～～んかクサイんだよなぁ・・・・）

さっきのビルの中に潜伏していた。
天井のライトの裏や、起伏の所為で死角になってる場所、単純に天井裏などをつたってビル内を見て回っていた

（あの男・・・純一ってったっけ？あの笑顔・・・キモチワルイ笑顔だ）

そして今つけているのはその海東純一本人の背中だ。
彼が「エリア管理委員会長官」と書かれた扉の前に立ち、厳かにノックし、部屋に入る。

蒔風もうまくその部屋の天井裏に入り込み、様子をうかがう

デスクの椅子に座っているのは頭を刈り上げ、眼鏡をかけた白いスーツの男だ
その男の前に純一が立ち、報告する

「そうか・・・海東大樹が戻ったか」

「はい」

「それで?この世界にいる他のライダーはどうした?」

「仮面ライダーランス、ラルク共にいまだ逃亡中です」

「ふむ・・・はやく捕らえ、プログラムに掛けなければな」

「私にお任せください。あのディケイドの一行は大樹や、他のライダーとも接触しています。彼らの仲間を捕らえれば、まとめて引きずり出せるはずです」

そう言って純一が懐からバックルを取り出した
「A」をモチーフにしたライダー、グレイブのものだ

(あいつもライダー?だがあの男はライダーを追っているはず・・・
「プログラム」ってのも気になるな・・・)

「では任せよう。それにしても、海東大樹に仲間とはな」

「本人は否定していますが、おそらくはそうかと」

「・・・その一行、注意が必要だな。ところで」

「なんでしょう。」

「招かれていない客を、私は好まない。知っているな?」

「ええ。もうすでに」

ドンッ!!

天井裏が小規模ながら爆発する
しかしそこから落ちてきた瓦礫の中にはなにもいなかった

「捕まえろ」

「はい。変身」

《ｏｐｅｎ　ｕｐ》

純一がグレイブに変身する
蒔風が逃げた方向はわかっていた

「まっさか、ばれるとは思わなかったぜ・・・・」

蒔風がいるのはこのビルの屋上だ。
さっきの爆発の直前に逃げたため、所々煤けているが、怪我はなかった

「で、まっさかこんなに早く追いつかれるとも思ってなかったわ」

蒔風の背後に音もなく現れたのはグレイブだ。
その剣の切っ先を蒔風に向け、宣告した

「もう逃げられませんよ。ライダーでもないあなたが、ここから逃げる術はありません」

そこの言葉に蒔風が思考の後に答えた

「・・・どうかな!?ここからでも、逃げる方法はいくつか考えつくけど?」

「では、見せてもらいましょう」

バッ、ブォン!!

グレイブが専用剣のグレイブラウザーで蒔風の首を狙う
蒔風がそれを身を引いて避けるが、グレイブがそのまま回転し回し蹴りを食らわせてくる

それを腕で受け、掌底をグレイブの腹に減り込ませ後退させる
しかし後退したのはその威力にではなく、自ら身を引いたためだ。

「おい、なんでライダーを敵視するみたいになってんだ?この世界の仕組みはなんだ」

「教えましょうか?そのためにはまずあなたの身柄は拘束させていただきます!」

グレイブが先ほどと同じ要領でさらにコンボを繋げようとしてくる

蒔風が避け、受け、それを知った上でさらに攻撃を仕掛けてくる

だが・・・・

ガキッ!!

「なに!?」

蒔風が上腕でグレイブラウザーを受け止めた

服の下からは鞘に収められたままの「天」が覗いていた

「これは!?うぐッ!!」

蒔風がグレイブの首元を掴み、壁に叩きつける

「答えてもらうぞ。この世界の仕組みはなんだ?」

「う、ぐ・・・この世界では・・・フォーティーン様がすべてだ」

「フォーティーン?あのおっちゃんの事か?」

「ふ。そうだ。この世界の住人は皆優しい。そうだったでしょう?それもすべてフォーティーン様のお力。逆らう者などいません」

「お前らは・・・一体何をしているんだ!?」

「人間は優しくあるべきです。それができない者は、この世界にふさわしくない」

「そうすることを強要しているのかお前らは！！！彼らの自由を！！」

「逆らう者にはプログラムを植え付ける。完璧だ。この世界は完璧であるべきなんだ！」

《ＭＩＧＨＴＹ》

「！？なに！！」

ドッズン！！

グレイブが蒔風から見えない位置でカードを剣にスラッシュさせるそうすることでスラッシュしたカード「マイティグラビティ」が発動し、その剣撃を蒔風にぶち当てた

重力の乗ったその一撃に、蒔風が吹き飛ばされ、フェンスを破壊し、身体が落ちていく

「～～～～！！！力を借りる！！」

蒔風の全身に電流が走る

その力で磁力を働かせ、ビル内の鉄骨に作用させる

ブワン、と離れがちだった蒔風の体がビルに向かって振り子のように近づいていく。
直前で力を切り、壁を蹴り砕きビルの中に入る
そこは何かの手術室のようで、気味が悪いほど薄暗かった

「おや、ここに何の用かな？」

蒔風の背後から声が聞こえた

振り返るとそこにはさっき純一と話していた男がいた
すなわちこの世界を統べる男、フォーティーンが

「おまえ・・・ここで捕らえた人を洗脳してんのか！？」

「それでこの世界は幸せになるのだ・・・かぁぁあああ！！！」

その全身から黒いオーラが噴き出し、一瞬だけその正体を見せる

「ッ！！お前は！！！」

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・
・・・

ドォオン！！！！！

大爆発を起こり、蒔風の開けた穴がさらに広がった
爆発の中から人間一人分の影が吹っ飛んで行ったが、誰もそれを気にも留めない

その部屋の扉からグレイブか飛び込んできた

「フォーティーン様！！」

「大丈夫だ。問題ない」

フォーティーンは元の男性の姿に戻っていた
あれだけの爆発にもかかわらず、一切の機材は傷一つ付いていない

「機材を移して、新たに運び込まれたものにプログラムを」

「は」

グレイブが変身を解き、歩き去るフォーティーンに頭を下げた
そして自身も任務をこなすために、ディケイドの一行のほうへ向かった

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～親切な世界とその裏～（後書き）

アリス「おお、確かにちょっと違います」

蒔風視点からの「ディエンドの世界」です
その代わり士とこの世界のライダーたちの共闘はなくなってしまいましたが

ア「そこはどうするんです？」

・・・動画サイトに行けばあるさ！！！

ア「うわこいつサイテーですね」

じゃあ書く？
蒔風がいないから原作そのまんまだぞ？
はたしてそれを二次創作と言っていいのか？

ア「確かにそうですが・・・・」

だからあえて蒔風と士たちは別行動にしました
多分、他の世界もそうなります

ア「と、なるとあまり士との共闘は？」

各世界の最後の戦いぐらいですかね

ああそうだ

今日ダブルの映画見に行きましたよ！！！
かっこよかった！！

ア「エターナルとかジョーカーとか？」

ジョーカーの変身ポーズがメチャかっこよかった。
あとオーズだよオーズ！！

ア「先行ライダーですね？」

そうそう。
で、映画の最後にこう言ってた

「ダブル、オーズ。ＭＯＶＩＥ大戦再び勃発！！」

ア「またやるんですか！？」

やるみたいだよ～～

ア「まったく。最近のライダーはなんというか

次回、ディエンドのエンド」

ではまた次回

オレたちは、共に助けあい、進化する！！！

ディケイド　～兄との決着～

蒔風が帰ってきたのはあたりが真っ暗になってからだ。

写真館にいるのはユウスケ、士、栄次郎だけだった
あと小さな白い蝙蝠のようなキバーラと呼ばれる者もいた。

夏海はいない。
グレイブに誘拐されたのだ

写真館の中は散々だった
ユウスケはキバーラに対し異常な優しさをふるまっていたし
栄次郎は夏海がさらわれたと狼狽していた

そんな栄次郎に士は声をかける

「大丈夫だ。絶対に助ける。絶対にだ」

「やっぱりまともな社会体制じゃなかったか・・・」

「ああ。海東からも話は聞いて大体わかった」

どうやら過去、海東はフォーティーンのもとでライダー狩りをしていたそうだ
そして純一はライダーとしてランス、ラルクと共にこの世界の体制に抗っていた

そしてある日、ついに純一が捕まった
兄がライダーだとは知らなかったが、それでも海東はまだ大丈夫だと思っていた

海東は自分の考案した安全な更生プログラムによって納得してくれると思っていたからだ。
だがそんなものは使用されていなかった
人間の頭の中にフォーティーンの因子を埋め込むことで言いなりにさせていたのが現実だった。

結果として海東はフォーティーンから離脱し、
純一はフォーティン側に着いた、というわけだ

「海東は自分の兄を元に戻そうと思っている」

「夏海さんはどうするんだ?ユウスケは使い物にならないぞ?」

ソファでユウスケがキバーラのどこだかわからない肩を揉んでいた
「どうだい?痛いところはないかい?あったら言ってくれよ?」

「・・・キモチワルイな」

「で、蒔風。オレに作戦がある」

「どんな?」

「それは・・・・・・」

ーーー

「借りてるだけな。だから使わない限りばれないの。にっしっし」

「ねえ、用があるなら早くしてくれないか？僕は忙しいんだ」

海東が二人に話をするように促す

「そうだな・・・オレたちはナツミカンを取り返したい」

「お前は兄を助けたい。どちらもうまくいく策があるんだが、乗るかい？」

「なんだいそれは？まさか僕に同情してるんじゃないだろうね？」

「なに？」

「僕の問題は僕が解決する。君たちは手を出さないでくれたまえ」

「海東。お前は信じる者に裏切られ、そして自分すらも信じられなくなった
だからお宝という確実に信じられるものを集め、自分をごまかそうとしている。
違うか？」

「わかったようなことを言わないでくれないか！！」

「はん・・・士、こいつ飛んだ腑抜けだぜ。オレたちだけで全部解決してやろうぜ」

「なんだと・・・・（ガッ！！）僕をバカにしてるのか？」

海東が蒔風の襟を掴みあげ激昂する
そんな海東の怒りをさらりと受け流し蒔風が言う

「じゃあなんでこの世界に来た時、真っ先に兄を助けに行かなかった？あちこちでダークローチを倒すだけで、兄と戦おうとはしなかった」

「そ、それは・・・」

海東の手が緩む

「この世界に来たのだって、士達というきっかけがなければ帰ってこなかったろう？いい機会だから言ってやる
お前は逃げてたんだよ。そして「逃げる」ということを「宝探し」という理由でごまかした！」

「違う！！僕は・・・僕は兄さんを救う！！！」

「だったら早く行くぞ。一人でだとかそんな詰まらん意地を言ってんじゃねえよ。何としても兄を助けたいんだろ？」

「・・・・・」

海東が黙る
そこに一組の男女が現れる

「さっきから黙って聞いてれば・・・私たちも手を貸すわ」

「しゃーねぇな。春香に免じて、一度だけお前を信じてやるよ」

そこに立つのは三輪春香と禍木慎(まがきしん)だ
彼らはかつての純一の仲間で、仮面ライダーラルクとランスに変身する

純一が捕らえられ、変貌してしまったのは海東のせいだと考えていたしかし、彼らも海東が昔の海東とは違うと思ったのだろう

「え？なに？士、知り合い？」

「お前がいない間に会っていたライダーだ」

「あんたもディケイドの連れでしょ？」

「なら俺らと目的は一緒だ」

「よろしくな」

「で、どうする海東。やるか？やらないか？」

「・・・・迷惑だ」

海東がぶっきらぼうに言い放った
それに慎と春香が怒る

「どうして？五人力を合わせれば、フォーティーンだってきっと倒せる！！」

「やめてくれないか。迷惑だって言ってるだろ」

「いま多くの人間がフォーティーンに操られている。あいつを倒せ

ばみんな解放され」

ドッ！バキッ！！

海東が春香の鳩尾に肘を、慎の顎に拳を命中させて昏倒させる

さらに蒔風にも殴りかかろうとするが、腕を掴まれ、空中で一回転させられる

しかし地面には叩きつけられず、一回転して再び地面に立たされた。

蒔風の掴んでいる手をさらに士が掴む

「オレはお前を信じている。なぜなら、お前の弱さを見たからだ

俺とおまえが手を組めば、お前はオレを信じ、いずれ自分を信じることができる」

「人を信じる想い。それはどこの世界、どんな時代でも、最高のお宝って奴じゃないのかい？」

「・・・・・・」

「やるぞ海東。この世界も兄貴も、お前の手で救ってやれ」

――――――

「で、これがその作戦かい？」

荒れ地の真ん中に蒔風、海東、士が立つ
海東の体は縄でグルグル巻きにされていて、まるで捕虜だ

「オレたちがお前をフォーティーンに引き渡す。ナツミカンと交換にな」

「で、入れ替わったところでお前がフォーティンに攻撃を仕掛ける。縄は簡単にほどけるようにしてあるから大丈夫だ」

「でも奴らが来るのはまだ先だろう？なぜ今から縛ってるんだい？」

先ほど海東と話をしていた時から時間はそう経っていない
あの時にフォーティーンに連絡を入れたなら、来るのはまだ先のはずだ

「いや、だってフォーティーンに連絡したの昨日の夜だし」

「俺様の完璧な作戦をすぐに実行したまでのことだ」

蒔風と士が言ったことに、海東が疑問を挟む

「君たち、僕がこの作戦に「イエス」と言わなかったらどうするつもりだったんだ？」

その問いにさも当然そうに、二人が同時に言った

「「ぶん殴ってでも気絶させて縛りあげてあとはポイ」」

「・・・・・・」

こいつらに任せて大丈夫なのだろうか？

と、海東が考えているところに士が海東に訊いた。

「お前のことはこの世界でよくわかった。今度は俺の事を教えてもらう番だ」

「お前の事？士、どういうことだ？」

「蒔風には話してなかったな・・・オレには昔の記憶がない。だから、オレが何者かは知らない」

だが、とそこまで話して海東に向き直る

「お前はどうやら俺の過去を知っているみたいだからな」

「いいだろう。それは・・・・」

海東の口が開く

しかし、それと同時に別の声が響いた

「来ましたよ！！さあ、大樹をこちらに渡してもらいましょうか！！！」

海東純一、フォーティーン、そして夏海の三人が現れた

「おい！！夏海さんにはなにもしてないだろうな！！」

蒔風が叫ぶ
昨日の連絡の時点で夏海に一切の手を出さないこと。
それがこの交換の条件の一つだった

「ええ、それはもう！！」

「いいだろう。海東、行け」

「手順はわかっているな？」

「あんな単純な作戦、何度も言わなくてもわかってるさ」

そう言いながら海東が歩いていく
夏海も純一に押し出され、歩いてきた

そして

二人か交差し、入れ違いになった瞬間に

海東が縄をほどいてディエンドライバーをフォーティーンに向けるが、それを夏海が背後から羽交い締めにして取り押さえた！！

「なに！？」

「ナツミカン！？」

「確かに、手は出していませんよ。あの連絡の後にはね」

純一がにやりと笑う
その柔和な笑顔の瞳だけは、邪悪にぎらついていた

「こ、の！！」

海東が夏海を振りほどいて押しのける
そして兄の元へと駆けながら

「変身！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＥＮＤ　！！］

ディエンドに変身し、フォーティーンに迫る

それを見過ごす純一ではない

「大樹、決着をつけてあげましょう。
《ｏｐｅｎ　ｕｐ》

純一もグレイブに変身し、海東と激突する

「海東！！」

「待ってろ！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ　！！］

蒔風とディケイドに変身した士も参戦する。

その隙にディエンドがフォーティーンに駆けて行こうとするが、その背中をグレイブが追う
しかし蒔風とディケイドがそれを食い止める

「行け、海東！」

「決着をつけて来い！！」

「士、蒔風・・・兄さん、今元に戻すから！！！」

ディエンドがフォーティーンに向かう
するとフォーティーンの体から黒いオーラが噴出し、またたく間に巨大な怪物へと姿を変えた

その姿は白く、四本の腕に剣、盾、聖杯、棍棒を持ち、下半身は蛇のような尾になっていた。

巨大邪神１４（フォーティーン）
その名の意味は、「規定をの数を超えるモノ」

「フォーティーン様！！」

グレイブがその姿を確認し、戦線から引いた。
あのお方さえいれば、自分の出番はないというように

その巨体が地面スレスレを飛んでいく
ディエンドの体が風圧に飛ばされ、斬り裂こうと跳んだディケイド

も弾かれる

「士ぁ！！グレイブ頼むぞ！！」

その隙に蒔風が空中に跳び上がり、力を借りる

ゴゴウ！！！

蒔風の獄炎砲が当たり、わずかに身を引かせるフォーティーン

クルクルと回転した蒔風の体が一瞬で変わり、巨大な姿となる

その姿はウィツァルネミテア。

別の世界における、神とも取れる絶大の力！

『貴様！！』

『邪魔すんじゃねえよこのデカブツが！！』

ドン、ドゴッ、ギャィン！ゴゴン！！

一撃一撃が大ぶりの攻撃を交互にぶち当てていく蒔風とフォーティーン。

フォーティーンの棍棒を奪って盾を殴り砕き、その肩口に噛みつく蒔風

だがフォーティーンも黙ってはいない。

蒔風の背面を剣の柄で殴打し、聖杯を掲げて電撃により引き離す。

蒔風がアッパーカットでフォーティーンを若干引かせるが、フォーティーンが回転からの尾による打撃に蒔風の体が飛ばされる。

ドッゴズン！！！！！

その体が大地に落ち、天地を揺るがすようなとんでもない音がした

『愚かなニンゲンども。私はこの世界に幸福をもたらしてやったのに！！』

ドゴガガガガガガガガガ！！！！！！

聖杯からの電撃を辺り一面にまき散らすフォーティーン

その爆発にディケイドもディエンドも吹き飛ばされ、蒔風は元に戻ってしまう。

三人が一カ所に集まり、フォーティーンを睨み、叫んだ

「お前が作ったのは、地獄だ！！」

「その通り。人間は自由に生きるべきだ」

「お前はその意志を奪い、殺し、利用した！！」

「「「人は誰でも自分の意志で生きるべきだ！それを奪っていいなんてことはあり得ない！！！」」」

『そんなもので幸福が作れるとでも？』

ブシュアアアア・・・・

蒔風たちの周囲にダークローチと呼ばれる怪人が何体も現れ、三人を囲んだ

『そう言って人間たちは争ってきた。それでも自由意思が必要か！！』

その考えを蒔風が否定する

「必要さ！！ま、確かに人はそう言った間違いを犯す。だけど、それを乗り越えなきゃ強い未来は作れない！！」

『なにぃ！？』

「お前の作る軟弱な未来なんざ必要ないって言ってんだよ！！！」

「おいお前ら！せっかく信じてやるってんのに仲間外れとかにしてんじゃねえよ！！」

「私たちも戦わなくちゃ、強い未来にならないじゃない！！」

蒔風の言葉に反応するように、二人が現れた

春香と慎だ。

「君たち・・・」

海東が思わず言葉を漏らす

「俺たちだって戦わせろ！！」

「行くわよ！」

「「変身！！」」

《《ｏｐｅｎ　ｕｐ》》

二人がラルク、ランスに変身し、周りのダークローチ達を一手に引き受ける

「雑魚どもはまかせとけ！！」

「あなた達はフォーティーンを！！」

「ああ！！」

［Ｆｉｎａｌ　Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ　！！］

その言葉にディケイドが動いた

ディケイドがコンプリートフォームに姿を変え

［ＨＩＢＩＫＩ！－Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－ＡＲＭＥＤ］

バシャシャシャシャシャ・・・・
ゴコン！！
ディケイドの隣に装甲響鬼（アームド）が召喚される
この世界の、地獄の元凶を断ち切るために！！！
グバァ！！！
フォーティーンの口から巨大な火球が放たれる
「力を借りる！！」
ゴッ、パアアアン！！！！
蒔風が右手を突き出し、火球に触れると、その火球は始めからなかったかのように霧散される
「いまだ！！」
［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＨＩ　ＨＩ　ＨＩ　ＨＩＢＩＫＩ！］
ボッ、ズオオオオオ・・・・・！！！！
蒔風に合わせてディケイドがカードを発動させる
ディケイドと響鬼の刀身が炎に包まれ、どこまでも伸びていく
その炎は、この世界の自由を奪われた人たちの叫びかのように、唸りを上げて伸びていく！！！

そして突進してきたフォーティーンの右下から左上にかけて二つの
刃が切り裂いた

ピギュアアアアアアアアア！！！！！！
ァァァァアアアアアアア！！！！

ドゴオオオオウ！！！！

フォーティーンが爆散し、姿が消える
それと同時に、ランス、ラルクが相手をしていたダークローチが泡
と消え

「あ・・・・」
グレイブがガックリと項垂れる

そして夏海やユウスケなどの洗脳された人々の頭の中からフォーテ
ィーンの因子が消滅した

「やったぜ！！」
「これでみんな解放される！」
「これで終わりなら、な？」
「確かに、蒔風もわかってたか？」
「ああ」

ディエンドとグレイブを除く皆が思い思いの声をあげていく

「兄さん・・・・」

ディエンドがグレイブに近づく
だがそれよりも早く、ランスとラルクが駆け寄った

「終わったな、純一！」
「これでみんな元通りね！」

そう言ってグレイブの肩をたたく
それに対してグレイブは

グレイブラウザーで二人を切り裂くことで答えた

「グアっ！！」「うあッ！？」

「兄さん！？」
「純一、どうして・・・」

ディエンドとラルクの言葉にグレイブが本性を現す

「バカめ。オレは最初から自分の意志でフォーティーンに仕えていた。
オレはな、ライダーとしてお前らの中に潜り込んでいた、スパイだったんだよ！！」

「そんな・・嘘だ！！」

「純一・・・」
「この・・・」

三人がグレイブに信じられないという思いと、裏切られたという思いの混じった眼差しを向ける

蒔風とディケイドは

「やっぱりか」
「操られているにしてはおかしいと思ったんだ」

と何となくわかっていたかのような声を出した

「で、どうするんだ？オレは今から第二のフォーティーンとなり、この世界を支配する！！止めるのなら・・・今のうちだぞ！！」

グレイブがディエンドに斬りかかる
それをランスとラルクが追うが、ディケイドと蒔風が二人を止める

「手を出すな。これは海東の・・二人の戦いだ！！」

グレイブの剣撃をかわし後退していくディエンド
それを追っていくグレイブ

「やめてくれ兄さん！！正気に戻ってくれ！」

「オレは最初から正気だ。それが嫌なら、オレを倒して見せろ！！」

ディエンドの戦法は基本的にはヒットアンドアウェイだ
避けたところで即座に反撃する

しかし、相手が兄であるということと、ライダーとしての経験値もあり、押されぎみだ
だが

「兄さん・・・うあ・・うあああああああああ!!!!!」

ドンドンドン!!!バキッ!!!

ディエンドががむしゃらに攻め立て、グレイブを一気に押し返して地面に倒す
その顔面に向けて銃口を向け、その手が止まる

「どうした?止めを刺さないのか?」

「・・・・っ!!」

ザキイッ!!

グレイブがディエンドの腹部の装甲を突き、退かせる
腹を抑えるディエンドの首筋にグレイブラウザーの刃を当て、止まる

そして兄弟がお互いを見据える
静かな時が流れる

二人が武器を下ろし、変身を解く。
他の皆も変身を解いた

「なぜ止めをためらった。大樹」

「兄さんだって」

兄弟が互いの矛盾を問いただす
純一が決別の言葉のように言い放つ

「後悔するぞ。オレを倒しておかなかったことを」

「・・・・・」

その純一の言葉に蒔風が口をはさんだ

「は、じゃあお前も後悔するぞ？ここで海東を倒しておかないことを、な」

さらに士が続く

「お前は海東の自由な意思を認めた。だから止めを刺せなかった。お前はフォーティーンにはなれない」

「・・・・・・・・・・・」

二人の言葉を聞くと、純一は歩き出した

その背中を、皆は見ていた
この世界の行く先は、この世界のライダーが担うのだろう

士たちの出番は、ここまでだ

――――――――――――――――――――――――――――――

「ということだったんだよ。わかったか？ナツミカン」

「はぁ・・・でも洗脳されてたって、実感がわきません」

「まあ、それが洗脳だしなぁ。海東を捕まえてた時の顔、恐ろしかったぞ？」

「いや蒔風。あれがナツミカンの本性だ。甘いと思ってるととんでもなく酸っぱいぞ」

「つ～か～さ～君？笑いのツボ！！！」

ドスっ！

夏海は士の首元に親指を突き立てる
すると士が笑い転げ始めた

「これは・・・なんじゃこりゃぁ～～！！」

「光家秘伝の「笑いのツボ」です。蒔風さんも気をつけてくださいね？」

「あっはっはっはっはっは！！久しぶりはッ！堪える！！！」

笑い続ける士を見ながら、蒔風は思った

（まだ洗脳されてんじゃないか？）

「さ、次の世界に行きましょう！！」

ガラガラガラ、ビシャア！！

カーテンロールが降り、新たな絵柄が現れた

そこには獅子、龍、熊、猿、亀が描かれた絵だった

次の世界は、五色の戦士、侍の世界だ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～兄との決着～（後書き）

アリス「ディエンドの世界、完！」

ですね

最後の戦いはさすがにオリジナルと変わらない感じで

ア「でも蒔風もいい感じに出せましたね」

それを判断するのは読者様さ

じゃあお願い

ア「次回、天下御免の侍戦隊見参！！」

ではまた次回

ちっぽけだから、守らなきゃいけないんだろ！！

ディケイド　～五色の戦士～

「この世界はなんだ？わかるか蒔風？」

「いや・・・あの絵柄からライダーに関する情報はなかったぜ？」

士が蒔風に訊く

現在四人で町を歩いていて、今はビルに囲まれた広場にいる

階段式の噴水があり、ベンチがあり・・・

何の変哲のない世界だ

「ま、この世界からライダーの情報は得られないと思うけど？」

「じゃあこの世界はライダーの世界じゃないのか？」

「そう言うこと。ここは、ライダーの存在しない世界だ」

「ライダーのいない世界か。ディケイドが回る世界だからといって、ライダーのとは限らないのね」

「ああそうか。君はライダーのいない世界を回る方が多いのか」

「そうだな。だから取り立てて騒ぐほどでも」

「おい待て、なんで海東が当然そうに会話に参加してんだ！！」

士が叫ぶ
そう、さっきまで会話していたのは蒔風と海東だ。
士たちは突如現れた海東にポカーンとしていただけだった。
「なに言ってるんだい士。僕はお宝を手に入れて忙しいんだ。あとにしてくれないか？」
「来たのはお前のほうからだろ！！」
「というか士よ。なぜそんな恰好してんだ？」
「黒子とは・・・また面白い。似合ってるよ、士」
「うるせえ！！」
この世界で士に振られた役割は「黒子」だ
一体何をやらされるのか・・・
「士、「で・す・の」って言ってみてくれ！！」
「わけわからんこと言うな！！海東！お前もさっさと行っちまえ！！」
「はいはい・・・っと」
海東が足元に置いておいたクーラーボックスを担ぎ、その場を去っていった。

「なんだったんだあいつは」

「それにしても士。ライダーのいない世界ってことは、ここに怪人はいないんじゃないか？」

ユウスケが士に問う

「いや、そうでもないようだ」

士の返答に合わせたように、噴水のタイルの「スキマ」から異形の怪人が無数に現れた

「ライダーがいなくても、怪人はいるみたいだな」

「別にそれって普通じゃね？」

カードを構える士と、並び立つ蒔風

戦闘開始！！と意気込んだところで和太鼓の音が鳴り、多くの黒子たちがいきなり現れた

さらには何かの家紋入りの陣幕とのぼり旗が立てられ、そこにはかま姿の五人の男女が現れた

「凝り性もなく現れて・・外道衆！！おとなしく「スキマ」に帰れ！！！」

五人のうちの一人が怪人たちを指さし言い放つ

だが気にも留めずに、うごめき続ける怪人

「もう！そんなんで帰るわけないでしょう！」

「むう。一回やってみたかったんだが、ダメか～」

「だから、私達が送り返してあげましょう。「三途の川」に」

シュキン！！！

各人が携帯電話を取り出し、それを筆の形に変え空中に文字を描く

「「「「「一筆奏上！！」」」」」

バッバっバッ！！

各々が「火」「水」「木」「土」「天」の文字を書き、それを身にまとい「変身」した

彼らこそがこの世界の秩序と平和を守る戦士

その名も

「天下御免の侍戦隊」

「「「「「シンケンジャー！参る！！」」」」」

「シンケンジャー？ああ、そゆこと」

シンケンジャーなる者たちが突如として現れた怪人たちを次々と切り裂き、倒していく

「知ってるんですか？」
「舜、知ってるのか？」

「ああ、今知った。あいつらシンケンジャーはこの世界とは別の、三途の川ってとこにいる妖怪集団、外道衆と戦ってるってわけだ」

「じゃああそこで倒されているのが・・・」

「外道衆だな。ま、あいつらは使い捨ての雑兵らしいが」

「なるほど・・・ってあれ？士は？」

周りを見るとどうやら外道衆の駆除は終わったらしく、シンケンジャーたちが変身を解き帰っていく。
その周りで黒子たちが先ほどの陣幕やのぼり旗の撤収作業に入っていた

そしてどうやら士もそれに駆り出されたようだ
皆黒子なのでどれが士かわからない

「士君？どこですか士君！」

「あれは？いや、あっち？」

「そんなこと言ってもしょうがないだろ。とりあえず行こうぜ」

「どこにですか？」

「この世界でやるべきことがあるんだろ？それを探しにだよ」

「でも士君は？」

「あいつには護衛付けてるから」

ーーー

「この世界の事よくわかってねえんだからよ。オレさんが教えてやっからまあ聞けよ」

士を座らせ、自身も胡座(あぐら)をかいて説明を始める天馬
その説明が終わったと同時、志葉丈瑠の声がある部屋の中から聞こえてきた

「じい！何度言えばわかる。しっかりと病院に行け！」

「いいえ。じいはまだまだ現役です！これくらい、なんてことありませぬ！」

「このわからず屋が！」

「殿はこの私を厄介払いするおつもりですか！？」

「そうじゃないと言ってるだろう。ここは大丈夫だからその腰を治して来いと言ってるんだ！！」

じいというのはシンケンジャーのサポートをしている志葉家に仕える家臣、日下部彦馬(くさかべひこま)の事だ
どうやら病院に行けという丈瑠と大丈夫だというじいのケンカらしい

「なんだなんだ？ケンカか？」

「殿さまっても案外普通なんだな」

「つかよー。あれかなりキテルぜ？」

「わかっているがもう止まらないんだろ」

「だろうなー。あーもー鬱陶しいな」

士と天馬が話しているところで、ついに丈瑠が部屋を飛び出してくる。

そこでふと立ち止まり、士と天馬に気付く

「なんだお前たち?ただの黒子じゃないな?」

「そんなことないですよ「殿さま」?」

丈瑠がムッ、とした顔をする

「お前ら、一体なにも・・・」

「ハイこっち来ようか、二人とも」

丈瑠の言葉をさえぎり現れたのは蒔風だ。

いつの間にか士と天馬の背後にまわり、二人に肩を回す

「蒔風!?」

「舜・・いきなり出てくんのは止めろっての」

「わりわり。じゃ、お殿様。オレたちはこれで」

「舜!!なに勝手に出てってんだ!」

そこにさらに一人の黒子が出てきた

「その声・・ユウスケ？」

「ちょ、ユウスケ、待て、引きずるなオレをどこに（連れうわあぁぁぁ・・・・・）」

途中から外に連れ出されていき、蒔風の声が遠ざかっていった。

丈瑠がそれを眺め呆れて、士達のほうを向くと、そこに士、天馬はいなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～五色の戦士～（後書き）

アリス「次はシンケンジャーの世界ですか」

はい

しかし、おそらく多くの読者はわからないことも多いかと思います

ア「まさか・・・」

わからないときは・・・

ア「もしかして」

ｗｉ○ｉかＹ○ＵＴＵＢＥでご確認を！！

ア「やっぱりかぁ！！！！」

ちなみにディケイド２４話です

ア「この丸投げ作者め・・・」

すみません

ア「次回、イカ泥棒海東？」

ではまた次回

愚かだから、転んで怪我してみないと判らない。時には道に迷い、間違えたとしても、それでも旅をしている。お前に道案内してもらう必要はない！

ディケイド　～蒔風、少しキレる～

「引っ張んないで！！お願いだから引っ張んないで！とれる！とれちゃうからぁ！」

「まったく・・・せっかくオレがタイミングよく出ていこうと思ってたのに」

蒔風とユウスケが屋敷の外に出て話していた。
ユウスケが蒔風のどこを引っ張っていたかはご想像にお任せする

「なにしに来たんだお前ら」

士と天馬があとからついてくる。
と、もう用はすんだからと、蒔風が天馬を鞘に収めた。

その光景を目の当たりにして、士と雄介が反応した。

「もう驚かないぞ、オレは」
「なんだ今の！すげーー！！」

士は蒔風の力を少しは知っているのでさほど驚かないが、ユウスケは蒔風の力を見るのはこれが初めてだ。
十分すぎるほど驚いてくれている。

「ありゃ、ユウスケは知らなかったっけか？」

と、逝って蒔風が簡単に天馬たちの事を教え始めた。

そしてそれが終わったと同時に、ドシャッ！とビルの陰から海東が倒れ込んできた。

一体何があったのか、体中ボロボロで、歩くこともままならないようだ。

だがそんな体になってもまだ、先ほど持っていたクーラーボックスは手放していない。

さすがというかなんというか。

「どうした海東？」

「何やってんだお前？」

「海東さん！！大丈夫ですか！？」

蒔風と士がドライに反応し、ユウスケが海東に駆けよって身体を起こす。

と、それと同時、海東を追ってきたのか、そこに異形の怪人が現れた。

身体は時間が経って黒くなった血液の色をしていて、その体中にいくつもの目が付いている。

外道衆「チノマナコ」

この世界にやってきたライダーを調べるために、、送り込まれた怪人だ。

「なんだぁ？あんな眼玉野郎に負けたのかお前は」

「いや待て蒔風。あいつが持ってるのって・・・」

蒔風が回答をおちょくるように言うが、士が促した先を見ると、確かにチノマナコの手にはディエンドライバーが握られてるではないか。

「あっはっは！なんだお前。泥棒のくせに盗まれたのか」

「なにやってんだか・・・大方クーラーボックス（そいつ）に気を取られてやられたんだろうよ」

士が笑い、蒔風があきれる中、ユウスケが海東に肩を貸して起き上がらせる

「ユウスケ、介抱してやれ。丁重にな。恩は高く売るもんだ」

「厄介だぞ？怪人がライダーの力だからな」

「全く問題ないな」

「そうだけどさ」

ヴォン！

士がカードを取り出し、眼前に構える。

「変身！！」

そしてそれを反転させてバックルに挿入、バックルを回転させて変身する。

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！］

「お前はそのままでいいのか？」

「オレはこのままでも強いの」

「そうか・・・行くぞ！！」

「をおおおうううあああああ・・・・・・」

ドンドンドンドオン！！

チノマナコが言葉にならない唸り声をあげて弾丸を撃ちながら突進してくる。

蒔風がそれをスライディングでかわし、チノマナコの片足を両足で挟み取りバランスを崩させる。

崩れるチノマナコの体の頭部をナイスなタイミングでバッティングするディケイド。

チノマナコの体から火花が散るが、ディエンドライバーの力か、それともチノマナコ本来の力か、全く効いていないようだ。
頭をポリポリと掻いて、なんだこいつら？みたいなジェスチャーをとる。

「この野郎・・・」
「あの目全部つぶしてやろうか・・・」

あまりにもこちらを馬鹿にした態度のチノマナコに、蒔風とディケイドがいらついた声を出す。
そもそも、あーうー、うをおおうう、とさっきからやかましく呻き続けているのだ。
しかも時々不愉快なほど大声で騒いでくる。

そりゃ二人のイライラゲージも溜まるわ。

と、そこを通りかかる謎の男が

「はぁはぁ・・・畜生・・泥棒野郎も追わなきゃなんねえのに・・スシチェン・・・っぐ・・・」

何だか寿司屋の大将のような格好をした青年がよろよろと歩いてきて、戦いに割り込もうとする。
しかし体力の限界だったのか、その場に崩れ落ちてしまった。

その男に向かってディエンドライバーの銃口がゆらりと向けられる。

「っつ!?おい、まずいぞ!!!」

ダッ!!

その状況に血相を変え、蒔風が一気に青年の元に辿り着く。
しかし、辿り着いたはいいがあの体勢では弾くこともできないだろう。

銃口から弾丸が飛び、それがまっすぐに蒔風へと延びていく。

「蒔風!!」

ディケイドが叫ぶ。
しかし、蒔風の顔には笑みが。
この男は弾く必要を考えなかった。

地面に手が付いていればそれだけでいい。

「畳返し!!」

バゴン!!バガッ!!

跳ね上がった地面に、弾丸が命中し、少しだけ削る。
その光景に士は少し驚いたが、蒔風の言葉にハッ、としてチノマナコに向きなおした。

「士！！あの野郎はまかせる！！」

「そうさせてもらう！！変身！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＮ－Ｏ！］

蒔風が青年を連れていく背後でディケイドがさらに変身した音が聞こえた。

だがそんなことを気にしてる場合ではない

とりあえずこの青年を安全なところに連れていくことが先決だ。

とりあえずその場を離れ、ベンチに腰掛けさせる。

「すまねえな・・・」

「気にするない」

「にしても情けねえ・・・泥棒野郎にイカちゃん盗られるし、外道衆とは怪我のせいで戦えねえし。はぁ～あ～」

「なんだ？おまえ、シンケンジャーだったのか？」

「おうとも！オレこそがシンケンジャーが一人、シンケンゴールドよぉ！っていたた・・・」

彼の名前は梅盛源太（うめもりげんた）

彼の言う通りシンケンゴールドとして戦う戦士だ。

だが先ほど「泥棒野郎」に大切な相棒であり、武器でもあるイカちゃんこと「烏賊折神」を奪われてしまい、それを追っていたのだそうだ。

「なあ、そいつってさ、バカみたいに偉そうにして、指ピストルにして撃ってくる男か？」

「そ、そいつだそいつ！！知ってんのか！？」

「知ってるけど・・・」

どうやら海東がさっきから持っていたクーラーボックスにはその「烏賊折神」が入っていたのだろう。

源太の話によると、海東を一度は追い詰めたのだが、チノマナコが襲撃してきた際にディエンドライバーを奪われたのだそうだ。
そして狙われた海東を守って自身も怪我をしたのだそうだ。

「お前・・損な性格してんな～」

「うっせい」

「だが嫌いじゃない。つまりは烏賊折神も海東も守るという意志だもんな。素晴らしすぎるぞこの野郎！！」

「それは褒めてんのか？」

「誉めてます」

「そ、そうか・・・へへっ」

鼻を掻いて満更でもない源太に蒔風が言う。

「ちょっとここで待っててくれ。あいつ始末してくるから」

「お、おい待ってくれ！！外道衆と戦うのは一般人じゃ無理だ！！」

「大丈夫。一般どころかオレぁ異端だからな」

そう言ってディケイドの元に走っていく蒔風。

「ホントに大丈夫かよ・・・・ん？」

そこで源太が何かを見かけた。
それはユウスケに運ばれる海東だ。

再び標的を見つけ、その眉間に青筋がまた浮かぶ。

「あの野郎・・・もう逃がさないぜ！！いたたた・・・」

ヨタヨタと追いかける源太。
それに気づかずユウスケ達は歩いていく。

――――――

蒔風がディケイドを見つけた時には戦いは終わっていたようで、たったいまディケイドコンプリートの隣から何らかのライダーの影が消えていったところだ。

「終わったのか？」

「いや、逃げられた。あの野郎バカ力のくせして逃げ脚がはやい」

「それは仕方がないな・・・」

「次は必ずとっちめる！！」

「はぁ・・・・」

蒔風は活躍の場がなくなってしまったので少々肩を落としながら先ほど助けた源太の元に向かった。
しかし、源太は海東を追って行ってしまったので、そこにいるわけもない。

自力で動けたなら問題ないだろうと二人は納得し、その場を去っていった。

――――――

その日の夕暮

いくつもの高層ビルの並び立つ街中
そのうちの一つの屋上に、チノマナコはいた

もはやまともな言葉は発しておらず、唸り声だけを呻き上げている

しかし、その使い方だけはよく知っているようだ
カードを取り出し、装填する

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ］

「へぇン・・・しィン・・・」

［ＤＥＥＮＤ！］

ドンドンドンドン！！ヴァアン！！

ディエンドライバーがいつもとは違う唸り声をあげて、変身音を発する。

チノマナコの頭部と肩にディエンドの装甲が装着される。
この世界に、最初のライダーが誕生してしまった瞬間である。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

士がディケイドだとわかるとそちらを向き、疑問を投げかける。

「お前が世界の破壊者だというのは本当か」

「まったく・・・またそれかよ・・・」

「この世界がおかしくなっているのはお前のせいらしいな」

「だから・・畜生!!」

士がうんざりした声を出しながら街道から上に伸びる階段の方を向き、言った。

「またお前か、鳴滝!」

その声に応じて灰色のオーロラと共に一人の男性が現れた。
鳴滝である。

にしてもあのオヤジ、一体何のつもりなのだろうか?

「そうだディケイド。私だよ。・・・シンケンレッド!ディケイドを倒すんだ。こいつはこの世界を破壊する!!」

その言葉を聞いて丈瑠が黙っていられるわけがない。
変身ツール、「ショドウフォン」を構え、臨戦態勢に入る。
それに対し士もカードを取り出し、互いに威嚇する。

「おいおいおいおい。ちょっと待てよおっちゃん。あんた・・・誰だ？」

「初めまして。私は預言者。鳴滝と名乗っております、翼人どの」

「・・・その呼び方やめろ」

「では蒔風殿。あなたにも協力願いたい。ディケイドは世界の破壊者です。今のうちに倒しておかなければ大変なことになる！！あのように！！！」

鳴滝が指をさした方向にディエンドチノマナコ（以降Dチノマナコ）が現れた。
その装甲の「スキマ」から先日も数多く出現していたアヤカシ、「ナナシ」を出し、こちらに迫ってくる。

「チッ！一筆奏上！！」

宙に「火」の文字を書き反転、それがエネルギーとなって身体を覆う。

丈瑠がシンケンレッドに変身し、チノマナコに立ち向かっていく。
それに加勢しようとする士と蒔風だが、鳴滝のオーロラによって阻まれてしまった。

「みろ、ディケイドのせいでああしてこの世界にライダーが誕生してしまった。この世界にライダーなど必要なかったのにだ！これもディケイドが元凶だ。即刻この世界から去れ！」

「おい待てよ。それはいくらなんでも」

「蒔風殿！！世界を渡り、その秩序を守る翼人のあなたならわかるはずです！各世界は浸食されてはならない。物語はあるべき姿をすべきだ。そうでしょう！？」

「・・・悪いがそんなの知らねえな」

オーロラのせいで遠くなっている戦闘音をＢＧＭに蒔風が言う。

「物語なんざ、こうしてオレがこの世界に来た時点でもう違ってるんだ。だったらなるべくいい方向に持ってくべきだろ？」

「しかし！奴は「破壊者」です。そんな者が」

「すべてを破壊する力なら、すべての悪を退かせる力にもなりうる」

「な・・・ん・・・・」

「それに「ディケイドディケイド」って、士本人を見てやってくれよ」

「・・・あなたは・・・翼人ではないのですか？」

「オレは確かに翼人だよ。でも、世界だとか物語に干渉はする。これはな、オレの物語でもあるんだよ」

「・・・ディケイドの「破壊者」の力は本人の意志とは関係ありません。いずれ後悔しますよ」

「かもな。だけど、オレは士達を出会い、共にいることを後悔はし

ない」

「・・・・翼人・・・世界の救世主・・・」

「んでもって「破滅と共にある者」だ」

「・・・・・・・」

シュウウウウウウ・・・・・・

オーロラと共に鳴滝が消える。

それと同時にシンケンレッドがDチノマナコを退かせたようで、変身を解いて再び士達に向き合う。

「さっきの男といい、「ライダー」と呼ばれる力といい・・・お前たちは何者なんだ?」

その問いにいつも通り士が答える。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけよ?」

と、自信満々に士が名乗りを上げた瞬間

「てめえも泥棒野郎の仲間かぁ!!!」

一体どこで聞いていたのか、騒がしい声と共に源太が疾走してきて、士に掴みかかろうとする。

「源太!?今までお前何やってたんだ!?」

それを丈瑠が止める。
そこで源太が蒔風に気付いた。

「お、兄ちゃんは昨日の!ありがとな、あん時は」

「いや、まあいいんだが。あの後どうしたんだ?」

「あの泥棒野郎を見かけてな、追っかけたんだが、こっちの調子も悪くてな。見失っちまったのよ」

「それで今日も駆け回っていたのか?」

「そう!!それでそこの!あの泥棒野郎と仲間なんだろう!?」

源太が士を指さして叫んだ。
それに士が反論する。

「オレとあいつは仲間じゃない。それに蒔風がら話は聞いたが・・・イカ盗んでどうするってんだ」

「源太っち。少なくとも士は泥棒じゃない。悪党ではあるが」

「おい!!」

「な~?目つき悪いだろ~?だから世界の破壊者って言われてみんな信じちまうんだよ」

「たしかに、そう言われてもしょうがないな」

「うんうん。で、そこのライダーってのが泥棒野郎の仲間じゃないってんなら、兄ちゃんは知ってんのかい？」

「昨日知ってるって言ったのに・・・」

「おおお！！じゃあ案内してくれ！！まったく、ライダーなんざロクなもんじゃねえや。変なアヤカシは出るわ、イカちゃん盗まれるわでもう散々だ。

おいそこのライダー野郎も、とっとといなくなっとけ。厄介を持ちこまないでくれよな！ライダーなんざ皆同じだ！！」

その言葉にムッ、とする蒔風。

確かに源太の言うことは理解できる。

何せ彼が一番の被害者なのだから、そう思ってしまうのはしょうがないことだ。

それでも蒔風は黙っていられなかった。

いや、理解できるからこそ反論することにした。

「ちょっと！！そんな言い方しなくてもいいじゃないですか！！」

しかし、実際に反論したのは蒔風ではなく、ちょうどその場に士達を呼びに来た夏海だ。

反論しようとしていた蒔風が「ありゃ」と出鼻をくじかれてすこしズッこける。

「士君は違います。今までもたくさんの世界を救ってきたんです！！」

「あー、それは俺からも言わせてもらおう。「ライダー」だとか「世界」だとか、そんなくだらない固定観念に縛られていてよくこの世界を守れるもんだ」

夏海と蒔風が言う。

その言葉に、源太が黙る。

確かにその通りだ。

今までだってあれだからこうだ、なんて思いこみで失敗してきたことは多かった。

それをこんな場所であらためて言われて、源太が少し落ち込む。

「それに、泥棒なら知ってます」

「居場所も知ってるって言ったろ。この直情バカが。全く昨日は少しは見所があるかと思ったんだがな」

「ホントにか!?あとバカとはなんだ兄ちゃん!!」

夏海の言葉に嬉しがり、蒔風の言葉に少し怒る源太。

喜怒哀楽の激しい奴である。

そこにさらに蒔風が追撃を掛ける。

「バカはバカだ。いや、「バカ」という単語を使うこと自体、「バ

カ」という単語そのモノに失礼だな。しかし残念なことに「バカ」としか言い表せないんだから、そう言うしかあるまい？だから「バカ」と言われるたびに「あまりにも愚かで「バカ」としか呼ばれようにない自分を許してください」と馬と鹿とこの言葉を作った古代人に向かって謝罪しておけ、バカ。とっとと博物館と動物園に行って謝ってこい。頭ン中もキンピカピーですか？コノヤロー」

その蒔風の言葉に夏海が若干引いて、青ざめている。
士すらも、うわこいつひでえ、といった顔をしている。

「蒔風さん・・・それはちょっと・・・」
「蒔風、それは言い過ぎだ」

二人が蒔風に注意する。

「そうか？こう言った理解力のなくてあれだこれだと決めつけにかかるバカがオレは何より嫌いなんだが」

「そ、そうなのか？」

「おう。ま、それはそれとして、ほら、泥棒のとこまで案内してやっから、ついてこいよ」

「・・・はい・・・・・・・」

地獄の底まで落ち込んだ源太と、それを支える丈瑠。
それと士と夏にと共に蒔風が写真館に向かっていった。

to be continued

ディケイド　～蒔風、少しキレる～（後書き）

アリス「今回蒔風少し怒りましたね」

いや、作者に悪意はないですよ？

シンケンゴールドファンの皆様、すみませんでした

ア「あれ？でも次回でも同じような口論が確か・・・」

・・・むふ

ア「ま、まさか！！」

そこは秘密

ア「次回、蒔風プッツン」

ではまた次回

実体があるとかないとか関係ないんだ。そこに存在することにはな

ディケイド　～蒔風、かなりキレる～

「で、海東、烏賊折紙をどこにやった」

「言わない」

「なんでこいつこんなに強気なんだ？」

写真館で昨日から傷の手当てでソファに寝そべっている海東。
その周りを蒔風、士、ユウスケ、夏海、源太、丈瑠の六人が囲む。
その状況でなお海東は問い詰められても烏賊折紙の場所を吐かない。
根性据わってるとかを一段階超えているなこいつ。

「そう言えばアヤカシの持っていたあの武器、お前のじゃないのか？」

「そうだ！！オレがそれを取り返してイカちゃんと～～」

「イ・ヤ・ダ！！」

「うを～～～～～～～！！！！！！」

丈瑠の提案に源太が賛成するが、海東は頑としてそれを拒否する。

なんだこいつ。

「おまえなぁ。だからといってどうするんだ？」

「そんなの君たちは気にしなくてもいいよ。じゃ、僕はこれで」

海東がたちあがって去ろうとするが、それを源太が止める。

と、その背後から四人の男女が写真館の中に突撃してきた。

「殿！！ご無事ですか！？」

「大丈夫ですか、殿！！」

「どうしたんだお前たち」

そこに飛び込んできたのは他のシンケンジャーの面々だ。

その内のシンケンブルー、池波龍之介が声を荒げた。

「黒子たちが、殿が・・・殿が仮面ライダーに誘拐されたと！！」

「なんだそれは！？」

実際には蒔風たちが丈瑠、源太を案内していただけだったのだが、

それを見た黒子たちが勘違いしたようだ。

が、それも無理はないだろう。

彼らの知らない「仮面ライダー」という存在。

さらにそこに鳴滝による「破壊者」の誤認情報。

これだけ材料が揃えばここまで慌てるのも無理はない。
無理はないのだが・・・

シンケングリーン・谷千秋と、シンケンピンク・白石茉子（まこ）の言葉がこの場を乱すきっかけとなる。

「まあ、誘拐うんぬんは龍之介の思い込み」

「だけど、ライダーは世界を破壊するって・・・」

その言葉に写真館メンバーが反応する。

だが士は椅子に座ってテーブルに頬杖をついて何やら考えているし。
海東はこの場からどのようにしてトンズラするかが最優先のようだ。

「そう、こいつが世界の破壊者さ。で、これが」

「・・！！おい！！！」

海東が士の肩に手を置き、さらに士のトイカメラを手に取ってこう言った。

「これが世界を破壊する爆弾。ハイ、プレゼント♪」

ボン、とそんなことを言って龍之介にカメラを渡す海東。
その瞬間、皆が騒ぎ出した。

「うわぁ～～～！！！ばっ、爆弾！？」
「こっちくんなよ！！」
「おいみんな落ち着け！！」
「殿さま、こっち着たらあかん。世界が破壊される！」
「おいそれはただのカメラだ！！」
「そんなこと信じられるか！！ライダーなんだろ！？」
「いや、信じてくれよ！！」
「爆発する～～！！」

蒔風と夏海、海東に源太以外がギャーギャー騒ぎたてている。
その隙に海東は逃げ、源太はその後を追う。

その間にも騒ぎはヒートアップする。
そしてついにこの男がキレた。

「ってっめえらいい加減にしろってんだ、ぶっ殺っさぁれてぇのか！！！！！捩じ切んぞ！！！！」

蒔風の怒声に屋根がビリビリと揺れ、埃が落ちてきた。
外にいる源太は写真館の周りの生き物が軒並み逃げ出したことを確認したほどだ。

部屋の中がシン・・・と静まりかえる。

「てめえらいい加減にしとけよ・・・異世界から来たのがなんだ？ライダーだから何だってんだ！？ライダーがいちゃいけない理由はなんだ？違う世界ってのがそんなにいけないか！？最初は誤認情報もあったろうから見逃してやったらこのざまだ。てめえらほんとにこの世界守ってんのか答えろやカラフルザムライ共！！！」

「カラフルザムライとはなんだ！！」

※ここから蒔風がキレます
結構ひどいと思いますので、見たくない方は飛ばしてください
なお文章中にシンケンジャーをバカにする言葉がありますが、作者はそんなこと思っておりません
では覚悟のある方だけどうぞ

「うっさい黙れ。とっとと切腹して死ね。さっきも源太にキレたけ

どよぉ、固定観念で決めつけてんじゃねえよ。人をジャンルで見てんじゃねえよ!!!バカかてめえらは。それくらいの判断もできなくて何がヒーローだ笑わせる。そもそもな、最初の情報くれた男だって信じられるもんなのかよ?え?それらを総合して、さらに自分の目で確認して、それで最終確認してんのかお前らは?そっれもなっしに勝手な先入観で決めつけやがって・・・ああそうか、すまんすまん。それがお前らの判断力の限界なんだな。こりゃ失敬だ。でもこれなら納得だよ。源太もそうだったんだもんな、バカにはバカが御似合いか。よかったな、外道衆がみんな悪もんでよ。もしそういう奴らにいい奴がいてもお前ら斬っちゃうんだろ?「外道衆だから」」ってよ。でもそれを失敗だとは思わなくてもいいぞ。それがお前たちの限界なんだもんねーー!!!あっはっはっはっは!!!バカみてえ!!殿さまも大変だな。こんなバカな家臣で戦わなきゃならないなんてよ。そもそもお前らライダーの何を知ってるんだ?知らないだろ?知らないくせに否定すんだろ?それも愚か者のすることだよ。脳味噌までカラフルなんじゃねえの?今すぐ三途の川突き落としてやろうか。理解できてない者を拒否するのは構わない。だがな、理解できないことを理由に、否定することは許さねえぞ。この意味わかる?バカでもわかりますか~~?夏海さん、この話通じたかな?俺ここまでの馬鹿と会話することがなかったからわかんないや。まあ、夏海さんはバカじゃないからこんなこと聞いても意味ないか。おいお前ら黙ってないで答えろよ。意味通じましたか~~?Ｄｏ ｙｏｕ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ?」

蒔風がそこまでまくしたてて、スッキリツヤツヤの顔をする。

この世の幸せ最高潮みたいな感じだ。

その背後に士と夏海、ユウスケが立つ。
そして思いっきり拳を振りかぶり、三人同時に

ドゴゴガン！！！！

蒔風の後頭部を殴った。

「いったぁ！！なにするん！？」

「舜、お前言い過ぎだぞ」
「蒔風さん、今のはあまりにも・・・」
「実はお前外道衆なんじゃないか？」

三者三様の感想を蒔風に告げる。
しかし蒔風は気にも留めない。

「ふぅ、スッキリ」

蒔風が息を漏らした先には、体育座りをして地面に俯いているシンケンジャーの四人がいた。
皆負のオーラをまき散らしている。

丈瑠は落ち込んではいないが、それでも思うところはあったらしい。
落ちていたカメラを手に取り、無言で士に渡す。
そこでショドウフォンが鳴った。
源太がDチノマナコを発見し、今交戦中らしい。

「どうした？アヤカシが現れたか？」

「どうすんだ？こいつら」

他のメンバーは打ちのめされて戦える状況じゃない。
何だか地獄の住人みたいだ。

「オレ、行きます！」

「ま、こうなったのもオレの責任だし、行くか」

「オレは・・・」

ユウスケと蒔風がたちあがるなか、士はどうにも乗り気でない。

「士。まさかお前この世界にオレたちは必要ないんじゃないかって思ってるんじゃないのか？」

「・・・それは」

「いいか？お前は戦っていいんだよ。この世界のために。お前の世界が見つからないなら、見つかるまですべての世界をお前の世界として守ればいい」

「すべての・・世界を？」

「そうだ。それに、今のお前には帰ってこれる場所があるじゃないか。夏海さんがそこを守ってくれている。誰かが出迎えてくれるんだ。それは幸せなことだぞ？士」

「誰かが・・・帰る場所を」

「そうだ。丈瑠もそうだぞ。あの爺さんだってお前らの帰る場所守ってんだからな」

「・・・わかってるさ。だが」

「それでも爺さんが心配なんだろ？そこはゆっくりしっかり話せばいいさ」

「・・・そうだな」

士と丈瑠に言葉を贈る蒔風。
そして士が勢いよく立ちあがった。

「そうだな。たとえライダーが必要とされていなくても、この俺、門矢士は、世界に必要だからな！」

「それでいい」
「スッゲー自信」

そうして四人が写真館を飛び出していく。

その道中で丈瑠が言う。

「士、今まですまなかった。世界はどうだか知らないが、オレとしてはお前を拒絶するつもりはない」

「そうか・・ありがたいが、断るぜ。なんせオレは、通りすがりの仮面ライダー。通りすがった世界すべてがオレの世界だからな」

「大きな奴だ」

「それが士さ」

四人が全力で駆けていく。
向かうは一人で戦う戦士の元に。

ーーー

そこにゆっくりと迫るDチノマナコ。

しかし、突如その体から火花が散り、その歩みを止めた。
ゴールドが振り返ると、そこには四人の姿が。

「おい。大丈夫か！」

「兄ちゃん、来てくれたのか？」

「まあな」

「ライダーの奴らも・・・」

「ああ」

「・・・さっきはすまなかった！お前ら確かに泥棒野郎とは違え！」

「気にすんな」

「それくらいにして。来るぞ」

「だったらオレたちは行くまでだ」

ヴォン！
ブォン！
シュキン！
バッ！

「変身！」

「変身！」
「一筆奏上！」
「十五天帝！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！］

ヴォンヴォンヴォンヴォンヴォンヴォン・・・パァン！！

シャキッ！！ドン！！

シュシュシュ、パァン！！

四人が一斉に戦闘態勢に入る。

その数にさすがに不利を感じたのか、Ｄチノマナコが一枚のカードを装填し、発動させる。

［Ｋａｉｊｉｎ　Ｒｉｄｅ－－－Ｎ・ＤＡＧＢＡ・ＺＥＤＡ！］

「お前それズルウッ！？」

蒔風がひきつった顔をする

無理もない
Ｄチノマナコが呼びだしたのは、かつての世界の「究極の闇」最強のグロンギ、ン・ダグバ・ゼダなのだから。

「なんだあいつ！？」

「あいつはオレの回ったクウガの世界の最強の怪人だ」

「だが呼び出した者なら能力は変えないはず。身体能力だけだろ？」

「馬鹿！！それでもきついんだよ！！ユウスケ！源太！手伝え！！」

「「おう！！」」

蒔風、ユウスケ、源太の三人がダグバを引きつけ、Ｄチノマナコの方はディケイドとレッドに任せた。

ザキギィン！！！

ゴールドが得意の居合切りでダグバを攻める。

しかし、ダグバの肉体の硬度にいくら斬ってもきりがない。

しかも斬れたところですぐに回復していく。

そのあまりの強度に源太が信じられないようあん声を上げる。

「なんだこいつ！？全然斬れねえ！！」

「一人で行くな!!はぁあ!!」

ガギン!!蒔風が「火」首筋に斬りかかるが、それを腕で防がれる。
そしてもう一方の腕で二人まとめて殴り飛ばした。

飛んでいく二人の間を縫ってクウガの蹴りが炸裂する。
しかしノーマルのマイティフォームで敵うわけもない。

ハエをはたくかのような動作で弾き飛ばされる。

「こいつ・・強い!!」

「・・・ユウスケ!!」

「なんだ舜?」

「ちょっとビリビリするぞ!!」

「え?うわぁ!!!」

蒔風がクウガの背に手を当てて、雷旺を流し込む。
そうすることで、蒔風が強引にクウガのライジングフォームを引っ張りだした。

「ったく・・・この世界にはないんだからよ・・・・ほい、ライジングフォーム移行可能!!ほれ早く!!」

「お、おう!!超変身!!」

ばっ、バチバチバチ！！！

クウガの全身に電流が流れ、ライジングマイティへと変わる。
しかし蒔風が納得しない。

「それじゃダメだ！！もっとだ！！ってうをお！？」

ダグバのキックが蒔風の脇腹数？逸れた所を通過していった。
あたっていれば間違いなくその個所はなくなっていただろう。

「ユウスケごめん！！雷旺！！！！」

「え！？ぐあああああああああああ！！！！！！！！」

クウガにさらに電流を流し込んで力を覚醒させる。

そうすることで赤かった装甲は黒く染まっていき、全身から稲妻がほとばしる！
アメイジングマイティにまで覚醒したクウガがそこに立ち、Ｄチノマナコを標的に見据える！

「って、いきなりやるな！！」

「こうしないとおおう！！！勝てないのっっとあああああ！！！！」

蒔風がダグバの攻撃を丁寧に、本当に丁寧に逸らしていく。
そうでもしないと腕が持って行かれてしまうのだ。

「源太！！お前にはこれ！！」

蒔風がゴールドの剣、サカナマルを握ると、その剣に絶光の力が宿った。

「オレは爆発の余波を食い止める！！お前らがやってくれ！！！」

「「わかった！！」」

その声に応じて、ゴールドが信じられないスピードで動く。

絶光の力を受けた「光」のモジカラの戦士はその速度のままダグバを切り刻む！！！

「ハッ！！ハアッ！！！」

「おおぉぉぉぉぉおおおおおりゃあ！！！！」

そしてゴールドが離脱した瞬間に、クウガの蹴りが炸裂する！！！

そしてダグバが爆発した。

本来ならば街一つ吹き飛ばす爆発を、上に逃がしていく蒔風。

「うわ～～今回オレ地味～～～」

そんなことを言いながら、ディケイドの方を見る。

どうやらあちらも終わるようだ。

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ――ＲＥＫＫＡ　ＤＡＩＺＡＮＴＯＵ！］

ズグァッ！！ドゴォオオオオン・・・・

Ｄチノマナコが爆死し、その場にはディエンドライバーが煙をあげて残されていた。
と、そこにいいとこ盗りをしようと、回答が飄々と表れてディエンドライバーに歩いていく。

「士♪僕のためにごくろうさん」

「海東！」

そう言う海東の肩にはしっかりと烏賊折紙の入ったクーラーボックスが掛けられている。
一体どこに隠していたのだろうか。

ディエンドライバーに手を伸ばす海東。

が、先に源太がそれをさっそうと奪い取り、海東に突き出して交換

条件を持ち出した。

「交換だ、泥棒野郎！オレのイカちゃん返せ！！」

海東の顔が鈍る。

世界を渡るために、ディエンドライバーは必要不可欠。

こうなってはあちらの条件をのむしかないのだが・・・

「海東、お前の負けだ」

「詰まんない意地張るなよ」

そうあっては仕方がないかと判断したのか、海東は渋々だが交換に応じた。

烏賊折紙は無事源太の元に帰り、丈瑠も爺さんと仲直りできたそうだ。

シンケンジャーの他の四人はすまなかったと謝ってきた。

その後に蒔風が本当に外道衆じゃないか調べようとして怒られたが。

そうしてこの世界での事件は終わった。

士たちは次の世界へと向かおうとする。

「じゃ、行こうか！！」

ガラガラガラ、ビシャア！！

カーテンロールが降り、新たな絵柄が現れる。

そこには空中に浮いた要塞、そこに伸びる三本の槍。

次はライダーの世界
一体何のライダーなのか・・・・

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～蒔風、かなりキレる～（後書き）

ア「それにしてもまたディケイドの戦闘は描かれませんでしたね」

それにはしっかりと理由が

蒔風が巡ったライダー世界はクウガ、アギト、龍騎、響鬼のみです
だからここで他のライダーのこと知っちゃうのはまずいんじゃ！？
ということでこのようになっております

じゃあこの先ディケイドの戦闘が描写されるのは・・・

なかなかないかもしれません
ネガの世界でも精一杯でしたし

ア「がんばってくださいよ」

がんばる！！

ア「次回、アｧァーーー、エｯ！！」

ではまた次回

この男は誰にも声の届かない世界で孤独に耐えながら皆を守ってきた誰より強い男だ

ディケイド　～士の仲間否定～

この世界に着いて、まず士の衣装がいつも通り変わった。

頭にはちまき、指の出たグローブ、Tシャツに肩から先のないGジャン
まさに「昭和！！」といった格好だ

「レトロな昭和感溢れる格好だな」

「・・・ふん！・・・こんな恰好でも、着こなしちまう自分が恐ろしいぜ」

「士、無理するなよ」

「だな。どうせ後で着替えられるんだからさ」

「そんなことよりなんで蒔風さんはあえてその服を選んできたんですか？」

夏海が蒔風を指摘している服装はこうだ

短パン、Tシャツ、麦わら帽子に虫取り網だ。
それはまさに「夏休み少年」の恰好だった。

「だって最近暑いし。あ！！アブラゼミ！！！」

「え?おい、待てよ舜!!」

蒔風が駆けだし、ユウスケが追う
その後をやれやれと言った風に士と夏海がついていく。

その背後に白き兵たちが蠢いていた・・・・

「おお!!なんてことだ・・・見ろ!!ツクツクホウシだ!!!」

「すごいな!!ってかいつの間にそんなに捕まえたんだ!?」

ユウスケと蒔風が昆虫を見て興奮している

「なんでそんな虫で楽しめるんだか・・・・」

「ほら!そんなつまらんこと言わずに、お前も見てみろよ!!」

蒔風が士に籠を突き出す

そこにいたのはさまざまな虫?だ

バッタ、トンボ、カブトムシ、などなど・・・
さらには

「おい・・・トカゲがいるぞ？」

「いいんだよ。虫偏だから」

「舜！！スズメバチ居んぞ！！」

「ビクビクすんなよ・・・夏海さんも、ほら！！」

蒔風が夏海にも見せようとするが

「い、いえ。虫はちょっと・・・」

といって下がってしまう

「なんだナツミカン。ライダーは大丈夫で、虫はだめなのか？」

「それとこれとは違います！！」

「♪～～～・・・・・なんだ？」

そんな蒔風たちの周りに、わらわらと白い兵隊が集まってきた

「どうやら、この世界の雑兵達みたいだな」

「ち・・・逃げるぞ！！」

士達がそこから離れようと走る

が、走り出して三分とたたないうちに目の前に何者かが現れ、行く

手を阻む

「オレはクライシス最強の戦士、怪魔ロボット・シュバリアン！！
霞のジョーを始末しに来た！！」

そう言って士を指すシュバリアン
先ほどの白い兵、チャップと呼ばれる雑兵が周りを囲む

「霞のジョー」というのがどうやらこの世界での士の役割らしいが・・・

（霞のジョー？そいつは別人のはずだ・・・だが、ということはこの世界は・・・！？）

「トオッ！！フン！！！」

バキッ、ドカァ！

そこに一人の男が入り込み、チャップ達を殴り飛ばし、士達とシュバリアンの間に立つ
こちらに背を向けているせいで、顔は見えない

「クライシス！！霞のジョーはこのオレが守る！！！！」

バッ、バッ！！ギィューン・・・・

「変、身！！」

ブオッ、キュガッ！！！

キィーーーイン！！！！

「オレは太陽の子！！！！！」

その男が変身を完了し、シュバリアンに対し声高々に名乗りあげた。

「仮面ライダーＢｌａｃｋ！！Ｒ、Ｘ！！」

その姿を確認し、士と蒔風が同時につぶやいた

「「ＲＸの世界か・・・・」」

ドドォ！！！

「ギィイイイイイ！！！！！」

何名ものチャップが吹き飛ばされて地面に転がり、姿を消していく。

次々とチャップをなぎ倒すＲＸにシュバリアンが迫る

「ＲＸ！！！今日こそ貴様を地獄に送ってやるわ！！」

「そうはさせん！オレは必ず貴様らクライシスの野望を砕く！！！」

「戯言を！！！（ガォンガォンガォン！！！！）」

シュバリアンの爪の上部の砲門から拳ほどもあるエネルギー弾を撃つ
それをかわしながら接近するＲＸはベルトから一本の剣を抜き放ち、
シュバリアンを斬る

ライトセイバーのように光るその剣、リボルケインが切り裂いた部
分から火花が散る。
しかし、散りはしたもののその装甲は想像以上に硬く、ダメージは
通っていない

「その程度の攻撃、オレには効かん！！」

ドンドンドンドン！！

上半身に攻撃を食らい、ＲＸが煙をあげて転がる
だが、すぐに立ち上がりながらその姿を変容させる

「ＲＸ！ロボライダー！！」

「ヌウ！？」

「ボルティックシューター！！！！」

ドンドンドンバババン！！！
キュンキュン！バババババ！！！！！！
お互いに撃ちあい、光弾が交差する
その攻撃はお互いに食らうものかと思われたが

「いきなり介入！呼ばれてないけどジャジャジャジャジャーーーン！！！！！」

ドギンギンギャンギャンギャン！！！！！
蒔風がＲＸに迫る弾丸だけを蹴り飛ばす
それに驚いたのはＲＸだ

「君は・・・一体！？」

「気になさんな。ほれつかさん、行きまっせ！！！！」

「オレに命令すんな！！だが・・・まあいいだろう。変身！！！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！］

士が変身し、蒔風とディケイドが並ぶ

「貴様はディケイド！！！！」

「霞のジョーがなぜディケイドに!?」

シュバリアンとRXがディケイドの姿に驚愕する

「ああ、彼ね?霞のジョーじゃないんですよ」

「なんだと!?」

RXがさらに驚く

「ま、その説明はあとで・・・」

そう言ってから振り返り、蒔風がシュバリアンに言った

「おい、シュバリアンとやら!思いっきり昭和チックな台詞をありがとう
だけど一つ訂正させろ。この人いい人だからさ、死んだら行くの天国じゃね?」

「そういえばそうだ。何でいつも「地獄に落ちろ」なんだ?」

「なぁ?仮面ライダーは大抵正義の味方なんだから、死んでも行くのは天国じゃね?」

「貴様ら・・・つまらんことを言うなぁ!!!」

そうシュバリアンが叫びこちらに攻撃を仕掛けようとすると、その背後に灰色のオーロラが現れ、そこから怪人が二体出現した。

「なんだ貴様ら！？」

シュバリアンも驚いている
ということは彼らは協力関係ではないのか？

一体何者なのか
その答えはユウスケが叫んでくれた

「ファンガイアにイマジン！？なんでこの世界に！？」

そこに現れたのはユウスケの叫び通りファンガイアにイマジンだ
二体が武器を持って蒔風とディケイドに襲いかかる

「おいなんだその名前！！オレぁ知らんぞ！！！」

「オレたちの回ってきた他のライダーの世界の敵だ！！！」

「オレの知らないライダー世界かよ・・・厄介だ、な！！！」

そういいながらも、蒔風とディケイドは二体を確実に追い詰めていく

「今日はこいつだ（ヴォン、ガシュウ！！）」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＡＧＩＴＯ！］

ヴォオン、ヴァアン！！！

ディケイドがアギトにカメンライドし、姿を変える

「お！！アギトじゃねえか！！じゃあオレは！！」

ガシュガシュガシュ！！
カチッ、ウィンカシュ！！

蒔風の背面からひっくり返ってきたかのようにアーマーが装着されていく

「（ピピピピ、カシッ！）仮面ライダー、Ｇ３－Ｘだぁ！！」

蒔風がＧ３－Ｘになり、ファンガイアの方を追い詰めていく

「これで終わりでしょう！！！」

Ｇ３－Ｘの装備、超高周波振動ソード・デストロイヤーをファンガイアの胸に突き刺し、股にかけて裂く。

しかし、ファンガイアは倒れない
しかも見る見るうちにその裂け目が戻っていくではないか

「なんでだ！？」

「ファンガイアにはよほどのエネルギーを込めないと斬撃じゃ倒せねえぞ！！」

「先に言え！！じゃあこっち！！」

G３－Xがどっから出したのか、ロケット弾頭の装填されたガトリング銃を取り出し標準を合わせる。

「Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－Ａ　Ａ　Ａ　ＡＧＩＴＯ！」

それに合わせてDアギトもファイナルアタックライドを発動させる

「フッ！！！」
「ハァ！！」

「「グギィアアアアアアアア！！！！！」」

ゴッ！！ドォン！！！！！

二体の怪人か爆発し、二人がシュバリアンに向きなおす
ちなみにすでにDアギトはディケイドに戻っている

「まだやるか？」
「相手には・・・まあ、なってやってもいい」

「ぐ・・・覚えていろ・・・・」

その場からシュバリアンが姿を消す

「じゃーなー！！」
「ふ、やはりオレは強い」
その二人の背後にＲＸが立つ
「世界の破壊者ディケイド！！この世界を貴様の好きにはさせん！！！」
そう言い放ってＲＸがリボルケインを構えディケイドに突進してくる
その言い草に夏海が弁解しようとするが
「Ｇ３ラリアットゥ！！！！」
Ｇ３－Ｘの二の腕がカウンターでＲＸの喉に減り込む
ＲＸの体が空中で五、六回転してから地面に落ちる
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@！！！！？？？？？？」
ＲＸが地面でバタバタともがきながら喉を押さえる
そんなＲＸに装甲を解除した蒔風が言った（服装は普通の物に変わっている）
「落ち付きなさい！！ほら、夏海さんも言っ（スッパァン！！！）
ごめんなさい、大丈夫ですか？」
変身の解けた男性に手を差し伸べる蒔風
男性がその手を掴んで起き上がると、開口一番訊いてきた

「君たちは一体・・・それにいきなりこんなことするなんて・・・」

そんな男性に蒔風が言う

「「世界の破壊者」とか言って問答無用で襲いかかる奴はみんなこうなるのさぁ!!!ひゃひゃひゃひゃひゃ・・・・・

あれ?ユウスケさん?どうしたのそれ?」

そういいながらジリジリと下がっていき、遠ざかる蒔風と迫るユウスケ

その姿が柱の向こうに消え、声だけが聞こえる

(舜・・・いきなり何やっとンじゃおどりゃぁ!!!)

(わあ!?なんで変身してないのに鉄パイプがソードに!?斬れる

斬れる!!!)

(オレはもうキレとるわ!!)

(うまいこと言わないで!!黒い、黒いよ!?なんか背後に黒い眼をしたクウガが見え・・・・

アッーーー

「そ、そうか・・・・」

「とにかく、士君は世界の破壊者じゃありませんから。いくつもの世界を救ってきたんです」

「・・・・・・そうか・・では君のその純粋な目を、信じよう」

「どこまでも昭和！！！あ！！待てユウスケそれ以上は！！！！・・・・・・・」

途中蒔風の声が聞こえたが、皆聞こえないことにした

「オレは南光太郎。ＲＸとして、この世界を征服しようとしているクライシス帝国と戦っているんだ」

「でもなぜイマジンとファンガイアが出てきたんだ？」

ユウスケが蒔風を引きずりながら訊いてきた。

「オレにもわからない。ある日突然、現れたんだ。それと同時期に霞のジョーも・・・」

「その霞のジョーってぇのは、一体誰なんでぇ？」

蒔風が荒縄でグルグル巻き状態で訊いた。

「霞のジョーは俺と一緒にクライシスと戦ってきた仲間だ」

「じゃあ今回士君がこの世界ですべきことはその謎を解くことです

ね！」

「はぁ・・・・・」

そこで士が盛大にため息をつく

なんかめんどくさいなぁ・・・、といった感じだ

「どうしたんだ士」

「・・・別に世界のために戦っても、オレの世界が見つかるわけじゃないしな」

「士ぁ、拗ねたのか？」

「いくら自分の世界が見つからないからって、それはいけねえよ。

「ない」訳じゃないんだから」

「それに、士君には帰るべき家はあります！」

そんな会話を聞いて、光太郎が士に訊く

「君も、仲間のためにだったら、戦えるんじゃないか？それをも理由にすればいいじゃないか」

その言葉に士はさらにつまらなそうなため息をつく

「で、お前はその仲間ってのを探してるのか？」

「そうだ」

「そんなことのために、一勝戦い続けるのか？」

「そんなこと？」

「オレはごめんだね。「仲間」なんてチンケな理由でいつ終わるかわからない戦いなんか続けられるか。じゃあな」

そう言って士が立ち去る

「おい・・・士!!待てよおい!!!」

その後を蒔風がイラついた声を出しながら追う

ユウスケと夏海は光太郎に謝罪してから、二人を追うつもりだったが、その時にはもう二人を見失ってしまっていた

蒔風の追う先を、士がどんどん先に進んでいく

仲間なんかいらない、オレは一人で歩いていける

オレはいつだって通りすがりだから

無言でそう語る背中を、蒔風が追う

そんなことはないと、伝えるために

「仲間」というものは、そんな言葉の羅列ではない

to be continued

ディケイド　～士の仲間否定～（後書き）

アリス「久々の更新ですね。どうしたんです？」

ええ

まず皆様に謝罪を

日曜及び月曜の交信をすっぽかしてすみませんでした

ア「では弁解をどうぞ」

コミケの疲れが抜けなかったからです

ア「そんなこと！？」

そんな事とは何のことだ！

三日間のスタッフ

その後の買い物

初日、二日目は曇ってたけど、三日目は日射しガンガンだったし

そんなこんなの三日間

（前日含め四日）

皆さんお疲れ様でした！！！

ア「でもその間も更新はしてたじゃないですか」

あれはがんばって１１日のうちに書き溜めて予約投稿したんですよ

いや、１５日に家帰ってから書いて更新しようと思ってたんですが、

家に着いたらバタンキューですよ。

実は昨日も一日中ベッドでした
さらに言うと今でも疲れが取れ切ってない

ア「それは・・・ご愁傷様です」

今回初めてのスタッフ
緊張したけど何とか乗り切った、「「一日目！」」
少し慣れたけど東の列の応援に行って気持ちよく疲れた、「「二日目！」」
前日に映画を見て四時間しか寝れなかった、「「三日目！」」

沈む夕日が心に染みた、「「閉会後！」」
ではまた皆さん今度は冬です

ア「というかなんですかこの卒業式みたいなのは」

着かれてんだもんいいレモン！？お前のトマトはニンジンか！？

ア「何言ってんだか分りません！！」

いけ！空飛ぶ飛行船！！東京都からお叱りを受けてしまえ！！！

ア「下手にリアルっぽいこと言わないでください。ただの噂じゃないですかそれ」

まあね
でも飛んでたのは事実
「ミルキィ・ホームズ」って書いてあったよ
ブシロードの本気を見たね

ア「さいで」

だから疲れたのでもう寝ます

ア「・・・はぁ。
次回、悪の巨大組織」

ではまた次回

言っておくけど！僕は君よりもずっと前から、通りすがりの仮面ライダーだ！！
・・・覚えておけ

ディケイド　～悪の組織、略奪の命～

皆から離れ、着替えてから士は街に出て写真を撮っていた
フィルター越しに見る世界。しかし・・・

「この世界も、オレに撮られたがってないみたいだな」

そうつぶやく
現像しなくてもわかってしまうのだ
木も、人も、建物も、空気ですらも彼の写真を捻じ曲げる

だがそれでもシャッターを切る
様々な景色が映る
異なる世界を直視することなく

否、できないのだ
あらゆるライダーや怪人を凌駕する「破壊者」の力を持つ青年は、
世界と向き合う強さを持っていなかった

「士ぁ。見つけたぞ全く・・・・・」

「蒔風か・・・」

そこに蒔風が声をかけてきた
傍らに立ち、写真を撮る士の姿を眺めてから、訊いた

「なあ、さっきの話だが、仲間なんかくだらないって、本当にそう思ってんのか？」

「ああ。そんな仲間のために戦い続けるなんてのは俺には理解できないね」

「そうか」

「そうだ。お前も、世界を守るために戦ってるんだろ？現にお前は今まで一人で回ってきたんだ」

「なるほどな・・・だったら貴様に南光太郎を否定する行為は許されない」

「なに？」

士がカメラから目を離し、蒔風を睨む

「否定する、というのはその事柄をよく理解しているものだけに許されるものだ。そのことをよく知っている者ができることだ」

「わかっているなら否定しないんじゃないのか」

「お前大体もわかってねえな。よく知って、よく理解して、どこが悪いかを明確にさせてからが否定だろうが」

「だったらわからなくても嫌な場合はどうすればいいというんだ」

「簡単だ。拒否すればいい。だからお前は仲間のために戦わない、というのは勝手だが、そのまま南光太郎の意志を否定することは許さない」

「なるほどな・・・ならばなおのこと、オレの意志に口出しするな」

士が再びカメラを構えるが、それを蒔風が止める

「そうはいかねえな。オレはお前のその考えを否定する」

「・・・お前・・・オレにケンカ売ってんのか？」

「そんなつもりはないがな。やるならお兄さん、相手になっちゃうぜ」

ヴォオン！！

シュカッ！！

士がカードを構え、蒔風が「天」を抜こうと手を添える。

「オレの世界はいまだに見つからない。それなのに仲間だとか別の世界だとかのために戦えというのか」

「見つからないだけまだましだ。オレの帰るべき世界はもう無いと言っていいんだからな」

「？それはどういう・・・・」

士が蒔風に問いただそうとするが、そこに大きな声を出しながら夏海が駆けよってきた

「こんなところで何やってるんですか二人とも！！士君も蒔風さん

も、武器を下ろしてください！！」

「ナツミカン」「夏海さん」

「全く・・・士君も、自分の世界が見つからないとか、そんなことで拗ねないでください
見つからなくても、帰る場所はあるじゃないですか」

「それが写真館だってか？」

「そうです。たとえどれだけ世界を回っても、あなたの世界が見つからなくても、私はあなたの帰る場所を守ります。だから」

「だから戦えってか？そんな考えを勝手に押し付けんな！」

そう言って士がその場から立ち去る

その士を追って行き、蒔風が士の胸ぐらと掴みあげた

「お前・・・いい加減にしろ。いつまで甘えてんだ」

「オレが・・・いつ甘えた！」

「てめえには帰れる場所があんだろうが。だったらそこを守れよ。強い強いというなら、あれもそれも、世界も仲間も、全部守って見せろよ、あ？」

「そんな勝手なこと決めんじゃねえ！！」

バキッ!!

蒔風が士の顔面を殴り飛ばした。
士の身体がベチャッ、と地面に転がる

「ッ・・・何しやがる!!」

士が蒔風を睨みながら怒鳴るが、蒔風にとってはそんなことどうでもいい

「それでもお前が戦いの後に帰る家はどこだ!傷ついたとき、お前がとっさに駆けこむのはどこだ!!
いろんな世界でてめえが「破壊者」だと罵られている時に、それを否定してくれていたのが、どこの誰だか答えて見せろ!!」

「ち・・・・っ・・・・」

士の視線がチラリと夏海の方へ向く
そして俯き、なんだかんだ自分についてきてくれた友を思う

「お前には共に旅する仲間がいる。オレにはない、共に世界を旅する仲間がな」

そこでため息をつく
士も言葉を発さない

「蒔風・・・オレはどうす・・・・」

士がそこまで言い掛けたところで寸断される
なぜなら

「キャアアアアアアアアアアアア」

と、甲高い悲鳴と共に、何人もの人間が倒れていき、そこには怪人をひきつれた白スーツの男が現れたからだ

「士!!舜!!」

「ユウスケ!!」

そこにユウスケも合流する
今までのやり取りを見ていたのか、妙に納得した顔をしている

「お前か・・・この世界でイマジンやファンガイアを引き連れている新たな敵ってのは」

そう、この男の引き連れている怪人はまさしくイマジンとファンガイアだ

男が士に気付く
そしてこちらを向いてこういった

「ディケイド・・・ここにいたのか」

「おまさんらは何者だい？」

蒔風の問いに男が答える

「謎の組織などではわかりにくかろう。よく聞いておけ、我々は、世界の秘密結社が大結集した大いなる大組織。それが我らの真の名である、「大ショッカー」だ！！」

「大ショッカー？」

四人の疑問に、これ以上こたえる必要はないと判断したのか、男が姿を変える

「アポロチェンジ！！」

グ、ボワッ

男を日輪のような形に炎が覆い、姿が変わった

「アポロガイスト！？貴様・・・どうやってこの世界に！！！」

「ほう。私を知っているのかそこの眼鏡。だが、その質問に答える必要はないな」

「眼鏡って言うなクソ！！！（オレの知ってる世界のものではないなこりゃ。あくまでも「ディケイドの世界」ってことか）」

「ディケイド、貴様を始末しに来てやったぞ。まさに貴様にとっては、私は迷惑な存在になるのだ」

「そう思うなら来るな！！」

士が変身しようとバックルを取り出すが、アポロガイストの銃撃でバックルがその手から弾き飛ばされる

「士！！」

蒔風にイマジンが、士にファンガイアが迫る
変身できない士の元にユウスケが変身して助太刀する

そこでアポロガイストが頭部の金属片を取り外し、士に向ける
それに気付いたのはただ一人であった

「士君！！！」

夏海が士の元に駆けより、突き飛ばす
標準から士が外れ、代わりに夏海が標的となる

その瞬間、金属片から赤い靄（もや）のような光が噴出し、夏海から何かを吸い上げていった
そしてその場に崩れ落ちてしまった

「お前！！！」

それに気付いた蒔風がアポロガイストに掴みかかろうとするが、バックステップでかわされる

「夏海?夏海!!!」
「夏海ちゃん!!」

士とユウスケが夏海の身体を抱えあげるが、一向に反応がない

「お前ぇ・・・何したんだ!!」

「ふん。きさま、ライダーではないようだな。貴様の事も調べておくとしよう」

「あっ、待て!!」

怪人二体とアポロガイストの背後に灰色のオーロラが現れ、そこに去っていこうとする
そのまま消えてしまうであろう彼らを見逃すほど蒔風は優しくない

蒔風がアポロガイストが消える直前にそのマントを掴み、オーロラの中から引きずり出した
そして地面に投げつけるべく放り投げた

だがアポロガイストは片手を地面につき、そのまま跳ね上がりながら蒔風に銃撃を浴びせて建物の屋上に向かって跳躍する。

「ふはははは!!その命、いつか私の物にしてやるのだ!!!」

「待てや！！二人は夏海さんを！！」

そのまま去るアポロガイストを蒔風も追う
高層ビルの屋上を十七ほど踏みしめて跳んだところで、アポロガイストが止まる

「貴様・・・変身もせずになぜここまで付いてこれる」

「そんなこたぁどうだっていい。答えろ。夏海さんに何をした！」

「堪える義理はないのだ」

「なら・・・これを見てもおう言えるかな！？」

「なに！？」

バッバッ！！

「セッタップ！！！！」

カシィン、カシィン、ガシュン！！
バァアアアア！！！！

「貴様は！！」

「仮面ライダー、X！！！」

「Xライダー・・・貴様は何者だ！？お前はライダーではないはず

！！」

「なに・・・ただちょいと知り合いなもんでね」

「どういう・・・」

「ＧＯＤ秘密警察第一室長だろ？そんぐらいてめえで調べろ！！」

そういいながらベルトのバックルのグリップを握り、抜き放つ

「ライドルホイップ！！！」

ガキィ！！

Ｘの武器・ライドルを剣のように扱い攻撃したのを、アポロガイストは巨大な盾で防ぐ

「ライドル！ロングポーーール！！！！！」

そのままライドルをロングポールに変え、長く長く伸ばしていく

「おおおおおおおお！！！！！」

盾に突きつけられたライドルが伸び、十メートルまで一気に打ち上げられたアポロガイスト

その崩れた体勢の彼に、Ｘライダーのキックが炸裂する！

「Ｘキィック！！！！！」

ドォン！！

ギュオ！！ガリュン！！！

アポロガイストとXが屋上に降りる

結果として、キックは的中しなかった
アポロガイストが自身の銃・アポロマグナムを撃つことによってその反動で身体を回転させてキックを避けたのだ
しかし完全にかわせたわけでもない

その脇腹を忌々しそうに抱え、アポロガイストがガイと名乗る人間体に戻り、背後にオーロラを出現させる

「行くな、待て！！」

「さらばだ。ここはいったん引いておこう」

シュアアアアア・・・・・・・・・・

オーロラにガイが消え、蒔風が残される

呆然と立ち尽くす蒔風の携帯が震える
夏海を病院に運んだユウスケからの連絡だった
士もいるそうだ

蒔風はいったん、その病院へと向かった

――――――

病院の屋上
そこに蒔風、士、ユウスケの三人がいる

「体に異常がない？」

「そうなんだ。ただ昏睡状態になってるって、医者が」

「さらに言うと、少しずつだが体力もなくなってきて、いずれは・・・」

「あのアポロガイスト・・・」

ガンッ！

蒔風がフェンスを殴り、つぶやいた

「蒔風、何か治療する方法はないのか！？」

士が蒔風に詰め寄る

「おそらくその方法を知っているのはアポロガイスト野郎だけだな」

「そうか・・・」

「士、とにかく今は、夏海ちゃんのそばに」

「そばにいて、それで夏海が助かるのか？」

ユウスケがム、と顔をしかめる
確かにその通りなのだが・・・

そこに、ひとりの男の声がする

「こんなに隙だらけの士は初めてだね」

海東だ
どこから話を聞いていたのか、事情はすべてわかった上でからかうような口調で士に歩み寄る

「おかげで最高のお宝が手に入ったよ」

そう言ってヒラヒラと振る手に持つのはディケイドライバーだ。
だが士は、大切な変身ツールを奪われているにもかかわらず、そんなことはどうでもいいと言った感じだ

「相変わらずお宝集めか・・・暇な奴め」

「気に入らないなぁ、その態度。ちゃんと僕を見ていてくれないか？」

「そんなつまらん児戯に付き合ってる暇はないんだ。
教えろ海東、大ショッカーとはなんだ」

児戯、と蒔風にいわれて少し顔をしかめるが、海東は答えた

「おや？知らないのかい？
大ショッカーとは様々なライダー世界に存在する悪の組織が集結してできた、まさに大いなる悪の秘密結社さ」

「アポロガイストとは何者だ。ナツミカンはなぜああなった！！」

士が声を荒げる
その質問には蒔風が答えた

「アポロガイストは「仮面ライダーXの世界」にあったGOD機関に所属していた殺人マシーンだ。
奴は一度Xライダーに敗れたものの、再改造で蘇った。
しかし、その命は他者の命を吸い取らなければ生きていけない体だった」

「それで夏海ちゃんは・・・」

「全く、僕の説明をとらないでくれるかな。まあ、そういうわけで、その命を吸い取ってるのが、あのパーフェクターってわけ」

「そこら辺は俺の知ってる「仮面ライダーX」とは違うな。
・・・とにかく、アポロガイストを探すぞ。
パーフェクターを奪い、夏海さんの命を返してもらおうとしよう」

「時間がない、急ぐぞ」

「ああ！」

そう言って提案を始める蒔風や士、ユウスケに向かって海東も提案した

「だったらそのパーフェクターは僕がいただくよ」

「なに？」

「お前ぇ・・・夏海ちゃんの命がかかってんだぞ！！」

そういきり立つユウスケの肩を蒔風が掴んで戻す

そして海東の方をチラリとみてから、ユウスケに呟いた。

海東には声こそ聞こえなかったが、唇の動きで何を言ったかわかった

「気にするなだって？ぼんやりしてたらお宝、いただいちゃうよ？」

そう言って挑発する海東

その言葉に反応するかの様に三人が海東に向かう

アポロガイストを探す案が出そろったようなのだが、海東は彼らが挑発に乗ったと思いこむ

「やる気になったようだね」

その言葉に蒔風が返す

「言ったろう。児戯に付き合っている暇はない」

そう言って三人が立ち去る

「これはどうするんだい？」

「これとは、オレの手にあるこれの事か？」

海東がディケイドライバーを取り出そうとして、それを蒔風が自身

の懐から取り出した

「な・・・い、いつの間に!?」

驚愕する海東。それも当然だ。
蒔風と海東が最も接近したのはユウスケを止めた時だ

あの時はお互いに一メートルくらいは離れていた
その距離で、あの短時間で、あれだけの大きさの物を海東に気付かれずにかすめ取っていたのだ。

焦る海東に本気でどうでもいい顔をして、呆れたため息を出して蒔風が言った

「言っただろう。そんなものは児戯だ。
誰かの命を救おうとする片手間以下の手順で終ることだ」

「・・・・・・」

「いつもみたいなお宝探しなら喜んでつき合おう。だが、人の命がかかってんだ。遊ぶならよそ行け」

「仲間・・・とやらのためかい?」

「強さの証明のために、だ。オレは世界最強だ」

そう言いながら屋上の扉を開く

「救えるものなら、根こそぎ救うさ」

バタン、と扉が閉まる
士とユウスケも後を追った

屋上に取り残された海東

「強さの証明のため・・・か
まるでここでお宝だなんて言ったら、僕が弱いみたいじゃないか」

そう言って病院入口の方に視線を落とす
そこからは士と蒔風のバイクが走り出していった
ユウスケは夏海のそばに着くようだ

「いいよ。その勝負、乗ったよ。
「仲間の素晴らしさ」ってのはまだわかりようもないし必要もないと思うけど、それが「強さ」だって言うなら、その強さは僕がもらう」

海東の目がキランと光る

最初はその程度でもいい
仲間の大切さなんて、知ろうとして知れるものじゃない

誰かを守れる強さをその手に
すべてのヒーローはそこから始まるのだ

世界を巡る二人の次元戦士のライダーは、ここからヒーローとしての「仲間」を知る

to be continued

ディケイド　～悪の組織、略奪の命～（後書き）

アリス「また更新なまけましたね」

う、うるさい！！

ア「なぜです？」

眠かったの

ア「シャラッ！！そんな言い訳はどうでもいい」

すみません

本当はフェイト／エクストラやってました

ア「ゲームか」

ゲームです

こないだＰＳＰを再購入し、やっと始められました

ア「この世界は出すんですか？」

内容的に難しい

でも、いずれは・・・世界を巡る形ではないけど

ア「やるんですか？」

予定は未定

ア「さいですか」

あと最近生活リズムが変わって大変だ！！

ア「どんなふうにですか？」

朝８時起床、夜１２時には就寝
だから今日はちょっと起きてるな、うん

ア「それ、身体にはいいんじゃ？」

不規則で少し寝不足な方が作者は調子いいんです

ア「まじかよ」

高校の時に一番点数がよかった定期試験
そんとき自分４０．７の高熱でしたもん

ア「寝てなさい！！」

電車の中の熱気で吐くかと思った
でも高校中学合わせて一番いい点数だったよ

ア「こいつむちゃくちゃや・・・」

ではこの辺で

ア「次回、アポロガイストさんみっけ！！」

ではまた次回

平成ライダー？１０年早ええよ！！

ア「今更キャッチコピー！？」

ディケイド　～仲間意識・感受～

「士はあっち、オレはこっちな」

「わかった。絶対に見つけるぞ」

蒔風と士は現在アポロガイストを探して街に出ている

「それにしても士、なんでそんなに必死なんだ？」

「？何言ってんだ、ナツミカンの命がかかってるからな」

その言葉に蒔風の表情が緩む

「こんな状況だけど、お前いい顔してる」

「はあ？」

「いくらお前が仲間じゃないなんて言おうとも・・・・な。
やっぱりお前はいい奴だよ。自覚するのは恥ずかしいかもしれないけどな」

「？・・・・勝手にオレを判断するなよ？」

一瞬だけ士の頭に「？」が浮かぶがすぐに理解し、からかう様に言った
その顔にはまだ焦りがあるにしろ、決意に燃えた目を持っていた

「行ってくる、か」

「ぜってー見つけてやろうぜ」

「おう」

追う行って二人は互いの腕をぶつけあい、離れる
そして二人はアポロガイストを探し始めた

「さて・・・始めるか」

タンタンターン、ストッ

蒔風が軽快に跳び上がり、ビルの屋上に着く
そこで自分の周りに正方形になるよう、「龍虎雀武」を突き立てた

「さぁーて、どこにいんのかなァ？」

そう言って蒔風がポケットから一枚の布切れを取り出す

四本の剣が光の線で結ばれ、陣が出来上がる

「東西南北を司る四獣。その力を使ってくそ野郎の居場所をとっとと示せ」

コオオオオオ・・・・

光がその場に地図を示す
そして赤く光る点が移動するのを見つけた

「ここか・・・・・」

ーーー

アポロガイストがシュバリアンに歩み寄ろうとする
そこでその背後にいる一人の男がアポロガイストに声をかけた

「オレは誰でしょうか、って宿題は解けたかな?アポロガイスト君?」

「!!」

ガイが振り返ると、そこに蒔風がいた

「なぜここがわかった」

「方法なんざどうでもいいさ。今ここにオレがいることの方が問題だろ?」

「・・・貴様はこの世界の・・・ディケイド以上に異物のようだな」

「おお!!よくわかったな。その通り。オレは、異端者だ」

「それで?私のパーフェクターを奪いに来たのか?」

「よくわかってんじゃん・・・だァ!!」

ブゴォ!!

蒔風の蹴りがガイの顎を捕らえようとする
それを紙一重でかわしたがいがアポロガイストへと姿を変えた

「あの女の命が消えないのも貴様の仕業か！！」

「その通りです、大正解！！飴ちゃんやろうか？」

「いらぬ！！」

アポロガイストがフェンシングのような剣・アポロフルーレで蒔風に斬りつける
それをその場から動かず畳返しで防ぐ蒔風

そしてそれを蹴り砕いて、アポロガイストの目をくらます

その隙に足払おうとローキックを放つが、アポロガイストがその軌道上に剣を配置する
キックに急ブレーキをかける蒔風
するとその止まった足を軸に、身体の方が回転し、アポロガイストの後頭部にカパァン！と蹴りが命中する。

「ぬ・・・おっ」

カラァン！

「よっし！！」

その蹴りの衝撃でパーフェクターが頭部から落ちる
それを蒔風が拾おうとするが、アポロガイストが許さない

巨大な盾、ガイストカッターをフリスビーの用に投げつけ、蒔風の
右手を切断しようとする

ギィイイオオオンン！！！！

恐ろしい旋回音を発し、ガイストカッターが迫る
蒔風に腕を引く時間はなかった

その右手が、ガキュウウウウ・・・・という音と共に吹き飛ばされる

「ぐごおおおお！！！！・・・っ、なんて重さだよ・・・」

だが蒔風の右腕はまだついていた
とっさに「天地陰陽」を出したことで、かろうじて切断には至らなかった
だが右腕からは赤い液体が滴り落ちてきている

落ちたパーフェクターを再び装着して、アポロガイストが言う

「ふふふ・・右腕を潰したぞ・・・さて、答えて貰おうか。なぜあの女の死のスピードがこんなにも遅いのか」

蒔風が右腕を抑えながらアポロガイストに言い返した

「ばぁーか、言うかよ」

「な・・・」

「やれ!!!」

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＳＬＡＳＨ!］

その電子音と共に、ディケイドがアポロガイストに襲いかかる

「ぬ!!ディケイドまで現れおったか!」

「貴様ら!何をしている!!」

そこれようやくシュバリアンらクライシス勢もこちらに気づく

そしてこちらに攻め込もうとするが、ひとりの戦士にそれを阻まれる

「ここは通さんぞ、クライシス！！」

「ＲＸ！！邪魔をするな！！！」

ここに見事な混戦の形が出来上がる

「ぬううう！！！邪魔をしおって！！！！迷惑な奴なのだ！！！」

「これに懲りたら頭のそれ返せ！！！！」

「それはできない相談なのだ！！！」

ドカッ！！バン、ドン！！！

蒔風とディケイドがまとわりつくチャップ共を千切っては投げを繰り返す

「蒔風」

「なんだ！？今いそことなく忙しいんだが」

「失ってから気付いたんだ。オレは、誰かのために戦うこともできる、ってな」

「士？」

「仲間なんて明確なものはまだわからない。だが・・・失いたくない奴はそれなりにいるからな!!!」

「それはっ!!どぉりゃ!!よかったな。また強くなったぞ、お前」

蒔風とディケイドが次々と雑兵やアポロガイストが新たに呼びだした怪人を圧倒していく

そんな攻防のさなか、アポロガイストはあくまで任務を遂行するようで、蒔風らから離れシュバリアンに声をかける

「クライシス皇帝に伝えろ。手を取り合いライダーどもを殲滅し、共に世界を手に入れるのだと!!」

「だまれ!!貴様らの手は借りん!!」

シュバリアンが鋼鉄の爪でアポロガイストを斬り裂こうと振るうが、簡単にかわされる

「確かに伝えた。よい返事を待っている。大ショッカーは寛大だからな」

シュウウウウンン・・・・・

そう言ってアポロガイストはその場に戦力を残しオーロラで離脱しようとしていた

「まて！！」
「こ、の・・邪魔だ貴様ら！！！」

蒔風とディケイドがアポロガイストを追おうとするが、多くの敵に阻まれてしまう

「ぬ、士君、蒔風君！！！フッ！ＲＸ！バイオ、ライダー！！！」

その状況を見たＲＸがバイオライダーへと姿を変え、その体を液状にして敵を絡めとる

一カ所にかき集められた敵を相手にしながら、ＲＸが叫んだ

「事情はユウスケ君から聞いている！！行け！！」

「すまない！！」
「そうさせてもらう！！」

蒔風とディケイドがオーロラに突っ込む

だがアポロガイストのために開かれたその門（オーロラ）は侵入者を拒んだ
バチバチと少しだが弾かれる

そのオーロラをまず蒔風が通り抜けた

翼人だからであろう、少しだけ静電気のようにはじけたが、なんの問題もなく通る

だがディケイドはなかなか通れない
蒔風が手を貸そうとしたそのとき、ディケイドの背中を何者かが押した

「まったく、仕方ないなぁ。だけど助けてあげよう。ほら、行きたまえ。これだけのハンデでも、僕は勝てるぐらい強いからね」

その言葉と共にディケイドはオーロラを破り、世界を越えた。

「士！どうしたんだ？」

「いや・・・なんでもない」

そういいながら二人が周りを見渡す。

夜だ

漆黒に包まれた夜の公園に二人入る

「どこの世界だ？」

「ここまで情報がないとわからん」

そんな二人の元に、ひとりの男がやってきた
街灯の逆光で顔が見えない

「・・・・!?お前は・・・世界の破壊者ディケイド!!」

その言葉と共に、男がさらに掛け詰め寄ってくる
その男は・・・・

「南光太郎!?だったら、ここはまだＲＸの世界なのか!?」

「いや・・・違う、ここは!!」

ギュバッ!!

光太郎が両こぶしを握り、右頬に寄せて力を溜める。

バチバチバチバチ・・・・
バッバッ!!

グオオオオオオ・・・・・・

「変、身!!!」

ズバッ!!!

一定のポーズをとり、その腕が力強く振るわれ、変身の掛け声をあげる

しかしそのライダーはＲＸではなく

「仮面ライダー、ＢＬＡＣＫ！！！！」

「ＲＸじゃない！？」
「やはりかよ」

ＢＬＡＣＫが二人に言う

「世界の破壊者ディケイド！！この世界をお前の好きにはさせない。
その仲間と共に、オレが倒す！！！」

仮面ライダーＢＬＡＣＫが構える

ああ、この世界でもめんどくさいことになりそうだ

蒔風はそんなことを考えていた

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ディケイド　～仲間意識・感受～（後書き）

アリス「仮面ライダー、ブワッ！！」

それはネタだ

ア「この回では士が仲間を認識し始めますね」

ええ

ですから夏海が倒れるのは必要かと思いました

そうじゃないと士の成長はないですから

ア「でも夏海さんが・・・」

そこは世界最強がどうにかしてくれる

そうそう、カラオケ行きましたよカラオケ

ア「どうでした？」

ダブアク（Ｄｏｕｂｌｅ－Ａｃｔｉｏｎのこと）を全部歌いましたよ

あ、でも牙王フォームはなかったな

ア「どれくらい歌ったんですか？」

朝の１１時から１８時まで

後半三時間は九割オレ一人で歌い続けましたよ

ア「なぜ？」

皆歌わなくっちゃったから
でもそのおかげで「なのは」全ＯＰと電王系の曲、それと多くのアニソンゲーソンが歌えました
ＡＮＧＥＬ　ＢＥＡＴＳ！とかの曲も歌ったなァ
ア「それじゃあのどは・・・」
すげえ元気
ア「枯れてないんですか！？」
枯れないように喉を使ったから
もはやのど飴いらず。あ、水はいるな
ア「なんて凄くて無駄な技能・・・」
ヒトカラで四時間十二分間、歌いながら曲送って歌い続けたこともあります
けっこう余裕でした
ア「アホですね」
本望だ！！
ア「次回、ブラックの世界」
ではまた次回

おのれディケイドォォォォオオオオオ！！！！！

ディケイド　～ＢＬＡＣＫの世界、即離脱！！～

暗い公園の中、ＢＬＡＣＫがディケイドと蒔風に襲いかかる
ＢＬＡＣＫの拳がエネルギーで赤く発光し、その拳で攻撃してくる

「ライダーパンチ！！」

「チッ！！（バチィ！）ぉおうあ！！」

蒔風が手刀で応戦するが、両者共に腕が弾かれる

「ぬうう！！トオ！！！」

ＢＬＡＣＫが跳躍し、足を突き出その構えは紛れもなくライダーキック！！！

「ライダーキッ、ぐオ！！」

バンバンバン！！！

だか空中でその体から火花が散り、地面に落ちる

「まったく。こんなところで何やってるんだい？士」

声のした方を見ると、そこにディエンドが銃を構えて立っていた

「貴様もディケイドの仲間か！！！」

その言葉にディエンドが返す

「さあね。そんなもの理解できないよ！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＦＥＭＭＥ！］

ディエンドがカメンライドを発動させ、ファムを召喚する

「ヤア！！！」

「くっ！トゥア！！」

ファムがＢＬＡＣＫに襲いかかり、その間にディエンドが蒔風とディケイドをその場から連れ出した

先ほどの公園から少し離れたところで、士、海東、蒔風が話をしている

「海東、あのライダーはなんだ？ここはなんの世界だ」

「一気に質問しないでくれるかな。とりあえずあのライダーは女ライダーのファム。お堅いＢＬＡＣＫ君は苦手だと思ってね」

「後この世界はＢＬＡＣＫの世界だな。確かこの世界の組織は・・・ゴルゴムだったな」

「だから僕の説明をとらないでくれるかな」

勘弁してよ、と蒔風に軽く抗議する海東に士が言及する

「おまえ・・・何のつもりで助けた」

「ふ・・・誰かを助けるってのは強さなんだろう？」

「は？」「え？」

「だったら僕はやってみせるよ。考えてみればそうだね。「殺す」ことよりも「生かす」ことの方が難しいからね」

その海東の言葉に感心したように蒔風は言う

「その、とーり。そんな難しいことやれるのは間違いなく「力のある強い奴」だからな」

「「仲間」なんてもの知らないけど、なるほどね。その「強さ」はお宝だ♪」

なにかすがすがしい顔をした海東だが、士は疑う

「お前・・・何を考えてる？」

「ん？パーフェクターを手に入れるんだろう？」

その二人の間に蒔風が入る

「まあまあ！ここからは三人力を合わせてアポロガイストの野郎をさ！！」

「それは断るよ」

しかし海東が蒔風の提案を断る

「今回の勝負は誰がナツメロンちゃんを助けるか、だよ？そこまでの慣れ合いはできないなぁ」

「海東・・・お前！！」

「よせって士・・・いいぜ。そういう勝負なら乗った」

「蒔風！？」

「だってこうすればお互いに急ぐ。結果的に夏海さんが助かるのも早くなる、だろ？」

「それはそうだが・・・・」

「じゃ、そういうことで♪」

そう言って海東がその場から去る

蒔風と士も海東とは違う方に進んで去っていった

――――――

周辺を見回すガイ
そして車のフロントガラスの中に、赤い龍の戦士を見た

「！！」

「ハァ！！」

そこから飛び出してきたD龍騎の攻撃をかわすガイ

「ミラーワールドから探しまわったかいがあったぜ」

「ディケイド・・・この世界にまで追ってきたのか・・・」

「オレだけじゃないぜ」

士がD龍騎からディケイドに戻りながら言う

その言葉を理解するよりも早く、気付いたらガイは地面にあおむけに寝ていた
何が起こったのか全く理解できないが、とりあえず起き上がろうとする
しかし、地面とスーツの裾などを突如として鉄矢が縫いつけ、起き上がれない

「ふっふっふ～～～。ジャッジメントですの！ってな」

仰向けに縫いつけられたガイのの顔を覗きこむ形に蒔風がパッ、と現れる

「テ、瞬間移動（テレポート）だと！？」

「御名答！！！さ、パーフェクターをよこせ」

「断るのだ・・・アポロチェンジ！！」

ブオッ！！

ガイがアポロガイストに変身し、撃ちこまれた鉄矢が融解する

「ち！！」

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＢＬＡＳＴ！］

ディケイドがいくつにも分身した銃身から弾丸を撃ち出す

だが巨大なガイストカッターにすべて防がれてしまう

しかし状況は依然として二対一

おそらくこの騒ぎであればディエンドが来るであろうし、最悪ＢＬＡＣＫまで相手にしなければならなくなる

「面倒な・・・ぬ・・貴様、来い！！」

アポロガイストが近くにいた、逃げ遅れたのであろう少女を人質に捕まえる

それを見て蒔風とディケイドが止まる

「手を出したら・・・どうなるかわかっているな？」

だがその体制もすぐに崩れる

「どうなるんだい？」

その声と同時にアポロガイストの背後にディエンドが現れる

アタックライド・インビジブル

姿を完全に消すこのカードの力によってうまく死角から入りこんでいたのだ

「ナイス海東！！！」

「ディエンド！！貴様ぁ！！！」

「パーフェクターはいただくよ」

「そうはさせん！！！」

「ばか！！まずその子助けろ、よっ！！」

ダコン！！

蒔風が地面を踏みつけると、離れた場所であるにもかかわらず、アポロガイストの足元の地面が跳ね上がった。

柔法・畳返し

その技ではね上げられたアポロガイストは少女をその腕から離してしまう

しかし、少女の方はディケイドが空中でキャッチし、アポロガイストの方は蒔風とディエンドのパンチがお見舞いされた。

「フン！！（バガッ！！）」

だがアポロガイストはいくつもの世界を越え、様々な悪の組織相手に勧誘してきた男だ
その程度のちゃちな攻撃ではその巨大な盾に阻まれてしまう

「海東！！！まずこっち助けろよ！！」

「子どもは次世代の担い手だぞ。未来だって相当大事なもんだろ？」

「・・・ふん・・・それよりもほら、アポロガイストが」

「ああ！！てめえ待て！！」

「さらばなのだ・・・ハッ！！」

アポロガイストがオーロラをくぐり消えて行ってしまう
そして入れ替わりにグロンギ、アンノウンが出てくるが

「邪魔、だ！！」

通り過ぎる一瞬で二体を切り捨てる蒔風
背後で爆発するのを感じながら、オーロラをくぐる

その直後、オーロラは消えてしまった

to be continued

ディケイド　～ＢＬＡＣＫの世界、即離脱！！～（後書き）

アリス「チマチマチマチマと鬱陶しい！！」

話ですか？
そうですね・・・・

もっと簡単にできればいいんですが・・・・

ア「もっと長く書いて一気に終わらせなさい。
下手したら「なのは」より長くなりますよ？」

たしかにそうですが・・・

ア「がんばって書きなさい」

大変だ・・・

実際、二、三日かけて長いの書くのと、短くてもどんどん更新って、
どっちが好まれるんだろ

ア「知りません」

校舎でいいなら俺、断然サボ・・・時間とりますよ？

ア「少し聞こえた酷い言葉は聞き流しましょう」

ありがとう

世界に問う!!!
どっちがいいですか?教えてください

こうやって原作ストーリーに絡めるとどうしても極端に長くなるか
短くなるかなんですよね・・・

ア「皆さんの意見、お待ちしています

次回、ふたりは光太郎!!」

ではまた次回

人はさ、皆旅人だよ

ア「誰の台詞ですか?」

栄次郎さん

ア「なるほど」

ディケイド　～蒔風の本質～

オーロラの先はどこぞの廃工場だった
コンクリートの柱、錆びた鉄骨、無数に転がるドラム缶

如何にもな場所である

そこに声が響く

「ほう・・・ディケイドを見捨ててきたのか。貴様の仲間意識も、たいしたことはなさそうだな」

工場の真ん中に立つアポロガイストが蒔風をののしる
だが蒔風は全く後悔などしていない

「仲間だからこそ、あいつなら大丈夫と思って置いてきたんだよ」

「戯言を・・・」

「ガキを人質に取るのはいい案だが・・・それを破られた時の代償はでかいぞ、アポロガイスト！！！」

ドン！！

蒔風が大地を思いきり踏みつける
すると地面が針のように真上にせり上がり、途中でグニャリと曲がって

ドドドドドッ！！！！

と、アポロガイストを串刺しにしようと迫る

だがアポロガイストは全くひるむことなく、地面スレスレを走り猛然と蒔風に迫る

迫りながら放たれるアポロマグナムを蒔風が「風」「林」で弾き応戦する

そして近距離になり、アポロガイストが剣、アポロフルーレに持ちかえ、斬りつけるのを防ぐ蒔風。

ギリギリと剣が呻く

蒔風は首を下に向け、俯いたまま耐えている

それに対しアポロガイストは真っ直ぐ蒔風を見据えていた

「どうした。まだ私には余裕があるのだぞ！！」

アポロガイストが蒔風を叩きのめすと言ってきた

だがしかし、アポロガイストはこの時想像だにしなかった

幼き者を人質にしたことの代償が、あんなにも苦しいものだったとは

この男がこの程度で倒れるものだとは、塵ほども思わなかった

「ブッ！！」

「ぐぬ！？」

蒔風がアポロガイストの目に唾を吐きかける

それに思わず後退し、目をふき取るアポロガイスト

そんなアポロガイストの右膝を、蒔風が思い切り踏み砕いた

ゴキュン！！！という音と骨格の砕ける音がした

「ぐおおおおおおおおお！！！！！」

「はーーい、まず「ごめんなさい」って言ってみようか」

蒔風がニコニコと笑いながら、蹲るアポロガイストを見ながら言った

「何を言って（グギャ！）ギイイイイイイイイイイイ！！！！」

そのの言葉が言い終わらないうちに、蒔風がアポロガイストの右腕をへし折った

「おかしいなぁ・・・オレは「ごめんなさい」って言えと言ったんだが？それ以外の言葉はいらないんだよ？」

「ぐ・・・おお」

ガゴギュ！！

「ガアアア！！（ボキッ！！）ゴオオオ・・・」

「だからそんな叫び声はいいから「ごめんなさい」って言え。ん？簡単だろ？」

蒔風の顔はとても穏やかだ
その口調はまるで子供に言い聞かせるかのように緩やかだった

「ガキを人質に取るのはダメだよなぁ？」

ゴキキキキ！！

「ぬっが！！」

さらにアポロガイストの右手の指をすべてへし折る
その痛みに呻くアポロガイストに、

「だからそんな叫びはいらないから「ごめんなさい」って言えばいいんだよぉ・・・わかってるのかぁい？」

アポロガイストの痛みに堪える声と、蒔風が身体を破壊していく音が淡々と、鈍く、響き渡る

そして三十分ほどたってから、アポロガイストは知った

この男はヤバすぎる
悪とか善とか、そんなものじゃない
そんなカテゴリーには当てはまらない

独裁、慈善、復讐、義理、偽善、救済、破滅、善、悪、情、志、歪

み、狂気、理性、本能、衝動

そう言った一切の概念すべてをこの男から感じる
故にこの男は完璧に偽装するのだ
誰から見ても「まとも」に見えるのだ

だが違う

この男は何か一つのきっかけがあればどちらにも転ぶ男だ
今は大きなきっかけがあったようで大丈夫だが、もしそれ以上の「なにか」があれば、あらゆるものにこの男は身を変えるだろう

この男はすべてを理解し、すべてをその身に宿して、それでいてまともなように振舞っている異常者だ・・・・

それを知った故に、アポロガイストはもう抵抗することを止める

「すまなかった・・・・」

「あん？」

「すまなかった!!私が悪かった。だからもう（ベギッ）ギイイイ

イイイイイ！！！」

そのアポロガイストを楽しそうに踏みつぶし、アバラに当たる部位を砕く蒔風

「ちがぁうんだよぉ。オレが求めてんのは「ごめんなさい」、だ！それ以外の言葉は求めてないんだよぉ・・・・」

「あ・・・あ、あ・・・」

そこからさらに拷問が始まった

「ごめんなさい」の一言、たった六文字言うのにアポロガイストはさらに二時間費やしたというのも、「ごめんな」や、「ごめ」の時点で蒔風がいきなりアポロガイストの体を砕き

「最後までちゃんと言ってくれないとオレわか～んな～い♪」

と言って先に進ませないからだ

それでもアポロガイストは死ねない

改造人間であるその体は、その程度では死ぬことができない

むしろ一番最初に砕かれた個所はすでに治ってきているところだ

「いいねえ。便利だねえ。これなら殺すことなく痛めつけられる。オレが「殺さない」って言うのは、こう言うこともあるんだよなぁ。生きてる方がよっぽどつらいってな！」

そう言って恍惚に笑う蒔風
その間にアポロガイストはついに言ってのけた

「ご・・ごめんな、さい・・・・・」

そう言ってアポロガイストは力を抜く
これで解放される

だが、そんな光景を見て蒔風がニヤリと笑った

「ざぁんねん。その程度じゃあ、許せない♪」

「あ・・・え?」

「ガキは俺らよりも先の世界を生きる。つまりは未来の世界だ。お前があのとき壊そうとしたのは世界だった。それを見て許せる俺と思ったか?」

「き・・・さま・・・」

「でも途中からお前壊すの楽しくなっちゃったんだけどね!!あはははははっ!!」

蒔風が笑う

無邪気にでも、冷酷にでもなく、ただ、笑う
だからと言って貼り付けたようなものでも、無感情なものでもない

だが蒔風は心から笑っていた

ただ、その根幹の感情は、誰にも理解できない
たった一人の自分自身を除いて

「ふう・・・もういいや。飽きた。あとは好きにしろ」

そう言って蒔風がアポロガイストを「山」で斬る
すると全快ではなくとも、折れた個所は治っていた

「!?・・・どういうつもりなのだ・・・」

「お前に飽きたんだよ。ま、これはいただいてくけどね」

そう言ってパーフェクターを手に持ち、振る蒔風

「か・・返せ・・・私の命を!!」

「その気持ち、覚えておけ。お前に命を奪われた者の叫びだ」

そう宣告し、立ち去ろうとする蒔風

アポロガイストはその後を追えない
その身に恐怖はしみ込んでいた

「そうそう。でもオレがお前に対してひとつだけ認めてるのはさ」

蒔風が首だけ振り返って指を立て、言った

「生きる、という執念。それだけは認めてやる。オレにはその執念がないからな」

「貴様は・・・人では、否、生物ではないのか？」

その言葉に身体ごと振り返って蒔風が言った

「その通り。オレは異端者にして破綻者。人にあらずして生物にあらず。「死」を恐れないがゆえに、「生」の実感がないものだ」

「な・・・・・」

「そして覚えておけ「ディケイドの迷惑な存在」となる者よ」

その声の凄みにアポロガイストの体がびくりと震える

「世界に下手に手を出してみろ。オレが潰すぞ」

そう言って蒔風の姿が消える

――絶対にな――

最後にそう言葉を残して

アポロガイストが人間体に戻る
その全身から気持ちの悪い汗がにじむ

「アポロガイスト！！」

そこに南光太郎の声が響く
どうやら自分を探しまわっていたようだ

ガイはいつも通り振舞った
自分は大ショッカー大幹部アポロガイスト

そんな自分がライダーに弱みを見せてはならない
お互いに睨みあっていると、二人の隣にオーロラが出現し、チャップ達がそこを通っていった

向こうにはシュバリアンがＢＬＡＣＫとディケイドを相手取り戦っていた

ここからはなんら変わらない物語

ディケイドがオーロラをくぐり、こちらに来る
ディエンドが現れカードを使ってＢＬＡＣＫを召喚し、四ライダーがアポロガイストと呼びだされた他の怪人と戦う

いつも通りだ
いつもどおりにヒーローが勝利する

ただ一つ違うのは、アポロガイストの額にはパーフェクターはなく
夏海の命は無事返却され、士は自身の命を削らずに済んだ

アポロガイストはＲＸに撃退され、他の世界に逃れる

だがもうアポロガイストはあの男の前には立てない
あの異常者（まいかぜ）を相手できるのは、同じ異常者（そんざい）だけだからだ

あの男がディケイドのそばにいると思うだけで、自分は行けない
故に次の世界にこの男が現れることはない

そして次の世界に敵が行かないのであれば、ディケイドたちの旅の
行き先も変わる

彼が出てくるのであれば、それは蒔風のこの世界での用事が終わっ
てからだ

――

「いや、本当によかったよ。夏海ちゃんも無事に助かったし！！」

「士、すまなかったな。お前を置き去りにして」

「いや、こっちも礼を言う。ナツミカンを、ありがとう」

「皆さん、本当にありがとうございました」

「結局君の勝ちかい？つまらないなぁ・・・これじゃ僕が強いことにはならないじゃないか」

ユウスケ、蒔風、士、そしてどこから来たのか海東の四人が写真館で騒がしく話している

「いいじゃないか。仲間がどんなもんか、知れたろ？」

「うんうん、海東さんはまた一つ、仲間を知ったんだな、うん！」

蒔風とユウスケの言葉に海東が考え込む

「そうか・・知らないことを知る・・・知識とは最高のお宝だ・・・そういうことだったんだね、蒔風君」

そう言って海東がパン、と指で蒔風を撃つ

「さて、次の世界はどんな世界だ？」

そう言って士がカーテンロールを降ろす

向かう先はアポロガイストの逃げた先の世界・・・になるはずだった

「なんですかこの絵！？」

夏海が驚愕の声をあげる

無理もない、そこにあった絵は・・・・

真っ黒に塗りつぶされた、ただの黒い布だったのだから

「蒔風・・・これは！？」

士の問いに、蒔風が面白そうに言った

「あの野郎のお出ましさ。思いのほか計算が早かったな」

ついに敵が来る

蒔風、「ディケイドの世界」最後の戦いだ

to be continued

ディケイド　～蒔風の本質～（後書き）

アリス「蒔風・・・酷い！！」

よくよく見て見なさいよ

「Ｓｈｕｎ　Ｍａｉｋａｚｅ」ですよ？

「Ｓ・Ｍ」なんですよ！！

ア「あれはただのドＳでしょう！！」

あれがダメだとわかっていることに対する背徳感でまた楽しいらしいですよ？

そういう意味ではほんの少しＭですね

ア「読んでて気持ち悪くなりましたよ・・・」

すみません

ア「次回、演算終了、戦闘開始」

ではまた次回

僕の目の前に広がる

九つの道はいつか重なって
新しい夜明けへと続く道に変わるのだろう
目撃せよ Ｊｏｕｒｎｅｙ ｔｈｒｏｕｇｈ ｔｈｅ Ｄｅｃａｄｅ

ディケイド　～世界を旅する戦士たち～

蒔風達が外に出ると、ただひたすらに荒野が広がっていた。

「蒔風、「奴」っのが来たのか？」

「そ、来たみたいだ。あそこ」

蒔風が指差した先三十メートル程
上に向いて立っている巨石がある
そしてその上に足を組んで空を見上げる青年がいた

「よう！計算、早かったな！「なのはの世界」じゃ半年はかかってたじゃないか！」

蒔風が話しかけた

その声に反応じ青年の首が軽くこちらに向いた

「ああ・・・今回は「ライダー」っつー共通事項が合ったからな。
それでも二、三ヶ月は掛かっちまったけどな」

二人の会話に海東が口を挟む

「君が「奴」かい？嫌にあっさり出てくるんだね」

彼等の回るライダー世界には様々な組織の陰謀が渦巻いていて、回りくどい事が多かった

故にいきなり出てきた事に驚いているのだ

「準備は出来た。やることは明白。だったらこれ以上時間をかける必要はないよ」

そう言って青年、「奴」が岩の先端に立ち上がる

「始めまして皆さま」

礼儀正しくお辞儀する「奴」

そしてその顔が上げられる

「んで、死ね。ディケイド」

ゴゴォ！

ターン、とジャンプし着地した「奴」が後方に巨大な砂埃をあげ、一足飛びで蒔風らの真ん中を通り過ぎていった。

「速・・・い！」

その速度に蒔風が驚愕する
皆も同じように驚く

「夏海！隠れていろ！行くぞ！」

士が皆に呼びかけ、バックルを取り出そうとする

海東がカードとドライバーを
ユウスケがベルトを出現させ
蒔風が龍虎雀武を解放合体させようと手を伸ばす

だが士が取り出そうとしたバックルは彼の元にはなかった

「蒔風がパクれたのをオレがパクれないわけないだろ？」

「奴」がその手に持つディケイドライバーとライドブッカーを見せ付ける。

「通りすがって戴きました。変身！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！］

「奴」がディケイドに変身する
だが士のモノと違い、鮮やかなマゼンタは黒く変わり、目は緑でなく黄色になっている

「キメゼリフはないけど、許してね？」

そういって両手を合わせるディケイド
そしてライドブッカーをガンモードにし、低い姿勢で突っ込みながら蒔風に撃ってくる

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＢＬＡＳＴ！］

銃身がいくつにも分身し、一斉射撃にて攻撃してくる

「チッ！！」

蒔風が前方に「風林火山」と「獅子天麟」を放る

その刀身に銃弾が当たり、回転するのを蒔風が解放した朱雀槍で落ちないように調整していく
そのほかにも撃たれた剣がほかの剣に当たり停滞し、さらに他のに当たって、と永続的に蒔風の前を守る

「全く、君も厄介なものを盗まれたね」
「お前！！それを返せ！！」

「「変身！！」」

ユウスケと海東が同時変身する

その間にディケイドは蒔風に到達し、ブッカーをソードモードにして斬りかかる
それに蒔風は手にしていた朱雀槍で応対する

外からの衝撃がなくなり、他の剣がすべて地面に落ちるか、突き刺さるかする

朱雀槍とライドブッカーが鍔迫り合いしているところに、海東の銃撃が入り込む

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＢＬＡＳＴ！］

蒔風の真後ろから引き金を引いたディエンドの銃弾は、蒔風を回避し、回りこんでからすべてディケイドに向かう

「フゥア！！！」

バゴン！！とディケイドが大地を踏み砕き、地形を崩す
粉塵が舞い、視界が奪われる

その瞬間にも地盤が崩れ、蒔風身体は崩れて落ちる地面と共に落下していく

「おいおい！どこに落ちてんだよ！！」

落ち続ける足場に周囲

そう言って周りを見渡す蒔風の横を落ちていく岩石にディケイドが降り立ち蒔風に銃撃を浴びせながら歩いてきた
それに対し朱雀槍を回転させて、防ぐ

だんだんと回転が「舞い」のようになっていき、体の右側左側と交互に回転していく
その途中で脇に差してある残りの「青龍」「白虎」「玄武」に触れ、一体としていく

ブンブンブン、バウッ！！

「龍虎雀武！！朱雀青龍刀！！」

蒔風が回転からそのままディケイドにドン！！と構える

ディケイドが武器をソードに変え、こちらに攻め込もうとしたそのとき

「ユウスケ！！この声の前方五メートルだ！！」

チュン！ドドドドドドン！！！

ディケイドの全身から火花が散り、この行進が止まる
ディケイドが目をやった先に、ペガサスフォームのクウガと、ディエンドが立っていた
それを確認し、ディケイドがカードを取り出し、装填した
［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！］
カードは発動しその瞬間、それの効果を最も知る男が動いた
「小野寺君、返してくれ」
そう言ってクウガからペガサスボウガンを受け取ると、それはディエンドライバーに戻った
［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！］
そしてディケイドとディエンドの姿が消えた
と、なにもないところから火花が散る
蒔風とユウスケの周囲で、幾度となく散った
ガッ！バァン！ドドドドッ、バガンバガンバガンバガン！！！ドゴゥ！！！

「ぐっ、うわあああああ・・・・・・・・・」

「海東!!」

上空からディエンドが落ちてきて、いくつもの岩石を砕きながらさらに下方へと落ちて行った

「ユウスケ!!あの感覚、覚えてんだろ?行くぞ!!」

「え?あ、ああ!!超変身!!」

クウガが蒔風の叫びに応え、アメイジングマイティに超変身する

「オオォォォオオオリャア!!!!」

クウガのアメイジングマイティキックがディケイドに放たれる
さらにそこに蒔風が朱雀槍の一方の先端に白虎釵を両方とも装着し、ディケイドに向ける

すると白虎釵からエネルギーが伸び、白く輝く牙が現れディケイドを挟み込んだ
身動きの取れないディケイドに、クウガの必殺技が迫る

しかし

バキャ！！ゴォッ！！

ディケイドが白虎の牙を右側だけ破壊し、その腕に力を込め、クウガのキックを正面から殴りつけた
その拳のエネルギーは凄まじく、クウガの足とディケイドの拳はとんでもない音を立てながらギリギリとせめぎ合っていた

しかし、ディケイドが左腕の拘束をも破壊し、そちらの腕もクウガに向かって突き出した
クウガの足先が爆発し、その体が吹き飛ばされる

クウガは周囲を渦巻く粉塵の向こうに消えていった

「こんなもんか・・・五代雄介の方がまだ手こずったぞ」

「調子に乗るな！！」

バガァン！！

蒔風が朱雀白虎棍の先端を玄武に変え、玄武盤とし、ディケイドの顔面にその側面を叩き付けた

が、それは直撃などしておらず
ディケイドの腕に阻まれていた

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＳＬＡＳＨ！］

ギャイイイン！！！

ディケイドのソードの刃が平行に分身し、蒔風に重い攻撃を仕掛けてくる

「ああ、そうか！！このライダーシステムは「ライダーを潰すためのもの」だったな」

「どういう・・・ことだ！！」

蒔風がディケイドの剣撃を受け続ける

（「奴」の体力でこの一斉同時剣撃なんざ、獅子天麟でなきゃこのままじゃマジで・・・！！）

獅子天麟は最初の荒野に落としてきてしまった

そんな蒔風の焦りを知ってか知らずか、ディケイドは答えた

「実際に門矢士という人間が変身したディケイドは、他のライダーに比べてそこまで強くない。まあ、怪人やある程度の奴なら軽くあしらうがな

だがそれでも他のライダーを圧倒しうるこは、このシステムが「他のライダーを潰す」ことが目的に作られてるから他ならない

なるほどなるほど・・・これならライダー大戦でも生き残れるな、うん」

ガギイ！！

そう言って自己完結させ、蒔風に思いっきりソードを叩きつけ、ひざまづかせる
そしてグリン！！とソードを捻り、龍虎雀武を蒔風の手から吹き飛ばした

そして武器のなくなった蒔風にライドブッカーの幾重にも分身した斬撃が襲いかかる

ドシュ！！！

五つか六つか、それぐらいの斬り傷が蒔風の胸に刻まれる
そしてさらにディケイドは一回、二回と蒔風を突き刺していく

だが蒔風にとっては一回二回ではない
一回に突きに五つも六つも同時に貫かれるのだ

その全身から血を噴き出し、蒔風の体も足場にしていた岩板から落ちて行った

それを追って跳び降りるディケイド

徐々に砂煙が晴れ、周囲が見えてくる
そして落ちて行った先は、最初にいた荒野であった

どういう世界構造になっているのか
ここから地盤が崩れ落ちて、落ちた先はまたここだった

蒔風がのろのろと首を捻ると、変身が解け、ボロボロになった海東

とユウスケが転がっていた

「海東！！おい！！」

「大丈夫ですか？ユウスケ！！」

士と夏海が二人を抱え上げる

そして蒔風にも気付いたようで、二人と共に駆け寄ってくる

「ふぅ～。これで十分だな。返すよ」

「奴」が変身を解き、ディケイドライバーとライドブッカーを手に持つ

「しかし変身されると厄介だ。故に」

「奴」がライドブッカーからすべてのカードを抜き取る

そして

ボゥワ！！！

そのカードすべてを焼き払った

そうしたうえで、空のライドブッカーとドライバーを返却した

「カ、カードが！！・・・・」

「そんな・・・・」

士がブッカーの中を見ても、そこには一枚たりともカードはなかった

そこから通じる「クラインの壺」には無尽蔵のエネルギーがあり、
それによってカードが生成されるにもかかわらず、一枚もカードは
出てこない

「おおおおおお！！！」

蒔風が落ちていた「獅子」と「天馬」を握り、たちあがって「奴」
に迫る
その途中にあった「麒麟」を蹴りつけて「奴」にダーツのように飛
ばす

それを指で挟んで止められ、投げ返される
それを右手でつかみ、三本を合体、「獅子天麟」にし、「奴」に振
りかぶった

「奴」も魔導八天を掴み、蒔風に迫る
そして「奴」の剣と蒔風の剣が交差した瞬間、「奴」の剣のうち、
一本だけその手に残し、他がはじけ飛ぶ

そして空中でふわりと止まり、その切っ先がギュカッ！と蒔風に向く
そしてその剣が蒔風に風を斬って向かって行った

その剣を撃ち落としていくが、受けきれない
いくつのもの斬撃に身をさらされる蒔風

そして最後にトンっ、と優しげな音が蒔風の腹に鳴る

その音は「奴」が最後の一刀を背中からその手で蒔風に突き刺した
音だ

蒔風の体が崩れる

士達は信じられなかった
あれだけ最強だなんだと言い、そして実際には恐ろしいほどの実力
を持った男が、「奴」の前には交戦するだけで手一杯なのだから

その蒔風を乗り越え、「奴」が士達に歩み寄る

「ここで旅は終わり。ああ、かわいそうに。門矢士は自分の世界を、
その正体を知らずにここで死んで行ってしまう！！
だが安心しろ。新たな世界において、しっかりとお前の世界に帰し
てやる。だから安心して」

「安心して・・・死ねって言うのか？」

士が「奴」を睨む
そして「奴」の後ろに倒れる、蒔風を見る

「世界をまわる旅は、危険が多くあったが、それなりに楽しかった。
破壊者だと罵られても、それを庇う奴がいた
どんなに突っぱねても、ついてきやがる相棒がいた
ひょこひょこ出てきては邪魔ばっかしやがるコソ泥もいた」

そして両手を広げ、皆を表して言った

「それがオレの、オレたちの旅だ!!その行き先はオレたちで決めるオレたちが自分の足で、力で、この想いで!進んでいった先に本当の自分の世界がある!!
それがオレたちの力になる!!
お前の偽りの世界、偽りの力は、必要ない!!」

だが「奴」は士を指さし、蔑む

「その力とやらのカードも消えたじゃあないか。所詮他のライダーと築いた絆も、その程度だったというわけだ!!」

だがその言葉は全く士には痛手にならない

「問題ないな」

「なに!?」

「力とは能力や、腕っ節じゃない。守ろうとする心、絶対に諦めない気持ち。それが力だ!!カードはそれを表す形態の一つにすぎない!!!」

その士の強き瞳の輝きに、「奴」が下がる
そして気付いたように蒔風の襟首を掴み持ち上げ、叫んだ

「だからと言って!!この戦力差は覆らない。人質、変身不可、重傷人。これだけのハンデを抱えて、勝てるのか?」

「勝・・・るさ」

そう答えたのは「奴」に掴みあげられた蒔風だ

「勝て・・るに決まってる。ここにいるのは・・・世界・・・さい、きょ・・・・だ」

「ムカつくんだよ・・・そういうお前のでかい態度がよお!!!」

蒔風の体を士達の方に投げつける
士たちが蒔風をキャッチし、肩を貸して立たせる

「泣き虫毛虫、いつも怯えて、自信の持てない奴が、張ったりで言うな!!!」

「蒔風は弱くない。ここで一番体を呈してオレたちを守ろうと戦った、世界を一人で回ってきた、最高の男だ!!」

「違う!!その男がその状態に簡単になれるのは、死を・・・・」

「そんなことはどうでもいい!!!いま重要なのはたった一つだ・・・お前を・・・倒す!!!」

その士の言葉に、蒔風がピクリと動き、自分で立つ

「大丈夫なのか?蒔風」

「なんてこたぁ・・・ない・・・」

「貴様・・・主人公きどりやがって・・・なんなんだよ!!お前は!!!」

その問いに士がにやりと笑う

ユウスケも夏海も海東も、ボロボロの蒔風ですらも笑い始めた。

「覚えておけ!!オレは・・・・」

そこまで言って士がライドブッカーを再び開くとそこから無限ともいえる大量のカードが次々と出てきて、士の周りを囲んだ

そのカードはディケイド自身のもあれば、今まで覚醒した他のライダーのカードもあった

「通りすがりの仮面ライダーだ!!!変身!!!」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ!］

大量のカードから一枚が士のバックルに滑り込み、その姿をディケイドに変身させる

他のカードはすべてブッカーに滑り込んでいって、収まった

「覚えておけだ？・・・・めんどくさいなぁ！！！」

そう言って走り迫る「奴」に、海東が銃撃を浴びせる

その間に蒔風とディケイドが目配せをする

「行くぞ、蒔風！！」

「ああ！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＣＡＤＥ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

すると腰に装着されたライドブッカーから一枚のカードが飛んできた

黄色いカードで、斜めに絵が両断されており、上半分には蒔風が、

下半分には凄い形の剣が描かれていた

「お・・おいまさかそれはぁぁぁぁぁあああ！！」

「ちょっとくすぐったいぞ！！！！」

［Ｆｉｎａｌ　Ｆｏａｍ　Ｒｉｄｅ－－－ＭＡ　ＭＡ　ＭＡ　ＭＡ　ＩＫＡＺＥ！］

「ぉうぐあ！！」

カードが発動し、蒔風の体が若干浮き、形を変えていく

転がっている十五天帝すべてが鞘におさめられてから再び抜け、鞘とは反対向きに定着していく
そして蒔風の体と顔を装甲が覆っていった

最後に腕がバンザイ状態になり天地陰陽と、背中の「獅子天麟」が三本とも真っ直ぐになり先端に
足が折れ曲がりそこが取っ手に
脇の「龍虎雀武」は円盤状に合体して巨大化、腹部に当たる部位を貫通し、モーターのように高速回転する
そして「風林火山」は刺又（さすまた）のように途中で折れ曲がって伸びた

『な、なんじゃこりゃあああああああ！！！！！！』
「なんじゃそりゃあああああああああ！！！！！」

蒔風と「奴」が同時に叫んだ
しかしディケイドはそんなことは気にしない

「はあああああああ！！！！ウオオオ！！！！」

ザッ、ギュギン！！！！！

無数の刃が「奴」に振るわれ、斬撃、指突、殴打、さらには中央部の回転刃による削り出し

その一撃に奴が吹き飛ぶ
その一撃にディケイド自身もよろめき、一旦地面にドン、と置いてしまった

『イッテ！もう少し丁寧に扱え！』

「わぁーたよ。じゃ、終わりにするぞ！！！」

『うっし！！』

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＣＡＤＥ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～

再び出てきたカードを掴む
先ほどと同じく黄色く、羽根の形をした紋章が描かれている

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＭＡ　ＭＡ　ＭＡ

ＭＡＩＫＡＺＥ！」

「おおおお

グァ！！ドゴオオオオオオ・・・・・・・

「奴」が爆発し、その場から霧散していった

――――――

こう話している場所は写真館だ
すでに先ほどの黒い絵はなくなっている
これから蒔風がこの世界から出ていくのだ

「では、これで」

「またいつか」

「おう！！」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＣＡＤＥ］

ゲートが出現し、蒔風がそれに向かう

と、不意に士に向き直り、言った

「士、オレがいたのはほんの少しだけだったけど・・・まあ、なんだ・・・
仮面ライダーディケイド・門矢士の物語は、結構おもしろかったぜ」

「蒔風・・・」

「お前の物語は確かに存在する。なんでかわからないけど、そう思

えたんだ」

「・・・・・・」

「じゃあな！！！」

そう言って蒔風が消えた

ここからはまた、彼らとは別の物語

「次の世界はなんなんでしょうかね？」

夏海や士達が次の世界に心躍らせる

これから彼らがめぐるのは、過酷な世界だ

大ショッカー、士の正体、ライダー大戦、スーパーショッカー

そして、ディケイドの終わり

そこから始まる物語

しかし、それは別の物語

蒔風が向かう次の世界は・・・・・

ーーー

to be continued

ディケイド　～世界を旅する戦士たち～（後書き）

【仮面ライダーディケイド】

構成：”ライクル”　３５％
　　”フォルス”　３５％
　　”ＬＯＮＤ”　３０％

最主要人物：門矢士

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：「ファイナルフォームライド：蒔風」の出現、「マイカゼ十五天帝」の使用

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：「ファイナルアタックライド：蒔風」、ディケイドブレイカーの発動

アリス「やっとディケイドが終わりましたか」

やっぱりオリジナル戦闘書いてる方が楽しい

ア「そうですか？」

なんかこう・・・

あらかじめある戦闘に蒔風を継ぎ足すよりは書きやすい

ア「さいですか」

じゃあこのへんで

ア「次回、四色の怪人、不幸な少年」

ではまた次回

時を越えて、俺、参上！

電王　～時の列車の特異点～

蒔風が世界に到着する

「どこですかここ？」

見渡す限りの砂砂砂・・・・

空にはオーロラが光っている

ポケットをまさぐると、一枚のカードが入っていた。

「これは・・・チケット、か」

蒔風がカードを自分にかざす

するとなにかが浮き上がってきた

そこには「∞」と、それをまたがるように「ＩＮＦＩＮＩＴＹ」と書かれていた

そのカードを確認すると、目の前に線路が走ってきた

線路だけだ

それだけが走ってきた

ファーーーーン！！

そこに電車が走ってきた
白いボディに赤いマスクの電車

その車両部の扉が開く

「客室乗務員のナオミです！デンライナーに、ようこそ！ご乗車、しますか？」

蒔風がなんだかわからない顔をしていると、中からナオミと名乗る女性ぎ出てきた

「乗るの？」

「乗らないんですか？」

「乗ります」

「ですよね！このままだと時間の砂の中で永遠にさ迷う事になりますし！」

「え？時間？」

「さあさあ、コーヒーもありますから！」

ナオミが蒔風の背中を押して、デンライナーと呼ばれた電車に押し込まれる。

向かった先は食堂車のようだ
そこには赤、青、黄色、紫の怪人がいた
いや、よく見たら黄色じゃなくて金色か？

「おいおい！こんなヒョロっちいのが他の世界から来た奴ってのかよ！？」

「先輩、いきなりそんなこと言っちゃ失礼でしょ？」

いきなり浴びせられるその言葉に、蒔風がムッ、とする

「何いきなり言うんだよ！！戦いは力とか能力もあるけど、ノリのいい方が勝つんだよ！！」

その言葉に赤鬼のような男は蒔風のほうに歩いて来て、肩をバシバシ叩いた

「お前・・・わかってんな！！」

「え？は？」

そう言って真ん中の席の方に連れてこられる

そこにはスーツ姿の男性が座ってチャーハンを食べていた
どうやらチャーハンに立っている旗を倒さないように崩していって食べてるようだ

その旗がカタン、と倒れたところで、男性が立ちあがり蒔風の方に向いた

「ようこそ、デンライナーへ！」

「デンライナー？」

「時を越える列車・・・それがこの、デンライナーです」

「で、こっちが電王の、野上良太郎君でーす！」

そこにナオミが一人の少年を連れてくる

蒔風よりも結構年下だ

「初めまして、野上良太郎です」

そう言って握手する

「君が・・・主人公か」

「え？」

「しかもまた「仮面ライダー」か。それにしてもちっちゃいな。何歳だい？」

蒔風がしゃがんで良太郎に訊く
その答えは結構衝撃的だった

「えっと・・・・こんな姿だけど、もうそろそろ二十歳・・・」

「・・・・はぁ！！？？？」

――――――

すなわち、その人間が存在した時間を行き来できるのだ
そうやって時間を飛び越えるイマジンを追って撃退しているのが「電王」だ

野上良太郎はいかなる時間の影響を受けない「特異点」である
それゆえに電王に変身することができる

だが少しばかし前に何らかの時間の歪みの影響で、本来十九歳だったのだが、十二歳の少年姿になってしまったのだ

「なるほどなぁ・・・で、あいつらは？」

と蒔風が先ほどの怪人たちを指さす
すると一斉にこちらを剥き、バァ、とおどけてきた

「おう、俺はモモタロスってんだ。名前の事は気にすんなよ」

「僕はウラタロス。男を釣る趣味はないかな。名前の事は気にしないでね」

「わいはキンタロスや！お前さん、実は強いやろ！あ、名前の事は気にせんといてな」

「僕はリュウタロスだよ！他の世界ってどんなの？でも、名前の事は気にしないでよね！」

そう言って自己紹介してきた

彼らもまた、イマジンだ
だが良太郎の味方に付き、共に闘う仲間である
良太郎は基本的には彼らに憑依させ、身体を貸して戦ってるらしい

「ってことは悪霊みたいなもんか？」

「ちょっと！悪霊はないんじゃない！？」

ウラタロスが反論するが、蒔風はさらりと流す

「あっちの男性は？」

「あの人はこのデンライナーのオーナー。あなたの事も、オーナーから聞いたの」

そこに女の子の声がした
振り返るとそこには良太郎と同い年くらいの子がたっていた

「ハナさん」

「私はハナ。こんな姿だけど、良太郎と同じくらいの年よ」

「へぇ～、やっぱり時間の歪みか。理由は？」

「私の事はわかってるけど、良太郎のは原因不明なの」

「へえ」

ハナは良太郎にベルトを与え、電王に変身させた張本人だ

「ふんふん・・・ん?俺の事?・・・俺の事ぉ!?」

「うん。他の世界から来たって聞いたよ。そこらへんの話、少し訊かせてくれるかな」

自分の事を察知していたオーナーに戦慄を覚えながらも、蒔風は説明した

それが終わり、モモタロスがウラタロスに質問した

「で、どういうことなんだ?」

「先輩・・・話聞いてなかったの?」

「あはは、モモタロスのば~か」

「うるせえ小僧!」

「つまりや、この世界の中心である良太郎を殺すことで、この世界をいただこうっていうんやな」

「なにぃ!?」

「モモの字、ホンマに話聞いてなかったんかい」

「うっさいクマ公!!えーと、なんだ、良太郎を狙ってくる奴がいるから、そいつをブッ倒せばいいだけだろ?簡単じゃねえか」

「て言うか最初からそうとしか言ってないよ先輩」

「カメちゃん、それ以上はモモタロスがうるさくなるからやめようよ」

「なんだと小僧!!」

「わーーーー!!!!」

イマジン達が車内で騒ぎだす

キンタロスやウラタロスが「クマ」とか「カメ」と呼ばれているのは、彼らの元になったイメージが「金太郎」、「浦島太郎」だからだ

イマジンがこっちの時間で手に入れる実体は、契約者の持つイメージから形づくられる
この場合、少し事情の違うキンタロスのほか三人は良太郎の持つイメージだ

ちなみにモモタロスは「桃太郎」の赤鬼
ウラタロスは「浦島太郎」のウミガメ
キンタロスは「金太郎」のクマ
リュウタロスは「龍の子太郎」の龍だ

「で、何かおかしなことはないか？」

そう蒔風が良太郎に訊くが、その前に良太郎が聞いてくる

「そういえば君、チケットは？」

このデンライナーにはチケットがなければ乗ることができない
持っていなければオーナーに乗車させてもらえず、時間の中に放り出されてしまう

そこで蒔風は最初に持っていたチケットを差し出す
それを見て良太郎は驚愕した

「これは！！・・・神の路線へのチケット・・・・」

「なんであなたが？」

「いや、わからん。この世界にきたら持ってたんだよ」

「オーナー、これ」

ハナがオーナーにチケットを見せる

「これは・・・ふむふむ、ひじょーおうに、興味深いですねえ。ただ、「神の路線」に入るという役割はもうすでにないようです」

「じゃあ、どういうことなんですか？」

「さて、ただのきっかけだったのでは?ほっほっほ～～」

そう言って客室から去るオーナー

そこでリュウタロスが蒔風に訊いた

「ねえ、お前本当に強いの?戦ってみてもいいよね?答えは聞いてない!」

「ちょっとリュウタ!あんた何言ってんのよ!!」

「おう小僧。お前いいこと言うじゃねえか。本当に強いのか?お前」

「ま、良太郎守るだけなら俺たちだけでも大丈夫やしな!」

「そうだね・・・ま、ここでのんびりしてれば?」

その言葉に引き下がる蒔風ではない

「上等だ・・・やってやらあ!!表でろォ!!」

「いいぜぇ・・・その気迫!!久々に楽しめそうだ～～♪」

「ま、たまに身体を動かすのも悪くないかもね」

「俺の強さは泣けるレベルやで!!」

「へっへー。ディケイドとどっちが強いのかな?」

リュウタロスの言葉に蒔風が反応する

「ん？知ってんのか？」

「うん。まぁ、あの時は引き分けだよ！！」

「そうか（ユウスケから話は効いていたが、あいつら「原典」ともクロスしてたのか）」

「あん？あの野郎知ってんのか？」

「おう、あいつらと引き分けるとは、楽しそうだな」

「へ！！こっちが一方的に楽しんでやるよ！！」

「ノリなら負けねえ！！」

「こっちもだ！！行くぞ良太郎！！」

デンライナーが止まり、皆が出口に向かう

「ちょっとあんた達！！・・・良太郎、いいの？」

「うん・・こうなったらモモタロスたちは止まんないよ・・・」

「さあ、始めようか！！」

「おう！！いくぜ！！最初から最後までクライマックスだぜ！！」

to be continued

電王　～時の列車の特異点～（後書き）

アリス「電王の世界！！！」

いや、電王は凄い
なにがすごいってこれだけ続いてるんだから

ア「超電王はどこまでやるんでしょうね」

ねー？
自分は超電王のＣＤ　ＢＯＸまで買ってしまいましたよ

ア「私はＤｏｕｂｌｅ－Ａｃｔｉｏｎ　Ｃｏｆｆｅｅ　ｆｏｒｍが好きですね」

作者はＲｏｄ　ｆｏｒｍが一番好きです
ポコスカポコスカっていうのが

ア「こないだのカラオケで全部歌ってましたもんね」

牙王フォームがなかったからなぁ・・・
Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐは他のフォームのなかったし・・・・

ア「あれはいいですよね。そっちでは「ファイナル」が好きです」

超Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐの冒頭での「まさかこの私までもが～～」のくだりが好き

ア「次回、コロコロ変わる電王たち！！」

ではまた次回

千の偽り、万の嘘。嘘の裏には針千本
それでもいいなら、お前、僕に釣られてみる？

電王　～電王四変化～

デンライナーを降り、砂の荒野に立つ蒔風たち

「前振りは？」

「は！前振りはいらねえ！！いくぜ、良太郎！！」

「はあ・・・あまりやりすぎないでよ？」

「わーってるって！！よっと！！」

そう言ってモモタロスが良太郎に飛び込み、憑依する

すると良太郎の髪の毛が逆立って赤いメッシュが入り、瞳が赤く染まる

「よっし！！よーく見とけよ？俺のかっこいい変身をよ！！」

ガチッ！！♪～～～～

「変身！！」

そう言ってM良太郎がデンオウベルト装着し、定期入れと酷似した形のライダーパス振ってその前を通過させる

《ｓｗｏｒｄ　ｆｏａｍ》

ベルトが起動音を鳴らし、囲むようにオーラアーマーが浮きあがり、
それが装着される
そうして赤い装甲に身をまとった、仮面ライダー電王ソードフォームのお目見え・・・のはずなのだが

「モモの字！！そいつの強さに気付いたのは俺や！！」

そう叫んでキンタロスが変身中の電王に突っ込んでいく
そうするとモモタロスが弾きとばされ、キンタロスが良太郎に憑依した

《ａｘ　ｆｏａｍ》

♪～～～～

ヒィィイイイン、ガシュウ！！

途中で装甲の手順が変わり、黄色を基調とした装甲を身にまとい、
アックスフォームへと変身した

「はっはっはっは！！俺の強さに、お前が泣いた！！」

「お?最初はそっちか?」

弾かれた先でモモタロスが「俺の変身がぁ!!な~んか前もあったよなこれぇ!!」とか叫んでいるが、ウラタロスになだめられ、大人しくなった

「行くで、蒔風!!俺の強さは、泣けるでぇ!!涙はこれで拭いとき!!」

変身の際に周囲に花びらのように散って現れた紙を見ながら武器、デンガッシャーを斧型のアックスモードに連結、組み立て構えた

「それは痛みで?感動で?」

「それは泣いてからのお楽しみや!!」

電王と蒔風が睨みあう

ふ、と蒔風が手を前に出し「土惺」と呟くすると地面の砂が集まって、目の前で棒状にかたまるさらにそれに「獄炎」と呟き、業火で焼くするとそれが一本の鉄の杖になる

熱いのでそれを「圧水」で冷やしてからそれを握る

「準備はできたか？なら、行くでぇ！！」

電王が突進してくる
蒔風がそれをひらりとかわす

そこから電王が回転して斧での一撃をかましてくる
蒔風が杖に滑らせる形でそれを逸らす

一撃、二撃とそうやって攻撃をい受け流していく蒔風

「どうした！！そんな単調な攻撃じゃあ見切られんのがオチだぞっと！！」

バガン！！

蒔風の杖の大きな一撃が電王の首元にぶち当たってその動きを止める

それで終わりかと思われたが、相手は電王全フォーム中最高の防御力を誇るアックスフォームだ
そんな簡単には終わらない

「あえて見切らせたんがわからんとは、お前さんもまだまだやな！！」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

その体勢のままライダーパスをベルトの前に通し、エネルギーを斧

に送り込む

「なに!?」

「言ったやろ!!俺の強さは、泣けるってな!!フン!!」

電王が突っ張りで蒔風を押し出し、その隙に上空に斧を投げ、腰を落とす
そして蒔風がそれに視線を向けた時には、すでに電王は上空の斧をジャンプでキャッチしており、蒔風に振りおろしてきた!!

蒔風がそれを落とそうと鉄杖を投げつける
しかし、その鉄杖をまるでそうめんを千切るかのように二本に両断してしまった

そしてさらに蒔風に迫る電王
その斧の刃から金色のエネルギーがほとばしる!!

ドゴォン!!!

砂煙が上がり、二人の姿が消える
その中から声が聞こえてきた

「ダイナミック、チョップ・・・だったんやがな・・・・」

砂煙が晴れ、二人の姿が露わになる

そこには「獅子天麟」を地面に突き立て、柄の方を上に向けて片膝をついている蒔風がいた

その柄は電王の鳩尾に減り込んでおり、その手の斧は蒔風の額十センチ前で止まっていた

蒔風が立ちあがって電王を突き飛ばす

「さ、あと三人もいるんだ。手っ取り早く終わらせよう！！」

電王が他のみんなのところに倒れ込む

「じゃあ次は僕の番だね、っと！」

「すまん！」

そう言ってキンタロスが電王から飛び出し、ウラタロスが入り込む

《ｒｏｄ　ｆｏａｍ》

今後は青を基調とした電王ロッドフォームへと変わった

「次にやられるのはウラタロスかい？」

「僕の強さをキンちゃんと一緒にしない方がいいよ?さて、お前、僕に釣られてみる?」

「そもそもカメは釣るもんじゃねえ。捕獲するって言うんだよ!!朱雀槍!!!」

蒔風が朱雀槍を構え、電王に突きの暴風を見舞うそれをバックステップで距離をとってかわす電王

「すごいねぇ。でも、それだけじゃ倒せないよ!!」

デンガッシャーをロッドモードにし、大振りに振ってくる電王蒔風がそれを朱雀槍で受ける

蒔風がそこで一旦離れて距離をとるが

「逃がさないよ!」

ロッドをつりざおのように使用し、先端から糸を飛ばし、その刃を蒔風の襟に引っ掛ける

蒔風は急にバランスを崩され、その場に倒れ込んでしまった

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

その音声を訊いて即座に立ちあがる蒔風

しかし、電王の方が行動は早く、蒔風に槍のように投げつけられた
ロッドが蒔風に命中した
それによりダメージはない

だが、蒔風の体に入り込んできたロッドがエネルギーと変わって蒔
風の眼前に亀甲状のバリアのようなものが現れ、蒔風の動きを封じた
そこにデンライダーキックを放つ電王
だが、蒔風の足は移動はできなくともその場で動くことができた

それが電王のミスだろう

キックの瞬間、蒔風が畳返しで地面を撥ね起こす

電王は想定していたよりも早い場所でのキックで多少バランスを崩
したが、それでもその壁を粉々に吹き飛ばした

だが、その先の蒔風にキックが命中していない
キックの勢いでその場にしゃがみこんだ電王

『ウラタロス、横だ！』

電王の体の中で、良太郎の意識が叫んだ
しかしそれも遅く、電王の横っ面に蒔風の拳がぶち当たった

飛んでいく電王
その体に紫の影が飛び込んで行った

《ｇｕｎ　ｆｏａｍ》

空中の身体から放り出されたウラタロスが地面に落ちる
電王は装甲の前方が上部に展開し、紫を基調としたガンフォームに変わる

「うわあああ！！！」

「へへっ、次は僕だね！お前、倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」

「人の話はちゃんと聞くように、だ！！」

ドンドンドンドンドンドン！！！

電王が蒔風を狙い撃ち、それを蒔風が蛇のように地面を走りかわしていく

その低い体勢の蒔風に、電王がブレイクダンスの要領での地面すれすれの回転蹴りをかます
蒔風もそれに対して蹴りで応対し、カポエイラのように回り出す

しかし、電王はそれに織り交ぜてさらにデンガッシャーガンモードによる銃撃をも放ってくる

ガン＝カタのようなその攻撃に、蒔風がすべてを知ったりとかわし、

受けているのに対して電王がいきり立つ

「もう！！倒されてよ！！」

ドンドンドンドン！！！！！

二人が立ちあがってから、一回転して電王が蒔風に銃撃を放つ

それを「林」で軽くはじいていく蒔風

「ふっとんじゃえ！！」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

ベルトの前をパスが通り、エネルギーが銃の前方に集まり、エネルギー弾を作っていく

「いっくよ！！」

電王がグッ、と引き金を引こうとする

しかし、それよりも早く、蒔風が動いた

ピィン・・・

コインが一枚弾かれる
そしてそのコインが、電磁の力で音速の三倍でぶっ飛んでいく！！！

ジュゴン！！！
ドゴォ！！！！

「うわア！！！」

電王の前にできていたエネルギー弾に超電磁砲（レールガン）が命中し、大爆発を起こし電王を吹き飛ばす

地面を転がり、変身の解ける電王

「良太郎！！」
「大丈夫！？」
「平気か！？良太郎！！」
「う～～～負けんの嫌だぁ！！」

みなが分離したリュウタロスと良太郎のそばに駆け寄る

「うん。怪我はないみたい」

「爆発とかしてたけど・・・」

ハナが心配そうに訊くが、問題ないよと良太郎が返す

当然である
蒔風がこう言う戦いをするときの爆発なんかは演出程度のもので、
ダメージは通らないのだから

「でも僕は「やられたー」って思ったよ？」

「どういうことなんだろうね？」

「それが世界最強さ。で、最後のクライマックスを閉めんのは誰だ
！？」

蒔風の声にモモタロスがついに立ちあがる

「ほら小僧、次は俺だ
やっぱりクライマックスは俺だよなぁ、良太郎！！」

「うん！」

そう言って再び憑依したモモタロス

「変身！！」

《ｓｗｏｒｄ　ｆｏａｍ》

フィーン、ガシュウ！！

変身し、自身を指さし、ビシィ！！と最高のポーズを決める電王

「俺、ついに参上！！！さぁて、オレには特に前振りはねえんだ

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

最初から最後までクライマックスだぜ！！！」

電王がデンガッシャーソードフォームを両手でつかんで前に構える

エネルギーがベルトからソードに送り込まれ、その刃が切り離され、

柄の延長線上に離脱して浮き上がった

「俺の必殺技、始まりのパート１。ゥおおりゃあ！！！」

電王がその手の柄を振るう

するとそれに連動して、切り離された刃が蒔風に迫ってきた！！

その右から来た刃を蒔風が「火」の抜刀で弾く

しかし、さらなる攻撃が左から折り返してやってくる

それを頭を下げてかわす蒔風

そのまま仰向けに回転し、玄武盾を投げつける

電王が最後に真上から振り下ろそうとしたところで玄武盾が装甲に

当たり、火花を散らす

だが振り下ろされた刃も、止まらない

蒔風がとっさに腕を十字にクロスし、鞘に収まったままの「天」「陰」で受けた

そして電王が倒れるのと、「天」「陰」の鞘が砕ける音が同時に響いた

蒔風が剣を消し、倒れて変身の解けた良太郎からモモタロスが飛び出す
そして両者が同時に走り出し、お互いにしたことといえば

ゴガァン！！

二人とも相手の後頭部を掴んでからの頭突きだった

「俺の方が勝ってたね！！」

「何言ってんだ俺の方が強えに決まってんだろ！」

「「んだとこらぁ！！」」

ゴスっ！！

再び今度はお互いに相手の鳩尾を殴った
だが互いにひるまず、今度は交互に肩を突きとばし始めた

ドン！

「って！なんだよ（バシッ！）」

「おまえもなんだよ（バシッ！）」

「なんだ？（ドシッ！）」

「やんのか？（ガスッ！）」

「「上等だコラァ！！！」」

そう言ってモモタロスと蒔風が取っ組み合いを始めてしまう

皆止めようとするが、一向に止まらない

と、そこにデンライナー最強の少女が割って入った

「あんたたちはいい加減にしなさい！！」

そう言ってモモタロスの鳩尾に拳をめり込ませるハナ

さらに取って返してすぐさま蒔風にも喰らわせようとするが、蒔風はそれを掌でパシィ！と受け止める

だが受け止めない方がよかった

その後刹那の瞬間もなくハナの蹴りが蒔風の足と足の間に存在する男子特有の急所に命中したからだ

「「「「「「おぉ～～～～～う！！！」」」」」」

それを見ていた男性陣（オーナー含む）が悲痛な叫びをあげた

そんなんで電王ＶＳ蒔風のバトルの勝者はハナに決定したのであった

・・・・あれ？

その時、ナオミが電車の中から出てきて、みんなを呼んだ

「みなさ～ん、オーナーが大変なことになってるかもって、呼んでますよぅ？」

「なにがあったの？」

良太郎がナオミに訊く

するとナオミの後ろからオーナーが出てきて言った

「ゼロライナーとの連絡が取れません。もぉしかしたら！なにか、大変なことになっているかもしれません」

オーナーがとても含みのある声を出して皆に言った

それを聞いて、全員が乗り込んだ

連絡がつかずとも、居場所はわかるらしい

向かう先はゼロライナー
そこで待つものとは

to be continued

電王　～電王四変化～（後書き）

アリス「さて、昨日休んだ言い訳を言ってみなさい」

疲れた

ア「執行！！」

なにを！？怖いから何か言ってよ！！

ア「拷問執行！！」

しゃべったのに！？

いえ、今回とある御縁で保育園の園児達のプールの付き添いに行ったんですよ

保育園の先生たちと一緒に皆の監督役としてですね

ア「で？」

あいつらの体力パねえ・・・

そんなフラフラ状態状態からバイト行ってから更新なんて無理

昨日はまた今日があったから夜ふかしできないし

ア「どれくらいですか？」

九時に集合、十時から一時間プール、遊び終わって保育園に１１時到着

ですね

ア「バイトは？」

午後二時から九時

ア「確かにきついかも・・・」

まあいいさ

あ、あとゼロライナーの説明を
ゼロライナーはデンライナーのように時間を越える列車です

良太郎たち共に戦った仲間が所有しています

ア「その人の説明は？」

そりゃ次回だ

ア「次回、仲間の居る場所では！？」

ではまた～～～

俺の強さにお前が泣いた！！俺の強さは、泣けるでぇ～！！

電王　～劇場版の悪者ライダー～（前書き）

ｄｏｕｂｌｅ－ａｃｔｉｏｎとかたれ流しにしながら書きました（笑）

聞きながら読めば興奮度ＵＰ！？

電王　～劇場版の悪者ライダー～

デンライナーがゼロライナーに向かう途中で蒔風が説明を受けた

ゼロライナーはデンライナーと同じく時間の中を走る列車だ

それと連絡が取れないとなれば、その所有者、桜井侑斗（ゆうと）の行方が心配だ

桜井侑斗
仮面ライダーゼロノスとして良太郎と共にイマジン達と戦った青年だ

「で、その桜井と連絡が？」

「うん、侑斗ともデネブとも連絡が取れないんだ」

デネブは侑斗の契約イマジンだ
彼からも連絡がないのはおかしい

「とにかく行こう。みんな！身体は大丈夫？」

「大丈夫だよ良太郎。派手だったけど、ダメージはそんなになかったし」

「やっぱ強かったで！うん！」

ウラタロスがコンディションを伝え、キンタロスが顎に指を当てて首をゴキッ、と捻った

「おそらく向かう先には「奴」がいる。気を抜かないでくれ」

蒔風が半端ではない双眸で皆を見渡した

それを見て良太郎らは気を引き締めた

自分達とあれだけの戦いをした男がこれほどまでに言う「奴」とは何者なのかと

――――――

「ここは・・・」

「わからない。どこかの建設予定地の小屋みたいだ。あいつら、何者なんだ？」

「知らない。だが、どうやら野上をおびき寄せるつもりらしいな」

「な、なんだって！？それは一大事ゃないか！」

「ああ、だからデネブ、なにか持ってないか？ここから脱出する」

「おう！えーっと・・・（ゴソゴソ）あ！」

「なにがあった！」

「デネブキャンディが溶けてきてるぅ」

「バカ！それよりもなんかないのか！」

「そうだなぁ～・・・お！」

「見つけたか！？」

「侑斗の写真が折れてるぅ！」

「デ～ネ～ブ～！！」

グワシ！

侑斗がデネブの腹に両足をたたき付けた

「痛い、痛いよ侑斗～」

「うっさい！今日こそは～！！」

「おまえらなに騒いでんだ？」

そこに「奴」が扉を開けて入ってきた

身体を縛られながら取っ組み合うという荒業をしていた二人が、「奴」を睨みつける

「お前どういうつもりだ！それに「あいつら」をどうやって出した！」

「あん？気にすんなよ。こっちこい」

「奴」が優斗とデネブを引きずり出していく

ちょうど外に出たところで、頭上に線路が走る

時空の穴から伸びてきたそれに、デンライナーが走る

「奴」と優斗達の前に、電車が止まり、蒔風らが降りてきた

「おい!!そいつをどうにか返してもらうぞ!!」

「野上!!こいつ誰だ!!」

そう叫んだ蒔風の事を知らない侑斗も叫んだ

「あいつは俺の敵です。では、ご協力どうも!!」

「奴」が侑斗とデネブを放り投げる
良太郎達が駆けよって、ロープをほどいて開放する

「大丈夫か?怪我は?」

「お前誰だよ!!」

そこにハナが仲介し、侑斗に事情を説明する

「そんなことがあんのかよ」

「現に目の前に「奴」がいるんだよ?信じてくらはいよ」

「ま、俺としてはそうじゃないほうが楽なんだがな」

「奴」と蒔風が話してるあいだに、モモタロスが割って入った

「おいおいおいおい！！俺たちを無視してんじゃねえよ！主役は俺だ！！いくぜ！良太郎！！」

「うん！変身！！」

《ｓｗｏｒｄ　ｆｏａｍ》

「こっちも行くぞ！！変身！！」

ゼロノスベルトを巻き、切符が他のカード・ゼロノスカードを挿入する

《Ａｌｔａｉｒ　ｆｏａｍ》

そうして、仮面ライダーゼロノスへと変身した

電王、ゼロノス、蒔風

ここに三人の戦士が並び立つ

「俺、今度こそ最初に参上！！」

「最初に言っておく！俺はかーなーり、キレてる！！」

「あー、えっと・・・がんばるぞー、おーー」

三人が見事な（？）見えを切ったのを見、「奴」がパン！！と両手をたたいた

「いいねえ・・かっこいいよ仮面ライダー・・・じゃあ・・・こいつらにも参戦してもらおうか！！」

ズゥア！！

地面から黒い塊が出て、それが三つに分かれる

「野上！！来るぞ！！」

『え？何が？』

良太郎が電王の中から話した

「「奴」はその地に刻まれた「記憶」を呼び出す。おそらく、そうとう飛びまわったな」

「ああ、勝手にゼロライナー使われた」

「それから俺と侑斗はずっとあそこに閉じ込められていたんだ」

後ろに並ぶデネブが状況を教えてくれた

「そう言ってるあいだにほれ、お目見えだぞ？」

ギュウウウ・・・・・

三つの黒塊が人型となっていく

そしてそこに現れたのは・・・・・

「お前ら、喰い殺してやろうか」

「絶対の悪ってのは、滅びないもんだ」

「生きてる人間は、皆死ね！！」

「なんだありゃあ！！」

「うそでしょ！？あいつらは前に倒したはずでしょう！？」

「なんちゅうやっちゃ」

モモタロス、ウラタロス、キンタロスがそれぞれ驚く

そう、彼らは

「牙王にネガ電王、それと幽汽か」

仮面ライダー、牙王、ネガ電王、幽汽だった
彼らはかつて電王らに倒され、死んだはずのライダーだ

「見たところ、ある程度の個性は残されているみたいだな。気をつけろ」

「は！！一度勝ったやつに負けるかよ！！」

「・・・・・・」

意気込む電王だが、ゼロノスはいまだに緊張が解けない

『どうしたの？侑斗』

良太郎の問いに、侑斗が答える

「あいつらの強さは半端じゃない・・・本当に気をつけろよ。一度勝ったからって、勝てるとは限らない」

「その通り。では、行けぇ！！！」

オオオオオオオオオオオオ！！！！

「奴」の号令に、三人が亡者の叫びをあげて蒔風たちに突っ込んで

きた

「行くぜ行くぜ行くぜ！！！！」

それに合わせ、こちらの三人も駆けだす
牙王と蒔風、ネガ電王とゼロノス、幽汽と電王が交戦する

ネガ電王ＶＳゼロノス

「この！！電王と同じ姿だと！？」

ガキィ！！

ゼロノスのゼロガッシャーサーベルモードと、ネガ電王のネガデンガッシャーソードモードがぶつかる
だが、電王と同じ姿にもかかわらず、その力はゼロノスをしのいでいた

「姿は同じでも、強さは、別格だ！！！」

バガァ！！

弾かれるゼロノスの剣
腕ごと吹き飛ばされそうな衝撃を受けながらも、ゼロノスはサーベルを離さなかった
その吹き飛ばされた腕に引っ張られるように離れていくゼロノス

「侑斗！！」

デネブがその指から銃撃を放ち、ゼロノスを援護する
その銃撃をロッドモードに切り替えたネガデンガッシャーを振るって弾くネガ電王

「侑斗！やっぱり身体がまだ回復しきってない！！無茶だ！！」

「うるさい！！野上にこいつを向かわせるわけにはいかないだろ！！」

ゼロガッシャーをボウガンモードに変え、ネガ電王を狙い撃つゼロノス
だが、クルクルと回転するネガ電王には当たらない

「クソ！！」

「侑斗！！もう駄目だ！！オレがやる！！」

「よし！来い、デネブ！！」

ゼロノスがベルトからカードを引き抜き、反転させて再挿入する
デネブがゼロノスの背後に立ち、腕をクロスさせ、手をゼロノスの肩に乗せる

《Ｖｅｇａ　ｆｏａｍ》

するとデネブがゼロノスの背中に吸い込まれていった
そしてゼロノスがマントを羽織り、ガタイが大きくなり、ベガフォームへと変身した

「最初に言っておく！胸の顔は、ただの飾りだぁ！！」

そう叫んでから、サーベルモードのゼロガッシャーを振り構える
ズズン！！と地面が円形に沈み、その重量感を表す

「行くぞ！！」

ゼロノスが肩に装着されたデネブの五指、計十指から銃撃を放つ
それに対してネガ電王がガンモードにした武器を向け、悠々と歩いてくる

ゼロノスは背後から飛んでくる影に気付かない

ーーー

少し戻って、幽汽ＶＳ電王

「いて！！いてっ！！この野郎！！チマチマした攻撃してんじゃねえ！！」

ズガガガガガ！！

「うをおおお！！！」

電王は早くも幽汽に苦戦していた
というのも、幽汽とモモタロスの相性によるものだ
幽汽は鞭を使って独楽（こま）を弾いて攻撃してくる
宙に投げた二、三個の独楽に鞭をあてる

するとその独楽が二十、三十の独楽になって電王に降り注ぐのだ
モモタロスはチマチマした、とは言うがそんなちゃちなものでは一切ない
そういった豪快な攻撃に、チマチマした対処をとるのには、ソードフォームは相性が悪いのだ

徐々に追い詰められる電王
無理もない

その幽汽の独楽はそれまで無敗であった電王の「クライマックスフォーム」を強制解除させたほどのものだ
ソードフォームでまともに食らえばひとたまりもない

そこにキンタロスが憑依体で近づいてきた

「モモの字、なら俺に交代や！！」

「ちっ！！しゃーねえな！！」

《ａｘ　ｆｏａｍ》

モモタロスは憑依体のまま出て、キンタロスが入る
電王がアックスフォームへとチェンジした

「俺の強さに、（ガガガガガガ！！ギギギン！！）って言っとる場合やないな！！おらあ！！」

電王が無理やり幽汽に突っ込み、斧の一閃を叩きこむ
幽汽の装甲から火花が散り、後退させる

「はっはっは！！行くでぇ！！！」

電王が思いっきり突進し、ぶちかましで幽汽に向かって突っ込んだ
だが、待ってたとばかりに幽汽が鞭をその脚に巻きつける

「おおうう！？」

電王がその勢いのままスッ転びそうになる
それをハンマー投げのようにブン回して、投げつける幽汽
投げつけた先にいるのは、ネガ電王と交戦中のゼロノスベガフォー

ムだ

ゴガッシャ！！！

「うお！！」
「なんだ！？」

ゼロノスと電王がぶつかり、その場に倒れ込む

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》
《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「あ、やばいやん」
「むおおお！？」

地面に倒れる二人に、ネガ電王、幽汽のフルチャージが放たれようとする
ネガ電王は電王ガンフォームと同じ形態の必殺技、「ネガワイルドショット」を
幽汽は剣を地面に叩きつけ、地表を砕きながら突き進む衝撃波を放つ「ターミネイトフラッシュ」を
それぞれが必殺技を放つ構えになる

そうして、引き金が引かれ、剣が振り下ろされ・・・

ーーー

その勢いのまま、右の掌底でその顎をしたからアッパーで打ち上げ、回転し、左の肘打ちを鳩尾にめり込ませる

牙王の身体が後退し、後ずさっていく
だが牙王は一瞬の間をあけ、その直後に蒔風に向かって刃を振るって目の前に立っていた

「な!?」

その速さに驚愕する蒔風

（あれだけの装甲、パワーを持って、さらにこのスピードだと!?）

巨大な鋸が眼前に迫り、蒔風が「天地陰陽」でそれを防ぐ
だが勢いが殺しきれるわけがない
天地陰陽はトンファー型で、小手先の力で戦うものだ

とっさに出せるが、これだけの衝撃を受けきれない!!

それでも、蒔風は両腕が吹き飛ぶのを防ぐため、天地陰陽で真っ正面から受け止めた
そのために蒔風の身体が、体勢そのままに牙王に押し切られていく

「ぬうううう!!!」
「おおおおおおお!!!」

ズガガガガガガガガ!!!

地面を少しだけ削り、足の裏から砂煙をあげて地面を滑っていく蒔風と、それを押しつぶそうと押し切る牙王
蒔風がチラリと横を見ると、電王とゼロノスに止めを刺そうとネガ電王と幽汽が構えているではないか

「ッ！！！？？？さ、せ、る、かぁ！！！」

ズドン！！

蒔風が左足を地面に突き刺し、その脚を軸に回転する
さらに牙王の肩の装甲を鷲掴み、回転の凄まじい勢いのまま、牙王を投げた

蒔風の手のひらが少し裂け血が少し出るが、あれに比べればたいしたものではない

「ぐお！！」

「ん？ドゥオ！！！」
「ウゴオ！！！」

弾丸のようにすっ飛んできた牙王が、ネガ電王と幽汽をかっさらっていった
必殺技がキャンセルされ、三人のライダーが離れたところで倒れる

「大丈夫か！！！」

蒔風が二人に駆けよっていく

「あ、ああ。信じられへん。独楽回しされてしもた」

「こっちもだあそこまで強いとは、驚いたぞ！！」

「まあ、でももうやったし」

ヒィ、ヒュイッ！！！

そう三人が言いあっているところに、突如として砲撃が撃ち込まれる

ドゴオオオオオオオ！！！！！！

「ぐあ！！」

「ヌア！！」

「うおお！！」

三人が吹き飛ばされ、二人の変身が解かれる

離れたところに良太郎のベルトとパスが落ちる

それを取ろうとする「奴」

蒔風の脳裏に、前の世界での戦闘が思い出される

「まずい！！！」

蒔風がベルトを取ろうと走る
良太郎たちイマジンも走り出した

そこで「奴」が走るのをやめる
そして、指をパチン、とならした

するとゼロライナーが走って来て、良太郎達をかっさらっていったのだ
さらにそのままデンライナーと連結し、そっちをも引っ張って、時間の中に消えて行ってしまった

ベルトとパスを拾う蒔風
そして「奴」の方へと向いた

「何のつもりだ。向こうにはオーナーさんがいるんだぞ？」

「ああ。すぐに止まんだろうな。でも、その「すぐ」だけの時間で十分だ」

「奴」の隣に、先ほどの三ライダーが並ぶ
その三人が、一斉に蒔風に襲いかかってきた

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

ギギッ!!ギギギギギギイイイイイ・・・・・・

プシュウ・・・・・・・

時間の荒野の中で、デンライナーとゼロライナーが止まる
オーナーによってゼロライナーが止められたのだ
実に暴走を始めてから一分もかからなかった

「早く戻んぞ!!おい!行けるか!?」

「いつでもどぉーぞ」

「全速で行くから、掴まれ!!」

モモタロスの問いに、オーナーが電車の状況から問題がないことを
確認し、ゼロノスがゼロライナーを運転してデンライナーを引っ張る

なんとこの電車、コックピットにはバイクが一台あるだけだ
そのバイクで電車を操縦するのだから、さすがはライダー、といった
たところか

そのバイクにライダーパスを入れない限り、デンライナーやゼロラ

イナーは動かせない
ゼロライナーのバイクには、「奴」がセットしたであろうパスが入っていた

そして戻る一同
時間にして二分間

「いやぁな予感がしますねぇ・・・」

オーナーがつぶやく
その言葉に、良太郎が悪寒を覚えた

――――――

リュウタロスが青ざめるような声を出して皆を呼ぶ
窓から外を覗くと、結界の中がよく見えた
リュウタロスが指差す先には何人かの人影が

それは紛れもなく「奴」らと蒔風だ

その蒔風の服はボロボロに裂け、上半身に巻き付けられた包帯から
血が滲みでて真っ赤に染め上げていた
なぜか腰にはベルトが巻きつけられ、その手にはパスを持っていた
その蒔風の身体を「奴」が胸ぐらを掴んで放り投げた

「蒔風さん!!」
「蒔風!!」
「あいつ!!なんだよあの怪我は!!」
「死んじゃうの?あいつ!?」

皆が驚愕の声を出す

そして蒔風が高く放り投げられた先に時間の穴が開く
おそらく奴が強引に開けたのだろう
そこに蒔風が吸い込まれて消えた

その瞬間に結界が消え、電車が入り込み、良太郎達が降りた

「蒔風さんをどこに飛ばした！！！！」

怒れる良太郎に「奴」がニマニマと笑いながら答えた

「さあな。オレも強引に開けちまったから、どこ行ったかわかんね。ＨＡＨＡ！！」

「ふざけないでよ！！」

「ふざけてなどいない」

「奴」の雰囲気が一瞬で変わる

場の空気が冷たくなった気がした

「さて、邪魔ものは消えた」

「奴」が良太郎に歩を進める

「お前を殺して、パワーアップして蒔風（あいつ）を殺してやろうかな」

「奴」が迫る

一歩一歩、巨大な脅威が迫ってきた

――

ーーー

電王　～劇場版の悪者ライダー～（後書き）

戦闘描写はいい
だがライダーの外見とか武器の説明が大変だよ！！！

アリス「そうでしょうねぇ・・・ああ言った武器はそれなりに複雑ですから」

だからここでまた俺は言いたい！！

ア「まさかまたですか！？」

ググれカス（笑）

ア「この野郎ついにカス扱いしやがった！！！」

すみません
一回行ってみたかった
皆さん巻きこんで申し訳ございません

ア「感想で叩かれてしまえ」

やめて！！

ア「次回、降臨！！」

ではまた次回

お前、倒すけどいいよね？答えは聞いてない！！

電王　～過去からの帰還～

ゼロライナーに良太郎たちがさらわれたころに時間を戻そう
あの二分間に何があったのか

ーーー

三メートルはノーバウンドで吹っ飛び、そこからさらに地面を転がった。
前の世界での傷が少し開き、服の中に血がたまっていく。
その蒔風に追い打ちをかけようと三人が迫る

ここまでで約三十秒

（荷物があるんじゃどうしようもねえ・・・）

蒔風が苦痛に顔を歪ませる
迫る三ライダーに目を向け、そして一つの考えに至った

「あ・・・着けちまえばいいじゃねえか！！」

蒔風がベルトを装着する
だがその動作の隙にもまず幽汽が迫ってくる

蒔風の顔面に拳を突き出す幽汽
その拳を蒔風があいた左手で受け止め絡み付け、脇に挟み拘束する
その間に牙王が正面から突っ込んでくる
それに対し、右手を腕を大きく下から振り上げての左のケンカキックでカウンター気味に蹴り飛ばす

その振り上げた手にはパスが

そしてその過程でベルトの前を通過する

ベルトが輝き、音声を発する

《ｐｌａｔｉｎｕｍ　ｆｏａｍ》

ゴウンゴウンゴウン、ヴァアアア・・・・・

ゴッゴン！！

全身が銀と白の装甲に包まれ、周囲に衝撃を発しながら装着される
そして仮面には剣が降りてきて、変形した物が装着される
その形は「←」の先が目の部分にあたるような形だ

挟み込んでいた幽汽を蹴り飛ばし、さらに突っ込んできたネガ電王を拳で殴り飛ばした

その変身に、蒔風も「奴」も驚く

「装着者のフリーエネルギーを元に変身する「デンオウベルト」・・・お前も変身できるのはおかしくないが・・・」

「まさかオレさんも特異点だったとは・・・いや、他の世界の人間だからか？それとも翼人が？」

二人が一瞬思考するが、すぐにその考えを捨てる
いま重要なのは、目の前の男との戦いだけだ

見栄きる蒔風に、「奴」の咆哮が呼応する

「唯一（オンリーワン）にして世界最強（ナンバーワン）、ここに参上！！」

「潰せ！！」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

三ライダーが一斉にフルチャージする
蒔風が見て左からネガ電王、幽汽、牙王と並んでこちらに向く

「まあ・・・こう言うのもたまにはありか！？」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

蒔風もデンガッシャーを拳に握りこむ「メリケンサックモード」に組み立て、右手に握り、フルチャージする。
左手を前に突き出し、右手を後ろに引く。

「行く・・・ぞ！！！」

「「「おおおおあああ！！！！」」」

三人が必殺技を放つ
ネガ電王と牙王のソードが分離、エネルギーに輝き左右から振り下ろされ、幽汽のソードにエネルギーがたまり、地面に叩きつけられた。

蒔風の正面から地面を砕きながら衝撃が、左右から挟み込む形でソードが迫る
その三つの攻撃が蒔風に直撃するコースで、一寸の狂いもなく襲いくる

そしてそれが射程圏内に入り込んできたとき、蒔風の拳が突き出された！！

ギュゴアアアアアアアアアアア！！！
バギャギャン！！バァン！！

「「「おおおおおおあああああああ！！！」」」

ズゴゴゴゴンッ！！！！
ドゴォ！！

巨大な拳の形をしたエネルギーがソード二本と衝撃波を吹き飛ばして、三ライダーをぶっ飛ばした

ここまでで一分三十秒

「さすがに三つに分かれちゃ・・・倒せないか・・・っ、もういっちょ！！」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

身体を少し俯かせながらも蒔風がもう一度フルチャージする

だが

バッキャ！ゴシャア！！！！！

「・・・・・・・あ？」

「いかんな・・・それはいかんよ、蒔風」

蒔風が自分の胸に突き刺さるモノを見る
それは拳だった

一瞬の時間で懐に飛び込んできた「奴」の拳が銀白（プラチナムフォーム）の装甲を砕き、
中の蒔風の肉体に深刻なダメージを与えていた

「・・・・・ごボッ・・・・」

蒔風の変身が解除され、身体が崩れる
その胸ぐらを「奴」が掴んで蒔風を持ち上げる

その服はズタボロに裂け、包帯から血が滲みきってぼたぼたと零れ落ちていた

そこでデンライナーが走ってくる
しかし「奴」が結界を張り、デンライナーが入り込んでこないようにしてしまう
その「奴」の背後に吹き飛ばされ、それでもしぶとく存在している三ライダーが集まってきた

「今なら開けるか、なッ？」

「奴」が蒔風を上空に放り投げる
そしてそこにある何かをこじ開けるような動きをとる

すると蒔風の飛んで行った先に時間の穴があき、蒔風が吸い込まれる

「さて・・・どこにいったのかなぁ・・・はっはっはっは！！」

そうして結界を解き、デンライナーを入れる

時間の中に人を放り出すという行為に激昂する良太郎に、軽く返答する「奴」
「奴」にしてみればどんなに酷いことをしたところで、「自分」なのだからいいじゃねえか、といった感じなのだ

「お前を殺して、パワーアップして蒔風（あいつ）を殺してやろうかな」

「奴」が歩み寄る
良太郎が後ずさり、その前にゼロノスが立ちふさがる
だが、ゼロノスもその場から下がっていっている

勝てない

この思いが心を支配する

カテナイ

そう思ったことはいくらでもあった
だがそれだけで戦えなくなるなんてことはなかった

この男は違う
この男には、勝てない

もし勝てるのならば

この男自身が自分の味方でなければ、成り立たない・・・・！！

「奴」がゼロノスに歩みながら「魔導八天」を出し、火花をチリチリと出しながら引きずってくる

地面と剣のの甲高い音が響く

そしてその手が振るわれ、ゼロノスが身を固め思わず顔を逸らした

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「なに！？ぐお！？」

しかしてその刃は振り下ろされることはなく、白き力をまとった二つの刃が「奴」を撃ち払った

その場にいる全員が何が起きたかと周囲を見渡す
そんな中ハナと良太郎だけは誰が来たのか想像はついていた

さらに無数の羽根が三ライダーに降り注ぎ、その全身から火花を散らして退ける

そしてついにその人物が現れた

「降臨！！満を持して！！」

「「ジーク！！」」
「鳥さんだ！！」
「この手羽野郎！！なんでてめえが変身してんだ！！」

そこに現れたのは電王ウイングフォームだった
ジークという白いイマジンの変身する電王である
その手には先ほど「奴」に投げつけられた「ハンドアックスモード」

と「ブーメランモード」に組み立てられたデンガッシャーが握られていた

電王が後ろに手を組んでゆったりと歩いてきた

「おや、お供その一。いやなに、わが友と共にお前たちのピンチに華麗に駆け付けたのだ」

「友って・・・まさか!!」

良太郎がある男を思い描いた

「では、わが友を紹介しよう!といってもお前たちは知ってるだろうがな」

そう言って電王がベルトをはずし、ジークが離れるそこにいたのは

「やっぱり・・・蒔風さん!!!」

「おう!長かったぞ～ここまで!!」

そう、蒔風だ

だがボロボロだった身体はきれいさっぱり完治していた

「なんで・・・お前は時間の中に放り込んでやったはずだ!!・・・・まさか・・・・」

「おう、その通りだよ」

「奴」が何かに思い当たり、蒔風が答え合わせをする

「まあ、完全に運だったがな。とばされた先が過去で助かったぜ!!」

「貴様・・・一体どれだけの時間を・・・」

「ざっと１０か月くらいかな?まあ気にすんな。肉体面は老けないんだしさ」

さらりと言う蒔風だが、良太郎は驚愕したその時間に自分たちに彼は接触しなかったのは今のこの状況を崩さないためだろうつまりはそれだけの時間、彼は一人で耐え忍んでいたということ・・・!!

「まあ、途中でジークにもあえたし、それなりに楽しかったぜ?」

「うむ。私と同じく美しい翼を持つ者だ。一緒にいて楽しかったしな。特別に友にしてやったのだ」

「な？こいつ面白いだろ？」

１０か月

それだけの時間が過ぎても変わらない蒔風
いや、変わらないのではない
変わらなかったのだ

自分の変化を押しとどめ、時間を過ごすと言うことは並大抵のことではない
時間が経てば人は代わる

ではそれを変わらないようにすることもできるこの男は本当に人間なのか？

「この・・・異端者め！！・・・」

「奴」の叫ぶに蒔風がにやりと笑って大きく胸を張って叫んだ

「はん！！残念ながら「蒔風舜」のブランドは、異端に異常、とち狂いもんの代名詞なんだよ！！」

「ぶっ潰す！！せっかくブン投げたのに、これじゃあ意味ねえじゃねえかよぉ！！」

「へ！なんでか俺って、最初の一回はとんでもなくいいもん引き当てんだよな。ほれ、良太郎！！」

蒔風が良太郎にベルトを渡す

「いくぜ・・・皆で一緒にだ！！！」

良太郎がその手のベルトを見る

１０か月経ったとは思えないほどに綺麗なそのベルト

きっと彼はこのベルトを大切に保管し、綺麗にしてくれていたのだろう

「どうした？」

蒔風が普通に聞いてきた

その声には一片の曇りもない

「・・・うん！！みんな、行くよ！！」

良太郎に皆が続く

「よっしゃぁ！！」

「いくよ！」

「いつでもいいで！！」

「てんこ盛り！！」

「ではわたしも」

《ｃｌｉｍａｘ　ｆｏａｍ》

ヴォオン！！ガシュウ、ガシュウ、ガシュウ！！！
ゴオオオンン、ガッ、バガァ！！

胸に両肩に背中に、各イマジンを表すパーツが取りつき、電仮面が
一段階ずれ、仮面ライダー電王・超（スーパー）クライマックスフォームへとなる

その身にあるのは皆の想い
その手に握るは皆の力！！
クライマックスフォームを越えた電王、最強フォーム

これまでの変身回数はただの一度のみにもかかわらず、「無敵無敗」
と言うに十分すぎる圧倒感！！！

「俺たちも行くぞ！！」

ゼロノスが言ったん変身を解き、新たなカードを挿入する！

《ｃｈａｒｇｅ　ａｎｄ　ｕｐ》

ゼロノスが新たな赤いカードを挿入し、ゼロノスゼロフォームへと
変身した

その姿は赤き猛牛
燃えたぎる炎を体現するかのように、その身体が赤く染まる

そしてデネブが変形し、「デネビックバスター」へと変わり、ゼロノスに握られる

ここに再び戦士が集う
だが、もう負けはしない

それは「奴」らの物になる

『俺たち、参上！！』

「改めて言っておく！！俺はかーなーり、強い！！」

「さて・・・お前ら、潰すぜ！！！」

名乗りを上げて構えるライダー
そして一瞬の静寂が

その後に壮絶な咆哮を！！

「「「おおおおおおおお！！！！」」」

「「「がああああああああ！！！！」」」

「奴」をも含め計七人の戦士が同時に駆けだした

ネガ電王とゼロノスが激突し、幽汽と電王がぶつかり合い、牙王と
「奴」が蒔風に襲いかかる

ネガ電王がゼロノスに回り蹴りを放つ
が、それを肩腕で軽く抑え込むゼロノス
そして脇に挟み、捕らえた

その腹部にデネビックバスターの銃口を押し当てる
片足を引き抜こうと奮闘するネガ電王だが、一ミリたりとも動じない

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「！？くおおおおおおおお！！！！」

ネガ電王の目の前でゼロノスがフルチャージする
ネガ電王はゼロノスを幾度も殴りつけるが、全く微動だにしない！
！！

「・・・はあああああああああああああ！！！！！！行くぞ、デネブ！！！」

「了解！！！」

ズッ・・・ドバアアアアアアアアアア！！！！！！

ドゴオオオン！！！！！！

ネガ電王が爆発する

至近距離であったが、ゼロノスに大きなダメージはない

剛健にして悠々とした、ゼロノスゼロフォームにふさわしい堂々とした終わり方であった

一方幽汽を相手にする電王

「おおおおりゃぁ！！」

デンガッシャーソードでの一閃が幽汽を追い詰める

「フッ、は！！」

幽汽も独楽を投げつけ応戦するが、全く効かない
なぜなら

『ちょ、先輩痛いって！』
『コッチ当たっとるがな！！』
『イタッ！モモタロスのバカ！！』
『背中なので問題ない』

当たった個所で他のイマジンが身代わりになってるからだ！！

「ぜぇ～んぜん痛くねえ。はははははは！！！」

『もう、モモタロス。終わらせるよ』

「おう！！よかったな。今日は珍しく前座があったんだ。終わりは派手に決めるぜえ！！！」

《ｃｈａｒｇｅ　ａｎｄ　ｕｐ》

「はああ！！！！」

電王が大きく跳躍し、背中の翼を大きく広げる！！

「だあああああありゃあああ！！！！」

その落下と羽ばたきの二重の威力を携えた「超ポイスダーキック」
が幽汽の装甲に突き刺さり、粉々に砕き飛ばした

ドッ、ズッゴゴン！！！
ドバアアアアア！！！！！！！！

「へへっ、こんなもんかな」

そして蒔風
こちらは「奴」と牙王の二人を相手にしている

「牙王とお前か・・・オレの新技、見ておけよ！！！」

「なに！？」

蒔風が十五天帝を電王ばりに放り投げ、「奴」に向かって何かを投げつけた
そしてそれが異常なスピードで、

・・・・
成長した

「なんだこれは！！！」

焦りを隠せない「奴」に、蒔風が言った

「１０か月もの時間、俺がただのほほんと暮らしてると思ったか！？」

「思ってた！！」

「否定できないのが悲しいが、今回はそうじゃなかったのさ！！」

投げつけたのはドングリの種
その種が異常成長を始める

その気に幹はまたたく間に「奴」と牙王をその中に飲み込み、押しつぶしていく

「圧水と雷旺を組み合わせて、それによって植物を異常成長させて攻撃する、その名も「植生」！！」

ギュカッ！！！

蒔風が拳を握りしめ、内部の牙王と「奴」を押しつぶす

幹が一瞬光って、真ん中から爆散した
一瞬だけ牙王の装甲がボロボロと現れ、そして消えていった

「おわらねえ・・・終われねえよ!!そんなセンスねえまんまな名前の技じゃアよ!!!」

「奴」がその中から這い出てきた
右足に左腕、そしてアバラが何本か折れているようだ

そこに電王、ゼロノスが集結する

「終わらせるぜ!!行くぜぇ、蒔風!!」

「おうよ!!てめえら、呼吸合わせろよ!?」

「わかってらぁ!!決めるぜ!!」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＮ－Ｏ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ
－～ＷＥＰＯＮ～!!

十五天帝のすべてがバラけて電王のデンガッシャーとリンクする

電王の周囲に全剣が浮遊する！

「これは俺たちの分」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

『そしてこれが侑斗の分』

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

『「そしてこれが蒔風の分！！」』

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

バチっ・・・バチバチバチ！！！

「三回まとめてフルチャージだ・・・行くぜ・・・俺たちの必殺技！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＮ－Ｏ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

デンガッシャーの先端の刃が離脱し、それが「奴」に振るわれると、同時に十五本の剣がその後を追って襲いかかる！！！

斬撃の暴風に「奴」が幾度どなく巻き込まれる
右から、左からの斬撃、計三十二回

そして最後の振り下ろし！！
十六本の刃がすべて「奴」に降り注ぐ！！！！

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫバージョン！！！！！」

「がああああああああああああああ！！！！！！」

ズガッ！！ドゴオオオオオオオオ！！！！！！！！

凄まじい爆発で、「奴」が粉々に消え去る

十五天帝が蒔風の鞘に収まり、皆が変身を解く

「みんな、帰ろう！！」

「「「おおう！！！」」」

――

デンライナー内

モモタロスたちがパーティーを開いている

「お前ら見たかよ～。俺のかっこいい必殺技を！！」

「あれ、何かというと蒔風のおかげでしょ？」

「うるせえ！！俺がやったんだから俺の必殺技だ！！」

「あれだって僕たちを身代わりにしたからじゃんか！！モモタロスのバカ！！」

「あれは痛かったで！！今ここで恨みはらしてやろか！！」

「もう、皆やめなよ！！」

「まったく・・・あんたたちは・・・」

騒ぐタロウズに良太郎とハナがあきれる

「は～い。今回は蒔風さんからの差し入れですよぉ～」

「また荷物に紛れ込んでいたものだ。なんでも一つだけ外れが入ってるらしい・・・」

蒔風がとりだしたのはすでに中身を移した缶だ

ラベルには「不思議飲料水缶ジュースシリーズ」と書かれている

例のシャ○先生監修料理教室監修のモノだ

モモ、ウラ、キン、リュウ、良太郎がそれを飲んでみようと手にした

「いいかてめえら、はずれの奴がなんでも言うこと聞くんだからな」

「ちょっと待ちいモモの字。それじゃ良太郎が不利やないか」

「そうだよ先輩。良太郎は歩けば転び、止まれば何かが飛んでくるんだから」

「何にも考えてないの？バカなの？」

「あああん！？だったらどうすりゃいいってんだよ！！」

「じゃあ蒔風入れちゃおうよ」

「お?それはいい考えだ小僧。蒔風!お前これだ!!」

そう言ってモモタロスが蒔風にカップを差し出してくる

「ふ・・・俺の最初の一回の運の良さをなめるなよ?(まあハズレがあるなら大丈夫だな。当たらなければな)」

「いくぜぇ・・・」

「「「「「せーーーのっ!!(ゴクッ!!)」」」」」

「ぶはあああああ!!!!!!!(エクトプラズム放出)」

「「「「蒔風ぇぇえええええ!!!!!!」」」」

蒔風が飲んだ瞬間噴き出し、地面に倒れた

「はっはっは!やっぱ良太郎の選んだのがハズレやったか(ゴクッ)ん!これはライチみっくすとかやな!!」

「わーいおいしい!えっとぉ・・・「ラズベリーソーダ」だね!!」

「じゃあこいつが飲んだのはなんだぁ?ん、んまい!アロエシェイ

クか?薄味だが、いいな!!」

「あれ?どうしたのカメちゃん」

リュウタロスがウラタロスに訊く
ウラタロスの首が、ギ・ギ・ギ、と動いた

「ねえ・・・ハズレって・・・なに味だっけ?」

「イ、「インド風しるこ」やったはずやで?」

「甘辛っ、ぼぶあらぶぉッ!!!」

「カメの字ぃいいいいいいいい!!!!」
「カメ公ぅうううううううう!!!!」
「カメちゃんんんんんんんんん!!!!」

「ぼ・・・僕こんな役回りじゃない・・・・・ゲフッ」

「なんでや!?ハズレは蒔風やなかったんか?」

「うおおおおうあ・・・・甘あああああ・・・・・・・」

蒔風がジュースを口から垂らしながら立ちあがった

「蒔風さん!どうして?これ・・・」

「おお?貸してみ?(ゴクッ!)甘い!!うまい!!なんだよ蒔風ぇ、お前あまいの苦手かよ!!」

蒔風が飲んだのは「みるくスイカ」だ
聞いてわかるように超撃甘ジュースである

「甘いのもそれなりに大丈夫だがここまでは・・・ごおおおお・・・」
(畜生!!なんだよ!当たりもハズレってこれは呪われてんのか!?)

床ではウラタロスがビクンビクンしながら倒れている
蒔風が涙を流しながら口の中の甘みを消している

「ま、いいか。おい蒔風大丈夫か?」

「大丈夫だ・・・(クイッ)」

「おいおい!!何飲んでんだよこれタバスコじゃねえか!!」

「ふう、一息・・・じゃあ、俺は行きますわな」

「お?じゃあな・・・まあ、カメの事は気にすんな」

「おう・・・(恐ろしい・・・なんなんだこの飲み物は)」

床から煙を出して残りのハズレ飲料は消えてしまった

「じゃあな」

「おう、また会えたらな」

「へん、待ってるぜ」

[Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＮ－Ｏ]

「では」

蒔風がゲートをくぐる

そうして蒔風が次の世界に旅立った

「これからも俺たちの物語は続くのか?」

「わかんないよ。でも、そろそろ元に戻りたいなぁ・・・・」

今日も時間の中をデンライナーが走っていく

時間は世界に密接したもの

だか、それもか彼らに任せれば大丈夫だろう

――――――

to be continued

電王　～過去からの帰還～（後書き）

アリス「電王の世界、堂々の完結！！」

いやぁ、最後にめちゃくちゃ長くなっちゃった

ア「それにしても、ゼロノスの戦い方って身軽に動いて相手を翻弄、じゃなかったんですか？」

あーでも・・・作者のイメージとノリだぁ！！！

ア「原作無視しやがったこの野郎！？」

ごぉめんなさぁぁぁあああ～～～～～い

【仮面ライダー電王】

構成：”ライクル”８０％
”フォルス”１０％
”ＬＯＮＤ”１０％

最主要人物：野上良太郎

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：デンガッシャーと十五天帝のリンク＆複数フルチャージの耐久

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：十五天帝を含めた刃での「エクストリームスラッシュ」

ア「あああと変身もしてましたね」

ええ！！

もうあれ考えるのが大変で大変で・・・

《仮面ライダー電王プラチナムフォーム》

デンガッシャー：メリケンサックモード

メインの色：銀白

あと電仮面なんかは表記の通り

あとは各人の想像に丸投げ(おまかせ)さ！！

ア「ひでえ！！」

それが二次の醍醐味

ア「体のいい言い訳ジャナイディスカーーー！！！」

ほら、次回は？

ア「次回、再びあの世界へ！！！」

ではまた次回

魔法少女、続けてます。

なのはA's ～始まりはいつも突然、なの～

ビル郡の一角
いまここでフェイト・テスタロッサとピンク髪の女騎士と交戦している

高町なのはが襲撃された

この報告に、すぐさまユーノ、アルフ、フェイトが助けに向かったのだが、たどり着いた時にはすでになのはは落とされていた

今では青い服の武人とアルフが、赤い服のハンマーを持った少女とユーノが、そして女騎士とフェイトがぶつかっている
だが相手は未知のデバイスを使っていて、歯が立たない

そしてついにフェイトがビルの屋上に倒れる
バルディッシュも全体にヒビが入り、今にも砕けてしまいそうだ

「終わりだ。殺しはしない」

そう言って騎士が剣(つるぎ)を振り下ろした

だが突如現れたゲートに、その剣が弾かれる

騎士が白いゲートから離れる

「なんだ!?これは・・・」

騎士は驚く
そしてゲートの中から音声が流れてきた

《ｇｕｎ　ｆｏａｍ》

ドンドンドンドンドンドンドン!!!!!

ゲート内から銃撃が襲い掛かり、それを弾いてかわす騎士
数歩分離れ、そのゲートに警戒をする

《ｓｗｏｒｄ　ｆｏａｍ》

再び音声が流れ、ゲートから赤い影が飛び出し、騎士の剣に自らの
ソードを叩き付け、押し離した

「オレ！参上！！」

仮面ライダー電王ソードフォームがポージングし、騎士を睨みつけた

「おお、声も変わるんだな」

「あ、あなたは・・・・？」

「ん？フェイトぉ！お久しぶり！ってか、いきなりクライマックスたぁ、面白いじゃねぇか！オレも交ぜろよ！！」

フェイトに挨拶し、騎士を睨む電王
その姿を知らない騎士が叫んで聞いた

「貴様！何者だ！！」

「・・・あんな世界の後にそう聞かれちゃ、こう返すしかないよな」

バシュウ！

電王が変身を解き、そこにいたのは小学三年生ぐらいの外見になった蒔風だった

「舜！？」

「やっぱこのサイズか・・・いいか！よく聞いておけ！オレは！」

ガシュウ！ブォン！！

ディケイドライバーを装着し、カードを取り出す蒔風

「通りすがりの仮面ライダーだ！変身！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥＣＡＤＥ！］

シュン・・シャキシャキシャキ、ジャカン！！

「仮面ライダーディケイド！！」

蒔風がディケイドに変身する

両手をパンパンと合わせて手を払う

「な！？先程とは違う姿・・・」

騎士が驚愕と共に切り掛かってきたのを、ディケイドがソードで受け止めた

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＳＬＡＳＨ！］

カードによって分身した剣身が騎士に襲い掛かるが、その攻撃をすべて受けたうえで騎士が訊いた

「お前は魔導師でも騎士でもない！何者だ！」

「そうだな。この世界じゃ、「救世主にして破滅の者」らしいが？」

「なに！？」

バキィ！

数回打ち合い、騎士が空に舞う
どうやら空を飛べるようだ

「ヴィータ！ザフィーラ！こっちへ！！三人でこいつを潰す！」

「シグナム！？」
「了解した、行くぞ！」

ヴィータと呼ばれたハンマー少女と、ザフィーラと呼ばれた武人がこちらに向かう

「シグナムっての？良〜い名だ。それに強い」

ディケイドがぼそりと呟く

「でもそう簡単にやられるわけには・・・いかないよなぁ？」

ヴォオン！！

ディケイドがカードを取り出す

「行くぞ！！レバンティン！！」《了解！》

「打ち砕く！！グラーフアイゼン！！！」《了解！》

「おおおおおおあああああああ！！！！」

上空ではシグナム、ヴィータ、ザフィーラが魔力を込めている

見るとシグナムとヴィータのデバイスから空薬莢が飛んでいる

ザフィーラはデバイスを持ってはいないらしい

（あのデバイス・・・確か・・・）

「「「はあああああああ！！！！」」」

蒔風が考え込んでいると、三人が同時に攻撃してきた

右から順にザフィーラ、シグナム、ヴィータである

ザフィーラはキックで、シグナムは炎をまとった剣で突っ込んで来て、ヴィータは赤い魔力に輝く巨大な鉄球を打ち放ってきた

「おっと！！［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！］もう一丁！！！［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＬＬＵＳＩＯＮ！］」」

ディケイドがカードをバックルに装填する
するとまずシグナムに向かって等身大の大きさのホログラムカードが幾重にも現れていく
そして二枚目のカード、イリュージョンでディケイドの姿が三人になり、ザフィーラとヴィータにもカードが伸びる

三人のディケイドが構える
シグナムに向かうのはソードを、ザフィーラには跳躍の姿勢、ヴィータにはガンを向ける

「な！？」
「なに！？」
「ぬぅ！？」

三者三様に驚く
が

「「「はあぁぁぁあああああ！！！！」」」

それでも三人はディケイドを一斉に倒してしまおうと考えたのか、さらに勢いをあげ突っ込んでくる！！

「「「おおおおおぉ！！！」」」

それにディケイドも答える形で攻撃する
三人のディケイドが同時に動いた

キックとソードのディケイドはジャンプし、ガンのはビルの屋上に立ったままだ
そし前者二名はカードを通過していき、後者一名は銃弾を放ち、その銃弾もカードを通過していく

キックを放ったディケイドの足先にはカードを通るごとにエネルギーがたまっていく
ソードのも同様に、剣身にエネルギーがたまり、剣が伸びていく
ガンの銃弾も、カードごとにどんどん肥大し、巨大化していく

「ぬぐぉ！？」

キックがザフィーラにぶつかり、爆発を起こす
煙の中からザフィーラが落ち、ディケイドの姿が消える

「うわあああああ！！！」

同時に、ヴィータの放った鉄球を飲み込んで、エネルギーの銃弾がヴィータに命中し、爆発を起こした

そして屋上に立つディケイドが消える

「う！おお！！」

そしてまたそれと同時にシグナムにソードを握ったディケイドが到達する
だが彼女は少しだけ耐えた

ディケイドの一撃をはじいたのだ
だが、ディケイドはくるりとシグナムの上を縦回転し、背後から回って切り崩した

斬られた部分から血は出ないが、そこにエネルギーが叩きこまれ、爆発する！！

ドォン、ドォン、ドォオオオン！！！！！

そしてディケイドが着地し、変身を解く

「こんなもんか？」

「舜！！」

そこにフェイトが声をかける

「よう！！フェイト、なのははどうした？」

蒔風がフェイトになのはの事を訊くと、事の顛末を教えてもらった

「なるへそなるへそ・・・じゃあ治しに行くか」

と、蒔風が足を延ばした瞬間

ドクン！！！

と何か大きな魔力の動きが感じられた

「この・・・魔力は！！！」

「なのは！！！！」

蒔風がなのはの居る場所に視線を向ける

なのははユーノの張った治癒結界の中にいた

だが、その胸には信じられない物が生えていた

腕だ

と言ってもなのはを貫いてるわけではない

おそらく空間魔法だろう

直接なのはの身体に突っ込んできた物だ

その手の先には何か光が見えた

「なのはのリンカーコアが！！！」

「リンカーコア！？そりゃ確か・・・ん、魔力の元みてえな物じゃなかったか！？」

「あれを取られたら、なのはは当分魔法が！！！」

「使えないってか・・・畜生、まだ仲間がいたか！！！」

蒔風が周囲を見渡す
その光景を、腕の主は見ていた

「うんしょっと・・・凄い魔力。これならページがかなり埋まるわ・・・」

腕の主は金髪の、おっとりとした優しげな女性だ
指輪から伸びた光の糸で作られたゲートからに腕を突っ込んでいる
その傍らには一冊の本があり、なのはの魔力が注入されるごとに白紙のページが文字で埋められていく

彼女の名は、シャマル
シグナム達の仲間だ

その仲間たちに念話で交信する

『みんな、大丈夫！？この魔力いただいたら、すぐに転送魔法で帰

還するから、待ってて!!』

『ああ・・すまない、シャマル』

『なんなんだよあいつ・・・滅茶苦茶だぞ・・・』

『怪我はないが、身体も動かん。あの爆発は虚仮脅しのようだが、実力は本物だ』

『シャマル、見つかるなよ』

『大丈夫よ。このクラールヴィントの結界で見つかるわけが・・・』

そう言ってシャマルが自身の指輪を見、そして蒔風に視線を戻したところで言葉が止まった

『どうした?シャマル』

『皆、今すぐに転送するわ!!場所はバラバラに!!各自で家に戻ってきてね!!!』

『それはいいが、どうした!?』

『見つかったわ!!!』

『なに!?』

そう、言葉が止まった理由

シャマルが蒔風を見たとき、蒔風の視線が、真っ直ぐこっちを向いていたのだ

グワリ、とかっ開かれた瞳、無機質な表情に、口だけがグパア、と笑っていた

＜●＞　＜●＞
　　▼
ミツゥケタァ・・・・・

ドォウ！！！！

蒔風がビルの屋上を飛んで、とんでもない勢いで迫ってきた
しかも依然として表情そのままに顔と目は真っ直ぐにこっちを向いていた

「クケケケケケケケケケケケ！！！！！！！」

「きゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

シャマルがお化け屋敷に入った女の子のような悲鳴を上げた
しかもダバダバと涙をこぼしながら
これではどちらが悪役かわからない

・・・・・・確実に蒔風が悪だな

「リンカーコア、ヲォォォォォォォォォォイ　ゞイイイイイイイイィデエエエエエエエエゲエエエエエエエエエエエエ！！！！！！！！」

「ひいいいいいいいいいいい！！！！！」

蒔風がシャマルを捕まえようと手を伸ばすが、それよりも一瞬早く
転移魔法で彼女は消えてしまった
どうやら他の三人も転移してしまったようだ

蒔風は他のみんなと合流しに、また屋上を跳ねた

ーーー

「なのはのリンカーコアの三分の二が？」

「ああ、持って行かれている」

ビルの屋上
気絶しているなのはの周囲にユーノ、アルフ、フェイト、そして蒔風がいる
ユーノはなのはの容体をみているようだ

「それにしても蒔風、またこの世界に来たのかい？」

「それがな～、まぁ～たらしいのよぉ～～。で、俺がいなくなってからどんぐらいたってん？」

「大体半年だよ」

「ふぅ～ん」

「舜の方は？どうだい？」

「え？俺は・・・えっとぉ・・・」

蒔風が視線を少し上の方にし、考え始めた
指がフラフラと動き、そしてパチンと鳴らして答えた

「ざっと一年半かな？」

「そんなに？」

「俺は肉体成長しないの。筋トレとかすればそりゃ筋肉はつくだろうが、背がおっきくとかは全然よ？」

「でもなんか「ヘンシン」した時は・・・」

「ああ、あの時はあの大きさだよ・・・さって、なのはを治しますか」

「治せるの！？」

フェイトが蒔風に振り向く

「当然。と言ってもわからないんだけどね。オレがあの力を引き出しきれるかどうか・・・ま、やってみるよ」

そういって蒔風が力を借りる

その背から純白の翼が生えてきた

「これは！！」

「翼さ・・・」

「あれ？でも舜のは銀白じゃないの？」

「これは・・・俺の仲間に翼人がいてな・・・それを、借りただけだ・・・・」

蒔風の息が荒くなっている

それでもなのはに手を当て、癒やしていく

その余波だけで、フェイト達の傷も癒えていった

「す、凄い！！」

「くそ・・・はぁ、はぁ・・・オレじゃ四分の一程度の力しか出せねえ・・・・」

蒔風からものすごい勢いで汗が流れていく
そして顔色がどんどん悪くなっている

だが、なのはの身体はもう傷一つ見当たらない
レイジングハートやバルディッシュなどの無機物は直らなかったが
そのあいだにも蒔風はどんどん体力を失っていっている

「舜！！」

「どうしたの？大丈夫！？」

「どうやら・・・他の翼人の力を借りるのは・・・・・っつあ！！はあ・・・はあ・・・はあ・・」

蒔風が翼を消し、息を整える

「ちょっと・・・大変みたいだな・・・つか、れた・・・」

蒔風がぐらりと倒れる

「あー、大丈夫だよ。疲れただけだ。ちょっとこうしてりゃすぐに

治る・・・あーつめてー」

蒔風が屋上に寝そべる
冷たいのは当然だろう。今は冬の入り口なのだから

「ち・・・観鈴ちんならリンカーコアまで治せるんだがな・・・」

「え？」

「こっちの話よー。気にしないで～」

「それにしても・・・あいつら何者？」

「あんなデバイス、知らないよ？」

「いきなり襲撃してきたみたいだし・・・」

「それに魔法陣も・・・・」

三人が議論を始めてしまう
そこに蒔風が起き上がって口をはさんだ

「あいつらの事なら教えてやる。どーせクロノあたりも来てるんだろ？続きはあっちで話そうぜ？」

蒔風のその提案に、皆が頷き、一旦アースラへと向かった

to be continued

なのはA's ～始まりはいつも突然、なの～（後書き）

しまった！！久々に忘れてたよ！！前回の話で出たジュースは剣流星さんから頂いた物でした！！！

アリス「本当に大切なことじゃないですかあああああ！！！！！」

すみませんすみません！！！！！

そしてなのは、ェエエエエエエエエエエエエィイイイイイイッス！！！！！！

アリス「なんだこいつーーーー。でも、なのはの世界第二弾ですね！！！！」

そうですなー

今回はA's！！

ア「それにしても今回一気にライダー出ましたね？」

これは第一話のタイトル見て考えつきました

ア「ああ、それで電王を」

そしてディケイドトリプルファイナルアタックライド

ア「あれは劇場版ディケイドから？」

そうそう

かっこいいよ！！ブイスリャー！！！

ア「あと蒔風、疲れてましたね？」

ええ

「力を借りる」というのは「願いの翼」の力ですから

同じ「翼人の力」を借りるのは途方もない体力と精神力を持って行かれます

借りられる時間も一分半と短いですし

ア「他が十五分なのにですか！？」

それだけ翼人の力は大変なんですよ

ア「へぇー、次回、彼らの秘密、新たな住まい」

ではまた次回

話をッ！

Ｄｉｖｉｎｅ

聞いてってばぁッ！！

buster

なのはA's ～運命ーを連れーて行く・・・違ったの～

アースラに帰還したユーノ達
もちろん蒔風も一緒だ
彼らを出迎えてくれたのはクロノだった

「舜！！久しぶりだな！！」

クロノが蒔風を見るなり嬉しそうに肩を掴む

「ははは、クロノ久しぶり！！って、痛い痛い！ど、どうしたん？」

「ふっふっふ・・・待ってたよこの時を・・・」

「クロノさん？」

「舜お前、前回自分のデータ消してったろうが！！」

「ひいバレた！？」

「バレれないでか！！！先の事件の報告書をまとめようとしたら君のデータがゴッソリ無くなってたんだぞ！！！！」

「翼人の事なんか残せるか！！それに俺がいなくても大丈夫だったろ！！！」

「それとこれとは話が違う！！管理局のデータベースに入り込んでデータの改竄をしたことが問題なんだ！！！」

「冷たいこと言うなよクロちゃぁ～ん」

「あーもーー、君って奴は！！！！」

「クロちゃんです♪」

「やかましい！！！」

蒔風とクロノがいきなり口論を始めてしまったなのはを抱えるアルフも、その後ろのユーノとフェイトも唖然としている

（ねえ、クロノってあんなにはしゃぐタイプだったっけ？）

（ううん。私もそれなりに一緒にいたけど、あんなクロノは初めて）

（なーんか兄弟げんかみたいで面白いねえ）

三人がひそひそと話しているのに気づいたクロノが、咳払いをして話を戻す

「さ、みんな。これからアースラは時空管理局本局に向かう。話はそれからだ」

アースラは時空管理局本局に向け、出航した

――――――――――――――――――――――――――――――――

なのはが目覚める

何処かの病室のようだ

窓の外には見慣れない街が見える

「ここは・・・・」

そして少し考えて、自分に何があったのかを思い出す

「そうだ・・・わたし、落とされて・・・」

「なのは」

ベッドで身体を起こしたのなのはに、フェイトが声をかけてきた

どうやらさっきからずっとそばにいてくれたようだ

「フェイト・・・ちゃん」

「なのは・・・その・・・えっと・・・」

二人の間になんとも言えない空気が流れている

それもそうだ

半年前に涙の別れをし、ビデオメールで連絡は取り合っていたが、
こうして会うのは本当に久々なのだ
それもあんな戦闘のあった直後に
それは気まずくもなる

「あ、あはは。なんか変な再会になっちゃったね」

「う、うん」

「・・・フェイトちゃん」

「なに？なのは」

「会いたかったよぅ・・・」

「・・・うん、私も」

そう言ってお互いの手を取る二人
そして話が盛り上がっていく

「そういえば、フェイトちゃんを途中で助けた人がいたよね？」

「あ！！！そうだ！！なのは、帰ってきたんだよ！！！」

「え？」

舜が帰ってきたんだよ！とフェイトが言おうとし、「しゅ」のとこ

ろで扉がガタガタとなりだし、ゴガガガガ、と振動し始めた

『おかしい・・・引いても押しても開かんだと!?』

扉の向こうから声が聞こえる
ちなみにこの扉はスライド式で、人が近づくと勝手に開くはずなのだが・・・・

『おのれこの扉野郎め、そこを開いて人を招き入れるのが貴様の機能のくせに、なんでそれもできないんだよ・・・・ひ、ら、け!!!（ドゴガン!!!）』

扉の向こうから声が聞こえてきて、散々騒いだ挙句にあろうことか扉を蹴り破ってきた。
本来開かない方向に開かれた扉は、バタン!!と部屋の中に倒れ、そこを開けた。

そして壊れた扉の構造を冷静に見直して、扉を蹴破った蒔風がふっ、と頭を振って言った。

「あ、あんたが開かないから行けないんだからね!!!」

訳のわからないツンデレである
いや、ツンデレですらもない

その蒔風につかつかとフェイトが歩み寄って、その頭を蒔風の脳天から拳を振り落として殴った

「オゴゥ！？」

「何やってんのかな？舜」

「ま、待てフェイト・・・オレはなんか暗そうな雰囲気だっとこの場をどうにかしようとだな！！」

「どっから聞き耳立ててたの！！！！！」

「え？モチ最初から。その質問は「最初からじゃねえか！！」のベタな・・・待て待て待て！！わかった悪かった俺が悪かった今度は普通に開くからゴォウ！？」

もう一度フェイトが蒔風の後頭部をはたき、粛正した

「フェ、フェイトちゃん？それに・・・舜君！！！！」

「おう、久しぶりですの。蒔風君だよ～。元気？ってもんでもないかな？」

「うん・・・」

「ま、あのままだったらリンカーコア全部取られてたな。あの騎士、やりよるのう」

「舜はあの人たちのこと知ってるの？」

「それは全員集まってからだ・・・噂をすれば、だな」

そのときちょうど扉があった場所に、リンディ、クロノ、ユーノ、

アルフ、エイミィが入ってきた

「蒔風君、元気だった？」

「ま、元気ですな。この姿以外は」

「また「実年齢は～」とかですか？」

「なんでそれだけ信じてくれないの？」

「なんとなくです」

「そんな～～～～」

そしてエイミィに挨拶をする

「どうも、久しぶり」

「ほいほいお久しぶり～。クロノのから聞いたよ～？翼人なんだって？」

ビシリ、と蒔風が固まる

そしてぐるりと蒔風の首がクロノの方を向く

それと同時にクロノの首が蒔風から逸らされる

「クロノ？」

「えっと・・・どうしてもって・・・・」

「え～？クロノ君の愚痴で聞いたんだよ～？翼人のどうとかって！」

蒔風がズズイッ、とクロノに近づく

「クロノ？」

「そ・・・その・・・・すまない・・・」

「・・・はあ、ま、いいけど。そこまで必死に隠すものでもないし」

クロノがフウ、と息を漏らす

「でもなるたけ言いふらさないでくれよ？なまじ伝説が残ってる世界だと面倒なことになりかねない」

蒔風との再会で一通りの言葉を交わし合ったところで、本題に入った

「交戦した四人の人物。彼らが今回の相手だ」

モニターが現れて、そこに今回戦った四人が写される

「たしか、シグナム、ヴィータ、ザフィーラって呼び合ってたね」

「最後の一人はわからないけどな、彼らの言葉からある一つの情報を得た」

「それは？」

「・・・・闇の書・・・・・」

口を開いたのはクロノだ
なんとも言い難い表情をしており、何かしらの因縁があるように見てとれる

「闇の・・・書？」

蒔風が説明を続けた

「なんでも古代から存在する魔導書でな。リンカーコアから魔力をいただき、その質と量に比例してページを埋めていくんだ」

「埋めていく？」

「そ、最初は全６６６ページが白紙の状態から始まる。そこから魔力を蒐集（しゅうしゅう）していくごとに埋まっていくんだ」

「それと彼らの関係は？」

「彼らは闇の書の防衛プログラムだ」

「プログラム？」

そこからクロノが説明した

「闇の書は持ち主が死んだりすると、次の持ち主のところに転生するようにされている。そしてその主と本を守るのが彼ら、「ヴォルケンリッター」だ」

「そういえば、あの人たちの魔法、なんか変だった」

「それは彼らだからというわけではないんだがな。魔法の系統が違うんだ。お前らのはミッド式。彼らのはベルカ式と呼ばれる物だ」

「遥か昔にミッド式と双璧を誇っていた魔法文化だよ。その最大の特徴がカードリッジシステムだ。薬莢の様な物の中に魔力を込めて、戦闘時にそれを開放することで瞬発的に攻撃力を激増させる物だ」

「ま、より対人戦に特化したもんだわな。で、優れたものは「騎士」と呼ばれる」

そこでなのはが手を上げた

「はい、なのは」

「えっと・・・それであの人たちはリンカーコアから魔力を奪ってそれでページを埋めて・・・何をするの？」

蒔風はなのはにビンゴ、という様に指を向ける

「そこなんだ。何が起きるかはわからない。その闇の書の主がどんな奴かはわからないしな」

「だが使いようによっては危険なロストロギアだ。どちらにしろ、話は聞かないといけない」

「それにこの事件、多分私たちアースラが受け持つことになりそうだし」

そこでリンディが当面の問題を言った

「そうなのよねえ・・・でも、アースラは今整備中だし・・・」

「地球は管理外世界で、行くのには時間がかかる。何かあった時に・・・」

そこで蒔風がぽろっと、言った

「みんなでくりゃいいじゃん。現地に住んでさ」

「あ」「え？」「あぁ～～」

皆が納得したような声を出した

「そうね、そうしましょうか。でも、まだうちの担当になるかどうかわからないし」

「なるさぁ。だって」

「だって？」

蒔風が指を頭の上でくるくる回しながら言った

「主人公達が出会ったんだから」

――――――

「そうはしない・・・ふむ、やはり立っても開かないか・・・よいしょ、ッ！？」

蒔風が扉をスライドしようとしても開かない
どうやっても開かない

「バカな！！！こうまでしても俺様を拒むか！！！」

ちなみに蒔風がスライドさせているのは右から左だ。
この扉は左から右に開く。

「舜・・・・」

「ぬおおおおお！！！！な、なんだクロノ！！」

「この扉は魔力に反応して開くんだ。それとは違う力を持つ君が開けないのはそのせいだと思うんだけど」

「そ、そうなの！？じゃあ・・・こうか？（、・ω・´）キリッ」

蒔風が魔力を生成し、扉を開く

部屋に入ると、ひとりの老人・・・と言うよりも、紳士と言うべき人物が立っていた
ひげを蓄え、優しげな眼をしていた

「舜、こちらはギル・グレアム提督。かつては艦隊指揮官、執務官長を務めた、歴戦の勇士だ」

そう言ってクロノがグレアムを紹介する

「はっは、そうおだてないでくれクロノ。照れてしまう。それにしても面白い子だね」

「へぇ・・・この人がクロノの師匠っていう？」

「ああ。執務官研修を担当していただいたんだ」

「どうも、初めまして蒔風君。ギル・グレアムだ。君の事はクロノから聞いているよ」

その言葉に蒔風がクロノに向く

「・・・・・クロノ？」

「・・・・・ナンダイ？」

「どこまで話したのかな？かな？」

クロノの弁解より早く、グレアムがバラした

「君が翼人であることまで知ってるよ」

「提督！！」

「クロノぉ！！！」

「す、すまない！！」

蒔風がクロノに迫るが

「まあまあ、彼に問い質したのは私なのだから、彼を責めないでください」

その言葉に蒔風も引っ込み、三人が席に着く

「ふう・・・さっき、なのは君とフェイト君とも話していたのだが、二人ともいい目をしていた。君も・・・面白い目をしてるね」

「ん？どういうことで？」

「いや・・・伝説の翼人がこんな子供だったとは・・・・」

「子どもぢゃない・・・って言っても信じてくれないだろうし・・・いいよもう、それで、はあ」

「ん？なんだい？」

「いいえ。それより、管理局の超お偉いさんが何の用でっしゃろか？」

蒔風が聞く

それに頭を下げて答えるグレアム

「頼む。この事件を必ず解決してくれ」

「？？」

グレアムが話し始めた

クロノの父、クライド・ハラオウンが自分の部下であったこと。
彼が殉職した原因の事件が「闇の書」の事件であったこと。
そしてグレアム自身も今まで独自に調査してきたこと。

「頼む。闇の書はたとえ所持者を殺しても新たな所持者に転生してしまう。
そんな代物をどうにかするには、この世界の力ではどうしようもないのだ」

そう言って頭を下げ直すグレアム
クロノの顔を見ると、言葉にしたいのに出せない何かがあるようだった

「クロノ、なんかあんのか?言ってみぃよ」

「・・・グレアム提督、あの事件はあなたの責任ではありません。あのとき父は船員を助けるために、自分と艦を涼めるように言ったのです。あれはだれの責任でもありません。提督が気に病むことなど・・・」

「そんなことはわかってんよ、この人は」

蒔風がクロノに言う

「こん人はそれを踏まえたうえでまだ自分が許せないんだ。だからこんな得体のしれない伝説にまで縋る」

その言葉に、グレアムが返す

「そうだ・・・これが自己満足だとわかっている。だが、もうあんな事件は起こしてはいけないのだ！決して・・・決して！！！」

「・・・・・・それで？主はどうする？」

「できれば・・・助けたいが・・・」

「ふ、無理なら殺れってか。いや、殺したら意味ないから、捕らえて生き地獄かな？ならお断りだ」

そう言って蒔風が部屋から去ろうとする
それにグレアムが諦めきれないと引きとめる

「それは・・・だが、必要ならばやるべきなのだ。本当に頼む！！
それが最善でないことはわかっている。だが、やってはならないことでも、やらねばならぬときがあるのだ！！それを」

「それを俺にやれっての？それとも俺に許して欲しいってか？悪いが俺は神じゃないんでな。翼はあっても天使ではない」

蒔風が部屋から出ようとする
そこで背中越しに言った

「やっちゃいけないことをなんでやっちゃいけないかわかるか？
それがやっちゃいけないことだからだ。それ以外の御託は必要ない。
ただそれだけの理由だよ、断るのは」

その背中にグレアムが聞いた

「では・・・君がやることとはなんなんだ?」

そこで振り返って言った

「当然、いいことだよ。ま、あくまでオレにとってな。
いいことをやるのに理由や信念なんてもんはいらない。
し続けるなら必要だがな、そんなもんはあとからついてくる。

高尚な理由なんていらない。
それが誰かのためになるなら、迷わずすべきだ。そうだろう?」

その瞬間、グレアムには蒔風が小学三年生の少年には見えなかった
まさしく、彼は世界を救う青年だと、確信した

「では・・・私は何をすべきなのだろうか・・・・」

「知らないね。あなたがやるべきことを、あなたの最善を。あなた
の願いの通りにやればいいのでは?今までやってきたことをすれば
いい。誰かにそれが打ち砕かれるまで、な」

そう言って蒔風が去る
その後をクロノがグレアムに一礼してから追いかけて行った

部屋にはグレアムが残される

「まいったな・・・逃げ道のための会話で、背中を押されるとは・・・」

そう言ってどこかに通信をつなげる

「私だ。ああ、やはりやろう。ん?迷い?もう吹っ切れたよ。打ち砕かれるまでやるとしよう。願わくば相手がこちらに気づくことに賭けるがね。ああ・・・実行するとしよう」

そういって通信を切る

天井を、いや、おそらくはその先の天を仰いで、グレアムは思った

闇の書に終わりが来るように、と

to be continued

なのはA's ～運命ーを連れーて行く・・・違ったの～（後書き）

アリス「説明回ですね」

すみませんですはい

何か間違ってるとこあったらおせーてください！！！

ア「それとグレアムさんとの会話」

ですねー

本編知ってる人は何となくわかると思いますが

ア「それにしても蒔風はいちいち魔力作らないといけないんですね」

そうなんですよ

彼は大体どんな力も生成できますが、する必要がいんですよね

ア「なんでです？」

だって必要なら「力を借り」ればいいし

ア「なるほど」

まあ、念話とかをしてたから、結構なれたろうけどね

ア「じゃあそろそろ」

お願い

ア「次回、今度こそ本当に新たな住まい」

前回の予行は実現できなかった（泣）

だめだ・・・どんなセリフも先取りしてまう・・・

なのはA's　～拠点と接触と共闘なの～

この「闇の書事件」が正式にアースラ主導の物になると決定した
それに伴い、現地での活動のため拠点は海鳴市のなのは宅近くのマンションになった

それが発表されたとき、なのはとフェイトは手を取り合って喜んだ
蒔風は自分の荷物があるからと、住所だけ聞いて、地球に降り立ってから別行動をとった

――

「すっご～～～い！！！」

なのはがフェイトの住むマンションの一部屋に入っての第一声である
そこは海鳴市を見渡せるような高層マンションで、すぐ近くになのはの家もあるので、いつでも会えるという好ポジションだ

「あ、あそこうちだよ」

「え？どこどこ？」

フェイトとなのはがベランダから階下を覗いてはしゃいでいる

さらにこの部屋、現地での本部でもあるため、いたるところにモニ

ターが出たり、何かとハイテクになっている
キッチンなどの技術はこの世界の物だが

「そうだ、屋上からの眺めがすごいんだよ！！」

「みたいみたい！！！」

そう言って片づけをしているエイミィに一声かけ、二人が屋上に向かい、扉を開けた

そこには想像してた以上の光景が広がっていた

「スキップ」
「ウノ」
「ウノ」
「あ、じゃあドロ２」
「私もドロ２」
「残念、持ってますよ。ドロ２」
「・・・ドロ４」
「・・・・・」
「主？」
「お前ら主を敬うってことしないのか！？」
「「「ゲームではしない」」」
「くっそう！何枚だ！！」
「１４枚だの」
「ああそうかい。いちにいさん・・・」
「待て主！？騙されているぞ！？」
「もういい構わん！！その程度でお前らの勝因になると思うなよ！

？」
「・・・負けたら私にプリン十個」
「をい！！最初三個だったのがおかしいぞ！？」
「じゃあシュークリームでいいです」
「この野郎！！！」

五人の男たちが屋上に丸く座り込んでウノをやっていた

四人は十代後半の青年で、あとの一人は蒔風だ
屋上にテントが張られ、そこの外で行われている

テントのそばに破壊された看板があり、「久々だと、つい、やっちゃうんだ。ランランルー」と書かれていた。

「舜君？」

なのはが声をかける
その声に蒔風が反応する

「おー、なのは。身体は大丈夫かい？」

「うん。怪我の方は大丈夫。魔法はまだ駄目だけど」

「なに、身体が大丈夫なら全然平気だよ」

「舜、このお兄さんたちは？」

「んあ？そっかそっか、知らないか」

蒔風がその場の青龍、白虎、朱雀、玄武を紹介した

「俺の召喚獣たちだよ。おまいら、戻っとけ」

その一声に四人が剣に戻り、蒔風の脇の鞘に収められ、消える

「す、すごい」

「で？何しに来たの？こんな屋上に」

「えっと・・・景色を見に来たんだけど・・・」

「舜は？」

「暇だったから遊んでた」

「このテントは？」

「荷物。ここにテントごと置かれていた」

「へ、へぇー」

「そういえばレイハとバルはどうした？」

「うん・・・二つとも破損が激しくて・・・」

「まだ治らないみたいなの」

「そうか・・・結構やられたからなぁ」

と、そこでフェイトが思い当たる

「舜はこんなところで暮らしてるの？」

「ん？いや、前回はなのはの道場に泊めてもらったな」

「じゃあ、今度はうちに泊まる？」

「・・・・はいぃ？」

蒔風がフェイトに聞きなおした

が、フェイトはこれは名案、と考えを変えない

「うちに住めば今後の活動もしやすいし、もしかしたら「奴」の事も見つかるかもよ？」

「まあ、俺としてはありがたいが、リンディさんはいいと言うのか？」

「「言うと思う」」

二人が同時に言い、そして下に戻ってリンディに訊くと、

「了承」

「一言っ！？」

あっさり決まってしまった

だが蒔風が硬くなに拒んだため、リンディにもうひと部屋借りてもらって、その部屋を蒔風が使うことになった。

ーーー

「どうした？」

「いやぁ、なんでも～♪」

蒔風がベランダの柵を乗り越え、自分の部屋に帰っていく
そしてパジャマから着替え、出かける準備をした

――――――――――――――――――――――――――――――――

巨岩が点々と置かれ、広大な荒野の広がる世界
ここにベルカの騎士の気合が響いた

「うをおおおりゃあああ！！！！！」

ドゴォン！！！！

巨大なワニガメのような生物が岩場のそばで地面に倒れる
他にも二、三体、同じ生物が点々と同じように倒れていた
死んではいないようだが、その体からはリンカーコアが抜かれている

「こんなもんかな？ちっちぇえけど、効率はいいんだよな」

そう言って魔力を取っているのはヴィータだ
この無人世界で、こう言った巨大生物から魔力をいただくのが最近
の主流だ

「まったく、管理局に気付けれなきゃこんなめんどいこと・・・」

「だったらぶちのめせばいいじゃん」

「それじゃあ傷つけちまうかもしれねえし下手したら殺しちまうかもしれねえ。主の名前を穢さないためにも、それだけはやらないと決めたんだ」

「結構なことだな。その主って誰なの？」

「それは、ってうをおおおお！？」

「あ、気付いた」

近くの岩場に、蒔風が座っていた
ニコニコ笑って、手をヒラヒラと振っていた

「てめえは！！！」

ヴィータが蒔風にいきなり攻撃を仕掛ける

武器であるハンマー、グラーフアイゼンからのジェット噴射で回転し、その勢いで殴りつけろうとする
蒔風が岩場からひらりと跳んで、その真上を飛び越していって、巨大生物の背中の甲羅に乗った

蒔風がたった今までいた岩場の先端を砕き、ヴィータか蒔風の方を睨む

「おおすげえ！！！何回転してんだ！？」

「お前、何しに来たんだ!!」

ヴィータがもう一度攻撃しようと構えるが、蒔風が手のひらをヴィータに向ける

「三人がかりで、いきなりとはいえ君たちを落とした男にそんな心情で戦っても勝てないよ？」

「うぐっ・・・・」

「それよりも知りたいんだな。なんで蒐集してんだ？完成させればどうするのよそれ」

蒔風が闇の書を指さして聞いた

「それは・・・いえねえ!!言ったってお前ら管理局はは・・・主をとっ捕まえんだろ!?」

「はぁ～～ん」

「そーゆーのから主を守るの騎士だ!!あたしはそのためにだったら何とでも戦う!!!」

「俺は管理局員じゃないよ」

「信じられっかよ!!!」

「そうだよねえ・・・お？」

蒔風が地面を見る

「あ?どうしたんだよ」

「お母さんが御怒りのようだ」

ドゴオオアアア!!!!!!

地面にひびが入り、そこから巨大な何かが出てきた
まあなんということでしょう。
地盤を砕いて現れたそれは、そこらに倒れているカメの二倍はあろうかという大きさがあります。
どうやら彼らの母親なのでしょうか。その瞳には怒りの炎が燈っております

「く・・・」

「おい!!どうやらやる気らしいぜ!?」

ドゴオ!!!!

蒔風とヴィータを前足でなぎ払おうとし、それを二人が避けて、地面に降りる

「お前さん、疲れてんだろ?どうだい?こいつとりあえずやらないか?」

「だ、誰がお前なんかと!!!!」

「いいの？なら別に俺はいいんだけど。だけどこのまま戦って勝てる確率は五分五分。もし負けたら闇の書がどーなっちゃうのかなぁ？」

「う・・・・」

ヴィータがガリガリと頭をひっ掻き、考え込む

「うーーーーあーーーー！！！！！」

「ほらほらどうする？そこまで来てるよ？」

母ガメが猛然と二人に迫ってくる
このままでは押しつぶされてしまうだろう

「だーーーーー！！！わかったよ！！手伝えお前！！！」

「いいよん（ピィン）」

蒔風がどこからか音叉を取り出し、鳴らす
そして焔に包まれ、変身する

「久々のぉ～～～～響鬼ぃ！！！！」

ドンドン！！！！

蒔風が仮面ライダー響鬼に変身し、その姿にヴィータが驚く

「それなんだよ！！前のと違うぞ！？」

「気にするない。ほらっ、来たぞ！！」

ドゴォン！！！

蒔風とヴィーダのいたところを踏み砕き、暴れまわる母ガメ
その勢いに蒔風がクルクルと吹き飛ばされた

「おお　ぅ！？こりゃすげえ・・・」

「おい！！まじめにやれ！！」

「はいはい。はぁ！！！」

蒔風がその背に飛び乗って、甲羅に音撃鼓・火炎包をセットする
たちまちそれが回転しながら巨大化し、母ガメの動きを束縛した

「いまだ！ぶったたけ！！！」

「おう！！行くぞアイゼン！！！」《了解！！！》

ガシュウ！！！！

グラーフアイゼンから薬莢が飛び出し、魔力が装填される
アイゼンに赤い魔力がともり、その全力で音撃鼓にぶち当てるヴィータ

キュゴアアアアアアアアアア！！！！！！！！

その一撃で音撃鼓から全身に音撃を叩き込まれた母ガメは、雄たけびを上げて倒れた

「っと、こんなもんか。やるじゃん」

「うっせー。お前本当に何なんだよ」

蒔風が変身を解き、ヴィータに声をかける

「そうだな・・・お前黒い影みたいな男、知ってっか？」

「しらねーよ」

「じゃあいいや。ま、俺は世界最強、と覚えておけよ？」

「・・・・あたしを捕まえないのか？」

「そうだなぁ・・・ダチ襲撃の件はもうその時にぶちのめしたからもういいし・・・うん、けえれけえれ」

「・・・シグナムに言った、あの言葉・・・・本当なのか？」

「おお。さすが古代ベルカから存在した騎士だね」

「じゃあ・・・本当に・・・」

「それを信じるかどうかは君だよ。まあ？こんな胡散臭い男は信じないに限ると思うにょ？にょにょにょ～～」

「・・・・じゃあな」

ヴィータは蒔風のうやむやな感じに、もうどーでもいいや、といった感じになり、その世界から去って行った

あとには蒔風が残される

「ふう・・・誰も殺してないし、殺すつもりもない、か。しかももそれは主のためにね。いい奴らだ。まあ話してはくれないだろうしなぁ～」

そういって蒔風が空を仰ぎ見る

「ま、華のあるいい戦いしたし、いい気分だ・・・だからお前らいらないよ」

ドゴォン！！！

地盤を砕き、一斉に巨大ガメたちが襲いかかってくる

五、六体はいるだろうか。サイズは最初にヴィータが倒してた物と同じだ

それらが地盤から勢いよく飛び出し、そのまま蒔風を圧殺しようとする

が、しかし、蒔風の眼が薄く開かれ・・・・

ーーー

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ］

世界名が告げられることなくゲートが開く
そこをくぐって蒔風もいなくなる

とりあえずの接触はした
さて、この物語はどの方向に歪むのか

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはA's ～拠点と接触と共闘なの～（後書き）

だーめだ眠い

アリス「あなたいつも眠いでしょう」

そうなんだけどね・・・・

ア「仕方ないですね。次回、新たなる力」

ではまた次回・・・ＺＺＺＺ

熱血バトル魔法アクションアニメ！

ア「ＤＶＤのＣＭ・・・「少女」の字を捨てましたね・・・」

フェイト達がこの町にやって来てから数日、彼女にとって新しいことの連続だった

「「こんにちわー！！」」

まず、フェイトの家に、すずかとアリサが遊びに来たのだ

お互いの事はなのはを通してビデオメールの事で知り合っていた三人は、すぐさま意気投合。

部屋でワイワイと遊びだした

「初めまして、でいいのかな？月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ」

「フェイト・テスタロッサです。えっと・・・」

「「なに？」」

「アリサ、すずか。よろしく」

「「うん！！」」

そしてまずは一旦、リンディと共になのはの両親のやっている喫茶店「翠屋」へと向かい、なのはの両親に挨拶にむかう

どうやらこっちはこっちですぐに仲良くなったようだ。
外のテラスではなのはたちがおしゃべりをしている

「わー。ユーノくん久しぶり！！」

「あんた、どっかで見たわね」

動物モードのユーノとアルフを抱えるすずかとアリサ。
腕の中でキューキュー言ってるユーノと、ぎくりとするアルフ。

『ユーノくん・・・がんばって！！』

『アルフもごめん』

二人に念話で話しかける二人に、構わないよと返す動物組

「ショートケーキです」

「え？あ、ありがとう」

と、そこにケーキを持ったウェイターがやってきてそれを置いていく

「モンブランです」

「あ、はい」

「チョコレートケーキです」

「まっ、え?」

「チーズケーキですトルテですシフォンケーキですカステラですマフィンですロールケーキです蒔風ですミルフィーユですホットケーキですマドレーヌですバームクーヘンです」

「ちょっと待ちなさーーーーい!!!」

次々とケーキを置いていくウェイターにアリサがキレた

すずかはポカンとウェイターを見つめていた

「えっと・・・舜君?何やってるの?」

「無論、手伝いだよ。前回泊まらせてもらったのに、全然恩返しできなかったからね」

なのはと蒔風は何でもないように話し始め、それに気付いた二人が驚いた

「ええ!?舜君!!??」

「舜!!あんたこんなところで何やってんの!?このケーキは何!?」

そう言いながら掴みかかってくるアリサ

「おいおい、やめてくれ。のぉうみぃそがぁしぇぇいくぅさぁれぇるぅ」

アリサが蒔風の首をグワングワン揺らしながら問いただしたので、
蒔風の言葉がぶれる

「急にいなくなっちゃうし、どこで何やってたのよ！！」

「いやあ・・・ちょっとね！！」

「うきーーーー！！そのしてやった感じの顔が腹立つ！！！！」

そう言ってから席に座りなおす五人

「じゃあ舜も学校に戻ってくるの？」

「いやあ・・・わからないんだよなぁ」

そう、実はそこがわからない
前回この世界で蒔風が学校に入ったのはなのはと少しでも知り合っておくことが目的だった。
だが、今回はそれが必要ない
故にこの世界に来た時も荷物の中には学校の制服はなかった

「わからないってどういうことよ」

「どうなんだろうねえ・・・・」

「考えてないで答えなさい！！」

「およよよよよ～～～～～」

蒔風が再びシェイクされ始める。

と、そこに荷物を受け取りに行っていたエイミィが通りかかった

「やあ、みんな、こんにちわ！！」

「エイミィさん！あ、紹介するね。こちらエイミィさん。フェイトちゃんの・・・お姉さんみたいな人」

「どうもこんにちは！エイミィ・リミエッタです。話に訊いてるよ。すずかちゃんと、アリサちゃんだよね」

「「こんにちは！」」

「うんうん、元気元気。と、そうだ。はい、フェイトちゃんの学校の制服」

「え？」

そう言ってエイミィがフェイトに服の入った箱を渡す
その中にはなのはの物と同じ、私立聖祥大学付属小学校の物だ

「フェイトちゃん、やっぱり同じ学校だね！！」

「うん！」

「ほい、それと舜君のも」

「・・・・はいぃ！？」

エイミィが蒔風にも同じ箱を渡してくる

「ま、まさかこの中身がフェイトと一緒なんてことは・・・・」

「大丈夫だよ」

「そ、そっか・・・よかった」

「ちゃんと男子の服だから」

「それは当然でしょ!?ああやっと自由に行動できると思ったのに・・・・」

そう言っていると、店の中からリンディとなのはの両親が出てきた

「あら、制服、届いたのね」

「舜君。また君に出会えてうれしいよ。今度私とも手合わせ願いたいんだが・・・・」

「やめてくださいやめてください!!そんな必要ないですってば!」

そしてその後、家に帰った蒔風が漏らした一言

「学校・・・めんどくせぇ・・・・」

ーーー

そして次の日

フェイトと蒔風（二回目）がなのはのクラスに転校してきた

「イエエエエーーーイイ！！！帰ってきたぜみんなぁ！！！」

ウヲオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

クラス中が巻き上がった。

フェイトはその状況に腰を抜かしてしまったのか、黒板に手を当てて寄りかかっている

「はい、というわけで、舜君はまた、フェイトさんは初めて、この教室の仲間になりました！！」

「みんな！！元気だったかぁ～～イ！？」

元気だったぁ～～～～～～～！！！！！！

そうクラスのみんなが叫んだ

おかしい、これが昨夜面倒くさいと言った男なのか？

そしてなのはも目を丸くする

よく見ればすずかもアリサもテンションが高い

このクラスってこんなクラスだったっけ?と自分のクラスメイトに関して考え始めたなのは

「俺の席は・・・そこだぁ～～～～!!!!(ズビシィッ!!)」

蒔風が前回も自分の席だったところを指さし、飛びこんでいった

パカァン!!!

だがその後頭部にチョークが砕け、蒔風が机の間に倒れる。

「そこはフェイトさんの席です。あなたはその隣」

「・・・・はい」

「ではホームルームを始めます」

そう言って学校が始まった

そして休み時間になるや否や、フェイトのところに皆が集まって、質問攻めにし始める

「まえはどんなとこ住んでたの?」

「他の学校ってどんなとこ?」

「好きな食べ物って何?」

「ツインテールびろ～ん(バキィ!!)」

「好きなテレビ番組って?」

「今どこに住んでるの?」

そんな質問攻めに、フェイトはおどおどとしてしまい答えられない
それを眺めるなのはたち四人
うち一人は頬に拳の跡がついている
「俺さんの時にはあんなに来なかったやん！！なんなん！？この差なんなん！？」
「フェイトちゃん人気だね～」
「でも大変そう」
「変なことされなけりゃいいけどね」
「それしたのはあんたでしょ！！」
そういってアリサからもはたかれる蒔風
腕を組んで、首だけがカクッ、と倒れ、そしてまたクイッ、と起き上がった
「それにしても・・・・凄いなぁ・・・」
「もう・・・仕方ないわね！！」
「キターーーー！！アリサ・バニングスさんの仕切り屋発動やでーーー！！！（ボカァ！！）すみません静かにします」
「よろしい。ほらみんな！！転校生が困ってるじゃない！！順番順番！！」

そういって質問者をさばいていくアリサ

「すげえ・・・」

「にゃはは・・・アリサちゃんは仕切らせたら凄いから」

「うんうん」

そうしてあっという間に放課後になる

五人は途中でリンディと合流し、電気量販店に向かった。

フェイトの携帯電話を買うためである

「そういえばフェイト持ってなかったんだっけ」

「うん」

「でもこれがあればいつでもお話しできるよ！」

「それはどうかな」

蒔風が顔を暗くして話し始めた

「俺も携帯を持った時はそう思ったさ。だけどそれが恐ろしいことに気付いたんだ・・・・」

「な、何があったの？」

フェイトが恐る恐る聞く

「それは・・・不幸のメール!!」

「不幸のメール!?」

「そう!送られた者に不幸を起こすと言われるメールだ!それを打ち破るには十人の知り合いにそのメールを送らなければならない!!」

「そ、そんな!!そんな誰かに押し付けるみたいな・・・」

「だがそうしなければ自分に襲いかかる・・・オレは知っている・・・あの暑い夏の日の事・・・俺の友人はその不幸を一人で背負い、そして・・・・・」

「そ、そして?(ゴクリ)・・・・・」

「ギャーーーーーーーー!!!!!!」

「キャーーーーーーーーー!!!!!(ビスッ!!)」

「ぐあああああ!!!!私の目が、目がああああ!!!!!」

フェイトが驚きのあまりわざわざ蒔風の眼鏡を取り払ってから攻撃した

フェイトを驚かせた自業自得というか何というか、蒔風が目を押さえてのたうち回る

「もう、騒いでないで、携帯選びましょ」

「え？でも不幸のメールが・・・」

「舜君の嘘だよ。多分楽しませようとしてたんだと思うけど・・・」

フェイトとなのはが振り返ると、すずかがどこから持ってきたのか
細い木の枝で蒔風を突いていた

「・・・あれ？そういえば舜って携帯持ったよね？」

蒔風は各世界で知り合った者と写真を撮って携帯に収めている
最後の戦いの後にも写真を撮ったので、フェイトはそれを知っているのだ

そのフェイトの言葉に蒔風が起き上がって答える

「持ってるよ？まあ、こんなんだけど」

蒔風が携帯を取り出し、みんなに見せる
色は蒼。
正面にはソーラーパネルが付いている

「それで、その携帯に不幸のメールは？」

「来たことないな。一度も来てないよ」

「・・・・・（ビスッ！！）」

「目が！！！」

なにもない状態の蒔風の目に再び襲いかかる衝撃

「で、どうするの？フェイトちゃん」

「えっと・・・・」

蒔風を残し、携帯を見て回るフェイト達
ちょうど買い終わった頃には蒔風も回復していた

「じゃあ帰るね」

「うん、ばいばーい」

そう言って別れるなのはたち
すずかとアリサはリムジンで、他の四人は徒歩で帰ろうとする

と、そこで蒔風の目にある物が止まった

「すずか・・・その本は？」

「え？図書館で借りた本だよ？」

「ちょっと見せてくれ」

そう言って蒔風がその本を見せてもらう
その本の内容に蒔風が目を見開き、手が震えだす

「すずか、この本を借りた図書館はどこだ？」

「えっと・・・風芽丘図書館だけど・・・」

「リンディさん、俺、帰り遅くなるかもしれません」

それだけ言って蒔風は走り出した

他のみんなが理由を聞く暇もなかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

風芽丘図書館

そこに到着した蒔風は本の内容を見て必死になってそれを探した

その内容は蒔風が驚くに値するものだった

それは、名前、地名、多少の表現が違うだけで、間違いなく蒔風の物語「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」の物だった

この世界では蒔風の物語はラノベではなく、図書館に置いてあるような書物として存在しているようだ

（確か番号はＤ－４５だったはずだ、Ｄ－４１、Ｄ－４２－００１、Ｄ－４３、Ｄ－４４、Ｄ－・・・・）

そしてその位置に蒔風がたどり着いた

が、そこには本はなかった

Ｄ－４４のあとには、隙間なく入ったＤ－４６の本が並んでいる

蒔風がその場を見つけ、一瞬だけ涙がこぼれそうになり、受付に訊

いた

「すみません！Ｄ－４５のシリーズって、どこにありますか？」

受付の女性に聞くと、親切に本棚のところまで案内してくれた。
そして先ほど蒔風が立っていた場所まで来て、女性が教えてくれた

「こちらがＤ－４５番ですよ」

「・・・・ありがとう・・・・ございます・・・・」

「はい」

そう言って女性は受付に戻る
そこにあったのは「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」ではなかった
そこにあったのはさっきは「Ｄ－４６」だった本があった
番号が「Ｄ－４５」になっていた
つまり、このわずかな時間で「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」の情報はこの世界から消えてしまった

「俺の世界が崩壊・・・仕掛けてるからかな・・・まだなくなってはいないだろうけど、さ」

各世界を描いた物語
それらは確実に存在するものだ
作者と呼ばれる者たちは、その「物語」を感じとって作品を作る

そして蒔風の世界は崩壊しかけている
つまり、発信する「物語」がないのだ。

いや、あったとしてもそれだけの力が世界にはない
それを目の当たりにした蒔風は、図書館のベンチに倒れ込んだ
「キッツ・・・これはきついなぁ・・・・」
そう言って目元を覆う
閉館のアナウンスが聞こえるが、蒔風は動かない
と、そこに声をかける一人の人物がいた
「どうしたん?気分でも悪いんか?」
蒔風が目をあけると、そこには車椅子に座った少女がいた
「・・・いや、なんでもないよ。ありがとう」
「ホンマに大丈夫?」
「大丈夫だよ。きみは・・・」
「うちは八神はやて。いつもは一緒に来てる人がおるんやけど、今日は一人や」
「俺は蒔風舜・・・ふう、いや、こんな辛気臭い顔しても始まらんな!!」
「どうしたん?落ち込んでたり元気になったり」
と、そこに図書館員が閉館だから出てくださいと言いに来たので、

二人ともそそくさと図書館から出た

「・・・・・・」
「・・・・・・」

「帰るか・・・」

「うちも帰るわ・・・」

そう言って車椅子を押し始めるはやて
キイキイという音だけが鳴る

「・・・・なあ」

「なんだい？」

はやてが蒔風に声をかけた

「足の事とか、聞かへんの？」

「特にはなぁ・・・そこを気にするわけでもないし・・・あ、疲れたら言ってくれ。押すよ」

「うん・・・じゃあ頼むわ」

そう言って、蒔風が車椅子を押す

「うちの足な、原因不明の病気で、動かへんのや」

「原因不明？」

「あ、でも病院の先生とか一生懸命やし、いつかは絶対に治るって信じとるし！！」

そういうはやての足を、蒔風が見つめた

（何かが足に停滞してそれが麻痺の原因になってる？・・・・その何かってのはわからないけど・・・・）

「どうしたん？」

「いや、なんでも」

そう言って交差点に差し掛かったはやてと蒔風

「俺ん家こっち」

「うちはこっちや」

そう言って逆方向を指さす二人

それに二人が同時に噴き出し、苦笑した

「あははは！じゃあ、ここでお別れやな」

「だな。その脚、少しいいか？」

「ん？」

そう言って蒔風が右手に力を借りる

そしてはやての足に触れると、バキンと音がして何かが砕けた

「あれ？」
「あれ？」

二人同時にそう言って、はやてが口を開く

「少し軽うなった気がする・・・ありがとな！！」

「あ、ああ・・・（溜まってた「なにか」は消せたけど、大元が消せねえ・・・あれじゃまた溜まるだけだ・・・）」

それから少しだけ話して、お互いに手を振って家路に着く

そこから少しだけ離れ、はやてに声をかける人物が。

「はやて！！」

「あ、みんな！！どうしたん？」

「いえ、今から一緒に家に帰るところです」

「車椅子、押しますね」

「ありがとな、シャマル」

「はやてー。今日の晩御飯はー？」

「ヴィータはくいしん坊やなァ。きょうはなぁ・・・」

ーーー

れから、二人には新しい機能を搭載したの」

「新しい・・・力？」

「そう、この子たちには「カードリッジシステム」が新しく搭載されているんだ」

「それって、あのシグナム達と同じ・・・」

「うん。主人の想いとか、信頼にこたえられなかったのが、よっぽど堪えたんだね・・・悔しかったんだよ」

「レイジングハート・・・・・」

「バルディッシュ・・・・・」

「ほうほう、それでそれに対抗するために彼ら自ら搭載してくれと頼んだの？」

《はい。私のマスターの敵わない相手ではなかったです》

《すべて我らの力不足ゆえに。だからこそ我々が主に見合う性能を持たなくては、と》

「やるなぁ・・・お前ら、十分に騎士だよ。主人に仕え、忠義を尽くすってな」

《《ありがとうございます》》

「じゃあ次からはなのはたちも戦闘に？確かなのはのリンカーコアは・・・」

「もう大丈夫！！」

「うん。それだったら出てもらう事になるかもしれない。で、それに関する注意点があるの」

「「はい」」

「まずは二機とも共通の事項ね。それぞれに三つのモードが搭載されてるんだけど・・・・」

エイミィが説明する

レイジングハートにはアクセル、バスター、エクセリオンモードが、バルディッシュにはアサルト、ハーケン、ザンバーモードが搭載された

どれも強力なモードだが、カードリッジシステム自体がまだあまり出回っておらず、普通は繊細なインテリジェントデバイスのレイジングハートやバルディッシュに着けるものではないらしい。
だから最初の二つのモードは大丈夫でも、最後の一つ、フルドライブと呼ばれるエクセリオンとザンバーはなるべく使わないこと
特にレイジングハートはフレーム強化がしっかりとするまで、絶対に使用禁止なのだそうだ

「それで、新しく生まれ変わった二人の名前は、「レイジングハート・エクセリオン」と「バルディッシュ・アサルト」だよ！！」

《私たちとしては今まで通りで構いませんが》

「まあ、正式名称はこうだ、って覚えときゃいいだろ？よかったな。

これで勝てる見込みが出てきたな」

「でも、まだこの形のデバイスは普及されてないから何が起こるか・・・」

エイミィの心配そうな声に蒔風が返す

「大丈夫ですよ。彼女たちなら、使いこなすはずですよ」

「う～～ん・・・無茶苦茶やって無理やり慣らすとかしそうで怖いなぁ・・・」

「・・・否定できない」

そうして夜が更けていく

戦闘準備は整った

これからが本番だ

to be continued

なのはA's ～日常と、崩壊の故郷～（後書き）

アリス「今回ヴォルケンズ全然出ない！！」

しかたありません

でも、次回からはある程度のオリジナル展開で行きます

ア「そしてだんだんと消えゆく蒔風の世界・・・ですか」

そうですね

崩壊してないと言っても、消えかかってはいますからね

すずかさんの持ってた本も、消えてしまったでしょう

ア「せつない・・・・」

それが世界ですよ

ア「次回、戦闘と分岐点」

ではまた次回

ドライブ、イグニッショ〜ン

1992

なのはとフェイトが新たなデバイスを入手してから次の日

学校からまっすぐ帰ってきた蒔風はユーノ、クロノと話しこんでいた

なのはたちは学校帰りに何処かによってきているらしい

「なあクロノ。結局「闇の書」ってのはどういったプログラムなんだ？」

「と、言うと？」

「いや、そんだけすごい力を持つ魔導書ならさ、確かに悪いことにも使えそうだけど、言い事にも使えるかもなんだぜ？」

蒔風の言葉に、ユーノが賛同する

「そうだね。もし持ち主がいい人なら話せばわかってくれるかもしれない」

だが、その言葉にすぐにうなずかないクロノ

「そうは言い切れない・・・今回の「闇の書」の騎士たちは何かおかしい」

「おかしい？」

「ああ。騎士たちは本来外敵から主を守るために動くのであって、自分から動くことはしない」

「主に命令されたんじゃないの？」

「そうかもしれないけど・・・あともう一点。騎士たちが感情的すぎる」

「どういうことだよ」

「前も言ったけど、彼らはプログラムだ。かつての事件で、彼らが感情的なものを見せたという記録はない」

「でも、なのはとフェイトは彼女たちにはっきりとした個性があるって言ってたよ？」

「そうだな。ヴィータもシグナムもザフィーラも、ハッキリとした感情で俺に向かってきたしね」

「それに最後の一人も蒔風を見て「悲鳴」を上げてたし」

「あんときそんなに怖かった？」

「「怖かったと思う」」

「え～～～？」

「だからこそ今回はハッキリとしたことは何も言えないんだ」

「でも、一体どんな風になるのかな」

「どんなふうに？」

クロノがユーノの言葉に首をかしげる

「うん。そんな魔道書なら今までだって発動してきたんだろう？その時にどんな風になったのかって・・・」

「ああ・・・記録上、ろくなことになったことは一度もない。毎回破壊にしか使われていない。だから今回も・・・絶対とは言えないが、おそらくは・・・」

そこで少し顔を暗くするクロノ

そこでユーノだけに蒔風が念話で話しかける

『ユーノ・・・確かクロノのお父さんは・・・』

『え？・・・・うん・・・うん・・・そうだったんだ・・・』

『謝ると余計に気を遣わせるから、言わない方がいいよ』

『うん・・・ごめん、クロノ』

届かぬ言葉で謝るユーノ

仕切りなおすかのように蒔風が会話を進める

「「闇の書」か・・・・情報が少ないな。何かトリガーになる情報があればいくらでも流れ込んでくるんだけど・・・」

「「世界」が与える情報か・・・・ユーノ、君に頼みたいことがある」

「何かな？」

「君には「無限書庫」で「闇の書」の情報を集めてほしい」

「無限書庫？」

蒔風の質問にクロノが答える

「無限書庫はありとあらゆる情報が、それこそ無限に貯蓄された書庫だよ。そこにならきっと闇の書の情報もあるはずだ」

「でも書庫なら普通に調べればいいんじゃ？わざわざユーノじゃなくても」

「いや、あそこはその貯蔵量の多さから、どこに何があるのかわからない状態でね・・・・」

「おいおいおい・・・・」

「でも、ユーノの持つ検索魔法なら、もしかしたら」

「あ、そっか。確か「スクライア」の部族は探索を生業にする部族だったな」

「そういうことなら任せてよ。絶対に見つける」

「よかった。そのための案内役も用意したかいがあるよ」

「なんだ。もう任せる気満々じゃないかよ」

「実はね。二人とも、入ってきてくれ」

クロノが声をかけると、奥の部屋から二人の女性が入ってきた
どうやらネコを素体とした使い魔のようで、頭からはネコ耳、後ろにはしっぽが見える
外見は同じで、双子のみたいだ。

「はぁ～いクロスケ。お久しぶりなのにそっけないぞ～？」

「ロッテ！！いきなり抱きついてこないでくれ！！やめっ、頭をッ！！うわぁ！！」

「はあ・・・ロッテがいきなりすまないな。騒がしい奴だが、気にしないでくれ」

「アリア、そういうなら助けてくれ！！」

そしてクロノがいきなりやってきた二人に揉みくちゃにされた

「んん？なんかおいしそうな子がいるね？」

「うーーーあぁっ！！もう！！話を聞いてくれないか！！」

そう言ってクロノがキレる
息を整えてから、クロノが紹介を始めた

「彼女たちはリーゼロッテ、リーゼアリアだ。今回、無限書庫での案内を務めてもらう」

「どうも～」「よろしく」

「二人はグレアム提督の使い魔なんだ」

「だったら結構やれるんじゃ？」

蒔風が二人に聞くが、手を振ってできないという二人

「あーだめだめ。こっちはこっちの仕事で忙しいから、案内したらそこまでだよ」

「そういうことです」

「じゃあ、君は早速向かってくれ」

「いまから！？」

「ああ、二人とも、頼む」

「「はいはい」」

「うわ！？ちょ、まっ・・・・」

ガシッ！とユーノの両脇を掴んで連れていく二人

隣の部屋に入り、そこから転送ポートの明かりがポワ、と浮かんで、

三人は行ってしまった

「なんとも・・・勢いのある二人だな」

「あれでも僕の魔法戦闘の師匠だからね」

「まじで!?」

「ああ」

そう言って蒔風とクロノが会話を止めたところで、玄関のチャイムが鳴る
フェイトとなのはが帰ってきたのだ

「「ただいま!!」」

「はい、お帰りなさいな」

蒔風が出迎え、中に入れる
リビングに入り、クロノがユーノの事をなのはに説明した

「ユーノくん、調べ物に行ったんだ」

「そう。で、これからどうするかを話し合おう」

「騎士たち・・・ねぇ・・・」

どうしようかと悩む二人に、なのはとフェイトがどうしたいかを言った

「あ、あの・・・わたし、しっかりあの人たちとお話ししたいです！！」

「私も。そのために必要なら、戦います」

その言葉の裏にどれだけの思考があったのか
だが、もうこの二人の魔法少女は心に決めたようだ

「ほほ。騎士たちを救うのかいな。いいねぇ」

「舜君に教わったんだよ」

「救える者は根こそぎ救う、って」

「素晴らしいね。ありがとう」

そう言って計画を立てる蒔風たち

現状、彼らの足取りを捕らえることはそう難しくない
だが、対人に特化したその力には、足止めが聞かず、すぐに逃走されてしまうのだ
さらにあのバックアップの女性の力で、あとを追うこともできない

「だから今回、あいつらを閉じ込めるために結界を張る」

「誰が？ユーノは調べもんでしょう。アルフだけじゃ・・・」

「いや、武装局員をグレアム提督の口利きで借りることができた」

「なるほど・・・だったらオレも一つ手を打とう」

そこに蒔風も乗っかる

「・・・というわけなんだが」

「それは・・・イケるかも」

「クロノくん、舜君。あのヴィータって子とは、私が一人で戦う」

「私も、シグナムと一対一で」

「それはいいけど・・・勝てる？」

「「勝つよ」」

「なら問題ないな。結界はこっちに任せろ」

計画は整った

後は実行するまでのこと

ーーー

そこに数十人の武装局員と、それに囲まれたヴィータとザフィーラがいた

「こいつら・・・やっぱり動きははばれていたようだな」

「関係ぇねえ。こいつらちょろいよ。ぶち抜いちまおう」

と、ヴィータが意気込んでグラーフアイゼンを握りしめる
そこで、急に局員が離れて行ってしまった

「なに!?」

「ヴィータ、上だ!!」

ザフィーラの声にヴィータが上方を向く
そこにはデバイスを構えたクロノと、その周囲に浮く数百の魔力刃があった

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト!!」

クロノが号令をあげると、その魔力刃一つ一つに環状魔法陣が取り巻き、発射と同時に二人に標準を合わせ、一斉に降り注いだ!!!

「させん!!!」

ザフィーラが一歩前に出る

そして腕を突き出し、目の前にバリアを張ってそれらを防いでいった

バキンバキンバキンドドドドンッ！！！！

魔力刃がバリアに当たり、爆散する
だが、すべては防げなかったのか、三本がその腕に突き刺さっていた

「ザフィーラ！！」

「大丈夫だ。この程度では、効かん！」

バキン、と腕の筋肉を絞り、魔力刃を砕くザフィーラ
それを見つめるクロノ

そしてクロノが腕を上げると同時に、離れて言った武装局員の準備が整い、すぐさまに結界が展開された。

「これは！？」

「俺たちを閉じ込めるつもりのようだ」

そう言って身構える二人

クロノがビルの屋上に降りる
そこには二人の魔法少女と一人の使い魔が

「二人とも、危なくなったら助けるからね？」

「うん、大丈夫」

「今度は・・・負けない！！」

「さぁって、あたしもあいつに用があるしね！！」

そう言ってなのは、フェイト、アルフが上空の二人を睨みつける

と、そこに結界を突き破ってシグナムが乱入してきた

「ふう・・・何とか誘導成功、だな」

蒔風がなのはたちの隣に着地する

どうやら結界の上部に立って、シグナムをおびき寄せていたらしい

「あとは、任せる」

「あと一人を探さなくちゃならないしね」

「うん。まかせて！」

「行こう、なのは！！」

「レイジングハート・エクセリオン・・・」
「バルディッシュ・アサルト・・・」

「「セーーット、アップ！！！」」

そうして新たな相棒（デバイス）を手に、二人の魔法少女が戦いを挑む

「この結界じゃ逃げらんねえ。それにあいつらのデバイス・・・」
「強化してきているようだな。油断するな」
「だが、我らにはなすべきことがある」
「「「我らが主のために、いかなるものでも打ち倒す！！！」」」

「僕たちは残りの一人、または主を探そう」
「おっけ。オレはこの作戦の関係上、あまりここから離れたくないから・・・」
「僕が外、君が中だな。ここからはどれくらいまで離れられる？」
「ざっと六十メートルくらい。それ以上離れると弱まっちまう」

「わかった。じゃあ行こう」

「ああ。この事件を終わらせような」

「「誰の悲劇も起こさないままに」」

蒔風とクロノが腕を一回組んでその言葉を言い、離れて行った

各々の戦いが始まる

そして・・・・

「ここまで大きく管理局が動くと厄介だ・・・少し手を出そうか」

裏で蠢く陰謀、知略。

どうやら素直に解決されてはくれないようだ

2006

to be continued

なのはA's ～迫る戦いのときなの～（後書き）

てっきり昨日が土曜だと思ってました、作者です

アリス「で、今日カラオケ行ってそこで気づいたんですよね」

はい

フリータイムの時間表で恥かいた・・・・

ア「今回はなんかいろいろと時間軸違ってましたね？」

そうです！

ユーノの無限書庫、リーゼたちの登場、市街戦の展開・・・・

これはひとえに異物の混入が原因です

ア「「奴」とか蒔風ですね」

よく時間旅行とかで昔言われてた言葉「そこらの枝一本折っただけで歴史が変わるかも」というやつです

特に彼らが何をしたわけでもないけど、何かが少し変わったということですね

ア「でも変わらないものもある、と」

はい

ア「ってかそれって順番とか間違えた作者のミスでは？」

2008

・・・・・否定しない

ア「うをおおい！！！」

だって前回書きあげてから
「やべ・・・ユーノ無限書庫に行かさなきゃ・・・・・」
って思いだしたしね！！

ア「胸を張らないでください」

すみません

ア「最近お気に入り登録や読者も増えてきたのですから、もうちょっとしっかりしてください」

そう！！
とてもうれしいのです私それが非常に！！

だからみなさん
ほら、この小説の下の方にある・・・おおぅ、いいよ・・・手を伸ばして・・・はぁはぁ

そうそう・・・いいねえ・・・その調子さ！！！

ア「それくらいにしないと運営に消されますよ、この小説！！！！！」

しまったぁ！！！
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・

ア「次回、戦闘、そして歪み」

ではまた次回

遥か天空(そら)響いてる　祈りは奇跡に

2010

なのはA's ～戦いの転機、狂気の叫びなの～

なのはとヴィータ、フェイトとシグナム、アルフとザフィーラが戦闘に入る

『まずは計画通りに引き離そう！！頼んだぞ三人とも！！』

『『『うん！！』』』

蒔風がどこかにいるかもしれない主、またはシャマルを探し出そうと走りながら念話を飛ばす

「お前らか・・・こないだ落としてやったのにまた来たのか？」

「今度は負けない！それに、今回はお話をしにきたの！！」

そういうなのはにヴィータがハンマーを向けて言った

「ベルカの諺にこう言うのがあんだよ。「和平の使者は槍を持たない」ってな！」

エッヘンどうだと胸を張って言ってやったヴィータに、なのはたちはきょとんとする

そんな三人にヴィータが意味の説明をした

「話し合いに武器持ってくるバカがいるかよ！！バーーーカ！！！」

「ば、バカって・・・いきなり攻撃してきた子がそんなこと言うかな！？」

『何やってんだ！！早くしろ！！こっちの準備は終わってんだ！！』

蒔風の怒号が飛び、そこで一斉になのはたちが動き出す

「レイジングハート、カードリッジロード！！」

ガシャッコン！！！

なのはの言葉（コード）と共に、レイジングハートから薬莢が飛び出し、魔力が充填される

「アクセル・・・シューーーート！！！！」

ドバァ！！

レイジングハートの先端から十個ほどの魔力スフィアが打ち出され、その数と勢いに誰よりなのはが驚いた

（やっぱり凄い！！少しやっただけでこれだけの数！！）

そのスフィアがヴィータを取り巻き、檻のように閉じ込め動きを止

める
だがそんな状況でも、ヴィータは余裕そうだ。

「こんな数の球、制御できるわけねえだろ！！」

そう言いながらヴィータが小さな鉄球を四つ取り出し、グラーフアイゼンで撃ち放つ
それらが赤い魔力を伴ってなのはに飛ぶ

だがその言葉になのはのデバイスが答える
この半年間、欠かすことなく彼女の成長を目の当たりにしてきたその相棒が、一切の迷いなく言い放った

《できます。私のマスターなら》

直後に起こったことが、この一言の証明となった

ひゅんひゅんと跳び回るなのはのスフィアのうち四つが、ヴィータの放った鉄球を、的確に打ち砕いたのだ！！

「なにぃ！？」

さらに残りのスフィアもギュオッ、と方向を転換し、一斉にヴィータに向かって行く。
ヴィータは瞬時にクリスタル状のバリアを張るが、幾度も幾度も衝突をしてくるスフィアが、そのバリアを削っていく

ビキィ！！！

「な！？マジかよ！！」

ついにそのバリアにひびが入る
もうもたないと判断したヴィータは、一瞬の隙間を見てバリアを解き、スフィアの檻から抜け出した
大きく弧を描いて飛んでいくヴィータの後を、なのはのスフィアが高速で追尾していく

だがヴィータも逃げてばかりではない
大きく回って、しっかりと背後にスフィアを連れて、なのはに向かって突っ込んできた
なのはすれすれを通過していくヴィータ。

そこでヴィータがさらに飛びながらなのはの方に振り替える
なのはの元に後続のスフィアが迫る
あれだけの高速で、あの数。まず当たったとヴィータは思った

だがそれがむなしくも外れた
すべてのスフィアがなのはの身体から一センチにも満たない場所を通過していき、先ほどとなんら変わらずヴィータに向かって来たのだ

「う、うわあああああああ！！！」

ドドドドドン！！

首を曲げて後ろを向いていたヴィータは逃げきれず、そのスフィアが数個命中する
だがさすがに全弾命中とはいかず、いくつかはアイゼンで叩き落とされたようだ

爆発が起き、その煙の中からヴィータが姿を現す

「・・・お前!!名前なんてんだよ!!」

ヴィータがパンパンとスカートのほこりを落としながら聞いてきた
それはきっと、相手の実力を認めた騎士の心得なのだろう

「高町、なのは!!」

なのはが元気よく答える
だがヴィータにはいささか言いにくかったようで

「た・・高町、なんの・・・わっかりにきぃ!!おい、なんとか!!」

「なんとかって・・・ちゃんと覚えてよ~!!」

「うっさい!!もう手加減はしねえ。お前を対等の実力者として相手してやる!!!!」

「・・・望む・・・ところだよ!!!!」

「行くぞ!!アイゼン!!!!」

《アイサー!ラケーテンフォルム!!!!》

ヴィータの掛け声とともに薬莢が排出され、ハンマーヘッドの片側に推進噴射口に、もう片方がスパイクに変形する

「うをおおおおおおおおおお!!!!!!」

ヴィータがその噴出口からのジェットで猛回転し、遠心力を加えてなのはに殴りかかる
その攻撃をプロテクションで防ぐなのは

そのまま取っ組みあって二人はその場から離れていく

ーーー

「主の盾となり守護するもの、「守護獣」だ！！！！」

「同じようなもんじゃんかよぉ！！」

ドッキャァ！！！

アルフの攻撃が再びザフィーラに炸裂する
その攻撃をクロスした腕で受け、その体が倒れることなく地面を滑る

「俺はヴォルケンリッターが一人、蒼き狼・ザフィーラ！！！この身が粉塵にまで砕かれようとも、主には一歩も近づかせん！！！！！」

「だったらこういくことになってんのが主にさらに罪と着せるって考えてんのかい！！！」

ドがァ！！！

主に仕え、その身を守ることに使命を燃やす二人が、その身に怒りの炎をともして動いていく

ーーー

「強いですね、シグナム。それとレバンティン」

「ふ」

《それはどうも》

シグナムが強者を前に狂喜する戦士の笑みを浮かべ、賛辞を返す

「お前もな。それと、そのデバイスも・・・名はなんという？」

「フェイト・テスタロッサと、バルディッシュ」

《ありがとう。以後お見知りおきを》

「あなたの目的を教えて！！手伝ってあげられるかもしれない！！話を聞きたいんだ！！」

フェイトのその叫びに、シグナムは諦めたような声を出す

「無理だ。我らはもはや相容れぬ場所に立っている。そんなことは不可能だ」

その言葉にフェイトはムカッ、ときた

そして、ああ、これがこの前に舜が思った怒りなんだ、と知った

「ヤダは堕落者のセリフ、無理は無能のセリフ！！やろうとすれば出来るのに、これを言う人はそういう人！！！・・・なんだってさ！！！」

「な・・・んだと!?」

「どんな話でも聞くから!!あなたの主なら、酷い人ではないと思う!!!だから、お願い!!!!」

その言葉にシグナムが黙り、そして聞いてきた

「その言葉、誰の言葉だ」

「私の友達。私を・・・闇から連れ出してくれた人の言葉!!!」

シグナムは、そうか、と呟き、そしてそんな朋のいるフェイトを少し羨んで、それでもこう言った

「こんな状況でなければ、お前とは最高の友になれただろう」

そう言いながら武器を構えるシグナム
その眼には一切の迷いがない

「だが、この身には為すべきことがある。心躍る戦いだが、それに没頭してもいられん。
そこを退いてもらおうか・・・・殺さずに済ます自信がない」

シグナムから殺気が噴き出す
一切の加減のない、相手の魂を切り裂く剣(レバンティン)がぎらりと光る
その眼光がフェイトを射抜き、双眸がギチリと引き上がる

だが、フェイト・テスタロッサは退かない

なぜなら、これよりも恐ろしい殺気を知っているからだ
自分のために怒り、幾度も止めに来た少女と少年
彼らの優しく、そして容赦のない少女の怒り、少年の殺気に比べれば、この程度などに恐れることなどあるだろうか

「大丈夫です・・・私が、勝ちますから」

ヒョォォォォオオオオオ・・・・・・

二人の騎士が構える
そしてその場で再び打ち合う

そして彼女らも動いていく

ーーー

結界の周囲を取り巻く武装局員に念話で号令をかける
そして彼女達の周囲に変化が起こった

なのは、ヴィータの周辺が何処かの世界の上空に塗りつぶされていく
どこまでも空が続き、雲が停滞している

フェイト、シグナムの周囲は広大な砂漠に変化した
照りつく太陽が、二人の身体をジリジリと焦がしていく

アルフとザフィーラの周囲にいたっては何処かの森に変わった
すがすがしい空気の漂う、美しい森が二人の周囲に展開された

「なっ!?これは!!」

「どういうことだ!!転移魔法!?」

「『ヴィータ!シグナム!!』くっ、念話も通じんか!!」

急に世界が変わり、三人が各世界でうろたえる

だが、それもすぐにやめた
なぜなら、眼前の敵がこれの原因であることは明らかだし、彼らを
倒す以外にこの世界から元の世界に戻ることはできないからだ

各世界での戦闘が始まる
それを眺める蒔風

「さって・・・こっちも探すかね・・・」

そう言って蒔風が立ちあがり、そこでクロノから念話がきた

『見つけた。結界の外だ』

『距離は？』

『三十メートルくらいだな』

『だったらオレも向かう』

そう言って結界から抜けだし、クロノの元へと向かう蒔風
その姿はすぐに見つけた

クロノがデバイスをヴォルケンズ最後の一人の後頭部に向け、投降を促している

「これでいい♪あとは制圧するだけ・・・！！！！」

そこで蒔風がクロノに向かって大声を上げる

「クロノ！！！左だ！！！！！」

その声に反応しクロノが左を見る。
すると右側から突如として蹴りが飛んで来て、その体をビルのフェンスまで吹っ飛ばした

だが衝突はせず、蒔風がキャッチして受け止めた

「クロノ！！す、すまねぇ！！えっと・・・・右だ右！！！」

ビルの屋上に着地し、クロノを下ろす蒔風

バッギキャ！！！！

「僕側から言わないとわからないだろ！！！なんであの状況で自分中心なんだバカ！！」

その蒔風の頭をデバイスで殴りつけるクロノ

蒔風が殴られた頭をさすりながら謝っている

「んで、あんた誰よ」

そう言って蒔風が睨みつけたのは仮面をかぶった男だ

急に現れたその男は、まるで騎士の女性を助けるかのようにクロノを排除しにかかってきた

「お前たちはそこから動くな」

質問には答えず、それだけ言った男は女性の方に向いていった

「闇の書の魔力を使え。そうすればあの結界を崩せるはずだ」

「え！？で、でも・・・」

「失ったページはまた蒐集すればいい。今仲間を失ってはその闇の

書も・・・」

そう言って発破をかける男に、クロノと蒔風が止めに入る

「そんなことさせると思ってか？」

「たとえ闇の書が復活しても、主以外は使えない！！君のやっていることは無意味だ！！おとなしく投稿しろ！！」

その二人の言葉に、やっと耳を貸す気になったのか、仮面の男がこちらを向いた

「やれやれ・・・いずれわかる。我々の行動が正しかったとな」

「何を言ってるんだ？こいつ」

「・・・・・さあ・・・」

そう言って顔をかしげる蒔風とクロノ

その表情は余裕だ

それもそうだろう

相手は明らかに戦闘タイプではないバックアップ担当の騎士の女性に、戦闘力の高い男が一人

対してこちらはＡＡＡ＋ランクの執務官魔導師と、世界最強を自負する少年だ

だが、それを相手にしても仮面の男の態度は崩れない

「・・・いいのか？こんなところで私ばかり見ていて」

「なに？」

「私の能力も知らないで、二人でノコノコ出てくるからこうなる・・・」

シュパッ！！！

その音だけを残し、男が消える

と、同時に、蒔風の表情が硬く険しくなった

「！！！・・・フェイト！！！」

蒔風が跳躍し、一気に結界の中まで戻る

彼が感じ取ったのはフェイトの魔力の乱れ

その時彼女は・・・・・

――――――

闘が繰り広げられていたのだろう

両者とも身体から血を滴らせており、体力も限界に近い

（ここにきて・・・なお速くなるか、テスタロッサ。目で追えない攻撃が出てきた・・・長引くのは・・・まずいな）

（強い・・・近接戦闘（クロスレンジ）も中距離戦闘（ミドルレンジ）も圧倒されっぱなし・・・スピードで引っ掻きまわせている今はいいけど・・・これ以上時間をかけるのは・・・舜、クロノ、まだなの？）

互いに互いを牽制し合い、構えたままビシリと動かなくなる

どう動くかを目で追っていく

さらに相手の目の動きを見て、自分の動きを上書きしていく

砂が流れて、一瞬だけ静かになって、そして・・・・

「うあああああああ！！！」

「はあああああああ！！！」

両者共に飛び出し、剣を振るう

その剣が火花を散らしてぶつかり合う！！！！

が、

「ガッ！？ハッ！！！」

それよりも早く、フェイトの身体を貫いた物があった

それは左腕だ

空間魔法で歪められたフェイトの体内を、先ほどまで蒔風の目の前にいた仮面の男の左腕が貫いていた。

そしてその腕の先にはフェイトの金色に輝くリンカーコアが握られている

「貴様ぁ！！！！」

シグナムが激しく激昂する

二人だけの勝負に、異物が乱入し、戦いを穢されたのだ。

騎士として、そして武人として、シグナムの全細胞が怒りに震えていた

だが仮面の男はそんなことは気にもしない

「こうやって奪われる・・・世界最強もなんてことはないな」

そう言ってからシグナムに一瞥する男

不意打ちとはいえ、自分と同等か、それ以上の実力であるフェイトを沈めた男に、シグナムが身構える。

だが仮面の男は遠くに何をするわけでもない

空間が固まった

そこに轟く獣の叫び

「貴様ァァァアアアアアアア！！！！！！！！！！！」

ゴキャアッ！！！！

男の背後に瞬間移動でもしたのか、現れた蒔風がその後頭部に回し蹴りを食らわせる
だが、男はすでにその場にはなく、少し離れたところに退避していた

「遅かったな。だがもぶっ！！？？」

退避した男の言葉はそれ以上続かなかった
男が退避したその先がわかっていたかのように現れた蒔風が、男の頭を掴み、後ろの岩場に叩きつけたからだ。
後頭部を、この世のすべての衝撃をかき集めたのではないかという程の力で叩きつけられた仮面の男。
その仮面の下から血が噴き出して地面を赤く染め上げる
蒔風が男を叩き付けた高さが百メートルはあろう岩場が、土砂崩れの後のように粉々に砕け散った

さらに蒔風が首根っこを押さえつけ、地面に男を寝かせると、拳を振りかぶり、思いっきりそれで殴り潰す。
その拳は顔面ではなく、男の右腕を捉え、骨と肉を一つの塊にしてしまった

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！」

男の悲鳴が響き渡る

そして蒔風が鮮血に彩られて、瓦礫の中から出てきた。
男はその場に置き去りにされている。

蒔風の顔はもはや狂気に満ちていた。
いや、これもまた彼の顔の一つだ。

すべてを理解する彼は、狂気ですらもその身に宿す。
最高の理性に、最凶の狂気。
その二つを持ってすべてを理解する彼の、黒い部分がまさにこれだ。
もし彼と「奴」の立場が逆なら、おそらくこの姿になっていただろう。

そしてその姿にシグナムは戦慄した。
恐怖が体を駆ける
全身の肌がざわつく
すべての髪の毛が逆立った

コレハホントウニショウガクサンネンセイノショウネンナノカ？
コレハアノトキケイカイニワライナガラワタシタチトタタカッタショウネンナノカ？

そのとき、シグナムの脳裏にあるフレーズが響いた

《救世主にして破滅の者》

すなわち

「翼・・・人・・・・・」

今なら信じられる
この少年は間違いなく伝説の通りの人間だ

いかなる概念にもカテゴライズされない、たった一人の存在
すべてを理解するものであり、誰にも理解はされない少年

その少年の後ろで、男が死にかけの声で言った。

「私に・・・・ダメー・・・を与えても・・・駄だ・・・」

そう言って男の姿が消えた。

「ど、どこへいった!!!」

シグナムがその姿を探し始めるが、もはや影も形もない
そんなシグナムに、少年が声をかける

「なあ・・・・ちっとつき合ってくれねえか?」

「・・・・なに?」

「あノバ鹿のセいでのーミ噌わいチまいソウなンだヨ・・・・」

蒔風がギチギチと話す
その眼には、必死になって狂気を抑え込み、一歩手前で止まっているのがうかがえた

「だカラちョッと憂サ晴らシニ付き合ッテもラウぞ！！！！」

「くっ！！！！！あああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

「あはははははははははははははははははははは！！！！！！！！！」

シグナムが蒔風に突っ込んでいく
そこで蒔風が感情を抑え込むのをやめた

戦闘狂（バトルマニア）と狂戦士（バーサーカー）
タイプの違う、戦いに狂うものが衝突した

――

蒔風とシグナムが衝突したとき、クロノは自分の目の前の事象に目を疑った

砂埃でよく見えなかったが、確実に蒔風によって戦闘不能にされていた仮面の男が、無事な身体で目の前に現れたからだ。
それを証明するかのように、その手にはフェイトのリンカーコアがあった。

「これも使え。それで結界を破壊し、仲間を連れて逃げろ」

「ど、どうして・・・」

シャマルの疑問に、男は答えない
だが、その顔は仮面に隠されていても、確固たる意志が存在した

「させるか！！」

クロノがそれを止めようとするが、身体にバインドを掛けられ、その場に倒れてしまう

「こちらもあれだけやられたのだ。やり返さねば気が済むまい？」

そう言う男を、クロノが睨みつけた

一体この男は何者なのか
蒔風に潰されても無事な身体、これだけの距離の瞬間移動、そしてクロノをしのぐ戦闘力

ここから物語は加速する

魔法少女の戦いは、ここからが転機

to be continued

なのはA's ～戦いの転機、狂気の叫びなの～（後書き）

アリス「やってくれましたね仮面の男！！蒔風があんなにキレちゃって・・・・」

蒔風にはプレシアを救いきれなかったことがありましたからね
そのせいで・・・プツンと

ア「でも、原作知ってる人は一発でわかりますよね、あのトリック」

いわないでね！！

ア「それと戦闘シーン追加ですね」

はい
第七話の戦闘シーンをこっちに混ぜました
こうしないともう出せないので

ア「と、なると？」

ここからがオリジナル展開になるのかなぁ・・・・
自信ないなぁ・・・・

ア「がんばりましょうよ。次回、結界の破壊！？」

ではまた次回

強装型の捕獲結界・・・。ヴィータ達は閉じ込められたか。
Ｗｌｅｎ　ｓｉｅ　Ａｋｔｉｏｎ（行動の選択を）
レヴァンティン、お前の主は、ここで引くような騎士だったか？
Ｎｅｉｎ（否）
そうだレヴァンティン。私は今までも、ずっとそうして来た！

なのはA's ～やっとお話しができるの～

（クソッ！なんつーバカ魔力・・・それにこの精密制御・・・やっぱつええ！！！）

大空の世界でヴィータがなのはと交戦を初めて五分
ここにきてのなのはに抱いた感想はそれだった

強い

ただそれだけの事実が、ヴィータをこの世界に捉えて離さない

「さあ！！お話、聞かせてもらうからね！！！」

「まだ負けてねーよ！！」

そのヴィータだが、すでに疲れが現れてきている
無理もない。
なのははあくまで「ヴィータを疲れさせてから話を聞く」が達成できればそれで勝ち
だがヴィータは勝ったうえに逃走、下手をすると他の仲間も助けにいかねばならない
しかしこのどこまでも広がる青い空では、どう逃げようともなのはの視界に映ってしまう

（こいつは明らかに砲撃タイプの魔導師だ。無理ににげようとして離れたらその瞬間に撃ち抜かれちまう・・・）

故にヴィータは勝つしかないのだ
ここから逃げ出すためにはそれしかない
だが、それは容易ではない

ヴィータは距離をとっての戦闘が不得意だ
大抵の魔導師相手なら砲撃ごとぶっ叩いて粉砕するだけだが、なのはクラスだとそうもいかない

だからヴィータは考えを改めた
そしてヴィータはなのはに声を飛ばした

「おい!!高町なんとか!!」

「なのはだよ!!」

「なのんは!!」

「な・の・は!!!」

「うっせえ!!・・・確かにオメーは強い。それだけは認めてやる!だけど!!お前がどんなに強くても、あたし達にはやらなきゃならないことがあるんだよ!!!!」

(あたしたちは闇の書を完成させなきゃならねえんだ・・・・・つっても、最近なんか変な感じしてんだけどな・・・)

「だから!!それを話してって言ってるの!!」

ドウッ!!!

なのはが再びアクセルシューターを放つ
ヴィータがそれを横に避けるが、大きくカーブしてヴィータに再度迫ってくる

前にしたように、後ろにスフィアを連れてなのはに飛んでいくヴィータ
だが、今回とった行動は違った

なのはすれすれに通過し、素通りしてそのまま逃走を図ったのだ
このまま出はジリ貧になる
ならば、とヴィータは多少のダメージは無視しでもここから離脱することを選択した

「ッ！？」

なのははその行為に驚きながらも、自分にスフィアが当たらぬように制御する
だがそうなることはすでに知っているヴィータは、振り返らずに飛び去ってゆく

だがいかんせんスフィアの方が早い
一発、二発と当たっていくと、スピードは落ちたが、確実に距離は稼いでいった

（制御できるからって、そのまま戦えるわけがねえ・・・だったらその間に逃げてやる！！）

最後に三発同時にヴィータに命中し爆発したが、まだ落ちてはいない
片腕を抱えてはいるが、まだ戦闘自体は続行可能だ

（よっしゃ！！勝った！！あとはこのまま・・・・）

逃げよう、というヴィータの思考が固まる
なぜならば、感じとったからだ

（なんだ・・・これ・・・いや、知ってる・・・これは砲撃魔導師に狙われた感覚！！だけどっ！！）

バッ！！とヴィータが後ろの方に振り替える
そこには自分にデバイスを向け、その鋭い眼光ですでに自分を捉えたなのはがいた
だが距離はかなり離れている

もし撃てるのならば、長距離なんてもんじゃない・・・それは、超々度距離砲！！！！

「な・・・こんな距離であたしを捉えて命中させるなんてそんなこと・・・・・」

そこでヴィータがハッ！！と気付いた
たしかこの少女は、まさかと思うようなことをやってのける
まさか・・・・まさか、まさか！！！！

そのヴィータの知りようもないレイジングハートが、なのはの手の中でつぶやいた

《ですから言ったでしょう。私のマスターなら、できると》

「いくよ！！レイジングハート！！！」

《ＯＫ、マスター。カートリッジロード。ディバイン》

「ディバイーーーーン！！！！！」

《バスター》

「バスターーーーーーーーー！！！！！！！」

ヒィィィイイイイイイイ・・・・・ドバウ！！！！！

桜色の砲撃が、音速を越えてヴィータに迫る

ドッパン！！パァン！！パァン、パァン！！！！

あまりの威力とスピードに、途中の待機がはじけ飛び、いくつもの空気の壁をぶち抜いていく音が聞こえた

「う・・・うをおおおおあああああああああああ！！！！

！！！」

その砲撃の衝撃波にさらされながらも、ヴィータは必死になってその砲撃を身体を捻り、回転し、地面を転がるかのように避けることに成功した

ドゴオオオオオオオ！！！！！

後方で砲撃が爆発し、その爆風でヴィータはなのはの方に近づいていって、戻ってしまう
なのはとの距離は目測で百メートルくらいか

「チッ！！なんてやろーだ・・・・」

「お話、聞かせてもらうよ！！」

なのはがデバイスを向け、ヴィータに宣告する
それにしてもこの少女、なんとも恐ろしい「お話」をするものである

（どーする・・・このままじゃ捕まっちまう・・・・・・・あれ？）

と、そこでヴィータがふと気付き、後ろの方を振り向いた。
そこはディバインバスターが爆発した地点で、もうすでにそこに爆炎はなかったが、ヴィータはそこを見つめて思った

（確かあの砲撃は直線型・・・はずれたらエネルギーが切れるまで

どこまでも飛んでいくはずだ・・・だったら・・・・

あれはいったい何にぶつかって爆発したんだ?)

その考えに至ったヴィータは、すぐさまに思いついたことを実行した
その手に魔力を込めた、バスケットボールくらいの大きさの球を作り出す

なのはが身構えるが、ヴィータはそれを撃ってくることはしなかった
だから、なのはは急なその攻撃に対処することはできない

その行動とはまさしく、ヴィータがその球を、ハンマーで打ち砕いたことである!!

球が割れ、中から膨大な光と音が噴出される
衝撃はないが、そのあまりの光と音の暴力に、なのはが若干落ちる

だが術者であるヴィータには何の影響もない
その隙にヴィータがとった行動はまさしくこの世界、否、この空間からの脱出の手がかりを見つけることだ。

そして、見つけた

空間の一部

雲の漂うそこが、ほんのわずかだが歪むのを視認したのだ

「アイゼン！！！」

《アイサー！！》

ヴィータが特別でかい鉄球をそこに叩きこむ
相手のバリアや砲撃をぶち壊すことに特化したヴィータの攻撃に、

その空間が割れた

青空は消え、元の夜の闇が戻ってきた
後ろのビルの屋上に、なのはのディバインバスターが当たった跡が
しっかりと残っていた

「よっしゃあああああ！！！！」

「あぁっ！！」

ヴィータがガッツポーズをとり、なのはが項垂れる

そう、彼女たちはいたのは幻影の中だった
だが、幻影と言ってもただそんじょそこらにあるものではない

説明すると、実際の幻影は武装局員たちの物だ
だが、それだけでは飛び回られると抜け出られてしまうし、足場が急になくなったり、あったりするところが出てしまう

そこで蒔風が補助をしていたのだ
結界の中には四角形になるように各「龍虎雀武」が、三角形になるように各「獅子天麟」が突き立てられている

蒔風がしたのは陣を敷き、幻影をある特定化に固定すること
言ってしまえば、幻影の中の人物を中心に幻影の範囲が移動する、というものだ
だからどこまで飛んでも幻影を突き抜けることはないし、足場もあるところにしかない

だが、強度自体は武装局員のみの物だ
蒔風は幻影などのそういった類は得意としない
せいぜいが防壁を張ったり、少しの傷をいやしたりすることだ

そういったことを真に得意とするのは「賢者」や「聖人」のタイプの人間だ

ヴィータの幻影が破られたことで、他の幻影も解除されていってしまう
地上にはアルフと取っ組みあうザフィーラの姿が確認された

そして

「ぐあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

幻影が解かれ、シグナムの叫びが聞こえてきた

「シグナムッ！？」

ヴィータとザフィーラが声のした空を見る

そこにはシグナムと、片手でシグナムの頭を前から鷲掴みにしている蒔風がいた
アイアンクローをする蒔風の腕を、シグナムが両手でつかみ、足をばたつかせて抵抗しているが、蒔風は一切動かない
片手をポケットに入れ、ただシグナムの顔を掴んでいる
レバンティンはビルの屋上に落ちている

「な・・・なんだよあれ・・・おい！！あいつ、あんな奴なのか！？前と全然違えぞ！！」

確か前に一緒に戦って巨大ガメを撃退した時はあんなふうな奴じゃなかった
何かがおかしくなってる

ヴィータがなのはに問うが、その光景に驚いているのはなのはも同じだ

だが、すぐに合点がいった

ビルの屋上に倒れているフェイトを見つけたからだ

だが、フェイトが負けたくらいじゃあそこまで怒る蒔風ではないというのも知っている

おそらく・・・・

「誰かが・・・戦いに乱入したんだと思う」

「だれかって・・・だれだよ!!!」

『仮面の男だ』

そこにクロノの念話が入る

『クロノ君!!』

『いきなり現れたこいつが、フェイトのリンカーコアを非道なやり口で奪ったんだ!!!畜生!!!』

「そん・・な・・・」

「おい!!何があったんだよ!!!」

ヴィータがなのはに説明を求めるが、それよりも早く結界外のシャマルから念話が入った

『みんな!!今から結界を壊すから、その隙ににげて!!!』

結界の外でシャマルが叫ぶ
傍らには仮面の男、そして少し離れてバインドされているクロノがいる

「闇の書よ・・・守護者、シャマルが命じます。眼下の敵を打ち砕く力を・・・今、ここに！！」

闇の書のページが次々と消失していく
それに伴い、その中心にとんでもない量の魔力が蓄積される
そしてそれは稲妻のように天空へ昇り、周囲の雲を巻きこんでいく

「やめろ！！ここら辺一体を吹き飛ばす気か！！！」

「大丈夫です・・・街は壊しません。中の魔導師も、適切な方法をとれば回避できます」

シャマルが弁解する
彼女自身だって、これが言い訳にすぎないことはわかっている
だが、今の彼女にはこれしか方法がないのだ

「それでいい」

そう言い残して男は消えた
だが、クロノのバインドは解かれることがない

「結界だけ破壊して・・・撃って、破壊の雷！！！！」

《ゲシュリーベン》

闇の書がその命に呼応する
漆黒の雷が天空に溜まり、一気に結界を破壊しようと迫ってきた

「？・・・ああ・・・面白そうなケンカ相手じゃねえかよ」

そういったのは結界内の蒔風である
すでに気絶してしまったシグナムをフェイトの隣に丁寧に置き、上空でバリアを破壊しようとしている雷を見る。

「おお〝い！！てめえらぁ、行くぞゴラァ！！！！！」

蒔風の号令に、各地点に突き刺さった計七本の剣が呼応する

結界内に巨大な四角形の陣、そして三角形の陣が現れる
さらにその中心地に、「林（りん）」を突き立てる

「あはははははははは！！！！これでやぁっとスッキリできそうだ！！！！」

バガァ！！！！

結界が破壊され、雷が地面に向かって突き進む
だが、それが地面に到達することはない

蒔風の二つの陣と、二つの剣による防壁に阻まれているからだ
地面からドーム状に展開されたバリアが雷の進行を拒む
四神、三獣の力はもちろんのこと、防御に特化した「林」の力は、
闇の書のページを半分埋めた魔力をもってしても破られることはない！！！！

「ぎいいいっひっひっひっひっひっひひ！！！！いいねえいいねえ、サイコォだねえ！！！やりがいのあるケンカ相手だクソッタレぇ！！！」

それに驚愕したのはシャマルはもちろんのこと、ザフィーラとヴィータ、さらにはなのはたちである

あの雷がどれほどの魔力量で生成されているかは一瞬で分かる。
ヴォルケンズなどは闇の書のその威力は知っている。
だからこそ驚愕した

あれを受け止められる人間が、存在していたのだろうか、と
事実、蒔風は人間の域を越えた存在なのだが

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

「そ、そんな・・・これでも破れないだなんて！！！！」

シャマルの顔が青くなる
仮面の男が差し出したフェイトのリンカーコアは、もうすでに使ってしまっている
それでも、蒔風のバリアは破られない

「こ、このままじゃ・・・ページが！！！」

次々と消失していく闇の書のページ
そしてついに最後のページまで消えてしまった

雷が消える
蒔風のバリアは黒く焦げながらも、依然としてそこに存在し続けている

パキン

そこでクロノがついにバインドを崩した
だがシャマルはそれには意を示さない
目の前の光景に、衝撃を受けるばかりだ

「な・・・なんで・・・」

そんなシャマルにデバイスを向けることなく、クロノが言った

「いいから、大人しく投降するんだ。あれを見ただろう？あれからは逃げられないよ」

「・・・わかり・・・ました」

そう言って闇の書をしまい、投降するシャマル

そこに通信が入る

どうやら、結界内でも各騎士は投降したようだ

無理もない

彼らのリーダー「烈火の将」シグナムが敗れ、さらにあれだけの力を見せつけられては、抵抗するだけ無駄という結論に至った

――――――

「ごめんなさい、まだ痛いとこないか?あったら言ってくれ。本当にごめん。あんなんにつきあわせちまって・・・・・」

そう言ってシグナムに頭を下げる蒔風

「あれは・・・仕方のないことだ・・・・・」

「そう言ってもらえると助かるけど・・・・」

蒔風がシグナムにもう一度頭を下げ、着席した

「さて、君たちの話を聞きたい。まず・・・一応名前を」

クロノに促され、皆自己紹介をしていく

「烈火の将・シグナム」

「紅の鉄騎(くれないのてっき)・ヴィータだ」

「蒼き狼・ザフィーラ」

「風の癒し手・シャマルです」

「よろしく」

「あ、ああ・・・」

握手を求めるなのは達に困惑しながらも、自己紹介を終えた

「やっと名前が知れたよ～・・・え？シャマル？」

シャマルの自己紹介に、蒔風が反応した

シャ○先生監修料理教室
←
シャ○（ポーン）
←
シャマル？（ピーン）
←
シャマル！！（ピンポーン）

「あんたかあああああああ！！！！！！！！！」

「きゃあ！？な、何がですか！？」

「なあ・・・この人の料理、どんなだ？」

そう残りの三人に蒔風が訊くと、三人はそろって視線を逸らし、何も言わなくなった

「なんで！？なんでみんな何も言わないの！？何か言ってよ～！！」

「やっぱりか・・・・」

「ち、違いますもん!!私、料理下手じゃないもん!!!」

（（（（（下手なんだな））））））

この瞬間、皆の想いが一つになった

「ま・・・まあ、それは置いといて」（置いとかないで～～）

「闇の書を完成させようとした理由、教えてもらいたい」

「・・・・わかった。話そう・・・・」

シグナムが口を開いて話し始めた

それは幸せな、そして残酷な話だった

彼らの主は、まだ小さな少女だ

彼女の誕生日に闇の書が反応し、ヴォルケンリッターは彼女の前に姿を現した

この魔法文化のない世界の住人の少女は、シグナムからの説明に戸

惑いながらも、最後にはこう言ってくれた

「じゃあ、今からみんなうちの家族や！！」

これには騎士たちも驚いた
自分たちはプログラムだ。闇の書と主を守るためにだけ存在している、言わば道具。

今までも多くの主に仕えてきた。
そのどれも力におぼれ、強欲で、彼らの事など一切考えもしないような人間たちだった

だが、そんな彼らに彼女は「家族」だと言ってくれた
自分たちのために服を買ってくれた
自分たちのために生活用具をそろえてくれた

そして何より、自分たちのために笑ってくれた

自分たちを意志ある「ヒト」だと認めてくれた
初めての経験だった
そして、それは騎士たちの欠けていた何かを埋めていった

闇の書の蒐集に関しても主は

「それは人様の迷惑になるからダメ。このままのんびりみんなで暮らしていこな？」

と、言ってそれを許すことはなかった

シグナムはある日聞いた
貴女に望む物はないのですか？と

それに少女はこう答えたのだ

「望むもんはもう手に入ってもうた。こんな素敵な家族がおるのに、これ以上何を望むんや？」

少女には家族がいなかった
両親は早くして他界
今は父親の知り合いという親切な「おじさん」が、財産管理や資金援助をしてくれているだけなのだそうだ

故に、彼女が望むものは「家族」だった
そんな当たり前の風景を、少女は何よりも求め、そして手に入れることができた
これ以上望むものなんて、あるのだろうか

もう一人でご飯を食べなくてもいい
もう一人で寝なくてもいい
もう一人で買い物に行かなくてもいい

それは幸せだった

今はみんなでお話ししながらご飯を食べれる

今は一緒に寝てくれる人がいる
今は今晩の料理を話し合いながら買い物ができる

そしてその幸せな生活に、騎士たちも確実に変わっていった

すさんだ想いは穏やかに
乾いた心は潤い
つり上がり、いつもキツイ表情だった顔はいつの間にか笑顔になっていた

帰れば幸せになれる場所がある
笑顔でお帰りと言ってくれる人がいる
いつでも主の笑顔が出迎えてくれる

ああ・・・自分たちはもうあんな戦いの日々には戻らなくてもいい・・・・
今のこの幸せを守っていこう
この主こそ、我らの求めた・・・・・・

だが、この世界はかくも残酷なものなのか
少女の身体は蝕まれていた

未完成である闇の書の膨大な力に、少女の身体が耐えられないのだ
少女の健康どころか、まともな生命活動すらをも阻害する、呪いのプログラム
このままではいずれ少女の全身を浸食し、死に至らしめてしまう

これを防ぐにはたった一つしか方法はなかった

闇の書を完成・安定させ、主に流れ込む負の魔力を浄化する

そのために騎士たちは決意した
今この幸せを守るために、一体何を惜しむことがあろうか

あの主のために、自分たちはいくらでも、どんなことでもして見せよう
そのためには主の命にも逆らおう
だが、その罪は我らだけのもの。決して主に知られてはならぬ。
その名を穢さぬために、決してに命を奪ってはならぬ。

彼らは本物の騎士だった
闇の書に選定されし王に使える、荘厳たる騎士たちだった

そうして今日に至る

その話を聞き、クロノが次の質問をした

「その子の・・・名前は？」

「・・・・・・・」

シグナムをはじめ、四人の口が閉ざされる

「大丈夫だよ。絶対に変なことはしない。なに、闇の書を調べて、その欠陥をどうにかすればいいんだろ？」

「・・・・そうだが・・・信じていいのか？」

シグナムが疑いの目をクロノに向ける

それは仕方のないことだ

クロノもそれを理解しているが、それを打ち破る言葉を持っていないと、そこで蒔風が口を出した

「あなた達の願い・・・それはすばらしい物だ。一つ聞こう。どんな罰でも受ける覚悟が？」

「ある」

その返答はシグナム一人からのものだったが、それは四人の意志だった

「では、主が事実を知ったとき、主にすべての事を任せられるか？」

「それは・・・・・」

「自分にも罪があると言ったとき、共に贖罪する覚悟はあるか？」

「・・・・・だが、この事件の主犯は」

「確かにあなた達だ。だけどそれで、はいそうですかと見捨てるような主じゃないんだろう？」

シグナムたちは考えた
そうだ。
主はそのような人物ではない
むしろ、自分が罰を受けるから見逃してくれというようなお方だ

もしそれを拒んだら、それは主の誇りを穢すことになる
それならば、主と共にその罪を清算していこう
王と共に、歩き続けよう・・・・

「わかった・・・言おう」

「そうか・・・ありがとう」

「だが、あとでお前の話も聞かせてもらう」

「俺の？・・・・ああ・・・わかった」

「・・・・われらの主、その名は・・・・・「八神はやて」」

「なに？」

「え？はやてちゃん！？」

「その名前って・・・・」

なのはとフェイト、蒔風が驚きの声を出す
それにクロノも驚き、聞いた

「二人とも、知ってるのかい？」

「俺はこないだ図書館で会った」

「私はすずかちゃんのお友達ってことで・・・写真でしか見たことないけど・・・」

「うん。私も聞いたよ。すずかのお友達で、八神はやてって子がいるって・・・」

「二人とも、すずかちゃんの友達だったんですか・・・」

「シャマル、お前知ってるのか？」

「もう、忘れちゃったんですか？はやてちゃんのお友達の、月村すずかちゃん！」

「おー、いたなそんなの。はやての友達の友達だったのか」

ヴォルケン組はヴォルケン組で驚いていた

「んじゃ、行こうか」

「え？どこに？」

「はやての家にさ。善は急げだ。今はいるよな？」

「ええ・・・あ、闇の書どうしよう・・・」

「あなたが持っていてもかまわないよ」

「クロノ？いいのか？」

闇の書を持つシャマルに、クロノが許可し、蒔風が訊いた

「ああいいんだ。彼女たちにもう戦闘の意志はない。だったら、持っていてもかまわないだろう？」

「おまえ・・・ほんっとーに、丸くなったなぁ・・・」

「誰の影響だと思ってんのさ。さ、いこう」

そうしてヴォルケンズ、なのは、フェイト、クロノに蒔風の八人が八神家へと向かう

そこで何が待ち受けているのか・・・

この物語はレールを外れた
だが、向かう先は同じであることを、まだ誰も知らない

to be continued

なのはA's ～やっとお話しができるの～（後書き）

アリス「オリジナル展開ですね。もう捕まっちゃったんですか！？」

ええ
だってあの結界で蒔風がいるんですよ？
逃げられるわけないじゃないですか

ア「それはそうですけど・・・どうするんですか？」

大丈夫です
なんとか最後までつなげましたから

ああ、あとヴィータがなのはに砲撃撃たれたとき
あれ別バージョン考えてました

ア「どんなですか？」

えっと・・・・

前略

「な・・・こんな距離であたしを捉えて命中させるなんてそんなこと・・・・」

そこでヴィータがハッ！！と気付いた
この考え方・・・・まるで漫画のやられキャラ！！！

そして迫るディバインバスター

「ちくしょおおおおおおおおお！！！！！！」

ドカーーン

でした

ア「ヴィータやられてるじゃないですか・・・」

だからやめました

なんか雰囲気にも合わなかったし

ア「それは確かに」

じゃあよろしく

ア「次回、王、誘拐」

ではまた次回

我ら守護騎士、あなたとの誓いを、一度だけ破ります
我らの不義理、お許しください！

はやて宅に到着した一向

なのはたちは家の外に待機し、先にヴォルケンズから中に入って、事の顛末を説明しに行った

「闇の書・・・呪いのプログラムか・・・・・・」

「主にその気がなくても、強制的に集めざるを得ない状況に追い込む・・・」

「ひどい・・・ね」

「うん・・・・・」

家の前でなのはたちは闇の書に関して話し合っていた

「とりあえずはやての身柄を確保してから、管理局の病院で検査だね」

「だけど・・・そんな簡単に行くのかな・・・・」

「なぁに、俺がまだこの世界にいれる時間は結構あるからな。その点は大丈夫だ」

「どういうこと？」

「俺は他の世界の仲間の力を借りられてね。ほら、俺がやってる変身とかがそれだよ」

「え？じゃあれは舜の力じゃないの？」

「違う違う。で、だ。その中のうちの一つに「幻想殺し（イマジンブレイカー）」ってのがある」

「いまじんぶれいかー？」

「簡単に言ってしまうと、魔法とかそういう「異能の力」を打ち消すものなんだ。だから、前にはやてに会った時も、それで触ったら負の魔力が消えたんだよ」

「じゃあ、それで闇の書を触れば？」

「いいや、そう簡単な話じゃないんだ」

「え？」

「この力は問答無用で消してしまうもので、制御ができない。闇の書とはやてのつながりは表面ではなくもっと深遠なところにある。闇の書をうまく分解して、その核を見つけて触れたとしよう。だがその時消えるのはその悪意あるプログラムだけなのか、ということだ」

「もしかして・・・ヴィータちゃん達も？」

「・・・消えるかもしれん。彼女たち自身に触っても問題はないだろうが、その核に触っては闇の書とはやての契約自体が切れてしまうかもしれない。そうなると闇の書は・・・」

「おそらくはやてが死んだと勘違いし、新たな転生先に飛ぶだろう。それでは意味がない」

「その通り。だから慎重に検査して、いらないとこだけ消すんだ」

「大変だね・・・」

「はやての症状の進行は抑えられるから、まあーーー気長に行けば」

ドォオオオン!!!!!

「「「「!?」」」」

その瞬間、家の二階の窓ガラスが爆発し、そこからあの仮面の男が飛び出してきた
その腕には二つの物を抱えている

「あいつッ!!!」
「はやてちゃん!?」
「闇の書までパクリやがった!!!」

その言葉の通り、男の腕には気絶したはやてと、闇の書が抱えられていた

「貴様！！その子をどうするつもりだ！！！」

クロノがとっさに結界を張り、周囲から見えないように一体を覆ってから、仮面の男に叫んだ

「お前たちにはもう任せておけない。闇の書とその主は私が預かる。なに、ちゃんと蒐集はしてやるから安心しろ」

ヒュン、ヒュンヒュン！！

そこまで発言した男を、騎士甲冑に身を包んだシグナム、ヴィータ、ザフィーラが取り囲んだ

「貴様ぁ・・・テスタロッサを不意打ちしただけでなく、我らが主にこのような仕打ちを！！！！」

「ぜってぇ許さねえ！！はやてを返せ！！！！」

「さもなくば、後悔することになるぞ！！！」

三人が激昂する

玄関からヨロリとシャマルが出てきた

なのはたちの方に歩いてきてから、そこでパタリと倒れてしまった

「シャマルさん！！！」

「ご、ごめんなさい・・・闇の書と・・・・はやてちゃんが！！！」

「気にすんな・・・」

そう言って肩を叩いてその場に座らせる蒔風

「フェイト、クロノ、シャマルを頼むよ」

「うん」

「蒔風、気をつけろよ」

「は！どーってこたァねえ。またボコすだけだ」

「わ、私も行く！！レイジングハート！！」

《セットアップ》

なのはがバリアジャケットを着込み飛び、蒔風は家の屋根の上にジャンプした

「てめえ・・・闇の書が完成したところでお前には使えない！！！それがわかってんのか？」

「私の目的は闇の書の完成だ。その使用ではない」

男が淡々と言う
その言葉にヴィータがさらに激昂した

「そんなことはどーでもいい！！はやてから手を離せ！！！」

男に向かってアイゼンを振るうヴィータ
だが

バシィ！！！

そのグラーフアイゼンの動きが止まる
見ると、アイゼンの先端にバインドが巻き付いていた
それが伸びて、ヴィータを簀巻き状態にする

バシバシィ！！！

さらにザフィーラとシグナムの身体にも巻き付き、束縛する

「お前らはまだだ。来るべき時になればお前らも・・・・」

「くっ！！！おおおおお！！！！」

「はやてえええええ！！！！」

「やぶっ、れん！！！」

三人が空中で身動きが取れなくなる
が、まだこの少年がいる

「その子をぉ・・・・離せや！！！」

蒔風が男に飛びかかっていく
その速度、方向、タイミング、すべてをとって完璧だった
これなら確実にはやてと闇の書を取り返せる、と思われた

ドドッ、ドドッ、ドドッ！！！！

ガァルァァァアアアアアアアア！！！！！！！！！

バゴォア！！！！！

そこに、漆黒の体躯を持つ巨大な獣が現れた
三つの首に二振りのしっぽ

「ケルベロス！！！！！まさか・・・てめえ「奴」と繋がってんのか！！！」

蒔風が男に訊くが、どうやら男も困惑しているようだ
と、いうことは

「なるほどな・・・「奴」の独断か・・・・全員こいつに手を出すな！！こいつは！！！！」

ヒュォオッ！！！

ドゴァ！！！

蒔風の身体がケルベロスの前足に弾かれ、地面に落ちる
地面を砕き、ゆうに百メートルはその後を残して蒔風が吹っ飛ばされた

「ごあああああ・・・・こ、の・・・・開翼！！！（ドバァ！！）」

頭を振って立ち上がりながら開翼する蒔風に、一瞬で接近したケルベロスの爪が襲いかかる
それを前回りでかわし、ケルベロスの後方に向かってジャンプする蒔風

それを反転して追うケルベロスに、桜色の砲撃が命中した

「舜君！！！」

「手ぇ出すな！！お前はその仮面ヤローを！！ッ、グォア！！！」

言葉の途中で蒔風にケルベロスの肩がぶち当たり、蒔風が住宅を二、三吹き飛ばしながら飛ばされていく

なのはが苦い顔をしながら、仮面の男に向かう
蒔風も心配だが、はやての事は今どうにかしなければならない

「はやてちゃんを、返してもらいます！！！」

「断る。どうやらあの犬はこちらを逃がすためにいるようなのでな。ありがたく逃れさせてもらおう」

「させません！！」

なのはが男に向かう
だが、男は幻影や砲撃でなのはを翻弄してその姿を掴ませない

なのはは善戦するが、先ほどの戦いの後だ
どうやっても掴み来ることはできず、ついにはバインドで体を縛られてしまう

そしてついに男は逃走してしまった

その光景を見ていたフェイトが身を乗り出そうとする
だが、その腕をクロノが掴んで止めた

「フェイト！！何をしに行くんだ！！君はリンカーコアを奪われたばかりだ！！！魔法どころか、立って歩くのだって本当はいいことじゃないんだぞ！！」

「で、でも・・・このままじゃ・・・」

「わかってる。助けに行きたいのは僕も同じだ。だけど、僕まであ

っちに言ったら、君たちが無防備になる。魔法の使えない君たちを、守らなくちゃいけないんだ！」

クロノのデバイスを握る手がギシリという
彼も、この場で耐え忍んでいた
蒔風とケルベロスの戦いはここら辺一体をすでに焼土と変えてしまっている
結界を解けば元に戻るとはいえ、なければ一体どれだけの被害が出たのか

そんな状況で、クロノは動くことができなかった

八神はやては、敵の手に落ちた

「てめえええ！！！！（ゴガア！！）あいつを助けるとは、何を考えている！！！」

蒔風がケルベロスに叫んだ
すると、頭の中に「奴」の声が響いてきた

『いやなに。（ドゴォ！！）俺としても闇の書を完成させてもらった方が、あとあと都合がいいし』

「どういうことだ！！闇の書は完成させねね、え！！（ズゴン！！）
それがお前のためになるならなおさらだ！！！」

『はあ・・・まだ「闇の書」の真の名も知らないのか』

「なに?それはいったい・・・」

『今確かユーノ君が無限書庫で調べ物してんだろ?だったら時機にわかるさ』

「お前・・・この世界の「原典」を・・・」

『知ってるさぁ!!お前は忘れちまったみたいだけどな』

「ならば・・・このあとどうなると言うんだ!!!」

『それは言えないよ。そもそも、俺やお前が介入した時点ですでに歪んでるし』

「まさか貴様・・・もうすでに構築の計算が・・・」

『いや、まだ５０%程度だ。だが、最後に「あれ」があるなら、結構役に立つしね』

「いくらお前でも闇の書は扱えないぞ。それに、計算してるんだろ?こんなんしててていいのかよ」

『今は休憩中さ。この会話も、ケルの中に埋め込んだ俺の力で交信してるし』

「どぉりで・・・強いわけだ!!!」

ドバガァ！！！！

蒔風の正拳が空中でケルベロスの胴体を横から殴り飛ばす

ケルベロスの身体がぐらりと揺れるが、そのまま回転して後ろ足で蒔風を蹴り飛ばす

だが、蒔風はそれを真っ向から受け止めて、ケルベロスの動くを止める

しかしその爪はズップリとその体に食い込んでおり、さらに先ほどからのダメージも相まって、蒔風の視界がぼやけてきた

そのまま握り潰してしまおうとするが、短い腕ではまわしきれず、それもかなわない

（畜生・・・この体じゃあ・・・）

荒い呼吸を一瞬だけ深く貯め込み、ケルベロスを投げ放つ蒔風

ケルベロスが空中で止まり、まるでそこに大地があるかのように四本の足で立つ

蒔風とケルベロスの視線が交差し、その瞬間に二人が動いた

ケルベロスの三つの口砲に焔が溜まり、まず左の首が火球を撃ってきた

左が撃ち、また溜めてるあいだに中央の首がうち、さらに右の首が撃つ

そうして間に左の口が装填し終わり、再び火球を撃ってくる

それはまるで鉄砲隊の様に、絶え間なく撃ち続けられる火球の嵐
それを蒔風がすべて弾かんと行動した
獅子天麟を「麒麟」と「獅子天」に分けて、それぞれ左右の手に持つ
そして最初の火球を「獅子天」の上薙ぎで弾く
次に来たのを「麒麟」で横に薙ぎ、回転しての後ろ蹴りで次を
そのまま回し蹴りで弾いた後にその脚を切りかえして踵で弾き、さらに「獅子天」振り下ろして地面に落とす
そういった行動を何十発と繰り返し、蒔風に一直線に飛んでいく火球は、蒔風に到達した瞬間、花火の様に四方八方に飛んでいく
そして痺れを切らしたのか、ケルベロスは三首同時に火球を溜めこみ、それを飲み込んだ
すると、ケルベロスの身体が焔に包まれる
その姿はまさに「地獄の番犬」
冥界の神よりその任を任された三つ首の黒犬
ならば、その身に焔をともそうともなんら不思議なことはない！！！
ケルベロスが猛烈な勢いで蒔風に突進してくる
蒔風はそれを見、獅子天麟を鞘に収め、腰に帯刀する「火」に手を伸ばす
荒い呼吸を沈め、目を閉じる
五感を研ぎ澄まし、ケルベロスの迫る音だけを聞いていた

そしてケルベロスが蒔風に到達する二十メートルほどのところで

シュカン・・・・・・

という音が静かに響いた

ケルベロスの身体が途中で凍ったように固まる

蒔風が口を開く

「・・・一閃・・・それは「一」瞬の「閃」光のごとき斬撃。

ゆえにこの一閃に冠する名は在らず。

なぜなら・・・これが「一閃」の極地だからだ

だた、「一閃」それだけでいい

鎌鼬切演武・単撃・・・・「一閃」」

パカァ・・・・

と、ケルベロスの身体が横に真っ二つに裂けた
斬った瞬間など見えなかった。
斬られた感触もまた、なかっただろう

それは最初からそういう形であったかのように、それが当然の形であるかのように、二つに分かれていった
さらにその後方の雲が綺麗に斬られている
上空では風は吹き荒れているにもかかわらず、斬られた後に雲が混じることはなかった

ケルベロスの身体が消えていく
蒔風が翼をしまい、地面に落ちていった

「舜君!!!」

「舜!!!!」

なのはが叫び、クロノがバリアを解いて蒔風に駆け寄った

「大丈夫か!?」

「はやては・・・どうした」

「・・・連れていかれた・・・闇の書と一緒にだ」

「チク・・・ショオオオオオオオ!!!!!!」

蒔風の叫びが響いた

少し離れたところで、ついにバインドが解かれたヴォルケンリッターやなのはも、悔しさに顔を歪ませ、その眼には涙が溜まっていた

この世界は素晴らしい
主人公はまっすぐで、敵ですらも美しい想いの持ち主だ

友達のため、娘への愛情、主への忠誠、もう悲劇を起こさせないという決意

ただ、この世界はあまりにも美しく
そしてその純粋な想いゆえに、どこまでも残酷だった

to be continued

なのはA's ～奪われた主～（後書き）

アリス「仮面の男ェ・・・・」

と、言う風になりました

ア「まだまだ終わりそうにないですね」

ええ。

「奴」も少しかかわってきましたしね

ここからががんばりどころです

もう一度「A's」見直しておこうかな

ア「もう説明しなくても？」

・・・あ、忘れてた

鎌鼬切演武はすべて斬撃を飛ばすものです

剣できることもありますが、鎌鼬との二重の斬撃で切りつけます

ア「だから離れた雲も切れてたんですね」

そゆこと

ア「次回、主なき生活」

ではまた次回

傷つくたびに　優しくなれる
君のその笑顔だけ守り抜きたい
願いは一つ

なのはA's ～闇の書の真実～

はやて家襲撃から一夜が明ける

蒔風たちは学校に行き、授業を受ける

だが、やりきれない思いで内容など一切入ってこなかった

休み時間になり、すずかがはやてとの連絡が取れないことを心配している旨を話してくる

その言葉を聞くだけでやりきれなくなり、三人は顔を俯かせるのだった

――――――

世界、覚醒、翼人、「奴」

それらの話を聞いて、皆一様に驚いたが、ある意味納得できる内容だった

シグナムが蒔風に問う

「では・・・お前は翼人なのだな？」

「その通り。っつても、あんたがたの知ってる人とは違うけどな」

「お前は他の翼人を知ってんのか？」

「オレのほかに二人、確認しているな。どちらも素晴らしい奴だよ」

そして話題は仮面の男に移る

「いま仮面の男は失われた闇の書のページ集めに奔走しているはずよ」

「シャマル、あの結界の時にどれだけ使ったんだ」

「・・・全部」

「「はぁ！？」」

「ありったけ使ったのよ！！」

「でもこれは好機だ。あの野郎の足取りも掴みやすくなる」

「いや、使わせ切らした奴が言うなよな・・・・」

「だが、「奴」が加担してると言うことは、その力も使われていると思う」

蒔風が顎に手を当てて考え始める

「さらに俺の力も使われたと思うから・・・・」

その言葉にクロノが待ったをかける

「待ってくれ。君、蒐集されたのか？」

その問いにその場の全員が蒔風に視線を向ける

「いや、だけど間違いないと思うよ？ケルベロスとやり合ったときあいつの爪が体内に食いこんでな。その時に力を持ってかれたんだ。だから最後には技能一発の技で仕留めるしかなかったんだよ」

「それで、どれほどページは埋まったと思う？」

そうだなぁ、と蒔風が視線を泳がせて考える

「なのはの三分の二で確か３３ページ・・・だから・・・奴がオレと同じ分分け与えたとして・・・ざっと二人合わせて４００ページは埋まったかな」

「「「「「「「「４００ぅ！？」」」」」」」」

「魔力にするとな。それに結構水増ししてだからな。オレの力は魔力じゃないが、魔力に変換するとそれぐらいってこと。オレの能力は燃費悪いからなぁ」

「と、なると残りは２６６ページ・・・・」

「あいつら・・・一体どう動くつもりだ？」

「闇の書完成前にはやてが浸食されて死んだらそれまでだから・・・あとどれくらい持ちそうだったんだ？はやての身体は」

「あのとき見たら・・・あと・・・ひと月は・・・もしかしたら、もっと短いかも・・・・」

「ひと月か・・・・なあ・・・・そういえば、はやてには蒐集の事とか伝えられたのか？」

その言葉にシグナムが唇をかみ、ザフィーラが答えた

「いや。お伝えする直前に、あの男が来たのだ。「盾の守護獣」が・・・聞いてあきれるな・・・」

「落ち込むなって」

そこでクロノが立ち、今後の方針を伝えた

「では、これより我々アースラは八神はやての保護と、仮面の男の

追跡を最重要任務とする!!はやての居場所は、わからないんだよね？」

「ああ・・・闇の書でつながってるから無事なのはわかるけど、それ以外はわかんねー」

「あの・・・クロノ。シグナムさんたちはこれから・・・・」

フェイトが心配そうにクロノに訊いた

そんなフェイトを見て、クロノがほほ笑んだ

「大丈夫だ。今彼らがここにいることは、ここにいるみんなと、母さんとエイミィ、ユーノしか知らない」

その言葉に、みんなが目を丸くする

「クロノ、お前なんか変なもん食べたか？」

「クロノ君、どうしちゃったの!?」

「クロノ、熱があるんじゃ・・・・」

蒔風なのはフェイトの順で次々とクロノの身体をベタベタ触り、異常がないか確認し始めた

「なにもないっ!というか、僕がこういうことをするのがそんなにおかしいか!?」

その言葉に3人が同時にうなづく

「クロノはもっと報告とか真面目にしてるかと・・・」

「クロノ君ってルール順守な人ってイメージがあるから・・・」

「クロノはもっとお固くて、融通の利かない子だと思ってましたっ！！！（バシィ！！！）なんで俺だけ！？」

「失礼だぞ君たち！僕だって報告すべきか悩んだけど、これが彼ら的にも一番いいと考えたんだ！！」

「確かに、このまま管理局に行け、と言われたらこの場から脱走して主を探し始めてた自身があるッ！！」

「確かにそうだけど・・・シグナム、ちょっとテンション高くねえ？」

「何を言っている！！この状況で、落ち着いてなどいられるか！！！主はやてがいまどのような状況に置かれているか・・・できることなら今すぐにでも・・・・・っ」

「ああ。だからこちらと連携がとれるようにした方がいいと思ったんだ。それに、今ここから離れろ、なんてことは・・・言えないよ」

「クロノ君・・・」

「クロノ・・・」

「クロちゃん・・・・」

「その呼び方は止めろ！！！」

「「「「クロちゃん・・・・」」」」

「ほら見ろうつったぁ！！！」

ーーー

その場には帰還したフェイトとシグナム、待機中のなのはとヴィータ、隣の部屋にはシャマルとザフィーラがいた

本来ならば一番取り乱しそうな彼らだが、蒔風が必要以上に荒立たせているために、逆に冷静になれている

「男の所在がわからねえ・・・あいつらどこにいるんだ!!」

そこでなのはが口を開く

「ねえ、闇の書がこのまま完成してもいいんじゃない？」

「え？」

「だってそれではやてちゃんが治るんでしょ？」

「あ・・・確かに・・・・・・いや待て待て、下手の場所で完成してみろ。あの男に何されっかわかったもんじゃねえ」

「そっか・・・・」

「「奴」、とかいう輩の事も気になるしな」

はぁ・・・とみなが一様にため息をつく

本当にどうしようか・・・

「・・・なあ・・・闇の書って・・・・本当にこんなもんだったっけ」

ふと、ヴィータが言葉を漏らす
それにシグナムが返答した

「何を言っているヴィータ。魔力を蒐集し、完成させることで主に絶対の力を与える。それが闇の書だ」

「確かにそうだけどよぉ・・・何か忘れてる気がすんだよ・・・・」

「忘れてる?」

「ああ・・・なんか違うんだ・・・本当にこれで幸せになれんのかなって・・・・でも・・・でもよお・・・はやてが死んじゃうなんて、あたし嫌だよぉ・・・」

「ヴィータ・・・そのようなことは我々がさせん。そうだろう?」

「ああ、ああ!そうだ、あたしたちが守るんだ・・・はやてを・・・また、はやてに笑ってもらって…ご飯食べて・・・・」

ヴィータが涙ぐみ、シグナムが慰める
その姿に、蒔風たちも心が痛む

ヴィーヴィーヴィー

そこにアラームが鳴り、仮面の男の居場所があらわされる
それにシグナムとヴィータが立ちあがった

「今度は逃がさん！！！」
「ぜってーぶっ潰す！！！！」
「私も行こう」
「私も行きます！！」

隣の部屋から二人も出てきた
ヴォルケンズは皆行く気のようだ

『だったら僕が付いていこう』

「クロノ！！」

そこにモニターが現れ、クロノを映し出していた

『現地で合流だ。行こう！！』

「「「「おう！！！」」」」

４人が飛び出していき、部屋が少しだけ広くなった
と、それと入れ違いに他の人物が部屋に入ってきた

「３人とも！！」

「「「ユーノ（君）！！」」」

入ってきたユーノはソファに座ってからこう切り出した

「闇の書の情報が集まったよ」

「本当!?」

「どんな?」

「ああ・・・ひどい・・・話しさ」

ユーノが話し始めた

闇の書

それは後世に起こったその陰惨な事件からつけられた別の名である

その魔導書の真の名は「夜天の書」

本来の目的は、偉大な魔法、魔導師の知識などを蒐集し、研究するためのものだった

そのための転生、そのための旅する魔導書だった

素晴らしく、そして優れた技術を失わせないために

だが、いつかの世代の主の一人が、夜天の書のプログラムを改変してしまった。

ただ、自らの願いのためだけに使おうとしたためだ

そこに集められた莫大な力、技術、知識。
それらを自由に、自らの欲望のままに行使しようとした結果である。

だが、それはうまくいくはずもなかった
相手は古代に創られし遺産、ロストロギア「夜天の書」

そのために旅をする機能と、自動修復の機能が暴走してしまったのだ
永遠に続く転生と、無限再生はそのためのものだった

さらには持ち主が蒐集しなかった場合、持ち主の身体を侵食し始めるのだ

「今のはやてちゃんがその状態なんだね・・・・」

「でも、完成さえさせれば」

「いや、そうもいかないんだ」

ユーノの話は続く

魔導書を完成させたとする
だが、そこに待っているのはさらなる悲劇と惨状だけ。
完成したらその書は持ち主の魔力を際限なく使わせるのだ

ただ、無差別破壊の力のみに

これが「夜天の書」が「闇の書」と呼ばれるようになった所以だ
だから、今までの主も皆、その死に抗い、完成と同時に自らの意志を消され、ただ破壊の力となってしまった

「そんな・・・」

「じゃあ、完成させても無駄じゃねえか・・・」

「どうするの？ユーノ！」

完成前での闇の書の封印はまず無理だ
魔導書を完成させた、真の主でなければ、システムに干渉できないからだ
つまり、闇の書を破壊や封印するには、未完成な状態ではだめなのだ

だが、完成させると主の意志は消され、荒れ狂う破壊の嵐となる

無理に外部から介入すると、主を吸収して、転生して逃げてしまう機能まである

「と、いうことなんだ・・・だから、闇の書の永久封印は、事実上不可能と言われているんだ」

「・・・・・」

「ヴィータちゃんが言ってたのはそういうことだったんだ・・・」

「確か幻影に気付いたのもヴィータだったな。なかなかに鋭い」

「でも・・・どうするの？」

「たしかに・・・元のプログラムに書き換えられるのははやてだけだ・・・」

「でも、完成させないと接触できないし、完成したらはやてちゃんは飲み込まれちゃう・・・」

「・・・・・・あの男はこのことを知ってんのか？」

「そういえば・・・・・」

「今の情報だと、封印できんのは完成直後ぐらいだ」

「そう・・・なるかな。暴走状態になった瞬間にどうにかするしか・・・」

「確かあいつ、「いずれわかる。我々の行動が正しかったとな」って言ってたけど・・・」

その言葉にユーノがまさか・・・と言葉を漏らした

「仮面の男の目的は・・・・闇の書の封印？」

「だったら説明がつく。シャマルの援護、はやての誘拐、完成の手助け・・・」

「でも、その状態で封印したら！」

「間違いなくはやてごと封印になる・・・しかしどうやるつもりだ・・・よほど大きな組織でない限り、あれを封印する物なんかできないぞ」

「それに、そんなものが作れるような組織なら、闇の書の力を得ようとするはず・・・」

「でも、ユーノ凄いよ。よくここまで調べたね」

フェイトがユーノに称賛を贈る

「いや、あの無限書庫は凄いよ。調べれば知りたいことはちゃんと出てくるし」

「すげえ・・・あれだけの蔵書をよく調べたな」

「今度ゆっくり整理しに来ないかって、無限書庫の司書の人に呼ばれちゃったよ」

「おおーー」

「でも、大変だったよ。リーゼさんたちは途中任務で出かけちゃうし、ロッテさんなんか、大怪我してきちゃって」

「大丈夫なのか？」

「うん。頭に包帯巻いて、右腕を吊っていたけど、全然大丈夫だって」

「・・・・よかった」

バタン！！！

そこで玄関が勢いよく開き、シグナムたちがクロノと共に帰ってくる

「また逃げられた！！！」

「シグナム！ちょうどいい。今ちょうどユーノが」

「それよりも！！！あの男から贈り物だ・・・一体何が映ってるのか・・・・くそっ」

そう言ってシグナムがクロノの持つ物を指さす
クロノの手には1枚のカードがあった
おそらく映像がその中に収められているのだろう

それをモニターに写し、みんなで見る

「ユーノ、資料は集まったのか？」

「うん。あとで話すよ」

「そうか。こっちも気になったことがある」

ぼそぼそとクロノとユーノが小声で話していると、モニターに映像が映った

そこには車椅子で眠り続ける八神はやてと、仮面の男がいた

乱れた物語はここから再び軌道に乗る
そして変わらぬ結末へとなだれ込むのだ

to be continued

なのはA's ～闇の書の真実～（後書き）

アリス「説明回ですね」

そうなっちゃいますよそりゃあ
だって

ユーノは説明した
アニメ8話をよろしく

なんて書けませんよ

ア「それはそうですね。それにしてもここからどう動くのか」

どうやって原作に戻そうかな・・・

あれらは彼らが後越えるべきものだから、なるべく変えたくないし・・・

ア「がんばれ作者」

はいな
そうそう、なのはA's になってから一気に1日のPV、ユニーク数が上がりましたよ

ア「なのはだからでしょうね」

なのはだからねぇ・・・
もうこれだけ書いてようかな・・・

ア「こらこらこら。そうですねぇ・・・毎日更新してるから、三日ぐらいほっとかれて一気に読む人がいるんじゃないですか？」

それはあんまりだぁ～～～～！！！！

ア「次回、仮面の男の宣告」

ではまた次回

悪魔め・・・！

悪魔で・・・いいよ。

悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから。

映像が再生される

そこは何処かの病室のようだ

その部屋に車椅子に座ったはやてと、その傍らに立つ仮面の男がいた

『やあ、管理局諸君。そして守護騎士の四人。そちらにいる「世界最強」と、「異世界の協力者」のおかげで、多くのページが集まり、闇の書はもう完成する』

男が闇の書のページをパラララ・・・と流して捲っていき、その状態を見せる

『故に君たちから彼女を預かる意味もない。最近症状もひどくなってきていてね。今この病院に預けているのだよ』

『ああ気にするな。ここは君たちもよく知っている病院だ。八神はやての主治医がいる方がいいと思ってね』

「海鳴・・大学病院か!!」

「まて!!まだ行くな!!」

飛びだそうとするシグナムを蒔風が腕を掴んで止める

「まだ最後まで見るんだ。いまさら居場所を教えたということはあそこからは動かない。違うか？」

そう言われてはシグナムも止まるしかない
モニターに再び目を向ける

『さて・・・さっきも言った通り、八神はやての容体が悪化してね。まあ、私としては完成間近だから問題はないんだが』

『もう諸君は気づいてるかな？我々の目的は闇の書の完全封印だ。未完成状態での封印は転生してしまって無意味なので、一旦完成させる必要があった』

『だか、もうその段階は過ぎた。これから彼女は闇の書と共に永遠ともいえる眠りにつく』

『その前に別れの言葉でも送らせてやってもよいと、我らが主人の言葉だ』

『闇の書の主に言葉を伝えたくば、来い。我らはその場にはおらん。最後の時間を過ごすといい』

そこで最後にカメラがはやてにズームする
彼女は眠っているようだが、表情は苦しそうだ

「みんな・・・どこにおるん・・・・ヴィータ・・シグナム・・・
シャマル、ザフィーラ・・・・」

それは寝言だったが、なによりも彼女の精神状態を表していた
そしてカメラが戻されて

『では・・・悲劇の「闇の書」ここに眠らんことを』

ガタガタとカメラが傾き、最後に男とは別の人影が映ってから、映像が終わる

ザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

モニターには砂嵐が映し出され、もうこれ以上はないことを表していた

「おい・・・・最後にちょっと映ったの・・・見たか？」

「ああ・・・お前にも見えたか、ヴィータ」

「私にも・・・見えたわ」

「同じく・・・・・」

ヴォルケンズが静かに立ち上がる

どうやら、映像の最後に映っていた「誰か」に反応しているようだ

「最後に映ってた「人影」・・・よく見えなかったけどよ・・・・

あの服、管理局(おまえら)の制服じゃねえのか？」

ヴィータの言葉がその場の蒔風たちを糾弾するように響いた

「そうか・・・我らは騙されていたということか・・・闇の書の封印・・・確かに、その可能性を考えなかった我らが愚かだった！！！」

「おまえら、少しはいい奴らだと思ったのに！！あたしたちをだましてたんだな！！！！」

「違う！！俺たちは！！！！」

「黙れ！！！！！！！！もはや信用ならん！！！！このまま主を封印させてなるものか・・・・
完成さえすれば、主は救われるのだ！！！！主はやてを救いに行くぞ！！！

ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！！！！」

「「「おう！！！！」」」

「待っ・・・・・」

ドゴン！！！！

マンションの一室から爆発が起き、騎士甲冑を纏った四つの人影が飛び出していった
そしてその後を一つの影が追っていく

それを確認し、シグナムがその人影を食い止める

『シグナムッ!?』

『先に行け!!こいつは私が食い止める!!!』

『わ、わかった!!!』

ヴィータ達が病院の方に飛んでいく
それを見た人影、蒔風がシグナムに訊く

「お前!!本当に俺たちがそんな奴らに見えんのかよ!?冷静に考えてくれ!!あれは・・・」

「もはや・・なにも信じられん!!!お前たちがそうでないとも思っているが、もしかしたらとも思っている!!そんな輩と、一緒にはいられない!!!!」

ガキィ!!!

シグナムが蒔風を押し返し、開翼した蒔風が宙に立つ

「・・・いくら翼人でも・・・今の私を止めることなどできないぞ」

「止めるんじゃない。助けるんだ！！！」

「う・・・うおおお

だけどすずかの友達って言って病室に先に入っちまえば、あいつらもいきなり戦闘はしない・・・はずだ!!!』

『はずって!!』

『こっちもいきなりなんだ!!今頃ヴィータ達の方には獅子天麟ズが追いついてるはずだ!!時間は稼ぐから、早くしろ!!!』

『わ、わかった!!』

『朱雀!!白虎!!お前ら、急げよ!!』

『おっけー!!』

『了解!!』

そこでもう一度シグナムと蒔風は離れ、お互いを見据える

「病院名を言うべきではなかったな」

「・・・どうやらヴィータ達も足止めされているようだ・・・・だが、我らヴォルケンリッター、主の元へといかねばならんのだ!!!」

「だから!!一旦体勢を立て直して!!それに闇の書は・・・・」

「そんなことはどうでもいい!!!!!主が・・・今!!この瞬間にも我らの名を呼んでいるかも知れんのだ!!!!我らを最も必

要としてくれているあのお方が！！涙をこぼして枕を濡らし、そばにいてくれと我らの名前を呼んでいるのだぞ！！！！たとえこの先にどんな障害があろうとも、我らは行かねば・・・行かなければならないんだ！！！！！」

「ッ・・・シグナム・・・・・」

「そのためにはたとえ翼人であろうとも！！我らは貴様を・・・殺してでも押し除ける！！！もはや我らには、主以外に、本当に心を預けられる物はないんだ！！！！！！主の笑顔のためならば、貴様を切って捨てる覚悟すらある。騎士の誇りだって捨ててやる！！！！レバンティン！！！！！」

《ダンケ！！！Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！！！！》

ガシャァ！！！

レバンティンの刃が分裂し、どこまでも伸びていく
鞭状連結刃の形態となったレバンティン・シュランゲフォルムが蒔風とシグナムを急退場に覆いつくす

「なに！？ぐおっ！？」

蒔風の背中が熱くなって、そこに手を伸ばすとヌルリと血がこびりついていた

「蒔風舜!!!そこをどいて・・・・貰おうかァァァあああああ!!!!!!」

シグナムが柄を引く
すると、蒔風の周囲の連結刃が絞り込まれて、蒔風を簀巻きにする

「ぐおおおお!?これは・・・・」

刃一つ一つが蒔風の身体に抉りこんでいく
その隙間から血が滴り落ちて、地面へと落ちていった

「はぁぁあああ!!!!」

シグナムがさらに柄を引く

ジャリ・・・ギャリリリリリリ!!!!!
ズパァ!!!!!

「・・・・が・・・・ふっ・・・・」

蒔風に巻き付いた連結刃が一気に引かれ、その肌を切り刻んだ
血しぶきが弾け、シグナムの頬に少しだけ撥ねる
レバンティンを通常の状態に戻し、シグナムが蒔風を見つめた

終わりか、と思われたが、蒔風の唸り声がその場に鳴り響く

「・・・・が、あああああああ！！・・・・この・・・・調子に・・・のるなぁ！！！！」

蒔風が斬撃を飛ばし、それをシグナムが弾く
だが、蒔風は止まらず、次々と斬撃を繰り出していく

その間にと傷口からぼたぼたと血がこぼれていく
そんな状態の蒔風を見てシグナムは叫んだ

「もうよせ！！死ぬぞ！！」

「心配すんなら・・・こんなこと最初からすんじゃねえええええええ！！！！！」

グブォッ！！！！

蒔風が吐血する

そこで蒔風の斬撃が一旦止む
いや、止んだのではない

溜まっていっているのだ

最初の斬撃が横一列に高く設置され、その下にまた一列、一列と連なり、巨大な「斬撃の壁」となってシグナムに襲いかかる！！

「鎌鼬切演武・四季早々！！！夏、津波ぃあああああ！！！！！」

蒔風の津波がシグナムに殺到する
それをよけるでもなく受け止めるでもなく、シグナムのとった行動とは

「レバンティン！！！」

《ダンケ！！カートリッジロード！！！》

ガシュウガシュウガシュウ！！！

レバンティンを鞘に収め、カートリッジをロード、魔力を圧縮しだした

「飛龍・・・一閃！！！！！！！」

そしてそれを抜き放つ

ゴゴゥ！！！！

連結刃の状態のレバンティンに魔力を乗せ、さらに炎に変換されそれを纏った刃が津波と正面からぶち当たり、大爆発を起こす

グォッ・・・ドゴオオオオオオオアアアアア！！！！！！！

その爆発に蒔風が一息つく
しかし、その顔はすぐに驚愕の物へと変わる

爆煙の中からシグナムが飛び出してくる
服が少し裂け、煤が付いて、血を少し流しているが、その眼は依然としてたったひとつの想いが宿っていた

―必ず、主の元へ―

「同じ相手に何度も破れるような！！ベルカの騎士ではない！！！！！」

ガギィン！！！！！！

シグナムのその剣撃をとっさに「火」を抜いて、半分鞘に入った状態で受け止める蒔風
だが、レバンティンの剣身に焔がともり、それが爆発し、蒔風を地面に吹き飛ばしていく

ドォっ!!ヒュオオオオオオオ・・・・・ドゴン!!!!

蒔風が落ちた先は小さな林だ
それを確認したシグナムはヴィータ達を追って飛んで行ってしまった

「ぐお・・・いってえ・・・・」

「大丈夫か、主!!」

蒔風は地面には直撃していなかった
手元に残していた青龍と玄武が人型に顕現し、受け止めてくれたのだ

「それにしても古代ベルカの騎士、侮れん」

「ああ、主をここまでやるとはな」

「ばっか野郎。今回はあれだ。行かせてやったんだよ。まだ負けてねえよ」

ふ、と蒔風の心情がわかって笑う青龍

そして玄武が訊いた

「では、儂らの負けはなんでしょうかな？」

「おまえら・・・わかってんだろ？」

「「「救える物を、根こそぎ救えなかったとき」」」

「獅子天麟はどうだ？」

「どうやら突破されたようだの。ようやる」

その報告を聞いて蒔風が息を噴き出す

「ふーー。行くぞ。まだタイムアップじゃねえ」

「は」「御意に」

蒔風がヨロリと立ちあがって足を進める

病院までは、少し遠かった

「畜生が・・・今日がなんの日だか知ってんのか・・・今日は・・・

・

クリスマスイブだぞ！！！」

ーーー

「言うなヴィータ。もはや何も信じられんのだ。我らは孤立している。「もしかしたら」ということに惑わされては・・・・・」

そういってたしなめるシグナムも悔しそうに唇をかんだ
あの二人の少女は本気で主を心配してくれている
それはここから見てもはっきりとわかった

しかし、シグナムの脳裏にいくつもの可能性が現れていく

もし、あれがすべて演技だったら?
もし、あれが自分たちをおびき寄せるためのものだったら?
もし、彼女たちも闇の書の封印を望んでいて、主もろとも・・・・・

そうではないと信じたい
だが、その考えを「ない」と断言できないのもまた事実
それができない自分が、シグナムたちは何より悔しく、己を恥じた

「すべてはあの男が悪いんだ・・・こんな変なことになったのも、全部・・・全部!!」

が、そこに四人とは別の声が響く

「悪いのは闇の書だ。その呪いのプログラムで、一体いくつの命が消えていったと思っている」

バッ！！！！と四人が振り返る

病院から少し離れたビルの屋上に、あの仮面の男が立っていた

「ッッッっ！！！！！」

四人が言葉もなく飛び出して屋上に降り、男を包囲する

「貴様ぁ・・・・・・」

「ほう・・・管理局の人間は一緒じゃないのか。まさか、映像の最後に映っていたあの影が理由でか？」

「お前・・・・分かってやってやがったのか！！！！」

「この場に管理局員に来られると厄介だからな」

「き・・・さまぁぁぁあああああ！！！！」

シグナムが激昂し、レバンティンの刃に魔力を乗せ、それで形成した斬撃を飛ばした。
反対側にいた三人は、とっさにそれをかわし、シグナムの方へと寄る。

斬撃は男の方へと向かい、爆発し、男から後方の屋上部分すべてを火の海に変え、灼熱の世界へと変える。
だが、その炎の中にゆらりと人影が映り、男は一切の傷なく歩み出

てきた。

その姿にシグナムが忌々しそうに言い放つ

「悪魔・・・・め」

「悪魔？違うな。闇の書を葬り去る、正義だ」

男が返す

自分のやっていることは正しいと、まるで自分に言い聞かせるように

だがしかし、この男は勘違いしている

本当の正義などどこにもない

「正義」を「正しさ」として語った時点で、その者は「正義」ではない

「正義」とは、各人の中にある定義に過ぎない

それに気づかないこの男は、ただの自己満足の塊に過ぎなかった

英雄とは、それになろうとした時点で、英雄失格なのだ

to be continued

なのはA's ～悪魔の正義～（後書き）

アリス「なのはさんを悪魔と言わしめた台詞をここで使いますか！」

ええ
これは書きたかった

なのはは自らを悪魔だといい、決して戦うことが正しくないとわかりながらも、分かり合うために戦いました
しかし仮面の男はもうこれしかない、と決め、これが正しいと自分に言い聞かせて無理やり正当化しています

ア「それがちがい、ですか」

その通りです

ア「次回、はやて、慟哭」

ではまた次回

こんな出会いをしていなければ……
私とお前は、いったいどれほどの友になれただろうか

まだ……間に合います！

止まれん……
我等守護騎士、主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた。
もう……止まれんのだ！！

止めます、私とバルディッシュが！！

Ｙｅｓ　Ｓｉｒ

なのはA's ～一方の視点、そして暴走の始まり～

時間は少しさかのぼり

蒔風がヴォルケンリッターを追って飛び出した後の部屋
煙にむせながらも、なのはたちは無傷だった

「みんな!!無事!?」

ユーノの張った結界で全員が無事に立ち上がった

「くそっ!!やられた!!あんな映像流されたら、騎士たちがああなることをわかってやっているぞ、あいつ!!」

「クロノくん、管理局は」

「もちろんあんな強引な封印なんか考案してないし、僕も知らない!!蒔風は!?」

「舜なら四人を追って行っちゃったよ!!」

「なら・・・彼に任せよう」

「え?私たちも応援に・・・」

なのはが蒔風を助けに行くと言い、フェイトがそれについて行こう

とする
だが、そこに待ったの声がかかった

「いや、ここは舜に任せてください」

「君たちは僕らと一緒にはやてちゃんのとこへレッツゴー！だよ！」

そこには白虎と朱雀が人型で立っている
初対面のクロノ、ユーノに最初の時に会ったなのはとフェイトが紹介する

「で、舜が言うには今すぐに向かって欲しい場所があるそうなんです」

「はやてちゃんのお見舞いだね！！」

朱雀と白虎の提案に、なのはたちが目を丸くする

「え？」

「で、でも・・・」

「大丈夫です。獅子天麟の三人がヴィータさんたちを足止めしています。はやく！！足は確保してあるので、急ぎましょう！！」

朱雀が二人に呼びかけて玄関から外に出ていった

「クロ君とユーノンはどーする？一緒に行くの？」

白虎が二人に訊くが、その返事はノーだった

「僕は・・・気になることがあるんだ。あの最後の映像・・・・
ユーノ、調べてくれないか？そのあとに僕も向かう」

「いいけど・・・なにを？」

「照合してもらいたいんだ・・・・はずれてくれたらいいと願ってるんだが・・・・・」

なので二人を残し、白虎と朱雀はなのは、フェイトと共に出ていった

途中で蒔風からの提案を貰い、その通りにすずかとアリサを拾って、ヴィータ達よりも早く病院にたどり着く

病院のロビー
ここに四人の少女がけたたましく入ってきた

「なのはちゃん!!ほんとうにはやてちゃんが入院してるの!?」

「ちょっと!!なのはもフェイトも黙ってないで言いなさいよ!!
それに舜はどうしたのよ!!」

「ごめん二人とも!!詳しいことは言えないんだけど、とにかく来
て!!」

「私たちを・・・信じて!!」

なのはとフェイトの真剣なまなざしにアリサが「うっ」とたじろぎ、
了承してくれた
病院の受付ではやての病室を聞き、その部屋に急いで向かう四人

そして病室に辿り着き、扉をあけると、そこには上体を起こして窓
の外を見つめているはやてがいた

「はやてちゃん!!!」

「すずかちゃん!!」

すずかがはやてに飛びつき、再会を喜ぶ

「お見舞いに来てくれたん?ありがとうなぁ。そちらさんは、たし

か・・・」

はやてがなのはたち三人を見て、前にすずかからもらったメールの写真を思い出す

「あ、紹介するね。私の友達の、高町なのはちゃん、フェイト・テスタロッサちゃん、アリサ・バニングスちゃんです」

「「「よろしくね！！」」」

「うわぁ・・・うち、身体が悪くて学校全然行けんから、こんなに友達できたのは初めてや！！」

はやてがうれしそうに両手を合わせてほほ笑んだ

『フェイトちゃん・・・わかる？』

『うん・・・言われてみないとわからないくらいだけど、確かに闇の書の気配がする』

『ヴィータちゃん達、どこにいるの？』

そう考えているなのはたちの前に、はやてがお菓子を出してくれたどうやら、見舞い品のようなのだが、誰が置いていったのかわからないもののようだ

「みんなでこれ食べよ！！な？な？」

はやてがこれ以上ないように笑う
その笑顔を見て、なのはもフェイトも納得した

この子は確かにヴォルケンリッターを、あんなにも人間に変えた子だ、と
この優しさを見ればわかる。この笑顔を見ればわかる。
あの四人が敬愛と、信頼と、親愛を込めて「主」と呼び、命や誇りを投げ捨ててまで尽くそうとする、そんな人物だと。

だからこそなのはとフェイトは悔しかった

こんな子が、いま目の前にいるのに
こんなにも近くにいるのに、もう大丈夫だよって・・・言えないことが、とてもとても悔しかった

思わず抱きしめて泣いてしまいそうになる
しかし、その感情をこらえ、楽しそうな笑顔をして見せる

と、そこで二人は気づいた

窓の外

そこには何のなかったが、確かに誰かの感情が増大するのを感じた

『いる・・・ね』

『うん』

そこではやてが二人に声をかけてきた

「なのはちゃん、フェイトちゃん、どうしたん？」

「え？あ、なんでもないよ？」

「そうそう・・・でも、そろそろ時間じゃないのかな？」

そういって時計を見る二人
見ると確かにそろそろ面会時間は終わりだ

「あ・・・ホンマやね・・・」

「はやてちゃん、今度、絶対に、絶対に、一緒に遊ぼうね！！」

「え？うん。わかったよ？でもなんでそんな・・・・」

「絶対に・・・・」

そういって決意する二人
この少女を永遠の眠りになどつかせてたまるか

四人はここに来たのは急だったこともあって、また今度ゆっくりお話ししようと約束し、病室を出た。

ロビーで白虎と朱雀が迎えた

「では、アリサさんは私が、すずかさんは白虎がお送りいたしましょう」

だが、そんな提案にアリサはノーと言った

「いいわよ。最悪車呼ぶし、これくらいなら二人で一緒に帰るわ」

「えーー？でもーーー」

「本当に大丈夫ですから・・・・」

『どうします？ここ、危険になるかもしれませんよ？』

『僕たちとしてはきちんと送っておきたいんだけど・・・・・』

『でもアリサは言い出したらなかなか曲げてくれないから・・・・』

『大丈夫だと思うよ。戦う時になったら結界を張るから』

白虎たち四人が念話で相談し、これ以上引き下がってもしょうがないので、二人をそのまま帰した。

「ではこれから・・・む？なのはさん、フェイトさん。主が呼んでいるので、私たちはここで」

「はい。じゃあ私たちはヴィータちゃんのところに！！行こう！！
フェイトちゃん！！」

そういって四人はわかれ、それぞれの目的地に走っていった

「レイジングハート！！」「バルディッシュ！！」

「「セーーット、アップ！！！！」」

二人がバリアジャケットをまとい、デバイスを手に夜空に飛びあがった。

そこで近くのビルの屋上が炎に包まれる

そこにはヴォルケンズの四人と、仮面の男が立っていた

「フェイトちゃん！！」

「うん！！」

すぐさまその場に向かうなのは達

が、そこで二人の動きは止まってしまう

バシィ！！バシィ！！！

二人の体に巻き付く魔力の縄
空中にバインドされ、二人が三角柱の小さな結界に閉じ込められてしまった

「え！？これは！？」

「どういう・・・こと！？」

なのはとフェイトは目の前の状況に驚く
なぜならそこには

仮面の男がいたからだ
右腕を首から吊っているということを覗けば、全く同じ姿だった
しかし、シグナム達の居る屋上にも仮面の男はいる

つまりは二人

これが空間を瞬時に行き来し、蒔風の攻撃でも無傷を装(よそお)えたトリック

「ふ、二人！？」

「くっ！！これを・・・離せ！！！」

その結界と一緒に、第二の仮面の男が屋上に来た

「な・・・テスタロッサ！？」

「なのはちゃん！？」

シグナムとシャマルが二人の姿を確認し、名前を呼んだが、結界の効果でその姿は消えてしまった

「さて・・・では・・・」

「仕上げに入ろう・・・・・」

バシィン！！！

仮面の男が四人をまとめてバインドし、動きを封じる

「闇の書・・・蒐集！！！」

そして書に命じた

シグナムとシャマルの胸元からリンカーコアが抽出され、闇の書に収集されてしまう

「うわあああああああ！！！」
「きゃあああああああ！！！」

すると、二人の姿がゆっくりと消えていき、消滅してしまった

「そんな！！」

「シグナムさん！シャマルさん！！」

結界の中でなのはとフェイトが叫んだが、その声は届かない

「闇の書へ帰れ、騎士たちよ。今までもそうやって完成させてきたようにな」

「おい」

「・・・ああ、そうだったな」

そういって二人が変身魔法を行使する

二人が変身したのは、紛れもないなのはとフェイトだった

「闇の書の覚醒には主の深い絶望が必要だ」

「心は痛むが・・・仕方がない」

そういって腕を振るうと、魔法陣が屋上に現れ、そこにはやてが転

送されてきた

その瞬間に、なのはに扮した男がヴィータを蒐集する

「うわあああああああああ！！！！」

そしてヴィータの姿も消えてしまった

いきなりこのような場所に送られて動揺するはやてに、さらにそのような光景を見せつける

はやては目の前で「家族」が奪われることに、混乱し、錯乱した

「え・・・ちょ・・・なんで・・・・なんでや！？どうなってるんや！？なんで・・・なんでヴィータを！！！シグナムは！？シャマルは！？」

そんなはやてにフェイトに扮した男が言う

「彼女たちももう消えたよ。もうあなたの元に帰ってくることはない」

「闇の書も・・その騎士も・・・そしてその主のあなたも・・・ここに存在してはならないんだよ」

「「だから消えて」」

「うをおおおおおおおおおおお！！！！！！」

その瞬間、ザフィーラがついにバインドを破り、なのは姿の男に拳を突き出す
しかしそれは魔力壁に阻まれ、再びバインドで拘束されてしまう

「ぐあああああああああああああ！！！！！」

そしてザフィーラも蒐集されてしまった

「ザフィーラ！！ザフィーラーー！！！！！」

どうしてこんなことになる？
私は何も悪いことしてないのに
ただ、みんなと平和に暮らしていきたかっただけなのに。
なんでやっと手に入れられた家族を奪う？
なんでやっと手に入れられた幸福を奪う？

どうして！！どうして！！！！！

「あああああああああああああ

！！！

「はやて！！！」

「そして・・・騎士たちを傷つけたものには罰を」

《Ｄｉａｂｏｌｉｃ　ｅｍｉｓｓｉｏｎ》

「「！！？？」」

闇の書の管理人格が手を上げる
その手の先に濁った黒い球体が生成された

「デアボリック・・・エミッション」

ズゴォ！！！！

空間魔法がその場を包む
なのはとフェイトを、騎士たちを追い詰めた存在として管理人格が
牙を剥いた

ーーー

そこで仮面の男二人はその光景を眺めていた

「あの二人・・・もつかな?」

「闇の書が完全な暴走状態に入るまで持ってもらえれば・・・それまで・・・・」

ギュオッ!!バシィ!!!

その瞬間、地面から伸びた青い魔力光の縄が二人を締めあげ、拘束した

「ストラグルバインド・・・強化魔法を無力化するバインドだ・・・あまり使い勝手はよくないけど・・・こう言う場合は役に立つ」

その背後からクロノ・ハラオウン執務官の声がした

二人が振り返り、その姿を確認する

クロノが言葉を続けた

「君たちみたいな、変身魔法を強制解除するからね」

「くっ!」

男が魔法がインプットされたカードを取り出し、この場を脱しようとする

「動くな」

しかし、それもかなわない

蒔風がカードを取り出すよりかも一瞬早く、地面からビルの屋上のフェンスを飛び越え着地し。十五天帝すべての刃が二人の首筋にあてられていた。

「くそ・・・くあああああああ！！！」

「ぐあああああああああ！！！」

二人の変身魔法が解ける

そしてそこにいたのは

「やっぱりか・・・リーゼロッテ、リーゼアリア・・・・」

クロノが残念そうな声を出す

「もしかしたらと思っていた。だけど、そうではないと願っていた！！」

「闇の書の封印・・・か」

そこにユーノからの連絡が入る

『クロノ、映像の解析、できたよ。あの制服は・・・・ギル・グレアム提督のものと一致した』

「ありがとう、ユーノ。君もなのは達の助けに入ってくれ」

そういって通信を切るクロノ

「・・・説明する・・・必要はないみたいね」

「まさかクロスケがここまでやるなんてなぁ～」

「一人でも鍛錬を怠るなと言ったのは君たちだ」

「目的は闇の書の完全封印。おそらく、最初からはやてが闇の書の主だと知っていたな？」

蒔風の糾弾に、彼女たちが口を閉ざす

『いいんだ、話しなさい』

そこに映像が入る

そこに映っていたのはギル・グレアムだ

「でも、父様！！」

『彼らは、もうおおかたの事は知っているだろう。隠しても無駄だよ』

「・・・はい・・・・」

「提督、あなたは独自に闇の書の調査をしていました。そして八神はやてが今代の所有者であることを突き止めていた」

『そうだ。あの子の父の知人を名乗って、資金援助もした・・・・私は、これが運命だと思ったんだ。孤独な子ならば、例え封印されても悲しむ人は比較的少ないとね・・・・・欺瞞だな・・・偽善だな・・・・』

「そうだな。それが偽善で欺瞞だ」

「でも!!あの書のせいで何人もの人の命が!!・・・あんたの父さんだって!!」

「それとこれとは関係ありません!!!たとえ誰かが犠牲になったからと言って、あの子がいなくなってもいい理由にはなりはしません!!!まだ斧状態ならば、封印されるほどの罪は犯してない・・・・そんな子を!!あなた達は!!!」

「法だとか!!そんなこと言ってられるものじゃないんだよ闇の書は!!!今やらなきゃこの世界だって消える。あの子にはかわいそうだけど・・・そのためにこの世界が消えてもいいの!?」

そんなロッテの言葉に、クロノが反論しようとするが、それよりも早く蒔風が言葉を発した

「そんなわけあるか!!!だけどな、誰かが失われて誰かだ助か

るなんて、俺はそんなのはもう見たくない！！！ああ、そうさ！！綺麗事だよこれは！！！闇の書を止めて、はやても救うなんて、現実的じゃないかもしれない。でもな、それを為すために俺は力を持ってんだ！！クロノはここまで強くなったんだ！！なのはとフェイトはあそこで踏ん張ってんだ！！封印するならその後にしろ。そこで見ていてくれ。俺たちのなすことが、どんな結果になるかをな」

「「『・・・・・・・』」」

三人が言葉を失う
そこにクロノが言葉をつづけた

「それに・・・提督のプランにはまだ欠点があります。封印用の魔法が、暴走した闇の書に十分に効く可能性は決して高くはないはずです。たとえ成功して、どんな場所に隠しても、きっといつかは誰かが発見し、呼び覚ましてしまう。
力を求める人の想いが、その善悪に関わらずそれを見つけ出してしまう。闇の書のプログラムが、書き換えられてしまったように、人はいつか・・・・・」

「・・・・俺はもう行くぞ、クロノ。この二人はまかせたぞ」

「ああ・・・二人を送ったら、すぐにそちらに向かう！！」

「ああ・・・よっし・・・行くか！！」

ブワッ！！と蒔風が開翼する
その翼は銀白に輝き、夜の闇に美しく映えた

「俺の正義を見せてやるからよく見とけ！！ギル・グレアム、あな

たの手段は決して誉められたものではないが、その想いは本物だ。
悲劇を食い止めるその決意は、このオレが認めよう！！安心しろ。
闇の書は必ず止める。貴方の「願い」は俺が聞いた！！！」

バウッ！！！蒔風が飛び出し、なのは達の方へと飛んでいく

「行こうか」

クロノが二人を連れて、グレアムのいる管理局本部の部屋へと向かった

この戦いに関係した者の想いはたった一つだけだった

―悲劇を止める―

しかし、その想いが数々の事象を捻じ曲げてきた
だが、ここからは揺るがない

闇の書を止め、はやてを救う
その想い、たった一つだ

to be continued

なのはA's ～一方の視点、そして暴走の始まり～（後書き）

気付いたらこんな時間ですた

ア「時間かけ過ぎ！！！」

Ｆａｔｅ／Ｅｘｔｒａのアーチャーがかっこよすぎてつい・・・・

ア「をい！！」

次回、闇の書の夢

ア「私の台詞ですよ！！！」

ではまた次回

あれ？台詞が出てこないや・・・・

ア「全力全開！！」

二回目だぞ

なのはとフェイトが闇の書と交戦を始めて三分
にもかかわらず、二人の息は上がっていた

たった今空間魔法「デアボリック・エミッション」をバリアで防いでここまで回避してきたのだ
今いるのは闇の書からは見えない、死角になっているビルの影だ

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・だ、大丈夫?フェイトちゃん」

「なのは・・・大丈夫・・・・だけど・・・っ!!」

ズォオッ!!

瞬間、世界が結界に包まれる。

「私たちだけに狙いを絞ってきたね・・・」

「なんとかしないと・・・・」

「なのは!」
「フェイト!!」

と、そこでユーノとアルフが合流する。

「この結界は・・・」

「たぶん、私たちだけを狙ってるんだ」

「いま、クロノが解決法を探している」

「舜もこっちに来てるみたいだけど、まだわからないね」

「じゃあ・・・それまでは私たちが！！」

「「「うん！！！」」」

彼らが来てくれればきっと何とかなる
そう信じて、彼らは闇の書に向かって飛んでいった

ーーー

「フェイトちゃん！！」

相手の動きが止まると踏んで攻撃に向かったフェイトが急ブレーキをかけ、無防備になってしまうのを、なのはの砲撃で注意を逸らして助ける
戦闘になってない

これでは壁打ちと同じだ
相手にまともに効いた攻撃など一切ありはしない

フェイトとなのはの挟み込みでの砲撃ですらも、彼女は防いでしまう

「断て」

その一言から出現したバリアで、両側から迫りくる砲撃を微動だにせず受け止める

「穿て、ブラッディダガー」

しかも、その砲撃を受け止めた状態のまま、血のように赤い短剣による攻撃に移る
その軌道は直線的で、カクカクと折れ曲がりながら砲撃を回りこんで目で追えぬ速さでなのはとフェイトに直撃した
それは刺突による攻撃ではなく、あくまで魔力での攻撃だったのか、着弾と共に爆発し、爆煙で二人を包んだ

だが、その煙から出てくる二人に大きな怪我はない

ただ、その衝撃に顔を歪ませた

『そこまで大がかりな攻撃はまだないからなんとか行けるかもしれないけど・・・・』

『このままじゃジリ貧に・・・・こっちの魔力が先になくなっちゃう！！！！』

無事な二人を見て、業を煮やしたのか
闇の書は片手を上げ、宣告した

「咎人たちに、破滅の光を」

魔力が集束していく
なのはの最大魔法が使用されようとしていた

ーーー

なのは達は何かに追われているような緊張の面持ちで闇の書から急激に離れていった

「・・・・・まあいいや!!めんどくさいことは後回し!!とりあえず、おとなしくーーーーぅうおい!?」

蒔風が闇の書の目前、五十メートルで気付いた
集束された魔力。桜色の魔力光。そして魔法陣。あれは・・・・

「スターライトブレイカー!?いっぺんなのはが蒐集されたからか!?魔力は使い果たしてても情報は残ってたか!!」

蒔風が分析し急ブレーキをかけ、その場から離脱しようとする。
だがすでに集まった魔力は直径五メートルほどにまで溜まっており・・・

「スターライト・・・・」

「いい!?やっべやっべ!!もう一回言っとこうか?やっべ!!ちょい待ち待って待ちやがれって三段活用!?」

もはや回避不能な状態である
なればこそ、腹をくくって「星」を冠するその砲撃を、撃ち滅ぼすのみ!!
少年の拳は威力もさながら、そのことに特化した名を持つ拳!!!

「ブレイカー・・・」

バゴォウ！！！！！

その膨大な魔力による砲撃が周囲を包んでいく
そしてそれが蒔風に到達する

「しゃぁーーーねーーーーなぁーーーーーーーー！！！！！！！（泣）

打・滅・星！！！！！！」

ドゴゴゴゴゴガン！！！！！！

その拳を次々に叩きこむ蒔風
その名の通り、この拳は「星」を「打」って「滅」ぼすもの

星に関する名のつく技、概念は、この拳の前には無と消える
しかし

「こいつっ・・・・・質量がでか過ぎるッ！！！！」

蒔風が何度も何度も撃ち続けるが、その身体は徐々に後退して行っている
しかし、それは確実に受け止めていた
本来なら既に結界内を覆い尽くしているはずの魔力が、蒔風一人に食い止められていた

空中からだんだんと降ろされていく蒔風が、ついに地面に降りる
しかし、その勢いは止まらない！！！

「ぐ・・・おおおおおおお！！！！！」

グォッ・・・・ブワァッサ！！！！！

蒔風の翼がより一層大きく開かれ、全力での力の行使を始める
その過剰な力の余波が翼から放出され、銀白の羽根がキラキラと輝いてその場に舞う

（チックショウ！！！筋量が絶対的に足りねえ！！！この体さえ何とかなりゃア、こんなもんとうに追い返してんのによ！！！！）

バゴォォン！！！！

蒔風の渾身の一撃で、少しだけ砲撃を押し返す
だが、それはすぐに戻ってくる
なまじ勢いがついた分、さっきよりも強烈に！！！！

しかし、この少年はあとには退かない
息を吸い込み、両腕を引く

そして溜めこんだ息を一斉に吐き出し、戻る殲滅の光（スターライトブレイカー）にその両拳を叩き込んだ！！！！！！

「打滅星・双拳爆砲！！！！！！！」

バッグォアッ！！！！！！

両拳が同時にそれとぶつかる
その瞬間に、天地を轟かせる轟音が周囲に響き渡る
その音の衝撃に、結界内のビルすべての窓ガラスが砕け散り、小さい建物などは瓦解してしまった

「ごおおお

「あれ?誰かいたのか?」

「あ、うん・・・」

「えっとね・・・アリサちゃんとすずかちゃんが・・・・」

「ヴェ?そりはマジでぃすか!?」

「あ、あはは～」

「バレタの?」

「うん」

「俺は?」

「翼くらいは見られたかな?顔はわからないけど」

「あっちゃ～～～。説明めんどいぞ～～～～」

「うん・・・でも今は」

「そうだな」

蒔風たちが振り返る

と、そこに闇の書がふわりと飛んできた

「主は嘆き、悲しんでいる。我が主の望みは、このような絶望しかない世界が、悪い夢であってほしいということ。私はそれを成し遂

げる。そのためには・・・」

そういって闇の書がすっ、と三人に手を向ける

「主に永遠に続く安らかな夢の眠りを。そして騎士たちを傷つけた者には」

メキッ！！

「永遠の闇を」

ドゴゴン！！！

アスファルトが砕け、その下から茶色の龍のような巨大蟲が触手と共に飛び出してきた
かつてシグナムたちが蒐集した巨大生物だ
それが三人に迫り、絡みつき、その体を締め付けようとせまる

「ダァアッ！！！！！！！！」

ダゴン！！！！！

しかし、蒔風が地面を踏みぬき、振動が一体を揺らす
その衝撃に本体の蟲も、触手も、ぐったりと倒れてしまう

「夢の中でだと？そんな甘いことを、このオレが許せるとでも？バ

カなこと言ってんなよ！！人は誰でも生きてる限り、傷付き、絶望し、別れに涙を流していく。ああ、確かにはやてに振りかかったことは悲劇だ。それは悲しむべきことだ。慈しんでやるべきことだ！！だけどな、それから眼を逸らしていくなんてことは俺は認められない。はやてが目を逸らして、夢の中ににげちまったら、ヴィータやシグナム達の頑張りが全部なかったことになっちまうじゃねえかよ！！！！あいつら何のために必死になったのかわかんなくなっちまうじゃねえかよ！！！誰もが直面し、乗り越えていくことをお前だけ都合よく避けるなんてことは許さない！！！乗り越えて、強く生きろよ！！逃げるなんて軟弱な生き方は認められない。そんな生き方は誰も救われない！！！！俺の友人はな！！誰もが救われてなきゃいけねえんだよ！！！！！！！」

だがその叫びに闇の書は諦めた口調で言い返す

「そのようなことは知らない。私はただ主の願いをかなえるだけ」

「願いを叶えるだけ！？そんな願いを叶えて……それで、はやてちゃんは本当に喜ぶの！？　心を閉ざして・・・何も考えずに、主の願いを叶えるための道具でいて、あなたは、それでいいの！？」

なのはが叫ぶ
なるほど、それは正論だ

だが、悲しいことに彼女には、それだけの時間がなかった
自己が芽生えるだけの十分な時間がなかったのだ

いや、自己はきっとあるのだろう
その証拠に、その瞳からは涙が流れていた

しかし彼女はまだ、自己を認識することが出来ていなかった

「我は魔道書、ただの道具だ・・・」

「だけど、言葉を使えるでしょ！心があるでしょ！？そうでなきゃおかしいよ、ホントに心が無いなら・・・泣いたりなんか、しないよ！！」

「この涙は主の涙、私は道具だ、悲しみなど・・・無い・・・」

その言葉に、フェイトが感情を爆発させる
それはきっと、かつての自分の姿をそこに見たからだろうか

「悲しみなど無い？そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって…
…誰が信じるもんか！！」

その言葉を蒔風がつなぐ

「お前に心がないのなら、お前のその「主の為」と言う願いはなんだ！！！ここまで俺たちに執着して、それでもお前が俺たちを潰そうとしているのは、それがお前の願いだからだろ！？主のために願うその心が、ただのプログラムなわけないだろ！！！！」

「あなたにも心があるんだよ！？悲しいって言っていいんだよ！？
あなたのマスターは、はやてちゃんはきっとそれに答えてくれる、
優しい子だよ！？」

「だから、はやてを解放して……武装を解いて！お願い！！」

さらになのは、フェイトが続き、説き伏せる
しかし、彼女もはや止まれない

その瞬間、周囲が崩壊を始める
火柱が上がり、天が唸る

その状況は世界の崩壊そのものだった

「ッ！！闇の書による崩壊プログラムか！？」

「そうだ。私もじきに理性を失う。そうなれば主の願いは果たせない。そうなる前に・・・主の願いを、叶えたい」

それは彼女のたった一つの願いだった。
永きにわたり道具と扱われてきた彼女の、最初の願いた。
故に彼女は何にも変えてそれを成し遂げるだろう。

その胸に宿る、主の願い。
自分はそれを叶えるしかできないプログラム。
そうすることでしか、主に仕えることができない悲しみ。

ああ・・・と彼女は思う。
なぜ、こんな物になってしまったのか。
なぜ、こんな形でしか主に尽くせないのか。

しかしもう止まらない。
自分はもう、暴走するだろう。
もしこの呪縛から解き放たれ、主を真に救えればどれだけ幸せなこ

とだろう。
それができるならば、私は私の意義を為せる。

しかし、残りの時間はあまりにも短い。
故に、このような粗末な形しかで貴女を救うことのできない私をお許し下さい。

私は・・・・・・

ついに出会えた真の主と認めるあなたの、真の願いを叶えられなかった

「ハァッ!!」

闇の書が三人に砲撃を放つ
それを蒔風が畳返しで防ぎ、爆発して爆煙が起こる

そしてその中からフェイトが飛び出していった

「言うことをッ、聞けェ!!この!!!駄々っ子!!!!」

バルディッシュを戦斧のアサルトにし、斬りかかる

「お前も・・・安らかな闇の中に眠れ・・・・」

それをバリアで防いだ闇の書が、魔導書をフェイトに向ける
するとフェイトの身体が光の粒子となって、本の中に消えてしまった

《蒐集》

魔導書が宣告し、何が起こったのかを二人は理解した

「フェイトちゃんが・・・・」

「蒐集された!?一度蒐集されてるから、本人もお手の物ってか?」

その二人に闇の書が言う

「我が主もあの子も、覚めること無い眠りの内に終わり無き夢を見る。生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「永遠なんて、ないよ。みんな変わってく、変わっていかなきゃ、いけないんだ。私も……あなたも!」

「夢は終わりがあるからこそ夢なんだ。覚めない夢は悪夢に過ぎない。限りある命だからこそ、限界があるからこそ、そこに挑んで、それを乗り越え、そうやって人の人生は輝いていくんだ!!!お前のその永遠は停滞だよ。先に進まなくちゃ、その命は輝かないんだ!!!」

なのはと蒔風が闇の書へと言い返し、飛び出していく

「おおおおおおおおお！！！！！！！」

蒔風が飛びかかる

だが、それが到達する直前に、闇の書が砲撃を撃ちその動きを止めた

ドパン！！

「ぐおっ！？ノーモーションで砲撃！？でもそれじゃあオレは倒せな・・・」

「お前も・・・・・悲しみの過去があるようだな」

「！？」

「お前も・・・永久に」

シュウウウウウウ

蒔風の身体が光の粒子となって魔導書に吸い込まれていく

「ッ！？」

「銀白の翼人・・・か。翼人の色彩も増えたものだ」

「なに！？う、あああああああああ・・・・・」

そうして少年の姿も消える

残されたのはなのは一人

「お前も・・・幸せな夢の中で・・・・」

「私は、先に進むよ。それにみんなも、今に留まってるだけじゃない・・・未来に向かって、進んでるんだ！！フェイトちゃんも、舜君も、はやてちゃんも！！！！」

吸収された三人の友を救うため、魔法少女は単身で向かった

「永遠」はただ聞こえのいいだけの言葉だ
永遠なんてものは存在しない

そこにあるのは、強固な人の想いだけだ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはA's ～永遠の夢、有限の現～（後書き）

アリス「まさかの蒔風吸収」

それは置いといて・・・

さて

これから蒔風がめぐる世界を見直したんですよ

ア「はい」

ほとんどライダーだ・・・・

ア「ええ！？」

だからみなさん

もし出して欲しい！！というものがあったら言ってください

知ってる作品で、なおかつ書けそうなら書きます

ア「結構前に言ってたのもありますよね？」

マジコイとか？

あれも「読みたい！」という声があれば書くと思います

しかし基本知らない物は書けないので、無理な場合は無理、と言うので、そうなってしまったらごめんなさい

注意事項
ロボットアニメ系は出さないつもりです
某螺旋や某機動戦士好きのみなさん、申し訳ございません
あと”ｎｏ　Ｎａｍｅ”系は難しいので勘弁してください！！！

ア「次回、夢で逢えたら・・・・」

ではまた次回

じゃあ、いってらっしゃい、フェイト。
現実でも…こんなふうにいたかったな……

うわあああああああん（泣）（ノД`）

一人の青年が立つ

「ここ・・・・は・・・・・」

蒔風が人ごみの中にポツンと一人で立って周囲を見渡している

「どこだ・・・・■■■の中にしては・・・・」

と、そこに声が唐突と掛けられた

「おい！蒔風、どうした？」

その声にハッとすると、周囲はいつの間にか大きな駅のホールになっていた

「あ、ああ・・・・揃ったのか？」

「おう！じゃあ、行こうぜ！」

そう言って蒔風は五人くらいのグループの中に入り、駅から出発した

「最初の曲なに歌う？」

「ばっか初原（ういはら）、最初はモチ「Ｂｕｔｔｅｒ－Ｆｌｙ」だろ！」

「いいか？サビはみんなで一斉歌唱すんだぞ！！わかってんな！？」

「おい蒔風！なんかテンション高いな！！」

「ああ！！なんだろう・・・凄くうれしいんだ！！！テンションあがってきたＹＯ！！」

そしてカラオケボックスに入り、曲を歌い上げる

「「「「むげぇんだぁいなぁあああああ！！！！！」」」」

「いえええええええええ！！！！！！！」

「「ほーーーーッ！！！ほぉおおおおおおう！！！！！」

「にしても俺らバカなことしかしてねえ！！！！」

「ツッコミが追いつかねえぞ大谷木（おおやき）！！！あっはっはっは！！！」

「バカやろう！！俺たちは突っ込まれるために馬鹿やってんじゃねえんだよぉ！！なあ佳景山（かけやま）！！」

「そうだ。我々はバカなことやるためにバカなことやってんだよ。目的のあるテロじゃない。テロりたいからテロしてんだ！！！」

「うわあ！！こいつらマジキチ（笑）」

「今更だな本田。俺たちにそれは」

「「「誉め言葉！！！！」」」

「はじまって十分なのにこのテンションはヤベエ！！！」

そしてその後に水風船を買い、みんなで投げ合う

「くたばれぇ！！！」

「よっしゃ来い！！！（グバァ！！）」

バチィン！！

「バカな！！！当たっても割れない！？」

「気合がちがぁう！！！」

「おい！お前携帯大丈夫かよ！？」

「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ＢＯＵＳＵＩ！！」

「「「な、なんだってーーー！？」」」

「じゃあいいな（ザパァ）」

「うひおおおお！？ばっかお前ばっかお前！もっかい言っとく？ばっかお前！？」

「「初原がヌレヌレだーーーーー！！！」」

「変なこと大声で騒ぐな！！！」

「まあこのカンカン照りだし、すぐに乾くべ」

「まあねーーー。だが許さん（ベチャ）」

「濡れる！！」

「よし、みんな。逃げんぞ。鬼は初原。全滅鬼だぁ！！！」

「「「いえええええ！！！！！」」」

「え？なに？はじまってんの！？」

「当然だ！！」

「範囲は公園内な？」

「捕まえてみろい！！！！」

「上等だーーーー！！！！！」

そして夕暮れ
皆の服も乾き、これからどうするかを話しながら繁華街を歩く

「飯食ってくか？」

「どーするよ」

「・・・・・」

「大谷木、どうした？」

「あーーー。なんかガラの悪いあんちゃんがおっちゃんにイチャモンつけてんなと」

「なにぃ！？」

「よぉし」

「行くぜぇ！！」

「「「おぉおう！！！」」」

みんなでそこに突撃していく
相手は五人、こっちも五人
相手はナイフとか持っていたけど、余裕だった

みんなで戦った
みんなで勝った

ヤンキーたちが逃げ、荷物を置いていく
おっちゃんの荷物を払い、返すとお礼をと言ってきたから断った

「俺たちはやりたいからやっただけですから」

「そーそー。事実おっちゃんは怪我しちったし」

だったらせめて名前ぐらいは、と聞いてきたのでこう答えた

「名乗る必要はないですな」

「そ、俺たちゃ変人集団さ」

「騒ぎがあればそこにいる」

「だから、あんま俺らと関わらない方がいいかも」

「ま、今日は助かったってだけでいいじゃない」

「「「でわ！！」」」

「おい！警官来たぞ！！」

「めんどいから逃げよー！！」

「おあっはっは！！こりゃスリル！！」

「しっかり話せば感謝状くらいは貰えんじゃねえ！？」

「いーよいーよそんなけったいなもんもらったってしょうがねえ！！」

そういってその場から逃げる五人

そして気付くとまた昼ごろだった

「俺たち彼女いねーよなー」

「ま、変な奴らだしねーーーー」

「同感ｗｗｗｗ」

「おいそこ、悲しいこと言うなーーー」

「はいこれ」

「おう・・・ブーーーーーー！！！！」

「どした？」

「これ何入れた！？」

「コーラにメロンソーダと紅茶。あとシロップ三個」

「お前自分じゃ処理なんてしないんだからこういうのやめいよ！？」

「ほい」

「あぁッ！サキイカ入れやがった！！！」

「やめんか！！（スパァン！！！）」

「アたっ！？」

ファミレスのドリンクバーで騒ぐ

そのまま街に繰り出し、そこでもまた大いに遊んだ

ゲーセン、カラオケ、ボウリング、公園、海、山、テーマパーク！
！！

ああ・・・・
なんて最高な世界だ！！！
漫画とかゲームみたいなことは全然起こんないけど、それに対して
クソつまんねェとか思っても、それも込みでなんて素晴らしい！！！

最高の仲間、最高の時間

それがなにも起こらずこのまま続く、こんな「なにもない」世界が
大好きだ！！！
きっとこんな時間はずっとずっと続いていく！！！

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

本当に？

「ここは・・・・本当なのか？」

「え？」

「何か忘れてるんだ・・・・・・」

「蒔風・・・・・・」

「そうだ・・・・忘れてる・・・・・なんで忘れてんだ・・・・・」

「ふ・・・・・」

「そうだよ・・・なんで忘れてたんだ?」

「へ、さすがだな」

「忘れるわけもないはずなのに・・・・・な」

「やっぱこうなるか」

「俺の現実は・・・・・こっちだ」

ズゴオッ!!!!!

蒔風が自覚する
その瞬間に、周りの景色が崩壊した街に塗り潰された

「思い出したのか?」

「ああ・・・・完璧にな・・・・・」

「そっか・・・・」

振り返るとみんながいた
頭に包帯を巻き、煤が頬につき、服は所々千切れている

崩壊した街、ひび割れた空
それは「奴」の襲撃の悲惨な爪痕だった

「ゲームとかマンガみたいなこと・・・起きちまったんだな・・・・」

「そうだな・・・・」

「なあ、今ここってどうなってんだ?」

「ここは闇の書に蒐集されたお前の情報から得た世界だ」

「じゃあ・・・・幻想なんだな?」

「そうとも言えないさ」

「え?」

「お前と言う情報をもとに数多の世界に検索をかけて見つけ出した世界の情景がここにある」

「つまり、ここは幻想でありながらもお前のいた、元の世界なんだよ」

「なあ・・・・このまま一緒に遊んでようぜ」

「そうだよ。おまえ、このお話には本来登場してないキャラじゃないか」

「お前がいなくても「高町なのは」や「フェイト・テスタロッサ」はどうにかしてくれる」

「この世界ではあいつらアニメになってんのも、思い出してんだろ？」

「ああ・・・どうなるかもな・・・・」

「だったら・・・このままいようぜ・・・・」

そんな友の誘い

たしかにそうだ
蒔風はいなくても物語は回る
だったらここで幸せな世界にいてもいいじゃないか
今まで散々つらかったんんだ
何度だって死にかけたんだ

ここで幸せなままでいても、いいじゃないか

しかし

「仲間が・・・待ってるんだ」

蒔風が言った

「俺が戻ると信じて、外で戦ってる子がいるんだよ・・・それを見捨てるなんてできない」

その言葉にみんなが黙った
そして口を開いた

「だぁーーー。やっぱダメかぁ！！」

「そりゃそうだ。ここでそうだな、なんて言われてたらぶん殴ってるよ」

「早く行って来い」

「ケリ、つけて来いよ」

「・・・・・・・は？」

「ま、どっちにしろ俺たちはお前を蹴りだしてでも行かせるつもりだったよ」

「ちょ、お前ら闇の書の・・・」

「そうだけどほら、今は「俺」だから」

「それと、一つ言っとく。お前の世界は修繕に向かっている」

「何年かかるかわからない。もしかしたら生きてる間には直らないかもしれない」

「でも、いつかお前の帰る場所はちゃんとあるんだ」

「それは・・・ほんとうか？」

「マジマジ。だから行って来い」

「救うんだろ？」

「ああ・・・そうか・・・・俺の世界は・・・・まだ・・・」

「世界は強い」

「砕かれても、こんなにもボロボロになっても、まだ生きている」

「死を恐れないで戦う男。覚悟とか乗り越えたとかそんなんじゃなく、死に恐れない男」

「てめえはそんなバカなこと言ってたけど、そのおかげで俺たちは元の世界で生きている」

「だから、全部の世界救いきって早く戻れよ」

「オリジナルのオレっちだって待ってんだからな」

「ああ・・・・・ああ！！」

そして蒔風が決意する

「蒔風、こっから戻ったらここで思い出した「原典」に関する知識は失うぞ？」

「いいよ・・・今までもそうだったし」

「そうか・・・」

「十五天帝・・・・・」

その剣をくみ上げ、一つの巨剣とする

「さあ・・・夢の時間は終わりだよ」

ブゥン

「ここからは・・・・・・」

ゴォオ！！

「輝ける未来へと・・・・・・」

「ああ、待ってるぜ。馬鹿野郎」

カァァァァァァアアアアアアアアアアアアアアア・・・・・・・・・

ーーー

「だ、大丈夫？」

フェイトが蒔風を支える
そのままなのはに近づいていく

「舜君、翼は？」

「今管理局がこの光景見てるだろうから、あんまだしたくないンよ。足場とか作れる？」

「僕に任せて」

さらにそこによってきたユーノとアルフ
ユーノが魔法陣の足場を作り、そこに蒔風が立つ

「で、なにあれ？」

海上にある巨大な黒いドームを見て蒔風が聞いた

どうやらなのは達の説明によれば、あれこそが闇の書の暴走プログラムそのものなのだそうだ

驚くことに八神はやては闇の書覚醒後に、暴走するプログラムから管理者権限を取り戻した
そして暴走プログラムの切り離しに成功し、権限施行のために表に出ているプログラムをなのはが吹き飛ばしたらしい

「じゃあそこの黒いのは・・・」

「あれが暴走プログラム。もうはやてちゃんとは切り離されているはず！！！」

「だったらあれぶちのめせば！！！」

「終わる！！！」

と、そこで白い光が発生する

三角形のベルカ式の魔法陣が回り、そこから現れてきたのはヴォルケンリッター

そして、騎士甲冑に身を包んだ、完全に闇の書、否、「夜天の書」の主となった八神はやてだった

「はやて！！！」

「はやてちゃん！！」

「はやて！」

そこにみんなが寄る

蒔風はユーノの作る足場を跳んでいった

「なのはちゃん！！フェイトちゃん！！それに・・・」

「久しぶり。蒔風舜だよ」

「ああ！！舜君！！って、みんな管理局に人やったん？」

「俺ら三人は違うぞー。ま、フェイトは管理局保護下。なのはと俺は協力ってとこ」

「そっか・・・この書の中にいた時に、全部知ったよ。みんな、迷惑かけてごめんな」

「気にしないでよはやてちゃん」

「はやて、髪の色が・・・」

はやての髪を見ると白く、と言うよりクリーム色になっている

「あ、うん。リィンフォースがいるんよ」

「りぃんふぉーす？」

「この・・・夜天の書にずっといた子。あたしが新しい名前をあげたんや」

すると、融合デバイス・リィンフォースからの声が、はやての中から聞こえた

『今は主をサポートするために姿を出せません。すみません』

「そうか・・・この書も救われたということか」

「これが夜天の書・・・・」

と、そこにシグナム達が近寄ってきた

「その・・・なんだ・・・すまなかった!!」

「あたしたち、勘違いして・・・・それで・・・・」

「わかってるよ」

「でも、なのはちゃん達にひどいこと」

「もういいですってば」

「しかし、我らの気が収まら」

「「「もういいって!!!（困）」」」

なのは、フェイト、蒔風が同時に言った

「それ以上言われたらこっちが困っちゃうよ」

「あんさんらは主のために最大限動いた。それを誇りに思っとけ」

「あ、ありがとう・・・」

「みんな、こんな時にすまないが、事態は一刻を争うんだ」

「クロノ!!」

そこにクロノがやってきた

「あれをどうにかしなければならない」

「制御の失われた暴走プログラム・・・・」

「なに、今だけの人数がいるんだ勝てる勝てる！！！」

「そうだね！！！」

「負けないよ！」

「みんな！！！行くで！！！」

「「「「「「「「「「おう！！！！」」」」」」」」」」

こうして

逆転劇は始まった

そして

「やった!!計算オワタ＼（＾ｏ＾）／
あっとは機会を待つだけだぁ～～～～♪
物語は嫌いじゃないけどな～～～。目的のためだ」

はたしてハッピーエンドになるのだろうか？

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはA's　～夢で逢えたら～（後書き）

アリス「蒔風の若干の救い」

ですね

ア「フェイトとかはやてのほうか書かないのですか？」

書いたところで原作と同じだから、書いてもしょうがないんですよね

ア「確かに・・・」

ですので、きっとみなさん原作知ってると思いますのでスルーしました！！

決してあのシーンが嫌いなわけではないです！！！

感動しすぎます！！

逆に書けませんよあんなシーン！！！

う、う、うわあああああああああん（泣）

ア「ほらほら泣かないで」

う、う、グズッ

そのかわり蒔風のを書きました

あれらの物とは比べ物にはなりませんが、一読していただけると幸いです

ア「ですねーーー。さすがにフェイトやはやてのには勝てませんっ

て」

う、うわあああああああああああん！！！！！
アリシアぁぁあああああああ！！！！！！！
救えなくてごべんんんん！！！！！

ア「次回、ＶＳ暴走プログラム」

ではまた次回

我ら、夜天の主のもとに集いし騎士
主ある限り、我らの魂尽きることなし
この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり
我らの主、夜天の王、八神はやての名のもとに

「・・・・で、やるゆーてもどうやるんだよ」

「そこなんだよねえ・・・・」

意気込んだはいいが、暴走プログラムはまだドームから姿を現さない
アースラによると反応は依然消えず、おそらく中で肉体を構築して
いるのだそうだ

「つーことは出てきた時点でクライマックス？」

「そうなるね。だから今ここで策を考えないといけない」

そこでクロノが提案してきたのは「アルカンシェル」と言うアース
ラ搭載の魔導砲による消滅だ

「これは砲撃自体にはほとんど威力はないんだけど、着弾後に発生
する空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅するものなんだけど」

「世界ごと切り取って消すのか？」

「そういうことになるね」

「でもこれはこのままでは撃てない」

どういうことだ、と蒔風が聞くより早くクロノが先を言う

「効果範囲が広すぎるんだよ。発動地点から百数十キロ。これでは・・・」

「街が消えちゃう？」

「おおっと」

「はやての家も？それは絶対にダメ！！」

みんなから反対される
もちろんクロノも同感だ

「だからどうしようかと・・・・」

「ここじゃなくて別の場所で撃っちゃえば？」

「「「「え？」」」」

なのはのふとした一言が、みんなの耳に残った

「だ、だってここで撃てないんなら・・・・おかしなこと言ったかな？」

キョトンとするなのはの頭を蒔風がポンと手を当てて撫でる

「いーや、名案だ」

「と言うか、それしかない」

「でもあんな大きな物は僕でも転送できないよ？」

「「だったら吹っ飛ばすだけだ」」

クロノと蒔風が同時に言う

「でもあそこから出てきたら絶対防壁はってんだろうなぁ」

『それは間違いないでしょう。貴方などの魔力もあるので、おそらくは五層ほどかと』

リィンフォースが伝える事実に、蒔風がニヤリとする

「よっし、段階で攻撃しよう。まず俺が三層ほどぶち破る」

「「「「三層！？」」」」

「この身体で無茶して、だからな。本来なら楽に全部いってる」

「本来？」

「あーーー気にすんな。で、問題はその後だな」

「では私がやろう」

「じゃ、その次あたしな」

シグナムが名乗り上げ、その後にヴィータが立候補する

『蒔風の直後に攻撃しても、おそらく一層は回復しますよ？』

「だったらそれはまた俺がぶちのめす」

「え？わたしたちは？」

「なのは達は最後だ。防壁破ってもその後にデカブツが来るんだから」

「あ、そっか・・・・」

「だったらそれまでの舜君の回復は私がやります」

「その間の護衛はまかせろ」

シャマルとザフィーラが蒔風の援護に回る

「で、デカブツが出てきたら、なのは達、任せたよ？」

「任せて！！！」

「大丈夫！！」

「うちもがんばる！！！」

「その意気だ！！！それでちっちゃくなったら」

「僕とアルフの転送魔法でアースラの目の前に！！！」

「それでアルカンシェル！！終わりさね！」

ズッ、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・・・・

「来るぞ！！！！」

そして、ドームが割れる
中から現れたのは異形の怪物
全長五十メートルは越えてるだろうか

それだけの巨大な魔力の塊が、海上にその身を現した
まさに混沌（カオス）

今まで蒐集した巨大生物のキメラのような姿がそびえたつ

「んじゃ・・・いくっか！！！！ユーノ、翼をうまく隠してくれ」

『オッケイ！！』

蒔風が足場の魔法陣に立ち、構える

「一番！！！世界最強、蒔風舜！！！みんなの願いを乗せて！！！！開翼！！」

開翼し、力を溜めこむ

蒔風の周囲に黒い力場が発生し、それが手のひらにまとまる

「混闇の元に・・・獄炎！！雷旺！！いっくぜえええええ！！！！！」

二つの力がその手にまとまる

「獄旺砲！！！！！！」

ゴガウ！！！！！！！！

極太の砲撃が放たれ、それが第一の防壁に当たり、次の瞬間には二層に到達し、三層目を粉微塵にする！！！

蒔風の砲撃が放たれる直前にシグナムの用意は終わっていた

「二番！！烈火の将、シグナム！！レバンティン、刃（やいば）、連結刃に続く、もう一つの姿！！！」

《ボーゲンフォルム！！！》

レバンティンの剣身と鞘を繋ぎ、弓状へと変形させる

阻止れ自らの魔力から精製した矢を構え、咆哮する！！！

「駆けよ・・・隼！！！！」

《シュツルムファルケン！！！！！》

シュカッ！！！！

ボッ、ギュオオオオオオアアアアアアアア！！！！！！！！

音を越え、空気の壁をぶち割って、その矢が第四層目に衝突する！！！！！

ギャッ、ビキィ！！！！

ドゴオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

そして防壁は残る一層

そこにヴィータの超巨大化したグラーフアイゼン最終形態・ギガントフォルムでの一撃が送り込まれる！！！

「三番！！鉄鎚の騎士、ヴィータ！！！行くぞアイゼン！！」

《ギガントフォルム！！！》

「轟天爆砕！！！！ギガントシュラーーーーク！！！！！！」

ヴィータの全力の粉砕攻撃が、防壁へと振り下ろされる！！
最後の層とハンマーヘッドがぶち当たり、その層が粉々に砕け散った

「よっシャ！！行く、ぜってうをぉ！？」

むき出しになった本体に蒔風が向かおうとすると、まずいと思ったのかプログラムが蒔風に向かって触手をおおよそ三十本もの数伸ばしてくる

「させん！！！！縛れ！！鋼の軛（くびき）！！！！」

しかし、その眼前にザフィーラが立ちはだかり、白く輝く槍が地面から突き出し、それら触手をすべて貫き殲滅する

その隙に新たなる層を構築しようとするプログラム

だが

「させない！！デュランダル！！！」

《ＯＫ，ＢＯＳＳ》

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ。凍てつけ！！！エターナルコフィン！！！！」

クロノによる凍結魔法にその全身が固まる
その凍結魔法が水平線まで海を氷に変え、構築途中の防壁まで凍りついた

「よっしゃ、力をッ！！借りる！！！ハクオロさーーーーん！！！
ウィツァルネミテア！！！！！！」

ドゴォォン！！！！

ウィツァルネミテアと化した蒔風が跳躍し、未完成の防壁の上部に拳を叩き込みぶち壊す！！
さらに凍結したその肉体を牙と爪で掘り進み、ついに輝く核を見つける！！！

「ぁあったーーーーーー！！！！！！！」

蒔風がそれを抉り取り、上空に投げ放つ

すると、海上の巨大なプログラムの肉体がザアッ、と砂状になって
風に流れて消える
それと同時に打ち上げられた核からはボゴゴッ！！と肉体が超速再
生されていく

「撃てぇ！！！！」

「全力全開！！スターライトォ・・・・」
「雷光一閃！！プラズマザンバァーー・・・」
「ごめんな。おやすみな・・・響け終焉の笛！！ラグナロク・・・」

流星のように魔力（ひかり）は集まり、
すべてを貫く雷が舞い、
終わりを告げる輝きがともる！！！！

「「「ブレイカーーーーーーーー！！！！！！！！！」」」

バゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！

三方向からの一斉超巨大砲撃・トリプルブレイカーにより、核が破

損し、吹き飛ばされる
しかし再生は依然としてかのなようで、その速度は落ちてもいまだに再生を続けている

「長距離転送魔法！！」

「目標、軌道上！！」

ユーノとアルフの転送魔法によってコアが送られようとする
行く先は宇宙
この星の軌道上で待機しているアースラの前方
そこにアルカンシェルの砲撃が待っている！！！

「行くよ！！」
「任せな！！」

ユーノの掛け声にアルフが応じ、呼吸を合わせて同時に発動させる
！！！

「転送・・・・・ッ！？」

しかし、その声は途中で止まる

「どうした!!ユーノ!!!」

「おかしい・・・・目標がロストした!!!」

「な・・・に・・・・・？」

蒔風たちがユーノの元に集まる

皆デバイスを元の状態に戻し、蒔風も翼を消し魔法陣に立っている

「どういうことだ!!」

「反応が急に消えた!!」

「バカな・・・あれが移動などできるわけがない!!!」

と、そこに声が響く

「感謝感激雨霰!!!!!皆さんお待たせいたしました!!!呼ば

れてないけどじゃじゃじゃじゃん！！！！俺のぉ・・・・・ビッグイベントショーーーーーーーーーーーーーーーーウ！！！！！！！！！」

さっきまであの化け物のいたところに、一人の男が浮いていたその声のした方を、全員が一斉に見る

「あ、あいつは！？」

「お前ら始めてか・・・・なのはとフェイト、クロノは・・・」

「知ってるよ」

「うん」

「忘れるものか・・・・」

「さてさて、楽して手に入れたものだけど・・・・まあオレにはどーってことはないまあ！？蒔風ぇ！！お前まだちっちゃいのな！！！」

「うっせえバカ!!!なんてことしてくれんだこの野郎・・・・」

「あいつが・・・・」

「蒔風の言っていた・・・・」

「奴」

そう呼ばれる男が、手のひらにコアを乗せて立っていた
そのコアはなぜか再生を止め、大人しくその手の上にいる

「へへへ・・・こっちはそれなりに満身創痍・・・だが、まあ気にすんな切札はあるしな・・・・」

「あいつには・・・勝てるのか!?」

シグナムやヴィータ、おそらくは覚醒時にシグナム達のデータから知ったはやてが蒔風に訊く
それに対し、蒔風はこう答えた

「大丈夫だ・・・なに、さっきと変わらないよ・・・・あそこにいんのも、化け物だからな」

そして胸を張ってこう言った

「大丈夫だ!!お前らの勝因は、ここにいる!!!」

「さて・・・ラウンド?だ・・・・」

「バーカ・・・ファイナルラウンドだよ」

終わりかと思えた戦い
しかし、この男が乱入する

「空気読めよ!!!終わりだったじゃん!!!」

「そこにあえての乱入してみたＹＯ!!」

終わらない
まだ、終わらない

翼人、蒔風の戦いは、これが本番なのだから

to be continued

なのはA's ～プログラム粉砕？～（後書き）

アリス「う～～～わ。なんか思いっきり振りかぶってスカした感じ」

書いてて思いました

でもこのタイミングじゃないとねえ・・・・・

ア「それにしても「奴」はプログラム使えるんですか？」

それは次回のお楽しみ

ア「次回、「奴」の特権」

ではまた次回

夜天の主の名において、汝に新たな名を送る

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール

ーーーーリィンフォース

「主失いし者よ・・・いいだろう・・・ついてこい」

そこ言葉に呼応して、コアがドクン！と脈動を起こす
そして「奴」がその胸元にコアをうずませると、一瞬辺りが静かになった

「な・・・何が始まるというんだ・・・・」

「気をつけろぉ・・・・とんでもないのが来るぞ・・・・」

「Ｗｏｏｏ

いや、それはもはや怪獣と言っていいスケールだ
それの出現と共に、海底が隆起し、海だった場所が陸地にまで盛り上がってしまった

「「「「「「ッッ！！！！！！」」」」」」

その巨体に絶句する一同
蒔風ですら唖然とするほかなかった

怪獣の巨体は二段構造になっている

一段目
その巨体を支える脚は六本あり、昆虫の足のような形をしている
さらに正面にはクワガタの様なハサミまであり、そこに禍々しい表情があった
その一段目だけなら蜘蛛のように平たくなっており、さらにそこから二段目になっている

二段目
一段目の身体の真ん中から上に向かってだんだんと細くなるように鎧のような肉体がそびえ立ち、そしてその頂上にはまるで王座のような椅子が取り付けられていた。
そしてそこに「奴」が座る。
足を組み、頬杖をついて、下方の蒔風たちを見下ろしている。
それはまるで王者のようであった

一段目の上の面と、二段目の中腹までは無数のとげでおおわれており、巨大な物は十メートル、小さくても二メートルはある
そして所々から触手が伸びており、その先端はＵＦＯキャッチャー

の爪の様になっていた

「さて・・・・・どうする?・・・・・面白いデータが残ってるな・・・・」

「奴」が思案し、それを実行に移そうとする

「な、なぜだ!?あれも暴走していたとは言え、我らと同じプログラム!!」

「なんで主でもないあいつが使えんだよ!!!」

シグナムとヴィータが蒔風に叫ぶ
その蒔風は冷や汗を一筋流し、そして納得した

「なるほどな・・・・「奴」がなんで記憶操れたり、世界取りこめたのか分かったぜ・・・・・」

「どういうこと?」

なのはの問いに、蒔風が答えた

「「奴」には大きな特権がある・・・いや、特性と言っていいかもな・・・その特性は・・・・「君臨特権」!!!」

君臨特権

あらゆる物を従わせる一種のカリスマ性

「奴」のそれは主や、よりどころの失ったものを従わせると言ったことに特化した「君臨」だ
故に、主なき「記憶」や、主人公の失った「世界」をその身に取り込むことができるのだ

ちなみに主人公を「世界」の事を知り、そういった意図を持って殺すだけでは世界が崩壊するだけで取り組むことはできない
それを成し遂げたのがこの特性だ
「取り込む」は「手に入れる」とは違う

強いて言うならば、銃を手に入れることと、銃を肉体に埋め込むことの違い

それを為す「奴」は、間違いなく「王」の力を持つものだった
「影役の王」「陽の当らないモノの扇動者」

「奴」は世界にも類を見ない「王の特性を持つ脇役」！！！！

だから主を失った「闇の書の暴走プログラム」さえも手中に収める力は八神はやて以上
ならばその力は最大限に引き出される

「見ろよ・・・新しくまた作り上げてんぜ・・・・」
蒔風が指差した先にみんなの視線が向けられる
そこにはうねうねと立つ三本の触手があった
そのそれぞれの先端には光の球があり、その中で「何か」が構築されているようだ

「くるぞ・・・・気を引き締めろ!!!」
「何が来るんだ!?」
「闇の書の中にある、最も強力な魔力を持つ者を元にしたマテリアル・・・・俺や「奴」は再現不可だろうからおそらく・・・・」

そして三つの光が割れ、中から出てきた姿になのは、フェイト、はやてが驚愕した

「あれ・・・」
「もしかして・・・・・」
「うちらやないか!?」

そこにいたのはなのは、フェイト、はやてをベースにしたマテリアルの少女たちだった
しかしその眼に光はなく、ただの「奴」の操り人形だった

「星光の魔王、雷神の皇帝、闇の暴君・・・・行け」

「奴」が玉座動かず顎をクイッ、と突き出す
それと同時に三体のマテリアルがオリジナルに突撃していく！！！

「くっ、あぁッ！！」

「テスタロッサ！！うおっ！？こいつ・・・速・・・（ガキィ！！）
ぐあ！！」

フェイトが弾き飛ばされ、シグナムも押しのけられる

キュオッ・・・・ドォン！！！

「あああ！！！」

「高町・・なのは！！！！」

ドドドドドンッ！！！

「うわっ！！！」

なのはに砲撃が撃ちこまれて宙にクルクルと舞い、ヴィータに多く

のスフィアが突っ込み、助太刀を許さない

『主はやて！！！来ます！！』

「え、うん！！わかって・・・」

「危ない！！！」

ドゴン！！！

広範囲魔法の攻撃が逃げ場はなく、戦闘の経験もほとんどないはやてに打ちこまれる

その攻撃をクロノとザフィーラが防ぐが、弾きだされ、その衝撃にはやても吹き飛ばされてしまう
その衝撃にリィンフォースとの融合も解けてしまい、はやての髪が元に戻る

なのは、フェイト、はやての三人が一カ所に集められ、そこに化け物本体からの攻撃が迫る
触手の先端からレーザー光線や電撃のようなビームが放たれ、それがひとまとまりになって三人に迫る

「あっぶね！！！！！」

バッッッチィイイ！！！！！！

蒔風が両腕に雷旺をまとい、その反発で光線を弾く
しかし、そのあまりの威力に蒔風の身体は遠くに吹き飛ばされてしまった

そして間髪いれずに再度放たれる光線
しかもそれに上乗せして

「あの反応・・・まさか撃てるのか！？」

「スターライト、ブラズマザンバー、ラグナロク、ブレイカー、発射」

ドギュゴア！！！！！！！

その攻撃が放たれ、三人に一気に迫る
避けることはできない
かといって受け止められるわけもないその威力

シグナムやクロノ達はマテリアル三人娘に邪魔され手が及ばない

「ッ～～～～～～！！！！！！開翼！！！！！！」

ドッパン！！！！

蒔風が開翼し、三人の元へと高速で飛んでいく
しかし間に合わない

蒔風の脳味噌が、経験と感覚と計算が、いくらなんでも三人には間に合わないことを弾きだしてしまった。
それでも止まるわけにはいかない

「できないからって、ハイそうですかと諦めきれるか！！！」

翼がビリビリと唸り、その両端からは飛行機雲のような線が生まれていた

「うあああああああああああああああああ！！！！！！」

三人に手を伸ばす蒔風
三人も手を伸ばすが、あの戦いの後で魔力も少なく、さらには病み上がりのはやてだ

あと僅か、そのほんのちょっとが届かない

「このやろおおおおおおおお・・・・・・・届け・・・・」

蒔風が必死に手を伸ばす

「届けえええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

そして蒔風と三人の周囲は光に包まれ、視界が真っ白になる

その光の中で、伸ばされた手が・・・・・

届いた

ギュゴオオオオオオオオオオオオアアア

カァァアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

「奴」の反応と共に、上空に光の球が生まれる
銀白に輝くその光は、あまりにも美しく輝き、辺りを照らしだしていた

「まったく・・・・これじゃ管理局に「翼」が知られちまうじゃねえか・・・・」

その球が翼のようにグググッ、と開かれ、最後には一気に開かれた

パァァアアアン！！！！！

「でもま、別にいいよな！！！」

「蒔風！！！」

「舜！！！」

「蒔風ぇ・・・・・」

そこにいたのは、蒔風舜
外見は十九歳
小さくされていたその体が、ついに本来の姿へと戻る！！！

「ふえええ！？しゅ、舜君！？」

「なんでおっきくなってるの！？」

「え？え？どうなってるんや！？」

三人も驚く
その三人はと言うと、なのはは肩に担がれ、フェイトは脇に抱えられ、はやては背中にしがみつかせている状態だ

「お前二人は知らないか？これが俺の本来の年齢だっての。ってかなのは！！お前最初の時に説明してたの、忘れてたのかよ！！」

「にゃ、にゃはは・・・でも・・・」

「大きい・・・」

「凄いなぁ・・・この翼とか・・・・」

「蒔風・・・戻ったか！！！」

なのは達とみんなのところに戻り、集合する蒔風たちに、「奴」が期待していたと言わんばかりに言った

「こうでなくては・・・ガキの姿の貴様などつまらんからな。お兄さんが思う存分潰してやるからな！！！」

その言葉に蒔風が、ニヤリと笑ってこう答えた

「へっ！！な～～にいってんだ！！これが本当の姿なんだからよぉ！！これからが本番だ！！！」

バッ！！と翼と共に両腕を広げて蒔風が宣告した

「こっからがクライマックスだぜぇ！！！みんな！！行くぞ！！！」

「「「「「おおおおおおおおおお！！！！！」」」」」

翼人・蒔風の真の姿が現れる
ここからが本番

しかして相手も尋常ならざる者達

この決着は、ここで決まる

to be continued

なのはA's　～決戦前に元通り～（後書き）

アリス「今回のあの怪獣、モデルは？」

メビウスの映画のUキラーザウルスネオ（最終形態）

わからない方はレッツ検索！！

ア「きた！！得意の丸投げ！！！」

気にしないで・・・・
表現とか苦手なのよ・・・

ってか昨日はヤバかった
なのがヤバかったかってですね

ア「はいはい」

なのはA's の最終一斉攻撃を見てテンション上がって
それを自分好みに書いて終えてテンション上がって
そのテンションのまま更新してテンション上がって

ア「どんだけ上がってんですか！？」

そのままベッドの上ではね回っていたらシーツがずれて足滑って頭打って気絶しました

ア「はぁ！？」

気付いたら二時間経ってた
寝るのと気絶ってやっぱ違いますね
寝てると起きた時は身体の筋伸ばせばいいですけど、気絶だと身体がメチャ重い・・・・

ア「アブなッ！！」

その後普通に寝ましたけど
知り合いには「何やってんだ」と呆れられました

ア「ホントですよ！！」

首の骨とか逝かなくてよかったぁ～～～
あっはっはっはっは！！！

ア「もう一度言いますけどホントですよ・・・次回、最終決戦」

ではまた次回

一つ覚えの砲撃、通ると思ってか

通す！！レイジングハートが力をくれてる！
命と心を賭けて、答えてくれてる！
泣いてる子を、救ってあげてって！！

「待たせたな！」

【Ｍａｈｏｕ Ｓｙｏｕｊｏ ｌｙｒｉｃａｌ Ｎａｎｏｈａ Ａ's】－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－ ～ＷＥＰＯＮ～！！

蒔風の翼に皆の想いが集まっていく
その想いはみんな同じだ

－敵を倒してみんなで帰ろう－

そのためにこの力は発動する
金色の粒子が蒔風の周りを包み、銀白の翼が羽根を舞わせて羽ばたいている

それに触れると、皆の魔力、体力が戻っていくのを各自が感じた

「俺があのデカブツを一手にひき付ける。あのマテリアル共はまかせた」

「一手にって・・・舜君！無茶だよ！！」

そう言いうなのはの口にシー、と人差し指を当てて笑う蒔風

「勝てるよな？あんなにせもん、ぶちのめせるよな？」

蒔風の瞳には疑いなど一切なかった
信じていた

ここにいるのは一人たりとも負けはしないと
それをなのはは知った
だったらこう言うしかないではないか

「任せて！！」

「よし・・・行くぞ！！！」

「行け！！！」

蒔風と「奴」の声が同時に響き、一斉に動き出す

星光の魔王ＶＳなのは＆ヴィータ

星光の魔王が二人に向け、ディバインバスター級の砲撃を放つ
二人は砲撃にまわりこむ形でそれをかわし、ヴィータが鉄球を撃つ

それが長うスピードで飛んで行き、星光の魔王に直撃するが、それはバリアで阻まれる
しかし

「■■■■！？」

星光の魔王が一瞬だけ驚きの感情をあらわにする
その鉄球はぶつかった瞬間に一つにまとまり、幾度も幾度もバリアに突撃を繰り返していった

「な、なんだよこれ！！こんな制御いつもはできねえぞ！？」

「それが舜君のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫだよ！！」

そしてついに鉄球がバリアを砕き、星光の魔王の上半身の左半分を吹き飛ばした

「ーーー

ガシュウガシュウガシュウ！！！

カートリッジを三発装填し、魔力を溜めこみ砲撃準備に！！

「■■■

きている

「なのは！！」

「大丈夫！！！勝つよ！！レイジングハート！！！！！」

《ＹＥＳ、マスター》

パアッ！！！

なのはの砲撃の先端に変化が起きる
ぶつかり合っている本筋の砲撃から、触手のように魔力が枝分かれし、それが星光の魔王の星光の魔王の砲撃に突き刺さり、穴だらけにしていく！！！
そしてズバズバと糸で縫いとめるように浸食し、ついには星光の魔王自身にも到達する！！！

ドドドドドッドン！！！！！

十ほどの枝分かれした砲弾が命中し、その体が揺れる
さらに本番の砲撃が、穴だらけになった砲撃を引きちぎりながら迫ってくる！！！

「撃ち貫いて！！！」

《これで終わりです》

「■■■

ゴォウ！！！
雷神の皇帝がこの刃幕から逃れようと先ほどの超スピードで姿を消す
だが
「どれだけのスピードで動こうと、その動きを予測することはたやすい！！！テスタロッサ！！！！」
「はい！！！！」
ガキィ！！！
フェイトが雷神の皇帝の肩にバルディッシュザンバーフォームを押し当て、さらにデバイスを掴んで動きを封じる
「バルディッシュ！！！斬り裂いて！！！」
《イエッサ！！プラズマザンバー！！！》
ジュカッ！！！！
雷神の皇帝の動きが止まる
フェイトがバルディッシュを斜めに振り下ろし、振り返る
そしてそのままゆっくりと離れていく

《アサルトフォーム》

ガシュッ！ガチン！！！

「オオオオ

「だったら撃たせないようにするだけだよ！！」

「行くわよ、ザフィーラ！！」

「心得た！！！」

シャマルのクラールヴィントが十五個ほどの丸い空間ゲートを作り、
そこに向かってザフィーラの「鋼の軛」が突き刺さる
次の瞬間、攻撃が終わって次の魔法へと移行する闇の暴君の周囲に、
転送先のゲートが開く

するとどうなるかなどは明白である
そのゲートから突き出してきた鋼の槍が闇の暴君に突き刺さり、その動きを縫い止める！！！

「もう一回、いけるか？デュランダル！！！」

《オフコース、ボス》

「エターナルコフィン！！！！！」

クロノによるエターナルコフィンでさらに氷の柱に閉じ込められる
闇の暴君
その柱は天に向かってどこまでも伸びていた

「いくで！！リィンフォース！！！」

『はい、我が主！！！』

「『デアボリック・エミッション！！！！！』」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！

その氷柱ごと空間魔法に取り込み、極小にまで圧縮する
小さなビー玉にまで小さくなったそれを、はやてがそっと手に持つ
と、パキン、と砕けて消えてしまった。

「はやてちゃん！！！」

「なのはちゃん！！そっちは？」

「終わったよ！！フェイトちゃんも！！」

「舜は！？」

皆が蒔風の方を見る
蒔風はと言うと・・・・・

「ひゃっほおおお

「おい！！あいつら終わった見てえだぜ？こんなんでいいのか！？」

「ふ・・・甘く・・・・見るなぁ！！！！」

ドバァ！！！！！

巨大な肉体が全身から光を発する
その光は辺り一帯を白に染め、全員の視界を埋め尽くす

「ッ！？これ・・・・は・・・・うわあ！！！！」

「ヴィータッ！？グおっ！！」

「きゃあああああ！！！！」

「シグナム！！シャマル！？ぐっ、ぬお！！！！」

「フェイトちゃ、きゃあ！！」

「なのは！！はやて、こっちに・・・きゃ！！」

「フェイト！！うわっ！！ぐあああああ！！！！！」

「みんな！！どこに・・・きゃあああ！！！！」

『くっ！主はやて！！！』

その閃光の中で、離れた場所にいるなのは達が次々と触手に叩きつけたれ隆起した地面へと落ちていく
立ちあがろうとするが、腕や足ががくがくと震え、うまく立ち上がれない

「なにを・・・ぬぐっ！？」

その中で蒔風も触手に捕まり、振り回される
爪を両足と両手でつっかえさせて挟まれるのを防ぐが、捕まってしまっていることに変わりはない
そのまま触手は真っ直ぐに地面に向かい、蒔風を叩き付けた

ボゴオ！！ボゴッ！！ドゴゴゴゴン！！！ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッン！！！！！

さらにいくつもの触手が蒔風の落ちた場所に叩き付けられ、まるで料理の際、肉を慣らすかの様に蒔風を潰す

「舜・・・・・君っ！！」

「蒔風・・・・・・」

ズルリ、と地面から蒔風が触手に締め上げられながら、再び「奴」の眼前に持ちあげられた

「これで決まりだ・・・お前が異質だというならば、俺もまた異質なのだよ」

そう行って「奴」が触手を遠ざけさせ、砲撃の準備に入る
最初になのは達に撃たれたあの砲撃だ
喰らえば蒔風でも助からない

「逃げてえええええええええ！！！！」

「舜！！！そこから！！！・・・・・」

「お願い！！目を覚まして！！！！」

「蒔風！！！！おい！！！！」

なのは達の叫びが聞こえるが、そんなものは意に介さない

「さらば銀白の翼人、ファイナルカウントダウンだ」

ギイイイイイイイイイイイイイイイ・・・・・・・・・・・・・・・・
ッ、ドン！！！！！

「・・・一る・・・り・・・・・く」

蒔風が何かをつぶやく

ギュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！

そして砲撃が蒔風を触手の先端ごと吹き飛ばした

だが、この場に残る闘気は消えない

皆が願った思いは消えてない

銀白の羽根が降り、天に輝きがともる！！！！！

「な・・・なぜ生還する・・・・なぜだ！！！」

上空高くに蒔風がいた

雲が丸く消え、そこから何かの光が降り注ぐ

今は夜だ

ならばこの光はなんなのか

「願いが人の生きる力。今ここにいるのは未来に向かって希望を持った者ばかり・・・・・」

【Ｍａｈｏｕ　Ｓｙｏｕｊｏ　ｌｙｒｉｃａｌ　Ｎａｎｏｈａ　Ａ's】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！！

蒔風の翼が開かれ、それが七色に輝きだす！！！！

「だったら、今のオレの力はそれに呼応し、どこまでも強くなるッ！！！！！」

天からの光はみんなの願いを力にし、蒔風の周囲に漂う粒子からのだそれはあまりにも強く、陽の光とも思えるほどの！！！

さらに蒔風の身体も虹に輝き、全身に力がいきわたる！！

「がああああああああああああああああ！！！！！」

「奴」が大きく反り返って咆哮するそれと同時に玉座の怪獣にある全部のとげがミサイルのように飛んで行き、蒔風を爆散させようと迫る

それを十分に引き付け、蒔風に着弾し、爆発したその瞬間！！！蒔風が超高速スピードで真っ直ぐに「奴」に向かって飛び出す！！！

先に爆発したミサイルの爆風で加速し、後続のミサイル群を旋回してかわし、ついにすべてを振りきって、蒔風が怪獣に突っ込んでいく！！！！！！

ドンッ！！！メキッ！！グチャバキバキバキ！！！ドゴゴゴゴゴゴ、ドォン！！！！

その体内に飛び込み、縦横無尽に引っ掻き廻し、その体を崩壊させるそして核を掴み取り、後ろの方から飛び出して、その核を握って潰した
核を失った玉座は砂状になって崩れ去り、そこに叩きこまれたエネルギーの逆流で「奴」の全身から小爆発を起こす

「ぐ・・・あああああああああああああああああああ！！！！！」

「なのは！！！フェイト！！！はやて！！！」

「「「うん！！！！！」」」

三人が蒔風の方へと何とか飛び、そしてデバイスを構える
三人の魔法陣が重なり、一つの砲撃となってその場に集束されていく！！！！

「準備はいいか！？」
「行くよ！！」
「みんな一緒に！！」
「せーのでな！！」

「「「「せーーーーーのッッ！！！！」」」」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！

信じられないほどの、通常ならば使用者の身体も粉々になってしまうような反動を持つ砲撃が、「奴」に向かって叩き込まれた
しかしこれはＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ
その願いのあるままに、敵を葬る最後の技！！！

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「やった！！」

「いえーーーい！！」

「やったんか！？」

四人がガッツポーズをとり、勝利を喜ぶ
こうして、大きな戦いは終わった

どんよりとした雲は晴れ、朝日が昇ってきた
新たな日、新たなる未来

その光を、みんなしてゆっくりと眺めていた

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはA's ～最終決戦、全力全開！～（後書き）

アリス「まんまじゃないですか！！？？」

な、なにが？

ア「最後の蒔風の体当たり的なあれ、メビウスの映画の最後の技まんま！！」

だってあれかっこいいんだもん
使いたかったの！！

ア「まあ、確かにかっこいいですけど」

だがなんか人質にされていた姉ちゃんの弟あのガキはいらねえ

そこ飛ばして見てるしね、いつも

ア「マジかよ・・・・」

さて、あとはお片づけですな

ア「次回、そして別れのとき」

ではまた次回

セーーーット、アーーーップ！！！（最終回より）

なのはA's　～そして笑顔で～

戦いから二日後
蒔風はいまだにこの世界に残っていた

「はぁ～～～～～あ・・・・・・」

リンディ家で大きなため息をつく蒔風
それもそうだ
先日の戦いは管理局の戦艦がモニターしていた
つまり多くの局員が翼人の存在を目の当たりにしたのだ

「これめんどーなことになるーーーー」

リビングでぐったりとしている蒔風にエイミィがジュースをついで置いてくれた

「何やってんだか・・・いいじゃない、これで超有名人じゃん！」

「問題は俺が翼人ってことなのーーーー、ってか、もう慣れたんだな」

「まあねー。大体同じくらいっしょ？歳。だからかなー」

今この部屋にいるのはエイミィと蒔風だけだ
なのはとフェイトは学校
クロノとリンディとユーノは事件の報告と後始末

アルフは八神家の皆と共にはやての家にいる
なんでもザフィーラに小さな子犬形態の変身の方法を教えるんだとか

「ほら！しっかりして！！クロノ君がなんとかするって言ってくれたんだからさ！」

「できんのかなーーー？俺も行った方がいいんじゃないのかなーーー？」

「もし君の顔知ってる人とすれ違ったらばれるでしょ？」

「そうなんだよなー・・・・・だからクロノに任せるしかないんだよなーーーーー」

そういってグダグダとしながら一日を過ごす蒔風
大きくなってしまったので学校には行けないし、「奴」も倒したのでやることがないのだ
ではなぜ次の世界に行かないのか

答えは簡単
ゲートが開かないのだ

まるでまだ蒔風にはやることがあると言っているように

「まったく・・・何をやってるんだ？」

と、そこにクロノが帰ってくる

「クロちゃーーーん。どーだったーーーー？」

「どうって・・・何とかなったよ」

「まじでか！？」

ガバッと蒔風が起き上がり、クロノに向く

「ああ。記録映像をなんとか問題ないぐらいに修正してね。でもさすがに翼人の事は消せなかった。だから」

スッ、と書類のようなものを蒔風に手渡すクロノ
そこにはこう書いてあった

・・・・・・のような仔細である
なお、この「闇の書事件」の協力者に

現地の魔導師「高町なのは」
嘱託魔導師「フェイト・テスタロッサ」
闇の書改め、夜天の書の保持者「八神はやて」
及びその従者「ヴォルケンリッター」

そして異世界の者「銀白の翼人」の名を記したい
翼人の素性及び名前、外見はここに記さず
彼の者は異次元へと去っていった

※［翼人］に関しては別紙のレポート（著／ユーノ・スクライア）を参照されたし

「おぉ・・・・・」

「翼人は現れたけど、それが君である、ということは消しておいたよ」

「あぁりがとぉぉおおおおおおおお！！！！」

蒔風がクロノの腕をブンブン振って感謝する
そして最後にスピンさせて、ソファに座らせた

「あれ？艦長とユーノ君は？」

「め、目が回る・・・・う？ああ、艦長はまだあっちにいるよ。さすがに翼人の事を問いただされてね」

「大丈夫なのかなぁ」

「艦長なら大丈夫な気がする・・・・」

「母さん・・・・・だからね・・・・・」

「納得できるのが嫌だな」

「ただいまーーーーー・・・・・」

「お?帰ってきたな。なのはも一緒・・・・か・・・・」

玄関が開き、なのはとフェイトの声がして、蒔風がそれを出迎え、
そして声が小さくなっていく
なぜならそこにはなのは、フェイトと一緒にアリサとすずかもいたからだ

「連れてきちゃったんかい」

「あ、あはは」

「どうしてもしっかり話しが聞きたいって・・・・」

「ま、まあ中に入れうん、そうだな」

四人をそう言って中に招き入れる

「さて、説明してもらうわよ。あの夜のこと、あの不思議な力の事も!!」

アリサが催促し、クロノとエイミィが立ちあってすべての事情を説明した

魔法との出会い、ジュエルシード、フェイトとの戦い、次元世界の事、はやての事・・・・・・・

それを聞いて、二人は唖然とした
しかし、クロノの説明やあの夜目の当たりにしたことから、足りないピースが埋まっていき、二人は納得した。

「にしても・・・・とんでもない話があったもんね・・・・・」

「うん・・・・びっくりしちゃった」

「あれ?でも蒔風が来たのもそれくらいじゃなかった?」

「呼んだーーー?」

そこに蒔風がリビングにやってくる
手にはお菓子を広げた大きなお皿があり、反対の手には人数分のジュースがお盆に乗っていた

「・・・・・・・誰?このお兄さん」

「舜君の・・・・お兄さんかな?名前に反応したし、顔そっくりだし」

「あ、あはは・・・・」

「えっとね、アリサ、すずか、驚かないでほしいんだけど・・・・」

「その人が蒔風舜君だよ?」

「「え？」」

「どーも、確かにオレは蒔風舜！！真の姿だよん。ヨロ～～～」

「「えええええええ

「っていうか証拠を見せなさい！！証拠を！！！」

「問題ない。オレとみんなの間なら、きっと分かり合えるっさ！！！」

「く、くあああああ！！！！このノリまさしくあいつだわ～～～～～！！！！」

「あ、アリサちゃん落ち着いて・・・・」

「すずか！！あんたなんでそんなに冷静なのよ！！！」

「え？あ、アリサちゃんがそんなに驚くから、驚きそびれちゃったよ・・・・」

「グッジョブだよ！！アリサ！！！」

「フェイトも何言ってんのよ！？」

「まあまあ・・・・」

「なのはもなんでそんなに冷静なの？あれだったのがこうなってんのよ！？こんなに大きなお兄さんだったの！？うわぁ・・・・なんか今さらになって恥ずかしい・・・・あれ？一人で騒いでる状態じゃない？あたし」

「アホだなぁ・・・・」

「アホ言うな！！！」

それから十分してアリサが落ち着き、説明を受けた上で蒔風に訊いた

「それで？あんたまたいなくなるの？」

「そそ。さすがに次はないだろーしねーーー。これでこの世界とは最後かな？」

「ふーーーん」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは驚かなかったの？」

「驚いたけどなんか納得というか・・・・」

「無邪気の中に大人な感じがあったというか・・・・」

「それって「子どものままの大人」じゃないの？」

「「それだ！！」」

「あなた達そろってひどくないですか！？」

そうしてギャイノギャイノと騒ぎまくってから、アリサとすずかは帰っていった

そして夜、リンディとユーノも帰宅し、それからなのはの家に向か

った

理由は、魔法の事などを高町家の皆に伝えるためだ
なのはは自分の想いを言葉にし、管理局で働きたいと決心した

フェイトも、管理局で働くことを決めたようだ
さらにリンディ家への養子になることも、決定した

この話は当初からフェイトに持ちかけられていたらしく、今までフェイトは悩んでいたが、新しい自分を始めるきっかけとして決心したのだそうだ

その日の晩御飯は八神家で皆でとった

「皆いらっしゃい！！！こないだはありがとーな！！さ、じゃんじゃん食べてってな！！」

「このたびは我々がご迷惑をかけてしまったうえに主の罪を軽減してくださって、誠にありがとうございました」

「さ！！パーティーの始まりや！！！」

はやての家の庭に出て、満天の星空の下でバーベキューを楽しむ一向

「うまい！！！！すごいな、こんなにもうまいのか！！！」

「バカヤロー舜！！トーゼンだろ！！！はやての料理はギカウマなんだからな！！！」

「うまいうまい！！あ、ピーマン嫌い」

「てめえあたしの皿にピーマン乗せんなよ！！！」

「おっきくなれないぞ、ヴィータ！！！」

「うっせぇ！！！あたしは大人だ！！！お前より長生きなんだぞ！！！」

「おいしいねーー」

「うん、はやての料理ってこんなにおいしいんだね！」

「料理は任しといてな！！これでもあの子たちのご飯はうちが作ってたんやからな！！」

「もうそんなに動いても大丈夫なんだ」

「うん！！足もこのままいけば動くようになるって、先生が！！」

「よかったね、はやて」

「おおきにや」

「あれ?そういえばシグナムさんとかヴィータちゃんは料理しないの?」

「あの二人もそれなりにできるにはできるんやけど、それだと拗ねるのが一人いてなぁ」

「「ああ・・・・・・」」

そういってなのはとフェイトがシャマルの方を向き、当の本人がその視線に気付く

「え?何の話ですか?」

「な、なんでもないんよーーー」

はやてが明らかに視線を逸らすので、シャマルは大体の事を悟ってしまった

「い、いつか絶対お料理上手になってやるんだからーーーーー!!!!」

「「シャ、シャマルさーーーーーーーん!?」」

「シャマルゥーーーーー!!!でもシャマルの準備手伝いは助かってるんやでーーーーーーーーー!!!!!」

はやてがシャマルを追いかけていく

車椅子でどうしてあのスピードが出るんだろう・・・・・

「テスタロッサ、楽しんでくれているか？」

「あ、シグナム」

「今度一回手合わせ願いたいのだが・・・・」

「え？・・・いいですよ。受けて立ちます！！」

「いい返事だ。それでこそ「たっ、大変だーーー！！！」どうした！！！」

蒔風の叫びにシグナムが瞬時に騎士甲冑に身を包んでそちらに向かった

「ヴィータが・・・・ヴィータが！！」

「何があった！？」

「アイス好きだからって話になって、俺の持ってたかき氷喰わせたらこうなって・・・・」

そこにはかき氷を幸せいっぱいの表情で口に運び、頬張ったまま固まってしまっているヴィータがいた
ラベルには「極寒！絶対零度かき氷」と書いてある

「ヴィータ！？おい、なんでそんな幸せそうな顔して凍ってるんだ！？」

「シ、シグナム！！ちょうどいい！！お前のレバ剣で温めてやれ！

！」

「レバンティンは暖房器具じゃない！！」

「そんなこと言ってられないだろ！？（パシッ）」

「あぁッ！レバンティーーーーン！！！」

ジュアアアアアア・・・・・・

「・・・・・ハッ！！これうめーーーー！！でもなんか変だな」

「ヴィータそれは」

「あーん（パクッ、カキン！）」

「またかよ！！（レバンティンを返せえええええええ！！！！）」

後ろの方からシグナムの悲痛な叫びが聞こえるが、シャマルに抑えられてしまっている
帰ってきたんだなシャマル

「・・・ハッ！！なんだこれ！！うまいけど凍っちまうぞ！？」

「二回目にして気付いたか」

「でも食いたい」

「これで食えばちょうどいいんじゃね？（レバンティンを差し出す）」

「お？（サクッ、パクッ）ちょうどいいなこれ！！（よくわかってないヴィータ）」

「レバンティンーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

その後も器用にレバンティンでアイスを食べていくヴィータに、シグナムは崩れ落ちた

「ああ・・・私の剣がぁ・・・・・・・・ＯＴＬ」

蒔風が散々はしゃいだ後に一休みと、コーラを大きなペットボトルと小さなコップを持って屋根の上でのんびりと飲んでいると、そこに声がかけられた

「楽しんでますか？」

「ん？リィンフォースか」

その隣にリィンフォースがやってきて、隣に座った

「はい。貴方にも感謝しなければなりません」

「俺は「奴」をぶちのめしただけ出し、俺の気に食わないことがあったから手を出しただけだ。１００％お前らのためじゃねーよ。俺

自身のためだ」

「それでも救われました。「闇の書」は「夜天の書」へと戻り、主はやての力で呪いの機能も断たれました」

「それははやての力でしょうに」

「しかし、意識の眠っていた主を少しでも目覚めさせたのはあなた達の言葉でした。それがなければ、主はここに帰ってくることはできなかったでしょう」

「だったらなおさら俺じゃなくてなのは達に言ってね。オレはちょいと手を出しただけだよ」

「翼人は各世界に必要以上に干渉しないのでは？」

「ま、そうなんだけどな。あれ？そういえば翼人知ってる？」

「ええ・・・・・・わが身の、「夜天の書」の製造に一番貢献した人物が、翼人でしたから」

「古代ベルカの翼人か・・・・色は？」

「彼は「赤色（せきしょく）の翼人」でした」

「どおりで俺をすんなり取り込めたわけだな」

「彼には他にも「青色（せいしょく）」や「黄色（こうしょく）」と言った友人もいたようですが」

「あのとき色彩が増えたってのはそういうことか」

「ええ・・・あの時代は翼人の色は単色だけだったと記憶しています」

「他には知らない？」

「はい。直接知っているのは「赤色の翼人」だけでしたね。彼ももう過去の人物ですが」

そういってリィンにもコーラを差し出す蒔風
それを少しだけ飲み、一緒に空を見上げる

「・・・・・・」
「・・・・・・」

「あーーーーー！！そんなとこにいたん？こっち来てーな！！みんなで写真撮ろーーー！！」

はやてが二人を見つけ、庭から上を向いて声をかけてきた
それに応じて二人が降りようと立ち上がったところで、リィンフォースが蒔風に囁きかけた

（今夜・・・・・・街の見える丘の上で、お話したいことがあります）

「・・・・・・・・」

（待ってます）

そういってはやての元へと降りていくリィンフォース
その背中を見ながら、蒔風が一瞬目を閉じ、その後に続いた

――――――

「照れるなあ。俺こんなシチュエーション初めてだから・・・・」

「わかって・・・・いるのでしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やはり・・・・だめなのか？」

蒔風が陽気な表情をやめ、落ち込んだ声を出す

「ええ・・・・・やはり、呪いはそう簡単には消えてはくれないようですね」

呪い
闇の書の闇

それはいまだにしっかりとリィンフォースの中に存在し続けている
あの時に倒した暴走プログラムは、本体ではない

ようはあれはわき出した腫瘍だ
いくら腫瘍を切りだして破壊しても、それを作り出す大本がなくならなければ、また「あれ」は出てきてしまう
今この瞬間にも、新たな防衛プログラムが彼女の中で構築されているのだそうだ

そしてそれは再びはやてを蝕むだろう
そしてプログラムは常に成長を繰り返す
蒐集を繰り返し、無限に強くなっていくプログラムは、何度かは大丈夫でもいずれ誰にも止められなくなる

それを看過する管理局ではない
おそらくはやては夜天の書と共に隔離され、研究所か監獄に封印されることになるかもしれない

「それだけは・・・絶対に防がなければなりません」

「お前はどうなる」

「・・・・騎士たちは主が私と切り離して新たに再構築したので、存在し続けます」

「お前は!どうなるんだ・・・・ッ!」

「こうなるしか・・・・方法はないのですよ」

「ッ・・・・・・・・・」

「貴方にもわかっていたでしょう?でも、貴方には言えなかった。私が消えねばならない、と」

その言葉に、蒔風が目を閉じて天を仰ぐ
そして首を戻して言う

「その「闇」を消そうとしても、お前の核は傷つく。いや、お前の核ごと消すしかない。それほどまでに一体化してしまっている」

「その通り。ですから、貴方にお願いしたいのです」

「お前を・・・・消してくれと?」

「私には自己破壊のすべがありません。高町なのは、フェイト・テスタロッサに頼もうかとも思いましたが、あの子たちには重すぎる・・・・」

「騎士たちは・・・・そのこと知ってんのか？」

「はい。ですから今は、主や他の方々が気付かぬよう、見ていてくれているはずです」

「・・・・・・・それを・・・・よしとしたのか？」

「いいえ。彼らは反対しました。してくれました。ですが・・・・」

「これ以外の方法は・・・・ない、か・・・・・・」

「翼人であるあなたならば、私を消すことができるでしょう。そして、貴方の翼なら、私の「願い」を残してくれる」

「・・・・・・・・はっ・・・・・結局はこうかよ・・・・・・こうなんのかよ！？このためにオレを残したのか！？畜生・・・・・っちくしょおおお！！！！！」

ーーー

「う・・・・うぅん・・・・・・」

「・・・・・シグナム、はやてちゃんは？」

「眠っておられる。ほかは？」

「なのはちゃんもフェイトちゃんも眠ってるわ」

「そうか」

はやて宅
あのパーティーの後、なのはとフェイトはここに泊まっていくことにした

シグナムとシャマルは他の皆が起きないように見張りをしている
それは永く共にいた、夜天の書の彼女のために

「でも・・・ホントに消えちまうのかよ・・・そんなのあんまりじゃんかよぉ・・・・・」

ヴィータが涙ぐむ
大きなぬいぐるみを抱きかかえ、それに顔をうずませる

「ヴィータ・・・・」

「おそらく、こうなるしかないのだろう・・・・・・悲しいしいことだが・・・・・」

「蒔風は知っているのだろうな。だが、なにも言わずに出ていったということは、彼にもおそらく・・・・・」

「舜君は確かに強いわ。恐ろしいほどに。でも、決して万能じゃない・・・・なんだか彼が「世界最強」って言うたびに、無理してるように見えるの・・・・」

「どういうことだシャマル。あいつは確かに強いぞ」

「うーーーん・・・・そうなんだけど・・・・」

「そんなことよりも！本当にどうしようもないのかよ！」

「ヴィータ、皆が起きてしまう」

「でも・・・せっかく皆で幸せになれんのに、なんであいつだけ消えなきゃなんねえんだよぉ・・・」

「言うな。彼女は我らのためにその身を犠牲にしようとしている。変わることのできない自分の身が悔しくてたまらない・・・・それは皆同じだ」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

そのまま皆黙りこくってしまう

「う・・・・・い、いやや・・・・リィン・・・フォース・・・・・・・あれ？リィンフォース？」

その時、はやてがうなされてうっすらと目を覚ます。
そこにシグナムが慌てて行き、寝かしつける

「大丈夫ですよ、主。もう誰も・・・・・貴女のそばを離れません・・・・これ以上は、誰一人として」

「う・・・・・・うん・・・・・・」

シグナムの言葉には決意が込められていた
そしてはやては再びまどろみの中へ

「・・・・・・・ふう・・・・・・」

「・・・・・・・やっぱり・・・・・感じん・・・・・・・」

「ッ！あ、主？」

しかし、はやてが違和感に気付いた
そしていったん気づけば、それは瞬時に確信に変わった

「シグナム・・・・・・リィンはどこ？」

「あ、主・・・・・・」

「答えて！！リィンはどこや！！・・・・・・まさか・・・・・・」

「お答えできません」

「答えて！！主の命令や！！！」

「お答えできませんッ！！！！」

「烈火の将シグナム！！！答えて！！リィンは・・・・リィンフォースはどこに言ったんや！？」

「答えるわけには、いかないのです！！！！！」

「だったらええ！自分で探す！！！！」

「主はやて！！」
「はやて！！」
「はやてちゃん！！！」

「ううん・・・どうしたの？」

「なにかあった？」

なのはにフェイトまで目を覚ます
そして家からはやてが飛び出した

小さな夜天の主は、夜の街を車椅子で駆けて行く
自分の家族を探して

――――――

蒔風が慟哭する
届く位置にいつにもかかわらず、その命を救えない
またしても蒔風は、この世界で敗北する

地面に四つん這いになる蒔風にリィンフォースが肩に手を当てる

「こう言ってはなんですが・・・私はプログラムです。厳密にいえば人間ではありませんだから」

「だからって・・・・・納得できるかよ・・・・・」

ガシッ!!!

蒔風がリィンフォースの襟を両手で掴み、顔を下に向けて叫んだ

「祝福の風リィンフォース。お前は確かに皆の幸せにつながったさ。でも・・・でもよ・・・・・」

蒔風が一層強く握りしめ、吐き捨てるように言った

「あんたの幸せは・・・・その風は誰が運んできてくれんだよ!!!これじゃ・・・・あまりにもひどいだろうが・・・・・なんかないのかよ・・・・お前だからわかる抜け穴とかが!!」

「残念ですが・・・・・」

「祝福の風の末路がこれじゃ・・・・・一体何が救われるってんだよ・・・・・」

「大丈夫ですよ」

リィンフォースが蒔風に声をかける
握った拳を解き、蒔風が顔を上げる

そしてリィンフォースの顔を見た
その顔には一切の後悔や未練はなかった

むしろ、それは幸福なものだった
そして蒔風は知った

「お前の幸せは・・・・・」

「ええ・・・我が主が、しっかりとこの胸に与えてくれました。
私はもう十分に幸せです。今までの悲痛な記憶がまるでなかったかのように、私の記憶と心は幸せに満ちています
これ以上何を望みましょう。
主が生き、その周りには愛しの騎士たちとかけがえのない友、そして最高の理解者がいるのです
一体何を思い残すことがありましょう・・・・・・
後はただ・・・主が私のいない現実を・・・・どうか強く受け止めて、先の未来へと進んでくれることを願うばかりです」

「リィンフォース・・・・・・」

「そしてどうかあなたにも祝福を。貴方の先にも、祝福があらんことを」

リィンフォースが両手を組んで祈る。

その願いは確かに蒔風の翼に届いた。

「お願い・・・・・します」

「・・・・・・ッ・・・・・ああ・・・・・・わかった・・・・・・」

魔法陣が展開される
その中心に蒔風が立ち、手をかざす
リィンフォースはしゃがみ、頭を下げた
その姿はまるで、救いを求めて祈る信者と、それを赦す神父のようであった

雪が降り始める

「始めよう」

蒔風の背に翼が開翼され、リィンフォースの身体が輝く
そこに、大きな声が響き渡った

「リィンフォースーーーーーー！！！！！！」

「主・・・・はやて・・・・・」

「・・・・・・・・」

蒔風の背後、リィンフォースには蒔風越しに正面になる
そこにはやてがやってきた
後からはヴォルケンリッターとなのは、フェイトもいる

「な・・・なにやってん?さ、みんなで家に帰ってあったかいスープでも飲もう?な?」

はやてがおそるおそる切り出す
たぶん、今この状況が何をしているのかが分かっているのだろう
だが、それは信じたくなかった

「な?舜君も、なにやってるんや?そんな翼はやして・・・もう、なんの冗談や?」

「冗談ではない」

蒔風が振り返らずに低い声で言った
その言葉にはやての身体がびくりと震える

「じょ、冗談やないって・・・どういうことや?」

「簡単なこと。リィンフォースの中ではいまだに暴走プログラムが構築されている。
このままでは新たなプログラムが発動し、再びお前を飲み込む。
だから・・・・・・そうなる前に消す」

「け・・・・消すって・・・・・そ、それはリィンが?」

「・・・は「いいや、こいつはあくまで嫌だと言ったよ。お前といたいってな。だが、これ以上はやてを苦しめてもいいのかと言って説き伏せた」！？」

（舜！一体どういう・・・・）

（黙ってろ）

「そ、そんなことダメや！！絶対にダメや！！！何しとるん！？そんなことゆるさへん！！！絶対にだめや！！！！」

「それは関係ない。もう決めたんだ」

「決めたって・・・・・さ、さてはお前、「奴」やな！？舜君に化けとるんや！！！このにせもん！！！リィンを離せ！！そこからどきぃ！！！！」

はやてが車椅子を必死にこぎ、蒔風に向かう
しかし、それが蒔風に届くわけもない
車椅子の目の前に青龍を投げ突き立て、それを止める
車椅子が転倒し、はやての身体が倒れるが、雪に埋まる前に青龍が人型に現れて受け止めた

「これが証明だ。十五天帝は俺でしか使えない。
それに「奴」なら、リィンよりもこの場でお前やなのは、フェイトの首を刈ってるよ」

「そんな・・・・・ゆるさへん・・・・・絶対にゆるさへん・・・・リィンはやっと解放されたんや！！！これ以上不幸にはさせへん

「！！！リィン・・・リィンーーーーー！！！！」

蒔風は気にとめないように再びリィンフォースに向き合う
そこで入れ替わるようにリィンフォースがはやての元に向かった

「リ、リィンフォース！さ、逃げよ？皆で家に「すみません主・・・」・・・・え？」

「わが身はいずれ、あなたの未来を壊してしまうのです。それは私にとっても不本意であります」

「いやや・・・そんなこと言わんといて・・・・」

「貴女には未来があります。これから先に、無限の可能性が。貴女には幸せになってもらいたい」

「リィンがいなきゃいやや！！そんな未来は・・・・・」

「大丈夫」

「あ・・・・・」

リィンフォースがはやてを抱きしめ、優しく言った

「貴女に出会い、呪縛から解放していただき、そして新たな名前、新たな家族、そして最高の祝福をいただきました」

「う・・・・ぐ・・・・」

「祝福の風、リィンフォースは・・・・胸を張ってこう言えます。
私は今、世界で、歴史上で、最も幸福な融合機であると」

「リィン・・・・・ひっ・・・・うえ・・・・・・」

「だから泣かないで・・・・・私は・・・・貴女にあえて・・・・・
幸せになれましたよ」

「う・・・・うあ・・・・い、いかないで・・・・リィン・・・リィン・・・・・・」

「貴女の付けてくれた誇り高いこの優しい呼び名は、私の後続機に与えてあげてください。
これからあなたと共に存在する、新たなる祝福の風に・・・・・」

「あ・・・リィン・・・・あかん・・・・行かないで・・・・もう離れないどいて・・・・」

リィンフォースは伝える言葉をすべて伝え、蒔風の目の前に戻ってきた

「お願いします」

「では・・・・・
銀白の翼人により、あなたの願いを聞きとどけた
その想いは永久に
幸せの中に消えて逝け」

そしてリィンフォースの身体が光り出す

そこで、蒔風が彼女だけに聞こえる声で言った

「あなたとの出会いに感謝を
貴女のこれからの旅に、祝福を

そして別れには最高の笑顔を・・・・・ッ」

そして蒔風は思いっきり笑って見せた
声は出せなかった
出せば笑いではないモノが出てしまうから

（ああ・・・ちゃんとみんなを救えるヒーロー・・・・お前らなら救えるのだろうな・・・・きっと・・・・・・・お前らの、主人公の強さが欲しいよ。オレは・・・・ヒーローには・・・）

はやての泣き声がその場に響く

「う・・・ううううう・・・・・・リィン・・・・・リィンフォースーーーーーーーーーー！！！！！」

そうして、祝福の風、リィンフォースは消えた
一筋の光と共に

その光の元に十字架型のデバイスがゆっくりと落ちてきて、蒔風の手に収まる
それこそがリィンフォースが残した結晶
さらに一枚の銀白の羽根
それが十字架に触れると、羽根はとけていってしまった
十字架に一体化するかのように

その十字架を蒔風は車椅子に座らされたはやてに渡す
それをパシッ、と掴み両手で握り込むはやて

そしてその場からなにも言わずに帰って行ってしまった
その後を騎士たちが追う

途中、蒔風を一回だけ振り返ったが、その表情は雪でよく見えなかった

丘の上には蒔風、なのは、フェイトの三人が残される

「舜君・・・・・・」

「なんだなのは」

「あれって・・・・・・嘘でしょ？」

「「あれ」の定義によっては返答が変わるね」

「舜が・・・・無理やり説き伏せたってところ」

「・・・・・・・・何のことだ。あれは」

「嘘だよ、あれは」

なのはが断言する
フェイトもそれに頷く

「・・・・根拠は？」

「舜君は・・・誰かの意志を踏みつぶすなんてことしないもん」

「するにしても、最大限救いがあるようにしてくれる。それをわたしは知ってる」

「・・・・・・・・・・」

「自分から消えるリィンさんに罪悪感を、そして残されたはやてちゃんが絶望に染まりきらないように・・・・・」

「違うな」

「え？」

「で、でも」

「違えよ。オレはそんなたいした人間じゃない」

「舜君・・・・」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｍａｈｏｕ　Ｓｙｏｕｊｏ　ｌｙｒｉｃａｌ　Ｎａｎｏｈａ　Ａ'ｓ］

するとその場にゲートが開く
蒔風の役目は終わったと言わんばかりに

「・・・・・・」

無言で蒔風はゲートに向かう

「舜君！！！」「待って！！！」

「・・・・お前ら！さっきの変な話、はやてにするなよ？」

「でも！！」

「でもはなしだよ。なのは、お前はもちっと人を頼れ。なまじいろいろできるから頼りにくいかもしれないけどな」

「そんな話を聞きたいんじゃないよ！！！」

「じゃあな・・・・・」

バシュウ！！

「「舜（君）！！！！！」」

そうして、蒔風は淋しくこの世界を去った

一つの命をその翼に背負って

――――――

八神はやては知った。
自分の考えをその場でシグナム達に話し、それが事実かどうかを問い詰めた。
騎士たちはなかなか口を開かなかったが、最後には話した。
その後なのはとフェイトにも問い、答えをもらった。

そして少女は決心した
「謝ろう」
もしあの青年にもう一度会うことがあったら、絶対に謝るのだと。
なのは達も彼にはまだ言いたいことがたくさんあるのだと言った

そして彼のためにも、その遺志を継ぎ

必ず彼女の後を継ぐ子を誕生させよう
絶対に落ちない魔導師になろう
不幸な子を救ってあげよう

魔法少女たちの未来には、まだまだ光が満ちていた

――

次の世界
挟間にて立ち直った蒔風が降り立った世界

そこは

「”輝志”・・・・・か」

そこは奇跡の世界
夢の世界にて成長し、悲劇の運命を変えた、少年少女のいる世界

「リトルバスターズ・・・・か」

to be continued

なのはA's ～そして笑顔で～（後書き）

【魔法少女リリカルなのは A's】

構成：”ライクル”３５％
”フォルス”３５％
”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：高町なのは

－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－ ～ＷＥＰＯＮ～：全員の体力・魔力回復＆性能の一時的な超アップ

－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－ ～ＦＩＮＡＬ ＡＴＴＡＣＫ～：皆の願いを力を翼に、身体にまとっての突撃攻撃

アリス「今回はさみしい終わり方ですね」

しかし、私にはこれ以上の終わり方はないと思います
おそらく、無理やり設定すればここで彼女は救えるのでしょうですがそれは・・・・

ア「できなかった？」

はい
蒔風の力ではどう仕様もありませんでした

リィン最後のシーンはアニメ見直して泣き書きながら泣きでした
まさか自分の書いている文章で泣くなんて思わなかった

しかし、この悲しみは確実に彼や彼女らの胸に残り、乗り越えてそして・・・・

ア「続くんですね？」

と言ってもかなり終盤です
二百話あたりになるかも？
下手すると二百五十？

この物語はまだまだ先が長い

ア「そんなにですか」

ええ
ですので皆さん応援よろしくお願いします！！！！

なんだかんだで二十万アクセスいってましたしね！！！
じっさいなのはA'sの途中で越えましたがきりのいいところでの発表となりました
今回は番外は書きません

申し訳ない

ア「次回、ミッションスタート！！」

ではまた次回

この青春（イマ）を駆け抜けろ

リトルバスターズ　～遊び人二人の出会い～

朝である
学校である
そして今俺、蒔風舜は担任である教師と共に自分の教室へと向かっていた

「で、あっちが男子寮、向こうが女子寮だ」

「ふいふい」

「それから、今から行くのが校舎だな」

「オッケイです」

「にしても君、こんな時期に転校とは大変だな。三年ならすぐに受験じゃないのか？」

「あ、いえ」

「ん？なんだ？就職か？それにしたって・・・」

「まあそこは家庭の事情ってやつですよ」

「そうか。ま、深くは聞かんさ」

そんな風に適当な会話をしながら中庭を通って校舎の方へと歩いていくオレたち

と、その途中で教師の足が止まった

「しまった・・・ホームルームで配るプリント忘れた・・・」

「あ、じゃあオレこのまま待ってますよ」

「ん、そうか？すまないな。すぐに戻るから」

そういって教師は足早に職員室へと戻っていく。
そこに立ち尽くして待っていると、さっき食堂がある方だと言われた方角から、けたたましい声が聞こえた。

「だぁーーー！！！やばい遅刻すんぞ！！！」

「元はと言えば真人のせいなんだからね！！！」

「んだよ理樹、それじゃまるでオレのせいみたいじゃねえかよ！！」

「バカ。理樹はそうとしか言っておらんだろう」

「お前バカだな」

「あぁん！？てめえらオレをバカにすんのが筋肉さんをバカにすることと同義だと知っての言葉か！？」

「そんなこと言ってないで走ってよ真人！」

「そんなこと・・・うをおおお！！！！どうしてくれんだよッ！理樹にまで愛想尽かされちまったじゃねえか！！！」

「割と前から愛想は尽いたよ」

「もうバカだな。いやバランだな」

「鈴(りん)、それは弁当の中の緑の草みたいなものだ。決して馬鹿と言う意味じゃない」

「なにぃ!?」

「へへっ!バーカ!!」

「うっさいボケぇ!!!(ドゲシッ!!)」

ドッシャァ!!!

何やら五人の生徒が遅刻ギリギリで走っているみたいだな
ブレザー制服なのに学ラン来た筋肉質の男が紅一点の小柄な女子にハイキックぶちかまされてスッ転んだ。

「お前ら何やってんだ!!もう間に合わないっ!!」

「どーすんだよ!!」

「お前のせいだろ、真人」

「なんだとこの謙吾が!!!」

「やるのか？」

「やめろ、そんなことしてる場合じゃない！！こうなったらオレにいい考えがある」

「え？恭介、まさかそれって・・・・」

「言いから耳貸せ」

その五人が円陣組んでなにやら話し込む
なんだ？何するんだ？

気弱そうな少年が驚くが、結局何かが実行されるようだ

大柄な二人、真人と呼ばれていた学ラン少年と謙吾と呼ばれていた剣道着姿の少年が足場になる
そしてその二人の手に鈴と呼ばれていた少女が立つ

「今度は成功させるぞ！！」

「いっくぜーーーーーーー！！！！！」
「どぉりゃあああああああ！！！！！」

なっ、なにぃ！？
二人が少女を打ち上げて教室の窓から投げいれるだと！？

あ、あれ？あの軌道、入らなくねえ？

ってかあのままじゃ地面に落ちんぞ！？
下にいる男子達からでは手が届かない。だけど俺なら！！！

「あ、ぶなあああああああああああ！！！！！」

とっさに跳躍！！！華麗にジャンプ！！！
まだ二階部分にいる少女をキャッチしようと、オレが跳ぶ！！！
よし、このままキャッチだ！！！

と、思われた瞬間、少女が信じられない動きを見せた
空中で一回転して体勢を戻し、俺の顔を踏み台にしたのだ！！！

「ノウッ！？」

そして軌道修正して見事目当ての窓に飛び込む少女
地面に落ちるオレ

そして俺はこんな感想を漏らしてしまったのだ

「ネコさんか・・・・」

その言葉がオレの午前中の最後の言葉だったな
なぜならどう聞こえたのか、その教室の窓から先ほどの少女が机を
投げ出してきたからだ

「は？ンガッ！！！！」

それが顔面に直撃し、ほどなく気絶するオレ。
その周囲に四人の男子が気まずそうによってきたのはぼんやりと見

えた。

教室の方では彼女の友人らしき子がさらにイスを投げつけようとしてきたのを止めていた。

グッジョブだ。

あれ？隣の黒髪さんが殺気放ってきてるよ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・パタリ

そしてオレはこの学校でのデビューを、この日最初の保健室利用者として飾ったのだった

ーーー

ガラガラガラ

「お?目が覚めたかい」

そこに一人の生徒が入ってきた

「あ、朝の」

「よ、オレは棗恭介ってんだ。朝は妹を助けようとしてくれてサンキューな」

「ん?あれ?ああ、そういやそうだったな。彼女あんたの妹だったのか」

「そ。で、あんたの名前は?」

「おぉ、名乗られたからには名乗りかえそう。俺の名前は蒔風舜。趣味は熱いこと。特技は世界最強。座右の銘は「いつまでも少年ハート」だ」

ピクリ、と恭介の眉が動く

「あんた転校生だよな?何年だ?」

「三年・・・らしい」

「それでも今!青春を駆け抜けたいか!?」

「ふぇ!?お、おお!!いつだって青春は大好きだ!!!思いっき

り楽しめることは大大大好きだもんね！！！！

「へっ、お前、最高に面白いぜ。舜と呼んでもいいか？」

「いいぜ？じゃあオレも恭介と呼ばせていただこう」

「ふふふ」

「ははは」

「「あーーーーっはっはっはっはっはっは！！！！」」

ーーーー

なんでも彼の友達グループは今野球をやっていて、そのチームに蒔風は誘われたのだ

「オレとしては今すぐ入れてやりたいッ！！だが他の奴らはお前の事をよく知らない。だからお前の実力、見せてやれよ！！！」

これは恭介の談である

まだここには蒔風を含め男五人しかいないが、まだメンバーはたくさんいるらしい

「まあ恭介ががそういうなら仕方ないけどさ・・・・」

「いいのか？理樹。今リトルバスターズのリーダーはお前なんだから、お前が嫌だと言えばオレは何も言えなくなるんだが」

「うーーーん・・・・でも恭介が選定したならいい人みたいだし・・・・見てみるだけ見てみるよ」

「よっしゃぁ！！！！」

こうして、蒔風の適性試験が始まった

（このメンバーがリトルバスターズか・・・・・・・・だったら！！）

蒔風がグローブをつけてベースの外側に立つ

理樹の撃つ球を、それで捕球していくのだ

（何が何でも入ってやる！！！）

蒔風がなぜか冷や汗を流しながら、決心した

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

リトルバスターズ　～遊び人二人の出会い～（後書き）

アリス「今回は作者からお知らせがあります」

はい

実は昨日、「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」編を修正いたしました

いや、最初の方の分はあまりにもひどい！！

読んでて笑ってしまいました

そして悩みました

これは修正したほうがいいのか？

結構悩みましたね

自分の成長がわかるから残そうかとか、いろいろな理由から止そうかとかも思いました

しかし、今回百話分突破ａｎｄ二十万アクセスも行ったところで、ついに修正を施し少しはマシにしました。

理由としては最終的に「これはｅｎｔｅｒｔａｉｎｍｅｎｔなんだから、読み手優先じゃ！！」という感じになったからです。

どこが変わったのか、気になる方は読み直してみてはいかがでしょうか。

話の流れは全く変わってないので見なくてもいいのですが（笑）。

おそらく一つの世界が終わるごとに初期の方の世界はちょくちょく直すかもしれません。

ア「次回、蒔風の苦手発覚」

ではまた次回

リトルバスターズ　～蒔風、それなりに落ち込む～

蒔風がバットを握ってボックスに立っている
その体制から蒔風が神経を研ぎ澄ましている風に感じられる

「絶対に打ってやる絶対に打ってやる絶対に打ってやる絶対に打ってやるよっしゃコイヤーー！！！」

しかし蒔風の表情は違った
目はグルグルと渦巻いて、半分涙目、しかもやけっぱちだ

一体なにがあったのか
時間はつい１５分ほどに巻き戻る

――

「よっ！はっ！キャッチ！」

理樹の打つ球を調子よく捕球していく蒔風
跳んできたボールは十九個

蒔風は真っ直ぐ飛んできたボールすべてを普通にキャッチしてきていた

「なかなかやるな！」

「たりめぇよ！・・・・お？」

そして最後の球が飛んできた。
最後は凡フライである。
まず捕れたな、と皆が思うその球を蒔風が上を向いて追って行く。

「よし・・・いいぞ・・・このままこのまま・・・うわっ！アタッ！」

「「「「・・・・・・・・は？」」」」

そして驚いた
後ろ向きに歩き、腕を伸ばしていた蒔風のグローブには球がない。
球は蒔風の両腕の間を抜けて額にボコン、と当たったからだ。
蒔風はそれにのけ反り、足をもつれさせて尻餅をついて倒れてしまった。

「・・・・・えっと・・・・・大丈夫ですかーーー？」

理樹が恐る恐る聞いてきたので、蒔風が「大丈夫だーー」と仰向けになった状態から手をヒラヒラと振って答えた

「じゃあ今度はそっちに溜まったボールをこっちに投げ返して下さーい」

「オッ、ケイ！」

蒔風が跳ね起きて足元のボールを集める

「あー、それはそうとオレのことは気軽に「舜」でいいぞー」

「あ、はい！」

「恭介に話し掛ける感じでいいっての」

「だったら・・・バッチコーイ！！」

「お？いいね！いっくぜぇ！ほりゃ！」

そして蒔風がボールを投げる

その軌道はゆったりとしたもので、軽いキャッチボールのようだ

「もっと強くても大丈夫だよ！」

「あ、おう！」

蒔風が少し軌道を変えて投げる

今度は真っ直ぐだ

それを捕球した理樹が「ん？」と顔をしかめ、蒔風はすべて投げ終えてこっちに向かってきた。

「どうしたんだよ理樹。筋肉がプロテイン食らったみてぇな顔して

よ」

「？？？えっと、何だか微妙に球筋が逸れてるんだよね。あとまだ力抜いてるみたいだし」

「なんだそりゃ？」

理樹が真人の天然を華麗にスルーして答えた

蒔風はまだ力を抜いて投げている
いや、全力で投げたら大惨事だから、手は抜いているのだが、それでもまだ弱めだ。

「次は？」

「次はバッティングだな」

そういって謙吾がバットを差し出してくる
それに一瞬蒔風の身体が固まって、それから何事もないようにバットを掴んだ

ピッチャーは本来鈴なのだそうだが、今はいないので真人が受け持っている

「行っくぜぇ！！！おりゃあ！！！」

真人がボールを投げ、キャッチャー・謙吾のグローブに真っ直ぐに向かう

「ッ、せい！！！」

それに合わせて蒔風がバットを振る
しかし、ボールにはかすりもせずに謙吾のグローブに収まった

「・・・・・・つ、次だ!!」

蒔風が真人に次を投げるように言う
それに応えて真人が再び投球するが、またカラ振りだ
そんなことをもう五球繰り返してから、蒔風の肩を恭介が叩いた

「おまえ・・・・野球苦手か?」

ドサリ

その一言に蒔風が倒れ込んだ

「えええええええええ!?」

「おい・・・・倒れたぞ・・・・・」

「そうです・・・・オレ、野球とかメチャ苦手なんです・・・・・・
もっと言うなら球技が苦手なんです。野球、サッカー、バスケ、卓球などなどなどなど・・・・・」

「捕球とかは出来てたよね」

「それくらいなら・・・・でも打つなんてそんな・・・・投げるの

も力入れると変な方向飛んでくし」

「えっと・・・・じゃあなんで入ろうとしたの？」

「それは・・・・・・」

「おい、来たぞ」

そこに数名の女子たちがやってきた
合わせて六人

どうやらみんなで集まってから来たようだ
遅れたのはそのためである

「きょーすけ、何やってんだ？ってかそいつ！！！」

「うん？確か君は朝鈴くんを助けていた三年生じゃないか？」

「鈴りゃんを助けてくれたの？ありがと～～」

「わふ～～。スペシャルマンですねぇ！！」

「能美さん、その場合はスーパーマンでいいかと」

「ややや？つまりなにかー？この人もうちらの仲間になるのかなーーーー？」

なんとも騒がしい

しかし、とても楽しそうだ

「紹介するよ、この人は蒔風舜さん。恭介の推薦でリトルバスターズに入ろうとしているんだよ」

「どうも、蒔風舜でーーーす・・・球技のできないダメダメヤローでーーーす・・・・・」

「いきなり落ち込んでるけど？」

「そうなんだよね。この人、なんで入ろうとしたのか・・・・」

理樹が再びなぜ蒔風が入ろうとしたのか、理由を聞くと、蒔風が跳び起きて

「よっし！！お話しましょうか！！！誰かに聞かれない方がいいなぁ・・・・・」

「うーーーん・・・・だったら部室に行こうか？」

「あんの！？」

「廃部寸前の野球部のを勝手に使ってるだけだけどね」

そうしてリトバスメンバーと蒔風が部室へと向かう

「それで、なんで入ろうとしたの？」

「そうだぜ。確かに俺たちは楽しく遊ぶグループだけどよ、今の活動はほとんど野球なんだぜ？」

「そうだな・・・・じゃあ、話そうか。ここに主要、最主要が集まってることだし」

～蒔風説明中～

「と言うわけなんだよ」

その蒔風に、黒髪の女子生徒が言ってきた

「信じられんな。世界だとかそんな話はお話の中の物だ。現実に持ってくる物じゃない」

「そんなぁ・・・・恭介は？」

「そうだな・・・信じれば面白い話・・・・いや、理樹が狙われるのなら面白くはないが・・・そういう話はオレも好きだがさすがに現実に持ってくるほどじゃあないな」

その恭介の言葉に皆がうんうんとうなづく

みな、蒔風の話を信じられないと言う

まあそれが普通の態度だろう
しかし、次の蒔風の言葉でそれは一変する

「何をおっしゃるか。悲劇の運命を覆すために虚構世界にて成長し、そしてみごとそれを打ち破った少年少女と、その世界の作り手たちが」

「「「「「「「「「「!!!?!?!?!?!?!?!?」」」」」」」」」」

その場の全員の視線が蒔風に注がれる

「なぜ・・・それを知っている?」

「否、今なんか情報が頭にな、流れてきたんだよ。こう言うことがあったってな。
まあ、あったってだけで詳細は知らないけどな」

「・・・・・・・君は、世界を越えるとか言っていたね」

「んお?そだよ」

理樹の言葉に蒔風が答える

「だったら・・・・何か一つ力を見せてくる?」

「いいよーーー。じゃあ・・・・これっ!!」

そういって空中に水を迸らせ、水流のパイプを作る蒔風
それを見て理樹は納得した

「うん、信じるよ」

「理樹っ！？」

「こんな物まで見せられたら反論できないよ鈴」

「ううう・・・・」

「ほらぁ、鈴ちゃん、今は理樹君がリーダーさんなんだから、理樹君を信じようよ」

「小毬ちゃんがそういうなら・・・・・・」

そういって小毬、と呼ばれたほんわかとした少女が手を差し出してくる

「こんにちわ～。私、神北小毬ですっ。よろしくね～～」

それに続いて次々と女子たちが挨拶してくる

「わふっ！私は能美クドリャフカですっ！ないすちゅ～み～ちゅ～」

「やっほ！はるちんは三枝葉留佳だよ！！」

「西園美魚です」

「うむ、私は来ケ谷唯湖だ」

「棗・・・鈴です・・・・・」

次々とあいさつを交わしていく蒔風
と、そこで恭介が何処かに連絡しているのを確認した

「恭介？どこに連絡してんだ？」

「いやなに・・・ことが大事だけな、それに詳しそうな奴に電話してんだ」

「・・・・・誰？」

蒔風が聞くと、恭介がニヤッ、と笑ってこう答えた

「元学園の財宝を狙ったスパイ・・・・だな」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

リトルバスターズ　～蒔風、それなりに落ち込む～（後書き）

アリス「そういえばこの世界はどの時期なんですか？」

そうですね
あの事件の後です
虚構世界で成長して、バスの事故現場から戻ってきたところですね
なおこの世界は正規ルートを回っているので、理樹と鈴は付き合っています
にゃんにゃん

ア「そう言えば蒔風球技苦手なんですね」

そうなんです
刀で銃弾跳ね返せるくせにバットにボール当てられないんです、彼

ア「なんでです？」

彼曰く「なんか無理」だそうです

ア「獄炎弾投げる時とかどうするんですか」

あれはそれなりに軌道修正できるので

ア「そして最後に出たあの台詞はまさか・・・・」

おおっとそれは次回だ

ア「次回、ドジっ娘スナイパー」

ではまた次回

ミッションスタート！！！！

リトルバスターズ　～それがきっと幾千もの力になる～

恭介が電話相手を呼び出し、ほどなくしてその人物がやって来た

「ど、どうも～～～」

おずおずと入ってきたのはこれまた少女だ

なんだか気まずそうだ

入ってきてすぐに恭介のもとに行き、首根っこ掴んで話し込んだ

「理樹君のピンチって言うから来たのにピンピンしてるじゃない！」

「なるのはこれからだそうだ」

「そうそう、危ないのはこれからなんだ」

「時にお前は「あの世界」でのことは覚えているか？」

「うっすらとね・・・・理樹君のことは覚えてるけど」

「恭介、彼女は？」

「ああ、こいつは朱鷺戸沙耶（ときどさや）。例の虚構世界に迷い込んでいた奴だ」

「そこではスパイごっこをして大いに楽しんだわ～・・・・・・・・って

てあんたいつの間に！？」

と、ここで沙耶が蒔風に気づく

「え？最初からいたけど」

「そんな・・・あたしはスパイなのよ・・・そりゃ確かに本物じゃないけどさ・・・・・」

「もしかして・・・・・さやちゃん？」

そこに小毬が離しかけてきた
その声に沙耶が振り返る

「やっぱりさやちゃんだ～。こんにちは～」

「ああ・・・・えっと、神北さん？」

「小毬でいいよ～。さやちゃんもリトルバスターズに入るの？」

「え　？あ、あたしは・・・・」

「理樹、どうする？」

恭介がニヤニヤしながら理樹に聞いた
おそらく理樹がどう答えるのかわかっているようだ

「いいよ。朱鷺戸さん。っていっても今は大変な時だから・・・・・」

「いいえ！入ります！いれて下さい！絶対入る！！」

そこまで言った理樹の両手をガッシ！と掴んで沙耶がまくし立てる
その勢いに若干びっくりしながら理樹はよろしく、と返事をした
沙耶が理樹の手を掴みながら「よっしゃー！！」と叫んでいる

「フカーーーッ！！理樹の手を離せーーーーー！！」

そこに鈴のハイキックが飛んで来るが、沙耶がヒラリとかわし、距離をとる

「り、鈴？」

「理樹はあたしのだ！！」

声高だかにそう宣言する鈴に、皆がやれやれと頭を振る

「はっはっはっ、鈴君も可愛いヤキモチを妬くなぁ。ああ・・・・可愛い・・・」

「来ヶ谷さん、そのワキワキした両手をどうにかしてください」

「む？すまないな。だが西園女史もよい題材が一人増えたのではないか？」

「そうですね・・・彼は一見攻め・・・・・いえ、受けにも回れそうな・・・・」

部屋の隅でそんな会話が行われているとはつゆしらず、沙耶に説明していた蒔風の背筋にゾクリと悪寒が走る

「ま、まあ、とりあえずこんな感じだ」

「なるほどね・・・私が呼ばれた理由がわかったわ。ようはその「奴」を探すか、理樹君の護衛ってところ？」

「そうだ。舜、問題は？」

「あるわバカモン」

蒔風が恭介にチョップでツッコんで答えた

「「奴」相手に偵察なんて自殺行為もいいとこだ。学校ごと・・・とはいかなくても、まあ確実に消されるぞ」

「そうか・・・・」

「護衛をつけてもいいが、「奴」にもそういった使えるやつがいてな。おそらく意味をなすまい」

「だったらどうするんだ？このまま待てと言うのか」

謙吾が蒔風に言った。

それはそうだろう。

彼にとって最高の親友が狙われているのに、待っているしかできないとは

だが、そんな謙吾に、いあや、その場の皆に蒔風は言う

「そうだ、待て。それしかないんだ。この戦いはいつだって後手なんだよ。それでも勝ってきた、俺を信じてくれないか」

蒔風が頭を下げてそう言った。

「僕はそれでいいよ」

「理樹！！」

理樹の言葉に蒔風が頭を上げる

「守ってもらえるだけでも十分だよ。舜がいなかったらただ殺されていただろうし」

「そう・・・・だな」

「理樹がそーいうならいい」

真人や鈴の言葉に、恭介が続いた

「確か「奴」が来るのは・・・・・・」

「明後日だ。この世界はほとんどが”輝志”に該当するからな。”輝志”の世界は少ないけど、構築がややこしいんだ」

「だったら今は大丈夫なんだね」

「今は・・・な。それに心配するなよ！！オレは世界最強だからな。

明後日だって何も心配はいらないさ」

蒔風のその言葉にメンバーの一人が顔をしかめる。
が、それが何だか確信が持てなかったのか、すぐに元の表情に戻った

「だったら今は対策を練ろう！！ミッション名「世界の捕食者から理樹を守れ」だ！！！！」

「ちょ、ちょっと恭介！皆を巻きこんだらだめだよ！！」

そう言って恭介を止める理樹だが、それを真人や謙吾、さらには女性陣までもが止めた

「水臭いぞ理樹。お前の危機に立ち上がらなくて何がリトルバスターズか」

「そうだぜ！！そんなに強い奴なら、俺の筋肉さんの出番だしな！！！」

「ふむ、このまま少年が死んでは私も悲しいからな」
と模造の日本刀を手入れしながら来ケ谷が言う

「まだ夢の恭×理をこの目で拝んでいないのに死なれては困ります」
と両手にグッ、と力を入れる美魚

「リキを死なせはしないのですッ！！」
「死んじゃうのは悲しいことだもん・・・・私も頑張るよ！！」
とクドと小毬が意気込んで

「やはは、何だか面白いことになってますな～～～～。これははる

ちんの出番かっ！？」
と何やらタンバリンを振り始めた葉留佳

「理樹君に手なんか出させない・・・今度は私が助けるんだ」
とモデルガンをチェックする沙耶

そんな皆に理樹はどう説得しようかとおたおたしていると、肩をポンポン、と叩かれる
理樹がそっちの方に振り向くと、頬に指がツン、と刺さった

「理樹は油断し過ぎだ、だから・・・・・・あたしたちが守る」
その指を頬に付けながら、鈴が理樹に言った

いつもは言葉足らずな彼女だ。
だからこそ、たったこれだけで彼女たちが本気であるとわかってしまった

「お前はあたしがいないとだめだからな。つきっきりで守ってやるから安心しろ。死んだら・・・・・ぶっ殺すぞ」

なんとも物騒な言葉だ
しかし、「守る」と言う言葉の奥にある、その一つの決意に、理樹はこれ以上「やめてくれ」なんて言えなくなってしまったのだ

「鈴・・・その時は僕はもう死んでるよ・・・・・」

はぁ、と肩を落としてしまった理樹に、蒔風が話しかけた

「いい、友達だな。多分、ここにいる誰一人たりとも、その場で言ってるんじゃないな」

「そうだろうね・・・」

「本当にお前が死にそうになったら、命懸けで助けてくれる連中なんだな」

「そうだったしね・・・・」

「だったら・・・・そいつらはオレが守ろう」

「僕も・・・何かやるよ」

「それはいい。だが、無茶はするな。決して戦おうとするな。それは俺がやる」

「・・・・うん」

「だからさ!!ウジウジすんな!!!お前は胸張ってこう言やいいんだよ!!」

「え?・・・・うん・・・・はは っ!」

「愉快だろ?」

「そう・・・・だね!!」

そして理樹が皆の前に立って、改めてこう言った

「みんな!!僕のためにいろいろありがとう!!でも、僕は死なない。皆も死なない!!前にも一回死にそうになったところから生き延びた。あの時に比べて今はまだピンピンしてる!!!だから大丈夫だ!!こっちには舜もいるし!!」

理樹が蒔風の方を向き、さらに皆を見渡して宣言した

「よし・・・さあみんな・・・・・ミッションスタートだ!!!!」

to be continued

リトルバスターズ　～それがきっと幾千もの力になる～（後書き）

アリス「沙耶ちゃん生きてるんですね！！！」

あのまま死んではいません
それが沙耶ちゃん

タイムマシンで過去に戻って、それから普通に成長したんだよ！！！
沙耶は死んでない！！！

このゲームには男ばかりに泣かされました
一番泣いたのは真人が消えるシーンでした・・・・

ア「原作知らない人この話してもわからないでしょう」

そうですよね・・・ごめんなさい

時にこないだの世界で百話をゆうに超えてしまい、フォルダ内に保存してある「世界をめぐる、銀白の翼」のメモ帳を見たんですよいや、我ながらここまでよく連投してきたもんだと

ア「ほとんど毎日でしたっけ？」

そうなるのかな？
これはひそかに自慢話ですよ

まあ何日か休んだ日はありましたけど
さらにクオリティ低くなってるけど
一話一話短いけど

そんな中でそのメモ帳の並び順を「大きさ」順にしたんですよ
一話分のメモ帳に本編と後書きを一緒に入れて「「奴」の部屋」シリーズと最初の設定二編を除いて、どれが一番大きかったのか小さかったのかを見てみました

ア「どうだったんですか？」

発表！！
大きい順ランキング！！

三位は！！
同着で四話分！！
「バカとテストと召喚獣　～バカと想いとそのつながり～」
「なのはA's　～やっとお話しができるの～」
「ｔｈｅ　ｄａｙｓ　崩壊　～ほとんど説明だなこりゃ～」
「電王　～過去からの帰還～」
です！！！

次回は小さい三位の発表です

ア「次回、蒔風を見抜いた者？」

ではまた次回

リトルバスターズは・・・・永遠だ！！

蒔風は結局リトルバスターズには本加入しないことになった。
数日後にはいなくなってしまうからだ。
それでも、一時的には仲間になる、という事で、放課後に食堂でパーティーを開いてくれることになった。

「マジで!?パーティーとか大好きなんですけど!!!もうみんないるん?理樹っち!」

蒔風がわくわくしながら理樹に訊く。
そんな蒔風を見ていると、理樹は「この人ホントに十九歳かなぁ・・・」と考え込んでしまったが、凄く身近にも子供みたいな年上がいるので、すぐに慣れてしまった。

なぜ理樹が食堂に蒔風を連れて行っているのかと言うと、恭介は何らかの準備をしているらしいのだ。

「くそみたいに楽しみなんですけどっ!やばいやばいっ!」

移動中にも蒔風はなんだか騒がしい。
よっぽどうれしいみたいだ

「そんなにうれしかった?」

「そりゃあもう!!いつも一人だからね、こう言うみんなでワイワ

イは大好きさ！！！」

「いつも一人？」

理樹は顔をしかめた。

確かいろんな世界を回っていて「奴」と戦っているはずだ。

だったら各世界で友達や仲間はできなかったのか？

「できたよ？皆最高の仲間だし親友さっ。でも・・・・」

「？？？」

そこで蒔風の声が少しだけ落ちた

「誰かと一緒に世界は回れてはいないのさ。行く先々で友人はできても、俺の隣にはだれもいないのさっ」

軽快にそう言い放つ蒔風に、理樹は少しだけ寂しさを覚えた。

そんな旅をしていて、彼は大丈夫なのだろうか、と。

「ん？理樹ぃ、俺の心配してくれてんの？」

「え？うん・・・ちょっとね」

「ありがとな」

そう言って頭をくしゃくしゃと撫でる蒔風。

そしてすでに吹っ切れた顔をしてこう言った。

「確かにオレは一人かもしれない。でも、俺の戦いがきっと誰かを

救っていると、信じている
だから大丈夫なんだ。だから・・・・・戦えるんだよ」

その言葉に理樹は何も言えなくなり、ついには顔がニヤケてしまった。
なんてすごい人なんだろうか。
その考えに達するのに、この人はどれくらいの・・・・・

「え?この程度は高一ぐらいで知ったさ。その後に「正義と悪の存在」、さらには「死と生」だ」

「そんなこと考えてたの?」

「まね。もっと人生をかけて知るべきことを、俺は二十年もしないで、考え始めてからだと三年もしないで知ってしまったからな」

「それって・・・・」

「ま、普通じゃない。だから俺は「異端者」なのだよ。えっへん」

「威張ることじゃないだろ」

「その通りです（笑）」

そんな話をしてると、二人が食堂に到着した

「ここかっ!!」

「そうだね」

「では行くぞッ！！」

「あ！！待っ・・・」

バタン！！
と勢いよく扉が開かれる

ボフン！！

瞬間、蒔風の視界が真っ白になった
なにやら扉の上に仕掛けがあったようだ。
何かの粉で蒔風の全身が真っ白になり、前方では葉留佳がケタケタ
と腹を抱えて笑っていた。

「やははっ！！引っかかってくれましたなぁ～～～～舜さんは！！」

「はるちゃん、やっぱり悪いよ～～～」

「え～～？こまりんノリ悪いぞ～～～」

そう言って蒔風の方にピョンと寄ってきた葉留佳。

「にしし、かんそーどーですか！？」

固まったままの蒔風に、葉留佳が聞いた。
そして蒔風がフッ、と笑ってから、叫んだ。

「小娘が！！！お前も同じようにしてホットケーキに埋めて食って
やるわ！！！」

「きゃぁ～～～～～～～～！！！！！」

蒔風が葉留佳を追いかけ始める。
事情を知ってる彼らだからいいが、なにも知らない人間が見たら真っ白な変質者が女子生徒に迫る光景だ。
かなりやばい

「まったく葉留佳さんは・・・・」

「理樹、遅いぞ」

「ごめんごめん。ちょっと話しててね」

食堂中を走り回る蒔風と葉留佳を眺めながら、理樹もテーブルの上にあるものに手を伸ばす。
テーブルの上にはホットプレートが並び、そこで小毬やクドが主体となってホットケーキを焼いていた。

「ぜぇーーー、ぜぇーーー、やっと・・・捕まえたぞ・・・・」

「はぁはぁはぁ・・・・・捕まっちゃうとは思わなかったですな・・・・・・」

そこに肩で息をした蒔風と葉留佳が戻ってきた。
葉留佳は蒔風のように頭から小麦粉を被っている。

「やられた～～～～！！悔しいですね～～～～～～！！！！」

「何やってんのさまったく」

そう言って二人にタオルを差し出す理樹。

「こいつメチャすばしっこいのな。まさか軽く本気出すとは思わなかった」

「褒めて褒めて～～～」

「褒めるかいっ！！！」

「舜！！こっち来いよ！！！ゲームやろうぜ！！！」

そこに恭介からの声がかかる

そちらに足を運ぶと、恭介がビンゴのカードを差し出してきた。

「やろうぜ！！」

「景品は？」

まずそこに食い付く蒔風。

それに対する恭介の返答は

「無い！！だが、ビリには罰ゲームがある！！真人！！！」

「んだよ。こっちはいま食ってんだよ！！」

「いいから、持ってきたもん出せよ」

「へいへいっと！（ドスン）マッスルエクササイザー？セカンドだ

！！！！」

2が二回ある！？

と、そんなことを思いつつ、それを掲げる恭介

「ビリにはこいつを飲んでもらう！！！」

「待てよ恭介。なんでこれが罰ゲームに使われるんだよ！！」

「そりゃそうだろ」

そりゃそうである。

このドリンクは真人が筋肉のさらなる成長のために作り上げたものだ。

その味は何とも形容しがたいものである。

「筋肉の筋肉による筋肉のためのこのドリンクをそんなことに使うなよな！！！」

「じゃあこっちで用意しよう」

そう言って蒔風がドリンクを取り出した。

「どこかの世界からの贈り物だ。なになに・・・・超栄養ドリンク・・・・？」

そのラベルには当て字としか思えない名前が書いてあった

それは野菜汁（苦）・ペナル茶（ティー）（辛）・青酢（酸）・イワシ水・粉（コ）悪秘胃（オヒイ）とある

「なんだこれ・・・・・」

「ま、まずそうだ・・・・・」

「何処かのテニスの世界で飲まれているらしいんだが・・・・身体にはいいらしいぞ？」

「飲んだ瞬間にぶっ倒れそうだが？それにこれでは罰ゲームは五人ではないか」

謙吾の言葉に、蒔風がふっふっふ、と笑って答えた。

「大丈夫だ、秘策がある」

「どんなだ？」

「一つにする」

「なに！？」

「そして一つにしたものがこちらでございます」

「何やってんの！？」

そこにはなんだかよくわからない色と形状をした飲み物？が置いてあった。

「命懸けのビンゴゲームだ・・・・・」

「ゲームスタートだ！！！」

そして始まったビンゴ
みんな目が本気だ

と言っても完全にこれは運だ。
どうしようもないほどの運頼み。

そして結果を言えば、蒔風が負けた。

「な・・・なぜだ・・・・・」

「うわぁ・・・・・・」

「ご、ご愁傷さま・・・・・」

蒔風の握るカードは穴が開きまくっていた。
あとどこでもいい、一カ所でも穴があけばビンゴなのに、そこが全く開かないのだ。

「なんで・・・・あと一つなのにぃぃぃぃぃイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！」

「さ、飲もうか」

そう言って恭介がドリンクを差し出してくる

「い、否だ！！！」

「おっと逃がさないよ」

「！？」

蒔風の背後にいつの間にか来ケ谷が回りこんで退路を塞ぐ

「ちぃっ！！ならば！！」

蒔風が強引にわずかな隙間から逃げようとするが、ビー玉に足を取られて転んでしまう

「ふっふっふ～～。はるちんからは逃げられないのだ！！」

「何このお前らのハイスペック！？」

「気にしないでください。それよりも、飲まないんですか？」

美魚が冷やかに蒔風に言う。

自分で言ったくせに逃げるのですか？と目が語っていた。

「・・・・飲んでやる！！！！見てろよ！！！（ゴ）ブルァアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

ゴクッ！！と行く前に蒔風は噴き出してしまった。

皆がそれを避け、蒔風が床に倒れてビクビクしている。

まあ、そんなことがあって皆で大騒ぎをした。

その途中に天井裏からホットケーキを大量に持っていた沙耶が落ちてきたり
来ケ谷が鈴、小毬、クドに襲いかかり、三人の貞操の危機があったりと、いろいろあった。

そして日も傾いた頃に、片付けをして、各自寮に戻った。
明日に備えて、みんなの士気は最高潮にある。

きっと大丈夫だろう。

――――――――――――――――――――――――――――――――

月の綺麗な夜

蒔風が寮の裏で構える。
ジ・・・・・・・と動くことなく構え続ける蒔風に、フワ、と風が吹く。

その瞬間蒔風が一瞬だけ動き、風の軌道を変える。
そんなことをジッと続けていた。

「・・・・・・・・なんだい？」

唐突に蒔風が声をかける。
その声に応じて寮の陰から出てきたのは謙吾だ。

「すまない。邪魔するわけじゃないんだが」
「いいっての。何かあったのか？」
「いや・・・・気になることがあってな・・・・」
「？？？」
蒔風が首をひねる。
何かあっただろうか？
「・・・・オレはうまく言葉にするのが得意ではないから単刀直入に言う・・・・・・舜、お前、無理してないか？」
「無理？」
蒔風の眉が少しだけ動き、反応する。
「ああ・・・・昨日、「世界最強」って言ったとき、その時はわからなかったが何だかそんな気がした。
もしかしてお前・・・・・自分の事そんな風に思ってないんじゃないのか？」
その言葉に蒔風がそらを見上げ、頭を掻いてから、謙吾に向き直った。

「まさか・・・・・・な・・・・・・」

「オレもそうだったからわかるんだ。無理をしてるんだな？」

「ふぅ・・・・確かに」

蒔風が言葉を紡ぐ

「オレは世界最強じゃない。それに近い力は持っているが、決してそうじゃないんだ。
オレの本質は結構泣き虫でな。本気で「バカ！！」と十回も言われれば泣きだす男だ。
あまり自分にも自信はない。それでも・・・・・オレは世界最強じゃないといけないんだ」

「そこまで・・・・・・なのか？」

「そうじゃなきゃ世界がパァだからな。
だから、俺は世界最強だと言い張るんだよ。
ようは自己暗示に近いかもな。「本当の蒔風舜」に「蓋」をしているのがオレだ。
これが蒔風舜の理想形態なんだよ。そしてその形をとってるだけの道化（ピエロ）だ」

「そんなことが・・・・できるのか？」

「さあな。だけど俺は異端者さ。普通から異常に足を踏み入れ、どの理からも外れた人間・・・・
いや、人間としてどころか生物として違ってんもんなァ・・・・・」

「お前はそれで大丈夫なのか？」

返事の代わりに、蒔風が謙吾に拳を突き出す。
その拳圧が風となって謙吾を通りぬける。

「大丈夫だよ。今までこうやって生きてきたんだし、例え何かあっても「蓋」をすぐにかぶせればいいんだしね」

「・・・・・・・・・」

宮沢謙吾は考える。
ではそれが溢れてきてしまったらどうなるのか。
心が恐怖やストレス、または幸福や信頼でうまったら、その蓋はどうなるのか。

よく知られてないが、幸福なイベントでも心のストレスになるのだ。
悪いことばかりがストレスになるとは限らない。
だが、それならまだいい。
蓋が取れる頃には、彼は幸福に包まれているから。

だが、もし逆だったら？
その時彼がどうなるのか、想像もつかなかった。
目の前にいる青年は、自分の考えよりも上の次元にいる。

そんなことを考えていると、一陣の風が吹く。
それにハッとなって謙吾が顔を上げると、蒔風はもういなかった。
紙が一枚置いてあって、「明日は戦いになると思うから、早く寝な」と書いてあった。

「舜・・・・・・・・一人の旅で・・・・お前は本当に大丈夫なのか？」

いつかきっと彼の蓋は剥される。
しかし、それはずっとずっと先の物語。

もしそうなれば、きっと彼は元の「人」に戻れるのだろう。
今はその時ではない。

明日には「奴」が来る。
戦いは、待ってはくれないのだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

リトルバスターズ　～パーティアンドメンタル～（後書き）

仮面ライダーｓｐｉｒｉｔｓ第三巻買いました！！！
やっぱメチャかっこええ！！！！

アリス「ア～～～マ～～～ゾ～～～～ン！！！！！！！！！」

大切断！！！

ア「すぅぱぁだいせつだぁん！」

ちょ、それやめて（笑）

ア「あれはあれで好き」

リトバスはキャラ多くて大変だ・・・・
とても全員書ききれない・・・・・
沙耶なんて完璧に空気だ・・・・

ア「彼女何やってるんですか？」

ホットケーキパクって天井裏から理樹のこと見てました

ア「アホですね」

アホですから

ア「次回、「奴」が来る」

ではまた次回

この世界には秘密がある

夜が明けて次の日

リトルバスターズのメンバーは、グラウンドで野球の練習をしている。
今日は授業がないので朝からだ。

蒔風は真人と理樹にバッティングを教えてもらっていた。

「いいか舜？こう筋肉さんが唸りをあげて、そのパゥワァーがバットを通してボールに伝わって、「よっしゃあーーっ！！」って気合いを入れればいいけんぜ」

「最初から気合いしかないじゃないか」

「それで行けるのは真人だけだよ」

「ああん！？じゃあなにか？理樹は思い込みじゃなくて技術で打ってのかよ！！」

「それが普通なんだけど」

と、こんな感じにいろいろと教わって行くうちに時間が正午をさす。
ちょうどいい時間なので理樹がみんなに声をかけ、ベンチでお昼にすることにした。

「舜さんのばってぃんぐはどうですか？」

クドが蒔風、理樹、真人に練習具合を聞いてきた。

「まだだめだなぁ。下投げの軽いもんしかまともに当たらない」

「タイミングは合ってるんだけど、高さが合わないんだよね」

「気にすんなよ！諦めたら試合終了だぜ！？」

「じゃあ頑張った舜さんに甘ぁいお菓子をプレゼント～～～」

そこに小毬がお菓子を差し出してきた。

「甘ぁい」とは言っていたが、差し出されたのは普通のお菓子だったので、蒔風はありがたくいただく。

「サンキュー、こまりん」

「どういたしまして～」

そんな風に皆で食事をとっていると、恭介が蒔風に聞いてきた。

「それで舜。「奴」はいつ来るんだ？」

蒔風の読み通りなら「奴」の計算が終わるのは今日。

つまり襲撃も今日だ。

それに関した恭介の質問に、蒔風が答える。

「多分そろそろ・・・・・あ」

蒔風が何かに気づいてサンドイッチを頬張りながらグラウンドの向こうを指差した

そこにみんなの視線が集まる。

そこに蒔風には見慣れた男がいた。

「よう！いい天気だな！」

「だな！準備はできたのかいクソヤロウ！」

「おかげさまでな！」

蒔風と、グラウンドの向こうにいる「奴」が大声で話していると

グオン！

「奴」が結界を発生させ、グラウンドを包囲した。

戦いの準備はこれで整う。

そこで蒔風が身を乗り出してみんなに言った。

「お前らは隠れていろ、あとはオレが」

蒔風が前にでる。

「奴」もこちらに向かって歩いてきた。

二人の距離が近づき、野球場の中央で、手を出せば殴りかかれる位置にまで来た。

「この世界はちょいと面白くてな。ついつい計算が弾んじまってよ」

「そうかい。悪いがあいつらはやらせねえぞ」

「「・・・・・・・・・・」」

「十五天帝!!!!」

「魔導八天!!!!」

ガバギィ!!!!!!!!

蒔風と「奴」が同時に自分の剣をバラでだし、応酬する。

一撃で地面が抉れ、一振りで万物を斬り裂き、一太刀で空気の振動する攻防が超近接で行われる。

「畳返し、己囲い!!!!!!」

蒔風の畳返しで地面が跳ね上がる。

それは二人を閉じ込めるように六角形の筒となり、狭い空間に押し込める。

「ちっ！！！」

そのような非常に狭い空間では蒔風の方が有利になる。
「奴」の持つ「魔導八天」はそのすべてが素晴らしい西洋剣だ。
だがこの狭さでは存分に振るうことができない。

それに対し蒔風の「十五天帝」には「天地陰陽」がある。
トンファー型のこれはこのような場所においての戦闘をも可能にする。

「奴」が「魔導八天」を捨て唯一空いている上から飛び出してそこから抜け出す。
蒔風もそれを追って飛び出して行く。

「ぬ・・・・おおあ！！！！」

「どりゃあ！！！」

飛び出した勢いで空中にいる「奴」が波動砲を打ち出してきたのに対し、蒔風が拳で打ち払い、絶光砲を撃つ。
「奴」がそれを紙一重でかわし、接近する蒔風を迎え撃った。

蒔風の持つ「天地陰陽」をすべて適確に受け、なおかつ細かな蹴りの動作にてそれらをすべて蹴り飛ばす。
そして二人が地面に降り、さらに蒔風が新たな剣を抜刀しようとしたところで、「奴」の蹴りが蒔風の右肘を捉えた。

ゴキッ！！！と嫌な音がして、蒔風の肘が外れる。
そこを蹴り飛ばされた蒔風が独楽のように回って倒れる。

うつ伏せからすぐに仰向けになり、上を向いた蒔風の視界に、「奴」の拳が跳び込んできた。

バゴン！！！！！

「奴」の拳が地面を揺るがす。
蒔風はそれを地面を転がって避けるが、そこから立ち上がることを「奴」がさせてはくれない。
逃げた先を狙って「奴」が波動砲を撃ち、ジリジリト追い詰めて行く。

そしてついに蒔風が撥ね起き、走り出す。
「奴」の波動砲の隙間を縫い、接近していく。
と、一瞬だけ「奴」の砲撃が止まり、そして最高出力の波動が打ち出された。
その真正面にいた蒔風の姿がぶれる。

砲撃が後ろに飛んで行き、そこで爆発したとこを出蒔風がさっきまでいた場所よりも若干横にずれた位置に立つ。

「十分な速度で、十分によけきった・・・・・・」

そこで蒔風の右腕がダラリと下がる。

「はずだったんだがな」

その右腕は血と砲撃で黒くなっており、ピクピクと痙攣していた。

「その腕はもう使い物になるまい」

「くっそ・・・・・」

「舜！！！！」

そこに理樹たちが駆けよってくる。

蒔風の表情が驚愕と憤りに染まり、忠告を飛ばす。

「オレに任せろって言ったろうが！！！！下がってろ！！！」

が、しかしそこで恭介の熱い、それでいて冷静な声が発せられた。

「いや、ここは俺達に任せてもらう」

「な！？」

恭介の言葉に蒔風が驚愕する。

その間に理樹が前に出て、それに鈴に真人や謙吾、来ヶ谷らが続いて、横に並ぶ。

「僕たちだって死ぬわけにはいかない。友人をみすみす傷つけさせたちなんかできない！！！！

そのために・・・・僕は・・・僕たちはあの世界で強くなったんだ

！！」

理樹たちの脳裏に浮かぶのはかつての悲劇
崖から落ちた修学旅行のバス。
血まみれの仲間たち。
一度は諦めかけてしまった未来。

だがそこから理樹と鈴はみんなを救って帰ってきた。
ならば今度もできないはずはない。

「行くよみんな！まずこの結界を！！」

「「「「「おう！」」」」」

ズオァッ！！！

その瞬間に世界が変わる。見た風景は一切変わらない。
しかし、確実に違う世界。

この世界には彼らの他には誰ひとりとして存在しない。
いつまでも続く、彼らの青春の世界！！

「ば・・・かな・・・結界!?しかも、固有結界だと!?」

固有結界

空間から隔離する結界とは異なり、これは世界を塗り変えることで存在するもの。

そんな希少能力を、複数人でとはいえ発動させつ彼らはとても普通ではない

だがそれよりも特筆すべきは

「なに!?”輝志”は基本的には”ｎｏ　Ｎａｍｅ”と変わらないはず・・・こいつら・・・”輝志”の力の使い方を知っている!?」

そう、想いの強さによって奇跡が起こる”輝志”とはいえ、それを使いこなすなど通常ではありえない。

だが、彼らはそれをやってのける。

友人を救うという、その想いたった一つに賭けて。

「さ、舜、始めよう!!!」

「・・・・・そうだな」

蒔風がにやりと笑いながら、差し出された理樹の手をとる。

「僕たちは正義の味方、リトルバスターズだ!!!」

「いっくぜえええええええええええ！！！！！！筋肉革命だぁアぁアアアアアアアア！！！！！！！！」

真人の雄たけびが響き渡る。

と、その瞬間に、塗りつぶされていた世界がさらに潰される。

「これは・・・・まさか真人は・・・・これとは異なる固有結界の持ち主か！！！」

「これって固有結界って言うんだ？」

「そうだが・・・・お前ら凄いな。〝輝志〟の力を使いこなす「奴」は始めてみた」

世界が塗りつぶされ、真人の固有結界「筋肉旋風（キンニクセンセーション）」が発動する。

それを確認した真人が、「奴」に向かって突進した！！！

「筋肉さんが通りまーーーーッす！！！！！」

「バカか・・・・・返り討ちだぁ！！！！！！」

真人のショルダータックルと、「奴」の蹴りがぶつかり合う。

「奴」の蹴りは一撃で地盤を砕くほどのもの。

本来ならば、比べるべくもなく真人の身体を二つに千切ってしまうだろう。

本来ならば

「グブッ・・・ガバアアアアアアアアアア！！！！！！！」

しかし宙を舞ったのは「奴」だった。
それもそうだろう。今この世界は真人による「筋肉至上主義」の世界となっているのだから！！！！！
ただ力があるだけではこの世界ではだめなのだ。

この世界では「筋肉の総量」が絶対的な物となる！！！！
それに関しては、蒔風と「奴」を含めても、真人がダントツで一番なのだ。
故にここにおいては真人に勝てる者はいない！！！

「へっ！！貧弱な筋肉だぜ！！！謙吾ぉ！！！」

「応ともさ！！！！！」

そこに筋肉量第二位の謙吾が竹刀を構えて「奴」に突っ込み、その脳天をたたき割った。
顔面から地面に落ちた「奴」に、さらなる追撃で真人の踵落としが叩きこまれる。

「す・・・げえ・・・・・」

「舜さん。こっちこっち！！」

「今治療しますから」

美魚と小毬に呼ばれ、右腕を差し出すように言われた蒔風がそのようにする。

すると見る見るうちにその腕が回復して言ったではないか。

「このメンバー敵なしかよ・・・・オレ必要なくね？」

「そんなことはありませんよ。貴方が来なければ、このような力を自覚できなかったと思います。さて、私も行きますか」

そこで真人の固有結界が解かれる。

おそらくはもう限界だったのだろう。

二人が戻ってきて、小毬が癒す。

「このクソッタレ共が！！！！！寄ってたかってボコボコにしやがって！！！！！ケルベロス！！！！！！」

ゴガァ！！！！！

その声に応じてケルベロスが跳びだし、一行の元へと走り寄ってくる。

それに向けて美魚がどこから取り出したのかバスーカ砲を構えた。

「んな！？」

「やっぱりこの世界内ではＮＹＰは使えるんですね・・・・エネルギーチャージ！！！」

そういうとバズーカに何らかのエネルギーがたまっていく。

「なんなの！？ねえあれ何なの！？」

完全に取り乱している蒔風。
それに理樹が説明する。

「西園さんはこの世界内ならＮＹＰと言う力を使えるんだ！！！」

「何それ！？」

「「な」んだか、「よ」くわからない、「パ」ワー」

「本当に何それ！？」

「ふぁいあー」

ドッゴゴゴン！！！！！！！！

美魚の気の抜けた声とは相反して、とんでもない威力でケルベロスを吹き飛ばす！！！

「・・・・おいいいいいいい！！！！！！！！くそ！！なんだこの世界は！！！！
こんなこと原典じゃ・・・・・少なくとも現実ではないはずだぞ！！！！！」

「そんなこと言ってる場合かね？」

「ッ！？らあ！！！」

ガギギン！！！！

その背後に瞬間移動でもしたかのような側語で来ケ谷が回りこんで、いつもは模造品の日本刀を「奴」に向かって振るう。

「っ！！やはり無理か！」

「その程度ではやられんよ・・・・死ね」

ズギャン！！！！

来ケ谷の首を跳ね飛ばそうと、「奴」の手刀が唸り上げて打ちつけられる。

その光景を見ていた者は、皆そうなってしまうであろうことを予見した。

しかし

「何度でも繰り返す・・・・・っ！！」

恭介のその言葉に現実が歪められた。

来ケ谷の位置がずれ、「奴」の手刀が空振りに終わる。

そしてその「奴」の脇腹を来ケ谷が斬り裂き、鈴のハイキックが後頭部にめり込んだ。

「な・・・・なにを・・・・・」

「この世界は理樹と鈴を強くするために、何度も何度も繰り返されてきた。それを任意で行っただけだ。そうそうできる物じゃないけどな」

そう言う恭介の額には大粒の汗がにじんでいる。
確かにあと何度もできるものではないだろう。

「さて！！！舜！！！いける！？」

「おおよ・・・そろそろオレも何かやんなきゃなァ！！！」

蒔風の背から翼が現れ、皆の願いを力に変える！！！

「わかったんだよ・・・なぜ”輝志”の世界においてお前らがこんなに力を持てたのかが！！！」

【Ｌｉｔｔｌｅ Ｂｕｓｔｅｒｓ！！】－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－
～ＷＥＰＯＮ～！！

そこからともなく聞こえてきたその声と共に、蒔風の手の平に鍵が出現する。
その鍵を、蒔風は見覚えがあった。
なぜならばこの鍵は！！！！

「理樹、覚悟はいいな」

「いつでも！！！」

その光景を見ていた「奴」が、二人に猛然と突っ込む。

しかし

タァン！！！

「奴」の側頭部に一発の銃弾が命中する。

それにより頭がブレ、倒れ込む「奴」

「私を忘れてもらっちゃ困るわ！！！」

校舎の屋上から、朱鷺戸沙耶が立ち上がり、ライフルでの狙撃で「奴」の足を止める。

その間に蒔風が理樹の胸にその鍵を放る。

すると鍵は理樹の胸に吸い込まれるように消えて行き、カチリ、と何かの扉を開いた。

バッサァ！！！

そして理樹の背中に翼が現れる。

その色は薄い緑。司る想いは、友情！！！

「薄緑（はくりょく）の翼人、直枝理樹。君の存在、この銀白の翼人が見届けた！！！」

「これは・・・・この力は・・・・・」

理樹の肩に蒔風が手を乗せる

「わかるか？皆の想いが！！！その友情が！！！」

「うん・・・わかるよ・・・・みんなの想いと一緒に！！！」

「シャァラくせあああああああああああああああ！！！！！！！！」

ドドバウ！！！！！！！

その翼を目視した「奴」が、両腕で波動砲を撃ってくる。
それに対し、理樹は軽く片腕を差し出しただけだった。

それによって理樹の前に水晶のようなものでできた薄いバリアが現れ、「奴」の砲撃を打ち消していく！！！
しかも全く意に介していないようだ。
異常なほどの防御力を誇る、その姿に「奴」は焦っていく。

「うをおおお

そして理樹が一旦そのバリア刃を引き抜き、そしてもう一度突き立てる！！！
そのバリア刃一枚一枚に、十五天帝が内蔵されて！！！

ドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！！！！
キィィィィィイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！！

「これで」「終わりだ！！！」

ドゴォォォォオオオオオオン！！！！！！！！！！

「奴」が爆散し、この世界から消滅した。

二人の翼人は、互いの顔を見据え、そして笑いながら、みんなの元へと戻っていった。

ーーー

校門から出た先にある河原で、別れの言葉をかわす蒔風たち。

「・・・・っとまあ、翼人に関してはこんな感じだ」

「ありがとう」

「もう行くのか？」

「そうだね。いくよ」

「舜！！」

蒔風に理樹が声をかける。
そして無言で握手を求めた。
その手を眺め、そして蒔風がしっかりとその手を握り返す。

「ありがとう。次の世界でも、がんばっていける」

「応援してるよ。友達のために」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－Ｌｉｔｔｌｅ　Ｂｕｓｔｅｒｓ］

ゲートがちょうど落ちる夕日と重なって開かれる。
そこに向かって蒔風が歩いていく。

そしてまるで日に消えて行くかのように、蒔風はこの世界から去っ

た。

ーーー

リトルバスターズ　～希望という名の未来を～（後書き）

【リトルバスターズ！！】

構成：”輝志”８５％
　”ＬＯＮＤ”１５％

最主要人物：直枝理樹

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：理樹の翼人覚醒

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：十五天帝と理樹のバリア刃のコラボ

リトバスの世界終了！！

アリス「三人目の新たなる翼人ですね！！！」

ええ！！！

ちなみにあと一人います

お楽しみに

《薄緑の翼人》

所有者：直枝理樹

翼色：薄緑

想い：友情

タイプ：賢者

能力としてはただ薄いバリアを張るだけです。
しかしそのバリアは超硬度であり、並大抵の攻撃では破れない。

ア「どれくらいですか？」

なのはのＳＬＢを至近で食らってもビクともしない。
二発でヒビかな？

ア「すげえ！？」

そしてそれは薄いものだから、刃としても使えます。

ア「「奴」を貫いていたあれですね？」

そうそう
とまあ、翼人に関するものはここまで！！！
前回発表できなかった（し忘れた）ランキング発表！！

ちなみに小さいランキングは数多すぎてやめました

と、言うわけで本文&後書きの容量大きかったランキング第二位は

！！！！

「涼宮ハルヒの憂鬱　～蒔風舜の激闘～」

でした！！！！

第一位の物が更新されるまで、これが一位だったんですねぇ

ア「次回、蒔風、猫舌に出会う」

ではまた次回

５５５　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ

555　～出会いは激突から～

広い公園で、戦闘が繰り広げられている。
戦っているのは仮面ライダーファイズに変身した乾巧（いぬいたくみ）と、灰色の怪人・オルフェノクだ。

この世界の敵勢力・オルフェノク
彼らが人間を襲う理由は一つ。
仲間を増やすためだ。

死んだ人間が突如目覚め、復活することでオルフェノクは誕生する。
それゆえに多くの者は化け物として復活したのちに、オルフェノクとして生きることを選択する。
中には「人間」として生きていくことを決心した者もいるが、小数だ。

そんな奴らと、ファイズは戦い続けているのだ。

そして今戦っている相手はチーターオルフェノク。
そのスピードに翻弄され、うまく攻撃が当たらず苦戦気味だ。

「ったく、調子ノリやがって」

パパッとスナップをきかせて手首を振り、ベルトに挿入されている携帯電話型変身ツール、ファイズフォンからミッションメモリーをぬき、同型のプログラムキー、アクセルメモリーをはめる。

《Ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

音声と共に全身を駆け巡るフォトンストリームが赤から銀に変わり、胸の装甲が肩にせりあがる。

さらにファイズフォンを開き、「Ｅｎｔｅｒ」を押した。

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

ベルトからエネルギーが全身を駆け巡る赤いライン、フォトンブラッドに沿って移動し、それが右足首に装着したポインターに溜っていく！！

「行くぜ」

そしてファイズが左腕に装着しているリストウォッチ型のコントロールデバイスのスイッチを入れた。

《Ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

音声とともにファイズアクセルフォームの姿が消える。
超高速移動に入ったファイズの姿は、目にすることもできない速さに移行するからだ。

異常なスピードを誇るチーターオルフェノクすらもついていけない速さで、ファイズの必殺技が放たれる！！

バシュ！ババババババシュウ！！

チーターオルフェノクの周囲に赤いホログラムの円錐が現れ、そのすべての先端が向けられている。
そして超高速移動のファイズが次々とそのいくつもの円錐型のポインターを次々とくぐり、何発ものキック「クリムゾンスマッシュ」を叩き込む！！！

ドッ、ドドン！ドドドドドンッ！！

「ぐガァァアアアア！」

チーターオルフェノクが断末魔の叫びを上げ、

《３、２、１、Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ．Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ》

そこでアクセルフォームの高速移動時間の限界、１０秒が過ぎ、ファイズの姿が現れ、通常フォームへと戻った。

ボッ！ギィーン、ザラザラザラ・・・・

チーターオルフェノクから青い炎が吹き出し、Φの紋章を残し、灰となって消えていった。

「ったく、人を襲うオルフェノクはあとを絶たないしよ。めんどくせぇ」

そう言いながらベルトを外して変身を解く巧。

ファイズフォンのボタンを押し、公園の外に止めたバイク、オートバジンを呼び出すと、すぐに林の中からやって来た。

走ってくるオートバジンを見ていると、どこからきたのか一人の青年も近づいて来た。

「おぉーい！あんたファイズだよなー？」

そういいながら走ってくる青年。

その後方からオートバジンが迫る。

「あんた！そこあぶねぇぞ！！」

巧がファイズの事を知っている青年に驚きながらも、彼に迫る危機を叫ぶ。

その声に反応し、青年・蒔風が振り返ると、そこには太い機械の腕があった。

「トレビアンッ！？（ボキャァ！！！）」

どうしたことか、人型のロボットに変形したオートバジンのラリアットが蒔風の喉に突き刺さった。

クルクルと空中で三回転を決めた蒔風の身体が地面に落ち、オートバジンは何事もなかったかのようにバイク形態のビークルモードに戻って、巧の元へとやってきた。

「・・・・・・・こいつどうしよ」

なんだかよくわからない液体を口から吐きだして倒れている蒔風を見て、巧がひとりごちた。

――――――――――――――――――――――――――――――

「おい！！こいつ頼む！！！」

蒔風を担ぎ、巧が帰ってきたのは東京で創業百年の老舗クリーニング店「西洋洗濯舗　菊池」だ。

巧はここで住み込みのアルバイトをしており、一緒に住んでいる園田真理と菊池啓太郎とは永く共に戦った仲間だ。

「巧？帰ったの？って何その人？」

巧の担いできた男に、真理が呆れたジト目で巧を見る。

「いや、急にやって来てよ、バイクとぶつかってぶっ倒れちまったから。

・・・・んだよその眼は。ほっとくわけにもいかねーだろ！」

「元の所に捨ててきなさい」

「犬猫じゃねえんだぞ！？」

「まま、たっくん。とにかくその人中に入れてあげて」

啓太郎が巧をなだめ、蒔風をソファに寝かす。

それからあーだこーだと巧と真理が口論しているうちに、蒔風が目を覚ます。

「ここ・・・・どこなんだろうか、と蒔風は思ってみたり」

「あ、目が覚めた」

啓太郎が蒔風の目が覚めたことを確認する。

そして蒔風が周囲を見渡し、巧の姿を捉えて納得した。

「んお？ああそうか！！オレバイクにぶん殴られたのか！！」

「ぶん殴られた？」

真理のその疑問に蒔風が答えた。

「そうそう。彼に近づこうとしたらロボットに変形したバイクにね

！！！」

「ちょ、巧どういうこと！？」

「そんなことはどうでもいい。おいお前。お前はオルフェノクか？」

巧の質問は単刀直入だ。
それもそうだろう。巧にしてみれば蒔風は「ファイズですかー？」なんて声をかけてきた謎の男である。
そしてファイズを知っている人間は一般人とは思えない。

「あーーそっか。じゃあ話そうかね。オレはこの世界の人間じゃないんだよ」

「・・・・・・・・・は？」

「とにかく、お前の命が狙われている」

ーーー

「・・・・・まあな。そこまで知っているのか」

「何となく普通とは違うと思っただけだよ」

蒔風の話が終わり、巧が蒔風がオルフェノクでないこと、言っていることがおそらく本当だということをそれなりに信じたところで、真理が口を開いた。

「確かにそれも大変だけど巧。あんたまた戦ったの？」

「・・・・・・あーーーーー」

「あんたの身体は限界なんだから、もう戦わないでよ！！」

「そう言ってられっかよ。人が襲われてりゃ戦うのは仕方ねーだろ」

「でも・・・・・」

そんな真理と巧のやり取りを見て、蒔風が啓太郎に訊いた。

「巧の身体が限界ってどういうこと？」

「うん・・・たっくんは・・・もう長くないかもしれないんだ」

啓太郎の話に蒔風が耳を傾ける。

ファイズのベルトをはじめとする「ライダーズギア」は、普通の人間には使えない。

ベルトを使って変身できるのは、オルフェノクの力を持った者だけなのだ。

そして乾巧も例外なくオルフェノクである。
しかし彼はオルフェノクとしてではなく、人間として生きて行くことを決めた。

中にはそのようなオルフェノクも多くいたのだが、それを許さない者がいた。
それこそ覚醒した人間・オルフェノク達を集め、オルフェノクとして生きることを広めようとした「スマートブレイン社」だ。
スマートブレインはオルフェノクに覚醒した人間がわかると使者を送り、人間を襲いさらなるオルフェノクの増幅を狙った組織。

もちろん、そのサーチに引っかからずに生きてきた者もいる（巧はこの場合だ）
しかし、多くの者はそのような生き方に呑まれ、拒絶するものは「裏切り者」として処刑された。

その組織を数か月に壊滅させたのだが、その最後の戦いで彼らが倒したのはオルフェノクの王と言われるアークオルフェノクである。
オルフェノク達は人類の進化形態だ。
だがそのあまりにも激しい進化に身体が耐えきれず、いずれは崩壊する。アークオルフェノクの力をわけてもらわない限り。

しかし、自身がいずれ死ぬとわかっていたも、乾巧はアークオルフェノクを倒したのだ。
どうやらまだ生きているらしいのだが、もはや巧が王に延命してもらえることはないだろう。

故に巧が戦ったことで真理はあんなにも怒っているのだ。

「なるほどね・・・・・巧・・・だっけ?」

「なんだよ」

「それがお前の望みなのか?」

「・・・ああ。確かにオルフェノクの中にも・・・・いい奴はいた。
でも、俺はオルフェノクのような生き方は絶対に許さない。」

「ならばよしだな」

蒔風が何か納得し、巧に握手を求めた。

「よろしくな。「奴」を倒すまでのそんなに長くない間だが、頼む」

「任せておけ。この家は好きに使ってもいい」

「ちょ、ちょっとたっくん!?」

そんな巧の言葉に、啓太郎がうろたえる。
この家は啓太郎の実家だ。
そこに勝手に住んでもいいなんて言われればそれは焦るだろう。

「いいじゃねえか啓太郎。小さいこと言うなよ」

「そんなぁ～～～」

「啓太郎。大丈夫だ。まあ、ちょっとものは相談で・・・・・」

蒔風が啓太郎の首に腕を回し、何やらこそこそと何か話をする。
そして五分後、啓太郎が叫んだ。

「皆で歓迎パーティーをしよう！！！！」

「「心変わり早くねえか（ない）！？」」

そうして今夜も夜が更ける。
そのパーティーの様子はまた別の機会に

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

５５５　～出会いは激突から～（後書き）

アリス「仮面ライダー５５５（ファイズ）！！！」

作者的ナンバーワンのライダーです！！！！！

変身ポーズのやりごたえならＢＬＡＣＫやＲＸ
ただ「ライダー」としてはディケイド

だがしかし、作品、内容、機能どれをとってもファイズがダントツ一番です！！！

ア「カブトや電王は？」

カブトはクロックアップや二段変身最高！！！
電王はキャラクターの勝利。

ア「なんか描く作品に思い入れがあるみたいですね」

そうだねー

クウガ：やっぱこれはいいでしょう
アギト：人間の可能性に痺れた。Ｇ－３シリーズが好き
龍騎：戦うことの強さと虚しさ、しかしそれでも戦わなければならないことに深く考えさせられた
５５５：異常なかっこよさに全身がゴワッ！！となった。アクセルフォーム最高
ブレイド：オンドゥルラギッタンディスカー！！！！
響鬼：鍛えるってすごい。誰でもヒーローになれるという希望を持

てた。
カブト：おばあちゃんが言っていた・・・・・
電王：これはもうキャラクターの勝利だよ・・・・
キバ：時代を越えて、伝わる想いは確かにあることを知りました。
ディケイド：人は誰でも主人公になれる。物語を紡いでいけることを知れた。この作品に大きな影響を残しましたねはい。
W：シリーズ初の「二人で一人」。最初はなんだこれ、と思っていたら一気に化けた。これはいい作品。
オーズ：歌は気にするな！！

と言ったところでしょうか

ア「途中ネタでしかない物が入ってましたよ？」

だってカブトは先に言ったやん

ア「いやあの、ブレ「それ以上言ってみろ・・・・オレァクサマヲムッコロス！！！」わかりましたよ・・・・」

でもブレイドはあれでよかったと思います。

さて、容量の大きかったランキングの一位は！？

発表！！
「なのはA's　～そして笑顔で～」でした！！
やっぱりこれが一番長かったですね～～～

ア「というより、これが出るまで「ハルヒ」が一位だったんですね」

長いことね。

これを抜くのは一体何なんだろう。
・・・・またなのはの気がする

ア「次回、この世界のライダーとの出会い」

ではまた次回

おい知ってるか、夢ってのはな
時々スッゲー熱くなって、時々スッゲー切なくなる、らしいぜ。
俺には夢が無い、けど、夢を守る事はできる！

555 ～Δ（三つ）のベルト、ライダーのX（選）逅～

次の日の事だ。
蒔風は巧と共にある養護施設に来ていた。
その名は「創才児童園」といい、孤児たちの施設だ。
そこで働いている三原修二、という男に会いに来た訳なのである。

「乾さんが狙われている？」

園の外、子どもたちが遊んでいる広場を眺めながら、話を聞いた三原は驚愕した。
三人は幼稚園ほどの大きさの建物の一階部分、開けられた大きな窓のところに座っている。

三原は驚愕したが、よく考えてみればそれもそのはずである。

大元のスマートブレインを壊滅させたとはいえ、その生き方を実践しているオルフェノクは多く存在する。
そういった者達から見れば乾巧は人間側についた裏切り者として、まさに敵だ。
しかも所有するベルト、ファイズギアはかなりの力を持つ。
彼を倒して名を上げようとする者は多くいるだろう。

「わかりました、協力します。で、敵は何者ですか？」

「それはだな」

「いや、それよりも三原、海堂の連絡先知ってるか？」

蒔風が説明しようとする前に、巧が三原に質問した。

「あの人の連絡先ですか？えっと・・・ちょっと待ってください」

そう言って三原が携帯を取り出して海堂と言う男の連絡先を探す。

「なあ、彼はいったい何者なん？」

蒔風のそんな質問に、巧が答える。

三原修二

三本のライダーズギアのうち、「デルタギア」の所有者だ。

アークオルフェノクとの最終決戦にも参加し、共にオルフェノクと戦った人間だ。

ちなみにデルタギアは人間でも変身可能なものだが、不適合な者が使用すると極めて凶暴かつ好戦的な性格に変貌してしまう。

そういうわけで適合者である三原はオルフェノクではなく人間だ。

最初こそ戦いを恐れ、拒んできたが、未来を切り開くために決意し、戦うことを決めたのだ。

だからこそ、彼はデルタギアに呑まれなかったのかもしれない。

「なるほど・・・・・」

そこで三原が携帯をしまい、巧に向き直る

「巧さん、海堂さんとの連絡がとれないんですよ」

「あいつ・・・・どこで何やってんだ?」

「さあ・・・・・・」

「オレがどうしたって?」

「「!!」」

その声に反応し、園の入り口のフェンスの方を見ると、そこにはバイクに跨った青年がいた。

「海堂!!」

「よ。ここのガキどもに会いに来たんだけどよ、なによなによ?こんなところにこんなメンツが集まってよぉ~~」

巧や三原をチラチラと指差しながら海堂がおどけた態度で言ってきた。

海堂直也(なおや)

その正体はスネークオルフェノクである青年だ。
彼もまた、人間のために戦ったオルフェノクである。

「ちょうどいい。海堂。お前まだカイザのベルトは持ってるか？」

「あるけど、どうしたん？」

カイザのベルト
これもまた、ライダーに変身するためのベルトである。

このベルトの持ち主はいたのだが、ひとりは戦いの過程でベルトの力に耐えきれなく、最終決戦前に死亡。
二人目はその直後にあった最終決戦にて、ファイズがとどめをさすようにアークオルフェノクの動きをしがみついて止めたためにその反撃を食らって死亡してしまったのだ。

その二人目が海堂の友だったため、今ではこのベルトは海堂が持っている。

と、その間にも蒔風が二人に説明を終えた。
三原は納得し、戦うことを承諾した。

しかし

「オレはパスするよ」

そう言って海堂は出て行こうとしてしまう。

「ちょ、海堂さん！」

三原が海堂を呼びとめる。
それに振り返って海堂が言った。

「オレはあの時王様のオルフェノクとやり合ったんだ。もうこの体だって長くはねえ。なのになんでオレがそんな寿命を削るようなことしなきゃならないんだよ」

「う・・・・・」

そう言われては三原も何も言えない。
彼もオルフェノクである以上、このままでは消滅して死んでしまうのだ。
そんな彼に戦えとは強制できない。

「残された時間を思いっきり楽しむって俺様は決めたのよ。でわでわ、おたっ、しゃで」

そう言ってペコリとふざけた感じで頭を軽く下げて、海堂は出て行ってしまう。

「しかたないよ。彼の人生さ。強制はできないしね」

「蒔風さん・・・・・」

「で、だ・・・・・・・これからどうしようか？」

「決めてなかったのかよ」

「だぁ～～～って～～～～～。「奴」が来るまで何するよ」

「先にその「奴」を叩く・・・・とか」

「「奴」の居場所は見当もつかん。まあいるとしたら・・・・・」

「したら？」

そこで蒔風がにやりと笑いながら、こう答えた。

「アークオルフェノク・・・・・だな」

ーーー

とある荒廃した建物の中にて
どうやらこの建物は何処かの研究機関のものだったらしい。
その機関がつぶれ、打ち捨てられたこの建物に、住み着いた者がいた。

重傷を負い意識不明状態のアークオルフェノクと、最終決戦の場からここまで彼を運び込んで来た女性オルフェノク・ロブスターオルフェノクだ。

「王の目覚めはすぐそこ・・・・・待っていろ、裏切り者のオルフェノクめ!王が眼覚めた暁には、必ず・・・・・」

そういいながら培養液に漬けられた王が入っている水槽ど愛おしそうに撫でるロブスターオルフェノク。

ドゴオア!!!!

その時、建物が揺れ、計器がぶつかってガシャガシャとやかましい音を立てた。
何事かと思ったその矢先に、その部屋の扉が勢いよく開かれ、一体の彼女の部下のオルフェノクが跳び込んできた。

「た、大変です・・・・・何者かがこの施設、にッ!?」

ビクン!!と身体か震え、全身から青い炎を吹き出してそのオルフェノクが灰となって消える。

灰となって消えた先には一人の男が立っていた。

なぜだか顔の部分だけ常に影がかかっていて、その素顔がはっきりしない男、「奴」である。

「あなた・・・・何者？」

「・・・・・・・」

「いいから答えなさい！！！この場で死にたい・・・・の・・・・・・」

ロブスターオルフェノクが「奴」に詰め寄り、近づいたところでその言葉が途切れる。

ガクガクと震える頭を下に向けると、自分の腹を「奴」の抜き手が貫いているのを目撃した。

「こ・・・・・んな・・・・・・・」

ボッ！！ザラザラザラ・・・・・・・・・

そしてロブスターオルフェノクも、先ほどの物と同じように灰になって消滅してしまった。

「奴」がアークオルフェノクのいる水槽に近づく。

「これがかの王か。目覚めると厄介だから、その前に・・・・・・」

だが、「奴」がその水槽に手を伸ばした瞬間、アークオルフェノクが目覚め、その首元に両腕を突き出してきた！！！

「ぬっ、がッ！！！」

ドゴン！！！！

そのまま壁を突き抜け、二、三部屋先でアークオルフェノクが「奴」を壁に押し込んでいる。

「ゴオオオ

この建物はかなり郊外にあるようで、とてもじゃないが一般人が目撃することはない。

「これなら安心して・・・ってうを！？」

「奴」が驚愕の声を上げる。
なぜならば、アークオルフェノクがその建物を守っていたオルフェノク達だった灰をかき集め、空中にて一つの巨大な形を作っていたからだ。
それは徐々に一つの獣の形となり、サイの特質を備えたオルフェノク・エラスモテリウムオルフェノク激情態となって「奴」に襲いかかった。

大きさにして六メートル。
異常な個体を誇り、理性の無い化け物が今解き放たれた。

ゴルルルルルルルルルルルアアア

ケルベロスとエラスモテリウムオルフェノクが衝突する。
しかしケルベロスの大きさは約三メートル。
二倍の大きさにそれ以上の重量を持つエラスモテリウムオルフェノクを止めることはできない。

だがそれでも一瞬は押しとどめる。
そしてズルズルと押しやられていくが、その少しの時間で十分だった。

「フッ、セイッ！！！」

「奴」が魔導八天でエラスモテリウムオルフェノクの巨大な角を根本から切り落とす。
そしてその角を掴み、その巨体の背中のど真ん中に突き刺した。

ゴギュアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！

エラスモテリウムオルフェノクが壮絶な雄たけびを上げてのたうちまわる。
「奴」がその腹部に入り込んで、地面を踏み抜かんとする勢いで踏みこみ、その巨体を全身の力の限り蹴り上げた！！！
巨大な化け物が宙に浮き、背中を下に向ける。

そしてその背中に突き刺さった角めがけ、ケルベロスが突っ込み、反対側の腹から突き出し、エラスモテリウムオルフェノクは灰と消える。

その間に「奴」はアークオルフェノクに向かう。
相手の突き出してきた拳を下に払い落し、左手に持った剣で肩口から一気に切り込んだ!!!

ズシャアッ!!!!

地面を転がるアークオルフェノクの切り口から薄く青い炎が上がっている。
もはや終わりだ。このまま放っておけばこいつは消えるだろう。

「でもそれではいけない。オレの力になってもらうぞ」

「奴」が倒れる王の頭に手を当てる。

「ゴ・・・ゴオオアアア・・・・・・・」

「あん?人間相手に手を出したお前が悪いんだよ。
人間をなめるなよ、くそ野郎」

バシィ!!!!

そしてアークオルフェノクの姿が「奴」に消える。
ゴキゴキと首を鳴らし、建物の方へと手を伸ばし、波動砲を撃って跡形もなく吹き飛ばした。

「よしよし。これでいいな」

そういって満足し、「奴」は携帯を取り出す。
掛ける先はあるクリーニング店だ。

こうして、各々の戦いの準備は整った。
後は戦うだけとなる。

「もしもし？世界をまっさらにしたいんだけど」

今回の戦いは、まるで決闘のように始まった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

555 ～Δ（三つ）のベルト、ライダーのX（邂）逅～（後書き）

そういえば・・・最終決戦でオートバジンって壊れてたっけ？

アリス「覚えてないんですか？」

ちょっと古くて思い出せない・・・・・・

最後に見たのは一年前だから。

劇場版だと壊されてたよな・・・・・・

ア「どうするんですか。ふつーにバジンさん出てたじゃないですか」

あれだあれ。

壊れてないならそれでよし。

壊れていたなら・・・・何とか直したんだよ！！スマートブレイン襲ったんだな、うん！！

ア「それでいいのですか？」

いい・・・・・と思う！！！

ア「次回、戦いますよーーー！！！」

ではまた次回

戦うことが罪なら、オレが背負ってやる！！！！

５５５　～Ψ（最）後の戦い？Ω（終わり）ではない～

「たたた、たっくん！！！大変だよ！！家に電話がかかってきて・・・・」

巧の携帯に啓太郎からの連絡が入る。
電話の相手はどうやら「奴」であったようで、蒔風たちにある場所に来るよう指定してきたらしいのだ。

それを聞いた蒔風が少しうんざりしながら立ち上がった。

「はぁ・・・・行くか」

「おう」

「はい」

そうして蒔風、巧、三原の三人はバイクにまたがり、「奴」の指定してきた郊外の建物に向かう。

ーーー

「ここってどういった施設なんですかね？」

ここに到着して周りを見渡した三原がなんとなしに聞いてきたのに、蒔風が推測から答えた。

「研究所と工場が隣接しているからな・・・・おそらく開発した何かをこっちで量産していたか・・・・いやするつもりだったのかな」

「どういうことだよ」

「乾さん、これ！」

三原が何かを見つけたようだ。

二人がそちらに向かい、三原が見つけたものを指差す。

「これは・・・・」

「製造途中のライダーギア？」

「こっちにはライオトルーパーのベルトがありますよ」

ライオトルーパーはスマートブレインが作った量産ライダーだしかしこのベルトは

「こっちも未完成品だな」

蒔風の言葉通り未完成品だ。

手に持つとガシャ、と落ちて壊れてしまった。

「まさか・・・・ここで新たなライダーギアを？」

「待てよ。ライダーズギアは三本じゃないのか？」

「最初は三本だったんだけどよ、量産型のライオがでてきたしな」

「さらに言えば僕たちの三本はそれぞれ一回はスマートブレインの手に渡っています」

「つまり解析し、新たなベルトを？」

「可能性はあるな・・・面倒なことすんなぁ・・・」

新たなライダーギアの存在を懸念しながら三人は進む。

しかし

「キリねぇな」

「ですね。さらにあっちの研究所、地下まであります？」

「マジですかよ。にゃー、うんざりなのね」

広い工場を探索し、さっきのベルト以降全く手掛かりが見つからず、三人は少しうんざりしていた。

「しかも呼び出したくせになんでアイツいねぇんだよ!!」

そう、しかも「奴」がいない。
これだけ探しても出てこないのだ。

「奴」なら飛び出してきそうなものなのだが。

「しょうがねえ、別れるか?」

「まて、それは危険。絶対危険、マジ危険。このまま探索を続けるしか・・・・・」

・・・・・

Ωのマークをあしらい、漆黒の鎧に身を包み、「帝王のベルト」のうちの一本、「地のベルト・オーガギア」にて変身した「奴」、仮面ライダーオーガだ。

「よう・・・いいもん拾ってな。これで遊ぼうかと・・・ね」

「そうかよ」

オーガと蒔風が睨みあう。
それからゆっくりと歩み、近づき始めた。

ザッザッザ

「はっは。お前の理想はオレが潰す！」

ザッ、ガラン、ジャリ

「ひどいねえ。ここは「お前の理想は俺が継ぐ！！」じゃないのか？」

ザッザッ、ザシザシ

「知らねえなそんなこたあよ」

ザシ、ザ、ザ、ザ

二人があと一歩踏み込めば殴りこめる位置にまで近づき、そこから一気に走り込んでお互いの胸元を殴りつけた！！！

ズッ、ドグアッ！！！

「およよよっとと」

「ぐっがあああ！！！」

オーガが立ったまま滑り後退したのに対し、蒔風は後ろに倒れ、背中を削りながら巧の元まで吹き飛ばされた。

「蒔風！！」

「こっからだ！！行くぞ！！！」

「おう！《５５５、ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ》変身！」《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「はい！変身！」《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

巧がファイズフォンの変身コードを入力し、三原がデルタフォンに音声入力する。

それをそれぞれのベルトに差し込み、ファイズとデルタへと変身を遂げた

「おおおおおおおお！！！！！」

「「「あああああああああああああ！！！！！」」」

蒔風とファイズがオーガに走り込み、デルタが後方から銃撃での援

護をする。
しかしいくらデルタの銃撃が当たろうとも、蒔風とファイズの攻撃を食らおうとも、オーガの身体がグラつくことはない。

「こんの！！！」

蒔風の蹴りがオーガの側頭部に命中する。
さらにファイズが腹部めがけて拳を放った。

が、オーガは蒔風の蹴った方の足を掴み取り、棍棒のように振り回してファイズを殴り飛ばし、
さらにそのまま地面に蒔風を叩き付け、バウンドして跳ね上がってきたところを足刀蹴りで吹き飛ばした。

その間にオーガフォンを銃型に変形させたブラスターでデルタの上半身にまんべんなく銃弾をぶち込む。

蒔風が苦しそうに片膝をついて立ち上がり、血を吐き出して睨みつける

「がっふ・・・・ぺッ・・・・おおおおおおおおおおおお！！！！！」

そしてオーガに再び挑み、凌ぎを削る。
その間にファイズがミッションメモリーを新たに挿入する。

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ．ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

ファイズアクセルフォームへとチェンジし、超加速での移動を開始する。
周りがスローモーションになり、宙をうく蒔風も、オーガに向かうデルタの銃弾もゆっくりと動いている。

ファイズが一気にオーガの背後に回り込みながら拳にナックルを構え、エクシードチャージしエネルギーを込める。
だが、それだけ有利な立場にあっても巧は嫌な汗が止まらなかった。

オーガの表情は仮面に覆われてわからない。
だが、確信できることが一つだけあった。

―ミラレテイル―

まさかそんなことはない、とその考えを振り払うように必殺の威力がこもった拳、グランインパクトが幾重にも放たれる。
だが、その嫌な考えは最悪の形で現実のものとなってしまった。

ギュガッ!!!!ブォン!!!!ボグゴゴゴゴゴゴンッ!!!!!!

「ゲ、ブァッ!!!ゴガガガガガガッ!!!!!」

オーガが蒔風の腕を掴み、姿が一瞬ぶれるほどのスピードで立ち位置を入れ替えた。
オーガに向けられていた多くの拳はすべて蒔風に叩きこまれ、さらにファイズもオーガの持つ剣、オーガストランザーでファイズを五、六度斬り、ファイズが火花を散らして地面に転がる。

「あああああああああああああ！！！！！！！チェック！！！！！」《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

デルタが立ち上がり、デルタフォンに音声入力する。
するとエネルギーが銃の先端に集まり、そこから三角錐状のポインターを放ち、オーガにロックオンする。
その状況にオーガが気付き、そちらの方にまっすぐ向き合った。

「おおおお

一閃の突きにて喉元を貫く！！！！

そして蒔風が一瞬で間合いを詰め、オーガに迫り、その切っ先を突き刺した！！！

そしてオーガの身体が崩れ落ちる。

蒔風にのしかかるように倒れ込んできたそれは

・・・・・ィィィィィィィィィィィィィィィッ！！！！！！！

「な！？」

ドゴォォン！！！！！！！

工場を揺らし、至近距離の蒔風を巻きこんで、大爆発を起こした。

to be continued

555　～Ψ（最）後の戦い？Ω（終わり）ではない～（後書き）

アリス「まだ終わらないですよ！！！」

倒したと思ったら実は生きてる「奴」クオリティ。
学校始まって執筆のペース配分がわからなくなった作者です。

ア「毎朝学校までの電車の中で携帯使って書いてるんですよね？」

そうなんですが・・・・
夏休みが二カ月近くもあって慣れなおすのに一苦労だ。

ア「がんばってくださいよ」

ああ！！！
へい！感想家紋！！評価遺影！！！

ア「字、間違ってません？」

テンションで乗りきれ。

ア「また気絶しますよ？
次回、・・・助っ人誰だか解るよね！？」

皆わかってるさ！！！彼が来ることくらい！！
ではまた次回だイヤッホォォォォォォオオイ！！！！！！！！

「乾巧」って奴のせいなんだ・・・・・

555 ～俺たちのＪｕｓｔｉφ ｓ～

落ちる天井、炎に爆ぜる金属、ひしゃげた鉄柱、窪んだ地面。
それら一つ見るだけでも凄まじい威力の爆発が起こったことを物語っている。

そしてそこから少し離れたところの鉄柱に蒔風が背中を持たれたせて倒れていた。
頭からは血を流し、衝撃からかばったせいで左腕はボロボロ。
さらには全身にやけどを負い、内蔵の奥深くにまでダメージがいきわたっていた。

「が・・・は・・・・開・・・翼・・・・」

蒔風の背から翼が現れる。
それにより、少しは蒔風の身体が軽くなった。

（こうしてりゃ少しはマシだが・・・・治癒することもままならねえかよ・・・・・）

と、その傍らにガシャン、とオーガギアが落ちてきた。
あれだけの爆発にもかかわらず、少し煤が着いた程度の損傷しかない。

「蒔風ッ・・・・・」

巧とデルタが蒔風によってくる。
どうやら巧はあの一撃に変身が解除されてしまったらしい。

「どういうことですか？あれは「奴」ではなかったんですか？」

三原が蒔風に訊く。
あのオーガは爆発し、肉片もなしに残ったのはベルトのみ。
そこで蒔風が途切れ途切れに応えた。

「オーガは・・・・通常の二倍以上の、フォトンストリームを形成するが・・・・・いくら「奴」でも・・・・・あの高速移動についてこれるほどの性能は・・・・・無い・・・・・」

「どういうことだよ」

「あれは「奴」ではなかった・・・・・やられたよ。あれは「奴」の「欠片」だったんだ」

「ご明察だよ」

と、そこに本物の「奴」が降りてきた。

「いやなに、そのベルトを見っけたのは別んとこだったんだけどな、どうにも上級オルフェノクの力で無いと使えないらしいんだよ。だからせっかくだし王様を取り込んで、それで「欠片」に使わせて後はボン！！」

そこまで言って「奴」は顎に手を置き、うまくいったと笑う。

「ここまでのダメージは期待以上だったな」

「ッ！！させるか！！！」

「奴」の視線が落ちているオーガギアに向き、それに気付いた巧がそちらに走り出す。
しかし「奴」の方が早い。

このままでは奪われてしまうことを悟った巧が咆哮を上げる。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

バシュウ！！！！

巧の身体がウルフオルフェノクへと変身し、俊敏な動きでオーガギアを蹴り飛ばし、「奴」にもドロップキックをかます。
「奴」の胸を蹴って一回転し着地したウルフオルフェノクだが、「奴」に勝てるはずもなく、足払いをかわしてジャンプしたところに蹴りを叩きこまれて吹っ飛んでいく。
地面に落ち、人間体に戻ってしまい、腹を押さえて悶絶する巧。

ガチリ

ベルトの装着する音が聞こえ、「奴」が蒔風の方を向く。
三原に担ぎあげられた蒔風が、荒い息で意気込んだ。

「翼人の力があればよ・・・・《０００　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ》こう言ったもんにも代用が効くだろ（バチン！！）・・・・・・変身」

ガキッ、ガチン！！！《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

蒔風の身体を黄金のフォトンストリームが駆け廻り、漆黒の装甲が身を包む。

バシィ！！！

「今の身体じゃこんなもんでも使いたい気分なんだよ・・・・・・おおおおおおおあああああ！！！！！」

オーガに変身した蒔風が「奴」に走ってゆく。
だがしかし、「奴」は冷静に蒔風を見据えるばかりだ。

オーガのパンチが放たれるが、「奴」がそれを真正面から握って止める。
そして身体を返し、後ろの方へとオーガの身体を投げる。
基本的な柔法なのだが、今の蒔風にはこれすらも深刻なものだ。
受身も取れず、地面に叩きつけられたオーガに、「奴」の蹴り上げが腹に入り込み、その体が天井近くまで浮く。

その衝撃に変身が解け、装甲が砕け散った。

「が・・・・ぶ・・・・・・・・し・・・・・・死ぬ？」

（死ぬ？オレが？あーーー何となくわかってたけどねーーーーってか、このまま死んだら巧たちやばいもんなーーーーー。それ以前に痛いのは嫌だし。感覚もう無いけど）

見た目の悲惨さとは裏腹に、蒔風の心象はそんな呑気なものだった。
そしてはずれたオーガギアと蒔風の身体が地面に落ちる。

「そうなんだよなぁ・・・・この・・・ま・・・死ぬわけにはいかないんだよねぇ・・・・・・」

ガクガクと震える腕に全身の力を込めながら立ち上がろうとする蒔風。
三原が巧を起こそうとするが、巧もまた、今すぐに立ち上がれる状況じゃない。
だからと言って三原一人では相手にならない。

最初に手分けして捜索することに蒔風が反対した意味がここで本当にわかった。

ダメなのだ。

巧や三原はもちろん、蒔風ですらもひとりでは危険な相手。
それが――――――「奴」だ

「さて、せっかく使えるんだからこいつは使わせてもらおうかな」

「奴」がオーガギアを手にとる。
そしてベルトを巻き付けコードを入力した。

《ｂａｔｔｌｅ　ｍｏｄｅ》

ドンドンドンドン！！！！！
キィィィ！！！ドゴオア！！！！！

そして「奴」に向かってミサイルが飛ぶ。
その予期せぬ爆発にオーガギアは再び吹き飛び、見当もつかなくなってしまった。

「まったくよぉ。お前らオレ様がいないとほんっとにだめなー」

「奴」をはじめ、蒔風、巧、三原がミサイルの飛んできた方向を見る。
そこには一つの巨大なシルエット。

大型二足歩行型戦闘メカのバトルモードに変形した、サイドカーの着いたバイク・サイドバッシャーが工場の大きな入口の所に立っていた。
そしてその上部にある操縦桿を握っている人物こそ・・・・・

「まさか・・・・・カイザ!?」

「海堂!!!!!」

「まったく、何やってんだよ。早く立っちまえよ!!!」

そこに現れたのは仮面ライダーカイザに変身した海堂だった。
巧と三原が蒔風に肩を貸してそちらに近づき、カイザを見上げる。

「来てくれたのか」

「んあ?ばっか言っちゃいけねえよ?オレはオレ、海堂様だ。まぁ、このままほっといても死ぬんならよ、派手に言った方が俺様らしいっつーかよ」

「まったく・・・お前らしいよ」

「うーーーーーあーーーーーーーーーー!!!!!鬱陶しい!!!オーガのベルトもどっか行っちまったじゃねえか!!!!!」

「奴」が吠え、全身から波動砲を数十発一気に放ち、周囲を爆破に包み込む。
その衝撃を受け止めようとカイザが前に出るが、あえなく吹き飛ばされてしまう。

「ッ！！ごぁあ・・・・・」

「海堂！！！」

「ライダー一人増えたくらいじゃオレには勝てない。大人しく死んでおいてくれ」

「なにもわかってねえな・・・・一人増えるのがどんなことか・・・・それだけで俺たちの意志は・・・願いは大きくなるんだ・・・・・・」

蒔風が横転したサイドバッシャーに身体を預けながら立ち上がる。

「なあ・・・このまま終わらせてもいいのかよ！！巧！！三原！！海堂！！」

「そうだよな・・・・あいつの理想は・・・・オレがどうにかしなきゃなんねえんだよなぁ！！」

「オルフェノクとはなんなのか・・・その答えが出ていませんしね」

「そんなことはどーでもいいけどよ・・・ここで負けるなんてこともできねえよなぁ！！！」

「行くぞ・・・三原、海堂！！！オレたちには夢がある・・・・・・俺には夢が無かった・・・・・でも今なら！胸を張れる夢がある！！！！」

その言葉に呼応したかのようにオートバジンが飛んできて、巧にトランクボックス型トランスジェネレーター・ファイズブラスターを落とす。

《５５５　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

巧がファイズに変身し、さらにファイズブラスターのボタンを押し、コードを入力する。

《５５５　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ》

そしてベルトのファイズフォンをブラスターに差し込み、それが起動する！！！！

《Ａｗａｋｅｎｉｎｇ》

バッ！！バシュウ！！！ゴオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

ファイズのスーツ部分が赤く染まり、フォトンブラッドに包まれて行く。
そして仮面ライダーファイズブラスターフォームへと変身を遂げた！！！！

《１０３　Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ》

ファイズブラスターをフォトンブラスターモードへと切り替え、そ

の光弾を何発も放っていく。
一発であのエラスモテリウムオルフェノクを灰塵にする光弾を魔導八天で弾きながら「奴」が突っ込んでくる。

その砲撃の音をＢＧＭに蒔風が巧に話しかけた。

「巧、このまま「奴」を倒せば、取り込まれた「王」は爆散する。それはおそらく多くのオルフェノクに降りかかって・・・まあ、崩壊は止まるかもな」

「・・・そうか」

「そしておそらくオルフェノクは強力になるし、オルフェノクになる者も増えるかもしれない・・・・それでもいいのか？」

「はっ、上等だ。やってやるよ！！オレの夢を・・・叶えてやる！！！」

「いい願いだ！！！いけ・・・巧ぃ！！！！！」

「おおおお

ボシッ！！！！

「奴」の魔導八天がファイズを捉えようとした瞬間、ファイズが消える。

否、消えたのではなく、飛びあがったのだ。

背中に装着されているマルチユニットで空中飛行に入ったのだが、そのスピードは通常の物とはケタが違う！！！！

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

その間にカイザとデルタがエクシードチャージし、銃口にエネルギーを充填する！！！

ドッゴガガガガガガガガゴン！！！！！！！

目に止まらぬスピードで「奴」を殴り続け、空中に浮かすファイズ。

そしてスピードが最高潮に上がった時、ブラスターのコードを入力する。

《５５３２　Ｆａｉｚ　Ｐｏｉｎｔｅｒ　Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　５５５】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－

～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

「はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

ババババババババン！！！！

十や二十を軽く超える数のポインターが地面に落ちた「奴」の周囲にバラバラの方向を向いて出現した。
だがしかし外したのではない。
そのポインターを次々と通り、赤い閃光となったファイズが「奴」の周囲を駆け巡る！！！

バシィバシィバシィバシィバシィ！！！！！！！

周囲のポインターが次々と無くなっていき、次第に数が絞られてくる。
それでもファイズの姿はとらえられない。捉える事などできはしない！！！！！

そして一切のポインターが消える。
「奴」が周囲を見渡し探しているところで、カイザとデルタが動いた。

「はっ！！！」「おりゃあ！！！！！」

二人がポインターを放った先を見、「奴」はそれを確認した。

自分の真上。

地面に対して垂直に、デルタ、カイザ、ファイズの順に、ポインターが自分に向かっている！！！！

「魔導八て「おっせえええええええええええええ！！！！！！！！！！」」

ドギャウ！！！！！

デルタのポインターを通過し、

バシィ！！！

カイザのポインターを潜り抜け、

ガオン！！！！！

赤い円錐のポインターに踏み砕く勢いで突っ込み、「奴」の胸へと蹴りをぶち込む！！！！

バッ！！ズゴォ！！！！

「奴」とファイズの蹴りの接点からポインターとなったフォトンブラッドが巨大な渦を巻き、周囲のものをなぎ倒していく。
そしてそれが収まり始めると、「奴」の身体から蒼い炎が吹き出、その粒子が風に乗って流されていく。

「がああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「うおおお

「ッ！！は・・・・・ここは？」

「起きたか蒔風」

蒔風が目覚めるとそこは啓太郎の家だった。
額には濡れタオルが置いてあり、身体は包帯で巻かれている。

「大丈夫か？」

「・・・・・問題はないな」

拳をグッグッ、と握りながら蒔風が笑顔で答えた。

「さて・・・オレはもう行くさね」

「その怪我でかよ！！もう少し・・・・」

そこまでいいかけた巧の目の前にズビシと指をさす蒔風。

「そう言うなよ。行かなきゃならないんだ」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　５５５］

白いゲートが開き、そこに向かう蒔風。
しかしヨロリと身体がぐらつく。

その体を巧が支えたが、それでも蒔風は進む。

「・・・・・がんばってこい！」

「おうさ。そうしてくるよ！！！」

グイッ、と巧の肩を押し、蒔風がゲートに踏み込む。

世界は止めない。

彼に戦い続けることを強要する。

どれだけ残酷なことになっても。どれだけ蒔風が傷つこうとも。

それが蒔風の使命なのだから。

――

次の世界は魔術の世界。

七人の魔術師。七人のサーヴァント。

かつてこの地で行われた聖杯戦争（ころしあい）

今はそれも終わり、おだやかな日々を送る毎日。

そこに降り立つ翼人。
この世界には真の聖剣が存在する。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

５５５　～俺たちのＪｕｓｔｉφｓ～（後書き）

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　５５５】

構成：”ライクル”６０％
　　”フォルス”３０％
　　”ＬＯＮＤ”１０％

最主要人物：乾巧

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：ブラスターフォームでの超高速移動

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：ポインターの応用化＆他ライダーのポインター使用

アリス「これで王の力がまかれ、オルフェノクは滅びなくなったんですね。
よかったよかった。

作者はもう限界と寝ました。

次回、腹ペコ王、なんでさ
ではまた次回」

問おう。あなたが私のマスターか

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　～Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ／ｍｏｒｎｉｎｇ　ｓ

冬木市、衛宮邸

今この家の広い中庭にそうそうたる顔触れが集まっていた。

まずこの家の家主、衛宮士郎にそのサーヴァント、セイバー。
士郎の友人、遠坂凛にそのサーヴァント、アーチャー
さらには後輩の間桐桜、ライダーまでいる。

中庭で彼らが集まっている中心には一人の男がぶっ倒れている。
もうお分かりだろう。
蒔風である。

白目を向いて倒れている蒔風、一体何があったのか。
時は１０分程前に遡る。

――――――――――――――――――――――――――――――

「で、桜に叩き起こされて来てみたけど・・・何よこれ」

凛が言っているモノ。
この家の土蔵に集まった先程のメンバーがその一つの異常に視線を向けている。

それは蒔風がいつも使っているゲートだ。
だが開いているだけで変化がない。

「朝食を作ってたら歪みを感じ取ったんだよ。で、桜に呼びに行ってもらってオレはセイバーとこっち見に来たんだ」

「その時には（グー）もうこれがありました。凛、（じゅるり）これは一体なんなのですか？（ぐるぐる）」

凛が呆れ眼でセイバーを見、士郎に問い掛けた。

「・・・・士郎、朝ごはんは？」

「あ？いや、まだだけど」

「はぁ・・・・セイバーは食べてきていいわよ・・・・」

「！本当ですか凛？いえ決して士郎よりもご飯というわけではないのですが、ほら！腹が減っては戦は出来ぬというように・・・・」

そこまで一気にまくし立てたセイバーの肩をガッ、と掴みライダーがセイバーの至近距離で短く言った。

「行きなさい」
「はい」

セイバーが即答し、大人しくターン、猛ダッシュで食卓に向かう。
そのあとを桜がついていき、この場には四人が残される。

「それで凛。これは一体なんなんですか？」

ライダーがゲートを指差して凛に聞く。

「・・・・なるほどね。士郎の感覚に引っ掛かるわけだわ・・・・結論から言うわね。これ、他の世界に繋がっているわよ」

「「「・・・・・・は？」」」

三人は耳を疑う。

異世界への移動はもはや魔術ではなく魔法の、第二魔法の領域だ。

しかも通じているのはパラレルではなく確実に違う世界だ。

そんなものがどうしてこんなところに開いたのか。

「んなもん私にもわからないわよ。でも、気をつけるに越したことはないわ。なにが出てくるかわかったもんじゃないし」

そこまで凛が説明したところで、壁にもたれて黙っていたアーチャーが口を開いた。

「ふむ、それはさておきマスター。来るようだぞ？」

「え？」

アーチャーが壁から離れ、凛の前に出る。
そしてゲートが輝き、そこからひとりの男が出てきた。

「ふぁ・・・・みなさん・・・・おはよぉございまふい・・・・・・・」

眠気に満ちた瞳がトロンとして、半睡半覚状態の蒔風が出てきた。
茶色いカバーの抱き枕を腕に抱え、パジャマ姿でのそのそと出てきた。

その姿にあっけにとられる一同だが、ここで凛が甲高い声で蒔風に訊いた。

「あんた何者よ・・・・こんなところに現れて何するつもり!?」

「ふぃ?・・・ああ・・・ちょっと待って・・・・ここ冷たくて気持ちいー・・・・・」

そう言って土蔵の地面に横になってしまう蒔風。
凛がその蒔風にギャイノギャイノとまくし立てる。

「ちょっと!!寝てないで答えなさい!!!それから!!こんなとこで寝るな!!!聞こえてんでしょ?「ふぁい」じゃないわよ!!こっちは朝っぱらから叩き起こされてイライラしてんだからいい加減にしないとブッ飛ばすわよ!?」

「そんなに知りたきゃギャーギャー騒いでんじゃねえよこの豚野郎が」

さっきまでの眠そうな声から一変、蒔風の声が唸った。
その声に全員が身じろぎ、ゾクリと何かを感じた。

「寝起き弱えのはこっちも同じだってのに無理やり叩きだされた俺の気持ちを考えろや・・・・
消し炭にすんぞゴラ。ッたく死ねよもう・・・世界なんか腐って死んでしまえばいいんだ・・・・
・・・・・・・・だからうっせえって言ってんだろうがぁ!!!!!!」

バゴウ!!!!!

蒔風が跳ね上がって凛に向けて蹴りを放つ。
とっさにアーチャーがそれを弾き、凛を後ろに下げる。

「どうやら君の声が彼の癪に障ったようだぞ・・・・どうしてくれるんだ全く」

「知らないわよ!!ってかそんなこと私に言うなーーー!!!」

ウガー!!とアーチャーにまで当たる凛。
どうやら彼女もまだ眠かったらしく、ライダーが部屋まで連れて行くことになった。

残されたのは士朗とアーチャー。
目の前には寝起きで機嫌を損ねた蒔風（バーサーカー）

「・・・・・」
「・・・・・」

「「お前にまかす！！！！（ドカァ！！）なにすんだお前！！！」」

二人が同時に相手を突き出し、二人同時にスッ転んだ。
そうやってグチャグチャしている間に二人に影が降りる。

「こちとら低血なんだよ・・・上は97しかねえんだよ・・・そんなオレが寝起きいじられてどんだけイラついてっかわかるかてめえら！？」

「「知るか！！！」」

「しらねえだ？知っとけよゴラ！！！！知らねえとはてめえら何様のつもりだぶっ殺すぞぁ！！？？」

ドッ、バフン！！！！！

土蔵の扉から土煙が噴き出し、そこから志郎とアーチャーが飛び出、蒔風がそれを追う。

ギン！！ガガガン！！！！ガギンガギン！！！！！

アーチャーも士朗も投影魔術で木刀を出して応戦する。
相手の素性もわからないのにいきなり真剣で斬りかかるわけにもいかない。
だが蒔風はそんな二人に怒涛の猛攻を仕掛けて行く。

居間にて

「??桜、何処かで乱闘の音がするのですが?」
「（先輩とアーチャーがいれば何とかなるよね?）だ、大丈夫ですよセイバーさん」
「そうですか。桜、おかわりを」
「はいはい」

凛の部屋にて

「凛、落ち着きましたか?」
「うう・・・ありがとライダー・・・我ながら取り乱したわ」
「朝は大変ですからね」

「あいつもそんなんだったなら悪いことしたわね・・・」

「外で士朗とアーチャーが交戦しているみたいですが、どうしますか？」

「あいつらに任せれば大抵のことはどうにかなるでしょ」

バキバキ！！！ドカァ！！！

「むぅ・・・どうやら我々は丸投げされたようだ！！！」

「はっは！！あんたも人望ねえな！！！」

「貴様はそれが自分に言ってることだとわかっているのか？」

「あんたと違って俺には信頼できるサーヴァントがいるからな！！！」

「そのセイバーはたった今十二杯めのおかわりをしているぞ」

「セイバーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「ん？何か聞こえ？」

「セイバーさん、ハイおかわり」

「おお、ありがとうございます桜。いやただの白米でもやはりおいしい」

「完全に見捨てられたな」

「なんでさーーーーー！！！！」

「こっちも不本意だが、協力するしかあるまい！！」

「ちっ、しょうがない、今だけだかんな！！！！」

「ひょおおおおおおおおおお！！！！！あれ？なんで暴れてんだっけ？」

だんだんと目が覚めてきた蒔風に、士朗とアーチャーが同時にその腕をとり、ブン投げようとする。

しかし

「ふんっ！！！」「せやあ！！！」

二人は壊滅的にタイミングをはずし、見当違いの方に蒔風の身体が飛んでいく。
そちらには衛宮邸、さらに言うなら障子がある。
そしてもっと言うならそこはセイバーが朝食をとっている居間だ！！！

ドガシャア！！！

そこに蒔風が突っ込む。
机の上に仰向けになっている蒔風の目がパチクリと開かれ、起き上がって全身の筋を伸ばした。

「あぁーーーー。寝起きは最悪だったけど、まあそれなりにすっきりしたな。さて、ここはど・・・・こ・・・・・」

蒔風が振り返った先にはセイバーがいた。

茶碗を持ち、今まさに箸でそれを掴もうとしている姿のまま固まっているセイバー。
しかし左手に茶碗は無く、前髪に双眸を隠して少し俯いてなんかのオーラを出しているセイバー。

頭にひっくり返った茶碗を乗せているセイバーが、蒔風に叫んだ。

「三人まとめて消え失せろッ！！！！！よくも朝御飯を（エクス）！！！！！！」

「ちょ、ま！！！！」

「俺たちも！？」

「アイアス・・・間に合わん！？」

「最後の一杯（カリバアーーーーッ）をぉ！！！！！！！！」

「「「だあああああああああああああああああ！！！！？？？？？」」」

ゴゴォウ！！！！！！

士朗とアーチャー、そして蒔風が黄金の光に吹き飛ばされる。
何か間違った一撃だったためか、吹き飛ばすだけでたいした威力は無かった。

それでも蒔風は庭の真ん中まで吹っ飛ばされて気絶してるし、士朗とアーチャーは茂みに頭を突っ込んでバタバタと暴れていた。

――

そうして冒頭に戻る。

「どうしようか？」

「と、とりあえず中に運びます？」

「そうしよっか・・・・」

「セイバーは？」

「髪に付いた米を洗い落としに行ってる」

「そう・・・・」

そしてみんなが綺麗な朝日を見、同時に想った。

『なんでさ・・・・ってかほんとに誰こいつ！？』

to be continued

アリス「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界ですね！！！」

そうですなーーー
この話大好き！！！

ランサーの兄貴が一番好きなキャラ。
次にバーサーカーですね。

ア「時系列とか、どのルートのラストですか？」

それは明確にはしません。
でも、聖杯戦争は終わってます。
ステイナイトとホロウアタラクシアの関係みたいな感じにみてください。

ア「じゃあサーヴァントはみんないるんですか？」

そうなりますね。
アヴェンジャーとハサンの方のアサシンはいませんよ。

ア「その方が面白いし、ですか」

そうです！！！
難しいこと考えちゃだめ！！！

あ、あと今回説明は入れられませんでしたが、ないようわからなかった方は次回、そこらへん書きますのでそれで許してください。

ア「次回、目覚めて説明ゴー」

ではまた次回

別にあれを倒してしまってもかまわんのだろう？

それから数刻して、蒔風が目を覚ます。

そして

「いやーっはっはっは！どーも失礼しました！」

と頭をペシペシと叩きながら謝った。

――――――

喚して戦う殺し合い。

サーヴァントにはクラスがあり、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七クラスだ。
サーヴァントとなる存在はかつての伝説に名を残した英霊たちだ。
神話、伝承、古代文、歴史。
そういったものに名を連ねた英雄をクラスにわけるのだ。

そして勝ち残れば聖杯を手にし、その願望機に願いをかければそれが叶う。
故にマスターとサーヴァントは殺し合いと言う戦いを開始した。

しかし、その聖杯はすでに歪んでいた。
まっとうな願望機として機能していなかったのだ。

例えば「戦いをなくしてほしい」という願いならば、人間すべてを抹殺してそれを完遂する、というものだ。

故に士郎たちがその聖杯を破壊し、サーヴァントたちも現代に残ったままである。

ちょうど蒔風の話が終わり、アーチャーが片目を開けて蒔風に訊いた。

「なるほどな。よくわかった。つまり君は世界を巡る者なのだな？」

「そゆこと」

「つまりは翼人だと」

「そゆ、うぉい！？」

アーチャーの言葉に驚く蒔風。

一方凛や士郎達は何の話かわかっていない。

「翼人とは異世界や時間を越える存在だ。英霊（あそこ）の座にいたとき話には聞いていたがな」

「私は知りませんが」

ライダーの言葉にアーチャーが皮肉気味に答える。

「私は君のように優れた人間ではなかったからな。向こうに行っても貪欲に知識を集めなければ英霊としてやっていけなかったのだよ」

「それ、誰から聞いたん？」

「英霊の座を管理するものだ。ま、君達からすれば神のような者だ。本人はあくまでも管理者だと言っていたがな」

「”フォルス”の管理者か・・・・」

そこまで話したところで凛が立ち上がった。

「そういうことならこっちも戦力を集めなきゃね・・・・士郎がそいつに殺されたら世界もおじゃんなんて冗談じゃないわ」

そう言って携帯を取り出し、士郎に渡す凛。

「どうしろと？」

「連絡、とりなさいよ」

「オレが！？ってか遠坂！携帯持ってたのか！？」

凛が携帯を持っているということに驚く士朗。

彼女は非常に優秀な魔術師なのだが、機械類が苦手で、テレビの録画はおろかプッシュホン式電話の扱いにも困るほどの機械音痴なのだ。

「うっさいわね！！！最近買ったのよ！！」

「どうやって登録してもらったんでしょう・・・・」

桜の素朴な疑問にアーチャーが苦笑して答えた。

「ふふっ、なに。相手に頼んだまでだ。滑稽だったな。片っ端から知り合いに「登録してくれ」と頼みこんでいるマスターの姿は」

「あああ、あんた何ばらしてんのよ！！！！」

「そういえばそれを買った時も店員に勧められるままに使いもしない機能付きのを勧められてそれにしたんだったかな？」

「うっさい！！！！！」

と、そこでアーチャーにセイバーが言った。

「あなたは着いていかなかったのですか？あなたがいればまともなものを買えたでしょうに」

「いや、その時はくだらないことに口論になってな。「見ていろ。私一人でも携帯ぐらいどうにでもなるんだから」と意気込んでいたのでね。そっと傍観させてもらっていた」

「そんときあんさんはなんでケンカしたん？」

「外出時に電話番号のメモや小銭、その他諸々の管理を一手に押しつけられてな。それは文句の一つも出るだろうと言うほどのものだ」

「それはひどいｗｗｗ」

そんな会話をしているうちに士朗が連絡を取り終えた。

「どこに連絡したんだ？」

「教会のカレンって奴と、魔術師のイリヤって子だよ」

「ンじゃその子たち待ちだな」

そう言って居間でくつろごうとする蒔風だが、そこでセイバーが口をはさんだ。

「しかしその「奴」と言う者と戦うにしても、あなたの実力はどれくらいですか？」

「かーなーり、強い」

「その力量、はからせてもらってもいいですか？」

「・・・・いいぜぇ・・・いっちょやろうか！！！」

二人が庭に出て準備運動をする。
セイバーに凛と士朗が声をかけた。

「あまりやりすぎないでよね？」

「セイバー、どれくらい自身があるんだ？」

「やりすぎない自信はありませんね。彼もかなりのモノを持っている。それに・・・・」

「それに？」

「エクスカリバーが、疼くんです。何かに反応してるみたいに」

蒔風が声をかけ、互いに構える。
セイバーは手合わせと言いながらも甲冑に身を包んでいる。

「手は私が立ち合おう。危険なことになったら止めるからな」

アーチャーが間に立って、そして始まった。

「両者・・・始めっ！！！」

to be continued

アリス「今回短いですね」

説明回だからなー

そこは大目に見てください。

ア「次回、セイバー対蒔風。勝つのはどっち？」

ではまた次回

そうだ、誰かを助けたいという願いが綺麗だったから憧れた！

故に、自身からこぼれおちた気持ちなどない。これを偽善と言わずなんという！

この身は誰かの為にならなければならないと、強迫観念につき動かされてきた。

それが苦痛だと思う事も、破綻していると気付く間もなく、ただ走り続けた！

だが所詮は偽物だ。そんな偽善では何も救えない。
否、もとより、何を救うべきかも定まらない――！

アーチャーの掛け声と同時に、二人が走り出す。

セイバーが握るは不可視の剣。

宝具・聖剣エクスカリバーを覆う光すら捻じ曲げるほど圧縮された風、風王結界（インビジブル・エア）の効果である。

「？ああ・・・・不可視の剣か！！ちと厄介だな・・・・」

セイバーの横薙ぎをしゃがみ込んでかわす蒔風。

髪の毛が少し切れ、パラパラと散る。

（見えないだけならともかくなっと！！！）

蒔風がセイバーの剣をアクロバティックな動きでかわしていく。

決して剣を弾こうとしないその動きに、セイバーは感心した。

（ふむ・・・生身で弾こうものならすぐさま風王鉄槌（ストライク・エア）で吹き飛ばそうとも考えたのですがね）

クルクルと回りながら蒔風が一旦セイバーから距離をとる。

そしてその手の内が光り、ベルトとパスが握られていた。

「へへっ♪変身！」

《ｇｕｎ　ｆｏａｍ》

「倒すけどいいよね？答えは聞いてないっ！」

仮面ライダー電王ガンフォームに変身した蒔風がそう言いながらセイバーに銃弾を放っていく。

だがセイバーとて伊達で剣の英霊のクラスにいるのではない。
その銃撃をすべて弾き飛ばしながら蒔風に接近する。

「やっべ！？変身！！《ａｘ　ｆｏａｍ》」

撃ち続けながら蒔風がアックスフォームにチェンジする。
セイバーは銃撃が止み、そこで一気に飛びあがり剣を縦一文字に振り下ろした。

蒔風がそれをデンガッシャーアックスモードで受け止め、膝が若干崩れる。

「っ・・・・・」

「む！！硬いですね」

「そりゃそうだっ！！」

ブォ！！！

アックスを振り、セイバーを遠ざける蒔風。
セイバーが離れ、そこで剣に力を込めていく。

「解き放て！風の王！！！風王（ストライク）・・・・・」

「マズッ！？」

「鉄槌（エア）！！！」

ブオオオオッ！！！！！

セイバーが不可視の剣を振りおろすと、風の塊が蒔風に向かって飛んでいく。
それが命中し、蒔風の身体を土煙で覆い尽くした。

「おおっ！！」

「さすがはセイ「何を言っているんだ君たちは」え？」

士朗と凛が感心したところで、アーチャーがそれをさえぎる。

「まだ終わってはいない。これからだと思うのだがね」

アーチャーのその言葉を証明するかのように、セイバーはその土煙に向かって構えたままだ。

そしてそれから数秒後
その土煙の中からさらにドフン！！！という音が聞こえ、土煙が広がってセイバーをも呑み込んだ。

「くっ・・・・これは・・・・・」

セイバーが腕で顔を覆って、それでも油断なく周囲を見渡す。
と、その背後にゆらりと一つの影が迫る。

・・・・・・・・・・ギラッ！！

「！！ッ！！？？」

セイバーが理由のわからない寒気に身を固め、とっさに頭を下げた。

（なんだ今のは・・・・完全に気配がない・・・・・・）

ユラっ・・・・・

「！そこっ！！！！」

ブォン・・・・・・シュカッ！！！

セイバーの掛け声とともに二つの音が鳴る。
最初のはセイバーが剣を振るったもの、二つ目のは謎の斬撃だ。

それを紙一重でかわすと、また気配がなくなった。
セイバーの額を大粒の汗が一つ流れる。

打開策は見えない

――

「よぉ！面白いことになってんな！！」

「なになに？話の人がセイバーと戦ってんの？」

「この土煙はなんなんですかね？」

セイバーと蒔風が土煙に覆われてから少しして、ランサー、ギルガメッシュ（子）、イリヤがやってきた。

「カレンはどうした？」

「他に連絡するってよ。とりあえず俺らに行けって」

「ふーん」

「で、こりゃなんの祭りだ？」

「さっき話した蒔風がセイバーと戦ってる」

「マジでか！！オレもやりてぇ～～～！！！」

その言葉にアーチャーが呆れて言った。

「君はそればかりしかないのか？戦いづくめなど・・・・」

「んだよ！強い奴がいたらとりあえずぶつかってみんのが男気ってやつだろ？そういう意味じゃ、あの騎士王様の方がお前よか男っぽいな」

「私はバトルマニアではないのでね。必要以上にはやらんだけさ」

「へっ、つまんねえ奴だぜ。なあお前はこうはなんなよ？」

「はいはい」

そんな会話と共に煙の中では静かに激戦が続いている。

ーーー

そしてついにセイバーが前に出た。
かわすのではなく、前に出て受け止めたのだ。

すると土煙が一瞬で吹き飛んだ。
そしてそこで露わになった光景に皆目を見張る。

セイバーと蒔風がお互いの剣を握っている。
蒔風の「天地陰陽（組み合わせｖｅｒ）」とセイバーのエクスカリバーがだ。
そう、エクスカリバーだと一目で分かった。

あるべき風王結界が弾け、その剣身をさらしていたからだ。

「こ、これは・・・・！！」

「天剣と聖剣が反応したか・・・・・（チャキ）」

そこから蒔風がさらに剣を引き抜こうとする。
それに気付いたセイバーが蒔風に腹部をけり出して距離をとった。

蒔風は脇腹を押えながら蹴られた勢いで後ろに下がっていく。
そしてそのまま一瞬表情が苦悶に歪み、すぐに元に戻った。

「ふう・・・やるなぁ！！セイバー！！！」

「あなたもです。まさかあのような戦い方をしてくるとは！！」

「派手にぶつかんのが一番好きなんだがな。得意なのはこう言うのなんだよね」

「そうですか・・・・では・・・・そろそろ」

「終わりにすっかな？」

「望むところです！！！」

ドウッ！！！！

両者の闘気が一気に噴き出す。
そして数合相手の動きを予見し、同時に二人が動き出す。

「大鵬！！！」

蒔風が天地陰陽で大鵬を放つ。
セイバーはそれの切っ先を見抜き、蒔風に走り込みながら少しだけ身体を移動させ、回転してそれを回避した。

だが、身体が正面に向き直った時には蒔風がそこにはおらず、背後から気配がした。

バガァ！！！！

セイバーが振り返りながら剣を振りおろしたところに蒔風はいた。
が、空中で身を捻ってそれをかわし、エクスカリバーが地面を抉る。
それを踏み台にして蒔風がセイバーの背後に飛び、目にも止まらぬ速さでセイバーの首元に切っ先を突き付けた。

「・・・・ふぅ・・・・勝ったかな？」

「・・・・負けのようですね」

そう言って二人が剣を下ろす。

「聖剣の持ち主とこうやって出会えることができて光栄です」

「これが聖剣だと？」

「知ってるさ。セイバーのサーヴァント、アーサー王だっけ？」

「・・・・・他にも知ってそうですね」

「必要以上のことは知らないぜ？」

その後、イリヤ達とも知り合い、その晩は衛宮邸に厄介になることになった。

そして夜

「った～～～～・・・・やっぱ疲れるなぁ」

蒔風が布団に転がりながら一人ごちる。

と、そこに声がかけられた。

「それはその傷のせいかね？」

「・・・・アーチャーか？」

「すまないな。だがどうにもこう言ったものは見過ごせない性質（たち）なものでね」

そういうアーチャーの手には救急箱が握られていた。

「別にいいよ。やるべき治療はもうやったから。あとは時間だけだよ」

「言いから見せてみろ」

アーチャーが半ば強引に蒔風の診察をした。

すると

「・・・・・これは・・・・・・！！！」

「だから言ったっしょ？やるこたぁやったんだからって」

アーチャーが見たのは包帯で巻かれた蒔風の身体だ。
服を着てると全くわからないが、こうして見るとかなりひどい。
よくもまあこんな状態でセイバーに勝てたものだ。

「だから途中であれもやめたんだけどね」

「ああ・・・変身したやつか」

「そそ。あのままじゃ絶対に押し切られていたね」

「そこまで無理をして戦うのか？」

「世界最強が負けるわけにはいかないのさ」

そういうやり取りをしながら、なんだかんだで包帯の取り換えをする蒔風。
世界の挟間にて二週間いたとはいえ、その傷はいまだに癒えない。

「時に・・・君は本当に世界最強かね？」

「あん？」

「なぜそこまで強くなる。まさか正義の味方になりたいとか言い出さないだろうな？」

「おお？まさにそうさ、正義の味方ね。なるよなるなる。なってやるさ」

「・・・・それは止めておけ。ロクなことにならん」

「なに、この場合の「正義」はただのオレの信念だ。なにもみんなみんな助けられるとか思い上がってはいないさ」

「・・・・・・・」

「誰かを守りたい、何かに立ち向かいたい、友のために何かしたい。これらはすべて「願い」だ。それを為そうとすることになんの躊躇いがあろうか」

「それが自身を追い詰めることになってもか？」

「自分を追い詰める以前にオレは異端者だ。もうその域はとっくに飛び出しているさ、英霊エミヤ」

「・・・・・・・・」

そう、アーチャーの正体は英霊エミヤ。
つまりは未来で英霊となった衛宮士朗その人だ。

かつては「正義の味方」を目指し、そしてその理想のために死んだ

人間。
そして死後も英霊となって皆のために動けるのならば本望だと思っていた。

だがしかしそこに正義は無かった。

英霊とは本来その座に居続け、人類の守護のために動く存在だ。
だから世界から命を受けてあらゆることをやった。

大をつけるために小を見捨てたこともある。
危険だからと言ってまだ何もしていない人間を殺したこともある。

故にここまでひねくれてしまったのだ。

そんな彼だからこそ、「正義」の難しさを知っている。
本来の意味での「正義」とは、敵も味方も両方救うもの。
だがそんなことが本当に出来るとは、彼は思えなかったのだ。

「そんなもん強くなればいい」

「強く・・・か？」

「そうだ。どんな状況からでも助けられる、救える。強大な力を持っていれば、それができる」

「一人では無理な時はどうする」

「仲間に頼れ。協「力」もまた、力だ」

「・・・・・・・」

「ってかこのことぐらいもうわかってるはずだ。士朗を見たろ。あの目はもう間違うことのねえ目だよ。それはあんた自身が一番分かるはずだ」

「そうかも・・・しれんな。だが間違えたとあればすぐさま斬るがね」

「お前自分に厳しすぎ」

「かもな」

そんな話が静かに行われている。
そしてその部屋からほんの少しの笑い声が聞こえてきた。

――――――――――――――――――――そのころ

「ち・・・サーヴァントはみんないるし、聖杯も発動できる状態じゃねえな・・・・・」

ガシガシガシ・・・

「真っ向からかぁ・・・・めんどいなぁ・・・・・・」

「ま、めんどいだけなんだけどね」

to be continued

アリス「どんだけ時間かけてんですか！？」

うるっせぇ！！！

疲れてんだよ！！

ア「どんな休日のお父さんだあなたは」

母さんや、飯はまだかいな？

ア「母さん言うな」

他のサーヴァントや宝具の事を知りたい方はｗｉ○ｉにゴー！！

ア「キタ丸投げ」

すみません

でも説明ばっかじゃどーしよーもないじゃナイディスカーーー！！！

ア「次回、そして戦いのとき

この時になるとこんな予告ばっか」

しょうがないさ

ではまた次回

準備はいいか英雄王。武器の貯蔵は十分か。

そして次の日の朝。

蒔風たちは居間に集合して朝食をとっている。

「んお、この鮭おいしい」

「シロウ、おかわりを」

「はいよセイバー」

「うまいなぁ・・・この飯誰が作ってんだっけぇ？」

「うーん？士朗と桜が毎朝やってんのよ・・・・ふぁああ」

セイバーがモリモリとご飯を食べ、凛と蒔風は眠そうにモゴモゴと食べている。

そんな三人に士朗と桜は給仕をする。

「んれ？アーチャーはぁ？」

「あいつは見張りよ・・・・アーチャーの目は鷹の目以上なのよ」

「あぁ～、道理で昨日・・・・」

「どーかしたのー？」

「いや、何にも。うん、今日も味噌汁がうまい！！」

そこでランサーが乱入してくる。
どうもカレンからこちらに来るように言われたそうだ。

「お、うまそうな飯だな。オレにもくれよ」

「オレこれ以上は食えんからもういいぞ」

「おっ、そうか、悪ぃな」

そう言って蒔風が食べきれなかった朝食をランサーがうまそうに、実にうまそうに食べる。

「何かあったのか？」

「いや、昨日の夜にこの兄ちゃんの護衛に行けってカレンが言うもんだからよ、ギルとオレとで揉めてな。結局オレが来ることになったんだが、あのガキ、普通あそこまでして人を売るかよ・・・・・」

どうやら家庭の事情があるようだ。
これ以上聞くとなんだかロクなことになりそうにないので、蒔風は言及することをやめた。

「んで、その「奴」ってのはいつくんのよ」

「知らんがな」

「待つしかねえのかい」

「そゆことになるわいのう」

「難儀なこった。ん、味噌汁おかわり」

「結構あっさりとしてるんだな」

「なぁに。戦いなんざいつでも唐突さね。気付いてたら死んでたー・・・なんざザラにある。
最初に来んのがわかってるだけでも僥倖ってもんだろ」

「はぁーーっ。さすがその時代を生きた人間は違うな」

「いや、あそこで白米頬張ってる女もその時代の人間なんだがな」

そう言って箸でその女性をさすランサー
セイバーはそんなことには気づかずに、後ろに腕を伸ばしつっかえにして、後ろに傾きながら
「よい時代に生まれました・・・・」
とか言っている。

もうこの時代の子になっちゃいなさい。

「シロウ。あなた宛てに小包が来てますよ」

居間のふすまを開けてライダーが小包を持ってきた。
その後ろにはイリヤがついてきている。
おそらく昨日泊まったイリヤを呼びに行って、その途中の玄関で受け取ったものだろう。

「差出人は・・・書いてないな」

「うわ何それ思いっきり怪しい」

「疑わないバカはいないだろ」

「アホですね」

「言ってやるなよ・・・こう言ったことが好きな奴なんだよ・・・・」

そう呆れながら言った蒔風がひょいと小包を持って縁側のふすまを開ける。
そして小包をポーンと放り投げた。

と、同時に両手で地面を叩き、落下地点を覆う様に四枚の地面が起き上がってきた。
その中に小包が落ち、中で爆発する。

「なかなかに強力なもの送ってきたなぁ」

「ですがこれで？」

「「奴」はそこまで馬鹿じゃない（笑）次は直で来るぞーーー」

そう言って皆が居間で「奴」を待つ。

この家には防犯用の結界が貼っており、侵入者があれば音で知らせてくれるのだ。

なので緊張しすぎず、かといってだらけすぎないように時間が過ぎて行く。

――数時間後――

「全員、外に出た方がいい。何か来るぞ」

アーチャーのその言葉に反応し、皆が武装を整えて外に出る。

太陽が沈みかけ、もうすぐ夜になるだろう時間だ

セイバー、アーチャー、ランサーが戦闘モードに切り替わり、志郎と凛、桜にも緊張が走る。
ライダーはいざという時に士朗を守る役だ。
その後ろには巨大な肉体を誇るイリヤのサーヴァント・バーサーカーが仁王立ちしている。

「来たか」

蒔風が空を見て呟くと、ストン、と「奴」が降りてきた。

「やーーっぱ待ち構えてんのな。だから嫌なんだよめんどくさいし」

「だったらくんな!!」

「そうはいかない。取り込んだ世界のためにも、な」

あれが「奴」か？などと言った質問は誰一人として言わない。
そんなことは一発ではっきりする。

この一周して逆に純粋とまで言えるようなおどろおどろしい殺気を向けてくるのが敵でないはずがない。

それを確認した桜が家の敷地を包むように結界で覆っていく。

「ふう、前振りはいらないよな？いくぞ！！！！」

「ぶち殺すぞ！！！！」

「「「おぉう！！！！」」」

ダォウ！！！！

「奴」に向かって蒔風とランサーが突っ込む。

蒔風が顔面に伸びる腕をスライディングでかわし、通りざまにローキックをかます。

それに対処している一瞬の間にランサーが「奴」に赤き槍で数十の刺突を繰り出した。

ババババババババババッ！！！！！

バガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴン！！！！！！

「なん！？」

「サーヴァント最速のランサーか？少しがんばればまあ何とか・・・だな！！！」

あろうことか「奴」は拳と手刀のみでその攻撃を弾き飛ばした。
さらには背後からハイキックを繰り出してくる蒔風の足を振りむかずに掴み、ランサーに投げつける。
ランサーが蒔風を受け止め、その背後からセイバーが飛び出していった。

「おおおおおおおおッ！！！」

「ふんっ！！」

ガギィ！！！！！

「奴」が魔導八天の一本、「天人」を抜き応対する。

「聖剣か。この反天剣に、勝てるかなぁっと！！！！」

「奴」が左手一本に「天人」を持ちかえ、右腕を振りかぶって外側からセイバーの左こめかみを狙う。
それをセイバーはひじを張り、そこで受け止めた。

だがしかし受け止めた瞬間にセイバーの景色がブレた。
気付けば地面に倒れていたし、左肩が砕けたのではないかと言うほどに痛みを発している。

「バカな・・・・」

「一人一人で来るなよ・・・ん？」

「Ｉ（我が）ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ（骨子は）　ｏｆ　ｍｙ（捻れ狂う）　ｓｗｏｒｄ！！！！！
偽（ガラドボルグ）・螺旋剣！！！！！」

ギュオウッ！！！！！

「そうくるかっ！！！」

ガキン！！ドゴォン！！！！！！

アーチャーの放ったガラドボルグが「奴」に命中する。
爆音が響き、火柱が空へと伸びる。

「やったか？「バカ！！！」マ、ジかよ！？」

その火柱に向かって蒔風が「風林火山」を居合の構えで突っ込む。
そしてそこに到達すると、それを一瞬で抜き、火柱ごと中にいるモノを斬った。

「単撃、一閃・・・ダメだ・・・ランサー！！！！頼む！！！」

「おうよ！！！」

ゆらりと現れた「奴」の身体には少々の煤がついているが、ダメージはほとんどないようだ。
そこにランサーが殺気を込めた一撃の突きを、背後からはセイバーが、そして頭上からはアーチャーの放った赤原猟犬（フルンディング）が落ちてきている。

フルンディングはアーチャーが投影した剣で、標的に命中するまで追い続けるモノだ。
しかし、「奴」はそれにもおくさない。

ここで「奴」の驚異的な戦闘スキルが発揮された。
まず、頭上から迫るフルンディングを少しだけジャンプして、掴んだ。

本来ならば掴んだとしても暴れてその手から逃げ出すそれを「奴」は振るい、独楽のように回転して着地しながらランサーとセイバーの攻撃を弾き、さらには蹴りのおまけまで付けてきた。

「ぐあっ！！」

「ゲほっ・・・ちょいとあれは強すぎンじゃねえのか？」

「そう悲観的になるなよ。こっちにはお前ら最大の勝因がいるんだからな」

そう言いながら蒔風が「天地陰陽」を組み立てる。
いつものような両手に構える形にではない。

トンファー型のこの剣の取っ手部分。

そこで背を合わすようにくっつけると、その通りについていく。
そして四本組み立て、「十」の字型にした。

「天地陰陽・風斬車（かざぎりぐるま）」

その間に「奴」はフルンディングをへし折っていた。
アーチャーが壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）で爆破させようとしたのだが、その前に壊されては不可能だ。
壊れているものをこれ以上は壊せない。

蒔風が風斬車を右手に持って振り下ろした。
その勢いで手の中の取っ手を軸に高速回転で刃が回る。

「塵になりたきゃ触れるがいいさ。なりたくなくてもさせてやらぁ！！！！」

蒔風が「奴」に走る。
「奴」がとっさに足元にある拳大の石を蒔風に蹴っ飛ばした。

蒔風がそれを風斬車で殴るように振り払うと、回転する刃に削られ、石がキラキラと光るほどの粉末になってしまった。

「おいマジかよそれ鬼畜だろ！！！」

「お前にはっ、言われたくない！！！」

ギャリッ！！ギャリリリリリリリリリリッッ！！！！！

「奴」の「天人」と蒔風の「風斬車」がぶつかって壮絶な火花を散らす。

バチィ！！と蒔風が「天人」を弾き、腕を振るって回転を持続させながら「奴」に攻撃を続ける。

「いつまでも寝てらんねえわな」

蒔風と「奴」の交戦場所にランサーが突進してくる。

そして宝具であろうその槍の先端に、空気が焼けるのではないかと言うほどの殺気を込める！！！

「その心臓、貰い受けるッ！！！」

「いえっ！？」

蒔風の相手をしている「奴」に向かって、ランサーが下方に向かって槍を放つ！！！

「刺し穿つ(ゲイ)――」

「ッ！！！」

「死棘の槍(ボルグ)！！！！」

「転輪する運命(ジョブ・チェンジ)！！！！！」

ギュッ、オウッ！！！！

「奴」がそう叫ぶと、ランサーの槍、ゲイボルグに変化が起こる。

ゲイボルグは放たれれば最後、必ず心臓に突き刺さる宝具である。
実際には槍の持つ因果逆転の呪いにより、「心臓に槍が命中した」という結果をつくってから「槍を放つ」という原因を作るのだ。

ゆえにそれを回避するには槍の魔力を上回る力や、高い幸運などが必要だ。

だが「奴」のとった行動はその両者どちらでもない。
「奴」は本来ならば脇役だった男。それがここまでのし上がったのだ。
運命を越える力は十二分に在りすぎる。

故に因果を操るゲイボルグの切っ先を向けられた人物を、変更する

ことも不可能ではない！！！

「う、ゴアッ！！！！」

ゲイボルグが蒔風の左肩を貫いていた。
交戦中だったからか、完全な転輪はできなかったようだ。
蒔風が倒れ込み、セイバーがそれを回収して後退する。

「あの野郎、俺のゲイボルグの因果を変えてきやがった！！！」

「その宝具にとって「奴」は天敵だな・・・・」

「どうしますか！？」

「慌てるなよ。まだやって無いやつもいる」

「■■■

その衝撃を飛んでかわした「奴」に、アーチャーの剣、干将・莫邪が飛んできた。

それを弾いた「奴」だが、さらにアーチャーが干将莫邪を投影し、「奴」に飛びかかって斬り、地面にたたき落とす。

落ちたところでバーサーカーがその巨大な足で「奴」を踏みつぶし、巨大な斧剣を振り下ろした。
大地が揺れ、木々が軋み、家のガラスにひびが入った。

土煙が上がり、キャッキャとイリヤがはしゃいだ。

「ふん！私の士朗を殺そうだなんていい度胸じゃない！！やっちゃえ！！バーサーカー！！！」

ここまでやっても憂さはまだ晴れないらしい。
そうバーサーカーに命じるとその命のままに彼は動いた。
幾度も幾度も斧剣を叩き付け、そのたびに地面に亀裂が入る。

「これは・・・終わったか？」

「その台詞、まだまだ終わらないフラグだぜ？」

「な、なんですって！？」

聞こえてきた台詞にイリヤが驚愕する。
土煙が晴れると、そこには斧剣を素手で受け止めた「奴」がいた。

グググググッ、と膝をあげ、立ち上がってくる状況を皆信じられなかった。

パワー、スピード、そしてこの地における知名度で言ってもトップクラスに入るバーサーカー・ヘラクレスの攻撃をしのいだだけでなく受け止めただと！？

「筋肉筋肉～～～ってなぁ！！！！筋肉さんにいい思い出はねえ！！！」

「！！！そうか！！！！！！」

「ぶっ飛んどけ！！！」

「奴」が斧剣ごとバーサーカーを持ち上げ、投げつけようとする。だが、蒔風がそれよりも早く動く。

「力を借りるぜ！！真人ぉ！！！！！！」

ズォアッ！！！！

「筋肉革命だぁ！！！！！！」

蒔風が力を借り、固有結界を開く。

その瞬間、「奴」とバーサーカーの力関係が逆転した。

ズッシン！！！

バゴオ！！！！！

持ちあがっていたバーサーカーの身体が地面に戻り、逆に「奴」をすくい上げて思いっきり拳で叩き付けた！！！

「が・・・お・・・・・・」

「これは・・・固有結界！？」

「他の世界で仲間になった奴の力を借りただけだ。オレのじゃねえ」

驚愕するセイバーに蒔風が説明する。

（これで終ってくれればいいがな・・・オレのコンディションも最高じゃねえし・・・・）

その瞬間、蒔風の顔面を衝撃が襲った。

ビュオッ！！！！！

バガン！！！

「奴」が蒔風の顔面に拳をめり込ませ、蒔風が地面に後頭部から突っ込んだ。

「な！？」
「に！？」

「はぁあああ・・・・この場において一番の筋肉量はバーサーカーだけどな・・・・

二番は俺だっての」

シュウウウウウウ・・・・・・・

固有結界が消えうせ、自分の背後に迫るバーサーカーの斧剣を受け止め、さっきやろうとしたことを実行に移す。
地面にバーサーカーを叩き付け、その腹部に斧剣を深々と刺した。
地面に標本のように止められたバーサーカーが脱出しようともがくが、一向に斧剣は抜けない。

「ハァッ！！」

「オオッ！！！」

「オリャア！！！」

セイバー、アーチャー、ランサーが同時に攻撃を仕掛けるも、殴られ蹴られ投げ飛ばされて、相手にもならなくなる。

「どけよ、ライダー。お前じゃかなわない」

「わかりませんよ・・・・」

「魔眼は止しとけ。その前にお前の首が飛ぶぞ。またそんな最後は嫌だろう?ライダー・メデゥーサ」

「ッ!!!騎英(ベルレ)の・・・」

「遅いよ」

ッ、ドガシャァ!!!

ライダーの身体が飛び、居間に突っ込んで机を破壊した。

そこに桜が駆けよっていこうとするが、「奴」の目の前で背中を見せることはできない。

「お前・・・オレを殺してどうするつもりだ」

士朗が「奴」を睨みつけて聞く。

「この世界を喰って、新たな世界を。そこでならオレがうまく調節して、悪の無い正義ある世界を作れるが・・・どうする?」

「・・・・本当か?」

「ちょっと士朗!?」

「本当だともさ。ま、その前にお前は死ぬが、新たな世界で復活できるよ」

「・・・・そうか・・・・・・・・・だったらその話は呑めないな」

その言葉には決意と覚悟と、そして受け継いだ夢を実現させる想いがあった。

「ただえさえ貰いものであるこの憧れ、夢、羨望。
そこから生まれた感情は俺のものだ。
それをいくら誰かが幸せになって、敵も味方も救えたって、この想いが嘘じゃ意味がない。

そんな結果は俺が納得しない。
そんな結果じゃ、オレが置き去りにしてきた人たちに申しわけが立たねえよ!!!!」

「ち」

「先輩!!!」「士朗!!!」

士朗が詠唱を始める。
「奴」がそれを止めようと動いた。

「身体は剣でできている――――」

「させるか！！！」

「それをさせるかぁっはぁ！！！！！」

そこに蒔風が飛び蹴りで「奴」を弾き飛ばす。
着地の際に血がボダボダと身体からこぼれるが、蒔風は気にしてなどいない。

「できねえよ、お前には。こいつは「正義の味方」だぞ。ヒーローを殺せんのはよ、そのヒーローのそばにいる人間なんだよ！！！！」

「自分よりも人を優先させる異常が、破綻が！！それが正義だと言うのか。それを正義と言えるのか！！！」

「バッカ野郎が。それくらいならまだ人の域だよ。まだ戻れるし、戻そうとしてくれる友がいれば、こいつは問題ねえよ！！だよな？」

「はい！！」「もちろんよ。こいつをまっとうにさせてやんのが私の使命よ！！！」

「いいぜ・・・・士朗、準備はいいか！？」

「いけるぜ！！」

「よっし・・・・ゲッ、ブフッ・・・・（ボタボタ）」

蒔風が派手に吐血する。
肩の傷も酷い。

「大丈夫だ・・・・行くぞ！！！」

【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＷＥＰＯＮ～！！

全員の身体に魔力が巡る。
そしてそれはマスターを通じてサーヴァントにも！！！

「これは・・・・・」

「気前がいいな・・・・今から使う、魔力は、世界が負担してくれるから・・・・やりたい放題だぁ！！！」

そして士朗が固有結界を開く。
その世界はまさに剣の世界。
彼の内包する世界を、今ここに！！！！

――身体は剣でできている――
――血潮は鉄で　心は硝子――
――幾たびの戦場を越えて不敗――
――ただ一度の敗走もなく――
――ただ一度の勝利もなし――
――担い手はここに孤り――
――剣の丘で鉄を鍛つ――
――ならば、我が生涯に意味は不要ず――
――この体は、“無限の剣でできていた”
――

「無限の剣製（アンリミデット・ブレード・ワークス）！！！！！！！！！」

ドゴォ！！！！！

炎が走り、一面が荒野へと変わる。
そしてその荒野には墓標のようにいくつもの剣が突き刺さっている。
そして背景には巨大な歯車が回っていた。

「行くぞ、影役王。「正義」を殺す覚悟はできたか」

「そんなもんはとっくの昔に」

「だったら・・・ゆくぞ!!!!!」

ゴォウ!!!士朗が「奴」に走り出す。
その途中で士朗の手に投影された剣が飛んできた。
その剣で士朗が「奴」に斬りかかり、「奴」も剣で受けるが、その顔は驚愕に染まっていた。

「な・・・十五天帝!?」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

バキィ!!!!!!

士朗が「奴」を弾き飛ばし、空中に無数の剣を投影して、それを一斉に射出した。

「トレース、トレース、トレース!!!!!全投影、連続射出!!!!!」

ザザザザザザザザザザザザザザザザッ！！！！！！！

投影された剣が次々と「奴」へと飛来する。

「奴」は魔導八天をフルで使ってそれを次々と弾いていく。

「シュン！！大丈夫ですか？」

「セイバーか・・・ああ、大丈夫だ・・・シメに行こう！！！！開翼！！！！！」

「・・・・はい！！」

駆け寄ってきたセイバーと、開翼した蒔風が「奴」に向く。

【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

ゴォ！！ドォ！！！

蒔風の十五天帝と、セイバーのエクスカリバーが輝き始める。

そして蒔風が頭上を通るように左にいるセイバーに十五天帝を投げ

た。
セイバーも蒔風にエクスカリバーを投げる。
するとお互いの剣は吸い込まれるように手に収まり、より一層強い光を放ち始める！！！！

「行くぞ！！！」「ええ！！！」

二人が剣を振りかぶる。

「約束された（エクス）・・・・」
「正義の証たる（ソラウス・キング）・・・・」

そして同時に振り下ろす！！！！

「勝利の剣（カリバー）！！！！！！！！」
「十五の刃（フィフテーン）！！！！！！！！」

ドドゴア！！！！

恐ろしいほどに輝きを発する二本の光が、「奴」に向かって疾駆した。
だが

「受け止めるぞ、魔導！！！八天！！！！！」

「奴」もまたすべての剣を一つにし、大きく振りかぶってからその剣を光に叩きつけた。
すると信じられないことに、その剣はエクスカリバー、十五天帝の攻撃に耐えていた。

しかし、いまだに撃ち続けられる二本の光。
「奴」はその光を魔導八天で押し耐えている。

「は・・・ははははっ！！！なっんっとっかっ！！！耐えてやるぜぇぇぇぇえええええ！！！！」

ゴオオオ

と、踏ん張る二人の肩を二人の男がポン、と叩いた。

「援護しよう」

「オレを忘れるなよ」

「「Ｉ（我が）ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ（骨身を）　ｏｆ　ｍｙ（勝利へ捧げん）　ｓｗｏｒｄ」」

後ろに立つのは士朗とアーチャー

その手に握るは投影したばかりのエクスカリバー！！！

「「エクス、カリバーーーーーーーー！！！！！！」」

セイバーの横から志郎が、蒔風の横からアーチャーがエクスカリバーを発動させる。

四本の光は一つとなって、「奴」を沈めんと一気に迫る！！！

「うおおおおあああああああああ！！！！！！（バチィ！！！！！）」

だがここで「奴」が動く。

まだ「奴」の方には追加の二本は届いていないため、一瞬だけ今までの二本の光を弾く。

少しだけ押し、「奴」と光との間に余裕ができ、その隙に「奴」が力を込める！！！

「魔導八天！！！限界突破（リミットブレイク）！！！全力全開（フルバースト）ッ！！！！！！！」

ドゴゴゴゴガァッ！！！！！！！

そして魔導八天と四本の光が衝突する。
その反動に「奴」の足が地面に埋まり、クレーターのように周囲が陥没したが、それでもまだ「奴」は耐えていた。

「うはははははははーーーーーーーーーッ！！！！！！！
いける？いけるんじゃねえ？いけんじゃねえの！？このまま耐えれば俺の勝ちだ！！！」

「奴」が半分狂ったような声を上げる。
それに対し、蒔風は苦しそうな顔をした。

（いくらなんでもムチャクチャだ！！！もっと弱らせた方が良かったか！？
だがこれ以上長引かせるのはまずかった・・・どうする・・・・
ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫもそろそろ切れるぞ！？）

四人が焦る。
いくらなんでもこのままではまずい！！！

と

そこに実に余裕そうな感じの声がした。

「まったく何をしているのだ。あのような雑種にも劣る脇役、さっさと消し去ってしまえ」

その声の主は歩きながら金の鎧を着け、自身の肩口あたりの空間から一本の剣を抜く。
そしてそのまま歩を進め、四本の破壊の光の中に、なんの躊躇もなく入っていく。
まるでこの程度、どうとでもなると言わんばかりに。

「消えろ、脇役。貴様ごときが我(オレ)の視界に入ってくるな！！！！

天地乖離(エヌマ)す・・・・・」

「もうやめて！！オレのライフは・・・・」

「開闢(エリシュ)の星！！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

最強のサーヴァントによる最強の一撃が叩きこまれる。

「奴」は最後まで言えなかった。

言う前に、塵となってこの世界から消えた。

そしてＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが切れ、光が収まり固有結界も消えた。

と、四人がその場にバタリと倒れた。

「つぅかれたぁ～～～～」

「これはもう二度とやりたくはないな」

「あんなに撃ち続けたのは・・・・・初めてでしたよ・・・・・・」

「・・・・・・（ゲフッ）」

「ギャーーー！？蒔風が血を吐いた！！！桜！！早く早く！！！」

「は、はい！！！」

ボロボロの蒔風を皆で治療し始めるその光景を見、英雄王のサーヴァントはもう飽きたのか、取り出した小瓶の中をクイッ、と飲んだ。すると青年だった身体がたちまち小さくなり、少年の姿へと変わった。

「まったく。気になるなら最初から入ればいいのに。大人の僕ってホントなんであんなにひねくれたのか・・・・」

そう言いながら少年は皆のところへと駆けて行った。

――――――

「（ニッコリ）もう一度言うわよ～？文句言うな」

「はい・・・・」

蒔風は昨日泊まった部屋の布団で横になる。
さっきから士朗をはじめ、セイバー、ランサー、アーチャー、桜とライダー、最後に凛が見舞いに来ていた。

「舜、大丈夫か？」

「また来たのか・・・・」

そしてまた士朗がやってきた。

「お前は俺たちの恩人だからな」

「よせよ。オレは俺自身の世界のためにやっただけだ」

「お前の世界？」

「気にすんな」

そう言って無理やりに話題を終わらせる蒔風。
すると

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ］

ゲートが開いた。
それを見て、蒔風が立ち上がる。

「おい・・・まさかもう行くってのか!?」

「どーやらそうらしいな。蒔風使いの荒い世界だぜ・・・・・」

「その怪我でどうするんだよ!!!」

「どうにかするさ。じゃあな」

「あっ!!!ま・・・てよ・・・・」

言い終わる前に蒔風はゲートをくぐってしまった。
そしてその場には士朗が残される。

「そんなんでお前はいいのかよ・・・舜・・・・・」

世界にいいように扱われた自分自身(アーチャー)を見た、士朗だからこそ言える言葉。
だがそれは彼には届かなかった・・・・・

―――――――

渋谷に落ちた隕石。
そこから出てきた怪物ども。

奴らは人間に擬態して、この社会に溶け込んでいる。
怪物の名は、ワーム。

この世界の戦士は、天の道を往く男

to be continued

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　～Ｆｉｎａｌ／ｗｏｒｌｄ　ｌｉｎｋ～（終）

【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】

構成：”フォルス”７０％
　”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：衛宮士朗

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：魔力消費量＆身体への負担ゼロ

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：エクスカリバーと十五天帝による混合攻撃

アリス「いいとこ持ってくギルさま（笑）」

彼ならそうするかと
しかもかっこいい

ア「そういえば天剣とか聖剣とかのくだりは？」

あれの設定が生きてくるのはもっと先です。
全然先、すーーーっと先。

ア「どんだけ続くんだこの物語」

それは秘密

あ、あとエクスカリバー投影時のセリフのルビは
「我が骨身を勝利へ捧げん」です
ア「次回、変身するのは完璧男だ！！」
ではまた次回

天の道を往き、総てを司る男だ

カブト　～オレがいる！？～

ＳＩＤＥ　蒔風

あ・・・ありのまま今起こった事を話すぜ！

オレはオレに出会った。

と、思ったらオレが化け物になって襲ってきた！！

な、何を言っているのかわからねーと思うが

オレも何があったのかわからなかった・・・

頭がどうにかなりそうではないがな

だが「奴」だとか変装や変身だとか

そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ

・・・・・・すみません嘘です。

なんのことかわかってます。ワームですね。

沢辺の散歩道にいたら絡まれました。

ワーム

渋谷に落ちた隕石から出てきた地球外生命体。

彼らは人間の姿に擬態する。

しかも外見だけではない。記憶すらもだ。
そして人間としてこの世界に潜んでいる。

だが最近になって彼らにも種類が違う者がいたのだ。

ネイティブと呼ばれる彼らは、ワームから逃げてきた者たちである。
ワームは彼らろ追ってきたのだ。
彼らと接触した人間はＺＥＣＴ（ゼクト）という組織を作り、共にワームに対抗した。

今ではほとんどのワームはすでに殲滅され、あとはうまく逃れた者。
そしてネイティブだけだ。

「早めにケリをつけんぞ。最近はＺＥＣＴの蟲どもが・・・・う・・・が！？」

オレに擬態し、今はサナギ体であるワームが挙動不審にうろたえ始める。
ってかそうじゃなくても十分不審だけどな。

「げ、げ・・・・なんだ・・・この・・・・・記憶（なかみ）・・・っていうか・・・つよ・・・・」

そういえば擬態元の人間の記憶、意思が強いとそっちに飲み込まれる場合があるんだっけか？

「ああなるほどね。俺なんかコピーするから、飲み込まれるどころか押しつぶされそうになってんのね」

「ぎ・・・ぎいいいいいいいいひひひひっひひひっひ！！！！！ごあああああああ！！！！！」

「俺の狂気と理性がそんな簡単に包めると思うな」

「ヴシャアアア

と、それよりも早くワームの身体から火花が散る。

「あん？」

「そこの君！！はやく逃げろ！！！加賀美（かがみ）！！ワームだ！！！」

渋い顔したおっちゃんが銃を構えて走ってくる。

通信機で誰かを呼びだしている。

だが銃では牽制くらいにしかならなかったのか、ワームは今度はその男に向かって走り出した。

「うぉい！！相手は・・・こっち！！」

とっさにおっちゃんとワームの間に飛び込む。

すでに十メートルくらい離れていたけど、速攻で追いつき、後ろに投げ飛ばす。

「！？君のその力は？」

「あー、これ？」

この人主要か？

でも話して信じてもらう時間はなさそうだなぁ・・・・・

ってうお！！あいつもう来た！？

ぶっ飛んだ破壊衝動だけしかないのは怖いわ！！！

そこで身構えるオレだが、迫るワームに拳大の青いクワガタのよう

なものが突進してその体を弾いた。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「来い！！ガタックゼクター！！！」

その虫が走ってきて声を上げた青年に向かって行き、青年がそれを掴む。

「田所さん、大丈夫ですか！！こっちが相手だ！！ワーム！！変身！！！」

《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

青年がガタックゼクターと呼んだそれをベルトにはめ、装甲し、さらにその角を反転させて装甲を吹き飛ばし、仮面ライダーガタックライダーフォームへと変身する。
それと同時にサナギ体のワームも脱皮し、カマキリを元としたマンティスワームとなる。

「脱皮した？」

そうなることでワームはクロックアップという超高速移動に移行することが可能になる。

そしてその通りに動きだした。

「ッ！！クロックアップ！！！《Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ！》」

そしてガタックも同じように動き出す。
ライダーフォームになったガタックもまた、クロックアップが可能なのだ。

動き出す二つの影。
単純な攻撃をするワームの腕を掻い潜り、ガタックが自身の剣「ガタックダブルカリバー」を鋏状に組み合わせて挟み込む。
《１、２、３》「ライダーカッティング！！！」《Ｒｉｄｅｒ　Ｃｕｔｔｉｎｇ！》という音声と声。
そしてワームを挟み切り、爆散させる。

それらが蒔風の目、耳に残った物だ。
だが視認できただけで身体がついては行けなかった。

蒔風が参加しようとして足を出した時にはすでにワームは爆発したからだ。

「速えぇ・・・・・」

そこに変身を解いた青年がやってきた。

「君、大丈夫か？田所さんも」

「ああ、よくやった、加賀美。それと君・・・・」

「あ、助けてもらってどーも。蒔風舜です。田所・・・さん？」

「ああ、私は田所修一というものだ。そしてこっちが」

「加賀美新（あらた）だ」

自己紹介してくる彼らと握手し、田所が蒔風に訊く。

「ところで君は何者だ？ワームに追いつく、それを投げ飛ばす。まさか・・・・」

「オレはワームでもネイティブでもないですよ」

「む？そこまで知っているのか？」

田所は眉をあげて驚いた。
確かに最近はワーム殲滅のためにＺＥＣＴの存在もワームのこともある程度は一般市民にも知らされている。

だが、ネイティブの事などはあまり知らされていない。
だが蒔風の言葉からはおそらくかなりの事を知っているように感じられた。

「どこまで知っているんだ？ＺＥＣＴのメンバーか？」

「ＺＥＣＴのメンバーでもないなぁ・・・・でも大体はわかる。貴方がネイティブであることも」

「！！？？」

「お前・・・何者だ！？」

加賀美が蒔風と田所の間に入り詰め寄った。

「そうだなぁ・・・よし、話すか。人気のないところに」

――――――

とは不可能だ」

「・・・おい・・・お前、オレが最後ワームをどうやって倒したか言ってみろ」

「たしか・・・剣を鋏状にして切っていたな」

「あ・・・・・」

加賀美があんぐりと口を開けて驚いている。

「そういうわけだ。確かに世界云々は信じづらいが、誰かが狙われているのは見過ごせないな」

「田所さんがそこまで言うなら・・・・オッケ!!オレも信じるぜ」

「サンキューー。で、その最主要なんだが・・・「カブト」って誰さん?」

「・・・・天道か・・・・」

「天道?」

「ああ。天道総司。カブトに変身する男だ。確かにあいつならそれっぽいしなぁ〜〜〜〜」

加賀美が頭をガシガシと掻きながら言う。

「だが今彼は・・・・」

「そうなんだよなぁ・・・・」

「なによなによ～～。話題に置いてかれてるよ?オレ」

「ああ、それは・・・・」

ツーツーツー

そこに田所の通信機に連絡が入る。

『カブトがペンダントの配布場所に出現!現在、ゼクトルーパーが交戦中。ただちに急行せよ!!』

「は!?」

「またか・・・いくぞ!!加賀美!!君も来るか?」

「まあ行くけど・・・どういうことだよそれ!!」

「途中で説明するから!!速く行こう!!」

加賀美と田所に連れられてワゴン車に乗り込む蒔風。

どうやら何やらあるようだ。

to be continued

カブト　～オレがいる！？～（後書き）

アリス「カブトの世界！！」

この世界では思いっきりテレビ本編最後のほうですね。
カブトが襲撃しているとこですね。
これ以上は知ってる人も多いでしょうけど言いません。

だからサソードは出せません（泣）

神代ファンの皆様、申し訳ございません！！！！
多分復活もしないと思う・・・・・

ア「残念です・・・・」

でもどうにか出したいなぁ・・・・・

ア「次回、カブトの真意」

ではまた次回

オレはすべてにおいて頂点に立つ男だ！！！

カブト　～ＺＥＣＴの裏？～

車中にて蒔風が説明を受ける。

ＺＥＣＴは現在ワーム殲滅のためにあるものを配布している。
それはワームに反応し光るネックレスだ。
今では市民のほとんどがそれを持っている。

そして仮面ライダーカブト、天道総司はその配布場所を襲撃しており、それの妨害をしているのだそうだ。

加賀美の話を聞いていると、田所が加賀美に言った。

「加賀美、許可が下りた。ガタックに変身して現場に向かえ！」

「はい！変身！！」

《Ｈｅｎｓｈｉｎ》

加賀美がガタックに変身して車の屋根に上がってからキャストオフ、クロックアップし先に現場に向かった。

――――――

配布場所は市役所前の駐車場だ。
蒔風たちがそこに着く頃にはもう戦闘は終了していた。

クロックアップの可能なライダー同士の戦いは実際には五秒にも満たない。
それがカブトとガタックのようなこの世界で最強に近い二人ならなおさらだ。

だが今回もカブトは逃げおおせ、加賀美は後始末を手伝っていた。

燃え上がるダンボール。
中のネックレスは一つ残らず使い物にならない。
さらには在庫を詰め込んだトラックまで吹き飛ばされている。

「徹底的だな。ここまでやるからにはそれなりの理由があるのか？」

「わからないんだよ。天道の奴、肝心なことといつも言わねぇんだからよ」

「・・・言わない奴ってのはいくつかパターンがあってな」

「？」

「仲間を信じてないか、人に言えない理由があるか。そして最後に、誰かを巻き込みたくないかだ」

「どういうことだ」

話を聞いていた田所が蒔風に質問する。

「言葉の通りだ。巻き込みたくないってのは相手が巨大な組織って場合だな。
あぁ、前者二つの理由は省くぞ。そんなことで大局を見誤るような奴じゃなさそうだしな」

「巨大な組織って・・・・」

「この場合十中八九ＺＥＣＴだな。
なにかあるぞ。このネックレス。ちょっと貸してみてくれ」

「お、おお」

加賀美がワゴン車からネックレスを持ってくる。
蒔風がそれを首からかけた。

「だあぁ、なるほどね。
田所さん、これ掛けてみてください」

「ん？ああ・・・・む？」

「どうですか？」

「いや・・・なにか力が沸いて来るというか」

「やっぱりか・・・
・・・ふぅ～・・・んッ！」

パキン！

蒔風がなにかに納得し、力を込める。
するとネックレスの宝石部分が砕けた。

加賀美がそれにビックリしていると、背後に集まっている野次馬の中からもパキンパキンという音が連続で聞こえてくる。

「な、なにをしたんだ？」

「ここじゃＺＥＣＴ隊員が多すぎる。大丈夫な場所は？あと腹減ったにゃー」

「それならいい場所がある」

そうこうして加賀美たちはそこから離れた。
どうやら行きつけのレストランがあるようだ。

ーーー

「な！？」

「この宝石部分からネイティブの波長が微弱だが送り込まれている。
まあこの程度なら問題はないが・・・
もしも波長の強弱をコントロール出来るなら、これはまずい」

「ばかな・・・根岸さんは人類との共存を・・・・」

「根岸？ああ、ＺＥＣＴ上層部のネイティブか？多分それ嘘
おそらく全人類をネイティブにして支配下に置くつもりだ」

「だが・・・だが・・・・」

「まあ真意がどこにあろうと、これはいいものじゃないからシステムごとオレが破壊したＹＯ☆」

「破壊したって・・・どうやってだよ」

「他の世界の宇宙人の力を借りたまでさ」

「うちゅ、え？」

「とにかく、天道とやらの思惑は知れたな。
そして彼もペンダントが破壊されたことは知っているはず。
さらに彼が親しげにしているＺＥＣＴと関係があるのは加賀美だけ。
となれば・・・・・・」

バタン！！！

Ｂｉｓｔｒｏ　ｌａ　Ｓａｌｌｅの扉が勢いよく開かれ、ひとりの青年が入ってきた。

「加賀美はいるか？話がある」

ネックレスを手に握り青年が加賀美を連れ出そうとする。
だが、そこに蒔風が声をかける。

「ここで話していこうぜ、天の道を往く者よ」

その言葉に青年・天道総司が立ち止まり、蒔風の方を向く。

「お前・・・何者だ？」

「世界最強」

「それは違うな。世界で最も強いのはこのオレ、天の道を往き総てを司る男だ」

「まあ世界最強談義はあとでにして、今はそのネックレスについて、そしてお前さんの境遇について話そうか」

天道が眉をひそめる。
加賀美と一緒にいたようだが、この男は何者なのか。
ネックレスが破壊されたのはこの男の仕業なのか。

蒔風の言葉を聞いてしまってはいくら天道ですら無視にはできない。

「いいだろう。話してみろ」

「はいはい・・・態度でかいなぁ、もう」

そんな感じで蒔風が天道に説明する。
ネックレス、ネイティブ上層部の思惑、そして最後に蒔風自身の事。

それらを聞いて、天道はうなづいた。

「信じられないな。だが、信じるに値する話を聞かされては、信じるほかないだろう」

「よかった」

「ま、オレがいればすべて救われる。オレはすべてを救って見せる男だからな」

「ところがどっこい。「奴」はそう簡単に勝てる相手じゃねえ」

「そういうお前の実力は一体どれほどなんだ？」

「世界最強」

「・・・・いいだろう。お前の力を見てやる。ついてこい」

そう言って天道が蒔風を外に連れ出し、その後を加賀美がついていく。
そしてバイクに乗って三人がいきついた先は

「ここは・・・ＺＥＣＴ本部？」

「そうだ。オレはこれからここを叩く。人間をワームに変え、二つの種族の共存をぶち壊す愚か者を叩き潰すためにな」

「いいねぇ・・・わくわくするよ」

そう言って三人が歩いていこうとする。
と、そこに一人のスーツ姿の男がゼクトルーパーをひきつれて現れた。

「天道総司、加賀美新。貴様たちは反逆者だ。そして・・・貴様は誰だ？」

「まず自分から名乗ってくださいよ」

「そうだな・・・私は三島。ＺＥＣＴのお偉いさんだと思ってくれていい」

「じゃあ、どうも初めまして。蒔風舜です。あのネックレスのシステムぶっ壊しました」

「・・・・・貴様が？」

「そうさ。見たところ、あんたも人間やめたみたいだな」

蒔風の追及に天道と加賀美が驚く。
それを言われた三島が眼鏡をはずしながらクックと笑う。

「なるほどな・・・どうやらあの男に言っていたことは本当のようだな」

「！？貴様・・・「奴」と？」

「いいアドバイスをもらったぞ・・・そしてオレは・・・それによって最強のネイティブとなった！！！！」

ゴォオッ！！！！

三島からとんでもない殺気とエネルギーが噴き出す。
その顔が冷静そうな落ち着いた顔から、醜悪な、欲望むき出しの男の顔に変貌する。

「お前たち、見ていろ！！この三人を始末した後に、お前たちもこの力を手にすることになるのだ！！！！！！
うおおお

その体が変貌する。
コオロギの特性を持つネイティブワーム・グリラスワームの姿に変わった
そして命令通りに背後のゼクトルーパー達が戦闘に巻き込まれないように下がる。

「どうやらあいつはネイティブに変わったようだな」

「で、さらには部下の人間もネイティブにするつもりらしいな」

「ここで負けたらこの世界の人間は皆ああなるわけか・・・・・負けられないな」

「いくぞ、加賀美。そしてここでお前の力を見せてもらうぞ、蒔風」

「注文多いのなァ・・・まあいいけど」

「天道!!行くぞ!!」

「ああ・・・おばあちゃんが言っていた。
異なる者がわかりあうこと、それは世界で一番素晴らしい、ってな」

「いいこと言うなおばあちゃん。ネイティブだけの世界じゃ、それは為し得ないからな!!」

「「変身!!」」

《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ！》
《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

三人の戦士と一人の異形が相対する。
普通とは違うエンディング。

世界最強が介入する。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

カブト　～ＺＥＣＴの裏？～（後書き）

アリス「やっとカブト変身しましたね。しかも最後の方で」

いや、すみません
でもガタック好きなんです！！！
エコーのかかった高い声！！
一生懸命に走り回る加賀美！！

オレはそんな加賀美（カ・ガーミ）が大好きだ！！！

ア「地獄兄弟は出ないんですか？」

出す予定ではあるのですが・・・・
蒔風がネックレス壊したから影山は無事です。

神代は救えなかったけど、彼は救えたよ・・・・
地獄兄弟ファンの皆様、安心してください。

ア「その代わり神代・サソードファンを・・・・」

い、言うな！！
それ以上言うと・・・・

おや？こんな時間に誰か来たようだ

ア「次回、ＶＳグリラスワーム。ではまた次回」

俺は、俺にしかなれない。でも、これが俺なんだ。

カブト　～人の無限の可能性～

《《Ｃｌｏｃｋ　ｕｐ》》

カブト、ガタック、グリラスワームがクロックアップし、超高速移動で戦闘を開始する。

「ちょ、いきなり!?オレついてけねーじゃん」

そしてそれを呆然と眺める蒔風。
彼らがなにをしているかは見えている。
見えてはいるが体が反応しないのだ。

（こいつはどうにかしないとな・・・・）

そうしている間にもカブトとガタックが追い詰められる。
ただえさえ強力なネイティブになった三島に、「奴」が手を加えたのだ。
本来なら互角に戦える布陣が崩れている。

「あっ!・・・・危ねえ!・・・そこっ!チクショウ!!こうなりゃヤケだ!思いっ切り動く!」

バサァ

蒔風が動き出す。
その背に翼をはためかせて。

「がっ！」
「ぐお！」

カブトとガタックが地面に倒れ、その姿をグリラスワームが嗤う。

「どおしたぁ！カブトォ！ガタックゥ！我々の造ったマスクドライダーシステムの最高峰はそんなにも軟弱だったのかぁ？」

「な、めやがって・・・」
「くっ、だが、強いのは事実だ」

「ははははははははは！！あの男はクロックアップ出来ない！！助けは来ないと考えブフェッ！？」

ゴガッ！！！

そこまで叫んだグリラスワームの言葉が途切れ、身体が壁まで吹っ飛び破壊する。

「なかなか出来るもんだな。あとは慣らしか」

カブトとガタックの目の前。
そこには右手をニギニギと開いている蒔風がいた。
背中には翼、足元のコンクリは窪んでいる。
振り返って蒔風が片手ですまんの形をとる。

「すまない、遅れたわ」

「蒔風、お前のそれはなんだ？」

カブトが蒔風の背中にある銀白の翼を指差して聞いた。

「これ？翼人の証・・・・ってもわからないか。大きな力を使うときにはこれを出すんだが、その時に生まれる反動とか無駄なエネルギーの噴出口なんだよ。
で、そのエネルギーを無駄なく使ってみました」

「つまり？」

「まあつまりはオレにもクロックアップのまね事ができるというわけで」

ドコゥ！！

「ゴガアアア

になって生き、その過程で得てきた物が昇華すること。人為的に進化する進化は進化に堪えられない弱い奴がすることだ!!

お前が勝手にやるのは構わない。
だがお前の弱さを人類に押し付けるな!
ナメるなよ?人類は、弱くはない・・・・・!!」

「蒔風・・・・」

「・・・・蒔風」

「こいつはオレがやるよ。オレの力、見たいんだろ?」

「・・・・・ふ、そうだったな」

蒔風が一歩前に出て、グリラスワームを不敵な目で睨む。

「さぁて!ギャラリーもいるし!張り切るか!!」

蒔風の翼が消え、手にはこの世界とは別のライダーのベルトが現れる。

《５５５　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ》

「変身!!」

カチッ、ガキッ！！

《Ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

蒔風がファイズに変身し、さらにアクセルメモリーをベルトにセットする。

《Ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

ガッ、ガシィ！

ファイズアクセルフォームにまで変身した蒔風の姿にグリラスワームが混乱する。

「なんだそのライダーは・・・・・俺は知らんぞ！！」

「この世界の誰も知らないさ。
こっちは時間制限があるんでな！手っ取り早く終わらせるぞ！
付き合ってやるよ！１０秒間だけな！

あ、これ士の方だわ」

「なにを訳のわからんことを！！」

グリラスワームがクロックアップしファイズアクセルに疾走する。

《ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

それに合わせて蒔風もスイッチを入れて超加速する。

周りの動きが止まり、二人だけが動くクロックアップの世界へと突入した。

グリラスワームが腕の鉤爪で蒔風を引き裂こうと一切の前触れもなく振るう。

鉤爪が空間を裂き、あまりの速さに通過した後の空気がユラリと揺れる。

蒔風はスライディングしてそれをかわし、その間にエクシードチャージしてポインターにエネルギーを溜める。

そして前回り受身をとりながらグリラスワームの周辺を転がり、六つほどポインターを設置する。

「なっ！？」

「フッ・・・だらあああああああああ！！！！！！」

ドンドンドンドンドンドン！！！！！！

バァン！！！！！！

蒔風のキックが全弾命中し、爆発が起きる。

「どうだ・・・これが人として生きた、ある世界の男の力だ。
そいつも確か人類の進化系だったかなーそういえば」

「ぐ・・・・・あ・・・・・うぐ」

爆発後から三島がヨロヨロと出てきて倒れた。
大の字になって上を向き、完全に気を失っている。
体中にはあざができ、スーツもボロボロ。
整えられた髪型は崩れまくっていた。

「三島さんがやられた」
「どうする」
「やはり人間の方が強いのか？」

周囲のゼクトルーパー達も困惑気味だ。
まさか負けるとは思っていなかったのだろう。

「おいお前ら」

ビクウ！と蒔風の言葉にゼクトルーパー達がどよめく。

「こいつに起きたら伝えておけ。

お前は殺さない。その姿で、どのように生きて行くのか。
そのお前だけの答えを見つけ出せ、とな」

「わ、我々はどうすれば・・・・」

「知るか。いい大人がオレに頼るな・・・・ってもオレの方が実際年上になんのかな？
とにかく、お前らには道がある。
このまま俺らを止めるもよし、家に帰って休むもよしだ」

そう言ってカブトとガタックの方へと歩みよる。

「どうよ、俺の強さは」

「たいしたものだな」

「だろー？行こうぜ」

天道と加賀美が変身を解き、蒔風の後についていく。
すると数名の隊員がヘルメットをとってこちらに向かってきた。

「我々は・・・人のままでも、彼らと共存できるのでしょうか？」

その質問に、天道が指を立て、天に向けながら言った。

「それを為すのが天の道。覚えておけ。それを為す偉大な男の名を。
天の道を往き、総てを司る男の名をな」

「セリフトルナーー」

「蒔風、諦めろ」

「ふ、行くぞ」

「あ、！！先行くなよ！！！」

バタバタしながら進んでいく三人。
それを眺める数名の男達。

彼らになら、この世界の未来を任せてもいいのかもしれないと、そう思える光景だった。

「（スタスタスタスタ）」

「蒔風歩くの速っ！？」

「・・・・（スタタタタタタ）」

「ちょ、天道も待てよ！」

「「オレが先だぁ！！！」」

「よォしテメェら一旦そこになおれ。その真っ直ぐにひんまがった性格どうにかしてやるわ！！！」

「上等だ、やるか？」

「オレに挑むのか？お前ら」

・・・・・・・・心配になってきた彼らであった

と、そこに現れる一人の男の姿。

「あの翼・・・やはりここに現れたか。相棒を救った男・・・・あの男なら俺らに光を・・・・・」

――

――――――――――――――――――――――――――――――

廊下をほどなく進み（ケンカしながら）
途中に現れたネイティブを数名昏倒させ（ケンカの邪魔すんなとばかりに殴られた）
ついに最後の部屋に辿り着いた。

「このシステムは・・・・・」

その部屋には巨大なスパコンが一台。
それをコントロールするバーだとかキーボードだとかがついた機械。
さらに何かがそこにいたのか、大きなベッドがあり、その周辺にはその「何か」に繋がっていたであろうコードが散っていた。

それら機械一式はすべて壊れている。
外的なものではなく何かの干渉によるものだ。

おそらくはこれが人間をネイティブに変えるシステムだったのだろう。

そして最後に、一体のネイティブの死体があった。
近くには千切れたジャケットが落ちていた。

「誰だこのネイティブ」

「このジャケットは根岸さんのものだ」

「じゃあここに寝てたのはそいつか？で、脱出しようと暴れ出したと？」

「いいや。確か加賀美の親父さんの話では根岸はこの計画の立案者だ。それはないだろう」

加賀美の父はＺＥＣＴのトップだ。
だがその上にネイティブによる評議会があり、そっちの方が事実上のトップになっている。
加賀美の父は天道にこの計画を止めてくれるように言ったそうだ。

「じゃあ一体誰がいたんだ？ネイティブだろ？ここにいたのは」

「それは間違いないが・・・・・」

三人が一通り調べるが、一切の痕跡が見つからない。
これではもうすることはない。

三人はとりあえずこの部屋だけは破壊するかとメタメタのグシャグシャにしてから、アンテナを破壊しようとそのビルの屋上へと上がった。

ーーー

「斬って～～（ザシュ）、溶かして～～（ボッ、ドロドロドロ）、冷やしてから積み上げて～～（ジュワアアア・・・・ガラン）」

そんなことを何回か繰り返し、屋上には巨大な鉄の塊が積み上げられていた。

「これどうするよ」

「確か鉄って高く売れんだよなァ」

「おい蒔風、変なこと考えんなよ？」

「おばあちゃんが言っていた。金は・・・必要だ」

「それ本当におばあちゃんの言葉なのか！？」

そんな光景を見ている男が二人

一人はさっき三島戦の後に現れた男だ。

だがもう一人は違う。

「おおおおおお！！！速く早く計算終われ～～～～～！！！
せっかく揃ってんだから～～～。今が好機なんだから～～～！！！
あと、あとはこの作品（せかい）の劇場版だけなのに！！！
しかもよりにもよってこの世界には無いし！！！」

「奴」の世界構築計算終了まで、あと僅か。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

カブト　～人の無限の可能性～（後書き）

アリス「今回は何か言いたいことは？」

う～～ん・・・・

あ、そうだ。

蒔風の武器「十五天帝」は組み合わせ式なので単体で使ったり組み合わせて使ったりしますよね？

ア「そうですね」

単体の時は「火」とか「青龍」とかで

組み合わせて合体させた時は「風林火山」や「獅子天麟」って書きます。

今さらだな～～～～

ア「ホントに今さらですね」

「十五天帝」って書くときは全部組み合わせた形になりますけど、たま～～に鞘に収めた状態で全部を装備したって意味で使うこともあります。

ア「それはあなたがうまく表現すればいいじゃないですか」

すみません・・・・

私の無能を笑ってくださいやっぱ笑わないで泣いちゃうから

ア「否定速いなおい！！！」

いいの～～ほらほら、仕事仕事。

ア「次回、計算終了！！！」

ではまた次回

今、誰か俺を笑ったかぁ？

カブト　～掴む未来、天の道～

蒔風たちはまだ屋上にいる。

天道と加賀美はフェンスに寄り掛かって街を見渡していた。

「なあ、天道」

「なんだ？加賀美」

「本当に人間とネイティブは共存できんのかな」

「なんだ、そんなことを悩んでいたのか？まったく、何度言えばわかるんだ。俺を信じれば、間違いはないさ」

「お前が言うとそうなりそうで怖いよ」

「それに蒔風も言っていただろう。人類は軟弱ではない」とな」

「そうだな・・・」

「おい二人とも！」

「ん？」

「なんだ？」

そこで蒔風が声をかける。

二人が振り返ると蒔風がキラキラした瞳で笑いながらこっちにきた。

「見ろ！超巨大ねりケシだ！！」

「「アホか！！！」」

「本望だッ！」

蒔風が手に持つのは巨大なねりケシだ。
バスケットボールくらいある。
蒔風がさっき座っていた所には消しゴムの空箱とケースが転がっていた。

「ほら見て、うにょーん」

「あーはいはい。で？「奴」ってのはいつ来るんだよ」

加賀美が呆れながら蒔風に聞くと、蒔風はねりケシをグニグニしながら答えた。

よくその大きさをグニグニできるな。

「三島に力を与えたのは「奴」だからな。おそらくこれくらいのタイミングで俺達がここに着くぐらいの計算なんだろうから、そろそろ来るんじゃね？」

だから三人はここにまだ残っているのだ。
下手に街に戻って襲撃されたら面倒だ。
ここなら別に巻き込んでも構わないだろう物しかない。

「ま、もう来るさ・・・ん？ほら来た」

蒔風が少し離れて隣接されているビルの屋上を指差す。
そこには一人の人影があった。

「あれが！」

「そ、変身しとけ。なにが来るかわから・・・・開翼ッ！！」

蒔風の言葉が切れ、開翼した蒔風の姿が消える。

シュッ！バシイ！！

ボテッ、とねりケシが落ちる。
次の瞬間、蒔風と「奴」が別の場所に現れた。

そこは天道の目の前。
「奴」の抜き手が天道の胸の中心に伸び、その腕を蒔風が掴みギリギリのところで止めていた。

「「ッ！！？」」

「ち、やはり体得していたか」

「三島のおかげでな。開翼の条件付きだがクロックアップについて行けるぞ。
天道！加賀美！早く変身だ！！」

「変身！」「変身！！」

《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ！》
《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

二人がカブトとガタックに変身し、蒔風が「奴」を放り投げて下がる。

「奴」が空中で一回転してフェンスの上にスタン、と降りた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「おい、蒔風・・・・」

「動くな、「奴」はどうやらクロックアップを身につけているらしい。元々速いくせにまた速くなりやがった・・・・」

「わかるか。下の所にいいワームがいたからな。取り込んだよ。いや、途中で脱皮されてビビったが、実験体だったからか弱ってて助かった」

「めんどうな・・・・」

「手っ取り早く終わらせるぞ？（フッ）」

「加速開翼（ブーストオン）！！」

「「クロックアップ！」」

《《Ｃｌｏｃｋ　ｕｐ》》

四人が同時にクロックアップし、超加速の世界へと突入する。

「奴」が魔導八天を振るってカブトに斬りかかる。

それを蒔風が獅子天麟で受け止め、それを土台にジャンプしたカブトがカブトクナイガンで真上から撃ち抜く。

だが「奴」に撃ったしたそれは一発も命中せず、魔導八天から分離させた「獣人」ですべてはじいた。
蒔風が「奴」の剣を蹴りあげ、その隙に足払いから倒れ込む「奴」の顔面に肘鉄をぶちかます。

しかし「奴」はと言うと肩と手のひらを地面に付け、そのまま跳ね上がって蒔風の顔面を蹴り飛ばした。
空中に砕けた地面の欠片と蒔風の鮮血が散ってそのまま浮かび止まる。

後ろに飛んでいく蒔風を飛び越えてガタックがダブルカリバーで斬りかかっていき、さらにカブトが背後からカブトクナイガンをクナイモードにして斬った。
「奴」はそれを紙一重で、わずかな隙間に潜り回転してそれを回避し、ガタックに後ろ蹴り、カブトに突きをぶち込んで弾き飛ばす。

ヒヒイロアカネで構築された装甲から火花が散り、二人が転がった。
そこに空中で反転しフェンスを蹴って飛んできた蒔風が「奴」に拳を振るうが、「奴」の踵落としが炸裂する。
肩口にそれを食らいながらも両の足で地面を踏みしめてそれに耐える。

「お？耐えるか？」

「ぐっ、ぶっ・・・・」

「無茶すん、なッ！！！」

ゴグッ！！！！

「奴」がその状態から無動でさらに衝撃を叩き込む。

その衝撃についに蒔風の肉体が限界を越えた。
全身から血を噴き出し、上半身の服が散り、上半身に刻まれた見るだけで激痛に襲われるような傷をあらわにする。
だがその姿を見ていたカブトもガタックも、それが傷だとわからなかった。

その体はすでに血まみれ。
赤黒くなっている故に、傷など見えないのだ。

《《Ｃｌｏｃｋ　ｏｖｅｒ》》

そこでクロックアップが切れる。
それに合わせて「奴」も超加速をやめる。
この状態の蒔風などはすでに翼がしおれている。

そして雨が降った。
そのすべては蒔風と「奴」に振り、その全身を赤に染め、すぐに黒

くなっていく。

「まっ・・・・・」

「蒔風ェェェェェエエエエエエエエエエエエエ！！！

衝撃にビルのガラスがすべて砕け散り、下にガラスの雨を降らせる。
屋上の中心には穴が一つ。
その下には蒔風がいた。
穴から差し込む太陽の光が蒔風を照らす。

ここまでの攻撃でも、蒔風の上体は起きていた。
両膝をつき、上を見上げた状態でボーーーッとしている。
実際には何かを考えるだけの力もないのだ。
その蒔風に「奴」が波動を放とうと腕に黒い力が溜まっていく。

「させるか！！！」

クナイで斬りかかるカブトに中断させられてバックステップでかわしながら小さな黒弾を放つ「奴」
カブトがそれを斬り弾きながら突っ込み、「奴」に肉薄する。

《ｐｕｔ　ｏｎ》「どけぇぇぇぇぇぇ！！！天道ォォォォオオオオオ！！！！！」

ドガガガガガガガガガガ！！！！！！！！

ガタックがマスクドフォームに戻り、両肩のバルカン砲で「奴」を砲撃する。

そして「奴」を引きとめたところでエネルギーを圧縮し、プラズマ火球弾を撃ち爆撃する。

「グおっ！？」

「奴」がその砲撃に少しひるみ、その隙に再びキャストオフ。
カブトとガタックが同時にエネルギーを溜める！！！

《《1，2，3　ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ！！》》

「ライダーキック！！！」
「ライダー、キック・・・！！！！」

ゴォウ！！！！

エネルギー、タオキン粒子が二人のそれぞれのホーンに集まり、それが全身を走り足先に凝縮される。
そしてその二人のキック、カブトの高回し蹴りとガタックの飛び回し蹴りが炸裂する！！！

ガガゴォ！！！！

渾身のキックだった。
並大抵の奴ならばこれで終わる。
だがそれを「奴」は――――掴んで止めた。

「な！？」
「ばか・・・な・・・・・・」

「蒔風は戦闘不能だ。もはや脅威などありはしない。
やることやって食わせてもらうぞ」

ガタックを放り投げ、空いた右手を真っ直ぐに伸ばしてカブトに突き出す。
そしてそれがカブトに迫り・・・・・・

――――――

ＳＩＤＥ　蒔風

あ・・・・・・ここ・・・・・ど・・・・・こ・・・・・

ああ・・・・死・・・・・か・・・・・・・

楽な・・・・・・もんだな・・・・・・・

思ったより・・・・・軽いなぁ・・・・・・・・

世界が・・・・・・・・・やばい・・・・・・・

死ぬ・・・・・・の・・・・・は・・・・・構わないけど・・・・・・

さす・・・・がに・・・・死・・・・ぬわけに・・・・・は・・・・・

・行かないよなぁ・・・・・・

ダメだ・・・・・・・・・動かない・・・・・・・・

視界も・・・・・・・・・動かねえ・・・・・・・・

なにも・・・・・・できな・・・・・・・・・・

ガシィ!!!!

「お前には死んでもらっては困るんだよ・・・・・・
俺たちを光に連れて行ってもらうためになァ・・・・・・・」

だ・・・・・・・れ・・・・・・・・・

「オレか？ただの地獄の住人さ・・・・・・
お前ほどではないがな《Ｃｈａｎｇｅ　Ｋｉｃｋ　Ｈｏｐｐｅｒ！》

俺たちを地獄から連れ出してくれそうな奴を探してたんだよ・・・・・
お前には死んでもらっては困る
今から病院に行くぞ」

だったら・・・・・・・そこよりも・・・・・・
連れて行ってもらいたい場所があるんだ・・・・・・・・

「どこだ?連れて行ってやる。
お前は俺たち以上の地獄を知っている。
お前はもしかしたら俺たちの兄弟・・・兄貴になれるかもしれない
しな・・・・」

はは・・・・・・・
それは・・・・・おもしろ・・・・・そう・・・・・・だ・・・・・・・
・

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ーーー

「よぉ、天道・・・・あの人が頼んできたんだ。助けてやるからよお！！！！！！」

ドガァ！！！

「奴」をその人物が蹴りだす。

その人物とはさっき蒔風と話していた男、矢車想（やぐるまそう）が変身する仮面ライダーキックホッパーだ。

離れたフェンスには蒔風がぐったりと倒れていて、ガタックに担ぎあげられている。

「貴様・・・・・・」

「相棒を助けてもらったんでな・・・・

それにあの人はオレたち兄弟の希望になるかもしれないんだ」

矢車には義兄弟がいる。

影山瞬（かげやましゅん）という青年だ。

彼はなにも知らずにあのネックレスを多く身に着けていた。

故に通常よりも多くのネイティブ波長を受けていたのだが、ネイティブになってしまう直前で蒔風が別の波長でそれを破壊したため、ことなきを得たのだ。

そしてそのとき影山の脳裏に浮かんだのが銀白の翼を持つ男だったのだそうだ。

だが蒔風はこの話を知らない。
意識の飛び飛びだった蒔風には何の事だかわかってはいないのだ。

「ち・・・また厄介な・・・・・」

「オレに・・・・・・は・・・・・最高だよ・・・・・・・・」

「奴」の言葉に蒔風が反論する。
途切れ途切れに、苦しそうに、それでもなんの悔いも残さない声で言った。

「その人は・・・・・オレを・・・・・・助け・・・・・・に、来てくれた。
それは・・・・・・・素晴らしいこと・・・・・・なんだ・・・・・・・
その人も・・・・・・・・天道も・・・・・・・・加賀・・・・・美も・・・・・
皆・・・・・先に進んで・・・・・・・いる・・・・・・・・・・・」

その言葉に天道、加賀美も激が入る。
そうだ・・・なぜここでへこたれる。

この男はここまでなっても戦場に立っている。

ならば、自分たちがもう戦えないのはおかしいじゃないか・・・・・・！！！！

「どけよ・・・・・・・・・・・・・・

そこは・・・・・・・・・

オレたちの・・・・通る未来（みち）だ・・・・・・・・・・・・・」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＡＢＵＴＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～

「そうだ・・・・・俺たちの道はここから先にある。

その道を切り開くぞ！！加賀美！！！！」

「おう！！！！」

カブトと、そしてガタックの目の前にハイパーゼクターが現れ、二人がそれを手に取る。、

ガタックは蒔風に言われてフェンスにもたれさせて下ろし、カブトの隣に行く。

「お、俺にも！？」

「俺たちが掴む未来だ。お前も一緒に未来を掴め！！！！」

「オレは・・・・所詮・・・・」

「お前は・・・・まず吹っ切れ直さなきゃな・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・」

「ハイパーキャストオフ！！！！！！」

「ハイパーキャストオフ！！！！！！」

《ｈｙｐｅｒ　ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ！Ｈｙｐｅｒ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

《ｈｙｐｅｒ　ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ！Ｈｙｐｅｒ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

カブトとガタックがハイパーフォームへと強化変身し、その全身から凄まじいエネルギーが噴き出す！！！

「行くぞ・・・・この世でたったひとつ、確かな事。

それは天の道を往き、総てを司る男、天道総司だ！！！」

「完璧野郎が・・・・・てめえみたいなやつぁ一番癇に障る！！！！！」

「奴」が魔導八天を振るいカブトに突進する。
だがその体が止まる。

「奴」の目の前に蒔風が躍り出たからだ。
その体が魔導八天に貫かれ、その刃が八つにグバッ！！！と展開し引き裂いた。

「完璧な・・・・・奴なん・・・・・か・・・・いないのは・・・・・・・自分のできることと・・・・・・・・・できない・・・・・・・ことを・・・・・・ゲハッ・・・・・・知っている者だ・・・・・・・・だからこいつは・・・・・・・・・・・・まちがえ・・・・・・・・・な・・・・・・」

「蒔風ッ！！！！！」

「「ハイパークロックアップ！！！」」

《《Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ！！》》

二人がクロックアップを越えるハイパークロックアップを発動させる。
その速度はもはや計り知れない。
そのあまりの速さゆえに、多少の時間を巻き戻すほどに！！！！！！
貫かれた蒔風がスーーーと戻っていく。
そしてフェンスに戻ったところで、カブトとガタックがキックを構える！！！
《《Ｍａｘｉｍｕｍ－Ｒｉｄｅｒ－Ｐｏｗｅｒ》》
腰に装着したハイパーゼクターのホーンを倒し、エネルギーを溜めこみ、そして
《《１，２，３》》
「ハイパー、キック！！」
「ハイパーキック！！！」
《《ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ！！！！！》》
ドドドドゴガァ！！！！！！！！

二人の足先からエネルギーが竜巻の用に渦巻き、それが「奴」に炸裂する！！！！！

何が起きたかもわからぬままに吹っ飛び空中に飛んだ「奴」

《Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ》

「ライダーキック！！！」

《ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ！！》

ドゴァ！！！！

その「奴」にキックポッパーが振り下ろし蹴りを叩き込み、さっき蒔風が落ちた穴に「奴」をぶち込んだ。

ヨロヨロと蒔風がその穴に近づき、カブトがその横に並ぶ。

「終わら・・・・せる・・・・・・」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＡＢＵＴＯ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

カブトがパーフェクトゼクターを取り出し、他ゼクターをそこに装填していく。

《ＴＨＥＢＥＥ　ｐｏｗｅｒ―ＤＲＡＫＥ　ｐｏｗｅｒ―ＳＡＳＷＯＲＤ　ｐｏｗｅｒ―Ａｌｌ　Ｚｅｃｔｏｒ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！！》

ゼクターのパワーが装填されて「奴」に向ける。

その先端に竜巻状にエネルギーが充填され、その振動が周囲を振るわせる！！！！！！

さらに蒔風が十五天帝を持ち、それを「奴」に向けた。

するとその先端にも同じようにエネルギーがためって行き、さらに大気を轟かせる！！！！！

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

「お・・・・・おぉぉ・・・・・・あああああああ・・・・・・・・・！！！！！！！！」

ボッ！！ドギュゴアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

引き金が引かれ、そのエネルギーが解き放たれる。

二本の竜巻となって打ち出された砲撃は周りを巻きこみ、「奴」に到達する。

二本の奔流に巻き込まれ、身体が引きちぎられ、「奴」が霧散する。だが破壊はそこで終わらず、地下深くの研究所まで届き跡形もなく吹き飛ばした。

本来なら一発で山の半分を消し飛ばす者が二本もあり、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫで強化されているのだから、これでもまだ足りないところだ。

しかし蒔風の意識がそこで途切れ、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが切れる。砲撃が止み、崩れ落ちる蒔風をガタックとパンチホッパーが支える。

「このビルはもう駄目だな」

「急げ！！！こっちだ！！！！」

「蒔風！！死ぬな！！！！！」

「想像以上の地獄・・・・ここから抜け出す術を知っているのか・・・・」

四人がそこから脱出する。

死にかけの翼人を一人抱え、クロックアップも使えぬまま、必死に。

ーーー

「「奴」はこうしてる間にも他の世界に・・・・・」

「その体で行っても死ぬだけだ！！！」

「世界に行くたびに二週間ほどの空白があるから・・・・・その間に・・・・・体力は・・・・・・」

「怪我はどうなる！！」

「治るが・・・・・そこまでは・・・・・・な」

「だったらここである程度は治せ。せめて血液量は回復させろ」

「う・・・・・・・」

天道の言葉に蒔風が言い返せなくなってしまう。

そもそもこのまま天道を振り切る体力も無いのだ。

従うほかないだろう。

――――そうして二日後――――

「ありがとな。マシにはなった」

「礼はいらん。早く行け」

「蒔風!!がんばれよ!!!!」

「「うぉおおおおおおおおおおおお!!!!兄キィィイイイイイイ!!!!!!」」

「あの二人は大丈夫か?」

「大丈夫だろう」

「じゃあ・・・・な」

こうして蒔風が足早にゲートをくぐる。

次の世界では「奴」が活動しているかもしれない。

この休息が吉と出るか凶と出るか・・・・・・

ーーー

カブト　～掴む未来、天の道～（後書き）

アリス「蒔風死にかけ！？」

結構ヤバかったなぁ・・・・・・

【仮面ライダーカブト】

構成：”ライクル”８０％
　　”フォルス”１０％
　　”ＬＯＮＤ”１０％

最主要人物：天道総司

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：ガタックにハイパーゼクター＆蒔風にハイパークロックアップ付加（今回発動不可）

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：蒔風の十五天帝に「ハイパーマキシマムタイフーン」を付加、二人で攻撃

ア「結局「奴」がクロックアップについていけたのは何でですか？」

描写しきれなかったのでここで言いましょう。

擬態天道です。

でもそれらしいシーンを出せなかったのと、蒔風フルボッコだったので精一杯でした・・・・

すみませんでした

ア「そしてやっぱりいいとこ兄貴（笑）
そういえばなんで蒔風最後にああ呼ばれてたんですか？」

それは次回さ！！

ア「と、言うことは・・・・・・」

次回！！久しぶりの番外編！！！！
多分二つに分けるかも
あいだ空けすぎた・・・・・・

ア「素で忘れてましたもんね」

うっさい！！

ア「次回、ひぐらし～電王編！！！」

もしかしたらこれ以上かもしれませんし、書かない世界もあるかもです。
ではまた次回

蒔風「輝ける一ページを・・・・・・」

番外編　～ＢＡＮ☆ＧＡＩ～（前書き）

なんだこのタイトル

番外編　～ＢＡＮ☆ＧＡＩ～

【ひぐらしのなく頃に】～腹下し編～

「と、いうわけで部活出張編の開幕だぁ～～～！！！！！！」

「「「「「おぉーーーーー！！！！！！」」」」」

これは――――

蒔風たちがあエンジェルモートで騒いでる時の事。
唐突に始まった部活の出来事である。

「どんとこいだよ！！！」

「どんな勝負でも受けて立ちますわ！！！」

「ふ、オレが最強だ」

「蒔風さん、今回は一位独占させてもらいますよ！！！」

「みんな僕の前にひれ伏すことになるのです、にぱー」

「あぅあぅあぅ～～～～～」

気合十分、士気高揚。

そんな状態を見て魅音がうんうんと頷く。

「良きかな良きかな！！じゃあ今日のお題を発表するよ！！！！！」

「へへっ。ま、エンジェルモートでの部活は決まってるからな！！！」

「え？そうなん？」

「発表！！！『食いつくせ！！！デザート大食い競争』だぁ！！！！！」

ビシリ！

蒔風の表情、言動すべてが固まった。

この男、ある程度ならいいがそこまで甘い物は得意ではないのだ。

「魅音さん！！！棄権します！！！」

「却下します！！！」

「そうかっ！！」

「そうだッ！！」

ダメだった・・・・・

「敵前逃亡之最善策也ッ！！！！（ダゥッ！！！）」

「逃がしませんわよ！！！！（グイッ）」

「ギャアアアアアアアア！！！！！い、今！！今なんか！！！
彫刻刀が落ちてきたんですけど！？」

「ち！！仕留め損ないましたわ！」

「おかしい！！目的が足止めから数歩先に進んでいる！？」

「じゃれてる沙都子ちゃんかぁいい～～～」

「も、もうレナさんったら！！じゃれてなどいませんわよ！！！」

「沙都子は悔しいのですよ。かわいいのです。あぅ！」

「待て！！それでオレが被り被害は！？」

そこで蒔風の肩にポン、と手が置かれる。
振り返ると圭一が達観したような顔をしてこう言った。

「諦めましょうぜ！！！」

「てめえは何キラキラした顔で言ってんだ！？あれか？Ｍか！？」

「蒔風さんも似たようなもんじゃないですか～～～」

「は？」

「『Ｓ』ｈｕｎ　『Ｍ』ａｉｋａｚｅじゃないですか！！！」

「イイヤガッタナ！！！！！！」

蒔風がウェイトレスのお盆を掴んではたき倒そうと圭一に振り下ろす。
が、それよりも早く詩音のお盆が蒔風の顔面に命中した。
縦に。

「これ以上お店で騒がないでください！！！！部活をやるならさっさとやる！！」

「はい・・・・・」

「あっはっはっは！！じゃあ、大食い大会、始め！！！」

魅音の号令と共にケーキやらなんやらが運び込まれてくる。

（まずい・・・・オレは基本的にはそんなに食えんぞ・・・・・・！！！！）

「ショートケーキです」

「くっ、いきなりか。フルーツは苦手なんだがなっ」

バクリ、と食べきる蒔風。

苦手と言ってもこの程度の甘さなら大丈夫らしい。

「次っ！！」

「ジャンボマウンテンパフェでございます」

ゴトリッ！！

「ねえ！？飛ばし過ぎじゃない！？置くときの音がパフェとは思えないんだけど！？」

「黙って食うのですよ。にぱ～～」

「ちくしょおおおおおおおお！！！！！」

ガッツガッツガッツ！！！！！

「食ったどーーーー！！！！！ゲプゥ・・・・・・・」

（も・・・もうそろそろ無理・・・・）

「プリン丼です！！！！」

「（ガタン！！）シェフを呼べえええええええええええ！！！！！！！！」

「舜さんうっさいよ！！！！」

「なんだよこれ！！！なんだよこれ！！！もっかい言っとくよ？なんだよこれ！！！！」

「プリン丼です」

「なんで！？どうやってできたこのコラボ！？丼とプリンはどこで出会った！！！出会った曲がり角を教えろやアアアアアア！！！！！どんなカップルだってできるはそんなとこ！！！！！！」

「詩音、あんなのメニューにあった？」

「いいえ？なんかいつの間にか厨房にあったみたいですよ？」

「ん？お椀に何か書いているね・・・・・シャマ・・・・」

「シャマアアアアアアアアアアアアアル！！！！！！！！！！！！！

畜生！！異次元か！？別次元のか！！！世界は一体どんな・・・・・・

（ハラリ）なんだこれ？」

＜本人に直達！！！＞

「いらねーーーーよオオオオオオオオ！！！！！！

だがこれなら何とかなる気がするぜ！！！（バァーーーン！！！！）」

「お？どうするんだい？」

「魅音！！醤油とってーー！！！！」

「はいよっ！！ってまさか！！！」

「そうだ！！これを・・・・かける！！！」

「おおっ！？」

「そして食えばプリン丼がなんとウニ丼に・・・・ブフホッ！！！！！」

「舜さーーーーん！？」

「やっぱ・・・・・ダメやん・・・・・・・（ガクリ）」

そこで蒔風が白眼を剥いてぶっ倒れた。

結果としてはレナの圧勝。
二位に沙都子、三位に梨花と羽入
四位に圭一でビリが蒔風だ。

魅音は解説でちゃっかり試合には関与していなかった。

「甘ママママママママアアアア・・・・・・・・・」

【仮面ライダーディケイド】～ＶＳ海東～

「君のその剣、天剣・十五天帝は僕が貰う！！」

「だーかーら！！これは持ち主を選ぶから無理なんだってほら！！（ポイ）」

「（パシ！！・・・・・パシュン！！）あっ！！くっ・・・・・どうしても無理なのか！？」

光写真館での１コマ。

海東と蒔風が十五天帝をめぐって言いあいをしていた。

確かに蒔風の十五天帝はとんでもないお宝だ。

なにせ「世界四剣（しけん）」のうちの一つだ。

「海東、なんだその「世界四剣」ってのは」

会話を聞いていた士が海東に訊いた。

「そんなことも知らないのかい？
「世界四剣」とはまさに世界に散らばる四本の至高の剣のことさ。
ま、僕もそれ以上のことは知らないよ」

「なんだ。お前も知らねえんじゃねえかよ」

「そんなことはどうでもいいんだよ。とにかく僕はこの剣が欲しい！！！」

「無理だってのよ！！！」

「どうしても！！！」

「無理だ！！」

「お前らここでおっぱじめる気か！？」

「でも・・・でも！！！」

「だったら海東、これをやるよ」

蒔風が懐から何かを取り出す。
それは小さな瓶に入ったパウダーだ。

「これぞ世界中を旅し、２０００の技を持つ男の作った伝説のパウダーだ！！！」

「・・・・・いいのか？」

「もっていけ！！！！」

「ふ・・・・・（スタスタスタ・・・・・）」

「おい蒔風、あれあげてもいいのか？」

「構わんさ。レシピは持っているしな。それにあれ舐めたら大変だぞ？」

「は？」

「ンゴギョオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？？？？？」

「海東！？」

「舐めたか・・・・・これでこの剣への執着を忘れてくれるといいなぁ・・・・・」

士がおそるおそる廊下を覗くと、床に倒れ伏してビクンビクンしている海東がいた。
蒔風がケースを回収し、そっとしておいてやろうと言ったので、士も放っておいた。

何が恐ろしかったかと言うと、目覚めた後の海東は蒔風の言う通り剣への執着を忘れていたことだ。

【仮面ライダー電王】～蒔風、王子と出会う～

蒔風が過去に飛ばされて浮浪生活をしている時のこと

「さ・・・・・寒い・・・・・・」

これまでの三ヶ月は暖かかったからよかったけど、今は冬だ。
雪まで降っている。

「獄炎・・・ほぁあああ・・・あったか～～～～」

そんな状況でも何とかやっていけるのがこの男。

以外と逞しいのである。

「うぅうむ。今日はどうしよっかな～～」

そう言って街をぶらつく蒔風。

最近になって何だか事件が多い気がするが、あまり関われない。

告る為のシチュエーション作りにチンピラやとっている男とか、未来の自分がやってきてのドッペルゲンガーとか、どっかの泥棒が走り回っているとか。

「でも下手に手を出して未来変えたら大変だし・・・・めんど～～～～」

とか言いながらファミマで買った肉まんを頬張る。うまい。

と、そこの蒔風の背後に黄色い光が接近し、入り込んだ。

瞬間蒔風の目の色が変わり、髪に白いメッシュが入った。

「降臨！！満を・・・ぬふぉっ！？」

バシュン！！

だがすぐにその光は飛び出、地面に転がる。

「っあ!!なんだよいきなり・・・あんた誰?」

「む?我が名はジーク。呼ぶ時は気軽にプリンスでよい。それにしてもお前、面白い中身をしているな?」

「オレ?ああ、少し見たのね?やめとけやめとけ。オレが了承してもいないのに勝手に入ると気がふれるぞ」

これがジークと蒔風の遭遇。
なんでも蒔風の食っていた肉まんを喰いたかったのだそうだ。

「だがしかし私の入り込めないような人間!!私と同等以上か!!」

「人間やめてんだけどなぁ・・・オレ」

「さらには翼も見えたぞ?」

「ああ、翼人だからね」

「素晴らしい・・・・我が友人として認めよう!!!光栄に思え!!!」

「さいですか」

「では我がお供にも合わせよう。ついてこい」

「どんな奴だよ」

「なに、赤いのと青いのと黄色いのと紫のだ」

「それって野上達じゃねえの!?」

「ふむ・・・そんな名だったな」

「それには合えねぇなぁ・・・残念だが」

「事情があるようだな?聞こうではないか!!我が初の友人よ!!!」

~蒔風説明中~

「事情は分かった!!手伝おう!!!」

「その時が来ないと意味ないぞ?」

「なに、私が暇な時遊んでくれ」

「お前もうどっか行けよ!!!」

「私がどこかに行く必要はない。世界の方が動くのだからな」

「はぁ・・・じゃあその時まで待ってますよ・・・・・」

「ふむ、その心構え、ますます我が友人よ!!!」

そんなこんなでさらに七ヶ月。
この二人は時間を過ごした。

【リトルバスターズ！】～練習中～

「いくよーーー！！！」

「よっし！！こい！！」

ビュン！！ブワッ！！！！バシィ！！！

「ストライク！！なんだよ蒔風、まだまだだな」

「うーーん。タイミングはいいと思うんだけどな」

「いや、高さもタイミングもいい感じにずれてるぞ」

蒔風のバッティング練習。
理樹が投げ、蒔風がバットを振るい、真人がキャッチャーだ。
さっきから何度もやっているが、いまいち命中しない。

「はぁ・・・・・・」

「諦めんなよ舜！」

「そうだよ！だんだん近づいてきてるよ！！」

「ふぅ・・・・よっし！！やるか！！」

――十分後――

「やっぱダメだぁ・・・・・・」

「気にすんなよ。バットが顔にめり込まないだけオレとしては安心だ」

「じゃあ今度は山なりに投げるよ？」

「それなら打てるかもな・・・・・」

「いくよーー（ポーン）」

「・・・そこか!?（コキン!!!）」

「やったよ舜!!命中だ!!!」

「まだまだだけどな」

ボールは当たったが理樹の方に真っ直ぐ転がって行っていた。

「それにしても最近まで恭介がリーダーだったんだろ?」

「そうだよ?」

「今はお前がリーダーだっけ」

「うん」

「すげえなぁ・・・オレにリーダー気質はねえからよ。もう恭介とタメ張れんじゃねぇ?」

「そ、そんなぁ。僕はまだまだだよぅ（テレテレ）」

「恭介はいつもどんなふうに練習してんだ?」

「そうだなぁ・・・えっと・・・こんな感じだね!!（ポーン）」

「せいっ（コキン!!）」

「（パシッ！）なんだか物欲しそうな顔してるねっ。球筋に出ているよ！！」

「ブハッ！！」

「み、みおちゃん！？だいじょーぶ？」

「も、問題ありません・・・」

「次行くよー！！（ポーン）」

「ハイっ！！（コキィン！！）」

「（パシィ！！）カルピスの原液が大好きだって？球筋に思いっきり出てるよッ！！！！」

「（ドシャッ!!）グ、ぐフゥ・・・・・」

「わ、わふーー!?西園さん!?へ、へるぷゆーですかっ?」

「ま、まだ死ねません・・・・（ヨロヨロ）」

ポーン、カキン!!パシィッ!!!

「バットの調子が最高だね!!見てればわかるよ!!!」

「・・・・・・・」

「みお?どーし・・・う、うにゃっ!?み、美魚が立ったまま死んでるぞッ!?」

「あっち騒がしいなぁ・・・・」

「まあ、これがリトルバスターズだからね」

いいのか？これで？

【仮面ライダー５５５】～激突までの経緯～

「どっこかな～～ファーイズーーー」

蒔風が公園をうろうろしながら最主要人物を探す。

手がかりもなくいきなりここに飛ばされたってことはこの近くにいるはずなのだが・・・・・

と、ふいに足元に野球ボールを見つける蒔風。

誰かの忘れもののようだ。

「ちょっと練習するか？」

そう言って蒔風がボールと木の棒を持ち、打とうとする。
ボールを上に放って木の棒を構えて振るう。

バシッ！！！

「当たった！！！ってやばい飛んでく！？」

木の棒の突起に当たったのか変な方向にすっ飛んで行ったボール。
それを追って走り出す蒔風だが、すぐ近くの広場で爆発音がした。

蒔風はどっちに行こうかと悩みながらあっちそっちに首を交互に振り、結局は音のした方に向かった。

・・・ひゅるるるるる・・・・ゴン！！

ボールはと言うと、バイクにぶつかった。
そのバイクが蒔風にラリアットをぶちかますまであと２４秒。

ピッドン！！ドン、ドン、ドン・・・・・・・・・

【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】～アーチャーの固有結界講座～

「――以上が固有結界と言う魔術の構成だ」

蒔風が倒れているうちのこと。

アーチャーが蒔風に固有結界の説明をしていた。

「なるほどねぇ・・・・」

「本気でやる気か？確かに君には素質があるのは確かだ。翼人だからな。だがお勧めはしないぞ？」

「大丈夫だよぉ。生き物の理からも外れてんだからさ」

「そ、そうか？」

「あれだなぁ、ちょくちょく士朗や真人の力で感覚を掴んでから俺

自身のを作ってみるかなぁ・・・・・・」

「あまり根を詰め過ぎるなよ？」

「そこら辺は大丈夫だって・・・・・・やってみるぞ？」

「ああ」

「はぁっ・・・・・・」

蒔風がとりあえず詠唱なしで軽くやってみる。
身体が淡く光り、少しだけその空間の毛色が変わる。

「う、うぉおお！？」

「！！？？ど、どうした？」

アーチャーの声に驚いて蒔風が術を解いてしまう。

「い、いや・・・何か別の空間が見えてな・・・・どうやら君の固有結界の副産物は幻覚のようだな」

「幻覚？」

「厳密には少し違うみたいだがな。なにかイカレタ世界が見えたぞ？おそらく君の心象世界の断片だろうが・・・・」

「ということはオレの中身はぐにゃぐにゃってことか？いいねぇ。でも本気でやると気が狂いそうだなぁ・・・・・」

「狂気ぐらいどうにでもなるだろう、君なら」

「だけどさぁ・・・・コントロールだな、うん」

「まあ、頑張りたまえ（概念を教え、やり方を少し享受するだけでここまでできるとはやはり翼人だな）」

「おう！！どんな世界なのかな～～～？」

【仮面ライダーカブト】～またオチ（笑）～

蒔風がこの世界を出る前日。
つまりは戦いから翌日の事。

「アニキ！！身体の調子はどうだ？」

「アニキ！！食いたい物はなんだ、作ってやるよ」

「なんで年上にアニキ兄貴と慕われなきゃならんのだ・・・・」

天道家の客室のベッド
天道は買い物に出ていて今はいない。

その代わりと言わんばかりに矢車と影山の二人が蒔風の世話をしていた。

蒔風は何が何だかわからない。
話は戦いのときに矢車がしていた気がするがあんな状況では聞き取れなかったのだ。

しかし今さら聞くのもなんだかな～～と言った感じだし、聞き出そうとしたら「いいからいいから」と流されてしまった。

加賀美はいないし、天道もさぁ？と言った感じだ。

「で、あんたはあれだけの地獄を知って今も光の中で生きている」

「俺たちは闇に堕ちた地獄の住人だ。だけどアニキがアニキと慕うあんたなら光に迎える方法を知っているはずだ！！」

「「教えてくれ、大兄貴！！」」

え？なんなのこの人たち？
とも思ったが、蒔風は話を始めた。

「地獄・・・ね。確かに知ってるな・・・・・」

「そうか・・・・・」

「俺の世界が壊れたんだ。目の前で友人が叩きのされた。何度も死を見た。二度もある世界に負け、絶望しかけた」

「それでもあんたが踏ん張っているのは・・・なぜだ？」

「・・・いるからだよ」

「誰が？」

「自分を信じてくれている人が、な。そしてその皆とまた会いたい、笑い合いたい・・・
たったそれだけの想いが、オレを頑張らせてくれるんだよ。
一人で回る世界の旅だが、一人で戦うことはないしな」

「誰か・・・か」

「俺たちには・・・」

「となりを見ろ。その相手はちゃんといるだろ？
それに地獄のままでもいいじゃねえか。
仲間がいるなら、そのために力を振るえ。その行動は素晴らしいこ

とだ。
その際に使われる力なんか関係なく、な」

矢車と影山がお互いを見あう。
そして何かに気付いたように言った。

「相棒、勝手に死のうとするなよ？」

「兄貴も、俺たちは兄弟だからな！！」

「ふ」

ガシッ！！と二人が熱い握手を交わす。

「一件落着・・・・だな」

「蒔風、これはなんだ？」

と、そこに天道が顔を出す。
その手には何かが乗った皿がある。

「んあ？ああそれ？オレの生活セットに入っていた料理だよ」

「どうした天道？・・・・そ、その料理は！！！」

「知っているのか兄貴！？」

「あ、アワビの塩釜蒸しだ・・・・・！！！！」

「え？」

「そうだ、しかも素晴らしい。
見ろ、この肝は全く傷ついていない。それでいて鮮度は最高とみた・・・・・
時間をかけずに素早く肝を取り出した証拠だ。
さらに塩の量、焼く温度、時間、総てをとって完璧だ・・・・・・
ただ惜しむらくは素材だな。
最高級の物ならばさらに味が出ただろう」

「ってことはそれ、作り手の方は完璧ってことか？」

「ああ・・・・少なくともこれに関しては文句はないな。
基本に忠実だ。教本に乗せたいぐらいだ」

「そんなに・・・・・」

「大兄貴！！オレがもっとうまいもん作ってやる！！！」

「ほぅ・・・オレが好きなのは辛い物だ。しかも辛ければ辛いほどいい」

「兄貴!!だったら・・・・・」

「おう・・・味あわせてやるよ・・・・大兄貴にオレの地獄の麻婆豆腐をな!!!!」

「だったらこのパウダーを使いな!!オレ様特性激辛スパイスだ!!!!」

「ああ・・・行くぞ相棒。手伝ってくれ!!!!」

「待ってろよ大兄貴!!」

バタン!!!!

「行ったなぁ・・・・・」

「あれ、どれくらい辛いんだ?」

「ん?もう一つあるから舐めるか?」

「貰おう（ペロッ）・・・・・ッッッ!!!!?????」

「お?」

「ブオオおオオオオオオオオオオオオ!!!!!?????」

「耐えきれないか・・・・・・」

その後、天道はずっとビクンビクンと倒れ伏していた。

to be continued?

番外編　～ＢＡＮ☆ＧＡＩ～（後書き）

アリス「なんですかこれ？結局全部じゃないですか」

いや・・・なに書こうかと悩みながらキーボード打ってたらこんな風になった・・・・

ア「しょーもないですね。と、言うわけで今回は番外編でした」

ＳＰＩＲＩＳはすぐに消えましたし
ＡＩＲもそんな感じでしたよね。

なのはＡ'ｓは長かったからなぁ・・・・

大体これくらいしか無かったよ・・・・・

ア「次は本編でしたっけ？」

そうですね

の！！はずでしたが！！！

ア「オァチャア！！！」

ノリやテンションが続いたので、番外編を続行します！！！！

ア「もーいや！！！次回番外編！！カオス！！！！」

蒔風「もーーーいーーーもん。
頼まれたって後書きなんか出てやらない！！！」

番外編　～究極の非武装～（前書き）

この小説はこの曲を聴きながら読んでいただきたい！！！！
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ１４４６２３１
もしくは
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝１０ＥＢｇｇｚ１－Ｊｇ

番外編　～究極の非武装～

世界と世界のはざまの空間。
現在蒔風はここで二週間の空白時間を過ごしている。

そこは一面灰色で、地面、天井、壁などの物は一切見えない。
端から見れば蒔風は宙に浮いてるように見える。

だが実際に立ってみるとそこにはしっかりと地面がある。

そこで蒔風はまるでそこに椅子があるかのように座り込み、頭を抱えて俯いた。

「あぁ～～～～～～。くっそぉ～～～～身体ボロボロだよ・・・・・・・
もうヤダよ痛いの～～～～～。めんどくさくなってきた・・・・
ってもいざやり始めると全然億劫じゃないんだけどね・・・・・・・

いい加減・・・・もう・・・・・・・」

だんだん蒔風がくじけてきた。グダってきた。
だがこれは毎回毎回あることだ。

この男、いろんな世界ではかっこよく見栄切ってるつもりだが実際にはかなりのグータラだ。

「あーーーーーーーーーー！！！！ぐごーーーーーーーーーーーー！！！！！」

蒔風が大声を出してじたばたと足踏みしだす。
そしてついにしゃがみ込んでしまった。

と、そこに何かが現れた。

？？？

「やった！！！身体はボロボロだ！！！！」

蒔風

（後ろに誰かいる！？）

バッ！！！！

アーチャー（はっぱ一枚）

「ここまでくれば、あとはもう休むしかないぞ！！！」

蒔風
「！？」

？？？
「やった！！！」

蒔風
「（キョロキョロ）ど、どこだ！？」

ザフィーラ（アーチャーの隣・はっぱ一枚）
「その休息が終われば、君はさらに強くなっているぞ！！！！」

蒔風
「！！！？？？？」

タタタタタ！！！！

ハクオロ（はっぱ一枚）
「やった！！！これまでの怪我が、無駄にはならないぞ！！！！」

士（カード一枚）
「重要なのは、これまでの苦難じゃなくて、これからの幸福だろう！？！」

上条（はっぱ一枚）
「やった！！！これからの世界が、とてもやりがいがある物になるぞ！！！」

富竹（はっぱ一枚）
「嫌なことだったね！！！でも、自分自身に打ち勝ち、さらなる強みへと羽ばたけるんだ！！！」

蒔風
「あんた富竹さん！？ってかなんでオレ知ってんだあんた！！！！？？？？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

六人
「「「「「「やった！！！やった！！！やった！！！やった！！！」」」」」」

アーチャー（はっぱ略）
「よぉーーし！！！みんなでいっちょ、蒔風を応援しようぜ！！！！」

五人（ずっとはっぱ略）
「おぉーーーーーーー！！！！！」

ピルルルルルルルルル・・・・・・・・・

蒔風
「ハッ！！背後っ！？ウヲ何だこのステージ！？
てかいつの間に観客！？ちょっと待てなんだこれ、みんなもいるぞ！？」

ヒューーーヒューーーーーー
ワアアアアアアアアアアアアアア・・・・・・・・・・・・・・・

♪～～～～～～～～～

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

ヤッターーーーアーーーーー・・・・・・・

ヤッターーーーアーーーーー・・・・・・・

ザフィーラ（はっぱ一枚はこいつらだけ）

「Ｇ！！」

上条

「Ｒ！！」

土、ハクオロ

「ダブルＥ！！」

富竹

「Ｎ！！」

アーチャー

「ＬＥＡＶＥＳ！！！！！」

ザフィーラ（皆誇りある笑顔で）
「Ｇ！！」

上条
「Ｒ！！」

土、ハクオロ
「ダブルＥ！！」

富竹
「Ｎ！！」

アーチャー
「ＬＥＡＶＥＳ！！！！」

フゥーーー

蒔風を除いた観客含め全員（以下全員）
「ヒューヒューヒューヒュー！！！！！
オス　オス　オス　オス！！！！」

アーチャー
「・・・・・・アィ！！」

六人
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

（ステージに上がって）明久、雄二（以下同）
「大学～～～合格～～～～～」

フェイト
「執務官就任～～～～～」

ベナウィ、クロウ
「葉っぱ一枚あればいい～～～～」

富竹
「生きているからラッキーだ～～～～～！！！！！！」

全員
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

圭一、レナ、魅音、梨花、沙都子、羽入、詩音、悟史
「事件解け～～～つ～～～～」

こなた、かがみ、つかさ、みゆき
「日本代表～～～～」

昭和ライダーズ
「やんなるくらい健康～～～だ～～～！！！」

上条
「ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｓａｙ！！」

全員
「”ヤッター！！”」

裕理、ましろ
「世っ界キューキュー～～～～」

クロノ、ユーノ
「でも！（クワッ）」

良太郎、モモ、ウラ、キン、リュウ
「明日はワンダホー～～～～」

岡崎、渚
「いじわるされても～～～～～」

響鬼、威吹鬼、轟鬼
「ふとん入れば！！！」

全員（最前列にあの六人）
「グー！！グー！！グー！！グー！！
パス！！パス！！パス！！パス！！」

なのは
「おはよーーー！！！！！！！！」

全員
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

キョン、古泉
「９時間睡み～～～ん～～～～」

五代、津上、城戸
「寝起きでジャンプ！！！」

ユウスケ、夏海、海東
「どんないいことあるだろう～～～？」

富竹
「生きていたからＬＵＣＫＹだ！」

六人
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

エルルゥ、アルルゥ、トウカ、カルラ
「君が変われば～～～～～」

ハクオロ
「世界も変わる～～～～～」

上条
「丸腰だから最強だ～～～～～！！！！！」

土朗、セイバー、凛、ランサー
「まっすぐ立ったら！！！！！」

ザッ！！ビシィッ！！！！！

全員
『『『『『キモチィーーーーーーーーーー！！！！！』』』』』

一方通行、打ち止め
「フー！！フー！！フー！！フー！！」

イリヤ、バーサーカー（雄叫び）
「オス！！オス！！オス！！オス！！！」

応龍、アメリ、鵺、美冬
「Ｆｏー！！Ｆｏー！！Ｆｏー！！Ｆｏー！！」

ハルヒ、キョン
「オス！！オス！！オス！！オス！！！」

天道、加賀美、矢車、影山
「お水飲んだらうめぇー！」

全員
「やったーーーーー！」

はやて、ヴォルケンズ
「日に当たったらあったかーい！」

全員
「やったーーーーー！！！」

鈴、クド、小毬、来ヶ谷、西園、葉留佳、沙耶
「腹から笑ったらおもしれぇー！！！！！！」

全員
「やったーーやったーーーーー！！！！！」

観鈴、往人
「カラス飼ってみたらかわいい！！」

全員を超えた何か
『『『『やっっっったぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！』』』』

アーチャー
「Ｉｔ'ｓ　ｓｏ　ｅａｓｙ～～」

上条
「Ｈａｐｐｙ　ｇｏ　ｌｕｃｋｙ」

クラウド
「Ｗｅ　ａｒｅ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ～～～」

富竹
「Ｗｅ　ｄｉｄ　ｉｔ！！！」

全員（振り付けは最初から完璧）

「ヒュー！！ヒュー！！ヒュー！！ヒュー！！
オス！！オス！！オス！！オス！！」

全員
「・・・・・アィ！！」

六人
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

巧、海堂、三原
「すれ違いざま～～～～」

謙吾、真人、恭介
「ほほえみくれた～～～～」

瑞樹、美波、秀吉
「２度と会えなくたっていい～～～～」

全員（蒔風を指さして）
「君がいたからＬＵＣＫＹだ～～～～！！！！」

上条
「体調不調～～～」

士
「自信喪失～～～」

インデックス、美琴、黒子
「リセットさえすりゃ最高だ～～～～！！！」

理樹
「みんないるから」

全員（ビシィ！！！！）
「楽しぃーーーーー！！！！！！！」

六人（後ろでみんなもあのポーズ）
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

理樹、観鈴、クラウド
「世界最強～～～～」

なのは、フェイト、はやて
「勝ち続けて行け！！！」

アーチャー
「葉っぱ1枚あればいい～～～
みんな一緒だ」

全員
「ＨＡＰＰＹだぁ！！！！！」

全員
「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

みくる
「息を～～～吸える～～～～～」

長門
「息を～～～吐ける～～～～～」

ハクオロ、富竹、士

「やんなるくらい健康だ～～～！！！！」

女全員
「ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｓａｙ！！！！」

男全員
「ヤッターーー！！」

全員（蒔風ステージに連れ込まれる）
「Ｇ！！
Ｒ！！
ＥＥ！！
Ｎ！！
ＬＥＡＶＥＳ！！
Ｇ！！
Ｒ！！
ＥＥ！！

N！！

ＬＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＡＶＥＳ！」

タラランタラランタラララララララン♪

全員
「バイＱ～～！！！！！」

キャーーーーーーーーーーーー！！！！
Ｆｏｏｏ

蒔風
「どうした恭介!!クロノ!!!」

恭介
「ひ、姫たちが・・・・・」

蒔風
「姫?ヒロインか!!!」

クロノ
「ドンキー真人にさらわれてあの城に!!!!!」

蒔風
「なっ、なにぃ!?
ハッ!!振り向けばそこにまるでゲームそのままのピ○チ城が!!!」

クロノ
「行って・・・くれるかい?」

蒔風
「当然だ!!助けに行ってくる!!!」

恭介（２１）
「まて!!お前に仲間を連れてきている!!!彼らと共に行け!!!」

蒔風
「どんな奴だい?」

六人
「ヤッタ！！！！！！」

蒔風
「こいつら！？」

アーチャー
「さぁみんな！！ヤッタの布陣で蒔風を守るぞぉ！！！」

五人
「アイィ！！！！！！ヒューーーーーヒューーヒューーーーーー！！！！！」

蒔風
「まあいい行くぞ！！！！」

六人（三人は蒔風をあの歩き方でついていく）
「アイィ！！！！」

蒔風
「なんだかんだであっという間だぜ！！！！」

六人（もう三人は蒔風の周りを回りながらヤッタ！！ヤッタ！！）
「ヒューーーーーーーーーーーー！！！！！！」

蒔風
「助けに来たぞ！！！
お？皆気絶してるのか」

理樹（いつの間にか登場）
「さすがは舜だ！！！」

明久（こいつもいつの間にか）
「やっぱりかっこいいよ！！！」

裕理（こいつも）
「でもましろはかわいいなぁ」

理樹（怒）
「鈴の方が可愛いよ！！！！」

明久（怒）
「姫路さんや秀吉だって！！！」

クラウド（怒）
「ティファが最高だ！！！！」

士朗（怒）
「セイバーはオレの嫁！！！！」

男ども全員（怒）
「やんのかコラァ！！！！！」

どがががごごごきがぼこすかぼこすかどかどかがっしゃんぽこぽ
こぽこぽこぱりんぐしゃんどどどどどどどっかん！！！

蒔風（土煙内）
「ゲほゲほ！！！お、おいお前らケンカ・・・ケンカすなっ・・・・・
やめろよおい・・・おーーーーーい！！！！」

ぽこぽこぽこがしがしがし！！！（お互いに服を掴む）
びッ、ビリっ！！ビリビリビリビリ！！！！！（服が裂ける）

全員（はっぱ一枚）
「・・・・・・・ＹＡＴＴＡ！！！！！！！」

蒔風
「なんだこのオチィーーーーーーーーーーーーー！？」

ガバァ！！！！

蒔風（呆然）
「・・・・・・・・・えーーーーと？うーーーーーーーんと？

・・・・・ああ・・・・・・・・夢か・・・・・・・・」

目覚める蒔風。
どうやら夢だったようだ。

だが・・・・・・

その枕もとには・・・・・・・・・

はっぱが一枚・・・・・・・・・・・

to be continued!?

番外編　～究極の非武装～（後書き）

アリス「来ましたカオス」

いや、なんかやりたくなってきた。
都合上これから行く世界の人達は出せなかったけど

ア「それでも十分におかしい」

はっぱ隊は最高だ。
あんなに元気の出る曲はない。

最初の方の台詞と途中を少しだけ変えましたけど

ア「次回こそ更新するんですよね？」

はい！！次こそ！！！

ア「次回、降り立った翼人」

ではまた次回

はわわ！！敵が来ちゃいました！！！

これ以外に何かあったかなぁ・・・・・

「たったった、大変です！！！！緊急の伝令です！！！」

「な、何があったの！？」

ここは蜀の国の会議室。
そこに一人の伝令の青年が駆けてきて、この国の太守、北郷一刀に用件を伝えた。

「き、奇天烈な格好をした者が市街に出没し、騒動のど真ん中にいるとのこと！！！」

「本来騒動の方がメインなんじゃない！？」

「めいん・・・・？
と、とにかく大変なことに！！！」

そう言われてはこの国の太守として放ってはいけない。
一刀は途中であった武将を何人か引き連れて市外へと出た。

では一刀がその現場に到着するまでにこの世界の概要を説明しよう。

ここは古代中国、三国時代。
つい最近までは「魏」「呉」「蜀」の三国がこの大陸を統一しようと戦いを繰り広げていた。

いまでは一刀が統治する「蜀」が他の二国を併合して一つにまとまりつつあるが。

北郷一刀はこの時代の人間ではない。
学校の帰り道、怪しい男を追って博物館に入ったらその男が持ち出そうとした銅鏡が輝いてこの時代に飛ばされたのだ。

そして飛ばされた先は史実とは少しだけ違う三国時代。
いろいろあるがその最も大きな点は

「行きますよご主人様！！！」

「主が行くのなら、私も行くしかあるまい」

「鈴々も行くのだ！！！」

名だたる武将達が皆女の子だったということだ。

そしてこの時代の風習も一つ書いておこう。

それは真名だ。

知っている人もいるかもしれないが、真名とは性、名、字（あざな）の名前のほかにある真の名だ。

この名前を呼びあえるのは互いに認め合った間柄でなければならない。

もしそうでもないのにもかかわらず真名で呼べば首を跳ねられてもおかしくはない、と言うほど誇りあるものなのだ。

と、そうこうしているうちに一刀達が騒動が起こっている場所に着いた。

引き連れているのは関羽（真名・愛紗（あいしゃ））と、張飛（真名・鈴々）、趙雲（真名・星（せい））だ。

「て、てめえ!!ふざけてんのか!?」

「オレは一切ふざけてなどいない。さあ!!そのガキを離して大人しくしろ!!!」

そんな声が人ごみの中から聞こえてきたが、まだ姿が確認できない。

「時に主、一体どんなことが起こっているのです？」

星が一刀に訊く。
この二人は当然のように真名で呼び合う仲だ。

「ああ、なんでも食い逃げした男が逆上して、それを止めに入った人を振り切って逃走、子どもを人質にとって、そして今相手をしている人が対処に当たってるらしい。」

「で、その相手にしている男が」

「変な格好をしているらしいんだけど・・・・・・」

「食い逃げ？そんなことしてなんになる！！」

人ごみの向こうから声が聞こえる。
まだ姿は見えないが。

「こっちは腹減ってんだよ！！悪いか！？」

「やった！！おなかが減っていれば、次に食べた時とてもおいしくなるぞ！！」

「ああ、うまかったさ！！！」

「だけど、その味は罪の味が、しなかったかい！？」

「う・・・・・・」

「きちんと働いて食べれば、もっとおいしかったんじゃあ、ないのかぁい！？」

「う、うぅぅうううう！！！！！」

「さあ！！もうそんな過去は振り切ろう！！職を探して、明日に生きるんだ！！！」

「お・・・・オレは・・・・・・う、うううううううう！！！！！」

ガシャン

どうやら男が短剣を落として子どもを開放したらしい。

「さあ行きな・・・・強く生きるんだ！！！」

「あ、ああ！！！！」

どうやら無事解決したのか、人混みが散開して行く。
中には涙を流している人、「これからオレも頑張るぞ！！」と意気揚々としている者と様々だ。

そしてついにみんなが去り、動乱の中心人物が堂々と立っていた。

「やった！！今日も世界は平和だ！！！！」

はっぱ一枚の蒔風が。
と言っても肌色のパンツに葉っぱがついているだけなのだが。
それでも十分におかしい。

「何やってんだあんたぁ！！！！！！」

一刀が大声を上げた。
後ろの二人なんかは訝しげな顔をしている上に愛紗は武器、青龍円月刀を握りしめている。
星は腹を抱えてケタケタと笑っているが。

「む?この国の太守、北郷一刀か!!!!」

「え?そ、そうだけど・・・・」

「お会いできて光栄だ!!!!しいてはお話したいことが・・・・」

と蒔風が近寄ると武器を構えて愛紗が一刀の前に出る。

「え、ええい近寄るな変態め!!!!」

「な、何を言う!!!!これぞ究極の非武装!!!!平和の象徴だぞ!!!!」

「なるほど、故にあの男も冷静に話を聴けたのだな」

「せ、星も感心してないでこいつをひっとらえろ!!!!」

「まあ待て愛紗、この男、只者ではないぞ?」

星の言葉に愛紗が少し険しい顔をする。
星は普段はふざけているが人を見る目は確かだ。
その星が只者ではないというからにはその通りなのだろう。

「ん？ここはあれか？君に勝たなければならないのかな？」

「勝っても通さん！！！」

「えーーー？でも君ほどの武人が負けた時に知るか！！なんて言い張るとは思えない、だから」

蒔風が店先にかぶせてあった布をとり、バサア！！と身体を包む。
そしてその布を取り払うと、普通の服装になっている蒔風がいた。
それはいかにも現代ファッションで、ジーパンにワイシャツと非常にラフな格好だ。

「！？なんだその服は！！」

「あの服装・・・まさか・・・・・」

「相手は君でいいのかな？五虎将軍が一、関羽殿？」

「っ！！！こい！！！」

「ええ《５５５　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ》行きますともよ。変身！！《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》」

ヴァアアアン！！！！

蒔風がファイズフォンによって仮面ライダーファイズに変身し、その姿に愛紗が驚愕し、一刀が信じられない物を見るような目で見た。

「貴様、妖術使いか！！！」

「違うよ。言うならば「願い使い」だな。はぁッ！！！！」

二人が駆けだす。
その距離が休息に縮まり、ぶつかり合うというその寸前。

「愛紗、待ってくれ！！！！」

ビタァ！！！
ザザザザザザザザザ！！！！！

二人の手が止まり、接近したところで膠着する。

蒔風が青龍円月刀を左手で掴み、右の肘を愛紗の鼻先に付けていた。

「その人の話を聞くよ。気になることもあるしね」

「そうてもらえると（バシュ）ありがたいね。これいる？」

「「「いらんわ！！！！」」」

蒔風が差し出すはっぱを一言で払いのけ、四人は蒔風を城に案内する。

――――――

「まぁまぁ、そう言わないでよ二人とも」

謁見の間にさっきの四人と蒔風、そして元「魏」の王・曹操（真名・華琳（かりん））、元「呉」の王・孫権（真名・蓮華（れんふぁ））がいる。

「いや、彼の話は聞くに値すると思う」

「どうして？理由を聞きたいわね」

「そうだ、こんな恰好をした者など初めてだ」

「それは私たちも聞きたいのです、ご主人様、教えていただけますか？」

彼女達に言われ、一刀が答える。
その答えは彼女たちにとってかなり衝撃的なものとなった。

「彼は・・・・・オレがいた・・・・元の世界の人間かもしれないんだ」

「「「「「え・・・・・えええええええええええええええええええええ！？！？！？」」」」」

「と、言うことは天の国の方というわけですか？主」

「いいや、厳密にいえばオレは北郷の世界とは違う世界の住人だよ」

「どういうことだ？」

「それは・・・・・」

バタン！！！

「そこからは私が説明するわぁ～～ん！！！！」

と、いい声を出して入ってきたのはムキムキマッチョな大男。
それでいて恰好はパンツ一丁という実にキモチワルイ野郎だった。

「貂蝉（ちょうせん）！？」

「お？この世界の観測者か？」

「んふ、さすが翼人ね。そこまでわかるなんてん！！」

「くねくねしないで！！！」

「あらん、つれないわね」

「貂蝉！！知っているのか？」

「あ～～せらないでご主人様ん♪これからじっくりお話しするわん。ご主人様自身の、そしてこの世界の行く末に関して、ね」

to be continued

恋姫†無双　～外史へ舞い込む～（後書き）

アリス「恋姫†無双の世界ですね！！無印の方なんですか？」

はい

大丈夫ですよ、ちゃんと真の方も行きますから！！！

その構成はもう考えてありますし

ア「あらはやい。そういえば国名が「蜀」になっていましたね」

ええ。

でもあそこで「北郷軍」と書いたらわからない人はますますわからなくなってしまうかと思いこうしました。

と、ここで皆さんに質問です。

１１ｅｙｅｓとキノの旅、どっちを入れてほしいですか？

ア「なんという唐突な質問ですか！？」

いやぁ、結構前に残りの世界数言ったけど実際そんなになくってさ。
だからこっちから提案してみました。

ア「それでこの二つですか」

はい
この二つは結構好きなんですが、

・「キノ」は何だか激しくなりそうにない
・「１１ｅｙｅｓ」は知ってる人少なそう

という理由で省いてましたけど、ここで入れようかと思います。

この作品の感想はフリーなので皆さんどんどん進言してください！
！！
そしてついでに評ゲフンゲフン

「キノ」か「１１ｅｙｅｓ」か「両方」かの三つの中からお願いします。

ア「次回、説明回乙」

ではまた次回

長き戦乱に苦しむ民草のため、この関雲長、非情の刀と相成りて官匪匪賊を打ち倒す！

「じゃあお話を始めるわね？この世界の、外史の話はご主人様達にはしたけど、おさらいということで聞いてちょうだい」

貂蝉が話を始めた。

この世界は外史と呼ばれるものだ。
外史とは、正史という世界において想像されることで誕生する世界。
一刀はその正史からこの世界の主軸として連れ込まれた人間である。

外史は様々な「想像」で生まれる。

「もしもこんなことがあったら」「こうだったら面白そうだ」

そして、「三国志演技の武将がみな女の子だったら」

そういった思いから、この外史はできた。

そして貂蝉はこの世界の観測者として存在する者、らしい。

「なるほど！じゃあ今度はこっちの話だな。聞いてくれ」

次に蒔風が話に移る。
いつもする話。
実に手慣れたものだ。

～蒔風説明中～

「というわけですたい」

「確かに理論上は可能でしょうけど、本当に世界を食らうなんて・・・・」

「それが「奴」なんよ。気をつけんとどないことなるかわからんよ」

「そういうことだったのね。翼人様がいらっしゃるからいよいよこの世界の終わりが来たかと思ったわん！」

「「「「翼人？」」」」

一堂が首を傾げて声を揃えた。

「観測者というだけあるな。どんなふうに伝わってんだ？」

「・・・・・・最悪の悪魔だったわ・・・・・」

「そっちか」

蒔風が顔に手を被せてうんざりした。

「私たちの前に現れたのは「赤銅の翼人」だった。ある外史からやってきた彼はすべてを支配しようと暴れたらしいわ。その時消滅した世界は１１。私たちといっても前任者の時代だけどねん。その時１２８人もいた観測者も、生き残りは一人しかいなかったわ。その一人がどこかに封印したらしい、という話だけどね」

「・・・・・・ま、オレは違うがな」

「それは見てればわかるわ！まったく、あたしったら緊張でビクンビクンしちゃったわ！！」

「ま、待ちなさい！だったら一刀がその「奴」とかいう男に殺されるっていうの！？」

「その「奴」とはいつ来るのだ!?」

すっかり貂蝉と話しこむ蒔風に華琳と愛紗がすごい迫力で迫る。

「おぉう・・・ナイチチとウシチチがまさかのコラボ（ドカバガァッ!!）・・・・ここは外史。つまりはパラレルの一つだ。多重世界でない以上、明日かそこらか？」

「そ、そんなに早くか!?」

「「奴」は早いぞ～～」

と、そこで蓮華が疑問を口にする

「だがそいつは所詮一人だろう？こちらの武将全員で攻めれば勝てるのでは？」

「「無理だな（ね）」」

貂蝉と蒔風がその考えを否定する。

華琳や星はその意味がわかっているようだ。

「まあそうでしょうね。翼人だというこの男と同等かそれ以上の力をもつ「奴」が相手では奇跡が起こらないかぎり無理ね」

「待つのだ！鈴々たちは一人でもさいきょーむてきなのだから、みんなで戦えばきっと勝てるのだ！！」

「うん？張飛殿、では聞こう。百人以上の貂蝉に勝てるか？
「奴」はそれよりも強いぞ？この翼人と張り合うんだからな」

「う・・・・・」

この貂蝉、見た目は実に変態の極みだが、戦闘力は群を抜いている。おそらくこの城の武将の中でまともに交戦できるのは一人くらいか。

「と、いう訳だから舜ちゃんにはこの城にいてもらった方がいいわ」

「まあオレとしてはそうしてくれた方がありがたいが、多分ハイそうですかとはいかないだろ」

その言葉に愛紗、華琳、蓮華が頷く。

「どこの者とも知れぬ男をいきなり城の客、しかもご主人様のそばに置くのはあまりにも不自然だ」

「それに、あなたの言葉が真実かを知っているのはそこの筋肉とあなただけ」

「もしお前が「奴」とやらの仲間だった場合、取り返しがつかない」

「ふーーん。北郷はどう思う？」

「そうだ・・・ね。オレ個人としてはいいけれど・・・・・」

「ヘタレ」

「うるさい！！！」

「皆何悩んでるのだ？そんなもん、戦ってみればわかるのだ」

「は？」「え？」「む？」

鈴々のいきなりの提案に愛紗たち三人がポカンとする。

「り、鈴々？お前今何と言った？」

「だーかーらー、愛紗たちは何をそんなに悩んでいるのだ？
一度思いっきり戦ってみれば、そいつがどんな奴か一発で分かるのだ！！！」

という鈴々。
なんとまあ熱血な考えだ。

「それは・・・・いい考えね」

「華琳殿!?」

「愛紗、私たちは一度敵だったとはいえ今は友人よ?「殿」なんて言い方やめてちょうだい。せっかく真名を預け合ったのだから。それはそうと名案だわ。その男の実力を測ることもできるし、戦わせてみせましょう」

「ふむ・・・確かに、あなたの実力は私も見てみたいですからな」

「せ、星まで・・・・・」

「私も賛成だ。だがここは一刀の城。故に最終決定は一刀が決めてくれ」

蓮華の言葉に皆が一刀の方を向く。
そして一刀が口を開いた。

「蒔風がいいなら、それで」

「了承!!!」

「なら善は急げよ。各軍から武将を一人ずつ選び、勝ちなさい。そうすればあなたを認めましょう」

「ではこちらはいまの話を皆に伝えてくる」

「それは各陣営でやりましょう。では数刻したら城内の庭園に集まってから開催よ」

「オレはそれまではどうすれば？」

「じゃあオレの部屋にでも来てよ。面白い話が聞けそうだから。星、朱里にこの話をしておいてね」

「あいわかりました。行くか、愛紗、鈴々」

「ま、待て星！なんで私でなくお前なのだ！！」

「さっきの話を細かく説明できるか？」

「う、ぐぅ・・・で、でもしかし・・・・・・」

皆が各自部屋に戻る。

残されたのは一刀と蒔風のみ。

「・・・・・にしてもすごいな」

「なにが？」

「こうやってオレと二人にしてもらえるってことが。もう信頼されてるってことだろ？」

「さぁてね。オレは隠密なんかが得意だから、自然と溶け込んでるだけかもよ？」

「本当は天の御使いってあんたのことじゃない？」

「天の御使いだぁ？」

「オレがそう呼ばれてんの。いきなり現れて愛紗たちと出会って客寄せパンダみたいに祭り上げられて・・・ね。で、オレのいた正史の世界は「天の国」って言われてる」

「なるへそ～～～。うん、いや、それは間違いなくお前だよ。この国のトップに立ったのも、この国を、みんなを導いたのも、な」

そう言いながら一刀の部屋に向かう二人。

「にしても大変な時に来たね」

「大変な時？」

「ああ、話してなかったな、実は・・・・」

一刀はこの世界の観測者に狙われている。
左慈という貂蝉とは対極の位置に存在する観測者にだ。

この世界は本来、武装が女の子、ということを除けば史実の通りに話が進むはずだった。
それが北郷一刀によって歪んだ。
故に一刀を消し、本来の形に戻し、そして正しく観測すべきだ、と。

そして三国が一つになった時、ついに大きく姿を現してきた。
白装束の雑兵を操り、一刀を消しに来たのだ。

貂蝉が最初にした話は一刀たちは昨日聞いている。
そして数日後に軍備を整え、左慈達のいる山に攻め入ろうと言うところだったのだ。

「なるほど。左慈は改変、「奴」は捕食の目的でそれぞれお前を狙ってるってわけか」

「ああ。左慈が博物館の銅鏡を盗み、それを追いかけたところからすべては始まったんだ」

「・・・・・となると「奴」はすぐには来ないか・・・・・？」

「え？どういうことだ？」

「気にするな。もし明日中に「奴」が来なきゃ当分は大丈夫かもって話だよ」

「？？？」

「っと、そろそろ時間じゃね？」

「そう・・・かもな。行こうか。案内するよ」

気付けば時間は結構経っていた。
かなり話込んでいたようだ。

～～蒔風、一刀移動中～～

二人が庭園につくと、そこには全武将、軍師が集まっている。
そして中心には四人の将が立っていた。

「来たわね？では始めましょう！！！」

華琳の号令に愛紗が全員に話しかけた。

「この場にいる全員は新たに現れた敵の事を聞いたろう！！
そしてこの男がそれを食い止めるべくやってきたのだそうだ！！！
だが我々としてはそう簡単に信じることはできないし、彼もその考えだ。
故に！！各軍の武将一名と本気の手合わせをし、その形を見て皆に決めてもらいたい！！！
武に通ずる者ならば、その構えを見ればわかるはずだ！！！
では、まず我が北郷軍からの武将は！！！」

「この趙子龍が承る！！！！！」

星が出て、己が槍「龍牙」をダン！！と地面に突き立てる。

「そして我が魏からは」

「魏武の大剣！！！夏侯惇元譲（かこうとんげんじょう）が相手だ！！！！！」

その手に幅広い刀身を持つ片刃の大剣を握りしめ、肩に乗せながら
夏侯惇（真名・春蘭（しゅんらん））が気合を入れる。

「そして私たち呉からは、甘興覇（かんこうは）を出すわ」

「蓮華様の命とあらば」

凛としてそこに立つのは甘寧（かんねい）（真名・思春（ししゅん））である。

「あ、あの・・・・わ、私たち董卓（とうたく）軍からは！！呂布奉先を出します！！！！」

「・・・・がんばる」

なぜかメイド服の董卓だと言う少女（真名・月（ゆえ））が無口な少女を紹介する。

その少女は上がってしまったのか「えいちゃ～～ん」といって人ごみの中に帰って行ってしまった。

紹介された少女はと言うと、その手にかの有名な方天画戟を持ち、犬を撫でていた。

「北郷」

「なに？」

「ホントにみんないるのね？」

「ああ。皆大切な仲間さ」

「よくもまあここまで引き込んだもんだ。このハーレム野郎」

「あ、あはは・・・・・・」

「そしてあのメイド服はグッジョブ（ガシッ）」

「わかってくれるか（ガシッ）」

そういってから蒔風がその四人の前に出る。

と、四人のうち三人が引き、ひとりが残される。

その一人とは・・・・・・

「私が一番手だ！！！そして終わらせてやる！なぁに！！！この様なヒョロい男、一発ですよ華琳様！！！」

夏候惇、春蘭だ。

蒔風がガシガシと頭を掻いてから春蘭を指さし、こう言った。

「最初に言っておく。オレはかーなーり、強い！！！
魏武の大剣だか何だか知らないが、それはお前の勝因にはならない」

「面白いことを言うなお前！！いいだろう、特別に二発で倒してやる！！！」

そう言って庭園の中心で二人が構える。

その光景を見て、星が愛紗に言った。

「おぬしはやらなくてもよいのか？今からでも変わるが？」

「わかって言っているだろう。私はあの時にもう負けていた」

あのとき、とは街で一瞬蒔風とぶつかったときだろう。
寸前で止まったとはいえ、あのまま肘がめり込んでいたらと思うと、
恐ろしい。

「ふぅむ・・・ま、私も負ける気はしないがね」

自信満々の星に、愛紗が聞こえない声で呟いた。

「あの男・・・・強いぞ。本当に」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

恋姫†無双　～信頼への道～（後書き）

いやあ、書けた書けた
貂蝉って自分なかなか嫌いじゃないんですよね。

アリス「そっちの人？」

ちがうわ！！！
普通にいい人やん。
変態だけど。

ア「まあそうですね。そういえば投票はどうなりました？」

まだ言いません。
まあ感想読まれたら一発ですけどね（笑）

メッセージとか飛ばしてくれてもいいですよ

ア「次回、大激突！！」

ではまた次回

なのだ～～～～！！！！

開戦。

銅鑼の音が鳴り、同時に春蘭が飛び出していった。

「う、おおおおおおおおおおお！！！」

頭上高く振りかぶり、大剣を蒔風の脳天に振り下ろす。
訓練用の刃が潰れた物といってもそれは鉄の塊。
当たればただでは済まないだろう一撃だ。

「フンッ！！」

バギャッ！！

だが蒔風は一歩も動くことなく右の裏拳で真横にそれを弾いた。

「んなっ！？」

「どうした、夏候惇元譲。素手で剣に向かうのがそんなにおかしいか？」

「っ！！ハアッ！」

弾かれた剣を握り締め、そこから真横に剣を薙ぐ。
それを蒔風が手をつけないで側転し、風車のようにかわす。

着地し、タンッ、と地面を蹴って蒔風が下がり構えなおす。

相手に向かって斜めになるように足を広げ、腰を落とし、上半身も半身になって両腕を構える。

ズンッ・・・・という音がした気がした。
周囲の空気が重くなり、息が苦しくなってくる。

構える蒔風はなにかをしているわけではない。
ただ、構えているだけ。
だがその風貌はあまりにも重々しい。
春蘭にはまるで両足が地面に根を張っているように感じられた。

「ッ・・・・・・・！！」

春蘭がゴクリと喉を鳴らす。

（なんという気迫・・・・・・構え一つでここまでやるか！！）

だが春蘭の顔は心なしかニヤケている。
彼女もまた「魏武の大剣」と呼ばれた武人。
強者との戦いに少なからず歓喜しているのだ。

と、蒔風の手が開き、チョイチョイと誘ってきた。

――かかってこいよ――

どの世界においても共通のジェスチャー。
そのメッセージに春蘭が応ずる。

「いっくぞォォォォおおおおおおおお！！！」

「・・・・・ッハアッ！！！」

春蘭が蒔風の脚を狙って大剣を薙ぐ。
だがその攻撃を蒔風が飛び蹴りのジャンプでそれをかわした。

蹴りを放つ蒔風。
春蘭は攻撃が外れるとすぐに防御の態勢に入った。

その形は完璧だった。
蒔風のキックが一撃ならば。

「んっ！ダァッ！！Ｖ３！！」

蒔風がドカドカッ、と駆け上がるように左右の足で一撃ずつ蹴って
空中でのけ反りで一回転し

「反、転！キィック！！」

そこからもう一撃、本命のキックをぶちかます！！

バガァ！！

最初の二撃をその剣で見事受け止めた春蘭だが、三撃目のキックに
吹き飛ばされて仰向けに倒れる。

衝撃に顔をしかめ、目を開けたときには蒔風が跨がり喉元に指をま
っすぐに伸ばして突き付けていた。

「私の・・・・・負けだ」

周囲がざわつく。
無理もない。春蘭は魏において最強の武将だ。
その春蘭がなにも出来ずに打ち負かされた。
これは相当なことだ。

「さ、次は誰だ？」

と蒔風が周囲を見渡して言うが、実際はこの戦い、冷や汗ものだった。

（手ぇ痛ぇーーー！！！カッコつけて素手でやるんじゃなかったよ！！見た目以上の力だなおい・・・・・・こりゃフォルスが少なからず入ってんな・・・
力の使い方に気づけば化けるぞこれ
手ぇ痛い！ジンジン言ぅとるよ！？）

そんな蒔風の前に踊り出たのは北郷軍代表、星だ。

「クジ順では私だな。では、趙雲子龍、いざ参る！！」

「よし、やるか！」

蒔風と星が向き合う。

二回戦開始の銅鑼が鳴った。

――

「何なのだあやつは！素手に負けるなんてもう私はダメかもしれん・・・・」

「あ、姉者、気を落とすな。また今度勝てばいいではないか」

「そうですよ春蘭さま！！あ！！今度はボクがあいつをボコボコに・・・・・」

落ち込む春蘭を妹の夏侯淵（真名・秋蘭）と部下の許緒（真名・季衣）が励ます。

「まさかあんたが負けるなんて思わなかったわ・・・・・」

と、いつもは辛辣な言葉をかける魏の軍師、荀？（真名・桂花）までもが唖然とする。

そんな中

「あれには無理よ。諦めなさい。春蘭はよくやったわ」

華琳が声をかけた。

「か、華琳様！！！」

「あの男は確かに強いわ。それは認めざるを得ない事実よ」

「そ、それは・・・・・」

「まぁ、見てみましょう。あの男は一体どれほどの人間なのか」

「華琳様、まさか・・・・・」

「いいえ、違うわ。でも・・・・・」

「でも？」

（大きな器・・・でもないわね。なにかを感じるわ・・・本当に只者ではないみたいね。

でも、王の素質は感じられない・・・・・
だからと言ってそこらの凡夫とも違う・・・・
あなたが何者で、一体どんな人間なのか、じっくり見させてもらいましょう）

――――――

スパァン！！

蒔風の拳が壁に放たれ、無数の突きは掻き消され、星の身体が反動で軽く宙に浮く。

「んな！？」

「技名に「星」とつけなきゃよかったな。朱雀槍！！」

ガァン！！

蒔風が左前脇の柄を掴んで引き抜くと同時にそれが朱雀槍となり、星の龍牙と火花を散らした。

「フッハッ！んっ！セイッサイッ！！」

ガィン、キャンギン！カンカンギィン！！

蒔風が槍を振るい、それを星が受けていく。
その反動で星はいまだに地面に足を降ろせない。

ガンガンガン！ギィン！！

蒔風が星を弾き、庭園の木に向かって星が飛んでいく。
その木に足を付け、更に迫る蒔風を回避するように上方にジャンプし、当然蒔風もそれを追って跳び上がる。

皆が首を上げるほどに飛び上がった二人は城の屋根の上にまで上がり、更にそこからあちらこちらの場所に跳びはねて戦闘を続けていく。

「ど、どんな戦い方だ！！」

「すごいのだ！！あんなに速く、あっ！もうあっちにいる！！」

「おい！今度はあっちだ！壁走りながらやり合ってら・・・・」

「は、はわわ・・・・こ、壊さないようにお願いしま～～～す！！！」

「「善処しよう！！」」

「守る気ないですよねぇ！？」

「星！足を地面につけねば！！」

仲間からの声援に星が苦笑する。

「っ！タッ！！簡単に言ってくれる、なっ！！」

そう言いながら星が蒔風を振り切るように壁を走りまた別の屋根に跳ぶ。そして後続の蒔風に向かって再び星雲神妙撃を放った。

蒔風は朱雀槍で受ければよかったものを反射的に打滅星で応対してしまった。
必然、跳び移ろうと宙にいた蒔風の身体が反動で勢いを失う。

ガァン！！

そこに星が槍を振りかぶって叩きつけ、蒔風が地面に向かって落ちていく。

ドッフン！！

蒔風が地面を窪ませて着地し、追って飛び下りてくる星を見据えた。

「あ、マズ」

「いらっしゃいませぇ！！」

落ちてくる星に蒔風が槍を突き出す。
それを星が必死に丸くなって空中一回転し避け、そして

「ハァッ！よっ！！」

「おぉ！？すげぇ！！」

朱雀槍の上に飛び乗ったではないか。
これには蒔風も驚いた。

「じ、実戦じみた訓練でやるものではないな・・・・・」

周りはすごいすごいと騒いでいるが当の星は心臓バクバク、冷や汗が背中を伝っていた。
顔には一切だしていなかったが。

星が槍から飛び下り、蒔風が槍を放り捨てた。

「夏候惇がＶ３だったから、今度はっ！！」

蒔風が右腕を左上にまっすぐ伸ばし、それを右上にスライドさせる。

「ライダー・・・・・」

そして入れ代わるように左腕を右上に突き出し、ベルトの風車、タイフーンが回りだす！！

「変、身！！トゥ！！」

蒔風が高く高くジャンプし、仮面ライダー一号に変身した。

そしてその状態から星に向かって

「ライダァーー！！パァンチ！！」

ガゴォ！！

星はとっさに槍で防御するがあまりの威力に防御ごとすっ飛んだ。

蒔風のその姿に周りの皆も騒然とする。

だが市街で一度変身を見た星は一切怯まず蒔風に槍を振るう。

が、その槍を蒔風は受け止め、捻り上げる。

星の手から龍牙が離れ、蒔風が槍を星に向ける。

そこで動きが止まり、星が両手をヒラヒラと上げた。

「降参だ。負けを認めよう」

おおおお

to be continued

恋姫†無双　～対戦・魏&北郷軍～（後書き）

アリス「まずはこの二人ですか」

はい。

で、次に呉、そして最後に董卓ですね。

アリス「一体どうなるのやら・・・・」

そしてここで重大発表！！！

この「世界をめぐる銀白の翼」の今後！！！！

ア「おぉ！？」

この話、実は・・・・・・・・

まだ・・・半分も書いてないです。

ア「なにいいいいいい！？」

この続きはまた次回！！！

熱く滾る魂　雄叫びと共に解き放て
決められたルールを打ち壊して
駆け抜けろ　自由へと

星が退場し、蒔風がさあ次はと首を鳴らす。

と、そこで三回目の銅鑼が鳴り、変身を解いた蒔風に一閃が迫る。

のんびりとした動作で振り返りざまに腕を出してそれを受ける蒔風。
その腕には天地陰陽が現れており、その鞘で呉代表、思春の攻撃を防いでいた。

「暗殺者か・・・・・・」

「甘興覇！参る！！」

「思春！頑張って！！」

「はい！蓮華様！！」

蒔風から離れ、剣を構えてビタリと止まる。
蒔風もついに「天」を抜き、構えた。

そして二人が動かなくなる。

「む？なぜ二人は動かんのだ？秋蘭」

「姉者・・・なにも姉者みたいにぶつかるだけが戦いではないのだぞ？」

「そうか？私にはさっぱりだ！！あっはっはっはっは！！！」

「この脳筋が・・・・・・」

春蘭、秋蘭、桂花の三人が言葉を漏らす。
他の陣営でも同じような会話がされている。

二人は互いの一瞬のすきを見つけようとしている。
そのために一切動かず、ただ剣をソッ、と構えて相手を見据える。

サアアアアア・・・・・・・・・

静かな空気

スゥウゥウゥウ・・・・・・・・・

静かな時間

滑らかに時間が過ぎて行く・・・・・・・・・

～～数十分後～～

「おかーさん、おなかへった～～～～」

「そうねえ・・・・まだ時間かかりそうですし、何か持ってきますわね」

黄忠（真名・紫苑）の愛娘、璃々が母に抱き付き、ご飯をねだる。

「そういえばそんな時間かぁ」

「おなか減ったのだ！！！鈴々も何か取ってくるのだ！！！」

「それにしても一体いつまでやっているんだ？」

「さぁ・・・・・・」

いまだにこの二人は動いていない。

さっきから微動だにしていないのだ。

思春は隠密機動のプロだ。スパイ、諜報、お手の物。暗殺者としては一級品だ。

それを前にして構え、一切の隙を見せない蒔風。

一瞬の油断や隙が命取りになる、そんな場面が目の前に広がってい

た。
その光景に皆三分ほどは驚愕していたものだが、ここまで長引くとさすがに飽きが来る。

皆で茶をしたり寝そべったりと思い思いの行動をとってり始めてしまっていた。

だが当の思春はそんなのほほんとした心境ではない。
心を無にし、目の前の男だけを見る。
もしその身体に少しでも変化があれば即座に斬るつもりだ。

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

故に無心。
だが深層ではこう考えてもいた。

（この男・・・・一体どれだけの・・・・・・っ、いかん、やられる・・・・・長時間、それこそ何日でも粘って好機をうかがう暗殺者（われら）だが、この男の前に立つだけでかなりの疲労だ・・・・・本当に何者だ？）

そんな思春の推測。
冷や汗が垂れるが拭くことなどできない。
それほどまでに思春を追い詰める当の蒔風はと言うと・・・・・・

（・・・・・・・・・・・・・ハッ！！やべ、少し寝てた）

少し寝てた。

（やべーーーこの均衡どーにかしないとなぁ・・・・ちょっと脅かすか？）

そして蒔風が少し動く。

だがその動きに思春は隙を見いだせない。

（こ、この男・・・構えのまま近づいてくる！？）

ジリジリと

本当に少しずつだが

蒔風が距離を詰める。

最初は五メートルほど離れていた。

だが今は四メートル五十センチ・・・・四メートル三十・・・・

四メートル・・・・三メートル七十・・・・・・

そしてさらに数十分の時間をかけて思春と蒔風が超至近距離にまで近づいた。

もう一メートルも離れていない。

（ッ～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！）

（まだ耐えるの～～～～？ファふ・・・・・ねむ・・・・・・・まあ・・・・・）

シュカン！！！！！

「これでおわりでね、悪いな」

トスッ

ここで初めて周りの者が気付いた。
蒔風が倒れる思春を支え、地面に寝かせる。

この静かな攻防を最初から最後まで見ていたのはこの中でも数名だ。
ほとんどの物は見てもいなかった。

まさに、暗殺者としての戦いであった。

「オレさんの超得意分野でここまで張りあうとはこの子もやるなぁ！！！！」

「思春、よくやったわ」

「う・・・蓮華様・・・・申し訳ございません・・・・・」

「いいのよ。彼の実力は知ったわ。十分にね。あなたの戦い、確かに見届けたわよ」

「あ、ありがとうございます！！」

（い、言えないわ・・・・途中で飽きてて見てなかったなんて言えない・・・・・・）

呉メンバーも下がり、観戦モードに入る。なぜなら次は・・・・・・

「さあ～～この武芸会もついに最終戦！！！ことごとく勝利していくこの男を止められるのはもうこいつしかいない！！！！

董卓軍！！！！呂布、奉先～～～～～～！！！！！」

「星、おぬしノリノリだな」

「うむ、あの男、なかなかに楽しいな。嫌いではない」

「星、まさか・・・・・」

「む？何を早とちりしておるのだ。まだそうとは決まっておらんよ」

「そ、そうか？」

「そんな簡単に決めるような女に見えるのか？愛紗よ」

「い、いや・・・・」

そんな二人の言葉と共に、呂布（真名・恋（れん））が前に出る。

「さて・・・・・・史実では関羽、張飛、劉備の三人相手にきったはったをやってのけたという実力。見せてもらおう」

「・・・・・・行く」

そして二人が構える。

三国最強と世界最強。

超規格外がここでぶつかる。

皆が固唾を飲んでその光景にくぎ付けになる。

恋が武器、方天画戟を肩に乗せて立つ。

蒔風も獅子天麟を組み頭上で回し、地面に突き立てて腕を乗せる。

数秒にらみ合う二人。

ここからどう動くのか、とみなが見守る中、恋が方天画戟を下ろす。

蒔風もまた、獅子天麟をバラして背中の鞘にしまった。

「ど、どうしたのだ恋よ。調子でも悪いのか？」

「蒔風もどうしたよ。なんで戦わないん？」

愛紗と一刀が恋と蒔風にどうしたのかと聞く。

二人はすぐに答えた。

「ダメ。・・・・たたかったら、なくなる」

「なにがだ？」

「この城がだ。この庭園じゃ狭いってこった」

「「はい？」」

「このまま戦ったら・・・・この城、壊れる」

「だからここではやれないよ。にしても二回も仕留められそうになった時は焦った」

「そっちこそ、三回も仕留めておいてよく言う・・・・・」

「な、何を言ってるんだ？二人は」

「多分ですがお互いの目の先などを見て動きを予見し、その中で何回か戦ったのではないでしょうか？

達人にもなると実際に拳をたがえずとも想像のうちで相手と戦える者がいるそうですから」

「なで、その想像の中で城はどうなったって？」

「ボロボロの」「グシャグシャだ」

「は・・・・ははは・・・・・・」

「どうするよ」

「場外の荒野なら、思い切りやれる」

「よし、じゃあ行こう」

「え！？まさかそこまでやるのか！？」

「そりゃあ・・・・強者として戦ってみたいし」

「恋も。こんなに強い奴、初めて」

そう言って話し合う二人に、一刀と愛紗、さらにはその場の全員も

唖然とし、思った。

『こ、こいつら規格外すぎ・・・・・』

to be continued

恋姫†無双　～戦闘・呉&董卓～（後書き）

アリス「さて、前回言ったことを説明してもらいましょうか？」

この時がついに来てしまいましたか・・・・・
この「めぐ銀」の物語はまだまだ終わりません。

全然終わりません。
終わる見込みがありません。

ア「最終回はもうできてるんですよね？」

そうですね、頭の中に。
でもだからと言って最終回がすぐとは限らない！！！

ア「えぇ～～～～！？」

ですからもし！！

「こういう案があるんですけど使ってください」

というモノがあり、そしてそれを提案されても、どれだけ先のことになるかわかりゃぁしないのです！！！

それにあくまでも蒔風の連れ的な者は「奴」以外には出す予定はありません。

もし新キャラの提案があるのならば、さらにさらにさらに後、オリジナル世界に行った時ぐらいですかね？

ア「・・・・・まじで？」

マジマジ。
でもまあ案外すぐかもね。
あるときには「めぐる世界はあと２５こあります」とか言ったけど、実際にはあと十くらいしかないし。

ア「もうそんなに！？」

それでもまだまだ先ですし、二百話は超えたいところですからね。

・・・まだだ・・・まだ終わらんよ！！！！！
そんなこのお話をこれからもよろしく！！！！！

ア「次回、蒔風、認められるのこと」

ではまた次回

北方常山の趙子龍、主の求めに応え、いざ参らん！！！

ひと通りの闘いが終わった。
が、蒔風と恋の二人はこれから広い演習場で決着をつけると言っている。

そこで「じゃあみんなでいこうか」という一刀の発言に早速居残り組と観戦組に別れることになったのだが・・・・・・

さすがに城から武官文官がそろっていなくなるわけにもいかないだろう。
その組み分けに少々揉めている。

「鈴々は絶対に行くのだ！！」

「待てよ！あたしだって見に行きたいぞ！それに鈴々は紫苑となにか食うもん取りにいってたんじゃないのかよ！？」

「こっちの方が面白そうなのだ！璃々の面倒も翠に任せるのだ！！」

鈴々と馬超（真名・翠）がどっちが残るかケンカをしているし、ほかのところでも同じようなことが起こっていた。

名目上は捕虜扱いの魏、呉のメンバーは全員が出るようだが。

「星、おぬし休んでいたらどうだ？」

「いやいや大丈夫だ愛紗よ。私は見に行くぞ？こんなに面白そうなもの、見逃したくはないからな」

「私は恋が大丈夫が心配で心配でな。怪我はしないか？とかだな・・・」

「はいはいわかりましたよ母さんが」

「誰が母さんか！！」

その光景を蒔風、一刀、恋の三人はのんびりと眺めていた。

「北郷、オレとしては早めに行きたいんだぜ？」

「待ってやろうぜ・・・・」

「ご主人様。恋もそろそろお腹が空いてきた・・・・・」

「みんな～～～あまり時間かけないでね～～～」

だがそんな一言で解決するものでもない。

だがまあそれもそうである。
ここにいるのは一騎当千の武将だ。
誰も譲らないのは仕方がないのかもしれない。

「よし！じゃあくじ引きにする！！それなら文句はないな！？」

ついに一刀が提案し、主がそう言うならとしぶしぶ従う。

そうとなればくじの材料でも探そうと庭園を出ようと踵を返す一刀。
だがそれに蒔風が待ったをかけた。

「北郷、動くな」

「な、なんだ？」

「複数の木偶人形。あと火薬の臭い」

「は？」

「全員伏せろ！！爆弾だ！！！」

バッ！ババババッ！！

「北郷一刀の死で世界の浄化を！！」

「なっ！？」

蒔風が全員に警告を飛ばすと同時に白装束に身を包んだ何者かが複数人、城壁の上などといった高い位置に現れ、細い筒状の物に火のついた紐が繋がっているものを山なりに放り投げてきた。

「ダッ、ダイナマイト！？」

「そんなものまで引っ張り出してきやがるかよ！？」

そこからの蒔風の行動は早かった。
ダイナマイトは庭園すべてを三回は吹き飛ばすくらいの量がある。

それに対し蒔風は高く高くジャンプして蹴り飛ばし、落下しながらも蹴り、又は投げ飛ばした。
総数にして７９個ものダイナマイトはすべて打ち上げられ、花火となって大爆発を起こした。
最後のに至っては地面スレスレでキャッチし、上空にブン投げるほどにギリギリだった。

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォォンンン・・・・・・・・・

大気が振るえ、木々が振動し、みんなの鼓膜がビリビリと鳴る。

この時代には爆弾はない。

突如として起こったこの状況に、皆驚くばかりだ。

「う、うわぁ！」

「きゃあ！？」

「うおぉ！？」

「たーーまやーーーー・・・・っと、お前逃げんな」

「うぐっ！？」

蒔風が顔に付いた土をこすりながら白装束のうちの一人をふん捕まえる。

すぐに壁際に放り投げられ、武将たちに取り囲まれる。

「ほかの奴らはもう逃げたか。まあ?お前から話を聞こう。誰の差し金だ?」

「ほ、北郷一刀はこの世の歪み・・・・・それを正すは我らの正義・・・・・・!!!!!」

蒔風が睨みを効かせて問いかけるも、白装束はぶつぶつとうわ言を繰り返して聞いてもいない。

「どうやら「奴」ではなさそうだな。「奴」はこんな粗末な人形は作らない」

「どうやら佐治ちゃん達が送った刺客でしょうね。よぉっぽどご主人さまを殺したいんだわ」

「お前も大変だよなぁ?」

「あ、あはは」

「こいつは呪術で形作られた人形。ここで消さないと何をするかわからないわよん?」

「ま、そこらへんの処理は任せるよ」

そう蒔風、貂蝉、一刀が話し、周りの武将が白装束をたたっ切ろうとする。

だがその瞬間

「北郷一刀・・・・その周りの者の一人でも多く消すべし！！！」

そう叫んでから何かを投げつけ、そして黒い霧となって消滅した。
バサリ、と白い布がその場に落ちる。

だが蒔風をはじめ一刀、貂蝉はその男が何を投げたのかしっかりと見ていた。
そしてそれが飛んでいく方向には恋の飼い犬、赤兎、そしてそれとじゃれている璃々がいる・・・！！！！

「や！！め！！！！！ろぉおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

璃々たちに投げられたダイナマイトの導火線はもうすでに残り一センチもない。
もはや一刻の猶予もない。蒔風は全速で駆けだした。

（加速開翼！！！！！）

バッ！！！！！ゴォウ！！！！！

一筋の銀白の光となった蒔風が璃々の元に到達する。

そして・・・・・・

ドッゴォォォォオオオオオン！！！！！！！！！！

「！！！！！！！璃々っ！！！！！！」

「そ、そんな・・・・・・・」

「璃々・・・・璃々ぃ！！！！！！」

「璃々ッ！！赤兎ッ！！！！！」

皆が反応できたのは爆発が起こってからだった。
食堂から食べ物を持ってきた紫苑がそちらの方に駆けだす。

恋もまた、そちらの方を見やり、そして残った装束を踏みつぶした。

「許さない・・・・・・」

皆がうつむく。

だが、すぐに声が聞こえてきた。

「うぉ～～～～～。あぶなかった～～～～～」

「かった～～～～～」

「ワン！！！」

「先の世界で身に付けといて正解だったわ～～～～～」

「たわ～～～～～」

「ワンワン！！！！」

爆心地の煙が晴れ、その場が徐々に見えてくる。

蒔風がひっくり返っており、その頭の上に赤兎が乗り、腕の中では璃々が傷一つ無くボーゼンとしていた。

「り、璃々っ！！！あぁ、ありがとうございます！！！！」

「ガキに死なれちゃ寝覚めが悪いんだ。特に礼はいらんよ」

ビッ！！と蒔風が立ち上がってから左腕の血を払って答えた。

その手の傷は爆弾から璃々たちを守った時の負傷である。

「呂布！！！邪魔が入ったみたいだから、仕切り直そうぜ！！！」

そう言っていまだに戦う気満々の蒔風に、恋が首を振り、こう言った。

「赤兎、助けてくれた。恋、お前の強さは凄くわかった」

「んあ？こんなんじゃだめさな。まだ強くないよ」

そういう蒔風に華琳が訊いた。

「あなたは璃々の命を救った。それでなぜだめなの？」

「そりゃ駄目さ。「命を救う」ってことは「その命が危険に晒された」ってことだ。そんな状況を作り出した時点で、オレの力量不足さ。

そもそも、オレがあの男がまだ爆弾持ってたのに気付けりゃこんな

事にゃなってなかったし、そんな失敗で評価を得ようとは思ってない」

「だがそんなことを言ってはキリがないのではないのか？」

そう反論する星の言葉に、蒔風が少し残念そうな顔をする。

「そう、確かにキリがない。だがいかんせん、これがオレの正義だからね。無理だとわかっていても・・・いや、無理だとわかっているからこそ、オレはそれを成し遂げたい。できないって言われることができたら、すげぇじゃん？」

「・・・・・・・蒔風、いや、舜。ありがとう」

「どうした北郷。急に下の名前で呼んで」

「今の一件で、お前の人となりは十分に分かった。お前にも、オレの事は一刀と呼んでもらいたいんだ。これがオレの、この世界での真名みたいなものだから」

「そいつぁ・・・・受け取らないわけにはいかないなぁ。よろしくな、一刀！！」

「ああ！！！」

そう言って硬い握手をかわす二人に、他の武将達も集まっていく。

「ご主人様があそこまで言うからには我々も真名を預けるほかありませんね」

「い、いや、別にそこまでしなくても」

「そうでなくても先ほどの行動には皆感心し、認める者がありました」

「は、はぁ・・・・・」

「皆も、依存はないだろう!!!」

「とーぜんなのだ!!!あれだけすごいの見せられたら認めるしかないのだ!!」

「私は娘を助けられています。本当にありがとうございます。そんな人に真名を教えないのは失礼ですわ」

「それにしても、どんな速さだ。私の目をもってしても見えなかったぞ」

「そうか?あたしには見えたぞ?こう、バーーッ、と走って行って腕を突き出してあれを止めたの」

「よ、よりょしきゅおねぎゃいしましゅ!!!」

「朱里、噛んでおるぞ?」

「は、はわわ！！！」

そう言って蒔風に真名を教えた北郷軍。
と、そこに華琳と蓮華が話しかけた。

「我々としてもあなたを認めざるをえないようね。華琳よ。覚えておきなさい」

「あの武、あの心、どれをとっても劣ることのないものだった。我々の真名も預けようと思う。これは我々全員の意志だ」

「あ、ありがとう・・・・・（やべぇ・・・覚えきれるかなぁ・・・・心配になってきた・・・・・）」

そんな小さな心配をしている蒔風。
それはともかく、無事に皆に受け入れてもらい、蒔風はほっと安心した。
だが

「ぬぐぉおお！！！？？？」

急にそんな大声をだし、皆がびっくりする。
その背中には短刀が三本ほど刺さっており、城壁にはさっきの白装束が踵を返して逃げ出していた。

「しゅ、舜!!!背中背中!!!!」

「刺さってる!!!!」

「大変だ!!!急いで手当を!!!左腕だって・・・・・・」

「・・・・のやろ・・・・・・」

「舜殿?」

「ど、どうしたんだ舜?」

星と一刀が蒔風におそるおそる声をかけると、蒔風が爆発した。

「てめえらいい度胸じゃねえか!!!地の果てまで追っかけてブッ飛ばす!!!!ってかこれ一本も急所に刺さってねえじゃねえか!!!!!やるならちゃんとやれや!!!!!」

おもっクソ元気だった。
そのまま走りだして白装束を追いかけるほどに。
その姿は妙にシュールだった。

「・・・・・・嵐のような者だな・・・・」
「なあ貂蝉、翼人ってあんな奴ばっかなのかな?」
「わからないわん・・・・・でも変な人ねぇ」
「お前に言われちゃおしまいだな」

その日、蒔風が帰ってきた頃には日はとうに沈んでおり、自分の部屋がわからなかった蒔風はとりあえずどこかの蔵で一晩を過ごした。

「あれ?どうしてこうなった?」

to be continued

恋姫†無双　～突然の襲撃、怪我の功名？～（後書き）

・・・・・・いいのか？こんなんで

アリス「少なくともあなたは自信持って下さいよ・・・・・」

さてさて、ここからどうなるのか

「奴」は明日来るのか！？

ア「次回・・・・・なんですかこれ？」

いいから読め

ア「次回、次の日・・・・・まんまかッ！！」

そうだッ！！！ではまた次回ッ！！

この錦馬超！倒せるものなら倒してみな！！

「なにをやっておるのだお主は」

蔵で眠っていた蒔風を起こしたのはそんな声だった。
目の前には星がおり、蒔風はなにかの壺を抱いて寝ている。

「うぉふぁよ～～～そして夢の世界へ～～～・・・・・・」

「こらこら、こんなところで寝るな」

再び寝ようとしている蒔風を星が起こす。
なんでもここは星がとっておきのメンマを保存している蔵らしい。

「メンマン？」

「メンマだ。まだ目が醒めていないみたいだな。顔でも洗ってこい」

そう促されて蒔風が洗面所を探して城内をさ迷い始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「ここは・・・・・どこにゃ～～～～？（ボフッ）」

「はっ、はわ～～～～～ッ!?って、舜さん?」

蒔風がやって来たのは玉座のある謁見の間だ。
今は軍師達が書類整理や白装束との戦いの準備をしている。

そこに蒔風が現れ、眠気に負けて倒れ込み、顔が諸葛亮（真名・朱里）の帽子に埋まったのだ。
そして床に倒れてあぐらをかいて座り込んだ。

「な、なにしてるんですか?」

「洗面所・・・・・どこ?」

「それならあっちの方よ。全く、ホントに昨日あれだけのことやった人間なの?」

元董卓軍軍師で今は一刀の世話係も兼任している賈駆（真名・詠）が呆れた声を上げる。

「ふい。ありがと～～～～」

そう言ってヨロヨロと歩いていく蒔風。
まだ頭がはっきりしていないようだ。

それと同時に蒔風が出て行った方とは逆の方から呉の軍師、陸遜（真名・穏）と魏の軍師の佳花が資料を持ってやって来た。

「あれぇ～？さっきまでそこに誰かいましたかぁ～？」

非常にのんびりとした口調で穏が首里に聞くと、蒔風がさっきまで居たことを告げた。

「えぇ！？それならもっと早く戻ればよかったぁ！！」

「あんたあいつが気になるの？」

「それはもう！！世界、翼人、不思議な力！！好奇心がビンビンですよぉ！！」

穏の知的好奇心はかなり高い。
確かに蒔風なんかは恰好の対象だろう。

「ったく、華琳様に言われなければなんで私があんな野郎なんかに真名を・・・・」

「あ、あはは・・・じゃあ始めましょうか。ここは・・・・・」

ーーー

「受けてたつのだ！」

ーーー

そこでは蓮華と華琳がお茶をしており、蓮華のとなりには妹の孫尚香（真名・小蓮（しゃおれん））もいた。

「洗面所ってどこかね～～～～（＝ω＝）・・・・・・」

「なんて顔してんのよ。洗面所はあなたの歩いてきた方向にあるわよ」

「とおりすぎたか～～～～ふにふに、ありがと～～～」

「お前本当に蒔風か？昨日とは別人だぞ・・・・・・」

「じゃね～～～～～～・・・・・・」

ぐらぐらと頭を振りながら蒔風が戻っていく。

あ、今頭木に打った。

――――――

「洗面所？すぐそこだぞ？でも確かお前いろいろ操る技持ってるって言ってなかったっけ？」

「・・・・・・・おぉ！？」

「気付かなかったのかよ！！！！！」

ここは一刀の部屋。

今この部屋には一刀のほかにはメイド姿の董卓（真名・月（ゆえ））がいるだけだ。

蒔風がパシャンと圧水で顔を洗い、その水を窓から庭に捨てる。

「そういえば蒔風昨日どこで寝たんだ？」

「どっかの蔵だったな、うむ」

「それは・・・・あとでちゃんと部屋を用意するよ・・・・・」

「サンキューー」

蒔風が一刀の後ろに回り込む。

今一刀は処務仕事をしている。この国の太守ともなると懸案事項がたくさんあるのだ。

「おぉ、結構な物だなぁ」

「それよりも「奴」対策はいいのか？来るんだろ？今日にでも」

「そうだな、来るのなら日が傾いたくらいかね。でも・・・・・」

「でも？」

「もしかしたら来ないかもしれない。来ない来るは・・・・・六分四分くらいかな？」

「なんでだ？早めの方がいいんじゃないの？」

「う～～～ん。まあこれは完全にオレの推測だから言わないでおくよ。今日来なきゃ当分は来ないよ」

そんな風にくっちゃべっている蒔風と一刀。

たまに月がお茶を出してくれるのを、蒔風がうまいうまいと飲む。

そしてほんの少しだけ書類を手伝ってから蒔風は約束をした庭園の方に向かった。

――――――

「来たぞーーーー」

「お？舜！！遅いのだ！！！」

「うちらもう二十三本目だぞ！！！」

「それやりすぎじゃねぇ！？」

蒔風が庭園につくと、翠と鈴々が座って水と飲んでいた。
少し離れた所には元董卓軍武将、張遼（真名・霞）が観戦している。

どうやらまたすぐに始めるようで、蒔風がその隣に座る。

「で？どっちが勝ってたの？」

「鈴々が１２勝で翠が１１勝やな。さすがに鈴々の方が強いなぁ」

そんなことを離しながら目をやると、鈴々が翠の十文字槍、銀閃を弾き、勝利を収めていた。

「やったーーー！！鈴々の勝ち越しなのだ！！！！」

「だぁーーーーー！！！！！負けたぁ！！！！」

「なぁなぁ。あんたはあの二人どう思うん？」

「ん？そうだなぁ。鈴々はまだ荒っぽさがあるがそれを補って余りある豪快な攻撃で相手を叩いているな。
それに対して翠はとてもきれいな演武を舞っている。だがまだ粗削り。極めればもっと強くなるな」

「そうやのうてぇ、女の子としてや！！！」

「あん？普通に元気いっぱいだな、うん。ああいう子は好きだぞ。どっちもかわいいしな」

「おぉ？あんさんもかずちんみたいに節操なしかぁ？」

「え？ああ、違う違う、恋愛感情はないよ、オレは。誰に対してもそうだと思うよ？」

「はい？」

「お？りんりーーーん、今度はオレとやろーーぜ！！！」

「望むところなのだーーーー！！！」

蒔風が鈴々のところに駆け寄り、翠と入れ替わりになる。

「なあ舜、あのときやった早いの見せてくれよ！！」

その時唐突に翠がリクエストしてきた。

あのときの早いの、とは昨日蒔風が爆弾に走った時の加速開翼だろう。

「見えたのか！？あれが！！！」

「あ、ああ。確か霞も見えてたって言ってたぞ？なぁ！！霞！！！」

「うん？ああ、そうやな。確かに見えたで？でもほかの皆はだーれも見えんかったいうねん」

「お前ら・・・それはすごいことだぞ・・・・あのスピードが見えたってことは、あの速さで動けるってことだ！！！」

「すぴーど？」

「速さってこと。よしよし楽しくなってきた！！！翠！！！霞！！！特訓だ、あの速さで動きたいか！？」

「確かにできるようになれたら面白そうだけどさ」

「ホンマに出来るんか？そんなん」

「何を言う！！速さに置いて一位二位の二人ならこの領域に来れるはずだ！！！なぁに安心しろ、結構簡単なはずだ。この世界には”フォルス”が混じってるんだからな！！！」

そう言って二人を庭園の真ん中に連れ出し、早速やろうとはしゃぎだす蒔風。

「で？どうするんだ？」

「こうするんだ。力を借りるよ！！」

蒔風の手にカブトゼクターが現れ、腰にはベルトが装着される。

「変身！！キャストオフ！！！」

《Ｈｅｎｓｈｉｎ．ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

「おぉ！？」

「そういえばそれなんなん？」

「仮面ライダーカブト。他の世界の仲間の力さ。制限時間があるんだ。早速始めよう！！！！」

こうして蒔風の超加速講座が始まった。

「まずは目で追ってみてくれ。行くぞ？」

《Ｃｌｏｃｋ　ｕｐ》

蒔風が消える。
だが二人の眼にはしっかりと見えていた。

「さて、なにをしたでしょうか？」

「「後方かかえ込み２回宙返り１回ひねり」」

「エクセレンッ！！正式名称・ツカハラだな。ムーンソルトと言った方がなじみがあると思う」

「むーんそると？」

「なんでもないよーーー。見えているようだから次は動いてみよう

か・・・・せぇい！！！！」

「「うおぉおお！？」」

翠と霞が必死になってかわした。
ちなみに蒔風はクロックアップしている。

「おお！？これは少し繰り返せばすぐにモノにできるな！！！！どんどん行くぞーーーー」

「ちょ、ま」

「堪忍してぇーーーーー」

「シューティーーング♪（ドンドンドン！！！）」

「「ひいいいいいいいいいいい！！？？」」

to be continued

恋姫†無双　～午前の部、「奴」の可能性～（後書き）

アリス「蒔風エグイ」

彼、何かってーとSっ気あるんで

ア「あの二人が悲鳴上げてる時点でそうとうなことしてますよね！？」

制限時間１５分だもん。

余裕を持って１０分で終わらせるつもりだよ？彼。

ア「がんばってーーーー！！！！次回、午後の部」

ではまた次回

ドキッ！乙女だらけの三国志演義！！

恋姫†無双　～午後の部、特訓の成果、夜の散歩～

昼食後、蒔風は特訓の成果だと言って何人かを庭園に集めた。

「それで、どんな特訓をしたので？」

「（ニッ）超加速」

星の質問に蒔風がしたり顔で答える。
そして翠と霞に顔を向けた。

「さ、やってみようか！」

「「おう！！」」

そう言って二人の姿がフッ、と消える。

「は？」

「ど、どこに！？」

「わからん・・・」

そして再び二人が現れた。
その間実に一秒。
二人の手にはなにかが握られている。

「あたしがとってきたのは朱里の帽子だ」

「うちがとってきたんは愛紗の青龍円月刀や」

と、二人が発表すると同時に城内から二つの声が聞こえた。

「はわっ!?ぼ、帽子がーーーーーーーー!!!!??」

「私の青龍円月刀はどこだぁーーーーーーー!!!!」

「ほらな?こういうこと。二人は無事に超加速移動法、名付けて「風足(かざあし)」を身につけたのさ!!」

「す、すごいですな・・・・」

「これは相当な脅威ね・・・・」

その場に集まった星、華琳、小蓮は唖然とするばかりだ。

その後愛紗と朱里がダッシュでこっちに走ってきた。
それに対して蒔風は

「よーいドン！！」

と号令を出して、翠と霞が再び走り出した。

「んな！？」

「二人共消えちゃいました！？」

「落ち着け。実はかくかくしかじかでな」

「なに？それは本当か！？」

「どうやら本当のようだぞ、愛紗。確かにこの目で見た。といっても見えなかったのだが」

こんなこともあって翠と霞が「風足」を身につけたことはすぐに城中に知られた。

「それは他の武将達にも出来るのかしら？」

華琳が蒔風にそんなことを聞いてきた。
それもそうだろう。
全員が「風足」を習得すれば怖いものなしだ。

「あぁーーー、残念ながらそりゃあ無理だ。あの二人だから出来たんであってそうホイホイ出来るもんじゃないのさ。
しいていうなら「文官に戦場に立て」と言うものさ」

「そう・・・」

華琳が少し残念そうにする。

「なに気にするな。その分鈴々や春蘭のように力の強い者もいるんだ。相性だよ、相性。がっはっは！」

そう言ってバンバンと華琳の背中を叩いて蒔風は一刀の部屋に歩いていってしまった。

「奴」が来るかもしれない時間になり、その周辺を固めるためだ。

「で、また来ました」

「「奴」が来るのか？」

「そこがいまひとつわからないですな。ま、今日はここにいるよ」

蒔風がベッドに転がる。

一刀もカリカリと書類をこなしていっている。

部屋にはこの二人しかいない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

～～そのまま３０分後～～

ドォン！！！

「来たか！？（ガバッ）」

「（ガチャ）すみません！愛紗さんが料理に失敗したみたいです！！」

「そうか・・・ありがとう、月」

「では片付けを手伝って来ますね（パタン）」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「「・・・・ぷっ、あはははははははははははは！！！」」

「来ないなぁ」

「来ないねぇ」

「これは来ないな、うん」

「そういうもんか？」

「来ない来ない。くそったれなことだけど、「奴」のことは一番よく知っているからな」

「？？」

～～～数時間後～～～～

日も沈み、空に星が輝くころ。

「ご、ご主人様～～～～？い、いらいら、いらっしゃいますか？りょ、料理を作ったので、少しどど、どうでしょうかっ！？」

入ってきたのは料理を持った愛紗だ。

がんばってがんばって、も一つおまけに頑張って作ったチャーハン（四回目）を持ってきている。

だがそんなことよりも重大なことが目の前手起こっており、愛紗は冷静に、それはもう冷静にチャーハンを持って青龍円月刀を構えた。

「仕事まだ終わってないのにどこ逃げるおつもりですかッ！！！！」

窓から脱出しようとする蒔風と一刀に向かって叫んだ。

「い、急げ一刀！！！鬼が来た！！！（窓の外から一刀を引き上げる）」

「ひ、引っ張ってくれ！！！！早く！！！（なんとか窓の向こうに抜け出す）」

「にぃがぁすかぁぁぁぁぁあああああああ！！！！！（ドカバリーーーン！！！と窓を砕いて飛び出す）」

「き、来たっ！！！」

「おい一刀！！誰だよこの時間は見回り来ないから抜け出してもいいって言ったの！！！」

「まさかあのまま愛紗が料理やってるとは思わなかったんだよ！！！！」

蒔風と一刀は走る走る。

だがそれも長く続かない。

いつの間にか走っているのは城壁の上にある通路だ。
後ろにはまだ愛紗がついてきている。

「仕事ほっぽってどこ行くつもりですかっ！！！！」

「しゃーーねぇ、一刀、一言何か言ってやれ」

「えぇ！？えーーーとぉ！？」

蒔風が走りながら一刀の身体を掴む。
そしてそのまま二人の身体が宙に浮いた。

何事かと蒔風の方を見ると、その背には美しい銀白の翼が羽ばたいていた。

「夜間飛行とまいりまーーーす」

「愛紗ごめん！！！でもあの量は無理だーーーーーー！！！！」

「あっ！！・・・・・・・飛んで行ってしまった・・・・・」

「おお、美しい翼だな」

「星！そこにいたならどーして止めてくれなかったのだ！！」

愛紗が見上げる先には見張り台で酒を飲んでいる星がいた。

「まぁまぁ落ち着け。ほら、これでも呑め」

「いつから飲んでるのだ、おぬしは」

「それこそ気にするな。呑んでもないと、怒りが溜まってしまうぞ？」

「・・・・ふう、それもそうだな」

そう言って星の隣に座り込み、少しだけすする愛紗。

見上げる先には満天の星。

そしてキラキラと蒔風の羽根が輝いていた。

「美しい翼だったな」

「そうだな。だがあんなことに使われては困るぞ」

「いやいや、私としてはとても面白くなってきたぞ?今一度、舜とは論議を交えたいものだ」

「そういえば・・・舜が言うには「奴」とやらは今日来るはずでは?」

「来ないのならばそれでもよいではないか。彼がいれば大丈夫だろう?」

「そうであるといいがな、ふぅ・・・・・・」

一方上空、一刀と蒔風

「うおーーーー、飛んでる・・・・」

「この世界に翼人の伝承は一般には無いっぽいからな。いやーーー、羽根を伸ばすとはまさにこのこと」

一刀は蒔風の背に乗っている。

風を受け、一刀は上着を脱いでいる。

「にしてもあっついなーーーー」

「そうだねぇ。大体秋くらいなのにねぇ」

「蒔風はいろんな世界を回ってるんだろ？何か面白い世界なかったのかよ」

「面白い世界っつったらそりゃ全部さ。面白くない世界なんかないよ。っと、一旦降りるか？どこがいい？」

「じゃあ郊外にある川にいこう。いいところなんだ」

一刀の提案に乗り、蒔風たちはスイーーーっと飛んで行き、森の中の川に着いた。
小さな滝のようにもなっており、そばにある大きな岩がいい感じの形をしている。

「いいなここ。静かだ・・・・月が明るい」

「な？お気に入りなんだ、ここ」

そう言って二人で話し始める。

「世界について、ねぇ・・・・一つだけ言えるのは、消えていい世界なんてないってことだな」

「それが・・・・誰かのエゴで作られた・・・・こんな外史でもか？」

「誰かのエゴ？」

「この世界はある程度オレの思い通りになるって左慈が言ってたんだ。だから時々嫌になる。彼女達の想いも、オレの都合であああなったのかな・・・って」

「一刀・・・・・・このバーーーカ。喰らえデコピン」

「バ！？アタっ！」

「お前はその事実を知ってさ、どう思ったよ」

「そんなんじゃないと思った。だけど、そうだったらと思うと、やり直したくなったよ」

「ふーーーん。で、結局思いどおりにするってのは嫌だと思ったんだろ？」

「ああ・・・・・」

「だったらその通りなんじゃねぇの？この世界は最初からお前だけの思い通りにではないってことじゃね？お前がそう思ってるってことはさ」

「あ・・・・・そうか・・・・・・」

「自分の思い通りの世界作るなんてな、「奴」だけで十分だってーの」

「ありがとうな・・・・・」

「なーーに真面目腐った顔して考え込んでんだか。オレが今まで巡った世界にもな、同じような力持ったとんでも女子がいたよ」

「どんな？」

「現実をある程度捻じ曲げるってやつだな。しかもそこは外史じゃないんだぞーー？」

「そ、そいつはどうしてるんだ？」

「そんなこと知らずに周り引っ掻き廻しているよ。で、その周りが彼女に知られないように事後処理してる。面白かったなーーあそこも。死にかけたけど。あっはっはっは！！！」

「笑い事じゃないだろ、死にかけたって・・・・・・」

「笑い事だよ～～～～。「死」なんてオレにとっちゃ恐怖ゼロの取るに足らないもんだもの～～～～」

「へ、へぇ～～（凄い覚悟で乗り越えたんだろうな、それは・・・・・）」

（あれ？なんか勘違いしてるかも？まぁいっかな～～～～）

「で？他に訊きたいことは？お兄さん、なんでも相談にのっちゃう

ぞ？」

「お兄さん・・・か」

「ん？」

「いや、なんでもないさ。ありがとな」

「こっちもなかなかにスリリングな体験できたからいいさ。帰るか？」

「そうだな・・・・でもオレ部屋に帰ったら・・・・・」

「オレっちの部屋来い。そこなら大丈夫だろ」

そう言って蒔風と一刀は城に戻った。

こそこそと蒔風の部屋に戻り、蒔風はどこからかやってきた荷物から寝袋を出す。

蒔風は構わないと言ったが、一刀がいいからいいからと言って蒔風がベッド、一刀が寝袋で眠った。

結局、「奴」は今日来なかった。

to be continued

恋姫†無双　～午後の部、特訓の成果、夜の散歩～（後書き）

アリス「「奴」きませんでしたね」

彼にも彼の思惑があるのでしょう。

多重世界でもないのに待つ理由が・・・・

ア「それにしても星さんよく出てきますね？」

作者が一番好きなキャラですから。

恋姫の中では一番好きです。

ア「じゃ、じゃあまさか・・・・・」

ふふふ、そうなるかはお楽しみ

ア「次回、きた！！仮面モノ！！！」

ではまた次回

やべ・・・なくなったか？

「で、オレなにしてよ？」

現在蒔風は暇を持て余していた。
え？だって「奴」来ないんだもん。

一刀達も今は左慈達白装束との最終決戦に向けて準備中だ。

「だから舜は自由にしててもいいぜ？出発まであと三日か四日かかると思うし」

と言うは一刀の談。

「あのやろぉ・・・・・自由にしててが一番不自由なんだぞーーーー？」

そうぼやきながらなんだかんだでやること見つけるのが蒔風である。

仕事を見つけ、翠、鈴々と共に街の警邏に向かう。

「それにしてもなんで舜は着いてきたのだ？」

「あー、暇だ暇だと庭で寝っ転がってたら貂蝉がやってきてな、街で面白いことがあるかもって教えてもらってそれでだね」

「面白いこと？なんじゃそりゃ」

「さぁね～～～～？」

街中をそんなことを離しながら歩く三人。
途中ラーメンや点心を買い食いしてホクホクと先に進む。

「今度警邏に出るときは舜と一緒がいいのだ！！」

「食べ物的な意味で？」

「うん！！！」

「ちょ、鈴々・・・・・」

「なんだ？翠もそんなこと考えてんのか？」

気まずそうに否定するってことはこいつもそういうこと思ったな、うん。

「う・・・・・」

「あっはっは!!気にすんな!!誰かがうれしそうにしてんのはいいもんだ、うん!!!可愛い女の子二人も連れて、おにーさん大満足だ」

「あははっ、ありがとなのだ」

「か、かかかかわいっ、ってぇ!?あたしがぁ!?」

「なんだぁ?そっち方面に免疫なしか?一刀からも言われてんだろ?」

「あ、あたしみたいに男っぽいのがか?」

「それを含めて「翠」だろうが。それ以上に説明はいらんだろ」

「うぐ・・・・あ、ありがとう・・・・・」

「正直に話して礼を言われるとは得したねこりゃ!!!」

そんなこんなで歩いていると、目の前に町民の一人が駆けよってきた。

「しょ、将軍様！！！助けてくだされ！！！」

「将軍？あ、そっかお前ら将軍か」

「そーなのだ。わすれてたのかー？」

「わり」

「それでおっちゃん、何があったんだ？」

翠が訊くと男はあわてながらも正確にある方向を指さしてこう言った。

「う、うちの方の通りで子どもを人質に取った男が暴れてんだ！！！しかも三人・・・・・」

「なに！？」

「よぉし！！今すぐ鈴々が成敗するのだ！！！」

「それはいいけどおまえら相手に怪我させんなよ？」

そう言いながら男の案内で蒔風たちがついていく。

移動中……═══ΣΣΣ≡┐(￣*)､ﾄﾞ･ﾄﾞ)┌

蒔風たちが到着する。
だがそこにはすでに先客がいた。

「はーーーっはっはっはっはっはっは！！！！華蝶仮面一号参上！！！！！」

「同じくぅ！！華蝶仮面二号参上ぉぉぉおオオオオ！！！！！ブルァァァアアアアアア！！！！！！」

「・・・・・何あれ」

「やったーーー！！！！また出たのだ！！華蝶仮面！！！！」

「その通り！！！！華　蝶　仮　面　（ビシィ！！）だ！！！！！！！」

「だから何それ？」

「事あるごとに現れるんだよ。愛紗なんかは目の敵にしてんなーー」

「え？でもあれって・・・・・せ」いだよね？

と言いかけたとこで蒔風の言葉が止まる。

『それ以上は語るなよ?』

そういった意味を持った視線を華蝶仮面改め星が向けてきたからだ。
ちなみに二号は貂蝉である。

『なるほどな・・・分かったぜ。ヒーローの素性は秘密にってことだな?』

『ほう、わかるか』

なんだこの二人。

相手はチンピラ三人だ。
チビっこいのとデブとアニキと呼ばれる長身の男である。

長身の男が男の子を人質・・・・なのか?
肩車をしてグルグルと回りながら何かを叫んでいる。酔っているようだ。

「おぉらぁ！！なんだってんだようがぁ！！！おれぁ・・・・」

「あ、アニキ、暴れすぎっスヨ！！！」

「そ、そうなんだな、さすがに鬱憤がたまってるからってこれはひどいんだな」

「うっせぇ！！！うれはよっぺまへぇ～～～ん」

「ベロンベロンなんだな」

「いいや、それよりひどいっすね」

「あーーー、あれか、完全にあの男一人の問題だな」

「しかも人質なんかじゃねえじゃん」

「男の子も楽しそうなのだ」

「何があったか知らないが、暴れているのは事実である！！！」

「酒は呑んでも呑まれるな、よぉ？まだまだってことねん！！」

「行くぞ！！二号！！」

「わかったわ、一号！！！」

「あ、始まった」

「ま、今回のはたいした事件じゃないからのんびり見てようぜ」

「・・・・・なあ、あの仮面、誰だかわかる？」

「うーーん、そういえば正体は知らないんだよなぁ・・・・・」

（なんだこれ？・・・・・ハッ！！こ、これが有名な「お約束」だというのかっ！！！）

なんだこいつ

「むぅ、なかなかやりおる」

蒔風がそんなこと考えていると、星と貂蝉がちびとデブを倒していた。

と言ってもその二人は倒れたフリだ。

戦ったのも長身にいけと言われて渋々みたいだったし。

そして長身と戦い始めてから少しして、今は押され始めている。

（これも演出か。やりおるな、星！！）

だが周りの町民は心配そうな顔をしている。
よく見ると鈴々や翠も手に汗握っている。

をい、お前らそれでいいのか？

「へぇ～～～いいな、これ・・・・・・ん？」

ゴソリと蒔風がポッケに手を突っ込むと、そこに何かあった。
取り出してみて蒔風の顔がにやりと笑う。

「あのときか・・・やるなぁ貂蝉。ありがたく使わせてもらおう」

そうして蒔風の姿が路地裏に消える。

ーーー

「なんだ?何者だ、てめえ!!!!」

その脚が一人の男の前で止まる。
男はボロボロの布に頭から身を包み、その正体は誰にも知られない。

「誰かの叫びが聞こえたんだ」

「なに?」

「力と技の二人の戦士から受け継いだこいつが、ここにオレを導いた!!!!」

男がその手に持つのは仮面。
華蝶仮面の物と同じだが、色だけは違う。

「ま、まさかてめえは!!!!」

「ふっ、助けに来たぞ!!!!一号、二号!!!!!」

「お、お前は!!!!(貂蝉、うまくやったな!!!!)」

「ま、まさかぁん!?(ふふっ、ちゃんと受け取ったようね)」

ブワサァ！！！！

男が布をはぎ取って、顔が見られる前に仮面をつけた。

「風の唸りに血が叫び、力の限り、ぶち当たるッ！！オレの名は・・・・」

そして左手を右ひじにあて、右手は親指から中指の三本を立てて甲を向ける。

「華蝶仮面、ブゥイスリァ！！！！！！」

「「ぶ、ブイスリー！！！！！！」」

「か、華蝶仮面の新たな仲間か！！？？」

「この状況で、お前の味方だと考えるほど、お前はおめでたいのか？」

「ぬ、ぬかせぇ！！！！」

「トォ！！トォオ！！！！」

ガン、ガキィ！！！！

華蝶仮面Ｖ３改め蒔風が男の拳を弾き、星と貂蝉の元に寄る。

「大丈夫か！？一号、二号！！！」

「うむ、助かったぞ！！！」

「にしてもノリノリね」

「む、危ないっ！！！」

男がどこから取り出したのか角材を振り回してきたのを、蒔風が二人を押しのけてからジャンプしてかわす。
そしてそこからそのままキックを放つ！！！

「Ｖ３スクリューキィック！！！！」

ドカッバキィ！！！

蒔風が空中で身体を捻り、そのままスクリュー状に回転しながら男に、正確には男の持つ角材に向かってキックした。
すると角材は砕け散り、男は後ろに後ずさるだけとなる。

「（我ながらうまく角材だけ破壊できたな）いまだ！！！行くぞ！！一号、二号！！！」

「「おおう！！！！！」」

ババババッ！！！！！！

三人が高く跳躍し、そこからそろって降下する！！！！

「華蝶――――トリプルキィック！！！！！！」

「ぐ、ぐあああああああああああああああ！！！！！！！！」

ドゴォォン！！！！

長身が吹っ飛び、地面に倒れる。
そしてヨロヨロと立ち上がってから・・・・・爆発した。

（えええええええ!?さ、さすがにそこまでは・・・・）

（大丈夫だ。怪我はしてない）

（そのようね。ほら、あの二人が連れて帰ったわ）

煙でよく見えないが、起き上がったちびとデブが長身を抱えて帰って行っている。

「わーーー!!新しい華蝶仮面だーーーー!!!」

「でもぶいすりーってなんだーー?」

「わかんねーけど、かっこいい!!!」

「ふ、オレが出てくるのはまだ早かったようだ。まだまだ修業の身。また会おう!!一号、二号!!!」

「あっ!!ブイスリーー!!!」

屋根を跳ねてどこかへと去っていくブイスリー。

それと同時に裏路地から蒔風がひょっこり出てきた。

「あ!!舜、どこにいたのだ?」

「今日のはスゴかったぞ！！」

「らしいな。オレはトイレに行ってて見逃してしまったよ」

と、そんなこんなで騒動は終結した。

いつの間にか二人の華蝶仮面もいなくなっていた。

撤収早いな。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

恋姫†無双　～美しき蝶の仮面～（後書き）

アリス「きた、課蝶仮面」

これ書きたかったんだ。
いや、これが書きたかったんだ

ア「何やってんでしょうね、彼」

さら？楽しそうだからいいんじゃない？

ア「次回、その晩」

ではまた次回

誰かに捧ぐ命なら　自分の境界も越えて
今ならば　ここでなら　強さに変わり　明日へ続くよ

恋姫†無双　～翼人と恋姫と～

華蝶仮面の騒ぎがあった日の晩。

蒔風は一人城壁の上で座禅を組んである技の練り込みをしていた。

「世界座標を確認。自身の心象を完全理解せよ・・・・・それを詠唱に乗せて世界に映し出す・・・・・我、異端なる者也　故にそこに法則は無く・・・・・・（ブツブツ）」

スゥ、と蒔風の周囲が毛色を変える。

見えてきたのは世界の崩壊。

そしてそこに手を伸ばし・・・・

「っぁはッ！？・・・・・・っふ・・・・はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・キッツ・・・・」

そのまま腕を後ろに伸ばしてのけ反る蒔風。

額には汗が流れている。

「お一人で鍛練ですかな？」

「んあ？」

そこで声が駆けられる。
蒔風がその声のした方を見ると、そっちには酒を飲んでいる星が居た。
どうやらさっきから見ていたようだ。

「星か。よく会うなぁ、お前とは」

「なに、私は面白いことが好きですからな。そして貴殿も楽しい事が好き。ならば出会うのはそう珍しいものではありますまい」

「さいですか。高いとこって好きなん？」

「ふむ、好きですな。下に人がいたら・・・・」

「ハーハッハッハッ！と高笑いして登場？」

「よくわかっておられる。一杯どうだ？」

「酒かぁ。オレはそんな飲めんぞ？今までだって一回しか飲んだことがないし」

「なに、良い酒だから悪酔いはせん」

「じゃあ・・・・もらおうかな」

そういって蒔風もチミチミと飲み始める。

「それにしても良い酒出すって、なんかいいことあったのか？」

「ありましたとも。あらたな正義の仲間ができましたゆえ」

「？・・・あぁ昼間の・・・・」

「どうだろうか？またやってはもらえないか？」

「また？楽しかったからいいけど」

「お？よぅしよし！これでよりいっそう正義の伝道ができますわな！！」

「正義の伝道？」

「我々の活躍を見て、子供たちは正しいこと、正義のなんたるかを知る。そうしてゆけば、彼等がこの国を動かすとき、素晴らしい世の中になっているはずだろぅ？」

「あぁ・・・そういうことか・・・・・・

だったらオレァやめるよ」

「？なぜだ？」

星は不思議に思う。
璃々を助けだし、皆とも気が合い、さらに聞けばいくつもの世界を救ってきた男。
その男が次世代に正義を伝えるのに積極的ではないとはどういうことか、と。

「オレの正義と世間一般の正義は違うの」

「あなたの・・・正義？またなにをいうか。すべてに通ずる正義などありはしない。私もあなたも、異なる正義があり、似通った部分があるからこうして酒を交わしているのだろう？」

「自己正義までは知ってるのか・・・・・まあ、オレの正義もそうだよ。言っちまえば「自己満足」だな」

「それでも伝えることはないと？」

星の言葉になにかおかしなものを見たかのようにくっくっく、と蒔風が笑う。

「あぁすまん。別に馬鹿にしたわけではないんよ。それでも伝えることはあるさ。それは確かだ。ただオレが言っているのは違うんだ

よ」

「どういうことで？」

「うーん・・・・・・少しだけ長くなるけど、いいか？」

「時間だけはたっぷりありますからな」

「では・・・・・・

最初に言うと、オレには死の恐怖がない。
死を理解してしまったからな。
そこらへんは割愛させてもらうが、まぁそういうことなんだ。

星、戦いの時、お前は死を恐れるか？」

「ふむ？確かに傷や痛み、死ぬことは恐ろしいな。だが私を信じる仲間や国のために戦うのだ。恐怖は乗り越えている」

「そうだろうな。「死ぬのは怖くない」とか、「死を克服した」って奴はゴマンといる。
だけどそいつらは根本的に死の恐怖がないわけじゃない。

揺るぎない信念、絶対の覚悟でそれを乗り越えた強さだ。

だがオレのは違う。
大した信念も覚悟もなく、ある日「死を理解した」というだけでそれを打ち消した男だ。

信念や覚悟、正義を下地に死を乗り越えたんじゃない。
まず最初に死が無く、そこに言い訳するように正義を貼付けただけだ。

自分の自信にはなるさ。
死なない理由くらいには使える。
でもいくらオレが正義を叫んでも、それはその場しのぎの弁舌に過ぎない。
誰かの感情を左右できても、芯を変えるものではないのさ

そんな薄っぺらいものが誰かの模範になっていいわけがない」

「では・・・・・・あなたは・・・・・・」

あなたはそのような状態で世界を守り通して来たのか？
そのような少し揺るがされれば簡単にぶれてしまうような心境で？

星は目の前のこの男がとても儚いモノに見えてきた。

今にも消えてしまいそうな今の自分。

世界を幾度も救った世界最強は、誰よりも崩壊しそうな脆い精神を持つ人間だった。

にもかかわらず

彼はいくつもものを背負いすぎている。

負けることの許されない戦い。死。さらにはすべてを理解する狂気と理性。

もしかしたら誰かの死をも背負っているかもしれない。

「・・・・・・・」

蒔風が天を仰ぎ、目を閉じる。

その瞬間、星は想った。

この男を消したくない、と

「舜・・・・・・」

「あん？」

蒔風がなんでもない顔をして振り向くと、星が肩を抱いてきた。

「お主は・・・消えないでくれ」

「なんだよいきなり。それに・・・当たってるぞ」

「ふふ、当てている、と言ったらどうします？」

「え？なんだなんだ？
おい、なんで顔赤いんだ。まさか・・・・・・勘弁してくれ・・・・・」

「わかりましたかな？どうやら私はあなたを大切に想ってしまったようですぞ？」

事実上の告白だった。

蒔風舜、世界をめぐり始めていろいろあったが、今だに心は年齢１９歳。
生まれて初めての告白だった。

そこで蒔風が返した言葉は・・・・・・

「やめておけ」

これだった。

いままで人の想いを尊重してきて、それを守った男が、それをやめろと言った。

蒔風が立ち上がり、星に背を向ける。

「なぜですかな？」

「言っただろう。

オレはまともなもんじゃない。そんなオレを好む奴なんなんてのも、まともじゃない。

変な奴って意味じゃなく、存在が、だ。星は・・・違うだろ？」

「だが・・・・・それでも！」

星が立ちあがって蒔風に向く。

そんな彼女に蒔風はさらに追い打ちをかけた。

「それに俺には恋愛感情がわからない」

「え？」

「いや、それが何なのかとか、素晴らしいものだとかは理解している。

・・・・オレはみんなが好きだ。もちろん、お前もな、星。だけどそこから先がわからないんだ。一体どこからが恋愛感情なのか、どこまでが人間的に好きなのか、わからない・・・・・・オレの人類愛はデカ過ぎる。オレが、人間じゃないからな。翼人と言う意味ではなく、異端、という意味でだ。

そんな男のそばにいて、一体何が幸せだろうか？
たとえどれだけ愛してくれても、オレはその人一人に注ぐ愛情を持っていない。
人としての好意なら、いくらでもいい。

だが男女としての好意を向けられてオレは・・・・・・・自分に自信がない」

「そんな・・・・だったら・・・・」

「そんな奴を好きになる？それじゃ不幸になるだけだ。
いくらお前が好きだと言っても、オレが好きなのは世界のすべて。

その中にお前がいるだけなんだからな」

「それでも・・・・あなたのッ！！！」

そして星が蒔風に駆け寄ろうとした瞬間。

「我、この世界より異端とされた『人間』・・・・・・・」

蒔風がそれを呟く。
瞬間、星は何か得体のしれない物を知覚した気がした。

「う、うわっ・・・・・・」

「・・・・・・・」

それを首だけひねって見た蒔風は、少しだけ悲しそうな、残念そうな顔をして、その場を去ろうとし・・・・・・

足を止めた。

「どうした?酒でも染みたか?」

ぽたり、ぽたりと

何かが

こぼれる音がした。

「ああ・・・・今夜の酒は・・・・沁みてな・・・・・」

「そうか・・・・よい酒だったけどな・・・・・」

「ああ・・・・・沁みるよ・・・・だが、私はそれでも・・・・・「この酒」は諦めない」

「・・・・・・・好きにしろ」

「絶対に・・・・諦めん。私はこれだと思ったらもう止まらないの

でな」

「・・・・・・・・・」

蒔風がその場を今度こそ去る。

その時、彼の顔はどんなものだったのだろうか。

誰にも理解されることがなく、ゆえに誰からも信頼されながらも、
誰とも共に旅せぬ男。
彼に理解者はおらず。

彼は・・・・・いつか戻れるのだろうか？
世界から異端とされず、純粋に死を恐れ、そして・・・・・

彼は知らない。
まだまだ知らない。

世界はここまで残酷であることは知っている。
だが、同時に

彼をここまで救ってきたのも、世界自身だということを。
いつか訪れる救いが、彼に訪れるよう・・・・・・・・

to be continued

恋姫†無双　～翼人と恋姫と～（後書き）

アリス「なんか寂しいですね」

ハナっからあの男に相手などいません。

でも、もしかしたらいつか・・・・・・

ア「そうあることを願ってます。次回、決戦日」

ではまた次回

我が主よ。共にこの乱世を治めましょう！！

恋姫†無双　～進軍、そして特攻～

蒔風がやって来てから数日が経ち、準備が整った。

今日、一刀たちは左慈たちに最終決戦を挑む。

「皆のもの！！準備はいいか！！！」

オオオオ

「一刀、華琳や蓮華たちは置いてきてよかったのか？」

「それは」

「彼女らはあくまでも我等が捕虜。軍を率いられては我々はともかく兵達が困惑しますからな」

「そ、そうなんだよ」

「・・・・・・・」

「で、なんでオレの横にちょこんといるんだ？星」

「おや、いいませんでしたかな？諦めないと」

「舜？」

「ああ一刀、これはな・・・・・」

「がんばれ！応援する！幸せにな！！」

蒔風の拳が一刀の顔面に減り込んだ。

「ノォ！私の顔が！！顔がぁぁぁ！！」

「ったく・・・・う？なんでしがみついてくる、頬を寄せるな、胸を当てるな！！」

「おや、つれないですな。こんな美少女が引っ付いているというのに」

「確かに好意はうれしいがオレから返せるものがないからやめてくれ」

「なに、いずれあなたに恋愛感情が生まれた時に私がこういうことをしていたと覚えていれば一発でないですか」

「はいはい、そうなるといいですねーーーーー」

「おぬしらはなにをイチャついとるか！！御主人様も騒がないで下さい！」

一刀、蒔風、星が馬を操る愛紗に怒鳴られる。

今四人がいるのは馬車の幌の中だ。
うち愛紗は馬を操っている。
馬車のスピードは周りの行軍と同じスピードで、結構ゆっくりだ。

「向かう先はどこなんだ？」

「山中にある寺殿よぉ。よっこらしょ」

「貂蝉」

そこに貂蝉が馬車に乗り込んできた。
馬車が少しだけ沈む。

「御主人様はその寺殿の奥に安置されている鏡に触れなければならないわ」

「オレが？なんで？」

「なんでもよ。理由は秘密」

「ってか貂蝉！降りろ！馬が疲れる！」

「あらいやだ。舜ちゃんったら漢乙（おとめ）に重いというの！？」

「「「「いいからオルィロ！！」」」」

「な、なによ、みんなして・・・・」

貂蝉が渋々降りていく。

なんだか寂しそうに。

「ダァーッ！わかったわかった！オレも一緒に歩いてやるからそんな悲しそうな顔すんなや！！」

「舜ちゃん・・・・・もしかしてあたしのこと！？」

「それはない」

「それでもいいわ！舜ちゃん愛してる！」

「友人の域でならいくらでも。本当の愛は一刀にな」

「ごっ主人さまぁ！！」

「ギャー！こっちくんな！！」

一刀も引きずり出され、一緒に歩く。

三人が馬車の後ろを歩き、星が足を馬車からぶらつかせて組んで座る。

「御主人様～～～。翠さんが戻って来られました～～～」

そこに朱里の声がして、翠と一緒にやってきた。

翠は先に戦場を下見してきていたのだ。

朱里が馬から降りて、翠と馬車の中に入る。

「翠さんの「風足」はすごいです。おかげで正確な地形がわかってきましたから」

「馬に乗ってると出来ないのが残念だけどな」

「どんな地形だったんよ？」

「話にあった寺殿は見れなかったけど、周囲の地形はわかったぜ。長い長い階段が岩山に伸びていて、その両脇にも岩山が崖みたいにそびえてた。道の両脇に岩山があるってよりは馬鹿でかい岩山を切り出して道にした感じだな」

「細い通路か・・・・」

「翠の話だと両脇は五十メートルくらいしかないみたいだな」

「あそこで戦うのはまずいと思うんだ」

「そうですね・・・攻めるに不利、守るに有利な地形ですから・・・」

「一刀を餌に引きずり出したら？」

「可能かもしれませんが、それでも兵は残されます。最悪、挟み込みに」

「どうしますかな?主」

「うーん・・・・」

「・・・・なぁ、白装束って呪術で作られた泥偶人形なんだよな?」

「そうです。でもなんで?」

「相手に命と呼べるものが無ければ容赦する必要はねぇ。先陣はオレが行こう」

「舜が?」

「そ、オレが」

・・・全員思考中・・・

「ありね」「ありですね」「ありですな」「ありだな」

「まぁ見てろ。翼人の強さ、見せてやる。地形変えないように気をつけないとなーーーーー」

こうして方針は固まった。
あとは攻め入るのみだ。

――――――

そういう左慈の瞳には世界を修正するという指命以上のなにかがあった。
彼がここまで一刀に執着している理由はわからない。
だが、その行動には憎しみが混ざっていた。

「やれやれ。あなたらしくもない」

「うるさい。オレはいく。ここは任せた、于吉」

「あなたの期待に応えましょう、左慈」

その会話を最後に左慈が消える。

「さて!!お願いしますよ!!わたしの人形たち!!!」

そういってバッ!と両腕を開く于吉。
その眼下には幾万の白装束。
準備は万端だ。

と

その瞬間

ゴギュオァ!!ドッゴガァ!!

、一筋の光が軍を貫き、ど真ん中で爆発して止まった。

「な、何事!?」

「閉翼っと・・・・・・さて・・・・・・名乗ろうか?!観測者!!」

「あなた・・・・・・何者か!?」

「オレは・・・・・まぁ、なんだ・・・・・ただの世界最強、すべての勝因だ!!!!!!」

「なに?」

「さぁー覚悟しておけ?お前らの目の前にいるオレが敵である時点で、お前らの勝利は・・・・・・まぁないんじゃね?絶対とは言わないけど」

それと同時に、蒔風が両腕を真横に開く。
するとその腕から炎が柱のように噴き出て、両側の岩山を爆破させて崩していく。

ズギャッ、ズギャッ！！！！ボゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

そしてそれをそのままブン回して周囲の白装束をなぎ払っていく。

「な、な、な・・・・・」

「さぁて、久々にやるぞ！！！風林火山、四季早々！！！！！！」

蒔風が風林火山をくみ上げ、片手ずつに持ち振り回す。
白装束たちが吹き飛んでいく。

――――――

「はじまりましたね」

「ああ。舜はうまくやるって言ってたけど、本当に一人で大丈夫なのか？・・・・・」

「なに、彼はあの程度の雑兵にやられる男ではないですよ」

蒔風が戦ってるところから離れた場所で、一刀たちが吹き飛ぶ白装束たちを見ていた。
まるでご飯粒が散っているみたいに見えるくらい遠くにいる彼らは、蒔風の合図に合わせて一気に攻めるつもりである。

「今は待とうか。舜の合図が来るまで、な」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

恋姫†無双　～進軍、そして特攻～（後書き）

アリス「さあ始まりました決戦！！」

ようやく恋姫の世界も終わらせられそうですね。
ってか星との話だけになってしまった感が・・・・・・

ア「しょうがないですよ」

あんなんでよかったのか？

ア「さぁ？次回、まずは戦ってみよう！！」

ではまた次回

どーにも、こーにも世界の主・役、はあ・た・し！！！

恋姫†無双　～無限の人製？～

「花吹雪！！」

ドゴォア！！

斬撃が吹き荒れ、周囲を飲み込む。
蒔風の「鎌鼬斬演舞」が白装束たちを消し去っていく。

その光景を見て一瞬焦った于吉だが、

「ですが・・・・・一人でこの数を消し切れますかな？」

幾ら蒔風が暴れても如何せん相手は幾十万の人形。
消し切るまで何時間とかかるだろうし、その間に人形をまた作り出されたらいたちごっこだ。

（ＶＳ大軍勢ってのは初めてだが、これはこれで面倒だな。一気に吹き飛ばすと地形かわって寺殿まで無くなっちまうし。ま、面白い経験が出来たと思えばそれでいっか♪）

さらに蒔風が花吹雪から津波、秋風、霜柱と続け、大体五万くらい

削っていく。

（あの男、一体何者でしょう。たしかこの外史においてイレギュラーは北郷一刀のみのはず・・・・む？）

そこで蒔風が峡谷から飛び出て荒野に立った。

何人かの白装束が追って行こうとするのを于吉が止める。
彼等の指命はここで北郷一刀を待ち、殺すこと。
わざわざここから出ずとも、来るのを待てばいいのだから。

「流石に追ってはこないか。まあいいや（ドゴン！！）引きずり出すだけだ」

蒔風が両拳で地面を殴りつける。
すると、地面がグワッ！！と起き上がってきた。

畳返し

蒔風の技術の一つだが、今回は大きさが違う。

高さにして数十メートル。

見上げれば首が痛くなる高さだ。
それだけの地面が今、広大な荒野にそびえ立っていた。
それに蒔風が手を当てて能力を発動させる！！
「混闇陣！！」
ズルッ！グバァ！！
巨大畳返しの表面が混闇に包まれる。
混闇は引き付ける重量の力。
それをこうしたらどうなるかは・・・・・あまりにも明白だ。
「うわぁぁぁぁあああああ！！」
「あああああああああああああ！！」
「ぐおおおおおおおおおおおお！！」
白装束達が次々と宙を舞って混闇陣に引っ張られて峡谷から引きずり出されていく。
「そぉら！まだまだまだまだまだぁ！！」

さらに同様のものを幾つかブチ立てていく蒔風。
それによってほとんどすべての白装束が峡谷からいなくなった。

巨大畳返しの一面にびっしりの白装束。
正直気持ち悪い

「む？これはまずいです」

なんでもないように言う于吉。
だが、その瞳には少しだけ焦りが見えた。

「さ、チェックメイトだ」

ウォォォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！
！！！！！！！

蒔風が腕をスッ、と降ろすと巨大畳返しが混闇側を下に倒れ、白装束を潰して消し去る。

そしてその後ろから、待ってましたと待ち構えていた北郷軍が一気に爆発したように突っ込んできた！！

「ほどよくウズウズしてたみたいだな」

「舜！うまくいったな！」

「ああ、一刀。行くぞ！！」

「ああ！」

峡谷に残った白装束の数は一万に届くかどうかといった感じだ。
そこに押し寄せる北郷軍は幾数万。
勝敗は明白・・・・のはずだった。

「まったく、ここでこんなにも力を使うことになるとは」

バシュゥ！！！ババババババババババババン！！！！！！！

于吉が腕を振るう。
するとさっきまで無人であった峡谷が一瞬で白装束の塀に埋め尽くされる。
その数は当然ながら北郷軍を圧倒し、迫りくるそれを迎え撃とうとしていた。

「なっ！？一瞬であれだけの兵を！！！」

「くそっ！！だが兵はもう止まれん！！！行くぞ！一刀！！」

「あ、ああ！！！愛紗、星、鈴々、翠、紫苑、朱里、恋！！！」

「「「「「「「ハッ！！！！」」」」」」」

「絶対に、死ぬな！！！！！」

「「「「「「「御意に！！！」」」」」」」

ドゴォ！！！

ワアアア

戦い、ただの一人も命を落とすことは許さん！！！！！出番だお前ら！！！龍虎雀武、獅子天麟！！！！」

「ひっさびさの出番！！！！」

「はしゃぐなやガキ！！ここは戦場だぞ！！」

「では我らの仕事は」

「皆の命を散らさぬこと、ですね？」

「ふふ、やりがいあるのぉ！！！」

「んま、やったるかい」

「・・・・では、主」

「行くぞ皆の者！！！」

蒔風が七人を召喚し、戦場に散らせる。

と、同時に背後から迫りくる白装束を薙ぎ、一刀の馬の後ろに飛び乗る。

「一刀！！この呪術おかしいぞ！？いくらなんでもこんだけの人形を出すなんざ、オレはたった一人しか知らねえ！！！」

「つまり・・・どういうことだ？」

「何かあるぞ。あの男、あの場から動いていない。いくら指揮をとってるとは言え、全く動かないのはおかしい！！！」

「北郷一刀オオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

「ッ！？ディバイン！！！！！バスターーーーーーーー！！！！！！！」

ドギュゴァ！！！！！！

蒔風が桜色の砲撃が戦場の白装束たちを吹き飛ばす。
その力の使用のために、青龍たちをいったん戻してからまた出すというめんどくさいことをしている余裕もあるのだが。
蒔風が蹴散らしたその空白部分に白装束たちがすぐに埋まっていく。

「きりがねぇ！！！一気に潰す！！！！朱里ィ！！！！！！！！！！！！！」

蒔風がどこともなく朱里の名を叫ぶ。
これを合図に、彼女が軍を指揮し、ひと塊りに集めて行く。

「おお！！さすがは朱里の策。こんなにも簡単に奴らを固められたぞ！！！！」

「そこは私の名を呼んでいただきたかったなぁ・・・・」

お互いに背中を預けながら戦っていた愛紗と星がそんな感想をこぼしていると、遠くに見える蒔風が一刀の後ろで剣十字の杖、シュベルトクロイツをかざし、魔力を込める。

「行くぜ・・・・・デアボリック――――エミッション！！！！！！」

ズゴォ！！！！！

灰色の巨大な球体が于吉軍を飲み込み、その内部の物を徹底的に攻撃しつくす。
だがすべては覆えない。周囲では北郷軍が取り囲んでいて、万が一飲み込まれたら大変だからだ。

故に次は任意の敵を刺し貫く呪いの槍を！！！！

「さぁて、覚悟しな！！！」

蒔風が高く飛び、その手に紅の槍を掴んで振りかぶり、それを軍勢に向けて投射する！！！！

「突き穿つ――――――死翔の槍！！！！！！！！」

ゴォォォォオオオオオオァァァァァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

必殺の槍、ゲイボルグ。
その真の使い道をもって、白装束たちが派手に消し飛んだ。

その光景に北郷軍の誰もがガッツポーズをとる。

「よっし！！これで！！！」

だが

「とでも思いましたか？残念ですね」

ボゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！！！！！！！

于吉が再び腕を振るう。

「取り囲んだ、と思った側が、実は取り囲まれていたのはよくあることでしょう？」

いま北郷軍は峡谷の中心にいる。
そしてその峡谷の両側から、正確には両側の崖から、白装束たちがボゴボゴと這い出てきたではないか。

一面に現れて行く白、白、白。
びっしりと現れたそれらの腕には、矢、槍、剣が握られており、ドンドン抜け出してきて地面に降り立つ。

「マジかよ・・・・・これ反則だぞ！？」

「さて、私は愛しの左慈に、こう報告するとしましょう」

「全員伏せ・・・・・・」

「北郷一刀とその仲間は、無事に始末しました、とね」

その腕が振りおろされ、幾射もの矢が飛ぶ。

蒔風が一刀に覆いかぶさり、周囲の者を守るよう青龍たちに思念を飛ばす。

ドドっ！！！ドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！！！

幾千本もの矢が、何百人もの人影に突き刺さっていった。

to be continued

恋姫†無双　～無限の人製？～（後書き）

アリス「原作やってればこの後の展開丸わかりですね」

言うな！！それを言ってはいけない・・・・・・・・

ア「于吉ヤベエ・・・・・」

あなたそんな口のきき方してはいけません！！！

ア「それより心配なのは皆さんが「鎌鼬切演武・四季早々」の形を覚えているかどうかです」

心配はいらない。
わからなければ過去の話を読む。
そしてアクセス数がウハウハじゃあ！！！

ア「きゃあ、何て汚い作者！！！」

狡猾と言ってくれ。
そろそろお気に入り１００件行きそうですね。

また何か考えますか・・・・・

ア「あと二件ですよ？」

思いつくかどうかが勝負！！！

ア「次回、まあ大丈夫なんじゃね？」

テキトーだ！？ではまた次回

あなたのハートはこの私のもの。

それは天命で定められていることよ！！！

（恋姫†無双・覇王プロジェクト・魏より）

矢が放たれ、次々と突き刺さっていく。

「ぐっ！」「ガァッ！」「ぎゃあ！」「ぐお！」「いぎゃ！？」

ドドド

「さあ！魏の勇士達よ！！！我等の強さを、姿形だけの人形共に見せ付けてやれ！！！」

オオオオ

しない」って。だから私は私の意志でここに来たの。それと・・・・
（ゴガン！！）」

「アダッ！？」

華琳が蒔風の頭を己の鎌、「絶」の柄で殴る。

「だぁ～れが「ちっこい」ですってぇ？（怒）」

「お前だ！いやはい、ごめんなさいごめんなさいあっはっは！！（
ゴン！）イダッ！！」

華琳の援軍に態勢が再び傾く。
だが于吉はそうしている間にも次々と人形を生み出している。

「あいつの足元、なにかあるぞ」

「常識的に考えてこれだけの人形を短時間で休まず作り出すなんて
不可能よ」

「舜、いくか？」

「よし・・・・行くぞ！翠、霞！！道を開いてくれ！！」

「応！！」
「任しとき！！」

「春蘭！！あなたも行きなさい！！！」

「御意に！！」

「私も行くぞ！！」

翠と霞が「風足」で動いて白装束を蹴散らしていく。
道はすぐにひらけた。

蒔風と一刀が乗る馬が、愛紗と春蘭の援護を受けながら、一直線に
于吉の立つ階段に突っ走る！！！

「む！？流石にきますかっ！！」

「オラァ！！」

蒔風が馬から飛び出し、右腕を振りかぶって于吉に迫る。

「させませんッ！！」

バチィ！！

だがその拳は呪術の防壁に阻まれ、弾かれてしまう。

「ＡＴフィールドかよ!?いや、違うけどさ!!」

「ここは通しませんよ!」

蒔風と一刀は階段を二十段か三十段くらい登ったところで于吉と向き合う。

下方では愛紗と春蘭が白装束が来ないように迎撃し、さらに下方には凄まじい戦闘が繰り広げられている。

「舜!!早くしろ!!」

「この数は・・・・・やばい!!」

「一点突破する!朱雀!!」

蒔風が朱雀を呼び、その手に朱雀槍を握り締め、于吉に突進する。

バキン!!ズギャアッ!!

朱雀が尋常ならざる鋭さにて、于吉の障壁を突き砕く。

ついに于吉がその場から動き、蒔風の突進が于吉の立っていた階段

を吹き飛ばした。

ガラガラガラ、と岩が崩れ落ち、その向こう側に何かが見える。

ゴウンゴウンゴウンゴウンゴウン・・・

「さぁ！！北郷軍も、魏軍も！！！押しつぶしてしまいなさい！！！！」

「なんじゃこりゃーーーー！？」

三人の巨人が周囲を蹂躙する。
北郷、魏、両軍ともその三体に疾走するが、わずかに斬り出せるのはほんの数体分のみ。

戦いが長引いたせいで、負傷者が出、とてもじゃないが人数が間に合わない！！！！

「今すぐこれを！！！！！！」

「させませんよ！！！！」

ドッフン！！！

機械に走る蒔風の目の前に、三体のうち一体が手のひらを落とす。
そしてそのまま階段の蒔風たちに覆いかぶさるようにして機械を守る。

「こんなんで・・・・止められるとでも思ってんのかぁ!?」

「今それを放てば階段は崩れ、頂上まで無くなりますよ!!?それでいいのですか!?」

蒔風が力を込め、その手に獄炎を溜めこむが、于吉のその言葉にビタリと止まる。
于吉の言うこともっともである。

さらに言うならば一点を打ち抜く絶光などを放てばその部分だけ修復して立ち上がるだろう。
しかもそれで倒れてしまったら一刀達はぺしゃんこだ。
それを支えられても、その間に回復されては意味がない

「ちぃ!!!面倒なことを!!!!」

「華琳様!!!」

「っ!!めんどうね、あれ・・・・でも・・・・・」

「華琳どの!!!他に援軍は!?」

「ええ。そろそろ来るわよ。私たちと時間を逸らして出陣した彼女たちが、ね!!!!」

ドォーーーンドォーーーーンドォーーーーーーン！！！！！！！

そこで銅鑼の音が鳴り響く。

三体の巨人の足に縄や網が巻き付き、それにもつれて倒れ込む。

「往くぞ！！！！孫呉の誇りを、今見せつけてやれ！！！！！」

「「蓮華殿！！！」」

「遅かったじゃない！！」

「予定通りの時間だ！！！でも・・・確かに、少し遅れたみたいね」

「はぁ～～～いみなさ～～～ん。おっきな敵はまず、足元をすくっちゃいましょ～～～～」

「引けぇ！！！！力の限り縄を引け！！！！我らの力を、見せつけてやるのだ！！！！！」

オオオオ

そしてそれを機械の目の前でキャッチして一回転し、その勢いを殺すどころか何倍にも上げて、鉄の塊に突き立てた！！！！

ガギョッ！！！ギ・・・・ギガガガガガガガ！！！！！！！！

「朱雀！！！！飛翔！！！！！！！」

さらに反対の手に握る朱雀槍の先端が翼を広げたように三又槍になり、それに焔をまとわせて回転させ、機械を一気に貫いた！！！！！

ゴギャァァアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！ッッ！！！ズゴォォォォォオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！

機械が爆発し、その効果が切れる。
だが白装束たちは消えない。

「もう出てんのは消えないか。ま、とりあえずっ！！！！」

ジャキィ！！！！

朱雀槍と龍牙を于吉に突きつけ、蒔風が睨みつける。

「今度こそ、チェックメイトだ」

「そのようですね・・・・・では最後にささやかなプレゼントを」

ボゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！

于吉の言葉と共に、さらに出現する白装束。
だがさっきまでよりかは数が少ない。

だからと言って無視できる数でもない。

「私自身の力でも、これだけの物は出せますよ？」

「やめなさいよこら！！！！」

蒔風が二槍を振るうが、それよりも早く于吉の姿が消え、二つの刃が虚空を斬る。

『私は頂上に行ってますよ。ではこれで。アデューー！！！！』

そんな声が響き、一刀が階段を上ろうとするが、下で戦っている華琳や蓮華たちを見て、どうするべきか悩んでいる。

「一刀！！！何をしているの！！！行きなさい！！！」

「私たちはここでこいつらを食い止める！！！お前はあいつらと決着をつけろ！！！！！」

だがそんな一刀の背中を押したのは、他でも無い華琳と蓮華だった。

「一刀、あの二人はお前を先に行かせてくれるようあそこで踏ん張っている。それを無駄にするな！！！」

「・・・・・・・ああ・・・・ああ！！！！」

「早く終わらせて助けに戻るぞ！！！！」

「皆、行こう！！！！」

一刀が蒔風、星、愛紗、鈴々、翠、紫苑を引き連れて階段を疾駆する。
途中崩れているところもあったが、蒔風が土惺で修復していった。

「行ったわね？」

「そうだな」

「では、できる女と言う物を見せてあげましょう！！！！」

「望むところだ！！どちらの軍が多く倒せるか、勝負だ！！！」

そうして彼女達の最終決戦も始まる。

階段をかける一刀たち。

そこで行きついた先に、この外史の終わり（エンディング）が待っている。

to be continued

恋姫†無双　～北郷、援軍に助けられるのこと～（後書き）

アリス「今回はなんともすごいですね」

なんとか原作っぽくできたかなぁ？
熱く熱くなっててくれればそれでいいですね。

ア「たしかあなた書いてるとき曲聞きながら書いてますよね？」

大体はそうですね。
熱い、という意味では主題歌「Ｈφｗｌｉｎｇ　Ｓφｕｌ」を聞いてましたね。

ア「いい感じに熱いですね」

ハオプロとか突っ込みどころあり、それでいていい歌ですしね。
もう一回ファンディスク出てくれないかなぁ・・・・・

そしてついに！！！！！

お気入り登録百件突破ぁ！！！！！！！！！！！

でもどうしよう！！何も考えてないや！！！！！
でも何かやろう！！！！！

ア「次回、最後の戦い」

ではまた次回

国王が恋をしても・・・よいではないか！！！

（恋姫†無双・覇王プロジェクト・呉より）

「左慈っ！！」

「北郷ォ！！」

頂上の寺殿に到着し、重々しい扉を蒔風が蹴り破って突入。
その直後から入って行った一刀と左慈の視線が交差し、互いの名を敵意を込めて叫んだ。

その左慈の後ろにある壇上にはどうなっているのか淡く、だが力強く光を放つ銅鏡が置かれていた。

「あれだ！」

「一刀を行かせろ！」

「北郷ォ・・・・・・一刀ォォオオオオオ！！！」

左慈が銅鏡に走る一刀目掛けて殺気の篭った蹴りを放つ。

「させっかい！！」

それを蒔風が蹴りで受け、一刀を先に行かせる。
左慈がいまいましそうな顔で蒔風を睨む。

「貴様どけ！！」

「残念ながらそれはできん。この世界の行く末は、彼等が決めることだ。観測者は下がってろ！！」

「うるさい！！観測者だとかにはうんざりだ！オレは呆けたジジィどもとは違う。できるなら世界を修正にもっていく！！」

ゴォォォオオオオオオオオオオオオッッッ！！

蒔風と左慈が交戦している間に一刀が鏡に到達し、触れる。
すると鏡が一気に強烈な光を放ち始めた。

「世界（ものがたり）にはいつだって始まりと終わりがある」

「我々はマイナス方面から」

「私はプラス方面から、今ここに一つの物語が集結するわ」

「願わくば、終末（エンディング）を」

「願わくば、続編（コンティニュー）を」

「「さぁ、世界を指し示せ！！」」

いつの間にか銅鏡の脇に立っていた于吉と貂蝉が一刀に向けてそういった言葉を投げかける。

「ち、オレの役目はここまでか。できれは殺してやりたかったが、まぁ、仕方ない」

その言葉と共に世界が光に包まれ、そして・・・・・・

――――――

「ここは・・・・・フランチェスカ学院？」

「ここが一刀の母校か」

「舜！！みんなも！？」

一刀が目を覚ましたのは一刀の通っていた学園、聖フランチェスカ学院、その庭園だ。

周囲にはみんながいた。

北郷軍だけでなく、魏、呉、さらには城にいたはずの月と詠まで。

「わ、私たちは白装束と戦っていたはずでは？」

「それに、ここはどこだ？」

「一刀のいた世界・・・お前らにわかるようにいえば「天の国」ってとこか。な？貂蝉？」

「そう考えてもらって構わないわ。ここが御主人様のいた正史なのか、別の外史なのかはわからないわ。でも、物語はまた始まったようね」

「そう・・・・なのか？」

「では・・・・すべて終わったのだな！？」

「やっぱり鈴々たちが勝って一件落着なのだ！！！」

「やったな！！舜！！！」

「いぃや・・・・終わってねえぞ全員伏せろ！！！」

ドグォアッ！！！！！

真っ黒な波動弾が上空から打ち出され、それが全員の中心部分にいる一刀目掛けて飛んできた。
それを蒔風が獄炎弾を真っ向からぶつけて相殺する。

ズゴッ！！！ズズズズズズズ・・・・・・ボゴォォォォォォォォォォォォォォォォアアア

花壇の花はその爆風に耐えられず花弁を散らし、周りに立つ林の木々は何本かから炎が上がって燃え尽きる。

「うわあああああああああああ！？」
「なんだぁ！？」
「これは！？」
「きゃあああああああああ！！！」
「ご主人様！！！！」
「舜！！！！」

皆が思い思いの悲鳴を上げ、地に伏せる。

「今ここに！！世界は成った！！！食べごろだと思わないかね？諸君！！！！」

「そうだよなぁ、来るころだと思ったよ！！！」

蒔風が上空を睨む。
そこには「奴」が浮かんでおり、その手からは波動弾を打った名残か、ゆらゆらと黒いオーラが残っていた。

「あのまま食ってもよかったんだがな？せっかくこうやって世界が成ってより濃密なものとなったんだから、そっちの方がいいだろう？っと！！！！」

ガバギィ！！！！

「能書きはいい。今すぐ出てけバカ！！！！」

「おーおー、蒔風さんちの舜君は怖いねぇ～～～」

「ざっけんな！！！！」

蒔風が話し途中の「奴」に「獅子」を握って斬りかかるのを、「奴」もまた「魔人」を抜きそれを防いでいた。

「オレとしてはこのまま全員ぶっ放すのが・・・・・簡単なんだがな！！！！！」

ドォン！！！！

さらに反対の腕で二、三発と先ほどと同様の波動弾をぶっ放して周囲ごと一刀を殺そうとする「奴」。
それにいち早く感づいた翠と霞が風足で一刀の前に立ち、それを防ごうとする。

ドゴォ！！！

だがそれを防いだのは蒔風だった。
その背には銀白の翼が輝き、大きく羽ばたいていた。

「お前らは一刀のそばを離れるな。「奴」とやり合おうとするんじゃないぞ！！！！（バウッ！！！！）」

蒔風がさらに動く動く。
「奴」が全く惜しみもせずに波動弾を放ち続け、蒔風がそれを蹴り、打ち落とし、切り崩しては処理していく。
だがその処理後に起きる爆発に、蒔風の体力も削られ続けて行く。

ドォン！！！！！

「ウゴッ！？・・・・はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・だらっシャァ！！！！！」

蒔風の頬は煤コケ、どこからか飛んできた破片にぶつかったのか唇も切れている。
当然蒔風も獄炎、雷旺、圧水、土惺と攻撃を放つが・・・・・・

「こ、の、やろォ！！！！！」

ドゴンドゴンドゴン！！！！！！

打ってはすぐに「奴」が波動弾を打ち、それを処理しての爆発で消し飛ばされてしまう。

そして唐突に波動弾が止む。

蒔風がさっきまで奴のいたところを見ても、そこに「奴」の姿はなく

ゾクリ

とした背骨の関節がすべて氷になったような戦慄を感じた。

「舜！！！後ろだ！！！！！」

一刀の声に遮二無二天地陰陽を背後に突き刺すように出す蒔風。

だがそこにいたのは「奴」ではなかった。

そこに待ち構えていたのは獄炎にも劣らぬ炎を溜めこんだ、開かれ

たサラマンダーの大口だった。

「ッ！？オォォォオッ！！！！！！！！」

ドゴァ！！！！！

蒔風が必死になってそこから回避し、勢いのあまり地面に落ちる。
だが左腕が一瞬だけ炎にさらされ、蒔風の傍らに「天地」がカシャンと音を立てて落ちる。

それを見て愛紗が「奴」に叫んだ。

「くそ！！！おい貴様！！！正々堂々、降りてきて戦え！！！！！」

「私が怖いのか！！腰ぬけめ！！！！！」

「そんなところから「奴」だなんて男らしくないぞ！！！！！！」

武将たちが口々に「奴」を挑発する。
それを見て「奴」がめんどくさそうにため息をつく。

「あからさまな挑発だな。なんでオレがわざわざ降りねばならんのだ。こっからでできるならそれでいいじゃないか。ん?」

「厄介な敵です・・・目的のためにただ淡々とこっちを狙う・・・」

「左慈とか言う奴を相手にした方がまだ楽よ。なんなのよあいつ・・・」

「あの野郎にこっちの常識持ちこむな。それと!!手ぇ出すな、お前ら死ぬぞ」

蒔風がぐらりと立ち上がって考察する朱里と桂花のとなりに立つ。

「舜さん!!怪我は大丈夫ですか!?」

「気にすんな・・・絶対に一刀に怪我ひとつ負わせんなよ!!!・・・おら!!!」

蒔風が天地陰陽を風斬車に組み立て、右手一本で「奴」に挑む。
「奴」に風斬車を振るう蒔風だが、「奴」はそれを紙一重でかわす。

「奴」の顎に向かって振るわれたそれをひらりとかわして、「奴」の拳が蒔風の腹にめり込む。
それに対して風斬車は当たらずとも、腕を曲げて肘を「奴」の顔面にめり込ませる蒔風。

「奴」がのけ反り、蒔風が衝撃に耐える。
「奴」が顔を起こした所にもう一発、更にそこから攻撃をやめない蒔風の拳や足が「奴」に襲いかかる。

「がっお!?ぐっ、ヌ、おがっ!?」

胸板を強打し、鳩尾にめり込ませ、脛を割って、腕関節をへし折った。
眉間に中指を少し出した拳で殴り、エルボーを後ろ首にぶちかまし、踵落としを脳天に炸裂させる。

「いっが!?おおおおおお!?」

ドゴ!!バキ!!!ゴゴゴゴン!!!!!ゴキャァ!!!

蒔風の猛攻が「奴」に襲いかかり、最後に中段突きで吹っ飛ばして

その体が木々をなぎ倒して林に突っ込む。

「フゥっ！！！・・・・・我が武、未だ衰えを知らず！！！！」

蒔風が残心し、静かに構えを変える。
そう、まだ終わってはいない。構えを解くことはできない。

腰を落とし、両腕を前に突き出して反身になる。

そして・・・・・来た

「超三段回転突き蹴りチョォップ！！！！！！！！」

木々の倒れる林の中から「奴」が飛び出して言った通りの順番に回転しながら一撃ずつ攻撃を仕掛けてきた。
蒔風がその三段を腕で受け止め、反撃する。

ロー、ミドル、ハイの順にキックを右足で放つのを足で受け止められ、「奴」が反対の足で反撃する。

それを脇に抑え込み、投げ飛ばそうとした瞬間、「奴」が反対の足

で蒔風の胸を蹴り飛ばそうとしてくる。
それをとっさに握る形で止め、そのままブン回して地面に叩きつける。

だが「奴」はギャリリリッ！！と回転してその衝撃を無散させ、そのまま旋風脚で蒔風の足元をすくう。

蒔風も黙ってそれを食らう男ではない。
ジャンプして「奴」の首に絡みつき、「奴」自身の回転とは逆に回る。

「ぐっ、フッぉア！！！！」

このままでは首がへし折られる、と直感した「奴」が回転を止めて蒔風の髪を掴む。
そして思いっきり引っぺがすように背中から投げ飛ばす。

「（ダンッ！！ズザザザザッ！！！）いったぁ！？ハゲたらどーすんだこら！！！」

「こっちは首取れそうになってんだぞ！！！！」

「し、る、か！！！！」

ドウッ！！！

蒔風が飛び出し、「奴」に腕を突き出す。
身体を返して立ち位置を変えるようにそれをかわした「奴」に、蒔風が着地してからジャンプして二連蹴りを放つ。
それを両腕で受け、ハイキックを繰り出す「奴」。

蒔風がそれを屈んでかわすが、「奴」はそのまま回転して踵を起き上がった蒔風のこめかみに命中させる。

ゴコキィッ！！！！！！

蒔風が地面を転がり、その間に「奴」が一刀に迫る。

「ッ！！！させん！！！」

愛紗、鈴々が「奴」に向かう。
当然ながら「奴」は応対するが、全く二人を相手にしない。

愛紗の青龍偃月刀を「天人」で受け流し、鈴々の丈八蛇矛を受け止める。

「だぁぁあああ！！！！！」

さらに後方から来た秋蘭の七星牙狼を白刃取りで受け止め、その刃を砕いた。

「な！？」

「バカな・・・白刃取りで剣を砕くだと！？」

「かんしんしてな？おらっ！！」

ドドドンっ！！！！！

「奴」が一瞬で三人の腹部に拳をめり込ませフッ飛ばす。

そして一刀に向いた瞬間、二人の人影の攻撃をしゃがんで避けた。

「コイツッ！？」

「風足を見切りおった！？」

「速いな！！だけど、オレも速い」

ギュギン！！ギャッ！！ギャギギギギ、ギョギャィン！！！！！

「うわっ！！！」

「グアっ！！！」

翠と霞が地面に倒れ伏し、「奴」が剣を振るったそのまま腕を伸ばして一刀に波動砲を撃つ。

ヒィン・・・・ドゴォオオア！！！！！

だがその間に蒔風が飛び込み、直撃をもってそれを止めた。

「ガッ・・・・ごおおおおお・・・・・・・」

蒔風が地面に伏し、立ち上がろうと腕を張るが左腕は怪我と酷使のせいでもう使えず、右腕も限界に近い。さらにいえば上半身も見事に真っ赤である。
立ち上がろうと地面でもがく蒔風だが、ズルズルとしているだけで起き上がれない。

「舜！！！」

星が駆けより、蒔風を起こそうとする。
だが蒔風はそんな星の肩を掴んで叫んだ。

「こっちにくるより一刀のそばにいろと言っただろう・・・・・！！！！！」

「そんな・・・・あなたの怪我だって！！！」

「言っただろう・・・・そんなの関係ない」

シュラン・・・・と蒔風が「火」を右腕で抜いてそれを支えに立ち上がって背中で言った。

「オレにそんな感情を向けるな！！！完全に空回りだ・・・・命の心配をされようとも、オレがそれを受け止められない！！！！死ぬことに恐怖などないのだから・・・・・・」

蒔風が「火」を右腰の「林」に付け、組み合わせて抜刀する。

「オレは行く。総てを賭けて、世界を守る。それがオレのすべきことだと信じて戦おう。たとえ上塗りだけの信念でも、貫き通すこと

はできるはずだと信じて！！！！！」

「下積みの無い信念・・・・・軟弱だなぁ、蒔風ぇ！！！！！」

「うるっせぇ！！！！！」

ドゴガァ！！！！！

「奴」と蒔風がぶつかり合う。
その衝撃に皆が目を細め、叫んだ。

「舜！！！！！」

「はたして腕一本で勝てるのか？おい！！！」

「確かに左腕は使えねえ・・・だけど、それはオレの敗因にはならないんだよ！！！！！」

ゴドゴォ！！！！！

「奴」の顎に衝撃が走り、脳が揺れる。

地面から青龍が飛び出し、アッパーカットを命中させたのだ。

「不意打ちなら召喚獣も行けるだろ？ケルたち出される前にたたみかけるぞ！！！！」

ドゴゴゴッガン！！！！

蒔風を含めた総勢八人の攻撃に「奴」の身体が切り刻まれる。
だが「奴」も下がらない。

ゴォウ！！と腕を振るって八人を弾き飛ばし、ケルベロスたち出そうとする。
だが・・・・

ドスドスドスッ！！！ズシャアッ！！！！ザザザザン！！！！！

紫苑、秋蘭の矢が額、胸、腹と突き刺さり、翠、星の槍が両肩を貫く。
さらに愛紗、鈴々、恋、思春の刃が「奴」の肢体を斬り出した！！！！

「んなぁ！？くっ！！！！！」

「奴」の手足がズルリと元に戻ろうとした。

だが、この好機を蒔風が逃すわけがなかった。

「一刀ぉ！！！！行くぞ！！！！」

「ああ！！！舜！！」

【ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！

すべての武器が一刀の元へと集結する。

剣、弓、槍、さらには蒔風の十五天帝までもが一刀の周りを回り出した。

「行くぞ・・・皆と一緒に・・・出会えたことが、オレの力になる！！！！！」

一刀と蒔風が「奴」に突っ込み、そのすべての武器で攻撃する。

斬り、突き、薙ぎ、貫き、刺し、潰し、捻り、抉った。

そして最後に二人が同時に「奴」を斬り、その体中から血を噴き出

して宙に上がる。

「止めと行くぞ・・・準備はいいか！！！！！」

「ああ！！！！」

【ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

二人が一緒に十五天帝を握る。

するとそれにすべての武器がひっついていき、巨大な大剣へと姿を変えた！！！

「願いを翼に！！！！力を放て！！！！行くぞ・・・これからの物語のために！！！！！」

ドバゥ！！！！！！

蒔風の背の翼が雄々しく羽ばたき、二人が「奴」に剣を構えて突進する！！！！

ズガッ！！！

そして「奴」の身体を刺し貫いた。
その背かどうかもわからない反対側から十五天帝の切っ先が見える。

次の瞬間ッ！！！！

ドバガァッ！！！！！

傷口だけではなく、「奴」の全身から全員の武器が内部から突き出し、その体をズタズタにする。
もはや肉片とも呼べない形になってしまった「奴」の身体がうっすらと消えゆき、そして消える寸前に大爆発を起こす。

その爆発を背に蒔風と一刀が戻る。
一刀が蒔風に肩を貸し、ヨタヨタと歩いてくる姿に、みんなが安堵し、駆け寄っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

そこに保健室の扉が開き、星が入ってきた。

「皆の様子はどう?」

「皆、新たな世界に興味津々ですな。いや、知識がドンドン頭に流れ込んできたからよかったものの、そうでなかったら相当混乱したでしょうな」

「それ便利だよな。蒔風さんもたくさん助けられてます」

この世界にやってきた彼女らにとってすべてが初めての物だった。

テレビや携帯などと言った電子機器はもちろんのこと、学校や寮といった建物から、果ては水道や道路までもが違うのだ。

この世界に関する基本知識が流れ込んでこなければノイローゼで倒れてしまうだろう。

「時に・・・・もう行かれるのですかな?」

「次の世界に?ああ、そうなるな」

「では行きましょうぞ」

「は?」

「私も行きます、と言ったのです。よもや私を置いていくつもりで

はないでしょうな？」

その星の発言に蒔風がため息をついて顔に手を当てた。

「悪いが連れて行く気はない。この世界の物語にはお前がいてこそだろ？」

「それはそうかもしれませんが、知った事ではございませぬなぁ。そも、私の物語は私が決めます故」

星はどこまでも星だった。

だが蒔風は認めない。

「それでもお前をここから連れ出すわけにはいかないんだ。お前はこの世界の住人だ。お前の世界はここにあるんだ。そんなところからイレギュラー（オレ）が勝手に連れ出すわけにはいかない」

「それでは・・・・置いていかれる私はどうすればいいのですか！！あなたを思い、たった一人でこの世界で胸を焦がしていろというのですか！？」

星が叫ぶ。

その眼は潤む。

どれだけ恐ろしい敵を前にしても臆することのなかった少女が、未来の自分の姿を考えて恐れて泣いた。

「だから言っただろ？・・・・・オレに惚れてもロクなことがない・・・ってな」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ］

「ま、待ってくれ！！」

「なんだよ一刀」

「星を・・・連れて行ってやってくれ！！！」

「無理。じゃね」

蒔風はどこまでもそっけない。
そんな蒔風の背中を掴み、星が言った。

「いいでしょう・・・あなたは世界をめぐる・・・ならば私もその方法を探しましょう。そしてあなたに追いついて見せる！！！！」

「できねえよ。オレがめぐる世界層はかなりの高層になる。外史とかの比じゃねぇぞ」

「それでも、追いついて見せます。恋する乙女は恐ろしいのですよ

？貂蝉でも主でもなんでも使ってでも、あなたに追いついて見せる・・・・・・！！！！！」

「やめとけやめとけ」

そう言って蒔風がゲートに歩く。

「オレは異端者だ。その領域に踏み込むことはオレが許さない、ッてかして欲しくない。オレのために・・・・世界からハブられる奴なんか見たくないんだ」

「舜・・・・・」

「と、言うわけで蒔風さんはここでバイなら～～」

そう言いながら蒔風がくるりとターンして言った。

「やはり愛紗の方が大きいな・・・・いや、あのごめ・・・うをおおおお！？」

「早く行ってしまえええええええ！！！！！」

イスを投げつけようと持ちあげた星に追い立てられるように蒔風がゲートに消える。

それを見届け、静かに椅子を下ろしてそれに座る星。

「よかったのか？」

「ふ、次に会った時にもっといい女になって今の事を後悔させてやりますよ・・・ふふ、ふふふふふ・・・・・・う・・・あっはっはっはっはっは！！！！！！」

そう言って笑いながら保健室を出て行く星。

「無理しちゃって・・・・」

「でも、あの人はまた来るんですか？」

「それはわからないよ。でもこの世界はどうやら俺の都合よくなってくれるところはまだあるみたいなんだ。そしてオレの「都合がいい」の中には星の笑顔と蒔風の幸せもある。だから・・・・」

「ふふっ、お優しいですね、ご主人様は」

「ありがとう月。さ、俺たちも行こう。みんなにこの世界のいろいろなことを説明しなきゃいけないしな。知識だけじゃわからないだろうし」

そう言って一刀と月も出て行く。

保健室が静かになり、この世界はより一層にぎやかになっていくだろう。

ーーー

友を救うために、仮面の戦士は今日も変身し、その身をひとならざる物へと変えて行く。

《ｔｕｒｎ　ｕｐ》

「始・・・・お前の運命は、オレが変える！！！！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

恋姫†無双　～蒔風、世界と繋がるのこと～（後書き）

アリス「ついに終わった恋姫の世界・・・・」

長かったねぇ

そしてぶっちぎったなあいつ。

ア「女性を泣かせるとは許されん奴だ」

アリスさん？

ア「消えてしまえ・・・・」

ちょ、人が変わってる！？

【恋姫†無双】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”５０％

”ＬＯＮＤ”２０％

”フォルス”２０％

”ライクル”１０％

最主要人物：北郷一刀

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：一刀に全武器譲渡＆使用可能

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：総てを十五天帝につぎ込み、斬った後に拡散させる。

次回はまたまたライダーですね！！！

ア「最近ライダー頻度多くないですか？」

いや、あの・・・・世界回る順番とか最初は決めてたんだけどだんだんずれてきてそれで・・・・・・

ア「つまりは消化しきれてないのをここで一気にやるってことですか？」

オウイエス

ア「この無計画！！！！」

すみません！！！

あああとですね、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの音声、マーク・大喜多さんをイマージしてください。

ア「あれ音声入ってたんですか！？」

友人にも同じこと言われました。

それにキーワードにもあるように、これは「ディケイドっぽい」ですから！！！

ア「どっから聞こえてくるんでしょう？」

さぁ・・・・どこからだろうね？

全然考えてないや。

ア「次回、破滅へと向かう世界？」

ではまた次回

アンデッドはすべて封印した・・・・・

お前が最後だ・・・・・・ジョーカー！！！！

・・・俺とお前は・・・・・・・

戦う事でしか解り合えない！！！！

剣　～クローバーの出会い～

キャオオオオオオオオオオ！！！
ギチチチチチチチチチ・・・・・

「なにこのカオス。バケモンだらけじゃん」

蒔風がいるのはビルの屋上。
そこから見える光景はひどかった。

街の至る所に黒い姿の化け物「ダークローチ」
真っ黒なそいつらが、街だけで無く、空まで覆い尽くして暴れている。

通った後には破壊の跡のみ。

この惨状の成り立ちはこうだ。

５３体のアンデットが太古の昔、バトルロワイヤルを繰り広げました。
それは最後に残った一体の種族が地球上に繁栄するルール。
５２体は必死に戦いました。
なにせ自分の種族の未来が、繁栄がかかっているのですから。

そしてその時勝利したのが人間の始祖たるヒューマンアンデットでした。
こうして人類は地球上に繁栄し、今に至ります。

そして現代。
アンデットが復活し、バトルファイトが再び始まりました。
不死身である彼等を倒すには封印するしかありません。

人間は「ライダーシステム」を作りだし、アンデットをカードに封印していきました。

その戦いの果てに残ったのは５３体のうち、いかなる生物の始祖でもないアンデット「ジョーカー」。
ジョーカーがバトルファイトに勝利したとき、地球上の生物は根絶やしにされます。
人類も滅びます。

それを執行するのが統率者・モノリス。
それは捻れた石版で、次々にダークローチを生み出しています。

そして今、仮面ライダーは戦っています。
この世界を救うために

「・・・・・・・・・ん、なるほどな・・・・・・・あれは・・・・・」

蒔風が情報を知り、下を見ると、一台のバイクがダークローチに突っ込み、薙ぎ倒していった。

「変身！！」

《ｏｐｅｎ　ｕｐ》

バイクに乗っていた青年がベルトのバックルを開く。
すると人間大の大きさをしたホログラムのカードが出てきて、青年がそれをくぐってトランプのクラブをモチーフにしたライダー、仮

面ライダーレンゲルに変身した。

「行くぞ！！オオオッッッ！！」

レンゲルが尺杖型の武器、醒杖・レンゲルラウザーを振るってダークローチたちを次々と消滅させていく。

戦闘力や耐久力が高くなく、不死でもないダークローチを倒すことは簡単だ。

だが数が多すぎる。

黒い絨毯に緑の点がポツンとある。

そんな感じだ。

それでもレンゲルはそのビル群にいたダークローチの半数を倒していた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・き、キリがない・・・・・」

体力に限界が来たレンゲルの膝が落ちる。

餌を見つけたゴキブリのように、そこに一斉に襲いかかるダークローチ。

レンゲルがラウザーを構え、振り上げた、その瞬間。

シュカン！！！ボッ！！ドドドドドドドドドッドン！！！！！！！！

周囲のダークローチが一瞬で上半身と下半身に分かれ、爆発した。

「大丈夫かい？」

「山」を肩に担ぎ、レンゲルに手を伸ばすのは蒔風だ。
その姿にレンゲルが唖然とする。

「あ、あなたは！？それにあいつらを一瞬で・・・・・」

「なに、気にするなよ。君には訊きたいこともある。とりあえず！！！！」

蒔風がその手をかざし、振り下ろす。
すると土埃の力で浮かび上がらせておいた何枚もの「地面」がダー

クローチ達を踏みつぶした。

「こんなものでどうかい？」

「・・・・・・あ・・・・・・え？」

レンゲルは唖然とするだけだ。
だがこの周囲を一掃したものの、ビルの陰から次々とわき出てくるダークローチ。

「キリがないなホント。一旦逃げんぞ」

「ちょ、待って！！！あなた一体何者ですか！？」

レンゲルが蒔風の肩を掴んで話を聞こうとする。
だが蒔風はその肩をはずしてダークローチを指さして言った。

「ここ一帯の避難は終わったろ？はやくいかねぇと、飲み込まれるぞ、あれに」

ウジャウジャとしているダークローチはまるでそういうシステムであるかのように街を練り歩き、破壊を繰り返していく。

「キモイだろ?あれ。早く行こう。話はそれからだ」

ーーー

「ま、いいさ。とにかくブレイド、確か、剣崎一真（けんざきかずま）・・・・・だっけ？に会おう」

「・・・・・・わかりました。案内します」

「ありがと～～～！！！ムツキング！！！」

「なんですかその呼び名は！？」

そういって案内してくれた睦月の後をついて行った蒔風。
着いた先は荒野の一軒家だ。結構ボロい。

「ここ？」

「ボク達に協力してくれる人の家です。橘さん、いますか？」

扉を開けながら睦月が中に声をかける。
すると一人の男が玄関の廊下の隣の部屋から腕を組んで出てきた。

「睦月、こいつか？変な話を振ってきた男とは」

「はい。でも、僕を助けてもくれました」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

「橘さん？」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ナズェミテルンディス！？」

「！？い、いや、すまない。どうやら君の眼に嘘偽りはないようだな。詳しい話を訊きたい。入ってくれ」

そう言って男、橘朔也が中に案内した。

「あれ？お客さん！？困ったなぁ、いきなり連れてこられちゃ・・・・・」

「橘さん、この人は一体？」

入って行ったリビングには二人の男女がいた。

「えっと・・・・ＢＯＡＲＤ（ボード）の人かな？この家の持ち主、白井虎太

郎です」

「違うでしょ？この人会ったこと無いもの。元ＢＯＡＲＤ研究員、広瀬栞です。えっと・・・橘さんの知り合い・・・・・ですか？」

栞と虎太郎が自己紹介する。

ちなみにＢＯＡＲＤとはアンデットを研究し、ライダーシステムを作った組織だ。
組織自体は復活したアンデットに壊滅させられたが、こうして研究員の何名かが集まっているのだ。

「違う。だが、睦月が言うには面白い話が聞けるそうだぞ？」

「それがこう・・・突拍子もなくて・・・・それで橘さんにはあらかじめ連絡しておいたんですけど・・・・」

「そりゃそうだろ。いきなり世界だとかブレイドが殺されるなんて言ったら・・・・」

「剣崎くんが！？」

「こここ、殺される!?」

「詳しい話が訊きたいな」

「はいさい。待ってね、今お教えしましょうかな・・・・・・」

～～蒔風、説明タイム～～

「本当に・・・・・?」

「おっ!?その疑り深い目!!いいねえ・・・そうやって何事も鵜呑みにしない警戒心!!!素晴らしい!!!」

「でも・・・真実なんだよね?」

「確かに!!剣崎一真が「奴」に狙われているのは確かだ。だがそれよりもまず、やらなきゃならないことがある」

「え？」

「この世界はなぜこうなっている？バトルファイトの最初の方でジョーカーを倒せばよかったじゃないか」

その発言に橘や睦月をはじめ、全員が黙りこむ。

「それは・・・・・ですね・・・・」

「・・・・オレが話そう。そうだな・・・どこから話そうか・・・・・」

頭の中で話すべきことを整理する橘。
そして決まったのか、口を開いて話し始めた。

「ジョーカー・・・・相川始（あいかわはじめ）は・・・・・・・人間なんだ・・・・・・」

to be continued

剣　～クローバーの出会い～（後書き）

アリス「ブレイドのせっかい～～～」

オンドゥルの世界ですね。

ア「それが」

すべてさ！！！

この世界の時系列も最終回近くですね。

ア「やっぱりですか。劇場版でも本編でも、なんだかさみしい終わりでしたもんね」

確かに皆、救われた。
だがそこには確かな犠牲があった。

それじゃいかんのです！！！

ア「頑張れ蒔風。次回、キングフォームの呪い？」

ではまた次回

オンドゥルラギッタンディスカーー！！！！！！！

剣　～ジョーカーの心～

ジョーカー・相川始はたしかに不死生物たるアンデットだ。

そんな彼を最後まで封印出来なかった理由。

―彼はニンゲンだった―

「・・・・・・・なるほどな・・・・・人間の心に目覚めたのか」

「そうだ。あいつは会う度に人間に近づいていった。俺達にはつっけんどんだったけどな」

「そして剣崎君と始は、友達だったんだ」

「最初は敵だった。なんども戦った。だが、次第に剣崎と相川の間には友情が生まれていた」

「最初は僕たちも相川さんを封印しようとしましたが、無理でした・・・」

相川始

ジョーカーである彼は封印したアンデットのカードを使ってその姿に変身することができる。
彼はヒューマンアンデットのカードで人間の姿になっていた。
だが、次第にヒューマンアンデットの心までが入ってきた。
彼はゆっくりと、彼らしく変わっていった。
もはや彼はジョーカーでもアンデットでもなく、「相川始」だった。

「彼は今どこに？」

「バトルファイトが終決し、統率者・モノリスが動き出したと同時にアンデットの本能が激しさを増して、俺達の前から姿を消した」

「でも、ダークローチを倒している姿を僕たちは何度も目撃しました」

「彼は戦っている。自らの運命と、本能と」

「だったら・・・・・」

「だったら？」

「救ってやらなきゃ、わりに合わないよなぁ？」

「待て。なぜ君がそこまでする。君の目的は剣崎が殺されないようにするだけだろ？」

「オレだって面倒だ。だけどな、オレは世界最強なんだよ。そういうのを救いたくてなったんだ。意地でも助け出させてもらう。で？剣崎はどこに？」

「剣崎さんは・・・・・・ずっと戦ってます。毎日毎日身を削るように」

「戻ってくるのか？」

「来ないと・・・・思います」

「広瀬、サーチできるか？」

「場所の特定は可能よ。やってみる」

「急ぎめでお願いします。嫌な予感がする・・・・」

ーーー

ガシャンとキングフォーム専用の巨大な黄金の剣、重醒剣キングラウザーを落とし、両膝をついてしまう。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・眠い・・・・・クソッ!!眠くて眠くてしょうがない・・・・・・寝ている隙なんて、ないんだ!!」

ブレイドが剣型のラウザー、ブレイラウザーで体を支えながら立ち上がろうとする。

だが手が滑り、仰向けに倒れる。
それと同時に変身が解け、生身の体があらわになる。

「ぐっ・・・・・始・・・・・・待っていろ・・・・・・世界もお前も、助けてやる!はぁ・・・・・はぁ・・・・」

「剣崎さん!!」

「剣崎!!」

そこに橘、睦月、蒔風の三人が到着する。
倒れる剣崎を担ぎ上げて家に連れて帰ろうとするが、剣崎が橘の肩を掴んで叫んだ。

「橘さん!!オレを殴ってください!!」

「なに？」

「眠くて眠くてしょうがないんです・・・・殴って頭をはっきりさせて下さい!!」

「剣崎!!お前は戦いすぎだ!!休め!!」

「ッッ!!睦月!!」

「できませんよ!!」

二人から拒否され、剣崎が蒔風の方を見る。

「じゃあ・・・・じゃああんたでいい!!あんたオレを殴ってくれ!!!!」

剣崎の目は必死そのものだ。

何かに突き動かされ、なにがなんでも成し遂げなければならないという想いがあった。

だが

「目がイってるなこいつ」

「剣崎の疲労はピークをとっくに超えている。それでもこいつは戦

っているんだよ」

「オレの事はいい！！！この眠気をぶっ飛ばしてくれ！！！！」

「オーライ、わかった（ドフゥッ！！！！）」

「オンドゥルッ！？（バタリ）」

「剣崎ーーーー！？」

「ったく・・・一人でろくに立てないやつが・・・・ん？」

「どうした、蒔風」

蒔風が腹部に一発食らって気絶した剣崎を担ごうとして、何か異変に気付く。
そして剣崎が落とした変身のためのバックル、ブレイバックルに目をやった。

「そーゆーことかよ・・・・おい、こいつ連れて帰んぞ。そのバックルは隠しとけ」

「あ、ああ・・・・・」

蒔風たちが剣崎を担いでその場を去る。

その背後にはいつの間にか再び湧いてきたダークローチがいた・・・・

ーーー

トに変わりつつあったぞ？」

「な！？」

「それについては私から説明しよう」

そこにスーツ姿の一人の中年男性が入ってきた。

「所長！！」

「烏丸さん！！」

「橘、剣崎は？」

「上の部屋で寝てます」

「そうか・・・早めに回収できてよかった・・・・」

「おいあんた、どういうことだ。説明してくれるんだろうな？」

「ああ説明する。どうやら君は、我々の助けになってくれるようだからね」

そうして、今は無きのＢＯＡＲＤ所長だった男、烏丸啓が話し始め

た。

剣崎・・・仮面ライダーブレイドはラウズアブソーバーという機械にカテゴリークイーンのカードを入れ、さらにそこからカテゴリージャック、またはキングのカードを読み取らせることでジャックフォーム、キングフォームへと強化変身（フォームチェンジ）する。

キングフォームに変身したのは現段階では剣崎のみ。

だが、彼の変身は異常だった。

ジャックフォームへの強化変身はブレイドにカテゴリージャックの力を融合し、飛行能力や総合戦闘力を底上げする効果がある。

キングフォームも同様に、キングの力を付与してとてつもないパワーを得るというものだ。

だが彼のキングフォームは違った。

剣崎はアンデットとの融合係数が異常に高い人間だったため、キングだけでなく、スペードスートのアンデット全１３体との融合をしてしまったのだ。

この変身は装着者の体力を異常に消耗させ、さらに変身を続けると最悪装着者の身がジョーカーに変貌してしまう、というものになってしまった。

「おそらく剣崎は、キングフォームで戦い続けることで自らをアンデットとし、この戦いを終わらせるつもりだ」

「そうか・・・・剣崎がジョーカーになれば残ったアンデットは相川と合わせて二体・・・・バトルファイトは再開され、ダークローチも消える。そして二人が戦わなければそのまま・・・・・だが!!!!!」

「そうです!!そんなの認められません!!!剣崎さんがアンデットになってしまうだなんて!!!!」

「しかも、アンデットは統率者モノリスに戦いを運命付けられている。出会えば戦いの本能がうずく。二人は二度と出会えることはないだろう」

ダンッ!!!!!

突如なったその音に皆の身体がビクつく。
そちらを見ると蒔風がテーブルを叩きつけてブルブルと震えていた。

「いけねぇよ・・・そんなんじゃいけねぇ・・・・そんな救いは、あっちゃいけねぇ!!!いや、あってもいいんだろう。そう言った救いしかない時もあるだろう・・・・・だけど・・・オレがいる以上、そんな救いは認めない・・・・全員が笑えるエンドじゃなけり

や、意味ねぇんだ・・・・！！！！！」

自分以外の人間が、異端の道に走ろうとしている。
人間からアンデットへと

それだけは防がなければならない。
人間でなく、生物の理からも外れた彼は、誰よりも自分と同類が存在することを恐れた。

ガタン！！！！

リビングの外の廊下から音が聞こえた。
橘が扉を開き、皆が廊下を見ると、床に倒れた剣崎が玄関に向かって進んでいた。

「剣崎！！お前・・・・！！！！！」

「橘さん・・・・オレのバックル知りませんか・・・？オレ、いかなくちゃならないんですよ・・・・」

だがそんな剣崎を担ぎあげ、蒔風が言った。

「ばーか。あんた無茶しすぎ。そんなことしなくても、相川始を救ってやろうぜ」

「あ、あんたは・・・・・??」

剣崎のその質問に、胸を張ってこう答えた。

「オレの名前は蒔風舜。世界をめぐる、最強の男」

そういって右手を握りしめる。

「さ、そのくそ統率者の元に案内してくれ。なんだっけ?石盤だっけ?んなもんどーにでもしてやるさ」

ニッ、と笑うその男の言葉を、なぜか剣崎は疑うことはできなかった。

この男ならできる、と思った。

「さ、いくぜ。運命の切り札を、きってやろうぜ!!!」

to be continued

剣　～ジョーカーの心～（後書き）

アリス「お題！！ここにニトログリセリンっぽい何かを用意しました！！飲め！！！！！」

お題としておかしくないですかそれ！？

ア「飲～～め！！！飲～～～め！！！！！」

アッ！！やめっ・・・・ゴブゴブゴブ・・・・・・・・・

チーーーン・・・・・・・・・

ア「・・・・・・・・・次回！！ＶＳねじれこんにゃく」

・・・・・ゴブっ

ア「ではまた次回～～～」

オデノカラダハボドボドダーー！！！！！

剣　～捻れ蒟蒻の最後～

岩肌が露出した海岸。
太陽が沈もうとしている水平線。

ジョーカーの姿となった相川始はそこにいた。
そしてそこにいるのは彼だけではない。

「ウオォア！！来るな・・・・・オレによってくるな！！オレは・・・・オレはこんなこと望んじゃいない！！」

海岸には捻れた石版、モノリスがあり、ダークローチを次々と生み出していた。

相川は本能でその存在を察知し、ダークローチを駆除しているのだが・・・・・

「ガアアアアアアアアアア！！！」

数が多すぎる。
相川が倒れる。

「始！！」

と、そこに剣崎が叫び、蒔風たちが着く。
その姿を見て、ジョーカーの姿のまま、相川が剣崎に叫んだ。

「来るな！！オレに近づけば戦うことになる・・・・戦えばオレの中のアンデットの本能がより戦えと叫ぶ！！！」

モノリスを指差し、頭を抱えながら叫ぶ相川。
剣崎が相川の名前を叫ぶ。

「始！！」

「・・・いや・・・・・違う・・・・戦え！剣崎！！そしてオレを封印しろ！それでこの現象は止まるはずだ！！」

「オレには・・・・オレにはお前を封印なんか出来ない！！」

「やれェッッ！！剣崎ィィィイイイイイイ！！！！」

「仲間を封印なんか出来るわけないだろうが！！！！！」

「だったら・・・・戦わなければならないようにするまでだ！！」

「くっ！！変身！！《ｔｕｒｎ　ｕｐ》」

剣崎がブレイドに変身してジョーカーの爪を受け止める。

「剣崎！！」
「剣崎さん！！」

「二人は手を出さないでくれ！！これは・・・オレと始の戦いだ！！」

「剣崎！！キングフォームは使うな！！そのまま相川さんを引き付けてくれ！！」

「わかった・・・・けど！！一体なにをする気だあんた！？」

「見てればわかる。橘さん！ムッキー！回りの雑魚をお願いします！！」

「わかった！」

「変な呼び方しないで下さい！！」

「「変身！！」」

《ｔｕｒｎ　ｕｐ》
《ｏｐｅｎ　ｕｐ》

橘と睦月がギャレンとレンゲルに変身し、周囲のダークローチを消滅させていく。
その間に蒔風がモノリスに近づき、手を翳(かざ)した。

「おい、聞こえてるか？・・・・・まあいい聞け」

そういて蒔風が息を吸って、静かに唸った。

「これを、止めろ」

そう蒔風が言った瞬間、留め金が外れたかのように一気にダークローチがわき出て、蒔風を飲み込んだ。

「ッ！？蒔風ッ！！！」

「蒔風さん！？」

「来るな！！！オレは大丈夫だ！！！！！」

ギャレンとレンゲルが蒔風の方に叫ぶが、蒔風は大丈夫だという。

「ぐ・・・ガッ・・・・・こんの・・・・・・いい加減に・・・・・・」

頭を押さえつけられ、のし掛かられ、無数の爪と牙に引っ掻かれながら蒔風がもう一度腕を伸ばした。

「いい加減にしろこの捻れコンニャクが！！！！！！！」

バガァッ！！！！！

蒔風が右手に幻想殺しをまとわせて、蒔風曰く捻れコンニャクを殴

りつけた。

ビシッ！！！！！

モノリスには一切の傷は着いていない。
だが、そんな音が空に響き、ダークローチが泡と消える。

キィィィィィイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！

「グワッ！？」

「み、耳が・・・・・」

「なんだこの音！？」

「ぬあああああ！？」

「うるっせぇ！！耳キーンだ！！ボケぇ！！！」

ガコン！！！

蒔風が再度殴りつけると、ついに大きなひびが入り、バガンッ！！！と割れてしまった。
それと同時に高音も止み、曇天だった空も雲が引いて日が射してきた。

「これは・・・・・（バシュゥ）統率者の意志が・・・消えた？」

相川がカテゴリー2、ヒューマンアンデットのカードにより、人間の姿に戻る。
その表情は非常に穏やかであり、闘争本能など微塵もありはしなかった。

「始！！！大丈夫か！？」

「剣崎・・・これはいったい・・・・」

「あの人がやってくれたんだ！！！あの人が・・・あれ？名前なんて言ったっけ？」

そう言いながら剣崎と相川がモノリスのあった場所に目をやる。
戦闘で海岸から少し盛り上がった丘にまで移動していた二人なので、
少し目を凝らせば見えた。

蒔風は片膝を地面に付け、全身や顔にひっかき傷があった。
その蒔風の傍らには橘と睦月がいた。

「蒔風！！」

「だ、大丈夫ですか！？」

「眼鏡また壊れた・・・・ホントにどーしよ、これ」

「視力いくつですか？」

「両目ともに１．７」

「伊達！？」

「もう掛けんのやめようかなぁ！？なあ、どうよ、メガネなしのオレ」

「いいんじゃ・・・無いですか？」

「まじで！？パッとしないとかない！？」

「まあ少しインパクトはないですけど・・・なしでも十分いけますよ！！！」

ガッ！！！

蒔風が睦月の手を両手で握り、ブンブンと振る。
それに合わせて睦月の首もガクガクと揺れるが、蒔風は感動で見えていない。

「そんなこと言われたのは初めてだ！！！みんなみんなパッとしないから止せって言うんだ・・・よし、もう眼鏡は掛けん・・・・眼鏡っ子の卒業だぜ！！！！」

「眼鏡っ子って違うと思いますよ？」

「蒔風・・・さん？」

「おお、剣崎！！ってかオレが呼び捨てにしちゃってるのにそんな畏まらなくてもいいんじゃないですか？」

「じゃあ・・・蒔風！！ありがとうな！！！」

「オレからも・・・その・・・・・感謝する。だがお前は何者なん

だ?統率者の石板を消し去るなんて・・・・・」

「オレ?もう説明すんの三回目だよ～～。むっちゃん、頼んでいい?」

「任せてください!!ってか、変な風に呼ぶにやめてくださいって何回言えばいいんですか!!!」

「何度でも蘇るさ!!!」

なんやかんやでギャイギャイと騒ぎ始める五人。

皆で虎太郎の家に行き、パーティーをしようとバイクにまたがる。その道中、蒔風が一人ごちた。

(オレは・・・きちんと救えてるよな?後々この行動が裏目に出ることはないよな?もしそれで誰かが傷ついてたら・・・・考えんのはよそう。そのときゃそんとき、「オレ」を形作る「蓋」を再構築すればいいだけの事・・・・いつか来んのかなぁ?)

彼の精神や心はかなり複雑だ。
それが崩れるとき、彼は立ち直ることができるのだろうか？

それはともかく、この世界ではひとまずの勝利だ。
誰一人欠けることなく、蒔風は救って見せたのだから。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

剣　～捻れ蒟蒻の最後～（後書き）

アリス「ブレイドの悲劇回避！！」

マジおめでとう！！

そして蒔風、脱眼鏡

それと時にだね、アリス君

ア「なんでしょう？」

キノの旅書けないかも

ア「この腐れ作者が！！！！！自分でやるやる言ってたくせに何言ってんじゃコラァ！！！！！！」

ひぎぃ！！ごめんなさいごめんなさい！！！！！！

ですがその代わり・・・・・

ア「代わりになんですか？」

「真剣（マジ）で私に恋しなさい」参戦決定！！！！

ア「取ってつけたみたいに言ったってお前の怠慢は変わらないだろ
おぉぉオオオ!?」

マジすみまっせん!!!!!

ア「次回、ドカーン」

わけわかんねえ!?

ア「ほら、「奴」的な意味で」

理解した。
ではまた次回

オレァクサマヲムッコロス!!!

剣　～キングの剣（つるぎ）～

モノリスを破壊し、戦いの運命を断ち切った次の日

全員目を覚ます頃には蒔風の眠気もなく、昨日聞いた話を反芻した。

「剣崎を殺す？」

「おう。だから気をつけないとなんだよ」

「世界とかそういう話は信じにくい。だが俺達は蒔風の力を目の当たりにしている」

「え？みんなわかった？オレ全然わかんなかった・・・・」

「馬鹿」

「馬鹿じゃなくてアホだろ」

「わからないのか？」

「剣崎さん・・・・」

「ウェェ！？ナ、ナズェスォンヌァメデミルンディスカ！？」

「日本語を話せ」

とりあえず剣崎には自分が狙われている旨を教えた。

「ヴェ！？」

「だから変になるな」

――――――

「相川さん・・・・それマジ？」

「大丈夫だって！！そん時は俺達で打ち破ってやる！！なぁ？みんな！！」

「そうだな」

「だけど剣崎さんのキングフォームは使えないんですよね？」

「いや、今は体が徐々に人間に戻っていっている。一気に長時間、休みなく使用すると危険だが、普通に戦闘する分には大丈夫だと思う」

「そっか」

「「奴」との戦いには使わないでね？まだ体が万全じゃないだろ？」

「蒔風の身体もかなり酷い怪我があったみたいだけど？」

「オレさんは大丈夫なの。気にするな、よっと」

「ハッ！！」

「「サボテン！！」」

「お前らなにやってんだ？」

「「組体操」」

「の、呑気ですね・・・・」

「ホレホレ、睦月も一緒に・・・・・」

「「「扇」」」

「睦月、お前まで・・・・」

「いや、橘さん。これ結構身体鍛えられますよ？」

「なに？身体が？」

「橘さんも一緒に」

「「「「四段サボテン！！」」」」

「（一番下）うをォォォ・・・・おにーさん膝にキテマスキテマス！！」

「（二段目）た、確かにキツイな！！」

「（三段）睦月！バランス崩すなよ？」

「（最上部）は、はい！！うわあっ！！蒔風さん、揺らさないで！！」

「なにやってんだお前ら（スパァン）」

「うあっ！？バッ！相川さ、ムギュア！！」

「うぐっ」

「うお！」

「うわっ！」

「呑気だなホントに」

「お前ら重い～～～」

「始もやらないか！？」

「やらん」

「重い・・・・・」

「は、早く下りましょうよ」

「んあ？そうだな」

「重かった・・・・・」

「お前らホントになにやってんだ？」

「「「「！？」」」」

「来たか・・・・いつから見ていた！！」

「サボテンから」

「恥ずかしさで・・・・死んでしまいたいッッ・・・・！！！」

「「「「恥ずかしかったのかよ！？」」」」

「奴」がいた。
いつの間にか現れ、切り株に腰をかけていた。

「面白かった！んじゃま、始めますか？」

「終わらせてやんよ！！行くぞ！！」

蒔風が叫び、全員が戦闘体勢に入る。
バックルを腰に当て、ベルトが巻き付き、装着する。

「「「「変し・・・」」」」

バァン！！

「奴」がその瞬間両手を叩いた。
するとその両手から衝撃波が扇状に広がり、バックルを腰から弾き飛ばした。

「あっ、ぐ！！」

「バックルが！！」

「早く回収にいけ！！時間を稼ぐ！！変身！！」

《Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ　ＤＥＥＮＤ！》

蒔風が力を借り、仮面ライダーディエンドに変身する。

「奴」がその姿にニヤリと笑い、魔導八天を二刀に振り分けて片方を下ろし、片方を肩に担いだ。

「どんなライダーを出すんだい？楽しみだよ」

「ライダー？なにを言っているんだ？ディエンドが巡ったのはライダー世界。だったらオレが使ったらどうなるかな？」

「な！？」

ガシュウ！ガシュウ！ガシュウ！

《Ｓｅｒｖａｎ　Ｒｉｄｅ――ＳＡＢＥＲ！！ＡＲＴＨＥＲ！！ＲＡＮＳＥＲ！！》

バァン！！

シュンシュンシュンシュン・・・・・パァン！！

三人の姿がホログラム状に現れ、それが実体を成して現れる。

「聖杯戦争の三騎士の登場だ。楽しんでくれたまえ」

蒔風がディエンドライバーで「奴」を撃つ仕種をしながらそう言うと同時に三騎士が走り出して「奴」に向かう。

「っち・・・・・オラァ！」

ガガァン！！バガガガガガガッ！！！！！
ドギャン！ギャリリリリッッ！！

「奴」が三人の攻撃を弾きながら同時に攻撃を加えていく。
だがそこはディエンドの召喚だけあって、攻撃にのけ反ることはあっても、一切引くことがない。

「ウザっ・・・たい！！散れェェ！！」

「奴」が剣を振るい、三騎士を吹き飛ばす。
アーチャーとランサーの姿が消え去り、セイバーが庇われる形で残った。

「さて・・・・・」

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ！］

ゴォウ！！！

セイバーの剣に光が凝縮され、それが振り下ろされると同時に放たれる！！！

「はぁぁぁあああああ！！！！！エクス、カリバーーッッ！！！！！」

アタックライド、クロスアタックの効果で放たれたセイバーの必殺技が「奴」に向かって突き抜ける。
だがこの手の攻撃を「奴」は受け止めたことがある。

バギィ！！！！

魔導八天の横薙ぎにその光が打ち消され、セイバーの姿が用は済んだと消えていく。

「この程度か！！なんか拍子抜けだな！！！」

「いったろ（バシュウ）・・・・時間稼ぎだってよ。行くぞ！！！」

「「「「変身！！！」」」」

《《ｔｕｒｎ　ｕｐ》》

《ｃｈａｎｇｅ》

《ｏｐｅｎ　ｕｐ》

蒔風の背後でバックルを拾った四人のライダーが変身し、ブレイド、ギャレン、カリス、レンゲルが並び立つ。

「ハァッ！！！」

ドドドドドドドドッ！！！！

カリスが弓状の武器、醒弓カリスアローから高熱のエネルギー矢・フォースアローを、ギャレンが銃、醒銃ギャレンラウザーで銃弾を撃ち、その弾幕の中をブレイドとレンゲルが突き進む。

「ウウェア！！！！！」

「ハァア！！！」

ドガッ！！！！

ブレイドの剣とレンゲルの杖を剣と腕で受け止めた「奴」に、蒔風が真っ直ぐに「火」を振り下ろしてたたっ切ろうとする。
そこから二人を弾き、蒔風の剣を白刃どって蹴り飛ばす「奴」

蒔風とブレイド、レンゲルが地面に転がり、その直後にギャレンの必殺技が炸裂する。

《ＤＲＯＰ－ＦＩＲＥ－ＧＥＭＩＮＩ－－－ＢＡＲＮＩＮＧＤＩＶＩＤ》

ギャレンがギャレンラウザーにカードを読みとらせ、その力を開放する。
ジャンプして宙返りし、空中で分身しながら相手の頭上に炎の力を込めた二段つま先蹴りを打ち込む！！！

ガゴォッ！！！！ドォン！！！！

命中し、爆発する。

だが、「奴」にまともなダメージは通っていない。

「二体に分身するってんならよ、腕は二本あるんだ。一人ずつ掴めば必ずいける」

「奴」が片手でギャレンの足を掴み、地面に叩きつけようと振り上げて下す。
だが地面とギャレンの間に蒔風が滑り込み、その衝撃を緩和させ、ギャレンを引きずってその場から離れる。

「おおおおお！！！」

《ブリザード》

レンゲルがカードを読み取り、強烈な冷気を噴出し、「奴」の下半身を凍らせる。

「はあああああ！！！」
「うぇあああああ！！！」

そこにブレイドの電撃をまとったキック、ライトニングソニックと、

カリスの竜巻をまとったキック、スピニングダンスが放たれる。
そんな二人のキックを見、「奴」が首をフルフルと振りながらため息をつく。

バキン!!ドゴゴガッ!!!!!

「奴」はいとも簡単に下半身の氷結を砕き、踵からの後回し蹴りで二人のキックを粉砕、爆発させて吹き飛ばす。
その圧倒的戦闘力に、蒔風に引きずられたギャレンが驚愕する。

「オレたちは・・・すべてのアンデットと戦い、勝利してきた・・・だが・・・あれはいったいなんだ!!!??まるで歯が立たん・・・勝ち目は・・・・・」

「バカなこと言うな・・・・・っぐ、まだ負けねえよ」

蒔風が顔をしかめながらギャレンの方にポン、と手を当てて前に出る。

「お前の身体も限界だろ!!死ぬぞ!!!」

「・・・そんな言葉じゃオレは止められないよ」

ニヤリ、と皮肉った笑みを浮かべ、「奴」の方へと走る蒔風。

ギャレンもその後を追って走り出す。

四人があらゆるカード、あらゆる技を繰り出しても、「奴」は次々と打ち破り、蒔風が攻撃に入るも五分と言ったところのダメージ量。
このままではジリ貧である。

ゴリ押しされればおしまいだ。

「ガバッ・・・・・ゴッ、ハ・・・・プッ、ざっけんじゃねえぞ！！！！！」

蒔風が雷旺を「奴」に放ち、その電撃の中を突き進んでいく。
「奴」はそれを弾き、雷旺内の蒔風の首を掴み取った。

「ふん・・・・」

そのまま蒔風の首を捩じり切ろうとする。
だが、蒔風のだらりと下がった手に、圧水の力が集結する！！！

ドッパッ！！！！バシャアアアアッ！！！！！

蒔風と「奴」の身体が吹き飛び、倒れる。
蒔風の身体がベシャリと落ちて、「奴」がのそりと立ち上がった。

「ぐっつ・・・・・ゲほっ・・・・おい！！ジョーカー！！！お前、人間として生きたくはないのか！！！」

「なに？」

「奴」の言葉に、動きが止まる。
皆、地面に膝をつくか倒れ伏しているかの状態である。
蒔風も右足を引きずりながらなんとか立ち上がっており、ブレイドを立ち上がらせようと肩を貸していた。

「オレが世界を再構築すれば、お前は人間としての生が得られる！！！もちろん、この場の全員が存在する世界をだ！！！それが欲しくないか！！！！」

「奴」の提案を訊き、カリスが周りの皆を見る。
そして最後にブレイドを見据え、静かに立つ。

「そうだ！！！お前の本能を、ここで爆発させろ！！！そうすれば、世界は素晴らしくなる！！皆が笑顔で、欠けることのない未来を得られるんだ！！！！」

「奴」が吼える。
その言葉に、カリス・相川始が答えた。

「断わる」

「・・・お前は人間として生きたいんじゃなかったのか？お前はそんなんでいいのかよ！！！！」

「たしかに、オレはアンデットだ。だが、人でなくても、人として生きることはできる。それを、教えてもらったんだ。それに・・・・」

相川が蒔風、剣崎の方に向き、こう言った。

「もう十分救われた。この世界に救いは無い、なんてことはない。どんな世界にだって、必ず救いは存在する」

「この世界はお前がいくるにはつらい世界だぞ？・・・お前の居場所は酷く脆い！！そんな世界で、生きていけるのか！！！」

「「「生きていけるさ！！！！」」」

「奴」の言葉に相川だけでなく剣崎、蒔風も叫んだ。

「オレの帰りを待っていると言ってくれた子がいるんだ。その子のために、俺は帰る。その子がいる場が、オレの居場所だ！！！」

「始は人として生き、そしてそれを成し遂げようと必死に運命と戦った！！！そんな「奴」に、世界が居場所を与えないなんて嘘だ！！！」

「確かに・・・彼は人ではない。受け入れてくれない人も多いかもしれない。だが・・・それはお前が決めつけていいことじゃない！！！！」

「「「自分の居場所は自分で決める。自分の運命も、自ら切り開く！！！！！」」」

「行くぞ剣崎、準備はいいか！！！！」

「ああ！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＢＬＡＤＥ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！

四人のライダーの全カードが宙を舞い、それがブレイドの全身に張り付いていく。
装甲が黄金に輝き、巨大な剣がその手に握られ、重々しいその姿はまさに王者の風格。

仮面ライダーブレイド、キングフォーム。
さらにそれを越えた存在として、今ここに立つ！！！！

ブォァアアッ！！！！

装甲からオーラが噴き出し、周囲を圧倒する。
そして一歩一歩、静かに「奴」へと歩を勧めた。

「くっそ・・・・アンデットになられるとこっちも迷惑なんだよッ！！！！」

ドッ！！！ガギィ！！！！

「奴」が魔導八天を振るい、それをブレイドが腕で掴んで止めた。
胴体の開けた「奴」に向かって、黄金の剣ではない、ブレイラウザ

ーを後ろに引き、「奴」の腹部に突き刺した！！！！

ドブッ！！ブシャァアアアアアアッ！！！！！

「奴」を串刺しにし、掲げてから地面に突き立て、縫いとめるブレイド。
その圧倒的な力に「奴」が苦痛の声を上げる。

「がああああっ！？・・・は・・・それでアンデットになっちまったら・・・ガボッ・・・・お前も・・・おしまい、だな！！！！」

「アンデットにはならないさ」

蒔風の言葉に「奴」の目が見開かれる。

「これはＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫだぞ？そんな負担、かかるわけねぇだろうが」

「この力はみんなの願いがオレに宿ったものだ。それがオレの身体を蝕むはずか無い！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＢＬＡＤＥ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

―　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

《ＳＰＡＤＥ　ＴＥＮ－ＪＡＣＫ－ＱＵＥＥＮ－ＫＩＮＧ－ＡＣＥ》

ブレイドが一足飛びで「奴」と距離をとる。
そして巨大な大剣、キングラウザーに、五枚のカードが装填され、
それはコンボとなり、相乗効果で、邪神ですらも砕く威力を誇る絶対の剣となる！！！！

《ＬＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ！》

音声と共に、「奴」とブレイドの間にホログラム状のカードが出現する。
だが、五枚だけではない。
全アンデットのカード５２枚がすべてそこには揃っていた。

「オ、オ、オ、オオ、オオオオオ、オオオオオオオォォォ

凄まじいエネルギーが蓄積されていく！！！！

「ぐっ！！この！！抜けろ・・・バカ力め・・・地面に食い込んで抜けねぇ！！！が、がぁ！！！ごあああああああああああああああああああああ！？？？？？」

ドジュウウウウウァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！

ブレイドがもはや一つの光線と化し、「奴」を突き抜ける。
その膨大なエネルギーはその体を塵一つとして残さなかった。

――

ドガン！！！

「もう行く！！！行ってくる！！！」

「こら待てお前！！！きちんと治療しろ！！！」

「そんな暇無いってのよ！！！」

「抑えろ！！剣崎！！睦月！！」

「「おう！！」」

「うわっ！！うひょう！？あっぶねぇ！！お前ら怪我人になんてことしやがるんだ！！！」

「怪我人がそんな動きできるか！！！！」

「実はあの人アンデットなんじゃないのかな？・・・・・」

「せめて何か飯食ってけ！！！」

「ガリガリ君（ソーダ味）が食いたいです！！！」

「そんなもん食わせられるか！！！（ドンドンドン！！！）」

「うわっ！！！あの野郎！！本気で撃ってきやがった！？せい！！！」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＢＬＡＤＥ］

「飛び込めオレの情熱！！！」

「タチュバラサン！！！」

「パンツハワタサン！！！」

「言葉おかしくなってんぞ！？じゃあな！！！元気でやれよ！！！」

「喰らえ！！！（ブンッ！！！）」

「（ゴスっ）あだぁ！！・・・・・・・」

バシュン！！！

以上が蒔風がこの世界から旅だった経緯である。
なんとまあ、慌ただしい去り際だろうか。

「あんのバカ・・・行きやがった・・・・」

「大丈夫だといいけどな」

「あいつなら平気だろ」

心配しながらも、一方で大丈夫であるとも信じて、剣崎たちは日常に戻っていった。

ーーー

剣　～キングの剣（つるぎ）～（後書き）

アリス「ディエンドの力、面白く使いましたね？」

蒔風があれ使ったらああなりますって、絶対。

ディケイドでも使いたいけど、そんな二度手間するなら一発で本人の力借りちゃえばいいからそっちは使いどころないんだよね。

【仮面ライダーブレイド】

構成：”ライクル”６０％
　　”ＬＯＮＤ”３０％
　　”フォルス”１０％

最主要人物：剣崎一真

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：全アンデット融合キングフォーム（負担なし）

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：全カードを貫いてのロイヤルストレートフラッシュ

ア「次回はライダーじゃないんですね」

そうだ

次回はあの作品さ！！！

でもアニメ版はあんまりなぁ・・・・
原作とはかなり違ったし。

でもこの小説、基本「こんな恰好のやつらが戦っている」程度で十分ですので！！！

ア「あれ？蒔風は？」

作者の脳内じゃ蒔風君は人型に「蒔風」って書いてるだけだから。

ア「超簡略！？次回、蒔風、どこから現る」

ではまた次回

友と、明日のために！！

11eyes ～なんてとこから来るんだ～

喫茶店・ツィベリアダ

現在この店に学生服姿の、五人の少女と二人の少年がいた。

「さて、今日集まったのは他でもない。我々の力が戻ったことだ」

そう切り出したのは「美人」と言う言葉が似合う少女、草壁美鈴。
それに対して白髪が肩まで伸びた少年、田島賢久（たじまたかひさ）が答えた。

「力が戻ったならいいじゃないすか。別にあって困るもんじゃないっしょ？」

「いいや、こういったことはキチンと原因がわからないといけない。幸いにして菊理君が知っているらしい。菊理君、頼む」

そう話を振られたのは大人しい外見に長い黒髪の少女、橘菊理（たちばなくくり）である。

では、と頭をペコリと下げ、指を立てて説明を始めた。

「あれは・・・昨日の晩・・・・うつらうつらと眠っていた私の夢の中でのことです」

ーーー

緊急の・・・・用件？

「あなたたちに危険が迫っています。世界を破壊するものが、やって来ます」

世界を・・・・破壊する！？

「だから私は現れました。失われた皆さんの力も戻し・・・ああ、大丈夫ですよ。後遺症や副作用は出ません」

そ、そう・・・よかった・・・

「そして私も貴女の力に戻ります。菊理、どうか気をつけて。敵は強大です。銀白の翼を探しなさい。彼が味方してくれるでしょう」

え？ちょと、デミウルゴス！？

ーーー

「・・・・・ということでした」

「敵って・・・なんだよ。また戦いが始まるのか!?」

「駆君・・・・・」

戦い、という言葉に、水奈瀬ゆかが怯え、皐月駆（さつきかける）に心配そうな目を向ける。

「菊理先輩、その敵ってどこから来るんですか?」

「わかりません。デミウルゴスは言ってませんでした」

「今はどうなんだ?話は聞けるのか?」

美鈴の質問に首を振って答える菊理。

「彼女はまたアブラクサスとなって私の能力になってしまったので・・・・」

「そうか・・・」

「だが推論は可能」

「栞君?」

無表情な小さな少女、百野栞（ももののしおり）が言葉を発する。

「世界を破壊して特をする人間はこの世界には存在しない。つまり、異世界からの敵」

「異世界って・・・・」

「だが我々はその存在を知っている。一概に否定は出来ない」

皆が黙り込む。
いつもはひょうきんな態度の賢久も、まだ見ぬ敵に緊張を隠せない。

「や、やだなあ、皆さん！！なに黙っちゃってんですか！！皆が揃えば怖いものなしですよ！！ね？賢久先輩！」

なにやら重くなった空気を取り払うように元気を出していった広原雪子が賢久に話を振り、賢久がそれに答えた。

「おぉ、そうだな！こんだけスゲー力を持った人間が揃ってんだ！怖いもんなんざねぇよな！？なぁ、駆！」

「あ、ああ。そうだな。まだ敵の姿も見てないのに悲観するのは早いよな！」

「じゃあ私コーヒー注いできますね？」

「オレも行くよ」

「いーですいーです。私、広原雪子、全力でおいしいコーヒー注いできます！！」

この喫茶店でバイトをしている雪子が席を立ってコーヒーを準備しに行く。

「どーんなコーヒー注ごうかなー（ガパッ）ってひぃぃぃ！？」

「どうした雪子ぉ！！」

「あ、あ、ひ、人が・・・・・詰まってる・・・・」

「「「・・・・・・はぁ？」」」

全員が雪子の指差す場所を見る。
そこはカウンターの上にある横長の棚。

そこに我等が蒔風舜が横倒しなって白目を剥いて詰まっていた。見事に

「えぇ～～～～～？」

駆が感情を表しにくい声を出す。
そんな中、栞だけは無表情で土台に足をかけ、蒔風の服を掴んで引きずり下ろした。

ドダン！！と蒔風が落ちてきて、その衝撃に目を覚ましたのか身悶える。

「アダッ！？や、やっと出れた・・・・」

蒔風が腰をさすりながら立ち上がり、ようやく周囲の視線に気づく。

「呼ばれて飛び出「呼んでない」呼ばれなくてもジャジャジャジャーーーン！！」

「栞のツッコミを流れるようにスルー！？」

「大変なこと、起きてませんか？あなたの世界のお助けマン！！銀白の翼たぁ、オレのことよ！！」

蒔風がバァーーン！！！と自己紹介する。

その内容に皆、当然驚いた。

「銀白の翼!?」

「では・・・・・あなたが?」

「話は聞いていたぜ!さ、説明するから席に「それより片付けろ」片付けてから説明するから皆待っててね!!(涙目)」

栞の一喝に、蒔風がカウンターに散ったコーヒー豆やコップを片付ける。

そしてそれが一通り終わったところで、蒔風が席についた皆に向かって立ち、説明する。

ー=≡へ(*ー ー)ノ 説明中 ー=≡へ(*ー ー)ノ

「なんてことですはい」

「じゃあ・・・・その「奴」って言うのが・・・・・」

「オレたちの、敵」

「その通り」

蒔風が腕を組んでそう答える。
それに納得した駆が、蒔風に握手を求めた。

「じゃあ、お願いします。蒔風さん」

「蒔風とか舜とか、簡単な呼び方でいいよ」

「えっと・・・じゃあ、舜さん？」

「おう！！ああ、それと・・・・」

「なんですか？」

「お前らの素性、教えてくんない？」

「あ」

「てっきり知っているものかと・・・・・・」

彼らが説明を始める。
この世界であった戦いの事を。

といってもかなり複雑だ。
故に、ここで簡単に、非常に簡単に現そう。

？「赤い夜」と呼んだ幻燈結界（ファンアズマゴリア）という異空間に断続的に引きずり込まれる彼ら。
？そこで「黒騎士」と故障した敵と遭遇、幾度も幾度も「赤い夜」を行き来し、彼らを撃破していく。
？実は黒騎士は暗黒の魔女を封じたメンバーで、「赤い夜」は魔女によるものだった。
？駆を除く皆の力は魔女が封印されたときに散った物が移った物だった。
？黒騎士を倒し、魔女を撃破した彼らは、日常に戻った。

である。

ちなみに彼らの力と言うのは

陰陽師・草壁美鈴がその力の増大。
駆の幼馴染、水奈瀬ゆかには「赤い夜」や能力の無効化を持つ、「栄光の手（ハンズオブグローリー）」の発動。

メンバーのムードメーカー、広原雪子は超速再生能力。
清楚なお姉さん、橘菊理はアブラクサスの制御。
ヴァチカンの魔術組織の禁書目録、百野琛は魔術の底上げ。
食いしん坊お兄さん、田島賢久は発火能力(パイロキネシス)。

駆のみは魔女の力とは関係なく、別の力によるものだ。
それは劫の眼(アイオンのめ)だ。

未来を見、その未来を引きよせる力を持つ魔石が埋め込まれた眼だ。
そのためかつては両目の意をが異なり眼帯で隠していたが、今は別段変には見えない。
デミウルゴスの処理のおかげで、能力の使用時のみ変わるというものとなっている。

「なるほどなるほど・・・・・んじゃ、まオレは家帰りますよ」

「え!?」

「「奴」が来るのは・・・・・明日か明後日かな?そこまでのんびりしてますだい。どっとらはい」

そう言って蒔風が店から出て行く。

「あの人・・・・どこ住んでるんだろ?」

「さぁ・・・・・」

そんな疑問を置き去りにして、蒔風は街に消えて行ってしまった。

to be continued

１１ｅｙｅｓ　～なんてとこから来るんだ～（後書き）

アリス「なんてとこから来てんですかほんとに」

それが蒔風クオリティ

ア「今回の世界はどんな感じで？」

菊理さんはいますが、駆とゆか、賢久と雪子がくっついてます。

それとあと・・・ゆかの能力が何だか曖昧です。

誰か細かい事覚えてたら教えてーーー

ア「アニメ見ればいいじゃないですか」

アニメは原作と少し設定違うから参考になりきらない

ア「なる。次回、蒔風泊まる。そしてお風呂でヌッフッフ！！！」

ではまた次回

赤き夜に堕ちて　刹那に散りゆく運命
キミは何を望む？

１１ｅｙｅｓ　～避けられない戦いがある～

蒔風が何処かへと行ってしまったので、皆はいったん解散することになった。
その後、美鈴の家に集まり、事が終わるまで泊まりこむことになった。

「それにしてもさ、やーっぱでけぇよな、美鈴先輩の家」

「草壁家の別宅だったよな、たしか」

「でもまた皆でこうやって集まると、なんだかわくわくしますね！！！」

草壁邸へと続く道。
すでに敷地には入って、そこから邸宅までの道を駆、賢久、雪子の三人がしゃべりながら歩き、後ろを菊理とゆかがついて行っている。

「フゥゥウウ・・・さみぃなぁ・・・早く着かないかねぇ」

「そんなこと言ってもしょうがないだろ・・・ほら、見えてきた・・・ぞ？」

駆たちが家の前に到着する。
だが、その場の状況に皆が口を開けて呆けてしまった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・という雰囲気を満遍なくその場に表しているのは草壁美鈴さん、１８歳
そしてその眼の前にテント一式をまとめ上げられて正座している蒔風舜、１９歳（肉体的に）

「「何が起きたーーー！？」」

「おお、駆に賢久！！皆も来たか！！！」

美鈴が駆たちの方を見、蒔風もヒラヒラと手を振っている。

「美鈴先輩・・・これは一体？」

「この男がうちの林の中でテント張っていたから撤去させたんだ」

「それで事情をお話ししようとしたところさね」

「テント？あんた家無いのか？」

「オレは世界を回る者。家なき子なんですヨ！！で、世界に着くたび、テントの場所が情報として送られてきて、そこに着いたらあらびっくり」

「そうだったのか・・・・・」

「・。・（。＜ω＞）・。・＜だから許してください！」

「まぁ・・・そういう事情なら仕方ないね・・・・・」

「ありがとう！！じゃあ早速・・・・」

「待て待て待て。なぜテントを組み立て始める？」

「え？だってお世話になるわけにはいかないしですよ」

その発言にはぁ～～～と額を押さえて呆れる一同。
菊理やゆかはあはは・・・と汗をたらして笑っている。

「わかった、部屋を用意するからそんなところで寝泊まらないでくれ」

「マジで！？ありがとうございますだ！！！」

そんなこんなで蒔風の宿泊も決まり、夜がふける。

「はい、ここではじまりました「男湯、煩悩爆発！！！」の時間がやってきました！！！！！」

「「ワーーーー！！ドンドンパフーーー！！！！」」（一名棒読み）

そんなこんなで現在入浴中。
皆で晩御飯を食べ、そしてお風呂に入っているのだが・・・・

「おぉー。すげー！！！！」

「一軒家にこれだけのお風呂があれば十分だよな」

「温泉温泉～～～♪」

この家は凄かった。
男湯、女湯に分かれた浴場まであったのだ。隅の方にはサウナもある。

ホテルなどの大浴場までとはいかないが、個人の家が持つには十分な広さだ。

「にしても・・・・」

「ん？」

「蒔風の傷、すげーな」

「それ、全部今までのか？」

「そうだね～～はぁ～～ヌクヌク（「▽」）。ｏ０〇」

身体を洗い終わってから湯船に浸かった二人が蒔風に質問する。

「あいつ強いからね～～・・・ホント、俺なんて「勝った」って胸張って言えるのなんか三回くらいじゃね～～？」

「今までいくつ回ってきたんだ？」

「ん～～～とね、わかんない。ひ～ふ～み～・・・・・」

蒔風がのんびりと指を曲げて数えて、指をパチンと鳴らして答えた。

「２５個前後かに～～？二回行った世界もあるからメンドイに～～♪」

「そんだけしか勝てないのかよ。「奴」が強すぎんのか？」

「んん～～～？そ～～だねぇ～～でもま、安心してに。オイラさん、世界最強にゃから～～～～」

「大変・・・なんだな」

「別に～～～こうやって楽しいこともあるし～～～別に後悔はしてないよ～～ただ～～～～」

「ただ？」

「そのきっかけだけは・・・残念だったけどね・・・・」

「「きっかけ？」」

「・・・あーーーーのぼせそうだ！！サウナ行こうぜ！！我慢大会だ！！！！」

そう言って二人の手を取って湯船から上がる蒔風。

おっと、きちんとタオルは腰に巻いてますよ？

湯船にタオルを入れるな!!と言われそうですが、この男、こういった面では恥ずかしがり屋なのである。

蒔風が二人と一緒にサウナに入ろうとその扉に手をかける。

その瞬間

彼らを脳髄から揺さぶるボイスが聞こえてきた。

「美鈴先輩おっきいですね!!!」

「や、やめてくれ・・・そんなにじろじろ見ないでくれ・・・・」

「うぅ～～ん。でもやっぱり女性として憧れちゃいますね～～」

「雪子君だってないわけじゃないだろう?」

「でも美鈴先輩には叶いませんよ～」

「これも結構肩が凝って大変だし鍛錬には邪魔だし・・・・・」

「「「襲え！！！」」」

「え？なに、うひゃぁぁあああ！！！！」

ガシッ！！！！

今この時以上に心が一つになったことがあっただろうか？
おそらくは無いだろう。ああ、なぜ人はこんなにも愚かなのか・・・
・・

「壁の高さは約三メートル」

「厚さは十五センチと言ったところか？」

「なぁ・・・いいのかこれ？」

訂正、一名冷静な男がいました。

「なあ駆、考えてみろ。普通浴場作ってさ、露天でもないのにこんなふうに上の部分が開いてるなんておかしいと思わないか？」

蒔風の言葉どおり、この浴場は女湯と男湯に分かれており、銭湯のようにそこを仕切る壁の上部は空いている。

「普通はあそこを塞ぐ。だが、あえて開けられてるのはなんでだ？」

「オレには見える・・・ここを立てた大工のおっちゃんの笑顔が！！そのサムズアップが！！！」

「お？おお？」

「これは行かねばならぬ。かの織田信長も、合戦と女湯、どちらを選ぶか本気で悩んだらしい（嘘です）」

「そうだぞ駆。目の前に牛がいて、それを喰わないライオンはいない。オレたちは・・・ライオンなんだ！！」

何かと言うと亀のような気がする。

「さて・・・いきますか？」

「おう！！」

「行くぞ！！！」

「まず桶を片っ端から集めろ。それから逃走経路の確保だ。この場の条件ではじっくり見ることは叶わない。おそらく！見た瞬間に見つかるだろう」

「へっ、そんなリスク、恐れるにあらずだぜ！！」

「だけど逃走先はどうする？屋敷の中は見つかるぞ？」

「こんなこともあろうかと！！あのテントちゃんと林の中に立ててきました！！！」

「つまり覗いた瞬間心のフィルムに焼きつけてから脱衣所に逃走」

「衣服を持って屋敷街に逃げ、テントに向かう」

「その通り。準備は怠るな。時間をかけ過ぎると彼女らが出て行ってしまう」

「蒔風！！準備はできた！！」

「逃走ルートに障害物は無い。劫の目で確認した」

「圧水でタイル、および全身の徐水終了。これで滑ることは無い」

三人がせっせと桶を積み上げ、覗けるほどの高さになり、その上に乗る。

「せーので行くぞ・・・」

「「「せーのッ」」」

バッ！！！！！

「おぉッ！？」

「これは・・・・」

「ばんなそかなッ！！」

「ラジカセ・・・だとっ！？」

女湯にあった物。それはラジカセだった。

そしてそれはいまもキャッキャウフフな桃源郷の音を流していた。

「この家は私の家だぞ?賢久が来るとわかっていた時点で、壁にモノを積み上げたらわかる術を仕込んでおいたのさ」

背後から声がした。

三人が桶の上から見下ろすと、そこには室内着に着換えた女性陣が。

「・・・・・いや、なんとも熱いお風呂ダッタネ!!カケルクン、タカヒサクン!!!」

「そうだな。だがもう大丈夫だ。落ち着いた」

「逆に寒いくらいだけど、もう一度湯船につかろうか!!」

「「「あっはっはっはっは~~~・・・・・っは!!!!!」」」

三人が同時に駆けだす蒔風は脱衣所に、駆は窓から、賢久は女湯の方に飛び込み、それぞれ逃走を図った。

だが・・・・・

『ぎゃあああああ!!!ゆ、雪子!!なんでお前いつの間に!?』

『女の子には秘密がタクサァ～～～ン・・・・・』

『ぎゃあああああああああああ！！！！！！』

『駆く～ん？ニガサナイヨ？』

『な！？栄光の手（ハンズオブグローリー）！？』

『駆君はこの空間からは逃げられないんだよ～～？』

『まてゆか、落ち着け、落ち着くんだ』

『弁解、できるの？』

『できませんすみまぎゃあああああああああ！！！！！！』

「・・・・・なるほどな。駆が「目」で見たのは「覗いた場合」の未来。つまり、覗けなかった場合は想定外だったわけか」

「で？君はなにか言うことは？」

美鈴が草壁一族に伝わる5振りの宝刀、草壁五宝が一本、小烏丸天国(くに)をペシペシと手で叩きながら訊く。
その後ろでは菊理がにっこりとほほ笑み、さらにその背後に拘束具に身を包んだ天使、アブラクサスが鎖をジャラジャラと言わせていた。

正直、メッチャ怖い。

「では本当のことを言おう。正直、覗いた先に何があっても構わなかった。ラジカセでも満足だ。オレが求めたのは、「覗く」というシチュエーションと!!そのための経緯だったんだからな!!!!」

「それで言い訳になるかぁ!!!!」

「ですよねーーーーー!!!!!!!!ってうごあああああああああ!?」

蒔風の悲鳴が響く。

こうして悪は滅びた。

――

「フンフフ～～ン。ふっろっそうじ～～～～♪」

「なんでそんなに上機嫌なんだ？」

「この程度で済んだなら上々じゃね？」

「た、たしかに・・・・・」

蒔風たち三人は罰として風呂掃除を任された。
モップを手にゴシゴシと綺麗にしていく。

「蒔風はこういうのめんどくさいんじゃねえか？」

「やるまではめんどくさいよ？でもやり始めたら徹底的だから、俺」

「あーわかるわかる。やるまでが面倒なんだよな。やっちまえばあっという間なのに」

「そうそう！！！」

そう言いながら掃除して、終わるころに女性陣が飲み物を持ってやってきた。

「どうだ？終わったか？」

「「「終わりましたっす！！！（、・ω・）ゝ」」」

「よろしい」

「にしてもホントーにピカピカですね～～」

「フッ、オレにかかれば、この程度の掃除、簡単よ」

「何を威張ってるんだ」

「ごめんなさい」

それから皆で大広間に行き、そこでカードゲームやらボードゲームやらをやって遊んだ。

「ああ、そういえばさ」

「なんでしょう?」

蒔風が菊理に声をかけ、それに菊理が答える。

「なんでアブラクサスはオレが来ること知ってたんだ?」

「それは・・・・・えっと・・・・・」

「言えない事ならいいんだよ。ただちょいと気になってね」

「・・・・そんな聞きたそうな眼をしても、説得力無いですよ?」

「バレタか」

「わかりました、お教えしますよ」

この話は誰も知らない事らしいので、なるべく言いふらさないでくれと前置きしてから菊理が話を始める。

赤い夜での最終決戦。

皆が力を出し切り勝利したものの、ボロボロで、死者まで出ていた。

美鈴や駆は力の酷使で身体や魂が崩壊しかけていたし、ゆかと雪子は魔女、リーゼロッテに吸収され、賢久はすでに死亡していたのだ。

だが、戦いに勝利した皆の体内から力の源である「虚無の魔石の欠片」と、駆の「劫の目」を菊理は取り出し、アブラクサスに吸収させた。

それによりアブラクサスはデミウルゴスに覚醒し、真の姿となった。

その力は神に等しく、世界を修復するほどのものだった。

その力故に菊理は世界から孤立し、神の領域で一人世界を見守ろうとした。

だが、デミウルゴスには自我が宿っていた。

そのデミウルゴスが自らと菊理の関係を断ち、一つ高層の世界領域から皆を見守ると言って消えた。

こうして菊理は人の世に戻ってこれたのだ。

「なるほどね。それならこの世界に侵入者がいたことに気付いてもおかしくねぇや」

そう言いながら菊理の頭をくしゃくしゃと撫でる蒔風。

「よかったな。人間から外れなくてよ。オレとしてもうれしいよ」

「え？」

「オレは既に存在が人外だ。翼人とかそう言うのが無くても、死を理解した時点でオレは爪弾きもんだ。だからうれしい。あんたが、ちゃんと人間やってるとこを見ると、さ」

「・・・・はい。これも、皆さんのおかげです」

「うんうん、人生、楽しんでるかい？」

「もちろんです」

そう言って次のボードゲームを用意する蒔風。

その顔は、とても奇麗に笑っていた。

「次はこれだ！！！「レインボードリーム」！！！」

「また人生ゲーム！？」

「じゃあ・・・「ブラックアンドビター」！！！」

「そればっかかよ！？」

「また「エクストラ」やる？「関西版」もあるけど」

「もうなんでもいい・・・」

「「筋肉番付」と「ハローキティ」、どっちがいい？」

「「「「そんなのまであるのか！？」」」」

to be continued

１１ｅｙｅｓ　～避けられない戦いがある～（後書き）

アリス「何やってんですかまったく」

蒔風は覗きたかったんじゃない。

「覗く」と言うその行動を楽しんだんだ！！！だから別にその先に何があっても構わない！！

でしたからね。

ア「人生ゲーム・・・あれ大人数でやると面白いですよね」

作者が持ってるのは「エクストラ」「ブラックアンドビター」「レインボードリーム」です。

滅茶苦茶面白くていいんですが、なかなか仲間で集まる機会がなく・・・

それとみなさん、今日の「いいとも」見ましたか？

私は見ました。

テレフォンショッキングのゲストが、吉川晃司さんでしあた！！！

ア「仮面ライダースカルのおやっさん役の？」

そう、鳴海壮吉役の吉川さんです！！！
渋かった・・・・・

ライダー勢からもお花贈られてましたね。

ア「それはテンション上がったでしょうね」

それはもう！！１２月の劇場が楽しみ

ア「次回、送られた刺客」

ではまた次回

千鳥や千鳥、伊勢の赤松を忘れたか――

１１ｅｙｅｓ　～派手に戦ってみますか！～

朝である。

いい朝である。

そんな朝、皐月駆は寝起きにとんでもない物を見た。

「うみゃぁ～～～～」

「が・・・・・かけ・・・たすけ・・・・・・・・」

寝ぼけた蒔風が賢久にチョークスリーパーをかけていた。しかもホールドで。

「おいおいおいおい！！！」

駆がどんどん青ざめて行く賢久の首から蒔風をはずし、代わりに抱き枕を抱かせることで事なきを得た。

「し、死ぬかと思った・・・・・」

「大丈夫か?賢久」

「まあいいや、飯食いに行こうぜ」

「蒔風はいいのか?」

「あーーー・・・一応起こして（ブチブチ、ボンッ）いや、このままほっておくのが本人のためだ」

「だな」

二人の背後から何かが破裂する音が聞こえたが何も気にせず二人は朝食を取りに行った。

ーーー

「さて！！皆さん、今日と言う日がまたやってきましたが、ご機嫌いかがでしょうか！！！！」

「朝からデッドオアアライブ」

「死にかけた友人を救いました」

「それはとってもエキサイティングッ！！！」

「「あんたのせいだっ！？」」

朝食をとりながらなんだがテンションの高い蒔風が二人からド突かれてあっはっはと笑っていた。

「男の子ってすぐ仲良くなりますね～～」

「うらやましいですね」

「でもああいうのって本人大変なんですよね～～」

女性陣は女性陣で会話に花を咲かせている。

そして朝食後、男三人は何を思ってか、庭に出て何やら始めていた。

「よっしゃ駆!!どっからでも打ちこんでこい!!」

「おぉッ!!」

カンカン!バシッ!

二人が木刀を持って打ち合っている。
その光景を賢久がドーナツをつまみながら眺めてやんややんやと囃している。

「ほう、鍛錬か。いいことだな」

「草壁さんじゃないですか」

「私も剣術の心得があるんだが、あとで手合わせしたいな」

「ええよ?でもちょいと待ってね。今日来なきゃ明日・・・いや、明日だな。明日来る」

「なぜ断言できる?」

「いい男には秘密があるの♪」

蒔風が塞げた口調で振り振りと立てながらいたずらな目をして答える。

その間にも駆が木刀で打ち込んできているが、受けるなり弾くなり流すなりで蒔風には当たらない。

「かけちゃん、ハッキリ言ってお前の剣術では俺には勝てない。だからお前はお前の特技を使え。それはかな～り、厄介だ」

「・・・わかった。行くぞっ！！」

「来いッ！！！」

蒔風が剣を縦一文字に振り降ろす。

だが蒔風がそれを振るう動作よりも早く、駆が横に動いてそれをかわす。

まるで最初からそう来るとわかっていたかのように。

蒔風がもう一度駆に向き合うと、駆の左目が金色と黄色の中間あたりの色に変っていた。

「一劫の目（アイオンの目）・・・・さすがの性能だな」

「ふぅ・・・・（スゥ）でも見れてもオレの身体が動きについていけなかったり、受けても受けきれないような攻撃じゃどうしようもないからなぁ」

「それでも有利っちゃ有利だろ」

「そうだけどね。結構疲れるんだよ」

「そりゃそうだ。未来の情報を脳に受け止めるだけで相当な負荷だしな」

そんな話をしながら駆と蒔風が打ち合う。
そうして正午に近くなり、みんなでお昼にしようと言ったところで、
それが来た。

「む？」

「どうした？」

「敷地内に・・・・何かが侵入した・・・・」

「ああ、それ？「奴」じゃないね。多分過去あんたらが戦った敵だよ、それ」

「え！？」

ドドドドドンッ！！！！

六体の黒い影が蒔風たちの前に降り立つ。
その形態は武人、巨大な棍棒を持った丸い大男、鞭のような剣を持った悪魔的な女性、何かの像のような形をした者、二本の刀を持った女性。

そして・・・・・

「あれがリーダー格か・・・・なにあれ、オーガやん」

そしてその内のリーダー格であろう黒騎士。
確かに、彼らがこの姿を見て「黒騎士」と名付けたにふさわしい外見をした男。

それは蒔風が言う様にオーガ・・・仮面ライダーオーガに似ていた。

「トレスだろーーーあれーーーーー」

「な、何を言ってるんだ!?とにかく、ここはみんなで「ここはオレに任せてもらおう」んな!?」

蒔風が一歩前に出て拳をバキボキと鳴らして行く。

「あいつらは強い！！それがあれだけそろっていれば・・・・」

「でも今のあんたらなら勝てるだろ？やらせてくれ。今のオレがどれだけ動けるのか、試させてくれ」

「今の・・・君？」

「気にするなよ。それに、デカブツは終わった」

キィン・・・・・・ゴガアアアアアアア！！！！！！

蒔風がそう言うと、棍棒を持った巨体の黒騎士が斜めにずれ、消滅した。

「さぁて、はじめようか。この地に染みついた記憶より作られた過去の亡霊よ」

そう蒔風が言うと同時に、武人の黒騎士・イラが中段に拳を構えて突進してくる。
蒔風がそれに対して身体を開き、腕を「ハ」の字にして自分の腹にくるよう誘う。

はたしてその拳は周囲の空気を捩じりあげて蒔風の腹部に向かって放たれた。
それを左手で掴みながら蒔風は右足を下げて上体をひねる。
そこから左足を下げ、右手でも掴みながらさらに身体を返し、イラの身体を投げ、地面に落とす。

腕を極め、その根本からへし折ってから頭蓋を踏み砕く。
そして背後に迫る悪魔的な女性の姿をした黒騎士・インヴィディアに振り返りながら裏拳を振るい、顔面にめり込ませる。

「勢いよく飛び過ぎだ。飛翔音で丸わかりだったぞ？」

ゴゴン！！ゴゴン！ゴガッ！！ズ・・・ズン！！！

邸宅の周囲の林に突っ込み、木々をなぎ倒しながら吹っ飛んだインヴィディアが、最後の巨木でなんだかよくわからない染みになって終わった。

そしてインヴィディアがそうなるより少し前に、すでに蒔風と二刀流の女性像をした黒騎士・スペルビアと激しい剣撃を打ちあってい

た。

その速度はもはや人の範疇を超えており、実際には五回ほど打ち合った剣の音が、「ギン！！」の一音に聞こえる。
さらにその「ギン！！」がとんでもない回数、一気に鳴っている。

ギギン！！ギギャギャギャギギギギンッ！！ガキュィッ！！ガガギギギギンッッ！！！

「ハァァァアあああああ！！！！！ぬぅん！！！！！」

ガギギッ・・・ギャギィン！！！！！！

蒔風がスペルビアの剣を弾く。
それと同時に、唯一人型でない、像の形をした黒騎士・アケディアが蒔風に向かって炎と雷を同時に放ってきた。

「圧水砲！！！！！」

それに対し蒔風が圧水砲で迎え撃ち、爆発を起こして周囲が霧に覆われる。

「なッ・・・視界が・・・・・・・」

「ゆか!!離れるな!!」

「か、駆君?どこ!?」

「オレはここ「声を出すな駆!!!」ッッ!?」

ゴギャン!!!!

駆が蒔風の声にビクつき、ふいに見えた影に頭を抱えて防御をとる。

だが、その影が駆に危害を加えることはなく、蒔風がその影、スペルビアを背後から貫いていた。

さらに駆と貫かれたスペルビアの間には雪子がナイフを構えており、腕と頬に少し切り傷があったが、その場ですぐに感知してしまった

霧が晴れ、離れたところではすでにアケディアが黒い煙となって消滅していた。

「大丈夫か?」

「あ、ああ」

「びっくりしましたよも～～～」

「凄いな、超速再生か？その戦闘能力は別か？」

「あはは、これは自前です。私の力はすっごくよく治るだけですよ？」

「十分だ・・・・・ツオッ！？うわァァァ！？」

蒔風の身体が漆黒の巨大な腕に掴まれ持ちあげられる。
その腕の主はリーダー格・アワリティア。
巨大な竜へと変貌した彼が、蒔風を潰そうとその腕を握りしめた。

「こんの・・・・・」

「蒔風！！！」

「ち・・・いいだろう・・・試してみるか・・・・『我ここに異端を証明す』」

ブシャッ！！！！！

蒔風のつぶやきと共に、竜の腕が裂け、その体を離す。

「なんとかうまく行ったな・・・・固有結界、中々難しい」

「蒔風！！！まずい！！！！！」

「ん？なッ！？」

蒔風が賢久の声で竜を見上げる。
その口元には炎のように七色の虹が蓄えられていっている。

「契約の・・・虹ッ！！！」

「なるほど・・・・次元破断砲撃かよ・・・・・勘弁してくれ！！！！」

ドバォ！！！！！！！

虹色をした砲撃が放たれ、蒔風がそれを迎え撃とうとする。
だが、それよりも早くそれに対処したのは・・・・・

「や、やめてぇ！！！！！」

ゴォ！！！！

周囲が一瞬で赤くなり、その場の世界が塗りつぶされる。
そして蒔風の寸前で虹の砲撃が掻き消されるではないか。

蒔風が振り返ると、ゆかの手が光っており、それが力の発動を物語っていた。

「栄光の手（ハンズオブグローリー）による幻燈結界（ファンタズマゴリア）・・・それによる能力の打ち消しか！！！ありがたい！！！！！」

その隙に蒔風が手に力を借りて跳び上がる。

その手に握るは勝利の剣。
黄金に輝き、黒き竜を討つ！！！！

「エクスカリバーー！！！！！」

ドゴッ！！！！ゴシャァァァアアアアアア！！！！！！！！

その光によって竜が跡形もなく消し去り、同時に赤い夜も消え、普通の昼下がりの陽気に戻った。

「う～～ん・・・・助けられちまったな。ありがとさん！！！」

「う、うゆ・・・・・」

そう言いながら蒔風がゆかの頭をくしゃくしゃと撫で、ゆかがそれにワタワタと困る。

「ま、これで証明できた。「奴」は今日、来ない」

「では明日？」

「今晩１２時からだな。そこまでは気を抜いておけぇ。神経切れちまうからな」

ヒラヒラと手を振りながら椅子に座って眼をつむる蒔風。

「オレは寝るよ。ごめんな、草壁っち。相手はできそうにないや」

「いや・・・構わない。あの戦いを見れただけで十分だ」

「そ?よかった・・・・ふぁぁぁ・・・・」

そうしてあくびをして眠る蒔風。

最初は俯いていたが、次第に顎が上がって上を向き、口をポカーっと開けてしまった。

あ、よだれ垂れた。

「こいつ・・・ホントにすごい・・・・」

「それでも「奴」に勝つのは難しいらしいんだ」

「それホントですか!?」

「それなら我々も休もう。今日はなんだかもう疲れたよ」

そう言って皆が思い思いの行動に移った。

のんびりする者、いつも通りの者、遊ぶ者、身体を動かす者。

着実に時間は進む。

「奴」の襲撃時間が迫ってくる。

to be continued

１１ｅｙｅｓ　～派手に戦ってみますか！～（後書き）

アリス「今回蒔風強！！！」

そして「奴」が来るのは次回ですね。

ア「私が言うつもりだったのに！！！」

ではまた次回

そのアイ（眼／愛）が運命を変える

１１ｅｙｅｓ　～それは友と明日のために～

黒騎士の襲撃から数時間後の夜

正確にはもう次の日になってから二時間後。

「づがれだ・・・・・」

「待つのもキツイなぁ」

皆が起きて「奴」が来るのを待ち構えていた。

といっても外でではなく、家の中でのんびりしながらだが。

と、そこから数分、美鈴がなにかを感じ取り、頭を上げる。

「敷地内に侵入者・・・・なんだ?・・・・・酷く歪んでいる・・・・・」

美鈴が敵の情報を読み取ったのを聞き、蒔風がノンビリとココアを

飲んで言った。

「それ以上読み取ると魂とか精神とかそんなんが壊れるからやめときなーーー」

「こいつが・・・「奴」!?まずい、皆、戦闘に・・・」

「まあ落ち着け、な?」

蒔風がそういうと同時に、邸宅を囲む林の中から轟音と

(のあああああああああ!!!!!??)

誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「・・・・え?」

「さっき見回った時にトラップ仕掛けた。こいつは凄いな。流石トラップマスターだ」

ドゴンバガンと轟音が響く中、蒔風達はのんびりと邸宅を出る。

「駆、君にはこの剣を渡しておく」

そう言って美鈴が駆に草壁五宝の一本・雷切を渡す。

「どうやら君が使った方が相性がいいらしい。これは君に渡そう」

「いいんですか？これって・・・・」

「確かに草壁五宝は草壁家の物だ。だが、あの最終戦ですべて砕けた。ここにあるのは菊理君の力で戻った物だから、それを私がだれに与えても問題はあるまい？」

「・・・・ありがたく、お借りします」

そうやって準備ができたところで、「奴」ちょうど林から出てきた。

「はぁはぁはぁ・・・・・」

「どうだった？」

「死ぬわ！！いやまあ余裕ちゃんでしたけど！？」

「無茶すんな」

「いやマジだって。体力だってまだこんなにあるしなッッ！！」

「奴」が飛び出す。
蒔風がその拳を受け止め、上空に放る。

「奴」が空中で体勢を整えながら蒔風に波動砲を撃ち、爆発して煙で包む。

その煙の中から鏃（やじり）が先端についた鎖が伸び、「奴」の四肢を貫き巻き付いてきた。

「ぬがっ！？ぬぬ・・・・アブラクサスか！！」

煙の中から天使が飛びだし、「奴」の身体を拘束する。
だがパワーにおいて格段に「奴」の方が上だ。

ギリギリと鎖が悲鳴を上げる。
しかし、確かに「奴」の動きは止まり、最初からそれが狙いだった。

「おおおォォォォォおおおッッ！！」

賢久の指の先端に火の玉が圧縮されていく。
その数は三つ。
ビー玉程度まで凝縮された超圧縮の火炎が、叫び声と共に放たれる！

「ローゲ・・・フィンガー！！！」

ゴゴォ！！！

三つの火炎玉が「奴」に命中し巨大な爆発を起こして、蒔風たちの肌をチリチリと熱した。

「すっ・・・・・ご」

「やったか！？」

煙の中から「奴」が落ち、アブラクサスが再び鎖を伸ばす。

だが「奴」はそれを避けて掴み、ブチブチと引きちぎった。
その衝撃に菊理が小さな悲鳴を上げてアブラクサスを下がらせる。

「ったく・・・蒔風の獄炎弾レベルだぞ・・・・」

そういう「奴」の身体はユラユラと霧を吹き出している。

かなりのダメージだったようで、その息も荒い。

「はっ・・・ははは!!どうした!?・・・・まともな攻撃できるのは田島賢久だけか!?」

「それは・・・どうかな!?」

ゴゴゴゴゴッ!!!

美鈴が人型に切られた紙を飛ばす。
それは力の込められた式神であり、彼女の意志に呼応して、炎を生み出し、「奴」を襲う。

「千歳(ちとせ)の儔(ともがら)、火車切広光(かしゃぎりひろみつ)!!!!」

その隙に草壁五宝・火車切広光を術で呼び出し、その剣身に力を込めて切りかかる!!!

「護身破敵とともに、禍災を除かむることを請う――神隠す十拳(とつか)の如く火産霊(ほのむす)び、火車来々、焔羅に送られん・・・・・」

ゴォオッ!!!!

健診が赤く灯り、高温の刃となって「奴」に迫る！！！

「壱の閃！！！」

ガゴッ！！！

「弐の閃ッ！！！」

ギキィ！！！

「参の祓！！！」

ガァン！！！！！

「・・・・・・・・な・・・・・・」

「な？何の遊びだ？の「な」？」

ゴォア！！！！

「奴」の足元から黒き波動が噴き出し、美鈴を吹き飛ばす。
そして倒れた彼女に向かって剣を抜き、突き出すして突進するッ！
！！

だが

ガァン！！！

駆が劫の目による情報で先読みし、「奴」の攻撃を弾いていた。

「先読みの力・・・未来を見る目か。まあ厄介な。でもな・・・・・・
・」

ズォッ・・・・・！！！！！

「見える恐怖を知れ」

その瞬間、駆の右目が光り、未来（さき）が見えた。
一瞬にして駆を、「奴」の腕が分身したように迫り、突き貫こうとする映像だ。

「あ・・・ぐっ！！！！」

駆はよけようとするが、背後には美鈴がいる。
さらに言えば、駆の動きよりも早く、「奴」の腕が到達する。

そしてその映像通りのモーションを「奴」が起こし・・・・

ガシュッ！！！！

蒔風が間に入ってそれを止めていた。
脇に魔導八天の内の二本を挟んで受け止め、痛みに顔をしかめる。

「はっ！！！！」

そこに雪子が突っ込み、「奴」に逆手に持った大型ナイフで斬りかかる。
「奴」はそれに対して蒔風が掴む剣をパッ、と離して新たに二本抜

いて対応した。
しっかりと置き土産を残して。

「ケルベロス！！迦桜羅！！！やっとけ！！！」

ギィィィ・・・ドン！！ドドン！！！！！

蒔風の脇から剣がはじけ、ケルベロスと迦桜羅が姿を現す。

「んだよあのバケモン！？」

「ッ・・・賢久ァ！！！！雪子を一人にすんな！！！！全力でフォローしろ！！テメェの火力はあれば、「奴」に応対できる！！！！」

「わかった！！！オラオラオラァ！！！オレの雪子に手ぇ出すんじゃねぇ！！！！」

「迦桜羅はオレがやる！！（バサッ！！！）駆は他の者と一緒にケルベロスをおとせ！！！！」

「あ、あれを！？」

「琛君！！できるか！？」

「行けます！！！！」

「いい返事だ。蹴散らせ！！！！」

ドゥッ！！！！！

蒔風が銀白の翼をはためかせ、迦桜羅に空中線を仕掛ける。

駆たちは地上でケルベロスの相手を始めた。

ガルォォォッラァァァァァァァァ！！！！！！！！！

ドンドンドン！！！！！！

ケルベロスが口から三連の火球を打ち出す。

駆は既にそれを先読みし、ゆかに指示を出していた。

「こないでぇ！！！」

ゴァッ・・・パァン！！！！！

ゆかが手を突き出し、拒絶の言葉を放つと同時に、その火球は一瞬で消滅してしまう。
さらにケルベロスの右の首をアブラクサスが鎖で締め上げ、左の首を美鈴が火車切で斬りおとしていた。

ドチャッ、と首が落ち、それでもその目玉はギョロつき、駆を確認して首だけで突っ込んでいった。

「邪魔」

バァン！！！！！

その首の特攻もむなしく、栞による魔術攻撃に消し飛んでしまう。
だが残った首が一個だろうと二個だろうと、ケルベロスにとっては問題ではない。

与えられた使命を全うするために、その首の二本や三本など、惜しくはないと言わんばかりに、駆に向かって突進する！！！

それに向かって駆けるが走り出す。
狙うはすでに見えている、ケルベロスが到達するその場所！！！

ドシュッ！！！！

ガァァアアア

ーーー

蒔風が己の全武器最硬を誇る玄武盾を構え、それを迎え撃つ！！！！

ガゴゴゴォア！！！！！

回転を加えた突進を真っ向から玄武盾で受け止める蒔風。
接点から火花が散り、地上に降り注ぐ。

そしてその攻撃を受けきり、背後に流す。
だが迦桜羅は止まらない。

Uターンして、再び蒔風に向かって突っ込んでくる！！！

「行くぞ玄武！！！」

蒔風が玄武盾を迦桜羅に突き出す。
その縦に刻まれた甲羅の模様が、まるで花びらのようにグパァ、と開け、その中に貯蔵された先ほどの迦桜羅の攻撃がエネルギーとして放出される！！！
歳引力、攻撃力は共に互角。

だが、蒔風の力が乗った分、そちらの方が上であるのは当然！！！！

ドッ！！！ジュゴァァアアアアアアアアアアア！！！！！！

迦桜羅の身体が消し飛び、夜空に一筋の光線が伸びて行った。

「さてと駆は・・・・ッオ！？」

蒔風がそれを見る。

「ブースト、オンッ！！！！」

ゴォウ！！！！

駆に迫るは「奴」の投げた「獣人」
それを止めるべく、蒔風が駆の目の前に飛び込んで・・・・・

ドシュッ！！！！！

その手の平で受け止めた。
己の手を貫いたそれを抜いて投げ捨て、駆に蒔風が振り向き言った。

「よくやった！！！ケルベロスをやるとは、なかなかできる！！！」

ドォン！！！！

少し離れたところで、賢久の火炎に「奴」が覆われる。
だが、「奴」はその火炎を腕を振ってかき集め、雪子と賢久に投げ返す。

だが雪子はその場で瞬時に回復し、賢久は発火能力者だ。そもそも炎は効かない。

一進一退の攻防に、「奴」が忌々しそうな声を出して駆に叫んだ。

「だぁ！！うっとおしい！！！！なんなんだお前らは！！！チマチマチマチマと！！！！」

「オレたちは・・・オレたちはただ、約束をしただけだ！！！」

「約束？なんのだよ。蒔風とか？」

「違う。そうじゃない。オレたちがした約束、それは・・・・・」

「行くぞ、駆！！！」

「「「「「「友と、明日のために、だ！！！！」」」」」」

【１１ｅｙｅｓ～Ｔｕｍｉ　ｔｏ　Ｂａｔｕ　ｔｏ　Ｔｕｇｕｎａｉ　ｎｏ　Ｓｈｏｕｊｏ～】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが発動し、皆の力の源、「虚無の魔石の欠片」が駆に集まっていく。

そしてそれは雷切に注ぎ込まれ、途方もない電撃を放ちながら伸びてゆく！！！！！

「準備完了だ」

「させてなるかよ！！！！」

「奴」が駆を止めようと走りだす。
だが、蒔風がそれを許さない。

サギギギギギギッ！！！！

「奴」の身体を剣で突き刺し、地面に縫いとめる。
「奴」がそれに苦悶し、怨嗟の声を上げた。

「蒔風ェェェエエエエエエエエエエ！！！！！！！！」

「オレだって何回貫かれたと思ってんだ。たまには清算させろ」

【１１ｅｙｅｓ～Ｔｕｍｉ　ｔｏ　Ｂａｔｕ　ｔｏ　Ｔｕｇｕｎａｉ　ｎｏ　Ｓｈｏｕｊｏ～】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩ

ＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

駆の剣に、さらに蒔風の力までもが乗り、その太さを増していく！！！

「消　え　ろォォォォォおオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

「なっぐ・・・ガアアアアアアアアアアルアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

ドシッ！！！ズガァ！！！！！

駆がそれを振り下ろし、「奴」を叩っ切る。
その衝撃と斬撃に、「奴」の身体が霧散して、夜の闇に消えて行った。

「ふぅふぅふぅ・・・・・はぁ～～～～」

「終わった・・・・のか？・・・・あ・・・・・」

それが終わると、駆の身体から「虚無の魔石の欠片」が再び皆の身体に戻った。

「今回のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫはさすがに単発か。まぁ、あれが永続されたらきついけどな」

とりあえず、戦いは終わった。
戦闘開始から二十二分。

駆達にとってはかなりの激闘。
蒔風にとっては儲けた戦闘だった。

（軽い怪我で勝てた♪やったった！！）

――――――

「そんなこんなで、行かせていただきます」

「手の調子は？」

「問題ないよ。ほれ、ニギニギ」

「じゃあ・・・またな」

「会えることはないと思うけどな。また」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－１１ｅｙｅｓ～Ｔｕｍｉ　ｔｏ　Ｂａｔｕ　ｔｏ　Ｔｕｇｕｎａｉ　ｎｏ　Ｓｈｏｕｊｏ～］

蒔風がゲートをくぐって世界から出て行く。

それを見送って彼らは日常に戻る。

平和な日々の続く日々へ。

ーーー

to be continued

１１ｅｙｅｓ　～それは友と明日のために～（後書き）

【１１ｅｙｅｓ　－罪と罰と償いの少女－】

構成：”フォルス”５０％
　”ＬＯＮＤ”５０％

最主要人物：皐月駆

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：すべての欠片の力を駆に集結

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：蒔風の力も上乗せし、斬り倒す

アリス「今回はこの辺ですね。作者はどーしようもない友人に愛想が尽きてイラついてるのでここまでです

次回、いきなり果たし状！？ではまた次回」

ここが勝負　勝負の時なのだ
だから真剣（マジ）で　立ち向かえ乙女

真剣で私に恋しなさい　～いきなり宣戦布告!?～

朝

河川敷を多くの学生が登校している。
その中に一際騒がしい集団がいた。

「ふはははははははははは!!ぬるい!温いぞ!!」

一人の女子高生が五十人単位のチンピラを薙ぎ倒していたからだ。

「モモ先輩も朝からやるなーー」

「昨日暇だ暇だ言っていたから、ウサ晴らししてんだろ」

「少し眠そうな大和も超ステキ」

そんな会話をしているこの集団のメンバーは以下の通り。

リーダーのキャップこと、風間翔一。
最強の武を誇る戦闘狂美少女（自称）、川神百代。

百代の義理の妹の犬っ子、川神一子（かずこ）。通称ワン子
気の弱そうな少年、師岡卓也。通称モロ。
ガタイのいいタンクトップ男、島津岳人（がくと）。
大和に大胆な愛情表現をする少女、椎名京（みやこ）。
メンバー新顔その一、金髪少女のクリスティーナ・フリードリヒ。
通称クリス。
メンバー新顔その二、大和撫子、黛由紀江（まゆずみ）。

そしてチームの軍師で百代の弟分、直江大和だ。

周りの皆は彼らを総称して、「風間ファミリー」と呼んでいる。

「にしても後を絶たないね。モモ先輩の挑戦者」

「しょーがないだろ？姉さんは世界に名を馳せる最強なんだから」

「でも早く行かないと学校遅れるぜ？」

「今日は何気にチンピラさんも頑張ってんなぁ・・・・」

「弟ーーー！先に行っててていいぞー。私も後から追いつくからーーー」

チンピラをまた五人くらい吹っ飛ばしながら軽快に百代が大和にそう言ったので、皆が学校に向かう。

百代は嬉々としてチンピラを倒していった。

いつもの光景だ。
この学園には変人が多い。

――

「転校生の蒔風舜です。よろしく！」

さて、時は流れて朝のホームルーム。
蒔風がこの高校の転校生としてやって来た。

（フムフム・・・・最主要、主要ともにこのクラスにいるみたいだな）

蒔風がそう思いながら教室を見渡す。
すると、教室の扉が勢いよく開いた。

「ここに転校生が来たらしいな！！貸せ！！」

「えぅ！？お、あ！？」

突如として教室に乱入してきたのは川神百代。
入って来るなり蒔風の襟首を掴んで窓に向かって投げ放った。

窓は元々空いていたがどちらにしろ大変なことだ。
だが蒔風は窓の桟に捕まってグルリと回って教室から飛び出すのを防いだ。

「ほう！やるな、お前！！」

百代は心底嬉しそうに笑って言うが、この教室の担任、小島梅子は怒鳴り声を上げる。

「こらぁ！川神ぃ！！いきなりやって来てなにをしとるかぁ！！」

「そうだ先生！言ってやれ！！」

「今はホームルームだ！それに、キチンと申込みしてから決闘をしろ！！」

「そうだそう・・・・決闘？」

「転校したての蒔風は知らなかったな。この学園には決闘システムがあってな。決闘を申し込み、相手が了承したら、立会人の教師の

もと、決闘が行われる、というものだ」

「はあ・・・・」

「そこの転校生!!私と決闘しろ!!」

「オレと?オレと決闘?」

蒔風が窓枠から降りて、パンパンと服を払いながら訊き返す。
それに対して決闘決闘騒ぎ立てる百代に、ついに小島教諭がキレた。

「一旦席に付けぇ!!!!!川神も!!!!自分の教室に帰れ!!!!三年生だろうが!!!!!!」

「・・・・ち、しょうがない。あとでだ!!!あとでまた来るからなぁ!!!!!」

百代が教室から出て行き、そんなことはどーでもいいと蒔風がかばんを拾ってそそくさと席に着く。

「なぁ・・・・・あの人なんなんだ?」

「川神百代、最強の人だよ」

「へぇ・・・最強・・・・・・」

蒔風が席について隣のモロにそれを聞き、ニヤリと笑う。

「どーでもいいや♪」

――――――

「なにこれ？」

「これはな、あの転校生の書類だ」

「いいのかよ！？」

「ジジイが見せてきたんだ。かまやしないさ」

さっきから百代がジジイジジイ言っているのは百代の祖父で川神学園の学長でもある、川神鉄心の事だ。

それなら蒔風の書類を持っていても不思議ではない。

それを見た大和や他のメンバーが、また不思議そうな顔をする。

「ねえこれ・・・・・」

「名前、年齢・・・・・だけ？」

「確かなこと一つもかいてないではないか！！」

「どういうことなんでしょうか・・・・・」

そう、そこには大したことは書いてなかった。

名前と年齢だけ。
だけど確かに学長の印は押されている。
こんな書類、本来なら通らないが・・・・・

「まあそれはいい。見てみろ、この補足欄」

「補足欄？何があるんだ・・・・・って、え？」

「お？」

「ああ・・・・・」

百代が指差すそこには、小さく「世界最強」と書かれていた。

「これを見て黙っていられる私ではないだろう？」

「にしても姉さん、朝から突撃はやり過ぎだ。あと、この書類、貸してもらえるか？」

「お？どうした？」

「調べてみる。何かわかるかもしれない」

「弟はマメだなぁ・・・・だが、私はそんな弟のために動いてやったぞ」

「は？」

ギィ・・・・・

その言葉に合わせたかのように屋上の扉が開く。
そして、次の瞬間には大和の頭上から声が聞こえた。

「呼び出されてきてみれば・・・おいおい・・・書類にこんなん書いたの誰だよ」

「！？」

そこにいたのは蒔風だ。
あちゃ～、みたいな顔をしてその書類をパッ、と取り上げる。

「にしても随分ずぼらな書類だ。用意すんのめんどくなったか？」

「あ、あんたいつの間に来た！？」

「それに書類を準備って・・・・・」

怪しげな単語をいくつも並べる蒔風に、皆が訝しげな目をする。

「ん？いやだなぁ！！そんな変な目で見るなよ！！ほら、全部教えてやるから！！な？」

「へ？全部？」

「そ、オレがここに来た理由。その書類。そして世界最強。教えてやるから、まあ聞きなさい」

～～～～説明！！説明！！～～～～

「――――てなわけでしてね」

「お前頭おかしいんじゃねぇの？」

「おい・・・・傷つくぞ？」

「んな話はいそうですかと聞けるかってんだよバカ！！」

「バ・・・・かなり響いた・・・もう立ち直れない・・・・・」

「よわっ！？」

「そんな話はどうでもいい！！決闘、受けるのか！？」

「・・・・・条件がある」

蒔風が指を立てて百代に言う。

「一つ、立ち合うのはここにいるメンバー「風間ファミリー」のみ。
二つ、誰にも見られないところで。
三つ、勝負の間にオレの話の証明をするから、それで信じてくれる？」

「三つ目のはお願いだぞ？」

「だって信じるかどうかはお前次第だろ？直江大和」

「・・・・・・」

「それでいいぞ。じゃあ場所はうちの川神院でいいか？」

「あのおっきな道場か・・・・いいぞ。存分にやろう。放課後を楽しみにしている」

「じゃあな。オレはこれで失礼する。ああ、オレと戦いたいって奴は、誰でもいいぞ？」

「え？じゃあ・・・・」

「私たちもか！？」

「全然余裕だから。ど～～んとこ～い（グッ！！）」

蒔風がじゃ！！と言いながらビシッ、と腕を上げ、その場から立ち去る。

「ふふふ・・・・腕が鳴る・・・・あの男、世界最強を名乗るならまず誰に礼を言わねばならんか、教えてやる！！」

その場の武士娘、五人ともがやる気を見せている。
普段は好戦的ではない有紀江ですらも「が、がんばりますっ！！」
とか言っている。

「オレたち・・・どうする？」

「オレはやるぜ！！！」

「ガクトもやるんだ」

「おうよ！！普段はモモ先輩に隠れて目立たねぇけど、オレだって結構やるんだぜ？」

「そうだよね。かなり凄い筋肉してるもんね」

「やってやらぁ！！」

男連中もやる気である（一人だけだが）

「はぁ・・・なんなんだあいつ一体。ただの電波か、それとも・・・・」

軍師、直江大和は思考する。
だが、今この段階では答えなど出なかった。

to be continued

真剣で私に恋しなさい　～いきなり宣戦布告!?～（後書き）

アリス「真剣で私に恋しなさい、ですか？」

ええ

今回は一応リュウゼツランのルート後ですね。

百代にある程度まだ戦闘狂の毛があり、あの事件を解決した後です。

ア「事件については？」

この小説の中では関与しないので、基本キャラがわかれば問題なしですね。

ア「なるほど」

次回、さあ、戦闘だぁ！！

ア「私が言いたかった！！ではまた次回！！」

逃げ場の無い人生(みち)で
己を信じて　ｃｏｍｅ　ｏｎ！　Ｈｅｙ！　Ｈｅｙ！　Ｈｅｙ！

真剣で私に恋しなさい　～そして決闘、まずは三人（＋1）～

そうして放課後

蒔風は川神院の前に来ている。

「おじゃましまーす・・・おーい？」

「蒔風、来たか」

蒔風を呼んだのは大和だ。
どうやら他のメンバーは別の場所に集まっているらしい。

「ん。で？どこでやるの？」

「こっちだ。ついて来いよ」

蒔風と大和がその場所に向かって歩いていく。

「なあ」

途中、大和が口を開く。
蒔風は「ん？」と大和の方を向いた。

「あの話、本気なのか？」

「勝負のこと？世界のこと？」

「どっちもだけど、とりあえず世界の方」

「本気だよ？これからの戦闘で、そいつを証明してやる」

話していると着いたようで、そこは川神院の広い中庭のような場所だった。

「最初は俺様だ！カッコイイとこ見せてやるぜ！！」

「ガクト、がんばれーー！」

「おうよ！」

「最初は島津岳人か」

「そう。それともう一つ、いいか？」

「なん？」

「川神院の総帥・・・・鉄心のじいちゃんが立会いに立つそうなん

だが、いいか？」

「鉄心？学長か・・・・・いいよ、わかった。書類のことも説明しないとだし」

蒔風が中庭の中心に立ち、岳人と向き合う。

「オレだってやるとこ見せてやる！！」

「ふ・・・・・」

蒔風が短く笑い、それに応じる。

「立会人の川神鉄心じゃ。両者とも、正々堂々と戦うように。では・・・・・・・・・始めぇい！！」

蒔風と岳人が互いの両手の手の平をつかみ取り、握りしめる。
ギリギリ睨み合う二人の力は一見して互角の様に見える。

「ほう・・・中々の筋肉量。真人にも負けず劣らずだな」

「誰だ？そいつ」

「他の世界の仲間だよ。そらっ！！」

「う?をお!?」

蒔風が膝を崩し、しゃがみ込む。
そしてそのままブリッジのように反り返り、岳人を後ろに投げた。

「うごっ!?」

地面に落ち、岳人が立ち上がろうとした時には蒔風のチョキが目の前で止まっていた。

「勝者、蒔風舜!」

「さ、どんどん来い。ノンビリはいかないよ?」

「クリスティーナ・フリードリヒ!!参るッ!」

凛とした声が通る。
レイピアを構えたクリスが蒔風の前に立ち、礼儀正しく名乗り出ていた。

「さながら騎士だな。だったらこっちも騎士(ナイト)でいこうか」

蒔風がクリスの方を向きながら道院の窓ガラスにライダーデッキを向け、腰にベルトが装着され

「（バッ）変身！！」

カチッ、キィィィイ、パキィン！！

蒔風が仮面ライダーナイトに変身し、その姿にクリスが目を見開いた。

「なんだそれは！？」

「他の世界の力だ。これをもって、異世界の証明とさせてもらおう！！！」

蒔風がクリスに切り掛かり、それをクリスがかわし、突きを放って来る。
もちろん蒔風はそれを避けるが、至近距離だったからか少しギリギリだった。

「うにゃっ！？あっぶな！レイピア怖ーーー」

「ちぃ、まだまだ！」

「めんどいけど、正々堂々と行くか。分身とかしたら卑怯だとかいいそうだし。ハッ！！」

蒔風がクリスの突きを丁寧に弾いていく。
クリスの攻撃は決して甘くない。むしろ素晴らしいものだ。
だが、相手が悪すぎる。
蒔風はダークバイザーだけでなく、肘や膝でレイピアの側面、背面を押さえて防いでいるのだ。
つまり攻撃がレイピア一本に対し、蒔風は最低でも腕足剣三本の手段がある。
これはどうしようもない。

「素晴らしく速くて鋭い突きだ。ま、いかんせん相手が悪かったな」

ギャァン！！

蒔風がダークバイザーを振り上げる。
するとレイピアの長さが半分になり、無くなった半分が離れた場所にトスッ、と軽い音を立てて落ちた。

「・・・・・どうする？」

「負け・・・・だ」

「勝者、蒔風！」

「さあ、つぎつぎ！！」

蒔風が変身を解き、もとに戻ると、次には一子が立ち上がった。

「あなた、面白いわね！クリの仇、取らせてもらうわ！！」

「オッケー。薙刀ね。元気っ子は好きだぜ！変身！！」

さらに蒔風が変身する。
仮面ライダーアギトストームフォームに直接変身し、ストームハルバードを伸ばして一子とぶつかり合う。

「う、おりゃあ！！」

ドッフン！！

一子が力の限り薙刀を振り下ろし、それが逸れて地面に大きな穴を穿つ。
蒔風がその薙刀を踏み台に飛びあがり、縦にストームハルバードを振り下ろす。

だが一子は転がってそれをよけ、蒔風の足元を薙ぎ払いにかかった。

ガキィ！！！

しかし、ハルバードがそれを押し止め、ぐるりと回して一子の薙刀を打ち上げる。
そして無防備になったその体を、ハルバードからの突風で吹き飛ばし、カタをつける。

そして変身を解いて、蒔風が叫んだ。

「はいはい！！！次だよ早く！！！」

ドシュ！！！パシッ！！

蒔風が飛んできたそれを掴む。
それは矢だった。

先端は潰されているものの、当たればかなり痛いだろう。

「おぉ？・・・・椎名か・・・・・」

離れたところから、椎名京が弓を構えて蒔風を狙っていた。
そして次の矢を構え、撃ってきた！！

「よっ！！（ヒィ！）ハッと！！（ヒュン！！！）」

斬るような音を出して飛んでくる矢を、蒔風はひょいひょいと避けて行く。

「矢ってさー結構大変だよね？当たるのはたった一点のみ。射れば早いけど、最悪、体一つ分その場から動けば当たんないし」

そんなことを言っている蒔風は、京の矢をよけながらも、いっこうに近づかない。
だがそんな蒔風にイラつくことなく、焦ることもなく、標的に向かってただ淡々と矢を速射していく京。

恐ろしいほどの集中力。
一瞬たりとも目を離さず、正確に射抜いていく京に、蒔風は本気で感心していた。

「でもこれじゃなんだから、勝たせてもらう」

蒔風がその手に弓を出す。
それは弓（アーチャー）の英霊の物。

なればこそ、負けることなどありはしない

ドヒュッ！！カカカカカカカカカンッ！！！！

空中で京の射った矢をすべて撃ち落とし、そのぶつかり合う場所が、
蒔風と京の間の真ん中から徐々に京側に寄って行っている。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・・ッ！！！！」

「ソコォ！！！！もらったぁ！！！」

蒔風が一瞬の焦りを見つけ出し、弓を射る。
その矢は一瞬で二人の距離を進み、京の袖に当たった。

だがここで止まらないのが蒔風仕様だ。
矢はそのまま突き抜けず、京の身体を引っ張りながら壁まで到達し、
その部分を縫いつける。

京がそれを抜こうと掴むが、ビクともしない。パラパラと欠片が落ちることすらもないのだ。
完全に詰み・・・かのように思われた。

ビリィ！！

京が裾を引きちぎって蒔風に向かう。
掌底や回し蹴りを放ってくる攻撃は、かなり激しかった。

だが

「徒手空拳もできるとは恐れ入った。でもまだ荒いねぇ」

パシパシと受け、弾く蒔風がウンウンと感心しながら京の腹部に手

を優しく当てる。

「・・・・ッァ破ッ！！！！」

ズンッ！！と音が響き、京の身体がガクンと揺れる。
そしてそのまま倒れてしまって、戦闘はどう見てもできないものと見えた。

「勝者、蒔風！！！やるのう、お主」

「ふ、当然。オレは世界最強。この世界じゃどうだか知らないが、オレはもっと強い」

そう豪語する蒔風の前に、由紀江が日本刀を腰に携えて、蒔風の前に出てくる。

「黛由紀江・・・・・・よろしくお願いします」

「む？この闘気・・・・鋭く、澄んで、それでいて轟々とした気・・・・そうか、武道四天王っていたっけな、この世界には」

「まゆっちーーー！！！がんばれーーー！！！」

「意地を見せてやれーーー！！！」

「はいっ！！！！」

「どうやらスイッチ入ってるみたいだな。これは・・・・こっちも剣で行こうかな？」

蒔風が仲間の力を借りようと、その手に願いを宿す。

風間ファミリーで二番目に強い者、武道四天王・黛由紀江が剣を抜き、構える。

二人が闘気を放ち、ブルブルと大気が震える。
鋭い視線が、交差して、同時に動き出した。

――――――

to be continued

真剣で私に恋しなさい　～そして決闘、まずは三人（＋1）～（後書き）

アリス「戦闘開始ですか。にしてもライダーばっか」

趣味ですすみません。

あと矢に関しての供述ですが、決して作者は弓道が弱いと言ったわけではないです。
もしそう受け取ってしまった方がいたらすみません

ア「次回、残りの二人、そして？」

ではまた次回

冬花火　寒空打ちあがれ　凛と咲く大きな花ひとつ
この涙　夜空に消えてしまえと願う
私の上に　綺麗すぎた冬花火

真剣で私に恋しなさい　～マジバトル、二回目～

「悪いが気を抜ける相手じゃないみたいだから少し、本気だ」

蒔風が剣を出す。
それは己のものではなく、合体剣。
漆黒の翼人のものだった。

「翼じゃなけりゃ大丈夫みたいだな・・・・・ハァッ！！」

ゴォウ！！

二人が構え、剣がキリキリと鳴っている。

荒々しい空気のまま、静かに時が流れ、そしてッッ

「ダァッ！！」
「ハァッ！！」

ギャァン！！

二人がぶつかり、閃光が走る。
その光に皆が目を瞑り、開けた頃には二人はすでに上空にいた。

ギンギン！！ギャウン・・・・ギン！ガッゴッ、バキィン！！

「「ハアォア！！」」

ブンブン、バゴォ！

二人が半分宙に浮いた形で幾重も幾重も剣を打ち合う。

由紀江は速く、蒔風は重い。
そんな攻撃をお互いに繰り出し、どちらも押し切ってはいない。

（ッ・・・・この重量でこの速さ・・・・！！！気を抜いたら・・・・・・ッッ！）

（速いな。気をつけないと何回斬られるかわかったもんじゃない。

おっと）

ギギン！！キャンキャンキャアン！！ゴッバッ！！

「！！せやァッ！！」

由紀江が蒔風の上に上がり刀に気をこめ、薄く輝いたその刃を、蒔風目掛けて叩き付ける！！

ゴッ、ガシュア！！

蒔風は無言でそれを大剣で受け、地面向かって弾き飛ばされる。
落ちていく蒔風を追って、由紀江が空中を蹴ったかのように飛びだし、気を込めた刀を構えて真下に突進する。

落下している蒔風は、その間も目をつぶり、心を静かに清ませていた。
そして地面まで残り８メートルのところで、その目が、ガッ！！と開かれる！！！

ドンッ！！と大地を揺るがし着地して、蒔風が着地した勢いを腕に

送って、合体剣を頭上で回して由紀江に振り向ける。
無論、由紀江はまだ上空の域。その剣は届かない。

だが合体剣から飛び出していった剣は違う。
ファースト剣を手元に残し、五本の剣が飛び出していく。

一本が由紀江の刀を弾き、四本と共に周囲に散った。
そして蒔風が剣を構えて、由紀江目掛け飛んで行く。

ザシッ！ゴオォ、ザン！ザン、ザンザンザンザン！！！

由紀江を斬っては周囲の一本を掴みに行って、それを掴んでまた斬り迫る。
それを繰り返し、蒔風が技の名を叫んだ。

「超　究　武　神　覇　斬！！」

ザギュッッ！！ドンッ！！

蒔風が地上に降り立ち、周囲に残りの剣が刺さって消えた。
そして上方から由紀江が落下し、それをフッ、とキャッチする蒔風。

「お〝あ〝〜〜〜（ゴキゴキ）マぁ〜〜ジしんどい。で？次はぁ？」

「はっはっはっはっはっは！！！！ついにこの時が来たな！！！！」

「めんどくせーー」

「別の世界とか、そんなことは今はいい！！お前が変な力を持っているのも、どうでもいい！！ただ、どちらが強いのか、それを確かめ合いたいッ！！！」

「世界最強決定戦か・・・だったら、負けるわけにはいかないよな？」

蒔風が力を借りることで、その手にベルトを握って装着する。

「モモにはさ・・・・やっぱしモモだろ！」

ファン！カチッ、♪〜〜〜〜〜

「オレのカッコイイ変身、見せてやるからよく見とけ。行くぜ?変身!!」

《Ｓｗｏｒｄ　Ｆｏｒｍ》

オーラアーマーが周囲に現れ、身体に装着。
赤い装甲は闘志の証。

全身からオーラを吹き出し、ポーズを決めて、見栄を切る!

「俺、参上!!」

「ほう?」

「今回は前座が何人かいたがな、こっからは・・・・最後の最後まで徹底的にクライマックスだ!!!行くぜ行くぜ行くぜェ!!!」

ソードを振り回して百代に切り掛かる蒔風。
百代は気を込めた腕でそれを受け止め、蹴りを放つがふざけた挙動でそれを蒔風がかわし、再び切り付ける。

ガキッ!!

「ははは！面白いな！」

「バトルマニアはいいけどよ、戦う為に戦う戦闘中毒は嫌いだよ！！」

ガンガン！ガゴッ！！

蒔風の剣撃はすべて防がれる。
だが、拳撃はそうではない。

確かな急所に蒔風の拳が命中し、百代が少し下がる。
だが下がっただけで効いてなどいない。

「よーしよし。じゃあこれはどうだ！？」

百代の姿が消える。
そして次の瞬間、蒔風の背後に現れ拳が振るわれ！！

ドゴォ！！

粉塵が上がり、二人の姿が消える。
すぐに風が吹き、それを取り払って二人が姿を現した。

そこにいたのは

《Ａｘ　Ｆｏｒｍ》

すでにアックスフォームに変身した蒔風が、百代の拳を捕まえていた。

「ふ、ふはははは！！これを見抜くか！最高に面白い！」

「そうか。だったらその顔、今すぐ泣き顔にしたる。俺の強さは、泣けるからなぁ！！どすこいィ！！」

張り手で百代を押し出し、悠々と歩いて迫る蒔風。
それに、百代が腕に気を込めて

「かーわーかーみー・・・・」

「ムッ？」

「波ーーーーーーッッ！！」

気を放出し、かの有名な攻撃に酷似した砲撃を打ち出してきた。

「おぉあ！！」

蒔風がそれを前転でかわし、パスをベルトにセタッチする。

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「フヌァッッ！！」

金に輝くアックスを振り上げる形で振るい、その砲撃を斬り砕く。

「うぉッ！？」

「ダイナミックチョップ、振り上げ」

そこから真っすぐ百代に向き、ベルトのボタンを押して、パスを通す。

《Ｒｏｄ　Ｆｏｒｍ》

「ふぅ・・・でもま、相手は女の子。思いっきりやるのは趣味じ

ゃないけど」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「荒い魚は強引に。時に厳しくやるのも、優しさだよね？ハァッ！！」

エネルギーをロッド先端に集中させ、それで切り掛かる電王ロッドフォームの蒔風。

百代は薙がれたロッドを上半身を反らして避け、続いてきた廻し蹴りをしゃがんでかわす。
だが更にきた踵廻し蹴りは避け切れず、腕で捕まえ、振り回した。

その状況から百代が蒔風を投げ飛ばし、蒔風は強引に百代目掛けてロッドを投げつけた。

無論、それに反応できない百代ではない。
向かって来るそれを掴んで蒔風に投げ飛ばそうとした。

しかし、百代は知らなかった。
この投げられたロッドは、決して攻撃ではなく、攻撃の為の布石であることを！！

「取っ、なに!?」

ロッドが身体に入って消え、それが百代の眼前で六角形のエネルギーの板となり、百代の動きを束縛する。

地面に落ちた蒔風がフゥ、と立ち上がり、百代に向かって駆け出した。

「こんなものっ!」

ピキィ!!

六角形にヒビが入る。
蒔風によって本来のものよりも強度が跳ね上げられているそれに、力技で壊しにかかっている!

その百代に蒔風が一言言った。

「それ、壊すと全身の筋肉が断裂して使い物にならなくなるよ?」

「ッッ!?」

「嘘♪ハアァ！！」

蒔風の言葉に一瞬動きが緩み、蒔風のデンライダーキックが炸裂し、六角形を砕き、爆発を起こす。
爆発はあくまでも蒔風が演出で起こさせたもので大したことはないが、確実にダメージは通っている。

「ま、こんなものかな？」

そう言って蒔風が変身を解いて背を向ける。
だが、いっこうに鉄心が勝者の名を告げない。

「？？どうした？」

「まだ終わっておらんからじゃ」

「は？」

「まぁだ・・・・終わってないぞぉ！！！」

百代が立ち上がって飛び出してきて、蒔風の首根っこを押さえこんだ。
地面で一旦跳ねた蒔風は、跳ねた瞬間一瞬緩んだ腕をつかみ、力づくでそれを押しのけた。

「ゲほッ・・・・な・・・ダメージは確実に入ったはず」

「ああ！！確かに効いたなぁ！！凄い衝撃だった！！だけど私には川神流瞬間回復がある！！」

「気を巡らせて身体の再生を促したのか・・・なんて速度だよ」

「さぁ！！まだまだまだぁ！！！！」

蒔風がうんざりした顔をして、百代がそんなことは知らんと拳を握りしめて突っ込む。
そして蒔風まで残り五メートルのところで、その姿が消える。
だが蒔風はイライラした顔をしながら目を閉じ、次の瞬間、背後にハイキックを叩き込んだ。

「ガァッ！？」

ドォン！！！！

地面にとんでもない勢いで叩きつけられた百代が、今まで受けたこともない衝撃に目を見開く。

（い、今まで多くの強者と戦ってきた・・・その中には確かに痛いと感じたモノもあった・・・だが・・・これは・・・・・・そのどれとも違う・・・ジジイとも、揚羽(あげは)さんとも違うッ！？）

「・・・・ふん」

蒔風がそこからさらに足を振り上げ、踏みつぶしにかかる。
それを百代が転がって避け、そこから跳び、一気に距離をとった。

「すでに回復したのか・・・・この世界において、お前はあまりにも強かった。だから、お前に戦いの身の人生以外の事を教えられる者がいなかった。それは弱者の物だと一蹴してな。だからこそ、君に・・・・・」

フッ・・・・・ゴォッ！！！！！

「敗北を・・・送ろう」

ドゴォン！！！！！

蒔風の姿が消え、気付いたときには百代の懐に入り込んでいた。
足を払われ、宙に仰向けに浮いたところに裏拳が腹部にめり込んで
地面を陥没させて落ちる。

百代は強靭な肉体の持ち主だ。
生まれてこのかた、体を襲う痛みに恐怖したことはなかった。
誰の攻撃も効かなかったし、ヤバそうなのは技を以って避けてきた。

どんな奴でも相手にできると思っていた。
だが、この男は違う。

もはやこれはヒトの域ではない。
自分も存外化け物と言われるが、この男は、次元が違うッ！！！！

蒔風が百代の肩を片手でつかみ、持ち上げる。
そしてそんな百代の思考を読んだかのように、一言言った。

「言ったろ？オレは別世界の人間だって」

「ッ！？瞬間回ふ・・・」

「（バチン！！）瞬間回復解除」

ドンンッ！！！！

蒔風がその体に雷旺を走らせる。
気を巡らせて身体の組織を活性化させる瞬間回復はその力を乱され、暴走する。

いらないところに回復が向かい、身体の細胞を異常促進させる。
それはもはや回復ではない。ただの拷問だ。

「ガッは・・・・」

「はい、終わり」

蒔風が百代をドサリと降ろし、鉄心の方へと歩く。
その間に百代はすでに瞬間回復を終わらせ、立ち上がろうとしていた。

だが

「やめろ」

ズンッ・・・・！！！！

周囲の空気、否、世界の毛色が変わる。
いまだに未完成ながらも、それが百代の身体を縛る。
どす黒い何かに押しつぶされるかのように、百代の身体が何倍にも重く感じられた。

それでも百代は立ち上がろうとした。
ゆっくりと、確実に、その膝が伸びて行く。上半身が上がっていく。
そして立ち上がりきった。

「負けたくない・・・・こんな気持ちは初めてだ!!戦いたいんじゃなくて、負けたくない!!!」

「それに気付けば上々だ（パン!!）」

蒔風が両手を鳴らして元に戻す。

百代がひざから崩れ落ち、大和達が駆け寄った。

「姉さん!!大丈夫か!?」

「弟～～初めて負けたよ～～～～・・・・・あはははははははっ！！！！」

「も、モモ先輩が・・・・・・」

「負けて笑ってる！？」

「どうやらお主には礼を言わねばならないようじゃのう」

「なんのこと？」

「あれはの、いつまでも戦いの事ばかり考えて追って、力のみを求めておった。どうにかせんといかんかったんじゃが、なにぶんあの強さじゃ誰も言い聞かせられなくてのう」

「違いますよ。気付いたのは彼女自身だ。オレはきっかけ。オレが誰かの「芯」の元にはならないですよ」

そう言って蒔風と鉄心が大和達を眺め、皆を運んでけがの手当てをしに行こう歩きだす。

蒔風がその瞬間、背後に何か感じて振り返る。

だが、そこには綺麗な夕日があるだけで、特には何もなかった。

そして再び前を向いたとき

「よお」

「ッ！？」

ズッ・・・・・・・・ブパッ、バシャァァアアアアア！！！！！！！

「おっ・・・・・・ガッ・・・・・・・・」

蒔風の上半身が斜めに切り裂かれ、血が噴水のように噴きだし、地面を夕日以外の赤で染め上げた。

「あ・・・・・あ゛ぁ・・・・・・・あ、ごぁ・・・・・・・・・・・」

ガクン、と膝から崩れ落ち、仰向けに倒れる蒔風。
その前には血の滴る剣を握った一人の男が

夕日の中でも、影を身にまとった男が、そこにいた。

「!!!!蒔風ぇ!!!!!!!」

「ちょぉ～～～～どいいよなぁ？こういうタイミングゥ♪余裕ぶってる蒔風見てたら、殺りたくなっちゃったよ」

「な・・・・・そんな・・・・・・・」

「テメェ・・・・・誰だ!!!!!!」

大和が男に叫ぶ。
すると男は自慢げに、こう答えて見せた。

「蒔風から聞いてなかったか？おれが、お前を殺しに来た男だよ、直江大和」

「お前が・・・ッ」

「蒔風に勝てなかったお前らがオレに勝てるとか思ってんじゃねぇぞ？」

剣を消し、その場に立つのは「奴」
足元には血まみれの蒔風が転がっている。

「主人公、殺しに来ました、覚悟しろ。字余り、ってね」

圧倒的優位な立場に、立った「奴」が大和に指を差し、宣言するよ

うに言った。

「終わってんじゃねえぞ？こっから始まるんだ」

to be continued

真剣で私に恋しなさい　～マジバトル、二回目～（後書き）

アリス「蒔風、超重傷」

上半身に重い一太刀。さて、大丈夫かな？

ア「次回、そして最後はどうなるの？」

ではまた次回

いつの間にか友の背中　押し合ってたｇｒｅｅｎ　ｄａｙｓ

「まさに、最初から最後までクライマックスだな。いや？この場合、最期か」

「奴」がゴロリと蒔風を俯せに転がし、頭を踏み付けて大和に言った。

「直江大和。来い」

「殺されると解ってて行くと思うか？」

「こいつが・・・・・死ぬぞ？」

コツコツと蒔風のこめかみに爪先当て、脅しにかかる。
だが、大和はシレッとした顔をして言った。

「は？なんで？別にその人今日会ったばっかだし、そんな人の為に自分の命懸けられるわけないじゃん。もうちょっと考えろよ」

大和の言葉はあまりにも現実的だ。
確かに、大和に蒔風を助ける必要性はない。
しかも、蒔風は大和を助けに来たのだから、ここで出て行っては元

も子もない。

それに、大和には確信があった。

「手間を懸けさせるなよ、めんどくせぇ」

「奴」が蒔風を踏み付ける足に力を込める。

そして、踏み抜こうと足を少しあげた瞬間、その足に矢が突き刺さった。

「あん？」

「奴」が矢が飛んできた方向を見ると、京が弓を構えていた。

その前には大和たちが群がっており、京の姿は隙間からしか見えない。

つまり、京は狙っていたら見つかるため、「奴」が足を振り上げた瞬間に弓を構え、狙いを定め、仲間達の間を縫って矢を速射したのだ。

「奴」はその腕に些か感心し、だといってもやることは変わらず、矢を足から引き抜き修復させて蒔風に足を踏み下ろした。

ダゴンッ！！

「奴」の足が地面を踏み抜く。
パチャンと蒔風の血が跳ねた。

だが、そこに蒔風はいない。

「お？」

「やっべ・・・・」

蒔風は「奴」の足から少し離れた場所にいた。

そこでは蒔風の脚を風間が掴んで引きずっているところだ。

「脚、速いのな」

「あ、はは～～～どうも～～～～」

「邪魔（ブォッ！）」

「うわっとぉ！？」

「奴」が剣を横に薙ぎ、風間の首を狙う。
だが蒔風がうつ伏せのまま腕だけを振るって「奴」の足首を払った。
軌道が上に逸れ、風間がその場でしゃがみ込み、「奴」の剣をかわす。

「んぉあ？」

「！！後は任せたぜ、モモ先輩！！」

「任せろ！！」

ドゴォ！！ズガン！！

百代が「奴」の目の前に現れ、拳を叩き込む。
「奴」がそれに反応し、腕で受けて、地面がクレーターの様に陥没した。

「勝てるのか？最強」

「勝つんです！」

更に由紀江が刀を構えて切り掛かってきたのを剣で受け止めて百代に蹴りを放つ「奴」

二人が「奴」を引き付けている間に風間が蒔風を引きずりそこから離れ、そこにガクトとモロが駆け寄って蒔風を運んだ。

「おい、大丈夫か？」

「まぁだ・・・・・死なな・・・・・い」

「急いで救護室に運べ！！こやつを死なせるな！！」

鉄心が叫びながら「奴」に向かう。
百代と由紀江が二人掛かりで攻めているというのに、「奴」は微塵にも苦戦してないのだ。

鉄心は老体なれども、今だに世界に名を馳せる武人だ。
単純な力では百代が上だが、総合的な戦闘力は今だに鉄心の方がが高いほどに。

その間に蒔風を救護室に運び込み、手当てを始める川神院の救護官達。
気を送り込んで出血を止め、輸血パックを運び込む。

蒔風の上半身を左肩から右腰にかけて裂いている斬り口はどす黒く染まっており、もはやなにがなんだかわからない。

そこを消毒し、縫い止めようとした医師の腕を蒔風がガシッ、と掴んだ。

「あ、あなた!?」

「まて・・・・・そのまま気を送り続けろ・・・・・・・」

「死んでしまいます!寝ていてください!」

「よ、翼人は・・・・・この程・・・度じゃ・・・・・・死なない・・・・・血を・・・・・・よこせ」

医師が絶句する。
蒔風のその言(げん)に、その異様にギラギラした目に、戦慄した。
そして言われるがままに輸血パックを手渡した。

「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・グフッ、ガホッ・・・・・」

蒔風が血を吐きながら輸血パックを破いた。
零れ出た血は落ちることなく、圧水の力で宙に浮き、蒔風がそれを自分の身体に流し入れた。

その瞬間、蒔風の絶叫が響いた。
無理矢理に血を身体に流し込んだのだ。

今の身体ではその激痛が訪れるのは当然だった。

身体が崩壊しなかったのは彼が翼人であることと、川神院の院生達が気を送り込んでいるからだろう。

クリスや一子、京もそこに混ざっていたし、大和達はもはや願うしかなかった。

「ぎッッ～～～～～～～～ッア！！そのまま送れ・・・・・・・・・・・・できれば・・・・・・・・願え！！」

血を噴き出し、だがその血をかき集めて再び体内へ。

更に肉体の強制再生。

蒔風の絶叫が続く。

――――――

「カァァァ！！毘沙門天！！」

鉄心が己の気を巨大な毘沙門天の姿と成させ、その一撃が「奴」を襲う。

「・・・・・・ッフッ！！」

だが「奴」が闘気を噴き出し、それを掻き消す。
踏み抜こうとした足から消滅した毘沙門天の衝撃が鉄心を襲い、その身体が吹っ飛んだ。

「鉄心さん！！」
「ジジイ！！」

二人の額に更なる汗が滲む。
天下の武道四天王。そのうちの二人に川神院総帥が束になっても勝てない否、勝負にならない相手。

しかも鉄心はやられてしまった。
死んではいないだろうが、戦えないだろう。

現状、もはや勝ち目はない。
由紀江はもはや最初に見せていた速さは出ないし、所々から血も滲みだしている。
百代は身体に怪我はなくとも、体力は確実に削られていっている。

「さぁて、お前らは主要人物。しかもメインヒロインだ。とりあえず殺すか。楽しかった。新たな世界で、またやろうか」

「は！大事な弟殺す奴とんな約束したかないわ！！」

「ざぁ～んねん」

両腕を開いて「奴」が突進し、ラリアットのように腕が二人の腹部に減り込み、そのまま押しつづけられる。

「ッッ！！まゆ・・・・・ず・・・・」

あまりの勢いと速度に呼吸すらままならない。

「奴」の左腕に「く」の字になってへばりついている由紀江に百代が息苦しそうに声をかけるが、気絶してしまったようで、ぐったりとしてしまっている。

そこから脱出しようとするも、あまりの風圧に身動きができない。

だが、百代は知っていた。このまま「奴」が進めば、壁にぶつかる事を。

そしてこの速度でぶつかれば、自分たちの身体は腰から二つにブチ切られてしまう。

由紀江だけでもとその手を必死に伸ばすが、どうあっても届かない。

終わりか、と百代が本気で考えた時、男の声が聞こえた。

「人の事置いといてクライマックスやってんじゃねぇよ」

メキッ！！！！

その男の足の裏が「奴」の顔面に突き刺さり、二人の身体が勢いで飛び出していく。
そのままいけば壁に激突、ミンチになるところを、青龍、獅子がキャッチした。

「なんとか戦線復帰だバカ野郎」

蒔風が上半身を包帯でぐるぐる巻きにされ、その上に上着を羽織った状態で出てきて立っていた。

「青龍、獅子。二人と鉄心さんを運び込め。あと、大和を連れて来い」

「了解」

そんな蒔風を「奴」は顔面を抑えながらその指の間から睨みつけていた。

「てめ、もう回復しやがったのか・・・・・だが・・・・・」

ゴスッ!!!!!

「万全じゃあ、ねえだろ!?」

「奴」の膝が蒔風の腹部にめり込む。

閉じられた蒔風の口から血が吹き出、包帯をじっとりとした赤が染めていく。

だが蒔風はそれを押し込め、「奴」の両肩に肘を叩き込む。

ゴキボキと音が鳴り、「奴」の両肩を破壊した蒔風が、腹部に蹴りを入れて浮き上がらせてから踵を振り上げて「奴」の頭部を踏み抜いた。

ズゴン！！！と轟音が響き、衝撃が周囲を襲う。
その衝撃に、蒔風自身も血を噴いた。
包帯にも赤いラインが浮き上がって、傷が開いてきているのがわかる。

「ッ・・・が・・・・おおおおおおおおおお！！！！！！」

「奴」の四肢を「風林火山」の四本で地面に止め、さらに腹部に拳を突き入れ、内臓を引きずり出す。
長々とした肉がズルズルと出てきて、その部分から「奴」の血が噴き出し、蒔風を染める。

「フゥーーー、フゥーーー、フゥーーーーー・・・・・・・ヌゥアッ！！！！」

そしてそれを束にして引きちぎり、傷跡をぐちゃぐちゃに引っ掻き廻し始めた。

「この・・・・この・・・・・・・このこのこのこのこの！！！！！」

「奴」の意識はもう無い。
ただ、ビクンビクンと不気味に体が痙攣し、未だに消滅しきらないことを表しているだけだった。

そこに大和がやってくる。
青龍と獅子に連れられてやってきた彼は、蒔風の戦いに多少なりの戦慄を覚えていた。

あれだけボロボロになった男が、なぜここまで圧倒的に勝てたのか。
考えてみれば、この男は「奴」とはまともに戦ってない。
玉砕のように敵の攻撃を食らって反撃、そこから一気にエグイ戦いで勝利に持っていった。

つまり、彼に本気を出させたら、大変なことになるのでは？

それを考えての戦慄。
だが、そんな大和に蒔風が信頼を込めた声でこう言った。

「大和・・・・あとは・・・お前に任せる・・・・・・オレには・・・・できん・・・・・グ・・・・バッ！！！！」

バッ！！！！ビシャッ！！！

青龍が連れてきた大和にそれを伝え、一気に血を噴き出し、蒔風がその場に倒れ込む。
それと同時に、音声が流れ、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが発動した。

【Ｍａｊｉ　ｄｅ　Ｗａｔａｓｉ　ｎｉ　Ｋｏｉｓｉｎａｓａｉ！
－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！】

蒔風の背に翼が現れ、それが移動し大和の背に銀白の翼が付与され、それが輝きを帯びていった。

「な、なんだよこれ！！！」

「主の力が一時的にあなたに移っただけです」

「早くやらねば、この世界にどんなものを残していくかわからん。やってしまえ」

「ど、どうすればいいんだよ！？」

「「さぁ？」」

「さぁっておい！！！」

大和がうろたえるが、そんなことは知らんとＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが次の段階へと移る。

【Ｍａｊｉ　ｄｅ　Ｗａｔａｓｉ　ｎｉ　Ｋｏｉｓｉｎａｓａｉ！】
－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

その拳に蒔風の力のすべてが宿り、信じられないほどの光を放つ！！

「ち、チクショウ！！こうなりゃヤケだ！！！！おおオオオオリャアアアアアア！！！！！！」

ゴガッ！！！！ドゴォォッォォォォォォォォォォォォォォォォォォ・・・・・・

粉塵をあげ、エネルギーが「奴」の身体を中心にうずを巻いて、その体を吸い込んでいく。
そして圧縮されきったその渦が爆発を起こし、「奴」をこの世界から消滅させた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・」

大和が肩で息をしている。
そうしていると背から翼が蒔風の元へと戻って消えた。

ヨロヨロとした足取りの百代と由紀江を皆が支えながら歩いてくる。
それを見た大和は終わった、と思い、次の瞬間、蒔風の元へと駆け寄っていた。

「おい!!あんた、死ぬんじゃねえぞ!!!今すぐに病院に・・・ッ!?」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｍａｊｉ　ｄｅ　Ｗａｔａｓｉ　ｎｉ　Ｋｏｉｓｉｎａｓａｉ］

大和が蒔風の身体を起こそうとしたと瞬間、ゲートが開き、強制的に蒔風の身体を呑みこんでいく。
大和にはどうすることもできなかった。

「大和！！蒔風はどうした！？」

「消えた・・・・」

「消えたって・・・・・どこにだ！？」

「多分、次の世界だ・・・あんな状態で・・・・何をやらせるっていうんだよッ！！！！」

大和が憤慨する。
一体どこの誰だか知らないが、あいつを酷使しやがって、と。

礼の一つも言われぬままに、蒔風は次の世界へと向かった。

―――――――

真剣で私に恋しなさい　～無理矢理に勝利を掻っ攫え～（後書き）

【真剣（マジ）で私に恋しなさい】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”５０％
　”フォルス”３０％
　”ライクル”５％
　”ＬＯＮＤ”１５％

最主要人物：直江大和

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：蒔風の力を大和に一時貸出

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：全力での正拳突き。今回は空間を捻じ曲げ、その中に消滅させるパターン

蒔風結局ボロボロの話です。

アリス「大丈夫なんですかね？」

死にはしません。
ですが、大丈夫ってほどでもない。

ア「二週間の空白期間でなんとかできるモノなんですか？」

難しいね。

蒔風の身体は強靭だけど、決して再生能力が高いわけじゃない。
これが「賢者」や「聖人」タイプの人間だったらまだ何とかなったけど、彼は「戦士」だから。

ア「大変ですねぇ・・・・結構蒔風死にかけるの多いですよね？」

そうですよ？主人公いじめるの楽しいし

ア「鬼畜ですね。では・・・・この小説は最強系に入るのでしょうか？」

・・・・・・・・・・え？

ア「確かに世界最強って言ってますけどその割には「奴」に余裕勝ちなんて数えるくらい。その世界のキャラには勝ってますけど、正直クラウド辺りとぶつかったら負けんじゃないですか？」

・・・・・・・・・でも彼は勝ちますよ。
そうしなければなりませんから

ア「そういうもんですか。次回、出会いは血塗れに」

ではまた次回

覚醒（ウェイクアップ）！　運命（さだめ）の鎖を解き放て！！

キバ　～コン・ズランチョ？出逢い～

一台のバイクが都心の道を行く。
乗っているのは２０歳の青年。

「なあ渡。どこに向かっているんだ？」

「どことなく・・・・・かな？なんだか走りたくなったというか、外に出たいと思ったというか」

「ふぅ～ん。ま、最近はファンガイアとの戦いはもうないだろうしな。のんびりすんのも悪くないよな」

渡と呼ばれた青年が話しているのは手の平に乗りそうなサイズをしたコウモリ型モンスター、キバットバット？世だ。

渡のバイクに何の苦もなく着いて行っているのは流石というしかない。

彼等の言うファンガイア。
それは人間の命のエネルギー、ライフエナジーを喰らうモンスターだ。
最近まではファンガイアと人間は敵対関係にあったが、ファンガイアの王との和解により、共存への道を進んでいる。

「それでよ、渡・・・・・・渡、そこ、人が倒れてんぞ??」

「え?」

渡がブレーキをかけて車を止める。

キバットが指摘した場所。

歩道によくあるベンチが一定間隔で置かれており、その一つに一人の青年が倒れて眠っていた。

「キバット・・・・彼は寝ているだけだよ」

「なんだよ渡。オレを疑うのか~?オレにはわかる。こいつ、血の臭いがするぜ。多分、スゲエ怪我してる」

「え?」

確かに、よく見ると顔は血の気が薄く、ほんの少しだが苦しそうな顔をしているようにも見えた。

「じゃあこの人、寝てるんじゃなくて・・・・」

「気絶してんだよ。ほら」

キバットが翼を使って歩道の先を差した。
そこには点々と黒い水玉模様が残っていた。
いや、黒い水玉模様ではない。おそらく出来たばかりの時はまたあれは赤い水玉模様だったはずだ。

渡が青年の上半身の服を破いて見た。
そこには真っ黒になった包帯があった。
それしかなかった。

「こ、こいつ一体・・・・」

「それよりも早く病院に・・・・・」

そこまで言った渡の腕を青年――――蒔風が掴んだ。

「病院は・・・・・よせ・・・・・・・退院とか・・・・・・・すぐにできないだろ・・・・」

「じゃあどこに運びゃいいんだよ!?」

「ダメです。キバット、彼を兄さんの病院に運ぼう!」

「病院は・・・・・ゴブァ」

「わー!わー!わー!キ、キバット、早く行こう!」

「おっし!!」

「世界め・・・こういう出会いかクソッタレぇ・・・・・」

ーーー

そして医師に二言三言伝えてから、渡の元へとやってきた。

「もう検査終わったの!?」

「ああ・・・渡、こっちへ」

どうやら人には聞かせられないような内容だったらしく、応接室に招かれ、そこで話を受ける。

「なにがあったの?」

「・・・・何処から話そうか・・・・・・」

太牙は話の切り出しに困っているようだ。

二、三分考えて、それから口を開いた。

「彼だが・・・・・本来人間があれだけの傷を負って生きていられることはないそうだ」

太牙が蒔風のレントゲン写真を渡に見せる。

そこには斜めに切り裂かれた傷、切断された肋骨、そしてそれらを強引に何らかの力で接着した跡があった。

「ッ！！・・・・じゃあ・・・彼はファンガイアだったの？」

「それも違うんだ。あの男はファンガイアではなかった。それでいて人間でもあり得ない。これを見てくれ」

太牙がさらにカルテを見せる。
そこに書かれているのはほとんどがドイツ語でわからなかったが、ズラリと書かれた文字がなんのものか、渡は何となくわかった。

「これは・・・・まさか」

「彼の肉体に残っていた傷跡のすべてだ。その内の六割が致命傷、一割が軽傷、三割が重傷だ。致命傷一発でも死んでしまうような怪我をしている。医師もなぜファンガイアでもない彼がここまで生きてこれたのか首をかしげていたよ」

渡はそのカルテに絶句する。
自分も今まで多くの敵と戦ってきた。死にかけたことも多い。
だが、これほどの死を一身に受ける彼はいったい何者なのか。

そう渡と太牙が考え込んでいると、コンコン、と扉がノックされ、医師が血相を変えて飛び込んできた。

「た、大変です!!さっき搬送されてきた若者が、逃げました!!!」

「な!?」

「なんだと!?」

「本人は「もう大丈夫だから」と言いながら立ちあがっていたのですが、当然我々が認められるわけもなく・・・止めたのですがすでに病院の外に!!!」

「これだけの怪我で・・・・・」

渡がカルテを握り潰して部屋を飛び出す。
太牙がそれを止めようとするが、医師に一枚のメモ用紙を渡されて携帯を取り出した。

「・・・・あ、太牙です。多分、そろそろそちらに大怪我をした若者が行くと思うので、はい、はい・・・お願いします、嶋さん。では」

そののちに渡の携帯にも連絡を入れ、戻るように促す。
渡は納得しなかったが、理由を話したらあっさり了承した。

ーーー

二十分後

包帯でぐるぐる巻きにされ、病室に叩きこまれた蒔風がベットの上で唸っていた。
無論、顔までグルグル巻きだ。ミイラである。巻いかぜである。

「まったく・・・嶋さんに言われてきてみればカフェ・マル・ダムールで人は倒れるわ、それを運ぶわで・・・彼はいったい何者だ?説明しなさい」

軽い命令口調がデフォであるこの男は名護啓介。
人間に敵対するファンガイアと戦った戦士のバウンティハンターだ。

「それはまだわからないんです」

「だからあなたに連れてきてもらった。これから話を聞くところなんですよ」

「そういう事なら任せなさい。私の交渉術があれば、なにも隠し事はできない」

そう言って蒔風の頭を包帯から解放する名護。
蒔風はいったん暴れるのをやめ、言った。

「もう逃げないから放して？」

「嘘をつくのは止めなさい。丸見えだぞ」

「チッ！！」

本気で舌打ちした。こいつ完全に拗ねている。

舌打ちした時の顔はとてもじゃないが主人公の物とは思えないものだった。

「では・・・君の名前、職業、その怪我の事、尊敬する人の事、今まで何をやっていたかを答えなさい。そうすれば君に素晴らしい物を上げよう。そして私に着いてきなさい」

「名護さん・・・・・」

「今日日（きょうび）そんな「素晴らしい物」なんて簡単な手に子どもだって・・・・」

「素晴らしいモノ？（パァァァ・・・・）」

「「食い付いた！？」」

「ああ、そうだ。だから答えなさい。君の事を、教えなさい。そして私を尊敬しなさい」

「何をくれるの？（キラキラキラ）」

「そうだな・・・ではこの・・（ゴゾゴゾ）・・753Tシャツをあげよう。そして私を称えなさい」

「まさかそんなんで「名前は蒔風舜」ぇぇぇぇえええええ！？」

「職業は・・・なんだろうな。世界を守ってます・・・かな？尊敬する人は自分にできない事が出来る人。あと・・・今までの事と怪我の事はだな・・・・」

蒔風が説明を始めた。
それは世界の事と「奴」の事。

おそらくこのタイミングで集まるということは、きっと彼らは最主要、もしくは主要であるという蒔風の考えだった。

「なるほど・・・突拍子もない話だな」

「でもオレのこと、すべて説明するにはこれが一番だよ？」

「・・・・わかりました、信じます」

「お？サンキュー。で、時にキバって言うのは・・・・・」

「僕です。僕は紅渡」

「オレはファンガイアの王たるキング、登大牙」

「私は名護啓介だ。覚えておきなさい」

一応の自己紹介がすみ、渡達の話も始まる。
今回、蒔風は傷を癒やしきれるのか・・・・・

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

キバ　～コン・ズランチョ？出逢い～（後書き）

キバの世界！！！

アリス「キバっていくぜのところですね？」

名護さんは最高です。
あれほど面白いネタキャラはいない。

ああ、ちなみにコン・ズランチョは「衝動的に、性急に」という意味です。
切羽詰まってます、今回。

ア「そういえば今回は２２年前のキャラは出せるんですか？」

そうですね。この際はっきり言っておきましょう。

出ません

ア「それはなぜ？」

それは次回の後書きで話しましょう。

ア「次回、どうするタイムリミット？」

ではまた次回

その命、神に返しなさい！！

キバ　～コルテージュ？二十二年～

最初に言ってしまうと紅渡は仮面ライダーキバである。
ファンガイアのキングである太牙とは異父兄弟らしい。

そして名護敬介はファンガイアと戦うために組織された「素晴らしき青空の会」所属の戦士で、独自開発された対ファンガイア用パワードスーツを装着した、仮面ライダーイクサに変身する男だ。

少し前まではキングの立場である太牙と同じくキング継承権を持ちながら人間のために戦った渡は敵対関係にあったが、最終的には和解し、今ではファンガイアと人類は共存に向かっている。

太牙は現在ライフエナジーに変わる新たなエネルギーを開発中で、蒔風をがこの短時間で脱走まで出来たのもこのエネルギーによる回復の恩恵だ。

「あのエネルギーはすごかったな。力に満ちてきたもん」

「ふむ、ひとまずは成功かな？」

「だけど人間には麻薬にしかならない。もう少し改良が必要」

「それは今後の課題だな。それと、その「奴」が・・・・キバ、渡を殺しに来るのはいつ頃か？」

「今回、「奴」は早くここに来たらしい。前の世界で意識と一緒にブッ飛ばさなかったのが仇になった・・・だから世界もすぐにオレを前の世界から送り出したんだけどな」

蒔風が悔しそうな顔をして、残り時間を言った。

「正直に言おう。へたすりゃ今日だ」

「「「！！！？？？」」」

太牙と蒔風が話し込んでいる横では渡と名護が最近の治安について話し合っていたが、その言葉に同じく驚愕する。

「それは・・・時間がなさすぎる！！」

「しかもそれは「奴」のノリ次第では早まるかもしれない」

「とんでもない話になったな。しかもそれだけ強大な敵ならば、我々は万全を期さなければならない」

「今のままじゃ・・・・「奴」には勝てても大苦戦するな・・・オレの怪我は多分治りきらないし、これ以上擬似ライフエナジーは使えないだろ？」

「確かに・・・・・これ以上の投与は危険が伴うな」

「絶対に負けられない以上、そこまでのリスクは懸けられない」

「だったらどうする？もう一日切ってるんだろう？なにができるというんだ・・・・この際、イクササイズの強化特訓を「「それはやめろ」」だがしかし「「黙りなさい」」イクササイズは「「静まりなさい！」」・・・・・・・」

「イクササイズってなに～～～？」

「思い出させないで」

「オレは話に聞いただけだが、やりたくないな」

「とにかく、時間がないことは確かだ」

「時間がなぁ～～～」

そのまま四人が考え込んでしまう。

そしてどうしようかと考えて、名護がポン、と手を叩いてなにかを思い付いていた。

「確か・・・・過去に通じる扉ってなかったか？」

「え？・・・・・あ！！」

「なるほど・・・・・キャッスルドランにそういった扉があると話には聞いてきた。それならいけるな」

「キャッスルドランってなにどらん？」

「キャッスルドランは・・・・見てもらった方が早いかな？」

渡がそう言って皆を引き連れて病院の裏の林に向かった。

「ここならいいな。キバット」

「おっしゃ！来いキャッスルドラン！」

キバットの呼び声に呼応して、ドラゴンの鳴き声が響いた。

蒔風がその声にびっくりして肩を竦(すく)める。

そして四人に影が落ち、見上げるとそこには「城」があった。

そのボックスの様な城には四本の足があり、ドラゴンの翼と尾と頭が伸びていた。

「なるほど・・・・・確かに、こいつは巨城竜（キャッスルドラゴン）だな」

「このキャッスルドランの中にはある扉があるんです」

「扉？」

「過去・・・・・２２年前に通じる扉だ。オレも渡君も一度だけ行ったことがある」

「そこで特訓なり養生なりして、それからってわけだ」

「うーん・・・・・でもさ」

「なんだ？」

「それってこっちでの時間はどうなんだ？」

「あ・・・」

「そうだった・・・・向こうの時代で数日過ごして戻ってきたらこっちでも数日経ってた・・・・」

「・・・・・ふぅ。じゃ、帰りはこっちでなんとかするよ」

「なんとかって・・・・」

「まさかこのチケットがこう役立つとはな」

蒔風が懐から取り出したのはパスに入ったチケットだ。
それには「∞」のマークに重ねるように「ＩＮＦＩＮＩＴＹ」と書かれていた。

「こいつはパスだ。時を越えるためのな。帰りはこれ使って帰ろう」

そこで蒔風に太牙が質問する。

「それがあるなら、最初からそれで行かないか？」

「これで時間を越えるとオレの力の軌道が残る。ましてや時間を越えるなんてもんだからな。だから、これ使うと飛んだ先に「奴」が追っかけて着ちまうんだ」

「それでは意味がないな・・・・」

「だからこれ使うのは帰りだ」

「そうと決まれば行きましょう。こっちです」

渡の案内で皆がキャッスルドランに入り、その扉の前に向かう。

中はいかにも豪奢な作りになっており、城と言う名前に一切劣りはしていなかった。

「この扉です」

「じゃ、いこうか！！」

「どれくらいになるだろうか？」

「さね。行ってみてから考えようや」

そうして四人が扉をくぐる。

無論、キバットともう一体の蝙蝠モンスター、キバットバット二世も一緒にだ。

「お前、いたの？」

「無駄に喋らんだけだ」

ガシャン・・・・・

重々しい扉が開かれ。

ギィィィィ・・・・・バタン！！！！

それがビッタリと閉じられる。
こうして、蒔風達はむかった。そして戻ってくるのはすぐだろう。

――――――

そしてある公園の中に風呂敷を広げて、座り込んだ。
足を組み、目を閉じて、座禅のような体制になって世界と接続する。
「・・・・・・仮面ライダーキバ・・・・・”ｎｏ　Ｎａｍｅ”
”フォルス”””ライクル”””輝志”””ＬＯＮＤ”・・・・・その区
分を我に開け放ち、その姿を現せ」
座禅を組む男を中心にその世界の紋章が現れる。
今回はキバの紋章で、そこから上に向かって何らかの文字列がホロ
グラム浮き上がってきた。
そしてそれは次々と出てきて、ススキのように男を取り囲んでいく。
ピッ、ピピ・・・・・シュパァン！！！
空気を斬るような音がして、男の周囲に紙が落ちてくる。
その紙にはさっきまで浮かび上がった文字列が写されていた。
だがその順番はランダムだし、見ただけでは狂人の落書きにしか見
えないような文章だ。

そしてその紙を見て、ニシシと笑う男。

「さ、解くぞーーーー。世界のパズルを解き明かしていこうかな♪」

取り出したるは「みかん」と書かれた段ボール。
そしてシャープペンシルに消しゴム、定規などの文房具。

準備は整ったさあ始めよう、と男が額にはちまき巻いて解読にとりかかった。
その姿はただの受験失敗した浪人生に見える。

こいつ本当に王の資質の持ち主なのか？

「ふむふむ・・・・だぁ～～～っと？ここが？ちがうなぁ、こっちか？どこの紙にあるんだよ！！」

ガサガサと何十何枚もある紙を何度も何度も見直しては戻ってやり直し、進んでは確認してを繰り返す男――「奴」

毎回これだけの苦労をして望んでいるのだ。
その執念は計り知れない物があった。

「絶対に食う・・・そして取り戻すんだ・・・・・・・・・・あぁっ！！風っ！！待って～～～その紙持ってかないで～～～！！キャアアァァアアアアア！！！！！！！」

公園内でワタワタし始める「奴」
その十分後、結局は結界内にテントを張ってその中で計算を始めた。

この世界を食らうために。
彼にも願いはある。それをただ問答無用に慈悲も無く打ち砕けるのは、同じ人物である存在だけなのである。

「立場逆だったら絶対に応援して・・・・・いや、オレも邪魔するかもな。オレ、あいつ嫌いだから」

二日間に及ぶ計算の日々が始まった。

to be continued

キバ　～コルテージュ?二十二年～（後書き）

アリス「今回過去に行きましたけど・・・・・出さないんですか？キャラ」

出さない、というか出せない。
あっちの時間で数日経ったらこっちでも同じだけ流れる。

それならその逆もしかり。
となるととっくに音也さんはお亡くなりになってしまっているわけでして

ア「あぁ～～、確かに・・・・・」

ちなみに、この話の中ではディケイドに出てきた紅渡とは別人として解釈しています。
公式ではディケイドの渡はキバ本編後の渡と言うことらしいですが、その設定はそぉい！！させてもらいます。

ア「ややこしいですからね～～」

あとサガーク出しません出せません。
だってダークキバの方が絶対いいじゃん。

ア「今あなたはサガークファンを敵に回した」

ひぎぃッッ！？
今回のコルテージュは・・・・・なんだっけ？
興味あったら検索ゴー！！

ア「次回、そして現代、「奴」が来て」

ではまた次回

キバっていくぜ！！

キバ　～カルテット♪キバっていくぜ！～

「準備はいいか？」

「大丈夫だ」

「点呼とりま～～す。渡」

「はい」

「太牙」

「居るぞ」

「名護さん」

「ここに」

「キバット三世」

「おうよっ」

「同じく二世」

「ふむ」

「よし、では」

蒔風がパスを渡にかざす。
するとパスに仮面ライダーキバが写り込み、下には蒔風がやってきた日にちの時間が書かれていた。

「では、しゅっぱ～～つ」

ーーー

が覗けた。

その影の名は、仮面ライダーアーク。
その身長は3．2メートルと、基本的な姿のライダーとしては最大の大きさを誇る、レジェンドルガ族最強の王の鎧。

レジェンドルガ族は最強の種として存在していたが、「キバの鎧」を身につけたファンガイアの王により殲滅、封印されていた。
それを「奴」が遺跡から発掘し、邪魔なレジェンドルガを排除。
鎧のみを奪って中に「欠片」を詰めて使用している。

故にアークの巨体は5メートルほどまで巨大化しており、特殊能力は使えないまでも力は底上げされている。

その「奴」はアークの肩に立っており、家の中を覗き込んで確認する。

「いない？紅渡の仕事はバイオリン作り。工房にいないなら素材探しか？」

アークが「奴」の意志に反応して踵を返してその場から去ろうとする。

狙いはまず、「素晴らしき青空の会」の集会所になっているカフェ・マル・ダムール。
そして非常に面倒だがビルに擬態しているキャッスルドランだ。

だがその歩は爆撃で阻まれる。
時空を裂いて走ってきたレールに乗ったデンライナーの攻撃にアークが身じろぐ。

そしてその脇を通って行って、デンライナーがアークと「奴」を掻っ攫って行った。

そして郊外の森の中にある開けた場所。

そこにアークと「奴」は放り出されデンライナーからは時風たちが降り立つ。

「お前ら・・・・・あ、そっか。確かこの世界には時の扉があったなぁ・・・・まさか時風がここまで電王の力を借りられるなぞ思ってなかったわ」

「ああ、オレもびっくりだよ」

そういう蒔風の背後でデンライナーが消え去る。
それを確認してから、蒔風が言い放った。

「そっちの準備は万全。だが、俺たちの方は・・・・・億全だからな。今回は先手を打たせてもらったぁ！！」

「あ～～～～、くっそ！！！最初からキャッスル潰せばよかった！！！」

「もう遅い。いくぞ！！！」

「ガブッ！！」

「ガブリ！」

渡と太牙の手にキバット三世と二世がそれぞれ噛みつき、魔皇力を流し込む。

《レ・デ・ィー》

名護がイクサナックルを手のひらに押し当てて機動させる。

「「「変身！！！」」」

《フィ・ス・ト・オ・ン》

そして各人がベルトにそれらを装着し、キバ、ダークキバ、イクサに変身する。

「ふん・・・・・雑魚は任せる」

ゴガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

アークが咆哮をあげて一歩を踏み出して来、二歩目の瞬間にはすでにダークキバとイクサを腕にかっさらって森の中に消えて行っていた。

「兄さん、名護さん!!!」

「あっちは任せよう・・・・それよりも・・・・こっちに集中しないと・・・・・死ぬぞ」

「奴」が魔導八天を抜き放ってズルズルと引きずりながら近づいてくる。

それに対して身構える二人。

そしてその距離がある程度まで近づいて

「せやッ!!」

「ハァ!!」

「ドウッ!!!」

バゴァ!!!!

ぶつかり合う。

とんでもない衝撃と共に、二人が吹き飛び、「奴」が追撃する。
例え万全でも、この戦いは危ういのだ。

ーーー

大きな木に隠れ、背中越しにアークが通り過ぎるのを確認してやり過ごす。
イクサの装甲にはすでにひびが入り、ダークキバのマントは穴があいて、所々千切れてもいた。

「最初の衝撃が大きすぎる・・・・・・」

「森の中が功を成したな・・・・ここならあのスピードは使えない・・・・・」

そう話しあう二人。
だが周りの木々もなぎ倒され、その範囲もでき始めている。
このままではまずいのは明白だ。

これまでの数分間、アークとは交戦したが一歩歩くごとの衝撃ですら攻撃になっているアークはもはやどうしようもなかった。
あの巨体は本来の物よりも大きい。そんなアークを相手取るにはどうあっても二人のサイズでは撤退しながら攻撃し、隙を見つけるしかない。

だがその歩行すらも攻撃になっては、撤退しようもない。

「あの巨体を倒すには・・・・・」

「狙うは・・・・頭部!!しかも一発でだ」

「名護さんは気を引いてください。あのアークは伝承によればかつてのキングがこの「闇のキバ」の力で封印した・・・今度は破壊してやる・・・・」

「よし・・・・グッ・・・」

「大丈夫か!?」

「問題はな・・・・」

グシャァッッッ!!!!!!!!

イクサが膝をつき、ダークキバがそれを起こそうとしゃがむ。
その瞬間、二人の上半身がさっきまであった高さでアークの手が二人の隠れていた巨木を握りしめていた。

二人が戦慄し、その場から転がり出す。
アークはその二人を見、手にした巨木をまるでコンビニのレシートを丸めるようにクシャクシャと捻り捨て、追い始める。

「捕まったら終わりだ!!!!」

「くそっ!!太牙、早く頼んだぞ!!!!」

イクサがイクサカリバーガンモードでアークに銃撃を浴びせる。

だがいっこうに効いた様子はなく、その歩は止まらない。

「なら・・・これだ!!!」

《イ・ク・サ・ナッ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アッ・プ》

イクサベルトにナックルフエッスルを読み込ませ、電子音が発せられる。

そしてベルトからはずされたナックルをアークの足元の地面に向け、焦点されたエネルギーが発射され、地面を穿って吹き飛ばす。

その穴に足を取られ、わずかなりともアークの身体がよろめく。

ほんのわずかな隙。必殺技を叩き込む間もなくアークは体勢を整えるだろう。

だが、たったそれだけの隙で十分だった。

バツン！！！！！ガギィ！！！！！

「ガアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

ダークキバの紋章が地面に浮きあがり、それが立ち上がってアークの身体を磔にする。
紋章からは常に電流のようなエネルギーが流されており、それが脱出しようとするアークの邪魔をしている。

「いける！！！！！」

「いまだ！！！！」

《イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アッ・プ》

「ウェイクアップ、ワン！！」

イクサがイクサカリバーを剣型のカリバーモードに変え、その剣身に灼熱の太陽のようなエネルギーをまとい発光させる。
ダークキバがベルトのキバットバット二世にウェイクアップフエッスルを一回吹かせ、その拳に黒きオーラをまとった。

「「おぉぉおア！！！！！！」」

ザキッ！！！！ドゴンッ！！！！

上半身をイクサが「イクサジャッジメント」で切り裂き、さらに飛びかかってダークキバの「ダークネスヘルクラッシュ」を顔面に叩きこんでその体がのけ反り、地面に倒れる。

ドドォウ、と音を響かせ、全身からスパークを起こして空を仰ぎながらアークが仰向けに倒れる。

「やった・・・か？」

「この地形だから・・・よかった・・・・でなければ潰されていた・・・・」

二人がお互いの肩を支え、その場から先に行こうとする。
「奴」と戦っている二人に合流しなければならない。

二人の背後には地面に倒れるアーク。

死んだように倒れているそのアークが

そのアークの目が

バグンッ!!と一気に光り起動した。

巨体が瞬時に起き上がり、よろめく二人の身体を腕が薙ぐ。

二人は吹き飛び、イクサは地面に転がってダークキバは木々をなぎ倒して止まった。

「ぬ・・・ごぁ・・・・ッ！！！！」

ゴドン！！！！

巨大な踵落としをイクサがかわす。
だがその背中に吹き飛んだ地面がぶつかり、装甲から火花が上がる。

ヨロヨロとダークキバが立ち上がってそのイクサを助けに行こうとする。
だがゆうに二十は離れている距離をアークは一瞬で詰め寄って、右腕を振りかぶってダークキバを押しつぶした。

そしてボコッ、と腕が地面から引き抜かれ、その手にはマントを掴まれて吊るされたダークキバがいた。
ダランと力が抜け、まるで死体のようである。

その体を振りかえってその動作で一気に投げ飛ばすアーク。
森の中をノーバウンドで一直線に飛んでいくダークキバの軌道上に、イクサが立つ。

その体を受け止め、しかしその衝撃を受け止めきれるはずもなく、二人が一緒に吹き飛ばされて森を抜ける。

その先にはいくつもの爆煙が上がっていた。

ーーー

「奴」の砲撃が蒔風に迫る。
それを蹴りあげて軌道を逸らして、その間にキバが「奴」に迫る。

「ウェイク、アップ！！！」

キバット三世にウェイクアップフエッスルを吹かせてキバの右足の鎖、カテナが解き放たれ、赤い翼が現れる。
周囲が夜のように暗くなり、キバの必殺技「ダークネスムーンブレイク」が放たれた。

ドゴォ！！！

それが確かに「奴」の胸に直撃し、そのまま引きずるように押し出していって巨木にぶつかる。
その巨木を中心にして、地面に巨大なキバの紋章が打ちこまれてその衝撃が完璧に「奴」に伝わりきる。

だが「奴」がその脚をつかみ、自分の背後にある巨木に叩きつける。
巨木は倒れ、キバがそのままフルスイングのように回されて投げ放たれて蒔風がそれをキャッチして、それでも止まらず地面に二人がめり込んで倒れ込む。

「ホント・・・なかなかに効いたけど、そこまででもねぇなぁ・・・演出でも血反吐吐けねぇぞ？」

「・・・わ～～ったよ・・・見せてやる」

蒔風がキバを地面に置き、立ち上がった。

「あっちの時間で二週間。完成したオレの能力をな」

「やってみろよ・・・なんて言わないけどな」

「奴」が蒔風に魔導八天を構えて突っ込む。
その速度は風のように速く、一瞬で蒔風に到達する。

だが蒔風が言葉を発する前に、青龍たちが止めに入る。
青龍達が時間を稼ぎ、「奴」がすぐにケルベロスたちを出して応戦、蒔風に向かうが、詠唱はすでに終わっていた。

―異端者、法則から外れ―

―死を知りて人も生命も外れ―

―世の理との断絶者―

―異端なる者は世にただ一人―

―故に彼の者は孤独にめぐり、そこに付き添う者は無し―

―ヒトも世界も外れたならば、世の法則など意味はなく―

―結果、顕わすは法則の崩壊―

―彼の心に法則は在らず―

―心象的な世界の破壊、顕われん―

「心象的世界破壊（イマジナリティワールドエンド）！！！！」

ズキャッ！ゴォ！！

世界が完璧に塗り替えられる。
炎に満ちた空。
地面が隆起しては陥没している。

そんな中でも蒔風と「奴」の周囲はなにもなかったし何も起こっていない。
だがいつ破壊が身を襲うかわからない状況。

一切の平穏なき世界がそこにあった。

「バッ・・・・・固有結界！？習得したのか！」

「・・・世界は法則に満ちている」

蒔風が右足を上げて前に踏み出す。

だがその体は前に進まず、「奴」の身体が衝撃に襲われて地面に減り込む。

「その法則が乱れた世界がここだ」

頭を掻きながら獄炎弾を放つ。

「奴」がそれをクレーターから飛び出して回避した。

一気に獄炎弾が膨れ上がって爆発を起こす。

十メートルまで膨れて爆発した範囲から「奴」は十分に離れて回避していた。

だが

「グバッ・・・・・ガアアアアアア！！？」

その爆発範囲には一切の破壊の跡は無く、全く炎が届いていない範囲がえぐれ、焼き尽くされた。

「法則は数学や物理、科学などの学問だけのものではない。右足を出せば前に出る。獄炎弾は当たった場所を焼く。頭を掻けばそこが刺激される。これらも立派な法則だ。で・・・・それが乱れたら」

蒔風が右腕を真横に振るった。

「こうなる」

すると地面が隆起して、左右から「奴」を押し潰す。

それを見た「奴」が岩盤を砕いて脱出し、同じように右腕を真横に振るった。

だがやって来たのは空から落ちる流星群。

何十発もの隕石が地面に迫り、「奴」も蒔風もすべてを吹き飛ばそうとした瞬間

パァン！！

固有結界が切れる。
世界が元に戻り、法則が戻ってきた。

「ったく・・・・危ない事するなよな。本来と違くても法則が一定したらそれは乱れたことにならない。つねに乱れ続けてんだから、下手にいじらないで欲しいな」

サラリと言ってのける蒔風。

心象的世界破壊（イマジナリティワールドエンド）

それが固有結界の名だ。

死を理解した異端であり、生まれも育ちも純粋な”ｎｏ　Ｎａｍｅ”。さらにその世界内で異能に目覚めた彼だからこそ出来る事だ。

「奴」は結界内でのダメージに腕を抱えてヨロついたが、やがて立ち上がってから蒔風を見、そして倒れているキバを見た。

そのキバもなんとか立ち上がろうと膝を上げていっている。

その時、林の中からイクサとダークキバが吹き飛ばされてきて地面に転がった。

「名護さん、太牙!!」

「ぐあ・・・・」

「すまない・・・・やられた・・・」

「こっちはなんとか一発入れてやったよ。まだ一勝一敗だ。こっからだ!行けるか?」

その言葉に二人が目を合わせてから鼻で笑った。

「オレは歴代最高のキングだ・・・・・レジェンドルガの遺物なんぞに、過去のキングが勝ったものに、負けられるか!!」

「全く、誰に物を言っているのです。オレは名護敬介。この世の正義。名護がやらねば、誰がやる」

意地だった。
二人が立ち上がったのは意地によるもの。
一人はキングの、一人は戦士の。

だがそれは、どんなものよりも二人をしっかりと支えて立ち上がらせた。

イクサがマスクの口部を取り外し、それ――イクサライザーを携帯のように開く。
そして「1」「9」「3」を押して発信ボタンで起動させた。

《ラ・イ・ジ・ン・グ》

ガシュウ！ゴゴォウ・・・・・・バァン！！

全身から熱気を吹き出し、イクサがライジングイクサにフォームを強化する。

「タツロット！」

キバがその名を叫ぶと、キバットくらいの大きさをした金色の小型竜が飛んできて、キバの左手首に装着される。

「ビュンビュ～～ン！いっきますよ～～！テンションフォルテッシモォ～！！」

ガキンガキン！ブワァァァ・・・・

キバの身体が黄金に包まれ、最強形態エンペラーフォームに強化変身する。

こうして準備は整った。

ダークキバ、イクサ、キバ、蒔風が並び、「奴」に向かって言い放つ。

「王の判決を言い渡す。死だ！」

「その命、神に還しなさい！」

「キバっていくぜ？渡！」

「ああ！！」

「・・・・・・・アーク！！」

「奴」が名を呼び、森の中から巨大な影が上空に飛び出し、スズン、と「奴」の隣に着地した。

「ハァァァァァァアア！！！」

アークの中からいくつかの「欠片」が抜け出て、「奴」の身体に集まりだす。
アークの身体が本来の大きさの3．2メートルに戻り、「奴」の怪我があらかた修復された。

「さぁ、決勝戦だ。いくぞ、みんな！！」

「「「おう！！」」」

アークが先陣切って走り出し、蒔風をわしづかみにしようとつかみ掛かってくる。
だがそれは空振りに終わり、回避した蒔風が横っ腹にローリングソバットをブチ当てて巨体を弾き飛ばす。

そのまま蒔風はキバと共に「奴」に向かい、吹っ飛んだアークにダークキバとイクサが走る。

「行くぞ！！」

《パ・ワ・ー・ド・イ・ク・サ・ー》

イクサがパワードフエッスルをベルトに差し入れ、ドラゴン型巨大重機「パワードイクサー」を呼びだし、それに乗り込んで戦闘を開始した。

その大きさはアークよりも頭一つ抜き出ており、ドラゴンの首を模したアームがアークに噛みついてその装甲を砕かんとする。

だがアークとてそのような重機にただやられるものではない。腕で強引に噛みついている顎をはずして地面に降りる。

そして真っ向からぶつかり合って、下に手を入れ、ひっくり返そうとパワードイクサーの巨体が持ちあげられていく。

「ハッ！！！」

「ウェイクアップ、ツー！！！」

だがそのパワードイクサーの背後からダークキバが飛び出し、ウェイクアップフエッスルが二回吹かれた。
その脚にエネルギーが凝縮されていき、「キングバーストエンド」が放たれて、頭部に命中、その巨体が揺れてパワードイクサーが地面に降りる。

アークの背後に跳び下りたダークキバがジャコーダーを鞭状に伸ばし、アークを貫き縛り上げた。
さらにアークの頭上にキバの紋章が現れ、それに引っ掛けることでアークをつるし上げ状態にする。

「やれ！！いまだ！！！」

「わかっている！！！」

イクサがパワードイクサーから飛びだしながら最大稼働したエネルギーを銃型に変形させたイクサライザーへと集中させ、通常の数十倍もの威力を誇る強力なエネルギー波を発射する「ファイナルライジングブラスト」を撃った。
それは砲撃となって、とんでもない熱線がアークを焼きつくす。

その反動にイクサの身体が空中で押し返されるが、そのままパワードイクサーの頭部を蹴るようにして反転。
さらにその頭部も首を振るってイクサを押し出し、さらなる勢いを持ったイクサがアークの胸の中心に飛び蹴りをぶちかます。

その威力は果てしなく、ジャコーダーに貫かれ、熱線で焼かれたアークの装甲をやすやすと貫いて、アークの背後に突き出た。

そこでダークキバがジャコーダーをなぞる。
すると弦のように鞭部分が激しく震え、その振動でアークの全身が砕けて散った。

その際、「欠片」も飛び散り、何処かへと消えて行ってしまった。

「「ハァッ！！！」」

「ぬゴッ！」

ガギィン！！！

キバエンペラーフォームがザンバットソードを、蒔風が獅子天麟を構えて「奴」に斬りかかる。
それを正面から受け止めるが、その衝撃に「奴」の身体が浮き、そこに二人のパンチが放たれてさらに後方へと吹き飛ぶ。

「ふッ・・・・ハァアアッ！！！！！」

「奴」が上空に飛び出してその手に波動弾を溜めこむ。
蒔風が「奴」に向かって絶光砲を放つが、いとも簡単に剣で防がれてしまう。

そしてそれが放たれた。
蒔風とキバを漆黒の爆発が襲い、噴煙が立ち上がって大地を揺るがした。

「奴」の口元がニヤリと歪み、それが瞬時に歯ぎしりにかわった。

爆煙の中から巨大な翼竜型の形態「エンペラーバット」となったキバと、それに乗った蒔風が飛び出してきたからだ。

「奴」がさらに上空へと飛び、二人もそれを追って上昇していく。

雲を突き抜け、「奴」が波動砲を放ってきたのを旋回飛行でかわすキバ。
その上に乗った蒔風も雷旺を放ち「奴」にジャブを繰り返していく。

そして数回突進し、その剣で打ち合い、火花が散ってはまた砲撃戦になる。

キバもその口から炎弾を吐き出して「奴」に攻撃を繰り返していく。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！！！！！！！！！！！

キバが「奴」を狙って休むことなく炎弾を吐く。
「奴」が全力で跳び、それを回避して行ってふと気付いた。

蒔風がいない

ドギャッ！！！！！

その思考の瞬間、背後から蒔風が十五天帝で「奴」の背後から体を貫き、地面に向けて投げ放った！！！

そしてその後を追って蒔風が頭からまっすぐにに堕ちて行く。

「グッ・・・バッ・・・・・きぃ・・・さまぁ！！！！！」

「渡！！行くぞ！！！！」

『はい！！！！』

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＩＢＡ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＷＥＰＯＮ～！！

キバの身体に青、緑、紫の光が取りつき、装着される。
それはキバに使役される三体のアームズモンスター、ガルル、バッシャー、ドッガであった。

もしこれが本来の形態であれば、彼は仮面ライダーキバドガバキエンペラーフォームとも呼べる姿になっていただろう。

そしてその翼にさらに銀白の翼が取りつき、二対の翼が生えそろった。

「構えろ！！！！」

落下していく蒔風と「奴」を追いながらキバの口内に銀白に輝く超巨大なエネルギーが溜めこまれて行く。

「ぶっ放せ！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＩＢＡ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－
～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

さらに蒔風の足に赤い悪魔のような羽が現れた。
それはキバエンペラーフォームでのファイナルウェイクアップでの必殺技で現れる物と同じであった。

ドゴォッ！！！！！！！！

キバがエネルギーを放ち、それが蒔風に命中する。
そのエネルギーの砲撃に入り込み、その勢いに乗って蒔風が右足で「奴」に突き刺さる十五天帝にキックを放つ。

空気の壁を二回、三回と次々にぶち破って、地上に向かって落ちて行く。

地上何万メートルという距離を、凄まじい勢いでゼロに近づけてゆく。

雲はとうに抜け、鳥を追い越し、気圧が変わっていく。
そしてついに地上との距離がゼロへとなり！！！！

ドッ・・・・バガァァァァアアアッッッ！！！！！！

着地点を中心に三キロを覆う様にキバの紋章が地上に刻みこまれ、
それが渦を巻いて集まってその中心で火柱を上げた。

そしてその火柱が消える頃、キバが地上に戻り、蒔風が炎の中から出てきた。

もうすでに元の姿に戻ったキバに、翼をしまった蒔風。

戦いは終わったと、変身を解いた渡を一緒に地面に座り込んだ。

――――――

そして時間が来る。

蒔風がこの世界に現れてから実を言うと時計の上ではまだ十二時間も経っていない。

故に結構早めに出なければならないのだ。

「行ってらっしゃい」

「そうなるな。もう会うこともないだろ」

「でも・・・今度はゆっくりしたいな」

「それは・・・そうだな。じゃあ、また、だ」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＫＩＢＡ］

蒔風がゲートをくぐる。

そして今日も渡は日常を過ごす。

目指すは父を越えるバイオリンと作ることだ。

――――――

「「変身！！」」

今日も街には風が吹く。

悩みも笑顔も一緒に運んで。

to be continued

キバ　～カルテット♪キバっていくぜ！～（後書き）

【仮面ライダーキバ】

構成：”フォルス”６０％
　　”ライクル”３０％
　　”ＬＯＮＤ”１０％

最主要人物：紅渡

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：三体のアームズモンスターと蒔風の力をキバに付加

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：力を得たキバ飛翔体からのエネルギーを纏って蒔風が放つキック

アリス「過去のキャラどころかシーンまでスッ飛ばしましたね」

だって蒔風は固有結界の練り込み。
渡と太牙は模擬戦、名護さんはイクササイズだぜ？

そんなもん延々と書いて何が楽しいか。
過去のシーンは番外編で

ア「そういえば蒔風の新しい力!!あれ、なんですか?」

では説明しましょう

固有結界「心象的世界破壊（イマジナリティワールドエンド）」

あらゆる法則のなくなった世界を構築。
数式などだけの公式ではなく、本編中で言っていたような当たり前の事象ですら捻じ曲げる。

この固有結界、蒔風の意志で事象を捻じ曲げているのではなく、その事象に合わせて蒔風が動いているのだ。

「〇〇をやったら△△が起きる」と蒔風がやっているのではなく、「〇〇をやったら△△が起きる」ということを蒔風が知り、それに合わせて行動するだけです。
つまりここに置いて蒔風はどんな法則が成り立っていくのかを知っているだけで、コントロールはしてません。

そしてその法則は次々と変わっていっている。

ただえさえ世界を侵食する固有結界の上に、こんなに能力なので発動時間は三十秒のみ。
さらに飲み込む相手が多ければ時間は減っていく。

また、一度発生させたら時間が切れるまで蒔風にも解除できない。

ア「だから「奴」が腕振った時も別の現象が起こったんですね」

そうです。
だから「あのとき蒔風がああやってこうなったからこっちも同じことを」なんてことはできないんです。

ア「それチートやん」

いや?そうでもないですよ?
蒔風の考えに、「絶対なんてことは絶対にない」と言うモノがあります。

故に、「一撃で相手を倒す法則」はできません。

まあ、相手が耐えられなくて一撃で倒れることはある間も知れませんが。

ア「つまり耐えきればどうにかなると?」

はい
時間は三十秒。さらに動きまわれば蒔風自身も危険になりますから、

結構な諸刃の剣。

ア「以外と使いづらそ～～。次回、アクセル、怖い」

ではまた次回

俺たち／僕たちは、二人で一人の仮面ライダーだ！

W　～Aの出会い／異世界からいらっしゃい～

「お前、なんであれを持っていた。どこで買った。あの力はなんだ！！！」

「懐まさぐったら入ってたんです。信じてくださいよ刑事さん！！！」

「そんな言い訳信じられるか」

「だって本当にそうなんですもの！！どうすりゃいいんですか！？」

「オレに質問をするな」

皆さん、こん、にち、はー！蒔風舜でーす！

今ぼくは風都署の中にいます。今目の前にいるこわいかおの刑事さんに招待してもらいました！

やったね（＾ｏ＾）ｖ

今は小さい窓のある暗い部屋にいます。両手に金属のリングをはめています。ファッションだね！

さっきまで目の前の刑事さんとお話してました！

単刀直入に言おう。
現在取り調べられ中だコンチキショー！（泣）

・・・・・・・・・・・・・・・あれ？なんか最初の方にもあったぞ？これ？

――――――

「なんだこれ？」

蒔風がこの世界に着いて、まずやったのは身の回りの物の確認だ。

懐を探って見つけたのがＵＳＢメモリが二回り大きくなったような感じのものだった。

「ガイアメモリ・・・・・ここは風都か？」

この町の名は風都。

街の至る所に様々な形状の風車が回る、通称「エコの街」

そしてこの町にはある組織があった。

それが「ミュージアム」

彼らはこの地球に眠る様々な記憶を内包した「ガイアメモリ」を販売し、街の人間を犯罪に走らせた。

ガイアメモリに内包される記憶は「マグマ」や「Ｔレックス」などと言った実在するものから「ウェザー」などの現象、はたまた「テラー」や「ナスカ」と言った感情や文明など多岐にわたる。

そしてそのガイアメモリを人体に取り付けられたコネクターに挿入することで使用者はドーパントに姿を変えるのだ。

そして使用者の感情はどんなものであれ、「地球の記憶」という膨大な情報に圧迫されて歪んでしまう。

ゆえに、こんなものを持っていては犯罪者予備軍、と言われても仕方がない。

早々に破棄しなければ、と蒔風がそれを手に考えていたところに、その男はやってきた。

「お前、それはガイアメモリか？」

「え？」

背後にバイクのエンジン音が聞こえる。

振り返るとそこには赤いジャケットを着た青年が立っていた。

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ。それを大人しくこっちに渡せ」

その言葉に蒔風がちょうどいいや、と呟いてガイアメモリと渡そうとそれを手に持ってスッ、と出した。

《ワールド！！》

その拍子にメモリのボタンが押され、ガイアウィスパーが発せられたのが運のつき。
照井竜が完璧に敵意をむき出しにした。

「貴様・・・大人しくしろ！！！！」

（うぇえ！？鳴っちまったよこれ！？もうあの人敵意むき出しだよ・・・・）

さらに言うなら取り出したとき「ちょうどいい」とか呟いた瞬間から照井は身構えていた。
そりゃそうだ。蒔風にとっては「回収してくれるから」だろうが、照井にとってみれば「暴れる相手が出てきた」という意味に捉えられてただろうから。

ヴォン！！

照井がバイクのスロットルを模したアクセルドライバーを腰に装着し、赤い色をした「A」のガイアメモリ、アクセルメモリを取り出

して起動させる。

《アクセル！》

「変・・・・・・身！！！！」

それをアクセルドライバーに装填し、スロットルを捻る。

バイクのエンジン音のような音が響きわたり、一気に装甲が展開される！

ガコッ、ヴオォン！！！

《アクセル！》

照井が赤い装甲に包まれて、仮面ライダーアクセルに変身した。

その姿に蒔風は焦り始める。

「うわーうわーうわー！！待って待って！！これマジでオレいらな・・・・」

そう言ってガイアメモリをバッ、と突き出すがそれすらも危険な行為だ。
ガイアメモリのコネクターは使用者の任意で隠せる。どこにコネクターがあるかわからない以上、照井はさらに警戒するしかないのだ。

例に挙げれば、ニューヨークでいきなり懐に手を突っ込んだら銃を出されると思われてしまうのと同じである。

「それをよこせ！！《スチーム！》ハァッ！！」

大型剣エンジンブレードにギジメモリである「エンジン」を装填し、スチームを発動させてそれを蒔風に向け放つ。
もちろん生身の人間に対してなので、出力は抑えられている。

だがそれでもかなり熱い。
熱湯をいきなり掛けられたようなものである。

蒔風がスチームから逃げようと路地を通っていくと、目の前に海が広がっていた。
どうやら埠頭に出てしまったようだ。

どうにもこうにも追い詰められた形の蒔風にアクセルがさらにスチ

ームを蒔風に吹き付けてくる。

「あっつあっつ！！！！ああもうチキショーー！！確かにその対応は正しいけどさ、もうちっと話を聞け！！！なんでこうライダー世界の主要人物は喧嘩っ早いのばっかなんだ！？」

蒔風とて照井がここまで警戒し、対応してくるのは当然だと思っている。

第三者が見てもそれはそうだろう。

だが人と言うのは面白いもので。

「人がやられるのは見ていて面白いが、自分がやられんのは気にくわねぇ！！！！」

蒔風がガイアメモリを放り投げ、代わりに手にディエンドライバーを出した。

「君のしつこさにはうんざりだ！！変身！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＩＥＮＤ！］

蒔風がディエンドに変身し、カードを装填していく。

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－Ｖ３！Ｇａｒｒｅｎ！］

「「井坂」に因縁のある赤いサブライダーに、ち～ちよ～は～はよ～、い～も～お～と～よ～・・・ってな」

「何を言っているのかわからんが、逮捕する！！」

「やっぱなるならディケイドよりディエンド。こっちの方が面白～～イ」

ギャレンが遠方から銃撃し、Ｖ３が徒手空拳での接近戦でアクセル

を追い詰める。

「ああっギャレン、そこ狙う!?わぁい鬼畜☆おぉっと!?Ｖ３が執拗にアクセルの股間を責めている!!これはきつそうだ!!」

それにしてもこの男、ノリノリである。ってかそれらの行動の指示はお前が出してるだろ。

「んじゃ、そろそろ・・・・・んきゃぁッ!?」

カードを取り出した蒔風の手を、エネルギー弾が襲う。
アクセルが全身から熱気を噴き出し、仮面のランプが青々とギラめいて、Ｖ３の拳を片手で押えながらもう一本の手でエンジンブレードを握っていた。

その切っ先は蒔風に向いており、おそらくさっきのエネルギー弾はエンジンメモリのジェットによるものだろう。

そして何よりそのオーラが恐ろしい。
全身から噴き出した熱気に炎がチリチリと舞っている。

きっとあの仮面の向こうには阿修羅のごとき形相の照井の顔があるのだろう。

ズガン！！！！

アクセルがＶ３の腹部を切ってその体が消滅する。
ギャレンは睨みつかされた瞬間に消えた、ってか逃げた。

「おいおいおいおい！？そこで消えるか！？こうなったら・・・・・」

ガリガリガリ・・・とエンジンブレードをダラリと下げて、地面に引きずりながら一歩一歩近づいてくるアクセル。
正直言っておっかない。もし背景に文字が付けられるなら絶対に「ケタケタケタケタ」ｏｒ「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」である。

断続的に噴き出してくる熱気と炎もだんだんとその量をあげていっている気もする。

「貴様・・・・・覚悟はできているんだろうなぁ・・・・・・・」

「それは勘弁ッ！！」

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＬＬＵＳＩＯＮ！］

蒔風がアタックライドを発動させ、四体の分身を作り出す。
相手が計五人のディエンドになり、アクセルが身構える。

「さあ！！がんばってくれたまえ！！」

蒔風の号令に四体が同時にカードを取り出して装填する。
来るかっ！？とアクセルがエンジンブレードを構えた。

だが

［［［［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！］］］］

その四人が同時に消えて逃げていった。

「オイィィィィィィイイイイイイイイイ!?なんでそこだけオリジナルと一緒なん!?」

「覚悟はできてるか?」

天に叫んだ蒔風の前にアクセルがユラリと立つ。

静かに変身を解いて、冷や汗を流しながら蒔風が呟くように聞いた。

「答えは?」

「聞いてないッッ!!!!!」

「それ違うキャラだろ!!?」

「オレに質問をするなァァアァァ!!!!」

こうして蒔風は逮捕された。
その時の心境をこう語っている。

「いや怖かったね。やっぱり人をおちょくるのはよくないね。やめないけど」

――――――

そして冒頭から今に至る。

なんやかんやでガイアメモリの件はなんとか納得してもらったのだが、他の世界の力など、そちらの方を今は尋問されている。
なんやかんや？ちゃんと説明しろ？

・・・・・なんやかんやは・・・・・・・なんやかんやだッ！！！

そこに照井の部下、刃野刑事が三人の人間を連れて入って来た。

「ここだここだ。ほれ翔太郎」

照井がその三人を中に入れる。
どうやら照井の知り合いらしく、軽い挨拶を交わしてから翔太郎と呼ばれた青年が用件を聞いた。

「この男、奇妙な力を使ってな。どうにもならんから、フィリップに検索を依頼したいと思ってな」

「照井竜、君がそこまで言うモノとは一体なんだい？興味が沸いて来たよ・・・・早速検索を始めよう。彼の名前は？」

フィリップと呼ばれた青年が教えられた蒔風の名前を呟いてなにやら模索を始めた。

その姿を見て机にへばり付いている蒔風が翔太郎に聞いた。

「翔太郎だっけか？やっこさんはなにやってんのだい？」

「あん？ああ、フィリップはな、「地球（ほし）の本棚」っつーデータベースと接続できてな、あいつにかかれば、わからねぇことなんざねぇ。ま、まだすべての「本」を読んだわけじゃねえし、決して万能じゃないけどな・・・・・・ってか、なんでこんなこと話してんだオレは」

「キーワードは、「蒔風舜」。人名だからかなり絞り込めるはず・・・・・え？」

検索を始めたフィリップが驚きの声を上げる。

それに鳴海亜希子がどうしたの？と首を傾げた。

「彼に関するデータがない・・・・」

「なんだと?」

「いや、「蒔風舜」と言う人間のデータは確かにある。だが間違いなくこの「彼」ではない。「同一人物の別人」としか言いようがない。こんなことは始めてだよ!」

「なぜ別人だと断言できる?」

「簡単だよ。情報の上では「蒔風舜」はここから遥か海の先、ニューヨークで埴輪売りの屋台をやっているはずだからね。しかも御歳６８歳。彼ではないだろう?君は本当に何者だい?」

フィリップがニヤニヤと笑いながら聞いてきた。

フィリップはいわば「情報マニア」だ。

知らない事に関しては猛烈な好奇心を示していく。

「そりゃないさ。オレは別世界から来たからな。この世界に情報はない」

「別世界だと?貴様世迷言を・・・・」

「あぁ～～～～」

「なるほど、わかったぜ」

憤慨する照井をよそに、翔太郎とフィリップが納得する。

「おまえら・・・・納得するのか？」

「いやまあ・・・・」

「ボク達は別世界の存在を知っている。そこの世界の仮面ライダーと共に戦ったこともある」

「なああんた、こんなカード、知ってるか？」

翔太郎がカードを取り出す。
そのカードはディケイドが使っているライダーカードと同じものであり、描かれているのは仮面ライダースカルである。

「士を・・・・ディケイドを知っているのか？」

「やっぱそっち筋の人か」

「知っているよ。なるほど、君が「ディケイドの物語」の視認者だったんだね」

「どういうことだよ」

「つまり、ディケイドはキミの言葉で自分を見失わなかった、ということさ」

「それはよかった。ってかあいつ話したのか」

「最後に少しだけ話ができてな、その時に」

共通の話題が見つかり、話しが弾む三人。

置いてけぼりの照井と亜希子にも教え、信じてもらう。

さらに翔太郎たちの事、そして蒔風の事の説明も始まった。

to be continued

W　～Aの出会い／異世界からいらっしゃい～（後書き）

アリス「来ました平成ライダー11作品目！！！ダブル！！！」

ダブルはかなりいい作品でした。

ア「最初こそ「なんだこの半分こ、気持ち悪っ！！」とか思ってたんですよね？」

そうれはそうです。

ですがなんだろう・・・動くWを見たらね、なんかこうね・・・・・・

あらヤダかっこいい

ってなったんですよ。

二人で一人という新境地も若干心配でしたが、それに関しても大成功。

文句なしの作品でした。

早く映画のＤＶＤ出ないかな

ア「次回、メモリ捜索、思わぬ記念と負傷」

ではまた次回

オレに質問をするな

W　～乗り越えるU／食った男～

二人で一人の仮面ライダー、Wである左翔太郎とフィリップは探偵である。
二人はこの街を泣かせる犯罪者から皆を守るために、ドーパント共と戦い続けるのだ！！

「っつー話なんだな？」

「まあ、間違っちゃいないな。というわけだ。ハードボイルド、左翔太郎だ。よろしく」

「おけおけ」

だがそんな翔太郎の自己紹介にチャチャを入れる人物がいた。

「なに言ってるのよ。翔太郎君はハードボイルドじゃなくて半熟君（ハーフボイルド）でしょ？」

「全くキまらないからもうよしたらどうだい？翔太郎」

「左、お前はハードボイルドじゃない」

訂正、その場のすべての人間にだ。

「ダァーッ！なんでそういう事言うんだよ！こういうのは第一印象が大事なのによ！！」

「なるほど、ようは敵でも救えるなら救いたいって口か」

「う・・・・・・ぁ～～～～～が～～～～～！そうだよ！チキショー！」

だが翔太郎もハードボイルドに成り切れていない自分がよくわかっているらしく、やけっぱち気味に言った。

「ハードボイルド？」

「うるせー！！」

翔太郎が蒔風の頬をつまんでグニグニし始める。

「ひゃめろひゃめろ!!にゃにがかにゃひくて男にこんなことしゃれにゃなりゃんのら!!」

「そうだよな・・・・・・はぁ」

冷静になった翔太郎がパッ、と蒔風の頬を放す。

そこで照井が蒔風に言ってきた。

「とりあえず、あの時のガイアメモリを出してくれ」

「よしきた。持っててもしょうがないからな・・・・・・・・・あれ？」

「どうした？」

「・・・・・・ない」

蒔風がポケットをひっくり返しながら言った言葉に照井が、なんだと？という顔をする。

「照井との戦いで放り投げてそんまんまだ!?」

「馬鹿お前！早く拾いにいくぞ！」

「ああ！」

「オレを出していけ！こいつを外せ！」

部屋から飛び出す翔太郎、フィリップの後を亜樹子がワタワタと着いて行く。

更に照井も飛び出して行って、蒔風が最後に手錠をした手を突き出しながら後を追った。

――

そうして照井と蒔風が戦った埠頭に五人はやって来た。

現在は全員が腰を低くしてガイアメモリを探している。

「あったか？」

「まだ見つからない」

「どこ放り投げたんだよ！」

「ここ立って、スチームに蒸されてこう放り投げたから・・・・・・
下手すりゃ海の中？」

「マジかよ・・・・勘弁してくれ」

「海に潜るなんてそんなのあたし聞いてないよ！！」

ギャイギャイと騒ぐ四人を尻目に、フィリップが顎に手を当てて考えていた。

「ふむ・・・・・・お、どうやら海に潜ることはないようだよ？」

フィリップの言葉に翔太郎と蒔風が振り返る。
フィリップは四つん這いになって海に身を乗り出して埠頭の下を見ていた。

翔太郎と蒔風も覗き込むと、埠頭に窪みができていてそこにガイアメモリがあった。

「海に落ちた後波ですぐそこに入り込んだようだね」

「よくやったぜ！フィリップ！」

「見つかってよかった～～～～」

「そういえばこれはなんのメモリなんだ？」

「これかい？一旦鳴らしてみようか」

蒔風がガイアメモリのスイッチを押してみた。

《ワールド！》

「ワールドメモリ？聞いたことがない・・・・」

「は？そんなことはないだろ。ガイアメモリはお前がミュージアムに捕まっている時に利用されて作ったんだからよ」

「いや翔太郎、本当に知らないんだ。そもそも、こんな記憶は存在しない」

「どういう事だ？」

「このワールドメモリが言っているのは地球、という意味での「ワールド」ではなく、蒔風がいうような意味での世界だ」

「ん？ああ、そうか。確かそういうメモリはエクストリームがあったな」

「そう、あれは星や特定の惑星、つまりは「世界」としての記憶だ。だがこのメモリは「この世界」の記憶。そんなものを許容できるガイアメモリなんて存在しないし、使用できる人間も存在しない」

「じゃあさ、このメモリは・・・・」

「残念だが蒔風、中身スカスカのメモリだね。もっとも、記憶を詰め込む機構は完成しているようだからもし、「世界の記憶」なんてものを掴むことが出来たらこいつは起動するよ」

「ま、そりゃ無理だ。構築を知るのが精一杯だからな」

「「奴」ならばどうだい？」

フィリップが恐ろしい推測をするが、蒔風がそれを却下する。

「それをするには世界を破壊してじゃないと無理だ。もしそんなことするなら、「奴」は食う方を選ぶよ」

ガイアメモリをカチャカチャといじりながら蒔風が照井に聞く。

「これ、記念でもらってもいいかな？」

「・・・・フィリップ、大丈夫か？」

「問題はない。それには世界以外の記憶は入れられないからね」

「ならかまわん。記念にもって行け」

「わーい！！」

蒔風がメモリを懐にしまい、わいわいとし始める。
その蒔風にフィリップがじゃあ、と話題を振ってきた。

「君のめぐってきた世界はどんなものだい！？とても興味がある・・・ぜひ教えてくれ！！」

「待てよフィリップ。それよりも先に俺たちを狙ってるその「奴」って野郎の事を聞こうぜ」

「それもそうだね！！ああ、聞きたい項目が多すぎて大変だよ！！！」

フィリップが興奮のあまりトリップし始めてしまった。
その間に翔太郎が蒔風に聞いた。

「「奴」はいつ俺たちに手を出してくるんだ?」

「「奴」の世界構築計算はそれなりにかかる。しかも一時的とはいえディケイドの世界とつながったこの世界の計算なら少しは手間取るはずだ。軽く見て・・・・四日」

「四日か・・・・」

「で、でもその間は翔太郎君達は安全なんだよね!?」

探偵事務所先代所長の娘である鳴海亜樹子が蒔風に訊く。

だが蒔風が首を振ってこたえた。

「確かに「奴」は殺しはしないさ。でも・・・・・・」

ザシッ・・・・・・

「戦力を削ぐぐらいの事はする」

蒔風の発言と共に黒い影が倉庫の脇から出てきた。

その影が持つのは赤いガイアメモリ。

「あ、あれは？」

「「奴」の「欠片」だ。どうやらちょっかい出しに来たみたいだな」

その影がガイアメモリを起動させて、首筋に挿入した。

《アルティメット！！！》

「なっ！？」

「に！？」

ドグォン・・・・・・

・・・・・・・・・バンッ！！！！

「欠片」がガイアメモリを取り込んで、アルティメットドーパントに変貌する。

身体全体が黒く覆われ、かなりがっしりした筋肉質なシルエットに、全身を赤いラインが駆け巡り、背中には「究極」の二文字が書かれていた。

「究極の記憶」
それはあらゆるものを超越するための記憶。

メモリだけでもかなりの威圧感を放つそれが、「奴」の「欠片」で発動されている。

「究極・・・か。相手にとって不足なしだな」

そう言って蒔風が戦おうと乗り出そうとする。
だが、その肩を翔太郎が掴んで止めた。

「おっと、待ってもらうぜ、蒔風。この町で暴れる奴は、このオレが許さねえ。まずは見ていてくれ。いくぜ、フィリップ」

「ああ」

翔太郎が腰にダブルドライバーを装着し、それと同じものがフィリップの腰にも現れる。
その瞬間、二人の感覚はリンクし、二人は一体となる。

《サイクロン！》

《ジョーカー！！》

「「変身！！！」」

翔太郎がジョーカーメモリ、フィリップがサイクロンメモリを構えてダブルドライバーに挿入する。
サイクロンメモリが翔太郎のドライバーに転送されて、さらにジョーカーメモリを入れて、ダブルドライバーを「W」の形になるように展開する。

《サイクロン！ジョーカー！！》

そして風が翔太郎を覆い、半身で色の違う、仮面ライダーWに変身を遂げる。
隣では意識がWの方に飛んでいるため、眠るように倒れたフィリップの身体を亜樹子が支えていた。

「いくぜ！！」

『ああ！！』

Wがアルティメットドーパントに駆け出して行く。
そのWをアルティメットドーパントは全身の赤いラインから光を飛ばしてスキャンする。

その光に一瞬たじろぐWだが、何事もなかったためにそのまま攻撃を始めた。
だがそこで信じられない事が起こる。

Wの攻撃を見たアルティメットドーパントが、全く同じ動作でWを攻撃し、その体を易々（やすやす）とはじき返したのだ。

地面に倒れ、打ち合った右腕を押さえて蹲るW。
その状況を見て、ソウルサイドである左側の複眼が光り、フィリップが翔太郎に説明した。

『どうやらこちらの事はお見通しのようだね。こっち以上の力を得ている』

「は、だったらこっちはもっと硬くなってやるまでだぜ！！」

《メタル！！》

《サイクロン！メタル！！》

ジョーカーメモリトメタルメモリを入れ替え、ボディサイドの色が銀に変わり、打棒型武器メタルシャフトを構えるWサイクロンメタル。

だが即座にその体もスキャンされ、見透かされてしまう。

疾風を纏ったメタルシャフトを振りまわすWだが、それを真っ正面からすべて受け止め、しまいには掴んでWごと投げ飛ばすアルティ

メットドーパント。

どうやらメタルの硬度すらも超えてしまったようで、もはや太刀打ちできない。

「くそっ、こうなったら・・・・」

『ダメだ翔太郎!!ここでメモリを変えてはまたスキャンされる!しかもあのメモリはどうやらスキャンした性能をどんどん吸収している!!』

「つまりなんだ?あいつはサイクロンの特性にジョーカーの身体能力、さらに今メタルの硬度をもっちまったってことか!?」

『ああ。ここでヒートやルナ、トリガー、照井竜のアクセルやトライアルの力をスキャンされては非常にまずい!!』

「どーすんだよ!!!」

『大丈夫だ。今の僕達を越えればいいだけだ』

「なるほどな・・・・いくぜ!!」

Wがサイクロンジョーカーに戻って手をかざす。
するとWの意志に呼応し、一羽の鳥が飛んできた。

否、本物の鳥ではない。

それはバードモードで自立稼働する鳥型特殊ガイアメモリ、エクストリームメモリ。

フィリップの肉体をデータ化して取り込み、ダブルドライバーに装着、展開する。

そして翔太郎とフィリップの心と体が一体となり、Wをさらなる次元へと昇華させる！！！

《エクストリーム！！！》

荘厳な曲が流れ、サイクロンジョーカーエクストリームへと強化変身を遂げたWが、アルティメットドーパントに向き直る。

『あのドーパントの検索を終了した。この状態なら大丈夫だ』

そう言うWにアルティメットドーパントが迫り、その姿をスキャンし始める。

だが間もなくアルティメットドーパントの身体の赤いラインがどんどん発光し、しまいには火花を散らしてスパークしてしまった。

『やはりエクストリームメモリの取り込みはできないようだね。一気に決めよう！！』

「ああ！！！」

ドライバーを一度閉じ、そして再度開くことで、必殺技のマキシマムドライブが発動する！！！

《エクストリーム！マキシマムドライブ！！！》

「『ハァッ！！！！』」

Wが跳びあがって両足をそろえてエネルギーを込める。
そしてアルティメットドーパントに向かってゆき、技を叫んでキックをぶち当てる！！！

「『ダブルエクストリーム！！！』」

「ゴガアアアアアアアアアアアア！！！！！」

そのキックがアルティメットドーパントに命中、爆発を起こしてWが着地する。
その断末魔からして、命中したことは確かだ。

「やったのか？」

照井と蒔風がWに駆けよって状況を聞く。
だが返ってきたのはフィリップの悔しそうな声だった。

『ダメだ・・・どうやら逃げられた。サイクロンの疾風でいなされて、メタルの硬度で耐え、ジョーカーの身体能力で逃げおおせたようだ。まさに究極の名に恥じないドーパントだ』

「感心してる場合か！！あれは厄介な敵だ・・・倒しきれなかったのは痛い。「奴」との戦いであれがいたんじゃどう仕様も・・・・・・」

蒔風がアルティメットドーパントを追おうと言う。

そこで

《イーター！！》

ドブッ！！ガチュガチュガチュ・・・・・・・・

だがそこまで言った蒔風の腹を蛇のようなモノが貫いて、言葉が止まる。

その蛇の先端の口が、食いちぎった蒔風のソレを食っていた。

「グ・・・・バッ・・・・・・・」

「蒔風！！！クソッ！！！！」

Wがその蛇の頭を専用武器プリズムビッカーで切り落とす。
ズルズルと触手のようなモノが抜かれ、その先には一人の男がいた。

「このメモリ、なかなかオレの肌に合うな。巡り合わせ、か」

そうつぶやく男の姿は何ら一般人と変わらない。
顔がこの青天の中、影に覆われて見えなくなっているのみ。

そしてその右腕だけが変貌しており、長い触手になっており、先端が蛇の口になっていた。

「ガブッ・・・てめ・・・・・」

「お前は!?」

「蒔風の話にあった「奴」・・・・でいいのかな?」

翔太郎が怒気をはらんだ言葉で低く唸って聞き、フィリップが敵意

ある眼差しを向けて言った。

その言葉に「奴」がきっちりとした声で答えた。

「怖い怖い・・・・・そう、その通りだよ。「欠片」がやられて、メモリブレイクされては元も子もないからな。回収しに来たってところなんだが・・・・・」

そういう「奴」の手には角のようにとがった形の「U」が描かれた赤いメモリが握られていた。

「このアルティメットメモリは使えるんでな。ついでにそいつもやっといたし、一石二鳥だな」

腹から血をこぼして倒れている蒔風を指さしながら「奴」がフッ、と笑う。

その前に照井、Wが蒔風を庇うように並んだ。

「このまま逃がすと思うのか?」

『こんなことをさせられて、黙っているほど、僕たちはお人好しじ

ゃないよ？』

「覚悟しやがれ。オオオオオッ！！！」

《アクセル！！》

「変・・・身！！！」《アクセル！！》

ダッ！！とWが駆けだす。
その後をアクセルに変身した照井が追い、二人同時に「奴」に攻撃を仕掛ける。

だが

「ドンドーーン！！！」

「グハッ！？」

「ぬおっ！？」

「奴」の拳によって左右に吹き飛ばされてしまう。
Wは剣と盾に分かれる武器プリズムビッカーで、アクセルはエンジンブレードで防御はしたが、それでも通ってきたダメージに驚愕する。

「なんだこの力は!?」

『これが「奴」・・・・蒔風を幾度も追い詰めた男・・・・・』

「そんなの関係ねえ。オレたちの依頼人がやられたんだ。尻込みすることはねえ!!!」

意気込む翔太郎だが、それにフィリップが待ったをかける。Wの身体がガクンと止まる。

『待つんだ翔太郎!!もし今ここで僕らがつかまったら「奴」の計算終了と共に殺される!!』

「チッ・・・ここは撤退するしかないのかよ・・・・・」

「どうした?来ないのか?来ないなら・・・行くぞ!!!」

「奴」が蛇のようになっている右腕をダブル、アクセルへと鞭のようにしならせて振るう。
その先端にはすでに蛇の頭が再生しており、ガードを怠れば以下にライダーの装甲でも容易に食いちぎられてしまうだろう。

三人の脳裏に食いちぎられた蒔風の腹部がよぎり、背筋がゾッ、と冷たくなる。

そして二人が戦慄した瞬間、「奴」が標的を変える。

「邪ァッ！！！！」

一直線に伸びた蛇の先には、腹に穴をあけた蒔風と、それを青い顔をして必死に介抱する亜樹子がいた。

このままでは二人が！！！

そう思ってWとアクセルが動き出すがもう遅い。
その蛇は蒔風の喉笛を噛み千切り、最悪、亜樹子ですらもその餌食になってしまいかもしれない

迫る蛇に亜樹子が目をつぶって蒔風に覆いかぶさる。

どんな状況でも依頼人だけは守る。

先代、鳴海荘吉から受け継がれた魂が、彼女をその場から動かさなかった。
蒔風は言わば依頼人だ。

「「奴」を倒すため協力してほしい」という依頼の

だから命をかけて依頼人を守る。

偉大な男の偉大な意思。

それすらをも喰おうとする蛇が亜樹子に迫りそして

それは亜樹子には届かなかった。

さらに言えば覆いかぶさって自分の下にいたはず蒔風がいない。

それもそのはず

蒔風は亜樹子を庇うように立ち上がって、蛇に向かって拳を突き出していた。

その腕はすっぽりと蛇に丸呑みにされ、牙が上腕に食い込んでいる。

腹からはだらだらと血液がこぼれており、左手で押えてなければ内臓がこぼれてしまうかもしてないほど重傷だった。

「こいつ・・・さすが翼人と言ったところか・・・その怪我ではまだ死ぬに死ねんか!!!!」

「奴」が蒔風に叫ぶ。

蛇の口はさっきから蒔風の右腕を引きちぎろうと顎がギリギリと食いこんできている。

当然、蒔風の腹のように軽く食いちぎれるかと思っていた「奴」だが、ここにきて蒔風の腕の筋肉が硬く隆起し、噛み千切れないのだ。

蒔風がグワッ!!と目を見開き、食われた右腕をグリングリン回して捻って蛇を引きちぎった。

「奴」がその反動に少しよろけ、ニヤリと笑う。

「ま、このくらいか・・・これ以上はお互いに不毛だしな。オレは計算に戻る。お前も早く治せよぉ？」

厭味ったらしい顔をして、「奴」が虚空に消える。

Wとアクセルが変身を解き、蒔風のところへとダッシュで駆けよる。

「おい！！意識はあるか！？返事をしろ！！！」

「これはひどい・・・早くしないと死んでしまう！！！」

翔太郎とフィリップが蒔風の怪我の現状を見て、照井に救急車を呼ぶように言う。

「早くしろ、急いで救急車を回せ！！！！なに？質問に答える暇はない！！！！一刻を争う！！！！！」

一瞬にして血みどろとなったその現場に、まもなく救急車が到着し、蒔風を搬送していく。

照井と翔太郎が同伴として乗り込み、フィリップがバイクを運転して後ろに亜樹子が乗ってついていく。

その亜樹子の手はさっきまで蒔風を介抱しようとしてついた血でべっとりだった。

もうそれは乾いていたし、タオルで拭いてしまったが、まだうっすらと残っている。

その手を見て、亜樹子が一人つぶやいた。

「私・・・こんなの聞いてないよ・・・・・・」

風都に風が吹き、黒い雲が空を覆っていく。

to be continued

W　～乗り越えるU／食った男～（後書き）

ア「ここにきての蒔風脱落？」

次回は病室編で誰も変身しませんよ？

ア「そういう発言は私のモノ！！！」

ではここでアルティメットドーパントの説明をしておきましょう。

「究極の記憶」を内包したメモリ。
究極とはすべてを超越するモノ。

故にこのメモリはスキャンした相手の力を次々に取り込み、その一段上の力を得るのです。

ア「じゃあ今のアルティメットドーパントは？」

基本的なパワーに、サイクロン以上の俊敏性、ジョーカー以上の身体能力、メタル以上の硬度を持ってます。

戦うたびに成長し、越えていくメモリ。それが究極。
姿は・・・まあお好きなように。基本的には本編のまんま。

ア「また厄介なもん考えましたね」

いやあそれほどでも。
書いてたらね、ポンと浮かんできたから出しました。
逆にワールドメモリは何も浮かばなかった。

ア「なんですかそれ」

自分でもわかんない

ア「まあ、さっきも言ってましたけど、次回、病室での決意」

ではまた次回

さあ、お前の罪を・・・・数えな・・・・・・

W　～重症のM／戦いへの覚悟～

風都総合病院

現在この病院で蒔風が手術を受けている。

「そういえば蒔風の身分証明って大丈夫なのか？」

「あいつのポケットに入っていた証明書のカードは受理されたからな」

「おそらく、世界が与えたんだろうね。その世界での役割のように」

廊下でそんなことを話し合う翔太郎たち。
廊下の先にある扉の上には「手術中」のランプが赤く灯っている。

「それにしても・・・・あのメモリはなんだ！！「アルティメット」に「イーター」だと！？」

「アルティメットメモリは相手を超越するメモリだ。さらにイータ

ーメモリは捕食者の記憶・・・・・「喰らう」という衝動に特化したメモリ・・・・どちらも厄介だよ」

「そんななかで・・・・・俺たちは勝てんのか?・・・・・・・・蒔風は大丈夫なのかよ」

暗く落ち込む一同。
と、そこでランプが消えて扉が開かれた。
出てきた医師に照井が様子を聞いた。

「!!!どうなんですか」

「なんとか持ちこたえました。ですが、彼は何者ですか?あれだけの傷で、まだ息があるなんて・・・・」

「悪いが・・・・質問はしないでくれ」

「まあ・・・わかりましたけど・・・・」

そう言って医師はその場を後にする。
蒔風は病室に運ばれ、済し崩し的に皆がそこに集まって会議を始めた。

「問題は「奴」がどの程度動くかだ」

「蒔風は確かあと四日、と言っていたな。ではそれくらいは大丈夫ということか？」

「だがそれでも「奴」は来た。いや、それだけじゃねえ。こうしている間にも「欠片」の方がメモリをスキャンしてるかもしれねえ」

翔太郎がガシガシと頭をイラついたようにかきむしる。

「奴」は、この世界を破壊しようと動いている。
この瞬間にもそれは進み、この町が脅威にさらされている事が、彼には我慢できないのだ。

「落ち着くんだ翔太郎。逆を言えば、君さえ守り通せれば、最悪世界は破壊されない」

「とにかく蒔風と左の身辺を守り通さなければならない」

「お前ら・・・だけどそのためにお前らが殺されちまったら・・・」

「死なないさ」

唐突に放たれたフィリップの覚悟に満ちた声が、暗かった病室の空気を塗り替える。

「絶対に死なないさ。僕はもう、死なない。僕に・・・僕達に未来を送ってくれた人たちのためにも、絶対に」

その言葉に皆の心が立ち上がる。

落ち込み、これからどうしようかという思いを払拭し、必ず勝つという覚悟。

それが復活した。

そこで照井の携帯が鳴る。

出てみると、それは部下からの連絡でドーパントが暴れているとの連絡だった。

「まさか・・・・！！！」

「いや、アルティメットドーパントではない、他のドーパントだ」

「こんな時にも事件は起こるか・・・・・しょーがねーなぁ！行くぜ？フィリップ！！」

翔太郎が帽子をキュッ、と直し、意気込んで病室を飛び出そうとする。

だがその首筋をフィリップが掴み、翔太郎の身体に急ブレーキがかかる

「グエェッ！！？？」

「待つんだ翔太郎。君が言ってそこで「奴」に捕まったらどうする？もちろん可能性は低いが、ゼロじゃない。ここは僕が行くよ」

そう言って羽織った上着をバサッ、と直して、扉に手をかけながら言うフィリップ。

だがそんなフィリップに亜樹子が言葉を返した。

「フィリップ君、翔太郎君、気絶してる」

「・・・・・・・・行こう!!!翔太郎!!!」

「えっ!?（裏声で）お、おう!?あいぼー!!!」

翔太郎の手首をプラプラさせて亜樹子が裏声で答える。

「オレも行こう。もし「奴」が来たら一人では無理だろう」

「頼もう。アキちゃん、何かあったらすぐに連絡をしてくれ」

そしてフィリップは行ってくるよ、と言い残して、飛び出して行ってしまった。
照井もその後を追う様に病室から出て現場に急行する。

「ふう・・・・・なんだか慌ただしいなぁ～～～」

「ん・・・・んが?おい亜樹子、フィリップ達はどーした?」

「ドーパントが暴れてるから、そっちに行ったよ」

翔太郎が目を覚まし、それを亜樹子に訊くと、ダブルドライバーを装着して待機しておく。

「んごぁ・・・・・・ウォが？」

そこで蒔風も目を覚ます。
起き上がろうとして、そのとたん腹部に激痛が走って腹を押さえる。

「蒔風、目が覚めたか！」

「だ、大丈夫!?ゆっくりしてないと!!」

「あ、ああ・・・・あの野郎・・・オレの事まで食いやがって・・・・」

蒔風が二ヘラと笑いながら発言する。
その言葉で翔太郎と亜樹子がその瞬間の事を思い出し、ウゲェ、という顔をした。

「やめてやめて、痛そうな話」

「あ～～～～、そういう話はパスだぜ？」

「ッたく・・・治るのに三日はかかるか・・・・・いや、微妙に間に合わないかもな」

腹を押さえながら蒔風が言う。
その発言に、亜樹子がびっくりしていた。

「そんなに早く治るの！？」

「なんとかな。戦闘がきつくなるくらいか。万全ではないけど、贅沢はいってらんねえしな」

「「奴」って・・・だれなの？全然顔見えなかったっけど」

その問いに蒔風がう～～ん・・・と唸ってから、さぁ？と首をかしげる。

「だがまあ、今回は記憶を扱われずに済んだな」

「「記憶？」」

「蒔風、記憶を扱うって何だ？」

蒔風が翔太郎の問いに答える。
「奴」の「記憶」活用方を話してから、だけどな、と話し始める。

「この世界では「記憶」は形に残せる。それがガイアメモリだ。そしてそういった形になって、過去のメモリは破壊されている。この世界で使うと言ったら・・・ん、エターナルだな。だがそのメモリはブレイクされているし、その変身者は二重に死人だ。そんなもん引っ張り出すには時間がかかるし面倒臭い。そんなことするなら最初からメモリ使った方がいいし、現に超厄介になってるしな」

なるほど～～とうなづく翔太郎に、首をひねる亜樹子。

と、そこで翔太郎がフィリップが敵と遭遇したことを感知する。

「んじゃ、行ってくるぜ」《ジョーカー！！》

「がんばれ」

「負けんなよぉ？」

「おう。変身！！（ガシュウ！！）」

ジョーカーメモリをドライバーに挿入し、それがフィリップの方に転送される。
それと同時に翔太郎の意識も飛び、身体が倒れて亜樹子が支える。
それを椅子にもたれさせ、ふう、とひと段落する。

「大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。あいつらは二人で一人の仮面ライダー。この町のヒーローだ。やられることはあるめえよ」

病室から見える街。
その街の空には暗雲が立ち込めている。

だが、街のある場所で一陣の風が吹き、雲がゆっくりと流れを変える。

そしてそれから三日、蒔風は探偵事務所に居候した。
病院は一日後に退院し、残りは事務所で治療に専念した。

「奴」の計算の終わるであろう四日目。
その日までに腹を塞いで治さなければならない。

借りれる力は借りていった。

そして蒔風の腹は、なんとかではあるが塞がった。
いかんせん血液量が足りず、体力も万全ではないが、戦闘に支障はないだろう。

そしてこの間に何もしていなかったわけではない。

すでに行き先はわかっている。

あとは向かうだけ、そこに敵がいる。

その空は、三日前から晴れ渡っていた。

to be continued

W ～重症のM／戦いへの覚悟～（後書き）

アリス「うわ～～～。中身スカスカ」

言わないで・・・・・・

その代わり次回はゲキアツだから！！！

ア「ついにWと蒔風がやるのか！？」

いや、どっちかっつーと照井の方が熱い。

ア「えええええええええええ！？」

いや、蒔風は治っても身体万全じゃないし。

ア「そういえばですね、思ったのですが」

はいはい

ア「「マジ恋」の百代の力借りれば、瞬間回復でどうにかなるんじゃ？」

はいキタこの問答。

蒔風が借りているのはそのシステムや技術（技ではなく、武器や科学としての）です。
だから彼が百代の力を借りてもできるのは「気の扱い」のみなんです。

それを練って体力回復なんてことは蒔風にはできません。

ライダーの力借りても、そのまんまに戦うんじゃなくて、蒔風風に戦ってるでしょ？

ア「それにしてはオリジナルに近いですけど・・・・」

それは彼の趣味。
だから瞬間回復できないんです。

ま、瞬間は無理でもほんの少しずつなら何とかなりますから、それを含めて四日の内になんとかですね。

ア「そういうことですか。次回、「奴」と戦う・・・・何秒前でしたっけ？」

しらん！！
ではまた次回

さぁ、お前の罪を数えろ！！！

W　～この街のW／これで決まりだ～

風都の街の一角にある「かもめビリヤード場」二階部分。
そこに鳴海探偵事務所はある。

そこのなかで、四人の男が身支度をしている。

一人は帽子をかぶり直し
一人は本を閉じて机に置き
一人はコーヒーの入ったカップを飲み干し
一人は腹部の包帯をチェックして立ち上がった。

「行くぞ」

誰ともなくその言葉が発せられ、開け放たれた扉に向かって歩いていく。
その背を見つめ、送り出すのは一人の女。

彼らの身を誰よりも案じ、戦いの場へと送りだした。

「みんな・・・・帰ってきてね・・・・・・」

そうつぶやいて、椅子に座ろうとする探偵事務所二代目所長。

そしてそれから十分後、事務書の扉が叩かれる。

ゆっくりと開かれたその扉は、彼女を置いてけぼりにはさせてくれなかった。

ーーー

スクラップを適当に組み上げました的な感じの機械がそこに一台置かれていた。
機械がスクラップなら建物もスクラップだ。
元はナニカの製造工場だったようで、今は廃棄され、ガラクタしか転がっていない。

意気揚々とその上からメモリを手に取った「奴」が、拳を振りおろしてその機械を粉砕し、バチバチと火花を弾けさせて、機械が沈黙する。

そしてその建物から出てきて程なくする。

山から下りようとしている間に、「奴」の足が止まった。

「ほう・・・・・ここを嗅ぎつけてきたか。探偵!!!!」

「この街はオレの庭だ。わからないことなんざ、ねえよ」

その場に翔太郎、フィリップ、照井が立っていた。
山の中腹辺りの開けた場所だ。そしてここは、Wがミュージアム最後の敵と戦った場所でもある。

「奴」は感心したような声を出しながら、探偵モノの犯人がよく言う言葉を言った。

「では聞かせてくれ。なぜここがわかった」

「簡単さ。君の持つそのガイアメモリ、特にアルティメットは例外はあれど相手のどんな能力でも取り込む。だがそんなものが簡単に出来るわけなどないのさ」

「必ず微調整が必要になってくる。そう踏んだ俺たちは、この街に残る「ミュージアム」関連の建物を虱潰しに当たった」

「で、ここに行きついたってわけだ。もちろん、生半可なことじゃなかったぜ・・・蒔風のアドバイスとフィリップの検索、警察が押収した情報に、オレの土地勘。すべてがなけりゃ、ここにはこれ

なかった」

「じゃ、あいつは？」

「オレを呼んだか？」

蒔風が「奴」の前に現れる。
その身体はしっかりと二本の足で立っていた。

「全く・・・腹食い破るとはやってくれたな。完治できなかったぞコノヤロー」

「ふん・・・戦闘に差し支えないくせによく言う」

「まあな」

「とにかく、だ。これ以上この街に手出しはさせない」

「そしてこの街を守る、仮面ライダーにも、だ」

「ハードに行こうぜ？翔太郎！！」

「ああ！！いくぜ？相棒！！」

「準備はいいよ、翔太郎」

「覚悟を決めろ・・・・」

《サイクロン！》

《ジョーカー！！》

《アクセル！》

「「変身！！！」」

「変・・・・・身！！！！！」

《サイクロン！ジョーカー！！》

《アクセル！》

ドンドンドン！！！！！！！

フィリップの身体が崩れ、岩場に隠れる。

そしてその場に、三人が立つ。

W、アクセル、蒔風が「奴」を、「奴」の罪を糾弾するように睨みつける。

「さあぁ！！！・・・・振りきるぜ」

「やられた分は返させてもらう」

『行くよ、翔太郎』

「ああ・・・・・・」

「『さぁ、お前の罪を、数えろ！！！』」

その言葉に、「奴」がポケーッとして、それからハッとして指を折って数え始めた。

「ん～～っとね・・・・・・両の指程度？」

「それだけあれば十分だッ！！！」

その言葉にまずアクセルが飛び出す。

だが「奴」がアクセルに手の平を向ける。

その行動に手の方へとアクセルの意識が向く。
だが「奴」がとった行動は足にあった。

足元の石を、地面ごと抉って蹴り飛ばした。
散弾のように飛び散るその攻撃に、アクセルが顔を腕で覆い、その脚が止まる。

「貴様・・・余計なことはするな・・・・・」

その言葉に「奴」がふふふ、とニヤつく。
手をいじりながらアクセルの方を見て、両手を上にあげる。

その手に握られているのはイーターメモリ。
だが、それ一本しかない。

「!?貴様、もう一本はどうした!?」

アクセルが怒鳴って聞く。
それに答えるように「奴」は、指を鳴らした。

ドゴン!!!!

すると上から一本の丸太が落ちてきて地面に突き刺さり、「奴」の手にもアルティメットメモリが同じように落ちてきてその手に収まる。

土煙で「奴」の姿が一瞬消え、それがすぐに風に洗われる。
そしてそこにあった丸太には、ひとりの人間が括りつけられていた。

「なに!?」

『あれは・・・・・・』

「所長!?」

そう、そこに括りつけられていたのは鳴海亜樹子であった。
意識がないようで、その首はぐったりとうな垂れている。

「てめぇ・・・亜樹子に何をした!!!」

「なにもしてないさぁ。ただな、置き去りはかわいそうだと（ズッ）・・・・思ってな!!!（ブォン!!!!!）」

「奴」がその体から「欠片」を出し、丸太を運び攫わせる。
それを目で追い、アクセルが心底憎そうな声を出してそれを追う。

「くそ！！！！！！！逃がさんッ！！！！」

アクセルがバイクフォームに変形し、その後を追う。
さらにWと蒔風も駆けだそうとするが、その道を「奴」が阻む。

「行かせんよ」

「くそ・・・照井と俺らを分断させる為か・・・・・」

「しょうがない、俺らでやるぞ」

「でもあいつの相手は！！！」

『翔太郎。信じるんだ。彼も、この街の仮面ライダーだ』

その言葉に無言で答える翔太郎。

そして頭をあげ、蒔風と共に相手を見据える

「話は終わったか？始めようか」

「やらせねえよ。この街は」

『僕達が守る』

「よし・・・気合入れてくぞ！！！！」

「『応！！！！』」

Wと蒔風が駆けだす。

Wの右パンチに蒔風の右回し蹴り。

だが「奴」はここであえて蒔風のキックを無視した。

脇腹に蒔風の蹴りが命中し、「奴」の息が吐き出される。

それでも「奴」は一向に止まらず、ズゴッ！！と地面に足をめり込ませて、Wの顔面に拳を鋭く突き出した。
Wのパンチを頬から紙一重でかわし、その拳がWのマスクを破壊せんと迫る。

「！？　つぉおアッ！！！！！」

そこで蒔風が左腕を振り上げてその拳を阻害する。
拳はそれたが、それはWの右半分の顔をかすりゆく。

そしてWの視界が回転した。
頬を拳が下から上にかすっただけで、Wの身体が風車のように幾度も回転した。

一瞬で視界を奪われたWの回転の中心に、さらに拳を振るう「奴」
それを蒔風が真っ向から両手の手の平で受け、弾くように両腕を開いた。

バチィッ！！！！と信じられないほど鋭い音が鳴って、二人の身体が後方へと吹き飛び、巨大な岩にぶつかる。

Wがフラフラと、蒔風が手をプラプラと振りながら立ち上がって言った。

「野郎・・・・ダメージ無視しやがった・・・・・」
『そのまま押してはいけないのかい？』
「「奴」の方が基本値は高い。押し切るのはよほど調子のいい時か、「奴」を弱らせた時だけだ」

「奴」が地面に唾を吐きながらこちらに向かってくる。
それに対してうんざりしたように蒔風が叫んで走った。

「いちいちいちいち・・・厄介なんだよお前は！！！！！」

ドゴウ！！！！

蒔風の拳が放たれる。
だが今度は顔面に放たれたそれを「奴」は思いっきりのけ反って避ける。

《サイクロン！トリガー！！》

そしてその空を見上げる「奴」の視界に、緑と青に半身色分けされたライダーの姿が現れる。

サイクロンによって連射が可能となったトリガーマグナムを「奴」に放ち、その銃弾が「奴」の上半身に向かってくる。
だが「奴」は蒔風の襟を掴んで自分の身体にかぶせてそれをガードしようとする。

しかし、蒔風もそのまま受けるほど迂闊ではない。
即座に身を捻って「奴」と上下を入れ替わり、蒔風が下、「奴」が上となり、向き合って地面に倒れる。

「奴」の背中に風の弾丸が十五発程命中し、そこから黒い影が血のように散るが、「奴」はそんなことはお構いなしに蒔風の頭を掴んで、思いっきり頭を振りかぶって頭突きをかます。

ゴッ！！！ガゴンっ！！！

まず「奴」の額が蒔風の頭に当たり、そしてその勢いでさらに地面を衝突する。
その衝撃は果てしないものである。

ガゴバンッ！！！！！！

蒔風の頭を中心に地面が窪み、ひび割れる。

二段構えの衝撃に、蒔風の頭蓋骨の中が揺れ、意識を一瞬で脳味噌から消失させる。

《ヒート！トリガー！！》

と、そこに蒔風の頭を跨ぐようにWが着地し、「奴」の額に向けて高熱の弾丸をぶっ放した。

「奴」は瞬時に手のひらでそれを受けたが、それでも弾丸に押されてその体が後方に押し出される。

その「奴」にWは追撃をやめない。

炎の銃弾を放ちながらトリガーメモリを抜き、マグナムにセットして、マキシマムドライブを発動させる。

《トリガー！！マキシマムドライブ！！》

「『トリガーエクスプロージョン！！』」

ドゴォ！！！！！

炎の柱のような砲撃が放たれ、「奴」に迫る。
「奴」も波動砲を撃ってそれに対抗する。

砲撃と砲撃とがぶつかり合って、中間点でせめぎあう。
そこに蒔風が頭を振って立ち上がり、腕を構えて竜を放つ！！！

「土惺・・・竜！！！！！」

竜の形となった地面が空中でくだを巻き、「奴」に向かって突進する。
砲撃を撃っていた「奴」はそれを頭上からくらって、さらにマキシマムドライブで爆発が起こる。

「やったのか？」

「まだだろうな。だが、確実にダメージは・・・・・・」

《イーター！！！》

「んなっ！？」

ガイアウィスパーが鳴り、「奴」をやったはずの炎がどんどん中心部分に集まって吸収されていく。

そしてすべてが食われ、そこにはイーターメモリによって右腕が変わった「奴」がいた。

「腹いっぱいだな・・・っと！！！！」

そしてその蛇のような右腕を真っ直ぐこちらに向け、そこから先ほどWが放った砲撃と同じモノが放たれた。

「ッ！！！」

「うぉお！！！！！」

Wと蒔風が転がってそれを避ける。
だがその砲撃は途切れることなく、まるで図太いレーザーのように大地を焼き切ってWに迫る。

『翔太郎！！守りを固めろ！！』

「わかっ・・・てる！！！！！」

《ヒート！メタル！！》

Wがヒートメタルに変わる。
だがレーザーの威力を見るに、おそらくこれでも耐えられない！！！

「だアぁッ！！！！」

そこに蒔風が割って入る。
その手には超圧縮された獄炎弾があり、横に薙がれたレーザーとWの間に立ち、両手でそれを押しつける。

一瞬でそれが膨れ上がり、レーザーを押し返すが、それと同時に蒔風の足元も後退する。
そして二、三秒の膠着から、一気に獄炎が爆発し、Wと蒔風が吹っ飛ぶ。

「ぐっ・・・おい、蒔風！！！」

「ぐっ、がぁぁぁぁ・・・・・・・おグッ・・・・っは！！・・・・・・・・」

蒔風がWに庇われる形で地面に落ち、胸を押さえて悶絶する。
そこに「奴」がツカツカと迫ってくる。

「イーターメモリはいかなるものをも食らう。そしてそれを使用者のレベルに合わせて吐き出すことも可能なのさ」

そう、それがこのメモリ、「捕食者の記憶」のイーターメモリ。

恐ろしいのはその顎や牙だけではない。
飲み込むというその特性こそ真骨頂。

「だから・・・どうした!!!」

蒔風が痛みを振りきって立ち上がる。
Wも蒔風に並び、「奴」を睨みつける。

だがその息は荒く、とても善戦できる状態じゃない。

それでも蒔風は言う。

必ず勝つ、と

絶対なんてものがどこの世界にも存在しない事を知りながらも、彼は言う。

必ず成し遂げて見せるという、覚悟を込めて。

「てめえには前にも言ったろうが・・・てめえじゃ勝因にはならない。たとえどんな力を持っても、お前は勝因を手に入れられない」

「主人公が勝つってか?それが一番ムカつくんだよ・・・主人公だから大丈夫だなんて戯言がよ!!!」

「主人公・・・だからじゃない。オレだからだ・・・・・・オレがいる事が勝因だ。主人公なんざ、知った事か!!!!!」

そこまで言い切った蒔風がWにそっと耳打ちする。

「なんとかしてこの状況を打破する。時間を稼いでくれるか？」

「オーケ。やってやる」

『やれやれ、今回の依頼人は我がままだ』

「うるせぇ」

ドンッ！！！！

Wがメタルシャフトを構えて走り出す。

そして蒔風が自身の体力回復に専念し始めた。

――――――

「ハァァ！！！！！」

ザシッ！！！ズズン！！！

時間は巻き戻って一方アクセル。
結構離れた場所にまで来てしまっており、そこは彼が宿命を果たした場所と酷似していた。

バイクフォームで一気にジャンプし、身体を回転させてエンジンブレードを握る。
亜樹子の括りつけられた丸太を担いだ「欠片」の背をブレードで切り、ついに追いつく。

落ちた丸太をキャッチし、縄を斬って亜樹子を解放する。
アクセルが名前を呼んで、亜樹子が目を覚ます。

「え？・・・・・ここどこ？あたし聞いてない！」

「大丈夫か、所長」

「竜君！？」

「隠れていろ。説明はあとでしてやる」

アクセルが亜樹子の背を押して、その場から去らせる。
その間に「欠片」がメモリを挿入し、アルティメットドーパントへと変貌した。

「今度こそ逃がさん・・・・・」

「ブシュウウウウウウウウウウウウ・・・・・・・・・・」

「さあぁ！！・・・・振り斬るぜ・・・・・・」

ドンッ！！！とアクセルが一気に踏み出し、アルティメットドーパントへと迫る。

（スキャンされては終わり・・・・ということは、スキャンされる前に倒せばいい事！！！！）

《アクセル！！マキシマムドライブ！！》

アクセルがマキシマムドライブを発動させ、後ろ飛び回し蹴り「アクセルグランツァー」を放つ。

それが止められたことは一度もない。
アクセルはメモリを一つしか持たない代わりに、そのメモリの力を最大限に活用できる。
その威力は瞬間的にWのそれを越える！！！！

「オォオァ！！！！！」

ドッ、ガァン！！！！！

だが

それは止められた。

アルティメットドーパントの腕にギリギリと止められ、その首がキリキリとアクセルの方を向く。

ピーーーーッ!!!!!

そして赤い光がアクセルをスキャンし、その脚を掴んで投げ飛ばした。

「グアっ!!!!」

「竜君!!!!」

倒れるアクセルに亜樹子が声をかける。
だがアクセルは来るなと手の平を亜樹子に向けながら立ち上がる。

「そうか・・・・貴様はメタルと同等ではなく、メタル以上の硬度を持っていたんだったな・・・・・・」

照井が絶望的な状況を反芻する。

今この場で戦えるのは自分一人。

相手はサイクロン、ジョーカー、メタル、アクセルの力を取り込んだアルティメットドーパント。

しかも相手に対抗するにはエクストリームの力が必要になってくる。

だが今Wは「奴」の相手をしているだろう。

結論として、照井の思考に勝利という文字はどうしても浮かんでこなかった。

しかし、それでも

《エンジン！！マキシマムドライブ！！》

「ハアアアアア！！！！」

ドゴン、ドゴン、ドゴォン！！！！！！！！

アルティメットドーパントをエンジンブレードによるマキシマムドライブ「エーススラッシャー」で「A」の字に斬る。
無論、それでもメモリブレイクはされず、簡単にはじき返されてしまう。

「チッ！！やはり効かんか」

もうおわりか、と言う様にアルティメットドーパントが拳を握りしめてアクセルに迫り、その拳を振るう。
アクセルがそれをかわそうとするが、驚異の身体能力でその拳が軌道を変え、腹部のど真ん中、鳩尾に命中してその体が吹き飛ぶ。

「グボッ・・・ガッ」

ゴン！！ゴガン！！！ズシャッ！！！！

地面を削りながらアクセルが吹き飛び、その装甲にひびが入って火花が散る。

アルティメットドーパントはもはや単純な力では「奴」をも凌駕している。
全身から疾風を噴き出し、炎をまき散らして、硬質化した拳をガンガンと鳴らしている。

元が「奴」の「欠片」で、そこにあれだけの性能が降り混ざっては一撃の大きな技ではもはや倒せない。

無論、照井もその考えに至っている。
だがどうしてもそれになれない。

倒すには超高速の連続打撃による一点集中攻撃。
それがわかっていて、彼にはその手段があっても、それができない。

それになるということはこの装甲を脱ぎ捨て、速さにすべてを捧げなければならない。
しかしそこまで薄くなった装甲でもしも一撃でも食らえば、今以上の衝撃が身体を襲うだろう。

最悪、身体を貫き、そして・・・・・・

照井の脳裏に蒔風の貫かれた腹部が思い出される。

それに恐怖することは恥ではない。
しかし、照井はそんな自分が許せなかった。

「おおおお

にガスッ、と何かが当たった。

それは拳ほどの大きさをした石だった。
アルティメットドーパントが飛んできた方向を見ると、そこにはその場から今にも逃げ出しそうな感じで、それでいて絶対に逃げないという覚悟がある顔をした亜樹子だった。

亜樹子は何も言わない。
きっと言おうとしても言葉など出ないだろう。

だが、それでも

彼女の意思は、言葉に出さずとも伝わるものだった。
否、言葉にしないからこそ伝わる想い。

それは言葉にした瞬間に、陳腐な物に聞こえてしまう、そんな思い。

それを見たアルティメットドーパントがゴトンッ、とアクセルを手放し、亜樹子へと向かう。

亜樹子はその場から一歩たりとも下がらず、アルティメットドーパントを見据えて立つ。

そしてそいつが目の前に来て、亜樹子の姿がその影に包まれる。

ゴォウ！！！と拳が降りあげられて、亜樹子が目を瞑る。

そしてそれが振り下ろされて

「貴様、何をしている」

その腕をアクセルが後ろから掴んで止めていた。

「ぬ、オオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

アルティメットドーパントの身体を思いっきり振りかぶって投げ飛ばすアクセル。

アルティメットドーパントは全くダメージを受けずに着地する。

「欠片」は痛みなど感じない。
ただ、怯みはするだけである。

そしてもしアルティメットドーパントが生身の人間が使用者だったら、その右腕に痛みを感じただろう。

「竜・・・君？」

「心配をかけたな、所長。だがもう大丈夫だ」

「だ、大丈夫って・・・・」

「頭から少し血が抜けてな、スッキリした。もうゴタゴタ悩まん」

そう言ってアルティメットドーパントに向かうアクセル。
その背中に亜樹子が叫んだ。

「待ってよ！！あのドーパントって竜君以上の力を持ってるんでしょ！？だったらここで引きつけて、時間稼ぎをすればいいじゃん！！倒さなくっても、ここに引きつけているだけでも十分だよ！！！」

亜樹子の言うことはもっともである。
そして蒔風たちが「奴」を倒せば、おそらくはこの欠片も消えるだろう。

だが、もしそうならなかったら？
そして蒔風たちが負傷していたら？

ならば自分がやるしかない。

そしてそれ以上に

「所長・・・・・・オレがいつも変身するとき、なんて言ってるか知っているだろう」

――――さあ、振りきるぜ――――

そう、それは彼の覚悟だった。

彼は振りきる。
逃げる犯罪者たちを追って、捕まえるためにスピードを

彼は振りきる。
敵を倒すためではなく、街を守るために、その憎しみを

そして何より彼が振りきるのは

「今までの・・・・自分自身ですらをも、だ」

そしてその手には「挑戦」のメモリが

「さぁ・・・・《トライアル！！》（ガコッ、プーッ）すべて・・・・（プーッ）・・・・・振りきるぜ！！！！」プーッ・・・・プァン！！！！！

《トライアル！！！》

アクセルの装甲が一瞬黄色に変わり、そして装甲がはじけ飛んで、
その身が一気に青くなる。

仮面ライダーアクセルトライアル

その名の意味は、挑戦。
常に挑戦するその対象は、いつだって自分自身である！！！！

「ガアア・・・ガアッ！！！」

アルティメットドーパントが即座にアクセルトライアルの力をスキャンする。
それを見た亜樹子が絶望的な声を上げる。

これでアルティメットドーパントはトライアル以上の速度を得た。
トライアルの強みはその速度で攻撃をかわし、一気に攻撃を当てて敵を粉砕することにある。
だが相手がそれ以上の速度だったら、それは意味を為さない。

だがそれを知りながら、アクセルトライアルが悠然とアルティメットドーパントに迫っていく。
アクセルトライアルがトライアルメモリを抜き、宙に放り投げる。
それに合わせてアルティメットドーパントも超加速を開始する

そして、始まった。

「ガアアアアアアアアアア！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！」

アクセルトライアルの超高速連続キック、マシンガンスパイクとアルティメットドーパントの超高速攻撃がぶつかり合う。

アクセルトライアルの一撃よりもアルティメットドーパントの一撃の方が重い。

だが、それでもアクセルトライアルはアルティメットドーパントの攻撃と打ち合っていた。

なぜか。

そんなことは決まりきっている。

照井竜はただ、一撃で無理なら多撃で迎え撃つという、トライアルの基本的動作をおこなうだけだ。

「オレは・・・・もう失うわけにはいかない！！！！！」

ガン！！

「そのために・・・・・過去の自分を、さっきまでのオレを！！！！！」

ガンガンガンドドッガンガンガンドドドッガンドドドドドッガンガンガンドドドドドドッ！！

「すべて・・・・・振りきるぜェッ！！！！！！」

ドドド

《トライアル！！マキシマムドライブ！！！》

ギィーーーーーーーーーン！！！！！

「ご、ガ！ゴガアアアアアアアアアアア！！！！」

「絶望までの、タイムだ！！！！」

それはアクセルトライアル最速の数字。
彼はこの戦いの内に乗り越えた。

そもそも

彼は最初、トライアルを使った時の訓練で、十秒の壁を越え切るこ

とはできなかった。
だがしかし、彼は宿命の戦いの内にそれを越え、トライアルを使いこなしたのだ。

彼はできることをただやったのみ。
だがそれの何と力強いことか。

それを表すかのように、一点に集中された攻撃の破壊力が一気に解放され、アルティメットドーパントの全身に「T」の字のエネルギーが炸裂し、その身が膨れ、爆発する！！！！！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！

爆風が周囲を襲い、飛んできた砂に亜樹子が目をつぶる。
そして眼を開けた時、そこには見慣れたあの刑事の顔があった。

「怪我はないか?所長」

「竜君の方が怪我だらけじゃん」

「そうか・・・・そうだな。早く左たちの所へ・・・・・」

「そ、そうだね!!急ごう!!!」

照井が亜樹子の肩を借りながら歩いていく。
仲間の戦っているその場所に。

ーーー

ところ戻って蒔風たち。

「ははははははっ！！！」

「グッ・・・・・」

Wが時間稼ぎのために戦ってからまだ一分と数秒しか経ってない。

形態はヒートメタル。
その手にメタルシャフトを握っている。

「ハァッ！！！」

Wがシャフトを振るい、「奴」に攻撃を放つ。

ギャン！！！

だがそれはそんな効果音を放って「奴」を素通りしてしまう。

否、素通りではない。Wがシャフトの先端を見る。
そこにはあったはずの先端は無く、その先は「奴」の蛇の口内にあった。

「な!?」

「は、マズ・・・・・フンッ!!!」

「奴」が噛み砕いたそれを弾丸のように吐き出し、それがWを襲う。

「来た・・・・・・行けるぞ翔太郎!!!!!開翼!!!!」

「やっとかよ!!!!」

そこでついに翼人、蒔風が動き出す。
獅子天麟を盾のように構え、その弾丸からWを守る。

「射撃援護を頼む。いくぞコラァ!!!!」

「任せろ!」

《ルナ！トリガー！！》

蒔風が突っ込み、その背後からWルナトリガーが銃弾を放つ。
その銃弾はルナの特性によってホーミング弾となり、蒔風を避けて飛んで行き、的確に「奴」に命中する。

「ぬっ・・・逃げやがって・・・・・」

その軌道では「奴」もすべての弾丸を追い切れず、放たれた弾丸の9割をくらってしまう。
それでも蛇の口からは食った1割を放ち、蒔風がそれを弾き消していく。

そして蒔風が「奴」の腹部に獅子天麟を横薙ぎにぶった切ろうと振るう。
だが、それでも「奴」は引かない。

「奴」の上半身からワニの顎のようなモノが出てきて、蒔風を食い散らかそうとその牙を閉じる。

しかし

「グあああああああッ！？」

叫びをあげたのは「奴」だ。

蒔風は四本組み上げた風林火山を「奴」のその大きく開かれたワニの顎に向かって片手で二本、縦に突っ込んでいた。
それを噛もうとすれば当然、上顎と下顎を同時に貫かれ、もはやその口は使い物にならなくなる。

そしてその風林火山の内側に獅子天麟を通し、「奴」の腹部を切り裂いた。

「ごブッ・・・・・バアアアアアアアッ！！？？」

「胃袋斬られたイーター・・・・食っても喰ってもでてくる出てくる」

「ガブッ・・・・デメエ〝ェァアアアアア！！！！！」

「こっちも腹貫かれてんだ。それくらい大目に見ろ」

その「奴」を蒔風が風林火山を掴んで蹴り飛ばし、ワニの顎を引き裂く。

そしてWと蒔風が互いに寄る。
そして肩にポン、と手を置いて蒔風が言った。

「さ、言ってやれ」

「おう・・・・教えてやろうぜ、フィリップ！」

『ああ、何度でも言ってやるさ』

それは彼らの決め台詞。
この街を穢す犯罪者に、いつだって語られるその言葉。

ガイアメモリに溺れた彼らに、自らが犯した罪を自覚させるため

そしてその罪を忘れないために、何度でも、いくらでもいい放つ。

その意思に反応してか、エクストリームメモリが飛んで来て、ダブルドライバーに装着、自動展開される！！！

「『さぁ（ガシュウ！）お前の罪を（エクストリーム！！）・・・・・数えろ！！！』」

その発言に、「奴」ではなく蒔風が答えた。

「あいつの罪の数？・・・・ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫと同じ数じゃねえのか？」

『それはたくさんありそうだね』

「だったらその分ぶちのめす！！！」

『ま、それで許されるわけもないけどね』

「たしかにｗｗｗ」

「オレが罪なら・・・てめえらみんな罪人だぁ！！！！」

「うっせたーこ。お前の願いは確かに順当さ。だがな、そこに誰かを殺すなんて項目があったら、それだけでアウトなんだよ！！！いくぜ！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　Ｗ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！

その発動と共に、Ｗの基本の６メモリが空中に飛び出して、クルクルと回り出す。
ドンドンドンドン回転数を上げ、それが各色の球体にまで見えてきたところで、それが鳴り響いた。

《サイクロン！》
《ジョーカー！！》
《ヒート！》　《メタル！！》
《ルナ！》
《トリガー！！》

そのメモリを中心に、人の形が成っていく。
それは各メモリの色をしたW。
しかも単色だ。

六色のライダーに、本家本元のWエクストリーム。

そして六体が一斉に駆け出し、「奴」に攻撃を仕掛けていった。

まず、ルナが腕を鞭のように伸ばして「奴」に巻きつかせて、動きを止める。
その「奴」にメタルがシャフトで殴り上げ、さらにトリガーが追撃の銃弾を放ってさらに上へと押し上げられる「奴」

上空高く上がった「奴」に、サイクロンの手にジョーカーとヒートが乗り、疾風の力を身に受けて、その「奴」にまで到達する。
そして「奴」に二人同時にアッパーをぶちかまし、さらなる上空へと突きあげる！！！！

「さ、追いついてぶちのめせ！！！！」

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　Ｗ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

「ハアアアアアアアアアアア！！！！！！アぁッ！！！！！！！」

Ｗが飛び出し、上空高くにいる「奴」に向かって上昇していく。
そのＷの周囲を、風が覆っていった。

それはこの街の風、街の想い。

それを守護する仮面の戦士に、さらなる力が与えられる！！！

Ｗサイクロンジョーカーエクストリームの身体中央を走るクリスタルサーバーの色が黄金に変わり、街のシンボルである風都タワーの風車の羽を模した３対の翼で、自由自在に空を飛翔する事が可能となったその姿。

仮面ライダーWサイクロンジョーカーゴールドエクストリームが顕現する！！！！！

翼によってさらに飛翔し、Wが次々とマキシマムドライブを溜めていく！！！

《サイクロン！マキシマムドライブ！！》
《ジョーカー！マキシマムドライブ！！》
《ヒート！マキシマムドライブ！！》
《メタル！マキシマムドライブ！！》
《ルナ！マキシマムドライブ！！》
《トリガー！！マキシマムドライブ！！》

立て続けに腰のマキシマムスロットにメモリを挿入しては抜き放っていく。
そして最後に、「奴」のほんの少し上まで到達したダブルが、エクストリームメモリを閉じ、開く！！！

《エクストリーム！！！マキシマムドライブ！！！！！》

「ゴッがアアアアアアアア！！！！！！！！」

「『ダブル！！リミットブレイカー！！！！！』」

ドッ！！！！ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！

上空からWと、その脚の先端にいる「奴」が共に落ちてくる。
落ちながらもWはさらに羽ばたき、その速度を上げていく！！！！

「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

『はあああああああああああああああ！！！！！！！』

ゴッ、ドゴオオオ

「あんだけ療養中に聞いといてまだあるのか！？」

「大丈夫か！！左、フィリップ、蒔風！！！」

そこに照井と亜樹子が到着する。

「やったのか？」

「ああ、きっかりとな」

「そうか・・・・・よかった」

「そうだ、この街に来たんだ。名物の風都ラーメン、略して風麺、食いに行こうぜ！！！」

「そうだな・・・今回は時間もある。少しのんびりしていくか」

「時間ってどれくらいだい？」

「そうさね。大体二時間」

「だったら早く行こうぜ！！！！」

こうして蒔風達が街に繰り出す。

この世界を出る頃には、蒔風は腹いっぱいだった。

「そろそろ時間だ」

「またな」

「会えるかどうかはわからないけどな。じゃあな、ハーフボイルド」

「ハードだ！！！」

「はっはっは。でもな、みんなを救うって想いは、実は結構ハードなんだぜ？」

「ん？・・・そうだな・・・そうだよ！！オレはハードボイルドでいいじゃねーか！！！！」

「お前はハーフだけどな」

「あぁ！？このやろう！！！！」

「逃げろや逃げろ、と。じゃね～～～」

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　Ｗ］

そうしてこの街から蒔風が去る。

今日も街にはいい風が吹く。

幸も不幸も、一緒に運んで。

－－－

「あらん?また来るのね、翼人」

「ぬ?お主知っておるのか!?」

「知ってるわよ?彼とはお友達だからねん」

「ぬう・・・・・・」

「あなたにとっては結構キツイかしら?」

「大丈夫だ。あ奴とは違うのだろ?」

「そうね」

二人の漢女が話し合う

その国では今まさに出陣を迎えようとしていた。

なされたのは、予言。

銀白の翼が来ると言うもの。

一度来た世界。故にその予言はできたのだろう。

翼人、再び外史に舞い降りる。

to be continued

W　～この街のW／これで決まりだ～（後書き）

熱く書けてるかな？どうかな？

心配なのはエクストリームとトライアルへの強化変身シーン。

ああやって読むと何だかごたごたしてるけど、そのシーンを想像してもらえれば熱いはず！！！！！

ちなみに今回、メモ帳のサイズで一位を更新しました！！！

アリス「なのはA' sの最終話を超えましたか」

はい

そして今回、照井がとにかく熱い。

どうしてこうなった。それはそれでいいんだけど。

ア「そういえばアルティメットドーパントはトライアルの力を取り込んで、どれくらい早くなったんですか？」

マキシマムドライブ風に言えば、「8．8秒、それが絶望までのゴールだ」

ア「はや！！！！」

それを乗り越え振り切りました！！！！！
キャーーー！！竜くーーーん！！！！！

【仮面ライダーW】

構成：”ライクル”７５％
　　”フォルス”５％
　　”ＬＯＮＤ”１０％

最主要人物：左翔太郎

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：各メモリライダー召喚（仮面ライダージョーカーみたいな感じの）

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：Ｗをゴールドエクストリームに。更に基本６メモリ＆エクストリームマキシマムドライブ重ね掛け

ア「最主要は左さんだけなんですね？」

どっちかと言えば彼でしょう。最主要は。
もちろん、フィリップもそうなんですが、最主要に限りなく近い主要という感じで。

なのはとフェイトみたいな？
いや、これは違うか？

ア「そういえば平成ライダーはこれでやりきったみたいなこと言ってませんでした？」

ええ、この場で言ってしまいましょう。

オーズは出しません。

これは最初から決めていました。
Wは執筆を始めてその間に終わるだろうと思ってましたけどね。

ア「オーズはなしっと・・・・でも出したいんですよね？」

そうですね～～～

じゃあそろそろ。

ア「次回、蒔風、「真」の外史へ」

ではまた次回

乙女繚乱☆三国志演義

真・恋姫†無双　～激戦、闘う者達～

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｓｈｉｎ　Ｋｏｉｈｉｍｅ†Ｍｕｓｏｕ］

ゲートが開く。
そのゲートから蒔風が出てきた。

そして次の瞬間、いきなり叫んだ。

「あーーーー・・・・・・ああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

簡単に言おう。

落ちた。
そりゃもう落ちた。

場所は上空うん万キロメートル、雲の上。
もはや落ちるしかない高度である。

「っおりゃ！！」

だがまあ彼にとっては問題ではない。
地面が近付いてきたところで蒔風の背に銀白の翼が現れ、それが力強く羽ばたき、衝突を避ける。

バォオ！！ととんでもない風が周囲の砂を吹き飛ばす。
着地したのは荒野のど真ん中。遠くには街・・・というか城が見えた。
城壁の中に街があるようだ。

だが着目すべきはそこではない。
蒔風が目を見張ったのは街と自分の中間点。

そこに軍隊があった。
というかあれは軍隊なのだろうか？

兵などおらず、見たところ武将しかいないようだ。
軍が掲げる旗には「魏」「呉」「蜀」が立つ。

そして何人かがこっちに弓まで引いている始末。

「えぇーー？なんでなんで？確かここ一刀の世界だろ？」

呆然する蒔風だがちょうど頭に現状の情報が流れてきた。

「ん？ああ？マジかよ・・・・まあしょうがないよな、再構築された外史だもんな」

蒔風が呟く。
そう、ここは再構築された外史の世界。

この世界の住人に、前の世界の記憶はない。

一刀も愛紗も、そして星も、前の世界の事は知らない。
記憶を戻す方法はひとつ。

最主要人物と接触せよ。

「マジか・・・・ってことはこの軍勢を抜けて一刀に会わなきゃならないのか？」

蒔風がうんざりしていると、軍の中から旗が上がり、開戦の銅鑼が打ち鳴らされた。

同時、弓が一斉に放たれ、何十もの矢が山なりに飛来してきた。

「っつ！？喝ァッ！！！」

蒔風が闘気を吹き出し、大声を出して大気を震わせる。

その振動に矢が空中で勢いを失って落ちる。

それを見て、軍の中から三人が飛び出してきた。

「ついに来たか・・・・・新キャラとかいるだろうな。楽しみだぜ！」

「いくよ！季衣！」

「おう！」

「蜀が魏延（ぎえん）！参るっ！！」

その三人は前の世界にもいた季衣、そして蒔風は初対面の、魏軍親衛隊の典韋（てんい）（真名・流琉）と、蜀の武将、魏延（真名・焔耶（えんや））である。

「おぉ、重量級！いきなりくるなぁ」

そう言いながら蒔風が力を借りる。

蒔風の髪が伸び、黄色のメッシュが入って

ドゴン！

季衣が投げ放った巨大鉄球を蒔風が片手で受け止める。
そこに、身の丈ほどもある大金棒「鈍砕骨（どんさいこつ）」を共に、蒔風の頭上から落下してきた焔耶。

「よっしゃぁ！！！」

「へへ～んだ！！ボク達の勝ちっ！！」

「わ、私なにもやってない・・・・」

蒔風がいた場所はクレーターのように窪み、周囲の地面がめくれて針のように起き上がっていた。

そこから季衣が鉄球の先端を回収しようとして鎖を引っ張る。

しかし

「え？」

その鎖の先に鉄球は無く、土煙の中から電子音が聞こえてきた。

《ａｘ　ｆｏａｍ》

「なに！？う、うわっ！？」

押しつぶした際のまま鈍砕骨の上に乗っていた焔耶が、急に揺れた足場に驚く。

その下にいたのは、仮面ライダー電王アックスフォーム。
左手で鈍砕骨ごとそれに乗る焔耶を持ち上げ、右手には季衣の鉄球を掴んでいた。

「なかなかやるやないけ。でもな、力だけの強さじゃあ、俺は泣かせられへんでぇ！！！！」

ドゴン！！！と鈍砕骨を地面に叩きつけ、その上に乗る焔耶も同じく地面に倒れる。
その衝撃と、地面からの振動で焔耶の内臓が揺れ、その場から立ち上がれなくなってしまう焔耶。

そして両手で鉄球を担いで、それを季衣に投げつける蒔風。
とんでもない勢いで飛んで行ったそれを、季衣が真っ正面から受け止めようとする。が

「えいっ！！！え？うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」

だがその勢いの強さに、季衣の小さな体ごと掻っ攫われ、軍の後ろまで飛んでいってしまった。

「き、季衣！！！よくもぉ！！！！！」

幼馴染がやられてカチンと来た流琉が、巨大ヨーヨーのような武器「伝磁葉々（でんじようよう）」を蒔風に向かって飛ばした。

だが蒔風はそれに合掌で挟み込むように両手を叩きつける。

するとバァン！！！！と太鼓のような轟音が鳴って、ヨーヨーの両面が弾け飛んでしまった。

武器を失ってはどうする事も出来ず、ヒョイ、と蒔風に襟首を掴まれて猫のようにポーイと捨てられていく。

「おいおいどうした三国連合！！！！！どういうわけか知らないが、てめえらそこを通せ！！一刀に合わせろ！！！」

蒔風の大声に、聞き覚えのある声が答える。

それは愛紗、華琳、春蘭の物だった。

「やはり貴様・・・・・ご主人さまを狙っているのだな！！！！」

「ならばここを通すわけにはいかないわね。春蘭！！！！」

「ハッ！！！」

そして軍から一気に武将が押し寄せてきた。

その人数、十。

愛紗を筆頭に春蘭が続き、さらにその後に見慣れぬ三人娘、忍者のような風貌の少女と思春、最後に鈴々と少女、そして大きな何かを担いだ女性だ。

蒔風が変身を解いてそれに応じ、一気に駆けだす。

振るわれる愛紗の青龍偃月刀を右手で掴み、それを逸らして春蘭の大剣を防ぐ。

さらに後続から続く三人娘に対し、蒔風が瞬時に反応した。

一人目、于禁（真名・沙和）の双剣を左手刀で二本とも同時に砕き破壊。

そこから二人目が来る前に春蘭の腹部に蹴りを入れて後退させ、愛紗を偃月刀ごと放り投げる。

そして二人目、楽進（真名・凪）の突きをかわしてその下袖と左襟を掴んで背負い投げで地面に叩きつける。

「沙和！！凪！！！」

そして今さらながらに仲間の名を叫んだ三人目、李典（真名・真桜）が先端がドリルになっている槍「螺旋槍」を蒔風に突き出してくる。

蒔風はそのドリルを横から掴むように握りとめ、ギャギャギャギャギャ！！！！とドリルの回転と蒔風の手で摩擦が起きる。

そこに愛紗と春蘭が再び蒔風の首めがけて薙いで来た。

だが蒔風はドリルを放り投げ、一瞬放してから後ろ蹴りでその武器がクロスしたところに足を突っ込む。

ガキッ、と互いに引っかかりあってその剣が止まり、蒔風が足を落としてその剣をまとめて踏みつけ、再びドリルの横っぱらを先ほどと同じように掴み取った。

その間に鈴々がジャンプして蒔風の頭上から蛇矛を振りまわして襲いかかってくる。
それを確認し、蒔風が「フンッ！！」とドリルを掴む手に力を込め、ついにドリルの回転を止めた。

「え？お、うおぉぉおオオ！？うひゃあああああああああああ！！！？？？？」

そうなれば取っ手の方が回転を始めるのは必然。
そしてそれを掴んでいる真桜の身体も槍を軸に回転し、それを蒔風が空中の鈴々に投げつける。

回転している真桜と鈴々がぶつかって、絡み合って地面に落ちる。

「う、腕がからまったのだ！？」

「ウプ・・・・・・」

真桜の意識の混濁もあって、ここで鈴々、真桜がリタイア。

そして足元の二本の武器を踏み砕き、片手ずつに愛紗と春蘭を掴んで投げ飛ばす。

その瞬間

シュ・・・ジャジャカッ！！！！！

空気を切り裂く音と共に、忍者チックな少女、周泰（真名・明命）と、思春の暗殺者コンビが襲いかかる。

明命の日本刀風の長刀「魂切」と、思春の曲刀「鈴音」の斬撃をしゃがんでかわし、いつ放ったかもわからない速度での手刀で二人の後頭部を強打する。

その一撃に明命が倒れ、思春が転がってその衝撃から逃れる。

だがなんとか避けたとはいえ、首に残るダメージは甚大で、とてもじゃないが戦闘はできない。

そう思考しているうちにぐらぐらと視界が揺れて思春も倒れた。

そして思春が倒れる事を知っていたのか、それよりも前に残った少

女、翠の従妹の馬岱（真名・蒲公英）に向き合う。

その眼光に、蒔風にそんなつもりは毛頭ないのだがたんぽぽは「ヒイ！！」と小さな悲鳴を上げて武器の片鎌槍「影閃」にしがみついてしまう。

「たんぽぽ！！気をしっかりせんか！！！！！」（ドォン！！！！）

「なぁッ！？」

そんなたんぽぽに激を飛ばしながら、十人で最後の女性、厳顔（真名・桔梗）が剣と弩弓が合体した様な形の己の武器「轟天砲」から杭を撃ち出し蒔風を狙う。

それに軽い悲鳴を上げて逃げる蒔風。

「ちょっと待て！！！あれパイルバンカーだろ！絶対パイルバンカーだ！！！！！」

「訳のわからん事を言うでない！！！！！（ドォン！！！！！）」

さらに轟天砲から放たれる杭に、蒔風が力を借りてそれに鎖を巻き

つける。
蒔風の背後に現れたのは拘束の天使・アブラクサス。

鎖がぐんぐん伸び、そして伸びきったところで思いっきり蒔風が引き戻し、それが桔梗とたんぽぽのいた場所に突き刺さって衝撃を起こす。

二人がその衝撃に吹き飛ばされて、蒔風の十人抜きが終わった。

その光景に驚愕するのは陣に残った武将や軍師達だ。
立った今向かって行ったのは最高戦力ともいえる者たち。

それがあんな一瞬の動作であしらわれ、しかも撃破されてしまうなんて誰も考えてなかったのだ。

「は、はわわ・・・どうしよう」

「しゅ、朱里ちゃぁん・・・・・」

困惑し、慌てる蜀の軍師、朱里と鳳統（真名・雛里）の二人の肩に、ポン、と手が置かれる。

「安心しな、あたし達で終わらせてやるさ」

「うちらの速さについてきたもんはおらん。あっちゅーまや」

そう言って出てきたのは翠と霞。

その姿に蒔風が小さな汗をたらす。

「おいおいまさか・・・・・そういう事ばっか覚えてんのか!?」

二人の武将が蒔風に向かう。

この二人こそ、全武将中最速を誇る二人。

「チッ、めんどくさい事になんなぁおい（泣）！！！」

蒔風が力を借り、その身に装着する。

最速の戦いが始まる。

to be continued

真・恋姫†無双　～激戦、闘う者達～（後書き）

アリス「真恋姫ですね」

はい。

今回は萌将伝よろしくな感じです。

三国一体平和な時だよ。

ア「でも皆さん蒔風のこと忘れてるんですね」

まあ再構築された外史だからね。

一刀と蒔風が直接会えばどうにかなるけど。

観測者は・・・後に説明します。

無印もそうでしたが、真恋姫は更にキャラが増えて書ききれないキャラも出てくるかもしえませんね。

ア「まああんだけいれば・・・・・」

厳密にいえば麗羽さんや白蓮さん、南蛮の人達とかそこらへん。

ア「頑張ってくださいよ」

頑張ったら真恋姫の世界長くなるかも。
しかもそんなにネタが出てくるかが怪しいし。

ア「みなさん、この作者めんどいだけですよ」

ちょ！？　本音を言わないで！？

ア「シャレで言ったんですけど・・・・・」

・・・・・・・・・・・・てへ☆

ア「ほっとこ。次回、さらなる激戦、最強ＶＳ最強！？」

ではまた次回

行くぜ駆け抜けろ　覚悟を決めろ
臆病な自分から抜け出して
そして吹き飛ばせ　限界を魂燃やし走り抜け

真・恋姫†無双　～超激戦、更に闘う者達～（前書き）

恋との戦闘時に聴いていたＢＧＭ

ニコニコ動画で「闘う者達・更に闘う者達を集めてみた」

よかったらどうぞ

「力を借りんのも大変だぜ。変身！」

蒔風の手にガタックゼクターが飛んできて、それをベルトに装着する。

《Ｈｅｎｓｈｉｎ》

ウィーン・・・・ガウン！

蒔風がガタックマスクドフォームに変身し、両肩のバルカン砲を翠と霞にぶっ放す。

キュボボボボボボ！！と次々に放たれたそれを、超高速移動法「風足」でかわし蒔風に向かう二人。

「キャストオフ！」

《ｃａｓｔ　ｏｆｆ－Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ！》

迫る二人を視認し、砲撃しながらガタックゼクターのホーンを反転させ、ライダーフォームへとキャストオフする。
そしてそのままクロックアップし、蒔風も超高速の世界に突入する。

ガタックの双剣、ダブルカリバーを肩から抜き、右で翠を、左で霞を相手取る。

「っ!?お、お前!?」

「これに着いて来るんか!?」

翠と霞が驚愕の声を上げる。
それはそうだ。こんな速度について来たものは、今までに誰一人としていなかったのだから。

そんな二人に蒔風がムカッ、として声を荒げた。

「誰が教えたと・・・・・思ってんだい!!」

ザキッ!!

鋏状に組み立てたダブルカリバーで霞の飛龍偃月刀（ひりゅうえんげつとう）を挟み、カリバーを地面に突き刺しそれの動きを奪う。

そこから翠の腹を掌底で突き飛ばし、ゼクターのホーンを戻してボタンを三回押す。

《1，2，3！》

そしてホーンを再び元に戻し、その技の名を叫ぶ。

「ライダーキック！！」

《Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ！！》

ドゴゥ！！

蒔風の飛び回し蹴りが放たれる。

それを十字槍「銀閃」で受け止める翠だが、如何せん弾かれた直後だったのが悪かった。

体勢を崩した状態では防ぎきれず、体が弾き飛ばされる。

そしてカリバーから武器を引き抜こうと躍起になっている霞にデコピンかましていく蒔風。

当然霞は武器から手を離し、それを手で払って避けるがその隙に足元を掃われて地面にすっ転んでしまい、変身を解いた蒔風が土埃で地面に拘束してしまう。

周りの人間は目の前の光景が信じられなかった。

数ある武将が尽く敗れ、更には最速を誇るあの二人ですらも、姿を現したと思ったらやられていたのだから。

そして蒔風がついに軍の中に走り込む。
その場から後退する戦闘の出来ない軍師やトップの人間が下がらされ、戦える人間が蒔風に向かって来た。

宝剣「南海覇王」を呉の小覇王・孫策（真名・雪蓮（しぇれん））が、大鎌「絶」を華琳が振るう。

蒔風が左手で左腰にある「林」を抜いて雪蓮の攻撃を防ぎ、華琳の鎌を内側に踏み込んで避けた。

だが華琳は鎌をそこから引き、蒔風の後ろ首を狙う。

だが蒔風が空いた右肘で華琳の鎌を掴んでいる腕の肘の裏を打ち、カクリと曲げる。

当然鎌の狙いも逸れ、蒔風の後頭部には鎌の柄がコツンと当たっただけだ。

そして蒔風が華琳に追撃をかけようとした瞬間、目標の身体が消えた。

瞬間的に危機を察知した雪蓮が華琳の襟首を掴んで後ろに引っ張ったからだ。

蒔風が上体をお辞儀して後ろの鎌を避け、離れた二人を見ながら両手を地面にバンッ！と当てる。

すると二人の周囲の地面が板状に起き上がり、囲って閉じ込めてしまった。

そして蒔風が一刀がいるであろう方向に向き直り、足を止める。

「ふ・・・・・まさかここまで来るとは思わなかったぞ・・・・・だが悪いが主殿には近づけさせん」

「・・・・・・超雲、か」

「その通り!!北方常山の超雲子龍!!いざ尋常にアダッ!?」

名乗りを派手に上げる超雲・・・星に蒔風が容赦なくデコピンを弾く。

額を押さえて涙目になりながらも威勢の下がらない星が蒔風に叫び続ける。

「ここは通さんとアテッ!おいウツッ!?ちょイタッ!!待っアダッ!」

「う～ん、楽しい。お前に関しちゃあの感情忘れているならなおよろしい」

ズンズンと歩を進めながら蒔風が星にデコピンしていく。
星はそれに一回一回のけ反りながら後退させられ、ついに小石に躓いて転んでしまう。

その脚を蒔風が掴み、ジャイアントスウィングの要領でブン回して投げっぱなす。

そして障害は無くなった。

たった一人の最強の武将を残して。

「あわわ・・・・ついに最後の武将になっちゃいました・・・・・・・」

「れ、恋さん!!お願いしましゅ!!!!」

「わかってる」

ドンッ!!!!!!!!

方天画戟を地に突き立てて、そこに在るのは天下布武。
三国において最強となし、立ち並ぶものはすでにない。
頂点は、かけ離れているからこそ頂点なのだと言う事がよくわかる。

すべての者を抜き去って、最強の座にいる武将。

その名は呂布。字は奉先。真名は恋。

三国無双の最強が、ついにその武を振るいに来た。

「前に来た時はなんやかんやで戦えなかったからなぁ・・・・・・・・
行くぞ」

「・・・・・・・・・・こい」

蒔風が獅子天麟を中段にを構え、恋も下段に方天画戟を構える。

まず、その光景にも皆が驚く。

恋は基本、構えない。肩に乗せて、攻撃に応じて迎え撃つだけだ。

だが、その恋が構えた。

気付けば皆二人から離れていた。

近づけば、巻き添えを食らい、最悪命を落とすかもしれない。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・

大地と大気と天を揺るがせ、二人の武器がぶつかり合った。

その衝撃に地面はクレーター状に窪み、一瞬だけ二人の足が浮いて、その中心に降りる。

ギギギギギギ・・・・・・ガキュッ・・・・・・ギャギャギャギャギャギャ・・・・・・・・・

二人の武器が鍔迫り合いし、軋んだ音を出す。それがだんだんと接点をずらし、再び二人同時にガキッ！！と組み直し押し合う。

「あああああああああアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

「ハァァァアあああああああああああああああああ！！！！！！」

そして一瞬の攻防が展開される。

恋と蒔風が同時に弾き、恋の方が早く薙ぐ。
それを蒔風が受け止め、上方に向かって弾かれる。

横回転にグルングルンと回転して蒔風が、その回転の勢いを反転させて逆回転で地面に落ち、その勢いで地面に獅子天麟を叩きつけた。
それを後退ジャンプでかわす恋。恋がさっきまでいたところには一筋の伸びた斬撃の跡があり、そこがチリチリと燃え上がっていた。

それを追ってジャンプする蒔風と、空中で迎え撃つ恋。
まるで浮いているかのように二人が宙で攻防を繰り返す。

ガンガンガンガン！！！ギィン！！ギャギャッ！！！ガァン！！！・・・・ゴッ、ドォン！！！！

そして数合の打ち合いの後、弾かれて岩場に激突したのは蒔風だ。
ガラガラと崩れる岩場の中の蒔風の目の前に、恋が飛びこんできて

さらなる一撃をぶち込む。

それを蒔風が側転でかわし、割れた岩場の壁を左右交互にジャンプして上がっていく。

激突した岩場は高さがかなりあり、十五メートルほどあった。
一番上の広さは体育館ほどもある。
そこの一部が割れた程度ではビクともしない。

そしてそこの上に乗り上げ。あとから追って飛んできた恋の振り降ろしを転がって避けてしゃがんだ状態で即座に突き出す。

それが恋の腹部をかすり、浅く切りつける。
だがそこから蒔風が追撃をかけるよりも早く、恋の一撃に岩場が崩れる。

ガラガラと崩れる岩場に二人が呑まれ、だがそれでも二人は落ちながら打ち合っていた。
そして落下位置が中腹に至ったところで、その岩場が爆発した。

二人の振るう武器の威力がついに頂点に達し、それが二人と共に落ちる岩石を吹き飛ばしたのだ。

倒された者、目を覚ました者、その戦いを見守る者がその衝撃波と砂嵐に顔を覆う。

だがその間も剣撃の音は止まない。

その一撃一撃の衝撃に足場になっている岩場だった瓦礫がどんどん吹き飛ばされ、周囲の地面、否、大地に斬撃が切り刻まれていく。
その範囲はだんだんと広がりながら濃くなっていき、二人の中心部などもうすでに斬撃の跡がないのはどこなのだろうかという域にまで至っている。

そして

ドォオオオゥゥゥウウウ！！！！！！！！！！

二人が一気に距離を開き、その周囲に溜まっていた斬激も一気に弾き出されて周囲二十メートルの物を次々と切り刻み始めた。
陣形成のための布、旗、竹などの柱だけでなく、積み上げられた石、転がる武器、そして鋼の盾までもが切断されて見るも無残な姿とな

っていく。

蒔風と恋の身体には無数の切り傷ができており、しかしその眼は死んではおらず、息もまだまだ切れていない。

この化け物はいつになったら止まるのか。
皆がそう思った瞬間、二人は再びぶつかり合う。

蒔風が獅子天麟を恋に槍のように投げ、それを恋が空中で身を捻ってかわし、蒔風に突進する。
蒔風は握るは風林火山。「風林」「火山」にそれぞれの柄のケツの部分を繋ぎ合わされ、一対の剣として存在するその刃は離れた敵ですら切り刻む。

蒔風が両手のそれをステッキのように振り回し、恋に向かって斬撃を飛ばす。
それをすべて紙一重でかわしながら恋が蒔風の腹部に向かって方天画戟を突きこむ。

その攻撃を回転で避け、恋の腹部を蹴って再び距離をとる蒔風。

そして切演武を始める。

春
恋の周囲を斬撃が回り、それが集束する。
それを一閃で掻き消し、蒔風に向かう恋。

夏
膨大な量の斬撃が津波の形をして襲いかかるが、それを恋が足に力を込め、軽快に飛び越えてかわしてしまう。

秋
斬撃の砲撃「秋風」を蒔風が空中の恋にぶっ放す。

そこでついに恋が反撃する。
恋も同様に方天画戟を振りかぶり、蒔風の物と同様の斬撃砲を放った。

二つの膨大な斬撃がぶつかって、押し合うこともなく一気に弾け飛んぶ。

二人は自身にまで飛んでくる斬撃を武器で弾くが、そのあまりの量についに武器を落としてしまう。

蒔風がさらに武器を出そうとするが、それを出そうとした瞬間、恋の拳が蒔風の顔面を捉える。
結局武器を出せず、蒔風がその拳を上受けで受け、掴み捻った。
だが恋はそれに対し身体ごと回転して回避し、その回転で蒔風の顎に蹴りをぶちかました。

それを見た蒔風がとっさに恋の腕を離して蹴りを仰け反って回避、上体を戻した勢いで腹部に拳を叩き込む。

恋は蒔風のその拳を反対の足の裏で受け、そしてそのまま吹っ飛ばされた。
地面が一直線に抉れ、恋の身体が地面に跳ねて空中で一回転、そして着地する。

蒔風、恋共に衝撃で体中軽い怪我をしていたし、頬は煤コケている。

だがそれでも口元はよく見ないとわからないほどに笑っていた。

周囲の大地には抉れた跡、斬られた跡、潰れた跡が残っており、と

てもじゃないがこれがたった二人の人間の戦闘によるものだとは、到底思えないほどの被害。
だからと言って大勢の人間が行った戦闘でもこうはならない。

それは化け物。
人を越えた存在と言ってもいいほどの、言いかえれば、武神。

その域に達した者による戦闘の跡だと言って、何とか説得できるような物だった。

周囲の地形を丸々変更させた二人が、ジリジリと互いの距離を狭める。

そして蒔風が走り出した。

だがその方向は恋にではなく、離れて避難していた北郷一刀その人にである。

恋がとっさに駆け出すが、蒔風の方が早い。

周囲にいた近接戦闘のできない弓の武将三人の矢をかわして一瞬のうちに気絶させ、軍師をかき分け、ポワポワした少女と見慣れた褐色肌の少女、蓮華を抜き去り、一刀の身体をひっつかんでその場から走り去ってジャンプし、先ほどの岩場と同じくらいの岩場に着地して一刀を下ろす。

「お前一体何者だ・・・・オレの仲間を傷付けてよぉ!!!!!覚悟はできてんのか!?・・・・・この・・・・・・・やろ・・・・・う・・・・・・・」

最初の方は敵意をこめて、思いっきり叫び散らした一刀の声だが、だんだんと小さくなり、目が開かれる。

そしてあぁーーーーーーー・・・・・と言った感じにしゃがみこんでしまう。

ＯＴＬである。

「思い出してきたか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「思い出してきたか？」

「思い出したよッ！！！あー畜生！！！！」

蒔風がニヤリと笑って一刀の手を取って握手を交わす。

「久しぶり。こんなんで悪かったな」

「ホントだよ。事情はこっちにも来てるから大丈夫だ」

耳をすませると地上の方であーーーーーーーーーーー！！！！！という声が聞こえてきた。

「どうやらあっちの方も事情を飲み込んだようだな」

「みたいだな」

「じゃ、新しい子を紹介してくれ。あと、疲れた」

「おっけ。うちにはいい医者がいるんだ。にしてもまた「奴」が？」

「そうだ。すまねえな。あと、なんでいきなり軍で待ち構えていたのか、教えてもらうぞ？」

「城に帰ってからな」

二人の青年が崖の上から下りてくる。
全武将が彼らを迎える。

こうしてやっと、この世界での第一歩が踏み出された。

to be continued

真・恋姫†無双　～超激戦、更に闘う者達～（後書き）

アリス「やっと終わりましたか」

やっとです。

自分としては恋との戦闘を激しくできたかな？というところでした。

ア「あれ聞きながらならそりゃああもなります」

戦闘シーンは完璧にＦＦ７ＡＣでしたよ。

燃え過ぎてどうかなりそうだった。

ア「次回、戦い終わって」

ではまた次回

誇りを笑い飛ばされて　頭打たれて血を見つめ
苦しみ噛み締める前に　上を向いて足を踏み出して行け
強さが欲しいなら　その手で掴み取れ

真・恋姫†無双　～そして休息へ～

玉座の間

そこに全員が集まっており、城の名医、華陀による治療を受けていた。

「まったく・・・・・・舜殿も舜殿だ！最初からそうだと言ってくれれば・・・・・」

「愛紗ちゃん、知り合いなんだっけ？前のときってどんなのだったの？」

「そういえば桃香おねーちゃんはいなかったのだ」

大広間であるそこには武将たちが座り込み、蒔風のことや前の出来事を話している。

初対面の人も、蒔風や前の出来事に関して簡単には頭に情報が流れ知ることが出来たが、それでも実際に聞かないとわからないのだろう。

「舜さん、あなたが来たという事はまた・・・・・」

身体の切り傷を手当している蒔風に、朱里を筆頭に何名かの軍師がやって来た。

「おう、朱里！・・・・・でいいよな？」

「はい、真名でいいですよ。それで・・・」

朱里の聞かんとすることは蒔風も分かっていた。

「奴」の事である。

「そう、また「奴」がきた。ごめんな」

「い、いえいえいえ！こちらとしてはとても助かりましゅ！」

と、蒔風が朱里の後ろに隠れる少女を見つける。

手をヒラヒラと振ってやると、オズオズと出て来た。

「あ、あのぅ・・・・・はじめまして、鳳統です・・・・・真名は」

「真名まで預けんのか？いきなりの相手に？」

「愛紗さんや朱里ちゃんが預けていますし、前の時の話しを聞くかぎり、あなたには構わないかな、と・・・・」

「それは光栄なこった。預からせてもらおう。で？真名は？」

「雛里です」

「ひなちゃんね、サンキュ！ああ、あとさ、他の人も紹介してくんない？」

「では、案内しま「あいや待たれい！」しょってえ？」

朱里の申し出を遮ってやって来たのは星さんである。
額には×の字に白い布が小さく貼られている。

「その案内私が「朱里、行こう」待ってくだされっ！？」

ガシィ、と蒔風のズボンの裾を握りしめ、星がズルズルと蒔風を引き止める。

「やっと会えたのですぞ！？さぁ、愛の囁きを！！」

「友人として大好きだ」

「ふふっ、この超子龍には「大好きだ」しか聞こえない！！」

「・・・・・・はぁ」

蒔風が諦めたようにため息を吐き出す。

そこに一刀も合流して、四人でみんなの間を廻って行った。

その間に新たな仲間との真名交換も終わらせ、ついでに今の状況も聞くことにした蒔風である。

この外史では魏、呉、蜀による三国が天下を取ろうと争い、北郷一刀というイレギュラーによってまさかの三国一致。

今は平和な時を過ごしているのだそうだ。

「つまり大きな戦はないんだな？」

「そうだな。今は平和そのものだぜ？にしても驚いたよ」

「なにが？」

「いや、星にね。大体ここの武将は、その・・・・」

「お前に好意を持っているな。このクサレハーレム野郎」

「うるせぇ。だけど、星だけは違ったんだ。「主の事は主として好きだが、女としては違います」って言ってな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なあ蒔風、本当になんとも思ってないのか？」

一刀の言葉に、蒔風がうつむく。

そして、朱里と話す星の方を見ながら、蒔風が言った。

「思ってない事なんかあるか。こうやってオレにそんな感情をもっているだけでも、俺は彼女に仇で返してるんだ。申しわけなくてしょうがねえよ」

「そっちかよ・・・・・」

「そっち以外にあるか」

そんなこんなで全員との紹介が終わり、蒔風が最後の疑問を聞いた。

「なあ、なんでオレがあそこにいるって知ってたんだ?あと、なんで攻撃してきた?」

その質問に、一刀があはは・・・と笑いながら答えた。

「オレがこの世界にやってくる事を予言をした占い師、管輅(かんろ)がさ、予言したらしいんだよ」

「なんていうふうに?」

「それは私たちが」

「説明するぞい!!!」

ザシッ!!とその場に現れたのは二人の筋肉ムキムキの変態、貂蝉と卑弥呼である。

「おお貂蝉！！！と、そちらさんは？」

蒔風が初対面の卑弥呼を見て、名前を聞いた。

「お初にお目にかかりまする。我が名は卑弥呼。すでに身を引いた元観測者でございます」

「ってことは貂蝉の先輩か」

「そして、前にお話しした「赤銅の翼人」での戦いの唯一の生存者よ」

「マジか」

「あやつはとんでもない男だった・・・・だがお主は違うのだろう？」

「おっけおっけ、大丈夫だよ。オレはそんなことしない」

「ならいいのだ。がっはっはっは」

と、そこで一旦話題が終わり、蒔風が最初の疑問に関して聞いた。

「ふむ、街ゆく男にふと漏らしたそうだ。「銀白の翼、災いと共に来たる」とな」

「それで舜ちゃんが来たもんだから、そりゃみんな慌てるわよねぇ？全く、管輅ちゃんったらテキトーな予言しちゃって・・・・・・」

「知ってんのか？」

「そりゃもう、彼女もあたし達と同じく、観測者だもの。ま、彼女の場合、外史での道標をするのが役割だけどねん」

「その人・・・・・結構いい加減だな」

「そうね。そのせいであれだけの戦闘が行われてるんですものね」

「その話を聞いた男ってのは誰だ？」

「調べてみるか？」

「お願い」

蒔風が一刀に頼み、調査してもらうことにした。

数十分後

「と、言うわけで見つかりました」

「早ぁ！？」

一刀が蒔風に声をかけ、それに驚く蒔風。
なんでもその男、街中で言いふらしていたのだそうだ。

「で？どこに？」

「見つけたのは翠なんだ。連れてきてーー！！！」

「おう！！舜、このトントン拍子な男が予言を聞いたって奴だ。おい！私に話したみたいに、トントン拍子に答えろ！」

「街歩いてて声掛けられて予言聞いた」

「トントン拍子だ・・・・・」

「ってかはしょりすぎでしょ。情報はそれだけ?管轄はどこに行ったとか」

「ん?さぁ?おい、もっとトントン拍子な感じで答えろ!」

「予言言ったらどっか行っちゃいました」

「まさにトントン拍子だ」

「どんな感じの人だった?」

「おい、どんな感じか、絶好調にトントン拍子に答えろ!」

「まあ綺麗、女、とりあえず目に止まる。オレもう帰りますね」

「さすがにトントン拍子過ぎるだろうがぁ！！！！！」

エキサイティングした翠が男の胸ぐらをつかんでグラグラさせている。
蒔風がその翠を男から引き放し、男を返してあげた。

「まったく・・・・・どうしようか」

「もういいさ。見つからないならそれで」

そうして蒔風が一刀と城の中を歩きだす。

途中に会うみんなは蒔風にあれからどうしたのかという話を聞こうと引き留める。
そのたびに足を止め、話してあげている蒔風もだんだんと疲れてきたようだ。

「一刀ぉ～～～。オレの部屋どこ？もう休みたァい・・・・・・」

「だよなぁ。今日は凄い戦いだったもんな。うん、部屋に案内するよ。「奴」はまだ来ないんだろ？」

「来ないね。明後日の昼くらいかな？」

「なら安心だな。もう遅いし、休んどけ」

「サンキュー・・・・・・ふあああああ・・・・・・・・」

蒔風が大あくびをして部屋に向かう。
そして傷ついた体をしっかりと休めた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

真・恋姫†無双　～そして休息へ～（後書き）

アリス「やっと休めますね」

それはもう

次回はすっごく日常パート

ア「卑弥呼さんがあの戦いの生き残りだったとは」

あの人はそうである、という設定をつけさせてもらいました。

パねえな卑弥呼。

ア「次回、休みの日」

ではまた次回

幾千の苦しみ　幾万の絶望に身を焦がしながら

痛みを振り払い　この願い貫いてきた

蒔風がこの世界に来て二日目。

朝食の席でその話は持ち上がった。

「遊びに行く？」

「そ。いやぁ、現代の物をいろいろ話したらさ、実現しちゃうだけの技術があってさ！結構建てちゃったんだよね！」

一刀の話では彼の発言によって、発明好きの真桜が先頭に立って様々なものを再現してしまったのだ。

「なにを作ったんだ？」

「まずプールだな。アミューズメントパークみたいな遊ぶプール」

それから・・・・と指折って一刀が上げたのは競馬場、コーヒーカップ、ジェットコースターなどなど。

ただ、観覧車などの巨大なものはなかった。

「いや、それでも十二分にスゲェよ」

「ウチの発明やで！すごくないモンなんか作るかい！」

と言うは当の本人、真桜だ。

ちなみに現在朝食をとっているのは蒔風、一刀、翠、紫苑と娘の璃々、華琳とその（蒔風にとって）新顔軍師の程？（真名・風）と郭嘉（真名・稟）、真桜、沙和、凪、小蓮、明命、そして恋だ。

「え～～～！？一刀遊びに行くの？じゃあシャオも行く！」

「しゃ、小蓮様！これから午前のお勉強ですよ！？」

「勉強なんてつまんないじゃい。それより一刀と遊んだ方が楽しいもん」

自分も行くと大いに乗り気な呉の王家三姉妹の末っ子と、オドオドと止めに入る明命。

しかし明命は説得しきれないようで、小蓮が味方を増やそうとして

「ね？翠も勉強は嫌でしょ！？」

翠に矛先を向けた。

「うえ！？あ、あたし！？」

「そ、翠だって勉強は嫌いでしょ？遊ぶ方がいいわよね？」

その発言にう～～ん、と腕組んで唸ってから、翠がこう答えた。

「確かに勉強は大変だけどさ、知っといた方がいいことはたくさんあるもんだ。だから勉強したくないっつーのは嘘になるけど、しないってのは賛同できないなぁ」

その発言に小蓮が信じられないような声をあげていった。

「翠って脳筋のくせに頭良さそうなこと言ってる！！！」

「え?はぁぁあああああ!?あ、あたしは脳筋じゃないッ!!!」

「翠さんは脳筋に入ると思うの」

「そうやな、前ゴッツしごかれたしな」

一刀の親衛隊部隊長の三人のうち沙和と真桜がそれに反論し、そんな中、凪だけが反対意見を言った。

「す、翠殿はただ単に他のものと比べ一直線と言うかなんというか・・・・」

「凪、それフォローとしては微妙」

「そうだね~~~。確かに翠は脳筋の部類に入るけど、そこまでひどい脳筋じゃないね。考える脳筋だ」

「なんだよそれぇ!?」

そこで長机を挟んで小蓮の右前に座る華琳が頬を付いて言った。

「あなた・・・・今日の午前のお勉強の先生を前によくもまああんなこと言えたわね？」

「え？」

「あ」

視線が一斉に華琳に向く。

何を隠そう今日のお勉強の講師はこの曹孟徳なのだ。

「いいわ。今日は勉強はやめましょう」

「やった！「でもそのかわり」え？」

「欲しい自由（モノ）は苦労して得るということを教えてあげましょう」

「え？あれ？」

華琳が戦闘服に着替える。

気付くと小蓮も明命によって武器を手に握っていた。

「え?ちょっと明命?」

「小蓮様・・・・・・・・頑張ってくださいね!」

「なにそのキッパリとした笑顔ッ!?勉強も武芸も嫌ァーーーーー!!!!!」

華琳がものすごくいい笑顔で小蓮を追い回しはじめ、そのまま出て行ってしまった。

「おぉ、ナイチチ、ナイチチを追い回すの図」

「舜・・・・それ本人の前で言うなよ?」

「え~~~~?なにそれつまんな~~~~い(「3」)」

蒔風がニヤニヤとしながら食器を片付け、遊びに行くなら、と話を切り出す。

「他にも誰か誘おうぜ。誰がいる?」

「とりあえず「とりあえずご主人様は執務がありますよね?」そんな幻聴は聞こえないなぁ。さあ行こう蒔風」

「逃がしませんッ！！！！」

ではお教えしよう。

一刀の台詞にかぶせてきたのは愛紗さんです。

はい、もう簡単には逃げられません。

「前回の事を参考に、今回は絶対に逃げられない布陣を組みました・・・・もう逃がしませんよ！！！！」

ダダダダダダと走る抜ける蒔風と一刀。

愛紗は布陣を組んだと言うが、正直蒔風がいれば問題ではなかった。

第一関門・春蘭

「よくわからんがここは通さん！！！蒔風には先日の決着もだ！！！」

まだ武器は直ってないのか、素手で向かってきた春蘭を、蒔風が一刀を庇うように前に出て、先に行かせる。

そして

「ぐにーーーーーーん」

「え？バ！！それやめッ！？」

「バチーん」

バツッ！！！！！

「アッダアあああああああああ！！！！！！！」

春蘭の左の眼帯を掴んで伸ばし、それを離した。

ゴムパッチンのような感じになった春蘭が、地面をのた打ち回って居なくなった。

「お前ひでえな」

「正当防衛」（シレッ）

第二関門・桃香

「え、えっと・・・・ご主人様、お仕事してくださ～～～い！！！！」

如何にも天然さんな声を出すのは蜀王、劉備（真名・桃香）である。
だがその佇まいはどう見ても隙だらけである。

「ヌウっ！？次はポワポワ系でなごませる作戦だな！？」

「これなら突破は楽だな！！！」

「ああ！！！楽勝だ！！！」

「確かにそうだけど、ハッキリ言われると傷つくよ！？ご主人様だって同じようなものじゃないですか！！！」

そう言ってる間に一刀と蒔風が桃香を過ぎ去っていく。

第三関門・恋

「・・・・・・・・」

「恋!!遊びに行こうぜ!!!」

「（フルフル）愛紗がここ止めろって」

「じゃあ言い変えよう・・・・・遊びに行って飯食おうぜ!?好きなだけ!!!」

「行く」

恋が仲間になった!!!!!

第四関門・季衣・流琉

「にいちゃん！！！」

「ここは通しません！！！」

「魏のちびっこズか！！！！」

「「チビって言うなーーー！！！！」」

「ごめんなさっグボッ！？」

蒔風が二人のパンチを腹部に食らってる間に一刀と恋が走る抜ける。
後から蒔風が腹を押さえながら追いついてきた。

「二人は？」

「・・・・・女の子を泣かせてしまった」

「おみやげかってこような」

「うん」

第五関門・愛紗

「ぬぐーーーーーーー！！！！むがむがむがぁ！！！！！」

グルグル巻きになってる。
簀巻きの愛紗の脇で立っているのは

「正義の華蝶仮面さんじょ「さあ行こうぜ！！！！」ちょっとまったぁ！！！！！」

華蝶仮面さん改め星が仲間になった！！！

「ぐぐぐ・・・ぷはぁ！！！おい待てこらーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

愛紗が簀巻きでグニグニしながら呼びとめる。

だがその程度で止まることなどない。

蒔風が代わりにと言って「龍虎雀武」「獅子天麟」を置いていき、

彼らに手伝ってもらって～～～と言い残していった。

――――――

「マズ・・・・・」

魏の三人娘、沙和、真桜、凪だった。

見事に遊んでいる。

と言うか警邏の仕事サボってる。

「まあ待てお嬢さんたち。実は我々も愛紗から逃げてここまで来たのだ」

「だからここはお互いさまってことで」

蒔風と一刀の言葉にホッと胸をなでおろし、そして遊び続行する三人。

恋はと言うと蒔風からお金をもらってご飯コーナーに向かって行ったばかりだ。

星は蒔風の方へと走ってきて流れるプールにソォイ！！されて何処かへと流されていってしまった。

「にしても再現率高すぎんだろここ」

「三国の技術は世界一ィィィィィィイイイイ！！！！」

「まさにだなおい」

ここには普通の物からさっき言ったような流れるプールを始め、ウォータースライダー、波の出るプール、温水プールまであるのだからたいしたものである。

そこで蒔風が遊びに遊び、体力をいい感じに消耗してきたところで、昼食となる。

恋を見つけ、そこを中心に集まる一同。

もっしゅもっしゅとご飯を食べる恋になごみながら、昼食をとって次どこに行こうかと話し合う一同。

そうして最近できたばかりの、ところに行くことになった。

「最近できたところ?何作ったんだ?」

「聞いて驚くなよ?それは・・・・・・遊園地だ!!!!」

「そんなものまで・・・・・・あきれるやら感心するやらオレはどうすればいいんだよ」

「沙和も一回行ったけど、あそこすごいの!!!沢山アトラクションがあって最高なの!!!」

「そりゃそうや!!うちの技術ぎょーさん使(つこ)てるからな!!面白くないわけないやん!」

「前に行ったときとか大変だったもんな。鈴々とかが壊しそうになってさ」

「あれは主の説明不足が原因だったのでは?その後の説明を受けたらちゃんと遊んでましたぞ?」

「遊び方さえ間違わなければとれも楽しいところでしたね。一つを除いて」

凪の顔が暗くなり、それを沙和と真桜がからかう様に言った。

「凪、あん時大変やったもんな～～～」

「そうなの、キャーキャー騒いじゃって可愛かったの！！！」

「お、お前達！！！そんなこと言うな！！！！あんなもの、誰だって叫ぶ！！！」

「何がそんなにだったの？おせーておせーて～～～～」

「い、いえ、蒔風殿が気にすることでは・・・・・」

「知りたいですかぁ？そうですか、では教えちゃうの！！！」

必死に隠そうとする凪だが、沙和と真桜がフッフッフと笑っている。

あ、これバラされるな。

「えっとな?凪が言っとんのは、おまけ屋敷ーーー、やったっけ?」

「違うのー。お化け屋敷なの!!!」

「う、ううー・・・・・」

「う?オバケヤシキトナ?」

「知らない訳ないよな?」

「知ってるよ。知ってるさ・・・・あんの?お化け屋敷」

「おう、作ったぜ。オレの過去言ったオバケヤシキとか、思いついた諸々を詰め込んだ最高のお化け屋敷だ」

「へ、へーそうなんだ。でも面白いのほかにあるだろ?」

「あるさ。でもこれは外したくないな」

「そうか・・・・いや、いく、行くさ。楽しみだねぇ!!!あっは

っはっはっはははっはははは・・・・・・」

そんな蒔風を見て、星の目がキラーン、と光る。
対して蒔風はそんな視線にも気付かないようだ。

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

そして一行は一刀の言う遊園地に着いた。
ちなみに恋はあのまま街に出て食べ歩きに向かってしまった。
飯食えれば本当に良かったらしい。

一刀プロデュースの遊園地は現代のものとなんら遜色のない、見事なものである。

その見事さに、蒔風がさすがに言った。

「お前これやり過ぎ」

「正直オレもここまで本気なものが出来るとは思ってなかったんだよな」

そういいながら全員が歩いて廻って、人影を見てバッ!!と物影に隠れた。

どうした?と言った視線を向ける一刀に、蒔風が小声で話す。

「全員気をつけろ。愛紗たちが来てる」

「おお!?」

そう、確かに遊園地内には愛紗を始め何名かがおり、一刀を捜索していた。

「これはまずい・・・・遊んでるのを見つかったらアトラクションから出た瞬間取り押さえられるぞ」

冷や汗をかく一刀や三人娘だが星と蒔風はいたってのほほんとした顔をしている。

「普通に遊ぼうぜ？まずコーヒーカップにでも行こっか」

「これはダブルデートというものですな？」

「だれに教わった、んな言葉」

「無論、主」

グリグリと一刀の頭を捻りながら一同を引っ張り、蒔風がコーヒーカップに向かい、乗り込んだ。

ここは乗り込んで遊ぶまで何も障害などなく、普通に遊んだ。

だが

「柵の近くに朱里と詠がいるな」

「見つかったら愛紗はんを呼ばれてまう！」

コーヒーカップの柵の辺りに朱里と詠がうろついていた。
愛紗の差し金だろう。
まだ見つかってないようだがこのままでは乗っているのを発見されてしまう。

「あ、あの、隊長、もう素直に帰った方が・・・・」

凪が部隊では直接の上司の一刀にそう提案するが、ガタガタと震えながら一刀が答えた。

「無理無理無理無理無理無理無理無理・・・・・・」

「よっぽど愛紗さんが恐ろしいようなの・・・」

「いや、そら恐ろしいやろ」

「こうなったら・・・・やるぞ、星」

「お？わかりました。いきましょうぞ！！」

蒔風と星がニヤリと笑ってコーヒーカップの真ん中の円盤を掴む。

その笑顔に寒気が走った一刀たちがガシッ！とカップのふちを握りしめた。

「そぉ！」「いやっ！！」

グリンッ！！

そして二人が勢い良く円盤を回す。

それに応じてカップの回転も上がっていく。

休みなく全力で回しつづける二人。

その回転ですでに周囲の景色は見えておらず、全員の身体が遠心力に引っ張られ、おもっくそのけ反っていた。

「うぎぃぃぃぃ！！！」

「おーおーおーおーおーおー！？！」

「あっはっはっはっはっ！！！」

「飛ぶ飛ぶ！！飛んでっちゃうって！！！と、止めて止めて！ぐぇえ！？」

「首が伸びるぅーーーーー！！！！！」

一刀たちがついに身体が飛ぶと本能で察知し、真ん中の円盤を掴む。

だがその円盤もかなりの速度で回転しており、一秒と掴んでいられない。

飛ばされないようには円盤の回転に合わせて次、次、次と掴んでいかなければならず、その動作で余計に回転をあげていくカップ。

だがそのおかげでコーヒーカップに乗っている人の顔は確認されず、朱里と詠は別の場所に向かった。

だけどそれでも

「朱里と詠は！？」

「この状況ではわかりませぬなぁ！！」

「あっはっはっ！！そいつぁ一本、取られたな☆」

「「あーはっはっはっはっはっはっはっはっ！！！」」

「お前らどっか飛んでっちまえ！！！」

それから5分はそれが止まらず、時間が来て機能が止まり、降りる頃には四人は完全にグロッキーだった。

「大丈夫かーー？」

「は、話しかけんといて・・・・・ウプ」

「気持ち悪いのぉ～～～～～（┼◇┼）」

「これは・・・・・」

「あぁたまがまだグラグラする・・・・うぉえ」

「だらし無いにゃ～～～～次何行く？」

「そうですな。私としては・・・・・・」

蒔風と星が次に向かう場所を相談して、一刀がちょっと待って・・・

・とヨロヨロしているところに、ついにそれは来た。

「見つけましたよご主人様！！！もう逃がしません！！！」

「「「「ゲぇッ！？関羽っ！？」」」」

そう、そこには怒り心頭の愛紗と、彼女がひきつれる蜀の面々だった。

「なぜバレタ！？」

「「こーひーかっぷ」であんだけ騒いでいれば嫌でも目につきます！！！！」

「おい星！！蒔風！！」

「「メンゴメンゴ」」

「こいつらもう駄目だ・・・・・逃げろ！！！」

「さ、沙和と真桜がまだ・・・・・・」

「うあ～～～～」

「うぷお・・・・・・」

「「「囮だな」」」

地面にいまだ倒れている沙和と真桜を見た蒔風、一刀、星がシレッ、と見捨てた。
それはもう見事に。国語辞典の「見捨てる」の欄に載せたいくらい見捨てた。

「逃げろ！！！」

「こっちだ蒔風！！」

「おう！！！」

二人を見捨て、一刀、凪、蒔風、星がその場から逃げ出す。

一刀の案内は的確で、さすがはここの提案者と言ったところである。

そして逃げ込んだ先は

お化け屋敷である。

「ちょ、ここ！？」

「ここなら愛紗も苦手で入ってこない！！！」

「出口抑えられたら・・・・・」

「大丈夫だ。半分も行けば途中に出られる場所があるのだよ」

「星、その半分ってどのくらいだ？」

「そうですな、ざっと・・・・・」

そこで星が言った言葉は現代にして百メートルほど。
かなり長い。

「――――――～～～～～がしませんよ！！！！」

そこで愛紗の怒声が聞こえてくる。
気まずい顔をした蒔風の襟首を掴んで、一刀が引きずっていく。

じたばたする蒔風だが、三人が掴むので抗えず、そのまま引きずりこまれてしまった。

ーーー

ちょ！？」

「そうだなぁ～～～そうするか！！（ニヤニヤ）」

「あ、そういうことですか、では二人ずつですね」

ニヤニヤして星と蒔風を見る一刀に何かを察した凪が、さっさと先に進んでしまった。

蒔風が何かを言う前に扉が閉まってしまい、がっくりとうなだれる蒔風。

「さて楽しみましょうぞ！！舜！！！」

「あのなぁ、普通に遊ぶ分にはお前は最高だよ？気も合うし、同じ変人だし」

「ふむ、そこは褒め言葉として取っておきましょう」

「だけどな、オレに恋愛感情は向けないでくれってのに！！！なにも返せんのだから」

「返していただく必要などないですぞ？そばにいてくれればそれで十分！！！」

「オレがだめなの。オレはお前を優先しないぞ？お前一人に感情が向くことなんてないんだ。そんなもん、恋愛なんざ言えるか」

「だったら自覚させて見せます」

「そのためにはオレの中の最大の異端をどうにかするんだな」

そんなことを話していると、扉が開く。
順番が回ってきたようだ。

「では、とりあえず今は楽しみましょう！！！」

「そうだな。遊ぶか・・・・・・うう・・・・・・・・」

蒔風と星が中に踏み込む。
くらい暗い空間へと

――――――

一方その頃、お化け屋敷の入り口

「「「「「じゃんけんポン！！！あいこでしょ、あいこでしょ、あいこでしょ！！！！！」」」」」

愛紗をはじめとした、翠、朱里、詠、桃香がじゃんけんをして、誰と誰が中に入るかを決めようとしていた。

「愛紗ちゃん、行って来てよ！！！」

「な、ならば桃香様もぜひ一緒に！！」

「はわわ・・・なんでこうなっちゃったんでしょう・・・・・」

「あたしに訊くなよ・・・・来るんじゃなかったぜ・・・・・」

「あーーーもーーーそんなにここ怖いの！？」

（（；゜Д゜）） ガタガタ（（；゜Д゜）） ガタガタガタガタ（（；゜Д゜）） ガタガタッ（（；゜Д゜））

詠の一言に四人が一斉に震え、否、振動し始めた。
その異様な光景に、言葉はなくともすべてを理解した詠であった。

「ご主人様に連れられて入ったが、ここはヤバいぞ」

「でもその時は「これでも普通の方だよ？」とか言ってたよ？」

「たぶん・・・こういうのに私たちが慣れてないだけかもしれませんね・・・・・」

「くそう、星は向こうだし、蒔風も絶対大丈夫だろうしな」

「むしろ蒔風は幽霊とか出てきてもぶん殴っちまいそうだよな」

「はわわ・・・それは否定できません・・・・」

「そんなにすごい人なんだ」

「そうなんだよなぁ・・・あいつは凄いやつだよ。それだけは確

か」

「自由人ですけどね」

「翠や霞に「風足」を教えたのも蒔風だしな。いや本当に我らが束になってもかなわないとは、さすが世界最強と豪語するだけのことはある」

「え？世界最強？」

愛紗の言葉に桃香が首をかしげる。
その桃香にああ、と前置きして、翠が答えた。

「蒔風の口癖なんだよ。「オレは世界最強だ！！」ってな」

「あの自信はあれだけの実力の裏付けなのだろうな。敵でなくて本当によかったと思う」

うんうんとうなづく一同。
そこで桃香がボソッ、と呟いた。

「本当にそうなのかな？あの人、結構自信ない感じの人だと思うよ？」

「え？」

「うおあああああああああああああああああああ！！！！？？？？？」

桃香の言葉を訊き返そうと愛紗が言った瞬間、お化け屋敷の中から悲鳴が聞こえてきた。
それはまごう事なき、今話題になっている男の物だった。

ーーー

「だ、ダメなんだ・・・・・・・」

そんな星に蒔風がびくびくと声を上げる。

「は？」

「ダメなんだよぉ、こういうの。いやさ、ほんまもんの夜の病院とか、墓場とかを歩きまわるだけの肝試しならいいんよ？幽霊とか出てきたらぶん殴ってやるだけだし。でもこういった「びっくり系」のお化け屋敷とかはダメなんだよ。ついつい身構えて飛びあがっちまう・・・・・・は、早く行こうぜ・・・・」

そういう蒔風が先に進もうとするが、壁際に沿ってズリズリと進んでいく姿は面白いし、その壁から無数の手が飛び出してきて、「うひょウワはぁっ！？」とか悲鳴を上げながら飛びあがって腰を抜かす姿に星は

（ゾクゾクしてきた・・・・・・）

ゾクゾクしていた。

そして星が蒔風の手を取って、引っ張って行く。

「さ、行こうぞ！！先は長い！！」

「ま、待って！！そんなズンズンいかないで！！！ちょ、まだ心臓バクバク・・・・ヒィキャア！？」

ビビりまくりの蒔風が近くの物（この場合は星の腕に）捕まってガタガタしている。

死を恐怖しない男は、結構小心者だった、という一面である。

ーーー

ちなみに一刀は凪が内部を突っ走ってしまってそれに必死について行ったらそのまま出口へゴー。
あっさり捕まってしまったそうだ。

蒔風も完全にグロッキーで、星も特に抵抗はせずに、満足そうな顔をして捕まった。

――――――

「やめてそれマジリアルだから」

そう話すのは木に簀巻きで逆さ吊りされている蒔風と一刀だ。

そろそろ日も落ち、暗くなってくるころだ。

「そういえば結局政務はどうなったんだ？」

「青龍たちが片付けたみたい。あいつら優秀だから」

「そっかーーー」

「そっだーーー」

「「・・・・・・・・・・誰か助けて」」

そうして今晩も更けていく。
「奴」が来るのに、大丈夫か？

to be continued

真・恋姫†無双　～あいだのきゅうじつ～（後書き）

アリス「日常パートにしては長いですね」

今回は長くなっちゃいました。

本当ならプールと遊園地で分けるつもりだったんですが、遊園地の方が長くなっちゃって

ア「蒔風、お化け屋敷ダメなんですか？」

ダメなんですね。

「恐怖系」のならいいんですけどね。

本人が言ってたみたいにただ怖い場所を徘徊するっていうのなら。

でも「びっくり系」はダメなんです。

だからそういう感じのホラー映画もダメ。

「呪怨」とかの静かなホラーならいいんですけどね。

ア「それはまあなんとも・・・・微妙な・・・・・」

ま、そんなとこ

次回をどうぞ

ア「次回、そして戦いへ！！！やっほ～～～い！！！」

書くぞ書くぞ～～～！！！！
もうずっと戦闘パート書いていたい。
でも書く動作がめんどくさい！！！！

頑張ります

ではまた次回

主義や主張の違いから、戦いになって、そしてその戦いを生き抜いて――
そして生まれた確かな絆。

その絆があればこそ、声をたてて笑い、微笑みをかわしながら、こ

のお祭りを楽しめるんだ。

さて、三日目である。

この日、朝から蒔風は街の様子を視察するという朱里と雛里に着いて行っていた。

「一見ゴチャついてるように見えて、店の種類は区間で分けられてんだな」

「その方が競争率が上がって、さらに市場が活性化するんです」

「活性化すれば他のところからも商人を呼び込めますし、それらが結託すれば遠くの村に資材を送ることも出来ますし」

なるほどなぁ、と感心して、蒔風がふと気づいた事を聞いた。

「なあ、その結託した商人が国に無理言ってきたりしたらどうすんだ？」

その質問にそれなら、と雛里が口を開いた。

「商人はこの場所を国から借りて商売する代わりに、税が軽くなっているんです」

「だから不満を持つことはないと思います」

「そっか。店の種類ごとに分けられてんのもそういうことか」

「そうですね。もし毛色の違うお店があれば見つかりますし、同じ区間でお店を開いても新顔はすぐにばれますから、無断でお店を開く事も予防しているんです」

更に街を歩きながら蒔風が朱里、雛里にいろいろと教わっていく。

一箇所に店を集め過ぎても遠くの区間では大変だから、集中させる箇所を二、三箇所に分けたりだとか、蒔風にとって面白い話しになった。

そして時間もそれなりに経ち、蒔風が携帯を開いて時間を確認する。

「そろそろ１１時か。朱里、雛里、城に戻ろう。時間だ」

「は、はい」

「その機械（からくり）ってすごいですよね」

「朱里は前回一旦一刀の世界に行ったろ？」

「はわわ～、それはそうなんですけど、いろいろ目移りしているうちにこっちに着てしまったので・・・・」

「朱里ちゃん、いいなぁ」

「ま、この世界はもう成っているからな。あっちに行くことはないだろ」

「残念・・・・」

そう話しながら城に向かう蒔風たち。

「奴」の計算終了時間が今日の１２時と推測した蒔風はその前に全員城に集合するように言っておいたのだ。

途中、屋台でラーメン啜ってる鈴々を拾い、北郷隊の三人娘に声をかけ、猫と戯れている明命と風を捕まえて行く。

「城にちゃんと集まってるなかぁ？」

「大丈夫なのだ！みんなちゃんといるはずなのだ！」

「だから私は早く行こうと言ったのだ！」

「ううん、ごめんなさいなの」

「堪忍してな、凪ぃ」

「御猫様・・・・・ついつい時間を忘れて・・・・・」

「恐ろしい魔力を秘めている・・・・・それがにゃんこなのです」

「ま、拾えたからいいさ。このままなら・・・・・」

蒔風が城への一本道を歩いて行こうとし、その瞬間それは訪れた。

ドンッ！！！！！！！

異常なほどの重音が鳴り、空間が振動する。

一瞬空がまがまがしい赤紫になり、そして青空に戻った。

「な、なんや今の!?」

「さっきの音なに?!」

「まさか・・・・」

皆がさっきの現象に驚くが蒔風が即座に答えを出した。

「そうだ、「奴」だ!!あの野郎・・・・想像以上に早いぞ!?」

「あの、舜殿・・・・」

「舜、おかしいのだ」

悪態をつく蒔風に、異変に気付いた凪と鈴々が話しかける。
それに蒔風も頷いて応じた。

「ああ・・・・・・街から人が消えた。否、俺達が消えたんだな、これは」

「ど、どういう？」

「説明は城に入ってからだ！走れ！！」

蒔風が皆を促して走り出そうとした。

だが瞬間、地面から黒い影が湧き出てきて、次々と人の形をとっていく。

「「奴」の「欠片」だ！！油断するな。一気に突っ切る！青龍！！」

ドンッ！ゴォオオオ！！

通りを青龍が飛び、「欠片」を蹴散らして道を拓く。
そこを走っていく蒔風達。

だが

「きゃあああああああ！！」

「うわおおおおおお！？」

「朱里！風ッ！！」

「欠片」の一体が朱里と風がさらい、屋根の上を走って城の方に逃げていく。

「人質にする気か！！青龍！彼女達を任せた！！」

「御意！！ダァッ！」

蒔風が「欠片」を吹き飛ばす青龍に皆を任せ、「欠片」がうごめく

大通りを走って屋根伝いに走っていく「欠片」を追いはじめた。

キュイッ!ドンドンドンドン!!

その蒔風に「欠片」が気づき、目の位置からビームを撃ってきた。

蒔風が走る周囲が爆発し、そのせいで一気に接近できない。

蒔風が砂埃の中から突き抜けると、そこには固まった「欠片」共がいて、蒔風の進路を塞いでいた。

跳び上がって避けようとも足元にビームを撃たれてそれが阻害されてしまう。

「クソッ!!う?イィイイ!?」

蒔風が半分悲鳴、半分悪態のような声を上げる。

目の前の「欠片」共の目が光り、今まさにビームをチャージしているのだ。

「ッ！！南無三！！」

蒔風が拳を振りかぶり、打滅星で「欠片」を吹き飛ばそうとする。

ドォン！！！！

だがその拳が振るわれる前に「欠片」共が真横から吹き飛ばされる。

見ると大剣「牙狼七星」を握った春蘭が店の壁を吹き飛ばしてこっちに来ていた。

さらにその後から何十射もの矢が「欠片」を撃ち抜き、一斉掃射していく。

「春蘭！！！」

「蒔風！！これはまさか！？」

「「奴」だ！！急いで城に行け！！！朱雀！！！同行しろ！！！！」

「了解です！！！！」

その場を蒔風が止まることなく駆け抜け、なおも「欠片」を追い続ける。

そして一気に跳躍、「欠片」に飛び付き、朱里と風を奪還せんと腕を伸ばす。

だが「欠片」が蒔風の着地点を狙って足払いをし、やむなく脚を引っ込め、一回転してから蒔風が着地する。

その隙に「欠片」が腕を振りかぶり、風の身体を街の城壁と中心の城との間にある見張り用の塔に真上に向かって投げ放った。

「あぁッ!?テメッ、このぉ!!!!!」

蒔風がそれを追って跳躍する。
それには簡単に追いつき、風をキャッチする蒔風。

しかし、蒔風のさらに上空に「欠片」が飛び出し、身体ごと横回転して朱里を蒔風に向かってブン投げた。
地面に向かって直角に落ちていく朱里を受け止め、三人分の体が塔の真上から落ちた。

屋根を突き破り、床を抜け、塔を破壊して地面まで落ちる三人。
塔の窓からは上階から次々と煙を噴き出し、床をぶち向くたびに衝撃が塔から円状に発せられる。

蒔風たちが地面に衝突し、そこに向かって塔が崩れて押しつぶしていく。

「欠片」は屋根の上に着地し、それを眺めたが、次の瞬間に消滅し

た。

「開！！！！！！翼！！！！！！！！」

ドゴォオオオウ！！！！！！！

瓦礫の中から一対の翼がバサァ！！！！と現れ、その瓦礫を吹き飛す。

その吹き飛んだ瓦礫によって「欠片」は消滅したのだ。

ガラガラと音を立てているその塔だった場所には蒔風と、その翼の下で守られている朱里と風がいた。

「あ、あわわわわ・・・・・・」

「さ、さすがに風もこれは・・・・・・・」

「大丈夫か!?怪我ないか!?このまま一気に城に向かう!!!」

蒔風がさっき自分が駆け抜けてきた通りの方を見ると、そちらの方から朱雀が獣神体で飛び出し、更に天に向かって青龍がとぐろを巻いて上昇して同じく城に向かって行った。

それを見上げて目で追い、蒔風も朱里と風を脇に抱えて城に向かう。

「秋蘭!!!他に残された者は!?」

「いないはずだ!!!後は城に皆いる!!!!」

「よし!!!この結界はまずい・・・・急げ!!!」

蒔風が焦り出す。

この結界は本当にやばいものだった。

ーーー

「お前も帯刀するようになったのか」

「まあね、自分の身はある程度は守らないと。この剣、結構なものなんだぜ？」

「マジ！？後で見せてくれ。それはともかく、この場には全員居るか？」

「ああ、今来たので全員だ。ここはなんなんだ？なにが・・・・・」

「出し惜しみしてる暇はないな。ここは行ってしまえば鏡の世界だ。もう一つの「都」を作って、そこに俺たちを転送したんだ。ここは「都」であって「都」ではない。そしてここにいれば、身体が徐々に消滅する！！！」

「な！？」

「この城なら大丈夫だ。獅子天麟で結界を張ってるからな。だが・・・くそっ、まさか街丸ごと飲み込むなんざ、想像もしてなかったぞ！！！！」

蒔風が憎そうな顔をする。

「あのやろう・・・・・ここに来てこんなに大規模な結界張りやがって・・・・・・！！！」

「舜!!城の中の影はひとまず片付けた!!!」

「サンキュー・・・・・・皆、話しがある、ここに集まってくれ」

蒔風の言葉に、全員が耳を傾ける。
そして、蒔風が朱里に街の地図を出してもらって、剣で指しながら説明した。

「この結界はあまりにも大規模すぎる。おそらく、支点となる場所があるはずだ」

「支点?」

「そう、そしてこの結界はおそらく、四点によって構成される結界!!!!」

「ということは・・・・・その四点を潰せば!!!!」

「この結界も消えるのですな?」

その言葉に蒔風がうなづく。

「だが一点でも残れば結界は継続される。四点すべてを破壊しなければならない」

「ならば・・・・隊を作るのですな？」

「その通り」

蒔風が星を指さし、正解、と言い、組み分けを始める。

「壊れた武器は修復されてるな？まず破壊のための攻める者、その場に応じて案を出せる軍師、その間に守る者、周囲を見る者の四人一組だ。それぞれに龍虎雀武をつける。まず青龍隊！！！愛紗、春蘭、朱里、霞、頼む」

「誰が攻める？」

「それは臨機応変に頼む。桂花が指揮をとり、配役を決めろ。他もそうしてくれ！！！次は・・・・・」

蒔風が隊を発表していく。

その配分は以下の通り。

白虎隊：鈴々、明命、華琳、翠

朱雀隊：星、秋蘭、季衣、桂花

「玄武は？」

「玄武は俺一人だ。無駄に時間をかけたくない。恋はここに残って、皆を守ってくれ」

「わかった。みんな、恋が守る」

「サンキュ。オレの結界はこの場合、消滅を防ぐだけで敵を防ぐ事は出来ない。この場に集中させたからある程度は大丈夫だと思うけど、それでも一応迎撃してくれ。部隊の方は神獣がいるから大丈夫だ！！離れすぎなきゃ消滅からは守られる！！！」

そう言いながら一刀に布をかぶせ、押し込める蒔風。

「残った武将は恋を中心に戦えない者の警護を！！！さあ、てめえら久々の出番だ！！！暴れるぜ！！！！！」

「「「「応！！！！！」」」」

ドドドドンッ！！！！

蒔風の背後に四体の神獣、青龍、白虎、玄武、朱雀が現れる。
その姿に一瞬見とれ、そしてその背に乗って皆が飛び出していく。

「この場は頼んだぞ！！！奔れ！！！玄武！！！」

ドォウ！！！！

玄武の岩山のような甲羅の上に蒔風が乗り、身体を引っ込めた玄武が飛び去っていく。

「で、では全員この中庭から出ないでくださぁ～～い！！！」

「そうね。私は前の事は情報でしか知らないけど、かなりヤバいらしいから、死にたくなかったらここにいなさい？」

皆を取りまとめるのは雪蓮に雛里だ。

更に結界周辺に恋を筆頭に思春や流琉、焔耶が並び、さらに後方には紫苑や桔梗の弓兵が控えている。

「結界から出てもある程度の距離なら効果はあるらしいな」

「でも四カ所・・・すぐに終わりますよね？」

「いや、そうとも限らん。」

焔耶と流琉の会話に思春が難しい顔をして割り込んでくる。

「前の時、「奴」は火を吐く蜥蜴（とかげ）・・・蒔風は「さらまんだー」とか呼んでいたな。そう言った獣を使役している。蒔風のあれみたいにな」

思春がすでにいない龍虎雀武を指して言う。

「つまり・・・・守りがいるってわけか」

「・・・・・・・・問題ない」

その心配そうな声を、恋の気合の籠もった声が飲み込む。
その声には蒔風の言う「絶対の覚悟」があった。

「恋が、ここ守る。誰にも奪わせない、恋の居場所だ」

「・・・・・・・・そうだな。気を引き締めろ、あの雑兵なぞ恐るるに足りん!!!所詮は「欠片」、打ち消してくれる!!!!!」

そういう皆の前にグズグズと「欠片」が現れてくる。

ただ襲うという使命の身に動く「欠片」は、確かに恐ろしいものだろう。

だが彼女らの目に一切の恐れはない。

ただ使命があるからではなく、守りたいものがあるという意志、その願いの強さが、欠片と人間の違いであるという証明が、ここにある。

戦いは、始まった。

だがしかし、そこにまだ「奴」の姿はない。

to be continued

真・恋姫†無双　～大結界・集結～（後書き）

アリス「始まりましたね！！」

始まっちゃった！！！！次は長くなりそう！！！！

ああ、あと生まれて初めてバトンと言う物を受け取りました。

作者の名前をクリックして、活動報告なんかを見れば書いてあるので興味があったら読んでみてください。

ア「でも結局キャラ書ききれてないですよね？」

多すぎるんですよ！！！！

正直、一刀と蒔風と「奴」がいればいいんじゃないかな？

ア「身も蓋もないことを」

だって書いてると途中に「あ、あいついるんだった。会話に挟ませないと」ってなって慌てて加筆したりするし。

ア「気をつけてくださいね？」

はい

ア「次回・・・・・・登場！？サゴーゾコンボ！！！！！」

それはオーズだアアアアアアアアア！！！！！！！！！

次回！！！各点の戦闘！！！！

ではまた次回！！！！！

儚き「ひとよ」の交叉

心　露濡れ　詠う

真・恋姫†無双　～四点結界～

都の大通り

「欠片」がうごめく偽りの都に、その男はいた。

「動き出したな・・・・・」

見上げると城から四方に向かって蒔風の四獣が飛び立っていく。

それを確認し、男がぼそりと呟いた。

「ケルベロス、迦桜羅、サラマンダー・・・・・任せたぞ」

ギャオオオ

そう言った瞬間、街の三方から光の柱が伸び、その場所にそれぞれ一体ずつ獣が召喚された。

東にケルベロス、西にサラマンダー、南に迦桜羅

その発現を見、「奴」が歩を進める。
向かう先には、城がある。

――――――

グワアッと大きく旋回し、一気にその地へと向かって行く朱雀。
その背には武器を構えた星と、緊張した面持ちの季衣、そして弓を構える秋蘭に帽子を押さえる桂花がいた。

地面から伸びた光の柱から大きく翼をはためかせ、迦桜羅が一気に朱雀へと接近する。

「・・・・・・・ハァッ!!!!!」

秋蘭が矢を次々と速射し、迦桜羅を狙うが、それのすべてをグワァ!!!と周囲を大きく回り込んで迦桜羅が回避し、その隙に朱雀が地面に向かって降りたっていく。

その後を翼をたたみ、身体を矢のように細めた迦桜羅が接近する。
朱雀が大通りで地面スレスレを飛行して、星たちが朱雀から飛び降りて問題の場所へと駆けだす。

その後方から迦桜羅が迫ってくるが、それに対して一旦上空にまわって上昇した朱雀が迦桜羅の後方から再び降りて襲いかかり、地面に足がつくかつかないかの位置で翼を広げてストップをかける。

迦桜羅が即座に身体を反転、朱雀と衝突し、地面を転がってその勢いでふたたび上空へと飛びあがっていった。

その間の星たちは大変である。
後方から襲いくる暴風に耐えながらも、それを利用しつつ前に進んでいかなければならないのだから。

ヘリが高速で接近し、急ブレーキをかけたような暴風が吹き荒れ、それが去るころには朱雀が迦桜羅と共に上空へと飛びあがっていた。

「急げ!!!蒔風は集中すれば大気が淀んだ部分があるからわかるはずだと言っていたが!?」

「・・・・・・・・・こっちだ!!!秋蘭!!!」

「星さんわかんの!?」

「わからいでか!!!」

四人が通りを走り、向かうは城壁。
そこの一部分に張られた「火」と書かれたいかにもな札を、秋蘭が鷹の目で発見する。

「射抜け！！！！」

「応！！！・・・・なっ！？」

だがその瞬間、地面から「欠片」が湧き出、通りを封鎖する。

「ダメだ！！これでは狙えぬ！！！」

「全員こっちよ！！！早く！！！」

桂花の声がし、皆がそちらに向かう。

入ったのは細い裏路地で、店と店の間にあるような場所だ。

そこに星たちが走り込んだ瞬間、「欠片」もそこに殺到してその体が通路に詰まる。

「考えなしのバカどもね！！さ、こっから一気に・・・・・」

桂花が季衣に指示を飛ばそうとする。

だがその瞬間、四人を巨大な影が覆い、振り返るとそこには細い路地の入口で合体巨大化しつつある「欠片」がいた。

「なななななな!?」

「桂花・・・・どうする?」

あまりの事にうろたえる桂花だが、即座にハッ!!としてさっきまで言おうとしていた事を伝えた。

「季衣!!潰しなさい!!!」

「あいあいさー!!!」

ドォン!!!!

季衣の巨大鉄球がその「欠片」を潰し、道を塞ぐ。
そしてその鉄球を指さして、桂花が「行くわよ!!」と号令をかける。

その上に乗り、屋根に上がってそこから一気に城壁まで走り抜けようとする四人。

その隣に巨大な影が起き上がっていっていた。
さっきの「欠片」が巨大経過中だったのがよくわかるほどにまで大

きくなった「欠片」が、その腕を振り降ろし、四人の先の店を叩きつぶす。

飛んでくる破片、その衝撃に跳ね上がった地面の岩盤などが一気に襲いかかり、四人を飲み込む。

星がとっさに桂花を担いでその岩盤の上に飛び乗り、秋蘭、季衣もそれに則って瓦礫の中を進んでいく。
そしてそこを抜けた瞬間、目の前に巨大な「欠片」第二号が現れ、目に光を溜めこんでいた。

「まずい！！！来るぞ！！！！」

蒔風からあらかじめ聞いていたものだった。
どういうことかは理解できないが、あそこから放たれる光は危険であると！！！

ドンッ！！！！ゴジュアアアッ！！！！！

「うわあああああああああ！！！！！？？？」

「季衣！！！桂花を頼む！！！！」

「わあああああああッ！！！ってえええええええ！？」

星が地面に落ちていく季衣に桂花を投げ預け、秋蘭の足に手を添える。
その動作から秋蘭がそれから何を為すかを理解し、星の槍「龍牙」を手に、膝を曲げる。

「飛べっ！！！！」

「ハァッ！！！！」

星が秋蘭の足を持ち上げるように上空に投げ、それに合わせて秋蘭も跳躍する。

龍牙を回転させてから弓に添え、弦を引いて目標を睨みつける。
だがその目標は「欠片」に隠れて見えない。

しかし

「秋蘭！！！目標、あなたから左に三十度の方向、距離二区画分！！！！！眉間をぶち抜きなさい！！！！！」

「応！！！」

地上からその位置を観測した桂花が目標の位置を伝える。

それを信じ、秋蘭が弓に思いを込め、龍牙を放つ！！！！

ゴッ！！！！ボヒュッ！！！！！ガゴォオン！！！！！！！！！

空を裂き、巨大な「欠片」の眉間をぶち抜いて、秋蘭の放ったそれが城壁に到達する。

寸分たがわず目標の札に命中し、城壁ごとそれを破壊する。

「よし！！！！」

「やったぁ！！！！ってうわ！！このぉ！！！！」

秋蘭が空中でガッツポーズをとり、季衣が喜んでいると、そこに「欠片」が出現し、鉄球でなぎ払って行く。

星と秋蘭もすぐに季衣のところに集まって来るが、星の龍牙は瓦礫の中、秋蘭の矢もそろそろ尽きてきたところだ。

と、そこに大通りのすぐ真上、本当にすぐそばの真上を朱雀が飛び去り、その後を迦桜羅が追う。

その衝撃波に地上の「欠片」がすべて吹き飛び、周囲が開ける。

「今だ！！！行くぞ！！！」

秋蘭の掛け声に皆が駆けだし、城壁の方へと向かった。

何はともかく武器だ。

そこなら詰め所に矢があるし、星の槍も回収できる。

朱雀のおかげで難なく到着し、矢と槍を回収する四人。

だがそこから出てきた瞬間、上空の迦桜羅が口から炎弾を吐いてくる。

その数三弾。

しかし皆がその場から逃げ出そうとした瞬間、朱雀が星たちの目の前に飛び込み、翼を広げてその腹で炎弾を受け止める。

キャルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！

炎弾の爆発に朱雀も星たちも呑まれ、迦桜羅が勝利の咆哮を上げる。

だがそうはならない。
炎が渦を巻いて一カ所に集中しだし、消えていく炎の中から朱雀が姿を現した。
その口に集まった炎を思いっきり吐き出す朱雀。
その攻撃を避け、迦桜羅が旋回して距離をとり、朱雀に突進しようと翼をはためかす。
朱雀もその背に星たちを乗せ、同じ上空に上がってそれに応対する。

「皆さん!!大丈夫ですか!?」

「大丈夫じゃないわよ!!死ぬかと思ったわ!!!!」

「大丈夫ですね!?それだけ言えてればまだ余裕なほうです!!!!」

「お主は大丈夫なのか?朱雀」

「お恥ずかしながら、力としてはあっちの方が上です!!!手間取ってしまい、申し訳ないです!!!」

「なに、こっちも助かった。あれは・・・落としておかねばならんな」

「他の場所に向かわれたら厄介です。今ここで潰します!!!」

都の上空

そこで二羽の怪鳥による空中戦が始まろうとしていた。

ーーー

ケルベロスはそれに向かって三口による連続黒炎弾で青龍を圧倒する。

すでにその背には愛紗たちはおらず、支点の場所に向かっていた。

「どこだ!?」

「わから・・・いや、見つけた!!!!」

ドォオオオン!!!!

ギャオオオ

「支点はあそこだ！！！！行くぞ春蘭！！！霞！！！」

「応！！！」

「合点！！！」

愛紗が指をさすのは一軒の店だ。
どうやらあの店の柱が支点となっているらしい。

だがその店までの道のりを「欠片」が覆い尽くす。

それに対して春蘭がその中の中心に飛びこんで地面を爆発させるように大剣を叩きつけた。
その衝撃に何体かが掻き消えるが、あまりにも数が多すぎる！！！

「キリがない！！！朱里、どうする！？」

愛紗の言葉に一瞬だけ考え込み、そして朱里が命を飛ばした。

「霞さん！！！「欠片」の周囲を風足で走り回ってください！！！」

「どれくらいや！？」

「思いっきり！！！最高速度で！！！！時間がありません！！！！！」

「よっしゃぁ！！！！！！」

霞が足に力を込め、超加速スピードで周囲を旋回しだす。

最初は霞の姿が消えるが、その回転数を上げると共にだんだんと輪郭が見えてきた。

紫の髪に薄青の羽織が線を描いていく。

風が渦を巻き、「欠片」どもの身体が浮いていった。

そしてついに霞が最高スピードを出そうと下駄を脱ぎ、武器を愛紗に投げ預ける。

その渦は次第に竜巻となり、空中で「欠片」どもが集まって一つの塊となっていく。

「春蘭さん！！！今です！！！！」

「オオオオオオオオオオ！！！！魏武の大剣、此処に有り！！！！！！」

春蘭が氣を大剣、牙狼七星に込める。

するとその剣が炎のようなオーラを纏い、グングングングン伸びていった。

「ラアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

ザシッ！！！！！！ドオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！

そしてそれで「欠片」を切り裂き、更に大きく振りかぶり、店に向かって氣の籠もった体剣を投擲のように投げ放った！！！！！

しかし

ドスっ！！！！ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

その間にケルベロスが入り込み、その肩に牙狼七星が突きささる。
にも関わらず真正面から愛紗たちに咆哮して威嚇するケルベロス。

「全く効いていない！？」

「まずい！！！」

愛紗が叫び、朱里を引っ張ってケルベロスの正面から退く。

同じように霞と春蘭もその場から引き、その瞬間、ケルベロスの黒炎が周囲を焼き払った。

店までの道には炎の壁ができ、とてもじゃないが近づけない。

「これじゃ近づけません！！！」

「どうする・・・どうする！？」

「愛紗！！朱里！！」

「二人とも！！！」

悩む愛紗と朱里の元に二人が合流する。

戦況はかなりまずい。

青龍は落ち、道は断たれた。

しかも「奴」の使役獣最強のケルベロスまでいる。

額を汗が流れ、地面にたれる。

と、そこに一人の人影が現れた。

「ぐ・・・・・は・・・・・」

「あなたは!!!」

「青龍さん!?」

そこに現れたのは腕を抱えて壁に身を預けながら歩いてきた人型の青龍だ。
もとよりあまり感情の出ない表情に、少しばかりの苦痛と悔しさがにじみ出ていた。

「・・・すみません・・・・不覚をとりました・・・・・」

「いや・・・・大丈夫か?

「まだ・・・・・・いけます・・・・・・」

「行くにしてもどうする?道は・・・・・・」

そこで青龍が案を出す。
その案に皆少しばかり驚いたが、今はそれしかない。

そして動いた。

路地から飛び出してきたのは愛紗、秋蘭。

黒い炎の壁に向かって行き、それを確認したケルベロスが炎を越えて突進してくる。
その爪が振るわれ、地面に三本の溝が刻みこまれる。

愛紗と春蘭はその瞬間にUターン、ケルベロスから言ったん距離をとった。
そして次の瞬間、ケルベロスに向かって何かが疾走してきた。

霞である。
霞が黒炎スレスレを疾走してその炎を巻きあげ、引き連れて来たのだ。

霞が走った後を尻尾のように黒炎がついていく。
そして霞がケルベロスの正面に走り込んで鼻面を蹴って後頭部にまわる。

ケルベロスの顔面に黒炎がぶち当たって一瞬だけ視界が隠れた。

その一瞬の隙に霞がケルベロスの頭の一つに飛龍偃月刀を突き立てる。

さすがにその一撃にはケルベロスが暴れ出し、犬の仕草そのまんまに頭を振り、身体を独楽のように回転させる。

その遠心力に抵抗しながら、霞が必死に偃月刀にしがみつく。

身体が旗のようにはためき、それでも放さない霞は手元で刀を更に抉り込まれ、頭一つを潰すことに成功した。

その隙に春蘭が剣を投げる。

それは春蘭の物ではなく、剣身状態の青龍。

そしてそれがケルベロスの懐に投げ込まれた瞬間、一気に獣神体として顕現する！！！！

ガシュッ！！！ガオオオ

周囲の店が破壊され、その間を飛んでいく青龍が、ついに見張り台の塔に着き、そこに身体を巻き付け着地して咆哮する。

向かい合った先には空中に立ち、左の頭を潰され二対の眼球で青龍を睨みつけるケルベロス。

「グルルルルルルルルル・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「グァルアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

そして二頭が一気に駆けだし、ぶつかり合う！！！！

頭と頭がぶつかり合い、その衝撃で背に乗る四人が宙に浮く。
そして春蘭が右の、愛紗が真ん中の頭めがけて刃を落とす！！！！

ケルベロスが身を捻ってそれをかわそうとするが、その身を牙と爪に引き裂かれながらも青龍が意地で巻きつき、その動きを止める。

そして首が落とされた。

ケルベロスの身体が霧となって消滅し、青龍の身体も落ちていく。

ズズゴォン・・・・・・・・・！！！！！！！！

地面に落ちた青龍がクッションになり、うまく着地する愛紗たち。

そして青龍が人型になって、地面に倒れ伏した。

「青龍殿！！！！」

「大丈夫か！？」

その身体には全身にわたって切り傷が刻まれ、世界設定で着込んでいた青い中華服はボロボロで血に染まっている。

「なに・・・・・大丈夫です・・・・・・・我らは・・・・・主が死なぬ限り・・・・・死にません・・・・・・あのケルベロスをこの程度で斃せたのですから・・・・・・・・・これは僥倖です・・・・・・」

そう言いながらぐらりと倒れる青龍。

城までは近い。だが、上空を見ると朱雀と迦桜羅が戦闘を行っている。

「どうする？」

「こちらは負傷した青龍さんもいますし、あちらに合流はできません。そもそも、青龍さんがこれではあそこに行くことも・・・・・・」

「すみま・・・・・せん。この身が至らぬばかりに」

「い、いえ！！気にしないでください！！！」

「城に着くまでの護衛は承ります。さあ、行きましょう」

青龍が手に青龍刀を握って先に進む。

その後を追いながら、青龍組は何とか勝利を収めたのだった。

ーーー

なんとも全滅してしまいそうな名前だが、そんなことは一切なく

「いえーーーーい！！！そこどけそこどけ～～～～～♪」

「どんどん行くのだ！！！！！」

「行きますともさ！！！！！」

ノリのいい白虎の頭に鈴々が乗り、腕を突き上げゴーゴーと叫んでいる。

「欠片」を蹴散らし、爪で裂き、踏みつぶしながら進んでいく。

「「欠片」なんてたしたことないのだ！！！もうラクショーなのだ！！！！」

意気揚々とする鈴々だが、それに華琳が口をはさむ。

「調子に乗らないの。「欠片」だって、本来こんなに弱くはないはずよ」

「そうだよ～～？こんだけいっぱいいるから弱っちいだけで、使い方次第では舜だって追い詰めるくらいにはなるんだから」

「マジかよ・・・・・」

「お、恐ろしいですね・・・・・・」

翠と明命がうえええ・・・と言った顔をするが、そんなことは気にもしない鈴々と白虎。

「でも今は楽だし。このまま支点壊しに行こう！！！」

「おーーーーー！！なのだーーーーー！！！！」

白虎が大通りを走り抜ける。

が

ゴオウッ！！！！！！

白虎の行く先が炎に覆われる。
一瞬驚く白虎だが、その爪に風を纏って炎を引き裂いてその先で止まる。

そこにいたのは巨大な火蜥蜴、サラマンダー。

全身が赤く発光し、その皮の内側に溶岩が詰まっていると言っても過言ではない姿をしている。

「フシュルルルルルルルルルルル・・・・・・・・・・・・」

「あちゃ～～～～でてきたか」

シャアッ！！！！！！！

サラマンダーが一気に白虎に駆け出し、炎のともった尾で横殴りにしてくる。

白虎がそれを跳躍して避け、空中で方向転換して着地する。

「皆は支点を壊して！！！！こいつは僕がやるから！！！」

「任せたのだ！！！」

「行くわよ！！みんな！！」

「「応！！！！」」

鈴々たちを送り出し、白虎がサラマンダーを睨みつける。

「さぁって・・・・舜の使役獣のうち、最高の俊敏性をもつこの白虎に、地べたをはいずり回るトカゲが勝てるかな？」

シュシュシュシ

獣の咆哮を上げ、白虎がサラマンダーに飛びかかる。
獣が戦いを始めた。

そのころ鈴々たちはと言うと。

「翠、先行して「欠片」どもを殲滅しなさい。鈴々はその道を行って支点の破壊。明命は私と共にその後を追う。行くわよ！！！」

「「「了解！！！！」」」

華琳が的確な指示を出し、確実に支点へと近づいていく。
支点となっているのはどうやらある一軒家にある白い布だ。

「欠片」などものともせず、一軒家内に入り込む四人。
そしてその瞬間地面が揺れた。

地面の下から巨大な手が現れ、それが地面ごと一軒家を握り潰す。

GHOOO

そして大きく息を吸い込み、華琳が号令をかけた。

「狙うは足！！！！！片足に向かって集中攻撃だ！！！！！！皆、魂を燃やせ！！！！誰一人として死ぬことは許さない！！！！！」

「「「応！！！！！」」」

四人が駆けだす。

翠が風足で「欠片」の左脚を駆け上がり、その膝であろう部分を突き貫いた。

風足によって高速化しているその切っ先で突かれれば、ただで済むとかいう問題ではない。

さらにいえば翠は十字槍「銀閃」を回転させて突いた。

それはさながら掘削機のように「欠片」の膝を砕き、抉り、半分ほどにまで貫通した。

そしてその穴から右半分を、明命が日本刀（のような刀）「魂切」で切り裂いた。

「欠片」の身体がゆっくりと崩れ、片膝を突く。
だがそんな傷跡はすぐに回復する。

左手を使ってその体を持ち上げようとする巨大な「欠片」
しかし、その体は再び崩れることとなる。

「おりゃあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

鈴々がついた左手首を「蛇矛」にて一刀両断し、その体を支えきれなくなったからだ。

溜まらず両膝をついてなんとか上体だけはおこす「欠片」
しかし、この覇王がそこで止めるはずもなかった。

ジャキッ！！！！！！！

「欠片」の左胸に華琳の大鎌「絶」が突きささる。
地上にはそれを投げた姿勢の華琳がおり、傍らには明命だけがいた。

「翠！！！！そこよ！！！！！引き裂きなさい！！！！！」

「応さ！！！！！うぉおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！りゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

翠が「欠片」のその場所に現れ、片手に「絶」もう片手に「銀閃」を握って一気に回転しだした。

独楽のように回転するその刃によって、「欠片」の胸が次々と抉れていき、掘り進められる。

ギイガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！

だがそれを黙って見ている「欠片」でもない。
その巨大な手のひらで翠を押しつぶそうと腕を振りあげる。

しかし、それは実行されない。

それはそうだ。
これだけ高速回転する刃を持っている翠に触れようとするならば、
その手が細切れになるのは必須！！！！

指が切断され、手のひらが消滅する。

そしてそんなことも意に介さず、翠が回転を続け、ついに見つけた。

「！！！！！！！！そこぉ・・・・・・・・・だぁッ！！！！！！！！」

回転を止め、一気に振りかぶって銀閃と投擲する翠。
銀線はまさに銀の一閃と化し、「欠片」の胸を貫き、背中から飛び出す。

銀閃の先には白い羽織がバタバタと引っかかっており、それが地面に突き刺さった瞬間、ボロボロと崩れて消えてしまった。

そしてその「欠片」だけが残される。

巨大な「欠片」は守る対象が破壊された事で、優先事項を鈴々たちに変更する。

地面に降りた翠を含めた四人の頭上に「欠片」が迫る。

だが、その「欠片」の身体が白虎によって吹っ飛んだ。

しかし、白虎がやったのではない。

むしろやったのはサラマンダーだ。

その戦闘で吹き飛んだ白虎が偶然ぶつかっただけのこと。

「白虎!?」

「いったぁ！！！！！くそっ！！怒らせたったかなぁ・・・・・・・」

腹を上に見せ、倒れる白虎が見据える先には巨大な黒煙。

そしてその中から、それは出てきた。

サラマンダーの尾が切れ、それを右手に握り、上体を起こして二足歩行へと姿を変える。

そして全身を炎の鎧で包み、千切れた尻尾にも炎が纏われ炎剣と化す。

ゴキゴキゴキゴキ！！！！！という音を鳴らしながら、サラマンダーが第二形態へと姿を変える。

それはまさに炎の戦士・サラマンドラ。

地獄から来たのではないかというほどの炎を全身にまとったそれが鈴々たちに近づいてくる。

「こうなる前に倒したかったなぁ・・・・・行くぞ！！！！！」

「白虎！？」

「鈴々たちはここにいて！！！！！」

ドォン！！！！！

白虎がサラマンドラに飛び付き、拳で地面に落とされる。
だが即座に起き上がって前足で顔面を引き裂き、脚を下ろして頭で突っ込む。

それに若干サラマンドラが後ずさるが、ダメージはないようだ。
その手の炎剣を下から振り上げ、それが白虎の腹部に命中して身体が吹き飛ぶ。

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

白虎の咆哮が轟き、街を押しつぶしながらその体が転がっていく。

「白虎ぉ！！！！！」

「来るなぁ！！！！！！来たら焼け死ぬぞ！！！！！！！」

「ッッ！！！！！！」

鈴々たちが駆け寄ろうとするが、白虎がそれを止める。
このサラマンドラは危険すぎる。

確かに「奴」の使役獣で最高の力を発揮するのはいつだってケルベロスだ。
だが、そのケルベロスでも倒し切れなかった場合、その相手の最後の処刑人がこのサラマンドラ。

いままで三体同時に倒されてきたからこそ出てこなかっただけで、これが本来の使い方なのだ。

迦桜羅で逃れ、ケルベロスで潰し、それでだめならサラマンダーでやり、そして最後にこいつに変わる。

「奴」の使役獣は少ない代わりに強力だ。
とてもではないが白虎一体では倒せない！！！

「く、そおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

白虎がそれでも起き上がってサラマンドラに向かう。
その瞬間

ズッ、ドゴォ！！バァアアアアアアアアアアンンンン！！！！！

何処からか水の砲撃が飛んで来て、それがサラマンドラに当たる。

サラマンドラの胸にそれが命中し、強烈なその一撃に地面に倒れる
サラマンドラ。

サラマンドラの胸から、長い長い日本刀をもった人影が落ち、砲撃はそれを撃ったものであり、こちらに来たのは偶然であることを証明していた。
だが偶然だろうがなんだろうがそんなことはどうでもいい。

とにかく

「今がチャンス！！！！！ううううううううううううう！！！だぁ！！！！！！」

白虎がサラマンドラの首に噛み付き、その牙をしっかりと食い込ませる。

そして身体を回転させてそれを上空に投げ放った。

ちょうどそこには朱雀と交戦中の迦桜羅がおり、二つの巨大な獣が空中で衝突し、地面に落ちていく。

「ナイスです！！！白虎！！！！！秋蘭さん、頼みます！！！！！」

落ちてくるサラマンドラと迦桜羅に、上と下から朱雀、白虎が迫る。

上空の朱雀はその身を朱雀槍へと変え、秋蘭がそれを弓に構える。
その先端が三又槍に羽ばたき、炎を纏って打ち出される！！！！！

その矢はサラマンドラの脳天に命中し、ほんの少しだけ食い込んだ。
だがそれだけでもいい。それだけ食い込めば、あとは済む！！！！

ドッ、バァン！！！！！！

その状態から一気に朱雀が獣神体へと姿を変え、サラマンドラの頭部を中から爆破させた。

頭を失ったサラマンドラが地面に落ちながら消滅し、朱雀が地面に降り立つ。

一方落ちていく秋蘭たちを回収しようと上空にジャンプした白虎は、その途中で迦桜羅を捕まえ、翼に爪を、喉に牙を喰い込ませて、その首の骨を一気に捻り折った。

そして迦桜羅も消滅していき、落下する秋蘭たちをその背に回収して白虎も地面の降りる。

「なんとか・・・・・・・勝てましたね・・・・・・・」

「勘弁してよもー。僕らの性能は七体全員そろってあっちの三体を同じなんだから！！！！」

「文句は言わないんですよ、そこは。さ、おそらくさっきの砲撃は主のもの。おそらくあちらはそろそろ終わるでしょう。急いで城へ！！！！」

朱雀の先導で皆が城に向かう。
途中で青龍とも合流し、先を急いだ。

ーーー

蒔風の方には使役獣が来ていない。
故に楽に終わったと思った蒔風だが、そうはならなかったのだ。

こっちの支点は黒い石だった。

それを見つけ、接近すると、「欠片」どもが案の定現れてきたのだが、普通の物とは違っていた。

「あぁ!?なんだよあの「欠片」!!!!」

「どうやら「奴」が今まで回った記憶を元に創られているようですのう」

「ンなこたわかってら!!!あーーん?セフィロスにリュウガにウィツァルネミテアにアックアだと!?」

「まだ出てくるかもしれん!!!」

「チッ・・・・・・玄武、わかってんな?絶対その姿から元に戻んなよ!?」

「わかっておる!!」

そして蒔風が走り出した。
戦闘そのものは長引きはしたが苦戦はしなかった。
所詮は紛い物。しかも「奴」が再現したモノの、さらに二番煎じなのだから当然だ。

そして最後にセフィロス・レプリカを圧水砲で吹き飛ばして殲滅を完了。
黒い石を破壊して、支点がすべて失われた。

だが

「なぜだ・・・・・・なぜ結界が破壊されない！！？？」

蒔風が玄武を通して青龍たちに連絡を取る。
本当に破壊したのか、と

『しましたよ！！こっちは「火」と書かれた札を！！』

『僕の方だって翠がやってくれたよ！！！白い羽織！！あれ消えたら支点の気配もなくなったよ！？』

『我らは店の柱でしたな・・・・・愛紗殿が確かに・・・・・・・』

「どういうことだ・・・・・・・確かに支点の気配は消えている・・・・・なぜだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！まさか！！！」

蒔風が城の方を睨みつける。
そっちには恋達がおり、皆を守っているはずだ。

「・・・・・・・・・・！！！！！！！！！まずい！！！！！やられた！！！！」

「どうしたのじゃ！？」

「クソッタレ！！！！！これは四点結界じゃない！！！！！五点・・・・五行結界だ！！！！！！」

「な！？」

「東に「木」の柱、南に「火」の札！！！」

「五行において残りの西は「金」、北は「水」で・・・・・そうか！！！」

「色であらわすと西の「金」は「白」で、北の「水」は「黒」だ！！！！」

「ではまさか！！！！」

「このままでは城がヤバい！！！！最後の五行、「土」なんざどこにでもある！！！！！」

蒔風が城の方角を見る。

そこではまさに激戦が繰り広げられていた。

ーーー

最強が故に戦に時間をかけてこなかった恋ならではの弊害だ。
ここまで続く持久戦に、恋は慣れていないのだ。

と、そこに最悪がやってきた。

「お熱いねぇ・・・その仲間を思う気持ち、嫌いじゃないわ～～。だけど惜しむらくは主要人物ってとこか？」

「！！！！！お前・・・・・・！！！！！」

そこに「奴」がいた。

中庭の中を悠々と歩いて来て、恋を見据えて立っている。

「お前と戦ってみるのも面白そうだよなぁ」

「やってやる・・・・・・」

「ふふん・・・・・・・やだね」

その言葉と共に「奴」の姿がフッ、と消える。

そして「奴」が現れたのは、フードをかぶった人物の前。

「！！！！！！！！しまった！！！！！！！」

「貰ったぞ！！！！北郷一刀！！！！！」

「奴」が拳をフードの中の身体に突きこむ。

ドゴンッ！！！！というものすごい音を出し、その威力を物語った。

「か、一刀・・・・・・・・」

「北郷・・・・・が・・・・・・」

周囲から声が漏れる。

それが誰のかは分からないが、最後の言葉だけは誰のものかはっきりした

「ご主人様あああああああああああアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

桃香の声が庭園に響き、「奴」はニヤリと笑みを浮かべた。

to be continued

真・恋姫†無双　～四点結界～（後書き）

ってなわけで始まりました！！！

アリス「アリスと！！！」

作者の！！！

「「何を始めましょーか！？」」

さあ、始まりましたこの続けるつもり皆無の新コーナー、「何を始めましょーか！？」

ア「文字通り、なにを始めようかというコーナーです！！！」

「「だから何がしたいんじゃアアアアアアアアアア！！！！！！！！」」

ア「バカですか！？ほんとに何がしたいんですか！？」

自分でもようわからん。
なんでだろう？

ア「例によって今回もあの曲聞きながら書いたんですか？」

うん、ニコニコであれ聞きながら。
わからない人は三話戻ってみるといいよ！！！まえがきにあるから！！！

ア「こうしてアクセス数を稼ごうとするせこい作者なのでした」

うるさい

どうだい？そこのキミ、評価ボタン、クリックしてみないかい？

ア「携帯だとメンドイだけだろ」

はぐう！！！！！

ア「次回、「奴」の理想、一刀の叫び、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ覚醒」

ではまた次回

いつかまた、どこかで逢おうぜ！みんな！

萌将伝、エンドにて　～一刀～

「奴」の拳がフードに突き刺さる。

その顔がニヤリと歪む。

しかし

「お主が世界を喰らうものか？」

「なに？」

ドゴン！！

「奴」の胸元にデカイ拳がブチ当たり、その身体を吹っ飛ばした。

あまりの威力に「奴」が片膝をついて、倒れ込む。

「ゲホッ・・・・・・貴様・・・・・・観測者か！！」

「奴」が胸を押さえて悪態をつく。

それに合わせてフードを脱ぎさり、卑弥呼が姿を現した。

「いかにも！！我が名は卑弥呼！漢女道亜細亜方面前継承者にして、「赤銅大戦」唯一の生き残り！！もう二度と、我が目の前で世界を消させはせん！！！ゆくぞ、貂蝉！！」

「了解ぃ！！ブゥルアアアアアアアアアアッッッ！！」

卑弥呼と貂蝉が同時に駆け出し、「奴」に向かっていく。

見た目はあまりにも変態な彼等だが、その戦闘力は恋と同等。

力のみならば、それをも凌ぐ。

「チッ、筋肉馬鹿が・・・・」

卑弥呼が殴り掛かり、貂蝉が蹴りを放つ。
その力はあまりにも暴力的であり、まともに受ければ「奴」でもただでは済まない。

「クソッ、やっぱ北郷一刀は・・・・・」

「ご主人様は舜ちゃんと一緒よん」

「貴様の標的が主である以上、ここに置いて行くわけがなかろう！」

そう、一刀がいるのは蒔風のところだ。
もっと正確に言うなら玄武の甲羅の中だ。

卑弥呼はフードを被って身を小さくして囮を演じていたのだ。

「ぬあっ！！」
「どぅあ！！」

貂蝉と卑弥呼のダブルパンチが「奴」を襲い、腕をクロスして受け、

「奴」が後退する。

「調子に・・・・・・のるなっ！！」

ゴォウ！！ドォン！！

「ぬがっ！？」
「きゃあ！！」

「奴」が「獣人」を横に薙ぐ。
そこから発せられた斬撃破が卑弥呼と貂蝉を襲い、地面が吹っ飛び、
巨体が舞った。

「つ、強い！」

「流石だの・・・・・だが！！」

グラリ、と卑弥呼が立ち上がる。
その目は異様なほどにギラついている。

燃え上がるは、使命

すでに引退した身であろうとも、世界を破壊するその者に、もう二度と負けるわけにはいかない。

「まだ立つか・・・なあ、安心しろよ！オレは破壊するだけじゃない！その後に再び復活させ、理想世界を創るんだ！誰も蔑ろにされない、そんな世界を！」

「奴」が叫ぶ。自らの理想を。
そこに愛紗たちが到着し、それに叫び返す。

「我々は誰ひとりとして蔑ろにはしない！！」

「そう、私たちはこの国のすべての民の為に戦い、そして一つになった！！」

愛紗や華琳が「奴」に反論する。
自分達は戦った。この国の、弱き民のために。

そしてみんなで勝ち取った平和。
それを蔑ろになんかしたことは一切ない。

だがその真っ直ぐな想いに「奴」が言い返す。

「では・・・・・貴様らは散って逝った名も無き兵の事を思い起こせるか？一人残らず？いや、貴様らは出来るかもしれない。そういった奴らを、思い出せるかもな。だが他の世界でこの物語が語られるとき、その者たちがどのような扱いを受けているのかわかるか！！？どれだけ必死に戦おうとも、記されるのは「〇万人」の一人だったり、死んでしまってもただの数値でしかない！！彼等にも家族がいて、悲しむ人がいるのに、戦いの後に描かれるのは貴様ら主要や最主要のハッピーエンドだけ。この物語の脇役がどんなものかわかるか？顔はなく、ただの「蜀軍兵」や「町民」の扱い。しかも彼等が被害を受けても、そんな描写は一行にも満たず、物語を見るものは「そうか」の一言で済ませる！！主要の死には悲しみ、脇役は捨てられる。そんなことがあっていいのか？いいとでも言うのか！！！・・・・オレは赦さねぇ・・・・・・・誰だって蔑ろにしていいわけがねぇ！！オレは・・・・・オレの大切な友人がそんない加減な扱いを受けるなんて堪えられない！！だから・・・・・・・だから！！」

それは「奴」の・・・・・・かつてのマイカゼシュンの想い。

確かにそれは素晴らしいことだ。誰一人として脇役はなく、その皆が中心人物。

そんな世界を成そうとするのは確かに皆にとって良いことなのかもしれない。

しかし・・・・・・・・

「だからと言って、貴様のその為すことが許されるわけじゃない！！！！！！」

蒔風が玄武と共に庭園に降り立ち、玄武の中から一刀も出てきた。
そして「奴」に向かって叫ぶ。

「お前の理想は確かに素晴らしいかもしれない。誰一人として適当に扱われることはないかもしれない！！！」

「だが、お主にわかるのか？消えていくその世界に存在した者たちの叫びが、嘆きが！！！その涙が！！！貴様が手に掛けるのは最主要人物一人かもしれない。だがその結果破壊するのは貴様の言う脇役も、そのすべてを含めた世界なのだぞ！！！！」

更に続く卑弥呼の叫びに「奴」が頭をガクガクと揺らす。
そして、狂ったように叫んだ。

「知るかよオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！ンなこと知るか！！！！！オレは世界を食らう、力を得る！！そしてそれで理想の世界を作るんだ！！！！！誰にも邪魔はさせねえ！！！ハアアア

「グッ・・・・つった～～～・・・・・・・一刀？」

だがそんな中、蒔風に庇われた一刀が蒔風を押しのけて立ち上がる。
仲間を見、蒔風を見、そして「奴」を見据え、その言葉を紡いだ。

「オレがこの世界に来たのは、なんでかはわからない。必然かもしれないし、偶然かもしれない。奇跡かもしれないし、当たり前だったのかもしれない。でも、これだけは言えるんだ」

そして一刀が言い放った。決定的に「奴」の思想を否定する言葉を

「この物語は俺から始まった物語だ！！！！「北郷一刀」の世界なんだ！！！！！確かにあんたの理想は素晴らしいよ。オレだって誰かが死ななきゃならないなんて嫌だし、それがなくなるなら何でもする。でもそれだけはだめなんだ。この物語を誰かに任せるなんてできない。そんな無責任な事できるか！！！！誰かの死も、生も、総てを背負えるとは思っていないさ。でもな、それはすべて俺たちが起こしてきたことだ。その罪だけはオレたちの背負うべき物だ！

！！！それを投げ捨てて誰かに任せ、無かったことになんかできるか！！！！！出会えたことも、別れることも、すべて俺たちのだ！！！！それを全部なかったことにして、やり直すなんてことが、許されていいはずがない！！！！！！！」

そして一刀が腰の剣を抜き、「奴」に向かってその切っ先を突き出す。
眼前の敵を見、自軍に号令を下す王のように。

その姿はまさに王。
まさしく彼は、多くの物の上に立ち、皆を率いる王（しゅじんこう）だった。

「この世界で出会って、紡がれ、ときには切れても、こうして皆といられるこの絆。それが俺の力だ！！！出会える力が、俺の力だ！！！！繋がる絆が、想いが！！！！！俺のすべてだ！！！！！この世界は消させない。絶対に消させない。その俺たちの軌跡を、消させることなんかさせてたまるか！！！！！！」

その言葉と共に一刀の剣がほんのり光り出す。

そしてその傍らに蒔風が立ち、一刀の顔を見る。
一刀もその顔を見、頷く。

「その世界に存在する、人の想い。それは絶対に消させない。過去の翼人がどうだったかは知らないが、俺はそれを守りたい！！！行くぞ、一刀！！！」

「ああ・・・・って俺も？」

「あんだけ言ったんだ。やってやるのが筋ってもんだ！！！大丈夫。お前にも力はある」

蒔風が右手を前に出し、手のひらを上に向ける。

【ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ　Ｓｈｉｎ・ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ！！　ＡＬＬ　ＳＥＲＩＥＳ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ！！！】ー

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～！！！

いつもとは違うＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

同一の最主要の物語を渡った時に発動するそれは、一刀に新たな力を与える「鍵」を出現させた。

そう、「鍵」

その小さな鍵が、蒔風の手の平に光を発しながら浮いていた。

「一刀、どうする。これを、とるか？」

「取るとどうなるんだ？」

「お前は外史や正史を越えてしまう存在になる」

「・・・・・・どういうこと？」

「今までと変わらん。今までだって、お前は正史外史を飛び越えたんだからな。ただ単に力が手に入る。それだけだ」

「なんだよそれ・・・・・全く・・・・・使うさ。あの野郎を倒せるなら」

「よく言った！！！！！」

蒔風が「鍵」を一刀の胸に叩きつける。

その瞬間に「鍵」は消え、一刀の胸の奥でカチリ、と音がした。

だがその光は消えず、一刀の胸で輝き続ける！！！！！

「う、おおおお

「な・・・・・・・まさか・・・・・・・・・それは！！！！！！」

「その通り！！！！そもそも、前回でその兆候は表れていた！！！！！覚えているか？その時のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫを！！！！！」

蒔風の言う通り、前回のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ時、一刀は全員の武器を使用した。本物とは別の物を出現させて。
蒔風のように言うならば、まさにそれは「力を借りた」
しかも魔術などの技術でではなく、仲間のその想いによって。

そんなことができるのは、世界においてただ一種の者だけに許された特権！！！！！

「一刀もたった今言ってたはずだ。「繋がる絆が、想いが俺のすべてだ！！！」とな！！！！！」

ドンッ！！！！！！！

光が収まり、一刀のたった一カ所に変化が起こる。
その場所は、背中。

一刀のその背に、青い蒼い、「蒼青（そうせい）の翼」が大きく羽ばたく！！！！

「言ってやれ、一刀。お前の力、その想いを！！！！！」

「・・・・・・・オレの想いは・・・・翼の力は！！！！！」

ザァッ！！！！！！！

一刀の背後に全武将の武器が出現する。

もちろん、愛紗や華琳達の武器は本人の手の中にある。

つまり一刀は、力を借りることに特化した翼人、絆の最終形態！！！！

「俺の力は、皆と繋がる想い、絆だ！！！！！！」

一刀が右に青龍偃月刀、左に蛇矛を握り、構える。

それに合わせて蒔風も十五天帝を組み上げて並び立つ。

「「さあ、見せ場だ！！！！！行くぞ！！！！！！」」

ドォウ！！！！！

一刀と蒔風が同時に「奴」に攻め込む。

「奴」が魔導八天でそれを受けていくが、いかんせん相手が翼人二人では相手として不利すぎる。

しかも一刀は次々と武器を変え、突く裂く斬る潰すと一気に攻め、その攻撃のランダム性に「奴」の剣が徐々に鈍っていく。

「チィっ！！！！！！」

ドンッ！！！！！！

「奴」が上空に飛翔し、飛びあがる。
その後を蒔風と一刀もその背の翼で飛びあがり追って行く。

「奴」の波動砲が真っ直ぐに伸び、それがレーザーのように蒔風と一刀に伸びる。

それを二人はかわすが、「奴」がそれを伸ばしたまま振り、蒔風と一刀の狙い続ける。

蒔風もかわしながら絶光砲を放つが、いかんせん筋の太い「砲」では絶光の貫通力が生かしきれず、波動砲に撃ち消されてしまう。

だが、これだけで終わるつもりなどない。

一刀が次々と矢を放ち、槍を投擲していく。
そのあまりの数に「奴」がついに砲撃をやめ、魔導八天でそれを打ち払っていく。

「雷！！！旺！！！！！！」

その間に「奴」の上空に回り込んだ蒔風が両手を組んで、雷旺を溜めこむ。
そしてその手を少しだけ開き、「奴」に突き出してそれを放つ！！！！！

「砲！！！！！！！！」

ドバッ！！バババッ！！！！！！バババババン！！！！！！！！

「効いてない！？」

「だったら！！！！！！心象的世界破壊（イマジナリティワールドエンド）！！！！！！」

ズンッ！！！！！

蒔風が固有結界を発動させる。

瞬間、空が赤銅に燃え、一刀と「奴」をも世界に取り込む。

「剣を振れ！！！」

その声に応じて、一刀が振るう。

ザギッ！！！！！

「ご、ぼあ！？ガアアアアアアアアアアアアアアああああああ！！！！！！！！！」

その瞬間、「奴」の身体内部から無数の刃が飛び出し、その身を引き裂く。

さらに蒔風が両手をパァン！！と鳴らした。

するとその飛び出してきた刃が発光し、高熱を放って「奴」を焼く。

「ギイイイイイイイイイイイイイイいあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

と、そこで固有結界が切れる。

一刀と言う存在を入れたために、２５秒しか持たなかったのだ。

「だが十分！！！」

「蒔風！！こっちは行けるぞ！！！！」

「グッ・・・・・ア・・・・・・・」

そんな状況でも、「奴」は立っている。
だが意識はあれど身体が動かぬと言った状況だ。
その「奴」の身体がぐらりと傾き、腕がダラリと下がる。

「！！！！！」

「今だ一刀！！！！！！！剣をその手に！！！！」

蒔風の声に応じて、一刀が自分の剣を腰から引き抜く。

【ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ　Ｓｈｉｎ・ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ！！　ＡＬＬ　ＳＥＲＩＥＳ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ！！！】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！！

ドゴウ！！！！！

そして一刀の剣が輝きだす。
その細身の一本の剣が絶大な輝きを発し、それを一刀が天に向かって真っ直ぐにかざし、そしてそれを両手で顔の横に持って来て真っ直ぐ突き出すように構えた。

「天を奔る星の如く、光り輝き流れゆけ！！！！！！」

その剣の名は、「流星剣」
流星に乗ってやってきたと言われた一刀の伝承を元に付けられたその名の通り、その一撃は流星のそれに匹敵する。

ただ一本の、彼自身の真実の一振り！！！！！

「流星剣！！！！！！！！」

ズシャッ！！！！！ドオオオ

剣から発せられた一筋の光が「奴」を貫き、その体を一瞬で消滅させる。
そしてその光は天に向かってどこまでも伸び、流星のように消えていった。

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・・」

「よくやった、一刀。最初にしては上出来だ」

「サンキュ・・・・・あーーーー疲れる・・・・おっとっと!!!」

「アブなッ!!!」

慣れない飛行に身体を崩した一刀を蒔風が支える。
そうしてゆっくりと地上に戻っていく。

「お?結界、解けてきたな」

「なあ、結界解けたらオレたち元の街に戻るんだろ?」

「そうだな。こっちの破壊された場所は向こうに反映されないから大丈夫だよ？」

「いや、この姿が街の皆に見られたら・・・・・」

「それよか早く地上に着くさ」

「よかった・・・・この力の使い方なんだけどさ」

「あん？お前の思い通りに使えるよ。大丈夫だ。でも賢者タイプだから、多分炎とかは難しいかな？あ、でもそう言った力をもった人が仲間にいればできるな」

「いや、そうじゃなくてだな。これだと蒔風はオレの師匠になるのか？」

「師匠？それなんか違うなぁ・・・・・」

「じゃあ兄貴？兄弟子？でも弟子じゃないだろ」

「なんとでも呼べぇ」

そんな会話のうちに地上に着く。

真っ先に桃香が一刀に飛びつき、更に何人もの子が一刀にのしかかっていく。

そして口々に翼の事や、あの光の事を蒔風に聞いてきた。

卑弥呼と貂蝉は驚いていた。
まあそれはそうだ。翼人がこんな近くにいたのだから。

そして結界が完全に解け、遠くの方の街に人の気配が戻る。

戦いは終わった。
新たな翼人の誕生と共に

――――――

「これで終いだな。しっかりと鍛錬しとけよ？」

「わかったよ。うっさいなぁもう」

そして別れの時だ。

蒔風は一刀に翼人の事や、力の使い方などをしっかりと教え込み、
その説明を他の武将にもしておいた。

一刀の力はまだまだであり、これからの鍛錬が必要なことが分かってから、愛紗や華琳などが意気揚々と訓練メニューを組んでいた。

「怖いなぁ・・・・・・」

「臆するなよ。今のお前ならあいつらと同等以上に打ちあえるし、力だって上がってるはずだからな」

「すげえ・・・・・」

「じゃあ、そういう事で・・・・・・・・・・・」

「待ってくだされ！！！！！」

そこに星が駆けこんでくる。
その姿を蒔風がうへえとした顔をして眺めていた。

「なんだ？ついては来させないよ？」

蒔風の言葉に、星が首を振る。

「違いぞ？私はあなたに追いつくと決めた。だから、ここではついていかない。これはあなたの方から来てくれたのです。今度は私の方から向かって見せる！！！」

「その心意気は立派だけどな・・・・・はぁ・・・・・・・・・」

「それより・・・・・・皆！！！！！」

星の掛け声に、城壁の上から全員が姿を表し、一斉に礼をとった。

その光景は圧巻と言わしめるに値する物。
そして無言だからこそ、全員の意思が伝わってきた。

「ふ、ありがとうな！！！！！みんな！！！！！！！」

蒔風が手を振ってその場を去る。

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｓｈｉｎ・ＫＯＩＨＩＭＥ†ＭＵＳＯＵ］

そうして蒔風が世界をでる。

次の世界へと旅立って行った。

ーーー

翼人、三度（みたび）魔法少女の世界へと入る。

to be continued

真・恋姫†無双　～繋がる力、その想い～（後書き）

アリス「真恋姫終了！！蒔風含め五人目の翼人！！！」

そうですね。
この五人は最初から決めてました。

レッドはいないですけど。

ア「開翼戦隊！！ヨクジンジャー！！！！！」

やめて・・・・・今度書こうかな

ア「おう！？」

【真・恋姫†無双】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”５０％
　　”フォルス”３０％
　　”ＬＯＮＤ”２０％

最主要人物：北郷一刀

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＷＥＰＯＮ～：一刀翼人覚醒の「鍵」

―ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ―　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：一刀の剣「流星剣」の覚醒

ア「覚醒ばっかですね」

《蒼青の翼人》

所有者：北郷一刀

翼色：蒼青

想い：絆

タイプ：賢者

一刀君は絆を結んだ者、つまり仲間になった人の「力」を借りられます。

ア「でもそれって蒔風もできるんじゃないですか？」

翼人なら基本できます。
でも彼の場合は重ね掛けができるんですよ。

蒔風の場合は愛紗の青龍偃月刀を使ったら使ってる間は他の力は借りられませんし、自分の力も使えません。
一刀は青龍偃月刀を出し、更に蛇矛を出すことも可能です。

ア「じゃあもし一刀が世界をめぐっていたら・・・・・」

そうですね・・・・・・

クロックアップ！！スタートアップ。トライアル！！！

みたいなこともできます。

ア「何そのチート」

ですよね（笑）
でもそうはいかない。使いこなすには一刀の技量も必要なんです。
そこが彼はまだ未熟ですから、これからが楽しみですね。

ア「他の翼人もできるんですか？」

蒔風が「願い」によって力を借りるように、クラウドも観鈴も理樹もできます。

でも異世界を回ってない時点で、正直力を借りる必要はないんですよ。
もしティファがクラウドを助けたいと思います。

でも、同じ世界にいるのだから普通に駆けつけてしまえばいいじゃないですか。

ア「だからできないのか。納得」

そして次回は！！！！

ア「ついに来た！！！」

番外編だ！！！！！！！！！

ア「そっちかアアアアアアアアアアアアアああああ！！！！！！！！！！！！！」

ハイそっちです。
しかも少ない。剣とWと真恋姫だけっぽいし。

ア「すくな！！！」

ではまた次回

蒔風

「巡る世界も、だんだん・・・・・終わりが見えてきたかもな」

番外編　～オンドゥル、唐揚げ、政務～

【仮面ライダー剣】～平成ライダー歴代ヒロインで強さにおいて二番目にある者～

「ヴェェェェェェェェ！！！広瀬さん！落ち着いて！！！」

「なによ剣崎君！！ハナセ！！！ヴットヴァスゾ！！！！！！」

始が戻ってきてからの宴会

そこで悲劇が起こっていた。

事の発端は例によって蒔風である。

蒔風や始、剣崎のお互いを更に深く自己紹介し、広瀬栞のターンになる。

そこでいらん事を言ったのだ。

「広瀬さんっていくつなんですか？」

ビシリ

「確かまだ独身だから・・・・・まだ結構若いはずだ」

「あれ？僕もう広瀬さん独身のままかと」

橘や睦月の言葉に身体をブルブルと震わせ、どんどん酒を呑んでいく広瀬。

剣崎があわわわわ・・・・とうろたえているところに、始が止めを刺した。

「ヒューマンアンデットの力を得ているオレにはわかる。広瀬の年齢はもちろん、スリーサイズまで完璧だ。年齢は２０。そして体重はズバリドゥブガア！！」

だが、最強のアンデット、ジョーカーの言葉はそこで潰された。
箪笥（たんす）によって、その身体とともに。

蒔風や橘たちが箪笥のあった場所を見る。

そこには酒で顔を真っ赤にして、次なる冷蔵庫（ぶき）を担ぎ上げている広瀬がいた。

「・・・・・・・聞いたわね？」

「今あんたが潰したじゃん！何も聞けなかったよ！！」

「はっ、始ーーーー！！！！！大丈夫か！？」

剣崎が始に駆け寄って箪笥を退かそうとする。
だが何が詰まっているのか、そもそもどうやって持ち上げたのか、その箪笥は最前線で戦ってきた剣崎がいくら持ち上げようともびくともしない。

「剣崎！気を逸らすな！死ぬぞ！！」

「でも始が！！」

「剣崎くん、そこをどきなさい。今すぐそいつから私のデータ忘れさせるから」

始を救おうとする剣崎の背後に冷蔵庫を引きずってきた広瀬が立つ。
流石はかつて積み上げられた箪笥を指一本で支えた女性である。

「逃げろケンジャキ！！」

「ダデャーナサン！？ルラギルンディスカ！？」

「安心しなさい剣崎くん。どんなに殴ってもアンデットだから死なないわ」

「そこ！？」

「ヒロセサンヲトメロォ！！」

「ウワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

だがまず橘が逃げた。
そして睦月が窓から飛び降りて逃走した。

「剣崎くん・・・・・・どうしてもどいてくれないなら・・・・・・・潰すわよ？」

「クソッ！戦うことでしか、オレと広瀬さんは解り合えないのか！？」

ちなみに蒔風はすでにソファで寝ている。
こいつ放棄しやがったな。

「変し・・・あぁっ！？」

「それはさせないわよ？」

「ウ、ウエェェェ

【仮面ライダーW】～激辛のK／こんなんありか？～

「風麺ウマ！屋台のレベルじゃないなこれ！！」

「だろ！？これが風都名物、風麺だ！」

蒔風たちが戦いを終え、風都巡りをしている、そんな時間。

なんとも見所満載の街を、蒔風は楽しんだ。

再建された風都タワーの展望台に登り、フウト君ストラップを買い、動物園に行き、翔太郎の案内で今までの事件の話をその場所に行って聞いたりしていた。

「にしてもこのラーメン、ナルトデカイ！」

そして最後に風麺屋台に来ていた。

その噂の風麺とは、ラーメンの上にスッポリと覆うほどに巨大なナルトが乗ったラーメンだ。

確かに旨いが、少々食べづらい感も否めない。

「ばっか、そこがいいんじゃねぇか！」

「そういえば・・・・・・確かここでは風麺ライスを出していたね？」

「ん？フィリップ君、覚えていてくれたかい！君達に解決してもらったあの事件のあとに来たあの人、いいもん持ってんだ！」

そう言いながら親父がもう一人の男性を引っ張り出してきた。

「皆さん、お久しぶりです」

「あ！あんた！あのあとどうだい？うまくやってんのか？」

「おかげさまで・・・・・そうだ！新商品を考えたんです食べてみてもらえますか？」

何やら話し込む翔太郎ともう一人の男性。

蒔風がフィリップに男性の事を聞いた。

「ああ、彼はね、風麺の風都名物ね座に嫉妬してね、ガイアメモリで暴れたんだ。ま、今では親父さんのところで腕を研いている、というわけさ」

「ふぅ～ん。慕われてんだな、翔太郎」

「それはもう、絶大に」

「どうぞ！！お待たせしました！！」

そうして出してきたのはから揚げの乗ったラーメンだ。

それをみて、まず一同の反応は

「赤い」

「赤いね」

「赤しかないな」

「おお、赤い」

赤い

ただそれだけだ。
麺やスープ、から揚げに器まで赤一色。
出されただけだとただの赤い塊にしか見えない。

「なあ・・・・・これなんだ？」

「風都ラーメン赤！！超激辛ラーメンです！」

「興味深いね。これは麺にも唐辛子を練り込んでるのかい？」

「いいえ、麺もスープも風麺と同じものですよ？」

「「「え？」」」

「ただこのから揚げを入れると・・・・・ほらこの通り」

ラーメンにから揚げが投入されるすると赤い絵の具をぶちまけたかのように一瞬でスープに赤が溶け込み、麺が芯まで赤に染まった。

「どうですか？」

「怖いわ！！！なんだよそのから揚げ！！？どんだけ辛いんだよ！？」

「ああ、から揚げだけの注文はできませんよ？」

「それはなぜ？」

「ほら・・・・・その・・・・・・・（ボソリ）死なれたら困りますし」

「今死って言った！！死ぬって言ったぞ！？から揚げ単品殺人兵器！？おい蒔風、絶対食うな「ウマー」はぁぁぁあああ！？」

「なかなかに辛い。これは良いものだ」

「うちではこのから揚げを、「地獄から揚げ４５９号」と名付けております」

「単品で売ってくれないか？頼む！！」

「そうですね・・・・・・ではこの調理注意書を必ず読んでください」

「あいわかった。ありがとう！！」

こうして超激辛から揚げを手に入れた蒔風。

このあと単品で食おうとして、少し舐めたら蒔風がぶっ倒れた。

単品はどこまで辛いのか。

それを確かめられる者はいない。

【真・恋姫†無双】～七獣、政務を行うのこと～

「青龍ーーーそっち取ってくれるかの？」

「・・・・・どうぞ、玄武」

蒔風たちが愛紗から逃げている間、青龍たちが執務室で政務を手伝っていた。

「ったく・・・・・んでこんなめんどいこと・・・・・」

「ぼやくな天馬。さっさとやろう」

「ってもよーー麒麟さんよ、めんどいものはめんどい・・・・・・ん？おいこれ、こっちだよ、こうした方が良くねぇか？」

「え？あ、本当だ・・・・」

天馬が書簡を雛里に見せ、提案する。
そして書簡に書かれた文字を削り消し、書き直していく。

「だが天馬よ。お主が一番めんどくさくしとるぞ？」

「そうですねぇ。より良い案を出すのは素晴らしいのですが、あなた結構世話焼きですからねぇ」

「うっせーぞ獅子、朱雀!!ちゃっちゃと終わらねーだろーが!!
ってかあの餓鬼どこいったあ!?」

「白虎ですか?白虎なら・・・・・」

「・・・・華琳殿曰く・・・・・非常に面倒な方々を・・・・・・
相手にしているそうです」

「ああ!?なんでんなこと「ネコニャー!!」「捕まえるのにゃ!」
「僕は猫じゃなくて虎だーーーーー!!!!!うわーん!!」「おーーーーほっほっほっほっ!斗詩(いいしぇ)さん、猪々子さん、やっておしまい!」「あ、あらほらさっさー?」「あらほらさっさー!!」「七乃!我らもいこうぞ!」「はいは~いお嬢様~~~~」「だ、誰か助けうわぁ、あああああああああ!!?」・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれはあいつに任せよう」

「「「「「賛成」」」」」

いま、七獣（一体除く）の意志が一つになる。

「はくじょーものーーーーーーーー！！！！！！！！！」

to be continued??

番外編　～オンドゥル、唐揚げ、政務～（後書き）

アリス「短！！！」

すみません・・・・・・

あんだけ溜めといてこのくらいしかありません！！！！

ちなみに平成ライダー最強ヒロインは電王のハナさんです。

でもオーズにもひなちゃん出てきたからなぁ・・・・・・

Ｗで言ってる事件とは「ハイパーバトルＤＶＤ」でのことです

ア「で、次にあの世界ですか」

はい

それに関して皆さんに報告があります。

つぎからなのはＳｔｒｉｋｅｒＳという大台に乗りあげます。

もしかしたら今までの更新ペースが崩れる可能性も出てきてしまいます。

その場合、その日の深夜０時をもって、更新不可として次の日に更新いたします。

作者の執筆スピードの遅さゆえに、申し訳ない事をしてしまう場合もあると思いますが、ご容赦ください。

ア「まああれは結構大変な話ですからねぇ」

多めに見てくれると嬉しいです。

ア「次回、蒔風、列車にどーーん!!」

ではまた次回

魔法少女、育ててます。

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～出会いは激突から（二回目）～

「っあ～～～～～ぁ。どこだ？ここ」

蒔風が降り立った世界を欠伸をしながら見渡す。
周囲は自然。超自然だ。

そんな場所の遠くの空から爆発音が響いて聞こえる。

「なんだよ、いきなり戦闘？よぅし、お兄さんがんば・・・・・・ん？」

張り切り出すお兄さん。
が、そこでふと自分の立ち位置をみた。

立っているのは細く均された地面。
走る二本のライン。

つまり

「レールの上？右・・・・・からは何も無し。左・・・・・」

そうして左を見た瞬間、蒔風の景色がぶっ飛んだ。

――――――

「なにやってんのよ」

「アタッ！！」

「任務中よ！しっかりしなさい！！」

そうだそうだ

今から列車の真ん中車両にあるロストロギアを回収しに行くんだ。

気を引き締めなくっちゃ！！

「よし、行っくぞーーー！！！！！！！・・・・・・・・・ってティアティアティアーーー！！！！！！」

「ったく！なによスバル！！！！！！」

怒ってる場合じゃないよティア！

「人が！！」

「はぁ！？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

リニアモーターカーが暴走している。
その前部から真ん中に向かおうとしたティアナとスバルが見たのは
一人の男性。

列車とは反対側のレールの先を見渡し、こっちを向いた。

その瞬間

バゴン!!クルクルクルクル・・・・・・グシャッ!!!

男が列車に撥ねられて、ティアナとスバルの間に落ちてきた。

スバルとティアナはあまりにもいきなりの出来事に軽くパニック状態になる。
そりゃそうだ。目の前に暴走列車に撥ねられた人間が落ちてきたのだから。

「う、うわーうわーうわー!!?ど、どうしようティア!!」

「お、落ち着くのよスバル!!ってかこの人どこから来たの!?」

突然の乱入者（すでに重傷）に取り乱す二人。

そうこうしている間にも、俯せの男からジワ～～～～～～と血が流れて来ている。

「スバル!あんたは応急処置を!私は・・・・」

なのはさんに連絡を、と言う前に、ティアナの目に映ったモノがその言葉を変更させた。

「スバルッ!後ろ!!」

「ッッッ!?」

蒔風を仰向けにしようと屈んだスバルの背後に巨大な球型をした機械兵器、ガジェット三型が機械のアームを伸ばして現れていた。

スバルが振り返り、それを視界に入れた時にはもう遅い。
蒔風に気を取られていたスバルにガジェットの攻撃が迫る。

ヒュボッ、ドォン！！！

そしてガジェットが爆発した。
スバルの真後ろから腕が伸び、そちらに振り返ると拳を突き出して、
顔を真っ赤に染め上げている蒔風がいた。

「え？え？えぇ！？」

「あのガジェットを一撃・・・・・しかも素手で！？」

スバルとティアナが驚愕する。本日二度目だ。

「ったく・・・・・良い感じでこっち着いたってのに、殺す気か！！！！！いきなり激突ってなんだ！！「奴」を前にして死んでしまうわ！！！」

蒔風がウガーッ!!!と怒りながら立ち上がる。

それに合わせたように周辺に集まってきたガジェット。

蒔風というイレギュラーを察知して来たのだろう。

「か、囲まれた!!」

「スバル!行くわよ!!」

ティアナとスバルが構えをとり、ガジェットを迎え撃とうとする。

「まあ、待てお嬢さんたち」

「お!?」

「お嬢さん!?」

しかし、二人を蒔風が止める。

その顔はにこやかだが、頭から血をダラダラと流し、かなり怖い。

「いきなりの激突、襲撃、そしてなんなんですかお前らは!?壊れたいの?壊されたいの?壊しちゃってもいいのかな!?力借りんぞ!!」

蒔風の腰にベルトが、手にはゼロノスベルトが現れ、それを構え、変身前に言ってしまった。

「てめぇら最初に言っておく!!!オレはかーなーり、強い!!!!」

「ど、どれくらい?」

その言葉にスバルが思わず訊いてしまった。
ティアナがやめなさいよ・・・・とか言っていたが、蒔風は律義に答えた。

「世界最強、さ（ゴぽッ!!）」

「血を吐きながらあんた何言ってんのよ!?」

言いながら勢いで血を吐いてしまった蒔風にティアナが突っ込むが、そんなことは気にしない。

蒔風がカードを持って、変身する。

「まあ見てろ！！！デネブとかそういうの取っ払えるから、いきなりこっちだ！！！変身！」

《Ｖｅｇａ　ｆｏａｍ》

ゴォ・・・ン、ガシュウ！！！

蒔風がゼロノスベガフォームに変身し、あーあー、と声を出す。

「やっぱこっちでも声変わんのか。じゃあ・・・・・」

そう言って胸を張って、蒔風がこう言いなおした。

「もう一度最初に言っておく！！！！！」

（ドキドキ・・・・・・）

蒔風の変身を見て何かキラキラした目をし始めたスバルが、何を言うのか、期待していた。
それを見て、蒔風は

「胸の顔は・・・・・・・・」

（（コクコク））

ついにティアナまで混ざった。
お前ら任務どうした。

「ただの・・・・・・・飾りだぁッ！！！！！！！」

「「飾りかよッ！！！！」」

「ってかあんた、まさかそんな怪我でホントに戦うつもりじゃ・・・・」

「だ　ま　れ。オレはイライラしてんだ。このコバエどもを《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》・・・・消し飛ばすまでなぁ！！！！」

ドンドンドンドンドン！！！！！！

ゼロガッシャーをボーガンに組み上げ、片手でガジェットを狙ってフルチャージ「グランドストライク」を撃ち放つ。
命中したガジェットに黄色く「Ｖ」の字のエネルギーが刻まれ、爆発する。

「ッしゃあ！！！！！どんどん行くぞ！！！！」

ドドドドドドドドドっ！！！！！！！

次々とガジェットをぶっ飛ばしていく蒔風。
それを唖然として眺める二人。

そんな二人に、通信が入る。

『二人とも、なにしてるですか?早く進んでくださいです!!!』

それは先に列車の制御を取り戻そうと運転席に向かったリィンフォース?なのだが、その通信にティアナが呆れるやら慌てるやらで答えた。

「い、いえ、でもですね、どう見ても一般人がガジェットを・・・・・」

『一般人ですか!?無事なんですか!?』

「いえ・・・結構大丈夫な・・・・あ、でも重傷でした・・・・えっと・・・・・」

「重傷だけど元気に戦ってガジェットをぶっ飛ばしてます!!!」

『どんな状況ですかそれ！？』

「うはははははははーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

蒔風、絶好調である。

ちなみに骨は折れてないが、ダメージはかなり来ている。

普段ならこの程度で息を切らす彼ではないのだが、すでに呼吸は荒く、肩が上下して、如何にも苦しそうだ。

「と、とにかく来てみてみればわかります」

『しょうがないですね・・・・・・今行きますから！！！』

そう言って通信が切れる。

と言っても来るのはすぐだ。

コックピットは前、二人がいるのもリニアの最全部の屋根の上にいるのだし。

「で?どの人です?」

「あ、あの人なんですけど・・・・・」

「・・・・・・・・」

リィンがその人を見る。

一瞬知ってる気がしたが、そんなことはないなとすぐに否定し、話しかけた。

「こらーーーー!!!どこの誰だか知りませんが、早急に戦闘をやめて治療を受けてください!!!ティアナ、怪我はどれくらいです?」

「激突・・・・・・」

「は?」

「・・・・・・リニアと正面衝突しました(ダラダラダラダラ)」

「とんでもない重傷じゃないですかそれ!?は、はやく・・・・・」

「あぶねえ!!!!!!!!」

リィンが蒔風を力づくでも引っ張りこもうとする。
だがそれよりも早く、リィンを抜いて、ティアナスバルの背後に走る蒔風。

ドォン！！！！！！

そこに出現したガジェットと蒔風がぶつかり合う。
とっさに庇った蒔風が来た道を跳ね飛ばされ、列車から落ちる。
その先は崖になっていて、下は森だが、落ちたらタダでは済まない。

「ああ！！！！」

「そんな！！！！」

スバルとティアナが列車から落ちた蒔風を追い、落ちた先を見に行こうとする。
だがその脚は一歩も出ることなく、ガジェットに足止めされてしま

った。

「ッ！！！」

「邪魔よ！！！・・・・・ん？」

ティアナが耳を押さえて、何かを聞きとる。
それにスバルがどうしたのかと聞いた。

「なんか聞こえない？汽車みたいな」

「汽車・・・です？リィンには何も・・・・・」

スバルとリィンも耳をすませ、その瞬間、それは聞こえてきた。

ブォン、ブォーーーーーーン！！！！！！

「ほら聞こえた！！！」

「どこから！？」

そしてスバルのその疑問はすぐに解消された。

崖の下からレールが延びてきて、その上をゼロライナーが走ってきたからだ。

「落ちるかアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

そのコックピットでは蒔風が運転をしていた。

ゼロライナーはリニアと並走し、徐々にその距離を縮めて行く。

だがそれを簡単に許すガジェットでもなかったようだ。

列車上のガジェットが一気にゼロライナーに殺到する。

だがその勢いに跳ね飛ばされて行ってしまって歯が立たない。

そして次に狙ったのは

「レールを狙うか！！！この野郎！！！！」

レールにアームを絡ませ、ビームで破壊し始めたのだ。

その歪んだレールにゼロライナーがガタガタと揺れ始める。

「スバル！！行くわよ！！」

「うん！！！」

そしてついにスバルとティアナが動き出そうとした。

が

「お前ら！！！頭引っ込めてろ！！！下手したら首取れんぞ！！！！」

「なっ！？」

「は！？」

ゼロライナーから（デネブの声で）蒔風の警告が飛んでくる。

そして次の瞬間、レールに跳ねあげられ、ゼロライナーがジャンプして脱線した。

「あッ！！！」

「脱線した！！！！！」

が、それで終わるこの列車ではない。

空中で前後の車両を入れ替え、前になった車両の上部が少しだけ持ちあがり、バラバラバラバラ、とそこが回り始めた。

「と、飛んだ！？」

「ヘリコプター！？」

「も、もう列車じゃないです・・・・・」

三人がポカーンと呆れるなか、ゼロライナーがリニアの前に降りる。
先に後ろ車両をレールに下ろし、その後ろに前車両が降りて連結することでもう一度前後入れ替わってからだ

「連結！！！」

そしてリニアと連結する。
もちろん互換性などない。だがら連結用のアームを強引にリニアの前部に噛みつかせて連結させる。

ゆっくりと列車の勢いが弱まり、そして止まる。
その間に次々とガジェットがゼロライナーに群がっていくが、出てきたドリルやナギナタのプロペラに巻きあげられ、粉砕されていく。

ガシュウウウウウウウウウ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ティアナさん!!スバルさん!!!目標を確保しました!!!・・・ってなんですかこれ？」

「さ、さあ・・・・・・」

完璧に取り残されてやってきたのはエリオとキャロだ。
すでに小さくなってしまってる龍、フリードもいる。

取り残されている、という点ではティアナ達もどっこいどっこいだ。
完璧にわけがわからない。

その眼の前で、ゼロライナーが光の粒子になって一瞬で消えた。
そしてリニアの上に、蒔風が飛び乗ってきた。

それを見た五人は

「「「「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアア

御覧ください、これが「倒れる」と言う事でございます。

「きゃあああああああああ！！！！！！は、はやっ！！早く治療治療！！！！！！」

「エーとえーと！！！包帯！！！包帯ですぅ！！！！！」

「キャロ！！！早く治癒魔法！！！！！」

「は、ハイ！！！！！！」

そうして包帯でぐるぐる巻きにされる蒔風。

この時、すでに意識はなく、このままその体は彼女たちの部隊、機動六課の隊舎へと運ばれていった。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～出会いは激突から（二回目）～（後書き）

アリス「何という出会い」

なのは達とは未接触に終わってしまった・・・・・

ア「にしても今回蒔風いきなり撥ねられましたけど大丈夫なんですか？」

大丈夫、ギャグ補正だからすぐ治る。

ア「身も蓋もない事を・・・・・」

ってか自分としては・・・・・

あんなんでよかったのかなぁ！？

なのはＳｔＳ一応見直しましたけど、結構不安・・・

覚えてるのってなのは魔王シーンと最終決戦くらいでヴィヴィオとかスカさんの詳細設定忘れた。

ア「えええええ!?」

まあそこは見直してｗｉｋｉよんでなんとかしますんで、矛盾があったら指摘お願いします！！！！

ア「次回、そして再会」

ではまた次回

全力全開、手加減なし！

「それで？連れてきたんがこの人やと？」

「は、はい」

「で、なんで全身包帯グルグル巻きなん？」

「それは・・・・・」

機動六課隊舎の部隊長室。

そこにスバルとティアナ、そして部隊長、八神はやてがいた。

リィンや二人の報告を聞いて、とりあえずその人物を連れてくるようには言ったのだが・・・・・

「はあ・・・確かに連れてきてと言いはしたけど、まさか本当にこんなんとはなぁ」

はやてが頭を押さえてため息をつく。

目の前に転がっているのは頭からつま先まで包帯で巻かれ、ミイラ状態になっている男。

（・・・・・はっ!!!ここはどこだ?これは・・・消毒液の匂い。包帯か。くっそ、目まで覆いやがって、これじゃまともに見えも話せも聞こえもしねぇじゃん）

包帯男がそこで意識を取り戻すが、包帯は固くてちぎれない。どんな力で巻きあげたのだろう。

「にしても全員が記録映像残さなかったとは・・・・・なにやってん」

「「す、すみません・・・・・」」

「リィンまで忘れてんやから世話ないわ」

「ごめんですはやてちゃん・・・・」

はやてが目の前の男を見、どうしようかと考え、とりあえず包帯を取って顔を見ようとする。

「なあ、こん人、なんか言っとらんかったか?何か身元の分かりそうなこと」

「えっと・・・・・・」

ティアナが記憶をたどって思い出そうとする。

しかし、その間にミイラさんがビビっていた。
なぜなら

(何するんだ?顔?顔に手ぇ伸ばしてくる!?これ以上何されんだよッ!?ジョーダンじゃねえ!!!)

そんなこんなだ。
まあ確かに散々な目には合っていた。

世界に着いていきなり撥ねられ、ガジェットにちょっかい出されて、その場の人間に近づいたら悲鳴を上げられ、挙句の果てには包帯で

拘束。

これで勘弁してくれと思わない人間はそうそういないだろう。

バリぃ！！！！！

当然、こいつも思った。勘弁してくれと。

故に

「あっ！？」

「に、逃げた！？」

逃げた。

脚を広げて包帯を裂き、とりあえずそこだけが自由になって、その場から走って逃走したのだ。

扉にぶつかり、ひっくり返ってから、再度アタックしてぶち破る。

「ああ！！うちの扉！！！！」

「ま、待てーーーー！！！！」

廊下へと飛び出して言った包帯男をスバルがダッシュで追いかける。

その後をティアナも追おうとするが、それをはやてが止める。

「ティアナ！！あの人、なんて言ってたか思い出せる？」

「え？えっと・・・ですね。そうだ、「この世界に来て」だとか「「奴」の前に死ぬ」とか「世界最強！！」とか言ってましたけど・・・それより追わないとですよ！！」

ティアナが男の発言をはやてに伝え、追おうと促す。
だがその催促は耳には入っておらず、最初の方の言葉に、はやての目が見開かれる。

「そんな・・・・まさか・・・・・・・・」

「や、八神部隊長？」

「はやてちゃん？」

ティアナとリィンが心配そうに顔を見る。
その顔は驚きに満ちていて、そしてすぐにポカンと口を開けて笑った。

「帰って・・・・・来たんや」

「え？」

「ついに・・・・・やっと！！！！」

はやてが言葉と同時に部屋を飛び出す。
その後を慌てて二人も付いて行った。

ーーー

そこでまた壁にぶつかる。
だが今度は一気にその壁を崩し、別の部屋に飛び込んだ。

そこは空き部屋のようで、特に何もなく、さらに突き進んで反対側の壁も崩した。

その先は食堂。
だが、そこでさらなる衝撃が男を襲う。

バギャア！！！！

ハンマーが横なぎにぶち当たり、男の身体が吹っ飛んだ。
そのハンマーの持ち主はヴィータである。

騒ぎを聞き、アイゼンを取り出して気合を込める意味でブン回したのが偶然に命中したのだ。

「げ、げぶぅ・・・・・・」

「え?あれ?おい!!お前、大丈夫か!?」

「ヴィータ副隊長!!!その人捕まえてください!!!!」

「え?あ、ああでもよ・・・・・・」

捕まえるまでもないだろ、とヴィータが言葉を続けようとする。

ところがどっこい、この男は今耳がふさがれてよく聞こえていない。

そんな彼にはこう聞こえていた。

『え?あは!!!おっしゃ!!!!お前、大自滅な!!!!』

『ぶんどって腸!!その人のを!!得てください!!!!』

正直言って全然意味わからん。

だが

（俺の腸をぶんどる！？しかもこいつら俺ぶちのめして喜んでる！？）

彼はこう解釈してしまった。

「おおおお

「わかりません！！！さっきの出動の時にいきなり現れて来たんです！！！」

「いきなりだァ！？」

スバルが一部始終を追って説明する。
彼の言っていた事も含め。
それを聞いてヴィータの脚が止まった。

「マジかよ・・・・・・」

「え？はい、本当ですよ？」

「いや、そうじゃねえ・・・・・返ってきたのか！！！あいつ！！！！」

「ヴィーターーーーー！！！！！」

「はやて！！！！」

そこにはやてとティアナ、リィンがやってくる。

「ヴィータ!!さっきここに・・・・・」

「ああ、いた。間違いないよはやて、あいつだ!!!」

「やっぱそうやった!?」

「顔は確認してねえが、あんなでたらめな奴、あいつじゃなきゃ説明つかねえ!!!」

意気投合するヴィータとはやて。
おいてけぼりの三人は何が何だかわからない。

「そ、それで結局誰なんですか?あの人」

ティアナの発言に、はやてが答えようとする。

ドォン!!!

だがその瞬間爆発音がし、皆に視線がそちらに向く。

「あかん・・・下手したら隊舎破壊されてまう！！！」

「はやて、急ごう！！！多分今のは・・・・・シグナムだ！！！！」

二人が走っていってしまう。
その後を再び慌てて追い始める三人。

「ま、待ってくださいよ～～～～！！！！」

ーーー

男が窓から飛びおりて着地した場所。
そこにはすでに先客がいた。

シグナムである。

そしてなにも言わず、いきなり切りかかられた。

「この騒ぎの元凶はお前か・・・・・大人しくしなければ・・・・・・」

が、その言葉よりも早く男が逃げる。
脱兎である。その逃げ足は速い。

「話を最後まで・・・・・」

「!?」

「聞けえ!!!!!」

シグナムがレバンティンに炎を纏わせて斬りかかる。
それを紙一重でかわし、包帯が焦げて腕が解放される。

「シグナムさん！！！」

「高町！！こいつだ！！！」

「わかりました！！離れてください！！！」

そこになのはとフェイトが駆け付ける。
まあこれだけの騒ぎになれば出ても来る来る。

レイジングハートを構え、そこに砲撃のため、魔力光が集まっていく。

「！？もがもがががが！！！！」

「ハッ！！！！」

男が弁解しようとジェスチャーをとるが、それは伝わらず、足止めのためにシグナムがもう一度レバンティンを振るう。

が、それは驚愕にかわっていく。

「な!?素手でつかんだ!?」

そう、残った包帯越しとはいえ、男は炎に包まれたレバンティンを素手でつかんだのだ。
そしてその炎で、今度は顔の包帯が焼け、ついに男の顔左半分があらわになる。

「あ・・・・お前!!」

「んお?あ!!」

シグナムがその男を確認し、目を見開いて驚く。

「ディバイーーーン！！」

だがなのはには見えていない。
だからシグナムが避けることを信じて砲撃した。

「ま、待て、高町！！」

「バスター！！！！！！！」

「くっ！！」

「え？」

ドオン！！！

地面を吹き飛ばして、砲撃が着弾する。

シグナムはとっさにその場から離れ回避し、それにふぅっ、とスッキリした顔をするなのは。

「お、おい高町・・・・」

「え？シグナムさん、どうしたの？」

「どうしたのではなくだな・・・・・・あいつだ！帰ってきたんだ！」

「え？」

シグナムの言っていることがよくわかっていないなのはとフェイト。首をくりん、と傾げている。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、シグナムーーー！！！」

そこにはやて達が合流する。

「あ、はやてちゃん」

「どうした！？やってしもたか！？」

「その・・・・・高町が・・・・・砲撃を」

「えええぇぇぇ！？・・・・・・なんや、なら大丈夫やね」

「そーだな。あいつなら問題ねーな」

一瞬心配するはやてとヴィータだが本当に一瞬だけで、しれっとした顔をする。

「はやてちゃん、あの人知ってるの？」

なのはの言葉に、はやてが意地悪そうな顔をして言った。

「なんや？なのはちゃんもフェイトちゃんもわからんへんの？こん中じゃ一番付き合い長いんやで？」

「え？」

「誰？」

「しゃーないなぁ、じゃあヒント！！十年前！！」

そのヒントに少し考える二人。

「十年前？はやてと会った時？」

「確かその時・・・・・あ、もしかして・・・・・本当に！？」

なのはとフェイトがまさか！という顔をした瞬間、土煙から腕が出てきた。

「なるほどな。そういうわけか。まさか三回も来るとは思わなかった」

そしてその腕が横に払われ、土煙が一気に消し飛んだ。

「世界最強、再び、だ！！久しぶりだな。シグナム！！！」

そう言って出て来たのは、きちんとした服を着ている蒔風だった。

「「舜（君）！？」」

なのはとフェイトが驚き、次の瞬間、蒔風に飛びついていく。

しかし

ヒラリ、ベシャ

蒔風はその二人を避けた。

二人が地面にベチッ、と落ちて蒔風の方を向く。

「な、なんで！？」

だがそんな二人を見て、蒔風が言った。

「シグナムはいい、ヴィータもいるな。だがおま　えら　誰だ？」

そう言いながらビシリビシリビシリとなのは、フェイト、はやてを指差して蒔風が聞いた。

「「「えええええええええええええええええええΣ（T□T；）!?!?」」」

三人がうなだれ、ガックリと膝を四つん這いに着く。

「なに落ち込んでんだこいつら。なあ、シグナム、あれからどんぐらい経った?」

「お前が去ってから十年だ」

「じゅ、えええええ!?そんなにたったん!?・・・・・・・じゃあまさかこいつら・・・・・」

蒔風がわなわなと指を振るわせて三人を指す。
それにガバッ、と起き上がり、三人が叫んだ。

「なのは？」

「そうだよ！！！」

「フェイト？」

「うん！！！」

「そして・・・・・・はやてか」

「そうやで」

「・・・・そうか」

蒔風が表情を冷やかな物にして、はやてを見る。

そして立ち話もなんだと、なのはとフェイトがとりあえず隊舎の中に蒔風を案内した。

――――――

部隊長室に戻ってきた蒔風。
扉はすでに蒔風が修復し、壊した部分はすべて元通りになっていた。

そして蒔風が黙ってはやての方を見る。

今、はやて、なのは、フェイトが並んで座ソファに座り、テーブルをはさんで反対側のソファに蒔風が座っている。

そして終始無言だ。

それはそうである

前回最後の時。

蒔風ははやての敵として立っていた。
彼女の大切な家族を消滅させた者として。

そしてそれは彼の胸に大きく刻み込まれている。

彼の敗北として、そして・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・」

その事を考え、目を閉じる蒔風。
そして眼を開けて、こう言った。

「どうした?何か言いたいことでもあるんじゃないのか?」

それはきっと、はやては自分の事を恨んでいるだろうという蒔風の推察からの言葉。

その後にくるのはきっと疑問の言葉だろう。「なぜ」や「どうして」と

しかしきた言葉は別物だった。

「ごめんなさい。そして、ありがとうございました」

はやてが立ちあがって蒔風の手を取って謝る。

それに蒔風が目を見開いて驚いた。

「な・・・・・・・」

「舜君があんときリィンを消してしたいきさつ、全部聞いた。あんときは、本当にすまんかった。十年間、舜君にあったら絶対に言おうと思うとった言葉や」

その言葉に、蒔風が手を振りきり、立ちあがって言った。

「俺は・・・・・リィンを消した!!やっと救われたあいつを・・・・・中途半端に救って、それで・・・・・それなのに・・・・そう簡単に、許されていいはずがない・・・・・・・・」

蒔風がフルフルと首を振りながら座り込む。

そこにお茶が運ばれてきた。

「はい、お茶ですよー」

それは小さな人だった。

ユニゾンデバイス、という単語が頭に流れてくる。

「ありがとぉな、リィン」

「ハイですー」

はやてがリィンにお礼を言う。
その言葉に、蒔風が頭を上げた。

「リィン？」

そこで蒔風にはやてが、リィンフォース？を紹介した。

「舜君、この子が、二代目のリィンフォースや。あのときリィンが残してくれたあの十字架。あれを元に再構築して、私が作った、私の家族。ほらリィン、挨拶せえ」

「はい！！初めまして・・・・ですよね？はやてちゃんのユニゾンデバイス、リィンフォース？です！！」

元気よく頭を下げるリィン。

それを見て、蒔風は

「わわっ・・・ど、どうしたですか?泣いてるんですか?」

ほろっ、と、一粒の涙を流していた。

「そうか・・・・・・あいつは・・・・リィンフォースは・・・・・
自分を残せたんだな・・・・・・・・よかったぁ・・・・・・・・」

そう言いながら小さなリィンの手をとる蒔風。
その顔にすでに涙はなく、吹っ切れた顔をしていた。

「舜君のおかげやで?こうやってリィンがおるんも」

蒔風にはやてがそういうが、蒔風は首を振ってこたえた

「俺は彼女を消しただけ。残したのは、彼女自身だ。だけどまあ・・
・・少しスッキリしたかな?」

いい笑顔で蒔風がリィンを放す。

ありがとう、と言って蒔風が立ち上がる。

「でも、舜が来たってことは、「奴」が？」

フェイトが蒔風に訊く。

真剣な面持ちになってそれに頷く蒔風。

「ああ、どうやらそのようだな。だけどここは第一世界ミッドチルダ。計算も容易じゃない。今まで以上に長くかかるだろうからな。結構大丈夫だ」

「そうなんだ。じゃあいっしょにまたいられるんだね！！！！」

そういうなのはだが、蒔風がピシリと言い放つ。

「そうとは限らないだろ？俺の立ち位置もわからないし、ってか、またなんか起こってんのかよ」

蒔風がやれやれと頭を振る。

「そういえば・・・お前ら何やってんだ?時空管理局に入るって前に聞いたけど」

「そうだね。舜君がいなくなってから十年だもんね」

「俺の方じゃそんなに経ってない。大体七ヶ月くらいじゃないか?」

「なんや、それズルぅないか?こっちは十九歳になっとるんやで?」

「ずるくない。ってか、お前ら俺と肉体的に同い年か!?」

「あ、そうなるね!!!」

「本気で幼馴染かよ・・・・・・ってかお前らはオレにとってあの時から今までズーーーーーっと妹みたいな感じだからなぁ」

「いまでも?」

「いまでも」

「うんうん」

「私は・・・わかんないなぁ」

「そうやね~~~舜君って「頼れるお兄さん」って感じやもんね」

「そらなのはちゃんはなァ・・・・・」

「なのは、そう言うの疎いもんね」

女子三人が勝手に話しだしてしまったので、蒔風が話題を戻す。

「で、お前ら今何やってんだ？」

「うちは捜査官やっとる」

「私は執務官だよ」

「で、私が武装隊の戦技教導官！！！」

「なのはちゃんすごいんよ！！管理局不屈のエース「エースオブエース」なんて呼ばれてるんやから！！！！」

「はやてちゃんだって、私たちの中じゃ出世頭じゃん。フェイトちゃんだって執務官のエリートだし」

「そ、そんなことないよ・・・・それに、舜だってすごいことになってるんだよ？」

「は？おれ？」

蒔風が自分を指さして驚く。

「十年前の闇の書事件。あん時の情報は確かにクロノが消していたはずじゃねえの！？」

「そうだね。確かにクロノがなんとか洩らさなかったけど・・・・・」

「「銀白の翼人」は噂と言うか、都市伝説みたいに残ってるんだよ？」

「えぇ～～～～～？」

「闇の書事件を解決した管理局自慢の三人娘！！！しかしその戦闘

中、現れた者、「銀白の翼!!!」」

「確かな資料映像とか証拠は何もないけど、やっぱり人の口には戸は立てられないって言うでしょ？」

「それでさらに母さんの事件の時もいたらしい、なんて話になっちゃって・・・・いろいろと伝わって、今や舜はこの世界じゃ英雄扱いなんだよ？」

なんだか自分の知らないところでどんどんよいしょされていく蒔風。

そんな蒔風の感想は

「なにそれ、怖い」

だった。

「え？なに？オレの事そんな風に伝わってんの!?」

「管理局のお偉いさんにも結構問い詰められたんよ？「あの噂は本当か!?」って」

「本当のこと話してもしょうがないから知らないって言ったけど・・・・」

「マジか・・・・列車で開翼しないでよかった・・・・・・」

「ホントだね」

そんなこんなで懐かしい話をしていく四人。

そこで、ふと蒔風がポッケに手を突っ込んで、何かを取り出した。

「なんだこりゃ？」

「何それ？」

「う～～～ん・・・・どうやら何かのカードだな。たぶん、この世界でのオレの役割が出てくると思う。ほら」

蒔風がカードを机の上に置くと、ジンワリとカードに色や写真、文字が浮かんできて、一つの身分証となった。

「なになに?時空管理局本局　古代遺物管理部　機動六課・・・・・・機動六課?」

「ここ!?ここに舜君入るの!?はやてちゃん!!!」

「ちょ、なのはちゃん揺らさないでぇ・・・・・・」

そうして、世界が与えてきた蒔風の役職は機動六課の遊撃戦力。
まあつまりは

「好きな時出て好きな時戦えってことか?」

「それ違うと思う・・・・ねぇ?はやてちゃん」

「面白いから採用」

「部隊長!!!それでいいのでありますか!?」

「何言っとるんや!!!ここでは私がトップ!!!何者にも反論はゆるさへん!!!」

「うわぁ!!!独裁者!!!!」

なんだか十年の間に明るくなったはやて達に安心して、蒔風がいろいろと説明を受ける。
はやてが机に向かうと、すでにそこには蒔風の書類があり、一発受理。

いろいろと用意周到なものである、世界。

こうして蒔風は機動六課に入った。
さて、この物語はどのように歪んでいくのか。

先はだれにも見えない

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～そして対面、久々の再会～（後書き）

やっと出会えたやっとしこりを解消できた！！！

アリス「蒔風にとってリィン？の存在はある程度の救いにはなったみたいですね」

まあ、あれは彼が背負った罪ですから。
これからも背負って行くと思いますが、とりあえずはやてに対して大きな負い目は無くなったんじゃないかと。

ア「そういえばなかなか説明文ってなかったですよね？」

そうですねぇ・・・・

ライダーとかなんかだとわからない人のためにいろいろ説明つけますけど、今回は三回目だし、何より「なのは」

皆さんが知ってる事前提で書いちゃいますからね。

ア「ほう」

それより、ついに昨日買いましたなのは劇場版！！！！

熱い！！燃える！！かっこいい！！！！

こいつぁ・・・・・ヒーローものだよ！！！！！
ああ、あの世界に訊きたくなって来て来る。
なぜこの世界には時空跳躍の力がないんだ！！！！！

ア「”ｎｏ　Ｎａｍｅ”ですからね、作者の世界は」

チクショオオオオオオオおオオオオ！！！！！！！！！

ア「次回、ティアナ達にはどう話す？」

ではまた次回

勇気の意味を、知りたくて。

「結局、昨日のあの人はなんだったのかしらね」

リニアでの事件から翌日、機動六課の隊舎内食堂

そこで早朝訓練を終えたティアナたちフォワード陣がシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーと一緒に朝食をとっていた。

「さあ（モグモグ）でも、なのはさんたちの（モグモグ）知り合いみたいだったね」

「スバル、食べながら喋らない。シャーリーさんは何か知りませんか？」

ティアナがフェイトの執務官補佐を勤めるシャーリーに聞く。
だが彼女もよくわからないそうだ。

「話に聞くとフェイトさん達が最後に会ったのは十年前らしいんだよね」

「十年前・・・・・って、確か・・・えっと・・・・（モグモグ）」

「闇の書事件の時ですよね？」

「そうだね。でもそんな長い間何やってたのか・・・・・私もあんな人がいたなんて聞いてないしね」

シャーリーが頭を捻る。
そこでエリオが口を挟んだ。

「じゃあ、あの人は知ってるんですかね？」

「何を？」

「ほら、あの噂ですよ」

「「翼人」のこと？あんなもん、ただのお伽話でしょ？」

「えーーー？あたしはいると思うな！」

「スバル・・・・・エリオもそう思ってるの？」

「はい。っていうか、フェイトさんから聞いたことがあるんです」

「ほんと！？」

スバルが身を乗り出し、それに合わせて残りの四人も身を乗り出し、

エリオがヒソヒソと話した。

「フェイトさんが昔の話をしてくれたとき、助けてくれた人がいるって。はっきりとは言ってなかったですけど、多分「翼人」のことでした」

「本当に？フェイトさんのお伽話じゃなくて？」

「話してるときのフェイトさん、とても懐かしそうでしたし、多分作り話じゃないと思います」

エリオの話に、はぁ～～～～っ、と感心と溜息の混じった声を出す一同。

「エリオ君、なんかずるいなぁ。私そんなの聞いたことないよ？」

「あ、えっと、僕が話して話してってその時頼み込んじゃったから・・・」

そんな話をしていると、食堂の角の方から声が聞こえてきた。

「・・・・・・プリン！！」

「だぁ！青龍！いきなり出てくんな！！なんでてめぇこういうのは積極的なんだ！！」

「シャケもーらい！」

「白米、いただきます」

「ったく、てめぇらなにやってんだよ。お、沢庵（たくあん）もらうぜ？」

「お前らいい加減にオブッ！？」

「お主らは！主の朝食を奪うな！！」

「獅子よぉ、そう言うなよ。食事くらい俺等が楽しんでもいいだろ？」

「天馬！！麒麟からもなんとか・・・・」

「ダメだよ。麒麟とじっちゃんは朝は舜より弱いんだから、まだ寝てるよ？」

「ってかお前ら・・・・・俺の上からどけ・・・・・・」

五人が視線を向けるとそこには蒔風と、人型顕現した七獣（二体欠席）がいた。

蒔風の朝食を奪い、その上にのしかかっている。

構図としては

天馬（足組んで沢庵ポリポリ）
青龍（プリン味わい中）
白虎（焼シャケモグモグ）
朱雀（白米）
蒔風（俯せ）
――――――――
床

となっていて、それを傍らに立って獅子が注意していた。

「主が潰れる！！早く退け！」

「舜はんなくらいじゃどーってことねぇよ」

「そうそう、舜ならいけるいける♪」

いけしゃあしゃあと言ってのける天馬と白虎。
それについにキレた蒔風。

「んなわけあるかあ！！」

ドバァ！！と蒔風が起き上がり、上の奴らをはねのける。

その勢いに全員がテーブルの向こうに飛ばされ、誰にも見えないように剣に戻る。
もちろんその間に食うもんはしっかり食っていたが。

やれやれと獅子も頭を抱え、剣を回収して蒔風の背に消える。

「ＯＴＬ　ううう・・・・あの野郎ども・・・・朝飯全部とりやがった・・・・・・・」

がっくりとうなだれる蒔風に五人の視線が突き刺さり、ティアナが不意に口を開く。

「何やってんのかしら・・・・・・」

「さ、さあ？」

ぼそぼそと話すティアナ達に気付いたのか、蒔風が身体を起こして近づいてきた。

「おっす。どーやら昨日はメーワク掛けたみたいだな」

「え？あ、はい」

「自己紹介をしておこうか。オレの名前は蒔風舜。なのはの友人やってる。よろしくな」

「は、はい。私はティアナ・ランスターです」

別に管理局の人間じゃないから、階級は省いてティアナが自己紹介する。

それに続いて、スバル、エリオ、キャロ、シャーリーと自己紹介を済ませ、蒔風も同席させてもらう。

「さっきのは一体誰だったんですか？」

そこでエリオが気になる事を聞いた。

そりゃそうだ。あんだけ騒いでたんだから。

「あれ？ああ、あいつらはオレの・・・・なんだろ、使い魔みたいなもん？」

「使い魔をあんなに連れてるんですか！？」

その事実にティアナが驚愕する。
使い魔一体作るのには多くの魔力と資質が必要だし、その数が多ければ多いほど、維持するための魔力も膨大だ。
一体この人何者なんだろう、と推察し始めるティアナ。
そこでスバルがべつの話を聞いた。
「なのはさん達とはどれくらいの仲なんですか？」
「なのは？そうだなぁ・・・・十年前に事件を一つ解決して、その半年後にもう一個・・・・それだけだな」
「確かその事件って・・・・・」
「おや、さすがにフェイトの補佐。知ってるか。Ｐ・Ｔ事件に闇の書事件な。あんときにちこっと協力したぐらいだな」
「でもそれから十年間って何してたんです？」
「あ？おー、えーーーっと・・・・・」

そこで蒔風が言葉に詰まる。

（どこまで話したもんかなぁ・・・いつもだったらホイと話すけど、なのはの教え子たちの前だからなぁ・・・・・）

蒔風が腕組んで考え込んでいると、そこに珍しい客が現れた。

「舜君、ここにいたんだ」

なのはである。
それだけでなく、フェイトやはやてまでいる。

突然の隊長部隊長三人の登場に、ティアナ達四人のフォワード陣がびっくりして立ち上がった。

「な、なのはさん！？」

「あ、スバル、私たちも一緒で言いかな？」

「は、はい！！大丈夫です！！」

そうしてなのは達も会話に加わる。

そうそうたるメンバーにスバルはテンションが上がり、ティアナが恐縮してしまった。

そんな中でもスバルはゴーイングマイウェイ。

ちょうどいい、となのはに声をかける。

「あ、そうだ。なのはさん、聞いてもいいですか？」

「なにを？」

「十年前のことですよ！「翼人」が出たって本当ですか！？」

ブホウ！！

あまりのストレートな質問に、蒔風が噴き出し、なのは達があはは・・・と笑う。

『どこまで話すよ?』

『舜君の気分でいいんじゃない?』

『でもお前さんが狙われるって話だぜ?』

『う〜〜ん・・・・・』

蒔風となのはが念話で話し合う。

確かに、自分たちの教導官(せんせい)の命が狙われるだなんて言われたらショックだろう。

『うまく隠して離せないかな?』

『おれぁ欺くのはできても嘘つけない人間なんだよ』

念話ばかりしていっこうに黙ったままのなのはと蒔風に、エリオが聞いた。

「じゃあ、蒔風さんはなんで来たんですか?」

「そうですよ。十年も会わないで、どこで何をしてたんですか?」

更にキャロまで乗っかって、蒔風に好奇心に満ちた視線が向けられる。
それに蒔風がうろたえ、あーーー、とかうーーとかうなる。

頭をガシガシと掻いて、顔に手を当てて、考えてから、やめた、と言って話し始める。

「やめたやめた。どーにも隠し事はできん。正直に話そうか。びっくりすんなよ？」

そして蒔風が話しだす。

その内容はいつも世界で話すことだけで、翼人までの事には至っていない。
だがそれでも彼女らを驚愕させるには十分なインパクトがあった。

「な、なのはさんが！？」

「殺される!?」

「って話だよ。させないからな」

「それにしても高次の世界を回ってるだなんて・・・・・」

「それがオレさんの・・・・まあ、やらなきゃならないことだかんね」

そう言ってテーブルの真ん中におかれたスパゲッティをつまんで食べる蒔風。
フェイトやはやては知っていたことだが、初めて知らされたフォワード陣はシィン、としてしまう。

そんな状況に、またエリオが口火を切る。

「で、蒔風さん、結局「翼人」は・・・・・・」

「あん?・・・・・・・言ってもいいのか?」

「是非知りたいです!!管理局で英雄とされ、あの伝説の中でもさらに伝説とされている「翼人」ですよ!?」

「ミッドチルダの子供たちならみんな憧れてますよ!!!」

スバルとエリオのどーしようもない感じのよいしょに蒔風がプルプル震えて涙目になりながらなのはの肩を掴んで「どーにかして」と目で訴える。

「なんやむずかゆいなぁ。もう言ってしもたらどうや？」

「だって～～～こう言うのは長引かせるのが面白いんじゃないよ～～～」

「「「「？？」」」」

はやてと蒔風の話にはてな？となるみんなに、蒔風がついに言った。

「俺がその翼人ですよ。まったく、あまり言い広めないでくれよ？」

言った。ついに言った。だが

「冗談はいいですから、本当にいたんですか？」

「え？」

「蒔風さんは確かにわけわからないけどそれは別世界だからでしょう？なんか翼人って言う感じしないですよーー」

「は？そ、それは・・・・」

蒔風ががっくりと肩を落とす。
まあ確かに、へらへらしてるし、身体はヒョロい方だし、雰囲気は完璧にお兄さんだ。

対してスバルたちの思い描いている「翼人」は、いかにもな感じの英雄さん。
これで本人が「俺が翼人です」なんて言ってもその場しのぎの逃れ回答にしか聞こえないのも無理はない。

「ううう・・・・・ううううう・・・・・・・」

「で、蒔風さん、あなた翼人知ってるんですよね？どんな人ですかっ？」

好奇心満々で聞いてくるエリオにスバル。
頭を押さえるティアナにあはは・・・困ったように笑うキャロ。

そんな彼らに、蒔風が言った。

「なのは、こいつらの午後訓練、模擬戦にしていいか？」

「え？私はいいけど、ヴィータちゃんがなんて言うかな？」

「と、言うわけでここにヴィータを呼んどるよ」

「早ぁ！？いつの間に！？」

「うちは空間、広域魔法のエキスパートやで！！！！」

はやてさん、それ違います。

ともかく、はやてが通販で紹介するようにヴィータを出した。
本当にどっから来てたんだろう。

「あたしはいいぜ？手間が省けていいもんだし、舜が相手ならまあ無茶はしないだろ」

「そうだね。だったら任せるよ」

と、教導官二人の許可がおり、蒔風がよっし、と張り切る。

「お前ら、吠え面かかせてやっからなぁ！！！覚悟しとけよ！！！！」

そう言いながら部屋から飛び出す蒔風。

ポカン、とフォワード陣がその後を目で追い、どうしようかと話し合った。

「ね、ねえ。ほんとだったんじゃない？ティア」

「大丈夫よ。私たちはいままでだって訓練をしてきた。勝てるとは思わないけど、全力を出せば一撃くらいは・・・・・」

ティアナがやる気を出しながらそう言う。
だが、そこに声がかけられる。

「甘いな」

「あ、シグナム副隊長」

その背後に立っていたシグナムが腕を組んで立っていた。

「話は聞いた。おまえら・・・・・・」

そう言ってティアナの肩を掴み、マジ真剣な目をして忠告した。

「その・・・なんだ・・・・・・やってしまったな」

「あー、そっか。シグナムいっぺん舜と戦ってたもんな」

「ああ・・・・・・正直に言おう。死を覚悟した」

その一言に皆の背筋が凍る。

エリオとキャロがガタガタ震えながらフェイトにしがみつくが、フェイトと目があった瞬間、ブワッ、と涙を流して口に手を当てた時、

自分たちは終わったんだ、と肌で感じた。

なのははいっこうに目を合わせようとしないし、はやては今から医務室のシャマルに連絡を取っていた。

「確かに強いのは列車で見ましたけど、そんなにですか！？」

「やばいで～～～？正直、リミッターはずしてもうちら全員でかかって勝てるかどうかや」

「うっっそぉ・・・・・・」

シャーリーがずり落ちた眼鏡を治しながらつぶやく。

隊長格の五人は「一つの部隊の戦力基準」のラインを越えないように、その力に制限をかけ、ランクを二個か三個落としている。

そのランクを元に戻してでも勝てるかどうか。

いや、あの感じだと結構絶望的みたいだ。

「そんな・・・隊長格五人がかりで！？」

「ううん。舜なら多分ザフィーラとシャマルがいてもで勝っちゃいそう」

フェイトの言葉に全員が同時に立ち上がって模擬戦の仕度を始めた。
汗ダラダラで、その眼は必死に光っていた。

「フェイトちゃん、さすがにあれは言い過ぎじゃない？」

「そうかな？舜なら出来そうな気がするんだけど」

「八神家オールスターズだけならともかく、お前らまでいたらそれは無理ポだよ」

「！？」

フェイトの言葉にいつの間にか戻ってきていた蒔風が答える。

曰く、三人同時、もしくは八神家オールスターズなら勝てそうだが、全員だと結構きついらしい。

理由としては「数がいるとこっちも疲れる」だからだそうだ。
それはめんどくさいだけであって決して勝てない、というわけではない気がするのだが。

「それで、舜君は何しに戻ってきたん？」

「そうそう、はやて、聞きたいことがあんねんけど」

「はいはい」

「模擬戦ってどこでやるの？あと、俺の部屋は？」

「「「あ」」」

こうして模擬戦の準備が整って行く。

「スバル！！あんた気ぃ抜くんじゃないわよ！！！」

「だ、大丈夫だよ！！！ぜ、絶対やられないもん・・・・・絶対だもん！！！（涙目）」

「「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ・・・・・・・・・」」

それまでの間、フォワード陣は必死になってモチベーションを上げていた。

がんばれフォワード。
負けるなフォワード。
君たちはきっとやれる

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～翼人？うっそだぁ～（後書き）

フォワードたちの次回の健闘にご期待下さい。

アリス「打ち切りみたいに言わないでください。かわいそうに・・・あんなこと言ったから」

ぶっちゃけエリオスバルあたりは「どうだろう？」、ティアナは「ごまかしてますね」、キャロは「この人との接し方わかんないや」って感じです。

ア「きっと心の底で後悔してますよ」

でしょうね。

あのシグナムさんが「あいつと戦えていいな」ではなくマジもんの忠告しましたからね。

ア「それは恐ろしい」

まあ彼女前回大変なことになりましたから。

アイアンクローとか

そうそう、作者最近ニコニコ動画で「文字を読む動画」タグのものを見るんですよ。

その中にあったものに、「スカッとするコピペ集」ってのがありま

してね。

ア「笑いましたか？」

泣いた

ア「え？」

もう感泣号泣涙ポロポロ
あんなに泣いたのはアニメ版ＣＬＡＮＮＡＤ風子ルートのストーリー見て以来ですよ。
「ブワッ」という効果音が耳に聞こえてきたくらいです。

いくつかは確かにスカッとしましたが、その４とか５あたりで泣きました。
ジーちゃんとか自衛隊の女の子とか唐揚げの話に泣いた。

暇があったら見てみることをお勧めします。
あれはいい動画だ。

ア「作者のそんな話も終わって、私から報告を。

「世界をめぐる銀白の翼」でめぐる世界はもう決定してしまいました。
ですのでもし希望してこの世界出して！！という方がいらっしゃっ

たらすみません」

そうなんですね。

もうどんな世界を回っていくかは最後まで流れが決定してしまいました。

ですので懇願されても出せない・・・・・

本当にすみません！！

ア「次回、蒔風ＶＳフォワード四人」

ではまた次回

誰にも負けない夢があるから

そして時間がきた。
蒔風はなのは達の案内で訓練場だという場所の前まで来ていたが、目の前に広がるのは海海海。
海岸沿いの公園みたいな感じのフェンスに集まっただけだった。

「まさか海上戦とか言わないよな？」

蒔風がどこで戦うんだよ、となのはに訊く。
そこでシャーリーが自信満々に代わりに答えた。

「ふっふっふ。ではご覧あれ！！機動六課自慢の訓練シュミレーション！！！！ポチッとな」

シャーリーが浮かび上がったコンソールのボタンを操作して、起動させる。

すると洋上に浮かんでいた巨大なプレートから、廃墟と化したビル群が出現してきた。

「おーーーーー！！！！すげぇすげぇ！！！何あれ！？ホログラムとかじゃないんだよね！？」

「はい、ちゃんとした実物ですよ。あそこでいつも訓練や模擬戦をやってます。結構暴れても大丈夫ですよ？」

そう訊いた蒔風がにやりと笑う。
その光景を見ていた彼女達は・・・・・・

「終わったな」

「だ、大丈夫だよ！舜だって模擬戦って言ってるんだし、手加減はする・・・・よ」

「フェイトちゃん・・・・もぉちょい自信持って言おうな？」

「ま、舜だからなぁ・・・・・お、来たみたいだ」

そんな話をしていると、準備の整ったフォワードたちもやってきた。

「いけそうか？」

「わかりません。でも、全力は尽くします」

そう言って蒔風と向き合う四人。

「始める？」

「・・・・正直あなたに勝てるとは思ってません・・・・でも・・・・」

「？」

「負けません」

「・・・・っあは！！あはははははは！！！！！よっしよく言った！！！！始めようか！！！！」

そう言って五人が訓練場へと入る。

なのは達は全員そろってそれを眺めていた。

ーーー

『じゃあ、ルールは・・・そうだね、舜君にキチンとした一撃入れられたらフォワードの勝ちってことで。制限時間は十分！！』

「あれ？蒔風さんの攻撃が当たったらいけないとかクリアしないと終わらないとか・・・・」

『そんな無茶ブリ・・・できないよ（プツッ）』

「え？あ？なのはさん！？」

「さって、こっからは俺たちの領域だ。オレの事ヒョロいとか言いやがった事後悔させてやっからなッァ！！！」

蒔風がマギマギマギと笑っている。
どんな擬音だそれ。

「こ、怖いです・・・・・」

「ビビってないで、行くわよ！！打ち合わせ通りに！！！」

「「はい！！」」「うん！！」

プーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！

そこで開始の合図が鳴らされる。
それと同時に、フリードが巨大化、大きな竜となって上空に羽ばたく。

その背に乗るフォワード。
そこからティアナが射撃をし、フリードが炎弾を吐き出す。

これがティアナの出した作戦だ。

蒔風がリニアの上から一回落ちた。
つまり、空は飛べないということだ。だったらあとはそこを責めるだけ！！！

「ああっ！！飛びやがって！！こん畜生！！！」

蒔風が銃弾をかわしながらフリードの下にあるビルに向かって走る。
そしてそのビルの壁を一気に駆けあがっていった。

「そんな！！生身で壁走り！？」

そう言いながらティアナが双銃クロスミラージュで蒔風を狙い撃つが、くねくねと曲がりながら走っていてなかなか当たらない。

「キャロ！！！」

「はい！！フリード！ブラストフレア！！！」

「ゴオオオオオオオオオオ！！！！」

ギィィィィィ、ドンッ！！！！！

フリードの口の前に火球が生成され、それが蒔風のビルに放たれる。
その攻撃にビルが爆発、崩壊していって、蒔風の身体もぐらりと崩れる。

だが崩壊して飛び散っていくビルの壁を一気に駆け抜け、フリード

に向かってジャンプする。

「スバルっ！！」

「オッケイ！！！」

真っ直ぐにフリードへと跳んでいく蒔風に、右側から回り込んで青い道が現れてきた。
魔法によって作られたその道を、スバルがローラーブーツ型デバイス、マッハキャリバーで駆ける。

「行くよ！！マッハキャリバー！！！」

《了解》

「なんっ！？」

ウイングロードが蒔風に向かって伸び、空中でスバルを迎え撃つ蒔風。
膝と腕でスバルの拳を受け止めるが、その右手に装着されているリボルバーナックルが回転しだし、カードリッジを二発噴出した。

「リボルバーーーーー！！！！シューート！！！！！」

ドゴッ！！！と蒔風が空中で弾き飛ばされ、別のビルの壁面に着地する。

ガゴン

「あら？」

だがビルがそれに耐えられなかったのか、壁が崩れ、その中に蒔風が突っ込んでいってしまう。

「あらーーーーーーー！？」

その蒔風を見てスバルがウイングロードの上でガッツポーズをとるが、ティアナがまだだとスバルに叫ぶ。

「スバル！！油断しない！！今のはキチンと入ってないわよ！！！」

そう、今のではＯＫではない。
蒔風はガードしていたし、ダメージもないだろう。

ガラガラと崩れる壁の中から蒔風が現れ、そのビルの屋上まで上がる。
そして腕をブンブン上下に振りながら、フリードを見て叫ぶ。

「お前ら空とか、飛ぶなーーーー！！！！くそう、でもここで開翼すんのもなんか軽いなぁ・・・・・力を借りる！！！」

蒔風がその手に銃を握る。
そして左手には一枚のカード。

「ッたく・・・とりあえずこっち来い！！」

蒔風がカードを装填して指でディエンドライバーをクルクルと回転させてからクンッ、と振る。

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－］

「変身！」

［ＤＩＥＮＤ！］

その勢いにディエンドライバーの前部が前にスライドされ、蒔風がディエンドに変身する。

「こっちこいやぁ！！！！」［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＢＬＡＳＴ！］

蒔風の放ったホーミング弾がフリードの身体を回りこんで背に乗るフォワードたちに降り注ぐ。
それから逃れるようにフリードが急降下して地面に降り、キャロが防壁を張ってそれを防ぐ。

場所は廃墟の大通り。
そこに蒔風も降り立って、カードを三枚取り出した。

「やっとこっち着たか。逃げられる前に、行ってらっしゃい！！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＩＣＨＩ－ＧＯＨ！ＮＩ－ＧＯＨ！Ｖ３！！］

ディエンドライバーの銃口から三体分のホログラムが現れ、それが実体となって現れる。

その三体は、歴史に名を残す三大ライダー！！！

「仮面ライダー、一号！！」（バッ！）

「二号！！」（グッ！！）

「Ｖ３ァ！！！」（ガッ！！）

そして三人並んでポージングをし、名乗りを上げるライダー。

しかも最初からバイクに跨って。

これはかなり豪華である。

「スゴイ・・・・」

「かっこいーーーー！！！」

そんな姿にスバルとエリオは目をキラキラさせている。

「どうだ！！かっこいいだろう！！このために彼らを出したと言っても過言ではない！！！！」

この男、なにを言ってるのだろうか。

「さて・・・行け！！！」

蒔風の号令に三人が一気にバイクで駆けだす。

一号はスバルに、二号はエリオに、Ｖ３はティアナに向かう。

しかし三人のゆく手をフリードの炎が襲った。

だが三人は問題なくその炎を突破、各自の相手に向かって行き、Ｖ３は目標を変更し、フリードへと向かって行った。

「くっ、ウイングロード！！！」

「待てぇ！！トォ！！」

ウイングロードで逃げるスバルを一号がサイクロン号で追う。
またエリオは二号のバイクに突っ込まれ、その真正面にしがみついて、二号と共にその場から離れていく。

Ｖ３はと言うと

「ハリケーーン！！」

自身のバイク、ハリケーンと共に空中に跳び、その後輪を踏み台にして身体をブーメランのように高速回転させて上空にまで飛んだフリードに向かって行った。

「Ｖ３！！！マッハ・・・キィック！！！！」

空中を滑空してきたＶ３にフリードが炎を吐くが、その炎が回転によってかき消されてしまう。
寸でのところでＶ３をかわすフリードだが、なんとＶ３が空中で旋回、再びフリードに向かってきた。

「え！？そんな！！！フリード！！！」

「ゴアアアアアアアア！！！！」

そのＶ３にフリードが今度は炎弾をぶつけ、マッハキックと相殺させる。
Ｖ３がビルの屋上に着地して、フリードを睨みつける。

「ちゃぁ・・・・こりゃだめだ。だったら援軍！竜には龍だ！！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＲＹＵＵＫＩ！］

蒔風が龍騎を召喚し、その龍騎が「しゃぁッ！！」と気合を入れて拳を握る。
更にカードを装填し、銃口を龍騎に向けて発砲する蒔風。

［Ｆｉｎａｌ　ｆｏａｍ　Ｒｉｄｅ－－－ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵＫＩ！］

そして龍騎がファイナルフォームライドでリュウキドラグレッダーとなり、Ｖ３を背に乗せて飛んでいった。

「さて、残ったお前が俺の相手だ。ティアナ」

蒔風が後の戦闘は各自に任せ、ティアナと向き合う。

ティアナは非常に警戒していた。
増援を出し、自分たちをバラけさせ各個撃破を狙ってくるだなんて思ってもみなかったからだ。

まあ蒔風の「力を借りる」ことがあまりにも有利過ぎるのもあるが。

「射撃型のセンターポジション。楽しませてくれ、よっ！？」

蒔風がディエンドライバーを振り降ろしながら引き金を引く。
飛び出た弾丸は一発。

だがその弾丸は振り下ろされた勢いで本来の者以上の威力をもって、ティアナのすぐ脇を通り過ぎていった。

「海東がどう使うかは置いといて、これがオレの銃撃戦だ。ハァッ！！！」

同じように次々と銃を振るって発砲する蒔風。
ティアナはその攻撃に地面を転がってビルの陰に隠れる。

バゴンバゴン！！！と、どんどんビルの壁が削られるなか、ティアナは考えていた。

（私たちが一人一人で戦って勝てる相手じゃない・・・・・このままじゃやられる。考えろ・・・私にできること・・・・・私は・・・・勝つ！！！！）

ティアナの思考が固まる。
そして動きだした。

ーーー

直撃は避けたものの、その衝撃にスバルがウイングロードから落ちてしまう。

そこにエリオを引き連れた二号もやってきて、二対二の構図になる。

「エリオ！！」

「スバルさん！！！」

「大丈夫？」

「はい・・・でも結構離されてしまいました」

「うん。早くティアと合流しないと・・・・」

だが目の前のダブルライダーに一切の隙はない。
その風貌にはディエンドのレプリカとはいえ、流石と言わざるを得ない。

「とにかく、ここから逃げよう。私が道を開くから、エリオは行って！！」

「わかりました！！」

スバルがウイングロードを走らせる。
それは一直線にダブルライダーに向かって伸び、その上を疾走していく。

「ディバィーーン、バスターーーーーーーーーー！！！！！！」

スバルの拳から砲撃が放たれる。
だがそこで二号が拳を振りかぶって突撃してきた！！

「ライダァー　パァンチ！！！！！！」

ドゴォウ！！！！！

ライダーパンチで砲撃を打ち、爆発させてその爆炎の中から二号が出てきてスバルと取っ組みあう。
さらにその煙を飛び越えるように一号がエリオに向かって来る。

「くっ、いっけえ！！！！！」

エリオがその一号ライダーに向かって槍型デバイス「ストラーダ」を向け、そのブーストからの噴出で一気に突っ込んでいく。
そのエリオに対して一号が両足をそろえ、命中と共に光を放つキックを炸裂させる！！

「電光ォーーー！！！ライダーキィック！！！！」

カッ！！！ドォォオン！！！！！！

エリオと一号がお互いに弾かれ、エリオが地上、一号が残ったままのウイングロードに着地する。
そして一号が頭を上げた瞬間、真上からスバルの気合が聞こえてきた。

「ナックルダスターーーーー！！！！！」

ドゴォォン！！！！！

一号が真上からの攻撃に腕で顔を覆い、それをガードする。
そしてスバルと一号の衝突と共に粉塵が上がり、その姿が消えた。

「スバルさん！！！」

エリオがすぐにそっちに向かおうとするが、その眼の前にスバルと戦っていた二号が変わりだと言わんばかりに立ちふさがる。

「くっ、そこを・・・・え？」

エリオが構え、ウイングロードの上に視線を向ける。
そこでは竜巻が起こっていた。
確かにスバルのリボルバーナックルには回転するギアが付いているが、あんなに凄まじい竜巻を起こすものではない。
ならば、その原因は他にある。
土煙が晴れる。

そこにはその腕でスバルを頭上でブン回している一号がいた。

「ライダー、きりもみシューーーート！！！！！！」

ブォン！！！！

そしてそのまま回転しつつ、スバルの身体が上空に投げ出される。
そのスバルを追って一号が飛び出し、ライダーキックをぶちかます！！！！

「うわぁ！！！！！？？」

ゴガッ、ドォン！！！！

スバルの身体が飛び、そちらにエリオの視線が向く。

だがそれがいけなかった。その間に二号はすでに、その身にパワーを溜めている！！

「トォ！！！！！」

「！！！！」

エリオが気付いたときにはすでに二号は空中でキックの構えをとっている。
そしてその体を捻りまわし、回転キックとなってエリオに迫る！！！

「ライダァァァー　卍キィック！！！！！」

エリオがストラーダで防御姿勢をとるが、回転によってその威力の上げられたキックに小さな体が吹き飛んだ。

ーーー

キックで吹き飛ばされ、きりもみ回転しながらもスバルはなんとか体のバランスを取り戻し、よろけながらもウイングロードを出してその上に滑りながらも着地する。

膝をつき、肩で息をしているが、まだまだ戦えると言ったところ。そして周囲を見渡し、そこでディエンドに変身した蒔風とティアナの戦いが見えた。

ビルの陰からティアナが飛び出す。
蒔風がそれに向かって即座に銃口を向け、引き金を引く。
だが一発目は外れたのか、後方のビルの壁が崩れ落ちた。
そしてさらに銃を振って二発目を撃とうとしてそれが止まる。

たった一発の弾丸で壁を壊すのもすごいが、蒔風はティアナの幻術「フェイクシルエット」を見破ったのだ。

ティアナが得意とするのは幻術魔法。
それをもって自分の姿を表し、敵を錯乱させる。おそらく今のも囮だろう。

だがばれてしまっては囮にも意味はない。
蒔風が銃口をティアナのいるビル陰に向ける。

その瞬間、そのビル陰から無数のティアナが飛び出してきた。

一瞬うろたえる蒔風だが、即座に銃のポンプを戻し、カードを装填する。

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩＥＮＤ！］

そして再びビルに向かって銃口を向ける。
まるでその壁などないかのように。

ティアナの幻術が次々を蒔風に襲いかかるが、すべて無視した。
なぜならその中に本物などいはしない。

「どうせやるなら、影までしっかりやっておけ」

そう言って蒔風が銃口を引く。

「ティアッッ！！！！」

スバルが声を荒げてウイングロードをティアナの元に伸ばす。
彼女には見えていた。

隙を見て飛びだそうとしたティアナがそれに失敗し、一旦距離を取ろうとそこから逃げようとする姿が。
だがそれよりも早く蒔風の攻撃がビルを崩す。
そうなれば生き埋めだ！！！！

スバルは最高速でマッハキャリバーを飛ばした。
親友を救うために

ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！！

「ハァッ！！！！」

そして蒔風の声と共にディメンションシュートが放たれ、ビルの一階部分を見事に吹き飛ばした。
だが蒔風の目はそのビル陰から離れていく。

そのビルの反対側から青い道が伸び、その上をスバルがティアナを担いで走っていた。

「ティア、遅れてごめん！！」

「間に合えば上等よ！！！まだ来るわよ！！！！」

ウイングロードで逃げた二人だが、蒔風がディエンドライバーを振ってくる。
いまだに伸び続けるディメンションシュートをスバルがウイングロードやビルの屋上を走り回って回避する。

「ど、どこまでくんの～～～～～！？」

「泣きごと言わない！！！スバル！！！後ろ向き走行！！！」

ティアナの言葉に後ろ向きで走り出すスバル。
それに関してはマッハキャリバーの車輪の回転を逆にするだけだからあまりスバルには負荷にはならない。
だが
「後ろ向きってなんか嫌だぁ！！！」
「文句はあとで聞くから！！！クロスファイヤーーーー、シュート！！！！！！！」
ティアナの周囲にいくつもの魔力スフィアが浮き、それが一斉に蒔風に迫る。
それらすべてをディメンションシュートで薙ぎ払うが、その間に砲撃が終わってしまった。
「やった！！！」
「今はとにかくエリキャロを助けに行くわよ！！！！！」
そう言って蒔風はひとまず後回しにして上空で戦うフリードの元に向かうスバルたち。
とにかく四人揃わないと対抗策の立てようもない。

急いで集合しようとするティアナだが

「チィ、させん！！！」

蒔風がそれをさせるわけがない。

［Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ！］

「もう一丁！！！」

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵＵＫＩ！］

二枚のカードを立て続けに装填して発動させる。
すると上空のＶ３の複眼が光り、ベルトのダブルタイフーンが回転を始めた。

「トォ！！Ｖ３ィーーーーー！！！！」

Ｖ３がリュウキドラグレッダーから跳躍して上がっていく。
その周囲をグルグルと渦を巻きながらリュウキドラグレッダーも上昇していく。

「！！！スバル、急いで！！！！」

「うん！！・・・・うわぁ！！！！！」

その場に急いで向かおうとした二人だが、その眼の前にダブルライダーが降り立つ。

「邪魔をッ！！！！！」

「ま、間に合わないよ！！！！」

そして上空ではＶ３が身体を回転させながら、キックを放ち、そのＶ３にリュウキドラグレッダーが炎を吐きかける！！！

「ドラゴンスクリューキィック！！！！！！」

そして放たれた。
Ｖ３が回転しながら炎の塊となってフリード、しいてはキャロに向かってゆく。

だがキャロはフリードの背でブースト魔法をかけていた。
その対象はフリードではない。
駆けるべき相手は、Ｖ３の後方にいた。

「エリオ君っ！！」

「行くぞ！！！！！ストラーダ！！！！」

《ＹＨＥＡ！！！》

リュウキドラグレッダーよりも後方から、ブースターによって一直線に伸びてきたそれが、Ｖ３の身体を捉える。
それは槍を構えたエリオ。
どうやってそこまで上昇していたのか、二号によって吹き飛ばされたエリオはキャロの元へと向かって行っていたのだ

そしてそのエリオが、飛行機雲のような煙を残し、Ｖ３に突貫する！！！！

「なに！？」

Ｖ３は完璧にキャロのみを捉えており、そのエリオの一撃をもろに食らってしまった。
エリオがフリードの背に着地し、Ｖ３が爆発して消えうせる。

リュウキドラグレッダーもファイナルアタックライドが発動したためか、役目は終わったとその姿を消した。

「やるじゃないあの子たち！！！」

「やったぁ！！！！！」

「トォオ！！！！！」

「うわっ！！！！！」

だが二人の目の前にはまだこの二人が残っている。

どうしよう！！と聞くスバルに、ティアナが「あ」と思い付き、スバルに耳打ちする。

「あ、そうだね」

「やってみなさいよ」

「うん」

そういうスバルとティアナにダブルライダーが迫る。
そして

ダブルライダーの足元のウイングロードが消えた。

「え？」

「む？」

「「ばいばーーーい」」

「「ぐあああああああああああああああああああああ！！！！！」」

ダブルライダーが足場を失って落ちていく。
ってかその叫び声はおかしいだろ。

そして蒔風の前にフォワードたちが集合する。

蒔風の脇にも一号、二号が駆けより、数の上ではティアナ達の方が有利だ。

「時間は後二分！！！強引に決めるわよ！！！」

「「「おう！！！」」」

意気込むフォワードたちだが、蒔風がそれに笑いを含めた声で返す。

「まだこいつらのクロスアタックが残っているぜ？こいつらの攻撃に、耐えてみろ！！！！」

「行くぞ一号！！！」

「おう！！！！」

バッ！！！！

蒔風の声に反応してか、一号と二号が息を合わせる。

一号が左腕をまっすぐ右上に、二号が左腕を力こぶを作るようにし、右腕を胸の前で握る。
そして二人のベルト、タイフーンが猛烈に回転しだし、ダブルライダーが走り出した！！！！

「「トォオ！！！！！」」

「来るわよ！！！！！キャロ、防御魔法！！！！！皆にもブーストを！！！」

「はい！！！！！」

キャロが防壁を張り、残りの三人も各自でプロテクションを張る。

目の前にはジャンプしたライダー。
そして、今もなお伝説と語られる最強のタッグ技を放つのだ！！！！

「「ライダァーーーーー、ダブルキィィック！！！！！！」」

ドゴッ！！！！！！ドォォォォオオオオオオオンンン！！！！！！！

周囲一帯を爆発が覆う。
それを蒔風は変身を解いて眺めていた。

ーーー

「うん。さっきヴィータちゃんも言ってたけど、直接戦ってないからね」

その発現に皆がコクコクとうなづく。
シャーリーの眼鏡がズルッ、とずれ、それを戻しながら訊く。

「でもあの力何なんでしょう？」

「あれか？あれは・・・確か他の世界の力を借りている、と本人は言っていたな」

「かなり昔の事だからあたしは覚えてねーなー」

何となくうろ覚えのシグナムとヴィータ。

なのは達もなんだったっけ？と首をかしげる。

「確か・・・・・舜君の翼が願いを受け取れて・・・・だったかなぁ？」

「後で本人に訊けばいいやん。それよりほら、あん子たち、立ちあがったようやで！！！」

はやてがモニターを指しながらみんなをちょいちょいと呼びだす。

そこにはなんとか立ち上がろうとしているフォワードたちがいた。

――――――

激！！！！いやぁ、やっぱ人って強いなぁ！！！」

そこに嫌味や皮肉の類は一切なく本当に純粋な感情をもって祝福している蒔風がいた。

「素晴らしい！！！！上出来じゃないか！！！！こんな事ならあんな力を見る戦い方じゃなくて直接ぶつかり合えばよかった！！！！」

蒔風がそう言い、そして倒れそうな四人を担ぎあげた。

「さ、怪我の治療な？しっかり治して、今度またやろう！！！」

「できれば・・・・勘弁です・・・・・・」

「もう無理だよぉ～～～～～」

「くたくたです・・・・・」

「同じく・・・・・・」

あっはっはっはと笑いながら蒔風が四人と一緒に歩いていく。
その間にプーーーーーー、とブザーが流れて時間終了を伝えた。

『舜君、どうだった？』

蒔風の前にモニターが出て、なのはが訊いてくる。
それに笑顔で答える蒔風。

「スッげーいいよこいつら！！！おにーさん大満足！！！またやりたいな！！！」

『で、舜よぉ。信じてもらえたか？』

「なにが？」

『お前が翼人だということだ』

「あ」

その言葉に蒔風がやらかした感マックスの顔をして止まる。

確かに、この模擬選は蒔風＝翼人と信じてもらうためのもの。

だのにこの男、戦いに熱中し過ぎてそれを忘れたのだ。

「やぁーらぁーかぁーしぃーたぁーーーーーーーー！！！！！！！！！」

『やっぱり忘れてたんだね・・・・・』

「やらかした！！どれくらいやらかしたかってそりゃお前・・・・・・意気揚々と舞台に出て自信満々でギャグして誰も笑わない芸人くらいやらかしたよ！！！！」

『そら・・・とんでもなくやらかしたなぁ・・・・・』

「あーーーうーーーー・・・・あ、そういえばそこにシャマルっている？」

『連絡は入れたから、そろそろ来ると思うぞ？なんでだ？』

「そのシャマルにちょっと頼み事、いいかな？」

『さあ・・・本人に訊いてみないと・・・・お、来たぞ』

「あ、シャマル？おう、メッチャ久しぶり！！でさ、頼みたい事が・・・・・・・・」

そう言ってシャマルと話を終え、通信を切る蒔風。

そして四人の身体を担いで、こう言った。

「アテンションプリーズ。これより、銀白の翼、テイクオ～～～～フ」

その言葉に、四人が「え？」となる。

そんな顔をしていると、羽ばたく音が聞こえて、体が浮き始めたではないか。

「なに!?」

「え?え?」

「これって・・・・」

「ま、蒔風さん!?それ・・・・・」

四人が蒔風の方を見る。
そして言葉を失った。

蒔風の背には一対の銀白の翼があった。
それは噂なんかよりずっと綺麗で、ずっと強く、ずっとずっと輝いていた。

「どうだい?これが俺の翼」

「すごい・・・・・」

「ほらティア!!ホントにいたじゃん!!!」

「わかったわよ・・・それにしても・・・・やっぱり・・・・・」

四人が思い思いに感想を口にする。

こんなことしてばれないのか？と思われるがそんなことはない。
訓練のプレートからなのは達のいる場所までの一直線に、シャマルが蒔風が翼を広げるくらい横幅に結界を張っていた。
大きな結界だと管理局から連絡が来てしまうが、訓練場の近くだし、この程度なら大丈夫だろう。

「いいか？あんまり言いふらさないでくれよ？」

「「「「「はい！！！！！」」」」」

なのは達の元に着いて、四人が下ろされてシャマルが擦り傷などの手当てを始める。
それを眺める蒔風の横に、なのは達が寄ってきた。

「いい子たちでしょ？」

「そうだな。磨けば光るもんがあるってのはいいもんだ」

「舜だって相当凄いでしょ？」

「俺は・・・・・磨かずにここまで来てしまったからな」

「？？」

「ま、気にすんなや。これにてオレさんの翼人証明は終了だ。お疲れ様～～～」

「「ま、待ってください蒔風さん！！！！」」

と、そこにスバルとエリオが蒔風を呼びとめる。

なんだ！？と振り返る蒔風に、とってもキラキラした目でこう訊いてきた。

「あの人たちってなんなんですか！！？？すっごくかっこよかったです！！！！」

「うえ?そうかそうか、かっこよかったか!!!それは本望、かっこよく戦うのは、俺の信条だからな!!!」

こうしてフォワードたちとも仲良くなっていく蒔風。
それを見て、シグナムやヴィータが感心していた。

「やはりすぐに溶け込むな、あいつは」

「そうでもしねーと世界なんざ回ってらんねーんだろ」

「ふ、それがあいつの、強みなのかもな」

「それと、蒔風さんってのやめてくれ、。そんなに歳離れてないしさ、だから・・・・」

「でもなのはさんと同い年なんですよね?呼び捨てはちょっと・・・・」

「じゃあ、舜さん、でいいですか？」

「構わん！！！」

わーわーと元気にはしゃぎだす二人。
疲れた感じでへたり込んでいるキャロと、何かを考えているティアナも、その光景を見て何となく笑っていた。

「こうして、舜君は機動六課になじむことに成功した！！！っちゅうわけや！！！」

「その言い方だと打算的で嫌だなぁ・・・・・・」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～模擬戦ゴーゴー～（後書き）

はい、戦闘終了

アリス「こりゃまた長い」

長いでしょう？
長引きましたよ全く

このころのフォワード陣はそこまで強くないし、だからと言って弱いわけでもないですから。
どの程度に強くするか、難しかったです。

ア「でも途中からしょうじき忘れてたでしょう」

それはもう！！！
エリオがＶ３やっちゃったあたりなんか「しまったな」って思いましたもん。

ア「胸張って言うことか？」

フォワードの中で一番好きなのはスバル、エリオ。
そんな作者でした。

ア「次回、今回のなのはの世界の敵は！！」

ではまた次回

あれ？もう思いつかないや・・・・・・・

愛が足りん！！足りんぞ私イイイイイイいいいい！！！！

「ふぁ～～～～～ぁ・・・・あれ？なんでオレここにいるんだ？」

蒔風がいるのは森の中。
実際には森を再現した訓練場だ。

そこにあぐらをかいて座っている蒔風。
どうやらさっきまでうつらうつらだったようである。

すぐそこではエリオとキャロがフェイトから訓練を受けていた。

「・・・・・っていう感じにね？」

「すごい・・・・」

（む？どうやら回避行動の訓練みたい・・・・だ・・・・な・・・・・・ねむ・・・・・い・・・・）

そうして蒔風がまたコックリと首を倒してまどろみの中へとダイブする。
その光景をみて、キャロがあれ？と声を出す。

「あ・・・・・舜さんまた寝てる・・・・・」

「もう・・・・朝弱いのは変わらないんだから」

フェイトが呆れた感じで笑い、蒔風を見る。
そしてそうだ、と何かを思い付いたのかエリオとキャロに耳打ちをする。

「今から舜に攻撃を向けてみるから、その動きを見てみてね？」

「え？でも寝てますよ！？」

「大丈夫。舜ならあの状態でも避けるよ」

そう言って蒔風を指差し、威力の低いスフィアを作って飛ばす。

エリオとキャロが固唾をのんでそれを見守る。

そして、スフィアが

パコン、と蒔風の頭に当たった。

「あ」

「「あ」」

三人が同じ声を上げる。

当の蒔風はというと、首が後ろに反ったがすぐに前に戻ってまだ寝ている。

「・・・・・エリオ君、あの舜さんをどうやって連れて来たの？」

「え?普通に手を引いて来たけど・・・・」

そう、蒔風をここまで連れて来たのはエリオ・モンディアルその人である。

昨日のこと、蒔風の寝床はどこにしようか、という話題になり、ちょうどフォワードで男子一人だったエリオと同室になったのだ。

エリオとしてはありがたい申し出だった。

何しろ同い年だからと同室にされたキャロは自分をなんだと思ってるのか、いきなり着替え始めたり、風呂上がりにバスタオル一枚で歩き回って牛乳を一気飲みしたりとその行動に困っていたのだから。

蒔風に、注意しないのか?と聞かれてエリオの答えは

「しましたけど、「エリオ君、恥ずかしがり屋なんだね」って言われただけでした・・・・・」

「ｏｈ・・・・・」

だった。

無邪気な子供は恐ろしい。

そしてなにより、あの翼人と同室だ。
エリオが断るはずもない。

そして一晩が明け、エリオが訓練に出ようと起き、ついでに蒔風も起こそうとして、そしたら蒔風が「うーーー」とか言いながら腕を伸ばしてきたのだ。

そしてそのまま手をとってここまで来て現在に至る。

そんな朝の状況をキャロに教えていると、ポコポコポコと音が聞こえる。

エリキャロが振り返ると、フェイトが一個当ててはもう一個、またもう一個とポコポコ蒔風の頭にスフィアを飛ばしていた。

それに応じて蒔風の頭もグラグラと揺れていく。

「フェイトさん!?何やってるんですか?」

「え?あ、あはは!なんだか面白くなって来ちゃって・・・・・」

そう言いながらもスフィアを飛ばすフェイト。

「むう、起きないなぁ・・・・」

「フェイトさん・・・・・そろそろ・・・」

「あ、そうだね。じゃあ（ガスッ）」

じゃあ二人とも回避訓練を始めようか、とフェイトが言おうとよそ見をし、効果音が「ポコ」から「ガスッ」になって止まった。

フェイトが恐る恐る振り返ると、蒔風を見る。

あぐらをかいて、腕を組んで座っているのは変わらない。
しかしその首は後ろにのけ反り、黄色いスフィアが顔面に減り込んでいた。
上を向いていてちらりと見える口元がヒクヒクと動いてもいる。

そして蒔風の腕がゆっくりとスフィアを掴んで顔から外す。
蒔風の首が起き、にっこりと笑う。

「フェ～～～イト♪」

「あ、あは！おはよう、舜♪」

「昔みたいにひん剥いてやろうか！！」

「キャアアアアアアアアアアアアア！！！」

「「舜さんとフェイトさんの過去に何がーーーーー！？」」

蒔風が立ち上がって全力でフェイトを追いかけ始める。
効果音がガッシュガッシュと鳴っている。どんな走りだ。

それに対しフェイトも負けてない。
流石は得意分野が「速さ」であるだけあって、蒔風に勝るとも劣らない速度で逃げる。

しかしその表情は必死そのもの。
涙目になって走りまわすその姿は年相応の少女にしか見えない。

・・・・・・・いや、この歳の少女は逃げながら地面を一直線に抉ったりしないか。

「フェイトさん・・・すごい！！！」

「舜さんから逃げている！！！」

「そうか！！これを参考にしろってことですね！！？？」

エリオとキャロが二人をあこがれのまなざしで見ているが当の本人達はそんなこと知った話ではない。
追う方も逃げる方も必死なのだから。

「キシャアアア

そしてついにそんなことまで叫んでしまったフェイト。
しかし

「なるほど・・・ギリギリまで救援は呼ばないんですね！！」

「できるだけ自分の力でやり遂げる・・・流石です！！！」

もうこの二人には現実など見えていない。
なんかフィルターかかってしまっているようだ。

と、そこに

「ティアナ、あれを撃ってみて！！」

「は、ハイ！！！」

パンパンパン！！！！

なのは&ティアナの訓練場から二人がやってきた。
大方さっきのフェイトの叫びが聞こえたのだろう。

「いい？ティアナ、さっき教えた通りに、ああやって動く敵を打ち抜くのがセンターガードだからね。じゃあ・・・始め！！！」

そんなことを言ってフェイトと蒔風を訓練に使い出す始末。
いま、あなたの親友が危機にさらされているのですか。

ティアナが蒔風を狙って発砲するが、全く当たらない。

その間にもフェイトが走りまわり、蒔風が追いまわす。

その動きを見ながら参考にし、エリオとキャロが回避訓練を始めて

いる。

「おーーーい、何やって・・・・・なんだこのカオス」

「さあ・・・・・・」

そしてその場にヴィータとスバルがやってきて、フェイトがついに空中に逃げだしたところで騒動はおさまった。

ーーー

「ずっこくない？オレさん飛べないのに！！！」

「あれ？舜君飛べなかったっけ？」

「飛べませんよ。力を借りればできるけど、オレ個人の力として飛ぶには開翼しにゃあならんのよ」

「舜君も魔力使えれば飛べるのに」

「マジ！？魔力なら力変換して使えるって！！教えて教えて！！！」

目も冴え、落ち着いてから今日の訓練は終了となり、くたくたと歩くフォワード陣となのはたち。

蒔風がなのはに飛行のイロハを教えてもらう約束をしていると、六課の隊舎前に着いて、そこで外回りに出ると言うはやてと出会う。

なんでも今回彼女たちの追っているロストロギアは様々なルートで流れており、他の部署から人員を借りて調査するのだそうだ。

「ほんじゃ、行ってくるなーーー」

「行ってらっしゃいです。はやて、怪我すんなよ？気いつけろよ？」

「子どもやあらへんのやから大丈夫やって。ほななーーーー」

そう言って走り出すはやての車。

さすがに部隊長となると忙しそうである。

「そういえばさ、今回おまいらの追っちょるモンってなんだったけかな？」

「ああ、話してなかったっけ？「レリック」だよ」

「なにそれ？」

「ここで話すのもなんだしさ、一旦シャワー浴びてからにしよ？体中汗でベトベトだし」

確かにそうだ。

蒔風とフェイトは砂や土で汚れていたし、フォワード陣は汗ダクダ

ク。

よってそんな感じでシャワーになる。
しかし男のシャワーなんぞはあっちゅうまだ。
そんなわけでエリオと蒔風はシャワールーム外の階段に座っていた。

「それにしても舜さんって本当にすごいんですね！！」

「おだてるなよ。ほれ、ジュースだ」

「あ、ありがとうございます。でもフェイトさんと追いかけ回れるなんて相当ですよ？」

その言葉に笑いながら肩をすくめる蒔風。

「耳が痛いな。あいつの・・・と言うかお前ら全員もだけど、その力は自身の成長で得ていったもの。オレのは得てしまったものだから、純粋に素晴らしいかと言ったら、お前らの方が断然いい力だよ」

「？？？」

エリオが蒔風の言葉に首をかしげるが、蒔風がま、それは置いといて、と話題を変える。

「確かエリオってフェイトの保護下にあるんだっけ？」

「そうですね。キャロも一緒にです。引き取ってもらえて、優しくしてもらって、家族をくれました。フェイトさんは僕のお母さんみたいなものですよ」

そのエリオの顔を見て、蒔風が柔らかく笑う。
そしてその頭をガシガシと撫でた。

「え？うわ、なにするんです！？」

「にゅっふっふ！！！いいなぁ！！お前、幸せもんだよ！誰かが何かを残す。俺にもできたらねぇ・・・・・」

そんな感じで揉みくちゃとじゃれ合っているうちに、女性陣が出てきた。
そこのシャワー室にはフォワード陣しか入っていなかったので、ティアナたち三人だけだったが。

蒔風が立ち上がって「ンじゃ、ここで」と言ってフェイトの元に行

く。

エリオもまた後で、と手を振って皆とその場を去っていった。

――――――

部屋に入り、蒔風もモニターを見る。

「これってあのガラクタどもじゃねえか」

「ガラクタって・・・結構厄介な奴らなんだけどなぁ・・・・」

蒔風の言葉にガックシとなるシャーリー。
それを見てフェイトが軽く笑う。

「舜が使うのは魔法じゃないからね。だからＡＭＦも意味がないんだ」

「はーーーー。じゃあ何使ってるんですか？気合？」

シャーリーが感心したように蒔風に訊く。
それに対して蒔風が顎にを当てて答えた。

「ＡＭＦって魔法効かないエリアだろ？そりゃあ俺には効かないね。俺は他の世界で仲間になった奴らの力使ったり、十五天帝使ったりするけど、基本的に俺の力は「願い」だね」

「「願い」ですか？」

「翼人ってのはその翼に各人異なった感情を司っているんだけどな、

俺のはその想いってのが「願い」なんだよ。で、ありがたくも俺のことを心配してくれる「奴」のオレに無事でいてくれ、とか力になりたい、って思いを翼が受け取って、それを使ってそいつの力を俺が使用できる、というわけ」

「じゃあ他の事も出来るですか？」

「たしか・・・・・炎とか雷出してたよね？」

「おう、あれは単純な変換だな。力を炎とかに振り分けて使ってんのよ。だから出そうと思えば魔力も出せるよ？」

蒔風が自分の説明をし、そんなことは置いといて、と自分がここに来た目的を聞く。

「レリックって何なん？」

「レリックは・・・・・・第一級捜索指定ロストロギア。性質としては高エネルギーを帯びる「超高エネルギー結晶体」であることが判明してるんだけど、本当のことはよくわからないの」

「ふぅーーーん。とにかく、よくわかんない魔力を持った塊があって、なんかの拍子に爆発するとやばいから確保して安全な場所に保管しよう、ってことだな？」

「おおむねそんな感じかな？そして・・・・・」

「それをこいつらが集めてるってわけね？」

そしてモニターに出ていたガジェットドローンの映像を見る。

「このカプセル型のが？型。飛行機みたいなのが？型。大きな球体型のが？型」

「これどっから来るんだ？」

「それはわからないんですよねぇ・・・・この写真のはシグナム副隊長やヴィータ副隊長が捕獲したもんなんですけど」

「捕獲ってか、破壊、回収だな」

そんなことを話しながら写真が次々に出されていく。

そしてその内の一枚にフェイトと蒔風が注目した。

「シャーリー。二枚後に戻ってくれ」

「え？はい一、二と」

そして望みの画像が出てきた。
それはガジェットの内部の配電盤のようなものだ。
いくつもの回路が張り巡らされ、その中に二人のよく知る物が取り付けられていた。

「おお、やっぱジュエルシードじゃねえか」

「ジュエルシード？」

「私となのは、舜が、昔集めてたロストロギア。でも全部回収したはずなのに・・・・」

「大方、どっかのバカに盗まれたんだろ？ほれ、ご丁寧に名前まで書いてあらぁ」

そう言って蒔風が指差したところには確かに名前が書いてある。
その名前を見て、フェイトが重い声を上げる。

「Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ・・・・・・・・！！！！」

「だれ？」

蒔風の問いに、モニターから目をそらさずにフェイトが答える。

「ドクターの名の通り、生命操作や生体改造、精密機械に通じた科学者で、ロストロギア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者。私がここ数年追ってる奴」

「生体操作に生体改造、ね。それはまた因縁がありそうだな」

「あるよ・・・・とっても」

フェイトの目に因縁じみた何かを感じとった蒔風がフェイトを見、そしてモニターに映ったジェイル・スカリエッティの顔写真を見た。その顔には大人しそうな表情に、何もかもを欲したがるような目が張り付いていた。

「で、でも、なんでこんな名前出しなんかしたんでしょうか？リスクしかないんじゃ？」

「いいや、科学者ってのはな、自分がやったっていうことを証明しなきゃならない性分なんだよ。何かを成し遂げても、誰がそれをやったのかわからないんじゃ意味がないだろ？「自分の出した結果です」って公表しないとやっていけない人種なんだ。もちろん、すべてそうとは言えない。だけどこう言う俗にマッドサイエンティストなんてやつらは大体そうだね。一言でいえば「自己顕示欲が強い」」

「でも、簡単に決めつけるのは早いよ。もしかしたらブラフ(はったり)かも」

「そこを含めて調査しないとな」

蒔風がにやりと笑いながら改めてモニターの男を見る。
経歴はともかく、その内容は天才的だし、素晴らしい頭脳の持ち主であることがうかがわれた。

（いい顔してる。自分の欲望に忠実な顔だ。問題は・・・・・・そこで迷惑になるかどうかだけどな）

そうして蒔風は敵を知る。

物語が大きく動き出した。

ーーー

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～フェイト、受難の巻～（後書き）

今回は日常ａｎｄスカさんでしたね。
自分の中ではスカさん嫌いじゃないんですけど、なんかアニメ見直したら悪いやつだった。
二次創作のスカって大体いいキャラかネタキャラだからかなぁ

アリス「いろいろぶっ飛んでる人ですしね」

ラボの中に何人もの女の子か居るカプセル並べてたもんね。
あれじゃただの変態にしか見えないよ。

ア「彼女たちはみんな実験材料・・・・・・クズですね。
そういえば蒔風、飛行訓練うけてましたね」

長く生身で飛べなかったですからね。
飛ぶには開翼か力借りるかでしたから。

いや、作者としては早く飛ばせたかった。
この話で飛べないって結構大変だし。

ア「でもすぐに習得しますよね？」

しますよ。
身体に慣らすのは早いですから、彼。

ア「次回、海鳴市へゴー！！サウンドステージだ！！」

メタな発現しない。

ではまた次回。

もう大丈夫、安全な場所まで一直線だから！

蒔風がフェイトと追いかけっこしてから数日後

「出張任務？」

「らしいぜ？なんでもロストロギアが確認されたらしいから」

朝食の場で蒔風が伝言をフォワードたちに伝える。
今日は珍しくまともに早朝訓練に出られたので一緒に訓練を見て、自分も飛行の訓練をしていたのだ。

「なのフェイはやてにシグナム、ヴィータ、それからオレ、シャマルにリィンとお前らでな。相手がロストロギアだけあって万全に行きたいらしい」

蒔風が少なめの朝食をとって説明する。
その目の前では超山盛りのご飯をよそっているスバルとエリオがモリモリと食べていた。

「それで、どこなんですか？出張先は」

ティアナが質問し、それに後ろからの声が答えた。

「第９７管理外世界、現地名称、地球」

「今回の任務はそこの島国の町だよ」

「なのはさん」

「フェイトさん」

そこには朝食を持った二人がおり、席に座って朝食をとる。

「ま、言っちまえば俺達のホームグラウンドだ」

「確かなのはさんたちの故郷ですよね？」

「オレやフェイトがなのはとであった場所さ。懐かしいねー」

「最初に会ったのって確か・・・・」

「オレとなのはは小学校で会ってたけどな。意味のある出会いは森ん中でだな」

「あの時の舜がさ」

「貧乳？」

「（スパァン！）何を言ってるのかな？舜は」

「いやあ、話したいもん」

「ダメ」

「やめて」

二人が蒔風を止める。

一体何があったのか、フォワード陳がわからない顔をする。

「と、とにかく、みんな、食べ終わって書類整理が終わったら準備してヘリポートに集合ね？」

「「「「はい！」」」」

そうしてなのはフェイトが蒔風を引きずってその場から去る。

直後、恥ずかしさが込められた悲鳴と、その話を始めた男の痛々しい悲鳴が聞こえた。

ーーー

並べ！」

「男子はエリオしかいません！しかもトイレです！」

「チクショウ・・・・・男女やりたかった・・・・・」

蒔風がガックリとうなだれて気落ちするが、フォワード陳が励ます。

「ほら！まだいけますよ！舜さんの使い魔出せば！」

「スバルお前天才か！？」

「ただの馬鹿ですよ。はぁ・・・」

スバルのノリに頭を抱えるティアナ。
まぁこういったテンションが自分に降りかからないだけまだマシだが。

「と～～～かなんとか思ってんじゃないだろうな！？スバル！膝カックン！」

「アイサー！アダッ！」

「何してんのよ！」

蒔風の指示でティアナに膝カックンを行おうとしたスバル。
しかしティアナがデコピンでスバルのおでこを撃ち、迎撃した。

「やるな。だが私のテンションは終わらない！やるぞお前ら！せーの！男女男男「いつまで遊んでないではよういかんかい！！」はい」

はやての一喝に皆の視線がはやてに向き、蒔風の方を見直すとさっきのはっちゃけが嘘みたいに大人しく正座した蒔風＆ａｍｐ；七獣がいた。

「あはは・・・・じゃあ、転送ポートに行こうか」

そうしてフェイトが改めて行こうとするのを、蒔風が止める。

「え？こっちで行こうぜ？」

そう言って蒔風が手を振るう。

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ－－－Ｍｉｄ－Ｃｈｉｌｄａ］

そしてその目の前に、蒔風が世界を越えるときのゲートが開いた。
それに唖然としてポカンと口を開けるなのはとはやて。

「うん。開いた開いた。やっぱ世界内の世界移動ならできるみたいだな。って、おまいらどうした？」

「個人で世界移動できるって・・・・・」

「ま、まあ舜君なら何やってももう驚かへんからなァ・・・・・」

そんなこんなで蒔風たちがゲートをくぐり、管理外世界９７が地球の日本、海鳴市へと向かった。

――――――

「うむ、懐かしいな！！どこもかしこも！！！！」

そうして到着、海鳴市。
なのはに指定してもらったポイントにゲートを開くと、そこは湖畔のコテージだった。
自然と自然と自然しかない。
空気はうまい！！水も綺麗！！

「・・・・・・泳ぐか？」

「バカなこと言ってないで、ほら、今回の任務忘れてない？」

そうである。
今回の任務は紛失したロストロギアの探索。
本来六課はレリック専任なのだが、管理局は人手不足。故にこうして六課も駆り出されているというわけだ。

「でもよー。こっちの協力者ってのが来るまで足止めだろ？サーチャーの設置だって多分お前らで足りるし」

確かにそうなのだ。
本来転送ポートから行く予定が、蒔風によって簡単に来てしまった

ので、現地協力者との待ち合わせ時間までまだ余裕がある。
そしてこれだけの人数がいればロストロギア探索のサーチャーの設置もそんなにかかるものではない。

「だからさ、こっからオレ少しだけ単独行動するわ」

「舜君・・・今や舜君だって機動六課の一員なんだから、団体行動を・・・・・」

なのはが教導官らしく蒔風に言うが、その名のはの言葉を軽く流して蒔風がどこから出したのか、花束を肩に担いで行ってしまった。
そんな蒔風を呼びとめ、しっかりするように言おうとしたなのはだが、フェイトが蒔風の担ぐ花束を見て、それを止めた。

「連絡入れたら、すぐに戻ってきてね？」

「・・・・・・わかったよ」

そう言って蒔風がその場から去る。

「フェイトちゃん？」

「なのは、大丈夫だよ。行かせてあげよう。どこに行くかは、大体わかってるから」

そんなことを話す二人。
なのははどうしてわかるんだろう、と疑問に思うが、それにフェイトがすぐに答えてくれた。

「舜の持ってた花束ね？サンダーソニア、っていう花なんだけど、その花言葉が・・・・・・・」

――――――

のはもフェイトも、はやてだって元気だ」

そう言いながら蒔風が地面に花束を置く。
そしてそのまましゃがみ込みながら話し続ける。

「まあこんなこと、「この世界」にいたお前なら知ってんだろうな。
そもそも、お前の後を継いだデバイスはちゃんといるんだし」

「俺は・・・なんていえばいいのかわかんねえや。今更「すまない」でもないし「ありがとう」もおかしいな。オレはお前を結果的に消しちまったんだし。でも、まあ、これは俺なりのけじめだからねぇ」

そこで少し強めの風が蒔風の背中を押した。
その若干の力強さに、蒔風がふふ、と笑って目を閉じ、そしてそこから広がる景色を見た。

「俺に祝福あらんことをってか?優しいな。お前は・・・・・・・・」

「じゃあな。世界最幸のユニゾンデバイス」

そう言って蒔風が去る。
その場所は彼が前回最後にいた場所。
海鳴の街を見渡せる丘の上の展望台。

そこに「祝福」の花言葉を冠する花束が、風に揺られて残っていた。

――――――

蒔風が街中を歩きながらなのはに連絡を取る。
聞けばやっぱりサーチャーの設置なんぞにそんな時間が掛かるわけもなく、今は・・・・・・

『おっけ。じゃあ向かうから、待っててちょ』

そうして念話を切り、蒔風はなのはのいる喫茶翠屋に向かった。

――――――

久しぶりの両親との会話になのはも楽しそうだ。
そしてその光景を見てフォワードの二人は

『ティア・・・なのはさんが普通の女の子だ・・・・』

『え、ええ・・・そうね・・・・・・』

いつものなのはとは違う一面を見て、そんなことを思う二人。
と、そこに割り込む声が

「なるほど、お前らそんなこと思ってたのね？なのはは思いっきり年頃の女の子だよ。ただもうちょっとそれを前面に押し出してくれたらいいんだけどね」

「あ、舜さん！！！」

スバルの背後に蒔風が現れ、高町家の面々に挨拶をする。

「ご無沙汰してます、士朗さん」

頭を下げて丁寧なあいさつをする蒔風に、ティアナが正直驚いていた。

「舜さんが頭を下げるって・・・・」

「にゃはは。舜君、昔うちに居候してたから、お父さんには頭が上がらないんだよ」

「い、居候!?」

「一緒に住んでたんですか!?」

「うんそうだよ。何かおかしいかな?」

「い、いえ」

「別にそうでもないですけど・・・・・・」

『ティア!!完璧だ!!完璧な女の子がいる!!』

『お、落ち着きなさいスバル!』

そんなスバルとティアナにあいさつを終えた蒔風が絡む。

その顔は半分呆れた感じだ。

「お前らなァ・・・なのはだって普通の女の子なんだって。ま、こいつは昔っからこんな感じにポワポワした足りない頭で必死になって考えて、それでいて周りには遠慮するようなガキだったからな。そう見られてもしょうがないか」

「む、舜くんひどい！！私ってそんなにポワポワしてる？」

「してるってかさ、お前はもっと誰かを頼れってのよ。フェイトもはやても簡単に協力してくれるぜ？」

「だからだよ～～～。なんでも聞いてくれちゃうから遠慮しちゃうの！！」

「そこで遠慮したらダメだって！！昔っから言いたかったんだがな、大体お前は・・・・・・」

「それを言うなら舜君だって十年前いきなりいなくなっちゃって、無茶な戦いかたしてばっかりだったんだから・・・・・・・」

だんだん二人の会話がヒートアップして軽い口論になってしまう。お互いに意固地な部分があるので、全然収まりそうにもない。

と、そこにフェイトから連絡が入る。
どうやらあっちもサーチャーの取り付けが終わったらしく、こっちを迎えにくるそうだ。

「しょうがないな・・・・・じゃあ今度模擬戦で決着付けっか」

「そうだね。負けないよ！！！」

「ふ、こっちだって」

そんなことを話し合って拳をぶつける二人。
はたから見ればいい感じの二人に見えるのだが、ティアナとスバルからしたら

訓練場がなくなっちゃう！？

と言った感じだ。
リィンを見ると今からすでに修繕費を計算していた。
これが経験のなせる技か。

そうしているうちにフェイトが到着し、おみやげのケーキを買って最初に着いたコテージに向かう。

そこで、今晩のご飯が用意されて待っている

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～出張！機動六課！！～（後書き）

次回はもうちょっと長くします。

アリス「なのはＳｔＳ　ＳＳ０１ですか」

そうなんですよ。

いや、本当ならこのままホテルの方に行ってもよかった。

でもそれじゃあっという間じゃないですか。

だから挟みました、出張編！！！！

ア「次回、後編！！飯、風呂、バトル！！」

メフバコンボ！！！！

ではまた次回。

始めてやったけどモンハンおもしれーーーーーー！！！！！！

戦法など、届く距離まで近づいて斬れ！ぐらいしか言えん

全くです。
作者も同感です。姐さん

蒔風たちが街から戻って来て、コテージに到着した。
そこで出迎えたのは旨そうな肉の臭いだった。

「おお！バーベキューじゃないか！！」

「っていうか八神部隊長！？」

「部隊長に料理なんてそんな！！」

そこでははやて主導でバーベキューが用意されていた。

ティアナやスバルなんかは上司に料理してもらうなんて恐れ多いみたいな感じになっていたが、はやてはかまへんかまへんと料理を続けていた。

「今でも皆の料理は作ってるんやから、今でも料理の腕は落ちてないで？」

「はやての料理はギガウマだからな」

それをヴィータが称賛し、それならご相伴にあずかろうと（主にスバルが）納得した。

「それにしてもメンバー増えてねぇ？二人見ない顔がいるぞ」

蒔風がいつのまにかいた二人の女性を指差してはやてに聞く。
なんでも現地活動拠点のこのコテージと、別の転送先ポートの場所貸しをしてくれた現地協力者だそうだ。

「あ！来たわね！！蒔風舜！！」

「舜君！！久しぶり～～～～」

蒔風に気付いた二人がそんなことを言いながら近寄ってきた。
一人は歩いて、一人は走ってきてから飛び蹴りで。

「いきなりいなくなってなにやってんのよ！！」

そんなことを叫び跳躍して綺麗なキックを放ってきたその金髪美少女に、蒔風が目を見開いて言った。

「見ぃえた！！無地のピィンク！！！」

「ッ～～～～～～～～～～～！！！！！！／／／／／／」

ゴキャア！！

「セタップッ！？」

蒔風の発言に顔を真っ赤にして空中で右足キックから左足のけたぐりキックに変えて蒔風の首を捉える少女。

ガタックもビックリだ。

「ゴアアアアアアア・・・・・・何をする！ピンクガール！！」

「その呼び方をやめろ！馬鹿！！」

スカートを押さえて叫ぶ蒔風と少女の元にもう一人が追いつく。

「今でも元気みたいだね。私たちのこと、忘れちゃった？」

首を抑える蒔風におっとりしたほうの少女が聞いてきた。

その質問に、蒔風がにやりとする。

「覚えているさ。久しぶりだな、すずか」

「うん！」

顔をパァァと光らせて喜ぶすずかが蒔風とハイタッチを交わす。
そこで蒔風がもう一人の少女、アリサ・バニングスを見て、おお、と合点がいったように手を叩いて指を指した。

「バーニング・アリサじゃないか！！」

「ちっがう！！」

ボケた蒔風に鋭いツッコミ。
完璧や。完璧なツッコミングだ！！

「あれ？バーニングじゃないっけ？シャイニングだっけ？」

「ダァーッ！！違う！私は！！」

「ツインテール・グドン？」

「それなんていう帰マン！？」

「そうだそうだ！アリサ・バニングスだ！！」

「だから～～～～～！！！！！」

「アリサちゃん！！合ってる！合ってるよ！」

そんな茶番を繰り広げて、形はどうあれ久々の再会を喜ぶ三人。

その間にまた来客があったらしく、そちらにも顔を出しにいく蒔風。

来たのはエイミィ、なのはの姉、美由希、小さな子供姿のアルフだ。

「舜君！ひっさしぶり！！」

「シュン～～～～～！！！！また会えて嬉しいよ！」

エイミィが手を振って、アルフが蒔風の腹に向かって突っ込んできた。

ドフゥ！！というクリティカルな音をたててアルフが蒔風に飛びついた。

周りはその音にうわぁ、という顔をするがアルフは無邪気に笑うだけだ。

蒔風がそのアルフの肩を掴み、しっかりと捕らえて、再会の言葉を口にした。

「アルフ、久しぶりだな。小さくなってどうした？」

「四年前に現役引退して、今はハラオウン家の使い魔として、フェイトの家族を守ってんだ！」

「そうかーー。まあそれは置いといて、今な？お前のタックルが素晴らしく鳩尾に入ったんだ」

「？」

そこでキョトンとすりアルフを抱きしめ、蒔風が耳元でボソリと呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・吐きそう・・・・」

「ひぃやあアアァァァァァァ！！放してエエエエエエエエエエエエエエ！！！！」

まあ結果的に吐かずにすんだ蒔風がアルフを放し、エイミィとクロノが結婚していたという話を聞き、それなりに驚いていた。

「今は子供も二人いるんだよね？」

「ふーん（、ll、）」

「く、クロノくん今じゃ提督だもんね！！」

「はーん（－・－）」

「え？反応薄っ！！何がどうしたの！？」

「だってクロノの力なら提督クラスになるのは驚くくらいにはならないし、むしろなれると思ってたし、エイミィとクロノだったらお似合いだと思ってたからなぁ・・・・」

まあそんな感じで互いの自己紹介が過ぎ、食事に入る一同。

「うむ、やはりはやてんの料理はうまい！」

「そやろ？シャマルも手伝ってくれたんやで！！」

「マジで！？（カタリ）「切ってくれるのを手伝ってくれたんや！！」（スッ、モグモグ）やっぱうまいな！！！」

「「流れるように箸を置いてまた取って食べ始めた!?」」

「あのーーー、シャマル先生ってまさか・・・・」

「そんなことないもん!!!料理下手じゃないもん!!!」

シャマルが必死になって弁解する。
その肩を後ろから蒔風が叩いた。

「シャマル・・・・持ってこいよ!!!」

「え?舜君!!!もしかして・・・・・・」

「食ってやんよ!!!お前の料理をよ!!!俺が食ってやんよ!!!」

「舜君・・・・あんた漢や!!!!!」

蒔風をはやし立てるはやて。
だが蒔風はどーってことないと胸を張る。

（他世界のシャマルよかマシのはず・・・・・それに・・・・・）

「それに俺は超辛党。思いっきり辛くしてしまえば、味など関係ない」

自慢げに語る蒔風。
そしてシャマルが意気揚々と料理を準備しに行った。

「蒔風・・・本当に食せると思ってるのか？」

「なに、味が変なだけならまだ何とか」

「いや、そーじゃねえ。シャマルのはそんな域は通り過ぎてる」

シグナムとヴィータの言葉に「はてな？」となる蒔風。
そこでわかりやすいように、シグナムがモニターを出し、蒔風に写真を見せた。

その写真を見て、蒔風が思ったことは

「なにこれ？」

だった。

「そこに映っているのは・・・・・・シャマルの料理だ」

「え?だってこれ・・・・・・・タイヤやん」

そう、そこに映っていたのは車のタイヤだった。
更にページを進めるとボンネットやミラー、フロントガラスにエンジンと、いろいろと凄いものが出てきた。

もはやあれだ、異次元だ。
何だかわけのわからない煙を上げたり、化学反応をおこしたりするならわかる。
食材だって下手なもん混ぜたらそういったものにもなる。

だがこんなこと、誰が予想できようか。
食材からエンジンなどの無機物ができるだなんて。

「食えるとか食えないとかのレベルじゃねえ・・・・・」

「これ組み立ててはやての車になったんだもんな」

「マジで!?はやてのあの車シャマル製だったの!?」

なんということでしょう。
シャマルさんの料理は錬金術でも使っているのでしょうか。

「車検おりたのがびっくりだったよな」

「うむ。しかも動作不良など一切ないからな」

「あの・・・それもう料理じゃなくね？ってか、俺これから何喰わされんだろ・・・・・」

「ま、一つだけ言えることはあれだ。トウガラシとかじゃどうにもならないってことだ」

ズーーーーン、と気落ちする蒔風。
彼もまさか食える食えないではなく、絶対的に食いものじゃないのが出てくるかもしれないとは思っても無かったのだ。

「お待たせーーーーーーーー！！！さ、舜君、食べてみて！！！！」

そしてついにシャマルが料理を持ってきた。
こんだけの短時間で何ができたのか、それだけでも恐ろしいが、蒔風がくるりと振り返ってテーブルに向かう。

「こ、これは・・・・・・・・」

「まさかの・・・・・・・・」

「大根？（；。д。）」

そう、大根だった。
ただの大根。しかも生。

一切の手を付け加えられてない大根がそこにあった。

「シャマルさん・・・・・・・これは料理じゃなくて丸だしって言うんじゃ・・・・・」

蒔風がジトーーーっとシャマルを見つめるが、そこでティアナがふと気付く。

「あれ？でもバーベキューに大根って使いましたっけ？」

「「「「「！！！！！！」」」」」

確かにそうだ。
バーベキューに大根など使わない。
使わない物は買ってこない。
だったらこの大根はなんなんだ？

「シャマルさん・・・・これどこから持ってきたの？」

なのはがおそるおそる聞くと、シャマルは笑顔で答えてくれた。

「え？持ってきたんじゃないですよ？にんじんと玉ねぎ、そして豚肉で作りました！！！」

「嘘だッッ！！！」

「舜さん！！なんでかわからないけど、それ私の台詞だと思います！！！！！」

ギャーギャー騒ぐ蒔風の口に大根が突っ込まれ、沈黙させられてその場に倒れる。

そのあいだも皆で騒ぎ、たまに蒔風の方を見ると口に刺さった大根がモゴモゴと動いて口の中に入っていくのが確認されていた。

そうして食事も終わり、片付けをし、じゃあお風呂に行こうかという話になる。

「どこの風呂？」

「このコテージにはお風呂ないんですよね？」

蒔風やキャロがなのはに訊くと、はやてと目を合わせ、うん、とうなづいた。

「じゃあみんな、今から準備して！！これから市内の、スーパー銭湯に向かいます！！！」

はやてが全員にそう伝える。

わかっているフェイトやアルフなどはおーーー、と腕を上げるが、ティアナやスバルはよくわかってない。

「舜さん、スーパーセントウってなんですか？」

それを聞いた蒔風がにやりと笑って答えてあげる。

「セントウ、準備。つまりだ、スーパー戦闘を始めるから、各自戦闘準備に入れ！！ってことだ」

「ええ！？お風呂なのにですか！？」

「汗をかいて気持ちよく風呂に入るためだ。古よりこの世界の住人は戦闘を越えた戦闘、スーパー戦闘と呼ばれる行為を行ってから風呂に入ってだな・・・・・・・」

そんなことをスバルとティアナに吹き込んでいると、なのはが蒔風の後頭部を軽く小突いてそれを止めた。

「嘘言わないの。ただのおっきなお風呂だよ」

「実はそうなのだ。だがこの世界、魔法文化はないがその分、他の分野は凄く発達していてな。おそらく、楽しめる事は間違いない、と断言しておこう！！」

その話にスバルの目がキラキラしだし、ティアナは正直話半分に聞いていた。

ーーー

「にしてもなのはちゃんにフェイトちゃん、スタイルいいよねーー」

「ふふん、誰がここまで育てたとおもっとるん？私がこの二人の健全なバストアップに貢献してるんやで？」

流石は女性ばかりの機動六課。
女湯はとても騒がしいことになっている。

客がいなくてホントによかった。

一方、男湯

「ほれエリオ、背中流すから、こっちきんしゃい」

「あ、はい。ありがとうございます」

蒔風とエリオが背中を洗い合い、裸の付き合いで交流を深めていた。

「にしてもエリオ、あんだけハードな訓練してよく大きな怪我とかしないのな」

「なのはさんやフェイトさんの訓練って、無茶はするけど決して危険なものではないんですよ」

「ほおー。あいつら、何気によくやってんのな」

そう言って二人で湯船に浸かる。

「ほふぅ・・・・はぁ～～～～～」

「落ち着きますね～～～～～」

「フェイトとかに誘われてたからな、お前」

「あっち行ってたら正直気持ち休まりませんよ・・・・・」

「だよね～～～～昔は残念な貧乳ちゃんだったのに、いつの間にかあんな巨乳ゴールドになっちゃってねぇ・・・・・」

「じゃあ私にも希望はありますか！？」

「さあ～～～～キャロはキャロだから、将来どうなるかわかんないよ。絶対とは言い切れないから、がんばってみて」

「はい！」

・・・・・

「いつの間にっ！？」

まあそんな感じで三人一緒に湯船に浸かってのんびりした。
なぜか蒔風が「翼をください」を熱唱しだし、三人一緒に大合唱。

しかもしみじみとではない。。
アレンジ効かせてめちゃめちゃ熱く歌い上げていた。

そしてそんな大声出せばのぼせるのは当然で、エリオとキャロの体調を見て、蒔風が風呂からあがろう、と提案した。

「ふぅ～～～いいお湯でしたっと」

「気持ちよかったですね～～～～」

「エリオくん、舜さん」

「キャロ、来たか」

女性更衣室から出てきたキャロとロビーで合流し、三人一緒に牛乳やコーヒー牛乳をグイーーーっと飲んだ。
プハァ、と三人一緒に瓶から口を放し、飲み終える。

「ふぅ・・・・にしても、女性陣長いねぇ」

「女性の方はお風呂って長いですから」

「俺なんて湯船とか普段はいらないからね。シャワーだけだ」

ロビーのソファに座って皆を待つ三人。
と、そこでキャロのデバイス、ケリュケイオンが反応した。

「舜さん!!サーチャーに反応ありです!!」

「オッケ!!」

キャロの報告から間髪いれず、シャマルから念話が飛んできた。

『皆!!サーチャーが反応したわ!!!』

『了解シャマル』

『僕達はもう上がってるので、先に行って見てきます!!』

『俺も行くから、なるべく早めに来てくれ。オレはこういった処理はできん』

『わかったよ。スバルとティアナもすぐに向かわせるから、それまで無茶なことは・・・・・・』

『させないよ。そもそも、無茶なことしてもオレがいるから大丈夫だ。じゃな』

そう言って念話を切って、三人が夜の街に飛び出す。
サーチャーを起点にシャマルの結界が貼られたため、姿はみられていない。

エリオとキャロがフリードの背に乗り、蒔風が練習とばかりに飛行

していった。

「こりゃ便利だ。魔力だからそんなに力食わないし、いいねぇ」

「舜さんもう空飛べるんですか？」

「もともと飛べたからなぁ。ただ翼がなくなったって感じだな。感覚自体は掴んでたから、あとは楽だったよ。ンなことより、ほれ、あれじゃねえのか？」

蒔風がサーチャーの反応があった河川敷グラウンドを指差す。
どうやら一体だけでなく、複数体いるようだ。

蒔風たちが着地して、近くでその姿を確認する。
そしてその姿は・・・・・

「スライムだ・・・・・・」

スライムだった。
ポヨンポヨンした身体が、空中ではね回っている。

と、そこではやてから連絡が入る。
内容は目の前のロストロギアについてだ。

『舜君、持ち主の話によると、攻撃性はなく、動きは逃亡一択らしいんや。ただ、大変高価なもんやから壊さんように気をつけてぇな？』

『りょーかい。わかりましたーーーー』

『サーチャーによるとコアとなる一体がいて、他のは分裂したものだから、私たちは範囲が広がらないように足止めしておくね』

『舜君はフォワードの子たちの様子を見ててあげて？』

『はいはい。わかりましたよーー』

そう言っているとスバルとティアナもやってきて、蒔風たちを合流した。

「おーい来たか。あいつらの動きは逃亡のみ。ま、俺がやると壊しちゃいそうだから、封印までお前らに任せた。危ないことすんなよ？」

「「「「はい！！！」」」」

そう言って動き出すフォワードたち。
その動きは蒔風が模擬戦をした時よりも向上されている。

（なのはの訓練の賜物だな。だが・・・どうするんだ？フォワード諸君。そいつなかなかに厄介だぞ？）

そう、そのスライムには打撃も斬撃も、魔法もフリードの炎も効かないのだ。

「流石はロストロギア。そう簡単いってくれないのはどれも同じだな」

蒔風がポケーーーッ、と見ていると、ついに終わりそうだった。

どうやらコアを見つけたようで、キャロが錬鉄召喚で出したアルケミックチェーンを使って本体を縛りあげようとする。
それを本体はバリアで防ぐが、エリオとスバルのコンビにバリアを破壊され、最後にキャロによって封印魔法を練り込まれたティアナの魔法弾が射抜き、そのまま封印してしまった。

だがまだ完全な封印ではないため、未だに分身の方は跳ねまわっていた。

「こいつら本当に斬っても叩いても効かないのな～～～」

蒔風がブニブニとその分身をあっさりと捕まえていじくりまわしていた。

その間にキャロが自分が完全封印します、とはやてに伝え、実行していた。

「ふむ・・・・・」

そんな間に蒔風が「火」を抜き、スライムを空中に放り投げ、シュカン、と居合い抜いた。
するとスライムに半分ほど切れ込みが入り、しかしすぐに戻ってしまった。

「「「おぉーーーー」」」

「完全には斬れないかぁ。さすがだなロストロギア」

「・・・・・・遊んでないで、はやく終わらせるわよ。舜さんも手伝ってくれますか？」

ティアナが蒔風に頼む。
だが蒔風は手を振ってそれを断った。

「俺には封印なんてまねはできんさね。そいつが「願い」に反応するなら話は別だけどね。キャロならできんだろ」

「はい、大丈夫です！！」

「上出来。早く帰ってって、ゆっくりしようぜ」

そんな話をしているうちに封印も無事終了。

皆でコテージに集合して、もう帰ることをアリサたちに伝える。
最初は残念そうにする一同だが、まあ今生の別れでもないのだし、
また会おうと約束をした。

「ロストロギアはシグナムが聖王教会に直接持っていきますから」

『ありがとう、はやて』

はやてがそんなことをモニターでの通信で報告していた。

蒔風がフェイトに聞くと、モニターの女性はカリム・グラシア。
「聖王」という歴史上の人物を祀った教会のトップで、管理局での
地位は少将。
機動六課の立ち上げに尽力してくれた人物の一人だそうだ。

「じゃ、俺がそのゲートを開こうか」

「すまないな、蒔風」

蒔風が教会の場所を教えられ、そこに向かってゲートを開き、シグナムがくぐる。

「ふう」

「にしてもこの街でロストロギア封印かぁ・・・・懐かしいなぁ」

「ユーノがいれば完璧だな。あ、クロノいないけど」

「昔を思い出すね」

「あんときお前無茶して封印しようとしてたもんな」

「一気に発動させようともしてたね」

「ふ、二人とも、それは言わないで・・・・・・」

そんな雑談をしながら、蒔風がゲートを開く。
荷物をまとめ、はやてが号令をかけた。

「さ、うちらも帰ろか！」

おーーー！！とその声に返し、みんなが帰っていく。
これにて出張任務は終わり。また舞台はミッドチルダへと戻っていく。

ーーー

あれを半分も切り裂くなんて、普通じゃない。
しかも彼はあの翼人。きっとレアスキルよりもロストロギアだ。
そんな人たちがいて、私はなんなんだろう？

私は本当に強くなってるのだろうか。
私は・・・・・・必要なのか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～飯食って出動だ！！～（後書き）

出張編終了！！！

アリス「そしてティアナさんの葛藤」

次はホテルアグスタ編！！！！

ア「あぁ！！私の台詞を！！！」

モンハン、始めました。
いろいろと面白いですね。

冬コミの会場とか大変そうだな・・・・・

ア「２０ある集会所が満員とかになりそうですよね」

なるだろ。
コミケなめんな。

ア「あそこは・・・・夢のような地獄ですよ」

言い得て妙なり。

ではまた次回

守りたい、優しい人を。
私に笑いかけてくれる人たちを。
自分の力で、守りたい！

「さぁーて、今回の起動六課は！？」

「リィンですぅ♪今日、ミッドチルダのグランドホテル、ホテル・アグスタで骨董品や古物限定のオークションが開催されます。その中には取引許可の出ているロストロギアもあり、それをレリックと間違えてガジェットが出てくるかも知れません。だから今回の任務はそれからの護衛任務です」

輸送ヘリの中でリィンが全員に任務内容を伝える。

起動六課メンバーは現在新たな任務についており、その内容はさっきリィンが言った通りだ。

さらにはやてが言うにはシグナム、ヴィータは既に現地入りしており、ヘリの中にはシャマルにザフィーラもいる。

「こりゃ総力戦だな」

「まあね。こういったオークションは密輸取引の隠れ蓑にされることが多いし、用心にこしたことはないよ」

そう言いながらフェイトがスカリエッティに関する事も伝えておく。
そうしてある程度の話が終わり、ヘリがホテル・アグスタに到着した。

「じゃあ私たちは中の警備に回るから、外はヴィータちゃんたちとフォワードの皆に任せるね？」

そういって何かが入った紙箱を持って来たなのは、フェイト、はやて。
それに蒔風が任せとけ、と胸を張り、外に向かおうとして、なのはに腕を捕まれた。

「舜君は～～～こっち♪」

「え？」

――――――

数分後、オークションの受付にメイクアップした四人がいた。
その四人に注目が集まる。

「はぁ～～～～っ、お前らドレスとか似合うのな」

「舜君のタキシードだって様になってるよ」

なのはたち三人がドレス、蒔風がタキシードに着替えて中の警備に当たることになった。
確かに中の要人の方が護衛対象としては上だ。

しかし蒔風はタキシードなんて着たことがない。
だからやんわりと断ろうとしたのだが

「舜君がいない間に「奴」の「欠片」が来たら困るんやないの～～～～？」

と言われてしまった。
こうされたら蒔風にはもうどうしようもない。
やむなく着替え、中の警護に当たることにした。

「うむ、たまにはこういう服装もいいな」

「なんや、まんざらでもない感じやん」

「一回着ちまえばもうどうにでもなる」

「な、な、舜君、誰が一番綺麗？」

唐突にそうはやてが蒔風に聞き、なのは、フェイトも興味津々に蒔風を見てきた。

「あ？そうさなぁ・・・・誰が綺麗か？正直、三人とも綺麗だな。うん、普通の男性なら惚れちまうな」

「ふふん、せやろ？だけどうちが聞きたいのは誰が一番かや。評価は求めとらん！舜君なら誰に惚れる！？」

はやてがさらに突っ込んだところを聞き、なのはとフェイトがしどろもどろになる。

当の蒔風はキョトンとした顔をして、あぁ、と合点がいったような声を出し、頭をポリポリとかいた。

「無理無理。俺が誰かに惚れるなんてことないからさ。あっはっはっはっは！！！」

そう言って三人の肩に腕を回し、仲良く中に入っていく蒔風。

「俺たちは友人。仲のいい仲間。頼れる親友。それでいいじゃん。な？」

そう言って自分の立ち位置に向かう蒔風。

一体どういうことなのかわからないまま、三人が立ちつくす。

「舜君、もう好きな人いんかなぁ・・・・・」

「でも、誰かに惚れることはないって言ってたから、それは違うんじゃ・・・・・」

「舜君・・・・一人でいるつもりなのかな？」

そんなことをはやて、フェイト、なのはと呟き、友人として心配した。

彼はまだ、ひとりなのか、と。

ーーー

蒔風がはやての言葉を途中で切る。
その眼の前には黒い人型の蟲のような化け物。

漆黒のその姿に、紫のマフラーをしたそれは、脇になんかしらのケースを抱えていた。

「まったく・・・変な反応したから来てみりゃ、仮面ライダーみたいのがこの世界にいるなんてな。黒いボディに真っ赤な目ってお前はまりすぎ」

蒔風がその蟲に歩いていき、虫がジリジリと後ずさる。

『ガリュー、どうしたの?何かあったの?』

と、そこでその蟲、ガリューの脳内のみに、主の声が聞こえてきた。

『え?見つかった?だったら無茶はしないで・・・大丈夫?うん、じゃあ任せる』

ガリューの目が一瞬だけ閉じるように光を失い、そして一気に光った。

流石は蟲のような外見をしてるだけあって、その速度はかなりのものだ。
柱や壁、天井を飛びまわり、蒔風の目をかく乱させようとする。
しかし、この男は見るだけならクロックアップにだってついていく男だ。

身体は反応できなくても、その動きははっきりと見えていた。

「逃げる気か。なるほど、指示を出して居る者がいるようだな。そいつを持ち帰るのが最重要か？お前の主は・・・・・誰だっ！？」

ガシッ！！と蒔風が腕を伸ばす。
ついにガリューがその場から離脱しようとしたその瞬間、その隙に首に巻かれたマフラーを蒔風が掴んでその動きを止める。
そしてその間に腹に向かって拳を固め、一撃を放とうと振りかぶる。

「打・・・滅・・・・ぼ・・・あら？」

だがガラン、とケースを落とし、ガリューの身体が黒い光になっていずこかへと飛んで行ってしまった。
蒔風は追おうとも考えたが、とりあえず守るべきケースは守ったことだし、今はポジションを離れるわけにはいかないと、とりあえず回線を開く。

『俺だ。地下駐車場にて敵の使役獣と思われる者と交戦した。警備員が一人、昏倒されている。狙われたケースは無事だ』

『そうかーーー、って、いきなり念話切って何しとんのやぁ！！！』

『うっせ！！こっちだってすこし集中せにゃならん状態だったんだ！！ってか、なんかあったのか？』

蒔風がはやてに外の状況を聞いた。

なんでもどっかの召喚魔法師によってガジェットが最終防衛ラインであるフォワードたちの目の前に転送され、そこで一戦交えているのだそうだ。
しかもとたんにガジェットの動きがよくなり、ＡＭＦもあって簡単には倒せない。

『しゃーねえ。やっぱ張ってて良かったってことだ』

『え？』

『前線に伝えてくれ。今から結界を張って一気にガジェットを押し出す。そこで殲滅してくれ』

『結界？いつの間に用意したんや？』

『青龍たちを所定ポイントに向かわせて剣に戻ってもらっただけだ。後は簡単に発動できる。カウント十秒前』

『了解、全員に伝えたで。七、六・・・・・・・』

蒔風とはやてがカウントし、それがゼロになり巨大な結界が出現した。

その起点はホテルの周囲四点にある。

中心のホテルからドーム状に大きくなっていき、蒔風が任意で敵とみなした無機物をドームの壁で押しやっていく。

そしてその外壁に溜まったガジェットを、シグナムやヴィータが破壊していった。

『これで終わりか？』

『そうやね。私はまだ中の警備におる。なのはちゃんとフェイトちゃんは外の現場検証に行ったから、舜君もそっちの方手伝ったげて』

『了解でっす』

そう言って駐車場に転がっている警備員を医務室から来た職員に預け、出口からそのまま外に出て、検証に付き合うことにした。

――――――

「いや、また「奴」がこっち来てさ。ビックリしたよ。こっちじゃ十年経ってんだから」

「舜と僕達とじゃ時間の流れが違うみたいだからね」

「ま、十年前の時もおれは中身ずーーーっと十九歳だったんだけどな」

「そういえばそうだったね」

そんなことを言いながら、フェイトと一緒に話していたのか、ジュエルシードの話になった。

「またこのメンバーで探すか？ジュエルシード！！」

「僕はもうあんな激しい動きはできないよ」

「ンな事ねえって！！アルフも呼んでさ、リリカルマジカル！！ってやろうぜ！！」

「わーわーわー！！舜君、それ恥ずかしいからやめてぇ！！！！」

「フェイトも、止まれ止まれ～～～～って無茶してたしな」

「う、ううう・・・・・反論できません」

「でも舜だってアースラで叫んでたらしいじゃないか。僕となのはを送り出すために」

「あのときなにか言ってたんだ？」

「流石に十年も前じゃわからんだ・・・・・」

『これはオレの正義なんだよ！！ずっとそうだったんだ！！！ずっとそうしてきたんだ！！！』

「「「！！！？？」」」

『てめえらは解決するために行動してんのか？規則に書かれたことを守るために悲劇を食い止めんのか！？違うだろ！！！正義があって、そのために行動するんだろうが！！！！！』

「ゆ、ユーノ、それ・・・・・まさか・・・・！！！！」

「ふ、僕が君のような翼人のデータをそのまま破棄させる男だと思ってるのかい？翼人の伝承の検証、という名目で、クロノから君に関する映像記録などをもらっているのさ」

そう、ユーノが突然出したモニターには、十年前のアースラで、小学三年生姿になっている蒔風が啖呵を切っているシーンが流れていた。

「わー懐かしい！！思ってみればこのころから舜君大人びてたもんね」

「舜、私が無茶やったときこんなこと言ってくれたんだ」

「ユーノ君、そのデータ私にもちょうだい！！」

「私もほしいな」

「分かった。後で送っておくよ」

「や、やめろ！！！そんなもの流すな！！！お前らもほしがるな！！」

なつかしむなのは、笑顔で喜ぶフェイト。
そして狼狽して耳まで真っ赤になった蒔風。

「こんなもん改めて見るんじゃねえ！！！本人の前で流すな！！！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ蒔風だが、ユーノは容赦なく流していく。

『お前らが止めたかった悲劇ってのはよ、あそこにあるものじゃないのか？それを止めるために、みんなここにいるんだろう！？』

『正義を語るんなら、味方も敵も、どっちも救って見せてみろよ！！！潰すより生かす方が難しいんだ。だったらそっちをやってみせろよ！！』

『時空管理局は、何が救いたいんだ？人か！！世界か！！両方か！！！』

『フェイトのことを想うなら、時には主の命にも逆らえよ！！！あらゆる手段を使えよ！！！それが、命懸けってやつだろうがよ！！！』

『世界ってのはさ、確かにクソったれなことがたくさんあるさ。でも、絶望するほど救いがない世界なんて、ないんだ』

『だけどな、誰かが失われて誰かだ助かるなんて、俺はそんなのはもう見たくない！！！』

『ああ、そうさ！！綺麗事だよこれは！！！闇の書を止めて、はやても救うなんて、現実的じゃないかもしれない。でもな、それを為すために俺は力を持ってんだ！！クロノはここまで強くなったんだ！！なのはとフェイトはあそこで踏ん張ってんだ！！封印するなら

その後にしろ。そこで見ていてくれ。俺たちのなすことが、どんな結果になるかをな』

『はやてが目を逸らして、夢の中ににげちまったら、ヴィータやシグナム達の頑張りが全部なかったことになっちまうじゃねえかよ！！！！』

『逃げるなんて軟弱な生き方は認められない。そんな生き方は誰も救われない！！！！！』

『お前のその永遠は停滞だよ。先に進まなくちゃ、その命は輝かないんだ！！！！』

「おぉ！！」

「凄いねーーー」

「うん、そして、こうやって舜を追い詰めるのも楽しみだったんだ」

「やめてくれえぇぇぇぇ・・・・・・・・・・・・」

蒔風が地面で頭を押さえて転がっていた。
もう顔が真っ赤とかそんなレベルを超えている。
身体をビクンビクンさせて悶えるその姿に、なのは達は笑っていた。

「でもその時のこの言葉で、救われてきたんだからさ、そこは自信持とうよ!!!!」

「そうだよ?舜の言葉があったから、私は立ち上がろうとできたんだ」

「ううう・・・・オレさんに自信なんざねえよ・・・言ってなきゃ保てないから言ってるだけだよう・・・・・」

そんなこと言いながら和気あいあい?と話しこむ四人。

そんなこんなで今日の任務は終了した。

被害は多くなく、結果としては上々の任務となった。

――――――

（やっぱり・・・・・あの人は凄い・・・・・凡人は私だけなのか・・・・・・な・・・・・・・）

ティアナは気落ちしていた。

ついさっき、攻めてきたガジェットを撃ち落とすため、無茶なショットを行って危うくスバルに当たってしまうところだったのだ。

すんでのところでヴィータがやってきてその球は弾かれたが、あのまま当たっていたらと思うと恐ろしい。

ヴィータがその事を怒鳴り、蒔風の結界で押しやられたガジェットを破壊しに行ってしまい、ティアナが呆然と考える。

自分はやっぱり駄目なんだ。

今のままじゃダメなんだ。あの人たちの域には届かない。

私の力を、ランスターの実力を認めてもらえない。

こんな失敗して、挙句の果てにはスバルに八つ当たり。
これじゃ駄目だ。もう絶対に失敗はできない。

そのためにはもっと強くならなくちゃいけない・・・・・・・・・

でも、最近本当に自分の普通さを叩きつけられた気がする。

オーバーSやニアSクラスの隊長、副隊長。
将来有望な後衛スタッフ。
そしてどんどん成長している同期達。

さらにあの男だ。
蒔風舜。伝説の、銀白の翼人。

なのはさんたちにも負けないような、そんな噂の人物。

そんな中で私はどうすればいいんだろう・・・・・・・
どうすれば私は私としてあの中にいられるのだろう・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなことは決まっている。
そうだ、決まってるじゃないか。

もっと強くなって、自分を認めてもらって、ランスターの弾丸は、いかなるものでも撃ち抜けると証明するんだ。

私の・・・・兄さんを・・・・兄さんから受け継いだ私の魔法を、認めさせてやるんだ。

現場検証でなのはさんが来たとき、少しだけ注意を受けた。
「ティアナは一人じゃない。皆が一緒」と言われた。

そうだ。なにも一人で突っ走らなくてもいい。
私に仲間がいる。一緒に強くなっていく。

でも、これは私一人の問題。あまりあの子たちに迷惑はかけられない。

それに・・・・・・・・

なのはさんの訓練で、私は本当に強くなってるのだろうか？
いや、訓練に不満があるわけではない。
でも凡人である自分は、他の三人と一緒のメニューではだめなのだ。
なのになのはさんはほかの三人と同じ量の訓練しか与えてこない。

ダメなんです。
それじゃ私はだめなんです。

基礎ばかりじゃなくて、更に使える応用を。
もっともっと強くなれる、そんな魔法を
誰も失わなくてもいい、そんな強い魔法を

私に・・・・・ください・・・・

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～アグスタにて、ガンナーの憂鬱～（後書き）

アリス「ティアナさん、思いつめてますねぇ・・・・・」

大丈夫かな？

ア「あなたが書いてるんじゃないですか」

そうでした

ってかもうこんな話にまでなってるんだな、なのは

流れが速い！！

なんでだ？もっと他の人は長いのに！！！

ア「毎日更新してりゃそうもなります」

！！！

そうだったのか・・・・・・

まあいいか

ア「次回、師と教え子。思いの違い」

ではまた次回

行くよ！相棒！

ホテル・アグスタの任務から翌日、蒔風はヴィータからティアナのミスショットの話を初めて耳にした。

「ふーん。珍しい事もあるもんだな」

「んだよ、もうちょい言うことねーのか？なんでー、とかどうしてー、とか」

「失敗して、ティアナはその事をしっかりと受け止めているだろ？だったらこれ以上何か言う必要はない」

そう言いながらガリガリする氷菓子（ソーダ味）を蒔風がガリガリと食べていた。

「でもよ、たまにあいつ、無茶苦茶やるときあるよな」

「まああの年頃なら強くなろうとするのは普通だろ？多少の無茶ぐらいはするさ」

蒔風が一本目を食べ終え、二本目（ソーダ味）を食べはじめた。

「まあな。でもよ、あいつがやる無茶って、必要以上なんだよな」

「つまり、そこまでやるに見合わない無茶ってことか」

ヴィータがその言葉にコクリとうなづく。

「ホテルの時もそうだった。冷静になってみりゃ、あの程度ならフォワードでも持ちこたえられた」

「でも無理に全部破壊しようとして誤射、か。ま、確かに、仲間を傷つけてでもやらなきゃならない場面ではねぇな」

「ああ・・・・・そこでよ、舜は何か知らねーか？ティアナに何があったのかって」

蒔風は確かに色んな人と話す。
もしかしたらティアナの事も何か気付いているかもしれない。
ヴィータとしては大切な教え子の事だ。その目は真剣だった。

「良い先生やってるなぁお前。教導官になって正解だよ」

「う、うっせーよ！それより、知らねーか？」

その問いに蒔風が食べ終わったアイスの棒を捨てて首を振った。
さすがに蒔風でもそこまでは知らない。

人には話したくないこともあるだろうし。

「なのはにでも聞いてみるか？あいつならわかんだろ」

「なのはか・・・・聞いてみるか・・・・・なんか嗅ぎ回っているみたいで気が引けんなぁ」

「しょーがないよ。気にすんなよ、せ・ん・せ・い♪」

蒔風が立ち上がり、なのはの元に向かっていく。
その後ろからヴィータがドゲシと蒔風に蹴りを入れてついて行った。

――――――

「なのは、なにか知ってるか？ティアナが無茶やるほどの理由」

「・・・・・・・・・・・・・うん」

「その様子だと、どうやら結構深刻なようだな」

「何があったの？」

「それは・・・・・・」

なのはが話しはじめた。
それはある一人の、管理局魔導師の話だ。

彼の家族は妹が一人のみ。
両親は既に他界していた。

その彼は優秀な魔導師で管理局の執務官でもあり、執務官であるからには、多くの事件を追い、凶悪な犯罪者と命懸けの戦いもした。

そして数年前のある事件。
その事件を追っていた彼はついに追跡していた犯罪者によって帰らぬ人とされた。

残されたのは尊敬し、多くの事を教えてくれた兄を失い、天涯孤独になってしまった幼い少女。
だがその少女はまだ信じていた。

兄は確かに死んでしまった。
でもそれは悪を撃つためであり、平和を守るために兄は命を懸けたのだ。

そう悲しみの中で兄の事を信じた少女。

しかし

「犯人を追い詰めておきながら反撃されて死ぬとは情けない」

「結果として後日に犯人は別の者が捕まえたが、そうでなかったらどうなったか」

「これではただの無駄死にだ」

管理局高官の発言。

彼は犯罪者を追い詰めておきながらみすみす逃げられ、挙げ句の果てには殺された。

役立たずだ、と

その言葉に少女は絶望した。

しかし、彼女は強かった。

ならば認めさせてやる。

自分の兄の魔法は、兄から教わったこの魔法は、決して役立たずではないていうことを。

少女は決心した。
必ず強くなって認めさせてやると。

青年の名は、ティーダ・ランスター。
ティアナ・ランスターの、たった一人の兄だった男。

その話を聞き終え、皆が難しい顔をした。
こんな理由があっては、どう言えばいいのかわからないのだ。

なのはやフェイトがどんなに優秀でも、十九歳の少女。
そこにかける言葉なんて簡単に出ては来ない。

だがそこで蒔風が発言をする。
腕と足を組んで、真剣な顔をして。

「ティアナは自らの兄の死を無駄だと断じられ、決してそれが無駄ではない事を証明しようと必死なんだな」

「でもよ・・・・・」

「そうだな。無茶の方向性を間違えてる時がちょこっとあるな。まあそこはなのはさんが指導してくれるんだよな？」

「うん。それはもう、絶対に。無茶させて、落ちるなんてことは、させない」

なのはの決心を聞き、蒔風はなのはによる訓練メニューを見せてもらう。
それを見ての蒔風の感想はと言うと

「基礎ばっかだな」

そう、基礎ばかり。
ただひたすらに、基礎の繰り返し、それだけだった。

「うん。まず大きな基礎を固めてからじゃないと、次の大きな魔法にはいけないよ」

「土台がしっかりしてねーと、強い魔法教えても暴発するだけだからな」

「うーーーん・・・・だけどこれ、ティアナにしては不安だと思うよ？」

「フェイトもそう思うか？」

「うん。執務官試験のとき、すごく難しい魔法とか出るんだろうって思って、応用魔法ばっかりやっててね、基礎はできるからいいやなんてタカをくくってたんだ。でも試験に出てきたのは基礎問題ばかりで、応用なんて一握り。だから一回目は落ちちゃったんだ。二回目のとき、基礎をしっかり埋めてから挑んだらそこで合格。それに今までできなかった高度な魔法のできるようになったんだ」

「それで？」

「でね？その一回目のとき、とても不安だったんだ。応用じゃないと意味がない。凄いのじゃないと合格できないって。だからティアナはきっと焦ってるよ？」

フェイトが体験談を交えて話す。
なのははそれにうん、とうなづいて、答えた。

「ティアナは賢いから、もう気付いてるかもね。一人じゃないって、教えてあげたし。だから大丈夫。ティアナはよくやってるよ。それは確実に、ティアナの力になってる」

「・・・ま、それならいいけどな。言うべきことはちゃんと言っとけよ。後でこじれると、面倒なことになるから」

「大丈夫だよ」

なのはがそう言ってこの場の話し合いは終わった。

一体何に対しての大丈夫だったのか。

それは各人の心の中にしかない。

――――――

その足元には一体どれだけの時間いたのか、コーヒー缶がいくつも置かれていた。

（この時間まで自己鍛錬？おいおい・・・午後の訓練終わってから四時間、間に休憩入れてても三時間だぞ？あれじゃ明らかにオーバーワークだ。いくらやっても力になんねぇぞ）

蒔風が怪訝そうな顔をして見ていると、ようやく終わったのか、ティアナがヨロヨロとした足取りで隊舎の方へと戻っていった。
途中ヴァイスが飲み物を差し出したが、なにも言わずにそのままその場から去ってしまった。

蒔風はティアナがいなくなってから外に出て、ヴァイスに話を聞きに行った。

「よう」

「おう、舜の兄ちゃん。どうした？」

「兄ちゃんって・・・・あんたの方が年上だろ」

「気〜にすんなって。感じだよ、感じ。で？何の用だい？」

ひょうきんな感じで話す二人。
内容は当然ティアナの事だ。

「ありゃ、見てたか」

「実際何時間やってたんだ？あいつ」

「訓練終わって解散、ってなってからすぐにだ。四時間以上、ぶっ続けだ。しかも毎日。ここら辺ずっとだ。最初にフォワードの訓練、それから早朝よりも早くにスバルと訓練、さらに午後訓練の後にまたスバルと少しやってから今度は自己鍛錬だ」

「体壊すぞ。これで明日また早朝訓練だろ？逆効果だ」

「ま、そんなこと今更ガミガミ言ってもしょうがねぇって。だからほっといたんだけどな。これで訓練にでも出てりゃ、無茶やってたってことはわかるだろうと思ったんだが」

「なるほど。だが甘いな。あいつみたいな手合いは、更に無茶してそれをこなしちゃいそうな奴だから」

ティアナにかなり心配する蒔風に、ヴァイスが「じゃあ行ってくりゃいいじゃねえか」と提案する。
それもそうだな、と蒔風がティアナを追って六課隊舎の中に入り、シャワー室の前で待つ。

数分後

ティアナがシャワー室から出てきて、蒔風に気付く。

「よ、ティアナ。ちょっとお前に話が、って待て待て待て！！！」

蒔風が話しかけようとするが、ティアナは軽く会釈だけしてスタスタと歩いて行ってしまう。
その後を慌てて追って、何とかその脚を止めさせることに成功する蒔風。

だがティアナの顔は明らかにイラついており、うんざりしたような顔をしていた。

「なんですか？私明日も早いんです。なのはさんとの模擬戦もあるので、もう寝たいのですが」

「まま、待てって。すこーしおにーさんの話聞いてくれればそれでいいから」

ティアナがあからさまにムッ、とした顔をする。
しかしそこで無理に振りきるのも馬鹿らしいと考え、五分だけですよ？と言って聞くことにした。

「ティアナ、お前最近無茶しすぎ。そんな体力で、今から寝たようなコンディションで、明日しっかり動けるのか？」

蒔風の心配そうな声。
しかし、今のティアナにはそれすらもうっとおしく聞こえていた。

「私なら大丈夫です。明日の事だって考えてます。ちゃんと勝てます。絶対に。だからもう行かせてください。舜さんだって、明日早いんじゃないですか？」

「俺？俺は大丈夫。寝ながら歩くと言う妙技を最近会得してきたからな。眠気に弱いオレでも・・・・・・」

そんななんでもない話。
いつもなら「さいですか」と流すこともあるだろう。

だがしかし、ティアナには蒔風の言葉はこう聞こえていた。

俺はお前と違って体力もあるから平気だ。それに一番最初に言ったろ？俺は世界最強だ、と

「・・・るさい」

「ん？」

「うるさいっ！！私は大丈夫です！！やれます！！失敗なんかしない。だから必死になってやってるんだ。それを邪魔しないでください！」

一息で一気に生きるティアナ。

蒔風がそれを聞いて、さすがに言い咎めようとする。

だがティアナは「五分経ちましたから、これで」と言って蒔風が言葉を発するより早くさっさと部屋に戻って行ってしまった。

その後を追おうとも、一瞬蒔風は考えた。

だが、すぐに嫌な感じの顔になって、自分の部屋に戻っていく。

（やーめた。なんでオレがあんな馬鹿どもに付き合わなきゃならんのだ。もう知らん。お前らの正義ならそれでいいさ。だが・・・・）

そう言ってエリオが待つ部屋へと向かう蒔風。
その口は歪み、目は呆れとイラつきに光っていた。

「だが、それでなんか起こったら・・・・覚悟しとけよ」

そうして

いろいろなことがあって、翌日

早朝訓練が終わって、午前が終わり、午後の訓練。

今日の訓練は模擬戦。

最初はティアナ・スバルＶＳなのは

その時が、来てしまった

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～すれ違い～（後書き）

アリス「わーお。蒔風いらついてますね」

そりゃイラつきもします、いくら彼でも。

ア「そういえばあんな時間に、とか言っておきながらエリオはまだ起きてるみたいな発言してますね」

そりゃエリオは時間外に無茶した訓練してないですから、普通に起きてますよ？

あくまでティアナにとっては、と言う事です。

ア「さて、ＳｔｒｉｋｅｒＳもついに前半の終わりに近づいてまいりましたね」

来ましたなぁ・・・・・・

ア「次回！！どうなる！？スターズの模擬戦！！！」

ではまた次回

あたしはもう誰も傷つけたくないから，失くしたくないから，だから強くなりたいんです

「じゃあ今日の訓練は模擬戦。最初にスターズの二人、次にライトニングの二人ね」

「「「「はい！」」」」

今日は模擬戦

なのは相手にスターズとライトニングに別れて一対二で、なのはに一撃みまえば合格。

そしてなのはが言った通り、最初はスターズの二人、ティアナとスバルだ。

「やるわよ、スバル」

「うん。でも、大丈夫かなぁ・・・・」

「大丈夫よ。成功さえさせれば良いんだから」

「そうだね・・・うん、失敗すること考えてもしょうがないよね！」

「ええ・・・・そうよ。失敗は・・・・・しない」

――――――

「お！スバルがしかけた！！・・・・・・なんかおかしーな」

フェイトが蒔風に聞こうとするが、ヴィータの気になる一言に止まる。

スバルの機動はいつもものとは違っていた。

ウイングロードで走り回るまでは良い。

それでなのはに向かい、当然なのはが魔力スフィアを数弾迎撃で放つ。

しかしその際スバルは、しっかりと足を止めてではなく走りながらバリアを張って、強引に、力任せに押し切ってなのはに攻撃したのだ。

「あれをやるならスバルじゃまだ無理だ。突破出来ても、その後の攻撃に身が入らん。ほれ」

ビルの上で蒔風が解説する通り、スバルの拳となのはの魔法陣バリアがぶつかり、程なくしてスバルの身体が大きく弾かれた。

非常に危険なところでなんとか着地したが、下手をしたら大怪我になる動きだ。

「スバル、あんなあぶねーことすると思うか？」

「いいや。スバルがあんな無茶自分からするとは思えない。あいつは良くも悪くも一直線だけど、強引にはいかないはずだ。目の前にある障害をキチンと破壊してからやるだろ」

「だよな」

「するなら後ろに流したり、紙一重でかわす、もしくはティアナのフェイクシルエットで奇襲を狙うべきだが・・・・・」

「今のスバルにそのスキルはねぇし、そんなこともやってねえ。あれは本人だったからな」

「わかってんのか？あいつ。今どれだけ危険な事をやったのか」

蒔風たちが話してる間にも攻防は進み、なのはがスバルに注意するが、「必ず避けるから大丈夫です」と言ってなおも続けようとする。その言葉になのはが注意しようとするが、ティアナの照準がなのはを狙い、その行動に気を取られてしまう。

「ティアナが・・・・砲撃!?」

「おい、アホ言うな。ありゃ幻影だ」

「え?」

なのはが幻影のティアナが狙う照準に気を取られている間に、スバルがどこにいるかもわからないティアナと念話で話し、連携をとる。

そしてスバルがなのはに向かって走り出す。
狙う標的はなのは。

しかも、またさっきと同じようになのはの攻撃を強引に押し切りながら。

なのはが厳しい顔をしながらその弾丸のようなスバルの拳をバリアで受け、流石の威力にウイングロードの上に立ってそれを受け止める。

「・・・・・・・・・・・・・」

「はあああああああああああ!!!!!（ティア!!!早く!!!!）」

押し合うなのはとスバル。
なのはの魔法陣のバリアからは桜色の魔法光が火花のように散っていた。

と、同時になのはを狙っていたティアナの姿が消える。
蒔風の言う通り、それが幻影であった証拠だ。

「ほ、本当だ・・・・・・」

「じゃあ、本物のティアさんはどこに!?」

「（フゥ・・・・・）・・・・・・あそこ」

蒔風が呆れてものも言えないと言った感じでなのはの真上を通るウイングロードを指さす。
そこには壁走りのように一気に駆けあがり、なのはの真上に到達したティアナがいた。

その手に握られているのはクロスミラージュ・ワンハンドモード

しかし銃でありながらも、その銃口からはオレンジの魔力刃が飛び出しており、さながら短刀のようになっている。
そして逆さまにジャンプして、頭上からなのはを狙って飛び出した。

「まさか・・・・あれでなのはのバリアを引き裂いて！？」

「無茶だな・・・・・この距離なら、バリアは張れないな！！ってか？」

ドォン！！！！！！！！！

ティアナがなのはに到達した瞬間、その衝撃で粉塵が上がる。
フェイトやヴィータ、エリオにキャロが心配そうにそれを眺める。

そんな中、蒔風だけはゴキゴキと首を回し、肩を波のように揺らし

て「はぁ～～・・・・・・」とイライラした感情のこもった声を出していた。

そして粉塵が晴れる。

そこにいたのは

レイジングハートを待機モードに戻し、素手でスバルの拳と、ティアナの刃を受け止めているなのはがいた。

「ねえ・・・なんでこんな・・・・無茶するのかな?」

その姿に、スバルのティアナも目を見開いて恐れた。
なんという人だ、と。

自分たちの攻撃は非殺傷設定とはいえ、威力だけは通るはずだ。
それを素手で受け止めると言う事。
言うほど簡単なことではない。

全くの素手で掴むから、その衝撃は身体を走るだろうし、現にティアナの刃を掴んでいる右手の手のひらからは血が滴り落ちていた。

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は、ケンカじゃないんだよ？」

スバルは後悔する。
これが無茶をやった代償なんだ、と。

なのはは受け止められたからいいだろう。
しかし、これが自分たちだったらどうなっていたのか。

自分たちでは、無茶をやった代償を受け止められないかもしれない。

目の前にある恐ろしいものは、そういうものなんだと、体で感じ、全身が硬直した。

「練習のときだけ言う事聞いて、本番にこんな無茶するなら、練習の意味、ないじゃない・・・・・・練習通りやろうよ。私の訓練、そんなに間違ってる？」

そしてティアナもそれは同様だった。

しかし、彼女はまだ終われない。

終わるわけにはいかない。

だって、まだ証明してないから。

だって、まだ得てもないから。

大切だった人が、魔法（モノ）が、もういなくなるのは、無駄だといわれるのは怖いから。
それを失いたくないから。

だから

クロスミラージュの刃が解除され、ティアナが後ろに大きく飛んでウイングロードの上に着地して叫んだ。

「私は！！！もう誰も傷つけたくないから！！！無くしたくないから！！！！だから！！！！！」

そう、だから

そうならないために、自分は精一杯のことをやってきた。
皆との訓練、スバルとの訓練、更に、自分一人での自己訓練。

それが否定されたら、私はどうすればいいの？
私は・・・私は・・・・・・ただ、なくさないために、失わないために！！！！！

「強く！！なりたいんですッッッ！！！！！！！！！！」

クロスミラージュの銃口前に、ティアナの魔力が充填されていく。
それに対し、なのはも魔力を溜めこんんで周囲にスフィアを展開する。

そしてティアナを指さし、狙いを定める。

「ちょっと・・・頭冷やそうか・・・・・」

「ティアッ!!!なのはさん!!!!!」

スバルの叫びがこだまする。

しかし

「あああああああああああああああ！！！！！！！！ファントムブレイ・・・・・・」

「シュート」

ティアナの砲撃が放たれるよりも早く、なのはのスフィアが打ち出された。

そしてそれがティアナに命中すると、誰もが思った。

そこに、彼がいなければ

ゴォウ！！！ジュボアッ！！！！！！

真っ赤に燃える炎の砲撃に、なのはの攻撃と、一歩遅れて放たれたティアナの砲撃が掻き消える。

「なのはアアアアァァァあああああああああ！！！！！！！！！」

そこに向かって、怒気をの籠もった声が向けられた。

その方向を見ると蒔風が真っ直ぐに飛んできて、その手にはチリチ

リと獄炎砲を撃った形跡があった。

そして

「そのガキブッ飛ばすのは・・・・・オレだぁ！！！！！」

バギィ！！！！！！！！

「アぐっ！！！あああああああああああああ！！！！！！！！」

勢いのまま蒔風が拳を握り、ティアナの顔面にそれを叩き込んだ。
ティアナの身体が足場のウイングロードを突き抜け、ビルの側面に当たり、スーパーボールのように跳ね回って地面に落ちる。

人の身体とは思えないほどビルを跳ねまわり、そのあとを転々と残していくティアナの身体。

地面に落ち、訓練場のプレートにひびでも入ったのか、ティアナの周りが無機質な青いプレートに変わる。

「ティ、ティアァ！！！！！！！」

スバルが悲痛な声を上げ、なのはが蒔風を睨みつける。
その目には、明確な敵意が込められていた。

「どういうことかな？舜君。これは私の教導なんだよ？邪魔・・・・しないでくれるかな？」

なのはの敵意がこもった視線。
あまりにも恐ろしいその眼光に、蒔風が虚仮にしたような笑みを浮かべて高い位置から見下していた。

「そういうわけにはいかねえな。あのバカガキは再三の忠告を無視したからな・・・スバルァ！！！てめえもだ！！！踊らされてんじゃねえぞ！！！とっととそのバカ連れてフェイトんとこいけや！！！」

「え・・・あ・・・・・」

だがスバルは現状についていけてない。

無理もないことだ。
なのはに怒られ、ティアナが撃ち落とされそうになっただけでなく、

突如として蒔風にぶん殴られて叩き落とされ、しかもその蒔風は異常なまでの敵意を撒き散らしてなのはを見ているのだから、身体はもとより、声もうまく出ない。

「おい・・・・ボケッとしてんじゃねぇよ・・・・・とっとと行けっつってんだろォが！！！！顔面剥いで標本にすんぞテメェ！！！とっとと、退けェ！！！！！！」

「は、はいィ！！！！！」

その言葉にスバルの背筋を凍りつかせる。

恐怖、戦慄、怖気、なんでもいい。そんな感情が一気に噴き出した。

そして「死にたくない」と言う思いから、必死になってティアナを担いでフェイトの元に連れていった。

「さて・・・邪魔ものはいなくなった・・・・・・次はテメェの番だ、なのは」

「私?私に?」

「そうだ。ティアナはお前の意志を無視し、あんな無茶しやがった。それはお前の想いを踏みにじる行為。翼人として、許しておけない」

「じゃあ・・・・なんで・・・・・」

「てめえも同罪だからだよ、なのは。お前、ティアナとちゃんと話したか?ん?話してねえだろ?だからだよ」

「どういう事?・・・・・・・・私、今とっても怒ってるんだけど」

「わからねえのか?こいつはとんだバカ野郎だな。お前・・・・・大人数の教導だけやってて良かったな。小人数相手にやったらすぐにこれだ。被害者がティアナだけってのはバカの中に救いだなぁ、おい!!!!!」

「・・・・・舜君・・・そこまで言って・・・無事に済むと思っ

てんの？」

「はぁ？今からてめえとやり合うっつってんだよ。わからねえのか？バカ！！！」

「バカバカと・・・・人の事を・・・・・・・・」

一気に罵詈雑言の言葉を吐きかける蒔風に、なのはが完全にキレる。それに対し、蒔風が落ち着き、そして冷たく、どこまでもつまらない物を見るような冷えた目で、なのはを見ていった。

「お前が怒ってるのを止めるためじゃない。お前の暴走を止めるためじゃない。ましてティアナを助けるとか、庇うとかそんなくだらないことでもない。人の想いを無視した、てめぇとティアナへの断罪だ」

瞬間、蒔風の姿が消え、なのはが背中に何かを感じる。

振り向くとそこにはなにもなく、蒔風が元の位置に戻っていた。

しかし、変化はすぐに訪れた。
全身に魔力が回ってくるのだ。

どういう事かと、なのはが蒔風を睨む。

「言い訳されちゃ面倒だからな。お前にかかっていた制約、解かせてもらった」

そう言いながら蒔風が手でクルクルと奇妙な形の短刀をいじっていた。
稲妻のように幾重にも折れ曲がったそれの名は「破戒すべき全ての符（ルールブレイカ）」

かの世界の魔術師の力を借りて投影したものだ。

「これでお前はランクＳ＋だ。うまくやってそこだけ解いてやったよ」

「これは・・・余裕のつもりなのかな・・・・・・？」

「いいやぁ？これはな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

蒔風が髪を掻き上げ、怒りに満ちた顔をして言い放った。

「お前が死なないためにだよ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～激昂～（後書き）

アリス「ついに蒔風キレましたね」

蒔風の乱入は普通のとは違います。
大抵はなのはのやり過ぎを止めたりする場面になるのですが、そんなことはありません。

なのはに非がなければ、あのままいいぞ、もっとやれ、ってなってました。

ア「つまりなのはさんにも非はあると？」

次回で蒔風はそれを言います。
ですが・・・・・

ア「ですが？」

学校のレポートがヤバい・・・・全然書けてない・・・・

ア「それは・・・・・」

と、言うわけで皆さま申し訳ございません

明日、明後日、もしかしたら最悪だと明々後日まで、この小説の更新が止まります。

非常に一身上の都合で申し訳ございませんが、ご容赦ください。

ア「次回、初対戦、なのはＶＳ蒔風」

ではまた次回

少し、頭冷やそうか

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～失ったもの、取り戻すとき～（前書き）

私は帰ってきた！！！！
皆、会えてうれしいぞ！！
これまでの話を読みなおしたか？忘れていたことなどはないか？
よろしいならばはじめよう。
なのはＳｔＳ、はーじまーるよー！！！！

なのはと蒔風

二人が訓練場上空で立つように存在する。
その二人の表情は、フェイト達のいる屋上からでは図りきれない。

「ヴィ、ヴィータ・・・・・大変だよ・・・止めないと！！！」

「ば、バカ言え！！あんな二人の中に飛び込んで行って止めろってのか！？」

その周囲の空気は黒々とした感情で渦巻いており、とてもじゃないが入り込むなんてことはできない。
入ったら最後、どうなってしまうのか。

エリオとキャロはお互いを抱き合ってガタガタと震えて居るし、気

絶したティアナの傍らにいるスバルはいまだに腕を抱えて寒そうに震えていた。

「と、とにかくはやてとシグナムに連絡を・・・・・・シャマルも呼んで、それで・・・・」

「間に合うかよ!!!舜がキレちまったんだ・・・しかもなのはとかのためじゃないみてぇな事言ってたから多分手加減ないぞ・・・・!!!!!」

蒔風が構え、なのはがレイジングハートを起動させ、両手で握って蒔風に向ける。

「出張の時やるっつったけどよ、よくよく考えてみりゃ、こんだけの付き合いでお前とはやり合ったことはなかったなぁ！！！！」

「ッッッッッ！！！！

「なんで・・・・なんで！！！！私の教導が、間違ってたって言うの！？どうして！？」

ドォウ！！！

なのはの叫びと共に放たれたディバインバスターを蒔風が旋回してかわし、なのはに蹴りを放つ。
その蒔風を身体を回転させて、回り込んで避けるなのは。
そしてそのまま背後からレイジングハートを殴りつけるように振るう。

しかし

ギィン！！！！！！

蒔風の背に帯刀状態の獅子天麟が現れ、その攻撃を防ぐ。
そして後ろ蹴り。なのはの身体が若干浮き、さらになのはの髪を掴んで額に膝をぶちかます。

バリアジャケットは見た目こそ服だが実際には魔力バリアが全身を覆ってるものだ。
だから頭から落ちても、額を打ってもある程度の衝撃は防がれる。

しかし、この男がこの期に及んでそんな手加減をするはずもなく、なのはの脳は頭蓋骨内で激しく揺れ、額からは血が流れている。

が、そこは空のエース。管理局最強と名高い「エースオブエース」そう簡単には落ちず、最後に蒔風がいた位置に落ちながらも、レイジングハートの補助もあってスフィアを打ち出して攻撃する。

蒔風がそれを腕で顔を覆ってとっさにガードするが、足や胸、肩にそれが被弾し、爆発する。
その間に地上になんとか足で着地したなのはが、額から流れる血を拭いながら上空を見上げる。

しかし、爆煙の晴れた先、そこに蒔風の姿はない。

それを知った瞬間、真横のビルを一気に突き抜けて来た蒔風がなのはに突っ込んできた。

ドゴン！！ガゴゴゴゴン！！！！！

ドォン！！！！

蒔風がなのはの腹部に拳をめり込ませ、腕を振り切る。
その威力になのはの身体がくの字に折れて吹き飛んでいった。

その動作は一瞬だった。ビルが倒壊するよりも速い。
蒔風が突進して貫いてきたビルは今になって一気に根本から崩壊し、吹き飛ばされたなのははその勢いで五つほどのビルをぶち抜いていった。

なのはががれきの中で腰をつき、寄りかかりながら前を見る。

もうもうと上がる砂煙。
ガラガラと崩れ落ちるビルだった瓦礫。
そこになる、断続的なガラスを踏んだり、石の上を歩く音。

崩壊の中、蒔風が真っ直ぐになのはに向かってコツコツと歩いてき、それを見下す。

「どうしたよ。S＋なら、まだそんなにダメージはないだろ？」

「く・・・・・・」

「どうしたよって聞いてんだ・・・・・・・・答えろ！！高町なのは一等空尉！！！！！とっとと立って踊れってんだ！！！！！楽しい楽しい「お話」タイムだろォが！！！！呑気に寝てんじゃねえよコラァ！！！！」

ビュッ・・・ゴゴン！！！！！！

蒔風の脚がうねり、なのはを狙って蹴りあげた。
とっさにそれを横に転がって避け、なのはが崩壊するビルから一気に上空へと飛び出していく。

上空に着き、下を見下ろすと蒔風がビルを蹴り上げていた。
ビルの屋上部分をけり上げ、それがなのはに向かって飛んできたのだ。

それを砲撃一発で粉砕するなのは。
だがその間に、蒔風がなのはと同じ高さにまでやってきていた。

「・・・てめえはどうして否定するかっていったな？別に、お前の教導にはケチつけねえよ。だが、てめえの甘えが今回のティアナの暴走を生んだと思え！！！」

「甘え・・・・・？私は・・・・・甘えてなんかない！！！あの子たちが、いつか一人立ちしても、絶対に落ちないように、そんな風にしてあげたかった！！！！それが甘いって言うの！？」

そんななのはの言葉に、蒔風がゆっくりと首を振り、哀れなモノを見る目でいった。

「わかってない・・・・・・わかってないよ、高町なのは。お前・・・・・」

そこまで言って、蒔風がなのはを指さす。
そして、決定的な一言を述べた。

「お前、昔より劣ったな」

その言葉に、なのはの双眸が見開かれる。

自分がここまで強くなったのは、そう、守るためだ。

最初はただ手伝いだった。
困ってる人を、自分の持ってる力で助けられる。
そんな単純な理由だった。

そしてそれはいつかの事件で傷つく人を守りたいという決意にかわり、ますます魔法の力を上げていった。

程なくして後の親友と出会った。

その子とわかり合いたくて、その子を助けてあげたくて

そのためにまた、強くなった。

そしてまた事件があった。
次は自分が狙われた。大きな敗北だった。

もう負けたくない、という意地と、相手の話を聞く、という願い。

そのために、相手を戦い、勝つことも必要だと、また強くなった。

その強さはまた一人の親友を救い、なのはの胸で、まだまだ助けを求める人がいるはずだ、と言う思いが大きくなってきた。

助けがなく、泣いている人がいる。
その人も助けたい、そして自分にその力があるのなら、自分はそのために働きたい。

その想いから管理局にも入った。

そして、あの事件。
八年前の、事件。

あのとき誓ったんだ。
私の教え子たちにはあんな思いはさせたくない。
だから、絶対に落ちない、そんな訓練を。
自分は無茶ばかりしてああなったから、絶対に無茶はさせないんだ。
落とさせちゃいけないんだ。

そう思ってから、教導隊では必死になった。
絶対に基礎から固め、見極めるまでそれより上の魔法には行かせない。
訓練メニューも吟味する。
絶対に自分みたいな無茶を、他人にさせちゃいけない。

そう、これも、誰かのために、誰かを助けたいがためにだ。

そしてそれは、ひとりの男への憧れでもあった。

「世界最強」と豪語して、すべてを救って見せると叫び、救えなければすべてを背負う、その姿に、なのははひたすらに憧れた。

子どもの頃はそうでもなかった。
ただ凄い人、という認識止まりだった。

しかし、管理局に入って思い知った。

世界には救いがなさすぎる。

そんな中でも、彼は世界に救いはあると言っていた。

彼の話を聞くに、どうやらどんな状況になっても世界は彼に戦わせることを強要したらしい。
しかし、それでも彼は世界を信じていた。

そんな強さを、ここ数年でやっと理解し、その人を目指してきた。

全部を救うことなどできない。

だったら、自分の遺志を継いでくれそうな、そんな子たちをたくさん育てて、みんなで一緒に守っていこう。

それは、彼女の夢だった。
皆を救いたかった。

そして、いつの日か、あの人と並んで立ち、一緒に助けて、いつかはあの人も助けて見せる。

それなのに

あなたを目指して強くなって、できる限りのことをしてここまで来
たのに

なんで

それを

よりにもよって

「どうして・・・・・・あなたに否定されなきゃいけないのッ！？」

ドォン！！！！

なのはの砲撃が激昂と共に放たれ、それを蒔風が回避する。
だが、なのはは止まらない。そして更に言うならば、十年経ったなのはの力は、蒔風の想像を超えていた。

ドンッ！！・・・・ギュンギュンギュン！！！！

なのはのディバインバスターをかわした蒔風だが、その周囲をアクセルシュートが渦を巻きながら迫ってくる。
二つの魔法の同時砲撃。

蒔風が上空に向かって一気に上昇し、旋回を持ってそれをかわす。

だがそうしているうちにもなのはが次々とスフィアや砲撃を放ち、蒔風を追い詰めていく。

その攻撃をすべてかわしながらも、攻めに転じる事のできない蒔風が、青筋を立てて叫んで放った。

「・・・うっトォ・・・・・・・しぃやぁ！！！！！！」

バォオウ！！！！！

蒔風が獅子天麟で全力をもって薙ぎ、その風圧にアクセルシュートのスフィアが真っ直ぐなのはに向かって押し返されていく。
それはまるで桜色の雨であり、砲撃に集中していたなのはに襲いかかった。

「ッ、きゃあああああああああ！！！！！！！」

その雨に顔を腕で覆い、全身バリアで防御するなのは。
だが、それが蒔風に好機を与えてしまった。

ドゴウ！！！！

蒔風の獄炎砲がなのはに向かって真上から真っ直ぐに放たれた。
それを魔法陣で防ぐなのはだが、立て続けに二発目、三発目と来られ、ついに四発目でバリアが弾け消え、地面に向かって落下していった。

それを空中で体勢を整え蒔風の方向を見るなのは。
その瞬間、すでに蒔風はなのはの眼前に迫っていた。

「ダアアアアアアアアアアッシャアアアアアアアアア！！！！！！！！」

ドゴッ、ゴバン！！！！！バァン！！！！！

蒔風の拳がなのはに命中し、訓練場のプレートをついに突き破って、なのはを海中に沈めた。
その後を追って蒔風も海中に潜り、地上は一瞬だけ、静かになった。

―――――――

「やっぱり・・・・移動しといて正解だったね・・・・・・」

「なあフェイト、どーすりゃいいんだよ!?フェイト!!」

「・・・・・・・」

困り果てるヴィータと考え込むフェイト。
どうすればいいのか、なんて答えなど出ない。

相手はあのエースオブエースと世界最強だ。
対してこっちはリミット付きの魔導師二人。

止める術など、在りはしない。

だからフェイトは先にスバルに言って、フォワードたちを医務室や自室に帰らせた。

この戦いは、あの子たちに見せるようなものじゃない。

そう、判断したからだ。

「あれを止めるなんて、できないよ。舜があなった以上は、なのはと話をつけるか、舜が怒りをぶちまけ切るしか・・・・・・」

「・・・・・あ、あたしシグナム呼んでくる！！」

そう言ってヴィータがシグナムを呼ぼうと走りだそうとする。
しかし、フェイトがそれを止める。

「ここにいて、ヴィータ。もしどちらかが大怪我をしそうになったら、ひとりじゃ止められない」

「う・・・じゃあこの事だけでも伝えとく。それならなんとかいいだろ？」

「うん、お願い」

その内にフェイトが訓練所にフィールドで非殺傷設定をかける。
プレートは破壊されても、これなら効くはずだ。

なのは達の魔法には相手を傷つけないために非殺傷設定が用いられている。
しかし、蒔風の力にはそれがないし、今のなのはも手加減してるとは思えない。

さらにはいくら非殺傷でも、いきすぎた衝撃などは身体に深刻なダメージを与え、下手をするとショック死させてしまう可能性もあるのだ。

ヴィータが連絡をとり、フェイトがプレートのど真ん中を突き破って海に沈んだ二人に目をやる。

そして、海が盛り上がっていった。

ーーー

もはやプレートなど原形をとどめていない。
所々、まだ何とかビルを残している場所もあるが、それでもほとんどあるのはただ浮いてる板にすぎない。

海が渦を巻き。その渦がそのまま上空に抜きだされ、その中からなのはが放り出されてくる。
その上空のなのはの投げ出された方向に蒔風が海中から飛び出し、その脳天に踵落としを振りおろす。

だがそれよりも早くなのはが蒔風の顔面に向けて砲撃を放ち、蒔風の身体がのけ反って吹き飛んだ。

地面に落ちた蒔風。そこに向かってここぞとばかりに何十発のスフィアを叩き込むなのは。

そこで蒔風は周囲を見渡し、今だかろうじて生き残っているプレートの上にあるビルに向かって白虎叙の片方を投げ、突き立てた。
すると蒔風の手にあるもう一方の白虎叙とそれが白い光の糸で結ばれ、手にある白虎叙を引いて蒔風の身体がそれによって一気に旋回、ビルを回ってなのはの背後にまわる。

その勢いのまま、蒔風がひねりを効かせたキックを、なのはがバリアを張り、衝突してぶつかり合う。

そしてそのまま、拮抗するかに思えたそれは、あっさりと覆される。

一瞬だけ火花が散ってぶつかる両者。
だが蒔風がその瞬間に足を曲げ、衝撃を緩和してからバリアの上を飛び越えるように回りこんだ。

そんな機動を見たこともされたこともないなのはは何とか振り返るので精一杯だった。
しかし、それも叶わない。

蒔風が後ろ襟をひっつかんで、なのはを海に向けて投げ放つ。

海に再びダイブさせられたなのはに、蒔風が突っ込んでいく。
その蒔風に向かって海中からカウンター気味に砲撃が放たれてきた。

その砲撃をらせん状に周囲を回って回避する蒔風。
だが海面に到達した瞬間、海面が爆発して水しぶきに思わず蒔風が目を瞑る。

そしてその蒔風に、なのはの鉄拳が飛んできた。

なのはが殴る。
そんなことは今までもありはしなかった。

もちろん、教導官をやっている以上ある程度の護身術や動きは教わったし、知っている。

だが彼女は砲撃魔導師なのだ。
そんなものは本分ではない。

つまりは、そこまでやらねばならぬ状況なのだという事。

蒔風が上空に後退し、なのはが少し高いところに停滞する。
蒔風は口元を指でさすり、ニヤリと笑ってなのはを見た。

「なかなかに強くなったな、なのは。だが、まだ駄目だ。お前は劣った。十年前から、格段にな」

また言われた。劣ったと。

一体何が劣ったというのか。
強くなった、守ってきた、その道を貫いてきた。

目標となったあなたを見て、すべてを救えそうなあなたを見て
助け出せない絶望や、帰るところも先もない絶望も、すべてを飲み込み、背負う姿に

ただひたすらに憧れてきた十年間。

その結果が劣っただなんて、なのははもう何が何だかわからなかった。

「何が劣ったっていうの!?わたしは・・・・・・私の十年を、無駄にしたことなんてない!!!!!!」

ガキィ!!!!!!!!

蒔風の身体を、バインドが止める。

両手両足首、そして首に胴体と、桜色のリングが巻きついて、ギリギリと強く締め付けてきた。

「皆を助けるために、強くなった！！！もっと助けるために、そんなことができるような子たちも育ててきた！！！それなのに・・・・今までの十年を、劣ってきただなんて、言わないで！！！！そんな目で、私を見ないで！！！！」

レイジングハートに巻きつくように環状魔法陣が現れ、足元にも円状、更にレイジングハートの先端にも同じく円状の魔法陣が展開される。

「なのはッ！！！！それは！！！！」

「なのは！！！やり過ぎだ！！！！！！」

その魔法をよく知るフェイトとヴィータが叫ぶ。

しかし、フェイト達側からは訓練場に声は届かない。

その間にも、レイジングハートの先端に、魔力が集束されていく。

「私はみんなを救いたかった!!!そのために、あなたに憧れて、ここまで来た!!あなたに認めてもらいたかった!!皆を救う、なにもなくさない。そのために強くなったのに!!!なのに、なんでそれをあなたが否定するのッ!?何が劣っているっていうの!?」

蒔風の目が俯いて見えなくなる。

なにも言わないその姿に、なのはがついに限界を迎えた。

「あああああああああああああああああ！！！！！！！スターライト・・・・・・・・・・！！！！！！！」

なのはがレイジングハートを振りあげて叫ぶ。
しかし、そこで蒔風がボソッ、と呟いた。

「俺が言ってんのは強さだとかそこじゃねえ。そんなとこが劣ってるなんて、俺が気にすると思うか？違うんだよ、なのは。お前が劣ったのは・・・・・・」

そう言いながら蒔風が力を入れる。
するとバキン、となのはのバインドが破壊され、身体が自由になる。

その手首や首からは薄皮でも向けたのか、赤くなってうっすらと血が流れていた。

そして人差し指をなのはに向け、その先端に白い光が集結する。
その大きさはビーズ程度と言う超極小。

その光が高音を発してさらに圧縮され、蒔風の指先の前に光の球としてチャージされる。

なのははそれにも気付かないのか、慟哭しながら、それを叫び、蒔風もそれに応じて、一発撃った。

「ブレイカァァァアアアアアアあああああああああああ！！！！！！！！！！！」

「絶光尖・極」

その瞬間、なのはのスターライトブレイカーと、蒔風の極小砲、絶光尖・極が放たれる。

エリアを覆う桜色の砲撃と、一瞬を持ってレーザーのように真っ直ぐ突き抜けた白い光が、それを見ていたフェイトの目に焼きついていた。

――――――

そこには二人の人間が宙に立っていた。

一人は蒔風

その全身の服はボロボロになり、上体からは軽く血も流れている。
唇は切れ、髪も乱れ、肩も上下している。

ゲホゲホと咳をして、上半身がぐらりと揺れるがなんとか上体を起き上がらせる。

そしてもう一方はなのは

なのはのバリアジャケットは砲撃を撃つ前と大して変わりない。
だが、なのはは右肩を庇う様に抱え、その右腕はレイジングハートを握りながらもダラリと下がっている。

蒔風の「絶光尖」は貫通に特化したものだ。
腕の細さ程度に練り上げた光が、そのスピード、その細さで敵を貫く、まさに絶なる光の尖。

更にそれをビーズ程度にまで圧縮し、打ち出したのが今回の「極」だ。
その貫通力は、相手の砲撃すらも貫き通す。

だが貫通力にすべてを注いだ結果、相手の砲撃や攻撃を貫きはするが打ち消すことができず、こうして「痛み分け」のような結果となるのだ。

そしてそれがなのはの右肩に命中していた。
あらかじめこの空間に非殺傷が働いていたため実際に肩に穴が開いたわけではないが、それでもダメージは深刻で、とてもではないが魔法を撃てるコンディションではない。

右肩一点にダメージを集中されそこを痛めたなのはの元に、全身を平均的に攻撃された蒔風がヨロヨロと、ゆっくりと、なのはに近づいていった。

蒔風が近づいてきて、もうその手が届きそうにもなってくる。

それになのはが震え、左手にレイジングハートを持って

「あ・・・・・・あぁ・・・・・・うああ！！！！」

その蒔風を殴りつけた。

蒔風は受けることもせず、かわすこともせず、それを黙って受ける。

「え・・・・・？あ・・・・・・・アぐっ！！！！」

蒔風がそのままなのはの襟首を両手で掴み、捻り上げる。

そして、言った。

「俺が言ってんのはお前の強さの事じゃねえ・・・・・そんなことじゃねえ。オレが劣ってるって言ったのはよ、お前のそのスタンスだ！！！！」

蒔風がなのはに叫ぶ。
それはなおも続いた。

「お前はどんな状況であっても、まず相手と「話をする」とこに対して真摯だった！！！！そのために相手と戦うことも必要と解れば、そのために強くなった！！！思い出してみろ。お前は最初にあった相手に、なんて言ってきたんだ！！！！！お前が一番「話しあう」事が大事だって言ってきたんじゃねえか！！！！！！それがなんだ、このざまは。ティアナはお前の意志を無視し、お前もティアナが抱えているモノを知りながら、それを無視した。お前もあいつも同罪だよ・・・・強くなれれば許してくれるという甘えと、あの子ならわかってくれるという甘えだ！！！！その双方の甘えが今回の暴走を引き起こしたんだ。それがわかってんのか！？なんで話さないんだよ・・・なんで相談しないんだよ！！！話し合うのはお前の領分だったじゃねえか！！なんで忘れたんだよ！！どんな状況に持って行ってでも、とにかく話し合おうとした奴だったじゃねえかよ！

！！」

その言葉に、なのはが気付く。

そうだ

私・・・・・

あれからティアナとちゃんとお話ししてないや・・・・・・・・
どうしてだろう？いつから忘れちゃったんだろう？

沢山の人を相手にしてきて、一人一人とのつながりを忘れてしまっていた少女が、ここで気づいた。

話しあう、という、かつての自分の姿に

蒔風がなのはを放し、肩を掴む。
そして真っ直ぐに目を見て、しっかりと言った。

「それじゃ伝わらねえよ・・・・・確かに、言わないで伝わり合う関係は理想的だ。でもな、言わなきゃ伝わんないことだって、あるんだよ!!!!」

「あ・・・・あ・・・・・・」

「だから、ちゃんと話せ。いいか?必ずだぞ!!そしてしっかり仲直りしろ。言っとくがな、拒否権はないぞ。それをするまで、許さねえからな!!!」

「うん、うん・・・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・ごめんなさい・・・・・・」

なのはが蒔風の胸で泣き始めてしまった。
それに蒔風が「しょーがねーなぁ、お前は」と言って頭を撫でてから「山」で切ってその怪我を軽く治す。

そして二人で一緒にフェイトたちの元に戻っていった。

そこにはすでにシャマルがおり、シグナムが息を切らして走ってきていた。
しかし、何とかことなきを得たので一安心、と言ったところだ。

なのはがフェイトやヴィータに「心配掛けてごめんね？」と涙ながらに謝る。

その場についてきたリィンが先日の出張時に行っていた模擬戦による被害を想定していたおかげで、ここの修理は問題ないそうだ。

それを見て満足したのか、蒔風が戻ろうか、と提案する。

こうして、一連の出来事は終わった。

だが彼は知らない。

なのはの過去が、この後明かされ、それが彼にとってどれだけ過酷なことかを

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～失ったもの、取り戻すとき～（後書き）

やっと更新できたぞおオオオオオオオオオ！！！！

アリス「皆様、お待たせいたしました、更新、再開です！！」

でも明日は休みなんですよね・・・・・

ア「書けばいいじゃないですか」

ごめん、無理。
流石に休ませて

ア「さて、なのはさんとのやり取り、終わりましたね」

作者として、アニメを見たとき何やってんのこいつら？とマジで思いましたからね。
ティアナはなのはの教導、意志を無視し、なのははティアナの覚悟、想いを無視しました。

そりゃあーなって当然だと。

ア「あれ？でもティアナさんはまだ納得してないですよね？」

まあそこは次回ですね。

ア「なるほど。次回、力を得る、その代償」

ではまた次回

駄々をこねるだけの馬鹿はなまじ付き合ってやるからつけあがる

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～代償～

一人の少女が夢にうなされている。

迫る砲撃、打ち返す自分。
しかしその両方が掻き消され、直後、硬い硬い拳が目の前に迫り、
そして・・・・・・

「ッ！！・・・・・・・・・・はぁ、はぁ・・・・・はぁ・・・・・・・・」

その夢を最後に、ティアナが医務室のベッドで目を覚ます。

部屋の中には自分しかいないようで、時計の針が秒を刻む音だけが静かに鳴っている。

「私・・・・・・えっと・・・・・・・」

ティアナが身体を起こしてなにがあったのかを思い出そうとした。

しかし、身体が起き上がらない。

一体何が？

そう思いよく身体をみると、シーツなどで身体がベッドに括り付けられ、上を見るとちょうど眉間のど真ん中のところで一本の棒が吊されていた。

「な、なにこれ？・・・・・・・・そうだ・・・・・・・・私、なのはさんとの模擬戦で・・・・・・・舜さんに・・・・・・・・？」

なにがあったのかをティアナが思い出す。
そして、嫌でも目に入るその棒を真っすぐ見た。

これはどういう事なんだろう？と棒を凝視するティアナ。
そうしていると、その効果が表れてきた。

眉間に触れるか触れないかの位置に吊された棒。
それを見ているうちに、なんだか眉間の辺りがムズムズしてきた。

そして顔全体までもがムズ痒くなってくる。

その感覚は表現しがたいものだ。
首を振って目を背けるがもう遅い。

眉間が異常にムズムズし、掻きたくても身体が動かない。
目を閉じても感覚は消えない。

地味であるがかなり強烈なその嫌がらせに、ティアナはついにベッドごとガタガタと揺れだし、それから逃れようとする。

「イヤ・・・・・・・・・イヤァアアアアアアアアア！！！！！！」

ティアナがそのあまりの責め苦に悲鳴を上げ、その声を聞いて廊下からスバルとシャマルが医務室に入って来た。

「ティアナさん！？・・・・・・・うわ・・・・・」

「ティア！！・・・・・・・なにそれ？」

目の前のティアナの有様に唖然とする二人。
しかし、当の本人は精神的にキテしまい、瞳に涙を溜めてマジで泣

いちゃう五秒前である。

「早くこれどかして！あと両手！顔が！！ムズムズするっ、の！おかしくなるゥ！！！」

尋常ではないその様子に、スバルとシャマルが急いでティアナを解放する。
そして洗面台にダッシュして顔を全力で洗っていった。

「シャマル先生・・・・・これって・・・・・」

「この手の嫌がらせは舜君ね・・・・・まったく、いつ侵入したのかしら・・・・」

蒔風の名を聞いて、ティアナが顔を上げる。
顔をタオルで拭き、シャマルに自分はどれだけ眠っていたのかを聞く。

「もう６時間になるわ。よっぽど疲れが溜まってたのね」

６時間

つまり、自分はそれだけの時間を無駄にした。
それだけあればまた訓練が・・・・・・・

再び悪循環しようとするティアナの思考。
しかし、その考えを読んだかのように、シャマルがストップをかけた。

「ダメです。ティアナさんは自室待機だそうですよ？それに、もしそうでなくても、医師として訓練なんて認められません」

シャマルが優しく、しかし強く、ティアナを止める。
ティアナがどうして、と口を開くが、理由なんてティアナ自身も十分に承知していた。

毎日度重なる訓練による肉体の酷使、精神の疲弊、模擬戦での無茶、さらに蒔風の一撃。

これだけの負荷を受け、ティアナの身体は限界に近かった。
当然、６時間程度で回復するなんてわけもない。

「にしても・・・・・舜君もよくやるわ。モニターで見たけど、あれだけ殴り飛ばして死なせないなんて」

「え？」

「ティアナさん、自分がどれだけ吹き飛んだかわからないでしょう？」

「ティアは・・・・・・・その・・・・」

スバルとシャマルの説明にティアナは背筋が凍った。
自分にそれだけの敵意を、殺気を向けていただなんて。

「あの人は・・・・・本当になんなんですか？」

「・・・・どういう事かしら？」

「あの人が強いのは嫌というほどわかります」

「翼人だもんね」

「でも、怒ったくらいであんな簡単にあれほどの殺気や敵意を振り撒けるんですか？」

確かにそうだ。
人は怒れば敵意や殺気を振り撒く。
しかし蒔風のそれは心底憎しみを携えた敵のそれと大差なかった。
そんなことが簡単に出来るのだろうか？
そんなに簡単に、あの人は敵になるのか？

「なるわ」

それに対し、シャマルが一言、断言した。

その言葉にスバルとティアナがビクリと震える。

そんなに断言出来るものなのか、と

「と、言っても、シグナムが言ってたことなんだけどね？シグナムが昔、舜君と戦った時、感じたらしいの」

「な、何を・・・ですか？」

スバルがゴクリと固唾を呑んで聞く。

「すべてを、そして何も」

それに対する答えはそれだった。
全く正反対の答えに困惑する二人に、シャマルが説明する。

「シグナムと舜君が戦った時は・・・・ある敵の不意打ちでフェイトちゃんが倒れて、シグナムとの一騎打ちを邪魔したの。それに対して舜君は怒ったんだけど、その敵は逃げちゃって、代わりにシグナムが舜君の相手をしたんだけど・・・・」

「それで・・・・・どうなったんですか？」

「惨敗よ。私たちヴォルケンリッターの歴史でも、シグナムがあんなにも敗北したのは初めてってくらいに。でも重要なのはそこじゃなくてね、シグナムが感じたこと。それが」

「全てと、何も？」

スバルにコクリと頷くシャマル。
なおも話は続く。

「その時、シグナムは舜君の目からあらゆる感情を感じ取れたって言ってた。きっと、それは本当だし、舜君はそういう人なんでしょうね」

そう、それは正義だった。
そう、それは悪意だった。
そう、それは義憤だった。
そう、それは悦びだった　。

独裁、慈善、復讐、義理、偽善、偽悪、救済、破滅、情、志、歪み、狂気、理性、本能、衝動、歓喜、慟哭、哀愁、優越、劣等、善悪善悪・・・・・・・・・・

それらすべてを内包し、故にどれにも属さない。
願いを受けるということは、すべてを理解し、受け止めること。
だから彼には悪もあり善もあり、理性もあり狂気もある。

シグナムは十年前、蒔風に対してそういったものを漠然とを感じていた。

「えっと・・・・それで、舜さんは敵になるかっていうのは・・・・・」

「ええ。つまり彼は、簡単な理由一つあれば、私たちの敵にもなる、ってことよ。だって、善悪とかそういうのを超えてるんですもの」

ティアナはその言葉に猛烈に不安になる。
そんな不安定な人物を、自分たちの身近に置いて大丈夫なのか、と。

それに再び、シャマルが断言した。

「大丈夫だし、私たちは舜君を信頼してるわ」

それは最初の断言と同じくらいに確信に満ちた声だった。
スバルとティアナがなぜ？という顔をする。

「だって・・・・いつ敵になるかわからないんですよ？」

「今回だって・・・・・・そうでしたし」

「だったら、今回以外に舜君が敵になった事って、あったかしら？」

「「あ・・・・・・」」

それを考えると、それはそうだ。
今までスバルは楽しく接してきたし、ティアナは頭をはたいてツッコミもした。
自分たちでこれなのだから、同室のエリオなんかもそういった場面は多いのだろう。

しかし、彼は依然として自分たちの味方だ。

「彼は翼人よ。人の想いを司る者。だから、基本的には善悪に関係なく、人を認める人なの」

「善悪に関係なくって・・・・・」

「でも、そこで彼の人となりが合わさって、彼は彼の正義を貫いている。だから、大丈夫なの。彼の信念が、どれだけものか、知っているから」

シャマルが十年前の戦いを思い出す。
彼は闇の書の意思を・・・リィンフォースの想いを認めていた。

そしてその上でそれを否定し、訂正してきたのだ。
彼は人の意思を踏みつぶすことなどしない。
その先に続く意志を消し去ることをよしとはしない。

だからこそ

彼は彼女を消したときすべてを背負い、そして彼女（リィン）の残したリィン（それ）に涙したのだ。

「だから安心しなさい。彼は、私たちの最高の仲間よ」

シャマルが笑顔で締めくくる。
しかし、ティアナは納得してなかった。

否、蒔風が味方であることはもう疑ってない。

しかし、やはりそれだけのモノを抱え、へらへらとしている彼に、
また嫉妬していた。イラついていた。

それだけ強いなら、強そうにしていてください。
いつもいつもヘラヘラふざけている。

それは強者の余裕ですか？
弱者にはそこまで見せるつもりはないと？

無論、蒔風にそんなつもりはない。
彼はただ、世界を楽しんでいるだけだ。

しかしティアナにはそう見えてしまった。
盲目的に強さに固執する少女は、まだそこに固執していた。

―――――――

今まで使ってきた技で普通に倒す、という方針で、切札は出さないことにしている。
まあたしかに、この程度にいちいち切り札は出せないが。

「でもなのは、大丈夫？昼間の模擬戦の事もあるし・・・・・・」

フェイトはなのはの身を心配していた。
確かにそうだ。昼間の模擬戦でのあの戦闘。

もちろん、その話ははやての耳にも入っている。

あの後なのはには再びリミッターがかけられて、ランクは戻されていた。
そこに問題はない。ただ、身体に疲労がたまってるのではないか、とフェイトは心配していた。

それに対して、なのはがガッツポーズをとって大丈夫、と言いきる。

「あの後舜君に言われたんだ。「この事を言い訳にして仕事サボん

じゃねえぞ。すぐに終わらせて、すぐに話せ」って」

「そ、そうなんだ・・・・・・」

だがフェイトは別の話を聞いていた。

模擬戦後、おそらくなのはにそう言った後の蒔風曰く

「ここで仕事休まれてみろ。オレに回されるじゃねェか。なんでオレがそこまで尻拭いせにゃならんのだ」

だそうだ。

はやてはそれに呆れ声を出した。

「舜君・・・・ムチャクチャや・・・・・・いったいなにがしたいんや？」

そして出撃のため、ヘリポートになのは達全員が集まっていた。
フォワードの四人も収集され、これからの行動の指示を与えられているところだ。

「じゃあこれから私たちは、洋上に現れたガジェットを撃退してくるから、フォワードの皆は念のために待機して、有事にはすぐ出られるようにしといてね？」

「「「はい！！」」」「はい・・・・・」

三人が大きな声で返事をし、ティアナが元気のない声で答える。
それを見たなのはが、ティアナの事を気遣って優しく言った。

「ティアナは・・・・待機任務から外れておこうか？」

なのはの言葉に、ティアナが顔を上げる。
その顔は信じられないと言った感じに目が見開かれ、そしてそれは
そのままなのはに喰ってかかっていった。

「言う事が聞けない奴は、使えないってことですか・・・・・・・・・・」

ぼそりと言うティアナのその言葉に、なのはがカチンとくる。
だがここで怒ってはいけない、と踏みとどまる。

そうだ、今のティアナは不安定なんだ。もっと優しく伝えないと。

そう思ってなのはが言い変えて伝えようとした瞬間、ヘリポートに声が響いた。

「バァカ！ひよっこのお前が、勝手に動いて何かできると思ってんのか？ってか、お前が言った事、当然なことだぞ？」

蒔風である。
今までどこにいたのか、今になってひょっこり出てきた蒔風。
そしてどこかで出撃を聞いたのか、なのは達を見送りに来たのだ。

「なあティアナ、お前、ちょっと調子乗り過ぎだぞ？自分の弱さに甘えてんじゃないだろうな？訓練でも、模擬戦でも無茶をする。そんな奴が本番に出されると思ってんのか？」

蒔風が皆の元に近づく。
エリオやキャロ、スバルはその姿に若干身体を引いた。
無理もない。昼間のあんな姿を見ては、恐れを抱くのも当然だ。

蒔風がそれを見、悲しそうな、諦めた顔をしてティアナを見据えた。
そう、そんな中、ティアナだけはフォワードで一人だけ、蒔風を睨みかえしていた。

「なんなんですかあなたは・・・・・・なんで上司でもないあなたが私にそんなこと言うんですか・・・・・・私はちゃんとやってる、訓練もこなしてる、命令も聞いてる。それ以外の訓練ををやってもいいじゃないですか!!!なのになんで、ダメだっていうんですか・・・・・・・・？」

「ティアナ、それはティアナ自身が一番わかってるはずだよ。コンディションの万全じゃない状態じゃ、大怪我するだけだから」

なのはが間に入ってティアナに説明する。
後ろの方でヴィータも賛同し、シグナムが腕を組んでその話を聞いている。

「私は、あなたみたいに自分に自信なんてない。隊長達みたいに優れてないし、スバルやエリオみたいに才能もない、キャロみたいにレアスキルもない。だから、そんな私は死ぬ気で練習しないといけないんです！！！無茶をするのが、そんなに悪いことですか！？わたしはただ・・・・・」

と、そこでティアナの言葉が途切れる。

その場にいる全員が目を見張っていた。
シグナムが、ティアナを殴り飛ばしてその発言を止めていたのだ。

スバルが驚き、蒔風がほぅ、という声を出す。

ティアナがシグナムの一撃に心身ともに喪失し、ぼんやりとその場に倒れて座り込んでしまう。
そのティアナの肩をスバルがそばによって支えるように持った。

「蒔風の言う通り、貴様は甘えているだけだ。弱い弱いと、いつまでもそこに甘んじて・・・・そういえば許されるとでも思っているのか？つけあがるな！！だからお前は弱いんだ！」

シグナムがティアナに怒声を飛ばす。
その後ろではなのはがティアナに帰ったら話そう、と言いながらヴィータにヘリの中に引っ張られていく。

そうして飛び立っていったヘリを見送って、周囲が異様に静かになる。

そこで、スバルが口火を切った。

「・・・・・命令違反は絶対だめだし、今のティアの物言いも、そしてそれを止められなかった私も、悪かったと思います」

それはスバルやティアナの反省点だ。
今更ながらに言う事ではない。

しかし、スバルの本音はこの先にあった。

「だけど、自分なりに強くなろうとする事や、きつい状況でも何とかしようと頑張るのは、そんなにいけないことなんでしょうか！？」

スバルが叫ぶ。確かにティアナは悪かったかもしれない。
でも、その考えは間違っていないはずだ、と。

誰かを守りたいと強くなるのは、決して間違いではないと。

それに、蒔風が一言答えた。

「それは悪くない。むしろいい」

「え？」

スバルがきょとんとした顔をする。
絶対に否定されると思ったのに、こうもあっさり肯定されるなんて、
考えても無かったのだ。
しかし、それはそれでスバルの疑問が飛ぶ。

「じゃあ舜さん、なんでいけないみたいに言うんですか！？」

「やり過ぎだからだ。てめぇの力の分量もわからず、無茶な行動で
仲間を誤射。訓練漬けで身体を休めないオーバーワーク。強くなる
なら、無茶もいい。だが、それはそこまでですることなのか？」

蒔風の返答。

そんなに強さなんて求めてどうすんだよ。

そのように聞こえた蒔風の返答で、ティアナがついに癇癪を起こす。

「あんたなんかに・・・・・・・」

「あん？」

「あんたなんかに何がわかるのよ!!翼人なんて化け物並に強い力を持って、「世界最強」なんて言いふらして!!!!自分の世界を出て好きなように飛び回って!!!それでいてそんなヘラヘラしてて!!!あんたみたいな生れながらの天才に、私の気持ちなんかわからない!!!そんな力を持てたあんたなんかに、なにも言われたくないわよ!!!!!!」

ティアナが叫ぶ。

強大な力を得られたお前に、力が欲しい私の気持ちはわからない、

と。

そのティアナに蒔風が聞く。

「じゃあ、お前は・・・・俺みたいに力が欲しいと?俺が・・・・・・この力を受けた理由が何かも知らずに?」

蒔風の声は震えている。
それは怒りか、哀しみか。

どちらともとれるような声を出し、ティアナに再度聞く。
それに、ティアナは切実に叫んだ。

「欲しい・・・あんたはどうやってそれだけの力を得たの・・・・・・?私だって、それだけのモノがあれば!!失うことなんてない・・・

・・・！！！がハッ・・・！？」

ティアナの言葉と息がそこで突然つまる。
足が浮き、苦しそうにそれを両手で掴んだ。

その理由ははっきりしている。

ティアナの首を、蒔風が片手で締め上げ、持ち上げていたからだ。

「俺がこの力を望んで手に入れただと？ああそうさ、確かにオレは自ら「鍵」に手を伸ばした。だけどな、そんなことになった理由を、お前は知ってんのか？あの状況を、お前は望むってのかよ！！？あんなものがお望みだってんなら、今すぐにでも見せてやろうか！！！割れる空、ひびの入った空間、倒れる友に、崩壊する世界！！！！！そんなのが望みか！？力のために、あの光景を望むだなんて・・・言うんじゃない・・・・！！！！ああ、この力はすごいさ、得られてオレも得をした。でも・・・・それを気楽になんて言われたくない！！！！！！！！！」

ギリギリと、蒔風の手がティアナの首を絞めていく。

しかし、蒔風はなおも止まらない。

周囲の人間も、あまりの光景に手を出せずに立ち尽くすのみだ。

「自分の世界が壊れて、俺はこの力を得た。俺が世界を飛び出してだと？飛び出すしかなかったんだよ！！！俺だってあそこにいたかったさ！！！でもな、俺は自分の世界を捨ててきたんだぞ！！！！守るためにだ！！人として、更には生物からも外れたオレが、唯一の繋がりだったその世界からすらも外れ、いつも一人で世界を回る！！！！そんなことがうらやましいって？自分の世界にいて、自分の世界を守れるお前がオレはよっぽどうらやましい！！！なんだよそれ・・・なんなんだよそれ！！！オレが欲しかったのは、あんな代償じゃなかったんだよ・・・・・！！！！！」

蒔風が涙ながらに叫ぶ。
その手の力がゆっくりと強くなっていく。

「もしおまえがそれを見たいなら、いいだろう・・・・・・・・・・・・・・・見せてやる」

《我は異端者、法則から外れる》

「お前が求めた力の代償を・・・・・見ろ」

蒔風が一言つぶやく。
すると、ティアナの目の前の景色が変わった。

ひび割れた空、うねる大地に砕けた空間。

それだけではない

もう無いはずのかつての彼女の家に家族。
そして今の友、仲間、大切な人たち、大切な場所。

そのすべてが崩壊し、まさに世界の終わりであった。

その中で一人の男が自分に迫ってくる。

その姿は、黒

顔の部分が陰ったように見えない男が、この世界を破壊している。

ティアナの全身が震える。

なんだこれは

こんな世界、私は望んでない
この崩壊の中でどうやって力を得るのか

在るのはただ、破滅のみだった。

「あああああああ

この程度か？とティアナが思う。
しかし、今のは自分以上の力だという事に、気付いてもない。

「ヤッタね！！ティア！！」

背後から声がかかる。
それは自分の親友の声。
無事だったのかと振り返って聞こうとし、

「ヒッ！！」

その声がひきつる。

なぜなら

その身体はすでに死に体だったからだ。

そのスバルの顔は血みどろで、身体は抉れて腕はなく、血のせいでよく見えないが、きっと片目もつぶれている。

「あはは！！私、死んじゃったんだ。でも、ティアがその代わりに強くなれたんだから、いいよね！！！キャロもエリオも、大怪我してもう立てないけど、ティアが勝ったからいいもんね！！！」

そんなことを笑顔で言うスバル。

そのスバルから、ティアナが下がっていく。

違う

「どうしたの？ティア。ティアはたくさんがんばって強くなったんだよ？そのための無茶やフォローで私もエリオもキャロも、いなくなっちゃったけど、ティアはがんばってたもんね？強くなろうとしてたんだもん！！皆うれしいよ！！よかった！！ティアが強くなれて、皆うれしいよ！！！」

違う

「つまり、これでティアの夢はかなったんだよ。見て！！管理局の

偉い人が、ティアを認めに来てくれたよ！！」

違う！！！！

ティアナが頭を振ってしゃがみ込む。

こんな物は違う！！私はこんなことのために強くなろうとしたんじゃない！！！

私は・・・私は・・・・・・

そのティアナに声がかけられる。
その声は今は亡き兄のもの。

その声が、しゃがみ込んで頭を抱えるティアナの頭上に響いた。

「ティアナ、僕のことを認めるさせるために、仲間やすべてを代償にして、強くなってくれて」

――ありがとう――

その言葉に、ついにティアナが限界を迎えた。

「イヤアアア

「それがお前の言う「努力」か？お前が払おうとした代償は、あまりにもでかい。それも理解できずに、よくものうのうと力が欲しいなどと軽くのたまったな、貴様は」

蒔風の言葉が聞こえ、幻覚が解ける。

気付くとティアナの周囲は元に戻っていた。

依然として首には蒔風の手が。

ティアナは涙を流してすでに気絶している。
そしてその手により一層力がこめられ、そして・・・・・・

「主！！！！！！」

ガキィ！！！と、蒔風の身体が止められる。
ティアナの首がその手から外れ、意識はなくともゲホゲホと咳こみ、倒れた。

蒔風は、青龍たち七人掛かりで動きを止められていた。
蒔風の腕を、脚を、首を、胴を、その全身で青龍たちが止め、蒔風

を後退させる。

「主!!何をするつもりですか!!あなたは先の意志を潰してしまうつもりですか!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・クソッ・・・・・・・・・・」

青龍たちに取り押さえられた蒔風が、自分の両手を見てから手を下ろして、空を仰ぎ見る。

そして蒔風が全員が剣に戻してから、ヨロヨロと蒔風が自分の脚で自室に戻っていく。

そんな中、獅子だけが残ってティアナを見、聞こえないだろうとも、優しく説くように一言だけ言った。

「彼が力を得た時、どんなことが起こったのか。ティアナ嬢、相手の気持ちも知らずに、軽率な事を言うものではない」

そうして、蒔風の元に獅子も還り、その場を去っていった。

「舜・・・・・・・」

「蒔風・・・・・・・」

シグナムとフェイトが蒔風の後を見送る。
その二人に、エリオが聞いてきた。

「あ、あの・・・・舜さんの過去って、一体何があったんですか？」

その質問に、フェイトがシグナムに相談する。

「それは・・・・・・どうしようか？」

「・・・・・話してやれ」

「いいのかな？」

「あいつはそんなくらいじゃ怒らん。それに私たちが知ってるくらいの事なら、話しても大丈夫な範疇なんだろうからな」

そうして、ついに話そうと決め、そこに同じタイミングでシャーリーがやってきて、みんなを呼んだ。

彼女もまた、話したい事があると

それは、なのはの過去の話。

彼女の無茶をして、失敗した話だ。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～代償～（後書き）

蒔風君のトラウマを掘りかえそう！！！

アリス「いやいやいや」

やろうぜ！！！

ア「あんた鬼ですか。それより、蒔風はいつからあんな幻覚なんて能力持ってたんですか？」

あれですか？
あれは固有結界の副産物ですよ。

彼の固有結界は世界の法則を捻じ曲げるもの。
だったら、景色を歪ませるくらい出来るでしょ？

まあ、それくらいしかできないだろうし、あんまり強い物じゃないけどね。

ア「にしてもティアナさん、やっぱり殴られるんですね」

当初、あそこでいきなり蒔風がティアナを殴って壁までとばし、そ

ここで首を押さえるはずでした。

でも一回殴られて、さらにまたなんてあまりにもやり過ぎかもな、
と思ってあそこは姐御に任せました。

ア「次回、明かされる想い」

そして、彼の在り方を今一度

ではまた次回

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・・

あ、これ中の人繋がりだわ

なのはStrikerS ～揺らぐ～

機動六課隊舎内ロビー

そこでシャーリーがフォワードの四人に話をしていた。
内容は、なのはの過去。

フェイトとシグナムも同席し、その内容を静かに聞いていた。

なのはの歳には合わない異常なまでの正義感。
そして膨大な魔力。

魔法との出会い、二つの事件。

フェイトとの戦いや、ヴォルケンズ、闇の書の意志との戦いでのなのはの戦いをモニターに出しながら、その歴史を語っていった。

そのあまりのスケールに、フォワードの四人が唖然とする。

画面の中のなのははまだ齢九歳の小学三年生。
そんな少女が、身に余る危険と力と勇気を以って、ひたむきに、必死になって戦う姿。

自分達よりも小さな子が、あんなにまで恐ろしい一撃を放ち、そして一人でも戦ってた事に、四人は驚いていた。

そして、ついに八年前のなのはの過去が明かされた。

「八年前。ある世界で、なのはさんが大怪我をしたの」

それは今まで無茶をやってきた代償だった。

任務は無人世界に現れた謎の敵影との戦闘。
当時なのはは十一歳。

管理局内で早くもエースとして活躍していた彼女なら大丈夫だと、
現場の局員は皆そう思っていた。

だがそんなはずはなかったのだ。

小さな体に、大きな魔力。更にはどんなことでも成し遂げてしまう、強い意志。
それゆえに彼女は二年間、ダメだと言われて空を飛び、無理だと言われて戦った。

闘い続けて、そして墜ちた。

その巨大な魔力を、できるからと言って次々と使用した結果、彼女の身体には反動と疲労が溜まっていたのだ。

「全力全開」

それをいつでも言い続け、どんな時でもためらわずに貫きとおした彼女は、結果的に無茶な機動を行って、戦闘中に身体のコンディションが崩れた。
地上に落ち、そこに敵に攻められ、大怪我と言うのはあまりにも軽いほどの怪我を負った。

ヴィータがその場に駆け付けた時はもう遅く、レイジングハートは折れ、雪は真紅に染まり、白い彼女のバリアジャケットは真っ赤になって、胸の赤いリボンを隠してしまう。

その怪我は尋常ではなく、命を拾えたのが不思議なほどのもの。
だが、彼女の地獄はここからが始まりだった。
怪我の治療、一時的な魔力の枯渇、身体の損壊、残る痛み。

そして、もう二度と空を飛べないかもしれないという恐怖。

このときからすでに無意識下であっても、彼女は彼に憧れていたのかもしれない。
だから恐れた。私は、彼のようにもう誰も救えなくなってしまうのか、と。

しかし結果として、なのはは回復した。

過酷なリハビリや、先のことの不安や恐怖と戦いながらも、彼女は血反吐を吐く思いで必死になって身体を取り戻した。

そして決心した。
こんな思いは絶対しないし、させない。

誰にもさせない。あんな地獄は、見させない。

その想いから、なのはは教導を絶対に安全な、そして、絶対に墜ちない子を育てるようになった。

墜ちて命を散らさぬように。
墜ちて地獄を見ないように。

それがなのはの意志。
なのはの想い。

それを知ったフォワードが、言葉に詰まる。
特にティアナは、自分がどんなことをしていたのか、ここにきてようやっと理解したようで、その眼には涙がたまっていた。

そこでシャーリーが選手交代と、フェイトに次の話をしてもらう。

「じゃあ・・・・・・・」

と言ってフェイトがモニターに映像を出す。
そこには蒔風のワールドリンクによって発動した、なのはの砲撃や、「奴」との戦いの映像があった。

おそらく、先日ユーノからもらったものだろう。

それを映して、話そうとした、そのとき

「なんだよ・・・・・・これ・・・・・・・・・・・・・」

ロビーに蒔風の声が響いた。

ティアナに対して、やり過ぎたことを謝りに来たのだろう。

そして、廊下で話を聞いてしまった。

その真偽を確かめるべく、部屋に入ったらその映像。
これではまるで・・・・・・・

その蒔風はモニターに映るなのはにヨロヨロと近づく。

そして、呟いた。

「なのはが・・・・墜ちた?身体の負担で?それで・・・・・これは・・・・・・・・」

蒔風の目の前には「奴」との戦闘が映っている。
その中にはもちろん、ワールドリンクの効果で強力な砲撃を何発も放つなのはの姿も映っている。

「これは・・・・オレの・・・・まさか・・・・・・・・オレは・・・・・・・・・・・」

蒔風の考え。
それに気付いたフェイトが、蒔風の肩を掴んで必死になって言った。

「違うよ！！！舜のせいじゃない！！！これは別のものだから！！！舜のあれは、体に負担は残さなかったよ！！！！」

「俺は・・・・・オレは・・・・・オレハ・・・・・・・・・誰かの未来を・・・・・・・・・消しかけた？」

自分の肩を抱き、ガタガタと震えて膝を突く蒔風。
その眼は焦点があっておらず、今にも気を失ってしまいそうだ。

「なのはの無茶はなのはの責任だから！舜のせいじゃないから！！私もはやても、みんな大丈夫だったから！！！」

その言葉に理解しているのか、蒔風が首をフルフルと振って頭を抱え始めた。

「俺は・・・・俺はぁ・・・・・・・人の未来（さき）を・・・・その願いを・・・・・・想いを・・・・消してたのかもしれない・・・・・・・・」

「舜！！ダメ！！！！」

フェイトが必死に話しかけるが、蒔風が「ウッ」と息を止め、まるで嘔吐でもしそうな顔になる。

そして腹を押さえ、ヨロリと立ち上がって、その部屋を出ようとする。

「舜！！」「蒔風！！！」

フェイトとシグナムが蒔風を呼びとめ、せめて付き添おうとするが、蒔風が小さな声を絞り出して、それを断った。

「大丈夫だから・・・今は・・・・一人にさせてくれ・・・・・・・・俺はもう・・・・・・ぁ・・・・・・・うぅ・・・・・・」

ヨロヨロと

まるでまともに重力を得ていないような歩き方で

蒔風が部屋を後にする。

その憔悴しきった蒔風の姿に、エリオとキャロが信じられないと言った顔をしている。

「舜さんが・・・・・あんなに・・・・・・？」

「いったい・・・・・・どういう事なんですか？」

そこで、フェイトが皆に話し始めた。
蒔風の事を、知りうるすべてを。

「舜が世界を回っている理由は、前にも話したよね」

「はい、確か・・・・・・」

「世界の軸となる人物を殺して、その世界を取り込んで力にしようとしている「奴」って言うのを追ってきてるんでしたっけ？」

「そう。でもね、彼のいた世界は、私たちの知ってる地球とは違うらしいの」

「違う・・・ですか？」

「他の世界とか、魔法とか、そう言う特別な力なんて、何一つとしてない世界」

「蒔風は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”だといっていたな」

「その世界で、舜は「奴」に襲われた」

「襲われたって・・・大丈夫だったんですか？」

エリオが積極的に聞いてくる。
それに、しっかりと答えていくフェイト。

「大丈夫じゃ・・・なかったみたい」

「え・・・？」

「これは主はやてがリィンフォース？を作成する際、夜天の書のデータを調べた時に見つかった記録でな。映像では残ってないが、情

報として、我々はそれを知った」

「舜の世界は、一回破壊されかけた。舜自身も殺されかけて、大切な仲間も、傷付けられた」

「その時の蒔風はただの人間だ。「奴」に敵うはずもなく、瀕死の重傷にまでやられたらしい」

「そして、管理者と言われる女の人から、翼人の力を解放してもらったんだって」

「じゃ、じゃあ・・・・・あの力は・・・・・・」

「そう、自らの世界を破壊され、その悲劇を打ち破るために得たもの。だから舜はいつも必死なんだよ。自分の世界と同じことを絶対に繰り返さない、って」

「その存在の大きさから崩壊しかけた世界には居られない。そもそも、蒔風の世界は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”。居られ続けるわけもないのだろうな」

「だったら舜さんは・・・・・」

「その世界はだんだん修復には戻っているらしい。だが、その頃にはもうすでに蒔風を知る者はいないだろうな」

「そんな・・・・・・・」

「だから、彼はひとりなのだ。常に、ひとりで世界を回り、勝ち続けるという異常をこなし続ける」

「だからあんなに怒ったんだ・・・あの力が欲しいなんて・・・・・私・・・・・・」

ティアナが後悔する。

なんという事を言ってしまったのか、と

彼は決して、大丈夫などではなかったのだ。

ティアナが今すぐ蒔風に謝りに行こうと席を立つ。
しかし、フェイトがそれを止めた。

「ダメ！！今の舜は、多分誰の話も聞けないから・・・・」

「な、なんでですか？」

「そうですよ。舜さんのあの様子は普通じゃなかったです。一体何が・・・・」

そこからシグナムが話を始めた。

「翼人と言うものは、実はよくわかってはいない。だから蒔風の言ったことしか、現状情報がないのだが、あいつが言うには、翼人は人の想いを司っているらしい」

「人の・・・・」

「想い・・・・」

「舜によると、今までも何人かに合ったらしくて、勇気とか、愛情とかね？」

「そして蒔風の翼の想いは「願い」だそうだ」

「願い・・・・ですか？」

「そうだ。そしてそれは、人が未来に進もうとする力でもある。つまり、高町のあの事件が自分に原因があると思ったあいつは、今苦しんでいる」

「人の未来が、人の願い。だからこそ、舜は悪とか善とか、関係なくその質で見比べるんだよ」

「だからティアやなのはさんに・・・・・・」

「うん。人の意志を潰す、っていうのは、舜が一番嫌う事だから」

「だから、それをしてしまったあいつは、思いつめている」

「だったらなおさら！！！」

「でも、今はだめ。舜が落ち着くまで待たないと、きっと話はできないよ」

フェイトがそう言って締めくくる。

そして、蒔風が消えていった廊下への扉に、全員が目を向けた。

それから数十分後

ガジェットを何の苦もなく粉砕してきたなのはとヴィータが帰還する。

そして、シャーリーがフォワードたちに自分の過去を話してしまった事を聞く。
それに関しては、まあしょうがない、となのはも特にとがめなかった。

しかし、フェイトの言葉に、なのはが悔しそうな顔をする。

彼に知られた。あの過去を。

とりあえずはその後、なのははティアナとしっかりと話し合い、無事に仲直りすることができた。

だが、この問題は、まだ終わってはいなかったのだ。

エリオと蒔風の部屋

明りはついておらず、カーテンも閉じられて外の光も入ってこない、
真っ暗な部屋。
そのベットの中で、蒔風が頭を押さえて蹲っていた。

「だめだ・・・・・・・・だめだ・・・・・・・・もう・・・俺は・・・・・・・・」

蒔風は世界に情報を求めていた。

内容は、なのはの落ちたあの事件。

犯人なんかはどうでもいい。
なぜ落ちたか、それを求めた。

すると世界は必要と思ったのか、その原因を蒔風に流し始める。

その内容を理解し、蒔風が後悔し、そして思った。

確かに俺の負担じゃないみたいだ・・・・・・
でも・・・・俺はロクなモノを残さないみたいだな・・・・・・・・・・

なのはは落ちた。
こんなくだらない俺への憧れなんかで無茶をして

さらに自分は昼間に何をした？

自分の怒りにまかせて、勢いでなのはのリミット解除して、それでまたあいつの身体に反動や負荷が溜まったらどうするんだ？
それであいつがまた地獄を見るようなことになったらどうする？

そんなこと、「願い」の翼人として許されるわけにはいかない。

もう駄目だ。
関われない。

俺は最初から、「奴」だけ倒してればよかったんだ。

そうだ、俺はイレギュラー
本来ここにはいない者。

だったら・・・・・・俺は

この物語にはいらなかったんだな

だったらそうあろう。
俺はもう介入できない。

これ以上、あいつらの未来を、世界を、物語を、壊すことなんてできるはずもない。

さあ、「蓋」を再構築しよう。
なに、少し修正するだけだ、問題はない。

心を保て、蒔風舜。

お前は世界を守らなきゃならないんだぞ。
それが俺のやるべきことだ。

翼人として、やるべき事を為せ。

泣き虫に戻ってる場合じゃない。
臆病者になるんじゃない。

それにはすべて「蓋」をしろ。

自信を取り戻せ
誰とも関わらないだけの自信を

そうだ、いつもの言葉をつぶやこう。
そうすれば、自分はできると、思えてくるから。

「大丈夫だ・・・俺は世界最強だから・・・・・・」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～揺らぐ～（後書き）

暗いなこいつ

アリス「あなたのせいでしょうに」

そーですね

ア「あら気の抜けた返事」

ここから先書くのめんどいんですよ
ついに原作介入をやめると言う蒔風君。

そんな主人公、書いててつまらん！！！

ア「だったら早く復帰させなさいよ。そこまでのシナリオは考えて頭にはあるんでしょう？」

そうですけど、なんかそこでさっさと出すとそれもなんか薄くなってしまうじゃないですか。

ア「どうするんですか？」

だらだら続くかもしれません。
そうなったらすみません。

ア「次回、決別の告白」

ではまた次回

私の教導地味だから、あんまり成果が出てないように感じて、苦しかったんだよね？　ゴメンね

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～もう関われない～（前書き）

翌日

蒔風は早朝訓練に出て来なかった。

同室のエリオが言うには、蒔風はいくら揺すっても生返事をするだけで、起きては来なかったそうだ。

まあ、彼のことだからきっとまだ寝ているのだろう。

いつも通りだ。

そう思い、なのはとフェイトは朝食後に蒔風の部屋に向かうことにした。

そして早朝訓練が終わり、二人が蒔風がまだいるであろう部屋へと向かう。

しかし、部屋から気配が感じられない。
ドアを開けると、部屋の中には誰もいなかった。

もう起きてるのか。
だったら食堂だ、と二人が向かう。

もとより一緒に食べるつもりだったのだ。
そうとなれば善は急げと二人の足が食堂に向く。

そうして、食堂に到着した二人は、ついに蒔風を見つけた。

蒔風はフォワードたちと、普通にに朝食をとっていた。
その姿に一安心するなのはとフェイト。

「舜、大丈夫みたいだね」

「うん。でもちゃんと・・・話しておかないと・・・」

そうして二人もトレーに朝食を乗せてフォワードたちと同席させてもらう。

「あ、な、なのはさん・・・・・」

「おはよ、みんな。舜君も・・・・・・おはよう」

「おう、おはようさん」

見た感じはいたって変わりのない蒔風。
昨日の狼狽が嘘だったかのような、いつもの通りの蒔風だ。

「舜君・・・・昨日のことだけど・・・・」

なのはがさっそく話を切り出す。
朝食の場でするものではないのだろうが、これ以上引き延ばすことは出来なかった。

しかし、蒔風がなのはの言葉に待ったをかける。
そしてニッ、と笑っていつも通りに言った。

「大丈夫だ。キチンと持ち直したよ。もう大丈夫。関わり方に気をつけるからさ」

「え？」

その言葉に、なのはが疑問を浮かべる。
今何と言った？

「関わり方に気をつける」だって？？

一方、フェイトはフォワードに、念話で話を聞いていた。

『舜と何を話していたの？』

『私は・・・昨日のことで謝って』

『それで舜さんも悪かったって、頭を下げてまでしてくれて・・・・』

『僕とキャロには、怖がらせてごめんな、って頭を撫でてくれました』

『そ、それから舜さん・・・・・もう踏み込まないから大丈夫だって・・・・・』

『え？』

フェイトもまた、疑問を浮かべる。

もう踏み込まない？

「・・・・・舜君、今日のこれからの訓練、見てもらいたいんだけ

ど、いいかな？」

なのはが疑問を振って蒔風に聞く。
しかし、蒔風の返事は否定の断言だった。

「ＮＯ、だな」

「そ、そう・・・・だったら・・・・」

なのははなおも蒔風と話そうとするしかし

「なのは、オレは今後の訓練には出ない。出動もしない。注意もしない。「奴」が出たら、その時だけ戦う。もう、お前らとは関われない」

その言葉に、全員が絶句する。
もう、なにもしないと、彼は言った。

今まで、なにかあるとすぐに助けてくれた彼が、もう手をださないと、そう言うのだ。

「な、なんで・・・・・」

フェイトが聞く。
それに対し、蒔風が至極当然のようにさらりと言った。

「オレが残したもんに、ろくなものはないからな。この物語はオレがいなくてもしっかりと回るんだ。イレギュラーが相手をするのはイレギュラーだけだ」

そういって朝食を取り終わって席を立つ蒔風。

「もうお前らとは関われない。俺はお前らの物語には関与できない。

だから・・・・・・じゃあな」

その場を去る蒔風。
その出口でばったりとはやてと会い、訓練場の件で深々と頭を下げ、もう二度とすることはない、と言って部屋に戻ってしまった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん・・・一体何があったん？もうしないって・・・あれ、ちょう違う意味に聞こえたんやけど」

はやてはもとより、訓練場での損害について蒔風に愚痴るつもりだった。
だが昨日蒔風は訓練後にはどこかに行ってて、出てきた後には部屋にこもってしまったのだから、彼女だけは何が起きたのかわからずじまい。

そのはやてに、そして後から来たヴォルケンズにも、蒔風の言葉をそのまま伝えた。

蒔風はその後悔から、彼女たちの前から去った。
その最後の言葉は、決別。

自分はこの世界では災厄にしかならないと。
自分がいなくとも、この物語は回って行けると。

自分が残せるものは、なにもないと。

そう思い至って、彼は表舞台から姿を消すと言ったのだ。

もう、蒔風は今までのように助けてはくれない。
なぜなら、彼がいなくても世界は回る。
彼の標的は「奴」ただ一人。

ならば

彼女たちの物語に、首を突っ込む必要など、本来あるはずもなかったのだ、と

それから数日間

—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—
—　—

蒔風は完全に機動六課の局員との関係を断った。

「奴」が出現した場合を想定して、回線だけは開いていたが、決して蒔風がそれに応答することはない。

まず、部屋を変えた。

エリオと同室だったのだが、ある日に蒔風の荷物が全く別の部屋に移されていた。

そしてみんなと行動が被らないようにもした。

一日中訓練にも出ず、時間をずらして食事を取る。

朝から昼、夜まで、蒔風と顔を合わせることもない六課のメンバー。

たまに顔を見ることはあっても、蒔風はすぐにいなくなってしまう。

彼は怯えていた。

一体何が彼女たちの物語に関係してしまうかわからない。

情報から、あの事件が自分のものではないというのはわかったが、あの模擬戦の時、自分はなのはに負荷をかけさせてしまうところだった。

否、もしかしたらもう、その負荷はかかってしまっているのかもしれない。

更には訓練所の破壊、ティアナへの暴行

翼人として、人の先を、意志を潰す、その許されざる行為。

ここまでやってしまって、蒔風は気付いた。

俺は何も残せない。
この世界は俺がいなくても回る物語。

だったら

そこにイレギュラーをねじ込んだら、どうあっても歪んでおかしくなるのは当然じゃないか。

だから、俺は関わらない。

銀白の翼人は、「奴」のみを追う者であればよかったのだ。

「ダメだよ・・・・俺はもう・・・・皆と関わる勇気がない・・・・・俺の願いは・・・・・・・通じなかった・・・・・・」

――願いの翼――

その在り方を持つ青年は、誰も傷つけないために、ひとりで戦う道を選んだ。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～もう関われない～（後書き）

アリス「短いですねぇ・・・・・」

はい、今回のこの「蒔風非干渉」の話は少し続きます。
でも、こんな文章ダラダラ書いててもしょうがない。
だから短くなっております。

ア「戻ってくるんですかね？」

この作品としての答えはＹＥＳですね。
流石に戻ってこないとあれですし。

ですが、前来た時の二回で、彼が残せたもの、っていうのは考えてみればないかもしれないんですよね。

ア「他の世界では？」

あったかもしれません。
でも、それを蒔風は知らないです。

彼が戻るまで、どれくらいかな？

ア「次回、蒔風、自信の元と、彼の心」

ではまた次回

胸に宿る　熱き彗星は　始まりの鼓動へ・・・

フェイトとはやてが二人で話し合っている。
議題はもちろん、彼のことだ。

「舜君がもう関わらへんって・・・・」

「自分にはまともなものを残せないって言ってたよ」

「そんなことあらへんよ・・・・あたしら舜君にどれだけ助けられたと思とんねん・・・・」

「それについても、こないだ舜に話を聞いてきたんだ・・・・」

フェイトがその時のことを話し出す。

それはまた数日前のこと

フェイトは蒔風の部屋の前に立っていた。
そしてそのまま、閉じられた扉越しに蒔風に語りかける。

「舜・・・・舜が残した物は、ちゃんとあるよ。だから帰ってきて・・・・・・みんな寂しいよ・・・一緒にいようよ・・・・・」

誰かと関わるということを、誰よりも大きく大事に思う彼女だからこその言葉。

蒔風はきっと聞いている。
そう信じて、フェイトが語る。

すると、扉に寄り掛かる音が聞こえ、扉のすぐ向こうから、蒔風の声が聞こえてきた。

「俺が残せたのって・・・・・何だよ」

やっと会話が出来た。
その問いに、フェイトはすぐに答えを返した。

「私は舜の言葉に励まされて、あの時立ち上がれた。はやても助けてあげられた。だから、舜が残した物に、ろくでもないものなんか、なにもないんだよ？」

優しくフェイトが蒔風に言う。
もし蒔風が簡単に喜べるような簡単な男なら、これで終わっていた。

しかし、彼はこの世界で多くを背負っている。
それを無視など出来るはずもない。

「俺はプレシアを助けられなかった」

その言葉にフェイトの肩がビクリて震える。

「それは・・・・」

「さらに、リィンフォースも消した」

「だって・・・・・・でもあの状況で舜は全力を尽くした！それなら・・・・」

「全力どうのこうのじゃない。つまりは俺じゃなきゃ残せないものはない、ってことだ・・・・そこに首突っ込んで、いらん事なんかできねぇよ・・・・・・・・フェイト、お前はあの時立ち上がったと言うが、それは俺がいなくても、なのはの存在がやってくれた。はやても、お前らがいれば解決出来た事件だ」

「そんなことないよ！舜がいなかったら・・・・」

「いなくても解決出来た。それは原典が証明している。そこでプレシアやリィンフォースを残せれば、俺はそっちにいられたかもしれない。でも・・・・・・そんなことはない。オレはこの世界に何も残せてない」

そう言って、扉の向こうから気配が消える。

フェイトはただ、立ちつくした。

「原典」が何だかは知らない。

フェイトは世界について、なにも知らない。

でも、このままでいいわけがないという事だけは、わかってるつもりだ。

しかし

だからといって、今の蒔風にどんな言葉をかければいいのか、わからない。

確かに、この世界で蒔風は活躍をしたかもしれない。
だが、最終的に残ったのは原典通りの主要人物。

プレシアも、アリシアも、リィンフォースも、誰一人として救い出せてはいない。

では、彼のいる意味は・・・・・・・・・

「なんやそれ・・・・・・・そんなん、悲しすぎるやろ・・・・・・・」

はやてがフェイトの話を聞いて、今にも泣きそうな顔をする。

彼がこの世界に来たのは「奴」を倒すため。
それ以外の接触は不必要。むしろ、彼女らの邪魔にしかならない。

そんなことがあるのだろうか。
そんなことがあってよいのだろうか。

しかし、世界は残酷だ。

今までこの世界で、蒔風が残したものは何もない。

「はやてちゃん、フェイトちゃん・・・・・・」

と、そこになのはも合流する。

今まで蒔風の部屋の前で話していたのらしいのだが、フェイトとほとんど変わらない会話しかしてきていないことを告げる。

「なんで・・・・・あんなに消極的になってしもたんやろ・・・・・・」

「そうだよ・・・・いつもの舜なら、何とかするって言ってるはずだよ・・・」

フェイトとはやてが、蒔風のあまりの変わりようにわからないと頭を振る。

「舜君・・・・こういう事言ってるっていうの、ユーノ君に貰ったデータにあったよ。アースラで、叫んでたみたい。でもその時は、自信たっぷりに俺が何とかする、って、言ってたのに・・・・」

なのはも同様にわからないという。
彼はいつでも自信があった。
幾度負けても、立ち上がってきた。

しかし、今回は諦めてしまった。

なぜ今回はだめだったのか。
蒔風舜は、自信ある人間ではなかったのか、と。

「・・・・それに関して・・・・・知りたいですか？」

「！！・・・・・・あなたは・・・・・・・・」

三人の元に聞こえた一人の声。
その声の方向を見ると、そこにいたのは二人の「人」

青龍と獅子が、そこにいた。

「確か・・・・・舜君の使役獣とか言われていた・・・・・」

「・・・・私は青龍です・・・・こちらは・・・・」

「獅子だ。なのは嬢、フェイト嬢、はやて嬢。我が主のこと、知りたいか？」

まさかの二人の申し出。

一体どういうことなのか。

彼らは基本、蒔風の意思によってでしか出てこない。

それが歩き回り、あまつさえ主の事を話しに来るなど。

「・・・・我らとしても・・・・今の主は・・・・よく・・・・ありません・・・・」

「うむ。しかし決して勘違いされぬよう、ここでおそらく我等しか

知らぬであろう「蒔風舜」の事を、話しておこうと思ってな」

「我々としても・・・・これ以上主を見てられません・・・・主を理解できる方は、おそらく存在しません」

「それでも、少しは知っていてもらいたいのだ。蒔風の事を」

「そして・・・・彼がどんな人間かを・・・・どれだけ自分を偽った者かを」

彼らしか知らない蒔風舜。

いったい、どんなものなのか。

自分たちは、彼を勘違いしていたのか。

「彼がなぜああなったのか、だな？」

「うん。それと、なんであんなにいつも通りで・・・・それであそこだけハッキリと変えれたのか」

「一晩じゃ早すぎる・・・・舜君に何があったんや？」

その質問に、青龍たちが息を吐いてから答えた。

「主には「蓋」があるのだ」

「「蓋」・・・ですか？」

「・・・そう・・・それは本来の自分を隠すための仮面」

「本来の彼は自身もなく、出来ると言っても八割程度の、どこにでもいるような普通の青年だった」

「・・・しかし、そんなのではだめだと、彼は考えました」

「自分が弱くあるのは嫌だ。その想いから、彼は理想の自分を形作り、それを「蓋」とし、その弱さを押し込めた」

そう、その時だ。
彼が「死への理解」を得たのも。

「蓋」を作るには様々なものを理解しなければならない。
その過程で得たのがそれだった。

「だから、今回の失敗からの立ち直りも早いわけです。ただ「蓋」を書き変えて、在り方を少し変えるだけですから」

「主は今までの人生、そうやって過ごして来ました。失敗したら、乗り越える、という形ではなく、改良（アップデート）の形で回りこんできたのです」

「だからいざ大きな失敗などに直面し、それが連続的になると、彼は大きく変わる」

「・・・・そして今回・・・・ついに「自信」を・・・・書き変えてしまった」

「自信って、なんですか・・・・・・？」

「彼は自信がない。常に、なんにでも」

「・・・・おかしいと思いませんか？なぜ、主があそこまで・・・・・世界最強に・・・・こだわるのか」

確かにそうだ。
彼の気質なら特に勝ち負けにこだわらない、と言っても誰もおかしいとは思わない。

むしろ、楽しめればいいような人間だ。

しかし、彼は「世界最強」に固執した。
その理由は、簡単である。

それを獅子が語りだす

「自信がないからだ。だからいつでも「世界最強」と謳い続ける。そうでもしなければ、彼は自信を失い、自分を保てなくなる」

「・・・・あれは主の自己暗示なのです。だから・・・・・」

「ダメだよ」

そこで青龍の言葉を、なのはが遮る。
その眼には、絶対にそんなのはだめだという思いがあった。

「それはただの逃げでしょ?そんなのはダメ・・・・立ち向かって、乗り越えなきゃいけない!!」

「そうや!!失敗して、乗り越えもせずに改良だけしてそれでしまいなんて、そんな無責任なことあらへん!!」

「私も一度、逃げそうになった。でも、逃げるのはよく・・・・・」

「別にいいだろ、逃げたってよ」

フェイトの言葉をさえぎって、二人の主の声がした。

「なに勝手に話してんだお前ら」

「・・・しかし主!!」

「行くぞ」

「主よ、いいのか!?」

「良いも悪いもねえ。俺はもう、そっちに行く自信がねぇんだ。俺はお前らほど強くない。弱いんだよ。それを何とか言い繕ってきて、ボロが出た。ただそれだけだ」

獅子と青龍を回収し、その場を去る蒔風。

「待って舜君!!話を・・・・」

なのはがその背中を呼びとめる。

しかし、彼は一度たりとも止まることはなく、そのままいなくなっ

てしまった。

その様子に、なのはが涙してフェイトに飛びつく。

「フェイトちゃん・・・舜君・・・こっちの方全然見てくれてなかったよ・・・・・・」

「なのは・・・・・・」

「なんなんや・・・あのヘタレは・・・・ただ弱いから逃げるやと・・・・？翼人がなんや。そんなもん・・・・・」

はやてが憤って悪態をつく。

しかし、それにフェイトは違うと反論する。

「はやて。舜はもう、どこにも属さない人間なんだよ・・・・人からも、生物からも、世界からもって言ってたから・・・だから・・・「翼人」っていう枠は、舜の最後の居場所なんだよ」

「そんなん・・・・うちらがいくらでも作ったる・・・・それなら・・・」

「でも・・・それじゃあ私たちに迷惑をかけるって・・・・・・」

「・・・・ああもう！！！どないせぇっちゅうんや！！！！！」

「待とうよ。そして、伝えよう」

はやてが頭をがガシガシと掻くと、なのはが一言、ぽつりと言った。

「待つの。舜君は、いつか気付いてくれるよ。私たちがどれだけ舜君を待っているか。そして、それを伝えなきゃいけない・・・・・」

それはなのはの決心だ。
彼を必ず連れ戻す。

そのために、みんなで言葉を贈るのだ、と。
想いは伝えなければならないと。

それから、蒔風の元に皆のメッセージが届くようになる。
しかし、その内容はどれも蒔風の心を押すものではない。

この世界で、蒔風だからこそ残せた何か。
それが現れる日が来るのだろうか。

ーーー

誰かと関わり、そのものの願いを受け取れたとき、彼は真の強者になる。

忘れたことは、あまりに大きい。
誰の想いも受け取れぬ、関わりを断った翼人など、並の強者と変わらない、という事を

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～「蓋」～（後書き）

蒔風ヘタレ編です。

アリス「ヘタレヘタレーーー」

全くですね。

でもそれが何だか「仕方ないよね」と思えてしまうのが主人公マジック。

ア「主人公補整ってやつですか？」

そうそれ。「奴」が主人公を嫌う理由だよ。

サブキャラなら許されなくても、主人公ならあら不思議。

ア「それはむかつきますね」

それはそうと、五十万アクセス突破ァ！！！！！

ア「なにこの唐突な展開！？」

そして東京都で「あの法案」の可決・・・・・

ア「そして墜ち込んだ！？」

あの法案は「エロい物は子どもに見せちゃダメ！！」っていうもんなんですよね。
で、その規制を東京都が始めるそうなんですが・・・・

ア「ですが？」

作者としては、規制はした方がいいでしょう。
十八歳未満にエロいの見せるのはまずいですし、と言っておきます。

ですがこれが皮切りになって、様々な規制が漫画、アニメにかけられてしまうのではないか、という懸念はあります。

法律や政治の世界は前例があるとメチャクチャ有利になる世界ですからね。
だからここから言われも無い規制が始まると思うとがくがくブルブル。

しかし、正直そんなに気にしてません。
反対の署名は・・・東京都民じゃなくちゃ出来ないはずだから出来ません。
自分神奈川県民なんで・・・・・

あのおっちゃんは口悪すぎんですよ。
正直、言葉は捉える人間によって意味が変わるという事を理解してない。

更に言うなら

理解してないやつが否定するんじゃない。

と言ってやりたいですね。
これは小説の中でも言ったかな？
どこで言ったっけ？忘れちゃった・・・・

ア「話し終わりました？」

終わったよーー

ア「次回、休日、そこから始まる」

ではまた次回

またあえてうれしいよ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～休日の裏、脈動～

「舜、今日の訓練でみんな、第一段階を突破したみたいだよ」

「・・・それで今日の午後は・・・・オフシフトになるようで・・・遊ぶくらいなら主も・・・・・」

今日、ティアナたちフォワードは訓練の第一段階をクリアした。

基本、部屋にいる蒔風にそういった情報を持ってくるのが青龍たちの仕事になっていた。

自分からは動かず、ただ、見守らせて、「奴」が来るのを待ち続ける。

あの日からずっとこの調子だ。

だから青龍は提案した。

遊ぶくらいなら構わないのではないか、と。

しかし蒔風の首は縦には振られない。

「しつこいぞ、青龍。何がきっかけになるかかわからないでしょうが。それで下手に改変して、取り返しのつかないことになったらどうする」

蒔風の答えはいつもこうだ。

最初の内は七獣全員が蒔風を説得していた。

これ以上孤立して、どうするのかと

しかし蒔風の返答は変わらない。

その蒔風に、次第に注意する者はいなくなっており、今では忠誠心の高い青龍がたまに言うくらいだ。

「俺はまともな物は残せないんだ。残した物はすべて負の物。俺は関わるべきじゃない」

俺はもうあっちには行かない。
だからこれ以上言うんじゃい。

今までの数日間、誰がやめようとも、青龍だけは蒔風の為に、今からでも戻れると説得してきた。

しかし、いつもあまり感情を表さない青龍も、ついに蒔風に対し、感情が吹き出した。

「だったらなぜ我々に見回らせて、見守らせているのですか・・・・」

それに蒔風は胡座をかいて座り、青龍に背を向けたまま答えた。

「「奴」の行動はおそらくあっちに向く。だから些細なことでも・・・・」

「その程度の事ならば・・・・我々で結界を張れば・・・・簡単に察知出来るでしょう!!!」

「せ、青龍?」

いきなり叫んだ青龍に、白虎がビクリと驚く。
彼がこんなに叫ぶのは、初めてだったのだから。

「一々我々に・・・見守らせる必要は・・・ないはずだ!!・・・・ようはあなたは・・・・断ち切れないのですよ・・・・・あなたが誰かを見捨てられるはずなんかないんだ!!・・・・中途半端に・・・・しないでください!!あなたを待ってる人もいるし・・・・我々だって・・・・今のあなたは見たくない!!」

青龍が背を向ける蒔風の肩を掴んでこちらに向かせ、その目を睨んで叫んでいた。

「関わらないなら・・・・良いのです!!・・・・・だけどあなたは・・・・我々を通して関わりを望んでいる!!・・・・・それが・・・・いいわけないでしょう!!我等の主であるならば、もっと強くあってください・・・・どっちつかずは・・・・やめていただきたい!!」

青龍がついに蒔風の襟首を掴んで捻り上げる。

その青龍を白虎が抑え、獅子や玄武たちも出てきて下がらせる始末だ。

皆に退げられた青龍に、蒔風が無感情な眼をしてから、だったらこうすりゃいいんだろ、と新たに命を下した。

「だったらお前ら、今から任務を解く。ずっと剣でいて、出て来るな。あいつらと関わるな」

「・・・・・ッ!!ァ主!!」

「どうした、青龍」

「・・・あなたは・・・・もう違う・・・・」

青龍が首をうなだれて降り、その場に座り込む。

そして蒔風の意思で半強制的に皆が剣に戻され、鞘に収まって消えた。

その中で青龍が、一言だけ呟いた。

「私は・・・・もう・・・・着いて行けません・・・・」

――――――

すぐにでも、あっちに走って行ってしまうだろう。

それではだめなのだ。
それではいけない。

蒔風はもっと別な事を考えながら、自室に戻って行った。

――――――

て、その通りに店を見ていた。

二人とも管理局魔導師とはいえ、まだ子供だ。
街に出れば興味を引かれる物ばかり。

あっちこっちの店を見て、それでもお金は無駄遣いせず、楽しく街を回っていた。

「エリオ君、今度あっちのお店行ってみようよ！！」

「そうだね！！行こう！！」

その姿は本当に年相応の少年少女と変わりないものだ。
そして疲れてしまったのか、計画書に書いてあるのか、公園のベンチで一休みをする二人。

そこでいろいろな事を話す。

二人ともフェイトを保護者としている。
ここに来るまで、いろいろな経緯があった。

いきなりでもなんなので、軽くお互いの事を話し、そこからゆっくりと知って行こうと、交互に身の上話をしていく。

フェイトと出会う前、フェイトと出会ってから、そして機動六課に来てからの日々。

そして、そこまで来て、当然あの男の話になる。

「キャロは・・・・舜さんことどう思う?」

「うーーーん・・・・・模擬戦の時の事で、少し怖いなって、思ったかな」

「そうだよね・・・・あのときの舜さん、怖かったよね・・・・・」

「でも今は大丈夫だよ。あの人は、私たちの味方。それは、ちゃんとわかってる」

「うん・・・・・でも・・・・・・・」

しかし、彼は関わりを断った。
もう、話せないかもしれない。

「私、こんな性格だから、あんまり舜さんと話しもできてないんだ

よね・・・・」

「僕はまだまだ聞きたいことあったのに・・・・・・」

「ふふ、エリオ君、そんなに好きなの？」

キャロのからかうような言葉に、エリオが拳を握って語った。

「何言ってるの！すごいよ！あの人は！！そりゃ、最初は変なお兄さんだな、って思ってたけど・・・・・・」

「思ってたんだ・・・・・・」

「最初はただ「あの噂の翼人さん！？うわぁ、本当にいたんだ！！」って感じだったんだ」

「うん」

「でも、一緒の部屋にいるうちに、あの人、そんなにすごくはない人なんだってわかってきて」

エリオのその言葉に、キャロが首をかしげる。

「あれ？さっきは凄いって言ってなかった？」

「う～ん、なんていうんだろ・・・凄くないけど、そこがすごいって言うか・・・・」

「エリオ君・・・・わからないよ・・・・・」

「あ、ごめんごめん。そうだなぁ・・・・まずね、朝に弱いんだ」

「それは知ってるよ。フェイトさんと走りまわってたもんね」

「でも部屋での寝起き姿とか見たことないよね？」

「うん」

「凄いんだよ、本当に。前に起こそうとしたら、そのまま抱きつかれて抱き枕にされちゃったんだけど・・・・」

「エリオ君、それってあの時の遅刻？」

「うん」

エリオは一度、訓練に遅刻してきた事がある。
その理由がこれだったのだが。

「どうやって脱出してきたの？」

「えと・・・その・・・・（ボソッ）殴った」

「え？」

「脱出しようとしてもがいてたら舜さんの顔に当たっちゃって」

「だ、だからあの後の朝御飯の時、舜さん顔にあざあったんだ・・・」

キャロが大きな汗を流してあはは・・・と笑う。

「それでその時舜さん、即座に土下座の体勢になって介抱してくれたんだけどね」

「うわぁ・・・・」

キャロは「ダメだそれ」的な顔をしてその話を聞く。
更にエリオが言うには、その時寝起きで髪はボサボサ、よだれの跡が残り、目は半分眠っていたそうだ。

それを聞いてキャロが更にあらら・・・とあぁ～あ、を合わせたような顔をして呆れる。

「それは・・・ダメだね」

「うん、あのときは僕も、えぇ～～？ってなった。でもね、それでもあの人はすごいんだよ。強いし、かっこいいし、世界の話なんて、面白いものばっかりだったよ」

「そうだね・・・あの人は確かにすごいね・・・私ももっとお話ししたかったなぁ・・・・もう帰って来てくれないのかな・・・・」

このとき、キャロとエリオの共通感覚はまとまったようなものだ。

彼は、ダメだが凄い人、と

そして、キャロの最後のぼやき。
それに、エリオは自信を持って返した。

「舜さんは帰ってくるよ。僕はそう信じてる」

その眼には確信に似た信頼があった。
あの人はきっと、僕達のために帰って来てくれる。

理屈とかじゃない。理由なんてない。

ただ、蒔風と私生活を共にした彼だからこそ、そう何となく思えただけだ。

「でも、舜さんに送ったメール、一通も帰ってきてないよ？」

「それでもだよ。僕は毎日送ってる。帰ってきてほしいんだあの人に。もっと話をしてほしい。もっといろいろ教えてほしい。もっとたくさん・・・・その・・・・遊んでほしいんだ」

「エリオ君・・・・」

「フェイトさんの話だと確か、舜さんの翼は「願いの翼」だったよね？だったら、僕の願いも、届いてくれるはずって、信じてる」

彼は信じる。一人の男の帰還をずっと。

しかし、彼は蒔風の残したモノを知らない。
十年前の事件も詳細までは知らないし、その時どんなことをしたのかも知らない。

彼がこの世界に何を残したかなんて、わかりもしない。

今の彼には、願いだけでは届かない。
しかし少年は持っていた。

彼の残したもの、そして、彼が逃げる事の出来ない、その想いを。

それはから数十分もしない時間が経ち、街を再び歩くエリオの耳に、なにかの音が聞こえてきた。

そしてその方向へと行き、そこで少女を一人見つけた。

新たなる出会い。
新たなる物語。

この物語は、新たな人物（キャラ）との出会いによって、一つの節目を迎えることとなる。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～休日の裏、脈動～（後書き）

アリス「おぉ？エリオ君が何かやってくれそうな予感ですね？」

どうなるかは次回に。

ちなみに、今回他もメンバーの動向を知りたい方は、アニメ本編をご覧ください！！！

ア「出た丸投げ」

書いてどうする、そのまんまのものを。

ア「まあそりゃそうなりますけどね」

ではよろしく

ア「次回、彼は一体何を望むのか」

ではまた次回

最近のお前、センターガードの動きになってるな

機動六課でアラームが鳴る。

何か事件でも起こったようだ。

蒔風がその警告音にベッドから跳び起た。
そして急いで上着を羽織って、すぐに指令室に向かった。

その数分後

蒔風はアラームが鳴り終わらないうちに、指令室へと到着していた。

指令室に入ってきた蒔風に、はやてやシャーリーが声をかける。

来てくれたのか、と
助けてくれるのか、と

しかしそんな言葉には見向きもせず、蒔風がモニターの映像を見る。

オフシフト中のフォワードたちが裏路地で少女を保護。
どうやらレリック入りのケースを引きずっていたらしく、一つは少女と一緒にあったが、もうひとつは下水にあるようだ。

レリックと入りのケースと繋がっていた事もあり、少女は機動六課で保護となり、現在ヘリでシャマルが回収したようだ。

フォワードたちはそのまま下水へと潜り、紛失されたレリックケー

スを探しに向かった。
その途中、別ルートからでレリックの出回りを探っていた陸士１０８部隊所属の魔導師で、スバルの実の姉であるギンガ・ナカジマと合流する。

さらにどうやら洋上から多くの飛行ガジェットが押し寄せてきているそうだ。

おそらくは地下のレリックか、それに繋がっていた少女を狙ってだろう。
最初こそヴィータとリィンが防衛ラインとして迎撃していたが、途中からどうにも幻影を織り交ぜた混合部隊となった援軍が来、手に負えなくなる。

そのために現在はなのはとフェイトがその上空で防衛ラインとして交戦し、ヴィータが地下のフォワードたちに合流することになったらしい。

その情報を一部始終見て、ふぅ、とため息をついて、蒔風が指令室からコツコツと歩いて行ってしまう。

「舜君！！！」

その蒔風をはやてが呼び止める。
その声に蒔風が一言だけ言って、この部屋を出た。

「奴」じゃない、と

ガンッ！！！！！！

その言葉に、はやてがコンソールを殴りつける。
もうすでに蒔風のいない指令室に、殴りつけた音が鳴る。

「なんなんや・・・こんなんになっても、助けてくれへんのか？あんたはそれで・・・いいんか？舜君・・・・！！！」

誰にも聞こえない、やるせなさそうなそんな声で、はやてが小さくつぶやいた。

しかし、自分はここの指揮官だ。
めそめそばかりしてられない。

すぐに指揮を飛ばし始め、これからの対策を考え始めた。

ーーー

「本当にいいのかって？・・・・・・そんなん、もう俺に決めるだけの権利はないよ」

指令室の扉のすぐそこで、はやてのつぶやきを聞いて蒔風が部屋へと向かう。

その途中で何人もの六課スタッフが走りまわり、蒔風がそれを流し目で見、悔しそうにうつむく。

そう、彼だってあの場に行きたいのは当然なのだ。
あんな現場を、放っておけるほど、彼の感情は大人ではないし、押し込めるほど「蓋」は強くはない。

まだ改良が必要だな。

だが彼は行くことなどできないのだ。
誰かの先を潰してしまう可能性がある以上、翼人として、そんなことは許されない。

そんなことを考え、感情を押し込めながら部屋に戻る。

一人で寂しく、「蓋」の練り上げに入る蒔風。
いまだに彼が安定してないというのは、まさに青龍の言ったとおりだった。

そうしている事、数十分。

蒔風がフゥ、と息を吐き出し、一休みに入ろうとする。

そして、ベッドに座り、自分に送られてきたメールボックスを確認する。

それらは今日の朝にはすでに溜まっており、未だ消化しきれてない。

空中に浮くモニターを叩いて、メールを確認しようとする蒔風。

だがその寸前で、その手が止まる。

そうだ、関わりを断たないなら意味がない。

こんなことしてどうする。

だからさっきも青龍に言われたのではないか。

その考えが、一瞬蒔風の脳裏に走る。

しかし、結果として彼はメールボックスを開いた。

結局のところ、彼は弱い人間だったのだ。
彼は誰かと関わらない、なんてことはしきれない人間だった。
繋がりを求め、寂しさに簡単に潰れるようなそんな弱い心の持ち主が、青龍の言う「断ち切り」なんて、完全に出来るはずもない。

そして、その「弱さ」が

蒔風の扉を開けることになった。

その内容はすべてビデオメールだった。

なのはやフェイト、スバルやキャロにティアナ、シャマルやシグナム、さらはあの無口なザフィーラまでもが、蒔風に言葉を伝えようと、一通ずつ送ってきていた。

だがそのどれもが蒔風に言わせれば、自分がいる事の意味にはならない。

そして、最後のメールを開いた。

「舜さん、おはようございます。エリオです」

最後のメールはエリオのものだった。
そしてそれは、いきなりの独白から始まった。

「舜さん、僕は・・・・プロジェクトＦＡＴＥで生まれたクローンです」

いきなりの告白。
だが蒔風にとって、どう生まれたかなどは関係なかった。
少し驚きはしたが、だからどうしたという心境だ。
モニターの中のエリオは、そんなことは知らずに先を進める。

「僕のオリジナルになったエリオ・モンディアルは、すでに病気で亡くなっています。僕は、その両親が作り出したクローンです」

しかし、それは明らかな違法行為。
それの事実を突き止めた研究機関の人間が、なにも知らないエリオを両親と引き離して隔離してしまった。

「その時僕は、両親が助けてくれると思ってました。だけど、事実が露見された僕の両親は、そのまま逮捕され、ついに僕の元に来てくれる事はありませんでした」

そして研究所にて、プロジェクトＦＡＴＥの成功例として完全に隔離され、ときには非人道的な扱いも受けた事があったそうだ。
だが、そのとき、そんな彼の事を聞き、助けに来てくれた人がいた。

「フェイトさんが、僕を保護してくれて、助けてくれました。でも僕はその時、誰も信じられないで、魔法の力を使って、暴れまわりました。それでもフェイトさんは諦めず、僕の事を身体を張って止めてくれて、真剣な目と、その説得のおかげで、僕は立ち直れました。そのとき、フェイトさんが僕に言ってくれた言葉があります」

その言葉を告げるエリオ。
蒔風には、その言葉に聞き覚えがあった。
『私が知っているのは、死んでしまったエリオ・モンディアルの代わりじゃないよ。ましてやプロジェクトＦＡＴＥの成功例でもない。今ここにいる、あなた自身、「エリオ」っていう、一人の人間』
『確かに、生まれた理由は、誰かの代わりだったかもしれないね。でも、生きる理由は、そこじゃないんだよ？』
『もちろん、プロジェクトで生まれたってことは、あなたを形作る要因の一つかもしれない。でも、そうある前に、あなたはここにしかいない「エリオ・モンディアル」なんだよ？成功例とか、誰かの代わりだとか、そんなことは後回し。まず、あなた自身が何者で、なにをしたいのか。それが大事。エリオのしたいことって、何かな？』

「その・・・・・言葉は・・・・・・・・・」

聞き覚えもあるもないも無かった。
それは間違いなく、彼の言葉だった。

『オレたちが知っているのは、アリシア・テスタロッサの代わりの少女じゃない。ましてやプレシアの人形でもない！フェイト・テスタロッサと言う、一人の人間だ！』

『確かに、生まれた理由は、アリシアのクローンだったかもしれない。プレシアの慰み物だったかもしれない。でも、生きる理由は、そこじゃない！！』

『アリシアのクローンだとか、そういったものも当然、お前を形作る要因の一つだ。でも、そうある前に、お前はフェイト・テスタロッサだ！アリシアとかプレシアとか、そんなことは後回しだ。まず、お前自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてくれ』

それに蒔風の心が揺らぐ。
だがしかし、すぐに頭を振ってそれを否定する。

この言葉じゃなくてもいいはずだ・・・・
フェイトは他の言葉で、きっとエリオを・・・・・・

だが、そんなことは関係ないなど、彼自身も気付き始めている。

問題なのは、彼が残したモノが、プラスになっているかどうか。

それを必死になって否定しようとする蒔風。
もう本来の目的をも忘れ、自分は関わるべきじゃないと、固執しよ

うとしてしまっている。

だがその揺らいだ彼の心に、止めの言葉が突き刺さる。

「あなたは・・・・・・一体誰なんですか?あなたは確かに翼人ですし、その翼には願いを司っているかもしれない。そういったものも、舜さんを形作る要因の一つです。でも、そうある前に、あなたは一体誰なんですか!?翼人とか使命とか、そんなことよりもまず、舜さん自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてください!!」

「あなたがこの世界にやってきて、僕達を守ろうと決めたのは、なんでですか!?翼人だから、守るんですか?力があるから、守ってるんですか?あなたは翼人としてこの世界に来たのか、それとも、そうじゃないのか・・・・・あなたは何故、何のために戦うのか、

教えてください」

エリオは言う。
確かに、あなたがしてしまったことは翼人として許されないのかもしれない。
あなたにとって、「翼人」というカテゴライズは重要でしょう。

しかし、その在る前に

あなたはいったい何者なのか、と
あなたは一体、何がしたいのか、と

それこそ、あなたの属するものではないのかと。

「僕は・・・・待ってます。「舜さん」が帰って来てくれるのを、ずっと」

その言葉を最後に、エリオのビデオが終わり、未読の数が０になる。

なにも映らなくなったモニターの前で、蒔風が自分の手のひらを見て、答えるように暗い部屋で呟いた。

「そいつは・・・・・・・どーにも・・・・・・逃げられない質問だよな・・・・・・・」

そして立ち上がる。
バサッ、と上着を羽織り、扉へ向かう。

向かう先など、決まっていた。

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —

「現状を教えろ」

『調べておいたよ！』

『空中のガジェット編隊は手に負えず、はやてさんがリミッター解除で迎え撃つ為に出撃、リミットの解除申請を出しました』

「却下させろ。問題ない」

『それに伴い、なのは嬢、フェイト嬢が保護された少女が搬送されているヘリの方へと向かっています』

「エリオたちは？」

『ヴィータ、リィンと一緒で、召喚師と融合機を一名捕縛したみてぇだ。あっちの戦闘は終わってる』

「だったら大丈夫だな」

キィ・・・・・ザッ

『ヘリに向けての砲撃反応あり。推定ランクS。現位置からの防御は不可なため、なのはがリミット解除を申請。追い付くつもりです』

「却下。今から向かう。皆ははやての所に。フォワードには・・・・・青龍、行ってくれるか？」

『・・・・なにをしに？』

「・・・・・・・・助けにだ」

『どのような意図で？』

「助けたいからだ。目の前のソレを止めるためだ。関わってやるさ。ああ、前言撤回する。あいつらを、助ける」

『・・・・・・・』

「だから・・・・そのために・・・・・・力を貸せ！！青龍！！！」

『・・・・御意に！！！！！』

「さぁて、時間はないみたいだが」

バサァ、バシン！！！！

「追い付くことは」

ドゥッ！！！！！

「できなくはない！！」

――――――

「は?申請が却下やて!?なんでや!?」

「いやあの・・・ただ我々は「待っていろ」と・・・・」

「待つやて?なにをや?このままじゃ・・・・・」

迫ってきたガジェット編隊が都市部に入ってしまう。

そうはやてが返そうとした瞬間

突如として空が吹き飛んだ。

「なっ！？」

はやてが驚愕する。

本体は見た目より少ないとはいえ、あれだけのガジェットを一気に吹き飛ばしたのだから。

しかし、直後に現れた六体の姿にすぐさま納得した。

帰ってきてくれたのか

『はやて殿！大丈夫ですか！？』

『助けにきたよ！！』

『鬱陶しいガラクタ共だぜ！！』

七獣から青龍を除いた六体が、空を飛び交いガジェットを粉砕していく。

「これは・・・・・」

『はやてさん、無理をなさらずに。安心してください。我等が主は、

世界最強が故に！！！！！』

――

「このままじゃ、追いつかない！」

「どうして限定解除出来ないの！？」

なのはとフェイトがヘリへと全力で飛んでいる。

このままでは追いついてもバリアを張れない。

しかし、リミットは解除されないままである。

「こうなったら、とにかく追い付く！あとは・・・・」

「なのは！？」

「フェイト隊長は射手をお願い！」

「・・・わかった。無茶しないでね！？」

「了解！！」

二人が別れ、なのはがヘリに向かって一直線に猛スピードで進んでいく。

しかし、距離がありすぎる。

フェイトは射手までまだ遠いし、なのはもヘリに着くのがやっとだろう。

だが

「それでもッ！！」

なのはは飛ぶ。

ヘリの仲間を助けるために。

砲撃が放たれる。

そしてなのはが追いつき、しかし、バリアが張れまいまま

ドォオン！！！！

それが着弾した。

爆煙が上がり、ヘリが隠れる。

それを確認した離れたビルの屋上にいる二人が、次に命中したかを確認する。

「ディエチちゃん、どう？」

「クアットロ、静かにしてくれ・・・・・？あれは！？」

全身タイツのようなスーツを着た二人の少女が驚愕する。
完璧なタイミングで撃った砲撃であったにも関わらず、ヘリは無事だったからだ。

そしてなのはも驚いていた。

自分はバリアも張ってないし、着弾もしていない。
しかし、ヘリは無事だ。

ヘリを振り返って見たなのはが、前を見る。

そこには一人の男がいた。

――――――

爆煙の中

まず現れたのは一本の腕。

砲撃を打ち砕いたであろうその拳が、真っ直ぐにそこから伸びていた。

そして次に両の脚。

宙に浮いているにもかかわらず、まるでそれは大地に立っているかのような悠々とした構えをしている。

最後に、翼

煙の中から翼が飛び出し、一気にそれを掻き消していく。

その翼は銀白に輝き、太陽の光を浴びて、美しく輝いていた。

「あ・・・・・・あぁ・・・・・・・」

なのはの眼前に現れた、ひとりの男のその背中。

憧れて、今までただひたすらに、ずっとずっと目指してきた。

その背中が、目の前にある。

その背からは「願い」の翼がはためいて、その風がそっとなのはの頬を撫でていた。

「遅くなった。大丈夫か？」

男の声が耳に届く。
その瞬間、なのはの視界はぼやけてきた。

ああ、やっぱりこの人は強かった。

なのはの胸が熱くなる。

私が今まで憧れてきたこの人は、いま、私の目の前にいて
私が目指してきた人は、やっぱり助けに来てくれて

その背中は、とても安心に満ちていた。

もう大丈夫だと、思わせてくれるその背中に、なのはが飛び付き、
名前を漏らした。

「遅いよ・・・・・舜君・・・・・・・・・！！！！！」

ゴォウッ！！！！！！

銀白の翼から、迸るオーラを噴き出して、残った煙を完全に晴らし、

蒔風が腕をふるって高らかに宣言した。

「俺は「銀白の翼人」で、「願いの翼」で、「世界をめぐる者」・・・そして、俺の名は！！！！！！」

「世界最強！！！蒔風舜だ！！！！！熱く楽しくかっこよく！！行ってみようか！！！！！」

高らかに声を上げ、太陽の元に、彼は帰ってきた。

八神はやては歓喜する。
命の恩人の復帰に、まずはパンチやな、とこぼしながら。

フェイト・T・ハラオウンはガッツを取る。
最高の友人のその姿に、自分も犯人を捕まえなくてはと心に決めながら。

フォワード陣は手を取り合った。
ヘリは無事、そしてあの人も帰ってきた。また面白い事や話をしてもらおう、と

そして

高町なのはは涙した。
憧れの人。今までずっと追いかけてきた人。

一度は見えなくなってしまったけど、その彼がこんなに目の前にいる。
見える場所にいる。それだけで、彼女の心は不思議と安らいだ。

多くの人の待望を受け、ついに

銀白の・・・・否

蒔風舜、ここに帰還する。

to be continued

アリス「戻ってきましたか！！」

そんなことはどうでもいい
ＭＯＶＩＥ大戦、見てきました！！！

ア「こっちそっちのけかい！！！」

でもそれは活動報告の方に書きましたのでそちらをどうぞ。

ア「あ、さいですか。それにしてもエリオ君ＧＪ」

ですねーー
書いてる途中「あのモニターのって何らかの端末だから、蒔風使ってもおかしくないよね？」って疑問に思いました。

ア「支給品かなんかであるんでしょう？」

だよねー

今回、確かに蒔風が残せた物、っていうのははっきりとは見つかりませんでした。

しかし、彼が世界を回ってきたのは、翼人として力を得たのは、彼が「蒔風舜」だったからにほかありません。

翼人の使命とか、今更そんなこと気にする必要はなかったんですよね。

ア「それを普通に出来る人にしか翼人の力は宿りませんし」

と、言うわけで次回の「世界をめぐる、銀白の翼」は！！！

ア「次回、フハハハハハハハ！！！！！最高にハイってやつだ！！！！」

ではまた次回

なのは言ってた・・・うちの４人は全員一流のストライカーになれるはずだって

「な、なんなのよあいつ！？」

「私のイノーメスカノンを拳で！？」

ビルの上の射手二人、クアットロとディエチが驚愕の声を上げる。

確かに、彼のことはリニアやホテルでの事件で報告を受けてはいた。

しかし、普通ここまでとは思うまい。

ランクＳ相当の砲撃を、拳の一撃で破壊してしまうなど！！

そうして二人が蒔風に気を取られていると、ついに背後にフェイトがやってきて、罪状を言い、逮捕する、と宣告した。

「は、速い・・・・」

「ボーッとしない！逃げるわよディエチちゃん！！」

クアットロとディエチがその場から離脱、逃走を計る。

クアットロが空を飛び、ディエチは飛行能力がないのかビルの屋上をジャンプで跳んでいく。

「あいつら、逃げるつもりだな」

「み、見えるの！？」

かなり遠くの逃げる二人と追うフェイトを肉眼で視認する蒔風。

なのはも当然見えているが、あくまでもレイジングハートを介してだ。

「見えます見えます！なのは、回り込め。挟み込む！はやて！聞こえてるか？でかいの一発、用意しとけ！！」

『いきなりやって来てよう言えたもんやなぁ！？』

はやてが蒔風に愚痴をいいな放ちながらも詠唱を始め、杖に魔力が充填されていく。

「さて、追っつくぜ！！加速開翼（ブーストオン）！！」

蒔風の翼が羽ばたくソレから戦闘機の様に鋭利な形に変わり、超加速行動に入る。

なのはには蒔風が消えた様に見え、少し驚いたがすぐに蒔風の指示通りに回り込んでいった。

ーーー

フェイトはその行為に疑問を感じた。
一人は飛行能力などないのだ。あれでは速度が落ち、捕まえてくれと言うもの。

さらには

「鬼さん・・・・・こちらぁ！うははははははは・・・・ヌハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

蒔風が眼前に現れる。

完全に詰みだ。

と、思われた次の瞬間、二人が一緒に飛んだ理由が明らかになる。

「ＩＳ発動。シルバーカーテン！」

クアットロが自らの能力を起動させる。

すると二人の身体が虚空に消えゆき、その姿を見失いそうになる。

だが

「遅い！！心象的（イマジナリティ）・・・・・」

蒔風が指を突き出し、パチン！と派手に撃ち鳴らした。

「世界破壊（ワールドエンド）！！！！！」

瞬間、世界が無法則に塗り潰され、消えかかっていた二人の姿が再び現れた。

「な！？」

「これは・・・・なんだ！？」

あまりの事態に困惑する二人。
だが蒔風は高らかに笑っている。

「フハ、フハハ、ヌハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！無駄よ！無駄無駄ァ！！幻術使いよ！！今の私は、最高にハイってやつだからなぁ！！」

蒔風さん、悪役みたいです。

その蒔風が人差し指を下に向ける。
すると突如として出現した岩のリングに二人が束縛される。

「嘘ッ！？」

「な、なんだこの魔法は！？」

「魔法じゃない。魔術だ！！ま、何が違うのかオレもわかんないけど」

わかんないのかよ！！！

そう思った二人だが、状況は依然としてまずい。
今日の任務はレリックの回収と少女（マテリアル）の奪還。

にもかかわらずなにも成し遂げられないで、更には管理局に捕まるなんてことは絶対に許されない。

リングの中でもがき始める二人。

それを見て蒔風が顔を青くする。

「おいおい!!待って!!その行動はマズイってってオォウゥあああああああ!!!!」

一体何がトリガーだったのか、蒔風の服の下からなぜが野菜がゴロゴロと出てきて、その中のいくつかがつぶれた。
ぐちゃぐちゃになった蒔風の服の下。

首元からムワッ、と野菜の匂いがむせ出してきて、その中のある匂いに蒔風が悶絶した。

「ヌフォ!?と、トマッ!!!トマトはダメっ!?誰だドリアン入れたノオオオオオオオ!?」

じたばたと暴れ始める蒔風を見て、クアットロとディエチが思った。

逃げられるかも知んない。

だがまあ実際にそんなことはないのだが。

時間が経ち、固有結界が切れて元の空間に戻ってくる。

そこで待ち受けるは機動六課の隊長二人。

桜と金の色をした魔力砲撃が、空中で身動きの取れない二人に放たれる！！！！！

「ディバインバスター！！！！！」

「トライデントスマッシャー！！！！！」

二人の放つ砲撃。

確実に命中する。

この距離で、このタイミング。

更に二人は捕まっている。

これは行ける！！！

ってか普通に捕まえろよ。
オーバーキルだよ。

ドォン！！！！！

砲撃がぶつかり合って、空中で爆発を起こす。

ロングアーチスタッフが歓喜の声を上げるが、撃った本人たちは苦い顔をする。

「ダメ！！」

「ギリギリでかわされた！！！」

「超加速行動を可能としている仲間がいるな。何体いるんだよまったく・・・・はやて！！！準備はいいか！！！」

「いつでもどーぞ！！！ってか舜君、野菜臭いで？しかもドリアンもあるやないけ！！！」

いつの間にか翼を閉まった蒔風が、頭上のはやてに指示を出す。
それにはやてはいらん事を突っ込みながら、詠唱完了した空間魔法を、その指示通りの位置に叩きこむ！！！

「3時の方向、距離６５０メートル！！！！ぶち落とせ！！！！」

「遠き地にて、闇に沈め・・・デアボリック・エミッション！！！！」

黒い球体が蒔風の言う通りの位置に向かい、そこで一気に膨れ上がる。

その場にいる二人とその二人を助け出したもう一人の女性が、今日何度目かわからない驚きの声を上げる。

「なんでわかるんだ！？この動きについてくる人間など、報告には

無かったぞ！！！」

「トーレ姉様！！あのお方に関して、それを考えるのはもう無駄ですぅ！！！」

「うわあああああああああああああ！！！！？？？？」

それでも結果として、彼女たちはその攻撃から逃げきった。

トーレと呼ばれた女性の能力「ライドインパルス」による超高速移動でその場から離脱、何とか空間攻撃から逃れたのだ。

しかし

「速いねぇ。だがまだまだ」

再び逃げた先に蒔風がいなければ、更によかったのだが。

「さぁて・・・おにーさんとのお話しタァイム！！キミタチどこの何者？レリック狙う辺り、スカリエッティとかいう人のお仲間ですか～？」

ノリノリで聞いてくる蒔風に、どうにか逃げ道を探そうと目だけを動かして周囲を探る三人だが、目の前の男からどうにも逃がさないというオーラを感じる。

だが、ついにディエチが突破口を発見する。

三人が念話で打ち合わせ、クアットロが蒔風に話しかけた。

「私どうにもわからないんですけどぉ、あなたって一体何者なんですか？ここまでやる人だとは思えなかったんですけど～～」

「おおメガネちゃん。そうだねぇ、俺は蒔風舜だ。そして、ただそ

れだけの男さ。にしても・・・・・」

蒔風がクアットロ以下三人の首元を見て、指を指しながら名前を呼んだ。

「3、4、10でトーレ、クアットロ、ディエチ・・・・・イタリア語!?ここミッドなのに!?」

蒔風がツッコんではいけない事をツッコんだ。

当の本人たちもよくわかっていないようである。

だがまあ、と蒔風が先を言う。

「それなら一体何人までいるんだ?教えてくれないかなぁ・・・・って逃げんなそこォ!!!」

蒔風のその手から圧水砲が放たれる。

狙ったのはトーレだ。

彼女はビルの屋上に跳躍し、その屋上にあった何かを取ろうとしていた。

砲撃は彼女を捉え、ビルの壁に叩きつけられて地面に落ちる。
しかし、その衝撃でビルの上にあった物が落ち、それをディエチがキャッチした。

「ＩＳ発動！！！」

落ちてきたのは逃亡の際捨ててきた彼女の狙撃砲「イノーメスカノン」
それをキャッチし、瞬時にエネルギーを充填、蒔風にその砲口を向ける。

だが距離が離れている。
これなら蒔風は再び拳の一撃で葬るだろう。

本当にこの距離ならば。

蒔風が拳を振りかぶり、その砲撃に対応しようとした瞬間、ディエチの姿がぶれる。

と、同時、蒔風の胸元から数?もしない位置に、ディエチと、イノーメスカノンの砲口が現れた。

「ッ!?幻術・・・・・・」

「わたしのＩＳ「シルバーカーテン」。調子乗った人が驚く顔って、本当にいいわね～～」

「同感だがっ!!!」

ドォン!!!!!!

ディエチが砲撃を放ち、大きな爆発が起こる。
爆煙が高々と上がり、もうもうと空に上がっていった。

その隙に三人はシルバーカーテンを使って一時撤退、その後回復したトーレによるライドインパルスで帰還した。

一方蒔風の方はと言うと

「ブハァ！！！！イッタぁなぁ、もう・・・・」

力を借り、十二の試練（ゴッドハンド）をその身に宿した蒔風が爆炎の中から出てくる。
ゲホゲホとせき込みながらも、周囲を見渡すが、すでにそこに三人はいなかった。

「チ、逃げられたか」

「舜君！！！！」

「舜！！」

「舜君！！大丈夫！？」

三人が爆発を見て蒔風の元へと飛んできた。
そして、言葉をそろえて

蒔風の頭を殴った。

「「「遅い！！！！」」」

胸元から臭い野菜の匂いを出しながら、蒔風の頭がガクン、と下を向き、野菜を拭き取って頭をさすりながら上げてきた。

「わりぃ。迷惑掛けた」

「ホンマやで？」

「申請却下してたの舜だったんだね・・・・」

「舜君・・・ありがとうね！！」

三人が礼を言う。

だが、蒔風がやめとけぇ、と言ってそれを拒否する。

「オレは俺のやりたいようにやっただけだ。そう、最初から、最後まで、それを貫くさ」

蒔風が空を見上げる。

思い出すのはいつか言われた言葉。

『貴様はいずれ・・・仲間を失いかけた時に・・・・泣き、叫び、自らの信念が・・・揺らぐだろう・・・』

そう、確かに言われた言葉だ。

蒔風はそれに対し、また見つけて立て直す、と言った。

しかし、立て直す必要など、最初からなかった。

彼のそれは、気付かなかっただけで、はじめからあったのだから。

「今青龍がフォワードの方で交戦している。あっちに期待しましょうか」

そうして蒔風が向かい、三人も一緒に向かう。

最も頼もしい、彼と共に。

ー　ー
ー　ー
ー　ー

エリオの目の前に足元から突如として現れた人影が、エリオが持っていたケースを奪って再び地面に潜って行ってしまったのだ。

「なっ!?あ、てめ!!」

更にさっきの人影・・・歳はスバルやティアナと同じくらいだろうか、それくらいの少女が再び地面から現れ、少女を掴んでその場から潜って消えた。

「そ、そんな!!」

「何あの能力!?」

逃げた二人は高架下に着地し、そこから更に地面に潜って逃走しようとする。

「間に合ってよかったですね！ルーテシアお嬢様！」

「ありがとうセイン・・・でも、アギトが・・・・」

「アギトさんならあの隙に逃げましたよ。いやぁ、やりますねぇ・・・」

そんなことをいいながら逃げられるな、と思った二人。

だが、こちらでもそんなことはなかった。

「・・・・逃がぁ・・・・・・・・・さんんんんんんん！！！！！！！！」

ドゴォ！！！！！

いきなり頭上のハイウェイが崩壊し、瓦礫が雨のように降ってきた。
打ち砕いたのは青龍だ。

獣神体でではなく、人神体で。

エリオたちの真上から落下するように突撃してきた青龍が、驚くフォワードやヴィータ、リィン達を尻目にハイウェイを砕いてその下に逃げたセイン達を追ってきたのだ。

いきなりのそれに驚く二人が、更に地面に潜って逃げようとする。

だが、今この男は使命に燃えている。
もしかしたら一番燃えに燃え上がっているかもしれない。

そんな彼が、地面に潜ったくらいで逃がしてくれるはずなどなかった。

「ヌ・・・ウン！！！！」

高架下の地面に拳を突き立てる青龍。
そしてそこから一気に獣神体となり、巨大な龍の姿へと変わる。

そうなれば当然、地面が砕け、瓦解する。
そしてその中に潜っていたセインとルーテシアの姿もあらわになった。

「うえええええええ！？なんだそれぇ！？」

『・・・今の私は・・・・止められんぞッ！！！！！』

そこから再び人神体に戻り、セインとルーテシアを捕まえようと手を伸ばす。

しかし

「ルールーに手ぇ出すなぁ！！！！！」

ドォン！！！！！

巨大な炎の塊が、青龍を襲い、その手はついに届かなかった。

ルーテシアの目の前に現れたのは先ほど捕まっていた小さいなりの融合機、アギトだ。
おそらく離れていたのだろうが、ルーテシアの危機に戻って来たのだ。

「ルールー!!はやく逃げろ!!」

「でも・・・・アギトが・・・・」

「あたしはあとから一人でも転移できる!!!だから先に行けって!!!!」

「お嬢様、ここはアギトさんの言う通りにしましょう!!!」

「・・・・うん・・・・・」

そう言って二人が地面に潜って離脱する。

崩れたハイウェイ上では、フォワードたちとリィンが呆気にとられていた。

なにせいきなり上から誰か降りて来たと思ったら足場を崩してそのまま追っかけて行ってしまうのだから。

「あ、あの人、炎の中に！！！」

「ヴィータ副隊長！！助けに行きましょう！！！」

今すぐにでもそこから飛び降りようとするスバルやエリオ。

しかし、それをヴィータが止めた。

「やめとけ。巻き添え食らうぞ」

その言葉に、キャロがヴィータにあれ？と聞いた。

「ヴィータ副隊長、あの人、知ってるんですか？」

その質問に、にやりと笑って炎の中を見るヴィータ。

なんだかその顔は楽しそうだ。

「知ってるも何もねー。あいつは・・・・舜の使い魔だからな」

「え？」

「あ、そういえば！！一回食堂で見た事ある気が・・・・」

「じゃあ・・・・舜さんが！！！！」

その言葉にコクリとうなづいて、ヴィータがアイゼンを担ぐ。

「帰ってきたんだ・・・・・あのヤロー、心配させやがって」

ヴィータが安心の籠もった声を出した。
彼がいるなら、きっとヘリだって無事だろう、と。

そして高架下、炎の中。

その中から、一切の怪我を負ってない青龍がゆっくりと出てきた。

それにアギトが驚愕する。

自分は融合機だから、確かに単体での戦闘はそこまで強くはない。
マスターとユニゾンして、初めてその性能をフルで使えるのだ。

しかしそれでも古代ベルカの融合機としてかなりの戦闘力はあると思っていたし、事実、それなりの実力は持っている。
しかし炎熱を最も得意とする彼女が、その攻撃で、対象に火傷どころか煤一つすらつけられないとはどういうことなのか。

「て、てめえ、なんで焼けねぇんだよ!!??」

アギトがわけわからんと青龍に訊く。
それに対する青龍の返答は、全く彼らしくなかった。

「・・・そんなこと・・・・私が知るか!!!」

「「「「「知らんのかいッッ！！！！」」」」」

アギトだけでなくフォワードたちも思わずツッコムその台詞。
自分でも理屈がわからないってどういう事なんだろう？

「・・・・ですが・・・・一つだけ確かな事がある・・・・」

「な、なんだよ」

青龍がアギトに向かって言う。
それがちゃんとした理由かどうかは、また別物だが。

「・・・今私は・・・・主の命に燃えている・・・・つまり！！
私の方が、この炎よりも熱いという事だ！！！！」

「そ、そんなんでか！？」

「先ほどの二人は逃がしたが、あなただけでも捕まえよう！！！フ
ハハハハハハハハハハ！！！！ここ数百年ぶりのォ・・・・最高
潮だぁ！！！！！」

青龍さん、あなたキャラ違います。絶対に違います。
あなたは言葉の頭に必ず「・・・・」付ける人でしょ！？

「主から預かりし、雷旺の力で・・・・・消し炭にしてくれるわぁ
！！！！！」

「「「「「「それはダメだろーーーーーー！！！？？？」」」」」」

今、青龍が、壊れた！！！！！

「雷・・・・・旺・・・・・」

「やっべぇ！？」

アギトがマジで焦り出す。
目の前で溜まっていくあまりの電気量に、本気ビビりしかできないのだ。

その電気量がどれほどのものかと言うと、学園都市レベル５の第三

位のフルマックス×2．5ぐらいある。

「砲！！！！！！！！！！！！」

ドゴォウ！！！！！

そのすべてがアギト一体に向き、ぶっ放される。
この人もう完全に使命忘れてるよ。

だがアギトの足元に紫の魔法陣が現れ、瞬時にして彼女を転移させる。

雷旺砲が廃墟の都市部を蹂躙し、跡形もなく吹き飛ばした。

「ふぅ・・・・・」

そうため息をついてスッキリした青龍。
そして

「・・・・捕まえる・・・・任務でした・・・・・」

そう言って落ち込んだ。

その数分後に蒔風たちも到着する。

青龍が蒔風に謝り、まぁ仕方ないよと言われ、剣に戻って蒔風の脇元に収まって消える。

そして、蒔風が真っ直ぐにエリオの方を見て、その手を取ってから言った。

「ありがとう。君のおかげで、戻ってこれた。銀白（オレ）の翼人は蒔風（オレ）舜を見い出せた。俺がこの世界に来てやることは、目の前の、誰かの

世界を守る事。目を背けてはいけなかったんだ。君の言葉で、戻ってこれた。だから・・・・ありがとう」

その言葉にエリオが顔を赤くしてそんなに言わないでくださいと委縮してしまう。

そうして、彼は帰ってきた。

銀白の翼人、願いの翼、「奴」を討つ者

確かにそれらは彼のあるべき姿だろう。

だが、彼がそうなれたのは、何より土台に「自分」がいたから。

その「自分」の意思を殺して、翼人も何もなかったのだ。

そうして復活した信念と共に、この物語も新たな進展を迎えた。

これは素晴らしい！！！！！
この姿、この翼！！！！！

伝説のアルハザードにおいて、さらに伝説と言われた「翼人」そのものではないか！！！！！

十年前に現れたという噂ばかりだったから、あまり信じてはなかったが・・・・・

これはいい・・・・なによりも研究対象になる！！！！！

それから「彼」だ。
世界の仕組みをよく理解している。

彼の考えもまた、素晴らしい！！！！！

やはり人生はこうでなければ！！！！

ははっ！！とてもやりがいのある人生だよ！！！！

さあ、彼女（マテリアル）もついに出てきた事だし、ここからが本格的な実験だよ・・・・・

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～復活の翼人～（後書き）

わからない方もいると思うので説明をしておきます。

アリス「蒔風が借りた力「十二の試練」は「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ」のバーサーカーのものです」

確か命が十二個あるってものでしたね。

ア「でもこれでやっと戻せましたね」

そうですね。

今まで友人にも「つまらんから早く戻せ」って言われてました。

ア「でもポン、と戻すとなんか軽いんですよね」

そう！！

だから少しだけ長くなってしまいまして、申しわけございませんでした！！！

ア「そういえば年末年始はどうするんですか？」

うーーーん。

何とか書き溜められればいいんですけどね。

コミケ中は何もできませんから。

自分スタッフなもので。

ア「それは大変ですね」

暇な時だからと言って携帯いじって執筆もできんしね。

ア「あれだけの人数いますからねぇ・・・・・」

ああ、ノパソが欲しい！！！

ア「次回、少女との邂逅」

ではまた次回

あれ？出てこないや

出そうとするとまだ出番の早い台詞だ・・・

「人造魔導師？あの子供が？」

「ギンガさんが言うには、そうらしいです」

蒔風は翌日から部屋をエリオと同室に戻していた。
そこで先日保護した少女が人造魔導師である、と聞かされたのだ。

「そっか～～。ま、関係ないよ。子供は子供だ」

だが蒔風は思ったほど驚いていない。
だがエリオはどこかやるせない表情だ。

「きっと・・・プロジェクトＦＡＴＥはまだ続いてるんです。今日も、どこかで」

きっと自分の生まれの事もあるのだろう。
少女のこれからを思うと、少し気の毒になってしまう。

だがそれでも蒔風は大丈夫だ、と断言する。

「生まれた理由とか、どうしているのかなんてのは関係ない。生まれた理由なんかどうだっていい。問題はどうやって生きるかだ。だろ？エリオ」

「・・・・そう、ですね」

「さて、確かなのはが病院にその少女に会いに行くんだったな。行ってくるか」

蒔風が部屋を出て、なのはと合流して聖王病院に向かうため、隊舎の駐車場へと足を運んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

（舜君・・・・・冗談は選んでよ・・・・・）

一番の被害者はなのはだったかもしれない。

とまあ、そんな会話もたけなわに、車は聖王医療病院に到着する。

車から降りる三人に、ひとりの女性が走ってきた。
何やら慌てた感じである。

「シグナム、あの人は？」

「シスターシャッハ。聖王教会の修道女にして、優秀な近代ベルカ式の騎士だ」

「で？本名は？」

「・・・・・・・シスターシャッハだ」

「・・・・・本名は？」

「・・・・・シスターシャッハ、どうされました？」

「（こいつ本名忘れたな）・・・どうも初めまして。機動六課遊撃隊員の蒔風舜です」

「わ、私は聖王教会シスター、シャッハ・ヌエラです。実は・・・・」

車の方にまでシャッハが近づいてきて、シグナムが挨拶をする。
それに倣って蒔風となのはも挨拶をし、なにがあったのかを聞く。

なんでも保護していた少女が逃げ出してしまったそうなのだ。
現在手の空いた者が全員で捜索に当たっているらしい。

「そんな大げさな」

「大げさなんて事はありませんよ！あの子は人造魔導師です。先天的にどんな能力を持っているかわかりません。もしそれが暴発でもしたら・・・・」

「だとしたら、すぐに大人数での捜索は止めとくんだな。それこそビビって暴発させるかも知れんぞ」

蒔風の言い分ももっともだ。
あまりの的確な言葉に、シャッハも「う・・・」とたじろいでしまう。

だが蒔風は笑顔で

「ま、気楽に探そうや。案外、そこらへんの庭でも散歩してるだけかもよ？」

といってポクポクと歩き始めた。

なのはとシグナムは目を合わせ、ハァ、とため息をつきながらその後を追っかけていった。

「シグナムさん、一体あの人は？」

「まぁ・・・その、気にするな・・・・」

――――――

蒔風が指をさす。
その先の茂みがガサガサと揺れ、その中から金髪の少女だ出てきた。
病院特有の服を着て、手には小さなウサギのぬいぐるみ。
そして左右で色の違う瞳には、外の世界への怯えがあった。

「おお、オッドアイって奴か？キレーな目ぇしてんな。どうよ、この子？」

「しゅ、舜君・・・・」

いつの間にかその子の背後にまわり、脇に手を入れて高い高いと持ち上げてからベンチに座らせる蒔風。

「なにしてたんだ？」

「えっと・・・・」

「ん？どうしたの？」

蒔風となのはが二人揃って少女に訊く。
だが少女にとって、これがほとんど初めての他人との接触だ。

緊張か、恐れか、うまく言葉が出てこない。

そんなことをしていると、二階の窓がきらりと光り、何かが少女の目の前までやってこようとした。

「逆巻け！！ヴィンデルシャフ「子どもがビビる登場はＮＧラリアットォ！！！」っとぉ！？」

それは武装したシャッハだった。

二階の窓から少女と接近しようとする蒔風たちを見て、危険だと思ったのかその間に入ろうとしたのだ。

で、シャッハがそうしようとしてたのを、蒔風がラリアットで阻む。

いきなりの攻撃にとっさに身を翻してかわしたのはさすがはシグナムの良き剣友と言ったところか。

きっと彼女からしたら、この子は大変危険なのだろう。

うんうん、と蒔風がそれを理解し、頷きながらもシャッハの肩を掴んで、少女に聞こえないように言った。

「シャッハさん、確かにあの子は作られた命かもしれない。その身に危険な何かを宿しているのかもしれない。だけど、今のあの子はただ外に怯える小さな少女だ。子どもになにかあったら、それを止めるのが俺らの仕事。人造だろうが普通のだろうが、そこに違いはない。でしょう？」

「う・・・む・・・・・・・・そ、そうですね・・・・すみませんでした。どうにも私は先に手が出てしまうようなので・・・・」

少ししょんぼりと肩を落としながら武装を解除するシャッハさん
それに蒔風が少し呆れ気味に聞いた。

「武闘派なのはいいけどさぁ・・・もしかしてあんた、バトルマニアか」

「え？いやですねぇ、私はただ模擬戦とか闘うのが好きなだけですよ？」

（（それがバトルマニアって言うんだよ））

少女を抱えたなのはと、がっくりとうなだれる蒔風が同じことを思った。
ああ、こりゃシグナムとも気が合うや、と。

「さて・・・気を取り直して・・・嬢ちゃん、名前なんてんだ？」

「・・・・・えっと・・・・・」

「ああ、俺は蒔風舜な？で、こっちのが」

「高町なのは。よろしくね？」

「わ、私は・・・・ヴィヴィオ・・・・・」

「ヴィヴィオ・・・・ふむ、良い名じゃのう。よろしくだ、ヴィヴィオ」

「よろしくね？ヴィヴィオ」

「・・・・・うん」

そんなこんなでなんとかお知り合いになる事の出来た三人。

余談だがこの後シャッハはシグナムに「バトルマニアってなんですかね？」と聞いていたらしい。

ーーー

車から降りる蒔風たち。
なのはの腕の中ではヴィヴィオが眠っている。
その寝顔は安心しきった子供となんら変わらない。

病院の警備では完全ではないため、六課で預かる事になったヴィヴィオを部屋に連れていくなのはと蒔風。

「で、この子の部屋どこにするよ？」

「一人部屋じゃかわいそうだし、かと言って何かあった時大丈夫なようにしたいからね」

「いくらなんでも男部屋には置けないだろ」

「だったら・・・・・」

と、とりあえずなのはとフェイトの部屋に連れていくことになる。

そして部屋に到着し、ベッドに下ろそうとしたそのとき、ヴィヴィオが目を覚ました。

「あ・・・なの・・・さん」

「ありゃ、なのさんじゃなくて、なのはさんだよ？」

「なのは・・・さん？」

「簡単に呼んじゃえよまったく。なのはでいいじゃん」

なのはとヴィヴィオのやり取りを見て苦笑しながら、蒔風がフォワードたちを呼ぶ。

これから今度ははやて、フェイトと共に聖王教会本部へと足を運び、何やら重大な話があるそうなのだ。
だからその間、彼らにヴィヴィオを見てもらおうという事になったのだが・・・・・

「え？・・・いっちゃうの？」

「そう、なのはさん、お仕事なの。だから・・・・・」

「え・・・ふえ・・・・・・・・」

「あ」

「やべ・・・」

「いっちゃやぁだぁ～～～～～！！ふえええぇぇぇぇぇえええええ！！！！」

「泣いちった」

「しゅ、舜くん助けてよ～～～」

なのはは困った顔をして蒔風に助けを求める。

しかし蒔風もどうしたものかと肩をすくめた。

ヴィヴィオにとって、蒔風となのはは最初にコミュニケーションをとった他人だ。

信じられる人は彼らだけだろうし、その人物が離れてしまう事を、なによりも恐れたに違いない。

得になのはは女性ということもあり、ヴィヴィオにとって接しやすいのだろう。

それがわかっているからこそ、蒔風も何言えばいいのか分からなくなってしまっているのだ。

しかし、その後蒔風の口から出てくる言葉はないだろう。

「まったく・・・・じゃあ選んでください。威嚇して泣きやませるか、威圧して泣きやませるか」

「もっとまともな方法ないの！？」

と、そこで部屋のドアが開く。
フォワードたちがやってきたのだ。

「なのはさん、来ましたよ～～って、なんですかこれ？」

「オオ来たか！！実は君たちに彼女の事を頼みたいのだ！！！」

「ええ！？こ、子供の相手なんてできませんよ！？」

「は、初めてですし、なにしちゃうかわからないですって！！」

「名前はヴィヴィオ。どーだヴィヴィオ？此処にいるおねーちゃんたちがみんなヴィヴィオの友達になってくれるってさ」

「「「「こいつ聞いてねえ！？」」」」

フォワードフル無視状態の蒔風。

というか、ついにこいつって言われたぞ。

だがヴィヴィオは新しい人間関係の響きに、心が強く引かれていた。

「・・・・ともだち？」

「そうだ。こんなに頼もしいものはない、最高の宝物だ。みんなが一緒に遊んでくれるってさ」

「・・・ほんとに？」

「ホントさ！・・・・（ふぅ・・・）・・・・大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

そう言ってなのはの足元に縋るヴィヴィオを抱きかかえ、蒔風が笑う。

「今まで一人でさみしかったんだよな？暗いとこばっかで怖かったんだよな？でも大丈夫。此処にいるみんなは、お前を一人にしないし、呼べばすぐに駆けつけてやる。だから今は少し我慢して、お仕事に行かせてくれないかい？」

そういう蒔風の言葉に、ヴィヴィオがコクン、と小さく頷いた。

その姿に、なのはは何かを感じていた。

それが何かは、わからないが。

「よろしい。じゃ、後はお任せしたよ、諸君」

「え？あ、はい！！」

「あ、でも私たち報告書とかまとめとかなきゃいけないんですけど・・・・・」

ティアナが思い出したように言う。

確かに、先日の戦闘はいろいろな事があった。

新たな敵勢力。その武装。

レリックは彼らの機転で奪われなかったが、非常に危ういところだった。そういった箇所の今後の対処法。

報告書にまとめる事は多いのだが・・・・

「ンなもんはすでに手を打ってある。現場の天馬さーん？」

蒔風がそういうと、モニターが現れてオフィスルームから天馬の中継がつながってきた。

『おう、こっちの作業はつつがなく進行してるぜ。なにも問題は』『うっわぁ!?なんでこんなとこに空き缶がっ!?』『白虎!!それはさっきワシがまとめた書類じゃぞ!』『見事にデータ吹っ飛んでますねぇ』『またやり直しですか』『・・・・白虎、あなたは能力以前に体質的に書類仕事に向いてないのでは?』・・・・問題ねえよ☆』

「ならいいな（プツン）・・・というわけだ!!安心してヴィヴィオと戯れてやってくれ!!」

「「「「今の不安材料しかなかったんですけど!?」」」」

確かに不安はあるが、そもそものスペックは高いはずなので問題はない、と言って蒔風はフォワードたちにヴィヴィオを任せてはやてたちと合流する。

そして向かうは聖王教会。

明かされるのは、六課設立の本当の理由。

この部隊は、何のために存在したのか、明らかになる。

ーーー

ヴィヴィオから離れられたのかを話し合っていた。

「子どもの駄々って大変だったでしょ？どうやったの？」

「それは・・・ってかフェイトさん、あなた経験おありのようですが？」

「フェイトちゃんはキャロにエリオもおるし、ちっさい姪っ子たちもおるからなぁ」

「その歳でお母さんかよ」

「ま、まだ若いです！！」

「いつかはフェイトおばさんって・・・いや、姪っ子いるから分類上は叔母か？」

「バルディッシュ」

《ぶった切ってもよろしいかと》

「うん、そうだよね」

「ごめんなさい、あなたまだ全然若いお姉ちゃんです。考えてみればここの四人同年齢でした」

「あはは、でもあのときの舜君、お父さんみたいでぴったりだったよ？」

「じゃあそーいうお前は母さんかっての」

「え？」

なのはがその言葉にポカンとする。

はやてもフェイトも、ああ、そうなるなぁ、とか言ってニヤニヤと笑っている。

瞬間、ボン、となのはの顔が赤くなり、からかうはやてやフェイトをポカポカと叩き始めた。

「お似合いやで～～？」

「やで～～？」

「もー、二人ともからかわないでよーーーー！！！！」

その間にもポカポカと叩いていくなのは。

それを見て蒔風が何かを危惧したが、すぐに「そんなことあるわけもない」と考えをまとめて三人についていく。

と、そこではやてが思いついたように言った。

「あれ？でも舜君、その姿のまま世界めぐってるんよね？」

「そうだが？」

「だったら舜君、肉体年齢は同じでも精神的にはうちらより上とちゃうん？」

「「あ」」

その言葉におお、と言って手をポン、と叩く蒔風。

しかし、フッ、と笑いながら髪を掻き上げ、笑いながら言った。

「俺の心はいつだって少年ハート。童心を忘れない、がコンセプト。

だから俺は「ついたでー」最後まで言わせてくださいッ（泣）」

目的の部屋の前につき、コンコンとノックして返事を待つ四人。
とりあえず蒔風は落ち込んだ。

というか、かっこつけて言う事じゃないだろ。

――――――

「クロちゃんやないけ！！！」

「やあ、他一名」

ズーーーン　ＯＴＬ

いきなり蒔風を落ち込ませるその人物の名はクロノ・ハラオウン。

フェイトの兄であり、今は管理局の提督だ。

「ほ、他一名じゃないもん！！！クロちゃんのバーカ！！！」

「その呼び方をやめろ!!全く君は・・・いまだにそんななのか!?」

ギャイギャイと勝手に話し始めるクロノと蒔風。

その姿に呆気にとられたこの部屋の持ち主である女性が、ためらいがちに聞いてきた。

「えっと・・・・クロノ提督、この方は?」

「まったく・・・・騎士カリム、紹介します。彼の名前は蒔風舜。私の古い友人です」

「初めまして。蒔風舜と言います。カリムさん?でしたかね」

「舜君、こちらは聖王教会騎士団騎士で、管理局の理事官もしとるカリム・グラシア中将や。機動六課設立に尽力してもろうた内の一人なんやで?」

はやてがカリムを紹介する。

なんでも彼女が管理局に入ってからもいろいろと世話になった人物のようで、頼れるお姉ちゃんといった関係なのだそうだ。

「あーー、なるほど。「夜天の書」は古代ベルカ式だもんな。じゃあ納得ですわ」

蒔風が勝手に納得する。

そこでカリムも、ああ！！と納得したような声をあげて蒔風を見た。

「はやてが言ってた「なんでもできる凄い人」ってあなたの事？」

「はえ？」

「はやてが部隊作りたいって言ったときに、あなたのこと言ってたもの。ね？」

その言葉にはやてがあはは、と照れながら頬を掻く。

「そやな。うちもなんやかんやで舜君に憧れとった。おっきな力持って、それでいて小回りのきく舜君がな」

とまあ、そのあと、簡単になのは達も自己紹介を済ませ、円卓に座って話を始める。

話の内容は、機動六課設立の秘密だ。

「舜君には話してなかったけど、私は昔っからこう言う部隊が欲しかったんや。管理局は大きな力を持つ大きな組織。それでできる事は多いけど、いざという時に小回りがきかへん」

「だからはやてちゃんは即時行動できる部隊を作りたいって言って、四年かけて作ったのがこの機動六課」

「って言うのは私たちも聞いてたんだけど・・・・」

「本当の理由があんのか？」

蒔風の問いにウン、と頷くはやて。
そしてその視線がカリムの方へと向く。

「その理由は私のレアスキルにあります」

そういって何枚かのお札の束を取り出すカリム。
それが彼女の周りにバラけ、短冊のように立って彼女を囲う。
そこには何かしらの文字が書かれており、何枚かが空中を滑るようになのはやフェイト、蒔風の前に飛んできた。

「私のレアスキル、預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）。これは最短で半年、最長で数年先の未来を詩文形式で書きあらわす、という物です。ただ、二つの突きの魔力がうかむ揃わないと発動できないから、年に一度しか書きあらわせないんですけどね」

そう言ってなのは達の前に出した札を戻し、説明を続ける。

「預言の中身は古代ベルカ語。しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度です」

「それでも管理局の高官は毎年、年に一度はこの予言に目を通している。大きな災害や事件に関しては的中率は高いし、教会騎士で中将の力としての信頼も厚いからな」

「ふーん。未来を見通す能力か」

その蒔風の言葉に、カリムがいいえ、それは少し違います、と首を振って答える。

「この能力はあくまでも、現時点での世界中のあらゆる情報を統括・検証して、現状で最も起こりうる可能性の高い事象を書きあらわす物です。だから」

「つまり、未来は変えられる、ってことか？」

「そうです」

「ちなみに地上本部のお偉いさんはこの能力がお嫌いでな。あんまし信用しとらんのや」

そこで蒔風がハイ、と手を挙げて質問をする。

「同じ管理局内でなんか分かれてんのか？地上とか、本局とかよくわからんのだが」

その質問に今さらか、と呆れるクロノ、頭を抱えるはやて、ポカンとしてしまうなのは達。
その各人の反応に、蒔風が少しうろたえてしまう。

「な、なんだよ？わかんない事あったっていいだろ！？」

「はぁ・・・じゃあ僕がわかりやすく説明しようか」

クロノが蒔風に説明し始める。

まず、時空管理局と言う大きな組織があり、これを一般的に本局と言い、すべての部署を統括し、次元世界の管理を行っている。
この本局は直属に航空部隊や次元高校部隊を持っており、多くの魔導師を有していることが特徴的だ。

で、本局には地上部隊本部という管理局の地上施設がある。

そしてその地上本部とと本局との仲が悪いのだ。

と言うのも、地上のトップからしてみれば「地上の平穏を守ってきたのは自分達」らしく、そこにいらない介入をされたくないのだそうだ。
まあ確かに陸と空とじゃ勝手も違うし、各々の思想も変わってくるだろう。

それに加えて大きな事件を扱う本局は多くの優秀な魔導師を抱え込んでおり、地上はいつだって人材不足。

これでが腹も据えかねると言うものだ。

「で、その地上の事実上のトップと言うのが、この人、レジアス・ゲイズ中将」

「いかつい人やねぇ。この人が地上のトップか・・・凄い人なん？」

クロノが出したモニターを指さしながら、蒔風がはやてに聞く。

「まあ・・・確かにすごい人はすごい人やで？入局４０年の大ベテランで、「地上の守護者」なんて呼ばれとる」

「しかし古くからの武闘派でな。そのため、過激な言動や姿勢、武力から、本局から危険視もされている。黒い噂も絶えない人だ」

その説明を聞いて、蒔風が少し考えてから

「ふーん。ようは頑固ジジイってことか。融通利かなそうな顔してんもんなーー」

と、気の抜けた声を出す。

それにズコッ、とこけるクロノだが、気を取り直して先に進める。

「それで、このレジアス中将がこの手のレアスキルが気に入らないらしくてな。カリムや、更に言うならはやての事も気に入らないらしい。その・・・なんだ」

「うちの事犯罪者の小娘って言いおったからなぁ、あのおっちゃん」

はやてがなんでもないように、それでも少し皮肉った顔をして笑いながら言う。

「はぁ～～～・・・・さいですか」

それに対して蒔風の返事は実に魔の抜けたものだ。
その蒔風に、フェイトがあれ？と言った顔をする。

「舜なら怒ると思ったのに」

「バーロー。主犯ではないとはいえ、はやてが関わったあの事件は間違いなく犯罪のそれだ。だったら、それを撤回させる言葉を俺は持たんし、する気もない。はやてはちゃんとそれを償い、そして今をしっかりと生きている。だったらそれでいいさ」

しかし、それでもまあ、と前置きしてから蒔風がにやりと笑う。

「俺の目の前でそんなことのたまったらどうなるかは見物だよな？」

その蒔風の顔に四人の顔が引きつる。

ああ、あのおじさん終わったな。

とまあとりあえず蒔風に管理局の事を簡単に説明し終え、元の話に戻される。

「それで騎士カリムの預言書に、数年前からある事件について書かれ始めた」

「それが、これです」

カリムが一枚の紙を出してきた。
それは清書されたもので、古代ベルカ語の詩文を、意味はそのままに訳したものだ。

～旧い結晶と無限の欲望が交わる地～
～死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る～
～死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち～
～それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる～

「これは・・・・」

「詳しい内容はよくわかりません。解釈の違いで、大きく変わってしまいますから。ですが、この予言は・・・・」

「なるほど、管理局地上本部が焼け落ちる、か。確かにこんなもの、信じる気にもならないだろうなぁ」

「ええ・・・案の定レジアス中将は信じはしませんでした。嫌っているレアスキルですし、何より自分の地上本部が焼け落ちるなどと露とも信じてはおらず、なにも対策を取ることはしませんでした」

「だが、こうして六課ができたってことは、信じた人はいたんだな？」

その言葉にクロノがうなづき、三人の人物をモニターに出す。

「そのためにまず、騎士カリムと僕、クロノ・ハラオウン。さらに僕とフェイトの母であるリンディ・ハラオウン総務統括官が部隊設立の後押しをしてくれている」

「さらにかの伝説の三提督も、非公式ながらうちらへの協力を申し出てくれとる」

更に映し出された三人に、なのはとフェイトが息を飲む。
蒔風だけはその三人がなんなのかわからず、また何も考えずにさらりと聞いた。

「このじいちゃんばあちゃんだれ？」

その質問になのはとフェイトがあわて始める。
なんでもこの三人、時空管理局の黎明期を支えた功労者たちらしく、とてもじゃないが一部隊に三人も協力を申し出ることなどあり得ないことなのだそうだ。

「へぇーーーッ。すっげえなぁ・・・その分、その予言の内容を危険視してるってことか」

「え、ええ。だからこそ、このチームが成り立ったのですよ」

「うちの要望と、管理局の要請が重なって出来たスペシャルチーム。そこに舜君まで来てくれたんやから、もう絶対大丈夫やな！！」

そのはやての言葉に、うんうんと大きくうなづく蒔風だがクロノは

そんなはやてを抑えるようにと止める。

「はやて、舜をあまり調子に乗らせるな。突っ走ってなにするかわからないからな」

「そこは私が止めるから大丈夫だよ！！クロノ君！！」

「なのはまで・・・・はぁ・・・・」

そこからは知り合い同士のお茶会になりそうであった。

が、そこで蒔風がカリムに一つだけ願い出た。

「カリムさん、あなたの預言書の原本、見せていただけますか？」

「え？」

蒔風が言うのは清書されたものではなく、古代ベルカ語で書かれた大元の詩文を読ませろ、というのだ。

「舜君、なんで？」

「前も言った・・・ああ、十年前だから覚えてないか？俺は言葉には強いんだよ。めぐるから」

その言葉になのはとクロノが思い出す。

たしかに、蒔風には世界をめぐるため、各世界で言葉が違うと不便だから自動翻訳能力がある、と

「そっか！！舜君に読んでもらえば一発だね！！」

「確かにそうだな・・・騎士カリム、読ませてやってはもらえないか？」

事情を知るクロノとなのはがカリムに頼む。

なにがなんだかわからないが、この二人が頼むなら、とカリムがすぐに取り出した。

それを手に取って蒔風が黙読していく。

その間になのはがフェイトやはやてにどういう事か説明していた。

それから数分後、蒔風がダァッ、と椅子の背もたれに寄りかかり、後ろに首を回して頭が痛い時のような顔をして言った。

「だ～～～めだ。大して意味変わらんわ」

そんな蒔風の答えだが、なのは達は当然内容は聞きたい。
そこで蒔風が読んだ感じをそのまま伝えた。

「管理局の古き時代の遺物と果てなき欲を持つ者の思惑が混じり合う。
そしてかつての王の翼が復活するだろう。
生となる体を死によって変えられた者が蠢き、陸の守護たる塔は崩壊する
その後、数多の海を駆ける船は墜ち、秩序は形を失う

・・・って感じだな」

「ホントにあんまり変わってないね」

「だろ?下手に意味が通じるような言葉になってるから、そこから突っ込んだ情報は入ってこないのよ。だからわかんのはここまでだ。だが、わかる事はいくつかあるな」

そう言って蒔風が立ち上がって指を立てて説明を始める。

「まず、管理局の遺物と果てなき欲望を持つ者。これがなんなのかはわからないが、後者はおそらく、スカリエッティで間違いない。科学者の好奇心は凄いからな。まさしく「果てなき欲望」だ」

「「かつての王」・・・っていうのは?」

「わからんな。「王の翼」もよくわからん。最初は翼人の事かとも思ったが、どうにもそうじゃないらしいし・・・」

「よ、翼人!?あんな伝説を、信じてるんですか!?」

カリムが驚いて大きな声を出す。
それにびっくりする蒔風だが、クロノの方を見て、何かを目で問いかける。

だがそれに対してクロノは首を横に振ってＮＯと意思を表した。

それに納得して、蒔風が話を進めた。

「まあそれは置いといて次だ。『生となる体を死によって変えられた者』っつーのはおそらくあの全身タイツ共の事だな。魔法とは違う力を併用していたから、おそらくは・・・・」

「戦闘・・・・機人・・・・・・」

「ありゃ、そういうの?あいつら。まあそれはあとで聞こう。どうやらあいつらが地上本部を焼くらしいな。あいつら、最低でも十人はいるみたいだし」

「あ、あれが十人・・・・・」

「最低限な。何人いるかはわからん。で。そっから始める次元世界

の秩序の崩壊。なるほど、面白いシナリオじゃないか」

「・・・・そうやね。何かのおとぎ話なら最高の出来やね」

「でも、これはほっておくと・・・・」

「現実になる可能性が高い。しかも、当の地上本部は無警戒と来た。こうなったら、俺たちで守ってやるしか無いねぇってわけさね」

その言葉にはやてが立ちあがり、拳を握って言った。
まるで自分はそうしなければならないと、自分に言い聞かせるかのように。

「そうや！！そのために機動六課は設立された。私たちはみんなを守る。私も、みんなを守らなあかん。だからなのは隊長、フェイト隊長、そして舜君。もう一度聞く。うちに付いてきて、くれるか？」

はやてが聞く。
これだけの事を聞いて、まだやってくれるかと。
しかしはやての顔を見るに、どのような返答が返ってくるかわかっ

ているようだった。

「水臭いよ、はやてちゃん。私たち、友達じゃない」

「そうだよはやて。私たちは助け合う仲間だよ？」

「ってか、俺はもう関わるっつっただろーが。嫌だと言っても俺はやるから、覚悟しろよ？」

その言葉に、はやてが「ありがとーーー！！！」と言って三人に飛びついていく。
その仲のよさそうな四人に、クロノが笑った。

と、そこでカリムが質問をしてきた。

「えっと・・・それで舜さんは本当は何者なんですか？」

「「「「「え？」」」」」

「だって、おかしいじゃないですか。管理局員なのにその中身や伝説の三提督を知らない。そのくせ、翼人なんてアルハザードの時代でも伝説と言われていた翼人の事を知っていたり、古代ベルカ語をそのまま読めたり・・・・・はやてに最初にもらった六課メンバーの書類にも彼のことは書いてなかったわ。本当はただの局員じゃないんでしょう？」

その問いになのは達一同が「あーーーー」と目線を逸らしていく。

だがカリムは絶対に訊きだすつもりだ。

それ眼光に、蒔風がついに折れた。

「わかりましたよ。お話しします。ですが、この事は他言無用でお願いしますよ？世界にいらん言い伝えとか作りたくないんですよ」

そうして蒔風が話を始める。

最初こそ信じられない、いや、信じる気にもなれなかったカリム。

しかしなのはやフェイトの持っている昔の映像や、はやて、クロノの証言。さらには蒔風が目の前で開翼までしたのだから、流石に信じざるを得ず・・・・

「す、凄いです！！！本物の翼人をこの目で見られるだなんて！！！！は、早く自慢しなきゃ・・・シャッハ！！シスターシャッハーーーー！！！！！」

とかキャラ崩壊一直線しそうになるほどにまで興奮してしまったカリムさんでした。

「ダアアア！！！おちついてカリムさん！！！だから嫌なんだ！！チクショウ！！前の翼人誰だよ！！！あんたが伝説残すから俺がこうやって苦労するんじゃないかーーーー！！！！！」

聖王教会に蒔風の声が木霊する。

結局、シャッハにも蒔風のことは知られる結果となってしまった。

「はぁ・・・ま、いっか」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～予言の書～（後書き）

アリス「機動六課設立裏話編ですね」

それとヴィヴィオとのお知り合いの話。

ア「にしても蒔風でも予言は読み切れなかったんですね」

そうですねぇ

なまじ読める字に翻訳だから余計な情報は入ってこないんですよ。

完璧に読めないような言葉だったら単語の意味だとかも入ってくるんですけどね。

ア「どんな感じなんでしょう？」

そうだな・・・・・

古文の文章って、一応発音的には読めはするけど、意味は全くわからないでしょう？

あんな感じですね。

ア「ま、管理者の私なら余裕ですけどね」

作者は無理だな、古文。

マジで無理。

ア「そして壊滅的に書類仕事のできない白虎」

白虎は苦手なわけではないです。キチンと出来ます。
でもなぜかああうまくいかないんですよね。

ア「書類仕事限定の不幸体質？」

そうそれ！！

ア「次回、蒔風のある一日」

本編タイトルとがぶってる気がするけど、あんな事件は起きませんよ！！

ではまた次回

もう〜、フェイトママちょっと甘いよ

お知らせ

もしかしたら明日は更新できないかもしれません。
その場合、前回もお知らせした通り日付が変わった時点で投稿不可といたします。

申し訳ございません

聖王教会から帰ってきて、機動六課隊舎内

四人はそのロビーまで一緒に歩いてきて、これから自室に帰ろう、というところだ。

と、そこではやての足が止まる。

それに気づいて三人がはやてに振り返った。

「はやて、どうしたの？」

フェイトの問いに、少し俯くはやて。

しかしすぐに顔を上げてなんでもない、と言う。

「ちょっと疲れてしまったみたいやな。みんな、今日はありがとうな」

「いいんだよ」

「ゆっくり休んでね？」

なのはとフェイトが手を振って自室に戻る。

部屋でヴィヴィオが待っているはずだ。

少し足速になのはとフェイトがいなくなる。

だが、蒔風だけははやてを見つめてずっとその場にいた。

「ん？舜君、どしたん？」

何か話でもあるのかな？とはやてが蒔風に聞く。

そこで蒔風がため息を吐いてはやてに言った。

「ちょっとな・・・はやて、本当は何が言いたかったんだ？」

「え？」

「お前は疲れたぐらいじゃ泣き言は言わんだろが。な～んか思い詰めてるな？」

蒔風がズバズバと聞いてくる。
それにはやてが、あちゃ、という顔をして舌を出した。

「わかる？」

「わかるわ。で？どうした。あいつら巻き込んだのをまだ引きずってんのか？」

その蒔風の問いにコクリと頷いて答えるはやて。
そして、あんな、と前置きをしてから、はやてが話し出した。

「今回の事件はほんまにやばいことになるかもしれん。事件内での危険はもちろん、管理局内での立場的にもや。だからなのはちゃんとフェイトちゃん、さらにはフォワードのみんな、シグナム達にも迷惑かけるかもしれへん」

「んなこと、あいつらはすでに覚悟してのことだろ」

「・・・・・そうやね。でも、だからこそウチは守らなあかん。ウ

チにとってなのはちゃんもフェイトちゃんも命の恩人やし、大事な親友や。ウチはあの二人を守ったるんや。守るためなら・・・・」

「そりゃ・・・・壮大な覚悟だな」

「あはは、そうやなぁ。でも、ウチの命はグレアムおじさんに生かされ、なのはちゃんたちに助けられて、ヴォルケンズのみんなに守ってもらった命や。だから、私の命は・・・「それ以上いうなら俺は貴様の敵になるぞ。八神はやて」・・・・ッ！！」

蒔風の眼光がはやてを射抜いていた。
明らかな敵意を孕んで。

「簡単に命を捨てるような事を言うな。確かに、お前はいろいろと助けられた人間だ。だが、その命を蔑ろに扱ったら、あいつらは何のためにその命を助けた？はやて、お前の命はお前の物だ。だがなだからといって捨て身など許さない。それじゃぁ・・・・・・・・・・・・・・・俺がなんのためにリィンフォースを消したのか、わからないだろ」

「・・・・・・」

「お前は自分の幸せを追求しろ。命を捨てるな。命を生かせ。誰か

を助けるお前自身が、まず救われなくちゃ意味がないだろ」

「でも・・・・・ウチがかけた迷惑は・・・・・・罪は・・・・・・まだ許されない・・・・」

「馬鹿だなぁ」

「・・・・は？」

「罪は赦されるものじゃない。購うものだ。それにお前、「償う」って行為をするっつーことは、お前さん、赦されたいんだろ？」

「・・・・・！！！」

「罪は背負うしかない。そして、それは生きてなくちゃ出来ないことだ。お前は死に恐怖出来るんだろ？つまりは、きちんと「生きている」って事だ。だから、生きてくれ。俺の前でそんな悲しいこと、言わないでくれよ」

蒔風が寂しそうに、呟くように言う。

「死をしっかりと恐怖しろ。それがお前の生きる証だ。
罪のために命をかけるな。命をむやみに消費しないでくれ。

消えていった、あいつのためにも」

蒔風がお願いだ、と頭を下げる。

もしここではやてが強い願いで「それでもやる」と決心してしまえば、蒔風は彼女に対し、「リィンの意思を潰す者」としての意識を持つことになる。

そんなのは嫌なのだ。
蒔風はそんなこと望んでない。

だが相手が「願い」で来るならば、蒔風はぶつかるしかない。

だから蒔風も、「お願い」をしたのだ。

決して命を、罪のために投げ出さないでくれ、と。

その蒔風にアワアワと慌ててしまうはやて。

だが、蒔風は本気だし真剣だ。

彼女の残したモノを、こんな形で失う事など、彼の想いが許さなかったのだ。

「はぁ・・・・わかった。だから頭上げてぇな」

「マジか!?」

はやての返答にガバッ、と起き上がって肩を掴む蒔風。

それに困ったような顔をして、はやてがうんうんと頷いた。

「わかったわかったから・・・・・なあ舜君」

「なに？」

「うちは・・・・赦されてもいいんかなぁ？」

そう聞くはやての目は、救いを求めるような、拒むような、どちらとも見えるような光を宿していた。

だから、蒔風はこう言った。

思いっきり嫌がらせをするように。

「そんなことは知らんが、とにかくお前は幸せになれ。罪を償うだ？そんなん、お前の気が晴れるくらいじゃねーか。だからとにかく楽しく生きろ。お前は他人を差し置いて自分が幸せになるのを嫌う。だったらお前は幸せになれ。そうでもなきゃ、罰とは言えんなぁ」

その言葉にポカンとするはやて。

そして、蒔風がさらに言う。

「んで、そこで余裕ができたら助けてやれ。お前の幸せ、分けてやれ。お前にしか伝えられない事が、あるはずだ。たとえつらい事があったとしても、未来は可能性に満ちているってな」

「舜君・・・・・」

「未来の可能性は「人の願い」だ。お前は一人の世界で最も幸福な融合機の命をその身に宿しているようなものなんだ。そいつを不幸にさせんなよ？」

「うん・・・わかったよ」

その返事に、蒔風ははやての目を見て、うん、とうなづいて踵を返す。

「その眼なら「それでも私は～～」なんてことは言わなそうだな。安心して眠れるよ」

「ょぅゅーわ。行きも帰りも、車ん中でしっかり寝てとったくせに」

「俺はいつも眠いの。眠気にはどーにも勝てん。ふぁぁぁ・・・・おやすみ～～～～」

そう言って蒔風が自室に戻る。

そうして、はやては蒔風のその背中に、敬礼を返して送った。

精一杯の尊敬の念と、感謝の気持ちを込めて。

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

翌日、蒔風が朝起きると、時間は早朝。
着替えているエリオが目を見開いて信じられない物を見たような顔になっていた。

朝に弱い蒔風が、早朝訓練なんてものに出られるのは今までだって

両手の指の数くらい。

だから蒔風本人も、時計を見て一瞬固まった。

そうして「いやいやまさか」と頭を振ってもう一度時計を見る。

しかしさっき見た時間から十秒たってるだけだった。

そうして蒔風の表情も固まった。

「お、おはようございます」

「お、おう・・・おはよう・・・・」

おかしい

早起きしただけでなんでこんなに緊張してるんだ？こいつら

しかしまあ、このままいても仕方ないので蒔風が立ち上がって朝の仕度をする。

起きてから歯を磨き（クリ〇クリーン）、顔を洗い（お湯でヌクヌクと）、着替える（たまに前後間違える）。

そして小さいコップに炭酸ジュースを注いで一気に飲み干した。

そう、この男、朝から炭酸飲む男なのである。
と言っても少量だが。

本人いわく「朝のなまった口ん中が一気に覚醒する」んだそうだ。

そうして訓練場へと赴く二人。

訓練場に着くとスバルやティアナ、キャロは「あ、今日は早起き出来たんですね」と至って自然な感じで接してきたが、蒔風の朝の弱さを知っていいるなのはやフェイト、ヴィータにシグナムは本気でビビっていた。

「きょ、今日は何か起きるの・・・・・？」

「みんな、舜の暴走には気をつけよう！！！」

「「おう！！！」」

なんだか不本意な形で一基団結する隊長陣に、蒔風がなんとも言えない苦笑いをして周囲を見渡す。

すると、そこに見慣れない顔を一人見つけた。

「おや、初対面の人・・・・・いや、ヘリ襲撃のときにチラッと見たなぁ・・・・たしか・・・・・・ギンギラギンにさりげなく？」

「ギンガです（汗）！！！ギンガ・ナカジマ一等陸士です！！」

ギンガが蒔風に自己紹介する。

スバルの姉で、格闘技「シューティングアーツ」の師であるそうだ。

「今回の事件で、陸士１０８部隊から出向してもらうことになったの」

「ほほ～」

とまあそんな感じで訓練開始。

とりあえずギンガの力量と、スバルの成長を見てもらおう、ということで二人で軽い模擬戦をやってもらう。

「おお～～～！ウイングロードが走り回るとかっけぇな！」

「舜・・・・動きも見てやれよ・・・・・」

だが全体的に見て、やはりまだスバルよりギンガの方が上手であるか。

しかし、だからといってスバルが負けてるわけではない。
実際、ギンガの一撃をシールドで防いだり、痛烈な一撃を入れたりと善戦していた。

だが最後の最後、止めの一撃で、スバルの拳よりもギンガの拳が速さで勝利を収めた。

拳を振りかぶるスバルの目の前に、ギンガの拳がピタリと止まっていて、勝敗ははっきりと決しのだ。

と、いう模擬戦を見ながら蒔風となのは、フェイトはまた別の話をしていた。

「なのはがヴィヴィオの保護責任者？」

「で、私が後見人」

どうやらヴィヴィオを守る立場として、なのはとフェイトが登録されたのだそうだ。

蒔風がそれはいい、とうんうん頷いて賛同する。

「つか、そのまま引き取っちまえばいーじゃん」

「うん・・・でも、もっといい引き取り先がいるかもだし・・・」

「もうなのは、ヴィヴィオ、泣いちゃうよ？」

「そうだぞ、なのはママ。フェイトママの言う通りだ。泣いちゃうぞ？」

「舜君・・・・その呼び方は・・・・」

「舜からだとちょっと・・・・」

蒔風の反応に少し大きな汗をたらして困る二人。

とかやっていると模擬戦を終えたスバルとギンガが地面に降り、全体訓練が始まった。

「じゃあ今日はみんなで模擬戦。隊長陣四人対フォワード五人！」

「え？」

そのいきなりの無茶振りにギンガが半笑いで呆気に取られてしまう。

「時間内逃げ切るか、デバイスで決まった一撃が入れば終了です」

「最近はよくやるんですよね」

「いつもこんな感じだよ？ギン姉」

「え?はい!?ま、マジですか・・・・」

「さあ!みんな、所定の位置につくわよ!ギンガさん、よろしくお願いします!」

「・・・・ふう、わかったわ。全力を尽くしましょう!!」

最初こそ呆気にとられたが、やる気を見せたギンガになのはが頷き、手を挙げた。

「じゃあみんな!スタート地点につい「よっしゃ!それならオレもやるぜ!!」機動六課前線隊員総員、全力全開でやるよ!」

「おめーら油断は死に繋がると思えッ!!」

「「「「Ｙｅｓ　Ｉ　ｍａｍ!!」」」」

「戦わなければ生き残れんからな!!」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッ!!」」」」

隊長陳とフォワードメンバー、計九人が肩を担ぎあって円陣を組んで気合いを入れていた。

ギンガはなんだかわからないまま巻き込まれたが、他の八人の顔は戦場に向かうそれに変わっている。

「あれ!?みんな敵!?どうしてこうなった!?」

狼狽する蒔風だが、九人は所定の位置に向かい、完全に蒔風と戦うつもりだ。

「チクショウ!こういうことかよ!!」

「ヴィータ副隊長!私、い、生きて帰れるんでしょうか!?」

「スバル!不安になること言わないでよ!!」

「キャロ！絶対に前には出ないで！！フリード、キャロは任せたよ！」

「エリオ君、死なないでね！？」

「キュクッ！！」

「我々が前に出ねばならん！」

「そうだね。行くよ！フェイトちゃん、シグナムさん！！」

「えっと・・・・皆さん、必死になりすぎじゃ・・・・」

「「「「「「「「「ギンガ（さん／ギン姉）は死にたいのか（ですか／の）！！？？」」」」」」」」」

ギンガがあまりの必死さに疑問を挟んだが、八人の言葉と形相にビビって、ヤバイのか・・・・と気を引き締めた。

「じゃあゴングを・・・・・」

「待て！鳴らす前にもう来てる！！」

「な、涙を流して突っ込んできたぁ！？」

「総員戦闘開始！！」

「いい度胸だお前らぁァァァ！！！」

あまりの対処に涙してしまった蒔風が飛んできて、模擬戦は始まった。

ーーー

「み、みんないつもこれを・・・・・・・？」

「きょ、今日のは・・・・・・・・イレギュラーですから・・・・・・・・」

「舜さん・・・・青龍たち出してくるなんて卑怯です・・・・・・・」

「うる・・・・せぇ・・・・・・そっち九人掛かりのくせに・・・・・こっちが・・・・・どんだけ苦労したと・・・・・」

模擬戦を終えた後、訓練場にいた全員が地面に倒れ伏していた。

誰もが息を荒くして、肩を上下させている。

口なんかはだらしなく開きっ放しだし、立ち上がろうなんて気にもならないほど疲労していた。

「これは・・・・午前の訓練は・・・・・出来ないか・・・・・・？」

「そう・・・・・だね・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・」

いつもだったらどんな時に出動があっても差し支えないようにギリギリまで訓練をするのだが、今は一人残らず疲弊してしまっていて、そんなどころではない。

だから今日の午前訓練はお流れ、という事になってしまいそうだ。

「まったく・・・・舜君、急に言い出すんだから・・・・・」

「わりぃわりぃ。でもさ、楽しかったな！！またやるか！？」

「勘弁してください」

「もう許して」

「フリードが死んじゃいます」

「いい加減にしろや寝起き魔人」

蒔風の提案に一斉にダメ出しをしていくフォワード四人。
というか一名、遠慮容赦のないツッコミしたぞ。

そんなこんなで皆が立ち上がって朝御飯に行くか、と食堂に向かおうとする。

そうしていった時、ヴィヴィオが寮母のアイナと共になのはのお迎えに来ていた。

「なのはママ～～～フェイトママ～～～」

「あ、ヴィヴィオー。転んじゃうから気をつけてね～～～？」

ヴィヴィオがトテトテとなのはの元へと走ってくる。
そのヴィヴィオになのはが気をつけるように大きく声を出した。
それにつられたのか、蒔風も一緒になって声を出す。

「コケんなよ!?絶対にコケんなよ!?いいか絶対だぞ!?」

「だいじょうぶあっ・・・・・・」

そこでヴィヴィオがこけた。
コテンとこけた。

蒔風の顔がにやりと笑う

「な、何というテンプレ・・・・・・しゃーないな・・・・ったく」

「舜君待っ・・・ってって言っても聞かないんだからもう・・・・」

転んでしまい、涙ぐんで泣きそうになってしまうヴィヴィオに近づく蒔風。
なのはとしてはあのまま待って、ヴィヴィオが自力で立とうとするのを促そうとしていたのだが。

ちなみにフェイトはすぐに寄って行った蒔風を見て、うんうん、と感心していた。

ヴィヴィオの前に来て、しゃがむ蒔風。
そこでどんな言葉をかけるのか、なのはとフェイトが気にしていると・・・・

「立て！！立つんだヴィヴィオーーーー！！！！！ほら！！がんばれよ！！！諦めんなよ！！もっと熱くなれよ！！！！！」

なんか熱血やってた。

しかもそれに合わせてヴィヴィオも立とうとしている。

が、そこは子ども。
すぐに再び地面にペタンと倒れてしまう。

だが、その体を蒔風が両手でヒョイ、と持ち上げてから高い高いみたいにしてよくやったとヴィヴィオを褒めた。

「よく泣かずに立とうとした!!その立ち上がろうとする意思!!それがなくして何が強さか!!よしよし、今は立てなかったが、次は立とうな?頑張れるか?」

「・・・・・うん」

「オッケーだ!!」

グッ、とサムズアップを決まる蒔風に、ヴィヴィオも手をグーにして頑張る、と意思を表す。

そうしてヴィヴィオを降ろし、服をはらってあげてからなのはの方へと行かせてあげた。

「舜君・・・なんでそんなうまくやれるの？」

「簡単な事。オレもまた、ガキだから」

そう言ってシレッと答える蒔風に、フォワード陣はポカーン、とするばかりだ。

「しゅ、舜さんって・・・・」

「案外保育士とかに向いてるのかもしれないわね」

「え？僕はずっとお兄さん的な感じなんですけど・・・・」

「エリオ君、舜さんと同じ部屋だもんね」

「スバル、あの人誰なの？」

「なのはさんのお友達で・・・・えーーーっと・・・・」

スバルがうまく説明しようとする。

舜さんが言い出してないってことは言わない方がいいのかな？とか考えていると、蒔風が行こーーーぜーーーー、と皆を呼んで食堂へと

行こうとする。

まあ確かに朝っぱらから激しい模擬戦やって、腹もすいているのだろう。

そう言って先に行こうとする蒔風に、ヴィヴィオが待ってーーと声をかけた。

「ヴィヴィオも行くーーーーー！！待ってーー翼の人ーーーーーー」

その言葉に、蒔風の歩みが止まった。

そして振り返り、ヴィヴィオを見る。

当のヴィヴィオはどーしたの？と蒔風を真っ直ぐに見て、小首を傾げてきている。

「ヴィヴィオ、どうして俺が「翼の人」なんだ？」

蒔風が優しくヴィヴィオに聞く。
それにえへへーと笑いながらヴィヴィオが元気に答えた。

「えっとねーーー、なんとなくそんな感じがしたの！！しゅーは翼の人ーーーー」

その言葉に蒔風の口元がヒクヒクと動く。

（な、なんちゅう子供だよ・・・感性だけで翼人を当てる？元になった人物・・・興味が出てきたな・・・・）

その後ろではなのはとフェイトも驚いていた。フォワード陣も同様。
シグナムやヴィータなんかも開いた口が塞がらない状態だ。

「え?え?翼の人って、どういう事?スバル?おーい?」

そんな中ギンガだけは話についていけていなかった。

その現状を見て蒔風が、はぁ、とため息をついて、とりあえず飯にするか!!と皆と共に改めて食堂へと向かった。

その道中、蒔風がスバルに教えていいよと言ったので、スバルがギンガに蒔風の事を話した。
そこからはギンガの質問攻めだ。

しかし蒔風としては何度目になるかわからない話。
もうめんどくさいとすべてスバルに投げ出し、そのスバルも困ってしまう。

まあ何とかティアナやエリオが説明し、ギンガも納得してくれたようだったが。

「スバル、お前本当に苦手なんだな、そういうの」

「そ、そんな目で見ないでください！！わ、私はもっといい取り柄があるんです！！！」

「そうだな。とりあえず闘う時どうするか説明してみようか？」

「バーーッ！！っと行って敵を見つけてドカンです！！！！」

「・・・・・・・」

「な、何か言ってくださいよぅ！！！！！」

「そーいえばなのはママとフェイトママはヴィヴィオのママだけど、しゅーはヴィヴィオのパパなのー？」

「ヴィヴィオ、しゅーじゃない、舜だ。それからオレはパパじゃない。おにーさんと呼べ」

「パパー？」

「違う。おにーさんだ。皆の兄貴だ」

「パパ！！」

「だから・・・・」

「パーパー♪」

「ＯＴＬ」

「舜君、諦めなよ」

「うるせえ母さん」

「かっ！？」

「そうなっちまうから嫌なんだよ。お前母さん、俺父さんとか、どんな状況だよｗｗｗ」

「しかも二人この状況だと二人も侍らせてますもんね・・・・・」

「だから嫌なんだ。そもそも、オレに恋愛対象なんて存在しない」

「好きな人とかいないんですか？」

「いないねぇ・・・そもそも、俺は人からも生物からも外れた身だ。だからこそ人間が大好きだし、人を愛している。誰か一人を特別に愛するなんて、俺にはできないんだよ」

「舜君、それって・・・・・」

「だからヴィヴィオ、俺の事は・・・・・」

「舜パパ？」

「いやだからな・・・・・」

「でもそれだと語呂悪いですよね？」

「おいスバルお前」

「舜お父さん？」

「そっちもどうかしらね」

「でも舜さんって、頼れるお兄さんって感じですよね？」

「でもヴィヴィオからしたらやっぱりお父さんなのかな？・・・・・・舜さんの名前って、なんかやりにくいですね」

「お前ら人の名前勝手に持ち出しといてひどいなおい！？あと！！俺はお父さんじゃない！！！おにーさんだーーーーー！！！！」

to be continued

中途半端に始まって中途半端に終わってしまってすみませんでした
ーーーーーー！！！！！

アリス「区切りが変な所になってますもんね」

無茶して投稿しようとした結果がこれだよ！！！

ア「毎日更新はきついですか？」

そうかもしれません。
しかも年の瀬

私もいろいろと忙しいですから・・・・・・
年明けにまたレポート期限あるし。

だから・・・・

ア「ま、まさか・・・・・・」

すみませんみなさん・・・・
まさかこう言う時が来てしまうなど、思ってもなかったのですが・・
・・

ア「やめてーーーー！！！」

不定期更新になってしまうかもしれません。
いつ更新されるか、ドキドキですね！！！

ア「あぁ～～～～～～！！！！」

皆さま申し訳ございません。

もしかしたら不定期更新は一カ月ほど続きます。

冬コミ中は更新できないかもしれません。

ですが、これからもこの小説をよろしくお願いいたします！！！！

ア「次回、蒔風のそんなある日の続き」

ではまた次回

なのはママは厳しすぎです

模擬戦が終わって皆で食堂に到着し、各々が自分の朝食を手に取って座っていく。

「いただきます！！！」

「いただきまーーす！」

テーブルの割り振りとしては

フォワード&ギンガ
なのは・フェイト・ヴィヴィオ

そしてなぜか一人でテーブルに座った蒔風だ。

「なんで舜君そっちいるの？」

「なんだろうか・・・・嫌な予感しかしないのでねぇ・・・・・・」

そんなことを言いながら蒔風がふと、フォワード陣のテーブルを見る。

そこには山もりの食糧があった。

え？もうご飯とかそんな言い方じゃおかしいので「食糧」ですが？

それにガッついていくスバル、ギンガ、エリオ。

そう、ギンガもまた、スバルのようにたくさん食べる子だったのだ。

しかし真に恐ろしいのはギンガ一人しか増えてないのに置かれている食糧はいつもの五倍に増えていたことであろう。

「あれ・・・食い切れんのかな？」

「スバルとエリオもたくさん食べる子だけど、ギンガはもっと食べる子だったんだね・・・・・」

別のテーブルのため、背中合わせで会話をするなのはと蒔風。

と、話しているところにドドドドドドドドッッ！！！と走ってくる音がしてきた。

どうしますか？

・振り返って確認する

・めんどくさそうになるのでスルー

・「たぬきーーー」

「たぬきーーーーー」

「誰がタヌキじゃボケエエエエエエエエエエ！！！！」

「ナイスミドルッツ！？」

選択肢が頭に浮かんだ気がして、蒔風は好奇心に勝てなかった。

その言葉を口にした瞬間、音の元であった八神はやての素晴らしいケンカキックが座っている蒔風の横っ腹に命中し、その体が吹っ飛んでゆく。

何故選んだし。

「グオオオオオオオオオッ!?ヒール!ヒールがッ!?ハンマーのようだッ!?」

バタバタと床を悶える蒔風、見下ろすはやて。

そんな床には蒔風の朝食が散らばって・・・・・いなかった。

「・・・健康ゼリー・・・・いただきます・・・・・」

「味噌汁は貰ったぁ!!!」

「やったぁ!!アジの開きぃ!!」

「白米、シンプル最高!!」

「納豆は健康にいいんですよね」

いつの間にか出てきた強奪集団（せいりゅうたち）が宙に舞う朝食をキャッチ、そして食ってから消えていった。

それを見届けて、はやてにキャロがおずおずと聞いてきた。

「や、八神部隊長・・・・どうしたんですか？」

その言葉にはっ、と我に返ってはやてがここに来た理由を思い出した。

「そ、そうや！！！皆聞いて！！！実は六課の食料代が・・・・・」

「ゲほっ・・・・それなら今朝来たギンガがメキメキとエンゲル係数を上げてますが」

「いやあああああああああああああ！！！！！！（ドスッ！！）」

「目が！！！私の目がアアアアアアアアア！！！！！！！」

再び地面を転がる蒔風、取り乱すはやて。
その割には眼への攻撃が的確だった気がするが気のせいだ。

ＵニニニニＵ（　＾ω＾）ニつ　＜ニ、三分後！！

「ふう・・・すまんな、舜君」

「いやなに、身体貫かれるよかマシ」

落ち着いたはやてが回復した蒔風に謝ってからやっとのことで本題に入る。

「六課（ウチ）の食費が大変なことになってます」

「いまさらか」

「やっとですね」

「むしろ良く持ち堪えましたね」

「はやてちゃんはよくやったよ」

蒔風の言葉に、ついに来たかとティアナ、感心するキャロ、ねぎらうなのは。

その言葉にはやてがなのはに縋りついてさめざめと泣いていた。

「ううう・・・あ、ありがとうなぁ・・・・（T△T）

いやね？エリオの食べっぷりはフェイトちゃんから聞いた事あったし、スバルの事も初日で知った。だから食費分の予算を先に割り当てて余裕はあったんやけども・・・・・」

「なるほど。毎日の訓練で日に日に食べてく量が増えていったと」

「そうなんよ・・・そこでギンガまで来たら大変なことに！！！」

「「「す、すみません・・・・・」」」

そんな話に当のスバル、ギンガ、エリオが委縮してしまう。

それを見て蒔風が肩を叩いて気にすんな、と笑って見せた。

「はぁ・・・おにーさんに任せなさい。金の問題ならどーにでもなるから」

「ぎ、銀行強盗！？」

「詐欺はいけませんよ!?」

「いや?でもここで私が事前に犯罪を食い止めれば執務官試験に有利かも・・・・・」

「ティア!?私ティアが何を言ってるのか分からないんだけど!!??」

フォワード四人が次々とおっ立てる推測に肩と頭を下げ、頭をフルフルと振って蒔風が墜ち込んでいた。

「しゅ、舜君・・・・」

「ほ、ほら!!つまりなんでもできるって頼られてるんだよ!!!」

「そんなことより金や。持っとるんだったらはよ出しぃ」

励ます三人?の声に少し元気の出た蒔風が説明を入れる。

「言葉の事はお前らも知ってんな?それと同じで、世界ごとにお金も違ってくるだろ?だから俺には各世界に行った際それなりの金が支給されてんの」

「それってどれくらいなん?」

そのはやての質問に蒔風が首をかしげて「さぁ?」と言いながら財布を取り出す。

すると出てくる出てくる。
ひっくり返して財布を振ると、お札がヒラヒラと。

その量は明らかに財布の許容量を超えており、異次元にでも通じているのかというほどだ。

ゴクリ・・・・・・

「誰かの唾を呑む声が聞こえた。そして振り返るとそこには凄い目をしたはやてがいた」

「なんでナレーション風!?」

「ま、とにかくこれだけあれば食費はどうにかなんだろ。ってか、みんなで食いに行くのもいいかもな」

「私焼き肉!!!」

「私は旗の刺さったランチ食べたいです!!」

「前に部隊長が言ってた「オスシ」って食べてみたいですね」

「ラーメンとかカレーもいいです!!!」

「お前らもう食う気満々かコラ！？」

なんだかフォワード陣も蒔風に容赦なくなってきてる気がする。

と、そこで蒔風がふと思い至ってはやてに訊いた。

「なあ、今はこれでいいとしてさ、実際どうするつもりだったの？」

確かにそうだ。

蒔風が持っていたからよかったものの、持ってなかったらどうするのか。

「そこは・・・・六課がちゃんとした実績さえ上げれば予算なんかウハウハや！！」

「でも確か一年間の実験部隊だったよね？」

「うぐ・・・・」

「ヴィヴィオ、よく見ておけ。これが「取らぬ狸の皮算用」って言うんだ」

「たぬきー？」

「タヌキだ」

「そこ、いらんこと言わんといて」

「そういえばこないだ査察もあったんだよな？」

「そうやね。地上本部のレジアスのおっちゃんはどーにもこの部隊を潰したいらしいんや」

そう言いながら自分も朝食をとるはやて。
うーむと蒔風が腕を組んで考え込む。

「あーあ。あのとき来た女の人って、目つき怖かったもんなァ」

「オーリス・ゲイズ三佐やね。きっとうちのあら捜しでもしとったんやろ」

「お前らに押し込められて大変だったんだぞ？あんとき」

「だって舜くんいたらなにしだすかわかんないし」

「そもそも舜君の入隊はイレギュラーやから、いらん事されたら困るからなー」

「どんだけ信頼ないんだよ・・・・・」

「じゃあ会っていたらどうしたんですか？」

「フッ、幻術を見せて堕とします」

蒔風が手をワキワキ、顔をニヤニヤさせながら言い放った。

「ほう・・・どうやってや？」

「ありとあらゆる辱めを受けさせてから完全な○○○にして、△△で■■を・・・・・・」

「ダメーーーーー！！！！！」

蒔風のその発言になのはが大声をあげて止めさせる。
後ろの方では困った顔をしてフェイトがエリオとキャロの、はやてがヴィヴィオの耳を塞いでいた。

「耳キーンだ・・・・じゃあそうだな。もっと温和にして、適当に引き付けるか？他の世界のやつの力でも使えば簡単に・・・・・」

「お？色落とし？舜君も多彩やなぁ・・・・」

「それもダメーーーー！！！！」

更に提案する蒔風に、再び声をあげてやめさせるなのは。
フェイトはもう呆れていた。

「しゅ、舜君！！そんな不埒な事はダ、ダメだよ！！！！」

「おぉう・・・そうかー。確かにそれはいかんな。責任取れなんて言われても困っちゃうもんなー」

その発言にホッ、とするなのは。

胸をなでおろして、蒔風に言う。

「ダメだよ?人の想いを軽んじちゃ・・・」

「おっと、そいつは迂闊すぎた。すまんな。にしても、お前やけに必死だったな?どうした?」

「え?あれ、なんでだろ?」

なのはのきょとんとする顔。
それを見て蒔風が笑いながら頭をグシャグシャと撫でた。

「なんだよー、自分でもわからんのかい」

「うあうあうあ、やーめーてー!!」

完全に子ども扱いされるなのは。

それを見てニヤつくはやてとフェイト。

「はやて、これは・・・・」

「うふふ。面白そうな事になりそうやね・・・・」

そんなことをつぶやく二人。

と、そこで蒔風が思い出したように指を立ててはやてに訊いた。

「そういえばはやて」

「なんや？」

「戦闘機人ってなんだ？結局聞いてなかったんだが」

先日の聖王教会での話に出てきたその単語。

蒔風には馴染みのない言葉だ。

なんやかんやで今まで聞きそびれていたのだが、今回の敵とあって

は知らない、というわけにもいかないだろう。
蒔風は特に何も気にせずはやてに訊いた。

だが、その返答ははやてではなく、思わぬところから来た。

「戦闘機人って言うのは、人工的に生み出された人間に機械とかを埋め込んで、その体を強化した人たちのことです」

スバルだった。
更にはギンガまでその続きを話してくれた。

「普通の人間にいきなりそんなもの埋め込んでも身体が耐えられなくなって、いずれは使えなくなってしまいます。だから、最初からそういう改造に耐えられる人間を作って、改造する」

「それが戦闘機人です。魔法とは違うエネルギーを使って、ＩＳという先天的固有技能をみんな持っている。まさに・・・・戦うため、兵器として作られた・・・・人間」

その説明を聞いて蒔風が少し訝しげな顔をする。
スバルの隣ではティアナが少し心配そうな顔をしていたが、蒔風はそれに気付かない。

「なるほどな・・・・どーりで攻撃に魔力を感じなかったわけだ。そうなるとＡＭＦ内では脅威になるな」

蒔風が腕を組んで納得の行ったように頷く。

「だがまぁ、改造人間なんてもんは珍しくもねぇ。お前らフォワードと最初にやった模擬戦の時。あんとき出したあの三人だって改造人間だしな」

「え？」

「そういう意味では俺は別に何とも思っちゃいねーよ。敵か味方か、それだけだ。ってかお前ら、妙に詳しいな？」

「私たちのお母さんの最期の事件が・・・・戦闘機人がらみだったので・・・・・・」

「あ・・・・そりゃ悪いこと聞いてしまったな・・・・・・・・」

蒔風がバツの悪い顔をして謝るが、スバルもギンガも気にしないでくださいと手を振る。

「しゅ、舜さんが気にする事じゃないですって！！」

「そうですよ！！あ、あはは！！つまんない話ししちゃいましたね！！」

まるで取り繕うかのようにその場を濁す二人に、蒔風の気も少しは晴れたのか、あははとつられて笑う。

「そうか？まあそうならそれでいいけどな・・・・にしても作られた命か・・・・・やっぱ違法じゃないのか？それ」

「そうやね・・・・・だからある意味じゃ、あの子たちも被害者なのかもしれん」

「うむ・・・・・ま、関係ないね。オレにとって重要なのは敵か味方かだ。もっと言うなら、「作られた」なんてことに意味はない」

「え？」

「作られただろうがなんだろうが「命」がそこにあるんだろ？だったらそれでいい。生まれた理由なんか毛ほども価値はねえよ。大事なのは、生きる理由だ」

「生きる・・・・理由・・・・・」

「どう生まれてくるかなんてそいつは選べねえ。でも、そこからの道はそいつ自身で決められるものだ。誰かの助言（アドバイス）があるかもしれない、誰かが道を指し示すかもしれない。だが、その取捨選択権はそいつ自身に委ねられる。それがないなんてことはまず許さん」

そう言ってガタンと立ち上がる蒔風。
食器をかたずけ、部屋へと向かう。

「スカリエッティがもし、あいつらに「生みの親だから」なんて言って言う事聞かせてるなら、目を覚まさせてやるよ」

蒔風がにやりと笑いながらその場を後にする。

「そういえば舜君！！」

「はいはい？」

「数日後にな？地上本部で公開意見陳述会があるんよ。だから・・・・」

「ああ、わかった。行ってやる。ああ、間違いなく行ってやるともさ。ってか、そいつぁビッグイベントになりそうだな」

どこかの青春白書モノマネの芸人っぽくそう言って、蒔風が自室に戻っていた。

どうやら今日はのんびりと過ごすつもりのようだ。

「さぁて・・・・そんなコマ使ってどうするつもりだ？スカさんよ」

ーーー

そのどちらも、私の目的のために頑張ってくれたまえ！！！

私は・・・・歴史を！！！

そしてこの先の世界を作る！！！！

・・・・・・君にも頼みたい事があるからね
よろしく頼むよ？

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～迫りくるそのとき～（後書き）

ふぅ・・・・何とか今日は上げられた・・・・か・・・・・・・

ゲフッ！！！

アリス「ど、どうしたんですか！？」

冬コミが近くなってきたようだ・・・・・

ア「え？それでなんで吐血！？」

話数が・・・ストックできない・・・・・

ア「それはまぁ・・・・仕方ないんじゃ・・・・・・・」

年末年始は忙しいのに聖夜だけ暇とはどういう事だぁ！！！？？？

ア「（ブワッ！！）」

ふ、ふふ・・・・・・・

そうさ、俺は聖夜でもチマチマ書いていた男さ・・・・

ア「お、落ち込まないでください！！！」

・・・・・・・・・・ドンキ行ってくる

ア「え？じ、次回、陳述会編だ！！！ま、待ってください！！！」

爆竹買って祝いの花火を投げつけてやるぜぇヒャッハーーー！！！！！

ア「その日はもう昨日過ぎましたって！！！待ちなさーーーい！！！」

あたしは知りたいだけだ。
あたしたちの王さまがどんな奴か。

そいつは本当に、あたしたちの上に立つのにふさわしいがどうか。

「いきなりですが、やってきました。地上本部」

「舜君、誰に言ってるの？」

「いや、なんかな・・・・」

蒔風たちがいるのは地上本部の中。

地上何階だろうか、窓を覗けば下にミッドの街が広がるほどに高い階で、なのは、フェイトと共に内部警備に当たっていた。

彼らだけではない。

一階のロビー、そしてその周辺、内部、近、管制室から扉の一つ一つに至るまで完璧に警備が敷かれている。

これを見て凄いと言わない人間はそうはいないだろう。

「でもよ、なにもこんなに大仰に・・・・そうか、予言か」

「うん。やっぱり本局の方は危険視しててね」

「それに管理局の偉い人たちもたくさん来てる」

「狙うには絶好のチャンス、ってことか」

現在はやて、シグナムは会議室で陳述会に参加中。

フォワードの五人とヴィータ、リィンは地上で警備をしている。

なお、内部にデバイスの持ち込みは禁止とされているため、彼らになのは達のデバイスは預けられている。

「そう考えると舜君の武器って便利だよね」

「そうだねぇ・・・・いつでも俺の意思で出し入れできるから」

「いざとなったら舜君頼みだね♪」

「おいおい・・・・ま、頑張るさ」

そんなことを話しながら、時間はゆっくりと過ぎていく。

「舜から見て、戦闘機人ってどれくらい強いの？」

「ふふん、オレにしてみりゃあんなんどーってことはない」

「やっぱり？」

「って、言いたいところなんだけど」

「え？」

「実際、あいつらは相当の実力を持っている。俺たちとの交戦記録も、おそらく全員が共有し経験値として溜めてるだろうし、各人のＩＳとか言う特殊能力は厄介だ。しかも肉体レベルが底上げされてるし、武器も天才というだけあって用意してるのはどれも一級品。相手にできて余裕だと言えるのはせいぜい五人までだ。八人になったらキツイ。十人だったらまともにぶつかれん」

「まともに？」

「真っ向じゃなくて、背後を取って後ろからグサリ、とかな」

「それじゃ暗殺みたいだよ・・・・」

「俺の得意分野がそこなんだから仕方ないだろ」

「そうだったの？」

「そ。あんまり好きじゃないんだけどね・・・・ありゃ、コーヒーなくなっちまった。お前らもなんかいるか？買ってくるぞ」

蒔風が手に持っていた紙コップをヒラヒラさせて空である事を示すように振る。

その申し出になのははは今はいいや、と断ろうとするが

「あ、私は別に・・「じゃあコーヒーでお願いね？」フェイトちゃん？」

フェイトがそれをさえぎってコーヒーを頼んだ。
だが蒔風は聞こえてなかったのかワザとなのか、恐ろしいものを持ってこようとしていた。

「たしかゴーヤジュースがあったからそれにミルクをたっぷりかけたものを・・・・」

「「コーヒーで」」

「ははっ、りょーかい。ではでは～～～」

蒔風が少し離れた自販機コーナーに足を運ぶ。
それを見送って、なのはがフェイトを問い詰め始めた。

「どうしたの？フェイトちゃん」

「うん・・・なのは、。舜の事、どう思ってる？」

「どうって？」

「ほら、気になるとかさ」

フェイトの目はなんだか生き生きとしている。
その眼に若干押されながら、なのはが答えた。

「うーーん。舜君はずっと憧れの人だったからなぁ・・・ヘリを助けてもらった時も、胸が熱くなったくらいだし・・・・」

「なのは、それ本当？」

「うん・・・ってフェイトちゃん、なんでそんなに顔近いの？鼻息荒いの？怖いよ！？」

「（はやてが言ってた「面白い」ってこういうことだったんだ・・・）胸が熱くなるって、どんなふうに？」

「背中を見てね、安心したんだ。「この人がいれば大丈夫」って。それで何かこみ上げるように熱くなって・・・・フェイトちゃんどうしたの！？プルプル震えてるけど！？」

「な、なんでもないよ・・・・・（こ、恋だーーーーー！！！なのはが恋してるーーーー！！！しかも本人自覚なし！！！これは・・・面白い！！）」

なんだか心の中で暴走しているフェイトさん。
ちなみに彼女にとって蒔風は「いつでも頼れるお兄さん」だそうだ。
歳は同じだけど。

「なのは、それは・・・・・」

「ん？」

フェイトがついに自覚させようとする。

「それはね、こ・・・・・・」

ドォン！！！！

だが、その言葉の先は突然の轟音にかき消されてしまった。
地上本部の巨大な塔が、大きく揺さぶられるほどの轟音に、その階にいる全員が思わず膝を突いてしまう。

「な、なに！？」

なのはとフェイトがその事態に通信を繋げて現状報告を聞いていく。

「ぼ、防衛管理室と、動力炉が破壊されました！！！」

「な！？」

「防壁は！？」

「バリア自体は別動力なので展開されてはいますが、ガジェットが張り付いていてこちらの身動きが・・・・・」

「こちらに増援で向かってきている武装局員の部隊が、戦闘機人とみられる敵二体と交戦！！壊滅状態です！！」

「さらに内部のシステムに侵入され現状、緊急で降りたシャッターで各フロアが分断され、救援に向かえません！！！」

そうした報告を聞いて、二人の顔が青ざめた。

このままでは予言の通りに・・・・・・

今までの報告だって五分とかかったのもではない。

だったらこれ以上、一体何が起こってしまうのか、見当もつかない。

ドォン！！！ドォン！！！！

断続的に聞こえてくる爆発音。

なんとかしたいが、今の自分たちはデバイスもないのだ。

「しゅ、舜君は！？」

「舜！！いないの！？」

なのはとフェイトが蒔風を思い出してその場を探し始める。

だがその姿は全く見当たらず、周りの局員にも聞いてみた。すると・

・・・・・

「え?あ、その人だったら俺らにも飲み物いるかって聞いてきたけど・・・・・」

「は?俺だって聞かれたぞ?」

「わ、私も聞かれたけど・・・・」

二人が聞くとそのフロアにいたほとんどの人間の飲み物（全部コーヒー）を買いに行っているようだ。

何やってんだあいつ。

「と、とにかく新人たちと合流しないと!!」

「うん、確か合流場所は、地下!!!」

そう言って何人かの人に協力を仰いでエレベーターの扉をこじ開けようとする。

そこから一気に下まで降り、そこで合流してデバイスを受け取るという考えだ。

「んっ！！んぐぐぐぐ・・・・」

「かーたーいーーーーーー！！！！」

だがやはりそこは地上本部。
外敵からの攻撃を受けた今、そのような通路が簡単に開くわけもない。

一旦手を放し、交代でやってここを開けよう、と提案され皆が「おう！！」と勢いよく返事をしたところで、あの男がやってきた。

「戻ったぞ！！！なんだよこのありさまは！？」

「舜！！」

「舜・・・・く・・・ん・・・・？」

そこにいた蒔風は、人数分のコーヒーをしっかり確保してきていた。

紙コップは重ねて一本にし、中身のコーヒーは圧水で水球にしてプカプカと浮かせている。

そうして蒔風がみんなにコップを配り始めた。

「えっと・・・ヴォルフさんに一個、サクラティスさんに一個、ピンゼンさんに一個・・・・・・・」

律義に頼まれた順に渡していく蒔風。

その蒔風に、その場の全員が声をそろえて叫んだ。

「「「「「何やってんだあんた!?!?」」」」」

その声に若干ビビり、紙コップをバラバラと落としてしまい、それを床につくよりも早く何とかキャッチする蒔風。
そして「なんだよぅ」と言いながら置いてあったテーブルにコップを一つ一つ置き、均等にコーヒーを入れていく。

「あそこに置いといたから勝手に取ってってくださいね?っと・・・・・・・・まったく、どういった現状だ?」

なのはとフェイトがかいつまんで現状を伝える。
というか、お前通信機持ってないのか?

「なるほど・・・・やっぱ用意しといて正解だったってわけだ（パチン！！）」

蒔風が指を鳴らす。

なのはが「用意って何！？」と聞く前に、その現象は始まった。

地上本部の地面から上空を結界が覆う。

周囲三点に設置された獅子天麟を起点に展開されたものだ。

それがバリアにへばりついたガジェットを押し出し、引き離す。

ホテル・アグスタの時と同じものだ。

「これで幾分かバリアも持つだろ。地上本部が焼け落ちる、なんてことはないな」

「よ、よかった・・・・」

「それで、獅子から伝言。フォワードたちが合流のために地下へと潜っていったらしい」

「じゃあ私たちも！！」

「行こうか。どれ、そこ通してくれよ・・・っトォ！！！！！」

蒔風がケンカキックでエレベーターの真ん中に蹴りを入れる。
すると真ん中の開く隙間に足が突き刺さり、足の周辺だけ丸く変形してしまった。

「「嘘ぉ！？」」

「こんくらいで驚くなよ今さら・・・っと」

さらに足を引っこ抜き、そこに手を入れて強引にエレベーターを開く蒔風。

これで進路は開けた。

「行くぞ！！お前ら！！！（ガシッ！！）」

「え？行くぞって」

「一体何を・・・」

「バンジーーーーー！！！！」

「「キャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」」

どうするのか、という二人の肩を掴んで、蒔風がエレベーターの竪穴に飛び降りていった。

完全にいきなりの事で、なのはとフェイトがビビる。

そりゃそうだ。

デバイスも無く、こんな狭い竪穴に三人も同時に飛びこんだら悲鳴も上げる。

暗い穴を落ちていく三人。

そうして一番下に到達したところで

ボゥワ！！！！ズゴォオオオオッ！！！！！

蒔風が二人を掴んで開翼し、その勢いを完全に殺す。

そして同じようにエレベーターの扉を開け、その階に到着した。

「着いたな」

「「なにしてんの！？死ぬかと思ったよ！？」」

「悪い、その感覚はオレにわからん」

肩で息をする二人にシレッ、と返す蒔風。

そこで周囲を見渡し、状況を見た。

「ライフラインは完全に閉ざされてるな。空気は緊急時でも動くようになってるみたいだからいいとして・・・これじゃまるっきりダンジョンと変わらん。とりあえず合流ポイントへ・・・・」

地下という事も相まって、非常灯の明かりしかないこの階はこの状況下ではおどろおどろしい雰囲気しか表していない。

「とりあえずはフォワードたちと合流して・・・・待て、誰か来るぞ」

蒔風が暗がりに向かって目を凝らす。

その先からやってきたのは、息を荒くしたシスターシャッハだ。

「シャッハさん!!どーしたんですか!?」

「す、すごい音と悲鳴が聞こえて・・・何があったんですか?」

「「ああーーーーー・・・・・」」

なのはとフェイトが視線を蒔風に向ける。

なぜかそれだけでなんとなくわかってしまったシャッハが、話を本題に移した。

会議室の扉自体は有志達によって何とかこじ開けられている。

だがその会議室内にはいまだに高官たちが残っていて、はやてとシグナム、カリムも彼らへの説明のために残っているらしい。

「レジアスっておっちゃんは?」

「少し顔色が悪かったですね・・・・」

「ま、そりゃそうか。オレも見たけど、結構なセキュリティだったもんな」

「そこを崩してくるとは・・・一体どれほどの力を・・・・・」

シャッハの言葉に、蒔風はいいや、と首をふる。

「確かにあいつらは強力な戦闘能力を持っているが、たったあれだけの力押しではこうはならん。多分、先天的固有技能、ＩＳとか言うのがかなり特殊なんでしょうな。地面に潜ったり幻術見せてきたりとそれはもう多彩な」

「地面や幻術・・・・・それじゃあ・・・・」

「ガチガチに固めた鉄壁も、小さな策一つで簡単に崩れる。これはいい例だな。うん」

腕を組んで感心する蒔風をよそに、シャッハがなのはとフェイトにこれからどうするかを聞いた。

「今こっちに新人たちがデバイスをもって向かっています」

「今のところはそこで合流の予定です・・・・え？」

と、そこでフェイトに通信が入る。
なのはにも入ったようで、蒔風が置いてけぼりになる。

「なにがあった？」

「舜君、端末もらってないの！？」

「すまん。コーヒーまとめてる時にポチャンした」

「「本当に何やってんの！？」」

というかあれって落とすようなものなのだろうか？見たことないけど。

「それより現状！！！」

「う、うん・・・・六課隊舎が・・・・・・・襲撃中・・・・！！！」

「なん・・・だと・・・・・・？」

「今はシャマルとザフィーラを中心に残ったメンバーが何とか防衛線を築いているみたいだけど・・・・」

「・・・・・戦闘機人は何体いる？」

「わからない・・・・今交戦中なのは一人みたいだけど・・・・・」

「一人でその威力か・・・・・・ふむ、考えてみよう」

蒔風が悠長にも人差し指を上げ、まるで講義でもするかのように話しだした。

「空の武装局員を潰すのに、おそらくあいつらなら二人もいれば十分だ。動力炉に一人、監視室に一人、遠距離砲撃もあったみたいだからそっちに一人。それからハッキングを行ったものが一人。スカリエッティが身の回りを守るために一人。最後に内部制圧のために二人だとして・・・・予想総勢人数は十人だから・・・・あっちにはそいつしかいないか？」

「でも戦闘機人はあのとき十人だっただけで、今は増えてるかも・・

・・・」

「かもしれん。というかそうだろうな。一人が外から攻め、その間に六課に侵入、か。狙いは保管されたレリックにヴィヴィオだ」

「そんな！！！」

「おい、お前ら。俺は先に行く。デバイス受け取り次第すぐに・・・・」

蒔風がその場から急いで六課へと向かおうとする。

そこにちょうどいいタイミングでフォワードたちが到着、スバルが血相変えて叫んできた。

「ぎ、ギン姉が！！！今戦闘機人と交戦中だって！！！」

「なに？」

スバルの話によればギンガは襲撃のあった時、みんなと離れて裏手にまわっていたらしい。

地下で合流するつもりだったのだが、こっちの方も二体の戦闘機人に行く手を阻まれ、やっとの事で撤いてきたのだそうだ。

「なのはさん!!ギン姉を!!!」

「わかってるよ、スバル。スターズは今からギンガのもとに」

「ライトニングは六課隊舎の増援に向かうよ!」

「「「「はい!!」」」」

「シスターシャッハはデバイスをはやてちゃんとシグナムさんに渡してきてください」

「わかりました。お任せください」

「で、舜君は?」

「えーーーだーーーうーーーー・・・どうするどうする～～～？」

蒔風は悩んでいた。

六課がヤバい。

かと言って、あいつらをギンガが一人で戦闘機人を相手にできる保証もない。更にスバルたちが交戦したという二体もそっちに向かっていたら非常に危険だ。

しかし獅子天麟の三体はこの場から動かせないし、他の四体はどこから機人が来るかもわからない以上、なるべく自分から放したくなかった。

考えて、考え始めて数秒後、あっさりした顔をして蒔風が考えをまとめた。

「ソッコーでギンガを助けてタイツ共捕まえて六課に飛ぶ!!!」

「飛ぶって・・・・かなり距離あるよ？」

「うっせ!!今はそんなこと言ってる暇はない!!今の間にも結構ヤバいかもしれんしな。一気にカタをつける!!!」

「じゃあ・・・・・」

「まずは近場のギンガからだ!!スバル、ギンガの場所を教えろ。今から俺が先に行く。後からついてこい!!」

「はい!!」

「フェイト!!俺が行くまで六課を任せた!!!」

「うん、任せて!!」

「あそこは私たちの居場所です・・・だから」

「絶対に守ります！！！」

「よろしい！！先に行くぞ！！加速開翼（ブーストオン）！！！！」

蒔風が加速開翼し、翼からのブースターで一気に超高速移動を行ってギンガの元へと向かう。

その後を各自が各々の戦場へと飛んでいった。

先に言っておこう。

物語はここから大きく歪み始める。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～襲撃～（後書き）

アリス「現在作者はコミケの仕事でホテルに泊まってます。ですので・・・・」

よっと、面倒なのでここからは「」なしで行きますね？アリスです。

にしてもまた時間かかりましたね。
昨日の投稿は無理だったから、こうやって予約投稿したみたいですけど・・・・

作者曰く「今回の話は考えるのが大変だった。各戦闘にどうやって絡ませるかは考えてたけど、戦場から戦場への移動をどうやって動かすかが考えてなかった。アニメ三回くらい見てマジで悩みました」とのこと。
ちなみに今回はなのはさんたちと一緒でしたが、案としては「はやてと一緒」「ギンガと一緒」「フォワードと一緒」もあったそうです。

おそらく次回投稿は年が明けてからですね。
年明け記念なんてものは書かないそうです。

というか、なのはが続いてるのにそれを投下したら連続して読んで て邪魔になるんじゃ？という感じでなかなかできないそうです。

お気に入り登録１００の時も、アクセス５００，０００の時も。

そう考えるとＦＦ７編の跡って言うのは本当に神がかってたんですね。

ここでアリスからの耳よりじょーほー！！！

コミケ会場に作者がいるよ！！探してみてね！！

ってわからないでしょーーーーーーーーーーーーーー！？

・・・一人って・・・・疲れますね・・・・

と、言うわけで次回、「世界をめぐる、銀白の翼」第１８９話、なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～選択肢の有無～

お楽しみに

さぁ、始めようか！！！！（襲撃開始時、スカさん）

「次で止めだ。大人しく来てくれるなら、これ以上は何もしないのだがな。タイプゼロ・ファースト」

「それは・・・まだ・・・・わかりま・・・・・せんよ・・・・・ぐ、つッ！！」

荒い息づかいが聞こえる。

ここは地上本部の別区画。

スバルたちと合流するためにそのポイントに向かって走っていたギンガは、ここで突如として現れた戦闘機人によって足止めをされていた。

しかも、彼女は自分の事を知っているらしい。

彼女はいきなり現れてギンガを襲撃、そして一緒に来るんだと言ってきたのだ。

当然、ギンガがそれを快諾するはずもない。

故に彼女とギンガが戦闘を開始し、相手を倒して連れて行く、という思考に至ったのは至極自然なことだった。

「諦めては、くれんのだな？」

「あいにく・・・私がいないと・・・・寂しがるかわいい妹も・・・いるので」

しかし交戦を始めて五分もせずに、ギンガの息は上がりきっていた。

目の前の敵、眼帯をつけた少女・・・・たしか名前をチンクと名乗っていた。

彼女はギンガとは逆に遠距離からのナイフ攻撃を主としていて、しかもそのナイフを爆発物に変えているらしい。

自分は近接戦闘専門・・・というわけでもないが、そこが一番の得意分野だ。
こうやって遠距離から投げられ、しかもそれが爆発するとあっては回避だけでも相当ツライ。

更に言うならここは屋内だ。
爆発物を扱う敵と対峙するのはかなり危険。

現に今までだってまともに避けられたのは一回か二回。
後は少ながらず飛ばされたり、余波を受けて壁にぶつかることも多かった。

（スバルが六課の訓練は一辺倒じゃなくていろいろ教えてくれるって言ってたけど、私はまだ日が浅いし・・・・・他の特訓もしとくんだったかな・・・・・）

ギンガがよろりと立ち上がりながらも、拳を握って身体を構える。

右手を前に、へその高さに置き
左手を顎の前に、上半身を守るように

上体は返す、正面から急所を狙われないように
足は肩幅に、とっさの事態にも動けるように

たとえ身体が疲弊し、傷付いたとしても、その構えに乱れはなかった。

しかし、いかんせん体力がもう、ついていかない。

おそらくいい一撃でも食らえば終わりだろうし、相手の増援が来たら詰みだ。
逃げられる相手じゃないし、そんな時間も体力もない。

だがそんな状況でも、彼女は諦めなかった。
たとえ左手一本になろとも、彼女は諦めることなどないだろう。

だからこそ、対峙する少女、チンクはそれを感じとって言った。

「あまり気は進まんのだが・・・・命令だからな。ドクターは最悪破損してもよいとおっしゃっていたから・・・・・」

「ッ！！」

「その通りにする。ＩＳ発動、ランブルデトネイダー！！！」

キィン・・・・・・・ヒュオッ！！！

瞬間、ギンガの耳から集中で音が消える。

ギンガに向かって、チンクが放ったスローイングナイフ「スティンガー」が向かって行った。
それを回避して、回りこもうとするギンガ。

だが、ギンガが予定していたよりも早く、スティンガーが爆発する。

その爆発は今までとは違っており、爆風の方向が定められていた。

今までのスティンガーの爆発は拡散だったし、なにより対象に刺さってから爆発していたのだ。

更にこの極限状態。
そんな状況で、ギンガがそういった要素を考え損ねていた事を、誰が批難できよう。

だが、その要素でギンガの勝利は無くなった。

爆風自体のダメージはない。
しかし、身体は吹き飛び、壁に激突。そのままズルズルと床に座り込んでしまう。

肺の空気はすべて吐き出され、衝撃に目もくらむ。

ぼんやりとした視界に、チンクが止めのスティンガーを投げようと

振りかぶるのが見えた。

「あ・・・・・・」

「これで、終わりだ」

ドォン！！！！！！！！！

爆発した。

そのあまりの爆発に、チンク自身も羽織ってるコートでバリアを張ったほどだ。

それを見て、チンクが他の戦闘機人たち・・・・ナンバーズに連絡を入れる。

「タイプゼロ・ファーストを撃破した。これから回収する。手伝いに来てくれ」

『わかった』

『結局チンク姉一人で終わっちゃったッスねーーー』

そんな姉妹たちの声を聞きながら、回収しようと爆煙に近づく。

だが、そこでおかしなことに気付く。

奇妙だ。私は対象を破壊するつもりで攻撃した。
彼女ならば修復できるし、ドクターもそうするつもりだったから別段五体満足でなくても構わなかったからだ。

そういう指示だった。

だから絶対抵抗しないようにこの場が崩れない程度に最大火力で爆破した。
あの威力なら確実に仕留めたはず。

最悪、もう意識もなく息も止まっているかもしれない。

否、最悪、ではない。
確実にそうなるはずだ。

あれほどのダメージを与え、あれだけの爆発を叩きこんだのだから、腕の一本は余裕で吹き飛んだはず。息は止まって、活動は止まっているはず。

だったらなぜ

煙の中から呼吸音なんかが聞こえてくるのだ？

その疑問を得た瞬間、煙の中から翼が生える。
それは鋭利に尖った翼で、すぐに柔らかな鳥のようなそれにかわった。

その羽ばたきで煙が掻き消える。

そこにいたのは、ひとりの男。目にも止まらぬその速さで、間に入って爆破を防いだ者がいた。

「おまえは・・・・・」

「ようよう、結構痛めつけてんなぁ・・・・おい、ギンガ、大丈夫か?」

「う・・・舜・・・さん?」

蒔風がギンガの上体を腕で抱え、意識があることを確かめた。
そうして大丈夫なことを確認して、ギンガを壁にもたれさせる。

「意識あんなら大丈夫だな。寝てろ」

蒔風がギンガの肩を叩いて振り返る。
ギンガはそこでプッツリと意識を手放し、その場で気絶してしまった。

「よう、眼帯ちゃん。ギンガに勝つとは、やるじゃないの。いっちょおにーさんとも相手してくれや」

翼を閉じ、両手両足をプラプラさせて、準備に入る蒔風。

その蒔風に、チンクはかなり警戒していた。

トーレ、クアットロ、ディエチ。あの三人が逃走するだけで必死に

なったという男。
そしてドクターの話によれば、あの伝説の翼人だという事。

だからいきなり戦闘に入る、という事はあまりにも愚策、とチンクは判断した。

故に、ここは時間稼ぎに徹することに決める。
待っていれば他の姉妹も来る。そこまで待てば、こちらの勝ちだ、という考えだ。

「私はそのタイプゼロ・ファーストを連れて帰りたいだけだ。知っているか？彼女はそっちよりもこっち側の人間だ」

その言葉に蒔風がきょとんとする。
そうして首をかしげて、ギンガの方をちらりと見てから、頭に指を当てて考え始めた。

「タイプゼロ・ファースト？なんだそれ？うーーーん・・・・・・お前ら戦闘機人の名前は数字から来てたな。そしてゼロ・ファースト・・・・なるほど、プロトタイプ。ってことは、ギンガも戦闘機人か？で、ファースト、なんていうのがあるんだからセカンドもあるんだろうなぁ・・・・そっちはスバルだな？」

たったこれだけのキーワードで、蒔風が正解に行きつく。
そのあまりの頭の回転にチンクが驚きの表情をした。

そう、ギンガ、およびスバルの二人は戦闘機人だ。
そうなった経緯は知らないが、道理で詳しかったわけだと蒔風が納得する。

その蒔風に、なおもチンクが話しかけた。

「わかったか？だから、そいつを回収しに来た。連れていかせては貰えないか？」

無論、こんなことが通るわけもないとチンクも重々承知だ。
だが、今は時間を稼いで増援を待つ事が先。どんな話も、無駄にはならない。

「え？ああ、いーよ？連れてきゃ連れてけ」

「だろうな、ならば・・・・え？」

しかし、蒔風の答えは信じられないものだった。

連れていきたければいけばいいじゃない、と

「そ、そこは「そうはいかない！！」というところじゃないのか！？」

「え？いやだってさ、お前別にこいつと戦ったとき信念に反するような手を使ったわけじゃなさそうだし、たとえそうでもこいつは純粋に負けたんだろ？だったら別に口出しはしないなぁ」

なんともあっけらかんと言ってのける蒔風。

その蒔風になぜかチンクが焦り出した。

「そ、それでいいのか！？本当に連れていくぞ！？」

「だからいいって。ま、でもその前に一つ聞いてほしい事があるんだ」

「な、なんだ？」

いままでへらへらと笑顔でとんでもない事を言ってきた蒔風に、チンクが若干うろたえながら訊く。

その蒔風が、一体何を言ってくるのか。

「連れていくなら連れていくで構わない。だけど、俺を無視して通れると思うなよ？」

「・・・・・・・・は？」

「ギンガを連れていきたいならご自由に。だけど俺は、お前を捕まえなきゃならんし、こんだけの事件起こして見逃すわけにもいかない。だから・・・オレを突破してみろよ」

蒔風が本気の目になる。
もはやそこに笑っていた青年はなく、凄まじい気を放つ一人の男がそこにいた。

「そ、それは勝手にとは言わないぞ！？」

「ああ？しらねーよ。だから勝手に捕まえていけって。オレはそれを止めはしない。オレの狙いはお前だから」

「くっ・・・結局は障害になるという事か！」

「結果的にはね～～～。ギンガ連れていくなら別にそれで俺は、やらせはせん！！とかにはならないけど」

クソッ！！と悪態をついて、ついに蒔風に向かってナイフを投げる
チンク。
狙いは胸元、ど真ん中。

爆破で視界をくらませて、二撃目で仕留めるつもりだ。

だが

「よっ、とぉ！！！」

蒔風はそれから逃げも防ぎもしなかった。

ナイフに合わせて上体を反り、右手でスティンガーを掴み取ってか

らそれを見、チンクに向かって投げ返したのだ。

その間、実に一秒にも満たない。

全く動かず、さらには掴んで投げ返すという芸当にチンクが唖然としていると、その頬をスティンガーが通って行き、後ろの壁に突き刺さった。

恐る恐る振り返ると、そのスティンガーは根本までズッポリと突き刺さっており、出ているのはピンセットでつまむ程度だけだ。

「手投げ系は苦手だなぁ・・・・」

そういう蒔風がポリポリと頬を掻き、ついにチンクに向かって突っ込んだ。

とっさにそれに反応したチンクが、スティンガーを投げ放つ。

その途中や背後で爆発するそれを、蒔風がかわしながら近づいていった。
そして天井を蹴り、チンクを頭上から攻めにかかる。
しかしチンクは自分をコートで庇いながら、蒔風の目の前にスティンガーを放り、それを起爆させた。

グおっ！？と蒔風が声を出して爆発に消え、チンクもさすがの至近距離に地面を倒れて床を滑る。

その衝撃に耐えながらもチンクが立ち上がると、目の前の煙から足が伸び、足元をすくう様に右から左へと振るわれた。

それに立ち上がったばかりの体勢を崩され、一瞬無防備になるチンク。
しかしそんな体勢であっても、彼女は今まで訓練を受けてきた戦闘機人だ。
懐に手を伸ばし、スティンガーを手に取ろうとする。

が

「させまっせん！！！」

「ッ！？」

蒔風がガシッ！！とその両手を掴み、チンクの手からスティンガーがこぼれ落ちる。
さらには懐にあった物までボロボロと床に落ちてしまった。

武器を一瞬で失うチンク。取り押さえる蒔風。

勝負は着いた、と思われた、その時

「チンク姉にぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！手を出すなぁ！！！！！！」

ガゴォ！！！！！

蒔風の側頭部に踵が命中する。
やってきたのは戦闘機人二人。

短髪でぶっきらぼうそうな少女、ノーヴェと、気さくな感じの少女、ウェンディだ。

蒔風を蹴り飛ばしたのはノーヴェの方だ。
その証拠に、その脚に装着しているジェットエッジのリボルバーが勢いよく回っている。

「よっしゃ！ざまーみろ！！」

渾身の一撃を与えた事で勝ったと思いこむノーヴェ。
しかし、ウェンディに肩を借りて立ち上がったチンクが大声で警鐘を鳴らした。

「終わっていないぞ！！！油断するな！！！！」

「え？・・・・ぐあっ！！！！！」

呆けた声と、驚きの声が連続して響く。
ノーヴェがその声に搬送した瞬間、蒔風がその脚を掴み、大きくブン回してウェンディに向かって投げ放ったのだ。

何とか着地して、構えるノーヴェ。
更にはチンクがスティンガーを、ウェンディが大型プレート「ライディングボード」を構えた。

「戦闘機人三人か・・・・・・うーーーん・・・・・・ナイフ！ボード！リボルバー！！！ってか？」

「行くぞ！！！」

「「おう！！！」」

蒔風の言は無視し、突撃していく三人。
が、その瞬間思い知らられることになる。

あくまでも今まで攻撃が入ったのは、不意を突いたからこそだったという事実を

順としてはノーヴェ、ウェンディ、チンクの順に蒔風に向かう。
ノーヴェは近接戦闘、ウェンディはボードによる砲撃などの中距離、
チンクは疲労もしているため後方からの爆破を目的とした布陣だ。

まずノーヴェが突っ込む。しかし、即座に流されて後ろに投げ飛ば

された。
身体を右に向け、素通りしていくノーヴェがこっちに向き直す前に首根っこ掴んで投げた。

そして後ろに向かって伸びたその右腕をそこから一気に前に突き出し、ウェンディに向ける。
とっさにボードでガードするウェンディだが、二枚重ねて盾にした一枚が砕け、奥のもう一枚が蒔風に掴まれて引っ張られる。
そして寄せられたその体は、振られた左手の裏拳で蒔風の左に飛ばされる。

最後にチンク。
彼女は蒔風の真上の天井にナイフを投げた。
掴むほどなのだから、避けられるのは必須。

更に爆発させでもしてはずせば、その衝撃はすべてしまいに向いてしまうだろう。
だからチンクは天井を崩し、蒔風を埋めようと考えた。

だが

バガァッ！！！！

蒔風が一回転し、右の後ろ回し蹴りでその瓦礫をすべて、一撃のもとに吹き飛ばす。
否、この場合は「掻き消し飛ばされた」と言った方がいいだろう。

その驚愕の光景に、三人の身体が硬直する。

そして蒔風が下を見る。
そこに何かを感じた蒔風が、次に地面を踏み抜いた。

ゴガァッ!!と足がめり込み、亀裂が入る。
そしてその床をそのまま蹴り上げ、ひっこ抜くとそこからいつかの潜地少女、セインが掘り出されてきた。

そのセインに掌底を当て、雷旺をぶち込んで吹き飛ばす。

バツン！！という音がして、意識は刈り取られなかったが、身体がまともに動かなくなるセイン。

蒔風を中心に、四方に散らされた戦闘機人、ナンバーズ。

彼女たちを一瞥し、蒔風が言った。

「たしかに、動き一つ一つが熟練された者のそれだ。たいしたもんだよ、それは。だが、それでは届かない領域もある」

そう言いながら蒔風が静かに構える。

前の二人を視界に収め、背後の二人は後ろであるにもかかわらず、睨み付けられた錯覚を起こした。

「他の誰かの経験値・・・知識、戦闘実績、その他諸々。確かにお前たちは知っている。その技を、技術を、行い方を知っている。だがな、それはあまりにも未熟な知り方だ」

その言葉に、ノーヴェが反論する。
もとより口の悪い彼女だが、今はイライラしてるのか、さらにそれが激しくなっている。

「知ってんだから、出来んのは当たり前だろ!!!それが力だろ!!!」

確かに、知っていれば行うことも可能だろう。
それを「身に付けた」と言うものもいるだろう。

しかし、それではだめだと蒔風は首を振った。

「違うな。それでは意味がない。いいか・・・・力とは、技術と

は、武とは、長年の弛まぬ鍛錬の元に昇華されて、その身に刻まれるもの。知っているだけでは錬度が足りない。識って初めて、修得する。お前らのそれは、違う。「本物」だったらそんな動きなどしない。識っている者はああは動かない。本物の動きって言うのはな、型にはまらないもんなんだよ」

蒔風が構えに力を込める。
その動作だけで周囲の人間が固まった。

「教えてろうか？識るという事と、知るという事の、圧倒的なその差を、今ここで！！！」

その言葉に、ついにノーヴェが動く。

ローラーブレード「ジェットエッジ」を回転させ、地面を滑って蒔風に向かう。
その拳にあるガンナックルのリボルバーが回転し、渾身の力を溜めこんでいく。

そして蒔風の眼前に迫った瞬間

ダゴンッ！！！！！

地面に叩きつけられた。
目の前に見えるのは天井と覗きこむ蒔風の顔。

蒔風の手はノーヴェの襟と掴んでおり、そこを掴んで地面に叩きつけた・・・と言うよりは、押し付けたのだ。

一瞬だった。
何をされたのか気付いたのは、叩きつけられた後だった。

そのノーヴェを見、蒔風が見渡してからその場の全員に言った。

「お前ら、知りたくはないか？世界を」

「え？」

「お前らの世界は、今まで任務だの研究室だのしかなかった。お前らは他の世界を知っているのか？知りたくないのか？」

その言葉に、一瞬詰まる一同。
しかしノーヴェも含め、その場の全員が黙ってその言葉を聞いていた。

「命令されるがままに動き、生みの親だからと言ってその言う事を聞く。お前ら、それでいいのか？お前らの正義は、それでいいと言っているのか？こんなことして、気分がいいのか？ん？」

蒔風の言葉に少しだけ覚えがあるように、四人ともが顔を背ける。

確かに、誰かを傷つけることは好みではないし、実際チンクも指示がなければあそこまでギンガを潰そうとはしなかったろう。

確かに出し抜かれた、と言う点では六課のメンバーには苦渋をのまされた事もあった。

しかし、そこに明らかな殺気などない。

ぶちのめしてやる!!という思いはあっても、さすがにそこまでは思っていない。

だが

「しかし・・・だからと言って、私たちに選択肢などない!!!戦闘機人となるために創られ、生まれた命。そんな命が、それ以外の生き方など・・・・・」

そう、彼女たちには選択肢などなかった。

あそこから逃げ出してどうするのか。彼女たちには戸籍などない。

だから働いて暮らす事も出来ない。物心ついたときにはすでに改造されており、外に居場所などない。

あの二人は運がよかったのだ。

自分たちは知っている。

今まで廃棄されてきた者達のデータを見てきたのだ。

幸いにも、自分たちのラボでそのような者はいなかった。

しかし、自分がいつ、そうなってしまうかわからない。

だから彼女たちは努めて優秀な人材となった。

居場所はあそこしかない。

だから、その人の言う事を聞かなければ、自分たちは生きていけない。

もとよりそのために生み出された命なのだから。

「他に選択肢などない・・・・我々には、あたらな選択肢など現れなどしないのだ!!私たちは、戦と追う機人として生きていくしかない!それを・・・・・」

「ばっかでねェの？」

だがチンクの言葉を、蒔風が遮る。
最高に馬鹿にした目をして、完全に呆れた口調で。

「だからさ、お前らはその生き方に満足してんの？お前らの正義は、納得してんの？まずそこだよ。そこが聞きたいんだよ。どうだ？はい、そこの潜地ッ子！！！」

「え？あ・・・・そ、そりゃ、これが犯罪だって言うのはわかってるし、私は誰かと戦うのはごめんかな～～～って・・・・・」

「よしはい、次！！足元の熱血っ子！！」

「あたしはわかんねぇよ。ただ、戦うとスカッとするのはあるな」

「罪の意識は？これがいけないことだってわかってるか？」

「わかってっけど・・・・・他にどーすりゃいいんだよ？今にもあんたを殴り飛ばしたいんだぜ？ここでなきゃできねぇよ、そんなの」

「出来る！！ジムにでも通え！！知らないか？」

「じむ？・・・・・なんだそれ？あと、あたしはノーヴェだ！！！」

だがその言葉を無視したのか、蒔風が今度はウェンディを向く。

「そっちのお気楽っぽい子！！！どうだ？？」

「うえ！？えっと・・・・・まああたしは言われた事をしてるだけッスからね・・・・・」

「自分の意志で決めろ！！お前はこのまま犯罪者として一生名を残すつもりか？誰にも聞くな、自分で決めろ！！！」

その言葉に、ウェンディが考え始め、うぇ、という顔をして口を開いた。

「あーーーでもそう言われてみると・・・・・後の時代の人間に「

こいつサイテー」とか言われんのは嫌ッスねーー」

「だったら今からでも引き返せ!!可能性は無限大だ!!!次!!眼帯っ子!!!」

「ち、チンクだ!・・・・・・・それは・・・・確かに気が滅入る事もある。しかし、いわばドクターは私たちの親なんだ!!間違っていても、従うしか・・・・・・」

そんないまだにモゴモゴと言っているチンクに、蒔風が叫ぶ。

「お前の行いに少しでも疑問があるんなら、それはもはや正義じゃねえ!!!お前の正義は、なんつってんだ!!!どうなんだ!?ええぇ!?」

「選択肢がなかっただと?じゃあお前、俺たちだったら選択肢があるみたいじゃねえか」

「それは・・・・そうだろう!!私たちのような人間に、最初から・

・・・・」

自分たちはお前たちとは違う。
そう言うチンクに、蒔風がなおも言った。

「は？お前何言ってんだ？選択肢なんて、最初からどこにもねーーーーよ。お前はあれですか？ゲームの主人公ですか？ピピッと選んでそれで終了な人生生きてんですかー？」

「な・・・・」

「まあ？確かにそういう事もなかったとは一概に言えん。だけどな、目の前に選択肢の欄なんざ、現れるわけねえだろ？ここは現実だぞ？浮かんだ気がしているだけで、そんなもんはありはしない」

「よく「選択肢は自分で作る」とか何とか言ってるが、それは違う。選択肢なんて最初からない。ないんだよ、そんなもの。その場で人がとる行動パターンなんか、数えきれないほど、それこと無限大にある。それから選べって？無理だろ。だから選択肢なんてないんだ

よ」

「しかし、だからこそ人生はいつだってアドベンチャー！！！それが生きていくってことだろ？選んで生きていくんじゃない。やった結果、選んだ気になっただけ。でもまあ、それでもお前が選択したいと言うならば・・・・・」

そこまで言って、蒔風が両手を広げて大きく叫んだ。

「さあ！！選ばせてやる！！ここに俺が寛大にも選択肢を用意してやった！！」

蒔風が手を出す。

右手を出して「選択肢（そくばく）なき不確かな未来」を取るかと聞き
左手を出して「選択肢ばかりの先を決められた未来」を取るかと聞く

「さ、選べ。チンク、セイン、ノーヴェ、ウェンディ。お前らの人生で、最初で最後の選択肢だ。可能性を取るか、安定を取るか、自分の意志で。それが、生きる強さってやつだ。お前たちは何か一つでも自分で何かを決めてやるってことがなかった。さあ、此処で決めろ。そしてそれから・・・・・」

蒔風の言葉。

その言葉の先は発せられなかったが、十分に意味は理解できた。

数秒の沈黙

そしてその言葉に、まず動いたのは

「あたしは・・・・決められたレールなんか走れない暴走列車だからな。つまんねぇ人生なんざ、まっぴらごめんだ」

ノーヴェだった。
足元から腕を伸ばし、蒔風の手を取って立ち上がる。

その姿をみて、ウェンディ、セインもその手を取る。

「あ～～あたしは面白そうなとこにつくッス。それにノーヴェほっといたら大変そうッスから」

「私は潜ってばかりだったからね～～。確かに、広い世界には興味があるなぁ」

その手ににやりと笑って頷く蒔風。
そして、チンクの方を見た。

「で？どうする？チンクさんよ。お前はこれだけの強さを持てるかい？」

だがチンクはいまだに頭を抱えて振っている。

「そっちに行って、どうするのだ・・・わたしたちは・・・・戦と・・・・」

「生まれた理由に意味などない。価値があるのは、生きる理由だ」

「ッ！！！」

「生まれた時から人間は犯罪者だとか善人だとかって決まるのか？違うだろ？生まれた後、生きてる間にそう言うのは決まる。お前がどう生きるかは、お前の自由だ。戦闘機人として、兵器として生きるか。それともそれを受け止めた上で、これからの世界を生きていくか・・・・・どうする？今しか選択できんぞ？」

蒔風のその言葉に、顔を俯かせ、それからチンクが顔を上げた。

「貴方は・・・卑怯だ・・・・・選択肢などないと言っておきながら、貴方は今しかないと、一つしかない選択肢を私に迫る」

「ふふん。よく考えてみるんだな。そう、実は選択肢などないっていうのは大ウソだ。実はある。だが、人生の選択肢はあまりにも多すぎてとてもじゃないが選ぶなんてもんじゃない。だから、「ない」んだ」

「で・・・その中からあなたが二つを選んでくれたと、そういうわけですか」

「そうだ。さ、どうする？」

そういう蒔風に、チンクが近づく。

近づいていき、距離が狭まり

そして

蒔風の手をそっと下ろした。

「私は選ばない。私はこれから自分の意志で行く。私の意志で、そちらに行こう」

その言葉に、蒔風が満面の笑みを浮かべ、まるで新しい宝物を見つけた子供のように笑った。

「おおおおお！！！！すごいすごい！！！！！君は今！！「選択」しなかった！！！そう！！！それこそが大正解！！！選んだ彼女たちは強く素晴らしいが、君はより、強く素晴らしい！！！いやはや、人生これだからたまらない！！！決まったことなんて、何一つとしてないんだから！！！！！」

あははは！！！と笑いながら回る蒔風。

それを見てチンク達は唖然とする。

この人が本当にさっきまで自分たちを追い詰めた男なんだろうか？

「舜さん！！！！ギン姉は！！？？ッ！！戦闘機人！！！！！」

そこにスバルがやってきた。

ローラーブーツの彼女は、この状況なら飛べないティアナを担いだなのはよりも速い。

だから先についたのだろう。

しかしそこにいたのは笑いながら回る蒔風と、唖然とした戦闘機人四人なのだから、それは警戒もする。

思わず構えるスバルだが、そこに蒔風が来て軽くチョップする。

「こらこら待て待て。それを言ったらお前さんもだろ？彼女たちに戦闘の意志はない。彼女たちは今、明日へと向かって歩き出したの

だからーーーー！！！！」

「え？あれ？って舜さん！？お前もだろってどういう事ですか！？」

「あははーーーー！！！っと、いかんいかん、トリップしてる場合じゃない。六課がまずい！！！スバル！！なのは達は！？」

「えっと、すぐに来ると思いますけど・・・それよりも・・・・」

「わりぃスバル！！オレもう行く！！こいつら頼んだ！！！右からチンク、ノーヴェ、ウェンディ、セインだ！！！お前らも逃げるなら今のウチだぞーーーー？？それも自由なんだからーーー！！！」

「うえぇ！？」

ドォウ！！！！

そう言って蒔風が加速開翼してその場から消える。

スバルは蒔風の言った言葉にびっくりしながら、移動の際の突風に

髪を押さえた。

そして残されて棒立ち状態の五人。

と、スバルがクリン、とナンバーズの方を見、拳を構えた。

「逃げる？」

「「「「逃げん逃げん」」」」

そんなこんなであとからなのはとティアナが到着。

状況がよくわかっていなかったが、チンクの説明でなんとか納得し、彼女たちを連行した。

ひとまず、こちらの戦闘は終わった。

あまりにも少なすぎる犠牲のみで

「ところで・・・あの人はいつもあんな感じなのか？」

「あーーークルクル回って笑ったりしてたッスね」

「それは・・・・舜さんだと通常運転だとおもうけど・・・・・」

「そうなのか・・・・・・変人なんだな」

「にゃはは・・・・本人が気いたら「アホって言って！！」って言うだろうね・・・・・」

to be continued

と、言うわけで結局更新！！！
明日は無理だーーーーー！！！！！

アリス「これでまたストックなくなりましたもんね」

マジで勘弁してくれ。
コミケとかマジ疲れすぎる・・・楽しかったけど。

ア「て言うか今日が大みそかって気付いてないですよね？」

だって深夜から動くんだぜ？
正直、日付とかわかんなくなったもん。

だから大晦日って感じがしない。

ア「日付感覚滅茶苦茶ですね」

ええ

と、言うわけでみなさま、来年もよろしくお願いします！！！！

おそらく一月の中旬までこの不定期更新は続くと思いますが、しばしご容赦くださいませ。

ア「次回、機動六課崩壊？」

ではまた次回

ギン姉を・・・・返せよオオオオオオオオオオオオ！！！！

炎のように赤く染まる空。

その空に、やっと蒔風が天井を破って地上まで出てこれた。

現在、地上本部は獅子天麟の結界で守られているとはいえ、かなり危ない状況であることは変わりない。また、構造も非常に脆くなっている。

だから

「やっと出れた！！くっそ、時間食った」

だから蒔風は何層も天井をぶち破って出てこれなかったのだ。
破ったのは地下一階から地上の一層のみ。

しかし、もはやなにも気にすることはい。
後はただライトニングの三人が向かった機動六課隊舎に向かって行くだけだ。

フェイトと別れてからすでに十分は経過している。

もし相手側にあの高速移動を可能とするトーレがいたらかなりまずい。

「ブッ飛ばすぜぇ！！！加速開翼（ブーストオン）！！最高出力！！！！」

パァン！！！！

空気の壁をいきなり破って、蒔風が地上本部上空から一直線に隊舎の方へと向かう。

その瞬間

ドォン！！！！！

動き始めて一秒と経たないうちに、蒔風に砲撃が命中する。

放ったのはビルの屋上にいるディエチ。

直接対峙した自分とトーレ、クアットロの経験値の重ね掛け、更には力による一種の揺らぎから、蒔風の向かう先を想定し、砲撃を放ったのだ。

対して蒔風は移動中、しかもこれからという瞬間だった。
爆煙が大きく上がり、その姿が撃ち消える。

「目標には命中。クアットロ、チンク達とは連絡は着かないのか？」

ビルの上でディエチがクアットロに確認を取る。
彼女もこれだけ大きな戦いだと、少しばかりは姉妹の事が心配になるのだろう。

やられるとは思っていない。
しかし、こうも連絡がつかないと不安にもなるものだ。

だが、通信を取った先から聞こえる声には、そんなこといちいち知らないと言わんばかりにどーでもいいような声が聞こえてきた。

「さぁ？ま、やるべきことはもう終わっちゃってるし？ぶっちゃけもういらないというかなんというか・・・・・」

「クアットロ」

「あ～～らあらあら。ごめんなさいね。そうよね、心配ねぇ？これが終わったあともまだまだやるべき事があるのにぃ」

クアットロのあまりのいいようにディエチがたしなめる様に名前を呼び、クアットロがわかりましたよ、といった風な口調で弁解する。

「とりあえず私はこのまま翼人の動きを止める。クアットロは・・・・」

チンク達の方を頼む、というディエチの言葉は続かなかった。

彼女の目が、ある二つのものを捉えたからだ。

カカン！！！

彼女の足元から一メートルほど離れた左右に、一本ずつ剣が飛んで

きて刺さっていた。

なんだ?と疑問に思った瞬間、それが一気に人型に変わり、彼女の巨砲、イノーメスカノンと彼女自身を抑えつけて拘束した。

「武器、獲ったどーーーー!!!!」

「女性相手に私ですか・・・まぁ、相手には女性しかいないみたいですがね」

武器を抱きかかえているのは白虎、ディエチの手を取って捻っているのは朱雀だ。

ディエチがその二人を見て、まさかと上空の爆煙を見る。

しかし、朱雀がそのディエチに遅いですよ、と宣告した。

「舜はもうすでにあそこにはいません。私たちを投げた時にはもうすでに飛んで行ってしまいました」

「ッッ・・・私を・・・どうするつもりだ・・・・・」

「・・・・どうしたいですか？」

「な・・・・・」

「チンクって子たちはなのはっちと一緒だよ。こう言うのはなんだけど、だれも大きな怪我は負ってない」

それを聞いてディエチが目を見開く。

彼女の元に向かったのはノーヴェ達三人。

つまりは戦闘機人四人がかりで全員がつかまったというわけなのだから、無理もない。

一体何があったのか。

それを聞こうとして、それよりも早く朱雀が言った。

「ま、詳しい事はチンクさんに訊いてください。彼女は納得して投降してくれましたから」

それを聞いてこれ以上驚きようのないようにディエチが口を開けた。

負けて連行なら話はわかる。

しかし、納得してとはどういう事か。

「ま、これから連れて行きますから、大人しくしててくださいね？」

「ティアナっち？いまからこっちで捕まえたディエチって子連れてくから～～。うん、よろーーっと・・・朱雀、了解だってさ」

「では、行きましょうか」

「捕まって・・・行く先は牢獄か？」

「いいえ、新たなる可能性、未来ってやつにです」

ーーー

「時間食った・・・はやくはやく・・・・・・あん？」

蒔風が上空を飛んで言って六課に向かう途中、前方で何度か火花が散っているのを確認する。
そして、それは近づくにつれて三つの人影となり、更に近づいてきたところでその内の一つが蒔風に向かってきた。

「翼人！！！ここから先は「邪魔じゃあボケぇ！！！！！」ブグアッ！！！？？」

だがそれが何かを言って目の前に来た瞬間、蒔風の拳で弾き飛ばされていった。

突っ込んできたのはトーレ。
ちなみに他の二人は足止めされているフェイトともう一人の戦闘機人、セッテだ。

蒔風が残っていた二人を見、追い越して行きながらフェイトに通信を入れた。

「フェイト!!今二人の機人とやってんのか!?」

『舜!!あっちは!?』

「終わっている!!エリキャロはどうした!!」

『二人は・・・っ、この!!先に!!』

「足止めされてんのか・・・・・その二人は任せてもいいか!?俺は行く!!」

『わかった!!任せて!!!』

そう言った時にはすでにフェイトは後方にいたのだが、蒔風は一応連絡を入れた。
本当なら青龍か玄武を置いていきたいところなのだが、戦闘機人があと何体か、そしてどこから出てくるかわからない以上、もう残り二体でもギリギリなのだ。

こんな事ならチンクに割り当て聞いとけばよかったな、と今更後悔する蒔風。

そう思いながら飛ぶ。

そして、機動六課の隊舎が見えてきた。

隊舎から出てきたのは小さな少女と、いつか見た蟲人間。
更には戦闘機人二体だ。

三人と一体は大きなガジェットの上に乗り、そこには一人に人間がぐったりと横たわっていた。

「ヴィヴィオ！！！！！こんの・・・・・クッソがぁぁあああああ！！！！！！！！！！」

蒔風が一気にさらなる加速をして、途中でフリードに乗ったエリオとキャロを抜き去り、通り過ぎざまにヴィヴィオを回収、ガジェットを破壊した。

そしてそのまま燃え上がる隊舎前に蒔風が着地し、翼をしまう。
そこにシャマルとザフィーラが満身創痍で駆けよってきた。

「舜君、来てくれたの!?」

「いや・・・・遅かったみてぇだ」

ヴィヴィオを左腕で抱え、燃え上がる隊舎を見る蒔風。
それを見る表情はとても悔しそうに歪んでいた。

「俺も・・・・守りきれんかった。危うくこの子を・・・・」

「言うな。オレだって同じだよ。だが、まだ負けてない。まだ、いけるか?ザフィーラ」

「たとえこの身が崩れようとも、俺は盾の守護獣だ。こんなところで、倒れてはおれん!!!」

ザフィーラが立ち上がり、なおも戦おうとする。
しかし、その脚が震えているのは確かだし、もう戦う事は実質無理だろう。

「ああ、頼む」

しかしそれでも蒔風は休んでろとは言わなかった。
護る事、それが彼の誇り。

そして今、ここに守るべきものが戻ってきたのだ。
そこで彼に休んでろなんてことは、蒔風には言えるはずもなかった。

「舜さん!!!こっちいつ来たんですか!!??」

と、そこにエリオとキャロも合流する。
それで蒔風が今だよ、と答えてにやりと笑いながら、上空の敵に向かって叫んだ。

「どうだ!?まだやるか?レリックは取られっぱなしだが、ヴィヴィオは渡さねえ。かかってくるってのかい?」

そう叫ぶ蒔風を、無感情な瞳で見つめる三人。
いや、あまりにも無感情すぎる。

「おそらく、あまり人間としての教育を受けてないんだわ・・・・」

「兵器として生まれ、兵器として育てられた者たちだ。動きが洗練されていたぞ。油断するな」

シャマルとザフィーラの忠告に、蒔風がコクンとうなづいてキャロに抱えたヴィヴィオを預けようとした。

その瞬間

ゴゴン！！！！

その一瞬の隙を突いて、ガリューが蒔風たちの中心に現れ、蒔風の側頭部に向かって背後からハイキックを叩き込んでいた。

が、それは命中せず、蒔風の残った右腕でガードされたいた。
しかし、ここでヴィヴィオを誰かに託せなくなってしまう。

さらにガリューの主、ルーテシアの転送魔法で目の前に機人の一人、ディードが双剣「ツインブレイズ」を持って地面から現れ、独楽のように回転してその場の全員を散らす。
バックステップでそれをかわす蒔風の頬元にうっすらと切れ込みが入った。

蒔風はさっきまで六課隊舎に背を向けて正面上空の機人たちに話していた。
そこに中心からの攻撃をバックステップで避けたのだから、当然、残った上空の機人に背を向けるわけで・・・・

「ＩＳ発動、レイストーム」

そしてそこを攻撃された。
ルーテシアの横に残った短髪の戦闘機人、オットーが右掌を蒔風に向け、そこから幾本にも拡散された光線が打ち出される。

それはシャマルのバリアを打ち破った物だけあってかなり強力だ。
しかも、背後からはガリューとディードの二人が迫り、左腕はヴィヴィオを抱えて動かせない。

そんな状況。
しかし、蒔風の目にはまだ余裕があった。

「混暗陣！！！！」

その言葉と共に、ズンッ！！！と一気にルーテシアとオットーの身体が地面に落ちる。
ベシャリと地面にへばりつく彼らを見てから、蒔風が身体を回転させてガリューの拳とディードの双剣をほんのわずかな間を縫って避けて後ろに回る。

そしてその背中を蹴り出し、四人をまとめようとする。

ディードはそれで攻撃の勢いもあって人の中に入ってしまうがしかし、ガリューは耐え、蒔風の片足を掴み上空へと投げ放った。

蒔風はそのまま青龍と玄武を抜いて機人の方へと投げ、彼らを捕縛しようとしていた。

結果としてうまく投げられはしたのだが、ガリューのその投げによって視界が乱れ、上空で体勢を整えるころには陣の中からルーテシアはいなくなっていた。

「主だけでも助けたか・・・・あんな小さな子に何させるつもりだ、スカリエッティ・・・・いや、それとも・・・・利害関係があるのか？」

そんなことをつぶやきながら蒔風が考える。

「舜さーーーーん！！大丈夫ですかーーーーー！！！？？」

と、そこで下の方からエリオが手を振って蒔風に呼び掛ける。

どうやら混闇で動きが封じられていた上に、青龍と玄武の助けもあってか、オットーとディードを捕縛することに成功したようだ。

「これでなんとか七た・・・・七人はこっち側、か・・・・エリオ!!キャロ!!!フェイトの加勢に行くぞ!!それからもう一度地上本部だ!!!!」

「「はい!!!!!」」

そう言って蒔風がヴィヴィオをシャマルに預けるために、ゆっくりと降りて地面に向かう。

「う・・・・ん・・・・・・・・？」

そこでヴィヴィオが目を覚ましたのか、薄く眼を開けて蒔風の顔を見る。

「お、とーさん？」

「誰が父さんじゃ。おにーさんだって言ってんだろーが」

「あうっ、いたいよーーー」

蒔風がヴィヴィオに軽くデコピンし、まあ良かったと一安心する。

しかし・・・・・・

そこで蒔風に通信が入った。

『主!!ち、地上本部は・・・・・もう・・・・・・がああああああああッッ!!!!!』

「獅子!?何が起こった!!おい!!!」

突如として入った獅子からの通信。
しかし、その後は爆音と叫び声しか聞こえなくなってしまって、何も聞こえない。

「おい!!何があった!!獅子、麒麟、天馬ァ!!!」

蒔風が空中で降りるのをやめて、大声で彼らに叫びかける。

すると、切れ切れの声で麒麟からの言葉が聞こえてきた。

『主・・・・いかん・・・・・・・・結界が・・・・・・』

「なにがあった!?結界がどうした!!」

『あやつらが・・・・・・やってきて・・・・結界どころではなく・・・・（キュロオオオオオオオオオオオ!!!!）ヌガッ、ぐオオオオオオオオオッッ!!!!』

ドォン!!!!

通信の向こうから爆音が聞こえる。
そして蒔風の目に残ったのは、聞き覚えのある鳥の鳴き声だった。

「まさか・・・まさかまさか・・・・・介入が早すぎる！！計算はまだ・・・・・」

「舜さん！！！！後ろーーーーーーーーー！！！！！！！！」

蒔風が焦り出した瞬間、キャロの叫びが蒔風の身体を動かした。

その場から動いた、その瞬間、今まで蒔風がいたその場を、三つ首を持った地獄の番犬のキバが空を切って噛みついていた。
すなわち、そこに居たのはケルベロス。

その存在が現す事はただ一つ。

「「奴」が・・・・来やがった！！！」

「舜！！！！」

ケルベロスを過去に見た事のあるザフィーラが蒔風の名を呼ぶ。
だが、蒔風は「大丈夫だから地上本部の援護に向かえ」という言葉を返す。

「おとーさん、こわいよぉ・・・・・」

「おとーさんじゃない、おにーさんだ。大丈夫だ。この腕にしっかりしがみついてろ。ぜってー離さないから」

「う、うん・・・・・」

そうしているとヴィヴィオが目に涙を溜めて蒔風に訴えてくる。
そのヴィヴィオの頭をそっと撫で、蒔風がグッ、と左腕を締める。

奪われてなるものかと

これ以上、もはやこの世界での敗北をしてたまるものかと。

だが

世界はいつだって残酷だった。

「ならば、その腕ごといただく」

――――ゾンッ！！！！！！

蒔風の背後から、一言だけ聞こえてきた。
その直後、左肩口に蒔風が熱い痛みを感じた。

そして

ヴィヴィオが蒔風から離れて行ってしまった。

蒔風の左腕ごと、一緒に

「ッ、キャアアア

「子どもを使うのは趣味じゃないんだが・・・・まあ、これしかないなら仕方ない。ガキはいただく」

そう言って地面に倒れる蒔風を一瞥する「奴」
その言葉に反応してか、蒔風が左の肩口を押さえながら立ち上がった。

「そいつを・・・返せ・・・・・」

「舜さん!!!!う、腕が!!!!!」

「血も!!!!い、急いで手当を!!!!」

立ち上がった蒔風にその場の全員が駆けよってその有様に閉口し、戦慄した。

特にエリオとキャロはそうだ。
いつだって強かった彼が、たった一人の敵に対して、この重傷。
目がうつろで、足はふらつき、片腕がなく、しかも切り口からは血が吹き出ている。
そんな彼の姿を、一体誰が想像しただろうか？
「ヴィヴィオを・・・・返せ・・・・・」
「いかんなぁ、蒔風。今お前を殺しときたいのは山々なんだが、もう少しでテスタロッサハラオウンが来てしまう。あれの相手もするとなると非常にめんどうだ。だから・・・・」
そう言ってふわりと消えて行く「奴」
空間が歪み、その中に去って行こうとする。

「ここは引くさ。計算も終わってないからな」

その言葉に、蒔風の目がガッ！！と開かれる。

「返せって・・・行かせねぇって・・・・・」

ブシッ！！！！

「言ってんだろ！！！」

そこで蒔風が飛び出した。

左の肩口を押さえていた右手を放し、拳を握って「奴」を殴り飛ばそうと踏みこんで跳躍する。

瞬間、左肩口から一気に血が噴き出し、足元を染め上げるが、そんな事で蒔風は止まらない。

自らの死などでは、蒔風の足を止めることなどできない。

だがやはり限界はある。

「奴」は放息をひとつつき、めんどくさそうに蒔風を蹴り飛ばして、その反動で一気に消えて行ってしまった。

だが蒔風はそれも見えていないのか、立ち上がって血を噴き出しながらヨロヨロと周囲を見渡して、どこともなく歩きだそうとした。

「行かせねぇぞ!!返せってんだ・・・ガキを返せ!!!!そいつを巻きこまないでやってくれ!!もう勘弁してやれよ!!!!・・・クソ・・・今行くぞ・・・・・・待っていろ・・・・おにーさんが今、助けに・・・・・・」

そこまで言ってついに蒔風が倒れ込んだ。

ビシャン、という音がして、足元にどれだけの血があるのかという事を証明していた。

「舜君!!!無茶はしないで!!!」

そこでやっとシャマルが寄って行って止血の魔法をかけて結界を張る。

さらに傷口を見て、数回うなづいてザフィーラに指示を出す。

「切り口が綺麗・・・今ならまだ間に合うわ。ザフィーラ!!腕を!!それから、殺菌の結界をお願い!!!」

「了解した!!!」

「シャマル先生!!これ、舜さんの・・・・」

そこでエリオとキャロが今にも大泣きしてしまいそうな顔をしながら、蒔風の腕を持ってきた。

その腕についている衣類には、ハッキリと解るほどに、ヴィヴィオが握っていた跡がついていたままだった。

それを見て、シャマルが頷いて彼らに隊舎から避難した皆の誘導を頼んだ。

「舜君!!あなた、死ぬ気!?なんでこんな状態で向かって行ったの!?無謀もいい所よ!!!」

エリオたちがいなくなると、シャマルが蒔風に怒鳴り声を上げた。しかし蒔風の顔は痛みに耐えるばかりで、死ぬかもしれない、などという心配は一切していなかった。

否、そもそも、死ぬ(そんなこと)は最初からどうでもいいと言った顔をしているのだ。

「俺にその説教は成り立たないぞ、シャマル。と言うか、早く繋げろ。すぐに追う。止血と接合がすんだら・・・・」

「バカを言わないで!!このままみすみす死なせるなんて、私のプライドが許しません!!!」

「バカを言ってんのはどっちだシャマル!!!こちとらはなから「死ぬ」なんてことはどうだっていいんだよ!!非生者よか、これからの未来たるガキを助けに行くのが当然だろうが!!!俺は行くぞ・・・早くしろ!!!」

「蒔風!!貴様が死ねば、主はやてをはじめ、どれだけの人間が悲しむと思っているのだ!!!ヴィヴィオは取りかえす。そのためには、貴様の力も必要なのだ!!!」

結界内で倒れる蒔風と、クラールヴィントでなんとか応急的に腕を繋ぐシャマル、更に結界で内部を浄化しているザフィーラが怒声を上げて口論する。

それを見ていたのは、青龍と玄武にとらわれていたオットーとディードだ。

自らの命を命と見ず、ただひたすらに立ち上がろうとし、その瞬間

だけ「人を救うという一つのシステム」となっていた蒔風に、二人は驚き、そして戦慄していた。

「あの人は・・・・人間ではないのですか・・・・・？」

「私たちも・・・道具として教育させられてきました・・・・・・しかし・・・・あれが私たちの行く末なのですか・・・・・？」

誰に向けたものでもないその質問。

彼女たち二人は極力人間味を持たないように教育された戦闘機人だ。つまりは人間兵器として、道具として教育されてきた。

故に最初からそういう状況だったため、そうなっていく事に一切の疑問を抱くことなどなかったし、それを教える者もいなかった。

しかし、自分たちの目の前で命が・・・・否、その肉体が動きを

止めるまで動き続けようとしていた、機械のようにひたすら救おうとしている男。

それを見ていて、急にそうなる事が恐ろしくなってきたのだ。

そこに誰の意志もなく、誰に止められる事もなく、ただ肉体に限界が来て、醜く崩れ落ちて身体が身体と呼べなくなって始めて動きを止めるような、そんな生き方を、今一瞬でも行っている男を見て、自分の行く末に恐れ慄いたのだ。

あんな人生は嫌だ。

何かをやって、それが誰かに認められ、その中で死んで朽ちるならまだいい。

しかし死んで誰にも見ても貰えず、どことも知らない土地で、ただ

むざむざと朽ちて行く、そんな行く末を恐れ始めた。

道具として死ぬ。

確かに、それは貫き通せば立派な死に様かもしれない。

だが、貫いた先にそれがあるかもわからず、「自分」の無いまま終わるという事が、どれだけ恐ろしいかを、彼女らは今、知ったのだ。

「・・・・主は、死と言うものを恐れない」

「乗り越えた結果ではなく、根本的に持っておらんのだ」

「死を・・・・」

「恐れない・・・・？」

「さよう。じゃからこそ、彼は「生きる」と言う事に執着せんのだ」

「・・・いうなれば・・・・嫌いな食べ物のようなモノ・・・・食べるのは嫌だけど・・・・別に食べることはできる・・・・」

「つまりはいつ死んでもいいのじゃよ、あやつの胸の中ではの。死にたいわけではないが、いざというときは軽く命を投げ捨てる」

「・・・・覚悟も何も・・・・持たないままに・・・・」

「そんな人間は生きてなどおらん。死があるからこそ人間は生きることに必死なのじゃからの。ゴール泣きマラソンなぞ、だた日常的に歩いてるにすぎん」

「・・・・だからこそ・・・・主はすでに・・・・死人なのです・・・・」

そう、だからこそ

彼は生きると言う事に素晴らしさや美しさ、輝きを見出し、それを守ろうとしているのだ。
そこまで離れてしまったからこそ、彼は人というのが大好きなのだ。

しかし、なんとその基盤の無残で、残酷なものか。

誰よりも「生」を愛する彼は、誰よりも「生きて」などいないのだ。

「僕達は・・・・」

「お主たちはまだ戻れる。チンク殿をはじめとする数名のナンバー

ズも、こちら側に投降しとる」

「・・・・・私たちが・・・・・・人として・・・・・」

「・・・・生きていけます。必ず」

そう言って青龍が強引に締めくくる。

そしてその視線の先には、未だに騒いでいる蒔風たちがいた。

「仮止めでもいい・・・・俺は・・・行くぞ・・・・・・」

「待ちなさい!!!」

「うるせぇ!!今さらオレの命に・・・・・」

ガゴッ!!!

叫んで結界から出て行こうとする蒔風に、強烈な手刀が撃ち込まれる。
人型となったザフィーラが、後頭部を打たれて崩れ落ちた蒔風をそのまま抱え、臨時の医務室にまで運んでいく。

「このまま連れていけ。こっちはこっちでさらに客のようだからな」

ザフィーラが上空を見上げ、それにつられて皆がそちらを見る。

その上空の先には無数のガジェット編隊があった。

それを迎撃しに行くというザフィーラに、エリオとキャロもついていくと言い、その迎撃に当たる。

一方青龍達は実際、こうしてここに顕現している事すらやっとの状態だ。

主である蒔風があんな状況で、いまだに存在していられる方がスゴイのだ。

ザフィーラの当身で意識を失っていく蒔風が最後にみたのは、巨大な足で立つ竜王の姿だった。

そして、崩れ落ちた地上本部では

ナンバーズをとりあえず地下会議室から出てきたはやてとシグナム

が見、ティアナ、スバル、なのはは倒れた獅子天麟の元へと向かって行った。

「大丈夫ですか！？」

「だめ・・・ですなぁ・・・・・・」

「この体たらく・・・・なさけない・・・・・・」

「グッ・・・・がぁ・・・・・・・」

獅子天麟の三体はよく善戦していた。

突如として現れた迦桜羅によって、周囲が焼かれ、結界どころではなくなったのだ。

そこで対処すべく三体が獣神体となってガジェットを瞬時に一掃、迦桜羅に向かった。

しかしその瞬間、二足歩行となったサラマンドラがその炎の太刀で地上本部の塔を斜めに切断、一気に破壊したのだ。

さらには地面にそれを突き立て、地下のある一室を破壊した。
その「人」が一人も存在しない、最高評議会室という札のあった部屋は、炎と瓦礫によって完璧に破壊されて一切として動くものは無くなった。

そこからはもはや負け戦だった。

被害は大きく、死者が出なかったのが奇跡なくらいだ。

しかし、その代償は大きかった。

三体の再起不能。
地上本部システムの瓦解。

スターズの三人が駆け付けた時、三体はすでに人型にまでなっており、担ごうとしたら、剣の姿に戻ってしまった。
しかたがないのでそれを持って救護のテントまで戻る三人。

更にそこに上空で敵方の騎士と戦闘を行っていたヴィータとリィンも運ばれてくる。
何とか地上本部への進攻は阻止したのだが、そのあまりの戦闘力に撃墜されてしまったのだ。

それを見て、なのはが両手の指を組んで、祈るようにつぶやいた。

「助けて・・・・舜君・・・・・・」

しかし、それに応える青年はいない。
それどころか、その手を取る腕を一本、失ってすらいたのだから。

ヴィヴィオは奪われ、蒔風が重傷。
結果的に地上本部は瓦解、崩壊し、六課隊舎も使い物にならない。

大きな敗北

大きな歪み

物語は変わっていく。

下に上にと、大きく振り幅を変えながら。

to be continued

やっと更新できました！！

みなさま、お待たせしましたよ！！！

アリス「お疲れ様です。でも不定期更新はまだ期間内なんですよね？」

そうですね。
すぐにレポート提出もありますし、やはりそちらをおろそかにはできないので・・・・

ア「と、言うわけで不定期更新はまだまだ続きそうです。そういえば」

ん？

ア「蒔風通信機持ってましたね？どうしたんですか？」

シャッハから借りました

ア「後付けですね。」

うるっせぇ

ア「しかしこれで敵型に残っているのはウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、セッテの五人のみ」

見事に構成組、拘留組。
だけどここでふるいにかけたかったんです。

蒔風の腕を落としたかったんです

ア「酷いですね」

ニヤリ

ア「次回、宣戦布告」

ではまた次回

私達の居場所を…壊さないでえェッッ！

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～エース×翼人～

地上本部壊滅、そして六課隊舎崩壊から翌日。

蒔風が、目を覚ますと、見慣れぬ天井が目に映った。

ボーーーッとした目をして、周囲を見渡す。

どうやら病院のようだ。

ベッドに横になっており、左腕は肩口ががっちりと固められ、首から三角巾で吊るされている。

腕には点滴が繋がり、一滴一滴、少しずつ落ちていっている。

指はぴくぴくと動かせるので、どうやら腕は一応繋がったようだ。

そして昨日の事を思い出す。

襲われた地上本部、燃える六課、落ちる左腕、奪われるヴィヴィオ。

「・・・・・クソッ・・・・・」

開いた窓の外を見て、悔しそうに言葉を漏らす蒔風。

そうして蒔風が起き上がる。

点滴などが繋がっていたのだが、気になどするはずもなかった。

ーーー

聖王病院

ティアナ、フェイト、なのはの三人は、負傷した六課のメンバーの見舞いで訪れている。
ティアナはスバルの、フェイトはシャーリーたちの、なのはは蒔風の様子を見に来た。

三人は終始無言だった。

無理もない。
機動六課は敗北した。

ここまで決定的な敗北は、初めてだった。

そうして無言のまま、三人が各々の部屋に入っていく。

なのはも蒔風の部屋をノックして、その扉を開けようとする。

なのはは本来、来るつもりはなかった。
しかし、蒔風の腕が落ち、彼の目の前からヴィヴィオが奪われたと聞いて、いてもたってもいられなくなったのだ。

だから現場検証をヴィータに無理を言って代わってもらい、やってきた。

しかし

ノックした扉の先から、人の気配がしない。

そして扉を開けた先には、空のベッドと、床に落ちた点滴の針だけだった。

「舜くん？・・・・・・舜君！？どこに・・・・」

会いたかった人がいなかった。
なのはが困惑しはじめる。

あの人ならきっと励ましの言葉で奮い立たせてくれるはず。
そうして、一緒に戦ってくれるはず。

ヴィヴィオを奪われ、憔悴したなのはは、何か支えを求めていた。
そして、真っ先に浮かび上がったのが彼だったのだ。

しかし、その彼がいない。
どこに行ったのかと、フェイトやティアナ、病院関係者を呼ぶことも忘れ、部屋から飛び出して探し出す。

どうしようもなく、会いたい。

その想いを抱えて、なのはは走った。

そうして、見つけた。
時間はさほど、かからなかった。

蒔風は、よろよろと玄関に向かって中庭を歩いていたのだろう。
なのははその姿に安心したのか、寄って行こうと歩いていく。
その瞬間、蒔風が地面にガクリと倒れ伏して倒れてしまった。

「舜君！！」

なのはが驚いて蒔風に走り寄り、仰向けにして身体を起こす。
蒔風は苦しそうに呻き、顔は白い。
しかしそれでも、前に進もうとしているのか、右腕が虚空を掻いていく。

「なのは・・・・・ちょうどいい・・・・俺を・・・連れていけ・・・あの・・・・・・う・・・・」

呻き声の蒔風がそこまで言って、身体がさらに崩れる。
なのははその蒔風をなんとか支え、病室まで連れて帰っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんだよ・・・・病室じゃないか・・・・」

「当たり前だよ・・・なんで舜君・・・」

病室に戻り、なのはが蒔風に問う。
なんであんな無茶なことしたのかと。

「感覚がな・・・・・残ってんだ」

「え？」

「すまん。ヴィヴィオを・・・・・守れなかった」

蒔風が左腕を掴んで辛そうに言う。
彼の腕にはまだ残っているのだ。

あの時、自分を頼りにして、すがり、必死になって掴んでいた、幼い少女の手の力が
たとえ一度千切れたとしても、その感覚はこの腕に宿っている。

その蒔風に、なのはも心苦しそうな顔をしてそんなことないよ、と首を振る。
だが、蒔風はそれでは納得できなかった。

「俺は・・・約束したんだよ・・・・助けを呼んだら、すぐに駆けつけてやるって・・・・」

「それは・・・」

「俺は!!・・・もう負けるわけにはいかないんだよ・・・この世界にも、理不尽にも!!!守れたんだ、もう少しだったんだ!!!なのに・・・・クソ・・・・・クソ・・・・・!!!」

頭を叩きながら慟哭する蒔風。
涙などは流さなかったが、彼は大きく嘆き叫んでいた。

「舜君・・・大丈夫、だよ」

「・・・なのは・・・・お前は・・・・いいのか?俺は・・・・お前の大事なヴィヴィオを・・・・・・」

「舜君は・・・・世界最強なんでしょう?だったら、また助ければいい。私も、フェイトちゃんも、はやてちゃんもみんないる!!だから・・・・だから!!」

「なのは・・・・・・」

その言葉を聞いて、蒔風が目を閉じる。
そうして何を思ったのか、スゥっ、と目を開けて、にこりと笑った。

「そうだよな・・・・何を言ってんだかな、俺は・・・・・・助けるぞ、なのは。なにをしてでもだ。手伝って・・・・くれるかな?」

「もちろんだよ!!!」

なのはが気持ちを改め、それに応える。

実際、なのはも蒔風も気はまだ晴れきってなどいない。
しかし、少しだけ、本当に少しだけ、立ち上がれた。

「絶対に助ける。そのために惜しむモノなんざねぇな」

「そうだね。でも、今回みたいに命を捨てるみたいなまねは絶対にダメだよ？」

「ん？何言ってんだ、俺に死ぬなんてことは止まる理由にならない」

「え？」

「もう何度も説明するのは面倒だから言わんがな、死ぬのがなに？って感じなのよ、俺」

「そんな・・・・」

「言っとくが俺の優先事項項目のトップ十五にも入ってねぇぞ？俺の命なんてもんは。そんなこと、今更怖くもないし、そのような恐怖最初から持ち合わせていないし」

「舜君！！それはあんまりだよ！！舜君が死んだら・・・・」

「はぁ・・・めんど。青龍」

「は」

と、そこで蒔風が青龍を出し、部屋を出て行こうとする。
それを止めてしっかりと話を聞こうとするなのはだが、蒔風は構わんという感じで出て行ってしまった。

そうして部屋に残されるなのは。
青龍と二人だけになってしまう。

「青龍さん・・・・舜君って・・・・昔からそんなこと言ってたけど・・・・本当に死ぬのが怖くないんですか？いったい・・・どういうことなんですか？」

ポツリと、なのはが青龍に聞く。

その質問に対する青龍の言葉は、ＹＥＳだった。

そこから、なのはは一部始終を聞いた。

蒔風の、死を理解し、生とは別の、その在り方を。

――――――

そう言ってザフィーラの隣にまで行く蒔風。
そこで犬型となっているザフィーラの頭をクシャリと撫でて礼を言った。

「すまんな、ザフィーラ。いくらなんでもあそこで命を捨てんのは早かったわ。お前がいてくれて助かった」

「気にするな・・・・・」

と、そこで言葉が途切れてしまう。
そもそもザフィーラはそんなに語る方ではない。

だからこれくらいで蒔風は退室し、次の部屋へと向かった。

――――――

「そ、そんな・・・・舜君が・・・・生きて・・・いない？」

「・・・・概念的に、そうなります・・・・ですから・・・・主は・・・・・」

「そんなの・・・・・・いやだ」

「・・・・なのはさん？」

「私、決めたよ、青龍さん。舜君を、絶対に死なせない。そんなことはさせない。死んでほしくないの。なんだろう・・・・私は・・・・あの人を失いたくないの」

「それは・・・・つまり、主に想いを寄せている・・・・という事ですか？」

「・・・・・・え？ええええええええええええええ！？／／／／／／／／／／／／／／」

「違うの・・・ですか？」

青龍がなのはに確認する。
そうしてなのはが一旦深呼吸した。

なのはは考えた。

私にとって・・・・・舜君は憧れの人だった。

ずっとずっと、憧れてきた。

また会えた時は凄くうれしかった。その時は、成長しても立った姿を見てもらいたかった。
ティアナとの模擬戦の時、見捨てられたみたいですごく悲しかった。
ヴィヴィオと一緒に笑っている彼は凄く見ていて気持ちがよかった。

そして今、自分は彼を求めてここにやってきたのではないか。

そう思うと、とたんに彼のそばに居たくなってきた。

顔を赤らめながら、なのはがそっと、目を開ける。

「私は・・・・舜君の事が大事になってる。あの人に守られたいし、守ってあげたいの。あの人のそばで、一緒に」

高町なのはは自覚した。

ああ、自分はこんなにもあの人に・・・・・・

それを見た青龍が、嬉しそうな、それでいて悲しそうな顔をして、なのはにさらなる言葉を告げる。

「・・・・・で、あるならば・・・・・・貴女にもう一つ、話しておかねばならない事が・・・・」

「え？」

「主は・・・・個人を愛せないのですよ・・・・」

―――――――

バァン！！！

「ギンちゃん元気かぁい！？」

「うっひゃぁ！？」

「きゃあ！？」

「ひいい！？」

蒔風が勢いよく扉を開けて、ギンガの部屋に入って行く。
そこにはティアナもいて、いきなりの来訪者にびっくりしていた。
スバルなんかはガタガタと震えている。

「しゅ、舜さん・・・・」

「ようっす。お前らは大丈夫か？」

蒔風がギンガに身体の調子を聞く。
どうやらチンクとの戦闘でかなり負傷はしたものの、別段重傷ではなかったようだ。

「舜さんは・・・・・・確か腕が・・・・・」

「ん?まぁな。ま、気にするなよ。大したことじゃないさ。くっついたし」

そういって軽快に笑う蒔風。

しかし、なんだか元気のないスバルに、笑い声が一端止んだ。

「どうした、スバル。元気ないな」

「あはは・・・・いや、気になっちゃいまして・・・・・・ほら・・・私たちの事とか・・・・」

「戦闘機人、か?」

「はい・・・・」

「そういえばみんなは知ってたん?」

「私は・・・訓練校からの付き合いだったので・・・・」

「そっかー。はやてとかなのはも知ってたクチだな?俺さん全然わからなかったわ」

ニシシと笑ってスバルの頭を撫でる蒔風。
それでも隠し事をしていたためか、改めて知られたからか、はたまたその両方か、スバルの顔はまだ晴れない。

そんなスバルに、蒔風がしょーがないなぁ、とため息をついてスバルに言った。

「スバル・ナカジマ二等陸士！！」

「は、ひゃい！？」

いきなりの蒔風からの言葉に変な声で応えてしまうスバル。
それをクックと笑いながら、蒔風が優しく聞いた。

「お前の、名前は？」

「スバル・ナカジマです！」

「・・・・・・そうか。なら、それでいいじゃないか」

「え？」

「お前はスバル・ナカジマ。戦闘機人で、ギンガの妹で、スターズのＮｏ．０４。親友も、師も、仲間も、相棒も、家族もいる。そんなやつが、ここにいるお前だ。これ以上、何かいるかい？」

「あ・・・・・・はい」

その言葉に蒔風が「お？」と目をキョトンと開く。

「私は、ナンバーズ（あのこたち）も、一緒がいいです！！」

「・・・・・・ぷっ、あはははははは！！！そうかい！お前の願いはでけぇな！！欲張りさんめ！嫌いじゃないわ！！」

「え？あれ？ティア、私なんか変な事言った！？」

「ふふ・・・ううん。あんたはそれでいいのよ。難しいこと考えんのは、あんたらしくないわよ？」

「そうね。スバルは想いのままに動くのが一番よ」

二人の言葉にむーーー？と手を顎に当てて考えてしまうスバル。

それを見て、蒔風がうんうんと頷いて部屋を出る。

「次はどこブラつこっかにゃ～～～」

―――

「舜君が・・・個人の恋愛ができない？」

「・・・そう・・・・かつて他の世界で、一度だけ・・・・主を好きだと言ってくれた人がいましたが・・・・」

「舜君は許さなかった？」

「・・・・はい」

「そんな・・・」

「しかし主の言う事は確かです。それでも・・・・あなたは主を想い続けられますか？そうあり続けて・・・・くれますか？」

「青龍さん？」

「我々が主に使える事が出来るのは、主が”ｎｏ　Ｎａｍｅ”の垣根から越えたからです。その大元が「死の理解」。今では仕えることに誇りを思えるあの方を・・・どうか一人にしないで上げてくださいますか？・・・・主には・・・・幸せを掴んでほしいのです」

「・・・・大丈夫だよ・・・・・」

「・・・・・・・」

「うん、わかった。舜君は、私が助ける。絶対に、助けたい。もう憧れてるだけじゃ、嫌だもん。私は・・・・あの優しくて、強くて、いつだって助けてくれたあの人を、護ってあげたいの」

「・・・・ありがとう、ございます・・・・・」

「もう・・・そうだなぁ・・・ひとまず、死ぬほど怖い目にあわせれば、その死の恐怖って言うのを思い出すかな?」

「それは・・・・違うと思いますが・・・・・」

ーーー

たいことがあるんだがな」

「「え？」」

「あっち方に小さな女の子がいるのを知ってるか？」

「は、はい・・・・」

「紫の子ですよね・・・・・」

「あの子、どうにもおかしい。一体なぜ、スカの野郎に加担してるのか・・・・知りたい」

その言葉にエリオとキャロがコクリと、力強くうなずく。
それをみて、蒔風が二人を肩に抱えあげて元気づけるようにはしゃいだ。

そうやって何回転かしてから二人を降ろし、二人と別れた。

「よしよし・・・今度はお前らが助けてやれ。この世界の理不尽に、打ち勝って見せてくれよ。それがお前たち未来ある者の力だからな」

一方、去っていく蒔風を見て、エリオがポツリとつぶやいた。

「舜さんの左腕・・・まだ痛いはずなのに・・・・」

「え？」

「動きが・・・ぎこちなかったんだ。あの人は・・・やっぱり凄いよ。キャロ、あの子、絶対に助けよう」

「エリオ君・・・・うん！！絶対に！！」

ーーー

蒔風は首をかしげ、部屋に入る。

そこにはもう、なのははいなかった。

ただ、一枚の紙が置かれており、そこにはこんな言葉が書かれていた。

『舜君へ
あなたに言いたい言葉があります。伝えたい想いがあります。
だけど、それはすべてが終わってから。この想いは、それまで大切にとっておきます。
どうかその命は、あなただけのものだとは思わないでください。
あなたの命は、そこにあるのだから。　高町なのはより』

それを呼んで、ますます首をかしげる蒔風。

そして一つの仮説に想いいたる。

しかし

「いやいや・・・・まさか・・・・・そんなことあるかよ・・・・・ハァ・・・・・」

マジマジと何度も何度も読み直す蒔風。
しかし読めば読むほどそうとしか思えない内容に、蒔風がうんざりした顔をする。

「俺みたいなやつに惚れたって・・・・不幸にしかならないぞ・・・・なのは。憧れで、止めておけ・・・・・フゥ・・・・寝よ」

蒔風がごろりと横になる。
その顔はそれなりに嬉しそうではあったが、決してそれは為す事の出来ない、無駄なことだとわかっている。

自分は・・・・・「人」を愛せても、「その人」自身が大好きでも、「その人」のためだけの感情などは、持ちえないのだから。

「なのはに・・・・・会うのめんどくせーーーーーー」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～エース×翼人～（後書き）

やっと更新できた・・・・・

アリス「前回の予告と違うじゃないですか」

すみません・・・・

ア「それにしても二人目ですか・・・・・まあなのはさんとは結構長く一緒にいましたからねぇ」

ここまで行きつくのにこんなに大変になるとは思わなかった・・・・・

自分は恋愛書くのは不得意ですなぁ・・・・

なんか不自然に感じた方がいたら申し訳ございません。

ア「そして次回は？」

おや、自分に振りますか？

次回、決戦までの期間でーーす

ア「ではまた次回」

ギン姉を、返せェェエエエッ！

いやぁ、こうならなくてよかった

「懐かしいなぁ」

「うちらにとっては想い出の船やからねーーー」

「舜君とかも懐かしいでしょ？」

「俺にとってはお前らほど時経ってないもの」

「そうやったなぁ」

そんなことを話しながら内部設備を整えて行く四人。
さすがに廃艦予定だけあって、中の設備はほとんど死んでいる。
まあ、機材はそのままだったから再起動させればいいだけなのだが。

蒔風の腕は戦闘は無理でも、日常生活には何の支障もない程度にくっついていた。
迅速なシャマルの処置のおかげである。

その蒔風がちらりとなのはの方を見る。

あの手紙があった日以来、なのはとは何度も話したが特に今までとは違う感じはしない。
蒔風にとっては、まあそれならそれでいいんだけどね、といった感じで、特にあの手紙の事を聞こうとはしない。

（このまま思いなおしてくれれば嬉しいからな）

とまぁ、そんなこんなでアースラへの移設が完了し、早速全メンバーを会議室に集合、これからの事を報告した。

「うちらが追うのはスカリエッティでも、ヴィヴィオでもなく、あくまでもロストロギア、レリックや」

切りだすのははやて。
だがその発現に、顔をしかめる者など誰もいない。

「ってーのは建前で？」

「そう、そしてその途中にスカリエッティがおるから叩きのめすだけや。そんで、ヴィヴィオを救出する。この方針で、みんなええか？」

はやての言葉に、みんなが頷く。
しかし、なのはやフェイトは心配そうな顔だ。

「大丈夫？はやてちゃん」

「無理とかしてない？」

「大丈夫やって！！もううち無茶せぇへんもん。それに、三提督も他の上の人も黙認してくれることを確約してくれとる。なんでもこいや！！」

「現在、アコース査察官がスカリエッティのアジトを捜索していますが、まだ見つかりません」

「はやて、そのアコースって人は大丈夫なのか？」

はやての副官、グリフィスの言葉に蒔風が疑問を挟む。
それに対してはやては大丈夫や、と自信ありげに答えた。

なんでもアコース・ヴェロッサはあのカリムの義弟で、レアスキルも持っている、やり手の査察官らしい。
まず心配はないそうだ。

「チンク達ナンバーズから情報が得られれば良かったんやけど・・・・」

「さすがというかなんというか・・・・腐っても天才だったよな、あのスカ野郎」

そう、施設で保護されているナンバース投降組から、スカリエッティのアジトの場所などの情報をもちろん聞こうとはした。
しかし、一体どのような仕組みなのか、チンク達はアジトの場所をことごとく思い出せないでいた。

ある程度までは絞り込めるのだが、はっきりとはわからないのだそうだ。

そこでシャーリーやデバイス担当の技術官、マリーが建てた仮説は、「敵に敗北、又は捕縛された場合、味方陣営の情報の破棄」というプログラムがある、という事だった。

おそらくこれは兵器として作られた際の当然の施しだったのだろう。もし撃破され、敵に情報が渡っては意味がない。

しかも彼女たちの身体はかなり強化されて作られているため、言ってしまえばかなり痛めつけても死ぬことはない。つまり、かなり過激な拷問が効くのだ。

ならばどうするか

簡単である。情報そのものを消せばいい。

と、言ってもまだ量産型ではない彼女らにすべてを忘れさせるなどという事はいきなりしなかったようで、忘れているのはアジトの場所と、これからの計画の細部のみ。

当のチンク達は「協力はしたいのだが・・・すまない」と落ち込んでしまったそうだ。

「でもま、絞り込めるだけマシだな」

「そうやね・・・・でも、きっと・・・・」

「きっと、奴はすぐに動く。スカリエッティは、あんなんだけど、天才。準備が整ったら、すぐに動くよ」

フェイトが双眸を厳しくして言う。
長年スカリエッティを追い続けてきたからこそわかる。
あの男は、あっという間に何かを仕掛けてくるはずだと。

「で、だ。さらなる脅威について話しておこう」

そう言って蒔風が椅子から立って、モニターを出す。
そして久しぶりに伊達眼鏡をかけて、講師のように正面の大型モニターの前に立って話しだした。

「今までチンクの話で、敵の戦力は残ったナンバーズ、ウーノ・ドゥーエ・トーレ・クアットロ・セッテ、更に召喚師のルーテシア・アルピーノ。ヴィータが交戦した融合機アギトと騎士ゼスト。そして・・・・・」

蒔風がモニターに四つの写真を出す。

それは突如として出現した三体の使役獣と一人の男。

その姿に、会議室の空気が少し重くなる。

「「奴」だ。そして、その使役獣のケルベロス、迦桜羅、サラマンダー。言っておくぞ、かなりの勢いで化け物クラスだ。正直な話、管理局とかでどうにかなる相手じゃない」

「・・・・・・・・・」

蒔風の言葉に、みんなの顔が暗くなる。

それはそうだ。

あれだけこっち側が優勢だったあの状況を、この男は一発でひっくり返してきたのだから。

「だが・・・「奴」はまだ世界構築の計算は終わっていないと言っていた。おそらく、今回ヴィヴィオをさらったのはスカとの協力だろうな」

「協力って・・・なにをですか？」

「わからん・・・恐ろしい兵器でも作ってんのかそれとも・・・・・案外、ただ単に寝床借りてるだけかもしれないぜ？」

「それだけで・・・なんですか？」

ティアナが信じられないという顔をする。

あれだけの力があるにもかかわらず、わざわざスカリエッティに協力する必要があるのか？と

「「奴」を読み切ろうだなんざやめておけ。時間の無駄にしかならない」

「でも・・・・」

それでも気になってしまうのだろう。ティアナが推測をしようとする。

「はぁ・・・いいか？こう言うのは俺自身気が滅入るし自信無くすからあまり言いたかないんだが・・・・・」

そうやって前置きしてから蒔風がギシリと椅子に座って眼鏡をはずしながら先を言う。

「「奴」は俺よりも強い。勝てた、なんて言えるのは勢いで行けた何回かぐらい。五回くらいか？その程度だ」

「え？」

「で、でも勝ち続けてきたんでしょ？」

フェイトのそこの賭場に首を振って応える蒔風。
その顔は妙に皮肉った感じに笑っている。

「俺と「奴」は・・・戦えばまず、あっちが高確率で勝つ。俺がここまで勝ってこれたのは、最後に世界のひと押しがあったからだ」

「あの～、世界のひと押しって・・・・なんですか？」

スバルの質問に、蒔風がモニターを叩いて説明する。
モニターに出たのは十年前の最終決戦の映像だ。

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ。世界をこの翼を疑似的につなげ、その力で様々な現象を起こしてヴットばす最後の決め技。それがあったから俺はここまで勝ててきた」

「つまり・・・「奴」はそれさえ越えられれば舜君に勝つ自信があるんやな？」

「そう。だから「奴」は今までも様々な力を使おうとしてきた。究極の闇（ダグバ）、神の半身（ウィツァルネミテア）、願いの宝玉（ジュエルシード）、過去の英雄（セフィロス）・・・・・・挙げていけばきりねぇな」

「ってことは・・・・スカリエッティと何らかの武器の約束を？」

「そのために・・・ヴィヴィオを・・・・・」

「うん。だから今回スカが事を起こすようなら、「奴」自身は無くとも、使役獣ぐらいは出しゃばってくるだろうな」

更に言うなら

蒔風の獅子天麟は戦闘不能状態だ。
普段なら大丈夫なんだろうが、今は蒔風の腕の完全接合のために、
獅子天麟の方に力が回せないのだ。

よって使えるのは龍虎雀武の四体のみ。

しかもあっちはガジェットを無数に保有している。

その戦力差に、全員が気落ちするが、そこで蒔風がダン、とテーブルを叩いて立ち上がった。

「だから全員のパワーアップを図りたいッ！！！」

「パワー」「アップ？」

「そう。一体どんな風に来るかもわからないし、最悪、バラバラに動かなきゃならない事もあるかもしれないでしょ？だから各個人のステータスや能力のパワーアップをする。時間は・・・三日かな？」

「みっ！？」

「三日ぁ！？」

「そ、三日。時間もねぇんだ。かーなーり、きつく行きまっせーー」

そう言ってだははと笑う蒔風に、フォワード四人は当然のこと、なのは達までが青い顔をする。

「どどど、どうしよう！？私まだ舜君に何にも伝えてないのに！？」

「うち・・・・ここで死ぬんかなァ・・・・」

「主！！大丈夫です・・・この烈火の将が必ずや！！」

「アリシア・・・母さん・・・わたし、そっちに行くかもしれない・・・・・」

「あーーーーさすがにそこまでじゃねえと思うけど・・・・・ダメだ、やっぱあたしもコエーーーー！！！」

「ティア・・・私、メンテナンス終わったばっかりなんだけど・・・・・」

「私だって・・・ギンガさんは怪我してていいなぁ・・・・不謹慎だけど」

「も、もうなんでもこいですよ！！（ＴＡＴ）」

「かかか、かかってこいやーーーーー！！（（ＴＡＴ））」

「お前らって俺のことなんだと思ってんの！？」

会議室に皆の声が木霊する。

士気は十分。なんでもこい。

必ず、叩き潰して見せる。

ーーー

これで準備は整った・・・・・
彼の計算とやらはもう少しらしいが・・・・

まぁ、こちらの準備が終わったら始めてもいいと言われたからね、
ありがたくそうさせてもらおうか。

「これ」とマテリアルの接続までもう少し。更に洗脳を加え・・・・
・

くくくくくく・・・・
面白くなりそうだよ

ナンバーズ達数名は残念だが、まああれで捕まってしまうなら今後、
いても仕方ないだろう。

「彼」も何とかすると言っていたし、そちらに期待かな?

さあ・・・・すべてを解き明かそう！！！
私が世界の中心へと赴き、すべてを知ろう！！！！

それが私の存在理由。
私はそうあるように生まれてきた！！

私を作った者はもういない・・・・・

存分にやらせてもらおうじゃないか！！！！！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～想い出の船で～（後書き）

はーい！！後書きの時間ですよーーー！！！

アリス「わーーい！！」

今回の後書きでは今までの後書きで思いっきり書き忘れていた事を発表するよ！！

ア「久々ですね！書き忘れ！！」

では

Q、蒔風がヘリを砲撃から守ったとき、開翼してたけど管理局の人達は知ってるの？

A、知りません。と、言うのも、モニターされていたのはガジェット迎撃していたはやてさんで、ヘリの方を見ていたのはロングアーチだけです。もちろん、その後にはやてからの話で蒔風＝翼人というのは伝えられました。

ア「なぜ描写しなかった」

忘れてましたぁ！！！！

Q、地上本部から六課隊舎に飛んだとき、開翼してたけど、やっぱりばれてないの？

A、加速開翼してたから大丈夫だよーーー。こまけェことは気にすんなってことで・・・・

ア「なぜその時言わなかった」

忘却の彼方へ・・・・

もしかしたらまだ忘れてるかも・・・・

ちなみにギンガは負傷していて、戦闘は参加できません。

止めの一歩前まで持っていかれてましたから、ソレハソウダロウーーー

ア「次回、さあ！！特訓だぁ！！！」

ではまた次回

大丈夫、ヴィヴィオは絶対大丈夫だから。助けよう、二人で、きっと

フェイトさん、役割、うちの主人公が奪ってしまいました・・・・・

「はい！！と、言うわけでぇ！！これから個人レッスンを始めまぁす！！！」

「はい！！！」

アースラ内、訓練施設。
ここの中央にスバルが立ち、その前に蒔風が立っている。

訓練室の壁の方にはギンガやフォワード陣がシートを広げて座っていた。
と、言うのもたった今、彼女たちはなのはの訓練を受けていたばかりなのだ。

つまりぶっ続けで訓練をするという事。
それを聞いてマジですか・・・・という顔をする四人に、苦笑するギンガ。
一番手を指名されたスバルなんかはうへぇ、といった顔をしてからティアナに泣つく始末だ。

ギンガに関しては、怪我こそ治ってはいるが、まだ身体の調子は万全ではない。

ゆえに、今回蒔風は戦力から外した。

蒔風曰く「こう言うのも何なのだが、万全でない者を連れ出すわけにはいかない」だそうだ。

「そ、それで私は何をするんですか！？」

なんだか緊張して直立状態のスバル。

そのスバルを見てクックと笑いながら蒔風が言う。

「そう緊張すんなよ。今からやるのは激しい動きじゃない。お前の力を引きのばすだけだから」

「私の・・・？」

「ギンガ！左手用のリボルバーナックルは持ってるか？」

「え？は、はい！！」

蒔風の言葉にギンガが反応し、スバルに自分の左手用のナックルを持って来て装着させる。
それにスバルが唖然とし、自分の腕に付けられたそれをまじまじと見つめる。

「今回、ギンガの参戦は無理だ。だからスバル、お前がそいつを連れて行ってやれ」

「え？」

「左右揃ってこそだろ？それに、お前にはギンガの分も頑張ってもらわなきゃならないしな」

「は、はい！！」

その言葉を受けてますます緊張するスバル。
そして、特訓が始まった。

「スバル、お前を最初に持ってきたのは、ある程度筋肉が暖まってた方がいいからでね？」

「えっと・・・・なにをするんでしょう・・・・」

「お前の「能力」を「技」にまで昇華させる」

「能力を・・・技に？」

きょとんとするスバル。
そのスバルの拳を手にとって、蒔風が先を言う。

「スバル、お前のＩＳはなんだ？」

「え？・・・えとお・・・・「振動破砕」って言います。振動で相手を内部から攻撃する力なんですけど・・・それを技にですか？」

もう隠す事がなくなってスッキリしたのか、きっぱりと答えるスバル。

そのスバルにコクリと頷いて蒔風が重々しく、それていで流動的に構えていく。

「俺はシューティングアーツはわからんが・・・・武道なら多少の心得がある。こい、スバル。使うのは振動破砕のみ。まともに教えはできないが、やってる間にわかってくんだろ」

「なんだか投げやりだ！？しかも結局激しくなる予感！！！」

懇切丁寧に教えてもらえるかと思っていたスバルは、結局こんなんである蒔風に「ええーーーー！？」と声を出す。

それを見た同僚たちは、これからのスバルに声援を送っていた。

「頑張れスバル！！」

「あんたはできる子よ！！！」

「スバルさん！！がんばってください！！」

「ご冥福を祈ります」

「皆ありが、って！？だれ！？今私の冥福祈ったの！？」

「「「「さあ？」」」」

「うわーーーーーーーーん！！！皆まとめて後で砕いてやるぅ！！！！」

「よっしゃ！！来いスバル！！お前の力、見せてみろ！！」

ーーー

透き通る、爽快感！！！
ア○エリアス！！！

「タイミングはわかった？」

「はい！！なんとかですけど・・・」

「次からはなのはとの訓練でやっていけ。あんだけできてりゃわざわざ全身で振動噴き出さなくても、必要な一、二カ所だけとか、更に応用次第で防御にも使えるでしょうしね」

「わかりました！いやぁ、このＩＳって中々訓練できないんですよね～」

「当たればまず、一撃必殺だからな。こっちだって受け流すために腕使ったけど、まだヒリヒリしてんもん」

蒔風が腕をさすりながら話し、はっはっはっはと二人で笑う。
それを見てのフォワードの感想は・・・・

「あれだけ動いてまだ特訓なのね・・・・」

「スバル・・・成長したわね・・・」

「私には無理です・・・・」

「二人とも、かっこいいです！！！」

――――――

蒔風の呼び声に、次はティアナが出る。
そのティアナに蒔風がいきなり言った事は・・・・

「ティアナ、クロスミラージュ起動。オレを狙い撃て」

「はい！！（ジャカ！）」

「躊躇なし!?ちょっと待て、説明させて!!相手はお前がガンナーだって知ってるし、当然それに対策は講じてくる。すなわち、数で来るか、銃弾なんざものともしない奴が来るか」

「はい」

「もし前者ならば一体残らず打ち抜き、なおかつこっちは無傷でなければならない。後者なら来るのは使役獣だ。だが、こいつらは固い上に速い。だから・・・・」

「動き回る舜さんに銃弾を命中させる?」

ティアナが正解を言う。
腰を捻って動く準備をしながら、蒔風がティアナに条件を言った。

「俺に効いただとかそんなんはいい。とにかく当てろ。オレの選択は回避のみだ」

「そ、それだけですか？」

「それだけ。威力とかは気にスンナよ？弱かろーが強かろーが一向に構わん。あ、超加速移動はしないから安心しろ。じゃあ・・・・・」

「はい！！行くわよ！クロスミラージュ！！」

《了解！》

「行くぞ！！」

――――――

ガオン！！！

ティアナの銃弾が蒔風の前髪をかすっていく。
壁を走っていた蒔風は無理にそれを回避して空中でクルクルと回転し、ベタン！！と床に落ちる。

しかし、だからと言ってティアナは銃撃をやめない。
それは蒔風がその程度で止まるとは思っていないからだ。

うまく受身を取って身体を張りつけるように床についた蒔風が、そこからゴロリと転がって銃弾を避けていく。

「（狙いがぶれてきたか？・・・さすがに疲労が・・・）・・・・・ッオ！？」

蒔風がティアナの動きを考察して油断していると、ティアナがいきなりとんでもなく正確な銃撃を放ってきて、思わず畳返しで銃弾を防ぐ蒔風。
それにティアナも蒔風も「あ」という顔をして、動きが止まる。

「・・・・ふ・・・・・よくやった！！合格！！」

「よしッ！！！」

「わーーい！！ティアーーーー！！！」

「じゃあ次はこっちからもちょくちょく攻撃入れるから回避するなり撃ち落とすなりして当てにこい」

「《え？》」

やっと終わった・・・・と、思って膝に手をつくティアナに、スバルが駆け寄ろうとして、そこにこの蒔風の一言。

こいつ鬼か。

「デバイスもそろって何言ってんだよ・・・・避けてるだけの敵なんざいねぇぞ？さ、始めっか～～～」

陽気に言う蒔風。

蒔風自身も結構汗を流しているが、まだ動けるらしい。

対してティアナは結構疲れている。

そして、ハッ、と思いだす。

それなら一人でも巻き添えにしてやると。

「ッ！！スバル！！あんたも・・・」

「ティア！！私こっから応援してるから！！！」

「見捨てんの早ぁ！？いつの間に壁まで！？あんたそれでも私の親友！？」

「命は粗末にしちゃいけないと思うんだ！！それにオーバーワークだし！！！」

「じゃ、じゃあ・・・・」

「「こっち見ないでください！！！」」

「あ、あれ？おかしいわね・・・・私このチームのリーダーなのよね？・・・・」

「じゃあ合図しまーす。よーーーい・・・・」

「ギンガさんまさかの鬼進行！？待って待って！！クロスミラージュ！！準備は！？」

《出来ました。いつでもどうぞ！！》

「始め！！！」

――――――

「ティ、ティアナさんの目からハイライトが消えてる!?」

「助けて!!誰か俺を助けてーーーー!!!!／（×Δ×）＼」

ーーー

スバルが足を投げ出して上を仰ぎ見、更にはキャロとエリオも四つん這いになって荒い息を吐いている。

「ふ、ふふふ・・・そうさ・・・・こう言う特訓だったのさ・・・なかなかだろう？・・・・・」

「舜さん・・・適当に言わないで・・・・・ください・・・」

「ごめん・・・・・」

計画どおりみたいな事を言う蒔風だが、エリオに突っ込まれて反論する元気もない。

「エリキャロは・・・午後にでもしようか・・・・・」

「「はい・・・・・」」

さすがに蒔風も病み上がりとあって、ここで午前の訓練は終わりにしておいた。

エリオとキャロも、ティアナを止めるのに疲れて倒れこんでいて、

どうみてもこれ以上出来るなんて誰ひとりとして思ってないし、本人たちだってそうだ。

もしやろうなんて言われたら本気で勘弁してほしいと泣いて頼み込むつもりだったし。

ーーー

「「オオオオオオオオオオオオオッッ！！」」

蒔風が午後になって訓練場で気合を込めて叫ぶ。
ちなみにエリオとキャロは半ばヤケになって叫んでいた。

だって怖いもん。

「ＨＡＨＡＨＡ、なにをおっしゃるルシエさん。怖くなんてないよーー？」

「う、うそです！！その目は嘘をついてる人の目です！！！」

「と、まあ冗談はここまでで」

「どこまでが冗談だったんですか！？」

終始振り回されるエリキャロに、蒔風が話を進めていく。

ちなみに今はこの三人しかいない。
残りのメンバーはなのはと一緒に模擬戦やらなんやらの訓練中だ。

きっと午前中に得たモノをフルで使って、順調に伸ばしているのだろう。

「キャロ、お前って確かフリードのほかにもう一体竜いるんだっけ？」

「あ、はい。ヴォルテールって言うんですけど・・・・・」

蒔風がキャロに聞くヴォルテールとは、彼女の出身地、アルザスを守護する巨竜である。
彼女の真の切り札にして、それに見合った、莫大な魔力と攻撃力を誇る。

「それってあれだよな？六課が焼けた時に出したやつ？」

「あ、はい。舜さん、見てたんですか？」

「うんにゃ？すぐに意識なくなってうろ覚えだったよ？でもまぁ・・

・・あれの実力を見たい、ってところだな」

その言葉にキャロは少しだけ考えて、首を振ってこたえた。

「ダメです・・・今の私だと、契約して呼び出せても、そのコントロールがしきれなくて・・・・六課の訓練場の仮想プレートもガジェットの迎撃で勢い余って割っちゃいましたし・・・・」

「それに緊急時にはすぐに呼べるそうなんですが、制御するためには長い詠唱が必要みたいで・・・・」

それを聞いて蒔風が頷いて考える。
頭に手を当て、少し考察してから、ポン、と手を叩いて訓練内容を言った。

「よし、キャロはそれを呼びだす詠唱をして、エリオはフリードと一緒にそれを守れ」

「えぇ!?ヴォルテールをここに呼んじゃうんですか!?」

「いやいやいやいや。呼ばなくていいよ。ただ唱えるだけでいい。で、俺はそれを妨害しようとするから、エリオはそれを守れ。あれ

を呼びだせればまず勝てるだろ」

「はい・・・・あ、でも」

「ん？」

キャロがモニターに映像を出しながら、蒔風に説明する。
出てきたのはチンクから得たルーテシアに関するデータだ。

なんでも彼女は母親をスカリエッティに握られているらしい。
レリックのＸＩ番があれば復活できる。

そう言われて、彼女は協力しているそうだ。

しかし今注目すべきは彼女の召喚獣だ。

人型の蟲で格闘技戦を得意とする「ガリュー」
大量に存在し、ガジェットなど無機物にとりつく「インゼクト」
数体存在し、振動によって局地的地震を引き起こす「地雷王」

そして・・・・・・

「究極召喚・白天王・・・・・・画像はないですが、データだけ見るとこれは・・・・ヴォルテールと同じステータスを持ってるんです」

「つまりあっちにも同じようなやつがいるってことか？」

「はい。しかももしかしたら、あの子の方が召喚師の力は上かもしれません・・・・そうなると・・・・・」

キャロが俯いて、自信なさげに言う。

たしかにキャロは、自信満々に、と言うようなキャラではない。

むしろ控えめな性格だ。

しかし今はそれが裏目に出ている。

だが、そんな落ち込むキャロに、エリオが肩を掴んで笑顔で言った。

「キャロ、自信持って！僕はキャロのブーストに何度も助けてもらったし、フリードがいなかったら初任務の時落ちていたんだよ？そんなキャロが、あの子に負けてるなんてことはないよ！！」

「エリオ君・・・・」

「だから、安心して。キャロは凄い力を持ってるんだから。でももしキャロに危険が迫ったら・・・・」

そう言ってエリオがストラーダを片手に持ち、縦に真っ直ぐ持って、キャロに言いきった。

「僕が絶対守る。この槍にかけて。二人で助けよう。あの子を、ルーテシアを」

エリオの決意。
そのエリオを見て、キャロも「うん！」と頷いて決意する。

それを見て蒔風がいひひと笑って、じゃあ始めようか、と掛け声をかける。

特訓内容はさっき言った通り。
キャロはコントロールのための詠唱、そして、エリオはそのキャロの護衛だ。

「始めまっせぇ！！！」

「「はい！！！」」

ーーー

「舜さん！！逃げてっ！！！」

「おおおおおおおおおおおッッ！！！！！」

ガオンッ！！！ドゴァ！！！

「な！？ちょっとぉぉオオオオオオオ！！！！！」

「キャロ！！コントロールは！！？？」

「やろうとしてるけどッ！！」

「キャロ！！気にすんな！！こうして出て来ちまった以上、コントロールまで持ってく！！！強く願え！！信じるんだ！！！」

「キャロ！！がんばって！！」

「エリオ君・・・舜さん・・・・うん！！」

「掛かってこいやこのデカブツがぁ！！！」

「私は・・・助けたい、守りたい・・・・・そのために・・・・戦って勝つことが必要なら・・・私はあなたを恐れない・・・・・私と一緒に、戦って！！ヴォルテール！！！！」

――――――

「舜さん!!舜さん大丈夫ですか!?」

「いっつ～～～・・・ふぅ、何とかモノにしたか?」

「はい・・・ありがとうございます!!!」

キャロの言葉に、ムクリと身体を起こす蒔風。

イチチ・・・と口元の血を拭ってエリオとキャロに「よくやった!!」と激励の言葉を贈った。

「エリオ!!おまえ速くなったな!!!まさかあそこで飛んでくるとは思わなかったぜ!!」

「え、えへへ・・・・・でも、まだ速くなるんですよ!!」

「はぁ!?おまえ速すぎ・・・いつか俺もお前とやり合うときは加速開翼しないといけなくなるかもな!!」

「その時は負けません!!!」

エリオの頭をくしゃくしゃと撫で、その成長を称える蒔風。
次にキャロの方を見て、やっぱり頭を撫でながらその力を絶賛した。

「お前のヴォルテールってありゃただの強い竜じゃなかったんだな」

「え？えっと・・・昔からアルザスを守ってますから！！」

「うんうん。それに、あれは生物というより「自然の体現者」って言った方がいいな」

蒔風の言葉に、なんですかそれ（・ω・）？と首をかしげる二人。
その顔を見てウンウンと頷いて説明する蒔風。

「つまり、あれは自然が命として現れた形だ。嵐だとか地震と同じなんだよ」

「えっと・・・つまり？」

「止められないってこと。オレでも勝てん。いやそもそも、勝つだとか負けるだとかいう次元の存在じゃない。嵐を爆弾で吹き飛ばそうとも出来ないし、借りに出来るとしても更に強いのがやってくる」

「そ、そもそも嵐が来たら過ぎるのを待ちますよ・・・」

「だろ?それと同じなんだ。退けることはできても、倒すことなんてできない。あれは確かに制御なんざできねぇよ。それをやったお前は凄い!!」

その後もめちゃめちゃに褒める蒔風に、どんどん照れていってしまうキャロにエリオ。

しかし、思いのほか時間がかかってしまい、なのは達の方はどうしても見きれないだろう。

「舜く~~ん。だいじょ・・・って、ホントに大丈夫!?」

と、そこになのはがやってくる。
後ろには訓練を終えたヴィータとティアナ、スバル、がいた。

訓練室はいくつかあって、それなりに離れている。さらにはその間には防護壁もあったのだが、さっきの轟音はそこまで聞こえていた

ようだ。
蒔風なら大丈夫だろうと心配せずとも、社交辞令的なあれで「大丈夫？」ときいてきたなのはは、その惨状を見て本気で心配そうに聞いてきた。

なんせ床は全部へこんでるし、壁はグニャリと曲がっている。
更にはいまだ炎がチラチラと上がっているし、当の三人はボロボロなのだから、心配もするだろう。

てゆーかよく大丈夫だったなアースラ。

そんななのはに歩いて行って、その肩を叩いて蒔風が眉毛をあげて満足した笑みを浮かべてすれ違う。

「気を抜くなよ？なのは。次からの模擬戦、おまえ苦戦するぜ？」

「え？」

そう言って和気藹々と訓練内容について話している四人の方を見て、蒔風がにやりと笑う。
なのはもそっちの方を見て、まだ負けないよ！！と両手をあげて反論する。

それを見てあははと笑う蒔風。

「じゃ、明日はお前だから」

「え？」

「訓練、ってか調整だな。お前もあるよ？明日やっからなぁ～～～」

そう言って今日はもう寝るといって部屋へ帰ってしまう蒔風。
今日はこれでおしまい。

あしたはなのはたちだ。

それを想像して、なのはが一言つぶやいた。

「どうなっちゃうの・・・・私・・・・・」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～くんれん！！～（後書き）

準備期間めんどくせーーーーーーーーーー！！！
という作者でございます。

アリス「いきなり何叫んでんですか」

いやね？
こういう準備期間書くのが一番苦手なんですよ私！！
自分が書くとどうしてもグダグダになってしまって・・・・

ア「うぬぼれるなッ！！それを決めるのは読者さんだ！！！」

ヒィっ！？
で、ではアリスさんは読んでみてどうでした？

ア「グダグダ」

アッーーーーーーーーーー！！！！！

ア「次回、なのは達編。強化です！！」

ではまた次回

私達は、とめなあかん

早くここまで行きたい・・・・

「さて、フェイト、なのは」

「うん」

「な、何をするの？」

フォワード陣の訓練の翌日、なのはとフェイトは蒔風に呼び出されていた。

昨日のフォワードたちの様子から、自分たちも何か教えてもらえるのか、と思っていた二人は期待半分怖さ半分といった心境だ。

だが蒔風が二人を呼び出したのは訓練室ではなく、デバイスを解析、修復する技術室だった。

「何をするかって言われてもな・・・・お前らには特にないぞ」

「「へ？」」

蒔風の言葉に、二人は思わず変な声を出してしまった。

「なにもしない？」

「お前らはな。ほれ、レイハとバル出せ」

「え？ってひゃあ！？」

そういって蒔風がヒラリと二人の手元などを触れるか触れないかのスレスレの距離で撫でる。

きっと触れてないからセーフ・・・・だろう。
うん、セーフだ。セーフなんだよ！！

しかしまあ、当の二人は触られてはいないものの、当然反射的に悲鳴が口からこぼれる。
が、蒔風はすぐに後ろを向いてシャーリーやマリーとコンピューターに向き合ってしまった。

「あの～～舜君？私たちは・・・・」

「お？別にもういいぞ？用があるのはこっちだしにゃ～」

なのはの質問に蒔風がデバイスポットの中をクイッ、と親指差して答える。
そこにはいつの間にか掠め取られたレイジングハートとバルディッシュが浮かんでいた。

「あぁ！！？」

「い、いつの間に！？」

当のなのは、フェイトは当然驚く。
なぜならレイハはなのはの首に、バルはフェイトの胸の内ポケットに入っていたのだから。

結局触れてんじゃねーか。

「セ、セクハラ！」

「そんなでかいもん胸につけてる方がセクハラだよ」

「好きでおっきくなったんじゃないよ！！」

「「「フェイト（ちゃん／さん）喧嘩売ってんの？」」」

フェイトと蒔風の口論は怒りマークを頭につけた三人の声にて一瞬で終わった。

と、蒔風が気を取り直して本題に入る。

「お前ら二人の技術だとかはもう俺が口出しするようなことはないよ。ったく・・・十年でホントに成長しちまってよ。おにーさんなんだか寂しいぞ？ま、あとの問題はお前らは自分の身体の後先考えずにバッカンバッカン撃ったり動いたりすることだ」

「「も、申し訳ございません・・・・」」

「ふぅ・・・年下は大人しくおにーさんに任せなさいっての・・・・まぁ、だから後はその負担を軽減できるようにこっちをいじくるだけだ」

そこまでいって蒔風が説明は終わったとばかりに再びマリーやシャーリーと話したりモニター見たり開翼したり閉じたりし始めた。

「あ、あの・・・私たち、これから訓練が・・・・」

「ん？ああ、行ってきても大丈夫だぜ？」

「いやあの、デバイスがないと・・・・」

「フォワードはヴィーナムが見てるから大丈夫だろ？お前ら二人で組み手でもやっとけ」

いやにそっけない蒔風。
まあ、その分デバイスの方に集中しているということか。

「だからさ、ここでこいつの機構をどうにか組み込んで・・・・」

「でも仕組みがあんまり・・・・」

「じゃあ今こうやって・・・」

「そっか！で・・・・」

あーだこーだと話し合ってモニターが出ては横に逸らされ、また前に持ってきて等を繰り返して話を進める三人。

なのはとフェイトはそれを見て唖然としてしまうが、とりあえず訓練場に行こうか、ということになり、ため息をついて部屋を出ていった。

――――――

「なにこれ」

「フェイトさんのリミットブレイクですけど」

「エロいな」

「あ、やっぱり？」

「フェイトさん肉付きもいいですからねー」

「なんだ？これで相手を悩殺か？」

「いえいえ、そうではなく、速さを追求した結果ですよ」

「なるほど、無駄を省いたんだな。だが・・・・」

「エロいですよね？」

「エロいっすねー」

「恥ずかしくないのかね、あいつ。ま、速さならこうして・・・・・・」

「それいい！」

「やりましょう！」

ーーー

組み込んだ機構に関しては内緒だが、まず確実に力になるとのことらしい。

「なのは、フェイト。おまえらは「無茶すんな」って言ったところで絶対するだろ。だからしても大丈夫なもん取りつけといた。ぶっつけ本番で、しかもかなり使えるものだが・・・やっぱ限度回数ってのはあるからな？よく聞いておけよ？」

「ダメだよ舜、なのははそんなこと言ってもきかないよ」

「ダメだよ舜君。フェイトちゃん平気で無茶するんだもん」

同じ顔で同じようなことを言って、一瞬の間をおいて互いの顔を見るなのはとフェイト。

ニッコリ笑った一瞬後、ガシィッ！と互いの手を握りしめてギギギギ・・・と力比べみたいな事を始めてしまった。

「フェイトちゃんっていつもいつもアホみたいに危ないところ行っ

ちゃうんだから」

「なのはも人のこと言えないよ?全部抱え込んで先の事考えないでバカみたいに砲撃撃つんだから」

「バカって言った!?」

「アホって何!?」

「テメェらどっちもどっちじゃボケェッ!!!」

ガツン!!と頭に拳骨食らわせて怒鳴る蒔風。
その足元ではしゃがみ込んで頭を押さえる／（T△T）＼なのはとフェイトが涙ぐんでいた。

「そ、それをいうなら舜だって・・・・・」

「シャラッ!!」

「自分の命を何とも・・・・・」

「黙らっしゃい!!!」

「ん？なにやっとん？」

と、そこに昼食を取りに来たのか、はやてが通りかかる。
どうやら今日の昼食はとんかつのようだ。

「げん担ぎか？」

「そや。こんな時だからこそこう言うもん食わんとな！！」

「めったに動かない役職なのにそんなカロリー高いの食ってからに・・・・」

「う、うっさいわ！！！それより、あっちはなんなんや？」

そう言ってはやてが箸でなのはとフェイトを指さす。
と、言っても蒔風のすぐ後ろだが。

いまだに蒔風にギャーギャーと言ってくる二人を、今の今まで完璧にスルーしていたのだ。

「なのは、フェイト。そろそろうっさい」

「「舜（君）が聞いてくれないからでしょ！？」」

二人の言葉にさらりとした態度で受け流し、デバイスの説明の補足を入れるため、蒔風が指を立てる。

「おおすまん。でだな？もしおまえらが限界数超えて使用しようとした場合なんだが・・・・・」

「う、うん・・・・」

「デバイスの方が損傷する。しかも直るまでずっと「あのときあなたが無茶しなければ・・・・」といった趣旨の言葉を呟いたりやメールを送り続けてきます」

「「なにそれ怖ぁ！？」」

想像してたものと違い、あまりにもねちっこいその後始末に背筋が

凍る二人。
それを見て蒔風とはやてが心底面白そうに笑っていた。

「あっはははははは！！！！そらいいわ！！二人の無茶にはうちも困ってたんやからな？」

「ほんとほんと。やめろっていってもやめねぇんだから、ったくなぁ？」

と、そう話し込んでいる四人の後ろに、今度はシグナムとヴィータがやってくる。
彼女らも昼食のようで、騒いでいる四人に呆れ半分笑顔半分といった感じで隣に座った。

「蒔風。私たちの訓練の方は午後になるのか？」

「あたしらは大丈夫だからな。いつでも相手してやんよ！！」

「あ、そういえばうちもそうやな。それとも、うちらもデバイスいじくるだけか？」

シグナム、ヴィータ、はやてが順番に蒔風に訓練の内容を聞いてこようとする。

それを聞いて蒔風がう～～んと唸りながら、腕を組んでしまう。

「シグナムもヴィータもそこまで強化するとこ見当たらないし、はやてはどっかのバカみたいに無茶するようなやつじゃないし・・・・ま、特にはないかもしれないな」

「あ、そ、そうなん・・・・・」

「ん？残念そうだね？」

「いや、うちらとしても身体は動かしときたいからなぁ」

「あたしたちだと生半可な相手じゃおちおち本気の模擬戦も出来やしねーからよ」

「それに比べて蒔風が相手なら、私たちでも本気が出せると言うものだ」

と、なんだかんだいってる彼女らだが、ようは言いたいことは一つのようだ。

「「「やらせろ」」」

「こんなんでも俺、腕くっついたばかりの病み上がりなんですけど!?」

「こっちはスカリエッティ(あのバカ)のせいで鬱憤たまっとんのや!!!!」

「それは私もだよ!!あの狂人・・・・一体どれだけ人に迷惑を・・・・」

「あ、じゃあ私もやろうかな」

「私ももうこれ以上お前と戦えないのは嫌だからな。十年前の雪辱、晴らさせてもらう!!!!」

「あたしはとくにねーけど二人がやんなら、って感じだな」

「シグナム&ヴィータはわかるけどお前ら三人はただの憂さ晴らしじゃねえか!!」

「うちらが全力で相手しても大丈夫なんって舜君だけなんやから」

「しかたないよ」

「そうなると今度は俺が手加減しないといけないんですけど・・・・」

「ほう、よくいった」

「だったら手加減できないまでやってやる」

「お前ら決戦前って理解してるのか！？」

と、やっぱりギャーギャー言い合う一同。

結局、この後蒔風ははやてにバインド掛けられて訓練場に連行。

三十分後にはボロ雑巾のように訓練室から出てきた。
それでもなんとか勝ったのは「世界最強」の意地だろうか。

ちなみにその時の戦闘状況、はやて曰く

「いきなり「腕がとれる」なんて言われたら、そら「はっ！」とするわ・・・・・卑怯やで、あれ」

だそうだ。

――――――

「おまえら人生楽しんでいますかい！！！！？」

「「「「「「「「「おぉーーー

「こんにちは、舜さん」

「舜さん、お久しぶりです」

「舜～～～プール行きたいよ～～～」

蒔風の状態を聞くディエチ、おみやげを期待するウェンディ、組み手を希望するノーヴェに一歩で遅れたチンク。
更にペコリとあいさつをしてくるオットーとディード、最後にセインが遊びに行きたがっていた。

「おうおうおう、おまえらちょっと待ってくれ。今日は話があってきたんだよ」

一気に囲まれて困ってしまった蒔風が、どうどうと全員を落ち着かせてから座らせて、今日来た旨を伝えた。

「今日はお前ら全員と・・・・・・身体の調節に来たんだ」

「身体の調節？」

「おう。聞いての通り、見ての通り、俺の左腕は一回千切れて、なんとかくっついた。で、治ってから動きはしたがどーにも本気で動ける相手がいねぇってわけで」

「そこで私たちですか？」

「そう。なのはたちじゃ怪我なんてさせたら戦いに支障がでるからね。ある程度の怪我もさせられん。怪我してもまあ大丈夫だろうな相手がお前らしかいないのよ。だからお願い！！お願いお願い！！！」

蒔風が両手を合わせて懇願する。
その姿を見て、ナンバーズはというと

「いいぜ！！あたしははなっからそのつもりだったしな！！」

「おもしろそーっすね！！」

「あん時負けた分は返す！！」

「舜さんのお願いならば」

「私も、異論はありません」

全員乗り気なようだった。
だが、ノーヴェがそこでハイ、と手を挙げて蒔風に聞く。

自分たちの装備はどうするのかと。

「「「「「「「あ」」」」」」」

「私たちの武器は当然だが全部没収されている。能力だけでも戦えない事はないだろうが・・・・そもそもそんなこと自体許されるのか？」

確かに。
自ら投降したとはいえ、彼女らが凶悪犯罪の一端を担っていたのもまた事実。

面会ならともかくとして、模擬戦、更に武装なんて事が許されるはずなどないのだ。

が、そこはこの男。
そんなルールなどお構いなしだ。

「そんなもんはここに用意しておきました！！！（バサァ！！）」

「「「す、スゲーーーーーーーー！！！！」」」

「「お・・・・」」

「「どっからどーやって出したんだ！？」」

蒔風がいつの間にかそこにあった、布のかかったなんかの山に近寄ってその布を一気にはぎ取る。
するとそこに現れたのは彼女らの武装のすべてだった。

ライディングボードからスティンガーナイフ、ガンナックル&ジェットエッジにイノーメスカノン、ツインブレイドのすべてがあった。

「各自自分の武装を持って位置に付けー。ソッコーで始めるから」

「い、今からですか？」

「そ。ほらほら！！はじめっぞ～～～～」

「い、急げ！！あの男はやると言ったら本気だ！！！」

「あたしは万全だ！！」

「「ノーヴェ早ぁ！？」」

「ディード、はい」

「ありがとう、オットー」

「ではゴングは僭越ながら私が取らせてもらいます」

ナンバーズが準備を終え、朱雀が現れてスタートを切ろうとする。

前方にはノーヴェ、ウェンディなどの近距離の者。

後方にはチンク、ディエチなどの遠距離の武装を持つ者が立ち、蒔風に向き合う。

「では・・・・始めっ！！！」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～きょうか！！～（後書き）

よっしゃーーーーーー！！！！
やっと更新できましたよコンチクショーーーーーー！！！！
アリス「ようやっとですね」

ホントにもう・・・・
呪いの感想とか来ないかと内心びくびくしてましたよ
ア「考え過ぎです」

それでいて頭の中では最終決戦のシーンだとか台詞がポンポン浮かんできてもう大変でした。
早く決戦を書きたーーーい（人間になりたーいみたいな感じで）

ア「次回はナンバースとの？」

いいえ。そこは飛ばします。
次回はそこから少し後で、スカさんの宣戦布告からです。
ア「飛ばすんですか」

いや、一旦この小説をゆっくり見たんですよ。
そして思った事が一つ・・・・・・

なのは長ぁ！！！！

いやまぁこういう「多重世界」なんて設定にしちゃったし、最初から長く書くつもりだったからある程度は覚悟してましたけど、まさかここまでになるとは思わなかった！！！！
二百話ぐらいにはなのは終わってるかな？とか思ってたのに・・・・
・

これじゃひと段落するの下手したら二百五十を少し超えるかも・・・
・・・

ア「一段落・・・・ですか？」

おおっと、それはまだ秘密

さて・・・・今回の後書きはまだ続くぞ！！！！

ア「そんなに言う事あるんですか？」

ない！！！無いが書く！！！！
テンションが言っている・・・・・書くのをやめるなと

ア「その分本編書けや」

後書きの方が面白くなってきた。
会話文だけって楽だーーーー

ア「まあ・・・そうですね。にしても本当にあと何書くんですか？」

わからん・・・・だがとにかく目標は

目指せ本分量突破

ア「字数制限的にアウトでしょ」

ぬ、ぬかったぁ・・・・！！！
だったらこれもう本文として掲載していしまおうか？

ア「アホですかあなたは。そしてあなたは「本望だ！！」と言う」

本望だ！！ハッ！？

ア「もういいでしょう？」

い、いやまだだ！！無意味に続けていたいんだ！！！

後書きを終わらせたくない！！！

そ、そうだ！！今度「めぐ銀」検定やろう！！！

問題書くから・・・・・

ア「誰得だよ」

すみません、やりません

じゃ、じゃあライダー検定だ！！！

ア「本家がやってたじゃないですか」

にょろーん

ア「ふ、所詮その程度ですか」

じゃ、じゃあ何か思いつくのかよ！！

言ってみろよ！！！言えるのか！？え！？

ア「そうですね。では他の小説の紹介を、作者の了解もなしに勝手にやってしまいましょうか！！！！」

やめろ！！！
いろんな人に注意されてしまう！！！！

ア「次回！！戦いに火ぶたが、切って落とされる！！！」

なにぃ！？や、やめろ！！終わらせるな！！
後書きは永遠に・・・うわ、なんだおまえやめｒくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

愛おしい日々を　刻みこんだａｍｕｌｅｔ
ｉｎ　ｍｙ　ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｄａｙｓ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～約束～

各自の訓練や強化を終えて

機動六課のメンバーは一向に動きを見せないスカリエッティにピリピリしていた。

しかしそれはなにも機動六課に限った話ではない。

その不穏な空気は、地上本部が完全に崩壊し、未だ復興の目処が立たない管理局全体を覆い尽くしていた。

だがそんな中でも人々は決して諦めるなんてことはなかった。

スカリエッティのアジトの捜索、武装局員による警備強化、管理局内の暗部

特に地上本部の崩壊から、多くの事がわかってきた。

一つは瓦礫と化した地上本部跡地から発見された「最高評議会室」にあったのは人間ではなかったという事。

彼らはその身を失い、生体ポットの中に浮かぶ脳だけの存在になって、管理局を裏から見守り続けていたのだ。

そして二つ目は、その評議会の三人がどうやら秘密裏にスカリエッティと繋がっていたという事。
これに関しては確実な物証はないものの、状況証拠は完全にそうであることを示しており、まず間違いないというのが結論だ。

そしてそれは、彼らと懇意であったレジアス中将もおそらくスカリエッティのバックボーンだったであろうことを示していた。
こちらにもまだ確かな物証がないために身柄の拘束はできないものの、レジアスは実質チェックメイト状態だ。

仮にそうでないとしても、予言を無視し、地上本部をここまで壊滅させてしまった責任は重い。
おそらく、管理局にはもういられないだろう。

そして三つ目

それは・・・・・・・

「ヴィヴィオが聖王のクローン？」

「そう。かつての古代ベルカの偉大な王さま、聖王オリヴィエの遺伝子から作られた、人造魔導師。それがヴィヴィオや」

定期的にアースラ内で開かれる報告会議。

そこではやてが告げたのはヴィヴィオの正体とでも言うべき内容だった。

「聖王って確か・・・聖王教会の聖王か？」

「古代ベルカの王、オリヴィエ。伝承によれば、永く続いた古代ベルカの戦乱の世を終結に導いた強き王だったそうだ」

蒔風の質問に、聖王教会に顔を出すことの多いシグナムが答える。

それを一応の説明とし、はやてが話を先に進めた。

事の発端は十年前。

教会で聖王の遺物「聖遺物」を管理する司祭が、その聖骸布を持ちだした事が始まりだ。

その結果、遺伝子情報は教会外にばらまかれ、それを用いた研究の

唯一の成功例がヴィヴィオだそうだ。

つまり、結局スカリエッティは天才だったというわけだ。
惜しむらくはその才能の矛先を間違えたという事か。

しかし、その天才性はあまりにも異常だ。

「スカリエッティは・・・・なんでそんなにまで出来るんでしょう・・・・」

「今の技術を軽く超えてますよね・・・・・」

そう、あまりにも出来すぎる。
それはもはや天才としての域を超えていた。

そしてその答えも、まだ推測の域に過ぎないが、はやては得ていた。

「スカリエッティは・・・・・伝説の時代を生きた人間やったからや」

「え？」

「はやてちゃん、それっていったい・・・・」

困惑する一同。

だが、ひとりだけ納得の言った顔をして、蒔風が発言した。

「戦闘機人、人造魔導師。そのどちらもが古代ベルカ、否、下手をしたもっと昔、伝説の時代（アルハザード）に存在したロストテクノロジーだ・・・・・まさか・・・・」

「そう、ジェイル・スカリエッティは・・・・・あのその時代を生きた人間の遺伝子を元に作られた・・・・クローンや」

その言葉に全員が驚愕する。

確かに、その説明ならあれほどの頭脳も納得がいく。

しかし、一体誰が？なんのために？

「つまり、それの黒幕が評議会の連中だったという事か」

「そう。管理局はいつだって力が足りへん。有史以来、魔導師の数は増えたと言ってもまだまだ少ないし、管理できてない世界も多い。だから、さらなる力を求め、世界を平和に導くために・・・・」

「その身を捨てて脳味噌にまでなって、世界の行く末を見ていこうとしたわけか・・・・その結果が無限の欲望（アンミリデット・デザイア）」

管理局評議会によって、技術の発展やさらなる平和のために生み出された科学者、ジェイル・スカリエッティ。
その身をひたすら研究に費やさせるために、探究心や好奇心を増幅させて成長させられてきた。

しかし、そんな偏りで人間がどうにかならないわけがない。
いつしか彼の暴走した探究心は誰にも止められなくなり、ついには希代の犯罪者として今、世界を騒がせている。

「・・・・・そんなことがあったのか」

「うん・・・・でも」

「そうや。だからと言って、許されるわけなんかあらへん。うちらは、どうやってでもあのバカを止めるんや」

「そして、もしあいつがなにも知らないなら・・・・」

フェイトの目が少し、本当に少しだけ憐れみに染まる。
彼もまた、誰かの都合に取って作られた存在だった。

そのつらさは、自分がよく知っている。

しかし、その思いを砕くかのように、会議室に声が響いた。

『自分の出生なんて、私はとっくに知っているよ』

「ッ！？」

「おまえは・・・・・」

「ジェイル・・・・スカリエッティ・・・・・!!!!!」

フェイトが鋭い目つきでモニターに映る男を睨む。
しかしそのような感情には興味がないかのように、スカリエッティが笑い声をあげた。

『あっはははははは!!!何を感傷に浸ってるんだい!?そんな生まれなんて関係ないねぇ・・・私はただ!!知りたいだけだ!!!そのために行動してるし、評議会の連中ももういらなかったから「彼」に頼んで消してもらった!!!自分の生まれなんて最初に調べて知った事項だよ?まぁ、もしかしたらこの「知りたい」という感情も埋め込まれたものかもしれないのだが・・・どうでもいいな』

いきなり現れてベラベラと喋るスカリエッティに、フェイトが歯ぎしりをする。
目の前にいる凶悪犯罪者は、やはりどうあっても凶悪犯罪者だったのかと。

『おやぁ?なんて顔をしているんだい?何を思っていたのかは知ら

ないが、勝手に思い込んで勝手に裏切られた顔をされても困るよ。
一方的な感情は迷惑だよ』

「スカリエッティ！！！」

フェイトの激昂。
そこにもはや意味のある言葉などはなかった。
ただ目の前に標的を絶対に捕まえてやるという殺気じみたフェイトの声が、会議室に響いた。

そのフェイトの肩に手を当て、落ち着いておけと蒔風が後ろに下がらせて前に出る。

「よくもまぁ、このアースラに直で通信入れてきたもんだな。ばれんぞ？」

『おっと、これはこれは翼人くん。心配をどうも。しかしね、どうやら君たちの仲間みたいな二人が私のアジトを見つけたようだよ？そろそろ通信が行くんじゃないかな？』

「は？」

と、スカリエッティの言葉の直後、はやてに連絡が入る。
アコース査察官とシスター・シャッハがスカリエッティのアジトを

発見したのだそうだ。

しかし中から無数に湧いてくるガジェットに内部調査を諦めて一時撤退、現在はアジトの入り口である洞窟の前で出てくるガジェットと交戦中らしい。

「なるほど・・・・それでもその余裕・・・っちゅうことは、そっちの準備ができたってことなんやな？」

『理解が速くて助かるよ、部隊長殿。それで、いろいろとなじみのある君たちに招待状だ。私はアジトの奥にいるよ。捕まえたくば来るがいい。まぁ、来るだけの暇があればだが』

「どういうつもりだ！！」

『どうもこうもないよ。こっちでの話は終わりだ。後は管理局全体に話がしたいのでね。一旦こちらとの更新は切らせてもらうよ』

「待て！！！」

『ではまた後ほど（プツン）』

そこまで言って、通信が言ったん途切れる。

しかし、またすぐに映像が立ち上がり、スカリエッティの宣戦布告が始まった。

それは管理局すべてに対する宣言だった。

地鳴りが響き、大地を押しのけて、地の底から黄金の戦艦が出現する。

聖王のゆりかご

古代ベルカの戦乱の時代。
聖王が所持していた超巨大空中戦艦。
その武装には魔力兵器だけでなく、質量兵器も装備される「失われし脅威（ロスト ロギア）」

かつて聖王の元、世界を席巻して破壊したとされる最悪の兵器。

そして

『ママァ！！！ママァーーーーーーーー！！！！！！！助けてぇ・・・
パパァーーーーーー！！！！！』

「・・・・チッ」

「ヴィ、ヴィヴィオ・・・・ヴィヴィオッ・・・・・・！！！！！」

ゆりかごの起動キーとして利用され、聖王の間の玉座にしばりつけられた状態で苦しそうに叫び、助けを求めるヴィヴィオの姿が、スカリエッティの映像から流された。

その姿にその場の全員の顔が歪み、モニターを睨みつける。

『さあ！！挑んでくるもどうするかも！！すべてキミタチ次第だよ！！！？君たちが忌避し、封印し続けてきた最悪の力を前に、一体どうすると言うのかね！？』

と、そこでさらに管理局内の通信が全局員に通達される。
内容は至極単純だった。

《戦闘機人、総数七体と謎の巨獣三体によって、地上防衛用巨大魔力攻撃兵器「アインヘリアル」全三機が大破》とのこと。

「な！？」

「戦闘機人・・・全七体！？」

「どういう事・・・・・なの？」

なのは達が困惑する。
スカリエッティの元に残ったナンバーズは残り五体のはず。
チンクの話だとさらに作り出すだけの上質な個体はいなかったそうだから急増したとは考えにくい。

ではなぜか。

「あの野郎・・・やりやがったな・・・・・」

「舜さん？」

「大体の見当は付いている・・・やっと来たか。あの野郎・・・・・」

「舜君・・・・まさか！？」

蒔風がその正体を理解する。

その元凶は、彼が今まで、幾度となく戦ってきた相手だった。

「間違いない。「奴」だ」

ーーー

暗い空間で二人の声が聞こえる。
一人はこの場から聞こえる声だが、もう一方は通信によるものだ。

通信の方――スカリエッティが宣戦布告の傍ら、「奴」にモニターを繋げて礼を言っていた。

『まさか彼女らの「存在の記憶」まで操れるとはね』

「それが俺の特権だ。あのナンバーズ達は自ら「兵器」である自分を捨て、新たな自分として生きることを決心した。だから俺はその「兵器としての彼女たち」を生み出したにすぎん。実物よりもパワーは勝るが、戦力は低いぞ？」

『構わないさ！！私はあれさえ潰せればいいのだから』

「あんな瓦礫に何があるんだい？」

『見ていてくれたまえ。そっちも早く終わるといいね』

「こっちの戦力はできるだけ貸すから、後は勝手にやっててくれ。こっちは仕上げに入りたいんだ」

『おっとすまない。ではこのへんで』

そこでスカリエッティが通信を切り、「奴」が再び計算の仕上げに戻る。

「スカリエッティ・・・・おまえは負ける。どんなに頑張ろうとも、策を巡らせようとも、おまえは負けるんだ。原典がそれを証明している。オレの貸した戦力があろうとも、蒔風に対抗できるのは俺くらいなもの。プラマイゼロだ。だが・・・その先に何があるかは、まだまだお楽しみだな」

――――――

た。
その様子を見て、フェイトがなのはを抱え、蒔風がおもむろに通信を切った。

「まったく・・・・ガキの泣き声はうるさくてかなわん」

「舜・・・・君？」

「だから・・・・泣き止ませに行かないとな。ガキに泣き顔は似合わん。それに・・・・俺はパパじゃないっての」

「うん！！」

アースラのモニターに移るのは三つ。

周囲に大量のガジェットを撒き散らして宙に浮く巨大戦艦「聖王のゆりかご」
地上本部跡に駆ける、「奴」の「欠片」に「記憶」を練り込まれた数体のレプリカナンバーズ。

そして、泣き叫ぶヴィヴィオ。

それを見て涙しなかった者はいない。
蒔風ですら、その目に悔しさが溜まっていた。

だが、そのようなものはもうすでにない。

目に宿るのは、一つの決意。

今まで何度も口にしてきた。
今まで何度も胸に抱いた。

しかし今一度、もう一度言おう。

それは・・・・・世界に絶対などなくとも、その想いの存在だけは、何者にも否定されない「絶対」のものだという証明。

「必ず助ける。この身に変えても」

「舜君・・・・・」

彼の脳裏に蘇るのは、前にヴィヴィオに告げた言葉。

【此処にいるみんなは、お前を一人にしないし、呼べばすぐに駆けつけてやる】

「約束は果たされなければならない」

「うん・・・・そうだね」

「全員、準備はいいか！！！」

『はい！！！！』

「行くぞ・・・・待ってろよ、世界（スカリエッティ）の理不尽・・・・・・今度は負けん。三度目の正直か、二度ある事は三度あるか・・・・・・勝負だ。もう、やらせない」

翼人の、蒔風舜の

三度目にして最後の

この世界へのリベンジが始まった。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～約束～（後書き）

キムチ鍋うめーーーー！！
と、言うわけで武闘鬼人です。

今晩のご飯はキムチ鍋！！！
お椀に残った汁にご飯をぶち込み、啜って食うのがたまらない！！！

アリス「私は辛いのそんなに得意ではないですね」

そっか～～～
自分のお椀にキムチ鍋の元を入れて喰いましたよ。
かき込み過ぎてむせて噴き出しましたけど

Ｏｈ，Ｓｈｉｔ

ア「そういえばもう一月中旬ですけど、大丈夫なんですか？」

なにが？

ア「更新」

それがですね、今度は大学の期末試験とか始まったんですよ！！！

ア「あーーーー」

だからもしかしたら、一日くらいは更新しないかもです。

ア「とか言って毎回更新して単位落としてるバカじゃないですかあなた」

言わないで！！！！

そして買いました、Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ文庫版！！！

前からあったのはどうにも大きくて手が出しにくかったのですが、文庫版が出たと聞いて買いました。

やっぱ面白かったです！！！

ア「ほかには？」

ない

ア「次回、各隊出動！！！」

ではまた次回

パンツめく・・・・あ、これ違うや

ア「違うでしょう」

「全員、集合や」

はやてが一同を集める。

すでに地上ではゆりかごから射出されたガジェットと、地上部隊の魔導師が交戦を始め、市民の避難誘導を進めている。

モニターには廃墟と化した地上本部に向かうレプリカナンバーズ、ゆりかご、スカリエッティアジトの様子が映っていた。

「現状、潰さんとならんのはこの三つや」

「おそらく一カ所に一体ずつ、「奴」の使役獣がいる」

「それに対してこっちはこの人数だし、高度なＡＭＦ戦が出来る魔導師は多くないから、各部署に協力していく事になるね」

「私はアコース査察官、シスターシャッハと一緒にスカリエッティのアジト。シグナムは地上本部で待機。他の隊長格はゆりかご。そして」

「地上本部に向かうナンバーズもどきはフォワードに向かって貰うつもりや。みんな、大丈夫か？」

はやての決定に、皆が首肯して了承する。

しかしそれでも、フォワード陣の表情は重く暗い。

彼らのとって、最初の大勝負。本気で本当の一本勝負なのだ。

負ければすべて終わる。

そのプレッシャーはいかほどのものか。

さらにエリオとキャロは保護者であるフェイトが部隊からは単身で、スカリエッティのアジトに向かうこともあって不安も大きい。

それを汲んでか、スターズとライトニングでそれぞれ新人たちを激励していって、ヘリへと送る。

「舜君からも何かない？」

と、そこでなのはが蒔風に声をかけた。

蒔風はお前らで充分だろ、と言うが、気付いたらフォワードたちの視線が蒔風に向いていた。

もう完全に何か言葉をもらうつもりだ。

それを見て、蒔風が適当にため息をつき、それからフォワードの前に立つ。

「じゃあ・・・まずティアナ！」

「はい！」

「お前はなのはみたいに膨大な魔力量があるわけでも、派手な大技があるわけでもない」

「はい・・・・」

「強く打たれれば崩れ落ちるし、一人になったら敗率は一気に跳ね上がる」

「はい・・・・（泣）」

「だが、だからこそ。お前の魂は強い。師匠譲りの不屈の魂がある。どんな状況でもあきらめず、立ち上がる強さがある。そこから這い上がってきたお前の心は、何よりも打たれ強くなっている」

「あ・・・・・」

「強き信念。優れた頭脳。見せてやれ。ランスターの弾丸を」

「はい！！」

「次、スバル」

「はい」

「今までの人生、簡単にでいいから振り返ってみろ」

「・・・・はい」

「どうだった？」

「・・・辛かったし、大変でした。悲しいことも、苦しいこともたくさん。楽な人生じゃなかったと・・・思います。でも」

「でも？」

「私は、スバル・ナカジマは、今までの人生を嫌だったとは言いません。とても楽しく、幸せなものだと、胸を張って言えます。そし

て、これから先も、ずっとずっと」

「うん、そうだ。あそこを走っているのは「兵器」としてのチンクたちだ。だが「兵器」は「人間」の道具。だったら・・・」

「だったら、私たちが道具に負けるはずない！！ですよね！！！」

「その通り！！お前がなのはからもらったのは、貫く力。敵も障害もぶち抜いて、その先の道を切り開く力だ」

「はい！！」

「ぶち抜いてこい！！スバル・ナカジマ！！その先に、一直線に進め！！お前の魔法は、それほどに強い！！」

「はい！！！」

「で、キャロ」

「は、はい」

「力は怖いか？」

「はい・・・・・・」

「でも、必要な力だ」

「・・・・・・」

「気落ちすんなよ。お前の力は、誰かを守る力。キャロの使う魔法は、ここにいる奴らの中でも、誰よりも優しい」

「舜さん・・・・」

「その優しさは、フェイトからもらった大切なものだろう？だったら、あの子を救って、証明してくれ。キャロが受け継いで得てきた力は、決して脅威などではなく、頼もしいものであるということを。」

「はい！！」

「んで・・・・・終わりか」

「ちょっとぉ！？」

「はっはっはっは！！じょーだんですよエリオ君。お前には正直、感謝してもしきれないからな」

「え？」

「俺を立ち直らせてくれたのはお前の言葉だった。お前の言葉は、世界最強ですらも救う力がある。大丈夫だ、エリオ・モンディアル。お前は確かに作られた命だが、お前をここまで形作ってきたものは、お前自身のものなんだから」

「え？う、うあ、舜さん？」

蒔風が膝を折り、エリオと目線を合わせて言った。

「お前の速さは、どんなところに誰がいても、すぐに駆けつけられるものだ。お前を育ててくれた人から、教えてもらったその速さで、キャロを守り、ルーテシアを救ってやれ」

「はい！！わかりました！！！」

「気合い入れてけよお前ら！！あんな瓦礫の本部に何があるのかは知らないが、向かってる以上何かある。本部には最終防衛ラインでシグナムとリィンが張っているが、そんなものはいないと思え！！」

「はい！！」

「お前らの信念で！！！叩き潰してこい！！！」

「「「「了解！！！」」」」

「では諸君!!準備は整ったな?そろそろ俺たちは降下ポイントだ。ティアナ、エリオ。こいつらを預けておく」

そういって蒔風がティアナに朱雀を、エリオに白虎を刀剣状態で預ける。

「おそらく、そっちがキツさではかなりものになるはずだ。二体預ける。任せたぞ」

「「はい」」

そうして、準備が整った。

降下ポイントにつき、蒔風も隊長陣と主にアースラの降下ハッチから飛び降りていく。

空に飛び出し、雲を突き抜けながら落ちていっていると、背後ではフォワードの乗ったヘリが地上本部へと向かうレプリカたちに先回りし、シグナムとリィンは単身で本部に直行した。

そして、空中に四つの光が灯る。

なのは、フェイト、はやて、ヴィータの四人がバリアジャケットを展開し、セットアップして蒔風と共に現場に向かっていった。

「俺マジ飛べるようになってよかったわ」

「うちらはこのままゆりかごに、フェイトちゃんはアジトのほうに直行や」

「フェイト、お前には玄武を預けておく。なんか出たらすぐに使え」

「わかった。でも舜の方が・・・・」

そう、このままでは蒔風の手持ちがなくなる。

獅子天麟は剣として問題ないが、召喚はできない状態だ。

だからフェイトは聞いた。
手持ちは青龍のみ。しかも、「奴」まで出てくるかもしれない状況で、大丈夫なのかと。

「大丈夫だ。こっちにはなのはにヴィータがいるし、ゆりかごの外ではやてが指揮をとってくれるから無視できる。問題はない。お前のほうも、リミッター外すときはしっかり俺さん特性プログラム使えよ？」

「わかってるよ。なのはも！！無茶はしないでね！！！」

「フェイトちゃんも！！舜君のシステムがあるからって、やりすぎはだめだよ！！」

「それはなのはもだよ！じゃあ、そろそろ行くね！！」

「頑張ってこい！！あの野郎は一発ぶん殴ってやるからな！！」

「あはは！！じゃあ！！！」

そしてフェイトが森の中へと向かっていく。

向かうは宿敵、ジェイル・スカリエッティのアジト内。

決着を着けるために、金色の魔道士は飛んで行った。

「さて・・・・あれか」

そして見えてきた「聖王のゆりかご」

すでに戦闘は始まっており、航空武装隊とゆりかごを取り巻くガジェットの激しい交戦が行われていた。
その下にはすでに交戦し、落とされた戦艦が二、三隻程あった。

「ＡＭＦのせいでみんな十分な戦いが出来とらん。しかも、情報だとゆりかごは少しずつ上昇して、数時間後には衛星軌道上に乗って二つの月の魔力を受けることになっとる」

「調べてくれたユーノ君によると、そうなったらもう完璧な防御力を誇る無敵の戦艦になるそうだよ」

「無敵の戦艦・・・・・か。それはまずいな」

「その前にあたしたちでぶっ潰す！！！」

「いくで！！みんな！！！！」

「「「応！！！！」」」

ーーー

「とは言ったもののッ！！！」

「はやて！！数が多すぎるよ！！！」

航空隊に合流し、ガジェットを落としていくなのは達。
しかし、一体どれだけの貯蓄があると言うのか、ゆりかごの周囲を飛び回るその機影は一向に減らず、こちらの数が減って行くばかりである。

「皆、ここが踏ん張りどころや！！！数が減れば、ゆりかごからガジェットが射出される！！そこからなのはちゃんたちは内部に突入、ヴィヴィオの救出と、動力炉の破壊や！！」

「ならばそのガジェットの数減らし、俺が承る！！！」

はやての言葉に蒔風が飛び出し、なのはに魔法陣での足場を頼む。
そして現れた桜色の魔法陣に、両足を広く取って構える蒔風。

そして数秒、息を深く取り、力を練り込み、そこから一気に真上にジャンプし、回転しながら敵に向かい、右の拳を突き出した。

「打・滅・星！！音割（おとわり）！！！」

ドカッ！！ギィィィィィィイイイイイイイイイイイン！！！！

打ち据えられた巨大な球体型のガジェット？型に、蒔風の拳が命中する。

その？型自体は、当初全くの無傷だった。
しかし、殴られた衝撃が機体を振るわせ、その振動は空気を伝って周りに存在するガジェットへと共振して行った。

その衝撃に内部構造から攻撃され、次々とガジェットが墜ちていく。

「今や！！！どっかから噴出口があるはずや！！」

はやての指示に、目を皿にして探す三人。

「見つかって・・・どこに・・・・・・・！！！はやてちゃん！！あそこ！！！」

「どこや！？・・・・なるほどな。見つけたで！！私はこのままここで指揮を執る！！三人はゆりかご内部に突入！！」

「「「了解！！」」」

「アースラはゆりかごから離れて、衛星軌道上の戦艦隊に合流や！

！」

『了解です』

「ほないくで・・・・・こっからがクライマックスや！！！！！」

to be continued

やっと始められたよ最終決戦！！！

アリス「でもここからですよね？」

そうだね。

と、言うわけで私の得意技を発動しようと思う

ア「なんですか？」

「内容トントン拍子」のスキル発動じゃあ！！！！

ア「ここで！？しっかり書きなさいよ！！！」

下手するとフォワードの戦いとか次回と更に次回で終わるかも・・・・・

ア「二話で！？」

下手をするとね。

いい加減なのは長すぎたよ。

しかも戦闘終わってからもなんか少し書かなきゃみたいな感じだし、
少しでも早く終わらせる。

ア「手抜き！！」

は、しない！！

だけどトントン拍子だ！！！

次回予告を！！！

ア「次回、フォワードの戦い」

ではまた次回

数の子戦隊、ナンバーズ！！！！（ドーン！！！）

スピンオフでやってくんないかなぁ

「見つけた！！」

ヘリの中で、ティアナが声を上げる。
その視線の先には黒いシルエットをした七人の姿。

捕虜となった彼女たちの「兵器としての」記憶を埋め込まれた「奴」の「欠片」だ。

その数、七体。

対してこちらは四人にフリード、そして二体の使役獣。

「そういえば「奴」って人の使い魔はいないみたいですね」

「でも六課の時に現れたあの三つ首の犬はいきなり現れたし・・・・」

「油断はできないってことだね・・・・・」

『四人とも、準備はいい！？これからあいつらの先に回って、四人を降ろすから今のうちに・・・・』

ドォン！！！！！

「きゃあ！？」

「うわぁ！！！！」

パイロットのアルトが四人を降ろそうとヘリを操ろうとした瞬間、そのヘリを衝撃が襲った。
何が起こったのかもわからぬまま、回転して落ちていくヘリ。

その衝撃と遠心力でハッチが開き、真ん中に立っていて取っ手に手が届かなかったスバルが投げ出される。

「スバルッ！！！」

『大丈夫！！ウイングロードで何とか着地したよ！！』

ティアナがスバルの身を案じ名前を呼んだが、すぐにスバルからの通信が来てほっと胸をなでおろす。

「このまま私たちも行くわよ！！！」

「「はい！！！」」

このまま投げ出されたスバルを一人にしておくわけにもいかないので、残りの三人も飛び降りてスバルと行流する。

しかし

「う、ぐぁッ、ツッ！！お前は！！！」

「エリオ君！！！」

降下中のエリオを、ヘリを襲った衝撃の犯人が襲いかかった。

ガリューである。

その拳をストラーダで受け止め、そのままガリューに連れて行かれる形で離されていくエリオ。
それを見てティアナの指示よりも早く、キャロがフリードに乗ってその後を追う。

ティアナはそれを見てスバルの傍らに着地、合流した。

「ティア！！エリオが！！」

「わかってる。でも、私たちがここを離れるわけにはいかない。それに相手は召喚士だから、どうしてもキャロの力があっちには必要

よ」

「じゃあ・・・・・」

「やるわよ、私たちで。あの七人を」

「ティア・・・・・」

「なんて顔してんのよ。大丈夫よ」

スバルの表情を見てティアナが軽快に言うが内実、ティアナもまずいことは重々把握していた。

もとより四対七、否、蒔風の使役獣やフリードを合わせて互角の数だった戦況が、一気に塗り替わってしまったのだから、それは当然まずい。

しかもあっちは「奴」の「欠片」がベースなだけあって、パワーは段違いだそうだ。

「まさか召喚士がこっちに来てるなんてね・・・・・迂闊だったわ」

「うん・・・でも」

「そう、あっちはあっちに任せる。行くわよスバル！！」

「うん！！！」

ティアナとスバルが駆け出す。

敵は機人七体。

向かいながら朱雀を出し、その背に乗って、戦場へと飛んで行った。

――――――

廃棄都市のビル群の中。

槍と一体になったかのように構えるエリオが、ガリューと幾度となくぶつかり合う。
しかしガリューの装甲は想像以上に固く、なかなか好機が訪れてこない。

「キャロ！！」

「うん！！フリード！！ブラストレイ！！！」

「ガアアアアアアア！！！！」

ドォン！！！！！

フリードの火球が大気を振動させる轟音とともに吐き出される。

その先にはガリュー。

確実に命中するコースだ。
しかし

ゴガッ！！

「なっ！？」

「きゃあ！！！」

信じられないことに、それをサッカーボールのように蹴り飛ばし、まっすぐに打ち返してきたのだ。
さらにその火球に身を隠し、フリードの股下に滑り込んでゆき、しっぽをつかんで投げ放った。

あまりにも強い力に、フリードの巨体が揺れてビルの屋上に背中か

らたたきつけられる。

その勢いは、ビルの屋上を二階分ほど下げさせるものだったが、それでも主とその騎士は自らの腹のほうへと回し、直撃を防いだのはさすがというところである。

「フリード！！大丈夫！？」

「ガウ」

「ねえキャロ・・・・なんだかおかしい」

「うん・・・前に戦ったときは確かに速くて強かったけど」

「こんなに無茶苦茶な力じゃなかった。それに、あの子も見当たらない」

そう

この場で二人と戦っているのはガリューのみ。

ガジェットがいない以上、インゼクトがいないのはまだわかるが、

こちらの体勢を崩してくる地雷王も出てきておらず、あまつさえル

ーテシアすらもいないのはおかしい。

「どう思う？」

「多分、どこからガリューに補助魔法をかけてるんだと思う。ここからそんなには離れてなくて、こっちの様子が見える場所」

「探せる？」

「やってみる。エリオ君はその間・・・・」

「ガリューを止める！！！いくよ！！ストラーダ！！！」

≪Ｊａｗｏｈｌ．≫

竜騎士の少年が、一人、蟲武人へと向かっていった。

その間に、キャロが周囲をサーチしていく。

自分と同等の召喚士。
しかもあっちは身動きの取れない状況。

ならば、見つけることはそうそう難しくはないはずッ！！

「見つけた！！フリード！！！」

「ゴアアアアアアアアア！！！！」

キャロの声にフリードが即座に炎弾を吐きかける。
標的は少し離れたビルの中腹。そこの壁に命中し、壁が崩れてその中から一人の少女が出てきた。

「ルーテシア・・・アルピーノ・・・・」

しかし、その少女の様子もおかしい。
あまりにも静かすぎる。

いや、前回あったとき、彼女は無表情に無感情という、希薄な印象の少女だったことは確かだ。
しかし、全くなかったわけじゃない。バインドで縛れば悔しそうに顔をゆがめ、レリックケースを奪われた時は残念そうな顔をしていた。

だが今の彼女は、そんな感情すらも無く。

ただ己の召喚虫へと指示を送る電波塔になっていた。

「あ、あれは・・・・・・」

「なんて事を・・・・・・」

ルーテシア・アルピーノの行動は当初からかなり自由度が高かった。
眠る母親を目覚めさせるがために、スカリエッティと共に行動していたが、そこはまだ子供。なんの拍子に管理局に身柄を拘束されるかわからない。
故に彼女にはあらかじめ、自我を奪い、外部操作が可能なような「処置」を施されていた。

つまりは洗脳。

しかも先日にナンバーズすらも投降してしまったことを受け、いよいよまずいと思ったのか、彼女をすぐさま「兵器」としての操り人形へと変えたのだ。

なるほど、確かに合理的である。

あのナンバーズを説き伏せた人物が相手に居るのに、ルーテシアを放っておけば確実に戦力は削がれる。
こうすれば揺れる事も無く、戦闘のコマとして使えると言うもの。

あまりにも合理的で、それでいて、あまりにも人の意志を無視した行為。

「ふざけるな・・・・・・」

その様子に、エリオが静かに怒っていた。
ガリューと向き合いながらも、その視線の先にルーテシアを見据え、さらにその眼は、背後にいるであろうスカリエッティを睨みつけているかのごとく形相。

「ふざけるな!!!なんでそんな・・・・人の意志を無視した事をするんだ!!!!その子はお母さんを助けたかっただけなのに、

それを・・・・それを利用して・・・・・・」

「エリオ君・・・・・・」

そう、彼だからこそわかる。
様々な理不尽に振り回され、一時はどん底まで荒(すさ)み、ふさぎこんだ彼だからこそ

彼女の不遇と、その運命を、好き勝手に利用する者に対して、激しく激昂した。

「行くよ・・・キャロ」

「うん。エリオ君。助けようね。絶対に!!!」

エリオが槍を切り捨てるように振り、第二形態「デューゼンフォルム」に変形させ構える。
その背後で、キャロがエリオに、さらなる力を与えるよう、セカンド

モードでブーストを掛けた。

そうだ、今度は助けるんだ。

自分たちは助けてもらった。
いまでは一番大切な、お母さんになってくれた人。

その人だけじゃない。

自分たちに、力を教えてくれた人。
自分たちに、道を指し示してくれた人。

自分たちと、仲間になってくれた人。

自分たちを、育て、評価し、絶賛してくれ、ここまで送り出してくれた、総ての人達のように。

今度は自分たちが助ける番だ。

「行くぞ!!!機動六課ライトニング分隊０３、ガードウィング、エリオ・モンディアル!!!あの人のようにはいかないかもしれないけど・・・・・・」

「大丈夫!!私がしっかりサポートするから!!だから・・・絶対に!!!」

「ああ!!!」

「「救える者は、根こそぎ救うんだ！！！！」」

そうして騎士と武人が、そして二人の召喚魔導師が、決意と洗脳の元でぶつかり合った。

ーーー

「ツッ！？キャあああああ！！！！」

「ティアッ！！！」

轟音、爆破、悲鳴、驚愕

今、ティアナ達はレプリカナンバーズと交戦をしていた。

当初として、相手は七人、こっちは三人だったため、どのようにして相手全員を引きとめるかが課題だった。
それに関しては簡単な事、ティアナのフェイクシルエットで解決できた。

しかし、そこからのナンバーズによる進撃がやばすぎた。

「奴」の「欠片」が素体のレプリカナンバーズは、荒い動きである

ものの、信じられない勢いでティアナの幻影を次々と消し去って行ったのだ。
一気に三百出した幻影は、三秒後には二体になっていた。

そしてそれをどう解釈したのか、七体すべてがこの場に留まり、三人を標的として突っ込んできたのだ。

その後、一気にビルの中にまで押し込まれ、外に出ようともそのあまりの力にあっけなく押し返されてしまい、未だに廃ビル内での戦闘を余議なくされている。

「ティア！！大丈夫！！？？」

「バカ！！！こっち気にしないで、後ろ！！！」

「ぬん！！！！！」

ガゴォ！！！！！

襲いかかってきたのはディードのレプリカだろうか。スバルの首に向かって振るわれたツインブレイドを、寸でのところで朱雀が朱雀槍で防ぎはじいた。

しかし、敵は多い。

さらにその朱雀にウェンディ、オットーの砲撃が襲いかかり、朱雀がスバルを押し出してから転がって避けるとそこにノーヴェの強烈な蹴りが放たれた。

そこにティアナの援護射撃。

その弾丸は連続してノーヴェの足に命中し、その向きを若干変えた。

そう、若干のみだ。

それほどまでに、レプリカの身体は強靭だった。

しかしそれでも朱雀は何とか回避し、スバル、ティアナと背中合わせに集まった。

「お二人とも、大丈夫ですか！」

「ええ、大丈夫」

「朱雀さん、ありがとう」

「いえ・・・・しかしこの数は・・・・私にとっても脅威ですね・・・・」

周りを囲む戦闘機人の数は現在は四体。
全身は黒いが、そのシルエットは間違いなくウェンディ、ノーヴェ、オットー、ディードだ。

そして残りの三人、チンク、ノーヴェ、セインの三人はビルの外で逃がさぬよう見張っているのだろう。

「どうやら結界などの力は使えないみたいだけど」

「それでも十分に厄介ね・・・・・あのパワー、反則よ」

「しかも相手が多いです。ここは時間を稼ぎ、エリオとキャロが来るのを待つのが得策かと」

「そうね・・・・でもッ！！！」

ドゴァ！！！

警戒しながら話している三人に、ライディングボードが飛んできて三人のいた場所を直接ぶち抜いた。

三人はそれを散開して避けるが、各人に向かってさらに残りの三人が回り込む。

「このままじゃ・・・・時間を稼いでる間にやられる！！！」

「あっちもそんな簡単に終わる相手じゃないと思うしッ！！」

そう言ってスバルがウイングロードを天井に伸ばして、それが上を突き破る。
そうして屋上へと道を伸ばすが、それはすぐに砲撃と爆破を受けて消滅させられる。

おそらくは外のチンクとディエチだ。

完全な包囲網。

これでは逃げられなどしない。

そこからまた数秒だけ走り回り、フェイクシルエットで身を隠す三人。

「朱雀さんはおっきくなれませんか？」

「獣神体ですか。いえ、出来ますが・・・今のままではいい的になるだけです。しかも、相手の数が七体。これは舜でも苦戦するレベルですよ？」

そう、問題はそこだ。
当初この場はフォワード全員で戦う場面だった。

その数ならばおそらく、正面からぶつかり合い、きつかったろうが、勝利をおさめられただろう。
しかし、四人は分断された。

蒔風は五体でキツイと言っていたのに、今の敵は更に＋2だ。

おそらく、朱雀が獣神体となって飛び出してもすぐに落とされるだろう。

「しかし、逆にチャンスでもあります」

「そうね・・・今なら相手は四人だけ・・・まだチャンスはある」

「下手に外に出なくてよかったね」

「ええ。もしそうすることができていたら、七人同時戦闘になっていました」

「考えたくないわね・・・・・・・・・朱雀さん、スバル」

「はい」

「なに？」

「あの四人のうち・・・・三人は私に任せてもらえる？」

「ティア！？」

ティアナの突然の提案に、スバルが大声にならないように叫んだ。
それは端から聞けば、あまりにも無謀な提案だ。

しかし、ティアナは黙って聞けと親友にデコピンして話を進めた。

「いい？今はこの状況だからいいけど、あれは命のないただの人形なのよ？つまり、しようと思えば使い捨てができるってこと。今は

多分戦力の温存のためにしないんでしょうけど、長引いていけばおそらく、このビルを爆破してあの影もろとも私たちを潰しに来るわ」

「そんな！！」

「いいえ、あり得ます。一度引き抜いた記憶は、１０％以下まで劣化しますが、もう一度使う事も出来ますし、最悪、駒は捨てにくるでしょう。それが「奴」です。目的のためなら、ある程度の犠牲は払う男ですから」

「わかった？つまり今しかないのよ。私に相手ができるのは三体。でもその内の一人でも倒れれば即座に外の三人が入ってくるでしょうし、最悪その場でドカンよ。三人でやっても一緒。一人潰せば、まとめてやられる。だから二人にはそれをさせないために、残りの四人を押さえてもらいたいんです」

「・・・・・・・勝算は、あるのですか？」

「・・・・ふ、何言ってんですか。私が今からやろうとしている戦術は、あなたの主人から教わった物ですよ？大丈夫です。真っ向勝負はできなくても、私には私の「強み」がありますから」

「でも・・・・ティア！！」

「いいから！！はやくあんたも・・・・ッ！！！？？」

ティアナがまだ何か言おうとするスバルを納得させようと口を開くが、そこから言葉は出てこなかった。

三人がしゃがんで隠れている壁。
その壁が一気に光の砲撃でレーザーのように切り倒されたのだ。

真一文字に切られたその高さは、三人が立っていれば頭の位置だった高さだ。

その事実にゾッ、としながらも、さらなる追撃が襲いかかる。
残った壁を突き砕き、ノーヴェが突撃してきたのだ。

そしてティアナとスバル、朱雀の間に立ち、三人を二組に分断する。

おそらくはティアナが幻影の使い手であるという事に気付いたのだろう。
ならば簡単、先にそちらを潰すことが先決だ。

それを見た朱雀が、ティアナを助けに向かおうと足を動かすが、それが即座に止まった。

バインドである。

オットーによるバインドに、スバルと朱雀がしばりつけられ、その身動きを封じられていた。

「ティアが!!」

「くっ、結界は晴れないのにバインドはできるって・・・どういう基準なんですかまったく!!」

目の前ではティアナがどんどん押し込まれ、視界の外へと追いやられていく。

モードをダガーにして応戦していたが、彼女は基本ガンナーだ。どれだけ持つかわからない。

朱雀がバインドを引きちぎるのは簡単だ。
あくまで強化されたのは肉体的なパワーだけであるし、オットー一人分の魔力のバインドなら容易な事。

しかし、その間にティアナはこちらの目の届かない場所へと移動させられてしまうだろう。

そうなればこっちは二対一。外のメンバーが入ってきてもおかしくない構図だ。
そうなると無理に合流するのは危険すぎる。結局三対七になる可能性が高い。

と、なれば

苦渋の決断ではあるが、ティアナの提案通りにする必要があった。

「スバルさん！！このまま外に出て四人を相手取ります！！！三人はティアナさんに任せましょう！！！」

「そんな！！ってうわあ！！！」

抗議しようとするスバルだが、朱雀があっという間にバインドを砕いてからオットーの襟首をつかんで外へと投げ放ち、その後にスバルを連れて飛び出して行ってしまった。

「大丈夫です！！舜が授けたのであれば、まず負けることは・・・・・無いと思いますから！！」

「でも！！」

「もう遅いです！！きますよ！！！」

「あ～～～～もう！！！ティアも朱雀さんも勝手なんだから！！こうなったら、すぐに倒してティアの援護に！！！」

「そうするとしましょう！！！」

こうして、布陣は完成した。

しかし、どれも敵は強大。

勝って仲間を助けに行くとスバルは言ったが、果たしてうまくいくのだろうか。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～フォワード陣、戦闘開始～（後書き）

主人公がいない・・・・
どうしてこうなった！！！！

アリス「そんなことより明日テストでしょう？大丈夫なんですか？」

一教科だけだからまだ何とか大丈夫かもしれない。

ア「その油断が命取りでしょうに」

う・・・・・・

ア「次回、今度は洞窟！！フェイトさん、頑張れ！！！超がんばれ！！！」

ではまた次回

『もう一度、私にチャンスを下さい』
『今度は必ず、あなたの全力を受け止めます』
『あなたがどこまでも全力で走れるように』

なんだかこの小説、デバイスの影うっすいなぁ・・・・・・

よし決めた。まさかのあいつに活躍の場と与えよう

フェイト・Ｔ・ハラオウンは現在の状況をおかしい、と感じていた。
おそらくは隣のヴェロッサ・アコース査察官とシスターシャッハも同じ心境だろう。
と、言うのも、アジトの入口である洞窟に入ってから、一切の攻撃がないのだ。
確かに、入口での戦闘は激しかった。
しかし、この場のＡＭＦはガジェットの発するものだけで、ゆりかごほど強いものではない。
故にそこでの戦闘はフェイトが到着してから二分とかからず終了した。

そのときは次のガジェットが来る前に内部に侵入することが第一だったため気にはならなかったが、思えばその時から相手からの攻撃がない。

「どういうことでしょうか・・・」

「順当に考えるなら、誘ってるんだろうね・・・・・・で、その招待客が」

ヴェロッサがそこまで言ってフェイトを見る。

スカリエッティはフェイトを「プロジェクトF．A．T．Eの残滓」だと言っていた。

記憶の継承の失敗という不完全な形ながらも、その一応の成功例であるフェイトの身体は、スカリエッティにとって素晴らしい研究材料なのだろうから、招き入れるのはまだわかる。

しかし、捕らえるとなると、こちらの体力を削らなければならない。まさか自分の目の前に来るまで待ち、そこで戦おうなんてことは言

うまい。

「多分・・・・・なにかあります」

「なにか？」

「わかりませんが・・・・・あの男がこのまま先に進ませることはありえません」

そこまで言ってしばらく進み、三人の足が止まる。

巨大な扉があった。

おそらく、巨体化したフリードも余裕で羽ばたきながら入れるサイズ。

もはや鉄の塊だ。

しかもその扉には古代の闘技場のような紋様があしらわれていて、おおよそスカリエッティの研究所らしくない。

そこで一人の新たな声がした。

「いかんの。この先にかなりまずいものがおる」

人型の玄武が、扉を撫でながら現れてきていた。
突然現れた玄武にヴェロッサとシャッハは驚くが、出元がフェイトの懐で、彼女も真摯に耳を傾けていたため、次第に気にしなくなる。

「玄武、どういうこと？」

「なにがあるかわからぬ・・・しかしじゃ、この先はやばいぞ。正直回り道をしていきたい気分にさせられる」

冷や汗を流して扉を睨みつける玄武。
しかし、ここまでの道は一本だったし、壁を崩して回り道をいくのは危険だ。
洞窟ごと崩れるかもしれない。

玄武の流す冷や汗に、フェイトが恐る恐る聞いた。

「まさか・・・・「奴」の？」

「かもしれん。否、そうとしか考えられん。しかもこれは・・・・・
貧乏くじを引いたかもしれんな」

ガゴッ！！ギゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・

そこでその扉が重々しい音を上げ、ゆっくりと開かれていった。
その先にあるのは深い闇。

しかし、音の反響から察するに、かなり広い空間になっているようだ。

その空間をしばらく見つめる四人。

しかし、このままここにいても仕方がない。

思い切って玄武が一歩踏み出し、その後に三人も続いて行った。

「暗い・・・・・」

「でも、かなり広い空間のようですね」

「気をつけろ・・・・一体何が出て来るか分かったものじゃないからの」

なにも見えずとも、周囲を見渡しながら歩を進めていく四人。

そうして何歩進んだだろうか。

バタン!!!という音を立て、開いたときの重々しさはどこへ行ったのか、素早い動きで扉が閉められる。
それと同時にこの空間のライトが一斉につき、周囲が明るく照らされた。

「ここは・・・・・なんじゃ?」

「フェイトさん!この地面のプラグは・・・・・」

「まさか、ここにガジェットを?」

その場所は円形のドームだった。
しかし、なんにしろ広い。

今フェイト達がいるのは入り口から十メートルぐらい。
入口から反対側の出口までざっと二百メートルはあろうか、同じ大きさである巨門がそびえ立っている。

得広い円形の地面に、フェイト達が立っている細い一本の通路が一段だけ高く真っ直ぐに伸びている。
そして一段下のその面積の大多数を占める床には、多くのプラグがあった。

おそらくはここにガジェットを保存し、メンテナンスなどをしていたのだろう。
それらは今、すべてゆりかごに詰め込まれ、あの空で使用されている。

そして真ん中には一本の剣がポツンと突き刺さっていた。

『ようこそ諸君！！君たちが来るのを待っていたよ！！！』

「「「！！！」」」

「スカリエッティ！！！」

と、突如として空中に大きくモニターが現れ、スカリエッティが映し出された。
その顔は、今からサーカスの出し物を見る子供のように楽しそうで、それでいてそれにはない歪みを持ち合わせたモノになっている。

『四人だけとは少し残念だが・・・・・まあ仕方がないね。私も、自分かゆりかごを比べてどっちかと言われれば、あっちの方が魅力的に見えるからね』

「魅力的・・・・？あんな古代の兵器を持ち出し、世界を滅茶苦茶にして、更に何人もの人間を自分の好きなようにしてきたおまえは、まだあんなものが魅力的だと言うのか！！」

『魅力的さ！！！私はもうあのシステムを知っているからいいがね、もし知らなければ喜んでゆりかごに突貫して内部を調べ上げたくなるだろうよ！！ま、あれもまだ、私の目的を達成するための「手段」に過ぎないのだがね』

「これ以上何をするつもりなんだ・・・・・」

『おっと・・・・話がそれそうになったね。それで、どうだい？Fの残滓、否、フェイト・T・ハラオウン』

「・・・・なにがだ」

『私の方へと来てくれないかね？私としてもここで君を失うのは惜しい。こっち側へと「断る！！」・・・・だろうね』

「おまえは犯罪者だ。私は執務官だ。私はお前を捕まえるため、ここに来たんだ！！」

『犯罪者だって？ははははは！！！！そんな肩書き、非常に下ら

ん！！！それを言うなら、君の母上だって立派な犯罪者じゃないか！！！！』

「ッッ！！！！」

モニターのスカリエッティが嗤う。

君を生み出した親も、彼女（ナンバーズ）たちを生み出した私も犯罪者。

そこになんの相違がある？

どちらも同じじゃないか。

そんなもの君の勝手なエゴだ。

一個人の感情論で、勝手に人を裁くなよ。と

『それに君たちの所属する時空管理局のトップたちだって、必ずしも「正義」とは言い難いねぇ・・・・身体を捨てて醜い脳味噌にまでなって生きながらえ、私という犯罪者を生み出し、あまつさえそれの行為を黙認してきたんだよ？地上の英雄、レジアス・ゲイズだってそうさ！！私の一番のスポンサー様でね、多大な協力をしてもらったよ！！』

「やはりか・・・・」

「そんな・・・・」

その事実にヴェロッサが苦い顔をし、シャッハが信じられないという顔をする。

そんな彼らを置いて、スカリエッティが話を進めていった。

『小を切り捨て、大を救う。確かに、合理的だねぇ。だが、それが果たして正義だと言えるのかい？』

「それは・・・・」

『ゆりかごを止めるために、その発動キーである少女を、殺す事が管理局の正義なのかい！？』

「ッ！！！！」

『ばかばかしい！！！そもそも、全部を救うなんてそんなことができるはずもないじゃないか！！！私たちは等しく人間さ！！！救えるモノなんてたかが知れてる。おだからね、思い上がったこの世界に、私が正しい認識を与えてやろうというのだよ！！！』

「そんなことは！！！」

『じゃあ今の世界で君はいいのかい？こんなどうしようもない世界で、君は果たして君の正義を貫けるのかい！？』

スカリエッティが高らかに言う。

世界に正義なんてない。
救えぬ者は救えない。そんなことなどできないと。

フェイトだって子どもじゃない。そんなことわかっている。

今までだって、救えなかった人がいた。
救った人より、嘆いた人の方が多かったことだってある。

それはヴェロッサやシャッハとて同じだ。

世界は、どこまでも残酷である。

全員が救われる世界など、どこにも存在しないのだ。

「黙れよお主」

しかし

その言葉に反論する者が一人いた。

「なにも救えないじゃと?それは力の無い、弱い者だからじゃろうが。そのとき、力が足りないから救えなかった。だったら簡単だの。強くなればいい」

玄武である。

そう

彼の主が、いつも心に決めている事。

「救えるモノは根こそぎ救う」

主はそれを成すために、どこまでも強くなっていき、その信念を砕かれぬために、「世界最強」などと豪語している。

「結局、重要なのは「力」だ。強い者が生き残る。そしてその者は、誰かを守ってやればいい。倒すことより、守ることの方がはるかに力のいる作業じゃからの。だったら、強い道を選ぶ。単純に潰すなど、弱者のやる事。殺しなど、その最たる例じゃ」

静かに言う。
ただただ、湖面のように静かに、玄武がそれだけ言い放った。

しかし、その言葉の奥底には力強さがあった。

この場の皆を、奮い立たせるほどに。

「そうだ・・・私たちは、弱い。助けられない事もある！！でも・・・だったら、次は助けられるように、もっともっと強くなるだけだ！！！いつかは世界をすべて救えるほどに・・・・そうしてきた人を、私は一人知っている！！！！」

『ほう・・・残念だよ。君があの愚か者たちと同じ側に行ってしまうなんて』

「嗤うな、スカリエッティ」

管理局のトップだった者たち――最高評議会やレジアス達――を、「愚か者」と笑うスカリエッティに、フェイトが鋭い言葉でやめさ

せる。
その言葉に思わずスカリエッティの口が止まった。

「おまえには無いだろう・・・・たとえ身体を失っても、その身が罪でまみれようとも、己の世界を捨ててでも、禁じられた研究に手を伸ばしてでも、守りたかった大切な物が!!!おまえには無いだろう!!!みんなみんな必死だったんだ!世界の平和を!地上の安息を!自分の世界を!愛する者を!!守りたかっただけなんだ!!!そのために別のモノを失おうとも、それでも何かを守りたいという、強すぎる想いが、おまえにはあるのか!!!そのジレンマに苦しむだけの覚悟があるのか!!!辛かったんだ!!涙したんだ!!それでも守りたかったんだ!!!その想いが、おまえにわかるか!!!!!・・・・おまえに彼らを嗤う資格なんてない、スカリエッティ。一人安全圏で、そんなところにいるお前に、すべてを投げうった彼らを嗤うことなんて許されない!!!!!」

フェイトの言葉が木霊する。

そうだ、誰だってこんなことは望んでいなかった。

でも、それでも、守りたかったものがあったんだ。

そこまでに強い思いを持つものは、そのために苦しんだ。

その言葉を聞き、スカリエッティはというと

『・・・・・そうかい・・・・・では・・・・・お別れだ』

フェイトの言葉を聞いて、スカリエッティがなんともあっけなく通信を切る。

瞬間、玄武が血相を変え、声を荒げた。

「まずい！！！三人とも、急いで反対の扉へ走ってゆきなされ！！」

「玄武？」

「あれが動き出すぞ！！！フェイト嬢達は急いであの野郎の元へ向かえ！！！！おおおおおおおおおおおッ！！！！」

ゴドォン！！！！！

玄武が必死の形相で叫ぶや否や、獣神体へと姿を変えて、その巨体で真ん中に刺さっていた剣を押しつぶした。

それを見て、フェイトが気付く。

「まさか・・・あれは・・・・！！！ッッ！！！二人とも！！急いでください！！！」

唖然としている二人を押し出し、フェイトが反対側の扉へと飛びだして行く。

途中で玄武の足元を通り、そうして扉まであと少し

と、いうところで

ドゴンッ！！！！

『ごアアアアアアアアアッッ！！！』

玄武の巨体が叩きつけられて、ガラガラという轟音と共に扉がひしゃげながら埋もれてしまった。

その状況にフェイトが唇を噛み、玄武が起き上がって悪態をつく。

『クソッタレ・・・申し訳ない。進路を断ってしまった』

「う、ううん・・・気にしないで・・・・・でも・・・・あれって・・・・」

『そう・・・たしかフェイト嬢にとっては十年も昔の話ですからな。覚えてはいないかの？』

「・・・・・覚えてるよ・・・忘れるわけがないよ・・・・・」

フェイトの視線のその先に、玄武を投げとばした張本人が、ドームの真ん中に仁王立ちしていた。

全身から黒い煙を噴き出して、逞しい漆黒の体躯に、三つの首、二振りの尻尾。

三対もあるその目は赤く光っており、その眼光はそれだけで射殺すかのような怒気を持っている。

その脚の爪は死霊ですらをも切り裂けるかのように湾曲し
その牙は魂ですらをも噛み砕くかのように鋭い

魔導八天が最凶の一振りにして、最強の使役獣

地獄の番犬、ケルベロス

条件によっては蒔風と一対一で交戦できるほどの化け物が、目の前に現れていた。

「な、なんですかあれは！？」

『スカリエッティが雇った用心棒というところですな。お気を付けください。あれは・・・・・最悪ですぞ』

驚く二人に玄武が説明している間、フェイトは昔の事を思い出していた。

自分があれを見たのは十年前、はやてを迎えに行った時だ。
その時襲撃してきたのがこいつ、ケルベロスだった。

あのとき、自分は戦っていた蒔風を助けに行きたかった。

しかし、この十年でいくつもの死線を潜り抜けてきたからこそわかる。

なぜ自分はあの時、助けに行こうなんて考えたのだろうか。

それほどまでに、こいつはヤバい。
魔力も何もないはずなのに、この恐ろしさはなんなのか。否、そんなものでは計り知れない禍々しさが、こいつにはある。

十年前に感じる事の出来なかった恐怖を、今、携えて

フェイトの前に、最強最悪の怪物が迫った来た。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

一方ゆりかご内部

ガジェット射出口からなんとか侵入した蒔風たちがたどり着いたのは、高さにしてゆりかごの下方、ちょうど前後の中間部分である。

ここからはヴィータは別行動になる。
と、言うのも止める対象は二つあるからだ。

一つはゆりかごのキーとなっているヴィヴィオ。
もう一つはゆりかごの動力炉だ。

どちらかを壊せば止まるかもしれないが、両方壊さなければならなかったとき、それではまずい。

だからここで二手に分かれ、それぞれを撃破する、というのが方針だ。

「ここからは前部のヴィヴィオと、後部の動力炉に別れるわけだが・・・・ヴィータ、大丈夫だな？」

「任せとけって！！こいつもいるしな！！」

「・・・・よろしくお願いします」

そういうのはヴィータの横に立つ青龍。
ここにくるまでに何とかヴィータの押しつけたのだ。

と、言うのもこっちは大丈夫だからとか言って最初、ヴィータは一人で動力炉に行くと言い張っていた。

そこで蒔風のお説教タイムである。
移動しながらなので、青龍を顕現させてその背中でここにつくまでずっとヴィータに言い聞かせていたようだ。

「ったく・・・・やっと聞き入れやがったんだから・・・・おまえの身体だって、昔ほど丈夫じゃねぇ。無茶すんなよ」

「まあ・・・丈夫じゃなくなんのは人間に近づいてるからだって思ってんだけとな・・・・」

「だったらなおのこと、用心しとけ。なんかお前って、前に進んでばっかで後ろからグサリとやられそうだからな～～～」

「こえー事言うなよ！！！ほら！！おまえらも早く行けよ！！」

そんな会話をし、ガッ、を拳をぶつけ合ってから四人が飛び出す。

決意を一つに

この船を止める。

ゆりかご衛星軌道上到達まで、あと三時間

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～それでも守りたいものがあったんだ～（後書き）

昨日はすみませんでした。

この小説のデータが紛失し、一から書き直す羽目になってしまって・・・・・

ア「うわ、酷いですねそれは」

マジ泣いた。

号泣ものだったよ。

ア「で、今回の内容ですが」

フェイトの敵決定ですねぇ。

頑張れフェイト。

負けるなフェイト。

ア「次回、いろいろなところでの戦いだよ！！！」

ではまた次回

いいじゃんか。
怪我したらなかなかなおらねぇのもやり直しがきかねぇのもなんか
普通の人間みてぇでさ。

ゆりかごとの交戦空域、右方。
そこで八神はやては全航空隊の指揮をとっていた。

しかし、いくらガジェットを落とせども落とせども、その数が減っていくことがない。

それに対し、こちらの戦力は魔導師だ。
どうあっても、体力や魔力は削られていく。

有利不利にかかわらず、このままではこちらの敗北は決定的である。

「だけど、それを引き延ばすことはできる。そうしていれば、なのはちゃんやフェイトちゃん、舜君がかたを付けてくれる。うちの仕事は、それまでこの戦況を引き延ばすことや！！！」

かといって、守ってばかりでもない。
外部から落とせるならそれに越したことはないのだから、隙さえあれば、前部に並んだ砲門を潰しにかかる。

そうやって何とか今までに二門ほどつぶしたが、まだまだ数は多い。と、その時、汗を流しながら空を飛ぶはやてに、一本の通信が入った。

『八神指揮官!!緊急です!!』

「どうした!?」

『ゆりかごの左方を攻撃していた部隊が、謎の怪鳥の襲撃を受けて壊滅状態です!!あれは・・・・あの鳥はアインヘリアルを潰した・・・グあああああああああッッ!!!』

「ちょっと!!大丈夫か!?くっ・・・誰か!!こっちを頼む!!私は左方のほうへ・・・・・」

キュロオオオ

甲高い鳴き声を上げて、怪鳥「迦桜羅」が飛来してきた。

その身に焔を纏い、武装局員をなぎ倒しながら突っ込んでくる。

それを見て、はやてが迅速に指示を飛ばした。

「総員、あれには手を出さんといて！！！！」

『しかし！！』

「あれの相手は・・・・うちがする！！！」

今代にして、最後の夜天の主が、化け物退治に乗り出した。

ーーー

本来魔導師同士の戦闘は長くても三十分を少し超えるがどうかである。
その三分の二がすでに経過し、未だに戦い続けている。

敵の人数が多いにもかかわらず、よくこれだけの時間ねばったものだ。

それでも身体にダメージはあり、現にスバルの身体は所々から出血し、唇なぞは始まって一分もしないで切れていた。

しかし、休んでいる暇などない。
そこにオットーのレーザーのようなレイストームが浴びせられ、それをバリアで防ぎつつ離脱しながら体制を整える。

だが、相手の攻撃は終わらない。
相手の体力はこちらの遥か数倍上をいっているのだ。へばる、なんてことなど決してない。

ウイングロード上で一瞬動きの止まったスバルに、ディエチが隙有りとばかりに砲撃を連続で撃ってきた。
それをきつそうな顔をしながらマッハキャリバーを走らせて、まるでジェットコースターのように疾走するスバル。

と、そこでその顔がさらにひきつる。
ウイングロードの先、あと数秒で自分が通るであろうそこに、チンクのスティンガーが数本突き刺さったのだ。

「うっそ・・・・勘弁してよ、ねっ！！！」

それをとっさにジャンプして、山なりに避けるスバル。
そのスバルを、オットーとディエチが狙いを定めて砲撃を放つ。

その迫りくる光に、空中のスバルはどうする事も出来ない。

が、それは結局スバルには当たらなかった。

朱雀が獣神体で飛来して、スバルをその背にのせて回避したからだ。

「ありがとう！！！」

『いえ！！こちらもなかなか抜け出せずに申し訳ございません！！
あのレプリカのディープダイバーに手を焼かれまして！！！』

そう、今まで朱雀はセインを相手にしていた。
しかし、いくら「奴」素体と言っても、一体だけなら問題ではないはず。

更に言うならセインは本来、偵察や奇襲と言ったいわゆる真っ向勝負の能力持ちではない。

なのになぜ、朱雀がここまで手こずったのか。

それをスバルが聞くよりも早く、休みなく砲撃や投擲が放たれてくる。

光線、砲撃、爆撃

更には直接の肉弾攻撃もある。

もちろん、今までも攻撃は何発か入れているし、その手ごたえもあった。

しかし、その耐久性や、再生速度が半端ではないのだ。

スバルが殴り飛ばしても、上半身をのけ反るだけで、その体勢で蹴りを放ってくる。
朱雀が斬り込んでも、あろうことか刃を腕で押えられ、反対の手で殴り飛ばされる。

「このままだとジリ貧だよ！！どんなにやってもこっちがやられちゃう！！！」

『しかし、こちらにある一撃必殺の技はどれも簡単に出せるものではないです！私のは溜めに、貴女のはその後の残心に、それぞれ時間を取られます！』

「でも！！うわあっ！！！！」

バチィ！！！！！

朱雀の背にスバルが乗って、旋回するように砲撃をかわしながらどうするか言い合っていると、極太の砲撃が二人を襲う。

それ自体はかろうじてスバルのバリアが抑え込むが、あまりの重さに朱雀がよろめき、そこにセインが重い一撃を叩き込んで来た。

「このッ！！」

『行けませんスバルさん！！受けずに避けてください！！！！』

「えっ！？っとぉ！！！！」

その攻撃を受け止めて反撃しようとするスバルだが、朱雀の忠告に慌てて身体を引いてそれを回避する。
セインはそのまま地上に着地し、チンクやオットーが追撃してくる。

「な、なんでダメなんですか！？」

『あれに接近戦はいけません！！ティアナさんと合流してから出ないと、現状では無理です！！』

「え？え！？」

『ですから！！とにかく今は他の三人を潰すとしましょう！！行けますか！！！？』

「は、はい！！！」

攻められっぱなしだった二人が、ここから攻めに転じる。

ここからスバル・ナカジマの、ブチ抜き粉砕が、始まるのだ。

『行きますよ！！！』

「はい！！！」

ドォウ！！！！

おおよそ飛翔とは言えないほどの大きな羽音を打ち鳴らして、背にスバルを乗せた朱雀が一気に空中に立つ機人たちに突っ込んでいく。

まずその風圧に、チンクのスティンガーが落とされた。

だが、当然それは物質であるスティンガーのみだ。

ディエチとオットーの砲撃と光線はそんなものでは落ちない。

だが、ここで朱雀は突っ込み方を変える。
機人たちに向けていたのが嘴の先という「点」から、急ブレーキをかけるかのように自らの腹を前面に出した「面」へと変えたのだ。

そう、朱雀は自らを盾にした。

『ごガっッ！！？ッッ！！いま、です！！！』

「ハアアアアアアアアアアア！！！！！！」

その苦しそうな声を受け、朱雀の背中方面から真上を飛び越え、スバルが砲撃を撃っているオットーめがけて接近する。
しかし、黙ってそれをさせるほど、彼らも甘くはない。

スバルの目の前にセインが現れ、更にセインの後方からは、チンク

の投げたスティンガーが迫る。

「オオオオオオオオッッッ!!!!ディバイン、バスターッ！！」

ドンッ!!という音を立て、スバルの左拳のナックルが砲撃を放つ。
だがそんなものは当然とばかりにかわされてしまう。

しかし、それでいい。
むしろそれこそが目的だった。

必要だったのは、撃つことによって発生する「反動」だったのだから。

「セヤッ!!」

その反動で身体を反時計回りに回転させるスバル。
そうする事で、うまくセインに触れることなくかわした彼女が次に相手をするのはチンクのスティンガー。

しかし、スバルの反対の拳、右のナックルはすでに準備を終えている。

手首部分のギアが回転し、その力を最大増幅させて、スバルが拳をぶち当てる!!!

「ハァッ!!!」

キィン!!という甲高い金属音が響き、次の瞬間

チンクのスティンガーは、粉々に「破砕」された。

そこまで粉になってしまえば、もはや爆破スキルなど使えない。

後方では朱雀がセインに火球を吐きかけてその動きを引きつけている。

もはや邪魔する者など、一切なく

その身体が光線を潜り抜け、拳がオットー・レプリカの顔面に突き刺さる！！！！

ギィィィィィイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！

「うをおおおおおおおおおおおおおおおりゃアアア

スバルの拳の振動は、外部ではなく体内に深く浸透し、頭から首へ、胸へ、肩へ腕へ腹へ脚へと響き渡り、その体を内部から破壊する。

ＩＳ「振動破砕」

その能力を最大限にまで引き出し、足の運びや体重移動、拳の突き出しを以って一つの技へと昇華した、「振動拳」が炸裂する！！！！

ドォォォォォオン！！！

オットー・レプリカが爆散する。

ようやく一体、倒す事が出来た。

「やった！！！」

『スバルさん！！！危険です！！！』

「え？」

そこに

あろうことか砲撃でではなく、その巨大な大筒をブン回して、ディエチがスバルに迫ってきていた。

しかし、スバルはすぐに動けない。

振動拳はその威力もさることながら反動も大きく、放った後は一～

二秒の残心を要するのだ。

この技は最初から混線には向いていなかった。
しかし、それでも朱雀はそこもフォローできるはずだった。

ここでディエチがまさかの直接攻撃に出てこなければ。

「う、うわあ！！！！」

『スバルさんっ！！！』

ドンドン！！！ギィン、ガァン！！！！

しかし、目を閉じるスバルに、いつまでたっても攻撃は来なかった。

その事態に目を開けて前を見ると、ディエチ・レプリカの頭、喉、胸の三カ所に、正確に穴が開いていた。

「・・・・え？」

「ったく、何やってんのよスバル！！」

「！！！！」

その声は聞き覚えのあるもの。

スバルの一番の親友にして、フォワードのリーダーの少女だった。

肩で息はしているし、バリアジャケットはボロボロで髪は乱れて、片方のリボンは千切れたのか、後ろで一つにまとめ上げられている。

頭からは一筋の血が流れた跡まで見えたが、ティアナ・ランスターは勝利を手にして生還してきた。

「ティア！！！」

「行くわよスバル！！！残りは二体でしょ！？」

「うん！！！」

ティアナの言葉に、スバルが動き出す。

一体どうやって勝ったのか、怪我とかは大丈夫なのか。

聞きたいことはたくさんあったが、今はとにかく、目の前の敵を倒す事が先。

そう、終わった後に聞くんだ。

全部全部、笑い話にできるような、そんなハッピーエンドにして。

とか言ってホントに最後に書くわけにもいかないので

――――――――――――――――――――――――――――――――

少しだけ時間は戻って

スバル、朱雀と別れた後のティアナは、廃ビルの中を駆け回っていた。

もはや「階」なんてものは意味をなさず、「部屋」や「フロア」なんて区切りもなく、ダンジョンのようになっているそこをティアナは必死に走り回った。

自分には一撃であれを吹き飛ばす手段などありはしない。
しかし、蒔風との模擬戦で知ったのだ。

私には私の勝ち方があり、それは絶対的にあいつらに有利だという事を。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・クロスミラージュ、どれくらい集まった？」

《蒔風さんのデータから見ても、まだ５５％に届くかというところです。まだ足りません》

「そう・・・だったら今度は・・・・こうしてみる、か！！！」

ティアナが幻影に身を隠し、ノーヴェに向かって弾丸を数十発撃ち放った。

しかし、相手の身体は強靭だ。そんなものは意に介さない。

瞬時にティアナの居場所を見つけ、そこに拳を叩きこむ。

それをダガーの刃で滑らせるように受け止め、再び幻影で身を隠す。

さっきからこんなことばかりをしている。

飛び出してからの場所移動、不意打ち、横っ面、正面からの攻撃、フェイクシルエットでのフェイント、ダガーでの攻撃

それらすべて、命中してはいるのだがとてもではないが決定打とはなりえない。

それでも、どうやら核となっている部分があるらしく、そこは全身くまなく撃ち抜いた結果、ガードをしている三カ所だとわかった。

すなわち、頭部、首、胸部の三カ所だ。

だがわかったからと言って、現状が変わるわけではない。
そもそもティアナの攻撃など効きもしないのだ。

異常な再生速度はこちらも同じで、銃弾によって穴が開いたところで、すぐに再生して埋まってしまう。

（私、ホント幻影使えてよかった・・・・じゃなきゃとっくに押されまくって一発ダウンよ・・・・・）

そう、それでもティアナがまだ生き残っているのは、ひとえにその幻影の恩恵だ。
やられそうになればそれで姿を隠し、幻影を突撃させてから自分が死角から撃つことも可能なのだから。

だが、それをもってしても敵三人はすざまじかった。

この廃ビルも、最初はただの廃棄された埃塗れのビルだったのに、今では三人の攻撃の余波による衝撃で完璧に廃墟になってしまった。

（でもまぁ・・・この調子なら行けるかしら・・・・クロスミラージュ、あとどれくらい？）

《残り、３５％と言ったところですね》

「（だったらこのまま同じように・・・・・）ッッ！！？？」

ザキッ、シュカンッ！！

ティアナが首筋に悪寒を感じ、とっさに背をもたれて隠れていた壁から離れる。

先ほどの音は、ちょうどその位置にツインブレードが貫通してきて、鋏のように交叉した音だ。

「うっそ・・・・もう見つかった！？まさか・・・・やばっ！！！！」

そこにドゴンッ！！！という轟音をあげながらノーヴェの拳が飛んできて、それを頬に一筋の切り傷を残しながらも、紙一重で何とか回避するティアナ。
ノーヴェの腹部にゼロ距離で銃弾を撃って後退させ、自身も距離を取る。

だがその真上、穴のあいた天井から、ライディングボードに乗ったウェンディが、ティアナを押しつぶそうと飛び降りてきた。

それをダガーで受け止め、横に落とそうとするが、受け止めた瞬間ボードの重みが軽くなった。
降りてきた直後に、ボードから飛び降りたウェンディが、もう一つのボードで殴りかかってきたのだ。

それとティアナは腕の力を抜き、頭上のボードを横に落として、ボードでボードをガードする。
が、そこでツインブレイドが迫ってきて、空いたダガーで防御するが、腕が弾かれてしまう。

そして無防備になったその上体に、ノーヴェのハイキックが叩き込まれた。

「ぐっ、あああああああああああああ！！！！！」

《Ｓｉｒ！！！》

ティアナの身体がテニスボールのように跳ね、廃ビルの隅から隅に飛んで行った。

「グッ・・・・ああ・・・・・」

《大丈夫ですか！？》

「ええ・・・・でも・・・地面が揺れてるわ・・・・・」

《！！Ｓｉｒ！！！七時の方向からきます！！！》

「くそっ・・・・たれえええええええええええ！！！！！！クロスファイアーーーー！！！」

《Ｓｈｏｏｔ！！》

「シューーーートッ！！！！！」

ドドドドドドドドンッ！！！！！

オレンジの魔弾が、接近してきていたウェンディに向かって連続でなだれ込む。
が、当然防がれてしまって。ティアナは地面を撃って穴を開け、そこから飛び降りて回避した。

「ッ・・・この・・・ままじゃ・・・・」

ティアナは頭部から血を流し、いつ切れてしまったのか、ツインテールは片方のリボンがなくなってほどけていた。
後ろの髪を一つにまとめ上げ、フェイクシルエットでナンバーズを引きつけながら息を整える。

《Ｓｉｒ》

「なに・・・・クロスミラージュ」

《先ほどの行動で、９８％の解析終了。行けます》

「！！・・・・ようやくね・・・・これが終わったらマリーさんに頼んでしっかりプログラム組もっかな」

《そうですね。これにはまだまだ貴女の負担が大きすぎます》

「問題ないっての。行くわよ。クロスミラージュ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ》

ーーー

しかし、その動作はいかにもイラついているかのようも見えた。

敵のティアナは、力も魔力も、自分たちよりもはるかに下だ。
にもかかわらず、仕留められないのはどういう事か。

それはただ単に、フェイクシルエットによるまやかしによるものか。
否、それならばとうに解析が済んでいる。

割り出しまで五秒ほどかかりはするが、本人かどうかの識別は可能だ。

現にそれを見破り、先ほど隠れていた対象を吹き飛ばしたばかり。

だがそれでも対象は倒れない。

こちらの一撃は確かに入った。
その一撃は相手を行動不能にまで陥れるほどのものだ。

なぜ、倒れないのか。

だがそんなことはどうでもいい。あと数発でも叩きこめば終わる。
そう、これは作業。プチプチと丹念に潰していくだけだ。

と、そこで敵が行動を起こした。

ギリギリまでシルエットで隠した弾丸が、ノーヴェ・レプリカの眼前に現れたのだ。
それに片腕を振ってなんでもないように弾くノーヴェ。

それに反応して、ディードが双剣を構えて発射元に向かって行く。
対象は壁に隠れている。穿つ事はあまりにも容易だ。

ディードの後方ではウェンディがボードを、壁から飛びだしてくるティアナを撃つために構えた。

が

ギュガガガッ！！！！

ズ・・・・・ズン・・・・・・・・・

重い音を鳴らし、床を振動させて、ウェンディ・レプリカがライディングボードを落とした。
その身体には、頭部、喉、胸部に穴が開いており、直後、その黒いシルエットがグズグズと崩れて崩壊していった。

足元の床には撃ち抜いたであろう弾丸がめり込んだ穴が三つ開いていた。

その事態にノーヴェ・レプリカが振りかえり、ディード・レプリカがなおも変わらずティアナのいるであろう壁に向かって双剣を振り

降ろす。
しかし、それは壁を崩していったのみで、その先のティアナを切り裂くことはない。

壁が崩れて、そこから現れたのは、ダガーモードのクロスミラージュで双剣を受け止めたティアナだった。

「こうやって剣の根本を押えて、足の構えさえしっかりすれば、非力な私でもなんとかだけど受け止める事が出来るのよ」

《お見事》

その言葉と共に、クロスミラージュの片方をゼロ距離から眉間にピタリと押し当てた。

「ＢＡＮＧ（バン）、よ」

《Ｓｈｏｏｔ》

ドドドンッ！！！

そして同じように、ディードにも三発しっかりぶち込む。
その消えゆく身体を腕で押しのけながら、ティアナが残ったノーヴェに迫っていく。

「まったく・・・ここまで行動パターン集めんのに苦労したわ」

《蒔風さんからもらった彼女たちのデータがなかったらもっと掛かってましたよ》

「そうね・・・感謝してもしきれないわね」

ユラリと立ち上がってくるティアナに、ノーヴェ・レプリカが後ずさる。
その何もかもを見透かしたような瞳に、一体この「欠片」がなにを感じたのだろうか。

ティアナがやったのはまず、敵の行動パターンの収集だった。
それをクロスミラージュがまとめ上げ、一つの対策ファイルともいえる物を組み上げたのだ。
だが、それはあるだけではどうしようもない。

敵が動き出したのを見てファイルを開いても、先がわかるころにはもう敵はその行動を終えている。
いわば格闘ゲームでいちいちコマンド表を見ながら対戦をするようなものだ。

ならばどうするか。
いや、そんなものはどうするか、などという疑問にするのもばかばかしい事だ。

基本、そのような事をする者は皆、コマンドを覚えて対戦に挑むのだから。

そう、ティアナ・ランスターは

ただ単に敵の行動パターンを、すべてその頭に叩きんだだけだ。

そのティアナが、今不敵な笑みを浮かべながら、ノーヴェ・レプリカに歩み迫る。

「さあ、どうするの？言っとくけど、どう来てももう私の勝ちよ。あなたが何か一つでも行動すれば、そこから私はあなたの行動を割り出す事が出来る」

ジャコン！！！チャキ

「さ、動いてごらんなさい？その瞬間、私はあなたの行動の、十五手先まで見透かしてるけどね」

ーーー

そう宣言してから、あとは二分もかからなかった。

実際、反撃からは五分もかかっていない。
今までの二十五分はすべて情報を集めている時間だった。

「さあ、行くわよクロスミラージュ！！！スバルを助けに！！！」

《ＹＥＳ，Ｓｉｒ！！》

そうして、ティアナはスバルの応援に駆け付けたのだ。

おそらく、こちらはもう大丈夫だろう。

しかし、不気味な事に

いまだに紅蓮の断罪者は、現れていない。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～乾坤一擲、必撃粉砕！！～（後書き）

アリス「なんと言うティアナ無双。スバルの頑張りが何だか薄くなりませんかね？」

ホントだったらこの二人分けて書くつもりだったのに・・・・

どうしてこうなった！？

ア「無計画め」

褒め言葉だ

ア「次回、・・・・誰になんでしょうか？」

さあ？これから書くからなぁ・・・・・

ではまた次回

夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間。どんなにつらくてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない

地上本部跡地

起動六課ライトニング隊副隊長、烈火の将シグナムは、リィンフォース?を従えて、ある人物の背後に立っていた。

その人物の名は、レジアス・ゲイズ。

二人の秘書を連れて、崩れて落ちてきた自分の部屋のデスクに手を当てながら、何かに思いを馳せていた。

「・・・・・何か用か?」

と、そこでレジアスがシグナムに振り返らずに聞いた。

別段隠れていたわけでもなく、シグナムは普通に後を付けて姿を見ていただけだったので、気づかれるのはおかしなことではない。

「・・・・・いいえ、特には」

「そうか・・・・貴様はゆりかご(あっち)の方に行かなくていいのか?」

「頼れる仲間が、いますので」

シグナムが答える。
そこで今度はリィンがレジアスに質問した。

「公開意見陳述会の時、私とヴィータ副隊長はここの空で一人の騎士と交戦しました。騎士の名は、ゼスト・グランガイツ。書類上、既に故人とされている人でした」

リィンの言葉に、二人いる秘書の内の一人が「え?」と驚愕の表情を浮かべる。
それに対し、レジアスは静かに振り返って聞いた。

「・・・・それで?なんだというのだ?」

「そして、彼が死亡した事件に、あなたが少なからずかかわっている情報がありました。もしかして、あなたはあの騎士を、・・・・」

そこまで言ったリィンに、レジアスが何かを諦めたかのように天を仰いで言った。

「それは貴様にではなく、あいつに言わねばならんことだ・・・・・・みっともない、言い訳をな」

「それは一体・・・・・」

「言ってもわからん。理想だけを追い続けられる、貴様らのような若い者にはな・・・・だが、それをあいつに話し終えたとき、おそらくわしは・・・・・」

「オレがお前に復讐すると？そんな風に思われていたとは、心外だな。レジアス」

「！！！！！」

いきなり聞こえてきたその声に驚いて、シグナムが振り返る。

一方、特に驚きもせず、レジアスもゆっくりとそちらの方に振り返る。

そこには先日、ヴィータを落とした騎士がいた。

瓦礫の中を歩いて進み、ここまでやってきたのだろう。
傍らには融合機・アギトを従えている。

ゼスト・グランガイツ

表向きだけとはいえスカリエッティの協力者にして、レジアスの親友だった男が、黄泉より戻りて、ここに立つ。

――――――

「デアボリックエミッション！！！！」

ドズォ！！！！

はやての空間攻撃魔法が、迦桜羅に向かって放たれる。
だが相手は空中を自由に飛び回す怪鳥。その攻撃範囲から悠々と逃げのび、旋回してから再びはやてに向かって突進してきた。

それをはやてはバリアを張って受け流し、息を荒くしてぐらりと揺れた。

もうこのような攻防を幾度となく続けている。
はやてはチャンスさえあればすぐさま攻撃魔法を向けるが、機動力ではあちらが完全に上だ。

なのはのように砲撃に優れていたり、フェイトのように高速戦がで

きるならばまだ違ったろうが、はやての主力魔法はあくまで空間魔法での殲滅攻撃。

まさに後方から指揮を飛ばし、止めの一撃を叩き込む司令官の立ち位置なのだ。

だが今はそうも言ってられない。
現状全局員はガジェットと交戦していて手一杯だし、そもそもこの迦桜羅とまともに交戦できる者などいないだろう。

だから自分がやるしかないのだ。

そうはやては思ってこの怪物を引き受けたのだが・・・・・

「あかん・・・動きが速すぎる・・・・うちの魔法じゃ狙いきれん」

先ほども言った通り、やはりすべてはそこだった。

速い

ただそれだけのことなのに、あの大きな的に当てることすらできないのだ。

一方、あちらからの突進は、直撃こそしていないものの、魔法陣のバリアで受けて流すという対処しかできないはやては、徐々にその魔力と体力を削られていった。

「どうすればいいんや・・・・・このままじゃ・・・・・」

このままではこちらが墜ちる。

そうなってしまってはこちらの隊は総崩れだ。

指揮官の自分が落ちるわけにはいかないし、この怪物を、他の局員に向けてはならない。

その意地が、未だにはやてが墜ちないための柱だった。

「絶対に墜としたる。皆が踏ん張っているってぇのに、うちだけここでのらりくらりとやってられへんもんなぁ！！！！」

ーーー

ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「ッ！？キャロッ！！！準備は！？」

「出来てる！！！行くよ、エリオ君、危ないから下がってて！！！！

天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠（とわ）の護り手、我が元に来（こ）よ、黒き炎の大地の守護者。竜騎招来、天地轟鳴、来（こ）よ、ヴォルテール！！！！」

キャロの召喚に応じ、地面に現れた巨大な魔法陣から、彼女の最強の召喚、アルザスの守護竜「ヴォルテール」が召喚される。

しかし、なぜいきなりこんな状況になっているのか。

簡単である。相手もまた、究極召喚をしてきたからだ。

究極召喚「白天王」
それこそが彼女、ルーテシア・アルピーノの最強の召喚だ。

出てきた姿は・・・そう、ヴォルテールが「古竜」というならば、こちらはさしずめ「蟲竜」とでも言うべきか。
名前の通りに白い体躯、硬質な外骨格、それを支える筋肉、半透明の膜状羽は昆虫を思わせ、人型に近い体であり、ヴォルテールと肩を並べるほど大きい。

そして召喚から数秒が経ち

二竜が一気に激突した。

大地を打ち鳴らし、大気を揺らし、遠いゆりかごまで響いてるのではないかというほどに大きな咆哮をあげて、地上に立つ巨竜二体は拳をぶつけ、衝突した。
その一撃で地割れが起き、胸部からの砲撃や、口部からの火炎で周囲のビル群がなぎ倒されていく。

蒔風が言ったことは正しかった。

これは災害である。
ただの大きな力ではなく、これは自然の猛威なのだ。

いくら大きな力を持とうとも、星の息吹にかなうはずはなく、それに対抗しうるのは、同じく星の力を受けしモノだけだと。

しかし、その白天王の動きがどうにも荒い。
と言うのも、動作がいちいち大きいのだ。

殴る際には無駄に振りかぶり、魔力砲を撃つ際にはわざわざ最大まで溜めてくる。

明らかに常軌を逸した攻撃。
ただ「白天王」という巨大な力を使っているだけの動作。

武器を持った人間が、むやみやたらとそれをぶん回しているようなものだ。

もしこれが、ルーテシア本人による召喚で、本人による意思疎通だったならば、こうはならなかっただろう。

的確な攻撃、適度な威力を以って、ヴォルテールを押し込み、そして勝利していたに違いない。

あまりにもあっけなく、絶望的なほどに。

しかし今の彼女は「ルーテシア」ではないのだ。

洗脳による司令塔。ただそれだけの存在となっている彼女に、白天王を操りきることなど不可能に決まっていた。

絶大な信頼を寄せ、常時自立行動を許可しているガリューであればまだ大丈夫であっても、白天王などという、切札にしか召喚しない物は、暴走させてしまうのがオチである。

むしろ逆に、白天王からルーテシアに対する警告やエラー、力の逆流で、ルーテシアの脳がパンクし、回路が焼き切れ廃人になってしまうかもしれない可能性まである。

「エリオ君！！このままじゃ！！！」

「くっ・・・一体どこまで・・・・・・誰かを利用すれば気が済むんだ、スカリエッティ！！！！！」

ドゴォ！！！！

エリオの渾身の斬り払いに、ガリューがその装甲にひびを受けながらビルの屋上に激突して埋まる。

ガリュー自身も当然、強化されている。
しかも今は白天王から受ける負荷で暴走したルーテシアによって、過大な強化までされているのだ。

全身からは血を流しながらも棘が生え、全身の武装を強制解除されていた。

それにもかかわらず、エリオはガリューに肉薄、否、それどころか

善戦していた。

全身から電流を迸らせ、総ての身体能力を底上げするという、模擬選の時に蒔風すらをも一時的に焦らせたエリオオリジナルの強化魔法で、此処まで追いつめてきていたのだ。

「ガリュー、君はそれでいいのか!!!??君の主が、あそこで苦しんでいて、それを助けられなくて悔しくないのか!?」

そのエリオが、ガリューの落ちたビルに着地し、全身の力を込めて叫んだ。
主を救ってやらないのかと、苦しんでるあの子を、助けてはあげないのかと。

無論、今ガリューを動かしているのは強制的なルーテシアからの命令で、それに逆らう事は、簡単に出来るものじゃないという事を、

エリオはよく理解している。

だが、それでも彼は言った。

思いのままに、その胸に想ったその言葉を。

「ルーテシアのことを想うなら、時には主の命にも逆らうんだ！！！あらゆる手段を使ってでも助けるんだ！！命を懸けても助けたいんだろ！？だったら、ここで僕と戦ってる暇はないはずだ。あの子を助けたいのなら、僕らに力を貸してくれ、ガリュー！！！！！」

自分よりも小さなその少年の言葉。

その言葉に、ガリューが今までの攻撃すべてよりも、身体の奥に何か一撃を叩き込まれた気がした。

そして、咆哮を上げる。

全身の関節の節々から血が噴き出し、腕を掻き毟ってその武装をはぎ落とす。

そうして眼の色は赤く、一つの意志と、使命に灯った。

「・・・・・行くよ、ガリュー。白天王はキャロが押さえてくれている。その間に僕らでルーテシアを捕まえて、まずは一旦の落ち着かせるんだ!!!」

「ガアァ!!!!」

ダンッ!!と地面を抉って二人が跳躍し、ルーテシアへと向かう。

二竜の嵐を掻い潜り、ひとりの少女を助け出すために。

――――――

主の指示に従って、その全身全霊を以って押さえつけている。
彼もまた、目の前の少女を救うために。

そうして、ガリューとエリオがルーテシアもとにたどり着く。
場所はまた別のビルの屋上。そこでルーテシアは叫び声をあげていた。

「う、うあ・・・・・・アアアアアア！！！」

そのルーテシアは今、頭を押さえて暴れまわっている。
全身からは魔力を吹き出し、額には青筋が浮き、頭を抱えて振り続けているのだ。

おそらく、全身に激痛が走っており、それをやめようとも洗脳によってやめられず、延々と苦しんでいる状況なのだろう。

そのルーテシアを見て、エリオがつらそうな顔をする。
と、その隣にキャロが降りてきた。

「ヴォルテールは？」

「白天王を押さえてくれてる。あんまり時間はないよ」

「うん・・・・」

そう言って、手をつないでルーテシアのほうへと歩いていく。
魔力の渦が襲いかかり、時折魔法弾となって飛んで来もしたが、それはガリューがすべて弾いてくれた。

しかし、その魔力の渦で二人は横から押されたようによろめき、更には薄い切れ込みが足や腕、頬にも入り、うっすらと出血していく。

それでも二人は止まらなかった。

まるでそんな障害など、何一つとしてないというように。

そうして、二人がルーテシアのもとへとたどりつく。
世界に置き去りにされてしまった少女を助けるために、二人はその手を取って、強く握りしめた。

「大丈夫・・・大丈夫だから。私が制御を受け持ってあげる。あの子をこれ以上、苦しめないであげて・・・・」

「今まで一人で何もかも背負い込んで、大変だったと思う。でも大丈夫。君のお母さんも、友達も、全部一緒に、守ってあげるから！！」

「う、あああああ！！！ああ！！あああああああああああ！！！あ・・・・ああ・・・・」

キャロがルーテシアのデバイス「アスクレピオス」に触れて、白天王の制御の補助を始める。
こうすることでルーテシアの負荷を下げ、彼女の暴走を止めていく

のだ。

それと同時に、彼女の洗脳も解いていく。
早くから封印魔法などの才覚を発揮していた彼女なら、この程度の洗脳を解くことなど、造作もないことだった。

癒しの魔法

キャロの魔法は、最後まで優しい魔法だった。

そしてエリオが、身を以ってここまで来てくれたのだ。
自分のために動いてきてくれる人がいる。今までそんなのは虫たちしかいなかった。

徐々に正気を取り戻していくルーテシアは、それを何というかわからなかった。
いったいどうして、彼らは自分のために涙して、怒って、ここまで身を賭してくれるのか。

「そんなの、簡単なことだよ」

「友達に、なりたいからですよ。ルーテシアちゃん」

「とも・・・だち・・・・・・」

「相手の目を見て、しっかりと名前を呼べば、その時から友達だって、教えてくれた人がいるんです」

「僕たちは、逃げない。そんな弱いことはしない。ここまで強くなったのは、誰かを助けてあげたかったから。だから、助けに来たよ」

「う・・・うあ・・・・・でも・・・・・おかあさんが・・・・・」

「大丈夫。今、その人を助けに、私たちのとっても頼もしい人が戦っているはずだから」

気づいたら、白天王はすでに召喚を解かれていなくなっていた。
それに伴い、ルーテシアも緊張の糸が切れたのか、はたまた体力と魔力切れによる疲れか、パタリと倒れこんでしまった。

「お、終わったぁ～～～～」

「本当にヴォルテール級とは思わなかったよ・・・・・・」

「あとはティアナさんたちだけだね。すぐに行こう、キャロ！！」

「うん！！あ、でもルーテシアちゃんどうし・・・・・・・・」

フシャアアア

「まずい！！二人とも、逃げんよ！！！！」

と、そこで今まで黙っていた白虎が人型に現れ、二人を担いでそのビルから跳んで逃げる。
ルーテシアのほうはガリューが抱えて行った。

そうして、少し離れたビルの上で、声のした方を向く。

そこには紅蓮に燃え上がる断罪者の姿があった。

最初からすでに立ち上がり、その尾を手に持ち炎剣として振るう者。

サラマンドラが、二人を視界に収め、殺気を炎とともに放ってきた。

「あ、あれは！！！」

「確か、地上本部を切り倒した怪物・・・・」

「ヴォルテール！！！お願い！！！！」

その化け物に一瞬引きながらも、キャロがヴォルテールに指示を飛ばす。

彼ならば、いかなる敵であろうとも負けるわけがない。そういった考えで、キャロは信頼を以ってヴォルテールを、向かわせた。

が

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「ギャアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

サラマンドラのふるった炎剣が、ヴォルテールの胸を横一文字に切ったのだ。

幸いにして切り込みは浅く、まだ戦闘不能というわけではないが、あのヴォルテールにいきなり一撃を入れてきたのはどういうことなのか。

サラマンドラの役目は「断罪者」である。
そして、命あるものはどんなに小さくとも「罪」を持って生きているものだ。

それはヴォルテールとて同じこと。
元が自然だろうとなんだろうと、命があれば罪があり、罪があるならば、サラマンドラは切り裂くことが可能なのである。

「ッ！！ガリュー！！今から言う場所に、僕たちをここまで運んできたヘリがあるから、ルーテシアをそこまで運んで！！」

「ヴォルテール！！大丈夫！？いける！？」

キャロの声に、高々と咆哮を上げるヴォルテール。
いまだ戦意は衰えず、眼前の断罪者をにらみつけている。

ガリューがエリオの教えたポイントに向かい、ルーテシアを運んでいき、キャロがヘリに連絡して彼女の保護を頼んだ。

それを見届けてから、獣神体と変わった白虎にエリオが、フリードの背中にキャロが乗って、ヴォルテールと並んでサラマンドラと対峙する。

「二人とも！！準備はいい！？」」

「はい！！行くよ！！キャロ！！！」

「うん！！」

敵は紅蓮の断罪者。

白虎は前回戦って、朱雀とともになんとか勝った。

しかし、その朱雀は今はいない。

代わりにいるのは、頼もしい力を持った、一人の騎士と、竜召喚士。

そして彼女のしたがえる二竜。

ならばよかろう、十分だ。
相手にとって不足なし。

今度は余裕で、勝たせてもらおう！！！

「余裕で勝って、みんなのところに行こうか！！」

「「はい！！！」」

ーーー

「スバル！！そこッ！！！」

「振動破砕、振動拳ッッ！！！！！」

ドォン！！！

スバルの一撃に、ついにチンク・レプリカが沈黙する。

ティアナが合流してから五分後には追い詰め、こうして残りはセイン・レプリカ一体のみ。

しかし、朱雀が言うには、ここからが大変だという。

「そういえば・・・どうしてあれには触れちゃいけなかったんですか？」

「ええ・・・・それはですね・・・・・」

朱雀が説明し始めた。

それはティアナがまだ応援に来ておらず、最初にセインと戦っていたとき。

三体がスバルに向かい、自分のところに一体のみ。
朱雀は当然、まずいと思っていた。

しかし、最初こそここを突破するのは簡単だと思っていた。
相手は一体だし、最悪、いや、最善ここで倒していってしまってもいい。

それに相手はセインだ。攻撃は五体による徒手空拳のみ。

いったいそれであそこまで手こずるなんて思う者がいただろうか？

朱雀は軽くあしらってからセインをまいていこうと考えていた。
だが、そんなことは簡単にいかないと、瞬間一発で悟った。

朱雀が人神体状態で、朱雀槍をを突き出し、セインに牽制してから
そこを通過しようとする。

しかし、セインは全く動かなかった。
そして槍がズプリとその胸に「入っていった」

「刺さった」のではない。「入った」のだ。

ＩＳ「ディープダイバー」

それをこのように使用してくることなど、セインはしてなど来なかった。

こんなことをしてもあっちの攻撃は通らないが、こちらの攻撃も通らないからだ。

つまりはしても無意味だということ。

しかし、こいつは違う。

そのままスッ、と腕を朱雀の胸に突き出して、通過させるセイン。

「？・・・・・ッッッ！？オオオオオオオオッッッ！！！！！」

そして直後、朱雀が悲鳴にも似た雄たけびをあげて、弾かれたようにセインから後退した。

胸を見ると底の部分の服は千切れており、まるで無理やり何かを突っ込んで破れたようになっていたのだ。

「これは・・・・・かなり厄介ですね・・・・・」

セイン・レプリカがしたこと。

それは自分のいた場所の物質を押しのける、ということだ。

もしオリジナルのセインが壁に潜っているときにＩＳを切って出現したらどうなるか。

そうすればおそらくは壁に押しつぶされて、セインは壁の中で圧殺という面白い死体になっていただろう。

だが、このレプリカは「欠片」が元だ。その強度はオリジナルよりも上。

つまりこいつならば、壁の強度の負けることなく、逆に壁という物質を押しのけて破壊することが可能なのだ。

これが朱雀が手こずった理由。

決して触れてはいけないという理由だった。

「相手は近づいてくるだけです。そして体が重なった瞬間、実体化するだけでその部分を抉り取る。そんな相手に、肉弾戦ができますか？」

「そんなの・・・・反則じゃん・・・・・・」

「しかもこちらの攻撃はすべて素通りなんですよね？いったいどうすれば・・・・・・」

だがそこで朱雀が人差し指をあげて策を言う。

「方法が・・・・ないわけではありません」

「ホントですか！？」

「はい。最初はティアナさんにとどめを刺してもらおうと考えてましたから」

「私にですか？」

「はい。ですが、ティアナさんはまだあれを一発で殲滅するほどの砲撃魔法は持ち合わせていません。ですから最初に考えた案はなし

になりました」

「最初の・・・ですか？」

「・・・・私が獣神体で突貫し、あいつが体内で実体化した瞬間をお二人に攻撃してお任せする、というものです」

「そんな！！！」

「しかし、それは言った通りの理由でできません。いや、こういうのもなんですが、助かりましたよ」

「そんな笑いながら言われても・・・・」

「ですので、第二案です。まあ、これも変わらないのですが・・・・」

「ど、どんな・・・・・ですか？」

「あいつが実体化するタイミングは・・・・・・一回食らっただけですが何とかわかります。だから」

「あえて体を素通りさせて、攻撃の一瞬を回避してその隙に攻撃・・

・・・ですか？」

「そのとおり」

その提案に、ティアナもスバルも血の気が引ける。

一瞬間違えば、間違いなく致命傷。良くても戦闘続行は不可能だろう。

しかし、反論しようにも、今はその手しかないのも事実。

さらにそれを実行する朱雀のプレッシャーはいかほどのものか。

「いきますよ・・・なぁに、ティアナさんの先読みと、スバルさんの一撃があれば、すぐに終わります」

そう言って無理やりにでも笑いかける朱雀。

正念場は、ここからだ。

ーーー

ＡＭＦが働いていても、それはなのはに聞くというだけのもので、蒔風には何の縛りにもなっていないからだ。

蒔風が剣を投げ、薙ぎ、突き、ガジェットを鉄クズにしながら、その後をなのはが追う。

「うっとーしいな！！こいつらは！！！」

「舜君！！一人でやってて大丈夫なの！？身体の方は・・・・」

「ここでお前が砲撃撃っていく方がややこしくなるっての。ただえさえ魔力食う場所なのに、そんなことに力注いでる場合じゃないだろうがぃ！！！」

蒔風が後ろから聞こえるなのはの言葉に応えながら、なおもガジェットを撃破して先に進む。

そうしていて、どれだけのガジェットを倒したか。

ついに、到達した。

「ヴィヴィオッ！！！！」

「大丈夫か！？」

聖王の間

そう呼ばれる場所の最奥に、玉座が一つこしらえられていた。

そこにしばりつけられて座っているのは、幼き少女。

なのはと蒔風が助けに来たヴィヴィオは、ぐったりとしてそこにいた。

「・・・・・なるほど・・・・あそこに鍵となる人物が座る事で「ゆりかご」は聖王を認識し、行動を起こしているのか」

「でも・・・ヴィヴィオは意識がないみたいだし・・・・」

「おそらく狡すっからい奴が指示だけをどっかから出してんだろ？車のキーと運転手みたいなもんだ。ほれ、とにかくあそこから引っぺがして、玉座を落とすぞ」

「うん！！今行くよ、ヴィヴィオ！！！」

そう言って走り出す二人。

しかし、玉座まで残り三メートルというところで、謎の衝撃に二人が打ち払われて弾き飛ばされる。

なのはには何が起きたのかわからないが、蒔風は肌に残る感覚で分かった。

「奴」の「欠片」だ。

だが何故ここにいる？

あれらはすべて地上本部に向かったはずではなかったのか！？

その疑問を残したまま、黒い影が玉座の裏から飛び出し、蒔風をひっつかんで玉座の間の後方まで連れて行った。

「舜君！！！！」

なのはが連れていかれる蒔風に手を伸ばすが、その瞬間、二人の目の前に巨大な壁が上下から出てきて、重い音を打ち鳴らして、二人を寸断した。

こうして、玉座の間は二部屋に分けられた。

後部に蒔風、前部になのは。
間には分厚い壁がそびえ立つ。

「くそっ！！後ろの扉も閉められてやがる・・・・・このまま俺らを各個撃破するつもりか？」

後部の蒔風が悪態をついて壁を殴る。

その音や力の浸透から、厚さは一メートルほどもある鉄板である事と解り、更に力を込めてそれを破ろうとする。

『あ～～らあらあら。そんなことをして、ここの敵をあっちになだれ込ませるきですかぁ？』

「！？・・・・・おまえは・・・・・」

と、そこに声が聞こえてきて、振りかえるとそこにはモニターに映ったナンバーズ０４、クアットロがいた。
そこに映る彼女は眼鏡をかけておらず、目もつり上がってなんともキツイ顔に変わっていた。

「お～、怖い顔してんなぁ。でも付き合ってる暇はないんよ、元メガネちゃん。こっから先に進ませてもらうとするよ」

『それはいけませんわね。聞いてなかったんですか？「敵をあっちに送ってもいいんですか？」って』

「なに？」

クアットロのその言葉に呼応するように、床からズルズルと黒い影か現れてきた。
それは壁の方からも現れ、蒔風がバックステップで部屋の真ん中にまで下がる。

そうして最終的に、取り囲むように八体も出てきたのだ。

「・・・敵ってこれか？」

『ええ、そうです。あなたの足止めにこれ以上有効的な物はないでしょう？』

「・・・・・・随分と安く見られたものだな、クアットロ」

『あら？』

「この程度の「欠片」で、俺を止めるつもりだったとは、浅はかなこった」

蒔風が鼻で笑いながら嘲笑する。
だがそれをもってしても、クアットロは余裕の表情を崩さない。

それどころか、より硬骨な表情を浮かべ始めたのだ。

『キャはははは！！！そう思います！？思い上がってますね、翼人！！！これを見てもそう言えますか！！！！！？』

クアットロがモニターの向こうで指を鳴らす。
すると「欠片」が姿を変え、一つ一つがヒトの形を取っていく。

黒いままのそのシルエットは、蒔風にとてもよく見覚えのあるものだった。

一体は小さな姿で小竜を従え
一体は槍を振るう少年の姿
一体は拳を構える少女で
一体は二丁拳銃のガンナーだ。

更に一体はポニーテールに剣を構え
一体はハンマーを肩に担ぎ
一体は鎌を手に握り

一体は魔導師の杖を蒔風に向けていた。

機動六課スターズ、ライトニング両隊の前線メンバー総勢八人。

その姿を模した「欠片」が、蒔風を取り囲んでいた。

『「あのお方」は愚かな妹たちの昔の記憶とやらを埋め込んで再現してましてね？だったら私が集めた機動六課のデータを埋め込んでもできるんじゃないかな～って思ったんですよぉ。あは♪やっぱぁり私ってばなんて天才でしょう♪』

「・・・・・・・・・三流が」

『ウフフフフ・・・なんとでもいいなさい！！！今あなたを取り囲んで、追い詰めているのは間違いなく私！！！ドクターではなく、この私！！！あっははははは！！！！！このまま捻り潰して、ホルマリン漬けにして研究材料にして上げますよ！！！銀白の翼人！！！！』

クアットロがうっとりするような顔をして、蒔風に言い放つ。

そうして、そのすべての影が蒔風に向かって攻撃を仕掛けてきた。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～さらなる脅威～（後書き）

書いてて思った事

白虎を戦闘時に出し忘れてた・・・・・

アリス「かわいそうに・・・・・」

ち、違うんだ！！！
えっと・・・その・・・・・

そ、そう！！！
あそこは二人が助けてあげなきゃいけない場面だったんだよ！！！
だから白虎はなにも言わないで黙ってたんだ！！！

忘れてたわけじゃないんだから！！！！

ア「忘れてたんですね？」

はい

ア「おおかた、書き終わってから「あ！！こっち白虎いんじゃん、

ど～～しよ～～」とかなったんでしょう？」

・・・面目ないです

にしてもまたヤバそうな展開ですね。

ええ。

迦桜羅に押されぎみ、サラマンドラは出てくるは、なんとセイン最強だったり、クアットロが「欠片」を利用してくるともりだくさん。

そんな中でついに旦那がこの小説に登場した！！！！

ア「いままで出てきてませんでしたよね？」

ええ、あくまでヴィータが交戦した相手としか出してませんでした。だからもしかしたらわけわかんない人もいるかもしれません。

ア「どうするんですか？・・・・まさか・・・・」

アニメや情報をどうぞ！！！
Ｗｉｋｉなんかは結構詳しいよ！！！！！

ア「来た作者得意の丸投げだーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

本当にごめんなさい！！！！！

ア「次回、・・・本当に誰書くか決まってないんですか！？」

順番とか決めてないよ！！どうしよう！？
展開は決めてるけど！！！！

ア「ではまた次回」

ずっと心配してくれてたこと…よく知ってる。だから、今日もちゃんと帰ってくる。ヴィヴィオを連れて一緒に元気に帰ってくる！

ゆりかご、聖王の間、前部分

そこでなのははヴィヴィオに向かってレイジングハートを向けなければならなくなっていた。
目には涙を、杖には魔法を

止めるためには、戦わねばならないこともある。

しかし、それがこんなにもつらいとは

「私のママを・・・・・返せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

蒔風と分断されてからすぐに、ヴィヴィオを異変が襲った。

拘束は解け、玉座から解放されたのはいい。

しかし、そこから立ち上がったのは、いつものヴィヴィオではなかった。

クアットロによる強制覚醒。

レリックを埋め込まれたヴィヴィオは、見た目の姿がなのはとそう変わらないところまで成長させられ、強固な洗脳によって目の前のなのはが自分の大切なものを奪ったという認識をとらされているのだ。

「ママを返せ・・・・・パパをどこに連れて行った!!!!!」

「ヴィヴィオ!!私・・・・なのはママだよ!!!!わからないの!?」

なのはは懸命に呼びかけるが、ヴィヴィオは頭痛のしているような顔をして頭を振り、違う違うと叫び続けた。

「私のママは、あんたなんかじゃない!!!!パパだって、あの人じゃない!!本当のママとパパはどこだあああああああああああ

ああ！！！！！！！！」

狭くなった聖王の間で、ヴィヴィオが叫ぶ。
その声はビリビリと壁に反響し、なのはの肩を竦み上げさせた。

そして一歩、また一歩とヴィヴィオが壇上から降りてくる。

その歩みを進めるごとに、全身からは七色の魔力光が吹き出し、部屋の中に充満していく。

基本、ゆりかごの中にはＡＭＦが発動している。
否、そもそもＡＭＦもガジェットも、もとはといえばゆりかごの一機能にすぎないのだ。

スカリエッティはそれを見つけ出し、再現したのであって、何もオリジナルではない。

だが、この場のみ、聖王の間だけは、ＡＭＦが発動していなかった。

『あはははははは！！！ほら！！ハンデはなくしてあげましたよ？全力で止めたらいいじゃないですかぁ～ウッフフフフフフ・・・・あなたの言葉、なんでしたっけぇ？ほらほらほらほら！！！言葉の通り、全力全「壊」！！しちゃえばいいじゃないですかぁ！！それで全部終わるんですから！！あっはははははははははははははははは！！！！！』

クアットロの笑い声が聞こえてくる。

彼女のは分かって言っているのだ。なのはにヴィヴィオを斃せないことなど。

攻撃はできても、痛めつけることなんてできないことを。

だから笑う。

それが所詮は限界なのだと。
醜悪で、世界の真実を携えているかのように、残酷な声で。

「返せ・・・返せ返せ返せ!!!返してくれないなら・・・・・」

ゴォッ!!!!!

「殺す!!!!!」

――――――

トと玄武の一人と一体のみとなってしまった。

ヴェロッサはすでに気絶して壁にぐったりと寄りかかっている。

本来、彼のレアスキルは偵察や諜報に本領を発揮するものだ。
もちろん、ガジェットを相手取ったところから戦闘もできないわけではないが、このような相手と戦闘をする機会はないに等しい。

一方、シスターシャッハはそのヴェロッサを守るためにバリアを張り、その中にいる。

彼女は聖王協会での巡礼の際、過酷な道を信者とともに歩き、時には危険な獣から彼らを守ることもあるため、防御魔法にも心得があった。

もちろん、彼女の本分は戦闘である。
シグナムとサシで戦える実力に、偽りはない。

だが、このケルベロスを相手取る場合、人数が多すぎると、一気に薙ぎ払われる可能性のほうが大きいのだ。

腕の振りかぶり、連続火球、コマのように回転しての突進

それを食らって全員が一撃でやられるわけにはいかない。
そのために、シャッハはヴェロッサのそばについた。

そして何より、フェイトが「これを倒してスカリエッティのところに行くとき、捕まえるだけの体力がないかもしれないから」と、その後をシャッハに託した。
そう言われては、シャッハはこの場で倒れるわけにはいかない。

ゆえにこの場は、フェイト、玄武の二人でケルベロスを撃破しなければならなかった。

「とは言ったものの・・・これはきついのぅ！！！！」

「でも、やるしかないよ！！ハーケン、セイバァッ！！」

フェイトが魔力刃をケルベロスに向かって数個飛ばして攻撃する。

だがそのすべてを跳躍してかわし、そのままケルベロスは天井や壁をぐるぐる回って疾走し、玄武に体当たりをしてそれでフェイトも押しつぶそうとしてくる。

「舐めるな！！！！十五天帝使役獣玄武、最硬の座は、伊達ではないわ！！！！」

ガゴンッ！！！！という思い一撃が玄武を少し後退させたが、何とか踏みとどまってそれを止める。

『が・・・うう・・・・フェイト嬢、これからあ奴の動きを止める。そのうちに、きつい一撃をぶち込んでくだされ！！！』

「げ、玄武！？」

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

ケルベロスと体を押し合いながら、玄武が息吹を吹き出していく。
と、同時、玄武の甲羅の下から、大量の水が流れ出てきた。

それはそのまま下には流れず、グルリと上に向かって伸び、二体を球型に閉じ込めた。

その巨大な水球の中で、ケルベロスの体がコポコポと、浮き、地に足がつかなくなる。

『今じゃ！！ブチ込めェ！！！』

「くっ・・・避けて、玄武！！！トライデント・・・スマッシャーーーーーーーー！！！！」

フェイトの砲撃が、水球中のケルベロスに向かって伸び、命中する。

ケルベロスの咆哮と、水球のはじける破裂音が、ドーム内に木霊して、ゆっくりと消えていった。

辺りには雨のように水が滴り、弾けたそれは霧となって、水球のあった場所を覆い尽くした。

「ぐ・・・ゲハッ・・・・あいつにはしっかりと・・・当たりましたな・・・これは」

「玄武!!!」

と、水の落ちてくる雨の中、玄武がヨロヨロと霧の中から歩いて出てきた。

腕を抱えて、足を引きずり、いかにもつらそうな表情だ。

「避けなかったの!?」

「あそこでワシが動けば・・・・ケルベロスには逃げられてしまうのでなぁ・・・・あれだけの事をして、失敗しましたじゃあ・・・・取りかえしつかなんだ」

「じゃあ・・・あいつは!?」

「・・・・・憎たらしい奴じゃて・・・・・・どうやらまだ先には行けないようじゃぞ」

「え?」

玄武が振りかえって霧の中を見る。

その霧の中に、ギラリと光る目があった。

霧をかき分け、ケルベロスが出てくる。
しかし、攻撃のかいあって、その頭は一つ潰れており、真ん中と右の頭が怒りに狂ってガチガチと牙を鳴らしていた。

「そ、そんな・・・ここまでやって・・・・・」

「ここまでやって、ようやく来たのじゃから、頑張らないといけないのぉ」

「え？あ・・・・」

苦しそうにしながらも、玄武の目には諦めなどはなかった。
単体では遥かに力負けする相手を前にしても、この余裕。

玄武は間違いなく、あの男の使役獣だった。

「ケルベロス一体に何を怯えておるのじゃ？相手は手負い。こちらはまだまだ、戦えますからな！！！」

玄武が意気揚揚をよそおって言う。
だが、そう高々に宣言したところで、玄武の身体はかなり限界に近いのは確かなのだ。

フェイトの一撃だけではない。

今まで玄武はその防御力を以ってケルベロスの周囲を回り、攻撃を弾き、防いできた。
だが相手はケルベロス。たとえ防御をしたとして、いかに玄武でも耐えられるのは二、三撃がせいぜい。そこから先は、鈍く重い攻撃が、玄武の身体に浸透、蓄積されていく。

そこにあれだけの大質量の水を出し、フェイトの攻撃をケルベロスもろとも食らったのだ。

これだけ摩耗していて、まだこれだけ声を張れるだけでも十分だった。

一方フェイトも、全く無傷、というわけではない。

ケルベロスの攻撃の大半は玄武が受けてはくれたものの、それとて完全ではないのだ。
どうしてもこちらに攻撃は来るし、それを避けるにも最大動作を要した。
紙一重なんかで捌こうとすれば、その勢いによる風圧に引っ掛けられ、次の攻撃で落ちてしまうからだ。

更に言うなら、ここはＡＭＦの濃度がゆりかご周辺ほどではないが、濃い。

そんな中で回避に全力を注ぎ、その間を縫って攻撃し、最後にあの一撃を叩き込んだのだから、体力、魔力共にかなり削られている。

大体全快時の４０％程は残っているが、六割使って頭一個なら、すべて潰すのには、さらにその三倍。

この敵は厄介だと、フェイトは改めて思い知った。

攻撃、疾走、広い視界

そのどれもが面倒この上ないくせに、更には二回までは頭を犠牲にできる。

これを厄介と言わずなんというのか。

「やあやあ、どうしたんだい？もうおしまいかな？フェイト・テスタロッサ・ハラオウン？」

「!?」

と、そこにいきなりドームの扉が開いて、スカリエッティが戦闘機人、ウーノとトーレをひきつれてやってきたのだ。

それに伴い、ケルベロスが大人しくスカリエッティの後ろに下がって行った。
おそらく、「奴」からある程度の権限はもらっているのだろう。

いきなり現れたスカリエッティに、驚きを隠しきれないフェイト。

なぜこのタイミングでやってきたのか。

だが、フェイトは自身の身体を以って、その理由を思い知る。

スカリエッティの方へと視線を向けていたフェイトは、一瞬のうちにバルディッシュを弾き飛ばされ、地面に倒れ伏し、トーレに押さえつけられていたからだ。

少し離れた場所では、すでに玄武が倒れていて、赤い糸のような魔力糸で縛られている。
おそらくはヴェロッサもシャッハも同じ状態だろう。

トーレのＩＳ「ライドインパルス」

不可視の高速移動による一撃で、疲弊していた彼らは瞬時にして撃破されてしまったのだ。

「ふむ・・・ここまで弱らせてくれるとは、さすがは「彼」の使い魔だね。いや、厳密には違うらしいが・・・まあいい。今はこっちの方が重要だ」

そう言いながら、コツコツとスカリエッティがフェイトに近づいてくる。
トーレに抑え込まれて、地面からスカリエッティを睨みつけるフェイト。

その目を見て、スカリエッティがにやりと笑う。

やっぱり駄目なんじゃないかと。

「どうだい？君らの力はこの程度さ。それでよくすべてを救うなんて言えたねぇ？それになんだっけ？次にそんなことがないようにだったかな？面白い事を言う。次がある現実なんて、本当にあると思ったのかい？」

「くっ・・・・このっ・・・・・・」

「だから言ったんだ。無駄なことはするな、とね。まあ、安心したまえよ。次に目覚めたときには、なによりも強い身体にしてあげるからね。もうそんな後悔しないで済む。そうだ・・・私の力と、あそこの技術さえあれば、すべての人間をそのように出来る」

「あそこ？・・・・・いったい・・・・貴様はどこに向かおうというんだ！！！答えろ、スカリエッティ！！！・・・ぐっア！！！」

フェイトが怒声を上げて、それを押さえさせようとトーレが押さえつける手に力を込める。
だがそんなことはお構いなしに、スカリエッティが話を進めた。

「そうさ!!私がすべての人類を改造し、一つ上の段階へと引き上げる存在となる!!!どうだい!?私は・・・・世界を格上げする者となるのだよ!!!!」

「狂ってる・・・・・」

「そうかい?そうでもないさ!!!成長と発展は世界の常じゃないか!!!そしてそれを成し遂げるのは、いつだって偉大な天才たちによってだ!!!今はキミらも私を悪だと思うかもしれない。だがね、そういった歴史の転換点にいる人物は、いつだって当時は悪役扱いだったのだよ!!!そもそも、世界をより高次なものにしようとする事の何が悪い?それならすべての科学者は、犯罪者なのかい?うん!?私は、世界を改造する!!!彼女ら(ナンバーズ)のように、より強く!!逞しいものへとね!!」

「それは!!!」

「反論するならなにが悪いのか、はっきりしてからにしてくれたまえよ?私とそこらの科学者は、なにが違うのか!!!」

「貴様が悪いのは決まっとるじゃろうが。歪な進化などに、未来はないからじゃ」

と、そこに割り込んできたのは、玄武だった。
スカリエッティはうん？という顔をして玄武の方を向く。

玄武は地面に倒れ、身体を縛られているため、顔もこちらに向けられないが、ハッキリとした言葉は伝わっていた。

「進化・・・・・否、進歩とは、書いた字が如く「歩」んで「進」むことじゃ。一歩一歩、しっかりと踏みしめていく事。貴様がしているのは、登山と言いながらヘリコプターで山頂を目指そうとしている、ただのバカと同じじゃて」

「・・・・・・ほう」

「そんな登頂になんの意味がある？そこまで行けたとて、次に行くことはできん。真に高い山を登るには、いつだって自分の足で歩むしかないのじゃからな」

それを聞いて、フェイトは思い出した。
そうだ、自分だって、生まれた時から強かったわけじゃない。
一つ一つ、積み上げてここまで強くなったんだ。

母さんは自分を作ってくれた。
ならば、その時さらに強化した個体を作ろうと思えば作れたのではないか？
否、そもそも、戦闘機人という技術の研究自体は昔からあったのだから、あの人ならば簡単に実現したはず。自分にそれをしてしまえばよかったのでは？

だが、あの人はそうはしなかった。

まっとうな手段で、私を強くしてくれるように、使い魔に指示を出していた。

こいつが育てたという、一足飛びの強さと、母さんが私にしてくれた、厳しくも丹念に行った鍛錬。

こいつの言う強さが、母さんがくれたモノよりも、勝っているわけがないじゃないか!!!!!

「よくもまあ・・・ここまで言えたものだね・・・どう言おうと

ももう変わらないよ。ここは・・・・・・・・・私たちの勝ちだ」

「それを言った悪役の行く末を、ヌシは知っておるのかな？」

「なに？」

バツンッ！！！

その言葉と共に、いきなり玄武の身体が弾けるように寝たままの状態で浮き上がった。

スカリエッティによる魔力糸を強引に引きちぎった反動によるものだ。

そしてそのまま地面を転がり、落ちているバルディッシュを手に握ってスカリエッティの足を打つ。

「ぐあぁ！？」

それが脛に命中し、もんどりうって倒れるスカリエッティ。
その事態に一瞬気を取られたウーノとトーレの視線が、玄武からスカリエッティへと向く。

と、その隙に玄武が三角形のデバイスモードに戻ったバルディッシュをフェイトの手元に投げつけ、自身はたたずんでいたケルベロスに向かって跳びかかって行った。

しかし、その時にはすでにケルベロスは動いており、人型の玄武を噛み砕こうと、その巨大な顎が開かれていた。

だが玄武はあえて、そこに飛び込んだ。

玄武が飛び込んだのは真ん中の首に
そして飛びこんだ瞬間、その牙が閉じられて玄武の姿が一瞬消える

しかし、直後その顎から、獣神体として顕現した玄武が、その堅固な甲羅で顎と牙を砕いて飛び出してきた。
だがその体中からは血を噴き出し、甲羅も所々砕けている。

そんな状態でも玄武は、仰け反ってから俯くケルベロスの最後の頭に向かって押しつぶそうと、巨大な足を振りあげた。
それと同時に、ケルベロスもまた前足を振るって玄武の甲羅を砕き、その内部を抉りだそうと、猛威を振るう。

ゴキャッ、ズガァ！！！！！

そうして玄武の足はケルベロスの頭を捉え、ケルベロスの爪は甲羅を砕いて玄武の脊髄を引き裂いた。

二体の獣が同時に倒ながら、姿が消えていく。
そうして最後にカラーン、という音を立てて、二本の剣が地面に落ちた。

ここまでに要した時間は、わずか三秒と端数。

だが、何が起きたのかを理解するには、十分だった。

「あああああああああああああ！！！！！！！バルディッシュ！！！！！」

《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ．　真・ソニックフォーム　展開します》

それを見たフェイトがバルディッシュを手に、上にのしかかるトーレを力任せに押しのけ、その刃で攻撃する。

トーレはそれをとっさに回避、フェイトから離れるが、その右の二の腕にはしっかりと切り傷が刻み込まれていた。

そして、金色の魔導師が、真の姿を解き放つ。

すべてにおいて最速で、ただそれのみに特化して

誰をも守り、駆け付けると言う、彼女の願いを表した、電光石化の雷神が、大剣を手に、眼前の敵と対峙した。

その背に、最も頼れる男からの、贈り物を宿して。

ーーー

はやてのある魔法で、空中に射止められているのだ。

はやてによる迦桜羅との戦闘。
それはかなり熾烈を極めていた。

先にも言った通り、何より相性が悪かったのだ。

まあ、だからこそ迦桜羅を送り込んできたのだろうが。

しかし、そこは機動六課部隊長、八神はやて。
普通の人とはまた違う策を出し、実行に移したのだ。

その策とは

「あーーーもううっとおしい！！！滅茶苦茶にぶっ放して逃げ場無くしたる！！！！覚悟しろやぁ！！！！！」

迦桜羅のヒット&アウェイ・・・いや、この場合、飛び去るからヒット&ランになるのか。
その攻撃についにキレてしまい、周辺空域には近づかないよう全局員に通達し、それが済み次第、はやては空間魔法をぶっ放し始めた。

それに何より焦ったのは、迦桜羅ではなく局員たちの方だ。

このＡＭＦフィールド下において、こんだけの魔法ぶっ放しても大丈夫なのかと。

しかし先の戦闘の事を考えなければ、問題など、一切なかった。

はやての魔力量は、管理局でも指折りである。

つまり、どれだけ撃ったところで、全力の砲撃でも撃たなければ魔力切れなんてことはないのだ。

そうして撃っていくうちに、迦桜羅の動きは徐々に制限され、はやてに翻弄され始めてきていた。

そうしてしまえばこっちのものである。場所さえ分かれば、はやての魔法はその空間ごと巻き込むのだから！！

バシィ！！！と、何かを縛りつけるかのような音が聞こえて迦桜羅の動きが止まった。

それこそ、さっき言った迦桜羅を止めていた「ある魔法」である。

その魔法は、拘束魔法。つまりはバインド。

だが、ただのバインドではない。

はやての魔法は、何度も言うが空間魔法。

で、あるならば

周囲の空間そのものごと、対象をバインドしてしまう事もまた、応用次第では可能なのだ。

「舜君との模擬戦でもしかしたら～～って思ってたら負けてしまったからなぁ。ちゃんと使えてよかったぁ・・・・・」

はやてが汗を流しながらも、不敵に笑みを浮かべながらシュベルトクロイツを空中で周囲ごとバインドされた迦桜羅に向ける。

「これで・・・しまいや・・・・ようゴツゴツとやってくれたなぁ!?遠き地にて、闇に沈め・・・・・・デアボリックゥーーーーー!!!!!!エミッション!!!!!!」

空間魔法が、迦桜羅を完璧に捉え、膨れ上がって爆破する。

その魔法に、迦桜羅はついに沈黙し、一本の剣がどこかへと消えていった。
それをすぐに追おうとするはやてだが、今はこの場を離れるわけにはいかない。

最後の方こそ迦桜羅の相手ははやてのみだったが、最初の方では管理局員もかなり落とされているし、攻撃からの旋回によってゆりか

ごの反対側の方の局員もかなりの数が落とされていたからだ。
現状、局員とガジェットの対比は４：６と言ったところか。

ゆりかご外部の脅威はひとまず沈めた。
しかし、驚異がなくなったわけではないのだ。

戦いは、終わらない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

はやてが何だかギャグっぽくなってしまった気がする・・・・・

アリス「いいんじゃないですか？」

いやでも、大丈夫かなぁ・・・・

と、昨日は済みませんでした。
言い訳は活動報告の方にして見てますので、聞き苦しい言葉でも読みたいからはそちらにどうぞ。

ア「そういえば前の活動報告になんか書いてましたね」

そうですね～～

誰か書いてーーーーー！！っていう提案も、一つ前に書いてましたね。

前半はただの歓喜の叫びでしたけど。

ア「でも、自分で書けばいいじゃないですか」

それは活動報告にも書いたけど、そんな時間はとれない。
自分は複数作作れるほど器用じゃないです。

この小説だって終わりまで見えてないのに。

ア「あとどれくらいかかると思います？」

まだまだ先ですもん。
正直、来年までかけても終わらないかもしれない。

ア「へぇ～～。次回・・・だから誰なのか決めておけやあああああ！！！！」

と、とりあえずスーパーおっさんタイムです！！！
ではまた次回

いつでもそうだ…俺はいつも遅すぎる…

いえいえ、今回はそうはしませんよ（悪笑）

「少し、歩くか」

そういってレジアスがゼストを誘って、地上本部跡を歩いていく。
そのあとをシグナムと、二人の秘書がついていっている。

最初ゼストが現れた時、シグナムはレヴァンティンを構えてゼストの前に立った。
しかし、直後にレジアスが声を上げて、それをやめさせたのだ。

「剣を下げろ。シグナム二等空尉、リィンフォース?空曹長」

その言葉に、二人が驚く。
よもやこの人物が、自分たちの階級までしっかりと知っていたとは思わなかったからだ。

「たとえ本局といえども、大まかな局員の名前と階級は知っておる。それがあのタヌキ娘の下ならなおのことだ」

そう言ってにやりと笑い、レジアスがゼストと並んで歩く。

「レジアス、お前は今何をしている？」

「今は、地上本部の中将の席に居る」

「また・・・・知らない間に階級が上がったようだな」

「・・・・いろいろと・・・・あったからな」

ぽつぽつと語っていく。

最初はつまらない話から、だんだんと、核心の本題へと。

「レジアス。俺が最後に受け持った任務。そのことをお前は知って

いたのか？」

「・・・・・どういう任務かは、な。だが、それを受け持ったのがお前であることなど、微塵も知らなかった」

「しかし、俺でなければよかったということにはなるまい」

「・・・・・・・・」

「あの任務で、クイントをはじめとして、全員が死んだ。メガーヌはスカリエッティに囚われ、娘のルーテシアの人質にされている。俺はこうして人形として存在させられた」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「俺に関しては、別にそれでもいい。お前の正義に殉じるならば、俺は本望だった。だが、俺の部下たちはそうではない。彼らの命が失われ、お前の正義はそれを良しとしたのか？」

ゼストの言及。

しかし、その言葉には一切の恨みも憎悪もなく。

ただ事実をだけを述べ、真実を聞き出していた。

「ワシは・・・・・今の秩序を作り出すために、必死になってきた。どこまでも理想を追い求めようと、動き続けた」

「そうだったな。若かりし頃、俺とお前とで語り合った理想だ」

思い出されるのはかつての自分。
語っていたのは、夢物語。

いつかは全部を救うんだという、青二才の願い事。

だが

「だがな、ゼスト。世界はそんなに甘くはない。理想だけで秩序は

作れん。願いじゃ平和は訪れない。それを・・・・否、何か成し遂げるためには、何か犠牲が必要になる」

「その犠牲が・・・・俺たちであり、ゆりかご(ヴィヴィオ)の鍵であり、この地上本部だというのか?」

「ッ・・・・・・」

「俺たちの追い求めていた正義はどこに行った・・・・・俺たちの正義に、こんな犠牲はなかったはずだ。お前が与えてくれた俺の正義に、こんな悲劇などなかったはずだ!!!」

「ワシが・・・・・与えた?」

レジアスが聞き返す。

ゼストにも自分の正義があり、かつての自分たちはそれが同じだったから、語り合っていたのではないのか?と

「いいや、違う。俺に最初、正義などなかった。ただ、強くなろうとしていただけ。俺は武人だ。すべてがそうではないが、少なくとも俺は、たいそうなもんなんか持ってはいなかった。自分の力は何のために振るわれるのか、と疑問にも思った。だがな、そこでお前の理想を聞いたんだ。ああ、なんて甘く、青臭く、無茶難題を言ってるんだと思った。だが・・・・・・俺にはそれが素晴らしく輝

いて見えた」

「・・・・・・」

「そして、俺は決めたんだ。お前の理想を、俺の願いにしよう。お前の正義を、俺の信念にしようと。だが、お前は変わってしまった。正義のためといい、同じく正義のために戦ってきたものを犠牲にしてしまう男になってしまった」

「う・・・ぐ・・・・」

「お前の正義を、お前は見失ってしまった」

「では・・・お前はやはり・・・・・」

「だから返しに来たぞ、レジアス・ゲイズ。借り物だった、お前の正義を。あのときのまま、大事に胸に抱いてきた、あの理想を、返しに来た」

「！！！」

「俺はすでに死人だ。この体も長くは持たん。おそらく、明日の朝日は見れまい・・・・・・・先無き死人に、抱く理想は不要。ならばこそ、先を生きるお前に返すのが道理というものだ」

「ゼスト・・・・・」

「おまえにもまだそれが残っているのなら、為すべき事を為せ。もしないのなら、俺が共に行ってやる」

おまえに正義を取り戻させるために、さあ、一体何をしようか？

ーーー

ヴィータと青龍が向かった先には、破壊目標の「動力炉」がある。
これさえ破壊すれば、ゆりかごは止まらなくても、最悪衛星軌道上への浮上は止まるはずだ。

と、思ってその場へと向かって行き、最初にその途中でガジェットの襲撃を受けた二人。

が

「ハァアアア！！！！！」

ドォン！！！ドドドドドッ！！！！

青龍が放った電撃にガジェットが次々と沈黙する。
と、言うかこの程度の敵に苦戦するはずもない。

「あ、あの、あたしは・・・・」

「・・・・貴女はおとなしくしていてもらえると・・・・助かります・・・・私の使命の一つは・・・・あなたに無茶をさせて怪我をさせない・・・・事ですから」

「え?あれ?じゃあ、あたしがいる意味・・・・」

「行きましょう」

そんな会話をして、二人は先を進んだ。

そして次には何やら新しいタイプのガジェット。
だが、ヴィータには見覚えがあったようだ。

「こいつら・・・なのはが墜ちた時のアンノウン!!!」

「・・・・八年前の・・・・ですか?」

「ああ・・・・あの事件も、こいつらのものだったってわけかよ!!!チクショウ・・・てめえらのせいで・・・・」

「主が一時ああなった大元は貴様らかアアアアアアアアア！！！！」

「へ？うを！？オイイイイイイイイイイイイイイイ！？」

ゴガン！！ドゴゴゴゴゴゥッ！！！！

青龍がそのガジェットの群れに飛び込んで獣神体に顕現、次々と押しつぶし、すり潰し、ひねり潰して行く。

その攻撃の衝撃にヴィータが帽子を押さえて目を閉じる。

そして目を開けた瞬間、そこには鬼神のように立ち、ガジェットの頭っぽいところを握りつぶしている青龍・人神体と、瓦礫と化したガジェット群だった。

「せ、青龍？どうしたんだ？」

ヴィータがオズオズと聞く。
こいつらの姿を見てヴィータは頭に血が上り、力任せにブチのめしてやろうという激情に駆られた。

だが、それよりも断然に早く、青龍が暴れてしまったので逆にポカーンとしてしまったのだ。

「・・・・ハッ・・・・さ、行きましょうか・・・・」

「おまえのキャラがわからねぇ！！！！」

そうして先に進む二人。

次に待ち受けていたのは、ナンバーズが一人、セッテ。
一対のブーメランブレイドを両手に握り、動力炉の前で待っていた。

「申し訳ないですが、ここは通しません」

「うっせーー！！ここは潰さなきゃならねぇんだ！！！外のはやても、前のなのはも、地上の皆も、そうしねーとぶっ倒れちまうからな！！！」

「では、やってみてはどうでしょう。私に敗北はありませんが」

「どーしても退く気はねーみたいだな・・・・だったら！！！」

「・・・目的を先にしてもいいですよね？」

「は？」

ドォン！！！！

セッテの後方で、動力炉が爆煙を上げる。
しかし、直後に煙から現れてきたのは全く無傷の動力炉が出てきた。

ヴィータが振り返ると、青龍が手を動力炉にむかって伸ばし、電撃砲を放った姿勢になっていた。

「ふむ・・・・さすがに硬いですね・・・・ここはしっかり腰を据えて・・・・やりたいところです」

「ちょ、おま・・・・いきなり何やってんの！？」

「？私達の使命は・・・・あれを破壊することでしょう？・・・・こんなに広く、天井の高い通路で・・・・ああして立って待ちうけるなど・・・・撃ってくれというものでは・・・・ないですか・・・・だからやったのですが・・・・」

「いや、確かにそうだけどよ・・・・」

「やはりその程度ですか。たとえ私にこの場で勝っても、ここは破壊できません」

セッテの言葉は確かだ。
ここの動力炉の硬度はすでにそれだけでもロストロギア級に匹敵する。

この広い通路に彼女一人だけで配置された理由。

それは、絶対に砕かれないという自身があってこそだった。

「ですので、このまま潰させてもらいます。他のところに加勢されては、面倒との指示なので」

「・・・・ですが・・・・そうもいきません」

「あたしらはこいつをぶっ壊さなきゃなんねーンだ！！！」

そうして構え、臨戦態勢に入る三人。
その間に、ヴィータに青龍が念話で話しかけた。

『どうしますか？最悪、一人がひきつけて一人が破壊にまわるという手もありますが？』

『いーや。ここであいつを一旦ぶっ潰す。その方が早く終わんだろーし、そうすればほかの奴らも助かる』

『了解』

青龍は会話を終え、バッ！！と腰を落とし片手に青龍刀を握り、拳法の構えのように構えて、向かってくるセッテに向かって行った。

セッテのブーメランブレイドが青龍の首を狙って鋏のように閉じられるが、青龍は剣を閉じるブレイドに突っ込んで、挟み込めないように迎え撃つ。

が、そこで終わるセッテではない。
そこから青龍の胸を駆け上がるように蹴り、そのまま一回転して片方の剣を振り降ろし、もう片方を横から薙いだ。

そこで青龍はセッテの蹴りの勢いに身を預けて床に倒れる。
それによって横からの攻撃は避け、上からの攻撃を左に転がって避けた。

そしてそのまま起き上がりながら足払い、よろけたセッテの足を掴んで掬い上げて転ばせ、俯けにさせてのしかかる。

ヴィータの入り込む余地もなかった。
そもそも戦闘機人一体に、青龍が後れをとるわけがない。

完全に捕まえている。
これでは身動きも出来まい。

そこで最初の言葉に繋がるのだ。

「ッ・・・・」

「ヴィータさん・・・・バインドをよろしくお願いします・・・・」

「オウ。次元犯罪加担の罪で、オメーを」

逮捕する。そう言ってバインドを掛けようとしたとしたヴィータの言葉は、その口から出てくることはなかった。

ズズン・・・という重く、低く、それでいてかなりの衝撃である何かが、ゆりかご全体を揺らしたからだ。

その振動の隙に青龍の下から転がり出て、ブーメランブレイドを手に動力炉の方へと飛んでいくセッテ。
地上戦は不利と感じたのか、空中戦に持ち込む気だ。

「上等・・・相手してやる！」

「抑えきれなかったとは・・・それにしても今のは・・・・」

ヴィータがセッテにむかう中、青龍が先ほどの振動に・・・・否、

正確には振動にではなく、その瞬間に感じた違和感に顔をしかめる。

おそらく、今のは蒔風によるものだろう。

と、言うかこのゆりかごを揺らすなど、彼しか思いつかない。

だったら、今の振動とこの違和感に関係がないはずはない。

疑問に思う青龍だが、今はヴィータがセッテと交戦している。

思考を頭の隅に押しのけ、青龍もまた、彼女との戦闘に参加していった。

――――――

そこで二体の巨影が衝突している。

ヴォルテールとサラマンドラ

轟拳がサラマンドラの頭(かぶり)をもたげさせ、炎剣がヴォルテールの身体を揺らす。

その動作は見た目ではあまりにもゆっくりに見えるが、彼らの身体の大きさを考えてみれば、それは恐ろしい勢いと威力を持っているのだ。
その攻撃による踏み込み、受けた事での後ずさりで、地面が跳ね上がって周囲を揺らす。

まるで怪獣映画の一幕を見ているようだ。

その戦闘に、エリオはもちろん、フリードや白虎すらも入り込めない。

この周囲を襲う衝撃は、一撃で一同を昏倒させるに値するものだ。
だからと言ってそうならないように調整すると、今度はヴォルテールがやられる。

だからこそ、白虎は戦闘には参加せず、彼らがやられないようにコントロールするキャロやエリオたちをバリアで守っているのだ。

だが

「ヴォルテールッ！！！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！？？？？」

サラマンドラの動きは俊敏だ。
最初の蜥蜴形態が嘘だったかのように、フットワークが軽い。

炎剣だけではなく、拳や蹴りなどを織り交ぜた剣舞に、ヴォルテールが後退し、ついには白虎たちのいるビルに倒れ込んできた。

「うわあああああああ！！！！」

『くっ！！皆！！ここから離れるよ！！！僕一人じゃとてもじゃないけど、あそこに割り込めない！！！！』

白虎が悔しそうに叫ぶ。
実際、白虎があそこに割り込めばサラマンドラには勝てるだろう。
ヴォルテールとの共闘になるのだから、それは必ずだ。

しかし、それをやると周囲への衝撃で、二人がやられてしまう。

更に言うなら、ヴォルテールは「自然の体現者」である。
その衝撃に白虎も耐えられる保証はないし、そうなれば当然、二人を守れない。
フリードならばなおさらだ。

故に、こうして守りに徹するしか、方法がないのだ。
決して自身が倒れることを恐れているのではない。
彼らの身を案じてこその、苦渋の決断だった。

『せめてあっちが来てくれればどうにかなるんだけど！！！』

「ティアナさんたちは七体の戦闘機人を相手にしてるんですよ！？」

「そうなんだよねってうおおおおおおおおおおおおオオオオ！！！！！」

背中に二人を乗せて疾走する白虎が、ビルの隙間を、空中を走って行くと、いきなりビルの中から何かが飛び出してきて、彼の横っ腹に当たった。

「白虎！！」

『朱雀！？そっちは終わったの！？』

それは人神体の朱雀だった。
セインを相手取り、その必死の回避でついにビルを突き破ってまでしたのだ。

その体には所々血がにじんでおり、あまり無事とは言えない状態になっていた。

「それより、こちらを手伝えませんか！？ディープダイバーがなかなか厄介でして！！！」

『それを言うならこっちもだよ！！あの化け物、自然の体現者も倒しちゃう勢いなんだよ！？』

しかしその瞬間、ついにヴォルテールが膝をついて倒れ、そこにサラマンドラの炎剣が薙がれた。
それを腕でとっさにガードするヴォルテールだが、ダメージがすでに限界を超え、その体が魔法陣に消えていった。

ヴォルテールが消えていった魔法陣跡に残ったのは、セイン・レプリカ。
膝をつかせたのは、こいつだった。
なんのリスクもなしに攻撃を素通りさせながら膝に飛び込み、内部から破壊したのだ。

「エリオ!!キャロ!!」

「大丈夫!?」

「ティアナさん!!!!」

「私たちは何とか・・・でも、ヴォルテールが・・・・・」

『朱雀・・・厄介だよ。あの二体』

「魔導八天（あれ）を相手にして、厄介でなかったことなどありませんよ」

最悪の状況。

最後の切り札、ヴォルテールは倒れ、目の前には二体の敵が。

全身を炎に包み、魂すら切断する「紅蓮の断罪者（サラマンドラ）」
すべての攻撃を無効化し、触れただけで終わらせる「潜行する密偵（セイン・レプリカ）」

彼らに、勝利はやってくるのか

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～終わらぬ戦い～（後書き）

セッテ、どうしてああなった!?

アリス「完璧にギャグじゃないですか。なんですか?あの覇気のない効果音は」

いやその・・・ですね・・・・・・

セッテのキャラってつかみにくかったんです!!!
でもアニメ見てなんとなく戦い大好きみたいな子かな?って思って、トーレが教育係だったから脳筋かな?って

ア「で、ああなったんですか?」

うん

アホの子になっちゃった・・・・・

ア「セッテファンにムッコロされますよ?」

ごめんなさいです。

そして旦那来ました旦那。

この小説、なかなか旦那が書けなくてですね、ここでポンなもんですから。
いやはや全く、困りましたよ。

まあ、なのは見てない人は基本いないと思うますので、わかってくれるとありがたいです。

ア「もう次回とか言わなくていいでしょう？」

うん。
正直決まってないし

ではまた次回

追記：セッテの性格の違いや、展開に違和感があり、また、自分も読みなおしておかしいと感じたので、そのシーンを修正いたしました。原作の性格を無視した内容を書いてしまい、申し訳ございませんでした。

何故だろうなアギト。お前との融合は不思議と心が温かい

蒔風が六課メンバーのレプリカを相手にして立ち回っている。

しかし、それだけの相手と戦っているにもかかわらず、全く危うさが感じられない。

だが、動きには余裕があるものの、顔は険しく、目の前にある「欠片」を殴り飛ばしていく。

「こんなものは違う」

なのはのバスターが唸り、ティアナの射撃が襲い掛かるが、蒔風はそれを避けようともせず、片手でそれを一振りで弾き飛ばす。

無論、それで右腕が無傷なわけがない。

手の甲は裂け、握りしめた拳からは血がボタボタと垂れて床に跡を残していく。

「これも違う」

フェイトのバルディッシュザンバーによる斬撃を、右腕に出した「天」の鞘で受け止めシグナムの連結刃を左腕に巻きつかせて引き付け、武器を奪って粉と砕く。

「何もない、ただの「何か」だ」

左腕からは血を流しながらも、バルディッシュを振り落としの裏拳で砕いてからヴィータのハンマーを額で受け、血を流しながらそれを握りしめて握力で砕く。
さらに背後から迫るスバルの腹部に後ろ蹴りを入れ、吹っ飛んだ身体がキャロを巻き込んで弾き飛ばす。
その衝撃に、二体が消えた。

「これがあいつら？笑わせる」

スバルとキャロの「欠片」が消滅していくのを見ながら、エリオがブースターで突貫してきたのを紙一重で躱し、脇に挟み込んで顔面を殴りつける。エリオ・レプリカも、これで消え去った。

そして、まるで順番だといわんばかりに再びなのはの攻撃が来た。槍のように変形したレイジングハートを構え、蒔風に突進してくる。

が、それをもはや回避もせず、懐に踏み込んでその顔面を片手でつかんで持ち上げた。

「「奴」がこういう風に「欠片」を使ってきて厄介なのは、それが本物の「記憶」だからだ。ただの記録（データ）ではないからだ」

攻撃のために群がってくるレプリカ共を一瞥し、まるで相打ちでもするかのように真っ向からその攻撃を受け、そうしてすべてを消し飛ばす。

だが、蒔風はそれを負傷としてとらえていない。
いや、今までの敵（レプリカ）ですらも、傷害などとは思っていなかった。

それは「欠片」だからという力量を以ってのことではない。

右腕になのは・レプリカを握りしめて、聖王の間を寸断する壁に向かい

握りしめているほうの手を引き、腰を落とす。

「起動六課を相手にしてもらう？馬鹿言うなよド三流。これはただの人形だ」

メキメキという音を上げ、筋肉が隆起する。
そうして、壁をブチ砕く一撃とともに、言い放った。

「各人の・・・こいつならば、高町なのはの、その魂を、信念を宿していなければ、これは決してエースオブエースではありえない！！！！！」

ゴガッ！！！ガゴォッ！！！！！

「ただの情報を載せただけの傀儡が、あいつらの名を傲慢にも語るんじゃない！！！！！」

「舜君！！！」

「！？」

蒔風が壁をブチ向いて、なのはと合流する。

なのは・レプリカは壁をぶち抜いた衝撃で、ザァッ、と消え去っている。

当然だ。あんな真実（しんねん）のない紛い物に、耐えられる攻撃などない。

「舜君・・・ヴィヴィオが！！！」

なのはが悲痛な声を上げる。

蒔風が見た先には、聖王モードのヴィヴィオ。

なのはのバリアジャケットはすでにスカートの端が切れ、レイジングハートにはどれだけの力で握りしめたのだろうか、血が滲んでしまっている。

「強制覚醒・・・・なるほど、聖王としてのヴィヴィオか」

「しかも、洗脳で私達を完全に敵だと・・・・」

「ふむ、なかなかに美人。体つきもいい。将来は安泰だなこりゃ」

「そんな呑気な！！！」

蒔風が考察しているのを、なのはが諌める。

一方ヴィヴィオは新たな乱入者に頭を抱え、流れ込んでくる偽りの認識に頭痛していた。

「あああああああああああ！！！！お前もか！！！！！おまえも私のパパとママを奪った奴か！！！」

「おいおい・・・・」

「私の本当のパパとママを奪って・・・それで自分たちがそうだと嘘をついた！！！そうじゃないくせに！！！！！」

「ヴィヴィオ・・・・それは！！！！！」

「ようやく気付いたか。だから最初から言ってただろ？俺はパパじゃなく、おにーさんだとな」

蒔風の言う事は確かだ。この男は今まで一度も、父と呼ばれる事をよしとはしていない。

『あ～～ら？正義の味方も、なかなかにひどい事を言いますねぇ？』

「黙れよ、三流。おまえには何一つ理解できていない事がある。それがお前の敗因で、俺たちの勝因だ」

『私が知らない事？なんでしょうね～～～？気になりますぅ』

それを言おうとした蒔風だが、瞬間、目の前にヴィヴィオが突っ込んできて、蒔風の顎に拳を命中させた。

信じられないスピードだ。

おそらく、フェイトと同じくらい早いのではないか？

蒔風の視界が揺らぎ、そこに加勢に入るようになのはが砲撃を撃つ。

それに対してヴィヴィオもまた、砲撃を以って迎え撃った。
だが、なのはにヴィヴィオを、牽制とはいえ攻撃することにはためらいがある。

なのはのデバイス「レイジングハート」は祈願型だ。
簡単な防御や攻撃程度なら、主人の思考に合わせてデバイスが自動で発動させる。

それは普段の攻撃にも当てはまる事。

故に、そんな躊躇いの砲撃などは、この場においてはないのも同然。
呆気なく打ち消されて、ヴィヴィオの砲撃がなのはに直撃した。

『あっはははははは!!!ダメですねぇ・・・戦闘中に気を逸らすとか馬鹿ですかぁ?あ、そっかー♪あなたの翼は確か「願いの翼」ですもんね~?つまりぃ、私の願いを聞いてくれてるってことですか?あはは!!それってなぁんて損な力。願いが力になるなんて面白いけど、この場合まるっきり無駄じゃないですかぁ?』

片手間でなのはを砲撃で弾いたヴィヴィオが、蒔風の首を掴んで投げようとする。
だが、蒔風とて伊達や酔狂で世界最強を名乗ってはいない。

視界はまだ定まっていないので、感覚の身で足を地に付け、爪先で踏ん張り、逆にヴィヴィオの身体を投げつける。
地面に倒れるヴィヴィオは即座に立ち上がるが、蒔風がそこに打滅星をぶちかまして、玉座の方へと吹き飛ばした。

そこで恐るべきは聖王のステータスか。
身体は衝撃で吹き飛んで、背中を壁にぶつけこそしたが、打滅星自体は腕でガードしたのだから。
壁から落ちて、今ではその拳をなんでもないように握って構えて戦闘の意を伝えてくる。

なんというハイスペック。
蒔風とて、この場で本気で昏倒させるつもりでぶん殴ったのに、ガード、さらに耐えられてしまったのだから。

しかし、そこでヴィヴィオをバインドがロックする。
なのはだ。彼女がヴィヴィオにもう戦わせまいとして、動きを束縛している。

だがそのバインドも長くは持つまい。
よくて五分が限界だ。

「チッ、名前に「星」でもついてりゃ楽だったんだがな」

『えげつねぇですね～～。あなた、自分をパパと呼んでいた女の子を、そう簡単に殴るんですかぁ？』

「殴る」

クアットロの問いに、蒔風の答えは即答だった。
その言葉に、なのはも黙ってしまった。

「ああ殴るさ。なにがおかしい？そもそも、この世界だけでなく、どの世界でもそういう事はある。知らないのか？最近では親が子を、逆に子が親を殺す事もあるんだぜ？殴るぐらいなんだってんだ。それに、憎いなら最初からこんな事しない。これはあくまでヴィヴィオのための拳だからな」

『なかなかにクソな反論ですねぇ』

「なんだ？お前ともあろうド三品が正論たれんのか？「子どもを殴るのはダメだよ！！」って？じょーだんｗｗ」

『・・・・・・』

「この世界はクソッタレだ。他人なんざ完全には信用できねぇ。人は人を騙すし、殺しだってしてしまう。どれだけ頑張ろうと悪は出てくるし、幸せな世界は崩壊する。だが、だからこそいい」

『この男・・・・』

「だからこそ！！自分の大切な物が、より一層！！美しく輝くんじゃないか！！！なにもない日常に、退屈できたあの日々が！！！そんなクソッタレな世界だからこそ、そこに生きる人間はなによりも強い！！！どんな世界でも、それは変わらぬよ」

『聞いてて胸くそ悪いですね。黙ってもらえませんン？』

クアットロの声がイラついてくる。
それは、自分の思い通りに苦悩しないこの男に向けてなのか
それとも簡単に悪を肯定するその思考に嫌気がさしたのか

前者ならいいだろう。まだまっとうな悪役だ。
だが、もし後者なら・・・・否、それは彼女ではないだろう。

彼女の不快は、この場の空気を一人の男に持っていかれていることにある。

「ああそうさ・・・どれだけ頑張ったって、悪なんてものはなくならない。悪は必ずそこにある。この世界はクソッタレだし、どうしようもなく醜いさ。でもな、だからこそより一層輝きが増す。だったら・・・おれはこのクソッタレな世界ごとすべて愛して守ってやるさ！！！」

『ふん・・・だから何だと言うんですかぁ？もしかして、他の援

軍をお待ちですかぁ？無駄無駄！！そんな人がいると思います？此処までやってきて助太刀に？』

「・・・・人を助けるのには、確かにその場に行かねばならない。だがな、俺は翼人ぞ？そのような瑣末なこと、我が翼において奇跡を為せばよいことだ」

『ですから・・・・・』

「教えてやるよ、クアットロ。世界の理不尽（やみ）に呑まれし哀れな者。おまえが知り得ぬ「人」の強さを教えてやる」

蒔風が豪語する。
必ず助けはあると。

あれだけ世界はどうしようもないという男が、ここで世界は素晴らしいという。

矛盾

だが、思い返してみてわかるが

矛盾のなかった世界など、今まで一つもありはしなかった。

「見せてやる、クアットロ。おまえには無い、「願い」って奴をな」

蒔風の翼が開かれる。
その目が向く方向は、玉座に向かって左下側の端。

その先に、撃つべき相手を見ていた。

「なのは、場所はわかるな？」

「え！？あ、ああうん！！今見つけたよ！！でもどうして・・・・」

「おまえがなにしてんのか、わからない俺だと思っていたの？そんなことあるわけないでしょう」

傍目から見て、二人はなんの話をしているのか、わからないだろう。

その内容を簡潔に言うとこうだ。

なのははゆりかごに突入してヴィータ達と別れた直後、サーチャーを一つ放っていた。

そう、ただそれだけのことだ。
きっと今頃は発見されたクアットロが、その桜色の球体（サーチャー）に驚愕しているだろう。

そして蒔風が知りえたのは、それに自らの羽根を一枚、乗せていたから。
なのはがサーチャーを放っていたのはわかっていたから、その状況

を知るために付けていたのだ。

「よ～～くやった。さて、これからが俺の見せ場だ」

「舜君、ここは私が・・・・」

「おまえのはここになにをしに来た?ヴィヴィオを救いに来たんだろ?だったら、三流のぶち抜きは俺に任せて、その後のためにその魔力は残せ」

「でも、正確な場所が・・・・・」

そう、蒔風はサーチャーが見つけた、という事はわかっても、どこに、という正確な情報は来ていない。
大体こっちだろうと推測はつくが、感覚的なものだ。

まあもちろん、撃てば当たりはするだろうが、今、そんな中途半端は嫌だった。
キチンとど真ん中でぶち抜いてやりたい心境なのだ。

「大丈夫だ、こいつを借りるからな」

心配するなのはから、そう言って手に持つ杖をヒョイと取り上げる蒔風。
すなわち、レイジングハートだ。
それによってヴィヴィオのバインドが解けるが、直後に蒔風が自力でバインドを掛け直した。

「俺の力を魔力に変換してバインドを張った。その維持くらいならレイハがなくてもいいよな？」

「え？え！？で、出来るけど・・・なにをする気なの！？」

「そこで見ていろ。レイジングハート、力を借りたい。マスターじゃないけど、いいかな？」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ．Ｍｙ　Ｆｒｉｅｎｄ》

「嬉しい事言ってくれるじゃないの！！行くぞ！！！」

パァン！！！と、蒔風の翼がより大きく開かれて、そこにに金の粒子が集まってくる。

それは、願い。

この空で、地上で、そしてどこか別の場所で、戦っている者の、願いだった。

『は・・・ははは・・・・・な、なにをしてるんですかぁ？それが願いって奴で？は、かかか！！！バカですねぇ！！人の願いなんて、同じなわけないじゃないですか！！！！』

「そうだな。違う。だが細部は違えども、今この戦いに身を投じている者は皆、少なくともこの事を願ってくれている」

クアットロが聞く。それはなんだと。

あれだけの、これだけの
それだけの人数が想っている、共通の願いとは一体何だ？

蒔風は言う。

彼らが想っていることはそれぞれ違う。

それは地上の平和だと
それは愛する物を守るためだと
それは自分の正義だからと
それは任務や仕事だからだと

そこには多くの想いがあり、少しずつズレ、同じモノなどない。
だが、重なっている部分があるのもまた確か。

その部分を、蒔風が誇らしげに、まるで息子自慢をする父親のよう

に言って見せた。

「あの子を、助けたい」

『は？』

「モニターの向こうで苦しんでいる、あの子を助けたい。運命に翻弄され、母親を求めて叫ぶ、あの囚われの少女を助けたい。今この空、地上にいるすべてのものが、どんなに小さくともその事を願ってくれている」

それは名誉のためかもしれない
それは偽善や偽りかもしれない
それはただ出来たらいいという夢かもしれない

だが、どんな形であれ、すべてのものが願ってくれている。

ヴィヴィオに、家族を
泣き叫ぶ彼女に、救いの手を、と

「侮ったな？クアットロ。これが俺の援軍だ。これが俺の力だ。皆の願いを一身に受け、俺はこの場でお前を討つ！！！！」

気が付けば聖王の間を、金粉のような粒子が充満していた。
一体どれだけの人が願ってくれたのだろうか。

過去、蒔風がこの力を使ったのは一回のみだった。
その時皆が想ったのは「生きたい」という生物自身の持つ、半ば本能のようなものだった。

だが、ここに集まる願いは、それをはるかに凌駕する。
数の差ではない。そんなものでは決してない。

にもかかわらず、それを凌駕する理由など、今さら言う必要もないだろう。

「す、凄い・・・・」

その光景を見て、なのははこれが奇跡だと思った。
ヴィヴィオのために、これだけの人が想ってくれている。

それだけで涙が出る想いだった。

意識を凝らして見ると、声まで聞こえる。

助ける、という強い思いが。
そこには全く効いた事のない人の声もあれば、自分の教え子のものもあったし、親友のものもあった。

間違いなく、目の前に起こっていることは奇跡だ。
本来見えなかった世界の輝きが、そこで威光を放っていたのだから。

《しかし蒔風。あなたのこれだけの力を、私は受け止めきれません。どうするつもりですか？》

そこでレイジングハートが訊く。
確かにそうだ。これだけの力を魔力に変換して砲撃など撃てば、彼女が粉々に散ってしまうだろう。

だが、大丈夫だ、と蒔風がレイジングハートを左手に持ち変える。
そうしながら自分に集まった力を魔力に変換、それを周囲にばらまいた。
ただばらまいただけなので、当然破壊などは起きないし、衝撃も無い。これはただの下準備だ。

「願いの元が、同じ「高町なのは」という同一人物だからこそできる妙技、見せてやる！！！力を借りる！！！」

そう言って手をマジシャンのようにひっくり返した蒔風の指の間には、真紅に輝く二つの宝石があった。
そうして、それを、起動させる。

「レイジングハート、レイジングハート・エクセリオン！！セットアップ！！！」

《《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ．》》

そうして、ここにまた奇跡が起きる。

本来ならあり得ぬこと。
同じ人物でなければ、蒔風は「願いの複重」で腕の一本、消えてもおかしくはない。

三世代にわたるレイジングハートが、同時にこの場に集結していた。

「さて・・・・三機すべてに、銀白の翼が命じる！！！集束開始！！！」

《《《ＯＫ》》》

そして、周囲にばらまかれた魔力がまるで掃除機に吸い込まれるかのように、三機それぞれに集まって行く。
集束されていく魔力は渦を巻き、その質はもはや見た目以上に厚いはずだ。

「更に・・・・レイジングハート、シューティングモード。レイジングハート・エクセリオン、エクセリオンモードＡ．Ｃ．Ｓ。ややこしいが、レイジングハート・エクセリオン、ブラスタースリー、ビット稼働！！！！プログラム（あれ）は機動させなくてもいい」

《《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ．ｍａｓｔｅｒ》》《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ．Ｍｙ　Ｆｒｉｅｎｄ》

一機だけ返答が違うのは御愛嬌だろう。

だが、もはやこれを止める者はなにもない。

三本が蒔風の周囲を回り、その切っ先を真っ直ぐに壁に向ける。

その先にはきっと、見えはしないがクアットロが恐れ慄いた表情でいることだろう。

更には四つのビットまでである。

「さて、クアットロ。おまえは言ったな?自分の願いもかなえてくれと」

『あ・・・ああああ・・・・・・』

蒔風の方からクアットロに回線を開く。
レイジングハートを手にしている今だから、彼女の位置も正確にわかるのだ。

「無理だな。そもそも、おまえのは願いじゃない。そこがお前の知らないところだ」

『な・・・なん・・・・・・』

「「なにが」って?今それを教えてやる・・・・いいか?確かに、「したい」と思えばそれは、確かに願いと、かろうじて呼べるだろう。だがな、そんなものは認めん。それは別のものだ。断じて願いなどではない。おまえには信念がない。状況を見て、最終的にはスカリエッティを捨てるようなおまえには、一貫した誇りがない、信念がない。チンク達だって、一応はあいつの身を案じたというのに、おまえだけにはそれがない」

なぜ蒔風は、クアットロだけがスカリエッティを見限るとわかるのか。
他の姉妹はどうなのか。そもそも本当にそうなるのか？

そういった疑問も、あるかもしれない。

だがそんなこと、蒔風自身もわからなかった。
そんな気がする、というだけだが、確信はある。こいつは絶対にそうすると。

そこで最後の一言を言おうと、蒔風が息を吸って、その言葉と共に、一気に息を吐き出した。

「教えてやる・・・・信念無き思いなど、ただの醜い欲望に過ぎないという事を！！！！！スターライト！！！！！」

《《《Ｓｔａｒ　ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》》》

「ブレイカー」

最後の一言だけ、蒔風が静かに宣言した。

そして、放たれた。

銀白の魔力光が、三本の杖と四つのビット、合わせて七つから伸びていく。

その砲撃は途中の壁などは障子のように突き破り、太さを以って収納されているガジェットの実に七割を消し飛ばした。

幾層もあるゆりかごを突き抜け、ついにはクアットロの階層にも到達し、そのフロア全体にまるで液体を流し込んだかのように広がっていく。

だが、まだ止まらない。

その砲撃はそこで広がりながらも更に直進を続け、唯にはゆりかごの下腹部を貫き、少し角度を付けて斜めに貫通した。
真下に向けて撃ったわけではないので、角度がつくのは当然だ。

正確にはゆりかごを正面から見て左側下方、前後の位置としては前のところから、それは伸びてきた。
おそらく輪切りにすれば、蒔風とクアットロの姿が見えただろう。
それくらいに、前後感で言えば同じ位置にいた。階層が違うだけだ。

そして砲撃が地面にブチ当たり、その反動にゆりかごが後ろ方面にグラついた。

その揺れで動力炉の方では青龍がセッテを逃してしまったのだが、今はいい。

そうして地面に大穴をあけ、どれだけ抉っただろうか？
ようやっとして、その砲撃は細くなっていった。

と、言っても元々の太さが尋常ではなかったのだから、細くなったと言ってもまだ太い。
まるで悪徳セールスマンの言い口だ。五十万と言って、二十万で買わせる。どちらも高いのは変わらないのに。

まあ、細くなっていくのであれば、いずれは消えていくというもの。ほどなくしてから、消えていった。

砲撃を始めて実に二分。そこから細くなって消えるまでが、更に一分。

管理局史上例のない、三分間放たれ続けた超超巨大集束砲撃。

外で指揮をとっていたはやては、その光景を目撃していたが、未だに今の光景が信じられない。

が、その砲撃が「落ちた」後の地面はぽっかりと開いていて、森の仲に怪異な穴ができてしまった。
おそらく、落ちればひとたまりもないだろう。ここが将来の自殺スポットにならないことを祈ろう。

そこではやてが連絡を受ける。

蒔風からだ。
あの大穴の周辺に戦闘機人が一体転がっているはずだから回収してくれ、というものだった。

それだけ言って、はやてが今の事を聞こうとするより早く、蒔風が通信を切ってしまった。
だが、はやてには見えた。通信は音声だけだったが、間違いなく見えた。

舌を出して、半ばふざけるように謝る、あの男の顔が。

実際には舌を出して「俺、知ーらね」という顔をしていたのだが、大差は無いだろう。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～一つの想い～（後書き）

皆さま、前回は申し訳ございませんでした。
これ以上はしつこくなるので、この辺で。

アリス「蒔風、ド派手な砲撃編。それにしてもですね」

はい

ア「ここってフェイトさんのスカリエッティ攻略の跡だったりしません？」

そこら辺はあれです。二次創作の特権です。

それに加えて言うなら、私は最終決戦のシーンを見直していません。

ア「そんなことするから前回間違えたんでしょうに・・・・」

それは私の失敗です。

ですが、この最終決戦から、完璧に原作とは変わってきます。
ですから、原作にとらわれてその順番通りは嫌だったんですよ。

ア「なるほど」

でもそこであんな間違いをするとは・・・・ひどかったですね。

ア「もうそれはいいでしょう。あれから苦情も無いという事は、皆さん納得してくださっているかもしれませんという事でしょう？」

推測なんだね・・・・

でも、そうだと思いましょう。

信念無き想いなど、醜い欲望に過ぎない。

これは言いたかった台詞でした。

なんかオーズで後藤さんが言ってたっぽいけど。

ア「次回、おっさんズ&フェイトちゃん！！！この今回は決まって

ますよ！！！」

もしかしたらフェイトは切ってしまうかもしれません・・・・・・

ではまた次回

見つけた・・・

なのはさん、怖いですｗｗ

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～取り戻したモノ、先に進むモノ～

ＳＩＤＥ　？？？

まずいまずいまずい。

このままでは起動される。
ドクターは起動の瞬間を押さえ、その場所がどこにあるのか突きとめてから終わらせろとおっしゃっていたが、このままではそれもできない。

くそっ・・・最悪の場合、あの騎士が現れてしまったら仕方ないが殺せとも言われていたが、直前に別の騎士が来たからそれもできなかった。

私は戦闘に向いていない。
この変装に特化した能力で相手の背後を取り、静かに命を刈りとるのが私のやりかただ。

こんな騎士二人を、相手にできるものではない。

だが・・・・・

このままでは絶対に起動される。

他のナンバーズも向かっては来ていたらしいが、これだけ何もないと、失敗したか足止めを食らっているのだろう。

この場で動ける駒は私だけ。

だが今この場には、目標と共に騎士が一人。そして私の傍らにも一人、それと融合機が二体もいる。

こうなったら・・・・・・・・

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「ゼスト、こっちだ」

「こんなところになにがある？レジアス」

一通りゼストと話したレジアスは何かを取り戻したのか、それともこれからそれを取り戻しに行くのか、ある場所に向かって行った。

地上本部の跡地からそうは離れていない更地。
表向きには「現在建設中」としか書かれていないが、そこに入るには少なくとも今までに、三つはセキュリティーを通ってきた。

最初のフェンスから、建物の扉、そして地下へと続く隠し扉だ。

「ワシは・・・後始末をせねばならん。そのすべてを、子ダヌキに持っていかれてたまるか」

「レジアス・・・・・」

ゼストはフッ、とその言葉に苦笑する。
文句を言って、ただ名声を求めるかのように聞こえてしまうかもしれないその声は、長く彼の親友をやってきた男にはまるで「おまえらばっかりにいい場面(とこ)は取らせん。ワシも混ぜろよ」と言っているかのように聞こえた。

と、言うか、そういうふうにしか聞こえない。
もはやこの男に、つまらないしがらみなどない。

「なんだゼスト。何かおかしいか？」

「いや・・・存外、人は簡単に変わるものなのだな、と」

「なにを言っとるのかわからんが、ここを守るのはワシの務めだ。他の奴らにばかり、任せてはおけんというだけの事・・・・・

着いたぞ」

地下に入ってから長い通路を通って、レジアスが止まったのは、また厳重な扉だ。
しかし、着いたというからにはこれで最後なのだろう。

今まで通過してきたセキュリティーは最初を含めて全１６カ所。
尋常ではない。しかも、本部かあの状態で稼働しているという事は、
ここは別電力で稼働させて守らなければならないという施設。

一体なにがあるのだろうか？

「この扉をあけるには左右で同時にキーを捻らねばならん。だから・・・」

「わ、私がお手伝いいたします！！」

「おまえが？」

と、この扉を開くためのもう一方のキーを取りだしたレジアスに、秘書の一人が歩いてくる。

だが、この展開はおかしい。
どう見てもここは彼女の出てくる場面ではないし、そもそもここで名乗りでる必要がない。

しかもその目はギラギラと血走っており、まともな物とは思えない。

「いや、いいのだ。これはワシらが・・・・・」

そう言って近寄ってくる秘書の申し出を断ろうとするレジアス。
そして背中を向け、扉に向き合った瞬間、秘書が動いた。

「ッッッッア！！！！」

いつの間に装備したのだろうか？
その手の指には爪のような武器が装着されており、それがレジアス

の背中に吸い込まれるように突き出された。

鮮血が散り、うめく声が聞こえた。

「・・・・・クソッ・・・・・」

だが、それは標的を捉えてのものではなかった。
レジアスと秘書の間にはゼストが立ち、その屈強な二の腕に爪「ピアッシングネイル」を突き立てさせて、それの到達を防いでいた。

「貴様、スカリエッティの手の者だな?大方、そこの騎士や俺がいてレジアスを狙えなくなって焦ったのだろうが・・・この先にある物はよほどお前らの不利益になるようだな?」

「クッ・・・・」

秘書の顔がぶれる。
まるで、映像か何かが切れたかのようだ。

そこで気づいた。
この女、戦闘機人である。
顔が戻ると同時、服装にも変化が現れ、それは戦闘機人の武装する物と全く同じものだった。

ナンバーズ０２、ドゥーエ

最後の一人の任務は、レジアスの「後始末」だった。
が、それはもう叶うまい。

こうして捕まり、身動きが取れない。
この状況で任務をこなせるのであれば、彼女はこんなところではなく、前線で戦っているだろう。

が、彼女の目にいまだあきらめは無い。
虎視眈々と、レジアスをどうにか狙っている。

「やめておけ」

「ッ・・・・・」

「今こそこうして捕らえるにとどめてはいるが、これ以上レジアスを狙うそぶりを見せようものなら・・・・・」

「殺す・・・ですか？」

「いいや。殺してくれと泣き叫ぶような地獄を見せる」

その言葉に絶句する。
この男には、それだけをするだけの力が十二分にある。あり過ぎるほどだ。

そしておそらく最終的には殺される。
この男は殺しを良しとしないまでも、そうでなければならない時は、躊躇なく実行する。
それを背負う覚悟もまた、この男はしているだろう。

そこまでやられては、ドゥーエは黙るしかなかった。
心底憎らしげな顔をしながら、その身柄をリィンに拘束されていく。

「命拾いしたな」

「なにを・・・・・！！！」

と、そのドゥーエにシグナムが話しかける。
その顔は特に感情は感じられないが、彼女の胸の中では、今すぐにこいつを斬り伏せたいという思いがあった。

「もしあそこで中将の命を奪っていれば・・・・・・私が貴様を斬っていた。おそらくグランガイツも、ああは言っていたがそうしただろう。おまえの命は、結果的に救われた」

「・・・・・・・」

ドゥーエが今度こそ、本気で敗北した顔をする。
もう彼女が、なにをしようと思う事は無いだろう。

「さてレジアス。ここには何があるんだ?」

右腕の傷を抱えることも無く、なんでもないようにブラブラさせながらゼストが聞く。
アギトが治療だけでもしようと言っていたが、ゼストはそれを拒んだ。

もはやこの身体に、それだけのことをしても意味はない。

「ワシは・・・・この地上を要塞にしようと考えたことがあった」

「地上を?」

「ああ。そうすれば守りはより堅固になる。外からの攻撃にも耐えられる。ここはそのために作った」

レジアスがパネルをいじって起動させると、その部屋が明るく照らし出された。

「だが、そんな案はあまりにもでか過ぎて却下されてな。ここはその名残だ。撤去するにも金がかかるから、それまで放っておかれていたのだが」

「なるほど、あのセキュリティは誰かにその機能を使わせないためか」

「そうだ。まあ、この兵器自体は採用されて、三つのミッドの高地に一つずつ、建造されたんだがな」

「まさか・・・ここは！！！」

話を聞いていたシグナムが、驚きの声を上げる。
そしてその推測は当たっていｔ。

「そう、市街戦を想定されて作られた、アインヘリアル零号機。その建造途中で破棄されたのがここだ」

なるほど、スカリエッティが狙っていたのはこれだった。

三機は潰した。当然だ。あんな巨砲がゆりかごの脅威にならないはずはない。
そして四機目、否、零機目か。その存在も、スカリエッティは当然知っていた。

だが、存在は知りえども場所がわからず、やっとわかっても今度はセキュリティーだ。
何度もシュミレーションしたが、結果は惨敗。どうやっても突破できるセキュリティーは二桁まで到達しなかった

だからこそ、そこの場所が分かればドゥーエに乗っ取らせ、出来ずとも（この場合はゼストが現れたら）レジアスを処分する、という計画だったのだ。

「さて・・・・・これで準備はいいな」

「ああ・・・・問題は・・・・・ない」

「ゼスト？」

返答したゼストの声が重い。
それはそうだろう。二の腕から流れる血は、未だに止まっていない。

アギトやリィンが不慣れな治癒魔法をそれでもかけるが、まったく止まってはくれないのだ。

「どういう事だこれは！？」

シグナムが驚愕の声を上げる。
治癒魔法をかけているにもかかわらず、何故止まらないのか。

だが、レジアスにはわかっていた。
友の肉体は、すでに終わりが近いという事に。

「言ったろう。俺の身体はすでに死人だ。しかも、もう限界だ。この身体に治癒など効かんし、おそらく、これのせいでもう五分と意識を保っていられまい」

ゼストが言うのは、自らのカウントダウンだった。
だが、だったらなぜ、彼はさっきの攻撃で右腕一本犠牲にしたのか。

どうという事はない。
彼にはもはやデバイスを扱う余力もなかったという事に他ならない。

もし発動させれば腕が千切れただろう
ユニゾンすれば胸に穴が開いただろう

それほどまでに疲弊していた。

だが、彼はまだ止まらない。
彼の正義を、返すまで。

「・・・・今からこれで、ゆりかごを撃つ。一発も撃てがここはもう使えん。手伝ってくれるか？」

「そのために・・・・来たのだ・・・・」

息も絶え絶えゼストが答え、ゼストがレバーに、レジアスが発射ボタンに手をかけた。

「行くぞ！！オオオオオオオオオ！！！！」

渾身の力を込め、ゼストがレバーを下ろす。
これで安全装置が解除され、発射準備が整った。

地上では地鳴りが響き、更地の地面がぱっくりと割れて、そこからアインヘリアルがゆっくりと上昇してきていた。
その砲手にはエネルギーが充填され、おそらく上がりきると同時にチャージは終わるだろう。

制御室に、発射可能までのカウントダウンが流れ始める。
残り二十五秒。

だが、レジアスの隣にゼストは来ない。

そして来ないままに、時間が来た。

「アインヘリアル、発射ァ！！！！」

レジアスは振り返らない。
その胸には、確かに過去の正義があった。

だが、それは昔のままのものではない。
そこには、今と過去の自分、そして自分の正義のために殉じた、一人の親友のものだった。

狙うはゆりかご、後部動力炉。
そこにむかって、破壊の光がまっすぐに伸びていった。

発射されてから、レジアスがモニターの映像を見ずにゼストに駆け寄った。
彼はレバーを下ろしてそのまま、膝から崩れ落ちてしまったのだ。

「旦那・・・旦那ァ！！！」

「そこにいるのは・・・・アギト・・・・か」

彼を慕っていた融合機、アギトがその胸に縋って泣いている。
しかし、ゼストにはすでにその姿は見えていない。見えないのだ。
肉体の限界が訪れていた。

「そこにいる・・・・・騎士よ・・・・・・」

「はい」

ゼストがシグナムに話しかける。
それに対してシグナムは恭しく耳を傾けた。

彼女にはわかっているのだ。
言葉を交わしたのはこれが最初だが、この男は生粋の騎士であるという事が。

「こいつと・・・アギトと、紫の召喚師の少女は・・・・・俺に付いてきただけだ・・・・罪はない・・・・どうか・・・・こいつのこ

とを・・・引き取ってはくれないか・・・・・」

「大丈夫です。アギトの事は私が責任を以って、お引き受けいたします。ルーテシア・アルピーノも、すでに保護の対象です・・・・・騎士ゼスト」

「なん・・・・だ・・・・・・」

「あなたは騎士だった。守るべき物のために戦い、友のために走り、正義に忠実だった。あなたは真の騎士だ」

その言葉に、ゼストの口元がフッを笑う。

なにも見えない視界だが、浮かび上がってくるイメージがあった。

管理局に向かう自分。
立ちはだかるシグナム。

幾合か剣を交え、自分はレジアスの元に向かい、言葉を交わしたものの、そこでさっきの戦闘機人にレジアスは討たれてしまうというものだ。

それと見て、ゼストはそれが夢であるとは思えなかった。
きっとそれはどこかの現実。
それを見て、ゼストは最後に、つぶやいた。

「俺は・・・・やっと・・・・・・・間に合ったのだな・・・・・・・」

それが

時空管理局でエースと呼ばれ、死してその身を利用されながらも、
己の忠義を貫いた

騎士、ゼスト・グランガイツの最後の言葉だった。

――――――

！！！！これは・・・・質量兵器！？」

「なッ！？」

キャロが察知したその報告に、ティアナが顔を青ざめる。
質量兵器を使ってくるのは敵のみだ。

ならば自分たちはどこからか狙われているのか？

が、そんなことはなく、キャロによれば自分たちの頭上を飛んでいってしまう軌道らしい。

それを聞き、朱雀と白虎がニヤリと笑った。

「白虎！！！チャンスです！！！」

『オッケイ！！！ウヲオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！』

二人が砲撃を遠身で確認し、その延長線上にセイン・レプリカとサ

ラマンドラを投げつける。

当然無傷で、とはいかない。
朱雀は左腕を犠牲にして右腕で投げたし、白虎は炎剣を腹に貫通させ、奪い取っての反撃だ。

それだけのダメージで、もはや顕現はしていられない。
投げつけた直後に剣になってしまい、エリオとティアナの手元に戻った。

そしてセインとサラマンドラが、砲撃にさらされる。
衝突などなかった。

サラマンドラの身体は肉が削げ、骨が砕けて瞬時に消滅し、セイン・レプリカにいたっては砲撃が接近しただけで蒸発してしまったのだ。

「な・・・・なに・・・いまの・・・・・それに、お二人も剣に・・・・」

「私だってわかんないわよ・・・・・でも、これで障害は消えた。二人も、多分死んだわけじゃないと思う。全員、このまま地上本部に・・・・・」

『その必要はない』

「シグナム副隊長！！！」

地上本部に向かおうとしていたフォワードに、シグナムからの連絡が入る。
どうやら地上本部への脅威はすべてなくなったようで、フォワードにはこれからゆりかごに向かってもらいたいのだそうだ。

『私もすぐに向かう。先に行け』

「わかりました。皆！！ゆりかごに行くわよ！！！」

『みんなーーー！！大丈夫ーーーー！？』

と、そこにタイミングぴったりにアルトの乗ったヘリが頭上にやってきた。
おそらく、シグナムからの連絡を聞いていたのだろう。

『エリオとキャロから預かった子は、施設に送って保護してもらったよ！！！』

「ありがとうございます！！」

『いーって！！みんな、乗って！！！真っ直ぐに向かうよ！！』

「「「「はい！！！」」」」

そうして、フォワードが乗り込んで、ゆりかごに向かう。

その中になぜかヴァイスと、彼のバイクまで積んであったのだが、それはまた後の話に。

そして、フォワードの方は終わったが、アインヘリアルの砲撃はそのまま伸びていっていた。

目標は遥か遠方のゆりかご。
その後方部分、動力炉。

飛来してきた砲撃は、見事そこに命中した。

「ッ！？危ない、伏せてくださいッ！！！！！」

「え？」

「なに？」

そのエネルギーを感じとったのは青龍だ。
とっさにヴィータを引き戻し、目の前で交戦していたセッテを、抱きつくように庇う。

その間も、何が何だかわからないセッテは青龍に攻撃を加えていくが、もはやそんなことを気にしていられる場合ではない。

そして、やってきた。

ゆりかごの後部を貫いて、あれだけ堅固だった動力炉を、一瞬のうちに破壊、消滅させてしまったのだ。

今までだって、ヴィータ達はなにもしていなかったわけではない。
青龍がセッテを引きつけ、ヴィータがその隙に動力炉を攻撃していた。

だが、最初に言ったように、とにかくこれが堅いのだ。

おそらく、玄武の甲羅の四倍近くは堅い。

ヴィータがどれだけ魔力を込めても、アイゼンを振り降ろそうとも、リミッターを解除しようとも、破壊されることなどなかった。
そのせいで、まったく攻撃を受けていないヴィータが、攻撃した反動で一番怪我をしていた。

手のひらからは血が滲み、リミッター解除の状態で無茶をしたため筋肉繊維は傷付き、自らの魔力の逆行に所々肌も斬れている。

青龍はそれを見た瞬間、役割を変わろうとした。
だが、それはできなかったのだ。

出来るはずもない。ヴィータは最初から全力でやって、その時点ですでに怪我をしていた。
ここでセッテに向かわせたら、間違いなく敗北し、最悪命を落とすだろう。

だから戻せなかったのだが・・・・

『二人とも、そっから動かないでください！！！！！』

いつもの大人しい口調は無く、丁寧ながらも激しく叫ぶ青龍はすでに獣神体へと姿を変えており、とぐろを巻いて、その中の空洞に二人を入れて守っていた。
セッテに関しては庇った際に思い切り腕を締めて圧迫させて気絶させてある。

ガラガラと崩れる天井や、砲撃の衝撃波から青龍が二人を守る。

そしてそれが収まり、程なくして青龍の身体が人神体へと戻った。
ヴィータの周辺だけは瓦礫がなく、ぽっかりと綺麗なままだった。

なんだよ、これ・・・・というヴィータの言葉が、その空間に静かに聞こえる。

たしかに、そう思っても仕方ないだろう。
動力炉の方を見ると、すでにその動力炉は存在ごと消えていて、右から左にかけて砲撃が通過した大きな穴が左右それぞれ一つずつ開

いていたのだから。

「ヴィータ・・・・・さん・・・・・・」

「おい青龍!?おまえその怪我!?」

青龍が腹を押さえて倒れ込む。
おそらく、とっさにセッテの身体を抱きしめた際、ブレイドが食い込んだか突き刺さったかしたのだろう。苦しそうにうめいて、言葉を途切れさせながらも、伝えるべき事を伝えた。

「そこの大穴から・・・・脱出を・・・・彼女の身柄を・・・・連れ・・・・」

「青龍!?」

と、そこで限界が来たのか、青龍が剣の状態に戻って床に落ちる。

それを見たヴィータは、納得したように頷いてから、青龍を腰に付

け、セッテを抱えて砲撃の穴から外へと離脱した。

自分たちは、これで役目を果たした。
なのは達の事も気にはなったが、今はここから離れていくことが先だったのだ。

――――――

「・・・あんたには悪いけど・・・旦那の身体を、このままにはしておけねぇよ・・・・・」

そう言って、レジアスの上着がかけられたゼストの遺体を見るアギト。
それを見て、シグナムが「よい」とアギトに頷いた。

「しっかりと弔ってやれ。私に付くのは、その後でいい」

「・・・・ありがとう・・・・・」

そう言って、アギトはゼストの元へと向かい、シグナムはリィンと共にゆりかごに向かった。
フォワードたちはもう向かっているはずだ。遅れるわけにはいかない。

――――――

「こ、これは・・・・・・」

《それが蒔風さんが与えてくれた、私たちの翼です》

スカリエッティアジトにて、真・ソニックフォームを展開したフェイトは驚いていた。
しかし、驚いていたのは彼女だけではない。

意識を取り戻したシャッハとヴェロッサ。更にはトーレやウーノ、果てにはスカリエッティまでもが驚愕していた。

翼である。

と、言ってももちろん本物ではない。
フェイトの間良好と同じ黄色と金色の間のような色合いをしており、色は薄く、それがフェイトの背で輝いていた。
その形はバルディッシュサイズフォームの刃と非常に酷似していて、その鋭さは空気を裂くかのようである。

《彼の翼の加速能力。それの機構を、何とかねじ込んだらしいです》

「舜の・・・翼・・・・・」

《ちなみにそれによる加速は、今までのあなたの物の1．8倍ほどあります。行けますか？》

「大丈夫！！！」

その翼は、擬似的な翼。
より負担の無い加速のために、蒔風がフェイトに送ったプログラム。
故にバリアジャケットが極限まで排除される事も無く、服装はさっ

きとは変わりない。
せいぜいマントがなくなった程度だ。

そうしてザンバーを構えるフェイトに、拳を握り直したトーレが気を気張り直して、フェイトに向かう。

「あんなもの、コケ脅しだ！！！ＩＳ発動！！！」

トーレのＩＳが発動する。
彼女の能力も加速移動だ。十分にやり合うだけの自信があったのだろう。

しかし

「ゴアッ！？」

ドォン！！！！

なにが起こったのかわからないままに、トーレの身体が壁にめり込んだ。
その音に気付き、フェイトがいたところに目を向けた時、すでにフェイトはウーノのコンソールを破壊してバインドまでかけていた。

あまりにも速すぎる。

その現状にスカリエッティの額を冷や汗が垂れた。
自分の周囲に赤い魔法糸を円錐状に張り、防御をするが、そもそもトーレがやられた時点でスカリエッティは詰んでいた。

その防御を張って一瞬、何を安堵したのかため息をついたスカリエッティだが、背後に気配を感じて振りかえる。

そこにフェイトはいた。

加速を以って、防御が展開し始めてからし終わるまでの間に、その体を滑り込ませたのだ。

「な・・・なな・・・・・」

「スカリエッティ。おまえがやったことは犯罪だ。だが、そのおかげで出会えた人もいる。そういう意味では、私はあなたに感謝もしている」

「は、はは・・・やっとわかったか・・・・だったら・・・・・」

「だとしても、おまえがやった外道は、間違いなく悪のそれだ。おまえの胸に、誇りある思想などない。あるのはただの、願望だけだ。それを私は許さない!!!!」

「グッ!?クソッ!!!」

スカリエッティが魔法糸を消してフェイトに背を向ける。

だが、その背中に容赦なくザンバーの面に当たる部分でスカリエッ

ティを殴り飛ばすフェイト。

壁に激突して、スカリエッティが痛みに呻く。

「ふ・・・ふふふ・・・・そうやって・・・自己満足に浸るつもりかい？いつだってそうだ・・・・正義だと言って、君らはただ単に己の満足感を満たしているだけだ・・・・それが・・・・」

「それが私たちの正義だし、それを持つ私たちが正しくあればいいだけだ。私たちには仲間がいる、間違ったらそれを正してくれる、仲間が。だから、私は安心して自分の正義を貫けるんだ。私はもう、揺るがない。私は悩んで、その末にここにいる。それに賛同してくれる、仲間がいる」

「ああ・・・・クソッ。悔しいが・・・・そういう君の瞳は・・・・美しい・・・・・出来れば・・・標本にしてやりたかったよ・・・・・」

「だったら私はお前に独房というプライベートゾーンを与えてやる。終わりだ、スカリエッティ」

「ふ・・・・出来れば・・・・見たかったな・・・・・我が故郷・・・・・」

「なに？」

「アル・・・・ハザード・・・・・・」

そこまで言って、スカリエッティは意識を失った。

理想郷、アルハザード

彼が目指したモノ。

衛星軌道に乗り、ゆりかごが得たその魔力を以って、向かおうとした先。

そこがアルハザード。

スカリエッティのオリジナルがいた世界。

なるほど、そこに向かいたいという思いがあっても、おかしくはない。

「アルハザード・・・・か」

「フェイトさん！！！」

「シスターシャッハ！！アコース査察官！！」

と、そこに二人が駆け寄ってくる。

どうやら身体はもう大丈夫なようで、トーレにウーノを拘束し、普通に歩いてきた。

「すみません二人とも。スカリエッティを任せてもいいですか？」

「え？はい、それは構いませんが・・・・・」

「ゆりかごの方がまだ終わってないみたいなんです。私はあっちの加勢に向かいます」

「わかった。はやてのお友達にそう頼まれては断れないね。はやてを、頼むよ」

「わかりました。では！！」

そう言ってフェイトがフォームを通常のそれに戻してスカリエッティのアジトから飛び去っていく。

後は、ヴィヴィオを解放するだけである。

一同が集う。

最期のその瞬間に、立ち合う様に

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～取り戻したモノ、先に進むモノ～（後書き）

だぁーーーーっ！！！
やっとここまでこぎつけた！！！

アリス「お疲れ様です」

でもまだまだ続くんだよねぇ・・・・・・
しかもまた一日ぐらい休むかも

ア「戦闘シーンは大変ですね」

楽しいからよし。

で、そこで皆さま、ここで原作との相違点の説明を。

まず一つ目
地上本部にガジェット群が向かわなかったのはなぜか

これは、蒔風がクアットロをフッ飛ばした際にゆりかご内のガジェット七割を吹き飛ばしたじゃないですか。
あれでその分の余裕がなくなったんです。

ア「二つ目は？」

スカリエッティアジトの爆破です。
まあ、これもフェイトがコンソールを破壊してしまったから、それを使えなかったという事で。

ア「そういえばフェイトさんのプログラムでてきましたね」

はい

あれは蒔風の翼の構造というか、力の流れ的な物を解析し、それを組み込んだものです。
と、言ってもバルディッシュやレイジングハートのためのオリジナルカスタムなので、他のデバイスには付けられません。

更に言うなら、発動には魔力がたくさんかかってしまうので、普通の魔導師がやろうとしたら、魔力なくなって干からびちゃいます。

ア「なのはさんのも加速ですか？」

ちがいます。
ま、そこは次回のお楽しみに。

ア「次回、ヴィヴィオ解放！！！そ・し・て☆」

ではまた次回

疑うことなんて、無いんだよね。私は弱いから、迷ったり悩んだりをきっと・・・ずっと・・・繰り返す。

・・・だけど！いいんだ・・・それも全部、私なんだ！

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～王権復古～

ヴィヴィオを蒔風が掛けたバインドで押さえつけるなのはと、砲撃を終えた蒔風に通信が入る。

内容は

・フォワード陣によるナンバーズ・レプリカ、サラマンドラ撃破、及び召喚師ルーテシア・アルピーノ保護の完遂

・地上本部による戦闘機人一体の無力化、及び融合機の保護。騎士ゼストの死去

・ゆりかご外での怪鳥迦桜羅の撃破

・スカリエッティと戦闘機人二体の捕縛、及びケルベロスの撃破

・ゆりかご後部での動力炉の破壊、戦闘機人一体の撃破

というものだ。

「まあ・・・こんなもんだろ。よくやったみたいだし」

「うん・・・・あとは！！！」

「ああ、あとは」

「「皆で一緒に、帰るだけだ」」

そう言って、蒔風がヴィヴィオを見ながらなのはにレイジングハートを返す。

当のヴィヴィオは、そのバインドにもがきながらも、徐々にその目に理性が戻っていっている。

洗脳をかけていた当のクアットロが倒れた事で、その洗脳も切れていっているのだろう。

が、その目はいまだになにかを恐れていた。

「あ・・・・あああ・・・・・・・」

「ヴィヴィオ、わかる？なのはママだよ？」

「あ・・・マ・・・・マ・・・・・・パパ・・・・・・」

「パパじゃないっつってんだろォが。わかんない子だなーお前も」

「わ、私を・・・・・」

「うん？」

「私を・・・・そのまま撃って！！！！」

「はい？」

「ヴィヴィオ！？」

ヴィヴィオが悲痛に叫ぶ。

その身体はすでにその洗脳が解けているにもかかわらず、未だにバインドを振りきってなのは達を倒そうとしているし、その暴走は止まらない。

「も、もう止まらないの・・・・・このままじゃ・・・・・皆を・・・・・それに・・・ヴィヴィオは、一人だから・・・・」

そう、ヴィヴィオはまだ、止まらない。

理由は埋め込まれたレリックだ。
それはヴィヴィオの神経をも乗っ取り、埋め込まれた命令を遂行させ続けている。

しかも、その体力、魔力共に最高レベルで、下手をすれば蒔風をも圧倒してしまうかもしれないもの。

たしかに、このままでは打つ手がないように見えるかもしれない。

だが、この男がそんな安直な道を往くはずかなかった。

「だから殺せってか？バァカ」

「で、でも・・・・」

「ガキがでっかくなったところで、粋がってんじゃないの。おまえは子供、俺はおにーさん。だったら、おまいさんを助けんのは俺の仕事だ。まさか俺が負けるとか、思ってないよね？」

「おとーさん・・・・・」

「だからおとーさんじゃないっての」

否定すべきところはしっかりと否定する蒔風。
そこで続きをなのはが引き継いでいく。

「それに・・・ヴィヴィオには家族、ちゃんといるよ？確かに、本当のお母さん、お父さんは大切。でもね？舜君も言ってたけど、生まれなんて、だれも選べない。一緒にいてくれる人が、大切な家族。私はヴィヴィオの本当のママじゃないけど、これから、本当のママになっていけるように努力する」

「でも・・・でも・・・私が一緒にいたのは、全員の情報を蒐集するためで・・・・」

「ああなるほど。だからおまえさっきなのはの砲撃っぽい事とかフ

ェイトの高速移動できたのか。ま、それこそ今更だ。おまえはそれを意識したのかい？それとも、それがお前の生きる理由かい？」

「あ・・・・う・・・・・」

「たとえ作られた命でも、生まれた過程がどんなに許されないことだったとしても、命が存在してはいけない理由にはならない。そんな理由はどこにもない。おまえはどう生きたいんだ？この世界で、皆と幸せになりたいのか。それとも、みんなだけで幸せになってもらいたいのか。どっちだ？」

「・・・そ、それは・・・・・・」

「ヴィヴィオ。今までヴィヴィオと一緒にいて、なのはママはね・・・・」

「・・・うん・・・・・・」

「何にも、辛いことなんて、なかったよ？だから、これからも・・・・私を「ママ」って呼んでくれると、嬉しいな」

「ま・・・・・ママァ・・・・・・」

「さて、それなら、おまえが言うべき一言は決まっているだろ？」

「言って？私たちは、いつだって、そのために動くから！！！ホントの気持ち・・・ママ達に教えて・・・？」

「俺はパパじゃないけどな」

「私は・・・私は、なのはママのこと、舜パパの事が・・・大好き・・・！！！」

「だーかーらーーー！！」

「もういいでしょ・・・・諦めなよ。舜君」

「イヤダ！！！俺はおにーさんだ！！！」

「まったくもう・・・」

呆れるなのはにダダをこねる蒔風だが、ヴィヴィオの言葉を聞いて、ここで決心が固まった。

「私を・・・助けてっ・・・・・・！！！」

「助けるよ！いつだって、どんな時だって！」

「根こそぎ・・・な。行くぞなのは！！！」

「うん！！」

そうしてなのはがレイジングハートを構え、蒔風がヴィヴィオに向かって行く。

だが、蒔風の足はなんだかおぼつかない。すでに何らかのダメージを負っているかのようだ。

しかし、そんなことはどうでもいいとばかりに、気合いでヴィヴィオに向かった蒔風。

ヴィヴィオには蒔風のバインドがかかっているが、それももう解けるだろう。

そして蒔風には、それを張り直すだけの時間は無い。

「舜君！？」

「え？」

だから蒔風はヴィヴィオを抱きしめて止めにかかった。

その身を、バインドで傷つけないよう
その身で、何も傷つけないよう

「なのははそのまま砲撃を撃て。俺がばらまいた魔力はまだ散ってるから！！！」

「で、でも！！！」

「俺は大丈夫・・・だっ！？」

と、そこでヴィヴィオのバインドが解ける。
その瞬間、七色の魔力光が噴き出し、周囲をまとめて噴き飛ばそうとし始めた。

その威力は、今まで抑えられていたためか、あまりにも強い。

だが、それがなのはまで届くことなどなかった。

「舜君！！ヴィヴィオ！！！！」

「いい・・・から・・・・ぐっ・・・・集束しろ！！！」

「ッ・・・レイジングハート！！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ》

そうして、蒔風の背後でなのはがヴィヴィオに向かってスターライトブレイカーの発射準備に入る。
その間の時間稼ぎをするのが蒔風の仕事だ。

蒔風はその身を以って、ヴィヴィオの凶悪な魔力を、全身を以ってして受け止めていた。

その衝撃は凄まじい。

上半身前部の肌はすでに破れ、五臓六腑が捻じれ、四肢の骨が軋む。

「グッ・・・がハァ・・・・・グボッ！！！！」

と、その蒔風の口から血が噴き出した。
圧迫された内臓が傷ついたのだろう。
蒔風の尋常でない量の吐血が、玉座の間の床を汚していく。

が、それは一滴たりとも、決してヴィヴィオを汚すことなく足元に落ちていった。

「舜君ッッ！！！」

「大・・・・丈夫・・・だッ！！！ちょっと内臓を骨が引っ掻いただけだ・・・・気にすんな・・・・・」

「パパァ！！！」

「パパじゃ・・・・ねぇ・・・・・ンな顔すんな・・・大丈夫だよ」

蒔風が唸り声で、口元を血で濡らしながら答える。
が、その肢体はもう限界に近い。
腹筋に力は入らないし、ついには頭からも出血し始めた。

だが、その顔から笑顔が消えることはなく、抱きしめる腕は一切ゆるまなかった。
むしろより強く、それでいてそっと、ヴィヴィオの体と頭をしっかりと抱きしめていた。

「パパ・・・パパぁ・・・・」

「安心しろよ、ヴィヴィオ・・・・・・もう、さみしい思いはさせないから」

「でも・・・このままじゃ死んじゃ！！「死なない」」

「俺は死なない。そもそも「生きて」ないからな。だから、大丈夫だ。今はママと・・・おにーさんを信じろ」

「うん・・・・うん！！！」

「舜君！！準備できたよ！！！！そこから早く！！！！」

『構わん、撃て！！！！こっちはすぐに離れられるから大丈夫だ！！！』

「でも・・・・・」

蒔風にはもう口を開く余裕もないのか、念話でなのはに叫びかけてくる。

だが撃て！！といわれても蒔風はぴったりとヴィヴィオに張り付いているのだ。

しかも、あの位置ではどうやっても砲撃をかわせなどしない。なのはの砲撃は、それほどまでに強大だし、手を抜けばいたずらにヴィヴィオを傷つけるだけで、レリックの破壊はできないのだ。

だがそれでも、蒔風は撃てと叫ぶ。

そして、容赦なくカウントダウンを始めたのだ。

『撃て！！！！なのはァ！！！！三秒前ェ！！！！３、２！！！！』

「ッッ！？レイジングハート、ブラスタースリー！！！！」

『1！！！』

「スターライトブレイカーッ！！！！」

瞬間、蒔風が手を放す。

直後、ヴィヴィオの魔力によって、蒔風の身体がまるで鉄砲玉のように弾きだされ、なのは後方の壁に叩きつけられて、ベシャリという音が聞こえてきた。

ドォウ！！！

そして放たれたスターライトブレイカー。

だが、レイジングハートの形態が少しだけ変わっていた。

翼が、レイジングハートから生えていたのだ。

否、そもそもレイジングハートをここまで解放されると、翼らしきものが展開されてくるのは最初からだ。
だが、この翼は違う。

その翼が出ているところは全く同じだが、翼の形は蒔風の背中のものと同じように、まったく鳥のものと同じだった。

「これは・・・・」

≪蒔風が与えてくれたプロクラムです≫

「舜君の？」

そう、これがなのはへの贈り物。

なのはの砲撃魔法で一番ネックだったのが、使用者への体の反動だった。
そのせいでなのはは八年前に墜落しているし、リミッターがかかっているのだって、そういう理由もある。

だが、このプログラムはそういったものをまとめてなくしてしまった。

このプログラムもフェイトのものと同様、蒔風の翼を解析して、レイジングハート使用に組み込んだ世界に二つとないオリジナルだ。

フェイトのは加速能力だったが、なのはのを負担軽減が付加されている。

翼人の翼は制空能力や「想い」の収束にも使われるが、そもそもの存在理由は「反動やエネルギーの噴出孔」である。
翼人の力は強大だ。翼もなしにフルで使おうものなら、その反動に体が粉々になってしまう。

それゆえの翼。

その翼の反動噴出機構を、レイジングハートに取り付けたのだ。

「舜君・・・・・」

現に、ブラスタースリーでスターライトブレイカーを撃っているなのはには、一切の反動も負担も来ていない。せいぜい、自分の魔力を使用している故の疲労くらいだ。

「アアアアアあああああああああああああ！！！」

「ハアアアアアアアアアア！！！！まだまだ行くよ！！ヴィヴィオ！！！」

「頑・・・・・張るッ！！！」

「全力、全開ッッ！！！！！！スターライト、ブレイカーーーーーーーーーー！！！！！！」

そうして、なのはがヴィヴィオに渾身最高の砲撃をさらに押し込んだ。

砲撃自体は非殺傷だ。だが、その魔力流は確実にヴィヴィオに埋め込まれたレリックを浮き彫りにし、その宝石を砕いていく。

なのはは一切後ろを振り返らなかった。

蒔風のことは心配だ。
でも、今はこうすることが、彼の望みでもあると、彼女は分かっていたから。

だからこそ、今は振り返らない。
今は全力で、自分の娘を助けるのだ。

パリン・・・・・・

そうして、ヴィヴィオのレリックが砕け散った。
後に残るのは砲撃のクレーター。そこに倒れる、元に戻ったヴィヴィオ。そして、背後で崩れるように壁にもたれて倒れる蒔風。

「ヴィヴィオ・・・・・！」

「大・・・・丈夫・・・・・一人で・・・・・立てるよ・・・・・・・」

クレータ内で倒れるヴィヴィオになのはが駆け寄ろうとするが、まだ意識があったのか、ヴィヴィオがそれを止めた。

そして、その小さな腕で、必死になって立ち上がろうとしていた。

それはいつの日か、交した約束。

『次は立とうな？頑張れるか？』

『・・・・・うん！！』

そう、約束は果たされなければならない。

だが、それがなくとも、彼女は一人で立ち上がっただろう。

ヴィヴィオはもう、大丈夫だから。
一人でも立ち上がれるよと。

だって、立ち上がった先には、大好きなママとパパがいるんだから・・・・・

「ったく・・・・・ゲホ・・・・・ヴィヴィオが立ってんのに・・・・・
俺が寝てるわけにいかない・・・・・じゃんか・・・・・ォグッ・・・・・
ゴポッ・・・・・・」

「舜君！！！！！」

それを見守るなのはの背後から、蒔風が腹を押さえ、同時に腕を抱え、口からいまだに少量の血を吐きがらよろよろと寄って来た。
その姿はあまりにも痛々しい。

無理もない。ヴィヴィオの暴走を、その体一つで受け止めていたのだから。

そうして見守り、ヴィヴィオが立ち、しかしすぐに崩れ落ちてしまう。
それをなのはが受け止める。
大事に大事に、名前を呼びながら。

「ヴィヴィオは？」

「気絶・・・ううん。寝ちゃったみたい」

「そ・・・・っか。がっ・・・・・」

蒔風が苦しそうにうめくが、すべて終わったのだ。もうここには用はない。

と、そこで壁を突き破って、新たな来客者がやってきた。

「なのはさん!!舜さん!!!助けに来ました!!!」

「聖王を失うとゆりかごの中で魔力は・・・・ってあれ?」

ティアナとスバルである。

調査結果によって、聖王を失ったゆりかごは、聖王よりもゆりかごそのものを防衛するものとなり、内部での魔力の結合が一切できなくなることが分かったのだ。

だからこそ、ヘリにはバイクが乗っていたし、その持ち主のヴァイスが乗り込んでいたのだ。

だが、おかしいではないか。

ヴィヴィオは解放し、ゆりかごとのリンクは絶ったというのに、この場では魔力がまだ使えるのだから。

しかも、ゆりかごの防衛機能が働いていない。

「ど、どういうこと?」

「わ、わかりません・・・ヴィータ副隊長たちが動力炉は完全に破壊したって言っていたんですけど、ゆりかごは上昇をやめただけで落ちないし・・・・・」

「ヴィヴィオを解放したらここは封鎖されて、魔力も使えなくなるから脱出不可能になる。そう聞いて私たちが来たんですけど・・・・」

たしかに。

ここまで破壊されつくして、ゆりかごはいまだに浮遊している。

ガジェットももう出てこない。外にある残り二十基ほどをつぶせばもう終わりだろう。

しかもそっちにはすでにフェイトやシグナムが来ているから、時間はそうかからないはずだ。

確実に終わった。

なのになぜだろうか。

この場に残る、おどろおどろしい空気は、まだ一切消えていない。

「諸君、ご苦労。これでゆりかごは我が配下に入った」

「「「「！！！？」」」」

そこで声がした。
いままでで誰も気づかなかった。

否、そもそもいつからいたのだろうか？

聖王の間、その玉座。

そこに「奴」が足を組んで、頬杖をついて実に偉そうに座っていた。

「俺の特権はあくまで所持者のいなくなった物限定だからな。こうしていったん、聖王の器の手放しが必要だったんだが・・・・うまくいったな」

「な・・・・なのはさん・・・・・」

「久しぶりだな。高町なのは。お前にとっては十年ぶりか。さて、三度目の正直だ。殺しに来たぞ」

「させないよ・・・・私は、死ねない」

「こ、このひとが？」

「やあ、初対面の新人さん。そう、私が蒔風の言っていた「奴」です」

ティアナとスバルが、立ち上がってきた目の前の人物に恐怖する。
確かに、蒔風の相手を今までし続けていたということから、只者ではないだろう、ということは分かっていた。

だが実際に目の前にしてどうだろうか？
その威圧感と力の重圧に、今すぐにでもつぶれてしまいそうだ。

桁違いではないか。

しかも、一度破壊されたゆりかごを、己の支配下に置いたという。
つまり・・・・・

「ゆりかごの恐怖は・・・終わってないってか・・・・・」

「舜君！？」

そこで蒔風が会話に入る。
肩を貸してくれていたなのはから離れ、「奴」に向き合う。

「てめえなら自分でぶんどれただろ。わざわざ俺らにやらせるとか・・・悪趣味め」

「それでもよかったんだがな。それでお前が消耗してくれるならこっちのほうが合理的だろ？」

蒔風と「奴」がにらみ合う。
だが、コンディションが悪すぎる。

「奴」は今、万全を期してゆりかごを手にした。
対して蒔風は満身創痍だ。今までの戦いで、体に結構なダメージを負っている。

『なのは。三人を連れて逃げろ』

『え？』

蒔風が「奴」をにらみながら、なのはに念話で話しかける。
その声は、「奴」に向かって余裕そうな顔を向けるのとは裏腹に、
思いのほか焦っているようにも聞こえる。

『この状況はやばい。最悪だ！！このままだと死ぬぞ！！早く行け
！！！！』

『でも！！！』

「ッ！！おらぁ！！！！！」

なのはとの会話に業を煮やした蒔風が、クアットロを打ち抜いた大
穴に向かってなのはたちと、乗って来たバイクを投げ落とした。
そのあまりの勢いに、なのはが飛行魔法を展開したころには、すで
にゆりかごの外だった。

「なのはさん！舜さんは！？」

ウイングロードを出して着地したスバルとティアナがなのはに聞く。
その質問になのはが苦い顔をして上を見上げた。

が、そこから一発、漆黒の波動砲が撃ち出されてきた。

それをなのはが慌ててギリギリ回避して、また撃たれてはかなわないとゆりかごの左側にいたはやてと合流する。
さらにその姿を見たフェイトたちやシグナム、ヴィータ、エリオとキャロも集まってきた。

「なのは!!ヴィヴィオは!?」

「ヴィヴィオは大丈夫。アルトさん、お願いします」

『了解しました。任せてください!!!』

アルトの乗ったヘリにティアナとスバルがバイクとヴィヴィオを載せに行き、彼女らも集まってくる。
だが、一人だけいない。

それに気づいたシグナムが、なのはに何があったのかを聞く。

「蒔風はどうした。一緒だったのだろう？」

「そ、それが・・・・「奴」が・・・・・」

「なんだと！？」

「「奴」が・・・・・・来た」

「なっ・・・・・」

「じゃあ舜はどーしたんだよ！？」

ヴィータが声をつい荒げてなのはに聞く。

その瞬間、ゆりかごが振動した。

その前部から小爆発が起き、そこから後部まで、まるで何かが移動しているかのように、爆発が続いていく。
そして最後部まで達したところで、そこから一気に最前部まで、内部を何かがとんでもない勢いで突き抜けたかのようにゆりかごの外郭が歪み、その勢いのまま、ゆりかごの額とも呼べる位置が爆発、人型の何かが突出してきて、地面に落ちて行く。

それには翼が生えており、その人物はさっきまでなのはとともに聖王の間にいたものだ。

「舜君！！！！！」

その姿を確認し、なのはが飛び出して落下していく時風を抱きしめてキャッチした。

ひどい状態だ。

頭から血を流し、腕は折れているのだろう、あらぬ方向を向いている。
顔を青くし、意識がないのか目をつぶっている。

「舜君?舜君!!!」

「きこ・・・えてる・・・・・・・・」

血まみれの蒔風が、声を絶えさせながらブツブツと答える。
まずいことに、これは重体である。

なのはがすぐに治癒魔法の使えるキャロのもとに連れて行き、その傷を癒す。
だが、完全には無理だ。あまりにも傷が深すぎる。

一応死にはしないだろうが、危険な状態であることは変わりない。

『八神指揮官!!!なぜ・・・なぜゆりかごは落ちないのですか!?それにさっきのは・・・・・・』

局員の声が聞こえる。
だが、はやてはそれに対し、意気揚々とは答えられなかった。

「全員・・・よう聞いといてや・・・まだ、戦いは終わっとらん・・・・」

目の前で、ゆりかごが修復されていく。
吹き飛ばされた瓦礫が、戻って行く。

この事件は、ひとりの男にかっさらわれた。

否、ここからはもう、事件ではない。

一つの世界をかけた、戦争だった。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～王権復古～（後書き）

「奴」が来た！！！
って言うとなんだか緑色の悪魔を思い出すなぁ・・・・

あ、ちなみにタイトルの方は何となくつけたので、意味とか考えてません。
本当になんとなくですので。

アリス「なにいってんですか」

「奴」の目的
それはゆりかごを奪う事だったんだよ！！！

ア「な、なんだってー！？（棒読み）」

ノリ悪いね

ア「いつもいいと思ってたら大間違いです」

そっか

ア「そうです。次回、ゆりかご、変貌」

ではまた次回

一人で…立てるよ…強くなるって…約束したから

ゆりかごの抉り飛ばされた外壁が埋められていく。

まず、大穴や爆発の破損が直っていった。

こうしてゆりかごが、最初に出現した時とさほど遜色のない状態になる。

だが、さすがに完全には無理なのか、ところどころはヒビが入っていたり、崩れているところもあった。

次に、ゆりかごは膨張した。

内側から押されるようにして、形はそのままにゆりかごが大きくなっていく。

その膨張で、外壁にさらにヒビが入って、そのヒビは全体を覆って、ヒビの所々から砲台が針のように伸びてきた。

そうして最終的にゆりかごは、当初の１．５倍ほどまでに巨大化しきったのだ。

それを見て、シグナムが誰に言うでもなくつぶやいた。

「で・・・・でかい・・・・・」

『ゆりかごはもはや戦艦ではない。要塞だ。そもそも、かの聖王殿下はこの中で一生を果たしたこともある。これぐらいできなくてどうする？』

「奴」の声が響く。

まるでゆりかごが振動して「奴」の言葉を発しているかのようだ。

そしてその現状に、ほとんどの管理局員は絶望する。

こんなもの、勝てるわけがない。

最初のゆりかごとの戦闘だって、善戦していたわけではないのだ。
それの巨大化、さらにはこっちの戦力だって、かなり減っている。
勝てる見込みは、あまりにもない。

『さぁてとりあえず・・・うるさい小蝿は・・・・・消え去れィ！！！！』

ゴウン！！！と、ゆりかごが雄叫びのようなものを発し、全身に走ったひび割れがポゥ・・・と紅に染まる。

そして、そのゆりかごのすべてから攻撃が放たれた。

それは帯状のレーザとでもいうのだろうか？
オーロラの用に薄い膜のようなレーザーが、全体を覆うヒビから放出されていく。

しかも、そのヒビは三百六十度すべてに入っているのだ。逃げ場な

どない。
さらにそのヒビのところどころから出現している砲首からの砲撃や、線状のレーザーが放たれてくる。

オーロラは軽いようにも見え、風に吹かれたら揺れてしまいそうなほどだが、そんなことはない。
あのヒビの幅は約一メートル。そこから紅いオーロラのように帯状になって噴き出しているのだ。
幻想的な見た目とは裏腹に、恐ろしい攻撃だ。

もちろん、最初からついていた砲台だって健全である。

蹂躙だった、惨状だった。

ゆりかごがいくつかの次元世界を滅ぼしたといわれたのもわかるというものだ。
これは間違いなく、史上最悪の兵器だ。

『蹂躙せよ、破壊せよ。大丈夫だ。世界を食ったのちに、ここも元通りに返してやる』

局員の悲鳴が聞こえる。
次々と落されていっているのだ。

幸いなのはすでにこちらの戦力が少なかったところだろうか。一塊になっているところを、狙い撃ちにされなかった。
だからと言って、脅威でないわけがない。その衝撃や空中でいきなり爆ぜた威力でも、十分過ぎる破壊力だ。

脇役は殺さない。

「奴」のそのポリシーで、直撃を食らった者、死んだ者は一人もいなかったが、それだけで十分に戦闘不能だ。

攻撃の嵐、破壊の暴風。

一切の容赦もない、一斉総攻撃だった。

もちろん、衛星軌道上に待機していた戦艦が向かわなかったわけではない。

だが、あまりにもその攻撃範囲が広すぎる。

戦艦が来れば何とかなるかもしれない・・・・・・などと思っていた局員の心をも、これは砕いた。

ゆりかごの周辺に巨大戦艦が三隻、ゆっくりとした速度で落ちてきたからだ。

その船体からは爆発と火災が起こっており、もはや戦闘どころか航行もできない状態である。

その中にはクロノの戦艦、クラウディアもあった。

「お兄ちゃん！！！」

『大丈夫だフェイト！！一体何があった！？』

悲鳴を上げるフェイトだが、そこにクロノからの連絡が入る。
どうやら転送ポートで船員は全員脱出し、他の船のクルーも無事らしいが、もはやまともな戦闘は不可能だそうだ。

フェイトがクロノに現状を報告する。
その内容に驚愕するクロノだが、これ以上回線を繋いでいられないフェイトが、再び回避に移る。

いま、機動六課のメンバーは空をかけ、襲いかかる砲撃、攻撃から身を守るので精一杯である。

そんな中、総てを無差別に攻撃しながらも、ゆりかごがある一点に向かってゆっくりと動いていく。

なのはだ。

蒔風を担いだなのはがにゆりかごの艦首が向けられ、そこに向かってゆりかごは進んでいた。

が、ゆりかごの速度がゆっくりに見えるのはゆりかごそのものがあまりにも大きいからだ。
実際のスピードは現在のなのはと同じくらいだし、この大きさにしては異常な旋回力も見せる。

逃げられない。

そう覚(さと)ったなのはが、ゆりかごに向かって杖だけを向けて砲撃を放つ。

だが、前部に設けられている砲撃二発程に軽く打ち消され、他の砲首が向いて一斉に砲撃される。

「ッ！？」

「くっ・・・・なのは・・・・気にすんな、撃ちまくれェ！！！」

バァンッ！！！

そこでなのはに声がかかる。
蒔風だ。意識を取り戻し、キャロの治癒魔法で回復力が促進されていた彼が、何とかその砲撃をバリアで弾いていた。

確かに、蒔風の回復力がブーストされれば、かなりのスピードで大丈夫な状態になるだろう。

しかし、身体に残ったダメージや、染み込んだ鈍痛の様なものからはとてもではないが回復できない。

その抵抗を見て、ゆりかごが全方向砲撃を一旦止め、その砲首をすべて蒔風に向ける。
前部にあった物から、ヒビの隙間から現れた物まですべてだ。
ヒビから出てきた物は、砲身がメキメキと伸び、棘のようになってから、折れ曲がって蒔風に向いた。

そしてその隙間をオーロラが走り、さらに砲撃が一斉に光線を発し、蒔風を焼こうと襲いかかってきた。

「舜君ッッ！！！」

「離れんな！！大丈夫だ・・・・おまえを死なせやしないから！！！！」

「舜君・・・・ッ！！ディバイーーーーーン！！！バスターーーーーーーーーッッ！！！！」

ボウッ・・・・・・・

蒔風に守られながら、なのはが砲撃を撃つが、どうあっても効くはずなどない。
煙のように消え去って、桜色の霧になるだけだ。

『ふん・・・・・・さすがに持ちこたえるか。ま、このくらいならお前はやるだろうな。だが・・・・・なぜ俺がわざわざめんどくさいことしてまでこのゆりかごを手に入れたのか、わかるか？』

「ガッ・・・・・・・んなもん、ただ単に・・・・おグァあああ！？」

『ふ・・・・・・・手の皮が裂けてきたか。まあ、ただのでかい質量・魔力兵器だからな。今は・・・・・・ん？』

「奴」が何かに気づく。
異常なまでの状況認識能力だ。戦艦を動かして攻撃する際は、オペレーター、操舵主、、観測手、全体指揮の艦長など、実に多くのスタッフが必要なはずだ。

だが、この男はゆりかごの玉座に座ったままで、そのすべてを取り行っていた。

全体を見渡し、総ての砲台の管理をして、攻撃する。

「奴」の姿は見えないが、おそらくはこれだけのことをしても特に感動はなく、ただできるだけ、というった顔をしているのだろう。

そして、その「奴」が気付いたのは、はやてである。

「遠き地にて・・・・闇に沈め・・・・・・」

『八神はやてか。おまえも十年ぶりらしいな』

「デアボリック・エミッション！！！！！」

ゴォ！！！！！

再会を懐かしむかのように言う「奴」の言葉を無視し、全砲撃が蒔風に向かった隙にはやてが攻撃を加える。
その空間魔法の範囲は今までと比べ物にはならないものだ。

一気に膨れ上がったそれは、ゆりかごの三分の一ほどを呑みこんで、一気に爆発した。

「・・・・あかん・・・・・無理や・・・・・」

「はやて！！！諦めちゃダメ！！！ライオットザンバー・カラミティ！！！！」

《Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

苦い顔をしたはやてに変わって、フェイトが大剣をかしたバルディ

ッシュを振りかぶって、ゆりかごに斬りかかって行く。
その刀身は、ゆりかごを輪切りにしようとすれば、おそらく四分の一は斬れるんじゃないかという程に大きい。

さらに速度は真ソニックだ。威力はどんどん跳ね上がり、ゆりかごへと向かっていく。

そして、ゴォン！！！という壮絶な音を鳴らして、刃とゆりかごの外壁がぶつかり合った。
が、そんなにも長く押し付けてはいられない。

熱いのだ。

当然と言えば当然だ。
ゆりかごのヒビは全体にまわっており、そこからオーロラ状のレーザーが出ている。

方向こそ蒔風に向かっているものの、やはり近くに行けば熱い。

が、このまま引き下がるわけにもいかない。

フェイトがザンバーを振り下ろしたのは、はやての攻撃で付いたわずかな損傷部分。
そこでバチバチと火花が散り、フェイトがそこで汗を流しながら刃を押しつけ続けている。

「行けッ・・・・・行けえええええええええええええッッ!!!!」

「テスタロッサ!!!変わるぞ!!!」

「シグナム!!!」

後方から聞こえてきたシグナムの掛け声に、フェイトがゆりかごをザンバーで振り切り、そこに切れ目を残す。
それを残しフェイトが離脱した瞬間、そこに向かってシグナムが一本の矢を放った。

「翔けよ、隼（シュツルムファルケン）！！！！！」

シグナムの魔法で、最大の破壊力を持つ魔力の矢を以ってして、ゆりかごを射抜こうと試みる。
だが、ゆりかごはフェイトが離れた瞬間から、すでに再生を始めており、その斬り込みは消えようとしていた。

「くっ！？」

「諦めるな！！！ヌオオオオオオオオオおッッ！！！！！」

「！？ザフィーラッ！？」

そこにいきなり、と言っては失礼だが、現れたザフィーラの雄叫びと共に、その切れ込みが「鋼の軛」でつっかえ棒のようにされて開かれていく。
そこに見事、シュツルムファルケンの矢が突き刺さった。

「な、なぜここに！？」

「あのような禍々しいモノが出てきて、黙って居られるオレではない」

「だからアースラから転送魔法で真っ直ぐに来たの。「奴」と戦ったことのある戦力、私たちくらいだから」

「シャマル！！！」

ザフィーラだけではない、シャマルまでいた。
つまるところ、これで八神はやてのヴォルケンリッターが集まったというわけである。

が

「うっそだろ！？まだ耐えてんのか！？」

ヴィータが叫ぶ。
今のシグナムはリィンとユニゾンした状態だ。
それで放ったシュツルムファルケンである。
更にはあらかじめつけられた傷跡。

にもかかわらず、矢は突き刺さったままだ。

貫通せず、矢の半分ほどが付きささり、止まってしまっているのである。

「ヴィータちゃん！！」

「おう！！ブースト頼む！！！ウオオオオオオオオオオオオオオオッ！！フルドライブ！！！轟天爆砕、ギガントシュラーク！！！」

と、そこでヴィータがさらにそれを押し込もうと、巨大化したアイゼンで矢にギガントシュラークを叩き込む。

かつて、闇の書の闇による魔力と物理の複合結界、その一層を破壊した魔法が、ゆりかごに叩きこまれた。

しかもその威力は十年前と比較にはならない上に、シャマルのブーストまでかかっている。

だが

「なッ！！！？くっ、全然動かねえ！？」

「そんな・・・・・どうして！？」

これだけの威力に叩きつけられても、矢はゆりかごを貫かず、それどころか少し食い込んだくらいだった。
万事休すか。と、思われたが。

「ヴィータ副隊長！！退いてください！！！！」

「あ！？ってお前ら！？」

「スバル・ナカジマ、行きます！！！！」

そこで準備を整えていたフォワードたちが攻撃を仕掛けた。
と、言ってもこの攻撃はスバル主体だ。

キャロによってブーストがかけられ、エリオのストラーダを左手に握り、ティアナの指示通りのタイミングで、スバルが突貫して行った。

ストラーダのブーストと、マッハキャリバーの推進力、さらにはエリオがスバルの身体に電流を流してその身体能力を増強し、一気にトップスピードを乗り越えていくスバル。

空気の壁を打ち破って、目も開けられないようなスピードでゆりかごに向かって突き進む。
そして到達した瞬間、右腕を振りかぶり、リボルバーをフル回転させて振動拳を叩き込む!!!

「ウォオリャアあああああああああああああ！！！！！！！」

振動拳は内部破壊の到達点だ。
外壁など、破壊できなくてもいい。内部に伝える手段があれば、それだけで十分！！！

ドゴォウ！！！！

振動拳の威力がやりかご内部の、全体とは言えずともその一角に広がり、更には矢に内蔵された魔力が一気に炸裂して大爆発を起こす。

ヴィータとスバルがその爆発からバリアを張って退避し、一旦全員と合流した。

「やったか!?」

『・・・・その台詞はな?やれてない時の台詞だぞ?』

「・・・・・くそッッ!!!!」

結果として、ゆりかごにダメージは通った。
爆発の中心部には、確かに穴があいている。

だが、その大きさは直径一メートルほどだ。
この大きさのゆりかごに、これでは効いたとは言えない。

『だが・・・・ＡＭＦが働いていないとはいえ、穴が開いたのは正直驚きだな』

「奴」が飄々とした口ぶりで称賛する。

そう、今この場に、ＡＭＦは働いていない。
何故だかわからないが、「奴」がゆりかごを乗っ取った瞬間から、
その機能は機能していなかった。

『ま、穴はしっかり塞いでおこうか。で・・・・・いいのか？お前らの頼れる男が、そろそろ限界に近いぞ？』

「「「「「！！！！！」」」」」

「舜さん！！！！！」

「舜！！！！！」

皆が一斉に蒔風の方へと視線を向ける。
否、向けたのはこの現状を見ているすべての者たちだった。

蒔風の腕の損傷はすでに肩まであり、そろそろ胸まで裂けてしまう

のではないかというところまで来ていたし、さらには今の体力だと、翼を開くほどの力も出ない。
身体の傷は異常な回復を見せたため、大方は大丈夫だが、今度は腕が深刻な状態になっている。

「舜君!!もういいよ!!死んじゃう!!!」

「バカ野郎!!!腕がなんだ!!!!!このまま俺がどいたら、誰がお前を守るってんだよ!!!!!グッ・・・ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!!!??」

なのはが蒔風の背にしがみついて悲痛な声を上げる
蒔風が腕を伸ばして押しのけるように複重砲撃を受け止めているが、もう受け止めていると言えるのかどうかという状態だ。

最初は手のひらに触れず、その手前に張ったバリアで受け止めていた。
だがその反動で手のひらが裂け、バリアが押し込まれてきたのだ。

決してバリアが破壊されたわけではない。呑みこまれてしまっているだけ。
しかし砲撃は手のひらに達し、上腕を侵食し、二の腕を飲み込んだ。

そして今、ついに胸へと到達する。

「ゴオオオ

「バカなことすんじゃねえぞなのは・・・・おまえが死んで！！！
それで「ありがとう」なんて事言う奴が一人でもいると思ってんの
かよ！！！！！？？」

「ッッ！」

蒔風の言葉にハッ、とさせられるなのは。
そうだ、彼女には帰りを待つ娘（ヴィヴィオ）がいる。

だがそうはいっても、現状はどうすることもできない。

『強情を張るなよ、蒔風。しかし・・・この状態も飽きたなぁ・・・
・落とすぞ』

ドォンッッッ！！！！！

「奴」の発言と共に、蒔風を襲っていた砲撃が爆発した。
まるで今までのが侵食系、今のが爆破系とでも言わんばかりの変化
だ。

その爆煙の中から、二人の影が墜ちていく。
だが、なのはに爆発での怪我は一切ない。

蒔風がその体をボロボロの腕で抱きしめ、背中でガードしていたからだ。

そうして、森に堕ちる。

そこに向かって、ゆりかごが砲撃を加えようと砲首を向けた。

「まずい！！！！」

「オレが行く！！！ブーストを頼むぞ！！！」

「わかったわ！！」「了解です！！」

「私が連れていく！！！真ソニック！！！」

落ちた二人を守るため、全員が動く。
はやてもそこから動こうとするが、そこに通信が入る。

アースラからだ。

こんな時になんだとはやては思いつつも、何かしらの攻略が見えてきたのかと期待して、通信を繋ぐ。

だが、通信の先の声は震えており、どうしようもない絶望の色に染まっていた。

『や、八神部隊長・・・・・・』

「なんや？どしたん！？」

『ゆ、ゆりかごを解析したのですが・・・どうやら、あ、あの男の一人の力でここまでやっているようで・・・・』

その報告に、はやては驚きながらも納得する。
確か自分の記憶が正しければ、「奴」の特性「君臨特権」は、主を失ったものを取り込んだり、利用できると言うものだ。

つまり、使いこなせるかは本人の力量次第だが、使うこと自体は容易なのだ。

更に言うなら、「奴」には「王」としての資質がある。
ゆりかごを聖王以上に扱えても、おかしくはないだろう。

だが、その後の言葉に、はやては絶句するしかなかった。

『それで・・・「奴」という男の力も出てきたんですが・・・・ランクにすると・・・・』

「・・・・・すると？」

『魔力ランクＳＳＳ＋＋』

「な・・・・・・・・・」

『管理局以前の旧暦の時代にもこんな例はありません・・・・・・あの男は・・・・・・・正真正銘の化け物です！！！！！』

ランクＳＳＳ＋＋

その恐ろしさは、下手にＥＸ（測定不可能）と言われるよりも、恐ろしいものだった。

ランクにおいては、なのは、フェイトが空戦Ｓ＋。
はやてでも総合ＳＳだ。

ちなみに、戯れに蒔風が測った時は、魔力ＳＳ＋＋だった。

それを数ランク上を行く「奴」の力。
力押しで十分に蒔風を圧倒できる。

それだけの力の前に、なぜ自分たちは向かって行ったのだろうか、と疑問すら抱いてしまう強さだ。

もし、相手がＥＸ（測定不能）だったらまだ楽だったかもしれない。
ただ全力で、もはや何も考えずにぶつかればいいのだから。

だが、こうして見えてしまった事で、どれだけの差があるのかがわかってしまう。

どれほど離されているかが明確になってしまった。

だからこそ、怖い。

その通信は、フェイト達をはじめとする全管理局員に通じていた。

いや、通じさせられていた。「奴」は通信を傍受し、すべてにこの通信を流している。

それは管理局の戦意を削ぐためか。

そして、その思惑はうまくいっていた。

魔力ランクＳＳＳ＋＋だって？

そんなもの、個人が内包する魔力じゃない。兵器で使われるエネルギー値だ。個人が持っていいものじゃない。

そして、すべてのものが思った。

それは、都市伝説。
十年前に現れた、奇跡の男。

翼人が現れてはくれないかと。

だが、機動六課メンバーを除き、彼らは知らないのだ。

さっき落とされたあの男こそ、その希望の人物であるという事を。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～落ちる翼～（後書き）

圧倒的ですね！！！
にしても自分のイメージ通りにゆりかご改の描写ができたかどうかが心配です。

アリス「絵でも描けばいいじゃないですか」

無理ですよ。
自分にはそんなツールも無いですし、正直絵心がありません。

棒人間が限界ですもん。

ア「じゃあ誰かに書いてもらえばいいのでは？」

確かに私の友人には絵のうまい人がいますが、わざわざ頼むのもなんだかねぇ・・・・

ア「さいですか。にしても、ゆりかごにはまだまだ秘密がありそうですね？」

はい！！
それはもう今回考えましたよ！！！

この設定は作者のオリジナルです！！

まあ、その内容は次話で書きますので。

ア「ほう。ゆりかご建造の秘密ですか。ふむふむ・・・・・」

あ、こら読むな!!

ア「でもこのままいったら次話で「奴」倒しちゃいますよ?」

そこが悩みどころ。
引っ張ろうかどうか少し考えてる。

ア「これ以上引っ張んなよ。あ、でもここで簡単に倒してもなんだか味気ないですね・・・・・」

そうだ!!!

ア「なんですか?」

ちなみにランクの「空戦」は空中戦において、「総合」は全体的にみて、「魔力」はただ単に魔力量の事です。

ア「そっちですか!?次回、ゆりかごの秘密」

ではまた次回

謝ることなんてなんもあらへん。鉄槌の騎士ヴィータとグラーフアイゼンがこんなになるまで頑張って…。それでも壊せへんもんなんてこの世のどこにもあるわけないやんか

「魔力ランクＳＳＳ＋＋！？」

「そんな・・・・くっ・・・・・・・」

蒔風となのはを後ろで、ザフィーラが驚愕し、フェイトが一瞬くじけそうになる。

今二人を守っているのは、ザフィーラの盾と、フェイトの防壁だ。
ゆりかごの複合砲撃をザフィーラが受け止め、それによって周囲に巻き散らかされる衝撃からフェイトがなのはと蒔風を守っていた。

「だが・・・だったらこの俺が受け止められているのは、どういうことだ！？」

「この攻撃はゆりかごのもので、「奴」の攻撃力とは無関係だから・・・だと思う」

そう、この砲撃をザフィーラは、ギリギリとはいえ、何とか受け止めていた。

確かに、フェイトが推測した原因も正しい。
この砲撃はあくまでゆりかごのもので、「奴」の力の大半は、あくまでゆりかごの制御に回っている。

だが、それでもおかしい。
あの蒔風がゆりかごの総攻撃の三分も耐え切れず押し込まれたものを、ブーストをかけているとはいえ、ザフィーラが耐えられるのか。

『疑問か？呑気だなぁ・・・・・・ま、あくまで蒔風は防御よりも攻撃のほうが得意な男だ。そこな守護騎士のほうが、守りのほうは上だろう。それにだな・・・・・くくっ、このゆりかごの製造理由を考えれば当然といえば当然なのだよ』

「ゆりかごの製造理由やって？」

「聖王を守るためのものでは・・・・」

「奴」が語る。
よほど面白いのだろう。その声は若干ながら弾んでいた。

『そいつは表向き。どんな時代にも表向き裏向きってのがあるみたいでな。そこの男はゆりかごは勝てない。このゆりかごは・・・・・・翼人との戦闘を想定して作られたものだったからな』

「なに!?」

「奴」の言葉に、一同が驚愕する。
その言葉に驚く一同をさらに面白がってか、「奴」の言葉は進む。

「奴」は世界構築を計算するうちに、ある程度の事実を知り得る。
今回のこれもその中にあったものだ。

はるか太古。
それは古代ベルカでのおとぎ話。

翼人が無数の世界を破壊し、消滅させたというものだ。
だが、どんな怖いものでも所詮それはおとぎ話である。かみなり様が来たらおへそをとられるだとか、恐怖の大魔王がやってくるだとか、そんなものと同程度と考えられていた。
しかも、アルハザードの壁画に一文だけ書いてあったらしいぐらいの伝承しかない、翼人（そんなもの）を本気で信じる者などおらず、ほとんど誇大妄想として扱われていた。

しかし、それは事実だった。
しかも、昔のことではない。

この世界は多重世界だ。何かの拍子でほかの世界の情報が流れてくることも、珍しくはない。
そしてこの話もそうだった。

いくつもの世界、その数十七。
それだけの世界が、確かに破壊、消滅させられていた。

それを事実だと知っていたのは、当時の王たちとその臣下数名だけ。

世界を破壊して回る翼人。その数はすでに十を超えていたのだから、脅威というには十分すぎる。
そうでなくともその時代は戦乱の時代であったし、力はあれど、世界を滅ぼす伝説の翼人などにかなうはずもないということは、彼らにはわかっていた。

彼らは決して慢心などしていなかった。いや、もしかしたら、ただ単に怯えていたのかもしれない。自分の世界が破壊されることが。

だからこそ、彼らは絶対的な戦力のため、「聖王のゆりかご」を作り出した。
王を守り、そして、王自らゆりかごとともに戦場へ出て、その翼人と戦うことを目的とされて。

しかし、結果的に言えばゆりかごは一度たりとも翼人と戦闘をしなかった。それどころか、目の前にすら現われず、ほかの世界で打倒され、次元の狭間に封印されたのだそうだ。

だが、せっかく作りだしたものを活用しない手はない。
古代ベルカはその力を以って戦乱の世を正し、平和へと導いた。

逸話としてあった世界を謁見して滅ぼした、というのは、この翼人と同等か、それ以上の力を持って作られたことによって噂されたためについてしまった尾ひれだ。

実際にはそんなことなどはない。

そうして、役目を終えたゆりかごは封印された。
またいつか、翼人の脅威に世界が晒されたとき、誰かがそれを以って救うという願いを載せて。

ちなみにＡＭＦというのは、翼人の力を弱体化させるために作られたシステムだ。
翼人の使う力が魔力だと思って作られたものだったが、翼人は別に魔力しか扱えないわけではない。
結果的には無駄な機構になったのだが・・・・・・

『だが、発想としては悪くはない。それでな？ここに俺が持ってる蒔風のデータを組み込めば面白いことに・・・・・アンチ・マギリンク・フィールドは見事、アンチ・マイカゼ・フィールドとして作用したというわけだ』

そう、この男はゆりかごに組み込まれていたＡＭＦのプログラムを書き換え、その対象を蒔風一人に向けていたのだ。

なるほど、確かにそれならば、蒔風に耐えられずザフィーラが耐えられたのも納得がいく。
もともと防御にはそこまで秀でていないのに、さらに制限までかけられては、蒔風も大きく弱体化する。

『こうして!!聖王のゆりかごはついに、翼人兵器として完成した。さて・・・・そろそろこっちの戦力のスキャンも終わったんじゃないのかな?俺のランクは結構上らしいしな?勝ち目は・・・まあないと思うぞ?』

「ッ・・・・・」

「奴」のその言葉に、はやてが唇を噛む。

さっきの「奴」の力の報告で、すべての管理局員はうなだれてしまっている。
その実状が、今の苦境を作り出しているといってもおかしくはないだろう。

『こっちの勝率はすでに９９％を数えている！！！どうだ？まだやるか管理局諸君！？いやいや、俺はお前らが嫌いなわけじゃあない。そこは安心してもいいぞ、うん』

「奴」が納得するように言う。
もちろん、この間にもはやてやシグナム、フォワードたちはゆりかごに総攻撃を仕掛けていた。
掛け値なしの機動六課総戦力。

しかし、それを受けてもなお、ゆりかごは墜ちるどころか揺れもせず、延々と砲撃を撃っていた。

「グッ・・・・おぉぉおおおお・・・・・・」

「ザフィーラ！？大丈夫！？」

「大・・・・丈夫・・・だがっ・・・・・・これは・・・・・・・ッア！！！」

険しそうな声を出して、ザフィーラがフェイトに応える。
ここまで耐えられているのは、ひとえにシャマルとキャロのブーストのおかげだ。

そのため、二人は戦闘に参加できず、また、攻撃を仕掛けている方のブーストもかけられない。

が、いくらなんでも限界だ。

ついにザフィーラの防御結界にひび割れが入り始めてきた。

「ぐ・・・おおおおおおおおおお・・・・・・・！！！！！」

「ザフィーラ！！！！」

「だめ・・・これ以上持たない！！！」

「なのはさん！！フェイトさん！！！！」

シャマルの額にも汗がにじみ、キャロが泣きそうな声を出して二人の名を呼ぶ。

だが、もはやどうしようもないのだ。

機動六課のメンバーは、今や誰もがエース級だ。

そして、今戦っているのがそのエース級であるという事が、なによりも管理局員たちを落ち込ませる。

あの人たちがあれだけやって、それでも落ちないゆりかごに、一体どうやって戦えばいいんだ？

それは同じ起動六課でも、アースラに残ったロングアーチスタッフにも同じことが言えた。

アースラのモニターには「奴」の数値と、現状でのこちらの戦力が現れている。

絶望、諦め、悲哀

世界は終わる。

そんな異常な日常を、当たり前のように享受できそうな心境。

誰もが挫けた。
もう出来ることなんてないんだと。

誰もが泣いた。
守りたいものが守れない。

誰もが後悔した。
ああ、自分にもっと力があれば。

誰もが恐怖した。
まだ死にたくない。

誰もが諦めた。
想いだけじゃ、どうしようもない。

そしてそこに

一人の男の怒声が響いた。

『なにをやっとるかバカモンどもがァ！！！！！！！』

「「「

！！！奮えろ！！！あんな子娘どもに、すべてを丸投げにして、貴様らは恥ずかしくもなんともないのかこの腑抜けがァ！！！！』

戦場の、すべての局員の通信網に、太い男の声がビリビリと飛び出してきた。

「こ・・・・この声は・・・・・」

「ゲイズ中将！？」

誰が言ったのだろうか。

そう、声の主は、レジアス・ゲイズだった。

かの地上の英雄。地上世界を守り通して４０年。

魔力も無く、力も無く、しかし、それでも理想と信念で走ってきた

男。

その男が、全管理局員に渇を叩き込んでいた。

『なにをのそのそと寝っ転がってる！！！とっとと起きて、戦わんか！！！艦隊も何をしている！！！！そんなところで怯えてどうする！！！でかい図体持っているなら、せめて皆の盾になれ！！！！二十も生きていないあの魔導師たちが、あれだけ必死になって諦めんというのに、貴様らは恥ずかしくないのか！！！相手が強いか？恐ろしいか？貴様らの守りたかったものは、そんな物に負けるほど、どうでもいいものだったのか！！！！！』

その言葉で、全員の脳裏に守りたいものが浮かび上がる。

名誉
それでもいい。十分立派だ

家族
それでもいい。十分立派だ

命
それでもいい。十分立派だ

財産
それでもいい。十分立派だ

平和
それでもいい。十分立派だ

正義
それでもいい。十分立派だ

なんでもいい、守りたいものはおまえらにあるか。
それがあるなら、十分立派だ。

そしてあるのなら、立ち上がれ。
ここで不貞腐れてる場合じゃない。

あいつはただの強奪者。泥棒、強盗、盗人だ。
だったら、こっちに正義がある。

自分たちの守りたい大切なモノを守るなら、間違いなくこちらが正義だ。

そして

正義は、勝つ。

否

正義は、勝たねばならんのだ。

『ワシには、戦う力などはない。こうして、貴様らに言葉を送るだけだ。だが、それでも！！必ずやるべきことはあるのだ！！！それを教えてくれた、たった一人の友のために、貴様らに叫び続けてやる！！！！！』

戦え！！！！！！

レジアスの言葉は、まさに英雄のそれだった。
もしこれが、はやてやクロノ、仮に管理局トップ、元帥の言葉であっても、皆の心には届かなかっただろう。

だが、この男の言葉は、なによりも強く、芯があった。

それこそ、英雄。
力ある物が英雄になるのではない。

どんなに絶望的な状況でも、皆を立ち上がらせることのできる者。

それが、英雄たる力である。

そしてこの英雄の、過去と現在と、友の正義を芯とする彼の、その言葉に、突き動かされない者など、誰一人としていなかった。

しかし

『ほう・・・中々にいい演説だ。だがな、力の差は歴然だ。どうする？オレの勝率は９９％！！！貴様らに勝率は１％程しかない！！！！』

「奴」が叫ぶ。

その言葉に、心がくじけそうになる。
それは今やはやてやフェイト、なのは達機動六課のメンバーもそうだ。

もう限界だ。

すべての者がそう、思ってしまった。

そしてついに

「ゴガアアアアアアあああああああああッッッ！！！！！！」

「ッ！！！ザフィー・・・・・」

「キャアアアアアアアアアア！！！！！」

ザフィーラが弾き飛ばされ、倒れている蒔風の身体を支えるなのはの元にまで転がってきた。
そして迫りくる砲撃に、フェイトが思わず叫び声をあげてしまう。

「あきらめちゃ・・・・・ダメ！！！」

「それを教えてくれたのは・・・・フェイトさん達じゃないですかッッ！！！」

しかし、それはシャマルとキャロが押しとどめていた。
が、いくらなんでも無茶だ。

もう十秒も持つまい。

だが、その状況を見て、六課の戦いを見ていた局員皆が思った。

何故諦めないのか。

この絶望の淵において、どうしてまだ踏みとどまっていられるのか。

その疑問は、誰かが声に出したわけではない。

だが、まるでそれが聞こえたかのように、なのはがポツリと、涙をこらえながら答えた。

「待ってる、から」

『？』

「ずっとずっと、待ってるから。絶対に助けてくれる人。私が憧れ続けた人。私が・・・・・大好きになった人。その人が、いてくれるから」

『・・・・高町ィ・・・・・・』

「どんな絶対的な絶望の中でも、この人の翼が、力強くそれを吹き飛ばしてくれるから!!!!!だから、私たちを助けて・・・・・私も、一緒に戦うから!!!!守られるだけは、嫌だから!!!!!」

『なのはァァアァァああ!!!!!!!』

「助けて、目を覚まして・・・・・舜君!!!!!!!!!」

ドォウ!!!!!!

そしてついに、防壁が完全に消失する。
全員が襲いかかるであろうその衝撃に身をこわばらせ、目をつぶり、
なのははその腕に蒔風を抱きしめた。

だが

「大丈夫・・・・・負ける気はないさ」

「え？」

パァン！！！！！

その砲撃は、霧へと消える。

ゴォン・・・と、ゆりかごの巨大な船体が微妙に揺れた。

そして男が静かに、立ち上がる。

『な・・・に・・・・？』

「願いって、やっぱすげえな・・・・・・・ホントにこれ、たった数人だけの願いかよ・・・・・これだけ想われりゃ、十分十分」

『まだ・・・これだけの力を・・・・・・』

「これだけの力？そんなもの俺には無かった。まったくな。だが、こいつらがくれた。忘れているようだな？オレの力を。弱体化させたところで、意味はないさ」

その背に銀白の翼をはためかせ、男が宙に舞い上がる。

「勝率９９％？ああ、そりゃこっちの勝率は１％だな。勝ち目はねえよ。よく「１％でも可能性があれば、不可能じゃない」なんて言うけどよ、ンな事ねえよ。百回やって一回だぞ？たった一日乗り越えるために、百年かけたカケラの少女と神様がいたっていうのに、そんな簡単に一回で１％を呼び寄せられるわけねえじゃねえか」

その言葉に、なのはの肩が震え、皆が落胆の渦に落ちそうになる。
しかし、この男は

「だが・・・・可能性の上限が１００％だと誰が決めた・・・・・・！！！！！」

蒔風舜は、それでも自信満々に言う。
まだ勝ち目はある、と。

その言葉に皆が顔を上げる。
そして、聞いた。

「百を超え、二百を超え、どこまでも伸びていくのが可能性（みらい）だろ！！！？？そうやってどこまでも計り知れないのが可能性だし、未来だし願いだ！！！！そこに「百」なんてつまらない数字を当てるんじゃない・・・・そんなに数えられるもんなのかよ！？そんなにちっぽけなのかよ未来ってのはよ！！！！？？違うだろ！？お風呂で数えられるような、そんな数字じゃないはずだ！！！！可能性は無限大なんだ！！！数えきれる９９％がなんだよ！！！！たかが９９じゃねえか！！！！！そんなもんに負けるほど、俺たちの未来は、小さくない！！！！！！！」

ドォウ！！！！！

背中の翼が肥大して、巨大に羽ばたき、輝きを放つ。

そうだ、可能性に上限などない。
それはみんな知っていること。
今までだって聞いてきたはずだ。

何故それを忘れていたのか。

何故勝手に未来を決めたのか。そんなこと、出来るはずもない。

どこまでも、どこまでも強く輝く翼が、全員の目に止まって行く。

願いの翼、銀白の翼人

願いが叶う。願いは叶う。

だって、未来に、可能性に限界は無いのだから！！！！！

「可能性は未来、その未来を想う心こそ、我が翼が司りし、願い！！！俺の名は蒔風舜。心してかかってこいよ・・・・俺の翼は、願いの翼！！！！！未来は、誰にも撃ち消せやしない！！！！！」

ゴォウ！！！！！

「安心しろ・・・・・必ず勝てる！！！あっちの勝率が９９なら、こっちの勝率は、無限大なんだからな！！！！！！！」

全身の産毛がざわつき、翼が猛る。

すでに、絶望に染まった者はいない。

すべてのものに、願いが戻った。

銀白の翼、ここにあり。

その翼こそ、勝利たる、願いの翼なのだから！！！！！

「さあ、勝ちに行こう！！！。おれ達の勝因は、今ここにあるんだから！！！！！」

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～未来、願い、可能性～（後書き）

来た来た来たぁ！！！！！
ここですよここ！！！この言葉が書きたかったんだ！！！！

アリス「そうだったんですか？」

この小説を想い浮かべた時、なのはのこのシーンも当然想像してました。
このシーン書くまでどれだけかかるだろうと思ってたから、とても感無量です！！！

ア「それにしても・・・・もう絶対大丈夫じゃないですか？この翼」

いえいえ、実はそうでもないです。

レジアスさんの演説で、皆の心にわずかながらの希望が生まれたからこそ、蒔風は立ち上がることができ、そしてそこから彼自身によって希望が膨れていったからあそこまで行けたんです。

ア「あれ？じゃあ今回のＭＶＰって・・・・」

そこまでの時間を稼いだザフィーラとレジアスさんです。

ア「おおう・・・何とも渋いお二人が・・・・・・」

まあそんなとこ。
さて、ではどうぞ！！！

ア「次回、蒔風、ついに、ついについに！！！「奴」に、世界に、大・逆・転！！！！！」

ではまた次回

今は前だけ見ればいい・・・信じる事を信じればいい・・・
愛も絶望も羽根になり　不死なる翼へと

甦れ僕の鼓動

挿入歌　「Ｐｒａｙ」水樹奈々　より

銀白の翼が舞い上がる。

その翼長はいつもの二倍ほどもある。
しかも、今現在も大きくなっていく。

当然だ。
今この瞬間にも、この姿を目の当たりにし、願いは膨れ上がっているのだから。

『蒔風ッ・・・・・・・！！！！！』

「よく言葉一つ言っただけとか、新しい味方が来ただけとかで勝ちフラグになる展開あんだろ？そんなんあるわけないじゃん、ってのが現実だが、翼人はそれを現実にするんだ。誰か一人でも諦めない限り、翼人は・・・・決して落ちない」

ゴオオオオオオッッッ！！！！！！

その言葉に反応してか、ゆりかごが振動し、まるで怒りの咆哮を上げるかのように全身を唸らせる。
そして全砲撃攻撃が、再び蒔風に向かっていった。

「チッ・・・・・！！！！」

それに蒔風は舌打ちをして旋回、攻撃をかわしていく。
ああまでは言ったものの、いまだダメージが完全に抜け切っていないのも事実だし、いまだにＡＭＦは効いていて、蒔風の力は十全では使えない。

「みんな・・・・・行くで・・・・・」

「うん、はやて」

「大丈夫です」

「舜があれだけ言ってくれたのに、立ち上がらないなんて、できないよ！！！」

「さあ、行くよ。みんな！！！！」

「「「「おう！！！！」」」」

そうして、起動六課メンバーも出撃する。

ゆりかごの周囲を飛び回り、砲撃、打撃、剣撃を加えていく。

魔力の切れた者は蒔風とすれ違った際に魔力を分けてもらう。

それでもなお、まだ戦い続ける。

誰一切として、もはや諦めてなどいなかった。

管理局員もすでに数名飛び上がってきている。
その目にあの翼人を写し、それに希望を見出して、彼らもまた、空を翔ける。

また、はやてがはるか上空に停滞しているであろう戦艦アースラに通信を入れた。

「全戦艦を引き連れて、ゆりかごを射程範囲内に入れて砲撃開始！！！ゆりかごからの攻撃はうちらが半分引き受ける！！！！」

『部隊長、遅いですよ！！！もうとっくこっちは降下してます！！！』

が、どうやらいらぬ指揮だったようだ。
すでにアースラをはじめとする次元航行戦艦は降下し、ゆりかごを射程範囲に収めようとしていた。

もちろん、「奴」がそれに気づいていないわけがない。
当然のように砲撃がそちらに伸びる。

が、それはキャロやシャマルを中心とした局員二十名に張られたバリアで弾かれてしまう。

こうして、ゆりかごと戦艦が同じ高度にそろう。

『全戦艦、攻撃準備完了！！！』

「総攻撃や！！！てェ！！！！！」

合わせて八隻の戦艦から、いくつもの砲撃やレーザーがゆりかごに放たれる。

その攻撃を、「奴」はゆりかごの砲撃で撃ち落とし防衛するが、いくつかはそれをすり抜けてゆりかごに到達していた。

が、その程度でどうこうなるゆりかごではない。まるで損傷といったものを受けていない。

しかし、その抵抗は確実に「奴」のカンに障っていた。

『効かないとわかっていながらも・・・・やはり粘るか、主人公！！！！！』

「効かないなんてことはない・・・・そんなことは、絶対にない！！」

「舜君がやってきたことを、今まで二回も手伝ってきたんだ！！！今回だって、できる！！！！！」

『馬鹿やろぉが・・・・・三度目の正直ってのを、しらねぇのかぁ！！！！！！』

「てめえが三度目の正直ってんなら、こっちは二度あることは三度ある、だ！！！」

「奴」の言葉に、蒔風たちが返していく。
その言葉はより一層「奴」をイラつかせ、そしてついに、その怒りが頂点に達した。

『うぅっとぉしいやぁ！！！！！！！！全砲台、制限解除！！！！！聖王のゆりかご、全稼働（フルドライブ）！！！！！』

「なっ！？」

「うわぁぁあああああああああ！！！！！！！！」

「なのは！！フェイト！！！！！くっ・・・・・・みん・・・・・・ごぁあああああああああああ！！！！！！！！」

ゆりかごのヒビが一斉に輝き、全砲台からオーロラと砲撃とか一気に噴き出してきた。

砲撃、だけではない。電撃や炎、更には衝撃波までもが吹き荒れて、ゆりかご周辺を一気に薙ぎ払った。

円状にソニックブームが広がって、すべての局員が墜ち、戦艦にも

命中し、また二隻ほど、落とされていく。

そしてその攻撃は、アースラにも届いていた。

「きゃあっ！！！！」

「うおっ・・・・ッ、損傷は！？」

「アースラ、右舷損傷！！」

「戦闘はできますか！？」

「出来なくはないけど・・・・移動が今までのようにはできない！！！いい的になるだけです！！！」

「くっ・・・・こんなところでッ・・・・・」

『損傷した戦艦は、その場で地上に降りてそこから砲撃を再開！！！総員、すぐにでも脱出できるようにしとけ！！！』

「了解！！！！」

そのアースラに、蒔風の指示が飛ぶ。
アースラはもともと廃艦予定だったものをメンテナンスしてきたものだ。
ここまで戦況に付いてきただけでも上出来なほど。

だが、そんなゆっくりとしたものを、奴が見逃すはずがない。

『油断はできないな・・・・あの次元砲がある以上、その戦艦どもは落とさせてもらう！！！！』

アースラが地上に降りていくのを見て、「奴」が砲撃の四割をアースラに向けて撃ち放った。
それを見て、蒔風が翔ける。

ゆりかごの全方向一斉放射に、一度は墜ちた蒔風だが、あのような全体攻撃で薄かったからまだ何とか耐えられたのか、多少苦しそうにではあるものの、まだ立ち上がる。
なのは達も同様に立ち上がり、他の局員もまた数名空に戻ってきている。

地上に降りたアースラを攻撃て破壊しようとするその砲撃の前に、蒔風が巨大な圧水掌を出現させ、叩きつけて霧散させる。
だが、それは少し照準を逸らしただけで、完全に止まるわけではない。

それを突き抜けてきた砲撃が、今度はアースラの左上方を掠めていった。

「うわぁ！！！！？？」

『急げ！！！こっちももう持たない！！！！』

「は、はい！！！！」

そこから蒔風が攻撃に移って行き、ゆりかごがそっちに引きつけたれている間にアースラが地面に着陸、そこからまた砲撃を撃とうとする。
周りにはアースラのように被弾した戦艦が降りてきて、地上からの固定砲台となって砲撃を開始していた。

「よし・・・これなら!!!」

そう言って、まだ自分たちはやれると意気込むロングアーチ。
だがこの状況で、「奴」が狙うのをあきらめたわけではない。

蒔風の攻撃の隙を見て、再び砲撃の嵐が戦艦群に向き、そのいくつかがアースラにも被弾した。

「グああ!?」

《警告。船体の損傷が激しく、これ以上船内にいるのは危険です。ただちに脱出をしてください。繰り返します・・・》

アースラの中にアラームが鳴る。

グリフィスをはじめとしたメンバーが苦い顔をするが、もはやこれまで。
ここは脱出して、足を引っ張らないようにするだけだ。

そうして全員はすぐに脱出した。
あらかじめ蒔風に言われていた通りにしていたのが功を為す。

だが

「よし、全員いるか？我々ロングアーチはこれから・・・・・」

ゴォン・・・・・・

「え？」

「な・・・・・なんで！？」

「アースラが・・・・動いてる！？」

アラームが鳴って、もう動けないはずのアースラが再び浮上していっていた。
その光景に、ロングアーチスタッフは目を見開き、グリフィスがブリッジに通信を繋げた。

「おい！！誰かいるのか！？勝手な行動は危険だ！！！！！戻れ！！操縦しているのは、誰だ！！！！！」

だが・・・・その通信から、返信はない。
そうして、アースラは飛び立って行ってしまった。

他の戦艦の砲撃弾幕を背に受けて、それを援護とするように。

ーーー

唸り声を上げ、獄炎と土埃を混ぜ合った「獄惺竜」が、砲撃にその身を削られながらもゆりかごの額に向かって突っ込んでいった。
衝突と共にひねり潰してから爆散し、そこに小さな穴をあける。

その穴になのはが砲撃を叩き込んで、更にそこに休みなく蒔風が絶光尖で貫通させる。

「見えた！！！」

「いまだ！！！！！雷　旺！！！！！」

「ディバイィィィイイン！！！！！」

「砲！！！」「バスタァアアア！！！！！」

二人の息のあった砲撃が、その穴の先に見える「奴」を狙い撃った。
だが、「奴」にしてみればなのはと、弱体化した蒔風の砲撃など脅威ではない。

片手をめんどくさそうに払って、その砲撃を上に弾いた。
ゆりかごの天井に穴があいて、その砲撃が逸れていく。

だが、その砲撃は終わらない。

砲撃に宿った雷旺のエネルギーは電気。

なればこそ、彼女であれば、それを動かしての方向転換も可能である。

《いまです！！！》

「せぇ・・・・のッッ！！！！！！！ハァアアアッッッ！！！！！！」

フェイトが、その砲撃をバルディッシュザンバーに巻きつけるかのようにまとわせ、己の魔力も上乗せしてから、叩き返す。

しかし、開いた穴はすでに四分の三は塞がっており、たとえ届いても「奴」は難なく弾くであろう。

だがらこそ、フェイトが打ち出したのは、そっちの方向ではなかっ

た。

「ヴィータ！！お願いッッ！！！」

「まっかしとけェ！！！！うをおおおおおおおおおおおおオオオオオオッッッ、りゃあァァァ！！！！」

その行き先は、ヴィータ。

彼女のハンマー、グラーフアイゼンを以ってして、彼女も魔力を上乗せいしてから飛んできたそれをゆりかごに向かって撃ち返した。

ドグオォグァッッ！！！！！

その衝撃に、ゆりかごが少し揺れ、その船体に傷ができる。

そこに向かって、エリオが電撃槍となって突貫し、一気に貫通しようと試みる。

しかし、電撃のようなレーザーを放つ砲台が振るわれ、まるで鞭のようにしなってエリオを打つ。
それをスバルがガードして、それでも反動で吹き飛ばされてから、ウイングロードに着地する。

「すみません、スバルさん！！！」

「気にしない！！今はあれをぶっ潰すよ！！！ティア！！！」

「わかってる！！でも・・・あれの行動が・・・・読み切れない！！！だから」

「とにかくぶちのめせばいいんだよね！？」

「その通りよ！！！わかってるじゃない！！！！」

全員が一丸となってゆりかごへと向かう。
だが、いくら意気込んでも、勝っているのは心意気だけ、というのも現実だ。

到底、ゆりかごを落とすには至らない。

『どうする？これはやはり、三度目の正直ってことだろう！？ハァアアアア！！！！』

空にいる攻撃対象が減ってきて、「奴」の砲撃がついに全体からピンポイントへと移って行く。

フォワードを打ち、シグナムを打ち、シャマルを打とうとしてそれを庇ったザフィーラごと撃ち落とし。
ヴィータがバリアと旋回でかわすがオーロラに挟み込まれて撃墜され。

更にそのオーロラがまるでスキャンでもするかのように下から上へとかけて走り、局員たちを落としていく。

その攻撃になのは、フェイト、はやては耐えるが、立ち上がったと

言ってもすでに限界な蒔風の身体がグラついて動きが止まる。

そこに奴が砲撃を当て、何とか弾くが、蒔風の身体はその反動で地面に向かって落ちていく。

「舜君！！！」

「あかん・・・・もう限界や！！！」

なのは達の身を案じる声が聞こえる。

だがそれでも、蒔風は地面にまでは落ちなかった。
決して落ちることはない。否、決して落ちてはいけないのだ。

「負けるわけには、いかないんだ」

血を吐きながら、足をぶらつかせながら、蒔風が呟く。

「もう俺は。二回も負けている。ああそうさ・・・・おまえの言う通りだよ。二度あることは三度ある、じゃあ困るんだ」

蒔風は呟いていく。

それは、決意。

もはや決して負けないと。
世界の理不尽には屈しないと。

二度も負けたんだ、今度は勝つ、と。

『無茶するなよ。おまえ、俺が出ていった時からもう体ボロだったろ？』

「いいや・・・・勝つ、なんてのじゃダメなんだ・・・・オレが求めてるのはそんなんじゃない・・・・・」

『おい・・・・』

「奴」の言葉を無視して、蒔風が語る。

一体何に？

決まっている。この世界にだ。

蒔風が今勝つべきなのは、「奴」にであり、世界にであり、今までの自分にであった。

「ふんぞり返ってよく見てろ！！！！これが俺の三度目の正直だ・・・・これが・・・・・ここからが大逆転って奴だからな！！！！！」

ゴォウ！！！！

蒔風の翼が唸る。

しかし、今までのキレはもう無い。

身体がクラ突き、意識が一瞬途切れにそうになる。

【Ｍａｈｏザッ・・・・　Ｓザザッ・・・ｏ　ｌｙｒｉザｌ　ｎｏザザｈａ　ザァーーーーッッｋｅｒＳ】－ＷＯザザザァッ・・・・・ＮＫ－　ザシッ・・・・・Ｎ～

いつもは発動するとすぐに聞こえてくるあの音声も、ノイズだらけでしっかりと出来ていない。
世界に不都合はない。

ただ、蒔風のコンディションの問題だ。

しかし、「奴」はそれで安心することなど、出来ない。

蒔風が実行しようとしているのは、世界（ワールドリンク）の奇跡。
しかし、彼にはそれを一瞬で発動させるだけの体力がもう無いのだ。

と、いってもしっかりと立ち止まって呼吸を整えて行えば、それは

おそらく発動できるだろう。

そしてそれだけの隙を、「奴」が見逃すはずがない。

『ジ・エンドだ！！！！！蒔風ェ！！！！！』

ゆりかごの砲撃に、「奴」の漆黒の波動砲までもが混ざり合って、蒔風に迫る。

「舜君！！！！！」

「舜ッッ！！！！！」

「あかん！！！・・・・・え？なんやて？」

「はやてちゃん！？」

「そんなことって・・・・・・」

その瞬間、はやてが通信に驚愕する。

そしてその内容が、なのは達の目に飛び込んできた。

ゴォッ！！！！カッ・・・・・・ゴゴォォォォォオオオオッッッ・・・・・！！！！！

アースラだ。

長らく彼女たちと共にあり、その成長を見てきた船が、ここでその先を開くため、蒔風とゆりかごとの間に飛び込み、砲撃をその身に受けて轟沈した。

「ア、アースラが！？」

「な、中の人は！？」

なのはとフェイトがはやてに聞く。

聞かれたはやてのその首は、横に振られてしまう。

しかし、それは決して被害者が出たというわけではない。

「だれも・・・おらんて」

「え？」

「アースラのロングアーチスタッフは、一人残らず脱出しとる。あのアースラには、誰も乗っ取らんのや」

そう、このアースラは無人だった。
誰も乗っていない船。いやむしろ、この船は飛べないと言ってアラームを鳴らしたのではなかったのか？

それにもかかわらず、アースラはアラームを鳴らし、誰もいないその体で、このピンチをチャンスに変えたのだ。

戦艦には基本、そこまで高性能でなくとも、ＡＩが組み込まれている。
だからもしかしたら、アースラはわかっていたのかもしれない。

この戦闘が、自分の最後のものになることが。
そして、その戦闘で、自分の中で暮らし、過ごし、笑っていた彼らが、危機にさらされているのを察知し、彼らのために戦える最後のチャンスだという事が。

無論、普通に考えれば、そんなことはあり得ない。
戦艦が自律行動など、とりはしないのだ。取るはずがないのだ。

おそらく、しっかりと説明するならば、戦闘の際のバグとして処理されるだろう。

しかし、だれひとりとして、そんなことは思えなかった。

アースラは、その最後の瞬間まで、自分達と共に戦ってくれた、仲間だったのだと。

機械のそれに、感じる心はなかった。

しかし、そのＡＩは、それがそうであるという事だと「考えた」

爆炎を上げて落ちるアースラ。
外壁が崩れ、外からブリッジが見え、それが蒔風の目に止まる。
崩れた壁の隙間から見えたブリッジのモニターには、ただ一文だけ、
こう表れていた。

《ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ．Ｍｙ　Ｆａｍｉｌｙ》

『ッ・・・・この・・・・・・・廃艦寸前の鉄くずがァ！！！！！！』

「・・・・はは っ・・・・・残念ながら、ｔｏ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．だったみたいだなァ！！！！世界も粋なもんを用意してくれるよな・・・・行くぜ・・・・・大逆転劇ってのを、見せてやる！！！！！」

【Ｍａｈｏｕ Ｓｙｏｕｊｏ ｌｙｒｉｃａｌ Ｎａｎｏｈａ－－Ｎａｎｏｈａ Ａ's Ｓｔｒｉｋｅｒｓ！！ＡＬＬ ＳＥＲＩＥＳ ＣＯＭＰＬＥＴＥ！！！】－ＷＯＲＬＤ ＬＩＮＫ－ ～ＷＥＰＯＮ～！！！

その発動と共に、空に大きく二つ、光が輝く。

その光の元は、フェイトとはやて。

今、蒔風が敗北してきたすべてのものに、逆転勝利を突きつける！

！！！！！

フェイトの身体がらホログラムのように文字がいくつも浮き出してきて、それがだんだん人の形を取って行く。

同時に、はやての魔導書「夜天の書」のページがものすごい勢いでめくられていき、やはりそこからもホログラム状に文字が浮き出て人の姿を取って行く。

そうして現れたのは、二人の人物。
もはや、会う事などないと思っていた人物だった。

一人は、フェイトと二つ瓜の少女だった。
ただ、フェイトが大人しそうなのに対し、とても元気のありそうな、活発な目をして、リボンの色は緑色だ。

もう一人は、長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性の姿をしている。
静かな紅い瞳に、溢れんばかりの優しさを以って、はやての事を見つめていた。

「え？」

「そんな・・・・・ホンマに・・・・・？」

「夢じゃ・・・・・ないよ」

「帰ってきました。我が主」

「え？え？も、もしかして・・・・・・」

「どうもです！！フェイトのお姉ちゃん、アリシア・テスタロッサと！！！」

「祝福の風、リィンフォース。お二人ともも、お久しぶりです」

その二人が名乗りを上げる。

それはこの世界の理不尽によって奪われた者たちだった。
それは蒔風が助けようとして助けられなかった者たちだった。

しかし、ここに、それは逆転する。

最後に世界は、彼に救いを。

決して取り戻せないはずだったものが、ここに奇跡を以って帰ってきた！！！！

「アリシア・・・・・・！？」

「リィン・・・・・・リィン！！！！！！？？」

その突然の出現に、一番面喰っているのはフェイトだ。

なにしろ、彼女のことは知っていても、しっかりと会うのは初めてなのだから。

「大丈夫?フェイト。ほら!!お姉ちゃんだよ?」

「え?え?えっと・・・・うぇ・・・・あれ?な、涙が・・・・・」

「・・・ありがとう。私のせいであなたが酷い目にあったのに、あなたは私のために泣いてくれる。私はね?ずっと見てたよ?フェイトが今まで頑張っていたのを、あなたの中から、ずーーーっと」

「うん・・・うん・・・・・うえええええええええ・・・・・・」

そしてフェイトはついに本泣きしてしまう。

しかし、はやてはすでに本泣きだ。
失われた家族が帰って来たのだから。

「リィン・・・・リィン・・・・・・!!!!!」

「ご心配をおかけしました。ですがもう、私はあなたの元を離れま

せん」

「うちだってもう放さへん・・・・もうずっと、一緒の家族や！！！」

「はい」

その光景に、蒔風の目頭は熱くなっていた。

ああ、やっと形になった。

俺がこの世界に残せた物が、やっとあったんだ。

こんなオレでも、何かを残せる。

そう思うだけで、心が満たされた。
そんな思いで、蒔風の心は一気に羽ばたいた。

大丈夫だったんだ。自分が世界をめぐる意味は、確かにこうして存在したのだから！！！！！！

『なにを・・・・・しているんだ・・・・・・』

「・・・・ッ・・・・・あん？」

それを見ていた「奴」が、震える声で言う。
それに対して、蒔風が涙に声を少し詰まらせて、反応した。

『そいつらは・・・・過去に失われたものだぞ！！！！それを復活させることが、どういう事かわかっているのか！！！！蒔風！！！！』

「十分に、な！！！わかっているさ・・・・・だがよ、世界の奇跡が認めちまったんだ。許容するしか、ねえだろうが！！！！！」

『まともでないぞ・・・・まともじゃあない！！！！！そんなことは認めない・・・・大切な人がいなくなって、悲しいのはそいつらだけじゃない！！！！だと言うのに！！！！なぜそいつらのだけが戻ってこられる！？不公平だろうが！！！！いいのかよ・・・・・そんな差別が、許されるとでも思っているのか世界がよオオオオオオオオオオ！！！！！！』

「奴」の叫び。

主要人物だけ、こんな優遇許されていいのか。

なんでお前らだけが許される。

何故世界は等しくないんだ、と。

「ああ・・・確かに、世界は理不尽だ。こんなこと、許されるべきじゃないだろう。だけどな・・・もうここにあるのは一つの命だ！！！それを奪うというのなら、それは許されることじゃない」

『いつも通りの言い訳か・・・開き直りか！！！！！脇役がそれをいえば叱咤され、主人公なら称賛される！！！そんなのが・・・クソッタレって言うんだよ！！！！』

そんな奴の言葉に、蒔風が、本当に誰にも聞こえない声でボソリと、一言だけ言った。

「ま・・・こいつら、厳密には本人じゃあないけどな・・・・・」

しかし、その声はだれにも、「奴」にすらも届かない。

そうして蒔風がなのは達の元へと向かって行く。

その周辺に、他の六課メンバーも集まって行く。

「リィン・・・フォース・・・・か？」

「ええ、シグナム。帰ってきましたよ」

「よがっだぁぁあああああ・・・・・・」

「ほらほら、ヴィータちゃん・・・・」

「えっと・・・フェイトさん・・・じゃないんですよね？」

「そ！！私は、アリシア・テスタロッサ！！！あ、でもフェイトと同じようになるから、どうなるのかな？」

「わ、私はもう・・・・こうしてるだけで・・・・・」

初対面同士だったり、感動の再会だったりでワイワイしているが、そこに蒔風が手を叩いてやってきた。

「おまえら！！今の状況わかってるか？そこの二人も、いきなりで悪いが力を貸してくれ！！！！行くぞ！！！！」

「「「

そのデバイス、本人たちに全員に、その力が付与される！！！！

『砕け散っちまえよォァ！！！！！！！！』

「動け！！！！！！」

ドォウ！！！！！

ゆりかごが、「奴」の怒りに呼応したように暴走を始める。

が、その攻撃の一切は誰ひとりにも当たらない。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム、押してまいるッ！！！！レバンティン！！！！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！！！》

その攻撃を、シグナムがレバンティンの連結刃のドームですべて打ち消していったからだ。

いくらまとめれば驚異の砲撃でも、まとまる前の短髪ならば、恐れることはない。

しかもその連結刃のドームは、ゆりかごをすっぽりと覆うまでに巨大なモノ。

撃ち落としそこなうなどという事は、あり得ない！！！！

『なぁッ！？』

「行くよッ！！フェイト！！！」

「うん、アリシア！！！！」

『小娘が・・・・粋がるなぁ！！！！！！』

そうしてすべての攻撃を防がれたゆりかごに、アリシアと、目元が赤くなっているフェイトがバルディッシュを一緒に握り、ライオットザンバーの大剣でゆりかごに向かって上方から突撃して打ちおろした。

その刃は強化され、さらに二人の魔力を吸って、ゆりかごを前後半分に切り分ける！！！！

『バカな・・・・このゆりかごがッ・・・・・』

「行くわよ！！スバル！！！さっきと同じ要領で！！！」

「オッケーー、ティア、いつでもいけるよ！！！」

「ストラーダ！！スバルさんを、ちゃんと運んでいくんだぞ！！！」

「ブーストかけます！！！フルドライブ！！！！」

そこで、フォワードたちの準備が完了する。
やっていることは、最初にゆりかごにぶちかましたものと同じだ。

エリオの電気変換された魔力でスバルの身体能力を底上げし、キャロのブーストで強化されたストラーダのブースターで突っ込んでいく。

ただ違うのが、今度はストラーダを以って突っ込んで、振動拳ならぬ振動槍になるという事。
スタートダッシュに、クロスミラージュの第三段階「ブレイズモード」で、スバルを打ち出していくこと。

そして何より、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが働いている！！！！

「必　中　粉　砕！！！」

「フラストレイトアロー！！！！！」

「「イッケえええええええええええええ！！！！！！」」

「うをおおおおおおおおおおおおおオオオオオオッッッ！！！！！」

ドッ・・・・パァン！！！！！

スバルが一瞬のうちに音速を超え、その空気との摩擦に炎を纏い、
ゆりかごの真っ正面から突入し、そのまま真っ直ぐに後部正面から
突き出てきた。

メキメキという音を上げ、ゆりかごが軋んで落ちていく。

しかし

「バラけさせへんよ！！！！行くで！！リィンフォース！！！！」

『はい！！主はやて！！！！！』

「『エアロック・バインド！！！！』」

ゴォン！！！！

空中でバラけ、崩壊し始めるゆりかごを、はやての空間バインドでその場にとどめる。
その空間はまるでモノクロのように色が褪せ、名前の通りに空間ごとその動きを止めていた。
まるで、まとめて吹き飛ばしてやると言わんばかりに。

「これでこちらの攻撃ができるな。我らヴォルケンリッターに、二代目祝福の風が五人!!!!!すべてをかけて、貴様を穿つ!!!!」

シグナムがリィンとユニゾンし、レバンティンを弓状に変形させる。

「フルドライブ!!ボーゲン、行くぞ!!!」

「「「『了解!!!!!』」」」

シグナムが弓を引く。
が、まずその大きさがいつのも1．5倍にまで大きくなっている。

そして弓の弦は、クラールヴィントの魔力糸によって紡がれていた。
それだけの巨大な弓を引く弦は、限りなく強力なものでなければならない。

そして矢は、先端にザフィーラの鋼の軛が、尾の方にはアイゼンのブースターがセットされ、その推進力はとうにマックスだ。

「翔けよ！」「「「「隼！！！！！」」」」

「「「「「シュツルムファルケン！！！！！」」」」」

ヒュン・・・という静かな音を立てて、それでいて火焔を纏って爆進するその矢は、五メートルほど進んだ後に、ブースターによ手、本当に爆発したかのような推進力で一気に吹っ飛んで行った。

真横から後部を狙い、反対側まで容易に貫いたそれは、ブースターによってUターンして、今度は別の場所を貫いた。
そしてまたターンして貫き、またターンする、その繰り返し。

まるで紅い糸で裁縫をしているかのように、爆炎を跡に残しながらゆりかごを縫って行くその矢は、ついに真上から奴がいるであろう聖王の間に手、一気に炸裂、爆破した。

その船体の後ろ三分の二はすでに瓦礫となって、ゆりかごの前部上半分が吹き飛んで、その爆煙の中からグラーフアイゼンが回転しながら飛んでくる。
そしてそれをヴィータがキャッチする頃には

管理局最強　砲撃のエキスパート　エースオブエース、高町なのはの集束が、すべて完了しきっていた！！！！

「覚悟して・・・これはただの集束じゃないよ・・・・・この場に残った皆の魔力。今倒れてる人たちの、残った魔力。そして、みんなのあなたを倒すという願いが、すべて集まったこの砲撃！！！受けてみて！！！」

『ガッ・・・・くぉ・・・・・空間バインドッ・・・・・・この・・・・・』

はやての空間バインドに、身動きが制限された奴が舌打ちをする。

なのはのこの砲撃は、すべての者の、その想い。
ただの魔力だけじゃない。すべての願いと、可能性が乗っている。

魔力を持たない者の願い(ちから)をも乗せたその砲撃は、まさにこう呼ぶのがふさわしいだろう！！！

【Ｍａｈｏｕ　Ｓｙｏｕｊｏ　ｌｙｒｉｃａｌ　Ｎａｎｏｈａ－－Ｎａｎｏｈａ　Ａ'ｓ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ！！ＡＬＬ　ＳＥＲＩＥＳ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ！！！】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！！

「オール！！！！！」

≪≪≪≪スタァァァアアアアアアアアアアア！！！！！！≫≫≫≫

『『『『『ライトォ！！！！！』』』』』

【【【【【ブレイカァァァアアアアアアアアアアアア！！！！！】】】】】

その技名を、すべての管理局員が叫んでいた。

まさしく、オールスター。

誰一人として、この砲撃に、欠けた者などいないのだから！！！

『クソッ・・・・これはもうダメか・・・・・・ッッ！！！！』

桜色の砲撃が、ゆりかごを吹き飛ばす。
その太さは空間バインドでロックされたゆりかごをすべて包み込み、
そのすべてを瓦礫に変えて、原型というものをなくしていった。

そうして、世界すべてを振るわせるような轟音と共に、ゆりかごだ

った残骸が、地表にバラバラと落ちていく。

戦いは終わる。

その残骸跡に、聖王の玉座だけが、まるで墓標のように立って残っていた。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～これが世界への大　逆　転！！～（後書き）

最終決戦
ここに
完　結！！！！！

アリス「やっと来ましたか！！にしてもまさかあの二人が帰ってくるとは！！！！」

こういう展開は最初から考えてました。
ここにて蒔風はついに世界に勝利する。

それどころか、今までの敗北をチャラにするくらいのものでです！！！！

ア「しかし、「奴」のいう通りこれは死者復活。あまり許されることではないのでは？」

そこは次回に説明しますよ

ア「そういえば蒔風も何か言ってましたね。どういうことなんでしょうか？」

それを含めて、また次回です。

ア「そしてまさかのアースラ活躍」

この戦いの跡、ただ廃艦されるなら、こういう散り様がいいかな、と

ア「いつか言ってた活躍させるあいつ、っていうのはこれだったんですか」

その通り！！！
まさかアースラだと思った人は・・・・・いないと思う！！！！

幸運なことに、感想でそこに触れてきた人はいなかったから、助かりました！！！
自分は嘘をつけないので・・・・・

ア「次回、蒔風、世界を去る」

ではまた次回

やっと長かったこの世界が・・・・・終わるぞーーーーーーーーー！！！！！！！！

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～事件のその後～

ジェイル・スカリエッティによる大規模な次元世界間でのテロ。
後にＪ・Ｓ事件と呼ばれた事件の、その後はというと

まず、崩壊した地上本部は機能している。
と、いっても、建物自体はまだ工事もなにも始まっておらず、とりあえずその機能をまだ生きている他の地上施設に移し、何とか臨時で動かしている状態だ。

それとは対照に、機動六課隊舎はもうすでに元通りになっていた。
あの事件の後、何故だかどこよりも早く工事が着工され二日もしないで元通りになった。

まあ、まだ一応の原形はとどめていたからそれだけできたのはわかるが、なぜこんなにも早く工事が始められたのか。
はやて達はその理由は知らないが、なんだかあのおじさんの顔が浮かんでくる。

そしてそのおじさん、レジアス中将だが、管理局から去るのだそうだ。

今までやってきたことの落とし前をつける、といって管理局にすべてを自白したのだが、どう調べてもその証拠が出てこない。
いくら自白しても、そうである証拠がなければただの被害妄想だ。

しかし、そうはいっても納得がいかないのはレジアス自身である。
そうして、レジアスは辞職した。しかし、いまだに管理局から助言が求められたりと、彼の人生はまだ忙しくなりそうだ。

そんなことを思いながら、管理局員はかき集め、そして調べ上げたあるデータを消去した。

首謀者曰く、「グレアムおじさんと同じよーなもんや。それに、あの人恨んだってしゃーないやろ？」だそうだ。

逮捕されたスカリエッティと、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロの五名は、その後管理局に協力することを拒み、各人異なる次元世界にある監獄に投獄された。

セッテは保護組に入った。

あのアインヘリアルの砲撃の際、なぜ青龍が自分を助けたのかを疑問に思い、それを聞いたものの今一つ納得できなかったらしい。そこで、「その答えを知りたい」と言って一人で様々な世界を回ると言いだしたのだ。

それに対し、管理局は「構成プログラムを終了し、誰かが保護責任者になったら」という条件をつけて承諾した。
今頃は先に投降したナンバーズと共に、施設でプログラムを受けているだろう。

なお、その施設にはルーテシアとアギトも一緒におり、彼女の母、メガーヌが目覚め次第引き合わせ、共に暮らしていくことが可能だそうだ。
と、いっても彼女が自分がしたことをそう簡単に許せる人間かと言えばそうではないので、それなりの制限がつくのだろう。

ちなみにナンバーズたちの保護者候補としては、スバルの父、ゲン

ヤ・ナカジマと、聖王教会のカリム・グラシアが立候補している。
まだ未確定ではあるものの、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、の四人はナカジマ家に、セイン、オットー、ディード、セッテが聖王教会に身を置くことになりそうだ。

セッテの保護者に関しては、本人の希望で青龍の主、蒔風が指名されていたのだが、本人がこれを頑として拒否。
説得の末、各世界に施設を持つ聖王教会の方が旅をするのに効率がいい、と言われて最終的に聖王教会保護下になった。

なにはともあれ、彼女たちの未来は大きく開けた。

そこから自由という名の不自由を、苦しみ、楽しみを自分で選択し、生きていく。
この施設から出ていくのも、そう遠くはない。

次にヴィヴィオだが、あの後にもなにひとつ後遺症はなく、翌日に

病室のベッドで目を覚ました時には、目の前に機動六課メンバー全員が見舞いに来てくれた。

その後、ヴィヴィオは正式になのはが引き取り、高町ヴィヴィオとして家族になった。

ヴィヴィオが蒔風もパパになってと叫んだが、やっぱり本人が拒否し、結局フェイトが後見人になった。

ちなみにその時ヴィヴィオを泣きやませたのは

「大丈夫！！絶対に舜君をパパにしてあげるから！！！」

というなんだか鼻息の荒いなのはの言葉だったらしい。

フォワードたちは事件が終わった翌日からすぐに訓練を始めていた。

あれだけ凄かったの事件の翌日に！？と思ったが、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫで体調は最高になり、それに加えて特に大怪我もしていなかったので仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

今日も彼らの悲鳴に似た掛け声が訓練場から聞こえる。
覚えることは多く、機動六課運用期間終了まで、訓練スケジュールはびっしりだそうだ。

そして、はやて、というか、八神家は大変な大盛り上がりを見せていた。
なにせリィンフォースが戻ってきたのだから。

困ったのは初代、二代目の二人だ。
なにせ呼び名が同じでいちいち反応してしまう。

だから今のところは初代を「リィンフォース」、二代目を「リィン」と呼んで分けているらしい。

しかし、それでもリィンフォースの悩みは尽きない。
今度ははやてがリィンフォースから離れなくなってしまい、家でも職場でもべったりなのだ。

ヴィータやシグナム、ヴォルケンズたちは「すぐに戻んだろ」、とあきれ顔だったが、本人は少し困り顔だ。
と、いっても抱きついてからの上目使いで「リィンフォース～～～

♪」と言われた瞬間グネグネと身をよじらせて悶えていたから、まんざらでもないのだろう。

一方リィンははやての隣を奪われて悔しいのか、ヴィータに泣きついてしまった。

そう、シグナムにアギトがつくことになって、もはや逃げ場がそこしかないのだ。

「リィンは・・・もうヴィータちゃんしか・・・うう～～～」

「おーおーよしよし。まあ気にすんな。ああなってんのも今だけだから」

「余裕ぶっこいてて・・・フッ」

「リィンお前どうしたよ!?」

今日も今日とて、八神家は平和である。

そしてはやて同様、大切なモノを取り戻せたフェイト。

現在、なのはと相部屋だった彼女の部屋は、フェイトとアリシアの部屋になっている。
なのはは新しい部屋でヴィヴィオと一緒だ。

「アリシア・・・・あの・・・・・」

「・・・・・・」

「えっと・・・・・」

「ダーーーーッッ!!!!!」

「ひぇ!?」

「もう、いつまでももじもじしてないで!!!言ったでしょ?私はあなたを知っているって」

「え?でも・・・・なんで?」

「うーーん、なんだろ。あそこで目覚めるとき、いろいろ知ったのよ。いやぁ、大変ね、フェイトも」

なんとも軽い。いや、気さくなだけだろうか？
アリシアの言葉には、本当に会えてうれしいよ！くらいの意味しかなかった。

「ねね、私もフェイトと一緒に働きたい！！」

「え！？」

「いーじゃんいーじゃーん。おねーちゃんも一緒がいいぞぅ！！そして今までの分の時間をごっそりと取りかえすんだから！！！」

「うん・・・そうだよね！！あ、でもそのためにはまず戸籍がいるかな・・・・」

「どうするの？」

「大丈夫！！執務官やってると戸籍のない人を相手にしたり保護したりしてるから、そういうのを作ったりしてごまかすのは得意だよ！！！」

「いやフェイト、それはいけないことだっていうのは私わかるよ？任せるけど」

なお、近々シャーリーとマリーがアリシアのためにデバイスをプレゼントするらしい。
もしかしたら、「雷光の魔導師」の異名は、フェイト一人のものではなくなるかもしれない。

そして、なのは。
今はヴィヴィオと楽しく暮らし、良好な親子関係であるようだ。

決戦の後、なのはは蒔風に想いを打ち明けたが、やっぱりというかなんというか、蒔風はこれを拒否した。
しかし、なのははすでに青龍からそのことは聞いていたので、それでも絶対に振り向かせて見せると息巻いていた。

なお、その際他の世界でもそういった女性がいると聞かされて、まだ見ぬライバルに激しい闘争心を燃やしていたりする。

彼女の身体には何一つとして一切の反動や負担は残らなかった。

「舜君のプログラムの賜物ね」とは彼女の主治医、シャマルの言。フォワードたちの訓練にも手を抜くことなく、彼女は全力全開で鍛え上げるのだろう。

機動六課は、ゆりかごを落とし、更には「奴」という巨悪を撃ち払った部隊として「奇跡の部隊」として話題になった。

そこでは「銀白の翼人」蒔風舜の事も一緒に知られ、翌日、彼のベッドには多くの見舞い品が送られてきて、廊下まで並べられたほどだ。

更には週刊誌などのマスコミが殺到してきて聖王病院は混乱したが、そこは恐ろしい魔王（なのは）によって全員返り討ちにされた。

彼は管理局のトップ三人から元帥になってくれ、とまで頼まれたが、これを拒否。
だったらせめて表彰をともいわれるが、それは言いかけたところで却下した。

自分のことは口伝ぐらいの言い伝えで残すくらいがちょうどいい。

そう言って、記録に残すことを許さなかったのだ。
しかし、おそらくそれは無理だろう。

全管理局員が知ったとなっては、百年くらいじゃこの名声は衰えることなどないだろうからだ。

不幸中の幸いとしては、彼の名前を知られても、顔まで知ってる人はいない、という事だ。

知ってる人は知っている。
その程度で済んだのは本当によかったと、蒔風は胸をなでおろしていた。

ーーー

現在時刻、１８：００
蒔風が眠りから覚めてみると、彼のベッドは病院の大会議室みたいな部屋に運ばれていて、頭にはパーティー用の三角帽子がかぶせられていた。

なんでもこれから「事件解決&アリシア、リィンフォースお帰りなさいパーティー」を開くのだそうだ。
なお、パーティー名が書かれた看板は、「アリシア」と「リィンフォース」の名前どっちを先に書こうと揉めたのか、何度も書き直された跡が見える。

「あの・・・・俺この通り動けないんですが」

皆パーティーやる気マンマンだが、蒔風は本人のいう通りベッドから動けない状態だ。

と、いうのも腕、右足はギプスに覆われ、点滴も三本くらい通ってるのだから、そりゃ動けないのだろう。
そしてそうでなくとも、ヴィヴィオが目覚めた時に無理矢理病室抜け出して会いに行って、すぐにやってきた病院長からカルテ（縦）

で頭を殴られて昏睡、そこからベッドに縛り付けられていたのだ。

「でも、院長先生からはこれならいいよ、って言われましたし」

「それに、これ以上舜さんを視界からはずしたら、どんな無茶するかわかりませんし。こうしてるほうが安心です」

おそらくここまでベッドを運んできた二人だろう。
スバルとエリオが拳を握って語っていた。

「舜さんの怪我って、まるで私たちがしなかった分全部引き受けたみたいなんですよね」

「そんなことないぞ。ってか今さらだけど、俺の身体ってワールドリンクやった時から攻撃食らってないよね？あの時ある程度回復したから、このギプスいらないはずだけど？」

その蒔風の言葉に、そんなことないです、ときつめの口調でシャマルが言う。

「確かに元には戻ったけど、疲労自体はその体に残ってたのよ？腕なんて簡単に疲労骨折したわ」

「いつ」

「ゆりかご落とした後舜君が気絶して、運ぼうとしてスバルさんが持ちあげようとした時にポキッと」

「そこで落ちそうになったのを私が支えようとした時に、反対の腕が」

「で、最後に落下した舜君を私が掴んだ時に右足が・・・・・ね？」

え？（；¬△¬）となる蒔風がスバル、シグナム、なのはの方を見る。

その視線にスバルはあ、あはは～～と笑い、シグナムは申し訳なかったというかのように咳ばらいをし、なのはは両手を合わせてごめんね？としていた。

「勘弁してくれ・・・・・」

「あはは。でも、これはこれでいいと思うんだ」

「なんで？」

「だってこれなら舜君にアーンって出来るでしょ！！！？」

「なにを拳握りしめていっとるんだお前は！？そこ！！フェイト、はやて、ＧＪしない！！」

「舜、あっちはアリシアだよ」

そんなこんなでパーティーが始まった。テーブルには実に多くの食材が並んでいる。

一瞬食べられるのか？と思った人も何人かいたが、スバルやエリオ、そしてギンガを見て「ああ、大丈夫だな」とか納得した。

「体重・・・・・・」

「（ビクッ！！）」

「デブ・・・・・」

「（ビビクッ・・・・・！！！！）」

「ギン姉。なんか舜さんの言葉に皆反応してるけどなんなんだろーね？」

「さあ？それよりスバル、食べましょ。向こう一週間分は溜めないと、おなか減っちゃってもう駄目だわ」

「うん！！いくら溜めても全部どっか行っちゃうもんね、私達！！さあ、食べるぞーーー！！！」

「ぎゃあ！！！こっち動けないのになんでお前らそんな一方的に殴れんの！？おかしい！！おまえらおか、ブホッ！！！！」

「このッこのッ！！！！」

「もっと考えてから言ってくださいッッ！！！」

「やめて！！フェイトちゃん、うちを止めんといて！！！」

「ダメだよはやて！！！さすがに魔法はまずいって！！アリシアも手伝って！？」

「あっはははははは！！！やっぱ知ってるだけじゃダメだわ、こうして見てやっと面白い！いいぞ～～、もっとやれ～～☆」

蒔風を殴るなのは、ティアナ。
攻撃魔法を仕掛けようとシュベルトクロイツをブンブン振るはやてと、それを後ろから押さえるフェイトに、完全傍観爆笑者アリシア。

ちなみに最初に攻撃したのはキャロで、その拳は蒔風を守ろうとしたエリオに命中した。
今は蒔風のベッドの隣辺りでキャロが正座したエリオに説教している。

「あれは女の子のパンチじゃないよ・・・・ブーストかかったスバルさんのより痛かったもん・・・・・」

エリオは知らない。
恋する乙女は強いが、怒りに狂った乙女は恐ろしいのだ。

「スバルおねーちゃん、このお肉いーい？」

「ん？いーよ？たくさん食べるんだよー？」

「うん！！！」

むしゃむしゃと食べているスバルたちのお皿に山のように積まれた肉を、ヴィヴィオが貰ってなのはと蒔風のベットに向かう。

「あの中に向かって、しかもご飯を持って行ってあげるとは・・・・」

「ヴィヴィオ、強くなったね」

山積みになっている一本の骨付き肉、いわゆる「マンガ肉」を食べながらスバルとギンガは感心していた。

ちなみに食べ方としては

・まず、縦に口に入れる

・そして、骨を掴んで引き抜く

・骨だけ出てくる

というものだ。

「こんがりしててうまい！！！」

「こんがり肉！！！スタミナ回復！！！」

「これでいくら走っても大丈夫だね！！！！」

おまえらはどこのまわしもんだ？

「時にフェイトちゃんはあの言葉大丈夫なん？」

「え？わたし、いくら食べてもここに・・・・」

「「ぶっ殺すよ！？」」

「えええええ!?」

そしてフェイトの言葉に今度はヴィータ、はやてがキレた。
まあ、フェイトが「ここ」と言ったのがどこであるかは、皆さんの想像にお任せします。

「いてて・・・酷い目にあった・・・・・」

「僕もとばっちりですよ・・・・」

「すまんのぅ・・・・で、時にエリオはキャロとどうなの?」

「ブボッッッ!?」

殴り終わられ、エリオが蒔風のベッドのとこにある椅子に座って呑んでいたジュースを噴き出す。
顔が真っ赤なのはむせたからだけではないだろう。

「な、ななな、なんでですか!?」

「え?だってお前ら、いいコンビじゃん。お似合いだとおにーさんは思うけどなァ」

「じゃ、じゃあ舜さんはなのはさんのことどうなんですか!」

「え?ああ、あいつは俺にとって妹みたいなもんだからにゃー。それに、俺は誰かに恋することはないんだって」

「う・・・・」

「ほれ、諦めてお前らの赤裸々なお話を聞かせんしゃい」

「フェ、フェイトさ~~~ん!!!舜さんがいじめるーーーー!!!!」

「ほーれ、お姉さんが慰めてあげよう」

「エリオ君!!そっちアリシアさん・・・ってなに胸に顔うずめとんじゃボケぇ!!!!」

「まっ、これは不可抗りょブゲッ!?」

「エ、エリオーーーーー!!!!」

走り去るエリオ。

立ちふさがって、それを回避しようとしたエリオを捕まえて抱きしめるアリシア。
それにとんでもない声を出してドロップキックを放つキャロ。
叫ぶ蒔風。

ちなみにアリシアは「やっぱ面白〜〜い」とか言って指さして笑ってる。

「ひ・・・ひど・・・い・・・・・」（ガクッ）

「い、いいのか？エリオ、完全に伸びてるぞ？」

「ここは病院ですから」

「いや、理由になってねえよ！？」

「それにしてもなんでいきなりこんなことしたんだ？」

「え？」

パーティーも終わりつつあり、眠ってしまったヴィヴィオを膝の上で撫でながら、蒔風が隣に座るなのはに聞いた。

「だって・・・舜君、「奴」を倒したからすぐにいなくなっちゃうんでしょ？」

「ああ・・・そういう事か・・・・・」

「だから、想い出を残すなら今のうちかなぁ、って」

「ふーん」

「でも！絶対に会いに行くからね！！」

「くんなくんな。来られても困る。なんでそんなにするわけ？」

「す、好きだから！！！」

一瞬どもりながら、なのはが力説するように言う。
それを聞いて蒔風はため息をつく。

「いいかなのは。もっといい男がいるって。みんな、ではなく、おまえを大事にしてくれる人が、な」

「そんなことないよ。舜君は、私を守ってくれた」

「「みんな」の一部としてな」

「その意識、変えてあげるから!!!」

「そう言って息巻いて、会えるかわかんねぇんだぞ?」

「会うよ」

「え?」

「絶対に、また会うもん」

「・・・・・さいで」

そうして、パーティーはお開きした。

それから二、三日、蒔風は病室で過ごし、後に六課隊舎へと生活の場を移した。

もう日常生活には何ら支障も無く、軽い物なら模擬戦もできるそうだ。

そうしてから一週間が過ぎた。

――――――

そして待つこと、十分。

待ち人が、そこに現れた。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～事件のその後～（後書き）

ごめんなさい続きます。
アリシア達の事も言わせるとか言ってすみませんでした次回です。

今回、とりあえず各自のこれから、みたいのを書きましたが、「あの人は？」的なモノがあったら言ってください。
書き加えるなり、返・・・信！！なりでお返しいたします。

アリス「で、次回こそ終わるんですよね？このなのは！！！」

ええ終わります。
やっとここまで来たって感じですよ全く

ア「次回、待ち人、来たる」

ではまた次回

全力全開手加減なし…機動六課で最後の模擬戦！

深夜の訓練場

そこに、二人の男が立っている。

一人は蒔風、もう一人は、蒔風が待っていた人物だ。

「よお」

「・・・・おう」

「やっぱきたか。まあ、大体このタイミングだと思ったよ」

「・・・・・・わかるか」

「クソみたいなことだが、わかっちまうんだよ」

「・・・おい、なんでオレは来ると、いや、なんでオレがまだこの世界にいるとわかった、蒔風」

「その問いはいたって簡単だよ。マイカゼ」

蒔風が、誰もいないことをいいことに相手の名を呼ぶ。

訓練場にやってきたのは「奴」だった。

蒔風が言った名前に嫌そうな顔をして、「奴」がなおも聞いた。

「その名でオレを呼ぶな・・・・・で、なんでわかった？」

「簡単なこと。ゆりかごの玉座が残ってた」

「なに？」

「おまえが知ってるかは知らんが、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫはな？おまえを倒すと同時に、おまえが取り込んだ物を完全に破壊するんだよ。ま、今回は取り込んだわけじゃないが、おまえの力でゆりかごは膨張してたし、かわらんだろ」

「そういう事か・・・・それで玉座が残っていれば」

「そう、つまりおまえはあの砲撃でゆりかごが完全崩壊する前に、あれを放棄して脱出した。まあ？力技で、更にあの砲撃じゃあ怪我もしてるだろうからな。それで大体これくらいかな？って」

「そうか」

そう言って「奴」がポリポリと頭をかく。

蒔風もあくびをしながら、それでいて、「奴」から視線を逸らさない。

「どけ」

「断る。世界は壊させない」

「死者を復活させた男に言われたくない」

「アリシアとリィンフォースか？は。ありゃ本人じゃねえよ。言っちまえば超高性能な同じ魂を持ったクローンだ」

「・・・・・・・なに？」

「フェイトの身体にはアリシア・テスタロッサのデータがすべて詰め込まれている。だが、それをそのままクローンにしても、生まれ落ちた瞬間にそれは別もんの魂だ。アリシアにはならない。で、今回やったのがその誤差をなくし、フェイトに埋め込まれていたアリシアのデータがそのまま成長したらどうなるかをシュミレートして誕生させたのが彼女だ。もち、本人じゃない。だが、そうなったら同じ魂を持つのは自然だろ？本人だが、本人じゃない。クローンでありながら、クローンじゃなくて本人。それが、彼女だ」

そう、蒔風の言う通り、彼女が本人かと言われれば、ＹＥＳとは言えず、そうはいってもＮＯとも言えない。
世界がシュミレートを行ったと蒔風は言ったが、そのシュミレートには寸分の誤差も無いのだ。それこそ、世界の奇跡。

揚げ足取りのようだが、世界にはこれが精一杯だった。

この世界を三度も救ってくれた、彼に対する、精一杯の恩返しだったのだ。

「なるほどな。そうなるとリィンフォースはもっと簡単だな。夜天の書に残ったデータ。それを元に、穴があいた所を世界が完璧に埋めて再構築したってところか」

「ご明察。だから、あれは同じ魂を持ったクローンだ。まあ、気にすんなよ。本人だと思えばいいさ」

「ふん。確かに完全な死者蘇生、というわけではないようだ」

そう言ってクックと笑う「奴」
それにつられて、蒔風も軽く笑う。

だが、「奴」はそんな話をしに来たわけではない。

「さて、話を戻すぞ」

「なに言われるかわかってるから言っとく。断る」

「・・・まあ、そう来ることはわかってたけどな」

「そうでもなきゃ、こんなもん用意しないよ」

そう言って、剣を抜く「奴」に合わせて、蒔風も獅子天麟を組み上げて突き立てる。

「やる、か。覚悟は言いか？脇役王。おまえの体力、万全じゃないだろ？」

「ははっ、いいぜ、合わせてやる・・・・・抜かせ雑種。この我（オレ）にとってはいいハンデだ。貴様とて万全でないだろう？」

「こんだけあればじゅーぶんだ。さて・・・・WORLD　LINKなしでお前とガチでやんのは初めてだからな・・・・」

「なぁに、オレにとっては問題はない。倒してしまっても問題はないだろう？」

「おまえ、それ死亡フラグだぞ？キャラ違うし」

「些細なことだ。そんな運命（フラグ）なんてへし折ってやる。運命は、金魚すくいの網よりも薄く、破りやすいんだからな」

「おいおいｗｗｗ。その幻想をぶち殺すってか？」

ヒュォ・・・・・・

静かに風が流れる。
ほんのりとした潮の香りが、二人の間を駆け抜けた。

「脇役を統べる者として、行くぞ」

「銀白の翼、蒔風舜。推して参る」

言って、一瞬の間が開いてから

ドンッ!!という地面を踏みつける音がして、両雄が剣を構えて激突した。

ーーー

「ラアッ！！！！」

蒔風の十五天帝と「奴」の魔導八天がぶつかり合う。

十五天帝は本数こそ魔導八天を超えるが、重さにおいて負けている。
獅子天麟の三本で二本分。残りの十二本で六本分だ。つまるところ、威力は互角。

現に最初は、蒔風の剣と「奴」の剣が、お互いの攻撃に同時に弾かれ、そのまま手から飛んで行って上空で回転しながら飛んで行っている。

しかし、それを取りに行くことなどしない。
二人は次の剣を抜き、蒔風は二本、「奴」は一本で打ち合い、またそれが宙を舞う。

そんなことをしていればあっという間に手持ちがなくなる。
どうやっても八合で剣がすべてなくなってしまうのだから。

だが、その八合目が終わるころは、一本目が落ちてきて、それを掴んでまた打ち合う。

まるで大道芸。ジャグリングだ。
しかも、この状況で律義に自分の剣を選んで取っている暇などない。

蒔風が魔導八天を、「奴」が十五天帝を、ときにはそれらがごっちゃになって、二人が二人の剣を使って切り合っていた。

が、ここでついに均衡が破られる事態が起きた。
剣が上でなく、横に飛び始めたのだ。

飛んで行った剣は、ビルに直撃し、そのビルを根本から破壊して、いとも簡単に瓦礫に変えた。
これが先にあった倒壊音だ。

なんという威力だろうか。

そうしてすべての剣がなくなり、ついに肉弾戦に入る。

「奴」の蹴りに、蒔風が身を返して回避し、相手の胸に拳をぶち当てて「奴」を後退させる。

が、「奴」はそのままのけ反り、返した身体で蒔風に頭突きを放ち、
それを両の掌で受け止めた蒔風がビルにまで飛んで突っ込んでいった。

それを追う「奴」
しかし、蒔風が突っ込んだ穴から絶光砲が放たれ、「奴」はそれを
緊急回避するが、右腕をかすり、地面に転がる。

ビルから出てくる蒔風、立ち上がる「奴」

ビルは蒔風が抜け出てから崩れ始め、その音がこの戦いのＢＧＭに
なっていた。

両者とも、一撃ずつ。
まだ、戦いは終わらない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー戦闘開始から三十分後ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あっ、がああああああああ！！！！」

「おおおおおおおおおお！！！！！」

空中で蒔風が「奴」の頭を掴み、ビル壁に押し付けて、そのまま削るように真横に飛んで行く。
当然、途中でビル壁が途切れるが、蒔風はそのまま通りを横断して、隣のビルに今度は叩きつけた。

今度は押しつけて、などというものではない。
すでに「奴」の頭はビルの中に入っており、通過した後には横一文字の溝が出来上がっていた。

そしてそうやってビルを二、三ほど通り抜け、最後に四つ目のビルに叩きつけようと振りかぶる。
が、そこで「奴」が身体をグルンと返し、逆にその反動で蒔風をビルの根本に投げ叩きつけて、そのビルを反対側から倒壊させて押しつぶす。

蒔風の声が聞こえた気がするが、倒壊音で掻き消されてしまってよく聞こえない。

砂煙が起こり、それを吹き飛ばすかのように瓦礫の下から翼が生える。
ガラガラという音を立て、蒔風が瓦礫の下から這い出てきた。

それに応じて「奴」の全身から黒い煙がオーラのように噴き出してきた。

「奴」が地面の蒔風に、蒔風が上の「奴」に

一気に飛び出して行って衝突し、周囲のビルが二つほど崩れた。

――――――――――――――――――――戦闘開始から一時間後――――――――――――――――――――

「あああああああああ！！！！！」

「おおおおおおおおお！！！！！」

もはやまだ立っているビルは最初の三分の一程度しかない。

そのプレートの上で、「奴」と蒔風が攻防を繰り広げていた。
辺りには剣が突き刺さっているが、それを取りに行く余裕もない。

しかし、「奴」の一撃に蒔風が弾き飛ばされ、その際に剣を一本、引き抜いた。
それを見た「奴」がその剣を振りかぶる蒔風を見て、とっさに横に走り出す。

蒔風が斬撃を次々に飛ばし、「奴」がそれを横に走破して避けていく。
そして前回りに飛び込んで、剣を拾い握ってその斬撃を跳ね返し始めた。

その余波でまたビルは崩れ、飛ばしたり飛んできたりの斬撃に、両者の身体に切り傷が刻まれていく。

しかし、こうしていてもらちが明かない。
そう思った二人は、同時に剣を捨て、そのてにそれぞれ波動と獄炎を携え、相手に向かって走って行った。

「「ウオァッッ！！！！！」」

ドンッッ！！！！

そのエネルギーを持った拳が交叉し、クロスカウンターのように、両者のこめかみに命中した。
二人の身体がまるで反発する磁石のように吹き飛んで、よろりと立ち上がって再び走って行く。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー戦闘開始から二時間後ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「星！！轟！！噴！！！破ッ！！」

ガ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴン！！！！！

「奴」の拳が、蒔風の急所を的確にとらえていく。
その攻撃一撃ごとに血を噴き出しながらも耐える蒔風だが、その足が段々と折れ曲がっていっていた。

「激！！！」

「ッ！！！サァリャァ！！！！」

連撃最後の一発に、「奴」の力が込められて来たのを見て、蒔風がその腕を、首と肩の間を滑らせてかわす。
そしてそのまま身体を返してからの一本背負い。

しかし、ただの一本背負いではない。
「奴」がおちる地面には困難が発動し、その重力に引かれて一気に叩きつけられる。

その衝撃に、「奴」の口から血が噴き出して、その顔面を踏みぬこうとした蒔風の足を、転がって避けた。

それを負ってかかと落としを放つ蒔風、受け止めてその体を押し返す「奴」。
かかと落としを打ち上げられて、一回転してから着地した蒔風が、構えなおして口元を拭う。

「奴」も同様に口を拭って、二人は再び同時に駆けだした。

――――――――――――――――――――――――戦闘開始から三時間後――――――――――――――――――――――――

ゴシャッ!!! バキッ!!!!! ドゴッ!!!

鈍い音だけが、鳴り響く。

すでに周囲に立っているビルは一つも無く、ただ、瓦礫の山が広がっている。

ここに至るまで、二人は一切の広範囲攻撃を行ってはいない。
すべてが肉弾戦や、剣劇でくずれたものだ。

そしてその瓦礫の上で、二人の男が、無様に殴り合っていた。

一発殴って相手の身体がのけ反って、その相手は仰け反りから身体を戻して相手を殴って。
その繰り返しだ。しかも、一撃一撃の攻撃で、一回一回息切れのように動きが止まっている。

「ッああッ！！！」

「ブぐっ・・・・おァッ！！！！」

「おがッ・・・・ジャアッ！！！」

無様だ。あまりにも無様。
これではただの不良のケンカだ。

ただ広がる瓦礫の海で、殴り合う男二人。
決着はつきそうもない。

――――――――――――――――――――戦闘開始から四時間後――――――――――――――――――――

「ハア〝ッ・・・・ハア〝ッ・・・・お〝わりか?・・・・・」

「まだ・・・・に決まってんだろォが・・・・・」

ドゴッ

「ぞんな・・・もんか・・・・・じゃあ・・・今度はこっちだ・・・・・ッ!!!」

ゴキッ

「ガッ・・・は!なんだよそれよ〝・・・・・・ぞれじゃ俺は死なねえ・・・ぞ!!!」

ガゴッ

「あま〝い・・・・・!!!」

バキッ

「奴」が最後に蒔風を殴り、そこで蒔風からの反撃がなくなった。
「奴」が心底きつそうで、それでいてまだ余裕な態度を崩さずに、
蒔風に問いかける。

「ハァーー・・・・・ハァーーー・・・・・・・どうした・・・・・」

息が荒い。
それは蒔風もだ。

おそらく二人は、もはや目の前すらはっきり見えていないだろう。
ただ、そこにあるものを殴る。それだけだったのだ。

「いや・・・・・こいつで終わらせようと・・・・思ってな」

「じゃあこっちも・・・・・そうしようか・・・・・・」

そう言って、二人が拳を握りしめる。
全身の力をすべてここに詰め込み、これで相手を終わらせるのだ。

「グウウウウウウ・・・・・・・ッ!!!」

「アアアアアア・・・・・・・ッァ!!!」

そして、その拳が放たれる。

しかしそれは

一人分のだけであった。

「あぁ！？」

「バァカ・・・ケンカに・・・・正直もくそもあるか」

「蒔風ェ！！！！」

蒔風は拳を打ち出すことなどせず、背を向けて近くの剣を掴みに行ったのだ。

一方「奴」は、拳を打ち出してそのまま勢いで体勢を崩す。
それはそうだろう、相手がその場にいないのだから。

そうして、蒔風が剣を握ってジャンプし「奴」に向かい、突き立てるように剣の切っ先を下に向けた。

それに対して「奴」は、蒔風が剣を取りに行く事でできた一瞬にて、近くにあった魔導八天の一本を呼び寄せて、飛んできた剣をその手に掴む。

ザクッ！！！！

という音が、二回分、重なって一回分に聞こえた。
そして、二人の剣の切っ先は・・・・・・

「奴」の剣は蒔風の腹を貫き、蒔風の剣は「奴」の左肩に突き刺さっている、というものだった。

「これで・・・・・・」

「ご・・・フッ・・・・ああ、これで終わり・・・・・・だ・・・・・・集え・・・・・十五ッ・・・・・・天帝！！！」

「なッ！？」

蒔風が、腹を貫かれながらも、叫んだ。

蒔風が手にしていたのは「天馬」

十五天帝を組み上げるとき、その中心に位置する剣だ。

つまり、この天馬には、他の剣を呼び寄せる、ということも可能になっている！！

そうして集った蒔風の他の十四本の剣が、「奴」をめった刺しにしていく。
頭、胸、腕、足、すべてをだ。

それを受けて「奴」は怒声すら上げなかった。
貫かれ、その体が消えていく。

「ち・・・こんな事なら、ゆりかごから吹き飛ばさないであのまま中で殺すんだった」

「そうだな。あの時オレは中無かったからな」

「なにがなくなってた」

「肝臓の三分の一、血液の十分の三」

「全部戻ってくる器官じゃねェか・・・・・くっそ、ずりぃ」

「ざまーみろだ」

そう言って、「奴」が消える。

二人が最後に話していたこと。
それはあの、蒔風がクアットロを打ち抜いたときのことだ。

あのとき、蒔風はなのはの力を借りた。
まあ、あれ自体はなのは一人分だったから複合できたから、という事で問題はない。

問題なのは、その時青龍たち、しいては十五天帝、蒔風の力を使っていたという事だ。

蒔風は力を借りた時、自分の力を使えない。
使えば、身体が崩壊するからだ。

願いに同じものはない。それはその通りだ。
つまり、蒔風に力を貸してくれる願いにも、それぞれの差異はある。
だから違う人物からの願いは一緒に使えないし、自分のも当然無理だ。

が、あの時蒔風は力を借りた。

その代償が、さっき蒔風が言っていたものだ。

つまり本当に、「奴」が蒔風を倒すのは、あの瞬間しかなかったのだ。

「まあ・・・・終わったことだ・・・・諦め・・・・ろ・・・・・・」

そう憎らしげに呟きながら、蒔風が倒れる。

しかしそうしながらも、目の前にモニターを出して、訓練場を元のプレートに戻し、使用記録を抹消した。

「ははは・・・・終わった・・・・・・・・・ああ・・・・・つかれ・・・・た・・・・・・な・・・・」

そう一言、一人空を眺めながら。
その空の星を目に写して。

蒔風の意識は途絶えた。

ーーー

そうしていると、シャーリーが何かおかしなものを発見した。
蒔風の何か痕跡が見つからないかということでデータを片っ端から漁って、そして何かを見つけよう、と思って見ていなければ、おそらく見逃していただろう、その痕跡。

フェイトが復元できる？ときいて、それでＮＯという彼女ではない。
さすがというかなんというか、そのデータを復旧させた。

出てきたのは、訓練場の使用記録。
映像は残っていなかったが、時間と、そのプレートの状態は出せた。

それをシャーリーが再生する。

プレートの上に、廃棄都市のビルが現れた。

そしてそれから十分と少しして、いきなりビルが崩れた。
そこからはまるでないかが戦っていたかのように、次々とビルが崩れていく。

それをみて、一同は何が起きたのか、わからないままだった。

しかし、ひとりだけはわかった。

再生をやめましょうか？と聞くシャーリーに、なのはは最後まで見せてと頼み、ひとりで最後まで、そのプレートを見ていた。

延々と崩れ続けるビル群。

それを見て、なのはの目はせわしなく右へ左へと動いていた。
そこには人などいない。ただ、ビルが崩れていく現象しかない。

だが、彼女には見えていた。あの人が、どのように戦っていたのかが。

そうして、その倒壊が終わる。
しかし、まだ再生は終わらない。

なのはの目が、一点に止まる。

そして、終わった。

再生時間、四時間と十三分二十秒。

それが終わってから、なのははプレートへと降りていき、最後に見ていた一点に向かった。

そしてそこで膝を曲げ、静かに泣いた。

あの人は、ここで戦ってたんだ。

誰にも知られることなく、どういうことなのかわからないが、生きていた「奴」と戦って、最後にここで私たちを守ってくれた。

そして、「奴」を倒した彼はいなくなってしまった。

おそらく、帰っては来ないのだろう。

なのはは泣きはらした後に、その胸をみんなに伝えた。
彼はもう、次の世界に行ってしまった、と。

また、いきなりいなくなってしまった。
お別れの言葉も言えなかった。

だが、なのはは想い立つ。

そうだ、別れの言葉なんていらない。

絶対に、必ず

また会えると信じているから。

否

「絶対に、会いに行ってあげるから」

そう言って、魔法少女は決心する。

こうして、この世界での話は、実にあっさりと幕を下ろした。

―――――――

学園

そう、学園だ。それも夜の。

そこのグラウンドで、蒔風は目を覚ました。

来ているのは黒い学ラン。

仰向けに寝っ転がって、空を仰いでいる。

「ここ・・・は・・・・・・どこだ?」

「目、覚ましたか?」

蒔風が目を覚ましたのを見て、一人の青年が話しかけてくる。
その青年は缶コーヒーを投げ渡し、蒔風の隣に座った。

「ここは・・・・次の世界か・・・・」

「ん?覚えてるか?自分に何があったか」

「えっと・・・・・・ああ、まあな」

「それだったら話は早い。自己紹介、してくれるか?」

「蒔風舜だ」

「そうか、よろしく蒔風。オレは、音無結弦(おとなしゆづる)。生徒会長だ」

「生徒会長?」

「ようこそ、死後の世界へ」

蒔風、ついに終着の世界へと降り立つ。

to be continued

なのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～翼人は静かに世界を去りゆく～（後書き）

なのはＳｔＳ、終了です！！！！

【魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ】

構成：”ライクル”３５％
　”フォルス”３５％
　”ＬＯＮＤ”３０％

最主要人物：高町なのは

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：アリシア・リィンフォースの再構築。全員のデバイス出力の激増。

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：あらゆる全エネルギーを集束しての「オールスターライトブレイカー」

アリス「まぁた何ともさびしい終わらせ方しましたねぇ」

はて、なんの事かな？

そして来ました前半の説明部分。
中でも言いましたが、あれはほとんどいいわけです。抜け穴です。
もし、気に食わない方がいらっしゃったら、申し訳ございません。

ア「で、次回はあの世界ですか？」

そう、死後の世界。を、舞台にした物語。
先に言っておきます。

次の世界は、本編終了後です。
ですので、原作を見ていないともしかしたらわからない部分があるかも？です。

でも大丈夫！！
アニメは１３話！！！あっという間さ！！！

ア「ＣＭとか抜いて一本２５分くらいだとして、その１３だから・・・３２５分？」

五時間半かかりますね・・・・・

ア「・・・・・」

・・・・・

気にしないッ！！！

ア「丸投げた！？」

ほらほら、任せましたよ！！

ア「次回、久々に・・・説明回だッ！！！」

ではまた次回

――神への復讐。その最前線

「死後の・・・・・世界？」

「ああ。実感ないか？まあ、最初はそうだよなぁ」

暗くなったグラウンドでそう言った、音無という青年は話を進める。
一方、蒔風は困惑していた。

自分は死んでしまったのか？
それとも、ここはそういう設定の世界であるだけなのか。

確証がない。
そもそも、確か最後に自分は「奴」との一騎打ちで、腹を貫かれたのだ。
あのまま死んだといわれてもおかしくはないし、あの直後にこの世界に運ばれ、傷が治ったといっても、これもまた、おかしくはない。

「なあ、俺は死んだのか？」

「この世界にいるってことはそうなんじゃないのか?そこだけ記憶がないとか?」

「いや・・・その前に、この世界のことを教えてくれないか?じゃないと推測も立てられん」

「?ま、いいか。この世界はな・・・・・・」

音無の話通り、この世界は死後の世界だ。

生前、理不尽なことがあって、それに自分の生きたかった時間、青春を失ったもの。
そういった人物がこの世界に送り込まれてくるのだそうだ。

未練ある、迷える魂。
そういった彼らはここで失った青春を取り戻すのだ。
自分の人生に、納得する。

そうして、満足して心置きなくこの世界から成仏（さっていく）するのだそうだ。

「で？お前はその導き手か？」

「俺は・・・そうだなオレの事も話しておこうかな」

そういって、音無が今度は身の上話を始める。

かつて、この世界には戦線があった。

名を、「死んだ世界戦線」という。

そこのメンバーは、理不尽な人生に対し、それを与えた物に復讐を誓っていた。

そう、彼らの人生は理不尽だった。

まあ、この世界に死後、やってきた時点でそういう人物たちなのだが。

ある者は、夢を断たれ
ある者は、妹、弟を殺され
ある者は、幸せをつかめず

それが実行できなかったのは、自分たちのせいではない。

暴力で夢を追えなくなった
強盗に押し入られて殺された
交通事故で半身不随になってしまった

そういった、なにを憎めばいいのかわからないようなそんな悲劇を、身に受けてきた者たちだ。

そんな彼ら、彼女らが、この世界にやってきて、そしてそこが死後の世界なら、そこには自分たちにあんな人生を叩きつけた張本人がいるはずだ。

すなわち、神。

自分たちは復讐するのだ。
あんな理不尽な人生を叩きつけた、神に向かって。

「それで・・・・そいつらはどうしたんだ？」

「成仏したよ。紆余曲折あったけど、自分の人生に納得して、みんな、旅立った」

「ふーーーん・・・・・あれ？じゃあこの学園の奴らみんなそんな奴らなの？」

「いや、そうじゃない。大半はＮＰＣっていう人間みたいなやつらだ」

「人間みたいだけと、そうであるふうに用意されたものってことか？村人Ａとかそんなんか」

「そうだ」

納得する蒔風。
そこで、あれ？と思い付く。

「じゃあ音無。おまえは人間なのか？」

「生前がある人、って意味なら、そうだな。オレは人間だ」

そう言いながら、音無が立ち上がる。
しかし、蒔風の疑問は尽きない。

「じゃあ、おまえはなんでまだこの世界に居るんだ？なんか納得いってないのか？」

「・・・・違う・・・・・オレはただ・・・・この世界で・・・・・」

「？？」

そうして話が終わったのか、音無が蒔風を連れて寮へと案内する。
どうやら同室になるらしく、それで音無は蒔風という人物が新たにこの世界にやってきたことを知ったのだそうだ。

「それで、おまえの疑問は解消できたか？」

「それなりにな。そして、オレはおそらく死んでこの世界に来たんじゃない」

「・・・・・・は？」

「今度はこっちが話す番だ。驚くなよ？実はな・・・・・・」

そうして、蒔風の説明が始まる。

ベッドに座って、不思議がる音無に、今この世界に起っていることを話した。

――――――

「・・・・って、ことなんだよ」

「まじか？」

「にわかには信じられないかもしれないけどな」

「そうか・・・・でもまあ、大丈夫だと思うぞ？ここなら」

「は？」

説明を聞き終えて、音無はなんだか納得したように頷いてから、特に何かを意識することも無くベッドに入ってしまった。

「お、おい・・・・・お前な・・・・」

「明日には授業あんだから、さっさと寝よーぜ？」

「いやだから、そんな間に・・・・・・」

「オレ、生徒会長なんだし、寝坊とかダメだろ？じゃ、おやすみー」

「いやだから・・・・・寝ちまったよ・・・・・・こいつわかってんのか？状況」

ベッドに入ってすぐ、音無は眠ってしまった。

なんだか納得はしていたみたいではあった物の、本当に信じてるのか、それとも「あっそう」と流しているだけなのか、蒔風には判別がつかなかった。

もう何時間か話していれば人となりがわかってどういう感じなのかわかるものなのだが・・・ここまで短いとどうしようもない。

まあなんにしろ、本人が眠ってしまったのだ。

無理矢理起こしてもしょうがないし、そもそも「奴」はそんなすぐには来ないだろう。

とりあえず、本腰入れるのは明日からだということにして、蒔風も眠る。

ちなみにベッドは二段ベッドで、音無が下、蒔風が上だった。

ーーー

蒔風がレンゲを音無に向けながら聞く。
ここを信じてもらわないと、蒔風にとってもどうしようもないからだ。

「さぁなー。信じるも信じないも、変わらないし」

「変わらない？おいおいそりゃないぜ？おまえが死んだらこの世界は・・・・・」

蒔風が音無にもう一度しっかり話そうとして、その言葉がつまる。
人ごみの中に、気になる人物を見たからだ。

「あい・・・つ・・・・・」

「どうした？」

「隠れろ、音無。「奴」だ・・・・・どうにも来んのがだんだん早くなってきてんな・・・・・」

そう、こっちに気付いていないのか、「奴」が食券売り場に並んで

いた。
しかも、ご丁寧に学ランまで着ている状態で。

「多分、計算中の息抜きってとこか・・・・ここは狭い世界だからな・・・こうしてかちあうのもおかしくはない・・・・か」

「ふーん。あいつが？」

「そうだ、あいつが「奴」だ・・・っておまえ普通に食ってんのな！？」

蒔風がテーブルに身をかがめていると、隠れていろと言っておいた音無が横に来て同じ人物を見ていた。

「ちょっと聞いてくるわ」

「バッ！！おまえ、説明聞いてなかったのかよ！！！」

「だってよ、あいつ、生徒じゃん。で、オレが生徒会長。わけへだてはできないよ」

「は？っておい、ちょっと待て待て待て！！！！」

そう言って、蒔風の制止も虚しく音無が歩いて行ってしまう。
それはもう一直線にだ。

そして

「新しく来た人か？」

至って普通に話しかけた。
その言葉に、「奴」は振り返って、こちらも普通に返事をしてきた。

「ん？」

「オレは音無結弦。生徒会長だ」

「・・・・ッ・・・・今は用、ないんだがな・・・・」

「？ああ、計算、だっけ？オレを殺すとかっていう人？」

「・・・・・・・・（バッ！！！）」

音無の言葉に、「奴」が周囲を見渡して、蒔風を発見する。

そして、その目がギラリと光った。

「今こいつを殺す必要はねぇけどよ・・・・」

「イいッ!?」

「てめえは殺しても構わねえよなぁ!!!」

「バッカ・・・こんなところで!!!」

「奴」が剣を構え、テーブルの上を走って蒔風に突っ込んでくる。
それにとっさに拳を構えて迎え撃とうとする蒔風。

そして両者がぶつかりあおうとしたところで

パァン!!!

と、そこで銃声が鳴る。

音無だ。
どこに持っていたのだろうか、その手には拳銃が握られており、真っ直ぐ天井に向けられていた。

「やめるんだ。ここは喧嘩するとこじゃない」

「お？む・・・・・・」

そう言って、「奴」がその言葉自体には忌々しそうな顔をするが、周囲の学生達（わきやく）が騒然としているのを見て、唾を吐いてテーブルから降りた。

「グラウンド出ろや蒔風。前回での一騎打ち。借りを返してやる」

「・・・・・クソッ・・・・」

そう言って、蒔風が「奴」に応じて食器を片づける。

と、そこに音無が寄ってきて、話しかけてきた。

「本当みたいだな」

「てめ・・・そんなこと確認するためにあんな危険なことしたのか！？」

「大丈夫だって。だってよ、この世界は・・・・・」

そう言って、音無がまた、拳銃を取り出す。
そして銃口を自分の胸、心臓の真上に押し当てた。

それを見て蒔風はもちろん、自分の手で殺さなければならない「奴」も動揺する。

「な、おい！？」

「バカ！！貴様が自分で死んだら！！！」

だが、その二人を見て音無は笑い

タァン！！と、引き金を引いた。

「音無ッ！！！」

「クソ・・・やってくれるな、主人公ッ・・・・」

そう言って、蒔風が顔を青くし、「奴」が怒り心頭になる。

が

音無の身体が倒れない。
銃弾の勢いで後ろにふらついたが、倒れないのだ。

そうして、胸にハンカチを押し当てて止血しながら、にっこりと笑ってこう言った。

「言ったろ?ここは死後の世界。つまり、ここではもう、誰も死なない」

その現状と言葉に、蒔風も「奴」もポカーンとする。
確かに音無が撃ったのは自分の心臓だ。その位置に間違いはない。
ならば、彼の言っていることは正しいのだろう。

「なるほどな・・・オレにも「奴」にも、「破壊者」が持つ「破壊機構」はない。つまり・・・・」

「そ、いくら「奴」が襲ってきても、俺は死なないの」

「バカ・・・・な・・・・・・」

「・・・・とんだ貧乏くじだったなぁ・・・・おまえ、実はこの世界よくわかって選んでなかっただろ?」

「チッ・・・・クソッ・・・・・」

笑う蒔風に、憤る「奴」

「奴」は踵を返して食堂を出ていった。
おそらくは計算して、この理をどうにかするための模索をするのだろうが、無理だろう。
そもそもこの世界の前提である「死後」というものが壁なのだ。
打ち破れるものではない。

「ふーー、なるほど。大丈夫ってのはそういうことか」

「そういう事だ」

そういう音無の胸の血はもう止まってきている。
あと十分もすれば穴もふさがってしまうらしいし、最悪バラバラになってもくっついて戻るらしい。

「で、あと一つなんだけどよ」

「なんだ？」

ゴガンッ！！！

「無茶し過ぎだバカ。心配させんな」

「イッッッツぁ～～～～～・・・・・・！！！！」

頭をそれなりの強さで殴る蒔風。
そこを押さえて涙ぐむ音無。

どうあっても主人公が死なない世界。

一体この世界はどうなって行くのだろうか

to be continued

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｈｅ　ｗｉｌｌ　ｎｏｔ　ｄｉｅ～（後書き）

来ましたね、Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！

アリス「今回はどの時間軸なんですか？」

本編後です。

あれからどれだけ立っているのかは明言いたしません。

が、出てくる原作キャラは音無のみです。

ア「天使ちゃんとか立華さんとか奏さんは？」

それみんな同じ人。

出ません。でも、過去バナ的なモノでぽろぽろと出てくるかも？

ア「で、主人公が死なない、と」

そうですね。死にません。

この世界の根底に関わる設定なので、蒔風はもちろん、「奴」にもどうすることはできません。

ア「そうですか・・・ん？じゃあ蒔風とか奴は死なないんですか？でも彼らは死んで来たわけじゃないから・・・どうなるんでしょう？」

そこら辺は追々わかって行きますよ。

ア「そんなもんですか」

そんなもんです

ア「次回、やることなくなった蒔風、どうしようか？」

ではまた次回

お前の人生だって、本物だったはずだろぉっ！

「生徒会に？俺が？」

「ああ、あんたは普通とは違った来かたをしている。つまり、未練だとかそういったのはないんだろ？」

「そうだな・・・そもそも、死なんてもんはどーだっていいもんだから・・・たしかにそうだ」

「で、この世界でやることって言ったら「奴」から俺を守ることなんだろうけど・・・」

「それも意味ないしなぁ。お前死なないし」

「だったらさ、一緒にやってみないか？生徒会」

音無から誘われたのは、「奴」といざこざがあってから翌日の放課後だ。

音無の言うとおり、蒔風は暇だった。

まあ確かに、この世界は初めて訪れることもあったためそれなりに見て回ることもできたのだが、いかんせん範囲が狭い。

なんせ学園、寮、設備などぐらいしかなく、あとは延々と広がる森だけだ。もっと離れれば山もあるそうだが、そこまで行くのも億劫なだけ。

つまりは簡単に見回り切ってしまったのだ。

そうして、特に思い残しだとか未練なんかはとっくに飲み込んでいるこの男は、特にやることもなくなってしまっていた。

と、そこで音無からの誘い。たしかに、いい話だ。
しかし蒔風にはそんな経験はないし、そもそも、途中から入っても先のメンバーがいるのではのか。

そう思って聞いてもみたのだが

「大丈夫だ。生徒会は俺しかいないから」

「は？」

「教師だってＮＰＣなんだぜ？ここで人間・・・前世がある奴らってことな？は・・・今はお前、「奴」、俺くらいだ」

「いないの？なんで」

「少し前までいたんだが、成仏して行ったよ。なんでもできるやつだったけど、そこに至る苦労ってのを知らないから、それを知りたかったんだってよ」

「でも・・・そんな中で残ったお前はどうするつもりだったんだ？」

「どうもしないさ・・・・それに、あとからそんなに来ないってのは、それはいいことだろ？ようは自分の人生に納得している人が多いってことなんだから」

「なんか「医者は暇なほうがいい」ってみたいだな」

「それに近い」

そんなことを話しながら食券を手にカウンターで受け取ろうと並ぶ二人。

そこで、最初の質問に戻った。

「生徒会、入ってくれるか？」

「・・・・・はぁ。わかった。入ろう。特にやることもないし、

そうやって誰かと接するのも面白そうだ」

「ははっ、大変だぞ？」

「誘ったのは誰だよ。ともかく、よろしくだ、会長」

「よろしく、副会長」

そうして、なんやかんやあって蒔風の生徒会参入が決定した。
なんやかんやはなんやかんやだ！！

「できれば「奴」も誘いたいなぁ。ほら、どうせ俺死なないし」

「それはやめとけ！！」

ーーー

「で？なにすればいいんだ？」

「そうだなァ・・・・って言ったところでやることないんだよな」

「はぁ！？」

蒔風が素っ頓狂な声を上げる。
それに音無がははは と笑いながら先を話す。

「だっていつもやってんのはここに来たやつらを成仏させることなんだけど、今はみんないないし・・・・」

「じゃあお前も成仏すりゃあいいじゃねえか。ってか、だったらなんでオレを誘ったんだよ！！」

「ん～～～。面白そうだったからかな？だって、死なないでこの世界に来たやつなんて、初めてだし」

「・・・・はぁ・・・・もうお前それでいいよ」

そんなことを話しながら蒔風と音無が歩いていくと、チャイムが鳴って、授業の始まりを告げる。

「お、しまったな・・・急いで教室に・・・・・」

「だめだ。遊ぶぞ」

「・・・・・は？」

授業に出ようとする音無に、蒔風が待ったをかけて腕をつかむ。
その蒔風になにすんだとあきれ顔をする音無だが、蒔風は問答無用だ。

「おまえオレのこと誘っといてなにも無いんなら、オレのやりたいようにやる！！まずは球技だ！！」

「は？は！？」

「俺は球技ができん！！だからそれを克服させてくれ！！やんぞコラーーー！！！」

「ちょ、待てって！！授業は！？」

「そんなんどうだっていいだろうが！！！どーせん死なばもろとも

だし！！！」

「まあ、確かに死んでんけど・・・・」

強引にグラウンドにまで出ていく二人。
そして、蒔風がバットを握り、音無がグローブを持った。

「よっしゃ！！打てるまでやんぞーーーー！！！」

「はあ・・・・」

「なんだよ、ため息つくなよ！！暇になっちまったんだから、やることないんだよ！！」

「まあ・・・誘っといて何もなかったオレが言うのもなんだけどな・・・「奴」を倒しに行かなくてもいいのか？」

「いーの！！どーせあっちもなにもできないし、俺はあいつが動かないと何もしようがないんだからさ」

「そういうもんか？」

そんなことを話しながら、普通に練習を始める二人。

蒔風がバットを振り、五回に四回は空ぶって、それを音無が注意、指導していた。

そうして再度始めると、手からすっぽ抜けたバットが音無の顔面に直撃かけたり。

当たれば間違いなくボールは見えなくなるが、まったく見当違いの方向へと飛んで行ってしまう。

そんなことを続けて、早くも放課後になってしまった。

すでに夕日がまぶしく、すぐに暗くなりそうだ。

「なんとか様にはなってきたな！！蒔風！！」

「なぁに、もうすでにコツは掴んだ。今に見てろよ？世界の果てまで飛んでくホームランを見せてやっからな！！！」

結局乗り気になって楽しそうになっている音無と、汗をかいていい笑顔になっている蒔風が、これで最後にしようかと叫びあった。

最初、蒔風はとにかくタイミングがあったら「ここだぁ！！」とか言って思いっきり振っていたのだが、音無の注意でなんとかそう言った「思い切り打法」をやめ、慎重に、とりあえずバットに当てることから始めたのだ。

その成果もあり、弱くではあるが、だんだんバットに当たるようになってはきている。
音無の足元にテンテンテン、と転がってきているいくつものボールがその証拠だ。

「よっしゃ！！いくぞーーー！！！」

「バッチこーーーい！！！」

そう言って音無が投球の姿勢になり、アンダースローでボールを投げる。
それを冷静に視界とらえる蒔風。

「（落ち着いてだ・・・・無理することはない。しっかり見れば見えるんだ・・・・全力じゃなくていい、必要な分の力でッ！！！）」

カキィン！！！！

「お・・・・おぉッ！！！」

「やっ・・・・・・・・たぁアアアアアアアアアアア！！！！！！」

そうして、気持ちのいい音を立ててボールが空に消えていく。
方向は真っ直ぐに音無の後ろの方だ。

つまり

「ホームラン行ったろ、これ！？」

「おおお！！やっとやったな！！！」

ホームランである。
それにはしゃぎまくる二人。

そうしてある程度ワイワイやった後に、用具を抱えて帰ろうとする。

その途中

「音無、なんだ?その赤いの」

「え?赤いの?」

「えっと・・・ッ!!!音無ッ!!」

蒔風が用具を投げだして音無の前に出る。
蒔風が見たのは音無の額に写る赤いポインターだ。

つまり、狙撃。

それを見た蒔風が、とっさに音無の前に出て、それから守る。
そしてその直後、蒔風の後頭部に銃弾が命中した。

頭が割れるような痛みと共に、蒔風が地面に倒れ伏す。

それと同時、後者の方の茂みから、「奴」が出てきてライフルを投げ捨てた。

「あぁ、クソッ！！不意打ちなら死ぬんじゃないかと思ったのによォ！！！邪魔すんじゃねぇ！！！」

「あ・・・おまえか」

「おまえかって・・・・まあいい・・・蒔風はこれで・・・・・」

そういって舌なめずりする「奴」

どうやら今回は「不意打ちなら殺せるのかも」という実験だったようだが、蒔風を打ち抜くと言う思いもよらない結果に嬉しがっていた。

しかし、それを見て音無が頭を抱える。

「あのな、前にもトラップ・・・つまり不意打ちで死んだ奴も、普通に生き帰ってんぞ？」

「あ？・・・なんだよ・・・・だがまあ・・・・」

「それにこいつも「ダァッ！！！いってぇなクソ野郎！！！」生きてるし」

「なあッ！？」

音無の言葉通り、いきなり立ち上がって頭を押さえる蒔風。

驚愕する「奴」

頭から血が流れているが、それも治まりつつある。

「あーーっつ・・・・ん？あれ？これって・・・・・」

「つまり蒔風も例に漏らさず、この世界じゃ死なないってことなんだろうよ」

「マジかよ・・・・じゃあ・・・・」

「ああ、もちろんお前の方も死なないぞー？」

「ななな・・・・・」

「なんだよこの世界・・・・それにおまえ、まだきっちり計算終わってないだろ？」

「うぐ・・・・・」

「焦ってないで、とっととやることやってこい。ってか、何やっても無駄だろ？そんなことわかってるくせに・・・・」

「く・・・・っそ！！！ぜってぇ諦めねえ！！必ずぶっ殺してやるからなァ！！！！」

そんなことを言いながら、「奴」が何処かへと去っていく。
それを見て苦笑する音無に、何か言いたげな顔をした蒔風。

「おまえなぁ・・・・死ぬの怖くないのかよ？」

「この世界でその質問は無意味だって。それに、蒔風はどうなんだ

よ」

「おれか？」

「俺が狙われると知って、おまえは何の躊躇も無く俺の前に立った。おまえは死んでこの世界に来た人間じゃないのに、なんでそんなことができたんだ？死なないかどうかもわからんかったのに」

そう言われて、蒔風の顔がすーっ、と大人しくなっていく。
そして、普通さと、寂しさと、孤高さという、三つの感情の降り混ざったよくわからないような顔をして、複雑そうに言った。

「おれは・・・ここにきてこんな事しなくても、死、っていうのがよくわかっちまった人間だからな」

「・・・・・・」

「わかるか？意味が。俺はな・・・・死ななくても、死んじまった人間なんだ。だから・・・怖くない」

「そうか・・・・・」

そうして、用具を片づけて寮へと戻る二人。
食堂はもうしまっていたので、買い置きのカップラーメンを喰った。

「ペヤ○グってこっちあるの！？」

「あるぞ？それだけじゃなく、マル○ゃんだとかど赤いき○ねに緑○たぬき、定番のカ○プヌードルまでよりどりみどりだ」

そんなことをしながら、二人の夜は更けていく。

ちなみに別の寮の部屋で、カリカリと計算し続ける男はというと・・・・

「ガーーーーーーーーーーーーーー！！！殺せないってなんだよこれよ！！くっそ・・・なんでこの世界セレクトしちまったんだ・・

・・そもそもなんでこんな世界あるんだーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

と、頭を抱えて叫んでいたそうだ。

to be continued

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｇｏｉｎｇ　ｍｙ　Ｗａｙ～（後書き）

なんか普通の学園生活になりそうだ・・・・

アリス「だって「奴」がなにしようと死なないじゃないですか、この世界」

そうなんだよねぇ・・・・

引っ張っては来たけど、どうしようか？

ア「そういえばＡｎｇｅｌ　Ｐｒａｙｅｒとか言うのありませんでした？」

あれって世界そのものを書きかえるのは無理だろ

ア「そっかぁ・・・・・」

ま、なんとか持っていきますよ。

泣けるかどうかは・・・・別だけど！！！！

ア「泣けないんですか！？」

なんだ？泣かせる文章が書けるとでも思ってんのか！？私が？無理デス！！！

ア「次回、続く日常」

ではまた次回

そんな人生・・・あんまりじゃない・・・・・

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｔｏｄａｙ　ｔｏ　Ｄａｙ～

「よっしゃ！！今日はサッカーすんぞ！！」

「おい！！今日は卓球だ！！」

「なあ、今日はボウリングしようぜ！！」

あれから数日間、蒔風と音無はずっとこんな感じだ。
音無もそれに連れられていろいろと大変そうではあったが、楽しそうでもあった。

無論、授業にもしっかり出ている。
最初こそ丸々一日さぼってはいたのだが、途中からやはり授業には出ようという音無の提案である。

「授業も授業でいいもんだろ？それに疲れんだろ。さすがに」

とは音無の言葉だ。
まあ確かに、こんなＮＰＣしかいない世界でも、彼は一応生徒会長なわけであって。
そうなると授業をずっとボイコットはまずいだろう。

「ふっ、いいだろう。授業ですら楽しく受けてやるぜ」

一方そう言うのは蒔風の言葉だ。

それから数日後、小テストがあったので点数を比べようとしていたのだが、その時の手ごたえは

「まあできたかな」（音無）
「これはキタ」（蒔風）

というもので、結果が来た後に

「まあこんなもんかな」（音無）
「なん・・・だと・・・・・？」（蒔風）
だったそうだ。

「音無、お前頭いいのな」
「蒔風だって真ん中くらいじゃないか」
「真ん中よりも下だ。中の下ですよ？はぁ・・・・」

そんなことをしながら、日々をゆっくりと、それでいて楽しく過ごしていった。

もちろん、「奴」が何もしてこなかったわけではない。

計算を終え、もう無駄であることが分かっているのだろうに、いまだに音無や蒔風殺しを諦めていないのはさすがというかなんというかといったところである。
が、そこはやはり無駄だった。駄目なものはダメだったのだ。

途中にも、「Ａｎｇｅｌ　Ｐｒａｙｅｒ」という世界改変ソフトを使ったプロクラムで襲い掛かってきたが、結局二人を殺すことはできず、それによる世界の設定も変更不可だった。
そのプログラム内に魂を食って「人」をＮＰＣ化するという物もあったのだが、それは能力の割に耐久が低く、まるで蒔風の相手にならなかったし、無差別なものだったためさらに「奴」にまでも襲い掛かって来たのでＮＧとなった。

なにより、「個性を殺す」や「人格破壊」ではダメなのだ。
「音無という主人公の命を断つ」という事が必要なため、そもそもこのＮＰＣ化は意味がない。

しかも、仮にそうしたとしても意志さえあれば簡単に戻ってきてしまうから、なおのこと意味がない。

そんなこんなでいろいろと試した「奴」だったが、もう手がなくなったのか最近はついに授業にまで出ているらしい。

無論、教室は違うが。

それでも「奴」は諦めない。

何かあるとすぐに突っかかってきて、すぐに殺そうとしてくるのだ。
まあ、蒔風は別に死ぬことに恐怖はないし、何度かは本気で相手をしているが、大抵は軽く相手をして殺されといている。

正直言ってめんどくさいのだ。
生き帰るから窮地にもならない。ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫはするだけ疲れる。

そんな適当な蒔風の態度にイラついているのか、「奴」は今日も蒔風にケンカをフッかけてきていた。

「お前・・・・・いい加減この世界諦めたらどうだよ」

「それができりゃあこんな下手こかねえよ！！！」

今日は昼食中に「奴」が教室の扉を蹴り飛ばして蒔風のところまでドカドカと進んで行ってから、中庭にまで殴り飛ばしてきたことから始まった。

教室は二階。その教室から廊下を突き抜けて中庭に落ちた蒔風。

まあ、この程度の高さはなんでもない彼なのだが、昼食はチョココロネだったために、口の周りはベトベトだ。

「あーあ。まったく・・・・（フキフキ）そーいえばお前、チョココロネってどっちから食べる？」

「あ？そりゃお前、尻尾の方を千切って、頭の方からチョコすくって付けてだろーがよ。って、そんなことはどーでもいい！！！」

「なんだよ～～。おまえオレと一緒かよぉ。まあ、当然っちゃ当然

なんだけどよ」

そんな他愛もない話をしながら、蒔風が「奴」と戦おうと襟を締め、拳を構える。
その間に音無が離れて観戦し、しかも音無の周りにはＮＰＣたちも群がって観戦する始末だ。

もはや一種の見世物、エンターテイメントとなってしまっている。

「下手こかない・・・ねえ。もしかしておまえ、来ることはできても出ることできないのか？」

「・・・・・」

蒔風の推測。「奴」の沈黙。
そう、「奴」は世界に入ることはできても出ることはできない。

こんな世界があることなんて知らなかったため今はこうなってしま

ったが、そもそも、「奴」の目的は主人公を殺して世界を取り込むことだ。
つまり、主人公を殺せれば世界を食えるから、出る手段なんて必要ない。

しかし、この世界は主人公を殺せない世界だった。
と、いうことは、「奴」がこの世界を出るためには、蒔風に殺してもらって、この世界から締め出してもらうしかないのだ。

だがそれを知ってか知らずか、蒔風は「奴」を殺していない。
そもそも、殺したところでこの世界では復活してしまうので、「奴」を消すにはＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫしかない。
そして、先にも言ったように、いままでで蒔風はそこまでする必要性を見出していないのだ。

当然と言ったら当然だ。
何度でもリベンジできて、負けようが勝とうがどちらでもいいのだから、わざわざＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫをする必要はない。

しかし、ここにきて蒔風はやっぱりやんなくてよかったー、と安堵した。

ここでもし「奴」にＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫを放って消したら最後、次の世界に行ってまたイタチごっこだ。

しかも、ほかの世界が危険にさらされる。

ほかの世界も見てみたいな、という思いも無きにしも非ずである蒔風だが、世界の危険には代えられない。

ここでこのままいるのが安全策だ、という結論に達した。

「なぁるほど。じゃあ俺はお前を殺さないよ。そもそも、人殺しって嫌いなんだ」

「チッ・・・・・このままじゃあよ・・・・俺がこの世界から・・・・いや・・・・・・・そうか・・・・・」

そういって何か納得したような「奴」だが、とりあえずはこの場の戦いはしておこうと思ったのか、魔導八天を構えて来た。

それに対して蒔風も風林火山を構えて「奴」と打ち合う。

「いつもいつも適当に流しやがって！！！」

「だったら今日は・・・・本気で行こうか！！！」

そう言った瞬間、蒔風の全剣が鞘から噴き出すように抜けて、周囲に停滞したようになる。
無論、それは物理法則に従って地面に落ちていくものだが、蒔風はバトンのように風林火山を振って打ち続ける事でそれをその場にとどめている。

「ハアアアアアアアアアアッッ！！！！」

ガキン！！ガキゴゴゴゴゴゴゴッ、ガガン、ギャキィ！！！

そこからは蒔風の猛攻だ。
とっかえひっかえに周囲をうく剣を掴み、ドンドン攻撃して行っている。

一秒に八は攻撃しているだろうか。

風林火山をバトンのように振って攻撃するのを、途中で上空にそれを投げてやめ、即座に玄武盾で顔面を叩きつけてから獅子天麟で切りつける。
だが「奴」は玄武盾を腕で、獅子天麟をしゃがんで、それぞれその

攻撃を回避する。

蒔風は獅子天麟を振ってそのまま一回転し、地面に垂直に叩きつけてから朱雀白虎釵で「奴」に向かって突きつけた。
が、その先端はまるで三又のようになっていて、そこの隙間に「奴」の手刀が入って簡単にひねりあげられてしまう。

そこで蒔風は朱雀白虎釵を放し、上空から落ちてきた風林火山を掴んで、真上からそのまま降り降ろていった。
それを「奴」が受けたらまた放し、今度は横から青龍刀と天地を掴んで左右から脇腹を切ろうとする。

その攻撃を「奴」は頭上に受けた風林火山を落として地面に突き刺し、ガードする。

瞬間、正面から蒔風のケンカキックが腹に向かって突き出されるが、ゴスッ！！という音がして、「奴」の腹筋に止められてしまった。

「あり？」

「バカ」

ガシャァ！！！というおとがして、蒔風の周囲を覆うようにあった十五天帝の剣群が一瞬で薙ぎ払われて、視界から消える。

「奴」はこの一瞬で魔導八天を三つと五つに分け、二振りの剣にしていた。
剣群を消し飛ばしたのは三つの方だ。

そして「奴」はそれとほとんど同時に、五つの方で蒔風の肩にかけて剣を振り下ろした。

丸腰の蒔風がそれを白刃取りで受け止めるが、勢いに押されてすでに肩まで刃か食い込んでいる。

「おぉッ・・・・は！！止めてやったぜ・・・・・」

「だから言ったろ・・・・バカ」

そう言って「奴」はまとめられている五つを、更に三つを二つに分けた。

するとどうなるか。

蒔風が押さえているのはちょうど剣の真ん中だ。つまり、三本目。
そこでこのように分離したら、当然のように・・・・・・

ズシャッ！！！

「ガッ！？」

蒔風は剣を放していない。
だが、それは切り離された三本まとめの方だ。

「奴」の残りの二本まとめの剣で、蒔風の左肩から右腰にかけて切り捌いた。

蒔風の血が吹き出て、そのまで倒れる。

返り血などは一切浴びず、「奴」が取り出したハンカチで魔導八天

を拭いてからそれを消した。

こうして、今回の勝負は、「奴」の勝ちで締めくくられる。
この勝負で「奴」の7勝2敗。ちなみに、蒔風が適当に流したのを除いて、だ。

「ふん・・・さて、と・・・もしかしたらだからなぁ・・・もう少し計算してみっか」

そんなことを言って、ふぅ、と一息ついてから「奴」がその場を去る。
音無が回りを見ると、すでに他の生徒たちも自分の教室に帰って行ってしまっている。

そうしているのを見てから、音無が蒔風のいる中庭まで下りてきて、横にしゃがんで話しかけた。

「まーた負けたな。3連敗だぞ?」

「うっせぇ。所詮これがオレと「奴」との実力差だよ・・・・った〜〜〜〜」

口に残った血を吐き出しながら、蒔風が腹を押さえてムクリと起き上がる。
全身の骨をゴキゴキさせながら、調子を整えて立ち上がった。

「授業、次なんだっけ？」

「たしか、化学だったな」

「げぇ〜〜〜・・・こんな目にあってからの化学かよ・・・俺苦手なんだよなァ・・・・」

「ほら行くぞ。それとも、もう一度死んで保健室行っとくか？」

「ごめんこうむる」

そう言って二人も教室に帰る。
授業はまだ、先生が来ていなかった。

「なあ、そういえば今は何学期だ？」

「そう言うのはないからなァ・・・・」

「じゃあ卒業式はないのか」

「いや・・・・あったよ。一回だけ、な」

「？？」

to be continued

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｔｏｄａｙ　ｔｏ　Ｄａｙ～（後書き）

そんな日常パート2です

アリス「にしても展開の無い話ですね」

そりゃそうですよ。

ちなみに、この時点で蒔風が来てから一週間くらい経ってます。

ア「いい加減どうにかしましょうよ・・・・」

いや、話は見えてるんだけどね？

ここでそっち持ってくといきなりすぎて肩すかしみたいになっちゃうのよ

ア「あ～～それは・・・・」

あ、そういえば説明してたっけ？「魔導八天」のこと

ア「確かしてましたよ？あれは・・・・・ＦＦ７辺りではなかったですか？」

そうだっけ？忘れたなぁ・・・・

魔導八天はすべてが西洋剣です。

組み立て合体ではなく、融合合体ですね。ここは十五天帝と同じです。

で、その融合は二本以上ならどれとでもオーケー。まあ、全部名前が違うだけで形は同じですからね。

って感じです。うまく読者様のイメージに映し出せると言いのですが

ア「そこはあなたの表現力次第ですね」

精進いたす！！！

ア「次回、夢の話」

ではまた次回

私は天使なんかじゃないわ。生徒会長よ。

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｐｈｅｎｏｍｅｎｏｎ　ｉｎ　Ｄｒｅａｍ～

ある話をしよう。
すでに忘れ去られ、失ってしまった世界（ものがたり）
それはその世界の、終末へと向かうちょっとした話だ。

夜

自室のベットの掛け布団にくるまって、俺は頭を悩ませていた。

いや、悩ませていたのではない。苦しんでいたのだ。

一体何にだろうか？

その時はただ漠然としてわからなかった。

今までの事だろうか？今の事だろうか？今からの事だろうか？

将来への不安なのか、勉強に関しての不安なのか、友人関係の不安なのか。

まったくわからない。

なにがなんだかわからない。

今になってやっとわかることだが、この時オレが苦しんでいたのは自分の存在の在り方についてだったんだと、なんとなく思う。

「わかる」と言っておきながら「なんとなく」ってのもおかしなもんだが、本当にそれくらい漠然としかしていないんだ。

その時はわからず、ただ苦しんでいた。

なぜ？どうして？そもそもなんで苦しんでいたのか。思考の渦に取りつかれ、どんなにかもがいても立ち位置の変わらない海中に居るようなものだった。

もしくは、箱にがっちり詰まって身動きのできない、あの苦しさだ。息苦しくはないが、身体が微塵も動かないあの苦しさ。

頭を抱えて、足をばたつかせ、布団の中でもがき苦しんだ。

もし、その時外に飛び出して、大声をあげて走りまわれたら、きっとスッキリもしたのだろうが、その時の自分にはそれを押さえるだけの理性があったのが幸い、否、不幸だったのだろうかと、夢の中ながら俺は笑う。

そうだ、そして俺のその悶々とした苦しみは、次の日には無くなっているのだからたちが悪い。
消化などできていない。回答など得られていない。ただ、解けないから後回しにしただけだ。

その日の夜にはまた俺は苦しみの渦に飲み込まれていく。

そうやって、俺の日常は回って行っていた。

日中に通っている学校。オレの大学は・・・まあ、ランクは中の下ぐらいだ。
この大学に来た理由は、受験の日に限って元気いっぱいになったインフルなウイルスがどうにもオレの中で暴れたらしく、ここくらいしか残ったのがなかった。
どうせなら「インフル」よか「インテル」の方が良かった。

・・・訳わかんね。

まあとにかく、そんなこともあった。
今?まあ夢の中で「今」ってのもおかしな話だが、後悔はしてないよ。

この学校は普通に楽しいし、いろんな人間がいるから見てて飽きない。
俺の友人たちのほとんどは高校時代の仲間だったし、こっちの学校でも同じように仲良くできるやつはたくさんいる。

ヤンキー、バカ、頭いい奴、イケメン、オタク（俺もその一人だったりする）、普通、ひ弱

本当にいろんな人がいた。

だがまあ、この学校で何が一番おもしろかったって、こういう人たち見んのもそうだが、こういった人たちがまったく争わないのが面白かった。
と、いうか、微妙に重なり合ってんのが面白くてしょうがなかった。

ヤンキー、と言ってもオタクな俺たちと一緒に混じってそんな話する人もいたし
バカ、って言っても何かと一緒につるんでるのは普通なやつだったりオタク、って言っても武道系の人達と一緒にマジになって修錬してたし（俺だ）
イケメン、って言っても頭いい奴と合コン行ってたり
頭いい奴、って言ってもバカと一緒になってバカなことしてたし
普通の奴、って言ってもヤンキーと一緒にバイクでドライブ行ってたり
ひ弱、って言ってもイケメンと一緒に酒飲みに行ったりして、愚痴を聞いてた

つまり、巡り巡って皆友達みたいな感じの学校だったんだ。
面白かったな。たぶん、上の学校言ってもこの面白さはなかったと思う。上の学校にはまた別の面白さがあったんだろうけど、俺はこっちで満足していた。

よく遊びにも行ったし、バカなこともやった。
勉強も教えたり教えられたり、そんなこんなで成績も悪くない。

そう、俺の人生に、後にも今にも先にすらも、悩みや考え事なんてあるはずがない。

だからこそ、何に悩んでいるのかもわからず、オレの苦しみは毎晩続いた。

そんな日が何日続いただろうか。

俺の人生はついに転機を迎える。

それはある十月の事。
この街に来た観光客の一人を見たことだった。

オレの住んでいる街は地方都市だ。
そして、すぐ近くに観光名所の五、六箇所は存在する。

つまり、観光に来た人がホテルなどを構えるのには、もってこいの町なのだ。

彼もそうだったのだろう。
地図を持って街を歩き、目印になるような建物を指して方向確認するその一団は、間違いなく観光客のそれだった。

その日、俺は友人と一緒に服を買いに来てて、その一団が目に入ったのは、ほとんど背景としてだけだったのだが・・・・・

だが、意識するしないではなく、視界に入った瞬間に、何かが俺の中で弾けた。
何か、わかった気がした。

その瞬間の事はよく覚えている。
揺らいでいた自分の存在が、わかったような気がした。

「この世界」の自分。「他の世界」の自分。あいつ、こいつ。あれらそれら。きみ、お前、貴様、彼、私、一人称二人三人彼女オレわたしそっち主役ヒロインこれあれそいつだれ？わたしだ神？ここ、

あそこ、世界世界世界世界。仲間敵悪役味方主要最主要、柱、構築、俺はなんだなんだなんだなんだなんだ?役割?それは?なんだ?誰だ?誰だ誰だ誰だ

誰だ誰だ誰だ

誰だ誰だ誰だ

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・その晩から・・・・・・・・・・・・

俺はずっと取りつかれたかのように考え続けていた。

世界の構築、物語、主要脇役主人公・・・・・・・・・

あいつのことは知らない。
だが、こうして俺が反応したなら、あいつは主人公?って奴なんだろう。

だが・・・これは本当のことなのか?
俺はただ単におかしくなってしまったのか?

多分、そうだろう。

自分の中に浮かびつつある推論。
だが、推論であろうとも、俺には確実だと言えるだけの自信があった。

そして、それが何より怖い。

精神異常者やトンチンカンな予言者は、自分がイカレテいるという事に気付いていない。
彼らは自信満々なのだ。持論に、何の疑いも無い。

きっと今の自分はそれと同じなのだろう。

だから早くこんなこと早く忘れてしまうのが一番いい。

馬鹿げてる。
アホくさい。
実に現実的でない。

作品（せかい）は確かに存在し、それが他世界に電波のように伝わって、それを受信した者が作者となって作品にしているなど。

この世界を舞台にした、あの時見たあいつを主人公とした物語。
他の世界でその物語を見てみると、彼がすべての中心で、自分たちは目にも止まらぬ脇役なのだ、などと言ったことは

すべて、バカげた妄想なのだ。

そもそも、そんな事知ったところで俺たちの人生がどうなる？

俺はしっかりとここにいて、実に楽しく人生を謳歌してるじゃないか。
そこに不満はないし、いまさらどうしようもない。

それにあの時見たあいつだって、もう自分の町に帰っているだろう。
顔ももうぼんやりとしか覚えていない。

名前もなにも知らないのに、これ以上どうすると言うんだバカバカしい。

それに本当に今の立ち位置に不満があるなら、自分から彼に会いに行って知り合えばいいじゃないか。
出てきたホテルはわかるから、彼の事を知るのは別に不可能ではないだろう。

だがそうしたところで、もしかしたらあいつは俺にとってはそりの合わない人間かもしれない。
そんな人間と一緒にいてどうする？

オレは今、十分に満足している。
それに何度も言うが、そんなことしても俺は今の人生には・・・・・

・
・

『不満はないか？そうかそうか。お前は今、自分の人生に満足しているのだな？』

そうだ、その時、そんな声が聞こえてきたんだ。
いつものように布団の中で、苦しみと悩みが払拭され、この議題を自己完結させようとした俺の脳裏に。

『お前の友人達、あれはいい友人だな』

・・・・・・・・・・・・

『？おいおい、無視か？お前に語りかけてるのは幻聴じゃないですよー？』

・・・・・だから何だ。
ああわかったよ答えてやるよ、最高の友人だ。

『お？答えてくれる？そうなのだね。君の友人はいい者ばかりだ。だが、彼らに何かあったとき、皆は彼らをないがしろにするぞ？』

・・・・そんなことはない。皆一丸となって・・・・・・

『この世界でじゃない。そうだなァ・・・・もし、全員で旅行に行った時、飛行機が墜落したとする。そして全員の命が失われた』

・・・・考えたくないな。

『だが、その時その事件を知る者はいるのか?いないだろう?あの主人公だって、テレビや新聞で読みながらも、適当に流すだろうさ』

・・・そんなこと言ってどうする。

俺だってそうしてしまうだろうし、そこで「ないがしろにしやがって」とキレるのはお門違いだ。

『それだけじゃない。他の世界では、誰かの死なんざ適当に流されてしまう。考えてみろ。今までお前が見てきた作品で人死にがあったろう?そのなかで、すべての人の死が掘り下げられてきたか?』

そんなことをしては・・・・・

『そうだ。そんなことはない。そんなことあったね、だ。最悪、描写すらされないかもしれないな。そんなんでいいのか?お前の仲間の死なんて、だぁれも見向きもしないぞ?無視だ無視。あったってなかったって、同じようなもんなんだよ』

貴様・・・・

『お?お?キレる?この声は幻聴かもしれないのに?そう言ったのはキミなのに?それに向かって切れるんですか?この声の存在を受け入れるんですか?』

・・・・・黙れ、お前はいった・・・・・

『はい、残念。認めましたね。ではさようなら。フェ～ドアウ～～～ト』

――――――

してない。

普通は「もやがかかったように」だって？

いや、そうじゃなかった。だって頭の中では沸々とした怒りがわき上がっていたから。

あいつらはなくてもいい存在なんかじゃない。

あいつらは決して無視されてもいいような、そんなどうでもいい奴らじゃない。

そんな思いに駆られて、俺は行動していた。

ホテルに聞き込み、住所を割り出し、入念に準備までしてきた。

なんでだ？どうしてこうなる？あいつらがないがしろにされていいはずなんかない。

なぜだ？なぜそうなる？なんでこんな扱いなんだ？

『決まってる。それは主人公がいるからさ。彼がいるから、こっちに誰も目を向けないんだ』

そうか・・・・・

なんだ、だったら簡単じゃないか。

ただ

そいつを

ケシテヤレバイインダ

そう思って名前も知らないあいつの玄関前に立った。

あれから二カ月。今晩の天気は雪だ。すでに少し降りつもって、足跡がつきそうだな・・・・・・
息が白く、フードをかぶっても耳が少し痛い。

待っている間にもいろいろと考えた。
自分は何をしているのか。これは犯罪だ。しかも、最悪の部類に入る。

そんなことをしていいわけがない。今すぐ辞めて、家に帰ろう。

そんな理性の声がしていたが、脳内でわきあがっていた怒りの感情によって、すぐに、消えた。

あの時、俺が外を走り回って大声を出すのを止めていた理性など、もはやなかったのだ。

そうして待つこと一時間。

夜遅くになって、コンビニにでも出かけようとしたのか、二か月前に見たあいつが家から出てきた。

少し後をつけ、五分くらいして公園を通り抜けようとする。

そこの街灯の明かりであいつの顔がはっきりと見え

その瞬間、俺の頭にすべてが流れ込んできた。

この世界（さくひん）の情報。

他の世界でどう描かれているのか。

主人公、主要、その周辺人物。あらすじ、いきさつ。そのすべてがだ。

そしてその中に、自分と、そして何より一番重要な、自分の仲間の事など、一切なかった。

その直後、胸の中にくすぶっていた怒りに火がつき

俺はナイフを握って突進していた。

その時の俺は、やっぱりどうかしていたんだろう。
まるで、自分のこの感情が自分のものじゃないような感じがしていたのだから。

そう、元は確かに自分だが、なんだか、養殖されたかのような気分で・・・・・・・・・

事を為し終えるまで、三秒もかからなかった。

人体の急所は十分に知り尽くしていたし、短刀を使った際の重心の乗せ方も知っていたから、一発だった。

彼はなにが起きたかもわからない顔をしてから地面に倒れて、その

目からすぐに光が失われた。

あっという間だった。

そして、自分の手が震えだす。手元に少しだけついた血が、妙に艶やかに光っている。

怖い恐いコワイ・・・・何がが俺に迫ってきている気がして、ついに全身が震えてきた。

そしてその瞬間、世界が揺れたんだ。

周囲の景色、否、空間が歪んで自分に雪崩れ込んでくる。
苦しい苦しい。なんだこれは。まるですべてが自分に入ってきているみたいだ。

すべて？・・・・・・・世界だ。

これは世界が入ってきているのだ。
ああ、ならばこの異常なほどの苦しみは納得だ。
すべての幸福と不幸を、未練と達成を、死と生を、すべてその身に受け止めようとしているのだから。

その辛さに大声を出す。
こんなに大声を出して苦しむのなんて、きっと生まれた時以来初め

てだ。

『そのとーり。君は今から生まれ変わる。さあ、あとは存分にやりたまえ』

あの声が聞こえる。

でも、答えてなどいられない。だってそうだろう？世界が入り込んでいるのに、思考がまともなわけがないじゃないか。

今のこれ？ああ、これはいいんだよ。これは夢なんだから。客観的に見た、俺の過去なんだからさ。こうして冷静なのも、わかるだろ？

でもまあ、そうはいっても自分は自分、やっぱり苦しい。

汗が次々と流れ出て、口からは涎が垂れている。目の前がチカチカと光って、耳がガンガンと鳴り響く。全身の筋肉が鈍い痛みを訴えて、中から押しつぶされているかのようだ。

その苦しさに、大声は止まらない。

ああ、やばいな。この現場、見られたらいけないのに。

おいおいなに言ってんだよ。世界丸ごとなんだぜ？そんなの気にする奴らがいるもんかよ。

それもそうか。

あれ?今のはオレの思考か?

違うよ俺だよ。

違う私だ。僕だよ。ウチだってワシじゃ自分ですオイラだｅｔｃ.
ｅｔｃ・・・・・

自分の思考がわからない。
自分というものがなくなって行く。

俺はなんだっけ?俺は・・・だれだ?

一体何をすべきなのか・・・・・

そう思った瞬間、周囲が黒に呑みこまれた。
この世界のすべてを取り込んだのか。

数泊してから、目の前に、大切だった仲間たちが映る。

ああ・・・これだけは守れたのかな?

そう思いながらそれを見て、俺は足掻くようにそこに手を伸ばそうとして

瞬間、その姿が砕けて消えた。

そしてそれらはオレの中の世界と共に、ただのそういう力と化した。

「うあああああああああああああああああああああああああ

あああああああ

必ずだ。

そのために、さて・・・・・どうしようか・・・・・

世界を再構築するには・・・・更に力が必要だ。
は、だったら簡単だぜ・・・・・主人公ぶっ殺してやればいい。

はは、ウヒ、クフフアヒアハハハハハハ！！！！！！

あレ？お化ＳＩいナ？なｎだカとっテも・・・・・

「楽しくなってきた・・・・・・」

自分にはない高揚感。
そりゃそうだ、俺は「自分」じゃないんだから。

「さて・・・・・世界を食らおうね。翼人？そんなもんはぶちのめす。そうだな。せっかくだから、取り込んだその世界もその時戻して行こうか。そうすれば・・・世界はもっと良くなる」

そうだ。俺たちだけがいい目を見るんじゃいけない。他の奴も等しく主人公にだ。

「・・・そのために、すべてを捨てる。俺はもう、一つの世界を取り込んだ。俺はオレではない・・・・・・さしあさっては、名前

を捨てよう・・・・・・」

そうだ、俺の名を・・・・・・・・・

俺の名は・・・・・・・・

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

「おぉい、起きろ。授業中だぞ？」

「・・・・・んあ？」

目が覚める。

どうやら授業中に寝てしまったようだ。

にしても、なんでまだこんな授業出てんだろうね、俺は。

・・・・・おぉう・・・・・ブルっときた・・・・・

・・・あんな夢見りゃ当たり前か・・・・まさかあのときの夢を見ることになろうとは・・・・この世界か?未練をなくせって?

バカ言うな。こんなもんは未練じゃねえよ。

確かにあんとき幻聴を聞きはしたが、あの感情は間違いなく俺のもんだ。俺の罪だ。

簡単には戻らないだろうが、世界をいくつも取り込めばいつかはできることだろう?

そうだ、取り戻さなきゃならないものだよ。

・・・・こんなこと考えるなんざ、俺も落ち着いてきたのか？
俺の中の世界が・・・オレになじみ始めている？

まずい・・・それじゃあ構築できなくなる。
あの世界を、取り戻せなくなる。

早くこの世界から出ないと・・・・・いや、あれさえうまくいけば
そんなことしなくても・・・・・

「・・・・次こそ必ずぶっ殺す・・・そうだ、これさえうまくいけば・・・・・」

「ん？どーしたお前。具合でも悪いか？」

「いえ、そうでは・・・・・いや、そうですね。体調がすぐれないので、少し保健室に行ってきます」

「そうか。大事にな」

まあ・・・その前にこの夢で沸いてきた嫌な思いを、あのくそ野郎を一回ぶち殺して発散してくんのもありかな・・・・・死なないのは癪に障るけど。

to be continued

さて、今回は主人公も音無も出ないお話となりました。
ちなみに、私はこの世界の事など一切考えてません。

今後も、書くことは無いでしょう（多分）

彼が訊いたあの声が、彼の内なる本能からのささやきだったのか、
ただの幻聴なのか、はたまた第三者のものだったのかはわかりません、という事で。

誰だって、自分に理不尽を感じた。だが、それでもこの世界で生きていくしかない。この話はただそれだけのものです。
そして、その一線を踏み越えてしまった、哀れな男の話、ただそれだけ。

さて、次回には主人公も音無も、ちゃんと出てきますよ。

そしてもしかしたら、次でＡＢ！！は最後かもしれません。

短いな・・・・でも、これ以上は続けてもしょうがないしなぁ・・

・・・

ではまた次回

なら・・・あんた認めてくれんの？このボクを・・・

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｎｅｘｔ　Ｄｏｏｒ～（前書き）

今回でこの世界でいきなり終わりになります。
なるべく流れは汲むようにしましたが、いきなりすぎたらすみません

「にしても・・・・・」

「どうした？蒔風」

「いや、ちょっとした興味なんだけどな？」

ある晩、寮の自室で、蒔風が音無に話題を振る。
すでに寝る準備はできていて、あとは布団をかぶればそれでいい、といった状態だ。

「お前がこの世界に残ってんのってさ、どんな未練があるからなんだ？」

「え？」

「いやだってさ、この世界にいるのは生前に何かやり遂げられなかった人なんだろ？でも、お前を見ててもなぁ・・・・なんだろう、そういったものが見えてこないんだよな」

そう、この世界にいる、ということは、何かしらの未練を持っているということだ。
そしてこれまでの長い時間、この世界に居続けているということは、音無にはまだ吹っ切れていない「なにか」があるということだ。

しかし、ここまで一緒にいても、蒔風は音無にそういった未練を見出すことはできなかった。
時折、何かを懐かしむような顔をしているが、それは懐かしさであって未練ではない。

だから、聞いた。
蒔風は相手に遠慮して聞かない、なんてことはしない男だ。
聞くだけ聞いて、相手が本気で嫌がるようならやめる、それでいいじゃん、というのが蒔風のやり方。

「俺の・・・・・未練か」

「そ。お前もこんな閉塞された世界から出て、次の人生を歩んだらどうだ？いやまあ、ここは楽しいけどさ、次ってのは絶対にない世界じゃん？」

「そう・・・・かもな」

この世界から成仏すれば次の人生、つまりは来世がある、と言われている。
言われている、というのは実際にそうなるのかはわからないからだ。
まあ、当然か。行って戻ってきた人はいないのだから。

「でも・・・俺は次に来る奴らを、ちゃんと導かなきゃならないからな・・・・・・」

「お前はどうなる?ってか、お前の仲間だった奴らは、お前がここに残ってることを、本当に良しとしてんのか?」

「・・・・・・・・」

そういって、音無が机のわきに立て掛けられている黒い筒に目を向けた。
何かの賞でももらったのだろうか?この世界にそんなものあったのだろうか?
それは何かにおいて行かれた感じを醸し出していた。

「これは・・・俺の卒業証書だ」

「？　ああ・・・確か言ってたな。一回だけ卒業式があったって。そんときのか？」

そういって、蒔風が卒業証書を手に取って開いてみる。
そこに書いてある文章は、決して大仰なものではなかった。
ただ、一生懸命頑張った、そのひたむきな姿が大切だったということが、書かれてあった。

「その時な、俺は残ってこの世界でやることを見つけたんだ。そして・・・・」

「おい、音無・・・・・」

「俺はこの世界に残って、みんなを救い続ける。それが・・・・・俺の「何言ってんだ音無」」

音無の言葉を蒔風が遮る。
まるで、それは許さない、と言わんばかりに。

「おいおいおいおい。待てよ音無。それじゃ何か？お前はいったん納得しておきながら、それでもこの世界に執着してんのか？」

「・・・・そうだ」

「・・・音無。お前の仲間だって、この世界には未練を抱えてやってきた。多分、それは生半可なものじゃないんだろう。とんでもなく大きなものだったんだろう。多分、生きることが嫌になるくらい、生きることが苦しくなるくらい、大きなものだったはずだ。そんな彼らにとって、また「生きる」という選択肢は、きっと辛いものだったと思う。確かにそうだ、生きることは辛い。でも、彼らはそれを乗り越えて、それでも生きようとして、来世に向かっていったんじゃないのか?お前はその場にいて、一緒に行こうと言ったんじゃないのか?」

「それは・・・・」

「その時の思いは嘘だったのか?生きることは素晴らしいということは、戯言だったのか?音無」

「・・・・・・・」

蒔風の言葉に、音無はあの時の光景を思い浮かべていた。
皆が順番に旅立っていき、その顔はすべて、次への希望に満ちていた。そんな、あの時のことを。

「音無・・・おまえの生前に、未練はないな?あるのは、この世界への執着だ・・・・」

「・・・そうだ」

「やり遂げなきゃならないことがあるのか？」

「・・・そうだ」

「これから来るやつらが心配か？」

「・・・そうだ」

「誰かがまた来るのを・・・・・待っているのか？」

「・・・・・・・・・・そうだ」

その答えだけで、十分だった。

蒔風はよいしょと音無の肩に腕を回し、そこからその体を担いでベットに投げ飛ばした。

ソォイ！！である。

「よいしょォ！！！」

「ぶわっ!?な、なにすんだ!!」

「お前さんよ、それはいけねえよ。みんな一緒に旅立って、次の世界で逢おうぜ、って言ったんだろ?お前にありがとうって、言ってくれた人がいたんだろう?だったら、お前はその人のために生きなきゃならん。次に進まなきゃならん。お前の世界は、ここから始まるんだ」

「・・・・でも・・・次の世界で会えるかなんて・・・」

「お前の親友は、そう思ってこの世界から去ったのか?６０億分の１の出会い。それを信じて、旅立ったんじゃないのか?」

「お前・・・なんでそれ・・・・」

蒔風の脳裏に、知らないはずの事が流れてきていた。
きっと、これはこの世界での彼らの記録、記憶、出来事だ。

その「彼ら」がどんな人間だったかなんてことに、蒔風は興味はない。かれらはもう、ここにはいない。

ただ、その最後はどんな奴らでも、満足し、そして次なる希望へと胸を躍らせていた。
それだけは分かったし、それだけで十分だった。

「いいか、音無。お前は、その待ってる人を置き去りにしているん

だぞ?次で逢おうと、その人が思わなかったわけないじゃないか。お前は行かなきゃならない。だろ?」

「お、俺は・・・・でも・・・・」

「だーーーもーーー・・・・卒業生がいつまでも学校にいるんじゃないの!お前は、今までに不満があったか?」

「・・・ないさ。オレの人生は、満ち足りていたんだ」

「じゃあ、この世界に来てからはどうだった」

「それもないさ。ここでのオレの人生は・・・まあ、騒がしかったけど、楽しかったし、大切な人に出会えたから」

「じゃあ、次の世界には、不安はあるか?」

「・・・それは・・・・・」

そこで、音無の言葉が詰まる。
次の世界。そこに向かえば、自分は彼女に対するこの想いを忘れてしまうだろう。

それが、何より怖かった。
せっかくここで出会えたのに、なんで別たれなければならないのか。
ああ・・・生前に不満などなかった。

だが、この世界での人生で、俺は神を呪った。
この理不尽さを呪ったんだ。

「だったら、願え、音無」

不安に駆られる音無に、蒔風が言葉をかける。
安心しろ、大丈夫だ、と。その言葉に根拠はないが、なぜだが確かなものがある気がした。

「大丈夫だ、音無。そりゃたしかに、この世界に絶対なんてことはないさ。でもな?願いがあるなら、それは現実にできる」

「願い・・・・・」

「・・・・もし、お前に、この世界の先に行く勇気ができたら、体育館にこい」

「・・・・ってあ、おい、蒔風・・・・・」

「では、おやすみ」

最後に一言言って、蒔風はベットに潜ってしまった。

音無が二段ベットの梯子を登ってみると、蒔風はすでに眠っていた。

それをみて、音無は考える。

自分は今、この世界に居るべきなのか、先に行き、大切なあの人に会えるかどうかもわからない世界を生きるのか。

青年は考える。そして、願った。あらん限りに。

「奏・・・・オレに、お前の勇気をくれないか・・・・・・・・・・」

ーーー

そうして、体育館の扉を開いた。

だが、いくら探しても蒔風はいない。
そこで音無はハッ！と気が付いた。

ずっと悩み、考え、俯いてきたから気付かなかったが、蒔風が体育館で待つと言ってから今まで、あいつが授業に出ているのを、俺は見ていない。
そして今思うと、ベッドの上の段は膨らんではいたが人の気配がなかった気がする。

つまり、まさか蒔風は・・・・・・

そう思って、音無は体育館の用具倉庫の重い扉を開いた。

そこにいたのは・・・・・・・

「・・・・・・何時だと思ってんだ・・・・・・このバカ・・・・・・
まだ寝てるよ・・・・・・」

マットの上で、抱き枕にしがみついて眠っている蒔風だった。

隅の方にはごみ箱があり、そこには今まで食べた分であろうビニールゴミがあり、蒔風が寝ているすぐ横にはまだここにいるつもりだったのか、パンやらなんやらが積まれていた。

「お前・・・・本当にいつまでもここで待つつもりだったんだな・・・・」

蒔風を見て、苦笑する音無。
と、そこで蒔風が眠気眼をこすって起き上がった。
そして、眼をしょぼしょぼさせて、目の前の人物を見る。

「ん・・・・・・・・・・お？・・・音無・・・・来たか」

「ああ・・・・・」

「こんなとこまで俺を探すとは、しっかりと決心はついたんだな？」

「ああ」

「胸を張って、自信を持って、次の世界に、希望は持ったか？」

「ああ・・・・！！！」

それを聞いて、蒔風が音無の肩を叩いき、用具室の外へと出る。

「さ、始めようか」

「ああ・・・少し遅れた、本当の卒業式だ・・・・・」

――――――

「って言っても、やるのはほとんど音無、お前だけどな」

「え？・・・・ああ。まあ、そうなるな」

「えーー、では・・・・・・・・・音無結弦」

「はい」

「今までの人生に、悔いはないな？」

「ないな」

「この瞬間に、思い残すことなないな？」

「ないよ」

「これからこの先に、不安や恐怖はあるか？」

「それはある」

「だが、君の胸にはそれに打ち勝つ溜めの、大切なものがある！！」

「ああ！」

「希望は持ったか！？」

「あるさ！！沢山ある！！！」

「会いたい人は！？」

「まずは奏に！！そして日向とユイもからかってやりたいし、ゆりに振り回されんのもいいし、直井は俺がいてやんないとダメなやつだからな！！みんなに会いたい！！また、次の世界で！！！」

そこまで一気に、最後には大声で叫ぶように言った音無に、蒔風が祝福を込め、そして願って、音無に言葉を贈る。

「願いを胸に！！勇気を一歩に！！！さあ、向かうがいいさ！！！この先へ！！君の願いは聞きとどけられた！！大丈夫。この翼が保証する！！！」

――――開翼――――

「願いの先には、幸福を。これまでの人生に悔いはなく、ここにきてｋ楽いたという稀有な迷える魂よ！！！希望の光に見つびかれ、存分に！！！生きる苦しみをその身に受けて、生きる幸せを噛みしめてゆく！！！人よ！！！」

バサァ！！！

「そう、人よ！！ただ、幸福に生きよ！！！！それだけが、君たちに与えられた、たったひとつの義務なのだから！！！！」

音無が、目の前に翼を持った蒔風を見る。
その姿はさながらに天使だ。

だが、彼は知っている。

天使なんていない。神もいない。

たとえいたところで、自分たちに差しのべてくる手なんてないだろう。
そうだ、いつだって人生を歩んでいくのは、他でもない自分自身なのだから・・・・・・

音無の視界が、翼から噴き出してくる羽に覆われる。
なにも見えなくなって、周りが銀白に包まれた。

その中を、必死になってかき分けて、音無が先へと進んでいき

そして・・・・・・・

その翼の先に、大切な彼女を見た気がした。

――

――――――――――――――――――――

蒔風がその翼で音無を優しく包み込み、そしてその中からその存在が消えたことを感じとってから、静かに涙を流した。

決別の涙ではない。

彼が勇気を以って旅立ったこと、そしてその先の幸せを想ってこその、涙だった。

蒔風がその余韻に浸る。

が、そこにその雰囲気をぶち壊してくる男が一人、乱入してきた。

「ここにいたのか・・・・やぁっと・・・・何とかいけそうだ・・・・」

体育館の扉を開け、羽根の舞い散るその中を蒔風に向かって歩いてくる。

「奴」だ。

「音無はどうした」

「残念だったな。次の世界へ行ったよ・・・・」

「・・・成仏か。まあいいさ。この世界さえ出れれば、どうにかなるからな。この世界は諦めよう」

そういって、「奴」が蒔風に向かって走り出す。

その手には魔導八天が握られており、思いっきり蒔風に向かって振り降ろされた。

が、振り下ろしたのは、蒔風までまだ十五メートルも離れた位置でだ。
それもそのはずである。「奴」は蒔風を切ろうとしたのではなく、魔導八天を投げつけただけなのだから。

「!?そんなことしてもッ!!!」

そう言って蒔風が魔導八天を避けようとする。
そしてそれと同時に、十五天帝を出して「奴」に応戦しようと構えた。

今の奴は剣がない。
この気持ちのいい場面に突入してきた「奴」に対して、イラついていたのだろう。
ボコボコにしてやる、という思いの蒔風が、飛んでくる魔導八天の延長線上から身体をずらして、「風」と「林」に手をかける。

その瞬間

「汝が主、マイカゼシュンが命じる！！主の元へ、その手に剣を！！」

走り止まって、「奴」が叫んだ。

直後、二人の剣に、変化が起きる。

蒔風の元へと飛んで行っていた魔導八天は止まり、十五天帝は蒔風の元を離れていった。

そしてその二剣は、まるで蒔風と「奴」という二人の磁場に押されあっているかのように、ちょうど真ん中で停滞してしまったのだ。

その二つの剣が蒔風や「奴」の方にグラグラと揺れ、ぶつかり合うたびに巨大なエネルギーを生み出していく。
そのエネルギーは球体状となって、まるで竜巻のように周囲の空気を巻きこんでいっていた。

「な・・・・・お前！？」

「このために、Ａｎｇｅｌ　Ｐｒａｙｅｒをずーーーっといじくってたんだ！！！」

これまで、「奴」がやっていたこと。
それこそ、今回この現象が起こったことの原因だ。

蒔風と、「奴」

二人の持つ剣は、「天剣」と「反天剣」
反する存在の二振りの剣。

そしてその担い手は、世界は違えど、同じ人間。
異世界での同一人物。

だからこそできたことなのだが

「奴」はこの世界での蒔風と自分の境界線を薄めた。
二人をある程度まで同一人物ということにしたのだ。

故に、「奴」のあの言葉に剣が今、暴発しようとしている。

蒔風に向かえばいいのか、「奴」に向かえばいいのか。

一体どちらが担い手なのか。

どちらも同じ人物だ。しかし、どちらも違う人物だ。

二人の剣には意思が宿った物もあるが、このようなバグを起こしては意味のない事だろう。

しかも、この剣はただの剣ではない。「世界四剣」と、その反剣だ。更に言うならば、そのうちの一本と、ちょうど反対に位置するモノがぶつかっているのだ。

そのエネルギーは計り知れない。

そして、その暴発が今、巨大な球体となって二人を飲み込んだ。

「な・・・ぶぉッ!?」

「ははははは!!うまく行った!!これで爆発すれば、世界の外まで弾き出される!!」

「きさま・・・・これが・・・・・」

「そうだ!!安心しな、この世界は諦めた。だがな、次の世界で、俺はお前を殺す!!!暴発することがわかってりゃあ、その方向性もどうにかできるからなぁ!!!」

「奴」が叫ぶ。次こそ終わりだと。
何度も聞いたその言葉が、何故だかいやに耳に残る。

「どういう・・・・ウアぁッ!?」

「「お前」を殺すんだよ蒔風!!!消してやる・・・・次の世界で、絶対に殺してやる!!この世界で死んだ方がましだったって思わせてやるからなァ!!!!!」

「奴」の笑い声が聞こえる。

目の前が光に包まれ、その光が光として見えなくなったころ

それが爆発して、世界から二人を弾きだした。

・・・

蒔風が目を覚ます。
いや、正確には意識が覚醒しただけで、目はまだ開かれていない。
ただわかるのは、自分は今、ベッドの上で眠っているという事だ。

目を覚ます。
まあ当然だが天井がある。

周囲を見渡す。
この世界は・・・・情報が流れ込んでくる。

記憶をたどる。
・・・・・だめだ、薄ぼんやりだ。世界のはざまで何かあったことは覚えているが、その内容が思い出せない。

だが、少しずつ思い出してきた。
だからまあ、すぐに記憶は戻るだろう。

とりあえず、現状を確認しよう。

今わかっていることは

この世界は、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”である、ということだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！　～Ｎｅｘｔ　Ｄｏｏｒ～（後書き）

終わりましたぁ！！ＡＢ！！

アリス「にしても呆気ないですね」

もしそのように感じてしまったらすみません。

私の力量不足です。

【Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！】

構成：“Ｎｏ　ｎａｍｅ”７０％

“フォルス”２０％

“輝志”５％

“ＬＯＮＤ”５％

最主要人物：音無結弦

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ：次なる世界での幸福を・・・・・

ア「今回のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは攻撃ではないんですね？」

いえ、あの場面で出したからああなっただけで、「奴」と戦ってい

るときに使ったら別の効果を出したと思います。

ア「その時はどうなるんですか？」

さあ・・・考えてなかったですね・・・・・・

ア「おい！！！」

にしても今日は良かった・・・・・
雪じゃなかったら土砂降りの中帰ってくるところだったよ・・・・・

ア「降ってましたねぇ」

まあ、神奈川じゃ積もらないでグズグズの氷になりますけど。

ア「次回は番外編！！」

と、行っても狭間でのことですけど

ア「お題としては「もし廻った世界が微妙にこんな風に違ったらいやだ！！！」です」

最初からやるので、二、三回に分けるかもです。

ではまた次回

蒔風「狭間の時間を見に行こう！！！！」

番外編　～ＣＬＡＮＮＡＤから龍騎まで～（前書き）

蒔風「最初に言っておこう。これは夢オチだ！！」

番外編　～ＣＬＡＮＮＡＤから龍騎まで～

こんな世界は嫌だ！！！

【くらなど】　～演劇「鉈少女」～

渚
「じゃあ蒔風さんのために今から演劇をしましょう！！」

蒔風
「お？ありがとうだぜ！！なにやんの？」

渚
「待ってくださいね？今小道具を・・・・」（ゴソゴソ・・・・）

渚
「これをどうぞ！！」

蒔風
「へ？金属バット？」

渚

「今からこれで、戦いを演じます！！！」

蒔風
「ちょ、どんな流れでそうなった？お前のそれ鉈じゃねえか、刃ぁつぶれてないんじゃないか、なんか今ギラリってなんなかったか！？」

渚
「嘘だッッ！！！」

蒔風
「それお前違・・・・ってか、俺の立ち位置は岡崎だろう！？」

岡崎
「マジやめて」

杏、椋、ことみ
「「「こっちみんな」」」

春原
「僕にそんなひどい役はできないよ」

蒔風
「岡崎だけでなく女子に春原まで！？自分以外皆敵！？」

渚（青い目）
「あっははははははははは！！！！！」

ブゥン！！

蒔風
「ギャーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

【くうが】　～もし五代が帰ってこなかったら～

蒔風
「お前にこの世界の主人公はやらせない！！！」

「奴」
「調子に乗るなよ！！まだ始まったばかりで・・・・・・」

一条
「五代、あと四年は帰ってこないって」

蒔風、「奴」
「「何いいいいいいいいいいいいいいいいいい！！？？」」

一条
「だから、俺が！！！」

蒔風
「一条さん！？」

一条
「見ていてくれ・・・俺の！！変身！！！」

ピキーーン！！！

蒔風
「ライジングアルティメット！？」

「奴」
「ちょ、おま、しかも目ェ黒いぞ！？」

何か真っ黒なモノを背負った一条さん
「グファァァァ・・・・・ヴットバス！！！」

蒔風
「ぎゃーーーーーーーーーー！！！仕事のストレスかーーーーーーーーーーーー！！！！！！？？？？」

「奴」
「おい蒔風！！てめえ主人公なんだからどうにか・・・って俺もぎゃーーーーーーーーーーーー！！！！」

【ハルヒちゃん】　～まさかのスピンオフだったら～

ハルヒちゃん
「さあ！！今日の不思議を探すわよ！！」

蒔風
「どうも、異世界人です」

キョン
「うおーーう！！いきなり言っちゃったよこの人ーーーーー！？」

長門
「・・・・・・この世界に行った？」

蒔風
「ん？ああ、クラナドなら・・・・・」

長門（目がキラキラ）
「今度、詳しく」

蒔風
「長門がゲーマーだ！？ってかこっちハルヒちゃんだ！！俺の正体明かしても大丈夫なあたりギャグ漫画だな？これ！！！」

【ハルヒちゃん2】　～浅倉違い～

「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」「イライラするんだよ」

『『『祭りの場所は、ここかぁ・・・・』』』

「怖えええええええええええええ！！！！！！！！！おい！！これシャレになんｎ《－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－》おいいいいいいいいいい！！！！！弁護士！弁護士を呼べえええええ！！！！」

【羅鬼巣堕（らきすた）】　～もし根本から違ったら～

蒔風
「いや・・・この世界、名前が・・・・・」

あんちゃん
「ゴルァ！！ここに来るとはいい度胸じゃけんのう！！！？？」

蒔風
「いや、何かおかしいよ！？確かに、こんな「らきすた」嫌だけどさ、これは根本から間違ってんだろ！？」

モヒカン&リーゼント
「覚悟しんときぃや！！！！」

蒔風（殴られてキリキリ舞い）
「スキンヘッドにモヒカン！？なんて世紀末ッ！？ブハァっ！？」

【ひびき】　～もし完璧な音楽サークルだったら～

「（プオーーー）」

「（ドンドン）」

「（パフー）」

蒔風
「なに？どうしてこうなった？なんで変身して女子高生の制服着てんの！？」

響鬼
「君はキーボードだ！！！」

蒔風
「いや、俺できないから！！芸術関係全く駄目だから！！」

斬鬼、轟鬼、響鬼
「「「おんげき！！」」」

「それだけはやっちゃいけないだろ！？」

威吹鬼
「僕は・・・・無力だ」

蒔風
「確かに管楽器はないけど・・・・・」

響鬼
「大丈夫だ威吹鬼。これを付けろ」（スッ）

威吹鬼
「これは・・・・ネコ耳！！！」

スチャッ

斬鬼
「いぶにゃーーーん」

蒔風
「よりにもよってそのポジションかーーーーーーー！！！！！」

【うたわれてしまったもの】　～仮面つながりで～

オボロ
「大変だ！！秘密結社アルルーが蜂蜜を強奪して回っている！！」

蒔風
「え？アルルゥじゃ・・・・・」

ベナウィ
「アルルーだ！！こんな時にあの人がいてくれれば・・・・」

バッ、ザザッ！！！トウッ！！！！！

謎の仮面男
「はーーーっはっはっはっは！！およびとあらば、即参上！！眠れる名探偵から、２４時間で任務遂行の刑事、そのとき不思議なことが起こった男の相棒まで、なんでもござれのスーパーヒーロー！！！苦しみを破り、炉が如く熱いハートを持つ男！！！！！仮面破苦（ハク）御炉（オロ）、ここに誕生！！！！」

蒔風
「参上と言って誕生した！？斬新だな！！！ってか、あんたは時系列的に封印されてんじゃないの！？」

破苦御炉
「ＮＯ。ソレ、はくおろ。ワタシ、チガウ。めたハツゲン、ダメ、ゼッタイ」

蒔風
「なんでそこだけ片言なんだよ！！！絶対そうだ！！ハクオロさんだ！！！」

アルルー
「ハチミツ食べたーーーーい！！！」

破苦御炉
「許さんぞ！！！蜂蜜は私のものだーーーー！！！！！」

蒔風
「この人蜂蜜欲しさに来ただけかクソッタレぇ！！！！！」

【ターユーターマ！！】　～まさかの最初の猿最強伝説～

蒔風（猿を迎撃中）
「さて、ハクオロさん、力を借りますよっと！！！！」

パァン！！

猿
「キ？」

蒔風
「は？」（顔をペタペタ）

・・・・・・・・・

蒔風
「仮面ついてるーーーーーーーーーーーー！？」

猿
「キーーーーーー！！！」

蒔風
「アッ！！？こら、やめッ、イタタタタタタタタ！！！と、とれッ。取れないから！！その仮面取れないから！！顔の皮はげちゃう！！！や、ッ、アーーーーーーーーーー！！！！」

猿
「キキャーーー！！！」

蒔風
「おおおおおおお！？う、うひッ！！く、くすぐんなっ！！わ、脇は・・・脇腹はダメぇ！！！ッてかこれハチミツくせえ！？破苦御炉だこれ！？！？」

【りゅうき】　～日本じゃなかったら～

蒔風
「龍騎の世界か？」

？？？
「Ｈｅｙ，Ｙｏｕ　ｔｈｅｒｅ！」

蒔風
「ん？」

？？？
「Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ？」

蒔風
「ん？あれ？英語！？」

???改めキッド
「カァメンライダー！！！！」

蒔風
「ドラゴンナイトだったーーーーーーーーーー！！！！だが、これはこれでいいんじゃないか？」

【りゅうき2】　～こんなベントだったら・・・蒔風死ぬな～

―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―

ゾルダ
「喰らえ浅倉ァ！！！」

王蛇
「ウオッ！？」

ドガァアアアアアン！！！！

ゾルダ
「やったか！？」

蒔風
「・・・ぐふう」

王蛇
「そこにいた、お前が悪い」

龍騎、ナイト、ゾルダ
「ガードベント蒔風ーーーーーーーーーー！！！！！？？？」

夢は終わらない！！！

番外編　～ＣＬＡＮＮＡＤから龍騎まで～（後書き）

大丈夫かなこんなんで・・・・・
苦情とか来ないかな・・・・

アリス「大丈夫です！！だってこれは夢だから！！ほら、夢ってめぐるましく場面変わるじゃないですか」

確かにそうだけど・・・・
私とあなた、言う立場逆じゃありません？

ア「そうですか？次回はバカテスからＡｉｒ！！」

全部のネタが思いつくかが心配だ・・・・・

番外編　～バカテスからＡｉｒまで～

【バカテス】　～恐るべき男の嫉妬～

蒔風
「明久！！逃げておけ！！！」

明久
「うん！！わかったよ！！」

「奴」
「こいつ、自分の世界に恋人残してきてるんだぜ？」

Ｆクラス
「コロセ！！」

蒔風
「ちょ、お前ら待てェ！！！この野郎、嘘つくんじゃ・・・・」

明久
「裏切り者には死を！！！！」

蒔風
「隠れてろって言ったろぉ！？」

【アギト】　～これだからディケイドはネタにしやすい～

翔一
「お・・・お・・・・・」

蒔風
「どうしたんですか？」

ショウイチ
「俺を呼ぶなアアアアアアああああ！！！！！」

蒔風
「どっから来たんだあんたァァァァああああ！！！！！」

氷川
「あれ？こうなるとG3取られるんじゃ・・・・・」

芦原
「ギルスもか・・・・・？」

蒔風
「そこの二人は地味に落ち着いてないで助け「呼ぶなぁぁぁアアアアアアア！！！！真魚ちゃんン゛ン゛ン゛ン゛！！！！！」お前ホントにどっちなの！？」

【なのは】　～皆！！彼が始まりだったんだよ！？～

蒔風
「さて、君に来てもたったのはほかでもない」

ユーノ
「な、なんだい？」

蒔風
「お前、このままじゃ出番なくなるんだぞ？」

ユーノ
「えーー？何言ってるんだよ舜。そんなわけないじゃないかーー」

蒔風
「知らぬというのはかくも幸せなことなのか・・・・・・」

ユーノ
「僕の地位は揺るがないんだ。だって、なのはが魔法に出会った原因は僕。つまり、ぼくがいなければなのはは始まらなかったんだよ？そんな僕の出番がなくなるなんてことはない！！！！！」

蒔風

「ユーノ、わかった。もうわかったから!!だから泣きながら太陽に叫ばないでくれ!!!!!」

【とある魔術の禁書目録】　～もし上条が日々の鬱憤を、いやな方法で発散させていたら～

上条
「あー、今日も不幸だった・・・・・おーい、インデックス。これあげるよ」

インデックス
「あ、お帰りとうま。なに?食べ物?」

上条
「この錠剤、すぐにおなかがいっぱいになるみたいだぞ?」

インデックス
「ほんと!?もーらい!!」（ゴクン）

上条
「ＨＡＨＡＨＡ、そしてこれを飲んでくれ」

インデックス
「あ!!これ「こーら」ってやつだね?いただきマース!」（グビリ）「ゴボァ!!??」

上条
「（にやり）ストレス発散できないわーーー今度御坂に砂鉄バラまいてやるか」

蒔風
「お前絶対チゲえよ!!!!上条じゃねえよ!!!」

【とある科学の超電磁砲】　～もし上条が日々の鬱憤を、以下略～

御坂
「黒子ーーーー」

黒子
「なんでしょう。おね・・・ぎゃーーーーーーーーーー！！！！」

御坂
「どうしたのよ」

黒子
「な、な、な、なんで全身砂鉄まみれなんですの！？」

御坂（ポッと顔を赤らめながら）
「だ、だって！！こうしたほうがいいって言われたから・・・・」

黒子
「だからってムック（黒バージョン）になんなくてもよろしいでしょう！？」

上条
「（プーーーー！！クスクス）」

蒔風
「お前ぜってー違う！！！こんなん上条じゃない！！！！」

【ＦＦ７】　～最初作者も言えませんでした～

クラウド
「行くぞ！！超究武神覇じゃん！！！」

蒔風
「・・・・・・・・」

クラウド
「・・・・・ちょうきゅ・・神覇斬！！！」

蒔風
「・・・・・超究武神覇斬？」

クラウド
「ちょーきゅーぶじんはざん！！！！！」

蒔風
「やけになってそんな「すぅぱぁだいぜつだぁん」みたいに言わないでいいから！！！あっちで練習しよう！？」

【ＦＦ７】　～きっと長く使ってくるとこういうこともあると思うんだ～

クラウド
「超究武神覇斬！！！！！」

蒔風
「おおおおお！！！」

クラウド（剣を振りまわして）
「ハァッ！！！！」

バラッ！！！ヒュンヒュンヒュン！！！！

蒔風
「ぬおおおおおおおおお！？ちょっ！？剣の組み合わせの接合が緩い！！！辺り一面串刺しにする気か、ってオウぅア！？」（ジョリッ！！！）

【ＦＦ７】　～一瞬忘れた～

カダージュ
「ありがとう、兄さん」

クラウド
「ああ、・・・・・カター・・・・・ジャ」

カタージュ
「ジュ！！！！」

【ＦＦ７】　～書けなくてごめんなさい～

レノ
「俺達きっと忘れられてっぞ、っと」

ルード
「言うな・・・・・」

【ひぐらし】　～もし携帯電話があったら《鬼隠し編》～

圭一（メールで連絡）
『なあ、あれってどういう事なんだ？』

魅音
『え？おはぎに入ってたのタバスコだよ？（・３・）』

圭一
『なぁんだ』

解決！！！！

【ひぐらし】　～もし携帯電話ｒｙ《綿流し編》～

圭一（メールで連ｒ）
『なあ、今日オレと一緒にいたのって』

魅音
『詩音』

圭一
『ＯＫわかった。大丈夫だ問題ない』

【ひぐらし】　～もし携帯ｒｙ）《祟殺し編》～

レナ
『圭一君、沙都子ちゃんのおじさん※しちゃったんでしょ？』

圭一
『え？』

レナ
『大丈夫、みんなで口裏合わせしとくから』

圭一
『ありがてぇ！！』

【ひぐらし】　～もしｒｙ《暇潰し編》～

赤坂
『雪江、元気か？』

雪江
『ええ』

赤坂
『よかった』

梨花
「つまんないのです・・・・・・」

【ひぐらし】　～彼女に防犯ブザー持たせとけばいいと思うんだ～

鷹野
「死ねぇ！！！」

梨花（ストラップの防犯ブザーを引き抜く）
「（ニヤリ）」

ピリリリリリリリリリリリリリリリリ！！！！！

村民１
「どうしただ！？」

村民２
「梨花ちゃま！？」

村民３
「びっくりしたよ～～～」

医師
「このメイド服を！！！ブハァ！？」

村民４
「助けに入れてよかっただ～～～」

梨花
「これさえあればこれさえあればこれさえあれば・・・・・」

蒔風
「ダメじゃねぇ!?いや、でもハッピーエンドだからいいのか?うぅむ・・・・・」

【仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ】　～あれってどういうエネルギーなんだ?～

彼らは仮面ライダー、改造人間である。

事件が起こるまでは、その身にエネルギーを蓄え、そして極力その消費を抑えるために、日々努力しているのだ！！！

蒔風
「つまり食っちゃ寝してんだな？」

「「「「「「「「「「オーーールライダァキィック！！！！！」」」」」」」」」」

蒔風
「なんてディケイドッ！？」

【Ａｉｒ】　～ゴール？させねえよ！？～

観鈴（晴子に抱きつこうとしている）
「もう・・・ゴールしても・・・・」

晴子（そこから後退する）
「（スッ）」

観鈴
「・・・・も、もう・・・ゴールしても・・・・・・」

晴子
「（スッ）」

観鈴
「・・・・・・・・・ゴ、ゴールしても・・・・・・・・・・」

晴子
「（ズザザザザザザザザザッッッ！！！！！）」

観鈴
「ゴールさせろォォォォオオオオオオオオオ！！！！！！」

晴子
「あかん！！ゴールしたらあかん！！！！！」

蒔風
「これは・・・・悪夢なのか何だかわからないな・・・・・・」

まだ夢は続く

番外編　～バカテスからＡｉｒまで～（後書き）

なにこれひどい

アリス「ＦＦ７、多かったですねぇ」

なんか書いてたら出てきた。
なんだかクラウドはネタにしやすいぞ！？

ア「次回、ディケイドから恋姫まで」

ではまた次回

もしかしたら明日は更新できないかもしれません。
そうなったら、活動報告に載せますので、ご了承ください。

番外編　～ディケイドからまで恋姫～

【ディケイド】　～海東ソッチ疑惑～

海東
「僕だけを見ていてくれ・・・・」

海東
「君は大切な宝だ」

海東
「士、死ぬな！！！」

蒔風
「海東ってソッチの気があるんじゃないのか？」

士
「否定できねぇな」

ユウスケ
「二人は大切なものを盗んでいきました・・・・・・あなたの尊厳です！！！」

海東
「（ブワッ）仲間なんて・・・・仲間なんてーーーーーーーーー！！！！！」

蒔風・士
「ニヤリ」

【ディケイド】　～増える蒔風～

士
「行くぜ」

カメン・・・カメンラ・・・カメカメカメカメカメ・・・・

士
「あ、あれ！？バグった！？」

カメンラカメンラカメンライライライライライライライライ

士
「このっ、このっ！！！」

カメンライド――――――

士
「？」

［Ｙｏｋｕｊｉｎ　Ｒｉｄｅ――ＭＡＩＫＡＺＥ！］

士
「お、ちょ、ま！？」

パァン！！！

蒔風×２
「「私は一人ではない」」（エージェントスミス的な感じで）

ディエンド
「僕も行こう！！」

［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－ＭＡＩＫＺＥ！］

蒔風×３
「「「まだまだ増えるぞぉ？」」」

「奴」
「やめて！？」

【電王】　～きっとそれは不幸のせいだ～

蒔風
「それ！！」

モモタロス
「おをぉ！？」

良太郎
「憑依だけが解けるみたい」

蒔風
「の、ようだな」

ナオミ
「コーヒー持ってきましたよぉ・・・あっ！！」

蒔風・良太郎

「おぉおおお！！！？？」

モモタロス
「あぶねえ良太郎！！蒔風バリアーーーー！！！」

バシャッ！！！

蒔風
「アッツゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウ！！？？」

良太郎
「しゅ、舜ーーーーーーーーーー！！！！！！」

【電王】　～もしマジでハナが良太郎のヒロインやってたら～

侑斗
「・・・・・・・」

良太郎
「・・・・・・・・・お義父さん？」

侑斗
「義父さん言うな」

【電王】　～つまりこう言うことだよね～

ハナ
「良太郎おじさーーーーん」

良太郎
「見た目は完璧に幼馴染だけどね」（ルーーーー）

デネブ
「ダメだ野上！！その関係は不埒だ！！！」

侑斗・良太郎

「そんなわけないだろオオオオオオオオオオオオ！！！？？？」

【なのはA's】　～最終決戦にいなかったよ・・・・・～

ユーノ
「・・・・・・・・・」

蒔風
「・・・・ほれ見たことか」

【なのはA's】　～君だけは同じだと思ったのに～

ユーノ
「フッフッフッフ」

ザフィーラ
「どうした？スクライア」

ユーノ
「君もこっちに・・・・」

ザフィーラ
「いや、最終決戦で活躍したから俺は勝ちだ」

ユーノ（涙）
「（ダバァ！！）」

【なのはA's】　～八神名作劇場～

はやて
「ん～～～～～～～～～・・・ハッ！！」

ヴィータ
「立った！！はやてが立ったーーーーーーー！！！」

シグナム
「なにしてるんだ、ヴィータ」

はやて・ヴィータ
「「予行練習」」

シグナム
「頭痛い・・・・・」

【リトルバスターズ】　～理樹がもし理鬼だったら～

真人
「筋肉筋ｎ「バカやってないで行くよ、真人」はい・・・・・」

謙吾
「メーーーン！！マーーーン！！！ドォーーーウ「うっさい」はい・・・・」

真人
「理樹が・・・理樹がっ・・・・・」

謙吾
「理樹は・・・・あんな目しないッ！！」

蒔風
「おーおーよしよし・・・・」

【リトルバスターズ】　～彼なら何とかしてくれる・・・はずだ～

恭介
「なんだお前ら、ふがいないぞ？」

蒔風、真人、蒔風
「恭介！！！」

恭介
「今から俺が、元の理樹を取り戻してきてやる！！！」

バッ！！！

理樹
「仕事探せよ」

恭介
「チックショオオオオオオオオオオオ！！！！！」

蒔風
「恭介ぇエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

【５５５】　～彼はツッコミ～

蒔風
「なあ、ファイズフォンの番号って覚えんの面倒じゃないのか？」

巧
「そうでもねェよ。使ってりゃ慣れる」

蒔風
「ふーん」

巧
「？蒔風、なんでオレの腰にベルト巻いてんだ？」

蒔風
「（にやり）３７５６４！！！」（ピピピピッ！！）

巧
「バッ！？」

蒔風
「そら！！」

カシャン！！！バシュン！！！

ドォン！！！！

蒔風
「・・・・爆発しちった」

巧
「どーすんだよ！！！！」

蒔風
「いうや、マジごめ・・・・」

巧

「爆発オチなんざ今更やったって・・・」

蒔風
「そっち!?」

【Ｆａｔｅ】　～彼らなら何でもできるんだ～

アーチャー
「アーチャーレッド!!」

ランサー
「ランサーブルー!!」

バーサーカー（しゃべれることは気にしちゃいけない）
「バーサーカーｂｌａｃｋ!!」

ライダー
「ライダーバイオレット!!」

セイバー
「セイバーホワイト！！！」（リリィ的な意味で）

アーチャー
「理想におぼれぬ、我らが魂！！！」

五人
「英霊戦隊！！！！」

ダンッ！！

五人（ポーズかっけぇ）
「サーヴァンジャー！！！！！」

蒔風
「心なしかアーチャーがノリノリだ・・・・・」

凛
「甘いわね・・・・」

士朗
「え？」

【Ｆａｔｅ】　～最後の一言は作者の言葉～

凛
「リンレッド！！」

桜
「サクラｂｌａｃｋ！ＲＸ！！！」

士朗
「ブルーナンデサー」（棒読み）

イリヤ
「イリヤホワイト♪」

慎二

「ワカメ！！！」

凛
「戦わなければ生き残れない！！！」

五人
「魔術師戦隊！！」

バーン！

五人（なんかヘコイ）
「マスターファイブ！！！」

アーチャー
「・・・ちょっと待て」

凛
「なによ」

アーチャー

「いや、君はいい。桜も・・・なんだか黒であるのをいいことに何かパクっている気がするんだが、まあいいだろう。で、お前はなんだ？」

士朗
「ブルーナンデサー」

アーチャー
「それでお前はいいのか？」

士朗
「いいよ・・・・もう・・・・」

アーチャー
「そうか・・・・で・・・まあイリヤのブルマは許可しよう。お前はホントになんだ？」

慎二
「・・・ワカメッ！！！」（ビシッ！！！）

アーチャー
「もはや色も何もないじゃないか。ただのワカメで・・・何ができるんだ？」

慎二
「ただよってます」

アーチャー
「それで何ができる」

慎二
「だってほら・・・敵を倒せばいいってもんじゃない。破壊された町の修復。心の傷・・・そういったものを、なんとか・・・」

アーチャー
「いや、確かにそうなんだが・・・それはただよっていればできるのか？」

慎二
「いや・・出来ないですけど・・・・・でもせめてこれくらいはやっておきたいかなぁって」

アーチャー
「やらない方が身のためだ」

蒔風
「ちなみに作者が一番好きなのは・・・・・・「五星戦隊ダイレンジャー」ダァァッ！！」

【Ｆａｔｅ】　～いつかやりたい「めぐ銀」メンバー聖杯戦争～

蒔風
「そういえばオレが英霊になったらどうなるんだ？」

士朗
「さあ？変人（ストレンジャー）とかじゃないのか？」

蒔風
「お前言うね」

天道

【カブト】　～ワームってことはこう言うことだよね？～

「ひより、買い物に行ってくれるか」

ひより（シシーラワーム）
「わかった。（グァン）行ってくるよ」

シュバン！！！

蒔風
「ワームだった事ってトラウマじゃないの！？ねぇ！？」

【カブト】　～これはディケイド版にも言えることだったΣ！！～

ソウジ
「クロックアップの世界に一人か・・・・・」

ヒヨリ（シシーラワーム、クロックアップ）
「おにーーーちゃーーーーーん」

蒔風
「だからそれは、やめろーーーーーーーーーーーー！！！！！」

【恋姫】　～いや、そうなんだけどさぁ！！～

蒔風
「にしてもさ、女の子ばっかだよなァ・・・・」

一刀
「だなぁ・・・・」

蒔風
「このハーレム野郎」

一刀
「いや、オレに言われても・・・・・」

星
「ちょっとお待ちください」

蒔風
「どうした？星」

星
「そう言った趣旨の、ゲームではありませんかッ！！！！」

蒔風
「メタ発言はーーーーー、お控えくださいッッ！！」

まだあるよーーーーー（泣）

番外編　～ディケイドからまで恋姫～（後書き）

やっと次で番外終わりそうだ・・・・・

アリス「にしてもなんでこんなに長くやるんですか？」

知りたい？

ア「まあ、読者様的には知りたいことではないかと」

次回でなんとなくわかると思いますよ？

ア「次回？次回はブレイドからＡＢ！！までですよ～～」

ではまた次回

やばい・・・脳味噌干からびてきてるかも・・・・・

番外・・・そして、序章　始まりの世界

【ブレイド】

ケンジャキ
「イッタイヌニガオコッテイルンダ！？」

ダディ
「ゼンインノコトヴァガボドボドニサレテァ！？」

蒔風
「ボボザ　ブレイドボゲバギ　ジャバギボバ！？」

訳

剣崎
「一体何が起こっているんだ！？」

橘
「全員の言葉がボロボロにされてる！？」

蒔風
「ボボザ　ブレイドボゲバギ　ジャバギボバ！？」

睦月
「蒔風さん、それグロンギ！！！」

始
「蒔風、ここはちゃんとブレイドの世界だ」

睦月
「わかるんですか！？」

【１１ｅｙｅｓ】

蒔風
「そういえば駆の目が見えると、「１１」じゃなくて「１２ｅｙｅｓ」になっちゃうのか？」

ゆか
「あ、そうだね。確かそういうタイトルだったもんね」

栞
「だったら、潰せばいい」

駆
「怖ぁ！？え？ちょっとなんでみんな尖ったもの持ってきてんの？ねぇちょっとぉ！？」

美鈴
「許せ、駆。これも作品のためだ！！！」

駆
「二次創作なんだからそういうの関係な、ギャーーーーーーーーーー（３Д┳）！！！」

【マジ恋】

蒔風
「ここは・・・・特にないっ！！！！」

大和
「ハァッ！？」

蒔風
「だって・・・だって！！！作者がこの世界入れたのって「蒔風ボロにしたいなぁ・・・よし、なんか入れてボコそう」って思ったからだもん！！」

大和
「作者に愛はないのかぁァァアアアアアアアアアア！？」

【キバ】

蒔風
「オレに音楽の知識はないッ！！」

渡
「教えましょうか？」

蒔風
「やってみよう」

ドォン！！！！

蒔風
「だろ？」

渡
「なんでバイオリンが爆発したんだ！？」

【W】

男
「このメモリで暴れてやる！！」

翔太郎
「やめろ！！」

《マイカゼ！！》

蒔風
「は？」

照井
「なに？」

翔太郎
「はぁアアアアアアアアア！？」

蒔風×２
「やはりこうなるか」

「奴」
「だから・・・・・やめてーーーーーーーーーー！？」

【真・恋姫】

星
「舜ーーーーーーー♪」

蒔風
「またかッ!?」

ボンッ

星（男）
「んーーー?どうしたのか・・・・・まあよい。舜!!行くぞ!!」

蒔風
「男になった!?なんだよこれ!?」

・・・・・・・・・

蒔風
「すみません！！三国志って元から男ばかりでしたッ！！！！」

【なのはＳｔＳ】

ティアナ
「ファントムブレイ・・・・・」

蒔風
「（ピラッ）」

ティアナ
「・・・・・・」

なのは・ティアナ
「死ねぇッ！！！！」

蒔風
「一件落着ッ！？」ドォンッ！！！

【エンジェルビーツ】

音無
「俺の未練？」

蒔風
「そ。あ、言いにくかったらいいよ？」

音無
「うーーーん・・・・」

蒔風
「ああ、彼女できなかったとかだったら俺には無理だぞ？」

音無
「え？」

蒔風
「オレにそっちの気はないから」

音無

「俺だってねぇよ・・・・・」

「ハッ!!!・・・・夢か・・・・・・」

蒔風が目を覚ます。

ここは世界のはざま。
世界を超えるたびに、蒔風が停滞しているどこも言えぬ空間。

なんだか妙に長く変な夢から覚めたせいで、頭がまだはっきりしない。

『目が覚めましたか・・・・・・』

「!?この声・・・・・まさか」

『久しぶりですね。蒔風』

「・・・・管理者・・・か」

蒔風が目を覚まし、聞こえてきた声の方向を向くと、そこには懐かしい顔があった。

世界の管理者、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”の神ともいえる存在
蒔風を世界に送り出した張本人が、このはざまにやってきていた。

「なにしに来たんだ？いままで・・・一度も来なかったくせに」

そう、だが、それはおかしな話だった。
今まで一度だって、彼女はここに来ていない。
それどころか、蒔風が最初の世界に行きついてから、一度だって顔を見せていないのだから、それはそうだ。

それを聞くと、彼女は重い顔をして、蒔風に事実を率直に伝えた。

『事情が、変わったのです。「奴」が向かった世界。そこはあなたでは行きつけません』

蒔風では行きつけない。
その事実が、どれだけ非常事態なのか、蒔風は理解出来ない男ではない。

つまり、「奴」は追えない。
世界は食われる。

世界は護り手を失ってしまうのか。

「な・・・・・・じゃあ・・・・どうすればいいんだよ!!!」

蒔風が焦る。それはそうだ。

「奴」によってどこかの世界が食われるのも嫌だが、その後に被害にあうのは、今まで彼がめぐってきた世界すべて。そっちの事の方が、より恐怖を感じる。

『大丈夫です。これから・・・あなたをその世界に送り出しますから』

「よ・・・よかったぁ・・・・さすが管理者、だな」

胸をなでおろす蒔風。

そして、管理者の女性に次の世界の事を聞こうとする。

『ここでは言えません・・・・しかし、着けばすぐに知ることです』

「は?」

『さあ！扉は開きました！行きなさい、銀白の翼人！！！』

「お、おい・・・うわっ！？」

光が白く輝いて、その光に蒔風が引き込まれていく。
視界が光に包まれて、なにも見えなくなったとき、管理者の声が耳に届いた。

『”ｎｏ　Ｎａｍｅ”管理者、アリスの名において・・・・どうか、あなたの世界に祝福あらんことを・・・・』

「なにを・・・・うわぁぁアアアアアア！？」

意識が飛ぶ。
位置が定まらない。
腕をもがいても、足をばたつかせてもなにもわからない。

そうして、蒔風は眠りに落ちて・・・・・

ーーー

そう、そうして蒔風は世界に送り出され、あのベッドの上で寝ていたのだ。

そんな回想を振り返って、蒔風が目を開ける。

そうだ、そうだった。

そう言われて、俺はこの世界に来た。

そりゃ、俺一人の力じゃ無理だ。
こんなところ、来れるわけがないんだから。

記憶がこんがらがるのもわかる。
だって、時間を巻き戻ってんだからなぁ。

そういえば古手梨花も、こんな感じだったらしいしな。
彼女も神の力を借りてでだし。

なるほど、だったら・・・・俺は・・・・・

俺がやる事は・・・・否

俺は・・・やれるんだ。
やり直せる

救いなおせるんだ。

蒔風がいるのは電車の中。

今から先週した約束通り、カラオケに行って歌い尽くすつもりである。

そしてその後、街を歩き回って遊ぶのだ。
仲間と一緒に、この世界で

「今度こそ救ってみせる」

そうつぶやいた蒔風を乗せ、電車は目的の駅へと進み
時計の針は、一刻一刻とその時間へと向かって行く。

「さて・・・・」

そう、向かう先、この世界は・・・・

「行きますかね」

始まりの世界

「明日のオレに、顔向けできるように、さ」

銀白の翼、蒔風舜

時を巻き戻り、帰還する。

世界の名は、「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」

翼人は、世界を救うために、やってきた。

to be continued

番外・・・・そして、序章　始まりの世界（後書き）

彼の旅も、ついにここまで来ました。
さて・・・・次回からまた本腰入れますか！！！

ちなみに最初のグロンギ語は

「ここはブレイドの世界じゃなかったのか！？」

です。

ここで逃げたら、顔向けできなくなっちまうだろうがよ

―明日の、自分の面にだよ！―

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　～必ず救う／必ず食う～

街を歩く一団。
どうやらさっきまで騒いでいたテンションが尾を引いて、いまだに騒がしい。

だが、その騒がしさも街の喧騒の前には小さく、周囲には全く迷惑になっていない。

そんな彼らの一幕。

そろそろ時間は二時を回ると言ったところか。

どこかの店に入って昼食を取ろうと誰かが提案し、だったら店を覗きながら決めようと、また別の誰かの提案が採用された。

そうして、一団は進んでいく。

同じ方向に歩く人
追い抜く人、
追い抜かれる人
すれ違う人

実に多くの人間が、この場にいた。

そして

街を往く一人の男が、すれ違ってから数歩歩いて

それこそまるで当然のように懐から銃を抜き放って

当たり前のように一人の男の後頭部に銃口を向けた。

男の唇の片方がグイ、と引きあがり

引き金に指が掛けられてそれが何の躊躇も無く引かれた。

パァ、ギィン！！！！

だが、それは決して男の思い通りの音を立てなかった。
発砲音とほとんど同時に、金属がぶつかった音がした。

その理由は、見る者が見れば一目瞭然だ。
狙われた男、蒔風舜が、背に「獅子天麟」を出現させて、その弾丸をつかの部分で弾いていたから。

「な・・・・・？」

「このタイミングだと、思っていた」

いきなりの音に、周囲の人間は立ち止まり、食い入るようにその二人を見ている。

片や、銃を真っ直ぐに腕を伸ばしている男
片や、背中の剣でそれを受け止めた男

どちらも異常。
どちらも、この場らしいものではない。

そして、それから一瞬の空白を置いて、人々の仲の一人が悲鳴を上げた。

「け、拳銃だぁあああああああああああああ！！！？？」

ブワァッ！！！と、周辺の人間にその事実が電光のように伝わり、蜘蛛の子を散らすように走り出した。

その騒乱のさなか、蒔風はスッ、と振り返って撃った男、「奴」を睨みつける。

「よう」

「お前まさか・・・・蒔風・・・・・なのか・・・・・？」

「奴」が訊く。

この世界には、この男一人では来れないはずだ。

自分が来れたのだって、あの時起こった魔導八天と十五天帝の暴発エネルギーを利用してやっとだったのだから。

本当だったらもっと前に行きたいところだったが、この時点がギリギリだった。

それなのに、この男はこうも簡単に自分の前に立ちふさがってしまう。

奴か聞きながらも、己の頭で推察し、その答えを導き出した。

「なるほど・・・・管理者か」

「聞いといて自己完結すんなよ・・・・・ま、なんか最後に「アリス」とか言ってたけどな」

「ま・・・蒔風？なんだよこれ・・・なんだそれ！？」

と、蒔風と「奴」が話していると、蒔風の後ろから友人が恐る恐る聞いてきた。
彼らのその反応は当然だろう。

彼らには、今までの蒔風の旅どころか、世界の崩壊ですらも知らないのだから。
それでいきなりこの場面である。取り乱さない方がおかしい。

その四人を見て、蒔風がフゥ、と息を吐き、言った。

「ここにいるのは危険だ。早く避難しろ」

「な・・・・」

「じゃあ・・・お前はどうすんだよ！！！！」

ここは危険だからと、蒔風は仲間の避難を促すが、彼らはそこで「うん」とは頷かない。
それはそうだ。この男の仲間だという人間が、彼を置いてここから逃げるなんてことはしない。

だが、蒔風はその彼らの肩を掴んで、より強い口調で言った。

「逃げるんだ。大丈夫だって。俺はこの世界を一度壊されたんだ。二度も失敗するヘマは・・・しないさ」

「だ・・・だがよ・・・・」

「うっせぇ!!!早く行け!!!死にたくはないだろうが!!!!」

蒔風の言う事は半分以上わからなかったが、それでもこの場から逃げようとはしなかった彼らに、蒔風が怒声を浴びせる。

その言葉に、仲間の一人が反論しようとするが、別の仲間に肩を掴まれて押しとどめられる。

「・・・本当に大丈夫なんだな?」

「任せておけ・・・俺は・・・・・もう何度もこんなことしてっからよ」

その言葉を聞いて、仲間が走り出した。

蒔風が一体何を経験してきたのかわからないが、昨日のあいつとはまるで別人であるという事が、彼らにはわかった。

だがら、信じた。
いや、そうでなくても、彼らは信じただろう。

それが、この仲間というものだった。

「さて・・・・邪魔はねぇ・・・・・やるか？」

「くっそ・・・だが・・・・・・やるからには・・・俺はもう負けられん！！！！」

「それはこっちも同じだってのよ！！！！！」

ゴッ、バァン！！！！

「奴」の放った波動砲を、蒔風がその場から動かずに裏拳で薙ぎ払う。
その裏拳から一回転して、蒔風が獅子天麟を手に組み立てて「奴」に迫った。

それに対して「奴」は無手。
獅子天麟の広い側面を殴ってその軌道を変え、うまくいなして、蒔風に攻撃を加えていく。

蒔風もそれをうまく膝や脛、肘を上げるなどをして滑らせるように逸らしていき、どちらも渾身の一撃を与えるには至らない。

と、そこで蒔風がひときわ大きく獅子天麟を振りかぶり、「奴」の

脳天に叩きつけようとする。
だが、そのような大きなモーションでは当然のように「奴」に読まれ、両手で挟まれ、白刃取りされてしまう。

が、その攻撃はあまりにも軽すぎる。

当たり前である。
「奴」が白刃取りする頃には、蒔風は剣から手を放してその手に絶光を溜めこんでいたのだから。

「絶光尖！！！」

「おグッ！？」

射出さえされれば最高速度を誇るそれを、とっさに転がってかわしたのはやはり流石というところだろう。
しかし、やはり完璧にはいかず、それは「奴」の脇腹を少しえぐり取っていた。

「チッ。外した！！」

「ハッ！！そんな溜めが長い攻撃、当たるわけねぇだろうが！！！！」

そう言って「奴」が魔導八天を構えて突っ込んでくる。
蒔風がそれを「風林火山」で受け止める頃には、脇腹の傷はすでに塞がり、なんでもないようになっていた。

二人の剣が、ぶつかり合って火花を散らす。
そうして幾合か打ち合って、ガンッ！！と衝突させて鍔迫り合う。

それを見、苦(にが)そうな顔をしてから蒔風は、剣を弾くように押し、互いにバックステップで距離を取った。
同時に、上空に飛びあがり、風林火山を振りまわして「奴」を斬撃の渦で包み込んだ。

「鎌鼬切演武！！春夏秋冬・花吹雪！！！！」

次々と送り出され、地上の「奴」の周りを回り出す斬撃。
その斬撃の渦が、回転しながら狭まって行って徐々に「奴」押しつぶそうとする。

しかし

「な！？」

「力技でぇ・・・・勝てると思うな！！！」

「奴」はまったくこの状況を問題としていなかったのだ。

地面に立つ「奴」は魔導八天をバラし、それを頭上でプロペラのように回していた。
それによって発生した竜巻に、蒔風の花吹雪が巻き込まれ、むしろ「奴」のその竜巻と一体になってしまった。

「そらぁ！！！！！」

「ッ！？質量で押しつぶす！！！津波！！！」

それに対して蒔風は大量の斬撃によってその名の通りに押しつぶす「津波」を以って対抗する。

空中で大質量の斬撃が衝突し、周囲の建物やアスファルトに切り傷を残して爆発したかのように週に風を撒き散らす。

その突風と斬撃の余波に目を細める蒔風。
だが、そうしている間に、耳に何か聞こえてきた。

・・・・・・・ユンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン！！！！

「ッッ！！！アぐっ！？」

ザクッ！！という重い音を立て、蒔風の右太ももに魔導八天の一本が突き刺さる。
その重さと痛みに、蒔風が空中で揺らいでしまった。その体制を整えようとするが、この状態では落ちた方がまだよかっただろう。

「奴」の波動砲が体勢を整えようとした蒔風の左肩を掠めていったのだ。
その威力に完全にバランスを崩し、地面に落ちる蒔風。

その落下地点に向かって、剣を突きの構えにして「奴」が走ってい

く。

落ちる蒔風。

だが、地面に落ちる前に、その双眸が一気に開かれる！！！

「奴」が剣を突き出してきたその瞬間、蒔風は空中で一回転し、その剣の上に足をつける。

そしてそこを土台にしてまた一回移転、そこから「奴」の脳天に踵下ろしをクリティカルヒットさせた。

その一撃に「奴」は脳味噌を揺らされ、その体がぐらりと揺れる。

だが、この一撃では「奴」はすぐに回復するだろう。

だがら

「だから・・・このまま休ませねぇ！！！」

ゴォッ！！！

灼熱の音を立て、蒔風の手の平で獄炎弾が出来上がり、それを掌底で「奴」の腹に叩きこむ。

「ハッ！！！」

そこから蒔風が気合を込めると、その手の平から獄炎弾が射出され、それに押されるようにして「奴」も空中に飛び出していく。

そしてズゴッ！！というおとをたててそれが膨張、「奴」を飲み込み、そして数拍置いてから大爆発を起こした。

爆炎の中に消える「奴」
どうだ？とそこに目を凝らす蒔風。

だが、この程度で終わるなら、「奴」は「奴」として蒔風を苦しめてなどこれない。

ボゴォッ！！！！

爆煙を見上げていた蒔風に、衝撃が襲いかかる。

場所は、顎。

そこに向かって、いつの間にか潜っていた「奴」が地面からアッパーカットで正確に捉えていたのだ。

更にそこから襟を掴んで頭突き。

最後に右の拳で顔面をぶん殴って、その体を弾き飛ばす。

その威力は尋常ではなかった。

殴られた蒔風は、まるでキャノン砲で飛んできた鉄球を受けたような衝撃を身に覚えている。
だが、実際に蒔風がそれに撃たれたところでダメージはないだろう。

つまり、ただえさえ頑丈な蒔風が、それだけのダメージを受けたという事。

それは一般人に換算したら、一体どれだけの威力となるのだろうか？

そして、それで飛ばされた蒔風は、大通りを端から端までノーバウンドで横断し、ビルに直撃。崩れてくるビルのすべてをその身に受け止めながら、潰されていった。

「カッ・・・バカみてぇにデカイ火球投げてきやがって・・・・・」

そう言いながら、「奴」が蒔風を下敷きにしたビルに歩み寄って行

く。

そして、残り三メートルというところで、ビルの瓦礫の中から、蒔風が突っ込んできた。

その手に構えるのは「天」
それを「奴」に向かって、全体重を乗せて突き刺した。

「ぐぅっ！？いいタイミングでの奇襲だが・・・」

そういいながら、「奴」は左腕の上腕の甲に当たる部分でそれを受けて止めていた。
当然、手甲なんてものはないので、その腕に突き刺させての、苦肉のガードだ。

だが、そのまま黙っていつ「奴」でもない。
反対の右手の指を立て、それを蒔風の左肩に突き立てる。

そこは先ほど波動砲が掠めていった場所だ。

その痛みに、蒔風の顔も歪む。

そしてまるでその身体に突き刺さる痛みを振り払うかのように、二人が同時に足を上げ、相手の顔面に膝をブチかました。

そのお互いの攻撃に、「奴」がのけ反りながらも踏みとどまって立ち、蒔風がドカッ、と地面に転がってから膝立ちで構えた。

「はぁ・・・・はぁ・・・・」

「・・・・フッ・・・ハッ、ハッ、ハッ、ハ・・・・・」

戦いを始めて、どれだけ立ったか。
実際にはそれほど経っていないだろうに、本人たちはかなり長く感じていた。

これだけの戦闘ですでに大きな怪我を負い、呼吸も荒くなっている。
最初の怪我は再生していた「奴」も、その余裕がないのかその怪我の部分は影はゆらゆらと揺れるだけで再生していない。

「は・・・・なんだよ・・・だらし・・・・ねぇぞ?えェ!?」

「こっちはなぁ・・・あの暴発の威力をどうにかこうにかしてこっち来てんだよ・・・・おめぇと一緒にすんな」

「言い訳かよ・・・まあいいさ。それもまた・・・・事実だ。ごホッ・・・・・」

蒔風がせき込む。

余裕そうに言ってはいるものの、蒔風の身体もすでに疲弊しきっている。

右足は腿を突き刺されているためにうまく力をこめられず、実質左足で立っているようなもの。

さらに左肩のダメージでうまく肩が上がらなくなってきている。

全身にも、浅くではあるが広くダメージが残されていた。

戦いがこのまま長続きすれば、おそらくこっちが終わる。

いや、長続きなんてしなくても、おそらく五分かそこらで力押しさ

れてしまう。

蒔風はそう考えた。
だから、次の技で終わらせることに、即座に決めたのだ。

「終わらせる!!!自分が主人公の世界だと・・・・楽でいい!!!」

「待て!!!いいのか?またこの世界を飛び出していくことになるのだぞ!!!!!」

「奴」の浅い脅し。
そう、この脅しはあまりにも浅い。

この男は、この世界が救えればそれでいいのだ。
そしてこの先、世界をまたいくつも回ることになっても、それを後悔などしない!!

「やんなきゃこの世界が食われんだ・・・・そんな危険を冒してまで、この世界にいたいとは思わねぇよ！！！」

バサァッ！！！！

蒔風の翼が大きく開かれる。
銀白の翼が、周囲を照らす。

「俺は・・・救えなかった心残りを救えるんだ！！これで明日に顔向けできる。この世界は、救わせてもらうぞ！！！！」

「くっそったれぇ！！！！！」

「奴」が波動砲を放つ。

が、それよりも早く、蒔風による、この世界のＷＯＲＬＤ　ＬＩＮ

Kが発動した！！！！

【ｔｈｅ　ｄａｙｓ】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！

ボフッ！！！

その発動と共に、「奴」の波動砲がそんな音を立てて消滅した。

そして、消えていくのはそれだけではない。

「な・・・に!?」

「・・・この世界に、「マイカゼシュン」は二人もいらない。一人は不純。お前は消えろ」

そう、これがこの世界でのＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

複重する存在である彼らの内、この世界で正規なのは蒔風の方だ。

ならば、消えるのは、当然のことながら「奴」。

この技はそう言ったものだ。

この世界は、”ｎｏ　Ｎａｍｅ”

純なる世界。

何者にも染められぬ世界。

ゆえに、不純の排除などは、当然なのだ。

「い・・・きなり・・・かよッ！？」

「？・・・はーーぁん。なるほど。ＷＥＰＯＮの方が出てくるのを待ち構えていたんだな。だが残念。それはもうすでに発動していたんだよ」

そういって、蒔風が親指で自分の背中の翼を指す。

そう、今までの世界でも、ＷＥＰＯＮで翼人は覚醒していた。

この世界では、既にそれは行われていたのだ。

そうしている間にも、「奴」の身体は粒子となって消えていっている。

その事実に、「奴」の言葉が焦っているようにこぼれ出てきた。

「き・・・きえ・・・るッ！？」

「ああ、消えろ。この世界にいるな。じゃあな」

そういって、蒔風が肩を上下させて、汗をたらす。

そう、これで終わりのはずだ。

見栄は張っているが、こっちの体力はもう限界。
身体の傷も結構重い。

だが、こうなってしまえば勝ちのはずだ。

だが・・・だったらなぜ・・・・・・・

この悪寒はおさまってくれないんだ?

蒔風が消えゆく「奴」をずっと見据える。
しっかりと消えるまで安心できないという思いがあったのだろう。

が、その目に、信じられない物が映る。

「消える・・・・へ・・・これで終わり・・・・とか思ってんじゃないだろうなァ?」

笑った。

笑ったのだ。
いつもＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫをくらい、憎悪を叫ぶ「奴」が、この状況で笑ったのだ。
その事実は、あまりにも不気味。

この男は、ハッタリなどしない男だ。
何かある、と言った以上、そこには必ず何かがある。

「終わらねぇよォ・・・・まだ終わらねェ・・・・この世界で終わらせるって決めてきたんだ・・・・・」

もはや下半身と両腕の消えた「奴」が、まるで勝利を確信したかのようにニヤリと嗤う。

「このまま終わっちゃ、そろそろつまらないって思わないか？」

「な！？」

「奴」が、それを始めた。

周囲が歪み、世界が揺れる。

捕食者、いまだに諦めず。

to be continued

ｔｈｅ　ｄａｙｓ　～必ず救う／必ず食う～（後書き）

さて！！今週は最終回週間ですよ！！！

アリス「わーーーい！！！」

今週中に終わらせましょうかね・・・・

そして！！！

その先に！！！

ア「さきに！？」

そこはまだ秘密！！

ア「わぁい！！でもそう言っちゃうと頃を見ると、終わらないみたいですね！？」

シャラッ！！

そこは終わってからだ！！

ア「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫやっても終わらなそうですよ？」

そうですねェ。
まあ、一応明記しておきましょうか？

【ｔｈｅ　ｄａｙｓ】

構成：”ｎｏ　Ｎａｍｅ”１００％

最主要人物：蒔風舜

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＷＥＰＯＮ～：銀白の翼人の覚醒

－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～：「奴」の消滅

だったんですけど・・・・・

さて、どうなる！？

どうする！？

ではまた次回

あなたがこの鍵を手にするならば、あなたは世界の理からの外れる、
真の異端者になります

■■■

「奴」が笑う。
黒い「欠片」が次々と「奴」に集まっていき、その体を元に戻していっていた。

まるで襟の立った黒いコートを羽織っているかのような外見へと変わり、顔は陰で隠れているものの、その眼光は冷静に燃え上がっている。

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫがかき消された。

「世界をめぐって回って・・・俺が何もしていなかったとでも思っていたのか？お前、とんだおめでただな」

「どういう・・・ことだ！！！」

「奴」が笑う。

その「奴」に、蒔風が息も絶え絶えに聞き返した。
戦闘の負傷、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの発動による体力消耗。

蒔風はもはや戦闘を続行できるような、万全のコンディションではない。

「世界においてきていた俺の「欠片」。それを一つにまとめ上げただけだ」

「・・・・・・なん・・・・・・・・」

「ま・・・・余計なもんも引っ張って来たみたいだけどな」

「奴」の「欠片」
それは「奴」から切り離された力の断片。

「奴」の力は元が「世界」だったと言うだけあって、その適応性は無類だ。
無機、有機にとどまらず、「記憶」などといった無実体のものまでと結合しての使用も可能である。

その「欠片」を、「奴」は今までめぐってきた世界すべてに一つずつばらまいてきた。

もちろん、そんなに強いものではない。
ただそこにあるだけのものであり、最小限の自己防衛はするものの、下手をすれば銃を持った人間だけでも消されてしまうような弱いものだ。

「まあ、一つの世界では見つかって消されちまったし、単発でしかいなかった世界にはおいてこれなかったけどな」

そうであっても、ほぼすべての世界には、「欠片」が残っていたことになる。

そして、「奴」はその「欠片」をすべて、自分の体に戻したのだ。
するとどうなるか。

当然、「欠片」は本体である「奴」に戻っていく。
だが、それだけにはとどまらない。

いかに「奴」の「欠片」も、「欠片」だけでは世界を超えることはできない。
それにもかかわらず、「奴」の元には今、「欠片」が集結しつつある。

つまり

「世界ごと・・・引っ張って来たってのか・・・・・・!?」

「そのとぉり!!もはやこの世界は「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」ではない!!!名もなき世界よ・・・・そんな世界で、どうする?蒔風!!!!」

そういって、「奴」の体が完全に再生した。
体力は万全、傷は完全修復、さらに言うなら、「欠片」を戻したことでパワーも上がっている。

その状態で、「奴」は笑う。
これで勝ったと。

その姿に、蒔風は肩で息をし、冷や汗を垂らした。
だが、それでもまだ勝機はある。

世界が新しくなったのなら、その世界でのＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫがあるはずだ。
さらに、世界を一つにしたと言うならば、仲間たちが来てくれるかもしれない。

その希望を胸に、まだ立ち上がろうとする蒔風に対し、「奴」がそれを見越して言った。

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫを発動させるか？その体力で？そもそも、この世界の最主要って、誰なんだ？そんなもんいるのかねェ？」

「！！　くっそ・・・・そういうことか・・・」

「そう！！この世界は、正規に誕生したものではない。俺が強引に、無理やりにつなぎ合わせてできた世界だ。ゆえに、まだ不安定なんだよ。そんなところで、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが発動するわけがない！！」

「ッ・・・だが、まだ！！」

「仲間か？ああ、あいつらもこの世界にいるだろうなぁ。一つにしたんだし。だけど、思い出してみろ。要は世界で、お前が最初にこの世界で見たあの光景が起こっているようなもんなんだぜ？しかも今回は接合だ。モンスターのいない世界にモンスターが出たかもな。特定の力でないと倒せない敵が、別の場所に現れたかもな。いや、そうじゃなくったって、この衝撃での災害にてんてこ舞いだろうさ。こっちにくる余力などないさ！！」

「奴」が、笑う。

すべて、「奴」の言うとおりだ。

この世界は、たった今できたばかりと言ってもおかしくないのだ。

この状況では、ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫが発動できるわけがなかった。

さらに、仲間も来れない。

そもそも、この状況を理解している人がいるのだろうか？

蒔風はこの場にいる当事者だからわかっているものの、ほかの世界だったところではこの現状を理解することなどできないだろう。だた、大変なことが起こっているという認識のみで、まさか他世界と結合してしまったなどとは露とも思わない。

多重世界である世界ならばどうにかできるのかもしれないが、その解析には時間がかかるだろうし、そのころには蒔風は倒されている。

それに、わかったところでここにはこれない。

各場所で、世界の無茶な接合による余波が起こっているのだから。

「奴」の言うとおり、敵が出てきたのかもしれないし、地面が割れたり、火焔が噴き出したりもしているかもしれない。

そんな状況をどうにか解決して、そしてここまで来て助けに入るな

どといったことができる人間は、蒔風を含めて存在しない。出来ないのだ。

それがわかって、「奴」はここまでやってのけた。

切り札中の切り札。

世界を巻き込む、禁断のジョーカー。

それを「奴」が切ったのだ。

ぬかりなど、ありはしなかった。

「この・・・・」

「おぉっと・・・怖い怖い・・・・・・・今のお前は、疲弊していて、俺は万全。万が一つにも負けはない。だが・・・・」

ボゴッ！！！！

「げっ、ハッッ！？」

「それでも俺は、油断しねぇ。万全のお前を相手にしているつもりで、ブチのめす！！！」

「奴」が宙に浮く蒔風の腹に下からの拳をめり込ませ、身体がくの

字になった蒔風の後頭部を振り降ろしのチョップで殴り、大地に落とす。

その一撃で、蒔風が地面に直撃、めり込んで、それでも軸になっている左足をガクガクと揺らしながらも立ち上がった。
その目はいまだ諦めてはいないものの、この現状をどう打破すればいいのか、本人ですらもわからない。

だが、そんな状態でも立ち上がった蒔風を見て、「奴」は確信した。

「やはりお前は、ここで潰す。万が一にも負けはないが、その確率を跳ね上げてくるのがお前ら翼人だからな。それに・・・お前はどんな状況でも立ち上がってくる男だ。油断など、出来るはずもなかろう？」

「ッ・・・・龍虎雀武ッ！！！」

上空の「奴」に向かって、蒔風が解放されていない龍虎雀武を円盤状に組み上げ、それを「奴」に向かって投げつける。
そしてその円盤は、「奴」に向かって行く途中で次々に分身し、何十枚もの円盤刃となって「奴」に向かって行った。

そのすべてが回りこんだり、潜り抜けたりして、「奴」へと向かって行っている。

だが、今の「奴」にその攻撃が効くわけもない。

バラした魔導八天のうち、四本を胸、四本を腰の位置に、自分を中心として浮かせる。
そしてそれがプロペラのように「奴」の身体を回り出し、その円盤刃をすべてはじいていった。

「奴」はそっと剣に手を添えるだけで、掴んでもいない。
舞うように動き、その分身を一つ残らず掻き消していく。

その動作、実に二十秒もかからず。

そして最後の一つを弾き落としてところで、蒔風が追撃を仕掛ける。

蒔風は地面から翼で羽ばたいて上空の「奴」へと向かった。
そして地面に向かって落とされた円盤刃をすれ違いざまに左手で掴

み、「奴」に斬りかかった後にそのまま一回転して右手の武器で攻撃した。

それをスウェーでかわした「奴」だったが、ボッ！！という音と共に、その襟が削ぎ消されていた。

「ほう・・・やはりまだ動けるか、蒔風」

蒔風から距離を取って、「奴」がそれを見て笑う。

蒔風の右手には天地陰陽を組み合わせた「風斬車」が握られていた。

左手には、円盤刃。右手には風斬車。

その両方を腕を振っての遠心力で、高速回転させて蒔風は構えている。

それに触れれば、おそらく「奴」でもその部分が刃に削られて消えることだろう。
しかし、それを見ても「奴」は油断もしなかったし、焦りもしなかった。

「行くぞ」

ただ、そう一言言った後に魔導八天を構えて蒔風へと飛んで行く。

魔導八天すべての重量の乗った重撃に、蒔風は右手の風斬車で応戦。
その刃を少し角度を加えて魔導八天にぶつける事で、ガチッとかみ合わせてその動きを奪い、左の円盤刃で首をかっ切ろうとする。

だが、風斬車はうまく噛み合ったものの、その重量に右腕語と引っ張られて右肩がガクンと落ち、それでも円盤刃で斬りかかろうとしたが、こちらは上から蒔風の手首を掴まれて防がれてしまった。

「アがっ・・・・」

「ふンッ！！！」

「奴」がその掴んだ蒔風を地面に投げつけ、叩きつける。
蒔風の身体はアスファルトの地面に直撃し、その地面を波立たせてヒビを入れた。

さらに、そこからバウンドして「奴」の目の前まで戻ってきてしまい、蹴りの一撃で横へとすっとばされた。

このままではビルに衝突する。

その衝撃を青龍が獣神体で顕現して受け止めようとするが、その青龍をケルベロスが噛み砕かんと言わんばかりに組みかかってきて、連れ去って行ってしまう。
その青龍を助太刀に入ろうとして、他の者も獣神体で飛び出して行ったが、そこに「奴」のサラマンダー、迦桜羅までもが参戦し、同じように離れていってしまった。

よって、蒔風はそのまま障害物であるビルの壁に衝突し、コンクリートにしっかりとをその体をめり込ませていた。

「がほっ・・・・・は・・・・・ぁ・・・・・・」

ガコッ・・・という音と共に蒔風の身体がはがれるようにビルの壁から倒れて離れ、落ちていこうとする。
が、ぐらりとよろけたその体を、「奴」の手が蒔風の首を掴んで再度叩きつけ、さらなる衝撃をその体に与えた。

瓦礫が地面に落ち、パラパラと小石を落とすビルの壁に叩きつけられた蒔風。
その身体はすでにボロボロであるにもかかわらず、いまだに息をしている。

だが、「奴」はそれを見ても焦らない、驕らない。

そのまま蒔風を見続ける。

「・・・・・ぁ・・・・・・」

「む・・・」

蒔風の口から、弱々しい声が漏れ出てきた。
いや、それはもはや声などではなく、何かの音としか聞こえない。

だが、おそらくその音には何らかの意味があったのだろう。

蒔風の腕が、ガクガクと、ヨロヨロと、ユルユルと振るえながら、
「奴」の首元へと伸びていっていた。

それを見た「奴」が再び蒔風をビルに押しつけて叩きつける。
ガゴン！！という音を立てて、ビルの壁が完全に崩れて室内の様子がはっきりと見えた。

もうもうと煙が上がってくる中、「奴」は握っている蒔風の首から、徐々に力が抜けていって行くのを感じた。

だが、それでも

その煙の中からさっきと同じように、蒔風の腕が「奴」の方へと伸びていった。

それを見て、「奴」は再び蒔風を叩きつける。

その首を掴んで地面へと垂直落下していき、地面に蒔風を叩きつけたのだ。

塗装されたアスファルトの地面にクレーターができて、その中心に蒔風と、その首をいまだに掴んで叩きつけ、押しつけている「奴」がいた。

蒔風の身体はすでに地面にめり込んで、もはやその姿は砂煙もあって見えなくなっている。

だが、それでも

蒔風の腕は、「奴」に向かって伸びていき

その額にピンっ、とデコピンをかましていた。

その攻撃に、「奴」は今までと変わらず、更に息の根を止めようと一撃をブチかました。
クレーターがさらに窪む。

しかし、今度はさっきと違う。

蒔風の腕が、上にのびたまま倒れない。

それをみて、「奴」が哀れむような声を出して、蒔風に語りかけた。

「お前と俺の実力は歴然。ただ、いままで世界の援助があったから勝ってきただけだ。見ろ、援助の無いお前は、今こうして力なく腕を伸ばすだけだ。それでどうする？力のないデコピンを何百発も当てて、オレに額でも割ってみるか？できないだろう。お前に助けは来ない。翼人は、人の想いを糧に戦うもの。つまり、こうして一人のお前は・・・・・」

ブンッ・・・・

「無力だ」

バガァッ！！！！

「奴」が蒔風の身体を放り投げ、それに向かって波動砲を撃つ。

その砲撃に蒔風の身体が宙を舞い、放物線を描いて落ちていく。

「奴」は思った。
これで終わりだと。

蒔風がいなければ、あとはどうにでもんある連中ばかりだ。
翼人もいたが、蒔風ほどではない。

世界がしっかり成り立つまで待ち、主人公を殺すとしよう。

そう思いながら、落ちていく蒔風を見ていた。

だが、こちらの男は違った。

まだ終わらない。

終わらないさ。

世界は、祈っても力はくれないし
助けてといくら叫んでも手などは差し延べてくれない

いくらボロボロでも戦えと言ってくるし、死にそうになっても知らん顔だった。

でも・・・・・

俺は・・・・・・・・・

それでもこの世界には、救いがあると思うんだ。

だって・・・・・・

ほら、助けに来てくれたじゃないか。

そう思った蒔風の視界に、数人の人影が映り込む。

翼人の救い手がやってきた。

to be continued

■■■■■■■■■■■■　～世界がどれだけ苦痛に満ちていても～（後書き）

「奴」による世界の結合。
しかし、仲間は来れない！？どうする蒔風！？

これに関してはずっとこう行こうと考えていました。
「奴」が「欠片」を引っ張り込む事で、世界ごとぴったりと寄せて、一つにまとめてしまおうと。

ちなみに「奴」の言ってた結合できなかった世界というのは「クウガ」と「仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ」です。

その後の世界の構図なんかは・・・・最後になりますね。

さてさて、これからどうなってしまうのか・・・・・

次回か、次々回で終わってしまいそうです。
さすがはトントン拍子だな・・・・・

次回、救い、来たる

ではまた次回

救えるものは根こそぎ救う！

世界をめぐる、銀白の翼　～ＰＬＡＴＩＮＵＭ　ＷＩＮＧ，ＬＩＮＫ　ＴＨＥ

今回聞いてもらいたいＢＧＭ

「ｃｌｉｍａｘ　ｊｕｍｐ　ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ」

世界名が次々に述べられていったところから聞いてください。
注文多くてすみません・・・・出来たらでいいので！！！

しかし・・・これ以上のＢＧＭはない！！と、思っています！！！

今回で最終回！！
後にはエンドロールだけ！！！

では、どうぞ！！！

蒔風が砲撃で吹き飛んでいく。
その体が地面に向かって放物線を描いていく。

このままでは地面に落ち、そのダメージは蒔風を終わらせるだろう。

だが、

「蒔風！！」

ガシッ！！！

その落下地点に四人の男が走ってきて、その体をちょうどよくキャッチしたのだ。
蒔風の体は地面に落下することなく、彼の仲間によって抱え込まれていた。

「お・・・・まぇら・・・・・・」

「ったく・・・何が大丈夫だよ。ボロボロじゃねえか」

「にげ・・・・・」

「「「「られるか!!!」」」」

「こんなけったいな翼生やして、どんだけ強くなったかと思えばこのくらいか？」

「おまえ、もっと強かったじゃねえか」

「結局、俺らがいないとダメっこなんだからなぁ、こいつ」

「まて、ダメっこはなんだかおかしい。ダメ野郎だな」

「「「意義なし」」」

蒔風に肩を貸し、支えてくれる仲間を見て、蒔風はぽかんとしていた。

そんな体でポカンとしては意識が飛んでそのままお陀仏になってしまいそうなのだが、それでも蒔風はそうせざるを得なかった。

しかし、すぐに考えて分かった。

そうだよ・・・こいつらがあの程度の言葉で「はいそうですか」と納得するような奴らじゃないってことは、わかってたじゃないか。

「ずっと・・・見てたのか？」

「お前を見捨てて逃げる？できんよ。そんなこと」

「それに、あんなすごい戦い、見逃したらつまんねぇしな」

そういってくれる仲間たちに、蒔風は心底感謝していた。

ありがとう

お前らがいてくれるだけで

「俺はまだ・・・・戦える・・・・・・！！！！！」

右足を引きずって、蒔風が立ち上がる。
その体を支えるように付き添う親友。

彼は、まだ戦えるだけの気力を取り戻した。

しかし

「だが、だからと言って、貴様に俺を打倒する術はないはずだ」

ズンッ!!!

「奴」が一歩、蒔風に向かって足を踏み出して来る。
あまりにも重い一歩。その挙動だけでも、おそらくは恐怖が噴き出して逃げてしまってもおかしくはない。

だが、逃げなかった。

一人として、彼から離れるものなど、いなかったのだ。

「終わらねぇよ・・・・こうして仲間が来てくれたんだぞ？・・・・・おわれねぇ・・・・まだ・・・・・」

そういって、蒔風も弱々しく踏み出す。

しかし、その足はすぐに膝ががくんと屑で、その場に跪いてしまった。

「仲間？ああ、そいつらは来るかもな。お前の世界の住人だったわけだし。だが・・・・それ以上はない！！世界は、いつだってお前を無視してきたんだからな！！！」

「そん・・・なことは・・・・ない！！そんなことはない！世界はいつだってクソッタレだが・・・・・救いなんてものはどこにだって・・・あるんだ！！！！！」

蒔風が叫ぶ。

その瞬間

ゴォッ！！という音とともに、、蒔風の翼が光り輝く。

その翼が、力なく、それでいて悠々と

大きく開かれ、その瞬間！！

翼の内から各世界での、仲間と過ごしたあの時間。
そのワンシーンが写真をホログラムで空中に張り出されたかのように溢れ出ていって行った。

それは笑い合っている一場面。
ともに敵に立ち向かっていった一場面。
平穏な一幕、騒乱の一幕。

その画像が、映し出されていた。

「な!?」

「終わらない・・・終わらない・・・・・・こんなところで、終わるわけがない!!!!」

【■■■■■■■■■■】―Ｗザッ　Ｄ　Ｌザシッ―　～Ｗザッザーｌ－Ｅ・・・・～

蒔風が何かを発動させる。

だが、こんな世界ではやはり無理なのか、世界名などは告げられず、当然それも効果を発揮しない。

だが

「無理か・・・・・いや、でも・・・・・来てくれる・・・・・世界は・・・・・願いに応えてくれる！！！！ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫなんかなくったって、俺は世界と繋がってんだ！！！」

【CLANNAD】【Suzumiya Haruhi no Yuutsu】【rakisutta☆】【KAMEN RIDER A－Kiss on my Deity－】【KAMEN RIDER HIBIKI】【UTAWARERUMONO】【TAYUTAMA ERYUKI】【Baka to Tesuto to Shoukanjuu】【KAMEN RIDER AGITO】【Tsuki no Iwaya FINAL FANTASY VII】【higurashi no naku koro ni】【Air】【KAMEN RIDER DECADE】【KAMEN RIDER DEN－O】【Little Busters!】【KAMEN RIDER 555】【Fate／stay night】【KAMEN RIDER KABUTO】【KOIHIME†MUSOU】【KAMEN RIDER BLADE】【11eyes ～Tsumi to Batsu to Tasogare no Shoujo～】【Majide Watashi ni Koisinasai】【KAMEN RIDER KIBA】【KAMEN RIDER W】【Shin・KOIHIME†MUSOU】【Mahou Syoujo lyrical Nanoha Strikers】

この世界に結合された世界名が次々と述べられ、蒔風の背後にその記念写真が立体映像のように立ち上がっていく。
そう、まるでいつかの世界に見た、世界を超えるオーロラのように。

「ま・・・さか・・・・来れるはずがない！！そんなはずが！！！！」

『甘いですね』

『その程度、われらが何とか調整した』

『まだ粗削りだけど、天変地異は抑え込んだぞ』

『われら管理者。その程度ならば軽いものよ』

『お前にはかなわずとも、自然現象くらいならば・・・な』

驚愕する「奴」の目の前に、五人の管理者が現れた。

”Ｎｏ　ｎａｍｅ”、”ライクル”、”フォルス”、”輝志”、”ＬＯＮＤ”

五つの世界の管理者が、蒔風の背後、さらには宙にまで浮いてきた写真の牛を側に、巨大な姿で現れたのだ。

『あなたの言う、災害などは我々が封じ込めました。そして、彼の仲間に、すべてを』

「な！？」

『もう、見ているのは止めです。あなたを、ここで討ちます！！立ち上がりなさい！！銀白の翼人よ！！あなたはまだ、勝っていないでしょう！！！！』

五人の管理者、その代表で、アリスが蒔風に檄を送る。

それに呼応し、蒔風の翼が輝き

背後に光るそのホログラムから、人影が現れてきた！！！

「な・・・・そんな・・・・・なんでだよ！！！！」

そしてその影は映像からついにそれを超え、この場にその姿を現した。

彼らは皆、蒔風の友、仲間、盟友。

この状況で、彼を助け出そうと、離れた場所の仲間たちが集結したのだ！！

「青年!!いや、蒔風!!助けに来た!!鍛えに鍛えた鬼の力、また強くなったよ!!!」

「蒔風!!久しぶりだな・・・封印されていた私を助けてくれたように、今度は私が、お前を助ける番だ!!」

「大丈夫か蒔風!?僕の時もボロボロになってたけど、今度はまたひどいね・・・防御なら任せてよ。退魔の霊能、みせつけてやる!!」

「っしゃぁ!!助けに来たぜ!!蒔風!!人を守る願い、叶えに来た!!」

「蒔風さん、大丈夫ですか!?オレ、助けに来ましたよ!洗練された、アギトの力。ここで見ててください!!」

「蒔風!!この野郎・・・・・てめえ、あれだけじゃ物足りねえ見てぇだな・・・その幻想、ぶち殺しつくす!!」

「舜さん!!助けに来たぜ!!負けなんてない。そんな運命、軽く打ち破ってやりましょう!!」

「蒔風!!ここかお前の世界か?だったら、壊させるわけにはいかねぇな!!」

「俺、参上!!ったく、う～るせぇなぁ。おう!!蒔風!!助け

に来てやったぜ!!!」
『行くよ!!モモタロス!!!』

「蒔風!!しっかりしろ!!おまえにはオレの夢の行く末を見てもらわなきゃならないんだからな!!」

「助けに来たぞ!!さあ・・・友達を傷つけた、その落とし前をつける準備は良いか?脇役王!!!」

「天の道を往く者・・・すなわち世界も救う。お前を助ける事が、世界を救う事になる!!」

「お前には始を助けてもらった・・・みんな助けてもらったんだ!!ここで死んでもらったら、恩返しできない!!」

「蒔風!!この地獄から、助けに来たぞ!!オレに眼には、勝利の未来しか写っていない!!」

「おい!!あの後大丈夫・・・じゃなかったみたいだな。いきなりいなくなって、それなりに心配したんだぜ?助けてやる!!」

「蒔風さん!!ひどい・・・行くぞ!!キバット!!!」「オッケイ!!」

「大丈夫かよ!!この野郎・・・街だけじゃなく、世界まで泣かせやがるとはなぁ!!!」

「舜君!!大丈夫!?もう安心して・・・皆来たから!!!」

皆が、蒔風を助けようとして来てくれた。
全員が蒔風の前に立ち、「奴」に向かって武器や拳を構える。

『立ち上がってくれ蒔風！！お前の勝利を、ここから応援しているからな！！！』

『ちょっと！！仮にもうちの団員になったんだから、そのまま死ぬなんて、許さないわよ！！』

『蒔風君！！頑張って！！私たちは何もできないけど、蒔風君の勝利を祈ってるよ！！！』

『舜！！！僕達は戦いにいけない・・・でも、君のことを忘れたことはなかった！！！』

そして、戦う力を持たない彼らも、映像越しにではあるものの、喉が張り裂けんばかりに蒔風に声援を送っていた。
その願いが彼の力になることを信じて。

「管理者からの声が聞こえた。お前が危機だと。お前にやっと、恩が返せる！！」

「舜!!助けに来たぞ!!!おまえにはまだ翼人としての戦い方を教えてもらいたんだからな!!!」

「大丈夫?舜!!僕らは、仲間を見捨てない。正義の味方、リトルバスターズだ!!!」

「舜さん!!生きて!!あなた命を救ってもらった。やっと、その恩返しができるんだよ!?」

そして、最後に蒔風の脇には、四人の翼人が、まるで彼を守らんとするかのように囲んで寄っていた。

「お前ら・・・来てくれたのか・・・・・」

「当たり前だろ!!」

「俺たちは世界も、そして俺たち自身も助けてもらったんだ」

「そのままいなくなっちゃって、本当に心配したんだからね!?」

「だから、やっと今一つ返す番。私たちの、恩返し!!!」

「ま、蒔風・・・この人たちは・・・・・・？」

「安心しろ・・・皆・・・俺の友達だ！！！！」

『さぁ！！世界の戦士たちよ！！！！一人の翼人の元に集まりし者達よ！！！世界の為、私たち管理者のため・・・・・そんなものはどうでもいいです・・・だから！！その人を・・・蒔風舜のために、戦ってください！！！！』

オオオオ

アリスの号令に、全員が雄たけびを上げ、地を揺るがす。

それを見て「奴」がブチ切れた。
もはや、有利は働かない。

ならばこそ、本気を出して応戦することに、なんら異常もありはしない！！！

「現れよ！！！我が「欠片」よ・・・各世界に取りつき、その身に記憶を練り込ませた最高のモノよ！！！！あの者どもを・・・打ち倒せえええええええええええ！！！！！」

ゴオオオ

「奴」の号令に、地面から「欠片」が這い出てきて、今まで奴が世界で取り込んできたモノに姿を変え、次々と戦闘の意欲を示していく。

それを見て、蒔風の周りでも、緊張が走る。
だが、恐れることなどあるのだろうか？

だってこれだけの！！主人公がいるのだから！！！！！

「行くぞみんなぁ・・・・・・・・・・一緒に戦ってくれるか！！！！？？」

オオオオ

そして、変身する者は変身し、防護服を着込む者は着込み、武器を展開させる者は展開し

全員が戦闘の準備を終え

「行くぞおオオオオオオオオオオ！！！！」

「潰せえええええええええええええ！！！！」

「奴」と蒔風が同時に叫び、その大群が衝突した。

――――――

だが、そんなものは翼人の相手にはならない。
その虫どもを蹴散らしながら、クラウドが真っ直ぐに「奴」へと向かって行く。

しかし

「ッ!?セフィロス!?」

山になって襲いかかってきた虫どもの後ろから、セフィロス・レプリカ（以下、すべてレプリカ省略）がそれを切り崩して突っ込んできた。
そのいきなりの登場にクラウドの足が一瞬止まりかける。

「止まるな!!先に行け!!」

「こいつは私たちが相手をする!!!」

ガガァン！！という剣撃音とともに、そのセフィロスにシグナムとセイバーの二剣士が立ちふさがった。

それを見て、クラウドがうなづいて「奴」へと向かう。

無論、戦いはそこだけではない。

ほとんどの戦士たちは、虫どもを蒔風の元へと向かわせないように押しとどめている。
さらには、「奴」に向かって行く者も多く、クラウドのように固定人物の「欠片」が向かって行く場合もあった。

「フィリップ！！マキシマムだ！！」

『それならこっちのメモリだ。その方が効果的だ』

《ヒート！メタル！！》

「『メタルブランディング！！！』」

「ギイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

「よっしゃぁ！！！ドンドン行くぜ！！」

「ああ！？色替えならこっちも負けねぇ！！カメ！！！行けッ！！」

「オッケイ先輩！！！」

「ここの防衛ラインは僕らが守る！！行くよ！！みんな！！」

「おう！！この筋肉さんの力ぁ、見せつけるチャンスだぜ！！！」

「む！？固有結界？ふ・・・ならばこちらも負けてられんな・・・凛！！派手に行くぞ！！！」

「私は最初っから出し惜しみなんかしてないわよ！！！」

「三十秒後に二時の方向から大群が来る！！誰か対処を！！」

「わ、わかりました！！では、愛紗さんたちでそちらにくるという大群をよろしくおねぎゃいしましゅ！！！」

「劫（アイオン）の目・・・すごい・・・でも、そこからどうするかは、私たち軍師の仕事！！！」

「だれか！！こちらの防衛線に来てくれ！！あと十五秒で来る！！！」

「おっしゃ！！オレが！！」

「炎だったら俺だって負けねえ！！ローゲフィンガー！！！」

「《ーＳｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔーうおりゃああ！！！！」

「あっちは炎・・・だったらこっちは！！！」

「おおお！！そっちも仮面ライダー！？だったら俺だって剣で！！！」《ｒｏｙａｌ　ｓｔｒａｉｇｈｔ　ｆｌａｓｈ》

「「おおおおおおりゃあああああああああ！！！！」」

「あっちの長刀の剣士が強い！！押されているぞ！！！」

「みんな！！加勢に・・・・・」

「まて！！危険だ！！！」

ドゴォ！！！

「ウィツァルネミテア！！我が半身をいまだに利用するかッ！！！
オオオオオオオオ！！！」

「聖上！！」

「でかいもんなら、あたしも行くわ！！！」

「そっちも電気？だったら、私も行く！！バルディッシュ！！！」

「お姉様、お待ちになって！！！」

「あれは！？」

「ゆりかご！？そんな物まで・・・・」

「あれの弱点はわかっとる！！みんなウチが教えたるから、行くで！！！」

「空中戦艦相手なら、やったことがあるぜ！！ユウスケ！！」

「おう！！」「Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－－ＫＵＫＵ　ＫＵ　ＫＵＵＧＡ！」

「こんなに強い奴らがいるのか！！楽しいなァ、大和！！」

「姉さん！！いいから動いて！！！」

「危ない！！・・・強さに過信したらダメだよ？少年！！」

「ほう、あなたは強そうですな！！」
「鍛えてますから！！次来たよぉ！！」

「すべて・・・振りきるぜ！！！」
「行くぞ！！」《ｓｔａｒｔ　ｕｐ》
「「クロックアップ！！」」
「「風足ッ！！」」

シュカッ！！
ドォン！！！

「次だ！！！」

「ぶっちぎるぜぇ！！！」

「あの戦艦を落としに行こう！！」

「だったら・・・俺がその心臓部、貫い受けるッ！！！突き穿(ゲイ)つ死翔(ボルグ)の槍ッ！！」

「すごい！？だったら、そのまま頭部を落としに！！！フォワード、行くわよ！！」

「「「了解！！！」」」

「ほーらほら、こっちですわよ！！」

「ギャゴオオオオオオオオオオ！！！グゲッ！！！？？」

「やーりい！！まんまとはるちんトラップにはまったね！！」

「次に行きますわよ！！大勢が相手の戦い、腕が鳴りますわ！！」

「くっ！！牙王にネガ電王に幽汽！！」

「侑斗！！大丈夫か！？」

「心配すんな！！！」

「そうだ！！あんな奴ら、あたしがぶっ潰してやっからな！！アイ

ゼン！！！」

「相手が三人ならもう一人行きましょう！！タツロット！！！」

「ご主人様！！」

「安心していいよ・・・俺は・・・この程度じゃ死なない！！！」

「よし！！あの蒼青の翼に続け！！！武器の陰に入り、一気に「奴」へと突っ込む！！」

「いや・・・まて！！あれは！？」

「アーク・・・やはり出てくるか！！！」

「大丈夫だ・・・あの程度の巨体なら、いくらでも相手にできる！！！」

「いくぞッ！！！」

クラウドが「奴」のもとへと到達し、その剣をふるって攻撃を仕掛ける。
が、それは魔道八天の一撃で猛烈に弾かれ、体ごと後退させられる。

と、そこにアークを始末し終えた一刀が仲間数人とともに横から突っ込んできた。
無数の剣の乱舞に、「奴」がバックステップで大きく下がり、すべての攻撃をいなしていく。

一刀が出している武器はすでに恋姫たちだけのものではない。
この場にいるすべてのものの武器が、彼の武器となって力となっていた。

「すでに絆ができ始めているというのか！？」

「なめんな！！俺は、絆の翼だぞ！！！」

その剣の後ろから、ギルス、ベナウィ、応龍とが飛び出し、四人で

同時に攻撃を仕掛けるが、波動砲を打ち出され、さらにそれをまるでレーザーのように薙がれて弾き飛ばされる。
一刀はそれに踏みとどまるが、ほかの三人は後退を余儀なくされ、ほかの戦闘に参加していった。

「「奴」の相手は翼人だけでだ!!ほかは・・・・」

「ディバインッ!!!!!バスターーーーー!!!!!」

クラウドが翼人以外が「奴」に向かわないように言うが、それよりも早くなのはが砲撃を「奴」に放つ。

だが、その砲撃はいまだに振るわれ続けている波動砲にかき消されてしまった。

「ッ!!ダメ!?」

「諦めなさるな!!まだまだ行くぞ!!!」

そこで星が槍「龍牙」を手に、「奴」へと向かって突っ込んで行っ

た。
なのはあはそれに一瞬驚くが、すぐに頭を切り替えて、アクセルシューターで星に当たらないように「奴」を撃っていく。

「なんてこった・・・・」

「蒼青の!!俺たちも行くぞ!!」

「一刀!!北郷一刀だ!!」

「俺は、クラウド・ストライフ。漆黒の翼!!」

「オッケイ、クラウドさん!!行こう!!!」

「蒔風さん、大丈夫ですか!?」

「ああ・・・サンキューな、観鈴」

「あんたには観鈴を助けてもらったからな。まずは一つ目ってところだ」

その戦闘の場から後方。
そこで蒔風は観鈴によって体力を回復させてもらっていた。

すでに体力は八割戻っている。
身体の傷は、すでにない。

もう少しで、万全だ。

「あと少し・・・・・あと少しだ！！」

「マイカゼさん、これを。胆力の回復する薬を煎じました！！」

「エルルゥ、サンキューだ！！さぁて・・・行くぞ！！！」

ーーー

「レバンティン！！！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ．》

シグナムがレバンティンを連結刃へと形態を変えさせ、セフィロスの動くを封じにかかる。
無論、それでこいつがやられることなどない。

だが、そうして動きが止まれば、大技で狙い撃つことも可能！！

「エクスッ！！カリバーーーーーーッッ！！！！」

連結刃に包囲され、その攻撃を弾き飛ばしていくセフィロスに、セイバーの宝具が放たれた。

しかし、相手は翼人の翼を片翼持っていた男。
なんということか、エクスカリバーの攻撃を、その長刀の一薙ぎで吹き飛ばしてしまったのだ。

武器が弾かれ、シグナムとセイバーがよろける。

そこからもう一度振りかぶって今度こそ二人に引導を渡そうとするセフィロス。

だが、そこに

「そちらも長刀か。ならば、我が剣筋、受けてみよ！！秘剣！！！」

「！？」

「燕返しッ！！！」

アサシンによる三筋の同時斬撃「燕返し」をその身に放たれ、セフィロスの身体が三つに斬られる。

それを見て、満足そうにつぶやくアサシンに、消えゆきながらも長刀を振るいに来るセフィロスだが、程なくしてその体が消滅した。

「・・・一つは防ぐか・・・・だが、我が太刀筋、一つにあらず。出来れば本人と相見(あいまみ)えたかったものよ」

だが、彼が消えてもまだ敵はいる。

しかし、その戦闘は終わりそうにあった。

ドォン！！！

美琴のレールガンがウィツァルネミテアの大きな胸板を貫き、更にその四肢をフェイトが切断。
最後にハクオロ・ウィツァルネミテアがその頭部をひしゃげてひねりつぶす。

「・・・・ウィツァルネミテア、やられたか・・・・・」

「後はガラクタや！！跡形もなく吹き飛ばすだけや！！！」

「俺が行く！！！全員、力を貸せ！！！行くぞ海東！！」

「任せたまえ！！」［Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－Ｊ！！］

［Ｆｉｎａｌ　Ｆｏａｍ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＣＡＤＥ！！］

ディエンドがＪジャンボフォーメーションを召喚し、ディケイドが一人で自身のファイナルフォームライドを発動させ、ジャンボディケイドライバーへと変形する。

そして、それに取りついて、Ｊがディケイドジャンボフォーメーションへと姿を変えた。

［Ｆｉｎａｌ　ＫＡＭＥＮ　Ａｔｔａｃｋ　Ｆｏｒｍ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！！］

「「「

ジャンボディケイドがカードを発動させ、それに呼応して主要ライダーたちがカードに姿を変えて飛びあがる。
だが、そのカードに写るのはいずれも最強形態のライダー達。

そでを蹴りぬいて力となし、ディケイドがゆりかごを跡形残さず吹き飛ばす！！！

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッッ！！！！！」

ガキッ！！ドオオオオォ！！！！！

凄まじい爆音と共にゆりかごが爆発し、その姿を跡形もなく消しとばした。
それによってディケイドをはじめとしたクウガ～Wのライダーも元に戻り、再び戦線へと戻っていく。

「ゆりかご、沈黙・・・・・」

「行くぞ！！アイゼン、フルドライブ！！！！」

《1、2、3》「ライダーキック！！」《Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ》

「千歳の儔、小烏丸天国！八咫（やた）の黒鳥（こくう）の風切り羽根――――森羅に化（け）し生（よう）す万象を斬れ！」

ダークライダーを相手にしているヴィータ、ガタック、草壁美鈴が、その「欠片」を潰し、蹴り、切り捨てて消し去っていく。

最終的にはリュウガ、オーガ、牙王、ネガ電王、幽汽、更にはアルティメットドーパントまでもが参戦してきたが、こっちも彼ら三人だけ、というわけではない。

牙王をヴィータが、オーガを美鈴が、幽汽をガタック、リュウガを春蘭が、ネガ電王を百代が撃破し、アルティメットドーパントはランサーが宝具にで突き貫いて消滅させた。

「ライダー勢・・・終わったか・・・・・・」

「なにをぶつぶつと!!!」

「言っている!!!」

各場所で「欠片」が撃破されていくのを感じとりながら、「奴」がクラウドと一刀を相手にしていく。

更にはその隙を埋めるように星となのはが攻撃を入れているのだが、

まったく攻撃が当たらない。
いや、当たっていても、効いている気がしないのだ。

「奴」の戦力たる「欠片」はすでに潰しきっている。
アントロードや魔化魍はもはや数も少ない。まだ湧いては来るものの、あんなものが使えるとも思えない。

なのに

この男はまだ破れない！！！

「全員！！下がって！！！スターライトオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！ブレイカァァァァァアアア！！！！」

ゴォウ！！！となのはの集束砲撃が「奴」へと迫る。
しかし、「奴」は再びその手から波動砲を撃ち放ち、なのはの砲撃を一回二回と薙いで方向を逸らし、周囲を爆散させてそれが自身に当たらないように処置する。

その砲撃で数人が巻き添えられ、なのはが苦そうな顔をして砲撃を止める。

「なッ！？」

「あの威力の攻撃を・・・・片手間でか！？」

「てめえらじゃあ俺には勝てん・・・・・オレに勝てんのは、そいつだけだァァアアア！！！！！」

「奴」が両手を合わせて波動砲をチャージする。

それをみて、クラウドと一刀が食い止めようと「奴」へと迫る。
だが、それよりも早く、「奴」が攻撃の準備を整え終えた！！！

「消っし飛べぇぇぇえええええええええええ！！！！！！」

両手という脅威。
片手でなのはの集束砲撃スターライトブレイカーを弾いた砲撃が、二本分。

その極太の波動砲が、アントロードや魔化魍、そして主人公たちを巻き込んで蒔風の元へと真っ直ぐに飛んで行った！！！

「奴」に向かったクラウド、一刀は、「奴」が発射した反動によって起こった爆音で弾き飛ばされ、その波動砲の道筋にいた物は命中するよりも早く、砲撃の波動による先行してきた余波で残らず吹き飛んだ。

「うおおおおおおお！？」

「ウアッ！？」

「ぐあっ・・・・」

「ッッ！！蒔風ッ！！！！」

波動砲が伸びていく。

だが

「打ち消してやるっ！！！！ハァッ！！！！」

「その幻想、ブチ壊してやる！！！！」

ゴゴガンッ！！！！！！

打ち響く、衝突音。

泉戸裕理と、上条当麻による能力打ち消しコンビが、その波動砲にその身と右手をさらけ出し

蒔風への到達を拒んでいた！！！

「僕が先に！！その後を頼む！！！」

「任しとけ！！！」

ダンッ！！！

その波動砲に、裕理がさらに一歩踏み込み、全身を使って受け止めていく。

だが、退魔の霊能と言っても限界はある。

ゆえに、裕理はある程度削った後にその場から下がった。

そして、次に受け止めるは

「オオオオオオオオオオオオオッッッ！！！！！」

上条当麻、レベル０

幻想殺しが、その巨砲をブチ殺す！！！！！

パァン！！という感高い音が鳴って、砲撃が消えていく。

だが、その質量がでか過ぎてとてもではないがすべては消せない。

「それ！！！後ろに流して！！！！！私が弾くから！！！！」

「ッッッ！！！！頼むっ！！！！」

そして、上条がその残った砲撃を後ろに流し、それを純白の翼が受け止める！！！

「ハァッ！！！」

観鈴がその翼を以って砲撃の先にソッと触れ、その方向をいなして変える。
凶悪な砲撃は空へと伸びていき、そして消えていった。

「バカ・・・な・・・・・」

「バカなじゃねぇ！！！しっかり見てろ！！！これで・・・・・終わらせるからよ！！！！」

「行けるのか？」

「ばか、行けるに決まってんだろ！？」

「やってやれ！！蒔風！！！」

「ああ、やってやる！！」

「後で紹介してくれよな！！」

「ああ、みんな紹介してやる！！」

「お前は、最高のダチだぜ！！」

「お前らだって、最高さ！！！」

「「「「「「「「蒔風！！！！」」」」」」」」

「「「「「「「「舜！！！！！」」」」」」」」

「「「「蒔風さん！！！」」」」

『『『いっけぇえええええええええ！！！！！』』』

そして、回復の終えた蒔風が立ち上がり、離れた「奴」へとまっすぐ向き合って、その翼をはためかす！！！

【ザッ、ザザッーーーーー】ーザザザザＬＤ　ザシッ～ザッザッザＯＮ～！！！

しかし、いまだに音はならない。

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは答えない。

それに、「奴」はまだ笑えた。
まだ勝てる。

だが、その想いは間違いだ。

「ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫは答えない！！！この世界に、まだ主人公はいない！！！！」

「バカ野郎・・・そんなわけねえだろう」

「奴」の言葉に、蒔風が答える。
この世界はすでにできていると。

「まったく・・・俺もお前も何を勘違いしていたのか・・・・・この世界は、とっくに始まってたんだよ」

ゴォッ！！！！

【ザ界をザシッ、ザッぐる・・・・】ーWザシッLD　LINザッー　～WEザザッON～

「俺が帰って来てからじゃない。お前が世界をくっつけてからじゃない。もっともっと、最初から始まっていたんだ！！！」

バサァ！！！！

【ザ界をザッぐる、銀ザシュッの翼】ーWORザザザッNKー　～WEPザッN～！！！

「俺の物語は、もうとっくに始まっていた！！さあ！！これが！！！！オレの世界（ものがたり）だ！！！！」

CONGRATULATION！！

【世界をめぐる、銀白の翼－PLATINUM WING，LINK THE WORLD－】

－WORLD LINK－ ～Final WEPON～！！

ゴォッ！！！

その発動と共に、クラウド、観鈴、理樹、一刀の翼が輝き、蒔風の背へと粒子となって移動して行った。

「これが俺の世界だ。最初からそうだった。そして、これからも！！！十五天帝！！！」

蒔風の手に、十五天帝がすべて集結し、組み上げられて握られる。

そしてその剣も輝きだし、エネルギーのチャージが始まった！！！！

【ＲＥＬＯＡＤ、ＪＥＴ－ＢＬＡＣＫ！ＲＥＬＯＡＤ、ＰＵＲＥＷＨＩＴＥ！ＲＥＬＯＡＤ、ＬＩＧＨＴ　ＧＲＥＥＮ！ＲＥＬＯＡＤ、ＳＫＹ　ＢＬＵＥ！ＡＬＬ　ＷＩＮＧｓ　Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ！！！】

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの声に呼応して、十五天帝に皆の翼が移動し

ていく。

そしてその剣を真っ直ぐに突き出し、蒔風が己の翼で大きく羽ばたき、「奴」に向かって、突っ込んでいく！！！！

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

【世界をめぐる、銀白の翼】－ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ－　～ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ～！！！！

「止まれ・・・止まれ止まれ止まれえええええええええええ！！！！」

「奴」が突っ込んでくる蒔風に砲撃や光線を飛ばしてくるが、全く効かない。

すでに蒔風は光の塊となっており、その攻撃のすべてを弾き飛ばしていた。

「う・・・うをおおおおおおおおおおおおオオオオオオ！！！！！！」

「これが・・・・ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ、だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ドシュガッ！！！

ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「奴」の身体を貫通し、蒔風が空へと羽ばたく。

そして、剣から四翼がなくなり、元の持ち主へと戻って行った。

「お・・・おお・・・・・」

「お・・・おわ・・・・」

「お　の　れえええええええええええええ！！！！」

「終わったぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオ

この世界は、大丈夫だ。

なにはともあれ

長い長い

銀白の翼人の

世界をめぐってゆく戦いは

ひとまずここで終結した！！！！

もう少しだけ　ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！！！！

世界をめぐる、銀白の翼　～ＰＬＡＴＩＮＵＭ　ＷＩＮＧ，ＬＩＮＫ　ＴＨＥ

二日間かけてやっと書きあげた！！！

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ終わったあああ
あああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！

アリス「祝！！完結！！！！！」

蒔風「久々に来たけど・・・え？完結！？」

いったんね。
この後エンドロールみたいの更新して・・・・

蒔風「して？」

世界をめぐる、銀白の翼　第二章を開始しまっす！！！！

ア・蒔「おおおおお！！！！」

ですが、すべては後日談の後に

とりあえず自分が訊きたいのは・・・・

このまま続けてもいいのかどうかです。

新しくページを作るか
それとも、このまま章管理で第二章に行ってしまうか！！！！

さあ、どうする！？

皆さまの意見がすべてです！！！

どしどし言ってください！！！

でも・・・見たくないですか？

５００部とか！！！

蒔「お前がやりたいだけじゃん！！！！」

ではまた次回！！！

次回は・・・・・結構すぐに上げたいです！！！

もしかしたら・・・・明日のこの時間まで待たなくていいかも！？

更新できそうになったら、活動報告で！！

武闘鬼人でした！！！

エピローグ　～Ｌａｓｔ　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～（前書き）

エンドロールＢＧＭは、ひぐらしのなく頃に解　罪滅し編ＥＤ「Ｚ・Ｅ・Ｒ・Ｏ」です。
わからない方はニコニコで

ひぐらしのなく頃にの罪滅し編（原作）のＥＤに使われていたＢＧＭ

と検索すれば出てきます。

エピローグ　～Ｌａｓｔ　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

一つになった世界の、曖昧だったり、あったらまずい部分はすべて管理者が整えてくれた。

たとえば、各世界にあった「作品」の原典はまとめて無くなった。
つまり、「あ！！〇〇の誰々だ！！」という事にはならない。

まるで、最初からそういう世界だったかのように調節されていた。
むろん、もともとが違う世界であることは承知している。

また、世界観が著しく異なる世界では、その土地ごとでの基本的な知識はすべて頭に流れ込まされている。
例：うたわれるもの、ひぐらしのなく頃に、恋姫無双のキャラ達には、最新技術に関するものだったりの一般教養が流れた。

また、この機に世界を守る機関として、アリスを後見人に「ＥＡＲＴＨ」が設立され、蒔風はそこの大きなビルに、現在くぎ付け状態

らしい。

【ＣＬＡＡＮＡＤ】

岡崎朋也
学校を卒業後、一年遅れて卒業した渚と結婚。娘もでき、幸せな家庭で生きている。

岡崎渚
学校をさらに二年留年してしまうも、無事卒業。岡崎と結婚し、娘「岡崎汐」をもうける。

現在、彼らは友人とも仲良く、幸せな生活を送っている。

【仮面ライダークウガ】

この世界では「奴」の「欠片」が破壊され、この世界とは結合できなかったが、ディケイドの世界が繋がったことによって「ライダーの世界」として、世界の壁が緩くなり、わずかだが繋がりはできた。道が通ずるのも、そうは遠くないだろう。

五代雄介：今も世界を旅する放浪人。いつか、この世界にも来るのだろうか？

一条薫：原作通り、長野県警でいまも凶悪犯罪を追っている。五代とはこまめに連絡を取り合っているそうだ。

【涼宮ハルヒの憂鬱】

世界が一つになっても、ハルヒはＳＯＳ団の隠しステータスには気づいておらず、今日も不思議を探しまわっている。彼女の力は弱まったが、いまだに存在はし、なんの拍子でなにが出てくるかわからない。

だが、そんなんでも楽しいと、主人公は語っていた。

涼宮ハルヒ：「ＥＡＲＴＨ」登録（強引に）。自分の力にも、ＳＯ

S団メンバーの素性も知らない。最近、不思議を求めて蒔風の元にちょくちょく来るようだ。

朝比奈みくる：「ＥＡＲＴＨ」登録。今でもハルヒに振り回される日々。未来人であることは隠し、着せ替え人形とされる彼女の悲鳴が今日も聞こえる。

長門有希：「ＥＡＲＴＨ」登録。宇宙人であることはハルヒに知られていない。知られると何が起こるかわからない、というのは彼女の談。時折、時空管理局のメンテナンスに呼ばれるらしい。

古泉一樹：「ＥＡＲＴＨ」登録。自身が超能力者であることを【以下略】。何かあると頼る選択肢に、蒔風たちも含まれ始めたらしい。

キョン：「ＥＡＲＴＨ」登録（ハルヒが無理やり）。結局、世界がどうなってもハルヒは変わらない。彼の愉快と苦労は、まだまだ終わらないだろう。

【らき☆すた】

この世界は変わらない。

何にも変わらない。

今まで通り、なにも変わらない。
ただ、蒔風の元に遊びに行った時、ハルヒとこなたが嫌に意気投合したようだ。

泉こなた、柊つかさ、柊かがみ、高良みゆき：そろそろ高校を卒業するらしい。ただ、卒業後に与えられた職業選択に、蒔風の立ちあげた新組織の名前があったようだ。

【仮面ライダー響鬼】

魔化魍討伐組織「猛士」は「ＥＡＲＴＨ」と協力体制をとり、そのネットワークを広げた。
魔化魍を作り出す童子たちを、今日も鬼たちが追って行く。

なお、彼ら鬼は「ＥＡＲＴＨ」にも登録され、招集があれば駆けつ

けてくれるという事になった。

響鬼：長く連絡を取っていなかった少年と和解し、今は一人の弟子を育てている。しかし、その肉体にまだ衰えは見えず、今後も現役を貫いていくのだろう。

威吹鬼、轟鬼：響鬼と共に、関東支部を代表する鬼になった彼らは、今日も魔化魍退治に汗を流している。

【うたわれるもの】

トゥスクルは辺境ながらも自然に富み、裕福な国として存在している。

最近ではいろいろな機材が入ってきて民衆たちは頭に流れてきた知識をフルに活用し、それを使おうとしているが・・・・

おそらく、この国は今までどおりに、自然のままにあるのだろう。

白き皇（オウルオ）、ハクオロの元で

ハクオロ：今でもトゥスクルの皇（オウルォ）として、日々政務をこなしている。が、たまに逃げ出しているらしい。理想の国王として、様々な指導者から相談を受けることもあるそうだ。

エルルゥ：宮殿の薬師。ハクオロの周辺の世話を、あくせくと続けている。キレると怖いのはいまだ変わらず。

アルルゥ：お姉ちゃんを困らせて楽しむ日々。ただ最近は蒔風のところに遊びに行って、いろんな人と友達になってるらしい。

【タユタマ】

太転依たちは世界がこうなっても、うまく生きていけてるらしい。ただ、妖怪、ということで、「猛士」からの注意は多いらしいが。

しかし、彼らならしっかりと共存できるだろう。

泉戸裕理：その能力を人のために使いたいと「ＥＡＲＴＨ」に加盟。いつもは自宅の神社で太転依騒ぎの後始末に追われて奔走している。

泉戸ましろ：今日も夫の裕理を支えて、彼女もあっちこっちへと走りまわっている。良妻賢母。「ＥＡＲＴＨ」登録。

【仮面ライダー龍騎】

ミラーワールドはまだ閉じていないが、モンスターは出てこない。ただ、どこのだれが悪用するかわからない状況なので、油断はできないらしい。

城戸真司：龍騎として「ＥＡＲＴＨ」登録。いまだに「ＯＲＥジャーナル」での下働き。いい意味でバカはいまだに健在。「ＥＡＲＴＨ」の宿舎に、住居を移している。

秋山連：ナイトとして「ＥＡＲＴＨ」登録。友人である城戸に誘われて、しょっちゅう引きずりまわされている。だが、そんな彼の表情はなんだかすっきりしていた。そんな彼も「ＥＡＲＴＨ」移住。

北岡秀一：ゾルダとして「ＥＡＲＴＨ」登録。現在も最終兵器弁護士を驀進中。現在、浅倉の裁判を受け持つ（無罪にする気なし。無期懲役狙い）

【バカとテストと召喚獣】

今でも試験召喚戦争システムは継続中。
このシステムは、蒔風が学校を作った時に参考してみたいと、たまに見に行くそうだ。

吉井明久：今日も友人とバカやって捕まってまた馬鹿をやっている。将来は「ＥＡＲＴＨ」に入りたいとか言っているらしい。

坂本雄二：同上（笑）。最近はガールフレンドからの逃走先に蒔風の元があるらしいが、それも読まれているのはお約束

姫路瑞樹、島田美波：明久にアタックを仕掛けているものの、まったく気付いてもらいえない。頑張れ。

【仮面ライダーアギト】

「闇の力」はまったく音沙汰もない。
アンノウンは出てこないため、この世界からの脅威はなさそうである。

津上翔一：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。現在は「ＥＡＲＴＨ」内の食堂を経営しているらしい。レストランＡＧＩＴΩは平常運転。城戸とは仲がいいらしい。

芦原涼：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。もともと一人暮らしだったため、楽なこっちに引っ越したらしい。高校時代にやっていた水泳のインストラクターや、バイクのメンテナンスも最近では受け持っているらしい。

氷川誠：警視庁捜査一課に戻っている。たが、何かあった時はすぐに駆けつけて来てくれるそうだ。Ｇ３－Ｘの装着員として「ＥＡＲＴＨ」登録。

【とある魔術の禁書目録】

学園都市は普通にある。
今日もどこかで、魔術と科学は交差している。

上条当麻：「ＥＡＲＴＨ」登録。学園都市に在住。基本的には事なかれだが、何かあったとき、彼はすぐに駆けつけて来てくれるだろう。

インデックス：必要悪の教会（ネセサリウス）が「ＥＡＲＴＨ」と協力体制に入ったので、自動的に登録。彼女はいつも食い気ばかり。

【とある科学の超電磁砲】

今までと変わらない。
【禁書目録】と同じ世界なので、現状は同じ。

御坂美琴：学園都市が「ＥＡＲＴＨ」と繋がりをもってはいるが、それを抜いても個人的に「ＥＡＲＴＨ」登録。電撃姫は、伊達じゃない。

白井黒子：憧れのお姉様についていって「ＥＡＲＴＨ」登録。しかし、美琴が動かないと協力する気はないようだ（笑）

【ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　ＶＩＩ】

この世界は大きく変わり、平和な世界とまじりあった。
と、いうことでもしかしたら前よりもカオス（笑）としているかもしれない。

なお、神羅カンパニーは「ＥＡＲＴＨ」傘下に入り、世界に貢献していくそうだ。

クラウド・ストライフ：「ＥＡＲＴＨ」登録。漆黒の翼人として、「ＥＡＲＴＨ」のＮＯ．２の座につく。が、蒔風とは対等の立場。二人目のリーダー格と言った感じ。宅配業はいまだに続けているようだ。

ティファ・ロックハート：クラウドについていって「ＥＡＲＴＨ」登録。なお、ほかのメンバーは登録していない。だが、クラウドから呼びかけがあればすぐにでも駆けつけて来てくれるそうだ。

【ひぐらしのなく頃に】

時代が丸々二十年近く進み、携帯やパソコンに慣れていく日々。だが、基礎知識は与えられたので驚くことはなかったそうだ。

なお、変化が見られたのは雛見沢村のみで、他のどこの町がこの世界だったかどうかはわからない。

雛見沢症候群は、悟史の回復で特効薬への開発が飛躍的に進み、ほぼ完全に根絶された。

前原圭一：「ＥＡＲＴＨ」登録。魅音が卒業し、二代目部長に。将来は魅音と同じ学校に行き、またそこで部活を始めたいのだそうだ。

竜宮レナ：「ＥＡＲＴＨ」登録。圭一と共に、今度は受験組。同じく魅音の学校を狙っているらしい。

北条沙都子、古手梨花、古手羽入：「ＥＡＲＴＨ」登録。年少組三人は、いまだに気楽に山を走り回っている。蒔風のところに遊びに来て、リトルバスターズたちと仲良くなったそうだ。

園崎魅音：「ＥＡＲＴＨ」登録。蒔風が開いた高校に入学（半分コネで）。そこで新たな友人と共に楽しく後輩が来るのを待っている。

園崎詩音、北条悟史：悟史は永い眠りから覚めてあっという間に回復。一年遅れてしまったため、二人で一緒に、魅音の行った学校への受験勉強をしているらしい。

【仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ】

この世界は単発だったために「欠片」はなく、世界ともつながらなかった。
だが、彼らの物語は、いまだに続いているのだろう。

【仮面ライダーディケイド】

この世界は少々特殊で、この世界にやってきたのは光写真館の面々のみ。
他の、俗に言う「リイマジの世界」は、次元世界の一つとして存在している。

門矢士：「ＥＡＲＴＨ」登録。いまだにいろいろとぶらついているらしい。写真の腕は変わらず。今はいろいろな世界だった場所を回っているらしい。

光夏海：「ＥＡＲＴＨ」登録。最近手に入れた「仮面ライダーキバーラ」の力でいつも暴走する士のストッパーとして、更に力を発揮している。笑いのつぼは最終兵器。

小野寺ユウスケ：「ＥＡＲＴＨ」登録。士の旅に同行。彼もまた、世界を見て回ることに興味津々なようだ。

海東大樹：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。と、いってもほとんど写真館にいる。士達の旅についていって、その先々でお宝をいただいている。そして、「ＥＡＲＴＨ」の部屋に送って蒔風に没収されている。

【仮面ライダー電王】

時間の守護組織として、ターミナル自体が「ＥＡＲＴＨ」の管理下に入った。
しかし、現状は今までと変わらず。自由気ままに、彼らも旅を続けている。

野上良太郎：「ＥＡＲＴＨ」登録。いまだに身体は元に戻らない。時間関係の事件があれば、イマジンを連れて今日も走りまわっていく。

桜井侑斗：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。なにかとあるとゼロライナーで気ままにでかけてしまうので、彼の部屋は基本的に空。でも綺麗なのはデネブのおかげ。

イマジンズ：「ＥＡＲＴＨ」登録。彼らは今までと変わらず、契約者と共に自由に騒ぎまくっている。最近ではいろいろな人に取りついて遊んでいるらしい。

【リトルバスターズ】

メンバー全員が「ＥＡＲＴＨ」登録。
恭介は就職先に「ＥＡＲＴＨ」を選択したらしい。
他のメンバーはどうするかはわからないが。

雛見沢部活メンバーと息が合うらしい。

直枝理樹：「ＥＡＲＴＨ」登録。薄緑の翼人として、「ＥＡＲＴＨ」随一の防御力を誇る。彼の将来は、おそらくここに就職することになるだろう。

【仮面ライダーファイズ】

オルフェノクの死はなくなったものの、その活動はゼロにはならない。
しかし、スマートブレインはないので、悪に走る人はそうそういない。

乾巧：「ＥＡＲＴＨ」登録。啓太郎のクリーニング店でいまだに居

候。真理とケンカすると「ＥＡＲＴＨ」隊舎に止まりに来る事もあるようだ。

海堂直也：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。住みやすい家を見つけて、今は快適に過ごしているようだ。基本自分勝手だが、面倒見がいいのでたまに訓練に参加したりなんかしてるらしい。

三原修二：「ＥＡＲＴＨ」登録。変わらず孤児院で保父さんをやっている。

【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】

魔術がある世界もいくつか混ざってよくわからなくなりそうだが、あっちはあっち、こっちはこっちの魔術でやっぱり違うらしい。英霊の座には、この世界の全員が行くことになるのだろうか？

衛宮士朗：「ＥＡＲＴＨ」登録。衛宮家の者とサーヴァントは全員登録している。憧れの「正義」に入れて少し浮き浮きしているそうだ。

セイバー：「ＥＡＲＴＨ」登録。今日も衛宮家のエンゲル係数増長に貢献中。たまに「ＥＡＲＴＨ」の訓練に顔を出す。

凛：「ＥＡＲＴＨ」登録。「ＥＡＲＴＨ」に集まった人たちから、いろいろな話を聞いて、さらに博識なっている。だが、機械はダメ。

アーチャー：「ＥＡＲＴＨ」登録。また始めた正義の味方に、彼はもう揺らがないだろう。真人と固有結界について話したところ、頭が痛くなったそうだ。

【仮面ライダーカブト】

ＺＥＣＴが「ＥＡＲＴＨ」傘下に加入。
いまだに暴れるはぐれワームの討伐を担当。

また、局員にはネイティブもちらほら。全員仲はいい。

天道総司：「ＥＡＲＴＨ」登録。今日も変わらず、天の道。それ以上の説明はいらない。

加賀美新：「ＥＡＲＴＨ」登録。このままなら警官になるつもりだったが、世界が一つになって新たな脅威があると知ってＺＥＣＴ経

由で「ＥＡＲＴＨ」に入る。

矢車想：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。蒔風を兄貴と慕って加入。義弟の影山も同様。光を守るという決意で、これからも戦い続けるのだそうだ。

【仮面ライダーブレイド】

ＢＯＡＲＤのシステムは丸々「ＥＡＲＴＨ」へと運ばれた。アンデットはもう出ないが、まだ脅威はあるので彼らはまだライダーを続けている。

剣崎一真：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。「ＥＡＲＴＨ」内のアンデット研究機関で、その不死を使っての不治の病や癌の治療のための研究につく。

橘朔也：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。剣崎と共に研究機関に入る。こっちは生命の根源にいたる研究で、剣崎の方と両立しているそうだ。

上城睦月：「ＥＡＲＴＨ」登録。まだ高校生の彼は、登録のみ。だが、自分にできることはしたい、という事で、将来は「ＥＡＲＴＨ」に本格的にはいるそうだ。

相川始：「ＥＡＲＴＨ」登録。レストラン「ハラカンダ」で、手に入れた人間の生活を満喫中。彼の「人」生はまだ始まったばかりだ。

【１１ｅｙｅｓ】

駆をはじめとして七人全員は「ＥＡＲＴＨ」登録。
なお、「禁書目録聖省」はあまりにも影に徹していたためか、世界結合で更に陰に潜り、存在が確認できない状況だ。

皐月駆：「ＥＡＲＴＨ」登録。周期的にやってくる劫（アイオン）の目による予知で、事件を予見する。が、その力が弱いらしく、ハッキリしないらしい。

水奈瀬ゆか：「ＥＡＲＴＨ」登録。固有結界の扱いに不慣れなため、アーチャーに指導してもらっているそうだ。

【真剣で私に恋しなさい】

この世界もあまり変わらない。
「ＥＡＲＴＨ」に登録してくれた者はおらず、彼ら自身もすでに進路は決まっているらしい。

直江大和：このまま大学へと進学するらしい。登録はしてないが、連絡があればすぐに助けてくれることを確約してくれた。

川神百代：川神院次期党首として、今は心身練磨中（主に精神面）。たまに「ＥＡＲＴＨ」の訓練場に顔を出してくる。

【仮面ライダーキバ】

「ＥＡＲＴＨ」と太牙の会社による提携で、ライフエナジーの配給が実現。
ファンガイアによる騒ぎは少なくなったが、それでもまだあるため、「素晴らしき青空の会」は「ＥＡＲＴＨ」傘下に入り、治安維持に貢献している。

紅渡：「ＥＡＲＴＨ」登録。バイオリン作りに精を出す日々。定期的に「ＥＡＲＴＨ」のホールで疲労しているらしい。

名護敬介：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。「青空の会」は傘下に入っての登録。だが、彼も現状には満足している。強化スーツつながりで、氷川誠とたまに飲むらしい。

登大牙：「ＥＡＲＴＨ」登録。投資企業「Ｇ＆ａｍｐ；Ｐ」の敏腕社長として顕在。ライフエナジーの配給で表彰された。

【仮面ライダーＷ】

風都は「ＥＡＲＴＨ」本部からそうはなれていない位置にあり、すぐに遊びに行ける距離。
最近いろんな事件があるようだが、彼らなら何とかしていくだろう。

左翔太郎：「ＥＡＲＴＨ」登録。風都の街で、今日もハードボイルドに探偵をしている。フィリップの検索癖が爆発して頭を悩ませているようだ。

フィリップ：「ＥＡＲＴＨ」登録。世界が一つになって、検索事項でいっぱいのようだ。三日間なにも喰わずに検索して、ぶっ倒れて「ＥＡＲＴＨ」に運ばれた。

照井竜：「ＥＡＲＴＨ」登録。亜樹子との新婚生活を満喫。ノンストップ刑事（デカ）は伊達じゃない。

【真・恋姫†無双】

彼らは【恋姫†無双】の時にあったような移動でここに来たらしく、

全員が「ＥＡＲＴＨ」隊舎に身を寄せている。
また、彼女らはこの世界では学生のはずなので、蒔風が学校を立て、そこに押し込まれた。

ちなみに、今まで言っていた学校とはここの事。「ＥＡＲＴＨ」の敷地内にある。

なお、みなこの世界では真名が普通の名前となっており、初対面の人もそちらの名前でみんな呼び合っている。（これに関する違和感はない。管理者が調節してくれたから）

北郷一刀：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。蒼青の翼として、そして蒔風の弟子？として今日も鍛錬をしている。いろんな人と仲良くなって、彼の次々とモノマネしていく武器の種類は無限大だ。そんな彼もまだ学生。恋姫たちと、甘い学園生活を送っている。

愛紗：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。一刀と共に、学校に通う。勉学は少し苦手のようだ。同じクラスの魅音と仲がいい。

星：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。蒔風と一緒にいられるという事で真っ先に彼の部屋の隣を希望したが却下される。放課後には蒔風を追いまわしているらしい。

【魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ】

崩壊した地上本部はいまだ治っておらず、その機能を「ＥＡＲＴＨ」に移している。
これもあって時空管理局は「ＥＡＲＴＨ」と連携をくみ、世界の保安を受け持っていくことになる。

なお、機動六課はちょうどあの時が解散の日で、最後の模擬戦をやるところだったのだそうだ。

隊長陣らはそのまま「ＥＡＲＴＨ」に出向、隊舎に身を寄せている。
フォワードたちは各希望の部署へと異動して、夢へとひた走っている。

高町なのは：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。娘のヴィヴィオと共に「ＥＡＲＴＨ」の蒔風の隣部屋を狙うが、却下される。なお、その際に星と出会ってからは良きライバルとして、お互いを認めているとか何とか。

フェイト・Ｔ・ハラオウン：「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。姉のアリシア・テスタロッサと一緒に住んでいる。なお、彼女にはバルディッシュと同じ機能を持った兄弟機「バルディッシュ・ウイング」が与えられているそうだ。

八神はやて：彼女の家族と共に、「ＥＡＲＴＨ」登録、移住。こちらでも指揮官となって活躍する予定。

【Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！】

この世界はどこにもつかない。
ただ、もしかしたら彼らの来世がこの世界にいるかもしれないが・・・・

彼らが関わることはないだろう。
彼らは、もう新たな世界を生きているのだから。

【世界をめぐる、銀白の翼】

都会の真ん中に大きなビルを建て、世界防衛機構「ＥＡＲＴＨ」を設立。
世界の危機に立ち向かっていく機関として、いま、世界中から信頼を寄せられている。

「ＥＡＲＴＨ」本部の敷地は広く、イメージとしては国連本部を想い浮かべてもらえればいいと思う（川沿いではないが）
その敷地内に蒔風が建てた学校もある。

なお、大きな建物は学校と本部のみで、あとは屋外訓練場と、残りほとんどが庭のようなモノ。

ビルの区分けとしては

全３９階

一～二階が受付窓口。
二階から十九階までが事務室になっていて、そこから上の十九階から最上階までは隊舎となっている。

現在ガラ空き（笑）

なお、一階から四階は吹き抜けになっていて、解放感バッチリ。
隊舎のエリアは多い思われるかもしれないが、一階丸々トレーニングルーム、丸々浴場（いろんな種類が点々としている）となっている。

地下には大訓練場もある。

蒔風舜：「ＥＡＲＴＨ」のトップに立つ。本人は相当嫌がったが、「形だけでいい」という言葉でやっと頷いた。なお、自宅は別にあるが、「ＥＡＲＴＨ」にも部屋を持つ。毎日のようになのはや星に

追いかけられ、更には仕事にも追われて泣きだしている。

アリス：発端の管理者として「ＥＡＲＴＨ」後見人に。さらに、今後「ＥＡＲＴＨ」に協力していくことを約束した。

他の管理者たちはあの後消えていってしまったが、アリス曰く「いろいろと忙しい」らしい。

こうして、世界は今日も回っていく。

「いままで、いろいろあったけど、全部全部楽しかった！！！ありがとうな！！！」

では

今回はここでひとまず

世界をめぐる、銀白の翼

第一章　ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ　～Ｇｒａｎｄ　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

完！！！！

エピローグ　～Ｌａｓｔ　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～（後書き）

２０１１．２．２４．０３：００現在

ＰＶアクセス　７６９，５２６
ユニーク　８０，５６１

読んでくださって、本当にありがとうございます！！

以下の方々に感謝を

感想をくださった方&お気に入りユーザーに登録してくださった方
（英字、五十音順）

ＡＴＤ－Ｘ　様

h.o 様
MERAN 様
reimu 様
White Seal 様
アストラル 様
液体の蛇 様
神無月 様
キョン 様
久遠 様
クリア 様
グレイ 様
コンバース 様
準也 様
深蒼の覇者 様
だいさむ 様
剣 流星 様
とある旅人 様
ニャンコ隊長 様
灰狼 様
東雲葉月 様
バラランシャ 様
ポリンキー羽田 様
御剣悠一 様
夜一 様
保名 様
夕 様
リュウガ 様
ルシファー 様
ルシフェル 様
レイフォン 様

レン　様
わや　様

そして、今モニターの前に居る、あなたに！！！！

ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵ！！！

～あとがき～

と！！言うわけで皆さま！！！

こうして

「世界をめぐる、銀白の翼」第一章は、無事に完結いたしました！！！！

アリス「ワーーーーワーーーーーーワーーーーーー！！！」

蒔風「ヒューーーーヒューーーー！！！！」

いやぁ・・・長かったなァ・・・・・・

ここまで来るの！！！

蒔「そういえば二章があるらしいけど、一体いつから考えてたんだ？」

え？そんなもん

最初っからに決まってんだろ！？

ア・蒔「はぁ！？」

この話、書き始める前からすでに妄想で完成している、って言うのは話したよな？

ア「まあ、聞きましたね」

あの時点ですでにかなり出来上がってて、あとは書くだけなんだよ。

蒔「おま・・・・・だったら今何章まで出来てんだ？」

三章までは内容確定。
四章は練り込み中。

ア「どこまでやるつもりなんですか！？」

どこまでも
それでで、ですね。

四章で結構いいキャラ作って出すつもりだったんですよ

蒔「ほうほう」

でもね、そのキャラ、設定だけで名前とか全然思い浮かばなくてどうしようって・・・・・結構前に悩んでた。

ア「結構前に？」

そうなんです。
その名前は、すでに読者様からある日来たある案でビッタリ決めてしまいました。

蒔「どういうことだよ？」

蒔風が持つのが天剣「十五天帝」だろ？
じゃあその新キャラになにもたせようか、ってことになって

・名前は「神剣」

・属性としては「癒やし」（あくまで剣の）

ってのは決めてたんだけど、剣の名前、キャラの名前が出てこなかったところに「こんなキャラどうですか」という案が来て・・・・

ア「ああ！！それでなんとその設定がドンピシャだったと！！」

ザッツライ！！
運命すら感じましたよ。

ですがね、そうしたキャラをもらってもですね・・・・・

蒔「なるほど。第三章まではすでにできているから出てくるのは四章からだと」

そうなるんです。
しかも、三章まではもう本当に完成していて登場させる余地がない。

だから、その登場は四章まで待ってもらわないといけないんですよ・・・・

ア「それは・・・・・案をくださったリュウガさんに・・・・・なんかこう・・・・」

蒔「もうしわけないな・・・・・・」

ですが、こればっかりはどうにもならない・・・・・・
泣くしかないです。

蒔「それで?結局二章はどうするんだ?」

え?ああ・・・・・

このまま投稿します。

ア「沢山の人から感想きましたからね」

それ以上に新しく作るのがめんどくさい・・・・・・

蒔「ヲイ!?」

と、まあこんな感じでしたよ!!

蒔「そういえばクラウドの仲間とか出てなかったっぽいんだけど・・・って、お前友人に言われてなかったか？」

ああ、そこに関してですか？
正直ですね・・・・・

FF7に関してはクラウドだけが欲しかった部分はありますッ！！！

蒔「こいつぶっちゃけやがった！？」

ア「じゃ・・・じゃあ・・・・他のキャラは？」

いや、出しますよ？でもどうやって絡ませようか・・・・超悩む

ア・蒔「こいつクソだ・・・・・」

でもね?それを言われてちゃんと話に入れようとしてるよ?

だけど・・・・・

ア「だけど?」

私のＦＦ7知識って、本編とアドベントチルドレンしかないんですよね!!!

蒔「よくそんなんで書く気になったな!?」

書きたかったから書いたッ!!!

ア「ファンに殺されてしまえ」

蒔「ん？そういえばこれって第一章なんだよな？」

そうだけど？

蒔「でもこれ、「第一章　ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ　～Ｇｒａｎｄ　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～」って書いてあんぞ？」

ああ、それね。

だって書きたいのは一つになってからだからっ！！！

ア「どういうことですか？」

いやね、最初に考えたのはよくあるコラボ物。

この話の世界ではこの作品とこの作品の世界が混じっています、ってやつね？

蒔「まあ、よくみるな」

でも、いきなりそんな話からじゃ、この物語はダメだと考えたわけですよ。
だから

ア「だから世界が一つになる過程を書いた、と」

蒔「そしてここからがホントに書きたい話になって・・・・？」

つまりは、グランドプロローグ。
でも、ここまで長いとあれだからって理由で第一章。

ってわけ。

ア「だったら二章はどれだけ長くなるんですか！？」

ああ、大丈夫・・・・同じくらいか、それ以下だから。

蒔「本当か？」

いやだなァ、信じてよ。
詳しい事は言えないけど、扱う事件は二個だけだし。

ア「二個？少ないですね」

ええ、まあ、それは次にアップする次章予告で

ア「にしてもあなたって戦闘後を書きませんよね？」

君はなぜ蒔風が「奴」を倒した後にすぐ世界を出るかわかるか？

蒔「「奴」を追うためだな」

そう、そういう設定だ。

だけどな、それには裏があってだな・・・・・

私がその後を書くのが苦手という事もあるのだよ！！！！

ア「なるほど、うまく逃げていた、と」

その通り！！だから戦闘後の肩すかし感は半端ない。

蒔「「ＥＡＲＴＨ」のビルだってどうやって建てたか明記してないしな」

あそこはほら・・・・

管理者だし？ポンと出したんだよ。

蒔「・・・・まじで？」

そこをどうにかするのか管理者。

正直、建てたと言ってるけど、そこにドン、と出した感じで。

蒔「マジかーーー」

あ、それと前の話での

登録

って言うのは戦闘員として協力してくれるかどうか（任意。登録はしなくてもいい）

移住

って言うのは「ＥＡＲＴＨ」ビルに部屋を持つかどうか（別に本住まいじゃなくてもいい）

です。

と、言うわけでここまで来た「世界をめぐる、銀白の翼」

第一章は完結。
次は第二章へとコマを進めます。

ですが・・・いきなり事件に入っていいのか、それとも少し日常を出すべきか、悩んでいます。

正直、日常パートの話が浮かばない！！！

誰か案をくれれば嬉しんですがねぇ・・・・・

蒔「なにげに催促するんじゃないよ」

すみません。

では、この辺で！！！！

次章予告をどうぞ！！！

第二章　予告

武闘鬼人　Ｐｒｅｓｅｎｔｓ

銀白　ＰＲＯＪＥＣＴ　第二段

始動

一つとなって、一見平穏に見えた世界

「蒔風さん」

「どうした？」

だが、その世界に、暗い影は確実にやってきていた。

「仮面ライダーゼロノス、桜井侑斗との連絡が取れません！！！」

「なに！？」

消えゆくのは

「棗恭介、反応がロスト！！！」

「呉軍、全滅！？」

主人公達

「泉こなたさんたち四人が、学校に休学届を出して旅行に出たそうですが・・・位置がつかめません!!!」

「岡崎夫妻との連絡が途絶・・・・・?・・・・・娘の汐は、彼らの友人の保母に預けられているようです・・・」

今回起こる、事件は二つ

「どういう事だ！！！！」

「主要、最主要たちが狙われている・・・・！？」

敵は、どちらも同じといえる
あえて言うなら、それは

「おいおい・・・本気でオレに・・・勝てんのかァ？」

「くっ・・・ひるむな！！！！！行けぇ！！」

世界　そのもの

「「奴」ではない・・・こんな短期間では復活できん！！！」

新たなる「敵」

失われる主人公

「一刀は・・・・やられた・・・・・」

「「ＥＡＲＴＨ」本部、崩壊・・・・・」

そして、いなくなる翼人達

「蒔風ッ！！！」

「クッ・・・クラウド！！理樹ッ！！！！」

世界は、どこへ向かおうとしているのか

「そんな・・・・・おまえは!?」

「そうだ、初対面か?自己紹介だ。俺は・・・・・・・」

「貴様!!!!!」

世界をめぐる、銀白の翼

第二章

Ｌｏｓｔ　ＨＥＲＯＳ

「俺が最後の「ＥＡＲＴＨ」メンバーになってしまった・・・・」

「・・・・・・・」

「だから・・・・お前は俺が倒す！！！」

COMING SOON

第二章　予告（後書き）

どうでしょうか？予告編

第二章の更新は一週間ほど開けたいと思っています。
では、それまで皆三ん、ゴキゲンヨーーーーーーーーーーーー！！
！

ある一日

うっそうとした森の中。

二人の男が剣を握って向かいあう。

「オレが最後の「ＥＡＲＴＨ」メンバーになってしまった・・・・」

「・・・・・・」

「だから・・・・オレがお前を倒す!!!」

「御託はいい!!お前、オレを倒したいんだろ?えェ!?」

そういって、男二人が睨みあい。

その剣がぶつかり合って最期の闘いが始まった。

その数ヶ月前――――――――

ピピピピピ、ピピピピピ、ピピピピピ、ピピピピピ・・・・・

「ＥＡＲＴＨ」宿舎の一室で、甲高い電子音を鳴らしながら、目覚まし時計が鳴っている。
結構うるさい。

しばらくしてから、そのデジタル時計の頭を、ベッドで眠る男の掌が叩く。

この男こそ、この部屋の主、蒔風舜である。

だが、人間これだけで起きれるなら、国語辞書に「遅刻」などという項目はない。

叩いたては力なくそこから離れ、布団の中に戻っていく。
もぞもぞとしながら頭を掛け布団に潜らせ、抱き枕を手足で探ってたぐりよせ、ベストポジションで抱き直す。
ちなみに彼のために言っておくが、これはいたって普通の抱き枕であって、変なプリントはされていない。

そうして彼は再びまどろみの中に戻っていくが、五分もしないうち

にもう一度、目覚まし時計が持ち主を起こそうと鳴り始めた。
繰り返しアラームが鳴るタイプのようだ。

だが、それをさっきと同じ動作で消す蒔風。
そして、同じように鳴る目覚まし。

そうこうしているうちに、ついに蒔風が時計を掴み、アラーム機能そのものを切ってしまった。

これで彼の安眠を妨げる者はいない。

だが

ベッドで眠る蒔風に、一人分の小さな影が歩み寄る。
蒔風はまったく気が付いていないようだ。

それをみて、その人物の口元がニヤリと上がり・・・・・

「どーーーん!!!」

飛びこんだ。
そりゃもう飛びこんだ。

人体の中心ともいえる「水月（鳩尾のこと）」に頭から突っ込んだ。

「グホゥッッ!?」

「起きたー?」

今、一瞬目覚めて、一瞬でオチました。

蒔風の腹の上で、ヴィヴィオが馬乗りになってポンポン跳ねている。
見た目は可愛い光景だが、下にいる人間が気絶していることを考えると結構怖い。

ガタガタガタッ、バタンッ！！！

「ああ！？や、やられた！？」

「ふふふ、よくやったよ！！ヴィヴィオ！！」

「いえーい！」

と、そこでけたたましい音を鳴らしながら、蒔風の寝室に倒れ込んできたのは、組み合って地面に転がるなのはと星だ。

どうやらなのはが星を押さえている間にヴィヴィオが蒔風の元に向かうという作戦だったらしく、この様子ではかなりうまく行ったようである。

「舜君は！？」

「まだ寝てるよ？」

「ならばっ！！まだ私にも勝機があるッ！！！」

部屋の主を差し置いて、その部屋でギャーギャー騒ぎまくる少女二人。
そんな争いしてんだったら朝飯でも作ってやればいいのに、という事は考えちゃいけない。

なお、それを聞いたなのはの親友Fさんは叩(はた)かれた後に「朝起きて、最初に見たのが私だった方がいいでしょう!?」と言われたそうだ。ちなみにそのとき、Fさんのお姉さんはそれを見てケタケタ笑っていた。助けてやれよ。

「くっ・・・だがさすがだな、なのは殿・・・よもや私と同じことを考えるとは!!」

「それはこっちの台詞ですよ。でも、こっから先は通さないから!!」

認めながらも、戦う定め。
ああ、なんと悲しい世界なのか。

「これが・・・戦いなんだね・・・・」

それを見て、ベッドから降りていた高町ヴィヴィオは何かを悟っていた。
君が知るには、あの世界は少しディープすぎるよ？

「ん・・・・・んあ？」

と、そこで蒔風が目を覚ます。

なんだか普通の目覚めよりも身体が重く感じたのは、きっと気のせいではないだろう。

「「舜（君）！！おはよう！！！」」

「・・・・・・え？」

「「おはｙ「なんでいるんだぁぁあああああああああああ！！！

？？？？」朝の挨拶！！！」」

蒔風の叫びに、元気よく答える二人。
それを聞いてからの蒔風の行動は早かった。

バサッ！！ドスドスドス・・・・ガチャッ、ポーーーイ

朝起きて　目の前にいた　侵入者　布団にくるんで　廊下に捨てた
字余り

『（モゴモゴ）だ、出してーーーー！！』

『むぅ・・・・ハッ！？こ、これは舜の匂いが！！』

『ホントだ！！』

「ホ　ン　ト　だ　じゃ　ねェ」

『うう・・・なんでこんなことするのー？』

『そうか・・・わかりましたぞ、なのは殿』

『どういうことなの！？』

『舜も男子。きっと朝の処理を・・・・』

「よし、お前らそのまま浴場に放り込んできてやる」

『『そ、それは先にシャワー浴びてこいよ的な！！？？』』

「そ　う　じゃ　ねぇ」

そうして、蒔風が部屋に戻る。

ちなみにヴィヴィオは布団にくるまった二人を引きずって部屋に戻っていっていた。
逞しい子である。

「ったく・・・なんであいつら朝からミッドナイトなんだよ・・・・」

そう言いながら、蒔風が身体を伸ばす。

ここからの蒔風の行動はいつも通りだ。
洗面台に向かって歯を磨き、顔を洗い、炭酸を少しだけ飲み、朝ごはんを食べて、着替えて部屋を出る。

そして、蒔風はこれから学校の方に行くのであろう一刀や愛紗たち

とすれ違いながら（星は愛紗に簀巻きにされていた）会釈し、自分の事務室に入った。

「あ、来ましたか」

「お前が「来なかったら毎晩見る夢を悪夢にしますよ?」とか言うからじゃねェか・・・・・・」

「どうでしたか?」

「二度とすんな・・・・・・」

蒔風がその日の事を思い出して疲れた声を出す。
そう、蒔風がサボって仕事から逃げたある日の晩、アリスは宣告通りに蒔風の夢を悪夢にしてしまったのだ。

それはもう・・・うなされまくって次の日に蒔風がアリスにすがるほどだった、と言えば、どれだけのものだったかの想像はできるだろう。

「ってか！！形だけでいい、って言われたからここにいんのに！！なんでおもっくそポジションつけられてんの！？」

「ですから！！すべての世界を回ったのはあなただけなんですから、あなたじゃないとわからないことが多いからですよ！！」

「あんたでもいいじゃないの！！もういや！！私こんなの耐えられない！！！」

「なんでカマ臭くなってんですか。気持ち悪いです」

「キモイゆーな！！傷つくのは俺なんだぞ！！」

そんなことをギャーギャー言いながらも、蒔風は椅子に座り、その右手は書類を次々と回していっていた。
器用な男である。

「終わった！！」

「じゃあ次」

「オレ逃げるよ！？」

ーーー

「どうしたんですか？蒔風さん。元気ないですよ～？」

「いやぁ・・・・朝っぱらから疲れて・・・・」

「何かあったんですか？」

「いや・・・説明したくない・・・・・」

ぐったりしている蒔風に話しかけてきたのはこの「ＡＧＩＴΩ食堂」を取り仕切るシェフ、津上翔一だ。
どうやら一番忙しい時は抜けだしたようで、彼も昼食を取りに来たようだ。

「津上さ～ん。今日は何がいいですかぁ～？」

「ありゃ、疲れて眠そうですね？水泳なんかいいんじゃないですか？スイミング！！芦原さんがインストラクターやってるみたいだし、行ってみたら！スイミング～」

「・・・・」

「あ、今のは「睡眠、グ～」と「スイミング」を・・・」

「いや、それはわかってるから」

説明の入ったボケほど悲しい物はない。

「お待たせしましたー。はい、蒔風君」

「おう、サンキューだ。って、泉か」

「うん。ここでバイトしてんだよね～～」

津上と蒔風が注文してから数分後、頼んだものを持ってきたのはこなただった。
彼女いわく、ここの方がバイトしやすいらしいのだ。

「時給も蒔風君に泣きつけば上げてもらえそうだしね～～」

「をい」

そう言いながら皿を置いて仕事に戻るこなた。
頼んだものは、蒔風がマーボー豆腐。津上がオムライスだ。

「（もぐもぐ）うまいなァ、やっぱ！！」

「それ、蒔風さんのために作っておいたものですから」

「まじで！？ありがとー」

腹が満たされ、元気が出たのか蒔風の声が弾む。
津上もそれによかったよかったと頷きながら、厨房に戻った。

蒔風も食べるのはちゃっちゃと済ます人なので、食い終わってからはぶらつくだけだ。
アリスから新しい仕事が来なければだが。

「お、舜！！」

「一刀」

蒔風が廊下を歩いていると、一刀が声をかけてきた。
どうやらこれから鍛錬のようで、後ろには武器を持った愛紗と翠がいた。

「ガッコは？・・・ああ、午前だけか」

「そ、土曜だからな。で、俺はこれから愛紗たちと模擬戦すんだけど・・・蒔風も来るか？」

一刀からの提案。
その提案に、蒔風が顎に手を当てながら首をコキコキ鳴らして考えだした。

「ふぅむ・・・・最近体動かしてないしなぁ・・・・」

「じゃあ行こうぜ！！舜とも模擬戦したいから！！」

「そうだ・・・な。よし、やるか！！ためさないといけないことも

あるしな」

そう言って向かうは地下の大訓練場。

そこにはすでに使用者がいた。

いたどころか、思いっきり模擬戦をしていた。

「ハアアアッ！！！」

「良太郎！！そこでヒュッ、とかわしてバーンと反撃だ！！」

「先輩、その説明は無茶でしょ！？」

「リョウタロウ！！」

「クッ・・・剣技でここまで押されるとは・・・・」

「負けちまったあたしらが何言ってもしょーがねーけどなー」

「ふぅ・・・・・さすがは翼人、だな」

戦ってるのは、クラウド・ストライフ。
訓練場の脇にはすでに挑んで負けたセイバー、草壁美鈴、ヴィータ、ハクオロが座り込んでいる。

「にしても今んとこ五人目だろ？」

「それでまだあんだけ勝てんだからすげーよなァ・・・・」

そういってそのわきに立つのは士にユウスケだ。
その奥のベンチにはエルルゥとアルルゥが見学をしていた。

「おー、クラウドやってんなぁ・・・・」

「舜じゃないか」

「よ。今は・・・開いてないねぇ・・・・」

と、一同が蒔風に気付く。

更にその後からひょこりと一刀たちまで出てきて、会話に入る。

「なに？クラウドに勝ち抜き戦？」

「らしいな。オレが来た時にはもう始まってたぞ？」

どうやら、最初にクラウドを見つけたヴィータが戦いを挑んで、そこからギャラリーがどんどん挑んでいって今に至っているそうだ。

「クラウドはなにしに来たんだ？」

「さあ？なんか小包持ってたけど？」

「宅配ついでか・・・・不運な・・・・」

「電車斬り！！！」

「凶斬りッ！！」

ガゴォッ！！！！！

と、そんなことを話していると、どうやら決着がついたようだ。
電王ライナーフォームと、クラウドの技がぶつかり合い、飛ばされたのは良太郎だった。

「五人抜きかー」

「やっぱやるなぁ・・・・」

蒔風が感心して呟く。
そうしていると、クラウドも疲れたのか良太郎と一緒にこちらに向かってきた。

「やるなぁ、クラウド」

「シュンか・・・・見てたのか」

「五人抜き、おめでとう！」

「たいしたことじゃない」

そんなことを話し合っている彼らを見て、アルルゥがふと思ったことを言葉にした。

「おねーちゃん、マイカゼーとクラウドーは、どっちが強いの？」

「え？」

「「「「「え？」」」」」

「「「「「ゑ？」」」」」

その言葉に、皆が振り返る。
そして、面白そうだという顔をして士が言った。

「確かに。蒔風がどれだけ強いかは知ってるが、そっちが蒔風に並ぶくらい強いのか、俺らは知らないしなぁ」

「失礼だぞ！！士！！」

「ユウスケだって正直思ってんだろ？」

「う・・・・」

それを聞いて、蒔風とクラウドはどうしようかという状態だ。

「どうする？」

「さあ？」

「戦ってみりゃーいーじゃねえか」

「そうだな。私も、興味がある」

そこにヴィータとハクオロの賛成票。
ここまで来てしまえば、やらないのもなんだという事だが・・・・

「でもクラウド疲れてんだろ？」

「だったら後日だな」

「よし！！こっちで日程合わせるから、みんな呼ぶか！！」

「え？」

「と、なると全員分の飲み物と食べ物を・・・・」

「完全に見世物じゃねーか」

こうして、決まってしまった蒔風対クラウド。

勝つのはどっちなんだろうか？

to be continued

ある一日（後書き）

第一話がこんなんでいいのか、と不安な不安な作者です。
始まりました、第二章！！！

ここから数話は日常編です。
なんとか書いていきませう！！

事件が起こるのはそれから・・・・

ふふふふふふふ！！

ディシディィア　デュオデシムおもしれーーーー！！！

翼人対翼人　かーらーの？

蒔風とクラウドの模擬選が決定されてから数日後。
ついにその日がやってきた。

「で・・・何この大観衆」

「ＥＡＲＴＨ」地下大訓練場。
そこの観戦エリアに、なんとほとんどのメンバーが集まっていた。

皆、今か今かと蒔風とクラウドの戦いを待っている。

「どうしてこうなった・・・・」

困惑しているのはクラウドも同じだった。

この大訓練場は天井までかなりの高さがあり、二、三階ぐらいまでの高い。

だから見上げれば、上階部分にはガラス越しに何人もの観客がみえるのだ。

『さあ！！始まってまいりました翼人対決「蒔風ＶＳクラウド」！！！実況はオレ、棗恭介が！！！』

『解説はこのオレ、門矢士がやってやる』

『門矢さん、一体どっちが勝つんでしょうかね？』

『蒔風がどれだけ強いかは皆知っているだろうが、クラウドがどれだけ強いかわかんないからな。強くても、蒔風と比べてどれくらいなのかがわからない以上、まだなにも推測は立てらんねえな』

『なるほど・・・この場にいる者は、「奴」との最後の戦いでクラウドさんを見ただけでしたからね。その強さに注目です！！』

『どちらも攻撃特化の翼人。おそらく、どちらが勝ってもおかしくはない』

更にはこのように実況、解説まで付けられる始末。
完全にエンターテイメントだ。

出店を出していたり、お弁当持って来ていたりと、準備も万端だった。

プァーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!

『さあ!!時間がやってまいりました!!!!ご覧ください!!今回の選手の入場です!!!!』

アラームが鳴り、そんな声が聞こえて、蒔風がやれやれとベンチから腰を上げて真ん中へと向かう。
それに伴い、クラウドも気を引き締めて歩いてきた。

『実況席向かって右側！！銀白の翼、「ＥＡＲＴＨ」局長。蒔風ぇぇぇえええええええええ、しゅーーーーーーーーーーん！！！！！』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！

『そして対する左側ァ！！漆黒の翼、「ＥＡＲＴＨ」局長に並ぶとされる唯一の男！！クラウドォォォォオオオオ・ストライフゥゥウウウウウウウウ！！！！！』

ヒューーーーーー！！！！ワーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！

「なんかおかしなことになったなぁ」

「仕方ない・・・だが・・・・・・オレもお前とは戦ってみたかった」

「おや、クラウドらしからぬ好戦的な台詞」

「ふ・・・オレも最近、世界を楽しめるようになってきてな」

『では両者剣を構えて！！！』

お互いに話しながら、蒔風とクラウドが剣を握る。

「ま・・・やるからには・・・・なぁ？」

「全力・・・だッ！！！！」

『ゴー！！』

二人の剣が、轟音を鳴らしてぶつかり合った。

ーーー

それに合わせて蒔風が獄炎弾を放ったが、クラウドもマテリアによる魔法でそれに応戦していった。

「雷旺！！」

「サンダガ！！！」

「土惺！！」

「ブリザガ！！！！」

その攻防は圧巻の一言だった。
おそらく、あの場に飛び込んでは誰もが巻き込まれ、立ってはいられない。

怒声の攻撃を冷気が凍り砕き
獄炎の炎を雷で弾き

火炎弾を圧水で打ち消し、降り注ぐ隕石を拳で砕いていた。

『魔法と魔法!!剣技と剣技!!どちらの剣も合体剣ということもあって、白熱した戦いが行われています!!』

『蒔風のは融合式合体剣。クラウドのは組み立て式合体剣という違い話はあるがな』

『この場合どう違ってくるのでしょうか?』

『蒔風の剣は様々な形があり、多様性に富む分、クラウドのようなすべてに重量が乗るような剣撃を受けるには二本以上で受けなければならない。対してクラウドは組み立て式という手間のかかるものを持っていながら、その機能をうまく使った攻撃や防御をするからな』

『さっきの、合体剣から一本はじき出して使ったようにですね?なるほど、両者とも不利、有利があるというわけですか』

『だな。これは本当に・・・わからないぞ・・・』

恭介と士の実況解説が流れてくるが、当の本人たちは実際そんなもの気にしてなどいられない。

正直、一撃でもいいのをもらったら終わるような状況なのだ。

クラウドは一撃が重いし、蒔風は一撃は言った後の連撃で。

しかしその状況でも、二人は楽しそうに剣を交えていた。
命の削りあいでなく、技と力を見せ合うようなこういった戦いはクラウドにはほとんど経験がなかったし、蒔風もそういったことをしていなかったわけではないが、ここまで釣合の取れる相手がいなかったのも事実。

故に、楽しいのだ。
こうした純粋なぶつかり合いが!!

「青龍!!白虎!!」

「迎え撃て!!リヴァイアサン、イフリート!!」

さらには召喚獣まで出し始めてきた。

だが、そちらの戦闘に気を取られている場合ではない。
彼らは彼らでやってもらわないと、こっちが気が気でないからだ。

宙に浮いた蒔風の放つ無数の斬撃をかわしながら、クラウドが地面を駆けて蒔風の真下へと向かう。
そしてそこから真上に向かって剣を突き出し、ロケットのように飛び出していった。

それを紙一重で躱して反撃しようとする蒔風だが、躱そうとした瞬間、クラウドの剣がグリッ、と捻られてその切っ先が、蒔風が避けようとした方向へと向けられた。
さらにはクラウドの剣がバラけ、花びらのように開いたので、紙一重などとはいっていられない。

「うぉガッ！？」

「チッ！！」

その攻撃に、蒔風がとっさに開翼。その波動でクラウドを押し返す。
さすがに至近で開翼されては、クラウドも下がらずをえない。

地面に降り立ったクラウドに、蒔風が使役獣を引っ込めてから十五天帝を構え、対戦相手の方向に向かって垂直に降りてきた。

それに対してクラウドも同じく召喚獣を引っ込め、開翼して受け答えた。

火花散り、魔法が入り乱れ、気合いと咆哮が響き渡る大訓練場。

両者とも力は全く互角。

否、おそらく、蒔風がクラウドの使う剣を少しでも知っていなかったら、負けていたかもしれない。

クラウドも蒔風の剣は知っていたものの、そのすべてを知っているわけではない。

だが、その有利性を以って蒔風はクラウドと互角なのだ。

逆だった場合、負けていた可能性は高い。

「そんなこともできるんだな、シュン」

「知らなかったか？じゃあこれは知ってっか！？心象的世界破壊（イマジナリティ・ワールドエンド）！！」

「うぉ！？」

ここで蒔風が畳み掛けるかのように固有結界を発動、その破壊現象にクラウドを巻き込んだ。

と、言っても相手はクラウド。
このようなことでは倒れないし、また、彼が動かない、という選択肢を取るはずがない。

蒔風はその中での法則性は知っているものの、その法則を自由にすることはできないため、相手の動きから発生する事象を防ぐのは実際には難しいのだ。
だから、この技はギャンブルなのだが・・・・・

「うわぁッ!?バッ、バナナの皮ぁッ!?」

ツルンッ、ステーーーン

「か、金盥(かなだらい)が・・・ごわっ!?」

ガラガラガラガラ、ゴガンッ!!

お互いの行動によって起きた現象で現れたのは、バナナの皮と空から落ちてくる金盥の雨。

それによって蒔風は滑って転んで後頭部を強打。
クラウドは金盥を脳天に食らってグラついていた。

二人は今までの戦闘で、決定的な一撃は喰らわなかったものの、その疲労と軽傷は確実にその体に蓄積されていっていた。

今さら言う話だが、この大訓練場の空間には時空管理局から提供された「非殺傷設定フィールド」が適用されている。
つまり、どんな攻撃を食らっても、怪我にはならないのだ。

この空間では、ダメージはすべて疲労として蓄積されていく。
だから胴体を切られた場合、腹筋に力が入らなくなったり、右肩を貫かれた場合にはそこが疲れてしまい、上がらなくなるのだ。

そして死に至るようなダメージを食らうと、自動的に気絶にされてしまう。
その際、死亡で終わったか気絶で終わったかはモニターで判断される。

だから、この空間では怪我も疲労となって溜まっていく。
そんな空間で翼人二人が暴れたのだから、その本人たちは相当疲れていることだろうし、実際そうだった。

もしかしたらこんなアホなことで二人の決着になってしまうのでは？と、その場の全員が思ってしまったほどだ。

『さて・・・・固有結界も切れ、二人はいまだに頭をさすっていますが・・・・』

『さすがと言わざるをえないな。さすがは翼人。蒔風と並ぶとされるだけある』

「クラウドーーーーー！！負けんじゃねぇぞ！！！マリン、言っ

てやれ！！」

「頑張って、クラウド！！」

「ほらクラウド！！マリンにここまで言われちゃ、勝つしかないよ！！！」

「む、こちらも負けずに応援だ！！舜！！負けるな！！」

「舜パパーーーー！！負けないでーーーー！！！」

「舜君！！ほら、立って立って！！」

「バレット、なぜいる？というか、マリンにそういわれたら負けられないだろう！？」

「俺は　パパじゃ　なーーーーーーーーーーーーーーい！！！！！」

『両者とも応援席からの声援が耐えません。中には「蒔風たまには負けちまえ」などという声も聞こえてきます！！』

『あとで説教だろうな、そいつら。ばれないことを祈る。にしても・・・・・』

『どうしました？』

『これは・・・・チャンスじゃないか？』

『え？』

士の言葉に、恭介が訊き返す。
今こいつ何を言った？

『みんな、思い出せ。知っているはずだ。蒔風は強い。中には、ボコボコにされて物もいれば、一緒に戦った者がいただろう。そして、こうは思わなかったか？』

あいつに勝ってみたいなぁ・・・・と

「「「「「「「「「!!!!!???」」」」」」」」」

『確かに、俺たち全員が向かっても勝てないかもしれない。だが、今ならどうだ?むしろ、今しかない。蒔風に勝ってみたい奴は立ち上がれ・・・・しかも、漆黒の翼人のおまけつき♪』

え・・でも・・・

あそこに突っ込むのかよ・・・・

ってか、そんなの夢物語じゃん

そんなざわつきが訓練場の全域を覆う。
ちなみに、翼人二人は戦闘中で全く耳に入っていない。

『じゃあ・・・・蒔風を泣かせてみたいか?』

『『『『『それはある』』』』』

『満場一致！！ならばよろしい、フルボッコだ。たちかがれ有志達よおオオオオオオ！！！！』

ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

「な、なんだ！？」

「全員が襲いかかってくる！？」

「獲れ！！翼人を倒した称号を！！全員で打ち取れ！！！！」

「「士テメエえええええええええええ！！！！！！！！」」

ディケイドに変身した士が全員を先導して二人に突っ込んできた。
お前が大戦おっぱじめてどうする。

その彼らの行動に、なんとなく内容がわかった二人。
そして、こうなっては仕方ない、と二人は戦闘をやめ、その剣の切っ先を他に向けた。

「シュン、いけるか？」

「誰に言ってんだ。お前が行けんなら、俺も行ける。ま、あと一人増えたらきついだろうがなｗｗｗ」

「その時はオレが一人多く倒すさ」

「あ！！ずりぃぞお前！！じゃあオレは二人！！」

「三人」

「四人だ！！」

『さぁ始まりました「ＥＡＲＴＨ」最強決定戦バトルロワイヤル！！実況は私、高町ヴィヴィオとー♪』

『解説は私、古手梨花と羽入がしますです、にぱー。そういえば羽入、あそこにはいかないのですか？』

『あぅあぅ。こっちの方がのんびりシュークリームが食べられるのですよ。あぅ』

「向かってくるなら、全員倒す！！」

「くそーーー！なんでこーなるのーーーーーー！！！？？全員覚悟しとけや！！！」

ー ー
ー ー
ー ー

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・・」

「か・・・勝った・・・・・・・・」

「綺麗にいったのは・・・最初だけだがな・・・・」

「勝てたんだから・・・・・・・いいじゃねえか・・・・・」

大訓練場のど真ん中。

そこで、蒔風とクラウドが己の大剣を床に突き立て、その側面に寄りかかってへたり込んでいてた。

その周りには二人に挑んできた「ＥＡＲＴＨ」メンバーが死屍累々。

訓練場の大モニターには、軒並み「気絶」と書かれていて、「死亡」の文字は一つもない。

「シュンは・・・何人倒した・・・・」

「さぁな・・・途中から数えてない・・・・お前は？」

「興味ないね・・・・」

「じゃあ聞くなよ・・・」

「戦果は・・・半分ずつ・・・だな」

「じゃあオレの勝ちだ。フリードやってるし」

「だったらこっちはあれだ。ドラグレッダー落とした」

「まて、一刀の武器＝人数分だからオレの勝ちじゃね？」

「それならオレだってアーチャー切り捨てたぞ」

「翼人だからこっちが上だ」

「なら理樹を落としてるから互角だな」

「いやいやだから・・・」

「まて、だったら・・・・」

そんな口論をしながら、蒔風とクラウドが剣を握ってまた立とうと

する。
こいつらまだやる気なのか？
と、そこで
「いい加減にしなさいッ！！！」
「ガっ！？」
「アぐっ！？」
ゴゴンッ！！！というういい音がして、クラウドと蒔風の頭が地面にめり込んだ。
その跡に立っているのは、アリス。
翼人がいかに管理者より強くとも、相手がこの状態ならば勝つことも可能なのだ。

そう、その拳骨が二人のドタマにぶち込まされて、仲良く沈黙させられたのだ。

「まったく・・・こういうイベントがあるのは知ってましたけどね、やり過ぎはいけませんでしょう・・・ほら、仕事あるんですから、来てください。クラウドさんにも手伝ってもらいますよ？」

そう言いながらアリスがズルズルと二人を引きずっていく。
ちなみに絶賛気絶中だ。

「せっかく管理者の立場からあなた方と同じ世界で生きていこうと思っていたというのに、いきなりなんですかこの人たちは・・・・ブツブツブツ・・・・・」

『今回の「ＥＡＲＴＨ」最強決定戦バトルロワイヤルの勝者は、アリスなのですよー』

『飛んだダークホースだったわね・・・・・さすがは管理者、ってとこね』

『梨花ちゃん、話し方ちがーう』

『気にしてはいけないのです。にぱー』

「何故だ・・・・なぜオレもこんな書類を・・・・・」

「愚痴るなクラウド。オレは毎日だ」

「・・・・・・すまん」

to be continued

翼人対翼人　かーらーの？（後書き）

どうでしたか？
まさかのアリスの勝利。

蒔風「あれは完全にいいとこ取りだった」

クラウド「何故オレがなぜオレがなぜオレが・・・・・・」

あ、ちなみにこっちのクラウドは「めぐ銀」使用なので、キャラ崩壊が激しいかもです！！

ク「おい、他の奴らは出さないのか。ティファとか」

黙れリア充

蒔「文面上だけどな。こういうときって、二次元・・・じゃないよな？」

ク「線だけだから一次元だろ」

蒔「おい作者。今度友人にイラスト描いてもらえ」

うっさい黙れ。

ク「次回、今度はあの人にスポットライトだ」

ではまた次回

祭り　ｗｉｔｈ　管理者

とある朝。

ＰｉＰｉＰｉＰｉ　（プツッ）

目覚まし時計が鳴り、それがすぐに止められる。
止め主は、この部屋の主だ。

その人物はすでに起床し、着替え、朝の準備をすべて済ませ終わっていた。
どこかの翼人とは大違いである。

「さて、今日も行きましょうか！」

そう言って”Ｎｏ　ｎａｍｅ”管理者兼「ＥＡＲＴＨ」後見人、アリスが、この部屋の扉を開けて、出て行った。

ーーー

それから数十分後

蒔風の事務室で、アリスは一人時計を見ながら、カウントダウンを取っていた。

「あと・・・・五、四、三、二、い・・・・・・」

バタン！！

「ま、間に合った！？」

と、おそらく決められた時間まで本当にぎりぎりだったのだろう。蒔風が息を切らして事務室に飛び込んできた。

その顔はドヤ顔だが、アリスのは呆れた顔になっている。

「ギリギリですね。どうしてこう毎日毎日ギリギリなんですか。もう十分は早く来てもらえると・・・・」

「知らないのか？朝起きた後の十分はな、この世界でかなり重要なんだぞ？」

「管理者やってかなりになりますがそんな決まりを決めた覚えはありません」

ま、そういうのを決定するのは私でもないんですけどね。

最後にそう言って、アリスが蒔風に書類を渡す。
毎日なんでこんなに書類があるのか。もはや蒔風は考えるのをやめたが、本当にどこから来たんだろうか？

「こっちは魔化魍討伐組織「猛士」の活動報告です。どうやら、結構な勢いで魔化魍が勢力を広げているようですね」

「魔化魍って、音撃じゃないと倒せないだろ。どうすんだよ。「鬼」ってそんなにいないんだろ？」

「そこはあの最後の戦いのときに我々が調節しましたから、普通に倒せます」

「だったら各魔化魍の特性を適当に配布しとこうかな。あいつら、そこが厄介だから」

「で、星さんや雪蓮さんが酒を飲みたいと・・・・」

「未成年はいけません」

「それから、神羅カンパニーからの報告で、モンスターたちは比較

的温厚。よほどのことがなければ襲い掛かってくることはないそうですね」

「でも警戒はしないとでしょう。モンスターリストを上げてこっちによこしてくれ」

「それと・・・・あの件はやっぱり？」

「ああ・・・どうやら、やらねばならんことはあるな」

「そうですか・・・・で、次の話ですが」

「まだあんのか・・・・ってか、書類もまだあんですけど！？」

「頑張ってくださいね」

「鬼！！」

「管理者です」

そうして、蒔風が逃げ出さないように見張りながら、アリスも書類をまとめていく。

なにせ、蒔風は仕上げた書類はどんどん机の端にほっぽってしまう

し、最悪床に散乱していることもあるのだから、それを分類別にまとめていく必要があるのだ。

そんな作業を、午前中びっしりやる蒔風は、すぐにグロッキーになってしまい、十二時になるころには机にべったりを伏せていた。

「お・・・終わった・・・・・」

「ご苦労様です」

「でもよ、また２４時間経つと書類溜まるんだよな・・・・」

「そりゃそうです。いくら我々が調節したといってもやはりできたばかりの世界ですから、問題は山積みなんですよ。まあ、それを午前中に終わらせてしまうあなたもすごいと思いますよ？」

「でも多分安定したらしたで問題の量はかわらないんだろうしなぁ・・・あの野郎、とことん面倒なことしてくれたよな・・・・みんなと会えるのは楽しいけど」

会話を済ませ、アリスが昼食でも取りに行こうとし、机から動かない蒔風に何かいるかと聞いた。

それに蒔風はなんでもいいから飯をくれ、と答え、昼食をアリスに任せることにした。

「さて・・・津上さんならおいしい料理を作ってくれるでしょうから、楽しみですね」

そういいながら食堂に入るアリス。
が、そこはいつもの食堂とは風景が変わっていた。

「あ、アリスさんじゃないですか」

「なになに？何しに来たの？」

「いえ、少し昼食と・・・何をしてるんですか？」

その場にいたのはこなたたち四人組、ハルヒを始めとしたＳＯＳ団、なのは、フェイト、はやてとその同居者たち、リトルバスターズ、雛見沢分校部活メンバー、恋姫たちに、裕理とましろだった。
さらにこの場の提供として津上と、何かを設置しているのか、その手伝いの城戸とそれに引っ張られてきた蓮がいた。

「それ・・・ひな祭りの雛壇ですか？」

「そそ！！いやぁ、ご飯食べに来た璃々ちゃんとかヴィヴィオちゃんにひなあられ出してあげたら、知らないっていうからねー」

「そこで！すべてのイベントごとをすべからず実行する我がＳＯＳ団が、この雛祭りを開催することにしたのよ！！」

こなたとハルヒがアリスに説明して、ちらし寿司やひな人形を用意しに戻り、アリスは何とも大きな雛壇を眺めて呆気にとられていた。

「こんなに大きなものよく用意しましたね・・・・・あれ？でもひな祭りってたしか・・・・」

「そうなんですよね。三月三日はもう過ぎちゃったんですけど、これだけ用意するのに時間かかっちゃって」

と、そこにまだ積むのだろうか。雛壇を担いできた津上と城戸が、それを設置しながら話しかけてきた。

「ヴィヴィオちゃんも璃々ちゃんも、こっちのこういった伝統的な風習を知らないみたいでしてね」

「で、やるなら徹底的がいい！！ってことになったんですよ！いやぁ、やっぱお祭りって楽しいですね！」

「でも・・・なんでこんなに大きな雛壇を？」

アリスはそういいながらもう一度雛壇を見上げた。
そう、雛壇と言っても、その大きさは普通ではない。
まるでこの大きさは・・・・・

「源寸大くらいありませんか？」

「あ、わかりました？」

「津上ー。やっぱこれじゃ天井突っかかっちまうって」

「そうなるかー。棗さん、どうしましょう？」

「だったら、外の広場で派手にパーティーにしましょう。あそこなら気にしなくてもいいですし。おーい理樹！手伝ってくれ！！」

そう、それは人形の大きさが人間大くらいあるような大きさの雛壇だった。
その設置を指揮しているのはどうやら恭介のようだ。

どうしてこうなったのか。
それを恭介に聞くと曰く

「初めてのひな祭り。それは何としても最高の思い出にしてもらいたい。それだけさ」

そういってニヒルに笑う恭介だが、そのあとでの謙吾の話では

「むかし、鈴のひな人形がお内裏様とお雛様しかいなかったからさみしがっていたってここまで派手にするらしい」

とのことだった。

それを聞いて鈴のほうを見ると、大勢に囲まれてどぎまぎしながらも、この状況を楽しんでいる鈴を見て、アリスもふふっ、と笑ってしまった。

「では！私も手伝ってあげましょう！」

「か、管理者のアリスさんが？」

「はい。って、なにを驚いてるんですか？もう私はこの世界に関与すると決めてきているのです。今更除け者なんて、止めてくださいね？」

理樹が少し驚くが、その言葉になるほど、とうなづいてしまう。

「ささ！！皆で運ぼうかね！！このままじゃおじさん、寮に戻らないとだよ」

そう言って魅音が手を叩いてさあ行こうと号令を出す。

まあ、一刀、理樹や真人、裕理にライダーが三人、そしてアリスま

でいたのだから、運び出すのは簡単だったが。

「いいですね～♪こうして皆といるって。あれ？何か忘れているような・・・・・」

「アリスさん？大丈夫ですか？重かったら代わりますよ？」

「あ、大丈夫です。って、レナさんまだ持てるんですか・・・・？」

ーーー

「恭介！！段差設置完了だ！！」

「はいはい！！料理も運んだわよ！！こなた！！」

「ま、待ってよかがみん。料理できなかったからってなんでそんな運ぶの張り切って・・・」

「キョン、古泉君！シートしきなさい！！でっかいの！！」

「さ、そこな幼女と少女たちはこっちに。おねーさんが着付けをしてあげよう（ハァハァ）」

「姐御ー。目付き、目付きやばいっすよー」

「来ケ谷さんだと心配なので、私が見ましょう。能美さん、手伝ってください」

「らじゃーなのですっ」

こうして外に出てきた一同。
もはや雛祭りというよりただの宴になってきているのは、気のせいではないはずだ。

そして、男連中は完成した雛段の飾りつけと同時に、並び順を考えていた。

「雛段完成!!したことだし、さあ、みんな乗るぞ!!」

「おう!!」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・なあ」

「ん?」

「どういう配置だったっけ?」

「「「「あ」」」」

ーーー

「で、次の段に右大臣と左大臣の二人です」

「あれ？二人だけ？」

「間に柏餅と雛あられを置くんですよ」

「じゃあ・・・・謙吾と真人で」

「筋肉大臣じゃねーのか・・・・」

「オレはロマンティック大統領だ」

「そこ、文句言ってるともう遊ばないよ？」

「「全力で承った！」」

「理樹、鬼だな」

「鈴のためなら何にでも」

「それから、次に五人囃子、そしてもう一つ次に三人官女です」

「五人囃子って、楽器だよな？」

「太鼓、大鼓（おおつづみ）、小鼓（こづつみ）、笛、謡（うたい）ですね」

「どうせならできる奴を呼びたいね」

「でもいないだろ。響鬼さんの太鼓くらいしか思い浮かばないし」

「じゃあ、この場にいる五人でいいか」

「と、なると・・・僕、恭介、裕理にザフィーラと古泉さんだね」

「三人官女は？」

「あそこの三人でいいだろ。おーい！！高町さーん！！」

「え？なにー？」

「さて・・・メインだ」

「お雛様は誰にする？」

そう、そしてこの段階がやってきた。
雛段のトップ。雛祭りの主役。十二単に身を包んだ、頂点に座する者を決める時が来たのだ。

「まあこの風習を知らない子が座るのが当然だよな」

「だが、それには問題がある・・・・お雛様は一人しかいないという事だ・・・・ッ！！！」

「僕は鈴を推薦するよ」

「まてって。それじゃヴィヴィオちゃんや璃々ちゃんが可哀そうじゃないか」

「どうです?涼宮さんとあなたが座れば、僕的には非常に面白いのですが」

各々が推薦していく人物は、鈴、ヴィヴィオ、璃々、ハルヒと一気に増えていく。
更にすべての準備が整った女子までも会話に入り、彼女らも座りたいと言いだしたのだからきりがない。

「私もあそこ座りたい!!」

「かがみん、お内裏様は任せたよ!」

「なんであたしがそっちなのよ!!」

「シグナムとか行ったら綺麗そーやなぁ」

「待ってください。その場合、お内裏様は誰が・・・・」

「では僭越ながら私が」

「リィンフォース!?」

「あはは！！だったらあたしとフェイトで座ろっか？」

「え！？ア、アリシア！？」

「ご主人様の・・・隣っ！！」

「あ！！愛紗ずりぃぞ！！！」

「くっ、このッ！！」

「あらあら・・・でも璃々が座ると隣は誰になるんでしょうか・・・
やはりここはご主人様に・・・・」

「璃々、あそこ座りたーい！」

「ヴィヴィオもー！」

「ど、どうしようか・・・・・」

誰もがその座をめぐり、かと言って争いもせず。

どーぞどーぞと差し出しながらも、その目は絶対に渡さないとありありと主張していた。

「アリスさんは？どうします？」

「私はいいですよ。というか、もっと雛段増やせばいいじゃないですか」

「え？」

「ほら、こうやって・・・・・・ソォイ！！！」

「その掛け声はダメだと思うの・・・・・」

そうして、問題は解決した。
アリスが同じような雛段をもういくつか出して、そこに各自座って行こうというのだ。

だが、いかんせん人数が足りない。
これでは頂点に一人だけというさみしい雛段になってしまう。

と、言う事で再びアリスの管理者能力が発揮された。

「ＥＡＲＴＨ」にあるいくつかの扉を、離れたところの扉と空間結合し、一種のワープ空間にしてしまったのだ。
つまりどこでもドアである。

そこを通じて次々とメンバーを呼び、結局全員でパーティーになってしまった。

桜は咲いていなかったが、そこは管理者。咲かせることなど造作もない。
盛大にパーティが始まり、最後にはキャンプファイヤーで締めくくるという、なんとも派手なモノになってしまった。

「ＥＡＲＴＨ」敷地内の広大な庭にはいくつもの雛段。
そして、いつの間にか設置されたステージ。

野外訓練場ではスポーツが行われていたり模擬選していたり
とりあえず、パーティー開会の乾杯の音頭は、理樹がとっていた。

「みんなー！！三月三日ってね、両津勘吉の誕生日なんだよ！！」

「マンガのキャラ引っ張ってきてそんなこと言うなッ！！」

そして、一刀が突っ込んでいた。

もうこれ雛祭りじゃないよね？

「あー！楽しかった」

「なのはママ！ありがとー！」

「今日はいい日だった。呼んでもらって感謝する」

「いえいえ。だってまた書類仕事であなた呼ぶかもしれませんし・・・」

「やめてくれ・・・・・」

そう言って片付けに入るメンバー達。

だが、これだけの人数だ。あっという間に終わり、更にはごみの処分まで、各人の能力で終わらせた。

便利な奴らである。

そうして皆が帰路に付き（扉をくぐるだけだが）、それを見送るアリス。
と、最後に理樹がアリスに聞いた。

「そういえば舜は？今日はずっと書類仕事？」

「え？・・・・あ！！！！！」

その質問に、ハッ！とするアリス。

その日、銀白の翼人は、自分の事務室で涙を流しながら腹をすかせて、外から聞こえてくる笑い声を聞いていたそうな。

「う・・・うぇっ・・・・・うぁあうう・・・・・・・腹減ったよぅ・・・・動けないよぅ・・・・・なんか・・・・皆楽しそうだよぅ・・・・ズッ、グズッ・・・ふぇ、ううううう・・・・・」

to be continued

祭り　ｗｉｔｈ　管理者（後書き）

パーティーの一幕

はやて
「ヴィヴィオ、ほら、桜餅やで」

ヴィヴィオ
「ありがとーはやておねーちゃん！」

はやて
「別名、魔王餅や。ほら見てみぃ。色が・・・やろ？」

ヴィヴィオ
「あの時は死ぬかと思ったよー」

はやて、ヴィヴィオ
「あははははははははは！！！」

はやて
「ん？なんか後ろでジャキッ、って音が・・・」

羽入
「秘儀、オヤシロバリアー！！」

梨花
「あっ！！羽入ずるいわよ！！」

魅音
「おお！！羽入がんばるね！！将来的にも絶望な胸と、希望ある胸のテニス対決！！燃えるねー」

『『『『『『『『『『OK、貴様は今、死を選択した』』』』』』』』』』

魅音
「え？あ？うっそおおおおおおおお！！！？？？」

と、言うわけでどうでしたでしょうか？
日常アリス編

雛まつりを思いついたのはＧｏｏｇｌｅのタグ？でです。

次週から事件に入ろうか、と考えています。

そんなに長引かせても・・・・ですし。

ではまた次回！！

始まりの襲撃

事件は、いつだって唐突にやってくる。

だって、予兆があるなら防げるでしょう？

――――――

そこで一刀が次々と武器を出し、いろんなメンバーの武器の扱いを練習していた。
隣では蒔風とアーチャーがそれを見ながら時々指導に入っている。

一刀の力は強力だが、一刀の技量がそこに追いつかないと扱いきれないものもまだある。
まあ、翼人なのですぐに習得するだろうが、何分数が多いのでこうして多武器を扱うアーチャーと、各世界での能力を見、そして翼人の先輩として蒔風が見ていたのだ。

「じゃあ、次だな。今度は何やるんだ？」

「レールガン」

そう言って一刀の手のひらにコインが現れ、それを指ではじいて宙に浮かす。
そしてそれがまっすぐ伸ばした手の先に来た瞬間

ドォン！！！

轟音を轟かせ、熱線と化したコインが飛んで行った。
それは三十メートルほど進んでからコイン自体が蒸発することで、
自然に消えて行った。

「うーん・・・美琴が五十だったから、お前も行けなきゃおかしいんだけどなぁ」

「おそらく、無駄に力が入っているのだろう。もっとスマートに打ち出さなければ、受けるのは小さなコインなのだからすぐに消えてしまうのは道理だ」

「そっかー・・・じゃあ今度は抑えてやってみるよ」

そう言って何発も撃っていく一刀。
だがその調節がなかなか難しい。やはり学園都市最強のレベル5その第三位は伊達ではないということだ。

「はぁ・・・はぁ・・・・・これ反動もキッツー」

「そろそろ休憩しようか」

「そうだな。それに、そのあと気晴らしにほかの力を試してみるもよし。私が剣を見てやってもいいぞ。二流なれども、まだ教えてえやれることもあるさ」

バタン！！！！

と、そこで大きな音を立てて大訓練場の扉が開かれる。
その扉は更衣室につながっているはずだが、扉の向こうにある風景はそのものではない。

「蒔風！！ゆ・・・侑斗が・・・・」

「・・・・デネブ？」

「侑斗が襲われた！！助けてやってくれ！！！」

「なに！？」

蒔風らがデネブが駆け込んできた扉の向こうを見る。
そこにあったのは、ところどころから蒸気を吹き出し、ボロボロに

なったゼロライナーだった。

――――――

時間に降り立ち、見回って、キャンディー（侑斗をよろしく！）を配ってたデネブにプロレス技を仕掛ける。
いつものことを終わらせてから、また時間を走っていた。

「なぁ侑斗。もうこんなに飛び回らくてもいいんじゃないか？」

「あん？どういうことだよ」

ゼロライナー食堂車。
そこでご飯を食べながら、侑斗がデネブに聞き返す。

デネブが言うには、「ＥＡＲＴＨ」というちゃんとした部屋があるんだから、そこで暮らせばいいのに、だそうだ。
だが、侑斗はそれに対して横に首を振った。

「いや、それじゃだめだ。イマジンがやってくるのは突然だ。ターミナルも見ているんだろうが、こうやって常に見回っていないといつ来るかわからないからな」

「おお、そういうことか！さっすが侑斗！」

「それにずっとあそこにいたらそのままプーになっちまうかもしれない・・・」

「おお・・・そういうことか・・・・」

「って何納得してんだー！！」

「アタッ！痛いな～侑斗～。侑斗が言ったんじゃないか～」

車内にて、誰も見てない漫才を延々と披露していく二人。
相も変わらず仲のいいものである。

そうして床の上でゴロゴロと暴れあっていると、突然

ゴガンッ！！！

という音と共に、衝撃がゼロライナーを襲った。
その衝撃は重く巨大なゼロライナーを一発で脱線させ、緊急停止をさせるほどのものだった。

「な、なんだ!?」

「襲撃されてんだ!!行くぞ!!デネブ!!変身!!」

ゼロノスに変身し、デネブと共に外へと飛び出して行こうとする侑斗。

だが

カン、カランカラン・・・・ボシュッ!!

「なっ！？」

「ぶわっ！！」

少し開けられた扉の隙間から缶のようなモノが投げ込まれ、それから一気に白い煙が噴き出してきた。

ゼロライナーの狭い室内は一気に真っ白な煙に覆われ、視界を奪われる。

「これは・・・・」

ピンッ、ゴトッ！！

「！！！デネブ！！」

「侑斗！？うわっ！！」

何か重いものが床に落ちた音がして、侑斗が血相を変えてデネブの後ろ襟をつかんだ。
いや、実際にはその顔は仮面に隠れて見えなかったが、その時の侑斗の顔は、デネブには容易に分かったのだ。

『ゼロライナーを切り離して「ＥＡＲＴＨ」に戻れ！！そしてこのことを・・・・・』

「侑斗！？」

ドォン！！！

侑斗の声がドアの向こうから聞こえる。そして、その後に爆発音が聞こえてきた。
侑斗はデネブを掴んで、彼をゼロライナーの前部、つまりは操縦室に放り込んでいたのだ。

デネブが扉に縋りつくが、ゼロノスである侑斗がゼロライナーを切

り離し、一両目であるドリルだけを発進させてしまった。

おそらくはまだ、謎の襲撃者と戦っているのだろう。
だが、あの狭い車内ではゼロノスの武器はどちらも不利だ。

引き返そうにももう、マシンゼロホーンのハンドルは言う事を効かない。
窓から外を見ると、後部車両から炎が上がり、何か白い光が真上に向かって柱のように伸び、そして細くなって消えていくのが見えた。

ーーー

「それでそのままここに・・・・・頼む!!侑斗を・・・侑斗を助けてくれ!!」

一部始終を話したデネブが、蒔風に縋りつく。
隣で聞いていたアーチャーと一刀は信じられないと言った顔をしていた。

無理もない。
ある程度の上下はあれども、あの仮面ライダー、しかもゼロノスを、デネブの援護がないとはいえそう簡単に倒す者がいるのだろうか？

「場所が悪かったんだ・・・・あんな狭い食堂車じゃ、ゼロノスの武器は大きすぎて十分に戦えない・・・」

「いや、いい・・・話しは後だ!!急いでその場所に案内してくれ・・・行けるか？」

「ああ!!こっちだ!!」

「オレも行く!!」

「私もついて行こう」

デネブの後に、蒔風、一刀、アーチャーが着いていき、ゼロライナードリルに搭乗して現場に向かう。
時の中での事件という事もあって、野上達にも連絡し、一行は問題の事件現場に向かった。

――――――

「野上!!・・・・・こ・・・・れは・・・・・・」

「舜・・・・見てよ・・・・・こんなの・・・・・」

ゼロライナーが到着する頃には、デンライナーに乗った良太郎もその場に到着し、現状の酷さに言葉も無い状態だった。

ゼロライナー後部車両「ナギナタ」の真ん中上部は完全に吹き飛んで天井がなくなってしまっている。

そしてその状態で横転し、こちら側に中を見せつけているかのようだ。

その内部だが、ところどころからは火花が散って、そのど真ん中には何かが爆発したかのような跡がくっきりと残っていた。

「俺らが来た時にはもうこんなんだったぜ」

「多分、よっぽどいきなりだったんだね。なにも残っちゃいないよ」

「ゆ、侑斗は！？」

先に来ていたため、一応この周辺を見ていたモモタロスとウラタロスに、デネブが必死になって聞いた。
だが、二人はそれに答えることはできなかった。

「いないよ・・・見つからなかったんだ。あいつ、かなり強かったのに」

「あの侑斗に簡単に勝てる奴なんて、想像もつかへん」

と、さらに気落ちした様子のリュウタロスと、本当に今でもこの現状が信じられないというキンタロスが、侑斗どころか、手がかりも無かったと報告する。
それを聞き、デネブは泣き崩れてしまった。

その様子を見て、アーチャーがオーナーに話しかけた。

「だが、おかしいじゃないか。遺体も無いというのはどういう事だ？ほかに戦闘場所はあったのか？」

「いぃえ。この場だけです。おそらく、ここで襲撃され、ここで・・

・やられたんでしょぅ」

そのオーナーの言葉に、一刀が「ん?」と頭を捻る。

だったら、遺体がないのはやっぱりおかしいと。

「ここだけが戦闘範囲なら、なんで遺体がないんだ?もしそれごと消すぐらいの攻撃なら、ゼロライナーも無いはずだろ?でもあるってことは・・・・」

「おそらく、連れ去られたか何かだろうね。だけど、あの坊っちゃんを連れ去るなんてこと、短時間でできると思う?」

「殺した後に遺体を処分したってことはないか?」

「それはないやろ。そんなん、この砂漠でどうやるんや?」

現状を見て、推測を立てていく一同。

結論としてわかったのは、侑斗は襲撃され、なぜかはわからないが連れ去られたという事。

そして、襲撃者はゼロノスを圧倒し、尚且つ連れされると言うほどの実力者だという事だけだった。

「だが・・・なぜ侑斗が狙われた?デネブ、わかるか?」

「わからない・・・だが、いつもこうやって時間の中を監視していたから、邪魔だと思われたのかもしれない・・・・」

少しは立ち直ってきたのか、デネブが顔をグシグシとこすりながら立ち上がった。

なるほど、確かにここ最近、侑斗は一（時間の中）ここを見回っていた。

もし、襲撃者がこれからことを起こすつもりなら、未来過去に自由に行き来できるゼロノスが邪魔だと思うのは当然かもしれない。

「つまり・・・・」

「ああ、これから何か起こるぞ。アリス、全「ＥＡＲＴＨ」メンバーに通達。警戒態勢を敷き、いかなる襲撃にも備えろとな」

『蒔風!?一体それは・・・・』

「帰ってから説明する。あと、地下施設のどっかにドックがあったろ。あけといてくれ。これからでかいの運ぶから」

蒔風がアリスに通信で警告を出す。
「ＥＡＲＴＨ」所属の戦士に、これから何かが起こるという事を伝えてもらうために。

「これから・・・とんでもないことが起こりそうですねェ」

「オーナー・・・・あなたは知っているのか？」

「いぃえ？ですが・・・・・無事に終息することを・・・・祈るだけです・・・・」

オーナーの言葉。
そう、きっとこれは始まりに過ぎない。

だが、皆まだ気付いていなかったのだ。
もうすでに、事件はもう少し前から始まっていたという事に。

to be continued

始まりの襲撃（後書き）

始まりました事件。
これぞ第二章の本筋です。

侑斗「二回目の事件はどうしたんだよ！」

ありますよ？
でも、その話よりもこっちの方が長いです。

先に言っとくと、第二章は先の事件が長く、後のが短いです。

ここから始まる、事件・・・・・

一人、また一人と・・・・

さあ！！襲撃者の思惑とは一体！？

侑「オレも結局、戦闘描写すらも無く終わったからなー」

そんなことよりゴーカイジャーだ。
あーいうクロスオーバーというか大集合もの大好きだ。
最初はなんてディケイド？って思ったけど。

あとデュオデシム購入したから執筆できない・・・・

侑「我慢しろよ」

１３回目の戦いはクリアしたんですけど・・・クリア後の「もう一つの物語」？でしたっけ。あれが終わらない。
というか性能が変わり過ぎて前作やりこんだ自分マジ涙目。

タイミングとか射程、技の性能が変わり過ぎて慣れてしまった手が憎い・・・・・

ってか！！セーブデータ引き継げるのにアイテム引き継げないってどういう事だ！！！
せっかく最強装備そろえたのに、せっかく８００時間もプレイした

のに！！！

全部無駄。ぜーんぶむだ。

アヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！！

もうどーにでもなーれ！！！

侑「作者が壊れた・・・まあ、そんな感じだから、たまに更新が遅れることもあるかもしれない」

そうなったらスクエニのせいだ。

侑「十割お前のせいだよ」

ではまた次回

襲撃者、止まらず

桜井侑斗が襲撃されてから数日。
まるでその事が嘘だったかのように、それ以来襲撃はぱったりと止んでいた。

「なぜ・・・なにもアクションがないんだ？」

「おそらく警戒してるんだろう。前回の襲撃は多分、二人まとめて仕留めるはずだったんだろうからな」

一刀と蒔風が、「ＥＡＲＴＨ」にある指令室で現状を話し合っていた。

侑斗を襲った襲撃者は、おそらくデネブも一緒に倒してしまうつもりだったのだろう。
そうすれば、あの広大な時の砂漠の中だ。見つけることは難しい。
だが結果としてデネブは逃げ、事は「ＥＡＲＴＨ」全体に知れ渡ることになった。
こうなっては、敵も手を出しにくいのだろう。

しかし、ここまでだ。
ここまで推察して、二人の考えは行き詰ってしまった。

一方、「ＥＡＲＴＨ」地下ドックでは、いまだに大破したゼロライナーナギナタの調査が行われており、何か小さな証拠一つでもないか探されている。

「あかん・・・なにも見つからへん」

「この「時の列車システム」自体も、どこの時間でどんなふうに作られたかわからないんだもんねぇ」

「オーナーさんの協力があっても・・・私たちではこれ以上は何もわからないわね・・・」

そう理樹に報告しているのは魏国で工兵をしていた武将、真桜と、デバイスマスターのシャーリーという、機械に強い二人だ。

さらに機械のデータを見るという意味合いで、御坂美琴も来ている。

が、その調査結果は芳しくはないようだ。

なにぶん、損傷がひどすぎるのだ。

残ったデータは軒並み破損。
回収したのはゼロライナーだったモノだけという惨状。

修理にはまだ数日間かかりそうで、走り出すかどうかは五分五分だそうだ。

「そう・・・何の手がかりもないんだね？」

「そうなりますわな。こっから何かを見つけ出すのは、ちょっと無理があると思わん？」

「私も見たけど、もうなにも残ってないわよ。証拠っぽいのはあったけど、多分どれもハズレね」

「こういう時じゃなきゃ、楽しんで解析するんですけど・・・事件ですもんね・・・・」

襲撃者の証拠はない。
正体は依然として不明。

そう感じ取った理樹は、彼女らに礼を言ってから、ゼロライナーの修復に取り掛かってくださいと頭を下げて、蒔風に報告を入れる。

その報告を受け、蒔風が指令室のモニターを見る。

あれから、世界はなにも起きていない。
なにも無さ過ぎるのだ。

その事が、余計に恐怖を感じさせる。

「なにが・・・起きているんだ?」

「桜井侑斗との連絡、依然として付きません」

「こうなると・・・本格的に監禁されているか、消されたか・・・・」

オペレーター要員として席に座る朱里や雛里からの報告を聞き、更に頭を悩ませる蒔風。

と、そこに、プープープー、という電話音が鳴って、蒔風がその電話にでる。
どうやら外部からの電話で、蒔風に聞きたいことがあるそうなのだが・・・・

「ああ、繋いでくれ」

「はい。三番の通信です」

その電話をここにつないでもらい、受話器のボタンを押して話し始める蒔風。

「もしもし。蒔風ですが」

『あ、蒔風？覚えてる？私よ、藤林杏』

「おお、どうした？」

『いやぁね？朋也と渚が旅行に行くっているから、汐ちゃんを預かってるんだけど、実は・・・・・』

「うん・・・？・・・・・な・・・・・・・・わかった。じゃあ汐ちゃんは渚の両親に預けといてくれ。ごめんな」

『はいはーい。まあ、久しぶりに二人で水入らずの旅行に行ってるんだから、しょうがないと思うけどねー』

「まあ・・・そんなもんだろ」

『うんうん。よかったー。じゃあ、そっちに連絡入れとくわ。じゃーねー』

プツン

そうして会話が終わり、蒔風が受話器を置く。
それと同時に、携帯を開いてあるところに電話をかけた。
だが、繋がらなかったのか、もう一回、今度は別のところにかけてみるが、やはり繋がらない。

「どうした、蒔風」

「おい。今そこらへん見回って来たが、「ＥＡＲＴＨ」の周りに変な奴はいなかったぞ」

「オレたちの方も・・・どうした？血相変えて。なにかあったのか？」

と、そこに「ＥＡＲＴＨ」ビル周辺に怪しいものがいないかを見てきた天道達や士達が指令室に入ってくる。
その言葉に、蒔風がイラついたように身体を揺らし、たたんだ携帯をダン！！と机の上に叩きつけて指令室全体に指示を飛ばした。

「全員！！各世界の主要、最主要人物だった者の安否を確認しろ！！いいか！「ＥＡＲＴＨ」登録、非登録に関わらずだ！！！」

「い、いったいどうした」

「リストはここにある。全員の所在を明らかにしろ！！！急げ！！」

その言葉に、訳もかからない状態だがとりあえず蒔風がだした携帯のアドレス帳に入っている各主要、最主要人物へと、連絡がとらされて行く。

そうして、最初の報告を待つ。
それまでに、三分とかかりはしなかった。

「岡崎夫妻が旅行と言って家を出たきり連絡が途絶・・・・・娘の汐は、彼らの友人の保母に預けられているようです・・・」

「それは聞いた。今の電話だな・・・他は！？」

「文月学園の坂本雄二が、数日間学校に出てません。彼を慕っている霧島翔子という同級生も同様です」

「吉井明久によればきっと彼女のキツイアプローチから逃げている

のだろうという事ですが・・・・」

「バカ野郎・・・それで学校数日休むかよ・・・・」

「泉こなたさんたち四人が、学校に休学届を出して旅行に出たそうですが・・・位置がつかめません。なお、どこの鉄道、飛行機にも、彼女らが乗ったという記録はないです」

「あいつらはまだ高校生だ・・・免許持ってる奴もいないし、旅行なら鉄道か飛行機しかないはずなのに・・・・！！」

「川神市の直江大和が、友人に会ってくると言って昨日寮を出てから帰っていないそうです」

「誰に会うかは？」

「誰も聞いてないようです・・・・彼の交友関係は広いため、特定は難しいかと・・・・」

「お、おい・・・蒔風・・・・・」

「まさか・・・これは・・・・・」

「ああ・・・最悪だ・・・・完全にやられた!!!」

一連の報告を聞き、蒔風が机に両手を叩きつけて俯く。
そして起き上がりながら、今明らかになったその事を、憎々しげに言い放った。

「狙われてんのは「ＥＡＲＴＨ」だとかそんなんじゃない・・・・・・
各世界で、主要、最主要だった者たちだ!!!」

「な・・・・」

「主要、最主要たちが・・・・・狙われている!?」

蒔風の言葉に、驚愕する一同。

いままで、狙われているのは世界だとか「ＥＡＲＴＨ」だとかと思い、危機の通達を戦闘力のある「ＥＡＲＴＨ」登録の戦士のみに行ってきた。

だが、そうではなかったのだ。
敵の目標は、主人公たちだった。

しかも、彼らがいなくなった時間を考えれば、それはゼロライナー襲撃よりも前だ。

つまり

「とっくに事件は始まってたんだ・・・・唐突にどころじゃねえ・・・とんだ『後出し』だ!!!クソッタレ!!!」

このいままで、襲撃に会っていたのは力なき者たちだった。
なにも起こっていなかったわけではない。何か起こっていたにもかかわらず、それに気付けなかったのだ。

「チクショウ!!!他に!!連絡の取れないものはいるか!?」

「舜君。見回り終わったよー。皆もじきに戻ってくると思うんや。だからここで・・・・って、どうしたん?なにかあったん?」

そこに、士達と同じように、別エリアを見回っていたはやてが戻ってきた。
どうやら、ヴォルケンズとは別々に行動しているらしく、ここで合流するつもりだったのだそうだが・・・・・

「・・・・・・反応が・・・・ロスト・・・・・・」

「ッッ!!どこで!!誰がだ!!!」

オペレーターの言葉に、蒔風が振り返ってその席へと近づく。

「場所は・・・・そんな・・・ポイント００より、西に三キロの地点・・・・・・」

「ポイント００・・・・からだと?」

「そこ・・・って・・・・・・・」

「ここ・・・・」

「「ＥＡＲＴＨ」・・・・本部ビルから三キロです・・・・・！！！！」

「バカな！！！！！」

報告に、蒔風が部屋を飛び出してその位置に走っていく。
その後を士達も追うが、入っていたばかりのはやては、その場にぺたりと座りこんでしまった。
そのはやてを、天道がとっさに支えて立ち上がらせる。

「そ・・・・その位置って・・・・・・・たしか・・・・」

「・・・・ロストしたのは・・・・・誰だ」

はやてが恐怖に目を見開き、天道が覚悟を決めてオペレーターに聞

く。

そして、帰ってきた返答は、何より残酷なものだった。

「ロスト反応者は、ヴォルケンリッター・・・・・ザフィーラとシャマルです」

「～～～～～～～～～～ッッ！！・・・・・・ぁ・・・・・」

それを聞いて、はやてがその場に再び倒れる。

だが、今度はあまりのショックに気絶してしまって立ち上がれない。

そんな彼女を、天道が壁際のソファに寝かせ、モニター上の地図に写るその地点を睨みつけていた。

ーーー

「・・・・・・・・・なにがあった・・・・・・・」

現場に到着し、蒔風が呟く。
だが、それに応える者などいない。

「なにがあった・・・・・・」

現場は、大通りから外れた裏道。
ビルとビルの、広い隙間だった。

「一体ここで・・・・なにがあった!!!」

蒔風が叫ぶ、だが、やはり何も答える者はいない。

残っていたのは、両側のビル壁に残った、何らかの攻撃でつけられた抉り跡。

そして、はやて達とヴォルケンズ分、計八人分の飲み物の入ったコンビニのビニール袋が転がっていた。

これが示すことはたった一つ。

ついに、襲撃者が本格的に動き出したという事だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

襲撃者、止まらず（後書き）

ついにあの、ヴォルケンリッターの一角までもが墜ちてしまいました！！！

ザフィーラ「我々がどのように負けたのかの描写もなしか・・・・・・」

シャマル「確かに私たちは戦闘向きじゃないですけど・・・・・・」

大丈夫。機会を見てなんとか書くから。

ザ「そうか・・・だが、襲撃してきた瞬間、俺は見たぞ」

シャ「私も見ました！！襲撃者！！でも・・・・・」

はい、そこまで。
それ以上はダーメダーメよ？

ザ「む、そうか・・・・ならばその情報、この盾の守護獣が守って見せよう！！ゼェリャアアアアアアアアア！！！！」

おお・・・これは鉄壁・・・・・・

シャ「次回から、どんどんやられていってしまうみたいですよ?さあ、どうなるのか!!」

なんだか楽しそうだね

ではまた次回

な、なんとか間に合った・・・・
なかなかじかんとれなくて、書き始めてから二時間で何とかここまでいったぞ・・・・・

だから見直してません↑オイ

誤字脱字あったら申し訳ございません!!!

わずかな光明

襲撃者の狙いがわかった今、もはや全員を自宅などの各自離れた場所にいさせるのは危険すぎる。
その考えから、全主要メンバーが次々と「ＥＡＲＴＨ」へと集められ、戦う力のある者のみを選定し、更にチーム分けして調査に動き、移動の際には必ず「ＥＡＲＴＨ」敷地内はおろか、建物内でも複数人で固まることを義務付けられた。

しかし、ザフィーラとシャマルがいなくなった路地や、今までいなくなった者たちの前日などを、これだけの人数で調査したにもかかわらず、襲撃者の手がかりはまったく出てこなかった。

現場には指紋や足跡どころか、毛髪の一本や唾液の一滴も残っていなかったし、残った傷跡から武器の判定をしても、おそらくは意味がないものと判断された。
ゼロライナー襲撃時に使われたのは催涙ガスの缶に、手榴弾と言った通常火器だったし、通りに残された抉り跡は、剣によるものだということしかわからなかったからだ。

つまり、相手は特徴ある武器を使わない。
どこにでもあるような武器を使って、彼らを追い詰め、連れ去ったのだ。

「・・・・と、これが今のところわかったことだ・・・」

「・・・何一つとしてわかったとは言えないな」

「学園都市にサイコメトラーとかいるでしょ？その人に頼んで、あの場を見てもらえば・・・・・」

「ダメだ。あの裏路地、意外と大通り間の抜け道になっててかなりの人が歩いているから、思念が入り混じってて読みとれないらしい」

「なにか一つでも証拠があれば・・・・・」

「ＥＡＲＴＨ」ビルの一角。その会議室。
円卓のテーブルに脅威に対抗出来うる最高の力を持った者が集まり、そこで話しあっていた。

蒔風をはじめとした翼人五人。
彼ら五人が、この場に集まって今後のことを話し合っていた。

もちろん、この会議の様子は他のメンバーもモニターで見聞きしており、自由に意見できるようになっている。

「ここに集まってもらったメンバーで、チームを組んで動いてもらいたい。もちろん、ここにいない人間を含めても構わないが、「ＥＡＲＴＨ」関係者にとどめておくようにしてくれ」

『味方は多い方がいいだろ？なんでだよ』

「今、時空管理局の地上本部の機能は半分ほどしか戻っていない。ほとんどは「ＥＡＲＴＨ」で見回ってるようなもんだ。そこでこっちの主要メンバーが倒れていってるという情報が流れたら、どう転んだっていいことにはならないからな」

「こうしている間にも、襲撃者はこっちを狙ってきている。絶対に複数人で動くことを心がけてくれ」

これからの行動方針を、今一度改めて伝える蒔風。
そこで一旦彼の話が終わり、次に一刀が次の話を始めた。

「じゃあ・・・この中にも、すでに友人や知り合いがやられた者も多いと思う、今回の襲撃事件。その犯人だけど、いまだに一切の手がかりはない」

『犯人は複数人かもしれねぇな』

「それに関しては、まだわからない。僕の方でも全部の現場と物件を見たけど、見つかったのはどこにでもあるような武器で付けられて傷と、どこにでもあるようなものしかなかった」

『じゃあ、複数人と見て警戒しましょう。今時の状況じゃ、警戒しすぎていけないという事はないわ』

一刀の言葉に、翔太郎が犯人の人数を聞き、理樹の言葉に、華琳が現状は複数犯と見て行動するように提案した。

そうして又いろいろと話していくのだが、なにぶん情報は穴だらけで、ほとんどの事項がわからない事ばかりで、進めようにも進めないのだ。

とりあえず、この場での情報交換を済ませ、最後に観鈴が各人の前にモニターを出し、今までの証拠品を一つ一つ出していった。

「一度私たちでも見てみたけど、みんなにも見てもらいたいの。なんでもいいから、何か見つけたら教えてくれるかな？」

その言葉に、全員がモニターを見て写真や映像を回していくが、今までだってかなりの人数が鑑定してきた物品だ。
いくら力があったって、ここにいるのはほとんどが元々はただの一般人だった人や、まだ学生だったりする者がほとんど。

今さら新発見などあるはずも無く、皆が首を振ってモニターを消す。

「月並みな言葉だが、皆気をつけてくれ。一体敵がどこから来るのか、今回は本当にわからないから」

最後にもう一度、蒔風が注意を促してから、今回の会議は解散となった。

と、言っても帰る場所は皆同じだ。
現在、すべての者が「ＥＡＲＴＨ」に身を寄せているのだから。

だが、そこで何もしないわけではない。

数グループが見回りに立ち、警備を強化したり、出入り口を封鎖したりしている。

だがそれと同じくらい、重要なことがたくさんあった。

衣食住の確保である。

「衣」に関しては、問題はさほどない。
アリスがつないだ扉で、各人の部屋に空間を繋いで持ってくればいいのだから。

「住」むところは言わずもがな、ここである。

最大の問題は、「食」だ。

なにしろこんな人数。「ＥＡＲＴＨ」の食堂は全員が入るように設計はされているものの、いかんせん厨房の食材を扱う料理人の数が足りなくなってくるのだ。
更に、食料も調達しなければならない。

厨房には本来のシェフである津上を筆頭に、天道やアーチャー、士朗を始め、料理ができる者は全員駆り出された。

食材にも、細心の注意を払った。

「ＥＡＲＴＨ」圏内ともいえるような三キロ地点で、襲撃者は見事ザフィーラとシャマルを狩ったのだ。

ここの施設に忍び込んでいない、と考えるのはあまりにも甘過ぎる。

食材を大冷凍庫から厨房に運ぶ際には必ずチェックが入り、毒物がないかどうかを確認してから運び込まれていった。

「これは・・・大丈夫だな」

「舜さん・・・」

「ん？ハクオロさん？どうしました？」

そうして、食材のチェックをしていると、蒔風にハクオロが話しかけてきた。

どうやら、避難してきてから数日が経って、自国であるトゥスクルのことが心配になってきたのだそうだ。

「確かに・・・それはまずいな・・・」

「トゥスクルは安定した国だからそんなに心配事は多くないのだが、やはりな・・・・・」

「うーん・・・代役とか・・・立てられるか？」

「何人か部下は残してきている。だが・・・・」

「今あっちにいるのは？」

「オボロとカミュが残ってくれている。アルルゥも一緒だ」

「出来れば彼らもこっちに呼びたいんだがな・・・・」

そう話しながらも、食品の手分けをしていく。
レトルトやカップ麺などの即席物から、肉、野菜、小麦などの穀物、更には調味料まで見ていく。

結果、一切の問題はなく、食事は用意された。

大テーブルに並べられる料理。
それを前にして、皆席について食事に取り掛かった。

それはもうこの人数の上に、ひとりで何人前も食べるような者もいるのだから、すごい量だ。

最初は重い空気だった者の、この食事中だけは少し軽くなっていた。

「なあ、そういえば襲撃者はどうしてあいつらを狙ったんだ?」

「ん?さあ・・・「奴」のように世界をどうにかしたいのかもよ?」

「いや、そうじゃない。オレが言いたいのはだな・・・・・」

食事中の蒔風に、巧が話しかける。
猫舌の彼は確保した物が食べられるほど冷えるまで時間を置く必要があり、その間に蒔風に話しかけてきたのだ。

「なんだ？なにに気付いた？」

「いや・・・なんで今回の襲撃者はあいつらが主要だったり最主要人物ってのに気付いたんだろうなってことだよ」

「・・・・なんと？」

「だってよ、俺たちはお前に会って言われるまでそんなことわかりもしなかったし、今だって気にしてる事なんかはねえが・・・・」

「あいつらがそういう人物であることを知ってんのは限られている・・・デカした巧！！！」

「え？おい！！！」

そう言って、蒔風が食堂を飛び出してモニタールームへと向かう。

その様子を見て、どうしたどうしたと皆が巧に寄っていって話を聞

こうとする。

「ま、待て！！」

「なあ！！今なに話してたんだ！？」

「何かわかったんか！？」

「蒔風どこ行ったんだよ！！」

「ちょっと待て！！話すから・・・・」

「ん？おいこれ冷えちゃってんじゃん。あったかいの持って来てやっから」

「おい！！それは・・・・」

「ほい！アッツアツだぜ！！」

ＯＴＬ

一気に大人数に囲まれ、更にはせっかく食べられそうになった食糧まで持っていかれ、巧は一気に落ち込んだ。

——
——
——

くっそ、やっぱこうなるよなぁ・・・・
しょうがない。グループ分けされてるから、ひと塊ごとやるか・・・
・

ん?待てよ?・・・・

あの手があるなぁ・・・・・

to be continued

わずかな光明（後書き）

こなた「今回少しだけわかったね！」

かがみ「にしても、今回は誰もやられなくってよかったわ・・・・・・」

なに言ってんの君達。
次回ではまた何人かいくから。

こ「おお、そうでなくっちゃ！！」

か「不謹慎でしょ・・・・・」

こ「なにいってんのさかがみん！ここは後書き。あっちの私達とは関係ないのですよ」

その通り
この後書き空間は無限に満ちているのさ！！！

か「はいはい。次回、襲撃者、その手口」

こ「どうやって連れ去ったのかがわかるかもよ！！！」

ではまた次回

犠牲を払って得た情報

蒔風の事務室前。
そこに、理樹と一刀がやってきていた。
コンコンとノックして、返事があったので部屋に入る。

「舜・・・・大丈夫か？」

「ああ・・・・・・」

そう言って、眠そうな声を出して蒔風が答える。
ここ数日間、蒔風は報告があるたびに飛びまわり、戻っては調査し、また飛んで行っての繰り返しだ。
疲れも、かなり溜まっているのだろう。
しかも、そこまでやっても、いまだ手がかりなどなにも無いのだ。

あの日

巧の一言で光明の見えた蒔風だが、次の日には意気消沈して会議にあらわれ、なにもわからないと一言だけいってすぐに部屋を出ていってしまったのだ。
それからの現状はひどかった。

まず、威吹鬼と轟鬼が消えた。
こんな状況でも魔化魍は倒さねばならず、その帰りに消息が途絶えた。

次に、北岡秀一が居なくなった。
弁護士である彼は自宅に秘密度の高い書類が多くある。

その整理に何人かと一緒に家に戻って、ものの五秒。
その間に消えていた。

鏡は割られ、書類が散乱していたそうだ。

更に、神北小毬、能美クドリャフカ、西園美魚、朱鷺戸沙耶が、三原修二（デルタ）と海堂直也（カイザ）と共にまとめて消えた。

主に調査に当たっていた彼女らと、それを護衛していた間の出来事だった。

だが

その最後の犠牲者は、重大なヒントを残して行ってくれていた。

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

「まず。これを見てほしい」

クラウドがモニターに映像を映し、会議室にいる全員がそちらに目

を向ける。

「これは先日、「ＥＡＲＴＨ」の衛星写真が捉えた映像だ。時間は、海堂たちが消えた時刻。見ていてきつい者がいたら、退出してもらって構わない・・・・・再生するぞ」

そう前置きして、クラウドがモニターを再生させた。

そこには悲劇しか映っていないとしても。

ビル群を真上から捕らえた映像。
時間は夜遅く。暗い映像だが、人の動きくらいはつかめそうだ。

その中に、白いブロックがいくつも並んでいる。この場合、白いブロックは上空から見たビルの屋上だ。

その間、この場合では裏通りを、三人の少女と一人の男が走っている。
どうやら、三人を一人が守りながら、何かから逃げているようだ。

そして、その一瞬後、その四人が出てきたビル一階から煙が噴き出し、白い光が立ち上って、そこからバトルモードのサイドバッシャーが吹き飛んできた。

これは衛星映像なので、音は録音されていないが、きっとそれはすごい音だったのだろう。
三人の足が止まり、一人が止まらないようにと彼女らを促す。

だが、その一瞬のうちに何か白く細い光が美魚とクドを打ち抜き、小毬に迫ったそれをデルタが何とか弾く。

撃たれた二人は倒れ込んでいくが、瞬間、光が柱のように立ち上ってから消え、そのまま消滅してしまう。
それを見たデルタはジェットスライガーを呼びだしてその場から退避しようとするが、デルタの足元が爆発し、彼もまた光になって消えた。

そして、小毬はそこから一歩も動くことも出来ず、程なくして光となって消えた。

「これが・・・・先日、ここで会ったことの一部始終だ・・・・」

「真上からの映像でわかりにくいところもあっただろうけど、大体何があったのかはわかったと思う。で・・・・・だ」

辛そうに呟くクラウドの後を、一刀が引き継いで話していく。

「この映像は、今回の事件で唯一残った証拠。どれだけ解析しても敵の姿は出てこなかった。だけど」

一刀がコンソールをいじってある一場面で映像を止める。

それは、彼らは光となって消滅した瞬間だ。

彼らを包むように光が立ち上り、そして細くなって消えていった瞬間だ。

その瞬間の映像を停止させ、五人分を映し出す。

「見てもらってわかるように、彼らは倒された後にその場から消滅している。これが、今まで遺体もなにも無かった理由だ」

そして、その映像を拡大していく。

「で、これが拡大映像。荒くなっててわかりにくいと思うけど、ここを見てくれ」

そう言って一刀が射すのは、光の中心。
そこに、なんだかよくわからない黒い点があった。
そしてそれは、それぞれの光に一個ずつ、しっかりと存在していた。

「で、だ・・・・これが最大拡大映像」

そう言って、めいっぱいまで拡大した画像を移す。
だが、これでは粗過ぎてもはやただの抽象画みたいになってしまっている。

「そして・・・これを解析すると・・・・・」

その粗い画像が、徐々に鮮明さを取り戻していく。
その黒い点の正体が明らかになっていく。

それは、四角くて、薄い何かだった。
片面には顔らしきもの、裏面には何かのマークがついていた。

「これは・・・・・・・」

「これは・・・・・ディケイドやディエンドの使うライダーカードに酷似しているものだ」

会議場にざわめきが走る。

ならば犯人はディケイドたちなのか。

確か彼は「破壊者」という呼び名だったはず。ならば本当に？

一気にざわつき、士たちに視線が向く。

ユウスケは待ってくれと周囲を落ち着かせ、そんなわけないと叫んでいる。
そんな中、士は冷静に立ち上がって、意見を述べた。

「俺や海東じゃない。俺たちはあいつらが襲われたとき、グループで一緒になった連中と一緒にいたからな」

そう、士たちにはれっきとしたアリバイがある。
それに、蒔風自身も、彼がやったとは思っていなかった。

「士は過去、すべてのライダーを敵に回して戦ったことがあるが、今回はそれをする意味が全くない。別に・・・世界は平穏なのだからな」

「？・・・蒔風？」

一刀が蒔風が一瞬間を空けたことに疑問を感じたが、頭を押さえてぐらつく彼を見て、疲れているのかと思い、大丈夫かと声をかけた。

「大丈夫だ・・・ちょっと無理しすぎただけだから・・・・で、今回の敵は、おそらくディケイドやディエンド・・・いや、この場合はディケイドだけだな。そのライダーシステムを利用しているか、所持しているかだろう」

ディケイドがライダーをカードに封印していくことができたのは、そのライダーを倒し、三次元での存在を破壊して二次元に押しやってカードにしていたからだ。

おそらく今回の敵は、大ショッカーが開発したその「破壊機構」を利用したものか、ライダーかである、というのか最終的な考えだ。

「もしディエンドタイプなら・・・・封印した奴らを解放して戦わせてくるかもしれない。ディケイドタイプなら、封印した奴らの力を使って攻撃してくるかもしれない」

「たしかに、これは厄介極まりない・・・・・だが、これならまだ希望はある」

「カードに封印されているなら、まだ救い出す方法がある」

「希望が見えてきたな。今日はこれまでだ。各自、警戒を怠らず、そう言った方針で頼む」

蒔風が最後に締めて、会議は終了した。

だが、今回の収穫は大きい。敵の出方が分かったのだから。

――

「なあ・・・本当になにもわからなかったのか？」

「なにがだよ」

会議の後。
一刀が退出した蒔風を呼びとめて声をかける。
その隣には、理樹も一緒だ。

一刀が訊いたのは、先日、巧からのヒントで調査をした蒔風がなにもわからなかったのは本当なのかと。

「本当に何もわからなかった。情報がつかめない・・・なんだ？疑ってんのか？」

「そうじゃない。だけど、みんな不安なんだ。こんなに連続でいなくなっていって・・・・・」

「まだ短いけど決して知らない間柄じゃないし・・・ねえ、本当に・・・」

一刀が悔しそうに拳を握り、顔を俯かせる。
理樹は蒔風なら何かきっと掴んでいるだろうという期待を込めて、それでも顔を見れないでいた。

わかっているのだ。
こんなものが淡い期待だと。

敵の情報はまだ少ない。

「大丈夫だよ。すぐに終わらせてやるから」

「・・・・そんな気休め・・・・・」

「終わらせる」

蒔風の言葉に、ついそんなことを言ってしまった理樹だが、それを蒔風が断じた。

必ず自分が終わらせると。

「なぁに。形はわかってきてる。あいつらも死んだわけじゃない。だったら・・・・救いだしてやるさ・・・・・！！！」

蒔風の目が静かに燃える。
決して、揺るがぬ、その想いを燃やして。

to be continued

犠牲を払って得た情報（後書き）

小毬「ふぇ～、や、やられちゃってるよぉ」

クド「小毬さんッ、小毬さんはまだ最後まで入れたからいいのです！」

美魚「そうです、私と能美さんなど、何があったのかもわからず消えたのですから」

と、言うわけで被害続出。
蒔風は何も分からず、しかし、情報は得ていく。
その情報の代価はあまりにも大きいが・・・・

と、言うわけでようやく投稿です。

理由はいわずもがな、あの地震です。

地震発生時刻、自分はバイト先でした。
最初はすぐに収まるかな？と思いましたが、どうも収まる気配はあらず、更に大きくなっていくばかり。

ついにお店の外に避難してしまう。

ですが、大変でしたよ。
バイト先には高いビルもあるのですが、そのビルらまるでこんにゃく揺らしてるみたいにゆらゆら揺れるんです。
あれはぞっとしましたね。

そのまま電車が止まって帰れなくなりました。
バイト先で止まって、朝一の始発で帰宅。

心身ともに疲れ果てました・・・・

テレビは見れなかったので、家に帰ってから惨状を目の当たりにしましたね。

自分は神奈川ですが、東北地方、および被害の甚大な地域にお住まいの方、気をつけて、そしてがんばってください。

事態が落ち着くことを、心よりお祈りしております。

小毬「次回、迫れぬ蒔風」

美魚「そして、犯人に迫っていくのは・・・・・」

クド「あ、あなたを犯人ですッ！」

美魚「能美さん、それは違いますよ？」

ではまた次回

裏と表　そして・・・・・

相手の力の片鱗が見れてから三日。
蒔風は今、外を一人で回っている。

指令室では、理樹がディケイドやディエンドの「破壊機構」が始動された時の波長をモニターで監視している。
ただ単に物を破壊するならともかく、「三次元」などという実体のないものを破壊して二次元に押し込めるには、それなりのエネルギーが発生するはずだ。

その発生に即時対応できるよう、こうして動いているのだが・・・・

「舜君・・・大丈夫？」

「・・・・なのはか・・・・・ちょっと眠いな」

そうしている蒔風に、別の個所を回っていたなのは達がコーヒーを持ってやってきた。
彼女も精神的に疲労しているのか、あまり優れた顔はしていない。

「ヴィヴィオは？」

「この事は知らないよ・・・・その方がいいでしょう？」

「ああ・・・知らない方が・・・・いいな。はやては？」

「部屋で休んでる。ザフィーラたちがいなくなったのが、堪えたみたいで・・・・」

「それも・・・そうだな」

そう言って、会話を終わらせる蒔風。
もう彼の意識は別の方へと向いている。

動いているのはここだけではない。

翼人は常に四人動き、一人は休息を取っている状態だ。
そのうち、三人は外を回り、一人は「ＥＡＲＴＨ」本部内に必ずいるようにしている。

今はクラウド、一刀、蒔風が外に出ていて、観鈴が休息、理樹が本部待機状態で、そろそろ外の見回りを観鈴と変わる時間だ。

『舜さん、交代だよ』

「ああ・・・じゃ、オレは本部に戻ろうかね。理樹を休憩させてやんなきゃ」

「舜君！」

「なんだ？」

「気を・・・付けてね？」

「俺はやられねぇよ」

――――――

―翼人の前で、嘘はばれる

―感情を感じとれるからね

―だったら、どういう事だ?あいつは嘘をついている?

―わからない・・・・

―調べてみようよ

―よし、オレがやろう

―――――――

と、おもむろに蒔風が携帯を開き、何かをチェックし始めた。
そして、その画面を見て、うんうんとうなづいてから、また疲れるようにため息をついて、モニターに映るメンバーの位置を確認した。

休憩室では、理樹が横になって休んでいる。
強制ではなくとも、彼も皆のために駆けまわっているのだ。
身体には疲労が溜まっている。

そして、携帯を取りだして連絡を取った後、喉が渇いて飲み物を取りに行った。

―
―
―

―調べられたか？

―まだ確証はできないけどな

―でも、間違いは？

―ないと思う

―だったら・・・・

―まだだな。証拠が欲しい

―それなら、彼女に頼んでみるか・・・・・

――――――

今のところ異状はないし、誰も襲われてはいない。
怪しい人物もいない。

遠くでは一刀の翼も見える。
どうやら、なにも無いようだ。

それを確認してから、携帯を取り出してどこかに電話をかける。

そして二言三言話してから、すぐにしまった。

――

―情報は引きぬけたか？

―ああ、沢山あり過ぎてわからないけど、多分これは・・・・

―数人に声をかけようよ。

―敵は・・・・・強いぞ?

―翼人は二人で行こう。他は他所にまわっていてくれ。

―妥当だな。

―了解です

―――――――

観鈴が携帯を閉じて、丘の上から街を見渡す。
冷たい風が髪を巻き上げ、それを手で押さえる。

不安な気持ちが、胸に残る。

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

「破壊機構発動の反応あり！！場所は、現在華琳さん達が調査をしている現場です！！！」

指令室に、声が響き、緊張が走る。
大きな正面モニターには、そのグループのメンバーが映っていた。

リーダーは華琳、サブは恭介。他には、季衣と瑠璃、そして朱鷺戸沙耶がいた。

「来たか！！」

『もう向かっている！！』

「起動させるのが封印の瞬間だけでいい場合、もう終わっている可能性もある！！急げ！！」

――――――

どうやら翼人達が嗅ぎ回っているみたい？

問題ないよ。オレはこのまま続行する。
さっきも仕留めたしな。

さて・・・・証拠も残してないし、こっからトンズラするかね

――――――

「たどり着く直前に天に昇る光が五つ見えて・・・・最悪の場合が浮かんだが、その通りになってしまった」

「恭介・・・が・・・・・？」

「華琳もかよ・・・・・・！！」

集まった翼人達が、現場を見ていく。

観鈴は「ＥＡＲＴＨ」で待機してもらっているので、ここにいるのは四人だ。

他のメンバーは本部に戻らせた。

もはや、調査などとは言ってられないかもしれないからだ。

「何一つとして証拠がないな」

「それどころか・・・・戦闘の跡も無い」

「そんなことありうるのか？」

そう、この現場は、一切の破壊の跡がなかったのだ。
メンバーには重量級の季衣と瑠璃がいたにもかかわらず、壁や地面は綺麗なものだった。

「しかも、証拠がなにも無い？あの恭介と華琳がか？」

「あの二人なら、どうにかしてなにかでも残そうとするはずなのに・・・・・」

クラウドと一刀が驚愕する。
知能において、かなりの高さを要するあの二人だったら、何らかの方法で証拠を残せたはずだ。
だが、それがない。

そうしようとした跡も無い。

「相手が一瞬で片付けちまったんだろ・・・・なにも残す間もなく・・・・」

「本当にそう思うか？」

「西園とクドがやられたとき、誰も気づかぬまま一瞬で撃ち抜かれ、

三原がガードできたのもその後だったからだ。そんなのを一気に撃たれたら・・・・」

蒔風がとつとつと語っていく。
おそらく、相手は絶対の機会を見逃す気はもう無いのだろうと。

「本部に戻ろう。全員に伝えなきゃならん」

そう言って、この場での調査を終える蒔風。

四人が去った後には、本当に何も残っていなかった。

―――――――

そして、普通に正面の扉から普通に出ていった。

エレベーターに乗り、三階に降りた。

そこから、吹き抜けロビーの、湾曲した壁側の通路を歩いて、下に降りる階段に向かい

「待て」

呼びとめられた。

男の声だ。
気配からして、翼人。

だが、待つことなどない。
男はそのまま出ていこうとする。

だから、名前をつけて、翼人は呼びとめる。

「名指しで呼んでやろうか？待て――――――」

名前が呼ばれる。
男が振り返る。

後ろ向きだった男が、こちらを向いた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

裏と表　そして・・・・・（後書き）

あれ？おかしいな。なんだか次回で分かってしまいそうですよ！？
犯人！！

華琳「どうやら私たちのメッセージに気付いたようね」

恭介「にしても、あれはやばかったなぁ・・・・」

五人一気にだもんね。
ちなみに、最後の「男」のイメージとしては、コナンの犯人みたいな感じで。

全身真っ黒ー♪

にしても、頭がいたい・・・・
喉がひりひりする。
体が重い・・・・

一体どういうことだろうか？

風邪みたいな症状だが、おそらく違うだろう。
だってバカだから。

それっぽいだけであって、きっと風ではない。

このことを友人にメールしたら「そうだな。お前はバカだ」と言われたから間違いない。
これは風邪ではない。

一体どういう事なのだろうか・・・・

恭「寝てろ」

華「次回、ついに犯人発覚よ。まったく・・・よくここまでやってくれたわね！」

恭「ああ、だが事件は終わらなそうだぜ？」

ではまた次回

襲撃者ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；蒼青

通り過ぎようとしたその男に、翼人、クラウドが名指しで呼んだ。

「待て・・・・・・シュン」

呼ばれた男は、蒔風だった。

そうして、呼ばれた男、蒔風が立ち止まり、こちらに振り返った。

「・・・なんだよクラウド。今からオレぁ家帰って寝たいんだ・・・わかるだろ？疲れてんだよ。冗談は・・・」

「冗談ではない」

迷惑そうに答える蒔風に、クラウドが厳しく言及する。
その一言で、蒔風の目付きが鋭くなる。

「なんだよ・・・俺をそう言うってことは・・・言うなら、証拠はあんのか？」

蒔風の言葉。
それに応えるように、クラウドが懐から一枚の紙を取りだした。

何かのリストをプリントした物のようで、そこには多くの者の名前がずらりと書かれていた。

そして、クラウドがそのリストのタイトルを読み上げた。

「「襲撃リスト」・・・・このデータが、お前のパソコンの中にあった」

「・・・・どーやってだ」

「ミサカが手伝ってくれた。膨大な量の情報（データ）から、頑張って引き抜いてもらったものだ」

その言葉に、蒔風が参ったな、と言った感じで頭を掻く。

「それはなぁ・・・・狙われていくだろう人間をリストアップしたもので、決してこれから襲おうというものではないよ。メンバーを掌握するには必要だろう？」

「では・・・この消された欄はなんだ？これは・・・・」

「いなくなってしまった奴らをリストからなくしていった・・・・それだけだ。見やすいだろう？」

そう言って、蒔風がクラウドからリストをひったくる。
そして、くしゃくしゃに丸めた後に、そばのダストシュートに捨てた。

「じゃあ・・・・もういいか？オレは本当に疲れて・・・・・」

「まだ話は終わっていない！！」

ジャキッ！！！

ザザザザザザザザッ！！

クラウドが後ろを向いてその場を去ろうとする蒔風の背に剣を向け、
、更に蒔風の周囲には数人の「ＥＡＲＴＨ」メンバーが逃がさない
ように取り囲んでいた。

「お前を相手取るとして、オレ一人で来ると思うか？」

「・・・・・・で？」

蒔風がクラウドに振り向いて、話を進めていった。

「たとえそうだとして・・・・オレはあいつらが襲われたとき、本部だったり、誰かと一緒だったりとアリバイがある。なんでそんなオレが疑われなきゃならないんだ？」

「・・・・・・」

その言葉に、その場の全員が閉口する。

そうだ。確かに、クラウドからの話を聞いてこうしてきたモノの、確固たる証拠はまだわからない。

だが、クラウドは蒔風を肩を並べる翼人なのだ。きっと何かを掴んでいる。

そう信じて、彼らはこうして蒔風を取り囲んでいる。

「おいおい・・・・お前ら、オレが本当に・・・・やったと思ってんのか？」

「・・・・信じたくはない。だが、そうである可能性がある以上、看過はできない」

蒔風が周囲に聞き、愛紗がそれに応える。

その意見に、蒔風は言っておきながら見事だと思った。

たしかに、その通りだ。疑うべきは疑い、そしてそれを晴らせばいい。

「なるほどね・・・・でも、オレのアリバイは？どういう事になるんだ？」

だが、そう。

その問題が残っている。

皆が黙る。蒔風が待つ。

そして、クラウドは口を開いた。

「・・・・・わかった。行け」

「クラウド殿!?」

しかし、クラウドはそう言って剣を下ろしてしまった。
その行動に、蒔風が肩をなでおろして安心する。

「疑いが晴れてよかった。じゃあ、オレは・・・・・」

「最後に、一つ言いか?」

その場から蒔風が一歩歩いて、クラウドが最後だと言って質問する。
まあ最後ならと、蒔風も振り返ってその質問を聞こうとする。

「なんだ？・・・・これでもう三回も振り返ったんだ。四回目は無しにしてくれよ？」

「四回目はない。そもそも、蒔風は振り向いていない」

「は？」

「蒔風はどこだ、青龍。今すぐに呼んでもらおうか」

クラウドの言葉。
その言葉に蒔風の周囲を囲むメンバーからどよめきが起き、蒔風（？）は目を見開いた。

「お、おいおい・・・・そんなことは・・・・」

「気付いてないなら教えてやる。さっきから口調が出ているぞ。いきなりの事で動揺したか？」

「！？・・・・いや、これは・・・・・」

明らかに狼狽する蒔風（？）

だが、そこにクラウドは追い打ちをかける。
決定的な証拠として。

「もしお前が蒔風なら・・・・・十五天帝を出してみろ。すべてだ」

「ッッ・・・・・・」

その言葉に、息詰まる蒔風（？）

ほとんどチェックメイト。
もう、彼に逃げ場はない。

それでも何とか言い繕おうとするが、最初の一言を言っただけで、
もう無駄だと察したのか、黙ってしまう。

そこに

「もういいよ、青龍。全部わかってるみたいだ」

頭上から声がした。
このロビーは吹き抜けで天井まで四階の高さがある。
そこの高い天井から、声がした。

皆が一斉に見上げる。

その天井を走るの丸い鉄柱に、蒔風が腰かけていた。

そして、囲まれている蒔風改め青龍の横に飛び降り、彼の肩をポンと叩いた。

「・・・・すみません」

「しゃーない。よくやったよ。戻っとけ」

蒔風の言葉に、青龍が剣に戻って蒔風の脇に消える。

それを見て、全員が絶句した。
まさか本当にこの男が、この人が、この翼人が敵なのかと。

「・・・さ、てと・・・・・いや、クラウド、これはな？オレが狙われた場合の保険で・・・・」

「そんな戯言はいい！！なぜやった！！！」

この期に及んで、いまだにシラを切ろうとする蒔風。
だが、それを断じるクラウド。
その言葉に、諦めた感じの目をして、蒔風が訊いた。

「どこから気付いた？」

「発端は・・・お前がいろいろときっかけを掴んでいながらも、なにも発見できていないという事だ。今まで色々な情報が集まったのは、総てお前からではなく、他のメンバーからだった」

「で？」

「そして、決定的だったのは・・・・華琳と恭介がやられたあの現場だ」

「？証拠はなにも無かったが？」

「それが、彼らのメッセージだった」

「どういうことだ？」

「あの現場には何もなかった。だがあの時言ったように、あの二人がなにも残さないのはおかしい。つまり、彼らは“残せなかった”んじゃない。“残さなかった”んだ。自分たちがいくら策を講じ、どんな証拠を残しても、それは襲撃者に消されてしまう。だから何も残さなかった。戦闘もしなかった」

「・・・・・・」

「自分たちを襲った相手は、抵抗することも無駄で、勝つ見込みも無く、どんなものを残したところで消されてしまうような、圧倒的な力の持ち主だという事だ！！そしてそれをいきなりできたのは、襲撃者が知り合いだったという事だ！！！」

「それが・・・結論か」

「そうだ・・・・否定は？」

クラウドが、ここまで言って最後の望みをかける。
もしかしたら、彼には何か理由があるのか、それともこのように陥れられたのか、と。

だが

「よくできました。大正解だ！さて・・・どうしましょうか？やっとたどり着いた、強大な敵が目の前にいるぞ？」

蒔風は笑った。
そう、それはまるで、ついにたどり着いた最後の敵。ダンジョンの奥で待ち構えているような、魔王のように。

その顔は、悪に染まったように嗤い上げていた。

「それがわかってたんなら即捕まえることだ。こんなに標的集めてくれて、感謝するぜぇ・・・！！！」

「ッ！？全員離れ・・・・」

ガオンッッ！！！！

クラウドが全員に引くように指示を出すが、それよりも早く蒔風が突っ込んできた。
それを剣で受け止めたクラウドだが、三階ロビー外枠の通路などいう狭いところでは受け止めきれるはずもなく、ガラスのフェンスを突き破って一階にまで落ちて行った。

「グオッ！？」

「俺だからって油断してんじゃねぇぞ？ここにいんのはてめえの敵なんだからよォ！！！」

蒔風が剣を構え、両腕を広げるようにうち広げる。
それによって、クラウドが握っていた剣が両手とも弾き上げられ、胴体が無防備になる。
そしてその腹部に、蒔風の打滅星が一撃、ド真ん中に打ち込まれた。

その衝撃にクラウドの体は壁にまで突っ込み、たたきつけられる。

「ガ・・・ア・・・・」

「おいおい、真面目にやってくれ。このままじゃあ・・・終わっちまうだろう！？」

そのクラウドに、蒔風が「獅子」を握って歩み寄り、その首に向かって振り下ろした。

だが

ゴッ、バガァッ！！！！

クラウドがもたれかかっているその壁の向こうから、幾本ものの剣や武器が突き出してきて蒔風に対してカウンターのように攻撃してきた。

その無数の剣に蒔風は「獅子」を盾にし、その「獅子」を足場に反転、後ろに下がった。

「ッッ・・・・！？」

「舜ッッ！！！！」

そうして何とか体制を整える蒔風だが、壁の空いた穴の向こうから一刀が突っ込んできて、蒔風の背後に一瞬で回り込み剣で切りかかってきていた。
無論、それ自体は難なく受け止められてしまったが、蒔風の動きを止めることには成功していた。

「本当に・・・本当にお前がやったのか!!!」

「めんどくせーなァ・・・・言ってんだろ?それとも、まだ夢見てんですかァ?」

そう言って、剣を握る手とは逆の手で懐をまさぐり、蒔風が何かを取り出す。
それは、カードの束だった。一番上には、華琳の姿が書かれていて、さらに数枚、同じようなものが今まで襲撃された人数分あった。

それを見せて、一刀の目が見開かれ

蒔風の口元がギチリと醜悪に歪んだ。

「手ごたえがなくってな・・・お前は楽しませてくれんのかい？」

「～～～～～～～～～～～～！！！！！！！クラウドォッ！！！
全員を連れてここから離れろッッ！！！」

「一刀！！」

「む？」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

瞬間、一刀の蒼青の翼が大きく開かれ、周囲を衝撃が襲う。

それと同時に、クラウドはメンバー全員を連れて本部から撤退した。

「ご主人様！！」

「愛紗！！危険だ、今すぐここから・・・・・」

「離してくださいクラウド殿！！私は・・・・私は！！！」

今「ＥＡＲＴＨ」本部には彼らしかいない。
もしやと思ってクラウドが全員をここから帰していたのだが、それはどうやら正解だったようだ。

最後まで残ろうとした愛紗を無理やり引っ張って、クラウドも最後に本部を飛び出す。

「なぜ・・・何故だ、シュン！！！」

そう叫びながら、愛紗を抱えて空から「ＥＡＲＴＨ」本部を見るクラウド。
周囲には同じように、何人かが残って見届けようとしている。

その、数秒後

一階から四階、吹き抜けになっているエリアが銀白の光で満たされ、
それが消えた瞬間、「ＥＡＲＴＨ」本部が揺れた。

すべての窓ガラスが一斉に割れ、衝撃が一気に最上階にまで登ってから、すぐに最下層まで下がり、更に地下にまで突っ込んでいった。
大地が揺れ、ヒビが入る。いたるところが隆起し、陥没し、深い振動音と共にビルを損壊していく。

そして

ゴゴァッ！！！
ガギギギギギギギギギギギギンッ！！！！！！！

「ＥＡＲＴＨ」本部ビル正面から少し前。おそらくは地下大訓練場があった場所だ。

そこから地面を突き破って、剣山がせり上がってきた。
いくつもの剣が組み合い、折り重なったその剣の塔に全員が絶句する。

だが、それを見てクラウドが号令をかけた。

「全員・・・・この場から離れろ！！！」

「！？」

「な・・・・・」

その言葉に、釈然としないまでも従って離れていくメンバー。

「ご主人様・・・・・一刀ッ！！！」

「暴れるな・・・・ここではもうどうしようもない！！」

クラウドが一刀の名を呼ぶ愛紗を連れて、その場を離れる。

その後ろでは剣山の隙間から銀白の光が漏れだしてきて、その一瞬後に薄氷のように剣山が砕けた。

その中心に立つのは、服が千切れながらも一枚のカードを手に持つ蒔風。

表には一刀の姿が、裏面には十文字のマークが描かれていた。

「さて・・・・・まだ急げば追いつくな。何人かここで・・・・」

そう言って、逃げていくものを追いかけとする蒔風だが、その足が止まる。

理由は簡単だ。目の前にそれを止めようとする者が立ちふさがったからである。

「なんで・・・なんでおにーちゃんをやったのだ!!!」

「舜・・・もはやあなたは、私が止めまする。他の誰にも、止めさせはせん」

蒔風の前に、鈴々と星が立っていた。

その顔にはそれぞれ怒りと悲しみが込められていたものの、明らかな敵意が存在していた。

「・・・はぁ・・・・・これじゃあいつら逃がしちまうじゃん・・・・退け」

「「断る！！！」」

瞬間

クラウドは後方で、もう一度光が空に昇るのを見た。

それも、二本。

「全員・・・・聞いてくれ。今回の敵は・・・・・『蒔風舜』だ」

通信を以って、クラウドが通達する。
その反応は様々だが、こうして、戦いはついに切って落とされた。

「敵は、世界最強。世界と戦うつもりで行け・・・・・・！！！」

銀白、破滅の光とならん

to be continued

襲撃者ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；蒼青（後書き）

さて・・・犯人発表です！！

一刀「まさかの蒔風!?」

ふっふっふ。
この戦いを思い描いたのは言わずもがな。ディケイドです。

一「じゃあ・・蒔風にも何か思惑が?」

さあ?
そこはまだ明かしませんが。

一「にしてもオレが最初の翼人脱落者かぁ・・・・・・」

これは予定通りです。
さて・・・次はだれを蒔風とぶつけようかな！！！

一「次回、本当に蒔風か？」

ではまた次回

銀白ＶＳ剣＆夜天

ミッドチルダ郊外にある、八神家宅
その家に、数人のメンバーが集まっていた。

現在、「ＥＡＲＴＨ」メンバーは様々なところにバラけており、蒔風によって一気に殲滅されるのを防いでいる。
そして、今は通信を使って全員と連絡を取り、蒔風の戦力を検討していたところだ。

各世界でいろいろな力を見せてきた蒔風だが、一つの世界で見せた力はそう多くはない。
そのために、こうした情報のやり取りが今はとても重要なのだ。

『シュンの力は分かった』

『戦力としては・・・彼の武器、「十五天帝」に、その使役獣「七獣」』

『そして固有結界「心象的世界破壊（イマジナリティ・ワールドエンド）」』

『あとは炎とか雷とかの力に・・・・願いだね』

「願いの力は使えないんじゃないか？こうして敵になった以上、俺たちの「願い」は使えないだろうし」

現在、蒔風は願いが使えない。
なぜならば、彼のために願ってくれる味方がいないからだ。

だが、それでも翼人。まだ強い。
この世界で皆が一つに集まったことで、もともと借りていた力は失せていたが、これではっきりとそれは消えた。

「だったら総攻撃でつぶしてしまえばいいんじゃないか？」

『無理だな。固有結界は周辺の世界を丸ごと飲み込む。聞いただけの性能では全員を飲み込んだところで一秒と持つまい。だが・・・』

『あの性能なら「全員を一気に攻撃」や、下手をしたら「全員を撃破」などということも可能になりかねない』

そう、だから彼らは総攻撃を実施できなかった。
そうしたことで、全員が一気に全滅してしまうことだけは避けたかったからだ。

まあ、彼の固有結界で「全攻撃」はできても「全殲滅」はできない

ので、考えすぎということもあるのだが、それでも危険度は変わらない。

ちなみに、現在八神家に集まっているのは現存する八神家一同、それと、剣崎たち四人のライダーたちだ。
戦力をバラけさせたほうがいいという、理樹の考えで、こうやって一点に集中しないようにしているのだが・・・これは襲われたときにやられてしまうというデメリットがある。逆に言えば被害が少なくて済むということにもなるのだが・・・・・

『あれが蒔風でない、という可能性はないか？』

『・・・・・「奴」か？』

『そうだ！！「奴」ならば蒔風に化けることもできるはず・・・・だったら！！』

『それはない。一刀の最後の攻撃。あの剣山の中に、蒔風の十五天帝はなかった。つまり・・・・』

「蒔風との絆はもうないということか・・・・・？」

『そう。残念だが、あれはオレたちの知る蒔風だ。化けただとか、乗っ取ったとかでは、青龍を使役することはできないからな』

そうして話が一通り終わり、最後にクラウドが入手した蒔風の襲撃リストを皆に送って、話し合いは終わった。

「これから・・・・どうする？」

「リストの中には天音ちゃんたちはいなかった。彼女が無事なら、あとは気兼ねなく俺はあいつを倒すだけだ」

「待てよ。あいつのリスト、なんか変だったじゃねーか。主要だとか最主要が襲われるってのに、ヴィヴィオやユーノは入ってなかったじゃんか」

「そう、それが気がかりだ。高町やテスタロッサ、我らは入っていながら、同じように主要であったものが入っていない」

「私やアリシアも入っていたのに・・・・不気味ですね」

「関係あらへん」

「八神？大丈夫か？」

と、話を進める剣崎やヴィータたちの中に、はやてが入っていく。
家族を失ったショックと、信頼できた人物のまさかの裏切りに寝込んでしまっていた彼女だが、少しは気力が戻ったのかふらふらと近づいてきた。

「大丈夫や・・・とにかく、舜君は・・・あいつはもう敵になったんや。それをうちらは・・・倒すだけや」

「・・・・・復讐か」

はやての状態から、冷静にその心境をくみ取った始が、立ち上がったその原動力の名を言った。
その言葉に、はやてが皮肉気味に笑ってから、そうやなぁ、と頷く。

「復讐・・・と言ったらそうなるのかもしれへん。うちの家族を二人も奪っといて、それでもほかの家族を・・・仲間を奪っとるなんて許さへんし」

「・・・・・・・・辛いぞ?」

「それでもかまわん。うちは・・・家族を返してもらう。そのためなら・・・しゃあない。舜君を・・・倒す。それしかあらへん」

はやての決意。
敵として立つのなら、もう容赦はしないという、その覚悟。
その少女の思いに、今さら異を唱える者などいなかった。

「まあ、確かに・・・蒔風が敵になったのはショックだったけど、みんなをやるなら容赦はできないな」

「私は最初からそのつもりだった。蒔風は味方だったが、同時に敵になる危険も帯びていたのだからな」

「そういや・・・シグナムそんなこと言ってたっけな」

「あいつの中は「混沌とした虚無」と呼ぶのが相応しいくらいだ・・・何が起きても、おかしくはない」

そう、彼はいつだって敵にもなるし味方にもなる。
今までが味方だったというだけ。

そして今、敵になったというだけだった。

と、そこに

前触れも前兆も無く

ピンポーン

というインターホンの音が鳴った。

その音に各人が肩を振るわせた。
一体誰だ？
昼間だから誰が訪ねてきてもおかしくはないが、この状況では・・・
・・・

そう思って、睦月と橘が、玄関の覗き穴から外を見る。

だが、そこには誰もいない。

瞬間

ガオンッ、ドォン！！！

リビングの窓ガラスが吹き飛び、そこから蒔風が突っ込んできていた。
だが、その獅子天麟を構えての進行は、シグナムとヴィータ二人掛かりで食い止められ、その切っ先が他のものに届くことはない。

「ッッ！！！！」

「蒔・・・・風ッ！！！！」

「あちゃぁ・・・無理か。まあ？行けるとも思ってなかったがなッ！」

そう言って、獅子天麟から手を放し、腰の「風」「林」を回転しながら抜き、周囲を一気に斬り伏せる。
それをスウェーで必死にかわす二人だが、胸の位置に一文字の切り傷がぱっくりと開く。

皮膚には至ってないようだが、外装の鎧やフリルは切り落とされてしまった。

それを見て、一気にたたみかけようとする蒔風だが、同時に、このまま室内戦をしてはやられると察したシグナムが、己の剣に魔力を込める。

「レバンティン！！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

レバンティンを連結刃にし、一気に展開。
球体状に膨れ上がったそれは、家屋の一部を吹き飛ばしながらも、味方を守りかつ、敵を押しのけさせることに成功した。

「ここじゃ周囲の住宅に被害が出るかもしれん・・・こっから少し言ったとこに森がある。そこまで誘導してや！！」

「おし！！行くぞ！！変身！！」

ーーー

だが、それでもいい。
こちらにはまだ、戦力がいるのだから。

《ＢＵＬＬＥＴ－ＦＩＲＥ－ＲＡＰＩＤ－－－ＢＡＲＮＩＮＧＳＨＯＴ》

ドンドンドンドンッ！！！

上空から、蒔風に向かって炎の弾丸が降り注いできた。
それを剣で難なく弾く蒔風。

見上げると、ジャックフォームへと変身したギャレンが武器を構えて滞空していた。

「いきなりジャックか！！」

「お前相手に、手加減はできないからな！！！睦月！！」

《ＢＬＩＺＺＡＲＤ》

ギャレンの掛け声と共に、レンゲルがカードをスラッシュし、「ポーラーブリザード」で蒔風の足元を凍らせる。
この程度の氷は蒔風にとっては足かせにはならない。だが、コンマ数秒の足止めくらいにはなるのだ。

「今です！！！」

ギャギィン！！！

そうして、足元の止まった蒔風を、シグナムとブレイドキングフォームの剣が首元を狙って薙がれ、交差する。

それをしゃがみ込んで回避する蒔風だが、リィンとユニゾンしたヴィータによる下からのアッパー気味に振るわれてきたアイゼンの一撃をくらい、上空にまで弾き飛ばされる。

そこで

「遠き地にて・・・・闇に沈め・・・・・・」

「ッガッハ！！・・・・！？」

「デアボリックエミッション！！！！！」

「グアぁ！？」

ドォォン！！！！！

リィンフォースとユニゾンしたはやてが、蒔風に渾身の一撃を叩き込む。
しかし、一同は一切終わった、などという感情は抱けなかった。

その黒煙の中からは、いまだに恐ろしいまでの殺気が噴き出してきている。

「休ませたらあかん！！！攻撃を続けるんや！！！」

「翔けよ、隼！！！」

《ＷＩＬＤ》「オオオオオオオオ！！！！」

シグナムとカリスが、その弓状の武器に力を込め、それを一気に射出して蒔風を貫こうと弦を引く。

その間に蒔風は黒炎の中から降りてきて着地、その二人に迫るが、

もう遅い。
ギャレンとはやてが蒔風の足元を射撃と魔法で吹き飛ばし、彼の視界を奪ってから、二人の矢が放たれた。

ド、ドンッ！！！！！という空気の壁をぶち抜く音して、土煙の中の蒔風に向かって矢が飛んで行く。

だが、それと同時に、否、その一瞬前に、蒔風もまた、動いていた。
正確には、はやてとギャレンが蒔風の足元を吹き飛ばした、直前。

蒔風が、白虎を叉にして投げ放っていた。
叉という武器は、見てみればわかるが原則的には違うものの、三又のような形をしている。

その三本の突起。
今投げた白虎叉の片方は、その三本のうち、外側の二本が１８０度反転していた。

つまり、「返し」である。

さらに、白虎釵は二本だ。
そしてこの片方と片方が、光の紐で繋がれている。

一度突き刺されば、抜くことなどできない。
その釵を、蒔風はレンゲルに向かって投げていた。

ドムッ！！！

「・・・・・・え？」

それにレンゲルが気付いたのは、貫かれてからだ。
背中からそれが突き出し、紐を伝ってグイッ！！と、想いっきり引っ張られる。

「グ、ギアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！」

「なッ！？」

「睦月ッ！！！」

周囲の人間も、小さな叙に気付けず、レンゲルが引っ張られていってから始めて気付いた。

その体が、一気に蒔風の元へと吹っ飛ぶように引き寄せられて、そして

ゴゴオッ！！！！

そして、二人の矢が発射された。

だが、それが命中していないことははっきりしていた。

なぜなら

「グフアアアアアアアアアッ！？グアアアアアアアアアアア！！！」

ドドンッ、ドゴオオオオオォ！！！！！

レンゲル・・・睦月の断末魔の悲鳴と、蒔風に着弾するよりも早く、爆発が起こったからだ。
その爆発で、周囲の土煙が一気に吹き飛んでその場が晴れる。

そこに立っていたのは、力なくダラリとしたレンゲルと、その首を掴んで盾のように持つ蒔風だった。
そしてその直後に、レンゲルの身体が光り、光の柱になったかと思うとそれが消え、蒔風の手元に一枚のカードが残った。

「睦月・・・睦月ィッ！！！！」

「蒔風ェェェエエエエエエエエエエエエ！！！！！！！！」

「んだよ・・・・盾にできる者（モノ）があったから使った。それだけだろォ？」

「キッサッマぁあああああああああああ！！！！！」

あまりの仕打ち。
しかも、自ら手をかけるではなく、自分たちの攻撃を、自分たちの味方を盾にして防ぎ、そのまま終わらせるなどという行為に、シグナムは激昂した。

無論、そうなっているのは彼女だけではない。
その場にいるすべてのものが、今の行為に怒りを感じていた。

と、そこで蒔風が口を開く。

「おいおい、いいのか？・・・・てめえらの真後ろから、青龍たちが狙ってんぞォ！？」

『『「「「「「「「！！！？？？？」」」」」」」』』

その言葉に、全員が後方に意識を飛ばす。
しかし

「グ、ガハァッ！！！？？？」

ドンッ！！！

爆発音がした。
全員がそちらの方を見ると、シグナムの身体から煙が上がり、今まさに膝をついて倒れてしまうところだ。

「シグナムウウウウウウウウウ！！！」

「バカか！敵の言葉に耳貸して？全員揃って目ぇ逸らす？頭ん中春ですかァ？脳天に風穴開けて、春一番吹かしてみようかァ！？」

「ま　い　か　ぜェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

その言葉に、ヴィータがキレた。無論、はやて達も同じだ。

ヴィータとブレイドが翔け、蒔風に向かって重量級の武器を振り下ろす。

それをひらりとかわし、ブレイドの重醒剣キングラウザーを踏みつけて地面にめり込ませ、ヴィータに向かって銃を取り出して発砲した。

数発をアイゼンで受け止めるヴィータだが、ついにそれを肩と腹に受け、蹲る。

今は命の別状はなくとも、放っておけばかなりまずいのは一目瞭然だ。

そんな状況で、もはやはやては限界を超えてしまった。

全身が黒く染まり、身体に紋様を走らせ、かつて暴走した時のように、身体がリィンフォースのように変わっていく。

『いけません!!主はやて!!それ以上は・・・アぐっ!?』

それをユニゾンしているリィンフォースが止めようとするが、彼女の意志に呑まれてその意識が途絶えてしまう。

その魔力は周囲の木々をなぎ倒し、倒れている味方も、立っている味方も吹き飛ばしていった。
だから、シグナムをカリスが、ヴィータをギャレンが、吹き飛びながらも抱えて庇っていた。

だが、蒔風はそちらをいちいち気にしている暇はない。
ヴィータを撃った後、蒔風は即座にブレイドと剣撃を打ち合わせていたからだ。

だが、その重量はさすがに大きく、蒔風の剣は大きく弾かれ気味だ。

そこに、暴走してしまった八神はやて。

普通ならまずいと思うだろう。
だが、この男は・・・・・

「剣崎ィ・・・・あれにやられたら・・・・キツイと思わないか？」

「なに！？・・・・八神！？」

「アハッ！！！」

蒔風の楽しそうな声と共に、その手の銃から銃弾が発砲される。
その弾丸は自体は魔力の壁らしきものに阻まれて彼女に届かなかったが、明らかな敵意をこちらに向けさせるにはちょうど良かった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

彼女の魔力が集結し、白い魔力光がギチギチと音を鳴らしながら圧縮されていく。
それは、砲撃の準備。

しかも、デアボリックエミッションどころではない。
それはおそらく砲撃魔法「ラグナロク」なのだろうが、その魔力の違いで全くの別物に見えてしまう。

と、その充填を、蒔風がブレイドと剣を組み合いながら見、そしてそれが十分になったところで、ブレイドの剣を受け止めている腕の力を抜き、自分の後ろに落とさせる。
そして後ろにまわり、ブレイドの背中を蹴り出す蒔風。

すると、どうなるのか。

「すべて消えろ!!!!!終焉の笛ェェェェェェェ・・・・・・」

「ッッ!?蒔風ッッ!!!!!」

「早くしねぇとォ・・・・吹っ飛んじまうぜ!?」

蒔風とはやての直線上。そこに立たされてしまうブレイド。
ここで、彼に与えられた選択肢は二つ。

はやての攻撃の方を避け蒔風にそれを直撃させるか、はやての攻撃に向かって大技を発し打ち消すか。

前者ならば、まず確実に蒔風に大ダメージを望める。
だが、あの砲撃はおそらくここ一体を飲み込む。蒔風が耐え、そして体力が残っていた場合、巻き込まれた自分たちは無抵抗で消される。

後者ならば、蒔風は逃すかもしれないが、みんなが助かる。その後に反撃にも出れる。
だが、あの砲撃を受け止めきれるのかという懸念と、受け止めている間に蒔風が自分を潰しに来たら終わりだ。

ここで彼が取るべきだと考えたのは前者だ。
この場で蒔風を倒せずとも、ダメージを与えておけば後々戦う者にとっての有利になる。
自分たちがここで倒れても、あとに残せる。

戦士としては、そちらを優先すべきだろう。

今のこの場を捨て、蒔風にダメージを与える。

キングフォームの今なら、直撃さえしなければこの砲撃にも耐えて蒔風にとどめをさせるかもしれない。

だが

「許せ、八神ッ！！！」

彼は、そうすることができなかった。

スペードスートのカード１０からキング、Ａの五枚がキングラウザーに飲み込まれていく。

彼は、見捨てることができなかったのだ。

たとえこの先につなげようとも、今この場の皆を見捨てるようなことなど、彼にはできなかった。

すべての人、人間が

大好きだから、守りたい。

その想いでここまで貫いてきたこの仮面ライダーは、仲間を護る道を選んだのだ。

「ラグナロク！！！！！」

「ウェアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

ドォオオオオオオオオオオオオオオオ・・・・・・・・・・・！！！！

はやての砲撃魔法「ラグナロク」と、ブレイドキングフォームのエ

ネルギー射出型「ロイヤルストレートフラッシュ」がぶつかり合い、その場を光が覆い尽くした。

――――――

離れたところでは暴走したはやてがいまだに叫びまわっている。
あれだけの砲撃の後にもかかわらず、なんという魔力量か。

いや、そうではない。
暴走だから気付いていないだけで、彼女はもはや限界に近かった。

それでも、彼女は敵を探した。
自分の家族を奪った敵を。

そんなはやてなど眼中にないと言わんばかりに、ブレイドの前に蒔風が立つ。
その蒔風を睨みつけるブレイドだが、もう彼に剣を振るう力はない。

「よく受け止めたなぁ・・・・だが、思い通りに事が進んで何よりだ」

「クソ・・・・テメェ・・・・・」

「いいねぇ・・・だがお前のその願いは受け取れねぇな」

そう言って、蒔風が剣を振りあげる。

「最後に聞きたい・・・なぜこんなことを・・・・・」

「ん？理由？そんなん簡単だよ。だって・・・・こんだけ強い奴らがいるんだぜ？」

「まさか・・・・・」

「戦ってみたいダロ？暴れたくナッテキチャッタンダ♪」

「蒔風ェッ！！！！！」

「バァイ」

ヒュ、ガキィ！！！！

蒔風が剣を振り下ろす。
だが、その剣はカリスが武器、カリスアローを剣のように構えて受け止めていた。

それを怪訝そうに見ている蒔風に、更にギャレンの銃撃が襲いかかる。
だが、あの砲撃にあって威力が落ちているのか、蒔風はバックステップで下がりながら素手でそれを払っていた。

あの砲撃で、二人は既に通常フォームに戻ってしまっている。

「剣崎！！！あっちの茂みにシグナムとヴィータがいる。連れて逃げろ！！！」

「橘さん！！！始！？」

「ここはもう駄目だ・・・生き残ることだけを考えろ！！！オレたちが時間を稼ぐ！！！！」

「そんな事できるか！！！オレも一緒に・・・・」

「聞き分けろ！！！剣崎！！！！！今何が重要か、お前ならわかるはずだ！！！！」

「ッッ！！！！」

「行くぞ！！橘！！」

「オオオオオオオオオッッ！！！！」

剣崎の返事を待たず、二人は駆け出していってしまう。

その跡をなんとか追おうとするブレイドだが、そのわきをはやてが通る。

やっと敵を見つけたのか、口論の音を元に走ってきただけなのか。

それはわからないが、剣崎は確かに、すれ違ったその瞬間。

仮面越しに彼女の声を聞いた気がした。

―剣崎さん　あの子達の事　お願いします

「・・・・・・・・・・・・ッッッ！！！」

それを聞いて、ブレイドが翔けだして、茂みの中からシグナムとヴィータを見つけ、自身のバイク「ブルースペイダー」に跨ってその場から走り出した。

「それでいい・・・剣崎ッ」

「グアアアアアアアアア！！！！」

それを見届けたギャレンの前で、カリスが斬り伏せられてその身体から火花と緑色の地を噴き出して、光となって消えた。

それを見て、ギャレンも覚悟を決める。

銃を構え、狙いを合わせて撃ちながら蒔風に突進する。

もうカードでコンボ技を出す体力も無い。

だが今は――――

「オオオオオオオオオオオ！！！」

ドンッ！！！

そうして、ギャレンもやられた。

時間は全くといいほどかかっていない。
はやてがここまで駆けてくるまでの時間も無かったのだから。

そして、はやての拳が蒔風に向かって伸びる。
だが、いくらなんでもそれは無茶だった。

この身体は見た目こそリィンフォースに近いが、それでもやっぱり元ははやてなのだ。
近接戦闘どころか、普通の殴り合いだってできないような彼女がすることではない。

だから、蒔風は冷静にカウンターを顎に決め、その体をフッ飛ばす。

「あ・・・あああああ・・・・嗚呼・・・・・アアアア

「心象的世界破壊（イマジナリティ・ワールドエンド）」

蒔風のつぶやき。
その一言で、世界が歪んだ。

迫るラグナロクに、拳を当てる。

すると、それが１８０度方向を変え、撃った本人に向かって直進、
そして直撃した。

倒れるはやて。
三十秒経って、結界が切れる。

そして、はやての身体が光に消え、蒔風の元に新たに二枚、カード

が来た。

――――――

そのバイクには、ボロボロのシグナムとヴィータか一緒に乗っている。

意識がもうろうとしながらも、自分たちを主の元に連れていくように頼む二人。
だが、剣崎にそうする事などできなかった。

いまだに戻ってくれと涙するシグナムの言葉に、ダメだと言い続けるブレイドの顔は仮面に隠されている。

だが、それを見上げたヴィータには、その仮面が泣き顔に見えてしょうがなかった。

to be continued

銀白ＶＳ剣＆夜天（後書き）

レンゲル・・・クローバー
カリス・・・ハート
ギャレン・・・ダイヤ

リィンフォース、八神はやて・・・夜天の書にある十字のマーク

はやて「上のはなんや？」

カードに刻まれたマーク。
あったらおもしろいでしょう？

リィンフォース「そうですけど・・・・かなり派手にやられましたね」

橘「あの時はヤバかった・・・・・蒔風は本当に俺たちの敵になってしまったようだな」

は「にしてもあんな戦い方するんやなんて・・・・・・」

睦月「僕なんてほとんど戦ってないのに・・・・」

始「手段を選んでこなかったな。銃も使っていたが」

は「そういや、ゼロライナー襲われたんもガス管と手榴弾やったもんなぁ」

橘「ああ・・・あれはオレたちの知ってる蒔風じゃないようだ・・・・」

彼の本領発揮、というところですね。
ちなみに、今回のリストはここに乗せておきますので、確認を～～♪
あと、カリスの「ワイルド」は少しアレンジ聞かせたのでご了承ください。
弓の技じゃなかったけど、そう言う事にしました。

橘「次回・・・はまだ決まってないようだが・・・・・」

は「どうやら魔術関係みたいやで？」

始「いろいろあるな・・・・」

ではまた次回

襲撃リスト（完全版）

岡崎智也
岡崎渚
キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
泉こなた
柊かがみ
柊つかさ
高良みゆき
響鬼
威吹鬼
轟鬼
ハクオロ
エルルゥ
オボロ
ベナウィ
クロウ
カルラ
トウカ
泉戸裕理
泉戸ましろ
応龍
鵺
城戸真司
秋山連
北岡秀一

吉井明久
坂本雄二
姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太
津上翔一
芦原涼
氷川誠
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
前原圭一
竜宮レナ
園崎魅音
園崎詩音
北条沙都子
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
門矢士
小野寺ユウスケ
光夏海
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス

リュウタロス
ジーク
桜井侑斗
デネブ
直枝理樹
棗鈴
棗恭介
井ノ原真人
宮沢謙吾
神北小毬
能美クドリャフカ
来ケ谷唯湖
三枝葉留佳
西園美魚
朱鷺戸沙耶
乾巧
海堂直也
三原修二
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
アーチャー
間桐桜
ライダー
イリヤスフィール・アインツベルン
バーサーカー
ランサー
ギルガメッシュ
天道総司
加賀美新

矢車想
北郷一刀
剣崎一真
橘朔也
相川始
上城睦月
皇月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
直江大和
紅渡
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
八神はやて
リィンフォース
シグナム
ヴィータ
シャマル
ザフィーラ
リィンフォース？

スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・エ・ルシエ
エリオ・モンディアル

銀白ＶＳ英霊

「あの八神はやてがやられただと！？」

『うん・・・剣崎さんから連絡があった。今はまた別のところに身を寄せているみたいだけど・・・・』

あの戦いの後、八神はやて陥落の報はすぐに「ＥＡＲＴＨ」メンバーの間を駆け巡り、激震を起こした。

それはそうだ。

ブレイド達ライダーと、残ったヴォルケンズ達総出を以って蒔風を迎え撃ったというのに、その代償が敗北、しかも八神はやてがやられてしまった。

これはあまりにも大きなダメージだった。

ここは、地方都市「冬木市」

そのまた郊外にある、衛宮邸だ。

そこに、サーヴァントやマスター、総てが集まっていた。

あくまでリストに載っていた者だけだが、それでもかなりの戦力だ。

凛は他のアサシンやキャスターなども呼ぼうと提案したのだが、士朗がそれを許さなかった。

「関係のないあいつらを巻き込むことはできない」らしい。

アーチャーはその考えを甘いと言いそうだが、戦いの範囲が広がれば結果的に被害者が増えるという考えで納得していた。

「だが・・・・・まさかこんなにも早く主力の一人がやられてしまうなど・・・・・・」

「そういえば、ギルガメッシュはどうした？あいつも狙われてんだぞ？」

「知らねぇよ。あの金ピカ野郎なら簡単にはやられないだろうよ」

と、応えるのはランサーだ。

現在居間に居るのは、士朗、凛、アーチャー、ランサーだ。イリヤと桜は寝室で寝ていて、その部屋の前にセイバーがいる。

門の前では霊体化したバーサーカーが張っているし、屋根の上ではライダーが周囲を警戒している。

本来ならばライダーの仕事はアーチャーのものなのだが、さすがに休みなしは英霊にもキツイ。
と、言う事で魔眼を持つライダーとの交代になったのだ。魔眼の効果は石化だが、魔眼はそれだけで普通の目を超える性能を持つ。遠くを監視することは別に難しくない。

「それで・・・蒔風の目的が戦いだって・・・どういうことだ!?」
『おそらく、舜は・・・・世界を今まで守ってきた、という責務から離れ、自由に生きてきた。そして、失ってしまったんだ。力の向け先を』
「つまり・・・「奴」の消失が?」
『そうなるかもね・・・・これは士さんが言ってたんだけど、あいつはいつだって「自分」の正義を貫いてきた。それがオレたちに牙を向いただけ・・・だって』
「ふざけやがって・・・・・・」
『クラウドさんは「堕ちた」って言ってたけど・・・・』

士朗が話している通信相手は理樹だ。
こうやっていろんなところに情報を流しているらしい。

「そういえば・・・アリスとの連絡は取れないのか？」

『アリスさんがこの世界にいたのは舜との約束が元だったから・・・・こっちから彼女に連絡を取ることはできないと思う』

「そうじゃなくても！この現状を見れば・・・・」

そこまで言って、士朗が気付く。
そうだ・・・そういえばこの襲撃事件が始まってから、一度もアリスを見ていないんじゃないか？

『それは僕らも思ってた。だけど、管理者だったらこんな回りくどいことはしない。そもそも、管理者は力があっても人の意志までは変えられないそうなんだ。相手が翼人なら、なおさら』

「じゃあ・・・これは本当に？」

『舜の仕業。しかも、的確にこっちの居場所を突き止めてきている。僕らもそろそろここを離れるところなんだ。一カ所に、しかも、由縁のある場所は絶対にまずいから』

「わかった。オレたちも移動する」

『気をつけて。舜の戦い方は・・・僕らの知ってる舜のものと違うから』

そうして、連絡を切る。
一同はその話を聞いて、気落ちはしたものの、上がることはなかった。

「今の話、本当？」

「らしい・・・信じられるか？こんなの・・・・」

凛の言葉に、士朗が辛そうに答える。
だがそんな彼らに、ランサーだけがいつもと変わらない様子であっけらかんと言った。

「何気落ちしてんだ。「昨日の敵は今日の友」ってのがあんだろ？だったら、「今日の友が明日の敵」ってことがあんのも道理だろうが。敵は敵。やるだけだ」

戦士然としたランサーの言葉に、アーチャーも頷く。
今そのようなためらいがあっては、すぐにやられてしまうぞ、と。

と、そこに

カランカランカラン・・・・・・・

衛宮邸に仕掛けられている、侵入者を知らせる音が、静かに、だが確かに鳴った。
その音を察知して、庭にバーサーカーが顕現し、ライダーが降りてくる。

「今の音・・・・・！！」

「ああ・・・・誰かが・・・・・きた」

否、誰かが、などではない。

彼らは知っている。一体誰がここに来たのか。

しかし、その可能性を消したいというのもまた事実。

出来れば戦いたくないのだ。

心境的にではない。

自らの安全のためにだ。

居間で構えて、待ちうける一同。

何が起こるかわからないため、下手に動くことができないのだ。

だが、こうしていても仕方がない。敵はすでにこの敷地に入っている。

アーチャーが凛と士朗を促して、桜とイリヤを起こしてくるように言った。

確かに、セイバーがいるといっても、今は離れている彼女らの方が心配だ。

こちらに合流させた方がいい。

そうして、二人が居間から出ていこうとして、一歩その敷居を踏み越えたところで

ゴバッ！！！！！

という字練りのような音が、地面の底から轟いてきた。

と、言うかそれはそうだろう。

なぜならば、蒔風のものであろう土埃竜が地面から顎を開いて現れ、居間をばっくりと呑みこんでしまったのだから。

だが、その程度反応できない英霊ではない。
ランサーとアーチャーは怪我も無くその今から脱出していたし、凛と士朗はそのままダッシュして桜とイリヤを起こしに行った。

「怪我はないか？」

「へ、誰に言ってんだ？」

アーチャーの言葉に減らず口をたたくランサーだが、今はそうも言ってられない状況だ。
地面から生えてくるように出てきた土惺竜が、とぐろを巻いてこちらに狙いをすまし、一気に突っ込んできたからだ。
その狙いは、ランサー。

猛烈な勢いで、土惺竜がランサーに向かっていく。
当然、それを避け、回避するランサーだが土惺竜は止まらない。
バーサーカーなどがその体を削っても無駄だ。地面から土を補充してすぐに再生してしまう。

「ク・・・ッソ！！術者本人が見えねェからゲイ・ボルグも撃てやしねぇ！！！」

ランサーの宝具「ゲイ・ボルグ」は相手の心臓を一撃で破壊する脅威の武器だが、相手が見えなくては狙いようもない。
この土惺竜を止めるには、大質量の大技で吹き飛ばさないと無理だ。
しかし、それをやっている間にランサーに直撃してしまう。

そうして、ランサーがどうしようもなく避け続けて、バックステップで下がった瞬間。

ザキュッ!!という音とともに、地面から十五本の刃が突き出てきて、ランサーの体を傷つけていく。

「グア!?・・・ッチィ!!!!」

その剣に足止めと怪我を食らったランサーに、土惺竜が迫る。
だが、その前にバーサーカーが立ちふさがり、巨大な戦斧を以ってそれを真正面から塵芥までに吹き飛ばして防いだ。

「すまねぇな・・・・・」

「・・・・・」

その場を離れ、礼を言うランサーに寡黙で答えるバーサーカー。

そのランサーがさっきまで立っていた場所。
十五の刃が突き出している地面の中から、蒔風がボコリ、と地面を押しのけて出ていた。

「ふう・・・さて・・・・ランサー、傷つけたのは、利き腕か？反対の腕か？まあどっちにしろ、宝具は打てないだろうな」

「貴様・・・・最初からそれが狙いか」

「いーや？それだけじゃないけどね」

そう言って、二枚のカードを取り出す蒔風。
そこにあったのは、イリヤと桜のカードだった。

それを見て、ライダーとバーサーカーが目を見開く。
この男は、土惺竜にランサーを追い回させている間にこの二人を打ち取っていたのだ。

「■■■

「ああ、部屋の前にセイバーがいた気がしたがな？シカトしていったよ。ランサーのほうが脅威だったし」

そう、いつものように言い放つ蒔風。

と、そこに現状をようやく把握したのか、蒔風に向かって突風の塊が飛んできた。

風王結界による「ストライク・エア」

それを畳返しでその場を動かずに防御する蒔風に、セイバーが突っ込んで行って剣をぶつかり合わせた。

「貴様・・・それでも戦士かッッ！！！！」

「俺はただの戦人（いくさびと）だよ」

ガァン！！

セイバーの剣を弾き、全員を目の前に見据えながら、蒔風が剣を構える。

「・・・ライダー、バーサーカー・・・申し訳ございません。イリヤスフィールとサクラを・・・・私は・・・・」

「そう思うなら、あの男を殺すために全力で協力してもらいます」

「■■■

と、各々が小声で話していると、蒔風が待ちきれないとばかりに声を荒げた。

「おいおいおいおい・・・・早くしろよ！！！じゃねぇとこっちから・・・」

ゴォッ、ドォン！！！

「んおッ！？」

「ハアアアアアアアア！！！！」

ガゴンッ！！！

蒔風がそうしてしびれを切らして走り出そうとした瞬間。
まさにそのタイミングでセイバーとバーサーカーが同時に突っ込んできた。

（う・・・うまいッ！？・・・・くっそ！！！）

そのタイミングは完璧だった。
蒔風はこれから駆けだすという体制で、そこに向かって突っ込んでいったのだから、蒔風の行動はどうやったって咄嗟になる。

その攻撃を前周りに受け身を取ってすり抜け立ち上がり、右にセイバー、バーサーカーを、左にアーチャーたちを取るという、挟み込まれた形にされた蒔風。

「よし・・・！！！」

「周囲を囲め・・・凛は絶対にこちらに来るなよ！！！」

「わ、わかってるわよ！！！」

「・・・・・・」

周囲を囲んだサーヴァントたちを見て、蒔風が息を深く整える。
アーチャーが凛と士朗にこちらには来ないように注意し、二人がそれに従う。

これからの戦いに、生身の人間が入り込んでいいものではない。

そして、動く。

バーサーカーが戦斧を地面に叩きつけ、その衝撃が地面を跳ねあげながら蒔風に向かう。
だが、それを蒔風は先ほどと同じように畳返しで防ぎ、その姿を一瞬二人から消す。

その間に蒔風は屋敷側、つまりはアーチャー達に向かい、武器を振るう。

走りながら十五天帝を次々と投げ、アーチャーを串刺しにしようとする。
だが、ここで蒔風が疑問に思う。

ランサーがいない。

一体彼がどこに行ったのか。
それは疑問になったものの、今の彼は宝具を使えないので無視することにした。

むしろ今の相手がアーチャーとライダーになった事のほうが僥倖だ。

が、ただ飛んでくるだけの剣ならアーチャーに当たることはない。
そのすべてがかわされ、屋敷や地面に剣が突き刺さる。

そして、アーチャーの手にいつもの「干将・莫邪」が投影されて、それが蒔風に向かって振るわれた。
それを手元に残った天馬で受け止め、背中から翼を出し、それをアーチャーの後ろに回しこんで背中を狙う。

だが、アーチャーは受け止めながらも蒔風の腕を器用に蹴り、反転ジャンプしてその「枠」から逃れ、そのタイミングを見計らってライダーが鉄杭を投げ放ってきた。

それを肩に受け蒔風が痛そうに顔をゆがめるが、それを掴んでライダーを引っ張り上げてきた。

無論、ライダーは英霊だ。
そのような力押しで負けるようなことなどない。

多少ぐらついたものの、しっかりとその引っ張り合いに勝っている。
そして、それを引きながらライダーが目を隠している眼帯に手をかけ、その双眸をあらわにした。

「なグッ!?」

「[redacted]!!!!!!!」

いきなり体が硬直する蒔風。
その背後から降りあげられ、猛烈な勢いで振り下ろされる巨大な戦斧。

（キュベレイ・・・・石化の魔眼!!・・・・・・）

ドゴォッ!!!!

直後、蒔風の身体が戦斧の下に消えたかどうかも見えず、一瞬で猛烈な土煙を上げていった。
その衝撃は凄まじく、周囲にいたセイバー達は空気に叩かれたような衝撃を受けていたほどだ。

さすがにこの一撃。
やったか!?と、凛と士朗は思った。

他の者も、楽観視するつもりはなくとも少なからずそう思っただろう。

この場にいる者は皆、あの一撃の重さを知っている。
しかも、イリヤを奪った者に対してだ。容赦など欠片も無いに決まっている。

しかし

ザキッ！！ザギギギギギギギギギギ！！！！

なにかが土煙の中に湯っ込んでいき、金属の刃が肉を貫いていく音が中からしてきた。
直後に、土煙が晴れる。

現れたのは、バーサーカーと蒔風だ。

そして、バーサーカーには十五天帝すべてが急所に突き刺さっており、蒔風が何かをバーサーカーに向かってかざしていた。
バーサーカーの戦斧は、その「何か」の前でピタリと止まっており、その踏み込んだ足は地面にめり込むほど踏みとどめられている。

蒔風が持っていた剣は、天馬。中心となる剣だ。
だから、ここにこうしてすべてが集まってきたのは不思議ではない。

しかしどうやって、蒔風はあの状態から石化を解き、バーサーカーの攻撃を止めたのか。

繰り返すが、蒔風の持っていた剣は天馬だ。
そして、ライダーの真名は「メデューサ」。彼女は自らの仔である「天馬（ペガサス）」を駆る。

彼女ら英霊は「概念」というものに縛られる存在だ。
いくら蛇より強くても、過去蛇に負ければ圧倒的に弱くなるし、信じられないような化け物に勝っていれば、そう言ったモノに対して優位になれる。
つまり直接の関係などなくとも、「天馬」という存在はライダーにとっては使役対象であり、その効力を緩和できる。
敵を石化させた際、自らの天馬まで石化させては元も子もないから

だ。

無論、こちらの天馬にとってそんな事実は知ったことではない。バーサーカーが止まった瞬間、蒔風の手から人神体になって飛び出し、剣に戻って突き刺さり、他の剣を集めればいいだけなのだから。

そして、どうやってバーサーカーを止めたのか。

目の前の現実に、効力が弱まったのか蒔風の身体に自由が戻る。

そして、その盾のように掲げていたものを皆に見せながら、蒔風がライダーやアーチャー、そちら側にまわったセイバーに向かって歩いてきた。

「狂戦士（バーサーカー）なんて言いながら、かわいい事にこいつには人質が効く」

そして、カードを振りながらいやらしく笑って見せた。

「イリヤ（これ）のカード見せたらさ、簡単に止まったよ！！！！」

そう言い放って見せる蒔風。

あの時の土煙は、振り下ろすのを止めるためにバーサーカーが地面に踏みとどまった際に起こったものだったのだ。
そしてその理由が、イリヤのカード。

それを前にして、バーサーカーは止まったのだ。

それを見せつけた蒔風の後ろで、バーサーカーが光りになって消え、カードになって蒔風の手に収まる。

「しっかり十五回、だ。三回はオーバーキルかな？」

「蒔風・・・貴様・・・誇りはどうした!!!!戦士の誇りを・・・失ったのか!!!!!」

その蒔風に、セイバーが叫ぶ。
騎士王とまで言われる彼女だからこそ、この男のやり方は許せなかった。

ここまで戦士を侮辱した戦いなど、許されていいはずかない。

だが、蒔風は

「戦士の誇り？間違っているな、セイバーよ。オレは決して戦士じゃない。お前と最初にやり合ったときを忘れたか？オレの本領は・・・・」

ドフン!!!!!

そこで蒔風が地面を踏み抜き、自分の身体を土煙に隠す。

「これは・・・・」

「舐めているのか・・・・蒔風ッ！！！」

そう、それはかつてここで行った模擬試合。その時蒔風は取った戦法と全く同じだった。
その中にセイバーが突っ込んで行こうとする。

しかし

「行くな！！セイバー！！！！」

アーチャーがそれを止める。
その瞬間

土煙の中から蒔風が飛び出してきた。

まったく予期することのできないその突進に、セイバーがとっさに反応してそれをいなし、後ろに流す。

だが、彼の狙いは最初からセイバーなどではなかった。

「アーチャー・・・・撃ち取ったり！！！」

青龍刀を構え、アーチャーに振るって来る蒔風。
しかし、その動きが止まる。

ライダーだ。
ライダーがその目を以って再び蒔風を止め、同時に横っ腹に鉄杭を突き刺していた。

しかし、そこでライダーが異変に気付く。
一気に動いたためここまでやってしまったが、魔眼を発動させた瞬間に気付いたのだ。

「アーチャー！！こいつは・・・・・」

「ネタばれは禁止だよ」

シュカッ！！

「！？・・・カッ！？・・・カ・・・・・ヒッ・・・・・ア・・・・・・」

ライダーの言葉と共に、蒔風の言葉がしてその首がかっ切られていた。

ライダーの姿が光と消える。

何が何だかわからないアーチャー。

だが、比較的にではあるが一人離れていたセイバーは気付いていた。

残っている土煙の中から、蒔風が「もう一人」飛び出してきたということに。

と、その瞬間に魔眼が切れ、アーチャーに斬りかかっていた蒔風の身体が一瞬で青龍の巨大な獣神体へと変わり、その体を締めあげていった。

そう、こちらの蒔風は、青龍の変化体だった。

今までの戦い、凛と士朗は離れて見ていたが、何が起こっているのか全く分からない。
いや、眼には見えているのだ。魔力を目に回し、それを強化して様子を見ていたのだから。

しかし、そこで隙があれば宝石魔術や投影した剣を投げつけようと思っていた二人の思惑は外れた。

まったくその隙がないのだ。
あっても、そこにはすかさずサーヴァントたちが攻撃に入っている。
自分たち魔術師はあくまでも人間だという事を、否でも思い知らされる。

今も、アーチャーが締めあげられていくのを見ていることしかできない。

が、その巨大な身体をセイバーが逃すはずがない。
剣を振るって、その体に斬りかかっていく。

しかし、当然その前には蒔風が立ちふさがる。

「ッ・・・貴様！！」

「オレの青龍をいじめないでくれよなぁ？」

ギィン！！！

そういって交戦する二人。
だが、蒔風はどう見ても全力を出していない。

楽しんでいるのだ。
セイバーとの打ち合いを。そして、アーチャーを見て悔しそうに顔をゆがめるセイバーを見て。

「ヌあああああッ・・・・・ッッ！！『身体は剣でできている』・・・・・！！！！」

だが、そうしている後ろで爆発音が起き、青龍の腹部が爆ぜた。

何事かとセイバーがそちらに目を向けるが、わかりきっている蒔風はそのセイバーの腹を蹴りだして押しのける。

そして、まったく振り返ることなく、後ろの状況を正確に口にした。

「・・・・・「無限の剣製（アンミリデットブレードワークス）」での「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」か。無茶するよなぁ？青龍、戻れ」

と、青龍を脇の鞘に戻し、そこで振り返る。
アーチャーの腹部からは煙が上がり、口からは血がこぼれる。

「アーチャー！！！」

「っと、テメェはこの期に及んでオレを無視すんな！！！」

「ッ！！」

パンパンパン！と銃声が鳴り、セイバーに銃弾が飛んで行く。
それを弾くセイバーだが、それと同時に投げつけられてきた手榴弾の爆発に、少しばかり後退する。

そこで少し落ち着いたのか、蒔風がアーチャーに言葉を向けた。

「ランサーがどこに行ったかは・・・・・わからん？」

「貴様に・・・教える義理はないな・・・・・・」

「おお、息絶え絶え。だがまあ、大方言峰教会だろう。あそこにいる自分のマスターに助けを求めに行ったか？」

「・・・・・・」

そこまで読まれて、アーチャーに揺らぎはない。
なぜなら、そろそろランサーが戻ってくるころだったからだ。

「彼女」の「アレ」ならば、蒔風に絶対的に有効だろうと。

そう考えていたアーチャーには、また勝算があった。

しかし

「あー、すまん。もうわかってんだわ」

ズンッ、と地面に手を突っ込み、そこからズルズルと何か巨大な筒を抜く。
知ってるものは知っている。

それの筒の名は「イノーメスカノン」
時空管理局で押収されていたその巨大な大砲を、蒔風はここまで持って来て、地面に潜んでいる間に持ってきたのだ。

後は簡単。
自分の立っている場所に土埃の力で移動させて引き抜くだけだ。

「そっち」

ドォン！！！！

そう一言だけいって、蒔風がイノーメスカノンを最高出力で発射させる。

と、ちょうどその延長線上に、自身のマスター「カレン・オルテンシア」を抱えて屋根を跳躍してきたランサーが現れた。

「ッッッオオオオオ！？」

ドッゴオ！！！！！

そして、直撃。否、直撃というよりは直前で爆発し、二人を飲み込んだと言ったところか。

しかし、結果は変わらない。空中の彼に、避けるすべなどなかった。光が一つだけ走り、煙からランサーが落ち、何とか着地する。

そして光からはカードが飛び出して、蒔風の手に。

カードにはカレンの姿が描かれていた。

「来るならそっちの方向だと思っていた」

「な・・・・・・」

「彼女の持つ礼装「マグダラの聖骸布」は男性に対して強力な拘束力を持つ。それを持ってこられると厄介だからな。いい手だが、それなら最初から用意しておくべきだった」

「なん・・・だと!?」

アーチャーが腹を押さえこみながら驚愕する。

なぜならば、蒔風とカレンに面識はないはずだからだ。

確かに、会話の中に出てきたことはあったし、「ＥＡＲＴＨ」設立の際にその存在を知ってもいただろう。

だが、彼女の持つ礼装や、その能力まで把握していることなどあり得ない。

一体どこで知ったのか。
彼はいったい何者なのか、本気で困惑し始めるアーチャー。

と、話しているところで、蒔風の首元に槍が振るわれる。
それをパシッ、と片手で受け止める蒔風。

ランサーは耐えたと言っても、あの砲撃はあの世界でランクSとまで言われる威力を持っていた。
その直撃でカレンをなんとか庇おうとまでしたのだ。一番最初の攻撃、これまでの移動。

全身のダメージは、すでにかなり溜まりこんでいる。

そのランサーにイノーメスカノンを真上から降り降ろして叩きつける。
ランサーはそれを槍を横にして頭上で受け止めるが、ベキョ！！と巨大な砲首がへし曲がり、イノーメスカノンが爆発した。

その爆破に吹き飛んで地面に倒れるランサー。

現状を見て、五体満足なのはセイバーのみ。
魔術師とはいえ人間の凛や士朗にこの男は手に負えない。
自分は脱出のためとはいえ爆破をゼロ距離で受け、ランサーはダメージを負い過ぎた。

それを見て、アーチャーが覚悟を決める。

「セイバー！！ランサーと凛たちを連れて、この場から逃げろ！！！」

「アーチャー！？」

と、それと同時にアーチャーが一瞬の間に詠唱し、固有結界を発動させる。

そのために魔力を取られたマスターの凛が具合を崩したように倒れ、士朗が支える。
それを見て、セイバーも決心した。

倒れるランサーを抱え、二人の元に向かって更に担いで逃走を図る。
それ止めようとする蒔風だが、すでに固有結界は発動している。
アーチャーの無数の剣が、蒔風に向かって降り注いで行く。

「クソッ・・・心象的世界破壊（イマジナリティ・ワールドエンド）」

それに対し、蒔風も固有結界を展開させ、打ち消してきた。
この場合、打ち消したのは固有結界そのものをだ。

固有結界という魔法に限りなく近い魔術は、世界を侵食するものである。
故に、それを発動させると同時に世界空の修正力が働き、維持するためにはかなりの魔力量と意志が必要になるのだが、こうして固有結界を重複して発動させてしまった場合、それぞれの結界が反発しあい、消滅してしまう。

しかし、その反動は凄まじい。
アーチャーはそのまま地面に倒れ、蒔風は胸を押さえて脂汗をたらしている。

が、それでもやることはやりアーチャーの胸に「天」を投げ放って刺し、その体をカードに変える。
そして、三人を抱えて衛宮家の塀の上から跳躍しようとするセイバーに向かって手を伸ばし、簡易型獄炎弾を三発、正確に放った。

しかし、それは彼女らには届かなかった。

灰色のオーロラが彼女らを覆い、どこかへと連れ去ってしまったからだ。

「ハァ・・・ハァ・・・・ハァ・・・・・あれは・・・・・・・」

そして、そのオーロラが蒔風の前にも表れ、そこから四人の影が現れた。

その四人は

「間に合わなかったか・・・・」

「だが、彼女らは逃がしたよ」

「舜・・・・お前はオレたちが倒す！！」

「もう・・・・私も容赦しません」

世界を旅する仮面ライダー。

破壊者・ディケイド

その仲間だった。

to be continued

銀白ＶＳ英霊（後書き）

遅れて申し訳ないです！！！

ライダー「私がやられた後にライダーがやってくるんですか」

桜「あ、そうなるね」

バーサーカー「■■■■■・・・・・」

イリヤ「文句言わないのバーサーカー。私と桜なんて寝ている間に一瞬よ？」

マークの柄は、全員それぞれの令呪のマーク、でした。

にしても、ここまで書いてると何書いて言いかわからない・・・・・・

とりあえず、アリスは連絡が取れません。
蒔風にやられているのか、それとも・・・・・

カレン「なんで私の事を知っていたのかもわかりませんしね」

桜「そうそう！！なんででしょうか？」

それはこの事件の秘密に結構関わってきます。

イ「え?え?どういうこと!?」

バ「■■■■（正解）」

イ「なるほど!!!」

ラ「わかるんですか!?」

桜「次回、このまま連戦。世界の破壊者です!!」

ではまた次回

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹

響鬼
ハクオロ
エルルゥ
オボロ
ベナウィ
クロウ
カルラ
トウカ
泉戸裕理
泉戸ましろ
応龍
鵺
城戸真司
秋山連
吉井明久
姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太
津上翔一
芦原涼
氷川誠
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
前原圭一
竜宮レナ
園崎魅音
園崎詩音

北条沙都子
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
門矢士
小野寺ユウスケ
光夏海
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
棗鈴
井ノ原真人
宮沢謙吾
来ケ谷唯湖
三枝葉留佳
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
天道総司
加賀美新

矢車想
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
紅渡
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・エ・ルシエ
エリオ・モンディアル

銀白ＶＳ破壊者

「「「「変身」」」」

蒔風の目の前で四人が同時に変身し、明らかな敵意を向けてくる。

「固有結界を反発で無理に破壊してこっちも気分は最悪なのに、ここで来るかよ・・・・」

「あれだけの戦闘をやって、気付かれないと思っていたというのが無理な話さ」

蒔風の愚痴に、海東が答える。

だが彼らが来れたのも、あくまで距離が比較的近かったからだ。

他の増援は望めそうにない。

一応連絡は入れたが、自分たちがそこまで耐えられるかどうかもわからない。

「蒔風・・・お前、どうやってカードに変えている？」

だから、まず話しかけた。

時間稼ぎだ。

一斉には無理でも、連戦を重ねていけば蒔風も倒れるはず。

そのためには皆が来るまでの時間を稼がなければならない。

士の問いに、蒔風が懐から何か小さな機械を取りだした。

それは、ディケイドライバーの外層が取り外され、カードを挿入するスロットなど諸々がまだ取り付けられていない、基盤むき出しの機械。

大きさは大きめの携帯ストラップくらいか。

それを見せ、蒔風が話しだした。

「大ショッカーの巨大基地。その跡地にあったライダーシステム開発室。ディケイド、ディエンドに続く第三のライダーのために作られたのがこれだ」

「大ショッカーのだと・・・・・・！？」

「そう、この「破壊機構」を基本としているのはお前らのと同じ。まあ？これ作ったところでぶっ潰されちまったみたいだからこれしか残ってなかったけど」

そういってそれをしまう蒔風。
そして、次にカードを取り出す。

「で、こうしたわけ。お前はわかってるよなぁ、士！！！経験者だもんな！！！」

「ッ・・・・・」

そしてカードもしまい、士に言う蒔風。
だが、その言葉にユウスケが疑問を抱く。

「待てよ・・・なんでお前がそれを知ってんだよ！！おまえはいなかっただろ！？」

そう、蒔風はあのライダー大戦の詳細を知らないはず。
それどころかそれ以前に、大ショッカーの基地は彼らが跡形も無く

吹き飛ばしてしまったために、跡地もわからないはずなのだ。

「あん?知ってんぞ?仮面ライダー全員でシャドームーンごと基地吹っ飛ばしたのも、ユウスケがアルティメットゴウラムで特攻かけたのも、ドラスに苦戦しながらも勝利を収めたことも!!」

なのに、彼は知っていた。
まるで、どこかからその光景を見ていたかのようにだ。

「な・・・なんで・・・・・」

「ユウスケ、それ以上は言っても無駄だ」

「そう、今の彼はただの敵。そう・・・・ただの敵さ」

そうして、蒔風が呼吸を整えて剣を構える。

それに反応して、彼らも剣や銃、拳を構えて迎え撃とうとする。

だが

「・・・・やーめた。気分じゃない」

「な!?」

「言ったろ?気分最悪なんだ。今戦って増援呼ばれたら確実に倒れる。ここは逃げるよ」

そう言って、踵を返す蒔風。
しかし、士達としては困るところ。

今、蒔風は疲弊している。
倒すなら今なのだ。そのために増援も呼んでいる。

ここで逃がせば、更に被害が出る!!!

そう思った蒔風を、真っ先にクウガが追った。

その背中に向かってマイティキックを放ち、何が何でも足止めするつもりだ。

「待てぇ！！！」

「・・・・・・」

そう来られては、蒔風は避けるか受けるかするしかない。

結果、蒔風はそれを避けた。

ただし、その場から十メートルは横っ跳びして。

「な！？ウオぁ！？」

ドッ、ガゴッ！！！

クウガのキックが不発に終わり、地面にその衝撃が伝えられる。
と、同時に、その地面がまるで落とし穴のように崩れ、大穴の中にクウガが呑みこまれていった。

「なっ・・・ユウスケ!!」

「お前ら見てなかったもんな。土惺竜の土、どっから持ってきたと思ってんだ?」

そう、この穴は蒔風が最初の最初に放っていた土惺竜の分の穴だ。
そこの上に、土を固めて乗せていただけ。

歩く走るに影響はないが、ライダーのキックには耐えられず崩壊したのだ。

「おまえっ!!」

「ダーディーな戦いならお前も得意だろ?セイバーにも言ったがな、オレの最も得意とする戦闘は正々堂々、真っ向からの派手なぶつかり合いじゃない。オレが得意なのは!!」

そういいながら、蒔風が「青龍刀」と「獅子」を手に持って突っ込んでくる。
そしてそれをディケイドに振り上げ、そうしながらも蹴りを放って突きとばし、左のキバーラに切りつけ、右のディエンドには柄の後ろで殴り飛ばしていた。

「卑怯、外道の暗殺だ！！！勘違いしてんじゃねぇぞ！！！」

≪≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＢＬＡＳＴ！≫≫

ディエンドとディケイドの銃撃が、蒔風に向かって数十発叩き込まれる。
それを畳返しで防ぐ蒔風だが、その壁の一面が吹き飛び、キバーラが剣を構えて突撃してきた。

その攻撃にスウェーで躱し、そのまま地面に仰向けに転がってキバーラの腹に両足で蹴りをぶち込む蒔風。衝撃に、キバーラの体が浮く。
即座に蒔風が立ち上がり、浮いている体に拳をブチ当て、その手か

ら剣が宙に飛び出していった。

「知ってるぞ。仮面ライダーキバーラ。だがお前では相手にならん」

と、吹き飛んでいくキバーラを視界の隅に回し、ディケイドに向かう蒔風。
ライドブッカーをソードモードに変え、ディケイドが蒔風の剣を受け止めて鍔競り合う。

そこに、蒔風の背後からディエンドが回し蹴りを放ってきた。
それを横に転がって避け、銃を取り出してディエンドに向ける蒔風。

が、そこで気づく。

（キバーラの剣が落ちてこない！？）

ドンッ！！！！

その疑問とともに首筋に悪寒が走った蒔風が、横に転がるとそこにタイタンフォームになったクウガがタイタンソードを地面に突き立てて着地してきた。

おそらく、あの穴からドラゴンフォームの跳躍で脱出し、空中のキバーラの剣をつかんで超変身、機会を狙って強襲をかけたのだろう。

「くそっ、外した！！」

「ユウスケ、大丈夫か？」

「ああ・・・夏美ちゃんは！？」

「吹っ飛ばされてノビてるだけだ。まだ平気だろう」

宮邸の塀を見ると、そこにキバーラがぐったりとはしているものの、変身も解けずまだそこにいた。
それを見てクウガがホッと安心する。

「さて・・・ああいう戦いができんのがお前だけじゃないってのを見せてやる。海東！！！」

「ああ！！！」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

と、そこでディケイドがクロックアップに入る。
ライダー大戦で習得した他ライダーの能力使用だが、それに蒔風は驚くこともせず、姿の消えたディケイドを無視してディエンドのほうへと向かっていった。

（クロックアップしているあいつの姿は見えているし捕捉している。無理に追うより、今は厄介なディエンドをつぶす！！！！）

その考えで、まずはほかのライダーを呼び出してこれるディエンドのほうに標的を決めて突っ込んでゆく。
対して、ディエンドは近接はできても、やはりもっとも得意なのは銃撃による遠距離だ。
直接格闘の戦闘は相手を翻弄するものでしかない。

だから、ディケイドはその蒔風を見てその眼前に割り込んだ。

しかし

「墳ッ！！！」

「なっ、くそっ！」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！》

蒔風が攻撃の一瞬のみ加速開翼し、ディケイドを裏拳の一撃で弾き飛ばす。
無論、クロックアップ上ならまだ普通の行動速度なので、それをインビジブルで緊急回避するディケイド。

が、これでディエンドまでの間に障害物はなくなった。

クウガが後ろから走ってくるが、間に合うまい。

「もらったぁ！！！」

「ふっ」

拳を握り、一撃粉砕の剛拳をディエンドに突き出していく蒔風。

と、それに対してディエンドはカードを装填。引き金を引いて発動させる。

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ》

「インビジブルか！！」

「残念、違うよ」

《ＳＬＡＳＨ！！》

ザシッ！！！

蒔風とディエンドが交差し、蒔風の胸に袈裟切りに血が噴き出す。胸を押さえ、うずくまりながら振り向くと、ディエンドライバーの銃口からは青いエネルギーが刃のように出ていて、銃剣として存在していた。

その刃はすぐに消えたが、蒔風はそのカードの存在に驚愕していた。

「ディエンドが・・・・「スラッシュ」のアタックライドだと！？」

「カードは常に進化していく。僕もこの間大きなお宝を手に入れてね。そのおかげでいろいろと用途が増えたのさ」

「チッ・・・・！？」

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

と、その蒔風に向かってホログラム上にカードが伸びてきて、それを赤い光弾が通過して襲い掛かって来た。

それを地面を転がって避ける蒔風だが、爆風に身をあおられて吹き飛ばされてしまう。

「がっ・・・あ・・・・・」

「大丈夫か？海東」

「ああ、ヒヤッとしたけどね。もう彼とは真正面に戦いたくないよ」

全身を襲う衝撃に苦しげな声を出す蒔風。
ディエンドとディケイドがその蒔風を見て警戒しながらも最後にしようとし、クウガがキバーラを担いで集まって来た。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・」

「終わりだ。蒔風。時期の増援も来る」

「まだだ・・・・・まだ終わらんッ！！！！」

そう叫んで、蒔風が四人に突っ込む。
その蒔風にディケイドが銃撃を、ディエンドがライダーを召喚して防ぐが、全く止まらない。

銃弾をすべて弾き、サソード、タイガ、ラルク、そしてライオトルーパー五体を斬り消し、蒔風がついに到達する。

キバーラを担ぐクウガに向かって圧水を放出、彼らを吹き飛ばしたうえで、ディケイドに向かって手刀を振り下ろす。
その背後からディエンドが引き離そうとパンチを繰り出してきたが、蒔風は一回転してディエンドの顎を蹴りで捉えて吹き飛ばし、そのままディケイドにもう一度、今度は左の手刀で首を相手の左から狙う。

それをガンモードのままのライドブッカーで受け止めるディケイドだが、その威力にライドブッカーにヒビが入った。

「な・・・・・」

「ガアアアアアアあああああああああああああ！！！！！」

そして咆哮を上げ、右の拳でディケイドの側頭部を殴り地面にたたき落とす。
バチバチと音を立て、そのマスクが砕けて士の顔が半分ほど見える。

「士！！！」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「なロォ！！！！！」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＭＥＴＡＬ！》

膝立ちになり、何とか立ち上がろうとしたディケイドに、蒔風が剣を振り下ろす。
それをアタックライド・メタルで体を高質化して受け止めるディケイドだが、マスク部分の破損が響いているのかその硬度は十分に発揮されていない。

「士ァ！！クソッ！！！」

「まずい！！」

自分の肩にぶつかったままになっている蒔風の剣を両手で握りしめ、動きを止めようとするディケイド。
だが、徐々にその剣はずり落ちてきて、ディケイドを切り裂こうとしている。

「フーーッ、フーーッ、フーーッ・・・・・・」

「つッ・・・ガッ・・・・」

その状態で、士は考えていた。
蒔風のその目が、あまりにも必死だったということに疑問を抱いたからだ。

士はその目を知っている。
皆の記憶から消え、消滅してしまう世界を救うためにライダーと戦っていたあの頃の自分と同じだと。

そして、この戦いの意図に――――――――

「蒔風・・・・まさかお前!!!」

「ッッッ！！！！？？？ゼリャァッ！！！！！」

斬ッ！！！！！ドンッ！！！！

その言葉に蒔風が目を見開き、ディケイドの身体を切り裂いて消滅させる。
その姿がカードになって蒔風の手に飛び込んでくるが、それよりも蒔風の様子がおかしい。

まるで何かを探しているかのように上空を見上げ、焦っているようにも見えた。

が、その蒔風にクウガタイタンフォームとディエンドが迫ってきている。
クウガの突き、カラミティタイタンを脇に挟んで受け止め、ディエンドの銃撃をタイタンの背中を向ける事でそこに着弾させてガードする。

「小野寺君！！」

「大丈夫です！！それよりも・・・こいつを！！！」

「・・・・・クソッ！！」

と、士をやられた事で激昂する彼らを見て、蒔風がついに逃走する。
クウガを投げ転がし、ディエンドの銃撃をよけながら、衛宮邸の塀に向かって走った。

しかし、その勢いがガクンと落ちた。
見てみると、足をキバーラが掴んで止め、その場から逃がさないとばかりに踏ん張っているのだ。

「チッ・・・邪魔だ！！！！」

ドンドン！！とそのキバーラに向け、銃弾を撃ち込む蒔風。
その体が光となって、彼女もまた、カードへと消える。

そうして、塀に飛び乗って跳躍する蒔風。

彼の姿が、夜の街へと消えていく。

――――――

変身を解いた海東とユウスケ、衛宮邸で待機していると、そこにデンライナーが走り込んできて中から理樹と電王メンバー、泉戸裕理とましろ、更には応龍と鵺が出てきた。

「大丈夫!?」

「オレらは・・・でも、士と夏海ちゃんが!!!」

「舜は?」

「逃げたよ。でも、怪我は負わせた」

質問する理樹に、簡単にだが説明する二人。

と、そこで理樹が翼を広げ、何かの機器を取り出してそのモニターを見る。

「それは?」

「あれは翼人の力の波長を測る装置。それをああやれば、探知する

こともできる」

ユウスケの質問に、裕理が代わりに応える。
理樹は何かに集中しているようで、そのモニターを見続けている。

「・・・・・・どうやら、ここ以外で翼人の力は使ってないみたいだね」

「怪我は負わせたんだろ?じゃあまだ近くにいるかもしんねぇ!!」

「そうやな。見つけ出して、一発シメたろ!!!」

「うん。ここに来るまでに、冬木市を取り囲むように鵺が結界を張ってくれたから、この街からは出れないはず。追おう」

そう言って、理樹が機器のモニターの映像をみんなに送り、リンクさせる。
全員の手元辺りに、モニターが浮いて街の地図とが映し出された。

「今ここで、終わらせる。もうこれ以上は、やらせない！！！」

to be continued

銀白ＶＳ破壊者（後書き）

皆さま申し訳ございませんでしたぁ！！！

昨日はなにも言わずに更新せずに・・・・・

いえ、実はですね？こういった経緯があるのですよ。
まあ言い訳ですが、聞いてください。

いつもはこの小説をメモ帳で書いてフォルダに保存するのですが、昨日はノパソから移したからそのままＵＳＢメモリで書いてたんです。

そして、保存。
ＵＳＢメモリ内には、もうデスクトップに移してしまったいらない書きかけデータがゴロゴロ。

よし、スッキリさせよう。
ドラック、右クリックからキーボード「Ｄ」「Ｙ」

ハッ！？

そこで気付きました。
残ってるのがいらないの。

おや？さっき書き上げたのはどこだろうか？

ＵＳＢメモリだからごみ箱にも無い。

絶望しました。
鬱になりました。そのままもう一度書きあげる、活動報告するといった気力を失い、そのまま半泣き状態でベッドにダイブ。

本当に申し訳ございませんでした。

と、ここで本編の話に戻りましょう。
なんだか続いてしまった、今回の話。
次回は都市逃走編ですね。

ディエンドのスラッシュは前々から考えてました。奇襲にはもってこいじゃないですか？

今回、蒔風の一番の痛手です。
海東、今回のＭＶＰ。

士「そんなことより、オレをいきなり消すとはいい度胸だ作者」

夏海「そうです！！主役ライダーで一番最初にやられてしまっては、士君が可哀そうな子です！！！」

士「お前それはヒデェだろ！？」

ナ「いいんです！！そこで笑ってなさい！！」（グキッ）

士「あはははははははは！！！クソッタレぇぇぇえええっはっはっはっはっはっは！！！」

いやぁ、正直ディケイドは速攻で負けますよ？士自身は多分そんな

に強くないし。
彼がライダー達の中でタメ張れんのはディケイドの作られた理由がライダーの破壊だからだし。

ナ「まあ・・・劇場版でもRXに剣技でぼっこボコでしたけどね・・・ん?なんで私「ナ」なんですか?カタカナ?」

全表記してみる?ほい

ナツミカン「・・・・・ほう・・・・・」(ゴキッ)

夏「作者は滅んだ・・・・・次回、捜査網脱出!!!ではまた次回!!!」

逃走の銀白

冬木市、都市部の裏路地。

そこで蹲る、一人の男。後ろを振り返るとそこには点々と赤い血が残っている。

「結界・・・・この気配は太転依・・・鵺のものか・・・・・・」

上空を見上げ、一見して何もないように見える空に何かを見て蒔風が呟く。
更には空からも探しているのか、理樹の翼や応龍の姿もちらちら見える。

蒔風がビルに身体を預けながらズルズルと歩んでいき、ある一角で座り込んで胸の傷を見る。

袈裟斬りにされたその跡は、使用者がディエンドというのが幸いしてそんなに深くはない。
だが、その大きさには目を見張るものがあって、放っておけばじきに血が足りなくなる。
それはここまで残ってしまった血の跡を見ても明らかだ。

（ここまで逃げてこれたけど・・・・結界内で力を使えば嫌でも探知される・・・・だが・・・・・）

蒔風はここまで逃げるのにたいした力を使っていない。
というか、使えないのだ。

そんなことをしてはやがて来るであろう増援に見つけてくれというようなものだし、そもそも体のコンディションだって一気に崩れる。

とにかく、なんとかしてこの血を止めなければならない。

蒔風は覚悟を決めて、剣を取り出す。

「林」と「山」を取り出して、その柄と柄のお尻をつけて、地面に突き立てる。

すると、それを中心に小さなドームができ、蒔風を包み込んだ。

「林」の効力でバリア上のドームができ、「山」の効力で治癒効果が出たのだ。

本来「山」だけでは自分に突き立てても効果は得られないが、こうすることで幾分か回復を見込める。

胸の傷と、ライダーに突かれた肩の傷が徐々に言えていき、出血が止まる。

だが同時に、彼は自らの居場所を、ここですよとバラ撒いているのだった。

――――――

夜の冬木を、住宅街の高い丘から見下ろす理樹。

この街は住宅街と都市部に、川でわけられている。
今は二手に分かれて、都市部と住宅街を捜索しているのだが、中々
足取りがつかめない。

「舜の場所はわかりそう？」

『いや・・・流石と言ったところか、中々わからないね』

『だが、鵺のチビが言うには結界を抜けた人間に大きな力を持った
奴ァいなかったそうだぜ？』

「うん。舜はまだここにいる。全員、気をつけて探して・・・・・」

『理樹！見つけた、血の跡だ！！』

「どこ！？」

『いや・・・見つけたが、途切れてしまっている。場所からして、ビルの屋上に飛びあがって追跡しにくいようにしてるんだろう。上空から見てみてくれ！！』

「わかった！」

ユウスケからの連絡に、理樹が街に飛び出す。
上空で獣の姿になった応龍とも合流し、その背に乗った鵺からも話を聞く。

即興で作ったこの結界は今なお作り上げ中で、時期に蒔風の位置もはっきりと割り出せるようになるらしい。

「小野寺さんが見たのは・・・・」

「あそこだ。で、あっちのビルにも見つけた」

『理樹、こっちの地面にも跡を見つけだが、すぐに消えてる』

「大丈夫、こっちで見つけた」

そうして、徐々に蒔風へと近づいていく理樹たち。

と、そこでモニターが表示され、機器に反応があったことを示した。

「舜だ！反応あり！！」

「微弱だけどな・・・・」

『僕が近い！！行くよ、ましろ！！』

『はい！』

裕理からの連絡があり、一緒にいたましろと共にその地点へと向かう。

だが、そこにあったのは小さな血だまりと、剣の刺さった後だけだった。

「理樹！だめだ、こっちにはもう・・・・」

『裕理！！そこを今すぐ離れるんだ！！！』

「え？・・・・ッッ！！？？」

チュン、ギィ！！

現場に到着し、報告した裕理に、理樹の警告が飛ぶ。
直後、真上からの銃撃に、裕理が強化した手で反応して弾く。

手がしびれたものの、その攻撃を防いだ彼は、ましろに危険が及ばないようにその場から撤退する。

「ま、さか！！！」

『上から見てた！！舜だ！！ビルの屋上にいる！！』

そう、上空の理樹は、屋上からライフルで裕理を狙う蒔風を見ていた。
最初こそ陰で見えなかったが、狙った瞬間殺気を感じ、咄嗟に警告したのだ。

「クソッ！！」

「待て！！！」

奇襲を外した蒔風は、組み立て式のライフルをその場に投げ捨て、ビルの屋上を跳ねて逃げる。
その跡を追う理樹と応龍だが、蒔風が逃げながら銃弾を放ってくるのでうまく接近して行けない。

が、その行く先にデンライナーが通過するように停車し、行く手をさえぎる。
いきなり現れたそれに両手をデンライナーに当て、一回転して飛び越える蒔風。

しかし

「おりゃァ！！！」

「ぐっ！？おぁッ！？」

その屋根の上に飛び出した蒔風をクウガの拳が捉え、叩きつける。
直撃こそ避けたものの、ガードの上から押し付けられるような攻撃に、蒔風のひざが曲がる。

さらに、そのしゃがみ込んだ蒔風に背後からキンタロスが腕で締め

上げるように掴みかかり、蒔風を拘束する。

「はっは！！大金星や！！」

「も～ぉ逃がさねェからな！！」

「うまく釣れたみたいだね」

怪我はあらかた治っても体力までは戻っていない蒔風は、キンタロスの拘束を解くことができずもがくばかりだ。

と、そこに理樹と応龍が追いつき、階段から裕理とましろも合流したディエンドと一緒に上がってきた。

「もう逃げられないよ、舜。カードを出して、今までの事を全部話してもらうから！！！」

これだけの状況で、理樹が宣告する。

大人しく掴まれ、と。

だが、蒔風の目はいまだ鋭く、諦めた様子がない。

「理樹・・・・・」

「・・・・舜、一体何があったんだ・・・・戦いたいっていうなら、模擬戦をすればいいじゃないか!!!どうしてこんな・・・・」

「ものの見方が甘いな、理樹。強者は時に、その程度では満足しないものだ」

「な・・・・・・」

「あと・・・・・やはり悲しいな。いくら翼人でも、まだ学生、か」

「え?」

「フンッ!!!!」

「がっ!?」

ゴキッ！！と

蒔風が踵を思い切り、キンタロスの足の甲に叩きつけて踏み抜く。

人体の急所はイマジンにも有効なのか、あまりの痛みにキンタロスの腕が緩み、蒔風が跳躍、更にその頭を踏みつけて宙返りする。
蒔風の視界が逆さになるが、その瞬間に蒔風が両手に銃を持ち、全員を狙って発砲する。

咄嗟ながらもその攻撃は全員防ぐ事が出来たが、蒔風を完全に逃がしてしまう事になる。

「くっ・・・舜は！？」

「逃げ・・・・」

ボコッ、ゴキッ！！！！

逃げやがった。

そう言おうとした応龍の口が、その途中で開かれたまま止まる。
見ると、背中から胸に掛けて蒔風の腕が貫通しており、彼がそれを自覚するよりも早くカードへと消え、その隣で首を折られた鵺も消える。

「ッッ！！！舜ッッ！！！！！！！」

「今度こそ逃げる、か」

ダンッッ！！！という凄まじい足音を残し、蒔風がその場から逃げる。
その踏み込みは、デンライナー全体を揺らして脱線させかねないほどに強かった。

その跡を追おうと、理樹が一人開翼して飛び出すが、逃げ際に蒔風が獄炎弾を放つ。

それを見た理樹は咄嗟にそれをバリアで防ぎ、皆を守る。

だが、その獄炎弾が消える頃には、すでに蒔風の姿は冬木の夜空には居なかった。

to be continued

逃走の銀白（後書き）

なんだか締まらない逃走劇になってしまいました・・・・
でもやることはやってる蒔風。

応龍「オレなんてロクに戦ってないぜ？」

鵺「ワシもじゃ！！どーしてこんなにあっさりなのじゃ！！」

あ、ちなみにアメリも美冬も蒔風が敵というのは知りません。
襲撃の際に「ＥＡＲＴＨ」に呼ばれこそしましたが、あの後どうにか解決したと聞かされて学校生活を送ってます。

応「あいつらはリストになかったからな」

鵺「さすがに巻き込めないからのう・・・・寂しいのじゃ」

応「で、次回は山中での戦いだ」

鵺「どこの山かは・・・お楽しみじゃ！！」

ではまた次回

これ前回忘れてた・・・・・

残りリスト

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
響鬼
ハクオロ
エルルゥ
オボロ
ベナウィ
クロウ
カルラ
トウカ
泉戸裕理
泉戸ましろ
城戸真司
秋山連
吉井明久
姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太
津上翔一

芦原涼
氷川誠
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
前原圭一
竜宮レナ
園崎魅音
園崎詩音
北条沙都子
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
門矢士
小野寺ユウスケ
光夏海
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
棗鈴
井ノ原真人
宮沢謙吾

来ケ谷唯湖
三枝葉留佳
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
天道総司
加賀美新
矢車想
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
紅渡
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ

リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・ル・ルシエ
エリオ・モンディアル

山中襲撃

『逃がしたか・・・・・』

「ごめん、クラウドさん。僕の読みが甘かったみたい・・・・・しかも、応龍と鵺まで・・・・・」

『いや、シュン相手に一度でも捕らえる事が出来たのならたいしたものだ』

「でも!!!」

『理樹。お前の能力は、おそらく蒔風を捕らえる上で一番重要なものだ。また全員の元を回って、警告を促していてくれ』

「クラウドさんは？」

『オレも皆のところを回る。ティファに感づかれると大変だからな・・・こまめに顔を出しに行かないと・・・・・』

ーーー

「じゃあ・・・うん・・・・・わかった。こっちも気をつける。それじゃ」

そう言って、圭一が通信を切る。
まだ完全には慣れていないのか、その手はぎこちない。

「圭一、どうでしたのですか?戦況は・・・・」

「応龍さんと鵺ちゃんがやられたみたいだ。ほかにも門矢さんと光さんが」

「ここもそろそろまずいだろうな」

「そうですわねェ・・・・三枝さんとわたくしでいくつかのトラップは仕掛けましたが、どう見ても心許ないですわ・・・・」

ここは雛見沢村山中
そこにある一つの広い洞窟だ。

その中には理樹を除いたリトルバスターズ、雛見沢分校部活メンバーと、逃げてきたセイバーたちがいた。

「理樹は大丈夫だったか！？」

「鈴、落ち着けよ。あいつがそうやられるはずはねェさ」

「うん、理樹さんは大丈夫みたいだったけど・・・・」

今の報告の内容を皆に伝える圭一。
その内容を聞いて、皆がまた話し出した。

「そういえば、悟史はどうしてんだい？詩音」

「悟史君は診療所にいてもらってます。リストに名前がなかったので、あそこにいれば安心のはずですから」

「にーにーにはこのことに巻き込まれてほしくないですわ」

「我々もいつまでもここに籠城しているわけにもいくまい。理樹君が帰って来しだい、ここを離れなければ」

「そうだね・・・・いくらなんでも村の皆を巻き込めないし、沙都子ちゃんと葉留佳さんのトラップがあるって言っても、舜さんにはあまり意味がないよね・・・・」

「あうあう・・・梨花、大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ羽入。もう私は、絶対に死なないから・・・・」

「真人、わかってるな？」

「ああ、いざとなったら、俺らがこいつらを逃がさなきゃなんねェからな」

ーーー

羽入の言葉に、全員が洞窟から出てどんな状況にも対処できるように体制を整える。
しかし、その瞬間からすでに攻撃は始まっていた。

「・・・・・」

「・・・はぁ・・・はぁ・・・・・」

「なんか・・・息苦しいくないか?・・・・・・」

「これは・・・まさか!!!」

そう言って、レナが手元をハンカチで押さえる。
それにならって皆も押さえるが、すでに吸い込んでしまった量で身体がかなりだるくなっている。

「こ、これは!!!」

「毒ガス!?」

その場の空気には凶悪なモノが振り撒かれていた。
無色無臭の毒ガス。手っ取り早く、それでいて確実性の高い代物だ。

「身体が・・・・重い・・・・・」

「即死性のものじゃないのがまだ・・・・」

ドンッ!!

この状況でまだ何とか立ち上がろうとするが、その中で三枝葉留佳が消えた。
さらに続いて何かが沙都子に向かって飛来するが、それを来ヶ谷が何とか弾く。

飛んできたクナイは沙都子には当たらず森の中に弾かれて消えて行ったが、弾いた来ヶ谷の模造刀は砕け、弾き飛んでいく。

「くっ・・・・」

「来ヶ谷さん!大丈夫ですの!?」

「なに・・・幼気な幼女を守れてわたしも満足さ・・・・」

そうなんでもないように言う来ヶ谷だが、手は衝撃にしびれて動かないし、受け止めるために動いたせいで毒が全身に回り、両手を使ってしまっていたために、さらに吸い込んでしまってもいた。
額には大粒の汗が垂れ、膝をついて蹲ってしまう。

「来ヶ谷さん!!」

「圭ちゃん、行っちゃだめだ!!」

「来るな、圭一少年!!!来ればやられるぞ!!!」

「な・・・」

圭一が来ヶ谷のもとに走り出そうとするが、魅音と来ヶ谷の言葉にその足が止まる。
魅音に引き寄せられて、圭一がどういうことだと聞く。

「狙撃兵のやり口だよ・・・・負傷した仲間をそのままにして、助けに来た人間を狙い撃ちしていくんだ・・・」

「なに・・・・・!?」

見ると、来ヶ谷が沙都子をどの方向から攻撃が来ても守れるようにしゃがませる。
だが、その顔はどんどん悪くなっていくだけだ。

「来ヶ谷さん!!私のことはもう・・・・」

「バカなことを・・・いう物ではない・・・・」

沙都子は来ヶ谷を見てそう叫ぶが、それを認める来ケ谷ではない。
傍から離れないように抱き寄せるが、このままの状況がいい方へと働くわけもない。

そうして、状況が動いた。

だが、それを動かしたのは彼らではないが。

ゴトリ、と重い音がして、来ケ谷の足元に手榴弾が転がってくる。
それを視界にとらえる者の、今の彼女にそれを弾くだけの力はない。

爆発まで、あと二秒か。

そう考え、沙都子に覆いかぶさって守ろうとする来ケ谷。

そして直後に、それが爆発した。

「くるがやッ！！！」

「待て、鈴！行くなッ！！」

それを見て駆け出そうとする鈴を、謙吾が止める。

隣では梨花と詩音が走りだそうとしていたが、羽入に止められていた。

「なんで止めるんだ！！くるがやとさとこが！！！！」

「大丈夫だ！！あの二人はまだ大丈夫だ！！！」

「え？」

「あぶねェことしやがって・・・・筋肉さんがなかったら、どうなると思ってんだ!!!」

爆心地、その噴煙の中から、男の声が聞こえてきた。

真人だ。彼がその巨体と強靭さを以って、二人を爆破から守っていた。

が、そこで来ケ谷が地面に倒れてしまう。

おそらく、体力上の限界だろう。

「真人!!急げ!!!」

「おう!!」

謙吾の声に、真人が二人を抱えてその場から逃げ出そうとするが、

もはやこのままではメリットがないと考えたのか、一人分の人影が、

木々の中から飛び出してきた。

ギギィ！！！

飛び出し、真人を背後から切り捨てようとした蒔風の剣を、謙吾が折れた模造刀を拾って受け止める。
だが、いくら彼がかつて”輝志”の力を使った者とはいえ、この戦力差ではどうすることもできないのだ。

「謙吾さん！！」

「逃げろ！！今こいつに太刀打ちすることはできない！！！」

「・・・・・・・」

謙吾の言葉に、皆がそれでも！と踏みとどまるが、真人はその意思を汲み取り、全員を押し出して逃がそうとする。

「おいバカ！！謙吾を見殺しにする気か！！」

「鈴・・・わかってやれよ。ここで全員がやられるわけにはいかねぇんだよ！！！！」

そう、今、全員の身体は毒によってかなりの制限を受けている。
今まともに動けそうなのは、大柄で毒を少量しか吸っていない謙吾と真人の二人だけなのだ。

だから、逃げる。
今ここで勝てる相手ではないのだから・・・・・

しかし

「・・・・・自己犠牲。立派だが、そう言うのは相手を見てやるんだな」

「！！！」

ドドドドドドンッッッ！！！！

謙吾の背後で、轟音がしてから光が昇る。
その音に振り返ると、羽入と梨花、真人を除く全員が光となって消え、今真人にも七人が迫っていっていた。

「オレに青龍たちがいたってこと忘れんなよ。なぁ？」

「ッ！！貴様・・・真人ォッ！！！！！」

「うォおオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

それを見て、急いで蒔風を蹴り押し除け、真人を助けに行く謙吾。
だが、今の真人は怒り狂っている。

無理もない。
自分が守ってやらねばという対象を、ひとまとめにやられてしまい、そのうちの二人は自分の腕の中で消えてしまったのだから。

そんな真人に切りかかる七獣は、あれだけの事をやったのだから因果応報だが、哀れだと言うほかない。

白虎の腹に拳がめり込み、振るわれた腕が麒麟の首を折り、後ろから飛びかかる獅子を後ろ蹴りで吹き飛ばしてから、その獅子に続いて飛びかかり背中に抱きついてきた玄武を頭を掴んで背負い投げのように地面に叩きつける。
更に朱雀の足を払って仰向けになったところを踏みつぶし、その朱雀から奪った槍で天馬を串刺しにする。
そして最後、青龍に、顔面を数センチ陥没させるほどの拳がブチ込まれて七人が一気に沈黙した。

真人の足元では羽入と梨花が蹲って震えている。
いくら彼女たちでも、目の前の現状にどうすることもできないのだ。

「な・・・・に？」

「真人！！」

「謙吾・・・・俺は・・オレは理樹に顔向けできねぇ！！！」

「今はいい！！逃げるぞ！！！」

「逃がさん！！」

二人は梨花と羽入を抱えてその場から逃げることに全力を注ぐ。
しかし、七獣がやられた事で一瞬気を取られた蒔風が、逃げていく彼らに向かって絶光砲を放とうとする。

だが

「こっちだ！掴まれ！！！」

「な？」

「うお！？」

そこに、小さな恐竜のような馬（ウォプタル）が走ってきて、それに乗ったハクオロとベナウィが四人を拾ってその場を去る。
それでも絶光砲を放とうとする蒔風だが、背後から二刀の刃が迫り、身体を回転させてそれをかわしてその姿を見る。

オボロだ。
彼の両手に握られた刀が蒔風に迫るが、それを回転しながらの回し蹴りで下げ、絶光尖を逃げた真人たちに放つ。

が、それが彼らに当たることはなかった。

白く白い、純白の翼が、その先端に当てられて、軌道を大きく逸らしていったからだ。

「・・・・神尾・・・観鈴・・・・」

「私・・・こういうのは苦手なんだけど・・・・でも、絶対にいけないって言うのも、わかってるから・・・・だから!!!」

そう言って、観鈴が傍らに立つ往人の手を握る。
まるで、それがとても怖いことであると知っていて、その恐怖を押し殺そうとするように。

「わたし、戦う・・・もう誰も・・・悲しいことなんて、さないために・・・・・」

その言葉と同時に、蒔風が周囲を警戒する。
おそらくはすでに囲まれている。

相手は神尾観鈴、国崎往人と、ハクオロ率いるトゥスクルの戦士。
森の中での戦いが、本格的に始まった。

to be continued

山中襲撃（後書き）

圭一「オレらの戦闘シーンは!?」

レナ「はぅ・・・私なんて銃も振ってないよぅ・・・・」

葉留佳「はるちんなんて一言もしゃべってないのに!?」

沙都子「わたくしは足手まといに・・・・」

来ケ谷「私は活躍できたから満足だ。やられたのは心外だがな」

鈴「一発蹴ってやりたかった!!」

詩音「あ～あ、こんな簡単にやられちゃうなんて」

魅音「仕方ないよ・・・あんな状況じゃ・・・・」

はい、皆さんお疲れ様ですたー

全員「ですたー」

いやぁね?あの調子じゃどうにもキリがないので一気にやってしま

いました。
ごめんね！！

沙「そ、そんなことで・・・・」

レ「でも梨花ちゃんは生き残ったから！！」

そうして彼女もやられてしまうのだった

圭「変なこと言うな！！！」

今回も続きますね。
こうしたほうがやりやすいと思った。

来「ふむ、次回はこういう山の中での戦いを本領とした方々の出番だな」

鈴「さらに「よくじん」が来るのか。ようわからん」

あなたの先輩です。ｋｅｙ的に。

ではまた次回

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
響鬼
ハクオロ
エルルゥ
オボロ
ベナウィ
クロウ
カルラ
トウカ
泉戸裕理
泉戸ましろ
城戸真司
秋山連
吉井明久
姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太

津上翔一
芦原涼
氷川誠
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
天道総司

加賀美新
矢車想
剣崎一真
皇月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
紅渡
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・ル・ルシエ
エリオ・モンディアル

銀白ＶＳ純白＆謳者（前書き）

「謳者」は「うたわれるもの」です。

銀白ＶＳ純白&譁者

ギギィ！！！ドンッ！！！

森の中で、剣を撃ちあう音、そして砲撃が放たれたかのような轟音が響く。

蒔風が木々の間を走り、脇の茂みからオボロやカルラ、クロウが攻撃を仕掛け、どこから放っているのか矢も飛んで来ている。
今までの音は、蒔風が攻撃を防ぎ、砲撃で反撃したものだ。

しかし、彼らは攻撃してきたと思ったらすぐに茂みに隠れ、ヒット&アウェイの戦法を崩してこない。

もちろん、蒔風とて最強を名乗っているだけあって、絶対に命中するというタイミングで砲撃を放っているのだが、そこを観鈴が逸らしてしまい、まったくこちらの攻撃が入らない。

その観鈴を狙おうにも、往人が常にそばにいるために攻撃の手を向けられない。

確かに、往人自身の力はそんなに高くない。
人形を操る「法術」を扱えると言っても、その程度では蒔風を防ぐことはできない。
だが、間に一人入るだけでそれは大きく異なる。
そのために手間が、一つ増えるのだから。

もちろん、蒔風がこの山ごと吹き飛ばすような攻撃をすれば意味はないのだが、なぜか彼はそれをしない。

とにかく、彼はその手間の間に観鈴に一撃入れられることを恐れていた。
彼女は翼人の中では非力な方だ。しかしそれでも、一撃をまともに食らえば蒔風もただでは済まない。

ゆえに、今のようなチマチマした攻撃に対してチマチマと返していくしかないのだ。

だが

「クッ・・・ソ！！当たんねぇ上にあっちからはやりたい放題かよ！！！」

「お前相手に、真っ向からは無理だからな」

「少し納得いかんが・・・搦め手で行かせてもらう！！！」

攻撃を繰り出し、そして去っていくオボロとトウカが蒔風に言い放ち、だんだんとその攻撃を入れられるようになっていく。
それに対して蒔風が顔をゆがめ、ついにその脚を止める。

「いっつ！！」

「もらいましたわ！！」

その蒔風に、カルラの鉄塊のような大剣が降り降ろされる。
それを蒔風が前転でかわし、衝撃に地面が吹き飛び、その岩石に顔を覆う。

更に追撃でオボロとクロウが剣を振るい、逆立ちのように避けてから、そのまま足を広げて反撃する。

と、そこに

「オオオオオオオオオ！！！」

「！？　グアぁあああ！？」

巨大なウィツァルネミテアの姿が頭上に現れ、蒔風を巨椀で押しつぶす。

空にその腕を上げ、地面を抉りながらけち飛ばし、蒔風の身体が軽く吹き飛んで行って岩に激突。ガラガラと砕きながら、その中に埋もれていった。

「ハクオロさん！！」

『四人は安全な所に連れて行った！！ベナウィが一緒だ。安心していい』

「よかった・・・・・」

『それと、仲間も来てくれたぞ』

ーーー

そこまで言って、蒔風の背後から、足音と何かが展開されるような音が聞こえた。
首だけひねり、その方向を睨みつけるかのように見る蒔風。

その額に、汗がにじむ。

「青年、覚悟！！」

「なっ！？」

「音撃打！！爆裂強打ッ！！！！！」

ドドォン！！！

背後に現れた響鬼に対し身体を返そうとした蒔風だが、その途中で音撃が叩きこまれる。
結果として身体の左から強烈な二連撃をくらい、ソレが統合されて音撃鼓が炸裂、爆発して破壊的な一撃を以って蒔風を元いたところにまで吹き飛ばす。

「ご・・・バはッ・・・・・（な・・・内臓をやられた・・・・・長くは戦えん！！！）」

蒔風が地面に倒れ伏せ、顔を上げるとそこには見えていたハクオロや観鈴たちがおり、蒔風を見下ろしていた。

「・・・・・・・・・」

「もう・・・・話すことはないんだな？」

「理樹からの報告を・・・・聞いてない見てぇだな？え？」

その言葉に、ハクオロの目が見開かれ、巨大な足が蒔風を踏みつぶそうと下ろされた。

だが、蒔風はそれを転がって避け、そのまま立ち上がってハクオロの足を螺旋状に駆けあがる。

その走った後に切れ込みができ、中から血が噴き出して、ハクオロがひるむ。

腰のあたりまで走り、そこからひるんだクロウ、カルラ、トウカ、オボロらへと真上から突っ込む蒔風。
おそらく、このままならば彼ら四人のうち、どう見積もっても二人はやられるだろう。

しかし

「これで・・・・・っ！？　アぐっ！？」

真上から彼らを狙う蒔風に、矢が飛んできてその脇腹を掠めていった。
その攻撃に、蒔風が宙できりもみ回転し、地面に向かって無様に堕ちた。

「ッ・・・ドリィ、グラァか・・・・たいした腕だ・・・・・」

「カミュとウルトリィが強化してんだ。当然だろ」

「どーりで・・・・」

地面に倒れる蒔風に、オボロ達が取り囲んで元の姿に戻ったハクオロ、走ってきた響鬼もそこに加わる。
その一同が、蒔風に向かって剣や武器を向ける。

「切断まではせずとも、腱は切らせてもらう。悪く思うな」

「因果応報・・・か？はは！！だが・・・・」

「動くな！！！」

オォっ！！！

蒔風の背から、銀白の翼が現れてそれが一気に光り出す。
その光に一瞬目を奪われるが、それでもオボロが蒔風の元いた位置を感覚の身で切りつけた。

が、光が収まり、目を開けた頃には蒔風はおらず、その場に血だまりが残っていた。

「どこだ！？」

「剣は当たった・・・・感触からして・・・・真上だ！！！」

オボロがその手に残った剣で切った感覚から、蒔風の逃走経路を推察、そちらを見る。
はたして、蒔風は確かにそこにいた。

だが、上空だからどうという事はない。
観鈴が真っ先に飛び出していって、そこから逃がさないように衝撃波を撒き散らして突っ込む。

今の蒔風は満身創痍だ。
それに対し、観鈴は万全の状態。

彼女の攻撃は衝撃波たった一つだが、その威力は猛烈だ。
かつて彼女の先祖であった者が、取り囲んだ僧兵数百人をその地形ごとまとめて吹き飛ばしたのだから。

だが、頭から血を流し、脇からは出血し、喉の奥から血がいまだにこみあげてくる蒔風は、苦しそうな顔をしながらもそれに向かって幾分も臆することはなかった。

後ろの腰辺りから何かを取り出し、それを起動させて握りしめると、
それが体内の中に入って行った。

「!?」

「これを使うのはもっと後だと思ってたけどな・・・・・」

瞬間、無数の剣が上空に現れ、彼女たちを一斉に襲った。

ーーー

「こんな・・・・もんかな・・・・・・は・・・・はは・・・・・・」

血だまりの中に、蒔風が立つ。手にはハクオロを始め、オボロ、クロウ、トウカ、カルラ、ドリィ、グラァ、ウルトリィ、響鬼のカードがあった。
しかしながら、この血は彼らのものではなく蒔風一人のものだ。

周囲の木々は幾本か倒れ、突き刺さっている数十本の剣は次々に砕けて消えていった。

「アアアアアアアアアア！！！！」

ゴォン！！！！

その蒔風の右から、暴走したカミュ、かつてはムツミと呼ばれた状態になって殴りかかった。
しかし、その様子はかつての落ち着きはらったものとは違い、黒眼はなく、その表情が激怒のものへと豹変してしまっていた。

そのムツミを、蒔風が両手でその衝撃を受け止めながら、苦しそう

にではあるが呟く。

「これは・・・なるほど・・・・「その人格」の人物には・・・翼人の素質があったようだな・・・・だが・・・・」

バァン!!!

「翼人が転生したところで、翼人になれるわけではない!!!」

ムツミの拳と、蒔風の両手の間で生じていた衝撃が破裂するように吹き飛び、両者を吹き飛ばす。

大きな木に背中を打ちつけるムツミ。

だが、その脇腹にドッ、と短剣が突き刺さって、身体がぐらりと揺れ、カードへと変わってしまった。

その反対側では蒔風が息を切らしながら膝立ちになり、短剣を投げたままの姿になっていた。

観鈴はすでに吹き飛ばされていってしまっている。
あの無数の剣の雨から皆を守ろうとしたのだが、その物量の多さに押し負け、弾き飛ばされていってしまったのだ。

往人はその彼女を守ろうとして飛び付き抱きしめたが、その勢いの強さに一緒になって飛んで行ってしまった。

「ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・・・・やっ・・・・・・た・・・・・・」

そこまで言って、ドサリと倒れ込む蒔風。
意識が遠のく。そうして、最後に見たのは一人の少女の姿だった。

ーーー

「お前・・・・オレが何だかわかってんのか？」

「はい」

「敵だぞ！！！」

「ですが、怪我人です」

「な・・・・・・！？」

エルルゥは言う。

確かに、あなたは敵だ。自分の大切な人を消したし、今までだって何人も。

でも、それでも自分は薬師なのだ。

怪我人を治すのが自分の役目だ。

それは敵であろうと、変わらない。

「ダメだ・・・・ダメなんだよ！！！！オレは・・・・・・」

そのエルルゥに、蒔風が首を振り、剣が揺れる。

「私は、あなたを許しません」

「え？」

「確かに、私はあなたを少しだけ診ました。しかし、それは薬師としてだけです。私個人は、あなたの敵です」

その瞳には、確かな思いがあった。

私は私の誇りにかけて、目の前で傷ついた人を治す。いくらそれが敵であっても。

それでいて、この少女は蒔風に対する敵意を持ったままだった。

一体、どれだけ強い思いなのだろう。

相反する思いを抱きながら、その使命と誇りを全うしきる、その心は。

その想いに、蒔風が驚いたように目を見開く。

そして俯き、短く言った。

「オレは、敵だ」

「はい」

「オレを許せるか」

「現在では、何を言われてもあなたを許すことはできません」

「そうか」

エルルゥは思っていた。

いくら弱っているとは言っても、蒔風を自分が倒すことは不可能だ。
それに、誰かを倒すなんてことが、自分にできるはずがない。

相手は蒔風舜。
世界最強。そして、一級品の暗殺者なのだから。

「それでも、憎むことはできます。私はあなたを許さない」

「そうか・・・ならば安心だ」

俯いたまま、蒔風が剣を収める。

そして

「すまない」

そう一言言って、彼女の後頭部に手刀を当てて倒す。

エルルゥは、痛みすらも感じなかった。

だが、その瞬間の彼は、いつもの彼が悲劇に泣いているかのように、

エルルゥには見えた。

「は・・・は・・・・・・なんだよ・・・こんなんで崩れんなよ・・・・・・」

エルルゥのカードを手に、蒔風が慟哭するように呟く。
その顔は今にもグシャグシャに崩れてしまいそうで、それでいて悪役の一片を残していた。

「せっかくここまで悪役やってんだぞ・・・・・もう賽は振っちまったんだ！！最後までやるしかないんだよ・・・・・・！！！！」

そうして、カードを閉まって、心を練る。
呼吸を取り戻して、飛び立っていく。

揺るがない。
揺るぐわけにはいかないんだ。

一人たりとも逃さない。

これが、オレの正義だから・・・・・・

オレは、こうしないと貫けないから・・・・・・

to be continued

銀白ＶＳ純白＆謳者（後書き）

エルルゥ「蒔風さん、なんだか悲しそうでした・・・・」

ハクオロ「どういう事だ？やはり何が思惑があるという事か？」

オボロ「それはまあエルルゥにしかわからないな」

トウカ「それよりもあの力はなんだったのか、だ」

響鬼「一体何したんだろうねぇ？」

カルラ「ああもう！！一撃入ればどうにでもなると言うのに！！！」

クロウ「あ～あ、やられてしまいましたか。大将は逃げられたみたいですけどね」

皆さん御疲れですたー

全員「ですたー」

マーク

ハクオロ達・・・ハクオロの仮面を正面から見たシルエット（オリジナルで考えました。トゥスクルのマークってありますか？）

響鬼・・・従来のものと同じ

あと忘れていたので
レナ・・・鉈
圭一・・・バット
沙都子・・・紐とタライ
詩音・・・スタンガン
魅音・・・モデルガン
鈴、来ケ谷、葉留佳・・・リトルバスターズのロゴ

今回、何かをちらつかせてみました。
早かったかな?とも思いますけど、これからはまたどんどんやられていってしまうと思います。

少人数ずつだと鬱になってしまう方も多いと思うので、こういうふうにしたのですが、どうでしょうか?

最近執筆が進まない・・・・

ゴジラのＦＩＮＡＬ　ＤＶＤ　ＢＯＸを買ってしまってそれを見てばかりです。
こっちにゴジラ出そうかな・・・・とか思ってみたり。

活動報告にも書きましたが、自分はゴジラから始まった人間だ、と言っても過言ではないほどに大好きなんですよね。

多分いつか出します！！！

そして、この場を借りて謝罪を。

前話での感想で、自分の単純な操作ミスでリュウガ様の、感想を削除してしまいました。

返信を以って謝罪いたしましたが、この場を借りて今一度謝罪いたします。

申しわけございませんでした。

この文章がしつこい、と思われたら、言ってください。
後書きから削除いたします。

ハ「次回、蒔風を知る者」

ではまた次回

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
城戸真司
秋山連
吉井明久

姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太
津上翔一
芦原涼
氷川誠
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー

遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
天道総司
加賀美新
矢車想
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
紅渡
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・ル・ルシエ
エリオ・モンディアル

彼に関して

ある街の一室。
「ＥＡＲＴＨ」支部だった場所だか、本部の壊滅で今は機能のすべてが死んでいる。

そこに、クラウドと理樹、なのは、フェイト、海東、ユウスケ、愛紗、上条と、残った主力メンバーが集まっていた。
彼らが集まったのは、他でもない。「彼」を知るためだ。

何故あんなにも変貌したのか。
そのために、この場には二人の男が呼ばれていた。

「蒔風の知り合いさんたちか。なんの用です？」

「あなたに、訊きたいことがあります」

その二人は、蒔風の友人の中で最も親しそうであった、佳景山と初原だ。
二人が途中で買った缶ジュースを手に、そこらへんのテーブルに腰

掛ける。

「蒔風の事で聞きたい？あいつがどーかしたのか？」

「ばっかお前聞いてなかったのか？あいつが敵になったからあいつの情報が欲しいって話だったじゃんかよ」

「おっけ、把握した」

そう言って、佳景山がどっかりと座り直して話を聞く。

まず、何を知りたいのかを。

「シュンは・・・・いきなり変わったりするような男か？」

「うーん・・・わからん」

「もし仲間を襲う事があったら、どういう事かわかる？」

「わかんねぇなぁ・・・・・」

「・・・・なんでもいい。あいつの行動や、心境で分かるようなものがあったら・・・・・」

「「わかんないよ」」

しかし、いざ聞いてみると、返答は「わからない」の一辺倒だった。
その返答に、理樹が眉をひそめる。

本当に何もわからないのかと。

「わかんないなぁ・・・・あいつのことは数年間一緒にいるけど、
わからんな」

「だなｗｗ。蒔風ってどんな人物？って聞かれても、「わからない」
が一番合ってるｗｗｗ」

「そ、そんなんで？」

「そんなんでも、あいつが楽しいことはわかってるし、オレたちは
別にいいんだ」

「そしてあいつが何かするときは、必ずそれなりの理由がある。オ
レたちはそれを信じて敵になるだけだな」

「信じて・・・敵に？」

「そうだ。あいつのことなんてわかんねぇよ。ホントはすぐに泣く、精神的に弱い、臆病者だってのに、それを隠して強いと豪語してんだぜ？そんな奴の心境なんてわかんねぇな」

「それでも、オレらはそんなあいつを信じてる。だが、敵として立つならあいつは敵だ。あんたらに、そこまでしてあいつをしっかりと信じて敵になることはできるか？」

「それは・・・・」

「出来ないなら、あいつを理解することは止めておけ。やるだけ虚しいぞ」

「中途半端に知ろうとするくらいなら、しっかり憎んで、嫌い、敵になれ。じゃないと、そっちもあっちも辛いだけだからな」

そう言い残して、二人はその場を去って行った。
その背中に、なのはが叫んだ。

「あなた達の目の前に！！大切な仲間が他の仲間を傷つけていたと

いう事実を突きつけられて!!それでもあなた達は・・・・・」

「許さんね。だが、信じもする」

「生ぬるい敵意ではない。本気での敵意だ。しかし、同時に信じる」

「それが・・・・仲間だ」

「なんとも・・・・まだまだぬるいね。「ＥＡＲＴＨ」のみなさん♪」

そう言って、今度こそその場を立ち去る二人。
残った者は、愕然とした。

「信じても敵?そんなこと・・・・」

「いや。彼らならやる。間違いなく」

「これが経験の差か・・・・考えてみれば、オレたちは蒔風と全然一緒に居なかったもんな」

「でも、その友人を以っても「わからない」なんて・・・・規格外すぎるよ」

「あいつが規格外なのは承知の上だ。だったら・・・・」

そこまで言って、クラウドが拳を握って言った。

「オレは徹底的に、あいつの敵になるだけだ」

そう言って、個人のモニターを目の前に開く。
回線を通して、他のメンバーに連絡を取るためだ。

『理樹・・・俺は・・・俺は!!!!』

「ま、真人・・・もう落ち着いて。気にしないで・・・・」

『理樹、悪いがオレも同じだ。オレたちはもうお前に顔向けできない・・・!!!』

理樹の元に開かれたモニターには、真人と謙吾が映っていた。後ろ

にはベナウィも見え、梨花と羽入を介抱している。

『俺たちはみんなを守れなかった・・・・もう、あいつを倒すまで俺たちは戻らない！』

「真人！！」

『守ってばっかじゃ、やられちまうんだよ！！』

『理樹、守るのも大事だ。しかし、攻めなければ守れる者も守れん！！』

「でも・・・そんな危険な！！」

「だが、一理ある」

「クラウドさん！？」

蒔風を追う側にまわるという二人の意見に、理樹は危険だと引き留めるがクラウドはそれに賛成した。
その確かに一理ある意見に、理樹がそれでも危険だという。

「攻めていくのには危険が伴う。だが、そうしなければおそらくシュンは倒せない」

「蒔風は追い、それでいて追われる、か。たしかに有効だな・・・・」

「でも・・・それは！！」

「確かに危険だ。いや、だからこそ、やらねばならないかもしれない」

「・・・・・」

「攻めるぞ、あいつを。もう逃げてばかりではいられない」

ーーー

「ダァッ！！」

「クッ！！！？」

「ハァッ！！！」

荒野にて。

蒔風に対して猛攻を仕掛ける一団があった。

「蓮華様、お下がりください！！」

「ここまで近ければ意味はない！！！私に構わず、行け！！」

それは、呉国の一団だった。

彼らは数が少ないが、その全員が武術の心得を持つものだ。

しかし、その彼らを以ってしても、蒔風の前には敗れていくのみ。

だが、今までと違うのは、倒してもとどめは刺さず、そのまま転がしているというところだ。

「お前らを相手にする必要はない！！！引け！！」

「そうはいかない・・・・北郷を消したお前を、我々が見逃すと思うか！！！」

すでに地面には先頭切って飛び出していった雪蓮を始め、穏、亞莎、明命が倒れていて、残った者が総攻撃を仕掛けているところだ。
だが、周りには何もない荒野。蒔風はその能力で周囲一帯を吹き飛ばすような攻撃で、まったく彼らを寄せ付けない。

「くっ・・・我々では・・・・ダメなのか！！！」

「引け引け！！おまえらじゃあ、役不足だ！！」

そう言って、再び絶光での衝撃を噴き出して一掃する蒔風。
その衝撃に全員が吹き飛んで地面を転がる。

そうして、蒔風がもう誰も起き上がらないことを確認してから、その場を去ろうとする。

しかし

《アクセル！マキシマムドライブ！！》

「！？」

「ハァッ！！！」

ドンッ！！！

仮面ライダーアクセル、照井竜のアクセルグランツァーが蒔風を後ろから襲い、それを腕で受け止めて、転がりながらもどうにか防ぐ蒔風。
そうして起き上がると、そこにはWの二人が立っていた。

「まさか、お前が皆を泣かせてやがったとはな」

「許さないよ。絶対に」

その二人に、蒔風が髪を掻きあげながら目を細める。
彼らはリストのターゲットだ。ここで狙わないということはない。

「そこの二人だけでいい。お前は帰れ、照井」

「そうはできん。お前のやっていることを見逃せるほど、オレはお人好しではないのでな」

「邪魔だっつってんだよ・・・・帰れ！！！」

「断る！！！」

「翔太郎、行くよ」

「ああ、フィリップ」

《サイクロン！》

《ジョーカー！！》

「「変身！」」

《サイクロン　ジョーカー！！》

そうして、風都の仮面ライダーが立ちふさがる。

それに対し、蒔風が腰から何かを取り出す。
前回、観鈴やハクオロ達を一掃した原因だ。

ここから、蒔風からの、そして蒔風への攻撃が始まる。

to be continued

彼に関して（後書き）

今回は誰もやられなかったから一人だね！！

そしてきまりました　、これからの行動が。
いままでは守りに出て、来たら撃退、そして出来れば追い詰めると言った形でしたが、ここから攻撃に転じます。

もしかしたら何か思惑があるかもしれない。でも、敵意は持つ。

彼らにそんなことはできません。
出来るのは一部の人間だけでしょう。前回のエルルゥのような。

だから、今一度決意を。
彼を敵だと、認識し直す回ですね。

そして次回はライダー祭り！！
ドンドン増援でやってきます（予定です）

さらに、蒔風が取り出したモノはなんなのか。

乞うご期待です！！

今回はリストなしです。

ではまた次回！！！

ゴジラおもしれー
今は「ＶＳメカゴジラ」見てます。

荒野にて、Ｗとアクセルが蒔風と睨みあっている。
その蒔風の手には、握れば隠れてしまいそうな大きさのノック式ＵＳＢメモリがあった。

『なんだい？それは』

「なんだいとは面白い。お前らが一番知っているものだぞ？」

そう言われ、翔太郎が一つの考えに行きつく。
照井も同様に行きついたのか、しかし、それに信じられないでいる。

「ばかな・・・そんなに小型の物など、聞いたことがない！！！」

「何言ってんだよ。見つかりやすい犯罪道具・・・爆弾や銃なんてのは見つからないようどんどん小型になってんだぜ？こいつだって同じだ」

そう言って、蒔風が手の中でそれをくるりと回し、ＵＳＢをノックして接続部分を押し出した。

《ワールド！！！》

「ワールドだと！？」

「そのガイアメモリは・・・・・・！！！」

「世界接合の際、どっからあぶれてきたのか・・・・うまくこいつにコピペされたみたいでな。ちょいと融通効かないとこもあるが、これはこれでいい」

「まずいぞ・・・・」

アクセルの言葉に、Wがエクストリームへと強化変身して、ガイアメモリに対抗しようとする。

一方、蒔風が右手に握ったそれをそのまま右掌に握りしめ、体内に埋め込む。

蒔風の身体に淡くオレンジの光が走り、グキグキと首を鳴らして身体の様子を見る。

しかし、その体は一切変化せず、元の蒔風のままだった。

「ドーパントにならねえ？」

「あんないかにもな怪人、街中じゃ目立つだけだ。すぐれた道具は、無意味な変容はしないもんだぜ？」

それに、蒔風の場合は適合率もある。

彼らが関与したガイアメモリ事件で適合率が異様に高い事例があったのだが、その時の適合者はその能力のみを手に入れ、姿は一切変わらなかった。

このガイアメモリは、蒔風にとっての「運命の一本」なのだ。

「フィリップ！！あのメモリは！？」

『わからない・・・検索しても出てこない！！！』

狼狽するWに、蒔風が早速攻撃に乗り出す。

その両手に握られたのは、干将・莫邪だ。

いきなり現れたその武器に、Wとアクセルが驚愕するが今はそんな事で足を止めている場合ではない。

それを手にして、蒔風が突撃してくる。

「くっ、迎え撃つぞ、左！！！」

「わかってらぁ！！！」

そう言って二人掛かりで切りかかるが、蒔風のその剣はその攻撃を受け止めただけですぐに砕けてしまった。
しかし、即座に新たな剣が出現、再び二人に振るわれる。

「あれは・・・いったいどういうことだ？」

『おそらくはアーチャーの投影魔術という物だろう。前に見せてもらった。だが・・・それをなぜ彼が？』

「間違いなくガイアメモリのせいだろうがな」

ギィン！！ギャリリリリリリリ！！！！！

三人の剣が鎬を削って打ち合わされ続けている。
蒔風の剣は相も変わらず砕けては戻りの繰り返しだ。
しかし、そんな中でもアクセルとWは圧倒されている。

最初から剣など捨てている様な、重い一撃。その一撃を受けるたびに、彼らの剣が大きくはじかれるのだ。
無論、蒔風の剣は打ち付けた瞬間に砕け散るのだが、それでも衝撃は伝わってくる。
しかも、相手の剣は無尽蔵なのだ。
その怒涛の攻撃で、アクセルが弾かれた隙に蹴りを食らって転がる。
「照井！！」
「だからお前はハーフボイルドなんだ」
それを見て叫ぶ翔太郎だが、蒔風がその彼に向かって無数の剣を降らせてきた。
一瞬の隙。彼の取り柄であり、弱点でもあるその甘えが、この一瞬を生んでしまった。
「左！！！」
Wに向かって降りかかる数多くの剣が、次々と地面に突き刺さっていく。
その雨が止んだ後に残っていたのは、ぐらりと崩れながら変身が解除された翔太郎とフィリップだった。

「う・・・・く・・・・・」

「ッは・・・・そ、そのメモリは・・・・まさか・・・・」

地面を這うように蹲り、蒔風を見上げるフィリップがワールドメモリに大体の見当をつける。

彼の推測が正しければこのメモリはおそらく・・・・・

「あれは各世界の人物の記憶を持ったメモリだ・・・・!!!」

「なに!?」

「「世界」とはつまり物語だ。物語を記憶するという事はその登場人物の記録に近い・・・・」

「つまりオレたちや「ＥＡＲＴＨ」のメンバー全員の力が使えんのかよ!?」

「残念ながら、そこまで便利なもんじゃねぇ」

フィリップの推理を聞いて、クックと笑いながら蒔風が答えた。

曰く、彼が使えるのは倒して封印した者の力だけらしい。
そして、一度発動させたら使えるのはその時に決めた一人分だけ。
つまり、ほかの者の力を使うには一度取り出して、もう一度起動させるしかないのだ。

「まあそれでも、アーチャーのこれが使えるだけで十分だけどな」

そう言って、蒔風の背後にまるで壁のように剣が出現し、背景を覆い尽くしていった。

「ッ！？」

「無限の（アンリミテッド）・・・・・」

「まずい！！」

「剣舞（ブレイドダンス）」

蒔風の言葉と共に射出されてきた剣が、変身の解けた二人に向かって突っ込んできた。
それをとっさに入り防ぐアクセル。

しかし、いくらアクセルと言えども無数に迫ってくる剣の多さに防ぎきれず、だんだんとその足が下がってきてしまっている。

「照井竜・・・・」

「なんだ!!!」

「僕の相棒の身体を任せてもいいかい？」

「・・・・承知した!!」

「おいフィリップ!？」

と、その瞬間に翔太郎の腰にまだつけられていたベルトからジョーカーメモリが消え、フィリップのベルトに移動する。
そして、彼の手にはボロボロの恐竜型ガイアメモリ「ファング」があった。ファングは彼の呼び掛けに応じてやってくるんので、常に携帯しているものではない。この剣の雨の中を潜り抜けてきて、ここまで機能と外観を残しているだけでも奇跡的だ。

「翔太郎、大丈夫だ。僕らの絆は・・・そう簡単には消えないだろう？」

「フィリップ・・・わかったよ。つきあうぜ、相棒」

《ファング！》

「「変身」」

《ファング　ジョーカー！！》

そうして、フィリップの体に装甲が纏われ、仮面ライダーWファングジョーカーへと姿を変える。
その際、翔太郎の身体は意識をなくし、フィリップの肩に手を当てながら崩れて倒れた。

「いまだ！！」

その変身の衝撃とオーラで降り注ぐ剣が吹き飛び、その隙にアクセルがバイクフォームになって翔太郎の身体を背中に乗せてその場を去って行った。
それを逃がすまいと蒔風は翔太郎の身体に向かって剣を飛ばすが、Wがショルダーファングを発動、肩に出現したショルダーセイバーをブーメランのように飛ばしてそれを迎撃して行った。

『オレの身体に手は出させないぜ？』

「さあ、いくよ、翔太郎」

『ああ、フィリップ』

そうして二人が蒔風に指をさし、いつものように、あの台詞を叩きつけた。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

それを聞き、見、蒔風が一瞬止まり、そしてハァ、とため息をついてから弓を構えて矢の代わりになる剣を出現させた。

その剣は螺旋状に捻れており、まるで蒔風自身の捻れを表しているかのように禍々しかった。

「―偽・螺旋剣（ガラドボルグ？）」

ドッ！！！

そうして放たれた矢は、一直線にWに向かって突っ込んでいった。
炎の軌道を一本残し、大気を焦がしながら迫るその剣を、Wは真っ向から受けようとはしなかった。

まず、回避だ。

Wがその攻撃をその直線上から避ける事で回避しようとする。
そこから一気に走りだし、蒔風へと最短距離で走り寄ってきた。

しかし。、蒔風がそこれニヤリと笑う。
それで避けたつもりなのか、と――

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

ドォン！！！！

Wが外れたように見えたその剣の間横を通った瞬間、その剣に込められた魔力が爆発してその姿を炎と衝撃で覆い尽くした。

それを蒔風が、ただ冷静に、冷えた目つきで見ていた。
これで終わったとは思っていない。、曲がりなりにもWの強化体。
この一撃で終わるとはさすがに思ってはいないが・・・・・

その瞬間、爆炎の中から、炎の塊と何百という銃弾、そして赤と青の残像が目に映った。

「ほう」

だが、そのいきなりの攻撃にも蒔風は慌てず、畳返しでその炎と銃弾を防ぎ、その壁と突き破ってきた残像に対して一瞬だけ剣を交えて後ろに流した。

そうして、背後に立ったのはカブトとガタックだった。

みると、周囲を囲まれている。

煙の中から現れたWの脇には龍騎とG３－Xが、左にはギルスとキバ、右にはナイトとアギトがいた。

「蒔風！！おまえを――――」

「やっとここまでこれた・・・・覚悟しろ――――」

「お前にはこれ以上やらせない――――」

各人が蒔風を囲んで何かを言うが、当の蒔風にはそれが聞こえていない。
蒔風としては、この状況はこう言った思いしか生まなかった。

――獲物がゾロゾロとやってきた・・・・・・

そう片目を閉じ、フッ、と笑った蒔風。そこで、周りの声がやっと

耳に届いた。
しかしそれに今さら反応することもなく、いきなり動いた。

「遅いぞ」

ただ一言そう言って、三方向――正面と左右に向けて畳返しをし、背後のカブトとガタックの超高速ライダーに向かって走り出した。

それに対して二人はクロックアップを発動し、蒔風も加速開翼でそれについていく。
別にしなくてもついていけるのだが、その時間は二秒とあまりにも短い。
さっきのように一瞬の攻防ならどうにかなるのもの、先頭となるとやはりこうしなければついてはいけないのだ。

ツッコんでくる敵に、カブトが足刀蹴りで蒔風の顎を狙って来、バックステップでそれを躱すとそこにガタックがダブルカリバーで切りかかってくる。
それを畳返しで起こした地面を蹴り飛ばして防ぐ蒔風。

飛んできたそれをガタックが難なく粉砕するものの、それの陰に隠れてすぐ横にまで接近してきた蒔風がその腰に触れた。

［ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ］

その瞬間、ガタックのクロックアップが強制解除されてこの世界からはじき出される。

その動きの止まったガタックに対し、蒔風が踵落しでその脳天を踏み砕こうとするが、そこにカブトがクナイガンクナイモードで切りかかってきた。
それに対して、踵落しの落としどころを変更し、カブトに対して振り下ろす蒔風。

カブトは腕を十字にクロスさせてそれを受け止め、片手を降ろしてゼクターのボタンを押す。
1、2、3、とカウント音が発せられてエネルギーがチャージされ、その足にタオキン粒子をまとわせて、至近距離のままカブトのライダーキックが放たれた。

ゴッ、ドォン！！！！

凄まじい衝撃と破壊音を鳴らして、蒔風の身体が吹き飛んだ。
が、頭から血を流し、その視界が真っ赤に染まりながらも、蒔風は標的を定めていた。

吹き飛んだ先、静止したライダーたち。そこにいたのは、ギルスとキバだった。

「なに!?」

「・・・もらった」

ザシュ!!という斬撃音とともに、蒔風が吹き飛んだ勢いを利用してギルスに一閃、剣をふるった。
そしてその体がスローモーションで崩れていく。

カブトとて、その延長線上に彼らがいたことは知っていた。
しかし、誰が想定するだろうか?カブトの渾身のライダーキックをあえて食らい、それを利用するなどという捨て身の攻撃など!!!

［ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ］

そうして、カブトのクロックアップも解け、蒔風も必要がなくなったためか翼を閉じた。

世界が戻る。

突如として現れる蒔風とカブト。
驚愕するガタック、崩れ落ち消えるギルス、目の前の光景に硬直するキバ。

そのキバの腰にあるフエッスルを軒並み奪い取る蒔風。
そのまま彼の背後へと回って彼を羽交い絞めにし、ベルトにいるキバットの口に無理やりそれを噛ませて次々とガルル、ドッカ、バッシャーを呼び出させる。

「なにを!?」

「こうしてもらわなきゃこっちは困るんでな」

そうして、呼び出されたら来ないわけにはいかない彼らはキバのもとへと集まって来た。
その瞬間、蒔風がキバを蹴り飛ばし、光になって飛んできた三体を次々と切り砕いて封印した。

呼び出された際、彼らはキバ各フォームの専用武器へと姿を変えてやってくる。
そこを攻撃されたのだ。抵抗などできるはずもない。

「みんなぁ!!!」

「彼らがやれるかどうかが厄介だった。キャッスルドランごと吹き飛ばしてもよかったが・・・さすがに骨が折れるからな」

「くそ！！タツロット！！！」

と、そこでキバがタツロットを呼び出してエンペラーフォームへと強化変身する。
蒔風は飛んでくるタツロットを狙い攻撃するものの、ナイトとアギトの攻撃で邪魔をされてしまった。

「うざいぞ！！！」

「本望だな」

「蒔風さん、あなたを倒します！！」

そう言って、ナイトがサバイブ、アギトがシャイニングへと変わり、今度はその隙をキバが補った。
しかし、蒔風の攻撃を受け切るにはいくらエンペラーフォームといえども心許ない。

それはそうだろう。彼の本領はエンペラーフォームになることで使用可能になる「ザンバットソード」や、アームズモンスターによるフィーバー技だ。
ザンバットソードはそれ自体の力が強すぎてアームズモンスターたちの補助なしには使えないし、フィーバー技は彼ら自身がいないのでどうしようもない。

もちろん、彼単体でも攻撃はできる。できるのだが、ファイナルウェイクアップには時間がかかりすぎるのだ。それを待つほど、蒔風は優しい人間ではない。

だがまあ、いくら隙とはいっても彼らが強化変身を終えるまでに所要する時間は二秒と掛からない。
キバが蒔風の相手をし始めてすぐ、彼ら二人が攻撃に加わった。
ナイトサバイブとシャイニングアギトの剣、そして、キバの拳。

だが、それだけを相手取っても、蒔風は一切の余裕を崩さない。

（なんだ・・・この手ごたえのなさは!?）

（まるで攻撃が効かない・・・・届かない!?）

「（これは・・・まさか!!!）みなさん!!いったん攻撃を・・・・」

「行くぞ!!皆下がれ!!」

「うぉりゃアアアアアア!!」

アギトが何かに気づき、皆をいったん下げようとするがそこにＧ３－Ｘと強化変身した龍騎サバイブによる遠距離からの爆撃が放たれた。
その攻撃に、三人がその場を一瞬で下がりド真ん中にいた蒔風に直撃した。

「っしゃぁ！！！」

「これで・・・・！？」

ガッツポーズをとる龍騎の隣で、Ｇ３－Ｘが終わったのかと爆煙を見ると、マスク内のモニターが何かを察知した。
それを解析し始めると、なぜか目の前の光景が歪み、足元が揺れた。

「これは・・・・！？」

「みなさん！！これは幻覚です！！！オオオオオオオオオオオ！！！！」

頭を押さえ、立ち眩みのようにＧ３－Ｘがグラつくと、アギトが皆に叫んでシャイニングカリバーを輝かせて何もない空間に振るった。

しかし、そのカリバーは空を切ることなく、ガキィ！！という音とともに火花を散らして受け止められた。

「！？」

「さすがは超能力のアギト。思ったより早く気付いたな」

「やはりそうですか・・・これは固有結界から派生した幻覚！！！」

「ご明察」

そう言って、周囲が歪んで風景が正常のものへと変わる。
そして見えてきたのは、すでに発された後なのか消えていく光と、
蒔風の手にあるカードだった。

「あれは・・・・！！」

「蓮・・・・！！！！」

蒔風の手にあったのは、ナイトのカード。
おそらく、龍騎とＧ３－Ｘによる砲撃銃撃にやられたのだろう。

それを見て、龍騎が激昂する。
ベルトからカードを抜き、それをドラグバイザーツバイに装填、発動させた。

《ｆｉｎａｌ　ｖｅｎｔ》

「オオオオオオオオオオオオ！！！」

呼び出されたドラグランザーの変形したバイクに乗り、炎をまき散らしながら蒔風に突撃していく龍騎。
それと一緒に、Ｗとキバも走り、その上を飛び越えるようにキックを放ってきた。

「ウェイクアップ、フィーバー！！！」

《ファング！！マキシマムドライブ！！！》

「『ファングストライザー！！！』」

「ハァァアアああ！！！」

しかし

「混暗を基に混ざりし二属。雷旺、絶光」

蒔風がその拳に混暗を纏わせ、そこに雷旺と絶光を乗せる事で混ぜ合わせ、一つの力として握りしめる。

「拳閃、雷光拳」

ヒュォ――――――――――――――バァ！！！！！

腰を落とし、深く構えた蒔風が、その拳を構えて中段突きの高さで突いた。

しかし、恐ろしいのはそのスピードだ。

蒔風にとっては一歩踏み込んで拳を出しただけだが、その「一歩」は突っ込んでくる三人を一気に通り過ぎ、同時に何十発もの乱打を浴びせていたのだから。

「音を超え、雷、光を携えた拳は、当たらずともその余波だけで何発もの衝撃を与える」

「が・・・ぐ・・・・・」

「お・・・・・」

「あ・・・あぁ・・・・・」

「吹き飛べ」

ゴシャ！！

ゴンッッ！！

ガッ、ベキョッ！！！

三人が吹き飛び、ある者は岩に、ある者は垂直に地面に叩きつけられ、ある者はきりもみ回転して地面に落下、大地を抉って動きを止めた。

そうして、Wとキバが光と消えた。
彼らは宙でキックを放っていた。そこをあんな反則じみた途方もない威力で吹き飛ばされたのだから、踏ん張るもなにもなく直撃してしまったのだ。

龍騎だけはまだ無事だった。
しかし、サバイブは解け、ドラグレッダーも力なく地面に倒れ込んでいる。

その龍騎に、蒔風が慈悲もなく剣を振り下ろす。

ドンッ!!という音がして、G3－X――氷室誠が光となって消えた。

G3－Xはライダーとはいえ、決して強力なものではない。
ただの機械仕掛けの強化スーツなのだ。

しかし、彼はそれでも目の前で倒れている龍騎を助けようと、その身を犠牲に防いだ。

こうして攻めてきて、彼はわかったのだ。
やはり、警察官（じぶん）は攻める者ではなく、守るもの者なのだと。

その光景を目の当たりにした龍騎は、蒔風の腹に拳をめり込ませて吹き飛ばし、カードを抜いてドラグバイザーに装填した。
さらに、蒔風を挟んで反対側ではアギトが紋章を宙に浮かせ、蒔風にシャイニングライダーキックの照準を合わせている。

《―Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ―》

「ンンッ！！！アアアア

構えを取り、その脚にエネルギーを溜めていく二人。
しかし、二人は顔をあげようとしない。

いつもならば、真っ直ぐに敵を見据えて構えるはずが、今の彼らは下に俯きながら腰を落としている。
もう、彼らには見てられないのだ。仲間が倒れるところも、彼がその仲間を倒しているところも、自分が彼を倒すところも。

もう、憎んでいるのかも信じているのかもわかない、ある種の狂気に彼らは心を襲われていた。

「ハァッ！！」「ダァッ！！」

しかしそんな状況でも。、彼らはキックを蒔風に放った。
蒔風の前後から、同じ角度、同じ高さから二人のキックが放たれて、真っ直ぐに向かってきて、蒔風がそれを見て、小さくつぶやいた。

「心象的世界破壊（イマジナリティワールドエンド）」

瞬間、世界が変わった。
蒔風が法則を読みとり、そのタイミングで指をバチン、と鳴らした。

すると、彼らのキックの角度が変わって、あらぬ方向へとすっ飛んで行った。

彼らは自分の想定していた角度とは違う角度で着地させられ、龍騎は地面にこすりつけられ、アギトは背中から思いっきり打ちつけて地面に落ちた。

そうして、誰もが動かなくなる。
この空間内ではこれが切れるまでは動かない方が得策だ。

何が起こるか、全くわからないのだから。

しかし、ここで蒔風が吐血して倒れる。

一体何の法則が働いたのかわからないが、それと同時に時間が過ぎて結界が切れる。

それと同時に、カブトとガタックが動いた。
その手にハイパーゼクターを握り、それぞれハイパーフォームへと

変身したのだ。

「あーーーー・・・・げふ・・・・くそ」

それをみて　、蒔風が頭をガシガシと書いて口元の血を拭った。

彼らのハイパークロックアップの速度は彼も知っている。

しかし、いまだ彼にもあのスピードは出せないのだ。

加速開翼しても、最大で二秒。

しかも、今はコンディションが最悪だ。おそらくついてはいけないだろう。

だがら、彼は諦めた。

そして右の掌からメモリを出した。

《ワールド！！！》

そうしてもう一度メモリをノックして起動、再び挿入し、その手に武器を構える。

武器は、機召銃マグナバイザー。仮面ライダーゾルダの基本装備だ。

と、同時に蒔風が思いっきり足を地面に踏みつけ起き上がってきた壁で、カブトとガタック、そして龍騎とアギトをまとめて一つの部屋に入れた。
かなり巨大だ。しかも、その中には蒔風までも入っている。天井もどうやったのか塞がれており、彼らは完全に閉じ込められた形になった。

と、そこでカブトが身構える。
どうしたのかと聞くガタックだが、カブトはそのまま言った。

「忘れたのか・・・・蒔風は暗殺のプロだ。この暗闇でやってこないとは限らない・・・・」

「！！！」

その言葉に、全員が背を合わせて全方位に意識を飛ばす。
だが、聞こえてきたのは蒔風のやる気のない声だけだった。

「もうさ、お前らの相手めんどくさいんだわ」

カシ、カシュッ！

そして闇の中から、カードを取り出して何かに入れた音がした。
そして聞こえる起動音。

《－Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ－》

「こういうごちゃごちゃしたの、嫌いなのよね、オレ」

「皆！逃げ・・・・」

「バァい」

ドォオッ！！！！！

蒔風の引き金が引かれ、ゾルダのファイナルベント「エンドオブワールド」が発動してその「部屋」のなかを爆発と炎が包み込んだ。
逃げ場などない。密封された中で放たれたこの超重級爆撃攻撃は、部屋の内部のすべてを焼いて吹き飛ばした。

――――――

そして今向かっているのは、彼らがやってきた方向だった。

（この先にはあいつらが一緒にいたメンバーがいるはず・・・・・・
守り手は登大牙に名護敬介、矢車と言ったところかな？・・・・・・）

そうして一歩ずつ、その標的へと近づいて行く蒔風。
すでにその洞窟のような岩場は視界にとらえている。

それから三十分後には蒔風の手元にカードがさらに集まっていた。
矢車想と、吉井明久、姫路瑞樹、島田美波、木下秀吉、土屋康太の
五人のカードが。

名護と太牙は戦闘不能にして転がしてきた。
彼らをカードにする必要はない。

蒔風の脳裏に、彼らの最後の言葉が思い出される。

――やめて！！

――死にたくない――――

――なんでこんな・・・・・

その記憶に、蒔風が頭を抱えてぐらついた。

まるで呼吸の仕方を忘れたかのような声を出して苦しそうに歯を食いしばり、錯乱したように頭をかきむしった。

しかし、それでも蒔風の目に揺るぎはなかった。

その感情を押し殺し、蒔風はヨロヨロとその場を去る。

次の標的を、探して。

to be continued

銀白ＶＳ仮面（後書き）

今日も遅くなってすみませんでした！！
戦闘シーンを書くのは楽しいんですけど、そのせいで昨日は展開に影響の出る内容を書いていしまって・・・・

マークですが、ライダーはガンバライドと同じです。
明久達は文月学園の校章で。

翔一「蒔風さん、あれは反則ですよ・・・」

天道「まさかああやってハイパーを封じてくるとは・・・！！」

カ・ガーミン「捨て身の攻撃じゃねえか！！あと名前ちげェ！！」

真司「オレ結構頑張った！！がんばったのに！！」

芦原「オレなんて相手がクロックアップだったから何が何だかわからなかったぞ・・・・」

氷川「僕はまァ・・・・なんですか津上さんその目は！！私は決して不器用では・・・・！！！」

渡「皆一瞬だったね」

フィリップ「ふむ、まあ翔太郎は無事だろうから、そちらに期待かな？がんばれー」

ガルル、バッシャー、ドッカ「俺らは！？」

その他「俺ら／私たちもだ！！その他ってなんだァアアアアアア！！！！？？？」

じゃあ・・・つ「その他大勢」

その他大勢「ヒデェ！？ッてか採用すんな！！！」

皆さん御疲れですたー

全員「で、ですたー」

さて、こんかいでかーなーり、削りましたよ？
これで残ったのはかなりいい戦いをしてくれる人たちでしょうかな？

追い詰められてるから、きっと必死だな。

この調子で消すとあっという間に終わりそうなので、多分いつかは
一対一の話もあると思いますね。

ちなみに蒔風が吐血して倒れた時の法則は

敵の攻撃を避ける→直撃分の三分の二ダメージを食らう。です

まあ確かにどちらかと言われればそっちでしょうが、いい法則は発
生してくれなかったみたいですね。

では！！このへんで！！

名護「やめなさい！！・・・私を押しのけて自分が次回予告しよ
うとするのをやめなさい！！ボタンとるぞ！！！」

渡「名護さんはやられただけで封印されてないじゃないですか！！

！」

明久「次回、学園都市」

ではまた次回

名護「予告がァ！？その命、神に返しなさい！！！！」

大きな修正個所を見つけ、いったん削除して投稿し直しました。
誠に申し訳ございません

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
ベナウィ
泉戸裕理

泉戸ましろ
上条当麻
インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか

草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・ル・ルシエ
エリオ・モンディアル

「駄目だよ！！私は絶対に行かせないから！！」

「桃香様は悔しくないの！？ご主人様が消され、蓮華たちがあんなにも叩きのめされてしまったんだよ！！」

「蒲公英の言うとおりだぜ。しかもこっちは星、そして何よりも鈴々が・・・・・」

「桃香様・・・我々には仇討の権利があります。私も仲間や主、そして友人が手にかけられて、黙っていられるほど冷静な人物ではありません。春蘭たち魏はすでに蒔風を追っています。我々も！！」

「ダメ！！もうみんな離れないで・・・誰もいなくならないで・・・ご主人様に鈴々ちゃんと星ちゃんがやられて、それで愛紗ちゃんまで失っちゃったらどうすればいいの！？」

「桃香様・・・・・」

「いつもなら、私も一緒に戦うよ。でも・・・・これじゃまるで・・・」

「・・・・わかりました。我々は彼を追うのをやめましょう」

「！！　愛紗ちゃん！！・・・・・」

そうして、ボロボロになって工事中の「ＥＡＲＴＨ」本部横の学園の一室で、一人の少女が義妹を抱きしめた。
しかし、その瞳は申し訳なさと

確かな決意に燃えていた。

ーーー

「とにかく、ここにいれば大丈夫・・・・・のはずだ」

「上条さん、本当にそれ大丈夫なんですか・・・」

人口３２０万人の学園都市。
その廃棄都市の一角で、キョンや上条当麻をはじめとしたメンバーが集まっていた。

いるのは、ハルヒを除いたＳＯＳ団の四人、上条当麻、インデックス、そして彼女の所属する必要悪（ネセサリウス）の教会魔術師、ステイル・マヌグスに神裂火織だ。

しかし、ついさっきまではここにはもう少しメンバーがいた。
ティアナたち四人のフォワードと、御坂美琴、白井黒子だ。

つい二十分前の事。
学園都市の治安を司る警備員（アンチスキル）や風紀委員（ジャッジメント）に、学園都市に侵入者があったとの連絡が入ったのだ。

それを聞いて、その場にいた者は理解した。

ここに蒔風がやってきたのだと。

無論、それを聞いて黙っている彼女らではなかった。
ここの守りを彼らに任せ、蒔風に攻撃を仕掛けに行ってしまった。

ちなみにステイルと神裂はその後に出てきた。
この場にはいたのだが、どうも科学サイドの二人がいるとどうにもやりにくいそうだ。

「あいつら大丈夫かな・・・・」

「学園都市第三位の超能力者に、瞬間移動の大能力者だぜ？大丈夫・・・だと思う」

「そうですね。それにランスターさん達は選りすぐられたの精鋭です。かといっても相手は蒔風さんですし・・・長門さん、彼らの勝率、大まかでいいのでわかりませんか？」

大きな木箱に腰かけていた長門に、古泉が話を振った。
その質問に長門が一度キョンの方を向き、教えてくれ、と頷くと淡々と言葉を発した。

「彼女らの力と蒔風舜の力だけをみると、彼女らの方が勝っている」

「マジでか！？」

「まあ、あんだけ数いりゃあなァ・・・・」

「しかし、戦闘で勝てるかは話が別。もし彼女らが蒔風舜と交戦した場合、３８手以内に敗北するだろう」

「うそ・・・・」

「ホントかよ・・・」

長門の話に、みくるは怯え、上条が唖然とする。

無理もない。御坂や黒子の力はよく知ってるし、最後の戦いのときや模擬戦の時に見たティアナ達の実力はそれにも負けず劣らずと言ったところか。

そんな彼らが、四十も満たない攻防でやられると言われたのだから、唖然は当然の反応だ。

「しかし、計算通りに行く現実などない。私は、それを知っている」

「長門？」

「・・・私は・・・・信じたいと、想っている」

それでも、長門ははっきりそう言った。
誰よりも戦いの状況が分かっているであろう彼女が、それでも勝利を信じると言った。

もしかしたら、彼女は怖いとか絶望とか言った感情を持っていないのかもしれない。
しかし、キョンは頭の中でその考えを断じた。

違う、彼女は本気で信じているのだ。

出会ってまだ幾ばくも無い、あの少女たちの勝利を――――――

――――――

「わかったわよ。あいつが侵入したのは第１１学区。物資搬入のゲートから侵入したみたいね」

「さっすがお姉様。では、行きましょうか？」

「そうね。でもなんであんたがいるのかしら？黒子」

公衆電話からハッキングをかけ、蒔風が侵入した学区を割り出した美琴が、一緒に来ている黒子の頬を引っ張って問い詰めていた。
黒子はそれに対して「ひたいひたい」と言いながらその手を叩いた。

「あんたはリストに載ってないでしょ！？ここらでもう手を引きなさい・・・あんたまでやられたら・・・」

「では聞きましょう。逆の立場だったらお姉様はそうですかと引き下がりましたか？」

「そういう問題じゃないの！！相手はあの蒔風なのよ！？この人数で行っても勝てるかどうななのに・・・」

「だったら私も行きますわ。それに、私の能力ならば先に逃げて皆さんを逃がすこともできましてよ」

「う・・・・」

黒子の言葉に押され気味の機事が、助け船を求めるようにティアナの方を見た。

視線を向けられ、あ、あたし？と困惑するティアナだが、こほんと咳ばらいをし、黒子に言った。

「あなた、本気で来るつもりなのね？」

「もちろんですわ」

「・・・・わかったわ」

「ティアナさん！？」

「だってしょうがないじゃない。それに、彼女の言い分も一理あるわ。戦力としては申し分ないし」

その言葉に、ぐぬぬぬぬと頭を抱える美琴に、決まりですわねと笑う黒子。

そうして、彼女らは向かう。

その侵入者のあった学区へと。

――――――

い。このペースならまだ順調だが・・・・）

「できれば、早めに済ませたい・・・・・」

そうつぶやいて、ビルの角をまがった瞬間だった。

「リボルバーナックルッ！！！」

ゴッ！！という音が蒔風の顔面から鳴り、その体が吹き飛んで行った。
ぶつかったビルの壁を崩してに突っ込み、蒔風の姿が消えた。

しかしその瞬間、蒔風を吹き飛ばしたスバルの後方から、ティアナのクロスファイアと御坂の電撃が放たれ、一気にその一点へと叩きこまれていった。

そうして十秒ほど叩きこまれた後に

「・・・ストップ。様子を見るわ」

と、ティアナがその攻撃を中断する。
攻撃されたビルの一階部分はすで崩れており、どうしてまだ立っているのか不思議な感じだ。

煙が晴れ、案の定そこに蒔風はいない。
しかし、命中はしていたようで、血の跡が点々と残っていた。

「どこに・・・・・」

それを見たティアナが血の跡を探る。
もちろん、ビルに近づいてなどという愚行は犯さない。その場から見える範囲でその跡を追った。

そして、それが途中で途切れているのを見て、ティアナが皆に言った。

「ここにはもういないか・・・・いや、それで諦める人じゃない・・・」

「ティア、どうする？」

「・・・・キャロ、反応は？」

「近くに舜さんの反応は見当たりません」

「私も、不意打ちなら大丈夫よ。微弱な電磁波出してるから察知できるし」

キャロと美琴の言葉に三秒ほど考えるティアナだが、結論としてだったら善は急げと、彼女らが駆けだした。
ここにいないのなら、きっと狙われるのはあっちだ。

しかし

バゴォッ！！！

走り出してから十歩。
その地点で、美琴の足元の地面から蒔風が飛び出し、アッパーカットを叩き込もうと腕を伸ばしてきた。

が、それは叶わず、黒子によって美琴が緊急回避されて少し離れたところに着地した。

「あっぶな・・・・」

「お姉様、お怪我は？」

「ないわ。ありがとう・・・・でも・・・・」

「行くよエリオ！！」

「はい！！」

その場から二メートルほど離れた美琴の脇を、二人が駆けて蒔風へと迫る。

もちろん、二人ともキャロのブーストをかけてもらっていたし、スバルはすでにいつでも振動拳を放てる状態に、エリオも全身に電気を回して身体能力を底上げしていた。

にもかかわらず、蒔風の攻撃はスバルの身体に衝撃を深く叩きこんだ。

ゴガッ！！！

蒔風はまるでその場にスバルが来ることを把握していたかのように、踵を振りあげて待ち受けていた。
そしてスバルは、その真下にまんまと踏み込んでしまったのだ。

足が振り降ろされスバルがそれをガードするが、あまりの威力に地面が窪み、いきなりの攻撃に膝が崩れた。
しかしそうなってでも、蒔風の踵落としをしっかりと防いでいたスバルはさすがというところだ。

だが、同時にまずい。スバルはまだ振動拳を「完全に」扱いきれていないのだ。
もちろん、以前の蒔風の特訓で拳に集中させて放つことはできたし、あれからの特訓で蹴りでも放つ事が出来た。そこは全く問題なく自由にできる。
だが、まだそれ以外の任意の場所から放つことはできず、上腕をクロスさせて受けている状態では放ちようがないのだ。

無論、全身から噴き出すことも可能だが、それではエリオも巻き添えだ。
そんなことはできなかった。

と、踵落としとそれを受け止めた形のまま固まった二人に、残ったエリオが方向を変えて槍を突き出した。
場所は、蒔風の真背面から。狙うは、背中のど真ん中。

雷(いかずち)が迸り、蒔風に直撃。直後にエリオの槍もそこに突っ込んだ。

しかし、それは蒔風が背に出した「獅子天麟」の鞘で受け止められてしまう。

それでも押されていることには変わりない。蒔風の身体が押し出され、スバルがそれに合わせて身体を返し、蒔風の後ろに回りこんだ。

蒔風にしては支えを失ったようなもの。その身体が前にヨロつく。

それ自体はたいしたことではない。蒔風はすぐに体制を整える。

しかし、まずいのはここからだ。

「喰らいなさいませ！！！」

頭上に黒子テレポートで、どこから持ってきたのかコンクリートの塊を次々と降り落としていく。

それを拳で砕いてすべて粉砕する蒔風だが、そこに再びエリオとスバルが突っ込み、スバルが前に立って近接、エリオがその隙間を縫うような突きで攻撃してきた。

その攻撃に蒔風すらも舌打ちをしてついに剣を抜く。

「天地」と「陰陽」に組み上げて両手でいなし、防いでいく。

が、敵は彼らだけではないのだ。
そうして受けていくと、キャロのアルケミックチェーンが蒔風の腕と足、腰に巻きつき、その動きを止めた。

「行くわよ！！クロスミラージュ！！」

「黒子！！皆と一緒に下がってなさい！！！」

縛りつけられた蒔風の元へと、ファントムブレイザーとレールガンが放たれ、その顔が一瞬焦りに染まった。

しかし、そうしながらも蒔風が迅速に行動した。
アルケミックチェーンが引きちぎれないとわかるとその場にしゃがみ込んで、まず先に来た胸を狙うレールガンを避けた。
次に、誘導性能のあるファントムブレイザーに対してはタイミングを見て再び立ち上がり、真正面からそれを腹部に受ける。

その瞬間、蒔風が全身の力を腹部に回し、胆力を以って腰の軸を捻って、それを受け流した。

「ォァッ！！！」

するとファントムブレイザーは何発もあるにもかかわらずそのすべてが、蒔風の腰に着弾した瞬間、その腰を一周ぐるりと回って真っ直ぐにティアナへと跳ね返されていった。
嫌、実際には跳ね返されたのではない。しいて言うのならば、「腰で掴んで投げ飛ばした」のだ・・・・！！！！

その攻撃を、美琴が電撃で弾き飛ばす。
しかし、弾いたはいいもののそれは二人の周囲に着弾し、二人を土煙に隠した。

「ティアナさん！御坂さん！！！」

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

バキンッ！！

蒔風の咆哮と共に、身体を縛っていたチェーンが砕け、その拳が離れたキャロに向かって放たれた。
拳からは衝撃波のようなモノが飛び出し、それはまるで空気の塊のようにキャロへと激突。

咄嗟に間に入ったフリード（巨大体）もろとも吹き飛ばし、その巨体を光に変えた。
キャロはというと、吹き飛んでフリードとビルに挟まれる前に黒子が救出したので無事だったが、気絶してしまっていて戦闘続行は不可能だ。

と、そこで土煙の中からティアナが飛び出してきてダガーで蒔風に切りつけてきた。その刃を蒔風が裏拳で弾き、魔力で構成された刃が砕ける。
直後、ピタリと背中に触れる何かを感じた蒔風。

冷や汗を感じ、それに対応しようと身体をそちらに向けようとするが、エリオが槍で蒔風の臍の部分にストラーダの石突をめり込ませてその場に縫いとめてしまった。

その速さに、蒔風が一切気付かなかった。
目の前にティアナがいたためというのもあったが、その速さに蒔風は驚愕していた。

「ガッ!?はや・・・・」

「あなたに貫った、強さです！！！！」

「振動拳！！不動破砕！！！！！」

ヴゥン・・・・・ビギギギギギギギッッッ！！！！！

「お・・・ご・・・・・ぐっ・・・バハッァ！！！！！」

そうして、蒔風の背中からスバルの振動拳が叩きこまれる。
打ちこむ衝撃はなく、しかしそれでも全身に廻るその振動は蒔風の身体を内部から隅々にわたるまで攻撃し、甚大なダメージを与えた。

その体がぐらりと揺れ、しかしそれでも蒔風はただではやられない。
地面に倒れ伏す直前、両手を地面に付けて後ろのスバルに足払いを振り、横に倒れ、半ば宙に浮いた彼女の側頭部に向かって、地に付けた両手で逆立ちしてからその頭を真上から踏み抜いた。

地面に亀裂が入り、先ほど蒔風が吹き飛ばされたビルが崩れ落ち、スバルの身体が消えていった。

「げバッ・・・ごホッ・・・・ハア〝・・・・ハァ〝・・・」

蒔風がスバルのカードを手に取るが、その体の状態は瀕死に近い。

彼女のこれは戦闘機人としての能力を利用したもので、非殺傷にはしているもののあまり意味がないのだ。

爆破や砲撃といった手段ならともかく、内部破壊に殺傷も非殺傷もない。

内部からダメージを与えるとはそういう事。どうあがいても相手を潰す攻撃。

そして、スバルはそれを承知で叩きこんだ。

蒔風は全身に細かい傷を負い、頭部からは血を流し、アバラが何本か折れて背骨にはひびが入っているかもしれない。

さらに喉からは血が今も登ってきて吐き出しそうだし、血涙も流していた。鼻血など当然だ。

その光景にすこしだけ哀れそうな顔をしながらも、ティアナは銃口を蒔風に向けて逸らさない。

当然である。部隊長に引き続いて親友までやられた。

この男にかける遠慮、同情はもはやない。

その蒔風はジャケットの下に着ている服を引きちぎって、血を吸って重くなった布を捨てた。
素肌の上に直接羽織っている状態だ。

そして、その下に途方もない傷跡を黒子とエリオは見た。
周囲を蒔風が注意するように振り向いたので、必然的にティアナや美琴にも見える。

その状態はあまりにも陰惨だった。

上体に傷がないところはない。
肩から腰にかけては斜めに切り傷があり、脇腹にも切り傷が。そしてその上体は血が固まっているのかドス黒く染まっていた。

「どうしたぁ・・・怖気づいてんじゃねぇぞぉ・・・かかってこいよ!!剥ぐぞてめえらァ!!!」

シュキン・・・・・・

蒔風がそんな状態で腰から「風林火山」を抜く。
組み立て、片手にそれぞれ「風林」「火山」と握ってその腕をだらりと下げている。

一歩一歩、ダラリとした身体でそのまま歩いてきて、一気に美琴の方へと走り出した蒔風。
地面に付いた刃が火花を散らしてその軌道を照らした。

美琴は確かに学園都市で第三位を誇る超能力者だ。
しかしだからと言って、こんな相手と近接戦闘ができるほどじゃない・・・・・！！！

美琴が蒔風の腕を狙って電撃を発し、その狙いを逸らしていく。
もちろん手加減などしていない。しかし雷旺を操る彼には逸らす程度にしか効かないのだ。
それでも帯電した腕は痺れ、思ったように振れていないのかその顔に苛立ちが見えてきた。

「今よ！！エリオ」

「貫いて！！」

その一瞬の隙。
底をついて、ティアナと美琴が同時に叫び、エリオが雷槍（ストラーダ）を構えて蒔風の身体を貫こうと突貫した。

それを蒔風が後ろ向きに見て察知し、足で踏みこみ、畳返しで防ごうとする。
しかも三枚。これだけの数を前にして、今のエリオのスピードで突っ込めば間違いなくぶつかって潰れるだろう。

しかし、それはなにもせず突っ込んだら、という話だ。

「ストラーダ、フルドライブ！！！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！》

「だアアアアアアアア！！！！！必敵貫砕！！！！！紫電一閃！！！！」

ドンドンドンッ！！ドドドドドッ！！！！！

その突進が三枚の地盤を砕き、粉砕された破片をも爆砕させて疾走する。

元よりの速度、ブースター、そして爆風を背に、雷の竜騎士がトップスピードで蒔風へと迫った。

その空気抵抗で槍がぶれる。バリアジャケットが裂けていく。

バリアジャケットを羽織っているにも関わらずこの風圧。

エリオは必死になって両手でストラーダを握りしめた。

必ず届かせる。

そして

ギャッ！！ガギョギョギョギョギョギョ！！！！！！！！！！

その瞬間、蒔風が発生させたのか地面から触手のようなモノが飛び出て来てストラーダに絡まった。おそらくはその突進を止めようとしているのだろうう。

が、今さらそんな物でブレーキがかかるような代物ではない。

器用なことに、蒔風がワールドメモリで出したその触手――ギルスティンガーが引きちぎられて、ついに障害は一切なくなる。

この間にも蒔風は美琴と交戦していたのだが、それを考えれば相当なものだ。

しかし、ここまでか。

そう思った美琴の意識が一瞬緩み、その瞬間蒔風が腕を伸ばしてその首を掴んだ。
そして真後ろに向け、彼女を盾のように差し向けたのだ。

エリオはそれを見て必死に軌道を変えてビルに突っ込み、美琴と蒔風はその衝撃波で吹き飛ばされて地面を転がった。

そうして、蒔風の手元にエリオのカードが滑りこんでくるも、倒れた蒔風は動かない。

一方、美琴は足を引きずりながらも立ち上がり、ティアナはその光景を愕然と見ていた。

払った犠牲はあまりにも大きい。
しかし、まだ蒔風の手元にカードがあるなら戻せるかもしれない。

そう考え、蒔風の元に近寄っていって手元のカードを取る。
そこに描かれているのはエリオだ。周囲に散っていたほかのカードも集めていくと、その中にはやてやスバルのものもあり、それを回収するティアナ。

と、そこである一つの事実に気付く。

リストに載っていたメンバーは確かに主要人物だ。
しかし、彼が自分たちの世界に来ていたとき、ほとんどはともかくザフィーラやシャマルとの交流はあまりなかったはず。

いや、あったとしても自分はそんなにみていない。
この全員だけが共通の、つまり一緒にいた瞬間。

その瞬間とは――――――

「まさか・・・あのリストは・・・・・！！！」

「ティアナさん！！！！！」

「ッッ！？」

ドシュッ！！！

と、そこで倒れている蒔風の腕だけが上がり、「天」がティアナの脇腹を貫いていた。
その攻撃に、黒子が即座に近寄り、テレポートで剣を能力で飛ばしてから彼女を下がらせる。

脇腹を押え、苦しそうにするティアナが顔を青くさせながら黒子に礼を言う。
その後ろには気がついたのかキャロもやってきていた。

「はぁ・・・はぁ・・・これは・・・・ダメね・・・・・・」

「な・・・・・」

「何言ってるんですかティアナさん！！！」

脇腹を押えながら、ティアナが察する。
その言葉を否定しながら、キャロが簡単ながらも治癒魔法をかける。

しかし、それでも血は止まらない。

どうしたことかと目を見張るキャロだが、美琴が蒔風を睨みつけて呟いた。

「毒・・・・ッ！！！！」

そう、ティアナの血が止まらないのも、その顔がだんだんと青くなっていくのもそれが理由だ。

飛ばされてしまった「天」は見えないが、数百メートル先のその剣にはティアナの血の他に、透明な液体が滴っていた。

「皆聞いて・・・・分かったわよ・・・・あのリストの・・・選考理由・・・・・」

「え？」

「ティアナさん！！喋らないでください・・・・今から病院に・・・・」

「ダメよ！！聞きなさい。もう頭回んなくて私にはわかんないから、あんたたちに伝える。聞いて。自分のことは一番わかってるわ」

そう言って、自分の気付いた情報を伝えようとするティアナ。
そうしている間にも蒔風がヨロリを立ち上がろうとしているが、それにも構わず彼女は言った。

「あのリストは乗ってるのは・・・皆に聞かないとわからないけど、たぶん・・・ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ発動時に近くにいた人間よ・・・・・！！！！」

「！！」

「そ、そうですわ・・・・私あの時はお姉様と離れていましたわ！！」

「他の皆に聞いてみないとわからないけど・・・たぶん間違いないわ・・・それがどういう事かも・・・わからないけど・・・・ぅ・・・」

「ティアナさん！！」

「三人とも、逃げなさい。皆と合流しないと・・・あいつとなんか戦えないわよ！！！」

「で、でも・・・・」

そうは言われても、ティアナを置いてなどいけないキャロは何とかして彼女を助けようとする。
しかし、その肩を黒子が掴む。

「黒子さん・・・」

「これ以上困らせてはいけませんの」

「でも!!」

「逃げますわよ!!お姉様!!」

「・・・わかったわ」

そう言って、黒子が二人の手を取ってテレポートしようとする。

が、その瞬間

「お姉様!?」

「美琴さん！！」

美琴が黒子の手を放してしまう。
だが勢いというものか、黒子はキャロだけを連れて消えてしまった。

「残る・・・か・・・・」

「あんたはここで倒す。先には行かせない」

「ティアナも・・・・・気付きやがって・・・・・・」

その直後、ティアナの身体が光りになってカードへと変わった。
そしてそのカードと、ティアナが回収していたカードをポケットにしまって呟き込む。

「発動したら・・・・どうすんだよ・・・・」

「？　あんた・・・何を言ってんの？」

「・・・・・」

その美琴の言葉に、蒔風はなにも応えずに構えた。

左掌を突き出し、身体を横に向けて右手は腰の位置に握って置く。

「この先に行かねばならん・・・・消えろ、否、消されろ」

「消えんのはあんたの方よ!!!」

そう言って、美琴もポケットに手を突っ込む。

それから数秒後

彼女は「弾丸」を握りしめ、数秒の間を以ってそれが電撃に乗って放たれた。

to be continued

銀白ＶＳ前線＆超電磁砲（後書き）

おかしい・・・なぜかフォワードの話になってしまった。

エリオ「自滅・・・酷いや」

スバル「いやいやいや、あの威力を出して逸らしただけでもすごいじゃん！！！」

ティアナ「今回一番ダメージ与えたのあんたじゃない。まあ、あんなの直撃食らったら誰でもああなるでしょうけど」

フリード「キュクッ！！」

お三方プラス１、御疲れですたー

全員「ですたー（キュクル～）」

今回フリードがやられたのはついでみたいでしたね。

さて、今回の話の流れは！！

エ「まず最初に・・・あれは蜀のみなさんですか？」

そうだね。魏はもう動いているみたいだけど、蜀は桃香の命令で動いてなかったみたい。

ティ「本当は？」

なんだか思ったより少ない・・・あ、やっべ・・・彼女ら出してないじゃん、という事でした。

ティ「やっぱり・・・」

ス「でも絡んできそうだね？」

ええ、あれで黙っていられる彼らじゃないですから。
ちなみに、最初の二人までだけですよ？蒔風がリスト以外の人物を封印したのは。

他の人物たち・・・華琳や季衣、霧島さんは事実が露見されるとまずいから消しただけでしたし。

エ「あれ？名護さんや太牙さんは・・・」

ああ、君は前回更新した先の方を呼んでしまったんだね？

あの後読み直したら、リストになの無いあの二人を消してしまったことに気付いて、慌てて削除、修正して投稿し直したんですよ。
だから彼らは倒されただけで封印されてないようになっているはず。

ティ「死んでは・・・」

ないない。ちなみにその話の前にやられてた呉のみなさんもそうです。

ス「そして気付いた!!リストの内容!!でもこれってどーいうことなの?」

ティ「わかんないわよ。作者だってまだ明かす気ないんでしょうし」

ええないです。
ちなみにこのリスト、ああは言いましたけど基準は作者の気分なので「あれ?」と思ったら感想でどうぞ。
なのはや恋姫で愛紗やユーノが載ってないのは次回で説明しますので。と言ってもわかると思いますが。

ティ「そして次回は御坂さんとの戦いになるのね」

ス「あ　た　し　の振動拳でボロボロの舜さん!!勝てるのか!?」

エ「ではまた次回！！！」

ああ！！私の台詞！！・・・二回言っとこう
ではまた次回

ス「ティア～！！あ　た　し　の！！振動拳で――――」

ティ「わかったわよ！！うっさい！！！！」

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
上条当麻

インデックス
御坂美琴
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理

広原雪子
田島賢久
百野栞
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？
キャロ・ル・ルシエ

銀白VSレベル5

「黒子さん！美琴さんが！！」

「わかってましてよ・・・でも・・・・・」

そう言って、キャロを抱えながらビルの屋上をテレポートで飛び越えていく黒子。

今の彼女らがあそこに行くことは自殺行為に近い。

それに、あそこに美琴が残ったのは明らかに時間稼ぎだ。

もちろん負ける気などないのだろうが、もし三人で逃げた場合蒔風は即座に十九学区のほうへと到達してしまうだろう。

そうなっては意味がない。

だからこそ、黒子は戻らずに皆を逃がすことに決めた。

（お姉様、どうか御無事で・・・・・！！！）

自らの慕う「お姉様」の無事を祈って。

―――――――

それ自体は大した威力はない。
しかしこうも立て続けに打たれるとダメージは蓄積し、今の体には堪えるのだ。

だから、短期決戦。
一瞬のうちにこの間合いを詰め、反撃を許さぬ最速の一撃で美琴を叩くしかない。

そう思い、蒔風はまず最初に距離を取った。
その距離、五十メートル。レールガンの射程距離だ。
しかし、美琴はレベル５の第三位。
その地位にいる理由は威力もさながら、その能力の多様性にある。

「そんなんで・・・・」

「チッ、やはりかよ・・・・」

「逃げ切れると思ってんの！！」

ズシャァ、と砕けたコンクリートの下の地面から黒い砂――砂鉄がかき集められ、それが剣か鞭のように美琴の手に振動音を鳴らして現れた。
そしてそれを振るい、蒔風に襲い掛かってくる！！

それに対し、蒔風はやはり回避ばかりを取るしかない。
周囲のコンクリートが抉り削られ、それが粉になってさらに砂鉄を生み出していく。

（まずい・・・これはすぐに・・・・・思い出せ・・・思い出せ蒔風舜!!決して御坂も万能無敵ではない。絶対に追い詰められたことがある・・・・記憶をたどれ。思い出せ思い出せ思い出せ・・・・・）

「あったぜ・・・・お前の弱点ッ!!!」

そう言って、必死になって頭を回していた蒔風が一つの考えにたどり着き、それを実行し始めた。

美琴の砂鉄ブレードの隙間を縫って走り出す蒔風。
もちろん、その走りは疾走感あふれるものではなく地面を転がった無様なものだが、そんなことを気になどしていられない。

そうして美琴との距離を詰めた蒔風が、勢いあまってコケて地面に

倒れる。
が、もう距離は十分だ。
彼女がブレードを振るってくるが、それよりも早く蒔風が地面に触れて力を発動させる。

「土埃粉塵！！！」

ドォン！！！

その瞬間、粉のように細かくされた土が周囲を覆った。
それを見て美琴は目くらましかと思い、そのまま攻撃をしようとするが、さらなる異変に気付く。

周囲を壁で囲まれているのだ。
それは畳返しのレベルではない。おそらくはさっきの粉塵のタイミングで土埃の力で作った壁だろう。

そうして、美琴は気づいた。今この状況の不味さを。

「粉塵に満ちたこのフィールド。ここでおまえの力を使えば・・・・

ククク、どうなるかわかるな？」

「・・・粉塵爆発・・・・・・・・・！！！！」

そう、蒔風はこれをして美琴の能力を封じにかかった。

美琴の能力はエレクトロマスターと呼ばれるように、言わずもがな電気だ。

そしてそれは火花とは切っても切れない力でもある。

電撃を放っても、下手をすれば磁力を使っても、何をしてもこの空間では爆発につながるかもしれない。

（周囲に落ちた鉄骨や廃材をかき集めてドームを作るか？いや・・・それよりも早く爆発が襲いかかるし、そんな全方位を守るようなものはとっさには作れない・・・そもそも、それがきっかけで爆発したら元も子もないし・・・これ、私の能力全部・・・ッ！！！）

ゴッ！！！！

その中で、蒔風が拳を振るって美琴に殴りかかった。

そしてその首をつかんで締め落そうとしてきた。

もしここに風が吹けば粉塵を吹き飛ばして打開できるだろう。

しかし、周囲は壁に囲まれているし、もともとここは廃ビルに囲まれた場所だ。唯一開いている真上からの風など、望めるわけもなく。

美琴の体が消えゆくのに、そう時間はかからなかった。

――――――

体力、体調的に見て使える能力はあと一つといったところか。

そんな状態ではとてもではないが上条たちのいる場所には行けない。

今はとりあえず体を休めなければなるまい。

そう思って蒔風が踵を返してその場から去ろうとする。

しかし、直後にその足が止まる。

なぜか

それは――――――

「今ここで何をしていたのですか、とミサカはあなたに問いかけます」

「・・・・・・妹達（シスターズ）・・・・・！！！」

そこにいたのは、御坂美琴そっくり・・・いや、そのものと言っていい存在「妹達（シスターズ）」だった。路地からこちらに出てきて、その手にはゴム弾を装填したマシンガンが握られている。

詳しい説明は省くが、彼女らはある計画によって作られた御坂美琴のクローンだ。「達」というからにはそれなりの数がおり、学園都市には全部で六人いる。
持つ力こそ彼女に及ばずレベル2～3程度だが、その力は当然一般人のそれを凌駕している。

無感情な瞳が、蒔風を見つめる。
自分たちの存在を少なからず知っているということに彼女は驚いたようだが、特別それを表に出すこともなく蒔風になおも銃口を向け続けた。

「お前らにかかわると面倒な奴が出てくるから早めに済ませたかったのに・・・・・！！！！」

「さっきまでここで感じていたお姉様特有の電磁波が二秒前に途絶しました。と、ミサカは自分の感じたことを素直に言いながらあな

たに更に質問をします」

（不味いまずいマズイ！！今のオレじゃあこいつ「ら」どころかこいつ一体にも負ける勢いだってのに・・・・）

「今ここであったことの説明を求めると共にその手に持っているカードを見せてもらえませんか？と、ミサカはあなたに近づきます」

（しかもなによりまずいのは・・・ここでこいつに手を出したらもっと厄介な奴が来るってことだ・・・それだけは絶対に防がな・・・）

「返答がないので実力を行使します、とミサカは目標に向かって攻撃を開始します」

パパパン！！！

エアガンのような音が連射され、ガスの噴出で蒔風にゴム弾が飛んできた。
それを避けながらも、背中を向けて逃げようとする蒔風だが、膝、続いて肩に命中し、うつ伏せに倒れてしまった。

ゴム弾とはいえ、かなり痛い。

その蒔風に彼女が近づいてきて、落ちてしまった美琴のカードに手を伸ばして取ろうとする。

「ッ！！らぁッ！！！」

その瞬間、蒔風が撥ねるよう動いた。
うつ伏せから転がって仰向けになり、その回転で足を振りあげて妹達（シスターズ）の銃器を破壊する。

そしてその場のカードを手にとって、走り出した。

（一旦引くしかねぇ・・・・この街で一晩あたりか過ごさないと、戦うにしても街から抜けるにしても不可能だ！！！くっそ・・・もっと速く動け横の足・・・・・・・・ッッ！？）

が、その思うように動かない足はすぐに止まった。

妹達（シスターズ）の攻撃か？　いいや、違う

体力に限界が来たか？　それも違う

ならば諦めたのか？　断じてない

蒔風が足を止めたのは、目の前に現れた妙に白い人間が原因だ。

服は何かというとグレーに近い。

何やらメカニカルな杖をついて、こっちに歩いてきたとの男は・・・・・・！！！

「よォお。なァにやッてンだ？テメェ」

「ア・・・・一方通行（アクセラレータ）・・・・・・」

「ッたく、あのチビが大変な事かもッて言うから来てみりャァよ、こいつは楽しいお客さンが愉快なことしてンじゃねェか」

カラン、と

学園都市最強の第一位一方通行（アクセラレータ）が、細い路地からこちらに出てきた。

彼が見ているのは、たった今、少女に蹴りを入れた青年と、それを追おうとして手に怪我を負った少女。

しかも、その手に握ったカードには御坂美琴が映っているわけで・・・・・

「ンだァ？超電磁砲（レールガン）のファンにでもなッたのかよ？」

そう言って蒔風を茶化す彼だが、その目は一切笑っていない。

その一方で蒔風も焦っていた。

（この状況・・・ダメだダメだ・・・・戦えない・・・今の状態じゃ戦えない！！だから早めに済ませたかったんだ！！こんなの来たら・・・・・）

一方通行（アクセラレータ）は紆余曲折あって妹達（シスターズ）を守る事を心に決めている。

そして、蒔風はそれを傷つけた男だ。

そこで、ミサカが一言、彼に告げた。

「その男が持っているカードに、お姉様（オリジナル）がとらわれています」

その一言。

それだけで十分だった。

この男は御坂美琴を消した。

それが一体どういうことなのはか全くわからないが、あのカードに変えたらしい。

そして、彼女を狙う奴が妹達（シスターズ）を見逃すはずがないし、下手をすると・・・・

「テメェ・・・ほかにもそォやッて消してンのか？」

「・・・らしくねェぞ、一方通行（アクセラレータ）・・・今さら慈善事業かよ？」

「・・・・・・」

彼はかつて学園都市の深い部分にいた。
その闇の世界で、様々なことをやってきた。
だが彼はその半面、「光」や「表舞台」に属する人間がそう言った「闇」に利用されるのを良しとしない。

だからこそ、この男に彼は挑まなければならないのだ。
いや・・・逆だ。
蒔風はこの男に挑まれてしまった。

もちろん、この男は蒔風が「ＥＡＲＴＨ」のメンバーを消して回っている事など知らない。
ただ、ほかにもこうして狙われているとしたら妹達（シスターズ）の他ないし、ほかにも狙われているかもしれない。

ただ、それだけだ。
彼はそれだけで十分だった。

「おいそこのォ。ここはあぶねェから消えろ」

「・・・・わかりました。とミサカは踵を返してこの場を立ち去ります」

一方通行（アクセラレータ）の言葉に、ミサカが元来た道を戻って行った。

そうして、二人が向き合う。

「テメェには一度借りがあッたよなァ？」

「・・・忘れたね。俺は休みたいんだ」

「つゥれないねェ！まァいい・・・はなからテメェの都合なンざ知ッたこッちゃないンだわ」

そう言って、首のチョーカーにあるスイッチを入れ、彼は学園都市最強の超能力者へと変貌する。

「テメェが消したッつゥ奴ら、全部出してもらおォか」

「・・・ハッ・・・前にダッサイかっこさらして負けた奴が何言ってんだ。神様や天使にでもなったか？」

「・・・・・いいからよォ・・・黙ってそれを・・・寄越せッつッてンだよこの三下がァ！！！！」

ドォっ！！！

蒔風に向かって、一方通行（アクセラレータ）が突っ込んできた。
ぐらりと揺れながら、蒔風が辛そうな顔をする。

（使える力は一つだけ・・・こいつに勝つ必要なんざない・・・・・必要なのは・・・・・！！！！）

そうして、蒔風が力を発動させた。

彼がすべきなのは、なによりもこの場からの撤退である。

to be continued

銀白ＶＳレベル５（後書き）

美琴「だぁーーー！！やられた！！爆弾ルームとか自殺する気！？」

おつかれですたー

美「はいはいですたー。で、第一位出しちゃったけど・・・・」

ええそうですね

しかしそれよりも一方通行（アクセラレータ）の言葉変換がめんどくさい！！！

「ぁぃぅぇぉ」と「ん」をカタカナ・・・・間違えてないかなぁ・・・・

美「大丈夫なんじゃない？」

彼の登場は少し強引だったかな？と思います。

そしてここからがなやみどころ。

本編のいつぐらいの彼にしようか・・・・・

美琴「一章は確か原作十六巻直後だったわよね？」

はい。
しかしその後上条さんはイギリスに行き、ロシアに行き、海に沈んでから「新約」で帰ってきました。

そう考えると時系列的には原作よりももっと先の時点になってる・・・！？

美「もうそういうの考えないで普通に「彼ら、彼女がいます」でいいんじゃない？」

それでいっか（おい

美「次回！！第一位との戦い・・・・・」

は一瞬で終了！！だって逃げるから！！ランナウェイ！！！

ではまた次回！！！！

リスト残り

キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
上条当麻
インデックス
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ

海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム

ヴィータ
リィンフォース？
キャロ・ル・ルシエ

回避、そして再戦

「クソッタレがァ！！！」

裏路地で、一方通行（アクセラレータ）が地面を蹴り飛ばしてその怒りをブチまける。

しかし、すでにこの場にはその対象はいない。

今この場には彼一人しかいないのだ。

つい十分前の事だ。

一方通行は蒔風に向かって突っ込んでいった。
だが蒔風はその瞬間に、歯を食いしばって力を捻り出し、それを発動させる。

直後、一方通行の身体の勢いが止まり、蒔風の腕が折れた。

その痛みに蒔風が呻くが、一方通行は何が起こったのかまったくわからない。
ただ、自分の力がはっきりと断ち切られているのは感じとった。
更に周囲を見渡せば、何やら風景が変わっている。

否、見た目が変わったわけではない。風景はまるで変わらないのだ。
しかし、確実に何かが違う。まるで向こうの風景が、写真に張りつけられたモノのようにしか見えないのだ。

「どォいうことだ・・・・電波が切れたわけじゃねェのに力が失われただと?」

「ハ・・・・ァ゛ッ・・・・・・ッッ!!!」

そうして、蒔風が指を鳴らして、瞬時にその場から消えた。
それを彼も追おうとするのだが、一歩前に足を出すとなぜか横に進み、さらに一歩踏み出すと能力が発動して真上にジャンプしてしまった。

そうしているうちに、三十秒が経ってその空間が消えた。

そして今、逃走した男を追って周囲を捜索、見つからずに十分経ってしまった、というところだったのだ。

（だがあのヤロォもかなり重症だッた・・・ッつーことはだ。この街からは出られるわけがねェ）

そうして、彼が再び捜索を始める。
獣のように猛りながらも、頭は冷静に研ぎ澄まして。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「ハァ・・・ハァ――――す、すまない。一室貸してもらえるかな？」

「はいって・・・だい、大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ・・・問題ない・・・ただ救急箱はくれ」

そう言って蒔風がやってきたのは第三学区の個室サロンというところだ。

カラオケボックスを豪奢にしたような施設で、『監視の目が完全に無い場所』として重宝されてるのだとか。

純粋に楽しむだけでなく、もちろん不良集団が溜まっていることもあるのだが、もちろんこんな重傷人が来るところではないのは明らかだ。

だがそれでも蒔風はにこやかに笑顔を作ってなんでもないように部屋の鍵を受け取っていく。

フロントの男性はおそらくアルバイトなのだろう。最初こそ驚いた

が、何かの事情を察してそれ以上は聞いてこなかった。

（まあ金も多く渡しておいたから・・・彼が通報することもあるまい・・・・・）

そして、蒔風がドサリと倒れた。
息は荒く、腕も片方折れていて、血も少し足りない状態だ。

（とにかく一回身体を休めて・・・そうすればなんとかだがまだ戦える。丸一日経って明日になれば腕も使いものくらいにはなるだろうし・・・・）

そして、蒔風はそのまま寝た。
数時間後には動かなければならない。

（この身体・・・うまく使えるようにまで回復しないと・・・・・）

ーーー

「君の「お姉様」がその蒔風を相手にしてそしてまだ戻ってこないという事は、きっとやられてしまったのだろう。だが蒔風もまた来ない、という事は彼も酷い怪我を負って倒れているという事だろ？確かそんな話だったね。もし僕ならそのまま逃げるね。僕らが彼に一気に攻めいったら彼は死んでしまうだろうし」

そうして、更にステイルが言うにはそんな怪我だったらこの街からも出れない。もし回復したら即座にこの街を出るかこっちに攻撃を仕掛けてくるだろう。そして、その行動はどちらにしてもすぐに動かなければどんどん困難になっていくという事だ。

脱出するにも警備がきつくなっていくし、こっちに攻め入るにも逃げられたり増援があったら苦戦する。

だから彼が逃げるのならばそれでよし、こっちに来るとしたら、おそらくその体がある程度回復した程度で万全ではないはず、という考えらしい。

「手負い相手に、僕の「魔女狩りの王（イノケンティウス）」と神裂が負けるはずがない。だからここにいた方が安全なんだ」

「それは・・・・」

その言葉には確かな自信があった。そしてそれが、決して驕りでないこともわかる。

だが、それでも不安なものは不安だ。

しかし、彼らは結局ここに残った。
決め手は、彼の能力を見せつけたからだ。そして、その強さの源にも、納得させるだけの原因があった。

そうして翌日。
ちょうど蒔風と交戦してから一日が経った時。

「来るなら今かな？」

「だけど本当に大丈夫なのかよ」

「ん？ああ、君のことなんて心配はしてないよ。僕は彼女が守れれ

ばそれでいい。まあ、そいつがどれだけ強いかわからないけど、僕の魔女狩りの王（イノケンティウス）さえいれば・・・・」

「来た」

上条とステイルが話していると、その後ろで長門がポツリとつぶやく。

瞬間、ビルの壁が吹き飛び崩れ、その向こうから一人の男のシルエットが現れた。

来たか！！と身構えるステイルや神裂、上条らだが、そのシルエットは全く彼らなど気にしていなかったらしい。

翼が生え、それが鋭利に開かれて輝いたかと思うとその姿は消え、直後に朝比奈みくると古泉一樹、そしてキャロが消えた。

その影は更にキョンへといたろうとしてしかし、その腕が長門に掴まれて投げとばされて壁に突っ込む。

そこまで来て、彼らは気付いた。
彼は最初から自分たちと戦う気などないのだ。

ただ標的の人間を消すだけ。
この瞬間、蒔風舜は標的を消すことだけを考えていた。

「全員こっちに集まれ！！！」

「くぉッ・・・が・・・・まさか長門がこの速さに付いて来れるとは・・・・・・」

だが、その蒔風は壁に激突させられた。
彼の翼が折りたたまれ、その速度はもう出せなくなった。

それを見てステイルは全員を一点に集め、ガラガラと崩れた壁から

這い出てくる蒔風に向かって腕を振るった。

「――その名は炎、その役は剣
顕現せよ、わが身を喰らいて力と為せ――魔女狩りの王、イノケンティウス！！！！」

そうしてステイルの目の前に炎が生まれ、それが彼の力であることを表していた。

「我が魔法名をここに。Ｆｏｒｔｉｓ９３１（我が名が最強である理由をここに証明する）！！！」

そうしてその炎の塊が、立ち上がろうとする蒔風に向かって跳んで行く。
だが、それを見て立ち上がりつつある蒔風がにやりと笑い、パチン、指を鳴らした。

瞬間

ボシュッ!!という音を立てて炎が消える。
そしてそれと全く同じ炎が、蒔風の掌の上に現れたのだ。

「はっはっは!!すこーしそれっぽいことしてやったら有利になったとチョーシづく!!こいつはオレの獄炎だよ。未成年のガキが大人ぶってんじゃねェぞステイル君!!!」

「な・・・・・」

そう叫びながらステイルが再びイノケンティウスを出そうとするが、炎どころかこの場の気温すら変わらない。
それを見て、蒔風がグラリヨロリと立ち上がり、顔に手を当てて大笑いしながら狂ったように叫んだ。

「魔法名!?いいねぇ・・・面白いよ!!あんなに元気に名乗っちゃってさァ!!それでボシュッ、じゃ話になんねぇ!!ヒャッヒャッヒャッヒャ!!!演出御苦労!!!ステイルくゥゥゥウウウウウウん!!!ってかァ!?」

「イ・・・イノケンティウスが・・・・・」

「消された！？」

神裂と上条が、その事実に驚愕する。

その二人に、蒔風がさっきの様子とはひらりと表情を変え、静かな顔になってそれでもにやりと笑った口元だけは変えずに言った。

「必要悪（ネセサリウス）の教会魔術師、ステイル・マヌグス。歳は十四。しかし、現存するルーン２４文字の完全解読に成功し、さらに自ら６つの文字を編み出したルーンを極めし者。中でも、炎の魔術に特化し、それを用いた攻撃が最大の強み。しかし悲しいかな、ルーンは文字を設置したその内部でないとたいした効力は発揮されない」

バラバラバラ、と、蒔風の手元から何枚ものカードがばらまかれる。

それは彼が設置していたルーンの刻まれたカードだ。

そして足元に落とされたそれは、即座に燃やされ塵へと変わった。

「キチンと見回りして確認すべきだったな。そうすればこんなことにはならなかっただろうに」

「ッ！？」

「ステイル！！あなたはその子たちを連れて逃げなさい！！！」

ギィ――――――――！！！！！

と、驚愕するステイルの脇を、神裂が走りぬけて二メートルもある長刀「七天七刀」で蒔風に斬りかかった。
それを蒔風が右手で右腰、左手で左腰の「風」「林」を抜いて正面から受け止める。

「神裂火織。元天草式十字凄教の女教皇（プリエステス）にして聖人。貴女やステイルを倒す必要などないのだ。どういてもらえるか？騒ぎ過ぎると厄介な奴に見つかってしまう」

「そう言われて・・・下がれますか！！！！」

ギィイ！！！

蒔風と神裂の剣が打ち鳴らされ、蒔風はそのまま刀を逆手に握り、神裂がこれぞ構えと言ったような構えで、剣を握る。

「下がれないか・・・まあそうだろうな。インデックスを守るために敵にまで扱していたあなた達だ。その程度で下がるわけもないか」

「・・・・一体どこまで知っているのですか・・・・・」

「さてね？魔法名でも当ててみようか？」

「・・・・・」

そう言われ、神裂が目を閉じて、そして開く。

「その名は我が口から唱えて初めて意味を為すものです。私の魔法名は――――――」

ゴォッ！！！

神裂が剣を振るって鋼糸（ワイヤー）を伸ばし、それを以って敵を切り裂く「七閃」を繰り出してそれを唱えた。

「Ｓａｌｖｅ０００！！！」

ゴゴッ、ゴゴゴガンッ！！！！

周囲のものを斬り込みながら、何本もの鋼糸が蒔風に襲いかかった。
それによって土煙が起き、蒔風の姿が消える。

「神裂！！」

そうして、その間に外に逃げた上条が、中の神裂を呼びだした。
その声に応えて彼女も外に出て、中の様子をうかがった。

が

ボゴォッ！！！

その位置から上階部分。二階の位置から、蒔風が飛び出してきて神裂を飛び越えていく。
飛び越えると言う事は神裂は対象でないという事。目標は、その先の人間だ。

「救われぬ者に救いの手を・・・・か」

「！？」

神裂の真上を通過したとき、蒔風がそうつぶやいた。
それに驚愕する神裂だが、蒔風はすでに標的の方へと向いている。

その手から、何かが親指にはじき出されて黒子の顎に命中する。
はじき出されたのは、黒いゴム弾。先日蒔風に打ち出されたモノを拝借したものだ。

その衝撃は彼女の脳を揺らして、その場に昏倒させた。
これでこの場からの逃走を防ぐ。

そして、蒔風の手から雷が迸って、それを両手に溜めて一気に打ち出された。

「雷・・・旺・・・砲!!!」

ごゴォ!!!という猛烈な音と光を発して、蒔風の持つ力のうち最高の破壊能力を持つモノが発せられた。
雷旺の力は扱いにくいとはいえほかのモノを圧倒するだけの力がある。それを最も効果の発揮する「砲」で放ったのだ。
間違いなくこの場の全員はお陀仏だ。

もし、彼がいなければ、だが。

パィイン！！！！！

そう甲高い音がして、雷旺砲が止められる。
上条だ。その右手に宿る「幻想殺し（イマジンブレイカー）」を以って、その砲撃を止めていた。
しかし、止めている事だけだ。いずれは消えるのだろうが、そのあまり質量に雷旺砲はまだ残っている。

上条がそちらから手を離せない隙に、蒔風はキョンを狙い、それを長門に防がれる。
しかし、その長門の攻撃を地面をまるでブレイクダンスやカポエラのように回転して避け、一人の少女へと剣を伸ばした。

「インデックス！！！」

「え・・・あ・・・・・・」

ドスッ！！！！

そして、蒔風の刃が彼女に届いた。

ステイル・マヌグスという一人の男の身体を貫いて、彼の「朱雀槍」はインデックスの身体を貫通していた。

ドドンッ!!という音を立て、二人がカードになって蒔風の手に残る。

それを見て、上条が絶叫した。

受け止めている雷旺砲を蒔風の方へと投げ飛ばし、長門はキョンを抱えてその場から離脱した。

だが、投げ返されたとはいえ元はと言えば雷旺砲は蒔風の力。受け流して消滅させることは難しくない。

そしてその通りにして雷旺砲を打ち消す蒔風。

残ったのは、上条と神裂のみだ。

隣の小ビルの屋上―高さは二階分というこじんまりとしたものだ―の上にも長門とキョンがいるが、その二人に向かって上条が叫んだ。

「逃げてくれ！！こいつはオレがブチのめす！！！」

「おい・・・待ってくれ！！オレだってその野郎を・・・お、おい長門！？」

キョンが上条に反論するが、長門は彼を肩に抱えてそのまま屋上を跳躍していなくなった。
そうして今度こそ、目の前に残ったのは上条と神裂のみとなった。

「上条だけでいい・・・そっちは消えろ」

「そうはいきません。彼には恩があるので」

「そうかよ・・・やるしかないってか・・・クソッ」

そうして、手に持ったステイルとインデックスのカードを握りしめてからしまい込み、拳を片手それぞれで握るようにゴキゴキと言わせる蒔風。

と、そこにドンッ、という着地音を鳴らして一人の人影が降ってきた。

「でけェ光が見えたと思ッたら、やっぱテメェか」

「一方通行（アクセラレータ）・・・・・・・・」

昨日からいったん家に帰り、そして再び蒔風の後を追っていた彼が、この場にやってきた。

彼はさっきまで蒔風のいた個室サロンにいたのだ。そこまで彼は追いついていた。そしてあの雷旺の光。これを見てわからない人間はいないだろう。

「テメェら三人かよ・・・・・二人はいらん！！上条だけでいいんだよ！！」

「あァ？しらねーよそんなもン。オレはテメェをブッ殺しに来ただけだからよォ」

「一方通行（アクセラレータ）・・・・・」

「テメェもかよ・・・・言っとくが、オレァ仲良く戦うなンざ・・・・・」

「そうじゃない。一人じゃ無理だ。協力する」

一方通行（アクセラレータ）は上条の言葉に知った事かというが、上条は共闘しないと勝てないと言った。

確かにそうだ。彼は万全でないと言っても、昨日からはかなり回復しているようで危険度は数倍だ。

そんな状況で彼が来てくれたのはありがたかったが、それでも彼はまだ危険だと肌で感じていた。

「・・・・・・」

それを聞いて、一方通行（アクセラレータ）も考える。

確かに自分は最強と言われる力を以って入るが、昨日蒔風が見せた妙な力で自分の能力が消されたのも事実。

その正体もわからないのに一人で戦うほど、彼は愚かではない。

「・・・テメェは囮だ。あいつのわけわかンねェ力を引き出してこいや」

「十分だ。ありがとうな」

「ケッ」

そうして、この三人の共同戦線が始まった。

対するは、世界最強最上級の暗殺者。

相手にとって不足なし。

「行くぜ・・・テメェのクソみてぇなその願望（げんそう）・・・この手でぶち壊してやるからよ！！！！」

to be continued

回避、そして再戦（後書き）

時間かかったーーー！！！
誠に申し訳ございませんでした！！
誤字脱字多かったでしょう！？
チェックしてませんから！！（おい

キャロ「そう言えば黒子さんは大丈夫なんでしょうか？」

インデックス「そう言えばあそこに転がったままなのかな？」

あ・・・・・・

・・・・・・上条さんはできる子。
きっと雷旺砲を投げた時、黒子の身体を引っ張って安全なところに
ソォイ！！したんだよ！！

古泉「しかしそんなことをしたら・・・・」

いいんだよ！！

みくる「大怪我・・・・・」

こまけェことはいいんだよ！！！
皆さん御疲れ様ですたー！！

ステイル「僕の事を忘れないでほしいんだが」

ですたー！！

全員「ですたー」

まあ取り合えずマークを
この間忘れていた彼女らも一緒に

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ・・・各デバイス（デバイスモード）のシルエット。フリードはキャロと同じ

美琴・・・常盤台中学の校章

古泉一樹、朝比奈みくる・・・ＳＯＳ団のマーク

インデックス・・・十字架

ステイル・マヌグス・・・カードにあった五芒星

古「それにしてもよくあの人から逃げましたね」

それはまあ、あの固有結界がありましたから。
法則をいじってしまえば彼は無力化できます。それは原作での第二位との戦闘でも明らかですし。

ですが、問題はこの状況です。

み「あ、上条さんですね？」

そう、彼がいては固有結界は発動しません。
だから彼の排除が一番でしょうね。

キャ「でもなんでステイルさんの弱点を知ってたんでしょうか？」

ス「さあね。問い合わせでもしたんじゃないのか？」

イ「それはないと思う。魔術師の弱点を教えるほど教会も馬鹿じゃ

ないし」

そこはまだ秘密です。
でも、それに関してはよーっく考えればわかるハズ。

イ「次回、頑張れとーま！！！」

ス「で、更に神裂もいるし・・・」

キャ「一方通行（アクセラレータ）さんも・・・・・」

古「彼死んだんじゃないですかこれ？」

そうかな？作者としては結構漬け込みやそすそうだけど。
卑怯に行けば！！！

全員「え！？」

ではまた次回！！！

リスト残り

キョン
長門有希
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
上条当麻
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人

宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ最強＆最弱＆聖人

ギギィ！！！ドンッ！！パァン！！！！

剣が打ち鳴らされ、炎や雷が撃ち出されては消し飛ばされていく。
まだ戦い始めて五分だが、彼らは各自の役割を理解し、それを実行していた。

蒔風に斬りかかっているのは強靭な肉体を持つ神裂。
蒔風が放ってくる「砲」や「弾」を上条が消し飛ばす。
そして蒔風の足場を崩して攻撃のチャンスを作り出しているのが一方通行（アクセラレータ）だ。

（全員で突っ込んでくる戦いだったらやりようはいくらでもあったんだが、こうもしっかり分担されると・・・！！！）

ゴォ！！！

その名の通り、七本の鋼糸がコンクリートを刻みながら神裂の「七閃」が蒔風に襲いかかる。
それを蒔風が隙間を避け、後退しながら神裂からの直接の剣を受け止める。

神裂を潰すだけならまだ簡単な方だ。ムチャクチャすれば、力押しでまだ潰せる。
だけどそんな事やったら一方通行（アクセラレータ）が来る。彼を飛ばすには固有結界だが、それには上条を排除しなければならない。
上条なんかは単純だ。能力を使わずに普通に殴り飛ばせば終いである。だが、神裂の間を縫ってそんなことは難しいだろう。

「厄介に手ぇ組みやがって！！！」

「あなたは、倒します！！」

勇んで斬り込む神裂だが、蒔風が力押しで押し返すと弾かれてしまい、そこに蒔風が獄炎弾を放つ。
しかし、それが上条に手で弾き消され、一方通行（アクセラレータ）が足場を吹き飛ばしてきた。

そこに神裂が再びの攻撃。

蒔風は正直攻めあぐねていた。
それに、彼の体力もその場しのぎで回復した状態に近い。

（このままじゃどうしようもない・・・・一方通行（アクセラレータ）のバッテリー起動時間は十五分だが、ああやって必要な時だけスイッチ入れてんじゃ一時間はもつ・・・・）

そう考え、蒔風が十五天帝すべての剣十五本を宙に抜き、それを次々と手にとって神裂の攻撃に対処し始めた。

次々と掴んでは剣を握り変えてうごかし、一本たりとも下に剣は落ちない。。。
まるで大道芸のジャグリングだが、それを技にまで昇華させているのが蒔風だ。

剣によってまあいや攻撃の特質が変わって少し焦り出す神裂だが、こちらとて世界に二十人といない聖人だ。その程度の攻撃などは二秒で順応した。

しかし、この中で一番力を出し切れていないのが彼女でもある。

彼女のような聖人の力はとてつもなく強大だ。
それはもう、街一つを一人で壊滅させることができるほどに。

もちろん、神裂はすでに蒔風の力を知った。
この相手は本来ならば手加減して戦える相手などではない。おそらくは昨日のダメージをまだ引きずっているのだろう。

しかし、彼女はそれでも全力を出せない。
その強大さゆえに、周りを巻きこむことを恐れたのだ。

一方通行（アクセラレータ）は大丈夫だろう。
あらゆる力の向き（ベクトル）を捜査する彼ならば、どんなに力が大きくとも無傷でけろりとしているに違いない。

しかし、もう一人の上条はそうではない。
もし彼女が魔術による攻撃（こちらも並の魔術師を一般的な魔術（もの）でも一瞬で消し炭にするほどの膨大なモノ）を使うならまだ大丈夫だったかもしれない。

だが、今行っているのは接近戦、純粋な力だ。
本気でぶつかれば周囲に広がる衝撃や瓦解したビルの岩石ともいえる塊で彼は死ぬかもしれない。彼の力は「異能」にしか効かないのだから。

だからと言って魔術戦にしてもダメだ。
それには今使っている鋼糸を術式に沿って三次元魔法陣に組み上げなければならない。
だが、そんな隙はない。今この場でそんなことができるほど余裕もないのだ。

そしてその状況が蒔風をも助けていた。
先にも言った通り、神裂は周りを気にして全力を出せない。
つまり周りがいなければ彼女の力は今の蒔風を超えているのだ。簡単に倒せるだろう。

（この三人がそろっているから俺は苦戦し、それによる微妙なバランスで俺はまだここに立てている・・・・なんつージレンマだよ全く！！！）

そうして、蒔風が地面を踏みつけたタイミングで、地面を土埃で砕いて周囲に粉塵を巻き上げる。
美琴に取った戦法と同じものだ。

だが、それは一瞬で掻き消された。
一方通行（アクセラレータ）である。風のベクトルを変えれば、こんなもの一瞬で消し飛ばせるのかだら問題であるない以前の話だ。

しかし、それだけでは終わらないのが第一位。

風を操れるという事は、その粉塵の位置も操れる、ということだ。
つまり・・・・

「！！　離れろ神裂！！！」

「！！」

「しまっ・・・・・・」

「消し飛べ」

ドォオ！！！！

爆発音がして、蒔風一人を包み込んだ粉塵が爆発した。
おそらくは適当にその辺の廃材を投げて、更にもう一つ投げて火花を散らしたのだろう。

だが、その炎が渦を巻いて一点に集中、蒔風の手の上で炎の塊となってかき集められてしまっていた。
彼の服の所々に焼けた跡が付いているが、それだけだ。たいしたダメージにはなっていない。

「・・・ダメだな・・・この期に及んで先の事を考えてやがる」

「「「？」」」

蒔風が手の中の炎を握り潰して消しながら、忌々しそうに呟く。
彼らにはその意図が全く分からないが、蒔風は何かをするつもりだ。

「先が大事じゃないとは言わん。だが・・・今を越えなきゃ、先は来ないみたいでなぁ！！！！」

バッ！《ワールド！！！》

ゴゥン、という音を立て、それが蒔風の体に埋め込まれていく。
そのガイアメモリの存在はすでに何人かからの報告で聞いていたから驚きはしないが、脅威であることは変わらない。

一体彼は何をしてくるのか、今誰の力を発動させたのか。

それを知るすべは、ただ一つ。
彼がその力を使わなければならない。

しかし、彼は一向に動かない。
ただ、頭の前髪辺りから何やらパリパリと電気が放電されているようだ。

「なンだ？あのヤロォイカレちまったのか？そもそもありゃなンなンだよ」

「・・・あれは他者の力を使えるものらしい。だけど、あれは・・・・」

（なンだ？あの電気信号・・・・どッかで・・・・・！！！）

「まさか・・・あのヤロォ！！！！」

一方通行（アクセラレータ）がそれに気付き、駆けだした瞬間に蒔風の掌からガイアメモリが飛び出し、それをキャッチしてもう一度起動させた。

《ワールド！！！》

そして、挿入。

瞬間、蒔風の目の前に魔法陣が展開され、そこから青白い砲撃のようなモノが噴き出して一方通行（アクセラレータ）に襲いかかった。

「ッッ！？いけないあれは！！！！」

その光に見覚えのある神裂が、一方通行（アクセラレータ）に注意を促す。

一方、彼もそれには気づいていた。圧倒的なエネルギー。しかも魔法陣だ。

彼は過去に一度魔術攻撃を「反射」させたことがあったが、それは科学とは異なる法則で成り立っているものだったためにうまく返せなかった。

そして今も彼は魔術に関する法則を知っているわけではない。

だから、それを避けた。
変な方向にぶちまけるわけにはいかない。

そして上条もそれを避けようとしたのだが、神裂がそれに待ったをかけた。

「待ってください！！この砲撃がこのままいけば、この先の街は間違いなく壊滅します！！」

「な！？クソッ！！！！」

そう言われては、上条は受け止めざるを得ない。
その神秘なる右手で砲撃を受け止めた。

しかし、この砲撃の質量か何かはわからないが、消えないのだ。
否、消してはいるのだが幻想殺しの処理が追い付いていない・・・・・！！！！！

竜王の殺息（ドラゴンブレス）

かつてまだ「上条当麻」が生きていたころ、彼が守ろうとした少女が意識を失ってはなった最悪の一撃。
曰く、「伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同意」であり、この攻撃の光は粒子一つ一つの質が異なるため、幻想殺しの処理が追いつかないのだ。

もちろん、彼は今までそういう敵とも戦ってきた。
そして、敵の攻撃を掴んで投げると言う事も出来る。

しかし、この質量の前では、投げようとした瞬間に彼の身体の方が投げ飛ばされてしまうだろう。

と、そこでついに一方通行（アクセラレータ）が蒔風に到達して迫る。

（これだけの砲撃だ。それに使う力が何なのかは知らねェが、片手間でできるもんじゃねェだろ！！！）

そうして、信じられないことに近くのビルを投げ飛ばし、その影に隠れて一方通行（アクセラレータ）が蒔風を潰しにかかった。
が、そこで彼の耳に声が聞こえた。一体何をしているのかはわからないが、聞こえたのだ。その声が。

「一方通行（アクセラレータ）！！！！いいのかい！？可愛い少女が迷い込んでるよおオォォォォオオオオオウウ！！！！！！？？」

「ガッ・・・クソッ・・・タレエエエ

御坂美琴の力をメモリで使い、ネットワークに接続、その中で彼女に一方通行（アクセラレータ）の居場所を教えたのだ・・・・・！！！

ミサカネットワークとは妹達（シスターズ）が電撃使い（エレクトロマスター）であり、そして同一人物ともいえるクローンだからこそできる芸当だ。
同様の脳波を持った者同士なら、その脳波をリンクさせてネットワークを構築できる、というものだ。

しかしそれで知ったからと言ってもちろん、こんな早く来るなんてことはない。
だが、昨日一方通行（アクセラレータ）が来た原因の大元は彼女からの情報だ。

ならば、彼を心配する彼女だったらその跡を突いてきていてもおかしくはない。
そしてここまで来て見失い、その後もうろついていたとしたら・・・・

彼女がこのタイミングで来ることは難しくないのだ。

「このやろォが・・・・・・！！！！」

「そして・・・・・発動だ」

ドンッ！！と蒔風の固有結界が発動する。

一方通行（アクセラレータ）はこの瞬間にこの男を見誤ったことを怒った。

この男の底力は一体どこまであると言うのか・・・・

瞬間、竜王の殺息（ドラゴンブレス）はまるで鞭のようにしなった。が、結界外に居る上条にとっては変わりない。結界から出た瞬間、また真っ直ぐに上条に向かって放たれるだけだからだ。

ゆえに、彼は結界に触れない。触れなければ無効化もできない。

と、蒔風が一方通行（アクセラレータ）の方を向く。

彼の身体は空中に制止し、その格好は蒔風に拳を振り上げて殴りかかろうとしている瞬間だった。

「なに・・・・・・！？」

「この結界では法則を乱す。ようこそ、知らない未知の世界へ」

「は・・・・ご親切にドーモ」

「なに・・・・もうなにもわからなくなるんだからな。それくらいは教えてやる」

そう言って、蒔風が一方通行（アクセラレータ）のチョーカーに指をかけ、ビッと引きちぎるように没収する。
その瞬間、彼の脳味噌は世界から放り出された。

一方通行（アクセラレータ）は脳に大きな怪我を負っている。
故に、彼は日常生活に支障をきたすような障害を持っているのだ。
それでも彼がこうしていられるのは、彼がチョーカーで受信したミサカネットワークの演算機能で補助してもらっているからにすぎない。

つまりこうされてしまった彼は能力はおろか、立つことも歩くことも、しゃべることも言語を理解することも叶わない・・・・！！！

そうして、一方通行（アクセラレータ）が地面に倒れて、結界が切れると蒔風が砲撃をやめて神裂へと向かう。

《ワールド！！！》

もう一度、メモリをさし入れ、能力を入れ替えてから。

蒔風に神裂が剣を振るい、それを蒔風が受け止める。
しかし、その膝はガクリと崩れ、上から押し付けられるかの如くそれに耐えている。

「もらい・・・ました!!!」

「・・・・ッ・・・・・・いいや・・・それはこっちだ!!!」

ガッ!!と

蒔風がそこで神裂の七刀七閃を握りしめ、メモリによる力を発動させた。

「IS発動、振動破砕!!!」

瞬間、神裂の刀にヒビが入って、直後に砕けた。
それと同時に周囲を待っていた鋼糸もそれに連なっていたのかハタハタと地面に落ちていった。

「七刀七閃は霊装だ。おそらく、その鋼糸を操ってる大元もそれだろう?」

「な・・・・わたしの・・・・・」

「下がれ神裂。お前をやる必要はない！！！」

愕然としてしまっている神裂に一撃、重い当て身をくらわし、蒔風が投げ飛ばして上条にパスする。
その瞬間、それと一緒に駆け出した蒔風が上条に突っ込み、剣を振るってその右手を狙った。

そして

斬ッ！！という鋭い音を残して、彼の右の手首から先が落ちる。
その瞬間、彼が青龍を呼びだし、青龍が何かのビンにその右手を入れて密封、保存した。
そしてそれと同時に上条の喉元に剣をさし込み、彼を消滅させた。

「・・・・フゥ――――青龍、それはあるべき場所においてきてくれ」

「・・・・御意」

蒔風が青龍の持つ、何かの液体と一緒の右手を指してそう命じた。
青龍はそれに首肯してから、即座にその場から消えた。

蒔風がため息をつく。
倒れている一方通行（アクセラレータ）は打ち止め（ラストオーダー）が病院にでも運ぶだろう。
あのチョーカーは確かオーダーメイド物だから作るには時間がかかるはず。

神裂もそうだ。
剣を砕かれた一瞬で痛恨の当て身を入れたのだ。いくら聖人とて五分、十分では目覚めまい。
それに剣も特殊な霊装だから新注するには時間がかかる。これで彼らは無力化できたも同然だ。
彼女ならば肉弾戦でも戦えるだろうが、剣術を基本とした彼女にその戦いで蒔風に勝つのは無理だろう、という考えもある。

そうして、蒔風がその場から立ち去ろうとする。

だが

プァーーーーーーン！！！！！

その場にレールが走り込み、その上を時の列車が乗ってきて蒔風のゆく手を阻んだのだ。

「デンライナー・・・・・」

そして、その車両から数名のものが降りてきた。

降りてきたのは電王のメンバーに、途中で合流したのか、駆達赤い夜を乗り越えたメンバーだった。

「・・・は、理樹はどうした?裕理にましろは?途中下車でもしたのかな?」

「直枝さんは泉戸さん達とほかを回ってる」

「なるほど」

そうして、彼らが蒔風の前に立つ。
どうして分かったのか、という事は聞かなかった。
デンライナーの車両部。そこに黒子が見えたからだ。

「変身」

《ＧＵＮ　ＦＯＡＭ》

「お前らだけでオレとやる気か?いい度胸だな・・・・」

そうして、蒔風が若干荒い息を吐きながら両手をブラブラとさせる。

「行くよ・・・・あいつを倒すのは僕なんだ・・・お前じゃない」

「侑斗の事か？まァだ張りあってんのかよ・・・・」

無論、リュウタロスは妥当侑斗というかつて持っていた感情はもう無い。
しかしだからこそ、リュウタロスは彼を認めていたのだ。

だから・・・・・

「お前、倒すけどいいよね？」

「答えは――――必要ないよな？」

剣を構え、銃を構え、炎と携え、式神を出し

蒔風のこの地での戦いは終わらない。

to be continued

銀白ＶＳ最強＆最弱＆聖人（後書き）

上条「今回俺だけかぁ・・・・・」

上条さんが投げられた神裂を受け止めないわけにいかないじゃないですか。
卑怯ですねー。チョーカーと言い、武器破壊といい。
あと上条さんのマークどうしよう・・・

上「もっと言うならあのメモリは卑怯すぎる」

スルーですか。
まあいいや、と言うわけで御疲れですたー

上「ですたー」

これで封印はせずとも二人をほぼ無力化、上条封印という目的を見事達成しました。
一方通行は打ち止めに連れていかれるでしょうし、神裂は・・・・
あれ？

上「描写してな・・・・」

いや、隅に置かれているだろう。
おお、これはこれでまた卑怯なことができそう。

上「外道！！！」

いやいやそれほどでも

上「そういや竜王の殺息（ドラゴンブレス）ってインデックスのだろ？インデックスって魔術使えないんじゃ？」

そこが蒔風が使う「願い」との違いです。
あくまでもあれの力はガイアメモリによるものです。つまり、あれをやりながらも蒔風の力を使うことも可能。
だから知識と力を得て、蒔風自身の力で魔術を発動させたんです。

上「まじかよ・・・・」

さぁて、次回は！！

上「電王&11eyes!!」

ある意味科学と魔術ですね!!

ではまた次回!!

リスト残り

キョン
長門有希
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク

デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

明日は執筆時間が取れず、もしかしたら更新できないかもしれませ

ん。
もしそうなったら活動報告でお知らせいたしますので
よろしくお願いいたします

銀白ＶＳ電王&かつての欠片

蒔風の前にデンライナーが現れてから二分。
その時点ですでに一人、彼の手で消されていた。

広原雪子である。
その能力に「超速再生」を持つ彼女は、前々からあまり回避に対してそれほど大きな意義を持っていなかった。
むしろその能力を使っての特攻で敵陣に入り込む突撃隊長的なポジションだ。
ゆえに、攻撃を受けても再生するからと思っていたのが、一撃を食らって消えた。

周囲の人間は驚愕するしかない。
昨日のダメージを引きずり、さっきまでもあの三人と戦っていながら、あの雪子を一撃で葬るだけの余力を残していたのだから。

「雪子君の耐久力はその再生力を除いても群を抜いていたはず・・・・」

「それを・・・・一撃で!?」

「アァマイ甘い・・・・てめぇらごときで俺に勝てるとでも・・・・・思ってんのかァ！！！？？」

そうして、蒔風が駆け出して美鈴に切りかかっていく。
無論、それを見て何もしない彼らではない。

電王はデンガッシャーガンモードで狙い撃ち、タカヒサは発火能力による炎弾、菊理もアブラクサスによる鎖でその行く手を阻もうとする。

しかし、銃弾、炎弾は蛇行する蒔風に悉く避けられ、鎖は腕に絡んだものの、そのまま捻りあげられ、引き切れた。

鎖を引きちぎられて菊理が痛そうな顔をしたが、そんなことは気にもせず、蒔風が十五天帝のすべてをくみ上げ、一つの刃として美鈴に到達して振り下ろした。
その剣がうっすらと光り、それにどれだけの力が込められているのかが分かった。

おそらくは全力でないのだろうが、あの大剣を受け止めることなどできない！！

しかし、それでも彼女は剣を構えてそれを受けようとした。
あまりに無謀。しかし、蒔風がここまで迫ってくる速度があまりに

も速く、それ以上の行動、対処がとれないのだ。

ゴッ、ギャリッ、ドドンッ！！！

しかし、それを受けた――正確には受け止め、剣を斜めにして地面に流したのは皐月駆だった。
彼女より受け継いでいた「雷切」でそれを受け、受けた瞬間に剣を斜めに傾けることで十五天帝を滑らせて地面に逸らし落したのだ。

「ほう・・・先読みか」

「お前の動きは分かっているぞ・・・蒔風！！」

皐月駆の魔眼「劫（アイオン）の目」
その能力は、少し先の未来を見ることだ。
正確にはこの世界での可能性を見通すのだが、まあ結果としては変わりない。

しかも以前はこの力を使うたびに頭痛にさいなまやされ、この目を所持していた歴代の所有者の魂の集合体に同化していくというリスクがあったが、それもないのだ。
その分予知の力は落ち、歴代の所有者の知識を用いることは出来な

くなったものの、それでも戦闘においては十分すぎる。

それを見て、蒔風が心底めんどくさそうな顔をして十五天帝を振るう。

「剣に炎を。宿し力は地獄の業火・・・・獄炎烈火・・・・・・」

「みんな避けろ！！！！」

ゴォウ！！と炎を纏った大剣を蒔風が振るい、炎の斬撃が一振りで十五、唸りを上げて数名に襲い掛かった。

まず一振り目は駆、美鈴、ゆかへと飛来し、二人はその反応速度で避け、ゆかは栄光の手（ハンズオブグローリー）の力でその能力を無効化していた。

もう一振りで電王、賢久、菊理へと斬撃を飛ばした。

が、電王は避け、菊理はアブラクサスの鎖で弾き、賢久は斬撃の炎を巻き上げて取り込み、逆に蒔風に投げ飛ばしてきていた。

「・・・・剣に雷（いかずち）を。宿し力は旺なる雷撃・・・・雷旺招雷・・・・」

すると、その攻撃を蒔風は十五天帝の面で受け、獄炎では意味がないと思ったのか今度は刀身に雷旺を纏わせて振るった。
そうすると今度は十五の雷となって降り注ぎ、各人を次々と襲った。

雷を避ける人間はいない。
その落ちる先を予知できる駆以外の人間は、皆少なからず衝撃を食らってしまう。

その一瞬に、蒔風がゆりに向かって剣を振り上げて地を割るほどの斬撃を飛ばしてきた。
が、それを駆が一瞬で、というよりも、そこに来ているのが分かっているかのような動きでガードに入った。

しかし、ガードできてもその衝撃は凄まじく、雷切が弾かれて遠くに落ちる。
さらには両腕はしびれてしまい、これ以上はこの場に剣があっても握れないほどだ。

「駆ゥ、お前は「分かっている」からこそそこに飛び込むしかない・・・見捨てられないもんなぁ？」

ドンッ！！！

そうして、次に菊理に向かって土の塊を作って土惺弾として放った。
無論、そんな重量を彼女が受け切れるわけもなく、おそらくは潰される。

しかし、それでもその砲弾は当たらなかった。
駆がその場に飛び出し、菊理を担いでそのままジャンプして避けたからだ。、

勢いのまま飛び込んだため地面に二人してズシャリと倒れるが、あれに潰させるよりかは遥かにマシだ。

「グっ・・・・はぁ・・・・・・ハァ・・・・・!!!」

「か、駆さん!!!」

「大丈夫・・・大丈夫だから・・・・!!!!」

大丈夫と駆は言うがその肩は土惺弾が掠ったのか血が滲んできている。しかも、かなりの量だ。
おそらくはもう腕を上げることはできないだろう。

そうして、次に蒔風が腕を上げる。
そこにはいつの間にか集められた圧水が浮遊し、ユラユラと揺れな

がら今も徐々に大きくなっていっていた。

「駆・・・俺のすること・・・わかってるよなぁ！？」

「お前・・・・！！！！！」

「圧水掌！！！！！」

蒔風が掌を下に向け、叩きつけるかのように腕を真下に落として、それと連動して浮遊した水の塊がその場に落下してきた。

その流れに皆が呑み込まれる。

電王はとっさにロッドフォームへとチェンジし、彼のウミガメ型専用戦闘車両「デンライナーイスルギ」に飛び乗って賢久と美鈴を拾った。

しかし、当然この大規模な攻撃に間に合わなかった者もいた。

まず、水の中でその重量に耐えきれず菊理が消えた。

次に、栄光の手（ハンズオブグローリー）で圧水を消して何とか生き残っていたゆかが処理が間に合わず押しつぶされた。

そして駆は、その圧水に掻き混ぜられて上下左右を見失ったものの、どう動けば大丈夫かを半分直感交じりに感じ取り、水の引いた跡に

四つん這いになって助かっていた。

「ゲホゲホッ・・・ゲ・・・は・・・・・ゴホッ！！・・・はぁ・・・ハァ・・・・・」

だが、そのダメージはかなりのものだ。
正直、体を揺さぶられて今にも吐き出しそうだし、水中という圧迫された空間によって全身の体力は根こそぎ持って行かれている。

「さて・・・厄介なのはお前くらいだ、駆。電王は前にも一回やったが・・・・・まあ許容範囲内だしな」

「げほっ・・・・・ハッ・・・・・うぐっ！？」

「死ね」

蒔風が駆を背中から踏みつけ、四つん這いから俯せに変えてその首元に切っ先を当てて切り裂こうとする。
しかし、その瞬間に駆の口元がニヤリと笑った。

「百野、いまだ！！！」

「発射」

ドンッ！！！！

駆の叫び声と共に、蒔風へと魔術砲撃が襲いかかる。
その威力、まるでレールガンを三十発ほど込めたものと変わりないものだ。

その砲撃を必死にかわし、腹ばいになって不様に倒れる蒔風だが、更にイスルギからのレーザーが迫る。

それを刀身で弾く蒔風だが、その目はそっちの方を向いていない。

向いている先は、百野栞。
その周囲には無数の魔術書が浮いており、胸の部分は観音開きになっており、そこから魔導書が出てきているようだ。
その魔導書の数、五千。

その魔導書は一冊それだけでも術式の役割をはたし、そしてその魔導書の配置によってさらなる魔法陣を描いていた。

彼女がかつて所属していた、今は無き「禁書目録聖省」

そこでの彼女の呼び名は「書架のウルスラ」

書架

つまり彼女はその体に、魔術的な処置を受け、物理的に五千冊もの魔導書を保存、管理しているのだ・・・・！！！

「なるほど・・・・テメェもまた、ある意味一つのインデックス！！！」

「再装填、開始・・・・終了。弾丸を込めよ――――“裏切り者は代価に三十枚の銀貨を受け取った”」

「チ・・・ならばこちらも《ワールド！！！》こいつで受ける！！！」

蒔風がワールドメモリを起動させて宙に放り、混暗の力でイスルギを落としてからメモリをキャッチ、魔法陣を展開させて竜王の殺息（ドラゴンブレス）

を放った。
同時に、栞の砲撃も再び蒔風へと伸びていった。

そして、衝突。

その衝撃にイスルギは完全に吹き飛び、電王はロッドモードとなったデンガッシャーを地面に突き立ててやっと立てると言った状況に追いやられる。
その電王に賢久と美鈴がしがみついて吹き飛ばされまいとしているが、それ以上に動くことができなくなってしまっている。

また、駆はその場から衝撃で吹き飛ばされ、廃ビルの壁に叩きつけられてそのままズルズルと倒れ込んでしまった。

栞が放っているのは「裏切り者の銀貨」である。
かつて「人の子」を裏切ったとされる使徒が三十枚の銀貨を受け取ったという事から、その対象者に銀の属性を持つ者を三十連射する魔術だ。

実際には砲撃魔術ではないのだが、その威力と速度、そして連続性はほかの魔導書の陣による術式で驚異的に底上げされていて、それ

が砲撃に見えてしまうだけのこと。

対する蒔風は先ほどと同じく竜王の殺息（ドラゴンブレス）。
しかも二回目だ。その威力は先ほどよりも落ちている。

しかしながら、蒔風に表情には一切の焦りはなく、栞の砲撃を受け続けていた。

この砲撃には普段無表情の栞もその顔に驚愕の感情をあらわにさせるほどのものだった。

無論、彼女はこの砲撃がどんなものかは知っている。
しかし、こんなものを知識を得ただけで、なんの補助もなく撃ちだすなんて思いもしなかったのだ。

だが、今のところその力は拮抗している。

蒔風だって限界に近いはずなのだ。
現にだんだんとその額を流れる汗の数が多くなってきている。

しかし、それでも蒔風は笑った。
これでなんとかできるな、と。

「さぁて・・・『主が、お前の名は何かとお尋ねになると彼らは

応えた――我が名は“レギオン”我々は大勢であるが故に』・・・・・！！！！！」

瞬間

ボコリと地面から土の塊が立ち上がってきて、人型になって無数に現れた。
その手には身体と同じく土でできた鈍器を握っており、今にも殴りかかってきそうな様子だ。

だが、そんなことよりも驚異的なのはその数である。
その傀儡の数、実に二千体。

それだけの数の傀儡が、衝撃で動けない彼らに向かって一斉に攻めていった。

電王、賢久、美鈴の三人は、衝撃に体が慣れてきたのか手を放し、その傀儡に応戦しようとする。

しかし、その圧倒的な数の前にまず、美鈴が倒れた。
剣の一薙ぎで五十は削った彼女だが、彼女の剣は一振り、二振りしたところで傀儡の崩れて出来た土砂に剣を呑まれ、更にその体にのしかかってくる傀儡によって消滅した。

次に、賢久が倒れる。
彼はその合かを以ってして傀儡を焼き砕き、実に九百もの数を吹き飛ばしたが、その能力とは別に、身体に限界が来ていた。

いくつもの炎を発してきたその彼の手はすでに焼けただれており、炎を放てば皮がめくれ、圧縮すれば肉が焼けた。
その半ば自滅に近いようなダメージに明久の炎が弱まっていき、ついにその体が傀儡にうずもれて消滅した。

そんな中、電王は奮闘していた。
圧倒的に不利を感じたウラタロスはキンタロスと咄嗟にバトンタッチ、電王に無数の傀儡がのしかかろうと飛びついてきたが、電王アックスフォームの気合と共に振りあげられた腕にまとめて吹き飛ばされていた。

そして、彼が向かうのは駆の方だ。
フォームチェンジしてから美鈴、賢久の元へと向かおうとした彼だったのだが、その時にはすでに美鈴がやられ、賢久はまだやられて

いなくとも自暴自棄のように炎を撒き散らさして暴れ回っていた。

あのままでは自滅する。
そんなこと彼だってわかっていたし、電王もそれを見て一発で確信した。
だが、彼は止まれなかったのだ。

自分の恋人をいきなり消され、その怒りの炎をブチまけなければ彼の心は壊れてしまう。
それがわかって、電王は彼を止める事などできなかった。

良太郎は中で「助けよう」と叫んでいたが、キンタロスはそれを許さなかった。

「あかん、良太郎・・・・あれを止めようと近づいたら、こっちまで焼かれてお陀仏や!!!」

『でも・・・それでも助けに!!!』

「あかんのや!!おまえさんには死んでもらいとうない・・・・俺らの存在が消えるからやないで。お前がいなきゃ、全員おらんかったんや。だから・・・お前さんを死にに行かせるわけにはいかんのや!!!!」

『キンタロス・・・・』

それは彼にも苦渋の決断だった。
助けたいという思いが、ないわけなどないのだ。
だが今の彼を止め、なだめ、落ち着かせるには時間がなさすぎる。

だから、キンタロスは向かえなかった。
それよりも、まだ無事な駆の方へと向かうために走ることを選んだのだ・・・・

「堪忍や・・・・堪忍してや・・・・・・」

そう呟きながら、彼が駆の元に辿り着き、彼の身体を抱え上げた。

「兄ちゃん、しっかりしぃ!!!そこの嬢ちゃんもはよぅ!!!」

そう言って、電王が栞にも促しながらデンライナーへと走っていく。
だが、彼女はその場から動かない。否、動けないのだ。

もしこの砲撃を撃ち続けることをやめれば、蒔風はあの場から動くことができる。
そうすればこの傀儡以上の脅威だ、逃げられない。

しかも、その瞬間に賢久がやられて光になっていた。
これで傀儡もこちらに向かってくる。

逃げることは実質不可能になる。

だから

「逃げて・・・ください」

「なんやて!?」

「彼を押さえつけられるのはあと一分もありません・・・だから、今のうちに!!!」

「アホ!!そんな事できるか!!」

「全員やられるよりかは、数倍マシです・・・・・早く・・・彼を電車に乗せて逃げてください・・・・・」

「・・・・・くぞッ!!!」

電王が、そうして栞に背を向けて走る。

その声はすでに涙ぐんでおり、どうしようもない現状を嘆いていた。

そして、彼はすぐにデンライナーに乗り込んで、駆を寝かせて変身を解いた。

外の方では直後、栞がついに撃ち抜かれて消えるのが確認されていた。

「そんな・・・・・」

「チクショウ・・・おい良太郎!!なんでオレを出しに行かなかったんだよ!!全員でいけば・・・」

「全員で行ってみんなやられちゃったら嫌だからだよ!!!」

モモタロスの怒りの言葉に、良太郎が拳を強く握りしめて叫び返した。

「嫌なんだよ・・・あのときみたいにみんないなくなっちゃうのが・・・・・!!!」

「良太郎・・・・」

そう、彼ら良太郎と契約している今人は一度消滅の危機に立たされた。
結果として、良太郎との絆の強さが記憶となり、その記憶が彼らを存在させることに成功して問題はなかったのだが、それでも一度は彼らは消滅してしまっていた。

その別れが嫌だったのだ。
だから、彼は強化フォームで行けばよかったのを、一人のフォームでしか行かなかったのだ。

もし皆が許せば彼は一人で変身した「ライナーフォーム」で出陣して行っただろう。
しかし、そうすれば彼らも一緒に並んで出てきてしまうだろう。

だからこその一人ずつ。

しかし、今回は彼のその心が、裏目に出て決まっていた。
けっかとして、駆以外のメンバーは全員消滅。

大きく戦力を失った。

そうして落ち込んでいると、リュウタロスがふと気付いた。

「あれ・・・・・・クマちゃんは？・・・・・・」

――――――

キンタロスが、その場に残って蒔風と対峙していた。
その手にはデンオウベルトとライダーパスがあり、それを巻きつけて単独変身、電王アックスフォームへと姿を変えていた。

「駆を逃がしたその手腕は立派だったな」

「お前さんにやらせるわけにはいかんかったからのぅ」

「だが・・・・クくっ・・・・・」

「？　なんや、なにがおかしい！！！」

「クカカカカカカ！！あっはっはっはっはっは！！！！」

シュカッ、ドンッ！！！

蒔風が笑いながら、天地陰陽の四本を一点に投げ、それが廃ビルに横たわるかのように立てかけられた岩に当たって、光となって消滅した。

「な・・・・」

そして、キンタロスははっきりと見、気付いた。
その岩が光となって消える瞬間・・・・・・・駆の姿をしていたことに。

「そんな・・・・あほな・・・・・・・」

「お前がめでたく持ちかえったのはそれ相応の重さをした岩の塊だよ。ククッ・・・幻術かけて見た目そろえたら騙されちまって・・・・・」

「貴様・・・・・・・」

「重かったかい？あれ。そろそろ幻術が解けると思うけど・・・・岩抱えて走るお前は滑稽だったよ！！！！」

「貴様ァあああああああああああああああああああ！！！！！！」

ドォ！！！！！！

アックスフォームの全身から衝撃波のようなモノが吹き出、その装甲を残像でブラし、仮面をまるで鬼の形相のように歪めながらなが

ら蒔風へと突貫していた。

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「蒔風ェェェぇえええええええええええええええええええ！！！！！！」

ドゴゥ！！！！！

・・・

・・・・・・

・・・・

・・・

そうして、その衝撃から三十秒と経たずに決着はついた。

蒔風の手にはキンタロスのカード。

その体はビル三つ突き抜けてガラガラと崩れるその中にいた。

「ゲッ・・は・・・・・い・・・ギアあああああああああああああっ！！！！！」

そして、絶叫。

胸を押さえて悶え苦しみ、地面を蒔風が転がった。

だが、その五分後にはすでにその場に彼はいなく、学園都市の侵入者警告も解けていた。

to be continued

銀白ＶＳ電王&かつての欠片（後書き）

今日は作者の体力が限界なので後書きはなしで。
申しわけございません。

ちなみに今回出てきた魔獣てゃオリジナルです。
勝手に考えましたごめんなさい。

カード

キンタロス・・・電王のマーク
１１ｅｙｅｓメンバー・・・タイトルロゴと同じ

リスト残り

キョン
長門有希
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
クラウド・ストライフ

古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ六課＆恋姫

今まで

蒔風に攻撃を仕掛けて行こうという動きが出始めていたころ。

クラウド・ストライフは考えていた。

蒔風に対して攻めるといってもがむしゃらになって全員でかかれば固有結界の餌食だし、そのような乱闘にでもなれば蒔風に付け込まれる。
だから、攻めるためには段取りを取っていかねばならない。

そう考え、彼は各地に散っているメンバーを集めるなり配置するなりで蒔風に効果的な攻撃を仕掛けようとしてきていた。
今までどうも連戦続きだったのはそういうことだ。

しかし、最終的には間に合わない。
蒔風が先に駆け付けたメンバーを倒してしまったり逃走してしまっていたり、または蒔風の攻撃がまるでこちらの段取りをつぶすかのような形で来たりと、クラウドがその場に着くころには蒔風の姿はいつだってなかったのだ。

だが・・・・・・

（今までどうしても集まらない・・・こうなったらがむしゃらにでも攻めねばならないのか・・・？）

そう、ここまで多くの仲間がやられた。
この襲撃事件を隠せる者にはなるべく隠してきたが、もうそろそろ怪しんできてもおかしくはない。

そうなればリストにない、やられる必要のない者まで巻き込むことになる。

それだけは避けねばならない。

幸い、蒔風はなぜかリスト以外の人物は最初のうちのみ封印していたが、あとは戦力を削るだけで封印は極力避けている。
しかし、だからと言ってこれ以上巻き込めるはずなどないのだ。

だから

（もう今しかない・・・・・十分にそろってるとかは関係ない。いま攻めなければこのまま全員・・・・・・）

彼は、いつまでも冷静だった。
本人が聞いたら「臆病なだけだ」と否定しそうなものだが、それでも彼は冷静に考えていた。

彼は決して臆病ではない。
彼の翼は勇気なのだから。

そんな彼が、空になっていた隠れ家の一つでメモを見つけた。

『捕捉出来たようです。私たちは行きます。場所はここです。勝手に動いてごめんなさい』

それを読み、クラウドが外に出てバイク「フェンリル」に跨って走り出した。

場所はかなり遠い。

おそらく彼女らは転移魔法で向かったのだろう。

「早まるな、高町なのは・・・・あいつはもう・・・俺たちの知っているシュンじゃない・・・・・・！！！」

バイクが駆ける。

一人の男のもとに。

間に合うのだろうか。

今度こそ

――――――

ここ三十分は走っているが全く変化が見られない退屈な時間だ。
変化と言えばたまに大きな石をタイヤが踏んで振動するくらいか。

ここまで来るとまるでベルトコンベアを逆走しているかのような気分にさせられる。

この地面、後ろに向かって流れてんじゃないのか？と思ったのは何度目か。

だが、そんな風景に変化が訪れる。

前方から、鮮やかな桜色の砲撃魔法。さらには数十本の矢が正確に蒔風へと飛来してきた。

ヴォン！！ヒュン・・・ヒュンヒュン、ゴォオ！！！！

それを蒔風がハンドルを強く握りしめ、重心を羅してバイクを横に

そらす。
が、その攻撃の主はどうやら蒔風がはっきり見えているらしく、とめどなく放たれてきていた。

それをなだらかな蛇行を描いて避けていく蒔風。
そして、その攻撃の隙間から、確かに見た。

高町なのは達生き残った機動六課メンバーと、蜀と魏の混成メンバーを。

「グっ・・・しょっぱなから距離を取られた・・・・！！！」

その遠距離からの砲撃と射られた矢に、蒔風が回避に専念するしかないようにさせられている。
しかし、それでも前には進んでおり、彼女らの姿が徐々に大きくなって見えるようになってきた。

と、その瞬間

ゾクゥッ！！と首元に寒気を感じた蒔風が咄嗟にバイクを右に倒し、体を右に倒した。まるでバイクと扇の組体操をしているようだ。そしてそうして躱した蒔風とバイクの上を、二つの刃が薙がれて行った。

直後、バイクに二人分の体重が加算された。翠と霞である。その高速移動「風足」によって蒔風の背後に回り、彼の首を狙ったのちにバイクの後ろに飛び乗って来たのだ。

「くぉっ！？」

「ハァあああああ！！」

「セリャァアア！！！」

だが、これで終わらせるつもりなら最初から飛び乗りはしない。その狭い足場ながらも、翠が蒔風に切りかかり、それに対して蒔風がハンドルから片手を放して頭の上にあげ「天」で受け止めた。

が、彼女はそのままその接触点を軸に蒔風の上を飛び越えてハンドルを踏みつける。

蒔風がそれを見て驚愕しながらもハンドルを固定して跳躍、バイクの上に立つ。

気がつくと砲撃や矢は止まっていた。
おそらくは彼女らへの配慮だろう。

だがそれがなくなったからなんだと言うのだ。
脅威がなくなったわけではないのだから。

そこで蒔風が加速開翼し、二人の動きに合わせた。

一瞬のうちに数百合打ち合い、その激しい応酬の後、霞が蒔風の蹴りに弾き飛ばされて地面を転がった。
だが、いくら体感時間が長くなっているといっても時が止まっているわけではないのだ。バイクがついになのはや愛紗たちの立っている場まで到達していた。

が、彼女達から見ればバイクと、その上で何かがせわしなく動いているようにしか見えないため攻撃のしようがない。

と、そこで二人が動いた。

一方バイクの上、高速の世界で戦っている二人

その翠の表情から血の気が引き切り、だんだんと意識が朦朧としてきた。

当然だ。本来のものではないスピードで体感とはいえこんなにも長い間動いているのだ。もうその剣筋はブレ始め、蒔風からの攻撃も入り始めている。

それでも、彼女はここから足を放さなかった。

絶対にこの男から引かない。

その意地がこの場に彼女を留まらせていた。

しかし、どんなに頑張ってももう限界だ。これ以上このまま戦えば彼女の身体がそのスピードに振り回され、空中にきりもみで弾き飛ばされて自滅するだけだ。

だが、それは蒔風も同じことだ。

むしろ、すでにファイズアクセルやトライアルは当然、クロックアップの制限をとっくに超えた時間加速している。

ここまで翠が耐えられたのは彼女の体力故。その彼女にも限界が近いというのに、蒔風のこの余裕はなんなのだろうか。

と、そのバイクの両脇に、金の閃光が光って蒔風の首を狙って薙がれた。

「翠さん、降りて！！」

「今度の相手は・・・私達だ！！！」

ゴッ、ジャカッ！！！

二刀のバルディッシュ、アサルトとウイングの名を持つ大剣が、アリシアとフェイトによって挟み込まれるように迫り、それを蒔風がバイクの上でバク宙して飛び降り避けた。

と、同時に高速の世界から翠が出てきて地面を転がり、蒔風とフェイト、アリシアの二人が向き合い、その横になのはと愛紗が立つ。

「ふっ・・・どう見ても同じだな、お前らはよ」

そう言って蒔風が二人に視線を向ける。二人はバリアジャケットの姿まで同じだった。
ただ、ベルトの色がフェイトが赤、アリシアが青で、構えがそれぞれ聞き手が違うためか左右逆に。あとはバルディッシュ・ウイングのコアが銀になっている事か。

「ふむ・・・あとフェイトの方がバストが大きいな。それ以外は全く同じだ」

「なっ・・・・・」

「ふざけるな!!」

蒔風の言葉にフェイトが羞恥に顔を赤らめて睨み、愛紗が激昂した。
そんな愛紗やなのは達に対し、蒔風がふざけた顔をし、舌をベェとだしてにたりと笑った。

「お前ら武将には興味ねぇんだよ。お前ら総力戦でオレに一回負けてんじゃねえか」

「黙れ！！！だからと言って・・・貴様を許すことはできん！！！」

そう聞いて、蒔風が呆れたようにため息をつく。
後ろを向き、スタスタと歩いてからバイクを立て直し、腰に手を当てて心底めんどくさそうに言った。

「武将なんざどーだっていいんだよ。そもそも、いつも俺は言ってただろうが。「結局何をするにも強くなきゃならん」ってな」

「その強さは・・・誰かのために振るうものじゃなかったの！？」

「バァカ。ちげェよ。すべてはオレの気分だ。あの時はそれが気分良かったからやってただけ。で、今はいまだ」

「・・・・もういい・・・しゃべるな・・・・」

「今のオレはとても楽しいぜ？」

「・・・しゃべるな・・・」

「なんだよ。信頼してたってか？ハァ・・・いいか？フェイト、一方的な信頼はってのはな・・・」

「しゃべるな・・・・・・」

ジャカッ

「ただの迷惑にしかならんのだよ」

「その声で・・・・その顔で・・・・・」

ドォウ！！！

「そんな言葉を、それ以上吐くなァアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

かつて、敵から聞いたことのあるような言葉を聞き、フェイトが怒りをあらわにして砲撃を放ちそのまま蒔風に突撃してきた。

それを見て、蒔風が加速開翼をし、フェイトも真ソニックへといきなりフォームを変えていった。

両者とも、トップスピード。

しかし、なぜだろうか。すでにあれだけ動いていながら、蒔風の加速には一切の減速もキツさもない。

しかし、更にそこにアリシアも入ってくる。

バルディッシュにかつて組み込んだ加速プログラム。それは当然アリシアのバルディッシュ・ウイングにも入っている。

そしてフェイトと身体を基本的に同じとする彼女は、そのプログラムを使う事が出来る。

だから彼女もこの戦闘に入れるのだが・・・・・

『おかしいよこんなの！！なんでこの人こんなに長くいられるの！？』

『舜相手に疑問は無意味！！いつだってこの男は・・・考えの外から襲いかかってくるんだ！！！』

『だけど・・・キャア！！！』

「アリシアッ！！！！」

蒔風との交戦でアリシアが弾かれる。
無理もなかろう。いくらアリシアがフェイトと同じ知識を持っていると言っても、その体に刻み込んだ経験はまだ皆無に近しい。もちろんアリシアは今まで多く模擬戦や訓練で驚異的な速さでその強さを修得している。だが、いくらなんでもそれだけでは蒔風に及ぶわけもない。

「大丈夫！？」

「くっ・・・ごめんフェイト、足引っ張って・・・」

「やっぱりアリシアはさが・・・・」

「言ってる場合じゃないでしょ。さ、行くよ！！！」

「・・・・クソッ！！！」

アリシアまでもこの場に駆り出さなければならないことと、その場に巻きこむような事（リスト）にした蒔風に、彼女らしくもない激しい悪態をついて再び向かって行った。

しかし

「ガッ！？」

「ま・・・まだ！？・・・アぐっ！！！」

蒔風のまったく衰えを見せないその速度に、徐々に追い込まれていくフェイトとアリシア。
それに対し全く速度を緩める事の蒔風が、ついにその首元に剣を持って来て、振り下ろした。

ギィン！！

と、しかしそれを翠が受け止めて蒔風を弾き飛ばした。
蒔風が加速をやめ、剣を収めて両手をパンパンと叩く。

「す、翠さん」

「ごめん・・・ありがとう・・・」

「なに・・・気にすんなって・・・・・う・・グえっ・・・・・」

と、そこで翠があまりの負担に吐いてしまった。
だが、それですんでいる方が異常なのだ。

もうとうに筋肉が切れていてもおかしくはない状況だと言うのに、
ここまで動いたのだから。

だが、蒔風にとっては好都合だ。
剣をだらりと下げ、蒔風がフェイト達に向かって行った。

「させん！！皆突撃ィイ！！！！！！！！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！

それを食い止めるかのように、愛紗たち恋姫がその脇を走りぬけていって蒔風へと向かう。

それをうつろな目をして蒔風が眺め、向かってくる武将を次々と潰していった。

まず、偃月刀が振るわれるよりも早く先頭の愛紗を殴りとばし、次に続いてきた春蘭の腹部を後ろ蹴り、壁キックのようにそこを踏み台にして逆の足で背後から復帰してきた霞を蹴り弾いた。
焔耶が武器を振るってくるが、巨大なハンマー鈍砕骨を拳で砕きその石飛礫（つぶて）ならぬ鉄飛礫で目をくらませた後にアッパーで沈め、蒲公英の片鎌槍「影閃（えいせん）」の柄を腕で受け、腕をからませて回し奪いその石突で身体のど真ん中に突きこんで意識を奪う。
そしてそれを武器にして凪、真桜、沙和の三人を流れるように避け、後頭部に手刀を当てて気絶させた。

と、そこに飛来する矢。
紫苑、桔梗、秋蘭の三人による弓の攻撃が蒔風へと放たれる。

しかし蒔風は自身の剣を抜く事もなく、その矢を次々と払い落としていったが、その手の武器を三つにへし折り、それをそれぞれ三人に投げつけた。

無論、それは軽々とかわして次の矢を射ろうとする三人だが、その瞬間投げられたそれがボフンと爆発して煙を出す。
すぐにそれを手で払う三人だが、どうしてか意識が遠のき、その場に倒れ込んでしまった。

「小型の睡眠ガス爆弾だ。知ってはいても経験がなかったな」

ゴォオオオオ・・・ドォオ！！！

と、そこに地面を窪ます一撃が叩きこまれる。

「そうさ・・・お前が厄介すぎるんだ・・・」

「お前、コロス。絶対に許さない」

「悪いが・・・・手加減はできねぇぞ、呂布奉先！！！！」

その恋の一撃を紙一重で避け、大剣「獅子天麟」を下から上へと振り上げて行く蒔風。
それを恋がスウェーで避けるが、蒔風はそのまま獅子天麟を上に投げて「風」「林」を抜いて斬りかかった。

それに対して即座に反応し、方天画戟の柄で受ける恋。
だがそれからもすぐに蒔風は手を放し、青龍刀で袈裟斬にする。

それを下がってかわす恋だが、そこで獅子天麟が落ちてきて地面に刺さった。

「ッ！？」

それはまるで壁のように恋のバックステップを止め、それにドン、と寄りかかってしまう恋。
しかも予期せぬ壁に体制も崩れた。その恋に蒔風の拳が迫る。

「星、巡りて天日（てんじつ）を廻る。その日数（ひかず）三百と六十五」

ゴキッ！！！！

「打滅星、年巡り！！！」

ゴゴッッ、ゴゴッッゴゴゴ

蒔風の拳が、次々と恋の身体に突き刺さる。
拳といっても掌底だが、部位によっては指突であったりとその拳は多彩だ。

そして十五秒後、その拳の嵐が止まり、恋の身体がぐらりと崩れる。
しかし、そこは天下の三国無双と謳われし者。それでも片足を踏ん張って恋はまだ倒れなかった。

が、今すぐに戦闘は無理だろう。
蒔風が恋の後ろの獅子天麟を抜き、背中に収めてフェイトに向かう。
翠はもう動けない。
アリシアだって今の攻撃を喰らってはもう立てないだろう。

そう想い、フェイトが蒔風へと向かった。

「年巡り」

「真・・・ソニック！！！！」

ゴッ、ガガガガガガガガガ！！！！

フェイトのバルディッシュに、蒔風の拳が当たっていく。
フェイトはあの猛攻を受けきっていた。
さすがにもはや加速プログラムは無理でも、ここまでの加速ならば可能だ。

そうして、十五秒。
フェイトがすべての攻撃を受けきり、蒔風へと攻撃に移ろうとした瞬間、蒔風が背を向けてシグナムに向かって行った。
逃がすもんかと、その背に向かってバルディッシュを振るうフェイトだが、蒔風に魔力刃が当たった瞬間、その黄色の刃が粉々に砕け散った。

「な・・・まさか・・・あの攻撃で・・・・!?」

驚愕するフェイトだが、蒔風はまったく振り返りもせずにシグナムへと向かった。
が、到達するまで二三秒。その間にシグナムの隣にはリィンとユニゾンしたヴィータも立っていた。

「行くぞ、ヴィータ!!」

「おう・・・ぜってェにブッ殺してやる！！！！！」

『行きます！！！』

ゴゴッ！！

そうして、三度目の衝突。
しかし、もう二度も見た攻撃、しかもこちらは二人。その攻撃を受けるのは容易だ。
そして、二人も受けきる。しかし、その攻撃にカートリッジはすべて使い果たし、彼らの攻撃手段はなくなったと等しくさせられる。

それを見て、蒔風が今度はアリシアへと向かっていく。
フェイトが即座にそちらに向かおうとするが、バルディッシュの刃はまだ戻らないし、その状態では真ソニックはおろかソニックも無理だ。
だが

「アリシアさん、行くよ！！」

「なのは！！」

アリシアの横に、なのはが着く。

それに蒔風が眉をピクリと動かしたが、それでも構わずまったく同じ攻撃を仕掛けた。

「・・・・年巡り」

「行くよ、なのは！！」

「レイジングハート、エクシード！！！」

ゴッ、ゴガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッッ！！！！

と、その攻撃を受け続ける二人。

彼女らのような相手に、初見ならともかく三度も見せてはもはや意味がない。

受けて、捌き、弾き、その攻撃を弾き切ったところで。

「ディバイン!!!」

なのはがレイジングハートを構えて叫ぶ。

しかし

「グハァッ!?」

隣のアリシアが肺からすべての空気を吐きだした。

その声に、レイジングハートの先端から魔力が引き、彼女の腹部を見る。

そこには蒔風の拳が

しかも抜き手であり、アリシアの腹部に文字通り「突き刺さっていた」

なのはは困惑していた。

今までの攻撃は３６５回すべて防いだ。それなのにこの一撃は・・・・・

そこまで考え、ハッとするなのは。

蒔風が口を開く。

「しらねェのか？四年に一度は閏年だ。この技はこの一撃のためにあるよーなもんだ」

ゴポリと

血を流し落としながらその手がアリシアから引き抜かれ、その激痛が脳に達する前に光となってカードに変わった。

「ア・・・・アリシアァッァァあああああああああああああ
あああああ！！！！！！」

フェイトの絶叫。
なのはが蒔風に蹴り飛ばされたが、その蒔風にフェイトがバルディッシュをサイズフォームにして突っ込んでいく。
その顔は、まるで鬼神だ。
そうしてフェイトが降りかぶり、弾かれたなのはが砲撃を放とうと構えた、その瞬間。

「あ・・・アがっ！？」

ガクン！！と、カードを持つ蒔風の身体が揺れ、頭を押さえて呻きだした。
その痛みは相当なモノのようで、頭を押さえながらついに膝を付き、カードがバラバラと落ちていってしまったほどだ。

「しゅ・・・舜？」

「おっ・・・おゴッ・・・がァあああああああああああ！！！！！」

そうして更に胸を押さえて絶叫。
涙を流し、涎を撒き散らして地面を転がる。

「舜君！！！！！」

あまりの蒔風の姿に、なのはが駆け寄ってその頭を抱えて胸に手を当てる。
だが苦しみは消えないのか、歯を食いしばって頭を掻き毟る蒔風。

その蒔風に、なのはが叫びかけて聞いた。

「舜君・・・どうしたの！？何があったの！？どうしてこんな・・・話してよ！！私は・・・全部受け入れるから！！！どんな話でも、信じるから！！！お願い、話して！！舜君を苦しめているのはなんなの！？」

叫ぶなのは。
その名のはの透き通るような目を見て、蒔風の口がパクパクと動く。
が、それを言葉に出さないのも蒔風の意志だ。
最初の一言が聞こえ、その先を言わないようになのはには見える。

そして、目を堅くつぶり、歯を食いしばってから一気に息を吐き出して

ドッ

「え？」

「俺は悪役、オレはあくやく、オレハアクヤク・・・・・・」

バン！！！！

「オレは悪だ・・・・テメェら、勘違いするなよ・・・・・・」

なのはの胸に、「天」が突き刺さり光りに消える。
仰向けに寝そべりながら、蒔風が呟いて拳を上げる。

そして立ち上がってから、カード集めて非常に冷めた、感情の乏しそうな顔をしてフェイト達に向き合った。

「舜・・・なのはは・・・・・・」

「？」

「なのはが！！今どんな思いでお前の元に走ったかわかるか！？この・・・この・・・・・・・・・」

フェイトがもはや言葉にできないと歯ぎしりし、ヴィータとシグナムが武器を構えて向き合う。

が

「え?うわ!?」

「くっ、なにを!?」

「はなせ!!あの野郎を・・・・!!!!」

『恋さん、翠さん!?』

三人（と中の一人）を攫って逃げる姿があった。

馬に乗った恋と翠だ。
彼女らが三人を抱えて、その場から走り去っていた。

「恋!どうして!?どうしてあの場から・・・・」

「あそこ、危ない。今の恋じゃ・・・・皆守れない」

「え？」

恋の身体は蒔風の攻撃で滅多打ちにされていた。
その状態からここまで回復するのはたいしたものだが、それではまだ戦う事などできない。

しかし、だからと言ってなぜ逃げるのか。

「・・・黒いのが・・・来る・・・・・らしい・・・・」

「なに？」

翠が、恋から聞いた話を息絶え絶えに言う。
そして、恋が言った。

「黒い翼、あいつ倒しにやってくる。だから・・・あそこは危険だ」

いまだに額に残る脂汗を拭きとり、周囲に転がっている愛紗たちの武器をへし折ってからバイクに跨る蒔風。

が、そのエンジンをかけることはない。

目の前に、漆黒のバイクに跨った、もう一人の翼人を見たからだ。

「クラウド・・・・・・か」

「シュン・・・・・これはお前が？」

「・・・・・ああ、やった。カードにする価値もないんでな」

「・・・わかった」

そう言って、バイクに収納されている剣を抜き、バイクのエンジンをふかせるクラウド。
それを先ほどから変わらず覚めた目をして見つめる蒔風。

空が淀み、どうやら一雨きそうな空気だ。

だが、ここ一帯だけは違う。

雨がいくら降ろうとも、この熱気は下がる事を知らない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

銀白ＶＳ六課＆恋姫（後書き）

なんとかクラウドが今まで来なかった理由を考えてみたよ！！

なのは「舜君・・・一体あなたはなんなの？」

アリシア「う～～～、さすがに無茶だったかなぁ・・・・・」

よく考えてみると今回やられたのはこの二人だけですね。

さて、ついに恋姫全滅！？

まあ恋は動けるけど武器がない、翠は体調が戻らないだけで結構すぐにまだいけそうですけどね。

ア「なんであんなに長く動けたのかも不思議だし・・・・」

ああ、まあそれは簡単に推測つくでしょう。

と、言うか「あれ」しかない。

な「あの時の絶叫と苦しみは・・・・・」

ああ、あれはここで断言しておきましょう。

演技ではございません。

あれはマジもんの絶叫でした。
胸の苦しみも、苦悶の表情も何もかも。

な「じゃあやっぱり・・・・」

そうですね、何かがあるのでしょう。
しいかし、その顔を見たのはなのはだけ。
ほかの面々は「あれはなのはをだますための演技」だと思ってます。

で・・・ついに来てしまいました！！！

な「次回はＶＳ漆黒の翼、クラウドさん！」

ア「さあ、みんなも映画館にゴー」

何言ってんですかまったく。

ではまた次回。

リスト残り

キョン
長門有希
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
小野寺ユウスケ
海東大樹

野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；薄緑＆ａｍｐ；純白

二台のバイクが交差し、火花を散らしてターン、そうしてまたぶつかり合う。

そして何度か目の交差で、ついに蒔風がジャンプしてクラウドのバイクに飛び乗った。

クラウドがそれを剣で受け、その上に乗るようにして剣を押し付ける蒔風。
そこからクラウドの顎を狙って蹴り上げ、それをクラウドが躱して蒔風を振り落とす。

地面に着地した蒔風。向かってくるクラウド。
そのクラウドのバイクに向かって、蒔風が銃を構えて数発放った。
しかし、銃弾はバイクの装甲に当たって弾かれてしまうだけで、全くダメージを与えられない。

「防弾装甲・・・・銃弾の量と大きさが足りないな」

《ワールド！！！》

そうして蒔風がメモリを取りだし、起動させて握りしめる。
するとその手にはＧ３－Ｘの装備であるガトリング銃が現れ、蒔風の背に翼が現れる。

「加速開翼（ブーストオン）・・・・・」

「ッッ！！！」

瞬間、クラウドがバイクから飛び降りて地面を転がる。
それは攻撃によるものではない。むしろ回避のための行動だ。

直後、火花の嵐――実際には果てしないスピードの蒔風から放たれた銃弾が、バイクに襲い掛かった。
しかし恐ろしいのはバイクの装甲度である。それだけの銃弾を食らっても、多少窪んで倒れただけで、バイクそのものはまだ生きていた。

が、だからと言って乗っていたらクラウドは蜂の巣だ。

そのクラウドも同様に翼を開き、蒔風の姿を見る。
ガトリングを構え、その驚異的なスピードで迫ってくる蒔風を見てから、目をつむる。

クラウドの視界が消え、音と感覚だけの世界へと変わった。

・・・・・・・ザ・・・・・・

そうして、合体剣のうち、小振りな一本を握りしめ、両手で構える。

・・・・・ザシッ・・・・・・

音が近い。
しかし、彼は全く呼吸を乱さず構えを微塵も動かさない。

そして

・・・・・・・ザキッ!!ゴゴンッッ!!!!

自分の目の前で音が聞こえた瞬間、その剣を振り降ろして蒔風の顔面を殴りつけた。
地面にバウンドしながらも、何とかしてクラウドから距離を取る蒔風だが、頭からは血を流している。

「なかなか・・・・・」

（軌道を逸らされたか・・・・・）

両者とも、相手の力量に改めて驚嘆していた。
蒔風はあのクラウドの一瞬の動きを察知し、とっさに体を捻ってその面が当たるように回避し、クラウドは蒔風の動きを翼で上がっていたとはいえ五感のみで捉えたのだ。

蒔風が頭から流れる血を拭い、メモリをしまって剣を構える。

「そいつはもういいのか？」

「お前相手に他者の力を使っていたら負けるから」

しかし、それでも蒔風はどこか冷めていた。
無感情な目をし、冷めた口調で言葉を返す。

そうして剣を構える二人。

直後、その周囲にもう二人、降り立ってきた。

「クラウドさん!!加勢に来た!!」

「もう・・・逃がさないよ・・・・・」

その場に現れたのは、薄緑と純白の翼人だった。

理樹と観鈴。その二人の登場に、少しばかり表情に変化が現れた蒔風だが、すぐにそんなものはなくなり蒔風が剣を握って走り出した。

狙うは、観鈴。

しかし、あまりにも順当すぎるその攻撃は間に入った理樹に防がれてしまう。
直後、観鈴の翼から衝撃波が放たれて蒔風を吹き飛ばした。

その衝撃に蒔風は吹き飛ばされながらも地面に着地。正面から受け切って、それでもなお前進を始めた。

「な・・・・・」

「そんな!!」

この衝撃波を放っている観鈴は確かに攻撃が得意なわけではない。
しかし、それでもこの衝撃波は周りが森なら木々をなぎ倒し、周りが街ならビルを倒壊させているはずなのだ。

が、それでも蒔風は前に進んできた。
もしここが森ならば蒔風の背後の木々は無事で、街ならばビルの壁は人型に残っていただろう。

とはいっても全くダメージになっていないわけではないようで、ところどころの皮膚が薄くだが裂けてきている。
感覚としては少しずつ薄皮がはがれている感覚だ。
非常にヒリヒリするといったとことか。

そして、この攻撃のダメージをそんなもので済ましているこの男は、間違いなく

「化け物・・・・・か・・・・・！！！！」

「違う。ただの悪だ」

ドゴッ！！！

蒔風の踵落しが地面にめり込み、理樹と観鈴がそれを避ける。
そこにクラウドが剣を蒔風に叩きつけようと振りかぶってくるが、
蒔風がそこから地面を蹴り上げて土をクラウドの目に放った。

その攻撃にクラウドが腕で土を弾き、再び目を開けた時には蒔風はいなかった。

直後、クラウドが身を捻って身体ごと上を向くと、そこから蒔風が落下してきてそれを剣で受け止める。

と、そこに観鈴からの衝撃波が飛んできた。
しかも、今度は先ほどのような拡散ではなく一点集中型だ。
ライフル弾のようなその衝撃波が蒔風の左ももに命中しその機動を削いだ。

と、クラウドがその場から飛びのいて地面から薄いガラスのようなプレートが刃の形をして突出してきた。

理樹だ。
彼の本来防御に使われるその透明のプレートが、蒔風の足元から一気に突き出してきた。

それを蒔風が顔を腕でガードしながら吹き飛ばされ、後方に下がる。

「くっ、速い・・・」

「だが、確実にダメージは通っている」

「勝てるよ！！」

理樹、クラウド、観鈴が並び、その背に翼を表しながら一切の油断なく蒔風を見る。

対して、蒔風は肩に付いた埃を落とし、左足を上げ下げして怪我の具合を見た。

「・・・・・」

そして、ごく自然な動きで腰から銃を抜いて、三人に向かって発砲した。

それを弾くクラウド、バリアで防ぐ理樹、飛びあがって回避する観鈴。

そのクラウドに向けてなおも発砲しながら蒔風が走り迫り、クラウドがそれを弾きながら蒔風に迫る。

そしてちょうどクラウドと蒔風がぶつかり合う瞬間、蒔風が銃を放

り捨てて背中から獅子天麟を抜いて組み上げ、クラウドの大剣とぶつけ合った。
と、クラウドが後腰に挿してあるほかの合体剣を蒔風に振るい、その手首の部分を蒔風が膝を上げて止めた。

「くっ・・・」

「・・・・・行け」

ドバッ!!!!

その状態で組み合っていた蒔風とクラウドだが、蒔風の言葉と共に脇に挿してある青龍と白虎が飛び出してクラウドの胸を狙って吹き飛ばした。
それをかろうじて防ぐクラウドだが、すでに蒔風の剣がクラウドに振り下ろされている。クラウドのガードは間に合わないだろう。

しかし、それを理樹が防いだ。
クラウドの目の前にバリアを張り、蒔風の獅子天麟を全く微動だにせず受け止めていた。

「む・・・・」

「ガードは任せて・・・クラウドさんは攻撃に専念を！！」

「任せた！！！」

ドゴッ！！ギンギィン！！！！

そのバリアが解け、その瞬間にクラウドが蒔風に剣を振るってマテリアによるファイガを放ってきた。

それを剣の二薙ぎで切り裂き、火球を四分割して後方へと流す蒔風。
そして身体を返しながら宙に反転、両手を合わせてその挟間に雷が迸る。

ザッ、ガッ！！ガッ！！！

そして、両手を突き出して、その間にできたエネルギーを、一つの指向性を以って爆ぜ打ち出す！！！

「雷旺砲！！！」

ドンッ！！バツン！！ババッ！！バツツツツツツツツッッッ！！！！！！！！！

そうして放たれたのは、雷旺砲。
蒔風の持つ獄炎、圧水、雷旺、土惺、混暗、絶光を、弾、掌、砲、竜、陣、尖の形にして打ち出す基本的な攻撃で、最もシンプルで、それでいて最強の一撃・・・・・・！！！！

触れたものを吹き飛ばし、近づくものを爆ぜ飛ばし、前に立つ者を砕き消す。

そんな雷が、クラウドと理樹に向かって猛威を上げて伸びていった。

ドゴォッ！！！

そうして、命中。

二人のいたところが、軒並み吹き飛んだ。
本来ならば、五体は荒れ狂う雷に引き裂かれてバラバラになってい

るはず。

そう、はずだった。

しかし、土煙の中から現れたのは、バリアをドーム状に張ってその攻撃を防いでいる理樹と、クラウドがいただけだった。

そのバリアには多少の焦げ目があるだけで一切押し返された跡も何もない。

つまり、理樹は真っ向から受けて耐えきったのだ。この男の最高ともいえるこの砲撃を。

「むぅ・・・・・・」

「クラウドさん！！」

「ああ！！！」

そうして、再びクラウドが蒔風に向かってくる。

それを受け、銃弾を放つがそれはすべてクラウドに弾かれ、途中から理樹も刃状にしたバリアで蒔風に切りかかってきていた。また、上空遠距離からは観鈴の集中型衝撃波による狙撃。

このままいけば、蒔風は間違いなく負ける。

翼人三人を相手にしてここまで粘っているのは大したものだが、いくらなんでも無茶である。

（仕方ない・・・搦め手を使いましょうか・・・・）

そうして蒔風が剣を収めて、その動きが変わる。
腹を引っ込めてクラウドの剣を避けたと思ったら、逆に腕はクラウドの方へと伸びており、その拳が顔面を掠った。
そのまま腕を振りながら回転し、理樹に向かって腕を振り下ろしにかかって、それでいて腕を止めて足払い、そして止めていた腕を振り下ろし、理樹の顔面を地面にたたきつけた。

「な・・・・」

「この動き・・・・」

「・・・見よう見まねだけど・・・・何とかいけるものだ」

全く一貫性のない攻撃法。
それは、一般的に酔拳と呼ばれるようなものだ。

腕や体をグネグネと動かし、その攻撃のタイミングや軌道が読めなくなった。

しかし、彼らとて翼人だ。
最初に二、三撃は翻弄されようとも、即座に対応して対処した。

と、そこで蒔風の踏み込みが地面を鳴らし、理樹に向かって正拳突きを放ってきた。
その構えは全くの不動であり、まるで銅像を着色したかのようである。

その拳にバリアを張って防ぐ理樹だが、バリアが少し押されて跡を残した。

「なに・・・!?」

「さっきと動きが・・・・」

そして直後、観鈴の衝撃波が蒔風に飛来するが、それをまるで逆立ちでもするかのようにして足を振り回し、クラウドに向かってはじき出した。
それを防ぐクラウドだが、蒔風によるやはり先ほどとは違う動きに翻弄されてしまう。

「こいつ・・・・ッ!!!」

「動きをどんどん変えてきてる!?」

そうして、蒔風の猛攻が始まった。
曲線、直線の動きから、構え方に至るまで一切の一貫性がない。
その攻撃に二人は次々と慣れていくのだが、そうなった途端にまた次の動きに替わるのだ。その対処に精神的、肉体的な疲労はかなり溜まってきている。
そうして蒔風が蹴り技主体の動きをしたかと思うと、おもむろに地面を踏み抜き周囲を粉塵で覆い尽くした。
直後、その煙の中から七獣が人神体で飛び出していって三人ずつ理樹とクラウドに、残りの一人は蒔風とともに観鈴へと向かっていった。
――――――

その戦いを遠くから見ていたものがいる。

真人、謙吾、往人だ。

彼らは理樹、観鈴とともに行動していたが、ここに蒔風との戦いとなっていったん引かされている。

最初こそ彼らは自分たちも戦うと言い張った。

真人や謙吾は戦力になるし、往人の能力は戦闘向きとは言えずともアシストくらいならできるはずだ。

だが、ここにきて彼らはそれが間違いであったことを知る。

翼人同士の戦いには、おいそれと入り込めるものではないと。

無論、純粋なパワーならば真人のほうが強いし、謙吾や往人が入ればより確実に蒔風の体にダメージを与えうるだろう。

しかし、何かが違うのだ。

翼人同士の戦いは何かが違う。

そう、まるで・・・・何か得体のしれない感情の渦があの場を取り巻いている気がしてならないのだ。

だから、入れない。
入れば、どうなるかわからない。

願い、勇気、友情、愛情

それだけの思いが入り乱れたあの場に飛び込んで、無事でいられる気が全くしてこない。

それが、翼人の戦いだった。

――――――

本来、このように蒔風が使役獣を出した場合はそれに応じてクラウドも召喚獣を出すつもりではいた。
しかし、こうしていきなり仕掛けられて、しかも三人も相手にしてはそれを行う暇もないのだ。

無論、理樹も同様だ。
彼は守る事には非常に特化しており、そのバリアによる刃は相当なものだ。
しかし、三人に攻められてはやはり守り一択になってしまうし、攻めるにしても彼のそんなに得意でない攻撃に、三人が直撃などするはずもない。

そうしているうちに、最も打たれ弱い観鈴に蒔風と玄武が向かった。
もちろん観鈴もただ見ている事などなく、衝撃波を発して止めにかかるが、蒔風は玄武を剣に変え、更に玄武盾にしてその衝撃波を防ぎながら観鈴に接近する。

「こ・・・ないで!!!」

「そうもいくまい」

ガッ!!と、蒔風が観鈴の首を掴み、そのまま地面に引きずり降ろす。
そして、彼女の頸動脈を親指の付け根で締め、即座に意識を飛ばそうとする。

しかし、彼女も純白の翼人だ。
体の耐久力は常人のそれをはるかに超えている。
故に、普通ならば十秒かとかからずに意識を失うところを、たっぷり三十秒も駆けて意識を失っていった。

そうして、蒔風が彼女の身体をぶらりとぶら下げて、青龍たちを引かせた。
彼の元に集まり、後ろに下がる青龍たち。

そして、蒔風に掴みあげられている観鈴を見て、理樹とクラウドの動きが止まった。

「さて・・・と」

「観鈴さん!!」

「貴様・・・・」

その蒔風に、激昂する二人。
その二人を見て、蒔風が鼻で軽く笑った。

「お前ら三人相手して、まともに勝てるか」

「なにが・・・望みなんだ・・・・・」

「ん？」

「観鈴さんを放せ・・・・望みなら・・・」

「ねえよそんなの・・・・捕まえたらこうだ」

瞬間、ゴグッ！という音を立て、観鈴の首が折れて光へと変わる。

「な・・・」

「なんだよ・・・なんて顔してるんだ。注目したのはお前らの勝手だ。人質とかにでも使うと思ったか？」

「お前・・・・」

「翼人相手に人質は効かない。そんなことはオレが一番知っているからな」

「お・・・まえ・・・・」

「どうした・・・絶望でもしたか。たかが「聖人」の翼人が、なんの策もなしにこうなりゃ「戦士」の翼人に勝てるわけねえだろ？」

「蒔風ェぇえええええええええええ！！！」

「絶対に・・・許さないッッ！！！！！！！」

ドドンッ！！！

二人の周囲に、赤と青の光の粒子が集まり、翼にすべて集約されていく。

彼らの翼の司りし想い。

勇気と友情が、彼らの仲間の思いが。
すべて集まって彼らの力と変わっていく。

「蒔風・・・・貴様に立ち向かう皆の勇気、受けてみる覚悟を決めろ！！！！」

「舜。仲間を想うその気持ち。それを踏みにじった事を後悔させる！！！！」

そうして、二人が力を込め、蒔風へと向かってこようとする。

しかし

「翼に集え、我が力よ！！！！！」

青龍たちを引っ込め、そう蒔風が叫んだ瞬間、その翼に尋常ならざる量の金の粒子が集まって行った。
それは、願い。彼の翼が司る想い。

だが、おかしい。
今彼の事を願う仲間などいない。
彼の勝利を願っている者などいないというのに、この願いはなんなのか・・・・・！！！！

「すべての感情が何から来てるか知ってるかい？」

「なに？」

蒔風が話す。

「敵に立ち向かいたいと「願う」事で、勇気が生まれる」

「・・・・・」

「仲間を救いたいと「願う」事で、友情ができる」

「まさか・・・・」

「誰かと一緒に居たいと「願い」、両者に絆が生まれ・・・・誰かを大事にしたいという「願い」が、愛情を生む」

その言葉は、あまりにも雄弁で。
それでいて、遥かな上位からの語りかけであった。

「すべての感情は、「願い」から発生する。ならばこそ・・・「蒔風を倒したい」の「倒す」という部分のみを取り出し・・・・「仲間を救いたい」という「救う」のみを取り出し自分に当てる・・・・するとどうなるか!!!」

ドォオ・・・・・・!!!!!

蒔風の翼が大きく開き、その力が全身にまわって回復する。

「大まかな感情になるゆえに力は下がるが、二人分なら全快してな

お余りある・・・・ありがとうよ。お前らが集めなきゃ、こんなことできなかった」

そうして、蒔風が降り立つ。
理樹とクラウドが目の前の存在に脅威と、それとほんの少しの絶望を感じとった。

勝てないのではないか・・・・と

感情をエネルギーにし、取り込むのは翼人にとって最後の手段だ。
それをしては自分の体力も大幅に削られ、その力は攻撃か回復下に回される。

二人はすでにその力を「攻撃」に加えることに決定し、そうしている。今さら変えることはできない。

だが、この男はその二人の力をかすめ取って全回復。
正直に言って、全開状態のこの男に勝てる気などしていなかった。

もちろん、二人で粘り続ければ勝てるだろう。
と、言うか蒔風を手段を選ばずに本気で潰しにかかれば勝てるのだ。

だが、二人は隣に仲間がいる事も忘れ、目の前の男を凝視していた。

そして、その顔がだんだんと脅威を目の当たりにした者から、怒りへと変わっていく。

あの感情は、離れた場所にいるみんなが自分たちのために出してくれた勇気と友情だった。
それをこの男は利用し、かすめ取って行った。

確かに、総ての感情は「願い」から来るのかもしれない。

だが、だからと言って

自分たちのためのその感情を、他者が利用することなど、許されるはずもないのだ・・・・！！！！！

「理樹・・・潰すぞ・・・・」

「うん・・・絶対に・・・・倒す!!」

「故に、我、原初の翼人。すべてに根ざす者。お前たちはその力を使うべきではなかったな」

蒔風が剣を地面に突き立てる。

いま、過去に一度しか見せなかった蒔風の大技が発動しようとする。

それに対するは「漆黒の翼人」クラウド・ストライフと、「薄緑の翼人」直枝理樹。

最高峰ともいえる攻撃力を持つ者と、最高峰の防御を持つ者。

両者は、再び激突する。

この戦いは終わらない。

to be continued

銀白ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；薄緑＆ａｍｐ；純白（後書き）

観鈴「うう・・・やられちゃったよ・・・がお」

御疲れー

観「私確かに翼人じゃ弱いけどあんなやられ方なんて・・・ひどいよー！」

ブー垂れないで

マーク

観鈴・・・「Ａｉｒ」のロゴ

さて、今回は重要なお知らせがあります。

実はこの小説、次回からは隔日更新にしたいと思います。

理由は簡単。私が書くのが遅いからです。

度重なる戦闘シーン。

その描写はどうあっても長くなってしまい、更にはその戦闘を決める技なども考えるに当たり、どうしても時間を長く取らねばなりません。

しかし、私が執筆にとれる時間は学校が始まり、バイトもあるためにそんなに長くはありません。

第一章は大丈夫でした。日常パートがあったから。
でも第二章は戦ってばっか。さすがに大変です。

現にここ数日は一日飛ばしになってやっとというところ。
ですので、次回からは隔日更新という事にしました。

その分、日曜でも更新するようにしますので、次回からもお楽しみにしてください！！

観「次回、引き続きクラウドさんと理樹さんの戦いだよー！」

ではまた次回

リスト残り

キョン
長門有希

ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
国崎往人
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
井ノ原真人
宮沢謙吾
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

二神ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；薄緑

蒔風が獅子天麟を突き立て、それの上にまるで天使の輪のように龍虎雀武を浮遊させた。

「剣の一薙ぎ、拳一発すらも放たずに、完全なる全快状態のみに発動できる技・・・・二伸召喚。顕現せよ二柱！！！！」

ゴォッ！！！と風が渦巻いて、剣が輝き、とてつもない光を放って二つの剣が姿を変えた。

真ん中に蒔風が指を合わせて遊んでいた。
背には翼が輝き、顔はニタニタと歪んでいる。

その左に青い髪をした応竜が立つ。
手には解放組立状態の龍虎雀武が。今は朱雀槍の先端に青龍刀がついた薙刀のような形になっている。

そして、右には赤い髪をした鳳凰が。
手には獅子天麟。大地に突き立て、腕を組んで敵を睨む。

「ふむ・・・この状態は本当に久々ですな」

「だが、この相手ならば納得だ。して主。どのように？」

「生死は問わん。倒せ」

「「御意」」

蒔風が土埃で地面を椅子に作り上げてそこに座る。
そして応竜、朱雀はそれぞれ理樹、クラウドのもとへと剣を構えて突っ込んでいった。

「これ以上手間とらせんなよ？二人とも」

蒔風が笑う。
その笑みは、悪の者のそれだった。

ーーー

「ッッッ！！！！」

そして、地面にそれを叩きつけると、叩きつけた場所から三つに切れ目が走り、そこが赤く光って爆発した。
それを上空に飛び上がって回避したクラウド。そこから着地とともに朱雀に剣を振り落としてそこから回転して後ろ蹴りを顔面にたたきつける。

朱雀はクラウドの剣をバックステップで躱したが、顔面へのキックは躱せなかったのかまともに命中してしまう。
だが、そんなものは全く効いていないかのようにその顔面に当たった足を左手でつかみ、地面にクラウドを叩きつけた。

ゴカッ！！！という音を立てて、彼の体が地面を撥(は)ねた。
しかし、それでも宙で体制を整えて、剣と突き立てストッパーにして両足で着地したのは流石だ。

「あまりこの体を傷つけないでもらえるかね」

「それは・・・断る！！！」

ブンブン、ゴカッ！！

クラウドが剣を振り上げて突っ込み、朱雀に向けて横薙ぎ、しゃがんで躱した朱雀が一回転したクラウドの背に向かって剣を振り下ろす。

が、クラウドは振り回した剣を握ったまま投げるかのように朱雀の上に向かって伸ばし、その勢いに乗って跳躍、地面に振り下ろされた獅子天麟を踏みつけて地面にめり込ませる。

そうして一瞬動きを止められた朱雀めがけて、そのうえでもう一度跳躍。

宙で体ごと剣を振り回し、その剣に青い魔光のオーラを纏わせて叩きつけた。

それを朱雀は獅子天麟を地面にめり込んでしまった麒麟を残し、「獅子天」のみを引き抜いて回避した。

だが、地面にぶち当たったクラウドによる衝撃凄まじく、朱雀の体がはじけ飛ぶ。

一方、理樹のほうだが応竜の変幻自在な攻撃に防戦一方だった。
朱雀槍の先端を次々と変えたり、両手に青龍刀と玄武盾などといった武器を以っての二刀攻撃などで全く先が読めないのだ。

だが、それでも理樹はそのすべてを防いでいた。
ひっかくような刃、引き裂く斬撃、重く鋭い打撃。それらすべての攻撃を、最小限の防御で防ぎ切っていたのだ。

防御とは、ある意味で攻撃よりも高等なスキルだ。

いくら防壁が頑丈だからと言って、ずっとバリアを張っていればいいというわけではないからだ
そんなことをすればいくら頑丈なバリアでも、いずれは疲弊して打ち破られるし、大きなバリアほど隙が大きい。

その分、理樹が現在行っている防御は素晴らしいものだった。

最小限にして最硬のバリアで防ぎ、決して無茶な大振りはしない。

ゆえに、一見一方的に見える応竜の攻撃なのだが、実際には彼は攻めあぐねていた。

いくら攻めても、この防御壁が破られる気配がないのだ。

通常、こういった手合いが相手の場合は一点を集中して攻撃して破壊するのがセオリーだが、このバリアはただ張っているように見えて、実は表面上は流動的になっている。
バリアが理樹の意志によって変則的に動いているため、一点集中などできるはずもないのだ。

つまり、彼のバリアはそこに壁を作るのではなく、それがベルトコンベアのように動き続けているということ。
それはまるで川の一部を切り取ったかのようで、どこから来てどこへ流れるといったものではない。

そんなバリアではもはや打ち破るとかの話ではない。
もともと何もしなくてもあの雷旺砲を受け耐えうるものだというのに、それがこんな力まで働いていては破壊するだけでも相当の労力である。

そうであっても応竜には攻撃するほかない。
大振りや小振りな攻撃で攻めていくが、その一瞬を見切った理樹によって武器がバリアの回転に呑まれ弾かれる。

と、同時にクラウドの衝撃で朱雀も弾き飛ばされてきた。

吹き飛ばされながらも、その二人が視線を交差して一瞬で意思を疎通させる。

そして二人がすれ違う時、そのまま互いの足の裏を踏みつけ、朱雀は理樹に、応竜はクラウドに向かって飛び出していった。

こうして、相手が入れ替わる。

しかも、獣神体となってだ。

標的が大きくなったものの、その脅威は数倍に上がったと思ってもいいだろう。

応竜の姿は東洋の龍に翼が生えた姿で、鳳凰は通常の鳥型に、二股に分かれた尾がさらに一対の翼に見えるという形だ。

巨大な姿をうねらせて、クラウドと理樹をその通過した風圧だけで吹き飛ばしてひとまとめにした。
二体は上空でぐるぐると回って滞空している。まるで二人を見定めているかのように。

その彼らが何をするのか。どんな攻撃をしてくるのか。
理樹とクラウドは各々身構え、攻撃に備えた。

しかし、彼らの攻撃は単純明快にして強力だった。

そう、ただその巨体に有り余る膨大なエネルギーを全身から吹き出すだけだ。

身体のいたるところからレーザーのように噴出したエネルギーが周囲を駆け廻っていく。
その隙間を走り抜け回避していく二人だが、相手は上空なのだ。このままではいずれ潰される。

故に、理樹がバリアを張って上空に突っ込み、その後ろにクラウドがぴったりとついた。
理樹のバリアに何本ものレーザーがぶち当たっていくが、その程度ではバリアは何ともない。勢いに押し返されそうにもなるが、後ろ

からはクラウドも後押ししているのでその勢いが衰えることはない。

そして、理樹がついに到達した。

バリアという弾丸になった理樹がその勢いのまま鳳凰の腹部にめり込んでそのまま押し上げ、クラウドが応竜の尾を掴んで振り回し、同じく上空に投げ放ってその後を追っていった。

「・・・・グふっ・・・・・・ペッ・・・・・・・・あと・・・二分かな・・・・」

それを見上げ、蒔風が口から吹き上げてきた血を地面に吐き、口元をぬぐって腹を押さえる。

見ると鼻からは鼻血でも出ていたのか真っ赤になっていた。

――

――――――――――――――――――――――――――――――

雲の上

そこで空中戦が繰り広げられていた。

薄緑と漆黒の翼が舞い、それに襲い掛かる二体の巨大な怪物。

応竜がとぐろを巻いてクラウドに襲い掛かるが、クラウドも弾丸のように回転してその鱗を削り、すれ違いざまに髭を切り落とす。

が、後ろに抜けた瞬間、応竜の尾がクラウドの横っ腹に衝突し、ゴキゴキと嫌な音を立てていく。

クラウドは下方に吹き飛ばされ、雲に突っ込みそうになるがその寸前で体制を立て直してその上を滑空して距離を取る。

一方、理樹は自らをバリアに包んで弾丸のように鳳凰へと突っ込んで行っていた。

しかし、鳳凰もその巨体からは想像もつかないような旋回や急降下を見せ、理樹の体当たりを避けていく。

だからと言って、鳳凰のターンかと言えばそうでもない。

鳳凰はその口から炎を吐き、理樹を包み込んでいくが表面の回転しているそのバリアには当たったところでかき消されていってしまうのが関の山で、いまだ焦げ目の一つも付けられていない状況だ。

薄緑の翼。最高防御を誇る翼人は、いまだ攻撃と言えるような攻撃を一切食らっていないのだから。

「理樹！！離れろ！！！」

そうして理樹が鳳凰と超高速の空中戦を演じていると、クラウドの叫びが耳に届いた。

見るとクラウドが頭上で剣を振り、そこにエネルギーが溜まっていった。

「メテオ・・・レイン！！！！」

ゴッ・・・ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュ！！！！！

『ヌぅう・・・・！！！！！』

『これ以上のダメージは主に・・・・！！！！！！』

ドドドドドドドドドドッッ！！！！！

天空から降りかかる無数の岩石に炎が纏い、応竜と鳳凰に落ちていった。
それを旋回や急降下、身体をよじってなどして回避するが、その数はまさに星の数ほどあるのではないかというほどのもので、八割という実に多くの隕石群が命中していった。

しかし、その攻撃に二体は耐えた。
とはいっても形状は人神体に戻っているし、最初にあったような神々しさすら思わせる畏怖、威圧感はまったくなくなっている。

「さすがは翼人という事か・・・・」

「我ら二人で・・・倒せぬとは・・・・・」

無論、この二体とて弱いわけではない。
この二体はかつて、五体満足、全開状態だった「奴」をその体当たりと衝撃波で粉砕し、打ち負かし、死に体だった蒔風を勝利へと導いた二体だ。

今回の相手は翼人二人。それが悪かった。
ただ、相手が強すぎたというだけの事。

しかし、その二体の身体には傷らしきものは一切なく、このまま戦闘は続行できそうな様子だ。

だが

「・・・・！・・・・・・・聞こえたか？」

「うむ・・・・目的は達された。我らはもう戻るか」

鳳凰が何かを感じとり、応竜が応えて頷く。

すると二人の身体が輝き、応竜は四つ、鳳凰は三つの光に分かれてその場からバラバラに離脱し散ってしまった。

『全員このまま離脱。主の元で再集合だ』

『捕まるなよ!!』

『『『『『応!』』』』』

そうして、七体が飛んで行って消えてしまう。

その跡を追おうとする理樹だが、クラウドはハッ、と何かを思い出して真下を見、真っ直ぐに降りていった。

ーーー

『こちら、白虎だよ。まずい事になった』

『どしたよ？』

『とちったんじゃねーだろうな？』

『理樹っちが僕のこと追っかけてきてる。このままじゃ舜のところ戻れないよ』

『・・・・クラウド殿は？』

『誰の方にも向かってないのう』

『追われてるのは白虎だけですか。あなたは追いかけっこになるとホント不運ですね』

『七分の一だからな』

『そんなのいらないよ～』

『我らで引きつけるしかなかろう』

『・・・・タイミングを見て、主の元へ。我々では封印はできない』

ーーー

あの応竜、鳳凰を召喚する代償。

それは「二体が受けたダメージをすべてフィードバックする」

故に、あの二体が受けたダメージはすべて蒔風が背負ったのだ。

だから彼は戦闘に参加しなかった。

しかし、あれだけの大技をして狙いはクラウドたちではない。

むしろすべてはあの三人を何の苦もなく潰すために二人を引き離したにすぎないのだ。

「やってくれるな・・・・」

そうして、理樹が飛んで行った方向を見るクラウド。

その方向に、自分のバイクに跨って走り出した。

銀臼、まんまと逃げおおせる。

to be continued

二神ＶＳ漆黒＆ａｍｐ；薄緑（後書き）

と！！言うわけで超久々に出ました「二神召喚」！！！

三人「描写は！？」

キック！！パンチ！！チョップ！！
固有結界には固有結界で討ち破ったよ！！

マーク
三人とも各作品のロゴ

三人「説明がヒデェ・・・・・」

さて、かなり佳境に入ってきましたね。

これからは敗者復活戦になりそうです。
つまり、一度負け、敗走した者たち＋αで行きますよーーー！！！

にしても二日かけたくせにこの時間・・・・
申しわけございませんでした。

ここからは自慢話だよ！！！

ですが、恐ろしいことが発覚してしまいました・・・・

皆さまは「Ｇｏｏｇｌｅ」をご存じだろうか？
そう、かの有名な検索サイトです。

そこのメインページで文字を打つと検索候補が出てくるのですが・・・・

「世界」と打ち込むと「世界一受けたい授業」や「世界地図」
「世界を」と打ち込むと「世界をかえておくれよ」「世界を変える１００人の日本人」

と、出てくるのですが・・・・

そこで、さらに「め」と打ち込んでみると・・・・

なんと候補の中に「世界をめぐる、銀白の翼」の文字が・・・・・！！！

ちなみに一緒に「世界をめぐるスープの旅」がありました。
蒔風＝スープですか・・・・

これを見た瞬間、嬉しくてさらに恐ろしくなりました・・・・！！！

と、言うだけの話。

真人「次回、オレの筋肉が！！！」

謙吾「違うだろ！！俺たちのリトルバスターズが・・・・」

往人「はぁ・・・次回、神に近しい者との戦い」

ではまた次回

リスト残り

キョン
長門有希
ベナウィ
泉戸裕理
泉戸ましろ
クラウド・ストライフ
古手梨花
古手羽入
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク

デネブ
直枝理樹
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー
ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ御社＆太転依

「今は誰だっけ？」

「朱雀じゃ。あやつなら涼しい顔して帰ってくるであろうよ」

「ったく・・・振り切っちまえよ。テメェも逃げ切っちまえばよかったのによ」

「無茶言わないでよ。翼人相手に僕らじゃ勝てないに決まってるじゃないか」

「・・・次は誰か・・・」

「また白虎かもしれんな」

「やめてよもぉ！！」

「来たぞ！！！」

六人のうち一人が叫び、その体が光になって六つの光体となる。
そして、飛んできた朱雀も同じように姿を変え、七つの光がまるでシャッフルのようにぐちゃぐちゃと交差してからバラバラに散った。

そのうちの一つを、あとからやってきた理樹が追う。
考えてなどいない。とにかく追うしかないのだ。しかし、このやり取りはもう三回目。
改めて翼人の化け物じみた力を思い知る。

「次は俺か・・・へっ、じゃあこれで振り切ってやるぜ!!!」

そうして、次の標的になった天馬が理樹からの逃走役として飛び去っていく。

残りの六人はまた集合場所を決めてそこで天馬を待つ。

「主のもとには・・・まだ帰れぬな」

『・・・残りの八剣で・・・・何とかしてもらうしかない・・・・』

ーーー

ベナウィと共に古手梨花、羽入を守りながらほかのメンバーとの合流場所に向かって、この場所を通過していた所を蒔風に狙われたのだ。

当初、能力を打ち消し、さらには神通力をも使う裕理が蒔風を攻めていた。
その補助でベナウィが蒔風の足元を狙って槍を薙ぐ、ましろの槌が頭上から振り下ろされるなどの妨害もした。

だが、その陣形が出来て蒔風を追いたてようとした瞬間、蒔風が狙いを古手梨花のほうへと変えた。
傍らには羽入がおり、その神力で蒔風の撃った銃弾を止めて落すが、そこからは完璧にそちらに標的を変えたのだ。

それを受け、ならばと裕理がそちらに走って二人を守ろうとする。

だが、そちらに走り出した瞬間、蒔風が銃口をましろに向けた。
その蒔風に行動に裕理が目をギョッと開き、梨花たちの方へと向いていた足を強引にましろのほうへと回し方向転換、彼女のもとに向かった。

その瞬間、蒔風が簡単な獄炎弾を放って裕理を吹き飛ばしたのだ。

あまりにいきなり、そして崩れた体制ということもあって、直撃こそはしなくとも裕理の体が焦げる。

最初の叫びと静止はここでのことだ。

裕理が吹き飛んだのを見て、まだ倒れていないと思いながらも、蒔風が向かってきたベナウィの槍を銃身で受け止める。

数秒してから、ベナウィの槍と蒔風の銃が互いに押し返し離れ、そこからもう一度振り戻し、ベナウィが槍を蒔風に突き放った。

それを脇腹数センチで躱した蒔風がベナウィの眉間に銃口を突き立てて発砲。ベナウィは体を回転させてそれを回避し、その回転のまま蒔風の右につき、銃を持つ腕をわきに挟み掴んだ。

額が裂け、血が流れてきていたが、あの至近距離で銃弾をかわしたのはとてつもないことである。

蒔風の動きと銃が抑えられ、羽入がついに動いた。

その能力を解放し、時間操作能力をいかんなく振るい始める。

蒔風がベナウィを振るい放そうとすると、その瞬間にベナウィは消え、ほかの場所に移っていた。
また、銃弾を羽入に放つと見えない壁に押しとめられて反転、蒔風の肩口に着弾した。

その反撃に蒔風が銃を落とす。
しかし、地面に落ちる前に蒔風がそれを足で軽く蹴り上げ、宙に浮いたそれを後ろ回し蹴りでベナウィに蹴り飛ばした。

それをベナウィは槍を使うこともなく避ける。
否、避けようとした。しかし、その飛距離はどう見ても彼の足元で落ちてしまうであろうものだ。

それを見て、ベナウィがその場から走って離れ、銃との距離を取った。

横にずれてから蒔風に突進するベナウィ。
背後では銃が地面に落ち、猛烈な爆発を起こしていた。

その爆風を背に、より加速したベナウィが蒔風に槍を突き出してくる。

その槍を蒔風が焦った表情で白羽取りし、刃を折ろうと力を込めた。
と、その瞬間に再び彼が消える。

見渡すと羽入がベナウィと共に蒔風から離れた場所にいるではないか。

「時間操作・・・・」

「誰もやらせません・・・・ボクがみんなを守るんだ!!」

それは、かつて、そして今も。
土地神としてみんなを守ってきたオヤシロ様の信念。

守ってきたなどと言われても、自分はずっと傍観者だった。
そして、教えられたのだ。生きる意志の強さを。その強さを、もう失わせないために!!

「あなたを・・・倒します!!柳桜(りゅうおう)!!」

そう叫んだ羽入の手に、七支刀と呼ばれる形をした剣「鬼狩柳桜(おにがりのりゅうおう)」が光を放って顕現する。

「・・・過去を断ち切ったか・・・・！！！！」

「いいえ・・・乗り越えたのです！！！！」

そう言って、羽入が神力を込めてその剣を振るい襲いかかってきた。
それを蒔風が組み上げた「天地」で受け止め、飛びのいて襲い掛かってきたましろの槌を回避する。

と、そのタイミングを狙ってベナウィが槍を蒔風の背中に向かって放った。

が、それには蒔風が消していた獅子天麟らの鞘をだし、背後の攻撃を防いだ。

そこから転がったまましゃがんでの足払い、「天」を上向きに地面において、羽入とましろに向き直った。
蒔風の背後で光が立ち上ってベナウィが消える。

「ベナウィさん！！！」

「オオオオオオオオオオオおおおおおおお！！！！」

その光景を見て、全身の痛みなど吹き飛んだ裕理がらしくもない咆哮を上げて法力を練って尋常ではない神通力を発する。

彼の体の構築はすでに人間のものを超えている。
ましろと一緒に生きていくために、その身体の半分を太転依と同じものにした彼は、半神半人のようなものになっているのだ。

その彼が、その膨大な力を放出するがために頭に血管を浮かせ、白目を剥き、鼻血を流して全身から発せられる力を一点に収縮、その一点から一気に撃ち放った。

その攻撃を、蒔風が避けようとする。
しかし、それを蒔風の脇腹を紙一重で通過して行った瞬間。

その膨大なエネルギーを撒き散らし、大爆発を起こした。

「っつッ!?ガアアああ!!!!」

「や・・・った・・・あぐ・・・」

「裕理さん!!」

「大丈夫なのですか!?」

「大・・・・丈夫・・・・それよりも蒔風は！？」

ましろに抱え上げられ、裕理が蒔風の方を見た。

ちょうどそのタイミングで、爆発で吹き飛んだ蒔風が頭を抱えながら草むらから出てくる。

血を流し、くらくらと揺れながらも、その揺れから戻ろうとしているようだ。

「今です！！」

「神域展開！！」

「グッ！？・・・・・・・・・」

・・・・・・・

羽入が力を再度発揮し、数秒という短い間だが、時の流れが停止した。

この世界で動けるのは羽入だけ。
しかし、今の羽入には宝刀「鬼狩柳桜」がある。

その世界で、蒔風の首元狙ってその剣を振るう。
ザクッ！！という音がして、蒔風の首に剣がめり込む。

しかし、その首にどれだけの力が込められているのだろうか。
刃がめり込んで、すぐに止まってしまった。

それを見て驚愕する羽入だが、それでも力を込めて振りきろうとする。

「くっ・・・このぉ・・・・！！！！」

しかし、その刃は更に一ミリ進んで完全に止まった。これ以上の力を羽入が出せるわけもないし、そもそもこの神域結界が限界だ。
羽入が剣を引き、蒔風から離れてその結界が切れる。

瞬間、ブシュッ！という音を立てて蒔風の首から血が流れ出し、その痛みに首を押さえて歯軋りする。

「テメェ・・・・・・」

「ハァッ！！」

ドッ・・・スン！！！

と、蒔風の真横からましろの槌が襲いかかる。
血をぼたぼたと流しながら、それを回避する蒔風。

現状、裕理はあの一撃での反動疲労で梨花のそばにいるようだが、
この二人だけでもキツそうな表情をする。

と、更にそこに

ブンッ・・・ドゴッ！！！！

「ガッはぁっ！？」

「・・・・目標の耐久力、５３％に低下」

長門の拳による重い一撃が、脇腹にめり込んだ。

彼女のその動きはまるで達人のそれだ。

おそらくはその体に情報をインストールしての動きだろう。

そう言う場合、身体の経験が追いつかないものだが、彼女の場合はそれを容易に越えてきていた。

蒔風の身体が吹き飛び、大木に衝突してその木がメキメキと横に倒れた。

「退くぞ！！」

「キョンさん！！！」

と、そこでキョンが裕理を肩に抱え、梨花をその後ろに隠すようにして出てきた。

「こっちにも負傷者が多いんだ。オレらがこれ以上がんばる必要はない！！」

キョンの言う事は確かだ。
だが、ここまで弱らせたのに追い打ちをかけなくともよいのかという思いもある。

「ダメだ・・・キョン、ここで斃さないと・・・・！！！」

「なんでオレらがそこまでやらなきゃならんのだ。この状況でまた何人かやられてみろ・・・プラマイゼロだろうが！！」

そうしていると、蒔風を見張るかのように立っていた長門がバックステップでましろの横まで下がってきた。

その右手は何か液体がかかっており、シュウシュウと音を立てて融けていた。

「これは！？」

「強酸性の液体」

そう痛みに顔を変えることもなく長門が淡々と言って手を修復する。

立ち上がった蒔風が手にしているのは、一本の小瓶だ。
おそらくは長門の手を溶かした液体はその中に入っていたのだろう。

そして、蒔風がさらに懐に手を突っ込みその小瓶を十本ほど取り出して、蓋を開けて宙に放った。
ガラス瓶がカランだったりカシャンだったりの音を立てて地面に落ちるが、液体が落ちた音はしない。

見ると、蒔風の手の上にはその液体が圧水で集められてフヨフヨと浮いていた。

「マジ・・・かよ・・・」

「ッ・・・ハ！！！」

そうして、蒔風がまるで指揮者かのように指を振るい、その液体が細い鞭のようになって襲いかかって行った。

「うオォっ！！！」

「キャぁッ！！」

「・・・・・」

各々がその鞭を回避して行く。

しかし、そんな物を回避しきるほどの体力などないし、そもそもキョンは裕理を抱えてその背後には梨花がいるために動くことができない。

その足を鞭が通過して行って、ジュワッ！！という音を立ててその皮を爛(ただ)れさせる。

その鞭は液体ゆえに触れたところで通過して行くだけだ。

だがそれは蒔風の動き次第。

当たった時に腕を引けば肉が爆ぜ、振りきれば通過して融かされるだけ。

キョンの足がガクガクと揺れ、次第に肩、頬、脇腹と鞭が掠めていってその傷が増えていく。

無論、ましろや羽入はもちろん、長門もそちらに向かおうとする。
しかしその瞬間、どういうふうに踏みつけているのか、蒔風が地面を踏むとその行く先に畳返しの壁が立ちふさがって邪魔をする。

その妨害に、ましろが蒔風に向かってその攻撃をやめさせようと走って行った。

その間にも蒔風はキョンに攻撃をやめない。
ましろが迫ってきているのがわかっていながらもそちらに一瞥することもなく圧水をコントロールしているのだ。

「もう・・・やめてください！！！」

そうして、ましろの槌が振るわれる。
どうせ避けられる。だから、最初から顔面ではなく腹部を狙った。

にもかかわらず

「ぐッ・・・・」

「え！？」

その槌は命中した。
蒔風の腹にメキメキとめり込んだ。

そして

「バはッ！！」

「！？キャアっ！！！」

蒔風が吐血する。ましろに向かって。

その血流がましろの顔面にバシャッ！とかかって視界を封じ直後、
ましろの心臓部を絶光尖が貫いて彼女をカードに変えた。

「ましろさん！！」

「ましろォ！！！」

「さて・・・囮ごくろう」

そして、ガポンと

キョンの頭部を圧水――肉を溶かすほどの強酸性の液体が包み込み、彼の身体が消えていった。
同時に、裕理の身体が地面に崩れ、キョンを包んだ液体がそのまま口から滑りこんで弾けた。

その攻撃に、当然裕理も消える。

それらの事態に、羽入が梨花を連れて逃げようと彼女の方へと走り出していた。
長門もそれに続いて彼女を守るかのように蒔風に立ちふさがった。

長門が腕を硬質化させて蒔風に突き出すが、それを蒔風が右掌を出してそこに突きたてさせ、そのまま握り止める。
そうして長門の動きが止まり、蒔風の左熊手が顎を捉えてその身体を草むらの向こうに吹き飛ばした。

「梨花!!逃げるのです!!」

「は・・・」

「早く！！」

「羽入ッ！！！」

ガッ

「実に掴みやすい角だ。これなら苦もなく・・・」

「ッッッッ！！！！！鬼狩（おにがりの）・・・・！！！」

ゴキン！

背後の蒔風に羽入が剣を振るおうとするが、それよりも早く蒔風が両手で掴んでいた角を捻って首を折る。

目の前で羽入が消え、カタカタと震えながら梨花が座り込んでしまう。

ブツブツと何かをつぶやいているが、その梨花を蒔風が抱きかかえ、一気に腕を絞ってコキリ、という音がたってその体が消滅した。

その後、蒔風が長門を吹き飛ばした草むらを見るが、すでに逃げたのかそこに彼女はおらず、遠くから何人かがやってくる気配がした。

それがここに来るまでに、蒔風はこの場から消えた。

五分後、セイバー達が到着したころには、多くの血の跡しか残っていなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

銀白ＶＳ御社＆太転依（後書き）

いきなり始まり、いきなり終わるよ！！

ましろ「うぇ・・血でべったりですよ・・・」

キョン「顔面に酸とかあいつは鬼か・・・・・」

裕理「僕はながしこまれたけど?!」

羽入「この角がこの角がこの角が・・・・」

梨花「また死んだまた死んだまた死んだ・・・」

はいはい皆さん御疲れですたー。

全員「ですたー」

マーク

羽入、梨花・・・クリスタルみたいなカケラのシルエット

キョン・・・ＳＯＳ団マーク

裕理・・・八衢の紋
ましろ・・・槌にあるマーク

さて、今回は本文に出た「熊手突き」について説明いたしましょう。
まあ言ってしまえば「掌底」ですね。
手の作り方は

1、手を指の隙間を開かずに開く。
2、指だけを曲げる。指だけグーにする感じ
3、手のひらの下の部分で殴る。

です。

今回は剣があまり使いきれないので能力と卑怯を使って勝ちました。
このままだと次回は・・・・

キョン「次回、そのまま追いかけて・・・？」

ましろ「セイバーさん達ですか？」

ではまた次回！！

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
ランサー

ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ英霊？

渓流。
両側を崖に挟まれ、その最下層に川が流れている。
崖に挟まれているとは言っても沢があり、その広さは十分にひろい。

空は晴天。
きれいな光に、美しい川。沢から崖にかけては小規模ながらも木々が生い茂っている。

そのきれいな川の水に、赤い液体が流れてきた。

見ると、川の中に誰かが入っており、どうやらこの赤はその人物のものであるという言うことが分かった。

川から上がり、傷を拭く男は蒔風だ。

濡れた体を圧水で水分を飛ばし、一瞬で乾かす。

そして掛けてあった服を取り、着替える。

「傷が多くなったな・・・それに・・・・」

そう言って、懐から懐中時計を取り出す。
しかしそれは現在時刻を示すものではないのだろうか、動いている針は一本のみ。針の動きは目を凝らして初めてわかるくらいのもので、普通の時計にして４５分のところを指し、何かの経過を示していた。

「もうそんなに経ったか・・・・」

蒔風が時計をしまう。
その顔は心なしか焦っているようにも見えた。

と

「見つけたぞ・・・・蒔風!!」

「・・・・・・・おぉ」

蒔風がびっくりしたようなジェスチャーをして、セイバーたちに対しておどけて見せた。

「あそこから追いかけてきたのか？よく来たな。歓迎しようか？」

「そのようなものは結構だ」

そう言って、セイバーが剣を構える。
いつも通り目に見えないが、確かに存在している聖剣だ。

（七刀は理樹との追いかけっこでこっちに来れない・・・気配からして・・・・士郎と凛もいるな。大方、セイバーに止められながらもランサーと来たってことろか・・・・）

蒔風がおもむろに銃を取り出し、特に見もしないで右斜め後ろの木の上に向かって発砲した。

直後、銃弾が弾かれる甲高い音がして三発の銃弾が六つになって地面に落ちた。

「気付かれてるみてぇだな・・・・」

「ランサー!!・・・やはり来てしまいましたか・・・」

蒔風の後ろで、ランサーが凛と士朗と共に茂みから出てきた。

そのランサー曰く「戦いたいならやらせりゃいい。抑え込んでも仕方ない」だそうだ。

だが、蒔風の表情は良くも悪くも変わらない。

「やんのか?やらないのか?どっちだ?」

「こちらが下がっても追ってくるくせに・・・」

「今は怪我してんだ。少し休みたいんだよな」

「だったら・・・なおのこと引けないな！！」

そうして、セイバーが剣を振るう。
が、蒔風はそれに対してまともに対応しようとしない。

スウェーで、しゃがんで、バックステップで
そんな簡単な動きでセイバーの剣を避けていく。

「この剣を見切るか・・・・！！！」

「典型的な西洋剣じゃねえか。ンなもん見切るもくそもねぇよ・・・・っと」

ゲシッ、と

蒔風が剣を振るセイバーにケンカキックをかまして後退させる。
その攻撃はあまりにもあっさりと入れられ、セイバーの自信とプライドが揺れた。

彼女は最優のサーヴァントとしてカテゴライズされている。

そんな彼女が、超一級とはいえ暗殺者（アサシン）である彼にこんなにも遅れを取る。

あり得ない。が、それがまた蒔風のありかた。

「オレは真っ向からより背中からブスリが一番得意なんだよ。お前と最初にあった時の模擬戦でもそうだったろ？」

「だったらよぉ・・・・俺なんかの相手はどうだい！！！！」

ボボッ！！と、空気を貫く音がしてランサーの槍が蒔風に放たれる。その槍はランサーを飛び越えて回避した蒔風の上着を引っ掛け、それを穴だらけにしてしまう。

ランサーの背後にまわり、「天」で突き刺そうとする蒔風だが、それはいとも簡単に止められる。

「チッ」

「どうした？もっとまじめにやれよッ！！！」

死の呪いを持つ槍を、ランサーが振るって蒔風が避ける。

と、そこに叩きこまれる凛の宝石魔術。

その目的は蒔風の気を逸らすことだが、狙いはすべて急所を的確にとらえている。

「今よランサー！！」

「オレァもうちっと楽しみたかったんだがな・・・・」

「そんなこと言ってないでさっさとする！！！」

「わぁったよ・・・っと！！」

背後から迫る宝石魔術に対し、背中に生やした翼で振り返ることもなく防御するが、目の前のランサーの動作に双眸がきつくなる。

槍の先端に魔力が回り、赤くうっすらと光って宝具が発動される。

「刺し穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ）！」

ドスッ！！という音がして、鮮血が散る。

この宝具は決して派手なものではない。

ほかの英霊が持つ超絶的な武器に比べて、いってしまえば地味な方

だ。
だがしかし、その威力はどの宝具よりも遥かに高い。放たれさえしてしまえば、必ず相手の心臓を打ち砕くのだから・・・・！！

そして

「放たれさえ・・・・すればな」

その槍は蒔風の心臓を貫いていなかった。
貫いているのは、蒔風の手の平。しかもそれは槍の突出によるものではなく、蒔風が自ら手を出し、貫かせて握ったものだ。

つまり・・・・

「放たれなければただの槍」

「テメェ・・・・」

「放たぬ宝具は、ただの棒だ」

《ワールド！！！》

蒔風が貫かれた左手をそのままに、右手でメモリを起動、握りしめて腕に赤い布が現れる。

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

直後、その布がランサーの体に巻きついて行き、更には離れた場所にいる士朗にまでそれが伸びていく。
そちらの方は咄嗟に掛けたセイバーによって切り裂かれたが、至近距離に居るランサーは逃げようもなく束縛される。

しかしそれでも宝具を放そうとしないのはさすがだ。

が、それ以上は何もできない。

この布は「マグダラの聖骸布」
男性に対して絶対的な束縛力を持つ、カレン・オルテンシアの所有する魔術礼装だ。

「お前は最初の時にこれで仕留めるつもりだったんだよ。お前の宝具は厄介すぎる」

「ご・・・ごふぃ・・・・・・」

ランサーがミイラのように聖骸布にくるまれながらも、蒔風に悪態をつく。
しかし、それが蒔風に聞こえるわけもなく。

「わかんねぇよ。バーカ」

ドンッ！！！

地面に倒れ、無抵抗と化したランサーに、蒔風が頭、喉、胸、の三点に剣を突き立てた上に引き裂いた。

「心臓貫いた程度じゃあ英霊は死なない。だからしっかりやらせてもらったぞ？」

「ランサー！！！」

ランサーが消え、セイバーが叫ぶ。
だが、この男がそれを手に入れた今、そんなことを気にすることなどなく・・・

《ワールド!!!》

もう一度メモリを使用、その手には先ほど消えた英霊の、赤き槍の宝具が握られ・・・・

「ゲ～イボ～ルグ♪」

ドスッ!!!

なんともおどけた、リズムにでも乗るかのような動きで、滅茶苦茶な方向に一突き突いた。
するとセイバーが目に見えぬほどの動きで緊急回避し、その肩口に穴が開く。

「貴様・・・・」

「さすがによけるかー。でもまだまだ・・・」

そう言って、蒔風が再び放とうと槍を構える。

構えると言っても、適当な方向に突き出すだけでも心臓に向かって突き刺さるのだ。彼はいちいちそんな大仰な構えはしない。

「凛!!士朗!!!私に魔力を回してください!!!!」

「セイバー・・・何を!?」

「ハァァァアあああああああああああ!!!!!」

セイバーに向かって、凛と士朗の魔力が流れ込んでいく。

蒔風がそれを面白そうに眺めながら、槍を首の後ろに回して両肩に担いだ。

直後、白い羽根が散って、セイバーの姿があらわになった。

その姿は先ほどの甲冑が青だとしたら、今のは白と呼ぶべき姿だ。

まるで花。ドレスのような外見に、その装甲は幾分か少なくなった。

姫騎士・セイバーリリィ

速度にすべてを置いた、彼女の別形態が二人の魔力を吸い取って今ここに現れた。

「ほう・・・・・・」

それに、蒔風が感心したように言葉を漏らす。

その姿は、ただ美しいものだ。とても戦闘のできるような、否、戦闘など出せば崩れてしまいそうなほど美しいものだった。

しかし

「行きます・・・・・」

セイバーのその掛け声と

「覚悟ッ！！！」

速度によってその考えは改めさせられる。

まるで視認できない。

蒔風は一瞬自分に迫ってくるセイバーを見たが、次の瞬間には脇腹が切られていた。
そこを押さえ、血を止めようとする蒔風だが、セイバーの攻撃は止まらない。

肩を、足を、少しずつ切られていく。
蒔風はそれに対し、何とか身をよじって避けている。だからこそこの程度。本来なら既に足の一本でも切り落とされて当然だ。

（クロックアップに慣れてっからいいけど・・・これはいささかき

ついぞ！！！）

蒔風の感想はこんなものだ。
そう、彼女の速さに、蒔風は追い詰められつつある。

それを見る士朗と凛にしてみれば、ただ白い亡霊が蒔風を通過して切り刻んでいるようにしか見えない。

が、その現象は蒔風にも発生した。

加速開翼。

超高速移動についていくため、蒔風が獲得した活性法だ。
その速度はクロックアップや風足に匹敵し、彼らの動きについて行くことができる。

だが、それでもセイバーはなお速い。下手をすれば全力を出したフェイトよりも早いのではないだろうか？

しかし、勝負は一瞬で終わる。

「ゲイボルｇ「風王鉄槌（ストライク・エア）！！！」」

ドバッ！！と

風の奔流に殴られ、同時に吹き飛ばされた蒔風が沢の砂利の上をジャラジャラと転がり、すられ、身体の半分が水に沈む。

その蒔風に向かって、セイバーが超高速をやめて蒔風の元に走る。
もう彼は動けまい。このままでも十分に勝てる。早くしないと二人の魔力も危ないのだ。

しかし、瞬間その槍が光って蒔風の手から飛び出した。

「ッッ！！まず・・・・」

そうしてその場から動いて回避しようとするセイバー。
彼女はこの攻撃を、本家本元のランサーからくらったときにそのスピードと幸運ランクでなんとか避けた（肩には当たったが）経験がある。

故に、今のこのスピードならば避けられると思ったのだ。

しかし、彼女には読めなかった。否、読ことなどできないと言うべきだろう。

なぜならば彼女は「王」だ。しかも、その中でもことさら誇り高き「騎士王」である。
そんな彼女が、卑怯な手、外道な行いをする蒔風の思考など読めるはずもなく・・・・・

ドンッ！！

その槍は手首のスナップ程度に「放たれ」、凛の心臓に突き刺さって彼女を消した。

「凛！！」

「リン！！！！・・・クッ・・・魔力が・・・・・！？」

カランと、赤い呪槍が地面に落ちる頃には、魔力の供給のなくなったセイバーはいつもの姿に戻っていた。

「圧水」

そして直後、蒔風のつぶやきと共に川の水がセイバーを包み込んで水球に閉じ込める。

彼女は水の上を歩ける。これは湖の精霊の加護によるものだが、それゆえに彼女は泳ぐという事を知らない。
最近は士朗とプールに行って練習していたらしいが、今の甲冑姿で泳ぐほど出来るわけがない。

その水の中で、セイバーがジタバタと暴れるが、圧水からは逃げられない。

そしてその中から見える光景に絶句した。

士朗が、投影した「干将莫邪」を振るって蒔風に向かって行ったのだ。

士朗は半人前だ。

しかし、彼の持つ固有結界「無限の剣製」は絶大な威力を誇るものだし、それを全開させれば蒔風を止めることはできる。

しかし、先ほども言ったように彼は半人前だ。

何らかのバックアップもなしに固有結界は展開できないし、そもそもリリィへの形態変化のために、魔力をかなり使っている。

果敢に蒔風に攻め込み、攻撃をかわしていく士朗だがあえなく蒔風の刃に倒れる。

それを見て、セイバーの脳内で血管が切れた気がした。

蒔風は士朗の始末を終え、セイバーを包む圧水を絞って彼女を潰す

か、と振り向いて腕を出す。
直後、その水が弾けて爆散した。

周囲を雨のように水が覆い、一瞬で地面に落ちる。

そこに立っていたのは漆黒の甲冑に身を包んだ暴君がいた。

「貴様・・・死んだぞ」

「それはおかしいねぇ。まだ生きてるわけだが？オルタさん？」

セイバーオルタ。
彼女が反転し、その属性が「秩序・善」から「秩序・悪」へと変わり果てた暴君だ。

その力は――――力だけは通常はもちろんリリィも凌ぐ。

「必ず殺す。どんな手を使っても殺す。命乞いしたらその瞬間に首を切り落としてやる」

「だからやってみろっての。暴君様はいちいち相手に了解取らないと殺戮もできないのかよ」

「ガアアア

いくらこの形態だろうとも、勝負など見えているからだ。
彼女の魔力はもう持たない。

勝負は五分もかからず付いた。

――――――

しかし、その体を流れるエネルギーを変換し、体の健康を保っていた。

「本気で化け物じゃの・・・・・」

現在逃走中の玄武が呟きながら、この男からあと三十分は逃げなければならないと考えるとうんざりしていた。
無論、これは両者ともにメリットがある。

理樹からすれば蒔風に近づけるし、彼の戦力を削れる。
青龍たちからすれば理樹を蒔風の向わせずに済む。

いったいが逃げ続けることは不可能だが、こうして交代ならば青龍らにも逃げるだけなら可能だ。

しかし、ここで獅子が何かを感じ取って叫んだ。

「まずいぞ・・・クラウドが接近している！！」

「翼人二人かよ！！」

「・・・玄武、聞こえましたか？」

『ああ、ああ！わかっておる！！厄介極まりないのぅ！！』

「今から合流しましょう。そして、再びシャッフルを」

「とはいってもクラウド殿は理樹殿と違って召喚獣を使いなさる・・・これはまずいのでは？」

「・・・我々はとにかく逃げるのみ。召喚獣が来たら撃墜しよう」

そうして、玄武が見えてきて同時、漆黒の翼を視界にとらえた。

「逃げるぞ！！」

七つの光が交差し、バラバラに逃げる。

案の定クラウドが召喚獣を放ってきたが、それでも逃げるばかりだ。

それでいい。

否、むしろそうするしかないだろう。

七獣には、翼人に勝つ力はない。

――――――

そのきれいな川の水に、赤い液体が流れてきた。

蒔風が身体の血を流したのだ。
そうして再びさっぱりしてから、その場を去った。

そこに残ったのは、戦闘の跡のみ。
川を流れる赤い液体は、もう薄まって見えなくなってしまっていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

銀白ＶＳ英霊？（後書き）

そろそろ終わっちゃいそうで「あれ？」な武闘鬼人です。
第二章、五十話も行かないで終わっちゃいそうだぞ？

凛「人間に宝具なんて・・・敵うわけないじゃない！！」

ランサー「あの野郎オレの宝具好き勝手に・・・」

セイバー「さすがにもう無理・・・」

士朗「料理あるからみんなで食おうか」

御疲れですたー

第一章が長かったせいで終わりが速いと感じる。

なお、セイバーリリィの設定は作中にあるようにしました。
リリィ可愛いんだもん。出したかった！！

なぜかマスター陣が全く活躍しない。
とくに士朗。どうしてこうなった・・・・・
そして追いかけっこ翼人。
化物か！？

セ「次回、私が倒れ、そしてあの男が・・・」
ラ「あの野郎今まで何にもしてこなかったくせによ・・・」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
小野寺ユウスケ
海東大樹

野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧
ギルガメッシュ
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ英雄王

蒔風が携帯を開いてリストを見る。
残る人数は二十もいない。

それから例の時計を取りだし、残り時間を見る。
大体針は４８分くらいか。相変わらずどういう単位で進んでいるのかも、何の時間かもわからない。

場所は荒野。
モニュメントバレーのような地形が進み、空には太陽があるくせにオーロラじみた色がついている。
しかも、荒野のような見た目のくせして一面は砂ばかり。

そう、蒔風は今、時間の中を逃げているデンライナーを追っていた。

――――――

「逃げ切れんのかねぇ？」

「天馬、おぬし他人事のように・・・・」

「いやだってよ、俺らはこいつ相手にして倒せたからよかったけどほかのやつらはどーだかなんだぜ？」

「まあ確かに・・・今は理樹殿が朱雀を、クラウド殿が獅子を追いかけているんじゃったかの？」

「おう」

そう言って、天馬と玄武の目の前からタイタンとイフリートが消える。

現在七獣たちは、クラウドと理樹、さらにはクラウドの召喚獣から逃げていた。

当初それぞれ一人ずつ担当して逃げていたが、召喚獣が相手ならば勝機がある。

そこで近くにいた玄武と天馬が合流してこの二体を倒したのだ。

その身体が光となって、ヒビの入ったマテリアの球体へと変わり、どこか――おそらくはクラウドの元――へと飛んで行った。

「ほかの加勢に行こうかの？」

「だなー。オレァ青龍さんとこ行きますわ」

「では儂は麒麟のところへ行こうか」

「白虎のガキはいいのか？」

「追いかけられることに慣れとるアイツなら大丈夫じゃろう」

「同感。じゃ、あとでな」

「うむ。健闘を」

そうして、二体が別々に飛んでいく。

主に害を及ぼさないように、その敵を砕くために。

ーーー

――――――――――――――――――――――――――――

「見つけた・・・・・」

崖の上で、蒔風がバイクにまたがって呟く。

崖の上から荒野を、蒔風が見下ろしていた。
そこを走る時の列車。
間違いなくデンライナーだ。

このまま電車ごと吹き飛ばしてもいいが、それではいらない犠牲が出る。
オーナーやナオミ、ハナをやる必要はないのだ。

それは最後の手段だな。

そう考えながら、蒔風が崖をバイクで駆け下りていく。
砂埃がうっとうしいが、それはまあ気にするほどでもあるまい。

そうして、デンライナーの後方につける蒔風。そこから前へと追い抜いて線路を攻撃、脱線させてあぶりだす作戦だ。

まだデンライナーの後ろである蒔風が、バイクを加速させようとアクセルを捻る。

が、その瞬間。
無数の剣がデンライナーの上から蒔風に降り注ぎ、蒔風がバイクのアクセルを弱めて後退させた。

デンライナーとの距離が空き、その開いた地面に向かっていきなり宙に現れた剣がつぎつぎと射出されては刺さっていく。

その数に蒔風が思わずバイクを止め、デンライナーを見送る。
が、その列車はUターンし、蒔風の前に停車してきた。

「王自ら潰しに来てやったぞ。雑種」

「・・・ギルガメッシュ・・・・か」

呟く蒔風に、別段驚いた様子はない。

彼は最古の英雄王。その所持する宝具の中に、蒔風の所在を掴むものがあってもおかしくはない。

それに、蒔風はなぜここにきて彼が来たのかも理解していた。

おそらくは彼は無視していたのだ。

これまでのことなど、自分には関係ない。下々が勝手にやっていればよい、と。

だが、そんな彼が出てきた。その理由・・・・・

「・・・・セイバーか？」

「わかっているではないか。あの女は我（オレ）の物だ。愚かな雑種どもが勝手に争い消えるのは構わん。だが・・・・」

「自分の所有物に手を出すなってか。まあそもそも、おまえはこの世界そのものが自分のものだと思ってる誇大妄想野郎だからなぁ」

「その口のきき方、王に対するものではないな」

「すまんね。俺が長～く相手した「王」はろくな奴じゃなかったもんで」

と、そこで良太郎がデンライナーから降りてきた。
例によって、イマジンに憑依されてだ。

車両の中では残されたイマジンが見守っている。

一人欠けている今、クライマックスフォームはできない。
いったい誰がついているのか。

見ると良太郎の髪は白いメッシュが入り、目は白くなっている。

ジークだ。

「何をしに来た雑種。ここは我(オレ)の戦場。貴様ごときが出てくるのはおこがましいぞ」

「まあ何、気にするな。私は何もせぬ。世界の方から動くのだからな」

その二人に、蒔風がやれやれと頭を振る。

この高慢ちき二人を、いったいどうしてくれようかと。

（ま・・・とりあえず保険を掛けとくかね）

《ワールド！！！》

蒔風がメモリを握りしめて挿入する。
特に何を構えるわけではないが、何らかの力が付随されたのだろう。

「でさ・・・やんならやるでこいよ。時間かけたくないんだ。お前らに対する勝算はすでについている」

「なに？雑種が息がってしまったようだな。我（オレ）に対する勝算だと？ふん、大方我（オレ）が油断でもすると思っているのだろうが・・・・」

ゴォッ・・・・・

「そんなことはないと思えよ？」

ギルガメッシュが黄金の鎧を構え、背後に剣をいくつも浮遊させる。

王の財宝（ゲートオブバビロン）

彼の所有物（コレクション）であるあらゆる武器を貯蔵する異次元の扉だ。

それを撃ち放つことで彼はかつて「アーチャー」のサーヴァントとして存在していた。

《ＷＩＮＧ　ｆｏｒｍ》

そして隣に立つは電王ウイングフォーム。

自らを「王」だという相手に、蒔風が鼻で大きく笑って見せた。

「かかってこいよ王様ども。王への反旗は慣れている」

そうして、始まる。

バビロンからの法具射出。
それに対して蒔風が足による畳返しで地面を撥ね上げながら走って回避する。

しかし、その武器の中にいくつか追尾機能のようなものでもついているのか、二、三本が蒔風の後を追って突っ込んできた。

それに対して風林火山で受け流し、地面に刺さったところでへし折った。

だが、そうして足を止めている間にも打ち出された剣はまたバに論へと戻り、再び射出されていく。

永久機関だ。

この射出は終わることを知らない。

だが、蒔風は避けてばかりで一向に反撃にはうつらなかった。

ギルガメッシュは射出こそすれど、その射撃の精度は低い。

相手のいる一面を、適当に剣を掃射して力任せに薙ぎ払うのが彼の戦法だ。

圧倒的な暴力。

一方的な蹂躙。

それが彼の王たる証であり、あり方だった。

「ふむ・・・私の出番がないではないか」

「だから言ったであろう。あのような男、我(オレ)一人で充分だとな」

蒔風を視界にとらえながら、隣でぼやくジークにギルガメッシュが言う。

確かに、このままならばいずれはこの男は倒れる。

だが・・・・

（我が友であったこの男がこれで終わる・・・そんなわけ、あるわけないだろうな？）

ジークにはそうは思えなかった。
いやむしろ、そう思わせることがこの男の狙いであるとしか思えないのだ。

「はっはっはっは！！どうした？その程度か！！！」

しかしギルガメッシュは一方的に相手を攻撃している事で興奮し、その事に気付いている様子はない。

慢心、傲慢、油断

それこそが彼の自信と力の源であり、同時に大きな弱点でもある。

「ッう・・・グアっ！？」

と、そこでついに蒔風が地面を転がった。
回避しきれなかった剣を、畳返しで壁にしたもののその勢いに吹き飛ばされたのだ。

そこに降り注ぐいくつもの剣。
地面を独楽のように回りながらもそれを弾き回避して行く蒔風だが、いかんせん数が多すぎる。

五体が刻まれ、血が噴き出す。
そうして右の腿と肩に剣が突き刺さり、更には左手の甲を剣が貫いて地面に縫いつけた。

「ぐぅゥゥウウウウウウウウウ・・・・！！！！！？？」

「ふん。最初からそうして、雑種らしく地べたを這っていればよかったのだ」

そう言って、ギルガメッシュが後方から彼の「担う」一本の剣を引き抜いた。

乖離剣「エア」

その名はただ単に彼がそう付けて呼んでいるだけの、無銘の剣。
しかし、この剣の回転は時空を裂き、その威力はかのエクスカリバーを相殺してなお相手を粉砕しうるというもの。

この局面で彼がそれを出してきたという事は・・・・・

「終わらせようか。この期に及んで出し惜しみはせぬ。我が全力で殺してやるぞ、雑種」

ギィィィィィィ・・・・と、乖離剣が回転を始めてその腕が振り

あげられる。
すでに魔力は充填され、あとは振り下ろすだけで蒔風はこの場から消え去るだろう。

「・・・・・は、ははは!!あはははははは!!!」

「む?」

「ちゃんちゃら可笑しいぜギルガメッシュ・・・雑種?ははは・・・・傑作だこりゃ!」

しかし、左手を地面に刺し止められ、右の肩と腿に剣を突き刺しっぱなしにしながらも、蒔風はおかしそうに笑っていた。

その目に死の恐怖はない。ただ「痛いなぁ」という感情しかないのだ。

蒔風のその姿を見て、ギルガメッシュは今まで感じたことのないモノを感じた。

それは恐怖か？
自らの「知り得ぬ存在」のこの人物が怖いのか？

そんなことはない。
理解の及ばない相手とは今までだって遭遇してきたし、彼はそのすべてを粉砕してきた。

それは畏怖か？
死を超えてしまったこの男に、そんな感情を覚えたのか？

そんなことはない。
自分は王だ。自分が一番だと言うのに、そんな感情は芽生えない。

それは拒絶か？
すべてを理解し、そして何者にも属さないこの男を拒んだのか？

そんなことはない。
拒むようなものは殲滅してきた。許すべきは自らが望んだ者だけだ。

だったらこの感覚はなんなのか。

まるで何もないようなのにどうしてもそこに何かが見えてしまう錯覚。
「いる」のに「いない」この男。生きていながら、死んでいる。

ここまで人間味にあふれ、それでいて人でない彼に、なんとも言えない薄気味悪さを感じていた。

それは形容しがたいもの。

まるで雨上がりに水たまりを見て、そこにどこからか流れてきた油が混ざってオーロラのように見えるかのように。
まるで何色ものスライムを混ぜ、その色が完全に混ざらず、各色が見えているかのように。

そしてそれを見ながら乗り物に酔い、今にも胃液が喉をこみ上げて来そうになりながらも脳味噌をガンガン振られ続けている感じだ。

気色悪い

王として、総てを許容するだけの器を自負するギルガメッシュが、自分は生涯、この男を理解することはないだろうと確信した瞬間だった。

「雑種雑種ってよォ・・・つまりは何かと何かの掛け合わせだろ？それ」

「だからどうした・・・・」

「嫌なに、お前の事を思い出してな・・・・そんなに自分が嫌かい？完全でない自分が？」

「なにを・・・言っているのだ・・・・・」

「そんなに嫌なら死んどけ王様。そういうお前も半神半人（ざっしゅ）だろう？」

「貴様・・・我（オレ）を愚弄するかァ！！！！！天地乖離す（エヌマ）ァ・・・・・」

ギルガメッシュが激昂し、その剣の名を叫んで振り下ろす。
その瞬間、蒔風が左手から剣を抜き、地面から解き放たれるがもう遅い。

「開闢の星（エリシュ）！！！」

ギルガメッシュの右手に握られたそれが、怒りと力のままに蒔風の頭上へと振り下ろされた。

瞬間

「全て遠き理想郷（アヴァロン）・・・・・・」

バチィ！！！！

ギルガメッシュのエヌマ・エリシュが蒔風と、その後方だけを避けるかのように割れ、その威力を完全に無効化された。
残ったのは、蒔風が四つん這いになって居る場所の両脇を走る深い溝だけ。

その四つん這いになっている頭の前には、神々しい光りを放つ、エクスカリバーの鞘が浮いていた。

「貴様・・・それは・・・・！！！！」

「所有者を別次元におく事であらゆる攻撃の干渉を防ぐ宝具「全て遠き理想郷（アヴァロン）」・・・・一度発生した貴様のそれを防ぐにはこれしかないからな・・・・」

「おのれ・・・・・・・・・・・・・！！！！！」

ギルガメッシュが更に激昂する。

そうして、再び剣を振るう。

無論、魔力などまだ切れないし、この男はもはやこの一撃で吹き飛ばすと決めたのだ。

しかし

ゴン、という音と共に、力なく握られた蒔風の左拳が振りあげられたそれに触れていた。

それと共に充填された魔力が消えうせ、エヌマ・エリシュが強制解除される。

目の前の現象に信じられないのか、再び下がってそれを振るうギルだが、蒔風が左足だけの跳躍で接近、再び同じように拳をつける。

たったそれだけ。
たったそれだけで彼の発する問答無用の必殺技は封じられた。

「エヌマ・エリシュ・・・・ね。発動すればその質量だ。消しきることはまず不可能。しかし・・・・・」

「お・・・の・・・・」

「天理乖離す開闢の「星」だもんな。発動前にこうして拳をつけちまえば・・・お前の「星」は「打」ち「滅」ぼされる。」

「れぇぇえええええええええええ!!!!」

ゴシャッ!!!という生々しい音と共に、開翼した蒔風の頭突きがギルガメッシュの鼻面にめり込み、その整った顔面を少しへこませる。
そこから左手だけで後頭部を掴んでさらに顔面に膝をいれ、髪の毛数本をブチブチと言わせながら、その体を投げて地面に叩きつける。

たったそれだけの動作だが、その速度が開翼、しかも加速開翼で通常の数倍の速さだったら、その威力はどれほどのものだろうか？

叩きつけられたギルガメッシュは地面に練り込み、その口から血を吐きだして動きが止まる。

「受肉している、って言うのがお前の弱点でもある。いくら英霊とは言え、受肉している以上瞬時に回復とはいくまい！！！」

「こ・・・の・・・・・」

《ワールド！！！》

蒔風がメモリを抜き、もう一度起動、挿入する。
すると身体から黒いカーテンのようなモノが帯状に出てきて、彼を食らおうとそれを触手のように伸ばす。

「間桐桜謹製の「影」・・・融けて吸われて消滅しろ」

「が・・・お・・・・・・・・のれ・・・・・・・・」

蒔風の足元から、まるで沼のように広がる黒い影。
ありとあらゆる生物を溶解し、吸収する魔術。

間桐桜が「反転」した時に発生させた闇。

それを以って、蒔風が激しかったこの男を、静まりの中に消して見せた。

無論、この間に電王が何もしていなかったわけではない。
しかし、デンライナーからの砲撃ではギルガメッシュが吹き飛んでしまうかもしれないし、接近しようにもエヌマ・エリシュにアヴァロン、更にはこの「影」だ。まったく手が出せない。

「ギルガメッシュ・・・確かにお前は強い。オレの身体も結構やられた。だがな、最初からそこそこ前回のオレとやり合おうと考える時点でお前は傲慢だったんだよ」

彼のカードを手に、蒔風が呟く。
そうして電王を見、彼の方へと影を伸ばした。

それに対し、咄嗟に下がって回避する電王。
が、あまりの範囲にもはや攻撃は意味を為さない。

見るとデンライナーの車輪が影に巻き込まれ動けない。
このまま逃げられる、もしくはやられてしまうのか。

そう思い、せめて一撃と武器を構えてジークがフルチャージしようとしたその瞬間。

灰色のオーロラがデンライナーを覆ってどこかへと消えていった。

「・・・・・・・なに？」

「舜・・・見つけたぞ。お前は俺たち二人で斃す！！」

「なかなか厄介でね。でも、なんとか連れてこれたよ」

そうして、電王の横にも同じオーロラが現れて、そこからユウスケと海東が出てきた。

「お前ら二人で？オレを？嗤わせんなよ」

蒔風がイラついた声を出す。

あの列車には標的の対象がまだ何人も乗っているのだ。

それをこのチャンスで逃され、かなりイラついてきているようだ。

が、そんな蒔風を無視し、海東が電王の方を掴んでオーロラに消える。

その光景に、蒔風が首をかしげた。

なぜ逃げる？

いや、それが正しいのだろうが、それならなぜユウスケを・・・・・

そこまで言って、蒔風の顔からすこしだけ　血が引いた。

海東が消えたオーロラは、まだなくなってない。

「まさか・・・・」

「いっただろ・・・・俺たちで斃すと」

そうして、オーロラから人物が出てくる。
この世界に統合されることの無かった世界の主人公が。

「行きますよ、五代さん」

「はい、小野寺さん・・・どうやら、本当みたいだしね」

ユウスケの横に立つのは、五代雄介。

今、目の前の邪悪を撃ち払わんと、古代の戦士が二人立つ。

to be continued

銀白ＶＳ英雄王（後書き）

電王は正直道案内で終わったよ！！！

ギル「あの男が来たところにわざわざ張っておったというのに・・・・！！！」

はいはいお疲れですた。

ギ「おい！！一章みたいなカッコイイ見せ場は・・・・」

ないッ！！

マーク

前回忘れた皆含めて、全員令呪のマーク

蒔風が保だといってメモリで起動させてたのはセイバーでした！！

あれ？でも確かあれって士朗の投影だったから・・・士朗か？どっちでもいける気がするけど！！

電王は・・・なかなかやられてくれないなぁ・・・

ギル（小）「次回、究極の闇を撃ち払わんと、究極の二人が立ち上がる、です」

え？ギル？

ギル（小）「大人の僕は拗ねちゃいましたよ」

そうかい。
ではまた次回！！

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス

リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ空我

なぜだなぜだなぜだ。

何故　貴方が　此処に　いる。

あなたは免れた。
この世界に巻き込まれなかった。

こんな悲劇に付き合う必要なんてなかった。

自分の世界で、やっと手に入れた平和な世界で、好きなところを巡る旅ができたというのに。

あなたには自分のできないことができ、そして世界を回ってもらいたかったのに。

なぜだ、なぜ・・・・・なぜだ！！

「なぜ・・・来てしまったんだ・・・・五代さん・・・・・・・！！！！」

蒔風が悔しさと悲壮感を織り交ぜた、何とも言えない表情を作って五代を睨みつかせる。

蒔風には解っている。
なぜ彼がここまでやってきて、目の前に立っているのか。

それを知っているからこそ、それを否定したかった。
だから問いた。なぜ来たんだと。

出来ればここにいるということすら否定したかった。

彼はこの世界に関して全くの無関係だというのに。
解っているのに否定したい。それを蒔風はこれほど思ったことはなかった。

「なんで・・・来たんですか・・・五代さん！！！！」

「蒔風さんが罪もない人を襲い、次々と消していると聞いたからです」

「それでも・・・無関係のあなたは来る必要はなかった！！」

「それは、できない」

そうして、五代が腰に手を当て、アークルを出現させる。
その隣で、それにならって両腕を開いてアークルを出すユウスケ。

「俺は嫌なんです。誰かの笑顔が、一方的な暴力で失われるのが！！！」

「みんなの笑顔を守る・・・そのために俺たちは来た！！」

「あなたに見せる、最後の変身」

「見せてやる・・・守る者の強さを！！！」

カチッ、と
ポーズをとってアークル横のスイッチを入れて蒔風へと走ってくる二人。

蒔風は左から来たユウスケのフックを腕でガードし、五代の前蹴りを右腕で止めた。

「うぐっ・・・」

蒔風が右肩の痛みにうめくが、二人はさらに攻撃を繰り出していく。
するとどうだろうか。

攻撃したその四肢から次々と黒い装甲が纏われて変貌していき、最後に顔をマスクが覆ってその目が赤く光る。

「「ハァっ！！！」」

ドムッ！！！

そうして、変身を終えた二人はそれぞれ右と左のストレートを放って蒔風を後退させる。
そこに立つのは、仮面ライダークウガ。その究極の姿だった。

「アルティメット・・・クウガ・・・・・！！！！」

全ライダーをして。

その最高スペックを誇る仮面ライダー。

空我

その泉枯れ果てようとも、胸に残ったその思い。

伝説を乗り越え塗り替えて、漆黒の正義を携えて

すべてをゼロにほどの還す力を持つ者。

一人で充分だった英雄が、今ここに二人立つ。

（こっちは右肩、右腿、左掌を負傷して、さらに剣だって全部ある状態じゃない・・・こんな状況でどうしろって・・・・！！！？？）

ドオッ！！！！

と、蒔風が思考を走らせているとその体が突如として炎に包まれる。
その熱に蒔風が転がるが、そうしていると蒔風の手のひらに炎が集まってそれがボシュ、と掻き消えて行った。

「やっぱり効きませんね」

「だったら・・・・直接倒すしかない・・・・・」

――――――

どこかの廃工場。
そこでバハムート零式、リヴァイアサン、フェニックスが消え去って、五人が集まっていた。

彼らは合流し、なんとかしてクラウドの召喚獣を撃破していた。

だが、驚異の大元が消えたわけではない。
いまだ理樹とクラウドは彼らを追っているし、そうある以上は彼らは蒔風の元に戻れない。

「そろそろ獅子と朱雀と入れ替わらぬとな」

「次の合流ポイントは・・・・」

「みんないるか？どうにもおかしなことになった！！」

「・・・・どうしました？」

と、そこで獅子が合流してきた。
今彼はクラウドに追われていたはずなのだが・・・・

「クラウド殿が消えた！！追って来ていない！！」

「なに？」

クラウドがいなくなった。
それは彼らにしてみれば負担の少なくなったと喜ぶべきことなのかもしれない。

だが、追われることに何かと慣れてしまった白虎が、嫌な考えに達した。

「ねえ・・・もしかして」

『誰か・・・・誰か救援に来て下さい！！これは・・このままでは・・・・！！！！あああああああああああああああああ！！』

ドォン！！！！

そこで全員の頭に響く助けを求める朱雀の声、爆発音。

そして空を見上げると、炎が膨れて爆発が起こっていた。

「なにが・・・！！」

麒麟が目を凝らし、その爆発の中心を見る。

すると、その中から炎に包まれた人がらの朱雀が力なく落ちていき、工場を走るパイプを何本もへし折って地面に落下した。

「朱雀！！！」

「まさか・・・・！！！」

彼らが朱雀の落ちた地点に走る。

そこは一つのクレーターのなっていて、そこから人間の手が力なく伸びていた。

そしてその体が光り、一本の剣になって沈黙した。

「な・・・」

「お前たちがいると厄介だから・・・・確実に潰していくことにする」

「そして・・・舜の力を削ぐ」

朱雀の落ちた際に焼かれたのか、チリチリと熱を発する地面から剣となってしまった彼を引き抜いた彼らの後ろに、クラウドと理樹が降り立つ。

彼らは、全てを追う事をやめたのだ。
どれを追っても蒔風の元に戻ることはない。だったら全てを倒してしまった方がいい。

蒔風の十五天帝の数がそれだけで半分近く減るのだから。

「これは・・・かなりまずいと・・・考えてよいのでしょうね・・・」

「ったりまえですよ・・・」

「覚悟しろ。ここでお前たちは終わらせる」

「怯むな!!天剣の意地、見せてやれ!!」

「一歩も引くな・・・我ら七獣。推して参るッッ！！！」

青龍以下、一人掛けた七獣六名が己の剣を握って二人の翼人に挑みかかる。

勝機などない。
ただ、少しでもこの二人を削れればそれで彼らとしては十分だった。

――――――

た。

蒔風が転がりながらも立ち上がり、もう一方にハイキックを入れる。

しかし、その首が少し勢いに押されて曲がるだけで、全く効かない。

足を掴まれ、投げ飛ばされる。

「ガッ・・・は・・・勘弁してくれよ・・・ここまで規格外だとおにーさん泣いちゃうって・・・・・」

地面にうつぶせになりながら、上体を起こして二体のクウガを睨みつける蒔風。

そこから一気に撥ね起きて、両拳でのラッシュを浴びせかける。

それに対応して腕でガードする二人に、そこからの反撃を受け流していく蒔風。

と、蒔風のケンカキックにさすがに押しのけられたクウガが少し後退した。

が、攻撃したのなら無論隙ができる。
そこに攻撃してきたもう一体のクウガの拳を頭を倒して、首すれすれで回避し、その腕をつかみんで背中を向ける。

そこから背負い投げでもしようとしたのか、蒔風が腰を入れて腕を引く。
しかし、その体がガクッ、と止まり、逆にその腕を掴まれて蒔風の身体がブン回されて地面に向かって投げとばされた。

ブチッ・・・という音が聞こえた。

そして地面を抉りながら蒔風が地面に命中する。

背中を打ち、その衝撃に目をこれ以上ないほどに見開きながら二、三回撥ねて地面を滑り転がる。

一方、蒔風が蹴り押した方――五代だ――のクウガが、ユウスケであるクウガを見た。

その手に握られているのは、蒔風の左腕。

ぶらりとそこにある腕の持ち主は、今この少し先で転がっている。

「小野寺君」

「このまま、叩き潰しましょう。絶対に許しておけませんから」

五代がユウスケに声をかけるが、ユウスケにはそってなく反応してからなおも蒔風に歩み進む。

その赤い目の輪郭は、徐々に黒い闇に侵食され始めていた。

to be continued

銀白ＶＳ空我（後書き）

クウガ強すぎる・・・・
どうやって倒すのか。

朱雀「そしてまさかの私の敗退」

一度真人にのされて、そこから何とかして復活したら今度は翼人に。
これはもう復活できないよね？

朱「ですねー。まあ、剣の状態なら大丈夫ですけど。槍の状態にはなれませんが」

あっちもこっちも死闘状態。

蒔風の左腕もま～た飛びましたし。

朱「とりあえず「アレ」を使えば腕は大丈夫でしょうけどね」

でも勝てるかどうか・・・・

まあ勝たせないといけないんですが・・・・

卑怯に行くぜッ！！

朱「次回、ＶＳクウガ×２パート？。そして・・・」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
小野寺ユウスケ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧

剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ空我？

「う・・・ぐぅぅうううう・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

蒔風が腕が千切れた跡を抑え、痛みにうめいて蹲る。
その耳にはズシャリズシャリと自分に向かって歩いてくる二つの足音。

《ワールド！！！》

蒔風がメモリを取りだし、幸運なことにまだ残っていた右掌にそれを突き刺した。
すると、千切れた左腕がズシュリと再生して蛇のように生えてきたではないか。

しかし腕が戻ったとはいってもその息は荒いし、その腕はまだ力なく震えてる。

（芦原さん倒しといてよかった・・・なんて思えるとはな。腕一本瞬時に再生させたギルスなら何とかなると思ったが・・・）

「どうやら・・・・現実はそう甘くはなかったらしい・・・・・」

そう、腕は再生したが状況は何一つ好転していない。

クウガが二体。大変な脅威だ。

もしも普通のフォームであるならば、ここまで苦戦はしなかった。

搦め手、卑怯。何が何でも押しのけるだけの力は自負している。

だが、アルティメットフォームはそうも言っていられない。

一体でもなかなか厄介なのが、二体なのだ。

正直、手も足も出ないというのが素直な感想。

（一気に吹き飛ばそうにも獄炎は意味がない。圧水じゃ押し切れない。土埃じゃぶち抜かれるだろうし、絶光は外した時のリスクがでかすぎる。雷旺なんてもってのほか・・・・）

「これは詰んだか・・・・ッッ！！！」

と、そこに片方のクウガが駆けてきて、蒔風のいる場所に向かって飛びかかってきた。

それを転がって避ける蒔風。今までいた場所がクウガのパンチでクレーターに変わった。

と、転がった先にはもう一方のクウガ。

そのクウガに腕を掴み引かれ、頭突きを食らって蒔風の意識が薄れる。

「お？ぐ・・・あ？」

脳を揺らされ、朦朧としている蒔風の足をまた別のクウガがつかみ、逆さまに片手で掴んだままもう一方の手で腹を殴り、地面にたたきつけた。

足が千切れ、蒔風の体がブッ飛んでボトリと落ちた。

その足はすぐにまた再生するのだが、それによる体力の消費はあまりにも激しい。

だからと言って再生しなければ回避の取りようがなくなって・・・・

「はは。これは死ぬのかな?」

「気楽・・・・ですね」

「ん?ああ・・・・死ぬことは別段どうとも思ってねえよ」

声からして五代だろう。
蒔風の足を千切った方とは別のクウガが、蒔風を視界から外しながら聞いた。

だが、そう言っている間にもユウスケであるほうのクウガは悠然と蒔風に歩み寄り、近づくにつれて雄叫びをあげながら突進していった。

そのタックルに、蒔風の体が掻っ攫われる。
その衝撃だけにはなんとか耐え、身体の上と下がおさらばするような状態にはならずに済んだ蒔風だが、首だけを回して後ろを見てギョッとした。

そこには巨大な岩がある。
このまま突っ込めばあの岩は砕け、自分もどうなってしまうのかわからない。

しかもこうしている間にも自分を捕まえている腕はメキメキと締め上げる力を上げつつあるのだ。

「チョ・・・タンマ・・・・・！！」

「・・・・・・ォアッ！！！！」

ドゴォァ！！！

そうして、まるで牡牛のように岩に突っ込みそれを粉砕させたクウガが、蒔風を手放して勢いを止めた。
すると当然、蒔風の体は慣性の法則に従ってしばらく地面と水平に飛び、ほどなくして地面を削りながら滑って転がる。

「い・・・ガぁ・・・・・・」

痛みに呻く蒔風。
その腹部はグルリと真っ赤に染まっており、再生したばかりだった左腕は折れているのだろうか、おかしな方向に曲がっている。
さらに全身はクウガの肩の棘から発生した斬撃波でズタズタにされて血でベトベトだ。

その骨もすぐに再生しまっすぐになったが、その痛みはいまだ消えない。
ダメージは体に染みつく。

（こ・・・このままでは・・・・いや・・・死ぬのは別段いいんだが・・・それでは意味がない！！）

「俺には・・・・やらねばならないことがある・・・・・・！！！」

そう言って何とかして傷を再生で治し、メモリを抜き出す蒔風。

その行為にどうしたのかとクウガが動きを止めたが、いまさら恐れることなどない。
このまま叩き潰してさえやればいい。

そうだ・・・・

必ず

目の前の男を

物言わぬ肉の塊に変えてやるのだ・・・・・・・・！！！

「小野寺君！！！」

その攻撃をやめようとしないユウスケに、五代が叫んで声をかけた。

「あまり攻撃的になると・・・君自身が危険だ!!」

「・・・んです・・・」

「え?」

「いいんです。気にしないでください。俺は決めてるんです」

そうして、クウガが蒔風を改めて見、その言葉の先を言った。

「みんなの笑顔を守るためなら・・・・究極の闇にもなる・・・・!!」

「小野寺君!!!」

《ワールド!!!》

「おおおおおおおおおおお！！！」

蒔風が飛びかかり、その体を締めあげようとする。。
無論、その程度で身体も足も揺るがぬクウガは、そのまま蒔風の頭を掴んで強引に引き放そうと腕に力を込めた。

頭蓋骨がメキメキと音を上げ、その握力に目が充血して更には血涙まで出てきたが、それでも蒔風はメモリで借り受けた力を以ってその邪気を払い続けた。

「う・・・・が・・・・・・あぁあああああ！？」

と、そうしているとクウガの装甲から黒い意思が払われるかのように煙が上がり、その姿がアメイジングマイティにまで退行されていくではないか。

「くっ・・・このぉ・・・・・」

「どんなパワーだよ・・・こんだけひっついてもこの程度か・・・・！！！」

蒔風が全身から発しているのは泉戸裕理の持つ「八衢・退魔の波長」その力を以って、ユウスケを蝕み始めた黒い意識を祓っていったのだ。

その効果か、ユウスケはアルティメットからアメイジングマイティにまで下げられてしまった。

「お前・・・・！！」

「がむしゃらに攻め、相手を倒すことしか眼中にないお前に、アルティメットは御しきれんよ」

が、このフォームをしてもまだ強い。
それを表すかのように、蒔風を自らの身体から引き剥がし投げ飛ばす。

その力に蒔風が軽々と投げ飛ばされ、地面を転がっていくが、今度はしっかりと足を付けてその勢いに踏ん張って見せた。

「か・・・は・・・・ど、どうしたユウスケ・・・出力が落ちてい

るぞ・・・・」

「チ・・・・ダァァりゃぁァアアア！！！」

自分の手を見て、フォームを下げられたユウスケがそれに対して苛立ちを露わにしながら蒔風にキックを放ってくる。

が、蒔風にとって今脅威なのはそちらよりももう一方のクウガだ。

そのキックに向かって走り、すれすれで頭を下げてそれを回避する。

背中が焼けるかの様な熱を感じたが、それをそのまま無視、いまだアルティメットフォームである五代に向かってタックルして行く。

が、当然効くようなものではなく、ズドンッ！という音がして両者の足が地面にめり込んで、まるで岩に衝突したかのように蒔風の身体が止まる。

「蒔風さん、これ以上もう・・・・・！！！」

「オオオオ

その蒔風の肩を掴んで彼を止めようとする五代だが、蒔風の脚の筋肉が隆起してクウガの体が浮きだした。

そしてそのまま駆けだす。
その身体は斬撃波と発した炎で焼け裂けて行くが、彼は止まることなく走り続ける。

が、その脚は次第におぼつかなくなって戦いの衝撃で転がっていた拳大ほどの石に爪づいて倒れた。
だがその勢いは途切れることなく、ベシャリと蒔風は倒れたものの、クウガの身体はすっ飛んで行き・・・

《ワールド！！！》

そして、蒔風が即座にメモリを発動させ、飛んで行くクウガの後ろにオーロラを出現させて元の世界へと強制送還させた。

が、そのオーロラに下半身が突っ込んだところで、クウガが何につかまっているのか上半身のみをこちら側に無理やり突き出してきた。

「蒔風さん！！」

「あなたは・・・こちらに来る必要はない！！」

蒔風がそのオーロラに向かって腕を伸ばして強引に閉じようとする。
そうして力を込め、鼻血まで出たところでようやっとオーロラが閉じる。

「へへ・・・やった・・・オガァッ！？」

蒔風が五代を元の世界に返し、やりきったと言ったところで今だアメイジングであるクウガが蒔風の伸ばされたままになっていた左腕を踏みつぶした。

痛みに蒔風が涙目になりながら、右手でその足を払って立ち上がる。

「五代さんをどうした！！」

「元の世界に返しただけだ・・・にしても・・・よくも関係のない人間巻き込んだなコラ」

「おかしいと思っていた・・・俺の知っているワタルじゃない、渡さんのキバとかがいたのに、なんでクウガは俺だけなんだって・・・」

「それで海東と探し回って連れてきたってかよ・・・・面倒なことを・・・」

「お前を・・・倒すためだ！！！」

そうして、クウガがもう一度蒔風にとびかかっていく。
力を使う前に、この力で叩きのめす！！！

「ハァァアアあああああああ！！！！！」

クウガの拳に炎と雷が宿り、それが蒔風へと振り下ろされていく。

それを蒔風が右手で実に危うそうに回避していった。

受け流すだけで汗が一気に噴き出す。
下手をすれば受け流すために出した腕がそのまま引かれて行ってしまいそうだ。

だが

［ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＩＬＬＵＳＩＯＮ！］

そんな音がして、蒔風の体が六体の分身へと変わっていった。
腰にあるのは、ディケイドライバー。蒔風は変身することなく、その力を使ったのだ。

と、そこにさらに追い打ちをかけに行く。

［ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――Ｃｌｅａｒ　Ｖｅｎｔ！］

「インビジブルだとこちらからも攻撃できないが・・・」

「他ライダーの力も使えるディケイドだからこそのこの戦法」

「複数人からの見えない攻撃」

「お前に受けきれるかどうか」

「試してやろう」

［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ］［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔ

ａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！］　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！］Ａｔｔ［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　Ｄ［Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！］Ｅ　ＤＥＣＡＤＥ！］ａｃｋ　Ｒｉｄｅ－－ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！］

ディケイドのファイナルアタックライドが放たれる。
いくつもの音声が重複し、何が何だかわからないがそれはクウガに向かって確実に突っ込んできていた。

ドドドドンッッッ！！！！！

二つの斬撃、二つの巨大な弾丸、一つのキックをランダムなタイミングに打ち出されてそのすべてをクウガがまともに食らった。

カードが切れ、姿を表した蒔風の口すべてがニヤリと歪む。
しかし

「ガアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「う・・オォっ！？」

「ぬあああああ！！！！」

クウガはいまだ立っていた。
姿を現した蒔風たちの頭を掴み、地面に叩きつけ、握りつぶし、踏みつぶして消滅させる。
そして四体を消し、最後の一体に馬乗りになって拳を叩きつけようとしたその瞬間。

ギャリン・・・・・・

と、

背中に鋭い痛みを感じ、それが自分の前腰にまで伸びているのを感じた。

降り降ろそうとした拳をそのままに、クウガが自分の腹を見る。

そこには背中を貫き、腹から飛び出した「火」が、アークルを貫通しているという光景だった。

「う・・・あああああああああああ!!!!!」

「分身は六体。攻撃したのは五体・・・気付かなかったか?だから御しきれてないと言ったんだ」

斬ッ!!

そこから蒔風上に向かって刀を振りあげ、クウガを両断、カードへ

と変える。

「お前はあの瞬間ペガサスフォームになるべきだった。あのフォームならば攻撃を見切り、オレの居場所もわかっただろうによ・・・・・」

蒔風がクウガのカードを手に、話しかけるかのように呟いた。

そして、力なくブラブラしている左腕を見て、メモリを起動、挿入して再生しようとする。

しかし

「お・・・ぐぅウゥウウう!!・・・・ッッハ!!はぁ・・・はぁ・・・・無理か・・・・・」

蒔風が再生しようとすると、ただただ激痛が走るのみでまったく再生しない。

身体に限界が来ているのだ。この腕を治すまでどれだけの時間が必要か。

それを考え、蒔風が例の懐中時計を見る。
時間はもうあまり残されていない。

蒔風はそこで通信を繋げた。
機械的な通信ではなく、何かというとテレパシーのようなモノを。

――――――

しかし、その数はもう半数近くにまで減っている。

たった今、麒麟と白虎がやられ、剣に戻った。

これまで彼らは倒そうとする戦いではなく、相手を消耗させる――つまりは逃げ回る戦法を取っていた。

そのまま本格的に逃げてもよかったのだが、そうしては朱雀の二の舞だ。あくまで相手の見える範囲を逃げ回る。

残る七獣は青龍、獅子、玄武、天馬のみ。

と、そこに蒔風の言葉が聞こえてきた。

『お前ら、今理樹に追われてるな？』

『そうも言ってられませぬぞ。クラウド殿にも攻められ・・・・』

『今絶賛戦闘中だコノヤロー』

『・・・・いかがなさい・・・・ましたか？』

それに対し、四人は声に出さず返答する。

蒔風は理樹だけでなくクラウドまでそっちに行っていたことに少し驚き、さらにそれに対してまだ何とか持ち堪えていた彼らを称賛しながら、さらなる無茶を言ってきた。

『理樹だけを引っ張ってこい。できるか？』

『難しい注文しやがんなぁ・・・』

『できるか？』

『・・・やりましょう』

『任せた』

そこで通信が切れる。

そして、青龍が二秒ほど考えて、叫んだ。

「・・・我々では・・・敵いません！！逃げます！！！」

「よし来た！」「了解じゃ！」「うむ！！」

青龍の言葉と、彼らの応答から、その場にいたすべてのものの行動は速かった。

まず、倒れた三体分の剣を青龍が抱えて飛びたち、それを理樹が追う。

次にその後に続いて行こうとしたクラウド目掛け、天馬が突っ込んで一瞬で返り討ちにされた。

しかし、「逃げる」と言って逆に突っ込んできたのでクラウドが蹈鞴を踏み、止まる。

そしてその前に獅子と玄武が立ちふさがり、剣になった天馬を青龍に投げ放って回収させて先に行かせた。

「天馬は囮か・・・！！」

「この先には通せませんのぅ」

「招待客は理樹殿のみでな。貴殿はまだ招かれておらんのだ」

「まさか・・・罠か・・・・・！！！」

「ま、主ならどんな手を使ってもおかしくはないの」

「正攻法で行くのか・・・はたまた得意な卑怯で行くのか・・・・
それはわからぬ」

そう、今の蒔風はわからない。
騙してくるのか、それともそれすらも騙しで逆に正攻法で来るのか。

なにはともあれ、急がねばなるまい。

「そこをどいてもらうぞ・・・・」

「・・・龍虎雀武が一の堅牢・玄武。ここは通せぬ」

「獅子天麟が一の剛力・獅子。推して参る」

そうして、たった二人の時間稼ぎが始まった。

彼らの戦闘時間は実に五分と三十四秒。
しかし、終わるころにはもう理樹の居場所などわからなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

銀白ＶＳ空我？（後書き）

ユウスケ「負けた・・・・チクショウ、オレクウガなのに！！」

あなたはクウキです。

ユ「うるっせえ！！」

マークは・・まあユウスケですし、クウガのマークで。

五代さんは送りかえし、ユウスケは弱体化させて何とか勝利。
しかし、何を考えたのか今度は理樹をおびき寄せて・・・・？

ユ「次回、ＶＳ薄緑。満身創痍の舜は勝てるのか・・・・やられちまえ！！」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

銀白ＶＳ薄緑

「まだ逃げるのか・・・・！！」

理樹が追う。
眼前十メートルほどの位置には青龍が計四本の剣を抱えて飛んでいる。
クラウドは来ない。どうやら足止めを食らったようだ。

「どこに・・・まさか・・・」

飛んでいくうちに、理樹はある推測を立てる。
このままいくのはまずいのではないか？

もしかしたらおびき寄せられているのかもしれない・・・・・
この先に罠があったら・・・・

最硬の翼人として、いかなる攻撃も防ぎきる自信はあるし、実際に彼はそれだけの力を有している。

だが、なんといっても相手はあの蒔風だ。
隙を突く、背後から一撃、搦め手、非道、卑怯、なんでも使ってくるだろう。

そんな相手と、理樹はなかなか戦ったことがない。
否、そもそもがただの高校生だった彼に、そんな機会などなかったのだが・・・・

それでも、一癖も二癖もある仲間たちを遊んでいるうちに彼にも騙しなどの耐性はついていたし、この戦いの中で蒔風の手法もだんだんとわかってきた。

その仲間たちはいない、蒔風は敵だ。
「友情」の名を冠する翼人は、すべてを失ってしまうのか・・・・・

そうしていると、青龍が一気に急降下して地表に向かって下りて行った。
それを追って行く理樹。

雲に突っ込み、そこから飛び出したその瞬間！！

「獄炎弾！！」

「わ！？！？」

ドォウ！！！

地表から離れているにもかかわらず、蒔風の声が聞こえ、理樹めがけてバスケットボールほどの大きさをした球体が飛んできた。
それをスレスレで回避、一気に加速して急降下する理樹の後ろで、獄炎弾が一気に膨れて爆発した。

それは巨大な火球となって雲を飲み込み、その肥大によって理樹を飲み込もうとするが、それよりも早く理樹はその範囲から脱し、地面に降り立つ。

「チ・・・流石に避けるか」

「舜！！」

そうして降りてきた理樹の前に、蒔風がいた。
すでに四本の剣は鞘に納められ、その右手に青龍刀が握られている。

が、その体はどう見ても満身創痍だ。

もっとも目につくのは、左腕。
力なくだらりと下がり、持ち上げたらそれだけで千切れてしまうのではないかというほどに力ない。

そして良く目を凝らすと、外見こそ傷は目立たないが、体内部に蓄積されたダメージはかなりのもののようだ。
ゴホゴホと咳込んでもいるようだから、内臓へのダメージは確実にある。

いったい、ここまで誰が戦っていたのか。
そして、やられてしまったのか・・・・

「覚悟しろ、理樹・・・・お前を倒すぞ」

「・・・・そんな状態でよくも言えるね・・・僕を舐めすぎていない？」

だが、そんな満身創痍でも、彼は一切臆することがない。

死を恐れない彼にとって、「死にそうである」などというのは一切戦闘に躊躇いを持たせない。

せいぜいが「痛くて動きにくい」くらいの認識だ。

そんな男を直視し、次第に気分が悪くなって理樹が視線を逸らす。

ゴガッ！！！

その瞬間、理樹の側頭部を蒔風の蹴りが襲った。

しかし、そこにはバリアが張られ、理樹には一切届いていない。

「よそ見したと思った？そんな簡単にやれると思った？」

「・・・少しは思ってたな」

「バカにするな！！！」

ドォウ！！！

理樹の翼が大きく開かれ、そこから発せられるオーラで蒔風の体が吹き飛んだ。
地面に背中を打ち、肺から空気が吐き出される。

「かッハ・・・・・て・・・めえは・・・・・」

「？」

「てめえは・・・・あっさり倒すって決めてんだよ！！！」

ドンッ！！！

青龍刀では無理だと悟ったのか鞘に納め、蒔風の右手に光が集まり、それが腕の細さにまで圧縮、光速を以って打ち出された。

絶光尖

貫通力と瞬間的な速度を誇り持つこの絶光の力を、さらに細めて貫くことに特化した「尖」にして打ち出す、絶光系最高の攻撃。

それを蒔風が理樹に向かって撃ち放った。

しかし

バチィン!!と、「弾く」という事をまさに音で表したかのような音とともに、理樹のバリアでそれは難なく防がれてしまった。

その事実に、蒔風が流石に冷や汗を流す。
最高攻撃力を誇る雷旺砲も防がれ、最突力を持つ絶光尖も効かない。

いま、改めてこの翼人の強さを感じた。
こいつに効く攻撃なんてものがあるのだろうか？

「それだけ？だったら・・・・・」

「ッッ!!こいやァ!!」

「こっちから行くよ！！！」

ザゴン！と理樹がバリアを柱状にして自分の背中から地面に突き出し、その反動で一気に飛び出してくる。

そして、蒔風の懐に一瞬で踏み込んできた彼は、バリアを拳にまとわせ、それだけでなくそれで巨大な拳を作って蒔風を殴りつけた。

その拳の大きさは通常の拳の五倍ほどもあるか。
バリアを自由に組み上げれば、このようなナックルを作り出すこともでき、それがこれだけの硬さを持っているのならば十分に脅威となりうる最たる例だ。

が、それを蒔風は右掌で受け、受けて触れた瞬間に掌を下げながら舞うようにするりと回して後ろに流す。
そして、カウンターでそのまま右拳を理樹の顔面に正面から突き出した。

しかし、それも阻まれて理樹が今度は蹴りを放ってきて腹にめり込む。

「ぐぼっ・・・・っは！！」

蒔風が腹を抱えながら、地面を転がって呻いた。

全く効かない。
こちらの攻撃は防がれる。

これが、彼が「賢者」と分類した防御系の翼人。

その頂点に立つ者だ。

しかし、だからと言って

蒔風が諦める理由にはならない。

「オオオオオオ！！風斬車！！！」

天地陰陽を組み上げて、蒔風が風斬車で削りかかる。

手を振り、その遠心力で回転する風斬車が理樹のバリアと接触した瞬間、まるでフラッシュを焚いたかのようなスパークが起き、二人の目の前を白で覆い尽くした。

「う・・わ・・・・」

「オオオオオ!!!リャァアアアアア!!!!」

その光に目を細めてしまった理樹に、蒔風が咆哮を上げて蹴りを放つ。

全く見えていなかった理樹の腹部に蒔風のつま先が鋭く突き刺さり、理樹の内臓が圧迫された。

その体が転がって、膝立ちに立ちあがった。

「ゴホゴホっ!!蹴り一発で・・・これ?」

「さぁて・・・はぁ・・・はぁ・・・視界を奪えば・・・どうにかなることは証明されたし・・・こんな感じで行くから・・・・フーッ・・・・・ハー・・・宜しくゥァ!!!!」

そう叫んで蒔風が再び風斬車を振って理樹へと走る。

それに対し、バリアを張らず理樹は回避で対処した。
あれに対してバリアでは逆効果だ。

無論、全身をバリアで覆えばいいのだろうが、それでは身動きが取れない。
そうなれば滅多打ちにされるのみ。こうして一撃ずつだったりなら受け切る自信はあるが、滅多打ち状態が継続されてバリアが破壊されないとは言い切れない。

が、受けるだけがこの翼人の強さではない。

ゴン！！！

「ウゴッ・・・・？」

バカッ！！！

「ア・・・ガッ！！」

重い鈍撃の音と、蒔風の口からそれに応じた音が漏れる。

バリアを展開する勢いで、理樹が蒔風に向かって柱状のバリアを突出させたのだ。

咄嗟の攻撃に対処するバリア。その展開速度は蒔風の拳と同程度だ。つまり、蒔風が突っ込んでくるのに合わせてその速度で出現させれば、こちらのその速度と蒔風が突っ込んでくる速度とでのカウンター攻撃が可能となる。

が、いくら片腕しか使えない状態とはいえ蒔風だって翼人なのだ。翼を開き、その動きに変則性を持たせてくる。

カウンターは先読みしたうえでの攻撃だ。
相手が動きを変えれば、アホみたいに棒を突き出すだけ。

しかし、だからと言って理樹が自分にバリアを張れないというわけではない。

その柱が外れた直後、理樹はすでに蒔風の攻撃を受け止めていた。

強い

決して理樹からは激しい攻めをしてこない。
彼ならばこのバリアを刃状にしての攻撃もできるはずなのだが、彼はそれをしない。

攻撃に転じるのはもっともっと優位になってから。
あくまでも自分は防御に秀でた翼人だ。無茶はしない。そんなことをしてはつけ込まれて返り討ちにされるだけだ。

だから、相手が来たときにその数倍はあるカウンターを入れよう。

こちらは決して攻撃を受けてはならない。さっき蹴りの一発を受けて分かったが、理樹自身の耐久力は決して高くはないからだ。
それゆえに高い防御力なのかもしれないが、だからこそこのバリアは破られるわけにはいかない。

そして、彼はこの戦いでも学び、経験し、成長していた。

彼はかつての悲劇を、幾度も繰り返してきた虚構世界での経験で乗り越えた。

その繰り返しの記憶はない。

しかし、体にしみこんだ経験は生き残っているのだ。

彼は、何一つとして無駄にせず、取り込んでいく。

それこそ、努力の最終形態。

彼の成長率は果てしないものだった。

「チ・・・テメェ・・・いつまでも受け切れるとか思ってんじゃ・・・！！！！」

「な・・・・・！？」

「ねェェェェエエえええええぞ！！！！」

「ゲふっ！？おグっ・・・・・は・・・・！！」

が、それでも彼との経験の差は大きい。
彼は《ｔｈｅ　ｄａｙｓ》時代にすでにそれなりの強さを持ち、さらに世界をめぐって戦いを経てきたもの。

彼の拳がまるで蛇のようにうねり、攪乱、そして渾身の一撃を打ち放ってきたのだ。

それが理樹の腹部に命中、腹を押さえて理樹が転がる。呼吸が一瞬止まった。

「オォラァ！！！」

「ぐ・・・あああああ！！！」

と、そこにさらに蒔風の右拳が理息の顔面に放たれた。

無論、それ自体はバリアで防げる。
威力も速度も、不可能なものではないはずだ。

しかし、一瞬呼吸が止まったのが悪かったのか、ついにそのバリア

に亀裂が入った。

しかも、それだけではなく、拳は半分ほどこちら側に突っ込んでまで来たのだ。

そのバリアの欠片と衝撃にとって、理樹は後ろに転がった。
さっきの声はその時のだ。

受け切れるはず、それが受け切れないかった。

それは仕方のないことだろう。攻撃に続く攻撃、しかも呼吸が途切れていた。
しかし、そうわかっていても、その事実は理樹を確実に焦らせた。

どうするどうする・・・・・

もう生半可な（それでも蒔風の攻撃のほとんどを受け切ってしまうのだが）バリアではだめだ。
しかし、それほど強固なバリアでは瞬時には出せないし、だからと言って展開しっぱなしでは動けない。

・・・・・・・・・

「そう・・・か!!!」

「何を思いついた?さあ・・・やってみろ!!!」

そうして、蒔風が理樹に駆ける。

理樹はバリアを張ったようには見えない。

だから蒔風は、狂気じみた邪悪な笑みを浮かべて、理樹に向かって右手で手刀を、その首をへし折ろうと振り下ろした。

が

それはゴスッ、という音とともに押しとめられた。
蒔風の手刀は間違いなく理樹に振り下ろされた。
理樹はバリアを張っていない。

かのように見えた。

しかし、理樹はしっかりとバリアを張っていた。

しかも、その強度は今までのモノと比にならないほどに硬い。

「これが・・・僕の力の最高／硬だ」

「鎧・・・だと!?」

理樹が微動だにせずにその体を動かす。

その全身を、見えないほどに薄く、それでいて最高強度のバリアで覆っていた。

「は・・・・でもそれじゃあ動けるはずが・・・・・」

ドゴッ！！

「が・・・・・」

「動けるよ？そういうふうにしたんだ！！」

理樹の身体が異常な速度で動いて蒔風を攻め立てる。
それに対して右腕一本ながら受けきる蒔風。
理樹自身の格闘能力はそこまで高くはない。
しかし、その腕や足を覆うバリアの硬さに、受けるたびに防御しているはずのこちらの腕が傷ついていく。
更に言うならば理樹は自分から動いていない。
理樹は自分を覆うバリアの方を動かす事で、自分の身体を動かしていた。

故に、無理な動きもできる。
そのために少し身体が痛むが、それは許容範囲内だ。

今や理樹に手出しできる者などいない。

この鎧こそが理樹の今の最高力。

「さあ・・・終わらせるよ。今までの事、これからの事、全部！！」

「テメェ・・・」

蒔風が理樹を睨む。

その姿にはバリアを纏っているなど思いもよらない。

なにも見えないのだ。

普通に立っているようにしか見えない。

これが、翼人。

今、立場が逆転した。

理樹が見下ろし、蒔風が見上げる。

戦いの終わりは近い。

to be continued

銀白ＶＳ薄緑（後書き）

理樹、超善戦。

賢者の翼人はさすがだぜ！！！

何ひとつとして効かないバリアを纏い、一体どうすればいいのか・・・・

そう言えば今日、ゲーセンでｊｕｂｅａｔやりました！！中々面白い。

と、言うかあれで「ユビート」って読むんですね。全然わからなかった。

もしユーザーに「ＢＴＯＫＪＩＮ」っていたら私ですｗｗｗｗ

あと「ＢＯＳＳ」面白いね！！！

ではまた次回！！！

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
直枝理樹
乾巧
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

ＶＳ薄緑決着（前書き）

これまでの、世界をめぐる、銀白の翼　第二章は――――

「主要、最主要たちが消えた！？」

「大正解！！俺が犯人だ・・・・・・！！！」

「蒔風・・・貴様！！」

ォォォォォォオオオオオオ・・・・・・・・・

「お前を倒す・・・・・」

「絶対に許さん！！」

「舜、全部終わらせるよ・・・・今ここで！！」

「やってみろ！・・・・どこまでできるか、見せてもらおうか！！」

VS薄緑決着

「ゼァァァァあああああ！！！」

ゴン！！バッガァッ！！！！

「メリッ・・・ッて・・・・・ゲ・・・フ・・・・・・ァ」

「もう無駄だよ。こうなったら・・・僕は倒せない」

理樹が猛然と攻めてくる。

それはそうだろう。彼は彼のできる内で最硬の防具であり、最強の武器を手に入れた。

しかも相手は満身創痍。

いまこそ攻め時だ。この男を倒し、すべてを終わらせる。

今はそれだけを考えればいい。
「戦闘」は彼の本性からすればあまり向いたものではないのだが、そうも言っていられない。

彼は温厚な性格だ。殴るや蹴るなどの行為を好ましいと思ったことはない。
しかし、この相手だけは許しておくべきではない。
何か理由があるならば、聞かせてもらう。

しかし、相手が話さないのならば、無理やり聞き出すまで・・・・・!!!!

無論、その相手(りき)に対して蒔風が何もしていないということはない。
当然様々な手段を試していた。

絶対防御、という単語から、彼はかつて学園都市第一位に放った攻撃を試してみる。

獄炎弾

それが理樹の元へと一気に向かい、触れるか触れないかの位置で膨れ上がって飲み込んだ。
その火焔自体にはダメージを食らわずとも、周囲の酸素はなくなるはずだ。

前に第一位とやりあったときもそれで倒した。

しかし、この場合はまた別だ。

理樹はすでにいったんバリアを張って定着させている。
動き回るならその都度バリアを動かさなければならないが、立ち止まってならほかのバリアを張るだけの余裕はある。

ゆえに、理樹は立ち止まってそれを受け、炎にのまれてからドーム状のバリアを一気に自分から膨れるように展開していった。

そのバリアに獄炎が内側から押しのけられてかき消された。

これは効かない。

では、固有結界はどうか？

しかし、これは蒔風が考えているうちにやめた。

この固有結界は「法則」を弄る。
だから「バリアを張る」という行動をとってもその通りになるとは限らない。

その動きが蒔風のためになるか、理樹のためになるか、それとも両者にとって有利不利になるかはわからないが、兎に角あのバリアは張れないだろう。

しかし、この固有結界にはある欠点があった。

「行動」にしか反応しないのだ。

つまり、発動した瞬間に動きを止めて突っ立っていれば何も「法則」は働かない。

あのバリアはもう張られてしまったものだし、そのままいるなら余計な行動はいらない。
あれほどの硬度ならば三十秒間バリアを張り直さなくとも耐えきるだろうし、消し去ることもできない。そう言った「一瞬で終わらせる」ということはできないのだ。

つまり、理樹としては発動した瞬間に動かなければいいのだ。

この固有結界のことは彼も知っている。

ここまでの詳細は知らなくとも、自分の思い通りにならない、というのは知っているはず。
ならば下手に動くのは危険とみて、動かないだろう。

それでは意味がない。
体力を消耗するだけだ。

これは効かない。

あれを破壊しうる方法としては、十五天帝による一撃粉砕だが全部そろっていない今ではそれも出来ない。

そもそも中心になるべき獅子天麟がないのだ。

天馬があるから呼び寄せることも可能なのでそれをしてもいいが、それでは飛んでくる剣を追ってクラウドが来るかもしれない。

これはできない。

雷旺砲、絶光尖と防がれた今、こういった能力系は一切効かないだろう。

これは意味がない。

そもそも、雷旺砲は両手でないと放てない。
片手では拡散してしまい、本来の三分の一程度の威力しか出ないのだ。

そう考え、いきついた先はただ一つだった。

「うん・・・やっぱり捨てるしかないみたいだな」

「？　いったいどういう・・・・・」

何やら気楽な声で、蒔風が首をゴキゴキと鳴らす。

いったい何をするというのか。

流石に理樹も身構えた。

この男はどんなことをしてくるかわからない。

「見せてやるよ、理樹」

蒔風が翼を開く。

「死の恐怖無き男の」

そして翼（それ）が鋭利になって。

「未来（さき）を見据えぬ戦い方を」

蒔風が加速開翼してその場から消えた。

「!?　高速移動・・・・!!!」

視認できないほどの高速移動。
そこから放たれる攻撃はなるほど、確かに強力だ。

だが今のコンディションではとてもではないが理樹のバリアを破ることなどできない。

そう考え、理樹は蒔風が攻撃してくるのを待った。

あの体ではそう長くは移動し続けられないはずだ。
すぐに限界は来る。

その瞬間に叩き潰してやるのだ。

蒔風の移動で踏み込められた土が少しだけ、そしてところどころ宙

に弾ける。

バッ・・・・ザっ・・・・・・

しかし、音を確認できても、それは蒔風にとってはもう五秒も前のことだ。
ゆえに聞くだけで理樹は視線を逸らすことをしない。

ただ真っ直ぐ顔を向け、視界はどこともなく焦点を合わさずに空間を見ていた。

（どうくるのか、受けてからの反撃か・・・・・よく見ていやがる。
よくぞここまで強くなったものだ）

グ・・・ギチギチギチ・・・・・・

（だが・・・そのバリアには決定的な欠点がある。そこさえ改善されれば本当に手出しできなかったが）

メキメキメキメキ、ブシュ・・・・バキン！

（その高度ではそんなことは簡単にできまい・・・・・・！！！！）

直後、蒔風が理樹の目の前に現れ、左腕を思い切り振るって真っ直ぐに、正拳突きを放ってきた。

それに対して理樹が瞬時に身構え、反撃に転じようとする。

しかし、その一瞬後に理樹の視界は真っ赤に染まって潰された。

ーーー

その答えが、理樹の視界をつぶしたものにある。

加速開翼でのスピードはかなりのものだ。

そして、蒔風はそこから身体を止め、姿を現して左拳を放った。

しかし、よく見てみるとその拳は理樹に命中していない。
見えもしない理樹のバリア。その十センチほど前で、その拳は止まっていた。

だが、その腕はしっかりと伸びきっており、ただ単に寸止めしたようでもない。

そう、それでいい。
彼の目的は最初からそれだ。

超加速から一気に脱して放った腕。
そんなことをすればどんなことになってしまうのか。

簡単だ。答え合わせをしよう。

その左腕の皮はすべて反動でめくれあがって剥げ、筋肉繊維は裂かれて弾きだす。

それと同時にその腕に詰まっていた血液がすべて前へと、ペンキの缶を放り投げたかのようにぶちまけられた。

理樹には一切かからない。
しかし、そのバリアはすべて真っ赤に染まって中からは見えなくなってしまった。

これでは反撃も何もない。
しかも、こんないきなりのことに理樹はパニックになった。

無理もない。
戦闘経験の豊富ではない彼の目の前で、腕の皮がまるで解剖実験のようにべろりとはがれていき、筋肉がむき出しになって血を噴き出してきたのだから。

しかも、視界を一瞬で奪われて咄嗟に理樹はバリアを解除してしまった。

その瞬間。

「旋脚（せんきゃく）」

「な！？ゴフ！？グガアアアアアアアアアア！！！！」

蒔風が足を振りまわし、何回もの回転蹴りを放ってきた。
その一撃をくらい、理樹が吐血するものの、その後の攻撃はすべてバリアで受けていた。

が、その猛攻は止まらない。
もはや落ち着かせてバリアを張らせることなどさせないように。

「突！！」

「うぐッ・・・・・」

「天馬に集え！！」

「う・・・おおわあああ！！！！！」

更には天馬を理樹に向かって突き出し、バリアに阻まれた瞬間に現在所有する分だけの剣をバラバラに出して、全方向から理樹を突き刺すように突っ込ませた。

それをなんとかバリアで防ぐ理樹だが、そちらに意識が言って蒔風の右拳が腹にめり込む。

更に喉の奥から血がこみ上げ、バリアが緩んで剣が突き刺さり全身に激痛が走った。

だが、それでもまだ倒れない。

理樹が地面を思い切り踏み込んでバックステップで距離を取る。

その理樹に向かって蒔風が獄炎砲を放って追撃。

「ハッ・・・ハッ・・・クッ、こんなもの・・・・ああああああああ！！！」

が、身体に剣が突き刺さり、しかも今の状況からの心の状態児ではまともにバリアなど張れるはずもなく、その砲撃は理樹を撃ち落とした。

地面を転がる理樹。
その耳に自分のすぐ目の前に足が置かれる音が聞こえ、立ち上がって攻撃する。

しかし、その攻撃を足で蒔風は防いで、その体を独楽のように回転させた。

ビチャリと、理樹の顔面に血がブチ撒けられ、その視界が奪われた。

それをこすって落とす理樹だが、次の瞬間には拳が見え、その時点で理樹の意識は消失した。

ーーー

「だが・・・それだけの硬度のモノでそれを実行のにはまだ経験不足だったなぁ？・・・・・」

蒔風が空間からバイクを出し、そこに収納されているものの中から包帯を取り出して左腕を吊る。

処置はしたが、この左腕は当分先まで使えないだろう。

しかし、彼はなにも後悔はしない。

また一人、仲間を屠って蒔風舜は、次の獲物を探しに行く。

to be continued

ＶＳ薄緑決着（後書き）

最初にあらすじ入れてみました！！！

理樹「あんな・・・腕を捨てるなんて・・・・・・！！！」

千切れてないまでも、再起不能でしょうね！！

理樹の敗因はズバリ経験不足でしたね。
まあ本編でも言いましたが仕方ないですけど。

理樹の切り札と、その破り方に関してはこう考えていました！！

満足しました！！

理樹「次回、ライダー、最後の抵抗」

ではまた次回！

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
乾巧
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

訪問者／襲撃者

《ワールド！！！》

「ふぅ・・・ハァッ！！・・・・・ったたた！？イデデデデ！！！
ったぁ～～～・・・・・・ダメかぁ～。がっくり」

廃棄都市の一角、柱と床と天井しかないようなそのビルに、蒔風が手の平からワールドメモリを抜き、ため息をつく。

左腕はいまだ治っていない。
包帯に巻かれ肩から吊っているものの、それをはがせばそこには人体模型のようにむき出しになった腕がある。

ワールドメモリで回復能力を持つ者の力を引き出して治そうとしていたのだが、痛みが走るだけで治らないのだ。
ほかの傷は治ったし、体力もそこそこ戻った。戦闘に支障はないだろう。

だが、この左腕だけは無理だった。

呪いか怨嗟か

腕のおぞましい外観とその痛みはまるで蒔風を許さないと言っているかのように感じた。

「残りリストは・・・・実力者ばかりか・・・・・とりあえず・・・・」

そうして、時計を見、リストを確認して蒔風が瓦礫から立ち上がって街を見る。
廃棄されたビルの一角を越え、その先に見えるのは風車が町中に並ぶエコの街。

蒔風は風都に足を運び入れた。

ーーー

かもめビリヤード一階の「鳴海探偵事務所」には生き残ったライダーたちが集まっていた。

つまりはファイズである乾巧。
ブレイドである剣崎一真。
電王である野上良太郎。
ディエンドである海東大樹。
Wの半身である左翔太郎。

そして狙われてはいないが事情は知っている照井竜だ。

「そういやお前の嫁さんは知ってんのか？このことよ」

「襲撃事件は終わったと言ってある。巻き込むわけにはいかないからな」

「ふーん」

バイクに乗りながら、信号で停車するたびに二人が会話を交わしていく。

「だがそろそろごまかしも効かないだろう。所長はあれでなかなか勘が鋭い」

「わりぃな。そろそろ出ていくからよ」

「いや、それは構わないが・・・」

「ったく・・・真理のやろぉ、「危ないから逃げていようよ」とか言いやがって・・・そのせいで俺は一度もあいつと戦ってねぇんだぞ」

「確か知っているんだったな?園田は」

「ああ、蒔風を問い詰めた時、俺はあの場にいて・・・その提案を受けた時にアイツもいたからな。北郷がやられて怖くなっちまったんだろ」

「それは仕方ないことだろう」

「まあ気持ちは分からなくねぇけどよ・・・正直鬱陶しい」

「今はどうしてるんだ?」

「啓太郎ん家にいる。ここにいることまではわからねぇさ」

そうして大通りから路地に入り、回る風車を横目にバイク二台はかもめビリヤード前にバイクを止める。

ライダーたちのバイクは地下、リボルギャリー格納庫に収納されている。
目の前においておいてはここにいますというようなものだし、バイクをそんなに並べては（といっても全部で四台だが）邪魔になってしまうからだ。

だから彼らも前にいったんバイクを止め、買ってきたものを運び入れようとした。

と、その瞬間

ドオン！！！ギィィィィィ・・・・ガォォオオオン・・・・・・・

地下から重々しい爆発音と、いくつもののエンジン音。
そして離れた位置にある格納庫出口から飛び出してきたリボルギャリーの走行音が轟いてきた。

「ハァ!?んだよ・・・来てやがんのかよ!?」

「追うぞ乾!!格納庫出口は遠い・・・間に合わなくなるぞ!!!」

バイクから降りかけていた二人が、買い物袋をその場に放置してエンジンを再度吹かせ、後輪を流して方向転換、リボルギャリーの出口へと向かった。

ーーー

そして夜に出るのは危険、外食もダメということで、今の内に照井と巧が買い出しに行っているのだ。

「それにしても僕らが来ていなかったらどうしてたんでしょう？」

「その時は刑事さんが作ってたんじゃないかい？ま、探偵君もできないわけじゃないみたいだけど」

ちなみにこの二人はつい一時間前にここに来た。

海東は前に共闘したことのあった電王のメンバーと合流し、その良太郎はちょうどほかのライダーたちのいるここに顔を出しに来るつもりだったので、ついでについてきた、という経緯だ。

「誰かと組むのは性に合わないんだけど・・・どうにもそう言ってられなくてね」

「五代さん・・・でしたっけ。押し戻されてしまった方は」

「ああ。しかも翼人の力でゲートが強めに閉じられてしまってね。また会いに行くのは難しそうなんだ」

「ってことはやっぱ俺らでやるしかないってことだろ？」

「今度こそ、救って見せる。何もできなかった俺は嫌だからな」

「翔太郎、剣崎さん」

「まあ、その話もいいけどよ・・・・・」

「とにかく今は飯食おう！！」

ガゴォン・・・・・

と、そこでリボルギャリーの前にある大きな扉が開く。

その扉は巨大な体躯を誇るリボルギャリーが出ていくための物なのだが、それがゆっくりと開かれていった。

「あ、照井さんたち帰って来たみたいだ」

そういって、良太郎がその大きな扉に近づいていく

たしかに、今ここにブルースペイダーにハードボイルダーと二台のバイクはあるし、実際に照井や巧のバイクもここに置く。だから良太郎の取った行動は正しいと言えば正しいのだろう。正面からでなく、この通路から帰ってきたと考えるのは妥当だ。

だが、翔太郎はそこから来るのが照井達ではないことに気づいていた。

なぜならばあちら側、リボルギャリー用のこの通路からは、入ってきたことなどは一度もないし、向こうから入り込むことはできないはずだからだ・・・・・

「離れろ野上ィ！！！！《ジョーカー！！》」

「え？」

バァンッ！！！

直後、ジョーカーへと変身した翔太郎が良太郎の肩を掴んで引き下げ、開いて来た扉の隙間から出てきた拳を両手で受けて弾いた。

「ウガッ！？」

「翔太郎！？」

「下がれ翔太郎！！！おおおおお！！！」

《タックル》

ヴォオオオオオオオオン！！！！！

ゴガッ！！！

ジョーカーが転がって扉から出てくるであろう相手に向き合っていると、背後からすでに変身を終えた剣崎の叫びと共に、スペード４「タックルボア」のカードを専用バイク「ブルースペイダー」にラウズ、更にはスペード９「マッハジャガー」までをも読み取らせ、その相手、蒔風の身体を掻っ攫って地上までの通路を一気に駆け抜けて行った。

そしてさらに、ジョーカーがリボルギャリー内部に入りその後を追って走り出した。

後に残ったのは床に倒れた良太郎と、それを受け止めた海東だけだ。

「まさか・・・こんな風にいきなり来るなんてね・・・・」

「あの人が来るのはいつだって突然だよ・・・・それよりも・・・・」

ガチャ

「僕らも追おう。二人だけじゃ無理だ」

そう言って、良太郎が扉を開ける。

その向こうは時の砂漠。デンライナーが、発車音を鳴らしてやってきていた。

to be continued

訪問者／襲撃者（後書き）

なんだか短くなってしまった気が・・・

この襲撃シーンを考えるので手いっぱいになってしまった・・・・・
今回考えるだけでも一日中妄想してました。

残すライダーは最初から決まってるのでどうやってやられる　ｏｒ
やられないの場面に持っていくか・・・とか

次回まで続き、次々回まで続くかもです。

細かくする分もしかしたら！！！短く感じてしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、戦闘描写は手を抜かずに頑張りますので許して下さい！！

あっ！！痛い！！モヤッとボールを投げないで！！！！

ブルースペイダーにはカードの効果を付属させる装置ありましたけど、考えてみると「タックルボア」は使ってないんですよね。
使ったのは「マッハジャガー」と「サンダーディアー」のみ。

でも本編で一回も成功しなかった「タックルボア」が活躍できたからいいよね！！！

ではまた次回！！！

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ

乾巧
剣崎一真
左翔太郎
フェイト・Ｔ・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

コンディション

左腕使用不可。

体力はバイクに押しのかされながらもいまだ健在。
体力値：９８％
ただし度重なる戦闘で耐久力は低下している

銀白ＶＳ切札＆剣

地下格納庫からの広く大きな通路を、一台のバイクが走っていく。

そのハンドルを握るのは仮面ライダーブレイド・剣崎一真。

そしてそのバイクに押され続け、前部にしがみつき後ろ向きで進まされていくのは蒔風だ。

本来ならばここで足を地面につけ、その勢いを殺してバイクを持ち上げてから投げ飛ばしてやるところなのだが、突っ込んできたバイクを受けるために右腕で押さえている状態だし、このままの維持なら勢いで張り付いていられるが勢いそのものはを殺すことができない。

ゆえにこのバイクが止まるか、外に出て自ら脱するかしないとこの状況は変わらない。

それに後ろ向きだからわかったことだが、このバイクの五十メート

ルほど後方にはリボルギャリーがあり、だんだんと迫ってきているのが見えた。

グォン！！！

と、そうして状況を考えているとバイクがついに地上へと飛び出した。

場所は工場地帯側面を走る道路だ。

おそらくは工場の敷地内だからか、走っている車はほかに一台もなく、トラックなどの大型車両が走るためにその幅は以上に広い。見た限り延々と道路は伸びていた。

「ッ・・・うまく着地・・・できるといいなっと！！！」

そして蒔風は即座に右腕をまげてバネのように跳ねてバイクから離

脱した。

慣性の法則か蒔風はバイクと並行して宙を流れていくが、いずれは地面に落ちるだろう。

《ワールド！！！》

が、そうはいかないのがこの男だ。

メモリを取り込み、その足にローラーブーツ型デバイス「マッハキャリバー」を履き、右腕にはリボルバーナックルを装備してウイングロードを展開、その上を滑走していった。

「もしこれがギンガだったらナックルは使えなかったな・・・あぶねぇあぶねぇ」

そんなことを呟きながら、蒔風が跳躍。ブルースペイダーに向かって飛びかかっていった。

真上から迫る蒔風。
その蒔風にブレイドはハンドルを固定し、ブレイラウザーを真っ直ぐに突き出した。
それをリボルバーの手首に当たる部分で受け、バイクの前部に立ち乗ってブレイドと組み合う蒔風。
その着地の衝撃でバイクはコマのように回転するが、乗っている両者はそんなことは気にしていられない。
ブレイドが空いた片腕で蒔風の足を攻撃するが、攻撃された片足を上げてそれを受け止める蒔風。
ブレイラウザーを押しのけて拳を放ち、さらに足で受けている拳も押しのけて蹴りまではなってきた。
が、それを受け切れないと悟ったブレイドはバイクから真上にジャンプし、真下の蒔風に向かって剣を突き立てるようにして落ちて行った。
ジャンプから落ちてくるまでは一瞬だ。
その一瞬でできることは限られており、さらには片腕しか使えないのならば受けることも不可。

蒔風はとっさにバイクから前に向かってジャンプ（蒔風にとってはバックステップだが）、それを回避した。

そのジャンプで、蒔風が前に向かって飛んだのだから、バイクは当然後方に流されてブレイドの剣が地面に突き刺さる。

蒔風はウイングロードに着地するものの、後方から追いついてきたリボルギャリーからの体当たりに着地した瞬間に真横に吹き飛ばされ、その先でロードを展開して着地して戻っていく。

ブレイドは地面に着地した。そこに後ろへと流されていたバイクがやってきて、それに飛び乗って先を行く蒔風を追い始めた。

一方蒔風

リボルギャリーの攻撃から何とか戻ってこれたのはいいが、そのダメージは無視できない。
まあそうはいってもこの大型車両は確かに強烈なものではあるが、いかんせん体当たりしか攻撃法はない。

ゆえに離れていれば無事と言えば無事なのだ。

（だけどあれん中には翔太郎がいる・・・やらないわけにはいかないな）

蒔風が行動を開始する。
あれの装甲は固い。しかし、今蒔風が借りている力は、その装甲を内から破壊する拳。

ならばためらう必要などありはしない。

「ォォオッ！！」

リボルバーが唸りを上げ、拳を握って蒔風がウイングロードを疾走してリボルギャリ―に徐々に接近する。

この道路は確かに広いものの、リボルギャリ―が回避するには十分な広さではない。それに、やっと行き止まりも見えてきた。
その中には、絶対に回避できない一点があるハズだ。

そこに打ち込みさえすれば、どこに当たろうとこの攻撃は耐久力など無視して破壊する・・・・！！！

「ＩＳ発動！振動破砕ッ！！！」

蒔風の身体がウイングロードから飛び出して、リボルギャリ―の横っ腹に拳を稚気出し、地面と水平に、真っ直ぐに突っ込んでいった。

もらった！！

蒔風はそう思った。
これさえ入ればリボルギャリ―は爆破、それができずとも横転にまでは持っていけるはず。
爆破されればそれで終わり、横転ならば中身がシェイクされてグチャグチャだ。
これで一人・・・・
そう、蒔風がそう思うのは無理もないのだ。
油断？
否
焦っているが故に

バガンッ！！！

「あゴッ！？ギアああ！！！」

しかし、そう蒔風の思い通りにはならなかった。

リボルギャリ―が中身をさらけ出すようにそのハッチを勢いよく開き、真横から突っ込んできた蒔風を地面に叩きつけたのだ。

地面を転がって勢いが殺される蒔風。

一方リボルギャリ―は勢いよくたらいたためかハッチが地面に当たって火花を上げたものの、それを開いたまま行き止まりまで行って反転、蒔風の方へと向き直った。

「ぐ・・・おおお・・・・・・イッテぇ・・・！？」

ヴォン、ギャィン！！！

「ォグアっ！？」

地面を転がり、立ち上がった蒔風の後方からバイクのエンジン音が聞こえ、振り向いた瞬間にブレイドが剣を振りながら蒔風を轢いて行った。

直撃こそはしなかったものの、身体を引っ掛けられ蒔風はその場で回転し背中を打って再び倒れる。

「おぉう・・・・・強・・・烈・・・・・ッ・・・・・・」

地面を倒れる蒔風だが、こうしているわけにもいかない。

今度はその倒れている蒔風が今いる場所を、電車のレールが走ってきた。

それ自体には特に何もない。そのしく間に蒔風が膝をついているだけだ。

しかし、蒔風は血相を変えてその場から即座に転がり出た。

その理由は明らか。

直後にデンライナーが蒔風を引き飛ばそうと突っ込んできたからだ。

その勢いでの突風にあおられながらも、蒔風が受け身で転がった勢いのまま立ち上がって睨みつける。

リボルギャリーにはハードボイルダーに跨ったジョーカー。

その横にバイクに跨ったブレイドがおり、その二人を通過し、大回

りして再び蒔風に向かってこようとするデンライナーがあった。

「くるか・・・・いいぜ・・・プランはたった。実行しようか・・・・・」

そうして、蒔風に向かってデンライナーと共にブレイドと、リボルギャリーからブースターを取りつけたハードボイルダースタートダッシュモードが突っ込んできた。

その三台のうち、最初に蒔風へと到達したのはジョーカーだ。

が、到達したと言っても途中でバイクから跳躍して蒔風へと殴りかかって行ったのだが。

それに応じて蒔風もジャンプし、空中でジョーカーと蒔風がぶつかる。

蒔風の半ば逆立ちになったたっかのような体勢からの回し蹴りを、ジョーカーが腕で受け止めた。

それを見て蒔風が逆の足で腹を蹴るが、ジョーカーも逆の手でそれを受け止め、蒔風に蹴りを放った。

その蹴りを右腕で受ける蒔風。
しかしさらに放たれた蹴りに左手を使えない蒔風がもろに食らい、吹き飛ばされる。

その蒔風に向かってジャックフォームへと強化変身したブレイドがバイクから跳躍して宙を飛ぶ蒔風に切りかかり、突進していく。

それを何とか剣で受け流した蒔風だが、ブレイドはそのまま蒔風の後ろにまで行き追い付いてきたブルースペイダーに着地して再び走ってくる。

止まることを知らない連続攻撃に、蒔風が肩を上下させながらやっと地面に降り立つも、そこにデンライナーからの砲撃が放たれて地面に大穴を開けた。

土煙で蒔風が消えるが、直後に蒔風がそこから転がり出、デンライナーに圧水砲を打ち放ってその車体を大きく揺らした。

そうして一時的にデンライナーを押しのけたものの、最後にリボルギャリーが残っている。
その突進を見、蒔風が歯ぎしりするもののそれを何とかして投げ飛ばした。

そう、投げ飛ばしたのだ。

突っ込んできたリボルギャリーが到達した瞬間に右足のつま先を地面との隙間に滑り込ませて持ち上げて仰向けに寝そべり、さらに左足で蹴り飛ばしてひっくり返したのだ・・・・!!

「うおおおぉぉお!?」

「なんて奴だ・・・うぐぁ!!」

落下してきたリボルギャリーを回避し、ジョーカーとブレイドが再び突っ込んで来ようとしてきた。
蒔風の後ろからはデンライナーが迫ってきている。

挟み込んだ

これはかなり有利な状況だ。
これならばもしかしたら・・・・

そう考え、ジョーカーとブレイドはハンドルを握ってエンジンを吹かした。
そしてバイクを疾走させようとしたその瞬間!!

「粉・・・・砕ッ!!!!」

ゴガッ!!と蒔風が震脚でも用いるかのように地面を踏み込むようにして思い切り踏みつけた。
その音は「地面を」というよりも「大地を」と言った方が的確なのではないのかというほどのもの。

その足が踏みつけた地面から小さな亀裂のようなものが二人の元へと走り、到達した瞬間にメキッ、という音を立ててアスファルトが砕け、バガッ!!と爆発したかのように爆ぜた。

「地面がッ！？」

「クソッ！！！」

地面が吹き飛び、瓦礫とともに宙を舞う二人とバイクとリボルギャリー。

が、ブレイドはすでにジャックフォームで空中移動可能だし、ジョーカーもリボルギャリーの後部を換装すればハードタービュラーとして空を行ける。

空中という無茶な大勢だが、ジョーカーは何とかして換装を完了させて体勢を立て直し、ブレイドも容易に立て直した。

もはやブルースペイダーとリボルギャリーはあきらめるしかないだろう。

そう思い、蒔風へと視線を戻す二人だが、その場に蒔風がいない。

「どこに・・・・」

そう呟いて周囲を見るブレイド。
しかし、蒔風はすぐに姿を現した。

二人共々、宙を散っている地面だった瓦礫は大小さまざまであり、
その大きさは人ひとり隠しきれるものも当然あった。

そのうちの一つを破壊、粉砕し、蒔風がブレイドに向かって突っ込んできた。

「なぁっ！？」

「ぼさっとすんな。お前終わったぞ」

正面から来た蒔風はブレイドの片翼を掴んで背中に回り、その背を蹴って地面へと落す。
翼はもがれ、地面に落ちていくブレイド。その地面にはデンライナーの砲撃で開いた大穴が口を開いて待っていた。

「くっ・・・ォグッ！！」

その穴にブレイドが落ち、蒔風が手の平を向けグッ、と握ると、土
惺の力で周りの地面が寄っていきその穴に蓋をした。

「閉じ込めッ！？・・・・・あいつ・・舐めやがって・・・・！！！」

光の絶たれた穴の中で、ブレイドがカードを取り出してラウズした。
穴の中に、黄金の輝きが煌めいた。

「ふぅ・・・・あとは・・・・っと？」

一方いまだ上空の蒔風は翼を広げて滞空していた。

瓦礫が雨のように落ちているが、それももう三秒もすれば終わるだろう。
その瓦礫を避けながらジョーカーが蒔風へと向かってくるが、ターゲビュラーに当たらないようにここまで来るのには三秒以上かかるだろう。

そう考えていると、穴から何かが伸びてきた。

いや、伸びてきた、というのは少しおかしいかもしれない。

現れたのは、黄金のカード。
人間大にまで大きなそのホログラムのようなカードが、地面から三枚あらわれていた。

ロイヤルストレートフラッシュ

仮面ライダーブレイドキングフォームをして最強の一撃。

それは不死生物たるアンデットを解析して作られた人造怪人「トライアル」を一撃で消し飛ばすほどの威力を持つまさに「最強の一手」

それをブレイドが穴の中から発動させているのだ。

この時出現するカードは五枚。
おそらくは穴の中に二枚あるのだろう。入りきらずに三枚は地上に突出してしまったというわけだ。

「ほう・・・そこまでやるか？」

《ロイヤルストレートフラッシュ》

「ううぇえェェエエえええいアアアアアアあああああああああああ！！！！！！」

蒔風の呟きののち、キングラウザーの音声と剣崎の咆哮が、穴の中

からとは思えないほどはっきりと聞こえ穴のふたが爆発した。

この技は自分自身がカードを通過して相手を切り裂くのと、太い砲撃上のエネルギーを打ち出す二パターンある。

今回のこれは前者だ。
おそらくあんなところで砲撃を打てば自分が吹き飛んでしまうからだろう。

その勢いは容易に蓋を砕き飛ばし、そのまま蒔風へと突っ込んでいくようだった。

しかし

「剣崎！！いくなぁぁアアアアアあああああああ！！！」

「おぉぉおおおお！！！な！？がぁっ！？！？！」

翔太郎の静止の叫びもむなしく、キングフォームであるはずの彼がカードを四枚ほど通過したところで元の穴にたたき落とされた。

「突っ込んでくることは解ってたよ。だっから言ったろ？プランはあるってよ」

上空の蒔風が穴を見下ろして呟く。

その穴にはさっきまでの蓋はない。
しかしその代わりにいまだ装甲の健在なリボルギャリーが叩き込まれていた。

蒔風は解っていたのだ。
ああして閉じ込めれば剣崎一真という男はそれをぶち破って自分に向かってくる男だと。

だからあの瓦礫の中蒔風はリボルギャリーを掴んで持ち、剣崎が蓋を破壊して飛び出してきた瞬間にそれを投げ落したのだ。

剣崎にしてみれば飛び出したばかりで予測のできない攻撃だし、なにより一つぶち抜いてきて、その先にもう一個あるとまで考えてもいなかった。
更にはエネルギーが最高潮まで溜まりきっていない、体勢が整え切れていないなどの要因もあった。

そう、だからこそ蒔風はこのタイミングでリボルギャリーを叩きつけたのだ・・・・・！！！

「剣崎！！」

そうしているうちに瓦礫がすべて落ち切り、ジョーカーが蒔風へと向かう。
しかしそうしているうちに、いつの間にメモリを指し入れ直したの

か、蒔風の手に新たな武器が握られていた。

レイジングハート・エクセリオン

その先端に桜色の球体が生成、肥大されていき、その技名と共に蒔風は撃ち放った。

「エクセリオンバスター、シュート」

バゴンッ！！と穴の蓋になって逆さに埋まっていたリボルギャリーの後部にそれが命中し、更にその穴に押し込まれる。

しかし、あの装甲（キングフォーム）は一体どれだけ硬いというのか。

瓦礫と化したリボルギャリ―の残骸の中から、青い腕――おそらくは通常フォームに戻されてしまったブレイドの腕がガラリと出てきた。

それを見て蒔風がため息を漏らし、突っ込んできたハードタービュラーの鼻面を後ろ回し蹴りで吹き飛ばしてから右腕に力を込めて、絶光尖を撃った。

手を出す暇などなかった。

ジョーカーはタービュラーの体勢を立て直していたし、デンライナーは墜ちてくる瓦礫に巻き込まれないとう距離をとっていたのだから。

ズガンッ!!という金属を貫いた音と共に、絶光尖はその腕の根本に着弾し、その先にあるものを貫通して行った。

ブレイドの腕がビクン!!と跳ねて、その腕が光となってカードへと変わった。

「これで後は・・・お前らのみ」

そうして、デンライナーとジョーカーを睨みつける蒔風。

その顔は手っ取り早く終わらせたいと、ありありと書いてあるようであった。

そうして再びメモリを握り、新たに力を借りようとする蒔風だが、その行動のすべてが止まった。

円錐形の、クリムゾンレッドに輝くポインターが、宙に浮く蒔風を包囲するように取り囲んだからである。

to be continued

銀白ＶＳ切札＆剣（後書き）

今日はまだ２７日だ。

・・・２７日なんですっ！！（泣）

２７日の２４時とか２５時なんだッ！！！

だからまだ大丈夫。

え？何の話かって？

記念日ですよ。

正直自分は誕生日とかって最近ウキウキしてこない人で、あまり感動がない・・・・

しかし、始まりは重要です。

もちろん結果もですが。

と、言うわけで何か記念をしたいのですが・・・・

この小説ページからの短編は出さないと思います。

やるなら・・・そう、時系列、展開無視のギャグ番組。

そんな感じで行きたいです。

もしかしたら投稿は早くて明日、遅くてし明々後日ですかね？

投稿したらこちらの後書きか活動報告に載せますのでよろしくです！！！

さて、今回は風都でのカーチェイスっぽいのですね。

どうにも戦闘描写が細かくなりすぎてわずらわしいかもしれません

が、そこは申し訳ございません。

戦闘場所イメージとしては、W劇場版「運命のガイアメモリ」で「そろそろあたしも、行こうかしら？」とルナドーパント・泉京水、通称「嫌いじゃないわ！」がマスカレイドドーパントを出したところです。

ヒートドーパントとおっかけっこした場所ですね。
あの後すぐに地下トンネル出口とか海岸沿いの工場跡地に行ってましたけどｗｗｗ

剣崎「ついにやられてしまったウェイ。悔しいウェイ」

何かおかしいぞ君。

剣「ウェ？」

やばいなんか面白い。

剣「次回、蒔風による策略」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
リュウタロス
ジーク
デネブ
乾巧
左翔太郎
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

コンディション

左腕使用不可。
頭部から流血。

体力値：５１％
全員相手は実質不可能

銀白ＶＳ電王&ａｍｐ；切札

遠くで行われている戦闘の音が聞こえる。
大地が振動し、轟音、後に爆音。

最後に金属を貫く音がしたときにはその瞬間を目撃までした。

《Ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

メモリーを入れ替え、胸の装甲が肩の上にスライドし、フォームが変わる。

《ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

そして、身体が動いていた。

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

直後、周囲の世界が緩やかになり、右足首のポインターにエネルギーが集まって、それを一瞬で敵の周囲にばらまいた。

そして――――――

「巧か・・・ッ！ゼァアア！！！」

そうしてそれを打ち出された蒔風が、即座にそれに対応した。

周囲を浮くポインターは計八つ。
そのうちの三つを蒔風が瞬時に四（三）肢で破壊した。

しかし、その直後に破壊された三つがあった場所に新たにポインターが現れ、ファイズの体がそれを通って蒔風に次々に突き刺さって

いった。

エネルギーと化したファイズが八回続けて蒔風の体を通過し地面に着地、それと同時に蒔風の体を赤い「Φ」の紋章がホログラム上に現れ、血を吐き錐もみに落ちて行った。

立て続けに叩き込まれた八つの衝撃。
それによって蒔風の体が全く一貫性のない回転をして落ちて行ったのだ。

「ご・・・うが・・・・・・」

《ジョーカー!!マキシマムドライブ!!》

「ッッ!?」

「ライダーパンチ!!」

ガゴッ!!

と、そこにジョーカーのライダーパンチが放たれて、それを蒔風が必死になって転がり避ける。
転がったあとに血が点々と残るが、それでも蒔風はがんばって避けた。

それはもう頑張った。必死になった。

まあ必死にもなるだろう。
今の状況で重い一撃でももらえば終わってしまう。

終わりだけにはできない。

いったいどんなことがあったとしても、終わりにだけはできないのだ。

「左!!大丈夫か!?」

「ああ・・・だけど剣崎が・・・・」

さらにそこにアクセルも追いつき、デンライナーからは電王とディエンドが降りてきた。

（ついに総攻撃か・・・この全員相手は無理だ・・・な・・・・・だったら・・・・！！！）

「加速開翼（ブーストオン）！！！」

（この速度についてこれるやつはいない・・・・・ファイズはやったばっかで、トライアルには時間がかかるからな！！）

「ッッ！？」

「来るぞッ！！」

「ふ・・・」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――》

「させると思うか？このインビジ野郎」

「な！？」

「それとお前だ！！オオカミ君！！！」

直後、オートバジンをバトルモードに変形させようと寄って行ったファイズと、インビジブルのカードでこの一瞬をやり過ごそうとしたディエンドを蒔風がつかみ、同じ方向に投げ、蹴り飛ばした。
それにオートバジンも巻き込まれ、二人と一台が吹き飛んでいく。

「開け！！」

そうして吹き飛んで行った先に、蒔風がゲートを開いて二人を狭間ともいえる空間に閉じ込めた。
こうして、戦力は分断され、一気に低下させられる。

「行くぞ野上！左ィ！！！！」

「くっそ！！」

「かかってこい！！」

『行くよ、モモタロス！！』

「おう！！」

そうして、今一度覚悟を決めたジョーカーと電王、アクセルが蒔風へと駆けていく。

それに対し、ハァーー・・・と息をもらし、腹筋をに力を込めて蒔風が脚の筋肉を一気に解放し電王に突進して行った。

電王ソードフォームは勢いで、ジョーカーはその技や身体能力を尽くして戦うライダーだ。

とどのつまりは力技には向いていないという事。

だとすれば蒔風のやるべき戦法は一つだ。

「ブッちのめす！！！」

「この・・・やろう！！！」

「クマの野郎がいれば・・・」

『まさか・・・ここまで想定して！？』

否

そんなことはない

そんなことまで想定できるわけなどない。

しかし、こうなるように戦力を分散したのは蒔風である。

電王の振るう剣技のすべてを蒔風がスウェーなどの最小の動きで回避し、その腹部に重い一撃を叩き込む。
その一撃に電王が呻き声をあげてうずくまった。

彼の攻撃は強いが大振りなのだ。

良太郎に憑依しているモモタロスは決して「技」の強いイマジンではない。

しかし、戦闘での一瞬のすきをついて大きな一撃を叩き込むのが抜群にうまいのだ。
だからこそ今までの戦闘も勝ってきたし、その経験でその勘は研ぎ澄まされていっていた。

しかし彼は今までこのような男の相手はしてきたことがない。
免疫がないのだ。

しかし不利な相手にフォームを変えられるのが電王の強みだ。

故に不利となったら即座に変わった。

《ｒｏｄ　ｆｏｒｍ》

「さて・・・釣り上げてやろうか！！」

そうしてロッドフォームとチェンジした良太郎が蒔風へと斬りかかっていく。

騙しと卑怯を主流とする彼（ウラタロス）ならば、確かに対抗しうるだろう。

「オレたちを忘れんなよ！！」

「はァあ！！！」

そこに更にジョーカーとアクセルが乱入する。

しかし

「（ガッ）技はたいしたもんだが・・・力が足りんぞ翔太郎！！！」

「うお！？うおおおおおおおおおお！！！！！！？？」

そのジョーカーの足を掴んで、蒔風がアクセルを殴り飛ばし、電王へと投げ放った。

電王はジョーカーを受け止めて地面に倒れるが、アクセルは転がった瞬間に足首のタイヤを回して即座に立ち上がり、蒔風に向かってエンジンブレードを振るって突っ込んできた。

「覚悟しろ、蒔風！！」

「テメェにゃ用はねぇんだよ加速野郎！！」

その突き出されたエンジンブレードの背を掴み取って止める蒔風。

直後、そのエンジンブレードを折り曲げてエンジンメモリを取り出し、足払いでアクセルを倒す。

更に蒔風は、再び立ち上がろうとするアクセルの首根っこを踏みつけて逃げないようにしてアクセルのベルトからメモリを引き抜いてエンジンメモリを指し入れてスロットルを捻った。

《エンジン！マキシマムドライブ！！》

「なに！？」

「用はねぇんだ。レッツドライブ！！」

そうしてそのアクセルドライバをを取り外してアクセルに握らせる。すると彼の身体がバイクフォームへと変形し、マキシマムドライブのエネルギーでアクセルは疾走して行ってしまった。

これでは何かにぶつかってエネルギーを発散するほかない。

しかしこの工場地帯ではぶつかって爆発でも起こしたら大惨事だ。故にアクセルは工場を避けてそのまま道路を走るしかなく、フェンスを破壊し、それでも曲がりきれずに工場へと突っ込んだ。

幸いにしてその工場は稼働を停止していたようなので暴発はしなかったが、本体この技を向けられる対象のドーパントはこういった壁よりも強い。こんなものにぶつかっただけではエネルギーなど発散できるはすもないのだ。

そしてそのままその工場を突き抜け、反対側に飛び出したアクセルは、そのまま海に突っ込んでいった。

海中に突っ込まされ、海面との衝突で変身が解除されるアクセル。

口から海水が入り込み、その塩辛さにむせながら照井が海から這い上がってきた。

たとえ同じ動作でも、無駄なエネルギー消費というものは身体に堪えるものだ。
たとえるならば「疲れてもいないのに寝たり休むと、余計に疲れる」といった感じか。

「ゲほっ・・・ハッッ・・・は・・・くそガァッ！！・・・急がねば・・・・！！！」

照井が脇腹を押えて進んで行った。
今はその手にアクセルメモリは無い。

しかし今のうちに言っておこう。

彼がもとの場所に戻った時、そこには誰もいなかったのだ・・・・

――――――

「!?　あれは・・・・まずいよ。良太郎!!」

『え?』

「ゲイボルグ」

ドスッ!!

蒔風が呪いの死棘「ゲイボルグ」をチョン、と適当に突いて電王の胸を突き刺す。

「う・・・ぐぅ・・・・」

「ウラタロス!!」

「無事・・・だね・・・良太・・・郎・・・・」

ドンッ!!!

が、それが電王自身に突き刺さる前に、ウラタロスがそのダメージをすべて受け継いで分離、カードへと姿を変えた。

「ウラ・・・ウラタロスーーーー！！！！」

プラットフォームへと弱体化した電王が、その名を叫んでうなだれる。
その上体を見て、ますいと思ったのはイマジン達だ。

野上良太郎個人はそんなに強くはない。

もちろん、数々の激戦を乗り越え、彼自身もかなりの強さを持っているし、一人での変身で敵を倒してきたこともあった。

だが、だからと言って蒔風に勝てるほど強くはない。
彼の強さはイマジン達が憑依して活動したことで蓄積された「身体の経験値」による者が大きい。

彼はまだ発展途上中なのだ。

「・・・・ゲ～イ・・・」

「マジぃぞおい！！」

「良太郎！！」

「野上！！」

「ボ～ルグ・・・まだかよ・・・ゲイボルグ」

ドンッ！！・・・ドンッ！！！

そうして、蒔風が再びそれを放つ。
それに対して、二つの光。

リュウタロスとデネブがとっさに良太郎に憑依、くらった瞬間に離脱して彼を守ったのだ。

しかし、彼ら二人はカードになって蒔風の手へ。

「テェメエえええええええええええええええええ！！！！！！」

《ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！》

戦いもせず、ただ一方的に命を奪いにかかる蒔風に、翔太郎が激昂してライダーパンチを放った。

が、そのようなものではいくら体力の半分を失った蒔風でも当たることなどない。

それを大きく回避し、蒔風がジョーカーを無視して電王にゲイボルグを向け放つ。

ぎゅ・・・ォおおッ！！！

「ぬ・・・ハァッ！！」

ゴォッ！！

「な・・・回避しただと！？」

「世界は私を中心にまわっておるのだ。そんなもの、当たるわけがなかろう！！」

が、その槍は外れた。
今の電王はウイングフォームだ。

その元となるジークは自称するだけあってその幸運値は高い。

彼は驚くべきことに、その幸運のみを以って、ゲイボルグを回避したのだ・・・！！！

「く・・・・」

「まだ終わってねェぞ蒔風！！！」

ドゴォッ！！！

と、驚愕する蒔風に外れたためにまだそのエネルギーが拳に宿っていたジョーカーが、蒔風の腹部ど真ん中にそれを叩き込んだ。

蒔風が胃液を吐きだし、その身体からスパークを起こした。
見た目が全く変わってないが、今の彼はドーパントなのだ。そして更に言うならば、この状態で戦士の技がここまでまともにはいったことは今まで一度たりともない・・・・！！

「げ・・・ハッ！！！」

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

「覚悟せよ！！！フンッ！！」

そうして、そこに更にウイングフォームのフルチャージ「ロイヤルスマッシュ」を投げ放ち、それが蒔風の左の二の腕と右腿を切り裂いて行った。

まともに食らわなかったのは流石という他ないが、それでも起動は大きく奪われた。

蒔風が肩を抱えて膝をつく。

「う・・・がぁ・・・・」

《ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！》

「ライダァーーー！！！」

「クッ・・・ォォオおオオオオ！！！！」

「キィィイイイッック！！！！！」

ドッ・・・ガァァっァアアアアアア！！！！！

ドォン！！！

「ハァッ・・・ハァッ・・・ハァッ！！！」

蒔風にマキシマムドライブを叩き込み、ジョーカーが地面に着地した。
その蒔風は爆発に巻き込まれ、それを背にしてジョーカーは膝をついた。

煙の中からはバキン・・・という音と共にガイアメモリの残骸が弾け飛んできた。

そこに書かれている文字は「W」

形はノック式ＵＳＢ。
それは間違いなく、ワールドメモリの残骸だった。

「これで・・・やっと・・・終わったぞ、フィリップ！！」

ジョーカーが声をあげて拳を握る。
それは勝利をかみしめた者の動作だった。

しかし、彼は甘かった。

甘さは彼の長所だが、ここではマイナスにしか働かない。

頭を掴まれた。

「ッな・・・!?」

「メモリブレイクされたからと言って・・・その被体者が倒れると思うのはおー間違いだ」

ゴシャぁッ!!!

蒔風が煙の中からジョーカーの頭を掴み、顔面を地面に叩きつけた。
そして腰から無理矢理にベルトを引き剥がし、生身に戻してから更に押し付けて首をへし折る。

『翔太郎！！』

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

それを見て、電王がもう一度フルチャージして、蒔風へと攻撃した。

ウイングフォームはデンガッシャーをハンドアックスとブーメランモードに変形させるフォームだ。

そしてフルチャージの際にそれを投げ放つのだが、今投げたのはブーメランの方のみ。

それを蒔風が回避し、電王へと向かって行った瞬間に電王も走り、ハンドアックスで切り裂かんと真っ直ぐに突きだした。

と、その一瞬前にブーメランが戻ってきて蒔風を後ろから斬り裂こうとする。

ウイングフォームのフルチャージは、この二段構えの攻撃なのだ。

しかし、蒔風がブーメランの方を見ることもなく、背後の戻ってきたそれを掴み取って電王の腹部に突き刺した。

「ガッ・・・なに・・・・・見切・・・って・・・・・？」

「わかってんだよ。お前の必殺技くらいはな」

そしてさらにハンドアックスを奪い取り、駒のように身体を回転しながら背後にまわってその首を落とした。

一瞬で電王の身体が輝き、二枚のカードへと変わる。

しかし、蒔風はそれで止まることなどしなかった。

右足を引きずりながら、左腕の切り傷を口を左手で器用に包帯で縛って、デンライナーへと歩みを進めた。

――――――

蒔風が入って行った瞬間、モモタロスは自身の武器モモタロスォードで斬りかかるも彼が叶うはずもなく、「天」と「地」の二刀に首を挟まれ切り裂かれて消え去った。

その様子を見て、ハナが蒔風へと攻撃を仕掛けようとするものの、オーナーがそれをさえぎって蒔風の前に立つ。

咄嗟に蒔風がオーナーへと剣を向けるが、オーナーは全く意に介さない。
ステッキでその剣を下ろさせ、蒔風の目の前にまで接近した。

その距離は近い。
鼻と鼻が当たるのではないかという距離までに近い。

「この車内での戦闘は控えていただきたいのですが・・・！！」

「あなたらが手を出さなきゃこっちももう出ていく。気にしないでくれ」

「・・・・・・・」

蒔風の言葉に、オーナーは無言だ。

その無言を肯定と受け取ったのか、蒔風が下ろされた剣を鞘に収めて踵を返した。

「オーナー!!行かせていいんですか!?」

「・・・蒔風舜君」

デンライナーから去ろうとする蒔風に、オーナーが声をかけた。
その足が止まる。

「この事態は・・・・「時の重複」と類似したものであると考えてもよろしいのですかねぇ?」

「・・・・!!!」

ジャカッ!!

オーナーのその一言に、蒔風が血相を変えて刀の切っ先を向けた。
しかし、オーナーはなおも涼しい顔だ。

「私は誰にも言いませんので安心してくださぃ。それに私ならば・・・幾分かは安全でしょうしねぇ」

「・・・そうか・・・あなたは特定の時に所属しない人物でしたね・・・だからか・・・・・」

「えぇえ・・・」

「・・・誰にも・・・言わないでください」

「言うつもりはありません。安心してくださぃ」

その言葉に、蒔風が今度こそ本当に剣をしまい、さらには頭を深々と下げてデンライナーから出て行った。

「オーナー・・・今の言葉って・・・・・」

「今お話しするわけにはいきません。今の会話があったこともぉ・・・誰にも言ってはいけません。だぁれにも・・・・・・」

「??」

ハナがオーナーに質問するが、オーナーはそう言ってそれ以上取り合ってくれない。

そこで、ナオミがの寂しそうに聞いた。
なんでこんなことになったのか、と。

それに対し、それだけには、オーナーが言葉を選んで回答した。

「この世界には・・・主人公が集まり過ぎたんですよ・・・・・」

ーーー

蒔風がディエンドとファイズを閉じ込めた空間へと足を運びいれると、そこには大穴が空いており、誰も残ってはいなかった。

しかし逃げられたものの、蒔風は安堵の息を漏らした。

今の彼では、さらなる連戦は不可能だった

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

銀白ＶＳ電王＆ａｍｐ；切札（後書き）

遅れたけれども祝！！世界をめぐる、銀白の翼連載開始一周年ーーーーーー！！！！！

翔太郎「わーーーーー！！」

良太郎「どんどんパフーー！！」

タロウズ「いーじゃん！いーじゃんすげー！」

ハイそこまで！！

うかれんのそこまで！！

全員「えぇーーーー？」

と、言うわけで今回を記念して、特別番組（？）を始めました！！

タイトルは「レッツゴーめぐ銀レイディオ！！」

詳細はそっちの方をクリックだ！！

翔「メモリはぶっ壊してやったぜおい！！！」

今回のＭＶＰは何よりも翔太郎ですね。
ついにあのワールドメモリを破壊しましたから。

良「あんな必殺の技をポンポン出すとか・・・卑怯だよ・・・」

リュウタ「そのせいでボクら全然戦えなかったしね」

デネブ「侑斗をよろしく！」

ジーク「しかしあれを完全に回避するとは、やはり世界は私を中心にまわっていたな」

ウラ「僕もそれなりに卑怯だとは思ってたけど・・あれは外道だよ。なんであっちが主人公になったんだろうね？」

モモ「オレに聞くな！！」

さて・・・リストも減ってきて、言えることはただ一つ。

次回から最終戦に入ります。

もしかしたら隔日でも無理になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします！！

翔「次回、襲撃されるのは烈火と鉄槌から」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
乾巧
フェイト・T・ハラオウン
シグナム
ヴィータ
リィンフォース？

コンディション

左腕使用不可。
頭部から流血。
左肩、右腿に切り傷。

全身に鈍いダメージあり
メモリブレイクの衝撃はあるものの、常人でも耐える者がいる程度なのでそこまで重要視しませんでした。

体力値：２８％

現在回復中

最終戦、開幕

荒野である。

広大な大地にいくつものせり上がった大地（メサと呼ばれるテーブル上の台地）がいくつも点在し、岩石による天然のコンクリートジャングルのようになっている。

そのメサとメサの隙間（隙間といっても体育館ほどの幅はある）を、四人の人影が歩み進んでいた。

「この先・・・か」

「ああ。でも生き残ったメンバーはもう少ないから・・・」

「あ、熱いですー・・・」

「ほら、大丈夫か?リィン」

シグナムとヴィータ、リィンフォース?が、翠の案内でこの荒野を進んでいた。

もはやメンバーは少ない。
故に、クラウドがまだ倒れておらず、事情を知っているメンバー集めてもらうように頼んだのだ。

と、言ってもそんな人間は少ない。

恋姫のメンバーは軒並み武器を破壊され、事情を知っていたライダー達も全員変身に必要なモノを奪われていて戦えない。

実質、万全でいるのは翠のほかにはいない。
事情を知らない者にを話せばいいのだろうが、巻き込むことなどできるはずもないのだ。

しかし、今クラウドのいる場所に全員向かっているところだそうだ。

「にしてもまだ遠いのか？」

と、岩場に座って休憩しているとおもむろにヴィータが訊いてきた。
歩みを進めて、すでに何時間経ったか。

飛行魔法で進んでもいいが、この荒野では蒔風に発見されてしまうかもしれない。

この地に来ているかはわからないが、そもそも相手は蒔風だ。
気にしすぎていけないという事はない。

「まぁなー。一番遠かったのがシグナムとヴィータんとこだったからな」

「リィン、大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です。ありがとうです、シグナム」

「うむ」

「そろそろ行こうか」

「そうだな。休憩しすぎて見つかりましたじゃ笑えねぇ」

そうして、水分補給をし、周囲のメサの影に入って少し休んだ彼らが立ち上がってそこの陰から出て、また歩き出そうとする。

しかし、その影から出て、地面におかしなものを見つけた。

影である。

いや、影がそこにあったのは最初からだ。自分たちが休んでいた巨大なメサの影だ。

しかし何がおかしいかといえば、そのメサの影の上部。

メサの上は平らだ。故にその影も真っ平らになっているはず。

しかし、その影の上には確かに今、人一人分のシルエットが映っていた。

「！！！」

その影に、翠が振り返ってメサの上を見る。
そこには逆光で真っ黒に染まった一人の男。

その男のシルエットには吊っているためか左腕が見えないが、間違いなくあの男だった。

「逃げろ！！見つかったぞ！！！」

翠の見上げた先を見て、シグナムが飛びかかって行こうとするがその肩を翠が掴んで止める。
そしてそのまま二人を担いで走りだそうと、足に力を込めた。

だが

バツンッ!!
「アぐっ!?アアアアアア!!!」

ドォン!!

男――蒔風の右腕から放たれた絶光尖が命中し、翠がメサに突っ込んで土煙に消える。

それを見て、ヴィータが蒔風に向かおうとするがすでにユニゾンしていたリィンから警告が飛んできた。

『今のリィン達じゃ勝てません！！逃げて合流しないとですよぉ！！』

「・・・・クソッ・・・・チクショォ！！！！」

その言葉に、ヴィータがシグナムと共に飛行して逃走を図った。
翠を置いていくことには大いに抵抗がある。

しかし、ここで自分たちがやられてはなんのために彼女がここまで来て、さらには弾き飛ばされてしまったかわからない・・・！！

「絶光尖・・・・」

しかし、蒔風が小さくつぶやいた瞬間、再びは放たれたそれがヴィータを背中から狙い、魔法陣でのガードを容易く打ち砕いてその体を貫通させた。

「ヴィータちゃん！！！」

魔法陣が突破される直前にユニゾン解除されて無事だったリィンが叫ぶ。
だが、その声で気付かれてしまったのか絶光尖がそのまま振るわれてリィンに直撃、小さな彼女の身体がメサに激突し、二人がほとんど同時にカードへと変わった。

絶光尖は一瞬の突貫力に秀でた攻撃だ。
にもかかわらず、蒔風は打ち出してからのわずかな一瞬でリィンの位置を把握し、振るって命中させてきたのだ。

「ッッ！！！」

その事態にシグナムが歯噛みし、しかしそれでも速度を落とすことなく蒔風から離れようと上昇を続けた。

逃げ出すなんて彼女らしく、ひいてはベルカの騎士らしくないと言われるかもしれない。
しかし、彼女は嫌というほどに理解していた。
今の彼女ならば蒔風を・・・確かに圧倒できるかもしれない。

だが、そこまでだ。勝てる見込みはあまりにも低い。

自分がやられることに恐れはない。とうにそれに対しての覚悟などできている。

しかし、無駄死にするつもりもさらさらないのだ。

せめて後から増援が来なければ、今この場では倒せない・・・・！！！

そのために、まずは退いた。

決して臆したわけではない。勝利のための、策である。

そうして飛んで行き、雲の上にまで到達したシグナムだが、凄まじいエネルギーを足の方から感じていた。

間違いない、蒔風だ。

今ここでそれを感じると言う事は、相手は自分の位置を捕捉している。

（まさか・・・ここまで撃ってくると言うのか!?）

今シグナムがいるのは雲の上。
といっても最上層ではなく、その少し上にも雲はあり、その中間層辺りだ。

だが、その高度で捉えてくるなど・・・・!!!

しかし、メサの上に立つ地上の蒔風は確かにその方向を見て右腕に力を込めていた。

混闇を礎に練り込む力は「雷旺」「絶光」
それを砲撃として、その腕から解き放つッ!!!

「・・・雷光砲」

ギャオオッ！！！！！

凄まじい音がした。
まるで空間そのものを削ぎ落すような摩擦の音を立てながら、その砲撃が真っ直ぐにシグナムの元へと向かって行った。

「ッッッ！？！？　そんな・・・くそッ！！！レバンティン！！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ．Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ！！！》

その波動を肌で感じ取り、シグナムが身体を返して見えぬ蒔風へと向け、その弦を引いた。

「翔けよ隼（シュツルムファルケン）ッ！！！」

ドシュッッ！！！！

炎と衝撃波を撒き散らしながら、放たれた矢が蒔風へと一直線に突貫して行った。

そしてまた、シグナムも撃ち放った。

先に放たれた雷光砲とシュツルムファルケンがすれ違い、

そして、蒔風の放った雷光砲とシュツルムファルケンがすれ違い、

が、放たれたシュツルムファルケンは消えない。

まるで彼女の意志が宿っているかのようにその勢いは衰えるどころか更に増し、斜め上空から蒔風を突き貫かんと奔った。

蒔風がそれを見つけたのは、着弾するまで後五秒という時点だ。
雲を突き抜けた瞬間、それが炎と共に現れ周囲の雲を焼き消してきた。

円状に雲が開かれ、その中心を走る一本の矢。

が、それほどの猶予があって対処できない蒔風ではない。

「風林火山」で最も硬度の高い「林」を真っ直ぐに矢へと向け、それが着弾した瞬間に手首を捻ってその軌道を逸らす。

斜めの鋭角度から突っ込んできた矢が、その動作によってくの字に折れて蒔風の真後ろへと逸れて行った。

が、その反動が全くないわけではない。
右腕が引っ張られるかのように後ろに巻き上げられ、そのまま体がグワンと回転して蒔風がその場に膝をつく。

しかし、これであれの脅威は凌ぐことが――――

「――――――ぁぁぁあああああああああ！！！！」

ガキッ！！！

出来なかった。

逸らされた矢の先に、メサを駆け昇ってきた翠が勢いのまま飛びあがり、己が十字槍「銀閃」の先端でからめ捕り、蒔風へと真っ直ぐに投擲した。

「な！？」

「疾駆せよ、隼の刃よ！！！」

ゴォッ！！！

その先端にシュツルムファルケンを携えた銀閃が蒔風へと再び一直線に伸びていき、着弾して爆発した。

投げた際に前に伸ばした腕に引っ張られるように翠の身体が宙で動き、爆発を縦回転をしながら乗り越えてそのままメサの下に降り立つ。

と、爆炎の中からヒュンヒュンと銀閃が回転しながら飛び出してきて、それを翠が見もせずに後ろ向きでキャッチする。

ビッ、とそれを振るってから肩に掲げ、肩越しにメサの上の炎を見上げる翠。

しかし、その目が見開かれ、次の瞬間彼女は風足で走り出していた。

ヴォォン！！！！

直後、その炎の中からエンジン音が響き、バイクに跨った蒔風が煙の中から飛び出しそのままミサの下に飛び降りてきて走りだした。

視線の先には翠が走っている。
それに追いつこうと、蒔風がバイクのアクセルを更に捻った。

その速度は風足のそれに到達し、蒔風がその後を追う。

「案内してもらうぜ・・・翠！！！」

「この速度に・・・！？マズイ・・・くっ・・・」

ドォっ！！！

翠がどこかへと連絡を取りながらさらに疾走するが、蒔風はまったく振りきられることもなくそれについて行く。

その先には巨大な岩山。

どうやら洞窟になっているようで、その中へと翠が奔って入る。

（ついてくるか・・・？来るなら来い・・・あたしたちが相手し

てやる！！）

天然の岩石の洞窟。
所々天井に穴が開いているらしく、中は結構見えるようだ。

そこを蒔風が翠を追って疾走し、どんどん先へと進んでいく。

無論、天然というだけあってその洞窟には脇道が多く存在する。
居間と追っている洞窟が真ん中のモノのようだが、この穴よりも大きな脇穴もある。

そして蒔風が洞窟を走っていると、右の壁（所々にちいなさ穴があいている）からうっすらと光が見えてきた。

外か？

蒔風は、最初こそそう思った。
が、直後にそれは違うと知った。

外からの日光があんな放射状に、しかも一方向に向いているはずがない！！！

ドォウ！！

瞬間、その薄い壁を突き破ってフェンリルに跨ったクラウドが蒔風へと突っ込み、それを蒔風が回避してなおも翠を追った。

蒔風に回避され、少し遅れて追ってくるクラウドだが、その距離は縮まりつつある。

と、そこで蒔風が翠の真横にバイクを追いつかせ、その横っ面を殴

り飛ばした。

その直撃をガードはした翠だが、風足中だったこともありそのまま弾けるように壁にきりもみで突っ込んで行った。

厳密に言うと風足とクロックアップは違う。

クロックアップは時間軸によるものだが、風足は単純な高速移動だ。故に弾かれればこのように穴の開けられた風船のように吹き飛んで行ってしまう。

その翠をバイクから飛び出したクラウドがキャッチし、壁に激突する前に押しとどめた。

ぐったりと頭をたらし、気絶してしまった翠を見て、クラウドが歯ぎしりする。

彼女をその場に寝かせ、漆黒の翼をはためかせて自動停車したフェンリルに飛び乗ってその後を追う。

翼によって加速した漆黒が、蒔風へと向かって行く。

――――――

そこに蒔風は入り込んだのだ。

いくつも入り組んだ道路。
その道路を真っ直ぐに進んでいく蒔風だが、Ｙの字に分かれているのを見て右にハンドルを切った。

直後

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

「ライオットザンバー！！」

ゴッ、ジュカッ！！！

蒔風の腹部と首を狙って、オートバジンに乗ったファイズのナックルと、背から金色の翼を生やしたフェイトのバルディッシュザンバ

ーが、放たれ振るわれてきた。

それをとっさに跳躍して回避した蒔風は、宙で回転してバイクの上に立ち二人に蹴りを放った。

左右にいる二人はそれを受け止め、弾かれながらもなおも蒔風の横に付いてその後を追う。

荒野での襲撃からまだ十分。

荒野からの戦闘は、近代的なトンネル内へと場所を移して続く。

to be continued

最終戦、開幕（後書き）

このやられ方は想像していたとはいえ、彼女たちがこうもあっさりやられちゃうなんてぇぇえええええええ！！

シグナム「おのれ作者め」

ヴィータ「完全にやられ見せキャラじゃねーか」

リィン「あんまりですぅ！！」

ええい！！
いいの！！有利な立場から一方的は暗殺の基本でしょう！？

でもここで困りものなのはそこで本気で書きだすとまったく戦闘シーンがなくなるという事。

いきなり倒れて終わりと勝つとかつまらな過ぎでしょう！！！

シ「まあ・・・な」

ヴィ「そりゃそうだけどよー」

リ「だからと言ってやられたいわけじゃないですー」

作者の勝手な考えで、翠の風足にバイクで着いて行ってみました。
こう・・ファイズアクセルフォームとほぼ同じ速度でサイガが飛行ユニットで飛んでたみたいな!?

後調べてわかったのですが、テーブル上の台地って「メサ」って言うんですね。
おかげで書きやすくなりました。

そして・・・

後藤さんバース来たぁァァァアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!

５１０３は３１５です!!!

待ちに待った後藤バース!!!
彼はきっと説明書熟読するんだろうなぁ・・・

ここからの戦闘は完璧にＦＦ７ＡＣのバイク戦ですｗｗｗ
執筆ＢＧＭも以前紹介したニコ動にある「闘う者達・更に闘う者達を集めてみた」ですしねｗｗｗ

ヴィータ「次回はこのままフェイトとファイズだ」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
乾巧
フェイト・Ｔ・ハラオウン

コンディション

左腕使用不可。

体力値：８９％

最終戦、決死

バイクに立つ蒔風を、フェイトとファイズが追って行く。

後方からは別のバイク音も聞こえてきた。

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

ファイズフォンが鳴る。

蒔風へと、真紅のポインターが放たれてファイズがクリムゾンスマッシュの標準を合わせた。

蒔風は走行中なのだが、そのポインターは蒔風にぴったりと張りつき着いて来る。

「チッ・・・・」

「ウオリャァ！！！」

蒔風が舌打ちをし、ファイズが雄叫びとともにキックを放つ。

が、それはポインターにファイズが突っ込んだ瞬間に蒔風の右裏拳で弾かれ、後方へと吹っ飛ばされた。

その反動で蒔風のバイクが独楽のように回転して、それでもなお先に進んでいく。

そこからバイクに跨り直してそれを立て直そうとする蒔風。
しかし、跨る直前にフェイトが現れてザンバーを振るって蒔風の胴を狙ってきた。

それを咄嗟の跳躍で回避する蒔風。
その蒔風を追って、フェイトがバルディッシュをツインソードに分けてその片方を投げ放ってきた。

それを弾く蒔風だが、バルディッシュの二刀は魔力糸でつながっている。
フェイトが引き戻してそれを握り、蒔風を一切宙からに降ろさぬように上に向かって攻撃を仕掛けていく。

その後方では吹き飛ばされたファイズが、ミッションメモリーを取り換えてアクセルフォームへと強化変身をしていた。

《Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ》

そしてバトルモードになったオートバジンに拾われてその肩に乗り、そこを土台にすぐさま飛び出していく。
その後方からバジンもすぐに追い、機銃での援護射撃をはじめて行った。

「！！！」

それを視認した蒔風は、フェイトのザンバーを左肩で受けて肉に食い込ませ、筋肉を絞めて抜けないように奪い取った。

「な！？」

「一本いただき・・・・っと」

フェイトもここまでしてこっちの動きを封じてくるとは思わなかったのか、その行為に驚く。

確かにどうせ使えないものとはいえ、こうも簡単に自らの肉体を囮に使うなんて・・・・！！！

そこから蒔風が上体を返して左肩を引き、フェイトの体を引っ張り込んだ。
そうしてこちら側に来たフェイトの体を躱して後ろに回り込み、両足でキックを放って天井にたたきつける。

左肩から剣が抜け、その一撃にまるで地面を転がるかのようにフェイトが天井を転がり、地面に落ちて膝をつく。

だがまだ意識はあるようで、ファイズに抜かれてから、頭から血を流しながらもその先を追った。

フェイトをけり上げた直後、ファイズが蒔風に到達してチャージしたナックルを放って来る。
それを翼を使ってのバックステップで回避し、地面に足を付けよう

とした。

が、そこにバジンの機銃が襲い掛かってきたのだ。

翼で体を包んでそれをガードする蒔風だが、その隙にファイズが蒔風のバイクに飛び乗ってそこからファイズフォンでのブラスターを浴びせてきた。

すでに時間は過ぎ、通常フォームに戻ってはいるが問題はない。

現在、蒔風にとっての前方（進行方向から見ては後方）からバジンの銃撃が放たれており、蒔風のバイクはその少し先を行っている。

ゆえに、翼を前に回して防御しているために今の蒔風は後ろが無防備なのだ。

そこにそれを放たれ、三発ほど命中して蒔風が揺れる。

その瞬間、フェイトが再び追いついて二刀流を駆使して蒔風へと切りかかってきた。

それを「風林」を使って片手ながらも二刀扱うという手法で防いでいく蒔風。

が、その合間に入れられた蹴りが腹にめり込み、
蒔風が後ろ向きに転がっていきバンッ、と地面を大きく撥ねた。

そこを狙ってブラスターや射撃魔法を放つファイズにフェイトだが、
こんな状況でも見えているのかがむしゃらに振るっているだけなのか、くるくると回転する蒔風はそのまま「風林」や翼でそのすべてを弾いていった。

そうして着地地点はファイズの立っている蒔風のバイク上。

しかしあの動きでは、いかに蒔風でも空中での制御などできるはずもない。
蒔風がバイクに落ちてくる一瞬前に、バジンがその間に入って蒔風を殴り飛ばそうとその鋼鉄の拳を放ってきた。

ドムンッ！！！

重々しい音がして、蒔風にその拳が確かに命中した。が、蒔風の体は飛ばない。

腹部に力を込め、それをあえて食らって、そして弾き飛ばされないようにこらえたのだ。

直後、蒔風が剣を振るってバジンを上下に切り分けた。

火花を散らして落ちていくバジン。

その蒔風の後方からファイズが掴みかかってくるが、まるでそれを知っていたかのように、そのを伸ばされてきた腕を掴んで後方に回り、蹴り押した。

その結果ファイズは切り裂かれたバジンの上と下の間に挟まれ、そのまま爆発に巻き込まれる。

「巧!!・・・舜!!」

「いちいちキレんな。カルシウム足りてないんじゃないのか？」

ファイズがやられ、フェイトが叫ぶが蒔風は全く意にも介していない。

しかし、蒔風はまだそのバジンの煙を宙で見ていた。

いまだカード化の光は発されていない。

そして蒔風がバイクに着地、跨った瞬間バジンの残骸から真紅のシルエットが飛び出してきて、一気に追いついてきた。

背中のブースターで飛び出してきたそれは仮面ライダーファイズブラスターフォーム。
その手にはファイズブラスターソードモードが握られていた

それを肩越しに確認し、蒔風がバイクを反転、向かってくるファイズに向けて逆走を始めた。

そのいきなりの行動にフェイトが多少行き過ぎ、急いで進行方向を変えてその後を追い直す。

ファイズとしては向かってくる蒔風をカウンター、最悪相打ちの形

でも打ち取ってやるといった覚悟だ。

しかし、それに対する蒔風はファイズの動きからタイミングを掴もうと睨みつけるだけだ。
こちらに覚悟（けっし）なんてものはなかった。

しかし――――

ファイズが蒔風へと一直線に飛び、腕に力を込めていく。

そうして交差まであと二十メートルのところで、蒔風が行動を起こした。

一瞬の勢いでトンネルの壁を走り、そのまま天井まで到達してバイクを再び反転、方向を戻して真下の（蒔風にとっては頭上の）ファイズに向かって剣を突き立てた。

完璧に交差するつもりだったファイズはその視界外からの攻撃をもろに食らい、背中には「風」が突き刺さる。

そのまま蒔風はファイズの背中に乗りボードのように踏みつけた。

ファイズの体が地面に削られ、火花を散らし、そこに天井、壁をグルリと回って地面に降りてきた蒔風のバイクがやってきて、蒔風がファイズの頭を踏みつけて跳躍、バイクに跨った。

踏みつけられたためにファイズの顔面は地面で削られ、コンクリートで舗装されたトンネルの車道をガリゴリと抉る。

当然、そこまで強烈な衝撃に耐えられるほどマスクは強くなく、砕け、勢いに首があり得ない方向を向いて曲がり彼の体が光と消えた。

「な・・・!?」

「最終フォームになったからって、調子乗ってんじゃねえぞ」

「風」を収め、バイクに跨ったままの蒔風がフェイトの攻撃を回避しながら先に進む。

もはや走っている地面は舗装されたコンクリートだけではなく、壁や天井をも利用しての壮絶なカーチェイスとなっていた。

そこに

「ファイガッッ！！！」

ドォン！！！！

クラウドの放ったファイガが蒔風のバイクに命中、爆発した。
その直前にジャンプしてバイクから離れていた蒔風は無傷だが、そのジャンプ直後にフェイトがバルディッシュを大剣型にして腰を返し、バッターが振りかぶるかのようにそれを胴体に向かって振るってきた。

それに対し、蒔風が一瞬で左腰の「風」を握って交差した瞬間に居合い抜く。

ジュカッ・・・！！

という刃物の鋭い音がして、刃がまるで音叉のようにリーン・・・と鳴っていた。

バキン！！

「ッ！？」

「魔力刃ごとき、その程度か」

そして、バルディッシュザンバーの金色の魔力で形作られた刃が切り裂かれていた。

上半分丸々切り裂かれ、パキリ、と儚い音を出してそれが落ちていく。

しかし

「再変換！！プラズマランサー！！」

「なっ！？」

その裂かれた刃が空中で形を変え、金色の弾丸と化して蒔風へと真っ直ぐに疾駆して来た。
それをいなし、後ろに流す蒔風だが、その弾丸は蒔風の後方で停止、ぐるりと転換して再び突貫してきた。

更にはクラウドがバイクから飛び出して蒔風へと斬りかかって来る。

「な・・・ク、ソッ！！！」

その弾丸を蒔風が獅子天麟の面で受け全てを耐えきり、クラウドからの剣を相手の手首を蹴りあげることで逸らし回避していた。

が、それでもクラウドはもう一本の腕で剣を振るって蒔風へと振り下ろす。
それを獅子天麟で受け止める蒔風だが、その衝撃に二人一緒になって地面へと独楽のように回転しながら落下して行った。

ドォン！！

そして、着地。

その勢いに蒔風の膝がガクリと曲がり、回転を押し殺そうとしているためミキミキと骨がうねった。

「くっ、オオオオオオオオオオオオオ！！！！」

が、そこから蒔風は屈伸してしまった足を伸ばし一気に跳躍。
クラウドと共に再び回転しながら、巻き戻しのように天井へと突っ込んで行った。

「斬演武単撃・螺旋ッ！」

「画竜点睛！」

ドゴッ、ごガァッ！！

そしてその回転をそのまま攻撃に利用し、二人の翼人が一気に上昇、天井を突き破っていってしまった。

その先にあるのは先ほどと変わらぬトンネル内。
が、今度は天井と道路だけで、左右にあるのは壁ではなくいくつかの鉄骨だ。

おそらくは階層別にされたハイウェイが集まってくる地点にまで来てしまっていたのだろう。

穴を突き抜け、バチィ！！と二人が弾けて地面に着地する。

が、その直後蒔風の足元がうっすらと金色に光り、そこから大剣の刃が斬り出てきて、蒔風を一刀両断しようと横断した。

それを横に回避した蒔風。
そこにクラウドが剣を構えて突っ込み、道路に出来た切れ目からフェイトがフェンリルに跨って飛び出してきた。

先ほどの金色の刃はおそらく、フェイトが下の階からザンバーを振るってきたものだ。

そのフェンリルにクラウドが飛び乗り、フェイトが後部に立つ。
フェンリルが突っ込んできた衝撃を流そうと後ろに跳躍した蒔風は再び進行方向へと翼をはためかせて飛び出して行った。

その後を追うバイク。

射撃魔法や剣撃が飛び交い、蒔風が翼を小さく畳んで更に速く飛んで行く。
抵抗を減らしたのだ。身体を真っ直ぐにし、ロケットのように先に向かって飛んでいた。

その蒔風へとフェイトがフェンリルから飛び出していって今度はツインソードで切りかかって行った。

その双剣に対し、蒔風が獅子天麟を「獅子天」「麒麟」に分けて指で挟んで片手に二刀持つ。

そして片方を宙に放り投げ、まず麒麟で攻撃を受けた。
直後、麒麟から手を放して放った獅子天をキャッチ、フェイトへと斬りかかる。

それをもう一刀で受けて麒麟に押し当てていた方を蒔風へと振るう。
現在麒麟はフェイトが蒔風に斬りかかっていたから押さえつけるかのようにそこにあっただけで、そう離されては落ちるだけだ。

しかし、蒔風はこの程度で剣を落とさない。

麒麟の柄の先を足の甲で拾い、脛に麒麟を当ててフェイトの剣を受けたのだ。

左手の使えない状況ながらも、この男は二刀流を操る男・・・！！

「・・・強い・・・・！！！」

「ただの小手先だ」

そうつぶやき、空中でありながらもフェイトの身体を巴投げのように後ろ（実際には進行方向）に向かって蹴り出し、蒔風のその動作の隙に斬りかかってきたクラウドをバイクに弾き返し、そのバイクを狙って獄炎砲を放った。

その直撃をクラウドはハンドルを切って避けるが、道路の方はそうもいかない。
コンクリートが砕け、道が消える。

その瓦礫の中をバイクに跨ってクラウドは回避、着地するも別路線の道路に乗ってしまって直後に姿がトンネル（山の中ではなくチューブ状の道路）に消えてしまった。

と、直後に蒔風とフェイトもトンネルの中へと入った。

相手は一人。

ならば、確実に潰しうる方法が一つある！！

「心象的（イマジナリティ）・・・・・」

「干渉成功。空間断絶を実行する」

「世界破（ワールドエン）・・・な！？ッ、ゲボッ！！」

しかし、その方法たる固有結界は発動しなかった。

蒔風がその名を叫ぼうとした瞬間、それに割り込んできた声の主によって固有結界が阻害された。

そうなれば当然反動は術者に帰って来るし、このような強力な物ならば反動は強い。

血を吐き、それでも天井を蹴って飛翔、更に加速する蒔風。

すると、地面を高速で走る一人の少女を発見した。

フェイトではない。フェイトは今自分の少し後方だ。

その姿は、はかなげで、それでいて今ははっきりとした意志を持った「宇宙人」だった。

「長門・・・・！！！」

「目標の排除、開始」

ダンッ！！

長門が飛びあがり、一瞬で蒔風の真後ろにまわり後頭部を手刀で強打した。
その衝撃に蒔風が地面スレスレにまで落ち、ギリギリで体勢を直した。

そこに放たれるさらなる射撃魔法。

その弾幕を長門がまるですり抜けるかのように蒔風へと切迫し、その体を羽交い締めにしてきた。

「!?　このッ・・離せ!!!」

「今」

長門が呟く。

と、そうしていると蒔風の視界に外の光が見えた。
どうやらチューブの出口らしい。

が、そこに一人の姿が見えた。

遠く、そして外からの光の逆光でよく見えないが、そのシルエットを見るに手には銃を握り、腰から何かを取り出して装填していた。

「まさ・・・か・・・・！！！」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＧＥＫＩＪＯＵＢＡＮ！！》

その耳に、確かにはっきりとその音声が聞こえてきた。

直後、その姿を中心に、更に九人の姿が現れてきたのだ。

ガチャ・・・

《Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ》

《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

《ＭＩＧＨＴＹ》

ドンドン！！

《Ｍａｘｉｍｕｍ－Ｒｉｄｅｒ－Ｐｏｗｅｒ》

《ウェイクアップ！》

《エターナル！マキシマムドライブ！！》

《Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ――ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ

ＤＩＥＮＤ！！≫

「っ！？ディエンドコンプリート・・・ッッ！！！」

ドドドドドドドドドンッッ！！！！

身動きの取れない蒔風に、計十人分のライダーの技が叩きこまれていく。

回避しようにも受けようにも、長門が羽交い締めにしていて動けない。

そうして、蒔風が地面に落ち、総攻撃が命中する直前に長門の拘束が解けて、彼女がフェイトに担がれているのを蒔風は見た。

「このッッ！！！」

ドォオオオ！！！！

そうして大爆発が起き、トンネルの出口は粉砕された。

地面までは吹き飛んでいないが、出口付近の天井と壁は完璧に落ちた。

これで終わるといい・・・・

ディエンドがそう思いながらも、瓦礫を見続けた。

嫌な感じは、おさまってくれない。

to be continued

最終戦、決死（後書き）

ｉＰｏｄが死んだ・・・・

今朝方にパソにつないだらなんか勝手に同期を始めて、「中止」をクリックしたらデータが全部「その他」になってた・・・・

だからこれからまたバックアップしておいたデータをブチ込んで、編集しないといけないじゃないですかヤダーーーー！！！

巧「荒れんなよ。ったく、たかが音楽データだろ？それに元は取っといてあんなら・・・・」

曲データ約１４００曲（ドラマＣＤ含む。内、約７００曲が曲。約４００がＢＧＭ）を全部プレイリストに分け、曲順を並び替えなければならないんですよ？

巧「おぉう・・・」

曲だけでも９Ｇ！！！

ビデオも入ってたから全部合わせて５６Ｇですよ！？

めんどくさいったらありゃしねぇ

巧「まあ・・・がんばれや」

おう

とまあまたｂａｔｔｌｅでしたが・・・・

巧「発音にいいなおい」

あのバトル、イメージしていたのは完璧にＦＦ７ＡＣのバイク戦です。

なんで彼らはあんなに宮中で流れるんでしょうね？って言うのは前にも書いた気がする。
そんな感じでイメージしていただけると幸いです。

今回のトンネルも何かをくりぬいて、というよりはチューブ状のハイウェイのようなものだと思ってくれれば・・・・

巧「誰か絵を書いてくれればいいんじゃねェの？」

書けん。
棒人間が精一杯じゃ。

ちなみに、ディエンドコンプリートフォームは今回初めて出しましたが。出てきたライダーはお分かりでしょうか？

あの効果音順に・・・・

G4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、アーク、エターナルです。

エターナルに関しては勝手な想像なのですが、ディケイドの方も電王が更新（ライナーから超クライマックスに）されていたので、こうしました。

一瞬「この場合はコアじゃないのか？」とも思いましたがエターナルで行きました！！
かっこいいもん！！嫌いじゃないわよ！！

巧「おっしゃるとーりだわー（棒読み）」

さて・・・ｉＰｏｄの編集が終わったらラジオでも書こうか次話を書こうか・・・

巧「次回、ディエンドの最高の攻撃に一体蒔風は・・・？」

ではまた次回

リスト残り

長門有希
クラウド・ストライフ
海東大樹
フェイト・Ｔ・ハラオウン

コンディション

左腕使用不可。

体力値：５３％

最終戦、最後の一人

ディエンドの周囲から八人のライダーが消え、彼一人だけが崩れたトンネルを見ていた。

ここもまた入る前と同じように、左右が壁ではなく鉄骨の鉄橋。

終わったはず。

だが、このジットリとした嫌な感じは何か。

目の前の瓦礫。

ただの残骸にすぎないその中から、いまだに途切れぬ敵意があふれ出てきていた。

それに――――

ガラッ・・・・

攻撃をぎりぎりで回避したはずのフェイトと長門がいない。

「！！」

ディエンドがディエンドライバーを握り、驚愕する。

瓦礫の中から蒔風が立ち上がってきたのだ。

その右手にはブスブスと煙を上げて焼けている「何か」を握っていた。

おそらくはその「何か」を盾にして攻撃をしのいだのだろう。

しかし、それでもダメージは通っており、頭からは血を流し、全身からは擦過傷が見え、口は切ったのか吐血なのかはわからないが血

の跡が残っていた。

「まさかあれを耐えきるとはね・・・・・・！！！」

「小賢しいぞ、海東。インビジって逃げておけばいいんだよ、お前は」

「・・・・確かにそれは考えたさ」

蒔風の言葉に、海東が応えた。

そう、彼はやろうと思えばいつものように引っ掻き回してはインビジブルのカードで逃げることもできた。

だが

「だけどね、君は前に言ったんじゃなかったかい？」

「あん？」

「倒すことより、守ることの方がはるかに難しい。それこそ強さ、ってね。弱いのはシャクだから僕もやってみたけど・・・いまでは皆を守りたいと思っている。もちろん、自分が一番なのは変わらな

いけど」

「・・・・上等」

「だから危なくなるまでは、君を倒すためにいろいろやらせてもらおう」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＢＬＡＳＴ！！》

ディエンドがカードを装填し、数十発もの弾丸が蒔風へと襲いかかる。

その弾丸をすべて右手で握っているそれで弾き飛ばし、接近して行く蒔風。

そして、ディエンドが蒔風の握っているものを見てギョッとした。

最初、握っているのは瓦礫か何かなのかと思った。それを盾にして凌いでいたものだとばかり思っていた。

だが、接近して初めて分かった。

これは人だ。

しかも、こんな消し炭のような状態でもまだ再生しようとしているようで、再生したてでもろい肉体がブラストの弾丸ではじけ飛んで行っていた。

「ッッ！？」

それを見ては銃弾など撃てない。

ディエンドが蒔風の攻撃を避けながら、ディエンドライバーで殴っていく。

と、蒔風の後方頭上にフェイトが現れ、その首を狙ってバルディッシュサイズフォームを振るった。

その左足は怪我をしており、血でボロボロになっていた。

おそらくは回避しようとした瞬間、蒔風が掴んで引きとめたのだろう。

蒔風が何をつかんで彼女を止めたのかは、わかりきっている。

その右腕に握られているモノがそれだ・・・・

蒔風は右手に握ったそれをフェイトに突き出し、その鎌を寸前で止めさせた。

「お前・・・ッッ！！！」

「やらんのか？ならおれがやろう」

蒔風がそう言ってグシャリ、と非常に耳障りで嫌な、炭を握り潰し

たような音がし、その「人」の首が握りしめられもろく崩れた。

直後、その体が光と変わって消え去り、それが長門の姿の写ったカードへと変化する。

「有希さん！！！」

「厄介な長門やれてよかった。礼を言っとくぞ」

「お前・・・！！！」

その言葉に、フェイトがバルディッシュからハーケンセイバーを放ち、それとともに飛び出してきて蒔風へと自身も切り掛かる。

計六発のハーケンセイバーと、フェイト自身とで計七つの斬撃が蒔風へと迫る。

（掛け値なしの七発同時斬撃！！片腕じゃ防ぎも弾けもしない。躱

しても大樹さんが狙い撃ってくれる。さあ・・・）

「終わり・・・だ・・・・・！！！」

その考えのもとに、フェイトが蒔風へと突っ込んだ。
フェイトの後方ではディエンドがファイナルアタックライドのカードをディエンドライバーに装填して準備をしていた。

――――彼女の考えは正しい。

今の蒔風にはこれを防ごうにも、フェイト自身の攻撃は受け切れない。
うまく弾き、流したとしても、同様にフェイトの攻撃には弾き返されてしまうし、そうして体がはみ出た瞬間にディエンドに撃ち抜かれるだろう。

だからと言って最初から回避などしたら当然ディエンドに撃たれるし、そもそもそんな大きな動作では下手をしたらフェイトにだって切り捨てられるかもしれない。

そう、彼女の考えは正しいし、十人に聞いたら十人は「倒せる」と答えただろう。

だがそれは、そこに「相手が蒔風だったら?」という項目がなければ、だが。

この男に、「決死」はない。
それに、あくまで死に対してだけだが「覚悟」もない。

だから、「やる」と思った瞬間にはその行動がとれるのだ。

たとえそれが、未来（さき）を無視した行動であっても、だ。

ドドドドド、ザシュッ・・・・・・・・・

想像よりもはるかに静かな音と主に、フェイトが蒔風に突っ込んだ。

しかし、おかしい。

剣を打ちすえた音もしない。

回避し、受け流したのか？

違う、それならば地面に突き刺さったコンクリートが破壊された音がするはずだ。

回避はしていない。

ならば、導き出される答えは一つ。

「え・・・？」

「やっといて・・・驚くな・・・覚悟の強さを、見せてくれよ」

「そん・・・なっ！？」

ゴゴッ！！

直後、蒔風の右拳にブゥン、と絶光の光が宿り、光速で拳が振るわれてフェイトを撃ちすえた。

「ガはっ！！」

「・・・・・」

フェイトの左腕上腕に蒔風の拳が叩きこまれ、そのまま地面に叩きつけられる。

地面との板挟みに、彼女の内臓が圧迫されて地面に亀裂が入った。

「やめろ！！」

と、そこに銃弾を放つディエンドだが、蒔風が身体に突き刺さった刃でそれを器用にはじいた。

フェイトが地面に倒されて始めて見えた、蒔風の姿。

背中に三つ
左腕に二つ
左肩に一つ
それぞれにハーケンセイバーの刃が

そして、バルディッシュが右肩に突き刺さった状態で、蒔風は立っていた。

そう、彼は最初からなにも考えていなかった。

避ける？

受ける？

耐える？

笑わせる。そんな物に意味はない。

そこに必要だったのは、ただ目の前の相手を叩き伏せるこの腕があればいい。

そこに飛び込んでくるのなら、喜んで受け入れようじゃないか――

――

蒔風の身体から、フェイトへダメージを与えたことでハーケンセイバーが消える。

身体から血が流れ出すが、この程度の出血ならまだ翼人は動ける。

《ワールド！！！》

「な！？」

「に・・・！？」

と、そこであの音声が流れる。

蒔風の右腕は、フェイトを地面に押し当てているので見えないが、
何やらもぞもぞと動いていた。

「ばかな・・・あのメモリは探偵君が確かに・・・！？」

その事実に驚愕するディエンド。
それを無視し、蒔風は上空を見上げ視線だけをディエンドへと向けた。

「落ちよ・・・」

「！？」

「刃っ！！！」

「クッっ・・・！！！・・・・え？なにも・・・（ドスッ）・・・・か・・・は・・・・・？」

蒔風のその言動から、おそらく真上から刃が落ちてくる――つまりはアーチャーの力か何かだろうと思ったディエンドが、咄嗟に上空を見上げた。

しかし、その先にはなにもなかった。
直後、胸に重い衝撃と、鋭利な痛みが走る。

間抜けな声を出し、自分の胸を見るとそこには「獅子」が突き刺さっていて、蒔風はフェイトの背中に座り、腕を拘束して封じ込めていたのだ。

その瞬間、ディエンドは後悔した。
たとえ一瞬だったとしても、この男から目を逸らした自分の行動を。

そうして装甲が散って、大量の血を流しディエンドの身体がカードへと消えた。

それを見て、蒔風が右手に握った携帯の決定ボタンを押して音を鳴らす。

《ワールド！！！》

「こんな程度に騙されるとは・・・・」

「ッッ！！アアアアアアアアアアアアアアああああ！！！！！ああ・・・アアアアアアアアアアアアああああ・・・・・アアアアアアアアアアアアああああああああああああああ！！！！おまえ・・・・お前はァァァアアアアアアアアア！！！！！」

その蒔風の言葉にフェイトが嘆き、悲痛な声を上げ、更にそこに怒気を込めてなおも方向し、背中に乗る蒔風を睨みつけた。

「お前ッ・・・は・・・！！！」

「最低、か？」

「それ以下だ・・・この犯罪者が・・・！！！」

「皆言ってただろ？俺は一級品の暗殺者（アサシン）だ・・・ってな」

ゴキッ！！！

そうして、蒔風がフェイトをカードへと消す。

そして

ヴォォン・・・・・・・

「来たか」

「お前・・・！！！」

そして、ようやく合流することに成功したクラウドは、その光景を目の当たりにして絶句した。

もはや、残っているのは自分だけ。

全員だ。

自分を残して、全ての者がやられてしまった。

「来いよ。終わらせるんだろう？」

「・・・・！！ォ・・ォオ・・・・・・」

「さあ・・・・」

「ォォォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

ドォン！！！

クラウドがバイクを疾走させ、蒔風へと突っ込む。

蒔風はそれを紙一重で回避しようとし、身体を返した。

しかし

「おアアアアア！！！」

「うぐッ！？」

バイクからクラウドが飛び出し、蒔風へと掴みかかって行った。

そのクラウドと共に蒔風が押し出され、そのままハイウェイから落下して行った。

落下先は、森。

上を通るハイウェイのせいで、所々に影が射し、それがこの森の鬱蒼(うっそう)感を醸し出していた。

クラウドが無言で大剣のすべてを組み上げ、一つにして握る。

それに応じ、蒔風は風斬車に組み上げた「天地陰陽」を握って静か

に見る。

「オレが最後の「ＥＡＲＴＨ」メンバーになってしまった・・・・」

「・・・・・・」

「だから・・・・だからオレがお前を倒す！！！」

「・・・・御託はいい・・・・お前、オレを倒したいんだろ？えぇ！？・・・・・来いよ・・・・」

そういって、男二人が睨みあい。

その剣がぶつかり合って最期の闘いが始まった。

to be continued

最終戦、最後の一人（後書き）

ついにここまで来ました・・・！！！

次回で、全ての戦いが終わります。
そこであらかじめ言っておきましょう。

次話の戦闘は非常に短いです。

力ある者同士の戦闘は、本当に一瞬で終わるということで。

やっと冒頭に続いた・・・！！！

次回はもしかしたら、明日に更新できるかも・・・？

次回、戦闘終了。そして・・・・

リスト残り

クラウド・ストライフ

コンディション

左腕使用不可。
体力値：３６％

背中に三つ
左腕に二つ
左肩に一つ
右肩に一つ、刃の刺突痕

終結→破滅

ドゴォッ！！！

「げフッ・・・・が・・・・」

「どうした・・・その程度か！！！」

クラウドが剣を構え、地面に倒れる蒔風を睨みつける。

それに対し蒔風は、「山」を突き立ててそれを杖のようにして立ち上がろうと膝を起こした。

周囲には蒔風の十五天帝の剣が散っており、すでに打ち払われてしまったものであることが分かる。

此処で戦いを始めた時すでに、蒔風にはクラウドと打ち合うだけの力など残ってはいなかった。

ぼたぼたと血を流し、それでもクラウドの攻撃を必死に回避していく蒔風。

もう膝も満足に立たない。

気を緩めれば剣を落としてしまいそうだ。

背中が痛い。
腕が痛い。
腹が痛い。
首が痛い。
頭が痛い。
足が痛い。

筋肉が呻く。
骨が軋む。
拳が震える。
膝が嗤う。

地面がグラつく。
空が歪む。
視界が捻れる。
意識が途切れる。

そして何より、胸が締め付けられたようになり、そこに何かを突き刺したくなる。

「ッ・・・は・・・・・・・ハァ・・・・・ゥぁ・・・・・・」

クラウドの攻撃は大振りだ。
しかし、大振りだからといって簡単に回避できるわけではない。

例えば

クラウドが剣を振って蒔風に斬りかかるとしよう。

無論、それは振りかぶってからの攻撃である。

彼の持つ剣が大剣なのだから、それは仕方のないことだ。

そして、大振りという攻撃は強力だが、あまりにも簡単に見切られるものだという事は、説明するまでもなく理解できよう。

だが、この男の攻撃はそんな簡単な、一定枠に収まるような代物ではない。

そう、例えば――――――

その大振りから降り降ろされるまでの動作が、全快状態の蒔風の拳と同じ速度だったらどうだろうか。

ドゴッ！！！

「おグッ・・・ガッ・・・ぅうォ・・・・ァ・・・・・」

そうして、蒔風がその攻撃を紙一重に回避するが、勢いに引っ掛けられてまた剣が弾け飛んだ。

すでにこれで十一本目。
速くてあと二回、長く持っても、あと十回も攻撃されれば彼は終わるだろう。

二本はクラウドが所持しているので、十五天帝は揃っていないのだ。

と、そこにクラウドが剣を突き出しての突進をかける。
地面を滑るように一直線に突っ込んだ彼を、蒔風が剣の背で受け流し回避するが、その衝撃に背中の皮膚が裂けて血液が噴き出した。

そして、また剣が飛んで行った。

後一回。

それだけで蒔風は終わる。

「ゼッ・・・ゼッ・・・ゼッ・・・ぅプッ・・・ゲホゲホッ！！！・・・・・」

「舜・・・・・」

「・・・・・・・・・」

もう終わりというところで、クラウドが剣をゆっくりと振って構えながら、蒔風へと声をかけた。

今の蒔風は本当にボロボロで、この声が聞こえているかもわからない。

しかし、それでも訊かないわけにはいかなかった。

これできっと、最後だから。

「なぜ・・・こんなことをしたんだ・・・・・」

「・・・・・」

「お前は・・・！！全てを救うんじゃなかったのか・・・・・！！」

「・・・・よ・・・・・」

「？」

「もう・・・疲れたよ・・・・・」

「なに・・・・・・？」

「速く・・・終わらせようよ・・・・・なぁ・・・・」

「・・・・・・・・・」

「クラウドォ！！！」

そうして、蒔風がクラウドへと疾走した。

いまだこんな力が残っていたのかと驚愕するクラウドだが、蒔風の勢いはどう見ても弱々しい。

こんな状況から動いた、という事に驚いただけで、その勢い自体はたいしたものではないのだ。

「・・・・ハァあっ！！！」

ズッ、ドンッ！！！

その蒔風へと向かって、クラウドが剣に気を込め、地面に叩きつけて剣気を放つ「破晄撃」を放った。

それが一瞬の速度を以って蒔風と衝突し爆発、蒔風を空中に跳ねあげさせる。

「ォ・・・・・ぁ・・・・」

「フッ！！！」

その蒔風へと飛びあがり、クラウドが合体剣を解除し周囲の宙にばらまく。

しかし、いつもと違う事がある。

クラウドの身体に、魔晄の青白い光が灯った。
それはいつものことだ。それはいい。

だが、クラウドがはじき出した剣は蒔風を３６０度囲むように展開され、更にはその剣には、まるで分身したかのように魔晄で形作られたクラウドが着いて行っていた。

そして

「ハァァッッッッ！！！」

各クラウドが己の剣を握って蒔風へと突っ込み、同時にそれぞれ十

五撃斬り込んだ。

本来の超究武神覇斬と、そのＶｅｒ．５を合わせたようなその技が、対象を一瞬で切り刻んでいく。

ゴォッ！！と、一連の攻撃を終えてクラウドがその剣撃の中心から抜け出し、空中で振り向くことなく、その中心（おそらくは切られた蒔風がいるのだろう）を背にし、止まる。

彼の手にファースト剣が残され、分身が消え、地面に残りの剣が突き刺さって行く。

確実に斬った

彼の手には確かな手応えがあった。

確かに彼の剣には血液が付着しており、その手には斬ったという確かな感触が残っている。

そうして一瞬目を閉じた後に、自分が切った後を振り返ってみた。

その瞬間

ボフッ!!!ブワァァアァ・・・・・

「!?ブッ・・・これは・・・・・!?」

突如、クラウドの視界を一気に深紅が覆い尽くし、彼自身を覆い尽くした。

それは真っ赤な霧だった。

全身をジットリと濡らし、気持ち悪く張り付いて、即座に乾いてくる。

そして、それは存分に鉄の匂いを含んでおり、彼の鼻を衝(つ)いた。

「まさ・・・ガッ!?・・」

「ふお(おわり)あり・・・だ・・・・ぁ・・・・・」

クラウドの喉を潰したような声と、蒔風のくぐもった声が聞こえてきた。

否、「ような」ではない。

その赤い霧の中、蒔風がクラウドのの喉笛に喰らい付き、ブチブチと引きちぎっていた。

更にはその頭部に右腕を押し当て、噛みつきながら首の骨をも砕く。

確かに、蒔風に対して刃は通っていた。

しかしそれは、彼の「一部分」のみだったが。

そして、肉食獣が獲物をしとめるかのように蒔風はクラウドを仕留めていた。

が、そこで倒れるようなクラウドでもなかった。

翼人はこれでは倒れられない。

しかし、蒔風はクラウドに抱きつき身体を捻った。

即座にクラウドの腰からゴキボキと重い音が鳴り、背骨が砕けた。

その捻りで肋骨が内臓を傷つけ、吐血するクラウド。

二人が地面に落ちる。

が、更に蒔風は有らん限りの力で、まるで全身の血を絞り取るかのようにクラウドを締め上げた。

クラウドは抵抗するものの、血が一気に失われ、意識が薄れ、そして――――――――

ドンッ！！！！

消えた。

蒔風が残った唯一の腕で、そのカードを拾い上げる。

「一級の暗殺者・・・ね・・・・・」

フゥ・・・・・・

「そんな奴、この世に存在するはずねぇだろ」

彼に、左腕は無かった。

上空の霧はすでに落ち、地面をドス黒く染め上げている。

それは全て、つい一分前までは彼の左腕だったものだ。

「はァ・・・は・・はは・・・まあー・・・終わった・・・終わらせた・・・・・・」

左腕の斬り口を布で縛って止血する。

そして蒔風がケタケタと笑いながら、右腕を広げて上空を仰ぎ見、狂ったように声を上げた。

「やった！！やったぞ！！！これでいい・・・これでいいぞ・・・・！！！」

そうして、懐中時計を取り出して、その針を見る。

もうほとんど頂点だ。
あと一度もない角度に迫っている。

「間に合った・・・ハァ・・・ハァ・・・間に合ったぞ・・・・あ・・が・・・・・」

その時計を投げ捨て、狂気に取りつかれたように笑う蒔風が、どこともなく足をふらつかせて進む。

しかし、すぐに倒れ込んで木に寄りかかってしまった。

だが、それでも蒔風は嗤っていた。

「さあ・・・はじまるぜ・・・こっからだ!!!来いよォ・・・・この瞬間のために、存分に練って来てやったんだからな・・・・」

蒔風が気から手を放し、自分の足で立つ。

ガクガクと震えながら、メトロノームのように揺れながら、蒔風が上空を仰ぎ見た。

「かかってこいよ――――世界」

直後、地面に捨てられた時計の針が頂点を指した。

そして、蒔風の身体がビクンと揺れ、ガクリと崩れ、そのままの表情で倒れた。

「――――――

彼の心に、「総て」が圧し掛かっていた。

to be continued

終結→破滅（後書き）

戦闘が終了しました。

一体ここからどうなるのか。

彼にのしかかってきたモノはなんだったのか。

そのすべてはまた次話に

次回は解説編！！！

これまでの事件の真実。

いったい何があったのか・・・・

ではまた次回

リスト残り

―――――――

Ｌｏｓｔ　Ｈｅｒｏｓ．．．．

その時世界で起こっていたこと（前書き）

今回の説明ＢＧＭは「生まれ変わった新しい生命」です。
クラナドのですね。このタイトルでｙｏｕｔｕｂｅ検索すればでてくると思います。

その時世界で起こっていたこと

渚の実家「古河パン」の一階で、彼らの娘、岡崎汐は変な光景を目の当たりにしていた。

朝起きて、パン屋さんを手伝おうとして店に出たのだが、そこに自分の両親、朋也と渚が倒れて目をパチクリさせているのだから。

――

復興した「ＥＡＲＴＨ」本部の一室でも、同じような光景が起こっていた。

北郷一刀の部屋からガタガタと激しい音が鳴り、桃香や愛紗が駆けこむとそこには、部屋の主の北郷と、さらにはリトルバスターズの

メンバーが転がっていたのだ。

「え？あれ？」

「重い重い！！」

「ふぇえ～！だ、誰かおしり触ってるよぉ～！！」

「ふむ、いい感触だ」

「ぐえぇ」

――――――

そしてまた別室でも、起動六課のメンバーがそろって転がっていた。

まるでいきなりここに現れたかのように、逆さまだったりなんだったりでぐしゃぐしゃに。

――――――――――――――――――――――――――――――――

学園都市の学生寮で、上条当麻がガバリと上体を起こした。

右手首が一瞬だけ痛んだが、見ると何の変化もなく、そこに右手はあった。

そばには何やら大きなビンがあり、それが割れて中から何か培養液のような液体が流れ出している。

周囲にはステイルやインデックスが倒れており、もうすぐ目を覚ま

すかのように瞼がぴくぴくと動いた。

ーーー

「え?なんでなんで!?」

「いったい何があったってんだよ!?」

困惑する一同。
モモタロスがハナに聞き寄るが拳に沈められ、床に倒れた。

彼女の話では、突如として扉の隙間からカードが滑り込んできて、光ったと思ったらいきなりみんなが現れたそうだ。

「それってどういう・・・・」

「と、いうか・・・僕らがこうやって戻ってきた、ってことは・・・・」

「!!誰かがあのバカたれをブチノメシたんか!?」

「いぃえ。あのリストにあった者は全員やられましたねぇ。凄まじい人です」

その言葉に、ハナが口を開こうとしたが、その前にチャーハンを食べているオーナーが答えてしまう。

そこでハナがオーナーに詰め寄って、聞いた。

「オーナー。蒔風さんと何か話していましたよね？」

「ええ」

「なにか・・知っているんですか？」

今まで、こうして何度も聞いてきた。

だが、そのたびに彼は答えてはくれなかったのだ。

しかし、こうして終わった今なら教えてくれるかもしれない。

「知っています」

「なら!!」

「ですが・・・彼からは話さないように口止めされていますからねぇ・・・・・と、言ってもあの時だけ・・・・と考えましょうか」

そして、なおもペースを崩すことなくチャーハンを掬い、口に運びながらオーナーが話し始めた。

ーーー

先に言うと、「時間」と「世界」はかなり密接な関係にある。
完全なる別世界でなくとも、パラレルという形で時間は世界を無数に作る。

例えばの話

一人の男が、ある行動――仮にAとしよう――を行ったとする。
その結果、それに見合った現象が起こる。

だが、その行動Aがもし、世界を分岐するファクターだったら?

その際、もし別の行動をとっていたら?

ここでAではなく、Bの行動をとればそれに即した世界に変わる。
これだけならば、今までの戦いで電王も経験してきたことだ。

だったらもし、ＡとＢ、両方の行動をとったら？

結果だけをいえば単純な話、Ａの結果とＢの結果が同時に起こるだけだ。

事象のダブルブッキングだと思えばいい。

そして、今回のそれはこの事象に非常に近い。

世界が一つになった。

それによって、物語も重なった。

事象の重なり（ものがたり　ダブルブッキング）

結果が先に来てしまったが、結果は同じだ。
だったら、そのために経過がなければならない。
その経過が、一斉にのしかかるのだ。

「経過が・・・のしかかる？」
「この世界は確か２８の世界が融合したもの・・・一体それの何がのしかかるのかは・・・わかりませんがねぇ・・・・・」

何が来るのかはわからない。
しかし、それが世界の何かならば「２８」という数字は脅威だ。

「一体・・・何がですか？」
「わかりません・・・わかりませんが・・・・・あ」

と、そこでチャーハンに刺さっていた旗が倒れ、頬に手の甲を当てておどけた後、ステッキを持ってオーナーが立ち上がった。

「わかるであろう人物は・・・管理者のアリスさんだけでしょうねぇ・・・・わっかるっかなぁ～・・・・」

と、最後に少しだけスキップしながら、食堂車から出ていくオーナー。

その話を聞いて、良太郎は頭を振った。

わからない・・・・

自分たちは・・・守られたとでも言うのか？

ーーー

子に座って外を見ながら、振り返らずに聞き、そして黙った。

「教えてください・・・一体何があったんですか!?」

「一刀、舜の部屋には誰も・・・・・あ・・・・・」

と、そこに理樹も入ってくる。

部屋の中には三人のみだ。ほかのメンバーは部屋の外で話を聞いている。

「・・・・・・・」

「黙ってないでください・・・教えてください」

「・・・・・・・・あなた達がいると言う事は・・・・舜はやり遂げたようですね・・・・・」

「そのまま・・・なにも言わない気なの?そんな事で舜が・・・・・・」

「話せるのならば話します。しかし、彼はすべてを背負うと言った。私は管理者ですが、もはやこの世界の一員なんです。彼の意志を・・・」

「だったら!!舜の意志をしっかりを僕らに伝えるべきだ!!」

「そうだな・・・もしそれであいつがあなたに突っかかるなら、オレらがかばってやる。だから・・・」

「しかし・・・・」

「・・・こうして・・・敵になって戦ったけど・・・・・・」

「え?」

「僕らはまだ、舜の事を「舜」って・・・・呼びかけるように言えるんだ・・・・でも、面と向かっては言えない」

「それは・・・」

「敵だったから、しょうがないよね・・・でも、いいの？もし話してくれれば、僕らは知ることができる。機会を与えてくれれば、僕らはまた、舜を呼べるんだ」

「・・・お願いします・・・・・教えてください・・・・舜に・・・いえ、世界に一体何があったんですか？」

「・・・・・・」

「蒔風舜と言う魂を！！これ以上一人にさせたくないのはあなたも同じでしょう！！！」

「ッ！・・・・・・・・わかりました・・・・では。お話しましょう」

世界に何があり、彼が何をしたのか・・・を

ーーー

それで困った者はいない。

しかし、困ったモノはあった。

「世界」というのは、自分の中で起こった物語を他世界に発している。
それを受け取って、その他世界で「世界」は様々な媒体で「物語」となって知られていくのだ。

そして、世界には少なくとも一名、もしくは複数名の最主要人物、すなわち主人公がいる。

その人物は、各世界が定めた人物。
しかし、今回それが一気に集まった。
全員をそこに当てはめるのは無理だ。

クラス内でグループ分けされ、そこでせっかくリーダーを決めたの

に、クラスで一纏めにされ、誰をリーダーにすればいいのかわからなくなってしまう様に、世界もそうなったからだ。

世界は困惑した。

一体誰が、この世界の最主要人物なのか、と

「世界の意志」と「管理者」は別物だ。
それぞれに意志があり、前者は合理的(ざんこく)で、自身が存在すればいいという考えだ。

世界は、選定を行うことにした。

主人公

即ち、運命に立ち向かう者
即ち、自分に納得のいく者
即ち、多くの思いを抱えた者
即ち、多くの変動を目の当たりにしてきた者

全てがそうであるわけではない。

しかし、ほとんどの者がそうだろう。

そして、彼らはそれに耐え、打ち勝ち、世界を生き抜いてきた。

だったら、それに耐えられるのがこの世界の主人公だ。

全ての者に、それをぶつけよう。
全ての世界の、全ての物語の、主人公たちが経験してきた喜怒哀楽を。

彼らは一度耐えた者。

ならば、今回も耐えたれるであろう者がこの世界の主人公だ。

ただし、世界に加減などない。

どんなにボロボロになっても、彼を世界のために戦いに駆り出して行ったように、「世界」を「自身」の存在を守り、確立させるためならばそこに感情を挟まない。そんな物はそもそもない。

２８の世界――実際には何度も行った世界があるので、３０を超える物語。

その中での喜び、怒り、哀しみ、楽しみ――全てをぶつけようとしたのだ。

では、誰に試そうか？

ちょうどよく過去に、世界に繋がり、力を発揮したことが何度かあった。

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫ

だったらそこに名を連ねる人物は間違いなく「そういったもの」に耐えられる人物だ。

だからこそ、この世界に来た人物のみがあのリストにあった。

順番にやっては身構えられるかもしれない。
物語は突然なように、これもいきなり始めねば。

全員一斉にそれをのしかけなければ。

そうして、それを整えるのにかかった時間が蒔風の持っていた時計が示したカウントダウン。

彼はその話を、彼女から聞いたのだ。

もともとこの世界は「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」だった。
その基盤になった世界の最主要だったからか、彼がその話を聞いても選別は行われなかった。

しかし、ほかの者が知れば、身構えられるだろうと思う世界は途中でも何でも選別を始める。

だから、誰にも言えなかった。

そうして、彼は仕事に取り掛かったのだ。

大ショッカーの跡から「破壊機構」を取り出し、該当人物をカードに封印して行った。

そこに封印しておけば、世界との関わりを断てる。
選別を免れる。

しかも、戻った時は五体満足だ。

皆戻る。

そうして起こったのが、今回の事件だった。

「じゃあ・・・・なんであんなひどいことをしたんだ・・・・・」

「あの破壊機構は敵意のない相手には封印を発動できないんです。かつてディケイドがライダートーナメントで戦った時は封印できませんでしたが、その後のライダー大戦では出来ましたから」

「「敵意」がトリガーだった・・・だからあんな・・・憎まれるような戦法を・・・・」

「それは違います」

「え?」

「彼は・・・決して最強などではありません。あのような卑怯な戦法を最も得意とし、そしてそうでなければ勝てない男です」

「でも!!そうじゃなくても・・・・」

「十分に強い?それは彼が、なにも恐れていないから。死を恐れず、先を見据えない戦いをするからです。一流の暗殺者?そんなものではありません。彼曰く、そんな人物は存在しません。なぜなら、「殺し」という手段は、それだけで三流だからです」

「・・・・・・」

「戦いの前に、彼はは話してくれました・・・・・・」

『やっぱ・・・クラウドと模擬戦やったけど・・・これはちゃんと敵にならないとダメみたいだな』

『でも・・・本当にやるんですか・・・・？あなたの心は・・・・・』

『心には「蓋」をする。理想的な「悪役」を作り出す。それにそもそも、オレにはそういった戦い方の方が似合ってるしな。それに、「選別」も蓋を何層も重ねれば・・・・即興品でもなんとか行けるかもな』

『それで・・あなたの「本心」は耐えられるんですか？』

『・・・たぶん何回か悪役用の「蓋」は壊れる。ま、そのたびに練るさ。ずっと続くような蓋なんか、この人格の一つしかないから』

『あなたは・・・・強いですね』

『・・・・強い・・・ねぇ・・・・・そんなんじゃないさ・・・・俺はただ・・・・・』

「あの瞬間まで、彼がどんな人物か私は・・・・私は忘れていまし

た」

「え？」

「彼はね・・・・”ｎｏ　Ｎａｍｅ”の住人なんですよ」

「その話は・・・・前から聞いていたけど・・・」

「完全な”ｎｏ　Ｎａｍｅ”に、争いが起こるとでも？戦いの経験があったとでも？確かに、ちょっとしたイザコザはあったでしょう。しかし、それだけです」

「いわば、こなたさんたちと同じなんですよ。理樹さんや、一刀さんのように何かに立ち向かって勝ってきた人物なんかじゃないんです。本当に、そこら辺を歩いているような一般人よりも、ほんの少し強いような普通の青年なんですよ・・・？私はその人を・・・・素質があると言うだけで力を与え、戦い人間に仕立て上げたのです。それなのに・・・彼は私に、ありがとうって・・・言ってくれました・・・・「オレの憧れたちを、守りきることができる。あいつら

みたいに、なりたかった」・・・・って」

「？」

「“死を恐れない”・・・・・そんな人間がいて、歪まないとでも思いますか？そんなことはありません。そんなことがあっては、生きる気力をなくし、先もなく堕落し、最後には何もかもがどうでもよくなって・・・・もしかしたら周囲を巻き込む破滅へと迷いこむかもしれません。ですが、彼はそれでも歪まなかった」

「なんで・・・・」

「それは「あなた達」がいたからですよ。世界を旅する前、彼はあなた達の作品（ものがたり）をすべて知っていました。そして、憧れたのです。夢見たのです。「自分もあんな風に、皆を救いたい」と。だから彼はあそこまでまっとうな人間に、これまで歪むことなく生きてこれた。

彼は言っていました。「死を恐れない、なんてのが強さだなんて、オレは嫌だ。みんなみんな死を恐れ、それでも必死に抗い頑張ってハッピーエンドに持って行ったんだ。それが強さだって、オレはそうありたかった」って・・・・でも、今回彼は・・・・・」

「そうだったからこそ・・・僕らに勝った・・・勝ててしまった・・・」

「そうなるかもしれないことは、彼もよく知っていました。でも、その結果がわかっていながら、実行しました。彼は嫌だったんです。世界の理不尽で、自分の憧れがいなくなってしまうのが。あなた達は彼を英雄だ、最強だと思っているかもしれませんが、とんでもないです。

彼の正義を作り、そして、ここまで歩ませてきた根源は、間違いなくあなた方なんですから。あなた方が、彼にとっての英雄（ヒーロー）だったんですよ・・・・・・」

「そして、全てが終わって・・・僕らは戻された・・・・・・」

「平穏な・・・もう何も起こらない・・・」

「そう、世界の選別は終わりました。これで本当に、この世界は安

定したんです」

その一連の話で、彼ら全員は理解した。

自分たちは守られていた。

しかし、彼は英雄ではなかった。

彼は、憧れだった自分のヒーローを守った、ただのファンだった。

そんな一介の男が、なまじすべてを救えるような力を手に入れて、
そして必死になって守ったのだ。

だから、彼はあんなにも「主人公」をやってこれていた。

当然だ。
彼はその憧れ達を元に、憧れ達と共に戦ったのだから。

そして、彼は・・・・・・・

「それで・・・・・舜は？」

「そうだ・・・・・その選別が終わって、舜はどうしたんだ？」

「・・・・・・・」

「まさ・・・か・・・・・」

「彼はＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫの発動者です。当然、リストにはその名が連ねられています・・・・・」

「まさか・・・・そんな！！！」

理樹と一刀が、外へと飛び出す。

部屋にはアリスが一人、残されていた。

「この世界に戻ってきたとき、あなたは思い出したんでしょうね。旅に出る前に消された、忘れていた全ての物語（さくひん）を・・・だから、その辛さを知っている。そのすべてを、仕掛けるわけにはいかなかった・・・だから・・・・・」

「”ｎｏ　Ｎａｍｅ”、いや、アリスよ」

「え？――――――――――」

数時間後

「ＥＡＲＴＨ」本部の前に、数人の手によって、一人の男が運び込まれてきた。

その男には左腕がなく、身体もズタボロだった。

しかし、それ以上にひどかったのが、彼の倒れていた森だ。

周囲にはおおよそ人間から吐き出されるモノ全てがまき散らされており、そこから少し離れた岩に、彼は座り込んで寄りかかっていた。

目は虚ろで、口は半開き。

その上体はまさに、心が死んだ、というのが相応しい。

彼は死体のように動かず、それでいて信じられないほどに軽かった。

顔には涙や嘔吐の跡があり、全身の服は自分で引きちぎったのかボロボロで、さらはそのまま引っ掻いたのか、身体中にもひっかき傷があった。

誰もが駆け寄った。

しかし、彼は答えない。

まるで人形のように止まってしまった彼は、そのまま動くことは無かった。

今回の敵は、世界だった。

世界のために飛んだ翼人は

仲間のために飛び

世界に沈んでプツンと・・・・

きれてしまった。

to be continued

その時世界で起こっていたこと（後書き）

全ての物語、その重みを全てぶつける。
これからすべてを逃がそうとして、彼はあんなことをしてきたんですね。

ここで「蓋」に関しての説明を少ししておきましょう。

簡単な説明は「なのはＳｔＳ」の話で触れましたけど・・・・

本当の彼は、人見知りで、怖がりで、自信などない人物です。

しかし、それではいけないとして無理矢理強い自分像を作り出し、それを「本心」にかぶせてこれまであったような人物としてふるまってきました。

「死の理解」といったものも、この「蓋」を構築してくみ込まれた思考の一つです。
これは意図してではなく、ある日ふと考えたら至ってしまったものですね。

この「蓋」は彼の・・・どうしよう、中学生くらいにしよう（オイ）、その時に作り出し、それ以来練り込みを繰り返して作り出してきた強固なモノです。

そして今回は、新たに即興の「蓋」を作り出して悪役となりました。更に世界からの衝撃にも、蓋を何層かにして耐えようとしていましたね。すべて砕けましたが。

本来の「蓋」は砕けてません。
これは蒔風自身が、おそらくは蓋を何層重ねても耐えられるとは思っていなかったからです。

だからこの「蓋」は耐えるのには使わなかったんですね。

即興で作ったものは簡単に砕けるか、消えてしまいます。
だから途中で揺らいだことが何度かありましたね。

その「蓋」に、理想のヒーローを描いてきたんです。

さて、しかしこのままどうなるのか。

その「本心」にまで「重み」がブチ込まれ。心が疲弊した蒔風は大丈夫なのか。

そして、アリスを呼んだ声は誰だったのか・・・・・

先にいっときますが、「奴」ではないです。

今回の事件も、大元は「奴」によるものでしたね。

身体が消し去られても、彼に立ちはだかるのかｗｗｗｗ

おのれ「奴（マイカゼ）」エぇぇえええええええ！！！

おっとネタばれｗｗｗ
でもここまで読んだ人はわかっているから問題ないよね！！！

次回、蒔風の容体、管理者の行方。

そして、今章での第二の事件とは・・・・・・？

ではまた次回！！

不日常

「ＥＡＲＴＨ」本部医務室の奥
そこにある隔離された部屋。壁に大きなガラスがはめ込まれ、そこから中がうかがえる。

そのベッドの上で、蒔風があれから一週間たった今でも眠り続けていた。

「舜・・・」

それを見て、廊下からガラスに手を当てているのは星だ。
その廊下にある長椅子では、なのはがすうすうと寝息を立てて眠っていた。

おそらく、ずっと起きていたのだろう。その目の下には隈ができている。

その長椅子の先には、彼女から離れて理樹が座っている。

アリスから事の顛末は聞いたが、実際に彼の口からは何も聞いていないのだ。
それに、今の蒔風ではもしかしたら暴れ出すかもしれない。
翼人が常に一人はここにいる状態を維持している。

「なぜ・・・目覚めないのか・・・・」

「・・・僕が経験してきたことは・・・素晴らしいことだったけど、その分大変なこと、酷いこともあった。それを乗り越えるだけでも必死だったのを、まとめて一発で、しかもそれを３０以上も叩き込まれたんだ・・・・当然と言えば当然だ」

そう、そんな衝撃では心が潰れ、容易に死に至るだろう。

こうして生きているだけでもおかしいのだ。

（アリスさんの言っていた「心の蓋」・・・舜を人から外れさせたそれが、こうして舜が死なずに済んでいる要因だったのかもしれないと考えると・・・・皮肉だよ・・・・）

――――――

そしてなにも起きず、不気味なほど静かな日常が続いていた。

まるで二人が、この世界を荒らしていた要因だと言わんばかりに。

「アリスさんとの連絡は取れずじまい、か・・・・・・」

「舜さんがあんなことになってしまって・・・・もしかしたら責任感じてるのかも・・・・」

指令室モニターの前で、一刀と観鈴がのんびりと飲み物を飲みながら話す。

なにもないとはいえ、一応何かが起こってはいないかこうして見ているのだが・・・やはり何もないものはない。

無論、事件自体は起こっているのだが、「ＥＡＲＴＨ」が取り扱うほどの大きなものはない。
その全ては警察や様々な組織で受け持っているようなもので、「ＥＡＲＴＨ」からも数名が派遣されている。

「静か・・・だね」
「ああ・・・寂しいな」

虚無感は消えない。

ーーー

「いえ・・・筋肉はそんなに・・・・・」

「く・・・この女顔野郎!!絶対今度ぶちのめしてやっからな!!」

「なにか・・・・言ったかい?」（ニコォ・・・・・・）

「いっ!?・・・・・・す、すみませんでした・・・・・・」

「はぁ・・・・・・」

「でも理樹のおかげであっちも油断してたから助かったよ。凄く似合ってたねあの・・・・・」

「言わないで!!!」

「え?でも可愛かったよ?」

「あーあーあー!!きこえないーーーい!!!」

そんなこんなで暇なため、いろんな事件に手助けをしている「ＥＡＲＴＨ」メンバーだが、フェイト達のように「ＥＡＲＴＨ」登録とは別に所属している（と、いうか本来「ＥＡＲＴＨ」の方がついでみたいなものなんだが）者は、当然そちらの仕事もある。
それで理樹たちや一刀以下の武将たちはそちらをたまに手伝っているのだ。

「本当に・・・・大きな事は何も起こらないな・・・・」

「ううん・・・そ、そうだね・・・・全部・・・舜が背負ったからなのかな・・・・？」

――――――

そんなある日

「次元震？」

「いや、実際には次元空間でのものではないから・・・・時「空」震って言ったほうがいいのかもしれへん」

次元空間でもなく、世界そのものでもない、全くの別空間からの振動が計測されたそうだ。

とはいっても非常に微弱なもので、どこからなのかもわからないものだ。

たとえるのなら（たとえること自体難しいのだが）海の浸透を図っ

ている振動計が、水族館のプールの波を観測したようなものだ。

ようはなんでこんなもの計測したのか、わからないのだ。

そんな計測データを見ながら、はやてと理樹が頭を捻っていた。

「だけど、どこかで何かが起こっているのは確かみたいだね」

「舜君なら何か分かっとるかもしれへんけど・・・・あんなんやからなぁ・・・」

結局、なにもわからずに時間が過ぎていき・・・・・・

その時は突如としてやってきた

ーーー

「う・・か、一刀さん・・・理樹・・・さん・・・・・」

「どうしたんですか！！一体今まで何を・・・・・」

「みなさんを巻き込みたくはなかった・・・・ですが・・・・もう私では・・・・四人も相手では・・・・この世界が・・・・！！！」

「一体何と戦ってたんです！！！誰と・・・なにが！！！」

「あの方たちが勝っては・・・・・この世界は・・・」

ドォン！！ドォン、ドォン！！！！！！！！！

『”ｎｏ　Ｎａｍｅ”よ。出てこい。我々は決めねばならない！！！』

『世界の住人に助けを求めるとは・・・』

『それでも管理者か！！！』

と、そのとき、「ＥＡＲＴＨ」ビルを爆破による衝撃が襲い、更には空間を響くような声が聞こえてきた。

その声に応じて、理樹と一刀が外に飛び出す。

ほかのビルにいたメンバーは、すでに外にいた。

その全員が空を見上げている。

そこに、強大なる敵がいた。

to be continued

不日常（後書き）

短い・・・
タイトルの「不日常」とは、なにも起こることなく、そして何かが欠けている、という事です。

今回また起こった事件・・・

これはかなり短いです。
下手をすると、後三話か二話で終わってしまうかも・・・・

ち・・・違うんや！！第一章が長すぎたんや！！

決して二章が短いという事ではあらへん！！！

でもこれだと四章で１０００はさすがに無理かなぁ・・・・

次回、今回の敵「世界」

ではまた次回！！！

予測感想が・・・今から怖いっ！！

終末への戦い～管理者の戦～

「ＥＡＲＴＨ」本部ビル

そこから外に飛び出した理樹や一刀、メンバーたちが見たのは、上空に立つ巨大な人物たちだった。

「あの人たちは・・・・」

「最終決戦の時に見た人たち・・・だよね？たしか・・・・」

『我が名は・・・・“ライクル”』

『“輝志”』

『“フォルス”』

『・・・・“ＬＯＮＤ”』

『此度の事件で、我らは知った。やはり最主要がこれほどの数、一つの世界にいることは不可能だった』

『混ざった世界は危険すぎる』

『管理者を一人に統一しなければならない』

『そこで、その女は逃げだしたのだ。出せ』

と、上空にいる各世界区分の管理者たちは一方的にアリスを出せと言ってきた。

が、そんなことを言われても「はいそうですか」と言って出すわけにもいかない。

統一するとはどういうことなのか。

何故アリスはこんなにも傷ついているのか。

それを知らないうちには、どうすることもできないのだ。

『・・・・返答はどうした』

『黙ってないで、早く出してこい』

しかし、それを聞く前にもこうして彼らは催促してきている。

いったい何のつもりなのか彼らには、こちらの話を最初から聞く気などないようにも見えた。

「待ってください！！彼女は怪我をしています！！そんな彼女を・・・」

『知るか。出せ』

「そんなことはできない！！！」

『ほう・・・貴様、まさかこの私に逆らうか？』

「なに？」

『直枝理樹。お前の世界の構成はほとんどが“輝志”で成り立っていたな』

「・・・・・らしいね」

『私はその管理者だぞ』

「だから僕よりも・・・・上だって言うのか？」

『貴様が生き残ったあの奇蹟は、私によるものでもあるのだぞ？』

「お前・・・・・！！！」

『ふむ・・・勘違いしているようだから言っておきましょう。私たちは別に、お願いをしているのではないです。私たちは、命じてい

るんですよ。わかっていますか?』

『我々は各構成を管理するもの・・・・お前らのその力、奇蹟、技術、混沌、日常は・・・・全て我らが与えたようなものだ』

「調子に乗るのもいい加減にしなさい!!!!!」

「アリスさん!?」

「だめだ!!あいつらあなたを・・・・」

そういって中に戻そうとする理樹たちを手で制して、ヨロヨロと出てきながらも姿勢だけは真っ直ぐにして、アリスが四人を見上げて言った。

「我々は「管理」するだけです!!その管理されたものをどう使うかは、彼らの力です!!!」

『またそれか・・・・』

『何度でもいうが、それは違う。我々が管理しているのだ。我々が与えたと言っても、間違いではあるまい？』

「それは傲慢です・・・我々はあくまでも「管理者」ですよ！！？神にでもなったつもりですか！！！！」

『そうだな』

「なっ・・・・・」

『我らはいわば、神だ。貴様が異端なのだよ、“Ｎｏ　ｎａｍｅ”』

『我らと同じ立場にいながらも、そちら側を好み、そちら側に属する者よ』

『来い！我々は決めねばなるまい！！世界を統一する管理・・・否、

神を決めるのだ！！皆で決めたことだろうが！！！』

「そのようなことは多数決で決めることではないでしょう！！！あなたたちは・・・ただ世界を自分の手中に収めていい気になりたいだけだ！！！」

『そうして世界に関わっている貴様も同じではないのか？“Ｎａｍｅ”』

「ッッ・・・・・」

『下手に関わろうとするから、世界は揺れる。内心、お前も思っていただろう』

「ち・・ちが・・・私は・・・・・」

『「ｔｈｅ　ｄａｙｓ」の最主要を駆り出し、戦いに行かせたのはお前だろうが。いまさらそんな善人ぶったことを言ってるんじゃない』

『自分は何もせず、ただ上に立つだけ。いる場所が変わっただけで・・・貴様は我々と所詮は変わらぬよ』

『我ら五人で、最も先に生まれ・・・・そして最も罪深き“Ｎａｍｅ”・・・・最初に消えるのは貴様だ！！！』

「！！！マズイ！！！」

「理樹！！！」

「わかってるよ！！！」

ゴォン！！！バリィ！！！！

叫んだ瞬間、理樹が巨大なバリアを張って“フォルス”の巨大な拳を受け止めた。

しかし、やはりなんと力強いのか。
その振動から、「ＥＡＲＴＨ」ビルの窓ガラスは割れたものの、バリアは少し振動しただけで一切退くことはなかった。

『む？逆らうか？』

「アリスさんは・・・・確かに罪を背負っているかもしれない！！でも・・・・・！！！」

「罪を背負おうともせず、ただ君臨することだけを考えているあんたたちよりもマシだ！！」

「そうだ！！」

「この人は一緒に生きるって言ったんだ！！」

「お前らみたいな勝手にやってろな奴なんかごめんだ！！！」

理樹と一刀の言葉に、皆が続く。

その声を実に鬱陶しそうに聞く四人の管理者たちだが、その顔からは嘲笑が消えない。

『ふう・・・まさかあなたたち・・・・私たちに勝とうとでも?』

「アリスさんの敵なら・・・僕らの敵だ!!」

『まさか戦いになるとでも思っていたのか・・・・愚かな』

瞬間

「え?そんな!!!」

「うっそだろ・・・・」

理樹のバリアが消えた。
“フォルス”の拳が障害物がなくなって、突っ込んできた。

「うおぁ！！！」

「わぁあああああ！！！！」

その攻撃を、アリスを抱えて回避する理樹と一刀だが、その顔は驚愕に満ちていた。

何もしていないのに、「薄緑」たる理樹のバリアが消えた・・・・？

消されたという感覚はない。
壊されたという感覚もない。

そうまるでその感覚は

こちらから消してしまったかのような・・・そんな感じがした。

『貴様の世界の大半は“輝志”で構成されていた。貴様自身も、“輝志”なのだ。それを管理すれば・・・その力、どうにでもできるわ』

「テメェ・・・・！！！！」

『北郷一刀！！貴様があの世界に行けたのは“輝志”だったか“フォルス”だったか？』

『どちらでもやれるだろう』

そう言った瞬間、一刀が展開していた何本もの剣が消えた。

そうして、見えない力に押しつぶされる。
見ると、理樹も同じようにへばりついている。

まさか・・・こんな・・・・・！！！
まるで存在を抑え込まれたかのようなことをされるだなんて・・・・・
！！！

「バルディッシュ！！！」

『そのデバイスは完璧な“ライクル”だなぁ？』

ブシュゥゥゥゥ・・・・・

「え？きゃぁっ！！！！」

《申し訳ありません、サー。展開不可です》

「そんな・・・あぐっ！！」

そうして、フェイトも抑え込まれる。

が、彼らはそれでも四人にとびかかっていった。
だが、彼らに通る攻撃など、一つたりともない。

当然だ。
“ライクル”“輝志”“フォルス”“ＬＯＮＤ”

このどれにも属さないとなれば、それは世界構築“Ｎｏ　ｎａｍｅ”１００％の世界だ。

そんな世界に、彼らと戦うだけの力があるとでもいうのだろうか？

「み・・みな・・・さん！！！」

「ひるむな！！」

「こいつらに・・・世界は渡せない！！！」

『鬱陶しいな・・・・わざわざ封じずとも、貴様らなんぞ・・・・・・！？』

と、そこで“フォルス”が背後に迫る巨大な力に振り替える。
“フォルス”は腕を振るい、飛びかかってくるメンバーをまるで蠅を払うかのように落そうとしていた。
その背後から首を狙って、漆黒の翼をはためかせたクラウドが飛び切り掛かっていたのだ。

『チッ・・・この・・・』

『面倒だ。まとめて終われ』

ズシッッ!!!!

「オゴッ!?」

「う・・・あ・・・!!」

「い・・・・そんな・・・これは・・・・・」

『お前らが立ち向かってきた「何か」・・・それはすなわち、全て我が“ＬＯＮＤ”に通ずる。そうして「立ち向かう力」を持つ以上、貴様らの世界には必ず“ＬＯＮＤ”がある。オレに逆らえると思うなよ?』

そうして、“ＬＯＮＤ”によって彼らがまとめて押しつぶされる。

なにも出来ずにだ。

彼らは何もできず、管理者に手も触れずに倒れされた。

『管理者の話に、お前らが口を出すんじゃない』

『ふん・・・まあこれで邪魔も入らん。さあ、管理者で決めようか』

『その点に関しては感謝するぞ、”ＬＯＮＤ”』

『・・・・・・・』

そうして、四人がアリスに迫る。

それを見て、数名の人影が「ＥＡＲＴＨ」の中に走って行った。

向かう先は、ただ一つ。

この状況を打破しうる、最も適任で、最も傷ついた人間の元へと。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

終末への戦い～管理者の戦～（後書き）

さて、今回の敵は四人の管理者ですね。

四人に攻撃そのものは普通に通ります。
しかし、彼らがそう念ずるだけで、そこに属した者はすべからず無力化される、という者でして・・・

こらそこ、深く考えないで！！！

考えたら負けや・・・

こまけェコタァいいんだよ！！！

すみません、取り乱しました・・・・

しかし、今回で全員が無力化。
戦えるのは、あの男のみ。

それを呼びに行ったのは無論、同じく”ｎｏ　Ｎａｍｅ”１００％
のあの子たち・・・流石に全員じゃないですけどｗｗ

次回、銀白、最期の戦い

善と為り、悪と為り、どちらに属すること無き主人公の行く末は・・
・・

ではまた次回

終末への戦い～立ち上がる者～（前書き）

後に――――――

「管理者大戦」と呼ばれた戦い。

実質、その決着をつけたのは一人の翼人。

その者の、最期の戦いを――――――

ここに記す。

薄緑の翼・直枝理樹

蒼青の翼・北郷一刀　連名

終末への戦い～立ち上がる者～

『さぁて・・・まず一人、確実に消さねばならない奴を消しておこうか』

『”ｎｏ　Ｎａｍｅ”・・・・貴様がいては、多大な障害だから・・・』

だから、最初に彼女が狙われた。
理由は簡単だ。

『あっちもやっておこうか？』

『それが一番だな。我らでやろうか』

ドドドンッ！！！！

”フォルス”の拳と”ライクル”の砲撃がアリスに放たれ
”ＬＯＮＤ”の波動と”輝志”の掌底波が「ＥＡＲＴＨ」ビルにブチ込まれた。

「クッ・・・アぁッ！！！」

それをバリアで防ぐアリスだが、すでに疲弊しているために弾かれ、地面に倒れ込んでしまう。

うつ伏せに倒れ、「ＥＡＲＴＨ」ビルを見るアリス。

攻撃を叩き込まれた箇所

そこは・・・・

ガラリと崩れ、穴の空いたビル。
せっかく直したのに、また壊された。

その穴を見て、痛快そうに笑う”フォルス”に”ライクル”

しかし――――――――――

カァッ・・・・ボウッッッ！！！！

「！！！？」

『む？』

『なに？』

その土煙が内側から光り、そこから砲撃が撃ち出されてきた。
それを回避する”フォルス”と”ライクル”

その砲撃を見て、アリスに迫った”ＬＯＮＤ”と”輝志”も目を向けた。

そこで煙がだんだんと晴れ、その中心に、一人の男が立っていた。

その男は、こなたとかがみに肩を支えられ、息を荒く吐きながら、腕を伸ばして睨みつけていた。

左腕は無い。
そこにプラスチックのカバーのようなものが掛けられていた。

見るからに元気がなく、覇気もなく、しかし、ある感情のみが彼を目覚めさせ、立ち上がらせた。

「最初に・・・・自分の世界を奪われて・・・・・・」

そこから一歩、男が踏みだす。

「世界を取り戻しても・・・・次に仲間を危険にさらされ・・・・
奪われかけ・・・・・」

ビルの穴から二人と一緒に飛び降りて、地面にふわりと着地した。

「そして・・・また、奪うのか」

こなたとかがみを脇に避難させ、蒔風が「風」を抜きながら上空の四人を睨みつけた。

「もぅ・・・・させん・・・・・」

その立ち姿は力強く――――――

「何一つとして奪わせない。失うのはもう・・・嫌なんだ・・・・！！！！！」

そして、その自らの力で砕けてしまうのではないかというほどに、儚げだった。

『・・・は・・・・誰かと思えば！！瀕死の英雄君じゃないか！』

『貴様は先の戦いで片腕を失っている。安定させてくれたことは感謝するが・・・今は邪魔だ』

蒔風を見て、一瞬はたじろいだものの、管理者たちが蒔風を指さして笑った。

だが、そんな言葉など無視して蒔風が剣を振りかぶる。

「風」を右腕に握り、左側にまで振りかぶって――剣の峰が後首に当たるまで振りかぶった。

そんなところで何をやっているのだ。

管理者たちが嗤う。

指を指す。

そして、”フォルス”の指の先がなくなった。

『は？』

『な！？』

そして直後、”フォルス”の視界が上下でわかれ、左右にずれた。

『な・・・ガアアあああああ！！？？』

「腕がなくなった・・・・ね」

目から上を失った”フォルス”の肩に、蒔風が立っていた。

ボシュゥ・・・・！！！！

そしてその”フォルス”の体が、粒子に散って消えた。
粒子が宙に少し留まり、それが残った四人の管理者へと流れていく。

『バカな・・・・バカな！！！その力は・・・・・・そもそもお前！
！なぜ抑制しな・・・・』

ザシッ！！！

『ォご・・・・ブハッ！！！！』

そして、粒子が流れるよりも前に、次に”輝志”が消された。
股の下から、脳天にまで縦割り一閃。

しかし、蒔風の姿はすでに彼の頭上におり直後、逃げ出した”ライクル”を銀白の翼で追って行っていた。

『は、話が違う・・・この男はお前なら押さえつけられると・・・・・
う・・・うわぁぁあああああああああああああああ！！！』

ドンッ！！ザグッッ、バァアアア・・・・・

と、そうして”ライクル”も粒子と消えて、残った管理者へと流れていく。

「腕がなくなった分・・・速くなったと・・・・」

ブォッ!!

「思わない・・・かい!?」

ガァン!!!!

『・・・・・思惑通り』

「なに？」

が、そこでこの快進撃は止まる。
蒔風が次の標的にと、”ＬＯＮＤ”に斬りかかったが、腕でそれを防がれ、刃は全く通らなかった。

『バカな奴らだ・・・デカけりゃ勝てると言ったらほんとにずっとでかく居やがる』

ブシュぅゥゥゥウウウうううう・・・・・

「こいつ相手にデカイだけじゃいい的だ。全員そろってバカばっか・・・罪を知らなきゃダマシも知らない、愚か者どもめ」

「？・・・・！！！」

そうして、”ＬＯＮＤ”の身体が縮み、蒔風と同じ大きさまでになる。

「だが考えたな。倒された管理者の力がほかの管理者に流れる前に倒せば・・・確かに、翼人にとってはたいしたことはない。まあだが、遅かったねェ」

「・・・くそ」

「すでに力は流れた。三人の力のうちの半分は我が手中。半分は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”に流れたが・・・あの身体では戦えまい。ま、そうなるようにあらかじめ潰したんだがな」

「お前・・・なんのつもりなんだ・・・・一体何なんだ・・・・」

「管理者”ＬＯＮＤ”、それ以上ではない・・・・今は、な」

「なに！？」

ドゴォ！！！！

”ＬＯＮＤ”の拳が蒔風の腹部にめり込み、身体がくの字になって蒔風が吹き飛んだ。
バランスの取れない蒔風はうまく着地することもできず、両足を地面につけてもまた倒れて勢いが殺せずに吹き飛ぶ。

「お・・・ぐ・・・」

「さて・・・吸収終了。後は”ｎｏ　Ｎａｍｅ”を倒しその力をすべて取り込めば、俺は五つの構成要素を持つ絶対なる管理者になれる。そうすれば・・・」

ほしいモノを手に入れた、と言わんばかりに自分の目の前で両拳を

握りしめる”ＬＯＮＤ”

抉れた地面に倒れ込み、ぐったりとした蒔風にアリスがヨロヨロと駆け寄る。

「大丈夫ですか！！どうしてまたあなたは・・・・」

「出てくるつもりなんてなかった・・・・んだがな・・・聞こえたんだ。あいつらの声が」

「え？」

「涙ながらに、こなたたちが・・・な。立ち上がってって・・・言いたくもないような言葉を、涙ながらに叫んで言ったんだ」

そう、蒔風が目覚めたのは、なにより彼を求めるその声だった。

１００％”ｎｏ　Ｎａｍｅ”であった世界。

そこにいた彼女らは、どの管理者からの干渉も受けずに動くことができた。

しかし、彼女らには何もできない。
戦う事など、できないのだ。

だから、彼に頼るしかなかった。

自分たちと同じように”ｎｏ　Ｎａｍｅ”出身で、それでいて戦える彼に。

彼女たちも、そうはしたくなかった。

こんなにも疲弊し、いまだに眠り続けていた彼を、また戦いに駆り出すことなどできない。

最初こそ彼の元まで走った彼女らは、彼を目の前にしてなにも声が出なくなった。

この方法を思いつきはした。
しかし、実際に彼を目の前にして、そんなこと言えるはずもなかったのだ。

だが、それでも蒔風は「言った」という。

言葉にできなかったそれを、聞いたというのだ。

しかしそれも当然だ。

彼は「銀白の翼人」
たとえ眠っていても感じとり、口に出さなくても分かったからだ。

それほどに大きな「願い」だったからだ。

た・す・け・て

たったその四文字に込められた、シンプルな大きな願い。

それを見逃せるはずはあろうか。

言葉にできなかったその「願い」は、出さなかったからこそ押し込まれ、そして強大な力として彼を呼び醒ましたのだった。

だが

「しょうもねーな・・・こんな体じゃあ・・・勝てもしない・・・」

「私が・・・私が・・・・！！！」

「やめとけアリス・・・四人の攻撃に逃げ惑って、あんたは戦える状態じゃない。ここは・・・」

ぐっ・・・グッ・・・・・

「この世界の・・・主人公に・・・・任せてくれや・・・・」

彼が立ち上がる。

そう、それは騎士のようであった。

後ろ（せなか）に居るのは、アリスだけではない。

彼の背中に背負われているのは、この世界だった。

事実、一度は背負ったのだ。

彼は、それを守らねばならない。

心が摩耗した

身体がボロボロ

片腕がない
敵が強大
仲間はやられて動けない

関係などあるものか

守りたいものがある
敵がいる

そして、立ち上がるだけの力がある

それ以外に理由などない。

彼の理念は、ここまでも、今までも、これからも

何一つとして変わらない。

「救える者は、根こそぎ救う・・・・・」

それは、味方も、敵も、世界ですらも

それは、絶望、地獄、虚構から

たとえ応じてくれようとも、たとえ応じてくれなくとも

どんな状況であろうとも、彼はいつだって立ち上がってきた。

いくらでも立ち上がろう。

そこに、希望を持つ者がいる限り。

「さあ・・・行くぜ・・・明日の自分に・・・しっかり顔向けできるようにな・・・・・・！！」

to be continued

終末への戦い～立ち上がる者～（後書き）

はいきました！復活です！！

ですが、状況は厳しいです。

いくら彼でも、戦いの場に持ち込む程度でおそらく勝つことは難しいでしょう。

だが・・・それでも・・・

彼はどんなことをしてでも、勝つでしょうね

あと最初の文章でなぜあの二人なのかは、また後々に

次回、蒔風は戦う。しかし相手は強大だった。

しかしそれでも、それでもまだ・・・・・

ではまた次回

終末への戦い～総てを賭して、立ち上がる者～（前書き）

後半の復活ＢＧＭは「ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ」です。

終末への戦い～総てを賭して、立ち上がる者～

メゴッッ！！！

「ゲ・・・ハァっ！！！！！」

ドォン！！！

“ＬＯＮＤ”の蹴りに、蒔風の体が吹き飛ぶ。
だが、それでもヨロリと立ち上がって再び斬り掛かっていく蒔風。

「風林」による斬撃を、硬質化でもしているのかその腕で受け止めて、即座に反撃してくる“ＬＯＮＤ”

無論、蒔風の攻撃だって入ってはいるし効いてもいる。

だが、あまりにも蒔風へのダメージが多く、そして相手の回復が早い。

決して再生ではない分確実にダメージは蓄積されているのだろうが、いったいどれほどしか効いていないのだろうか。

そうして、首をゴキゴキと鳴らして蒔風を弾き飛ばした“ＬＯＮＤ”が、アリスへと歩み寄る。

が、その足が三歩も進まないうちに再び蒔風が掴みかかってその身体を投げ飛ばした。

それ自体は難なく着地する“ＬＯＮＤ”だが、体制を整えて前を向いた瞬間に蒔風の拳が顔面に突き刺さった。
さらには腹部に膝蹴り、一回転しながらの後頭部にエルボー、足払いをして、宙に浮いたその体を蹴り飛ばす。

「オオオオオオッッ！！！」

その吹き飛んだ“ＬＯＮＤ”目掛けて、蒔風が「天地」を握りしめ

て突進した。
腰に構え、体重がすべて乗るようにして、確実にその身体を貫こうと。

ゴッ、ガァッ！！！！

そして“ＬＯＮＤ”の着地地点で、爆発とも思えるような土煙を上げて蒔風が到達した。

おそらくは最初にメンバーが総攻撃した時にひっくり返ってきたのだろう。そこには一台の車がひっくり返っており、蒔風の突進は“ＬＯＮＤ”をそこに張り付けるかのように突っ込んで行っていた。

しかし

「ッッ・・・・・」

「また距離が空いた・・・やめてくれないか。そういうの」

その切っ先を、“ＬＯＮＤ”が指先で抓むようにして止めていた。

それでも押し込もうと力が込められて剣が振るえるが、せいぜいそれで“ＬＯＮＤ”の指が一緒に振るえるだけだ。

ドォン！！！

直後、“ＬＯＮＤ”が背にしている車が爆発して二人が炎に包まれた。

轟音と共にあたりが炎に包まれ、二人の姿が消える。

だが、すぐにその姿は現れてきた。

炎の中から、二人の影。

一人が一人の頭を掴み、ぶらぶらと持ち上げながら炎の中から出てたのだ。

そうして出てきた“ＬＯＮＤ”が、力なくそこにある蒔風の体を放り投げて一瞥した。

「よくもそこまで食い下がった。さすがだな。「奴」とあれだけ戦ったことだけはある・・・フンッッ！！！！」

「ゲッブッッ・・・オゴッ・・・・・ッハ・・・ゴ、ふ・・・・・・・・」

“ＬＯＮＤ”の拳が地面に倒れる蒔風の鳩尾にめり込み、彼を中心としたクレーターを作り出した。

蒔風の肺から空気が押し出され、口からは空気と一緒に音が漏れてきた。

それはただ単に喉を通って来た際の呼吸音なのか、それとも痛みからくる呻きなのかはわからない。

一撃で沈めた。

攻撃――否、全ての力はすでに、蒔風を越えている。

蒔風は確かに疲弊してはいるが、体力自体は万全なのだ。

なにせ、さっきまでようは寝ていたのだから。

それを潰し、一撃で止めた。

今、管理者“ＬＯＮＤ”以上の力を持つ者はいない。

唯一そうであろうアリスも、体がぼろぼろで戦うことなどできない。

そして、瓦礫に寄りかかり崩れる蒔風の足元に、“ＬＯＮＤ”が立って言葉をつづけた。

「だがまあそれまでだろうよ。そこで見ていろ。やっと成就する・・・俺がこの世界を管理する。そのためにここまでやってきた・・・長かったぜ・・・俺が唯一の神の者になる！！！絶対なる存在に・・・楽しみだぜ・・・・どんな世界が出来るかなぁ！！！」

「あなたは・・・そのつもりで・・・！？」

その言葉を聞いて、アリスが驚愕する。

この管理者は――――この男は、最初からこのつもりだった。

世界を自分のものにする。

思い通りの箱庭を得ようとしたのだ。

だから、世界が安定してすぐに、ほかの三人を唆して一番の障害になるであろうアリスを襲った。

一番の懸念である蒔風は目覚めないから大丈夫だし、いざとなれば自分が抑え込めるから、と言い包めて。

ほかの三人はそれを信じた。

彼らは悪くはない。ただ、愚かだったのだ。

管理ばかりし、その重みを知らなかった。背負うことを知らなかった。

そのことがどれだけ大事か、わかっていなかったのだ。

そうしたことを知らない彼らは当然「罪」を知ることがなく、そして、免疫がないために騙されて利用され、簡単に彼に染まった。

結局、わかっていたのは二人の管理者だけだった。

日常の“Ｎｏ　ｎａｍｅ”
非日常の“ＬＯＮＤ”

両極端にありながら、二人は同じことをしっかりと理解していた。

「それ」は背負うべきものである、と

だが、そこから進んだ道は今こうして、はっきりと違えている。

「そのためにここまでやった！！あの男はもう立てん・・・いいぞ・・・世界をオレのモノにィィィいいいいいいいいい！！！！」

拳を握り、空を見上げ、“ＬＯＮＤ”が高らかに叫んだ。

それを聞いたアリスは、立ち上がろうとしたが膝が崩れた。

無理もない。ここに来るまで四人の管理者に追い立てられ、ボロボロになったところを駆けこんできたのだ。

それでも“ＬＯＮＤ”の前の立つものアリスだが、二、三撃で弾き飛ばされて地面に崩れこむアリス。

その服の端がすでに粒子となって消えている。

まだ“ＬＯＮＤ”には流れていないが、このままでは・・・

「死期が近いぞ？“Ｎｏ　ｎａｍｅ”・・・お前のヒーロー様はもう来ない」

「・・・く・・・・・！・・・そう・・・ですか・・」

「諦めたか？」

「・・・・・私は・・・今まで何を見て来たのでしょうね・・・・・そして、あなたも」

「なに？」

アリスの言葉。
最初は諦めかと思ったが、そうではなかった。

彼女の言葉が続く。
その視線は“ＬＯＮＤ”の真後ろに

「あの人は、私が何も言わなくても立ち上がっていましたよ。力を与える前から、「奴」に面と向かって啖呵を切って。彼を支えるのは、力でも、死の理解からくる無恐怖でもありません」

「「がんばって！！！！」」

ドンッッ！！！！！

と、そこでこなたとかがみの声がした。

そしてそれに呼応するように、黄金の粒子に覆われた銀白の翼が、まるで地面から生えたかのように、倒れている蒔風の背中から大きく開かれ、あたりを照らして眩いた。

そろそろ夕方に近づく。

しかし、いまだに二つの輝きが地上を照らして、その中心にいる主人公が立ち上がった。

黄金の輝きは粒子となって周囲を覆うように浮き上がり、空を照らす太陽のように輝いて

銀白の羽根は雪のようにハラハラと舞い、闇夜を照らす月のように輝いていた

「な・・・んだと・・・・・」

「我々は解ってなどいませんよ、“ＬＯＮＤ”。私がいまだわかりきってもいないのに、あなたがわかりきったような口を利かないでください」

男が起つ。

翼は銀白、想いは希望

敵は、今までだって何度も打倒してきたもの。

「彼は、そこに救えるものがいる限り、何度だって立ち上がってくるのです・・・我々が止められるようなものではありません・・・・！！！！」

「お前の管理するそれは・・・・なるほど、確かに強大だ・・・・だがな・・・主人公(おれたち)はそれに立ち向かって打ち勝ってきた・・・・・」

バッ!!!

「一度敗れた相手には、決して二度と負けない・・・・・・それが・・・・」

――それが、主人公だ――

今この場のすべて者。

その者の願いを一身に受け。

銀白、最期の、そして、宿命の戦いへと足を踏み入れた。

to be continued

終末への戦い～総てを賭して、立ち上がる者～（後書き）

一度は倒れた彼ですが、ここにもう一度立ち上がることができました。

”ＬＯＮＤ”は強大です。

しかし、彼にはそれを超えるだけの力を得ることができます。

次回、想いと共に・・・・――――

ではまた次回

果てなき希望（前書き）

今回の戦闘ＢＧＭは、平原綾香の「ｊｕｐｉｔｅｒ」です。
歌詞が彼にぴったりかなぁ・・・と思いました。歌詞は女性になってるけど。

果てなき希望

“ＬＯＮＤ”がアリスに向かって歩む。

蒔風は、軋む体を起こそうと地面にめり込んだ体を起こそうとするが、地面から外しただけで立ち上がれなかった。

仰向けになって、首を倒して見ていることしかできない。

拳を握る。足を踏ん張ろうと足の裏を地面につける。

しかし、もはや立てない。

体力はあるというのに、身体が立ち上がってくれないのだ。

“ＬＯＮＤ”の攻撃は無造作で、それでいて確実に蒔風の体を確実に破壊していた。

ようはエンジンが破壊された車だ。

体力（ガソリン）はあっても、身体（エンジン）が潰されているようなもの。

だが、それでもまだ、彼は立つ術を持っていた。

「舜君！！！」

「舜！！あんた・・・大丈夫！？」

こなたとががみが駆け寄ってきてその手を取った。

だが、蒔風の身体はあの儚さとは裏腹にかなり重く感じられた。

「おーい・・・・聞こえ・・・てるか？」

と、そこで蒔風が口から声を漏らした。

それを聞き、耳を傾ける二人。

「聞こえてるよ！」

「そ・・・・っか・・・・なあ・・・オレ今スゲー疲れててさ・・・・立てないみたいなんだ・・・・」

「う・・・・・うん・・・・」

「だから・・・・・「がんばれ」って・・・・・言ってくんねぇかな

？」

「それは・・・・」

「頼むよ・・・・」

一瞬、口ごもるこなた。
その一言で彼は確かに頑張れるだろう。

立ち上がってゆくだろう。

立ち上がって行ってしまうだろう。

もうこれ以上はダメだった。

どう見ても、彼は戦える人間の体をしていない。

でも

「また・・・取りこぼすのは嫌なんだ・・・みんなの力が必要なんだ・・・あんなこととしといて虫がいいかもしれないけど・・・・もう・・・失うのは絶対に嫌なんだ・・・！！！」

それを聞いて、こなたとかがみは悟った。

この男は、絶対に行く。

ここで自分たちが何も言わなくても、這ってでもあの男のもとに行き、噛みついてでも立ち向かうだろう。

そんなことがわかりきるくらいに、この男の言葉には力があった。

現に今も、動こうとして少しずつそちらの方に移動している。

だったら・・・・・自分たちにできることなど、もう一つしかなかった。

「ずるいわよ・・・・何を言っても止まらないなら・・・・こう言うしかないじゃない・・・・」

「・・・・・・・・・・・・頼む」

「「がんばって!!!!」」

ゴォッ!!!!

瞬間、蒔風の足が動いた。

身体が持ち上がって、クレーターのようになった地面から、蒔風がぐらぐらと揺れながら出てきた。

そうして歩みを進めていくと、地面に押しつけられた仲間から、言葉はなくとも想いが届く。

がんばれ
負けるな!!
任せる・・・・
絶対に勝ってくれ!!
アイツを倒せ!!
守るために・・・
お前だけが頼りだ

一人すれ違うごとにその輝きが増し、黄金の粒子が噴き出して、銀白の翼が大きく開かれた。

その光景を、アリスは見ていた。

背に翼を生やし、立ち上がる者。

翼人

その姿は、神話の中の天使にも見える。

しかし、彼らは一度として「天使」と呼ばれたことがない。

思われることはあった。
あれは天使なんじゃないか、と

だが、呼ばれたことはない。

なぜか

その答えが、ここにある。

「人の想いが、俺の力だ」

彼が在るのは、神の力でではないからだ。

「願いが、心を奮い立たせる・・・！！！」

彼が立つのは、神の言葉だからではないからだ。

「世界の意志よ！！」

粒子が舞い

「星の声よ！！」

翼が輝き

「街の願いを！！」

全てが彼に凝縮され

「皆の想いを！！！」

そしてそれが、すべてを終わらす力となる。

「まだ立つのか・・・銀白ッッ！！！」

「当然だ」

「だが・・・だがな！！いくら貴様でも、その力ではコンディショ

ンを１００％にするだけで、今までを超えることはできない・・・・
忘れたか！！すでにオレの力はお前を越えて・・・・」

「ああ、そうだ。お前は俺よりも強い・・・だったらなぁ！！！」

粒子がすべて、彼に流れ込み、そしてオーラのように放ち始めた。

「皆の力を！！今こそ・・・・」

「貴様・・・正気か！？」

「！！！あなた・・・まさかそれは・・・！！」

「借りるッッ！！！」

世界をめぐる、銀白の翼

第二章

果てなき希望（ねがい）

彼の後方に、金の粒子が形作って、多くのものが浮かび上がった。

それは剣で

それは銃で

それは杖で

それは戦士たちの武器だった。

「オオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

そしてそれらが再び粒子となって彼へと流れ、彼の手元が光って武器が生成される。

その手にあるのは、バルディッシュ・アサルト。

その鎌の刃を“ＬＯＮＤ”の首元に叩きつける蒔風。
鎌の刃を“ＬＯＮＤ”は上腕で受け止めるが直後、腹部に桜色の衝撃を受けて吹き飛んで行った。

蒔風に、左腕があった。

粒子が押し固まってできたそれはうっすらと光りながらも、確かに彼の左腕として機能していた。
そしてその左腕に、もう一本の武器が握られている。

レイジングハート・エクセリオン

その二本を握りしめ、吹き飛んだ“ＬＯＮＤ”に向かって金色と桜色の魔力弾を雨のように叩き込んでいく蒔風。

が、吹き飛びながらも“ＬＯＮＤ”はそれらすべてを腕で弾き、忌々しそうに宙で反転、蒔風に向かって吠えてきた。

「その程度でぇえええ！！！舐めるナァァァッツ！！！！！」

その弾丸の雨の中を“ＬＯＮＤ”が突っ込んできた。

その手にエネルギーが溜まり、砲撃を放ってくる。

が

《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ》

蒔風の腰にベルトが現れ、その右腰を叩くとそんな機会音声が聞こえて彼の姿が消えた。

「その程度の高速で・・・逃れられると思うなよォッッ！！！」

しかし、“ＬＯＮＤ”はその動きを捉えていた。
その後ろに一瞬で回り込み、確実に借りとれる一撃。

「獲った・・・！！」

「と思うだろ？」

《ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

そして直後、再び蒔風が消えた。

クロックアップであるその世界でありながらも、さらなる加速を始めていたのだ。

「ッッ！？おオオオオオッッッ！！？？」

そして、見えない猛攻に”ＬＯＮＤ”が襲われた。

その間、十秒。

蒔風の手には、エクスカリバーと青龍偃月刀が
次の瞬間にはザンバットソードとデンガッシャーソード
そして、ましろの槌に、グラーフアイゼン

計六つの武器に斬られ潰され、”ＬＯＮＤ”の身体が地面に落ちた。

叩きつけられた”ＬＯＮＤ”は頭を振りながら立ち上がるが、その目の前に真紅のポインターが現れて、その体に狙いをすました。

”ＬＯＮＤ”はそれを掴み、逆に砕こうとするがそのポインターの奥にさらなるものを見た。

ディケイドのファイナルアタックライドの際に現れるカードがそこにあり、その奥にはリボルバーナックルを構える蒔風がいた。

直後、カードとポインターを突き抜けて、振動破砕が”ＬＯＮＤ”に叩きこまれて彼の身体が地面に更にめり込んだ。

そこに襲い来る、指先に圧縮された火球「ローゲフィンガー」それを放ちながら、「無限の剣製（アンミリテッドブレイドワークス）」で斬りつけていく。

身体を焼かれながらも、それを腕で弾いて行く”ＬＯＮＤ”だが、下がっていくといきなり背中が何かにぶつかった。

振り返ると、電流から来る磁力でまとめ上げられた鉄塊が山になっており、彼に向かって叩き込まれた。

舐めるなと言わんばかりにそれを腕で受け止めて投げ飛ばし、蒔風へと殴りかかる”ＬＯＮＤ”

しかし、彼にはすべてが見えていた。

「劫の目（アイオン）」で全ての行動を先読みした蒔風が、ス・・・、と鬼狩柳桜を差し出すように向け、そこに”ＬＯＮＤ”が突き刺さった。

痛みにうめきながら、その剣を引き抜いて蒔風を蹴り飛ばし、波動砲を放つ”ＬＯＮＤ”

が、それは彼の右手に消し去られた。

驚愕する”ＬＯＮＤ”に対し、即座に蒔風がその肩口に向かって装甲声刃（アームドセイバー）の刀身を炎で伸ばし、斬りつけた。

喰い込むだけでそれは致命傷にはならないが、そのまま蒔風がダッシュして接近、剣をタイタンソードに変化させて腹を貫く。

直後、その位置が爆発して、”ＬＯＮＤ”が吹き飛んだ。

「効くと思っているのか・・・その程度では俺はまだまだ死なんぞおッ！！！」

が、彼の言う通りその体がみるみる再生し、元通りになる。

「らしいな・・・だが・・・」

「もう・・・やめてください！！！！それ以上は・・・・！！」

「まだ、ある」

アリスが途中で口を挟むが、蒔風がさらに翼から光りを放ち、それを発動させた。

雪のような白い光が”ＬＯＮＤ”の体に巻きついて動きを封じ、手に現れた剣で斬った。

蒔風の目から光りが放たれ、爆破、斬撃された後、青白い巨人に”ＬＯＮＤ”が踏みつぶされた。

蒔風が何発も”ＬＯＮＤ”を殴りつけ、直後、それが多大な威力でぶり返してきた。

太鼓の鼓に”ＬＯＮＤ”が拘束され、手に現れた炎の剣で切り裂かれた。

周囲に巨大な武器が現れ、それで斬り裂いた後に白いリングが爆発した。

巨大な槌が手に握られ、それで叩き潰して爆破した。

全契約モンスターが現れて、そのエネルギーを叩きこんまれた蒔風がキックを放つ。

小さな召喚獣が現れ、十五天帝を握ったそれが”ＬＯＮＤ”を切り捨てた。

四つの紋章が現れ、それを通過して蒔風が蹴りは命中させた。

桜色の集束砲撃を二発分、叩き込んだ。

十万三千冊もの魔導書の魔術が発動して、”ＬＯＮＤ”を押しつぶした。

電流が流れ、巨大な鉄塊が熱線となって身体を貫いた。

手に握られ、周囲に散ったいくつもの剣で、宙に放りだした”ＬＯＮＤ”めがけて何撃も斬りつけた。

まるで時が止まったかのようになった”ＬＯＮＤ”に、光りを放つ鬼狩柳桜で地面にたたき落とした。

十五天帝を鎧のように身に纏い、”ＬＯＮＤ”に突貫して切り裂いた。

そしてその十五の刃と手に持つデンガッシャーを連動させ、細切れにまで斬りつける。

再生しつつある”ＬＯＮＤ”に、七色の魔力を身にまとった蒔風が体当たりして拳で沈めた。

此処まで行けば、誰でもわかった。

彼は、かつての世界（ワールドリンク）の奇跡すらをも再現している。

「ダメです・・・やめてください！！！そんなことをしては・・・あなた自身が！！！」

「アリスさん？」

それを見て、アリスが涙を流しながら叫んだ。
こなたとかがみがそれをみて、どうしたのかと声をかける。

「願いを一度にあんなにも・・・他人の者を使役すれば、願いがぶつかり合って彼自身が消えてしまいます！！！」

「で・・・でも、みんなのお願いは同じなんだから・・・・・」

「完璧にですか？何一つたがえることなくですか？意味は同じでも、一体どういう感情から来るのかまでも同じですか？そんなことはあり得ません・・・人の願いはどれだけ近かろうとも、決してぴったりとまでに同じにはならないのです・・・・」

「じゃ・・じゃあ・・・・・・」

「あのままでは・・・彼が!!!」

そうして、蒔風がすべての奇跡を放ち終えた。

しかし、一体どれだけの力があるのだろうか。

いまだにその体はメゴメゴと再生し、元通りに戻っていっていた。

「そこまでやって・・・貴様は消えるぞ・・・確実に消える!!貴様は・・・」

「心配すんな。気色悪い。んなことわかってるよ」

「この・・・この・・・・化物がァァアアア！！！！！」

その言葉を聞いて、慄然と立つ蒔風に向かって”ＬＯＮＤ”が突っ込んできた。
手に持った岩を、鋭利な剣に変えて突き立てて来る。

それに対し、蒔風がまるでピンポン球を避けるかのような軽い動作でバックステップをとる。

直後、”ＬＯＮＤ”をいくつもの刃が襲いかかった。

”ＬＯＮＤ”の手にした剣は容易く砕け、何十という剣、刃、様々な武器にその肉体を切り裂かれ、叩き潰され、消し飛ばされた。

蒔風の背には、蒼青の翼。

そして更には漆黒の翼を生やし、その武器すべてを以って超究武神覇斬を放つ。

その速度はクロックアップ、風足、加速開翼（ブーストオン）によって光速化しており、宙にいる”ＬＯＮＤ”はまるで無数の火の玉に殴りかかられているかのよう。

しかも、剣だけではないのだ。

拳、剣はもちろん、槌、槍、弓矢、砲撃、蹴り、炎、水、雷などの力全ても使用されている。

「お・・・・・ゴガァァァアアアアアア！！！！」

だが、その攻撃の中から、”ＬＯＮＤ”が蒔風の足をつかんだ。

攻撃がやみ、爆炎の中から”ＬＯＮＤ”が姿を現した。
その姿は、破壊された人体模型というのが正しいだろう。

皮などすべてなく、全身の筋肉繊維が見えており、所々からは骨が見えている。それどころか、骨しかない個所もあった。

その”ＬＯＮＤ”が、蒔風を地面に寝下つけて叩きつける。
それでも蒔風は一切の危なげなく着地し、更に追撃して来ようと突っ込んでくる”ＬＯＮＤ”に視線を向けた。

”ＬＯＮＤ”再生はいまだ続いており、蒔風に到達する頃には元通りにまでなって、その拳を蒔風に放った。

だが

「このバリアは、オレにも破れなかった・・・・」

「!?おグッ・・・・!!?」

その拳は、蒔風が纏っていたバリアの鎧に阻まれた。その背には薄緑の翼が。

そのバリアの前に、逆に攻撃した”ＬＯＮＤ”の拳が砕け、反動で腕が裂けていってしまっていたほどだ。

そこからなおも”ＬＯＮＤ”が殴り、蹴り、斬り、攻撃してくるがこれだけは破れなかった。

そして

ゴォウ!!!

蒔風の背中に、更に純白の翼が生え、衝撃波で”ＬＯＮＤ”を吹き飛ばした。

その威力になにもできず、弾けたように吹き飛んで地面に落ちる”ＬＯＮＤ”。

そして、蒔風が手をかざすと蒼青の翼と無限の剣製による武器が現れ、それが一斉に降り注いだ。

実に三分はそれが続いたか。

終わるころには”ＬＯＮＤ”の身体はいくつもの剣に突き刺さって、まるで磔にされているかのようにぶらりとぶら下がっていた。

「ようやく・・・神に見えてきたじゃないか」

それを見て蒔風が皮肉を言う。

「・・・のに・・・・」

が、それにちして帰ってきたのは、”ＬＯＮＤ”の苦痛の声だった。
しかしその苦痛は、今この痛みによるものではない。

「せっかくここまでやって来たのに・・・全て終わる・・・だと・・・？」

「この世界が一つになった時から・・・こんなこと考えていたのか・・・・」

「この世界・・・？ふふ・・・ふふふはははは！！！！そんなものだと思っていたのか！？オレがどれだけ時間を費やしたか！！！その程度だと思っていたのか！！！！」

「なに？」

”ＬＯＮＤ”がブチブチと身体を引き裂きながら地面に降り、ズル

ズルと再生しながら独白した。

「全てオレの計画だ!!脇役をそそのかせば、最終的にこうなることはわかっていた・・・・世界を一つにすることぐらい、誰だって考えるからなァ!!!」

「まさか・・・貴様・・・」

「長かったんだぞ!!本当に長かった・・・・素質のある脇役なんざ、どこにでもいるようなもんじゃねえからな。その人間を探して、そっ、っとささやいてやれば簡単だった・・・・あの男を見つけて、お前が戦って、世界が一つになって・・・・全て完璧だった!!!それを・・・お前が・・・全部台無しにしやがった・・・・・俺があんなにも時間を費やしたものを、貴様がァアアア!!!」

「お前が・・・「奴」を・・・・・」

「そうよ!!オレだ!!ははは!!あいつが本当に勝手に気付い

たと思ってんのか？バカが！！あんな脇役に何かができるわけねえだろうが！！全部オレのおかげだ！！！オレがお前らのストーリーを作ってやったんだよ・・・それを・・・此処に来て全部・・・全部ブチ壊しやがって――――――――――」

「このクソ野郎がぁぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

瞬間、蒔風の右手に十五天帝が握られた。

そして、もう片方の手――希望の粒子で作られた左手には、かつての彼の敵であり、そして彼自身であった者の剣が。

魔導八天

その二刀の天剣・反天剣が、”ＬＯＮＤ”の胴と腕を挟み取り、蒔風が勢いのまま上空へと飛び出して行った。

ギリギリと挟み込まれる”ＬＯＮＤ”だが、腕に力を込めてその進行を止めている。
しかし、それは確実に食い込んできており、引き裂くのも時間の問題だ。

「は・・・ははは！！それで！？オレを倒してどうする蒔風！！お前は消える・・・その力でな！！甲斐の無い話だねェ・・・皆のために立ち、それでいて自分は消えんのか！！理解者もなく、悪にも善にも染まりきらず！！実に虚しい男だ！！貴様は・・・・空っぽだ！！」

「・・・・・・・・貴様はそう思うかも・・・しれん」

「あん？」

「だがな・・そいつぁちょっと違うんじゃないか？”ＬＯＮＤ”」

「なにが・・・・」

「だったらなんでオレの胸は、今こんなにも熱く・・・・満ち足りてるんだ？」

「な・・・グォぉオオオオオオオオオオ！！！！！」

「倒させてもらうぞ、”ＬＯＮＤ”。貴様はオレたちの敵としてのそれだ・・・今まで何度も倒してきたものだ！！！！」

ザクッ

「グぅゥゥウウウウウウうう！！！！」

「そんな物を今さら相手にだなんて・・・笑えるぜ。貴様はただの的になっただけだ！！！！」

ブツンッ

「オグゥぅッッ！！！！う、腕がァァアアアアアア！！！！」

「お前は・・・俺を・・・・「マイカゼシュン」を敵に回した・・・・・」

「そんな・・・・・・・そんなぁァアアア

一瞬再生するかと思われたそれはしかし、傷口が輝きだしてすぐに崩れて消滅した。

断末魔の一つもあげず、”ＬＯＮＤ”はその場で消え去った。

「へ・・・消え際はあっさりしてやんの・・・・・・な・・・・・」

そうして、蒔風が地面に落ちていく。

翼を出す気力も体力も使い果たした。

魔導八天は手から離れ、消えた。

十五天帝は鞘に戻ってから消えた。

両腕を広げ、蒔風の身体が地面に落ちていく。

その風は、どうにも心地よい。

そうして・・・・・・

彼は、地面に着いた。

”ＬＯＮＤ”が消え、自由になった仲間によって、抱えあげられて。

to be continued

果てなき希望（後書き）

タイトル、完璧に龍騎ですね。
戦っても生き残れない・・・・

さて・・・第二章もここまで来ました。

そこ、短いとか言わない。

第一章が長かったからそう感じるだけなんや！！！
第二章が短かったわけやあらへん！！！

と、言うか・・・・

考えなしに更新して行くからこうなるんや・・・・・

今回、彼が仲間だけでなくＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫや魔導八天まで再現できたことに関して解説しましょう。

ＷＯＲＬＤ　ＬＩＮＫに関しては簡単です。
彼が途中で叫んでいた通り、彼は「世界の意志」からも願いをかき集めていたからです。

世界も、あんな男はごめんだったんでしょうねェ・・・・

そして、魔導八天。

もしかしたら、「奴」は聞いていたのかもしれません。
身体もなく、たまゆらの様に漂いながら再生していた「奴」が、今回の”ＬＯＮＤ”の言葉を。

そして・・・・・

しかし、これははっきりとは言わないでおきます。
とりあえず「これは奇跡だった」と思っておいて下さい。

全ての元凶、”ＬＯＮＤ”
彼は倒され、消えました。

「奴」にささやいていた言葉は、こいつのものだったんです。

しかしだからこそ、この物語は始まった。

”ＬＯＮＤ”とは、ある意味で全てにおいての作者なんですね。

その物語がどうなるかは敵の在り方ですし、主人公が立ちまわるために必要なモノですから（といっても、ほのぼの系には必要ないですけどね）

支配、といえばその通りです。
もしかしたら”ＬＯＮＤ”は、元はどこからの世界の「作者」だった人間なのかもしれません。

そして、蒔風。

これからどうなっていってしまうのか。

そして、彼の運命は・・・・・

全ては次回で

ではまた

♪愛をー学ぶたーめーに、孤独ーがあるーなーらー

願いをありがとう（前書き）

ＢＧＭはＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！！の「Ｂｒａｖｅ　Ｓｏｎｇ［Ｇｌｄｅｍｏ　ｖｅｒ．］」です

こっちも歌詞と雰囲気がいいので。

願いをありがとう

地面に落ち、キャッチされて地面に倒れる蒔風。

それを、仲間たちが囲んでいる。

その身体は外側から淡く光っており、さらさらと流れていっていた。

「舜君・・・大丈夫？」

「・・・大丈夫だが・・・・・アリス、あんたは何やってんだ？」

地面に仰向けに寝そべりながら、蒔風が顔を横に向けた。
その先には、蒔風に両手をかざして何かを送り込んでいるアリスがいた。

彼女が送り込んでいくもの。
それは”ＬＯＮＤ”が消滅し、その力が流れ込んできているものだ。

「・・・なにやってん？」

「このままではあなたが消えます・・・・この力さえ送り込めば・・・・！！！」

そう、蒔風の身体は今、消滅へと向かっていた。

無理もない。
あれだけの願いを同時に使い、なおかつ自分の力も使用していたのだ。

その体が今にも、粒子となって消えて行こうとしている。

しかし

「やめとけ」

蒔風がアリスの手を取って止めさせる。

「流しこんでるったって、その力全部流れてんじゃん。その力は、あんたがもらっときなさい」

そう、流しこんでいるはずなのだ。
アリスに流れ込んでくる力を、たしかに蒔風に流している。

しかし、まるでざるに水をためようとしているかのように彼からすべてこぼれ出し、またアリスに流れていってしまっていた。

「まあ・・・こんなのもあり・・・かな？」

「そんなこと・・・言わないでください！！！わたしは・・・あなたになにもできなかった・・・・・・！！！！」

「・・・・・・・・・」

その言葉を聞きながら、蒔風がゆっくりと体を起こして、立ち上がった。

身体の上に乗っていた粒子が、ザラリと地面に落ちる。

「もう・・・・十分だったよ」

そう言ってどこかへ歩き出そうとする蒔風。

と、すぐにその体が引きとめられる。

その腕を、なのはが掴んで引き留めていた。

「舜君は！！ずっとずっと私たちのために戦って！！ずっとずっと一人ぼっちで・・・・・それで・・・・それで一人で全部・・・」

「なのは・・・・」

そのなのはの頭を、蒔風が撫でてから、優しそうな目をして言った。

「だから言ったろ。こういう事だ。お前は俺じゃ幸せになれん。こういう男だからさー」

そうして、なのはの腕からするりと抜けて、蒔風が先に進む。

「蒔風さん」

「舜・・・・・」

「・・・・クラウド」

「せっかく・・・同じ世界になって・・・・・これからたくさん恩返ししようと思っていたのに・・・私たちは何もできない・・・助けられない・・・」

「オレたちは・・・そうだ、ずっと助けられてきた・・・・世界をお前に救われ、俺たち自身を救われ！！恩返しもさせないで・・・勝手にいなくなる気か！！！」

「そうだ、オレは勝手に消えるのさ」

観鈴とクラウドの言葉に、蒔風が皮肉気に笑いながら、二人を過ぎて、背中越しに最後の言葉を交わした。

「・・・とんだ英雄だ・・・・」

「どっちつかずだったからなぁ・・・・」

ははっ、と笑いながらそうして、二人を過ぎて、その先に進む蒔風。

「蒔風」「舜」「舜君」「蒔風」「マイカゼ」

そうして歩いていると、次々と声をかけられる蒔風だが、それでも彼は止まらない。
歩き続け、そして、身体から粒子がこぼれ続けて行った。

「舜！！！」

と、そこに理樹と一刀が駆け寄ってきた。

「そんな・・・待ってよ！！」

「お前らなら大丈夫だろうからな。厄介者は早々に退散するよ」

「バカ！！」「野郎！！！」

蒔風がそんなことを言うと、二人が蒔風の腹を殴った。

おフッ、と少し身体が折れる蒔風だが、それを笑って受けていた。

「はは・・・良い攻撃」

「殴ったからな・・・ちゃんと殴りかえしに来いよ！！！」

「厄介なんて思ったことは・・・・まあ前にはあったけど・・・・・
でもそれでも！！いなくなって欲しいなんて思ったことはない！！」

「また・・・帰ってこいよ」

「絶対はない、と言っておこうかね」

そうして、蒔風がさらに先へと歩を進める。

そして、みんなの輪を抜けたところで、アリスがその中から走ってきてその背中を引きとめようとした。

が、その手は伸ばそうとして伸ばせず、言葉も出そうとしても出なかった。

「・・・なに？」

「ぁ・・・わ・・・私は・・・・・私は・・・・なにも・・・・あなたに・・・本当に・・・できなかった・・・・・・」

アリスが言葉をたどたどしく紡ぐ。

今さら、自分が何を言えるのだろうか。

彼をこの道に連れてきたのは自分だ。
彼のこんな力を覚醒させてしまったのは私だ。

彼がここで消えてしまったのは、私の責任だ。

そんな私が、ここでどんな言葉をかけられるというのか。

そんな物は、私が許されたいだけだ。
今消えゆく彼に、更に自分を許してくれと・・・言われたいだけなのだ・・・・

「私は・・私は・・・・・・」

「ありがとう」

が、それでも蒔風の口から出てきたのはこの言葉だった。

「そんな貴女だから、俺は戦ったんだ。俺はあなたの世界で、心からよかったと思う。皆を守れて今、とても感謝している」

「でも・・・でも・・・・・」

「なにも出来なかった・・・・ね」

「・・・・はい・・・・・」

「近頃そう言う奴がどうにも多いよなぁ・・・・じゃあま、一言だけ言っといてやる」

そうして、蒔風が人差し指を立てながらこちらに振り向き、励ますようにアリスに言った。

「人の価値は、何ができないか、じゃない。何ができるか、だ。成績表にできないこと書いて行く者はない。テストは正解点を数える。出来ないことを嘆かないでくれ。出来ると言う事を誇りに持ってくれ」

「ぁ・・・ぅ・・・・・」

「貴女は俺を救ってくれた。皆を救う、力をくれた。こんな歪んだ俺でも、皆を守って、胸を張って生きてこれた。だから・・・十分だ」

そうして、蒔風が踵を返して、歩いて行く。

その歩く先には、今沈もうとしている、綺麗な夕日が、煌々と光りながらそこにあった。

――――――

蒔風が振り返らず、歩きながら右手を軽く上げてから振って、別れを告げる。

最初に左腕が、光の中に溶けるように消えた。

次に、右足が粒子に流れながらなくなる。
しかし蒔風の身体は崩れることなく、そのまま歩みを進めていた。

そして、左足が透けていき、粒子を噴いてパァ・・・と消えた。

身体が順番に、ゆっくりと、うっすらと消えていく。

下半身が消えた。
ゆらゆらと揺れながら、蒔風がそのまま先に進む。

そして、残った上体の左下から、スゥ・・・・・――――――――
となくなって行った。

だんだんと向こう側が透けていって、綺麗な夕日の光がこちら側にまで来る。
すでに影など、残っていない。

そうして、光の中に溶けるかのようにして、蒔風の全身がとけるかのように消えた。

蒔風から出た粒子が空を舞い、地面や建物、全員に降り注いで、その怪我が治っていく。

全て元通りになった。

何一つとして、「異常なモノ」はここにはいなくなった。

こうして

世界を一人でめぐった銀白の翼人、蒔風舜は

希望と共に、世界に溶けていなくなった。

「ぁ・・・・・・・・」

「消え・・・ちゃった・・・・・・」

「舜君・・・・・・」

「アリス・・・あいつは・・・・・死ん――――」

「死んだわけではありません」

「え・・・・・」

「彼は、「願い」として消えたのです。その体が分解され、世界に溶けた・・・・彼の思念は、どこかに生きているかもしれませんね」

「・・・!!ライフストリーム・・・・・・」

「そこかもしれませんし、そこではないかもしれません」

「戻って・・・・来るの?」

「わかりません。でももし・・・・・世界中の人々が彼を必要としたとしたら・・・・ただ会いたいなどではなく、本当に必要としたとき・・・・もしかしたら、本当にもしかしたら、彼の翼が反応してくれるかもしれません・・・・・それに・・・・」

「それに?」

「この世界には・・・なんという皮肉でしょうか・・・・まだ彼はいるのですよ。どちらも・・・身体を失っていますが」

to be continued

願いをありがとう（後書き）

これでストーリーは終わりです。

三十分後ぐらいには、エンドロール（短い）と後書きと次章予告を入れます。

もしかしたらもっとかかるかもしれませんけど・・・・

では、最速で三十分、最遅で一時間後に、また

エピローグ　～Ｌｏｓｔ　Ｈｅｒｏｓ～（前書き）

ＥＤ曲は、ニコニコ動画で人気があった「パンダヒーロー」です。

「みーちゃん」という歌い手さんのが一番好きです。

エピローグ　～Ｌｏｓｔ　Ｈｅｒｏｓ～

世界は安定した。

一人の男が戦いぬいて。

「ＥＡＲＴＨ」はそのまま存続

局長室に座ろうとする者はおらず、欠番のようになっている。

局長にはクラウド・ストライフが推されるものの、「自分のガラじゃない」と本人の希望で辞退。

結果、直枝理樹と北郷一刀の二人が連名で「ＥＡＲＴＨ」トップに立つことになった。

十五天帝は蒔風の消滅と共に石化したものが瓦礫の下から発見された。

何故次の資格者の元に行かないのかは、アリス曰く「彼は死んだわけではないから」だそうだ。

その剣は「ＥＡＲＴＨ」の周囲に十五本付きたてられ、それぞれが石碑のようになっている。

彼は死んだわけではないものの、概念のような存在となったため、単に魂や思念体とはまた違ったものになっているらしい。

世界をめぐる、銀白の翼　第二章　Ｌｏｓｔ　Ｈｅｒｏｓ

キャスト

想像、執筆
武闘鬼人

登場人物

蒔風舜

岡崎智也
岡崎渚
五代雄介
キョン
朝比奈みくる
長門有希
古泉一樹
泉こなた

柊かがみ
柊つかさ
高良みゆき
響鬼
威吹鬼
轟鬼
ハクオロ
エルルゥ
オボロ
ベナウィ
クロウ
カルラ
トウカ
泉戸裕理
泉戸ましろ
応龍
鵺
城戸真司
秋山連
北岡秀一
吉井明久
坂本雄二
姫路瑞樹
島田美波
木下秀吉
土屋康太
津上翔一
芦原涼
氷川誠
上条当麻

インデックス
ステイル・マヌグス
神裂火織
一方通行
打ち止め
妹達
御坂美琴
白井黒子
クラウド・ストライフ
前原圭一
竜宮レナ
園崎魅音
園崎詩音
北条沙都子
古手梨花
古手羽入
国崎往人
神尾美鈴
門矢士
小野寺ユウスケ
光夏海
海東大樹
野上良太郎
モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス
ジーク
桜井侑斗
デネブ

ハナ
オーナー
ナオミ
直枝理樹
棗鈴
棗恭介
井ノ原真人
宮沢謙吾
神北小毬
能美クドリャフカ
来ケ谷唯湖
三枝葉留佳
西園美魚
朱鷺戸沙耶
乾巧
海堂直也
三原修二
衛宮士朗
セイバー
遠坂凛
アーチャー
間桐桜
ライダー
イリヤスフィール・アインツベルン
バーサーカー
ランサー
ギルガメッシュ
カレン・オルテンシア
天道総司
加賀美新

矢車想
北郷一刀
蜀・魏・呉の各武将
剣崎一真
橘朔也
相川始
上城睦月
皐月駆
水奈瀬ゆか
草壁美鈴
橘菊理
広原雪子
田島賢久
百野栞
直江大和
紅渡
登大牙
名護敬介
ガルル
バッシャー
ドッガ
左翔太郎
フィリップ
照井竜
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリシア・テスタロッサ
八神はやて
リィンフォース
シグナム

ヴィータ
シャマル
ザフィーラ
リィンフォース？
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
キャロ・エ・ルシエ
エリオ・モンディアル

初原
佳景山

”ライクル”
”フォルス”
”輝志”

”ＬＯＮＤ”

アリス

以下の方々に感謝を

これまでも引き続いて感想をくださった方&お気に入りユーザーに登録してくださった方
（英字、五十音順）

3　様
anoki　様
ATD－X　様
h.o　様
MERAN　様
reimu　様
tyta　様
White Seal　様
アストラル　様
ウエイ　様

液体の蛇　様
桜龍　様
彼方からの翼　様
カレーパン　様
神無月　様
キョン　様
久遠　様
クリア　様
グレイ　様
コンバース　様
シャドー・ナイトメア　様
準也　様
深蒼の覇者　様
だいさむ　様
蛸壷の主　様
剣　流星　様
ティエト・コーティオン　様
とある旅人　様
ニャンコ隊長　様
ハイパーカイザー　様
灰狼　様
東雲葉月　様
バラランシャ　様
H@LYA　様
ブレ　様
ポリンキー羽田　様
夜一　様
保名　様
夕　様
リュウガ　様

ルシフェル　様
レイフォン　様
レン　様
わや　様

今、モニターの前にいるあなた様に

ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！！

あとがき？

第二章、完結です！！！

蒔風「俺、消えたんだが・・・・？」

最初からその予定でした。
此処で蒔風が消えることは、本当に最初から決まっていたことなので。

蒔風「じゃあ新しいキャラで主人公にすんのか？」

いえ、そうはしません。

次章・・・つまりは第三章ですが、これは外伝みたいなものだと思って下さってよかです。

蒔風がいない世界で、彼らが立ち向かう敵とは一体！？

蒔風「俺が戻る予定は？」

当然ある。
だけどまあ・・・まだ先だね。

第三章も、二つの事件で出来ています。

流れとしては二章とほとんど同じですね。

最初のがメインで長く、二つ目のが締めくくるものになって短いです。

蒔風「今回の二章についてのコメントはないのか？」

違うんや！！短いんやない！！一章が・・・・

蒔風「その話はもう聞いたよ」

そっか・・・

いつか言ったかもしれませんが、この話を思いついたのは、ディケイド完結編です。

「しっかりと主人公たちＶＳ蒔風をやりたい」という思いから作りました。

で、うまく蒔風消滅と絡ませて、此処までかこつけました。

彼は消えました。
しかし、必ず復活することをここに明言しておきます

それと、次章でもしかしたら「奴」が主人公になる、と考えている方がいらっしゃると思うますが、そんなことはありません。
「奴」は「奴」です。彼はもし仮に！！味方になったとしても、主人公にはなりません。

と、まあ正直言ってあまり言う事ないような・・・・

あ、そうだ・・・・

第三章ですが、しっかりと形の出来ていた今までとは違い、まだ細かいところやどのようにしてストーリーを持っていくかは煮詰め切っておりません。

ですから、おそらくこれまでのようにドンドン更新・・・は難しいかと思います。
三章第一話更新にも一週間はかかるかも・・・

多分、飛び飛びな更新になってしまうでしょうが、お許しください。

この物語が始まるのは、蒔風が消えてそろそろ一年が経つ頃です。
そこ、上条の学校とかどうしたって言わないでください。

また、もしかしたら今までも出したキャラが一気に登場しなくなる可能性がありますが、そこはご了承ください。

十人もいればいいのに、こんなにたくさんいたら大変なことになるぅぅぅ・・・・・うー・・・・・ぅーーーー

基本的に翼人たち中心に進んでいきますので、よろしくお願いいたします。

それから、一番忘れてはいけないことを忘れていました。

この三章を書くに当たって、見直さなければならない部分があるので最初の投稿まで時間がかかると思いますが（再び一週間ほど）、ご了承ください。

では、次の話をクリックして、レッツ次章予告へ！！

第三章　予告

一人の男によって、安定した世界

しかし

敵はいつでもそこにいる

同時に起こった、複数の事件

妹達襲撃

不死生物復活

希少能力保有の少女誘拐未遂

次元世界間放火殺人事件

そして、その事件は一つの思惑の元に――――――

邪神復活

彼が守った世界のために、彼らは負けられない戦いに挑む。

「守りきって見せる・・・・あいつが残した、この世界を・・・・・」

そして

「こぼれた力を拾ってきました!!!主人公諸君!!久しぶりだ・・・戻って・・・来てやったぞ・・・・」

復活するのは、それだけではなかった。

世界をめぐる、銀白の翼

第三章

X（クロス）

物語は交差する。

GO to NEXT STAGE

予兆

夜

学園都市

繁華街から少し外れた、ビル影の道

「はぁ・・・はぁ・・・・」

そこを、一人の少女が走っている。

その少女はこの都市の超能力者第三位を瓜二つの顔をしているが、額に当てているゴーグルが別人であることを表している。

彼女は妹達（シスターズ）の一員で、「あの実験」で、最後に一方通行と戦った個体だ。
仲間からは一〇〇三二号、上条からは『御坂妹』と呼ばれる彼女が、今裏路地を走って何かから逃げていた。

『今ミサカは・・・謎の生物に追われています・・・・誰か救援に来てください、とミサカ一〇〇三二号は懇願します』

『懇願するということは、かなりやばい相手なのですか？とミサカ一九〇九〇号は質問します』

『攻撃してもひるむだけで倒れません。対処に困ります、とミサカ一〇〇三二号は半笑いをしながら空元気を出します』

彼女がミサカネットワークを通じて仲間に連絡を取る。
そこで空元気だと自分で言ってはしょうもないのだが、そこを突っ込む者はいない。

『お姉様（オリジナル）を狙ったのでは？と、ミサカ一三五七七号は相手のミスを指摘します』

『しかしたとえそうであっても、今の状況にはあまり関係がないです。言葉の通じる相手にも見えません。と、ミサカ一〇〇三二号は身に迫る危機を回避しながら・・・・・・』

「ガァァアアアアアアアアアアア！！！！」

そこで、彼女を追っていたそれが雄たけびを上げ、その鋭い爪を振りおろしていった。

ーーー

「ＥＡＲＴＨ」本部

その食堂

「橘さんが？」

「ああ、連絡が取れないんだ。何かの調査に向かった、っていうのは聞いていたんだけどさ」

二人の男が、円形のテーブルで少し遅めの晩御飯をとっている。

その人物とは、剣崎と一刀だ。

調査のこと自体は知っていたが、彼が何の踏査をしているのか、そして音信不通であることは知らなかった。

「何かトラブルに？」

「でもバックルは持って行っているから大抵の事だったら大丈夫だと思うけどなぁ・・・」

そう話しているテーブルから離れたところでは、理樹が何人かのメンバーと一緒に何かを話し合っていた。

「そろそろ一年だね・・・・」

「なにも起こらなねぇなぁ」

「で？なんて報告するつもりなんですか？」

そのメンバーは、理樹と上条とエリオだ。

「彼」がいなくなって、それからそろそろ一年だ。

あの事件から一年が経って、彼らは「彼」に報告をするという計画を立てていた。

彼ら、というのは勿論この三人だけではなく「ＥＡＲＴＨ」メンバーでだ。

どこで声をかけるか、というのはあの十五天帝・青龍の突き刺さっている場所で。

しかし、誰が声をかけるかが決まっていない。

「いや、ここは理樹か一刀じゃねえの？」

「僕としてはクラウドさんがいいんだけど・・・・」

「でも断られてしまったんですよね？」

「内容はどうするんだ？」

「『何もなかったです』・・・じゃない？」

「まあ確かにそうだけど・・・ねぇ？」

そんなことを話しながら、彼らの手が進んでいく。

今日の飯もうまい。

ーーー

「では・・・あなたは――――――です」

「ひ・・・ひぃぃいいいいいい!!た、助けてくれ!!助けてくれ!!!」

炎の中で、女性の声はよく聞こえなかったが、この男性にははっきり聞こえたようだ。
質問し、その手に握った剣を振り上げる長身の女性に怯え、質問された男が四つん這いになって逃げだす。

しかし炎は周囲を覆っていて、逃げ道はない。
逃げられるとしても、死を覚悟してこの炎を突破しなければならない。

と、そこに何か動く影を見た。

そのシルエットは、自分を襲おうと背後に迫っているそれとは違う。

「た・・・助かった・・・・・お、おい！！聞こえてたら助けてくれ！！！こ、こいつを・・・・え？」

炎が踊り、そのシルエットが明らかにされ、瞬間

その姿を見て、一瞬ほころんだ顔が最初よりも恐怖に染まった。

それは、瞳に映ったその姿が、異形のモノであるからであろう。

「な・・なんだよ！！なんなんだよ！！てめえなんなんだぁアアアアアアア！？」

ドンドンドン！！！

銃声が鳴り、その異形から火花が爆ぜる。

しかし、その銃弾に少しよろめくだけで全く意に介していない。

そして、その鋭い爪が男に食い込み・・・・・・

「グ・・・ぎゃぁぁアアアアアあああああああああああああ
ああ！！！！！」

男の体が裂かれ、その体がただの物言わぬ肉と骨へと変わった。
そしてそれは、今この炎によって焦げていっていた。

「あなたは・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

その女性がスピーカーから出るような声を出して、視界に入ったその異形に問いかけるが、それは踵を返してその場を去る。

「探し出してもらおうか。礎となる、その魂を」

「・・・・・・・・・・」

炎の中にその異形が消え、立ち尽くす女性もその場から消えた。

遠くからサイレンが聞こえる。

しかし、救える命は、すでにそこにはない。

ーーー

再び学園都市

裏路地の中の裏路地、ザ・裏路地ともいえるような、薄暗い通り。

「はぁ・・・・はぁ・・・・・ここまでですか・・・・と、自分の身の危険を顧みながら・・・・」

そこでついに御坂妹は地面に倒れ、迫る化け物からズリズリと下がるものの、塀に背中が当たってその後退が止まる。

「ガぁぁアアアアアアアアアアア！！！！」

そして、その化け物の鋭利な爪が振り上げられ――――――――――

《バレット―ラピッド―ファイア――バーニングショット》

ドンドンドンッッ！！！ドォン！！！

そして、機会音声とともに炎の弾丸が飛んできてその化け物を吹き飛ばした。
その弾丸の飛んできた方向を彼女が見ると、夜の闇でできたビルの陰がそこにあるだけだ。

直後そこから、一枚のカードが飛んできてその化け物に刺さり、身体が吸収されてていく。

「これは・・・・・」

「大丈夫・・・・か・・・・？」

その闇に向かってカードが戻り、それを手にした赤き銃士が息も絶え絶えに聞いてきた。

その手にあるカードには先ほどの化け物が描かれていたが、溶けるようにその絵が消える。

「あなたは確か・・・・・」

「仮面ライダーギャレン、橘朔也・・・だ・・・・・・・頼む・・・急ぎ・・・・「ＥＡＲＴＨ」に連絡を・・・・・ぐっ・・・・・（ドサッ）」

「！！大丈夫ですか！！とミサカは体を抱えながらも、あなたに問いかけます！！」

倒れたギャレンの変身が解け、橘が御坂妹に抱えあげられる。

（この近くで、問答無用で助けてくれそうな方は・・・・・とミサカは目的地を決定してそこに向かいます）

そうして二人の影が、第七学区の学生寮に向かう。

しかし、その背後には、先ほどと姿が違うながらも、同じような異形がいた。

to be continue

予兆（後書き）

はい！！始まりました第三章！！

蒔風「みんながんばれー」

時期としてはもうすぐ蒔風が消えて一年になろうとするころです。
で、そのタイミングでこう・・・なんかしようとしているわけですな、彼らは。

蒔風「記念とも違うし、一周忌とも違うしなぁ」

そして、うごめく影達。

蒔風「なぁ、これって章のタイトルとかからしてメインになるのは・・・」

そこは黙って！！

いやさ、わかると思うけどさ。
しかしそれだけでは終わらないのがこのめぐ銀。
多くの世界のファクターが織り交ざって、どうにかこうにかしていくぜ！！

蒔風「次回、動き出す「ＥＡＲＴＨ」」

ではまた次回

出動

翌日の朝

「え？協力要請？いいけど」

理樹が自分の部屋で男メンバーたちと一緒にツイスターをやっていると、通信モニターが開いてそんな連絡が入ってきた。

通信相手はティアナ。

執務官である彼女が今担当している事件に、協力してほしいとのことだった。

「いいけど・・・・ティアナさんが要請してくるってことは・・・・」

「並みの事件じゃねぇってことだな。筋肉の出番か」

「どんな事件なんだ？あ、理樹、左手を青」

『ツイスターしながら聞かないでください・・・・・連続放火殺人です。現在で十一件、死傷者多数。二つの次元世界で起こっているんですけど・・・』

「そんなかしこまらないでよ・・・同い年じゃないか・・・と、右足を黄色？」

『だから・・・まあいいわ。それで・・・・・』

「うん、協力するよ。死人が出ているならなおさらだ。僕らは・・・・」

『救えるものは、根こそぎ救う、よね？』

「その通り。じゃあこれからリトルバスターズがそちらの事件に協力するよ」

『ありがとう』

そうして通信が切れ、入れ替わりに事件の報告書が出てきた。

ツイスターを取りやめ、彼らが部屋から出る準備をしていく。

「さ、行こうか。相手は放火魔らしいよ」

「大丈夫だ。俺の筋肉のほうが熱い」

「ふ、任せておけ、理樹」

――――――

上条が言うには、昨晩遅く――――日付が変わって三時間が経とうとした頃に扉が開かれたのだ。
最初こそ空き巣かと思ってフライパンを振り上げた上条だったが、電撃で反撃された彼はその姿をみて即座に部屋に入れ、介抱した。

橘は意識不明・・・というか眠っている。
御坂妹はこの部屋のソファの上で眠っていたが、今はすでに起きていてインデックスと共にテレビを見ているらしい。

『御坂には連絡したから、すぐこっちに来ると思う。それから妹の言うには、化け物はカードに吸われて消えたらしいぜ』

「アンデット？だけどそれはたしか・・・・」

そう、倒され、カードを突き立てられて消えたとなればそれはアンデットと同じ反応だ。

不死生物たるアンデットは、一部の例外を除いてカードに封印とい

う手段でなければ倒せない。
ダメージを与えても、いずれすぐに復活してしまうのだ。

しかし

「アンデットは52体、きちんと封印されてるはずだよな？」

「そうですね・・・・確かそうだったはずです」

一刀の横で、彼の秘書替わりをしている朱里が答え、資料を雛里がもってきた。
それをみて、やっぱりそうだと頷く一刀。

「アンデットはジョーカーである相川始を除いて全員封印済み・・・・」

『でも、御坂妹が言うにはアンデットとしか考えられないってよ』

「うーーーーん・・・・・よし、今からそっちに行こう。朱里、剣崎さんを呼んでくれないかな？」

「はい、ご主人様」

そうして通信を切り、部屋から出ていく一刀。

と、そこでこれからどこかに行こうとしている理樹たちとぶつかりそうになった。

「おっと」

「あ、一刀。これから僕たち、ティアナさんの事件の協力に出てるから」

「こっちもだ。橘さんがアンデットみたいのを追っていたらしいぜ」

「そっか・・・お互いに頑張ろうか！」

「おう！！」

そうして、二人の翼人が、その場を後にする。

理樹はリトルバスターズの残りのメンバーと合流して、ティアナのもとに。
一刀は剣崎と数名の武将と共に、学園都市の上条の部屋へと。

――――――

ところ、大きく変わって雛見沢村は古手神社の展望台

そこに門矢士をはじめとしたディケイドのメンバーが観光に来ていた。

ユウスケと夏海はこの大自然の前に感動しまくっており、それを見て士は頭を抱え、海東はさらにそれを見て面白そうに笑っていた。近くにはパタパタとキバーラも飛んでいたが、何を気に入ったのか森の中に入って行ってしまった。呼べばすぐに来るらしいが。

「喜んでもらって何よりなのです」

「あぅあぅ、僕もうれしいのですよ」

と、そこで後ろから声が掛けられた。

この神社の主、古手梨花と古手羽入だ。

時間はちょうど一時。
彼女らは早めに学校が終わったこともあり、彼らの案内を買って出たのだ。

ちなみに年長組はまだ授業中、沙都子は悟史を待って学校にいる。

「こんな平日からぶらぶらできるなんて、大人はうらやましいのです」

「またまた、梨花だって十分もう（ゴスッ）あぅッ！？」

「なにか・・・いいましたですか？にぱー♪」

そんなことを言いながら、麦茶の入った大きな水筒とビニールシートを抱えてきた二人を見て、士が「？」となるが、体よく暇人と言われたことに気付いた海東は少し落ち込んでいた。
ユウスケと夏海は持ってきてくれた二人に感謝しながら、急いでそれをかわってシートを広げるのを手伝いに向かう。

「冷たい麦茶をお持ちしましたですよー」

「ごめんね、ありがとう」

「汗だくじゃないですか。本当にすみません」

「幼女にへりくだっているな、夏みかん」

「士君も手伝いなさい！！」

「（バッ！）は！こうして首さえ押さえちまえば笑いのツボも・・・（ゴシャッ！！）パンチは反則だろう・・・・（ドサッ）」

「これが後に雛見沢六回目の惨劇と呼ばれ・・・・」

「大樹さんも物騒なこと言わないでください！！！」

その様子を笑いながら眺めている梨花と羽入もシートの端に置く石を持ってきて、六人でゆっくりと休憩を取っていた。

「どうですか？雛見沢は」

「いいところだな。景色もきれいだし、空気もうまい」

「じゃあ都会の空気はまずいのですか？」

「ここよりは澄んでないなぁ」

と、そんなことを話していると、どこからか「カランカラァン・・・」という軽い音が聞こえてきた。

それを聞いて「なんだ?」と考える士たちだが、梨花が立ち上がりながら説明していた。

「沙都子のトラップなのです。と言っても、誰か来たというのをお知らせする程度なので、多分沙都子やレナたちが来たのです。迎えに行ってきますですよ」

「あ、じゃあ私も行きますよ」

「いってらっしゃーい」

そういって、梨花と夏海が境内のほうへと向かい、ユウスケが送り出す。

そして話をしようとする三人だが、羽入だけは何かを考えていた。

「どうしたの?羽入ちゃん」

「・・・・おかしいのです」

「なにが?」

「沙都子をはじめとした部活メンバーはみんな、この神社内に沙都子のトラップがあるということは知ってます。そう簡単に引っかかるはずがないのです」

「・・・・どういうことだ？」

「もしかしたら、本当に侵入者なのかもしれないのですよ・・・・・・」

「・・・・マジ？」

「行ってみた方が――――」

――――ジャギィ！！ギャン！！ゴォン・・・・・・！！！

「！！！」

「あの音は・・・まさか！！」

「梨花!!」

「夏みかん!!行くぞユウスケ!!」

遠くから金属のぶつかる音と、爆発音が聞こえてきて、四人がその場に向かって走る。

その場にたどり着くと、足首をひねってしまったのか座り込んだ梨花と、仮面ライダーキバーラに変身して彼女を守っていた夏海がいた。

「あいつらは・・・・」

「いいから!!行くぞ士!!」

士が彼女らを取り囲んでいる三体の化け物を見て頭を捻るが、今はユウスケの言うとおりだ。

ユウスケがキックで首の長い一体を押し出し、階段のほうへと連れ込んでいく。

それにならって士も思考をやめ、キバーラの剣と、棘のついたレイピアのような武器を使って鍔競り合っているバラの花びらを散らし

ている化け物を横から蹴り飛ばして、カードを構えた。

「せっかくの観光に出てきて・・・覚悟できてんだろうな！！変身！！」

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＤＥＣＡＤＥ！》

そうして、ディケイドへと変身した士がライドブッカーでその化け物に切りかかっていき、相手をした。

しかし、それでもまだ一体残っている。
その一体――なにやら豚のように見える化け物が、キバーラ、というよりも梨花に向かって突進していった。

が、その腕はディエンドに変身していた海東につかまれ、そのままインビジブルのカードで一緒に消えて行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「ブシャァアアアアアアアアアア！！！」

「やれやれ、僕が家畜の相手とはね（ビッ、ガシュウ！）」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＢＬＡＳＴ！！》

森の中
そこで、インビジブルを解除して姿を現したディエンドと化け物が交戦していた。

と、言っても相手は突進してその爪で抉ることしか考えていないのかそれしかしてこず、ディエンドの変幻自在な弾丸に、一方的な攻撃を食らっていた。

「悪いけど、まだいるかわからないからね。あっちも心配だし、手早く終わらせてもらおう！！」

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ

ＤＩＥＮＤ！！≫

「！？グブルァァアアアアアアアアアア！！！！」

「バイ（カチッ）」

ドンッ！！ズゴォア！！！

「ガァアアアアアアアアアア！！！」

ドォォォンッ！！！

ディエンドのファイナルアタックライドに、その化け物が爆発して消滅する。
が、ディエンドはなにやらすっきりしていないようで、顎に手を当てていた。

（あの腰のベルトは・・・・だとすると、君らは一体なんなんだい？）

そう考えながらも、（夏海は大丈夫だろうが）梨花や羽入が心配である。

森を走って、彼女らのいる境内へと向かった。

――――――

一方、ユウスケ

場所は、階段を二十段ほど降りたところ。

化け物を階段まで蹴り飛ばし組み付いたのはいいものの、そのまま階段を転がり落ちそうにまでなってしまい、化け物のキリンのような長い首にしがみついて落ちないようにしていたのだ。

この神社の階段は長い。しかも、途中途中に平たく広い段差もないのだ。

生身で転がり落ちたらただではすむまい。というか死ぬ。

だから彼は必死になってしがみついたのだが、化け物はそれを振り落とそうと首をぶん回して暴れていた。

「うわっ！！ちょ・・・落ち・・・落ちるッッ！！！」

「ゴおオオオオオ！！！」

「え？うわぁっ！！！」

と、そこで化け物の首がビタッ！と止まり、一瞬後にまた振られた。

その動きについにユウスケの体が宙を飛び、階段から放り出される。

「いィィィいいいいいい！！！へ、変身！！！」

しかし、彼とて仮面ライダーだ。

空中でベルトのスイッチを入れ、ドラゴンフォームに直接変身して、木の枝の上に着地した。

「ふぅ・・・・じゃあこれで！！」

そこでさらに木の枝を折り、それをドラゴンロッドに変化させて構える。

「来い！！」

「ブフォァアアアアアアアアアッッ！！」

そのユウスケの声に反応し、その化け物が首を伸ばしてクウガのいる場所に振るってきた。

「タァッ！！」

足場にしていた太い枝が砕けるが、クウガが跳躍してそれを回避し、その長い首に向かってドラゴンロッドをブチ当てた。

相手の首は長い。

そして、ロッドで打ったところはその先端ともいえる後頭部。

そこを殴られて、化け物の体がぐらりと揺れて階段からよろける。

「グフォ・・・・」

「落ちろ！！！」

とそこに、化け物の後ろに着地したクウガがその背中を蹴り飛ばし

て階段から突き落とした。

その衝撃に、化け物が手足をじたばたさせながら落ちていく。
「転がり落ちて」ではなく、「宙に放り出されて真っ逆さま」に。

ドォン!!という凄まじい音を立てて化け物が地面に落ちる。

うつぶせに落ちたそれが、仰向けに体を返したその瞬間、視界に太陽が入りその中心に、青き戦士が金色の雷を携え、ロッドを突き立てて落ちてきた。

ドガッッッ!!!ギィィィイイイイイ、ドォン!!!

ライジングドラゴンフォームとなったクウガが、キリンのような化け物の腹部にロッドの先端を突き刺してエネルギーを送り込む。
そのエネルギーによって化け物は爆発、炎は火柱を上げ、クウガはマイティフォームに戻った。

しかし

「？・・・！！こいつ・・・・」

ユウスケは見た。
爆発したその炎の中に、その化け物が原形を留めたままで焼けていっているのだ。

そのベルトのエンブレムが、パキン、といって縦に割れた。

「ユウスケさーーーーん！！」

「どうし・・・・えぇ！？な、なんですかこれ！？」

と、そこに圭一とレナが走ってきた。
詩音と沙都子は悟史の定期検診に付き合っているらしい。

二人が神社の階段の前で焼けているそれを見て驚愕するが、ユウスケは信じられないものを見るような顔をして、呟いた。

「わからない・・・・アンデットは全部、封印されているはずだ・・・・でもこいつは・・・・・」

――――――

「キリンに豚にバラのアンデット・・・・？そんな奴らはいなかった！！」

ガキィ！！

「５２種の生物に、お前らはいなかったはずだ！！」

「フシュルルルル・・・・」

そう、その５２種のアンデットの中に、そんな生物はいなかった。

だったら、こいつらは一体何なのか。

「お前ら一体なんなんだよ！！」

そう叫びながら、士がバラのアンデット「ローズアンデット」を蹴り飛ばした。

しかし、鞭のように伸ばした棘付きの茎をディケイドの腕に絡ませ、一気に引っ張って入れ替わるようにして彼の後ろにいる梨花たちに突っ込んでいった。

「させっか！！」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

だが、超高速で動き出したディケイドがその間に割って入り、さらにカードを装填する。

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

黄色のホログラムカードがローズアンデットに伸び、そこに向かってディケイドがライドブッカーを槍投げのように構えてから投げ放った。

ライドブッカーがホログラムを通過するたびにその刀身にはマゼンタ色のエネルギーが蓄積されていき、巨大な刃となってローズアンデットを突き貫く。

貫かれたローズアンデットは爆発、消滅し、ライドブッカーはそのまま飛んで行って階段の下で倒されていたアンデット、ジラフアンデットに突き刺さってそれをも吹き飛ばし消した。

「いったい・・・・何が起きている?」

森の中から海東が、周囲にはもうアンデットはいないようだと出てきた。
階段の下からはライドブッカーを持ってユウスケ達が駆けあがってくる。

観光はどうやら、ここまでのようだ。

――

「なんだこれは・・・・・」

「橘さん！！！」

一刀が連絡を受けて一時間後
学園都市の学生寮、そこの上条の部屋

そこ部屋の前に立った一刀たちが目の当たりにしたのは、吹き飛んだドアと、荒らされた部屋、倒れている上条と橘だった。

剣崎と一刀が即座に中に飛び込み彼らを抱えあげると、彼らの呼吸音が聞こえた。
どうやら、死んではいないらしい。

「よかった・・・上条！！大丈夫か！！！」

「う・・・お・・・・」

「・・・・・・・ご主人さま」

「ん？」

と、そこで共にやってきていた愛紗が部屋の隅を見、一刀に声をかけた。

「そこの隅・・・結界のようなものが張ってあります」

「え？」

そう言った瞬間、部屋の隅が柔らかく歪み、その中から血まみれの土御門とインデックス、そして御坂妹が現れてきた。

「とーまぁ！！大丈夫なの！？」

「大丈夫、死んではないよ。怪我はひどいけど・・・・・」

「大丈夫ですか！？橘さん！！・・・・・くそ・・・いったい誰が・・・！？」

インデックスが上条に駆け寄り、入れ替わるようにして土御門に駆け寄る一刀。

剣崎は橘をしっかりと寝かせ、憤っていた。

「なにが・・・起きたんだ?」

「・・・お姉様(オリジナル)が連れ去られました、とミサカは結果を簡潔に述べます」

「な・・・・・!?」

一刀に、御坂妹が報告する。

「この部屋で起きたことの一部始終を、ご報告します、とミサカは言葉をつづります」

敵はアンデット。

しかし、その出自は明らかにならず。

to be continued

出動（後書き）

蒔風
「さぁて、事件が本格的に始まりましたな」

まずは不死生物復活と、希少能力持ち少女の襲撃です。

蒔風
「「原典」を知ってる俺でもあんなアンデットは知らんぞ？何だあいつら」

それはまあ・・・今度で

蒔風
「でも原典は何となくわかったな。あの二つだねぇ」

ええ、あの二つです。
それを大元にしています。

そこを「めぐ銀」風にアレンジ！！

蒔風
「さて・・・みんなは救えるんでしょうかね？」

そこを含めて、お楽しみに！！

蒔風
「次回、数時間前にあったこと、回想」

ではまた次回

奪取

昨晩、と言っても時間的にはもう今日になっていたその時刻に、橘が御坂妹に抱え込まれてきたそのあと。

朝になってから「ＥＡＲＴＨ」に電話した上条は、魔術師である隣室の友人、土御門に事の次第を相談していた。

彼の所属する必要悪の教会（ネセサリウス）も今は「ＥＡＲＴＨ」と協力体制を取っている。

なのでここで彼に相談することは何らおかしくはない。

むしろ、上条は戦力として彼に協力してほしかった。

相手がアンデットのようなものであることは上条も理解したし、それがどんな奴らかうろ覚えだったが、御坂妹の説明でしっかりと思いだした。

彼の右手に宿る幻想殺し（イマジンブレイカー）は異能の力を問答無用で打ち消す。

それはアンデットの放つ炎や電撃、さらにはその特性である「不死」をも無効化することが可能だ。

しかし、いくら相手の力を無効化できても、それはあくまで右手首から先に当てなければならないし、そうしたとしても相手の肉体はそうあるだけでも人間のそれを容易に超えている。

拳ひとつで立ち向かっても、無謀であるのは火を見るよりも明らかだ。

ゆえに、取り急ぎすぐに呼べた土御門を連れてきたのだ。

「アンデット？カミやん、オレを呼ぶ気持ちは分かるが、そいつぁ役者不足すぎやしないかにゃー？」

「お前が魔術を簡単に使えない身体だってのはわかってる。でも一刀に連絡はしたから、一時間もしないうちに来るとおもうんだ。だからその間・・・」

「・・・・・カミやん、カズちんにはなんていって呼んだんだ？」

それを聞いて、土御門が魔術師の――プロの目をして聞いた。

その質問に、上条は一刀を呼んだ時の会話を簡単に教える。

「橘さんが連れこまれて、アンデットがいるかも～って・・・」

「・・・カミやんもカズちんもまだ学生ってことか・・・・」

「は？」

「一時間もあれば襲撃作戦なんて３０は仕掛けられる。待ち時間としては長すぎるぞ・・・・」

「お、おいまさか・・・」

ベランダに続く窓をカーテンで遮り、その隙間から簡単に外を見まわした土御門に、上条が心配そうな声をかける。
そして、部屋の周囲に彼がいつも魔術に使う色つき折り紙を設置していった。

「土御門、お前魔術を使ったら・・・」

「へーきへーき。今はまだ準備しているだけだから、スイッチを入れない限り身体に支障はないんだにゃー。ほれ」

そう言いながら、シャツの前を開いて身体に異常がないことを表す土御門。

能力者に魔術は扱えない。

それはこの世界（まじゅつし）において、常識だ。

しかし、土御門はこの学園都市に潜入した時、能力開発（カリキュラム）を受けている。

そのために、彼は「能力者」にカテゴライズされてしまい、魔術を扱えば身体が崩壊するということになっている。

かつては陰陽術のエキスパートだった彼は、一つ魔術を使うだけで血を吐き死ぬような思いをすることになってしまったのだ。

しかも開発された能力は、傷の上に薄皮を張る程度の力しかないレベル0という非常に微弱な「自動再生（オートリバース）」

これのおかげで魔術を使ってもある程度は大丈夫なのだが、それでも死ぬような思いをするのだ。

「崩壊するということになっている」とはこういうことだ。

しかし、それでも彼は魔術施行の準備をしていた。

「で？襲われたのはそこの・・・」

「妹達（シスターズ）、一〇〇三二号のミサカです、とミサカは簡潔に自己紹介をしてテレビのほうに向きなおします」

「はー、うわさにゃきいてたけど初めて見たにゃー」

そういって、彼は話には聞いていた第三位のクローンをまじまじと見て感心したような声を上げる。

「私たちの考えでは狙われたのはお姉様（オリジナル）のほうかと思われます、とミサカは自分の考えを述べておきハキキュアの視聴に戻ります」

『うぬの覇気が、我が五体を刺激しておるわ！！』

『ゆくぞ、フザケンナー！！この世界は私たちが守る！！ォアタァ！！』

「なるほど、古代中国に伝わる魔力「気」を、覇気と称して体を魔

術で強化してるんだね。となるとあの服装は・・・・」

「何やら隣からよくわからない解説が出てますが、ミサカは純粋にこの作品を楽しみましょう、と言いながらミサカどうせ勝つであろうハキキュア応援します」

テレビの液晶の向こうで、何やらフリフリの衣装を着た少女（？）が劇画タッチに描かれて激しく戦っているのを、二人の少女が目をキラキラさせて見ていた。
二人のそのキラキラの方向性は少し違う気がするが、とにかく楽しんでいるならいいのだろう。

その二人を置いて、土御門がポイポイと折り紙を放りながら設置していく。
適当に投げているようで意味があるらしく、片手で瞬時に折っていくつか放ると、よし、と頷いて上条の隣に座り込んだ。

「もしも誰かがこの部屋に無理やり押し入ろうとした瞬間に発動するようにしたから、とりあえずは時間は稼げると思うにゃー」

土御門いわく、効果としては気配や姿を完全に遮断する決壊を張る程度のものらしい。

しかし、その中に上条は入れない。
理由は右手だ。

「だからもしもの事があったら、カミやんはすぐにこのベランダから逃げろ。こっちから来たら玄関からだ」

「お前らを置いて・・・」

「お前がいて、アンデットに吹き飛ばされでもしてみろ。結界にぶち当たったら俺らは丸見え、全員ミンチだ」

その言葉に「う・・・」と言葉を詰まらせる上条。
と、そこにピンポーン、というインターホンが鳴らされ、呼び出されていた御坂美琴がやってきた。

「で？後で話すって言ってたけど、いったいどうして呼ばれたのかしら？」

「ああそれは・・・」

と、上条が中に招き入れて事情を話す。

それを聞き、美琴が驚き、理不尽だという顔をしていた。

「なんでまたあの子たちが狙われなきゃならないのよ！」

「それはわかんねぇって！でも狙われてんだから無視できねぇだろう！？」

思わず叫んでしまった美琴だが、上条の言葉にそれもそうだと落ち着く。

「で？この人はなんなの？」

「ああ・・・妹が連れてきたんだ。助けてもらったみたいで・・・・」

と、そこまで聞いて、美琴が上条の言葉を「シ・・・」と遮った。

「な、なんだよ」

「近くで電磁波が発せられてる・・・・」

「発電機とかのじゃねぇの？」

「違うわ。機器からの電気じゃない・・・これは・・・・生体電気？しかもこの大きさ・・・！！！」

その感知したものの大きさに、美琴が驚いてベランダのカーテンをバサッッと開いて、その先のビルの屋上に、敵を見つけた。

直後

バツゥィッッッ！！！という凄まじい電撃の爆ぜる音がして、上条の部屋のリビングが光に包まれた。

が、直後にそれも消える。

飛んできたのは、電撃の光線。

それを美琴が受け止め、上条が消したのだ。

ビルの向かいには、黒く、ほそ長い体をした、どうやら魚のようなアンデットがいた。

「あっぶなぁ!?」

「へぇ・・・あたしに向かって電撃放ってくるなんて・・・・いい度胸してるじゃないの!!」

ガゴォ!!

そう言いながら、美琴が磁力を使って上条の部屋の壁の中にある鉄骨を、コンクリートごと抉り取った。

「ギャーーー!!御坂さん!?あなたオレの部屋になんてことを!!??」

「いちいちうっさい!!」

そして、上条の不幸の叫びを背に受けながら、美琴がそれを投げ飛

ばし、それに対しビルの上のアンデットはそこから一足飛びに上条の部屋へと突っ込んできていた。

躱す術などない。
誰が見てもそうだった。

だが、美琴の投げたそのブロックはアンデットの体に当たった瞬間、ぬるりと滑ってあらぬ方向へと落ちて行ってしまったのだ。

「え!?」

「ちょいちょいちょいちょい!!こっちくんぞぉぉぉオオオオオオ!?」

ドゴォ!!!

そのままアンデットは上条の部屋へと突っ込み、美琴へと突進してくる。
が、美琴は部屋中の家電や金属をかき集め、磁力で壁にしてそれを受け止めていた。

上条が振り返ると、そこには土御門やインデックス、御坂妹はおらず、おそらくは発動したという結界内に隠れているのだろう。
魔術が発動したことで土御門の体には反動が跳ね返っているはず。
それはそれで心配だが、今自分がやるべきことはとにかく・・・・

「こっちだこの野郎!!おらこいよ!!」

そう叫び、アンデットを部屋の外に誘い出そうとすることだ。
しかし、アンデットは全く上条に反応せず、美琴と向き合って動かない。

「無理よ・・・こいつ、あたしに用があるみたいだから」

「クソッ・・・・・」

「あんたは早く逃げなさい!!」

「お前置いて、逃げられっかよ!!」

捜査権で、美琴の隣に立つ上条だが、ぼそりと小さな声でつぶやいた。

「で、でも、できればこの部屋とは別のところでやってほしいと上条さんは提案するのですが・・・」

「相手に言いなさい！！」

バッ、バチィッ！！！

と、直後に両者が同時に電撃を放ち、ちょうど真ん中でそれがぶつかって光を放つ。

「グ・・・む・・・」

「あたしに電撃で張り合おうなんて、調子のってんじゃないわよッッ！！！」

ドォオ！！と、美琴から放たれた電撃が、中間地点を相手の方へと押しのけていく。
上条は美琴の隣で、もしもこちらに弾かれてきたときのガードとして、右手を構えていた。

そんな心配をしている上条に、美琴が自信満々に言う。

「私が負けるなんてことはないから、あんたは早く避難しなさい！
あいつと一緒に昇天したいの！？」

「ば、馬鹿野郎！オレは自分の部屋の心配してんだよ！！」

そんな口げんかをしながらも、美琴の電撃はアンデットのそれを押しのけていき、もうすぐで達するといったところまで行っていた。

それはそうだ。

彼女は学園都市の頂点のレベル５、その第三位なのだ。

彼女に電撃戦を挑んでは、勝てるものはそうそういない。

しかし

「何やら余裕そうだが・・・・後天的に身に着けた発電能力で、俺と張り合って勝てると思ってるのか？」

「え？」

「うそ・・・・」

「ふぬぁっ！！！」

いきなり声を発してきたアンデットは、同じようにいきなり電撃をやめ、その体で美琴のそれを受け止めた。
すると、その全身から電撃が吸い込まれ、バチバチと爆ぜながらアンデットに蓄電されていっているではないか。

「俺はあらゆる生物の中でも希少な、自家発電することが可能な生物の始祖だぞ。後付けされたその程度の力で、張り合おうなどおこがましいぞ、人間！！！」

「そんな・・・きゃぁあああああああああ！！！」

「御坂！！！」

吸収された電撃と、アンデットの「そこそこ本気の」電撃が合わせてぶつけられ、美琴が悲鳴を上げてその場にうずくまる。

上条はとっさにその電撃に右手をぶつけ消滅させるが、その電撃による光が晴れた先には、アンデットが腕を振るって立っていた。

「もらっていくぞ。電撃使い（エレクトロマスター）の頂点に立つ少女」

「この野郎！！！」

そんなことを言って、美琴に手を伸ばすアンデットに、右拳を振るう上条だが、それはあっさりと受け止められて逆に上条が殴り飛ばされた。

アンデットはその上条に対し、興味などないといった風に視線を外し、美琴の体を肩に抱えてベランダから出て行こうとする。

「魔導書をその身に宿した少女もここだったはずだが・・・・逃げたらしいな。ではさしあたってはこいつだけでも・・・・」

どうやら上条は結界にはぶつからなかったようで、この部屋にいる別の人間はばれていなかった。

が、その背中に一枚のカードが突き刺る。

振り返ろうとすると、背後から《ｔｕｒｎ　ｕｐ》という音声が聞こえ、背後に仮面ライダーギャレンが立っていた。

「さ・・・・せん・・・・・」

「・・・封印のカードか・・・・ふん、所詮選ばれたといっても、人間に封印された程度の奴等だったということか」

「クソッ・・・・・」

「その程度のアンデットを封印したくらいで、勝てると思うな。人間」

バッ・・・・ツン!!!!

と、上条の部屋を再び一瞬の閃光が覆い、あとにはブスブスと煙を上げ、バチバチと火花を散らしながら倒れるギャレンと、上条が部屋に転がっていた。

ーーー

「そうして、あなたたちが来るまで待っていました、とミサカは話を終えます」

これまでの時間、御坂妹は土御門の体の具合をできる範囲で診て、飛び出そうとするインデックスを押さえていたのだ。

アンデットの発言から、インデックスも狙いだということは簡単に分かった。

だからこそ、まだ敵がいるかもしれないのに彼女を出すわけにはいかなかった。

「御坂よりも上の・・・・電撃を放つアンデット・・・！？」

「生まれつき、と言っていたので、あの体からしてもおそらくは電気ウナギかと思われます」

そう、敵はエレクトロエェルアンデット

電気ウナギの始祖たるアンデットだ。

しかも

「言葉を発するだけの知能がある？」

「完全に上位アンデット級・・・・しかも俺たちの封印してきたアンデットを「あの程度」扱い・・・・」

「ご主人様・・・・」

「ん？」

「囲まれています。数は五体と言ったところでしょうか。おそらくは異形のモノ・・・アンデットでしょう」

と、そこで愛紗が息をひそめるように一刀に報告する。

それを聞き、改めて一刀が耳を澄ませると、確実に人間のモノではない足音と息遣いが聞こえてきた。

「・・・インデックスは俺が連れて行く。愛紗は俺が戦っている間に全員を逃がして「ＥＡＲＴＨ」に連れて行ってくれ」

「御意です」

「俺もアンデットのほうに行く。そっちは俺の領分だ」

「助かる」

「え・・・えっと・・・と、とーまと・・・」

「大丈夫だ、インデックス。必ず守ってやるから。また上条と会えるさ」

そういって、翼を開く一刀と変身する剣崎。

一刀の背中にインデックスを乗せ、二人が飛び出して行ってアンデットに向かう。

その隙に愛紗の先導で全員が「ＥＡＲＴＨ」に向かった。

――――――

目の前には、バイザーで顔面上部を覆った長身の女性。
男の利き腕である手には、すでにすべての弾丸を打ち切った銃が、まるでお守りでもあるかのように強く握りしめられていた。

『――――は――――――どこですか――――――?』

そこでは先の現場と同じように、スピーカーのような声を出してなおも女性が質問する。

それに対し、男は知らないと叫び、命乞いをしていた。

その男性に対し、女性が採取確認というかのように、また同じ質問をした。

『教えてください。イクス・・・イクスヴェリアはどこですか』

「し、しらねぇって言ってんだろ!!何なんだよ、そのイクスってのは!?」

『知らない・・・・・そうですか』

そう言って、女性が本当に知らないということを確認し、その場を去る。

「た・・・すかった・・・・?・・・・し・・・死ぬかと思ったぜ・・・」

助かったのかと男がその場で安堵し、息をもらす。

しかし

「なんで俺がこんな目に会わなきゃ・・・・・あん?・・・・・お、おい・・・うそだろおい!!?」

その男性の手にナイフが握られ、その手が徐々に自分の喉仏に向かって持ち上げられていく。

「おいおいおいおい・・・じょ、冗談だろ・・・とまれ・・・止まれよ俺の腕だろうかよ!!やめろ・・・俺ぁ死にたくなゴブッッ」

男のそれを拒否する声もむなしく、ナイフの刃が喉につきたてられ、そこから血が噴き出してくる。

なおも動く心臓の動きに合わせ、そこから噴水のように血が噴き出してくるが、それも十秒もすれば収まってきて、男が自らの血液でできた池の中に倒れこむ。

コヒュー、コヒュー、という枯れるような呼吸音が弱まり、完全に沈黙する。

その火災現場は、のちにミッドチルダ連続放火殺人事件の１１件目に数えられる事件で、この放火殺人事件がついにミッドチルダに入

ってきた、はじめての事件である。

物語は交差する。

今はまだ交わらなくとも

それはいずれ、新たなる物語を作り出すために。

to be continued

奪取（後書き）

と、いうわけでいったい何があったのか、でした！！

蒔風
「これで今回、まずは美琴が連れて行かれたわけか・・・・橘さんは何か知ってるみたいだったけどな」

ええ、彼はあのアンデットがどんなものか知っています。
次回か次々回にでも、それを明らかにしたいと思います。

さて、今回で何と何が交差するかわもうお分かりでしょう。

ドラマＣＤ「ＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｘ」と、「劇場版仮面ライダーブレイド　Ｍｉｓｓｉｎｇ　Ａｃｅ」です。

蒔風
「だけど時期が少しずれてるんじゃないか？「Ｘ」のほうは「ＳｔｒｉｋｅｒＳ」から３年後だし、ブレイドのほうは４年だろ？」

そう、第一部の終わりからと第二部の終わりまでが半年だとしても、まだ約一年半しか経っていないです。

だからティアナは執務官になりたてです。
と、言ってもあんまり変わりませんけどね。

でも、なぜ早く始まったのかもまた謎にしておきましょう。

蒔風
「にしても今回のアンデットにも強弱があるみたいだな」

あるね。
今回のエレクトリックエェルアンデットは、完璧に上級以上です。
何故そこでわざわざ「エェル（ウナギ）」ではなく「エレクトリックエェル」と細かく分類したのかは、また橘さんの解説待ちです。

ちなみにこんな感じのアンデットはまだ出てきます。
雑兵のアンデットと、上級のです。

蒔風
「次回、ティアナ、ミッドチルダへ。そして薄緑参戦」

ではまた次回

捜査

「これで十一件目・・・・」

「ですね。ではミッドに？」

「ええ、そこで協力者とも合流するわ」

時空管理局本局転送ポート

そこで執務官のティアナ・ランスターと、その補佐ルネッサ・マグナスが打ち合わせをしていた。

彼女が追っている事件は、次元世界における連続放火殺人事件。一つ目の世界ではフォルスで六件、二つ目はヴァイゼンで四件、そして、今回三件目はついに第一世界（ミッドチルダ）の地上にやってきた。

その被害者――主だった犯人による死者は、すべて遺跡発掘などの

学者たち。
しかも、盗掘疑惑の掛けられていた者たちばかり。

犯人の姿はすでに掴んでおり、その名を「マリアージュ」と呼ばれていた。

が、被害者の死因は焼死ではなく、のどを引き裂いたことによる失血死だ。
しかも、ナイフの刺さる方向からして、明らかに自らの手によって。

だが・・・・

「一件前の事件は確か鋭利な何かに引き裂かれていましたよね？」

「そう、だからわからないの・・・・確かにマリアージュは剣を持っているわ。でもあの剣でできる切り傷ではないし、今までのやり方とは違うのも気になる・・・」

そう言いながら、どうやらポートの準備ができたらしく、二人が乗って転送される。

行き先は、ミッドチルダ。
まずはそこで、現地の捜査官との合流だ。

――

「ギンガさん！！久しぶりです！！」

「久しぶり、と言っても、最期にあってからまだ一ヶ月もたってないけどね」

ミッドに到着したティアナが向かったのは、ミッドでの放火事件を担当する陸士１０８部隊。
そこで合流した現地の捜査官は、なんの偶然か親友の姉、ギンガ・ナカジマだった。

付き合いの長い二人だ。
こうして会えば、否応にもテンションは上がる。

しかし、ルネッサがジトーーー、と見てきているのに気づき、コホンと咳払いして紹介した。

「ルネ、こちらはギンガ・ナカジマ捜査官。私の親友のお姉さんよ。で、ギンガさん、こっちが私の補佐をしてくれている、ルネッサ・マグナス執務官補佐です」

「よろしくね」

「はい。二人はお知り合いだったんですか」

「そうねー、かれこれ付き合いとしては五年以上かしら？」

と、まあそんな自己紹介はともかくとして、今は事件である。

そちらの打ち合わせを始めて行った。

「事件の犯人は？」

「現場に駆け付けた隊員からの報告から、マリアージュで間違いないそうよ」

「その隊員の話を聞きたいのですが・・・・」

「駄目よ。駆けつけたのは五人だったんだけど、そのうち三人が重体、二人が意識不明のまま」

「そう・・・ですか・・・」

そうしてその後も打ち合わせをして言っていると、ふとルネが思い出したように質問した。

「あの・・・そういえばほかにも協力者がいるようなことをおっしゃっていたような気がするのですが・・・・」

「あ・・・そういえば理樹さんたちはどこにいるんですか？こっち来ることは連絡していたので、多分来てるはずなんですが・・・」

「え？あ、ああ・・・あの人たちは・・・・」

「さぁーーーみんな！！これからみんなを守る正義の味方の登場だーーー！！！！」

『『わーーーーーーーーーーーーー！！！』』

と、そこに司会のお兄さんのような声と、それを聞いてパチパチと拍手する小学生くらいの子供たちの歓声が聞こえてきた。

「ギンガさん、あれは・・・・」

「どうやら、低学年生の見学のようですね。こういったデモンストレーションもするんですか？」

「そうね。やっぱり、この仕事のこと、もっと知ってもらいたいからね」

どうやらそれは防災課による見学会で、そこで実際の隊員と話をしようと言う催しのようだった。

それはいい。しかし、ティアナの視線はそのイベントにではなく・・・・

「あれ、恭介さんじゃないですか？」

そのステージに立ち、マイクを（小指を立てて）握っている青年に向いていた。

「じゃあ呼んでみよう！！せーの！！」

「「「ナカジマさーーーーーーん！！！」」」

「そしてーーー！？」

「「「リトルバスターズーーーーーー！！！」」」

ドーーーン！！

「スバル・ナカジマ防災師長と！！」

「「「「リトルバスターズだ！！！」」」」

と、何やら背後に爆発を起こして登場したのはスバルとリトルバスターズ初期メンバーだ。

というか、もはや何でもありである、この集団。

「ヒーローの登場には爆発・・・・・これが正義だ」

「おうよ。謙吾っち、今日は熱くいこうぜ」

「そんなことよりもクチャクチャハズいぞッ!!」

「恭介・・・行き当たりばったり過ぎるよ・・・」

「わ、私もびっくりで・・・って真人さん!?背中燃えてますよ!?」

「おう!!燃えるように熱い背中の筋肉だぜ!!」

「違います!!爆発の火が燃え移ってますって!!!」

「ん?・・・おぅぁお!?あっついーーーーーーーーーー!!!!」

と、ステージの上で体を張った漫才をする真人。

恐ろしい男である。

と、言うか防災課のステージで火事を起こしていいのだろうか？

「ふぅーーー、危なかったぜ。まさか俺の筋肉がついに炎を上げる時が来るとは思わなかった・・・」

「真人、それは違うよ・・・」

「私たちは日々！みなさんの平和と安全を守って訓練を繰り返し、危険な場所にいる人を安全な場所にまで・・・」

「だ、大丈夫なのかしら・・・？」

「あんなんでも子供受けはいいみたいなのよねぇ・・・・」

大きな汗を流しながら、ティアナが唖然とし、ギンガがあはは、と困っているのか呆れているのかわからないように笑った。

――――――

残りのメンバーは特に召集されていない。

「全員じゃないんですね」

「うん。でもバックアップは取ってくれるから大丈夫だよ」

『まかせてよー』

『がんばるのですっ！』

『ティアナ君、今度おねーさんとクロスシフトしないかい？』

『姉御、エロいっす』

『・・・・ぽっ』

「来ケ谷さんのが気になるけど・・・ありがとね」

「で、敵はマリアージュだっけ？」

「そう、目的も放火方法も不明。ただわかっているのは、発掘学者、それも犯罪者スレスレの人たちを狙っているということよ」

そんなこんなで、とりあえず事件の現状を説明しているティアナと、
それを聞く理樹。

と、そこに突撃してくる一人の少女がいた。

「ティーーーーーーーアーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

「え？スバ・・・オフゥ！？」

ドスッ！

そんな音がして、ティアナに突っ込んで来たのは、さっきまでステージではしゃいでいたスバル・ナカジマその人だ。
床に倒れるティアナ、のしかかるスバル。

「ひっさしぶり！！事件か何か？」

「突っ込んでくるのやめなさいよ！！」

「えーーー？だってぇーーーー」

「だっても何もない！！」

であってさっそくそんなド突き漫才を繰り広げる二人だが、そこにギンガが割って入ってやめさせた。

「ほらほら、事件なんでしょ？せっかく理樹さんたちも来たって言うのに、恥ずかしいところ見せるんじゃありません」

「「は、はい・・・」」

そうして話していると、こっちでの拠点はどこにしようか、とルネが聞いてきた。

ティアナはホテルでもいいというのだが、そこでスバルは自分の部屋でもいいよと提案してきてくれたのでティアナはそっちに。別拠点を構えるといったルネッサはそのままホテルに向かい、リトルバスターズの面々は・・・・

「僕らは乗ってきた船にいるよ」

「どの船ですか？港は？」

その質問に、理樹はうーーーん、と声を出して、ニコリと笑って口に人差し指を当てた。

「「船」というかなんというか・・・・秘密だね♪」

「え？でもそれじゃ・・・」

「大丈夫。いざとなったら船ごと行くから」

「え？」

と、そこで理樹はこの話を打ち切り、これからどうするのかを聞いた。

どうやらティアナはこれからこっちでの現場検証に向かうそうだ。荷物はスバルが「まっかせて！！」と張り切っているので、彼女が帰宅する時に一緒に持って行ってもらうことにした。どうせ帰りは遅くなる。

そうして、ティアナ、ギンガと共に、理樹と鈴が手伝いに行って、ルネッサは建物に入って資料をまとめに行った。

残されたのは、スバル、恭介、真人、謙吾。
と、そこで不意に真人がスバルに話しかけた。

「なあスバルっち」

「なんですか？真人さん」

「おまえらって同じ部隊にいたんだよな？」

「そうですよー。ティアがいて、私がいて・・・で、うちの部隊にヘリパイのアルト、さらにギン姉」

「なんだ、ほとんどそろってんじゃねェか」

「そうなんですよ！！エリオとキャロも呼んで来れば・・・・」

そんな世間話のような話をしていく二人だが、恭介と謙吾が驚愕に包まれていた。

「真人が・・・・筋肉以外の会話をしているだと・・・・！？」

「しかもまともに・・・これは大変な事件になりそうだ・・・・・！！！！」

失礼な奴らである。

しかし、この事件が大変なものになるのは正しい予見だった。

――――――

た。仮面ライダー」

「え？」

「へぇ・・・」

「私を、連れて行ってください。五体満足な状態で、化け物の蠢くその最深部まで」

to be continue

捜査（後書き）

まずは謝罪をば。

ミッドでの放火事件は三つ目の世界でであって、三件目じゃなかったんだーーーー！！

蒔風
「な、なんだってーーーー！？」

そこは修正いたしました。
気付いてよかったぁ・・・・

蒔風
「今回はティアナと理樹たちの合流シーンだな」

ほとんど原作と変わらないからかなり難産だった。

蒔風
「まあなーー。ここはあのシーンで、そっからでーす・・・とか言ったら読者に張ったおされるもんな」

それに内容知らない人もいらっしゃる。
と、なると簡単には書かないとまずい。
難しいね。

蒔風
「そして最後のは？あれは翔太郎かね？」

そうです。
風都の探偵、左翔太郎です。フィリップも一言だけ言葉を発してましたね。

蒔風
「依頼人は・・・女か？」

ええそうですね。
ちなみにオリキャラです。と、いうことは当然キーマン・・・この場合はキーウーマンですね。

蒔風
「なるほど・・・さらにキャラを絡めていくんだな」

そのとおり！！
ちなみにこのキャラ、名前に困ったので友人（相手はどう思ってるか知りませんが）の名前を少しもじりました。

蒔風
「許可は取ったのか？」

大丈夫だ。問題ない

蒔風
「次回、復活の不死生物とは一体？」

ではまた次回

根幹

風都、かもめビリヤード一階

そこにあるこの街の切札、鳴海探偵事務所

その中で、テーブルを挟んだソファに座っているのは、左翔太郎と、依頼者の女性だ。

「化け物の中を安全に？つまりは・・・護衛ってことか？」

「ええ。お願いします。私はそこに行かなければなりません」

「それはまたどうして？そんなところに行く理由を知りたいね」

依頼人の女性に興味を持ったのか、フィリップがいつもの仕草をしながら女性に聞いた。

それに対し、女性は特に答えない。

「依頼人のプライベートよ。それとも、ここの探偵事務所はそこま

で知らないと依頼に応じられない？」

その言葉に翔太郎は少しムッ、とするものの、それでも確かにその通りだ。
いちいち内容の細かいところまで気にしない。依頼を完遂することがこの仕事だ。

別に知るのはそれまでの過程の内でもいい。

「わかったぜ。あんたを絶対に送り届ける。俺は左翔太郎。こっちは相棒のフィリップだ」

「よろしく」

「で・・・あんたの名前は？」

「私？私は、長岡ユキよ。なんとでも呼んでちょうだい」

ーーー

そう、あの周囲をかこっていたアンデットに、エレクトリックエェルアンデットはいなかった。
だからこそ、もしかしたら一刀はインデックスを守り切れたのかもしれない。

「カードに封印したら消えた。やっぱり橘さんが相手にしたのと同じだ」

「どういうことなんだ・・・・愛紗、橘さんは？」

「それがまだ・・・・」

と、玄関口でそんなことを話していると、医務室から連絡が入った。

『みなさん、橘さんが目を覚ましました。話があるようです』

それから数分後には、医務室のベットに横たわっている橘のもとに一刀や愛紗、剣崎が集まっていた。

「橘さん！」

「おお剣崎。心配かけたな」

頭に包帯などを巻いてはいるものの、いたってげんきなたちばなをみて、一同がほっとする。

だが、こうしているのも惜しいほどに、彼等には知りたいことがあった。

「橘さん、聞きたいことがあります」

「ああ、アンデットのことだろ?その話をするためにみんなに来てもらった」

そうして、橘が口を開く。

ことはつい一か月前にまでさかのぼる。

「ＥＡＲＴＨ」でアンデットに関する研究をしていた橘のもとに、一本の電話が匿名でかかってきたのだ。

その内容は、海岸近くの山奥、その洞窟に、意味不明な、そして大きな石板がある、というものだった。
その電話自体は橘がもっと詳しく聞こうとする前に、石版の場所を伝えただけで切れてしまったが、確かめてみるには十分な内容だった。

今考えてみれば、なぜ「ＥＡＲＴＨ」のほうではなく、この橘の部屋に直接かかって来たのかを考えると違和感があるのだが、この時

は特に気づかず橘はその場所に向かった。
なにぶん、匿名からの電話だし、内容もあいまいな情報なので、特に重くも受け止めず一人で。

しかし洞窟に入りその石板にたどり着いて、橘は思い直した。

「デカい・・・・・」

その石板は、もはや「板」というよりも、「壁」と言った方が的確であるほどに巨大なものだった。
そしてそこには、確かにアンデットの紋章があった。

その石板をカシャカシャと写真に収めていく橘だが、

「ふむ・・・これは確かに・・・む？」

と、ここで彼は電話の違和感に気づいた。
一切アンデットのことを言ってはいなかったのに、なぜ自分のところに電話が来たのか。

自分のところにそう言った案件の電話が来たために、錯覚してしまっていた。

周りを見らたそうとし、石版に背を当てる。

そして直後、彼は後悔した。もっと大人数で来るべきだった、と。

『ニンゲン・・・』

『ニンゲンノタマシイ・・・』

『人間?』

『魂だ!!何万年ぶりかの!!』

『外・・・そうだ・・ここには外がある!!』

『食え!喰え!!』

『魂を食らえ!!』

「な！？」

ゴポッ・・・ゴボゴボゴボゴボッッ！！！

そして突如、石版の中から黒い水があふれ出してきて一面を覆った。
その水は洞窟内の地面を全て覆うと、さらに壁を這いあがって全方位を水で覆いつくしていき・・・

「こ・・・これは・・・まさか・・・！？」

それを見、橘は急いで洞窟の外に出た。

後ろをちらりと振り返ると、水から湧き上がるかのように次々と化け物――――アンデットが出現し、そしてそれは一体たりとも見たことのない者だった。

「く・・・こいつらを野放しにするわけには・・・・！！？」

と、そこで「ＥＡＲＴＨ」に連絡を取ろうとして連絡機を取り出す橘だが、直後にそれをアンデットに弾き飛ばされてしまう。
手を押さえ、舌打ちする橘だが、湧き上がってくるアンデットは止まらない。

そして、アンデットの顔が一斉に、グルリと橘に向けられてきた。

「ギェエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

「ッ！？変身！！」

《ｔｕｒｎ　ｕｐ》

そうして変身した橘は襲い掛かるアンデットと交戦しながら、怪我を負いながらも何とか逃げ出したのだ。

そして撮った写真を解析して、その文字盤を読み取りその内容を知って、襲われるであろう少女のうち、一番近い場所に向かったのだ。

すなわち、学園都市。

そこで、彼は御坂妹を助けたのだ。

「そ・・・そんなことが・・・・」

橘の話を聞いて、剣崎が驚く。
そして、話はアンデットのほうへと移った。

「だけどアンデットは全部封印していたんじゃ？」

「俺もそう思っていた。だが、そうなるとおかしくないか？」

「え？」

「生物の始祖たるアンデットを戦わせてこの星の生態系の頂点を決める戦い「バトルファイト」。だが、それに選ばれた生物は５２種・・・少ないとは思わないか？この地球上にはまだ途方もないほどの生物がいるのに？」

それを聞き、剣崎ははっとした。
確かにそうだ。しかも、個体によっては細かく分類されていたものもいた・・・・

「人間、ゾウ、カマキリなどと簡単に分けられているものもあれば、スパイダーとタランチュラ、さらにはギラファノコギリクワガタなどとまで細かく分類されていたものまでいたのに、５２種は少なすぎる」

「じゃあつまり・・・あのアンデットたちは、バトルファイトに選ばれなかったアンデット？」

「そうだ。しかも、その理由は「弱いから」ではない。無論、そう言った理由のものもいたが、そうでない者もいる」

そう、バトルファイトは地球上での生態系の頂点に立つ者を決めるべく行われるバトルロワイヤルだ。

ゆえに、異常に強い者がいてはならない。バランスが重要なのだ。一人勝ちだけは許されない。
そこからあぶられたものには、当然その力が強すぎたがゆえに封印され、バトルファイトに参加できなかった種族もいたのだ。

いわば、オフィシャル選手ではなくストリートで名を馳せるようなもの。
ただただ強すぎたがゆえに、枠に入れなかったということ。

「そ、そんな奴らが・・・・」

「ああ・・・襲ってくる雑魚共の大半は俺たちが勝って封印したアンデットと同等くらいの力。弱いアンデットははなから戦わずに自然に帰った。しかし、強力なアンデットは、あのジョーカーすらをも凌ぐ」

「な・・・・・」

そう、今回の敵は、そんな奴らだ。
だからカードに封印すると、彼らの姿は消えてしまったのだ。

「ま・・・何枚もラウズカードを使わずには済むが、な」

そこまで話た橘に、一刀が最後の疑問を挟んだ。
まだ、橘の話には聞くべきことがある

「橘さんは、「狙われるであろう少女のうち」って言ってたよな?」

「ああ」

「標的は・・・複数人いる?」

「そうだ・・・・・」

「なんで彼女らだと・・・・」

「石版を解析、解読した。見てくれ」

と、橘が宙にモニターを表し、そこに写真を提示していく。

そこにはよくわからない文字で言葉がつづられていたのだが、すでに解読は終わっているということもあって、即座に訳文が出てきた。

「これは・・・・・！！」

《我ら、「大いなる者」》

《この地にて、一つの種を選びて繁栄を約束せん》

そこにあったのは、バトルファイトを開始するといった旨が書かれていた。

つまりこれは、その観測者が残したものだったのだ。

そして、そこに書かれているのはそれだけではなかった。

《我ら、この地に邪神を見つけたり》
《そのもの、世を破壊と混沌に導かん》
《この地の繁栄を約束せんがため、我ら邪神を封印せり》

「邪・・・神・・・？」

「ああ、おそらくはこいつが元凶だ。見ろ」

と、モニターの一部を拡大し、さらに細かく見ていく橘。
そこには、先ほどまでの筆記とは明らかに違う文字で掘り込まれた文があった。

【十の幼き少女の魂を捧げよ。我が身の力と成らんが為に】
【さすれば我、彼の者に無限の力を与えたもう】

「これは？」

「こいつを封印した「大いなる者」ってのは、多分あのモノリスを作った奴ら・・・バトルファイトの統率者だ」

「モノリス？」

「ああ・・・バトルファイトを促していた、捻じれた石版だよ。結構前に破壊したんだけど・・・まさか！！」

「そうだ。おそらくはその影響で封印が弱まり、あの文字を外の石板に掘り込むことができたんだろう。そして、俺がアンデットを解き放ってしまった」

「待ってくれ。ってことはアンデットで蓋をして封印してたんだろ？それならもう邪神の封印も解けてるんじゃないのか？」

「いや、それは違う。ここにもあるように、「邪神」はアンデットとはまた別の存在らしい。封印に使われたアンデットは不死だから衰えることはないが、この邪神は一万・・・いや、場合によってはさらに太古から封印され続行けていた」

「邪神は魂に飢えている・・・・ってことか？」

「ああ。そしておそらくは強い能力や魂を持つ者であろう者の中で、一番近かったのが彼女だった・・・・連れ去られてしまったがな」

「なるほど・・・」

「だったら警戒態勢を引かなければなりませんね」

「うん。力を持った少女は、幸いなことに多く「ＥＡＲＴＨ」にいる。みんなをここに・・・」

そうして一刀が各方面へと連絡を取ろうとするが、そこで医務室の扉が開いて、一人の青年の声が聞こえてきた。

「なるほどな。大体わかった。二人ならもう連れてきたぜ」

「！！　士！」

「それにユウスケも・・・・あ、梨花ちゃんに羽入ちゃん！」

「見たこともないようなアンデットってのそういうことか」

「俺たち、雛見沢に行っている時に・・・・」

標的であろう梨花と羽入をここまで連れてきた士とユウスケが、一連の話を聞いて納得していた。
海東と夏海はすでに雛見沢で別れ、各地に走っていた。

そして話の内容から、士は大まかながらも邪神の目星をつけていた。

「そいつ・・・知ってるかもしれねぇ」

「本当か！？」

「ああ・・・だが俺が知ってんのは別世界のだ。こっちのとはかなり違う。それにそれなら・・・・・」

「それなら？」

「多分、海東の方が詳しいと思うぞ？」

――――――

ゴォンっ！！

と、そこで宮殿の屋根を突き破られた。ハクオロがウィツァルネミテアの姿となって、巨大な姿に変貌したのだ。

が、その睨みつける敵は人間大のモノ。

現在、カルラとトウカが交戦しているものの、一向に攻撃が入らない。

この二人の攻撃をして、そのすべてを回避、防御しているそのアンデットは、全身が黒光りしており、マントのような羽を持っていた。

『二人ともどけェ！！』

ドォン・・・・！！！

そのハクオロの咆哮と共に、巨腕が振り下ろされてアンデットに叩きつけられる。

だが

『いない！？』

「おっそいねぇ・・・あんたら人間は、デカけりゃ勝てると思ってんのかい！？」

そんな声がし、直後シュカッ、という音がしてハクオロのアキレス腱が切り裂かれた。

ガクリと崩れる巨体。

しかし、即座にそれは再生し、再びその足で立ってアンデットを睨みつけた。

『カァぁああアアアアアアアア！！！』

そして、その口の前に黒い球体が出来上がっていく。

それは見て分かるように、途方もない力を込めたエネルギー弾だ。

「へっ・・・まぁじかよ・・・あんたクレイジーだぜ！！」

『オオオオオオオオオオオオ！！！』

ドォン！！！

そして、それが放たれて着弾、爆発。
炎を上げて、宮殿の広い謁見室が炎に包まれた。

しかし、その炎の中にアンデットはいなかった。

それを見て、ハクオロが空に向かって咆哮を上げる。

奪われたものは、あまりに大きい。

その奪われたものとは――――――――――――

そうして

アンデットが逃げてきたのは森の中。
その肩には一人の少女が担がれていた。

「『森の母（ヤーナマウナ）』の少女、ね。これでまた一人、と」

意識を失い、担がれている少女の名はアルルゥ。
森と心を通わせ、動物の言葉を聞く少女だ。

「さっきも虎が追っかけて来たみたいだし、力は本物。申し分ない」

「申し分ないところ失礼だが、返してもらうよ」

「なに!?」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＢＡＲＲＩＥＲ!!》

と、アンデットが森を走っていると、目の前に青いホログラムのような壁が現れ、行く手を阻んだ。
その壁の前に急ブレーキで止まるアンデットが声のした方向を見ると、そこからシアンのカラーに身を包んだ仮面ライダー、ディエンド――――海東大樹が現れてきた。

「なんだテメェ？」

「今連絡が入った。お前達が復活させようとしているもの・・・まあ、復活させるわけにはいかないんだよね。しかも、そんな子供の命を使ってなんて」

「あぁ？・・・ああそうかそうか。お前「仮面ライダー」ってやつだな？バトルファイトのボンボンどもがやられたって言う」

「おや、ならば君も同じ未来をたどることだね！！害虫君！！」

そう言って、ディエンドが銃弾を放ってそれがしなり、肩のアルルゥに当たらないよう的確に命中させていく。

しかし、その弾丸の九割は回避され、残りはすべて打ち弾かれた。
アンデットの、実に素早い動きによって。

その動きは本能に訴えかけるような気味悪さを持っており、それがゆえに一発で何の始祖かはっきりした。

「テメェ・・・害虫呼ばわりしといて・・・ただで済むと思ってんのか！！！」

アンデットが激昂し、しかしそれでも肩のアルルゥは降ろさずにそのままディエンドへと突っ込んできた。
その速度はかなりものだが、ディエンドもある程度ならば加速することができる問題はない。

突っ込んでくるアンデットを見て、銃口を向けながらディエンドが相手の正体を叫び走りこんでいった。

「問題ないね。さ、その子を放したまえ、ゴキブリ君！！」

to be continued

根幹（後書き）

と、いうわけでアンデットの出自を明かさせていただきました！！
え？アルビノジョーカー？そんなんいなかったんやｗｗｗｗ

と、いうのは冗談で。

当初、アルビノジョーカーも出すことを考えていました。

しかし、彼を入れるとまた話がややこしくなりますし、どうしようかと悩んでいました。

と、ここで思いつきました。

あのアンデット達は、邪心を封印するために使われていました。
そして、アルビノジョーカーはその封印とはまた別に封印されていた、と考えたのです。

これはいける。
こぎつけ？いいえ、設定です（笑）

友人もこう言っていました。

「原作から変えていくのが、二次創作の醍醐味だ」と

よろしい、ならば改変だ。

アルビノジョーカーにはさよなライオンしてもらいました。
ごめんねアルビノくん。

そして、十人の少女。

これは魂の質や持っている力の強さで選びました。

まあ、礎には十人の少女が必要。
その強さで邪心の力も上下しますからね。

さて、その十人とは一体!?
すでに判明しているのは五人。

これからまた誰が狙われるのか!!

ではまた次回で！！

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ

残り五名

害虫

森の中での戦闘
コックローチアンデットとディエンドの戦いは、高速移動によって展開されていた。

しかし高速移動いっても、まだ目視できるレベルだ。
だといっても、コックローチアンデットは依然としてその肩にアルルゥを抱えている状態で、ディエンドの動きについてきていた。

（なんて速度だ・・・こっちの弾丸がもう掠りもしない！！）

そう、しかもその状態でディエンドの攻撃は一切当たっていなかった。
それどころか相手の攻撃に装甲から火花を散らしてしまうほどだ。
ついてきていたどころではない。すでに凌駕し始めていたのだ。

「その程度か？その程度だろうなぁ？所詮人間じゃあこの星の統治者になっても、一番の強者にはなれない、ってこった！！」

ガギィ！！

と、ディエンドの装甲にコックローチアンデットの鉤爪が命中して火花を散らす。

（ぐっ・・・・勝て・・・ない・・・だが彼女だけは！！）

しかし、それでもディエンドは諦めてはいなかった。
現に、コックローチアンデットが彼女を連れてこの場から逃げていないのがその証拠だ。

相手にしてみれば逃げればそれで勝ちなのに、ディエンドはいまだに敵をこの場に引き留めている。

それに、彼は怪盗だ。
盗んで逃げるは専門分野。
くらまし、惑わし、かすめ取る。

今までだって、そうして戦ってきたのだから！！

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＩＬＬＵＳＩＯＮ！！》

ディエンドがカードを装填、引き金を引くと、コックローチアンデットを囲むかのように五体のディエンドが現れ、銃口を一斉に向けた。

「早さじゃ勝てねェから今度は数かよ！！」

「そう。君らだってうじゃうじゃいるじゃないか。ハッ！！」

と、計六人のディエンドが次々に襲い掛かり、その肩に担いだアルルゥを奪い取ろうと腕を伸ばしていった。

まず一気に二人が掴みかかり、それをバックステップで避けるコックローチアンデットだが、さらにそこに背後から一人が飛びかかってくる。
それを後ろ蹴りで押しのけるが、その隙に左右からディエンドが一人ずつ掴んで拘束した。

「このっ！！」

「いただいたよ！！」

と、そこでコックローチアンデットの頭上を宙返りして飛び越えて言ったディエンドは、そのままアルルゥの体を掴んで奪い取った。

成功である。
しかし

「テメェこの野郎！！」

激昂したコックローチアンデットが、さっきと比べ物にならない速度で突進してくる。
それに対し、ディエンドはアルルゥを抱えながらカードを装填しようとしていた。

間に合わないか！？

ディエンドがそう思いとっさに彼女を守ろうと背を向けた瞬間

「ガォルルルルルル！！！！」

バザァッッ！！と茂みを押しのけて、アルルゥになついている白虎「ムックル」が飛び出してコックローチアンデットに剛腕を振るい爪で引き裂こうと襲い掛かった。

それをギリギリで回避したコックローチアンデットだが、ディエンドとアルルゥを守ろうとムックルがさらに咆哮を上げた。
コックローチアンデットはその声の振動に若干ながらも後退させられ、その隙にディエンドがカードを発動させる。

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！》

そしてムックルの姿ごと二人がその場から消え、コックローチアンデットが咄嗟に飛びかかってその腕が空を切った。

「チッ！！・・・逃げられたか・・・」

「ありがとう、白虎君（しろとら）」

「ヴォフ」

と、その戦闘の場から逃げ出した海東は変身を解き、疾走するムックルの背の上で腕を押さえていた。

（強かった・・・想像以上に。とりあえずこの子を保護者のもとに連れてって、それから「ＥＡＲＴＨ」に保護だ・・・）

「まったく、厄介なことになって来たね」

ーーー

「私の番犬。一緒にいて、損にはならないわ」

そうして彼女が車に乗って目的地に向かい、その後を翔太郎がバイクでついていった。

二人の乗った車とバイクが、町を抜け、海岸線沿いの道路を走る。

と、そこで

『なあ、行くとこは聞いた。でもよ、なんでそこに行くんだ？化け物ってなんだよ？』

『あら、気になるの？』

『まあそりゃあな』

車の中の長岡と、バイクで追う翔太郎が通信機で会話をする。

その内容は、至極まともなものだ。
いったい何から守ればいいのかわからなければ、護衛のしようがない。

『そうね・・・だけど、そんなこと話している場合かしら?』

『あん?』

『お客さんよ、ハードボイルドさん!!』

そんな会話をしていると、長岡がハンドルを切って曲がり、海岸の駐車場に突っ込んだ。

この海岸は岩場ばかりで、とてもではないが海水浴場として機能している場所ではない。
ゆえに車も他の人も一切おらず、とりあえずほかの被害は出なさそうだ。

そして、長岡と犬が一緒に車から飛び降りてきた。
直後にその車に向かって何かがが飛んできてボンネットに突き刺さり、車を爆散させる。

「キャあっ！！」

その爆風で地面を転がる長岡だが、それでも何とか受け身を取って膝立ちになる。
その目の前には、一対の羽根を持ち、口がまるで針のようにとがった怪人が舞い降りてきた。

柴犬が長岡の前に立って怪人（アンデット）に向かって唸り声をあげ、長尾もポーチから銃を取り出して銃口を向けた。

「守り、ってこと？石版に行かせないつもりね」

「フィリップ！！出たぞ！！」

《ジョーカー！！》

そこにダブルドライバーを装着した翔太郎が割って入り、ガイアメモリを起動させた。

『ああ、翔太郎。いこう』

《サイクロン！》

すると翔太郎の脳裏にドライバーでつながったフィリップの声が聞こえてきて、相棒のガイアウィスパーも聞こえてきた。
そして直後、ドライバーにサイクロンメモリが出現。それを押し込み、さらに自分のジョーカーメモリを押し込み、ドライバーを展開させた。

《サイクロン！ジョーカー！！》

そして、その身体を風が覆い、姿を仮面ライダーWのそれへと変身させ、戦闘を開始した。

「行くぜ！！オォリャァ！！」

気合一発。

声を上げ、再び上空から襲いかかろうとするそのアンデットの足をつかみ、引きずり降ろそうとしがみついた。
しかし、アンデットはそのWを足蹴にし、地面に落して上空から襲

いかかる。

「アダッ！？」

『翔太郎！こいつはアンデットだ！！』

「なんだって！？」

『こいつは倒してもすぐに復活する。勝負を長引かせるのは不利だ！！』

チュン、チュンチュンチュンチュンチュン！！！

フィリップからの警告が飛ぶものの、上空のアンデットの針のような口から、同じように針のような赤い弾丸が打ち出されてそれが地面に突き刺さり穿った。

この駐車場には一切の車もなにもなく、しかも開けているので、上空から狙われると格好の的になる。

「うおっ、った、った、った！？」

『翔太郎！岩場に隠れるんだ！！ここでは的になってしまう！！』

「くっ！」

と、フィリップの提案に乗って海岸に向かい、荒々しい岩場に隠れるW。
するとそこには同様に長岡もいて、その隣にはちょこんと柴犬も座っていた。

「ちょっと！！こっち来ないでよ！！」

「え！？」

『そうだぞ翔太郎。依頼人を守らなきゃならないのに、依頼人のところに逃げ込むとは何事だい？』

「はぁ！？え？俺悪いの？確かにその通りだけど、俺が悪いのかこの場合！？」

そんな言い合いをする彼らだが、そこにあるものを発見する。

服だ。

作業員の着るようなものから、男性用の服、女性用の服、子ども服、さらにはサーファーが着るようなライフジャケットやダイバースーツ、釣り人のジャンパーや、釣り竿やらの道具もそこに捨てられてあった。

「これは・・・？」

『・・・・翔太郎。あのアンデットはおそらく蚊のアンデットだ』

「フィリップ？」

『モスキートアンデット、といったところかな？そして、あいつが撃ち出してきているのは、赤い弾丸だ・・・！』

「・・・まさか・・・あの野郎！？」

『そうだ、あいつは・・・ここにやってきた人間の血を吸って、それを押し固めて高圧で噴き出してきているんだ！！！』

「これだけの人間を・・・」

『許せないね、翔太郎』

「ああ・・・あの野郎は、絶対にブチノメス！！！」

ザッ！！

《ルナ！》《トリガー！！》

「行くよ！！翔太郎ッ！！」

「ああ・・・フィリップ！！！」

《ルナ！トリガー！！》

「『オオオオオオオオオオオオオオ！！！！』」

そして、岩場から飛び出した幻想の狙撃手の銃口から飛び出した金色の弾丸が、吸血の化け物へと襲いかかった。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！！』」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

害虫（後書き）

さて、今回はディエンドとWの戦闘でしたがいかがでしたでしょうか？
敵は、タイトルの通り害虫ですねぇ！

蒔風
「キモチワルイ・・・・しかもコックローチに至っては上級じゃねぇか！」

そうです。
そりゃあそうでしょう。
だって恐竜の時代からいるようなやつですよ？
生存能力も高いし、一説だと人間が滅んだ後に繁栄するのは奴らだってもいわれてんですから。

それにほら、M宇宙ハンター星雲人だって正体はゴキブリだったじゃないか。

蒔風
「何のネタだ」

「ゴジラ対ガイガン」での敵宇宙人。

蒔風

「濃いわ！！」

で、それ考えてたらまた面白い考えが浮かんでしまった。

蒔風
「ほう？」

一万年前のバトルファイトは人間の始祖、ヒューマンアンデットが勝った。

だったらその前の恐竜時代ではダイナソーアンデットが勝ったのか？

蒔風
「む？確かにそうだな・・・・・」

では彼らと戦ったのは？
伝説に残っているドラゴンや人魚なんてもののアンデットがいたら！？

蒔風
「それはまた壮大だな」

でもありえなくはないでしょう？

蒔風
「確かに」

ま、話には出しませんけどね。
誰かこの案使いません？

蒔風
「にしても強かったな、コックローチ」

彼の速度はクロックアップほどではないですが、ディエンドの移動よりは早いです。

ちなみに作者の考えとしては

ハイパークロックアップ＞クロックアップ＝アクセルフォーム＞アクセルトライアル＞ディエンド高速移動

くらいに思ってます。
ちなみに「風足」や「加速開翼」はクロックアップくらいです。

蒔風
「で？コックローチは？」

アクセルトライアル程度です。
でもトライアルの速度もだんだんと上がっていくので、いつかはクロックアップに追いつくと思いますよ？

蒔風
「そして、長岡とかいう女史。いったいなぜ、石板の事を知っているのか、そこに向かおうとしているのか。気になるな」

地味にオリキャラですしね。
今回の事件、いろいろとめんどくさいです。

しかも下手するとこのまま続いていって、「次の日」とか「数日後」とか忘れそうだ。

読み返してみて「あれ！？この第三章一日でかたついてる！？」なんてことになるかもしれない！？

蒔風
「気をつけろよ！？」

気をつけます！！

蒔風
「次回、Wの害虫退治！！」

ヒャッハー！汚物は消毒だーーーーー！！

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ

残り五名

輪郭

Ｗ　ＶＳ　モスキートアンデット

Ｗルナトリガーのもつトリガーマグナム銃口から金色の弾丸が放たれ、めちゃくちゃな軌道を描きながらもひとつ残らずモスキートアンデットに向かって飛んで行った。

それを左右上下にとちょこちょこ飛び回って回避するモスキートアンデットだが、回避したはずの弾丸がＵターンして戻ってくる。

「ギッ！？」

「ほらドンドン行くぞォ！！」

ガキョンガキョンガキョン！！！

さらにＷは追い打ちをかけるかのように弾丸を放ち、モスキートアンデットを弾丸で包囲していく。

そうして一発が命中し、そこからはなし崩しのように二発三発と命中していった。

「ギ・・ギギ・・・・」

『このまま引きずりおろそう！』

「ああ！」

《ルナ！ジョーカー！！》

動きの止まったモスキートアンデットに、ルナジョーカーへとハーフチェンジしたWが腕を伸ばして足に絡めた。
そしてそのまま引きずりおろし、地面にたたきつけた後にさらにフィリップがメモリを変える。

《ヒート！ジョーカー！！》

「オォラァ！！」

ボゴォ！！！

翔太郎の気合いと共に、炎を纏ったヒートジョーカーの拳がモスキートアンデットの顔面に突き刺さり、その体を岩肌に叩きつけてやる。
ガリゴリと岩場を削りながら吹き飛ばされたモスキートアンデットを睨み付け、Wが腰のスロットにジョーカーメモリを落とし、腰を叩いてマキシマムドライブを発動させた！

《ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！》

その発動を以って、その両拳に先ほどとは比べ物にならない程の炎が灯った。まるで、怒りの炎であるかのように。

「うぉオオオオオオ！！」

そうして、その拳を握りしめて走り出したW。
その拳で渾身の力を持って殴りつけ、相手を爆散させるつもりなのだ。

しかし

「危ない！！もう一体いる！！」

「なに！？ぐぁッ！？」

長岡の言葉と同時に、ガゴッガゴッガゴッ！！！という重い音を立ててWに向かって拳ほどの大きさをした鉄球が飛んできて、その動きを阻害した。
その鉄球をその両拳で粉砕、地面に落として鉄球が飛んできた方向を見ると、そこにはもういったいアンデットがこちらに向いて立っていた。

「なんだよ・・・まだいやがったのかよ！！！」

『鉄球！？そういえば・・・・そうか翔太郎。あいつは鉄バクテリアだ！！』

「はぁ！？」

マキシマムドライブを中断されたばかりでなく、それを無駄撃ちさせられた翔太郎がイラつきながら、その鉄球を打ち払って落としていく。

そうしながらも、フィリップが相手の生物を推測していっていた。

新たなアンデットは鉄細菌、というよりもただ単の細菌の始祖たるアンデット、バクテリアアンデットだ。

その種の中には鉄を食べるバクテリアが存在するのだが、おそらくはその力を持って鉄を食らい、押し固めて吐き出しているのだろう。

『被害者たちがここに来た時に乗っていた車などを処分していたのはあいつだったんだ！』

「チッ・・・とことん食らいつく野郎どもだ！！！」

と、そこでモスキートアンデットがムクリと起き上がり、バクテリアアンデットの隣に立つ。

そして、バクテリアアンデットがWに向かって吐き出した鉄球に赤い弾丸をぶつけて破砕、散弾のようにして浴びせかけてきた。

「うぉ！？オアあああああ！！！」

『うわぁあ！？くっ・・・翔太郎、まとめて焼き払うしかない！！』

「だったらこいつで間違いねぇな！！」

《トリガー！！》

《ヒート！トリガー！！》

全身から散弾による火花をちらし、後ろに押し込まれるWだが即座にメモリをチェンジして、ヒートトリガーへと変わった。

だが、相手からの散弾がやむことはない。
変わった瞬間にはエネルギーによる膜があるので大丈夫だったが、
その後の散弾はなおもこちらに当たり続けている。

「グァッ・・・こ・・・の・・・・・！！」

『グアア！！・・・クソッ、怯んでいる暇はない！！一気にやろう！』

《トリガー！！マキシマムドライブ！！！》

「『トリガーエクスプロージョン！！！』」

トリガーマグナムの先端から噴き出してきた熱線が、炸裂してきた散弾を蒸発させる。
そしてさらにはモスキートとバクテリアアンデットのもとにたどり着き、その体を焼き焦がしていった。

「ギギギギギィィィ！！！」

「ブシュルァァァアアア！！！」

そしてその二体が炎に焼かれ、爆発、吹き飛んで身体が岩場にたまっている水辺に突っ込んだ。
だがその体が爆散することはなく、炎と水の中で倒れた二体の腰のベルトが、パキンと縦に割れた。

「クソッタレ・・・これでもまだやれてねぇのかよ・・・・」

『だがベルトは割れた。これでしばらくは動けないだろう。場所を教えてくれ、翔太郎。僕もそっちに向かう』

そうして二体を行動不能にしたWは変身を解き、フィリップが到着するのを待った。

数十分後、フィリップがリボルギャリーに乗ってやってきた。
翔太郎は大げさすぎると思ったが、相手が相手だ。用心に越したこ

とはない。

そして彼が持って来たラウズカード（興味があったので検索用に橘からもらっていたもの）で二体を封印しようとする。

一枚しかないのでモスキートだけでもと封印したものの、やはりカードに封印した瞬間に絵柄は消え、消滅したため続いてバクテリアのほうも封印した。

「どういうことだい？君を狙っているのはアンデットだった。しかも、普通ではない」

「訳を・・・聞かせてもらえねぇかな？」

そしてその場に残っていた遺品をすべて回収したうえで、フィリップと翔太郎が長岡に聞いた。

彼らは今起こっている別の事件は知らない。

しかし、それでもアンデットが狙ってくるなんてことはよほどのことだ。

だが、長岡は今それどころではないようだった。
ぶつぶつと独り言を言い、思考を廻らせているようだ。

「・・・・規模が大きすぎる？・・・なんで二体しかいないの？・・・」

そんなことを言いながら、こめかみのところを抑えて考え込む長岡。
隣には柴犬がちょこんと座りながらクゥ～ン、と小さな声を上げていた。

「あ～、なあ？話だけでも・・・・」

「？・・・・！？翔太郎！！あれは！？」

そこでさらに話を聞こうとする翔太郎だが、フィリップの言葉に振り返り、空を見た。

「な、なんじゃありゃぁ！？」

「あれは・・・まさか全部アンデットなのか・・・・？」

その空を飛んでいたのは、無数のアンデットどもだった。
飛べないものは飛べるものにしがみつき、さまざまな方向に飛んでいく。

それはまるで、世界の終りでも見ているかのような光景だった。

「どういうことだよ・・・・」

「ここではまずい。いったん風都に・・・いや、「ＥＡＲＴＨ」に向かおう。僕ら二人じゃ事が大きすぎる」

そうしてリボルギャリーに乗り込み、三人と一匹は「ＥＡＲＴＨ」へと向かった。

各地へと向かったアンデット達。
いったい何を始めようというのか。

ーーー

「この文字の解読は・・・・」

「まだです。なにぶんこちらもつい昨日に消化したばかりだったから・・・・」

「この文字って、何語？」

「わけわからんな」

その血文字を見て、ティアナとギンガが話し、そこに理樹が聞いてきた。

「どうやら、古代ベルカ文字見たいで・・・・専門家の知識が必要ですね」

「なんて内容だろう・・・え・・・と・・・『詩篇の六　かくして王の帰還はなされること無く、大いなる王と・・・・』長いね」

壁の血文字を見て、すらすらと読んでいく理樹。

その理樹に、ティアナとギンガは驚いていた。

「わ、わかるんですか！？」

「まあね、翼人っていうのは基本的に世界をめぐるものらしいから、僕ら言葉には強いんだ」

「あ、そういえばそんな話聞いたことが・・・・」

「う～～ん・・・「詩篇」ってことは何かからの引用かな？」

「でしょうね。でもいったい何の・・・・」

「それに、古代ベルカがらみだったら聖王教会にも連絡しないとですね」

鈴が飽きたといわんばかりに周囲をぶらぶらとみている間に、理樹とティアナとギンガは情報の収集と今後の動きを話し合う。

「連絡は僕がやっておくよ。えっと、写真写真・・・」

「あ、それなら私が撮ってます。クロスミラージュ、お願い」

《了解。そちらの端末に送っておきました》

「あ、どうもありがとう」

「理樹ーーーー」

と、そこで鈴が何かを見つけたようで、理樹を大声で呼んできた。
なんだなんだとそっちの方へ向かう三人。

「どうしたの?鈴」

「ん、これ」

理樹が聞くと、す、と鈴がコンクリートの床を指さした。
そこには消火した時の水が溜まっており、水たまりになっている。
おそらくは気にも留めるようなものではない窪みでもあるのだろう。

「これが?」

「水たまり」

「え、あ・・・そ、そうだけど・・・」

「ハァ・・・」

「え!?なんで!?なんで溜息!?」

「理樹はわかってない。床がボコボコたとコケるだろーが」

「ま、まあそうだけど・・・」

「この前小毬ちゃんもコケてた」

「小毬さんはなぁ・・・・・」

と、そんな話をしている理樹と鈴の横で、反対にティアナとギンガは真剣な顔をしていた。

「ギンガさん、このビルって・・・」

「建ってすぐってわけじゃないけど、床がくぼむほど古いものじゃないわ」

「そうですよね・・・・クロスミラージュ」

《ＯＫ》

「ど、どうしたの?」

「鈴さんの言う通りよ。ビルの床がくぼんでるのはおかしい」

「え・・・と？」

「つまり、ここには何かいたのよ。マリアージュじゃない・・・いいえ、下手をすると人間じゃないものかもしれないわ」

「じゃあこれは何かの足跡で、重みで少しくぼんだと？」

「ええ・・・こんなの、普通気付かないわ・・・・ありがとね、鈴さん」

「ん、たいしたことない」

腕を組んでなぜか偉そうに返事をする鈴。

そうして、そのデータを別行動中のルネッサに送り、解析を頼むティアナ。

ここには、なにかいた。

ティアナとギンガ、そして理樹が顔を見合わせる。

この事件には、自分たちの知らないところで動いている何かが、確実に存在するのだ。

「でも連絡は明日になってしまいそうだね」

「そうねー。こんな時間だし、今から連絡じゃあたぶん無理よね」

時間はもう午後の１０時を回ろうとしていた。

確かに、こんな時間に連絡するのはよろしくないだろう。
それに急がなくとも、古代ベルカ語を知っているものは知り合いに何人かいる。

「じゃー今日はここまでなのか？」

「そうだね・・・こっちの血文字は僕のほうでも調べておくよ。これだけのメッセージだ。文字以外にも手掛かりはあるかもしれないし」

「何かあったらここに連絡。私かルネは起きていると思うから」

そうして、あらかたの手掛かりを持って、四人は解散する。

日が沈んで、深夜となって、そしてまた日が昇る。

同じように事件もまた起こるものだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

輪郭（後書き）

はい、害虫退治その二と、マリアージュ事件の方の進展ですね。

蒔風
「これで一日の終わりか？長いな」

えっと・・・・

前日深夜

御坂妹、アンデットに襲われ橘が助ける
ミッドチルダで放火事件発生

午前

１０：００　一刀、上条の部屋に向かう
１０：３０　雛見沢にてアンデットの襲来
１１：００　ティアナ、事件の報告を受けてミッドチルダへ向かう
準備
　一刀、剣崎が到着
１１：３０　インデックスを連れて脱出。アンデットと交戦

午後

１３：００　風都鳴海探偵事務所に長岡が依頼を持ってくる。
　ティアナ、ルネッサ、理樹、ミッド入り。
１４：００　一刀、剣崎、アンデットを倒して「ＥＡＲＴＨ」到着、橘から話を聞く
　防災課のイベント
１５：００　士、ユウスケが梨花と羽入を連れて「ＥＡＲＴＨ」到着
　海東、トゥスクルの森でコックローチと交戦
１５：３０　ティアナ、理樹が合流。現地での様々な手続き
　翔太郎、長岡、目的地へと出発
１７：００　ティアナ、防災課内での情報収集。そして現場へ
１８：００　Ｗ、海岸にてアンデットと交戦
１９：００　現場入り。その後調査

といったところですかね？

蒔風
「うわぁお、なんという同時進行。ってかティアナは結構かかってるな」

まあ、まだ慣れていないのでしょう・・・
細かいことは気にしないで！！

それについい昨日放火があったばかりということなので、現場はまだ

荒れ荒れです。
それらの整理もしていたら、自然と時間もかかりますね。

蒔風
「にしてもちょこちょこ柴犬いるな。何だあれ？」

さあ・・・何となく出したんだ。
後悔はない。ただ空気になる。

蒔風
「うぉい」

さて、次回は夜！！
明日に向かってガンバロー！！

蒔風
「おー」

リストは増えた時に出します。
なんか毎回あってもしょうがない気がした

ではまた次回で

初夜

「ふぅ・・・・今日は疲れたぜ・・・・・」

「翔太郎、何やら騒がしいようだよ？」

「ん？みてーだな・・・・理樹か一刀はいんのか？」

「えっと・・・・ああ、一刀がいるね」

リボルギャリーに乗って、Ｗの二人と長岡が「ＥＡＲＴＨ」に到着すると、何やら何名かの人間が集まってきていた。

そこで翔太郎はフィリップにリボルギャリーを「ＥＡＲＴＨ」地下にある格納庫においてくるよう頼み、長岡とともにその中へと入って行った。

「おーい、一刀！」

「ん？あ、翔太郎さん！！」

そこで手を振って声を投げかけると、一刀も手を振って返してきた。
彼の周りには女子ばかりが集まっており、それをまとめようとしているようだった。

「一刀・・・お前ついに節操なくなって来たか？」

「ば、馬鹿言うな！！そんなんじゃない！！」

「ご主人様！いったいどういうことですかッ！？」

「えぇ！？愛紗は状況知ってんじゃんか！！」

「気を付けよ愛紗！主は保護と言ってついでにペロリするつもりだぞ！！」

「星もバカなこと言ってないで手伝ってくれ！！！」

「みなさん、こちらです。説明しますですよー」

「おい、おめーら危ないから走んなよ」

「ヴィータも対象なのかな？」

「あ　た　し　は　大　人　だ　！！」

そこには一刀だけではなく、愛紗やフェイト、ヴィータ、リィンに星もいて、その少女たちをまとめていた。

「おいおい、これはどういうことなんだ？」

「説明するからとりあえずみんなを会議室に入れてくれないか？急に連れてきたから説明してないんだ」

「おっけ。そのあとにはこっちの話もさせてもらうぜ？」

と翔太郎も一緒になって全員の誘導を手伝った。

しかしここに集まっているのは皆少女だ。

女三人寄れば姦しいというが、さすがにこの人数では女子でなくともうるさいだろう。

だがそれでも何とか会議室に全員を入れ、席にも就かせることに成功、そこから一刀が事の説明を始めた。

「今日、御坂美琴がさらわれた」

最初の言葉はその一言から始まった。
そしてその言葉には、全員が閉口した。
御坂美琴と言えばあの電撃使いのトップではないか。
一体彼女に何があったというのだろうか。

と、さらに一刀が詳細を説明していく。

その内容はあまりにも唐突で、すでに被害にあっているものも改めて聞いて自分たちが危なかったことに少しだけ背筋が凍った。

「じゃあここで、敵に関しての説明をするから、変わるよ。じゃ、お願い」

「わかったよ」

そういって次は敵の話に移り、壇上には一刀に替わって海東が上がってきた。

「知ってる人もいると思うが、今回の敵はアンデットだ」

「え？」

「なんで・・・・・」

海東の言葉に翔太郎はまさかの偶然にびっくりし、長岡は耳を疑っていた。
しかしその言葉は小さかったのか海東には聞こえず、彼は先を進めた。

「仮面ライダーギャレン、橘朔也が言うには、十人の少女の魂を求めているらしい」

「そんな・・・どうして！？」

「おそらく、邪神、って言うのを復活させてその力を自分のモノにするためだ。だからここに集めたのは邪神の力になりそうな、そんな魂を持った少女たちばかりだろう？」

そう言われてみると、と少女たちが周囲を見渡す。
ここにいるのは、皆力を持った少女たちだ。

「それで・・・その邪神ってのはなんなんだ?」

と、そこでヴィータが質問した。

完全にみんなに埋もれ、これでは被害者候補の一人・・・というか
完全にそうとしか見えなかった。
だが、それを皆は言わない。

それが大人という物だ。

そして、その質問に海東が応えようとする。

「邪神の名は・・・」

しかし

「邪神の名は、フォーティーンよ」

その答えが飛んできたのは海東からではなかった。

「え？」

「だ、だれ・・・？」

その声に、全員が振り返る。
そこには椅子に座ってその話を聞いていた長岡ユキがいた。

「確かにそうだけど・・・君は一体誰だい？」

「長岡ユキ。あの化け物どもを、いえ、邪神を封じ込める者よ」

ーーー

「私の家に代々伝わっている話でね。邪神が目覚める時、封じ込めるのは私なんですってさ」

「どういうことだ？」

長岡の独白が始まって、早々に翔太郎が聞き返した。
それに対し、特に向かいなおすこともなくそのまま話を続ける長岡。

「祖母から聞かされていたのよ。半分おとぎ話でね。邪神が目覚めるとき、使者が現れ私たちの一族の一人が、その魂を以って邪神を封じ込めるってお話」

「それが、今回のことだと？」

「ええ。私だって最初は信じちゃいなかったわ。だけど、数日前にこの子が来た」

「ワン！」

そういって、長岡が傍らにお座りしている柴犬に視線を落とした。

長岡の言う数日前。

その日、仕事から帰ってきた長岡のもとに、その犬はいたそうだ。
玄関口で座って、まるで数年一緒にいた忠犬であるかのように。

最初こそただの犬だろうと思った彼女だが、どうにも気になってしまい、餌を与えた。
そして、撫で上げた時に見たのだ。その首輪にあるものを。

「これは・・・アンデットの紋章・・・石版にあったものと同じじゃないか！！」

「ええ、その紋章だけは知ってたわ。なにぶん祖母が聞かせてくれた話の本に載ってたから」

柴犬を抱えあげ、一刀が驚愕する。
そのあとから剣崎や海東もそれを見て驚く。

「だったらこの犬はアンデットなのか？」

「わからないわ。でもそのあと私のもとに化け物・・・アンデットだったかしら?が一体だけやってきたときにこの子は立ち向かっていって、そのあとひょっこり帰ってきた。だから多分・・・」

「・・・それで?あなたはなぜそれをどこかに連絡しなかった?」

と、そこでフィリップからの質問。

当然だろう。それだけのことならば、「ＥＡＲＴＨ」の管轄になる。

ほかの機関ではとても出ないが扱いきれないだろう。

「これは私たちの一族の問題だと思ったからよ。まさかほかの子たちがこんなに狙われているなんて思わなかったわ」

長岡は言う。

あくまで自分一人でこれは処分する問題だったと。

しかし、彼女の知らないところでどうやらその内容は変わっていたそうだ。

「私が祖母から聞いた話とは違ったわ。化け物どもは邪神を封印しようとする私を狙ってくるかと思ったけど、私を狙ってきたのは最初の一体だけ。それからは音沙汰なし。だから探偵さんと封印に行こうとしたのよ」

「一体なにが・・・」

「それはわからないわ。私は、祖母から話を聞いて、すぐに動き出した。それだけ」

「待ってくれ」

と、そこで長岡の言葉を、剣崎が止めた。

「あんた言ったよな?自分が封印するって。それって、どうやってだ?」

「・・・私の魂をフォーティーンに捧げ、そして内から抑え込んで封じ込めるのよ。伝承ではそうだったと言い伝えられているし」

「そんな方法で!?」

「私はこれしか知らないもの。それにね、私はこの世界が・・・それなりに好きなの。まとめて滅ぼされるくらいなら、助けたいくら

いには、ね」

否にあっさりという長岡。

彼女の考えはなるほど、確かに合理的だ。
巻き添えを出したくないからとどこにも連絡をしなかった。それも正しい。

しかし一人では無理だから最小限ですみ、なおかつ死にそうにない護衛を頼んだ。

おそらく、彼女は決断したのだろう。

抑え込めるのは自分だけ。
だったら被害はそれだけでいい。

だが、それでも長岡の腕は小刻みに震えていた。

「そうか・・・」

「だがいったいなぜ彼女なんだ?」

「さあ?知らないわ。とりあえず私の家に伝わっているというだけ

だし」

そういって話を終える長岡。

内容は分かった。

彼女は成し遂げようとしていた。

しかし、その言い伝えは変貌し、狙われるのは彼女ではない。

――――――

「第一回！スバル宅ツイスター大会ーーーーーー！！！」

イェェエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！

一方、ミッドチルダ

スバル・ナカジマのマンション一室。

そこで元フォワード陣とリトルバスターズが、ポカーンとしたティアナと理樹を出迎えていた。

ティアナはあの後現場を後にしてルネッサと情報のやり取りや今後の方針を伝え、彼女が今日は自分が起きているのでというのでお言葉に甘えてスバルの部屋にやってきたのだ。

一方理樹と鈴はこちらでの拠点にしている「船」に戻ったところ、書置きがあって「スバルの家に行ってる」とだけ書いてあったのでやってきた。

「な、なんで！？」

「ってかエリオにキャロ！！あなたたちまで来たの！？」

「僕らのほうもちょうど休暇が取れまして」

「それに、ティアナさんとはなかなか会えませんし」

確かに、執務官になってティアナは各所を飛び回っているためになかなか友人と会っていない。

一か所にとどまるような仕事ではないので、「ＥＡＲＴＨ」にも管理局にも顔を出す機会がないのだ。

会えてもそれは事件の合間だとか、向かいの通路からだったりで、会えたという気がしていなかった。

「だからって・・・まさかスバル・・・」

「うん？私は呼んだら面白そうだな、って恭介さんに提案しただけだよー？」

「俺は今こっちでこんなことがあるって連絡しただけだよー？」

と、そこでティアナがスバルに視線を向けると、スバルがてへっ、と舌を出して頭をコツン、おどけた感じで白状した。
そしてそれと同じ動作で恭介も暴露する。染色体が違うだけで、同じ動作なのにこうも差が出るものなのか。

腹立つ。おのれ染色体め。

「そして俺と真人が筋肉宅急便で掻っ攫ってきたんだ」

「ティアナさん」

「ええ、誘拐の現行犯ね」

「二人とも、弁護には立ってあげ・・・やっぱやめた」

「「辛辣ッッ!?」」

そしてさらなる暴露をする真人と謙吾。
本当に何しているのか。

「びっくりしましたよ。連絡があってどうしようか考えてたら、『そういうこともあろうかと!』とか恭介さんが言った途端に真人さ

んが飛び出して身体掴んで来ちゃったんですもん」

「わ、私も同じ感じで・・・・」

「あれ？でもそれだと二人は着替えとか・・・」

「それはすでに用意してあります」

「ここにはエリオさんの下着が」

「そしてここにはキャロ君の下着が」

「「なんで！？」」

「「趣味と実益」」

そこでとんでもないものを取り出してきた来ヶ谷と美魚。

こいつら妙に満足した顔をしてると思ったらそういうことか、そうかそうか。

「と、まあそれはともかくとしてツイスターだ」

「あたし明日も捜査があるんですけど」

「僕らだってそのはずなんだけど？」

「そうさ、俺たちは明日も捜査がある」

「しかし、だからと言って遊んでいけないわけがない」

「むしろ遊ぼうよ、ティア！！」

「あんたは何でそっちに取り込まれてるの！？」

完全にリトバスメンバーに取り込まれた親友に突っ込みをするティアナ。

ちなみに理樹はもうあきらめており、鈴に至っては素早く小毬の隣に行っていた。

余談だが、スバルも今日は今日で遅くまで仕事の予定だったらしい。

しかし、それらはまさにこの瞬間の時間を作るためにリトルバスタ

ーズが総出で手伝ったそうだ。
この暇人どもめ。

「だって恭介や来ヶ谷ならともかくよ、俺や謙吾っちは戦いにならないと大して意味ねーじゃねーか」

「神北や能美のように情報処理ができるわけでもないしな」

「だから遊ぶしかないんだよ」

「それにたのしーしねー」

そして話をほんわかと終わらせた小毬がお菓子を取り出してキャロとクド、鈴とでお話を始めてしまった。
もうこの流れはどうにも変更できないらしい。

しかし、理樹とティアナはまだ食事をとっていないのだ。
だからこれから食べるのだが・・・・

「人が食べてる前でツイスターはやめてくれない！？」

「ああ、スバル君のふ・と・も・も♪（はぁと）」

「うっひゃぁ！？た、助けて！！」

「そうなったら来ヶ谷はもう俺らにはもう止められないな」

「うひゃー、姉御さすが！！エロい！！」

「ほらほら！次は青に左足だぞ！？こっちに！！こっちにその足も延ばすんだ！！」

「なんで来ヶ谷さんはそんな体制で私の足をってうきゃぁ！？」

ティアナと理樹（鈴は小毬たちと食べている）の目の前でスバルと来ヶ谷がツイスターをやっていた。
しかも来ヶ谷はスバルの体にすり寄ってハァハァしている。

「そこにパンツがあれば見、太ももがあれば撫でまわす。至極当然じゃないか。どうして君らは減りもしないモノにこだわるんだい？わけがわからないよ（？？？？）」

「来ヶ谷さんが言ってることがわからないですよぅ！というか、この場合私の精神がすり減ります！！」

「そのあとおねーさんがしっぽりと癒してやるから！！」

「きゃーーーーーーーー！！！！」

「いつもこんなのなの？」

その来ヶ谷とスバルを、もう慣れたのか、ティアナがモフモフとごはんと食べていた。
理樹は最初は叫んだが即座に慣れていたようだ。これが経験の差。

「あはは・・・これがいつもだったらご飯食べ終わった後に僕が女装させられて・・・・」

ガラッ！！

「や、やめてください！！なんでそんな女の子の格好（ガッツ！）
グぇ！！ちょ、西園さんなんでそんな力つよ、うわやめくぁｗせｄ
ｒｆｔｇｙふじこｌｐ；」

ピシャッ！！

『これで直枝さんに勝つる！！！』

『うわーいたずら好きのはるちんでもここまではやらないなぁ・・・
エリオ君、だってこの中とか・・・』

『見ないでくださいよッッ！！！（怒）』

「ってなるんだ」

「エリオ・・・強くなるのよ」

しかし結局なぜか手をワキワキさせた来ヶ谷と洗脳でもされたのかスバルによって、理樹もその部屋に引きずり込まれた。

『エリ×理樹？理樹×エリ？リバＯＫ？ああ、もう何でもいいです！！』

『美魚君のレベルはどんどん上がってるなぁ・・・・』

「理樹、強く生きろよ・・・・」

『エリオ君かわいいーーーーーーーーーー！！！ねね、こっちも着てみてよ！！！』

『キャロ！？』

「キャロが変態さんになってしまった」

「ゆいちゃーん。あんまりやりすぎちゃだめだよー？」

『ゆいちゃんっていうなゲボボクボェ！！！』

ドサッ！！

事件とは裏腹に、こちらの夜は楽しく更けていった。

しかし、それでも情況は着実に進行していっている。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

初夜（後書き）

前後との差が大きすぎる。
どうしてこうなったｗｗｗｗ

蒔風
「「ＥＡＲＴＨ」の方とミッドのほうがテンション違いすぎるという」

勢いで書いたらこうなった。
本当にどうしてか私は分からない。

蒔風
「しかも事件のさなかだって言うのに何とも楽しそうな・・・・」

私もそう思いました。
事件のさなか、こんなに愉快に騒いでいかがなものかと。

ですが、これは二次創作

こんなんでもいいじゃない！！
という考えに達しました。

蒔風
「なにそれ・・・あと、長岡女史の目的がわかったな、とりあえずは」

はい。
邪神を内から抑え込もうというわけですね。

しかし、長い時間とともにその伝承は薄れ、しかもその伝承とはまた変わってしまっているのですから、そりゃあうまくいきません。

蒔風
「でもまだ謎はあるわけだな」

なぜ、とくに力もない彼女の家にそれが伝わっているのか。
言い伝えの内容が変わり、十人の少女が狙われるのか。

そしてあの柴犬はいったい？

蒔風
「そういえばそろそろあの柴犬に名前つけてやれよ」

どうしましょうか？正直名前思いついてない。

蒔風
「応募するか？」

ではしましょう。

柴犬の名前、募集！！

そのまま使われないかもしれません。
二つの案を組み合わせるかもしれません。

それでもいいという方は、是非どうぞ！！

蒔風
「次回は各地での奮闘」

少女たちを守ろうと、各地で戦う姿を書きたいなぁ・・・とか思ってみたり。
マリアージュの方もチマチマ進めます。

ではまた次回！

攻防

深夜

とある駅前広場で

「変身！」

「カァ～プ？」

光夏海が、キバーラと共に変身し、仮面ライダーキバーラへと姿を変え剣を構えた。

その眼前には三体のアンデット。

右から見ておそらくそれぞれ、松（パイン）、竹（バンブープラム）、梅の始祖たるアンデットだろう。

確かに、蔦や蘭の始祖たるアンデットがいたから植物系のモノがいておかしくはないのだが、こう並んでは竹ぐらいしか見た目ではわ

からない。

「あれ、なんのアンデットなんでしょう？」

「さあ？みんな植物、って言うのははっきりしてるけどね」

「とにかく・・・ここから先にはいかせません！！」

夏海がキバーラに聞くが、まあわかるわけもない。
しかし、ここですべきことは決まっている。

ここは涼宮ハルヒの家の近くの駅前だ。

もう数キロ先に行けば彼女の自宅がある。

少女たちの収集の際、当然こんな時間なので集めきれない少女もいたのだが、ハルヒに関しては話が別だ。

彼女に自身の力――――世界を無意識に改変させるほどの力を自覚させてはならない。

そのために、とりあえず彼女がここに来ていたのだ。

「ＥＡＲＴＨ」からの話だと、すぐに増援が来るそうなのだが・・・・

「まだみたいですね・・・」

「なぁに言ってるのよ夏海ちゃん。わたしたちなら余裕よ？」

そんなことを言っていると、三体のアンデットがそれぞれの葉を飛ばし、キバーラに向かって攻撃してきた。

それを剣振りながら弾いていくキバーラだが、いかんせん数が多すぎる。

「ど、どうしましょう！？」

「うーん。わたし、人間を変身させられはするけど、その分形態変化とかはできないのよねぇ」

「それじゃだめ押しじゃないですか！！」

「だぁいじょうぶ。その分、お兄ちゃんよりも優れたところがあるんだから。行くわよ！」

そういって、キバーラの背から白い翼のようなエネルギーが噴出し、それによって一気に攻撃ごとアンデット三体を飛び越え背後に回った。

「ハァっ！！！」

そして直後、ジャギィ！！という音とともに振り返ってきたバンブーアンデットを縦に切り裂き、そのままベルトをも叩き割った。

「かぐや姫が入っていたら真っ二つだったわね」

「そんなことより、次ですよ！」

そのアンデットにカードを投げつけ封印消滅させるキバーラだが、ほかの二体は逃れ、パインアンデットが針のような棘を飛ばし、追ってくるキバーラを押しとどめた。
その隙にプラムアンデットが一直線に目的地へとジャンプしていく。

「この・・・邪魔を・・・しないでください！！」

キバーラを向かわせないよう邪魔をしてくるパインアンデットにそう叫んだキバーラが、背のエネルギーを剣にまとわせ、頭上に掲げて構えた。

その間も棘の弾幕が彼女に飛んできているのだが、それはエネルギーの膜によってすべて弾かれてしまっている。

「ハァァアああ！タァッ！！！」

そして、一振り。
その一振りによって剣から斬撃が飛び出し、パインアンデットへと向かっていった。

無論、それを腕でガードしようとするパインアンデットだが、目の前でその斬撃が散り消え、直後全身を切り裂かれて爆発した。

この斬撃は、一つに見えて一つではない。
無数の細かい斬撃波が固まることで、一つに見えているだけだったのだ。

「ふう・・・急がないと！！ハルヒさんが！」

そうして、カードをアンデットに投げて、その姿を封印消滅させるキバーラ。
戻ってきたカードを回収し、彼女が急いでプラムアンデットを追っていった。

――――――

そして、ハルヒの体に手を伸ばし、その体を抱えあげ、窓の桟(さん)に足をかけて外へと出ていく。

ハルヒは熟睡しており、全く起きるそぶりなどない。

このまま彼女は連れ去られてしまうのか。

そう思われた。
しかし

ドドドドンッ!!

「・・・・・ギゥ?」

「困りますね。我らが団長を連れて行ってしまっては」

パインアンデットの体に三発の赤い光弾が命中し、その足をその場にとどめた。

そして、住宅街の道にアンデットが着地数ると、そこには一人の青年が立っていた。

立っていたのは、ＳＯＳ団副団長で、自称超能力者の青年である。

――――――

キバーラと松竹梅のアンデットが戦闘を行っていた場所からから、また少しばかし離れたマンションの前。

そこに、また別のアンデットが三体立っていた。
その真ん中にいる個体は、堅そうな皮膚に、振ればしなるような剣を持っていて、しかも言語を発していた。上位である。

「行け」

そう一言、脇にいるアンデットに発すると、うち一体がマンションの壁に張り付いてひょいひょいと登っていく。

全身は緑。四つん這いになって這っていくその姿は間違いなくカエル（フロッグ）のそれだ。

そうして、ある一室の前にぴたっと止まって、中をぎょろぎょろと確認しはじめた。

深夜とあって、部屋の中は真っ暗だ。
しかしそうでなくても、この部屋には生活感という物が稀薄な気がする。

そして、フロッグアンデットがその中に侵入しようと、口の中をモゴモゴさせてから何やら紫色の液体をべっ、と吐き出し、べちゃりと張りつけた。
すると静かにガラスは溶け、大穴があいてその穴から侵入しようと手をかけた。

《ｆｉｎａｌ　ｖｅｎｔ》

そんな時だ。
そんな無機質な音声が聞こえ、小さく、本当に小さなタンッ、という音を立てて、屋上から何かが飛び降りてきた。

頭上を見上げるアンデットには何も見えない。
視界に広がるのは漆黒の夜空と、マンションの小さな光のみ。

しかし直後、そこには敵がいたということを、フロッグアンデットは身体を顔面から貫かれながら思い知った。

見えたのは、漆黒の中でもさらに黒さを映(は)えさえた一点。

そしてそれは一筋の斬撃となって、フロッグアンデットを貫き、地面に叩きつけたのだ。

ドシャッ、という音を立てて、フロッグアンデットが落ちてくるとそこにカードが突き刺さり、その体を消滅させた。

カードが飛んできたのは、マンションの陰から。
そこに立っていたのは、アギトと龍騎の二大ライダーだ。

「貴様らは・・・・」

「城戸さん、あいつしゃべってますよ？」

「上位アンデット、って言うらしいな。強いみたいだぞ？」

と、そこにさらにふわりとマントをなびかせて、仮面ライダーナイトもその場に降りてきた。

「馬鹿とアホで会話してないで、早くこいつらを倒すぞ」

「はーい」

「蓮、俺のことバカって言うなよ！津上も、はーいじゃないだろ！？」

そんな漫才をする三人だが、目の前のアンデットはそれを見ても特に反応することはなく、三人を見ていた。

「仮面ライダー・・・というものか」

「ん？そうですけど、あなたは？」

「自己紹介して仲良くなろうという間柄でもあるまい？」

「まあ、そうですけどね」

「はぁ・・・やるぞ。お前はそっちだ」

アギトとそんな簡単な会話をしてからそう命じると、残った一体のアンデットが走り出し、ナイトに襲い掛かって行った。

「うわぁ・・・こいつらなんのアンデットなんでしょうね？」

「知るか」

「っしゃぁ！行くぜ！」

ナイトに襲い掛かっていくのは、ヤシ（パルム）の始祖たるアンデット。
そしてアギトと龍騎には、上級アンデットである桜の始祖たるブロッサムアンデットが襲い掛かった。

――――――

ハルヒを担いでその場から逃げようとするプラムアンデットを、古泉一樹が赤い光球を投げ放って押しとどめていた。

現在この場で彼が力を使えるのは、ほかでもないハルヒの力だ。
古泉の推測では無意識化で自分に降りかかる脅威を察知し、そして無意識化で自分を守れるだけの力を古泉に与えたのだ。

ゆえに今、こうやってアンデットを押しとどめておいているのだが・・・

（この力で充分・・・とでも思われているのでしょうか？少々きついのですが）

そう、実際には倒すには至らない。しかし、古泉はさほど焦ってはいなかった。

なぜならば、彼女がこの程度の力で充分だという認識で力を使えるようにしてきたのならば、それで大丈夫なのだということなのだから。

そして

ギャリリリッ！！

アンデットの体に、鞭のようなものが巻き付いて、その場にハルヒと落させた。
そしてそれをキャッチしたのは、バイクフォームで突っ込んできた仮面ライダーアクセルだ。

「これは・・・」

「よくやった。後は任せろ」

そういって古泉の肩を叩いたのは、レヴァンティンを連結刃にして握っているシグナム。

そしてその腕を大きく上に振り上げて、アンデットをコマ回しのように上空へと投げ放った。

「ギ・・・ギヒィ・・・・？」

「紫電、一閃！！」

《アクセル！マキシマムドライブ！！》

「絶望が、お前のゴールだ！」

ド、ドンッ！！

シグナムの紫電一閃、アクセルのアクセルグランツァー。
その二撃が確実にプラムアンデットに叩き込まれ、その体が燃え盛りながら地面に落ちていった。

「ありがとうございます。僕だけではどうにも倒せそうもなかった

ので」

「仕方ない。あれは不死生物だ。こうしなければ倒せんからな」

そういって、アクセルがカードを投げつけ、アンデットを消滅させた。
その間にシグナムがハルヒを起こさないように部屋に戻し、二人の元に帰ってきた。

「何が起きているんです？」

「彼女の存在上、まだ連絡していなかったな」

「実は・・・・」

そうして、事の次第を古泉に伝える二人。
ほどなくしてキバーラも追いついてきた。

しかし、ほかの場所でも、戦闘は行われている。

――

――――――――――――――――――――

《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》

「オオっ！」

ドゴォ！！

サバイブと強化変身したナイトが、パルムアンデットにファイナルベントを発動させて吹き飛ばした。
そしてそれをカードに封印消滅させると、いまだブロッサムアンデットと戦っている、アギトと龍騎の元へと走っていった。

すでにアギトはバーニング、龍騎はサバイブへと強化変身しているのだが、堅い樹皮とその技量によって、攻撃らしい攻撃が全く入らないのだ。

「こっちは二人とも炎だってのに・・・・」

「これはキツイ・・・ですね・・・」

「ハァッ！！」

と、そこで息を切らして構え直す二人を飛び越え、ナイトがダークブレイドで切りかかってく。
しかし、それすらもいなされ、逆に回転からの後ろ蹴りで飛ばされてしまった。

「ガハッ・・・」

「「桜切るバカ、梅切らぬバカ」、という言葉を知らないのか」

「お前は、枯れてもいい桜だからな」

「なるほど」

そんな何とも思っていないような声を出しながら、ブロッサムアンデットが腕をかざして三人に向ける。
そしてその腕の前に、桜の花びらが押し固められて行き、エネルギーを纏って高速回転し始めた。

「な！？」

「まずい！！」

《《ｇｕａｒｄ　ｖｅｎｔ》》

キュボッ、ドッゴォ！！！！

そして、それは撃ち出されて三人へと向かい、大爆発を起こす。

「・・・・ガードするか」

しかし、ブロッサムアンデットはやれたとは思っていなかった。
現に、土煙が晴れたそこには三人の姿はしっかりとそこにあった。

だがしかし、無事でないことも確かである。

ナイトと龍騎が二人掛かりでガードベントを発動させたものの、それでもあの衝撃には耐え切れずにサバイブが解除され、アギトのフォーム内でも耐久力なら随一のバーニングフォームすら、ノーマルのグラントフォームに戻っていた。

さらに言うならば、攻撃のエネルギーをアギトは真っ向から殴りかかっていたために現在は仰向けに倒れており、龍騎とナイトは膝立ちになってすぐには立ち上がれない状態だ。

「なんて火力・・・・だ・・・・」

「く・・・ぉおお・・・・・」

「・・・上々だな」

ガシャァッッ!!!!!

ブロッサムアンデットがそう呟き、マンションの一室を見上げると、その窓ガラスが派手に割れて、ガラスの雨と共に何かがどしゃりと落ちてきた。

それは透明であり、地面をバタバタとのた打ち回ったのちに姿を現し、バキン！とベルトが割れて沈黙した。

おそらくはヒトデの始祖たるアンデットだ。

こいつは三人が交戦している間に壁を登り、しかも身体を擬態で隠していた。
だが、どうやら撃退されてしまったようで、今こうして落ちてきたのだ。

「む・・・・・？」

そして、ブロッサムアンデットが見上げた先のマンションの一室に、一人の少女が立っていた。
その部屋の主である、長門有希。

その少女を見てからブロッサムアンデットは顎に手を当て、少し考えたのちに踵を返してその場を去ろうとする。

「まて・・・・どこに行く！！」

その背に、何とか這い上がった龍騎が剣を構えて聞くが、ブロッサムアンデットは特に振り返ることもなく、ポツリと言ってその場から消えた。

「あれでは見込めないな」

そうして、この地の脅威は去って行った。

再び、謎をその場に残して。

――――――

「兄貴ぃ、来ないよ・・・」

「は・・・どぅせ俺なんか・・・」

一方朝比奈みくる宅前。

そこに仮面ライダーキックホッパー、パンチホッパーである矢車想と影山瞬とが体育座りで待機していた。

こちらにはアンデットの「ア」の字もない。

二人は変身することもなく、黙々とカップめんを食べていた。

「なあ・・・こっち来ないんじゃ・・・」

「かもしれんが、来た時が大変だからな。それに・・・こんなのが俺らにはお似合いだ・・・・」

「兄貴ぃ・・・」

「・・・泣くな」

「「はぁ・・・・」」

――――――

それから一、二時間後

もうあと一時間もすれば夜も明けようかという時に、照井、シグナム、夏美が長門のマンションにやってきて津上たち三人と合流した。古泉は明日・・・というかもう時間的には今日、学校があるために家に帰らされた。

警察官がサボりを見逃すわけがない。

「では、アンデットが「これでは見込めない」・・・そう言ったんだな？」

「ああ。わっけわかんねぇよ。あそこまでしといて間違いでした、かよ・・・」

「だけどそのおかげで助かったんですから。文句は言えません。気持ちはわかりますけど」

「確かにそうだけどさぁ・・・・・」

そして、そこでは、その六人が情報のやり取りをしていた。

長門はすでに寝ている。
というか寝かされている。

彼女のスペック上、不眠不休でも大丈夫なのだろうが、津上がそれはいけないと寝室に押し込んだのだ。

「涼宮ハルヒ、長門有希。この二人は力を持つ少女としてはかなりトップクラスに入るはずだ」

「だがそれを「見込めない」・・・・？訳が分からないな」

照井とシグナムが聞いた話を頭で整理し考えるが、どうしてもわからない。

なぜ彼女たちは見逃されたのか。
さらに朝比奈みくるの家で張っていた矢車と影山からの話だと、アンデットは現われすらしなかったそうだ。

「ただ単に力のある少女ではない、ということか・・・・？」

「いったい何が・・・・」

「どうなってるんでしょうねぇ・・・」

そうして、六人はほどなくしてその場から「ＥＡＲＴＨ」へと帰還した。

考えても始まらない。

わかったことは、とりあえず彼女たちは狙われない、ということだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

攻防（後書き）

ようやく更新です。

レポートがきつくてきつくて・・・・
新聞の中から題材を見つけて授業で学んだことを参考に書けとか・・・・

新聞の中に授業と関連させた内容が見つからなくてワロタ。

と、言うわけで今回は深夜の攻防

蒔風
「さて、ただ力がある、というだけではなさそうだな」

ええ、力があるというだけではないです。
それを考えれば、十人は何とか絞れるかと。

ちなみにそう考えると、美琴はかなりギリギリだったんだなぁ、といまさら思いましたｗｗｗ

蒔風
「そういえば地獄兄弟の二人はどうしたんだ？」

あのまま直帰しましたよ。

蒔風
「哀れな・・・・かわいそうに・・・・・」

しかし、それがネタ

蒔風
「次回、今度はマリアージュ事件を進めたいらしいな？」

そうですねぇ・・・・・

ではまた次回！！

火災

「大丈夫ですか!?今助けに来ましたから!!!」

劫火が周囲を取り囲み、３６０度どころか上下すらをもすべて焼き焦がしている。
そんな中、スバル・ナカジマは休日にもかかわらず、救助活動として火災の中に呼び込んでいた。

数十分前

「すっごく美味しいでしょ！！ここ！！！」

「はい！！全然食べれますね！！」

「筋肉に優しい食いもんだぜ！」

「恭介・・・財布は大丈夫か？」

「・・・・・もう・・・・いっそ・・・空にして・・・」

いま、エリオとスバル、そして真人と謙吾、恭介はとあるビルのレストランに来ていた。
今日もティアナと理樹は調査に走り、当然ながら暇になってしまった彼らはスバルおすすめのこのレストランで今日という日をつぶそう、と考えたのだ。

潰されそうなのは恭介の財布だが。

ちなみに鈴やキャロは小毬や西園といった女子メンバーのほうへと遊びに行っている。
スバルがこっちにいるのは、完璧に花より団子状態だ。

「なんで・・・男女に分かれなかったし・・・・」

「恭介、大丈夫だ。いざとなれば俺らからも・・・」

「ああ、この筋肉を売ってでも払ってやるぜ」

「いや・・・こうなることは予測していたからな。理樹からカードを借りてきている」

「「ちょ、おま!?」」

ドンドン積み重なる皿、皿、皿・・・・・

しかもスバルとエリオは言わずもがな、真人まで慰めながらもバクバク食っているのだからたちが悪い。

だがそんな中でも、恭介はスッ、と一枚のカードを取り出してこれで払うからと言い出したのだ。

「お前、理樹が知ったら大変なことになるぞ!?」

「問題はない。理樹は将来の義弟、いや、もうすでに義弟だ、と言ってもいい」

「ま、まぁな・・・・」

「それに!俺たちリトルバスターズは家族じゃないか!!」

「ああ」

「だからこの程度は・・・いいと思いたい」

「「いや、それはおかしい」」

恭介の話が飛躍するのはいつものことだが、今回はまじめに金銭が絡んでいるので真人もボケない。

と、そこで恭介が「だけどなぁ」と前置きしてから持っている理由を話した。

「理樹にな、みんなで食事行くから何かあったら連絡頼む、って言ったらこれ貸してくれたんだ」

「みんな・・・俺たちぐらいだと思ったんだな・・・」

「と、言うか男子組、女子組に分かれると思っていたんだろ・・・・・」

「「「哀れだ・・・・」」」

そう思うなら真人、お前は食べるのを押さえなさい。

そうして腹に詰めるものを詰め、それでも腹八分目に抑え満足した頃（桁も結構行った頃）に、昔話をするようになった。

「私、昔なのはさんに災害現場で助けてもらったんです」

「へぇー」

「なのは・・・ってぇと高町さんか」

「あの究極魔法兵器さんか」

「はい。それで憧れて救助隊に入って・・・・・」

そこからのスバルはしゃべるしゃべる。

皆同じ「ＥＡＲＴＨ」登録員と言ってもやはりそこは現役救助隊員と学生なわけだから、面白い話は当然両者ともにある。

「じゃあ、今度は俺が話そうか。あれは忘れることのない、理樹が初めてじょ・・・・・ん？」

「どうしたんですか？」

「じょ！？な、なんですか！？何があったんですか理樹さんの過去に！？」

恭介が過去の何かを話そうとし、その内容にエリオが予想、戦慄した時。

恭介が窓の外を見て、何かに気付いた。

彼らのいるのはさっきも言ったようにビルの上層階だ。
そして当然、そこからは他のビルも見える。

その見えるビルのうちの一つから、黒煙がモクモクと伸び、その一瞬後にビルの一部が爆発、大穴があいてそこから炎が噴き出してきたのだ。

「え・・・・」

「おいおいおいおい!?」

「爆発・・・火災!?」

「恭介さん!」

「ああ、こいつぁ俺たちの出番みたいだな!!理樹に連絡をしとけ。俺たちはあっちの火事をどうにかするぞ!!」

「よし！！」

「筋肉の出番だぜ！！」

「じゃあ今日は特別、スバルたちも合わせて・・・・リトルバスターズ、ミッションスタートだ！！！」

「「「「おう！！！」」」」

ーーー

『お願い。私は知り合いの古代ベルカ文字を読める・・・・』

「ルーテシアさんだよね？」

『ええ。そっちに連絡するわ。じゃあ』

ピッ

理樹が通信機のモニターを切って、目の前の建物を見上げる。

ミッドチルダ郊外にある、聖王教会

近くには付属学校もあるここに、直枝理樹は直接来ていた。

内容は、今回の連続放火殺人事件に古代ベルカ文字があったことの報告と、その文字の詳しい解読だ。

「あの、「ＥＡＲＴＨ」の直枝理樹なんですけど、騎士カリムにあわせてもらえませんか？連絡は昨日したはずで・・・・」

そういって、受付の人に通してもらうように頼む理樹だが、その必要はほとんどなかった。
なぜならその返事が来る前に理樹のもとにシスターシャッハがやってきて、直立不動で出迎えに来たからだ。

だが・・・・

「ようこそいらっしゃいました!!薄緑のモガッ!?」

「ちょォーーーーーーーーい!?何大声で言おうとしてんですか!?（ボソボソ）」

シャッハの口を塞ぎ、その発言を大急ぎでやめさせた理樹。
まあ当然と言えば当然だろ。それにそもそも、恭介とは違って理樹自身も騒がれるのがあまり得意ではない人間だ。

「い、いえいえいえいえ!翼人さんが来るというのにこっちに粗相があってはならないので・・・・（ボソボソ）」

「そういうのいいから!!あくまでも普通にしてください!!（コソコソ）」

「そ、そうですか・・・・?しかし・・・・」

そういって理樹はシャッハを説得しようとするが、シャッハとしてはいきなり普通にしてくれと言ったところで実際そうするのは難しいだろう。
なんせ彼女がかつて一度だけよく人と会ったときは、ラリアットをブチかまされそうになったうえに、説得までされたのだから。

どうしようか・・・・

理樹はシャッハの態度をどうにか普通にしようと考え、そして妙案を思いついた。
これなら緊張も解けるだろう。

「（ボソッ）あ、ガッカリおっぱい」

「誰がなんだとこの鳥人間がァッ！！！！」

ヴォン！！

「え？」

直後、理樹の視界をトンファー型アームドデバイス「ウィンデルシャフト」の面が埋め尽くし、長方形のそれが真横にめり込んできた。

――――――

「それはそうと・・・大丈夫ですか?顔・・・・」

「最硬の翼人なんで」

「いや、それは体が頑丈という意味じゃないはず・・・」

「硬いんで」

「はあ・・・・」

「ボドゥドゥドォードゥー」

「はぁ!?」

カリムの素っ頓狂な声が出て、とりあえず伝えるべきことは伝えた理樹。

カリムの背後では胸をペタペタと押さえながら「まだいけるもん・・・成長期に終わりはないもん・・・・」とか呟いているシャッハがいた。

と、そこでがらりと医務室の扉が開いて、部屋に客がやってきた。

「あ、ほんとだ、理樹さんだー！」

「こんにちは、理樹君」

「あれ？ヴィヴィオちゃん？なのはさんも」

そこにやってきたのは、高町なのは、ヴィヴィオ親子でだった。

なんでも今日は授業参観日で、無理言って管理局を休みにしてもらい、来ていたのだそうだ。

ここに来たのは教会の騒ぎを聞いて、管理局員である以上見ないわけにもいかないために話を聞き、そして理樹が来ているのを聞いてあいさつに来たといったところか。

「理樹君が来てるってことは・・・「ＥＡＲＴＨ」のお仕事？」

「「ＥＡＲＴＨ」というよりは管理局の協力ですね。今ティアナさんが追っかけてる事件の」

「ああ・・・あの放火事件・・・」

もちろん、なのはも管理局員で「ＥＡＲＴＨ」登録員だ。

事件があることは当然知っている。

だが、それはそれ、これはこれだ。
事件があるからといってすべてに首を突っ込んでいられるわけではないし、教え子（ティアナ）の事件だからといって自分が手を出しては彼女の成長にならない。

だから、まあ知っていても特に干渉することはないのだ。

「・・・ということで、聖王教会に報告と協力を頼みに来たんだ」

「現場に血で古代ベルカ文字？」

「うん。それで・・・・」

「だったらわたし調べるーー！」

「え？」

それでなのはたちにここに来た事情を簡単に説明した理樹なのだが、そこでヴィヴィオが解読すると買って出たのだ。
確かに、ヴィヴィオは暇さえあれば無限書庫に行って読書をしている関係で、勢い余って司書の資格まで取っているのだ。

調べ物を頼むのにはもってこいの人材と言えばそうだ。

「いいん・・・ですかね？」

「ん？私はいいよ？ヴィヴィオがやりたいようにやれば」

「わーい！！じゃあいこー！どれ？ベルカ文字って？」

そうしてなのはからの許可も出たので、ヴィヴィオに血文字を写した文章を見せる。
さすがに現場写真を祖もまま見せるわけにもいかない。

「うーーーん、とね、これならすぐに出ると思うよ？」

「ほんと！？」

「あはは、これだけ長いんだもん。検索すれば一発だよ！高町ヴィヴィオ！！根こそぎみんなを助けるために、がんばりまーす！」

そう言って、ヴィヴィオがさっそく無限書庫へ、といった感じに医務室から外に出ようとして、なのはと理樹がその後についていこうとする。

ピーピーピー・・・・

「ん？なんだろ」

「どうしたの？」

「恭介からの通信・・・え？」

と、そこに力の通信に恭介からの連絡が。

ミッドチルダのビルで大規模火災が発生。

それに対し、「船」の解除を願うといった内容だった。

「！！ご、ごめん！僕こっちに行くから！」

「じゃあ解読が終わったらすぐに送りますね！！」

「こーら！ヴィヴィオはまだ授業があるで・・・・」

ドォンッッ！！！！

ヴィヴィオが急いで解読しようとするのを、学校があるだろうと諌めるなのは。

しかしその言葉を、とてつもない爆音が遮り掻き消してしまった。

それに、爆音だけではない。

教会そのものも揺れたし、よく見ると学校の方からももくもくと小さな火が上がっている。
どうやらさっきの衝撃でボヤでも起きたようだ。

「た、大変！！」

「いったい何があったのです！？」

「・・・駄目です、連絡が取れません！！」

「急いで怪我人の救護と治療、そして鎮火を！！」

「なんだ・・・いったい何が・・・！？」

あまりにもいきなりすぎた振動と衝撃に、理樹がよろめいていから立ち上がり、医務室の扉をがらりと開けて廊下を見た。

すると

「かつての王の魂を正確にコピーした希少なる魂・・・・まさにちょうどいい」

廊下に、化け物がいた。

そいつは突出した巨大な顎をもち、まるで・・・というか、まさに鰐（ワニ）といった感じの風貌をした怪人だった。

しかもそいつは言語を操り、さらには明確にヴィヴィオをターゲットといって指差しまでしてきた。

「・・・カリムさん、シャッハさん、早く救助と、この事態の鎮静に向かってください」

「え？あ、あれは・・・」

「あれは僕が何とかします。ここに詳しいあなたたちなら、大事故になる前に全員を助けられるはずです。急いで！！！！」

「は、はい！！」

「行きましょう、シスターシャッハ！！シスターセインやシスターオットーたちにも連絡を！！」

そうして、理樹たちの背中の方から怪人とは反対側にカリムとシャッハが走ってその場を離脱した。
怪人は周囲の悲鳴や逃げる人々には見向きもしないで、ただまっすぐにこっちを見ている。

そうして、周りに誰もいなくなったころ。

「レイジングハート、セットアップ」

《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ．》

なのはがバリアジャケットとレイジングハートを展開させ、この怪人に向き合った。

当然だ。自分の娘を狙っているといわれて、引くような人ではない。

「なのはさん。あいつのベルト見てください」

「？・・・あれは・・・」

《データと照合しました。アンデットと呼ばれる不死生物のものと同型です》

「アンデット・・・倒せないの？」

「死ななくても、ベルトさえ割れば無力化はできます。その後で僕が「壁」で封じ込めるので・・・」

「じゃあ」

「ええ、全力で」

「わかりやすいね。行こう！！」

「はい！！！」

「抵抗する・・・か。翼人にエースオブエースとは、少し荷が重いのではないかね？」

その二人を見て、腰を落とすは鰐の始祖たるクロコダイルアンデット。

太古の昔より

かつては地上を支配した者の血統に最も近い牙獣が

二人の強者（にんげん）に挑みかかった。

to be continued

火災（後書き）

ふう・・・少し時間がかかってしまいました。

ラジオも更新したので、そっちもよろしくです！
最初の方は勢いやばいです。
最初の方は・・・・

と、いうわけでリトバス、スバルたちが火災現場に遭遇。
そして、聖王教会へと赴いた力のもとになのはとヴィヴィオがいて、
そこにアンデットが襲来、です。

そこで心配なのがヴィヴィオの通う魔法学校の位置です。

ＳｔＳのエンド的に見て、教会の隣とか近くにある、ってことでいいんですよね！？

いやぁ、少し心配になってしまいましたよ。
ここでなのはも出したかったので、授業参観ということで。

え？フェイトママ？

・・・・・

フェイトさんごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

次回としては、確定なのはティアナの方。
そして火災現場ｏｒ教会のどっちかにいきます。

ではまた次回！！！

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴

インデックス
アルルゥ
高町ヴィヴィオ

残り四名

勃発

「スバルさん！どうしますか！？」

「まずは人命救助！！生体反応をサーチしてから、安全なとこをにまで保護して！！」

火災に見舞われているビルの真下。

そこで到着したスバルとエリオ、真人、謙吾がこれから内部に突入しようとする際の注意事項を頭に叩き込んでいた。

スバルたちはバリアジャケットを、真人と謙吾は防火服を着て準備を整え終わっている。

「いい？何があっても、まずは自分の命優先！！自分が死んだら、誰も助けられないから！！！」

「「「了解！！！」」」

そういって、彼らはレスキュー隊が到着するよりも早く、内部に突入していった。

「絶対に、根こそぎ全員、助け出すよ！！」

「「「おう！！！」」」

ーーー

「わかった。ふふっ、ティアナさんの頼みじゃ、断れないね」

「あたしも手伝うから、大船に乗ったつもりでいてくれよな！！」

火災発生から少し前のこと、理樹と連絡を取った後にティアナは、ルーテシア・アルピーノに古代ベルカ文字の解読を頼んでいる。

ここにはちょうど遊びに来ていたアギトもいる。

彼女はキャロやヴィヴィオの繋がりでいろんな書物から知識を漁ることが日課となっている。それでこうして拘留された世界にいながらもさまざまな知識を持っているのだ。

と、なればまぁ、こうして依頼が来るのも当然であって・・・・・

『ありがとう。データは今そっちに送ったから、お願いね』

「うん。えっと・・・「詩篇の六　かくして王の帰還はなされること無く・・・・」ね。アギト、下から二段目の棚にある赤い本を取ってくれる？」

「あいよー。これだな？」

「うん・・・・えっと・・・・あった。ここ」

そういって、文章を読んだだけで何の詩編かを割り出し、簡単にその参考書を取り出してきたルーテシア。

まさか今ここのやり取りで終わってしまうとは思っていなかったティアナは、その手際の良さと彼女の記憶力に驚嘆していた。

『すごいわね。全部覚えてるの？』

「何回も読んだからね。頭には大体」

「ルールーは勉強家だもんな！！」

そういって、内容を伝えるルーテシア。

どうやらこれは何かの歴史を記したもののようで、長い詩編の中でも何かの兵器にまつわる部分であるらしい。

そして、その兵器の名称を見て、ルーテシアが頭を捻った。

『兵器・・・・穏やかじゃないわね』

「うん・・・・？ねえアギト、この兵器って・・・・・」

「うん？・・・・あーーー、どっかで聞いたなぁ・・・・どこだっけ？」

「私がおぼえてる、ってことは、ドクターの所にいたころだったと思うけど・・・・」

『ドクター？・・・・って、まさか・・・・』

ヴー！ヴー！！ヴー！！！ヴー！！！！

と、そこでティアナ側で警報が高らかに鳴り響き、ただ事ではないということを伝えてきた。

『！？なに・・・・ミッドでビル火災・・・爆発あり！？』

「事件？」

『ええ、こっちで追ってるのがまた起きたみたい』

「じゃあ、レポートにまとめて後で送るね」

『お願い！！ごめんね！！』

防災課にいたティアナは事件発生のほうを受けてすぐに現場に走り、通信を切ってしまった。

まあ、仕方のないことだ。
とりあえず、自分のすべきことは・・・・

「これ、解読しないと・・・・」

「よっしゃ！！ありったけの資料を集めよーぜ！！！」

友人のティアナの頼みとあっては、張りきらない方がおかしい。
そうして、ルーテシアとアギトが資料を探そうと部屋を出た。

その瞬間。

ドドドドドドドドドッ、チュンチュン、チュィン！！

その部屋に、おそらくは外からの無数の銃弾が叩き込まれ、部屋の中をハチの巣にして家具の八割を粗大ごみに変化させられてしまった。

「え？」

「なぁ！？」

部屋から出た瞬間にその背後から銃撃・・・というよりも銃弾の音を聞いて振り返る二人は、直後に背筋が寒くなった。

なぜこうなったのかはわからない。

しかし、もし自分たちがこの部屋にいたらと思うと、ぞっとする話しだ。

「な・・・なんだよこれ！！いったい誰が・・・・」

その惨状を見て、アギトが絶句する。

ルーテシアに至っては声が出ていない。

と、そこに

「ふぅー・・・はずれか。まあ、下手に当たって死なれても困る、な。これは失策。失敗してよかった」

「「!?」」

そんな声がどこからか聞こえてきて、二人が周囲を見渡した。

そして、部屋の中の穴だらけになった壁がガラガラと崩れ落ち、外から一体の異形が現れて入ってくる。

そいつの両手には一丁ずつ、合わせて二丁の銃が握られていて、耳がピンと立ち、精悍そうな顔立ちをしていた。

ただ、そいつはまるで犬のような顔をして、鋭い眼光をしていたが。

「なんだてめぇは!!」

「おやおや、これは失敬。自己紹介が遅れた。俺はドーベルマンの

始祖たるアンデットで、名前はそのままドーベルマンアンデットという者。訳あってあなたの魂が必要なのでね。なぁに、この場で殺そうというわけではないよ。じゃあ・・・・」

ジャカ

「いただいていきましょう」

ドンドンドンドンッッ！！！

そう言うなり銃口をルーテシアに向け、何のためらいもなく発砲してきたドーベルマンアンデット。
が、その銃弾はアギトが発生させた炎熱の壁によって瞬時に解け消え、防がれてしまう。

「ほぅ、四肢の動きを封じて連れ去ろうと思ったが・・・なるほど、優秀な護衛がいるようだ」

「あったりまえだ！！それにテメェ、それがルールーに当たったらどうすんだ！！」

「連れ去るだけだな」

「そうなったら私、出血多量で死んじゃうけど・・・・」

銃口を向け、向けられながら、そんな話をする彼ら。
何かずれているように感じてもそれは気のせいだ。

『ルールー・・・こいつやべぇ・・・・』

『うん。アンデット・・・だもんね』

そんな会話をしながらも、二人は念話でも会話をしていた。

相手はアンデット。
ルーテシアも、その存在のことは知っていた。

彼女が好きなのは古代ベルカ・・・というよりも古代史や考古学に近い。
それならば一万年前に起こったバトルファイトなどの事柄に興味を持たないわけもなく、当然アンデットのことも知っている。

『それもだけどさ、さっきの銃弾。あたし融かしたの実はかなりギリギリだったんだ・・・・』

『え？』

それを聞いて、ルーテシアは表情に出さないように、それでもかなり驚いていた。

彼女の知る限り、アギトはかなり高性能なユニゾンデバイスだ。
さらにはデバイスというカテゴリーで見なくても、彼女以上の炎熱使いはそうそういない。

その彼女が防ぐのがキツイ（彼女自体が攻撃型ということもあるが）というのはなかなかないことだ。

これだけでも、相手の強さが伺える。

『だからルールーはすぐに転移魔法で逃げろ!!ここは・・・』

『アギトは!?』

『あたしは標的じゃないみたいだからな。うまく逃げ切ってやるさ!!』

そんな算段を付けていると、念話の内容など知らないドーベルマンアンデットが、口頭の会話の返答をしてきた。

「・・・おぉ、確かに。この場で死なれては困る。ふむふむ失策失策。これまた失敗してよかったな。では・・・・」

「ッ！！！ルールー！！行け！！！！」

「的確に意識を刈り取らせていただこう」

そういって双銃を腰のホルスターに収め、ドーベルマンアンデットがルーテシアに向かって疾駆し、その間にアギトが飛び込んだ。

「ダメだ！！！」

「アギトッッ！！！」

ゴォォオッッ！！！

ーーー

ーーー

「え・・・？」

「・・・む？」

通路の曲がりかごの向こう側から、ひょっこりと一体の怪人が現れたのだ。

「犬・・・あれはテリア・・・・？」

「知ってるんですか？」

「まあな・・・だが・・・・あれは！？」

「牙（ガ）ァァァアアアアアア！！！」

「グ！？」

「おぉ！！？」

そして突如、二人を視認したそいつは涎をダラダラと飛ばしながら、エリオと謙吾に飛びかかっていった。

ーーー

る。

何故無事なのか。これが”輝志”の力なのだろうか？

「ガォォォォォおオオオオオオオオオオ！！！！」

「うん？」

と、そこに一体の怪人が現れ、真人に襲いかかっていった。

おそらくはロットワイラーという犬の種類のアンデットだろう。

そいつが真人を見るなり、いきなり襲いかかってきたのだ。

しかし

「龍牙斬（ロンガーザン）！！！」

「ぶヒュルわ！！！コヒューーー・・・・」

真人の渾身の気合とともに放たれたラリアットによって、首を支点

にアンデットが高速回転、そののちに地面に叩きつけられ、バキリとベルトが砕け散った。

哀れなり。

「あんだぁ？こいつ」

『井ノ原さんッ！』

「ん？どーしたクド公」

と、肩をぐいぐいと回して倒れたそいつを見る真人に、クドリャフカからの通信が入った。
何やら慌てているようだ。

『謙吾さんとエリオさんが、アンデットみたいな敵と交戦してますッ』

「おう、そんなの今俺も倒したぜ？」

『わふー!?も、もう事後でしたかっ!!』

「助けに行くか」

『ですです!!場所を送ります!!』

「よっし!筋肉がうなるぜ!!!」

そうして、無敵の筋肉さんが仲間を助けに走り出した。

『井ノ原さん!?防護スーツはどうしたですかっ!?』

「俺の筋肉の方が熱い!!」

『わふー!?納得できそうなのが怖いですっ』

ーーー

「・・・配達に来てみれば・・・・・」

「貴様、誰だ」

「お前がなんだ」

場所は戻って、辺境世界マウクラン
アルピーノ邸の一室

二人に向かって走ったドーベルマンアンデットのその手が、アギトとルーテシアに到達する前で止まっていた。

その腕は別の腕につかまれており、その腕は一人の青年のものだった。

黒い服に、ツンツンと立った金髪。そして、元ソルジャーの証たる魔眺に染まった蒼い眼。
背中には巨大な大剣を背負っている。

「あ、あなたは・・・・」

「フンッ!!!」

ルーテシアがその青年に声をかけると、ドーベルマンアンデットが中で一回転しながら後退し、その男を睨みつける。

一方、金髪の青年はルーテシアに、届けものだといって小包を渡した。

「宅配を頼まれて世界を越え、こうしてやってくれば・・・・危なかったようだな」

「貴様・・・まさか!!」

「下がってろ」

ドォウ!!

青年が剣を構え、ドーベルマンアンデットに向かい立つ。

「翼人か・・・・しかも貴様は・・・・！！」

「・・・クラウド・ストライフ・・・・漆黒の翼、だ」

まさに偶然。
ここに、今や最強の翼人がやってきていた。

名を、クラウド・ストライフ

勇気を司る漆黒の翼をもち

そして、唯一「世界最強」と互角に戦うことができるとうたわれた人物だ。

to be continued

勃発（後書き）

更新ですよーーー！！！

と、いうわけで一気に攻めてきた・・・というか混ざってきましたね。

今回出てきたのは、ドーベルマンアンデットです。
もう完全に上位ですね。

こいつの武器は双銃です。
ゴツイ感じのイーグルとかをイメージしてください。

銃を持った怪人ってなかなか見ませんのでね。

で、問題はこの「ドーベルマン」なんですよ。

感じよくて強そうなイメージで出したんですが、調べてみて後悔しました。

ドーベルマンって、人工的な勾配で生み出された種だったんです！！！

そんな種に「始祖たる」もくそもあるわけないじゃないか！！！（劇中じゃ言っちゃったけど！！）

でもその分その大本となった犬種は出しましたけどね。（テリアとロットワイラーです）

真人はあれでいいんです。
きっと彼には何より筋肉が最高の防護服なんですｗｗｗｗｗ
後「龍牙斬」出せてよかったｗｗｗｗ
哀れなりロットワイラーアンデット・・・・

次回は、それぞれの戦いの続きですね。

ではまた次回！！

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ
高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピーノ（？）

残り四名

破壁

聖王教会

瓦礫と煙がところどころに散る廊下にて――――――

「アクセルシュート！！」

「ちょざこい！！」

バパァン！！！

なのはと理樹が、クロコダイルアンデットと交戦をはじめ、すでに五分。

ヴィヴィオは医務室で理樹のバリアに入って隠れていて安全だ。

すでに火事も収まっており、この場でこいつを倒せばそれで終わりだ。

しかし、まだ倒せずにいる。

正直に言おう。この状況は異常だ。

あの「エースオブエース」高町なのはに、「薄緑の翼」直枝理樹が二人掛かりで挑んで倒せていないというのは。

「攻撃が効かない・・・・!?」

「室内だからディバインバスターはできないし・・・・」

そう、この室内においての戦闘が、一番のネックだった。

攻撃のなのは、防御の理樹と、戦闘が始まった瞬間に二人は瞬時に自分の持ち分を理解し、実行していた。

だが、なのはの攻撃は基本的に砲撃魔法だ。

距離が近くては近接戦闘になり、そしてそれはなのはにとってあまり得意である分野ではない。

だからと言って距離を取ろうにも大きな攻撃では建物ごと吹き飛ばしてしまうので却下。

いつも使っているカウンターバインドで相手をとどめ、距離を取る戦法、バインドがあっさりと砕かれて不可。
強いバインドを練ればいいのだが、そうさせてくれる相手ではない。

ゆえに、こうして押しとどめる程度しかできていないのだが・・・・

「会話をする・・・ということは上級・・・ってやつだね」

「なんでここにアンデットが・・・そもそもアンデットは全部封印したんじゃ!!?」

「そんな会話はいいから、そこを退け。全く・・・この二人がいるとは思ってなかったが、やっぱりめんどくさいことになったな」

この二人をして「面倒くさい」で片付けるこのアンデットは、確かに強かった。
この状況というのを差し引いても、このアンデットはおそらく、自

分たちとまともに戦えうるだろう。

『なのはさん。僕があいつを引き留めるから、ヴィヴィオちゃんをここから避難させてください』

『・・・大丈夫？』

『僕は最硬の翼人だよ？「世界最強」だってまともに傷つけられなかったこの壁なら大丈夫！！』

『・・・・・じゃあ、お願い！！』

ダッ！！

念話でそう言った会話を取りかわし、なのはがヴィヴィオのもとにUターンして走りクロコダイルアンデットの前に理樹が立ちふさがった。

「む・・・逃がしたくはないな！！」

「僕を突破できると思ってるの？」

フォン、フォン・・・フォンフォンフォンフォン！！！

走り出そうとするクロコダイルアンデットの前に立ち、うっすらと青い粒子をためた掌を流すように構える理樹。

クリスタルのような外見の小さな盾が連続で現れ、理樹が完全に臨戦態勢に入った。
ここから先は通さないという、確かな意思がそこにある。

「さぁ、かかってこい！！」

「舐めやがってぉおぁ！！！」

そうして、クロコダイルアンデットが理樹にとびかかっていき、その巨大なアギトで喰らいついていった。

体を捻り、理樹の体を左右から挟むようにして上顎と下顎を閉じるクロコダイルアンデット。
理樹は自分の体をバリアで作った箱に入れ、それを難無く防いでいた。

「かみつくだけじゃ、このバリアは壊れないよ」

「ほぅか？でふぁこふしほう！！」

ではこうしてやろう、と言ってクロコダイルアンデットがそのまま顎を持ち上げた。

それによって、理樹は「箱」の中で横倒しにされる。

「う、わ！？」

「ン゛ン゛ン゛ン゛ン゛ン゛！！！！」

ギリギリギリギリ！！！

そしてとてつもなく大きな軋みを起こしながら、クロコダイルアンデットの牙と理樹のバリアが火花を散らす。

その目の前で起こるスパークに、理樹が眼を眩ませながらも、その硬度に驚愕していた。

並みの武器でこのバリアを全力で攻撃した場合、その反動で武器の方が破壊されることが多い。
それほどまでに硬いのだ。

それに対し、これほどに責め立て、ヒビ一つ入らないその強靭なあごと堅牢な牙。

しかも、それだけには終わらなかった。

「轟(ゴォ)オオオオオオオオオオオオ！！！！」

ギャオッ、ゴゴォ！！！

クロコダイルアンデットはそのまま理樹を壁や地面に叩きつけ、さらなる衝撃を持って破壊しにかかった。

いくらなんでも、これでは理樹もたまったものではない。

バリアからビリビリと振動が伝い、それが空気を伝って理樹を直接叩きつけているのだ。

「うゥゥウウウあ!?こ・・・れは・・・ちょっと・・・!?」

叩きつけ、ブン回し、顎の筋肉を収縮させる。

その動作が、ついにこの生物の持つ能力を、最大最恐にまで引き出す技にまで到達した。

グルンッッッ!!!ゴガガガガガガガガガ!!!

時に

デスロール、という技を知っているだろうか。

ワニが標的にかみつき、その体を引き千切ろうとする際に用いる技である。
その動作は豪快にして破壊的だ。

標的に噛みつき、身体を回転させることでただえさえ強靭なあごの力をさらに増大させ、相手の身体を引き千切って息の根を止めるというものなのだから。

そして、その動作をこいつができないわけもなく・・・・

ゴゴン、ゴゴンゴゴン、ゴゴンゴゴンゴゴン！！！！！
ゴガガガガガガガガガガガガガッッッッ！！！！

「い！？」

「ガアアアアアアアアオオオオオオオオオオオ！！！」

回転する視界。
すっとんでいく景色。

もはや方向などわからない。

最初に自分が立っていた向きもわからくなるような回転に、理樹が頭を押さえながら箱の中で小さな悲鳴を上げていた。

そして、ついに

ビギッッ！！！

「ば・・・そんな！！」

理樹のバリアに、ヒビが入った。

「そ、そんな・・・この壁が・・・・・！！？？」

「死ねぇぇぇぇえええええええええええ！！」

「ッ！？流動（フロウ）！！」

理樹のバリアに牙が食い込み、もう少しで破壊されるというところで理樹がバリアを流動させて顎から脱出した。
が、デスロールの最中にそれをしたために理樹の体はきりもみ回転しながら吹き飛び、どっちが上で下なのかもわからないまま壁に叩きつけられ、その壁の向こう側にまで突っ込んだ。
ガラガラと崩れるがれきの穴から、理樹の腕がだらりと垂れ下がる。

「フゥ・・・フゥ・・・まさか、ここまでやらねばならんとは思わなかった・・・だが・・・」

理樹が突っ込んだ穴をちらりと見、そしてクロコダイルアンデットがクイ、と少し上の方を見て、何かを察知するかのようにしてから、肩を落として踵を返した。

「離脱された・・・・か。ち、結局のところこいつに邪魔されたということか・・・・む？」

忌々しそうにつぶやき、理樹に止めでも刺そうとしたのかそちらに足を進めようとしたクロコダイルアンデットだが、何かを感じ取ってからさすがに今の消耗した状態では分が悪いと思ったのか、その場から即座に消えた。

「ぐ・・・あ・・・・・・・せｎ・・・・・戦艦・・・・・・承・・・認・・・・」

《（ピピッ）コード認証。直枝理樹、承認いたしました》

「これで・・・あっちは・・・・なんとか・・・・・な・・・・（ガクリ）」

ーーー

『こちらスバル！要救助者と接触！今から脱出します！！』

『こちらティアナ』

「ティアナさん！！来てたんですか！」

『爆発火災って聞いたからね。急いで来たのよ。それで、地下一階でマリアージュと遭遇。多分これから交戦に入るわ』

「わかりました。ではスバルさんはウイングロードで脱出を。ティアナさんも放水のタイミングでそこを離れてください」

『わかった！！』

『了解！』

「メイン駆動炉、オールクリア」

「全消火冷凍弾、装填完了」

「エネルギー、７８％使用可能」

「反重力エンジン、問題なし」

「パイプライン、問題なし！！」

「了解。起動システム、機動エンジン、オールグリーン」

「行くぜ・・・空中移動戦艦「瞬風（しゅんぷう）」・・・起動、発進！！！」

ゴォン・・・・・！！！！

エリオたち三人がビルから飛び出し脱出した瞬間、海の底からそんな重い駆動音が聞こえ、徐々に海面が盛り上がって行った。

そしてその山になった海面がはじけ飛び、そこから巨大な戦艦が姿を現しそのまま空中にまで飛び出していった。

「あ、あれは!!」

「空中移動戦艦「瞬風」。「ＥＡＲＴＨ」の地下で作られてしたのが、やっと完成したんだ」

「で、今回それを持ってきたってわけだ」

「あの名前は・・・・・」

「・・・ああ、そういうことだ」

「消火冷凍弾、発射！！」

「発射！！」

ドドドドドドドドドドドドンッ！！！

瞬風の操舵室で恭介が号令をだし、流れるようにミサイルが飛び出して行ってビルに着弾。
その瞬間に着弾したところから白い煙が上がっていき、急速冷凍して炎を消していく。

「ほとんどの方が避難していて助かりました」

「だな。じゃないとこの弾は使えないから」

「スバルさんの脱出を確認！！・・・・え？」

「どうした!?」

「担がれている・・・きゅ、救助者の男性が、喉にナイフを突き立てて・・・!?」

「じ・・・さつ・・・・?」

――――――

そこで、ティアナはこの一連の事件の犯人であろう人物、マリアージュと向き合い立っていた。

相変わらずのスピーカーから出ているかのような音声。
人間と話している気がしない。

『私という個体が消滅しても、また別の個体が、彼女を探し出すでしょう』

「彼女？・・・・別の個体？・・・あなたは一体・・・・・」

『トレヴィア・グラーゼの居場所は知れました。いまこそ我らにイクスを取り戻すとき。邪魔をしないでください』

「ッ！？」

そこまで言って、マリアージュがティアナに向かって走り出してきた。
手に持った剣を突き出し、その喉を引き裂こうと突進してくる。

が、ティアナはとっさに地面に倒れ、仰向けになって頭上を越えていくマリアージュに向かってクロスミラージュからの弾丸を放った。

バチュン！！

「え？」

「ォ・・・・・」

そして、その弾丸はマリアージュの股を抜け、脳天から飛び出して天井に当たった。

一番驚いているのはティアナだ。
この弾丸は非殺傷設定の弾丸なのに、一発撃っただけでここまで人体を貫くなんてことはありえない。

ティアナを越え、少し行ったところでマリアージュが止まる。

立ち上がり、その姿を見るティアナだが、その瞬間彼女の困惑の表情が、驚愕の表情へと変わった。

「え・・・液体！？」

『新たなるマリアージュたちよ・・・我らが主を・・・みつ・・・け・・・』

ドロッ！！！

ティアナが驚くのも無理はない。

マリアージュは彼女の目の前でたちゴマって振り向いたと思ったら、突如としてどろりとした液体になって溶けてしまったのだから。

『ティアナさん、一階と二階部分に放水を始めます。そこは危険なので、脱出してください』

そこで、ティアナに西園からの連絡が入り、その液体を少しだけ瓶に入れてその場を離脱した。

キーワードは、そろった。
解くための鍵は、あの天才科学者（マッドサイエンティスト）だ。

to be continued

破壁（後書き）

さて、今回は理樹の戦いを終わらせ、火事のほうも終結させました。

蒔風
「で、スバルの目の前で救助者が自殺・・・か。この点は原作と変わらないな」

自殺される現場が違いますけどね。

蒔風
「俺でも傷一つ入れられなかった理樹のバリアをかみ砕きに来るとは・・・恐ろしいアンデットだな。クロコダイル」

そうなんです。
上級アンデットは恐ろしい。
半端ない強さですから。

蒔風
「そして戦艦。「船」って言うのはこういうことか」

名前は言わずもがなです。
イメージとしては「ランブリング」です。

蒔風
「ゴジラファイナルウォーズに出てたやつか」

ああいう特撮怪獣映画はこういう時に便利ですね。

蒔風
「次回、ところ変わってクラウドの戦い」

ではまた次回

未熟

辺境世界マウクラン、住居開拓地域

ドンドンドン！！

「下がれ！！」

チュンチュン、ギィイ！！！

ドーベルマンアンデットＶＳクラウド・ストライフ

「邪魔、だな！！」

ガンガン！ゴッガ！！

ドーベルマンアンデットの放つ銃弾を弾きながらクラウドが疾走してファースト剣と呼ばれる大剣で斬りかかって行く。
が、銃身をクロスさせ、そこで受け止めたアンデットはそれを流すように降ろしながら一回転、そして銃口を向けて数十発撃ち放った。

それを大剣の面で受けるクラウド。
ドーベルマンアンデットは銃弾を放ちながらハイキックや回し蹴りをも放ち、回転しながらの攻撃を連続してきて止まろうとしない。

銃弾と脚撃の連続攻撃。

しかもそれは勢いに乗ってドンドン速くなっていっている。

「クッ・・・・！？」

「ははははははは！！どうしたのか？人間！オレに勝てないか！！」

「舐め・・・るなよ！！！」

ドォウ！！！

クラウドの気が充満し、バイク「フェンリル」から残りの合体剣がすべて飛んできて手や腰に収まる。

「ここからだ」

「フッ・・・笑わせないよう・・・がんばってくれ！！！」

ドンドンドンドン！！！

ドーベルマンアンデットが銃を放ちながらクラウドに走り、クラウドもまたそれを弾き飛ばしながら迫って行った。

そして、交錯する瞬間。
クラウドが横一文字に剣を薙ぎ、それをドーベルマンアンデットが縦一回転しながらクラウドを飛び越し回避する。
しかも、回避しながらクラウドの真上で銃弾を放ってきすらした。

クラウドはそれを腰に収めている剣で何とか防ぎ、相手の動きを止めるためにブリザドを放つ。
が、当然ながら何も強化していない魔法では相手の動きを止められ

るわけもなく、氷の塊はいともたやすく銃弾に打ち砕かれていった。

「ははは！私も甘く見られたものだ。その程度の力？翼人とはこんなものか？」

「・・・・・」

「これで終わりなら・・・」

「封じろ」

ビギィッッ！！！

大口を叩き、こんなものかと嘲るドーベルマンアンデットに対しクラウドが短くそう言った瞬間、そいつの手足を巨大な氷塊が覆い、動きを封じ込めに来た。

いきなりの現象に戸惑いを隠せないドーベルマンアンデット。
銃を持った両腕は肘まで凍りつき、脚は同じように膝まで氷に閉ざされていた。

「目の前で氷が出て・・・おかしいと思わないのがおかしいだろう」

「なに！？」

クラウドは確かに、ブリザドを放った。

しかしよく考えてみよう。

ブリザドとはいったいどんな魔法なのか。

「氷で相手を攻撃する」のか、「冷気を以ってして相手を攻撃する」のか。

そう考えると、前者ならば別に氷でなくてもいい。

むしろ鉄球を投げつけた方が威力は高い。

そう、ブリザドの攻撃とは、冷気を以って相手を凍らせ、それによってダメージを与えるということ。

ブリザドを放ったときに発生する氷とは、軌道上の水分が凍った際にできる副産物に過ぎない。

この魔法はそれで攻撃するものではない。

そして、クラウドほどの人物ならば、空気中の水分を凍らせずとも相手に冷気を飛ばすことなど造作もないこと。
最初の氷などは、ただの囮にすぎないのだ。

「未熟・・・だな」

「なんだと?」

「力や強さだけならばオレと同等程にもかかわらず、その未熟ゆえに弱い」

「・・・・・・・・」

「お前、アンデットだな?なぜいる」

「・・・・・なあ」

「?」

動きを封じられたドーベルマンアンデットに、クラウドが問い詰めようとすると、ドーベルマンアンデットはにやりと笑って勝手に、そして聞いたこととは関係のない話をし始めた。

「自分は、実をいうとバトルファイトを知らないのだよ」

「？・・・どういう・・・」

「ドーベルマンという犬種はあなたたち人間によって誕生させられた新たなる種。だけど、そんな種でも次回あるであろうバトルファイトには参加できるかもしれない。そんな感じで、多分私は生まれた。だけど、その統率者（モノリス）がいないんじゃ、バトルファイト再開の見込みはない」

「だからどうした」

「だから・・・今このチャンスを逃せないんですよねぇ。比較的生まれたばかりで、まだこうやって自分のキャラも定まってないってのにさぁ！！！もう先がないなんてあんまりじゃねぇ！？」

ビキッッ！！

「！！無駄だ！！」

ガキィ！！

「いくら逃げようとしても、それは氷だ。すぐに作り直せる」

「チ・・・ま、それはいいんだが・・・いいのかな?そんな「俺一人」に気をまわしちゃって」

・・・・・・ガシャァ・・・・・・

「!!!!」

「ハハハハハハハ!!そうさ!俺はまだまだ未熟者!!だからこそ何体もつれてきたんだよ!!!気づかなかったか!!間抜け!!」

「クッッ!!!」

聞こえてきた破壊音と、ドーベルマンアンデットの言葉に歯ぎしりしながらクラウドがルーテシアのもとに走り出した。

場所は、リビング。
そこでは彼女を守ろうと、アギトとガリューが奮闘していた。

もちろん、ルーテシア自身も交戦しているが、彼女は魔道士といっ

ても召喚魔導師だ。
弱くはないが、アンデットを相手にするにまだは不利としか言いようがない。

「ルーテシアッ！！！」

「クラウドさん！！」

と、ルーテシアの声を呼び、彼女もクラウドに気付く。

そこからは念話で会話をしたのだが、彼女の話ではメガーヌとガリューは一緒に遠出をしていたそうだ。
と、そこでガリューがこちらの異変を察知、まずは一人で急いできたらしい。

もちろんメガーヌも一緒に連れて来ようとしたらしいのだが、彼女がガリューだけでも先に行くように指示したそうだ。
確かに、担いていくよりは一人のほうがはるかに速い。

転移魔法も使えないことはないが、彼女たちがここに住んでいる理由を考えればそれは実際不可能だろう。

現在彼女らを取り囲んでいるアンデットは三体。

アギトがセミ（ロウクスト）、ガリューが蝶（バタフライレディバグ）とテントウムシだろうか、それらのアンデットを相手にしていた。

そこに向かって、クラウドも参戦しバタフライアンデットを一閃のもとに切り伏せ、上に飛ぼうとしたそいつを叩き落とした。
そしてその際に、天井を張りつく――ヒル（リーチ）だろうか――アンデットを見つけ、それに向かって垂直に天井へと剣を構えて突っ込んだ。

残った二体をアギトとガリューに任せ、天井を突き破り二階へと突っ込んだ彼はリーチアンデットをバラバラにし、そこに見つけたほかの三対のアンデットを切り捨てて部屋から蹴り飛ばした。

そして、穴から一階を見下ろし、そこにあいつを見た。
氷を砕き脱出できたのか、ドーベルマンアンデットがルーテシアに向かって疾走しているのを。

「ッッ！！リフレク！！」

だが、クラウドはルーテシアに向かってリフレクを展開し、彼女をドーム状のバリアで守った。
そのドームにドーベルマンアンデットの銃弾が当たるものの全く揺らがず、蹴りを放たれるが少し揺れただけで問題はない。

「終わりだ！！」

そしてそれと同時に、クラウドが剣を構えて一階に飛び降り、ドーベルマンアンデットを狙って突っ込む。

しかし

バゴォッッ！！！！！

「なに！？」

「ルールルー！！」

リフレクの張った内部の地面から、ミミズの始祖たるアースワームアンデットが出現して彼女の体を掻っ攫っていったのだ。

クラウドは咄嗟にドーベルマンアンデットを蹴り飛ばして押しのけ、リフレクを解いて中を見た。

そこには大穴がぽっかりと残っており、ルーテシアはどこにもいなかった。

「もらったぞ！！召喚の才能を持った少女！！」

「させるか！！！」

クラウドが背後で叫ぶドーベルマンアンデットを無視して剣を床に突き刺し、マテリアを輝かせた。

彼が発動させたのは、「クエイク」と「召喚獣・タイタン」

その効果は絶大だ。

クエイクで地面を隆起させ、タイタンがその地面に両腕を突っ込んでそのままひっくり返すのだから。

それによって、ルーテシアを掴んだアースモールアンデットが宙に放り出され、クラウドがそれに向かって跳躍した。

しかし、それよりも早く鳥系のアンデットがルーテシアの体をキャッチ、飛び去って行こうとする。

しかも、少し行ったところでもう五体ほど現れて、一点に集まったのちに六体がバラバラの方向へと飛び去って行ったのだ。

「クソッッ！！！」

バォオ！！！

それを見てクラウドが悪態をつきながら開翼し、五体すべての召喚獣を出してそれぞれを追っていかせた。

相手は六体、こっちも五体と一人。

「させてたまるか・・・・！！！」

「ガゥウ・・・」

「だ、大丈夫かよガリュー。くっそ・・・頼んだぜ・・・・」

飛んでいく彼らを見ながら、ガリューが意識を失うように倒れ、アギトがそれを介抱する。

ドーベルマンアンデットはもう、その場にいなかった。

ーーー

彼の目の前にいるのは、ナナフシ（スティックインセクト）の始祖たるアンデットだ。
あのモールアンデットが弾きだされた瞬間、姿を隠していたこいつがルーテシアをキャッチし、擬態して身体を隠し、こちらに逃げてきていたのだ。

「もらったぜ。召喚に秀でた少女。新人アンデットだからって、なめてもらっては困るからね」

――――――

その避難所としてのテントで、理樹は目を覚ました。
脇には恭介や鈴をはじめ、治療班としてきた観鈴もいる。

「聞いたぜ、理樹。アンデットだって？」

「うん・・・恭介たちのほうは！？」

「大丈夫だ。ちゃんと鎮火してきた。お前の方もこんな大変だったってのに承認とか、すまなかったな」

「・・・そういえば、ヴィヴィオちゃんが！！」

「ヴィヴィオはなのはが一緒にいて大丈夫だったぞ。だからお前は寝てろ」

「そ、そう・・・よかったぁ～～～～」

鈴の言葉に、理樹がはぁ～、と息を漏らして安堵する。
しかし、そのあとに表情は苦々しいものに変わっていき、寝たまま拳をベッドにボスリと叩きつけた。

「でも・・・僕は負けた。あのままだったら、ヴィヴィオちゃんは確実に奪われていた・・・」

「それは・・・」

「なんでアンデットが来たんだ?いったい何が・・・」

「俺らの方にも来てたぜ」

「ああ、火事現場にいた」

「そっちにも!?」

「理樹!!」

謙吾や真人の話に驚く理樹のもとに、今度入ってきたのは一刀と愛紗、朱里だった。
おそらくはアンデットの話を聞いて、ここまでやってきたのだろう。

「一刀・・・そうだ・・・たしか!!」

「ああ、今こっちはアンデットを追ってる」

「どういうことなんだ・・・?五十二体以外のアンデットが・・・

いたの・・・？」

「今から話すからさ。そのために来たんだ」

――――――

「そう・・・・・」

その話を聞いて、理樹はとりあえず襲撃された訳は分かった。
彼らがヴィヴィオを狙う理由も。

「でも・・・こっちに来たのは解る。でも、どうして火災現場に？」

「わからない。もしかしたらリトルバスターズのメンバーや、スバルさんたちを狙ったのかも・・・・」

ちなみに、スバルやティアナは事件現場に残っている。
消火後の片づけや、証拠などを見てデータを取っているのだ。

「火事のほうは・・・？」

「ほとんどの人命は救助できた。だが、一人だけ救助されたとたんに自殺しちまった」

「え・・・？」

そして、理樹が今度はそっちの方の話を聞き始めた。
すると、一刀のほうに連絡が入り、それに出るためにテントから外に出る。

「救助された人が自殺・・・どうして？」

「おそらくは催眠や操作系の魔法で自害させられるようになってたんだろう、って言うのがティアナの考えだ」

「今までの被害者の傷はそういう・・・」

「なんだって！！？？」

その瞬間、テントの外から一刀の大声が聞こえてきた。
なんだなんだと外を見ようとする理樹だったが、直後にバサァッ！

！と一刀が中に駆け込んできた。

「な、どうしたの？」

「クラウドさんからの連絡で・・・・ルーテシア・アルピーノがアンデットに連れ去られた・・・・！！！」

事件は、ようやくここで重なろうとする。

しかし、完全にX（クロス）するのはまだここでではない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

未熟（後書き）

気～高～い、雄たけびをォ、あげろォ！

蒔風
「おい」

地球～うのォ、い～のチィ、守るためにィ！

蒔風
「ちょっと」

ガオ！もっと！ガオ！強く！百獣戦隊ーー！！

蒔風
「話を」

ガァァアアアアアアアアアオレンジャーーーーー！！！！

蒔風
「話を聞・・・」

ウォォオオオオオオオオオオオオオ！！！吼え

蒔風
「吼えんな！！！（ドゲシッ）」

あうぅ！！
な、何すんのさ。

蒔風
「何でお前は人の話無視してガオレンジャー吼えてんだ」

ん？ああ、そうかそうか、そういうことか。だったら・・・・

シュシュッと参・・・

蒔風
「戦隊の種類いってんじゃねぇよ。何で歌ってんだってンだよ！！！」

そっちぃ？
・・・・・・・・・ノったから。

蒔風
「まず先にあとがきしろよ」

はいはい

と、いうわけでクラウドＶＳドーベルマンアンデットでしたね。
ルーテシア連れて行かれましたね。あんだけごちゃごちゃやられち

ゃさすがに無理でしょ。

では

急げ救急戦隊、ゴーッゴーッファイッブゥーーーー！！！！

蒔風
「それやめろ（マイク没収）」

あぁ！！
な、何すんのさ！！今回の内容かえりみたじゃないか！！

蒔風
「解説をしろよ解説を！！ただえさえお前解説し忘れ多いんだから！！」

わーったよ・・・
バーローめ

蒔風
「あ〝ぁ〝！？」

うひぃ！！

と、まあ、今回はそんなもんでしたね。

ブリザドの考えに関しては自分の勝手な解釈です。
きっとゲームのあれは演出上のものであって、実際に氷飛ばしてるわけじゃないはず・・・と、思ってます。

だって氷ぶつけるってそれ思いッきり物理じゃないですかｗｗｗｗｗ

あとメガーヌさんでてきませんでしたね・・・・
忘れていたわけではありません。

きっと山菜を採りに行ってたんですよ。ガリューと。

ドーベルマンアンデットに関してはああいう風に考察しなおしました。
その代りキャラが安定しなくなっちゃった。てへ

未熟だということを知っている分、あいつは強いと思います。
無知の知、って奴でしょうか？

それと、クラウドの召喚獣ですが、確か明言してなかった気がするのでここで言ってしまいます。

してたかなぁ・・どうだったかなぁ・・・・？

バハムート零式
フェニックス
リヴァイアサン
イフリート
タイタン

の五体です。
ＦＦ７にはまだ召喚獣いたんですが、これくらいにしないときりがない・・・・
ナイツオブラウンドくらいは出したいと思いますけどね。

理樹と一刀はお互いの事件の事を少し知りますが、ここで合流操作にはなりません。
今回はたまたまかぶった、というだけで終わりそうです。

そして、手掛かりをもとにマリアージュ事件は終わりに向かう・・・・

蒔風
「次回はそこらへんか？」

いいや？まだまだ。
っていうかルネッサさん忘れてる自分に今気付いた。どうしようか

蒔風
「急いで出せ」

はいな

蒔風
「次回、今回の事件後」

あと一刀たちの方へとまた返したいと思います。

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ

高町ヴィヴィオ
ルーテシア・アルピーノ

残り三名

会話

「どうしても後手後手になる・・・・ッたっ！」

「対象が多すぎるんだ。こればっかりは・・・ェあ！！」

「ったく、そろそろ一年なんだろ？こんなんじゃまずいよなぁ・・・」

「ＥＡＲＴＨ」本部ビル、道場内。

そこに、北郷一刀、剣崎一真、左翔太郎の三人が今回の事件の内容を話し合っていた。
ちなみに一真と一刀が木刀を手に打ち合っており、翔太郎がそれを眺めている形だ。

「対象になる少女が多すぎるし・・・フッ！そもそもなんでハルヒさんたちが対象外なのか分からない」

「力としては絶大なんだっけ？彼女。なんでだろうな」

「さあ・・なっと！！！」

「うわっ！！」

と、そこで一刀の木刀が受け流されて、体制を崩し倒れてしまったところに、一真の木刀が向けられた。

「勝負あり、だな」

「はーーー・・・なかなか勝てないなぁ・・・」

「実戦では俺より強いんだから、拗ねない拗ねない」

「それで、実際どうなんだ？」

実際どうなのか、というのは保護した少女たちの事だ。

こちらに保護したのは古手梨花、羽入、インデックス、アルルゥ、ヴィヴィオだけだ。

他の者たちには警護をつけておいただけだし、そもそも本人たちが大丈夫だと言ってしまったので、これ以上引き留めようもなかったのだ。

「標的になる少女とならない少女の基準がまだ分からないからなぁ・・・・」

「ここまで来ると力ある、とは限らなくなってくるかも・・・あくまでも石板にあったのは「十の少女」だからなぁ・・・・・」

「ってか、そもそもその「封印」ってのは何で崩れたんだ？」

「それは・・・たぶん「あいつ」が俺たちの世界で・・・・」

「ああ・・・・そっか」

これからどうしようかという話を、困りながらもした彼らだが、ここでその根本の理由に行きついた。

そう、この根本の理由。

邪神の封印がわずかながらにも溶けてしまったが故に、アンデットは復活した。

その原因は、間違いなく「彼」が統率者からの意思を伝えるモノリスを破壊したからだ。

「じゃあ・・・後始末、しっかりしてやらないとな」

「だなぁ。次会ったら二回は殴ってやる」

「はは・・・「あいつ」も大変だ」

今は無き「彼」を思いながら、笑う三人。
いかなる状況でも、彼らは落ち込むことなどしない。

いつでも楽しむことを忘れるな。

それもまた、「彼」の言葉だった。

――――――

「イヌー！」

「待てー！」

「ワンワン！！」

「ちょ、なんでおじさんのところにうぷわぁ！！？」

その「ＥＡＲＴＨ」の敷地内の芝生で、アルルゥとヴィヴィオがが柴犬を追いかけ、そして柴犬は放課後で遊びに来た魅音を追いかけていた。

そこから少し離れた所にはシートがひかれており、その上で古手梨花、羽入が寝ており、見守るようにアリスとなのはが座っていた。

ちなみにハクオロやエルルゥ達は破壊して（されて）しまった宮殿の修理で来れないのだ。

事のついでに海東も手伝っているが、ひと段落つくまではアルルゥはこっちに預けることにしたらしい。

インデックスは食堂で「ＥＡＲＴＨ」のエンゲル係数を順調に伸ば

している。
ちなみに、それが直接響くのは上条のポケットマネーになのだが。

「いい天気ですね」

「うん。みんな元気で何より。でも・・・」

「御坂さんやルーテシアさんが心配ですか？」

「・・・はい」

シートの上で、なのはとアリスが話している。
なんだかんだと言って、すでに二人も連れ去られているのだ。

しかも、うち一人は翼人の手をかいくぐって。

もしここにそんな奴が何体もせめて着たらと思うと、守りきれないかもしれない。

「ほかの事件で動いている方たちにも、一応はラウズカードを渡しておいたのでアンデットの対策はできるはずです。それに、ここには今一刀さんだけでなく観鈴さんにクラウドさんもいますので」

「そう・・・だよね。フェイトちゃんもヴィータちゃんもシグナムさんもいるし・・・」

「はやてさんは確かまた別の仕事でしたっけ？大変ですねぇ」

そう、今ここ「ＥＡＲＴＨ」本部には四人中三人の翼人が集まっている。

正直言って、アンデットが何体かかってきても勝てるという自負はある。

しかし、理樹が対一で苦戦した相手クラスのアンデットは現在確認されているだけでも五体いる。

上級アンデット。

エレクトリックエェル
コックローチ
ブロッサム
クロコダイル
ドーベルマン

計五体

ただのアンデットならまだしも、上級となると話が別だ。

しかも、まだいるかもしれないのだ。

これ以上の脅威はない。

「・・・・アリスさん」

「？　なんでしょう」

「原典・・・って知ってます？」

「え？」

なのはが、唐突にアリスに聞いた。

原典

それ即ち、「彼」が関わることのない、オリジナルのストーリー。

それの存在を、知っているのかと、彼女は聞いてきた。

「・・・・知っています」

「！！」

「しかし、世界が一つになった影響で、様々な要因が混じり、重なり、原典と同じとは限らないのですよ。現にアンデットのほうはすでに私の知っている原典とは全く異なったストーリーになってます」

「つまり・・・やっぱり元の話からはずれている・・・ということなの？」

「ええ・・・でもそもそもあなたたちにそのような話が関係あるのでしょうか？」

「それは・・・」

「あなたたちはそれを知ることはありえません。いうなれば、物語の未来ですよ？それは。運命、と言ってもいいかもしれません」

「・・・・」

「そんなものを知ってどうするというのですか？確かに、私の中に仮設は生まれています。火災現場にアンデットが現れた理由も、わかっています」

「な、なんで黙ってるんですか！？」

「問題ないからですよ」

「そ、そんな・・・・」

アリスは言う。
自分はアンデットがなぜあの火災現場に現れたのかを知っている、と。

なのはは問う。
だったらなぜその理由を教えてあげないのかと

再びアリスは言う。
だからそれを知ってどうするのか、と
問題はない、と

「現れる、ということは知りませんでした。しかし、現れたということを聞くと、理由は確かなものが一つあります」

「だからなんでそれを・・・」

「信じてますから、あなたたちを」

アリスの言葉には、自信と確信があった。

そう、彼ら、彼女らならば、必ずどんな状況でも立ち上がり、救ってくれるのだろう、と。

「「彼」だって何も知りませんでした。それでもあなたたちの世界でうまくやっていました。だから、あなたたちにもできる」

「・・・・・」

「私のこの世界は、世界のみなさんは・・・・未来を知ろうが知らなかろうが、どこよりもすばらしい人々だと思ってますから」

そういって、ニコリと笑うアリス。
世界に関わり、見守ると決めた管理者。

その姿は間違いなく「女神」と呼ばれるに相応しいものだった。

「それに、原典通りならもうそろそろ情報を掴んでいるはずですしね」

「ＥＡＲＴＨ」にいまだ、迫る影はない。

――――――

「ど・・・・どれくらい・・・」

「僕のバリアを、破壊するくらいには」

その言葉に、ティアナたちが驚愕した。

誰一人――――あの「世界最強」ですら破壊しえなかったあのバリアを、破壊できるというほどの力を持つ敵。

しかし、だからと言って負けていいことにはならない。

「本当に・・・僕の方も危なかった・・・あと少しでヴィヴィオちゃんもだったし・・・」

「でも、それはあっちが捜査するんですよね？」

「うん、一刀のほうがね。さらにクラウドさんと観鈴さんも協力するみたいだから、まず問題ないと・・・思う」

そういって、理樹が全員に一刀から渡されたラウズカードを一枚と、予備にもう一枚渡しておく。

あのアンデットたちが現れたのが、もしもこっちで調査している彼女たちを狙ってのことならばこれは必ず必要だからだ。

「それで、手がかりをつかんだって？」

「え、ええ。それなんだけど・・・」

と、そこで理樹がこの話を打ち切り、事件の内容に話題を移した。

理樹の方では報告はしたものの、ヴィヴィオの襲撃で調査は依頼できない。

一方ティアナの方はというと・・・

「ルーテシアが言ってた・・・「ドクターのところで聞いたことのある」話だ・・って」

「そうか・・・・」

「あと、トレヴィア・グラーゼって名前も気になるな」

「マリアージュが最後に言っていたという言葉か・・・・」

大きなモニターが現れ、そこにマリアージュの映像が映し出される。

長身で、片手に剣を握り、顔の上半分を覆うバイザー。間違いない。

そして、ティアナの考えとしては、彼女らは人間ではない、というものだった。

「地下で交戦して撃破したんだけど・・・そしたらドロドロの可燃液になって崩れたのよ。直後に放水の水が来たから燃えはしなかったけど、あのままいたら間違いなく焼けてたわ」

「それが放火の原因か・・・」

「倒してもその場で爆発、炎上・・・なんて奴だ」

「それでいて、対象となった人物を自害させるような操作魔法の類・・・」

「そんな奴が何体もいる？冗談きついぜ」

そう、マリアージュは言った。「自分たち」だと。

つまり、あれは人型の何か――――否、もうわかってる。兵器、だということだ。

「これから行くべきところは決まった、ね」

「ええ、話を聞く必要があるわ」

「ジェイル・・・スカリエッティ・・・」

稀代の天才科学者にして、最悪のテロリスト、ジェイル・スカリエッティ。

次なるキーワードを持っているのは、ある世界に隔離拘留されているその男だった。

――――――

「あ、長岡さん」

ところ戻って、「ＥＡＲＴＨ」敷地内芝生上

今はアリスと、今ここに来た長岡だけがシートに座り、ほかの人は柴犬と戯れていた。

「あの犬の名前、なんていうんですか？」

「まだ決めてないんで・・・」

「あぁ、だったらつけましょうよ。名前！」

「え？」

これはいい考えだ、と言わんばかりにポン、と両手を合わせるアリス。

そうしてう～ん・・・と考えたのち、これはどうでしょう？と人差し指を伸ばして言った。

「シヴァ！！」

「まんまじゃないですか。却下です」

「シバ！！」

「変わってません」

「じゃあ何がいいんですか～」

ぶーぶー言いながら長岡にも案を求めるアリスに、しょうがないですね、と考える長岡。
と、そこに静かな、夕暮れの風が流れてきて彼女の髪を軽く流した。

「風・・・ですか」

「そうですねぇ・・・そろそろ、夏ですから、ちょうどいい感じですね」

「・・・・・・凩・・・」

「え？」

「凩（こがらし）、なんてどうですか？」

「おお、いいですね！！いかにも柴犬っぽいですし！！」

そんな会話をワイワイとする、一人の管理者と、一人の女性。
とてもでないが、大きな因果を背負った人の会話には見えなかった
そうな。

――――――

もしかしたら、自分の知らない情報も持っているかもしれない。

「じゃあ明日の十時にそっちに行くと伝えてもらえる？」

「了解しました」

「それで・・・こっちに来るのは私と理樹、ギンガさんなんだけど、あなたも来るかしら？」

そう言って、ティアナがルネッサを一緒に来るかどうかと誘う。
会う人物は多い方がいい。
適度な数の意見は、様々なものの見方を得ることでいくつもの情報を得られるからだ。

まあ多すぎると、逆にみんなが一つの意見に流れてしまって悪影響なのだが。

『いえ・・私は遠慮しておきます』

「そう？」

『私は・・・私のしなければならないことがあるので』

「・・・そう。じゃあ、今晩だけでもこっちに来ない？」

『え？』

ティアナが、今度は今現在でルネッサを誘った。
彼女がいるのはスバルの家だ。
今日もメンバーが集まって馬鹿騒ぎをしている。
と、言うのは建前で、実は目の前で救助者が死なされたスバルを落ち込ませないようにしているだけなのだが。
「いまね？スバルがお気に入りの番組見てんのよ。昔やってたやつなんだけど、みんなで・・・」
『いえ、私は・・・』
「・・・ふぅ・・・・ルネ、あまり重く受け止めないで」
『？』
「あなたは何か重いものを背負っている。確か、出身は内戦地区だったわよね？」
『・・・はい・・・・』

「それで、保護されてそのまま検視官」

『生きている人間は・・・・怖いので』

「・・・そうね。怖いわ」

ティアナが言う。

生きている人間は怖い。

死んでいる人間は、何もしてこないのだから。

だからこそ、過酷な状況で生き、幼いころから武器を手にしてきた彼女がそんな気持ちになるのもわかる。

でも

「だからこそ、その怖さを克服してやらなきゃ」

『克服・・・ですか・・・』

「そう。だから、来ない？それに友人は多いに越したことはないわよ」

『しかし・・・・私が行っても・・・・』

「ふぅ・・・じゃあ、あなたの上司として命じます。今すぐ来なさい」

『え・・・あ・・・その・・・・』

「この事件が終わった後にも、あなたには私の補佐をしてもらいたい。だから、ね？」

『自分のことを、もっと知りたいという・・・ことですか』

「ええ。だから来なさい！これ以上グダつくと、人さらいを寄越すわよ？」

『それってどういう・・・・（バタン！！）』『リトルバスターズ参上！！』え？ちょっとうわぁ！？なんなんですかあぁぁぁぁぁあ・・・・――――』

「遅かったか・・・・」

モニターの向こうで今まさに誘拐のシーンを見たティアナが、あはは・・・と笑いながら、スバルたちのいる部屋に戻った。

「スバル、もう一人お客さんが来るけど・・・大丈夫？」

「え？へーきへーき！！全然大丈夫！！」

そういって、再びテレビに向かって理樹と肩を組んでギャーギャーと騒ぎ出すスバル。

「もう絶対やらせないからなぁ！！」

「そうだぁ！！次は絶対に助けてやるからなぁ！！」

「「アハハハハハハハーーーーー！！！！」」

「どういう吹っ切れ方よ・・・」

テレビでは、少し昔のだろう、ビデオが再生されていて、どうやらそれを見てテンションを上げて吹っ切れたようだ。

ちなみに、スバルは今回の火災で正式にティアナの事件に協力することになった。

to be continued

会話（後書き）

と、言うわけで前回の予告とはなんかずれた気がするけど、「会話」でした！！

柴犬の名前決定！！

リュウガ様の案をいただきまして、「凩（こがらし）」と命名させていただきました！！

蒔風
「この「凩」って漢字、確か夏目漱石が考えた国字だったっけか？」

そうそう。造語ってやつね。

蒔風
「アリスは原典知ってんだな」

知ってます。
しかし、教えても教えなくても、彼等ならば大丈夫だと信じてのことです。

蒔風
「ま、内容も変わってるし、意味無いっちゃ無いしな」

それに、それを知ったうえで物語に参入ってずるいじゃないですか。

蒔風
「それは・・・まあ・・・なぁ・・・？（こいつたった今多くの二次創作作者にケンカ売らなかったか？）」

次回は・・・・どうしようか？

蒔風
「おぉ！？」

正直なところ

スバル宅でのバカ騒ぎを書くか

事件を進展させるか

のどちらかで悩んでいる。

どうしましょう？

蒔風
「先が決まってない執筆なんていつものことだろうが」

まぁね。
でも予告に困る。

蒔風
「じゃあ・・・次回は気分で！！」

それはないだろー・・・
しかしそうなる。

ではまた次回ｗｗｗｗ

宴会

「では！第二回、スバル宅で何か騒ごう大会ーーーー！！！」

『オォーーーーーーーーーーー！！』

「「よぉぉぉぉぉぉぉぉぉっし！！！」」

なぜかマイクを持った恭介の言葉に、全員が乗り気になって片手をあげて応える。

理樹とスバルに至っては、両腕を振り上げて異様なテンションを見せていた。

「恭介！！今日はゲストがいるんだよね！？」

「あぁそうさ！！入ってこい！！真人！！謙吾！！」

「筋肉が通りまーす！」

「筋肉宅急便が通りまーす！！」

ドサリ

そういって入ってきた真人と謙吾が、一人の女性を肩から降ろして床にぺたんと座らせた。

女性の名は、ルネッサ・マグネス。
ティアナの補佐官をしている少女だ。

そのルネッサはというと・・・

「!?・・・・・・・・!!?」

一回びっくりして、状況を把握したうえでまた驚いていた。

「あ、ありのままを話しますよ?私はホテルで今回の事件に関してティアナさんと話していた。そして・・・誘われたと思った瞬間にはこっちにいた・・・何を言ってるのかわからないと思いますが、私にも訳が分からないです!!」

「あーー、ルネッサ・・・さん?」

「あなたは・・・」

「はじめまして。エリオ・モンディアルです」

「キャロ・エ・ルシエです。私たち二人ともティアナさんと同じ部隊にいた・・・」

「ああ、元機動六課の・・・それで・・・ここは?」

ポン

「災難でしたね」

「受け入れるといいですよ」

「さらわれた状況を納得されたうえで受け入れる助言!?」

「それしかないですから!（グッ）」

「考えるだけ無駄ですから!（グッ）」

「何この子たち、怖い」

そんなこんなで連れてこられて来たルネッサは一通り自己紹介され、同じく自分もしたのちにティアナの隣に避難した。

「ラ、ランスター執務官、これは一体・・・・」

「考えちゃダメ」

「え？」

「考えたら負けよ」

「誘ったの執務官ですよね！？」

もうだめだ、おしまいだ。逃れられるはずがない。

そう覚悟したルネッサ・マグネス執務官補佐。御年１７歳である。愛銃、シルバーダガーを握りしめていま、人生とは何かを見つめ直していた。

「私はどうすればいいのかな?シルバーダガー・・・・世界ってもっと暗かったはずだよね・・・なんか明るいや・・・あははは・・・・」

ま、速い話が現実逃避だ。

「あまりの衝撃にルネさんがおかしくなった!?」

「あー、彼女小さいころ大変なところで生活してたから、こんな能天気な空間初めてなのよ」

「なるほど」

そんなこんなでルネッサを落ち着かせてから、今から何をするのかを発表し始めた。

「知らない人もいるかもしれないが、俺たちリトルバスターズは野球チームだ」

「「そうだったの！？」」

驚愕の声を上げるティアナとエリオ。
キャロも声が出てないだけで驚いているようだ。

スバルは理樹とビデオを見に戻ってしまっている。
どうにもはまってしまい抜け出せないようだ。

「ビックリされたことにビックリだが、まあ話を戻すぞ」

「はい・・・」

「しかし、ここは室内だし時間も遅い。そんな中、野球ができると思うか？」

「できませんね」

「と、思うところが素人なのだよルネッサ君！！」

「え？」

「ミッド育ちの君らは知らんだろうが、我々の国にはこういうときにもできる野球があるのだよ」

「それは・・・いったいなんですか？」

ルネッサの目が光る。
おそらくは彼女の好奇心をくすぐったのだろう。
その質問に、恭介と来ケ谷が腕を組んで並び、高らかに宣言した。

「「その競技とは・・・野球拳だッッ！！！」」

「「野球じゃないよ～！！／ですっ！！」」

と、そこで小毬とクドも驚いた声を出した。
何をやるかまでは聞いていなかったようだ。

「ぬ、脱ぐんですか！？」

「そういうのはやだよ～（泣）」

涙目になっていやいやと騒ぎ出す二人。
むろん、ティアナとキャロも内容を聞いて素直にウンとは言えなか

った。

しかし、そんな彼女らを乗り気にさせる言葉が、ここにはあった。

「脱がせるのはただの野球拳。しかし、俺たちがやらせるのは違う」

「そう・・・負けた人間にッ！！好きな衣装を着させるのだッ！！！」

「「「「な、なんだってーーーー！？」」」」

「つまり！！理樹君にあんな服を着せることもできる！！」

「ゆいちゃんにフリフリの服も！？」

「ハッ！？しまったか！？・・・しかし・・・それでもまだ追い求めるだけの価値がッ・・・ぬぅぅ！！」

「エリオ君をもっとかわいくしても！？」

「キャロが何を言ってるのか訳が分からないよ！！」

「大丈夫！！みんなが振り向くように絶対可愛くするから！！」

「こんなのってないよ!!ひどすぎるよ!!こんなの絶対おかしいですよ!!」

「じゃあティアにあんなカッコやこんなカッコも!?」

「許可するッ!」

「勝手にしないでくださいッ!!」

「つまり全員に筋肉の肉襦袢(じゅばん)を着せて筋肉隊を作ることもできるってわけだな!!」

『『『筋肉ルート一直線ッッ!?』』』

そんなこんなで始まる野球拳。否、内容からして逆野球拳というべきか。

いっせいにやってもしょうがないので、チームに分かれることにした。

着せ替え人形チーム

理樹、エリオ、小毬、クド、鈴

お着換え推奨チーム

来ケ谷、西園、葉留佳、キャロ、スバル

勝敗調整チーム

真人、謙吾、ティアナ、ルネッサ

「「一部の女子からの明らかな悪意を感じるんですが！？」」

「というか何じゃこのチーム名はーーー！！」

「どうした鈴」

「どうしたじゃないわボケェ！！」

「（ズゴシッ）なんで俺ッ！？」

恭介が鈴をなだめようとするのだが、なぜかそこでハイキックを食

らうのは真人だった。
お約束とは恐ろしい。

「むっふっふ、鈴君や理樹君、そして今夜はエリオ君と、より取り見取りのラインナップ！！」

「それを俺たち調整チームがどうにかしてお前らを負かせる、ということさ！！」

「面倒なチームに振り分けないでくださいッ！！」

「と、言うわけで頼んだぞ、リーダー」

「私が！？恭介さんは！？」

「俺はほら、審判だから」

卑怯である。

「と、言うわけでくっちゃべってないでいくぞ第一回戦！！」

クドＶＳ来ヶ谷ＶＳ真人

「「「やきゅ～う～ぅするな～ぁら～、こういう具合にしやしゃんせ～・・・」」」

「アウト！！」

「セーフ！！！」

「よっよいの、よい！！！」

グー、チョキ、パー！！

「あ、あいこですねぇ」

「危なかった・・・ナイスパーだ、真人少年」

「へ、いいってことよ。パーを出すならオレしかいねェからな」

「ああ、君以上にパーな人間はいないさ」

「へへっ、照れること言ってくれるじゃねえか来ヶ谷の姉御よ」

「真人ーー、暗に貶されてるぞーーー」

「言うのもかったるくなったので簡単に行くぞ!!」

「「「じゃんけんポン!!」」」

チョキ!チョキ!グー!!

「わふっ!負けましたぁ～」

「なん・・・だと・・・・!?何をしている真人少年!」

「す、すまねぇ。力を籠めたら握力を最大限に発揮しちまったぜ・・・恐ろしい筋肉だ」

「では!!勝者の真人は何か着せたい衣装を!!!」

「や、やはり筋肉肉襦袢を!?」

「いや・・・全身を鍛えるサスペンダーかもしれんぞ!?」

「おいおいお前ら、俺だからってすぐにそういう決めつけは良くないんじゃないかい?」

「え?じゃあ違うんですか?」

「おうよ。確かに筋肉はたくましく強い。しかし、同時にしなやかでなくちゃいけねぇんだ。だから・・・」

バッ!!

「フィットネス用の全身タイツだぁッ!!」

「まさかまさかだったぁぁぁぁあああ!!!!」

ぽぽぽぽ~ん♪

「わふ～・・・・ぺ、ぺったんこなのですぅ・・・・」
「がふるぁ!?」

「きょ、恭介（２１）ーーーーーーーーーー!!!!」
「理樹・・・そのカッコはひどいんじゃ・・・ないか・・・ガクッ」

「ふふ、フリフリドレスを着るよりも何倍もましだな。ほーれほれ少年たち、どうだ?」
「女性の凹凸に感動した」
「エリオ君、あとでヴォルテールと模擬戦しようね」

「えっ?」
「ん?」

「恭介（２１）さんが倒れたので次の勝負行きます！！司会は変わって私ティアナがやります！！（あんな勝負になって変なの着せられてたまるか！！）」

「えぇーーーー！！！！」

「そこの約一名のスバルうるさい！！！では第二回戦！！」

エリオＶＳ西園ＶＳルネッサ

「負けられない負けられない負けられない・・・・」

「さて・・・出陣です」

（ランスター執務官も進行役になったなら、別のゲーム提唱すればいいのに・・・・）

「「「じゃんけんポン！！！」」」

グー、グー、グー！！

「あっぶなぁ！！」

「あいこですか」

「・・・・ときにモンディアルさん」

「（ビクリ）な、なんですか西園さん」

「あなた、さっきルシエさんに怒られましたよね？このままでは巨竜と戦う羽目になるとか」

「（ガタガタガタ）そn、そんなこと・・・冗談に」

「しかしさっきからあっちで魔力練ってますが？」

「夢も希望もありゃしない！！」

「しかし、ここであなたが女装してルシエさんを満足させれば・・・・」

「ハッ!?いや、しかし・・・ぬぐぁあああぁぁあああああああ!!!?」

「ご決断を。さあッ!!じゃんけん!!」

「う、うわあああああああああああああああ!!」

「「「ポン!!」」」

・・・・

「ちょっと待ってて今から写真撮るから動かないで！！！」

「キャローーーーーーーーーーーー！！！」

「動くなッ！！！」

「ハイィ！！」

「いいものを見せていただきました」

「西園美魚・・・・要注意人物です・・・・・ね」

その後もうたげは続いていった。

三回戦は小毬、スバル、謙吾の三人。

勝者は小毬。

スバルと謙吾は見事な執事服を着せられていた。

「く・・・せっかくのチーム分けなのにまだ目的を果たせたのはエリオ君だけではないか！！」

全身タイツの来ケ谷が、コブシを震わせて悔しがる。

確かに、いまだ目標を果たせているのはエリオのみ。

小毬もクドもなんとなしに逃れている。

このままでは・・・

「もうジャンケンとかよくね？」

「おお、恭介氏、もどったか・・・・して？」

と、そこに復活した恭介が来ケ谷の肩にポン、と手を置いて立ちあがってきた。

その顔は明らかに何かを企んでいるそれだ。

そして、その考えを恭介が来ケ谷に耳打ちしていく。
その話を聞いていくうちに、来ケ谷の顔が「ニヤリ」どころか「ニタァ」・・・・をこえ、「ニマタァ、ゲヘヘヘヘヘ」と歪んでいった。

「俺らでこうして・・・それで・・・すれば・・・」

「なるほど。では・・・・・」

「ああ!!真人、謙吾!!お前らもやるぞ!!!」

「「応よォ!!」」

「「「「固有結界展開ッッ!!!」」」」

「はぁっ!?」

「え!?」

「なんで四人で出来んのッッッ!!??」

「私もいますよ?」

「完成！虚構世界ッッ！！」

そう、それはかつて彼らが運命を覆そうと発動した虚構世界。
”輝志”という世界だからこそできた、集団で行うという、奇跡の固有結界だ。

それを五人という人数で発動させるとは・・・・

「これが欲望の力ァ！！」

「素晴らしいッッ！！」

「ハッピーバースデイ！！！」

「この欲望、解放しよう」

「ふふふ、フフフフ、腐腐腐腐腐腐・・・・・」

「こいつら人間やめやがった！？」

「ティアナさん、口調荒くなってますよ！！」

この虚構世界、または固有結界。
その名を「運命を乗り越えし虚構の学園　（ハッピーエンディング）」という。

かつて彼らの世界が襲撃されたときにもこれを発動させて、大いに活躍したのだが・・・・

これを発動する際に必要なのは構築のために軸、そして多くの、または強い想いだ。

この「軸」とは恭介、真人、謙吾の三人を指す。
恭介が世界を概念から引っ張り、真人がそれを「そうあるもの」だと存在させ続け、謙吾がそんな中で変革させていくのだ。

無論、展開するために協力した人の思いは無視できないため、彼らが好き勝手出来るわけではない。
しかしこの場合・・・・

「理樹の女装が見たいか！！」

「「みたいみたい！！」」

「理樹と遊びたいか！！」

「「筋肉筋肉ーーー！！」」

「よかろう、ではお着換えタイムだッッ！！」

「「「「レッツパーリィー！！！」」」」

言うまでもない。一致団結だ。

というか理性が完全にすっとんでますね。

こりゃ一致もするわ。下手なこと考えてないんだから。

「覚悟するがいい！！そしておねーさんを抱き締めろォォォォオオオオ！！！」

そして、暴走した姐御が一人。
誰一人として逃げられないッッ！！

ーーー

消え、皆で片づけに入った。

ちなみに最終的な服装としては・・・・

理樹・・・猫耳ａｎｄ女制服

鈴・・・素晴らしき男装

恭介・・・猫の着ぐるみ

真人・・・バカ殿

謙吾・・・ふんどし

小毬・・・スバルのバリアジャケット

クド・・・巫女服

来ケ谷・・・全身タイツ

西園・・・メガネをかけてブルマ体操服

葉留佳・・・チャイナドレス

ティアナ・・・スクミズ（旧に非ず）

スバル・・・こっちはこだわりの旧スクミズ

エリオ・・・メイド服（はだけてます）

キャロ・・・剣道着（新品なので大丈夫）

ルネッサ・・・理樹の制服

となった。

「あの・・・・・・」

「ん？あールネ、それ理樹のだから返してあげてね？」

「いえ・・・まあ、それもそうなのですが・・・・」

「？　どうしたの？」

片づけをしながらルネッサがティアナに声を掛けてきた。

何やら聞きたいことがあるようなのだが・・・・

「いま私たちは事件を担当しています」

「そうね」

「それは彼らも同じはずです」

「うん」

「なのになぜ・・・こうもお気楽なのですか？」

「・・・不謹慎じゃないか、ってことね？」

「・・・はい」

そう、彼女はここに来た時から・・・いや、実際には最初から思っていたかもしれない。
なんでこんな時にこんなに能天気にはしゃいでいられるのか。
事件ということを軽く受け止めているのではないか、と。

しかし、ティアナはふぅ、とため息をついて「確かにそうね」と前置きをしてから、でもね、と先を続けた。

「だからってね、いつまでも辛気臭くちゃいけないのよ。こうしてなんでもないような仲間や親友とはしゃいで、遊んで・・・それでね、こう思うのよね。やっぱりこの世界は素晴らしい・・・って」

「世界が・・・ですか？」

「いまとなっては「世界」って言葉はとても広くなってしまったけど・・・それでも私は、この日常や仲間たちを大切にしたい。そして、それは他の誰にでもあるもの。もしもそれを守れるなら、それはとても素晴らしいことじゃない？」

「・・・・・はい」

「誰にだって素晴らしい世界がある。それを守ることは、とてもとても強いこと。だから・・・かな？こうやって、自分たちの護っているものの素晴らしさを、楽しさを、しっかりとかみしめて・・・そしてそれを壊させないために、私たちは戦うのよ」

「・・・私が生まれたのは、内戦地区のひどい土地でした・・・・・」

と、そこでルネッサが自分の生れた土地のことを話す。
そのことはティアナもすでに知っている。

「生きるために殺したことも、盗んだこともありました。すぐ隣で人が死んでいきました・・・・そんなところでも、あなたは同じことが言えますか？」

彼女の生まれ故郷はひどい土地だった。
笑い声ではなく銃弾が飛び交い、煙で灰色になった空と真紅が染み込んで所々黒くなった土地。

そんな場所を知ってもなお、この世界は素晴らしいと思えるのか。
世界は決して、きれいなところばかりで構成されているわけではない。

醜く、穢く、汚らわしく

救いようのない現実というものでできた、そんな場所も存在するのだ。

それでもなお、この世界は素晴らしいと思えるのか。

「言えるわ」

それに対するティアナの回答は即答だった。
その言葉に、ルネッサの相貌が鋭くなる。

まるで、何も知らないくせに、と言わんばかりに。

「そう・・・ですか・・・・」

「と、言っても、私は何も知らないからこういえるだけかもしれないわね」

「・・・・・」

「だからこそ、あなたには知ってもらいたい」

「え？」

「この世界の、素晴らしさを。たとえそんな土地でも命は生まれるし、こうしてわたしはあなたに出会えた。それに・・・・」

「それに？」

「そこから生まれてこれたあなたは、とても強いはずよ。そんなあなたがいるなら、その世界はいくらでも変わる余地はある。一人でだめなら、私たちを頼りなさい」

「しかし・・・・・」

「水臭いぜルネっち！！！」

「そうだ。俺たちはもう友達じゃないか」

「困ったことがあったら何でも言って来い。あたしたちも頑張るから」

と、そこに話を聞いていたのか、真人に謙吾、鈴が後ろから元気よく声をかけてきた。

そして、その真ん中に立った理樹が手を差出し、言葉を紡ぐ。

「ルネッサさんの生れた土地はひどくて、そのころの生活はひどいものだったかもしれない」

その通り。

あそこでの生活は、ただ一つを除いてひどいことばかりだった。

人としての自分を忘れそうになりもする。

しかし

「だけど・・・いや、だからこそ、さ。これからの人生を、もっともっと楽しく、凄いものにしようよ！そして、助けに行くんだ。その世界を。最後には、こんなこともあったって、高らかに笑い飛ばせるくらいに！」

「人生ってのは辛いことの方が圧倒的に多い。苦しい時間の方が幸せな時間より多いことがほとんどだ。だったらよ、人生の醍醐味っ

てのはそれをどれだけ楽しいことで埋め尽くせるかってことじゃないか？」

「私たちがルネちゃんを幸せにして～そしてルネちゃんも私たちと楽しく遊んで～、そしてみんなでほかの人を幸せにします。それが幸せスパイラル♪」

「美少女のためとなれば、おねーさんはいくらでも協力するぞ」

「そこに救える命があるなら、私だってどこにでも！！」

「不条理な環境がどれだけひどいか知ってるから・・・僕も、助けに行きたいです」

さらに恭介が続き、小毬、来ヶ谷、スバル、エリオとルネッサに声をかけていく。
大丈夫、一人じゃないと。

必ず一人は、世界のどこかに仲間がいいる。
しかも今は、一人どころではない人数がいるのだ。

「だからさ、こんな事件は早く終わらせようよ。そして、この世界を楽しもう？」

「でしょ？大丈夫よ。みんな事件を忘れてバカやってるわけじゃないんだから」

「ティアナさん、そんな風に思ってたの？」

「あ、いや・・・・あはははは」

そんな彼らを見て、ポカーン、としてしまうルネッサ。
そして、スックと立ち上がり、片づけをしようごみ袋にごみを詰めていく。

「さ、早く片付けましょう？次のことが、できないじゃないですか」

「おう！」

「そうだな」

「次はなにしようか？」

「それは明日の夜な？明日は事件を追わないとだから」

そのあとも片付けは続いていく。
新しいごみ袋をバサリを広げるルネッサの口元にはうっすらと、確かに笑みが浮かんでいた。

ーーー

「そうかそぅか！！だけどな？楽しいことはまだまだあるからな～？」

ありがとうございますと言わんばかりにそう言うルネッサに、まだまだこれからだという恭介。

と、そこでルネッサが足を止め、空を何となしに見上げた。

「？　どうした？」

「あ・・・先に部屋に戻ってください。ちょとっと興奮した身体を冷ましていきますので」

「ん、そうか。風邪ひかない程度にな」

ルネッサの言葉に、恭介が手を振って先に部屋に戻る。

それを確認し、ルネッサがポケットから何かを取り出した。

それは何かの端末で、ピッ、と起動させるとモニターが現れてきた。

そのモニターを見ながら、同時に現れたコンソールに指を当てて何かを解除していく。

「やはり・・・止めるべきでしょうね・・・・私は見ているだけでした・・・止めないと・・・」

「何をしている?」

「!?」

独り言をつぶやきながらコンソールを叩いていたルネッサの背後から、そんな声がして咄嗟に彼女がシルバーダガーを構え向ける。

そこにいたのは、一体の化け物。

硬そうな、まるで樹皮のような茶色い皮に、美しいピンクの花を肩に携えた化け物だった。

「それは君の目的を果たそうとするためのものではなかったのか?」

「私はこれを使っていません。ある日送られてきて「君のしたいことを為せ」と書いてあっただけです」

「・・・なるほど。どうりでなかなかたどり着けないわけだ・・・・」

「あなたは・・・なにものですか?」

銃口を向けられているにもかかわらず、化け物はルネッサと普通に会話している。

見た目で人（？）を判断するのは良くないが、どうにもこいつが味方に見えないルネッサは何者なのかと問いかける。

しかし、この化け物――――――ブロッサムアンデットはそれに答えることなく話を進めた。

「世界は平和にかまけ、陰惨な事柄を、事件を、痛みを知ら無すぎる。今一度それを知らしめ、この平和がどれだけかけがえのないモノか認識させよう・・・それが貴様の「親」の意志ではなかったのかな？」

「・・・たしかにそうです。もしあと一、二年でもすれば、私もそう考えていたでしょう」

「では・・・なぜ？」

「私は知りました。平和であろうとも・・・いや、平和であるからこそ、それを大切に守ろうとする人たちがいるということを。世界はまだそこまで終わってはいません」

「・・・・まあ・・・・最初からまったく制御していなかったからな。いつか使うと思っていたのだが・・・・捨てるというならばそれを寄越せ」

「断ります。これは破棄します。マリアージュの全稼働を停止させたのちに！！」

「ふぅ・・・そのようなことをしても、冥王は止まらぬというのに」

「え？」

「渡さないというならば、死体となった貴様からはぎとらせてもらおう！！」

ドォン！！！！

直後、ブロッサムアンデットが手を向け、そこに桜の花びらが押し固まった拳ほどの弾丸が四つ生まれ、ルネッサに向かって突っ込んでいった。

そのうち一つは撃ち落としたものの、残りの三つはどうしてもはじけず、脇に転がり避けようとしたルネッサ。

しかし、それはククッ、とそちらの方へと微妙に曲がり、彼女を爆炎に包みこんだ。

「人を壊し、端末を壊さずに・・・この程度の威力なら大丈夫かね？」

そういって炎の方へと歩いていくブロッサムアンデット。
だが、そううまくいくわけがない。

バフォァ！！！

炎を腕でかき消し、その場を晴らして見たブロッサムアンデット。
しかし、そこには端末どころかルネッサの死体すらなかった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「あっぶなかったな～～～。大丈夫か？ルネッサ」

「きょ、恭介さん・・・」

「恭介！！ルネッサさんをお願い！！」

「こいつ・・・こっちまで来たの！？」

ルネッサを腕の中に抱えてその場にしゃがみ込む恭介。
そして、その二人をかばうようにしてティアナと理樹が駆けつけてきていた。

「ぬゥ・・・・・」

「話せる・・・ってことは、上級アンデット・・・」

「気を付けて・・・こいつら、油断できないから」

「・・・・ち、分が悪いな。ここは引こう」

ザァッ

「ま、待て！！」

「それはなくとも構わん！！どうせマリアージュは止まらないのだからな！！」

そうして、桜の花びらと共にブロッサムアンデットが消え、その場には彼ら四人だけが残された。

「いったい・・・どういうことなんだ?」

「あ・・・あの・・・もう大丈夫なので・・放してくださいませんか?」

「ん?おう、わりぃな」

「いえ・・・・」

そういって、恭介がルネッサを放し、地面に立たせる。

「何があったの?それは何?」

「・・・・すべて、話します。しかし、今知ったこともありますので・・・・」

「構わないわ。教えてちょうだい」

そうして、部屋に戻ってルネッサの話が始まる。
内容は、この事件の始まりに関わるものだった。

――――――

へ？誰だって？
下級は物覚えが悪いなぁ・・・・

あの屋敷にいる一人の少女は、綺麗な奇麗な聖杯（ホムンクルス）の器だよ。

to be continued

宴会（後書き）

と、言うわけでどんちゃん騒ぎからのシリアスへドーン！！
前後のテンションがおかしい第二弾でした。

今回のネタ考えるのに結構かかってしまった・・・
最終的にはアンソロのネタをパク、ゲフンゲフン・・・参考にしてしまったし。

ブロッサムアンデットが言っていた「分が悪い」とは決して勝てないわけではなく、端末を破壊せずに奪い取るのが難しい、ということでした。

ここからマリアージュ事件は終わりへと一直線！！

あ、最期のは全部一人のセリフです。
口調が一定しないあたり、あのアンデットですね。

今回見直してないから間違い多いかも！？

蒔風

「物書きとしてそれでいいのか」

次回、ルネの独白と、新たなる候補

ではまた次回

告白

スバル宅内のリビング。
そこで恭介が、先ほど起こったことを簡単に説明していた。

ブロッサムアンデットの襲撃。
相手が狙っていたもの。
そして、そこから助けたこと。

それが終わると次に、ルネッサが前に出てきて、テーブルの上にある一つの小さな端末を置いて話を始めた。

「数か月前、私の部屋にこれが送られてきました」

「・・・これは？」

「マリアージュの制御装置・・・・のようです」

「！！？」

ルネッサの言葉。
しかし、それにはなんだか確証がないようだ。
順を追って話そう。

数か月前、彼女の部屋にある小包が届いた。
入っていたのは、「これは貴女の父が残したものだ。貴女の為すべきことを為せ」という小さなメモと、一緒に送られてきた端末。
彼女は最初、それがなんなのか知らなかった。
起動させようにもしないのだ。

そして、それと時を同じくして発生した今回のマリアージュ事件。

それを追っていくうちに、彼女は気づいたのだ。
これはマリアージュが発生し、事件が起こるたびに反応している、と。

しかし、最初は全く気付かなかった。
そもそも、マリアージュは普通に人間だと思っていたのだ。

無理もない。あの外見で「人間ではなく兵器」だと思う方が難しい。

だが、ティアナの「彼女らは兵器である」という結論。

それによって、事件を追ううちに抱いてきていた疑惑が、確証に変わった。

そこからマリアージュを「兵器」として今晩調べようと思っていたのだが・・・まあその前にこちらの運ばれてきたという次第だ。

彼女の確証。

それによって、彼女は「彼女の親」の言葉を思い出していた。

「世界に痛みを。今この平和がどれだけ脆く儚いものなのかを思い知らせなければならない」

そういっていた彼の名前は、トレヴィア・グラーゼ。

陰惨な内戦地域でルネッサが出会った老人であり、その地での唯一の救いだった人間だ。

いま彼女が此処にいるのは、トレヴィアのおかげと言っても過言で

もないほどに。
彼は彼女の父となりえていた。

しかし、そんな彼も数年前に死んでしまう。

ならば・・・彼の思想を受け継ぐのは自分だけしかいない。
小包にあったメモ、そして、「父」の残したこの端末。

そういった経緯で自分のもとに来たかは知らない。

受け取った時はなんだかまったくわからなかった。

しかし、今はわかる。これの使い道が。

それが彼女を、誘惑に誘った。
自分の為すべきこと。それは、これを使って・・・・・

マリアージュを自分が手引きして、世界により効果的な痛みを・・・
・

そう、思っていた。

今日の事件が終わり、ホテルでティアナからの連絡を受けるまで。

しかし、そう思っていた思いも、今はない。
それははっきりと、ブロッサムアンデットに言ってやった。

あの化け物曰く、これらの真相を知った自分にマリアージュを操らせ、あるものを探させるつもりだったらしい。

しかし、最終的に彼女はこれを使うことをやめた。
その原因となったのは・・・・

「ありがとうございました。みなさん」

そういって、ルネッサが頭を下げる。
その相手は、この部屋にいる全員だ。

世界は決して、平和であることに堕落などしていない。

そう、思わせてくれた人たちだ。

もし・・・・
もう何年か後だったら、彼女は踏みとどまれなかったかもしれない。
もし、もう何年か検死官をし、途絶えることのない、事件に巻き込まれたいくつもの死体を見ていたら・・・・彼女はこの世界の愚かさを嘆いてしまったかもしれない。
世界に牙をむいてしまっていたかもしれない。

「それでも、私は世界はまだ素晴らしくあれると思えました。本当にありがとうございます」

そういって、また頭を下げるルネッサ。
そして同時に、ティアナに向かって両手を差し出していた。

「なに？ルネ」

「私は・・・これを持っていました。何かわからなかったとはいえ、事件を止められたかもしれないモノを。しかも、これから使おうとも思ってしまっていた。だから・・・」

「馬鹿ね」

「え？」

ティアナがルネッサのその手をおろし、しっかりと目の前に立ってこう言った。

「貴女は最初、これがなんなのか知らなかった。ここに来てやっと、マリアージュ制御のプログラムだとわかった。それを使おうとも一瞬思ったが、踏みとどまってマリアージュの活動を全停止させようとした。そういうことでしょ？」

「はい・・・・」

「だったら、あなたは罪に問われない。故意がない以上、私にはそこに手錠をかける権利を持ってないわよ？」

「しかし、何かしらの・・・！！」

「うーーーん・・・じゃあこの場合、「ＥＡＲＴＨ」的にはどうなるんでしょうね？理樹」

素直に「わかりました」といわない・・・・というか、言えないルネッサ。

それに対し、ティアナはじゃあどうしようか、と理樹に聞いてみる。

「そうだなぁ・・・・上司であるティアナに報告しなかったことへの始末書かな？」

「そ・・・そんなことで？」

「それとも筋肉に関して原稿用紙３００枚のレポートでも書くか？」

「いえ・・・遠慮します」

と、そこに口を挟んできた真人。
こういう空気の時、彼のバカは素晴らしい効果を発揮する。
愛すべきバカとはこういうことを言うのだろう。

それを以って、ティアナがパンパンと手を叩いて話にピリオドを打とうとした。

「だったら！これでこの問題はおしまい！さ、明日は忙しくなるわよ。そういえば、その端末は使えるの？」

「あ、それは・・・さっき見たら、あいつの砲撃で発生した衝撃で細部が故障したみたいで・・・・うまく起動しません」

「そう・・・・」

テーブルの上にある端末。

それは見た目こそ無傷でも、中のチップやら何やらは破損してしまっているようで、もう使える状態ではないようだ。

「ま、明日はスカリエッティのところに行くわよ。マリアージュ、トレヴィア、冥王・・・・聞きたいことはたくさんあるから」

そういって、各人布団に入って翌日に備えた。

一人の少女を救った夜は、こうして朝に向かって輝いていく。

余談だが、翌朝になって簀巻きにされている来ヶ谷が発見された。ルネッサの布団にもぐりこもうとして、反撃されたようだ。

――――――

深夜

地方都市、冬木市

その郊外の森に、大きな大きな屋敷・・というよりも、すでに城と呼べるような建物がある。
と、いうかその建物の名称は「アインツベルン城」だ。
呼べるような、どころか立派な城だった。

その城の高い場所にある一室。

その部屋の中で、一人の少女がベッドの中でじたばたと暴れていてメイドを困らせていた。

「やーだー！！士郎の家に泊ーまーるー！！」

「アインツベルンの淑女（レディ）がはしたないことするんじゃありません！！リゼも見てないで手伝ってください！！」

「えー？私もあっちのほーがいいー」

「クラぁ！！！」

部屋から出て行こうとする、イリヤ。
その服をつかみながらもずるずると引きずられる、セラ。
それを眺めながらお泊りの荷物を抱える、リゼことリーゼリット。

どうやらイリヤは士郎のいる衛宮邸に泊まりたがり、淑女たれというセラはそれをよしとしなかったのだろう。

「私だって狙われてるかもしれないのに、ここに一人にしてていーの？さ、お兄ちゃんのところに・・・・」

「バーサーカーがいますよ！それともバーサーカーよりも衛宮士郎

の方が強いと!?」

「う・・・・でも・・・・」

確かに、バーサーカーは限りなく強い。
その体をもってすれば、勝てない相手はそうそういないだろう。

その宝具「十二の試練（ゴッドハンド）」はその命の上限を十二に上げるものだ。
一時期は七つしかなかったのだが、ある事件でやられ、復活した際にすべて戻っている。

万全といえば万全だ。

「いついかなる時もアインツベルンの淑女はしとやかにですね・・・・」

だからこそ、こうして大人しく城の中にいるようにセラは言っているのだ。
今から衛宮邸に行くのは逆に危険なことである。

しかし・・・・・

「くどくどくどくど・・・・ってあぁ!?そこ!!窓から逃げない!!!」

「やばっ!!見つかった!?バーサーカー!!受ーけ止ーめてーーー!!」

スッピョーン

まるでそんな音が聞こえるかのように窓から飛び降りたイリヤ。
それを止めようと窓へとダッシュしたセラだが、時すでに遅し。
逆に窓から落ちそうになったのをリーゼリットに助けてもらってすらいた。

「こらーーーー!!お嬢様ーーーーーー!!!」

「あははーーー!じゃあ行っちゃえバーサーカー!!!」

「■■■■■■■■■■■■■■!!!」

ダゴンッ!!!

そんな音がして、イリヤを抱えあげていたバーサーカーが一気に跳躍、森の中に消えていった。

「オオおオオオお嬢様ァッ!?」

「イリヤ、すごーい」

「リゼ!!こんな一大事に何をのんきな!!」

「？　バーサーカが一緒なら大丈夫。それに、今は森の方が安全かも」

「え？」

・・・ズッ・・・・ズン・・・・・・

「!?」

「誰か入ってきてる。敵」

「そ、そんな・・・ここは魔術的な処置が施されたアインツベルンの隠れ城ですよ!?」

「それでも来てる。それが現実。セラはここに隠れてて」

そう言って、リーゼリットがどこから取り出したのか身の丈以上のハルバードを抱えあげ、ムン、と仁王立ちしていた。

確かに、セラには戦闘能力どころか、運動能力すら皆無だ。
今戦えるのはリーゼリットだけだと言うことになる。

しかし・・・

「ひ、一人ではあなたが！！」

「大丈夫だよ。私は、みんなを守るためにここにいる。私も、みんなといたいから」

そう言って、リーゼリットは部屋を出て行ってしまうセラ。
こうなっては、自分はここに隠れるしかない。

一緒に行って邪魔になることはわかりきっているのだ。自分はそういった目的に作られたホムンクルスではない。
しかし、彼女は自分の姉妹のようなものなのだ。みすみす見殺しになどできるはずもない。

と、そこでセラはあることを思い出す。
否、そもそもなぜ思い出さなかったのか。

まあ、今までずっと、この家の問題は彼女らで解決してきたからかもしれないが・・・・

「早く出て・・・あ!!はい、あの・・・え?向かってる?お願いします、セラを・・・・死なせないでください!!」

内通電話で、ある人物へと連絡するセラ。
相手の人物は、すでに動いていた。

その人物のうちの一人は、三国に無双を轟かせた武将である。

ーーー

屋敷のメインホール。
そこには多くのアンデットがひしめいていた。

その数、ざっと二十はいようか。
気配から察するに、この周囲も囲っているようだ。それを含めると五十体以上いるかもしれない。

「さて・・・お掃除お掃除・・・」

そう言って、そのアンデットを前に大階段の上に立つセラ。
その表情にはまるで焦りは見えないものの、ほほを一筋の汗がつたって行っている。

「よし・・・」

「《ＲＥＡ・Ｄ・Ｙ》魑魅魍魎の跋扈するこの世界・・・・」

「行くよ！キバット！！」

が、そうしていざ挑みに行こうとする彼女を両脇に、二人の青年が立った。
彼らこそ、護衛としてこの城にやってきていた、二人のライダー。

紅渡と名護啓介だ。
まさに今返信しようと、キバットとイクサナックルを手にしている。
。

それに対し、セラは・・・

「あ、そういえばいた」

と、まるで・・・というか、本気で忘れていたらしい声を出していた。
それにがくりとコケる渡に、突っ込むキバット。

名護だけは何か前口上を延々と言っている。

だが名護おのそれもなんやかんやで終わったらしく、意気揚々と宣言した。

「では行くぞ渡君、セラ君!!」

「はい!!」

「はーい」

「死なぬというあなたたちのその命、それでも神に返しなさい・・・！！変身！！《ＦＩ・Ｓ・Ｔ　Ｏ・Ｎ》」

「「ガブッ！」変身！！」

「張り切って行きまーす（ズンッ！！）」

そうして構える三人。

向かうは目測五十のアンデット。

相手にとって不足はない。

「そういえばイリヤが森の中に・・・」

「大丈夫です。まだ護衛はいますから」

ーーー

彼の本文は圧倒的破壊力による蹂躙だ。
こうして逃げ回るのは得意ではない。

「逃げてんじゃねぇよ！！疲れるだけですのでねぇ・・・・」

「だったらそれ撃つのやめてよ！！あとキャラを安定させてよね！！気持ち悪くなる！！」

「それはできない相談。そして、定まってくれればいいんだけどね、っと！！！！」

そう言って、ドーベルマンアンデットが一気に跳躍、木々を足場にして三角飛びし、バーサーカーの目の前に躍り出てきた。

正確に言うと、バーサーカーの走っている右脇の木をけり、地面と平行に移動するようにして前に躍り出たのだ。

「もらったァッ！！」

「ッッ！！？？」

その位置から一気に反転し、ドーベルマンアンデットがイリヤへと飛ぶ。
それを剛腕で叩き落とそうとするバーサーカーだが、空中にもかか

わらずひらりと身の返しで回避され、イリヤへの障害物がなくなってしまう。

「ふむ・・・いただいたってばよ!!」

ガァンッッ!!!ザザッ!!!

が、しかし

そんな音がして、ドーベルマンアンデットの腕がイリヤへと届くことはなかった。

バーサーカーは疾走をやめ、イリヤを降ろして近くに隠れさせる。

一方ドーベルマンアンデットは腕を抑え、離れて着地している。
地面にぽたぽたと、アンデット特有の緑色の血を流しながら、自分の邪魔をしてきた一人の少女をにらみつけた。

「・・・誰なんだい?」

「・・・・・恋」

そう問われた少女は、自分の名前をぽつりと言った。

三國無双、呂布奉先。
武器たる巨大な方天画戟を肩に担いで、敵を淡々と見据えていた。

「は・・・上等・・・・・」

一人は無口な者
一人は咆哮を上げる者
そして一人は安定しない口調でベラベラとしゃべる者。

三者は三様に、これだけの言葉で済ませ、無言のうちにぶつかりあった。

直後、この森のすべての木々が、衝撃に振動した。

to be continued

告白（後書き）

はいはーい！！
「告白」でしたよーーーー！！

っと、では、ここで分かりにくかったかもしれない事項をおさらいしておききますね。

数ヶ月前、ルネのもとに端末がメモと送られてくる。
この時点でルネは何の事だかわからない。
←
事件発生
いくつか事件が発生するうちに、同じころに端末が反応するのでもしかしてと疑問に思う。
←
そして、ティアナによる発言で、兵器だったというマリアージュ。
疑問が確信に変わる。
←
ならば自分はこれを使ってなすべきなのかもしれないと思う。
マリアージュを知るために、「兵器として」の情報を集めようとする。

←
筋肉隊にさらわれる
←
前話へ

という流れですね。

いったい誰が彼女にそれを送ったのか、というのはまだ謎ということで。

何故彼女は、この事件の真相を知らなかったのか。
マリアージュの事を知らなかったのか。

それは、この事件発生の時間に関係します。

本来の「サウンドステージX」よりも、この物語は一、二年早く発生してるんです。
彼女がオリジナルで知っていたトレヴィアやマリアージュ、そして冥王に関する情報は、この一、二年の間に調べたことだったんですよ。

だから知らなかった。

と、言うことでしょうでしょうか？

蒔風
「そして紐解く次の手掛かりは、ルーテシアの残した言葉、ドクター・・・」

はい、スカリエッティですね。
そこに聞きに行くのが、彼らの次のミッションです。

蒔風
「でもそれより前に・・・」

イリヤの方の戦いですね。
いやぁ、一刀の方に戻すとかいっときながら、一刀出てきてないじゃん！！ｗｗｗ

さて、彼女はアンデットの眼鏡にかなうのか！？

蒔風
「かなわれても困るなぁ・・・」

マジでリーゼロッテとセラが分からなくなる。
どっちが強くてどっちが弱いのか！！

いや、強い方が無口、礼節だの口うるさいのが弱い、というのはわかるんです。

蒔風
「後者に対する印象ひどいな、おい」

しかし・・・名前がどうしても結び付けられない・・・
ごっちゃになる。

もしかしたら間違えている個所があるかも・・・・・

蒔風
「もっと見ろよ・・・・」

見たよ!!
でももしかしたら・・・ってあるじゃん。

蒔風
「まぁな・・・さて、リゼの助っ人は渡(キバ)に名護(イクサ)さん」

そしてバーサーカーには呂布奉先こと恋!!
一瞬リゼとのハルバード（っぽい）コンビでも面白いかと思いましたが、こっちのバーサーカーコンビ（ＥＸＴＲＡ的な意味）で行きました!!

蒔風
「次回、風雲イリヤ城！！そして、残りの選ばれた魂は誰だ！？」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ
高町ヴィヴィオ
ルーテシア・アルピーノ
イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残り二名

轟天

ドドドドドンッッ！！

爆散する地面。

破裂する空気。

振動する夜空。

そして、相手に向かってはじけ飛んでいく戦士。

いま、戦いにおける最高潮で起こるような現象が三つ四つほど同時に発生していた。

「ッッッっ！！！」

「■■■

たことによってできた勢いをそのまま一回転して受け流す。
そして、もう一度襲いかかる斬撃。

が、ドーベルマンアンデットは即座に自分の足元に向かって銃弾を放った。

一体どれだけの威力が・・・否、一体どれだけの早さで、何発の銃弾を放ったのか。
その反動でドーベルマンアンデットの体が浮き、恋を飛び越えるようにしてそれを回避し、バーサーカーへと突っ込んでいった。

と、そこでバーサーカーが、まるで待ってましたとばかりに振り上げて待機していた岩の塊のような斧剣を、その重量と剛腕をもって力の限り叩きおろした。

大地が裂け、直線上に会った木々が軒並み吹き飛び掻き消えた。

その衝撃に、ドーベルマンアンデットの体も当然吹き飛ばされるがいかんせん戦闘不能に追い込まれるまでではなかった。

「紙一重で躱した・・・・」

「いっけーーーーーーーーーー！！バーサーカーーーーーーーーーー！！！！」

それをみて、恋が驚愕しイリヤが応援する。

あの斧剣による攻撃は、とてもじゃないがそれ自体を交わしたところでどうにかなるような攻撃ではない。

生半可に見切ろうとするならば、衝撃に身体をさらわれてあの破壊の潮流にのまれて粉みじんになるだけなのだから。

しかし、こいつはそれすらをも見切り、回避した。

衝撃で体は後退させられながらも、それでも回避と呼べる行為を確かにしたのだ・・・・！！！！

「■■■

それを見、まだ仕留めていないことを確認したバーサーカーが標的に向かってその破壊を実行しに突進していく。

ドーベルマンアンデットが吹き飛びから着地し、前を見るとそこには岩石のような巨体があった。

「チッ！！」

それを軽いバックステップをしながら飛び上がり避け、そのままバーサーカーの肩に乗り、踏み台にして後ろに回ろうとするドーベルマンアンデット。
が、後ろに回った瞬間にバーサーカーも斧剣を振り回しながら反転、その遠心力を使って方向転換と攻撃を同時に行ってきた。

標的は、飛び越えたばかりでまだ着地できていないドーベルマンアンデットだ。

それに対し相手は宙で銃を連射、その斧剣の根元を狙って軌道を逸らそうとしてきた。

無論、その程度で変わるバーサーカーの攻撃ではない。

しかし、それでも意味はあった。

銃の反動でドーベルマンアンデットの身体が動き、その斧剣は結果として命中することはなかったのだから。

が、そこに恋の方天画戟がすっ飛んできた。
着地したドーベルマンアンデットはそれを両腕で受けるものの、衝撃にまるで万歳でもするかのように弾き上げられてしまった。

方天画戟がフォンフォン、という音を立てて回転しながら地面に落ち、突き刺ささる。

と、方天画戟と一緒にすっ飛んで気でもしたかのようなスピードで恋が走り込んできた。
そして、地面に突き刺さった方天画戟を掴み、そこを軸にして一回転、ドーベルマンアンデットのどてっ腹に強烈な後ろ回し蹴りを叩きこんだのだ。

「げっふ!?」

それにはドーベルマンアンデットもさすがに吹き飛んだ。
その先にはバーサーカーがいて、咆哮を上げながら斧剣を両腕で振りかぶって待っている。

それを見たドーベルマンアンデットはとっさに身体を地面に落した。
スライディングする形になり、ドーベルマンアンデットがバーサー

カーをくぐりぬけていったのだ。。

横に薙がれた斧剣の下をすれすれに潜り抜け、バーサーカーの股下から数十発の銃弾を叩きこんで、さらにはそのまま背後に抜けて背骨の位置を下から上に、正確に撃ちぬいていった。

その攻撃にぐしゃりと身体がねじれて地面に倒れるバーサーカー。
彼の皮膚には、通常の銃弾など通らない。

しかし、同じ個所にこいつは少なくとも八発ずつ打ち込んでいるのだ。
しかも、打ち出しているのは上級アンデットの武器になっている銃である。

それだけの数を打ち込まれては、さすがの彼の背骨も砕けるだろう。
背骨(ささえ)を失えば、体が崩れるのは当然だった。

が、本当に恐ろしいのはこいつの連射速度だ。

背後に回った一瞬でバーサーカーの背骨をハチの巣にし、しかもその放った銃弾の数は見た弾痕の×８だけの数があるのだから・・・・・！！！

そこで崩れてしまったバーサーカーの巨体を飛び越え、恋が方天画戟を手に飛びかかってきた。

それを体を回転させて回避し、顔面に銃弾を放つドーベルマンアンデット。

しかし、恋はそこであえてさらに踏み込む。頬の真横に銃身が来るほどにまで。
そうなってしまっては銃弾など当たらない。

ドーベルマンアンデットは距離を取ろうと回し蹴りを右でミドル、そのまま左の踵でハイ、右足で足払いという順に回転して放ち、それを受けて後退した恋に向かって最後に銃口を向けた。

が、それに臆することなく恋は攻撃が終わると即座に接近し、その首を取ろうと方天画戟をつきだしてきた。

良い的になるだけだ。

そう思い、ドーベルマンアンデットが引き金を引いて恋の頭を吹き飛ばそうとする。

しかし

「■■■

しかし、効かないものは効かないのだ。
自分にたかるハエを追い払うかのようにバーサーカーが腕をふるうが、それに合わせてドーベルマンアンデットは背中、頭、反対の肩へと飛び移ってなおも銃弾を浴びせにかかる。

と、そこに恋が割って入り、ついにドーベルマンアンデットの後ろ襟のような個所を掴んで地面に引きずり下ろした。

地面に倒されるドーベルマンアンデットだが、即座に恋に向かって足払い、そのまま立ち上がり、回転しながら銃弾を放ち同時にけりなどの攻撃もしてきた。

ガン＝カタと呼ばれる戦闘方法だ。
銃を使った格闘技、とでもいったらわかりやすいだろうか。

しかし、その攻防虚しくドーベルマンアンデットの首元に恋の手刀が命中し、さらにはバーサーカーのけりが横っ腹に、体制を崩したところに恋の蹴りとバーサーカーの拳が叩きこまれてその体が森を突き抜けて吹き飛んだ。

「や、やったの！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・まだ。腕で防がれた」

暴風雨のような戦闘だったために、到底顔の出せないイリヤが、終わったのかと二人のもとへと駆けてきた。

しかし、恋曰く終わってはいないらしい。

最後の二人の蹴りと突きは、何とかガードされたらしいのだ。

しかし、あれだけの威力。おそらく腕はただでは済んでいないだろう。

と、そこでバガァッ、という破砕音が聞こえてきた。

見ると、吹き飛んだ先の大木に背中からめり込んでいたドーベルマンアンデットが、両腕両足を大の字に開いて、そこの木を弾き壊して脱出したようだった。

が、口や胴体からはポタポタと緑色の血液を流し、ベルトに至っては「ピキ・・・ピピキ・・・・」と今にも割れそうな音を出しているのだ。

終わりは近いように見えた。

「が・・・はぁ・・・やはりわたくしめはまだ未熟者でしたなぁ・・・こっちにも何体か連れてくりゃぁよかったぜ・・・」

そんな言葉を吐くドーベルマンアンデット。

それを見て聞いて、恋とバーサーカーが身構えた。

なぜならば、このアンデット。
この状況になってもいまだ――――――

「このままベルト割られちゃぁ退場になっちまいますでな。逃がさせてもらいましょか！！」

笑っていたからだ。

ジャカッッ！！！

そう言って、双銃を構えるドーベルマンアンデット。

しかし、これだけでは終わらなかった。

ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカカカ

そういうドーベルマンアンデットの握っている銃の数は、確かに二丁だ。
しかし、それはあくまで「握っている」数。

他の銃は、それぞれの腕を筒状に囲むようにして、くるくるとゆっくり、回っていた。

それはまるで、ガトリング銃。

しかもそれは腕だけでなく、胸の前、そして両方の肩の上にもあり、計五砲のガトリングがあるように見えた。

ガトリング一つ一つはまず、最前列に銃がこちらに銃口を向けた形で魔法陣でもあるかのように回転し、その隙間から狙うようにしてその後ろにも同じように銃が置かれていた。

合計でいくつあるのだろうか。
そして、こいつの連射速度から考えて、一秒に打ち出せる段数は容易に億を越え、兆を越え、京にまで達する勢いすらあるだろう。

「未熟ゆえに、逃げに入ります」

「なっ・・・・」

「黒空（こっくう）流星群！！！」

ＤＯＲＲＲ

ー　ー
ー　ー
ー　ー

無論、無事ではない。

あの一瞬で、バーサーカーは地面を斧剣でえぐり飛ばし、隠れるための穴を掘った。
そしてそこに恋とイリヤが飛び込み、恋はそれでも伝わってくる衝撃から守り、そして土に押しつぶされないようにイリヤを下に抱きかかえていたのだ。

バーサーカーは地面に潜れはしたものの、最後だったので当然受ける衝撃も大きい。

しかし、それでも彼は初撃で三つ命を落としたものの、その後のは耐えきっていた。

「ゴ・・・ォォ・・・・・」

「ハァ・・・・・ハァ・・・・・・・つか・・・れた・・・・・」

「大変大変大変・・・・・と、とりあえず城に!!」

そう言って狼狽するイリヤだが、彼女とて聖杯戦争のために送り込まれた魔術師なのだ。

すぐに冷静を取り戻し、バーサーカーを霊体化させてひっこめ、恋の体を背中に抱えてずるずると歩き出した。

それから五分。
比較的早めに彼女は屋敷から助けに来た渡やセラたちに会うことができ、無事に城に戻った。

屋敷を取り囲んでいたアンデットはもういない。

ドーベルマンアンデットがひいた瞬間に、彼らもいなくなっていた。

to be continued

轟天（後書き）

はい、天も轟く戦闘でした！！

ドーベルマンアンデットが特化したのは連射術と素早さです。

速さではなく、素早さです。
近接戦闘においてかなり優位になりますね。

そして連射、速射。

さらには実は持っていたものすごい数の銃。
二丁じゃなかったんだねｗｗｗｗ

イリヤは守れても、損害は大きいです。

バーサーカーなんて背骨で一回、黒空流星群で三回、命を失ってますからね。

え?城の方ですか?
あっちのアンデットは有象無象ですので、無双してきましたよ!!

一階部分は完全に瓦解してますけどね。

さて、では次回はついに出てきた天才科学者!!

ではまた次回

条件

第9無人世界「グリューエン」軌道拘置所第1監房。

ここに収監される者は、世界から隔離されるほどに凶悪な犯罪者。

彼も、それに漏れることなく入っていた――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

「交換条件？」

「はい。どうやらドクタースカリエッティは我々に協力するにあたって、いくつかの条件を出してきました」

「内容は？」

「それが・・・私たち本人に直接言いたいとのことでしたので、いまだ言ってはないそうです」

その拘置所内の廊下。
そこで、数人の人物が手続きを済ませて目的地に向かって歩いていた。

ティアナ・ランスター
直枝理樹
ギンガ・ナカジマ
ルネッサ・マグナス

そして、彼の生み出した戦闘機人の中で、更生したメンバーで一番年上のチンク・ナカジマだ。

「ふーん・・・スカリエッティが、ねぇ」

「どう思う？チンク」

「私にもわかりかねる。ドクターはこう・・・いろいろとすっ飛ん

でいる方だったので」

「あはは、まぁね」

と、そんなこんなで話している内に、スカリエッティとの面会部屋につく。

ガチャリ、と扉を開くと、ガラスの壁の向こうには、二人の看守に挟まれて座る天才科学者、ジェイル・スカリエッティが足を組んで座っていた。

「やぁやぁ久しぶりだね！！タイプゼロ・ファーストにチンク！！それに面識はないがそちらも元機動六課のメンバーだった・・・」

「ティアナ・ランスター執務官よ」

「おお、合格したんだね。祝福を述べておこう。ただまぁ、犯罪者（わたしたち）にとっては喜ばしいことではないかもしれないがね」

「そのとおりね」

看守二人が部屋から出ると、そんなことを言って旧来の友人に会っ

たかのような顔をして話しかけてくるスカリエッティ。

と、そこで視線が初体面に二人に向かった。

「ん？君らは？そっちの方は階級章からして執務官補佐のようだが」

「ルネッサ・マグナス執務官補です」

「僕は直枝理樹。「ＥＡＲＴＨ」で・・・」

「「ＥＡＲＴＨ」！！！」

ガタンッ！！

理樹がそこまで言って、スカリエッティが興奮したように立ち上がり、その勢いに椅子が倒れた。

そして、理樹のことをまじまじと見つめて、笑顔でガラスに両手を張りつけた。

「世界が一つになったときはすでに私はここにいたからね。あれから世界がどうなったのかが知りたくて知りたくてたまらなかったんだ！！「ＥＡＲＴＨ」所属の君ならば知っているだろう？ああ・・・久々の知的好奇心がうずくよ・・・・！！」

「え・・・と・・・そ、それで、「ＥＡＲＴＨ」所属「薄緑の翼人」直枝理樹です」

「翼人！！いやはやさらには翼人だなんて君らはなんて気前がいいんだい！！私はモニター越しばかりで、ついぞ「彼」には直接会えなかったからね。今すぐにでも君を調べ上げたいよ！！・・・・っと、今日はそんな話ではなかったかな？」

理樹が翼人であることを知り、さらに興奮するスカリエッティだが、一呼吸してから何とか落ち着きを取り戻します。
椅子を戻し、そこに座って、最初と同じように足を組む。

「取り乱してすまない。それで？君らの話とはなんだい？」

「ええ。でもその前に、あなたが私たちに出す「条件」を教えてくれるかしら？」

今すぐにでも話は聞きたいのだが、それでも油断できないのがこの男だ。
一体何が望みなのかを聞いてからでないとこの男、話が違うと言って何をするかわからないのだ。

「ん？なぁに、大したことではないよ。とりあえず翼人の諸君を調べ上げたいだけさ」

この男としてはまあ普通の欲求だ。

翼人のことを知りたいという知的好奇心はわかる。

しかし

「それはできないね。なんか改造されてしまうだろうし」

理樹がそれを却下した。

自分だけならまだ決定権もあるが、翼人みんなのことを彼一人で決めるだけのことはできない。

まあ無論、自分だけだと言っても断るのだが。

「だろうね。そう返答すると思って、私もこの考えは断念したよ。その代わり・・・」

「代わり？」

「私を外に出してくれ。いや、自由にしてくれというわけではない

よ。ただ、一変した世界という物を見てみたいのさ」

「出来るわけないでしょう！！」

「そうかい？私をほんの少し事件に同行させるだけでいいのだよ？もちろん、私の自由を奪ってくれても構わない手錠にバインド、なんでもするがいい。私はただ見たいだけだからね」

「あなたは自分がどれだけの犯罪者だと・・・「ギンガさん、待って」え？」

が、その言葉を理樹が制した。

そして、スカリエッティに近づいて、目と目を合わせた。

「目的はそれだけ？」

「ああ」

「ほかに何かしてやろうと思うことは？」

「ないね。いまのところは」

「本当に外に出てどんなものか見たいだけ？」

「そうさ。翼人である君なら、私の言葉が嘘かどうかはこれで証明されたかな？」

「・・・・・そうだね」

そういって、理樹がティアナの方を向いた。

「よし、彼を出そう」

「理樹！？」

「彼は嘘をついていないよ。それだけは確実だ。僕らに嘘は通じないから」

そう、翼人によこしまな嘘は通じない。
感情を基にする彼らは、それを感じ取ることができる。

まあ、欺く方法もないわけではないが、この状況でそれはないだろう。

「だから彼は本当に外出したいだけだと思うよ？」

「でも・・・彼は犯罪者。罪を償うためにここに入っているのに、出してしまっては意味がないじゃないですか！！！」

「うん、ギンガさんの言うとおり、確かにそう。でも、今起こってる事件を解決するために必要で、そして彼もそれに協力してくれるなら、それは立派な償いじゃない？」

「そう・・ですけど・・・・」

「それに、ぼくらがいるからね。さすがに彼も翼人とこれだけの人数相手に何かやらかそうとするわけもないし。どうする？ティアナさん」

「ん？」

「僕としては、彼を出してもいいと思う。後はティアナさんの承諾さえあれば、僕らの権限で一時的に動向してもらうことはできる」

「・・・・・」

それを聞いて、ティアナが顎に手を当てて考える。

しかし、まあ答えなど最初からこうするしかないのだが・・・・

「わかったわ、条件をのみましょう。スカリエッティ」

「感謝するよ。その代り、約束通りにすべてを話そう」

そうして、条件は満たされ、取引は成立した。

そして、ティアナたちが今回の事件に関して話を始めた。

――

「イリヤが襲われた・・・？」

「うん。それで、しっかり狙ってた」

「じゃあ、彼女も標的になるのか・・・・」

「ＥＡＲＴＨ」本部。

出迎えた一刀にそう言った報告をしながら、連れてきたイリヤを部屋に案内する恋。

これで狙われたのは計八人。

御坂美琴
インデックス
古手梨花
古手羽入
アルルゥ
高町ヴィヴィオ
ルーテシア・アルピーノ
イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

もはや、気づくなという方が難しい。

「全員、高校生に満たない者ばかりだな」

「ああ・・・・年の低い少女ばかり狙っている・・・・」

そういって、狙われたメンバーの書類を見てそう推測をする一刀にクラウド。

もっと力のあるものはいくらでもいる。

陰陽師の血を引く、草壁美鈴
驚異的な再生の能力を持つ、広原雪子
翼人である、神尾観鈴
エースオブエース、高町なのは
最後の夜天の主、八神はやて
神にも等しい力を持つ、涼宮ハルヒ

魂の特異性というならば

ネイティブワームと人間の中間的少女、日下部ひより
英霊であるセイバーは力も望める

偽・聖杯の器たる、間桐桜
「うたわれるもの」との契約をした少女、エルルゥ
太古の魂を宿した巫女、カミュ
太転依の中でも上位に立つ、泉戸ましろに鵺

というラインナップもある。

しかし、それらのモノではなく、彼らが選んだのはいまだ年端もいかない少女たちのみ。

一体どういうことなのか。

「・・・・でも、理由はともかくとして狙われる条件は分かった」

「ああ。この年で力を持つ者はそうそういない。自然と限られてくる」

「あと誰だ・・・？誰が・・・・・・」

そう話しながら、リストを見ていくクラウドと一刀。

保護している少女たちは観鈴が近くにいるので大丈夫だ。

彼女とて翼人。相手が上級アンデットでも、足止めすることは可能だ。

そうしてバサバサと書類をめくっていき、誰かを探す二人。

と、そこでふとクラウドの手が止まった。

「まて・・・・確か古手梨花は幾度もの輪廻ですでに百年の時を過ごしていたんだったよな？」

「そうだけど・・・それなら羽入ちゃんは千年だぜ？それにそうはいってもまだそこらへんの子と変わらないよ」

「そうだよな・・・だったらこの彼女は・・・・！！！」

ヴィーーーー！！！ファンプファンプファンプファンプファン！！！！

「な、なんだ！？」

「警報・・・しかもこの音は！！」

そこで、部屋中、否、「ＥＡＲＴＨ」本部を、警報の音がけたたましく響き渡って行っていた。

「ＥＡＲＴＨ」の警報には種類がある。

出動
緊急出動
戦艦出動
重体者などの搬送時

そして、この警報は・・・・

「ここの襲撃警報!?」

「一体誰が・・・・いや、というよりこれはまさか（ザザッ）!?」

「観鈴さん!!」

と、そこで観鈴がらの連絡が入る。

現在、ビル内部の保護した少女たちの部屋をアンデットが襲撃し、撃退。
しかし、なおもやってくるアンデットに身動きが取れないそうだ。

「誰かやられたか!?」

『ううん!!大丈夫!!みんな無事だよ!!剣崎さんと左さんはアンデットに向かって行っちゃったけど』

「・・・そうか、なら任した・・・・あの二人なら大丈夫だ!!津上さんとか城戸さんもそっちに行ったらしいから!!」

観鈴と話をしていたクラウドに、朱里から現状を聞いていた一刀が

彼らのほうは大丈夫だろうと教える。
しかし、まだ脅威がなくなったわけではない。

『ご主人様!!二つの巨大な反応が観鈴さんのもとに!!』

『照合します・・・・出ました!!反応、上級。生体反応、ワニに桜です!!』

「!!」

「アイツらの力は危険だぜ?」

「俺たちであっちの足止めをするしかない・・・か」

メキッ・・・ドゴッォ!!

「邪魔だ!!」

「どけぇ!!」

クラウドと一刀が話しているとその瞬間、二体のアンデットが壁を

突き破ってこの部屋に突っ込んできた。
ちょうど、向き合っているクラウドと一刀のそれぞれの背後から。

が、クラウドが一刀の、一刀がクラウドの背後から迫ったそいつらを一刀に切り伏せ、消滅させながらその場を出た。

「オレがクロコダイルをやる」

「だったら俺はブロッサム・・・か。行こう!!」

そして、加速。
その場に一筋の蒼青と漆黒の光の跡を残し、二人の翼人は戦場へと向かった。

ーーー

「ん?大丈夫だよ。大丈夫。私だって、翼人だもん!」

そういっているのは、部屋の一角に衝撃波のドームでバリアを張る観鈴。
その中にはアルルゥ、インデックス、梨花、羽入が入っており、この状況に少なからず怯えていた。

イリヤは恋と共にこちらに向かう途中だったし、ヴィヴィオはなのはが一緒だ。

おいそれとやられることはないと思うが・・・・

ドォン!!

「!!!」

「フゥ――――・・・見つけたぞ。こうも固まってくれていると

やりやすくて助かるな」

「・・・・ワニ！！」

「そうストレートに呼ばれると少しへこむのだがな。やるべきことはやらせてもらおう」

観鈴たちのいる部屋の壁を突き破り、クロコダイルアンデットが入室してきたのだ。
それを見て、観鈴がバリアから出て彼女たちを守ろうと立ち上がった。

「観鈴さん！？」

「大丈夫・・・倒せなくても、邪魔することはできるから！！」

そういって、開翼する観鈴。

一点の濁りのない純白が開かれ、神々しさすら感じられるほどに美しい翼人がそこに現れた。

「知っているぞ。貴様は戦闘に向かない翼人であるということはな」

「そうですね」

「ならばこの結果がどうなるかわかっているだろう！！！」

ドウッ！！

そう叫び、クロコダイルアンデットが疾走し、顎をガチガチと鳴らして観鈴に突っ込んでいった。

が、それでも観鈴はその場から動くことなく、翼を大きく開いてそこから衝撃波を噴出、クロコダイルアンデットに命中させた。

「む？ゴッ！？」

その衝撃波は果てしなく、上がっている煙や瓦礫、部屋の壁ごとクロコダイルアンデットを吹き飛ばして「掃除」してしまった。

が、無論倒せるほどの威力はない。

ガラリ、と吹き飛んだ先の瓦礫の中からクロコダイルアンデットが

立ち上がり、頭をブンブンと振って観鈴を睨み付けた。

「なるほど・・・戦闘向きでないと言ってもやはり翼人。侮ることはできないということか。やはり聖王教会では逃げて正解だったな！！」

そういって、再度突っ込んでくるクロコダイルアンデット。
それに対し、観鈴は翼の内にいくつもの衝撃波の球をため込んでいき、それをライフルのように打ち放って行った。

その威力、先ほどの衝撃波ほど派手ではないものの侮るなかれ。

一発目ではクロコダイルアンデットの膝は砕け、二発目のは腹を貫通して風穴を開ける威力。

が、それでもまたベルトは砕けることがない。
そこで直接ベルトを狙おうとする観鈴だが、そうはさせまいと、クロコダイルアンデットは走りながらうつぶせに倒れこんでしまったのだ。

そして、その腹が床につく一瞬前に床を踏みしめ、滑空するロケッ

トのように速度を上げてきた。
しかも、顎を開け、無数の牙をむけながら回転までしてくる。

観鈴はとっさにバリアを張ろうとするが、間に合わない。
たとえ張れても、それでは簡単に破られる・・・・！！

「もらっ・・・！！！」

ガキッッ！！

「させん！！！」

しかし、その牙は観鈴に届かない。

観鈴とその無数の牙の間には、巨大な大剣。
クラウドがそれを挟ませることで噛みつかせ、そのままぶん回してクロコダイルアンデットを投げ飛ばしたのだ。

「お・・・っと。ふむ・・・二人目の翼人、か」

「貴様が・・・・」

そういって、向き合う二人。

「クラウドさん、気を付けてください」

「ああ、報告は聞いている。理樹のバリアを破るそうだな・・・・」

そう、こいつの力は理樹のバリアを破るほどのもの。

無論、容易くというわけではないが、脅威であることは変わりない。

実際、先ほど大剣でこいつの攻撃を防いだクラウドの腕も、ビリビリとしびれて軽くさすっているほどなのだから。

「観鈴はそこで彼女らを守っててくれ・・・下手に動かない方がいい」

「うん、そのつもりだよ・・・・」

そうして、クラウドがクロコダイルアンデットに剣を握りしめて切っ先を向けた。

「かかって・・・来い！！！」

ーーー

に向かっているようだぞ！！」

「ああ・・・・絶対にやらせない！！」

「そうはいかんざき！！！」

「！？」

「ッォ！？ぐあ！！！」

「ご主人様！！」

が、その途中で黒光りする残像に行く手を阻まれ、一刀が地面を転がった。

それを見て、瞬時に彼を守るように挟み立つ星と愛紗。

そこに現れたのは、人類が生理的に受け付けられない最悪の昆虫の始祖だ。

「こんの・・ゴキブリ野郎・・・・・」

「んん～？恐竜時代から生きている大先輩に何言ってんだこの猿のなれの果てがよォ～」

コックローチアンデット。
その速さにおいて最高のものを誇るそいつが、今この場で三人を阻んでいた。

「そんな、朱里の報告には・・・・」

「こいつはコソコソ隠れんのは得意だからな・・・・」

「レーダーをかいくぐって来たのか・・・・！！」

「こっから先は桜の大将の持ち場・・・オレはオレでやりたいことがあるんだが、いかんせん早い者勝ちでな。足止めさせてもらうぞ」

どうやら彼らはまず下級アンデットで襲撃をかけてから、上級が侵入して対象である少女に出会ったものがどんどんそのまま狙っていくという計画だったようだ。

つまり彼ははずれだったのだ。

「・・・愛紗、星。こいつは俺が止める。二人はなのはさんのところに！！」

「しかし・・・」

「大丈夫。こいつの速さは脅威だけど、俺にだって対抗策はいくらでもある。なのはさんのところに向かっているのも上級なんだ・・・・もしかしたらということもある」

「・・・わかりました。行くぞ、星！！」

「応！！」

そうして、愛紗と星が走り出してコックローチアンデットを抜き行こうと走って向かう。

もちろん、そうはさせないと姿がブレほどの高速で二人に襲い掛かるコックローチアンデット。

ガキィ！！

「そうはさせねぇっての！！」

しかし、それは一刀の出した無数の剣で阻まれ、二人は無事にその場を脱した。

「行っちまったか・・・・ま、翼人一人足止めできりゃそれでいいか・・・・」

「足止めで済むと思うなよ？」

「お前がついてこれんならな」

「なめるな」

そういって、一刀の腰が一瞬白く光り、そこにベルトが現れた。
それは、赤いカブトムシ型の機械が取り付けられた、太陽の戦士のベルトだった。

ーーー

「冥王イクスヴェリア？」

「そう。それこそこの事件の中核を担う存在さ」

そういって、一通りの情報を聞かされたスカリエッティは言葉を紡いだ。

マリアージュは兵器である。
言われた命令を遂行していくモノ。

その材料は、死体。
戦場において、これほど素晴らしい兵器はない。
死体などそこにはいくらでも転がっており、その数だけ兵隊が出来上がるのだから。

しかも、敗れて破壊されれば燃焼液に身体を変え周囲一帯を炎の海

に変える。

あまりに効率的で、人道に悖(もと)った兵器。

そして、それを作り出し、制御するのが彼の言う、冥王と呼ばれる太古の王だったそうだ。

「古代ベルカの歴代には実に多くの王がいてね。君らも知っている「聖王」や、ほかの有名どころだと「覇王」なんてものいたらしいが」

「じゃあ・・・そのイクスヴェリアが犯人？」

「いや。それは違うだろう。君らの話通りならば、そのための機能はその端末に移されてしまっているようだからね。彼女は生み出しているだけに過ぎない」

「でも・・・なんのためにそいつは・・・・」

「そこで出てくるのが、トレヴィア・グラーゼさ」

「え？」

「彼は私の「祭り」・・・ああ、今では光栄なことにＪ・Ｓ事件と呼ばれているんだったね。それに参加する予定だったのだよ」

そう、彼はスカリエッティのテロに参加するつもりだった一人だ。マリアージュの制御装置を持っていたのだから、それは大きな戦力になったに違いない。

古代の遺跡からイクスヴェリアを見つけ出し、そこからマリアージュを知り、制御に成功したのだ。

しかし、その前に彼は死んだ。殺されてしまったのだ。マリアージュによって。

だがその死に際にマリアージュを全凍結し、冥王も封印していたらしいのだが・・・・

「いやはや、私もマリアージュを使えれば、と思っていろいろと探したのだがね。ついぞ見つからなかったんだよ。この様子だと誰かが見つけたようだが」

とのことらしい。

しかし、マリアージュは戦闘能力底あるくせに命令遂行能力は昆虫並みの使えるのか使えないのかわからないような兵器なのだ。
だから古代ベルカでも封印されたのだろうが・・・・

ともかく、何かが原因であろうとも、とにかく冥王が復活して、今回の事件を巻き起こしているらしい。
しかし・・・・

「でも、マリアージュはそのイクスヴェリアって奴のことを知らなかったわ。探している、って言っていたし・・・・」

「ほう。つまりはそれを作り出すのは彼女の意志ではない、という可能性も出てきたね」

「そうね・・・・って、彼女？」

と、そこでティアナが首をかしげてスカリエッティに聞き直した。

ちなみに今ギンガとルネッサ、チンクはスカリエッティを出すための手続きをしに行っていていない。

「おや、知らなかったのい？冥王イクスヴェリアはね、まだ年端もいかない少女の姿をしていると私はトレヴィアから聞いていたがね？まあ、兵器を生み出す彼女が大人だと困るものもいたのだろう」

そう考察するスカリエッティだったが、そんなことよりも理樹とティアナは別の可能性を考えていた。
それはこの事件とは別件だが、決して無視はできないことだ。

「じゃあ・・・・まさかアンデットは・・・・・・！！」

「イクスヴェリアを狙って！？」

「？　何の話だい？私にも詳しく・・・・」

ピーピーピー！！

と、そこにクロスミラージュに連絡が入る、
どうやらスバルからのようだが・・・・

『マリンガーデンで大規模火災発生！！！ティア、私行ってくるね！！』

「スバル！？わかったわ・・・それと・・・」

『ごめんティア！もう行くから！！マッハキャリバー！！』

「ちょっとスバル！！話をちゃんと・・・あぁもうっ！！！」

どうやら大規模火災が発生し、スバルたちはそちらの方へと向かったようだ。

そこでティアナが大事なことを伝えようとしたのだが、あちらはどうも切迫した状況のようで通信はすぐに切れてしまった。

「火災？」

「ええ・・・でもスカリエッティが・・・・」

「私のことはいい。あとからあの三人と一緒に行くさ」

そう言ってくれるのならば、別に遠慮する相手ではない。

ティアナがバリアジャケットを纏い、理樹が彼女を抱えて拘留所から飛び出していく。

向かうは現場。
マリアージュ事件は、これで終わるのだろうか・・・？

to be continued

条件（後書き）

さまざまな条件が明らかになりました！！

蒔風
「オリジナルだとドゥーエが死んでるけど、こっちだと生きてるからな。まあいつだったらこういうのを望むだろう」

そう思ってスカリエッティの条件はこうしました。
無論、まったく自由にする気はないですけどねｗｗｗ

蒔風
「んでもって「ＥＡＲＴＨ」の襲撃か。あそこよくやられるなｗｗｗ」

ってか過去一回しかないだろ。
しかもそれやったのお前だし。

蒔風
「・・・・・記憶にないな」

クラァ

一刀がベルトを出したのは翼人の力！！
こういうこともできるんですよ！！

蒔風
「あれ？それって第二章の最後で俺がやったようなこともできるってこと？」

できるね。
でもあの時、一刀をはじめとしたメンバーはみんな抑え込まれてしまったからどっちにしろお前しかいなかったよ。

蒔風
「そして最後に・・・・・・アンデットはロリコンだったという件」

ハッ！そういえば相川始・ジョーカーも確か・・・・！！！

蒔風
「そういうことか！！」

いやまあ、本当の理由はちゃんとあるけどねｗｗｗｗ

蒔風
「次回、スバルの熱い救命活動」

人の命は地球の未来！！燃えるレスキュー魂！！
ではまた次回！！！

蒔風

「スバルたちが見てた懐かしいビデオって・・・・」

救急（前書き）

ＢＧＭ「救急戦隊ゴーゴーファイブ」

スバルが「着装！」って叫んだところからですね。

救急

「ＥＡＲＴＨ」襲撃や、ティアナ達の留置場訪問より、時間は少しだけ巻き戻って

――――――

スバルの部屋で、彼らが目を覚ました時にはすでにティアナと理樹、ルネッサはいなかった。
おそらく、スカリエッティのもとに向かい、話を聞きに行ったのだろう。
それなりに離れた世界にあるから、仕方がない。

「どうします？」

「う～～ん・・・じゃあさ、ミッドのこと知らない鈴ちゃんや恭介さんたちに、ミッドっ子の私が観光スポットを紹介しちゃいましょう！！」

「おぉーーー！」

そう言われて、よしそうとなれば、と即座に身支度を済ませる。
やはりなんだかんだで、外出は楽しいのだ。

それから数分後には全員が準備を済ませて玄関に立っていた。

無論、もしも緊急出動が掛けられた時に対応できるだけの準備も済ませてある。

「えっと・・・このボタンを押せばいーんだな？」

「そうだ。それを押せばもしもの時には即座に「瞬風」に転送されるから、そこから援護を頼むぞ」

「りょうかーい！」

そういって、リトルバスターズ女子メンバーはポケットに端末を入れてこれで良し、と靴を履きかえた。

「じゃあいくよー」

「どこに行くんですか？」

「むっふふう。ミッドに来たなら、まず見なきゃいけない場所！マリンガーデンだよ！！」

ーーー

くなるわけもなく、毎日のように多くの人がやってきて賑わっている。

まあそんな場所だから、もちろん朝一番から入らなければ見れない場所もある。
そのためにメンバーは開店時間よりも少し早めにつくように家を出てきたのだが・・・・・

「あちゃー、これじゃ全部回れないかもねー」

「そもそも一日で見れないんだから、焦ったってしょうがないだろ？また明日もあるさ」

「明日はルネッサさんもいっしょがいいなー」

「あっちは捜査があるから無理だろ」

そういって電車（と言ってもイメージとしてはモノレールと言った方がいいかもしれない）に乗ってマリンガーデンに向かう一向。

車はないし、だからと言って「瞬風」で行くのもどうかというから、まあ必然的に電車しかない。

「まず何見る？」

「お洋服とかー、お菓子とかー♪」

「あはは、だったらすっごくおいしいお菓子屋さんありますよ！」

「ほんと～！？スバちゃんありがと～」

ピピピピ

《相棒。防災課から連絡です》

と、そこにスバルのマッハキャリバーに防災課からの連絡が入る。
彼女は今、連続放火事件担当のティアナに協力として貸し出されている状態だ。

その彼女に、防災課から連絡が入るとなると・・・・

「ん、繋いで」

《ＯＫ》

『スバル！！お前今どこにいる！？』

マッハキャリバーが通信をつなぐと、その相手はスバルの上司、ヴォルツだった。
相手の剣幕に少しびっくりしたスバルだったが、聞かれたことに対して正確に答える。

「えっと・・・電車の中です。せっかくだからみんなでマリンガーデンに向かってるんですよ」

『ホントか！！そいつぁついてる・・・おい！そっからマリンガーデンは見えるか！？』

「え？」

『マリンガーデンで大規模火災発生！！しかも火元は地下だ。いずれ全部焼け落ちるぞ！！』

「！？」

「みなさん、ちょっとすみません！！」

「「ＥＡＲＴＨ」です！！ちょっと窓の外を見せてください！！」

スバルの通信を着ていたエリオや謙吾が、とっさに窓際に駈け寄って外を見る。

はじめてくる彼らはマリンガーデンがどこにあるか知らなかったが、黒い煙というはっきりとした目印が目に飛び込んできた。

「スバル！！」

「確認しました！！中に人は！？」

『開園前だったからな。客はいないし、従業員もすぐに脱出したらしい。だが万が一ってこともある』

「わかりました！！じゃあ先行して現場（げんじょう）に向かいます！」

『すまん！！こっちも向ってるんだが、お前らの方が早い！！「ＥＡＲＴＨ」の兄ちゃんたちも、頼んだぜ！！』

「ああ。任せておけ！！」

そうして、通信が切れてちょうど電車が止まる。

そして、そこの駅で全員が降りて、即座に恭介が声を張り上げた。

「全員いったん「瞬風」に！！そこから一気に向かう！！端末持ってるやつにつかまってくれ！！」

恭介の指示通り、スバルやエリオが女子メンバーにつかまって、そのまま瞬風に転送される。

戦艦が停泊しているのは海中だ。
こっちからのほうが絶対に速い。

ーーー

「！！ビル内にマリアージュの反応あり・・・！？さ、さらに生体反応をキャッチ！！生存者です！！！！」

「なに！？」

『じゃあ私の出番だね』

《ＯＫ》

そういって、ビルの入り口だった場所に、スバル・ナカジマがセットアップをして立っていた。
目の前には、燃え上がるビル。

背後・・・地上では脱出してきた人たちの救助が行われており、けがの治療が行われていた。

「行くのか？」

「はい」

「だったら俺たちも行くぜ」

「スバルさん一人は危険すぎますし、マリアージュだっていますから」

「わかった。お願いね！！」

「おう！」「はい！！」

そういって、真人とエリオを後ろに、スバルが挑みかかるかのように一歩、ビルに向かって近づいた。

「今度こそ助けて見せる・・・もうだれも、死なせない！！」

《その通りです、相棒！！》

「バリアジャケット、アンチハザードモード、着装！！」

《ＯＫ！！》

そうして、マッハキャリバーがスバルの体にあらゆる災害のためのバリアジャケットを着せる。

より高温に耐え、より水圧に耐え、災害から人の命を救うために、
彼女は持てるすべてを出し切る！！

「人の命は地球の未来。燃えるレスキュー魂・・・・そう、言ってたもんね！！！」

《子ども時代のヒーローですか？》

「うん・・・私だって、ヒーローにあこがれるもん！！行くよ！！二人とも！！」

待っていて。

生きていて。

絶対そこに、たどり着くから！！

「誰よりも、どこであろうとも、一直線に最短距離で！！！」

そうして、スバルがウィングロードを展開して、生体反応のある場所に向かって一直線に向かっていく。

相手はマリアージュなどではない。
そんなもの障害でもなんでもない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

ドォン！！

壁を崩し、内部に突入。
直後、マリアージュが一気に五体ほど飛び掛かってくるが、それを流れるような連撃で次々に殴り、蹴り飛ばしていく。

右拳、左拳、そこから腰を返して右の回し蹴りにそのまま回転して左の後ろ回し蹴り、そして最後に再び右拳で、それぞれを一撃で吹き飛ばしていった。

彼女らが壁に叩きつけられ、どろりと溶けて発火していくが、あとから到着したエリオと真人が消火剤を使ってそれを消していく。

「スバルっちは早く行け!!!」

「ここは僕たちが引き受けます!!」

「わかった!!絶対に・・・」

「無茶しない。それはスバルさんも!!」

「あはは!!!それじゃ!!」

そういって、スバルがマッハキャリバーをフル稼働させて深部へと突っ込んでいく。

途中の瓦礫などにマリアージュがはばまれていて邪魔だったが、彼女らを消し飛ばしてなおも奥へ。

通路にぎっしりと、マリアージュがひしめいているエリアもあった。

しかし、そこでブレーキをかけることなどない。

スバルがそこを通過する前に「瞬風」からの冷凍砲撃によって軒並み瞬間冷却させられ、氷の塊となったそれを粉砕していくからだ。

「行って来い！！」

瞬風の上に立つ恭介が、彼女を後押しする。

恐れるものなどもうない。

助けるべき命まで、隔てる壁はもうあと一枚！！！

そして・・・・・・

「見つけた！！」

スバルがその視界に、彼女を捉えた。
少女はおどおどするわけでもなく、この状況に対し比較的落ち着いた状態で佇んでいた。

「あなたは・・・・」

「スバル・ナカジマ防災師長です！！あなたを助けに来ました！！」

「助・・・けに？」

「あなたの名前は？・・・・・」

スバルが少女の肩を掴んで、怪我がないかどうかを確かめる。

どうやら、怪我の類どころか、火傷ひとつもないようだ。

「とにかく良かった・・・これから、外に出ます！私につかまって！！」

「・・・だめです。私から離れてください！私は、災厄を呼ぶもの・・・私と一緒にいては、あなたが！！」

しかし、それを拒絶してしまう少女。

この瞳を、スバルは知っている。
自分は兵器だと、いてはならないと悟った少女。

だからこそ、スバルはどうしても救いたかった。

しかしそうはさせないと、その場に新たな参入者が。

《見つけました。イクス、我々とともに来ていただきます》

「マリアージュ！！！」

そこにマリアージュが襲来、彼女を寄越せと言ってきた。
もちろん、それに対して「はい」と言えるわけもない。

「断る！！」

「逆らってはダメです！！あいつは師団長クラス・・・あなたの知っているマリアージュとは違います！！」

「え？」

なぜこの少女――――イクスというらしい――――がそんなことを知っているのかは解らない。
しかし、それでもこの言葉は本当であることがスバルにはしっかりとわかっていた。

こいつは、今までのとは違う！！

「大丈夫・・・こう見えても私、強いから！！」

グ・・・・ダンッッ！！！

「世界最強の人から教えをもらっているんだもん・・・・負けるはずなんて、あるわけない！！」

《挑みますか・・・・》

腰を落とし、右拳を腰に、左腕を立てて前にだして型を構えるスバル。
それに対しマリアージュは無造作に剣を取りだして突きのように構えた。

構えるという動作そのものが、このマリアージュにはなかったことだ。
この動きだけで、今までのとは違うということが分かった。

しかし、スバルの心に、「負け」という単語はどうしても浮かんでこなかった。

地面を踏みしめ、拳を構える。

それは到底「兵器」ではなしえない構え。

「人間」にのみ到達できる境地。

鋼の体に、金属の骨格。

しかしてそれを動かす原動力は、どんなものを使って燃えることのできない膨大な熱を持ったもの。

その原動力、物体に非ず。

確かに胸（ここ）にありながら、決して燃え尽きぬ不屈の炎！！！

「来い！！」

ダウッ！！

そうして、マリアージュが剣を突き出して突進してきた。

しかも、無数の瓦礫を飛ばしながら、猛然としてきたのだ。

その速度は最初から最高速（トップスピード）。

ただの人間ならこの一突きで終わる。

が、スバルはただの人間ではない。

飛んできた瓦礫のすべてを殴り、蹴り飛ばし排除した。

そして剣の切っ先がスバルへともう到達するといったところで、いまだ飛んでくる残りの瓦礫のすべては粉微塵となって消滅した。

《！？》

驚愕するマリアージュ。

しかし、その剣はもう止められない。

その剣筋を見切り、スバルは上体だけを右に少しずらして避ける。

と、同時に左腕を剣に絡ませ、脇に挟んで締め付けた。

するとその一瞬で剣が砕け折れ、反対に右拳のリボルバーナックルが蒸気と魔力粒子を噴き出して、空気を振動させて猛烈に回転し始めた！！！

「オオオオオオおおお！！！」

「この力・・・戦闘機人？」

イクスが呟くが、その声は誰にも届かない。
そのようなこと、些細な問題であると言わんばかりに！！

「振動拳ッッ！！」

《な・・・そんな・・・！？》

「粉爆裂破（ふんばくれっぱ）ぁッッ！！！」

ビシリ！！ブワァアアアアア・・・・・ッッ！！！

その一撃、まさに必殺。

師団長クラスと言われたそのマリアージュは、粉々に砕けるどころか霧になって文字通り消滅してしまった。

しかも、あまりにも粉砕が細かく行われたために発火作用すらも失われている。

「ハァッ・・・ハッ・・・・・ハァ――――・・・・・」

そうして、スバルが両拳を目の前でクロスし、息を吐きながらゆっくりと開いて降ろしていく。

残心

勝者たる彼女は、なおも悠然だった。

確かに、あのマリアージュは強かった。
師団長クラスといわれるだけのこともある。

だが、だからなんだというのだ。

ここには救うべき命がある。
兵器だとか、火事だとか、そんなもののため――――否、どんなことがあろうとも、失われていい命なんか、一つたりとも存在しない。

だから、彼女は勝利する。

理由なんて必要か？
大層な理想が必要か？

いいや、そんなことはない。

その場に助けたい人がいて、そこに手を伸ばす限り、人はどんな障害も乗り越えるのだから。

「あの・・・わたしは・・・」

「もう、助けなくていいなんて言わないでくださいね？」

「え？」

「助かりたくても、助からない人もいる。それなのに、まだ生きていられる貴女がそんなこと言っちゃだめです！！」

「あ・・・ぅ・・・」

そう言って、イクスの手を取ってその場を去ろうとするスバル。

その時、ティアナから連絡が入り――――――

ーーー

「おうよ!!俺はもう一人さらってるからよ。こうして一人で派遣されてきたんだよ?」

「!!・・・・じゃあ、お前が・・・・」

それを聞き、エリオがストラーダを構えて相手を睨みつける。

「お?やる?まあイクスヴェリアをいただくには、テメェ様方をぶっ倒してやらなきゃならないんでしょうけどなぁ!!!」

バツッ!!!

エリオの全身から、電流が迸る。

相手はドーベルマンアンデット。まだ回復しきっていない状態だ。
しかし手負いと言えども、上級アンデット。

決して油断の出来る相手ではない。

to be continued

救急（後書き）

イクスヴェリア救出！！
はい、今回は完璧にゴーゴーファイブでしたね！！
とにかく熱くいきました！！

そして、エリオとドーベルマンアンデットの戦い。

相手は手負いですが、それでもあいつですからねぇ・・・・

次回は「ＥＡＲＴＨ」での戦闘も交え、どんどん行きたいと思います！！

ではまた次回！！

では、また次回で！！

大事なことなので二回言いましたｗｗｗ

「イクスヴェリア・・・イクスって言うんですね！」

「はい・・・それにしても師団長クラスをああも簡単に・・・・」

「私だって、「ＥＡＲＴＨ」の一員でもあるんですから！！ってあれ？私なんで敬語なんだろ？」

「私、王様ですから・・・・」

火災現場のビル内で、スバルとイクスが互いに自己紹介をしてなんやかんやと話し合っていた。

ぶっちゃけると、戦闘の衝撃でビルが崩れて脱出できないのだ。

これ以上壁を崩すと、崩落に巻き込まれる可能性があるということだ。

「やりすぎちゃった・・・・」

そうスバルが呟いて舌を出したのはつい三十秒前。

しかし、その直後にティアナから通信が入って、彼女のことを聞いた。

冥王・イクスヴェリア

マリアージュを作り出す能力を持ち、そしてその力は今の時代に必要ないとし、自分を探すマリアージュから逃げ続けていた少女だ。

無論、スバルも自分の素性やらなんやらを話している。

相手は古代ベルカの時代を生きた正真正銘の本人なのだ。

戦闘機人のことも知っていたし、理解もある。

何より、自分は兵器だ、なんてことは、誰かを拒絶する理由にはならないということを知ってもらいたかったのだ。

そして、理樹とともにこちらに到着したティアナの通信から、彼女がアンデットの標的になっているらしい、ということを聞き、ここから脱出しようと待っているのが今。

「理樹、まだー？」

『もうちょっと。どう撃てばスバルさんたちを凍らせないでビルを凍結させられるか計算してるから』

スバルがもう安心しきった声で理樹に残り時間を聞く。

つまり、外からの冷凍砲撃でビルを凍らせて、崩壊と火災を同時におさめようというのだ。

「エリオたちもいるからしっかりね？」

『わかってるよ。えっと・・・エリオたちはここ・・？なんだこの反応・・・・！？こいつは！？』

「どったの？」

同じようにエリオたちの場所も割り出していた理樹だが、その声が張りつめたものに替わる。
それに対し、スバルが気軽に聞くが、その返答はとてもではないが気軽なものではない。

『アンデット・・しかもこの反応は上級!!』

「!?」

『現在エリオと交戦中・・・・真人は!?』

「理樹!!私、そっち見に行って・・・」

ドォンッッッ!!!

「キャあっ！？」

「ウォォォォオオオオオオオオオオ！！！！」

「ゲッは・・・速いッ・・・・このガキが・・・・！！！！」

と、そこに突如として壁が崩れ落ち、ドーベルマンアンデットを押しやってエリオがこの場に突っ込んできたのだ。

ストラーダはすでにギア・エクセリオン。
さらには全身から雷をほとばしらせて、その身体能力を限界にまで跳ね上げていた。

「ぐぅお・・・・！！おぉやぁ・・・・見つけたよ、冥王！！」

「！！スバルさん！！！！」

「もらっ・・・「させるかぁッッ！！！！」」

バツッ！！！！

この部屋に吹き飛ばされたドーベルマンアンデットがイクスを見つけそちらに駆けていくが、電光石火でその眼前にエリオが立つ。

「このガキ！！」

「覇ッッ！！」

ドバァッ！！

そして、エリオがストラーダを構えると同時に地面を踏みしめ、電流を周囲にまき散らして電磁波の壁のようなものでドーベルマンアンデットを弾き返して防ぐ。

「ルーテシアをさらったのはお前か！！」

「ガッッハァ・・・・・ち・・・万全じゃなきゃこんなにきついのかい！！」

エリオに向かい、抜き手のようにして二、三度突くドーベルマンアンデット。

命中すれば鋭い爪がエリオの体を突き貫いただろう。

しかし、今のエリオは身体能力が底上げされている状態だ。
その場のコンディションにもよるが、おそらくはライダーの最強フォームにも匹敵しうる。

その突きを身体を逸らし、返して躱し、最期の一撃をストラーダで叩き落として石突でドーベルマンアンデットの顎を下から突き上げた。

が、そこで頭を上に向けながらドーベルマンアンデットが双銃を抜き放ち、エリオに向かって発砲してきた。

それを弾き落とすエリオだが、立て続けにやってくる銃弾が肩や頬、腿を掠り、ところどころ出血させていった。

「エリオ！！」

「スバルさんはその子のそばにいてください！！！キャロッッ！！」

『フリード、ブラストレイ！！』

ゴォウ！！！

と、そこでビルの壁が崩れてその向こうから巨大化したフリードの炎が襲い掛かり、ドーベルマンアンデットを包み込んだ。

それにより、その場から彼の姿が消える。

しかし、それと同時にビルに限界が来たのかギギギギギ、というコンクリートと鉄骨の軋む音がして崩壊が始まった。

「マズイ、崩れるよ！！」

「スバルさん、こっちに！！」

そういってエリオがスバルとイクスを自分のもとに呼び、一か所に集まるように叫んだ。

それに従って集まる二人だが、逃げ道はもちろん、足場すらもが見えなくなるほどに周囲は崩壊し、砂埃を上げている状態。

足場だけはウイングロードを短く展開しているから大丈夫だが、これではすぐに崩壊に巻き込まれてお陀仏だ。

「ど、どうするの！？」

「大丈夫です。理樹さん！！今です！！！」

ドシュッ、ゴォン！！！！

スバルが心配そうに叫ぶ。
が、大丈夫だと言ってエリオが理樹に合図を出した瞬間、彼らを巨大なパイプが覆っていた。

そのパイプはビルを横一直線に貫いており、薄く緑色の色がついたバリアだった、

「大丈夫！？」

「大丈夫です！！救助者も無事です！！」

そのパイプの元には理樹が翼をはためかせて飛んでおり、おそらくはあそこからこれを発生させてビルを貫き、中にエリオたちを入れたのだろう。

「び、びっくりしたぁ・・・」

「あれは・・・翼人！？」

スバルが豪快な助け方に腰を抜かし、イクスが翼人である理樹に驚いて座り込んでしまう。

「真人さんは？」

「真人なら大丈夫。傷は深くないし」

ドーベルマンアンデットと遭遇した瞬間、エリオは激昂して突っ込んでいこうとしたのだが、それを待ってたとばかりにドーベルマンアンデットはカウンターで弾幕を張ってきたのだ。

無論、そんな攻撃を知らなかったエリオはそれをまともに喰らってしまう状態だった。

しかし、それを真人がとっさにかばったらしい。

そのあと、真人は大丈夫だと言って自力で瞬風に戻り、エリオはドーベルマンアンデットを追った、ということだった。

「そうですか・・・よかった」

「じゃあ今から降ろすから、ちょっと待って」てね

そう言おうとした理樹だが、その言葉が最後まで続く前に、そのパイプを何者かが攻撃してきた。

攻撃してきたのは、真下から。
崩壊して瓦礫の山になったビルの中から、ドーベルマンアンデットが二本のガトリングで黒空流星群を放ってきたのだ。

それはエリオたちのいる場所を挟んで左右の場所に命中し、パイプバリアを粉々に砕く。
無論、その間にいて支えを失ったエリオたち三人は落ちていく。

ウイングロードを再び展開しようとするスバルに、ストラーダを構えようとするエリオ、何かにつかまろうとするイクス。

しかし、その三人のド真ん中にドーベルマンアンデットがジャンプして飛び込んできた。
そして彼が三人の高度に到達した瞬間、独楽のように回転しながら左右に腕を伸ばし、エリオとスバルに向かって引き金を引いた。

二人は空中という不利な体勢にありながらもそれを防ぐが、その連

射と威力にストラーダは弾かれて落ち、ナックルで防いだスバルもウイングロードを展開する間もなく、その威力に押されて落ちていく。

そしてドォン!!とガシャァ!!という音をそれぞれ立てて、エリオとスバルが地上に落下した時には、すでにドーベルマンアンデットはイクスをその腕に抱えて気絶させ、その場から逃走を始めていた。

「!!!」

「足いった～シビレル・・・だがもらったぞ、冥王の名を冠する兵器を生産しうる少女!!!」

そう叫んだかと思うと、シュバッ!!という音とともに、ドーベルマンアンデットの姿がその場から消えた。

「ぐ・・・理・・・樹さん!!追えませんか!?」

『クラウドと違って、僕に加速開翼の力はないんだ!!でも大丈夫。居場所はわかってるから!!』

そう叫ぶのは、瞬風の中に戻っていた理樹。
モニターには海の上を走るという芸当をこなしながら逃走するドーベルマンアンデットと、その腕に抱えられたイクスが映っていた。

「ここからなら射程内だけど・・・・」

「ダメだ・・・イクスも巻き添えになってしまう!!「瞬風」搭載の武器は使えない!!」

モニタールームではそう言った言葉が交わされていた。

瞬風で海上を走るドーベルマンアンデットを追ってはいるものの、いかんせん手を出せる状況ではないのだ。

しかも、このまま市街地に逃げ込まれるとまずい。
否、地上を逃げられるだけでもまずいのだ。

今のドーベルマンアンデットはさほど早くない。

しかし、それはクロックアップや風足と比べた場合であり、理樹の飛翔と同じぐらいの早さだ。

そのスピードで、瞬風は追いかけている。
この速度でこの巨艦が地上の上を飛べば、その突風で地上が危険にさらされる。

どれくらい危険かと言えば、車が木の葉のように舞うくらい危険である。

かなり上空に上がれればいいのだが、消火活動から追い始めたので高度が足りない。
そして今から上昇しては、その間に逃げられてしまうのだ。

もしここで仮に、理樹が飛び出して追っていけば、確かに追いつく事は可能かもしれない。

しかし、それまでだ。
こうして戦艦には乗って来てはいるものの、まだ先日のクロコダイルアンデットとの戦闘のダメージも全快しているわけではない。

この状況で上級アンデット（ドーベルマン）と戦い、負けずにイクスを無事に奪い取ることは、あまりにも現実的ではないのだ。

さらにはもし万全でも、彼はあくまでも賢者タイプ――――防御の翼人だ。
一刀も賢者タイプに入るのだが、あれはまた特別な部類。

基本として、賢者タイプの翼人は、防御や能力に重きを置いたタイプ。

本来ならば攻め込むのはクラウドや「彼」のような戦士タイプであるべきなのだ。

この場にエリオやスバルがいれば、必ず取り戻せた。
二人と理樹がそろえば、必ずあいつを止め、イクスを奪い返せる。

しかし、この現状のメンバーでトップクラスの機動力、移動速度をもつ二人は善戦したもののあいつに落されてしまってこちらには来れない。

体力的に見て、もう追いつけはしないだろう。

だから今は――――――

「こうやって・・・追いかけるしかないのか・・・・！！！」

「！！理樹！二時の方向から、大量のアンデットの反応が！！！！！」

「そんな・・・・！！！」

と、そこに飛び込んでくるデータ、そして映像。
まだ遠くて細かく見えないが、ザッと見て三十体近くのアンデットだ。

それが群れのように固まり、こちらに向かって突っ込んでくるではないか！

「砲撃用意！！一体残らず撃ち落とすよ！！！」

「「「「「了解！！」」」」」

一同がドーベルマンアンデットを追いながらも、向かってくるアンデット共との応戦体勢に入る。

そして、衝突。

実にその衝突で十体ほどのアンデットが爆発して海に落ちていくが、今はそれを気にしている場合ではない。
残りの二十体ほどが瞬風の速度に合わせてきて、その機体にしがみついて攻撃してきたのだ。

無論、それを撃ち落としていくが、こうも張り付かれては戦艦では分が悪い。

戦艦が揺れ、速度が落ちる。
しかし、それでもまだ彼らはドーベルマンアンデットを追っていた。

だが

「！！！　敵からの砲撃が来る！！全員衝撃に備えて！！僕のタイミングで舵を切るんだ！！」

理樹が揺れる機体の中で、モニターにあるものを見た。

それはこっちに銃口を向け、にやりと邪悪な笑みを浮かべるドーベルマンアンデット。

そして、その腕には、腕を覆うように並んだ銃で構成された一門のガトリング。

無数に並ばされたその銃の中心。

彼自身の握る銃の引き金が、鋭い眼光とともにカチリ、という小さな音とともに引かれ、凄まじい音を放って弾丸が固まって砲撃のように打ち出されてきた。

「今だ！！」

「右方全力旋回！！」

ゴォォォォオオオオオオオ！！！

そして、理樹の合図とともに瞬風が大きく右に逸れ、その砲撃を回

避しようとする。

船内を凄まじいGが襲い、ティアナは壁に倒れ込み、イスに座っていたメンバーはベルトに身体を絞められた。

そんな中理樹だけはしっかりと立っていたあたり、さすがは翼人。

回避のタイミングも完璧だった。最善である。

そう、最善だった。

今この状況において、出来うる限りの最大の回避だった。

しかし、それでも

ドォン！！ヴィーヴィーヴィー！！！！

「左方推進エンジンに被弾！！」

「予備エンジンに切り替えます！！」

しかしそれでも、黒空流星群は命中してしまった。
船体がぐらりと揺れ、海に向かって落ちていく。

途中で予備エンジンが働くが、それでも落下は止められずに、瞬風は海に落ちた。
まともに落ちれば戦艦は衝撃でバラバラだったであろうことを考えると、本当に予備エンジンに助けられた、ということだ。

海上に浮きあがってきた潜水艦のように浮く「瞬風」

しかし、すでにその視界にはドーベルマンアンデットはおらず、代わりに数十体のアンデットがその船体の上に降り立ってきた。

それから数十分後

ハッチから飛び出した理樹とティアナ、そして艦内にいた者の中で戦える来ケ谷や、負傷したといっても通常アンデット相手ならば問題はない真人によってそれらアンデット達が倒されていった。

さらに数分後には、スバルたちの救助も来て、戦艦瞬風は港にまで運ばれていった。

本格的な修理、そして、この出来事を伝えるために、「ＥＡＲＴＨ」へと連絡を取ろうとする理樹。

しかし、何度呼び出しても応答かない。

彼らは知る由もなかった。
知れるはずがないのだ。

その同時刻、「ＥＡＲＴＨ」本部も襲われていたということなど。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

強奪（後書き）

救えども、やはり奪われる、イクスさん（字余り）

邪神
「ドーベル君はもう二人も連れてきたのかい！！エェル君も一人連れてきている。それに引き換えなんだね君たちは！！」

コック、クロコ、ブロ
「「「申し訳ございません部長」」」

ドーベル
「まったくもー、がんばってくださいよ。せ・ん・ぱ・い」

エェル
「私も一人だけだがな、一人も取って来れないとはどういうことだ？」

コック
「ンダとぉ？」

邪神

「君らに何か言えた口かね！！こんなところでしょぼくれている暇があったら、さっさと一人でも多く連れてきなさい！！」

三人
「わ、わかりましたぁ！！」

みたいなｗｗｗｗ

蒔風
「なにその今にもな「今日契約取って来れなきゃクビだ！！」みたいなドラマ。そんな邪神いやだわ」

ええ、こんな邪神ではないです。
そもそも、邪神に喋らせるつもりもないですしｗｗｗｗ

蒔風
「なるほど・・・上の会話はこう・・・マンガの裏表紙にあるショートコントみたいなやつだな？」

そんな感じ

蒔風

「そしてドーベル。また数で勝負か」

さて・・・これがどう影響してくるのか。
そして、「ＥＡＲＴＨ」で何があったのか!!!

蒔風
「次回、「ＥＡＲＴＨ」での戦い。そして、十人目の魂は？」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花
古手羽入
御坂美琴
インデックス
アルルゥ
高町ヴィヴィオ
ルーテシア・アルピーノ
イクスヴェリア

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残り一名

戦場

「ＥＡＲＴＨ」本部ビル

まるで廃墟のようになった廊下

向き合うのは、クロコダイルアンデットとクラウド・ストライフ。

「なぜ彼女らを狙う」

「その方が力になるからさ」

「なに？」

「ま、それは置いといて。こうして一か所に集まってくれるとは、サービスご苦労！！！！」

皮肉を口に、クラウドに向かうクロコダイルアンデット。

クラウドはそれを受け、後ろに投げ飛ばすかのように流す。
そして、後ろに流したそいつに向き合い、改めてこいつの脅威を思い知る。

（流したというのにこの衝撃・・・しかも流した先の壁がごっそりなくなっている。まともに受けたら・・・）

「打ァッッ！！！」

「二度と立ち上がれない、な！！！！」

ゴォン！！！

直線で突っ込んでくるクロコダイルアンデットに対し、真上から大剣を叩き落としてそれを止めるクラウド。

ワニの顎は閉じる、即ち噛みつく力は途方もないが、開ける力はさほど強くない。

こうして強引に閉じようとすれば、閉じられないことはないのだ。
現にこいつの大きく開かれた顎も、閉じられた。

だが、断じて防げるわけではない。
脅威の種類が変わっただけだ。

「閉じればいいとでも・・・」

ドッゴ！！！

「グ・・・ォオオッッ！？」

「思ってんのかァッッ！！！」

ゴゴン！！ゴガガガガガガガガッッ！！！！！

顎は閉じ、無数の牙の攻撃はなくなったが、その代わりに固い硬い鼻面が突っ込んできて、大剣でガードしたクラウドごとそのまま壁を何層も貫いていった。

いまさらだが、ワニの皮は堅い。場合によっては銃弾すら弾くほど

に。

ただえさえそれなのに、アンデットという肉体であるこいつのそれはすでに鋼鉄の域にも達している。

さらに言うならば突進速度もかなりのものだ。

それだけの速度で、それだけの硬度の物をぶつけられては、如何に翼人と言えども吹き飛ぶのは道理。

「がっ・・・こ、のっっ!!」

が、クラウドもそれだけで終わるような男ではない。

大剣から剣を一本分離させ、二刀でクロコダイルアンデットに切りかかっていく。

それを顎と爪で弾くクロコダイルアンデット。

「無駄よ!!俺の硬皮はそう簡単には斬れん!!」

こいつの言うとおり、この皮膚を切り裂くにはこれではだめだ。

一拍の空白を置いて研ぎ澄ませ、一閃を以って斬るしかない。
だが、その溜めすらをも許さないのがこいつの実力。

距離を取ろうにもさっきの一直線高速移動では溜める暇もない。

しかし

「ハァぁッッ！！」

「グッ、ォ？」

クロコダイルアンデットの体がぐらりと揺れる。

あまりの硬度にクラウドの剣は刃こぼれをしてしまっているが、そもそも斬れないのだから大した問題ではない。

「この・・・やろう・・・頭ばっか殴りやがって・・・」

「いくら皮膚が固くとも、衝撃は確実に脳に届いたようだな」

「揺れ・・・チッ・・・おグぁッッ！！？？」

クラウドの攻撃がクロコダイルアンデットの皮膚には通らずとも、その脳みそを確実に揺らし、脳震盪を起こさせる。

視界が歪み、平衡感覚がなくなったクロコダイルアンデットに、クラウドの蹴りが命中し、その体がゴム毬のように廊下を撥ねてすっ飛んで行った。

「翼人を舐めるな！！！」

「クッ・・・ザァッっ！！！」

頭を押さえて振りながら立ち上がるクロコダイルアンデットに、クラウドが大剣を一つにし、滑空するように向かっていく。

それを上体を逸らして躱すクロコダイルアンデット。

そこからの噛みつき。

が、クラウドもそれを見切って回避、再び攻撃に移る。

互いの体が揺れ、激しい攻防が行われている。

このやり取りではまだ致命的な一撃は入っていないが、クロコダイルアンデットの牙や爪が徐々にクラウドを掠り始めている。

それに対し、クラウドが狙うのはこいつの目玉やのど元だ。
もはや斬れるであろう場所は、そこしか思いつかない。
しかし、相手もそれは解っている。
だからこそ、そこだけを重点的に守っているのだ。

「クラウドさん！！」

「！！（バッッ！！）」

と、そこに観鈴がクラウドに向かって叫び、それに気づいたクラウドがその場からバックステップで離脱する。

そしてその直後、クロコダイルアンデットに向かって観鈴からの衝撃砲が放たれた。
それは竜巻のようなもので、一本のその衝撃砲の中には乱回転をするいくつもの竜巻が内蔵されている。
そんなものを食らえば、どうなるかは明白だ。
上半身が右に、下半身が左に、頭が下に、腕が前に、足が上に

そんなめちゃくちゃな方向に捻じ曲げられていき、クロコダイルアンデットの全身から緑の鮮血が噴き出してきたのだ。

「げ・・・ふ・・・・・」

「今だ！！」

そのタイミング。
その瞬間に、クラウドが大剣に魔晄を込めて大きく振り上げて構えた。

そしてその剣に観鈴がさらに衝撃を纏わせ、電動ノコギリのように超振動させる。

準備は整った。

「行くぞッッ！！！」

「ぬ・・・ぐぅぅぅう！！！」

ドォウ！！

そんな風の音を置き去りにして、クラウドが疾駆。
黒き翼を背に、青の閃光を剣に宿らせ、純白の後押しを以って、眼前の敵へと斬りかかる！！

ドゴッッ！！

「ゲバッッ！？」

クラウドの大剣がよろめくクロコダイルアンデットの腹部ド真ん中に見事命中し、その体を貫いた。
そして大剣に組み込まれた全ての剣が振動を纏いながら解放され、内部からも引き裂かれてゆく。

ギィィィィィイイイイイイイイイイイ！！！！

だが、振動波はまだ残っている。
それがその振動音をけたたましく鳴らし、甲高い音をまき散らす！

「吹き飛び、爆ぜろ！！」

ドォンッッ！！！

そして、その抑えられていた振動が衝撃となって一気に爆発、クロコダイルアンデットの背中から衝撃波が吹き出し、その体がノーバウンドで吹き飛んで、壁にぶつかりめり込んだ。

「・・・・フン」

それを見、クラウドが剣をビッ、と振り下ろして背を向けて、剣を頭上で回し、肩に引っ掛けるようにして背中に付ける。

直後、それに反応したかのようにクロコダイルアンデットが爆発し、その炎の中でバキン、という音が彼らの耳に聞こえてきた。

「やったぁ！！」

「ベルトも砕けたな。これでひとまず終わった・・・か」

そういって、クラウドがラウズカードを取り出し、手首のスナップで炎の中のクロコダイルアンデットに投げる。

カードは燃えることなくその体に向かって飛んでいき・・・・・・

ーーー

コックローチアンデットとの戦闘を始めてから、三分。
しかし、その相手をしている北郷一刀の体感時間は、そんなものではなかった。

コックローチアンデットの移動速度はすでにクロックアップレベルだ。

その攻撃方法は、徒手空拳。
二本の脚、二本の腕、そして、虫のような二本の鉤爪。

それに対して一刀は「ものまね」ともいえるような力を使い、仲間の力を次々と使って応戦している。
まず最初にカブトのベルト、終われればガタック、次にはファイズのアクセルメモリー、風足、アクセルトライアル・・・・・・

思い浮かぶ限りの高速戦闘を可能にする能力を借り受けて戦うのが一刀のスタイルだ。翼人の翼は無理だが。

ちなみに変身などはいちいちしていない。
生身でも十分移動には耐えられるからだ。しかし・・・・

「フッ、はっ、邪ァッ！！！」

「お、ダァ！！ぅおッ！！？」

コックローチアンデットの拳が一刀に伸び、それを左上腕で受けて右手で払い落としてからそのまま右拳を叩きこむ。

が、それをコックローチアンデットは屈伸で回避し、一刀の腹部を鉤爪で引っ掻くかのように裂いていく。

それには一刀もたまらず下がり、腹を押さえて驚愕する。

上級アンデットと交戦するのは初めてだが、まさかここまで強いとは・・・・！！

「さぁ（バッバッ）、もっと俺を（スゥ～）、楽しませてくれい！！（ダンッッ！！）」

一連の構えの動作を行いながら、コックローチアンデットが一刀を挑発する。

その構えに一切の無駄はなく、武人というのがふさわしいほどのも

のだ。

「ぜってーコスイ手使って来ると思ったのにな・・・・」

「あん？モチそういうのも使わないことはないがな。どっちかってーとそりゃドーベルの犬っこだ」

ダッ！！

そう話しながらも、コックローチアンデットが一刀に向かって中段突きを放って突っ込んできた。
まるで砲弾だ。漆黒の体がさらにそれを連想させる。

それをバックして下がる一刀。その後の追撃も次々と回避する。

が、ついに後ろがなくなり、背中にドっ、と壁が当たった。

「まず・・・・」

「もらったぁ！！」

「ッッ！？しゃがみ避け緊急回避！！！」

それを見逃すことなく、コックローチアンデットが顔面に向けて正拳突きを放ってきたのを、一刀が下半身を脱力させて一気にしゃがみこみ回避する。
一刀の頭上を拳が通過し、壁にボッ、という音と共にきれいな穴をあけていく。

「う・・・っそぉ」

「ラぁ！！」

「おうぁあ！！」

と、そこから腕を引き抜き、回し蹴りを放つコックローチアンデット。
しゃがんでしまっている一刀は受けるしかなく、とっさに巨大な金棒「鈍砕骨」を取り出してそれを盾にしながら吹き飛んだ。

直撃は避けたために吹き飛んだだけで大したダメージは通っていない。
しかし、背中をジットリと嫌な汗が伝っていくのがわかる。

一刀は翼人としては一番の後輩だ。

覚醒が遅かっただけではない。
観鈴、理樹、クラウドの三人は、もともとそう言った力を元の世界で使った経験がある。

それは前世の記憶から
それは虚構世界で
それは宿敵との戦いの旅で

しかし、一刀はそう言った力に飲み込まれて時空移動をしたことはあったが、自分自身が力を発揮したことはない。

ゆえに、翼人の中で最も多くの力を使え、最も扱えきれていないのだ。

「オォっ！！」

「う、ぬゥッ！！」

が、しかしそうはいってもやはり翼人。強いかどうかと言えば、もちろん強い。
彼の上に（あくまで戦闘面で）立つのは翼人の理樹とクラウド、後は数名の実力者のみ。

一刀の両手にはそれぞれ青龍偃月刀とレイジングハートが握られており、近ければ斬りかかり、遠ければ砲撃で応戦している。

それに対し、近づいて殴るしかないコックローチアンデットは当然高速移動でまず都に接近してくるが、一刀も高速移動の力にはストックがある。
彼自身は加速開翼できないが、こうすることで彼もそういった戦闘が可能なのだ。

「ち・・・ポンポンと武器変えやがって・・・めんどくせぇ野郎だなおい!!」

ブンッッ!!と、空気を震わす音と共に、コックローチアンデットの姿が消えて高速移動に入った。
それについていこうと一刀も腰に出して置いていたキックホッパーのベルトによるクロックアップでついていく。

（これが最後の高速能力・・・これで、決める!!）

そうして一刀がコックローチアンデットの背後に周り、レイジングハートを構えて突貫する。

超至近距離からの零距離砲撃＆斬撃

それをもって終わらせようとしているのだ。

このままならば、コックローチアンデットに確実に命中する。
クロックアップに入らなくても、視認することぐらいはできる。それによってクロックアップした直後、背後に一瞬で回り込むことに成功していた。

しかし

「遅いぞ、人間」

「なッ！？」

高速移動のその世界で、コックローチアンデットの姿が消えた。

「消えた!?・・・・違う、まさか!」

「さらなる加速。貴様らには決してたどり着けない速度の極地!!
まだまだノロいわ!人間がァッ!!!」

消えた、のではない。さらなる加速。

クロックアップと同等の高速の中で、さらに姿を消すほどの高速!!

ザシュッ!!

「アグッ!」

ガリっ!!

「うあっ!!!」

直後、一刀の体を幾度も鉤爪が遅い、全身にわたって切り傷と刻み込んでいく。
それに加えて、足首も切られてしまい、しゃがみこんでしまった。

戦闘自体は可能な傷だが、足首を負傷してはこれだけの高速移動はもうできない。

と、そこから引っ掻きは殴打へと変わっていき、一刀の全身を嬲りはじめた。

「どうしたどうした!?俺の速度に、ついてこれないことはなかったんじゃないのか!?」

「ぐ・・・こ・・・の、ォォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「おぉ!?」

コックローチアンデットの声だけが聞こえるなか一刀が吼えた。

拳を食らったその一瞬。
自らの体を囮に使い、逆にその腕をつかみ取って開翼、翼の内から無数の武器を飛び出させてコックローチアンデットを攻撃した。

その武器の種類は実に多彩で、剣はもちろんのこと、槍、弓、銃、砲撃などのすべてが嵐のようにコックローチアンデットに襲い掛かる。
それだけの攻撃をコックローチアンデットアは、最初の十くらいは何とか受け、流していたが、そのあとの者は暗い、一気に吹き飛ばされていった。

そして、一刀がガクリと膝をついて四つん這いに倒れた。

流れた血も少なくなく、連続した高速移動に体力もそろそろマズイ。

しかし、まだ相手はそこにいるのだ。
そう思い、一刀が起き上がって吹き飛んだ先を見る。

しかし

「い・・・ない・・・・・？」

しかし、そこにコックローチアンデットの姿はなかった。

一体どこに向かったのか。

一刀がヨロヨロと立ち上がってほかの場所に向かおうとする。

戦いが起こっているのは、ここだけではない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

戦場（後書き）

遅くなってすみません！！

上級に初勝利か！？な戦場でした！！

蒔風
「流石にクラウドは強いな」

観鈴ちんの活躍も忘れないでね！！

蒔風
「それにしても一刀とは惜しかったというかなんというか・・・」

相手が悪かった、というしかないですね。

クロックアップ上においてのさらなる加速。
ハイパーゼクターでも出せばよかったんですが・・・

蒔風
「一刀の力は多くの力を使うからな。体力の消費も激しいのに、さ

らにクロックアップを連続じゃぁな」

ってかあそこからさらに加速とかコックさんマジ害虫ｗｗｗｗ

ちなみに一刀が出した棍棒「鈍砕骨」がなんなのかわからない方にご説明！！

これは「真・恋姫無双」の魏延（真名・焔耶）の武器です。
青龍偃月刀とレイジングハートは大丈夫ですよね！！

「ＥＡＲＴＨ」戦闘編はまだまだ続きます！！

蒔風
「次回、砲撃勝負、最期の一人？」

ではまた次回

浸食

「ファイォア！！！」

「ディバインバスター！！」

ゴォッ、ドォン！！！

「ＥＡＲＴＨ」地下大訓練場。

そこで、高町なのはとブロッサムアンデットの戦闘が行われていた。

奥の部屋には鍵とプロテクションをかけて、ヴィヴィオが避難している。

下手に今、この「ＥＡＲＴＨ」の中を逃がすのは危険だ。

ブロッサムアンデットの周囲に桜色の球弾が作られていき、それをなのはが的確に撃ち落して行っている。

が、その一発一発がディバインバスター級なのだ。

このままではジリ貧。結果は目に見えている。

「ハァァッ！！」

「セアァッ！！」

と、そこでギギィ！！、と二つの刃がブロッサムアンデットに襲い掛かり、堅い樹皮に防がれて火花を散らした。

「愛紗さん！！星さん！！」

「なのは殿はかまわず撃ってください！！」

「私たちはそっちに合わせる！！やれ！！」

「・・・！！（コクッ）アクセルシュート！！」

ドドドドドンっっ！！

とさらに無数の魔力球がブロッサムアンデットに向かい、二人が離脱して爆煙にその姿が消えた。

しかし

「ふはははは、ふは、あーーーっはっはっはっはっはっは！！」

そう笑い声をあげながら、煙の中からブロッサムアンデットがなおも健在と言わんばかりに、腕を振るって煙を掻き消しながら出てきた。

それを見て舌打ちする愛紗。

無理もない。こんなことを何度も行っているのに、相手の体に傷一つつけられないのだから。

「笑ってんじゃ」

「ない！！！」

ドゴォッ！！と、その笑うブロッサムアンデットになのはの砲撃が再び伸びるが、ブロッサムアンデットもそれに対して砲撃を放ち相殺、さらには押し切って三人を吹き飛ばしにすらしてきた。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！》

「きゃ！！」

「うわ！！」

レイジングハートがとっさにプロテクションを張ってくれたおかげで直撃はしなかったものの、衝撃にバリアごと押し戻され、後退させられてしまう。

上級アンデットは翼人並み。
ならば、自分たちに勝てるのか？

「そっちもなかなかの手練れだということは解る。しかしだな、私に勝つにはちょいと実力不足かな？」

「この・・・・！！」

「だったら俺も相手してやるぜ」

ゴォン・・・・・

高笑いするブロッサムアンデット。
そこに、そんな声が聞こえてきて、地下訓練場が振動を始めた。

見ると頭上からパラパラと土が落ちてきて、天井が左右に開いてい

っているではないか。
その先には、空。この訓練場は天井が開く構造になっている。
そして、その地上に立っていたのは・・・・・

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

「ぬ！！ダァ！！！」

バキィ！！

訓練場の上、要は地上にいたのは、すでにディケイドに変身した門矢士だ。

そこから放ってきたディメンションシュートの巨大な弾丸を、ブロッサムアンデットは回転してからの右腕での打ち払いで弾き飛ばしていた。

「あんたの相手はまだまだいるということよ（ジャカ）」

「グルルルルル・・・・ガゥガゥ！！」

とそこにさらには長岡までもが現れ、銃を構え、凩を従えて訓練場にやって来きていた。

それを見て、ブロッサムアンデットが驚いたようなリアクションを取り、長岡に話しかけてきた。

「おお?誰かと思えば・・・・役目を負った一族の末裔ではないか!!しかしだな、我々にはあなたの魂を必要ない。即刻退去してもらおうか?」

「らしいわね。なんで私じゃなくてほかの子たちをさらうのか、しっかり教えてもらいたいものね」

銃口を一切ブラさずにそういう長岡だが、ブロッサムアンデットもそれに大した脅威を感じていないのかおどけ堕胎度しかとらない。

「・・・その様子では、役目によってどうなるかはわかっていても、それがどういう役目かはわかっていないというところかな?」

「?役目の・・・意味?」

「邪神に取り込まれ、内部から君がいったい何を為すべきなのか、だよ。そこまでは伝えられなかったか?」

「それは・・・・一体？」

「邪神を押さえる？そんなんで終わると思っているのかね？ま、それも別段間違いではない。だからあなたは邪魔なのだよ。我々はあれの力がほしいのだ。下手に制御されては、困るのだ！！」

ドォウ！！！

と、そう叫んで長岡に向かって砲撃を放つブロッサムアンデット。
それを転がって回避し、銃弾を放つ長岡。

ビスビスビス、と銃弾が樹皮にめり込み、ブロッサムアンデットの体が少しばかし揺れるが、効いていない。
が、こちらにはまだ四人もいるのだ。これだけでは終わらない。

《Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ――ＢＬＡＳＴ！！》

ライドブッカーガンモードから無数の弾丸が飛び出し、それをブロッサムアンデットが剣のようにとりだした一本の木で弾きと増していく。
それは鞭のように、とまではいかなくとも十分に撓（しな）るもので、そのまま走りだして愛紗と星に向かって斬りかかっていった。

バチッ、バチィッ！！という弾けた音を打ち鳴らし、青龍偃月刀と龍牙を打ち払ってなおも突進するブロッサムアンデット。

そこになおも向かってくるライドブッカーをソードモードに変えたディケイドが立ちふさがり、スラッシュのカードを装填する。

「邪魔だ、どけ！！」

「そうもさせられねぇんだよ！！」

ガァン、バチィ！！！

カードで強化されたライドブッカーとブロッサムアンデットの剣が幾度かぶつかり合い、激しい火花を散らしてゆく。

「こい・・・っつ！！」

「鞭ともまた違う、このしなる剣・・・というのは初めてかな？ディケイド。なかなかにして打ち合いにくいだろう！！」

そうこの剣、ただの剣より数倍打ち合いにくい。

剣と剣をぶつかり合わせて鍔競り合おうにも、ぎりぎりと凌ぎ合うことがないのだ。
そんなことをしては、グググ、としなってバチンとこちらに向かってくる。

だからと言って回避しようにもしなるために、見切るには困難を極める。

それに対してディケイドがこうして打ち合えるのは、いくつもの世界で様々な敵を相見(あいまみ)えたからこそ、こういったものにも柔軟に対応できるのだろう。

しかし、対応できるからと言ってもその威力はどうしようもない。
カードでの強化が切れてしまえば、一撃で剣は弾き飛ばされてしまうだろう。

「ハァッ！」

「フンッ！！」

と、そこで愛紗と星が武器に気を込め、再びブロッサムアンデットに斬りかかっていった。
さらには長岡も発砲してブロッサムアンデットに命中させていく。

なのはは攻撃に参加できないこともないが、今はヴィヴィオの方が心配だ。

そちらのそばに今は寄っていて、防衛に専念していた。

「ぐ、こいつ、ら・・・」

「先程は弾かれはしたが」

「今度は気を込めさせてもらった！！もうさっきのようにはいかん！！」

「じゃあダメ押ししてやるぜ！」

《Ｂｌａｄｅ！　Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ――Ｋｉｎｇ》

「なに！？」

いつの間にかコンプリートフォームに強化変身していたディケイドが、ブロッサムアンデットに愛紗と星が斬りかかっていった隙に仮面ライダーブレイドキングフォームを召喚し、狙いをブロッサムアンデットに定めていた。

さすがに仮面ライダーの最強フォーム二人がこうして並んで、大丈夫だ、とは上級アンデットも言えないらしい。

「士殿！！追いこみます！！」

「頼んだぜ！（ガチャ、ヴォォン！）」

ディケイドがカードを取り出し、タイミングを計る間に、愛紗と星が気力を放ち、大技と共にブロッサムアンデットの動きを止めにかかる！！

「青龍、逆鱗陣ッ！！」

「星雲妙神撃ッ！！」

「ガッ・・・ッ、だが・・・・」

しかし、そのダメージを負ってもまだ立ちあがるブロッサムアンデット。
むしろまだまだこれからだと言わんばかりに力強い。

「邪魔をするなと・・・（ガクンッ）なあっ！？」

立ちあがり、なおも全身を続けようとするブロッサムアンデット。
しかし、その足ががくりと地面に落ち、蹲くように動くがとまった。

「こ・・・れは・・・」

「あんたたちアンデットは死なない。でも、その体を動かしているのが筋肉っていうのは変わらないでしょう?植物だったから不安だったけど、効いてよかったわ」

「貴様・・・まさか・・・・・」

「対アンデット用の筋肉弛緩剤。それにしても驚いたわよ。十発近く打ち込んでも、動きが鈍るだけなんだから」

長岡の銃弾に込められていたものを知り、「葉」ぎしりをするブロッサムアンデット。

だが長岡の言うとおり、完全に動きが止まったわけではない。

「だけど十分!行くぜ!!」

《Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ――Ｂｕ　Ｂｕ　Ｂｕ　Ｂｌａｄｅ!!》

「ぬ・・・!?」

そのブロッサムアンデットに向かって、黄金のカードが五枚、二つ並んだ。

そして二人がシンクロした動きで剣を奮い、その先端から同じく黄

金の、ディケイドからはマゼンタのエネルギー砲撃が放たれ、ブロッサムアンデットに襲いかかった！！

「終わりだ！！」

「ぬ、あ・・・ぬぁあァァアアアアアアああ！！！」

ガゴンッッ！！！

その熱戦が直撃することを察知したブロッサムアンデットは唸り声をあげ、直撃する寸前、ひび割れた床に拳をめり込ませた。

すると直後、訓練上の床や壁から巨木が突き出してきて、地下訓練場をまるで森林のようにしてしまった。

「なに！？」

突き出してきたその巨木に二つの砲撃は防がれ、ブロッサムアンデットの姿はもちろん、仲間たちの姿すらも見失ってしまう。

完全に孤立。
巨木が突出したといってもまるで龍のようにうねって生えており、
森になったというよりは迷路になった感じだ。
まったく先が見えない。

「こ、これは・・・・」

「なのはママ・・・みんなは?」

「大丈夫。みんな強いし、ママも強いから」

「大丈夫?」

「大丈夫。絶対に連れて行かせないから!!」

それはなのはも同じだった。
ヴィヴィオから引き離されることはなかったが、完全に孤立した状況。

しかも、先が見えない。

あちらからは砲撃を放ってもかまわないが、なのはが砲撃を撃てば

最悪仲間にも当たる。

「やっぱりまずい・・・ね。どうしよっか？」

「とりあえず逃げるー！」

「だね・・・士さんが天井（うえ）を開けてくれたのは好都合・・・・」

ドォウ！！！

が、そこからなのはが空へと飛ぼうとし身体が浮いたその瞬間、今までいた場所に桜色の砲撃が襲いかかった。

そしてその砲撃は、なのはの片足を掠っていき、彼女の体制を大きく崩した。

「づッッ！？・・・ッァがッ！！・・・ハ・・・・」

「ママ！！」

これから上昇しよう加速しかけていたところにそれだ。ヴィヴィオをかばったために、なのはが背中から巨木に落ちていき、地面に倒れて呼吸が止まる。

倒れたなのはの目には、木々の間に空いた大きな穴の中を、ブロッサムアンデットが悠々と歩いてくる姿が映った。

「貴様に上空へと飛ばす隙は与えない。この状況では砲撃は打ちたくても撃てまい？まあこれなら」

ギィィィイイイイイ・・・・！！！！！

「お仲間はお前さんの砲撃と思うかもな！！！」

ドンッッ！！！

「ダメェッ！！」

「ヴィヴィオッ！！」

ブロッサムアンデットの放った巨大なエネルギー球体が、倒れるなのはに向かって打ち出された。

が、その前に立ったのはこともあろうかヴィヴィオだった。

癇癪を起したかのような否定の声を上げ、向かってくる球体に、防ぐかのように両手を突き出ると、ヴィヴィオの手の先から七色の魔力が噴き出してその球体を、まるで最初からなかったかのように霧散させてしまった。

「・・・・・おぉ」

「なのはママに・・・これ以上ひどいことしないで!!!」

「では貴女に御同行願おう!!素晴らしき聖王の力を持ちし少女よ!!!」

「ヤダ!!!」

ヴィヴィオが迫ってくるブロッサムアンデットに向かって、一切臆することなくそう叫ぶ。

そこに宿るは強固な意志。

自分は絶対にあきらめない。

守られてばかりはいやだから。

しかし、その意志もむなしく

「げホッ・・・」

「小さな体でよく頑張って抵抗した。さすがだ」

「ヴィヴィオ！！！」

ブロッサムアンデットの肩にヴィヴィオが担がれ、それを止めようとなのはが立ちあがってレイジングハートを向けた。
しかし、被弾した片足はまともに機能しておらず、酸素を一気に吐き出したからかまだ腕も震えている。

「その砲撃もいいが・・・当たるのか？外れれば仲間に当たるぞ？」

「ッッ・・・」

満身創痍で構えるなのはだが、それにブロッサムアンデットは特に警戒もしない。
撃ってくるはずはないと高をくくっているのだ。

そして、それは正しい。

いま、この空間での非殺傷設定はつけられない。訓練場がこのような状態では、作動させるのは無理だ。
万が一仲間やヴィヴィオに当たっては確実に怪我をさせる。

無論、砲撃に設定をつけることも可能だが、そんな設定では不死生物であるこの敵に勝てるわけもないのだ。

「では、な」

「行か・・・せない！！！」

ヴィヴィオを抱えて去ろうとするブロッサムアンデットを飛び越すようにして、なのはが跳躍。その真上から砲撃を放ってピンポイントでその脳天を狙った。

放たれる細い砲撃。
着地もなまならず、地面に落ちるなのは。

しかし、ブロッサムアンデットはその真上からの砲撃を特に弾くでもなく、直撃したうえで耐えきっていた。

「もう少ししっかりと腰を据えて撃ってもらいたいものだ・・・・」

「！・・・あ・・・あぁ・・・・あァァァァァァァァァァァあ！！！レイジングハート！！！」

《ＯＫ．Ｂｌａｓｔｅｒ　３．Ｏｐｅｎ　Ｗｉｎｇ！！》

レイジングハートの応答と共にビットが三つ射出され、なのはの周りに展開される。
その各々に魔力が充填され、さらに周囲の魔力も根こそぎかき集めての集束が始まった。

「開け、翼！！」

バサァ！！

そして、レイジングハートからは翼の形をした魔力が形成され、多大な反動を噴き出していた。

それを見て、ブロッサムアンデットも右腕を突き出してその前に桜の花びらを溜め始める。
その数は今までの中で一番大きい。

なのはが集束している間に集まった花びらはすでに押し固められ、
直径はすでにブロッサムアンデットよりも大きく、その姿を隠して
しまうほど。
そして、この大きさでありながら、これはすでに圧縮されたものな
のだというのだから恐ろしい。

だがしかし、それを前にしてもなのはは一切引かずに叫んだ。

「もう奪わせない！！私の目の前から、大切な人が奪われるなんて、
絶対にさせない！！！」

あのときは救えなかった。
私たちの目の前で、あの人は消えてしまった。

私たちには何もできなかった。

もうあんなのはいやなんだ。
絶対に救ってみせるんだ。

救えるものを、根こそぎ全部！！！！
あなたにもらった、この力で！！！

「スタァライト――――！！！！」

《ＳＴＥＲ　ＬＩＧＨＴ　ＢＲＥＡＫＥＲ》

「ブレイカァァァァァァアアアアアアアあああああああああああ！！！！」

「超圧縮、桜撃砲（おうげきほう）！！！」

ゴォォ！！キュボッ！！・・・・・・ドゴォォォォアアアアアアアアア！！！

ビットから放たれた者も合わせ、なのはから放たれた砲撃計四本が、ブロッサムアンデットに向かって伸びていく。

それに対してブロッサムアンデットのため込んだ球体からはいくつもの弾丸がはじけて向かい、うねうねと様々な軌道を描いて向かっていった。

「あァァアアアアアアアあ！！！」

ドンドンドンドンドンッッッ！！！

砲撃と弾丸がぶつかり合い、次々と砲撃の方が消されていく。

そして・・・・・

「が・・・は・・・・・」

「強力だな。まさかこちらの弾丸が二発しか届かなかったとは」

地面になのはが倒れ、ブロッサムアンデットがその姿を見てもう一度腕を向けた。

そして、その先端にエネルギーが集まり、砲撃が放たれ・・・・

「危ない！！！」

それはなのはに命中しなかった。

倒れてしまったなのはを、長岡が走りこんできて抱え込みながら転がって回避したのだ。

しかし、それを見てあきらめるわけもない。

長岡も処分しとかないと面倒になる人間だ。ここでやれるのならばやっておいてしまいたい。

そして再びブロッサムアンデットが砲撃を構え、その右手から撃ち放つ。

ドンッ!!という爆炎と爆音が響き、長岡となのはの姿が消えた。

しかし

「ガウワウ!!!」

「む?」

その煙の向こうから、凩が飛び出してきてブロッサムアンデットに向かって噛みついてきたのだ。

みると、全身の毛が妙に焦げ、血も滴り落ちている。

煙の向こうに二人の気配があるところをみると、どうやらこいつがかばって、そのまま攻撃してきたのだろう。

「邪魔」

「ギャう！」

しかし、その凩を適当な感じで腕をふるって叩き落とし、空いた天井からを空を見上げるブロッサムアンデット。

「そろそろ退却か・・・・これ以上固執してはほかの戦士に狙われかねんな」

そう言って、ブロッサムアンデットが巨大な幹の上に飛び移っていき、地上へと出る。

また一人、奪われてしまったのだ。

ーーー

「アダッ！？」

「ど、どうしたのモモタロス！？」

「わかんねぇ・・・・扉に触ったらバチッて言いやがった！！」

飛び降りてでも早く到着し、下の皆を助けようと出ようとして、扉に手をかけたモモタロスがいきなり走った電流にたじろいでしまう。

その状況に、良太郎がどうしたのかと声をかけた。

「一体何が・・・・（ババッッッッ！！）うわっ！？」

しかし、そう疑問に思った瞬間、外からのであろう電撃によって、デンライナーが揺れ所々から火が上がる。

デンライナーには乗車車両と戦闘車両がある。

戦闘車両はかなり頑丈なのだが、乗車車両はそうでもない。相手の強さにもよるが、簡単に破壊されてしまいそうな代物だ。

そこに襲いかかってきたのは・・・・・・

「やっと出てきたかデンライナー」

地上に、一体の黒い影が立っている。
その影は片腕を上空のデンライナーに向かってかざし、なおも電撃を放ち続けている。

がたがたと揺れながら走って何とか着地しようとするデンライナー。
右から左へと上空を走っていくが、こいつの電撃はそれも追っていく。

「美琴嬢が目覚めたとき対処できるのは私だけなのでな。チャッチャと終わらせて私は帰らせてもらいたい」

エレクトリックエェルアンデット

そいつが、着地して炎と火花を上げるデンライナーに向かって悠々と歩いていく。

狙うは十人の少女、最後の一人。

未来の特異点だ。

to be continued

浸食（後書き）

今回は侵食された場での戦いでした！！

遅くなってすみませんでした。

どういう終わりにしようかとかは考えが付いていたのに、そこに至る過程が全然思いつかずにズルズルと・・・・

にしても士は助太刀に来れたのはいいけど結果的に逃げ道を与えてしまったようなものだと読みなおして思いました。

ディケイドとは一体何だったのか・・・・

愛紗と星、さらには長岡さん、最後には凩まで活躍したのに・・・・

蒔風

「さすが破壊者だ」

鞭ほどではないがしなる剣、って、実際結構厄介だと思うんですよね。

イメージとしてはただのロッドに近い感じですかね。先端は細いで

すけど。

そして、奪われるヴィヴィオ。

蒔風
「ウナギはやっと再登場か」

ええ。
美琴だってきっと何度か意識は取り戻すはず。

その時抑え込めるのはそれ以上の力を持ったこいつだけですから、
離れられなかったんでしょう。

蒔風
「で、気絶させてから来て、目が覚める前に帰るつもりか」

らしいね。
どうする電王！？

蒔風
「次回、敗北」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト

古手梨花
古手羽入
アルルゥ
高町ヴィヴィオ
ルーテシア・アルピーノ
イクスヴェリア
インデックス
御坂美琴
イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
ハナ

全十人

敗北

燃え上がるクロコダイルアンデット。

そこに向かって、クラウドのカードが投げられた。

そして・・・・

「そらっ！」

「ツッ！！」

そのカードが真っ直ぐにクラウドへと投げ返され、顔面目掛けて飛んできた。
それを指で挟んで止めるクラウド。

「ゴキブリ・・・か」

「うっせー。ほらよ、ワニのとっつぁん。大丈夫かよ」

そこに現れたのは、ほかでもないコックローチアンデット。

一刀との戦闘から離脱し、ここまでやってきたのだ。

「お互い翼人の相手は大変だねぇ」

「・・・貴様は一人だったろうが」

「体動く？」

「見て分かるだろう。ベルトが割られた。体は動かん」

倒れるクロコダイルアンデットと話すコックローチアンデットは、その状態を聞いてふーん、と軽く頷いてからクラウド・・・というよりも、その後ろにいる観鈴と彼女の護っている少女たちをみる。

それを察知し、クラウドと観鈴が身構えるが、おいおい待てよ、といったジェスチャーをして、コックローチアンデットがズルリ、と曲がり角の向こうから何かを引っ張り出してきた。

「・・・・！！恋！！」

「恋ちゃん！！」

そこから引きずり出されてきたのは、恋だった。
ここに来るまでの間に、こいつに見つかってやられたのだろう。

「この子スゲーのな。十五体くらいのアンデットを相手取ってたんだぜ？ドーベルの犬っ子と戦った後で満身創痍だったらしいのにさ」

「・・・イリヤをどうした・・・・！」

「んあ？ああ、大丈夫大丈夫。ちゃーんとほかのアンデットに任せてあるさね。この子も生きとる。ってわけでさ、取引しようや」

「なに？」

恋の体をぶらぶらと持ち上げて、コックローチアンデットがクラウドに取引を持ち出してきた。

その内容は、ここから自分たちを逃がすこと。
そうすれば、恋の命は助けてやる、といったものだった。

「そんな条件・・・・」

「飲めなきゃこの子はここで死ぬ。こっちはそれでも別にかまわないんだぜ？」

「・・・・・くそが・・・・・」

「ところがどっこい。そんな奴だからこうして今でも生き残ってんの。しらねーの？人間（おまえら）の後に繁殖するのはゴキブリ（オレたち）なんだぜ？」

こんな条件は飲む以外の選択肢などない。
人質がある以上、あちらに完全に利があるのだから。
こうして、返答は決まった。
いまだ言えないのは悔しさからか。

「・・・・・」

「沈黙はイエスととるぜ。ほら・・・よ！！」

「！　チッ！！」

そして、コックローチアンデットが恋の体をクラウドに向けてポーン、と高く投げ放った。

放物線を描いて落ちていく恋の体。
それをキャッチしようとし、クラウドが走り出す。

最初に行っておこう。
今投げられたこれは、恋ではない。

無論、コックローチアンデットが言っていたことも途中までは本当だ。

恋は満身創痍の体でアンデット十五体を相手にしてイリヤを守っていた。
そしてこいつと遭遇して、負け、奪われたのも正しい。

しかし、恋はそのままそこに放置され、イリヤだけは他のアンデットに渡して離脱させている。
ではこの場にあるこの恋は何か。

正解は――――とても気持ち悪いものだが、すべてゴキブリだ。
それが固まって恋の姿になっているに過ぎない。

こいつの考えとしては、こうして放ればクラウドは必ずこのように駆け込んでくる。

しかし、これはゴキブリの塊。キャッチした瞬間にザーーーーッ、と一気にぶちまけられるだけだ。

それによって全員の体がコンマ一秒でも止まれば、観鈴から少女たちを奪える。
クロコダイルアンデットに至っては最悪見捨てても構わない。

そしてその思惑通り、今クラウドは恋に向かって駆け出した。
後はキャッチさえしてくれれば、それで終わりだ。

そう思っていた。

だが

「翼人に人質は効かない」

スッ、と

その言葉を発しながら、クラウドがその恋を素通りし、まっすぐにコックローチアンデットへと突っ込んで向かってきた。

恋の体はというと、観鈴の衝撃波でうまくふわりと浮かされたのち、そのすべてがグシャリと潰されて一匹残らず駆除されてしまっている。

「なぁ！？」

「それが恋でないことは――――」

「最初からわかってたよ！」

翼人に、人質は効かない。
あくまでも基本的に、だが。

二人は、コックローチアンデットがこの恋を出した瞬間こそびっくりしたが、瞬時にそれが何かの擬態であることを見破っていた。

そして、あの取引。
明らかにこちらの意表を突くつもりだ。
だからこそ乗り、こうして裏をかいた。

翼人に、このようなコスイ手は通じない。

「終わり・・・・だ！！」
「ちょ、勘べｎ」

ドゴォァ！！！！

「なに！？」
「おぉう！？」

が、そこに巨木が床から飛び出してきて、二人の間を遮った。
おそらくはブロッサムアンデットによるものがここまで侵食してきたのだろう。

だが、そのいきなりの登場に対し、クラウドらとコックローチアンデットの頭の中は違った。

どちらも同時に考えた。
これはなんだと。

そこまではいい。掛かる時間は同じだ。

しかし次に、クラウドはこれは一体どういう攻撃なのかを考えてしまったのだ。
それに対しコックローチアンデットは瞬時にブロッサムアンデットによるものだということがわかっていた。

その差。

その差が、ここからの一連の動きでの、勝敗を分けた。

（いただきっ！！）

コックローチアンデットがその巨木の脇をすり抜け、クラウドを追い越して観鈴を乗り越え、少女たちの元へと辿りついた。
クロコダイルアンデットはそのついでで最初に外に向かって蹴り飛ばされていた。運が良ければ、他のアンデットが拾っていくだろう。

そして彼女らの意識を瞬時に刈り取り、二本の腕と二本の鉤爪で四人をかつぎあげ、その場を瞬時に離脱した。

「待てェっ！！」

「おうおうオレを攻撃すると、この子たちだってただじゃすまないぜ！！」

「当てなければどうということはない！！」

クラウドと観鈴を越えて、その背後で少女を奪っていたコックローチアンデットが、そのまま壁を破壊して外へと飛び降りた。
それを追って、クラウドも飛び降りながら剣を投げ、その背中に命中させていく。

「（ドドドッ）オグッ!?が、ハッ!!」

「お前たちはその子たちの魂を狙っている。この場では死なせないだろう?」

「ち・・・コスいのはどっちだよ!!」

背中に三本ほどの剣が突き刺さっても、いまだ腕から彼女らを放さないコックローチアンデット。

クラウドが最後の一撃だと言わん掛かりにファースト剣を振りかざして突き構え、開翼して真っ直ぐに落ちていく。

「雑魚は雑魚なりに役に立ちやがれ!!」

「なに!?」

が、そこでコックローチアンデットが梨花たち四人をバラバラに投げ放ち、ほかの箇所で戦っていたアンデットにキャッチさせて離脱させた。

しかも、今度も擬態による偽物を織り交ぜている。

すぐに判別できるとはいえ、その一瞬は大きい。

「はっは！！一匹見たら、あと二百万匹はいると思いなァ！！」

「そんなにはいない！！」

そういって、クラウドがアンデットを追っていく。
だがしかし相手が多い。
こっちは一人、逃げるあっちは四体。三体が鳥系で、一体が獣系だ。
他にも偽物が多くいるが、どれが本物かはわかっている。
しかし、どれを追おうか、というのが問題。

だが

「ブリザガッ！！！」

「ギッ！？」「ガッ！？」「ギェッ！！」

そこでクラウドは鳥系三体の翼を瞬時に凍らせ、自分は獣形のアン

デットを一撃で排除、そいつの抱えていたアルルゥを奪い返して、即座にほかの三体のもとに向かっていく。

今はいたるところでアンデットとの戦いが行われている。上級でない相手ならばそう苦戦もさせられないが、いかんせん数が多いのだ。下手なところに落ちて巻き込まれては大変だ。

上空から落ちてくる三体の鳥系アンデットに向かって、クラウドが飛び上がる。

しかし、十分に間に合うであろうそれを、邪魔するものが一体・・・・

ドォウ！！

「ッ！？砲撃！？」

「ゼァッ！！！」

両肩にイリヤとヴィヴィオを抱えたブロッサムアンデット――おそらくは地下訓練場から地上に出たところでイリヤを拾ってこっちに来たのだろう――が、クラウドに向かって砲撃を放ち、一発蹴りを放って一瞬だけ足止めをする。

クラウドがそれに対して蹴りを剣の面で受け、逆に二人を取り返そうとするが

「サンキューだ、桜の大将!!もういいぜぇ!!」

「な・・・」

「背中に三本突き刺さったくらいじゃあ、オレァやられん!」

「しっかり潰してもピクピク動くくらいだもんな」

「桜の大将、ちょっと黙っててくんねぇ!?ってか早く行け!!」

そこにとびかかってきたコックローチアンデットがブロッサムアンデットの皮肉に突っ込みながら、クラウドに向かって打ち下ろしの拳を命中させて地面にたたき落とした。

その隙にブロッサムアンデットは完全に離脱。

さらには落ちた鳥系の抱えていた梨花、羽入、インデックスも植物系アンデットが抱えてその場からいなくなってしまった。

落ちたクラウドはしゃがみ、片手をつきながらもしっかりと着地していたが、頭を上げた瞬間にコックローチアンデットが目の前に着地、蹴りを放ってきた。
それをガードするクラウドだが、勢いに体が後退させられる。

そして、その先で三体のアンデットに右足、左足、身体を掴まれ、磔（はりつけ）のように動きを止められ、コックローチアンデットの追撃の拳をまともに喰らってしまった。

「がっ・・・！」

「へぇ、これで壊れないとは凄い。でも・・・」

ガシッ

「こいつはもらったぁ！！」

「まて・・・ッッ！！」

クラウドからアルルゥを奪ってその場から離脱するコックローチアンデット。
クラウドは自分を押さえる三体のアンデットを即座に殴り飛ばし、コックローチアンデットを追おうと開翼した。

「レーダーでコックローチアンデットを追えるか！？」

『だ、ダメです！！今日強力な磁場が働いていて、レーダーが使い

物になりません！！』

「磁場・・・・だと！？」

クラウドが膝を落とし、地面に拳をめり込ませた。

コックローチアンデットはすでに遠くだ。

いまさら加速開翼しても、追い付くことはできない。

――――――

その場には良太郎や侑斗、モモタロス達イマジン、が倒れており、デンライナー、ゼロライナーは脱線、横転して転がっていた。

「さて・・・急いで戻るか。思いのほか時間がかかった。美琴嬢が癇癪を起してなければいいが・・・・・」

そういって、その場からエレクトリックエェルアンデットが走って行き、近くの川に飛び込んだ。

こうして、すべての少女は奪われた。
こともあろうに、この「ＥＡＲＴＨ」本部で。

真の意味で、「ＥＡＲＴＨ」初めての敗北であった。

to be continued

敗北（後書き）

奪われる少女たち。
すべて、回収されてしまった敗北の話です。

蒔風
「さて、そろそろ彼女らがどんな力を狙われたのか、って言う内約を教えてくれ」

そうですね。ではお教えしましょう

御坂美琴
純粋に電撃の力を求められて

インデックス
その身におさめた膨大な魔術所、そしてその知識

古手梨花

時読みの力、カケラの魔女としての魂

古手羽入
時間干渉の力、神の魂の取り込み

高町ヴィヴィオ
古代の王たる者の魂。特異なる七色の魔力

イクスヴェリア
兵器となる兵の製造。炎熱系の力を求めて

ルーテシア・アルピーノ
召喚の力を求められて。あらゆる兵や自分を送り込むための力

アルルゥ
全ての生物を統べる力。

ハナ
未来の特異点としての特性。全ての時間軸においての自分の存在の確立

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
以上の力を取り込むために、聖杯の器（すべてを内包しうる器）として許容量を増やすため

ですね。

蒔風
「じゃあ過去に戻って阻止しようとしても」

ハナの特異点で聞かない。

蒔風
「相手の行動は」

梨花ちゃまのカケラで読まれる。
まあ、そうホイホイできるものじゃないけど。

蒔風
「しかも最悪」

羽入の力で止められたり巻き戻される。
これもホイホイできるもんじゃないね
三回くらいかな？

蒔風
「ルーテシアの力で何か呼び出して・・・」

アルルゥで操れる。

蒔風
「確かフォーティーンって雷つかえたよな？」

美琴でパワーアップ。
未知の攻撃はインデックスの知識で対応。

ヴィヴィオの力もあるし・・・
イクスの力で兵隊も作りたい放題。

蒔風
「やべぇ、勝てないｗｗｗｗ」

いやまあ、こんなもんは「設定だけ」になりそうですけどね！！

蒔風
「オォォォイイ！！？？」

だって特撮とかの設定見てくださいよ。
それを踏まえて実際の映像見てくださいよ。

矛盾、結構ありますよね？

そんなんでいいんです！！

それに最終的には勝ってもらわないとだし。

蒔風
「ま、まぁな・・・・・で？結局あの年くらいの子供だった理由ってなんなんだ？最終的に見た目で年の判断してたろ、絶対」

それはおいおい・・・どこかで言わせますね！！

蒔風
「次回、みんな集まってから、どーしよー、って話」

ではまた次回

翌日

「ＥＡＲＴＨ」襲撃、および少女誘拐から、翌日

「つまりそっちの放火事件の・・・・」

「イクスヴェリア・・・イクスのあんな不完全な復活も、アンデットが絡んでいたみたいね」

「というか、あいつの言ってる風だとそのためにわざわざ解き放ったらしい」

廊下を歩きながら、一刀、ティアナ、理樹が二つの事件の関連性に関して話あっていた。

今回の襲撃で、「ＥＡＲＴＨ」本部のビルはかなりの損害を受け、現在修復中だ。

今三人が話している廊下は、巨大空中戦艦「瞬風」のである。

「彼女らがさらわれて・・・でもまだ動きがないんだ。どういうことだろう？」

「向こうにも事情があるということ？」

「わからない・・・そういう意味では、彼を連れてきたのは・・・・」

プシュ

「良かったかもしれないね」

「おぉお！！これが今の世界の形！！それにこの戦艦も素晴らしい・・・む！？これはマテリアというのかね！？ほうほう、これもまた別の世界の魔法の形。我々のは魔法科学と言ったところだから、こっちの方が本当の意味で魔法と言えるかもしれない・・・・こっちは伝染病のデータかい！？ふむふむ、雛見沢症候群・・・・その土地特有の・・・おお、時を超える電車だって！？こちらは古代の戦士のベルトに、鏡の世界！？待て待てこの聖杯戦争とはなんだ？サーヴァント・・・・ぜひともお目にかかりたい！！ま、まさかこっちは・・・」

そう言いながら三人が入った部屋では、連れてきたジェイル・スカリエッティがここの端末を使って様々なデータを見漁っていた。
無論、変なアクセスや下手な情報を見られないようにはしているが。

それでも十分らしく、ウヒョー、と興奮気味にドンドンデータを漁っている。
お目付け役の朱里と愛紗が椅子に座ってげっそりしている。

愛紗なんかは気力や気合いという物を見せてくれとせがまれ、朱里に至ってはものすごい量の質問攻めにあっていたのだ。
しかもこのテンションである。疲れるのは当然だ。

「ジェイルさん」

「!?おぉおおおおお!!翼人のお二人!!ぜひともこれを・・・・」

「そんなことよりも今回の事件でちょっと・・・」

「見てくれ!!がんばったよ・・・・ティアナ・ランスターのスリーサイズをブフォア!?」

「なんでそんなもん手に入れてんのよあんたはッッ!?そこッ!!
理樹も一刀もデータを見るなぁぁあああああ!!!!」

ここからどうやってハッキングしたのだろうか。
とりあえずスカリエッティの顔面にクロスミラージュでぶっ放してめり込ませ、それをさりげなく手元に持ってきてまじまじと見ている二人の首元にダガーを押し当てるティアナ。

「はっはっは、スカさんＧＪ」

「ＧＪ！！」

「ご主人様！？理樹殿も鈴殿に言いつけますよ！？」

「やばっ」

「と、思ってすでに事情を知った鈴さんをこちらにご用意しています」

「理樹のバカ！死ねぇーーーーーーーー！！！」

「ガンキンッ！？（ドキャッ！！）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・と、漫才はそれくらいにして」

「顔をそんなにボコボコにされて漫才と言えるのかい？」

そんなこんなで本題に入る三人。

少女らの力など、事件に関する内容を聞いたうえで、スカリエッティが邪神に関しての推論を話し出した。

「あくまでも推論だがね？彼女らの力は邪神を強化するためのものだ」

「ああ・・・それはもうわかっている」

「時間や存在に関するもの。単純に力と知識、さらにはそれだけのものを受け入れるだけの器・・・」

「そう、そのために彼女たちはさらわれたと考えるね。全く、十分に世界を破壊しうるじゃないか」

「なんであの年なのか、とかは分かったの？」

「わからない・・とまでは言わないが、まだ予測の域を出ないよ。推論にもならない」

「そうか・・・」

「それに、いまさらそれを知ってもしょうがない。それよりも・・・」

「なんで全員揃ったのにいまだ動きがないのか、ということね？」

そう、そこが不安なのだ。

なぜせっかく全員がそろったというのに、その邪神というのが出てこないのか。

もし既に活動しており、人知れず動いているのならば厄介だ。

「ふむ・・・これも推論だがね」

「それでも十分です」

「なにぶん十人という人数だ。対象も少女・・・つまりは比較的不安定な年齢。取り込むということは一つにすること。そのために、

全員がある一定値以下にまで落ち着かないとダメなんじゃないかな？」

「つまり、今は復活させるために調整中・・・ってこと？」

「私はそう考えるね。もちろん、もう復活しているという考えもなくはないが」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「橘さんが石板を見つけた場所は？」

「いいや、もうすでにもぬけの殻だった。おそらくあいつらがほかの場所に移したのだろう」

戦艦「瞬風」の食堂

そこで剣崎と橘が、アンデットたちの行方に関して話しあっていた。
邪神の復活にはあの石板が必要だ。

だが、橘が見つけた洞窟の中に向かっても、そこにはすでに石版はなかったらしい。

「復活するにはあの場所でなくてもいいらしいな」

「石版はゲート・・・ってことですか」

「ああ。だからどこで復活してもおかしくない」

「ほかの時限世界等に逃げ込まれたらお手上げだな」

「あ、シグナムさん、ヴィータちゃん」

「おいこら。なんであたしだけ「ちゃん」なんだ」

「一緒にいいか？」

「どうぞどうぞ」

「おい、なんであたしにだけわざわざ椅子に台を乗っけるんだ」

「それで・・・」

「おい、なんであたしの頭を勝手に撫でてんだぁぁあぁぁあアアアアア！！！」

「ちっこいし」
「ちっこいからだろう」

「ウがぁぁぁアアアアアああああ！！！」

閑話休題

「で、次元世界に逃げるかもって？」

「ああ、そうなれば範囲は一気に広がってしまう。探し出すのは至難の業だぞ」

「あ・・・うーーーむ・・・」

シグナムの言葉に、剣崎が唸る。
確かに、石版があくまでゲートであるならば、どこであっても邪神は出てくる。
どの次元世界でも別にかまわないのだ。

だが、橘がそれを否定した。

「いや、それはないな。アンデットの中にも時を止めるような奴はいたが、次元を操るようなものはいなかった」

「つまり、あくまでもこの世界の中？」

「ああ」

「でもよ、もし今回復活した奴らの中にそういう力を持った奴がいたらどうするんだよ」

「そんなことを言ってはこの話し合い自体無駄だな」

「うぐ・・・」

ヴィータの言葉に、にべもなく返す橘。
ストレートな返しにヴィータが詰まってしまうと、剣崎が慰めるように何かを差し出してきた。

「ほらよ、ヴィータ。プリンだ。元気出せって」

「お、おう・・・って！プリンであたしを釣れると「じゃあいらない？」・・・・もらいます」

こ、こんなものに釣、釣られ、釣ら・・・釣られクマーーーー

ーーー

「大丈夫でしょうか」

「この子はアンデットだから死にはしないわ。もう少しすれば治るわよ。大丈夫」

そこのベッドに倒れているのは、ブロッサムアンデットに勇敢にも立ち向かって負傷した凩であった。

傍らには長岡が付き添っており、もう大丈夫だとシャマルが容体を見たうえで判断していたのだ。

部屋の隅にはザフィーラも伏せている。

「さすがね。治しているうちから細胞が再生していっていたもの。毛並だってもう全部生えそろってるし・・・・・」

「怪人・・・と言ってはなんだが、そう言った姿にもならないところを見ると、力がないゆえにバトルファイトから降ろされた種族なのだろう」

「それなのに上級に向かって行けるなんてすごい子ね」

「守護する者として敬意に値するな」

「クゥーン・・・ワン！！」

「あら、お礼言ってるのかしら？」

「・・・俺に犬の言葉は解らん」

ザフィーラの言葉に反応したのか、凩が元気よく、とはいかずとも返事をするように吠えた。

ザフィーラはオオカミなのでわからないことはないと思うのだが・・・

本人がわからないのならわからないのだろう。

「それにしても、結局長岡さんの役目って何なのかしら」

と、そこでシャマルが気になっていたことを話題にした。

本当に、長岡の役目とは何だったのだろうか？

「・・・わかりません。伝承も口伝のみでしたし、書物があったと言っても祖母の作った絵本くらいですし」

「邪神を抑え込む・・・つまりは復活した際の生贄としての役割だったのだろう？」

「ええ・・・しかしそれはあくまでもできるというだけで、本来の役割とは違うと、あのアンデットは言ってたわ」

「本来の役割ねぇ・・・・・」

「それに、どうして復活に関して私じゃなくてもよくなったのかも気になります」

「じゃあ・・・・」

「私もついていきますよ、最後まで。それが私の依頼だったもの」

――――――

「おーい、どうだい調子は」

「あと三日、といったところかな。いやはや全員が年頃とあっては調節も大変だ」

「ウナギのおっさんも大変だな。ここにつきっきりだろ？」

「俺が離れては美琴嬢に対抗できんだろうが」

どこかの洞窟

近くに海があり、陸と海との境界線は海岸でではなく、断崖絶壁の崖で分けられていた。

崖の上は森が広がっているが、この洞窟があるのは崖の方だ。

そこに開いた穴の中に石版が立たされており、その前に少女たちはクリスタルのようなものの中で眠らされている。

少女たちは円形に並べられており、その一つ内側にホログラムのような光の輪が浮かび上がっていた。

それはそれぞれの前で窪んでいたり突き出していたりで、きれいな

丸にはなっていない。

「イクスヴェリアは比較的落ち着いているな」

「美琴嬢がなかなか落ち着いてくれなくてな。みろ、輪が尖ってる」

「森の母(アルルゥ)っ子は落ち込んでんなぁ・・・・」

と、この会話からわかるようにこの輪は彼女らの精神状態を表している。
それがきれいな円形になったその時、彼女らの魂を邪神に捧げる準備が完了するのだ。

「しかし落ち着いてきているな」

「ああ、少しずつだが」

「いいかー?抜け駆けすんじゃないですよ?」

「ふん。邪神の復活、そしてその力を自分のモノに、か」

「復活したのちに五人で戦い、勝ったものが文句なしで邪神に飛びつく。それでいいな?」

「異議なーし」

「そいつが逆に邪神に取り込まれたらどうする？」

「その時はその時だ。次の奴が飛び込めばいい。少なくとも、必ず俺らの内、一人が手に入れる」

その力を以って地上を制し、己が種族の繁栄と栄光を

計画は、着々と進んでいる。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

翌日（後書き）

と、いうわけで襲撃から翌日の話ですよ！！

蒔風
「なあ、途中で次元世界って言葉が出てきたが」

ああ、あれですか。
この世界に統合されてしまったのは・・・・

なのはの世界からは地球とミッドです。
一期、二期そして三期の舞台すね。

だからこの世界では地球とミッドは同じ世界にあるんですよ～

蒔風
「他の世界は普通に次元世界か」

そそ。
ディケイドの回った世界もそんな感じで漂ってます。

蒔風
「アンデット曰く、後三日・・・か。長岡さんのあれこれもわからないし、凩もあれだしな」

まだ少しだけ謎が残る第三章！！
次回、焦り始める「ＥＡＲＴＨ」

蒔風
「ではまた次回で！！」

焦燥

さらにその翌日。

「ＥＡＲＴＨ」襲撃から、二日目。

巨木を撤去し、とりあえず形だけは見繕った地下訓練場。

そこで、数名の人間が訓練を行っていた。

その人物は、ハクオロや上条といった、さらわれた少女の仲間たちだ。

昨日

少女たちがさらわれたと聞いて、彼らは呼び出された。
そこで、どれだけの戦いがあったかを知ったのだ。

「俺たちもつれて行ってくれ」

今まで何があったのか、その説明を聞いて最初にそう言いだしたのは上条だった。
しかし、その思いはこの場にいる皆、同じだっただろう。

アンデットたちの居場所がわかり、そしてそこへの攻撃に向かう時には、自分たちも加えてくれと。

だが、全員を連れていくことはできない。
それに、彼ら自身のこともある。

「上条。お前はアンデットの肉体に対抗する術はない。お前を連れていくわけには・・・・」

と、上条には言い

「ハクオロさんも、自国のことがあるじゃないですか。それを放ってはいかないでしょう」

と、ハクオロに伝え

「圭一やレナは・・・・“輝志”出身とはいえ力は一般人に限りなく近んだ。危険すぎる」

と、圭一たちに話した。

だが

「だったら俺が強くなる。俺にだってサポートはできる。あいつら一発ぶん殴ってやる」

「これはもう国の話ではない。私の家族が連れ去られたのだ。私個人として参戦させてもらうぞ」

「梨花ちゃんと羽入ちゃんは俺たちの家族で仲間だ。力がないからって、引っ込んでられないぜ」

と、三者三様に返答し、絶対についていくと言って聞かないのだ。

確かに、戦力は多い方がいい。
あっちには上級アンデット五体に加え、さらには中級・・・つまりは普通にアンデットも多数いるのだ。

ゆえに、仮面ライダーたちにはすべて声をかけ、さらには武将や数名のサーヴァントにも、都合がつく限り協力を頼んだ。

相手は決して弱い相手ではない。

今回出てきた上級は、かつてブレイドたちが戦った上級よりも上の存在だ。
それらには翼人が当たるしかない。

そして、中級のアンデットもピンからキリまでいる。
その中に突入する可能性が高いというのに、ハクオロ等はともかくとして、圭一などは危険が多すぎる。

よって、ここでしっかりと訓練し、その結果を見て大丈夫かどうかを見ているのだ。

「瞬風のクルーとしては乗せられないのか？」

「乗せていくだけはできるけどな・・・それでもやっぱり危ない」

その訓練の様子を見ながら、さっきまで参加し、今は休憩しているアーチャーと一刀がそうぼやく。

彼等だって、連れて行ってやりたいのはやまやまだ。
しかし、それができるほど簡単な相手ではないし、簡単な現実ではない。

「最終的に全員をふるいにかける。そこで連れていけないと判断したら・・・しょうがないけど」

「置いていくしかないな」

「・・・ああ」

そういって、時計を見る一刀。
そろそろ訓練の交代時間だ。

ーーー

無理もないだろう。

わかっている正確なアンデットは五体。
さらには以下のアンデット達まで含めると、その数はいまだに把握しきれていない。

そんななか、どのようなワードで検索すれば引っかかるというのだろうか。

「アンデットと戦ってきたＢＯＡＲＤのデータからいろいろと調べているのですが・・・・」

「くそ・・・一体どこにいるんだ・・・」

部屋にいるのは数名のオペレーターだ。

この体制で昨日からずっとやっているにもかかわらず、結果は散々なのだから、クラウドのイラつきもわかるというものだ。

こうしている間にも、あっちの準備は進んでいるのかもしれない。
しかも、この考えも推測にすぎないのだから余計に焦燥感を煽ってくる。

「・・・・どこにいようと、必ず見つけ出してやる」

そう、かならず、叩き潰して見せる。

――――――

・・・

場合によっては

あと少し、あと少しで安定する・・・よし、こい！！
やった！ってなんでそっちがそうなるのーーーーーーー！？

みたいなことも多かった。

こんなものにも物欲センサーってあるのだろうか？

「本当に勘弁してほしいっての・・・あの方たちを維持してくのもよ、そう長くできるものじゃないんですよね」

「ドーベル、お前はいい加減・・・いや、もういい」

「それよりもどうする。このままでは力を手に入れる以前の問題だぞ」

「・・・・・まったく。どうしてそうお前らは自分から無理に変えようとするのか」

が、その言い合いを眺めていたブロッサムアンデットが、呆れたように溜息をついてそう一言いってきた。

「もし本人を弄って変わらないなら、周囲のものを変えればいい」

「周囲？」

「なんだ？景色でも変えるってか？」

その言葉にはてな、と首をかしげるドーベルマンアンデットにコックローチアンデット。

が、それに対してクロコダイルアンデットとエレクトリックエェルアンデットは気付いたようで、顎に手を当て一考していた。

「だがな・・・それは同時に危険だぞ？あっちは総力を挙げているだろうからな」

「安定から復活まではそうかからん。その間くらいの時間稼ぎに問

題はないだろう？」

「そうだな・・・・最悪、復活したらその場で取り込んで殲滅させてしまってもいい」

くっくっくっく、と実にいい考えが浮かんだと笑う三体。

二体はわけがわからんと首をかしげるが、話を聞いてなるほど面白い、と同時に笑いながら拳を握った。

「ＥＡＲＴＨ」に、アンデット

両社とも進まぬ状況に焦り、そしてそこからの脱却を見つけあのはアンデットだった。

計画は実行される。

その夕方から夜にかけて

彼らのいる海辺の断崖絶壁の洞窟

その上に生い茂る森の木が、たった一晩ですべて桜に変わってしまっていた。

to be continued

焦燥（後書き）

みじかっ！？

短いくせに実に時間がかかって申し訳ございませんでした！！

この数日間、私が何をしていたかと申しますとズバリ、レポートでございます。
といっても一つだけですが。

今回言われた課題は

・「新自由主義と「公共」」というタイトルで書け。

・５０００文字をワードで

でした。

そのレポートの存在を忘れて前日まで遊び呆けていた私。
アルバトリオン一人で全破壊とか楽しかったなぁ・・・・

そして、決戦の夜。

１００円自販機で缶コーヒー「ＢＯＳＳ」を一種類ずつ買う私の姿がそこにありました。

種類は「洗練の極み」「アイスコーヒー地中海ブレンド」「ＨＡＬＦ　＆ａｍｐ；　ＨＡＬＦ」「アイスラテ」「カフェオレ」「贅沢微糖」「レインボーマウンテン」でした。珈琲戦隊ＢＯＳＳセブンｗｗｗｗ

それを０時、１時、２時と順番に一巻ずつ飲んで、レポートを一気に書き上げましたよ。

ですが・・・６本目、５時まではよかった。贅沢微糖までは。しかし６時。レインボーマウンテンに手が伸びたものの、私はプルタブを開けられませんでした。

え？なんでかって？

そりゃあ両手が震えて・・・というか痙攣してましたからｗｗｗｗ

よくよく考えてみれば１時間ごとに２５０ｍｌを６本飲んだということは合計１．５？

それだけのコーヒーを飲んで徹夜とか、私は馬鹿ですか。

カフェインは薬物ですからね。
みなさん、過剰な摂取はやめましょう。中毒になります。

自販機にはあと「ブラック無糖」があったのですが、本当に買わなくて良かったと思ってます。

そして寝たら辛いと思い起き続けて、目の前にあったカップラーメンを朝食に食す。

直後、胃袋が飛んでもなく重くなって、ぐるぐると回りだしました。
唸りをあげて回ったんですｗｗｗ

その気持ち悪さにダウン、６：３０から８：３０まで仮眠し、それでも死にそうなほどキモチワルイ。

たぶんケミカルＸを飲んだらこんな感じ。
というか吐き出せばそれがケミカルＸ。

あとは「お砂糖」「スパイス」「素敵なものがいっぱい」あれば、パワーパフガールズができるところだったと本気で思います。

と、いうわけで吐けば楽になるかと思ったが、喉に指をつっこんで

も出てくるのは涎ばかり。

胃袋が気持ち悪がってるのに身体は拒絶しないってどういうことｗｗｗｗ

結局その気持ち悪さを携えて大学まで二時間の電車の旅。
揺れないでありがとうございました、京急さん、東海道さん

大学で友人に話したら1．5リットルのことを言われてから「お前良く死ななかったな」と言われました。
レポートは無事提出。死にかけたかいがありましたよ、ええ。

震えたてのせいで表示の字はブレブレでしたけどね。

それが、木曜から金曜にかけての出来事でした。
本当にもう二度とやらない。

そのまま帰宅後はぶっ倒れて何もできませんでしたもん。

反省も後悔も、あるんだよ

ちなみに今も私の目の前にはレインボーマウンテンが残っています。
おのれ、どうしてくれようか。

と、いうわけッで本編には一切触れずにあとがき終了！！

次回、突撃しまーす

ではまた次回

覚悟

「なに、これ・・・・・」

モニターに映ったそれを見て、観鈴がそう呟いた。

モニターにあるのは、ある衛星写真。
森がサクラに浸食され、見るも美しい桜の森が出来上がってしまっているのだ。

その隣には、何倍速かは知らないがそうなっていく映像も流れている。

こんな出鱈目な力は、一つしかない。
と、いうか数名はこの力を目の当たりにしているのだから、わからないはずがない。

「ブロッサムアンデット・・・・」

「間違いねぇな。あんとき見たのと同じだ」

観鈴の推測に、隣に立った士が肯定する。

あからさまなものだった。

これはもはや見つけてくれというようなもの・・・というか言っているのだろう。

これは誘いだ。

「だが・・・」

「行くしかない・・・ですよね？」

そう、行くしかない。

彼らに選択肢など、ありはしなかった。

ーーー

「こっちの準備が整っていないうちは無理。出発は、明日」

「明日・・・・」

「と、言うわけでいきなりだけど、連れていける人間をここで振るわせてもらうよ」

「！」

一刀の宣告。

だが、当然だろう。ことは一刻を争うかもしれないのだ。

悠長になどしていられない。

「まず・・・仮面ライダーの方たちは・・・」

「俺ァ絶対に行くぜ。文句は言わせねぇ」

「文句はないよ。全員に来てもらいたい」

モモタロスの言葉に、一刀が首肯してそう言った。

彼らは戦力としては申し分ない。
一刀としては、彼らには中級アンデットの対処を頼みたいのだ。

無論、上級アンデットとの戦闘に参加してもらえれば心強いのだが、相手の中級がどれだけいるかわからないのでは、安易に上級の相手をしてくれとは言えない。

翼人は上級にあたる。それはもう決定事項なので、彼らにはまずそちらの相手をしてもらいたいのだ。

同じ理由でサーヴァントたちにも声がかかった。

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカー
そしてマスターである士郎、凛、桜もである。

キャスターは家庭がどうのこうのと結局来なかったし、そのキャスターの許可なしにはアサシンはあの場から動けない。

ギルガメッシュに至っては居場所すら知れなかった。

そして・・・・

「ハクオロさん、あなたには来てもらいたい」

「わかった」

「じゃあ俺たちもついて「だけど、オボロさんたちはだめだ」なに？」

ハクオロが呼ばれ、それに対してオボロも意気込んでいたが、一刀が連れてはいけない、と来ることを許可しなかった。

曰く、国（トゥスクル）の方があまりにも危険だからというのだ。

一国の主が飛び出すということは、それだけでも大変なこと。

今こうしてここに居揃っているのも、実は大変なことなのだ。

それなのに全員が戦闘に参加しては、どうしようもない。

国を回すということは、そんなに甘くない。

「ハクオロさん一人抜いた以上、そっちから抜く余裕はないはずです。宮殿の修繕もまだ終わっていないでしょう？」

「う・・・ぐ・・・だがな・・・」

オボロも頭では分かっている。しかしそうはいってもすんなりとは呑み込めないのだ。

みすみすと仲間が奪われ、そしてそれに奪還にも向かえないのはあまりにも悔しすぎる。

だが

「オボロ」

「・・・・兄者」

反論しようとするオボロを、ハクオロが制した。
その言葉には、絶対の信頼がある。

「私の留守を、お前に任せたい。アルルゥと共に、帰ってくるからな」

「・・・・兄者が言うなら仕方ねぇ・・・今回は引いてやるからな！」

「ツンデレ乙。じゃあつぎは・・・」

「おい！！今なんか聞き捨てならねェ言葉が・・・・・！！」

そういうオボロを華麗にスルーし、一刀がエルルゥにも声をかける。
今回の戦いはおそらく大きなものになる。どうしても医療班が必要

なのだ。

その言葉に、手を握ってきてまで感謝するエルルゥ。

次には・・・・

「上条。お前にも来てらいたい」

「俺でいいのかよ？」

「そ。相手のアンデットにもし、永続する能力を持った奴・・毒とかな？そういう「奴」の攻撃を食らった人のを助ける側に向かってもらいたい。要は医療班だ。戦闘員じゃない。」

「わかった」

「絶対に外とか出んなよ？お前はあくまでサポートなんだからな！？」

「わかった。殴ればいいんだろ？」

「こいつだめだ。わかってねぇ」

そんな上条を何とか言いなだめ、納得させる一刀。
かなり疲れた顔をしている。

そして、残ったのは・・・・

「圭一たちは・・・・」

「解ってるさ」

「・・・・ごめんな」

悟った、というよりも、最初からこうなることがわかったような顔をして、圭一が一刀に言った。

実をいうと、この一日にも満たない訓練などには意味はないのだ。

彼らが納得するための時間。ただそれだけ。
連れて行くメンバーは最初からすでに決まっており、そこに彼らは載っていなかった。

「わかってたさ。俺らじゃどうにもならない。俺たちの力は、そんなに強くない」

「うん・・・アンデットに勝てるなんて、そこまで強い力、私たちにはないもん」

「ですので、皆さんに任せますわ。ぜーったいに梨花と羽入さんを助けてくるんですのよ！！」

圭一、レナ、沙都子と順番に一刀に声をかけ、頼んだと言って肩を叩いていく。

重い

誰かを救う、救わねばならないということは、ここまで重かったのかと、本格的な戦場慣れをしていない一刀は初めてその重さを知った。

無論、彼も元の世界では一国の主だった。

人の命の重さは嫌というほど知っているし、実際に戦では他国、自国共に民を失っていた。

戦場にも立ち、そこから目を逸らさなかった。

しかし、それは失う、ということを自覚し、肝に銘じ、覚悟するということ。

こちらの場合は、失わず、必ず全員で戻る。誰も失わない。もちろん最初からずっとその思いは変わっていない。

だが、今はその気持ちを心に秘めながらも、さらにほかの者のその願いも背負う。

自分の覚悟だけではないのだ。
他の誰かの覚悟をも背負うということ。

それは一体どれだけの重量があるのだろうか。

そして、自分の知る限り最も多くの願いを背負い、戦い続けてきた

「彼」はこれだけの重圧を背負っていたのか、と。

「・・・・ったいに」

「え？」

「絶対に・・・助けて見せるさ」

今ならわかる。

「彼」がなぜああも「世界最強」と言っていたのか。

つまりは、そういっていなければ自信が保てないからだ。

焚き付けろ。

魂を燃え上がらせろ。

身体を動かせ。

信じ続けろ。

そしてそれを胸にしながら達成した時、彼は「彼」に追い付けるのだ。

「なんたって、俺は世界最優だからな」

だから言う。

最強はあいつのモノ。だったらオレは最優だ。

ーーー

夜が明ける。

瞬風のドックへと向かう、廊下の途中にある準備室。

そこで四人の翼人が、いつもとは違う服装でそこに集まっていた。

「準備は？」

理樹が扉の脇に寄りかかり

「オーケーだ」

一刀が長椅子にどっしりと座って膝に肘を付け

「大丈夫」

観鈴がパタンとロッカーを締め

「行くぞ」

クラウドが黒いコートをバサリと羽織ってドアを開けて外に出る。

もう、準備はできた。

黒いスーツに身を包み、ビシリと決めて、グラサンまでかけている。

さあ、殴り込みだ。

あのクソ野郎共をぶっちめてやろうぜ。

to be continued

覚悟（後書き）

翼人、一刀の覚悟でした。
そして出陣。

蒔風が世界最強

だったらこっちは世界最優だ、と。

たぶんこの先で他の翼人も言っていくと思います。

最後、なんでスーツかって？
なんだかかっこいいからさ！！
この小説のキーワードは「熱けりゃいいじゃん」だぜ！！

イラストとかでなんかキャラが黒スーツでキメて並んでるの見ると燃えません？

ワンピースとか見るとそう思いますｗｗｗ
ｐｉｘｉｖでなのはのそんなイラストも見たことあるし。

あと戦闘服で上る朝日に向かって行く姿を、斜め後ろ下から眺めるイラストもかっこいい。

「行　く　ぞ」みたいな！！

上条さんはあくまで医療班にしました。
瞬風から出しませんｗｗｗｗ

だから戦闘シーンもありません。

いつもお前の戦闘シーンがあると思うなよ！！
ぜってー抜けださせないからなぁ！！！

ちなみに私は上条さん大好きです。
アンチではないですｗｗｗｗ

でもなんか・・・彼まで入るとめんどくさくなりそうなので。

ただえさえ仮面ライダーとかサーヴァントたちが「周りで戦っている人たち」になりそうなのに！！
最悪なのはたちもそうなりそう・・・・

あ、でも電王とフォワード陣は少し絡ませるかも。

そろそろ最終決戦へと行きますよ！！！

次回、突入！！！
ではまた次回！！

開戦

「来るかねぇ？」

「来てもらわないと困る。そのためにあんなもん生やしたんだからな」

洞窟内

そこで五体のアンデットが立って話し合っていた。

最奥には石版があり、その少し前に少女たちが円形に並ぶ。
彼らが立っているのはさらにその少し前。

姿は見えないが、横穴には無数のアンデットがひしめいている。

「桜（あれ）をやったのが昨日の晩。だったら来るのはそろそろだ」

そういってブロッサムアンデットがクイ、と顎を上に向ける。
そのさきには岩の天井があるだけだが、そのさらに先の地上には確かに桜の森がある。

「これで来ないならもう直接連れてくるしかないな」

「これでどーにかなんのか？」

「そもそもあのままじゃどうにもならなかったんだ。やるだけやってみようぜ」

「そうだねぇ・・・それに、来たみたいだぜ」

ゴ、ゴン・・・――――――――

洞窟の入り口に当たる場所。

岩で蓋をされたそこからそんな重い音を立てて、少しずつ崩れていき、外の光が差し込んできた。

それに反応してか、周囲の穴にいるアンデット達が近くまで出てきて、暗い穴の中でギラギラと眼光を灯してぎゃあぎゃあと騒ぎ出している。

そして、岩が崩れて全開された。
海から上る朝日が、まっすぐに洞窟の中を照らし出して入ってきた四人をシルエットにして黒く染め上げる。

「ようこそみなさん!!ですが、まねかねざる客というのは好みませんゆえに、とっとと名乗りを上げてくださいましぃ!」

ドーベルマンアンデットがパンパンと手を叩きながら、おどけた態度で前に出、丁寧な言葉づかいから乱暴なそれに変化してそう言う。
それに対して呆れたような溜息をだし、その四人が名乗りを上げた。

「直枝理樹」

「クラウド・ストライフ」

「神尾観鈴」

「北郷一刀。俺たちの大切な仲間を返してもらいに来た」

ギィン・・・・！！！

彼らが名乗りを上げた瞬間、アンデット達の背後でそんな音がして、石版が淡く光りだす。

しかし、そんなことは気にしないと言わんばかりに今度はクロコダイルアンデットが前に出て四人に言った。

「さて・・・来てもらって悪いが、早々におかえりいただこう。それともここでやるきか？洞窟が崩れれば、彼女らも死ぬだろうが？」

「・・・・さいですか」

「・・・・・は？」

ジャコン

「言ったことを忘れているようだな」

ガシャ、ガキンッ

「翼人に人質は効かない」

ブォン、ガシャコッ

「ここをぶっ放して、崩壊より前に助ければいい」

チャキ

「ちょっと、大胆かな？」

四人が次々と大型火器をや大型銃器を一刀の翼から取出し、それを構えて引き金に指を翔ける。

その光景に、アンデットどもがギョッとした。

自分たちはあんなものでやられないが、少女たちに当たったらこいつらどうするつもりだ！？

「問題はない。俺たちの救助の方が早い」

「じゃあ・・・いこっか？」

「行こう！」

「派手に・・・いくぜぇぇえええええ！！！」

雄叫びを上げる。

「ガチリ」と小さな引き金を引く音がして、その直後、圧倒的な爆発と破壊の音が、嵐となって洞窟内に吹き荒れて行った。

世界をめぐる、銀白の翼

第三章　X

開戦

「うぉぉぉオオオオオオオおお！？」

ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴンッッッ！！

いきなりぶっ放されたその無数の銃器の勢いにビビりながらも、ブロッサムアンデットがとっさに腕を地面に突っ込んだ。

直後、アンデット達と翼人たちの間に巨木が現れ、それがその銃弾や巨砲を受け止め、さらに洞窟の全域に張り巡らせられて崩壊を止めた。

その膨大な破壊のための物量は防御に出した巨木を跡形もなく吹き飛ばし、アンデット達を露呈させた。

「なんて無茶苦茶な奴らだ・・・・！！！」

「第二射！！」

「させるかァッ！！」

そこからさらにぶっ放そうとする翼人共に対し、ブロッサムアンデットがもうさせないといって砲撃を撃ち放った。

それを受けて四人を爆煙が包むが直後、その煙の中から現れたのは、誰も来ていない空のスーツだった。

「なに!?うぉっ!?」

それを見て驚くブロッサムアンデットだが、目の前に翼人が現れてさらなる驚愕の声を出した。

見ると、ほかのアンデットの元にも翼人が掛け迫っており、今にも戦闘を始めそうな勢いだった。

「来い!!」

「っと、おうっ!?」

まず、クラウドがドーベルマンアンデットの後ろ首をひっつかんで天井に投げ放ち、さらにそれを追って自身も突っ込んでいった。

その勢いは天井を突き崩し、そのまま地上にまで突き出していった。

次に、一刀だ。
一刀が無数の武器でエレクトリックエェルアンデットを横穴に押し込むようにして突っ込み、そのまま暗闇の中へと消えていく。

さらに理樹。
クロコダイルアンデットの四肢にリング状にしたバリアをはめて動きを止め、ドてっ腹にハンマーにしたバリアをブチ当てて洞窟の入り口外へとすっ飛ばす。
そのままクロコダイルアンデットは海へと弾き飛ばされて落ち、理樹も後を追って飛び込んで行った。

観鈴はブロッサムアンデットを相手にし、クラウドが開けた穴から地上に出、桜の森の中へと突っ込んで向かう。

「各個撃破する気か・・・だが俺の相手は誰になんのかな?」

そこで取りこぼされてしまったコックローチアンデットが、さて誰の加勢に行こうかとそれぞれ四人の向った方向をキョロキョロと見渡し始めた。
さらには横穴からは中級アンデットもわらわらと出てきている。

こいつらが加勢に向かったら、翼人と言えども勝てるかどうか。

しかし、そうはならない。

「てめえの相手は俺たちだ害虫野郎！！」

クラウドの開けた穴がガラガラと大きな穴へと広がったところで、連れてこられた「ＥＡＲＴＨ」メンバーが穴を囲むようにして見下ろしていた。

そして一気に飛び降りてきて、その他大勢のアンデットどもとの戦闘が始まった。

「おぉおぉ、派手だねぇ。じゃあ俺は今の内・・・」

「テメェの相手は俺だといったろ？」

『またコックローチの相手かい。だがその力は検索済みだ』

そこから穴をはいあがりどこかへと行こうとしたコックローチアン

デットを待っていたのは、仮面ライダーW、ディエンド、そしてハクオロの三人だ。

まるで最初からこいつがこうして上がってくることを把握していたかのように、この三人は待ち構えていた。

『こちらからも援護します』

「ありがとう。でも僕らでやってみるよ。翼人たちの援護にも何人かもう向かってるみたいだし」

こうして、戦いの幕は開かれた。

終末に笑うのは、いったいだれなのか。

《くっくっく・・・・せいぜい戦え。その力――――――――私のために完成させるがいい》

まだ、終わりは見えない。

to be continued

開戦（後書き）

ド派手に殴り込みしての開戦でした！！
でも短いなぁ・・・・

と、いうかなんというストロングワールドｗｗｗｗ
なんのためにスーツ着たのとか、こまけぇことはいいんだよ！
カッコ良ければそれが正義だ！！（えー

と、言うわけで

クラウドＶＳドーベルマンアンデット
理樹ＶＳクロコダイルアンデット
一刀ＶＳエレクトリックエェルアンデット
観鈴ＶＳブロッサムアンデット

を基本といたしました。
もちろん、各人に援護というか助けはいますけどね。

そしてコックローチアンデットの相手は何人かでしてもらうことにしました。

でもこうなると誰から書こうか悩むなぁ・・・・・

自分がこういう戦闘書くといろいろなところを転々と書いていくから順番が自分でもわからなくなりますｗｗｗｗ

もう書いてる勢いで決まってますからね。
あらかじめ順番なんか決めてませんよｗｗｗｗ

だから次回も誰からかわかりませんｗｗｗｗ

とりあえず次回、戦闘ですとしか言えない！！

ではまた次回

戦闘

ドォウドォウドォウ！！

「当たれッ！！」

ゴ・・・・・・・スゥ、ドォン！！！

森林内

桜の花びら舞う中で、ブロッサムアンデットが観鈴に向かって砲撃をいくつも撃ち放っていた。

その砲撃一発は、聖人タイプ――――つまりは治癒に特化した観鈴であるならば一撃直撃したらそれだけでダウンをとれるという威力だ。観鈴だって翼人である以上、ある程度の防御力を持っているにも関わらず、である。

実際観鈴はなのはのディバインバスターやWのトリガーエクスプロージョンを防ぐことはわけないぐらいの実力は持っている。

それを優に凌ぐ砲撃を放つブロッサムアンデット。
しかし、いまだにブロッサムアンデットは観鈴を仕留められてはいなかった。

「すごい砲撃・・・せっかくの桜がみんな散っちゃうね」

「む・・・・・」

荒れ狂う爆発による暴風でかき上げられる髪を手で押さえながら、見当違いの方向へと飛んで行った砲撃を見やって観鈴が呟いた。

当然なことながら、ブロッサムアンデットの放った砲撃はどれもが正確に観鈴を捉えていた。
何もなければ必ず相手に直撃していたし、直撃すれば先にも言ったように観鈴はそれだけでダウンだ。

しかし、ようは「当たったら」の話。

「衝撃波・・・それをうまく扱って砲撃の軌道を滑らかに逸らしたか・・・・！！」

「すごいでしょ？観鈴ちんイエィ！」

ぶいっ、とピースする観鈴に、ハッ、とあきれたように息を漏らすブロッサムアンデット。

衝撃波、と聞いてもあまり大きな力には聞こえないかもしれない。昨今のキャラクターたちの能力としては、もう新鮮味がないからかもしれない。

もはやそれは表現や描写においてのみ使われるような衝撃波（それ）だが、思えばこれほど厄介なものもないだろう。

よく聞く、ということはつまり、どんな攻撃においてもそれは存在し、すべてに共通する万能の道具なのだから。

この場合もそうである。

彼女は衝撃波の膜を作り、そっ、とブロッサムアンデットのはなる砲撃の先端に当てて砲撃の行く先をリード、変更させていたのだ。

「あなたの砲撃はすごいよ。でも、当たらないんだったら、怖くない」

そう言って衝撃波を小さな弾丸にし、さらに針のようにとがらせて回転、加速させて打ち出していく観鈴。

それはブロッサムアンデットの硬い樹皮に命中して抉り、その表皮の下からアンデット特有の緑色の血液を流しださせた。

が、五、六発受けたところでブロッサムアンデットが腕を振ってその弾丸を撃ち払い始めると、再び観鈴に向かって砲撃を放ち続ける。

それを誘導して回避する観鈴。

「見事な誘導だ！！しかしだな、そのような精密なコントロール、いつまでも続くものか！！」

「・・・・・・」

砲撃を撃ち、観鈴からも打ち出されてきた衝撃波の砲撃を回避、薙ぎ払っていくブロッサムアンデットが指摘する。

このような精密作業をしなからの攻撃。
それは確かに観鈴の体力と神経を確実に削っている。

それに気づかれ、観鈴の頬を小さな汗が垂れた。

「体力では流石に私の方が上とみた。このまま体力切れを待ち、勝負を決めさせてもらうぞ!!」

「ッ・・・やってみるといいよ・・・その前に終わらせるから!!」

激しい砲撃による猛攻と、それに見合った高度な防衛、反撃。

純白と桜色の嵐が吹き荒れる。

ーーー

その漆黒の闇が詰め込まれた洞窟の中で、一瞬だけスパークが上がって二人の姿が見えた。

どうやらエレクトリックエェルアンデットが電撃を放って一刀から離れようとしたらしい。

いま二人はかなりの速度で飛んでおり、エレクトリックエェルアンデットにとってはきつい状態であった。

正直呼吸もそれなりに苦しく、十分な電量は生み出せない。

しかし、それでも何とか脱出するだけの電力は出したし、それを見舞ってやった。

これでこの状況からは脱せられる。エレクトリックエェルアンデットはそう思っていた。

だが、その一刀の右手は一切の力を緩めることなく、エレクトリックエェルアンデットの首元を掴んでいた。

（・・・・！？こいつ・・・手を離さない！？否、そもそも電気が通って・・・・・）

「残念な。今この右手に電気は通らないぜ」

「な・・・・・ッ！？」

ガゴォッッッ！！！！！

エレクトリックエェルアンデットの気持ちを察したかのように一刀がそう呟いた直後、壁に激突してエレクトリックエェルアンデットの体が岩盤に叩きつけられた。

叩きつけられた衝撃と、衝突音が洞窟内で反響した振動とで脳ミソがグワグワと揺れる。

「こ・・・・のヤロ・・・・」

「視界の効かないこの暗闇。お前に俺を捉えることはできるか？」

「！！！」

エレクトリックエェルアンデットが立ち上がって周囲を見渡した瞬間、どこからかその声が聞こえてきて瞬時に身構える。

暗黒漆黒、なんでもいい。
とにかく真っ暗だ。

一切の光が差し込まぬ洞窟内で、一刀は確実にエレクトリックエェルアンデットを追いこんでいた。

「俺には見えるぞ、エレクトリックエェルアンデット。ここで一気に終わらせてもらう」

この暗闇の中、エレクトリックエェルアンデットにだって相手を察知するすべがないわけではない。

まず一つに、電気を発すればいい。
そうすれば先ほどのスパークのように周囲が明るくなって、見えやすくなる。

しかし、それをしてしまえばこの暗闇の中自分の居場所を教えてし

まうようなもの。
そんなことはできない。

それに対し、一刀には相手の姿がしっかりと見えていた。

翼人の力という物は、かなり互換性が高い。

基本的な肉体強化や各人の持つ能力に使うのもありだが、様々な世界の様々な力にも変換可能だ。

有名どころでは「魔力」や「気力」はもちろんのこと、言ってしまえば「瘴気」だって（その力のことをしっかりと知っていれば）変換可能だ。

そして今回一刀が用いたのはその有名どころである「魔力」

その魔力を目に回すことで、この暗闇でも相手の姿がはっきりと見えていたのだ。

「時間をかけている場合じゃないんだ」

「・・・・クソ！」

「さっさと終わらせてもらう！！」

一刀がそう叫んで翼から無数の剣を出し、それを携えてエレクトリックエェルアンデットに向かって突っ込んでいった。

突進して、まず一撃。

エレクトリックエェルアンデットの寸前でUターンするように体を返して、翼でその体を切り裂く。

鮮血が散り、エレクトリックエェルアンデットの呻く声が聞こえてきた。

そしてそのまま回転し、腰に携えた「流星剣」を構え、居合の形にかまえて一気に切り裂こうと呼吸を止めて――――――

「そこにいるのか」

「！？」

「カァッ！！！」

バンッッッ！！！！！

身体の痛み、そして足音。
今までは反響していたために、音から居場所を掴むことはできなかった。

しかし、この直接攻撃。そして間近での足音。
目の前に一刀がいるのは解っていた。

だからエレクトリックエェルアンデットはこのタイミングでありったけの力を使ってスパークし、一刀の目の前で強烈なフラッシュと焚いたのだ。

「グあああああああアアアアアア！！！！！」

「今まで暗闇にいて、しかもその状況でよく見えるようにまで視力を上げていたんだ。もう今は何も見えまい？」

「ッ、オオっ！！！」

両目を押さえて呻く一刀だが、即座に流星剣を手にエレクトリックエェルアンデットに向かって切り掛かって行った。

が、相手はそれをヒョイヒョイと避けてしまい、一刀は逆に重い拳の一撃を腹部に食らってしまう形になる。

「ゲホッ・・・・・」

「この状況でもまだ俺の位置を捉え、正確に斬りつけてくるのはさすがだが・・・・・む」

ブシュっ

そういって相手を称賛するエレクトリックエェルアンデットだが、直後一刀を殴った拳が裂け、そこから血がしたたり落ちてきた。あの中で、一刀はさらに拳のガードまでしていたのだ。

そしてそれを剣で行ったために、こうしてこいつの拳が切れた、ということだ。

「この程度は・・・・ハンデだ」

目をしょぼしょぼさせながら、一刀がガラリと立ち上がった。
その手には多くの仲間たちの武器。

「こっちにはまだお前の居場所がわかるぞ。翼人を舐めるんじゃない」

「ほう・・・・視力を奪われ、まだやる気か?行くぞ!!」

エレクトリックエェルアンデットが走り出す。
猛然と走り、向かい、そして

「とか言いながらどこ行こうとしてんだお前はァ!!!」

ドゴゴゴゴン!!!!

その行く先に、行かせはしないと剣が突き刺さった。

「・・・・・・・」

「解ってんだよ。そーゆーことするってことぐらいは」

いまだ目は開いていない。

視力は奪われたままだ。

だが、一刀はそれでも確実にこの場にいる相手を認識していた。

「お前・・・そこまで邪魔して・・・・」

「悪いね。だけど・・・オレを相手にするんなら、「ＥＡＲＴＨ」全員相手にする気で来てもらわないと」

「地獄行きにすんぞ!!」

「俺の翼は絆の翼。みんなと繋がっている以上、俺に負けはない!!」

洞窟内の戦い。

漆黒の中で、蒼青の輝きと電光が散ってゆく。

――――――――――――――――――――――――――――――

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＢＬＡＳＴ！》

『「トリガーフルバースト！！」』

「あっははははぁ！！寄っといでーよ弾丸ちゃーん！！！」

コックローチアンデットと交戦していたＷ、ディエンド、ハクオロは目の前の光景が信じられなかった。

すでにハクオロはウィツァルネミテアの姿に替わっていたし、素早い相手に対抗してＷはルナトリガーにチェンジもしていた。

だが、いまだこいつに当たった攻撃は一発もない。

「鈍い遅いトロい！！！その程度のスピードかい君たちハァ！！」

「オォッ！！」

素早い相手に対し、ハクオロの体が縮み（それでも二メートルとまだ巨体だが）、コックローチアンデットのスピードにかろうじてついていっていた。

流石は神として謳われていたものである。
おそらくはこのスピードに対抗するために行った急激な形態変化なのだろう。

しかし、コックローチアンデットはWのトリガーフルバースト、ディエンドのブラストの弾丸すべてをこともあろうか、ハクオロとの肉弾戦をしながら回避していた。

「馬鹿・・・な！！！」

コックローチアンデットの撃ち出す拳を両腕で受け止めて後退させられたハクオロ。
そこにWが弾丸を放ってゆくのだが、それはすべて弾かれてしまい、全く効果があげられない。

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＳＬＡＳＨ！》

と、その直後ディエンドがコックローチアンデットの懐に現れた。
おそらくはインビジブルのカードで姿を消していたのだろう。
そして、ここでカードをさらに装填、銃口から伸びた青いエネルギーで形成された刃で、コックローチアンデットの胴を思いっきり薙いだ。

「ゴォッ！？」

「よし！！」

コックローチアンデットの腹からはうっすらと血が滴り、そこを押さえてコックローチアンデットが片膝をつく。
そこに畳み掛けるかのように、その体を焼き尽くそうとハクオロが火炎を口から放射した。

さすがにこれだけの炎には弱いのか、コックローチアンデットがバッ、とその場を飛び退くが、背後に迫っていた新たな脅威に気付いていなかった。

《メタル！！マキシマムドライブ！！！》

「！？」

『「メタルブランディング！！！」』

超々加速のできるという油断、余裕、驕り。
それがこうして、今まで回避できていた攻撃を食らってしまうという結果に結びついた。

こいつの弱点は、そこだったのかもしれない。
そして

ドゴォウッッ！！！！

「（スタッ）やったか！？」

『手ごたえは確かにあったね』

「・・・・・」

地面に叩きつけられ、土煙に紛れて姿の見えないコックローチアンデット。
そこに視線をやって、ディエンドがとりあえずラウズガードを投げた。

が

ビッ！！という音とともにカードはコマ切れにされ、直後彼ら三人は地面に叩きつけられる結果となった。

「がっ」

「グワァ！」

「ウォッ！？」

「さっきのはやばかったぞ。炎に重圧とか・・・・オレを本気で叩き潰す気かよ」

倒れる三人の前に、いきなり現れるコックローチアンデット。

速い。

まったく攻撃の動作が見えない。

「もう出し惜しみなどせんぞ。最初からこのスピードでいかせてもらう」

「遠慮・・・したいね」

「すぐキレるあたり・・・っと、単細胞の害虫野郎ってわかるよなぁ」

『出来れば僕もこいつのことは検索したくない』

そういって立ち上がる三人。しかし、この状況では戦闘に持っていくことすら困難かもしれない。

「ハクオロさんはほかの何人かを連れてきてください」

「なに？」

「この中で集団戦闘（あっち）に入って戦力になるのは君さ。だからその代わり、あっちから誰かを呼んできてもらいたいんだ」

「・・・・・わかった」

メンバーの入れ替え。

これ自体は最初から想定していたことだ。

集団戦闘をしているのは中級アンデットばかり。

そちらの戦闘は相手がそれほど強くないため、それなりに楽な現場

だ。
ただ数があまりにも多いので、どれだけ戦えばいいのかわからないというのが不安なところだが。

コックローチアンデットの相手をずっとできるような人間などそうはいない。

翼人相手でも手こずるのだ。
メンバー三人そろったところで勝つのは至難の業。

だったらローテーションしてこいつと戦い、翼人が来るまでの時間を稼げばいい。

幸いにして、瞬風の中には結構な医療班がいる。
もしダメージを負いすぎたら、そっちで回復すればいい。

だからこうしてメンバーが入れ替わるのは別にかまわない。
最初からそのつもりだったから。

想定外だったのは

（こちらの消耗が早すぎる・・・強い・・・！！！）

コックローチアンデットの異常な強さだった。
この状況で、こいつはまだまだ速く、そして攻撃は重くなる。

この状況で、翼人が来るまでの時間稼ぎをするなどということは・・・・

「悪夢にしてはきつすぎるぞ・・・・・!!!」

皆が戦う現場に向かって、ハクオロが呟く。

この戦い、戦力差はこちらの方が最悪低い。
せめて上級アンデットと翼人の数さえ合えば・・・・・

ふと、一人の姿が頭に浮かぶが、すぐに頭を振ってそれを掻き消す。
ないものねだりをしている場合じゃない。
今のこの状況を、確実に乗りきらねばならないのだ。

勝利のために、一国の王が森を走る。

――

「オオオッッ！！」

ドンッ！ドドドドンッ！！！

桜の森を抜け、離れた荒野。
そこで五つの爆発と共に、アンデットが吹き飛んでいた。

その中心にいるのは、クラウド・ストライフ。

その様子を、大きな岩の上に立ってドーベルマンアンデットが眺めていた。

「一薙ぎで中級アンデット五体を一掃。さすがですねぇ（ドンドン！）」

そう言いながらも、クラウドへと発砲を続けるドーベルマンアンデット。
それをも弾くクラウドだが、服はすすけており、頬にもうっすらと切り傷が出来ていた。

さっきからこいつはそうだった。
下手な戦闘は行わず、どこから出てきたのか分からないが中級アンデットを呼び出してそれをクラウドにぶつけていたのだ。

「オレァまだまだ未熟者よ。ですからこうして入念にいかっせてもらいまっせェ！！」

「こいつ・・・・」

「イケイケイケぇ！！！」

ガァァアアアアアアアアアああああ！！！！

一歩引き、無茶はせず

自分の力量を見て、前面衝突は避けるこのアンデット。
絶対に周囲からアンデットが離れない。

「かかって・・・・こい！！」

「俺は翼人ほど強くないんだ。賢く狡猾に、行かせてもらうましょうな！！」

「・・・・・ふん」

クラウドが剣を握り、ドーベルマンアンデットへと斬りかかる。
それを遮る有象無象のアンデット。

相手は強敵。
どれも一筋縄ではいきはしまい。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

戦闘（後書き）

各場所での戦闘でした！！

理樹はどこ行ったかって？
彼は・・・・ほら、海中に行っちゃったからカメラが大変なんだよ！！だからさ！！

蒔風
「何言ってんだあんた」

状況としては

観鈴はジリジリと削られ。
一刀は暗闇の洞窟で目が見えず。
クラウドは取り巻くアンデットに邪魔されていますね

蒔風
「コックローチアンデットにはどんどんローテで戦うみたいだけどな」

メンバーが持つかどうかだよなぁ・・・・・

と、いうわけで次はとりあえず理樹の戦いでいきますかね！！

ではまた次回

海中

ゴポリ

「海中で私を相手にしようとは、思い上がったか？」

ゴポゴポゴポゴポ

「本来川にすむワニである私ならば、海の中なら対等に戦えると思ったか？」

ガボッ！！

「残念だがな、淡水だろうと海水だろうと、アンデット（わたし）には関係ないのだよ！！」

ゴゴッ！！

「うわっ！！」

ゴォン・・・・・！！！！！

海中

クロコダイルアンデットが猛烈な突進で海中を進み、理樹がそれを回避したために海中の岩に激突して粉々に砕いた。

が、だからと言ってそれでダメージを食らうこともなく、のそりと立ちあがって再び理樹へと突撃していった。

「ガァアアアアア！！！」

「このッ！！」

ガキィ！！！

理樹は今、全身をバリアで包んで海中で戦っている。

クロコダイルアンデットの突進は海中でさらなる加速を見せていた。

直進のみの動きだが、その速度は弾丸のそれに近い。

それをかろうじて回避する理樹だが、掠った時の振動は確かに、理樹へとダメージを重く、鈍く、伝えていた。

「突っ込んで来い・・・・返り討ちだ!!」

「ぬお!?」

Uターンして再び突進してくるクロコダイルアンデットに、理樹がバリアでの刃を向けてカウンターを狙った。

あの速度で突っ込んで来れば、確実にまっふたつだ。

しかしガキィ!!という甲高い音が海中に響き、それがかなわなかったことを教えてくれていた。

「突進だけかと思ったか?甘いぞ翼人」

「くそ・・・・」

「貴様のバリアを破ったのは、この牙であるということを忘れたか！！！」

バクアァッ！！！

噛みついていた理樹の刃を、頭ごと振り上げて砕き折るクロコダイルアンデット。

その反動に理樹の両腕があげられてしまうが、そこで理樹の双眸がギラリとクロコダイルアンデットを睨み付けた。

「そっちこそ舐めてるんじゃない？」

「なに？」

「僕の刃が、これだけとでも思ったの！？」

そう叫び、理樹が拳をグッ、と握りしめた。

すると海中の、今まで何もなかったところに、無数の刃が現れてそのすべてがクロコダイルアンデットに向けられているではないか。

「!?」

「これくらいのモノを作り出すなんてのは、僕にとっては朝飯前さ」

その数は十や二十を軽く凌駕しており、まるで満天の星でも見ているかのように刃が周囲を覆っていた。

これだけの刃を受けてはさしものクロコダイルアンデットも・・・・・

「ぐぉお・・・!?」

「逃がさないよ。何のためにここまで接近したと思ってるのさ」

その場から逃げ、回避しようとするクロコダイルアンデットだったが、またもや四肢――――だけではなく、尻尾の先端、胴までもをバリアで封じられ、さらには上顎と下顎もリングで閉じられてしまった。

回避不能

理樹のバリアの硬度はあまりにも強い。
自分も破壊できるとはいえ、それは牙を顎を使ってこその偉業。

とてもじゃないが動きをこう封じられた状態で、この刃を耐える硬度は自分にはない・・・・！！！

「つ・・・・よい・・・・・」

その状態で、クロコダイルアンデットが口の隙間からそんな言葉を漏らした。
しかし、理樹は頭を横に振ってそれは違うと言う。

「そっちの方が強かったよ。最初から全部。だからこそ、あんたは僕に対して速攻でデスロールを決めるべきだったんだ。敗因はあんたさ。下手な自信をつけて、僕相手なら勝てると油断していた、あんたが敗因だ」

「おのれ・・・きさ・・・・」

「それに、翼人は「理解者」だよ?ぼくはもうあんたの力を理解していた。だから勝てた。それだけさ」

「貴様ぁぁアアアアアアアアアアああ!!!」

理樹が腕を振り下ろす。

すると、無数の刃すべてがクロコダイルアンデットに向かって突っ込んでいき、その体を切り刻もうと襲い掛かった。

ーーー

この海中内、理樹は決して十分に酸素があった状態ではなかった。翼人の力を用いてこのバリア内での空気をかろうじて生産、戦闘を行っていたに過ぎなかったのだ。まあ、それでもここで戦わなければほかの上級と合流されて面倒になるのだから仕方がないのだが。

そして、その酸素がそろそろ尽きてきた。

流石に翼人と言っても慣れていない「酸素を生産」というのは疲れるらしい。

無論まだまだ出し続けることはできたが、なるべく無駄な力は抑えたい。

それに目の前であれだけの刃が突き刺さったのだ。全身へのダメージに、クロコダイルアンデットは動けまい。

ザパァ、と理樹が海面から顔を出し、そこで呼吸をする。

やはりそれなりに苦しかったらしく大きく深呼吸する理樹。

だが

（終わったと・・・・思うなよ・・・・ォ！！！）

海中では、クロコダイルアンデットまだ動いていた。

最初の数撃は喰らったものの、それによって体を縛っていたリングも砕け、自由に動くようになっていたのだ。

そうなれば後は防ぐのみ。牙を、爪を、尾を使って刃を弾き、砕き、何とかしてそのすべてから身を護ったのだ。

とはいってもやはり体に残ったダメージは相当なモノで、驚異的な肺活量を誇るクロコダイルアンデットの口から気泡があふれ出てきていた。

（ちょうどいい・・・・息継ぎついでに、貴様のその魂）

ゴォッ！！

（噛み砕いてやる！！！）

ますでスクリューでもついているかのような加速で、一気に飛び出していくクロコダイルアンデット。

目指すは海上で息継ぎをする理樹。

ギラリと牙が光り、猛然と理樹の背中へと襲い掛かり

「もらったぁ！！！」

その牙に、確かな衝撃が走った。

ーーー

そこでは仮面ライダーたち、サーヴァント数名、そして魔道士も数名戦っている。

「うわっ！！」

「スバル！！」

「危ないっ！！っと・・・こらこら、女の子には優しくしな、よッッ！！！」

倒れたスバルのもとにウラタロスが加勢に入り一体アンデットを吹き飛ばしたが、いかんせん相手の数が多すぎる。

まだまだ出てくるみたいだし、こちらの戦力はじわじわと削られていっていた。

「ありがとうございます！」

「いやなに。かわいい女の子を傷つけるような奴にお仕置きしただけさ」

「下がれーーーーーーーーーーーー！！カリバーが来るぞぉぉぉぉおおおお！！！」

「おっと！！？」

「ヤッバいねぇ！！」

「エクス・・・・カリバァーーーーーーーーー！！！！」

ゴオォウ、ドォン！！

直線状に味方がいないことを確認したセイバーから、金色の剣閃が放たれて多くのアンデットが宙を舞った。

しかし、まるでその穴を埋めようとするかのように即座にアンデットはザラザラとあらわれてきて、再び混戦へと逆戻りだ。

「これじゃきりがない！！」

「ゴキブリとのために体力は残しておきたいのだが・・・・！！！」

「いくら雑魚だっつってもこのままじゃ・・・・・！！！」

『伏せろォ！！！』

キュイッ・・・・・ドドドドドドンッッ！！！！

と、そこに野太い声が響き、レーザーのようなものが戦場を切り取るようにまっすぐ地面を走り、一拍おいてからその地面が次々と爆発していった。

振り返ると、そこには巨大なウィツァルネミテアの姿。

ハクオロだ。

「ハクオロさん！！」

「誰かあっちに向かってくれ！！強すぎる・・・・・こっちにはわたしが加勢する！！速く！！」

「わかりました！！じゃあ私たちが！！」

「おい、俺らも行くぞ！！」

「ちょ、そんなに抜けていいの！？」

「答えなんか聞いてられっか！！」

「あーー！！それぼくのセリフ！！！」

ハクオロの参入から、フォワード陣の四人とイマジンたちが走り出していってしまった。

急に走り出したものだからキンタロスは良太郎から抜け出してしまい、哀れ良太郎はプラットフォームで置き去りにされてしまった。

「ちょ、ま・・・・およぉ！？」

「がるぁぁアアアアアア！！！」

そこからモモタロス達を追いかけようとする良太郎だが、その行く先をアンデットが立ちふさがってしまったので、そこから逃げるので見失ってしまった。

「あっちはたぶん大丈夫だよね・・・・はぁ、いつもなんでこうなるんだろ。変身」

そうぼやきながら、良太郎がケータロスを取りだし、ライナーフォームへと変身しようとする。
だが・・・・・

グヴォン！《Ｗｉｎｇ　Ｆｏｒｍ》

「降臨！満を持して・・・・・」

『ジーク！？』

「喜べ。哀れにもお供たちにおいていかれたお前を、私が拾ってやったぞぅ？」

『いや、僕は大丈夫だったんだけど・・・・』

「遠慮するな。行くぞ、不幸なるお供よ!!」

『不幸なる、って言わないでーーーーーーーー!!!!!』

「ん?」

「どうしました?上条さん」

「いや、なんか呼ばれた気が・・・・・」

その上空、瞬風の中

そこでは怪我を負ったメンバーが治癒などを受けていた。
たった今も何やら毒を喰らったメンバーに右手を当て、治癒していたばかりだ。

「これで大丈夫だろ」

「ああ・・・げほ、楽になった」

「でもまだ体力が戻ってません。これを飲んでください・・・・」

こっちの方も優秀なメンバーがそろっているためにすぐに回復、出撃していくのだが、時間が経つごとに人数が多くなっていく。

押されているのだ。
これだけの混戦だと、せっかく倒した相手もカードを投げられずにまた復活してしまうということもあるのだから、しょうがないと言えばしょうがないのだが・・・・

「それを抜きにしても多すぎる・・・・・」

「やはり直接石板を叩くしかないんじゃないか？」

「ダメ。アンデットが蔓延って守ってるし、その前には彼女たちも並んでる・・・・砲撃も撃てないわ」

「全部駆逐してからか・・・・」

「・・・・ねえ、だったら、考えがあるんだけど」

「長岡さん？」

――――――

『急いでくれ。今は海東大樹ひとりで耐えているようなものだ！！！』

《ＯＲＧＡ！ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＰＡＲＡＤＩＳＥ　ＬＯＳＴ》

「おおおおおおおおお！！！！！」

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――Ｏ　Ｏ　Ｏ　ＯＲＧＡ！！》

地面に倒れて動けないＷエクストリームを見て、その場に到着したメンバーは驚愕していた。

ディエンドはすでにコンプリートフォームに強化変身しており、ケータッチで仮面ライダーオーガを呼び出していた。

オーガの剣から金色のエネルギーで作られた巨剣が伸び、ディエンドライバーからはシアン色のエネルギーで同じように刃が作られている。

そしてシンクロした動きでコックローチアンデットに向けてその刃

を振り下ろしたのだが・・・・・

「イィィイイイイイイイイイイイ、ヤァッッッ！！！」

まるで奇声のような気合いを放ち、その刃をけり砕くコックローチアンデット。
そこから猛スピードで突進し、ディエンドへと迫ってその装甲を粉砕しようと拳を握る。

「オラオラぁ！！もっと見せてよ！楽しいぜェ！！！」

「その動きで近づかないでくれるかなッ！！」

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＲＩＯＴＲＯＯＰＥＲ！！》

自身に迫るコックローチアンデットに向け、ディエンドがライオトルーパーを五体召喚して向かわせるがまるでドラックに小石をぶつけたようなものだ。簡単に弾き飛ばされて爆発、消滅する。

しかしその爆発の向こうからさらに召喚された仮面ライダーサイガが現れて飛んできた。

バックパックで宙を飛び、コックローチアンデットに向けて銃撃を放ってきている。

だがそれを軽々と飛び越え、真上から顔面に拳をめり込ませてマスクを破壊、そのまま着地と同時に地面に叩きつけるコックローチアンデット。

その衝撃にサイガも消滅するが、その間にディエンドは次の攻撃を始めていた。

《Ｇ４！ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｇ４》

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――Ｇ　Ｇ　Ｇ　Ｇ４！！》

「喰らえ！！」

そう叫んで隣に召喚されたＧ４と共にミサイルを四発、二人で計八発をぶっぱなしてコックローチアンデットを吹き飛ばさんとするディエンド。

コックローチアンデットはまず、三発を蛇行して回避し、四、五、六、と階段を上るかのように踏み台にして躱す。

そして七発目は羽根を広げて羽ばたき、何とかして回避した。

しかし

「一気に放たなくてよかったよ」

「オゥッ！？」

「ドーン、だ」

ドォンッッ！！！

そうして回避したものの、八発目のミサイルが命中してとんでもない爆発と共にコックローチアンデットの上半身が宙で仰け反り、後頭部から地面に落ちて行った。

やっと一発、攻撃らしい攻撃が命中した。
しかもケータッチで召喚したライダーでの攻撃だ。それはカメンライドで呼び出したそれをはるかにしのぐ。

「や・・・った・・・・ッハ・・・・はあ、はぁ・・・・」

それを見てディエンドが膝をついて変身が解除される。
海東の体は汗びっしょりで、まるで今まで土砂降りの中で突っ立っていたかのような様子だ。

四つん這いで息切れも激しく、だらりと顎を垂らしている。
汗が地面に跡を作った。

「海東さん！！」

「やあ・・・遅かったね・・・柄にもなく頑張っちゃったよ」

そういってスバルに担ぎあげられる海東。
そこに変身を解いた翔太郎も、まだ体力のあったフィリップに肩を借りてよろよろと寄って来た。

「でも、これでアイツはやったんですよね！！」

「ンだよ、オレら来た意味ねーじゃねェか」

疲弊した三人を見て心配する者の、スバルは一体倒したと喜び、モモタロスは無駄足（というより活躍できなくて）ぶーぶー言っていた。

だが、翔太郎や海東の目にはとてもではないが勝利した、という確信は宿っていなかった。

「君らは・・・・翼人たちがミサイル一発で死ぬと思うかい？」

「・・・・・え？」

「そういうことさ。まだ終わってないよ」

そうフィリップが呟いた瞬間、ミサイルによる炎の中にゆらりと影が揺れて、コックローチアンデットが歩み出てきたではないか。

「これで終わりかい？どんなライダー出してくれるのかと期待して

いたんだが・・・じゃあもういいな」

そういって楽しみはもうないのかと残念そうな声を出してコックローチアンデットがゆっくりと歩き、だんだんと加速して走りだした。

それに向かってスバルやエリオ、キンタロスらも駆け出し、迎え撃とうと応戦していく。

そこでモモタロスが振り返り、よっしゃ行くぜと声をかけた。

「おぉ～～～し、やっとオレの出番かぁ～～。良太郎！！行くぞ！！」

クルッ！

「・・・・・・あれ？」

自分をさす親指。
ビシリと決まった振り返り。

しかしそこに良太郎はいない。
今ごろ気づいたのか。

――――――

理樹に迫っていたクロコダイルアンデットは、海面から飛び出すことなく何かにぶつかっていた。

理樹はその何かの上に立っており、足元から来たその振動に特に何の感情もなく純粋に「何してるの？」と首をかしげていた。

「貴様・・・これは・・・・」

「ああ、バリアだよ？海の上に飛んでるのも疲れるからね。これは出しておけばそれだけでいいし」

理樹が乗っているのは海面に出したバリアだ。

クロコダイルアンデットはそれに衝突して鼻をつぶしたのだ。

このままでは息も切れそうだ。
クロコダイルアンデットはとりあえずそのバリアの範囲から逃れて海面から頭を出そうとするのだが・・・・

（ど、どこまで続いておるのだ・・・・・こいつ・・・海前面にバリアを張りおったんじゃないだろうな！？）

そう、そこからいくら見渡し、移動しようともそのバリアの終わりが見えない。
それに対し、本当に何でもないかのように理樹が言う。

「足場って広い方がいいよねー？だからおっきくしてみました★」

星が黒い。
黒いよ理樹君。

クロコダイルアンデットはそれでもあきらめず、牙を立てて回転、バリアを粉砕しようとするが・・・・・

ギャリィッ！！

「ッッ！？」

バリアが猛烈な勢いで回転し、牙と接触した瞬間にクロコダイルアンデットを体ごと弾き飛ばした。

理樹のバリアはそこに壁となって現れるだけではない。
自由に動かすことが可能なのだ。

思えばこれほど応用力のある能力もあるまい。

そしてこれは、さらにエグい物へと変貌する。

「いやぁ、僕ってなかなか怒らないキャラなんだけどさ」

グッ・・・・

「今回ばかりはキレてるんだ」

海面に張られたその円形のバリアの端が海中に回り込んできて、円柱のように形を変えてクロコダイルアンデットをその中に閉じ込める。

「だから・・・・結構きついよ?覚悟してね?」

そして、その底の部分にプロペラのような刃が出来上がって・・・・・

「おい・・・貴様まさか!!!!!」

「スイッチオーン」

ギャオォオ!!!!

回りだした。

その回転はすぐさま円柱の中に渦を作りだし、クロコダイルアンデットを引き込んでいく。

何とかして逃げようとするクロコダイルアンデットだが、周囲を覆う円柱の壁までもが回転を始めてしまったために、攻撃しても弾かれてしまう。

「君の攻撃は一点にぶち込まれると大変なことになるけど、こうしちゃえば大丈夫だよね★」

またもや黒い。

しかも、その円柱はだんだんと縮小してさらに逃げ場をなくしていく。

もうこれが何かわかるだろう。

そう、ミキサーである。

何とも恐ろしいものを作ったものだ。

ミキサーの天井部分をドンドンと叩くクロコダイルアンデットを、しゃがみこんでみる理樹。

「無駄だよ。僕は世界最硬。そんなんじゃ弾かれるだけだよ？」

「お、まて・・・・流石にこれは・・・いくら不死でもひど・・・・・！！」

「フ　ル　パ　ワ　ァ♪」

「オオオオオオおおお！！！おっ・・・ガっ・・・・あ、ああ〝・・・・ア〝ぁぁあ！！・・・・・・・」

そして、彼の体が巻き込まれる。
瞬時にして海水がメロンソーダのような色合いになり、アンデットがその場にいた唯一の証になってしまった。

それを見て、理樹がすっきりしたと言わんばかりの溜息をつき、バリアに小さな穴をあけてカードをちょん、と浸した。

するとその緑色の液体がずるずるとカードに吸い込まれ、一滴残らず吸収され、カードにはクロコダイルアンデットの絵が映り、直後に消滅する。

「ふう・・・すっきりはしたけど・・・・」

そういって理樹が海岸線の先を見る。

「遠くまで来ちゃったなぁ・・・・一発ですごく遠くまで行くんだもんな、こいつ」

クロコダイルアンデットの突進の距離と、逃亡しようとした際の移動によって陸からかなり離れてしまった。

理樹がその背に薄緑の翼を開翼し、飛び立つ。

ほかの仲間は無事だろうか。

そう思いながら、理樹は陸地へと戻って行った。

to be continued

海中（後書き）

どうだったでしょうか海中での戦い！！

今回の理樹君は鬼理樹、略して理鬼君になってもらいました。
彼は起こると怖い（ガタガタブルブル

ディエンドのコンプリートは勝手に考えました！！
ディケイドが「ライダー名・カメンライド・フォーム名」だったので、こっちは「ライダー名・カメンライド・映画タイトル」にしました！！

どうですか？
こっちでの召喚はカメンライドより高性能だということにしました。
そうでもないとする意味無くなっちゃうしｗｗｗｗ

そしてかわいそうな良太郎。大丈夫、ジークがいるからね！！

多分次の話あたりでモモたちは彼女らに憑依するかもｗｗｗｗｗ
やばいそれ面白いｗｗｗｗ

そして長岡さんはどうするつもりなんでしょうかね？

今回もまたレポートで更新が遅れましたよまったく。

流石にコーヒーは使ってないですけどね！！！

もうあんなことはしない

と、言うわけで次回・・・やっぱ決まってない！！

誰書こうかなー？

ではまた次回

流星（前書き）

ＢＧＭ「獣拳戦隊ゲキレンジャー」
二回目の一刀のシーンからどうぞ！！

流星

「フッ！」

「当た、るか！！」

洞窟内

一刀が剣を握ってエレクトリックエェルアンデットに向かって切り掛かっていくも、それは簡単に回避されて逆に殴られてしまうという状況。

一刀の目はまだ回復しておらず、その反面エレクトリックエェルアンデットは発光による光でしっかりと状況を見ることができていた。

「ふむ、しかし翼人。こんな状況でもオレを逃がさないようにするとはさすがだな」

「は、見てろよ・・・・そろそろお前の攻撃がわかりそうなんだ。次は躱してやる」

「やってみろ。ま、わかったところで・・・・・」

ダッ！

「いつ来るかわからなきゃ躱しようがないけどなッッ！！！」

エレクトリックエェルアンデットの拳に電光が走り、捻りのきいた拳が放たれる。

それに対して一刀は棒立ち状態だ。

真正面から走り出したエレクトリックエェルアンデットが、その拳を途中で右フックに変えて一刀のこめかみを狙った。

そこで、一刀が目を閉じた。

今まで見えずとも開けていたのだが、ここで両腕をおろし、目を閉じ、完全に起立状態になる。

だからと言って直立ではなく、力の抜けたリラックス状態で。

そして、一刀がその体制をとった瞬間に、エレクトリックエェルアンデットは拳を止め、さらに二、三歩瞬時に後退した。

まるで、何かを感じ取ったかのように。

「・・・・・貴様・・・・・」

「どうした？打ってこないのか」

一刀はいまだ目を閉じたままだ。
こっちなど向いてはいない。

しかし、エレクトリックエェルアンデットは確実に何かを感じていた。

そう、なにか――――――

――――真っ直ぐ直視されているかのような、そんな錯覚――――――

ゾクッッ・・・・・！！！！

薄暗い洞窟の中、エレクトリックエェルアンデットはそれだけが原因ではない寒気を感じ取った。

この男は・・・・ここで自分を仕留める気だ。

「・・・・・・（フゥ）」

それを見て、エレクトリックエェルアンデットの顔から油断が消えた。

今までは圧倒的優位だったその状況から、完全ではなくとも油断していたものだが、それを一切なくして構えを取った。

腰を落とし、全身の発光も止め、洞窟内が再び漆黒へと戻る。

「・・・・・！！！！」

そして、エレクトリックエェルアンデットが一刀に向かって駆け出した。
すでに電磁波で相手の居場所は解っている。

そしてその両腕がガシリと確かに一刀の体を掴みとった。

「捕まえタァッ！！」

バァッツィ！！！ババババババババッッ！！

その叫びと共にエレクトリックエェルアンデットが全劇を一刀の全身に流し込みその体をガクガクと揺さぶる。

電光で、一刀の姿があらわになった。
だがそれは、エレクトリックエェルアンデットをさらに驚愕させるものにしかならなかった。

「こいつ・・・・まだ！？」

全身を掴み締め上げられ、さらに電撃を食らわされているにもかかわらず、一刀の顔は先ほどの表情から一切崩れてはいなかった。
まるでこんな攻撃など、喰らっていないかのような様子。

「また無効化か!?ならばっ!!!」

先ほどあったような無効化かもしれないと思ったエレクトリックエェルアンデットは今度は両手をチョップのように一刀の首の左右に当てた。
だが、それでも一刀の様子は回らない。

むしろ自由になった両腕で、今度は一刀がエレクトリックエェルアンデットの体を締め上げ始めたではないか。
しかし、その力は相手を苦しめるほどの強さはなく、エレクトリックエェルアンデットの体を少し持ち上げる程度。

「ははは、この程度か?見苦しいぞ」

「・・・・んなもんじゃ・・・・・」

「なに?」

「こんなもんじゃない・・・・・」

ギュアッ!!

「がっ・・・こいつ!?力が・・・・」

「俺が一年前に食らった「アイツ」の攻撃は、こんなもんじゃなかったぞ!!!!」

ガゴオッッ!!!

「ガァハッッ!!!」

叫んだ一刀が片腕でエレクトリックエェルアンデットの身体をぶん回し始め、壁に、天井に、地面に向かって叩きつけて行った。

左に振り、反動のまま右に振り、跳ね上がってからのを地面に叩きつけ、そのまま持ち上げる過程で天井に。

まるでゴムボールが先端についているかのようだ。

凄まじい振動と衝撃音が洞窟内を響き渡り、エレクトリックエェルアンデットの身体が叩きつけられていく。

「この・・・・!!」

と、そこでエレクトリックエェルアンデットがヌルリ、とウナギ特有の粘液を出し、掴んでいる一刀の手から逃れた。

しかし、その勢いは殺せずに壁へと猛烈な勢いで激突してしまったが。

「お・・・グぉ・・・・こんのガキァ！！！！！」

バァッッ！！！！

足元から電撃を発しながらエレクトリックエェルアンデットが立ち上がる。

その顔は憤怒に包まれており、放つ電撃は触れるものをすべてを消し炭にするほどに激しい。

「優しくしてやりゃ調子に乗りやがってェ・・・・・てめえの脳みそ脊髄ごと引っこ抜いてやろうかア゛ぁ！？」

完全にブチギレたエレクトリックエェルアンデット。

しかし反面、一刀の表情はおとなしいものだった。

「来い」

「ウゴぁぁぁアアアアアあああああああ！！！！」

そう一言だけ言った一刀に、エレクトリックエェルアンデットが地面を踏み抜かんとする勢いで一気に接近していった。

二人の距離が一瞬で消滅し、寸前まで寄りあい・・・・

ブンッッ、ゴォッ！！

そして――――――ゴシャリ、と・・・何かがつぶれた音がした。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

スッ、ドンッッ！！！

「当たれってのに！！！」

「ハァ、ハァ・・・・・当たらないよ・・・・・」

桜の森の中で、砲撃と衝撃波が入り乱れた戦いがなおも続いている。

すでに桜の八割は散ってしまっており、そして砲撃は一撃たりとも観鈴に命中してはいなかった。

しかし彼女の体力は確実に削られており、それこそまさにブロッサムアンデットのもくろみどおりに事は進んでいる。

だがまあ、だからと言ってブロッサムアンデットの気がすっきりしているかと言えばそうでもなく、やはり当たらないというのは適度にイラつくようだった。
その証拠に、砲撃の精度がだんだんと荒くなってきているし、観鈴も衝撃波を使わずとも動きだけで回避できることもあったくらいだ。

「ったく・・・よくもまあ逸らすな！！！」

「そっちの思い通りに・・・ね。思い通りになっているのに怒るっておかしいよ？」

「それはそれ、これはこれだよ。確かに思い通りに消耗させちゃいるが、当たらないんじゃイラつくわ。勝ってるけど思い通りにフィニッシュできない格ゲーみたいなもん？」

「にはは、納得」

そんなことを言いながら笑う観鈴だが、彼女の体力も結構底を尽きかけている。

そもそも彼女は戦闘向きではないのだ。
汗は全身を濡らしているし、呼吸も数回に一回は深呼吸になっていた。

「ま、いいか。ここらでそっちをつぶす準備は十分にできたからな！！！」

「？」

走りながらまるで踊っているかのように回転、手から砲撃を撃ちまくってくるブロッサムアンデットだが、それがピタリとやんだ。

観鈴も舞を舞うかのように華麗な動きで衝撃をは放って逸らし、弾いていたのだが相手の動きに合わせてそれを止める。

「私の砲撃、一体どのようにして撃っているかご理解いただけているかな？」

そう言って、ブロッサムアンデットが手のひらに桜の花びらを集めてエネルギーとし、球体へと変えて浮かせている。

彼はそれを投げるかのようにして放ち、砲撃にしているのだが・・・・・

「！！！！」

「気付いたか？お前は弾幕の真上にいるのだよ！」

それを見て、観鈴がハッ、と地面を見たときにはすでにそれは薄い光を放っていた。

ここは桜の森。足元には今までの戦闘で散りまくった花びら。
もしこれがすべて弾丸となったら・・・・！！！！

「貴女の純白に、桜の輝きを添えましょう」

「ッッ！！」

「そこに鮮血のスパイスを加えて、ね」

ズゴォ！！！！

直後、観鈴の足元がピンクに輝き

「きゃあアアアアアアアアアアア！！！」

地面から桜の弾丸と化した花びらが何本も立ち上って行った。

――――――

殴り飛ばしたるは、「蒼青の翼人」北郷一刀

向かってきたエレクトリックエェルアンデットに対して、見事なタイミングで正拳突きを以って迎え打ち、顔面ド真ん中に命中させたのだ。

「が・・・・貴様・・・・見えて!?」

「いや?見えてはないよ。だけどな・・・・わかるんだよ」

ギリギリギリ・・・・

「お前の滑りのきいた魂が、どこにあるかってのは・・・・・・」

ギュゥゥゥゥぅウうううううう!!!!!

「俺の魂が、そこにあるお前を殴り飛ばせってな、叫んでんだよッ！！！」

ドゴォ！！！！

「ゲッバッ！？」

「捉えたぞ、お前の動き。ここからは俺のターンだ！！！」

ドゴッ、ガッ、バンッ！！！

「オ、グ、ガァッ！！？」

一刀の拳が、蹴りが、次々にエレクトリックエェルアンデットへと突き刺さっていく。
それに対してエレクトリックエェルアンデットはすべてをまともに喰らい、片膝をついて洞窟を照らして状況を確認した。

一刀はまだ目を瞑っている。

そう、彼はいまだに何も見えてなどはいないのだ

だが！！

「そこだ！！」

「ぬおっ！？」

一刀の剣がエレクトリックエェルアンデットを正確にとらえ、さらには攻防までもを演じてみせる。

エレクトリックエェルアンデットの思考は完全に混乱した。

なんだこいつは・・・・・・

なぜわかる、なぜできる、なぜ見える！？

居場所ぐらいならわかるかもしれない。

簡単な回避ならできるだろう。

だがしかし、これはそんなレベルの動きではない！！！

「ダァッ！！」

「効くか！！（バチィ！！）」

エレクトリックエェルアンデットがさらに電撃を放つが、それは一刀の翼に弾かれて消滅してしまった。
その後も次々と放っていくが、彼はその隙間を縫ってエレクトリックエェルアンデットへと肉薄、打撃や斬撃を加えていく。

それが続き、もう耐え切れなくなったのか、エレクトリックエェルアンデットがついに本気を出した。

今までは洞窟の崩壊の危険性から使わなかったが、もうそんなことは言ってられない・・・！！！

ドバァッ！！と、エレクトリックエェルアンデットが全身から電撃を放って一刀を弾き飛ばし、そのうちに両腕を前に突き出してそこに電磁をため込んでいく。

「エネルギーフルチャージ。爆ぜ荒れる雷の前に、消し炭になれ北郷一刀ぉォォォオオオオオオ！！！」

「へっ・・・・」

「地獄に落ちろォッ！！翼人！！！」

ガォウ！！

嵐をまるまる効果音にしたような、そんな音が洞窟内に響き、そしてそれが一刀の耳に届くよりも早くその雷砲は洞窟内すべてを満たして一刀へと向かって来た。

それに対し・・・・・

「剣製防壁（ソードウォール）、最大展開ッッ！！！」

一刀が翼の中から次々と剣を召喚し、それを積み上げて巨大な盾とする。

ただ盾というにはおかしいと言える点が一つ。それはは、その盾は剣の面を雷に向けてではなく、剣の切っ先を向けて作られているということだけだ。

「オオオオオオオオオオオオ！！！」

ドォン！！！！

まるで巨大な太鼓が爆発したかのような音が轟き、盾と矛はぶつかり合った。

否、これは・・・・

「回転!!」

ギュあああああああアアアアアア!!!

一刀の剣製防壁が唸り声をあげて猛回転し始めた。
それによって一つの塊であった雷は四方八方に散らされていく。

その砲撃は洞窟すべてを満たす大きさ。
散らされた雷は行き場を失い・・・なんてことはなく、洞窟の天井、壁、地面を破壊しながら突き進んでいっていた。

その衝撃に洞窟どころか大地が振動し、ガラガラと遠くから崩落の音もしてきた。

だが、砲撃は止まらない。

エレクトリックエェルアンデットにとってはまだまだこれから。
そのすべてを吐き出すまで、こいつは止まることがない!!

「どこまで受け切れるかな!?貴様の剣だって、いつまでも受け切れるわけがない。いつかはぶっ壊れんだろ!?」

エレクトリックエェルアンデットが届くかどうかも分からない言葉を叫びながら、さらに力を込めて雷を放つ。
その声は確かに届いてはいない。しかし、それに応えることは出来る・・・!!

ズンッッ・・・・!!!

「!?これは・・・・」

ズンッッ!!

「グオッ!?お、押され・・・まさか!?」

ズンッ！！！

雷が押されている。
エレクトリックエェルアンデットはそれを感じ取った。
この腕にかかる圧迫は間違いない。
そして、それが起こるとすれば可能性はただ一つ・・・・・・！！！！

「こちらに・・・向かってきているというのか・・・・！！？」

一刀の足が、一歩ずつ確実にエレクトリックエェルアンデットへと向かっていく。
回転する剣製防壁を押し込んで。

「グ・・・この・・・・・・・オォ！？」

エレクトリックエェルアンデットがさらに押し戻してやろうと雷を放つが、なぜだか今度は引っ張られていく錯覚にとらわれた。

下がったのか？

否、違う。こいつはそんなことをするタマじゃない！！！

ブォン、と何かを振り上げる音が聞こえた。

その音に、エレクトリックエェルアンデットが前を見るとそこには驚愕の状況が出来上がっていた。

先ほどの「ブォン」は、回転する剣製防壁の柄をどうにかして一本にまとめた一刀が肩にそれを担いだ音。

剣製防壁はさきほどのように洞窟を塞ぐような大きさはなく、普通に扱える大きさになっていた。

形はそのままなので、先端に剣が前を向いて揃っているから、それは一見してハンマーにも見える。

そして、その先端はいまだに回転転し続けておりさらに――――――

その回転によって、エレクトリックエェルアンデットの雷すべてを巻き取るかのようにして取り込み、吸収していっていた。

「馬鹿な・・・・・」

「回転によって電力を電磁や磁力に変え、お前の力すべてをこちらにもらったぞ」

「そんな馬鹿な・・・生まれ以って電気を操るオレが・・・・貴様らなんぞに・・・！！！！」

「翼人を・・・・人間を・・・・」

ガシャッ！！

「舐めるんじゃないッッ！！！」

ドォウ！！！

一刀がそれを構え、一気にエレクトリックエェルアンデットへと疾駆していく。

エレクトリックエェルアンデットはそれを咄嗟に回避しようとする

が、左上半身を完全に吹き飛ばされた。

当然だ。

今の剣製防壁はとんでもない電気量で数千度の高熱を発しているし、それが雷を巻き取るほどに回転しているのならば削り取れないものを探す方が難しい。

「グガァァァあああアアアアアア！！！！」

「まだだ！！！」

エレクトリックエェルアンデットの身体を削り、八しり抜けて後ろに回った一刀がさらに攻撃を加えようと剣を捨て、エレクトリックエェルアンデットの足元から二本だけ剣を出現させた。

それは見事にエレクトリックエェルアンデットの足を下から貫き、地面に縫い付け動きを止める。

だが、そこで終わりはしない。

その二本を皮切りに、次々と剣が大地から飛び出し、エレクトリックエェルアンデットをその中にのみ込んでいった。

そしてその部分が下から出現してきた剣で押し上げられ、巨大な剣山の山頂部分へと上昇していく。

その大きさは洞窟を崩し、大地を貫き、地上にまで飛び出していったほど。

我々はこれを知っている。
一度だけ見たことがある。

一年前のあのとき、一刀が「彼」に向かっていった際に放った技である。

「ご・・・お・・・」

「飛翔抜剣!!」

「ガァッ!?」

その山頂にいるエレクトリックエェルアンデットに、一刀が剣山の中を突き進んで上昇、抜剣と共に斬り裂いた。

エレクトリックエェルアンデットの目が見開かれ、そこに映る翼人のシルエット。
それは空に出ていた新月と重なって、舞い降りる天使のように見えた。

「貴様がいくら効かないといっても・・・・ダメージは確実にあるはずだ・・・」

「・・・・・・」

「一体どこにそんな力が!!何が貴様の体を動かす!?」

エレクトリックエェルアンデットが叫ぶ。
確かに一刀はこれまでも攻撃を食らいすぎている。
いくら大丈夫だといってもそれは心の持ちようだ。
ダメージは確実に体を侵食しているし、実際に真上にいる一刀からはポタポタと血が垂れてきている。

しかし、こいつはそもそも勘違いをしていた。

翼人とは、心の持ちようで戦える存在だということを。

「打ち得ぬ瞬間(とき)に繰り出す・・・それが極意だ」

「ぐ・・・ぬぅ・・・・この重圧・・・・・！！！ガァッ！？」

「空を駆けるは流星が如く」

そして、剣山すべてがギュアッ、とエレクトリックエェルアンデットを締め上げ、その全身を剣で貫く。

上空の一刀が、剣を肩にまで振り上げてエレクトリックエェルアンデットに向かって直下してくる！！！

「流星剣！！」

「オおオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

シュッ・・・ピィン・・・・・・・

「・・・・・・願い星・・・・・」

「お・・・ガァアアアアアアアアアア！！！！」

剣が光の尾を引いて、エレクトリックエェルアンデットに向かって振り下ろされ、一刀が一気に剣山の最下まで振り抜いていった。

流星剣

それは仲間の力を借りて戦う一刀が持つ、たった一つの自分自身の剣。

流星とともに異世界にやってきた彼だからこそ放てる一刀（いっとう）

その一撃は、流星のそれに匹敵する！

その一撃をくらいエレクトリックエェルアンデットの体が真っ二つに裂け、身体を支えていた剣山も砕けて消滅していき、穴だらけだった体がぼろぼろと崩れていく。

「クソックソックソッ！！テメェ、地獄に・・・・」

「悪いな」

ドォオオオオオンッ！！！！

「俺はヒーローだからよ。死んでも行くのは天国なんだ」

そう言って、一刀がカードをエレクトリックエェルアンデットの肉片の一つに投げつけ、吸収消滅させる。

「さて・・・他のとこにもいかなくちゃ・・・とと」

と、天井に穴のあいた洞窟内で一刀がカードを手にして上を向き、直後にトサリと座り込んでしまった。

どうやらダメージが一気にきたようで、今すぐ動くのは無理そうだ。

「・・・しょーがない・・・少し休んでいきますか、ね」

そう言って一刀が空を見上げて座り込む。

しかし

《大したものではないな、アンデット。だが・・・私の目的は果たしてくれそうだな》

それらの戦場をどこからか見ているのか、彼らの戦いをそうつぶやく怪しい存在がいた。

この事件には、もうひとつだけ裏がある。

to be continued

流星（後書き）

では今回は何故！！ＢＧＭがあれだったのかをお話しましょう。

簡単なことです。声ですｗｗｗｗ

恋姫無双のドラマＣＤには、一刀の声が入っています。
と、いうか一刀の声が聞ける唯一の媒体です。

それ聞いた後にですね、「獣拳戦隊ゲキレンジャー」を聞いたんですよ。

・・・・・あれ？声同じじゃね？

いやいや、そんなわけないんですよ。まあ実施クレジットの一刀の声は「？？？」でしたけど。

でもま、そっくりだったんですよね。

だからもうこれしかないと思いました。

今回獣拳全然関係ないけどね！！！（笑）

次回は美鈴さん終わらせて・・・・あとは長岡さんたちとコックさんたちをちまちま行きたいなー、と思ってます
思ってるだけでそういくかどうかはわかりませんがｗｗｗｗｗ

ではまた次回

裏目

森の中から桜の雨が立ち上っている。
それを眺めて、ブロッサムアンデットが呟いた。

「・・・・この中でいまだ息をしているといったあたり、やはり翼人か・・・・」

下から撃ち放たれていく桜の雨で、すでに観鈴の姿は見えなくなっている。

だがしかし、ブロッサムアンデットはその中で観鈴がまだ生きていることを知っていた。

なぜならば、感じるからだ。
自分の力で打ち出された雨のすべてが、ひとつ残らずいなされているということを。

「これだけの中にさらされながらも、逸らしきるとは流石だ・・・・流石すぎる。だがその流石もここで終わらせてもらう」

ブロッサムアンデットの腕に、エネルギーが溜まっていく。
今までと同じ砲撃だ。ただ今は、それを受ける相手の状況が違う。

「ここでこいつをぶっ放されて、貴女に防ぐすべはない！！」

キュボ、ドウッ！！

ブロッサムアンデットが放つ。
砲撃が迫る。

細い桜の雨を押しのけながら、それが観鈴へと到達し――――――

バチィ！！と弾かれた。
ブロッサムアンデットの首が傾く。

「なに・・・・？」

「アアアアアアアアア、はぁっ！！！」

ヴォォオン！！！！！

その瞬間、観鈴が最大開翼したその勢いとオーラによって、桜の雨のすべてが吹き飛ばされた。

口元を切ってしまったのか少し血が流れており、服もすすけてはいるがいまだに観鈴は立っている。
ただ、体力の方は――――――

「はぁ・・・はぁ・・・・はぁ・・・・・・」

「あ、あの状況で弾くとは・・・ふふ、面白い。しかし逆に言わねばそこまで大きく開翼しなければもう私の砲撃は弾けないということ！！もう底が見えたぞ、翼人！！」

「はぁ・・・・フゥ――――――――」

うろたえながらもそう言い放つブロッサムアンデットの前で、観鈴が目を閉じて深呼吸するように体と翼を開いた。

それはブロッサムアンデットからすれば観念したのだろう、と解釈できる。

だが、その解釈は当然のことながら違う。

全く持って、それは間違っている。

「・・・・・人を想うことに、限界ってあると思う？」

「なに・・・？」

「そんなものはないよ。誰かを思う気持ちに、限界なんてない」

真っ白な光の粒子が観鈴に集まり、まるで雪でも振っているかのように彼女を覆った。

それに応じて彼女の怪我はもちろん、体力までもが全快されていき、翼がさらに大きく開かれていく。

「だから・・・私の翼も・・・・・愛情の翼にも、限界なんて、ないんだよ」

この少女は、純白

「体力を削った？うん、そうだね。でもね？今だったら――――――」

この少女は、世界最愛

「私の方が、あなたより強い。だってこれは、ここには・・・・ここに集まった人たちのあの子たちを想う愛情で満ちているんだから！！！」

世界にはそういうモノが満ちている。

ゴォウ！！！

神々しいまでの純白の光を放ち、観鈴がブロッサムアンデットへと掌を向ける。

それに対し、ブロッサムアンデットが悲鳴にも似た咆哮を上げながら同じように腕を向けた。

森中の、すべての花びらがその腕に集束、圧縮されていく。
その大きさはすでに今までのモノとは一線を画するものだ。

あまりの数の圧縮に、今までは美しい桜色だったそれが、ドス黒くなってしまっているほどに。

「オオオオオオオオオオオおおアアアアアああああああああ――――――――喰らえェ、これで！！！」

ゴギュアァァァアアアアアアアアアア！！！！！

「衝撃波ごと、吹き飛んでいけェ！！！！！」

ボッ、ギュゴォオオッッッ！！！

ブロッサムアンデットが砲撃を放ち、その反動で体が大きく仰け反った。
あまりにも強大な反動に、砲撃を撃った右腕が吹き飛んでしまい、肩から先がなくなった程だ。

だがブロッサムアンデットはそんなこと気にしていない。

これで、これで終わったのだ。
こいつが防ぐすべなどありはしない！！！

確かにそうだろう。

それが、感情を集束した翼人でなければ――――――！！！

ゴォッ、ギィィィイイイイイいいいいいいン！！！！

高音速の音がする。

それは観鈴の腕からしていた。

衝撃波の渦。

力を受けるのではなく、流し、巻き上げるようなそんな形。

それを以って、彼女は砲撃のすべてを腕に吸収していっていた。

「な・・・ん・・・・・」

「あなたの振るってきた暴力（ちから）・・・・」

そして、その吸収されたエネルギーがキラキラと光りながら純白へと色を変えていく。

まるで邪なる意志から解き放たれ、浄化されていくかのように。

「そのまま・・・じゃないけど、きれいにして、返すよ！！！」

ブンッ、ドォッ！！！

観鈴がそのエネルギーの塊を投げ放ち、猛烈な勢いでブロッサムアンデットへと突っ込んでいった。

その威力は彼自身が一番知っている。

森と呼べるほどの大量に生やした桜の木。

その花びらすべてをエネルギーとし、砲撃にした。

邪神が復活した時の切札にとっておいたそれを、そのままそっくり、更には彼女のエネルギーまで上乗せされて、放たれたのだ。

放つのにも右腕一本代償にしたというのに、受け止めるすべなどあるはずがない・・・・・！！！

「オオオオオオオオオオオオ！！」

だから、躱す。
ブロッサムアンデットは全力で動き、その砲撃から回避しようと全身の筋肉をフル稼働させた。

しかし

パァンパァンパァンパァンパァン！！！！

砲撃の横脇から衝撃波の薄い膜による先導で、その向きが修正される。

回避したブロッサムアンデットに向かってそれは確実に突き刺さり・・・・・

「ひ・・・・いアアアアアあああああああああアアアアア

ア！！！！」

彼の視界を白く染め上げ、さらにその全身を包み込んで吹き飛ばした。

バキリとベルトが砕け、砲撃が撃ちきられた跡にはなんだかよくわからない塊が転がっているだけだった。

それに観鈴が近寄って、カードをえい、という声を出しながらトスリと刺すとその塊はカードに吸収され、さらに絵柄も消滅した。

「ふう・・・・やった、観鈴ちんいぇい！！」

周囲はプスプスと煙を上げているが、その中で観鈴がだれにするわけでもなくピースをして勝利を謳った。

残りは、あと二体。

ーーー

その為に石版を解析する役目を受けてスカリエッティも同行するそうだ。

そして後は誰かが回復し次第、同行を頼むつもりだった、という話である。

それを聞いてフィリップは自分が行くと手を挙げた。
確かにコックローチアンデットとの戦闘で疲労はしているものの、エクストリームになったのは途中からだったので比較的ダメージは低く済んだのだ。

だから自分が変身して、ファングジョーカーならついていける、ということだ。

それを断る理由など何もない。

そういうわけで今、シャマルの「旅の鏡」で石版のもとに直行するつもりなのだ。

「でも石版の目の前は危険すぎるわ。少し離れたところに開くから、そこから先は・・・・」

「解ってます。それだけでも十分ですよ」

「出来れば私も行きたいのだけれど・・・」

シャマルも当然行こうとしたのだが、ここには次々と負傷者がやってくるので彼女がいなくなればかなりの負担になる。

向かうのは長岡、スカリエッティ、フィリップ（Wファングジョーカー）、そして長岡に凩がついていく。

これ以上いると気付かれるし、石版の破壊だけならばフィリップだけで十分すぎるからだ。

「気を付けて」

「はい」

そういってシャマルに手を振り、彼ら三人と一匹がシャマルの開けたゲートをくぐって外に出る。

・・・

そうして、たどり着いたのは穴の近くの木の根元。

この穴はクラウドが開けたもので、この下には空の洞窟と十人の少女、石版があるだけだ。
木の裏側にたどり着いた彼らは、少し顔を出して穴の周囲を見る。

どうやらほとんどのアンデットは他のメンバーとの戦闘に向かってしまっているらしく、周囲には三体ほどのアンデットしかいなかった。

それを見てWが獣じみた動きで三体をすべて、死角からの一撃で撃破、カードに封印してゆく。

そして三人と一匹が穴から内部に侵入し、石版の前にたどり着いた。

「・・・これは・・・」

「興味深いねぇ、好奇心がわくねぇ、ゾクゾクするねぇ！！」

「ドクター、それは僕のセリフだよ？」

「おっと、そうだったかい？」

石版を前にしてスカリエッティが興奮し、できることなら邪神も見てみたいが、とつぶやきながら手元にコンソールを出現させてカタカタと叩き出した。

どうやら解析にはもう少しかかるそうだ。
周囲を警戒しながら、Wと長岡がスカリエッティを囲む。

Wは拳を握り石版側を、長岡は銃を構えて少女たちがいる方を。

しかし、二人はそれぞれ何かがおかしいことに気付いた。

Wは気づく。

自分の前にある石版がうっすらと光を放っていることに。

長岡も気づく。
少女たちの前にある光のリングが、きれいな円形を描いているということに。

「長岡さん」

「フィリップ君・・・・」

「「これは」」

「発動してる！」「安定してるわ！！」

「どうやらそのようだね」

コンソールのモニターを見ながら、スカリエッティが結論を言う。

この石板はすでに起動している。
少女たちの魂は安定し、石版に流れ込んでいた。

「そんな・・・・なぜだ！」

『俺たちが来たときには安定していたなんて反応はなかったぜ！？』

「待ちたまえ・・・ふむ・・・・なるほどこれは・・・・・」

フィリップの驚きと翔太郎の質問を、スカリエッティが流して考え込む。

そして、その考えが一つの答えを出した瞬間。

ドゴォッッ！！！

そこに漆黒の拳が叩き込まれ、三人の姿が粉塵に消えた。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

ティアナとキャロ、リュウタロスの弾幕を避け、スバルを投げ飛ばし、キンタロスを殴り飛ばし、ウラタロスを足蹴、踏み台にして空中二段蹴りでスバルとモモタロスを蹴り飛ばした。

そして振り下ろされた拳をティアナが腕を頭上でクロス、ダガーにしたクロスミラージュで受け止め、リュウタロスがその腹に向かってリュウボルバーを向け、キャロのブーストで強化された弾丸がぶっ放された。

その衝撃にコックローチアンデットの体がくの字に曲がり、ズザザザザッ！と地面を滑るように後退していった。
しかし少し行ったところでガッ、と踏みとどまり、まるで腹筋に力を入れるかのような姿勢から腹をさすりながら頭を上げる。

そのさする腹からはプスプスという音と薄い煙が上がるが、それだけだ。
大したダメージではあるまい。

「フゥ～～・・・なかなかいい連続攻撃だ。だがまだ浅いな」

「ちっくしょう、良太郎と一緒ならこんなヤロォ」

「しゃーないやろ。いないもんは！！」

「置いてきたのはテメェだろうが！！」

相手の攻撃を称賛しながらもまだ余裕を見せるコックローチアンデットに、なかなか思い通りの力が出せないタロウズ。

そもそもイマジンは他人の記憶に依存する存在だ。
この四人はすでに確固たる存在としてここにいはするものの、彼らの戦いの記憶の大半は「電王」となってのモノ――つまりは誰かに憑依してのことが圧倒的に多い。

もちろん彼ら四人が弱いわけではない。
しかし誰かに憑依し心を通わせた方が、より力を発揮できるというのも確か。

例外として単独で「変身」した時も同じ効果が得られるのだが、あくまでもあれはライダーパスを持っているときのみ。

よって今の状況が、彼らが思い通りにならないのも無理はないのだ。

「あんのヤロゥ・・・・どっかに使える身体がありゃぁ・・・」

「先輩、それは・・・・までよ・・・？」

「なんだよカメ公、言ってみ・・・あぁ～ん・・・・」

そう愚痴をつくモモタロスをウラタロスがなだめていると、何かを思いついたのか顎を手でさすりだした。
その様子に何かあったのかとモモタロスも同じ方を向き、彼も納得した。

そこにはエリオが槍を構えて突進し、電光の力で辛うじてコックローチアンデットについていって、それでも片膝をついてしまっているところだった。

「そういうことかァ！！トゥアッ！」

そして、モモタロスが駆ける。

身体が薄くなって光り、その体に飛び込み・・・・・

「俺、参上！！！」

そう叫んだのは、かわいらしいキャロの口からだった。

「んなにぃーーーーーー！？」

「ごめんねぇ、先輩。でも武器的にもボクがこっちでしょう？」

そういうのはエリオ――――否、エリオに憑依したウラタロスだ。
どうやらモモタロスを押しのけてこちらに入り、肝心のモモタロスはキャロの方に押し退かされてそのまま入ってしまったのだろう。

「なぁンでテメェがそっちなんだよ！！？テメェは色的にあっちじゃねェのか！！？」

「いやぁほら、僕女の子につく趣味はないからさぁ。それに・・・・・」

「こっちはオレが入ってしまったからなァ！！フンッ」

そういって顎に手を当ててゴキリと首を鳴らすスバル。

目の色が何の前兆もなしに変わったので戦闘機人モードかどうかとかティアナが驚いたが、直後に紫の光が入り込んで彼女も少し変わった。

と、言うかいちばん変わったのは彼女だ。
執務官のバリアジャケットには何やらストラップがいくつもあり、
ヘッドホンを首からかけているのだから。
そしていい笑顔。

「銃使いの子もーらいっ。銃が二つあるって面白いよね？」

『え？え？えぇ！？』

「すまんなぁ。だがオレはおまえさんのガッツが気に入ったんや！！」

『わ、私はいいですけど・・・・とりあえず笑顔のティアを一枚』

「僕が一番しっくりくるね。ま、少し目線は低くなったけど」

『ひょ、憑依ですか・・・なんだかおかしな気分ですね』

「な　ん　で　俺がこのちびっこなんだよ！！いだっ！？このチビドラゴン噛みやがった！！」

『ふ、フリード、私も痛いよ～。あ、あの、ちびですみません・・・クスン』

「な、泣くなよおい・・・だぁー、わかった、俺が悪かった！だから泣かないでくれって！！お願い！お願いお願い！！」

何やら漫才を繰り広げる八人。

それを眺めるコックローチアンデットはポカーンとしてしまっている。

外から見ている分には四人がそれぞれ一人漫才をしているようなものなのだから。

「ったく・・・ンなことしてる場合じゃねぇ。なんのためにこうなったか、おめぇら、忘れんなよ！？」

「おう！！」

「もちろん！」

「オッケー！」

タロウズが横に並び、各自の武器を手に取る。

と言ってもキャロのみはモモタロスォードだが。

『わ、私剣なんか使ったことないですよ！？』

「大丈夫だ。お前は俺を信じてろ。あとはツッこみゃあどうにかなる！！」

『どうにかってェ！？』

「行くぜ行くぜ行くぜェ！！！」

そう叫び、ソードを振り回してキャロが走り出し、コックローチアンデットに切りかかって行った。

気合いと共に振り下ろしたそれをコックローチアンデットは受け止めもせずに、高速移動で背後に回ってその小さな体をつぶそうと拳を振り下ろす。

が、その拳は当たらない。

振り下ろし、標的を外した剣を、そのまま後ろに向きながら今度は斜めに振り上げてコックローチアンデットの胸を切りつけたからだ。

その拳を抑えてコックローチアンデットがうろたえるが、キャロは――というかモモタロスは――剣を眺めるように持ってすげぇと感嘆の声をあげていた。

それはそうだろう。
モモタロスの戦闘における経験、勘、そして嗅覚。
そこにキャロの探知魔法まで入ってくるのだから、見えなくったって直感で動く彼には相手がどこに逃げたかは手に取るように分かる。

「おぅ・・・・びっくり」

「こっちもいるよ!!」

『ストラーダ!!』

そして、さらにはストラーダの突きも迫りくる。
もともとウラタロスもロッド使い。そこにエリオの力も来ればそれはもう猛烈な・・・・

「なめんなや!!」

ガキィ!!!

しかし、その突きをコックローチアンデットは肘と膝で挟み込み、引き寄せてエリオの動きを止めた。

エリオの持ち味は速さだ。
内部にウラタロスがいる以上、雷の力での運動神経増加などできないのだから、技術は上がってもそこが足りなくなってしまう。

そこにキャロ（モモタロス）が斬りかかるが、あっさりと剣は掴まれてキャロの小さな体ごと投げ飛ばされてしまう。

「ちょっと先輩！！その子のことも考えてよ！？」

『キャローーーーーーーーーー！！？？』

「わりぃ、怪我ねぇか！？ってか俺がこっち入ったのはオメーのせいだろうが！！！」

『ふぇえ～～～、だ、大丈夫ですぅ～～～～』

精神面で（どうなってるのか知らないが）目を回すキャロに、ウラタロスに文句を言うモモタロス。

それを見て、スバル（キンタロス）が大きく四股を踏んで気合を一発。

リボルバーを回して、その拳をコックローチアンデットの脳天に向けて振り下ろした。
が、それをコックローチアンデットはすんでのところで回避し、拳は地面に叩きつけられる。

すると円形にピィン・・・と力が浸透していき、そこを中心に地面がざらざらと崩れていくではないか。

「わー、クマちゃんスゴイ！」

『ちょ、これ流砂！？』

『こんなこともできるんだ・・・』

そのあまりの威力に、全員が絶賛。
これがイマジンとの・・・

「殴ったら地面も壊れおったで！？」

なんでもありませんでした。

「おいおい、足場あんなにされたらさすがに・・・・」

「いえーい、バンバン！！」

「ぬお！？」

と、回避したそこにティアナ（リュウタロス）がクロスミラージュでコックローチアンデットを狙い撃ちしてきた。

むちゃくちゃなフォームで撃ってるくせに狙いは的確。

中のティアナはクロスミラージュの制御をしながら泣きました。

「ち・・・数が多くてもあのレベルならよかったが、質が上がっての四人じゃチト手こずる・・・・」

その弾丸を腕で顔を覆うようにガードするコックローチアンデット。その両足がメキメキと音を立てて最高速度で瞬時に片づけに入るか、とした瞬間。

「・・・・・？・・・・・はぁん・・・・・そういうこと！！」

何かを感じとったのか、コックローチアンデットが弾丸を背中に浴びながら、その場から逃走。

それを見た四人が追いかけ始めた。

「みなさん！！フリードに乗ってください！！」

その後を追おうと、キャロが憑依を解いてもらってフリードを巨大化させる。

イマジンの憑依は慣れないと非常に体力を食う。

実際四人の体は汗だくだ。

コックローチアンデットの後を追っていく。
その後を、フリードに乗った八人が追う。

そして、時間が追いついていく。

ーーー

そこに漆黒の拳が叩き込まれ、三人の姿が粉塵に消えた。
その拳の持ち主はコックローチアンデット。

石板で何かが起こっていると感じ取り、即座に戻ってきたのだ。

「・・・・避けるか。だが犬一匹死んでないのはショックだぜ？」

そのコックローチアンデットが上をクイ、と見上げると、そこには背中に長岡たちを乗せ、壁にしがみつくファングジョーカーがいた。
そのままWは天井の穴から地上に出て、コックローチアンデットもその前に躍り出す。

「陽動作戦・・・・ま、来るとは思ってたけど」

「そもそも、もとから考えていた作戦じゃなかったしね」

コックローチアンデットの言葉に、フィリップが返す。
こいつの力は知っている。知ってはいるが、とても相手にできるかどうか・・・・

と、そこにスバルたちも到着した。

結構な数のメンバーに囲まれ、コックローチアンデットが面白い、とでもいうような仕草を取った。

ちなみに、モモタロスたちは途中で良太郎を見つけて飛び降りて行ってしまった。

今頃は楽しく（？）ジークと言い合いをしているだろう。

が、彼らにとってそれは今どうでもいい。

今聞くべきことはただ一つ・・・・

「何故あの石板が発動している！！」

そう、そこだ。

彼らが突入する前に見たサーチ映像では、あの中ではどのようなエネルギーも（アンデットのもの以外は）観測されなかったし、石板もあんなになっていなかった。

それが今は発動している。
一体どういうことなのか。

「は・・・なんで桜の大将があんたら呼ぼうって言ったと思う？」

『なに？』

「・・・なるほどねぇ」

その言葉に翔太郎が聞き返すが、ただ一人スカリエッティだけが理解していた。

「何かわかったの？」

「ああ、わかるさ。というかなぜわからないんだい？ゼロセカｎ――――」

「スバルです」

「おや、それは失礼した。そういえば君にはチンク達の面倒を見てもらっていたね」

「それはそうと、どういうことなんだ？」

勝手に話すスカリエッティに、エリオは少しイラついたように聞く。
それに対しスカリエッティは軽快に答えた。

「君らは捕まった人間が何を求めると思うかね？」

「・・・・助け・・・まさか！！」

「そして、まさに君らがきた。おそらくその瞬間だろう。少女たちは安心した。それでさ」

『俺たちが来て安定して・・・・邪神復活に導いてしまった？』

「そうなるね」

「その通り！！あんたなかなか頭の回転速いねドクター？」

邪神に魂と捧げるための、十人の少女の心の安定。
しかし、それはいくら待っても無理だった。アンデットも三日でやれると見込んでいたのだが、どうしてもそれで出来る気がしていなかった。

だから安定させるために、彼女たちが何を望んでいるのは何かを考えた。

自由？
それはできない。ここから出すわけにはいかない

家族？
連れてくるには骨が折れる

助け？
まさにそうだ。助けが来れば、こいつらは必ず安堵する。
石板はその瞬間を見逃さない。

そして、ブロッサムアンデットが桜の森を出現させ、彼らをこの地に呼んだのだ。

果たしてそのもくろみは果たされた。

いま、石板は少女たちの魂を吸っている。

「させるか！！」

「おっと行かせねぇ！！！」

Wが穴へと駆けながらベルトのホーンを押す。
透かしそれが二回鳴らされたところでWは見えない程に速く動くコックローチアンデットに殴り飛ばされて地面に倒れた。

「な・・・！？」

「は、速い・・・」

「見えなかった・・・・」

この場の誰一人。
エリオですらもとらえることのできない速さ。

それを以って、コックローチアンデットはたった一人で石板の防衛網を築いていた。

「さて・・・どうしてくれるかなぁ？とりあえずなんか起こされるとまずいんで・・・・」

ゴッ、ォオ！！！

「あんたから消えてもらおうかな！？巫女よ！！！」

コックローチアンデットが遊び口調で、しかし気配は本気で、そう言って姿を消す。
そして直後、その黒い姿は長岡の目の前に現れて・・・・・

一つの身体を大きく殴り飛ばし、その体に鮮血を浴びた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

裏目（後書き）

どうも、最近更新遅れ気味の武闘鬼人です。

武闘鬼人　ｏｆ　ｔｈｅ　武闘鬼人
武闘鬼人の中の武闘鬼人。

実を言うと「２０１０年度武闘鬼人オブザイヤー」に輝いた武闘鬼人はこの武闘鬼人なんですよ！！

蒔風
「何を言ってるかさっぱりわからん。とりあえず内容いけ」

ブロッサムアンデット撃破！！
そしてやりたかったフォワードでのイマジン憑依ができて僕満足！！

もう思い残すことはない・・・・

蒔風
「こらこらこらこら！！！」

イマジンたちと絡ませたのは本当にそのためだけです！！
良太郎は犠牲になったのだｗｗｗｗ

蒔風
「まさか観鈴ちんが一人でやりきるとはなぁ・・・・」

ものはやりよう、ということです。
これがクロコダイルアンデット相手だったら勝ち目なんてありませんよ。

砲撃で、しかもあんな方法使ったからです。

蒔風
「翼人による、感情の集束か。俺も何回かしかやってないなぁ・・・・」

あとはお前相手にしたクラウドと理樹だな。

実はすでに始まっていた邪神復活。
すべて後出しの「ＥＡＲＴＨ」に、勝ち目はあるのか！？

蒔風

「次回、今こそ真の姿を！！」

ではまた次回

忠犬（前書き）

ＢＧＭ「ガオレンジャー吼えろ！！」
あるキャラが名乗りを上げた瞬間からどうぞ！！

忠犬

「ハァッ！！」

斬ッ、ドンッ！！

「「「ギィィイイイイイイイイイ！！！」」」

「凶、斬りッ！！！」

ドドドンッッ！！！

ブオー！！ギャー！！フシュルルル・・・ピギャー！！コォー、
コッコッコ・・・・

「いい加減に・・・しろ！！！」

キィン・・・ドゴォウ！！！

迫りくるアンデット。
それを指揮するドーベルマンアンデットは、無限とも思えるようなアンデットと互角以上に渡り合っているクラウドを眺めてヒュ～、と口笛を吹いた。

飛び掛かって来たものは横一線に切り裂き
真正面からの大群は凶切りで消し飛ばし
遠くから攻撃してくる敵はファイガ等でまとめて吹き飛ばすその姿は、まさに現「ＥＡＲＴＨ」最強と言われるほどの物。

「全滅もこりゃ夢じゃないなぁ・・・・ま、そのころにはアイツも体力尽きるだろうし・・・・」

そう言いながらドーベルマンアンデットがクラウドの放ったサンダラを回避し、アンデットの中に隠れて再び様子を見る。
そして銃を取りだしその銃身をズルゥ、と大きな舌でなめた。

「こいつでお前の命を討ち取ったるってのよ・・・・・・」

自分は未熟。

ゆえに、こうして策で攻めよう。

これでいい。
まだ勝負するには自分は早い。
相手は翼人なのだから。

だが、このアンデットは一つ大きな勘違いをしている。

ーーー

「凩ッ！！」

ドッ、ドサッ、という地面を撥ね、凩の体が投げ出され、あたりに血液を振りまいていく。
長岡は凩に押しやられて地面に倒れていたため大丈夫だが、今は木枯らしのほうが心配なようだ。

一方コックローチアンデットはというと、自分に降りかかった緑の返り血を見て「？」という仕草をしていた。
しかし、それを考える間もなくスバルとWのパンチが背後から迫って来たためにそれを中断せざるを得なくなる。

「！！！」

「「『ウゥオリャぁぁああアアアアアアアア！！！！』」」

ドゴッ、ガガシィッ！！！

コックローチアンデットは二人の拳に対し、超速度で振り返り掌で受け止めてまるで合気のように二人の腕を回した。

二人が地面に倒れ、そこに踏みつける動作でコックローチアンデットが足を振り下ろしてくる。

二人が転がってそれを回避しているうちに、長岡は立ち上がってその場から離れ、凩の体を抱えあげた。

「凩？凩ッ！！」

呼びかける長岡に、凩は小さく声を漏らすだけで、ぐったりとしてしまっている。
口からはアンデットの緑の血液が流れており、死なないとはわかっていてもあまりにもひどい状態だった。

キャロが近くに駈け寄って治癒魔法をかけようとするが、なぜか効かない。
スカリエッティもその体を診るが、あまりにも衝撃が強かったからか再生が始まらない。

やられ、倒れた凩の姿にWとスバルがキレ、エリオまでもが咆哮を上げて切りかかって行っている。

が、それを相手にしてもコックローチアンデットの動きは彼らを超えていた。

Wとスバルはあしらわれ、エリオは投げ飛ばされ、ティアナの弾丸は当たらない。

「竜召喚士の御嬢さん。もう治癒はやめたまえ」

「な、何を言ってるんですか！！あなたやっぱり・・・・！！！」

いきなりそう言ったスカリエッティに、キャロが睨みつけて反論した。

その目には涙が溜まっており、「睨み」には思っていたほどの効果はない。

「その犬はアンデットだ。ここで戦力になるならまだしも、あくまでもこうして盾になることしかない。ならばその治癒を、ほかの仲間のために回す必要があるのではないかい？」

「そ・・・それはそうですけど・・・・・でも・・・・・」

ぼそぼそと反論の言葉を探すキャロだが、いかんせんここはスカリエッティの言葉が正しい。

凩をここで復活させても、幾分かの戦力にもならない。
それに彼はアンデット。ほっといても死にはしない。
ならば、その力は他の仲間が負傷した時に使うべきではないのか。
彼らは「死ぬ」のだから。

それを聞いてうろたえるキャロの手に、長岡がそっ、と手を当てた。
「ありがとう。でももう大丈夫よ。あなたのサポートなしで勝てる相手じゃない。行ってあげて」
「で、でも!!」
「自分の身は自分でも守れる。だから・・・・・」
「・・・わかりました・・・・でもこれくらいは（ヴォン）させてください」

長岡の言葉を承諾し、キャロがバリアを張ってその場から戦線のサポートに向かった。

中に残ったのは、スカリエッティと長岡、瀕死の凩。

しかし

「オラァ！！！」

コックローチアンデットがスバルたちに何かを投げつける。

それはなにか黒い塊で、それを咄嗟にスバルが魔法陣のバリアで防いだ。

その瞬間

ドォン！！！

「きゃあアアアアアアアアア！！」

「スバル！！！」

その塊が爆発し、砕けたバリアがスバルを襲う。
塊はコックローチアンデットの力を凝縮させた爆弾だ。

それを周囲にばらまき、一気に爆破させるコックローチアンデット。

その爆発にWやエリオは下がり、コックローチアンデットの姿は爆煙に消えて見えなくなってしまう。

そしてヒュボッ、という音を立てて、その煙の中から何かが長岡達のバリアに向かって突撃していった。

「狙いはそっちよぉ！！」

「しまった！！」

ゴォォォォォォン――――――

迫るコックローチアンデットの腕。その腕には先ほどの黒い塊が握られている。
その腕に向かって、凩が最後の力を振り絞るかのようにして長岡の腕から飛び出し、果敢にも向っていってしまったのだ。

しかし、凩はアンデットと言っても完璧にただの柴犬とそう変わらない。
結果は当然・・・・・・・・

ガッ

「ギャォオオオオウ!!!」

ドォン!!!

コックローチアンデットの腕のすぐ前で、その塊が爆発して凩が炎に包まれる。
その煙に凩の姿が消え、その場の全員が唖然としてしまう。

最後まで主人のために立ち向かい、そして果てて言ったその忠犬に・・・・・・

「ハァん・・・ま、アンデットだから死んでないだろ?まったく、無駄な悲しみだな」

そう「ハン」と笑いながらコックローチアンデットが再び走り出す。

長岡に防ぐすべはない。
コックローチアンデットに先を走られては、スバルたちにも止めるすべはない。

「終わりッ!!」

コックローチアンデットの腕が突き出され

「それはそちらのことだろう」

背後からの声と、その持ち主によって、その拳が掴まれて止まっていた。

コックローチアンデットの背中に立つそいつが、振りかぶった右腕内肘を掴んで止めていた。

「ゼァッ！！」

そして、その腕を一本背負いで投げ飛ばし、長岡からコックローチアンデットを離した。

彼女の前に立つその姿は、侍と騎士を合わせたような体裁で、うっすらと小麦色の乗った色をしている。
腰には刀を携え、真っ白なマントを羽織り、頭からはまっすぐに立った耳が一対あった。

目元にはマスク――――というよりも真っ白なバイザーをしており、視界確保のための穴が鋭い視線を放つかのように空いている。
そう、まるで正体を知られては行けないヒーローのように。

そして腰にあるベルトの紋章で、彼がアンデットであることが窺い知れる。

だが、どうやらコックローチアンデットの味方ではないらしい。
それはコックローチアンデットの表情からしてわかる。コックローチアンデットの顔にある感情は「驚き」そしてほんの少しの――――

「貴様・・・・シバイヌアンデ・・・・・・！！！」

「すまんが、それは適切な名ではない」

コックローチアンデットの口から出るその言葉を、違うと言って遮るシバイヌアンデット。

腰の刀に手を乗せて、長岡の前に立ち主を守らんとする忠犬は、自らを種族でではなく、確固たる個体としてこう名乗った。

「我が名は凩！それが・・・・我が主より承りし誇りある名だ！！」

ドォウ！！

全身から噴き出る闘気が、マントをなびかせてバタバタと騒がせる。
まるでそれが、この者の怒りを表しているかのごとく。

それを見てコックローチアンデットがうろたえながらもハッ、と笑い、凩を指さし叫んだ。

「己が種の繁栄ではなく、統率者についた物好きな野郎がいたってのは聞いてたがな・・・・なるほどね・・・・お前が！！」

「いかにも。我らのような不死生物（そんざい）には、そのような柱が必要なのだ」

「なにをわけのわからんことを！！！」

ドッ！！

凩の言葉を一蹴し、コックローチアンデットが高速で動きその場から姿を消す。

しかし凩は、自分と長岡の周囲をバシシシシ！と地面が少し撥ね、明らかに狙われている状況でも、それに一切ひるむことはない。

ビッ！！

と、そうしてから十秒ほどで凩の真正面にいきなり黒い塊が出現した。

コックローチアンデットが投げ放ってきたのだろう。

しかし

シュチン――――――！！！！ドドンッッ！！

構えもなく立つ凩が、気づかないほどの一瞬で動いた。

長岡の少し後ろの左右で爆発が起こり、凩の腕はまっすぐ伸び、その手には刀が鞘に納められまっすぐ縦に握られていた。

「な・・・に!?」

「居合、縦一文字」

コックローチアンデットの目にすらも捉えきれない縦一閃。聞こえたのは音のみ。

構えの動作も、抜き放った刀身すらも見ることなく、凩はそれを真っ二つに切り裂いていた。

「解っていないようだな。我らは不死だ」

「だからどうした」

「だからこそ。我らには確固たるものが必要なのだ」

「だからそれがなんだってンだ!!!」

パァンッッ!!!

音速を超えたその音を上げ、コックローチアンデットが再び消えた。
もはやクロックアップや風足、加速開翼ですらとらえきれないほどのスピードで動き出したコックローチアンデット。

地面を蹴るごとにその場が抉れ、跳ねればクレーターのように窪んでいく。
風すらをも置き去りにする速度で、コックローチアンデットが凩の周囲をかく乱し始めた――――――!!!

「凩!?」

「離れないで、そばにいてください。主」

その中心にいる長岡をそばに寄せ、凩が周囲を見渡すように首を回す。

『見えねェだろ!?声を聴いて居場所を特定することすらままなるまい!!』

「・・・・そうだな」

『はっは!!これが我が力!!太古より生き延びてきた、我が一族の集大成!!』

どこからか――――というより、この空間自体から響くようにコックローチアンデットの声が聞こえてくる。

もはや音からのサーチは無理だ。

しかし、尚に一切の緊張はなく、淡々とコックローチアンデットに話しかけていく。

「我らは不死だ。「死」という物がない。ゆえに、そこに覚悟はない」

『だからどぉした。だからこいつらよか強いんだろが!!』

「・・・それがない以上、「誇り」と「信念」しか残らぬ我らは、それを強く持たねばならん。生き抜く「覚悟」がない以上、貫く「信念」と抱く「誇り」をより強くしなければならない。ゆえに、私は仕えることにしたのだ。本来三本で支えるものを二本で支えあわねばならんのだから、それを強くしなければならないのは当然」

『は、何言ってんだ。だったら一本だけメチャクチャ強くすればいいだろ？』

「フ、もはや・・・妄執ともいえるな。生き残ることしか頭にない、傲慢なプライドしか持ち合わせていない貴様には解らないさ」

足音とはもう到底思えない音が周囲を唸っていく。

そして

ドスッ！！

『がァッ！？』

「一刀閃（いっとうせん）、心刺し」

見えもしないコックローチアンデットの胸を、凩の刀が正確に捉え刺し貫いた。

切っ先についた血をビッ、と払い、鞘に納めるが、コックローチア

ンデットはまだ姿を見せない。

『こ・・・の・・・・その結果、邪神のための封印に取り込まれて！！己の種の繁栄よりも、こいつらの方が大事か！！』

胸を貫かれた程度ではまだ倒れないコックローチアンデットが、凩に叫び返した。

自分たちは己が種の繁栄のためにいるはずなのに、邪神とやらの封印の捨て駒にされた。

それでいいのか。許せるのか。

繁栄のチャンスもなく弾かれた自分たちに、そしてお前に、怒りはないのか、と。

それに、凩は誇りを持って答える。

「我が一族は古くから彼らとともにいた。共に生きてきた。共に歩んできた。これまでも、今も、そして、これからもそれは変わらん！！」

『繁栄こそが生物(おれたち)の生きる理由(ワケ)!!それを放棄した貴様の方が、俺たちよりもよっぽど歪んでいる!!』

「・・・そうかも、しれん。しかし私の魂は」

『あん?』

「貴様のようなドブ臭さは放っていない」

『・・・・・』

「ま、不死(われわれ)にそんなものがあるのなら、な」

『魂?誇り?信念ンンンン!?臭え臭え・・・そんな臭えセリフ、吐いてんじゃねぇ!!』

――――――――――――――――――――――――――ッッッ！！！！

もはや音すらもない。
凩と長岡の周囲を、とてつもない速さに到達したコックローチアンデットによる黒い帯が覆い、今まさに襲いかかろうと拳を握る。

風が、凩の肌を薄く裂いていく。
しかしそれは命に届くことはない。

「・・・・・・」

凩が、その場に座り込む。
片膝をつき、もう片方をおろし、きれいに正座へと。

そして――――――――――

「死ィッ！！！！」

ゴォッッッ！！！

そして、その残像のベルトの中からコックローチアンデットが飛び出して

チンッッ・・・・・

そんな音だけが、静かに響いていた。

その状況を見ていた、スバル・ナカジマは後にこう語る。

――――真っ直ぐ見ていた。

だが瞬きをした瞬間に、それはすでに終わっていた――――と

正座していた凩が、瞬きの一瞬で片膝を立たせて腰に手を当てていた。
そして、その少し後方にはコックローチアンデットが。

その二体が互いに背を向けて、その場に立つ。

これからあの居合が！？
構えた！
どうするんだ？

そう思ったのはその場の全員だ。

だが

「こ・・・・・あぁあ・・・・・・」

「どうやら・・・・・」

スクッ

凩が立ち上がる。
動きの止まったコックローチアンデットの額から液体が流れ出した。

「私のセリフよりも、貴様の方が臭かったようだな」

「な、なん・・・・で・・・・・」

バキン!!

そして、首を回して背中越しに語りかけた。

「臭うぞ、蜚（ゴキブリ）？」

「バッかなぁアアアアアアああああアアアアアアア！！！！！」

ドォオオウ！！！！！

ベルトも身体もまっふたつに切断されたコックローチアンデットが、傷口から爆発して四散した。

シュウシュウと音を立てて、その肉片が消滅していく。

「封印もなしに・・・消滅・・・・？」

「す、凄い・・・・・・」

そのときすでに、すべて終わっていた。

動作も、構えも、何一つとして見せることなく、凩の剣閃はコックローチアンデットを切り裂き、この戦いを終わらせていたのだ。

「ご心配おかけいたしました、皆さん」

驚く一同に凩が頭を下げて一礼し、自分が倒れた時にあんなにも怒ってくれてどうの、ということを感謝していた。

コックローチアンデット、消滅

軍配は、白き忠犬に上がることとなる。

to be continued

忠犬（後書き）

忠犬、ここにあり。
野生の牙を、誇りの刃と変える。

凩の大活躍回です！！

蒔風
「こいつ速いな」

凩のイメージとしては「学園キノ」のサモエド仮面です。
もちろん頭にリンゴは無しでｗｗｗｗ

あっちはサモエドだけど、まあ変わらないよね！！

「オオカミ剣士」という物を想像すればいいかと思います。柴犬だけど

くっそかっこよく考えましたよ全く

しかもＢＧＭがガオレンジャーｗｗｗｗｗ
熱くなっていただけたでしょうか？

蒔風
「クラウドはドーベル指揮のアンデットどもに邪魔されてるみたいだな」

そう、彼は賢いからね。
無理はしないのさ。

でもな、その判断がまず間違っているのだよ、彼。

蒔風
「ほう？」

ま、そこは次回。
先に言うと、ドーベルの戦闘はあっけなく終わりそうですよｗｗｗ

邪神はどうなるのか、そして時々聞こえてきた謎の声は邪神のモノなのか！？

蒔風
「クライマックスになだれ込め！！」

ではまた次回

復活

四体目のアンデットを倒し、そのあと

コックローチアンデットを撃破した一同は、再び洞窟内に入って石版を調べ始めた。

見るとやはりコックローチアンデットの言うとおりで、魂は今も石版に流れ続けており、邪神復活までもう時間があまり残されてはいない、ということが分かっただけだったが。

「今これを破壊してはだめなのかい？」

「駄目だね。いま魂が流れている状態で壊してはパイプを破壊してしまう。そうなれば魂は途切れて戻ることはなくなってしまう」

『んだよ・・・ってことはこのまま見てるしかねぇってのか？』

「いえ・・・多分、石版に全部流れきった瞬間に・・・ですよね？」

スカリエッティとWの二人が話しているところに、ティアナが入り

込んできた。

今石板を壊してはそちらに魂が残されてしまう。

やるならば、すべて流れきった後に破壊するのだ。

それも、流れきってから邪神が出てくるまでの一瞬のうちに。

「タイミングはわかりそうかい？」

「私が計算するよりも彼の方が正確なのではないかい？」

フィリップの問いに、スカリエッティが凩の方を向いて質問をそのまま投げた。

その問いに凩が応える。

「後・・・二分と１３秒・・・・１２、１１、１０・・・・・」

そういってカウントダウンを始める凩。

あまりにも時間がなかったため、いきなりのそれに驚く一同。

だが冷静に考えればそれだけ時間がある。

最大火力にまで力をためるには、十分すぎる時間だ。

『最大まで溜めるぞ、フィリップ！』

「もちろんさ、翔太郎」

ガシュッガシュッガシュッ！

《ファング！マキシマムドライブ！！》

「クロスミラージュ！」

「マッハキャリバー！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「「「エクシードサード！！」」」」

フォワードも魔力をためていき、キャロの補助でさらに威力を上げていく。

「では、私も」

更には凩も構え、万全を期してその瞬間を待つ。

「・・・・残り、５０秒」

「行くぞ・・・・」

「はい」

「任せてください！！」

洞窟内を、甲高い音が響いていく。
魔力など諸々の力がうねりを上げて、装填される。

そして

「残り・・・・！？」

ガッ、ズン！！！

「うわっ！？」

「きゃぁ！！」

残り三十秒ほどとなったその瞬間、洞窟が揺れ、直後に瓦解、崩れて行ってしまう。

そのど真ん中にいた彼らは降りかかる土砂から逃げようとして、完全に構えを解いてしまった。

「ま・・・ずい・・・主！！」

「凩！！」

凩が長岡を引き寄せ、語りかける。

いま、その時間が来た、と。

しかし誰一人として石版に打ち込める状況ではない。

それどころか、今にも崩壊に飲まれまいと逃げ惑うので精いっぱいだ。

「ぬ・・・破ァッ!!」

その状況を脱しようと、凩が真上に向けて剣閃を打ち出す。

それによって降りかかる瓦礫の雨に穴が開き、そこから全員が脱出に成功した。

そして

「なんだ・・・これは・・・・・」

地上に出た彼らは、真っ白な巨大な塊を頭上に見た。

その塊の正体は、離れた場所で戦闘を行っているクラウドが見ることでやっとしっかり確認できるほどの大きさだった。

「フンッ!!・・・!?なんだ・・・?」

「あ?あーーー!!あの野郎独り占めする気かよ!!ずっこいぞ!!」

そこから見えたのは、巨大な巨大なクジラだった。
おそらくはシロナガスクジラの始祖たるアンデットなのだろうが、いくら始祖と言ってもあれはデカ過ぎる。

戦艦ではないかと思うほどの巨大。
同じ空域に浮いている瞬風がの五倍ほどもあろうその巨体の口から

は、ガラガラと岩石を落としていて、おそらく洞窟ごと石版と少女たちを飲み込んだのだろうというのが推測できた。

「いきなり飲み込んじまうとか・・・今まで動かなかったのは体が重かったからじゃなかったのかァ!!」

なんてこったと頭を押さえるドーベルマンアンデットだが、そこにクラウドの剣撃が迫ってきたのでおっと、といった感じに回避してアンデットを差し向ける。

「もうあんたと遊んでる場合じゃねぇんだ。あっちに行かせてもらうよ!!」

「行かせるか!!」

「行ーくーの!!お前ら、相手してやれ!!」

そういってさらにアンデットをクラウドに向けるドーベルマンアンデット。

背後からはクラウドに向かうそれらの叫び声が聞こえてくる。

しかし

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！

ドォドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドンッッッ！！！

「な・・・（ズガッッ！！）に！？」

その背後で無数の爆発音とアンデットの断末魔が聞こえた直後、自分の体を巨大な大剣が刺し貫いていた。

「逃げる？そんな奴が、俺に勝てると思うのか？」

背後で剣をドーベルマンアンデットに突き刺したクラウドがそう語りかける。

そのまま地面にうつぶせに倒され、標本のように剣で留められたド

ーベルマンアンデットは訳が分からなかった。

自分は未熟だ。
それが十分わかっているからこそ、周りをかこって堅実に戦ってきたのに、なんでここで崩れるんだ・・・・

しかし、その考えを読んだかのように、クラウドがさらに後を続けた。

「お前、気づいていないのか?オレ、バーサーカーと恋、そしてエリオたち・・・それらとの戦闘はかなり濃い経験だったろう。それによってお前の力は、すでにオレと同等か・・・・もしかしたらそれ以上にまでなっているんだぞ?」

「な・・・・・」

「そんなお前が隠れる戦い方を?それはもはや慎重や堅実ではなく、臆病以外の何物でもない」

そう、ドーベルマンアンデットの力はすでにクラウドを凌駕していた。

否、力だけならばすでに超えていたと言ってもおかしくはない。
ただ、新参者がゆえに経験値が足りなかっただけだ。

しかし、これまであった数々の戦闘により、ドーベルマンアンデットは成長していっていた。

速射、身のこなし、必殺技に至るまで、それの精度は上がってきている。

しかし、彼はいつまでも「未熟者」として戦い、その力を使うよりも早くほかのアンデットに任せてしまった。

それはクラウドの言うとおり、もはや策略でもなんでもなく、臆病であるというだけのこと。

「俺の翼は勇気の翼・・・・世界最勇のオレに、臆病者が勝てるわけがない」

「は・・・はは・・・・・やはり・・・まだ未熟だったか・・・・」

「ま、そういうことだな」

「自分が未熟でないことに気付けなかった・・・オレはもうお前らより強かったんだな・・・・・」

「そうだな」

「試す機会がないのは・・・」

「それでも、勝つさ」

「・・・残念。これは失策」

クラウドの剣は背中を貫き、そのまま正面のベルトをも砕いていた。

ドーベルマンアンデットが目を閉じ、クラウドがカードを突き立てる。

こうして、事件の主犯者・五体の上級アンデットはすべて消滅した。

しかし、脅威は終わっていなかった。

ーーー

その巨体のすべてをようやく視界に収めたころ、理樹が合流し、さらに巨体(これ)を見て一刀と観鈴も急いで駆け付けてきた。

更にはアンデットはすべて倒し終わったのか、ほかのメンバーも集まりだす。

最初こそ凩の姿にびっくりしたが、事情を説明して事なきを得る。

と、言うよりもこちらの方がやばいだろう。

「石版をみんなごと飲みこんだぁ!?」

「最初から体内に問いこんでの復活・・・うまい手だね」

驚く一刀にスカリエッティが冷静に答える。

しかも実は邪神復活のための準備は済んでおり、今にも出てくると聞いて理樹たちは焦った。

だが、それに対して一人だけ、今だ余裕にかまえるライダーが一人。

「何焦ってんだ。あんなのラクショーだっての」

《ＨＩＢＩＫＩ！ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＡＲＭＤ》

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＨＩ　ＨＩ　ＨＩ　ＨＩＢＩＫＩ！！》

そういうのはコンプリートフォームのディケイドだ。
隣にアームド響鬼を召喚し、ファイナルアタックライドを発動させる。

すると二人の剣が炎に包まれ、ぐんぐんと伸びていき、その長さは怪獣でもぶった切るのではないかというほどにまで長さに達した。

「オレは前にもフォーティーンを倒している。ちょうどこの技でな」

「ま、士ならやってくれるだろうね」

そういって、力を込めるディケイド。

するとちょうどその瞬間、シロナガスグジラアンデットが悲痛の叫びをあげ、身体がボコボコとうねりだしたではないか。

そして、腹が裂け、背中が割れ、口や頭から暗黒の煙が噴き出してきた。

「来るぞ！！」

ディケイドが叫ぶ。
それに応じて、ほかのメンバーも攻撃を構える。

煙が立ち上り、それが晴れていくとそこには邪神、フォーティーンの姿が・・・・・

「行くぞ！！」

「オォオオオ！！！」

「ハァァアア！！」

そして、気合いを込めて叫ぶディケイド。

だが

「アァァァ！！って・・・え？おいおいおいおい・・・・・」

相手を見る視線が、ぐんぐんと角度を上げていき、それをと共に気合いが掻き消えて行った。

「で・・・・でかい・・・・・・」

「おいおい・・・う・・・そだろ・・・・」

ディケイドの腕がだらりと放心したように下がっていき、攻撃はいつまでたっても放たれない。

デカすぎる。

さっきのクジラも相当なものだが、こちらも負けてはいないデカさ

だ。

かつて士が相手にしたフォーティーンは子供――――――否、ペットだったのかと思えるくらいの違いがある。

その場の全員に影と落とし、フォーティーンが彼らを見つけた。

そして、咆哮。

その咆哮で召喚されたアームド響鬼は消滅し、全員が踏ん張って地面から飛ばされないようにしなければならなかったほどのもの。

「うわぁ！！」

「なんつー奴だよ！？」

その大きさに悪態をつくなり見上げてあぜんとするなり、各人がフォーティーンの姿を見上げた。

「ＧＹＩＵＯＨＨＨ

ずだ。あれと共になりこの星に脅威が迫った時、その精神になり変って敵を粉砕するのは貴女の役目だった。だが膨大な時の流れが貴女の血を薄めた・・・・まさに「少女」と呼べる存在の魂の揺らぎが最も大きなエネルギーになると言っていたのはどこの次元世界の定説だったかな?もはや混じり合って力を成すのは、この時代の少女たちである方がふさわしい・・・・！！」

早口で一気に言い放つスカリエッティには、多少なりの狂気が含まれている。
おそらくはこれを目の前にして好奇心がうずいてしょうがないのだろう。

まあ、それで暴走しないだけでも昔よりまともになったということなのか。

フォーティーン
四本の腕に、蛇のような下半身。そして、真っ白な鎧を身にまとったかのような体躯。

腕にはそれぞれ剣、杯、棍棒、盾が握られており、それぞれが風、雷、氷、炎の力を持つ。

十人の少女たちは体の各部に、配置封印され、その力を利用されている。

聖杯からは雷が溢れ、盾の中心からは爆熱系の液体がどろりと垂れ出ていた。

海面を吹き飛ばし、炎上させ、フォーティーンが海上から陸地へと乗り込み、そのまま都市部へと向かおうと飛んでいく。

「させるか！！」

「えいッッ！！！」

そこに一刀が飛び出し、無数の剣を頭部に向けた。

しかしそれは一本も突き刺さることはなく、カンカン、と甲高い音を鳴らして落ちていく。

だが気をそらすことはできたようで、その恐ろしい相貌が彼らに向けられる。

剣が振るわれ、盾の中心から球体状の液体がドポッ、と飛び出してくる。

その剣を理樹の巨大バリアが防ぐがその重さに力が地面に叩きつけられ、液体は観鈴が衝撃波で遠くへ飛ばそうとするが触れた瞬間に爆発炎上、円状に広がった熱で、木々は焼け焦げあたりを焦土と変貌させてしまった。

「ぐお・・・」

「なんて・・・やろうだ・・・・・」

「これが・・・邪神フォーティーン・・・!!」

地面に倒れ、立ち上がる一同が武器を構えて睨みつける。

こいつをここで止めなければ、この星は終わりだ。

「クラウドさんもそろそろつく。全員で、こいつを倒す！！」

「「「「「よォッしゃぁ！！！」」」」」

一度は驚きはしたものの、彼らの士気は再び上がる。

思い出す。
思い出せ。

「勝てない」といわれる勝負に挑み、一度も負けることなく勝利し続けた男のことを。

異常なる偉業を成し遂げ、そしてついぞ負けることなく世界を救った男を。

気付けば「その日」は明日に迫っている。
胸を張って言えるようにしよう。

何よりも、自分たちのために。

ここで世界を終わらせては、明日の自分に向ける顔がないから。

to be continued

復活（後書き）

ついにフォーティーン復活！！

ちなみに少女たちの配置は

右腕（上）の剣・・・ルーテシア・アルピーノ
右腕（下）の盾・・・イクスヴェリア

左腕（上）の聖杯・・・御坂美琴
左腕（下）の棍棒・・・アルルゥ

額・・・インデックス
胸・・・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

背中（左）・・・古手梨花
背中（右）・・・古手羽入

尾（手前）・・・高町ヴィヴィオ
尾（奥）・・・ハナ

となっております。

その個所には彼女たちを形度ったプレートがあります。
ブレイドのキングフォームみたいに。

スカさんのまくし立て解説が何気に一番書いてて楽しかったですｗｗ
イメージは「ガメラ３　邪神覚醒（イリス）」でのワンシーンです。

そして何故あの年齢でなければならないのか。
それもスカさんの言うとおりです。

え？何がモチーフ？
巷で噂の例の「血溜まりスケ・・」ゲフンゲフン
あの魔法少女です。
僕と契約して魔法少女になってよ！！

ドーベルマンアンデットも本当に何気に終わってますしｗｗｗｗ
彼は自らがすでに「未熟でないこと」に気付けなかった。
はたしてそれは未熟なのか？ｗｗｗｗ

次回、ＶＳフォーティーン。

だがこれだけではないのだよ、諸君。
マリアージュ制御端末を送ったのは？橘に連絡をしたのは？アンデット達に力となる少女たちの情報を流したのは？

事件の根幹にかかわる謎は、実はまだあったりします。

では、また次回で！！

「オォオオオオ！！」

一刀が流星剣で切り掛かる。
しかし、その動きは最初からわかっていたかのように回避される。

「えい！！」

観鈴の衝撃波が襲い掛かる。
しかし、額部分から魔法陣が出現してそれを防いでしまう。

「行かせるか！！」

理樹がバリアを張る。
しかし、尾が振るわれて七色の魔力がほとばしり破壊されてしまう。

フォーティーンにあらゆる攻撃を加えていくものの、そのすべてが躱され、弾かれ、破壊される。

カケラによる先読みの力は絶大で
魔術書の知識から来る防衛策は完璧で
七色の魔力による攻撃は強力すぎる

これだけやって、まだ力を蓄えているのだから、まさに邪神だ。

フォーティーンが棍棒を振るうと、地面や宙に魔法陣が出現し、その中心から化け物が現れてきた。
さらに剣をタクトのように振るうことで、その化け物たちが「ＥＡＲＴＨ」のメンバーに襲い掛かって行った。

召喚、使役

「電王！！過去に戻ってあれを消せないのか！！」

『無理です。ハナさんを取り込んでるから、過去や未来からの介入はできないです！！』

特異点

「これだけの力を使ってるんだ・・・暴走しないわけが・・・」

「イリヤを取り込んでる以上、力が器を超えることはないと思います、よ！！」

聖杯の器

ドドドドドン！！バッチィ！！

「ホントに雷かよ・・・自然現象の域を超えてるぞ！？」

「液体に触れるな！！爆発するぞ！！くっそ・・・「あいつ」の獄炎の方がかわいく思える！！」

電撃、爆炎

「クロックアップ以上・・・・！？」

「違います・・・瞬間移動・・・それ以上の力だ！！」

「時を・・・止めるだと！？」

時間操作

それぞれの力は威力の上下こそあれど、そのどれもが強力だった。

いかなる対軍兵器も、巨大砲撃も、技も、能力も、この邪神を前にしては遊びに近い。

飛び掛かって切り掛かることも可能だが、近づいて一回斬りかかるだけで内部から衝撃波が吹き出し、叩き落とされてしまうのだ。

《ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ――ＦＵＳＩＯＮ　ＪＡＣＫ》
《ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ――ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ　ＫＩＮＧ》

「行くぞ剣崎！！」

「はい！！」

空を飛べるメンバーは残らず飛び立ち、四方八方から攻撃を仕掛けていく。
しかしだからと言って効いているわけではない。
だが意識をこちらに向けることは出来る。

彼らは待っていた。
現在を以って「世界最強」と言える、彼を。

《ＳＰＡＤＥ　１０　ＪＡＣＫ　ＱＵＥＥＮ　ＫＩＮＧ　ＡＣＥ――ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＲＡＳＨ》

「アアアアアあああああアアアアアア！！！」

ドゴッ、ギャギギギギギギギギギギギィィ！！！

ブレイドキングフォーム渾身のロイヤルストレートフラッシュも、フォーティーンの鎧の隙間を狙うが回避され、その鉄板のような場所にぶち当たって縦に真っ直ぐ火花を散らしながら少しだけ窪ませていくだけだ。

落ちていくブレイド。
それを剣で切り裂こうとするフォーティーン。

ブレイドは巨大なそれを、自身の剣を二刀握って受け止めた。
しかし、受け切れるはずもない衝撃に、地面に激しく叩きつけられて変身を解除されてしまった。

刻一刻とメンバーが減らされていく。

と、そこに

「フッ、ハァッ！！」

ドッゴォウ！！！

メンバーに向かって振り降ろされたフォーティーンの剣を、クラウドが全てを組ませた合体剣で真っ向から斬りかかって互いに弾かれていった。

フォーティーンの上体はよろめき、クラウドが地面に真っ直ぐ落下して着地する。

「クラウドさん！！」

「アンデットはすべて倒した・・・・それにしてもデカいな」

そうさらっと言って空を見上げるクラウド。

それに対しフォーティーンは、自分の剣を弾いた相手を見つけ最大限の威嚇を以って咆哮してくる。

「開翼！！！」

ドバッ！！とクラウドの背から漆黒の翼が広がり、咆哮の衝撃を掻き消していく。

「アイツのもとにたどり着ければ勝機があるかもしれない。三人とも、援護を頼めるか？」

「よっし！！」

「オッケイ！」

「任せて！」

「よし・・・行くぞ！！」

ドンッッ！！！

そう叫んで一気に地上を飛び立っていく四人の翼人。

それに対しフォーティーンが剣と棍棒を振るって襲い掛かってきた。

クラウドが魔法と剣技でそれを弾き、さらに前へと進んでいく。

その途中を召喚された無数のアンデットが阻んでくるが、クラウドの前に現れた観鈴が衝撃波ですべて薙ぎ払って地面に落とした。

更にクラウドを落とそうと、七色の魔力光と共にエネルギーが尾とともに振るわれる。

今度は理樹の番だ。

クラウドを追い抜いて飛び出し、その尾を防ごうと最高のバリアを繰り出した。

「さっきは壊されたけどね、今度はそうはいかないよ!!」

ヴォンヴォンヴォンヴォン!!

「五重に張って、さらに流動!!壊せるものなら、壊してみなよ!!」

理樹がバリアを張って、それを防ぐ。

しかし、恐ろしいことにその五重のバリアは三層目まで何の障害もなく破壊され、四層目もヒビが入って少し耐えた後に破壊されてしまった。

だが最後の五層目に尾がふれた瞬間、フォーティーンの尾が流動によって、引っ張られるかのようにがくんと突っ張り、フォーティーン自身の巨体が大きくブレた。

「いまだ！！」

理樹が叫び、作り出されたバリアの足場を力強く蹴ってクラウドがさらに飛び出した。

フォーティーンは眼前。

しかし

「ＦＵＳＨＵＵＵＵＵＵＵＡＡＡ

カケラによる先読み、そして時止め。

おそらくここまで来るのはフォーティーンにとっても予想外だったのだろうが、最終的にはこの力がある。

それを以って回避、さらにもう来れないように反撃して叩き潰すつもりだ。

「一刀!!」

「ああ、右後方から来るぞ!!」

ゴォ!!

「また動いたな。次は真左だ!!正面に誘導する!!」

一刀の片目が光り、それによる能力で先読みを行っていた。

その借りた力の目の名は「劫(アイオン)の目」

皐月駆の持つ、数ある未来の可能性を幻視する目だ。

だがその膨大な情報の処理は一刀にはまだ扱いきれていないのか、ツツー、と鼻血が垂れてきていて、頭が痛むかのように押さえていた。

しかし、それのおかげで相手の動きは見えるし、予測していくことも可能になっている。

そして

「行けるぞクラウド、真正面だ！！」

「（コクン・・・！！！！！）」

フォーティーンが一刀の力によって誘導され、その眼前に突如として出現した。

時間停止による移動だったのだが、それを一刀によってこの位置にずらされてきたのだ。

「「「ブッち」」」『『『かま』』』《せェえええええええええええ！！！！》

全員の咆哮に、フォーティーンの体がビリビリと振動する。

クラウドが剣を分離させ自分の周囲に出すと、それを次々とフォーティーンの体、ちょうど右脇腹に向かって連続で投げ放って行った。

「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！一点集中！！」

ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ、ビシッ、ドスッっ！

そして、最後の剣が見事にフォーティーンの脇腹に突き刺さり、鎧にひびが入る。

「集え！！」

クラウドの叫びとともに、それまで投げつけ、鎧に弾かれて行っていた剣から魔力の糸のようなものが伸び、ピィンと張った。

その行先は、フォーティーンの体に突き刺さった一本。

その柄の尾に二本目が突撃、ぶつかって一本目を体内に押し込んだ。

二本目が一本目と同じくらい突き刺さり、さらにそこに三本目、四本目と突き刺さり・・・・・

「ＧＹＩＡＡＡ

となれば当然、右わきから左肩に斬り裂かれるのはわかりきったこと。

ザギュッッ！！

「まだァ！！」

ギャオッっ！！

さらに右肩から左脇に、Ｘの字を描くようにしてフォーティーンを斬り裂くクラウド。

その斬り口から炎が上がり、フォーティーンの体を包んでいく。
その体から明らかに生気（と呼べるものがあるのならば、だが）が抜けて行っている。

しかし、いまだフォーティーンに倒れる気配はない。

「こいつ・・・まだかよ！！」

「インデックスの知識と羽入の神通力をフルに使って再生しようとしてやがる・・・・」

「それだけじゃない。「少女」の魂が力になる、というのが本当なら、そもそもの治癒能力、基本スペックもでかいはずだから・・・」

そう、なんということか今やフォーティーンの体は、すでに斬り口吹き出る炎のエネルギーすらも取り込んで、再生へと向かっていた。

しかし、体を傷つけられたというのがよほど頭に来たのだろうか。再生を待つことなくフォーティーンはクラウドへと襲いかかっていった。

「ＺＩＩＩ

「グッ、お！！」

バガン、ゴォン、バゴォッッッ！！！

その剣と棍棒を剣で受け、流すクラウドだが、真横から振り下ろされた盾をもろに食らい、吹き飛んでいく。

身体が横に「く」の字に曲がり、肺から空気が吐き出される声にならない呼吸音と、右半身の骨がミシメキと軋む嫌な音が聞こえてきた。

グググッッ、と振られた盾に張り付くように押しのかれていくクラウドは、それが降り抜かれると同時に目にもとまらないスピードで地面に向かって一直線に激突した。

が、その体はとっさに動いたカブトや翠といったメンバーによって、直撃は避けた。

しかし地面はくぼみ、クッションとなってくれたにもかかわらずクラウドはすぐに起き上がれないし、カブトと翠は完全に気絶してしまった。

そのクラウドにフォーティーンが襲いかかる。

それを止めようと一刀が地面を走り、フォーティーンの真下へと向かっていった。

それに気付いたのか、フォーティーンが一刀を見ることもなく盾から流した爆液で吹き飛ばそうとこちらに向けてきた。

走りながら一刀はそれを回避し、爆発によって跳ね上がった地面を駆け、真下に到達すると一気にしゃがみこんで跳躍、開翼して突っ込んで行った。

垂直に飛び上がった一刀の目の前には、フォーティーンの尾があり、そこからヴィヴィオを模したようなプレートが見えた。

直後、そこから七色の魔力が吹き出、幕でも張るかのようにして一刀に落ちてきた。

「ッ！？　フンッっ！！！」

それを見て、一刀が空中で足を踏ん張った。

「オォオオア！！つ　ら　ぬ　けェ！！！」

一回転し、反動をつけて足を踏み込み、左掌の甲に右拳を当て、全身の力を込めて、それを打ち込んだ。

拳から放たれ、掌底から打ち出された衝撃が、フォーティーンの体を下から一気に脳天まで走り、貫く。

ゴプン、とフォーティーンの目や鎧の隙間から何やらよくわからない液体がこぼれ、その体がビクンと揺れた。

「っしゃぁ！！」

一刀がガッツポーズを取り、フォーティーンの体が止まった事に手ごたえを感じていた。

しかし、直後フォーティーンの目だけがギョロリと周り、一刀を捉えた。

その尾が鞭のように奮われ、それを一刀は紙一重で回避。

しかしそれと同時に放たれた七色の光線が一刀を追い始め、七つの追尾から一刀が開翼して回避を始めた。

一つ、二つと弾き、回避し、消滅させていく一刀だが、一発が掠り、二発三発目と命中してしまい、動きが止まったところに電撃をくらって地面に落ちていく。

それを愛紗とセイバーが抱えあげるがあまりの電量に身体が痺れてしまい、まともにしゃべることすらもままならない。

そうしている間にクラウドが何とか立ち上がり、フォーティーンに向かって再び斬りかかっていった。

クラウドの力はすさまじく、フォーティーンとまともに数回斬り合っては地面に落ちていくことの繰り返しをしている。

無論、他のメンバーも見ているだけではない。

当然地上や空中からの攻撃は行っているのだが、まったくフォーテ

ィーンは気にもせず、ただ翼人組との戦闘しか行わないのだ。

まるで、相手にするのも馬鹿らしいといわんばかりに。

「グオァッっ！！？」

そして、何回目だろうか。
クラウドがまた地面に叩きつけられ、それを頭から血を流した理樹が抱えあげ、観鈴が一刀を起こそうと腕を引っ張っていた。

しかし支えている方も支えられている方も、すでに限界に近い。

足はガクガクで、視界もぼんやりしてきた。

そうまでなって必死に闘う姿を見て、メンバーは徐々に思い始めてしまっていた。

――勝てないのでは、ないか――

しかし、そうなってはならない。

そうはなってはいけないのだ。

「世界は、幾度も消滅の危機にさらされてきた」

理樹が言う。

「いつだって、大丈夫だと思っていた「世界」っていうのは、簡単に砕け散ってしまうものだったんだ」

くじけそうな魂に、言葉を向ける。

「でも、でもだよ?あきらめず、立ち上がる。たったそれだけを繰り返してきて、僕はこうして生きて、この世界にいる」

終わりなんてない。

「そして、それは誰だって知ってるはずだ。だって・・・・」

だって今ここにいるみんなは、そういう男の背中を見、憧れ、集まったみんなじゃないか――――――

「友の為に!!!」

「繋がる・・・絆を守るために！！」

「愛する想いを」

「立ち向かう勇気を、ここに」

ゴォッッ！！！

四人の翼人それぞれに、皆の思いが流れてくる。

翼が輝き、粒子が舞う。

その光にフォーティーンの目がくらみ、そして晴れた頃に四人はそこにいなかった。

驚愕するフォーティーン

直後、彼の左右の腕がへし折られた。
右を一刀に、左を観鈴に。

その再生はすぐだ。
しかしそれよりも早く理樹が懐に入り、バリアで作った超巨大なナックルでフォーティーンの体をアッパーで打ち上げる。

フォーティーンの顎が砕け、衝撃にそこからの咆哮も漏れなくなった。

そして

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

クラウドの気合とともに合体剣が振り下ろされて、フォーティーンの体を脳天からまっすぐに斬り伏せた――――――――――――――！！！！

「ゴ・・・・・ガ・・・・・・・・」

ズッ・・・グラァ・・・・・・・

フォーティーンの体が揺らぎ、そして・・・・・

ズゥン・・・・・

落ちた。

その光景に、すべてのものが歓喜した。

諸手を挙げ、喜んだ。

しかし

「ＧＡＡＡＯＯＯ

それによって体が爆発し、フォーティーンの体が消える。

「素晴らしい出来だ」

その人物が淡々と言った。

それを見て、ほとんどのメンバーは新たな味方かと思った。

そう、始めてみる人物だ。
しかし、何人かは「どこかで見たような気がする」と感じていた。

「私の為にここまで力をそろえ、さらにお前たちを弱体化させた」

そのメンバーの中、たった一人だけが剣を握りしめ、その男を睨み

つけた。

「膨大な力の奔流の中、ようやくまた戻ってきた。多くの絶望に惹かれてな・・・・」

クラウド・ストライフが、男の名を叫んだ。

見間違えるはずもない。
決して見間違えるものか。

長い銀髪
漆黒のコート
魔晄に浸った蒼い眼
男の伸長を優に超えて長い、異様な長刀

すべてを見下したような、冷たい視線。

「セフィロス・・・・・・・！！！」

「・・・・クラウド・・・お前の大切なものを・・・・・・奪いに来てやったぞ」

事件は、邪神に終わらなかった。
それらすべてを利用する、最悪の英雄が現れた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

邪神（後書き）

邪神さん退場！！

でも翼人四人がかりなのにをここまで痛めつけるって相当だと思うんだ。
だから弱いわけじゃないよ。ほんとだよ！！

と、いうわけでクラウド愛好会の会長、セフィロスさんに来てもらいましたｗｗｗｗ
もう静かな口調で語尾に「クラウド」ってつければ何でもセフィロスになる気がしてきたｗｗｗｗ

さあ、みんなもやってみよう！！

と、冗談はさておき。

昨日、バイトの先輩からマイクをもらいました。

理由は簡単。
ニコ動の「歌ってみた」って面白！って思ったからです。

そして昨日、さっそく「星獣戦隊ギンガマン」歌ってみたんですけど・・・・

難しい！！カラオケとは違って難しい！！

いやさ、まだ投稿なんてしてませんよ？とりあえずやってみただけでして。

もしかしたらいつかは投稿するかもｗｗｗｗｗ
この小説の挿入歌にしてきた曲かなぁ・・・・とかおもってますｗｗｗ

そろそろコミケですね！！

作者は死んできますｗｗｗｗｗ
でもコミケ中にも頑張って投稿したいなぁ・・・・とか

では。、また次回をお楽しみに！！

銀白

空が曇っていく。
日がこれから上りきるという時間に、空を分厚い雲が覆っていく。

この場にいるメンバーの大半は彼を知らない。
知ってる者も、あの最終決戦で「奴」の出したレプリカを見ただけだ。

これが、そうこれが

「良い絶望だ」

本物の、災厄の戦士

「何故あんたが・・・・・」

「忘れたのか？クラウド。私も、翼人と言われる存在だったことを」

セフィロス復活。
しかし、彼は体を失ったはずだ。

今までも何度か復活しているが、今回はなぜ・・・・

「この場にはよい絶望が蔓延している・・・・」

セフィロス

漆黒の翼をもった、かつての翼人。

その翼がつかさどる想いは「絶望」

その力が、この場に彼をこうして復活させたのだ。

「そして、これだ」

そういって、セフィロスが「開翼」した。

「なんだと・・・・！？」

クラウドが驚愕する。

彼はもともと片翼だ。
それを一度クラウドから奪って完全なる翼人になり、そしてクラウドはその両翼ともを奪って漆黒の翼人として覚醒した。

色が同じでも、ひとによって司る感情は異なるので彼が「絶望」でクラウドが「勇気」なのはなんらおかしなことではない。

クラウドが驚愕したのは、彼の開いた翼の色。

それは

「美しいとは思わないか?これが・・・・」

キラキラと光を放つ、白と銀の折り合った

「私の翼だ」

彼らがよく知る、銀白の翼だった。

「バカな!!!」

「そんな・・・ことって!?」

理樹が拳を握り、なのはが崩れ落ちる。

まさか、この翼が再び敵に回ることになるなんて・・・誰が予想していただろうか?

「人々が希望を胸に抱く時は、いつだ?」

セフィロスが語る。

これこそ自分にふさわしいと、翼を見せびらかすように開きながら。

「それは、絶望に立たされた瞬間。わかるか?この翼は、私にも共鳴することができる・・・・」

とはいえ、扱う感情はやはり絶望でしかない。

セフィロスは消滅し、形骸化した「彼」の翼を、こういった形で奪ったのだ。

「絶望したか？」

「・・・貴様・・・・・！！！」

「あの時果たせなかった約束を果たそう・・・・」

フッ・・・・ザッッ！！

「！？」

「ッッ！！！」

セフィロスが小さくそういうと、瞬間その姿が消え、クラウドの背後のメンバーのど真ん中に出現した。

「速・・・・」

「お前の大切なものを奪いに来た」

そして、破壊が振るわれた。

――――――

セフィロスの振るう剣をキバエンペラーフォームとヴィータが受けていく。

しかし、二合打ち合っただけでその武器が弾き落とされて身体を切り裂かれていった。

崩れ落ちる二人。
致命傷ではないものの、放っておけば命が危ない。

と、そこにシグナムが切り掛かって行き、そのあとに続いてセイバーも向っていった。

が、攻めていたのは最初の一打ちのみ。
そのあとはすべて防戦一方だ。

「こちらは二人掛かりだぞ！？」

「こいつ・・・剣（わたし）の英霊よりもッ・・・！！」

「フッ・・・・ン！！！」

セフィロスが思い切り剣を振るうと、斬撃が飛び放たれて二人を直撃した。
二人はそれを受けようとするが、触れた瞬間に体ごと吹き飛ばされて地面をえぐる。

「やめろ！！」

と、そこにクラウドが駆け込んでセフィロスの前に立ちふさがる。
しかし、クラウドの剣を撃ちあうこともなく、その大きな面を蹴りあげてセフィロスは彼を相手にすることもなく次々にメンバーへと切り掛かって行った。

刀が振るわれ、そこから炎と電撃が噴き出て五、六人が吹き飛んだ。

何も、特殊なものではない。
ただ単純に、強力な攻撃であるということ。

今や少女たちはその長刀にはめこまれた、マテリアの中に封じ込められていた。

その力を猛然と振るい、今や両翼の旧英雄は、その場にいたメンバーの七割を削り取っていた。

「ディバイン！！」

「トライデント！！」

「バスタァー！」「スマッシャァーー！！」

桜色と金色の、二色の砲撃がセフィロスへと放たれ、大気との摩擦熱で炎を上げながら彼女らの杖から放出される。

それを見ることもなくセフィロスは背後から迫るバスターを真っ二つに切り裂き、スマッシャーの外側二本を相殺させ、最期の金色は召喚したモンスターを盾にして防いだ。

そのモンスターの鎧は爆発によって四方に散り、ほかのメンバーを叩いていく。

しかし、それでも臆すること無く夜天の主がその頭上に膨大なる質量の魔力を叩き落としてきた。

十年来の友人同士だからこその連携攻撃。

だが、直後その場からセフィロスは消え、はやてを真下の地上から吹き上がった火柱が襲った。

気づくとセフィロスは一刀の前に立ち、激しい剣撃を繰り返していた。

セフィロスの一撃に一刀の剣は次々と弾き飛ばされ、しかし一刀の手の中には次々と剣が現れそれを以って応戦していく。

しかし

「こっちが出してんのは剣だけじゃないってのに・・・！！」

「ほう・・・武器だけでなく能力までも写し取る、か」

そのすべてが、セフィロスにとっては所見であるであろうにもかかわらず見切られ、回避、弾かれていってしまう。

そう言った攻防で固まってしまったのか、一刀はそこで剣を手放すべきだったのを、握りしめて受けてしまったために剣を弾き飛ばされてしまうだけでなく腕まで跳ね上がってしまった。
胴体が無防備にさらされる。

そこにセフィロスの手のひらが「そっ」と当てられ、そこから電撃の槍が噴き出そうと爆ぜはじめた。

「させるか！！」

と、直後セフィロスの手と一刀の腹の間に、理樹のバリアが入り込んで、その電撃を見事に防いだ。

だがその衝撃はどうしても通してしまい、一刀の体が後方に吹き飛び、腹の部分の服が吹き飛び身体が地面を抉り飛ばした。

「・・・ほう」

だがセフィロスは防がれたというのに、全く悔しがることもなくむしろ面白いものを見たといった顔をして理樹へと向かう。

が、理樹のバリアにはさしものセフィロスの刃も通らない・・・というわけでもなく、しかし少し食い込んだところで止まっていく。

しかも理樹のバリアは即座に元に戻すことができるし、流動させればさらにその性能は上がっていくのだ。

それを知りつつ、セフィロスはどんどん切り込んでいく。
さして効いていないというにもかかわらず、まるで敵を嬲るかのように。

そこに、クラウドが追い付いてくる。
セフィロスの腕を切り落とそうと、理樹のバリアに伸びる腕に大剣を振り下ろすクラウド。

だが、セフィロスは長刀から片手を放し、あろうことかその大剣の刃側を掴んでそれを止めた。

「な・・・に・・・・・！？」

そして、その剣を投げ飛ばすセフィロス。
クラウドは体を持って行かれて、これ以上離されてはまずいと思ったのか、とっさに剣を放してその場から飛ばされるのを防ぐ。

そして、セフィロスの腹に蹴りを入れて理樹から離し、その手に理樹がバリアでの剣を作り出して握らせた。

理樹のバリアに魔晄の力が充満していき、さらに開翼までしてクラウドがセフィロスに切りかかって行った。

大きく振り上げて叩きつけ、セフィロスがそれを軽く体を逸らして回避、踏み台にして今度はこちらがクラウドの上から斬りかかって行った。

それをクラウドは手を放し、後ろから飛んできた理樹のさらなる剣

を見ずにつかんでそのセフィロスの剣を受け止めた。

「クラウドさん！！」

と、そこにエリオがクラウドの剣を投げ、もう片方の手に合体剣が戻ってきた。
理樹の剣を放し、即座に両手でそれを構えるクラウド。

しかしそうしている間に、またセフィロスはクラウドよりもエリオに狙いを定めていた。

「クッ！！！」

それを見、エリオが迫るセフィロスの剣をストラーダで受けようとするが、ゾン！！という音と共に受け止めたはずのストラーダが真っ二つに切り裂かれてその胸から血が吹きでる。

その状況にアギト、ファイズが最強フォームに姿を変えて助太刀し、その間に龍騎がドラクランザーでエリオを回収し瞬風に運んで行った。

「やめろ！！」

その背にクラウドが叫び、セフィロスに向かって突っ込んでいった。

それにセフィロス派が応戦して答える。

「「大切じゃないものなんてない」・・・か。ならばお前は、すべてを守りきることができるのか？クラウド」

「なに？」

「これも」

斬ッ

「グオッ！？」

「これも」

ザシッ

「オゥあっ！！」

「すべてお前にとっては大切な「仲間」なのだろう？守ってやれもしないくせに、よくも大きなことを言ったものだ」

「ッッ！！」

傷つく仲間
護れない自分

大切じゃないものなんてない

そうだ。確かにそうだ。
その思いにいまだ変わりはない。

しかし・・・・

今の自分に、それを守ることは出来ていない。

また失うのか。

また、何もできずに？

「そんなことはない・・・・！！」

ギィン！！

クラウドが漆黒の翼を大きく広げる。
そこにチロチロと赤い光の粒子が集まっていく。

しかし、クラウドはすでに一回感情の集束を行っている。

今からそれを行っても、集まるものはなく、ただ力を消費するだけだ。
いうなれば、何も落ちていないのに掃除機を回しているようなもの。
エネルギーを消費するだけだ。

だが、それでも彼は止まらない。

「見ろ・・・あんたはやっぱり何もわかっていない」

翼を開き、クラウドが腕をかざしてみんなを表す。
セフィロスの視線が、周囲に向いた。

倒れているもの
膝をついているもの
誰かを抱えるもの

その場にいるものはすべて、もう疲労困憊もいいところだ。

しかし、それでもその目は真っ直ぐに敵(セフィロス)を睨み付けていた。

クラウドは何も優秀な戦士ではなかった。

意気込んで村を出て、しかし大した戦士にもなれないでいた、ただの一介の兵士だった。

ただ、ある悲劇に巻き込まれてその身体を力漬(まこう)けにされてここまで跳ね上げられただけだ。

そして記憶を失い、戦い、旅の過程で取戻し、それでも戦い続けていただけの男。

本来の彼は打たれ弱い、ただの青年でしかない。

そんな彼が、どうして星を救い、さらにはここまで戦い抜くことができたのか。

「大切じゃないものなんてない・・・・そして、俺の大切なものは・・・・・」

目の前にいる最強の英雄は、守ることを放棄し、攻め滅ぼすことを考えている。

守ることに苦悩したことがない。

自分の存在には悩み苦しんだ彼だが、それしかない。

彼の人生にはそれしかない。

しかし、こちらの戦士は違う。

自身の存在に悩み
護れなかったことを悔やみ
立ち上がることに苦悩し

そして剣を握ることに躊躇いを持って

そして覚悟してそれらを乗り越えてきたのだ。

英雄の乗り越えた階段は一段。
戦士の乗り越えた段数はそれ以上。

どちらが高みにいるかは、一目瞭然。

目の前の敵を倒し、撃ち破るだけなら英雄だ。

しかし、目の前の苦悩を乗り越え、そして苦しみの中を戦い帰還してきた戦士を

――――人は、それに敬意をこめて“英雄（ヒーロー）”と呼ぶ。

「オレの大切なものは、そう簡単に壊れはしない・・・・！！！！」

胸に手を当て、握りしめ、彼に赤き粒子が流れ込む。

チロチロと
ザラザラと

そして、一斉に流れ始めてきた。

「この量は・・・・！」

「・・・・あんたに見せてやる。立ち向かうということの、真の意味を・・・・！！！！」

漆黒、立つ

乗り越え、さらなるものを求めるために

to be continued

銀白（後書き）

こうして復活したセフィロス
そして背に映えるはあの銀白でした！

蒔風
「取られた！？」

あの翼は蒔風の物である以上「希望の翼」です。
それに彼は劇中で言ったように絶望を以って干渉し、その翼をみごと奪ったわけです。

しかしまぁ・・・次回でセフィロスさんやれそうですけどね！！ｗｗｗ

第三章の一つ目の事件は、そろそろ終息を迎えます。

ちなみにコミケは一日目は暑くて大変でしたｗｗｗｗ

この後（朝の）四時に集合してまた仕事にかかります。

自分は基本企業ばかりだから助かりますけど、ほかの人の同人を並んでるとねｗｗｗｗ

明日も頑張りまっせーーー！！

ではまた次回

決着

クラウドが剣をかざす。

空の頂点に太陽が差し掛かり、まるでその決起を祝福するかのように光が彼を照らす。

赤い粒子を見にまとい

黒でありながら美しく輝く翼をはためかせ

クラウド・ストライフが長年の敵に、牙を剥く。

「ウォァァアアアアアアアアア！！！！」

いつもの彼とは違う、そんな咆哮を上げてクラウドがセフィロスに切りかかってゆく。

ゴガッ！！

上段から振り下ろされるその剣を、セフィロスが難なく受け止めた。しかし、その足元がガボン、という壮大な音を立ててめり込みクレーターを作り出す。

「なに・・・・！？」

その予想外の力に、らしくもなくセフィロスは困惑した。
一体どこにこんな力が？
そのセフィロスに対し、クラウドが一言一言紡いでゆく。

「絶望は確かに大きな力かもしれない。しかし、人はそれを乗り越える」

オォッ・・・・

「誰かを護りたいから、誰かと繋がっていたいから。その思いが、立ち上がる力になる」

ギチッッ

「想いは、決して個別の物じゃない。あんたが絶望を糧にするなら、オレはそれも越えてすべてを力にする!!」

ズ、ガォッッ!!!

クラウドが上から振り下ろした剣を、グルリと下に回して打ち上げ、セフィロスの剣を弾きあげる。

連動する想い

理解した翼人に、負けはない。

クラウドが剣を一層握りしめ、合体剣の中心であるファースト剣を除くすべてが真上に向かって飛び出していった。

そして、そのうちの二本がセフィロスの膝を貫き砕く。

崩れ落ちるセフィロスの、上を向いていく上体の肩に向かってさらに二本が落ちてきて突き刺さり、地面と身体を縫い付けた。

「ッア！！」

「ッッ！！」

そのセフィロスに向かってクラウドが剣を突き立てようと両手で握り振り上げ降ろす。

が、セフィロスは肩がブチブチという音を立てるもかまうことなく、剣が肩と膝に突き刺さったまま無理やり起き上がってその剣を回避、真上に跳躍した。

そのセフィロスを見やって、クラウドも跳び剣を下段に構えて上空のセフィロスへと突撃してゆく。

それに対し

「落ちろ」

と一言いい、セフィロスの翼に、恐ろしいほどの輝きを放つ銀色の粒子が集まっていき、その間を稼ぐかのようにセフィロスの体に刺さった四本の剣を抜き、自らの長刀でクラウドに向かって弾き飛ばした。

猛烈な勢いで主に迫るクラウドの剣。

が、開翼したクラウドはそれを回避しながら自らの剣に打ちつけ、次々と結合、合体させていく。

その対処に、セフィロスは驚くこともなく淡々とクラウドを見る。

まるでありきたりの展開に、飽き飽きしたという顔をして

しかし、ありきたりというものは

正しいからこそ、幾度も幾度も取り扱われる事項なのだ。

「セフィロス。あんたにその翼は使えない」

目の前に巨大なエネルギーの塊が出来上がっていく。
この世界には、絶望などどこにでも転がっている。
いくらでもその力は集まる。

「「判断」はお前に必要ない・・・・与えられた使命をただ全うしろ」

ゴオオオオオオ――――――――――――

「だが・・・・たまには果てなき絶望に潰れ、這いつくばって眺める世界というのもいいものだろう？」

この男（セフィロス）はわかっていない。

確かに、この世に絶望はいくらでもある。
それは正しい。この世界は、悲しいことばかりだし、絶望するには十分すぎる要素で詰まっている。

しかし

この世界にあるのがそれだけしかないと言うならば、この世界はとうの昔に破滅している。

それを乗り越えてきたからこそ

数多くの絶望（それ）を踏み越えてきたからこそ

この世界は今もこうして、誰の手にも落ちることなく存在している。

この男はこの世界を手に入れることはできず

そして、この世界の護り手にもまた、勝つことはできない

その証拠に

「あんたにその輝きは似合わない・・・・・！！！」

翼の輝きすら、彼に順応していなかった。

セフィロスがため込んだ絶望（ぎんいろ）の粒子をクラウドに向かって放つ。
が、クラウドが剣を振ってゆくとそれは綿毛に息を吹きかけたかのように軽く消えていってしまった。

「その程度か、絶望」

斬ッッッ！！！

そして、剣がセフィロスの体をすり抜けた。
セフィロスが驚愕するよりも、早く。

だがセフィロスも当然それをガードした。
しかし、セフィロスの長刀は魔眩と勇気で発光した剣の前にはもろくも砕け、そこから十の光が飛び出していってしまったのだ。

背中の翼までが切断され、それが無数の羽となって消えていく。

セフィロスの体は斬られたにもかかわらず、血は流れていなかった。

しかし、そのコートの下の服は避け、通過した部分は真っ赤に焼けただれ、今まさにさらに発光していっている。

「・・・・ここまでか」

ボロボロと塵芥のように崩れていく自分の手を見、セフィロスがつぶやく。

そして、地上に降り立ったクラウドを一瞥し

「お前がいる限り・・・終わらないさ」

そう一言だけ言って、セフィロスは消えた。

あたりには、キラキラと光る羽根が、まるで祝福のようにきらめいていた。

――――――

「ＥＡＲＴＨ」の医務室はまだ、負傷したメンバーを収容出来るほど復興していなかったために、メンバーは聖王教会付属病院を訪れていた。

その一室。

そこで、クラウドは別途に横になり、体中に包帯を巻いていた。

窓の外を眺めると、そこには広々とした中庭があり、そして・・・・・

「あぅあぅ～待つのですよー」

「まったく・・・あんたら病み上がりなんだから大人しくしてなさいよー？」

「にぱー。わかりましたですよ、胸の小さなおねーさん」

「今なんつったコラァ！！」

「ん、ハチミツ」

「わ、ありがとう！おいしいんだよー、あまいんだよー♪」

「こっちだよー！イクスー！」

「せ、聖王殿下・・・」

「もー、その呼び方は禁止ー！」

はしゃいで駆けまわる、少女たちがいた。

中には座って休んでる者もいれば、芝生で眠っている者もいる。

しかし、そこには平和な、いつもの光景が広がっていた。

「こいつがうまく効いてよかったよ」

と、クラウドの部屋にやってきたのは上条だ。

セフィロスを倒し、彼女らが解放された瞬間に魂はその身体へと向かって復活した。
彼女らはすぐに目を覚ますことはなかったが、ただ一人だけ、イクスヴェリアだけはすぐに目を覚ました。

そして、言ったのだ。
自分の中のマリアージュを作り出す機能は止まってはおらず、またいつ暴走して吐き出し始めるかわからない、と。

だが、そこに現れたのがこのツンツン頭の幻想殺し（イマジンブレイカー）だ。

その胸にポンと手を当てて、イクスとスバルに張り倒されただけでその機能は簡単に消滅した。

その現象に驚いたイクスだが、スバルからの言葉を思い出し「生きていこう」と思ったらしい。
彼女の人生は、ここから始まる。

「・・・・いい光景だ・・・な」

「まさかあんた・・・・小さな子が・・・好きなのか？」

ドンッ、パキュィン！！

クラウドが魔法を放ち、上条がそれを消した。
高度なツッコミとボケである。

ちなみに両者とも見ていない。シュールだ。

「でも・・・戦い、手に入れたかいはある・・・そう思える光景だよな」

「ああ・・・この小さな窓から見える光景の為に、俺たちはいつでも命がけで戦ってきたんだ」

太陽は頂点に差し掛かってから少し傾いたところにある。
その日光は明るくともやわらかなもので、彼女らをやさしく照らしていた。

・・・彼らは気づいていない

今見えるこの光景がどれだけ得難いものだったかということを、彼らは知らない。

「彼」が「この世界」に勝ったのは、二度の敗北の後、三度目の戦いでであった。

しかし、彼らは一度で救いきったのだ。

救えるものを、根こそぎ救う

彼らはまさに、彼以上のことをやってのけていたのだった。

――――――

この世界の、物質に存在を頼らない空間。
そこは広い広い空間で、上下前後左右すべてが真っ白だが、足元数メートル下には蒼緑の光が流れている。

立っているのか、浮いているのかもわからないその場所で、セフィロスは静かな怒りを覚えていた。

『お前が強くなれたのは私がいたからだ・・・それをさも自分の力であるかのように言っている貴様は滑稽だ・・・』

まるで負け惜しみ。
しかし、彼自身にしてみれば、それは重大なことなのだろう。

足元の光――ライフストリームを見て、セフィロスの体が少し引かれる。

『・・・私は呑まれん』

しかし、その引力を引き千切るかのようにコートを翻し、その真逆へとセフィロスが歩いていく。

『個を失い、世界の循環器の一部になど私はならない。私には、母の願いを全うする必要がある』

星を我が手に
そして、新たなる土地へ

この星がどうなろうとも、必ずこの世界は私のものに

それは思考だったのだろうが、この空間においては声と変わらない。

次はどうした手で言ってやろうか。
そういえば、前に復活した時に利用した「あいつ」は記憶を・・・・

そこまでセフィロスが思考した瞬間

ザッ、ギィ！！

その目の前に、二本の何かが落ちてきてその行く先を遮った。

それは、大きなバスターソードと、金属製のロッド。

X字になって前を遮るそれに、セフィロスは見覚えがあった。

しかし、持ち主の気配はしない。

当然だ。彼らはすでに足元の流れの中にいる。

この空間に足場はあってないようなもの。

このように足止めされても、下や上、左右に回り込んで進めそうなものだ。

だが、セフィロスはどうしてもその前に進むことができなかった。

『これ・・・は・・・・・！？』

『ようやくあなたを、星に害を及ぼさないように受け入れることができるようになったよ』

『クラウドにはメーワクかけちまったなぁ』

『だいじょうぶ。クラウドなら、何度も立ち上がるよ』

どこからか、声が聞こえる。
聞き覚えのある、その声。

一人は自分を最初に殺した男
もう一人は、自分が殺した女

姿はない。
ただ、声だけが聞こえてきた。

そして、邪魔をする二つのそれに目を見張るセフィロスの背後に、
誰かが現れた。

ったくよー
せっかく静かにしてたのに、おまさんがこんなことするから起きちゃったじゃんよ

声ではなく、そんな思考が空間に響いた。
先ほどの二人とは全く違う声。

しかし、聞き覚えはある。
しかも声だけではなく、その男はセフィロスの背後にしっかりと立って（？）いた。

響いたそれに反応し、セフィロスが振り返ろうとするがそれよりも早く後ろから頭を掴まれ、その顔を見ることができない。

《人の翼引っぺがしといてあっさり負けるとかやめてくんない？俺まであっちに連れ出されそうになっちまったじゃないのよ》

『貴様・・・・！！』

《イレギュラーな死、っつーか消滅だったからねぇ～。早かった分の時間、ここで待ってんのよ。お前の方はもう終わりだけど》

『私は・・・・消えんぞ！！』

《ああ・・・命は消えないさ》

セフィロスの体に、足元から伸びてきたライフストリームの光が絡みつき、グン、グン！！と引きずりおろしていく。

みるみる下がっていくそれを見下ろして、あとから現れた男が立ったまま一言最後に言った。

《めぐるだけさ》

『・・・

男が、見上げる。

そこに何があるというわけではない。

しかし

《こぉ～りゃ・・・もしかするとだねぇ・・・・・》

そしてその場に光が満ち、男の姿が消えて行った。

――――――

「ＥＡＲＴＨ」の周辺に突き刺さった十五天帝のうちの一本、青龍の前に「ＥＡＲＴＨ」メンバーの大半が集まっていた。

青龍の一番前には一刀が立ち、理樹と観鈴も一緒にいる。
クラウドは少し離れたところでバイクに寄りかかってその様子を見ていた。

「なあ・・・あんたがいなくなって一年たったけどさ」

それは報告だ。
ただの活動報告。

一周年でも、一周忌でもない

彼は、いなくなっても何もないのだから

「世界は・・・・今日も平和さ。な～んにも、なかったさ」

ニカッと笑ってそういう一刀。

何一つ変わりない世界。

何もなかった。

結局報告はこうなった。

しかし、その中には多くの想いが詰め込まれている。

太陽が眩しい。

その中に、光る羽根が見えた気がした。

to be continued

決着（後書き）

いやぁ、あっけない「ラスト」と、「その後」っぽいのです！！
セフィロスを強そうに描写しきれなかったなぁ・・・・くそぅ

そしてやっぱり戦闘後ってメチャクチャ苦手ですｗｗｗｗ
なんかおかしかったら言ってください。

蒔風
「そして祝、俺出演」

そうだね。
ちなみに最初の武器は言わずもがな、エアリスとザックスのです。
まあ二人はもう完全にライフストリームになっているので、あくまでも残った残留思念とでも思ってくれれば。

武器は蒔風がやりました。
流石やでぇ・・・・

蒔風
「これでセフィロスも終わりか。もう出てこないよな？」

あくまでもこの小説で出す予定はないです。
ま、必要に迫られればどうにかして出しますがね！！

蒔風
「イクスも無事この時代で生きていくことができてよかった」

そこは上条さんです。
マジパネェっす。

中でも言いましたが、彼らには蒔風を超えていってもらいたいという思いを込めていました。

蒔風
「俺は「なのはシリーズ」の話には二回も負けているからね」

そして、三度目でやっと打ち勝った。
それをたった一回でやり遂げた彼らは、間違いなくすごいのです。

蒔風
「とはいっても、帰ってくるしね」

まね
と、いうわけで次回、ついに帰って来た！？

蒔風

「ではまた次回」

日常

「ヤアアア！！！」

「ハァあああ！！！」

すでに修復された「ＥＡＲＴＨ」の地下訓練場。

そこで二人の人間が、激しい戦いを繰り広げていた。

限りなく本気で、自分の愛機の名を叫んで技を繰り出す。

「シルバーダガー！！」

「マッハキャリバー！！」

そう、その二人とはまさにスバル・ナカジマ、ルネッサ・マグナスである。

銃弾と拳がぶつかり合い、弾け、見るも綺麗で激しく鮮烈な火花を散らし、一体何があったのかと思えるような戦闘を繰り広げていたのだ。

この二人がここまでして戦う理由。それは――――

「「イクスはウチんだぁぁアアアアアアあああああああ！！！」」

運命から解き放たれた冥王・イクスヴェリアの争奪戦だった。

時間を少しだけ遡って

先日保護された少女、イクスヴェリア。
体内に秘められた兵器としての機能ももう暴走することがなくなり、
一人の人間として生きていくことになった彼女には、まず必要なもの
のがあった。

即ち、戸籍である。

無論、そんなものは「ＥＡＲＴＨ」の方で簡単に用意できる。
しかし、イクスはどう見たってまだ子供だ。どうしても保護者が必
要になってくる。

そこで真っ先に立候補したのがスバル、そしてルネッサだった。

今のところ交流の多いスバル
父と慕った人物が残した彼女に親近感のあるルネッサ

その思いは大きい。

どれくらいかというと「聖王教会に預けたら?」と提案したティアナに二人して腹パンして撃沈させるほどだ。

「あんたら・・・覚えときなさいよ・・・ぐふぅ」

「ティ、ティアナさーーーーん!!!」

腹を押さえ、顔にタオルをかけ、グテッ、と横になったティアナが呟き、腕がパタリと落ちる。南無

そのわきにキャロがオロオロとスバル、ルネッサ、ティアナを見まわしていき、最後にエリオを見てみる。

その視線には「ど、どうしよう・・・」という意図が込められているのが容易に分かったが、エリオもどうすればいいのかわからないままだ。

「ぼくには・・・何もできない・・・ッ!!」

そんな茶番の横で、もう一つの茶番が行われた。

「ティア！くっ、ティアの犠牲を無駄にしないためにも、イクスはウチで引き取ります！！」

「ランスター執務官！！おのれ・・・上司の遺志は、私が継ぎます！！私が引き取るのです！！」

「まだ死んでないですよ！？「遺志」じゃなくて「意志」でしょう！？」

突っ込むエリオ。
どうやらこの騒動の立ち位置を掴んだ模様。

そういっていると

ガシッ、ガシィ！！

と二人が互いの肩をギリギリと掴み

「スバルさんの家はもう大所帯でしょう?食費とか大変なんですから、うちでイクスを・・・」

「いやいや私はもう一人暮らしだから実家は大丈夫だし、一人暮らしのルネッサさんこそイクスの面倒見るの大変でしょう?」

そんな話し合いを始めた。

笑顔で。でもこの笑顔カタイヨー

「でもやっぱり金銭的にうちの方が」

「ウチはお父さんがもっと働けばいいんですよ!!」

「ゲンヤさんオワタ」

その言い合いを見てエリオが呟く。

ゲンヤさんご愁傷様。

スバルの思考に「自分が」という選択肢はなかった。

「だってそれだとイクスと過ごす時間が無くなるじゃん!!」

さいですか。

と、そこに

「まてーーーい！！」

ガラガラ、ばん！！と勢いよく扉を開いてそこに現れたのは、夜天の主・八神はやて。
ヴィータと初代リィンフォースを引き連れて、駆けこんできた彼女は開口一番こう叫んだ。

「幼女がいると聞いて！！幼女をもらえると聞いてきました！！」

バリーン！！

「かわいい幼女をモノにできると聞いて!!おねーさん大歓迎だ!!」

そして、窓ガラスを割って来ヶ谷が登場。
何かのアクションシーンか何かのようだ。

ちなみに

「来ヶ谷さん!?こ、ここ３６階!!」

「幼女がいるのなら」

「不可能を可能に!?」

真人と言い、こいつと言い、“輝志”って怖い

「幼女幼女!!ハァハァ」

「うちには幼女分がたらん!!古代ベルカ的な意味でも、うちが引

き取ったる！！」

「いろいろ危なそうなので！！」「ダメです！！！」

ドコッッ！！

ひとしきり叫んだ来ヶ谷とはやて。
その二人の腹部に、スバルとルネッサの重い一撃が叩き込まれた。

その一撃で沈む二人。
崩れ落ちる二人を、それぞれリィンフォースとヴィータが抱えあげた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「はやて、はやてー！！早く誰か来てくれよ！！このままじゃはやてが死んじまうよ！！」

とは言う物の、来ヶ谷はリィンフォースの胸に埋まって幸せそうだし、はやてははやてでヴィータを抱き枕にして至福そうだった。

「あっちの心配は・・・」

「いらないみたいだね」

そんな二人を見てキャロとエリオが脱力していると、今度は開いたままの扉に相川始が現れた。

「おいどうした！すごい音が・・・・・」

「「ロリコンカリスはだめです！！」」

「なんという言われッ！？」

パリンポーン

そんな軽い音がして、始の体が宙を舞う。
身体は真っ直ぐ。まるで人形を投げたかのようにすっ飛んで行った。
ちなみに気絶してます。なんという早業。

『は、始ーーーーー!?』

『どうしたんだい?』

『は、始がいま上から落ちてきたんだよ!!』

『落下出会い系ジョーカー?』

『こ、これがテンプレという物かい!?』

『バカなこと言ってないで医務室に連れてくの手伝ってくれ!!』

下の方からそんな剣崎と翔太郎、フィリップの声が聞こえてきたが、
今は気にしていられない。

「イクスが私が守ります！」

「いいえ！私こそ適任！！」

そんなことを言い合っている二人はやがて、じゃあ強い方が守れる、ということで訓練場に向かっていく。
途中で見つけたイクスも捕まえ、これで役者はそろった。

さあ、トキめくぜ！！

ーーー

「泉さん。私、なんていった？」

「ＥＡＲＴＨ」の一室。
そこで正座させられたこなたが、目の前のハルヒに凄まれていた。

そのハルヒの手には一枚の原稿用紙（漫画用）。
握られている一枚には大きなインクをこぼした跡があり、失敗してしまったことを表していた。

この部屋にはいくつも机があり、今はこの二人しかいない。
ついさっきまでは長門やみくる、かがみ（ガタックに非ず）につかさ（ディケイドに非ず）、さらには朱里と雛里、西園などもいたが、今はいない。

外の扉にはデカデカと「男子禁制！！」と書かれており、ここで一体何が描かれていたのかはまあイメージにお任せしよう。

こなたは汗を垂らし、ハルヒは「やっちゃってくれてるなもう！！」といった感じにそのこなたを見ていた。

「あらゆる祭りに参加するＳＯＳ団は、当然年に二回の「あの祭り」にも参加しようとしていたわ。そして今回無事に受かって、サークル参加できました」

説明台詞乙

こなたはそう思ったが、火に油を注ぎそうなので言わなかった。

「そして、有志を募って漫画を描いていました。さすがに内容が内容だから男子はなしで」

そう、そうして作業してて、こなたがこうしてミスってしまったのだ。

それはまあいい。

あらかた文句言って、ハルヒは原稿用紙を買ってきてくれとこなたに頼んだ。

ここからの一連のやり取りが、今まさにハルヒの中で爆発していた。

「そして買ってきてって言ったら、泉さん、なんていった?」

「えっと・・・」

「なんて言った!?」

『じゃあ・・・どっちが行くかは（ピィン、パシッ）１０円（こいつ）に、任せようか!』

「しゃらくせーよぉー!!!なんでそんなドヤ顔なのよ!!泉さんがミスったんだから、あんたが買いに行きなさいよ!!」

「あの・・・」

「まあいいわ。それで結局泉さんが行くって言ったとき、あんたなんて言った!?」

「ちょっと・・・あの・・・」

「なんて言った！？」

『ねぇ、私いくつに見えるー？』

「知！ら！ね！ぇ！よ！ぁ！！！そんなの関係ないよ！！早くいかないと文房具店しまっちゃうよ。なんで今聞くのよ――――年相応より若く見えるわよ！！！」

「アーーー」

「まぁいいわ。それで？結局買いに行くってなってお金渡して部屋から出ようとした時にあんたが言った言葉がーーーーーーーーー」

『今日寒いねー。あ、そういえば私・・・・（ブイッ）風邪気味だった♪』

「（グワッ）泣いて馬謖を斬ってよ！！どこまで粘るのよ！（ガッ！）どんだけ行きたくないのよ！！しかも今日寒くないし！！！」

フゥー

「それで、あんたがいざ出かけて買ってきたのが――――――」

―甘―
つ―酒―

「どういうことよ！？頼んだのはゲンコーヨーシなのよ！！悪い冗談やめてよ！！そう言って、あんたが出してきたのが――――――」

ハイ！＞（＝Д＝・　）つ「ドロリ農耕ピーチ味」

「ノーサンキューよぉ！！ニッチもサッチもいかないわよ！！私にどうしてもらいたいのよ！！しかもこれ「農耕」だし！！「濃厚」じゃないし！畑で何が採れたっていうの！？腐ったようにゲル状よ！！渡した時妙に目ぇ逸らすなよ！！」

「あの、口調が・・・」

「待って！！何も言わないで！！それでさ、ちゃんと物はあるのかって聞いたらあんたは――――――」

『許してヒヤシンス♪』

「ヒ　ヤ　シ　ン　スッ！！！くだらないって騒ぎじゃないよ！！ヒヤシンスどっっっから出てきたんだよッ！！

それでも信じたよ。ちゃんと原稿用紙買ってきてるって！！それがハードなギャグだって！！でも、はやく原稿用紙出せって言ったら」

『ハルにゃん頭をヒヤシンス☆』

「（息を吐くように）ヒィヤシンスッッゥ！！！頭を冷やすのはどっちだよ！！どっちがヒヤシンスだよ！！」

「いやいやだから・・・・」

「それでもっかい聞いたよ。原稿用紙どこだって！！そしたら・・・・」

『ゆるしてくんさい（ペロ☆）』

「（自分の腿スパーン！）ヒヤシンスどこいッッッたんだよ！！つーかどーでもいいわよヒヤシンスは！・・・それよりも・・・・原稿用紙だよッッ！！

で！！結局出したのが！！！」

つ「原稿用紙（四百字詰め作文用）」

『そそそ、これこれ。さてと・・・薔薇な文でも（カタン）書きますか（カリカリカリ）・・・・・』

「ッて（ガバァッ！）アンポンターーーーン！！（ドタンドタンドタン！！）どんだけトンチンカンかませばいいのよ！！一体何がしたいのよ！！そう聞いたらあんた」

『真実がいつも正しいとは・・・限らないんだよ！（キラッッ）』

「（ゴワッッ！！）限るわーーーーーー！！もう泉さんじゃ埒が明かないからそこを通りかかったキャロちゃんに頼もうとしたわよ！！そしたら」

『どんなのですか？あ、これですか・・・』

『あ』

『（ボヒューーーーーーーーーーーー！！！）アわわわわわわ』

「夢中だよゥ！！目が釘付けだよ！！嬉しい悲鳴だよォう！！！それで、じゃあ有希に行ってもらおうとしたら」

『（真っ赤になりながらキャロが）ここはこうしたら？』

『・・・それはいい案』

「あっちに乗っちゃったよ！！結局その後ほかの人たちも呼ばれちゃったよ！！ＳＯＳ団率下がってくよ！「ＥＡＲＴＨ」腐女子人口の高さに・・・びっくりだよッッ！！　集まった人のうちＳＯＳ団は三人だけよ！！私除くと二人だよ！！他の二人も私たちの時より思いのほか楽しそうだったし！！サークル名「ＳＯＳ団」なのに正規メンバーが半分以下って何よ！！ジュウレンジャーかよ！！！」

「ハルにゃんいくつ！？」

「それであんた引っ張ってって急いで買ってきて！！そして帰ってきたときには」

『他のみんなと別の部屋で作業してます（置き手紙）』

「ぁ、みんないなく　なっ　ちゃっ　た　よ！！しかもどこの部屋

か書いてないし!!合流できないし!!そんなに私の考えた話が面白くなかったかコンチクショォーーウ!!!!　で、その置き手紙見てあんたこう言ったよね!?」

『神の悪戯か・・・悪魔の罠か（キリッッ）』

「悪魔の罠よォ　ゞーーーーーーー!!もう何をしたって悪魔が待ち構えていたわ!!私にだって手の施しようがないわよ!!どうすりゃいいのよ!!神の力がほしいと思ったわ!!そう聞いたらあんた・・・・」

『（　。Д。）ポカーン』

「何よその顔は!?あんたが元凶じゃない!?ミスった時にすぐ言ってくれればまだ原稿用紙はあったのにィーーーーーーーーーー!!!!」

ガクンガクンとこなたの肩を揺らし、（ギャグ的に）目に涙をためながらハルヒが叫び終える。

そうして、その場が静かになって・・・・

「この空気・・・どうする?」

「どうするじゃないわよ!!さっさとみんな探して作業始めるわよーーーーーーーーーーーーーーオ!!!!」

こなたの後ろ襟を掴んで、まるで子猫でも引きずるようにハルヒが廊下を飛び出す。

その勢いにこなたの体はブランブランしているが、別に大丈夫そうだ。

その途中、運ばれてきた相川始を突き飛ばして再びパリーン（ダイブ）させたのはまた別の騒動。

ーーー

負けたルネッサは似つかわしくない叫びをあげていた。
キャラ崩壊か？

「さあイクス・・・・こっちだよ!!」

そういって、スバルがティアナとエリオ（キャロは他の人たちとどっか行ってしまった）と一緒にいる、イクスに向かってそう呼びかけた。

だが、振り向いた先にイクスはいない。

その光景に呆然とするスバルに、ティアナが声をかけた。

「ああ、イクスならなのはさんとヴィヴィオが遊びに行こうって誘いに来て、そのまま行かせたわよ？」

ティアナは知っていた。
イクスが目の前の戦いに対し、一体これは何なのだ、と思っていたことを。

正直言ってこの騒動はめんどくさい。
だからいったんこの場から逃がすという意味も含めて、なのはにイクスを任せてしまったのだが・・・・

「友よ!!なぜ君は、魔王に魂を売ったのか!!!」

「なにが!?」

その話を聞いて、スバルが超獣戦隊よろしくそんなことを叫んだ。
しかしここまではっきりと魔王と言ってもいいのか?

「チャンス!!」

「あっ、まて!!」

それを聞いてルネッサが訓練場から飛び出して行こうとし、その足にしがみついてスバルが止めた。

「まだそんな力があったなんてね！！」

「命あるところ、正義の雄叫びありィィィいいいいいいいいいい！！！」

ここに、ルネッサのキャラ崩壊が証明された。
というかこの状況で自分を正義と言い張るのか。

どちらも悪の道に寄り始めている気がする。

そう言いながらもドタンバタンと泥試合を進める二人。

そこに、一人の人間の影がかかった。

「スバル？ルネッサさん？」

「この・・・え？」

「あ、エースオブエース・・・・」

そこに現れたのは高町なのはだ。

イクスを連れにきたときに、何をやっているんだろうと気になって、

結局こうして戻って来てしまった感じだが・・・

「なのはさーーーん」

「あ、ティアナ。さっきはどうしたの？お腹押さえてたけど」

「ええ・・・それでですね・・・」

そこに駈け寄ってきたティアナ。

さっきはまだ腹が痛くてなにもできなかったが、ここにきてなのはの耳元にクロスミラージュを当てた。

その時、ティアナの顔を、スバルは見た。

『言ったわよね？覚えておきなさいって』

「ティアーーーーーーーーー！！！！」

クロスミラージュには先ほどのスバルの叫びが入っており、それに気づいたスバルが叫んだ。

奇蹟的にも、その叫びはクロスミラージュから再生された音声と見事にハモっており、なのはの耳にステレオで、脳味噌にはしっかりと認識されてしまった。

『「友よ！！なぜ君は魔王（なのはさん）に魂を売ったのか！？」』

直後、スバルの体を桜色の砲撃が包み込む。
当然近くにいたルネッサも一緒であり、二人仲良く消し飛んで行った。

ちなみに、イクスはとりあえず「ＥＡＲＴＨ」預かりにして、誰が保護責任者になるかは保留になってしまったようだ。

エリオによる、今日の教訓

「女性はたくましい。が、恐ろしい」

――――――

「一体何があったんでしょう？」

「ＥＡＲＴＨ」の一室
完璧和風のその部屋に、アリスと長岡、そして凩がいた。

三人とも正座しゆったりと茶を飲んでいて、さっきから何やら騒がしい様子にはてな、と首をかしげていた。

「そうですねぇ・・・・管理者的勘がいうには何となくですが・・・・」

「何となくですが？」

「イクスさんをめぐってスバルさんとルネッサさんが戦って、思わず言っちゃった言葉で二人がなのはさんに吹き飛ばされた感じですかね？あとはハルヒさんとこなたさんが友だちを探して走りまわってるくらいでしょうか？」

「何となく以上の詳細情報！？」

大人しく茶をすする凩の横で、長岡が驚きの声を上げる。

ちなみに凩は人型で、目をつぶって茶をのんびり楽しんでいた。

一番日本人してました。
アンデットなのに。

――――――

《《Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ－－－》》

《ＤＥＣＥＤＥ！！》

《ＤＩＥＮＤ！！》

「や、やめろ破壊者（ディケイド）オオオオオオオオオオオ！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ　ＫＩＮＧ》

『うわお前何すくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；’』

『ライダー大戦の剣崎か！？』

『モゥヅァレモジナゼハジナインダアアアアアア！！』

ーーー

「・・・・っていうのが今日の報告です。今日中にまとめてくださいね」

「・・・・なあ」

「あ、理樹さんは今日休みですので、あなた一人で頑張ってください」

「・・・・あの」

「逃げたら・・・・ぶち抜きますよ」

「何を!?」

そして、北郷の部屋で、今日あったことを軒並み報告書にしてアリスが机の上にドサリと置いていっていた。

中にはどーでもいい内容も・・・・と、いうかどーでもいい内容しかない。

だがここで厄介なのは

「どーでもいい内容のくせに被害だけはマジもんだ！？」

「さあ、キリキリまとめていきましょー♪」

「待てよ待てよ！！訓練場の損壊はまだわかる。だけど窓ガラス数枚の補修、崩れた壁、廊下での戦闘、貫いた砲撃の被害！！！これ全部各個人がやっちまったやつだよな！？」

「やっちゃったＺＥ？」

「やっちゃったＺＥじゃない！！しかもあんた何気に茶葉のお金を請求してんじゃねえか！？」

机にたまった紙束を見て、げんなりしてゆく一刀。

ちなみに、この状態はすでに手伝ってもらった後でこれなのだ。

今更またやってくれとは言えない。

手伝ってくれた武将はみんなタレ武将になって休んでしまっている。

「さ、どうぞ」

「畜生！！理樹のヤローぜってーわかってて逃げやがったなァァアアアア！！！」

ーーー

それを追っていくヴィヴィオ。
それは敷地の門の方へと転がっていき・・・・・・

「おっと」

一人の男の足元に当たって止まった。

男がそれを拾い上げ、ヴィヴィオの方を向く。
その男の姿に、ヴィヴィオの足が止まった。

「・・・・・・・え？」

その様子を見て、なのはがヴィヴィオのもとに駆け寄っていき、彼女もその姿を見た。

その男は・・・・・

「よぉ。久しぶりだな」

ポン、とヴィヴィオにボールを投げ返し、一人の男が声をかける。

その姿は、忘れたことなどなかった男だ。

ちょうど一年前に消えた、あの男のものだった。

「戻ったぜ。なのは」

「舜・・・・くん・・・・？」

マイカゼ　シュン

いま、この男が帰ってきた。

to be continued

日常（後書き）

日常のアニメが面白いｗｗｗ
ついつい入れちゃったＺＥ！！

イクスはどうしようかと本気で悩んでます。
スバルでいいかな？もうｗｗｗ

ところどころに戦隊ネタを入れるのも楽しかったです。

今日は日中お神輿かついでて本気で疲れました・・・・
現在最後の力を振り絞っております。

剣崎のオンドゥル語は「もう誰も死なせたくない」・・・だったと思います。

そして、戻ってきた男。
まあ、あっさりと帰ってくるわけないですけどね！！！

本気で疲れてまずいのでこの辺でアデュー！！
ちなみに、ここから予告で言っていた「二つ目の短い方の事件」が始まります。

そして、この中で・・・・！？

次回、野望再び

ではまた次回

「本当に・・・・舜君なの・・・・・？」

「この姿を見忘れたのかい？なのは」

「ほ、本当に・・・・・・」

そういって、なのはがいまだ信じられないといった風に蒔風へと近づいていく。

一方蒔風の手も、そのなのはの方へと伸び、そっと頭を撫でようとして、言った。

「お前が大好きな蒔風さんだぜ？ほれ、おにーさんに飛びついてきなさい」

その言葉になのはが涙をこぼし、目を見開き、そして

「いけません！！」

「ＥＡＲＴＨ」ビルの廊下から眺めていたアリスが、窓ガラスをすり抜けて飛び出し、なのはとヴィヴィオの体を抱え込んでその場から後退させた。

その早業たるや、二人を抱えた一瞬で蒔風の手を後ろ蹴りし、衝撃波のような気迫を飛ばして一歩後退させるほどだ。

「おぉ～う。手荒い歓迎だねぇ、アリスさん」

そう言いながら、蒔風が手をプラプラと振って笑いかける。

が、当のアリスとなのははそんなこと聞いていない。
ヴィヴィオをビルの方へと帰し、避難しているように言ってからアリスがなのはを諭すとように言う。

「なのはさん、あれは・・・あの男は・・・・・」

「・・・・わかってるよ」

アリスの言葉に、なのははすでに気づいていた。

この男は蒔風ではない。断じて違う。

蒔風舜という男は一度たりとも、なのはが彼に対して思いを抱いているのを良しとしたことなどなかったのだから。

なのはの目にたまった涙は、そこから来る悔しさだった。

待ち焦がれていた言葉だったはずなのに、いまはそれがこんな否定の証明に使われるなんて、悔しくてしょうがなかった。

「戻って・・・来たんですか」

「おいおい、ひどい言われようだねぇ。あんたは俺の正体知ってんだろ?なら、ここは総じてオレの帰る場所じゃないのかい?」

アリスの双眸がグッ、と引き締まる。

かつて、蒔風と幾度となく死闘を繰り返し、そして一時は消えていた男。

「奴」と呼ばれていたその男が、蒔風の皮をかぶって今、ここに復活していた。

「どうやって・・・・」

アリスの疑問。
確かに、「奴」にはかなり優れた再生力がある。
しかし、流石に一年と少しでは全消滅した身体は戻らないはず。
彼が今までやられてもやられても再生していたのはあくまでも世界を超えた際にのみだ。
この世界の中では、そんなに早く戻るとも思えないのだが・・・
その疑問に、「奴」が蒔風への変装を解いて答えた。
黒い影の男曰く
「あんたは蒔風が消える時、“ＬＯＮＤ”の力をあいつに流し込んでたろ？が、あいつの体をすり抜けて行ってしまった・・・そうだろ？」
「ええ・・・・」
「だけどな、俺の方はどうだ？こっちにその力が流れてしまっていたら？」
「・・・・まさか・・・・」

「そのまさか♪・・・さぁっ！！」

ボウッ！！と「奴」の身体からオーラが吹き出し、凄まじい風が巻き起こる。

そして、その気の中には知った気配もあった。

「これは・・・“ＬＯＮＤ”の力！？」

「そ、助かったぜ？おかげで予定より早く戻ってこれた」

「奴」が復活の種明かしをしているが、理解しているのはアリスだけだろう。

「奴」と蒔風のつながりなど、知っている人間は少ないのだから。

「アリス！！」

「一体これは・・・・・！？」

と、そこに一刀や数名のメンバーが駆け寄ってきた。

そして、目の前の男に気付き驚愕する。

「「奴」・・・だと！？」

「お前・・・あいつに消されたんじゃ！？」

各々リアクションを取るメンバーだが、いまさらめんどくさいというようにひらひらと手を振る「奴」は、さてさっそくと言わんばかりに魔導八天を抜き放って首をゴキリと鳴らした。

「いまさら説明はいらないよなぁ？お前らは知ってんだろ？」

「ッッッ！！！」

「オレの目的、知ってんだろ？前置きは・・・・」

ダウッッッ！！

「いらねぇだろォッッッ！？」

ーーー

漆黒の波動砲が薙がれ、地面を軒並み吹き飛ばしていく。

その土煙を掻き払いながら、北郷一刀が開翼して「奴」へと切り掛かって行った。

「俺たちを殺って・・・・世界を食らう気か!!（ガァン!!）」

「（ギチッ・・・）それ以外に何がある?オレは最初から最後まで・・・そのスタンスを崩したことはねぇよ!!!（ドゴッ）」

一刀と剣を鍔競り合う「奴」が、一刀の腹にケンカキックを入れて後退させた。

そしてその顎を狙って回転、剣を横に薙いでさらに斬りかかっていく。

「くっ・・・だがこっちにはみんなの力がある!!」

そこで一刀が一気にバックステップして距離を取り、その背後に大量の剣を出現させて一つに結合、無理やり巨大剣を作り上げて「奴」へと振り下ろした。

それに対し「奴」は、魔導八天をばらして背中に回し、まるで羽のように装着した。
そしてその巨大剣に向かって飛び出し、くるくるとその旋回をしながら一刀へと向かっていく。

「ッ!?この数の剣を・・・輪切りに!?」

「おいおいおいおい。そんな粗末な技で・・・」

ザクッ!!!

「俺に勝てると思ってんの?」

一刀が流星剣で迫ってきた「奴」を受け止めるも、「奴」の背中から魔導八天が手裏剣のように回転して飛び出してきて、一刀の肩に突き刺さった。

それを食らい、滴る血と共に一刀が落ちていく。

その一刀を愛紗が飛び出して抱え込み、その愛紗の肩を踏み台にし

て鈴々が「奴」へと身の丈以上の己の武器「蛇矛」を振り下ろしぶちかました。

その一撃を「奴」が受け、鈴々と共にそのまま地面に押しつけられるかのように落下していった。

ゴッゴン！！という重々しい音と共に地面が揺れ、二人が地面に落ちて砂煙が起こる。
そして、その中からユラリと姿を現したのは

「重いな。だがオレの魂を潰すにはちと軽い！！！」

蛇矛の刃と持ち手の境目に二の腕を当てて受け止め、振り下ろした体制のままの鈴々を見て、「奴」が呟く。

直後、「奴」は蛇矛を掴んでブン回し、それを「ＥＡＲＴＨ」ビルに向かって投げ飛ばした。

バゴォ！！という音がし、鈴々の小さな体が「ＥＡＲＴＨ」ビルに小さなクレーターを作り出す。

それを見てまだ死んではいない鈴々を見て、「奴」は感心したような声を出すがそれはすぐにほかの攻撃に遮られてしまった。

斬りかかってきたのはライダーとセイバー。
更にはクウガやアギトたちといった仮面ライダーたちだ。

後方からはアーチャーからの援護射撃も助け、一気に「奴」へと攻め込んでいく。

しかし

「魔導八天・・・・・フルブラスト！！！！」

魔導八天の切っ先が彼らに向き、その先端から一気に砲撃が放たれていった。

計八本の無慈悲な砲撃はジュゴウッ！！！という音を立てて次々とライダーをなぎ倒し、アーチャーの投影の八割を消し飛ばした。

が、それでも生き残った者はいる。

飛んできた剣を回避していると、そこにセイバーがエクスカリバーを振り下ろして「奴」の首を狙ってきた。

「奴」はそれを横にそれて回避し、セイバーの腹を貫いてやろうと彼女の右側から拳を突き込む。

が、それよりも早くセイバーの左掌が「奴」の胸に当てられ、そこから一気にストライク・エアがぶち込まされた。

その風圧に「奴」の体が真上にすっ飛び、そこに向かってライダーのベルレフォーンが放たれる！！

「ベルレフォーン！！！」

ギャゴッッ！！という空気との摩擦音を上げながら天馬（ペガサス）に跨った彼女が砲撃となって突っ込んでいく。

しかし、「奴」は手に握った魔導八天を花びらのように展開し、それを回転させてバリアとして機能させた。

エネルギーが掻き散らされていき、ぶつかり合ったライダーが地面へと落ちていった。

が、その手からはジャラジャラと鎖が伸びており、彼女は落ちながらもそれを思い切り真上へと引っ張った。

その先端を握るのは、地面のセイバー。

まるで滑車のように入れ違うライダーとセイバー。

ダメージにライダーは地面に着地できず落ちるが、セイバーがそのまま「奴」に向かって切り掛かって行った。

片手でエクスカリバーを振り下ろし、背中に飛んできた投影によるエクスカリバーを握り、更に振り下ろす。

「聖剣の二刀流かい！！面白いことしてくれるね！！」

そういってその二刀を魔導八天の二本で受け止め、「奴」が手に握った剣を放した。
「奴」の二刀が落ちていき、それと同時にセイバーの腹に膝をぶちかまして回転してからのエルボーで大地に叩きつける。

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

と、そこにディケイドのディメンションシュートが地上から放たれ、「奴」に見事命中した。
が、「奴」はそれをクロスして腕でガードしており、そのまま引力に従って地上に降りていく。

「オオオオオ！！俺の必殺技ァ！！」

「紫電一閃！！」

と、その着地地点から「奴」に合わせてシグナムと電王が垂直に飛び上がって切り掛かった行った。

そのあとをほかにも剣を武器とするものが次々と切り掛かっていくが

「ラァッ！！」

「うおっ！？」

「ふゥっ！！」

「ゴアッッ！！」

「正（せ）ァッ！！」

「「「うぐァ！！！」」」

その飛び掛かってくる相手を、来た順番通りに蹴り投げ殴り飛ばしていく「奴」。

電王がエネルギーをためながら斬りかかったのを捻り躱して背中を踏むように蹴り、身体を捻ったそのままにシグナムの小手を回し蹴りで弾く。

星、翠、愛紗の三人の突き込みを、縦回転することで回避し、交差した三本の武器の上に乗るような形になる。
その上で回転し、三人の顔面を蹴り飛ばしてから、真上から襲い掛かったヴィータのギガントシュラークを見上げる「奴」。

「轟　天　爆　砕！！！」

「オウッッァ！！！」

それを両腕で受け、地面に叩きつけられる「奴」。

それにヴィータはガッツポーズをとった。
ハンマーの面は確実に地面にめり込んでいる。逃げる隙間はないはずだ。

しかし

「（ボコッ！！）モグラたたきはこうやんだ！！！」

「なッ！？ガアッ！？」

背後の地面から飛び出してきた「奴」がヴィータに向かって魔導八天を思い切り振りおろし、グラーフアイゼンで受け止めたヴィータがアイゼンごと切り裂かれて倒れる。

「オオオオオ！！」

ズンッッ！！

その瞬間、空間が重くなって毛色を変える。

リトルバスターズによる固有結界「虚構学園（ハッピーエンディング）」だ。

その中で、理樹が「奴」に挑みかかって行った。
バリアを全身に纏い、さらに流動までさせている。

かつて蒔風を追い詰めた物のバージョンアップ版だ。

「まさか、お前が帰ってきてるなんてね!!」

「おいおい。俺はもともといたぞ?あいつにふっとばされてただけさ」

「じゃあもう一度吹っ飛ばす!!」

ギャギィ!!ギャウッ・・・ギャリリリリリッッッ!!!

理樹はバリアを張っての徒手空拳。
「奴」はそれに向かって魔導八天で切りかかっていく。

一瞬触れるだけでも凄まじい火花を起こすそれに対し、「奴」は臆

することなく魔導八天を振るっていく。

そして、数撃打ち合ってから「奴」が一歩下がって魔導八天を構え直し、手の中で独楽のように軸回転させて一気に理樹に向かって突きこんできた！！

ギャッッ・・・・・バァン・・・・！！！！

「んな・・・？」

「そっちが回転してんなら話は簡単だ。そっち以上の回転を以って、一気に突き込むだけだ」

「奴」の呟き。

割れるバリア。

熱した鉄棒を突っ込まれたかのような感触。

激痛の信号が、理樹の腹から脳へと届く。

「お・・・グォ・・・がぁぁァァアあああああああ！！！？」

「お前の為の固有結界だ。すぐに回復するだろう？」

「グェ・・・あ・・・・・」

そう言って、理樹の腹に突き刺した剣をそのまま地面に突き刺し、標本のように縫いとめる。

あまりの激痛に、理樹が呻いて地面をひっかく。

これでは再生しようにも、剣が邪魔で立ち上がれない。

「何すんだテメェ！！」

「理樹を離せ！！」

と、そこに真人と謙吾が突っ込み、「奴」を理樹のもとから離そうとする。

その二人から大きなバックステップで距離を取る「奴」。

理樹を剣から解放し、肩を担ぐリトルバスターズのメンバー。

それ向かって、「奴」が頭上に巨大な黒球を生みだしていた。

「吹っ飛びなぁ！！」

「まずい！！」

「下がれ！！」

ゴギュッッッ、ギャッゴォォォオオオオ！！！

その黒球がメンバーを呑みこみ、空間を削り取るような音を起こして全員を地面に伏せさせた。
それと同時に固有結界が切れ、世界の毛色が戻る。

そこで生き残ったライダー数名によるライダーキックがいっせいに放たれてくる。
だが、それすらも「奴」は一人ひとりの足を掴み、後続のライダーに投げつけて衝突させたり、なぎ倒したりして一人残らずたたき落とした。

最後に、掴んでいたクウガを向かってくるランサー、アーチャーに向かってブン投げて飛ばす。

クウガはランサーに向かって地面と水平にすっ飛び、よけるわけにもいかないランサーはそれを受け止め、壁に叩きつけられてしまう。

アーチャーはそれを見ながらも止まることなく干将・莫邪を取り出し、円の動きで振るって「奴」へと攻撃を試みる。

が、その隙間を縫うように放たれた「奴」の拳がアーチャーの顔面を捉え、さらに背後に現れたディエンドを後ろ回し蹴りでなぎ倒し、波動砲でアーチャーを吹き飛ばした。

次々とメンバーを戦闘不能へと陥らせていく、「奴」

かつて、銀白の翼人もこのメンバーを相手取り、勝利を収めた経験がある。
しかしそれはあくまでも相手の裏をかき、非道を極め、勝つためなら何でもするという、おおよそまともとは言えない手段を用いたものだった。

それに対し、この男はどうか。
真っ向から立ち向かい、そして次々と連続で仕留めていくこの男。

やってることは悪役のそれにもかかわらず、勝ち方はかの男よりもはるかに正統派じみていた。

「俺は実を言うとこう言った真っ向からのガチが得意なんだよなぁ・・・好きなのは静かに隠密なんだけどね！！」

まるであの男と逆。

暗殺を得意として、派手にやり合うのが好きな男
派手にやり合うのを得意として、隠密を好む男

実は「奴」というのは正統派だった。

しかし、「正統派」だからと言って、許されるかどうかは、また別の話。

to be continued

襲来（後書き）

と、いうわけでやってきたのは「奴」でした！！
久しぶり！！良く帰ってきた！！

「奴」
「いやまぁそれほどでも／／／」

だが数話以内にやられていただきます。

「奴」
「うをいっ！？」

だーってお前がいるってことは当然あっちだって・・・ねぇ？

「奴」
「ねぇ？って・・・・」

蒔風ですらあれだけかかった「ＥＡＲＴＨ」メンバーつぶしを、こうしてとんとんと進めていくあたりやはり奴と蒔風の力の違いが分かるというものです。

「奴」
「それにあいつコスい手段使ってたしな」

そう、そこも違い。

同じだが、真逆。
戦闘方法とかももうこいつの方が主人公っぽいｗｗｗｗ

ではなぜ今までそうではなかったのか。
こんなまともに戦っちゃって、「奴」にしてはちょいと大人しい方ですよ？

「奴」
「ま、途中に出した黒球で一気になぎ払ったりもできるしな」

でもそれをしない。
至って理性的。

あの狂気はどうしたんだ！？

というところで次回なんですよ！！

「奴」
「次回はメンバーつぶし後編！！１１ｅｙｅｓメンバーとかもう空気だったな」

・・・・・・

「奴」
「忘れてただろ」

・・・・もう出てこないかもｗｗｗｗｗ

「奴」
「ファンに殺されてしまえ」

だってだって！！あのときはこう・・・間隔が短くなっちゃうと思ったんだよ！！

だから場つなぎとして入れただけの世界が結構あったりしたり・・・・

「奴」

「わかった。俺の敵は主人公じゃなくて作者、お前だ」

今更気付いたかウスラトンカチめが！！

じゃ、今から「奴」とバトってくるんでこの辺で！！

ではまた次回

激戦

剣撃、拳撃、黒球、波動砲

あらゆる攻撃で、「奴」がメンバーをなぎ倒していく。

「バルディッシュ！！」

「ストラーダ！！」

フェイトとエリオの二人が、キャロからの最大ブーストを身に受けて「奴」へと切り掛かっていく。

半ば無茶とも見えるブーストだが、相手が相手だ。そんなこと言ってもいられない。

金色と真紅の閃光と化し、二人が「奴」へと一気に突っ込んでいっ

た。
それを「奴」は魔導八天で受けながら、徐々に後退させられている。
相手の速度が速度なだけに、「奴」の身体にも少々の切り傷が増えていく。

「おいおい・・・その背中・・・・・」
「舜からもらったものだ・・・・・!!!」
「ぼくも・・この力はあの人にもらった!!」

バチチ!!と爆ぜる音がして二人がさらに速度を上げていく。
もはや「奴」の目ですらも追いきれない。
だから

「オラこいや!!!」

「奴」はガードをやめ、腕を広げて二人を受け止めた。
刃が二つ、身体にめり込む。

その光景に一番驚いたのは当の二人だ。

だが、「奴」はそこでニヤリと笑い・・・・

《イーター！！！》

そんな起動音を鳴らし、バキリ！とデバイスの先端をかじりとって破壊してきた。

コアは無事だったものの、戦闘など到底不可能だ。

「な・・・」

「に！？」

「ガイアメモリの記憶は破壊されたらなくなるわけじゃない。現に一回破壊されたメモリもまた出てきたりしてるしな」

ゴスッ！！という重い音が二回して、二人が腹部を押さえてその場に崩れ落ちた。

「奴」の腹からはワニの顎のようなものが飛び出しており、それがバリボリとストラーダとバルディッシュの先端を咀嚼していたのだ。

と、そこに

「音撃打・怒涛爆砕！！」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッ！！！！

「奴」の真上数メートルのところに太鼓の鼓のようなものが現れ、そこに向かって響鬼が思い切り音撃棒を連続で叩きつけてきた。

まるでバズーカの連続発射のように衝撃と炎が「奴」へと襲い掛かっていくが、「奴」はそれを左手の「口」でそれを飲みこみ、一気に固めて吐き出し放つ。

それを食らい響鬼が吹っ飛び、「奴」が両手をパァン！！と合わせると、ハイパーフォームとなって過去から攻撃を加えようとしたカブトがバチッ！！と現れて地面を転がる。

「な・・・ただの手合せで・・・時空に干渉だと・・・・！？」

「オレ、天の道どころか天そのもの行ってるから☆」

そういってゴバッ！！と地面ごとカブトを蹴り飛ばし、その先にいるメンバーを数人巻き添えにさせる「奴」。

土ではなく、地面。それを蹴り飛ばしだのだから、飛んでくるのは土砂なんてレベルではなかったのだ。

だが、その中をすり抜けて駆けてくる影が一つ。

「ウオおおお！！」

「チッ、劫（アイオン）の目か！！」

光りを放つその左目で未来を予知し、土砂の隙間を予見して駆けだしてきた皐月駆が、刀・雷切を爆ぜさせながら「奴」に切りかかって行った。

それを受け、反撃する「奴」だがそれが放たれるよりも早く駆は回

避行動を取り、完全に四角きあら「奴」の背中を切り裂いた。

初めて入った一撃。
しかし、ここまでやってやっと一撃なのだ。

それに反応して振り返りながら「奴」が剣を振るが、それも回避されて斬られる。

「わかるぞ・・・お前の未来を、敗北に追い込む!!」

「未来・・・か。思えばそいつを敵にするのは初めてだな!!」

そういって、「奴」がバックステップを取るが、それすらも予見されているのかぴったりとついて突き込んでくる駆。

しかし

「じゃあお前は・・・俺がこうする未来をどうする!!」

「?・・・ッッ!!うをぁっ!?」

そこで「奴」が一気に攻撃を仕掛ける気で魔導八天を握った。
逃げ場はない。受け止めきれるのか!?
そんな未来のヴィジョンが飛び込んできて、駆は焦って後方へと飛びのく。
それに合わせて「奴」が駆に接近し、こめかみに向かって拳を振り下ろして昏倒させた。

「未来に踊らされてるようじゃ、今の自分は越えられないぜ?」
「お前に、「今のお前」を超えられるのか?」
「!!!」

ギャォオッッ!!!

「奴」がニヒルに吐いた言葉に、背後から応える声がした。
それに反応して「奴」が魔導八天でガードしながら振り返った。

そこにいたのは、漆黒の翼。

「クラウドさんじゃァあーりませんか！！」

「奴」がクラウドに向かって呼びかけるも、当の本人はそんなことに取り合ってはいられないと言わんばかりに、「奴」へと斬り掛かっていく。
それを魔導八天で受ける「奴」

そうしていると背後から草壁美鈴が刀を携えて突っ込んできて、「奴」へと切り掛かってきた。

「奴」はそれにとっさに体を開き、クラウドを右で、背後からの美鈴を左でと、一人片手で受けながら剣撃を繰り返していった。

「陰陽剣士に漆黒の翼人・・・・ちと左右のバランス悪くない・・・かいっ！？」

美鈴の剣を「奴」が弾き飛ばし、彼女を蹴り飛ばしてからクラウドへと向き直って大きく剣を振るう「奴」
が、クラウドはそれを合体剣で受け止めたのち、「奴」の顔面を殴り付けた。

「奴」の剣がクラウドの合体剣に打ち付けられてから離されるまでの数秒に、「奴」はクラウドに数回殴りつけられていた。

「ブッ・・・くそ・・・・「離す」という意識がいくまでに何べんも殴りやがってからにぃ！」

「数秒でも、貴重な攻撃機会だからな！」

顔を押さえて後退する「奴」に、クラウドが合体剣を二刀に分けて左右から挟みこむようにして振った。
うまくいけば、上半身と下半身を分けることができる。

だが、「奴」も魔導八天を二刀に分け、右手と左手に握って地面に思い切り、杭のように突き刺した。
クラウドの二刀はその杭にガッァン！！と阻害され、「奴」はそれを握ったまま体重をかけ、両足でクラウドの胸に向かってキックを

ぶち込んだ。

「奴」の両足キックにクラウドの体が地面を数回バウンドして、大木に大の字で叩きつけられる。

更に「奴」はそのクラウドに魔導八天を分割し、投げ放った。

まず四本がクラウドの両肩と両腿を貫き、残り四本が脇の下などに突き刺さって身動きが取れないようにする。

「ガッ・・・っ・・・う・・・・・！！このッッ！！」

「王厳拳（おうごうけん）！！」

ドッ、パァン！！！

そのクラウドの胸に、「奴」の拳が叩きこまれ、衝撃がクラウドの背後の大木を木端微塵に吹き飛ばした。

クラウドは口から血を吹き出し、ズルリとその場に崩れこんでしまった。

その拳の威力たるや、クラウドに突き刺さった四本の剣が抜け落ちてしまうほどだった。

ゴッ、パァン！！

と、そうしている「奴」に観鈴からの衝撃波が襲い掛かり、「奴」が地面を滑るように押しやられ、後退する。

その隙に観鈴の衝撃波を背に受け、さらに加速したスバルと凩が「奴」へと突っ込んでいった。

「リボルｂ――――」

「おっそい！」

しかし、早速スバルが投げ飛ばされる。

高速回転するリボルバーナックルのギアをイーターメモリで変化し

た右手で噛みつかれ、逆にスバル自身の方がきりもみ回転していって投げ飛ばされる。

が、その一瞬を狙って凩が「奴」に向かって「チン！」と刀を抜き収めた。

直後、「奴」が腕をクロスして受けるがその体に次々と切り傷が出来ていき、肩口がバッサリと斬り裂かれた。

「おぅっ！？」

「ぬ・・・反応するか。なんという御人！！」

それに対して「奴」はやられたこと、凩は狙いを逸らされたことに驚愕するも、間髪入れずに向きあって武器を構え、再び衝突した。

刀に手を添えたまま凩が走り出し、一瞬の間を以って「奴」を通過する。

その瞬間、再び「チンッ」という音が聞こえ、同時に「奴」も魔導八天を左下から右上に大きく振りぬく。

直後、背中を剥かせあう二人の間で、無数の斬撃場ぶつかり合い、甲高い音を鳴り響かせていった。

「ぬ・・・！！」

「ったぁ～～！！やっべぇなおい！！でも・・・」

ギャギリリリリリリリ！！！・・・・・・

「いったな」

ギャッッ、斬ッ！！！

「アグッ！！」

その剣撃の中から、凩に向かって斬撃が一つ飛び、彼の背中を両断

した。

「アンデットの類か。凄まじいが、今一つ届かなかったな。惜しい！！！」

ドォン！！！

凩に向かってそう言葉をかける「奴」に、桜色の砲撃がぶち込まれ、それを片手で簡単に弾き飛ばす。

砲撃手は、なのは。
その隣にはティアナも立ち、二人そろって集束を始めた。

そして――――――

「「スターライト、ブレイカァァァアアアア！！！」」

ドッゴォウ！！！

「奴」に向けて、集束砲撃の頂点に立つ魔法が二つ、とんでもない大きさになって飛んできた。

無論、「奴」はそれに対して迎撃を試みる。

だが、なのはとティアナの狙いはこれよりも少し先にあった。

「レイジングハート！」

「クロスミラージュ！」

《《ＯＫ！！》》

そう二人がデバイスに働きかけた瞬間、二つの集束砲撃魔法はグバッ！！と枝分かれしていった。

それは本当に満天の星のようで、それが一斉に「奴」へと伸びる。

だが、それを見ても「奴」は不敵な笑みを隠さない。

「大したもんだ。でもな?そんな大質量、バラバラにして制御できるわけねぇだろうが!!」

そう、目測だがこれは一つの砲撃が五十ほどの数に分裂している。

そんな数を制御できたとしても、この質量ではどうしても不可能だ。

しかし、思い過ごしだろうか。

砲撃はすべて「奴」に向かって突っ込んできた。

「んなぁ!?」

砲撃を寸でのところで回避した「奴」だが、ぶつかり合った砲撃は一つになってまた「奴」へと向かってくる。
向かってくる間にも一つになった二つはちゃんと分裂している。

これほどのコントロール。
それを担っているのは、ほかの人物だった。

「私の力を使えば、砲撃の誘導は楽だよ!!」

「ありがとうございます!ティアナ、私たちは砲撃の大まかな照準を!!無理そうなのは観鈴さんがやってくれるから!!」

「はい!!」

誘導しているのは、ほかでもない純白の翼だった。
それを以って、「奴」へと一気に到達する砲撃達。

「チぃ・・・これは・・・」

がバッ!!!

「覚悟を決めるぜ！？」

ドゴォッッ！！！

そういって「奴」が自らの波動砲エネルギーで腕を覆って、その砲撃と受け止めて行った。

十発目喰らいはまだよかった。
しかし、そこから先は地面に足をつけ、右上腕を左手でつかんで支えながら強引に受け止めていく。

そして・・・・・

「う～け～と～め～ェ！！きったぁ！！！」

「な！？」

「そんな・・・」

「黒球！！！」

そして、その砲撃のエネルギーを取り込みながら黒球を作り出し、
生き残ったメンバーをまとめて覆い、ひねりつぶした。

全員が地面に倒れる。
そして、一番目の前の人間に、視線が向く。

「さて・・・終わらせに行きますか？」

そういって、なのはの頭に手が伸びていき――――――

「それ以上はさせません！！」

その腕が掴まれ、奴の体が投げ飛ばされた。
クルクルと回転し、体制を整えて着地する「奴」は、自分を投げ飛ばした相手を見た。

「アーリスさーん。最初からいたくせにおっそい登場で！！」

「もうこれ以上はさせません」

パァッ！！！

アリスの服装が、ゆったりしたものから変わる。
下はロングスカートだが、上がノースリーブになり、肘まであるような長い手袋を付け、二の腕をさらす格好になる。

「管理者として以上に、この世界の一員として・・・・あなたを、倒します！！」

「やってみろォア！！！！」

「奴」が吼え、アリスが構える。

最後の砦、立つ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

激戦（後書き）

さて、メンバーが軒並みやられてついにアリス参戦！！！

翼人はやられてしまいました。どんだけだよこいつｗｗｗｗ

感情の集束というのもできませんでしたねェ。

まあ、フォーティーンとの戦いのときに結構無茶して集めていたからできませんでした、という。

え？上条さんなら黒球をどうにかしたかもって？

あれは幻想殺しのキャパをオーバーしてて、しかも彼の腕力で捻じ曲げることもかなわない代物ですから。

次回はアリスＶＳ「奴」！！

ではまた次回

ＰＳ

そういえば感想件数が１０００件超えてました！！！

その１０００件目の感想は・・・・・・リュウガ様の感想でした！！
この小説に感想を送ってくださる古株で、いまだに送り続けてくだ
さるありがたい読者様です！！

これからもみなさん！宜しくお願いいたします！！！

帰還

アリスは、世界の管理者である。

もともと力は持っていたが、それはあくまで管理に使うすべき力であり、“Ｎｏ　ｎａｍｅ”をつかさどる彼女はそれに対して疑問はなかったし、満足していた。

だが、知ったのだ。

力がなくては、何も守れない。

だから彼女は今、その力を転換して敵へと挑む。

彼女が最初に敵と感じ、そして、彼を送り出す原因となった、その男へと。

「では・・・・ブッちめて行こうか！！！」

ダンッッ！！っと、「奴」が魔導八天の内三本を地面につき差、それが輝き姿を変える。

「グルルルルルルルル・・・・」

「キィーーーーーーーーーー！！」

「フシュルルルルルル」

ケルベロス、迦楼羅、サラマンダー

「奴」の誇る三大魔獣が、いま迫る。

「行って来い！！」

その言葉と共に、三体が駆け出してアリスへと突っ込んだ。

その先頭を駆けるのはケルベロス。

それを見、アリスが構えて迎撃に応じる。

そして、三体が二体になった。

「！？」

驚愕するアリスだが、なんということではない。
ただ単にケルベロスが高速でその視界から消えただけだ。

その行き先は、

「ギャァォウ！！！」

アリスの背後。

まるで「もらったァ！！」とでも言わんばかりに叫ぶケルベロスが、
アリスに向かって爪を振り下ろして地面を抉る。

しかしその爪が抉ったのは

「それだけですか」

地面だけだった。

ドォン！！！！

大気が轟く音を響かせ、アリスの拳がケルベロスの左頭を真横から殴り飛ばした。

その衝撃は左頭を貫き、真ん中、右と、次々と頭を粉砕してケルベロスの体を真横にふっとばし、一撃で戦闘不能に叩き込む。

「・・・・・へ？」

「甘く見ないでください。もう、あなたのことを彼に頼むことしかできなかった頃の私ではありません」

ダンッッ！！！

「あなたとの戦い・・・・・」

ゴッッ！！！！

「ここで終わらせて見せます！！！」

そう叫び、上空から突貫してくる迦楼羅に向かってアリスが飛び上がる。

羽根をたたみ、針のようになって突っ込んでくる迦楼羅。

その嘴を、アリスが脇に挟み込むようにして受け止め、巴投げのように薙げながら思い切り腹を蹴り上げた。

ガキュウ！！！と気味の悪い声をだし、迦楼羅の体が上に真っ直ぐ戻って行き、アリスは着地と同時に二足歩行となったサラマンドラの炎剣を、片手で受け止めた。

「！？」

「断罪者・・・ですか。しかし、すでに背負う覚悟があるのなら、それは脅威ではありません！」

炎剣というからには燃えているものだというのに、アリスはそれを全く感じさせずに掌で押さえていた。

それを押し込もうと腕に力を込めるサラマンドラだが、アリスの足が地面をズズズ、と少し土を退かすだけで全く切り込めない。

そして、それをアリスが一気に押しのけ跳躍、サラマンドラの顎に見事なアッパーカットを叩き込み、更に振り下ろしの回し蹴りを脳天に叩き込んで地面に顎から叩きつけて行った。

それを食らって、サラマンドラがフラフラと身体を揺らしながらも立ち上がろうとするが・・・・

ドォン！！

「ギィッッ！！」

「ゴギャァ！！」

先ほどの一撃を食らった迦楼羅がそこに落ちてきて、サラマンドラを叩き潰して完全に再起不能にする。
落ちてきた迦楼羅などは言わずもがなだ。

三体の使役獣を一気に殲滅し、そのすべてが剣に戻って「奴」の手に収まる。

その光景に、「奴」は少なからず驚いていた。

確かに相手は管理者だし、力も相当あったという予測は立てていた。
だが、まさかあの三体がここまで何もできずに負けるとは思ってもいなかったのだ。

眉をクイッ、と上げ、ひょうきんに驚く「奴」

その「奴」に、アリスが一気に走り込んで拳を放ち、それをパシッ、と「奴」が片手で受け止めた。

「やるね！！」

「どう、も！！」

そこからアリスが「奴」の頭を狙ってハイキック、「奴」はそれをしゃがんで回避し、アリスの軸足を狙って踵からの足払いをした。

アリスもまた、それを小さくジャンプして避けてから裏拳を「奴」の頭に叩きつけようとして、それを上腕で受け止められる。

「くっ・・・」

「フッ」

と、そこから「奴」がアリスのその腕を取り、曲げ、柔法の要領で地面に俯せに寝かせる。

さらには腕をがっちりつかみ、技までかけて抑え込む。

「強いな。だが、あんたが手に入れた力は俺だって手に入れてんだ。と、なれば後は大本のスペックの違いだろう？」

「ッッ！！！」

「せっ（グイッ）、ェアッッ！！」

「ガッは！！！」

「奴」が技をかけた腕を持ち上げ、アリスの全面をさらけ出してサッカーボールを蹴るかのように脚を動かした。

その蹴り一撃にアリスの体が地面スレスレを飛び、二、三回地面にこすり付けながら止まった。

「ふぅ、これで大方終わったかな？」

周囲を見渡す「奴」

そこに立ち上がろうとする者はいても、「奴」に向かってこれる者はいなかった。

一人残らず、倒されている。

無論、「ＥＡＲＴＨ」のビルにはまだ人はいる。

しかしそっちにいるのは戦う力のないメンバーだし、長門などといったメンバーはもしもの時にそちらを守っていてこちらにはこれない。

それも「奴」にはわかっているのだが・・・・

「・・・ま、当面は目の前の目標だな」

そういって、再び歩み、手を伸ばす。

そこにいるのは、やはりなのはだ。

襟を掴まれ、グイッと持ち上げられて、なのはが見たのは「奴」の拳。

大きく振り上げられて、おそらくこのまま振り下ろされる。
そうすればなのはの頭は、果物のようにつぶれて二度と元には戻らないだろう。

「・・・・てよ・・・」

「？」

そのなのはが、目に涙を溜め、胸に願いを抱え、ポツリと漏らす。

「助けてよ・・・そう言ったら・・・いつだって来てくれるんでし

ょう？・・・・・・」

「・・・・・」

その言葉に、「奴」の腕が振り上げの頂点で止まる。

見ると、周囲から光は上がっていた。

黄金の光
願いの光

希望の光

誰だって、いつだって望んでた。

でもそれは、彼をまた戦いに巻き込むことになる。

それはわかっている。

ああ、しかし人間(じぶんたち)はなんと残酷なんだろう。

このろくでもない世界に、自分たちはまた彼を求めてしまった。

生まれた瞬間、人間は泣く。

周囲は誕生したそれを祝っているがしかし・・・・

もしかしたら赤ん坊は、生まれたことを嘆いて生まれているのかもしれない。

こんなろくでもない世界にやってきてしまった、と

だけど、それでも

「それでも、いや、だからこそ、この世界は美しい」

「!?」

パァン！！と、「奴」の手が弾かれる。
そこを通過していったのは、一つの光の玉

皆の願いが集まってできた、バスケットボールほどの玉だ。

それが「奴」となのはの間を抜け、一気に上空へと上がっていき、
見下ろすように滞空した。

「・・・・来たか」

そして、そこから金の粒子が波紋のように広がり、崩れたビルや、
倒れたメンバーの傷を癒す。

が、傷が治っても体力の問題が解決されていない。

現に、なのはに向かって波動砲を放とうとする「奴」を誰一人とし

て止められない。

誰も立てない。

しかし、誰一人として焦燥など抱いていなかった。

抱いていたのは、呼んでしまった罪悪感と

「来て・・・・くれた・・・・」

そして、これからも共に生きていける希望の喜びだった。

「・・・・！！！」

そこで、「奴」が無言でなのはに波動砲を叩き込もうとする。

しかし、再び光の玉が飛び、今度はなのはの体を掻っ攫っていった。

その光の玉は今や形を変え、確かな両腕で彼女の体を支え、確実に両足で地面に足を付けていた。

どこかへと散っていた銀白の羽根が「主を見つけた」と言わんばかりにその者の背中へと集まっていく。

「おいおい・・・確かに条件はそろってたさ。翼持ってかれて、お前がいて、みんなが願う」

「あ・・・・・・」

「だけどよ、この状況はないだろう？俺を呼びたかったら、テメェが一言、こう言やよかったんだ」

「帰って・・・？本物？」

「オレは世界最強だぜ？誰かが名前を呼んでくれれば、そこに駆け付けんのが――――――」

「舜君！！！」

「主人公って・・・もんだろう！！！？」

ド、バサァッ！！！！

蒔風舜、帰還す

幾多の希望と、数多の願いを背に受けて

「オレの仲間に凝り性もなく・・・・いや、これはまだ過程か？」

その男、敵を睨みて拳を握る。
相対（あいたい）するは、対（つい）にして同なる者。

「その通り。ようやく軌道に乗ったぞ主人公」

「奴」が言う。ここからなんだと。
蒔風も言う。ここで終わりだと。

世界を食らう男と、世界を護る男

感動的な帰還はともあれ、二人の因縁はここにて決着する。

to be continued

帰還（後書き）

はーい！！帰ってきました第二弾！！

大復活の蒔風でっす！！！

わー！！ドンドンパフー！！！

蒔風
「よっしゃあ！！帰って来たぜ！！思えばここまで」

ハイカット！！ここまで！！復活の感動はここまで！！

蒔風
「えぇエエエエえええええええ！？」

そんなことよりも武闘鬼人　ｉｎ　博多ー！！！

現在家族で九州来てます。

一泊二日の短い観光ですが、短くったって楽しいものは楽しいです！！

明日（というか今日）は、福岡タワー見に行きます。

福岡タワーと言えばあれですよ、ＶＳスペースゴジラで破壊された場所ですよ！！

あ、あと福岡ドームは平成ガメラ第一作でギャオス捕獲作戦がとられた場所でしたね！！
ガメラもそっから上陸でしたし！！

・・・実は九州危ない・・・？

ＶＳスペゴジの時も何気にゴジラさん九州縦断してましたし。鹿児島から福岡に。

みんな！！住むなら四国だ！！あそこはまだ一度も怪獣が来てない！！（少なくともゴジラ作品は）

瀬戸内海にガメラが寝てるかもしれないけどね！！ｗｗｗｗ

ちなみに作者の地元も一度、ゴジラは上陸してます。
逃げ場はなかった、というよりもゴジラさんに死角がなかったｗｗｗ

あとそういえばオーズ最終回でしたね！！

蒔風
「お前あとがきにどれだけ詰め込むんだよ」

かなり

で、アンクボイスの「タカ！クジャク！コンドル！」は卑怯だろぉぉおおお！！！

マジ泣きました。
これから飛行機乗っていくって時に泣き腫らしました。

空港のロビーで携帯（ワンセグで見てた）握って号泣してる兄ちゃんとか・・・何それ怖い

ロビーにあるテレビは三人くらいのおッちゃんがニュース見てたし、それ以外にも二人の兄ちゃんがそれ見て話し合ってたし・・・・

いや、まあそっちだったら嗚咽してたかもしれないから結果オーライですけどｗｗｗｗ

と、言うわけで「めぐ銀」初の九州投稿！！
そこにどんな意味もないけどなんだかテンションあがってくるぜ！！

そういえばブラックロックシューターのゲーム買ってですね・・・・

蒔風
「本編の話してやれよ。アリス超強かったじゃん」

あ、それはまあね。
だって考えてみるとあの時に“ライクル”“輝志”“フォルス”“ＬＯＮＤ”の力を取り込んで、半分を蒔風に流してたんだもん。
その分は「マイカゼ」つながりで「奴」に流れたけど、それでも十分に強いお！！

蒔風
「お、っていうな。となるとホントに元のスペックか」

その点お前なら大丈夫。
復活した時点でお前にも力行ってイーブン！！

蒔風
「え?何それ怖い。てか結局大元のスペックで負けるじゃん」

は?この状況に持ってきた主人公が負けるわけないじゃんｗｗｗｗ

蒔風
「元も子もないこと言いやがったこいつ!?」

問題はどんな内容で勝つかだよ、明智君

蒔風
「明智じゃねーよ」

明風君

蒔風
「明智ファンに謝れ」

じっちゃんの?

蒔風
「名に懸けて！！」

真実は？

蒔風
「いつもひとつ！！・・・ハッ！？」

うむ、見事ノリに乗ったな。
流石は我が主人公。

蒔風
「真実はいつもひとつとは・・・限らないじゃん？（キラッ）」

限るわーーーーー！！！

次回、「奴」の行く先

蒔風

「ではまた次回」

蒔風（前書き）

挿入歌「Ｔｉｍｅ　ｊｕｄｇｅｄ　ａｌｌ」
頭からいきなりどうぞ！！

他者によって現界していた、主を失いし羽根
その羽根に皆の願いが共鳴し、「彼」という存在をこちらに引く。
だが、彼の現界の主軸になったのは、間違いなく「奴」だった。

「奴」は主人公を殺すことで世界のバランスを崩して破壊、食らうことで吸収し、そのエネルギーで己の世界を復活させようとしている。

しかしその対象は決して主人公でなくともよい。
それに準ずる人物でも、別にかまわないのだ（得るエネルギーは多少減るが）
かつて観鈴を狙った時がこの場合だ。

だが、「奴」はここから軌道に乗ったという。

わざわざ蒔風を呼び戻したのだ。

彼が、そこまでしてエネルギーを求めた理由

それは――――――――――

「オラァ！！！」

「だぁっ！！」

ゴッ・・・パァン！！！

「奴」と蒔風の拳が正面からぶつかり、周囲に波状衝撃を飛ばして止まった。

地面には円形に模様が浮かび、さらなる一撃でそれもまた変わっていく。

そこからの攻防はまるで手足が鞭のように見えた。
実際には様々な打ち手が飛び交っているのだが、あまりの速さに残像が起こって両者の四肢は鞭のようにしか見えなかったのだ。

スパァン!!と両者の拳がぶつかって弾け、お互いに地面を滑るように後退、距離を取る。

が、その直後「奴」が蒔風の周囲を動きだし、無数の残像となって一気に蒔風へと襲い掛かって行った。

「ぬ・・・ァあっっ!!!」

その残像に向かって、蒔風が構える。

腰を落とし、両拳を左右の腰に沿えて呼吸を深く取り、一気に吐き出して拳を放つ。

「雷光拳・無限突破！！！」

一回突き、それを戻す。

ただそれだけの動作が、雷旺と絶光の力を持った拳で行うことで、凄まじい衝撃波となって一気に「奴」の残像を叩いていった・・・・！！！

だが、その中に「奴」はいない。

それに感づいた時にはすでに「奴」の攻撃は行われていた。

ボッゴォッ！！

「奴」が地面から飛び出しながらのアッパーを蒔風に放ち、それを回避した蒔風の頬がうっすらと斬れる。

蒔風は回避のために仰け反った身体で、そのまま足を地面から離し「奴」の体を挟み込んだ。
その瞬間、身体に回転を効かせて「奴」を頭から地面にたたき込もうと落としに掛かる。

が、「奴」とてそれに対処できないということはない。

頭から落ちる「奴」が、手を頭の上にあげて逆立ちのように地面を掴んだ。

ギュゥウウウウ！！と「奴」の腕が衝撃を受け止めようと曲げられていき、ついに

「オォおうぁ！！！」

「うあっ！！？」

「奴」が逆立ち状態で回転し、逆に蒔風を地面に叩きつけようと仕掛けた。

その勢いに蒔風はとっさに足を話すが、地面に叩きつけられるのは免れない。

ズダンッ、ザッ、ガガガガガッ！！！

体が叩きつけられ、そこから受け身を取って体制を整え、地面を膝立ちで滑る蒔風。

頭からうっすらと血を流すが、蒔風もただ投げられたわけではない。この回転合戦の中で、「奴」の頭に爪先を叩き込んでいる。

「奴」も頭から流れてくる血を拭い、地面にビシャ、と払って蒔風へと向く。

「おい・・・お前、変わったな」

「・・・・・そんな世間話してる暇はない」

「いやいや、かなり重要な話だ。お前、どうしてこんなに「お前」なんだ？」

「ッッ！！！！」

蒔風の言葉に、「奴」が息を止めて一気に上空へと飛びあがって行く。

蒔風も開翼してしてそれを追っていくが、「奴」の放つ波動砲で阻まれる。

そして、地面から蒔風が十メートルほど、「奴」はさらにそこから十メートルは上にいるところで止まった。

「言ったろ・・・暇はないんだ。終わらせんぞ！！！」

「奴」の身体から漆黒のエネルギーが噴き出、それが頭上に集まって球体へと形を変えていく。

それに対し蒔風が開翼、金の粒子が一気に展開された。

蒔風を包むよう、球状に回っていくその粒子は、さながら地球の大気の流れでもあらわしているかのよう。

「奴」の黒球の大きさは今までの比ではない。
さっきまでのはサッカーボールほどだったのが、今は直径三メートルはあろうかという大きさ。

「!?あの大きさ・・・・まずいぞ!?」

「それを食らったら終わりだ!蒔風!!」

地上にメンバーが叫ぶ。
あれは自分たちのほとんどを沈めた技だ。

しかも、あの大きさではいかに蒔風でも・・・・・!!

「大丈夫だ」

だが、彼に一切の不安はない。

そうしているうちに「奴」が蒔風の斜め上から黒球を振りおろし、叩きつけるかのように投げ放って来た。

大気を焦がし、空間を削るような回転をしながら、黒球が蒔風に迫って着弾する。

蒔風も粒子でそれを受けるが、さすがに重すぎる。

「は・・・どうやらテメェが実体したとき、俺の中の管理者の力が配分されちまったようだが・・・それなら大本のスペックの違いだ。やっぱ勝つぜ！！」

「奴」が叫ぶ。
その通り、「奴」の中に流れていた管理者の力は、今は平等に二人の物となっている。

そうなれば後は大本のスペックの差。
蒔風は「奴」に劣る。

しかし

「俺には、この力がある」

バサ・・・・・

「皆が願い、思ってくれたこの希望（ちから）は・・・・・・」

ギャォッ！！！

「その差を補って、なお余りある！！お前一人では、勝ちえない！！」

ドォオオオ！！！！！！

蒔風の粒子と、「奴」の黒球がせめぎ合う。

黒い衝動と、黄金の粒子が散って行って火花を散らす。

そこに向かって腕を伸ばし、叩き潰そうとする「奴」が、切迫するその状況を見て、悲痛な声を上げて叫んだ。

「俺だってなァ・・・・背負ってんだよ・・・・」

ググッっ・・・・

「消えちまったオレの世界を!!!!何人もの人間の存在を!!!!失っちゃいけなかった仲間たちを!!!!俺はそれを取り戻さなきゃならないんだ!!!!」

「・・・・・・」

「アイツらがまだオレの中にあるうちに、俺は世界を食らわなきゃいけねぇんだよォォォおオオオオオオ!!!!」

ごァッッ!!!!

互角だったエネルギーが、蒔風に向かって押し返される。
それを聞き、蒔風が悲しそうにポツリとつぶやいた。

「そうか・・・お前の世界は、もう・・・・・」

ドォッ！！

「お前となってしまっているんだな？」

「アッッッ！！！」

それを指摘され、「奴」が一瞬ひるむ。

そして、一瞬のうちに蒔風の粒子が「奴」の黒球を引きずり込んで、粒子の流動が高速のモーター音のようなものを鳴らしながら回転し始めた。

「だったら・・・・テメェがそれを背負わないで、どうするんだよ

！！！」

ドンッッ！！！！！

蒔風の翼が、一回だけ大きく羽撃たき、それに合わせて粒子の球体が「奴」に向かって放たれた。

そのエネルギーは「奴」に向かって真っすぐに突っ込んでいき、「奴」はそれを両手で受け止めようとするが、ズルリと飲まれて――

――――

「おォォォオオオオオオ！！？」

ガォォォウゥゥゥウウうううううう・・・・・・！！！！！

――――――

「が・・・・は・・・・・」

ザシッ

「へ・・・来たかよ」

倒れる「奴」が「ＥＡＲＴＨ」内のちょっとした木々の中で上体を上げようとするところに、蒔風が降り立ってきた。

周囲には誰もいない。

「やれよ・・・だがな、また戻ってきてやる。そしたら今度こそ・・・・」

「今度はない。そうだろ？」

「・・・・・」

「お前の中の「世界」は、すでにほとんどがお前の力と成ってしまっているはずだ」

「・・・・クソ・・・」

「奴」の中には、彼が元いた世界が渦巻いていた。

だからこその狂気、安定しない心情、容易に自分らしからぬ行動をとる。

その代償として、己を見失い、目的のためだけに爆走する。

しかし、ここまで「奴」という中にあって、その世界はただの力として還元されてしまっていた。

もう今更エネルギーを得ても、世界はかつてあった姿そのままには戻らないだろう。

だからこそ、彼はここまでエネルギーを欲し、自らを主軸としてでも蒔風を呼び戻したのだ。

「そうだ・・・次はない・・・・・！！」

ガッ！！！

「だから！！俺は今に懸けるしかねぇんだよ！！！」

「奴」が立ち上がり、蒔風の胸ぐらをつかんで叫ぶ。
その顔は地面の方を向き、どんな顔をしているのかわからない。

そして、蒔風の顔を見上げてなおも叫ぶ。

「見ろ！！最初はメチャクチャだった俺も、今じゃこんなに「俺」だ！！世界の構築なんて、もう５％もない！！少しでもあるうちに、俺は取り返さなきゃならねぇんだ！！それがたとえ、誰かを殺してしまうという道であってもだ！！！！」

そう、かつての「奴」は、すでにほとんど「マイカゼシュン」にまで戻っていた。

世界の構築に気付きながらも、現状が最高として特に動こうともしなかった青年。
さらなる高みのために、主人公を殺そうだなんて露とも思っていなかった男だ。

“ＬＯＮＤ”の言葉に翻弄され、操られるかのようにその世界を手に懸けた男。

「“ＬＯＮＤ”の野郎の言葉に我を見失ったのは俺の責任だ。そこを言い逃れする気はない。だから！！！だから俺がやらなきゃならない！！俺はどんなものを背負ってでも、世界を取り戻さなきゃならないんだよ！！！」

「・・・・・できない」

「ッ・・・お前らの世界だってきちんと戻してやる・・・・このままにして返す。俺ならそれができる！！なぁ・・・・お前、主人公なんだろ？だったら、だったら俺の世界も救ってやってくれ・・・・・！！！」

「俺は・・・・世界を救ったことはある。だが、その原点は世界のためじゃない」

蒔風が言う。

自分は世界のために戦った。しかし、それはあくまで結果でしかない。

「自分の世界の仲間のため。ほかの世界の仲間のため。自分の味方をしてくれる管理者のためだ。そのために世界を救わなきゃならないから、救っただけだ。だから、今度も」

「・・・・・そうかい・・・」

「今、お前の世界はお前の記憶の中にしかない。精一杯思い出せ。そして忘れるな。一つたりとも忘れるな。それがお前が背負うべきものだ。人殺しなんてそんなもんより、もっとずっと、お前は重いものを背負っていくべきなんだよ」

「・・・忘れるなと？記憶の中で反芻し、決して届かぬ夢を見ろと？」

「お前も・・・・マイカゼシュンであるなら・・・・・・！！！！」

蒔風が拳を握る。

「それを乗り越えて」

ギチリと蒔風の手が握り締める自らの握力で拳を固め

「強く・・・・この世界で生きやがれ！！！」

そして、その拳が「奴」の顔面をとらえ、ど真ん中に命中する。

「ごッ！！！」

その一撃で、「奴」の体がすっ飛び、ゆらりと消えていく。
それに対し、蒔風が指差して言った。

「残った世界も使い果たし、きちんと「お前」として帰ってこい。
お前が背負うのは、それからだ」

「・・・残酷だな・・・主人公」

「奴」がいう。
それはなんと、残酷なことなのだ、と。

だが、蒔風は首を横に振ってそれを否定する。

「いいや、残酷なのは、俺じゃないよ」

そういって、踵を返す蒔風。
そして斜め下を見ながら、吐き捨てるようにこういった。

「残酷なのは、世界だった。最初から、最期まで」

「・・・・そうか」

背後から、「奴」の気配が消える。

そして、その場所に一滴のしずくが、ぽたりと垂れて行った。

――――――

「ん？どうした？」

林から出てきた蒔風に、皆が集まってジロジロとみてくる。

当の本人は最初からいたようにあっけらかんとしているし、どうにも現実感がわかないのだ。

「えっと・・・・・本物？」

「当たり前だ。お前らの願いが呼んだんだろうが」

「消えない？」

「消えない消えない」

手をひらひらと振って、蒔風がにやりと笑ってそう言う。

そして、全員が声をそろえて蒔風に叫んだ。

「「「「「「おかえり！！！！！」」」」」」

「おう、ただいま」

蒔風舜が帰ってきた。

長く長く続いた、一つの因縁に終止符を打って。

直後、メンバーが次々に蒔風へと飛び込んでくる。

笑う者、泣く者、なぜか怒っている者

それらに押しつぶされ、蒔風が呻いた。

「俺の背負う者、か・・・・・重いなぁｗｗｗｗ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

蒔風（後書き）

後書きは別に投稿しますので
では

あとがき3rd

帰ってきた翼人！！
そして、第三章完結ですね！！！

蒔風
「まさか「奴」とあんな決着になるなんてな」

「奴」はもともと非常に理性的な男です。
人殺しだって良しとしないし、決して世界に不満を持った人間ではなかった。

そこら辺は第一章のＡＢ！編を読めばわかると思います。

彼の中には「世界」があり、それをそのまま存続させていたからあそこまで狂気じみていたわけですが・・・・

長く彼の中にあったがゆえに、世界は彼の力となってなじんでいってしまった、もう世界としての情報はかけらほどしかなかった。
だからエネルギーを最大限欲したわけですね。

なんだか嬉しい

何気に一番自分の中で育ってくれたキャラは「奴」でしたし

さて、次章の話でもしましょうか。

次章は完全オリジナル！！
とりあえず自分が考えていたのはここまですね。

だから五章とかは全然イメージついてませんｗｗｗｗ

伝説の中にしかない敵が、動き出します。
世界四剣に関しても触れますからね～

あ、あとこの最終話ほっといてライダー小説とか書いてましたｗｗ
ｗ

世界観はゴーカイジャーに近いです。
昭和から平成までのライダーが連続して存在していた世界にしてますので。

もし読みたい、という方が何人かいらっしゃいましたら投稿してみようかと思います。

一話くらいしか書いてませんけどｗｗｗｗｗ

では、今から次章予告を書いていきます！！

それをお楽しみに！！

第三章、元ストーリー

劇場版仮面ライダーブレイド「Ｍｉｓｓｉｎｇ　Ａｃｅ」
ＳｔｒｉｋｅｒＳ　サウンドステージ　Ｘ

以下の方々に感謝を

これまでも引き続いて感想をくださった方＆お気に入りユーザーに登録してくださった方

（英字、五十音順）

3　様
anoki　様
ATD－X　様
h.o　様
H@LYA　様
MERAN　様
reimu　様
tyta　様
White Seal　様
アストラル　様
ウエイ　様
液体の蛇　様
桜龍　様
カイ（海）・R・銃王　様
彼方からの翼　様
カレーパン　様
神無月　様
キョン　様
久遠　様
クリア　様
グレイ　様
コンバース　様
桜の木　様
シャドー・ナイトメア　様

準也　様
深蒼の覇者　様
ソーヤ　様
だいさむ　様
蛸壷の主　様
剣　流星　様
ティエト・コーティオン　様
とある旅人　様
ニャンコ隊長　様
ハイパーカイザー　様
灰狼　様
東雲葉月　様
バラランシャ　様
ヒダリキキ　様
ブレ　様
ポリンキー羽田　様
ミケねこ　サマ
夜一　様
保名　様
夕　様
ライト　様
リュウガ　様
流寸　様
ルシフェル　様
レイガン　様
レイフォン　様
レン　様
わや　様

今、モニターの前にいるあなた様に

ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！！

第四章　予告

鬼人

produced by 武闘

銀白　PROJECT　第四段

翼人伝説

世界を越えて行く者
理解する者

輝く翼

帰ってきた銀白！！
訪れる日常は楽しいことばっかりだ！！

だけど、そうもいかないのが世界の理

迫るは赤い、封印されし破壊の男

「なんだこの街は・・・・」
「なにがあった！？」

「何一つまともじゃない・・・・」

世界四剣

「共鳴してる・・・」

「それは・・・その剣は失われし四本目の・・・・！？」

「なぜあなたがそれを持っているのですか！！！！！」

伝説が交差する。

否、蘇る。

もとは一つの存在だったものへと。

そして・・・・

「止めろ・・・オレの・・・・俺のそれを外すなぁァァアアアあ
あ！！！！」

直面する現実

「怖い・・・死にたくない・・・・・！！」

乗り越える魂

「世界を破壊だぁ？ザケンじゃないよお前」

戻る戦士

「この世界は俺が守る最後のモノだ」

・・・

「諸君！！兵器には、それに対するものがなくては商売にならないのだよ！！毒物に薬が必要なようにな！！！」

英雄に、最大の試練が訪れる。

世界をめぐる、銀白の翼

４ｔｈ　ＳＴＡＧＥ

ＲＥ：ＢＩＲＴＨ

今、主人公は再起する。

自らの、魂を乗り越えて

「「世界最強（オレ）を相手に、勝てるよ思うなよ！！！？」」

来週あたりから執筆開始！！

逃・げ・ろ！！

「はーい、次はこっちですよー？」

「うぐぅ・・・・」

今、「ＥＡＲＴＨ」局長室は凄まじい量の書類で埋まっている。

当然だ。

急に帰ってきて、今まで起こっていた事件の内容は知っているとしても、それでも確認してもらわないといけないことがあるのだから。

どうやら彼は消えていたあいだに起きていた事件は関知していたようで、内容は大体わかっていた。

しかしそれでも「見ろ」というのがこの管理者である。

「なあアリス・・・・」

「なんですか？」

「後この部屋にある分で終わりなんだよな？」

「・・・イメージしてください」

「？」

「テレフォンショッキングって、ステージに入りきらない花は廊下に並べられるそうですね」

「もうヤダァ！！！（ガバッ！！）」

「逃がさんッッ！！」

机から飛び出そうとする蒔風。
それに飛びついて取り押さえるアリス。

二人の「打ち合わせでもしていたんじゃ？」というほどの完璧なタイミングに、全米が泣いた。

「なんでこんな書類あんの!?こっちきたら遊ぼうと思ってたのにいいいいいい!!!」

「はは～ん。さてはあなた一回消えたことをいいことに、こう言った仕事類はすべて一刀さんや理樹さんに押しつけようとしてましたね？」

「な、何を言ってるんだ!ばかばかしい・・・そもそも証拠があるのかね?証拠は!?」

「・・・・・ニコ（ゴキン）」

「イェ〝ァ〝ァ〝ァ

ら」

「複雑骨折の未来が見えるッ!!誰かー!!タスケテー!!」

しかし、現実はむなしい。
誰も来ない

「チキショーウ!!みんなが呼んだら俺はいくのに、俺が呼んだら来ないとはこれいかに!?」

「夏休みですからねぇ・・・・・こら逃げるな（バキョッ）」

「お、折れたァ!?今確実に折れた!?何この管理者!?暴君!?」

「違います。折ってないです。ちょっと関節を曲がらない方向に・・・・」

「それ折れないと無理だからね?それは折れてるって言うんだッテテテテテテテテ!!!!!」

「逃げませんか?」

「逃げない!!」

「よろしい」

パッ

「ふぅ～・・・・・」

「・・・・・」

「ゴキブリ！！！」

「ぎゃぁーーーーーーーーーー！！！！」

アリスが蒔風を解放した一瞬で、彼は何か黒いものを放り投げてその場から遁走した。

彼の投げたそれはおもちゃだが、そこはこれ、「ＥＡＲＴＨ」の技術を結集して作った超高性能なゴムゴキブリだ。

多分、精密すぎて本物よりグロい。

「ひぃっ、ひぃーーーー！！・・・・［（落ち着く）・・・玩具

か畜生！！！」

「ほかの管理者の力取り込んで性格やばくなってないかアリスさん！？」

――――――

風。

そしてその直後、壊れて開けっ放しの扉の向こうからカァッッ！！と光があふれ出て、直後に爆発。その煙の中からショットガンを肩に担いで、タスキのように弾を肩にかけるアリスが駆け出してきた。

「待てェ！！」

「いや待つわけが・・・・」

「ハチの巣にしてやるから止まって！！！」

「止まるかァ！！！！」

蒔風は駆けだす。

この長い長い逃走路を――――――――

――――――――

ーーー

と、その途中で蒔風が理樹を見つける。

「理樹バリアー！！」

「うわぁ！？（ガキキキキン！！）」

そして、とっさにバリアにして再び逃走。

この男、鬼畜である。

そのまま理樹を背中に担いで走り続ける蒔風
すると、背中の理樹が話しかけてきた。

「こ、これってどういう状況！？」

「書類から逃げた」

「あぁ～・・・・・・」

いやにあっさりとに納得する理樹。
どうやら心当たりがあるようで・・・・・・

『もうこんな書類嫌だぁ！！！』

『翼人二人なら逃げられる！！行くぞ、理樹！！』

『（テ～ッテレ～ッテ　テレレレ～ン！）地球破壊爆弾～♪』

「ってことが・・・・」

「音はキテレツなのに道具はドラかよ・・・・・・」

走りながら意気投合する理樹と蒔風。
だからといってまあ理樹がこの状況に納得するわけもなく・・・・

「降りる！！」

「わあまってくれ！！これじゃ俺がハチの巣に！！！」

ゲシッ、と理樹が蒔風の背中を蹴り飛ばし、一気に離脱しようとする。

だが蒔風だって逃がす気はない。

その理樹の足を掴んで引き留めようとし、しかし勢い余って二人ですっ転んでしまった。

「やばいやばい！？追い理樹早くどけこのままじゃ撃ち抜かれるぞ！？」

「キュ～・・・・」

「気絶しとるーーーーーーーー！？バリアは最硬のくせに本人が何という脆弱！！」

そんな風にごろごろしてしまっている二人のもとに、アリスの足（？）音が聞こえてくる。

廊下の曲がり角をズシャァッ！！と飛び出してきたのはまさしくアリス（四足歩行）

なぜかショットガンは放棄したようで、某初号機よろしく脚と腕をガニマタにして駆けてきていた。

「ヒィィィイイイイイイイイイい！？ちょ、ちょ！？ホラー映画みたいなの駄目なんだって俺！！理樹ィ！！起きてーーーーーーーーー！！！」

その動きに比類無き恐怖を感じる男、蒔風

死の恐怖を失った男は、こうした小さな恐怖に弱かったりする。

「だ、だれか・・・ダレカタスケテーーーー！！！」

「ショルイヲミロォォオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「いやぁーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

ゴン！！ガキィ！！！

「どうした！！大丈夫か！？」

「「ザ、ザッフィー！！」」

「出番が減ってってさびしいザッフィー！」

「ほとんど犬形態で「人型？なにそれ」みたいな感じになってるザッフィー！！」

「それでもなんだか最近出番があるような気がするザッフィー！！」

「お前らそれが助けてもらった人間の言葉か」

「「残念（そんな）な君を待っていた！！」」

ゲシッ×2

「ぬお！？（バガガガギン！！！）ウおおおおおおお！？」

「「大逃走！！」」

「おのれ翼人ンンンンンンンンン！！！」

二人の前に現れてくれて、アリスをいったん押しのけてくれたザフィーラに対してなんというもの言い。

しかもそのあと蹴り出して盾にするとか超鬼畜である。

抗議をしようとするザフィーラだが、アリスが再びショットガンをぶっ放してきたためにいやおうなしに防衛に回らねばならなくなった。

「ザフィーラさん！！あなたまでそちらにつくんですか！！！」

「この状況を見てよくそんなことが言えるな！！」

「「ザッフィーは巻き込まれただけだ！！」」

「お前らのせいだァァアアアアアああ！！！」

ドッパン！！！

二人の言葉にザフィーラが叫び返すと、そのザフィーラが吹っ飛ばされて二人の後方に消えた。

え?という顔をしてアリスの方を見直す二人。

そこには背中にポンプを背負い、消防車などについている消火用のホースを握るアリスがいた。

俗に言う圧水銃というものだ。
しかし、威力はその比ではなく・・・・・

「逃げる!!!」

「逃がしません!!!」

ダダッ!!と走り出す二人。追う一人。

そもそも威力がおかしい。

蒔風だって圧水の能力でイニシアチブを取ろうとしているのに、それがうまくできないほどの水圧。
理樹もバリアで防ごうとするものの、バリアはよくても理樹自身が押されてしまってアウト。

「ＥＡＲＴＨ」の廊下をゴリゴリ削りながらなので、その破片を飲み込んだ圧水銃はさっきの散弾以上の威力を発揮していた。

「やめろやめろ！！ビルが壊れる！！修繕費かかるぞコラァ！！」

「では威力を落として・・・・・」

「やめはしないのか・・・・」

「五十人は吹っ飛ばす方向で」

「うぉい！？今までのは何なんだよ！！」

「もはや切断系？」

「ウォーターカッターかよ！！！」

恐ろしい。

拳大の大きさの水流が、ウォーターカッター。

無事なのは翼人だからであろうか。

が、威力を落としたと言ってもまだ凶悪だ。

まともに当たれば昏倒は免れない。

「ってかハプニングあるたびに走ってねぇか俺!?」

「まずいよ・・・誰か来る!!」

走りながら、理樹が曲がり角の向こうから誰か来ると指摘してくる。

言われてみれば確かに、小さく足音が聞こえてきた。

その前を通過し、水流を弾く蒔風。

すると曲がろうとしていた乾巧と園田真理にバシャァ!!と水がかかった。

「ヒャッハー!!理樹!!」

「写真に収めたよ!!」

「濡れた少女の写真ゲッツ!!後でムッツリーニに売ろう」

こいつら、何をしているのか。

ちなみに蒔風は楽しんでいるだけで、理樹は最近猫の餌(モンペチ)を山買いさせられて金欠なのだ。

だが

「?・・・おォオ?!なんかめっちゃスゴイの来てる!なんか壁と

か天井走りながらめっちゃ追ってきてる！？」

「ファイズアクセルだァァアアアアアああ！！走れ理樹！！キレた巧は病んだ小毬より怖い！！」

「なんと！？」

「テメェらちょっと待てやゴラァ！！！」

びしょびしょにされ、さらには写真まで撮られた乾巧がめっちゃキレてた。

劇場版よろしく壁や天井を走り、迫るファイズ。

が

「気張れ理樹！！アクセルの加速は十秒が限界だ！！！」

「一秒が永久（とわ）に感じるね！！」

「いや、実際には１０００倍だから・・・・・」

「マジレスしてる暇があったら引っ張ってよ！！！（怒）」

そりゃそうだ、と蒔風が理樹の腕を掴んで加速開翼。
ファイズを振り切ったところで解除して息を整えた。

「なかなかにまずい状況だったな」

「そうだね・・・じゃ、僕はここで。写真(これ)をムッツリーニに売ってくるよ」

「気をつけろよ？」

「そっちもね」

そういって、別れる二人。

しかし、理樹がどこから部屋の扉の前を通ったところで・・・・・

ガシッ！！

「（頭掴まれて）・・・・え？」

《Ｅｘｃｅａｄ　Ｃｈａｒｇｅ》

グイッ！（引きずり込まれる音）

「あ！うわァァァ・・・・・・・・！！」

ギィーーーンΦ！！！

蒔風の背後の教室の窓から、紅い閃光が漏れ出てきた。

それだけで何が起こったのか、蒔風にはすべて理解でき・・・・

ただ、彼には涙をこぼすことしかできなかった。

「逝ったか・・・・（男泣き）」

「あなたもです」

ガシッ

「いやだぁーー！！遊ぶーー！！」

「今こうしている間にも何人かに手伝ってもらってんですよ！？早く終わらせなさい！遊ぶのはその後ですッ！！」

どうやら、彼の休みはまだ先のようだ。

しかし仕事をしているとどうにも別のことを考えてしまうようで、

いろいろといきたいところが決まってしまった。

蒔風は頑張る！！その夢に向かって走り続けるのだ！！！！

to be continued

逃・げ・ろ！！（後書き）

みなっさーーーん！！
第四章の始まりですよーーーーー！！！

私が日常を描くと大体みんな走ってる気がする。

逃走劇しか頭に浮かばないんや・・・・・

と、言うわけで次回もこういった感じで日常編を書きたいのですが・・・・

どこのを書こうか悩んでます。

候補は
・海
・山

・遊園地
・ビッグサイトのお祭り
・神社のお祭り

くらいですね。

・・・・・では緊急読者アンケート！！

どれがいいですか！？

まずは次回でどの場面が見たいか！？です。

で、その結果は活動報告で言います。
だいたい明日の夜（１１時くらい？）ですかね。

そしたら今度は「どのキャラでいきましょうか？」という投票にします。
変に多くなければ、一人最高で二人まで。

多い場合は何人か削るかもしれませんがよろしくお願いします。

とにかく登場キャラが決まらなくて困るｗｗｗ
何人かは決まってるけど、その他が決まらぬｗｗｗ

上記の五つの場所（他にアイデアがあったら受付ますよー）を、まず選んでください！！

そして、その後のキャラ投票で誰連れて行くかは決めていきます！！

次回がどうなるかは皆さんにかかってるのでーす！！（他力本願）

ちなみに今作中では夏です。
夏って言ったら夏ですｗｗｗｗｗ

ではまた次回で

海だー！！

「はーい！今日これから海行くけど行ける人、挙～手♪」

「「「「「はぁ？」」」」」

「ＥＡＲＴＨ」内食堂「ＡＧＩＴΩ」

そこでは数名の人間が昼食を取っていたのだが、そこでいきなり蒔風がこう言い出したのだ。

その場でその言葉を聞いたのは五人。

理樹が書類仕事で、それを手伝いに来た棗恭介

何となく暇だから遊びに来た涼宮ハルヒ

この食堂でバイト中の泉こなた

何やら書類関係でこっちに来ていたはやての付添、ヴィータとザフィーラ

この五人が、スプーンを掲げる蒔風に向かってそんな気の抜けた声を発していた。

「いやぁね？これで俺っち書類仕事終わったのよ♪だからさ～これから遊ばないか？」

その反応に、蒔風がそう答えた。
今まで書類仕事ですし詰め状態だったから、こうして外に遊びに行きたい気持ちはわからないでもない。

だが、あらかじめこういうことは通知しておくべきではないのか？

そうヴィータが言うと、蒔風曰く「こういうのはサプライズだからいい」だそうだ。

「サプライズはいいけどよー、今からじゃ何の準備もしてないぜ？」

「うむ・・・海を楽しむには少し時間がないのでは？」

確かに、今はちょうど昼・・・よりも少し早い時間だ。
今から準備、出発、到着では、遊ぶ時間はあまりないだろう。

だが、この男はそれを可能にする。

「大丈夫!全員分の水着などはこちらに用意しております!!」

「「「「「なんで!?」」」」」

「・・・・なんでだろ?」

疑問に感じる五人、そして蒔風本人。
お前が分からないというのはおかしいだろう。

「・・・・なんであるんだろ?」

疑問で疑問を返すなと習わなかったらしいこの主人公は、胸に「泉」と書かれたスクール水着をひらひらさせていたがために貧乳ステータスの少女に見事な合気をくらって投げ飛ばされた。

「ななな、なに持ってんのーーーー！！？」

「見事だぜ・・・お前が貧乳じゃなかったらきっとおれは胸に邪魔されて投げられてはいなかった「うっさい！！」ぐぇぶ！」

自分の水着を抱えるこなたと、投げ飛ばされてさかさまに転がる蒔風。

直後に踏まれながらも、この男はなかなかにタフネスだった。

「と、言うわけでこれから海行くぞ！！一緒に行きたい子ら連れて、十分後に集合！！」

そう勝手に決めて、食器をカウンターに返す蒔風。

「事件は唐突に」というが、こういう唐突は本当に厄介である。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――――――――

では、ダイジェストでお送りしよう！！

「集合したな！！」

「おおー！」

「出発！！」

「おォオオオオオ！！！」

「到着！！」

「ウォォオオオオオオ！！海だァァァアアアアア！！！！」

『『『だからなんで!!??』』』

いま、彼らは海岸にいる。
来たメンバーはあの場にいたのと＋αだ。

まずは理樹、恭介、真人、鈴、小毬、来ヶ谷
ＳＯＳ団の五人は全員で、こなたはかがみとつかさ、あとは従妹のゆたか、その友達のみなみと来ている。

それに八神家の全員に、騒ぎを聞いて「行こう行こう」と騒ぎ出した城戸真司と剣崎一真、名護慶介に引きずられて渡も来ている。７５３は３１５です。

「ダイジェスト・・・書物などの内容を、わかりやすく要約すｒ・・・」

「そういうこと言ってんじゃない。なんでこうもとんとん拍子!?」

「何を言ってるんだ?普通にバスのって普通に来たじゃんか」

「う・・・」

明らかに間が省かれすぎな現状に、キョンがメタな感じに突っ込んでいた。
他のメンバーは何となく叫んだ後、海に向かって走って行ってしまっている。

そこ、準備体操しなさい。筋肉さんがこむらがえっても知らないぞ。

「まあいーじゃんか！さ、行くぞーーー！！！（ダダダダダダダダッ！！）」

「くぉら！！お前ら準備体操しろぉーーー！！！！」

ーーー

「あ、あのぅ、わたしは～・・・？」

「みくるちゃんは一番下で埋まってもらうわ！！」

「ふぇえ～！？」

「あ、あのはじめまして！おねーちゃ、じゃなくて泉こなたさんの従妹の小早川ゆたかです！」

「ゆたかの友達の岩崎みなみです」

「ん！どうもはじめまして蒔風舜だよ！話に聞いてるよ。ちっちゃくてかわいいね～、大丈夫？」

「えっと・・・？」

「ほら、ちっちゃい女の子がいると・・・・」

「合法ロリだから大丈夫ですもん！！」

「ちょ、どこでそんな言葉！？みなみさんめっちゃ睨むのやめてくれません！？周りの視線もいたいからやめて！！弁明のチャンスを！！」

じ～～～～

「っしゃぁ！！蓮のやつ「お前だけで行け」とか強情言っちゃってこないんだもんなー」

「気にすんなよ。始だってそんなもんだったさ。ビーチバレーやろーぜ！！あっちでもうやってるし！！」

「ほら！！そこでレシーブ！！アタック！！今だ！変身しなさい！！ラ・イ・ジ・ン・グ！！」

「ライジングはできませんよ！？」

「なぁ・・・」

「なーに？」

「あれすげーよなぁ・・・」

シグナム（ボイーン）
来ケ谷（ボイーン）
リィンフォース（ボイーン）
みくる（ボイーン）

「あっちもすごいですぅ・・・」

はやて（ポイン）
シャマル（ポイン）
ハルヒ（ポイン）

「なんてことはないよ、ヴィータちゃん！リィンちゃん！！」

「え？」

「貧乳はステータスだ！希少価値だ！！ってね！！」

「・・・おぉ！！」

「それにほら、好きな人ができても、その人が巨乳好きだったら私たちはどうにかできるけど、あっちはもうどうにもできないし」

「す、好きな人ですか！？」

「でもなんかその見返し方はしたくねぇ・・・」

「ってか姐御たちは何胸見て涙ぐんでんだ？」

「アギトは貧乳（それ）でいいのですか！？」

「いや、だってあたし融合機だからあんまそんな・・・」

「女じゃねぇ・・・」

「その言い方傷つく！！」

「小毬ちゃん！！あっちいこう！！」

「おっけ～・・・ふわぁ！！」

「（コソコソ）鈴の成長日記！！（パシャ！）」

「何してんのさ」

「（びくっ）・・・理樹、この写真は違うんだ。兄が妹をめでるのは当然で――――――」

「こけた小毬さんのお尻撮っといて何言ってんだあんた！？」

「二人ともなに言っとんじゃボケェ！！！」

「「げフゥ！！！」」

みな、それぞれで楽しんでいる。よきかなよきかな

ーーー

「ドラゴンライダースマッシュ！！」

「ウェーイ！！」

ドッ！！バサァっ！！

「渡・真司コンビ、一点！！」

「すんません！！」

「なに、ここからだ・・・名護慶介の本気をここに表さん！！」

７５３は３１５です！

「オイそっちの大人組！！バレーの俺に砂全部かかってんぞ！！」

「キョンうっさい！！」

「バッ！？やめろハルヒ！！落ち着くんだそれを置け。ナマコやワカメはともかくとして、フナムシだけはダ、ギャァァアァアアアアア！！！」

「うへへへへへ、美少女達！」

「こっちもうまく撮れたで・・これは永久保存版や！！」

「主はやて・・・・・！！！」

「落ち着けシグナム！！あのはやてを見たくないのはわかるが、男泣きしながら斬りかかろうとするな！！」

「とりあえずレバンティンは置いて！！余計に暑いから！！」

ーーー

「はーい注もーく！！これから「チキチキ！水泳勝負」を行いたいと思います！！」

「「「イエーーー！！！」」」

海に来たことで全員のテンションも上がっているようでノリがいい。

それに満足しながら、蒔風が沖の方にある岩を指さしてルールを言う。

「二チームに分かれてレースをします！！一人一往復！！負けた方には海の家で飯おごりな！」

昼食を食ってから来たというのにまだ食うのか。

と、言っても結構遊んだから腹は減っているのだが。

片道五十メートルはありそうな場所に、岩がポツンとある。

そこまで泳いでいって戻り、それをこなしていって早く終わった

方が勝ち、ということらしい。

ちなみに無理だった場合は並走している小舟から変わりが出ることになるが、「必ず全員は泳ぐこと」「変わった人の泳ぐ距離は変わった分プラスになる」ということになるそうだ。

つまり片道だけ行ったところで交代になったら、変わった人間はそのまま１５０一気に泳ぐことになるということである。

チームは以下のとおり

第一チーム
・理樹
・キョン
・ザフィーラ
・一真
・名護
・鈴
・長門
・こなた
・かがみ
・つかさ
・ゆたか
・みなみ
・ヴィータ

第二チーム
・恭介
・真人
・古泉
・真司
・渡
・小毬
・来ケ谷
・ハルヒ
・みくる
・はやて
・シグナム
・シャマル
・リィンフォース

である。

「ちなみに順番は出来るだけ男女交互なー？じゃ、オレ審判」

「小舟係はリィンと」「アギトでやってくぜ！！」

と、言うわけで各チーム順番を決めて第一走者がビーチに立つ。

第一走者はヴィータと一真

ちなみに第二が真司、シグナム
第三・こなた、はやて
第四・ザフィーラ、ハルヒ
第五・長門、みくる
第六・キョン、名護
第七・みなみ、真人
第八・ゆたか、小毬
第九・かがみ、シャマル
第十・渡、リィンフォース
第十一・つかさ、古泉
第十二・鈴、恭介
第十三・理樹、来ヶ谷

である。

「位置について！！よーーーい！！！」

ッドン！！！！

蒔風の掛け声の後に、アギトが撃ち上げた火球がこれでもかと爆音を響かせてスタートを合図した。

それに応じて海に飛び込むヴィータと一真。
どちらも最初こそは拮抗するものの、やはりタッパの違いで徐々にヴィータが引き離されていく。

ヴィータが折り返すころにはすでに剣崎は十メートルほど先の地点を泳いでいた。

だから

「アイゼン！！」

《！！》

ヴィータが愛機・グラーフアイゼンを構え水中で一気にロケット噴射、剣崎にすっ飛んで行ったのは間違っていない判断だ。
ルールとしてはおかしい気がするが。

「チョおォォおおい！？」

「審判！！あれはいいんですか！？」

「ひきょい！！ひきょいよ！！」

「面白いから採用」

「審判ーーーー！！！！おい誰かあの誇らしげな顔しているバカを審判台から引きずりおろせ！！」

が、残念！！降ろせない！！

「ワシャ辞めん！！ここから降りんぞ！！」

「う～わこいつめんどくせぇ！！」

文句をぶーたれる第二チームだが、審判がこういってはしょうがない。

それに相手がそれなら、剣崎も考えがあった。

「えっと・・・ブレイラウザーだしてっと・・・」

《サンダー》

ピピピピピピ！！

バチィッ！！！

「このまま一気に行k、アビッ！？」

剣崎がブレイラウザーを（変身もしないでどうしてかは知らないが）取りだし、「サンダー」のカードをラウズしていた。

その瞬間海中を電流が走り、ロケットで爆進するヴィータの四肢がピーン！！と伸びて、ぐったりと海面に浮く。

「「「「「ウをォォォおおい！！？？」」」」」

「よくやった剣崎！！」

「ナイスプレーやで！！」

「あんたら身内じゃねェの！？」

何はともあれ、ヴィータが回収されている間に剣崎はその差を縮め、追い付くころに真司が代走し始めていた。

並ぶ剣崎と真司。

と、浜辺について剣崎はシグナムと交代、真司はそのままターンして泳ぎ始めていた。

真司とシグナムは実力こそ近いが、もともと真司はただのジャーナリストだった男だ。基本的な身体能力ではシグナムに及ばないところがある。

それでも何とか食いさがり、距離を三メートル以内に抑えつつゴールしてバトンタッチする。

そして次にこなたとはやてだ。

ここで一気にこなたが追い上げを見せ、はやてに追いつき、追い抜いて行った。

「やっぱこなたの方が運動神経いいからなぁ」

「はやてちゃん、体力とかはからきしですからねェ」

「それにほら、あっちのチームは邪魔になるものがない」

「邪魔になるもの？」

「胸」

直後、蒔風がブッ飛ばされた。

そんなこんなでレースは続く。

追い越し追い抜き、結果は同着。

考えるのも面倒なので、すっ飛ばした蒔風の財布から飯代は出て行

った。

ーーー

と、いきなり足もとに穴が開いた。
いきなりの超展開である。置いてけぼりなのは読者だけではあるまい。

「!?!?!?」

そしてそのままドタッ!とそこに落ちる蒔風。
尻から落ちて行ったためにかなり痛い。

少し涙目になりながら蒔風が「なんだよもー!!」と叫ぶと、その穴の上に人影が現れた。

「大丈夫ですか?さあ!これにつかまって!!引っ張り上げてあげますよ!」

その二人が手を差し伸べてくれたので、蒔風がそれを掴んで穴の上に顔を出すと・・・・

「・・・・明久」

「・・・・えっと・・・・・舜？」

そこにいたのは吉井明久その人である。

少し離れたところには坂本雄二が転がっている。

背中の跡からして、明久にドロップキックを食らったのだろう。

「・・・・何してんだ？」

「えっと・・・吊り橋効果？」

「落・ち・ろ！！」

「う、うわぁぁぁアアアアアア！！！」

その後、二人を捜しに秀吉がやってきて、蒔風とあいさつをして事情を聴いた。

どうやら彼らもいつものメンバーでこの海に遊びに来ていたようで、明久と雄二は姫路たちに「ナンパする度胸はない」と言われてしまったらしい。

「なるほど。それで男の意地にかけてナンパしようとして・・・・」

「どうやら女子を危機的状況に追い込んで、助け出してそのまま・・・とでも思ったらしいのぅ」

ちなみにその二人は今、首だけを出した状態で砂浜に埋まっている。縦に。

まだ気絶しているが、今しがた姫路たちに連絡したので引き取ってもらえるだろう。

と、その前に

「（ボソリ）おっぱい」

「「どこにおっぱいが！？」」

蒔風のその一言で、気絶していた二人が目を覚ます。
バカしかここにはいなかった。

「嘘だよ。じゃ、せいぜい楽しめ」

「え？あ！舜！！騙すなんてひどいよ！！」

「あの野郎・・・男の深層心理に働かせてきやがったな！！」

蒔風のやり方に無駄な憤りを感じる二人だが、その背後に脅威が迫っていることなど考えてもいなかった。

「ア～キ～？（怒）」

「明久くぅん？（怒）」

「雄二。いま誰のこと考えてた？」

「そ、それはだな（ガシッ！？）返答も聞かずにアイアンクローはないんじゃないか！？」

後ろに振り向くこともできず、二人はしっかりゆっくり処刑（おしおき）されていった。

ーーー

「あ！！見つけたぜ！！」

「マジか！！」

「ああ！この人が持っててくれたよ！！」

「お前か・・・このボールを飛ばして来やがったのは・・・」

「！？」

「俺をイライラさせるとはな・・・」

「浅倉！？」

「ん？知り合い？」

そう言って一真が真司に聞くが、とうの真司は口をパクパクさせてしまっている。

と、そこで浅倉が真司に指を向け、こういった。

「・・・・馬鹿か？」

「みんな馬鹿バカって俺のことォーーー！！！（ブワッ！！）」

「え？真司？真司ーーーーー！？」

「オイお前・・・悪いと思うなら・・・・俺に喰いもんでも買ってこい」

「え？えっと・・・・？」

「あそこの・・・・焼きそばなんかでも何でもいい。早くしろ・・・腹が減ってイライラしてるんだ・・・・」

「わ、わかった！（な、なんだこいつ・・・言いようもない雰囲気を発してるぜ・・・）」

五分後

「はいよ」

「・・・・・・なんだこれは」

「何って・・・・・・焼きサバ」

「鯖じゃねぇ！！」

「えぇ！？」

「俺が頼んだのは焼きそばだ・・・焼いた！そばだ！！鯖じゃぁねぇ！！！お前・・・俺をよっぽどイライラさせたいらしいな・・・」

「ちょ、だってお前が焼きサバって」

「焼きそばだよォ！！！！！」

グワシッ

そう言って浅倉が一真の頭部を掴み、ブンッ！！という追いよく、それはもうとてもとても勢いよく投げ放ちました。

きれいな放物線を描いて飛んで行った一真は、頭から砂浜に落下、ビィ～ン、という感じに突き刺さってからグタッ、と倒れた。

「おい！！大丈夫か！？」

「あいつ・・・・誰なん・・・だ（ガクッ）」

「ケンジャキーーーーー―！！！！！！ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「真司さんあなた何気に楽しんでますよね？」

そのころ名護は

「くっ・・・そのボタンをよこしなさい・・・！！」

「なんだテメェは・・・・」

「そのボタンは俺のものだーーーーー！！！！」

何やら浅倉とボタンの取り合いをしていた。

ここに、因縁の戦いが幕を上げるのである。

――――――

「木？まあそこは・・・・ロウソクで？」

「何それしょぼい」

「千本ぐらい集めてきたから・・・・」

ゴォォォオオオオオオオオ！！！

「ロウソクとは思えない火力！！」

千本集めたというロウソクにはすでに火が灯されており、一メートル以上の高さにまで火は高く立ち上っている。

集まると火は大きくなるが、ここまで大きくなるとさすがに怖い。

「ちょっと！？洒落じゃない火力になってるわよ！？」

「木がないんだからしょうがないね。ああそうさ、それならしょうがない」

「蒔風、お前木とか出せるんじゃねェの！？」

「あ、そうだ」

真司に指摘され、そうだったと思い蒔風がそこら辺の土に手を当てて、圧水と雷旺の力を使って木々を急速成長、一気に切り倒して・・・・

「そぉい！！」

全部一気にくべた。

しかも燃えが悪いとか言ってポリタンクに入った油（１０リットル）を一気にぶちまけるという所業。

ほかのメンバーは蒔風がそれを手にした瞬間にその場からダッシュ逃走。

だって目からハイライト消えてるんだもん。そりゃ逃げるわ。

そして

ドォンッッ！！！

「うぎゃぁぁアアアアアアああアアアアアア！！！！」

とんでもない爆発音と、蒔風の断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

周囲に油が飛び散り、それも燃えているために被害拡大。
各々のメンバーがちまちま消火しているがいかんせん大本の火が大きすぎる。

ノリがわかってるメンバーは／（ＴДＴ）無茶しやがって・・・・・と涙し、まだまともな神経を持っていたメンバーは土をかぶせ消火しようと必死だった。

「ちょ、お前ら敬礼してないでこっち消せって！！シャレじゃない火力だぞ！？」

「♪燃～えろよ燃えろ～よ～」

「やめなさい！！歌うのをやめなさい！！」

そういってギャーギャーと楽しんで（？）いると、炎の中から人影がゆらりと出てきた。

おそらくは蒔風である。

そこで一回ぶん殴ってからこの炎をどうにかしてもらおうと近づき・・・

「ぎゃぁぁアアアアアア！！」

そのシルエットを見て悲鳴が上がる。

なぜならそのシルエットには、首から上が存在していなかったからだ。

「「「「ま、マミったぁぁあぁぁあああああ！！！！」」」」

実際には顔が焼けるのを防ぐために頭を服の中に入れただけなのだ

が、まあこの炎の中じゃわかるはずもなかろう。

数分後にアフロ頭で現れた蒔風に一通りのライダーキックをぶちかまし、みんなで消火して程よい火量でキャンプファイヤーをした。

一同は誓う。

この男に、二度と火遊びはさせまい、と

「ＥＡＲＴＨ」に変えることには完全に夜となっており、各々「ＥＡＲＴＨ」の扉（各家につながってます。さすがはアリスさんです）をくぐって帰っていく。

それから蒔風は髪形が直るまでの間「爆熱アフロさん」と呼ばれ続けていたそうな。

「ニューファンションだろ？」

堪えてはいないようだったが

ーーー

「検体Y、目標「鉄槌」「インターフェイス」を撃破。所要時間５３秒」

「ふむ・・・・・上々だな。調節を済ませ次第に次の相手をぶつけろ。次は？」

「・・・・・検体「漆黒」です」

モニターの向こうで、一人の青年が地面に倒れるクリスタルのようなもので出来た何かを、漠然とした目で見ている。

そのクリスタルからは赤い液体がどろりと流れ、それが青年に撥ねた返り血（？）から砕けた身体、すべてがスゥッ、と消えていった。

《第２００４番実験、開始します。目標レベル、＝（イコール）》

その実験場の扉が開き、そこから先ほどと同じようなクリスタルの人影が出てきた。

違うのはその人影が、我々の知る「漆黒の翼」のものと同じという

こと。

ただ、全身がクリスタルでできているだけだ。

そして、その二分後にはそのクリスタルは粉々に砕かれた。

また次の実験が始まる

to be continued

海だー！！（後書き）

どうも！！
時間がかかって上になんかこんな四コマみたいなノリになってすみません！！！

しかも何人か出せてないし・・・・・

グダグダになってしょうがないです。
もし面白いと思っていただけたらありがたいです。

面白くなかったら・・・・
とりあえず悪い点に「△」って付けといてくださいｗｗｗｗｗ

さて・・・次回は「神社の祭り」にしときましょう！！

絡ませたいキャラ、見てみたいシチュエーションなどあったら感想にどうぞ！！

ちなみに最後の話の「クリスタル」って言うのは、イメージとして「ディシディアファイナルファンタジー」のイミテーションみたいな感じですね。

あの実験とはなんなのか・・・・

わー、一体誰なんだーーー（棒）

多分わかってしまう人は解ります。
ある読者様とかなり前（第一章の時だったか？）に決めたキャラですのでｗｗｗ

・・・誰なんだ――――？

ちょっと感想読み直してきますｗｗｗｗｗ

ではまた次回

みなさん！！次回はがんばって速く書きます！！！
今回はホント時間かかってすんませんでした！！！

レッツフィスティボー！！

雛見沢村、古手神社、境内

そこには今夜、実に多くの夜店が並び出ており、その場にいる全員が浮足立っている。

そう、今夜は縁日。ようはお祭りの日だ。

「全員浴衣着たー？」

『はーい！』

「お金持ったー？」

『はーい！』

「じゃ、行きましょう！」

ここは雛見沢一の名家、園崎家の広間。

そこで数名の女性が、浴衣の着付けを行っていた。

クド、美魚、魅音、詩音とが着付けを見て回り、ほかのメンバーがやってもらってるという形だ。

この場に来ているのはまず年長者の光夏海

クド、美魚、葉留佳、そして葉留佳が誘った佳奈多

大和が行くということでついてきた川神百代、一子

それに祭り好きの星に、一刀についてきた愛紗、華琳、蓮華

後はティアナ、スバル、キャロとルーテシア

最後に当然ながら、雛見沢部活メンバー女子陣だ。

ちなみに梨花、羽入、沙都子はすでに境内でお神酒を配っている。

巫女服で。

そう、巫女服で。

大事なことなので二回言いました。

羽入もいつものではなく普通の巫女服で。

三回目いただきました。

「ふぅ～、こんなもんかねぇ」

「おお」

「すごいね～。私たちより年下なのにね！！」

皆のを見て回り、最終的な手直しをしていた魅音が汗を拭う仕草をして一息つき、見事な着付けに百代と一子が感心していた。

まあこの中では一番和服だとかに精通しているし、魅音に頼るのもわかる気がするのだが、この二人は武道ばっかじゃなくてもっと女子力を磨くべきだ。

「わふ～、魅音さんさすがですッ！」

「本物を見させてもらいました」

「ふむ・・・これが麻？とかいう生地なのね？」

「ご主人様の文化はこう何か・・・一つ一つに芸術を感じます」

そんなこんなで、冒頭での夏海の言葉に戻る。

男性陣は前原邸で浴衣に着替えているので、神社の階段下で合流することにしているのだ。

ーーー

と、言うわけで男性陣側の前原邸である。

いるのはまず蒔風、理樹、真人だ。

恭介は海での盗撮が原因で理樹の書類を押し付けられていて、謙吾は剣道の大会が重なってしまった。

謙吾は「大会などどうなっても構わん！！」とかいって屋上からバンジージャンプなど無謀な遊びを幾度も敢行していたらしい

♪高く飛べ～高く空へ～

だがしかし、なんということか
神は言っている。ここで死ぬべきではないと。

謙吾はなぜか擦り傷程度で済み、普通に大会に出れてしまったのだ。
理樹の必死の説得で何とか大会には出てもらえたそうだが・・・・

余談だが、謙吾は天下無双を起こして圧倒的優勝を飾った。

・・・・・憂さ晴らしでないことを祈る。

あと、直枝大和、北郷一刀というハーレム野郎。
話を出した時には今こっちに来ている人間しかいなく、それ以上連れて行こうともしたのだが

「お祭りでの食費」

という一言でそこから話を広げることはなかった。
おそらく全員連れて来たら雛見沢の食材は消え去るだろう。

無論、彼らの懐の中身もだ。
一人につき「さらば諭吉」×１５くらいは行けるかもしれない。

それと圭一、悟史、エリオ、以前来たときは祭りどころではなくなってしまっていた士、海東、ユウスケだ。

しかし・・・・・

「これどう着ればいいんだ・・・・？」

非常に残念なことにこっち側に浴衣の着方を熟知した人間はいなかった。

だから「俺に苦手なものはない」という士と海東のかじった程度の知識をもとに、全員で頑張って着てみたのだ。

真人はめんどくさいだとかで甚平（じんべい）にしているが。

「野郎の着付けして何が楽しいのか・・・・・」

「俺だって野郎にしてもらってもうれしかねぇよ！！！」

「うひょーー！！まっつっり！！まっつっり！！」

「「・・・・・・」」

「いや、あのバカは別だろ・・・・」

「アホって言って！！」

「聞こえてた！？」

そんなこんなでこちらも終了。

家を出て、神社に向かう。

――――――

まあ、男性陣の手間取りを知らないので、こうも気楽に言えるのだが。

そうして待っているとほどなくして男性陣が到着。

「悟史君!!なんで私柄の浴衣着てくれないんですか!?」

「詩音の顔がプリントされた浴衣なんて着れないって!!」

そんな言い合いも流し、さて行こうということで階段を上り始めた。

「俺たちはのぼり始める。この長い長い階段を・・・・・」

「人生はじまりそうだな、それ」

ーーー

少し上

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ご主人様？大丈夫ですか？」

「・・・いやいや大丈夫。はは、ちょっと甘く見てたねこりゃ。すこし・・・本気出すとしますかね・・・・」

「姉さん・・・・助けて・・・・」

「大和ぉ、お前体力無いなぁ」

「もう八往復してる姉さんと一緒にしないで・・・・」

もう少し上

「ご、ご主人様？」

「い、いや！大丈夫！ほら！！最近あれじゃん！あれだったからさ！！そうだよそうそう、だからだよ！」

「わふ～、楽ちんです～」

「筋肉さんが役に立ったぜ」

「でも私にクドさんに美魚さん、華琳さんを乗っけて大丈夫なんですか？」

「キャロ、こういう時は利用できるものは利用するものよ」

「華琳さんは早々にめんどくさいって言ってましたもんね・・・」

また少し上

「ほ、ほら！！蚊に刺されたから！！蚊のせいだから！！だから疲れてんだよ！！きっと貧血だな、うん！！」

「二十三往復目ーーーー！！！！」

「運んでくれるのはいいけど姉さんそのまま何往復もしないで振動が・・・・・！！うぷっ」

「な、なんでこんなに段数があるんでしょうか・・・・・？」

「も、もうだめだ・・・・（バタリ）」

「ユウスケ！？」

「い、一体何が・・・起きて・・・・・」

そしてついにユウスケが倒れる。

ここまでくればもう分る。
この階段おかしい。

と、そこで隣を歩く蒔風がペロリと舌を出して謝ってきた。

「あ、やべぇ幻術やりすぎちった（ペペロペロ☆）」

「「「「蒔風テメェ！！」」」」

「笑いのツボッッ！！！」

「ふげっ！？・・・・くっくっくっく・・・っはっはっは、あーーー！！！っはっはっはっはっはっは！！！ふふふ、うふふふふふふふふふふふ！！！あはははははははははははははははは！！！アハハハハハハハ！！！！」

「るっさい！！（ドカッ！！）」

「あっはっは～！？（訳：すんませんッ）」

笑いのツボを刺され、それでも苦しむことなく笑い続ける男、蒔風。

背中から蹴り落とされ、階段下に放り込まれたのは言うまでもない。

――

雛見沢にはお祭りというと有名なのが六月にある「綿流し祭」のことを指すが、当然のように夏祭りもこうしてある。

今回来たのは後者の方で、やはりいくつもの出店でにぎわっていた。

「じゃあこっから自由行動な？二時間後くらいに花火やるから、もっかい集まってなー」

「うーーい」

頭や腕を星に包帯で巻いてもらいながら、蒔風がキリッ、と言う。
そして、彼らがそれぞれ見たい方へと向かって歩いていった。

「じゃあ舜、我々も行きましょうか？」

「そう言いながら祭具殿の方へ行くなアホゥ」

雛見沢には禁忌がいっぱいだ。

ーーー

「ティア！！リンゴ飴！！」

「はいはい」

「ティア！！綿菓子！！」

「そうね、おいしいわね」

「ティア！！チョコバナナ！！」

「面白くておいしいのがたくさんあるわね。でもね？スバル」

「んにー？」

「次のモノ買う時はとりあえず両手の物を消費してからにしなさいね」

「わかってるよティア～ｗｗｗｗ私もさすがにそこまで馬鹿じゃないよｗｗｗｗ」

「そうよね」

「あ！！おじさん焼きそば一つ！！」

「わかってなーーーい！！」

「あ、ごめん！！おじさん！！ティアの分もネ☆」

「そうじゃなーーーーーい！！」

――――――

ーーー

「いやぁ、最近翔太郎への依頼もめっきり減ってしまってね」

「お金がないんですか・・・」

「そ、だから僕ら二人でこうしてたこ焼き屋をしているのさ」

と、言うことらしい。
ちなみに亜希子は照井と旅行に行ってしまっているようだ。

「ちっくしょーーー！！こうなったらハードボイルドに焼いてやる！！」

「ハードなのはいいが焦がさないでくれたまえよ？翔太郎」

そう言いながら二人にたこ焼きを渡すフィリップ。
値段は一舟５００円と少し高い気がするが、確かにうまい。

「当然さ。僕が検索してアキちゃんが手ほどきをしたんだ。まったく、翔太郎はこういうのは何気に得意なんだよね」

「・・・・・探偵さん・・・なんですよね？」

「キャロ・ル・ルシエ。時に純粋な疑問は人を傷つけてしまう物だよ？」

「俺は探偵なんだーーーーー！！！（ブワッ！！）くぅぅ、おやっさんごめんなさい。あなたの弟子はこんなとこでこんなことして食い扶持稼いでます・・・・」

「（にぱー）こんなとこでとは言ってくれますね翔太郎★」

「！？」

「頼み込んでくるから私のつてで夜店を出させてやったのをお忘れかしら？クスクスクス・・・・・」

「申し訳ございません梨花さん！！！（土下座）」

「そうね・・・・ボクはたこ焼きが食べたいのです」

「え、ごひゃ「（ズイッ）食べたいのです」どうぞお持ち帰りください！！！（涙）」

「・・・・翔太郎さん、もう三舟ください」

（パァァァアアア！！！）

「翔太郎さんが光ってる・・・」

「よっぽど優しさが身に染みたんだね・・・・・」

ーーー

「！？」

「筋・肉！！！」

ブンッッ！！！！（振り下ろす）

スッパァン！！！！

「よっしゃぁ！！」

「はぁぁぁぁぁあああああ！？」

そのコルク一発で標的が吹っ飛んだ。
腕をふるう遠心力のみでここまでやるとは恐ろしい筋肉だ。

標的だったのは「大当たり」と書かれた空き缶で、中には釣り具に使うような重しがゴロゴロと入っていた。

卑怯だぞおっちゃん

「アガーーーーー」

そのおっちゃんは（　。Д　。）な顔をしてポカーンとしていた。

「なあ、これ何でも持っててっていいんだよな？」

「ルールだとそうですネ！」

「井ノ原さんさすがですっ！」

「じゃあこのゲーム機もらってくぜ！！」

「あうあーーーー！！！」

「おっちゃん！！あと八発あるぜ！！」

「オマイガーーーーーーーー！！！！」

ーーー

「お宝なら僕の出番だＮＥ☆！！！！！」

と超大声で騒いで雄介と士にド突かれ、笑いのツボで絶賛抱腹絶倒中の海東である。

ちなみにその海東を士はバシャバシャカメラに収めており「将来国語辞書に載せる」とか言っていた。
こいつならやりかねん。

抱腹絶倒之図
←
写真

みたいな

一回百円というので、それぞれ三回ずつ挑戦してみるということでオッチャンに金額を払う。

まず一人目、一子が三つ選んで一気に引いた。
せっかちというかなんというか・・・・あまりの即断におっちゃんも唖然だ。

が、とりあえず何かは引いたらしくその景品を受け取る。

「辞書だったよぅ・・・・」

「あっはっは!!ベンキョーしろってことなんじゃねぇの?見せてみ?何語辞書?」

「グロンギ語辞書」「オンドゥル語辞書」「グディーン・ヅゥー!」

ポン、と一子の肩を皆の手が同情の意味を持って叩かれた。

というか最後のは違うだろ。
超電子!?超電子なのか!?このエゲ声め!!wwww

「じゃ、じゃあ次は私ね・・・・」

一子の引いた景品を見ながらも、いまさら後には引けない蓮華が両手をグッ、と握って気合を込める。

そして、一本を選んでまず引いた。出てきたのは・・・・・

「んにゃぁ？」

猫だった。しかもただの猫じゃない。

こう・・・型月シリーズを引っ掻き回す感じの、どっかの真祖に似た感じの猫だ。

「ニャニャ！！次元の穴をくぐってネコアルｋ」

「帰りなさい（ポイッ）」

なんだか自己紹介でも始めようとしたそいつを、一刀がひっつかんで次元の穴に落とした。

世界が一つになっているなら多分アイツはこの世界の住人なんだろうが、もうこの方法でいいと思う。

「か、一刀・・・・・せっかく引いたのに・・・」

「蓮華、あれはだめだ。なんだかそんな気がするんだ・・・・・ごめんな？」

「え？あ、うん、いいわ。まだあと二回あるものね！！」

蓮華、いい子である。実にいい子である。

そしてもう一度引く蓮華。
出てきた景品は・・・・・

「プハァ～！やっと出れたよ～」

鳥だった。しかもただの鳥ではない。
見た目からして思いっきりメカニックだし、何より言葉をしゃべる。

まるでどこぞかの宇宙海賊の舟で大いなる力の手掛かりを言ってるような鳥である。

きっと中身は梨花ちゃんと同じ人だ。

「レッツ！お宝ナビゲーｔ」

「ゴーカイ返却！！」

すると、また一刀がそれをひっつかんで次元の穴に放り込む。
多分これで帰れるだろう。

「一刀・・・・・」

「ごめん蓮華！！あれは・・・・まだ完結してないから作者もいじりにくいんだ！！」

「一刀が何を言ってるかわからないけど、メタいということは解ったわ」

蓮華さん、あなたよくわかってるでしょう。

と、言うわけで蓮華はこうしてせっかくの景品を二回連続で失ってしまった。
もう次しかない。

深呼吸し、目を閉じ選び、掴み取った一本のひもを勢いよく引き上

げる！！

「私は呉の国王だ・・・・自らの運命は！！自ら切り開くっ！！」

グイッ！！！

そして、現れたのは！！！

ゴトン！！（岩の棺桶が地面に落ちる音）

「「何事だーーー！？」」

ギギギ・・・・（棺桶、開く）

「もっと僕を笑顔にしてよ・・・・」

「ウををオオオオオオオオオオオオ！！！？？」

ドカッ！！バタン！！！

そこの言葉聞くやいなや、士が棺桶の扉を蹴り締めて中から出てこようとした少年（？）を閉じ込めた。

よく見るとその棺桶には模様のように文字が刻まれており、何やら厳重に封印されているもののようだった。

「ダグバだった！！いまの絶対ダグバだった！！！」

『アハハハハハハ！！！（ガタガタガタ）』

棺桶の扉を背中で押さえながら叫ぶ士、棺桶の中から聞こえてくる笑い声。

「士！！それを絶対に開くな！！」

「わかってる！だからそのディエンドライバーをこっちに向けんな海東！！」

「え？俺ごとやれって？流石は士！！ライダーの鏡だね！！」

「海東てめぇえええええええええ！！！」

そんな漫才をしている間にも棺桶は大きく揺れ、ついに扉が開いて士が前に突き出される。

士は海東に突っ込んでいって二人は転び、棺桶の中から飛び出していったものは真っ直ぐユウスケの元へと走り・・・！！！

「もっとボクを笑顔にしてよ」

なんだかそんなことを言ってきた。
いや、こいつが言うとこの言葉は恐怖にしかならないのだが、何かが違う。

「えっと・・・・？」

「もっとボクを笑顔にしてよ」

いうなれば「僕」が「ボク」になってた。
なんだろう、それだけでかなりかわいい。
あと、姿も変わっていた。

形態はあの究極の闇「ン・ダグバ・ゼダ」なのだが、大きさがひざ下くらいしかない。
後いうなれば「ちびキャラ」になってる。

そんなダグバがユウスケの脛のところをヒシッ、と掴んで「笑顔ー」とか言ってる。

なにこれかわいい。

呆気にとられるユウスケが手に持ってたリンゴ飴をなんとなしにダグバに与ええると、それを受け取ってカリカリと食べ始めた。
流石はクワガタ怪人である。

そしてかわええ。

「おっもちかえりぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

そのダグバをどこから探知したのか、レナが疾走して掻っ攫っていた。

「ンーーーー！？」

「はぅう！！かぁいいよ！！この子かぁいいよーーーーー！！」

「ゼダ！！ゼダーーー！？」

なんかダグバのほうも「ン！」と「ゼダー！」としかしゃべらなくなってる。

ホントにただのちびキャラじゃん。

結局、何とかしてダグバをレナから解放し、そのダグバはユウスケのもとへと走って行った。

そしてしがみつく。

どうやらなついてしまったらしい。

「「なに・・・これ・・・・・」」

ちなみに海東がゲットしたのは「紙飛行機」「銀玉鉄砲」「ハリセ

ン」だった。

うまくやればネタにできたのだろうが、今更あれ以上は不可能だ。

「ま、残念だったな、海東」

「最初からボケるつもりもなかったけどね！？」

ーーー

いろあったらしいがここでは割愛する。

「じゃあ全員に花火いったー？」

「はーい！」

「あの」

「じゃあ火の方向だけは気をつけてねー？」

「りょうかーい！」

「ちょっと」

「ん？どうした？舜」

星や愛紗がみんなに花火を配り終わり、さあ楽しもうというところで蒔風が星に向かって声をかけた。

「オレ、これしかもらってないんだけど」

「ああ、それはですね・・・先日海で舜が結構やらかしたと聞きましてな」

「あ、はいそうです」

「だからヘビ花火です」

「だからってこいつはひどくないですか!?」

線香花火さえも渡してもらえない蒔風。

まあこいつに持たせたらねずみ花火は投げるだろうし、ポンポン飛び出すものはひとまとめにして一気に発射とか馬鹿なことしかしないだろうから正解といえば正解なのだが。

みんながワイワイやってるのを見ながら、一人さみしく（頭の上にダグバのっけて）ニョロニョロ伸びる蛇花火を眺め続けた蒔風であったとさ。

チャンチャン☆

ーーー

壁には取っ手があり、それを引くと薄い板がスライドしてきてそこにいくつもの銃が掛けられていた。

部屋をぼんやりと移すモニターには人体の構造を映し出した映像が流れ、より効果的に人体を破壊する方法が計算され続けている。
また別のモニターにはそれをもとに何十人という人間が殺し合っている映像も流れていた。

さらには様々な用途に使えそうな小道具から、薬、注射器、拷問用の椅子、洗脳用のヘルメット、エトセトラエトセトラ・・・・・

そんな部屋に、また新たなモニターが映し出される。

そこに映ったのは、一人の青年。
プロテクターとも思えるようなメットをかぶり、それと一体になっているバイザーが目元を覆い隠している。

その男は、炎の中に立っている。燃えているのは様々なモノだ。

家、車、道路、木、空

そして、人

それらのモノにはすべて「だった」という過去形を用いるのが適切であろう。

家だった、車だった、道路だった、木だった、空だった

人だった

今や何が燃えているかもわからないし、その炎でもはや臭いも何も感じない。

だが、その青年はその熱すらも感じていないかのように、燃えた街並みを機械的に進み、その先に何があろうとも越えれるなら踏み越

え、邪魔なら破壊して進んでいった。

「上質ですね。やっとここまで来ました」

「はい。ここまでの成果は初めてになりますね」

その町から少し離れた安全圏で、一人の丁寧な物腰な男と、その後ろにつく研究員のような女性がそう言った言葉を交わしている。

男の方は1．5リットルのペットボトルに入った水を持ち、それをたまに口に運んでいる。
ペットボトルは専用のホルダーに入っており、肩から掛けて持ち歩いているようだ。

「いままで、多くの先人達が夢破れてきたことが、ついに実現するんですね！教授！」

「そうです。これこそが私がご先祖から受け継いできた夢なのです」

「じゃあ、今日はここら辺でやめておきましょう。下手に暴走して

も困りますし・・・・ウぐっ！？」

そう言って手元のコンソールを操作し、街を歩く青年を止めようとする女性だが、その声が詰まった。

原因はペットボトル男である。
女性の何に反応したのか、男の右腕が女性の頬を左右からつかみ、口を変な形に歪ませていたからだ。

「私と、私のご先祖がここまで培ってきたものが今更暴走するとでもあなたは言うんですか？」

「ひ、ひえ！！そういうわけへは！！！」

ゴキン

そんな重そうで、それでいて小さな音だけがその場に聞こえた。

「変な方向に曲がった首」という新しい特徴を得た女性の身体が、生命の反応を失いその場に崩れ落ちた。

「回収し、他の実験の素体にでもしなさい」

「はっ」

そういうと別の人間が現れ、その死体を回収していく。
それと同時に新たな女性が現れて地面に落ちたコンソールをひろいあげ

ゴキリ

先ほどと同じことがまたその場で起こっていた。

「長髪の人間は嫌悪すると言っていませんでしたか？ああ・・・・しかもポニーテールだ。そうしてれば邪魔にならないとでも思っているのかこの小娘は」

そう言って、その女性の後頭部をつま先で小突き、またさっきと同じように回収するように命じた。

ただし今度は死体の髪を切ってから、と付け加えたが。

「・・・ん、ああ。今はこっちに来なくていいよ。来てしまうとそこに何人控えていてもキリがないだろうからね」

誰ともなくそう男が言う。
その右手はゴキゴキと骨を鳴らしており、今すぐにでも何かを握りつぶしたい、と訴えているかのように見えた。

それは目の前の「実験」がうまくいっているからか、気に食わないことがあったからなのか

おそらく、どっちでもいいのだろう。
否、この男はどっちでも同じことをしていただろう。

結局、最終的にこの街の原型がなくなったところまでいってからやっと男は青年を止めた。

この後の、男の会話から、この街は青年の、故郷であることが、わかった。

「あっはっはっはっはっは。あっっっっはーーーーー！！っはっはっはっは！！！」

to be continued

レッツフィスティボー！！（後書き）

何このマッドサイエンティスト。書いてて楽しい！？

はっ！？自分もなんかやばくなってる気がする・・・・

と、言うわけでお待たせしました祭り編です！！

最初は読者様からの案もあって「らき☆すた」のモデルになった「鷲宮神社」を使おうと思ったのですが、今回は古手神社に。

だってこっちなら何があっても「まあ雛見沢だもんな」で片づけられそうだしｗｗｗ

そして今回最大の謎

何故現れた「ちびダクバ」ｗｗｗｗ

あのキャラの名前は「だぐば」です。

平仮名表記なんです。

ユウスケが保護者みたいになってるみたいです。
まあ何かあった時に対処できそうなのあいつくらいだし（スペック的にも）

本当になんで出たのかようわからん。

そして主人公はオチ担当。

星とのからみもやりたかったけど・・・・

あ、だめだ。
あの人相手だとどうしてもＲ－１８まっしぐらだ！！ｗｗｗｗ

きっと祭具殿にでもつれだして、ビビる蒔風でも見ようとしてたんじゃないですか？

でも蒔風は「おばけやしき」はダメだけど「心霊スポット」とかのマジもんは大丈夫だから全然平気だったという

きっとそんなくらいでしょうｗｗｗｗ

なんかギャグだと途端に残念になるな、主人公。
まあそんなもんかｗｗｗｗ

最後の男はマッドですねぇ

最後の一文が妙に句読点多いのはあえてです。
なんかキモチワルイ気しません？

長髪の人間に殺意を覚えるのは「あんな長いもんつけて邪魔でしかない」だからだそうです。
せっかくここまで人類は洗練されてきたのだから、あえてそんな邪魔なものをつける意味がわからない、だからだとか。

胸とかはいいらしいです。
あれは自分の意思じゃどうにもできないから。

ひどい奴ですね。
まあいつかぶっとばしてもらいましょう！！

と、言うわけでまだまだ続く日常編！！

次回くらいで終わらせようかな？とか考えてます。

次回は遊園地にしたいとか何とか考えてます。
それならＢＢＱとかもできるだろうから「山」ッぽいシチュエーションもできそうだしｗｗｗ

ではまた見てみたいキャラの絡みや、イベントがあったらどうぞ。
基本的に前の二つに出てないキャラで。ま、あくまで基本的にですｗｗｗ

ではまた次回！！

遊・園・地ッ！

朝、「ＥＡＲＴＨ」にある蒔風の部屋

そこに迫る人影。

部屋の鍵を合鍵（非公認）で開き

少しだけ部屋の中を見渡して

そして蒔風の寝ている寝室に忍び込み・・・・

「舜君！！！なんで海にもお祭りにも私を誘ってくれなかったのーーーーーー！！？？」

なのはがそう叫んで飛び掛かってきた。

これまで蒔風はその二か所に遊びには行っていたが、どちらもなのはは用事があったようなので声はかけていなかったのだ。

それに彼女ならば仕事をヴィータやフェイトあたりに丸投げしてでもついてきそうだったし。

まあ、はやてやスバルあたりからでも聴いたのだろう。

蒔風がそんな楽しいところに行っていたと知って、こうしてなのははやってきたのだ。

彼女も夜遅くに尋ねるのは失礼と思ったのかそれはやめ、こうして朝一で来たのだが・・・・・

ドォッッ！！！

そんな轟音と共に、蒔風の部屋の扉が外の廊下に吹き飛んで、その後になのはが転がり出てきた。

ちなみにさっきの轟音の正体は、投げつけられた目覚まし時計である。
それが扉に当たって吹き飛ばし、さらになのはが避難するように転がり出てきたのだ。

「わ、忘れてたの・・・・舜君、朝はすごい弱いから騒いだりすると・・・・」

「朝っぱらからなんですかァ・・・・・？（キリキリキリ・・・・・）」

「きゃーーーーー！！！」

なのは、これより３０分の逃避行を開始する。

ーーーー

「うん！」

ズズ、と味噌汁をすすりながら蒔風が目の前のなのはに聞く。
今二人は食堂のテーブルに向かい合わせで座っており、朝食をとっていた。

ちなみに逃避行の方は最終的に、青龍たちがわりとマジになって止めたので、何とか大事にならなくて済んだらしい。

・・・崩壊した壁は今、彼らが修復している。

閑話休題

話題は戻る

「まあそりゃ、俺だって遊びに行くのはやぶさかではないけど・・・・」

「じゃあ！」

「でもそう何度も行くと大変だし、何より書類がなぁ・・・」

「私と書類、どっちが大事なの!?」

「書類」

即答だった。

普段は嫌がるものの、やはりやらねばならないということは解っているのでそこは書類を選ぶ蒔風。

というか何より鬼(アリス)の管理者が怖い。

まあいざという時はもちろん「仲間」である彼女を選ぶのだろうが

「ひどい!!私今までずっとあなたに・・・あ~んなこともこ~んなことも!!」

「そんな劇的なドラマを繰り広げるようなことはしてないだろ」

「あっ、イタイイタイ!頭掴まないで!!」

「それともお前の言う「あんなことこんなこと」ってのは朝っぱらから低血圧者たたき起こして存分にイラつかせることを言うんです

かねェ？」

「舜君怖いよ！？はっ、これがこなたちゃんの言ってた「好きな子ほどイジめたい」っていう！？」

「こなた～カモーン」

「私にも標的が向いた！？」

梅干しの種を口の中で転がしながらなのはに説教し、こなたのドタマに軽くげんこつを落として蒔風が部屋から出ていく。

「まったく・・・俺だってできれば遊んでいたいけど、そう簡単じゃなかったり・・・・」

「え？いいですよ？最近何もないですし」

「いいんかいっっ！！！！！」

「ＥＡＲＴＨ」局長室でそんな話をすると、アリスの返答はまさかまさかの「ＯＫ」だった。

蒔風がふと後ろを振り返ると、少し開いた扉の隙間からなのはとこなたとヴィヴィオが「グッ！」と拳を握っていた。

「見てんな！！」

「「「（バフォ）にゃーーー！！！」」」

その三人に蒔風がクッションを投げつけ、逃げろー！と三人が走っていく。

そんな三人に蒔風がハァ・・・とため息をつき

「じゃあ・・・ここにでも行きますかねぇ」

机の引き出しから、何枚かのチケットを取り出した。

ーーー

今回ここにきているのは当然ながらまず蒔風。それになのは、ヴィヴィオ

イリヤの付き添いで士郎、セイバー、凛、アーチャー、桜

インデックスの付き添いで上条当麻である。

その少し後ろにはクラウドとティファがバイクで来ていた。

「な、なんでこんな大人数に・・・・・」

「チケットたくさんあんだもんよ。誘える人数は多い方が楽しいっしょ？」

「そうだけど～（うぅ～）」

てっきりヴィヴィオと自分と蒔風の三人で行けるものと思っていたなのはががっくりしていた。

まさかこんなに人数呼ばれるとは・・・・

「急に決まったことにしてはやっぱ人数集まってんな」

「どうするの？みんなで回るには大変だよ？」

ふむ、と考える蒔風にフェイトがヒョコ、と顔を出して聞く。

そのフェイトにうん、とうなずき、じゃあ各自自由行動で大丈夫かー？ときき、九分九厘の賛成をもらったのでそのようにした。

ちなみに反対意見は・・・・・

「「（上条、士郎）一緒に回ってください！！！（食費的な問題で）」」

が、ダメ！

ここは民主主義

とはいってもあまりに哀れだったので蒔風からお小遣いが出た。

多分足りないだろうけど。

ーーー

この遊園地は敷地が広い。

テーマパークの場所もあれば、少し進むとキャンプ場のような場所もあるのだ。

これだけ詰め込んで経営とか大丈夫なのかと言われそうだが、結構儲かっているらしい。

「先輩先輩！！これ！これやってみましょうよ！！」

士郎と回っていた桜が、ゲームセンターのような場所で一台の機械を指さしてぴょんぴょん跳ねていた。

その機械のタイトルは「占いマッスィ～ン☆」という怪しさ爆発のネーミングだった。

が、女子というのは往々にしてこういうのに惹かれがちであり、桜もその例外ではなかった。

「相性判別占い？」

「そうです！！やりましょうやりましょう！！」

「え？でもあっちのメリーゴーラウンドとか・・・・」

「やれ」

「はい」

一瞬桜の足元から黒いカーテンのようなものが見えたので即座に従う。

ヤダ・・・・女って怖い

その二人を見てセイバーが面白そうですねと眺めていると、イリヤが話しかけて行った。

「セイバーはいいの？シロウとの相性判断」

「私とシロウの間には信頼という絆が出来上がっていますし、私の鞘（アヴァロン）を宿しているんですから、相性もばっちりです。いまさらそんな箱にこもって測る必要もないですよ」

「ふ～ん」

「貴女はいいんですか？」

「私だって士郎の姉で妹よ？そんなもん今更・・・・」

「「ねぇ～？」」

フフン、と鼻を自慢げに鳴らして、無い胸を張るセイバーとイリヤ。
あ、無いとか言ってすみません。

そのふたりの話を聞いて、桜がグッ、と止まるが、それでも機械にコインを入れてデータを打ち込む。

「名前は・・・・」

「「衛宮士郎」と「衛宮桜」」

「なんで！？「間桐桜」だろ！？」

「生年月日は」

「知ってますよ（ピッピッピッ）」

「打つの速ッ！？」

「体重、身長、年齢・・・・」

「（ピピピピピピピピピピピピ！）」

「なんでそんな迷いなく打ち込めんだ！？しかも全部正確だし！！」

「ん、最後の質問？」

《自分たちがうまくいくと・・・・思いますか？》

「聞いちゃった！？それを測るための機械なのに、むしろそっちが聞くのかよ！？」

「ＹＥＳ　ＹＥＳ　ＹＥＳ！！」

「そして迷い無き桜さんに脱帽だぜ」

（ピロリロリン）

《検索結果が出ました！》

「お」

「あ」

《二人は良き先輩後輩でいられるでしょう！》

「まあ無難な・・・」

《逆に言えば先輩後輩以上にはなれないでしょう！！でも、人生きっといいことあるよ！！》

「ダメ出ししてきやがった！？なんだこれ！？」

「う、うえーん！」

「そして桜はガチ泣き！？」

そうして二人が垂れ幕から出てくる。

グズンと涙をふく桜をみて、セイバーは「あんな機械に桜の良さなどわからないんですよ」と慰めていた。

しかし、凛は

「・・・・・プー、クスクス」

吹いた。

それを聞いた瞬間に桜も「うがぁ！」と涙を吹っ切り、機械を指さして凛に叫んだ。

「じゃ、じゃあ姉さんもやってみてくださいよ！！」

「えー？私は士郎の師だし？いまさら測る必要もないってゆーか・・・」

「・・・・ぁはっ、そーですよねー。姉さんじゃ触った瞬間に爆発させるだけですもんねーｗｗｗｗ」

「士郎！！やるわよ！！」

「なんでさーーーー！！？」

・・・・・・・・ボンッッ！

「ゲェッフ！？爆発した！爆発した！？」

「もーなんなのよこの機械はーーー！！」

その後、その機会はアーチャーが何とかして修理したそうだ。

二時間くらい掛かったが

ーーー

その列の中に、クラウドとティファが並んでいた。

ティファとしてはこうしているのは本当に久方ぶりなので、クラウドと遊べて楽しいようだが、そのクラウドはというと・・・・

「ん・・・・あそこで直滑降・・・グワッ、と回って・・・・・」

コースターの写真を眺めて予習していた。

何を隠そうこのクラウド、こういうのが苦手だったりするのだ。

戦闘や移動の際ならもっと激しい動きをしたこともある。

だがそれは自分の意志だし、自分でハンドルを握っているから大丈夫なのだ。

ジェットコースターとかでのあの「内臓が浮き上がる感じ」がダメらしい。

だからこうしてコースターがどの順でどうなるのかを頭に入れ、楽しむための予習をしていたのだが・・・・

「室内コースター・・・・だと!?」

そう、二人が並んでいるのは巨大なドームの中を走るジェットコースター、つまりは室内コースターだ。

だからクラウドはそこら辺のパンフレットを見て必死になって予測していた。

これでは最後までどんな行き方をするかわからない。

前にシューティングコースターというゲームはやったことがあるが、おそらくあれ以上だろう・・・・

と、そこで後ろからクイクイ、と服を引っ張られた。

振り返ると、そこにはインデックスがいて、一緒に上条も列に並んでいるではないか。

今まで気づかなかったが、彼らも並んでいたのだ。

「緊張してるの？」

「あ、ああ・・・・ちょっとな・・・」

「だったらいいこと教えられるかも」

「何！？」

インデックスの言葉に、クラウドがわりとマジな目になって肩を掴む。

はたから見れば危ない人である。

「教えてくれ。コースターの形か？今からこの列を抜け出す方法か？」

「「人」って掌に書いて飲むと落ち着くらしいんだよ♪」

プラシーボ効果狙いだった。

が、その言葉にクラウドがそれだ！！！という顔をして、猛烈な勢いで掌に「人」と書いては飲みこみ書いては飲みこみを始めたではないか。

しかし時は遅かった。
そうし始めて五分くらいで

「次のお客様はこちらへどうぞ～」

案内のお姉さんにコースターへと連れられて行った。

しかも一番前。

「・・・・・・・！？」

「やったぁ！わくわくするねクラウド！！」

「そ、そうだなティファ・・・・」

「このコースター、落下個所が２５か所もあるんだって！！」

「そ、そそそ、そうなのかティファ」

「しかもその内側の角度、９０度よりも全部小さいんだって！！」

「そうなの！？」

「しかも時速は５０を下回らないって・・・・どこに行くのクラウドッ！！（ガシッ！）」

「ト、トイレだ！！そうだ！！こんなものに乗ったら大変なことに・・・」

「長い列だからって最初に行ったでしょ？」

「ぅ・・・・・」

ガコン、ゴンゴンゴンゴンゴン・・・・・

「ウォァァアアアアアアアアアあああアアアアアアア・・・・・・・・・・・・・！！」

「キャーーーーーーーーー！！♪」

「あぁぁぁあああああッッ！！・・・・・・・・・・・・・・・」

と、ここでクラウドの声が途切れて静かになる。

「クラウド？クラウドーーーーーーー！！！」

白目、泡吹き、ぐったり

彼ほどこの三拍子の合わない男はいまい。

そしてその三拍子が見事にそろっていた。

パシャパシャ

降りた後、ティファに介抱されるその珍しい彼を、上条がケータイで激写していた。

インデックスなんかは木の枝でつついていた。

五分後、目覚めたクラウドは記憶がすっ飛んでいたらしいが、ティファの斜め四十五度チョップで目覚めたらしい。

よかったよかった。

よかったのか？

ーーー

そこは特に人の並びが激しいところではない。
しかし、彼にとっては鬼門もいいところだ。

「舜君、幽霊もお化けも大丈夫でしょ！？」

「ああ！墓場でも夜の病院でも行ってやるし、そんなもん出てきたら殴って追い返してやる！！だけどお化け屋敷とかはダメなんだ！！作り物って駄目なんだ！！ビックリ系はマジで心臓に悪いから！！」

そう、お化け屋敷である。タイトルは「走馬灯への誘い」
ガチである。

なのはとしては「きゃー！」とか行って蒔風に抱き着こうとでも考えていたのだろうが、当の蒔風の方がガチで怖がっている。
というか嫌がっている。

が、ギャキンと背中からレイジングハートを構えられては蒔風ももう何も言えない。

と、いうかこの先の恐怖より、目先の恐怖の方が大きかったらしい。

ヴィヴィオと一緒に、なのはと蒔風がその扉を開く。

「くっそぅ・・・こういうビックリ系は苦手なんだよぉ」

「どこから来るかわからないと身構えちゃうんだっけ？」

「ああ・・・しかも俺、こういう小っちゃい恐怖にはめっぽう弱いからさぁ・・・」

ビクビクと身構えながらも、先へと進む蒔風。

と、道の脇に井戸を発見。

そのあからさまな置物に、蒔風もなにが来るかわかったようで、少し表情に余裕が出てきた。

「これあれだろ？井戸の中からいきなり人が飛び出してくるやつだ。ははは、わかっちまえば・・・・・」

（井戸の手前の地面からドバッ！！）《ギぇエエエエえええええ！！！》

「うぎゃアアアアアああアアアアアア！！？？」

その余裕の儚いことと言ったら。

余裕ぶって近づいた蒔風の足元からゾンビが飛び出してきて、蒔風の心臓が跳ね上がった。

そしてズザザザザザ！！と後ずさり、なのはのもとへと帰っていく。

「いいい、行こう！！こんなのとっとと終わらせるんだ！！」

「「はーい」」

自分の身体をなのはで隠すようにして先に進む蒔風。

ビクビクする蒔風になのははとてつもなく満足だったが、ここはお化け屋敷、そうおとなしく終わるわけもない。

突如としてバーーーン！！という大きな音がして扉が閉まり、蒔風がビックリしてなのはの腕をつかむ。

が、そのあとは幽霊らしいのがユラユラ出てきただけだったので、
何とかそれ以上はパニくらない蒔風。

（本当にビックリさせられるのが苦手なんだね・・・・・）

その蒔風を見てなのはは少しかわいそうに見えたが、そんな理性は
二秒で消し飛ぶこのシチュエーション。
蒔風がしがみついてて、なのはがハァハァしてます。

と、そこでヴィヴィオがコテッ、とこけてしまった。
足元も暗いし、まあそれは珍しくはない。

そのヴィヴィオに蒔風が「大丈夫か？」と手をさし延ばす。
その手を普通にヴィヴィオがとって、よろけながら立ち上がった。

「おいおい、よろけてんぞ大丈夫か？」

「うん・・・えっと・・・暗くて見えないの」

「ん？ああ、おばけ屋敷だからな」

「そうじゃないの」

「？　どういうことだ？」

「私の・・・私の・・・・・」

クルッ！！

（●Д●）

「私の目玉が落っこちちゃったんだーーーー！！！（両手を差出し、掌の上の目玉を見せながら）」

「ギャアアアアアアアアアア！！！！」

いきなり叫び、しかも両手に左右の目玉らしきものを乗せたヴィヴィオが蒔風に迫る。

しかもその目の合った場所には暗い穴があり、そこに目玉が入っていたのかと思わせた。

それを見た蒔風はダッシュしてその場から逃走を始める。

しかし今この部屋は密室で、いまだにホログラムの幽霊によるお披露目が続いていた。

逃げられない

振り返るとそこには「ア゛～～～～！！」と叫びながら走ってくるヴィヴィオ。

「開けて開けて開けてかけたテサセダシツカラステッ・・・・・・（カクッ）」

そこで蒔風が静かになって地面に座り込んだ。
真っ白に燃え尽きていた。

「ヴィヴィオ、そのおもちゃどこにあったの？」

「お化け屋敷の前の売店ー♪」

と、目から黒い丸のシールを取って、目玉の模型をポケットに押し込みながらヴィヴィオがキャッキャと答えた。

なのははというと、その話をしながら蒔風に抱き着き、座り込み、撫でまわして堪能してから肩を抱えて一緒に出口へと向かった。

一番の敵はヴィヴィオだったという件

ーーー

「わーーー、舜君って料理出来たんだ！」

「まあカレーだけですけどね！！」

バラバラバラ！！

そう言いながらもスパイスをどんどん入れていく蒔風

カレー、というか辛味に関しては壮絶なこだわりを見せる蒔風

というか入れる量多くないか？蒔風

最終的に食べれる人いるのか？蒔風！！

ボチャン

今何か真っ赤なから揚げが投入された気もするが、大丈夫なのだろうか？

ーーー

蒔風はというと、その場から逃げだしていた。

だってそりゃそうだろう。

作り終わって「ふぅ～」となって、みんなが「いただきま～す！」となって口に頬張った瞬間に

「ガァァアアアアアアああ！！」とか言いながらのたうちまわったのだから。

ちなみに上記の叫びはヴィヴィオのものである。

彼女でこれなのだから、他の者の叫びは断丸魔のものどころではなかっただろう。

蒔風は直後にダッシュして逃げた。

「何故か」とかの意識はなく、何となくここにいてはまずいと思ったのだ。

ーーー

「ああ・・・・・・」

「このまま帰らない？・・・・」

「いや、それはさすがに駄目だろう・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

・・・・・・・

「・・・・・なぁ」

「なんだ」

「何か言うたびにさ」

「ああ」

「「オレの」ってつけると何かエロくねぇ？」

・・・・・・・・・

「たとえばバスターソード」

「・・・・俺のバスターソードで・・・・」

「・・・・・プッ」

「プフッ！」

「オレの十五天帝がお前を貫く！！」

「フハッ！」

「オレのフェンリルが突っ走るぜぇ・・・・」

「タハッ！！」

「ギンガを貫く伝説の刃！」

「ちょ、やめろそれギンガマンｗｗｗｗ」

「しかも具体性ありすぎｗｗｗｗ」

「その妄言（げんそう）をブチ殺す！！」

ゴン、ゴン！！

そんなくだらない会話をしている二人に、上条のゲンコツがお見舞いされた。

どうやらあの激辛から何とかして回復し、二人を探してきてこんな会話を聞いたのだろう。

まあそりゃ殴りたくなる。

頭から「シュー・・・」と煙を上げ、二人の翼人がぐったりとする。

そうさ・・・

きっと・・・・

疲れてたんだよ・・・・・

ーーー

特になのははは満足したようである。

まあクラウドと蒔風の疲労感は言うまでもないが。

「やあみなさん！僕の遊園地はどうでしたか？」

そこに一人の少年が現れて、蒔風に挨拶してきた。
蒔風はその少年を知っていた。

「お前・・・・」

「ギルガメッシュ！？」

そこには少年姿のギルガメッシュがいた。

話に聞くと彼はこの遊園地のオーナーで、大抵のアトラクションは彼の考案らしい。

なるほど

彼には「黄金律」という生まれながらの特性があり、絶対に金には困らないということが約束されている。

これだけ無茶な遊園地を経営しても破綻しないというのは、そんな奇跡ともいえる力のうちだからである。

と、そんなギルガメッシュが蒔風やクラウドに意気揚々と自慢してきた。

「いやぁ、あのジェットコースターすごいでしょ！あれだけのものを室内のものにしたのは大変でしたよ～」

「おばけ屋敷もすごかったでしょ！！一緒に行く人にアイテム渡して「驚かせちゃおう！」っていうのは最高だったでしょ？」

「「お前が犯人かー！」」

ドリュッ！

その言葉を聞いて、蒔風とクラウドのコークスクリューが小ギルを吹っ飛ばした。

スポーン、と

「「俺たちの休日ぅ～～～！！」」

翼人が二人泣く

休日に　遊びに行こうと　連れ出され
　疲れるばかりの　遊園地かな

字余り

――――――

「はい、とある街からなんですけど・・・・」

「どんなだ？」

「それが・・・受信はしたんですけど、三秒後には切れてしまったんですよ。その後連絡してみても何事もなかったように返事されましたし・・・・」

「じゃあ何もなかったんだろ？間違え警報だろーよ」

「でも気になるっていうか・・・」

「だったら、あそこに回せばいーだろ」

「あそこですか？」

「「ＥＡＲＴＨ」に、な。街から音声から、データ全部送っとけ。あそこなら俺たちにわからん何かを掴むかもしれんしな」

こうして、また「ＥＡＲＴＨ」に一つの事件が持ち込まれる。

物語は、始まる。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

遊・園・地ッ！（後書き）

お待たせしましたみなさん！！

こういうストーリー書くって一話が限界ですね！！ｗｗｗｗｗ

四話も続くと書くのもきつくなってきて・・・・

どうしてこうしてしまったし。

蒔風
「どうやら次回から事件が始まるようですな」

そうなります。
次回はそこの説明と、調査に向かおうというところになりますね。

蒔風
「次回、俺にとってはひっさびさの事件になーる！」

ではまた次回

小さな始まり

某月某日

蒔風の部屋

「うひぇ～、書類めんどい」

「とか言いながらも午前中に終わらせられる勢いじゃないですか」

いつも通りの風景。
あと三十分で午前も終わろうとするそのころに、自分のデスクに向かって、蒔風が書類仕事をしていた。

なんだか遊びほうけてばかりに見られる「ＥＡＲＴＨ」だが、これでも様々な世界に顔が効くこともあって、連日さまざまな質問や書

類が送られてきている。

彼がいなくなっている間にかなり数が減ってはいたものの、それでもまだ「多い」というカテゴリーに含まれる量である。

蒔風は特に書類仕事が苦手なわけではない。

そもそもここにあるのは「報告書にまとめる」という物ではなく「内容を読んで、それに対する返答やサインする」だけなのだから、本人としては読書してるのと同じ感じなのだ。

報告書（レポート）をまとめるようなのもたまにあるが、三日に一回あればいい方だし、この仕事も嘆くほどの物ではなくなってきた、とは本人の談。

そうしていると書類の山もだんだんと小さくなっていき、ついに最後の一枚にサインをして終了した。

「あ～～、終わった」

「ご苦労様です」

ん～～！と腕を上に伸ばし、身体を伸ばす蒔風にアリスがお茶を出す。

と、そこでデスクの上にお茶を置くと、そこにはまだ一枚の書類が置いてあった。

それを怪訝そうに見るアリスだが、その視線に気づいたのか蒔風がその内容に関して説明する。

「あー、それな？小っちゃい通報があったらしいんだよ」

「小っちゃい通報？」

蒔風が言うには、というか書類にあるには

時空管理局に、一本の通報があったらしいのだ。

それは三秒しかないような、短いものだったらしい。

なにせオペレーターがそれに出て、どうしましたかと問いかけても何も返答はなく、そのままプツリと切れてしまったらしい。

そんな通報だ、おかしいと思わないわけがない。
連絡先を特定してみると、そこはある街の市役所の電話だった。
ゆえにすぐ、折り返しの電話をしたらしい。

が、今度はあっさりと電話に職員だろう男が出て受け答えしたそうだ。

そこに二言、三言交わし、結局は間違え電話だったということで、小さな笑い話になるような話なのだが・・・

「その三秒の無言電話な？こんなものが聞こえてきたんだ」

そういって、蒔風がコンソールを叩いてその音声を再生する。

《（ピッ）はい、こちら時空管理局緊急通報センターです》

《・・・・・・・・・・・・・・・》

《どうしま・・・・・（プツン）切れちまったよ・・・・》

「・・・・えーと？」

「たったこれだけ。だけど、この空白の部分、音声解析してみると・・・・」

《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》

「まだわかりません」

「じゃあ・・・・」

《・・・・・・・・〜〜〜・・・・・・・・》

「？　今何か・・・・」

「最高にまで上げたものが、これ」

《・・・・わぁぁ・・・・・・・》

「あ」

「ひっじょーに小さいけどね。しかもただ騒いでるだけかもしれないってくらいの声さ」

「まああれだけじゃ・・・・大声出してるようにしか聞こえませんしね」

「そ、近くの公園で子供が大声で騒いでるのか運動会でもしてるのか、って声だろ？」

「時空管理局は？どんな見解なんですか？」

「普通に日常生活内の音だと判断したらしいよ？まあ俺もそう思うし」

本当に何でもない音なんだろう、くらいに考える蒔風がさらに言うには

「あっこさんとしてはもう話を一回つけちまったのに、また顔は出しにくいんだとさ」とのこと

時空管理局は巨大な組織である。
巨大であるがゆえに、人々の注目も多い。

こうして一つの小さな事柄でも、言葉を返せばどう叩かれるかわからないほどに。

そうでなくともただでさえ時空管理局は、数年前に上層部の隠蔽などが騒がれていたのだから、どんな小さないざこざも起こしたくないらしい。

「ま、その点オレら「ＥＡＲＴＨ」はそんなこともないしね」

「「ＥＡＲＴＨ」の方が強いという意味では強大なんですけねぇ・・・」

「言っちまえば「ＥＡＲＴＨ」って俺の友達集団だし」

「あー、確かに」

「時空管理局って組織のこともわかってるさ。決してあっちも利用しようって算段じゃない。こうして助けあってくのも友達ってもんさ」

三提督のじっちゃんばっちゃんに心労掛けさせたくないしね～

と、そんなことを言いながら、その街の名前、地図を出す蒔風。

「と、言うわけでこればっかりは現地入りして見に行くしかないのよ」

「じゃあ誰かに頼みますか？」

「いいよ。俺も暇だし、何人か連れていくことにするさ」

「なにかあったら・・・・」

「ないない（笑）　下手すると小旅行で終わっちゃうかもしれないし」

そう言いながら「ＥＡＲＴＨ」内に残っている人間を探しに行く蒔風。
本当に適当に済ます気らしい。

ああ心配しながらも、実はアリスもほとんど同意見である。
あの程度の声なら、「ＥＡＲＴＨ」の中でだって何度も聞いてるし、街ならあってもおかしくない。

むしろあれだけの音声でいちいち動き出す人間の方が奇異だろう。

しかし「ＥＡＲＴＨ」のみとしては任された懸案だし、そのままほったらかし、適当に済ますのは蒔風の心情的にすっきりしないから一応見に行く、ということらしい。

「ＥＡＲＴＨ」という組織は、一般にその存在は認知されているものの、実際のところよく知られていない組織だ。
一応治安機関、という認識はされているようだが。

我々からしてみれば、政府の組織とかでよく聞く名前やどんなことをしているかはぼんやりと分かっているが、その内容を本当に知っているかと言えばそうではない、という感覚だ。
時空管理局のように「時空世界の警察」みたいなわかりやすい実例がないのだ。

だから結構自由に動けるし、当の本人も言ってるように実際には「蒔風舜の友達集団」といってもおかしくない。

世界の管理者支援の組織とは、危ういようなバランスの上に成り立っているのだ。

――

「んじゃ、行ってくるな」

「はい、気を付けてくださいね」

翌日、「ＥＡＲＴＨ」の門の前で、蒔風が数人を連れてその街に向かう車に乗り込んでいた。

メンバーはまず蒔風

後はその時「ＥＡＲＴＨ」ビル内にいて、都合のついた数名だ。

矢車想、影山瞬、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエと小竜フリード

その五人と一匹で街に向かうらしい。

「兄貴から誘いがあったときはうれしかったぜ・・・・」

「大兄貴、俺たちに任せてくれ・・・」

「えっと・・・宜しくお願いしますね、舜さん！！」

「おねがいしまーす」

「キュックル～♪」

いつも通りの服装の矢車と影山

蒔風と一緒に行けるのがうれしいらしいエリオと、エリオに付き添いのキャロ。

その肩ら辺にはフリードがパタパタと飛んで、白い羽が二枚ほど落ちた。

なんだか蒔風寄りの人間っぽいのは気のせいである。

まあ食堂に入った瞬間に地獄兄弟の二人は蒔風が何かあると気づき話しかけてきたし、それに気づいてエリオもキャロと一緒に飛びついてきた。

なんだかんだで蒔風はおにーさんだった。

約二名は明らかに蒔風より年上だが

「気にするな・・・あくまで魂の問題さ・・・・」

らしいです

街まではかなりある。

車を三人で交代して運転し、目的地に向かう一同。

今は、そこがどんな場所かという楽しみしか、胸になかった。

疑惑など、一欠片もありはしない。

to be continued

小さな始まり（後書き）

少し短い気もしますが、大丈夫でしょうか？
こういう説明文っぽいのかいてるのたのしいｗｗｗｗ
なぜだろう、ギャグ回よりも筆（？）が進む進む

と、言うわけで小さなきっかけからの始まりでした。

まああんな音で動く奴なんていませんよ、ホント

「ＥＡＲＴＨ」、よっぽど暇なのかｗｗｗｗｗ

やべぇすごく「ＥＡＲＴＨ」で働きたい！！
その分、一回でメチャクチャ疲れそうだけど・・・・

エリオ君とキャロは蒔風のこと結構慕ってますからね。
こういう機会が全然なかったからうれしいのでしょう。

蒔風
「まあこれから行くわけだが・・・・なぜ羽根がある？」

え？フリードのこと？

蒔風
「そう」

そんなことは知ってる
いまさら何を言ってるのだお前は

蒔風
「コイツ・・・」

と、言うわけであれは敢えてで～す！
どういうわけかは、まあ多分あっさりわかるかと。

蒔風
「次回、街に到着」

ではまた次回

街日和

「♪いっま～ひとりひとりのむっねっのっなっか～」

そんな歌を小声で歌いながら、蒔風が車を走らせる。
車はワゴンタイプ、中は結構広い。

助手席には矢車が座っており、後部座席に右からキャロ、エリオ、影山の三人が座り、一番後ろの座席でフリードが羽を休めて寝ている、と言う感じだ。

これから向かう町は、一つの道に店が集まり、そのまま大きくなったような町である。

一つの荒野を走る街道に、一つの店が立ち、その後、その後と立ち並んでいき、やがて膨れて行って街になったらしい。
今ではもうそんなことも気にならないくらいの街になっており、立派なものになっている。

ここ数十年でさらに発展したようで、ここら周辺では真っ先に挙がる街だそうだ。

「そんな街で何かあればすぐに・・・・・なぁ？」

「ああ、そんなところで大きな事件があれば俺たちじゃなくても警察が気付く」

「こりゃ完璧に小旅行になったかもなぁ・・・・」

軽く苦笑しながら、蒔風が矢車と話しながら車を走らせる。

「エリオ、お前背ぇ伸びたな？」

「最近じゃ買った服がすぐに着れなくなって大変で・・・」

「エリオ君は私の成長養分を全部吸い取ってるんですよ」

「納得」

「そんなことないですってば！」

後ろからはそんな会話も聞こえてくる。

あはは・・・とまた少し笑い、蒔風がアクセルを踏む。

周囲に車はなく、ただ一本道がそこにあった。

――

「・・・ポイントを通過。このままだと街に入る」

『旅人か？』

「モニターからは複数人が車の中から確認できました」

『家族か友人同士か・・・ま、いつも通りにやるだけだ』

――

――――――――――――――――――――――――――――――

キィッ

車のタイヤが地面を少しだけ擦り、街の入り口で停車する。

聞いていた通り大きな街だ。

と言っても大きなビルなどがあるわけではなく、どれか一つの屋上にでも立てば街の端がぼんやり見えるくらいの高さしかない。
本当に店が集まり、そこに住む人の家が集まり、といった街なのだ。

一つの大きな、それでいてやはり同じような高さの建物。
それはある機関の研究施設らしく、そこが入ってきてからこの街はさらにここまで大きくなったらしい。

そしてその街の周囲には等間隔――――大体十メートルずつ――――に、標識のポールくらいの鉄棒が立てられ、ぐるりとまわりと囲っていて、その上がリング状の同じような鉄棒で繋がっていた。

「なんだろうな、これ」

「さあ・・・・」

柵にしては間隔があきすぎだし、造形物としては訳が分からない。
まあ、芸術（アート）だというならわからなくはないが・・・・

「あれ？外の人ですか？」

と、そこに一人の少女・・・・というには少し年を取った感じだが、女性というほど年も取っていない、そんなくらいの女性が話しかけてきた。

まあ、気にはなるだろう。
街に入らず車を止め、街を囲むそのポールをしげしげと眺めている一団なんてものは。

こんな街だから外から来る人はそうそう珍しくないのだろうか、結構あっさりと話しかけてきたその少女に、蒔風がフランクに話しかけて行った。

「ああ・・・そそ、外の人。こんなところに町があるって聞いてさ、友達と一緒に遊びに来たんだ・・・っと、こんなところってのは失礼だったね」

「いえいえ、まあ確かにそうですよね」

蒔風の言葉にもカラカラと笑って受け答える少女。
少しだけ親しくなってから、蒔風がポールに手を当てて彼女に聞く。

「これ、なんなの？」

「これですか？昔この街ができた時、この辺には大きな鳥・・・まあ怪鳥ですね、がいたらしいんです。で、それ対策に上から頑丈なネットを垂らして、街全体を覆っちゃったらしいですよ」

「は～～～、つまり大きな蚊帳（かや）、ってことか」

「そうなりますね。まあ使ってたのは昔らしいですし、私が生まれる前にもう来なくなったらしいですね。そのおかげでここまで街も大きくなりましたし」

そんな話をした後に、蒔風がこの街にホテルやらなんやらはないか

と聞くと、ちょうどいい場所を教えてもらったのでそこに向かう蒔風達。

車に乗って、街の中に入る。

――

教えてもらったホテルにチェックインし、街に繰り出す。

かなり賑わった街だ。

こうして中にいると、ここが荒野にある街とは思えない。

影山や矢車も街を見たいと言ってくるので、蒔風はホテルの前にバイクを三台出した。

結構前にアリスからもらったものだが、問題はないだろう。

メンテナンスは欠かしていないはずだ。

「んじゃ、またあとで」

「じゃあ俺はこっちの方を見てくる」

「俺もだ・・・少し気になるところがあってな・・・」

そう言葉を交わし、二人が別々の方向へと走り出す。

それを見届けてから、蒔風は自分のバイクにサイドカーを取り付けてそこにキャロが座れるように準備しておく。

「ふんふふ～ん♪」

「あっちの方でパレードやってるみたいですよ？」

「おっ、そりゃぁ運がいいな。見ていこっか？」

「「はい！」」

――――――

「キャロ、俺かエリオにしっかりつかまっとけよ？」

「ふ、ふぇえ・・・・」

そこは確かにすごい人だかりだった。

大きな広場の真ん中で、大道芸人が五人くらい、互いに背を向けながらそれぞれの技を披露していた。

更にその広場の周囲では出店もあって、珍しい外の人だからと言って三人は実にいろいろなものをごちそうしてもらっている。

「いやいやダメだって。お金払いますって！」

「そうですよ！こんなたくさんもらっちゃっても・・・・」

「がはは！！大丈夫だ！みんな一個ずつしか出してねぇんだ。それぞれの出費はそんなデカかねぇわな！！」

それでもお金を払おうとする蒔風やエリオだが、お好み焼き屋台の

おッちゃんはそう豪快に笑って受け取ってくれない。

キャロなんかは差し出されるお菓子を断れず、ドンドンもらってしまっている。

さっきついに一つ目に口を付けたばかりだ。

はぁ・・・と溜め息をつき、エリオと蒔風がキャロのお菓子をいくつか持ち、フリードにはリンゴ飴をあげた。

「皆も呼べばよかったですね。こんな楽しい街」

「いやぁ、それはそれで迷惑になりそうだが・・・・」

ドンチャンとさらにやかましく音を鳴らす太鼓、上がるテンション。

結局蒔風たちは全く出費することなく、その日は満腹になってしまった。

――

「そっちはどうだ？」

『兄貴、やっぱり街をすっぽり囲んでるね』

「ああ、話してもらった通りだな」

そのころ、矢車はバイクで街の周りをぐるりと、ポール沿いにバイクで回っていた。

かなり大きい。

決してゆっくり走ってるわけではないが、かれこれ三時間走っても反対から来た影山の姿も見えないのだから。

と、そこで矢車が一人の少女を見かけた。

この街に来て最初に会った、あの少女だ。

バイクの音にあっちも気づいたようで、矢車もバイクを止める。

「あ、また会いましたね」

「大きな街だな・・・・中心街が騒がしいようだが・・・・」

「あ、お祭りですね。今日はみんなでワイワイと騒ぐ日なんですよ」

「そうか・・・俺も笑ってもらうとするかな・・・・・」

「え？」

「・・・いや、なんでもない。いったい何の祭りなんだ？」

「いやぁ、そういう伝統とか興味ないまま育っちゃったんで、はっきりと覚えてないんですよね、たはは・・・・」

少し申し訳なさそうに頭の後ろに片手を当てて笑う少女。

そうか、と矢車の方も返答し、街の中心に向かうことにした。

多分蒔風はそこにいるんだろうし。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

影山としてもバイクを走らせてきたため（バイクの運転は実は結構体力を消耗するのだ）、腹も減っていたからちょうどいいと財布を取り出す影山。
しかし、屋台のおっちゃんはいいといって受け取ろうとしない。
蒔風たちと同じように、外から来た人だからしい。

そのおっちゃんのやり取りをみて、ほかの屋台の人たちも渡してくる。

当然、影山はそれに困ってしまい、どうあっても払おうとするのだが・・・

「がはは！！大丈夫だ！みんな一個ずつしか出してねぇんだ。それぞれの出費はそんなデカかねぇわな！！」

そう言って笑うおっちゃん。
そこまで言われてしまっては受け取るほかない

受け取ったものが多いので、少し離れた場所にあるベンチに座って食べ始める影山。

食いきれるかと、少し心配になってきた。

ーーー

途中で影山も拾ったようで、お腹いっぱいで動けない彼を担いでいた。

「お前ももらったのか」

「ああ・・・ここの住人は眩しいぜ・・・・」

「でも・・・・」

「こんなに食えねぇ・・・」

とりあえず晩飯代は浮いた。

そう考え、五人と一匹はホテルへと戻って行く。

その後、矢車、影山、蒔風の三人は、この街に対する印象について話し合っていた。

特に何もない。

皆平和に、楽しそうに暮らしている。

一応町役場にも行ったらしいのだがなんてこともないし、あの電話の声はこういった祭りの準備をしていた時の掛け声かなんかだったのだろう。

そういう結論に終わった。

「じゃあ明日チェックアウトして、帰るか」

「だな」

「ああ」

そう言い合って、就寝する三人。

こうして、夜の闇が訪れる。

この街は、何かがおかしい

to be continued

街日和（後書き）

街の様子はいたって普通だぁーーーー！！
街日和でございまっす！！

読者視点から見ると、何やらおかしな点がいくつかあるかも？

ぬふふ

矢車
「今オレを笑ったなぁ？」

げぇっ！？矢車さん！？

・・・ライダーキック中・・・

今回、イメージして書いたのは「キノの旅」です。

「キノ」って変換しようとしたら「鬼の」って出てきた・・・

なにこれ怖い。

楽しそうな街ですが、一体何があるのかは次回から！！

一気にこの理想の街が崩れていく・・・・・

では、また次回をお楽しみに！

街・捕縛

夜

蒔風たちも寝静まっている頃

そんな時間に、その部屋で動く影があった。

当然矢車たちではない。

その影は淡々と、そして音もなく蒔風の荷物などを運び出していた。

と、その気配に気づいたのか蒔風が薄目を開けてその影をぼんやりとみるが、寝ている途中だということで、再び眠りについてしまった。

ーーー

『へぇ』

『死ぬのが怖いと思えば思うほど心臓は高鳴り、そのままショック死だ。殺人とはだれも思わないってことさ』

そんな会話と一緒に、一人の男が蒔風の腕を取って注射をする。

そして注射針を抜き、檻を出ようとする男。

しかし

「おォイ・・・・・テメェ人が寝てるとこに何してくれてんじゃゴラァ」

この男は知らなかった。

寝起きの蒔風は、特に無理やり起こされたようなときは、とても気分が最悪だということを。

「え？おグっ！？」

その男の後頭部にハンマーのように拳を叩きつけ、地面に倒れたところを蹴り飛ばす。

カシャン、という音と共に檻が閉まるが、特に気にすることもなく男を行動不能にして檻の中の、申し訳なさそうに置かれていたシーツで縛り上げた。

そこまでやって、蒔風の意識も眠気から抜け出していく。

地下牢、石の壁、怪しい研究職の男

「おいおい・・・マジかよ・・・・・」

檻の外を見てみると、そこには一つだけモニターがあって、そこがチカチカと光っていた。

もう一人くらい人の声が聞こえたのは、どうやらそれによる通信の

物だったらしい。

今、何が起こっているのかは特にわからないが、ここにつかまるようなことはした覚えがない。
まさかお祭りで貰いすぎたから捕まった、なんてことはないだろうし。

そして、他の四人は無事にホテルで寝ているだろうな、とも楽観的には考えられない。
ここにはいないようだから、ほかのところに捕まっているのか・・・・

そうであるならば、ここにいる理由はない。

蒔風が檻に手をかけ、グゥッ！とこじ開けようとする。
しかし

「ンギギギギギギギ・・・・・・！！！」

全く揺らがない。

おもいっきり蹴ってみるが、ビィーン！というだけで折れもしない。

はてな？と思う蒔風だが「何か特殊な金属でできているのか」とでも考え、今度は壁に向かった。

横の壁の材質は普通に岩だ。

まあその中に鉄板でも仕込まれていたら少し大変そうだが・・・・

「ラァッっ！！」

ゴンッッ！

そこを思い切り殴り、そんな重い音がした。

無論、壁は崩れていない。

かわりに、蒔風の方が痛みに拳を押さえていた。

「ノぉォォォオオオオオオ・・・・・・いってぇ・・・・・なんだこれ、ただの岩じゃないのか？」

手をプラプラさせて、蒔風が壁に手をやるが、特に何かを混ぜてあ

るようには見えない。
ただの岩だ。

「ただの岩・・・？なんでこんな程度崩せないん・・・・？」

と、そこで蒔風が、なんで気づかなかったのだろうか、自分の手首につけられている白いブレスレットのようなものに気付いた。

そして、それは・・・・・

「力が抑え込まれている？」

彼の翼人の力を抑え込んでいた。

ためしに開翼でもしてみようとするもの、一気に力が変な方向に流れて発散されてしまいできない。

「開翼できない！？なんだよこれ・・・これじゃあ・・・・」

翼人の力がなければ、彼はただの“Ｎｏ　ｎａｍｅ”の人間と変わらない。

こうして岩も崩せなければ、一撃で研究員をのすこともできないのだ。

そういやコイツ気絶させんのにも手間取ったしなぁ・・・・とそんなことを考えながら、蒔風がどうしたもんかと腰に手を当てる。

そうして三十秒、蒔風が思い出したようにパッ、と手を振った。
するとその腰、背中、脇、腕に、彼の専用剣たる十五天帝が現れてきた。

翼人の力と剣の力は別物、ということをここにきて思い出したのだ。

しかし

「重ッ！」

獅子天麟を振り上げようとして、蒔風が「よっこいしょ」という感じになる。
とても戦闘に使用できるとは思えない。

そう。
剣は所有、使用できても、扱いきれるかは別だった。
しかし、それだけでも十分だろう。

「せいりゅ～」
「は」

蒔風には使役獣がいる。
そのうちの一体、青龍を呼び出し、青龍刀で手首のブレスレットを斬ってもらう。

カラン、という軽い音を立てて、それが落ちた。

「・・・翼人の力を・・・・抑え込むとは・・・・こいつら・・・・何者なのでしょう・・・・？」

青龍の言葉を聞きながら、手首をグニグニと揉み、準備体操のようなものをしてから檻をこじ開ける蒔風。
が、その返答はしない。というかできない。

「わからないな。翼人の存在自体はもうかなりの人間に知られているが、その実態を知っているのは限られている」

そう、知っているだけではだめだ。
識っている必要があるのだ。
翼人の力を理解していなければ、こんな封じ込めるようなモノなど作れるはずがない。

「とにかく、今はほかの奴らと合流しないとな」

そういって、蒔風が机の上のレポートを見る。

そういえば注射されていたな、と思い出すが、その効力を見て鼻で笑う。

なんとなくいやな感じはしていたが、なるほど、そうか。

「死の恐怖、ね。そんなもんじゃ、俺は死なんよ」

バサァッ！とそのレポートを投げ捨て、その場を後にする蒔風。

「ま、そこで死ねた方がまともだったんだろうがな」

――――――

その屋根の上に立ち、周囲を見渡す蒔風。

普通に夜の街だ。

しかし、明かりが一つもついていないのはどういうことだろうか？

ヴゥン！！！

「！？」

と、その瞬間に蒔風の背後の方で何かが起動した音がした。

振り返ると、街の周囲を囲うポールの間を、何やらエネルギーのような幕が覆っていっている。

それは一番上をつなぐリングから出てきていて、上にまで張られており、街全体をすっぽりと覆ってしまったのだ。

その直後、蒔風の身体から少しばかり力が抜ける。

少し不愉快な顔をする蒔風だが、今はなんとなくわかった。

「翼人封じの結界版か・・・・効力は薄いようだが・・・・」

蒔風が身体を確認する。

獄炎などの能力はうまく出せそうにない。
開翼はできない。飛行も不可。
肉弾戦や剣を振るうということには問題はなさそうだが、威力は落ちている。

「・・・なんてハンディだよ・・・ったく・・・・」

そうぼやき、平坦な屋根の上を飛び越えて行って行く蒔風。

机の上に会った用紙に、地図もあった。
捕えられている場所は解ってる。

――――――

「うぐっ！？」

「ゴェッ！？」

「ハァぁ・・・・どうせ俺なんか・・・」

同じ頃

蒔風が捕まっていた場所と対して違いはない地下牢。
そこで矢車が、普通に研究員をのしていた。

ただえさえ強靭な矢車の肉体に、ライダーベルトを付けているのだ。
それはもう簡単だろう。

そのまま地上に出て、張られたバリアを見る矢車。

「さて・・・行くか・・・・」

そういって、どこともなく走り出す。

もはやここは地獄となっている。

ならば、彼の独壇場だ。

――――――

「引き払った・・・・？」

なんのことを言ってるのかはよくわからないが、とにもかくにもピンチであることは変わりない。

デバイスは離れた机の上におかれている。
呼び出して起動させるには離れすぎている。

「さて・・・じゃあまず竜(こっち)の方から調べるかな」

そういって注射器を持ち、フリードに向かって歩いていく研究員。

その姿にフリードは鳴き、キャロが悲鳴に似た叫び声をあげた。

「や、やめて！！！フリードに何もしないで！！」

「いやいやそうもいかないよ。仮に君から始めるとして、失敗したらどうするんだい？竜召喚士(きみ)という験体は一体しかいないんだ。それに比べ、数は少ないものの竜だったら何匹かうちにもいるしね」

キャロの言葉にも、なんてこと無いようにサラリと答える研究員。

ケリュケイオンがなければフリードを巨大化させられないし、仮に

させてもデバイスもない状態では傷つけてしまう。
それにフリードよりも、取り付けらているロックの方が強かったら、千切れるのはフリードの翼だ。

研究員が、フリードに近づく。
その注射の先端から怪しげな液体が滴り、それが肉体に侵入しようとした。

瞬間

『愛おしい女児がやめろと言っているのだ。止めぬとはとんだ無礼者だな』

「え？ワブッ！？」

フリードの目が真っ白に染まり、そんな声が聞こえてきた。

直後、フリードのむき出しになっている腹部あたりから真っ白な羽根が噴き出してきて、研究員を壁まで吹き飛ばしていった。

「え？フリード！？」

驚くキャロだが、そのフリードの身体から光が飛び出して実体化する。
その光が羽をまき散らし、実体化。スタンと足音を立てて着地した。

「降臨！・・・満を持して」

出てきたのはイマジン・ジーク
どうやら蒔風にこっそりついてきたらしいのだが、人ではばれるということでフリードに憑りついてきたらしい。

「大丈夫か？安心するがいい。私が来たからには、そなたの安全は確定した」

高慢、かつ自信にあふれ、そして少し上から目線でそういってくるジークが、壁際のボタンをいじって錠をはがす。

キャロとフリードが解放され、ジークとともにその場から脱出していった。

「みんなどこに・・・」

「探す必要はない」

ケリュケイオンでサーチしようとするキャロだが、ジークがそういって制する。

何か考えがあるのか。そう思ったキャロが、ジークの案を聞こうと耳を傾けた。

「私が動くのではない。世界の方が、私を中心に回っているのだ。だから大丈夫だぞ！」

「ケリュケイオン、サーチ」

《ＯＫ》

そのジークをサラリとスルーし、再び検索を頼むキャロ。

ガァン！と少しショックに打たれたジークだが、はっはっは！やんちゃだな、とか言って気を持ち直している。

まあ本人がそれでいいならいいのだろうが。

彼らが動き出す。

脱出もままならぬ、この街で

to be continued

街・捕縛（後書き）

とりあえず捕まって、逃げ出したよ！！

蒔風は弱体化、ほかはそうでもないです。

エリオと影山？
あっちはまた捕まりっぱなしです！！

蒔風も十五天帝がなきゃ脱出できませんでしたし、キャロはジークがいなきゃ実験されてましたしね。

矢車さんは説明いらず。
あの人だったら簡単に脱出できそうｗｗｗｗ

そしてジーク登場
フリードから散ってた羽根はそういうことでした！

本当に意味で蒔風フルメンバーですねｗｗｗｗ
見事に野郎しかいねぇなｗｗｗｗ

あ、キャロがいるか。

さて、次回は街、奔走！！
二人も助けないといけないし、こりゃ大変だ！！

ではまた次回

脱出！合流！！爆発！！！

駆ける、跳ねる、奔る

蒔風舜が、街の屋根を飛ぶように移動する。

向かうは中心部。

（用紙にあった地下牢のある場所は街の五か所・・・・）

すなわち、線で繋げば円形の街の中に、きれいな四角形ができる場所、そしてその中心。

（どこにだれがいるかは分からないが・・・・騒ぎも起こせば脱出できるだろう）

と、そこで自分のいた牢からかっぱらった拳骨ほどの大きさをした、黒い塊を取り出してピンを引き抜く蒔風。

中身は爆薬と鉄片。いわゆる「手榴弾」と呼ばれる代物だ。

「ま、自分らの武器なんだから、責任持って吹っ飛びなさい」

そうつぶやいて、気配のない家の屋根にそれら二十個あまりを置き去りにし直後、それが爆発して爆風で加速する。

狼煙は上がった。
反撃開始だ。

――――――

絶対に何か目立つことをするはずだ。

ドドンッ！！ドバババババババンッッッ！！！

そう考えていると案の定、爆音と煙、炎が遠くから聞こえ、はっきりとわかる目印を出してきた。

「あそこか」

そう小さくつぶやき、矢車が駆ける。

ーーー

左下の隅にある地下牢から脱した蒔風は中心部に向かう途中で、その道中には手榴弾による爆発がある。
矢車は左上にある地下牢にいて、そこから爆発地に向かってまっすぐ進む。
キャロとジークは右上から脱出し、蒔風と同じように中心部へと走っていた。

「爆音!?」

「ふむ・・・おそらくは我が友によるものだな。派手にやっているようだ」

そのキャロの耳にも、小さくはあるが爆音が聞こえてきた。

と、そこで町中の明かりが灯る。
今までは街の外壁（バリア）がうっすらと光っていただけだったのが、一気に明るくなった。

「おぉ?」

「これは・・・!!ジークさん!!敵が来ます!!」

「うむ」

その光景にジークは興味ありげに感心するだけだが、キャロのケリュケイオンが敵影を感知、臨戦態勢に入ろうとする。

その直後、走り抜けた後方の家という家から人が飛び出してきて、手に握った銃を構えて一斉に放ってきた。

銃の形は両手で構え、脇で挟むように固定するほどの大きさのものだ。

地方のお土産屋さんで売られている簡単な玩具にも見えなくない、チャチな外見はしていたものの、この状況で玩具だと思うバカはいないだろう。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！》

ギャゴォォォオオオオッッ！！

とっさの判断でケリュケイオンがドーム状のバリアを張り、その攻撃を弾く。

そのレーザーがバリアに当たって削るように後方へと飛んでいく音からして、その威力を推し量るキャロ。

飛び出してきたのは弾丸ではなく、単発のレーザーだ。

その大半はドームの形によって後方へと逸らされていくが、二、三発はどうしても直撃する。

そして、その銃の威力は・・・・・・

「そんな・・・たったこれだけで！！」

ただ二、三発当たっただけで、すでにキャロのバリアに穴を開け、破壊し、すでにドームは前方の壁になってしまっていた。

「むぅ・・・・おいそこの小竜」

「きゅ！？」

「女児を連れ、飛ぶがよい」

「・・・・・きゅくっ！！！」

銃の威力に少し考えたジークが、フリードに話しかけて指示を出す。それに一瞬だけ考え込むフリードだが、今は主が危険にさらされている場。そんな暇はなく、即決した。

「行け！！召喚士！！」

「え？きゃぁ！！！」

「きゅむ！！」

そして、ジークがキャロを放り上げた。
そのキャロを巨大化したフリードが咥えながら上昇していく。

「我が友の場へと行くがよい！！私は後を追う！！」

そうジークが叫ぶのを聞き、フリードがその両眼で街の反対側を見る。
そこには肉眼では小さな点で、巨竜となったフリードの目でははっきりと、屋根の上を走る蒔風の姿が見えた。

ドゥッ！！という風の音をまき散らし、フリードが一気にその方向へと飛んで行った。

ジークはそれを、無数のレーザーを自身から放つ無数の羽根で逸らしながら見た。
そっちか、とでもいいそうに顔を見上げて、走り出す。

威力の大きなものは、横からの衝撃に弱い。
狙撃手が風を気にするのはそのためだ。

そして、レーザーもジークの羽根もエネルギー。
ならば逸らすことはそう難しくない。常に自分に当たるのは二、三発くらいだし。

武器の威力は呆れるものだが、その使い手が素人同然なのだ。

そんなことを考え、ジークは上空のフリードを追って走る。
言っておくが、あくまでも優雅に、である。

こんな時でも、彼は自分のスタイルを崩さない。

――

そのころ、矢車は蒔風による爆発が起こったに到着していた。

曲がり角の先にザザッ！！と勢いよく飛び込む矢車。

そこにいたのは

「・・・・・・・・」

「・・・・ああクソ、どうせ俺なんか・・・・」

無言でこちらを見る、ひとりの男とその護衛か何かの十人くらいの人間だった。

当然だろう。
あれだけの爆発で敵(あっち)が何事かと思わないはずがない。

情報の確実性を求めるためにこうして直接見に来たのだろう。

そして、矢車はそこに飛び込んで行ってしまったのだ。

護衛らしき十人の腰には日本刀がぶら下げられており、呆れたような眼をした男が顎を向けるとその住人が一斉に刀を抜き放って突っ込んできた。

「ハァあ・・・・」

と、その十人の内三人ほどに、小さな手のひらに乗るほどの緑の塊がぶつかった。

それは地面を撥ねて矢車の手に収まり、馳せ参じる。

「変身」

《Ｃｈａｎｇｅ！ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ！！》

そしてベルトの台座にスライドインし、起動音と共にその体に装甲がまとわりつく。

ここでついに仮面ライダーキックホッパーへと変身した矢車が、七人＆遅れてくる三人と交戦する。

最初の七人の内二人が同時に、刀を振りかぶり

「ッ！？」

長年の戦士の勘が、矢車の背筋に悪寒を走らせた。

――――――

それに建物が崩れたぐらいでは、対象が矢車でも影山でもエリオでも問題はないだろう。
先の二人はＺＥＣＴで隊長を務めた経験者だし、エリオだってセンターガードだ。

キャロだったら飛んで行っただろうが、その無事は目の前の竜が証明しているし。

彼のために言っておくと、決して放置ではない。
彼らに対する信頼である。

「ま、いっか」

今の一言は聞こえなかった。

ーーー

蒔風に向かって飛ぶフリードは、すでに合流できる勢いである。

見た感じは残り二百メートル。

その距離で、蒔風がキャロに向かって叫んだ。

「どっから!?」

「こっちからです!!」

蒔風の質問に、キャロが真後ろを指さして自分が出てきた場所を示す。

キャロの声は風の音で聞こえないが、どこを指さしているのかはわかった。

それでは、脱出できていない場所は二か所、ということだ。

中心は誰もいないし、さっきの太刀音は戦闘によるものだろう。

自分は遭遇しなかったから、おそらく左上から来た誰か。

と、なると後はこの中心と右下の施設。

中心はともかくとして、右下は面倒だ。

だから

「フリード！！ブラストレイ！！」

「ガオオオオオオオオオオオおお！！！」

その方向を指でさして、フリードに号令をかける。

フリードは方向を変え、ドリフトのようにブレーキを掛けながらその方向を見た。

そして、口を開いてその手前に火球をためていき発射準備が整う。

そのフリードの鼻面の上に飛び乗り、蒔風が獄炎を混ぜて「発射ぁ！！」と叫びそれを打ち出した。

自分ではうまくできなくても、こうして力を付加する程度ならできる。

その火球は遠くへと飛んでいき、施設のあるであろう場所を炎に包んで吹き飛ばした。

「よしっ！」

「よし！じゃないですよ！？」

荒っぽいやり方に驚くキャロだが、まああっちはあれでどうにかなるだろう。

と、そこで蒔風がジークを見つけた。

後ろから銃を持った人間に追われ、そのままこっちにくるようだ。

なんでいるんだろ、と思った彼だが、見方がいるなら心強い。

「ジーク！！」

「おお！友よ！！」

「使え！！」

そういって、蒔風が中心部の地下牢があろう建物の上に飛びおっりながら、ちょうど真下を通るジークに向かって何かを投げた。

それは「∞」のマークの入った、蒔風の持つライダーパスだ。
それを見てジークはフリーエナジーを以ってデンオウベルトを出し、腰に巻きつけそれをキャッチした。

《Ｗｉｎｇ　ｆｏａｍ》《ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ》

「ハァッ！！」

変身とフルチャージを同時にこなし、タンッ、と跳ねて逆さまになりながら後方の人間に向かってハンドアックスとブーメランにしたデンガッシャーを投げ放った。

無論、狙うのは銃器のみ。
追ってくる全員のそれを見事破壊し、ジークがそのまま走り去る。

《ジーク！なんでいるのかは後で聞く。そっから向こうにある倒壊地域見えるか！？》

ジークの頭に、蒔風からの念話が飛んできたのだ。
蒔風の言う場所は、彼が手榴弾を置き、そして矢車がいるであろう場所だ。

《見えるぞ》

《そっち行ってくれ！誰かいるはずだから！！》

《友の頼みならしょうがないな。では》

いくらなんでもそこまで空気の読めないジークではないらしい。
蒔風の言葉に軽く首肯して、そのままその地へと向かっていく。

一方蒔風はというと、フリードから飛び降りながらジークにライダーパスを投げ、屋根に着地すると同時に獅子天麟を叩きつけて突っ込んでいた。
屋根だけでなく、床までぶち抜き、影山のいる地下牢にまで突っ込む。

そういう強引な突っ込み方だったため、地下の床に着地するころにはそこを見張っていた人間は見事に気絶して地面に倒れていた。

「影山！！いるか！！」

「舜さん！！」

影山の名を呼び蒔風に、同じく降りてきたキャロが声をかけた。

見つけたのか、と蒔風がよると、そこには驚くべき光景が・・・・・

「ね・・・・・」

「寝てる」

「ｚｚｚ・・・・」

「「・・・・・・・はぁ・・・・・」」

この騒ぎの中、見事に寝ている影山だった。

その姿にキャロと蒔風が同時にため息をつき、蒔風なんかはつきながら膝を落とした。

「げ、元気出してくださいよ！無事だったんですし！ね？」

そういって元気づけてくれるキャロ。
うん、なんか元気でる。というか癒される。

と、そこに

「もう食えないよ兄貴・・・・」

そんな寝言が聞こえ

「（イラッ）起きろやゴラァ！！（ゲシッ！！）」

蒔風の蹴りがぶち込まれた。

――

そのころ、右下の地下牢。
訂正。地下牢「だった」場所。

そこの瓦礫から「ボコリ」と人の腕が突き出してきた。

それは白いバリアジャケットを纏った少年のもので、ついに全身があらわになった。

「はぁ・・はぁ・・・ス、スバルさんからこういう時の対処法を聞いてなかったらヤバかった・・・・」

その手にはストラーダが握られており、今にもブースターから炎が吹き出しそうである。

わかってる。
あの炎はフリードのブラストレイに蒔風の獄炎が練り込まれたものだろうということは解ってる。

わかってるさ。
そしてこれは僕を救い出すための方法だってね。

ああ、大丈夫。僕は冷静さ。だから――――――

「一発殴ってもいいよね♪（にこっ）」

その笑み、ショタ好きのおねーさんなら一発で墜ちたであろう。

しかし、実際に見ると怖いこと怖いこと・・・・

エリオがストラーダにつかまって飛ぶ。

フリードの姿は見えている。

その後を、家から飛び出してきた人たちが追う。

皆、あの銃を持っており、機械のように走っていく。

全員の脱出が終了した。

しかし、街から出られるということにはならない。

to be continued

脱出！合流！！爆発！！！（後書き）

全員脱出完了！

エリオ？リア充は爆発するものでしょ？ｗｗｗｗｗ

ちなみにエリオには悪意はありません。
心境としては「あっはっは、あの人はしょうがないなぁ～（黒）」
といった感じです。

銃の威力としては一発で《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ―――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＥＮＤ！！》くらいですね。
途方もないなおい。

そして、ここの住人達もついに参戦してきましたね。
一体どういうことなのでしょうねー？

さて、そんなことよりみなさん。
来週のゴーカイジャーにあの五星戦隊ダイレンジャーが出てきますよ！！！！

しかもゴーマさんチャンズの中の人まででるっぽいし！！

これは燃えるしかないんだァッ！！！

フォーゼは早くも新フォーム！！

オーズはいろいろ出し惜しみしすぎて後半がトントンいった感がある
ので、これはいいことです。

４０もスイッチあることですしね。

次回、敵兵の危険武器

ではまた次回

最悪武器の威力

おそらくは、この街の住人だ。
何人かの顔に見覚えがある。

いま仮面ライダーキックホッパーが相手をしているのは、刀を持ったそんな人たちだ。

攻撃を避けるのはたやすい。
一人一人の動きはどうあがいたって素人の域を出はしないのだから。

本当にそこら辺の街の人に「はい」と言って刀を持たせて戦わせているものなのだ。

しかしその割には攻撃に迷いはなく、さらには殺気もありはしないのだ。

だが、それでもキックホッパーは攻めあぐねていた。
彼は徒手空拳で戦うライダーだが、だからといって武器を持った相手に後れを取るはずもないし、この装甲なら腕で受けてもさしたる問題はない。

しかし、彼は見てしまった。
この武器の恐ろしい威力を。

《ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ》

そこに電王が到着する。
フルチャージをため込み、手に持つ武器を投げ放って相手を後退させてキックホッパーの隣に立った。

「大丈夫か？」

「ち・・・お前は眩しいよなぁ・・・・」

「？」

そんないいタイミングで応援に来た彼にそんなことを言うキックホッパーだが、内心感謝していた。
正直彼らを相手にするには自分一人じゃ分が悪い。

なんでジークがいるんだと気にはなるが、ほかのみんな同様に気にしている暇はない。

「いいか、武器には触れるな。回避しろ」

「？　どういう・・・・」

「わかったか！！来るぞ！！」

そう叫んで、キックホッパーが電王を突き飛ばして地面を転がる。
その位置を一人の刀が振り下ろされ、さらに二人、三人と斬りかかってくる。

電王の方にも攻撃は仕掛けられ、忠告通りに回避しているもののすぐに家の壁に追い込まれてしまった。

それに対し、しかたなしと電王がハンドアックスとブーメランを十字に構え、真っ向から受け止めようとした。

しかし

「受けるな！！」

《ｒｉｄｅｒ　ｊａｍｐ！》

それを見て、キックホッパーがライダージャンプを発動させ、地面と水平に飛んで電王を突き飛ばした。

パンチホッパーにつかまれ、一緒に地面を転がる電王。

そして、その光景を見た。

刀が、普通に振られた。

いや、普通というのはおかしいか。普通ではなかったのだ。

あの位置から振るえば、まず確実に家の壁に当たる。

そのまま振りぬこうとも何をしようとも、必ず一瞬くらいは減速するだろうし、そもそもあの素人集団に家の壁を斬りぬくだけの技量も何もあるわけがない。

しかし、彼はそれを振りぬいた。

ヌルリ、と壁に刀が入り、そのままスラッ！と振りぬいたのだ。

豆腐を切るよう、なんて比喩どころではない。

素振り、空振りしたみたいに、何一つ抵抗なく切られたのだ。

そこで電王は気づいた。
デンガッシャーが切られている。

ブーメランのくの字の先がバッサリと。

感じなかった。
斬られれば必ずそこに重みを感じるはず。そうでなくてはおかしい。
だというのに、目で見るまで気づかなかったのだ。

ゾッとする切れ味。

斬るという感覚もなしに

斬られたという実感もなしに
持ち主の技量など丸っきり無視して、最強の斬撃を放つ刀。

「わかったか？あれを受けられるのは兄貴の十五天帝だけだ！！」

「おのれ・・・この私に刃を向けるなど・・・！！」

「兄貴の場所を教えろ！！俺たちじゃ相手にできないんだよ！！」

そう言いながらもすでに数人くらいは昏倒に成功しているあたり、さすがは仮面ライダーだというところだが、相手も学習しているのかこれ以上は無理そうだ。
どうしても攻撃を受けなければ、こちらが攻撃に移れなくなっている。

ギャーギャー言いながらそれでも向かっていこうとする電王の後ろ襟掴んで、彼の来た方向へと真っ直ぐ走り出すキックホッパー。

後ろから集団が追ってくる。

ーーー

一方蒔風達は銃撃部隊を相手にしていた。
さっきキャロが相手にしたのと同じものだが、数が明らかに増えている。

「おいおい冗談みたいな威力してんぞ！？」

「オォあっと！！大兄貴！！どうする！？」

「街の人たち、普通じゃないですよ！？」

それに立ち向かうのは、蒔風、影山（パンチホッパー）、そして合流してきたエリオである。
キャロはフルバックに立ち、三人の攻撃や防御をサポートする。

襲ってきているのは街の住人だ。それは解っているのだ。
しかし、彼らの目からはハイライトが消えており、明らかに様子が変だ。

その原因は一目見て分かった。彼らに取り付けられた首輪だ。
蒔風に取り付けられていたブレスレットと同じような外見で、無機

質な白いリングなのだが、それのランプが青緑に光っているのだ。

十中八九それが原因である。

しかし、だからと言ってそれを取ればいいのか、という単純な話でもない。

戦闘開始からそれに気づいた三人はすぐにそれを掴んで引きはがした。
するとバタリと倒れて動かなくなるのだが、次に行こうとするとガードされてしまう。

学習している。

結局そこからさらに奪えることはなく、今こうして殴りつけての昏倒や、縛り上げての拘束で倒していっている状況。

「くそ・・・・やろうがァッ！！」

「影山！！キレてもしょうがねェぞ！！」

「でもよ大兄貴！！」

「相手の動きはどうしたって素人だ！！」

「こっちが負けることはないですよ！！」

「そうだけど・・・・よ！！」

しかし、イラつく気持ちは分からなくもない。
影山が叫んでなかったら、エリオか蒔風も叫んでしまっただろう。

このレーザー、貫通力はないものの喰らえば確実に戦闘不能寸前に追い込まれる代物だ。

もはや力だとかそう言う物ではなく、いつまでもうまく耐えきれるかどうかの戦いとなっていた。

そして

「うぐ！？」

「舜さん！！」

「危ない！！！」

蒔風の膝が崩れた。

そこに向かって銃口が向けられるが、影山が蒔風を掴んで回避し、

エリオが放電でレーザーを逸らしていく。

「ハァ・・・ハァ・・・・・」

「大丈夫か！？大兄貴」

「くそ・・・体力面がやべぇ・・・・シャレにならんぞ・・・・っ」

蒔風の額を汗が流れ、いくつかの汗と交って大きな水滴となって顎から落ちる。

今一番疲労しているのは他でもない蒔風だ。

キャロからの（微弱ではあるが）治癒魔法も越える疲労。

原因は、街を包むバリアである。

「畜生・・・あのポールさえ倒せれば・・・・」

「無理だ・・・ありゃとんでもない硬さだし、バリアだって、今の俺じゃ崩せもしない・・・伏せろ影山！！」

パンチホッパーの肩を借りて一気に立ち上がった蒔風が、彼の背後に放たれたレーザーを十五天帝で弾いていった。
が、一発弾き、二発目を弾いたところで汗で手が滑り剣が落ちる。

放たれるレーザーの本数はかなりものもだが、狙いは悪く、当たるのはせいぜい二、三発だ。
とはいえ、ただの一撃ですらも喰らったらそのまま戦闘不能に押し込まれるので、その弾幕は恐ろしいとしか言いようがない。

ついに拳を握り、蹴りや突きでエネルギーを弾き飛ばしていく蒔風だが、拳からは血が流れ、地面に黒い斑点を残していく。

「舜さん！！くっ、ストラーダ！！」

「おおおお！！ライダーパンチ！！」

ドォウッッ！！

その蒔風を隠そうと、蒔風の前に出て地面を思い切り吹き飛ばすエリオとパンチホッパー。

爆発でも起こしたようにモウモウと上がる土煙だが、相手は銃撃をやめようとしない。

しかしそれが晴れたころには、その場に彼らはもういなかった。

――――――

飛び込んだ。

いま、そこの冷蔵庫を漁ってのどを潤し、包帯で手を巻いている。

「街の人たちは操られているだけだ・・・・」

「あの首輪ですよね」

「どこかに指令を出してる場所があるはずなんだが・・・」

そういって、この街の地図（地下牢から盗ったもの）を広げ、自分たちの位置を大体で指差す。

「俺たちがここ・・・・だな。なあ、こういう場合、やっぱどこからやるよ?」

「そうだな・・・やはり電波となると中央部からの発信が一番効率がいい」

「キャロは?サーチできるか?」

「サーチしたんですけど・・・・その電波、街を囲むバリアがら出てるんです」

「と、なると・・・・・あれを壊さないとダメ？」

「いや、あのバリアはオレが出て行った瞬間に展開されたが、その時はまだ彼らはいなかった」

自分が脱出した時を思い出し、蒔風が言う。

あの時に彼らが来てない、ということは自然に考えてあくまでもバリアを利用して発信している、というだけで電波基地は別にあると考えるのが一番だ。

もちろん、そうではない可能性もあるにはあるのだが・・・・・

「それを考えたら何もできないもんな」

「ああ、できることを順番にやってくしかないみたいだな」

そう話を終え、当面としてはその電波基地を見つけることを第一にした。

話しているうちにエリオが外の様子を見てきたらしく、話してくる。

どうやら探し回る、とい うことはせず、マネキンのようにその場

で突っ立っているらしい。
等間隔に、それこそチェスの駒のように並んで立つ彼らは気味の悪いものだ。

探し回ってくれれば隙もできるから抜けやすいのだが、こうされると抜け出すのも無理だ。

「あ～も～・・・・・」

「俺、裏口の方見てくる」

「頼む」

どーしろというのだ、と頭を振る蒔風に、パンチホッパーが裏口側を見てくると言って部屋を出る。

直後

「ウオおおおおおおお！？」

《ｒｉｄｅｒ　ｐｕｎｃｈ！》

ゴッ！！ドォオゥッ！！！

驚愕の感情が込められた声と、ライダーパンチの起動音がして、仮面ライダーパンチホッパーが部屋まですっ飛ばされて戻ってきた。

何があった！？と聞く前に、その部屋の扉がキィ、と開いていき、そこから一人の少女が出てきた。

服装はひどく簡単なもので、つなぎのような、それでいてスポーティーな雰囲気も感じられるもの。

街の住人と同じように目からはハイライトが消えており、無機質に蒔風たちを見ていた。

そしてその顔は、彼らの記憶にある顔だった。

「君は・・・・？」

「街に来たとき・・・最初に会った子か？」

無言で立つ少女。

それはまごうことなく彼らがこの街で最初に会った少女だ。

そして見るからに、今までの住人とは違う。

「・・・・・・・・・！！！！」

「ッ！？おぁ！！」

と、その少女が蒔風に向かって突っ込み、そのまま拳を突き出してくる。

それを両掌で受け止める蒔風。

ドッッッ！！ズ、ゴォンッッ！！！

凄まじい衝突音と共に、蒔風がそのまま押し退かされて、少女と共に家の壁を突き破る。

が、押し出されてもその拳を受けたままの体制で耐える蒔風。
周囲の住人はこっちに反応するも、少女がいるからか銃を撃ってこない。

「舜さん！！」

「兄貴！！」

家の中からエリオの、通りからは矢車の声がしたが、それを気にしていられる状況ではない。

少女の踏み込まれた右足が一瞬スゥッ、と弛緩し、直後、凄まじい

胆力を以って地面を踏み抜いた。

ゴ、ドォンッッッ！！！

まるで大砲を十発ほど一気に発射したかのような轟音が轟き、蒔風の体が民家を二、三崩壊させながらブッ飛んだ。

少女の立ち位置は変わらず、まっすぐに蒔風の吹き飛んだ方向に拳を向けて構えたままだ。

と、そこで住人たちの瞳にエリオやキックホッパーたちが映り、銃や刀の入り混じった混成部隊となって襲い掛かった。

「刀は受けるな！！豆腐みたいに切れるぞ！！」

矢車の言葉に、エリオが受けようとしたストラーダを引っ込める。

掠ってしまったのか、ブースターの一つが斬り落とされてエリオがその言葉を理解すると、蒔風が突っ込んだ民家の瓦礫が吹き飛び、

そこから剣が飛んできた。

剣は、十五天帝。
風林火山が一本ずつ、エリオ、キックホッパー、電王、パンチホッパーの足元に刺さり、各人がそれを手にして攻撃を開始した。

ガラリ、という音がして、瓦礫の中から立ち上がった蒔風が少女を見る。

「この街で何があった・・・・？」

「・・・・・・（ダンッッ！！）」

「あんたらを操ってんのは誰だ！！！」

飛び掛かる少女
迎え撃つ蒔風。

大きなハンデを負って、闇に彼らは立ち向かう。

to be continued

最悪武器の威力（後書き）

はいさい！！
相手の武器の解説回＆強敵少女出現です！！

銃は前回説明しましたが、刀は初めてですね。

この刀、もし地面に落とせばヌルリと入って行って鍔で止まるまで行っちゃいます。

柄も何もない刃だけで投げれば、減速して落ちるまで止まることはないです。

問答無用の切れ味の刀です。
逆に素人技量相手だから怖い。

蒔風の十五天帝なら受けられる、というのは彼の剣が世界四剣の一つだからです。
絶対に破壊されない剣なので、こういったものも受けられるんですね。

そして少女登場。

でも自己紹介は全然先になりそうだなぁ・・・・・

そういえば買いましたよ、バガミールｗｗｗｗｗ
フォーゼドライバーは売り切れていた・・・・

まあ予約してない自分が悪いんですけどね！！

マジックハンドとカメラのスイッチは手に入れました。
これだけじゃカチカチするだけじゃないかｗｗｗｗｗ

楽しいけど！！！

次回、ＶＳ少女
もしかしたらこの街の黒幕出現？

ではまた次回

少女、脅威

少女の拳が、壁を破壊する。
少女の踏み込みが、地面に亀裂を入れる。

動き一つ一つが、空を切る。

明らかに素人ではない。

おそらくはこのバリアがなくとも手こずるだろう。
そして、それがある以上は手こずる以上に、きつかった。

「！・・・！、！」

「ふっ、ほ、せッ！！」

無言で恐ろしい突きを繰り出してくる少女を、蒔風が最小限の動きで回避していく。

最小限、と言っても紙一重すぎると勢いに巻き込まれてしまうから見た目は必要以上に回避しているように見える。

無論、その少女の首にも住人と同じような首輪がついているが、この状況で取れるはずがない。

（くっ・・・あっちの相手は素人。武器があれば、すぐに誰か一人でもこっちに来てくれる！！）

――――――

現に今まで手こずっていたのが嘘のように、バタバタと刀を持った住人が倒れて行っていた。

首輪は取れないものの、簡単に昏倒される住人達は、面白いように地面を埋め尽くしていった。

残るは、あのレーザーを放つ銃を持った十人ほどだ。

正直、もう相手になどならなかった。

――――――

一回受けるだけで、身体が大きく仰け反っていく。

そこにさらなるラッシュを叩き込む少女の攻撃を、それでも姿勢を無理やり戻しながら受け続ける蒔風。

「つ！！おぁっ！？ウグォッ！！！！」

少女の攻撃に、とうとう蹴りが加えられてきた。

右回り蹴りに、蒔風の左わき腹がミシリ、と軋みを上げ、一気にその体が吹き飛んだ。

地面を一回はね、そこで体制を整え両手両足で着地、下に顔を向けながら踏ん張り、地面を滑る。

その勢いを殺しきった蒔風が顔を上げると、その顎に少女のアッパーが思い切り振られてきた。

顎の下に両掌を添え、それを受ける蒔風が、身体ごと縦回転して威力を殺す。

そこで少し宙に浮く蒔風に、少女の攻撃が止めど無く打ちこまれていく。
その威力は手足で弾いているにもかかわらず、蒔風の体がなかなか地面につかないほどだ。

鞭でも振っているような音が続き、ふとそこで、蒔風の腹に少女の脚がスッ、と当てられた。

「ッ！まず」

ドンッッ！！！

最初に受けたノーインチパンチ、それの蹴りが、蒔風の腹部にクリーンヒットした。
その蹴りの衝撃はその体を突き抜け、宙を奔り、その方向１５メートル先にあった民家を打ち砕く。

しかし、少女の脚に引っ掛かる蒔風の体が、まるで霧でのあるかのようにユラリと消えた。

少女は無感情に加え無表情だ。
だが、困惑はしているようで蹴りのその体勢のままで左右を見る。
一体どこにいるのか、と
その疑問に、蒔風の声が応えた。
「下だよ」
その声に気付いた時には、少女は下から蒔風に抱えあげられていた。
そして、そのままの勢いで、蒔風はタックルでもブチかましたかのように、その通りを一直線に飛んで行った。
蒔風がいたのは、蹴り上げられっぱなしの少女の脚の下だ。
そこからその片足ごと抱えあげられた彼女は、ドカドカと蒔風の背中を叩くがしかし、この体勢では威力はない。
このままでは、どこかの壁に叩きつけられる。
そう思ったのか、少女は蒔風の右脇腹に拳を当てた。

「は、踏み込みのできないこの体勢で、そんな拳が撃てっかよ！！」

ボゴォッッ！！！

そう叫んだ蒔風だが、直後にその認識を改めた。

なぜならその少女は、踏み込まずとも腕の力のみでそれを放ってきたのだから。

とはいえ、それの威力は大したことはない。

だが近距離とはいえ真横からの衝撃だ。直進する蒔風の体勢を崩すには十分だった。

少女を放し、地面を転がる蒔風は受け身を取って（あくまでこの攻撃での）傷は一つもない。

一方少女はそのままの勢いで投げ出され、全く方向を変えることなく吹っ飛び、民家に突っ込みそれを倒壊させる。

「っ～～！！」

頭をさすりながら立ち上がる蒔風。

しかし、少しの間もおかずに民家の中からは少女が立ち上がって蒔風へと突進してきていた。

「舜さん！！」

それを見て、エリオが少女へ向かっていく。

少女も迎え撃つつもりだ。

否、おそらくはエリオを轢き倒してそのまま蒔風へと向かうつもりなのだろう。

「エリオぉ！！」

そのエリオを援護しようと、蒔風が身体を横に向け、両掌を迎え合わせて上下に構えた。

その腕を突きだし、身体を横に向けてその間に雷旺を走らせる。

瞬時、エリオは理解してストラーダを振った。

蒔風のその両掌の間をストラーダが通過し、その電撃を纏ってブースターに火をつけた。

そのまま真正面に突き出されたストラーダが、少女に向かって突進する！！

「一点雷貫！！雷　旺　一　閃！！！」

ガゴォッッッ！！！！

凄まじく硬そうなそんな音がして、エリオと少女が土煙に消える。

直後に風が吹いて、それが消えたその場所には、ストラーダの先端、面の部分を上下から挟みこんで止めている少女がいた。

下から膝で、上からは肘で。

ガッツリ挟み込まれたそれは、少女の脚を地面にめり込ませ、後退させて止まっていた。

が、この槍は雷槍。

蒔風が与えたエネルギーは、突進力ではない。

バンッッッ！！！

弾くような音と光がストラーダから発せられた。

爆ぜる、弾ける。
それが雷旺の真骨頂。

少女の体はその衝撃に弾かれ後退、地面をズザッ、と滑って着地する。

そこに

《ｒｉｄｅｒ　ｊｕｍｐ》

仮面ライダーキックホッパーが、凄まじい跳躍量で少女の真上に飛来した。

「！？」

反応する少女だが、すでに攻撃態勢は整っている。
キックホッパーが宙で一回転し、右足を突き出して少女に向かってキックを放つ！！

「！！！ッッ」

「フンッ！！」

それに対し、少女は後ろ回し蹴りで迎え撃ち、キックホッパーの蹴りと激突させる。

綺麗にぶつかり合った、両者の右足。

そして、キックホッパーがベルトのホッパーゼクターのレバーを戻す。

《ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ》

直後、タオキン粒子が右足に集結し、圧倒的な爆発力で、少女の体を地面に向けて押しつぶしていった。

ゴゴゥ！！という凄まじい音で地面を揺らし、少女がその威力から逃げようと地面を転がって受け身を取った。

が、転がった先にはもう一人のホッパーがいた。

「ライダーパンチ！！」

《ｒｉｄｅｒ　ｐａｎｃｈ》

彼女の顔面に向かって、一直線につき放たれる拳。

少女がとっさに両腕でそれを受けるが、さすがに無茶だろう。

一回、二回転撥ね、少女の体が地面を転がり、立ち上がろうとして膝がガクリと落ちた。

「流石に限界が来たようだな」

獄、圧、惺、旺、混、絶

蒔風が円を描くように両腕を降ろしていき、エネルギーをためていく。

そして片手に三つ、合わせて六つのエネルギーを握りしめ、少女のど真ん中に向かってその双拳をぶちかました！！！

「六風波爆（ろっぷうはばく）！！！」

両手刀が肩に

両掌底が脇腹に

そして両拳が連続で叩き込まれ、彼女の中でエネルギーが渦巻いて吹き飛ばした。

その勢いの派手なこと。

少女は背中から六つのエネルギーを光として吐きだし、ぐるぐると風車のように回転しながら通りをぶち抜き、家々を破壊し、街の中心にある噴水にぶつかってやっと止まった。

ーーー

蒔風が矢車の肩に寄りかかりながら、みんなでその場に行くと、破壊された噴水はプシュー、と水を噴き出して傾いていた。

辺りは当然水浸し。

確かここは昼間に来たまつりの会場だったはずだが、到底同じ場所には見えない。

その噴水の瓦礫の中から、少女の体が出てきていた。

おそらくはここにぶち込まれたのちに這い出ようとして力尽きたのだろう。

あれだけの物を食らってまだ立とうとすることができる、というのは恐ろしい。

「終わった・・・・か？」

「でもこの街から出られませんよ？」

「それは後だー・・・・もうヤダ疲れた・・・・」

矢車、キャロ、蒔風と声を発していく。

しかし

「やーっぱダメかァ」

そんな声がして、一人の男が現れた。

一同が一斉にその声に振り向き、その顔に反応したのは矢車だった。

「お前・・・爆発場所にいた・・・・」

「おお、仮面ライダーか？あの刀集団とのやり取りはすごかったねぇ」

その男は、蒔風の爆発場所を調べに来ていた男だった。

コイツが目の前に来ている、ということは他の人間も来ているのか。

彼の周辺には刀を持った者、銃を持った者が二人ずつ付いているが、

ほかの人間の気配はしない。

「ん？ああほかの奴らは処分したよ。てんで使いもんにならないんで」

処分

男はそういった。

おそらく、深読みするべくもなくその通りなのだろう。

「お前・・・・」

「翼人に、仮面ライダーに、魔導師か。面白い組み合わせだな・・・・「ＥＡＲＴＨ」か？」

「・・・・・」

無言
蒔風たちは答えない。
しかし男はそれを肯定ととったのか、左腕の上腕半分を覆うコンソールをタタンッ、といじった。
「引き払った後にこんな上質な奴らが来て、しかもそれが初めてのお客様なんだってんだから笑える」
ゴゴン!!
そんな音がして、地面が揺れる。
しかし、男は特に驚くこともなく、さらに言葉を続けて行った。
「ここでお前ら捕まえればさ、俺の手柄になるんだよな？そいつぁさらに面白い話だ!!!」

ズゴォ！！

「あのショートヘアフェチの野郎に、一泡吹かせられるってわけだ！！！」

男が興奮気味に叫んだ。

直後、巨大な何かがさっきまで戦っていた通りあたりから出現し、その大きな影が蒔風たちを覆う。

小さく舌打ちをする蒔風
行くぞ、と声をかける矢車に、応える影山
後ろに手を回し、ムゥ、と唸って不快感を表すジーク
キャロをかばうようにストラーダを横に構えるエリオ

終わらない

終わらない

この街を覆う、狂気の技術は

まだ底など見せてはいなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

少女、脅威（後書き）

と、言うわけで少女決着！！

それと同時に、この街のボス出現。
発言からわかるように、こいつはあのショートヘアフェチのマッド野郎ではありません。

あと、実をいうと各牢に配備されていたのは一人ずつ。
影山さんだけ二人でしたね。

こいつは地下牢のポジションではなく、普通に街の中にいました。
ボスは働かない、ということで。

そしてその職員たちも「処分」されてしまい、すでにこの男一人なのですが・・・・・

ここから先は次回で。
次回は、この街での決着、ですかね？

じゃあここからは雑記！！

先日、バガミールとマジックハンドのアストロスイッチを買った私。

そして、それを友達に見せて、学校の帰りにゲーセンへ。

そこで見つけた「ガンバライド」！！！

今まで見向きもしなかったんですが、折角持ってるスイッチ。

ベルトもないし、遊んでみるかとやってしまったのが始まりです。

その日のうちに、千円。

翌日にはなんと一万ぐらい吹っ飛びましたｗｗｗｗｗ

どうしてこうなった。

しかもレジェンドレアが出ないという罠ｗｗｗｗｗ

だからカードゲームはだめだと自分にあれだけ言い聞かせていたのに！！！

買い始めると全部揃えないと気が済まなくなるから駄目だと知っていたのに！！！！

そして無くなる一万円。
さらば諭吉と叫ぶ暇もなかった！！！！

一万あれば何ができたかと考えると三日前の自分を殴りに行きたくなる。

でもあれ意外と出来がいい。
スーパー1で敵を倒した時とかの「ミョンミョンミョン」という音が忠実に再現されていたし、ＺＸキックとかメチャクチャカッコよかったし！！！

どうすればいいのだ・・・・

しかし、ここで思い出します。
偉い人（政治家）の息子は言いました。

「少しのお金（小銭）と、明日のパンツさえあれば生きていけますって！！」

バカ野郎。

その小銭すら吹っ飛ばすのがガンバライドなんだよ！！！

三ケタ以上のお金は軒並み吸い込まれていったわ！！！

マジふざけんなマジふざけんなｗｗｗｗｗ
悪いのはガンバライドじゃない。

全てオレが悪い。

アーチャーが過去の自分を嫌う気持ちがわかりました。

と、いうかこの勢い、どう締めていいかわからなくなった。
では、わけのわからない効果音で締めていきましょうか。

ではみなさん、せーの

♪辛味噌！！

また次回で！！

外道技術

街の外

そこから見える街は、薄紫のバリアに覆われた不思議空間になっていて、ポールの間をバリアが覆い、上も幕でふさがれていた。

その光景を、外から一人の女性が見ている。

偶然この場を通ったようで、ローブにもマントにも見えるような感じで羽織った布から地図をだし、確認を取っている。

そしてどうあってもあれは異常だと思ったのか、武器を構えて街へと走り出した。

その両手に、一対のブーメランブレードを握って。

ーーー

それはよく見ると、一人一人の姿がよくわかる。
まるでいったん粘土で人間をつくり、それを張り合わせて大きな人を作った感じ。

気持ち悪い。
なんという醜悪な姿。

そして、それを構成しているモノが、あまりにも人道に悖(もと)る。

「お前・・・人間を何だと思っているんだ!!!」

その大きな敵に、エリオが叫んだ。

しかし返答よりも先に、巨人の攻撃が始まり、それどころではなくなった。

巨大な拳が蒔風たちを狙い、叩き潰そうと振り下ろされてきたのだ。

それをバラバラに回避し、巨人を囲むように立つ四人と、フリードに乗って空から全貌を見るキャロ。

男の方を見ると、彼と共に来ていた四人の住人も巨人の脚に取り込まれていってあれを構成する一部分になってしまった。

「人？そんなもの、最初からいないさ！！そいつらはただの人形だ！！！」

男が嗤う。

そうしていると、巨人の目であろう位置がガァッ！と光り、周囲の蒔風たちに電撃のようなビームを発してきた。

それを転がって回避し、男の元へと走り出す蒔風。

巨人はそれを防ごうと拳や脚で踏みつけようとするが、蒔風はそれを回避する。

空からはフリードの火炎、地上からだってエリオやキックホッパーたちが飛び掛かっているにもかかわらず、軽くはねのけられる始末。

大本を絶つ。それしかない。

と、そこでビームが蒔風を包み、周囲を爆発させて吹き飛ばす。

その攻撃自体は回避する蒔風。
しかし、そのうちの一本が崩壊した瓦礫へと伸びて行ったのを、彼は見た。

「ッッ！！！」

ドォン！！！

蒔風がとっさに飛びつき、その瓦礫から少女を引っ張り出して腕に抱えた。

あと数秒遅ければ、瓦礫の代わりに少女が吹き飛んでいただろう。

「おい・・・あの人たちを元に戻せ！！」

「無駄だな。もうああなればただの兵器だ。単体ずつに取り分けるのは無理だ」

「テメェ・・・・・！！！」

ドンッッ！！

男に怒りを向ける蒔風だが、巨人の攻撃は蒔風たち五人を的確に狙っている。
大きな体ゆえの死角がないのだ。

どういうわけか、この巨人は背後を飛ぶキャロにも、脇の下に攻撃を仕掛けようとするキックホッパーにも気づいていた。

そのことを影山が疑問に思っていると、目の前の肉が動いた。

巨人に取り込まれた人の、それぞれの顔。
その顔にある目が、一斉にギョロリと開いたのだ。

そのおぞましい姿に、皆が目を見開く。
キャロは叫び声も上がらず、強く歯をかみしめた。

「必死だねェ。翼人はこんな物かい？」

「黙れ！！」

少女をそこらへんに置くわけにもいかず、蒔風が左手で抱えながら、男を右腕で殴ろうと突っかかった。

しかし、男はそれをひらりと回避して少女を指さして笑う。

「その女を抱えたままじゃ、俺に勝てんだろ!?はは、厄介だねェ。まさかあれも人だから殺せないとか思ってんじゃないか!?何度も言うが、あれは人じゃねェよ!!」

「・・・どういうことだ」

「そのまんまの意味だ。なにもオレの感性が、人を人と見ないからってわけじゃねェ。あれはホントにモノなんだっつの!!」

男が言う。

あれは本当に人ではない、と。

だったらロボットか?

いや、それはない。

街中で見たあの姿は、動きは、明らかに人間の物だ。

とてもではないが、命のないモノの動きとは思えない。

しかし、男はそれを聞いて馬鹿にした笑いをした。

「脳味噌の中身ってのは電気信号の塊よ。じゃあもし「死体の脳みそいじってそれをもとに動く」ように改造したら、どうだ！？」

その言葉に、目を見開いた。

この住人達は、すでに死人。
街中で動いていたのも、祭りではしゃいでいたのも、すべて。

問われれば答える。
動けば反応する。

しかしそれは脳と体に残った、生前の電気信号データをもとに構築されたプログラムで動くだけのものだ。
だから同じ問い掛けや反応には、同じようにしか動けない、反応しない。

死後すぐの死体をもとにし、さらにその記憶をもとに行動を設定しているなら、気配があっても当然だ。

しかもデータは、死んだ直後にいじらなければ失われる。

つまりこいつらは、この街の住人が死にいたるその瞬間まで待機していたのだ。

否、むしろそれよりも、この街を壊滅させたのがこいつらだったとしたら？

あの通報の電話は、決して日常の一風景ではなかったのだ。

非日常からの、助けを求める声だったのだ。

「お前らは・・・・この街を・・・・」

「おぉっと、俺は見てただけだからな？指揮とったのは別の奴、実行犯はそいつの持つ実験体さぁ」

こいつらはこの街を壊滅させ、住人を皆殺しにして、使えそうな死体に処置を施して偽りの街を作り出したのだ。

使えないほどに破損した死体は地中に埋めた。

損壊した町は処置を施した死体を総動員で修復させた。

その後、訪問者が来た時の対策マニュアルを作り上げ、やってきたものを捕えるシステムを作り上げたのだ。

そこで初めてやってきたのが、蒔風たちだった。

よく考えると、この街を囲うポールの話も、最初からおかしかったのだ。

少女は言った。

昔、この街を怪鳥から護るためにネットを張っていたものだと。

しかし、ポールは街の外壁をしっかりと囲っていた。

この街がここまで大きくなったのは十数年前だ。そんな昔には、まだこの街はこんなにも大きくない。

この街は、来たその時から偽りであり、すでに死んだ街だったのだ。

「じゃああの人たちは」

「だから、もう死んでる。昼に見せたのは、生前の記憶をもとにしたもの。今は、忠実に動く兵士で、混ぜればあのとおりよ」

そういって巨人を指さす男。
直後、真面目な顔をして蒔風にこう言ってきた。

「で？買ってみるかい？」

「なんだと？」

「死んだとしても、その者の力をそのままに再生！しかも反抗しないし、いざとなればスイッチを切れば元の死体。そんな兵士、いかがでしょうか？」

男は、なんとここにきてセールストークを始めてきた。
これだけの兵器、買うのは手だぞ、と。

「お前の組織は・・・・」

「兵器開発を主軸としたもんでね。死の商人、っていったらわかるかい？」

そういって、値段やらなんやらをべらべらと話し出す男。
これだけしゃべっても組織のことは大して言ってないのだから、大したものだが・・・・

と、そこで蒔風が腕に抱えた少女にハッと気づき、首元にそっ、と手を当てる。

そして、感じた。

静かな脈
上下する胸

生きている

「ああ？あーそうそう、そいつね。そいつだけは生きてるよ」

その男の言葉に、蒔風の顔が少し緩んだ。

よかった、と

しかし、直後その表情は、男の言葉で変化していった。

「「あの実験体」の知り合いらしくてよ、うちの施設まで乗り込んできたんだわ。こっちも「最終実験」の前日で面倒だったからな。「これに耐えられたら解放してやるよ」って言って地獄のような鍛錬をさせたのよ。耐えられたらいつもの日常を返して、とか言ってたな。どうせ死ぬかと思ってた実験だが、ところがどっこいそいつは死ななかったのよ。うちの組織は約束は守るもんでな。お望み通り「日常」ってやつを返してやったよ！」

そして、腕を広げて笑った。

「あっはっは!!とうに死体の人間に話しかけて、元気に応えるそいつを見んのは楽しかったぜ!!ま、どうせ気づいてもその首輪でコントロールできるしな!!」

それをきいて、蒔風が無言で少女の首輪を掴み、破壊した。

「ん?あ~あとっちまいやがってんの。そいつにとって現実を知る方がずっとずっと残酷なんだぜ?それをわかってやれよぉ~」

「だまれ」

「それによ!!コンソールをちょちょいといじればその女もこの街も、一発で粉々に吹っ飛んで」

ザン!ボト・・・・

「・・・・へ?」

「黙れと言っている」

男の間抜けな声と、蒔風の言葉が静かに聞こえた。

見ると、蒔風が少女を腕に抱えながら、男の左腕を刀で見事に切り落としていた。

血がプシューと噴き出して、その数秒後になって男の脳がやっとそれを認識した。

「ぎゃぁぁアアアアアアアアアア！！！」

「ベラベラベラと・・・実に不快なことを言ってくれる口だ」

「ぐぅぅぅぅうあ！！！」

ズンッッ！！

男の言葉に反応してか、蒔風の背後に巨人が立つ。

拳を振り上げ、即座に蒔風をつぶそうとするが、振り向きもしないで蒔風は叫んだ。

「こんなにタダで貰えませんよ!!お金払いますって!!!!」

そしてその叫びに、巨人はビタッ!と、揺れて止まった。

「あらいいのよ」「そんなん気にすんなって」「じゃあもらおうかな、あはは!」「お客さんなんだからもらってもらって!」「そっちがそう言うならしょうがないね」「いらんいらん!!」「持ってちゃいなよ」「おにーさんあげるー!」「いらねぇって。もってっとけ!」

直後、巨人を構成する人々が一斉にしゃべりだした。
どうしたことかと目を見張る男だが、蒔風は当然だと言って鼻で笑った。

「これだけの人数を一つにまとめて動かしているんだから、各人の意志が統一されてなきゃまともに動けんだろう?バカかお前」

そういって電王に少女を預け、バサァ！と翼を広げて男にコツコツと歩み寄っていく蒔風。

コンソールが離れたせいか、翼人の力を押さえている磁場は消えていた。
ただし、まだ街を包むバリアは消えていない。

「さて・・・何だったかな？」

「ヒィッ！！」

男が小さな悲鳴を上げる。
肘から先のない左腕を必死に握りしめ、それでも喚かないのは目の前の恐怖が大きいからか。

バリアからのうっすらとした光の逆光で、男には真正面にいる男が真っ黒に見えた。

開かれた翼が斜め上に向かって広がり、内側にギシギシと湾曲して

いる。
男の正面はすべて逆光の陰で黒く染まってよく見えない。
ただそんな中で、見開かれた眼光と、怒りに哂う口元だ下が、はっきりと見える。

「どうした・・・・もっとしゃべれよ・・・・・」

コツ

「う、うぁ・・・・・」

コツコツ

「あれだけ得意げだったじゃないか。あの子をどうするかとか、街を何かするとか。面白いからもっと聞かせてくれよ」

蒔風が一歩歩むごとに、男の表情が恐怖に歪んでいく。
男は今、「死」という物を目の当たりにしていた。

「わかるか?それが「死」だ。なに、わからなくても気にするな。これは軽い予習だから」

「な、なん・・・・・」

「今から、お前が体験することだよ。じゃあな」

そして、蒔風が腕を振り上げ刀を振りおろし・・・・・

「そこまでだ、兄貴」

その腕を矢車（キックホッパー）が止めていた。

「矢車さん」

「それ以上はいいだろう。この男に地獄なんぞもったいない」

「・・・・・ああ」

そういって、蒔風が腕を静かにおろし、キックホッパーが腕を放す。

「悪い・・・」

「気にすんな」

そう短くやり取りし、翼をしまって男を視界から外す蒔風。
それをみて男が気でも抜けたのか、一気にべらべらしゃべりだそうとしてきた。

「はは・・・結局やらないの。あんだけ怒ってたのに、あっさり下がるの！つまりあんたにとってその程度だったとッッ！！！」

が、その言葉が途中で詰まって止まる。
理由は、殺気。
蒔風の物ではなく、矢車によるものだ。

背中を向けるキックホッパーが、首だけ回して男に問いかけた。

「今・・・兄貴を笑ったか？」

「い・・・・・」

「だったら俺のことも」

ワラッテモラオウカ

「ぁ・・・・あ・・・・・」

キックホッパーのマスクが凄まじい殺気を発し、男がついに放心する。
その場に膝をつき、ぺたりとしゃがみこんでしまった。

「見苦しいとこ見せた。すまん」

「い、いえ・・・・」

エリオやキャロにそう声をかけ、蒔風が疲れたように顔に手を当てた。

ジーク、矢車、影山も変身を解き、大丈夫かと蒔風を案じた。

あれだけの殺意(もの)を飲みこんで、そして何もしないというのはかなり

堪えるはずだ。

心に重くのしかからなければいいが・・・・

と、そこで地面に落ちた男のコンソールがカタカタと動き出した。

「！」

それに反応した時には、すでにコンソールは機能を発揮していた。

男の腕を離れ、ポーンと飛び上がるコンソール。

高さは人の胸くらいか。

と、そこでクルクルと回転し、全方位に人差し指くらいの針が全方位に発射された。

「畳返しッッ！！」

バンッッ、ズカカカカカカカカカカカカッッッ！！！！

その無数の針の猛威を、蒔風が畳返しで地面を起き上がらせて壁にして防ぐ。

その向こう側から、ズシャリという何かが地面に倒れる音がした。

「な、なにが・・・」

「見に行かない方がいい」

エリオが一体何なのだろうと壁の向こうを見ようとするが、矢車がそれを制して向こう側へ行き、男の死体にそこら辺の布をかぶせた。

すると地面に落ちたコンソールが再び光り、一人の男をホログラムで映し出した。

『やあ、「ＥＡＲＴＨ」の諸君かね？』

その男が、話しかけてきた。

罠か？

矢車はすでに民家の影に隠れ、蒔風は畳返しの壁から様子をうかがっている。

『突然の攻撃は失礼した。しかしこちら側としてもそいつの口は封じなければならなくてね』

しかし、男はそれにもかかわらずそのまま話を進める。

『こうしてばれてしまった以上、その街はもう不要だ。好きにしていい。君らにしても、「ＥＡＲＴＨ」のデータはもういらないのだよ。まあ、銀白の君のデータは不十分なのだがね』

「どういうことだ」

そこで蒔風が応えるが、男の姿は消え、代わりに助手らしきショートヘアの女性が現れてきた。

『データはすべて破棄したので何も残ってないと思います。ご了承ください。あと、バリアはこちらからもそちらからも解除は無理ですので、外からの救助が来るまで我慢してください』

「おいふざけんな！！テメェら一体・・・・」

『では』

プツン

一方的にそれだけ述べて、ホログラムは消えてしまった。
蒔風がコンソールを拾い上げてみるが、プシューという音がして中の回路が焼けてしまった。

「手がかりは消されたか・・・？」

「どうする？」

「バリアの起動装置は街の外だし・・・・」

これからどうするか、と話し合う一同。
キャロは疲れてしまったのか、フリードの背中で少女と一緒に眠っている。

このバリアの起動装置が外にある以上、やはり救援が来るのを待つしかない。

ポールを破壊しようにも、一本破壊するとそこをすっ飛ばしてバリアが張られるので意味がない。

しかもバリアはパッ、と変わるのではなく、ズズズ、とずれて収まるのでどうやっても最終的に潰されてしまうのだ。

だから、待つしかない。

あと数日間はここにいなければならないと霹靂する彼ら。

が、そこでウゥゥゥゥウウウウン・・・・という何かがダウンする音がして、街を覆うバリアが消え去っていた。

「お？」

「バリアが消えたーよ？」

「停電でもしたか？」

そんなことを言う彼らだが、そこに一人の少女が走ってやってきた。

「蒔風さん！エリオさん！キャロさん！」

「「セッテさん！」」

「セッテぇ！！どうしたこんなとこで？」

そこに現れた少女、かつてのナンバーズ7のセッテが、このバリアを破壊してきてくれていたのだ。

彼女の持つ武器「ブーメランブレード」には、バリア破壊機能がついている。

各地を旅する彼女は偶然にもこの地を通りかかり、そこであのバリアを見たのだ。

何かあったと思い駆けこんで来れば、この有様である、というわけだ。

そんなこんなで蒔風が車をだして、皆を乗せて荒野を走らせる。

見張りに獅子天麟の三人を置いたので、おそらく荒らされることはないだろう。

この街での一件は終わった。

彼らはいったん、帰っていく。

次の戦いに備えるために。

to be continued

外道技術（後書き）

なんだかナァナァになってしまった気がするが大丈夫だろうか・・・・

相手の外道技術、そして唯一の少女救出

男に関しては名前も何も決めてません。

とりあえずクソ野郎ということは解っておいてくださいｗｗｗｗｗ

あれだけ武器、技術を持った敵とは一体何なのか。

彼らの目的は兵器開発です。
だからこうして「ＥＡＲＴＨ」にも勧めてきたんですね。

まあ無論無駄でしたが

少女の身に何があったのか、組織は一体何をしようとしているのか。

それは追々、説明していきたいと思います。

ちなみに「あの実験体」というのは日常編の最後に街を焼いていたあれです。

ホログラムの男は例のショーヘアフェチですね。

次回は・・・どう進めるか決めてないや（エー？

ではまた次回で

街の終わり・情報集め

事件の翌日。

といっても正確には事件のあった晩に帰り、日が昇ってから再びやってきたのだが。

街に入った「ＥＡＲＴＨ」は、即座に調査を進めた。

蒔風たちのつかまっていた地下牢
街を囲うポールと、街の外で発見されたバリアの起動装置
男の死体、そして住人達
回路は焼けてしまったが、男の使用していたコンソールも調べている。

だが、そこから見つかったのは兵器そのものだけであり、機関に関するデータは何一つ残っていなかった。

――――――

「あるんだよ」

「へぇ、これはすごい銃だね。一発が決め技クラスの威力を持ってるよ」

「当たったら一巻の終わりってことか・・・・クソ」

手に入るのは、武器の情報のみ。
決して機関に関するものはなかった。

そして、一番目立つ「兵器」の処理に、蒔風が向かった。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・キツイな」

その巨人を見上げるのは、蒔風、エリオ、矢車の三人。

巨人はあの時からショートでも起こしたのか、ピクリとも動くことなく停止していた。

男曰く、これはすでに死体だ。
これからはどうあっても救えない。

悲しい哉「救えるものは根こそぎ救う」ということは、救えない者は救えないのだ。

だから、彼らはこれを処理するしかない。

このままでは腐ってしまうし、そうなってはこの地域に伝染病やらが流行ってしまう。

蒔風が「火」を居合で構えて巨人の視点になっている部分を見る。

腰のあたりの一点。
そこを崩せば、この巨人は倒れるだろう。

タンッ、と軽く跳躍して、右手でその部分に抜刀する。

「すまん」

そう一言短くいって、蒔風が切り抜く。
その部分に在った人は、見覚えのある顔。

蒔風が抜き、刀が当たろうとする、瞬間

（がはは！大丈夫だ！）

「ッ・・・・・・」

そんな声が聞こえ、蒔風が辛そうな顔をする。

そして、巨人が倒れた。
バラバラと一人一人に分かれ、地面を埋め尽くしていった。

そこから蒔風は無言だった。

土埃で地面を掘り、そこに一人一人を埋めて、木の板を立てて墓にする。

「大丈夫？・・・・何言ってんだよ・・・・・」

必要なものを持ち帰り、街は閉鎖。
もうこの街を訪れる者はいない。

――――――

「アリス、どうだ？」

「ええ・・・これは間違いなく翼人を抑えるための装置です」

「ＥＡＲＴＨ」の一室で、アリスが蒔風を抑え込んでいたブレスレットを調べていた。

この世界に、彼女ほど翼人に精通した者はいないだろう。

と、言っても彼女とて決して専門家ではない。

管理者ゆえに多少の知識を持ち合わせているだけだ。

「だからこれ以上のことは解らないですね・・・・」

「そうか・・・だったら他をあたってみるか」

「他、ですか？あの少女はまだ無理だと思いますが・・・・・」

街で救助されたあの少女は、今「ＥＡＲＴＨ」の保護に入っている。

あのあと時空管理局から「身柄を寄越せ」と明らかに高慢ちきな、ストーリーに出せば必ずアンチが出てきそうなお偉いさんが言ってきたが

「知るか」

の一言で蒔風がぶった切った。

あっちとしては最初の通報を聞いたのは自分たちだから、というらしいがいまさらである。

蒔風はさらに「協力する気がないのでしたらお引き取りください。なお、通報を受けたオペレーターが何らかの処分を下されたら、そちらの方にそれなりの損害が出るであろうことをここに明言しておきますね？」と言って重圧もかけておいた。
これであの人たちが憂さ晴らしで何かされることもあるまい。

時空管理局とて一枚岩ではない。
善意ある者に預けても、どこで悪意ある者に掻っ攫われるかわからないのだ。

「信頼してないわけじゃないんだけどね」とは、蒔風の談。

ちなみにこの話をしていた時、蒔風の後ろにはやてがいたのだが、
しっかりとガッツポーズをとっていた。
このタヌキめ。

「あの子のことじゃない」

と、ここで話題を戻し、蒔風がアリスの返答にこたえる。
彼の頭には、何人かの心当たりがありそうだった。

――

「翼人、ですか？」

「そそ、夜天の書を作った人。前に話したやん？」

そこでまず蒔風が話を聞いたのは、夜天の書の管理人格・リィンフォースだ。

確かに結構前、蒔風は彼女から翼人の話を聞いた。

「ええ、確かに夜天の書の製造者には赤色（せきしょく）の翼人がいましたね。ですが、私が知っているのはそこまでです」

「わからない？」

「すみません・・・・夜天の書もその後何者かによって改悪されてしまったので、そこより過去の記憶が・・・・」

「あ、すまんすまん。そっか～」

そういって、蒔風がリィンフォースと別の話題を二言三言話し、次の心当たりに向かった。

ーーー

―――――――――――――――――――――――――――――

「翼人のことじゃと？」

蒔風が次に向かったのは、観測者「卑弥呼」のもとだ。
筋肉ムキムキのそっち系おじさんだが、決して悪い人ではない。

「そうじゃの。確かに知っておるぞい」

「どんな話かな？」

「前に話したのとそう変わらんよ。凶悪な翼人がおって、儂らがそれを封印した。それ以上のことはないのう」

「うぅ～む・・・・その時翼人の力を抑え込んだりとかは、しなかった？」

「したくてもできなんだ。じゃから儂らは死力を尽くしてあ奴を抑え込み、封印したんじゃからな。その生き残りも、儂一人じゃ」

よほど昔のことなのだろう。
遠い目をして語る卑弥呼には、いつもにはない哀愁が漂っていた。

―――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

「そうですね・・・・僕たちはある世界を追われ、追放された一族なのです」

「ああ、その角でか」

「う、ズバッと言いますですね・・・・」

「いやいや（照）」

「ま、その途中で僕らは力尽きようとしていました。なにぶん、放り出されるなど初めてでしたので右も左もわからなかったのですよ」

「ほうほう」

「そこで、一筋の光が僕たちを導いたのです」

「へ？光？」

羽入が言うには、翼人を直接見たわけではないらしい。
ただ、そこには羽根が舞っていたので「ああ、翼人が助けてくれたんだ」と思っていたらしい。

「まあ、そんなことできんのは翼人くらいだけどね」

「だから僕も大したことを知っているわけではないのですよ」

「そっか～・・・すまんな、急にやってきて」

「いえいえ。その代わり、今度シュークリームくださいです」

「ああ、今日のことを忘れられるような飛び切りの物をな」

「？」

教室に帰る羽入。

十分後、ギニャーーーー！！という悲鳴が聞こえてきて、蒔風が敬礼してから帰って行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ダーメだ。翼人つながりからは情報ないなぁ・・・」

食堂でグテッ、とする蒔風だが、ほかのメンバーも大体そんな感じだ。

この事件を担当しているのはあの町に言ったメンバーと、ほか数人だ。

「ＥＡＲＴＨ」全体が動き出すほどにはまだなっていない。

と、そこにはやてがやってきて「となりいい？」と聞いてきたのでジェスチャーで「どーぞ」と勧める。

「なあ、やっぱり時空管理局とやった方がいいんとちゃう？」

「やだ。あのおやじさんが出てくるだろ」

「あー、まああのおっちゃんはなぁ・・・・・」

二人が少女を引き渡せと言ってきた男を思い出し、嫌な顔をする。
あんな人もまだいるのか、と思ってしまう。

「まあその分「ＥＡＲＴＨ」だったら自由にできるからうちらも気分いいわ」

「建前とか気にしなくていいからな。あと、無茶だけはさせないし」

「うちはいいんよ？」

「お前のそういうところがだめだっての」

たらこスパゲッティをクルクルとまわしながら、蒔風がのそのそと答える。
それにたいしてはやても「まあそうやねー」と呑気に応える。

「・・・・「兵器」っちゅー面から、今シグナムとアギトが調べを回してくれとる。昨日もスカリエッティのところに聞きに行ったば

かりや」

「交換条件出されなかったか？」

「いや、何も知らないからそんな話にもならんかったって」

「スカリエッティが知らない、か」

「他にもフェイトちゃんとかティアナが過去に捕まえた犯罪者とか調べたんやけど、全然や」

「そっかー・・・ん？」

「どしたん？」

「そうひえはさ、もはて」

「食べながらしゃべらんの」

「あい（ゴクン）・・・彼女に話は聞いたか？」

「彼女？」

ーーー

「やあ初めましてかな？マグネスさん」

「初めまして、蒔風さん。私のことはルネッサでいいですよ」

「りょーかい」

翌日、蒔風が訪れたのはルネッサ・マグネスの執務官補佐室。

直通した隣の部屋では、ティアナが他の事件の書類を読んでいる。

「いきなりの訪問すんません。そっちも事件があるというのに・・・・」

「そちらもそうなのですから、お互い様ですよ」

そんな簡単な自己紹介と会話をし、早速本題に入っていく。

「え、トレヴィアのことですか？」

「うん。考古学者だったんでしょ？しかもイクスを発見するだけの

優秀な」

「そうですね・・・でもわたしはトレヴィアの仕事のことは、何も知らなんですよ」

まあ、それはそうだろう。

戦争孤児だった彼女がトレヴィアに拾われたのが子どもの頃。

十代後半にはすでにトレヴィアと別れ、管理局で働いていたらしいから、彼の仕事に関する内容は知らなくても無理はない。

だが

「むかし、彼と一緒に住んでいた場所なら、多分・・・・」

「どこ!?」

「内戦の絶えない次元世界、オルセアです。出来れば私も行ければいいのですが・・・・」

「いやいや、地図さえくれればそれでいいさ」

そういって、小さな端末で地図のデータや、諸々の必要な情報を受け取る蒔風。

よしよし、と笑顔の蒔風だが、その蒔風にルネッサが警告をしてお

く。

「オルセアは時空管理局の干渉を拒む地域です。いわば非加盟世界。十分気を付けてください」

「わかった」

自分も間に合えばあとから行く、と最後に言ってくれたルネッサと別れ、蒔風が部屋を出て行った。
一瞬だけ静かになって、少しだけ心配するルネッサ。

「ふぅ・・・・何事もなければいいのですが・・・・」

PiPi

「ん？どうしました？イクス」

『えっと・・・来週学校で、授業参観という物が・・・』

バンッッ！！

「ランスター執務官！！！とっとと捕まえに行きますよこのゴミ野

郎を！！」

「え？ちょ、ルネ！？」

「今日中に捕まえてさっさと仕事終わらせましょう！！」

「ま、まって？まだ情報がまとまってな「ここです！！」ナンデワカルノ！？」

「カン！！」

さあ、授業参観まであと三日。

ルネッサ・マグナスの戦いが始まった。

――

情報は得た。

と、言うかこれにすがるしかない。

蒔風が準備し、翌日には出かけていく。

目的地は次元世界オルセア。

内戦が今でも続く、無法地帯のど真ん中である。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

街の終わり・情報集め（後書き）

手がかりさがし、聞き込みじゃァ！！
足で探すのが一番でっせ！！

翼人関連からの情報は得られなかったが、兵器という面から簡単に来ましたね。
と、言うかこれが情報になるかまだ確定していないのですが、いちるの望みをかけてですね。

さて・・・オルセアの設定、サウンドステージ聞き直して思い出さなきゃ！！
無かった気がするけど、一応聞かなきゃ始まらぬｗｗｗｗ

あと、何気にイクスはルネッサの元で暮らしてます。
あの後どう収拾つけたのか不思議だ・・・・・

次回、オルセアにゴー！

ではまた雑記！！

現在作者、仮面ライダーＢＬＡＣＫを順調に視聴中です。

これを見終われば作者は結構な仮面ライダーシリーズを見ていますね。

今のところ

仮面ライダーストロンガー（ＴＶのみ）
仮面ライダースーパー１（ＴＶのみ）
仮面ライダーＺＸ
仮面ライダーＢＬＡＣＫ（視聴中）
仮面ライダー真
仮面ライダーＺＯ
仮面ライダーＪ（仮面ライダーワールドも）

平成仮面ライダーすべて（劇場版・スーパーバトルビデオ込み、ネットムービーはキバだけ見てない）

ですね。

もうコンプリートできるんじゃないかというｗｗｗｗ

このまま全部見てやろうかｗｗｗｗ

と、いうわけでだからなんだという雑記でしたｗｗｗ

ではまた次回

悪い子登場

次元世界オルセア

数十年前から南部諸国での内戦が絶えない世界だ。
時空管理局もこういった世界に公的支援を送ることで内戦を止めようとすることはしていたのだが、この世界はそれを拒否し続けているらしい。

蒔風たちが降り立ったのは、そんなオルセアの中でもまだマシに機能している場所の次元空港だ。
ただ・・・・・

［Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ――Ｏｌｓｅｒｅ］

正規の手段は踏んでいない。

「よっと・・・・到着だな」

空港の隅、周囲から比較的見にくい場所に、ゲートから蒔風が出て

きて、銃痕がいくつかある空港内の待合ベンチに座った。
その五分後、違う場所から今度はフェイトが、またその五分後にランサーがやってきた。

おそらく、空港にも内戦に組している人間はいるだろう。
そしてその人間は、この世界にやってきた人がどんな人間か、データをどこかに送っている可能性を考えると、律儀に航空券など買っていられない。
そのデータから時空管理局やら「ＥＡＲＴＨ」やらの人間が来たと知られては、後々面倒なことになりかねない。

「まあこうやってきてるのも問題なんだけどね・・・・・」

あはは、と笑いながら、フェイトがこの方法を褒めるやらなんやらしている。

今回のメンバーはこの三人だ。
当然私服で来ているし、適当なものを取って来たので上等なものはない。

こういった調査には執務官の仕事でなれているフェイトに同行を頼み、あと一人くらいはほしいと言ったところでランサーが逃げてき

たように駆け込んできたのだ。
おそらくは鬼（カレン）シスターから逃げてきたのだろう。

内戦が激しいのはこの世界の南部諸国だ。
空港があるのは北部よりの地域。

ここから南部に入る。

「直接行ってもよかった気がするけどなぁ」

「多分街には見張りがあるから急に出てきた人はばれちゃうし、出てくるところを見られるのはまずいよ」

幻術を張って周囲の意識を攪乱させたうえで、蒔風が車を出して三人がそれに乗り込み、荒野を南に進む。

そっちの方向に向かう車は一台もない。
代わりに、その道の両脇には爆破でもされたような跡を残した、錆びた廃車が打ち捨てられている。

「で？これからどーすんだ？」

よく内容を聞かされていないランサーが、運転する蒔風に向かってそんなことを聞いてきた。
彼も一応、あの町での事件の話は聞いているのでそこは省き、ルネッサからの情報の話だけした。

「なるほどなぁ」

「で、それがここ」

そういうと運転席と助手席の間の、普通ならカーナビが取り付けられる場所から宙にモニターが現れてオルセアの地図を表した。
そこには目的地の青い点と、自分たちの車の位置を表す移動する赤い点が映っており、もうそろそろ南の地域に入り込むことを表していた。

「オルセアでバトってんのはこの三国。名前は・・・うげ、長くてめんどい。適当に右上を「バカ」左上を「ボケ」下を「クソ」と命名しよう」

「酷ぇな！」

「ちゃんと読もうよ・・・・「バルガソウスベラ・カラッソス」と「ボルボダロングス・ケルッツァーリン」と「クックレリオウデリュス・ソーベクラウン」でしょ？」

「じゃあ前後の頭文字で略して「バカ」「ボケ」「クソ」だな」

「か、変わらない・・・・」

「ま、その方がわかりやすいわな」

自分たちが勝者だと信じて止まない指導者たちが、自国に偉大な名前を考えたらそれも対抗しあってこんなに長くなったらしい三国の名前を、便宜上適当に決め、話を進める。

地図を見るとこの三国は逆三角形の形をしており、それぞれを蒔風が言った通り右上、左上、下の三つに分けて所有している。
今蒔風たちはとりあえず分かれ道がないので真っ直ぐに走っているので、このままだと「バカ」と「ボケ」の間に入ることになる。

そしてトレヴィアの隠れ家というのが「クソ」の奥地にある遺跡らしい。
そこで彼は生活と発掘を同時に進めていたようだ。

「だから俺たちは「バカ」か「ボケ」かのどっちかを通過していかなきゃいけないわけなんだが」

「そうだな」

「まあ向こうがここを通る車を素通りさせてくれるわけもな、くッッ！！」

ギャォッ！！

そこで蒔風が急にハンドルを切り、直進していたところを右に逸れた。

するとあのまま直進していたら車がちょうどいたであろう場所に、ヒュルルルルルル・・・とミサイルのような魔力弾が飛んで来て爆発、地面をかなり吹き飛ばした。

「そぉらきた！！」

「お？爆撃か？」

「このままだと・・・・」

「「ボケ」だ！！」

その後、絶え間なく振ってくる爆撃の嵐を、蒔風が車を飛ばして一直線にばく進していく。

「こ、この車大丈夫!?」

「防弾使用だ!!」

「けどあれに当たったらひっくり返されちまうぞ!?」

爆撃のほかにも小さな魔力弾の一斉掃射も受けている車は、少しずつその形を変形させられながら「ボケ」の方へと突っ込んでいく。

もう少し、もう少し!!

街の中にまで爆撃が来ないとは限らないが、とりあえず飛び込めば何とかなるかもしれない。

そう（実に行き当たりばったりな感じに）思った蒔風が、車のアク

セルを踏み込んでいく。

時速がどんどん上がり、国の中に入れる！！！

そのゲートが見え、ラストスパートだと蒔風がこれでマックスだ！！と思い切りアクセルを踏んだ。

すると

バキン！

そんな音と共に、蒔風の体がガクンと揺れ、同時にドンドン青ざめて行った。

「ど、どうしたの舜！？」

「ふ、踏み込んじゃった」

「え？」

「アクセル踏みすぎて・・・・・」

クイッ、クイッ

「車の床、踏み抜いちった（滝汗）」

「「えええええええええええええええ！？」」

蒔風の足元を見るとそこにアクセルはなく、穴が開いていてその先に流れる地面が見える。

この男、力みすぎて踏み潰しやがったのだ。

「ど、どーすんの！？」

「わからん！！ブレーキも効かないし！！」

「飛び降りるしかねぇじゃねぇか！！！」

「「「うおオオオオオオオオオオオオ！？」」」

バッ！！ガシャァッ！！！ドゴンドコン！！！バキバキバキ・・・・・・

咄嗟に車から飛び降りる三人。

車はというと、そのまま街の方へと突っ込んでいった。

車対策のまきびしを越え（パンクしないから意味無し）
バリケードを突破し（衝撃で車が浮く）
フェンスをぶち破り（浮いたところからのダイブで）

そのまま着地、止まることなく街の中を爆走していった。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・あ～あ」

「「あ～あじゃないよ（ねぇ）！！」」

おそらくは車の方に目が向けられているのだろう。
三人の方には誰ひとりとして来ない。

あ、今町中から爆発音と火柱が上がった。
多分爆破されたのだろう。

しかしこうなってはもう「ボケ」には入れない。
仕方なく三人は「バカ」の方へと歩いていき、そこから国内に入って行った。

ーーー

蒔風たちが入ったのはバルガソウスベラ・カラッソス、略称「バカ」（命名・蒔風）だ。

門というかフェンスの扉というか、そこをとおって普通に入国する三人。

すると

「おい兄ちゃん」

「ん？」

そこに、四人くらいのヤンキーが突っかかってきた。

うち二人は肩からアサルトライフルを掛け、残り二人は豚でも解体するのかというほど大きなコンパットナイフをちらつかせていた。

そして、その真ん中にいた蒔風に向かってこんなことを言ってきた。

「俺たちゃここの門番でよ。通りたきゃ賃金置いてきな」

明らかなからみである。
当然、彼らも門番などではない。
しかし

「あ、そうですか。いくらですか？」

蒔風は律儀にそんなことを聞いた。

その言葉に「え！？」となるフェイトとランサーだが、蒔風は至極普通だ。
まあ当然と言えば当然だ。

多くの世界をめぐり、戦ってきた彼だが、こんな地域に足を踏み入れるのは初めてである。
“Ｎｏ　ｎａｍｅ”であった彼の世界では、こんな争い事はテレビの中か、小説、漫画の中だけだったし。

だから「ま、現実ならこんな門番もいるのかな」と変に理解してしまったということ。

一方、蒔風の質問にぎゃはは と笑いながら、男が応えた。

「そうだな。まず持ってる金目の物は全部出してもらおうか」

「普通に現金しかないが？」

「じゃあそれ全部だしな」

「あとそっちの女もよこしな」

金を要求し、さらにフェイトにまで目を付けてくるあたりは予想通りというかなんというか。
欲望に忠実な奴らである。

「見ろよ。でけぇ乳だぜ」

「顔も最高だ。いじめたくなってくるぜェ」

銃に肘を乗せ、それを持った二人がそんなことをコソコソと話している。

それをきいてフェイトが胸を押さえて真っ赤になるが、蒔風が肩にポン、と手を置いて気にすんなと言う。

「まあ君たち待ちたまえ。とりあえずフェイトをいじめたくなる気持ちもわかるが待つんだ」

「わかるんだ！？」

そんなことを言う蒔風にフェイトがえぇ～！？という顔をするが、まあ冗談だよね？と思い直してランサーの方を向く。

ランサーは見事なフェイトの胸に向かってサムズアップしていた。

フェイトは強く生きようと心に誓った。

「だがまあ、金はともかくこの人は上げられないな」

「あん？何お前逆らうの？」

「やられちゃう？やられたいの？」

「まあ渡してもぶっ殺しでしたけど！！」

やっぱり・・・という顔をして、フェイトとランサーがどうしようもない顔をしてヤンキーを眺める。

だが、蒔風は少し顎に手を当てて考え、直後キラキラした目をして二人に聞いた。

「ねえねえ、俺からまれてんの？」

「なに期待感たっぷりでそんなこと聞いてんだよ」

「いやだってさ、俺にこんな対応してくれる人は希少だよ？それにこんな状況は初めてだし！！」

今まで経験したことのない状況に、蒔風は好奇心バクバクだった。
そして楽しそうな、実に楽しそうな顔をしてヤンキーに振り返った。

「うんうん、で？いくら払えばいいのかな？」

「あ！？だから全部出せっつってんだろぉが！！」

蒔風の全くビビらない態度にイラついたのか、ヤンキーが大声を上げて喚きだした。
しかしそれすらも「うわー！テンプレ通りだー！！小説のまんま！！」とか言って楽しむ蒔風。

そして「よしよしわかったよ」といった感じで懐をまさぐって、そこからこの世界の紙幣を取り出して彼らの目の前に見せつけた。

「お、けっこー持ってんじゃん」

「ところで、君らはホントに門番なの？」

「・・・・・ぎゃっはっはっは!!そんなわけねぇだろ。ッバーカ!!」

そういって蒔風の手から紙幣を掻っ攫おうとするリーダー格。
が、その手は空を切る。

「んふふ~だったら君らはただのカツアゲってわけだ」

「おい、それ寄こせよ」

蒔風がひょい、とリーダー格の手を回避し、紙幣を握らせない。
それに対し、蒔風が笑顔のままでこう言った。

「おいおいぃ・・・お金がほしいんだろ?恵んで欲しぃんだろ?だったら物乞いみたいにくださいって言えよ」

超ドSだった。
にやにやと笑いながら、蒔風が言葉を続ける。

「俺はお金を上げる側。お前らはもらう側。お金貰うんだからぁ、くださいって頭下げろよぉ。どうしたの?欲しいんだろ?哀れにも働くだけの能力がないからこうやってもらうことしかできないんだろ?ほらほらほらぁ、人に頼むときには態度ってものがあるだろぉ?」

「でた。ドSモード」

完全に上から目線で、口だけがにんまりと笑う蒔風は悪役にしか見えないほどに悪い顔をしていた。
悪い奴である。

それに対しヤンキーたちは、少しずつボルテージが上がっているようでナイフのグリップを握る手に力が入り、銃口を蒔風に向け始めた。

と、そのタイミングで蒔風がポイ、と紙幣を投げた。
パラパラと蒔風とヤンキーの間に紙幣が落ち、それをヤンキーたちは拾い始めた。

が、膝をついてそれに手を伸ばすと、ワイヤーでもついているのか、蒔風の手に紙幣が戻っていく。

そして

「プ、プフー！そこまで這いつくばってお金が欲しいんですかー？プフー！！！」

噴き出した。
口に手を当て、目に涙をためながら。

「て、テメェ！！アゴッ！？」

リーダー格が青筋を立てて、立ち上がって蒔風に掴みかかろうとする。
しかし、その行動は立ち上がったところで止まってしまった。

「おいガキ。調子のンなよ？」

それは、蒔風が銃をリーダー格の口内に、ゴツイ銃身を咥えこませたからだ。
銃口は４４口径というハンドガンとしては大きい方。

「お、これが口に入るなんて、君は大きな口してるねー♪」

「あ、あが・・・・」

「俺はともかく、俺の仲間にちょっかい出すなよ。ゲスなこと考えてんじゃねェバカ」

「は、はひ」

「うし、行ってよし」

その一言で蒔風が銃を降ろした。
それを見た銃を持った二人や、残りの一人が突っかかろうとするがリーダー格がそれを止めて手を出すなと叫ぶ。

そのヤンキーたちの姿が消えると、フェイトが蒔風の銃を指さした。

「舜、銃口を向けるのはよくないよ？」

「大丈夫。これ水鉄砲だから」

そういって、蒔風がトリガーを引くと、先端からは水が飛び出してきた。

そこから街を進んでいき、ほどなくしてホテルを発見。
今日はそこに泊まることにした。

最初のヤンキーを追っ払ってから、絡まれることもない。

蒔風は少し残念そうにしていた。

――――――

翌日、特にからまれることもなく、また国内を進む蒔風一行。
また車を出して襲撃されてはもったいないので（破壊すること前提）、今回は自転車を出して進む。
翼人は便利である。

「さて・・・今日は「バカ」の半分くらいまで来たんだが・・・」

「問題はどうやってあっちに入るかだね」

街をそろそろ抜けるところで、蒔風が地図を出して現在位置と目的地を確認する。

今はバルガソウスベラ・カラッソスの一番南の街の一番南にいる。
わかりにくい表現だ。

「この先の荒野を抜けっと「クソ」に足を踏み入れるわけだな・・・」

「なんか士気下がるな。「クソに足を踏み入れる」とか」

「命名したのは舜じゃん」

そこら辺の木箱に座って、フェイトが突っ込む。

この先の荒野は基本的には「バカ」と「クソ」の戦闘地域だ。

今は戦闘は行われていないようだが、すぐ見える場所には銃器を持った男が数人いる。

無論、軍人ではないが。

「にしてもこいつらはなんでまたこんな戦ってんだ？」

「昔はいろいろあったらしいけど、今は純粋に食糧が足りないみたいから、って聞いたぜ」

壁に寄りかかるランサーの何気ない質問に、地図を見ながら蒔風が応える。

内戦は長く続いているが、その指導者がいつまでも同じというわけではない。

ほかの国はともかく、今こっちの方の指導者は人口問題に頭を抱えていた。

一見して寂れた町で人数が少ないように見えるが、実は食料の需要と供給が釣り合っていないらしい。

つまり、食料を作る人間が少ないのだ。
しかもあのヤンキーを見て分かるように、内戦しかしていないこの国は戦うことしか知らない人間ばかりだ。
昔はそういった知識人もいたらしく、このままでは国が飢え死ぬと提言していたらしいのだが・・・・

「ま、昔の指導者ってのは本当に戦うことしか知らなかったらしくてな。しかも飢えなど気合いでどうにかしろッつーわけのわからん根性論で反論したらしい」

「飢えを知らなかったんだろうな」

そのままその提言者は国家反逆罪で死刑。
数年後にその指導者も飢餓でが進んだために怒り狂った国民に殺されて死亡。

そして今、食料を奪おうとこの国は隣国に攻め込んでいるらしい。
しかも変なプライドもあり、施しは受けないとして管理局の支援は受けたくないらしい。

いらないところだけ受け継いでしまったものである。

「だから昨晩も今朝も今も、こうして隠れて缶詰食ってるってわけ」

そう言う蒔風の背後にはいくつかの缶詰が転がっていた。
これは後で地面に埋めるつもりだ。

「何はともあれ、この荒野を通らないことにはあっちに行けない」

「でも間違いなく見つかるよ？」

「見晴しいいもんな」

そう、ここを通ろうにも、目立つ。
目立ったら、間違いなく撃たれる。

次元世界ではあるので質量兵器（銃など）はないはず。
しかし、一応こうして世界の壁はあれど一つの世界に内包された場所だ、あってもおかしくない。

そもそも魔法だからと言って非殺傷にしているわけがないから、当然当たれば死ぬ。

「どうしよっか？」

「抜けること自体は可能だが、それやると向こうでの動きがなぁ・・

・・」

トレヴィアの隠れ家を調べるうえでの障害は少なくしたい。
その為には騒がれずに侵入しないといけないのだが・・・・・

「・・・・よし」

蒔風が思いつき、そしてどっかりと座りこんだ。

「待とう」

「何を？」

「抜けるチャンス」

そんなのあるものかねェ、とランサーが頭を掻くが、大丈夫さと蒔風が応える。

「街中の店を見ると、食料品が少なくなってる。街にいる人たちはくたびれているが、目だけはギラギラしている」

「・・・つまり・・・・」

「ああ。建物の中から殺気も感じるし、そろそろおっぱじめるだろうよ」

ドンドンドンッッ！！！！
わァァァアアアアアアああアアアアアアア・・・・・・・！！！！

と、蒔風の発言の終わりと共に、街から一斉に人々が飛び出していった。

先頭には軍用ジープが走り、人々を引き連れている。

どうやら第何回かもわからないような戦いがまた始まったようだ。

「待ってたのって・・・これ？」

「ああ、さて、行くぞ」

蒔風が立ち上がり、民衆の中に入るぞ、と走っていく。

さあ、侵入だ。

to be continued

悪い子登場（後書き）

ヤンキーの絡みが楽しくてしょうがなかったｗｗｗｗ

さて、オルセアでの一幕です。

今回はかなり少なめにいきました。
よく見れば真ソニックのフェイトさん、最速の英霊ランサー、加速開翼の蒔風と、なんだかスピードメンバーに。
狙ってなかったんだけどなー

直接行かなかったのは、そこがわからなかったからです。
空港なら写真からわかったから行けたんですが、トレヴィアの隠れ家は写真もないので。

第一章で行けたのは世界の導きがあったからということで。

そういえば出ましたよ！！
ガンバライドレジェンドレアのシャイニングアギト！！

マジかっこいい

あと岩石大首領が出過ぎで吹いたｗｗｗｗ

まず最初に当たる
「やった」

二枚目が当たる
「まぁまぁ・・・・」

カードショップでのガチャで当てる。
「ここに潜んでいたか」

友人とガーンバライド！
「また来たか！」

後日友人とガーンバライド
「ま　た　お　ま　え　か！！」

計五枚も来ましたよ。
どういうことなの岩石大首領ｗｗｗｗ

五人も来たら大変なことになるじゃない！！ｗｗｗｗｗ

と、言うわけでこれから友人と遊んできますｗｗｗｗ
今日は二千円かな？ｗｗｗｗ

次回、突破

ではまた次回

レッドカモフラージュ！（前書き）

タイトルがギャグだｗｗｗ

レッドカモフラージュ！

目の前で行われる戦闘。
相手の物を奪い、手に入れるための略奪。

生きるための、殺害。

目の前で行われているこの行為はそういう物だ。

数人が（おそらくは無人格（ストレージ）デバイスを構え、その他大勢は銃器を構えて突っ込んでいている。

銃から飛び出すのは魔力弾だ。
カードリッジシステムに近いものを使ったもので、使用者に魔力適性がなくとも、薬莢に込められた魔力が発射される武器。

相手も同じようなものを持っているようで、飛び出してくる魔法弾や砲撃魔法の色は少ない。

「バカ」の方は大半が黒ずんだ赤
「クソ」の方の大半は鈍色（にびいろ）だ

おそらくは魔力を持った者がそれしかいないのだろう。
他の色の魔力も見えるが、ごく少数である。

「だから俺たちはこの戦いには参加しない。魔力光でバレる」

「助けないの？」

「指導者ども引っ張り出して説教してやりたいが、今回は別の目的があるし、人数も少ない」

「それにこいつはあいつらがバカやった結果の戦いだ。テメェらでケリつけなきゃなんねぇんだろ」

「ま、それもある」

集団に飛び込み、真っ先に（「バカ」から見て）右の林に飛び込んで姿を消した三人がそんなことを話していた。

「林」というよりは「木々が集まった場所」と言った方がいいくら

いの大きさだが。
野球場くらいの大きさか。

そしてこんなとこにこんなのがあれば、当然両者とも罠は仕掛けるというもの。
実際、ここに来るまで二、三のトラップを抜けてきている。

今隠れられているのは、蒔風が幻術を張っているからだ。

その中で、どうやって「クソ」の方へと入り込むかを話している。

「でもよ、この分だとアイツら全員顔見知りだぜ？」

「見慣れない顔があったらバレそうだもんなぁ」

「私は変身魔法は使えないし、舜の幻術で姿消していくの？」

「まあそれが一番だが・・・問題はあっちから見えないから魔法弾が飛んできたときが怖い」

「非殺傷じゃなさそうだもんね」

「だからこうする」

「「え？」」

そこで蒔風が懐から真っ赤な何かを取りだし、それを二人と自分にぶちまけた。

――――――

ここは「クソ」、つまりは蒔風達の目的地である国の医療班のいるテントだ。

医療、と言っても痛み止めに数の少なくなっている鎮痛剤をぶち込んだり、怪我を消毒して包帯を巻く程度しかできない、保健室程度の効果しか持たないものだが。

しかしそんな施設でも次々と担ぎ込まれてくる。
ここに連れてきても無駄な、どうあっても死んでしまう人間もいる。
というかそちらの方が多い。

正直な話、そんな人間を連れてくる方が労力も人員も裂くのでほっといた方が効率がいいのだが、ここに何時連中はそんなことにも頭が回らない、もしくは考えられる状況じゃない。

と、そこに三つの人影が飛び込んできた。

「だ、誰か助けてくれ！！」

それは、全身真っ赤になった蒔風たちだ。
ランサーは腹部を真っ赤に染め、口からもボタボタと血をこぼしている。

フェイトは涙を目に溜め、肩から腕を力なくブラブラさせながら頭から血を流していた。
ちなみに髪は束ねて、男性に見えなくない顔をしている。

そして蒔風は二人に肩を担がれ、ズルズルと運び込まれてきた。
顔面に血をぶちまけ、もう死体同然のように見える。
右足はズルズルと引きずり、グラリと揺れる首が前後左右に揺れる。

「な、なにがあった!?」

「森に引きずり込まれてズタズタにやられた!!」

「あいつらエゲツねェ・・・・人間の仕掛ける罠じゃねェ!!あいつら俺たちを人間と思っちゃいねェ!!」

地獄から帰ってきました、とでも言わんばかりのその姿にその場の全員が驚愕する。

だがそれも数秒だ。
すぐに助からないと知ると、そいつをあっちに置いてこいと二人にいい、助かる人間の治療（という行為）に専念する。

それを聞き、二人が「畜生あの野郎ども・・・・こいつ寝かしたらすぐにアイツらぶっ殺しに行って来らぁ!!」とか叫び、周囲の人間も「やってやれ!!」とか「仇を取ってやれ!」とかいって送り

出していた。

ーーー

顔もそれである程度隠せたので、あの騒動と合わせてうまく通過できた。成功である。

「でもこれはこれで目立っちゃうよ」

「しかもくせぇ」

じーーーーーー

そんな文句を言いながら、蒔風の方をじとー、と見る二人。

顔をゴシゴシと拭き、蒔風が二人のそれに気づき、たじっ、と下がる。

「え、えっと・・・・わり」

「・・・はぁ、まあいいけど・・・」

「いまさらおめぇに文句言ってもなぁ・・・」

「アンガトサンキュー」

「「もうちょっと悪びれよ」」

フェイトの髪についた、乾いてネトネトしたケチャップを摘み取り、ランサーの肩を拭いてやりながら、蒔風がシレッ、という。

と、そこでちょうどよく井戸を見つけ、圧水の力でバスケットボールほどの球体で掬い上げ、身体をきれいにしていく。

「な？な？これで水に流してくれよ。あ、今うまいこと言った」

さして上手いことは言えてない

――――――

あとは目的地まで一直線だ。
ルネッサにもらった地図では、トレヴィアの隠れ家は国の南にある砂漠地帯。そこの遺跡にあるらしい。

「だけど夜に砂漠越えは危険だよ？」

「ま、何が起こるかわかねぇわな」

「そじゃね。じゃー今日はもうどっかで寝るか」

・・・・・・・・

「次の街までは行っとく？」

「「賛成」」

銃声が聞こえ、爆撃が飛んで来るかもしれない街に、宿などあるわけがなかった。

ーーー

ーーー

翌日

国境の近くのあの町から移動し、少し内部に入ったところで宿をとった蒔風たちが、朝にチェックアウトして目的地に向かう。

車を出したのは蒔風だが、今はまた後部座席で眠ってる。

「運転すうよー？」とか眠気で舌もまわらない男に、ハンドルを握らせることだけは阻止した。

そして、三人は砂漠に一番近い街についた。

街の砂漠側はすでに砂に地面が侵食されている。

「舜ー？着いたよー？」

「うぅん・・・おにぎりはネギトロで宜しく。あとファミチキ」

「ファミマじゃないよ？」

ここにあなたとコンビになるお店はない。

車を降りると、人の雑踏が聞こえてきた。

やはりここは戦闘地域から離れているからか、それなりに人も集まり、賑わっているようだ。

とはいっても一面に人、人、人・・・・といったほどではないのが、ここが内戦地域であることがわかる。

この先に、手がかりがあるのか。

それはまだわからない。

もしかしたら何もないかもしれない。

しかし、今は先に進むしかない。

装備を整え、蒔風たちは砂漠に踏み出す。

手がかりは、あるのか

to be continued

レッドカモフラージュ！（後書き）

入国成功！！
この内戦も何やら不穏な空気が？な話ですね。
なんだか大して進んでない気がするｗｗｗｗ

正直他にも侵入の手はありそうなものですが、これでいいだろ、と
蒔風の独断で決定ｗｗｗ
結果的にうまくいくのだから厄介ですねｗｗｗｗ

なにげにランサーもノリノリですし。

ケチャップぶちまけはマジでひどいです。お勧めしません。
ベトベトしてかなわん。

最近ＵＦＯキャッチャーで遊んでます。
店員さんにコツを教えてもらったら面白いようにとれるとれるｗｗ

この間も８つも手に入れましたよ。
まあ８０００円は抱えいましたが、一つ１０００円だと思えば妥当。

リラックマかわいいよリラックマクッション。

次回で砂漠入り、うまくいけばトレヴィアの隠れ家に到着、ですかね？

ではまた次回で

遺跡爆発！！

砂、砂、砂、砂しか見えない。
それしかない。

砂漠に踏み込んだ蒔風たちの目の前に広がる光景はただ砂ばかりである。

日光が上から蒔風たちを照らし、砂で跳ね返って下からも焼き付ける。
光に視界は眩むし、目印が見えないのでこまめに方角を確認して進み直す。

と、普通は三人共にキツイ状況なのだろうが・・・・・

「よ、翼人の翼はこういうのじゃない・・・・」

「涼しくて快適～」

「だな。よっ、さすが！！」

辛そうにしているのは蒔風一人だ。
汗はだらだら、帽子をかぶり、ストールを顔に巻きつけている。

一方、フェイトとランサーは蒔風が開翼した翼を屋根にして、その影で平然としていた。
翼がバサバサしていて、適度に涼しい風も来る。

こうなったのも数分前のこと、蒔風が砂漠に入って大変そうになっている二人を見て、提案したのだ。

もちろん、蒔風も大変なことは大変だったのだが、まあこの距離なら、と甘く見たのが運の尽き。

方向の確認、砂によるスピードの遅れで、思ったよりも時間がかかってしょうがないのだ。

最初の五分くらいは良かったが、そこから一気にツラくなってきた。
しかし「到着するまで俺が何とかしてやんよ」と調子に乗ったことを言ってしまった手前、いまさら「やめていいか？」などとは言えない。

「へぇ・・・ふぅ・・・・」

「おらおら～がんばれ～」

「ほら、もう少しだよ～」

二人も蒔風の口元にストローを持って行って水を飲ませて労をねぎらっているが、何とも気の抜けた声だ。

「おぅ・・・まかせんしゃ～い・・・」

蒔風が力なく答える。

大丈夫、目的地は見えてきた。

ーーー

「フェイト・・・お前それ違・・・もういいや（グテッ）」

そして、ついに遺跡にたどり着いた三人。
蒔風は岩を枕にして、顔にタオル掛けて倒れている。

この遺跡は、巨大な岩をくりぬいてできたような場所だ。

高さ三十メートルはあろうという巨大な岩に亀裂が入っており、そこから入ってすぐのところで三人は休んでいる。
ちなみにここから遺跡は始まっており、この先に神殿のような入口が設けられてるようだ。

組み上げて作った、というよりは、もともとあった巨大な岩に穴があり、そこを削ったりなんだりで作った感じだ。

「こんな感じの遺跡、インディ・ジョーンズで見たぞ」

「あ、思った。そんな感じだよね」

「ジョーンズってのはなんだ？」

テレビとかでたびたびやる映画を思い出し、頭にタオルを置いた蒔

風が一人ごちた。
それにフェイトも共感し、映画に興味のないランサーが「なんだそれ？」と言う顔をする。

「映画だよ、映画。確か聖杯を巡った物語だったな」

「聖杯？」

「お前の知ってるのじゃなく、宗教的にマジもんのな」

「なんだよ」

こっちの方がすごい気がするのだが、それをなんだの一言で切り捨てる男、ランサー。
流石である。

「ま、あくまで映画さね」

「そうそう、この先にあるのはただの隠れ家だし・・・・」

と、そこで踏み込もうとしたフェイトの足がピタリと止まった。

どったん？とフェイトに聞く蒔風だが、直後に理由がわかった。

ここは岩の亀裂の中だ当然左右は壁に挟まれている。
問題はその壁に開いている無数の穴の中から、同じ数だけ銃口が伸びてこちらに向けられているということだ。

「この展開は映画と違うなぁ」

ーーー

数分後、蒔風は壁の中にあった部屋に連れて来られていた。
おそらくはこの遺跡を作る際に使用された奴隷たちの住処だった場所だろう。
そしてそのまま残ったそれを、彼らが使っているというわけだ。

その中でも一番大きな部屋であるここは、目の前のリーダーの部屋らしい。
リーダーの部屋と言っても、彼の個室自体はここの隣にあり、広さも他の物と同じらしいが。
ただこの部屋は今行われていることや、作戦会議などで使われ、ほとんどの時間リーダーがいるため「リーダーの部屋」と呼ばれているというわけだ。

その部屋で、蒔風がリーダーに言う。
先に進ませてくれないか？と

特に縛られたり拘束されていないのは相手の余裕か、それとも自信か。
しかしここで争う意味はない。
通してくれるならそれに越したことはないのだ。

「・・・・お前ら、なんでオレらがここに住んでんのか知ってっか？」

「？」

「なんで遺跡の中じゃなく、わざわざここで生きてるかってことだよ」

「・・・・・罠か」

リーダーが忌々しそうに言う。
この遺跡にはトラップがあるらしい。

今まで何人ももっと住みやすい中を求めて行き、そして帰ってこないか、帰ってきても一部だけだったという結果しかないらしい。

「だから俺たちは奥にはいかない。ここでも十分住めるしな」

彼らは内戦で親を失った。
リーダーはこの集団の中でも古株だ。

そして放浪の末、この遺跡を見つけたらしい。

彼の同期はみんな死んだ。

親の仇を取る
こんな所より街に行く
街じゃだめだ、国を出よう
他の世界に行こう

そういって飛び出したものもいたが、噂にもならないところを見ると、おそらく結果は変わらないだろう。

そして、彼はここに残って孤児たちを連れてきては一緒に暮らしていた。

遺跡を作るために連れてこられた奴隷が暮らしていたこともあって、湧水はあるし、食料も採れる。たまにオオトカゲが出てくるので、それを狩れば肉も食える。ここでは一通りの自給自足が可能なのだ。昔の人さまさまである。

そうしてそのまま残った者が、生活し、もはや一つの街になっているのだ。

「こんなとこに来るやつはいない。武器は死んだ兵士・・・っつってもいいのかわからないけど、そいつらからとった。ここはこの国じゃ一番安全だと言えるかもな」

そう言うのはリーダーで、現にここが襲われたことは一度もないようだ。

「はーん、じゃあ別に盗賊じゃなかったんか。すまぬ」

「いや、まああんな対応したら普通はそう思うだろう」

そんなことを言ってぺこりと頭を下げる蒔風。

が

「だと言っても、俺はまだあんたらを信頼してない」

「え？」

いい感じに話がまとまりそうだったが、リーダーはまだ心は許していないようだ。

その言葉にフェイトが気の抜けた声をだし、ランサーが説明した。

「この話が本当である証拠は何もねぇ。こんな嘘言って適当に帰って、そしてここを奪えばかなりの要塞になるからな。それにもしかしたらオレらは「バカ」か「ボケ」の人間かもしれない。そう考えると、ホイホイ信じるわけにはいかねぇってわけだ」

「じゃあ身分を明かせば？」

「それがいい方に転ぶかどうか、五分五分だろ？」

この世界は管理局の介入を拒む世界だ。

「ＥＡＲＴＨ」だから大丈夫、という保証はない。むしろない方が可能性は高い。

今ある状況から、下手にマイナス方面にはもっていきたくないのだ。

「じゃ、どうすれば俺たちはいいのかな？」

「・・・まあ、遺跡に行くのはいい」

「ありゃ、いいの？」

「どうせ行っても死ぬだけだ。お前らが仮に帰ってこれたら、その時考えてやるよ」

「ま、確かに。でも中に抜け道があって逃げたらどうする？」

「その時はその時だ。まあ、人生なんてそんなもんじゃないか」

「？」

「いつだって、最期にモノを言うのは実力云々よりも「運」ってやつさ」

――――――

「アイツら、何もんでしょうか？」

「わからん。だが、悪い奴らでないことを祈る」

「悪い奴だったら？」

「黙ってこいつをぶち込むだけだ」

そう言って銃をスライドさせるリーダー。

そこに一人の少年が駆け込んできた。

「大変だ！ボルボダロンの奴らが・・・・」

「どうした？」

「こっちの中に入ってきやがった！！バルガの方もやられちまった！！！」

ーーー

それはゲイボルグの先端の炎で、蒔風の獄炎で、バルディッシュのコアの光だ。

少し中に入り、この光が外に漏れないくらいの内部。
思っていたとおりの内装である。

足元は砂まみれ
両脇を石像が固めている

これが映画なら石像が動き出して襲い掛かり、足元の砂が落ちていくところだ。

「大丈夫だよね？」

「さぁ？ま、落ちたら飛べばいいし、襲ってきたらぶち壊せばいい」

そういって、奥に進んでいく三人。
途中途中で人骨が見え、それは何百年以上も前の物だったり、ここ数年の物だったりとまちまちだ。

おそらくはトラップの犠牲者だろう。

「あちゃ～、理樹連れてくればよかったかな？」

「ねェちゃんから貰った地図あんだろ？大丈夫かよ」

「だってこれ見てよ」

ランサーが地図もあるんだから罠ぐらい平気だろうと言うが、それに答える形で蒔風が地図を見せた。

フェイトも一緒になってそれを見るが、二人の顔が固まった。

「ここにトラップ。それを回避するとそこ以外の足場にもトラップ。飛び越えて行ってもその先にトラップ。どこもかしこもトラップ」

「ってことは・・・・」

「とりあえず踏んでけ、ってこと？」

「鬼畜だ・・・・」

どう選んでもトラップだった。

と、そこで蒔風がもうめんどくさいと「林」を取り出して三人を包むようにボールの形にバリアを張った。

まるでハムスターボール、というかまんまそれだった。

「理樹なら壁全部にバリア張れんだけどな～」

「これでも十分だよ」

「これだと落とし穴あったら落ちるけどね」

そういってごろごろ転がしながら先を進む三人。

槍やら魔法弾やらが飛んでくるが、たいていはバリアに弾かれて消える。

そうして歩くこと十分後

ここか、とランサーが呟く。

それは遺跡には似つかわしくない厳重な扉だった。

金庫に使われるかのような扉だ。

ルネッサの話とも合う。

そして、そこを開いた。
そこには――――――

ーーー

その間に蒔風は見つけたコンソールに手を当て、起動させていく。
ランサーは奥の部屋に入り、何かないと物色していった。

「君たちだけ？お父さんお母さんは？」

「・・・・・」

質問されるも、言葉は発さない子供たち。
奥にいる子は暗がりで顔が見えない。

「そっちの子もおいで？外に出ようよ。危ないよ？」

そういって、フェイトがむこうにいる子を呼んだ。

同時、蒔風がコンソールであるモニターを開く。

検索事項は「兵器」「製造」

そこに、検索結果といくつかの画像が出てきた。

ランサーが奥の部屋を見ていると、壁を叩いた時の音が一部違う。
ためしに槍で突くと、ガラリと崩れて向こうが見えた。
そこには生体カプセルが七つほどあり・・・・

「「「え？」」」

それぞれの場所の三人が、全く同じ声を上げた。

フェイトが見たのは、暗がりの向こうから近寄ってきた子。
今まで話し掛けていた子と同じ顔をした子ども。

蒔風が見たのは、モニターに映った、さっきの子ども。
「マリアージュの能力、複製成功」と書かれている。

ランサーが見たのは、カプセルに浮いた三人の子ども。
七つのうち四つはわれており、今フェイトの目の前にいるのはその四人だろう。

直後

「「「「ッッ！！！」」」」

ドオォン！！！

フェイトがバリアジャケットを展開させ、後退した瞬間に子供が爆発した。
どろりと溶け、液体のように変質し、一気に着火、爆発したのだ。

蒔風の背中に、子供が一人飛びついてきた。
目がグワッ！と開かれ、口元が真っ赤に光って、炎を巻き上げ爆発する。

ランサーの目の前では三つのカプセルの中の子どもの目がギョロリと開かれ、ガラスをぶち割って襲い掛かってきた。

「うぁっ・・・！！舜！！ランサー！！」

「ッッ――――ガァッ！！大丈夫だ！！そっちは！？」

「ガキどもが出てきやがった。こいつら人間じゃねェぞ！！！」

部屋から飛び出し、各人が確認しあう。

蒔風はとっさに開翼し、翼で爆発から身を守ったらしい。
フェイトも頬にすすがついているが問題ない。
ランサーは爆発されていないので無事だ。

「マリアージュの子ども版！？」

「トレヴィアはスカリエッティのテロに参加する予定だった。こいつらを使うつもりで、研究中に死んだんだ！！」

しかし、七体はすでに製造中で、うち四体がここの維持に動き、三体は眠っていたのだろう。
七体全員がいたということは、ここまで侵入していた人間は一人もいなかったということらしい。

「子どもを模した爆弾・・・管理局員が近づいて保護したところで施設ごとドカンか・・・なんてことを」

「えっげつねぇな!?」

「効果的だ。現にさっきもフェイトは危なかった」

そんなことを言っていると、ガシャァ!と言う甲高い音を立てて残ったことも五人が蒔風たちに突進してくる。
うち三人は裸だが、手に持つ凶器がそんなことは気にさせなくなる。
まともな武器は持ってないのか、そこら辺にある岩や鉄パイプを握って突っ込んでくる子どもはかなり怖い。

「ランサー!!頼む!!フェイト行くぞ!!」

「うん!!バルディッシュ!!真ソニック!オープン!!」

《Ｌｉｍｉｔ　Ｂｒｅａｋ．Ｏｐｅｎ　Ｗｉｎｇ》

それを見て、蒔風とフェイトが背を向け、ランサーが槍を投げるように構えて魔力をためた。

フェイトは背中から魔力を翼のように展開し、バルディッシュをラ

イオットにして片手に持つ。
蒔風も加速開翼を準備してランサーの左に立った。

「行くぞ！！」

「いつでも！」

「どーぞ！！」

「突き穿つッッ！！死翔（ボルグ）の槍（ゲイ）！！」

ギャッ・・・ォオッッ！！！！

ランサーがゲイボルグを放つ。
それを同時に、蒔風とフェイトがランサーの脇を抱えて全力疾走して出口に向かう。

そして、後方で大爆発が起きた。

あの子供たちにゲイボルグが命中し、一気に爆発させたのだろう。
そしてそれだけ爆発させれば、当然この遺跡は崩れる。

だから、加速開翼と真ソニックで、一気にこの場を突破しているのだ。

「ランサー！！大丈夫か！？」

「密室やべぇ！？すげぇ勢いで炎が来てんぞ！！」

「やっぱり無茶だったんだよぉ（泣）！！」

ひーん、と半分笑い半分泣くフェイトだが、当然諦めているわけではない。

そうして走っていると、出口の光が見えた。

ーーー

遺跡の近くまで後退したリーダーたち。
彼らは今襲撃を受けていた。

内戦は、急に終わりを告げた。
勝者はボルボダロングス・ケルッツァーリン。

陰惨な戦争の次に訪れたのは蹂躙だった。

ボルボダロングス・ケルッツァーリンは、ほかの二国の領土に押し入り、奪えるものは奪っていった。
それは何もおかしくはない。それが戦争だ。

しかし、彼らが奪っているのは財産や食料ではなく「人間」だった。
そして今、ついにここのことも嗅ぎ付け、襲い掛かってきているのだ。

逃げるものは逃げた。
しかし、大半の人間はここに残った。

理由は、リーダーが声をかけた「彼ら」にある。

「おいお前ら」

リーダーがもう一度声をかける。
かけられたのは、一番上でも十代前半ほどの子どもたちだ。

「この先に隠し洞窟がある。危ないからいつも入るな、って言ってる場所だ」

「う、うん」

「今日は特別に入っていい。中にはたくさん飯もあるはずだ。そこで静かにしてなさい」

「お、おじちゃんは!?」

「オレは・・・あのうるさい人たちを少し懲らしめてくるから」

ダメだよ!!
死んじゃうよ!!
一緒にいて!!
いやだいやだ!!!!

リーダーの言葉に、年が上の方の子どもたちが泣く。
まだ小さい子はいつもはだめと言われた場所に入れると聞いて、ウキウキしている。
現状を理解していないのか、それともこんなことは理解したくないのか。

しかし、リーダーは子どもたちを抱えて、遺跡の入り口わきにある隠し洞窟に押し込んだ。
実際には抜けられない穴なのだが、大きいために「洞窟」と呼んでいる。

あそこなら地下に入っているから大丈夫だろう。
もともとこういうことに使うつもりだったから、強化もしてある。
よほどの攻撃じゃなきゃ崩れない。

一緒にいてと言う子供たちを押し込み、リーダーと四人の男、二人の女が、銃を担いで迫る敵をにらむ。
リーダーの武器はストレージデバイスだ。
若草色の魔力が、そこにたまっていく。

「弾は何発ある？」

「今日までにあんたが込めてくれた分、５００発」

「ってか、それ以上カートリッジ持ってねぇし」

「お前らは子供たちと一緒じゃなくていいのか？」

「あら、あんたたちじゃ不安だからね」

「今は女も戦う時代よ。管理局を見て見なさい」

「管理局、か。この国が頼ってくれればな」

そんなことを言っていると、目の前にぞろぞろと敵が出てきた。

そいつらは、クリスタルのようなものでできた人形だった。
中には管理局員のような姿をした者もいれば、大きな剣を握ったもの、装甲を纏った戦士などまちまちだ。

そして

「絶対にここから先には行かせん！！！」

「「「「「うォォオオオオオオオオオオ！！！」」」」」

リーダーの雄叫びと共に六人の仲間が吼え、敵に向かって突っ込もうとし――――――

「あっぶなぁい！！！脇に伏せろ！！！」

背後の遺跡の中から、蒔風たちが飛び出してきて、彼らをひっつかんで入口の脇に引きずり込んだ。

直後、遺跡の入り口である穴から、一気に炎が噴き出して目の前のクリスタルどもをまとめて焼き払い、消滅させた。

「！？！？！？！？」

「うぉあ！？すげぇ！？」

その炎が止むころには遺跡の入り口は二倍くらいに広がっており、目の前の敵は少しの欠片と、どろどろに溶けた何かになって残らず消えていた。

「・・・・・えっと・・・」

「大丈夫か!?いやぁすまん。遺跡焼いちゃった」

「いや、それはいいんだが・・・助かった」

「?」

そこで、蒔風が事情を聞く。

内戦が終わったこと。
地獄が始まったこと。
見たこともない兵器を使っているということ。
守るため、彼らは応戦していること。
敵はまだ来るということ。

「・・・わかった」

全てを聞き、蒔風が外に向かう。

「戦って・・・くれるのか?」

その蒔風に、リーダーが問う。
蒔風が笑いながら答えた。

「そんな上等に考えんなよ。オレらだってこのままじゃ帰れないからさ」

そういって外に向かう三人。

見たことのないような兵器。

大いに心当たりがある。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

遺跡爆発！！（後書き）

遺跡では何もわからなかったけど、これからわかりそうですよ！！

蒔風
「オルセアに手掛かりはあったが、遺跡にはない、か」

フェイト
「じゃあこの敵、っていうのが？」

ランサー
「あのクソ機関らしいな」

その通り！！
さあ皆さん、がんばっていきましょう！！

やべ、これから授業だｗｗｗｗ

では今回のあとがきは短めに

次回、翼人対抗兵器

ではまた次回

青年、来る

「トライデント・スマッシャー！！！」

「オラオラオラァ！！」

「ゼァアアああ！！獄炎弾！！！」

砂漠

その遺跡、巨大な岩の前

蒔風たちが飛び出していくと、そこには軍団がいた。

全身がクリスタルでできており、明らかに人間じゃない軍団だ。

しかし、その姿には見覚えがある。

「おい、あれシグナムじゃないか？」

「あっちはキバもいるよ・・・・後ろの方にははやても」

「アーチャーもセイバーもいやがる・・・・どういうことだ？」

そう、それは「ＥＡＲＴＨ」メンバーの模造品とでもいうべきものだった。

それなりの攻撃で砕け、中から赤い液体を流して止まりはするのだが、技量が本人のそれに近い。

しかも、蒔風たちに対応し始めているのだ。

「こいつら・・・・」

「ちょっとやばいかも！？」

ランサー、フェイト、蒔風と、もう一体一体に攻撃はしていない。

広範囲に対する攻撃で、一気に薙ぎ払っていく。

だがそれでも減って行かない軍勢。

ジリ貧だ。

「フッ・・・こうなりゃ一気に・・・・！？」

蒔風が雷旺砲でここら一面を吹き飛ばそうとする。
が、その瞬間五、六体のクラウドらしき模造品が飛び掛かり、蒔風に襲い掛かってきたのだ。

「うっそだろ！？」

その模造品に、蒔風が解放して組み上げた龍虎雀武（現在は先端が偃月刀）を片手に握り、迎撃していく。

まず一体目を朱雀青龍刀で突き刺し、二体目をハイキックで蹴り砕く。
そのまま回転して先端の青龍刀を落として白虎釵に取り換え、ブンブンとまわして釵を飛ばして二体落とす。

そして最後の二体を、朱雀槍で貫き、串刺しにして投げ飛ばした。

「けっ、大したことねェ。所詮は模造品！」

そう意気込む蒔風だが、内心ではそうもいっていられない。

まず、この数だ。
一人の模造品が一つではなく、さっきのクラウドのように何体もいる。

扱ってくる攻撃方法も、本人の物とそう変わらないから対応できているだけだ。

そして、各個体で強さも違う。
本人級の強さを持った個体もいれば、一般人が武器を持った程度のモノもいる。

もし本人以上の強さの個体がこれだけいたらと思うと、ゾッとする。

そして、もう一つの不安。
それは悪寒と言ってもいいかもしれない感覚。

誰かに、見られている。

ーーー

一体どういうルートから来たのか・・・・あの町では一切証拠は残していなかったんだがね

流石は「ＥＡＲＴＨ」というところかな。

・・・・ちょうどいい彼のデータも欲しかったし、「これ」の成果も試したい。
行って来なさい。
出来れば捕えてくるように。死ななければどうなってもいいよ。

・・・・いったか。

世界最強だと言い、そしてそう言われる翼人に勝てるのならば、我が一族の研究は私の代で為し得ることができる・・・！！
さあ、戦いたまえ！！

――――――

「雷旺砲！！！」

弩（ド）ッ！！ゴガガガガガガガガガガガガガガッッッ！！！

蒔風の放つ雷旺砲が、左右に薙がれて模造品を軒並み消し飛ばしていく。
ここが砂漠でなかったら、おそらく地図を書き換えなければならなかっただろう。

飛び掛かってくるのも、走ってくるのも、地面に潜っていたのもまとめて消し、それが済むころには激しい砂埃と鉄の臭いしかしなかった。

「・・・・・！！ッッ、ハァ、ハァ・・・フぃ～～」

「大丈夫？」

「問題ない」

そうして撃ち終えた蒔風が手をプラプラさせながら答えた。

もう目に見える敵はいないはずだ。砂埃が、風に払われていく。

そして、その「はずだ」は見事に外れた。

「あれは・・・・・！？」

「・・・・冗談勘弁」

そこに残っていたのは、セイバーの模造品と、銀の強化服を着た人間。

そしてみたことのない人間が六人。首にあるリングを見ると「あの街」にいた住人と同じように死人兵士だろう。

「あの武器は受けるな・・・・絶対にだ！！」

その模造品（セイバー）がもっているのは、いつもの剣ではなく刀だ。

そう、恐ろしい切れ味を持つ、あの刀。

それと同じ物を、後ろの六人も持っている。

強化服は銃だ。これもあの町の物と同じだろう。

「へ、俺のゲイボルグを斬れんなら切ってみろっての」

「大丈夫。対策はあるから」

「特にヤバいのがセイバーと強化服だ・・・・あれ、Ｇ４だぞ」

蒔風の忠告に、二人が頷く。

そして、覚悟を決めて走り出した。

当然、蒔風もそれと共に行こうとする。

しかし

ザシッ

「・・・・・・」

背後で、砂の上に誰かが降り立った音が聞こえた。
振り向くと、その瞬間戦いは始まっていた。

――――――

セイバー（模造品）　ＶＳ　フェイトとＧ４　ＶＳ　ランサーの構図が、こうして出来上がった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんだお前!?相手にしてる暇はない!!」

「・・・・・・・・」

急いで二人を助けに行きたい蒔風だが、この青年が邪魔で先に行けない。

年は蒔風よりも四つほど下か。

服装は一般人の物とそう変わらなく、首にはリングが取り付けられている。

（死人?・・・いや、違う。あの少女と同じ感じだ。こいつ生きてる!!）

考えながら相手の攻撃を受け、蒔風が後回し蹴りで踵を青年の腹にめり込ませ、その体を吹き飛ばした。

今はフェイトたちだ。

「あとで相手してやる！！」

そう叫び、フェイトの元へと走る蒔風。

ランサーのゲイボルグは宝具だ。

そして、宝具を破壊する術など、人の身を超えた大魔術でしかありえない。

そう考えると、フェイトを助けに行くほうが優先される。

そのフェイトは、何とかして刃を回避して相手の首輪を狙っている。

しかし、この刀は受け流すことも逸らすこともできないのだ。

触れたらそのままヌルリと斬られる。
スパッ、という表現すら許されない切れ味。

そして、セイバーに対しては完全に回避のみで対応している。

（この剣技・・・受けられなきゃどうしようもないよ！！！）

相手の実力は、フェイトに切迫している。
ツインソードの魔力刃も、何度切断されたか。

魔力で包み込んでも物質化した瞬間に寸断される。
雷で攻撃しても、相手の動きで回避される。

だったら

「真ソニックフォーム！！行くよバルディッシュ！！」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

ドッッッ！！！

砂漠の砂を蹴り、フェイトの姿が金色の閃光となって消え失せる。

その刃が、一人目の首輪を切り落とす。
その光景にほかの二人が首を振って探すが、そうしているうちに二人目のを破壊する。

あと一人とセイバー。

周囲の動きが鈍い。
どうやら相手はこの動きについてはこれないらしい。

三人目。
背後から刃が首輪を捕え、切断して地面に落ちる。

その瞬間、フェイトは信じられないものを見た。

倒れていく三人目。

その男越しに、セイバーの両岸がフェイトの姿を見ていた。

視線が合う。

（ッッッ!?今こっちを・・・!!!）

驚愕するフェイトだが、もうセイバーに対する刃は振り込まれている。

止められない。

そして

――――――

死人兵士はフェイトを捉えきれていない。
が、一人だけ静かに佇んでいた。

一人、二人とフェイトが敵を倒し、三人目に差し掛かった瞬間、セイバーの顔が動いた。
視線が向く。
視界に捉える。

「フェイトォ！！！」

しかし、フェイトは止まらない。止まれない。
振り下ろされるライオットブレード。

ガァン！という音と共に、セイバーの左小手がその刃を受け止めた。
同時、右手に握られた刃が振り上げられた。

フェイトが反射的にライオットブレードのもう一本でそれを受けてしまおうとする。

だがフェイトもこの行動を取りながら気づいていた。

これでは防げない。

そして、振り下ろされる。

――――――

それに対し、蒔風もこたえようとする。

なんつー重い一撃だ

しかし、声は出なかった。

スパッ!!ブシュウッッ!!

「オ・・・・ガッ・・・・・」

「!?」

蒔風の左肩から、右腰に掛けて、一太刀の刀傷が出来ていた。
刀は受け止め、防いだにもかかわらず、その先に続く斬撃は止まらない。

「か・・・そういえば・・・・腕のある奴が持つと、斬撃がホイホイ飛ぶんだっけ、な!!!」

そう苦しそうに言いながら、蒔風がセイバーの腹に一撃蹴り入れ、空高く打ち上げて一気にカタを付ける。

「十五天帝！！」

ビッ！！ビビッッ！！！

そして、放り投げた十五の刀の先端から銀白の光が伸びセイバーに直撃する。
一本、二本、三本と命中していき、そしてそれが今度は十四、十三と収束して数を減らしていく。

最後には極太の一本となり、ついにセイバーを吹き飛ばした。

「ッッ・・・・」

「舜！？」

「俺のことはいい！・・・早くランサーのところに・・・！！」

「わ、わかっ・・・！？」

息の切れる蒔風に寄るフェイトが、ランサーの援護に行こうとしたが、その言葉が詰まる。

さっきまで蒔風が相手にしていた青年。
その青年が、一本の剣を握って突っ込んできたのだ。

蒔風がとっさにフェイトを突き飛ばして、獅子天麟の面でそれを受け止め、そして吹き飛ばされていく。

斜め４５度の角度にすっ飛ぶ蒔風が、遺跡の上部に命中して内部へと姿を消した。
青年が、それを追って飛び出した。

「あっ！！ッ～～～！！こっち！！」

それを見たフェイトだが、蒔風なら大丈夫だろうという判断を下したのだろう。
それに、今追って行ってもしょうがない。彼女はランサーの援護に向かった。

ーーー

にランサーへと向かってきた。
銃の威力は、あの町で見たものと変わらないようだ。

だからランサーも弾くということはしない。

撃ってきたレーザーを機動力で回避し、その首を落とそうと槍を振るう。
Ｇ４がその槍を地面に倒れるようにして回避し、ランサーの腹部に銃口を向けた。

槍を振ったまま回転し、その場を移動するランサーがそのレーダーを回避し、足元のＧ４に向かって、串刺しにするように槍をおろす。
が、Ｇ４は後転してそれを回避、回転しながらトリガーを引き、レーザーをまき散らして少し下がった。

そのタイミングで、ランサーがゲイボルグの先端に魔力を込める。

一撃必殺の「突き穿つ死棘の槍」

しかし、それを溜め切る前にＧ４からの銃撃がそれを阻んだ。

いくら少ない魔力でいいと言っても、やはり溜めの時間は必要だ。

それを削られてしまっては、宝具は打てない。

「クソ・・・・・」

舌打ちするランサー。
Ｇ４には魔力感知の装置でもついているのか、こちらが溜めはじめると無茶苦茶に妨害してくるのだ。

しかも装甲を感じさせないくらいに身軽だ。
速いわけではないのだが、回避だけはしっかり取っているのも憎たらしい。

「ランサー！！」

「お、ねェちゃん！！あっちは？」

「舜が受け持ってる。問題ないと思うよ」

「そうかい」

そこにフェイトが合流してきた。
ライオットを構え、特に前置きもなくＧ４に向かっていった。

一瞬で背後に回り、その首を落とそうと振りかぶるフェイト。
しかし、Ｇ４は銃口のみを脇の下から後ろに向け、フェイトに向かって発砲した。

一撃で必殺技クラスの威力を持つ銃だ。
フェイトは瞬間的にバルディッシュを大剣にしてそれを受けたが、魔力刃にひびが入って、身体が後ろに下がっていく。

その隙にランサーが再び法具を放とうとするが、砂の中に腕を突っ込んだＧ４が、隠してあったのか四連ミサイルランチャーをガボッ、と取出し、ランサーに向かってぶっ放した。

「ィイ！？」

それに冷や汗を流して動き始めるランサー。
Ｇ４を中心にして円を描くように、回り込んで走っていく。

と、放たれたミサイルの先端がパカリと開き、そこからさらにロケット花火のようなものが噴き出して、逃げるランサーの位置を追尾していく。
ロケット花火と言っても威力はバカにならない。

ランサーの走った跡に次々と火柱が上がって行き、砂漠の砂を吹き飛ばしていく。

そしてランサーがフェイトと合流し、ハーケンセイバーで弾をすべて撃ち落とすまでそれは続いた。

「無茶苦茶やりやがるぜアイツ！？」

「Ｇ３－Ｘに似ているみたいだけど・・・・」

「面白れぇじゃん。楽しくなってきやがったぜ！！」

「・・・・まぁね」

バトルマニアの二人に、なんだか火がついてきたらしい。

多彩な武器と言ってもいつかは尽きるはずだ。

そこまで持っていき、一気にカタを付ける。

そうして、改めて二人が武器を構えると、Ｇ４が何かを取り出した。

それは手のひらサイズの小さな長方形の箱。
大きな、いや、あれにしては少し巨大だ。ＵＳＢメモリは通常あんな大きさじゃない。

ベージュ色の外装に「Ｗ」と書かれたメモリ。

そして、それが起動される。

《ウェポン！！》

「あん？」

「あれは・・・ガイアメモリ！？」

メモリがＧ４の首筋から中に入って行き、その形を変えていく。

さて、諸君はこんな感想想った事はないか？

「変形してるけど、これ一体どこから出てきたんだよ」というロボットを、一昔前のテレビで見たことはないか？

この変形、というかなんというか、それはそんな感じだった。
ガシャガシャとＧ４の身体のいたるところから兵器が飛び出し、ドンドンその体が大きくなっていく。

山のように積み上がり、下からも押し上げ、Ｇ４の身体が上がっていく。
Ｇ４自身はその兵器に下半身を呑まれ、山のてっぺんから少し下のあたりにいた。

「おいおい・・・マジかよ」

「これは・・・・・」

それはもはや要塞のようだった。

銃口、砲口が一斉に彼らに向けられる。

唸りを上げる鉄の音が、こいつの笑い声に聞こえた。

ーーー

ぶつかり合う剣と剣。

十五天帝と相手の剣が、全く同じように光り、呼び合っている。

「これは・・・・呼び合っている!?」

「・・・・・・・・」

青年は答えない。

しかし、はっきりしたことがただ一つ。

相手の剣は、世界四剣だ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

青年、来る（後書き）

はい！！また新しい兵器出てきましたね！！、な翼人兵器の回でした！！

剣と銃は今まで出たものです。
セイバーのクリスタル兵士はコピー品ですね。

これは日常編での最後にちょいちょいあった奴のと同じです。
イメージはディシディアファイナルファンタジーのイミテーション。

Ｇ４は敵が手に入れたデータを基に作られた装甲です。
さてさて中身は死人か生者か

敵は一体どれだけのデータを有しているというのでしょうね。

さらに組み合わせる「兵器」の記憶を宿したメモリ。
最悪の組み合わせをどうぞ！！みたいな。

今回出てきた青年は、ちょっとだけ出ていた検体Ｙの青年です。

当然意思などないです。

途中に出てきたのは当然ショートヘア大好き外道野郎ですｗｗｗｗｗ

このキャラはリュウガさんからもらったキャラです！！

ありがとうリュウガさん。
配役だけで何も決まってなかったから楽ですよ！！！！（オイコラ

次回、Ｇ４と青年、それぞれの戦いをどうにか書いていきます！！

ではまた次回

砂漠の死闘

世界四剣

それは世界を股にかけて存在する剣。
剣は所有者を認め、その所有者の生涯とともにある。

ある剣は勝利をもたらし
ある剣は世界を統べ護り
ある剣は人々の傷を癒し
ある剣は人々の心を開いた

うち二つは我々も知っている。

天剣・十五天帝
聖剣・エクスカリバー

そして、今三つ目の四剣が現れた。
その名は――――――――

「神剣・・・・・ヴァルクヴェイン？」

蒔風がふと言葉を漏らす。
目の前の剣の、その名前を。

癒しの剣、浄化の剣。

しかし、だからと言ってなんだというのだ。

癒せる、ということは脅威でないことにはならない。

ーーー

落ちてきた手榴弾（バスケットボールの大きさ）が、遠慮容赦なく爆発し、周囲に破壊を振りまいた。

「ちょっ！？」

「城壁相手にしたことはあったがよ、これはさすがに初めてだぁな！！」

相手の猛攻（猛撃、といってもいい）を受けて、ランサーとフェイトは砂漠を走り、飛び回っていた。

猛烈な爆撃の間をぬけ、ランサーは走りフェイトは飛ぶ。

バルディッシュを振るい、ハーケンセイバーを弾幕のようにいくつも飛ばし、さらにトライデントスマッシャーで背後の三点を一気に攻める。

しかし、要塞の背後にも目があるのか相手は反応、迎撃してきた。

ガキョン！！と砲口が三つ、内側から伸びてきて、そこから冷凍砲が発射されてきたのだ。

更にはそれを取り囲むようにガトリングが四門、こちらも一斉掃射されてきた。

その弾丸にハーケンはすべて掻き消え、スマッシャーは三本とも凍結して砕け散った。

無論、フェイトの魔法には雷が付加されている。

しかし、電気はすべて地面に流されているために効果がない。

「クッッ！！！！」

冷凍砲撃を回避し、避けようのない弾丸はすべて電磁を織り交ぜた魔力バリアで逸らしていく。

正面ではランサーが砲撃の隙間を縫って要塞へと飛びついて行っていた。

その山を一気に駆け上がり、Ｇ４の目の前へと到達し

「ウグォッっ!?火炎放射器!!?」

Ｇ４の周囲の隙間から吹き出してきた火炎に押し返されて地面に着地する。

直後、熱を纏ったＧ４が即座に自分へと冷凍砲を撃って冷却する。

熱疲労でバキバキと兵器にヒビが入るが、即座に新たなものが飛び出してきて意味がない。

むしろ砕けた鉄片などを爆破で飛ばしてきて、散弾のようにして来ている。

「くそッたれ・・・近づけねェ、攻撃が効かねぇってんじゃ、どうしろってんだよ」

「本体を狙えば・・・・」

「相手もそれがわかってるみてぇだけどな」

「だよね・・・・」

そう悪態をつく二人だが、相手は待ってなどはくれない。

要塞の下段から、回転ノコギリのアームが飛び出してきて二人へと襲い掛かってきた。

それをランサーが受け止め、フェイトが切り落とす。
しかし「ピピッッ！」という音がして、その切り落とされたアームが爆発した。

フェイトがバリアを張って防御、その威力に二人が後退する。

要塞の腹の部分がグパリと開き、太陽光線を集めて一気に打ち出してきた。
瞬間的にランサーがフェイトを突き飛ばして飛びのくと、その直線状の砂漠がドロドロに溶けて飴細工のようになる。

そうしているところにロケット砲が撃ち込まれ、避けたところでトリモチ爆弾が彼らを捕えようと襲い掛かってきた。
フェイトがトリモチを焼き焦がして無効化しても、またも現れた巨大なアームが彼女を掴み、ブンブンと振り回してしまう。

「ッッ・・・・あ・・・・・！？」

その勢いに呼吸が出来なるフェイト。
するとその腕が止まって、要塞からガキョンと二股の槍のようなものが突き出てきた。

その先端にどんどん電気が溜まって行き、二つの磁極によって鉄塊が打ち出される。

「なっ!?レールガ・・・・・」

「させるかァ!!!」

ギャギィ!!と、そのレールガンの根元にゲイボルグが突き刺さり、根元が傾いてその方向を少しだけ変えた。
根元では少しでも、先端では大きな傾きだ。

フェイトが必死になって首を逸らし、そしてレールガンが彼女の顔から二メートルのところを通って行く。

そしてランサーがアームを切り落とし、着地と同時にフェイトが要塞の中腹を斬り裂く。

ギィィいいいいい・・・・ギョゴォン

そんな金属がきしみ、砕けるような音がして要塞が一瞬揺らぐが、そこもすぐに治っていってしまった。

無限に兵器を生み出していくＧ４。

もはや、個人の持つ戦力では勝てない。

「ッッアォア！！突き穿つ！！！！」

ギィイイ！！ドドドンッッ！！

痺れを切らすランサーがゲイボルグを放とうとするが、そこに耳を砕こうとでもするかのような高音と共に魔法砲撃が放たれた来て地面を吹き飛ばした。

そして触手のようなアームが二本出てきて、そのハサミのような先端がガバリと開く。

その二本のアームに、魔力が凝縮されていき、巨大な球体となって集束されていく。

「集束魔法！？」

「俺たちの使った力丸々ぶち込んでくる気かよ！？」

叫ぶランサーだが、それだけではない。

「ここって内戦地区だったよね？」

「おう」

「で、みんなデバイスとかカートリッジの銃とか使ってたから・・・・・！！！」

集まる魔力は、彼等だけのものではない。

この地で行われてきた戦争。

そのすべての重みが、伸し掛かってくる。

ーーー

蒔風の十五天帝と、青年のヴァルクヴェインが交差して遺跡内で火花を生む。

ぶつかり合って、鍔競合う。

そうして拮抗する両者だが、蒔風が青年に蹴りを入れてその隙に剣を弾きあげる。

青年の腕が上がり、そこに蒔風が拳を叩き込んできた。

が、青年はあっさりと剣を手放し、その拳を手刀で落とし、肘鉄を顔面に叩き込む。

「ガッ！？ってぇ～・・・な！！」

それを掌で受けたが自分の手の甲が当たった蒔風が、青年の足元を払う。

それを小さく飛んで回避した青年は、蒔風の胸にそのまま蹴りをぶつけて後退させる。

後退した蒔風に、地面に刺さった神剣を抜いて斬りかかる青年。

が、蒔風がそこで目をガッ！と開き、その剣筋を見切って上体を逸らした。

そして素通りしていく青年の腕を横から掴み取り、壁にガンガンとぶつけてから外に向かって投げ飛ばそうと腕に力を込める。

しかし青年は投げられてしまう、というところで地面に足を付け、
め り込むほどに踏ん張る。

そうして、振り回す側と回される側が反転し、蒔風の体が壁に向か
って投げ飛ばされていった。

「ッッ！？オォ！！！アッッ！！！」

バフォア！！！！

壁に激突し、その先に飛ばされそうになる蒔風は、開翼して思い切
り大きく羽ばたくことでその勢いを止めた。
その風で遺跡内の小石康永巻きあがり、青年の全身を叩いていき、
目が細められた。

その一瞬、蒔風が一気に青年へと突っ込んでいき剣を振るう。

しかし

ドゴォッッ！！！

遺跡に大きな穴が開いて、そこからいくつもの刃が飛び出して行き、蒔風を外に押し飛ばしていった。

飛んできた刃は、エネルギーではなくキチンとした物質だ。

形は、鍔も柄もない剣。

上下のどちらもが切っ先となっている。

発生源は、神剣ヴァルクヴェイン。

その一振りがいくつもの刃を生み、ザァッ！！と蒔風に放たれていったのだ。

「ツッ・・・・世界四剣はどれもが「多剣」ってのは聴いていたが、こういうことか」

そういって、蒔風が右腿と左肩に突き刺さった刃を掴み抜く。

どろりと血が出てくるが、身体強化の力を回して止血する。

痛みや怪我はなくならないが、とりあえず失血はしない。

蒔風は十五天帝を分解し、「風林」「火山」だけを握って青年へと

突っ込む。

青年が剣を振るい、そこから刃が掃射のように飛び出してきた。

一振るい３０本と言ったところか。

それを二回、三回と続け、蒔風を落そうとする青年。

「風林火山」は演舞のように動き、手数で相手を責める十五天帝の剣だ。

バトンのように手の中で回し、旋回、上昇下降を繰り返して青年への攻撃範囲に入る。

そして思い切り振り上げ、まっすぐに二刀を一気に振り下ろした。

青年は剣を横にしてそれを受けるが、蒔風がそのまま前転するように回転し、反対側の刃を叩きつける。

その衝撃で青年の膝がぐらりと崩れ、さらに回転して蒔風が最初の二刀をもう一度叩きつけた。

蒔風にとってはそれが本命だったようで、遺跡上部にいた二人は、そのまま最下層にまで床を砕いて突っ込んで行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

を発散させていく。

翼人の最大ブースト。

その押し込む力と背中からの排出の勢いで、一気に青年を攻めようとする蒔風。

しかし

「（ガクンッ）え？・・・な！？」

突如、その翼の開き具合が小さくなった。

みると、青年が何らかの力を発揮しているかのように、その手がうっすらと光っていた。

「翼人・・・封じ！？いや、これは・・・・！！！！」

ヴゥン、ドォァッ！！

驚愕する蒔風だが、そんなことを気にしている間にヴァルクヴェインがさらなる刃を生みだして、蒔風を一気に押し飛ばす。

「世界干渉による翼人の抑圧！？こいつ「渡航者」か！？」

渡航者
世界を渡る者
科学技術などに全く頼らず、自らの力を以って世界の壁を越える者のこと。

翼人でなくとも、
そういった力を持ったものはまれに存在する。
おそらくこの青年もそういった人間なのだろう。

岩の壁を突き破り、砂の大地に蒔風が飛び出して驚愕するのもつかの間、青年がさらに剣を奮って刃を飛ばしてくる。

十五天帝を使って弾く蒔風だが、先の戦闘と今の抑圧で力が落ち、剣が次々と弾き飛ばされて手から離れていく。

そして、ついに

「うわァァアアアアアアアアアアああ！！！！！」

蒔風が刃に埋まる。

砂漠に突き刺さっていく刃は止まることなく襲いかかり、文字どおりの剣山となって蒔風を埋めてしまった。

数秒の静寂。

そののち、剣山から腕が出てきた。

蒔風のだ。

刃が擦れ、金属と金属がぶつかる音を鳴らしながら、蒔風がその山から出てきた。

全身に切り傷があり、出血も止められない。

さらに砂漠の日射と、金属に囲まれているせいでの照り返しやこもった熱で意識が遠のいていく。

「あ・・・く・・・・・ぉお・・・・・・」

その蒔風に、青年が剣を構えて突出してきた。

「ッッァあ!!十五天帝ェェえええエエエァあアア!!!!」

ガシャァ!!とその刃を押しのけ、さらに傷を増やし、切り込みを深くしながら、蒔風も飛び出していった。

まるで墨をふんだんにつけた筆で描くかのように、蒔風が走った跡には血が残って行っており、そしてすぐに真っ黒な跡となって砂漠にアクセントをつけている。

集え!十五天帝!!

言葉にならない叫びを蒔風があげ、その手にすべてが集結して異形の大剣となる。

開け!!翼!!

もうこれ以上開きようのない翼に発破をかけ、さらに開こうとする蒔風。
しかし、翼は力を発揮しきれていない。

そして

ガキィッッ！！

剣がぶつかり合う。
その一撃で、蒔風の手から十五天帝がはじけ飛んで遠くへと消える。

ズッッ

神剣が蒔風の右肩に切れ込みを入れ

バァッ！

そのまま左腰にまで振り抜かれた。

ザラァッッ！！

そしてその後を追うようにしていくつもの刃が全く同じ部分を切りつけていった。
後続の刃が斬り、そしてまたその後続が、後続が、後続が、後続が

「ごフッ・・・・」

蒔風の体が、ズシャリと地面に落ちた。

力なく開かれた腕
握られた拳がほどけ
膝がもう体重を支えていられない

血が思ったより出ないのは、もうすでに出しようがないからだ。

《連れて来なさい》

青年の首輪から、そんな声が聞こえてきた。

蒔風に、青年の腕が伸びる。

ーーー

もしも、これを相手にできるとしたらそれは

「じゃあ、あの魔力奪ってやろっか？」

人の範疇を越えた翼人（モノ）だろう。

「！？」

「か、一刀！？」

二人の背後に現れ、声を発した男。

蒼青の翼人、北郷一刀

その彼が、手にレイジングハートを握ってその矛先をＧ４に向けた。

「絆で借りたこの力で」

ゴォ・・・・

「どっちの集束が強いか、勝負だ！！！」

そして彼もまた、集束を始める。

頼りになる戦力が、やってきてくれた。

ーーー

青年が蒔風に腕を伸ばし、直後に魔法弾が飛んできてそこから下がった。

「大丈夫ですか!?」

「舜さんを・・・ここまで・・・・・・!?」

飛んできた弾丸は、ルネッサによるシルバーダガーからのもの。

驚愕の声は、倒れる彼の頭を抱えあげたティアナのものだ。

「用事が済んだので来てみたら・・・・」

「一刀に一緒に来てもらって正解だったみたいね」

薄れる意識の中、蒔風が口を動かす。

『や・・・めろ・・・・・』

しかし、彼女らには届かない。

彼をここまで追い詰めた敵に、立ち向かうことがどういうことかは十分わかっている。

だが、だからと言って引けるものか。

目の前の犯罪は、そしてもしかしたら保護すべきであろう対象を、見逃すようならば執務官にはならない。

「私の教官(せんせい)にここまでして、許せないわね」

クロスミラージュを構えるティアナ。

蒔風に防護バリアを張るルネッサ。

頼りになる戦力が、やってきてくれた。

しかし、勝ち目はあるのだろうか。

to be continued

砂漠の死闘（後書き）

久しぶりに蒔風ボロボロシーンを描いて楽しかったです！！

さて、今回出てきましたるは「神剣・ヴァルクヴェイン」

設定をば書きますと

特性としては「癒し・浄化」の力を持つ剣。
しかしやはりそこは世界四剣ですから、強力であることは変わりありません。

認識としては「治癒も、浄化も、あるんだよ」ということです。
出来る、というだけでそれだけでないんです。

そしてその力は「多刃」です。
振るえば矢のようにいくつも飛んでいき、斬りつければその後からも連続して切る。

どちらも戦闘で使ってましたね。

世界四剣はどれも「多剣」である、というのは

十五天帝・・・見たまんま、十五剣一対の剣
エクスカリバー・・・強力な一本の光線→一つにまとめ上げた一撃
ヴァルクヴェイン・・・振れば多くの刃を生む

ということです。

ちなみにまだ出てきていない一本は

???・・・その名を冠し、特性も同じ剣（同一のものではなく派生剣）がある。

ということです。

仮面ライダーみたいな感じですね。
いくつも有りますが、その大元が四剣になっているのですな。

さて、助けに来たのは一刀にティアナ、ルネッサ。

彼らは勝てるのだろうか！？

次回、戦闘終了・・・まで持っていけるといいなぁ

ではまた次回

見誤る戦力

砂漠の真ん中で、膨大な魔力が渦巻いている。

その魔力を奪い合うように、二者が集束魔法を展開していた。

一人はＧ４、一人は一刀

「集束は周囲の魔力をかき集める魔法だ。つまり相手と同時にこれを行えば、単純な魔力の奪い合いになる」

そう呟いて、一刀の翼が大きく開いた。

周囲を渦巻く様々な色の魔力が、一刀の魔力光をベースに次々と集まって来ている。

Ｇ４にいったん集まっていた魔力も、一刀に吸い上げられるかのように消えていく。

ギシィィィイイイイイイイ！！！！

その光景にＧ４が怒り咆哮のような音を上げ、一刀たちに向かって銃口、砲口、切っ先を向け、一斉に撃ち放ってきた。
しかし、その攻撃はすべて一筋の剣閃に斬り裂かれてしまう。

「これでよろしいか？」

「サンキュ、凩」

その剣閃は、凩によるもの。
声が掛けられた時一緒にいたので、ついてきてもらっていたのだ。

そして

「集束完了」

ギギャォオオオオオオオオ！！！

「集束魔法砲撃（ブレイカーキャノン）、発射」

ドォッッ！！

一刀の言葉と共に、蒼青の光がＧ４を要塞ごと包み込んで弾き飛ばしていく。
その光の中でガイアメモリが飛び出し、砕け、欠片も残さず消滅した。

そして、Ｇ４の体がバチバチと火花を上げて、ガシャァ！と砂漠に投げ捨てられる。

腕だけがまだ戦おうとバタバタしているが、ほかが全く動いていない。

しかし

――

「『双銃の執務官』を確認。対応する」

ティアナの姿を確認し、青年が初めて言葉を漏らした。
それは感情の込められていない、きわめて機械的な声。

「クロスミラージュ！ファイリング！！」

《ＯＫ！！》

それに対応するようにしてティアナもクロスミラージュに命じる。
ルネッサは援護をしようとシルバーダガーを青年に向けて引き金に指をかけた。

銃弾が飛び出し、青年に向かう。

が、青年はそれを剣で弾き飛ばして一気に接近してきた。

「!?　速い!!」

ガキィ!!!

その速さに驚愕するも、振り下ろされた剣をクロスミラージュのダガーモードで受け止め、銃口を青年の腹部に向け発砲するティアナ。

パパパパパンッッ!!と青年の体が若干くの字に折れるが、その顔にダメージを受けたという感じはしていない。

しかし、その崩れた体勢をティアナが足払いで押し倒し、銃口から紐のような魔力を発射して青年の体に巻きつけた。

そうして地面に転がる青年だが、足を回し、胴体を軸にして回転、ティアナを蹴り飛ばしてから勢いで立ち上がる。

だが青年の脚に手ごたえはない。

蹴り飛ばされたティアナの姿がゆらりと消え、青年の背後からオレンジの弾丸が迫りくる。

それを後ろ蹴り上げですべてかき消す青年だが、それもまた幻影と消える。

「？・・・・・（ドォッ！！）！？」

そして、疑問を頭に浮かべた彼の足元からクロスファイアが飛び出してきて、真下から彼に向かって襲い掛かった。
その隙にルネッサがバインド魔法を重ね掛けし、さらに拘束を強化する。

「行けた？」

「と、思います」

ティアナがフェイクシルエットを解くと、さっきまでそこにいた彼女らが消え、五メートルほど横にずれた位置に現れてきた。

砂煙が晴れる。

当選そこには、バインドにつかまった青年が倒れて・・・・・

「・・・・え？」

「そんな！？」

いなかった。

その体にバインドや拘束魔法の束縛は一切なく、クロスファイアの弾丸をすべて手で受け止めて握っていた。

ギュルギュルギュル、と回転するオレンジの魔力弾を握りしめた青年が、それを潰して消滅させる。

「うそ・・・・」

魔力弾や魔法砲撃を、素手で弾く人はいる。

掴んで投げる人だっている。

今この世界には魔力以外の力もあるのだから、そういった人が多くいるのは別に驚くことではない。

しかし、至近距離から、しかも真下からの魔力弾を、素手で受け止めて握れるかと言われればそれができる人間はそうはいない。

現に彼女だって、至近距離の魔法を受け止める人を見るのは初めてだ。

青年がヴァルクヴェインを握り、ティアナたちに振るう。
無数の刃が飛来して、彼女たちに襲い掛かった。

「ッッ！？走って！！ルネ！！！」

「はいッ！！！」

迫りくるその刃を、走り回って回避するティアナ。

撃ち落とすなんて考えは即座に捨てた。
あれはその範疇を超えている。

しかし、この砂漠でそんな回避がしきれるわけがなく――――――

「っ！！追い付かれっ！！？」

ティアナとルネッサに、刃が追い付いていく。
砂に足もとられて、うまく走れない。

ドバウッツ！！！

が、その瞬間、青年の足元から爆発したかのように、一気に砂が吹き上がった。

見るとそこから少し離れた場所で、蒔風が息も絶え絶えに地面に手を当てていた。

畳返しを、相手の足元で跳ね上げさせたのだ。
大地は砂なので、本来立ち上がる地面ではなく、地雷のように砂が巻き上がったというわけだ。

しかし、その一回で蒔風の頭がぐらりと揺れ、倒れそうになるのを踏ん張って耐える。

それを見て青年が砂の中から飛び出し、蒔風へと向かっていった。
剣が振るわれ、飛来した刃にルネッサのバリアが破壊される。

「・・・・・へ・・・・・」

それを見て、蒔風が笑う。
その先にある死（モノ）など気にしていないという顔で。

「逃げろ、ティアナ」

そう短くつぶやき、蒔風が叩きつけるように地面に手を降ろす。
青年の足元の砂が次々を吹き上がって行くが、全く止まることがない。

軋む足に鞭打って蒔風が下がるが、振るわれた刃が襲い掛かる。

肩に刺さり
腹に刺さり
そこを押さえようとして腕に刺さり
顔に飛んできたのを蹴り飛ばして足に刺さり

ドドドドッ！という重い音がして、蒔風が地面に落ちる。

そして、止めと言わんばかりに青年が力の限り剣を振り下ろした。

蒔風の両脇からティアナとルネッサが走って寄ってくるが、間に合わない。
それどころか横薙ぎに振るわれた剣からの刃で、三人まとめて串刺しだ。

「舜さん！！」

「くっ・・・そぉ！！！！！」

声を張り上げる二人だが、蒔風はすでに言葉を発さなくなっていた。

振るわれる剣。
その軌道上に現れ、射出されていく刃

そして

ドドドドドドドドンッッッ！！！！！

迫る刃の真下から、砂が一気に噴き出す。
最後の力を振り絞っての、畳返し。

しかし吹き上がったのは、ティアナとルネッサに向かう分の下からだけ。

「舜さぁぁあああああん！！！！！」

果てしない轟音
甲高い悲鳴

当事者二人は、一言も発さなかった

ーーー

その弾丸の向こうには、ガトリングを握る。
地面から引っ張り上げたものらしく、抱えるたぐいのものではない。

ガシャン、とスクラップのような音を立ててＧ４が一歩前に出る。

「まだ・・・・立てるのか・・・・！？」

「そんな馬鹿な・・・・・！！」

「Ｇ４システム」は装着車が死体あっても動き続ける装甲だ。
その概念は「人体が装甲を纏う」ではなく「装甲を動かすために人体というパーツを用いる」という物だ。

だから中が死体でもここまで動くのはおかしくない。

一刀も前にそんな話を蒔風や津上から聞いたことがあるし、フェイトも警察関係で氷川から聞いたことがある。

しかし今の衝撃は、そして外見は、完璧に破壊するものだったし、されたものだった。

と、そこでＧ４がベルトに手を当てて上部のボタンをガッ！と押し込む。

直後に

《ｃａｓｔ　ｏｆｆ》

という機会音声が響き、その答えを提示してくれた。

「な・・・・」

「キャストオフだと！？」

Ｇ４のゴツイ装甲が肩、腹、胸、腿、脛と解除され、最期にマスクの頬が盛り上がり、そのすべてが弾け飛んだ。

飛んできた装甲を避け、一刀たちがその姿を見る。

《Ｃｈａｎｇｅ――ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｇ４》

その体つきが非常にストレートなものとなり、腕や足周りがすっきりしている。

顔も丸いものから縦長になって、スマートだ。
それは「装甲」から「強化スーツ」へと表現を改めるほどの物だった。

「マジかよ・・・・・！？」

ドォッッ！！

驚愕する一刀だが、その腹部にＧ４の拳がめり込み、そのままフェイトやランサーの間を抜けて砂漠にめり込む。
その後で《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ》《ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ》という音声が聞こえてきた。

速い。
それは自らの発した音を超えるほどに。

一刀に駈け寄るフェイト。
直後に斬りかかるランサーと凩。

「みんな来て！！うん・・・うん！！翠さんと霞さん、あと加賀美さんたちも！！早く！！！」

フェイトが通信機に向かって叫ぶ。
もはやこまねいている場合ではない。

自分たちがここにいれば、それを察知して翼人ならゲートを開ける。
すぐに来れるだろう。

だがもう一つの戦いでは、すでに間に合ってはいない。

――

「しっかり・・・・しっかりしてください！！」

「あ、ああ・・・・・そんな・・・そんな！！！」

ティアナとルネッサが蒔風の体を抱えて声をかける。
揺するだけで、命が尽きてしまいそうな風体だ。

むしろ生きていられるのは翼人の力が微弱でも効いているからか。

ティアナとルネッサも、大なり小なり怪我をしている。

いくら砂が跳ね上がったと言っても刃を完全に止められるものではない。
いくつかはガードしたが、やはり何箇所には刺さり、数十か所を斬られている。

『ふむ、彼女らのデータを少し向上させておこうか・・・・さあ、連れてきなさい』

それを眺める青年の首輪からそんな声が聞こえ、蒔風たちへと足を進める。
ティアナやルネッサがそれを阻もうとするが弾丸は弾かれ、首を掴まれて投げ飛ばされる。

そして身体が赤く染まることも気にせず、蒔風の体を肩に担ぐ青年。

「連れて・・・・いかせないわ」

その背後に銃口を向け、ティアナがヨロリと立ち上がる。

そのティアナに青年は答えない。

しかし、代わりに首輪が応えてきた。

『困りましたね。我々は「ＥＡＲＴＨ」と事を起こす気はないんですよ。ただ開発するだけですから』

「そうやってその人を連れていくなら、見逃さないって言ってんのよ・・・・！！」

淡々という男の声に、ティアナが凄みを聞かせて唸る。

だが、相手の態度は変わらない。

『我々は「ある兵器」に対抗するモノを作ろうとしているだけです』

「ある兵器・・・？」

『ええ、兵器とは対になって初めて価値があります。毒と薬のように、対応するモノがあればこそ、両国に売れるのですから。それを作る過程での戦いという実験。そして検体を集めているんです。彼はちょうどいい』

「させないって・・・言ってんのよ・・・・・！！」

左肩が上がらず、右手だけでクロスミラージュを一丁握り、青年に狙いを合わせるティアナ。

しかし、手が震えてうまく狙えない。
もうそんな体力もないのか。

『どうやら手足の腱が切れかかっているようで。運が悪かったですね。まあ、すぐに治療すればきれいに治りそうですよ』

「このッッ！！！！」

それを聞き、ティアナが周囲に魔力弾（クロスファイア）を展開する。
それに対して青年が剣を握り、ティアナに振り下ろそうとするが

ガシッッ！！

その腕を、青年の肩の蒔風が掴んだ。
一瞬だけ青年の腕が止まったが、すぐにその腕から力が抜けてダラリと下がる。

『・・・・もういいでしょう。翼人をそれ以上ここに置いておいては誰の感情で復活するかわかりませんからね』

男の声に青年が頷き、ティアナからそこら辺の空間に向きを変えて剣を振るう。

そして空間に亀裂ができ、その向こうへと青年が消える。

ティアナがその背中を掴もうと腕を伸ばすが、青年に蹴り飛ばされて地面を転がる。

そして、亀裂も消えて、二人は跡形もなく消えてしまった。
特殊な方法なのか、行き先も探知できない。

「う・・・うぅ・・・・うわぁぁアアアアアアああああアアアアアアアアア！！！！」

ティアナが地面に拳をぶつける。

思っていたほどの衝撃はなく、ザフッ、と力なく拳が砂にめり込む。

彼女の足元の砂が、涙で固まり、すぐに乾いていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「「ハイパークロックアップ！！！」」

《《ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ》》

ハイパーフォームのカブトとガタックが、Ｇ４に追いつこうとそれを起動させる。

瞬間、クロックアップのスピードで動いているほかのメンバーの動きも止まり、世界は三人だけのものとなった。

Ｇ４のハイキックをカブトが潜って回避し、ガタックの蹴りを腕でガードする。

そのうちにカブトがパーフェクトゼクターで腹部を斬りつけて押し付ける。

するとガタックエクステンダーが背後から現れ、ボード状になってG４を押さえつけた。

と、そこでハイパークロックアップが切れる。

動きを封じられたG４はすでにいくつか喰らったダメージのせいか、複数個所がすすけており、装甲にもひびが入っている。

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

そのG４に、止めとばかりにディケイドのファイナルアタックライドが発動する。

が、G４のどこにそんな力が残っているのか、ガタックエクステンダーを跳ね上げ飛ばしてそのキックを回避した。

そこに振るわれるフェイトの大剣。

両腕でそれをガードするが、ついにその装甲が弾け飛んでＧ４の体が地面を転がる。

「「「ゼァッっ！！！」」」

と、その火花を上げる右腕に霞と翠の斬撃が命中し、一撃目で切れ込みを入れ、二撃目で腕を切り落とした。
さらにセイバーのエクスカリバーが胸を貫き、引き抜かれて五体が揺れる。

ピガガガガガガガガ！！！！と異常な電子音を火花を散らし、Ｇ４が魔力をため込むランサーに向かってクロックアップでの妨害をしようとするが

「させっかよ！！！」

それを背後から一刀が掴みかかって止めた。
暴れるＧ４だが、無理がたたったのかベルトは煙を噴き出し続け、ランプが異常に光っている。

「その速度で回避されたら大変だからな！・・・・ランサー！！」

「おう・・・その心臓、ようやっと貰い受ける！！突き穿つ（ゲイ）！！」

「（ドコッ！）ウオッ！？ランサァー！！！」

「死棘の槍（ボルグ）ゥア！！！」

バキィィイイ・・・・・・・！！！！！

Ｇ４が一刀の拘束から逃れ、走り出そうとしたがもう遅かった。
ゲイボルグはその装甲の心臓部である頭部とベルト（メモリーチップ）を破壊し、その機動を停止させた。

勢いで一歩、二歩と足を進めるＧ４が、まるでオブジェのように動きを止め、やがて完全に停止した。

戦いは、終わった。

しかし、失う物は大きい。

彼らの追跡が始まる。

to be continued

見誤る戦力（後書き）

Ｇ４が無双しすぎてヤバいｗｗｗｗ
もう少し戦わせたかったですが、もう一話は長くなってしまうので断念しました。

兵器だからまた出てくると思いますし、その時をご期待！？

ティアナさんたちじゃどうにもならなかったという。
誰も悪くない。
しいて言うなら「蒔風なら」という考えが甘かった。

そして何気にいた凩さん。
本当にスピード野郎ばっかだ（セイバー除く）ｗｗｗｗ

連れて行かれた蒔風。
なんかギンガみたいな感じですね。

改造されてしまうのだろうか！？蒔風君！！！

次回、内戦後のこの世界、そして追跡

ではまた次回

国のその後と

次元世界オルセアの内戦
それはボルボダロングス・ケルッツァーリンの突如とした猛進で終わりを告げた。

彼らの持ち出した兵器は他の二国とは比べ物にならないもので、二国の兵士を撃破して進行していったのだ。

当然二国の戦力もこれに立ち向かったが、勝てるはずもなくあっさりと占領されてしまう。

そして、人間狩りが始まったそうだ。
様々な年齢、男女、人種に関わらず連れ去らわれた。

今はそれも終わっているが、すでに連れて行かれた人数は、百人が両手の指で数えても足りない。

「そんなことになってんのに、オレらはこうしてる場合なのかよ？」

「おばあちゃんが言っていた。国と言う字は、「口（かこい）」があり、「王」

がいて、そして小さな一点がある。そしてその小さな点をきちんとした場所におかなければ、国として成り立たない、ってな。」

「一人は小さな力だけど、それがなくして国には成らない、ってことか」

「そう思うなら、メシだ!!食べることは人を良くすることだからな!!」

そうして併合された一つの国で、天道たちが炊き出しをしていた。

人間狩りが終わったあと、残った戦力が「ボケ」に踏み込んだらしい。

しかしそこにはまともな街も、国も、ありはしなかった。

街に人はおらず、家の中に入ると何人もの人間がぶっ倒れていたそうだ。

原因は、主に飢えと病気だ。

それを見ていい気味だと笑う者は少なくなかった。

しかし、あの遺跡のリーダーがこう叫んだ。

「こういう国にしたのは、誰だ？こうなったのは、本当に彼らなのか？何かが違えば、こうなっているのは俺たちだぞ？お前も誰かに助けられたことがあるなら、今すぐやるべきことがあるんじゃないのか！？」

その一言で、全員ではなくとも数名が動き始め、そしてそれが波紋となって広がりつつある。

戦闘で逃げようとした指導者や隊長などと言った人間も死んでしまったので、こういった人々を引っ張れる人間を、皆求めていたのだろう。
これをカリスマというのだろうか。

結局、三国とも人民が少なくなって一国ではやっていけなくなったので、三国併合して新たにスタートするらしい。
乗りかかった舟と言うことで当面は「ＥＡＲＴＨ」が支援し、時空管理局も手を出してくれるそうだ。

「ごめんなさい。私たちは何も・・・」

「いや・・・あんたらが来たから、俺たちは生き残った。こうし

て国を立ち上がらせられる」

フェイトがリーダーの男に頭を下げ、リーダーもフェイトに頭を下げる。

「あの男はどうした？連れていかれたんだろう？」

「いま、仲間が捜索してます」

「そうか・・・見つかるといいな」

「そうですね」

そういって、会話を終わらせる二人。

一人は捜索に、一人は指導に、それぞれ向かっていった。

ーーー

「いえ、それはまた今度にします。この国はこれから、何度も来れるような国になるので」

「そう・・・ね」

蒔風が青年に連れて行かれた場所。
そこでティアナ、ルネッサが肩から腕を釣って話をしていた。
他にいるのは、士、一刀、セイバーの三人だ。

「わかりそう？」

「難しいですね・・・・」

「はぁ・・・・アッチィ」

そこで、三人が蒔風を連れ去った青年の跡を追うべく痕跡を探していた。

ちなみに一刀は試したが駄目だった。
士は一目見て「無理」と断言。

そして最後の頼み、セイバーが今試しているのだ。

何を？

四剣のつながりをだ。

「さすがに無理かなぁ？」

「エクスカリバーも十五天帝も世界四剣ってのだ。他の世界でも、共鳴できるかもしれない・・・って海東が言ってたぜ」

「相手がわかってるならできなくはないと思うんですが・・・ん？こっちでしょうか」

エクスカリバーを握り、右に左にクイクイと揺らすセイバー。
それを士が指を絵の額のようにして片目で眺める。

「題名「宝探しの王」」

「馬鹿なこと言ってないで士さんも何かしましょうよ・・・・」

「っつったってよ。今はそこの王様しか取っ掛かりがないんだからどーしよーもないだろ」

「だけど・・・」

「それに、相手がなんだろうと、一度捕まろうと、蒔風がそうやられると思うのか？」

「そうですが・・・」

ーーー

部屋の明かりは壁の下から二十センチくらいのところにある非常灯のような物だけだ。

数名の男と青年によって固定された蒔風。
男たちと青年が部屋を出る。

するとヴィン！という起動音とともに部屋がほんの少しだけ振動した。

それと同時、蒔風の体の傷が少しずつ、本当に少しずつだが、回復に向かっていった。

それを見て、別の部屋の男が部下に指示を出す。

「その調子で戻してあげなさい。ただし抑圧をゼロにはしないで」

「はい」

部下の数名がレバーなどを弄り、蒔風の力に対する抑圧を徐々に緩

めていく。

――――――

「な、なのは・・・・」

「なのはさん・・・・」

「ティアナもフェイトちゃんも執務官でしょ!?なんで・・・なんでいつもあの人だけ・・・・!!!!」

「おい高町のねぇちゃん!!それくらいにしろ!!」

フェイトとティアナに、なのはが掴みかかって叫んでいた。

いつもの彼女とは違うその風体に、ティアナは恐縮しフェイトは泣きそうになっている。

そのなのはをランサーが引き離し、壁に押し付けて怒鳴った。

「俺だってあいつらだって、全員が全力で戦っていた!!その結果敗北し、連れて行かれた!!これ以上何か言うんだってんなら、それは俺たちと、あいつの!!戦士の矜持を馬鹿にしたと見るぞ!!」

「でもそれで連れて行かれたんだったら戦士も何もないじゃない!!!」

「だから今でもセイバーたちが夜通し手掛かり探してんだろうが!!!あの状況で俺たちは全力を尽くした!!まだ何か言うなら、いくらお前でも敵とみなす!!」

その言葉になのはが息を荒くして言い返そうとするが、その顔が次第に歪んでいき、くしゃくしゃになって涙を流し始めた。

「そんなこと・・・わかってるよ・・・・」

そして、ランサーの腕が緩められて地面にへたり込む。

「わかってる・・・わかってる・・・みんなが頑張って、今も必死になってくれてるのは・・・わかってる・・・だけど・・・やっぱり・・・」

それを見て、フェイトが肩を抱えてともに泣き、ティアナがその光景を見て拳を握りしめた。

「必ず、見つけ出します。絶対に」

拳からは、血が垂れている。

「みなさん」

と、そこに凩とともに長岡が何枚かのファイルを手にして、やってきた。

「少女が、目を覚ましました。限られますが、話もきけますよ」

ここで、一つ解き明かされ始める。

最初に戻って、あの街で何があったのかが。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

国のその後と（後書き）

特に先には進みませんですね。
なのはさんを取りみださせてみました。

国のその後、その頃の蒔風、これからの「ＥＡＲＴＨ」、そして目覚め。

あの街で何があったのかを次回で書いていきましょう！！

ときに・・・オーズって出していいのでしょうか？
自分としては、映画を見るまで出しにくいんですよ。コアメダルとかアンクのこととかありますし。

でも出したい！！
出すつもりだったけど、映画まで待てない！！！

もしかしたら矛盾が出てしまうかも・・・それが怖くて出せないんです。
チキンです。

だして・・・いいかなぁ？ｗｗｗｗ

ではまあそこら辺はまだ先になりそうですし、展開ももしかしたら映画後になるかもしれないですし！！

では、今から法事で名古屋にドットラハイ

ではまた次回

綺堂唯子

「ＥＡＲＴＨ」の中にあてがわれた彼女の部屋。

外一面がガラスになっており、街が一望できる開放的な部屋だ。

その扉が開かれ、入ってきたのは三人。

取り調べ担当としてティアナ、あの街を直に見た矢車、そして、彼女を診ていた長岡である。

三人が入ると、景色でも眺めていたのか少女が窓辺で振り返ってきた。

少女はこれから女性という域に踏み込むくらいの年で、ティアナと同じくらいだろうか。

服は真っ白で、ワンピースのような、診察服のような形をしている。なびいたスカートが日光の中を泳ぎ、とてもきれいな、まるで絵画を切り取ったかのような感覚になる。

「あ・・・・長岡さん・・・・・」

「大丈夫ですか？」

「はい・・・・・」

そう言って、少女がベッドに座る。

それを向い合せになるようにして、ティアナが椅子に座り、長岡が少女の横に座る。矢車は壁に寄り掛かった。

「話を聞かせ・・・いえ、話せますか？」

「・・・最初に、これだけは教えてください」

「・・・・なんでしょう」

「私の街は・・・・・どうなりました？」

「・・・・・・・・・」

「俺たちの見たうちじゃ、生存者はあんただけ。何名かが行方知らずだ」

「そう・・・・ですか」

矢車の言葉に、そう言って少女が顔をうつ向かせる。

「大丈夫ですか？」

「はい・・・・ごめんなさい。大丈夫です」

そう言って、目に少し溜まった涙をぬぐい、少女が顔を上げた。

「綺堂唯子、１９歳です。あの街の事・・・・お話します」

ーーー

その街は、長い長い一本の道の途中にありました。
ここを通る人の休憩所として、一つのお店が立ったところから大きくなったそうです。

そして、数十年前までは「大きな町」としてあたりにも知られる場所となっていました。

そんな町が、今知られているような「大きな街」になって行ったきっかけが、十八年前にやって来ました。

ある会社の研究機関が、ここに研究所を設けることにしたのです。

その研究所の人たちも住むそうなので、街は一気に大きくなると聞き、そして実際にそうなりました。
街の人たちはより豊かになって大喜びです。
研究所からの公害や騒音といった被害もなく、すぐに町の一部になり、溶け込みました。

その様子を見ながら、少女・綺堂唯子は育っていきました。

街が大きくなると犯罪も増えましたが、研究所の人たちが作ってくれた道具ですぐにつかまりました。
捕まった彼らは研究所での手伝いをさせられ、しだいに街の警察のようになってきました。

そうして十年と少しが経ち、彼女が小学校の高学年になった頃。

彼女の学校に研究所の人がやってきて、同じクラスの男の子を一人、研究所に呼びました。
このころすでに「研究所の人たち」と言えば街の平和を守るヒーローだったので、男の子たちはその子を羨ましがりました。

「オレ、かっこいいヒーローになるんだぜ!!」

彼とは隣の家だったので、彼女は男の子からよくそんな話を聞きました。

それからも彼は研究所に通い続け、そうして八年もの時間が過ぎま

した。

彼女と彼はその間も、男女間が離れていくという年になってもたまには一緒に遊んでいました。
本人たちは腐れ縁と言ってますが、傍から見ていると完全に付き合っているように見えます。

そしてそのお話の中で、彼がたまに研究所の中での話をしてくれるのです。

「本当は極秘だって言われてんだけどな」

そう言って話してくれる彼は本当に楽しそうです。
誰にも言ってはいけない秘密を知っている楽しさと、それを話してしまうというタブーを踏むのが楽しい年頃なのでしょう。

そして彼女もまた、その話を聞くのが楽しいと感じていました。

「ね、あそこで何やってるの?昔ヒーローになるとか言ってたけど」

「ん？今でも変わらねーよ。俺はあそこでヒーローになるんだ」

「じゃあピンチになったら助けにきてよね」

「うちの道場で稽古してんだから自分でどーにかしろ」

「ちょっと、レディーのピンチに駆けつけるのがヒーローでしょ？」

「レディーがいればな」

「ムカッ・・・まあ？あんたに助けられるほど弱くないしね、私」

「小学三年生に一本取られる高校三年生が何を言う」

「うるさい（ぽか）」

「アテ」

しかし、一年前のある日。

研究所から帰ってきた彼はいつもと様子が違っていました。

顔は強張り、口は固く閉じられ、拳は握りしめられていました。

「もう来るな」

そう一言だけ言って、彼との話は終わりました。

しかし

――――――

ーーー

「踏み込んだ!?」

「といっても、入口から5メートルのところで捕まりましたけどね」

そうして、彼女が知ったのはこの研究所の実態でした。

研究され、開発されていく兵器
身体をいじくられる人体
吐き気を催すような形をした「何か」

その先で、唯子は彼を見つけました。

今までの彼とは思えないような、虚ろな目。
だらりと下がった両腕、立っているのに、浮いているような感じな
見た目。

到底普通ではない状況でした。

そして、連れて行かれる彼女は、そのまま青年の目の前に連れて行かれました。

声をかけました。
体をゆすりました。
腕を引っ張りました。
全身で抱き締めました。

しかし、青年は一切反応することはなかったのです。

『幼馴染というその女に反応するかの実験ですが、何事もなかったようですね』

『安定してます。大丈夫でしょう』

『ではあの女を処分しなさい』

「！？」

唯子に聞こえていることを十分知っているだろうに、平気でそんな事を話す男たち。

逃げだそうとする唯子だが、押し入ってきた男たちに取り押さえられる。

目隠しをされ、手を縛られ、どこかに連れて行かれる途中で、彼女の耳にこんな声が聞こえてきた。

――この街にはもう必要なものはないな

――明日にでも焼き払っておくんだろ？問題ねぇよ

――ああ、あの男の性能を試す実験でもあるみたいだけどな

それを聞いて、彼女は死の淵にありながらも力の限り叫びました。

「街には何もしないで！！何でもするから！！みんなを殺さないで！！」

もちろん、そんな叫びなど聞き入れてもらえるはずがありません。

しかし

「確か、一つやり残した実験があるしょう」

「え？ああ、だけどあれは被験者が耐えられるもんじゃないぜ？」

「どうせ死ぬ女。有効活用しようじゃないか」

「・・・オイ女」

その言葉とともに、唯子の目隠しが取り払われて、目の前の男が言いました。

今からお前を実験する。

切ったり埋め込んだりするもんじゃない。

ただ、お前は確実に死ぬだろうな。
もし生きられたらみんな解放してやるよ。

それを聞き、唯子は敵意と殺気を込めて、睨みつける。
今まで感じたこともないようなその感情に、自分の目が焼けているんじゃないかと思うほどの怒りが脳を焦がしました。

そして、彼女は別の部屋に放り込まれました。

男の話では、体感時間はとてつもなく長いが実際の時間はそう経たない空間であるらしいのですが、彼女はそれどころではありませんでした。

次々に襲いかかる試練、訓練
拷問ともいえるような特訓、実践

あのクリスタル状の戦士も、死人兵士も、何人も何人も相手にしました。
何度も何度も死にかけ、耐え、勝ち、どんな手を使ってでも生き残

ろうとしました。

体感時間だけが長いだけで肉体へのダメージは実際の時間と一緒に負っていくのですから、それはとんでもない地獄だったのでしょう。

決して彼女は、肉体的に秀でた少女ではありません。
潜在的に何かを秘めているわけでもありません。

そんな少女が、一日を数何カ月ともいえる時間で過ごし、そしてそのダメージを一気に背負って、生きていけるはずなどないのです。

しかし、彼女は耐えきりました。

腕を片方失い、目は潰れ、もう五分も放っておけば死ぬような身体でしたが、その「実験」が済んだ時、彼女は確かに生きていました。

そして、次に気付いた時には、彼女は自分のベッドの上で寝ていたそうです。

腕も、目も、身体の傷は一つ残らず消えていました。
まぎれもない、自分自身の身体でした。

街はいつもの通り。
研究所など、最初からなかったかのよう。

彼女は、満足して日常に帰りました。

そして、蒔風たちが遭遇した事件が起こったのです。

「私は・・・利用されたんですよ。結局彼も、街も、何も救えなかった・・・！！！」

「綺堂さん・・・・・」

その話に、ティアナも長岡もどう声をかけていいか分からなくなる。
結局、彼女が耐えきった実験は何だったのだろうか。すべてが無駄

になってしまったのか。

そこで、落ち着くようにと紅茶を注いできた矢車が、唯子に差し出していく。

「飲め。落ち着くぞ」

「ありがとう・・・・」

紅茶に唯子が口をつけ、ほっと一息つく。

考えてみれば、彼女は目覚めてから今までしゃべり通しだ。

――――――

「おいおい・・・・注射はやめてくれよな。苦手なんだ」

「なに、上手にやりますがら、痛みは感じませんよ」

「そーかい（プスッ）・・・・・ウぐっ！？」

「バイタルは？」

「正常です。暴れているのは、おそらく薬に抵抗しているからかと」

「だ・・・から言ってんだろ・・・・そんな薬何本打ちこまれ・・・・たって、今の俺なら・・・・いくらでも耐えられるぜ・・・・・うぷっ」

「ふむ、まだ行けそうですね」

「ハッ・・・おウッ！？がァ・・・・ッは・・・・」

「翼人に薬物が効かないわけではないのですが、彼は強いですねぇ」

「こちら側に引き込むのは無理では？」

「まだ時間はたっぷりある。それに、改造できれば問題はないでしょう」

「・・・・ですね」

「ガァァあああああああああ！！！！やってみろォア！！全部の血液垂れ流してでも、テメェらの思い通りには動かネぇぞ！！！ッ！？ゴォあぁぁあアアア・・・・・・！！」

――――――

「これ・・・どこでですか!?」

「え?ちょ!?」

「この写真!!どこで撮ったんですかっ!!!」

ドタン!!

ティアナの体を揺さぶり、しまいには床に倒して唯子が激しく聞く。もはやその風体は「聞く」というよりは「問いただす」といった方が正しいかもしれないが。

「ちょっとちょっと!!落ち着いてって!!」

「その写真をどこで撮った!!教えろ!!!」

「(ムカッ)だぁ~かぁ~らぁ~・・・どけっての!!!」

押し倒されたティアナも、人の話を聞かない唯子に落ち着くように

言うがやはりそこは人の子である。
この状態で叫ばれれば、ムカッとする。

ティアナは言いながら唯子の手首を掴み、寝ながらだというのにそれを捻って投げ、ベッドに倒した。

「落ち着きなさいっての！この写真は、先日私たちが戦った時に撮ったもの」

「その様子だと、ただの知り合いってわけじゃないようだが・・・・まさか？」

あの体勢から投げられてびっくりしたのか、唯子は五秒ほどそこで大の字になり、そしてその口がすぐに動いた。

「鉄（くろがね）・・・翼刀（よくと）・・・・・」

「この人の名前ね？・・・そして・・・・・」

「私の言っていた・・・男の子です・・・！！！」

目に涙をためながら彼女がそう言って、ついに嗚咽を漏らして泣き始めてしまった。

それは、彼がまだ生きていたことに対する喜びか、それとも救いだせなかった悔しさか。

「ティアナさん」

「呼び捨てでいいわよ」

「ティアナ、私を・・・強くして」

「・・・・・・・え？」

そう言って、唯子がティアナに土下座する。
ベッドの上だが、その誠意は確かなものだった。

そしてそこから顔を上げ、イエスと言わなければ殺すとでもいいそうな目つきで、心の底から懇願してきた。

「お願いします。私を・・・・もっと強くしてちょうだい！！」

ーーー

・・・）

ゴゥン！！ヴィーーーー！！！！ヴィーーーーー！！！！

（見つかった！？いや・・・逃げたのがばれたかクソッタレ！！！）

蒔風が、荒野と砂漠を足して二で割ったような世界を見渡す。

服は簡素なもので、まるで入院患者のような風体だ。

しかも、この日照りの中を裸足である。

施設は刑務所のような形であり、高い塀はあったがそこはとりあえ

ず突破していた。
今はその塀の陰に隠れる形で張り付いている。

少しして、塀の扉が開き、そこから数台のジープと兵が飛び出してきた。
その兵の一人（やはり死人兵士だった）を捕まえ、服を奪って隊に混じる。

（この施設はやばい・・・・こいつらは、「あれ」の対となる、対抗しうる兵器を作ろうとしている。このまま「あれ」を開放させられたら・・・・！！！）

蒔風、脱出。
しかし、本番はこれからである。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

綺堂唯子（後書き）

時間がかかってすみませんでした！！
名古屋では結局一回も書けずじまいでして・・・・

今回は二人の登場人物が出てきましたね！！

青年の名は「鉄翼刀」
少女の名は「綺堂唯子」
です！！

翼刀はリュウガ様、唯子はソーヤ様から、それぞれいただいたキャラクターです！！

ではお二人から頂いたプロフィールの一部をば

名前　鉄翼刀（くろがねよくと）

年齢　１９

身長　１７２ｃｍ

体重　５４ｋｇ

性別　男

名前　綺堂唯子（きどうゆいこ）

年齢　１９

髪　金髪のセミロングをまとめている

瞳　紫

だそうです。

書かれているデータが二人で違う？

ＨＡＨＡＨＡ

それは武闘鬼人に創作力がないからさ！！

実はお二人からもらったデータだとここまでしか明かせません。

しかし、どのデータを採用し、不採用にしたかは読んでいけば分かると思います。

気に入らなかったら申し訳ございません。

自分は頭にキャラを置くとき文字が浮かぶのでだめなんですよね～
人型のキャラではなく、こう・・・顔にキャラ名を書いたマスク
をした感じの人が精一杯です。

それが動いているんです。頭の中で。
だから容姿ってあまり気にしないんですよね。

オリジナルキャラはみんな髪黒いイメージだし。
唯子とか金髪なのに・・・ごめんなさい。

ちなみに、いただいたキャラですが一応カテゴリーとしては「オリ
ジナルキャラ」とさせていただきます。
私としてもいただいたキャラを盗むような名称になってしまうのは
申し訳ないのですが、この言い方がしっくりくるので。

それにキャラ設定も結構変わってますしね。

というわけで本編の話。

過去話で何かわからなくなったら聞いてください。お答えします。
もちろんネタバレにならない程度で。

あれだけ書いてるとちゃんと全部説明したか心配だ・・・・

ちなみに唯子がきちんと街に返された理由は、もう書いた気がするので省きました。
さあ、読みなおそう！！（アクセス数ウマウマｗｗｗｗ

そして脱出の蒔風。
どうやって抜け出したか？

・・・・蒔風さんならしょうがないよねｗｗｗｗｗ

しかし、逃げ切れるかは別問題。
どうする蒔風！？

次回は蒔風メインでいきたいと思ったりなんだったり。
ちなみに映画が間に合っていたらオーズをここで出したかった！！
！ｗｗｗｗ

ではまた次回で

四面楚歌

兵士の装備は銃が一つのみ。
服は分厚いもので、深緑色をしている。

ヘルメットのようなものをかぶっており、蒔風はそれで目元を隠している。

（しかし熱い・・・・夜に逃げればよかった）

地面からの照り返しと、直射日光が身を焦がす。

あの施設の中で時間も何も分かったものではないので、飛び出せるときに飛び出したらこのざまだ。
夜だったら闇夜に紛れることができたというのに。

（もぐりこんだはいいがこのままじゃ帰っちゃうし・・・・・いや？こいつらは死人。だったら夜通し探すだろうからその隙に乗じて・・・）

様々なことを考えながらついていく蒔風だが、実をいうとついて行くだけでも結構な神経を使う。

先頭のジープは決して速く走っているわけではない。
しかし、この兵士たちの足並みが気持ち悪い程にそろっているのだ。
その足並みが少しでもずれればバレるかもしれない。

そう考えると、一歩一歩に神経を使うのは当然で、そんなことをしながら妙案も何も思いつくはずがない。

（こりゃぁ行き当たりばったりになりそうだぞ・・・・・）

そう思いながらも「いつものことか」と気を取り直す蒔風。

（しっかし・・・どこまで行くんだ？これ）

おそらくこれは自分を捜索する隊だ。

それにしては結構歩くし、散開した方が見つけられるんじゃないか、と考える蒔風だが、そんなことを考えているうちにジープが止まった。

ジープの上の男（研究所で見た顔だ）が、コンソールをいじって指示を出す。

蒔風の首にも首輪は付けているが、当然壊したものをばれないようにつけているだけだ。受信機能なんてあるわけない。

だがそれでも周囲の兵士が散開していくのを見て「そう言う指示か」と判断し、蒔風も走り出した。

パンッ！

「ッ！？」

そして、発砲音。

蒔風が身体を回転させて、弾丸を回避する。

ジープを見ると、その上に立つ男が銃（普通の拳銃）を手に蒔風を見下ろしていた。

「周囲の動きを見ての瞬時の判断。しかも、その一瞬で誰も向っていない方向を見極めて走り出しているのだから、流石と言わざるを得ないな。まあ、その一瞬が命取りだったわけだが」

「くそ・・・・」

「ああ、あと今の発砲はお前だと気づいていたわけじゃなく、すぐに動かない欠陥品を処分しようとしただけだ。お前は完璧だったよ」

男が蒔風を称賛しながら手を上げる。
すると周囲に兵士がやってきて、無言で蒔風に銃（こっちは兵器の）を向けてきた。

数にして十三人。
十三の銃口が蒔風を狙う。

「あんたなら耐えるだろ。じゃ、逆戻りだ」

スイッ

「ドォァッッ！！！」

カチッ、ドゴゴゴォンッッッ！！！

男の腕が下がり、蒔風がしゃがんで大声と気合を発し、引き金が引かれて十三の銃口からとんでもない威力のレーザーが発せられた。
その爆発に蒔風の姿が砂煙に消える。

「砂煙・・・・・砂煙だと!?」

レーザーが当たっただけなら、砂煙は上がらない。
つまりは間に遮る何かが入ったといういいこと。

男が驚愕した直後、その煙の中から黒い石のようなものが十四個、空に向かって投げだされた。
そしてそれが十三人それぞれの足元とジープの上に落ち、各人が逃げ出そうとする。

しかし

「牢壁(ろうへき)・畳返し!!!」

ガゴゴゴン!!という音と共に各人とジープを畳返しの壁が囲い、逃げられないように逃げ道を遮断する。

ドォムッッ！！！！

そしてくぐもったような爆発音が響き、牢壁の空いた上部から火柱が上がった。

倒れていく牢壁の中から、ズシャリと何かの炭が倒れ込んでくる。

「貴様・・・・・」

ジープの牢壁から、男が出てくる。
手にしている者を見てみると、運転手を盾にして生き延びたようだ。

土煙が晴れる。

「無駄な力は使いたくないんでな低コストで行かせてもらう」

地面に手を当て、蒔風が男に言う。
男はコンソールをいじり、さらに戦力を投じてくるだろう。

（さぁて・・・翼人の力は使わないとして、俺のカードは結構少ないな・・・・）

蒔風が風林火山を手に握る。
逃走劇は、闘争劇へと変わっていく。

――――――

「アタァっ！？」

「士郎おにーちゃん・・・・よわっ」

「うっせー！！！」

「ＥＡＲＴＨ」地下訓練場

そこでイリヤに言葉に士郎が叫び返していた。

相手は唯子だ。

士郎だって弱いわけではないのだが、それは投影した剣を握ったときぐらいなもの。

普通に木刀を握った彼は、一般人に毛が生えた程度の力量しかない。

その士郎の攻撃をヒョイヒョイ回避し、突っ込んできたところで後頭部に突っ込みのような平手打ちを入れたのだ。

結構いい音がしていた。

一方唯子はイエーイ！とVサインし、ぴょんぴょん跳ねながらティアナのもとに走って行っていた。

落ち込む士郎を尻目に、その様子を黙って見ていたアーチャーが立ち上がり、唯子に向かって声をかけた。

「次はオレがやろう」

「アーチャー？」

「私なら、少しは通ずる部分があると思うがね」

アーチャーが進んでこういうことをするのは珍しい。
頼めばしてくれないこともないのだが。

「いくぞ？準備はいいか」

「あ、はい。宜しくお願いします！！」

ーーー

―――――――――――――――――――――――――――――――

周囲に兵士が転がり、クリスタルの残骸が砕けて光を反射している。
大地に剣が突き刺さり、銃によるクレーターがいくつもできている。

そこにまた、新たに剣が突き刺さる。

しかし飛んできたものではなく、使用者が杖のように支えにしたものだ。

「ハァ、ハァ・・・・・・」

蒔風が肩で息をして、周囲を見渡す。

誰一人いない。

追っては破ったか？
もう来ないか？

そう考えながらも、彼は走ることしかできなかった。
ちょうどいい岩場を見つけて、そこに腰を下ろす。

（兵士や残骸でオレの居場所はすぐにバレる。くそ・・・・ここがどこだかわかればな・・・・・）

どことも知らないこの世界から、なるほど、確かに飛び出すことは出来る。
だがそれでは次元の狭間を漂っているうちにつかまってしまうのがオチ。
意味のない事に力は使えないのだ。

（せめてここがどこだかわかってから逃げるべきだったかなあ・・・・行き当たりばったりなのは悪いところだ）

そんな自己評価をしている場合ではないのだが、そうでもしないとやってられないのだろう。
自分に苦笑する蒔風。

ガォン!!

「!!　来たか」

蒔風がそうしていると、また新しいジープ三台ほどが走ってきた。
うち一台の荷台に搭載されているガトリングが唸りを上げて回転し、先端から火花と共に鉛玉を弾きだしてきた。
さらに一台はボンボンボン!と気の抜ける音でロケット砲を打ち出し、さっきまでいた場所を爆撃してくる。

蒔風が岩場から飛び出し、荒野を駆ける。
いくつか迫る銃弾、爆撃は蛇行して回避し、さらに剣で弾き飛ばしていく。

最後の一台の荷台には静電気発生装置みたいなのが乗っていて、そこから翼人の抑圧波が出ていた。

しかしそれを破壊しようにも他のジープが守っているし、そもそも今の体力でそこまで力が出るかどうか。

ドォン！！

「オゥッ！？」

銃撃を回避し、弾き飛ばした蒔風の背後からロケット砲が飛来し、即座に転がるものの爆風に体が投げ出される。

地面を転がる蒔風が体制を整えて膝立ちになった瞬間、その場に巨大なトレーラーが突っ込んできて蒔風をひき潰そうと爆進してきた。

「ターミネーターかよ！？」

そんな愚痴を叫びながら、蒔風がいつもの二倍はありそうな畳返しでトレーラーの足元を撥ね上げ、軸回転させながらトレーラーを吹っ飛ばす。

蒔風の頭上を飛んでいくトレーラーだが、その荷台部分がガチャガチャと展開され、オフロードのバイクが四台飛び出してきた。

そのうち二台が蒔風の両肩をかすめて行き、衝撃に蒔風が吹き飛ばされる。

さらにトレーラーの爆発で地面を転がり、引きずられるように滑る。

「ごっぉ！！野郎！！」

嬲られる蒔風が憤るが、向かって行ってもしょうがない。
今は逃げるだけだ。

とはいってもあっちと蒔風の機動力は違いすぎる。
今の蒔風は抑圧で開翼もできないのだ。
それに対し相手は高性能のジープやバイク。

逃げるには、撃墜するしかない。

そうしていると蒔風に向かってバイクが走ってきて、すれ違い様に蒔風に蹴りを放ってきた。
その足を蒔風が掴み投げようとするが相手の勢いが強いのか、そのまま押されてゆく。

その蒔風にさらに背後からもう一台が同じようにして蹴りを放ってきた。
両者の脚もただでは済まないだろうが、おそらくそんなのはどうで

もいいのだろう。

それを見て蒔風が紙一重のタイミングで一人目の脚の上で逆立ちしてそれを回避する。

そしてバイクの後部に立って男に殴りかかる。
しかし背後からの行為劇に対し男もそれを受け止め、裏拳で反撃して、蒔風の腕を掴んで前に投げた。

ブゥン、と蒔風の体がバイクの上を越え、それでもバイクにしがみつき、脚が地面に付いて滑って行く。

数十メートル進み、バイクの後輪が上がった。
蒔風がその両足に力を込め、バイクごと投げ放って爆発させる。

一台撃破した蒔風だが、即座に攻撃の手が伸びた。

バイクの男がペンのようなものを投げ放ち、そのお尻（ペンならノックする部分）から火が噴き出して蒔風に向かって飛んで来た。
文字通りロケットペンシルとでも呼べそうなそれを蹴り飛ばし、蒔風の周囲で爆発が起こる。

そこにジープからの爆発が襲い掛かり、さらなる爆風に押されて蒔風が加速する。

周囲は砂埃がひどい。
しかし、その先に蒔風が何かの影を見た。

それは

「あれは・・・・勘弁してくれってのによぉ・・・・・」

それを見て、蒔風の顔が歪む。
まるで質の悪いコメディを見たかのような、そんな顔だ。

目の前に見えたのは、まぎれもなく彼が脱出してきたあの施設だった。

目標物の見えないこの荒野。

本来なら幾度も地図と方角を確認して進まなければならない場所だ。
そこを蒔風は一心不乱に走り抜け、さらには送り込まれる戦力も相手にしていた。
そんな状態で、しっかりと離れていくことなどできるはずがない。

彼は気づかないうちに、元の場所に向かって走っていたのだ。

「くそったれ・・・・・」

悪態をつく彼の前方数百メートルの位置から、ガキン！！！という音がして地面から数百以上の砲門がせり出してきた。
それは足元にちょこんとあるような小さなものだったが、先端から飛び出している棘を見ればそれがどんなものかわかる。

そして、その形は蒔風にも見えていた。

「あれは・・・・！！　止めてくれよ！？」

その棘の先端は、刺さりやすく抜けにくいという形をしたものだった。
進行方向とは逆に向いた棘のついた針。そして外見からは見えないが、その針にはワイヤーが取り付けられていた。

ドンッッ！！！

それを見て、施設に向かって蒔風が一気に走り出す。背中を見せたら貫かれる。

と、同時にババババンッッ！！と一気に拘束弾が射出されてきた。

ワイヤーの尾を引きながら、いくつもが蒔風に向かって伸びてきて、大地に突き刺さった。

そんなワイヤーと針の隙間を蒔風が駆けていると、そんな中でも関わらずバイクやジープが飛び込んできた。

それを転がりながら回避し、横や下を蹴りあげて転がす蒔風。
しかし、針の一つが肩をかすめて皮膚を裂く。

すぐにそこを押さえて血を抜くが、視界が一瞬で揺れて来てしまう。
血抜きは間に合わなかったらしい。何かの毒が、身体を回る。

するとその隙に一瞬だけ針が止み、そしてすぐに百発ほどが一斉に放たれてきた。

蒔風が獅子天麟を背中に構え、背負った状態から力の限り一回転してから投げ放ち、ワイヤーを五、六本逸らす。
その逸れたワイヤーにぶつかって他のが逸れ、連鎖的に多くのワイヤーを食い止める蒔風。

膝が崩れる。
手がつく。
その手で身体を跳ね上げてそれでも前へ。

ドォドォドォドォオッッ！！！！

物凄い音を立てて針が地面に突き刺さる。
山なりに、放物線を描いていたそれが、だんだんと地面と水平に飛

んでくるようになってきた。

蒔風がそれを紙一重で回避し、どんどん前へ。

足場がワイヤーに埋め尽くされていく。

そのワイヤーに足を取られるが、青龍刀で斬り裂いて前へ。
ワイヤーの中から数本の触手のような機械が伸びてきて襲い掛かってくるが、白虎叙を投げつけて沈黙させる。
更に襲い掛かる触手やワイヤーは玄武盾で弾き飛ばす。

そして、その砲門群が見えてきて、その先にあの青年の姿を捕えた。

「やっぱ出てくるかよ！！！」

青年が剣を振るい、無数の刃が具現して、ワイヤーをブチ切りながら蒔風へと飛んで来た。

それを蒔風が身体を少し低くするだけで回避する。

「剣を振るって飛ばしてくるってことは、その軌道上しか飛んでこないってことだろ！！！？」

横薙ぎなら、身体を下げる。
縦なら脇に避ける。

それだけで、この攻撃は回避できる。

すると青年はグリンッ！！と螺旋状に剣を振るい、そしてその通りに刃が飛んで来た。

蒔風はその中心に飛び込んで、青年に向かって玄武盾と青龍刀をフリスビーのように投げつけた。
その剣を弾く青年だが、くるくると旋回して玄武盾と青龍刀が蒔風のもとに帰り、再び投げつけられる。

そうしているうちに蒔風が青年との接近戦の域に踏み込み、剣を玄武盾で抑え込んで青龍刀で切りかかった。
しかし、青年はあっさりと剣から手を放して蒔風の青龍刀を持つ手首を掴んでそれを止めた。

そしてそこを蹴り呼ばして青龍刀を飛ばし、玄武盾でのナックルを

回避して蒔風から下がる。

そのうちに剣を拾い直して再び蒔風に刃を飛ばそうとするが

「させるかァッ！！！」

ドウッ！！と空気を破る音がして、朱雀槍が青年に向かって飛翔していった。
炎の一閃となって青年に向かう朱雀槍だが、青年はそれを紙一重で回避してしまった。

しかしそれでも彼の頬からは血が流れ、刃の射出は止められた。

そして、蒔風が振り下げられようとする剣の持ち手を足刀で留め、玄武盾を右手に握って思い切り青年の腹部にそれを叩き込んだ。

「甲蓋（こうがい）打滅星！！！」

玄武盾が盾と言う役割からナックルへと変わり、青年の腹に衝撃をぶち込んで吹き飛ばした。

青年の体がノーバウンドで施設の城壁まで飛び、その一部を派手に破壊しながら激突する。

――

「む・・・・負ける？」

「どういうことだ？蒔風舜の力は抑圧しているんだろう？」

「翼人は強力ですが、倒せない相手ではないです。事実、一度は彼を死にかけの状態にまで追い込めました」

「確かに」

「しかし、翼人は幾度かの戦いで最終的に勝利をおさめます。それはなぜか」

「正義の味方だから、とか言わないよな？」

「いいえ。それは翼人が「理解者」だからです」

「理解者？」

「ええ。他者の感情をエネルギーに出来る、ということは、それを理解しなければならない。その理解力の高さを以って、一度相手にした者ならばそれなりに優位に戦えるんですよ」

「そう簡単なもんか？」

「・・・・あなた、小さいころアニメなんかは見ていました？」

「そりゃまあ」

「では、あなたはそのキャラの弱点も、攻撃法も、全部知っているわけですね？」

「今はうろ覚えだけど」

「彼らの理解はそういうことですよ。一度相手にした敵を理解し、そして幾度も立ち上がる心の強さ。それが、翼人を何度も勝利に導かせる理由です」

「なるほど・・・・じゃあ最初で勝てなければもう勝てないということか？」

「いえ・・・・そうでなくとも」

「？」

「まだ見せていない技で倒せばいいのですよ」

――――――

「投影開始（トレース・オン）、全射出！！」

ドドドドドドド！！！！！

投影した武器を宙に浮かせ、そのすべてを一斉射出する。

「キャぁアアアアアア！？」

「ちょ、アーチャーやりすぎ！！」

剣の陰に唯子が埋もれて行き、アーチャーに凛が叫びかける。
しかし、アーチャーはシレッとした顔をしている。

「この空間は非殺傷設定というのが効いているのだろう？ならば、よほどやりすぎない限り大丈夫だ。それに・・・・・」

アーチャーの射出が止まる。
そして、その隙間から――――――――

「この程度は、見切っているだろう」

剣の隙間に、唯子が立っていた。
彼女の立つ場所、わずかな立ち位置だけ、剣が突き刺さってない。

「やはりな・・・・彼女は特に秀でた能力などない」

「え？」

「私と同じ・・・いや、弓(これ)や投影がある私よりも、はるかに・・・・・こういってはなんだが、劣っている」

「でもあんだけ動いてんのよ！？」

「だからこそ、彼女が一体どれだけの「実験」を行ったのか・・・・想像もつかん」

そうした会話を脳内で済ませる凛とアーチャー。
その間に唯子がアーチャーに向かって駆け出し、拳を握ってそれを突き出してきた。

それを躱し、いなし、投げようとしたアーチャーだが

ごォッ！！！

「ッお！！」

その拳が眼前に迫って、咄嗟にそれを回避した。
するとその外れた拳から、本来アーチャーに叩き込むはずだった衝撃が飛び出し、レーザーのように一直線に壁に向かって行った。

目に見えない衝撃の光線がアーチャーの顔の横を通過し、凛のツインテールの片方をすり抜けて壁にボゴッ！と穴をあけた。

「ほえ？」

「ん？」

「おぉ」

それを見て唯子が気の抜けた声をだし、凛が何が起こったのか一瞬理解できず、アーチャーが感心の声を上げた。

「おぉ、じゃないわよ！！下手したら顔に穴が開くところだったわよ！！？」

「非殺傷だから大丈夫だろうが（ス・・・）」

「誰が正座やめていいって言った！！正座ッ！！」

「ま、まて！！なぜそこで令呪を光らせる！？」

「なんで俺まで・・・・」

「（膝の上のイリヤ）凛を守れなかったからでしょー？」

「なんでさ・・・・」

説教されてるWシロウを尻目に、唯子が自分の力にびっくりしていた。

「凄い・・・・・」

「あなた、自分の力に気付いてなかったの？」

「力は強くなったなぁ、って思ってましたけど・・・」

「それはそうでしょうね」

と、そこに長岡が彼女のファイルを持ってやってきた。

「あなたの話では、実験は死にもの狂い、そしてそのあとすぐに戻され、洗脳の中で戦っていました。だから実感がないのは当たり前ですね」

「そうなんですか・・・・」

その話を聞いてまた驚く唯子の脇で、ティアナが長岡に聞く。

「長岡さん。唯子って・・・・」

「ええ。私と同じ、“Ｎｏ　ｎａｍｅ”の人間です。世界が一つになって、“Ｎｏ　ｎａｍｅ”でも力を手に入れた者はいます。でも、彼女はそれでも力のない“Ｎｏ　ｎａｍｅ”の人間です」

「それであれだけの力・・・・・」

「異常ですよ。決して力を植え付けることなく、“Ｎｏ　ｎａｍｅ”のままあの域に達するなど」

ーーー

ダンッッ！！！

思い切り地面を蹴り、一気に蒔風へと突っ込んで来る青年。

それを蒔風がバックステップして間合いを整え、その顔面に剣を振るう。

しかし、青年は片手で「風林」の刃を抓(つま)み止め、剣を振るう。

蒔風はその剣を玄武盾で受け、「風林」を分離させて「風」を捨て、「林」で再び切りつける。

だがその刃が到達するよりも早く青年の蹴りが、後退させようと蒔風の腹に入る。

「フンッ！！」

「！？」

しかし、その攻撃で蒔風が下がることはなく、仕方なしに青年が地面に伏せて刃を回避する。

そして青年が蒔風に足払いし、一回転。

その勢いで、居合でもするかのように剣を構えた。

（ここから刃か！！えげつないが・・・）

グッ！！

（耐えられなかない！！！）

その攻撃を予測して蒔風が玄武盾に力を込める。

だが、迫った攻撃は全く違う物だった。

ヴゥン・・・・

「！？」

剣の刀身に、淡い光が灯った。それはエネルギーではない。
否、エネルギーではあるものの、青年の持つものではない。
そう、まるで「歪み」そのものであるかのような、強力な――――
――――

（渡航の力を歪みに変えて!?これは――――――!!!!）

「槍薙巳（つなみ）」

青年が短く、そう呟いた。

直後、振るわれた剣が世界の歪みの尾を引いて、蒔風の身体を飲みこんだ。

――――――

「が・・・は・・・・・世界を捩じって・・・・歪みを飛ばす・・・だと?・・・・・・ぅ」

蒔風が地面に倒れ、そう呟きながら意識を失う。

その攻撃は読み通り「津波」そのもので、懐という至近距離から喰らった蒔風は、いとも簡単に吹き飛んで地面に大きな跡を作った。

その体を抱え、青年が施設の中に戻る。

「まさかこの技まで引き出させるとは・・・翼人とは本当に恐ろしい」

「だからそれに対応できる兵器を作ってんだろ?」

「ええ。兵器とは片方あるだけではだめですから。それの抑止力があって、初めて利用価値が生まれます」

そう言いながら、蒔風を再び中に連れ込む。

黒く、重く、高い扉が、再び固く、閉じられた。

そしてその中で、再び――――――――――

――――――――――

荒野の中で、セイバーが剣を持って座禅を組み、士が毛布にくるまって寝ていた。

こちらの捜索メンバーは少し変わっており、一刀の代わりに星が来て、さらになのはも合流していた。

ちなみに、なのははあれから一睡もしていない。

ヴィヴィオに「絶対に舜君を取り返してくるから」と自分に言い聞かせるように出てきたのだ。

しかし、このままでは体調を崩す。

「なのは。私が見ているので、お休みになっては」

「いいの。セイバーさんが寝ないでいるのに、私が寝るわけにはいかないから。それに、星さんも起きてるし、負けられないよ」

「なのは殿・・・・」

声をかけるセイバーだが、なのはは自分の意地だからと言って眠ろうとはせず、それを見て星が小さくつぶやいた。

「私は・・・・最近分からないのです」

「え？」

「舜が連れ去られたとき、私は確かに悲しみました。しかし、それは本当に「愛」から来たものなのかと、疑問を持ったのですよ」

「星さん？」

客観的に言うのはいかにも星らしいが、彼女にとってはかなり真剣なことだ。

「私は舜のあり方を聞き、何と脆く、そして素晴らしいものだと感じたのです。そして、失いたくないと思った。それを今まで恋愛感情だと思ってきました」

「普通じゃないの？」

「しかし、今になってはこう思います。「それは世界遺産などがかけがえのない物と感じ、失ってはならないと感じているだけじゃないのか？」と・・・・」

「そんなことないよ！！星さんの想いは確かに・・・・・」

「確かに愛だと？しかし、私は貴女のように取り乱すことはなかっ

た。絶対に取り戻すと、心に誓っただけだ」

「それは私が勝手に取り乱しただけで・・・・」

「・・・まあ、それも彼の顔を見ればわかることでしょう」

そんな話をしている二人を見て、セイバーがふふっ、と笑う。

「乙女ですね」

「あんたもそうだろ」

「（びくぅっ！！）士、起きていたのですか？」

「女三人寄れば姦しいというからな。起きちまった」

「私は話に参加してないですが」

そんな会話をする二人が二組だが、こうしてエクスカリバーで四剣をたどろうとしてすでに三日。

英霊である彼女だから大丈夫だが、ほかはつらいはずだ。

まあ士は旅人ではあるから大丈夫そうだが、なのはや星はこれ以上ここにいるのは難しいだろう。

そうかんがえていた、その時

ビシッ！！！

「「「「！！！！」」」」

ビッ！！ビビッ！！バリッッ！！！

ドシャァッ！！

「うわぁっ！！」「っとと！？」「つ、着けた！？」

空間を裂いて、そこから七人の男が転がり落ちてきた。
なのはにはその七人に見覚えがあった。

「青龍さん！？それにほかのみんなも！！！」

「・・・なのはさん・・・・」

「何かに引かれると思ったら、エクスカリバーだったか」

蒔風の使役獣・七獣。
その人間体が、次元の穴から落ちてきたのだ。

彼らが言うには、蒔風は脱走した時にうまく自分たちだけを投げて逃がしたのだそうだ。

最初から出していくと相手に利用される可能性があるし、下手をすると彼らも改造されるかもしれないことを考えると、迂闊に出せなかったそうだ。

「それに、相手の剣も世界四剣・・・・我らもばれていれば何をされていたか・・・・」

「相手も・・・世界四剣!?」

「・・・世界四剣って・・・なんなの?」

なのはが、セイバーに聞く。
しかし彼女も知らないという。

その呼び名はもっと高次での物らしいのだ。

「アリスに聞こう。それが一番だ」

士の言葉に、一同は「ＥＡＲＴＨ」に戻る。

四剣の実体が、明かされようとしている。

――――――

「答える義理があるか？」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「モニターしました。驚きましたね。これ、十五天帝ですよ」

「では、彼は四剣の所有者だったと！！！」

「オルセアではわかりませんでしたねぇ。いやはや迂闊迂闊」

「待て。伝承では天剣には仕えし獣がいるということだろう？」

「このままではこの場所が「ＥＡＲＴＨ」にばれるぞ」

「なに。そうはいってもこの世界に来るのは・・・・・・明日でしょう」

「すぐじゃねぇか！！」

「だったら、それまでにことを済ませます」

「こと？こいつに洗脳も何も効かないぜ？」

男が、蒔風の部屋の扉に向かう。

そしてニッ、と、気持ちよく笑ってみせた。

「目標は、高い方が燃えるんですよ」

男が部屋に入る。

処置が、始まった。

「始めますよ。死ぬかもしれないので、覚悟はいいですか？」

「覚悟(そんなもん)ははなからないね。やれるもんならやってみろ」

to be continued

四面楚歌（後書き）

と、言うわけで周りはみんな敵だらけ（蒔風のみ）！！！
四面楚歌でした。

唯子の強さに関しては、本編の通りです。
彼女、まだ実感してないんですよ。恐ろしいｗｗｗｗｗ

そして、青年対蒔風・第二ラウンド
蒔風、再びの敗北。

男の処置に、蒔風が耐える耐える！！

がんばれー！！

・・・・応援はこれくらいでいいかなｗｗｗｗｗ
主人公だから大丈夫だよ！！きっとｗｗｗｗｗ

ではまた次回

VS銀白　再び

青龍たちと共にセイバーたちが戻り、蒔風の居場所がわかるかもしれないという情報を持ってきた。

それを聞いて、「ＥＡＲＴＨ」は攻め込む準備を始めている。

「クラウドさんに声を掛けないと・・・・」

「全員行くの？」

「そうしたいけど、前にそれでこっち狙われたことがあるから・・・・」

「でもあの男は「ＥＡＲＴＨ」が目標ではないと言ってた。大丈夫じゃない？」

「それなら全員で行くか」

「・・・主が対峙した青年は・・・・翼人の力を封じることが・・・・できます・・・・全員で彼に向かうのは・・・・得策ではないかと」

「そっちには手練れを回すしかないな・・・・」

会議室では理樹や青龍がほか数名のメンバーと共に準備を進めていた。

また、他の部屋では残りの七獣が蒔風(むこうの)の持つ十五天帝を捉えてゲートを開こうとしていた。
そのゲートを観鈴が安定させ、みんなを送り出す、という物だ。

準備ができ次第、出発する。

そして、その準備までの間に、なのはや一刀、セイバーが、アリスから話を聞いていた。

「世界四剣・・・・ですか。まさかまた集まることになろうとは」

「知ってるんですか？」

「・・・・私の話もあくまで聞いた話です。私よりも数代前の管理者の時の話らしいですし」

それでもいいなら、とアリスが前置きして、早速話し始める。

世界四剣
世界を股にかけて存在する剣。

その最初の持ち主は、もう数えることすらも億劫なほど、はるか昔の人間である。

ある男がいました。
その男がその剣を振るうと敵は倒され、自軍に勝利をもたらしました。

ある男がいました。
その男はそうして広げた土地を統治し、世界を統べて安寧を約束しました。

ある男がいました。
その男は戦いで傷ついた人間を癒し、敵味方関係なく救いました。

ある男がいました。
その男は人々の心を開き、自国の民の心も、敵国だった者の心も繋げ、一体とした国を築きあげました。

ある男の剣は、聖剣・エクスカリバー
ある男の剣は、天剣・十五天帝
ある男の剣は、神剣・ヴァルクヴェイン
ある男の剣は、開剣・キーブレード

男たちははるか太古に連携し、素晴らしい大国を築き、四人の王として統治しました。

しかし、彼らが死んでいくとその国はバランスを崩し始めます。
四剣は新たなる所有者を求めて、別の世界へ。

統治しきれなくなった国は、その後崩壊し、新たな国となったそう

です。

それから四剣は長い時の中をさまよいました。

ある剣は名をいたる世界に馳せ、その名を持つ剣がいくつも作られました。
王の伝説と共にあったその剣は、今では新たな所有者もいないために彼(か)の王と共にあります。

ある剣は長らく所有者がおらず、一番最近の所有者も“Ｎｏ　ｎａｍｅ”の人間だったためにその手に握られることがないと思われていました。
今ではその所有者と共に世界をめぐり、そして世界を救ってきました。

ある剣は使用者が固定され、今は敵の手にあります。

ある剣はまた別の次元を渡る多くの勇者の手にあります。
彼らが手にしているのは派生剣であり、本物ではありますが、本物でないのです。
四剣のキーブレードはその大元であり、またの名を「Ｘ(キィ)ブレード」と呼ばれています。

「その共通点は、多刃です。聖剣は一つに束ね、天剣は十五対、神剣は刃を生み、開剣は派生剣として多く名を馳せています」

「そのうちの一本が、敵の手に・・・・・」

「でもヴァルクヴェインって癒しの剣なんでしょ？なんでこんなことに？」

「世界四剣はどれも強大な力を秘めています。「治癒」や「統治」はその能力でしかないんです」

「つまり、使用者によって変わる？」

「舜を見てください。あの人、統治者って感じですか？」

「・・・違うな」

「もちろん、その青年が治癒の力を使えないわけではないのでしょうが」

ヴァルクヴェインの多刃は、凶悪そうに見えて実は一番相手を無力化しやすい能力だ。

うまく振るって相手を封じ込めれば、相手は大きな怪我を負うことなく無力化される。

そしてその小さな切り傷等を癒す、というのが本来の使い方らしいのだが・・・・

「まあ、要は使いようです。セイバーさんのエクスカリバーだって、風王結界とかがあるでしょう？」

「そういう物ですか」

「そういう物です」

「世界四剣のことは分かった。で、どう対処すればいい？」

「・・・・さぁ？」

「さぁ・・・・って・・・・」

「世界四剣だのなんだのと言っても所詮は剣です。ただの強力な剣。

対処の使用はいくらでもあるじゃないですか」

「確かにそうだけど・・・・あんたは戦わないのか？」

「戦っていいんですか？」

「いいんじゃないでしょうか」

「そうですか。では準備してきますね～」

そういって、あっさりと快諾したアリスが、鼻歌を歌いながら自室に入って行った。

「ノリノリ・・・でしたね」

「せやな」

ーーー

翌日

「ＥＡＲＴＨ」の一室に、ゲートが開かれた。

向かうメンバーが、門の前に立つ。

「俺たちの目的は蒔風の奪還だ。相手組織を潰せればそれでいいけど、無理ならすぐに引き返すよ！！」

「わかった」

「ＯＫ」

「では、いきましょう！！」

いつも通りの服装で、アリスがそういって先陣を切って踏み出した。

戦力は十分。

さあ、取り返しに行こう。

――――――

「いまみんなが向かっているのは舜を取り戻すためでしょ！！そっちの方もどうにかしようとするでしょうけど、もしもの時は置いてこられちゃうって！！」

「何で翼刀が後回しなのよ！！私、行くから！！」

ズっ！！

「え？うきゃぁ！！」

「ゴォオ！？」

叫び、勇んで、足を進める唯子。
バーサーカーがずるずると引きずられ、乗っかってるイリヤが頭にしがみつく。

「フニニニニニニ！！ウニャーーー！！！」

「かわいい声出してなんてことしてんのよ・・・・」

腕を引っ張ってバーサーカーごと進む彼女が、かわいい気合いを出して進む。
イリヤはそれを見て呆れていた。

ーーー

掴む腕をゲートに向かって投げるように伸ばした。
飛んでいくように前に進むバーサーカーに引っ張られて、唯子もゲートに飛び込んで行った。

「が・・・がお・・・・・」

その光景にポカーンとする観鈴。
そしてハッ！と気を取り直して、自分もゲートをくぐって行った。

――――――

城壁の囲む施設の中で、モニターを見る男たちが、一斉に外を写すモニターに視線を向ける。

見ると、グォン！と一気にゲートが開き、そこからドチャドチャと「ＥＡＲＴＨ」のメンバーが落ちてきた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・撃っていいと思う？」

「まあ待ちましょう。とりあえず・・・」

「とりあえず？」

「来訪者には挨拶です。それが礼儀です」

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

他のみんなも立ち上がり、その門を見上げた。

「この中か？」

「・・・はい・・・・私たちは中では出されなかったので・・・・・
中は解りませんが・・・・・」

クラウドの言葉に、青龍が応える。

と、大きな門の脇にある小さなドアから、一人の男が出てきた。

「やあみなさん」

「お前ッ・・・！！！！」

そこから出てきた男を見て、唯子が怒りの形相で走り出そうとする。

しかし、アリスがその肩を掴み、唯子を止めた。

「なるほど、彼が責任者ですか」

「アイツが街を壊したんだ・・・・あいつがみんなを、翼刀を！！」

唯子の叫びで、男に皆の注目が集まっていく。

それを聞き、男は人差し指を上げて訂正を始めた。

「ええ。ですが実際に行ったのは私ではなく「翼刀」ですよ」

「変わらないだろ！！」

「そうですよ。然したる差などないでしょう。ですが、それがなんです？」

「な・・・・・」

「あれは私の実験にとって重要なことでした。結果、十分なデータが集まったのですよ。彼らは無駄ではなかった」

「なにを・・・！！！」

「それに、あの街が壊滅しなかったらあなたたちは我々の影すら知らなかった。結果的に見れば――――」

「そんなこと聞いてんじゃないのよ！！！」

男の言葉に唯子が激昂し、アリスの抑制を振りほどいて飛びかかって行った。

しかし男がパチンと指を鳴らすと、足元からワイヤーが伸びて唯子の足に絡まって

「え？」

グーン、と高くまで持ち上げて

「ちょっとちょっと！？うわぁぁあああああ！！！！？」

ポーンと城壁の中に放り込んでしまった。

「彼女はあの実験に耐えきった検体でしたからね。約束を果たした今、じっくり調べさせていただきましょう」

男は淡々と言うが、アリスをはじめとした「ＥＡＲＴＨ」のメンバーが顔に手を当ててハァ・・・とため息をついていた。

「誰だあれ連れてきたの・・・」

「バーサー・・・いや、イリヤだ」

「勝手に引っ張ってったのよ！！」

「何人か助けに・・・・」

「いや、それは大丈夫だろう」

アーチャーの言葉に、走りだそうとする何人かが足を止めた。

「綺堂は自覚してないだけで緊急回避や戦闘力はかなりものもだ。よほどじゃなければ大丈夫だろう」

しかし、その言葉に理樹が「そうは言っても」と不安そうな顔をした。

だが、アーチャーが言葉を続ける。

「それに、すでに増援は行っている」

「そちらで話を進めるのはいいですけどね。そろそろお引き取りいただけませんか」

勝手に話を進める彼らに、男が淡々と言い述べる。
だが、そう言われて帰る彼らではない。

むしろ今から突入するという勢いだ。

その、まるで目に見えるという錯覚を感じるほどの意志を見て、やれやれと男が頭を振る。

「まったく・・・こっちは一晩中実験していて疲れているというのに」

「実・・・験・・・？」

男の言葉に、理樹が聞き返す。

「ええ。実験です。自称・世界最強というほどの翼人が手に入ったのですから、それはするでしょう」

「自称じゃない。事実だ」

「そこはまあどうでもいいのですが。ですがねぇ・・・彼、洗脳とか幻術全然効かないんですよ」

それを聞き、そりゃそうだと一同が思う。
あの男がそう簡単に染まるはずがない。

「つまり、うまくいかなかったってことだろ?」

「ええ、まったくうまくいかなかったですよ」

そう言って、再び男が指を鳴らす。

大きな門が、メインの門が、開かれていく。
ゆっくり、ゆっくりと、門が動く。

「うまくはいきませんでしたけどね」

門の厚みの分の鉄が見え、そしてその隙間が開いて光が差し込む。
向こう側の光景が開けてきた。

「諦めないとは素晴らしいことです。不屈が人に成功を届ける」

そしてそこに、蒔風舜が立っていた。

その姿を見た一同の想いは何だったのだろうか。
そして、男の言葉からして、それは最悪の現状を示唆していた。

「致死量ギリギリで難しい調整でしたが、どうにかしました。さすが私」

そう言って、男が閉じられていく扉の向こうに下がって行く。

「では、「ＥＡＲＴＨ」の皆様方。良き時間を過ごされますよう」

バタン！！！！

門が閉じる。
そして、残された男がユラリと一歩、幽霊のように踏み出して――
――――

特徴的な、日本刀のお尻とお尻を合わせた剣を左右に一本ずつ握り、
集団に向かって疾駆していった。

――――――

「りょーかい」

「世界中で戦う「ＥＡＲＴＨ」の戦闘データ。ハッキングしても「ＥＡＲＴＨ」のパソコンにはない。となれば戦場でとるしかないですしね」

「まとめて手に入るなら、僥倖だな」

「やっていますか？」

「おう」

「では、高みの見物といきましょうか」

モニターの中では、風林火山を奮う蒔風が集団に突っ込んでいっている。

彼が、再び敵になる。

to be continued

VS銀白　再び（後書き）

唯子がなんだかアホの子になっとるーーーーー!?

唯子
「これでいいのか武闘鬼人さん!?」

これでいいんじゃないでしょうか!!

唯子
「断言しおった・・・・」

彼女は突っ走っちゃってるだけで、別にアホじゃない・・・・です?

唯子
「なぜ疑問なのか話を聞こうか?」

スルーします。

今後の流れで自然にしていくともしかしたらなるかもしれないｗｗ
ｗ
でもそれもいいと思うんだ。キャラが勝手に育つっておもしろい。

世界四剣に関してもまた少し明かしました。
というかこれ以上のことはあまりないですが。

キーブレードは出してもいいかどうか悩みました。
さすがの私でもネズミーマウス（仮）の一団は怖いので。

でもあくまでもあっちが持っているのはキャラだけですので、設定は大丈夫！！という話を聞いたので出しました。

そして、蒔風が敵になったという
士とかは問答無用でぶっとばそうとしそうだけどｗｗｗｗ

さて、戦場分けが出来上がりました。

ここからまた進行させていきますよ！！！

次回、唯子でいこうか蒔風でいこうか、どっちだろーなー！？

ではまた次回

「いったぁ・・・何すんのよもう」

ワイヤーで放り投げられ、彼女が落ちたのは穴の中。
その穴の中を滑り台のように落ちて行き、一つの部屋にやがて到着した。

見渡してみても、大したものはなにもない。

「中に入れたのはいいけど・・・どうしようかなぁ・・・・」

彼女は特にこういった侵入作戦ができる人間ではない。
ただ中に入って暴れ、走っていればいいだろうという考えだったし。

と、そこでガシャンという音がして、部屋にクリスタルの人形が入ってきた。

「え?ちょお!?」

ゴッ、バキィ!!

突っ込んできたそれを、半ばあわてた感じで蹴って、それでも十分に粉砕する唯子。
すると間髪入れずに次の人形が入ってきて、今度は三回の蹴りで倒す。

どうやら相手は彼女の力を測っているようだが、唯子としては邪魔なのが来たから吹っ飛ばしてるだけだ。

そうして二十体くらいまで倒したところで、床が砕けたクリスタルで覆われてしまう。
するとクリスタルが溶けて消え、その液体がさらさらと流れて行ってしまった。

「？　そこ？」

そしてその流れた先を見て、バキッ！と拳を一発叩き込んだ。
衝撃を吸収する構造の壁だが、そのほんの少しの穴ではさすがに耐えられず、簡単に崩れた。

こうなれば簡単だ。

十五秒後には、この部屋には誰もいなくなった。

――

「蒔風ェ！！！」

彼らが蒔風の名前を叫ぶ。

それは彼を止めるため――

それは彼の目を覚まさせるため――

それは仲間を救うため――

どれも違う

「ついにこの時が来たな！！ブッ倒してやる！！！」

この男をブチのめす為である。
主に士が主導となって。

蒔風は開翼もせず、獄炎なども使わず、ただ剣技のみで彼らに攻め込んでいっていた。

当然と言えば当然だろう。
翼人は意志で戦う者だ。それが悪意であろうと善意であろうと、自身であろうと他人であろうと意志を得て立ち上がる彼らは強い。

それを上塗りされ、ただの人形のようにされては出せる力も出せないのだろう。

「よっし!!ブチのめして目ェ覚まさせるぞ!!」

「ねぇ・・・士さんって・・・・・」

「ただ倒したいだけですよね・・・・」

無論、ノリノリなのは士くらいのものだが、結果的には皆の行動は

変わらない。

この場に来ている他の人間は、普通に倒そうと、本気で掛かって行っている。

ディケイドに士が変身し、頭部のプレートで突っ込んでくる蒔風を弾き飛ばしてゆく。

ライドブッカーで切りかかっていくが、その剣筋を蒔風はするりといなしてディケイドの背中を転がって先に行く。

そしてディケイドの後ろにいたアーチャーに切りかかり、返す刃でセイバーを切り上げた。

そのタイミングでティアナが魔力弾を撃ち、蒔風がそれを回避するが魔力弾は蒔風を追って直角に曲がって行く。

その魔力弾を半ば無理やりな体勢で斬り落とす蒔風だが、そこにバーサーカーの雄叫びと共に斧剣が叩き落とされた。

「！！！」

「ゴッぉォォオオオオオオオオオオおおお！！！」

ドゴンッッッ！！！！

思い切り振り降ろされた斧剣が蒔風の脳天に落ちて行き、それを蒔風が風林火山を頭上でクロスさせて受け止める。

しかしその威力は真正面から受け止めきれるものなどではない。
膝がガクリと少し崩れ、蒔風の体が押し込まれていく。

そこに

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――》

蒔風のこめかみに銃口が当てられ、ディケイドがカードを装填した。

ディメンションシュートのホログラムカードの一枚目と二枚目に蒔風が挟まれ、その後にも六枚くらいそれが続いていく。

「！！！」

「喰らえ」

ドンッッ！！

そして容赦なく引き金を引くディケイド。
一枚目をくぐった弾丸が巨大化して蒔風を押しのけ、さらに通過しながら肥大し、蒔風の体を押していく。

しかし一番最後のカードをくぐったところで弾丸（すでに砲弾と言った大きさだが）が、四つに割れて後方に飛んで行った。

「クソが！！」

「士さん、悪ですね～」

まるで悪役のセリフを吐くディケイドが見た蒔風の手には、風林火山ではなく天地陰陽・風斬車が握られていた。
どうやら風林火山は弾丸を止めるために手放したらしく、バーサーカーの斧剣の下に落ちている。

その蒔風に、クラウドが二刀握って斬りかかっていく。
風斬車を「天地」「陰陽」に分けて組み直し、下がりながらそれを

受ける蒔風。

クラウドが大剣を叩きつけ、それを蒔風が体捌きで回避したところにもう一刀を斬りつける。

それを蒔風が側宙して回避し、そのままクラウドの胸に蹴りを放った。

が、その蹴りは理樹のバリアに阻まれ、一刀の掌底が蒔風の腹部にめり込んで身体を吹き飛ばす。

吹き飛びながらも蒔風は天地陰陽を投げ、クラウドたちの顔面を狙うもののそれは簡単に弾かれてしまう。

「タフだな」

ドスッ

アーチャーの短い一言と共に投影剣が射られ、それが蒔風の足元に刺さる。

そして

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

それが爆発し、蒔風の立ち位置を爆心地に変えた。
その攻撃を受けてごろごろと地面を転がる蒔風は、体のあちこちが煤けており、場所によっては甚大な火傷を負っている。

「死なれても困るが、あの程度で済まされるのも心外なのだがな・・・」

その驚異の耐久力に冷や汗を垂らすアーチャー。

「でもそれくらいのつもりじゃないと勝てませんよ!!」

その後ろからスバルが飛び出し、突っ込んでくる蒔風にカウンターを入れようと拳を握る。
リボルバーが唸り、その顔面に向かって拳を握って突き出した。

そして、蒔風がそのまま頭突きでそれを迎え撃つ。
バキリという嫌な音がして、そしてそれから蒔風の蹴りがスバルの腹に叩き込まれる。

「うグ・・・ゲホッ・・・・・そんな・・・・・・」

スバルが腹を押さえながら信じられないものを見たように蒔風を見る。

バキリ、といったのは、彼女の拳ではない。蒔風の頭蓋骨だ。
感触からして砕けてはいないが、ヒビは入っていると言ったところか。

そしてそれで拳を止めたうえで、スバルに反撃してきたのだ。

非殺傷と言っても、やはりそれは物質同士のぶつかり合いではあるのだから損傷はある。
だからこうした怪我は当然あるものだが、だからと言ってこの「行為」がまともであるわけがない。

「下手をすれば死ぬ判断だろ・・・・これ・・・・」

自分の命を無視した戦い。

それが簡単にできるのが、この男なのである。

覚悟も何も、ありはしない。

からっぽだとしても、彼はあっさり命を捨てられる。

頭部からドロリを血を流しながら、蒔風がまた突っ込んでいく。

クラウドたちがそれに対抗しようと剣を握り

「あなたたちは下がってなさい」

迎え撃つ前に、アリスが蒔風の腹に足刀を入れて真逆に吹き飛ばした。

「こんなところで全力を出してどうするんですか。たかだかこの程度一人に」

バサァッ!!とアリスが服を脱ぎ払い、ノースリーブの服に替わる。

そして、立ち上がってくる蒔風に対して、拳を真っ直ぐに向けて宣

言した。

「手加減なんかしませんよ?見ているだけで嫌ですから、あなた」

管理者、ついに参戦

ーーー

結論として、唯子は

「・・・・思い通りになるのはシャクだわ」

そういって、容赦なく右に向かって突っ走って行った。

数秒後、その通路の先から研究員の物らしい悲鳴と鈍い音、そして地面に倒れる音が聞こえてきた。

彼女は一番無事だった。

ーーー

蒔風の胸に、アリスの拳がめり込んで吹き飛ぶ。
蒔風も受け身を取ってその衝撃を逃がすものの、見るからにボロボロになっていっていた。

アリスに選手交代してから、蒔風への攻撃は怒涛そのものだった。
攻撃はすべて受け流すか防がれ、確実な一撃が確実にダメージを与えて行っていた。

蒔風の蹴りをアリスが掌で流し、拳を避け、後ろ廻し蹴りを掴み取る。
そして地面にビタンビタンと叩きつけまくり、最期に円を描くように地面を引きずって投げ飛ばした。

攻撃されることに対して、蒔風は最善の対策をとっていた。
叩きつけられれば頭を抱え、投げ飛ばされたら衝撃を流して受け身を取る。

だとは言っても、やはり攻撃のダメージは耐えられるものではなく、明らかに致命傷の傷をすでに四つほど抱えていた。

「頭蓋骨陥没、気管破損、内臓損傷、動脈失血・・・・・・まったく、どれだけのことをすればそれだけ動けるのでしょうね」

半ば呆れたようにアリスが呟き、向かってくる蒔風を見つめた。
腕を肘から振り、力を溜めて蒔風が拳を全力で握りしめる。

そうして蒔風が放った打滅星を、アリスが拳とすれ違うようにして躱し、上腕を首の下に引っ掻けて地面に叩きつけた。

バンッ!!という音がして蒔風の身体が跳ね、地面から浮いたところにアリスのラッシュが叩き込まれる。

右ストレート、左ブロー、右蹴り上げ、右後ろ蹴り
後ろ蹴りでまた少し浮かせた身体に左アッパー、左蹴り上げ、頭を掴んで右ひざ蹴り、一回転して左エルボー

そして止めに両手の連続突きを十発叩き込んでから、一回転して十分な腰の捻りを練り込んだ後ろ高回し蹴りが側頭部に命中して吹き飛ばした。

「ア、アリスさん、舜さんは大丈夫なんですか!?」

一通り終わらせたアリスに、ティアナが駆け寄って聞く。
あれで蒔風は大丈夫なのか、と。

それに対し、アリスがニッコリと笑って答えた。

「ええ、大丈夫ですよ」

そう言うと、蒔風の体がグラリとしながらも立ち上がり、蒔風に向かって腕を伸ばして突っ込んできた。

「しつこい」

そしてそれにアリスは手に剣を一本出し、振り向くと同時に肩から股間にかけてバッサリと蒔風を切り捨てた。
ブシャァッ！と血が噴き出して、蒔風の体が荒野に沈む。

「舜！！！」

「・・・・・は？」

セイバーが倒れた蒔風に駈け寄り、ほかのみんなもそうする中、アリスが一人気の抜けた声を出した。

「ど、どうしたんですか？」

「どうしたって・・・・舜が！！」

「ええ、だから助けに行くのでしょう？」

「え？」

「え？」

「あれ？何かかみ合ってない？」

何やらおかしい。
アリスとセイバーたちの会話が成り立たない。

ティアナがおずおずとアリスに聞く。

「あのー・・・舜さんを助けに来たんですよね？」

「ええ」

「着きましたよね？」

「ええ」

「（蒔風を指さして）出てきましたよね？」

「ええ」

「あれ、舜さんですよね？」

「いいえ？」

「あれ？」

ここでかみ合わなくなる。
あれは蒔風ではないというのか。

「動きも、見た目も、確かに蒔風です。さらに言うなら「死の恐怖」も取り払われています」

でも、あれは蒔風舜ではない、らしい。

「死亡直後の死体に生前の電気信号などのデータを送ることで気配から何までそのままに人形とする技術を彼らは持っていたでしょう。それを蒔風でやっただけです」

アリス曰く、彼らは結局うまくは行かなかったものの、蒔風から得た膨大なデータを送りつけ、「この蒔風」を作ったようだ。
致死量ギリギリ、というのはこの男に対するモノだ。

「つまり士さんはそれに気づいていたからあれだけ本気だったんですね！！」

「あ・・・・あぁ！あぁそうだ。俺には、全部わかってたさ」

「つまり、俺たちは謀られたのか」

「おそらく、あの中にまだ蒔風はいます。こうしている間にも、多くのデータや力を吸われて・・・・」

ダン！！ザザザザザザッッッ！！！

と、そこでアリスの言葉を遮るようにして城壁の上から何かが飛び出してきて彼等を取り囲んだ。
その数は十三。どうやら彼らはこの数が好きらしい。

そしてその顔は、全てさっきまで戦っていた相手と同じものだ。

「こいつらは・・・・」

「なんてことを」

周囲に現れた、十三体の蒔風。

十五天帝はさすがに全部ではなく、そのうちのいくつかを各人がもっていた。

風林火山を持つのが四体、天地陰陽が二体、獅子天麟が三体、龍虎雀武の未解放状態が二体、解放状態が二体だ。

「もう隠す必要はない、ってことか」

「だが、本気でやっていいなら（ガシャ）」

「やれない数じゃ・・・・」

ドンッッ！！！

武器を握り、じゃあ行くかというところで十三体全員にエネルギーが送り込まれた。

それは施設から送られているモノらしく、日光で薄れて見えにくいが、キラキラと光る銀白色をしていた。

「！！！」

「まさ・・・か・・・・・！！！」

バンッッ！！！

そしてエネルギーが溜まったのか、十三人が全身に力を込めて何かを解放した。
その構えはまちまちだが、どれもがさっきの一体とは全く違う気配を漂わせている。

「ねえ、これって・・・」

「ああ、翼は出てないが・・・・「開翼」だ」

「まさか、ここまで翼人のことを知っているとは・・・・・・！！」

限りなく蒔風に近づいた十三体が、武器をそれぞれ構えて周囲を回

る。

そして、十三人と十人が一斉に動き出す。

偽りの銀白は、いらない。

ーーー

「・・・っとぉ・・・俺、こういうの得意じゃないんだけどねぇ・・・ほら、大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です」

「問題ないぞ」

スタン、とそれに続いてなのはと星も降りてくる。

当初はこの男だけで来るはずだったのだが、二人がどうしてもとついてきたのだ。

「さて・・・どっちかなぁ？こっちかな？ん？この機械どう使うんだ？」

「「・・・・・」」

それにしても機械が苦手なこの男一人で本当に大丈夫だったのだろうか？

ついてきてよかった気がする。

そう思いながら、なのはが機械を受け取ってこっちだと案内する。

「お、ありがとな。じゃ、いっちょ行きますか！」

シュッ、と敬礼のように指を向ける男が張り切る。

日高仁志、普段は皆からヒビキと呼ばれる男性が、先に進む。

別働隊が動き出す。

――

「ここどこだ？」

気絶した研究員の胸ぐらをつかんでパッと放して落とす唯子。

あれぇ？と首をかしげ、彼女は先に進んでいく。

to be continued

偽翼（後書き）

実は蒔風ではなかったという件
そしてやはり敵は外道だった。

ちなみに青龍たちは気づいてましたけど、アリスと同じように「皆わかってるよね？」みたいな感じだったそうです。

そして侵入組。
ヒビキさんとか出したら面白い気がしたから出しましたｗｗｗｗｗ

次回はまた戦闘

時に・・・偽蒔風との戦い、一人一人書こうか悩んでます。
軽くしますか？ガッツリしますか？

蒔風
「自分で決めろよ」

では、また次回で

十三人、侵入班、囚われの身

「お・・・・グぅ・・・・・・」

蒔風が部屋で唸る。

四肢の先端を壁にはめこまれ、そこからエネルギーが取り出されていっている。
その下の床にはすでに水たまりのような汗が垂れており、疲労の程がうかがえた。

「くっそ・・・好き勝手に薬やったと思ったら今度はこれかよ・・・・」

苦しそうな顔をして、悪態をつく蒔風。
しかし、聞く人間は一人もいない。代わりに、壁に埋め込まれた機械が止まることなく動き続けている。

「ふゥ～～～～・・・・ダぁッツ！！！」

ゴッッ！！！

息を深く吸い、一気に吐き出して、蒔風がその手にエネルギーを放出し、壁ごと破壊して脱出しようとする。

しかし壁はガキョガキョという音を立てて少し揺れただけで、すぐにそのエネルギーと衝撃を吸い取って送り出してしまう。

「～～～～～ッ・・・・・ハァッ、ハァッ・・・・クソ」

そしてまた憎たらしそうに呟く。

（俺のエネルギーが使われているってことは、ここに誰か来たってことか・・・多分アイツらだろうなぁ）

脱出できればよかったのだが、これ以上抗うと逆にエネルギーを与えることになりかねない。

「ＥＡＲＴＨ」が来ているのなら、これ以上は首を絞めるだけだ。

「果報は寝て待て、ってことか」

そうして、蒔風が目を閉じた。
無駄にエネルギーを使うわけにはいかない。そうじゃなくても、ただえさえ吸い取られているのだから。

――――――

飛ばす。

後退するクラウドだが、大剣をクイッと持ち上げ、剣を一本射出、蒔風に向かって飛ばしていった。

しかし蒔風はそれを真っ向から弾き飛ばし、クラウドになおも向かって行く。

「クラウドさ、ウワォッッ!?」

「自分の相手に集中しろ!!」

「相手の数の方が多いんだからってもうこの!!!」

現在、各人がそれぞれ一人ずつ蒔風を相手にしている。

混戦、というよりは一対一がいくつかある、といった感じだろう。

「相手の方が数が多いんだ!!自分の相手以外を気にしていたら死ぬぞ!!」

「でも気にしないわけには・・・・・」

ドゴォウッッ！！！

周りを気にする一刀の言葉を遮って、アリスと蒔風の爆発が轟いた。
現状、超えた分の余人数はアリスが一人で相手にしているのだ。

「風林火山、獅子天麟、龍虎雀武、天地陰陽。十五天帝オールスターズですか」

そう言いながら、手に握った青龍を振るうアリス。
七獣を戻して戦わせてもいいのだが、正直言って彼等では粉砕されてしまう相手だ。
それなら武器となってくれていた方が戦力になる。

と、言うわけで龍虎雀武、獅子天麟は今、アリスが使っている。

アリスが上空にジャンプし、四人がそれを追うようにして一気に向

かって突っ込んでゆく。

それに対してアリスが独楽のように回転し、「獅子」「天馬」でその顔面を狙って斬り裂こうとする。

しかし四人はそれを受けず、少しだけ身体を逸らしてアリスに向かって剣を振ってきた。

四人の内アリスの攻撃範囲にまで突っ込んできたのは二人。

その二人は「切られても戦える程度の傷」になるように回避し、顔面と胸元を斬り裂かれながら獅子天麟と龍虎雀武を振るって打ち合う。

そして残った二人がそれぞれ突きと斬撃を飛ばしてきて、組み合ってきた二人もろともアリスを切り刻もうとしてきた。

「本気ですかッッ！？」

ギャゴゴゴゴ！！という金属が振動するような音がして、三人にそれが命中し、回避したアリスが地面に降り立つ。

回避したとは言ったものの、二の腕や頬にはうっすらとした切り傷

が出来ており、血がたらたらと流れ出てきていた。

「蒔風四人相当の相手・・・・これはさすがに・・・・・・・クラウドさん！！」

「なんだ！！！」

上空から降りて――――というより落ちてくる四人を見上げ、アリスがクラウドに叫びかける。
獅子天麟の攻撃をかわし続けてから蹴りを放つクラウドがそれに応えると、アリスが蒔風の一人を蹴り飛ばし

「一人あげます！！！」

「いるかァ！！！」

クラウドの方に飛ばしてきた。
クラウドは当然拒否するが、すでにこっちに飛ばされてきているのだ。対応しないわけにはいかない。

こうして、クラウドの方に二人目の獅子天麟蒔風がやってきた。

アリスの蹴りで顎が砕けているようだが、どうせなら腕の一本でもへし折ってくれていればよかったのに、と思う。

同じようにして理樹にも蒔風を一人飛ばし、いい仕事したと汗をぬぐうアリスが再び蒔風を相手にしていった。

「「ぜってーあとで呪う！！！」」

しかし、アリスの耳には届かない。

――

《ザっ、ザザッ・・・・・・》

「・・・・・外との連絡がつかない」

「妨害電波が出てるみたいだね・・・・・」

施設内を進むヒビキ、なのは、星の三人は、いまだ蒔風を見つけられていない。
外での様子もわからない以上、とりあえず先に進むしかないのだ。

研究員が慌ただしく騒ぎだし、対処に追われていたためここまでは楽に入ることができた。

「誰か入ってるのかな？」

「さぁ？でもま、俺らは俺らでやることしましょ。デバイスさん、準備はいいかい？」

《いつでも》

「お二人さんも、多分やったら敵が来るから、準備いいかい？（キィン・・・）」

「大丈夫！！」

「むしろ来てみろ、という感じですな」

「そりゃ頼もしい。では・・・・ハァっ！！！」

ドドンッッ！！

そうしてヒビキが変身し、音撃棒を手にしてクルクルと回す。
ベルトから外した鼓を外して壁にセットし、大きくなったそれを思い切り叩いた。

ドォン！！！という音が鳴り響き、施設内に浸透していく。
それをレイジングハートが感知し、ソナーのように内部の構造を測って行った。

「どう？レイジングハート」

《いま私たちがいるのはここです》

そういって、レイジングハートが地図を出して一点を点滅させる。

ここの地図は円形をしていた。
それを円グラフのように四分の一ずつ分け、それぞれを少しずつ離して隙間ができていて、その真ん中にもう一つ小さな円（塔になっている部分）がある。

そしてその四つに分かれたものから、それぞれ隣の区画と塔に通路が通っている。

響鬼たちがいるのは、右上の区画から右下の区画に伸びる通路だ。音が響き切っていないからか、左側の方に行くほど、地図はぼやけていた。

「広い・・・・」

《今のでは蒔風を見つけることが出来ませんでした。とりあえず地下はないようなので・・・・》

「じゃ、左側かな？」

「それか塔の上、ですな。でもその前に」

ガシャン、という音がして、目の前にクリスタルでの模造戦士が現れた。

見た目からして、相手は――――

「俺かよ」

ーーー

ーーー

カンカン

「うーむ。硬いなぁ」

鉄の扉をノックするように叩く唯子。
ここまで順調に進んできたものの、ここでいきなり壁が下りてきて行く手を阻んでしまったのだ。
戻ろうにもそっちにも壁が下りてきて閉じ込められている。

「じゃあ・・・・」

ドゴン！！

そして、唯子が下腹部に力を込めて、一歩踏み込んで拳を叩き付けた。
しかし数秒ビリビリと振動してから、その衝撃は唯子の体を叩いて弾き飛ばしてしまう。

「きゃあ！？」

そして反対の壁に当たり、その衝撃がまた弾け返って唯子の体を飛ばす。

まるで全面トランポリンだ。しかも壁の硬さはかなりのもの。

「クッ・・・キャぁあああああああ！！！」

そんな中でも、唯子は必死になってガードや受け身を取っていた。

そして、床に体がついた際に腕を全力で押し付けて方向転換する。

腕の筋肉がメキメキと嫌な音を立てるが、それでも唯子は前進方向の壁に向かって体を飛ばした。

「アァァァッァあああああああああ！！！！」

ドゴォウ！！！！

その勢いのまま、唯子が肩からタックルをしてその壁をブチ破った。

「つッぅ・・・・・」

しかし、右腕は肩から外れてしまったのかブラリと下がってしまっている。

「グッ・・・あァッ！」

だがその腕を左腕で掴み、一気に引き上げて無理やり関節にねじ込んだ。

痛みに顔がゆがむが、それを食いしばって唯子は先に進む。

ここに、彼がいるかもしれない。
そう思うだけで、この足は動いてくれる。

――――――

「ダメか」

ダメだろ
お前が

to be continued

十三人、侵入班、囚われの身（後書き）

蒔風はいったい何をしているのだろうかｗｗｗｗｗｗ
ちなみに区切りが違うだけで言ってることは前のと同じです。
あってるか自信がないｗｗｗ

唯子さんが少し負傷
戦いはかなりヤバい領域に
ヒビキさんはなかなか順調

といったところでしょうか。

なんだか進展ないなぁ
ごめんなさい

次回、やっと合流！！発見！！

ではまた次回

「死」という恐怖

《ＫＵＧＡ　ＡＧＩＴＯ　ＲＹＵＫＩ　ＦＡＩＺ　ＢＬＡＤＥ
ＨＩＢＩＫＩ　ＫＡＢＵＴＯ　ＤＥＮ－Ｏ　ＫＩＢＡ－ＦＩＮＡＬ
ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ－－－ＤＥＣＡＤＥ！！》

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ－－－ＢＬＡＳＴ！！》

ドドドドドンッ！！

コンプリートフォームへと強化変身したディケイドが、強化されたブラストを蒔風に向けて撃ち放った。
それを畳返しで防ぎ、その壁を蹴り飛ばしてくる蒔風。

ディケイドがそれを斬り裂いて防ぐと、その向こうから蒔風がディケイドの胸を飛び蹴りで蹴り飛ばした。

「ガァッ！・・・くそ、やっぱ強ぇぞ！！」

「当たり前のことをいまさら言うな！！」

半ば苦笑気味に言うディケイドに、アーチャーが皮肉で返す。

彼も多くの武器を投影して攻撃を受けているが、行けて互角程である。
これ以上の攻撃手段は固有結界しかない。

「まあこいつがそれを許してくれるわけもないのだがな！！」

「ハァッッ！！！」

ゴンッッ！！！という硬い音がして、スバルの蹴りが蒔風の腹部に突き刺さって身体を一直線に吹き飛ばす。

しかしカウンターで蒔風のパンチが顎をかすめたらしい。
スバルの膝がガクリと崩れそうになり、その一方で蒔風がゴボリと血を吐き出しながら立ち上がってきた。

「ッッ！！こんのぉ！！」

ザシッッ、ザシッッ、と不安定な足取りで蒔風がスバルの方へと迫り、未解放状態（円盤状）の龍虎雀武を投げ飛ばしてきた。

ビィン！！という振動音が聞こえ、それがスバルの体を上下に分けようと飛んでくる。
それをスバルは蹴り上げて防ぐが、代償にマッハキャリバーのローラーが二つ転がった。

致命傷は防いだが、機動力を削がれる。

蹴り上げ直後のそのスバルに、蒔風が拳を握って振りかぶり、腹部に向かって重い一撃を突き出してきた。

まるで槍か杭かを思わせる一撃。

喰らえば確実に腹に穴が開く。

そう直感したスバルが蒔風の腕を飛び越え、彼の頭に手を置いて逆立ちになってから背後に回る。

「ＩＳ発動！！！」

頭を飛び越えるスバルがその瞬間、両手から振動破砕を放って蒔風を破壊しようとした。

頭部の血管が切れて頭皮から血が吹き出し、血涙まで流しだす蒔風。

スバルはその恐ろしさを必死になって噛み締め、耐えた。

もしもここで即座に蒔風が頭を引いて体勢を整えれば、また仕切り直しと行けるだろう。

だが、この蒔風はそんなことはしない。

死の恐怖がない彼等は、ただ相手をつぶすことのみ考える。

もはや「個」ではない彼らは、自分の消失に何の疑問も持たない。

振動波を流し込まれ、頭部が破壊されながらも、蒔風がグリンッ！と頭はそのままに胴体をこちらに向けてスバルに向かって振り突きを腹に放ってきた。
蒔風の首からゴキボキと骨の砕ける音がした。

「ひッ！？」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！！》

その姿に戦慄し、スバルの動きが一瞬止まる。
それを察知したマッハキャリバーが魔力バリアを展開させ、その拳を受け止めさせた。

しかし、拳の威力は絶大であった。
横薙ぎに振られた振り突きが、そのバリアを砕いて突き進んできたのだから。

だがそれにも意味はあり、蒔風の振り突きがスバルの腹をかすめ、少し肉を抉る程度に済む。

もう少し下がるの遅ければ、スバルは腹を削り取られ、腹から内臓をこぼして死んでいただろう。

だが恐ろしいのはそれではない。
今それよりも恐ろしいのは、首があらぬ方向を向いてブラブラしているにもかかわらず立ち、スバルに向かって拳を向けているままの蒔風である。

首が回らないと判断したのか、身体を後ろに向け、両眼をこちらに向ける蒔風。

しかし破壊された頭部ではそれが限界だったのか、身体が前に向かって倒れた。

「ぅ・・・あ・・・・・・」

彼女はレスキュー隊員だ。
望む望まずにかかわらず、人の「死」というのは見てきたつもりだった。

目の前で絶たれる命だって、いくつだってあった。

しかし、ここまでまざまざと、あからさまに、「死」という物を見

せつけられたことはなかった。

彼女はレスキュー隊員だ。
命を救う人間なのだ。

その為の障害は取り払うものの、決してそれは目的ではない。
彼女はもしかしたら、今回来た中で一番「敵を倒す」事に向いていないのかもしれない。

「スバル!!大丈夫!?」

「ティア・・・・・」

「ボケッとしないで!!立てる!?来るわよ!!」

「だ、大丈夫・・・・・大丈夫!!!」

しかし、それでも立ち上がるだけの強さを彼女は持っていた。

身体は傷つき、出血も多いが、それでも立った。
身体を染める赤は、彼女の物よりも相手によるものが多い。

あれは偽物。あれは嘘。
そう思うことで、次の敵に向かって行く。

だが、これから倒す相手も、また同じ顔なのだ。
それも、さっきのと同じような死に方をするだろう。「死」を無視した、「命」を捨てた攻撃。

だから、アリスは最初こそ四人を相手にしていたのだ。

一人が一人、倒すのならば然したる問題ではない。
しかし、一人が同じ人間を何人も殺すのは、決してまともな状況ではない。

たとえ相手が偽物だとわかっていても、その死に顔は蒔風の物なのだ。
たとえ相手が偽物でも、その「死」は決して偽りではない。

それに立ち向かうことは、一朝一夕でできる覚悟ではない。

そして、戦場（ここ）は、その時間すら、許さない。

ーーー

《先ほどの音撃から、彼の居場所が特定されました》

「ホント！？」

《左下のエリア中央です。そこに捕らわれています》

「今俺たちが右下だから・・・・こっちか」

「行こう」

クリスタルの残骸を踏みしめ、三人が進んでいく。

順調であるのは、誰もが疑ってなかった。

しかし、その左下のエリアに入ったところで、敵は現れた。

「あれは・・・・・」

神剣・ヴァルクヴェインを握った青年・鉄翼刀が、三人の行く手を阻むように待ち構えていた。

ーーー

ろで、一つの扉の向こうから変な声が聞こえてきた。

（ゾボドビ、ズギギバボドガゴボダダ！ドサバセダ、ボドビジョデデバサザグジジュ、グビグゴババギゼガ、ダダバマイカゼ、ゴボグム、ムンバサンギバシグ、バセンジレサセダガギ、ゲギボグリョブゾ、ギビギビドザヅド、グガゲダボデガセ！！）

それを聞いて唯子は

「なにこれ怖い」

何とも言えない恐怖に捕らわれた。

ここはスルーしてもいいよね。

そう思い、通り過ぎようとした唯子だが

（ダメか）

そんな声が聞こえてきて、足を止める。

どうやら中にいるのは人間らしい。さっきの言葉がなんなのかよくわからないが、ダメか、と言っているということは会話はできるはず。

うまくいけば翼刀のことを聞けるかもしれない。

そう思い直し、彼女がコンソールを見つけて破壊、扉を開いて中に入った。

「お邪魔しまーす」

「ん？・・・ガゲツバ！！」

「ひぇ！？」

「あぁすまん・・・お前は！！」

「はぁ、私ですが」

そこにいたのは、蒔風だった。
無論、彼が蒔風であることや、蒔風と自分が戦ったことなど彼女の記憶にはないのだが。

「そうか・・・目を覚ましたのか」

「？　あなた私を知ってるんですか？」

「記憶がなかった系か？あの町でお前さんと戦った人間だよ」

「・・・・おぉ、ではあなたが蒔風舜さん？」

「テキトーに呼んでくれ。とりあえずこれを外してくれると助かるんだが」

そんなこんなでとりあえず唯子も自己紹介し、ペコリと頭を下げる。
そして蒔風の手足を壁から引っこ抜こうとするのだが・・・・・

「この壁ってさ、殴ったら」

「衝撃が反射して君を叩くだけだ」

「ええ。それはさっき試したし」

「やったのか」

蒔風と唯子が話し合うが、特に案が見つからない。
唯子に壁の機械を扱うのは無理だし、蒔風から指示を出そうにも機械が多すぎてよくわからない。

「もう翼刀探しに行っちゃっていいかな？」

「お～い？翼刀って誰？」

「聞いた話だとあなたがそうなってる原因の人」

「あいつか」

「機械壊してみます？あ、でも壁に埋め込まれてるから駄目か」

「だなぁ。うまく腕と機械の隙間を攻撃してくれるとありがたい」

そこで蒔風が提案する。

この際、四肢が傷ついても構わない。とりあえず脱出しないと話は始まらないのだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「これで三発目だ！！」

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！！》

「ウオラァぁあああああ！！！！！」

ゴッ！ドォオンッ！！！

荒野にて、蒔風の一体が爆発、四散して撃破される。

これで三体目だ。

しかし、この状況に持ってくるまでにかなりの負傷をした。

ディケイドはすでにファイナルアタックライドを三枚使っている。

アーチャーも投影に使用する魔力が尽きてきているし、セイバーの甲冑もすでに見る影がない。

スバルもティアナも、肩が大きく上下して魔力ももう少ない。カートリッジもあと二発くらい。

クラウドや理樹たちと言った翼人四人はまだ無事だが、疲労の方は隠しようがない状態だ。

唯一無事だと言えるアリスも、これから十体の蒔風を相手にするとなると

「結構・・・・キツイかもしれませんね」

「だが相手も少なからず消耗しているはずだ。このままならどうにか・・・・」

ズっ・・・・

「!?」

このままなら、どうにか勝てるかもしれない。
そう思っていた彼らの目に、それを打ち砕くモノがやってきた。

銀白のエネルギー

施設から再び放たれてきたその光が、残った十人に降り注いでいき、
失っていたエネルギーを充填していく。

「勘弁してほしいものだな・・・・」

「これだけのエネルギーを取られ、蒔風は無事なのか・・・・?」

エネルギーを浴びながら、十人が歩を進める。
歯を食いしばり、アリスたちが一斉に向かって行った。

ーーー

バンッッッ！！！

身体を思い切り仰け反り、その背中から大きな翼が一気に開かれ、
エネルギーをさらに発散させていく。

「グオオオオオオオオオオおお・・・・！！！ガァあああああッッッッ！！！！」

「は、早くしないと！！！」

目の前で苦しむ蒔風を見て、唯子がすぐに拳を構える。
そして、その瞬間

ーーー

「理樹ィ！！バリアだ！！」

「もう手が回らな・・・・」

ドォッッガァッ！！！！

――――――

だが、その数秒で充分である。

「響鬼装甲！！」

その数秒で装甲響鬼（アームド）へと強化変身した響鬼が、装甲声刃（アームドセイバー）を振りかぶって翼刀に肉薄していった。

その剣を翼刀も受け止め、しかし響鬼の圧倒的な力に押しこまれてそのまま壁に激突、押し付けた。
そしてその腹に火炎鼓を押し当て、束縛していく。

「！！！！」

「さぁ～、押していきますか！！」

ギィイ、オォン！！！

「！？」

「音撃打、烈火怒涛！！！」

ゴドォ！！！！

ーーー

そして唯子の目の前を、翼刀と響鬼が壁を突き破って来、蒔風と唯子の間を通り抜けて行った。

翼刀は身体を火炎鼓に拘束されながらもその衝撃に耐えており、響鬼はそれを押し込んでいこうと反対側の壁をも破壊してさらに突き進んでいってしまう。

「な、なに!?」

「グぉオオオオオオオオオオオ・・・・・ッッハァ!!はぁ、ハァ、ハァ・・・・」

そして壁の機械が破壊されたからか、蒔風のエネルギー抽出が止まり、束縛もとれて蒔風が地面に落ちる。

地面にベシャリと倒れる蒔風を、唯子が肩を貸して立ち上がらせる。

「い、今のは何なの・・・?

「ヒビキさんと・・・翼刀ってのが・・・戦ってるな・・・・」

「ホント!?」

勢いがあまりにもありすぎて、彼女にはよく見えてなかったようだ。

と、そこに穴を通ってなのはと星がやってくる。

その目に飛び込んでくるのは、蒔風と、その肩を持ち上げている唯子。

「その役目は私のなのにーーーー！！！」

なのはがウソダドンドコドーン！！の勢いでそう叫ぶ。

一方星は「よかった無事か」と軽くため息をつく。

蒔風、救出。

しかし窮地はいまだ脱していない。

――――――

ウウン・・・・・

「エネルギーが止まった！！！」

「いまだ！！行くぞ！！！」

《Ａｌｌ　ＲＩＤＥＲＳ－ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ――ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ》

エネルギーの供給が止まり、蒔風達の動きが一気に鈍ってきた。

その瞬間、ディケイドが相手にしている蒔風を蹴り飛ばしてケータッチを操作、起動させ、クウガからＷまでの最終フォームが出そろえさせた。

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＡＬＬ　Ｒ　Ｒ　Ｒ　ＲＩＤＥＲＳ！！！》

「ウォぁああアアアアアアアア！！！！」

ゴッ、ドッ、ドッ、バガァッ！！！

ドゴォオウッツ！！！！

その１１ライダーの必殺技で蒔風たちを一点に吹き飛ばし、その一点に向けてセイバーの宝具が振り上げられた。

「約束（エクス）された、勝利の剣（カリバー）！！！！」

「！！！？？」

ごォッ、ジュゴワッっ！！！！

光の束が満身創痍の十人に襲い掛かり、その体を跡形もなく消し飛ばした。

「や・・・ったぞぉおおお！！！」

「皆大丈夫か！？立てるか！？」

皆が一斉に歓声を上げる。

しかし、これから踏み込もうにも皆疲労しきっている。

そんな中アリスだけでも突入しようと足を一歩踏み出し

バァンッッ!!!!!

城壁の巨大な門が弾けて開き、その向こうから装甲響鬼と翼刀が弾丸のように飛び出してきた。

響鬼が押し付ける音撃棒を一気に押し出し、翼刀の体を荒野に転がす。

「ふぅ〜。や、みんな。大丈夫か?」

「ヒビキさん!!!」

「よっ」

中に入っていた響鬼が現れたということは、蒔風は助けられたということだ。
その結果は、彼らの心を明るくする。

しかし、そこに水を差す雄叫びが、一つ荒野に轟いた。

「ゴォ唖ぁアアアアアあああああああ！！！！！」

翼刀である。
頭を押さえ、剣を振り、何やら苦しそうな様子である。

だがやるべきことは見えているようだ。

剣を握り、今までのおとなしそうな顔とは真逆の顔をして、響鬼と、たった今戦いを終えた十人に突撃していった。

ーーー

「いや、急いでいこう、星」

星なりの考えで唯子を止めていたのだが、蒔風はとにかく急いで外に向かおうとする。
その蒔風に、星が聞く。なぜそこまでして向かうのかと。

「舜の身体も無事とは到底言えない状態。そんな状態で、何かできるとお思いか！！」

「必要ならこの命捨てよう。だが、今やるべきは俺じゃない。彼女だ」

「わたし？」

蒔風の視線に、唯子がきょとんとする。
何もできないというのは自分でもわかっていた。
ただ何かをしなければならないと思っていたぐらいだ。

しかし、蒔風は彼女にやるべきことがあるという。

「ヒビキさんを連れてきてくれたのは良かった・・・これなら何とかなりそうだ」

その小さな言葉で、蒔風が先に進んでいく。

「安心してくれ、唯子。鉄翼刀は、必ず救う。そして、それにはお前の力が不可欠だ」

満身創痍ながらも、蒔風の頭には勝利が見えていた。

はたして、それは現実にできるのか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

「死」という恐怖（後書き）

ディケイドによるオールライダー最強フォームフルボッコでエクスカリバーとかオーバーキルすぎるｗｗｗｗ
１１人ライダーの攻撃ですでに蒔風十人とかもう戦える状態じゃなかったですからねｗｗｗ

彼等だけでも苦労して蒔風三体は倒せました。
彼らも強くなってますからね。

しかし全員出し切った状態からのＶＳ翼刀。

さあ、みんなはだいじょうぶなのか！？

そう言えばＴＰＰによる二次創作の影響はだいじょうぶなんでしょうかね？
アメリカの著作権法が日本に適用されたら自分たち一斉検挙ですよ。
日本の著作権法は「訴える人」がいて初めて違法になる制度。
アメリカのは誰も言わなくても「やってるならアウト」になりますから。

でもまあそれで違法になっても武闘鬼人は　書　き　ま　す　けど　ね　！

サイトを上げるかもしれない。
ブログにあげるかもしれない。
欲しいと言う人にデータを送るかもしれない。

野田さんがＴＰＰでどこまで参加していくのかによりますが。
全部はいはいと飲みこんでいったら私はこの国をもう信じられません。

ともかく次回、剥げはじめる洗脳？

ではまた次回

翼刀の振るうヴァルクヴェインからの刃が、一同に向かって飛来してくる。
だが、大気を振るわす轟音がその刃を叩き、ひとつ残らず大地に落とした。

「危ないもん飛ばしてくるなぁ」

響鬼の叩く音撃が、その刃を空中で迎撃していっているのだ。
その援護を受け、バーサーカーが翼刀に向かって突進、一撃で吹き飛ばそうと剛腕を振るった。

だがその攻撃はまるで予測されていたかのように回避され、翼刀がバーサーカーの背後に回る。
そして膝裏を踏みつけて脚を崩し、ガクンと降りてきたバーサーカーの首筋に剣を斬りつけてダウンさせていく。

「ぐ・・・・ぅ・・・・」

「力が出ない・・・・」

理樹や一刀、観鈴といった翼人たちは力が抑圧されて戦えない。

バリアが出せない、武器が出てこない、衝撃波が発生させられないとあっては彼らは一般人となんら変わらないのだ。

しかし、そんな中でも剣を振るい、翼刀に向かって行く人間が一人。

「凶、斬りッッ！！！」

ゴッ、ゴッ、ゴッ、ゴンッッ！！！

クラウドである。
その大剣を振るい、翼刀に凶斬りでの四連撃を叩きつけ、豪快に攻め立てていた。

もともと戦う力を持つクラウドなら、抑圧されてもこうして戦うことができる。
力はもちろん下がるし、能力もいくつか削がれてしまうが、今は問題ない。

飛んでくる刃を剣撃で弾き飛ばしながら翼刀に向かって走り進み、一回転して横薙ぎに剣を振るうクラウド。
その剣をジャンプして回避し、翼刀がクラウドの頭上から剣を一突きしてきた。

それを紙一重に回避するクラウドの脇を、ボウガンのように一直線となって射出された刃が通過していって地面に突き刺さる。

回避に成功したクラウドは、着地した瞬間の翼刀を狙い、その腹部に向けて見事な蹴りを突き放った。
が、その足を翼刀は掴み取り、一気に捻り上げてクラウドを地面に叩きつける。

グぉッ!!と言う声と共に肺の空気をすべて吐き出したクラウドに、翼刀の拳が振り上げられた。

「マズイ!!」

その拳を止めようとアーチャーが弓を射、ディケイドやセイバーが切り掛かっていくが、すべて撃ち落とされにべもなく薙ぎ払われる。

「・・・・・・」

「クソッ!!」

翼刀が無言で拳をクラウドに振り下ろす。
腕をクロスしてクラウドがそれを受け止めようとした。

そのとき

「ハァッッ！！！」

バキィ！！と翼刀のその腕をアリスの飛び蹴りが弾き飛ばし、その拳がクラウドを叩き潰すを防いだ。間一髪である。

そのクラウドをアリスが起き上がらせ、声をかける。

「大丈夫ですか！！」

「ああ。行くぞ！！」

ギャォオッ！！

アリスと立ち上がったクラウドが構えて意気込むが、そこに無数の刃が飛来してくる。

だがその刃をアーチャーが投影で迎撃し、さらにバーサーカーが壁になってクラウドとアリスを先に進ませた。

そしてバーサーカーが翼刀にのしかかるように飛びつき、それを転がって回避する翼刀へ、クラウドが大剣を振り下ろす。

襲いくるその剣を翼刀が受け、するとクラウドの大剣が展開、翼刀の周囲に散って行った。

「超、究・・・ガァッ！？」

しかし、そこから技に繋げようとしたクラウドの言葉が痛みの唸り声で止まり、同時に技の発動も停止する。
彼の腿には一本の刃が突き刺さっており、翼刀がクラウドに拳をピタリと当て、右脚、腰、肩と内功を練り上げて、その衝撃をクラウドの胸部に不動で叩きつけた。

ズゴンッッ！！という凄まじい音がして、クラウドの足が地面を離れて一瞬宙を浮く。
そして、全身に衝撃が走り渡り、身体の中で鈍痛が蠢いてその場から身体がはるか後方にぶっ飛んで行った。

・・・ィイン！！という空を切る音がして、それから後にクラウドが地面を抉って突っ込み、そこからはじけるようにして二、三回回転して動きが止まる。

「ゴボぁッ！！・・・・・が・・・・・ハァ・・・・・」

そしてクラウドの動きが止まり、バタリと地面に倒れ伏す。
クラウドが、一撃で沈む。

「クラウド！！」

クラウドに駆け寄っていく観鈴を視界の端に捉えながら、自らに向かってきた剣を白羽取りの要領で挟み止めるアリス。
投げるようにしてそれを逸らし落とし、突き蹴りを織り交ぜて翼刀に攻撃を仕掛けるアリスだが、それを翼刀は体捌きと腕、脚の動きで受けていく。

そこにバーサーカーが飛び掛かって行って、大地を大きく抉り吹き飛ばした。
その攻撃をヴァルクヴェインで受け、そのまま後転してバーサーカーの腹を蹴りあげて方足を掴み、勢いを利用して振り回してから投げ飛ばす翼刀。

そして再びアリスに向かって行く翼刀だが、そこで響鬼が叫んだ。

「音撃刃、鬼神覚声！！ハァアッッ！！！」

装甲声刃に向かって声を張り上げ、それを音撃として打ち出して翼刀の足を止める響鬼。

その音撃に翼刀が頭を抱え、苦しそうにもがいてその場で止まる。

「これは・・・まさか！！！」

アリスが響鬼の方を見上げ、憶測を立てる。

「士！！ファイナルフォームライドです！！！最終フォームでもできますよね！！？」

「当たり前だろ！！！ちょっとくすぐったいぞ！！」

《ＦＩＮＡＬ　ＦＯＡＭ　ＲＩＤＥ――ＨＩ　ＨＩ　ＨＩ　ＨＩ　ＢＩＫＩ！！》

アリスの言葉にディケイドが応え、ファイナルフォームライドが発動されて響鬼の体が変わっていく。

巨大なディスクアニマル・アームドヒビキアカネタカへと変形した響鬼が、甲高い鳴き声と共に翼刀に向かって飛び立っていき、音撃鼓の形になって張りつこうと接近した。

だが翼刀も剣を振るって刃を飛ばし、その接近を許さない。

が

ゴスッ

「ッガ！？」

翼刀の頭に拳大の石が飛んできて、その動きを止めた。
その方向を見ると、蒔風が同じように石をポンポンと持ち、にやりと笑ってからドサリと尻をつく。

「あ～、限界」

そう蒔風が呟くのと同時に、翼刀の背後にアームドヒビキアカネタカの音撃鼓が張りついた。

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＨＩ　ＨＩ　ＨＩ　ＨＩＢＩＫＩ！！》

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ――ＯＮＧＥＫＩ－ＢＯＵ　ＲＥＫＫＡ》

そしてディケイドの手に音撃棒現れそれを握り、翼刀に向かって思い切りたたき始めた。

「ハァッ！ハッ！！ハァあああ！！！」

連続して叩かれていく音撃鼓が、翼刀の体に音撃をたたき込んでい

く。
十連、二十連と叩き込まれていく音撃によって、翼刀の顔がゆがんでいって、だんだんと緩やかなものになっていっていた。

――――――

洗脳というのにも、様々なものがある。

対象の思想を染め上げ、取り込んでしまうもの
認識を誤らせて、常識から外れたことをやらせるもの

そして、対象の自我を奪い、人形のように動かすものだ。

翼刀の洗脳は、彼の精神を閉じたものだ。
その「閉じたもの」が、邪悪でないわけがない。
音撃は「悪しき者を清める波動」だ。
ならばそれを打ち込むことで、洗脳を解くことも可能だろう。

「ただし、相手はあれだけの模造戦士を作るほどに「ＥＡＲＴＨ」の戦力を知っている。おそらくはヒビキさんたちの猛士のデータもかなり手に入れているはずだ」

「つまり、もうひと押し？」

星の言葉に、蒔風が頷く。

「君次第だ」

そして唯子を見、やってくれるかと確認する。

唯子の、返事は

――――――

彼はこうなる人物ではない。
きっと自分たちを守るために、身を挺してこうなったのだ。

「ごめん」

嗚呼、皆を救いたくて、貴方はこうなってしまった。
悪しき生物兵器へと変えられてしまった。

「私が、弱かったから・・・・・！！！」

だから、貴方を救うのは私だ。
私も助けられなかった。無駄だった。

あの街はなくなってしまった。

でも、もしその「無駄」に何か意味があるとしたら！！！

「それは、今この時のために！！！」

ギュアァッッ！！！！！

束縛された翼刀の身体に向け、拳を思い切り振りまぶって

「貴方が辛かったことも、背負ってしまった罪も、全部全部、私も一緒に！！！」

つまりは、断罪

それは、貴方の。そして、何よりも私自身の

「パニッシャァアーーーーー！！！！！」

ブンッ！

「パンチ！！！！」

ガッゴォァゥ！！！！！！

「グァアッ！！！！」

そのパンチが翼刀の胸に命中し、ありあまった衝撃が周囲の砂を弾き飛ばし、大地に亀裂を入れた。

先の声は反対側、翼刀の背面に張り付いていた響鬼とディケイドの物だ。

「唯子ちゃん！！！」

その振動を肌でビリビリと感じながら、なのはが叫ぶ。

あの拳を打ち込んで、本人も無事かどうか。

だがその砂煙が晴れた時、唯子の右腕が見えた。

高く空に向かって、突き上げられている拳だ。

翼刀の体はぐったりと地面に倒れており、出血もひどい。
何よりあの一撃のダメージが大きいのだろう。

「何をどうやったらあんな威力が出るんだ？・・・・・」

ブンブンと手を振って無事を表す唯子を見て、半ば呆れ気味につぶやく蒔風。
しかし、その顔が直後硬直した。

「唯子ォ！！後ろだァ！！！」

「え？」

蒔風の叫びと同時に唯子が振り返り、それとまた同時に唯子と翼刀の間に一人の男が飛び降りてきた。

即座に唯子が振り向きざまに裏拳を放ち、それを男がしゃがんで回避、翼刀の後ろ襟をつかんで足払いしながら飛びのいた。

唯子は足払いをジャンプで避けていたが、そのせいで翼刀を奪われてしまった。

「音撃の効能はわかってたがな。まあさすがにここまでされたら解けもするか」

翼刀の首筋にスタンガンのようなものを当てて、男がそう言う。
ウグ、という小さな声をだし、翼刀の身体から完全に力が抜けて行った。

「翼刀を返せ！！」

「それはできない。せっかくここまで完成したのを、みすみす手放せるか」

「返しなさい！！」

拒否する男に唯子がハイキックから後ろ回し蹴りで踵を叩きつけていく。
そのハイキックを頭を下げて回避し、踵を肘で受け止めて男が唯子の顔に蹴りを放った。
翼刀を抱えているにもかかわらず、唯子と対等に渡り合う男。

回転して攻撃の衝撃を流しながら、男が開いた手で懐からガイアメモリを取り出した。

《ウェポン！！！》

「マズイ！！」

そしてそれを首筋に突き立て、回転しながら男の体が兵器に埋め尽くされていく。

突如として飛び出してきた、砲身に唯子が横薙ぎに殴られ、ガードするものの弾き飛ばされてしまう。

「ダハハハハハハハハァッ！！！ぶっ放しなぁ！！！」

そしてそのまま回転しながら全身の砲口、銃口から様々な砲弾、銃弾、魔法、砲撃、光線を撃ち出し、周囲を一気に薙ぎ払う。
その爆発に全員が飲まれ、体中を衝撃が叩きつけていく。

そしてその爆発が終わったころ、周囲には地面に倒れたメンバーが転がっているだけだった。

「くそ・・・」

呟く唯子が最後に見たのは、城壁の中で起こっている、数か所の爆発の炎だった。

――――――

その際、恐らくここを爆破して行こうとしたのだろう。
施設のいくつかはそれによってきれいに吹き飛んでいたそうだ。
だが中に残った星がいくつかの爆破装置を解除していたので、施設の大半はそのままで残すことができた。

「手がかりが一気に増えたな」

「だが、まだ翼刀は相手の手中にある」

蒔風とクラウドが、治療を受けながら話していた。

蒔風は点滴をいくつも受けていたし、クラウドは全身に包帯状態だ。
クラウドに関してはさっきティファが駆け込んできたとき、致命傷が増えた。

「ところで、何もただ捕まってたわけじゃないだろう？」

「・・・・まぁな」

「何を見た？」

「最悪だ」

蒔風が、単刀直入にその「最悪」の名を言う。

――――――

ませんでしたし」

「どうするんだ？リョウマ」

「どうにでもしますよ。あと、私のことを名前で呼ばないでください」

「ヘイヘイわかったよレジェス」

リョウマと呼ばれた男が呼び名を訂正し、男がつまらなそうに呼び方を変える。

別段その名前に嫌なことがあるわけでなく、ただ「名前で呼ばれる」ということ自体が気に入らないだけのようだ。

「さあ、完成させましょう。対抗する力は出来ました。やっとあれを使えます」

次元の海を、船は進む。

その先に、あるものは――――

――――――

「・・・・聞いた覚えがないな」

「そりゃな。俺だって話に聞いただけで知ってるわけじゃない」

「だが・・・その話が本当なら相当まずいぞ」

「絶対に、止める」

そう言って点滴を抜く蒔風。
少し足が揺れるが、問題はない。

クラウドも包帯の上に服を着て、ベッドから立つ。
胸が少し軋むが、問題はない。

施設の中から、様々なものは運び出されていく。

あいての、思惑とは

to be continued

断罪（後書き）

はい！！ＶＳ翼刀は勝利したけど勝ててはいない、ですね。

乱入してきた男はウェポンメモリの適合者です。

そのデータを埋め込まれたのが、あのＧ４だったのですよ。
まあ死体にデータを打ち込んで偽蒔風を作るんですから、それくらいはやりますよね。きっと

ガイアメモリも一種類一本と言う訳じゃないですし、大丈夫なはず。

ともかくここで唯子さんの本気発動、パート１。
まだまだ威力をあげられるそうだが・・・？

さて、彼らは一体何を復活させる気なのでしょうか！！

とりあえず次回はなぜ翼刀だったのかということですね。
あの街であったことの回想を、翼刀方面でつづりたいと思います。

ではまた次回

YO・KU・TO

検体名：ＹＯＫＵＴＯ

一体いつからこのような名称になったのかは、もはや記述に残っていない。
ただ、われわれの求める人材の名前が、毎回この発音の物だったというのは確かだ。

我らが先祖は、その優れた技術を用いて最高の「兵器」を生み出した。
しかし、兵器は対抗するモノがあって初めて売れるし、使用できる。
毒ガス兵器を作るならば、同時に抗体も作らなければならないのと同じように。

我々は何も世界を滅ぼしたいわけではない。

我々の先祖は作り出した「兵器」はまさに最強だった。
しかし同時に、それだけのものをまた作り出すことはほとんど不可能だとわかった。

少なくとも、人一人の人生の内では。

だから、こうして記録に残して後世に伝わっている。
近代では子供の頭の中に記憶を埋め込んで受け継がせることもやっている。

我々の先祖が目に付けた最初の「兵器」の元は、あの翼人だった。
しかし翼人の存在は先祖から見てもまた、伝説の存在だった。

数年、数十年の探索が行われ、先祖が諦めかけたその時、ついに一枚のサンプルが手に入った。

真っ赤な羽根

数多くの伝説に名を遺す、あの「赤色の翼人」の物だった。
死後、翼人がその羽根にある程度の力を残して消えるという伝説があったが、まさか本当に見つかるとは。先祖の執念に驚かされる。

だが、驚くのは早かった。

翼人のクローンを作ったとしても、その者が翼人になるという事はない。
クローンだとしても、その能力は決して受け継がれないのだ。
その羽根からのデータをもとに他者に力を植え付けようとしたが、

とても翼人とは言えない劣化品しか生まれない。

そんな中、数世代ほどの実験を経て、ようやっとして成功と呼ばれる検体を開発した。

そして、先祖はそれを即座に殺した。
成功と「呼ばれる」程度ではだめだ。完全に「成功した」と言えなければならない。

先祖は妥協しなかったし、我々もその意思に賛同し、尊敬する。
何事も中途半端は良くない。

そうして、さらに数世代を経てついに「成功した」と書かれている。

感情を司る翼もしっかりとあったらしい。
しかも「赤色の翼人」が所持していた世界四剣の所有者として復活させられた。

これはものすごいことだ。
どれだけ気の遠くなるような実験を繰り返したのだろうか。
色は少しくすんでいたそうだが、それでも「翼人のクローン」を作り出せたのだから。

しかし起動実験でいきなり暴走（意識はあったようなので厳密には好き勝手暴れただけだろう）してしまった。
結果として１１の世界が消えてしまったらしい。

我々の先祖は反省した。
兵器には対応するモノが必要だと。

そして、その実験は我々に引き継がれ、完成しようとしている。

先祖は再びクローンを作り出すことは不可能だと判断した。
そして、あの翼人に対抗するには、まっとうな力ではダメだと。

優れた「渡航者」が必要だ。
しかも、翼人の力を封じることができるほどの、強力な渡航者が。

我々の先祖は再び探した。
そして、ついに一人の青年を見つけた。

その人物も、名をヨクトと言ったらしい（どう書くかはわからないが）

先祖は即座にその青年を連れてきて、実験した。
翼人のデータはある。それに対抗できるように肉体を改造するだけだ。

我々の「改造」は、身体に機械を埋め込んだりなどというそんな前

時代的な技術ではない。
もっともっと根本から変えていくものだ。時にそれは魔術や魔法と呼ばれたらしいが、分類などは然したる問題ではない。

さて、そして最初の被験者だが、一秒と持たずに死んだ。
投薬した瞬間、身体が崩壊したのだ。

先祖は落胆した。
また渡航者を探さなければ。

渡航者の能力は転生する。
魂とは別に別れてしまい、能力のみ（魂と実際あまり変わらない）での転生なので、探すのにはまた数年を要した。

そして、そうして検体を探しては実験していくごとに、先祖は手ごたえを感じ、着実に進歩していっていた。

最初は一秒と持たなかった検体も、二千を数える頃には十秒持つようになった。
そして一万を超えてようやく十分。十万で二十四時間の活動も成功。

先祖の実験で伸びる時間は回を重ねるごとに大きくなる率が上がっていた。

しかし、ここで今度は精神が耐えられなくなった。
肉体の方はほぼクリアしていたのに、ここでまた障害だ。

だが先祖はあきらめなかった。
渡航者の魂に魔術的な施しをし、精神面も回を重ねるごと強くしていった。

その実験の途中、まさかの事態が起こった。

なんとその中に、あの神剣・ヴァルクヴェインの保有者が現れたのだ。
我々の実態を知って暴れだしたが、種類は違えど四剣のデータは持っていた。抑える事はそう難しくなかった。

そしてそれからは能力が転生する度にそれの保有者になるよう術式を施した。

あの翼人も四剣の保有者なのだから、こちらもそうであっていけないわけがない。

能力の転生先を察知する技術もでき、我々の実験はどんどん捗って行っていた。最初は転生するたびに十年は月日を費やしていたのが、今ではその日のうちにわかったのだから。
とはいっても、その検体の身体がある程度出来上がるまでは何もいじれない。
しかし、事前に準備をすることができる。

その人物のデータを集めておけば、実験がスムーズになる。

そして、それを繰り返して私の代になる。

理想的だった。

あのヨクトこそ、我々の終着点となる者だ。

苗字は鉄。

「鉄」と書いて「くろがね」とは面白い。

そして、名前は「翼刀」と書いた。

翼刀

「翼」人に「刃」を向けし者

そして、そこから「一（人）」を取り除くことで、それは完成する。

ーーー

ーーー

ーーー

よかった。

彼らは俺の意志を汲んでくれる。
俺が嫌だと言うと、別の方法での強化を手伝ってくれた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

いままで、多くの訓練を受けさせてもらっていたが、ふと疑問に思って聞いてみた。
なぜ、俺だったのかと。

オレだってもう十七歳だ。
与えられて「はいそうですか」と鵜呑みにできるほど子どもじゃない。

そう聞くと、彼らは話してくれた。
なんとも滑稽な、妄想じみた話だったが様々な機械で実証させられてしまっては信じるほかなかった。

自分は渡航者と呼ばれる人間で、世界を超えることができるらしい。
だから、君だったのだと。

そこから俺の新しい修行が始まった。
この力をうまく扱うのだ。

さらに、今日は武器ももらった。
世界四剣だとかいう強力なモノらしいが、まあすごい剣だということだ。

名前は神剣・ヴァルクヴェイン

こいつが俺の武器。
剣の扱いもできないわけじゃない。

こいつも使いこなしてやらなきゃな。

ある日、唯子に何をやっているのかと聞かれて、俺は子どもの頃言われた言葉を思い出してこう答えた。

「ヒーローになるのさ」

――――――

それにしても、この修行ももうかなり続いてきた。
道場の修行と合わせても、もうかなりの物だ。
まあ道場の方は週に二回だけだし、やっているのはもっぱら指導だけだが。
何気に免許皆伝だったりする。

敵はいつもの通りクリスタル状の物だ。
人型だから、組合いもできる。たまに人外みたいなモンスター型とかもいたが。

だが、この仮想敵は強かった。
翼の生えた人間なのだが、俺の磨いてきた技術も何も効きゃしない。
一矢報いてやったが、あれで本物の性能をマイナスさせたものだというのだから驚きだ。

世界にはあんな敵がいるらしい。しかも、相手も渡航者の力を持つそうだ。
だから俺が選ばれたわけか。

俺は改めて強くなることを誓った。

――

今日は事件が起こった。

空も大地もみんな揺れて、収まったときには世界地図が変わっていた。

頭の中に何やら基礎知識が流れてきたし、ニュースを見ると「世界が一つになった」ととんでもないことを言い出していた。

みんなドッキリか放送事故かと思っていたが、俺だけはわかっていた。

これは全部事実だ。

それから三日して、「ＥＡＲＴＨ」という組織が設立されたとニュースで報じられた。

なんでも時空管理局やらなんやらと同じような組織らしい。

基礎知識が流れてきてなかったら、みんなパニックになっていただろう。

実際、法学を勉強していた町内のアンちゃんはそっち方面の法律も勉強していたし。

影響はいろいろあったが、大騒動にはならなかった。

この組織は「世界の管理者」だった女性が後押しし、トップには翼人がついているらしい。

・・・・・翼人？

ーーー

だが「ＥＡＲＴＨ」は世界を崩壊から守った精鋭の集まる組織らしい。
まさかそんなことをするとは思えない。

まあ一介のガキでしかない俺の考えでは及ばないこともあるのかもしれないが。

研究所の人たちに聞いたら「君の敵は翼人だが、「ＥＡＲＴＨ」ではないよ」といわれた。

なるほど、翼人と言っても色々あるそうだ。
人間にも善い人悪い人がいるんだし、当然と言えば当然か。

だけど、気になる。

きっと反抗期だったのだろう。
ほら、言われただけじゃ納得できない時期ってあるだろ？

テレビとかに影響されて何か裏があるんじゃないかー、とか馬鹿なこと考える時期とか。

多分俺はそうだったんだと思う。

俺は研究所の中を調べた。

そして悲しいかな。

俺の浅はかな考えは、まさか的中していたのである。

ーーー

一瞬だけ「厨二病か？」と考えたが、今まで鍛えてきたのは伊達ではない。

この感覚は確実なものだ。
俺は、研究所に対していい感じを持っていなかった。

初めてだ。
こんなこと。

確かめる必要がある。

そんな俺を心配してか、唯子が何かあったのかと聞いてきた。

巻き込んじゃいけない。
そう、俺の中の「失われた俺」が叫んだ気がした。

俺は唯子を突き放し、研究所に向かった。

ーーー

思い出せるのは、断片的な記憶。

目の前に女がいる。
何やら俺のことを知っているようだが、反応する必要はない。
俺は知らない。

今ならわかる。
唯子だ。

何故その時わからなかったのだろうか。

ーーー

殺・・・・し・・・・？

いいや、違う。
これはタダノソウジジャナイカ。

散らかってるのはスキジャナイ。

ウルサイノモキライダ。

デンワシヨウトシテイルオトコ
ニゲルオンナ
サケブチチオヤ
スガルハハオヤ

ウルサイナ

キレイニシナイト

――

ーーー

ガゴンッッ!!!

しかし後ろ手に手錠をされ、鎖が壁につながれている状態では先に進めず、むなしく壁が少し揺れるだけで止まってしまった。

「暴れてもしょうがないですよ。あなたの力は知っていますからね。ああ、ヴァルクヴェインも呼べませんよ」

「お前は・・・この野郎・・・・!!」

しかしそれでも動こうとする翼刀だが、男はそんなことは気にしていないように翼刀へと話しかけた。

「さて、思い出しましたか?」

「何をだ!!!」

「貴方が焼いた、あの街ですよ」

「ッッ・・・・・!!!それは・・・・」

「ええ、指示したのは私ですよ?あなたはどうにもできなかった、不可抗力だった。そうでしょう?」

「テメェ・・・・」

翼刀だってわかってる。
そんなことはわかっている。

だが、だからなんだというのだ。

あの街を焼いたのは自分だ。
皆を殺したのは俺だ。

今でも、否、今は思い出せる。

あの時誰かを斬った感触を
あの時誰かを踏み潰した足踏みを
あの時殴り飛ばした硬さを
あの時聞こえてきた悲鳴の振動も

全部全部思い出せる。

「えぇえぇその通りです！！あなたは一切悪くないですよ。あなたは仕方なかった！！不可抗力だった！！がんばりましたもんね。街が焼かれ、破壊され、皆殺しにされると聞いて、貴方は立ち上がった！！抗った！！でもダメだった！！大丈夫ですよ。あの街のみなさんはきっとあなたをよくやったと言ってくれるでしょう！！！」

「や、やめろ・・・・」

翼刀が頭を振ってうつむく。
男は止めない。

「さあ!!存分に恨みなさい!!それが正しいのですから!!鉄翼刀、君は悪くない。君がいくら」

「止めてくれ!!!」

翼刀が叫ぶ。
だが、男は止まらない。

「君がいくら友を握り潰そうとも!!助けを求め受話器に叫ぶ隣人を斬り捨てようとも!!止めようと向かってきた父親の胸を拳で貫こうとも!!縋り付く母親を焼き尽くそうとも!!」

「あぁ・・・アぁアアアアアアア!!!!」

「まだ君の半分も生きていない子供の未来を奪おうとも!!その子を守ろうとする必死な御老人を蹴り飛ばそうとも!!胎児を宿した女性を踏みつぶそうとも!!」

「俺は・・・オレはッッ!!!」

「人々の逃げ込んだ建物を見て一撃で吹き飛ばそうとも、今まで生きてきた思い出の詰まった街を壊滅させようとも!!!」

「ウァァァァアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「そう、君は悪くない」

プツン

そして、翼刀の意識が途絶える。

それを見届け、大演説をしたレジェスが白衣を直して部屋から出ていく。

「首尾は？」

「上々」

ーーー

クロノと、蒔風が会話を進めていく。

『船は見つかったが、遅かった。このままだと次元世界に入るぞ』

「そこまでわかれば大丈夫だ。で？どこの世界だ？」

『・・・・ここだな』

そう言って、クロノが地図を出してその一点を移す。
それは、この世界の世界地図そのままんまだった。

「ここか！？」

「そう。最大世界“Ｎｏ　ｎａｍｅ”。そこが、奴らの目的地だ」

世界が混ざった際にミッドチルダも地球も混ざってしまったため、その広大さも含めてこの世界は「第一」ではなく「最大」世界と呼ばれている。

我々の知る世界地図とは比べ物にならない広大さで、トゥスクルやミッドチルダは当然のこと、ミッドガルや魏、呉、蜀の風体を持つ地域まであるくらいだ。

そして、彼らが向かう先は

「封印地域・・・・・・！！！」

『「ＥＡＲＴＨ」からの要請で即座に封印指定した土地だ』

「・・・まあ・・・・「あれ」を復活させるならそうなるだろうな。この世界に来てても不思議じゃない」

『奴らの到着予想時刻は６時間後だ。間に合うか？』

「ちょうど同じくらいだろうな・・・・」

あの施設の戦いから、すでに六日ほどたっている。
相手もこちらも準備が整っている分、先に向かっていたあちらの方がやや早いだろう。

「だが行かなきゃならない。世界は・・・・破壊させない」

そうして、銀白の翼がその部屋を出る。

目的地は、見えた。
敵は、最悪の「あれ」を復活させる気だ。

to be continued

ＹＯ・ＫＵ・ＴＯ（後書き）

よくわからない構成になった回想編でした。

わかりにくいと思いますが、あの施設からの戦いからすでに六日たってます。

ちなみに翼刀がレジェスに追い詰められているのはあそこを出てすぐのことです。

つまり

施設の戦闘終了
←
翼刀目覚める
レジェスが言葉攻め
←
六日経過
←
時空管理局が敵船発見
「ＥＡＲＴＨ」に連絡

という感じです。

さて、翼刀に対抗させる兵器は何と翼人のクローンでした！！
多分誰だかわかったと思いますけどね！！
ネタバレになるからいいませんけどｗｗｗｗｗ

「ＥＡＲＴＨ」が配収したデータは頭から始まってるレポートっぽいのと、あとは翼刀の生い立ち（データはなかった）です。
ですのでレポートは読んでますが、翼刀の回想部分については完璧に把握してません。
まあほとんど問題ないですけどね。

次回は最終決戦になるのかな？
どうなるのだろうか？

作者自身もよくわかりません。
流れで書いて行ってしまっているのでｗｗｗｗ

そう言えばツイッター登録してみました。
登録自体はずっと前にやってたんですけどねｗｗｗｗｗ

何かするたびに呟くのがめんどくさいからやらないだろ、とほったらかしにしてました。

多分これからもほとんど呟かない気がしますが、よろしくです。
ユーザー名は「ＢＴＯＫＩＪＩＮ」です。

ではまた次回

航行中の超砲撃（前書き）

横のスクロールバーを見てください

・・・・

見ましたか？

信じられるか？

スクロールの三分の一以上、後書きなんだぜ・・・・ｗｗｗｗ

航行中の超砲撃

空を進んでいく、戦艦・瞬風
その一室

そこで蒔風が腰を下ろして休んでいた。
ボヤ―、と座って、一人ごちる。

「戦艦・・・ねぇ・・・・瞬風か。やだ、なんか恥ずかしい」

そして何をしてるかと思えば、名前の由来が自分だと聞き、少し恥ずかしがっていた。

そして

「暇だな・・・くんれ・・・・いや、とっく・・・・遊ぶか（ドヤ）」

オイ

―――――――

ーーー

この四人は相手が相手だからの戦力だ。

相手の能力を無効化する泉戸裕理
抑圧を無視しても戦える川神百代
時を止めるという能力を持つ羽入
巨大な敵に対して有効的なハクオロ

四人とも本来ならやるべきことがある立場だが、この状況に駆けつけてきてくれたのだ。
中には本気で頼み込み、交換条件まで出してきてもらった相手もいる。

そして、最後に一人、こいつがいる。

「儂が！漢女道亜細亜方面前継承者、卑弥呼である！！」

「出た筋肉ダルマ」

その声に開口一番はやてが突っ込んで、コラとクラウドが小突く。
こんななりでも彼は「観測者」、管理者に準ずる存在である。

そして今回、奴らが復活させようとしている「兵器」は、彼（彼女？）に深く関係している。

「じゃあ話そうかのう。ともあれ、今回わかった事実の方が大きいのじゃが」

そう、卑弥呼はその兵器と最後に戦った人間だ。

兵器の名が、その口から発せられた。

――――――――――

それは、世界を破壊した災厄の翼。

翼人伝説の中でも、とびっきりのダークサイド。

「当時はまだ世界は少なかった。いまではどれが外史でどれが正史かわからぬほどに多くの世界が存在するかわからぬほどあるがの。その数は全部で３００程度しかなかったのじゃ」

「そしてそのうちの十一を破壊した？」

「さよう。わしらは早々にその行動に気づき、早急に対処した」

だが、一つの世界が消滅して即座に動いた観測者たちだが、それを止めることは出来ず、その翼人は止まることなくさらに十の世界を

破壊していったのだ。
まるで彼らを障害物競走のそれだと言わんばかりに、楽しみながら驀進していったそうだ。

当時いた観測者は、卑弥呼を含め１２８人。
そのうち生き残ったのは彼だけだ。

卑弥呼の戦闘力はずば抜けている。

どれくらいかというと、恋とタメを張れるほどの強さを持つ彼の後継者・貂蝉よりも強いのだ。
蒔風も「戦いたくない人間」だと公言している。

当然観測者の強さもピンキリだったのだろうが、だとしても弱い者がいるわけがない。
そんな集団が、たった一人に全滅まで追い詰められたのだ。

脅威と感じないものはいなかった。

「じゃが儂らは散って逝った仲間たち残してくれたデータからそやつを追い詰め、捕え、どうにか封じ込んだのだ」

「そしてそのポイントがここだ」

そう言って、蒔風が地図の一点を指さす。
ぽつんと立つ岩山が、急に禍々しく見えてきた。

「絶対に復活させちゃいけないね」

「ああ、危ないことこの上ないからな」

船が進む。

到着まで、あと4時間

――――――

そこでティアナが蒔風と連絡を取っていた。
今回、蒔風が全員を連れて行かなかったのは万が一にも封印が解かれてしまった場合を想定してのことだ。

今連れて行っているメンバーでも、十分に翼刀を止めることは出来るはずだ。
現に、あの施設での戦いではかなりのところまで行っていた。

今回は対策も立てられている。
恐らくは大丈夫だろう。

『どうやら翼刀は俺たちの模造戦士との戦いを幾度となく繰り返していたらしいしな』

「私たちの攻撃も、なんだか最初からわかっていた動きもありましたもんね」

『だがさすがにこれらのメンバーを相手にして、翼刀を止められないことはないだろ。そしたら一気に相手を捕縛して終いだな』

ちなみに、ティアナはさっきまで翼刀のデータをスカリエッティに見せに行っていた。
結局収穫はなかったわけなのだが、彼が言うにはこの技術はなんだ

か覚えがあるような気がするらしい。

『それどういうことだ？』

「スカリエッティの技術は人体改造と生成。まあ通じるところがあるってことなんじゃないですか？」

『・・・だが相手はその改造法を「前時代的」だって斬り捨ててたからな・・・・』

一体どれだけの技術力を持っていたのだろうか。
十数、いや、下手をすれば三ケタに届くかもしれないほどの世代を超えて続けられた狂気の研究。

それによって積み上げられた技術は生半可なものではない。

『うちの技術陣は？』

「技術陣と言っても、人体改造に精通した人間はいませんよ」

『学園都市は？』

「送りましたが、返答はまだです」

『間に合いは・・・』

「しないでしょうね」

そりゃそうか、と蒔風がため息をついてから、ティアナに礼を言ってどうするかと伸びをする。

ティアナの方も同じように、ギィっ、と椅子の背もたれに体重をかけた。

こちらでの準備も大変である。

蒔風は万が一、と言っていたが、相手の技術が今までのですべてだという確証はないのだ。

今向かってるメンバーが負けるのならば、恐らくそれ以上戦力を投じても無理だろう。

だったら、こちらに残ってもらってその「もしもの時」に備えておいてほしいというのが蒔風の考えだった。

『全員で行っても負ける時は負けるからな』

「そんなこと・・・と言いたいですけどね」

『可能性は捨てられないさ』

そう言って、健闘を祈りますとティアナが通信を切る。
残ったモニターに、地図と瞬風の現在位置が映し出された。

この戦いは、ただでは終わらない気がする。
なんとなくだが、ティアナはそれを感じ取っていた。

全員、無事で戻るといいのだが。

モニターを見上げる。

彼らが到着するまで、あと二時間

――

「動力はどうですか？」

「おーう、レジェス。今ンとこ問題ないな。このままなら予定通りにつける」

「だけど・・・っとこれこれ、どーします？まだかなり離れてますが」

「・・・おや、「ＥＡＲＴＨ」ですか・・・」

「これでもぶっぱなしとくか？」

「そうですねぇ・・・ついでにこっちでも行きましょうか」

「おぉ、えげつない」

「我々の最終段階です。幾数世代に及ぶ祈願の成就です。邪魔などさせません――」

――今度ばかりは、牙を剥かせていただきますよ。

カチッ、ピッッ！！！

――――――

「おー、精が出てるねェ」

「あ、蒔風」

瞬風内の訓練室。

そんなに広くないその場所で、唯子が川神百代と組み手をしていた。

そこにひょっこりと顔を出しに来た蒔風を、唯子が見つけて声をかけた。

「どうしたのよ」

「いや、まだ時間もあるし暇だから歩いて回ってた。この艦初めてだし」

「ふーん」

「蒔風！！」

「うぉう！？な、なんだよ川神」

呑気に話している蒔風に、百代がいきなり話しかけてきた。

それにびっくりする蒔風だが、百代の顔はキラキラ輝いていた。

「こいつすごく強いな！！いやぁ、もう楽しくてしょうがない！！」

「自分は汗一つかかないでよく言うわよ・・・・」

タオルで汗を拭き、水分を補給する唯子が口を出す。
確かに、百代はまだまだいけるといった感じだが、唯子はマラソン後のように汗をびっしょりかいていた。

「あー、まあ川神には“フォルス”が入ってるからな。骨の髄まで“Ｎｏ　ｎａｍｅ”のお前じゃどうしたって差は出るさ」

「じゃあ勝てないの？」

「そうとは限らないな。あくまで総合的な力の差だから、一撃でも入ればそこから多分叩き潰せるだろ」

ようはスタミナと耐久力の違いで、唯子の攻撃も十分に強いのだから命中させられれば勝てるとのこと。
現に百代も、さっきの組手ではギリギリだったらしい。

「あのパニッシャー―パンチだったか？あれはまずいと思ったな」

「あぁあれな。「なんであんな威力が出るのかよくわからないパンチ」略して「意味不明パンチ」な」

「意味不明ゆーな。まあ自分で「パニッシャー」言ってても恥ずかしいけど」

そう言って椅子に座る唯子。
どうやらここまでにして、到着までの時間は休憩にするらしい。

「今度は全力で、外でやろうな!!」

「やめて・・・百代さっき気力弾が撃てるとか言ってたじゃない・・・」

「撃てないのか?」

「撃てないわよ!!」

それでもいい線行きそうだけどなぁ、と蒔風は思ったが口には出さない。

考えてみれば気力弾は打てなくても拳の衝撃は飛ばせるのだ、こいつ。

そんな話をして、十分。

その時

『高エネルギー反応!!十時の方向からＳＳランク級砲撃!!!』

「なに!?」

艦内放送が響き渡り、アラームが一斉に鳴り響いた。

それを受け、走り出す蒔風。

そしてデッキに到着すやいなや、即座に状況の報告をさせた。

「どこからの攻撃だ!?」

「わかりません!!レーダーに反応なし!!」

「肉眼でも目視できんだと・・・・!?」

「被弾します!!」

ガォオウッッ！！！

報告と共に、飛来した砲撃が瞬風に命中、その機体を大きく揺らした。

戦艦瞬風は「ＥＡＲＴＨ」唯一の戦艦ともあって、かなりの硬度を誇る。
しかし、それはあくまでも「通常の戦艦と比べて」であり、砲撃をいくつも受けて大丈夫ということにはならない。

「超々遠距離高度精密砲撃！？」

「先頭部外壁６７％を損傷！！」

「第二波きます！！！同じく十時の方向！！」

『蒔風！！』

次砲飛来の報告。それと同時にモニターが開いて、そこにすでに変身した天道総司が、ハイパーフォームになって映し出されてきた。

『俺が止める。反動に気を付けてくれ』

「ちょ、お前まさか！！！」

《ＡＬＬ　Ｚｅｃｔｏｒ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！！》

「ッ！！総員衝撃に備えぇ！！とんでもないのが来るで！！」

デッキの蒔風が言葉が出ないうちに、はやてが艦内に叫びかける。
もしも本気で天道が撃つつもりなら、かなりの衝撃が来るはずだ。

一方瞬風の額と呼べるだろう場所に立つカブトハイパーフォームが、その手にパーフェクトゼクターを手にして砲撃に向けてまっすぐ構えた。
そしてそのエネルギーがタオキン粒子となって先端部に渦巻いていき、荒れ狂う竜巻となって撃ち出されていく。

『（ガシャコッ！！）マキシマムハイパーサイクロン・・・・！！！』

ドッグォア！！！！！

凄まじい轟音と衝撃を伴い、大気を巻き込みながらそれと砲撃が真っ向から命中した。

ガゴォン！！

「ウォオオオオオオおお！！！！」

カブトの背面からは反動を殺すために甲虫の羽根状のエネルギーが噴き出しているが、それでも瞬風がかなり大きく揺れる威力だ。すでに第一波でヒビの入った外壁がバキン！！といってさらに砕け、カブトの脚がくるぶしあたりまで埋まっていく。

しかし拮抗しぶつかり合う砲撃は、どうやらカブトの方が強いようだ。もうすぐにでも打ち消されるだろう。

だが、その先にカブトはさらなる砲撃を発見した。

「マズイ！！！蒔風、第三波だ！！！」

『あぁ見えてる！！無理か！？』

「やってみるさ！！！」

ぐぉぉオオオオオ！！！と腹の下から出てくるような気合いを上げ、砲撃を巻き取るかのようにカブトがパーフェクトゼクターで円を描いた。

剣道の巻き技と呼ばれるものだが、それをまさか砲撃でやろうとい

うところが天道と言ったところか。

しかも相手は超超遠距離砲撃だ。巻き上げるにしても相当の力を要する。
だが、それをやるのが天の道。

「ヌゥアアアアアアアアアアア！！！！」

天道が雄叫び、パーフェクトゼクターを振り巻き上げる。
するとそれに引きずられるようにして相手の砲撃も流れて行き、第三波の砲撃をぶつかり、それが瞬風に命中するのを防いだ。

だが、直撃を防いだと言っても、カブトがそれを受けているのは変わらない事実。
むしろ二本の砲撃を一手に受けて、カブトの許容量を一気に振り切って行ってしまうのだ。

しかも、相手の攻撃はそれで終わらない。

『天道さん！！次が！！』

更に四回目の砲撃が視界に飛び込んできて、カブトが本気で覚悟を決める。

「これは・・・まずい！！」

「いやいや、お前さんだけいいカッコさせねーって」

「ありがうございます。今度は私たちが！！！」

ギャオォッ！！

と、そこに二人の人間が現れて、カブトを挟むようにして同じ方向を見る。
そしてその武器の先端に、己の魔力を練り込み始めた。

一つは、レイジングハート。
その杖の先端に、桜色の魔力が充填されていく。

一つは、ゲイ・ボルグ。
その槍の先端に、殺気とともに真紅の魔力が練り込まれていく。

「エクセリオン、バスタァーッ！！」

「ゲイ・ボルグッ！！！」

そして、その二本から放たれた攻撃によって迫りくる二本の砲撃が追撃されていった。

連射はさすがに威力が落ちるのだろう。
その砲撃と投擲によって穿ち消された砲撃の衝撃が、カブトが巻き上げていた砲撃を揺らし、一気に崩壊していく。

「ッァ・・・・・・ハァ・・・・ハァ・・・すまないな」

「大丈夫だよ！」

「さぁて、ちと早すぎる気もするが・・・」

『戦闘開始だ！！相手にはこっちの姿が見えているぞ！！』

蒔風の言葉とともに、全員が改めて気を引き締める。

目的地には、たどり着けるのか。

ーーー

ガギャンガギョンギャギョンッッ！！

その三角錐が、すべて砲首で構成されていたからである。

モノによっては、砲台である。
モノによっては、機関砲である。
モノによっては、銃口である。
モノによっては、魔力砲台である。
モノによっては、大砲である。
モノによっては、電磁砲である。
モノによっては、レーザー砲である。

あらゆる「砲」と呼ばれる物で構成されたその三角錐は、ある一点に向かってその先端を向けいている。
肉眼はおろかレーダーでも捉えられないような遥か彼方に存在する瞬風に、その先端の照準をピタリと、寸分の狂いもなく合わせていた。

そしてその脇から、一隻の時空航行船が現れてきた。

「これで邪魔は入りませんね」

「にしてもウェポンメモリの暴走体をこうも上手く使うとは・・・お前は天才か」

「知ってます。というか今までの失敗作を使えばこれくらいはできます」

――暴走も、探知も、ね

そう小さくつぶやいて、船が目的地に向かう。

行く者
追う者

解き放つ者
止める者

絶望する者
それを救いたいと望む者

様々な様相を持ち合わせ、船は先に進んでいく。
決して織り合わない彼らだが、向かう先は同じ場所だった。

そしてそれは、一人の封じられし男のもとへと

止めることは
　出来るのだろうか
解き放つことは

to be continued

航行中の超砲撃（後書き）

みなさん申し訳ございませんでした！！
遅れて投稿する武闘鬼人ですよ。

まあ言い訳はあとにするとしてとりあえず本編の話。

結局遊んでない蒔風。
まあ遊ばせたらどうしようもなかったし、本人もノリで言っただけでしょうｗｗｗ

困った時のスカさん頼り。
でもあの人くらいしか相談できそうな人いないじゃないか・・・！！！

そして砲撃からいきなり始まる戦闘。

カブトがいい仕事しすぎるｗｗｗ！！

敵の出してきた三角錐の砲台のイメージは「スマブラX」の・・・

こう・・・あれですｗｗｗｗ

あるじゃないですか、ストーリー終盤近くでクッパとガノンさんがめちゃくちゃにブッ放すやつ。
あれですｗｗｗｗ名前なんて言ったっけかなぁ・・・・

封印されている「兵器」はも皆さん絶対わかってますよねｗｗｗｗｗ

しかしあえて出しません。
いや、今後に素晴らしい展開が思いついているわけでもないんですけどｗｗｗｗ

そう・・・強いて言うなら・・・

何となくです。

ちなみに瞬風は世界内を航行
相手の航行船は次元空間を航行中でした。

さて、では言い訳を始めよう（キリッ）
ここまで遅れた、言い訳を！！

わたくし、武闘鬼人はメモ帳に小説を書いていた。

書き終わり、あとはあとがきを書いて上げるだけだった。
と、そこでメモ帳からのまさかの申告

「応答してません」

！？

・・・だがまあ落ち着け。

そんなことはいくらでもある。待てば元に戻るさ。

が、突如として消えるメモ帳ッ！！

告知もなし！！
「保存しますか？」なし！！

希望なし！

今まで書いてきた文章もなくなる！！！

そしてそこには絶望だけが残った・・・・・
バイトくそ忙しい中がんばって書いたのに・・・・・・

そしてグダグダと書いてこうなりました。
本当に申し訳ございません（平謝り）

もうここまで書いてるんだから今週のフォーゼとかゴーカイジャー
ネタ振ってもいいよね？
え？だめ？

聞く耳持たん

まずゴーカイジャー

メガレンジャーいいよメガレンジャー！！
電磁戦隊！！ＭＥＧＡＲＡＮＧＥＲ！！（ＯＰより）

というか留年していた彼が教師になれたとは・・・・
さすがはレッド。メガレッドは戦えば戦うほど強くなる戦士。
何度繰り返したというのだろうか・・・・・ｗｗｗｗｗ

あと鎧が気に入られ過ぎワロタ
あの人レジェンドに好かれすぎだろ

羨ましすぎる

電磁戦隊メガレンジャーは初のシルバーの戦士。
そう、メガシルバー・早川裕作が出てきた戦隊ですよ！！

変身時間２分３０秒ながらも圧倒的な戦闘力を誇ったメガシルバー！！
時間ぴったりで敵を倒し、背後で爆発する怪人と共に変身が解けてビシリ・・・！！

そこにシビレル憧れるゥ！！！

そして第二の高校生戦隊。
前作のカーレンジャーが「車」、次が「高校生」と、ターボレンジャーの二大要素が二年連続で掘り下げられているという。

ＯＰ前の戦隊名コールが本人たち（メガレンジャーたち）じゃなかったのも印象的ですね。

信じられるか？
あの一号メカ・ギャラクシーメガって、百人以上の研究員乗せたまま戦ってんだぜ・・・・？

しかも生身ですよ彼らは
マジ研究員すげぇ

俺たちメガ！メガ！！メガァ！！
・・・これ以上は歌詞に触れるからやめておこう・・・・

代わりにこっちで我慢してください。

蒔風
「私の目が！目が！！目がァァアアアあ！！！」

電磁戦隊～メ～ガ～レンジャー！！

ふぅ、削除から逃れることに成功したｗｗｗｗｗ

さて、今まさに高校生といえばフォーゼ

今回のフォーゼはフォーゼだからこそのエピソードですね。
今までのライダーで味方の基地に閉じ込められるなんてあっただろうか？

戦隊ならあった記憶が無きにしも非ずだが。

でもあの開通スイッチ（仮）があれば、フォーゼが取りに行って「わが魂はＺＥＣＴと共にありぃー！！」でもどって、またロッカー繋げれば行けるんじゃないか？と思ったのは私だけではないはず。

こまけぇことはいいんだよ？ごもっともですｗｗｗ
そんなこと言ってて特撮楽しめると思うなよ！！ｗｗｗｗ

そういうのはマジレスしちゃいけない。
武闘鬼人とのお約束だ。

そろそろあとがきも終わりだろうって？

・・・・・・・・・

正直書きたいことはまだある。

と、言うか別に特撮の話はしなくてもいいじゃないか。
活動報告に上げてろよ。

ええ、その通りです。
私の耳にも皆さんの声が聞こえてきます。

だが・・・だが・・・！！

この指が、止まらんのですよ・・・！！！

正直こんなこと書いてないで見直しして投稿すれば２１日の２時には上げられているはずなんです。

私はいったい何をしているのだろうか。

というか今この短時間でこんなに書けているのに、本編がもっと時間かかってるのはなぜだ。

だ、だれか・・・一年前の俺を知らないか・・・・
一日一話ペースで投稿していた、あの頃の俺が見つからないんだ・・・

それともあの頃の自分がおかしいのだろうか？
今となってはもう分らないのさ～（る～るる～

このままでは本編の長さを越えるかもしれない。
それはまずいかもしれない。

そろそろやめてくれという声が聞こえてくる。

え？感想書く欄にたどり着きたい？

ならば語ろうか・・・・・

夜明けまで書き続けたる!!

蒔風
「いい加減にしろよ・・・学校で死ぬぞ」

いつも寝てるから変わらん

蒔風
「おい」

さあ!!光に向かってゆくぞ!!

蒔風
「夜明けとかけたな?それでうまいこと言ったつもりか?」

ドヤ

蒔風
「そこまでうまいことは言ってない」

ショボーン

あ、そういえば来週のゴーカイジャーはタイムレンジャー回ですね！！

ゴセイＶＳシンケンに何故彼らがいたのかの謎が明らかになるのか！！

というかやはりタイムレンジャーの大いなる力というのはあながち間違ってなかったか

あと歌星君は来週までがんばってたえるんだ。
人間一週間は水と塩で生きられるらしいし。

いざとなったらポテチョキンと新しい仲間（名前忘れた）がいるよ！！

さ、がんばって食うんだｗｗｗｗｗ

・・・・そろそろ話題がなくなってきた。

蒔風
「無理して続けなくてもいいだろ！？」

あとガチで眠い。
それネタにして後三十分は・・・・

蒔風
「大人しく寝ろよ」

ちなみに現在４時ジャスト。
これから見直しして投稿ですよ！

蒔風
「とっととやれよ！！余計に遅れるだろ！？眠いんだろ！？」

ふ、もう眠くてまともに頭が回らないなどと・・・・・

バタリ

口が裂けても言えぬッ・・・・・ＺＺＺ

蒔風
「言ってるも同然だろ。という過去のネタどこかのアニメで見たぞ」

気にしたら負けだ。
作者は「おつかい」が大好きです。

ランサーマジドンマイ。

蒔風
「何の話をしているんだよ!!説明しろよ!!」

眠気負けて死にそうです。

大丈夫だって。
わかってくれそうな作者さんが一人いるから、彼がきっと感想に答えを書いてくれるさ・・・・

蒔風
「その作者さんの名前は？」

ｚｚｚｚｚｚｚ・・・・・

蒔風
「寝やがった。
リラックマクッション抱いて寝やがった。

リラックマは可愛い。

だが作者、テメーはダメだ。キック」

痛いです。
やめてください

蒔風
「とりあえず次回予告して締めなさい」

次回・・・・も更新しますよ～

蒔風
「それは当然だろ！！内容を言えよ！！！」

蒔風うるさい

蒔風
「ムカッ。しかし私は大人。こうなったら私が次回予告をしよう。
では・・・逆転！！」

作者
「い、一体何が・・・あぁ！！私がカギカッコに！？」

そして俺が地の文だ。

次回、ＶＳ巨大砲撃
何人脱落してしまうのか！？

ではまた次回だ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1043l/

世界をめぐる、銀白の翼

2011年11月21日16時50分発行